

# 遊戯王GX～精霊の抱擁 ～

ノウレッジ@元にしファン勢遊戯王  
書き民

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

【Notice!】

完全新規始まりました！にじファンやすびばる時代には無いお話が読めます！

また閑話は完全新作です、箸休めにお楽しみ下さい！

——人間では無い化物が、人間のフリをして、人間のようにデュエルを楽しむ。

——果たしてそれは許されるのだろうか。

現世で死んだ青年は、疎ましい世界から解放された。

心残りには数あれど、その事だけは救いであつた。

しかし神を名乗る者に告げられる。

「あなたの大切な人は、奪われました」

化物と呼ばれた男は、大切な家族を取り戻すために『遊戯王GX』の世界へと転生する。

※かつて『にしファン』『すびばる小説部』で投稿されていた同名の作品と同一の投稿内容となっております。

内容に大筋の変更はありませんが、一部改訂・改稿・増筆等をしております事をご了承下さい。

# 目次

プロローグ：Nothing	2
STORY 1：炎の力	11
STORY 2：実技試験 試験4番、遊馬	19
崎黎	35
STORY 3：深夜の戦い	70
STORY 4：十代が勝っていた可能性	78
STORY 5：偽ラブレター事件	161
STORY 6：月一試験―序・雷VS炎	
STORY 7：月一試験―次・爆炎の義兄	
と暗黒の義妹	201
STORY 8：月一試験―中・絶体絶命、フィールド魔法『集中豪雨地帯』	237
STORY 9：月一試験―終・反撃封殺。	279
黎、万事休す	327
STORY 10：月一試験―了・諸刃の爆撃	
STORY 11：痛感する力不足	343
STORY 12：「シャキツとしやがれ！」	370
STORY 13：もつと前に進まなくて	

	はいけないから	——	402
	STORY 14 : 扉の先へ	——	441
	STORY 15 : 底辺に生きる男と底辺へ落ちる男	——	494
	STORY 16 : 水の強襲!	——	548
	STORY 17 : 「我は未来を渴望せし者」	——	593
	STORY 18 : 太陽光線	——	622
	STORY 19 : 水の龍と炎の巨人		
646	STORY 20 : 桜色の女性	——	704
738	STORY 21 : 「認めさせてみる」		
	STORY 22 : 来客	——	787
	STORY 23 : トゥーンを攻略せよ!		
	切り札は「未来を切り開く右腕」	825	
	STORY 24 : SALは間違いでSLAが正しい	——	851
	STORY 25 : 「もうあの時の俺じゃない」	——	908
	STORY 26 : 「貴方は生まれて来てはいけなかったのですよ!」	——	924
	STORY 27 : 丸い卵も切りようで四角	——	960
	STORY 28 : 一刀両断・桜吹雪		

- STORY 29 : 手掛かり ————— 1028
- STORY 30 : 偽物VS化物 (前編)  
闇VS星 ————— 1044
- STORY 31 : 偽物VS化物 (後編)  
舞いて飛び立て、『L・S ドラゴ・チエ  
リー』 ————— 1089
- STORY 32 : 恋する乙女 ————— 1089
- STORY 33 : 騎士の在り方 ————— 1161
- STORY 34 : 天空一家との邂逅 ★ 1161
- 1242
- STORY 35 : VSエンヴィー 凶悪 1279
- ロックを打ち破れ! ★ ————— 1279
- STORY 36 : 神すらも超越 ★ 1330
- STORY 37 : 切り札敗北 一縷の光  
1330
- STORY 38 : 結末の切り札 ★ 1400
- 1400
- にかける希望 ★ ————— 1400
- STORY 39 : 黎の決意の正体 1465
- 1545
- STORY 40 : チーム黎VS エリー 1545
- ト軍団 ————— 1570
- 閑話 ☆6のクセに生意気だ ————— 1622
- STORY 41 : 森の中ではクマさん以  
外にも出会う ★ ————— 1721
- 1721

STORY 42 : 絶望の竜の牙 ★

1764

STORY 43 : 「アタシのせいだ」

1834 ★

STORY 44 : 「俺が悪い」

★

1901

STORY 45 : 覚醒する闇の神

★

2011

STORY 46 : 『究極魔導神—テネブラ

エ』降臨

★

STORY 47 : 不服VS闇

21472096

STORY 48 : 主人公対決！

黎VS

十代

2222

STORY 49 : 廃工場に飛ばされた家

族 ★

STORY 50 : 凶食攻撃

★

23352290

STORY 51 : 尽きる事無き食欲

★

2379

STORY 52 : 「食い尽してやるよ！」

★

2446

STORY 53 : 恐怖のカーニバル

★

2524

STORY 54 : 共鳴する魂

★

2642

STORY 55 : 蠢き出した闇

2766

STORY 56 : 激闘 憤怒VS暴食！

- |                      |      |                                    |      |                                    |      |                                    |      |                       |      |
|----------------------|------|------------------------------------|------|------------------------------------|------|------------------------------------|------|-----------------------|------|
| STORY 58 : フレイの同人誌   | 2980 | 閑話 スカツとするためにソリティアをするのは間違っているだろうか・急 | 2954 | 閑話 スカツとするためにソリティアをするのは間違っているだろうか・破 | 2928 | 閑話 スカツとするためにソリティアをするのは間違っているだろうか・序 | 2882 | STORY 57 : 暴食の意地 憤怒の咆 | 2829 |
| 者 ★                  | 3495 | STORY 63 : 女の意地 ★                  | 3407 | STORY 62 : 殺人絡繰人形 ★                | 3263 | ★                                  | 3217 | STORY 59 : 襲撃の炭鉱場 ★   | 3056 |
| STORY 65 : 二人の上級護衛 ★ | 3495 | STORY 64 : 最凶兵器VS冥府の使              |      | STORY 61 : 襲撃! 悪夢の機械軍              |      | STORY 60 : デス・トロッコ・ゲーム             | 3148 |                       |      |





キツト	4980	STORY 93 : 虚無	5438
STORY 84 : アーク vs サイ	4920	STORY 92 : 悲嘆	5375
STORY 83 : ジョーカー再び	4841	STORY 91 : 強襲	5356
STORY 82 : 光と闇をその手に	4752	STORY 90 : 『虚構』	5338
変化	4752	STORY 89 : 文明社会の邪蛮人	5225
STORY 81 : 希望の未来 ホープ七	4702	STORY 88 : 夜が終わる光	2517
STORY 80 : 1 VS 1万の戦い	4606	STORY 87 : 天使の嘆き／悪魔の笑	2176
STORY 79 : 恐怖の無間地獄	4511	STORY 86 : 五濁悪世(ごじよくあく	176
STORY 78 : 精霊三銃士	4511	せ)を喰らう覚悟	5122
STORY 85 : 緊迫の鏝迫り合い	5057	STORY 87 : 天使の嘆き／悪魔の笑	5122

STORY 94 : 恐怖

5520

STORY 95 : 不屈

5584

STORY 96 : 「わたしは君を死なせな

いためにここにいるんだ」

15661

STORY 97 : 憤怒

5681

STORY 98 : 勝利の存在しない決闘

(デュエル) 5734





## プロローグ：Nothing

死んだ。その記憶だけがしつかりと残っていた。

ならばここは、あの世か。

何も無いとも、モノに溢れているとも表現できる奇妙な世界。俺はその中で、裸とも着衣ともつかない姿で浮いている。

分かり易く、というより想像し易く言えば、虹色に輝く空間で体が輪郭線以外は光ってぼやけている、といった感じか。アニメの変身ヒロインの変身シーンでは体が光っているが、アレを思い浮かべると一番近い。

………!!? あいつは!? あいつはどこだ!?

一緒に死んだはずなのに!?

自らの半身とも言える奴がいない。探しに行きたいが、右も左もどころか、上下も前後も分からない。

——悔しい

探しに行けない。共に幸せを絶対に掴もうと誓ったのに。

「……………」

試しに移動を試みる。何もしないよりはマシかと思ったからだ。  
しかし、動かない。あるいは風景が変わらない。

……………おい、神様とかいう奴。俺、何かしたか？

あいつが何かしたのか？

生まれてから不幸ばかりを味わって来た俺達が、何故死した後も引き裂かれるという不幸を味わわなくてはいけない？

運命か？ ふざけんな。俺は、否、俺達はその言葉が大っ嫌いだ。

「どこにいるんだよ、ミヤコ……………」

ポツリと呟く。誰も返す訳が無いと知りつつも。

そばに誰もいないと分かりつつも。

『こんにちは』

「!?!?」

突然、俺の目の前にヒトが現れた。

性別は不明。声は……………女か？

女神像の様な姿形がするが、どちらかと言えば光がヒトの形を作っている様な感じ

だ。ぼんやりとした全体像以外分らない。

そして気がついた。強く発光しているのに、全く眩しく感じていない。何故だ。その能力は今適用してないのに。

「……誰だ、あんたは？」

恐る恐る聞く。

そのヒトはニコリと笑って（光の微妙な動きで判断した）答えた。

『神、ではありませんが、そう定義するのが一番分かりやすいでしょうね』  
「!？」

神、だと……………。

いや落ち着け。厳密に言えば違うだろう。

一番分かりやすい、という事は、そうじゃ無いと言う事だ。

『初めまして、レイ』

「……、初めまして」

挨拶ぐらいは返しておく。礼を失してしまえば聞きたい事も聞けなくなるだろう。

だが、心は焦りに満ちていた。たった一つの聞きたい事があるからだ。

「いきなり質問、というのも無礼だとは承知しています。しかし、答えて頂きたい事がありません」



『なんでしよう?』

一拍、間をおく。自身を落ち着かせるためだ。

「俺と一緒にミヤコという人が死んだはずだ。あいつは今、どこに?」

これがたつた一つの不安。生きているなら俺自身を幽霊にでもしてもらおう。死んでいるなら一緒にあの世で暮らす。しかし、何も分からない以上アクションは起こせない。

『ミヤコは、既に死んでいます。そして貴方と同じ世界に救世主の一人として転生してもらおう……………、予定でした』

「……………、どういう……………、意味ですか?」

でした、つまり過去形という事は、現在は異なる、という事だ。

『その前に、こちらの事情をお話します。その後の方が、説明し易いですから』

こちらをご覧下さい、と神様（とりあえずこう呼ぶ事にした）はスクリーンの様なものを示した。

映し出されている、あれは……………。

「遊戯王……………」

『厳密に言えば、その世界です。貴方達にはこちらに転生して頂くつもりだったので』  
創作なんかでよくある転生モノか。まさか当事者になるとは思わなかった。

『世界は1つの括りが無数に集まり、そしてそのそれぞれの括りの中には無数の平行世界が存在します。』

平行世界。同じように展開されている、されど異なる世界。

自分がいる世界をAとするなら、世界Bにも俺はいる。ただし、Bの俺は嗜好や性別、考え方が違ったりする。

『そして異なる括り同士は互いに交わっています。交わりは互いの世界にそれぞれの特徴をもたらしたり、あるいは何かしらの作品となつて表れます』

なるほど。遊戯王は作品では無く、実際にある世界。それが「偶然」という形を取つて作品としてこちらの世界に干渉した。そういう訳か。

「そこまでは分かった。本題に入つて欲しい」

『……………、実は、この平行世界は1つが欠けても他を元に修復できるといふ、パソコンでいうバックアップ機能のような便利な特性があります。』

しかし、その反面、連鎖破壊が起きやすいといふ欠点があるのです』

砂で作つたアーチを思い浮かべれば分かりやすいだろう。どこか一ヶ所を壊すと、その近くも崩れたり、作りが弱ければ自身の重さで崩壊する。

『この世界の内の1つに、時代は貴方達で言う「GX」の世代で、他には無い変化があるのです。しかも、それは確実に世界が壊滅する方向へと向かつている』

「が、その世界の住人を無理に動かせば他のGXの平行世界で綻びが生じ、そこを何者かにつけ込まれる、そういう事ですか？」

『その通りです』

「だから、俺達という死んだばかりのイレギュラーを投入しようとした。不確定因子なら、他の世界では同じ形で事象は起きず、仮に起きても別の人を投入するという形で違うストーリーを展開させられる」

自分なりに仮説を立ててみたが、神様は肯定してくれなかった。

ほっ、と息を吐く。どうやら頭の中身は変わっていないらしい。

『不運にも命を落とされた貴方達は、正に適材でした。そのまま2人とも転生させ、歪みの修正に充てようと思ったのです』

「……だが、もう1人の死者、ミヤコの方になにかアクシデントが発生した、か？」

『はい。変化の根源は意思のあるものでした』

調べ不足でした、と神様は素直に頭を下げたが、今の俺の頭の中はそれ所じや無かった。

アクシデント、意思あるもの、ミヤコだけ、そして遊戯王……………。

既に現状を表せる仮説が生まれていた。こういう時、自分の頭の回転力が恨めしい。

「まさか……………！ ミヤコは敵の手に落ちたのか……………？」

『残念ながら、その通りです』

間を開けずに言ってくれたのは優しさだと信じたい。

意志ある邪悪。

心が真つ暗になりそうなのを必死に堪え、どんな奴が黒幕なのか、時代を考慮し、考える。

パツと思ひ浮かぶのは「オレイカルコス」や「邪神」、「ユベル」か。時系列を考えなければ、「地縛神」や「パラドックス」、「ナンバーズ」といった所も追加できる。

世界を崩壊させる事を考えると、その中で否定できるのは、根源から断たれた「オレイカルコス」、目的が合わない「パラドックス」と「ユベル」、力の回し方が違う「ナンバーズ」だ。

「……………」

黒幕である何者かは、自分を邪魔しようとする存在を敏感にキャッチし、ミヤコを奪ったのだろう。死んだのか、それとも人質か。しかし、ほぼ同時に死んだ自分はここにいる事は僥倖だった。

「……、ミヤコは取り戻せるのか？」

『あの世界ではデュエルは所謂「万能」ですから……。確実とは言えませんが、何とかなるかもしれません』

希望は0じゃないという事か。もし不<sup>インポッシブル</sup>可能ならば断わろうと思っただが、僅かでも望みがあるのなら……!!

「分かりました、引き受けましょう」

『ありがとうございます』

あいつを俺は絶対に取り返す。それが1番の目的。世界の平和は2番だ。

あの後、神様は俺を光のゲートへと導いた。

必要な事があるらしく、物資は用意するのでこの先で力をつけて欲しい、との事。

(ミヤコ……………)

きつと敵は無茶苦茶強い。何か対抗し得る力を身につけられるのはありがたい。

「待ってろよ、今助けに行くからな……………!!」

静かに決意の言葉を呟き、俺はゲートをくぐった。

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 1 : 炎の力

ゲートから抜け出ると、周囲を見回した。

どう見ても……

「人間の世界じゃあ、ねえな……」

右を見ると夜だ。爽やかな草原が広がっている。

左を見ると昼だ。ゴツゴツした荒野が広がっている。

なんだ、ここ？

そう思ったが、その疑問はすぐに解けた。

「あれは……」

デュエルモンスターズが闊歩しているのだ。

草原に「天位の騎士」の称号を持つ『アルカナ ナイトジョーカー』がいた。

荒野に「神に最も近い」と言われた『神獣王 バルバロス』がいた。

「デュエルモンスターズの精霊界ってヤツか？」

仮にも現代っ子。転生モノは幾つか読んだ事がある。

しかし精霊界から物語を始める転生者は、もしや俺が最初では……。

「ん……？」

向こうから誰かがやって来る。遠くに町が見えるが、そこからやって来たのだろうか？

誰かは着実にこちらへ来ている。俺が立っている場所は道でも何でもないの、ただの通行者という訳でも無さそう。

やがてその姿を捉えた。黒い大きなボディに頭頂で燃える炎。人型では無く、大型のトカゲやワニといった印象を受ける。

そいつはいつの間にか目の前まで来ていた。

「『ヴォルカニック・デビル』……！」

攻撃力3000、オブライエンの主力モンスター。召喚条件があるが、場の炎属性モンスターを守ったり、相手モンスターの全滅が出来たりと、間違いなく炎系統の中でトップクラスの内の1体だ。

ヴォルカニック・デビルは、俺の前まで来ると、じつと見つめてきた。心の中を見透かされている様な感じがするが、不思議と嫌では無い。

おもむろに口を開いた。その言葉は、老練な戦士を思わせるような1つ1つに重みがあるものだった。

「……なるほど。お主があの子の言っておった『騎士』か」



「騎士？」

？

騎士を名乗った覚えは無いし、そう指摘された覚えも無い。

「カハハ、言っておらんかったのか。お主の魂の型じゃよ」

「魂の……型？」

「うむ。人の魂は、それぞれ生き方や気質で形を変える。ワシのような長い期間鍛錬を積んだ者や、才能のある者がそれを見る事ができる」

「――事は、あの神様もそれが見えていて、俺を『騎士』の魂を持つ者としても伝えたのか。名前知ってるクセに、魂見えない奴じや騎士って分からねえじゃんよ。」

「『騎士』は守る猛者の象徴。お主は何か守る者があり、そして、強い」

「炎属性最強クラスの貴方が何を……」

こいつを相手取ったら勝率は薄い。マジックトラップ魔法や罠を使うか、モンスター効果で対処するのが正しい方法だろう。

こすつからいけど。

「何、力だけが強さでは無い。心に決意や覚悟が無ければ、その強さはハリボテじゃよ」

『ヴォルカニック・デビル』……」

『デビル』と名は付くが、こいつ凄く良い奴だ。

「強さを誤解したり、囚われたりする者は身を滅ぼす。そういう者は魂の型は『戦車』や『愚者』だったりする。なに、『騎士』のお主ならば無意識であつても履き違える事はあるまい」

「心強いです」

「ワシは老いてなお、炎の民を指揮する立場にある。しかして、その力は必然、強力となる」

「どうやら炎属性モンスターのリーダーみたいなものらしい。」

「そう、自分で言うのも何じやが、ワシは強者の部類に入る。しかし、そのワシですらお主という救世主に頼らざるを得ん」

世知辛いのお、とヴォルカニック・デビルは切なさそうに笑った。

「炎の民を代表して頼む。どうか、この精霊の世界を、マスターの住む人間の世界を、救つて頂けないか？」

そんなの、答えは決まっている。

このヒトが強いつて事ぐらい、一目見て、そのオーラで分かった。それなのに俺に頼らなくてはならない状況。本当は自分で手を打ちたいのだろう。悔しさの溢れる決断だったに違いない。

そして、俺はそんなヒトを見捨てられるほど、人間を捨ててはいない。

「もちろん、引き受けましょう」

「それは、ありがたい。感謝する……」

さて、と言つてヴォルカニック・デビルは懐（多分）から何かを取り出した。

赤い光を放つ、水晶玉の様に見える。

「これは……？」

「炎の力の結晶じゃ。お主の戦い、デュエルに役立つじやろう」

結晶は占いとかで使われるヤツが強い赤い光を放っていると考えてくれればいい。

「受け取れ。お主の思いが力に変わる」

言われるがままに俺は結晶を手にとった。

温かい力が掌から感じられた。勇気が溢れて来る気がする。

「名をもつて宣誓せよ。戦いに臨む決意が、その結晶を武器へと変える……」

名。俺は今ほどのこの名字に感謝した事は無かった。きっとファーストネームだけだったら、拒まれるに違いない。

すう、と息を吸う。煩くなく、大きな声で叫ぶ。

「我が名、遊馬崎黎！ 今ここにこの身をもって、世界の平和を守り、巨悪を打ち倒す為に戦う事を誓う!!」

結晶は赤い光となって消え、代わりに1組のデッキがそこにあつた。

「結晶が、デッキに……」

「それがお主の武器じゃな。『騎士』は武器をもって戦に臨む」

パラパラとカードを確認する。OCGどころかアニメにも漫画にも出てきていないカードばかりだ。

これが、炎の力が具象化したカードという訳か……。

「ありがとうございます、『ヴォルカニック・デビル』」

「なに、礼を言うのはこちらじゃ。無関係のお主を無関係な世界を守らせる為に駆り立

てた。拒まれても文句は言えんのにのう」

それから『ヴォルカニック・デビル』は淡い赤色のゲートを出現させた。ここから原作、もとい人間の世界へ行けるらしい。

別れ際に『ヴォルカニック・デビル』は言った。

「結晶を守る者は後7人いるという。いずれまた、こちらに来る時が来る。その時は結晶に念じるが良い。ゲートが開く」

「また来る時、か。そうだね、遊びに来る事もきつとあるだろうし、お別れの言葉は言わねえ。じゃ、お元気で！」

軽く右手を挙げ、『ヴォルカニック・デビル』に別れを告げ、ゲートをくぐった。

さあ、目指すは人間世界！ どの辺りから介入するのか、楽しみだ！

何よりも、アイツを見つける為にも、強くならなくちゃいけないな。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 2 : 実技試験 試験4番、遊馬崎黎

ゲートをくぐる途中、試験用紙みたいな物があつた。解いてみれば、遊戯王、否、デュエルモンスターズ関連のモノばかり。

ちよちよいと解いたら『4』という番号が浮かび、受験証書に変わった。

……4つて、なんか不吉。個人的にすっごいイヤなんだけど、こーゆーの。

いや、オカルト云々以前に、そういう人生送つて来たからね。敏感になつちやうモンさ。特に、死に方も事故じやないからね。

で、ゲートをくぐり終わると、人気の無い林の前にいた。

「遅刻だあ〜っ!」

っ!?! あれってGX主人公の遊城 十代!?!

って事は終了時刻間際!?!

もう少し早くしてくれても良かったんじゃねーの!?!

大急ぎで追いかける。こっちは試験会場分からねえんだよ!

「待ってくれ! 多分俺とお前さんは行き先同じだ!」

「えっ!?!」

突然掛けられた声に驚き、足を止める十代。急いでる時は止めちやダメだぜ？

「そっか、アンタもか！ いやー、電車が遅れるとか、参るよな！」

「まったくだよ!!」

実際は違うけどね。

走りながらも会話は続く。

「俺、遊城十代。お前は？」

「黎。遊馬崎黎だ。よろしく」

「へへ、学園が楽しみだぜ！ お前、相当強いだろ？」

「ま、ね。地元じゃ一番強かった」

自慢じゃ無いが、連敗記録はここ数年作っていない。

「へー。でも、俺のE<sup>エレメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>デツキも強いぜ？」

「ふ、俺のデツキもまた然り、だ」

「くく、マジで楽しみになつて来たぜ！」

「だったらず、合格目指すんだな！」

「おう！」

そんなやりとりをしながら俺達は試験会場へ向けて走る。初っ端から遅刻とかシヤ

レにならんっ!!



取り敢えず間に合った。

で、普通のモブ先生が相手らしい。十代は原作通りクロノス先生が相手だ。受験番号4番、というのが功を奏したらしく、クロノス先生の怒りは買わなかったようだ。十代と同居なのに、ちよつと彼に悪い気がする。

さて、切り替えないと。モブ相手とは言え、油断は禁物だからな。

「受験番号4番、遊馬崎黎。お願いします！」

「うむ、全力で来なさい！」

デツキからカードを5枚切る。

因みに言っておくが、『サイクロン』や『強欲な壺』といったカードも入れてある。流石にオリカだけじゃ回らなさそうなんですね。

『デュエル!』

黎：LP 4000

試験官：LP 4000

さあ、行くぜ！

「俺の先攻で行きます！ ドロー!!」

引いたカードと手札を見る。どうやら考えておいた数十手の手の中のアレが使えそ  
うだ。

『ファイア スピリッツ』

『F・S マグマドラゴン』を攻撃表示で召喚!!」

「ファイア・スピリッツ……？」

ま、知らねえだろうな。この世に1枚しかないんだから。

『グオオオオオオオオオオ!!』

雄叫びと共に真っ赤なマグマから紅の龍が飛び出す。

一応言っておくと『プロミネンス・ドラゴン』とは全く似ていないので、悪しからず。

F・S マグマドラゴン：ATK 1800

F・S |ファイア・スピリッツ|

これが炎の結晶から生まれたカード。万物を焼き尽くす紅蓮の力。

「モンスター効果発動！ 召喚に成功した時、デッキまたは手札からレベル4以下の炎

属性モンスター1体を特殊召喚できる。来い、『F・S 鬼火のウイisp』!!」  
続いて青白い炎を纏って仮面を被った侍装束の男が現れる。

F・S 鬼火のウイisp：DEF 700

「ふん、何を出すかと思えば、クズモンスターか」

「——あ？」

おい。今のはムカついたぞ？

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

黎：LP4000

手札：3枚

フィールド

：F・S マグマドラゴン（ATK 1800）、F・S 鬼火のウイisp（DEF 700）

：伏せカード1枚

「私のターン、ドロー。君に良い事を教えてあげよう」

「……何でしょう」

ひつじよくに聞きたくないが、一応返す。こういう所、甘いと自分でも思う。

「クスなザコモンスターをいくら並べても、勝てはしない。デュエルはパワーだよ！」

こいつ、初期のクロノス先生といい勝負だ……！

はつきり言つて性格悪い。こんな奴に教鞭をとつて欲しくない。

「まずは『ゴブリン突撃部隊』を召喚！」

ゴブリン突撃部隊：A T K 2300

「更に『デーモンの斧』と『メテオ・ストライク』を装備！ これにより攻撃力が1000ポイントアップし、守備表示モンスターを超えた時、攻撃力が守備力を超えた分だけ戦闘ダメージを相手に与える！」

悪魔の顔を模した戦斧を装備する、緑肌の鬼トリオ。ところで斧装備してんの先頭の奴だけなんだが……。

ゴブリン突撃部隊：A T K 2300 ↓ 3300

……下らねえ。同じパワーなら『愚鈍の斧』の方がデメリットアタツカーの『ゴブリン突撃部隊』には有効だったのに。ま、貫通効果を持たせたつてもあるし、そこそこ優秀つてトコか。

簡易版『古代の機械巨人』アンティーク・ギア・ゴレムつてトコか？

「……、下らないつたらありやしない。腕前の程が知れるつてんだ」

「聞こえてるぞ」

おっと、声に出てたか。

謝らないけど。

「『ゴ布林突撃部隊』で右側のモンスターを攻撃!!」

右……、『鬼火のウイスプ』か。名前くらい覚えろよ。1分経つてないぞ？

「喰らえ、2700ダメージ!」

3300引く700は2600だ。計算も出来ないのか、この人は。

バイトか何かか？

突撃部隊がウイスプに向けて進軍し、そのまま取り囲む。タコ殴りにでもするつもり

なのか？ エグいな。

そのまま斧や金棒を振り下ろそうとした瞬間、青い炎が球体状にウイスプを取り囲

み、バリアの様に攻撃を防いだ。

『F・S 鬼火のウイスプ』は攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されず、ダメージも発生しない」

「なにっ!？」

へっ、見てろよ……。その高慢チキな鼻っ柱、押し折ってやる!

「モンスター効果は更に続く! 守備表示のウイスプが攻撃を受けた時、コイツを攻撃表示にし、ダメージステップ終了時に相手の場のモンスターの表示形式を2体まで変更できる! もっとも、『ゴブリン突撃部隊』には無意味だけどな」

攻撃後に自分で守備表示になっちゃうからね。

F・S 鬼火のウイスプ：ATK 800

ゴブリン突撃部隊：DEF 0

「おや、自慢の装備カードの影響が全部パーになってしまいましたね?」  
「くうっ、リバースカードを2枚セットし、ターンを終了する……!」

試験官：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：ゴブリン突撃部隊（DEF 0）

：デーモンの斧、メテオ・ストライク（魔法・ゴブリン突撃部隊に装備）、伏せカード  
1枚

「俺のターン、ドロー！」

お！ これならこのターンで終わらせる事ができるな！

じゃ、早速……

「このターンで終わらせる！」

「何い!? だが、そうはいかんど！ 永続罠<sup>トラップ</sup>『最終突撃命令』を発動!! 場の全てのモ

ンスターは永続的に攻撃表示になる！」

ゴブリン突撃部隊：ATK 3300

F・S マグマドラゴン：ATK 1800

F・S 鬼火のウィスプ：ATK 700

「はっはっは、どうだ、このターンでまだ終わらせられると言うのかね!!」

……こいつの高笑い、すんごいムカつく。

「下らねえ」

「ああ!?!」

「……デメリットアタッカーを出した時点で想定される行動はいくつかある。そいつは1番分かりやすく、少しでもデュエルモンスターズをかじっていれば打てる作戦だ」

守備表示を封じ、デメリットを消す。初心者でも簡単に使えるお得な方法と言える。

だがこのカードを採用するのなら、守備貫通を与える『メテオ・ストライク』を採用するのは頂けない。こちらのモンスターも攻撃表示になって死に札になりかねないからだ。

「結論。あんたは強くない」

相手の返事は聞かない。なにかギャーギャー騒いでるが、気にしない。

『F・S バーナーズ・キャノン』を召喚!!」

F・S バーナーズ・キャノン：ATK 1500

巨大なバズーカを背負った鎧兵が現れる。見た目は『ターレット・ウォリアー』に似



ている。

「はっ、そんなザコになにが出来る！」

「うるせえ、黙ってる！ 『バーナーズ・キャノン』の特殊効果発動！ 1ターンに1度、相手の場の魔法・罠カードを1枚破壊でき、更に相手に300ポイントのダメージを与える！ バーニング・ショット！ 対象はリバースカードだ!!」

肩に装着された2丁のバズーカから白い焰が噴き出し、リバースカードを焼き払った。伏せカードは『聖なるバリアーミラーフォース』。危ない危ない。メジャーなカードの中でも特に強力な奴だ。

聖なるバリアーミラーフォース

【通常罠】

(1) : 相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「ぐうっ！」

試験官 : LP 4000 ↓ 3700

「続いて魔法カード『融合』を発動！ 『鬼火のウィスプ』と『バーナーズ・キャノン』を

「融合！」

侍装束の男と鎧兵が時空の渦に飲み込まれ、消失する。渦は光を発し、そして光の中から新たな戦士が現れた。

「融合召喚!! 焼き斬れ『F・S ブレイジング・ナイト』!!!」

『ハアアアアアアアアアアッ、ハアアッ!!』

白銀の鎧を身に纏い、赤い炎を具象化したようなマントを羽織る騎士。兜から覗く紅の瞳には強い意志が宿っている。

F・S ブレイジング・ナイト（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星9

炎属性／戦士族

ATK 2900 / DEF 2700

「F・S」と名のつくモンスター×2

(1)：このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力と守備力の合計値の半分をダメージとして相手に与える。

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900

「な、何かと思えば、ゴブリン突撃部隊より弱「フィールド魔法発動」何いつ?！」

「『スピリッツ・ワールド』!!」<sup>スピリッツ</sup>「S」と名のつくモンスターがバトルを行う時、その表示形式の数値が相手の表示形式の数値より低いなら、その数値は1000ポイントアップする!」

平たく言えば、『摩天楼―スカイ・スクレーパー―』の上位互換。相手の表示形式もこっちの表示形式も一切関係無く発動できる優れ物だ。

『『ブレイジング・ナイト』で『ゴブリン突撃部隊』を攻撃!!』

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900↓3900

「<sup>くうはえんげきざん</sup>空破炎撃斬!」

『ぜ、えええええええ、やあつ!!!!』

紅蓮の炎を纏った剣が一閃、突撃部隊を3人とも斬り裂いた。どうでもいいけど、何で逐一爆発するのかねえ?

「ぐあああああつ!」

試験官：LP 3700↓3100

「そして『ブレイジング・ナイト』のモンスター効果！ 破壊した相手モンスターの攻撃力と守備力の合計値の半分のダメージを与える！ “ファイア・フォース”!!」

「のうああああああつ?!」

試験官：LP 3100↓1450

「そして『マグマドラゴン』でダイレクトアタック！ “ボルカニック・プレス”!!」

「ぎゃあああああああああつ!!」

F・S マグマドラゴン：ATK 1800

試験官：LP 1450↓0

黎：WIN

リアルだな、ソリッドヴィジョン。なんか熱いし。

さて、決して俺はドSじゃ無いが、意趣返しだ。

「1つ、良い事を教えましょう、試験官殿？」

「……何だ」

5D, sの主人公、不動 遊星の言葉を引用してみる。遊星、ちよつと借りるぜ？

「この世の中には、役に立たないカードなんて無い。クズだなんだと貶す心こそがザコの証明だ」

「なっ!?!」

「んじゃ、ありがとうございました」

文句つく前に退散。ま、これで十分に合格圏内だろ。

さて、行くか。デュエルアカデミアに。

——ドクンッ

「……っ!?!」

何だ、今の鋭い痛みは……! !

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 3 : 深夜の戦い

## SIDE : 黎

あの突然に感じた痛みの正体は、結局分からず仕舞いだった。

感じたのは数秒だったし、終わったらもう全身にどこにも違和感は無かったからである。

それはさて置き、実技試験が終了した。ざわつく会場の言葉に耳を傾けると、俺と十代の話題で持ち切りだった。哀れ、三沢。筆記1位でライエロートツプの実力だといふのに。

俺と十代はそれぞれ『クロノス先生を倒した110番』、『ノーダメージで1キルした4番』という風に呼ばれているらしい。

「おーい！ レエーイ！」  
「!？」

十代に気付かれた!? 馬鹿な!? どうして気付けるんだ!?

ってしまった! 電磁波が……!

そう思った時はもう遅かった。応急措置はしたが、後から来た2人の内1人に感付

かれた。

「君、4番君だろ？」

「……よく分かったな。俺がここに隠れているって」

「……誰かいるんスか？」

「君には見えないのかい、119番君？」

それぞれ原作キャラの十代、俺を挟んで翔、三沢だ。

二人には見つかっているらしいので、諦めて俺は姿を現した。

「うわっ!? 人がいきなり出て来た!？」

わめく翔は無視。

「何か用かい、1番、十代、119番」

「俺は1番じゃない。三沢大地だよ」

「ぼ、僕は丸藤翔ツス」

「そつか。俺は4番こと、遊馬崎黎。合格したらよろしく」

自己紹介は大切。

「で、何か用かい？」

「110番、いや十代が君の事を褒めていたからな。1番君が褒めるんだ、相当な腕前だ  
と違って接触してみた。それに、あのカード達も気になるしな」



ファイア スピリッツ

F・Sの事か？ と問うと三沢は肯定した。

「いったいどこで手に入れたんだ？ 君が使ったカードは『融合』以外、見た事も聞いた事も無いぞ？」

「……、それに関しちや、トップシークレットだ。今はまだ明かせない」

第3期の精霊界編<sup>相</sup>り<sup>相</sup>でならバラセそうだが、今はまだ時期じゃない。

十代も『ハネクリボー』の姿を認識できていないからね。

「そうか、残念だ」

「悪いな、三沢」

「いや、お陰で越えるべき壁が一つ増えた。寧ろ燃えてきたよ」

「……どうやら姿を隠していた事は忘れてくれたらしい。良かったところ、どうやって姿を消したんすか？」 しまった、翔がいたんだった。

応急処置の方を答えておくか。

「どうやってって、気配を消したんだよ」

「武術の達人みたいに？」

「そ。なれると呼吸するくらい簡単だよ。感受性が低いと見つけにくいけど、分かる人は見つけられる」

実際は違う。十代に声をかけられ、集中力が切れるまでは別の方法で隠れていた。恐

らく十代は姿を消した俺の精霊のオーラか何かを感知したんだろう。それだけで声をかけるとは、恐るべし十代。

「僕は感受性低いって事ツスね……」

「まあ、そう気落ちするなよ、翔。個人差だし、成長すれば身に着くよ、きつと」

つとと、聞く事があつたんだ。十代や翔よりも三沢に聞いた方が良かった。

「三沢、会場のデュエルはいつから見えた？」

「ん？ 最初の150番からだが」

原作より30人も多いな。いいけどサ。

俺の容姿はこっちに来てても変わらなかった。ならば……

「……茶髪でロングの女の子、いなかったか？」

今更だが、俺は黒い長髪に左眼が隠れており、少々鋭い眼つきといった外見。

「この数だ、10人はいたぞ？」

それもそうか。なら……。

「その中に下の名前が『ミヤコ』って娘は？」

三沢は思案顔を作るが、残念な事に首を横に振った。

「そっか、ありがとう」

ま、1つ年下だからな、仕方ないと言えば仕方ない。

アカデミアでも情報を集めるか。

——アカデミア

結論から言うと、無論合格した。

何故かオシリスレッドだったが。まあ、十代と絡み易いから良しとしよう。

さて、読者の方々（メメタア）は推測が完了しているとは思われるが、俺と一緒に死んだ「ミヤコ」という女を探している。ちなみに彼女では無いし、妻でも無い。妹でも姉でもない。母でも叔母でも違うし、伯母（字の違いに注意）でも双子でも無いぞ？  
無論、娘や孫娘でも、祖母でも無い。

失敬、話が逸れた。

一緒に死んだハズのあいつはこの世界への転生前に敵に奪われた。一応はこの世界にいるらしいので、「世界が違う」なんていう悲劇は起きないようだが。

さっさと探しに行け、という人もいるだろう。だが、俺は行かない。

お話にならない云々では無く、拠点を構えた方が良いと思っただからだ。

敵は俺達を邪魔だと思っただから戦力を削ぐ為にミヤコを奪った。言い換えれば、俺達転生者は邪魔者で、対抗策としてアイツをぶつけて来る為に強奪したと考える事もできる。仮にもアイツは俺の大切な人。死んでも傷つける事なんざ出来ねえ。そういう感情を読まれている可能性もある。

俺が邪魔なら、排除せんと向こうから仕掛けて来る可能性が高い。8種類の精霊の力を揃えて完全な対抗勢力になれば、最悪、敗北の未来が敵に待っている。

封印が解け始めている、という事は敵はまだ本調子では無いという事だ。なのに、エネルギーを消費してミヤコを奪ってまで妨害をするのなら、俺は——少なくともミヤコは、十分敵にとつての脅威という事だ。

さて、説明はこのくらいにしよう。

知つての通り、十代はデュエル大好き少年。悪く言い換えればデュエルバカ。

寮に着いて荷物を整理（1人部屋でした）している途中で「デュエルしようぜ！」なんて乗り込んで来た程だ。

ここで俺は閃いた。原作ブレイクはこつちにとつても不利に働く可能性が高い。だが、俺が誘導する形で原作に沿わせれば、問題は無いだろうし、何より自分で作った状

況。事態の把握は楽に出来る。

勿論、ここで言うべきはただ一つ。

「だったら、アカデミアのデュエル場についてみないか？」  
だ。

——屋内デュエル場

「おおー、すげえー」

「設備も最新っぽいな」

「やろーぜ！ 俺達ここの生徒だしな」

やっぱ、アニメと実際は全然違うな。ナマだと迫力とかが違う。

さて、そろそろかな？

「というワケにはいかないんだな！」

「ここはオシリスレッドのドロップアウトボーイ達が来る所じゃ無いぞ」

お、来た来た！

振り返って見れば、案の定。万丈目の取り巻き1と2だ。

ちなみに「取巻太陽」と「慕谷雷蔵」っていうそうだ。誰かの腰巾着になるために

生まれたような苗字してやがらあ。

「む、何か問題でも？」

「おおアリ「クイ」だ！　って何でアリクイなんだよ！」

割り込んだのは勿論の事、俺だ。

取り巻きはゴホン、と咳払いして言い直す。

「ここはオベリスクスブルー専用のデュエルフィールドだつて言っただろ。　ドロツプア

ウト共は帰れ！」

「あ、ホントだ。オベリスクの紋章がある」

む、良い出来栄えの一品だ。

「だったらさ、お前達とデュエルすりや良いんだよ！」

「お、グッドアイデア」

当初の目的から大分ズレてるがな。

「なにい！　……！！　お前ら110番と4番！」

「万丈目さん！　110番と4番です！」

サンダー登場。

にしても感付くの遅かったなあ。大分話題になっていたのに。

「で、こいつ、誰だ？」

十代、初対面に「こいつ」は止めい。

「おまつ！ 万丈目さんを知らないのか!？」

「デュエルアカデミア最強で!」

「未来のデュエルキングと名高いお人だぞ!」

大言放語にも程つつーモンがあるだろうが。最強が聞いて呆れるつつーの。

「……おかしいなあ」

「何が?」

十代が首を傾げた。ここは火種を撒く所かな?

「最強デュエルキングって事はこの学園で一番って事だろ? この学園の一番は俺か黎の事だからさ

!」

「少なくとも、コイツが学園最強と呼ばれるカイザーや、初代デュエリストキング武藤

遊戯さんに勝てるとは到底思えんがな」

「な、ぐ……」

そこでつまるな、取り巻き。万丈目が暗に彼らより弱いつて事認めてるぞ?

「こんの身の程知らずがあ……!」

「ビークワイエツト。諸君、はしゃぐな。入学試験デュエルで手抜きしたとはいえ、片やクロノス先生を負かし、片やノーダメージワンターンキルをやった奴だ」

「実力さ！」

「試験官がへボだったただけだ」

「ほう、その実力、ここで見せてほしいものだな」

「いいぜ」

「無問題だ」

激しく火花を散らす3人。後少しでディスクを構えようと思った時だった。

「あなた達、何しているの」

「そうだよー！」

お、今度は明日香の……………、

ん？



もう一人は……誰だ？

ひよっとすると、イレギュラー非原作キャラクターか？

「天上院くん、神山くん！ いやあ、この新入り共が余りに世間知らずなんでねえ、学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思って」

万丈目、それでカッコつけてるつもりか？ いやミにしか聞こえないぞ。

「そろそろ寮の歓迎会が始まる時間よ？」

「遅刻しても良いの？」

神山、という女子は当然の事ながら、オベリスクブルーだ。セミロングの赤っぽい茶髪で、白いヘアピンがアクセント。整った顔立ちで、ボーイッシュ。スタイルも良い。

ああいうのを古い言葉でボンキュツボン、っていう……いやエロ親父か、俺は。

万丈目達が退散した後、明日香ともう一人の娘が接触してきた。

「あなた達、万丈目くん達の挑発に乗らない事ね」

「ロクでも無いし、ロクな事にならないよ」

どうやら明日香とコンビらしい。ジュンコとももえ、立ち位置食われたな。

ちなみに翔は傍らで2人の魅力にメロメロになりかけている。

「忠告ありがとう。俺は遊馬崎 黎」

「天上院 明日香よ。明日香で良いわ」

「神山 フィオ。わたしもフィオで良いよ?」

良く見ると、フィオの目は青っぽい。ハーフか。

「十代、俺達も歓迎会始まるぞ?」

「お、ホントだ」

とと、そうだ。仮に彼女がイレギュラーならば、何か連絡手段を持っていた方が良い。「ここで会ったのも、何かの縁。俺の連絡先を渡しとく。相談でも雑談でも、気軽に掛けてほしい」

そう言ってPDAの番号を渡す。生徒手帳を兼ねた携帯電話みたいな感じだ。

「ふふ、面白いわね、あなた。普通は会ってすぐの人とアドレスの交換はしないわよ」

「変わっているとは思っているが、面白いという自覚は無いな」

「うーん、どっちかって言うと、ズレてる?」

「そう来たか」

自己紹介と雑談もそこそこに、俺達は寮へと戻って行った。

メザシは好きだよ? .....

泥や木の根よりも美味しいな。

## ——レッド寮・黎の部屋

「『後手後手になってしまったお詫び』か。フン」

現在、レッド寮の俺の部屋では大きな段ボール箱が複数鎮座していた。中身は無論、デュエルモンスターズのカード達。

奇妙奇天烈な事に、これらのカードには見覚えのある傷がついていた。言うまでも無く、いわゆる前世で俺とミヤコが使っていたカードだ。

神様のメツセージカード付きだったのだが、このくらい出来るのなら最初からやって欲しいものである。危うくF・Sだけでこの学園生活を送らねばならないと思っていた所だった、カードの枚数はこの世界では力そのもの。であれば、これだけで俺は誰にも負けないパワーを手に入れたと言っても過言では無い。

だが、解せない点が2つあった。

1つ目は、『何故前世で使っていたカードをこの世界に持ち込んだのか』という事。わざわざ俺とミヤコが持っていたカードを調達したあたり、そこに何かしらの意図を感じ

る。

もう一つは、『開かない箱の方が多い』という事。何をしても、何なら火を点けても水をぶっかけてもビクともしない段ボール箱があるのだ。この中に何が入っているのかは不明だが、その意味を掴みかねている。ハッキリ言つてこのカード達が何かしらの罫であると俺は訝しんでいた。

P i P i P i P i P i P i !

「ん、メッセージだ」

恐らく、中身はアレだな。デュエル場への呼び出し。

……、番号教えてないんだが？

P D Aを開くと、意外にも送り主は万丈目ではなく、取り巻きの片割れだった。

『やあ、ドロップアウト。互いのベストカードを賭けたアンティルールでデュエルだ。場所は例のデュエルフィールド。時間は今晚0時。勇気があるなら来るんだな』

ピンゴ！

やっば原作知識があると良いな。

なんて考えていると、十代が飛び出して来た。

「黎！ P D Aにメッセージが！」

「お前も来たか！ 当然行くんだろ？」

「ああ！」

ま、あいつら鼻っ柱、押し折ってやりますか。

「じゃ、ちよつと部屋の掃除をしてから行くから、先に行つててくれ」

「おう！」

「それに、ミヤコの事も聞きたいしな」

「え？」

「いや、何でもない。独り言だ」

知つてるとは思えないが、どっかにヒントぐらい転がっているだろう。そんな淡い希望ぐらい持っても許されないか？

さあて、実戦投入第二段を始めようか！

——デュエルリング

「よく来たな！ 110番！ 4番！」

「逃げなかつた事は褒めてやる！」

こいつら、ウザいな。

最初から自分達が勝つと信じて、己の負けるヴィジョンすら浮かべないタイプの人間だ。

「へへっ、デュエルと聞いちや来ない理由は無いぜ！」

「逃げたと思われるのは癪だしな」

熱血に自信に満ち溢れる十代と、冷静に自信たつぷりの俺。その相反するも恐れを微塵も抱いていない姿にカチンと来たのか、万丈目は取り巻きと一緒に頬をヒクヒクさせている。

「万丈目さん！ 4番はオレがやります！」

「いいだろう！ 遊城十代はオレがやる！ そいつは勝手にしろ！」

4番で、名前知られてないのな。十代はそこそこ有名なのに。

十代はリングに、俺はその脇でデュエルする事にした。もう既に万丈目が『リボーン・ゾンビ』を召喚している。

『デュエル!!』

黎：LP 4000

取巻：LP 4000

「俺のターン、ドロ―!」

勢い良くカードを引く。行くぜ……!

「あなた達、何してるの!」

「校則違反にも程があるよ!」

つとと、明日香とフィオの登場だ。

全く、ヒトが意気込んだタイミングで。

「明日香! フィオ!」

「きつ貴様! 何故天上院さんと神山くんを呼び捨てにする!」

「2人がそう呼んで欲しいだったから」

ギリギリと万丈目アンド取り巻きが睨みつけて来るが、気に留めない。男の嫉妬は醜いぜ?

取り敢えず、二人に向き直る。

「案ずるな。俺も十代も負けやしないさ」

「そういう問題じゃないよ！」

「見つかったらどうなるか、分かっているの!？」

「分かっている。が、問題無い。俺のPDAにはこいつの呼び出しメッセージが入っている。何かあればそれで言い逃れをするさ」

そう言つて俺はPDAを取り出し、例のメールを再生する。

『やあ、ドロップアウト。互いのベストカードを賭けたアンティールでデュエルだ。場所は……』

P i

「な?」

「抜け目の無い人……」

「呆れるべきか、褒めるべきか……」

堪忍してな。自分を守る術ぐらい持たなきやいかん生活をしてきたんだよ。

俺がカードを引いてしまったので、取り巻きはターンが回つて来るのを待っている。あそこじゃ俺のやっている事は見え辛いし聞こえ辛い。ラッキーな距離だね、デュエルって。



じゃあ氣イ取り戻して……!!

「俺は『F・S 鬼火のウイスプ』を守備表示で召喚！」

F・S 鬼火のウイスプ：DEF 700

仮面をつけた侍装束の男がフィールドに腕を組んで降り立つ。周りには青白い火の玉が踊っている。

ライフは4000だけど、表側守備表示で出せるつてのは良いね、コレ。  
「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

黎：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：F・S 鬼火のウイスプ（DEF 700）

：伏せカード1枚

「オレのターン、ドロー！」

取り巻きは引いたカードを見るとニヤリと笑った。

因みに俺には取巻と慕谷の区別はついてない。だから今戦っているメガネはどつちなのかは知らないの、悪しからず。

つーかポーカーフエイスを知らんのかね、こいつは。

「カードを一枚セット！ 更に魔法カード『デュアルサモン二重召喚』！ これでオレはこのターン2回通常召喚ができる！ オレは『不屈闘士レイレイ』と『にんけん忍犬ワンダードッグ』を召喚！」

不屈闘士レイレイ： ATK 2300

忍犬ワンダードッグ： ATK 1800

ほう、腐つてもオベリスクブルーか。『ウイスプ』は攻撃力1900オーバーのモンスターとの戦闘では破壊されないしダメージも受けない。

だからワンダードッグを召喚した。同じバニラモンスターでも『サファイアドラゴン』や『ジェネティック・ワーウルフ』といったモンスターの方が攻撃力は高いのに。

バカだと思っていたが、最低限の実力はあるようだな。

「その仮面の能力は知っているぞ！ 『ワンダードッグ』との戦闘では効果は発揮されないだろう！ 行け、『忍犬ワンダードッグ』で攻撃！」

ドロン！ と煙と共に『ワンダードッグ』が消え、次の瞬間には『ウイスプ』の目の前にいた。そのまま拳を振り下ろし、破壊しようとする。

そうはさせるか！

「リバースカードオープン！ 速攻魔法『突進』！ 攻撃表示モンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで700ポイントアップさせる!!」

「馬鹿め、守備表示モンスターの攻撃力を上げて何になる！」

「ハッ、馬鹿はテメエだ！ 俺はこの効果で『ワンダードッグ』の攻撃力を1800から2500にする！」

こいつは『フィールド上のモンスター』が対象なので、相手にも発動できる。『冥府の使者 ゴーズ』や『あまのじやくの呪い』とコンボで組み合わせられるカードだ。

忍犬ワンダードッグ：ATK 1800↓2500

勢いが増した『ワンダードッグ』の拳は、突如出現した青い炎のバリアによって弾かれた。

『ケヒッ！』

「何だど!?! 『突進』にそんな使い方が!?!」

「更に『鬼火のウイスプ』のモンスター効果を忘れるなよ!? お前のモンスターは2体共  
守備表示になる!」

『ウイスプ』が立ち上がると、手から青白い火の玉を飛ばし、相手モンスターに当たった。  
炎に包まれた『ワンダードッグ』と『レイレイ』は自分の身を守るように守備の体勢に  
変わった。

忍犬ワンダードッグ：DEF 1000

不屈闘士レイレイ：DEF 0

「なあっ!?!」

計算が狂ったつっ—顔してんな。アホが。相手を見下しすぎなんだよ。

……：そういうや、この世界じゃ相手がエンド宣言をしてなくても頃合いを見計らって自  
分のターンにできたな。いやはや、好都合だねえ。

取巻：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：忍犬ワンダードッグ（DEF 1000）、不屈闘士レイレイ（DEF 0）  
：伏せカード1枚

「俺のターン！」

一気に押し込むぜ！

「『F・S マグマドラゴン』を召喚！」

F・S マグマドラゴン（効果モンスター）（オリジナル）

星4

炎属性／ドラゴン族

ATK 1800 / DEF 1500

（1）：このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、デッキまたは手札よりレベル4以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚できる。

「モンスター効果で、来い！ 『F・S バーナーズ・キャノン』!!」

F・S バーナーズ・キャノン：ATK 1500

「『バーナーズ・キャノン』のモンスター効果発動！ 1ターンに1度、相手の場の魔法・罠カードを1枚破壊し、相手に300ポイントのダメージを与える！ 『バーニング・シヨット』!!」

両肩に背負ったバズーカから白炎が噴き出し、リバースカードを焼き払う。  
『魔法の筒』か。危ねえ。

「ぐ、熱ちちちちっ！」

取巻：LP 4000↓3700

「行くぞ！ 『ウイスプ』で『不屈闘士レイレイ』を、『バーナーズ・キャノン』で『忍犬ワンダードッグ』を攻撃！ 青色の炎弾!! 　『バーナーズ・バズーカ』!!」

『ウイスプ』は特大の青い火の玉を、『バーナーズ・キャノン』はバズーカから赤い炎を撃ち出し、相手モンスターを焼き払った。

「『マグマドラゴン』でダイレクトアタック！ 　『ヴォルカニック・プレス』!!」

『カアッ!』

「熱うっ!？」

取巻：LP 3700↓1900

「リバースカードを1枚セットし、ターン終了だ」

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：F・S 鬼火のウイスプ（ATK 800）、F・S マグマドラゴン（ATK 1800）、F・S バーナーズ・キャノン（ATK 1500）

：伏せカード1枚

「すごい、オベリスクブルーを一方的に圧してる……!」

端っこの方でフィオが驚愕に満ちた声を発した。こいつが弱いだけだったの。

「どうやらこの取り巻きクンはオベリスクブルーの中でも下の方の実力らしい。強い方を押し付ける形になってすまんね、十代。万丈目は上の方の実力者だ。」

「感動しそうだよ」

「よせ、この程度で」

「そうかな」

ザザツ、ザーツ

ファイオが言葉を続けようとした瞬間、俺の耳にノイズが走った。

「っ?」

何だ、何の音だこれ。

昔のテレビの砂嵐か? 何でそんなのが俺の耳に?

「モシカシタラ、キミハ——ナノカナ?」

? しまったな、聴覚を強化しておくんだった。『キミは』の後何て言ったんだ?

「ファイオ、悪い、今何て言ったんだ?」

「え、何? 何も言っていないよ?」

「そうか?」

「オレのターン、ドロー!」

ちら、と十代の方を見ると、『E・HERO エレメンタルヒーロー スパークマン』で万丈目の『地獄戦士 ヘルソルジャー』を破壊したタイミングだった。

あ、剣が飛んで十代に刺さった(?)。アイツの能力にはビックリだもんな。初めて相





攻撃力2000か。『パンサーウォリアー』と違ってバニラモンスターだからデメリットが無い。一撃入るだけで半分削られるな……！

漆黒の豹戦士 パンサーウォリアー（効果モンスター）

星4

地属性／獣戦士族

ATK 2000／DEF 1600

このカードが攻撃する時、自分の場のモンスターを1体リリースしなければ攻撃できない。

「魔法カード『ダブルアタック』発動！ 手札の『エメラルドドラゴン』を墓地に送り、『エメラルドドラゴン』のレベル未満のモンスター1体は2回攻撃が出来る！」

エメラルドドラゴン：☆6

ジェネティック・ワーウルフ：☆4

げ、マジ!? これ入ったら俺の負けっすか!?

「攻撃だ! ツイン・パワー・スクラッチ!!」

轟! と唸りを上げ、鋭い爪が俺を襲う。

は、冗談! 一発でライフ0にされてたまるか!

「伏せカード発動! カウンター罠<sup>トラップ</sup> 『攻撃の無力化』!! 攻撃を無効にし、バトルフェ

イズを強制終了させる!」

罠<sup>トラップ</sup> カードの発動と同時に薄緑のバリアが発生し、『ジエネティック・ワーウルフ』の

攻撃を防いだ。

あつぶねえ……。

攻撃の無力化

【カウンター罠】

(1): 相手モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃を無効にする。

その後、バトルフェイズを終了する。

「チツ、しぶとい！ ターンエンド！」

取り巻き：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：ジエネティック・ワーウルフ（ATK 2000）

：魔法・罨無し

「俺のターン！ ドロー！」

まったく、思ったよりやるな。

ま、このターンで終わりだけだな！

「黎、頑張れ！」

「おう！」

ファイオの応援が届く。つーか遅い。どっちか勝つ方を応援するみたいだな事すんな。

「（ギリギリギリギリ……！）（）」

そして取り巻き1と2、齒軋りやめな。齒に悪いぞ？

お、『スパークマン』を『フレイム・ウィングマン』が倒した。あ、万丈目への効果ダ

メージで左手から雷放った。そういえば、『フレイム・ウィングマン』が左手使うの、これが最初に最後だったな。

さて、『異次元トンネル―ミラーゲート―』を使ったって事は次の万丈目のターンで終わりだな。俺も終わらせよつと。

「終わらせるぞ!」『F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃表示で召喚!」

F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK 1900

両肩に嵌めている炎の歯車が印象的な男が光と共に現れる。

「魔法装備カード『レッド・シンボル』を『ヴォルカニック・ギア・ガイ』に装備! このいつは『F・S』と名のつくモンスター専用の装備魔法。攻守が1000ポイントアップし、装備モンスターが破壊される時、こいつを墓地に送れば破壊を無効化できる優れた物だ」

F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK 1900 ↓ 2900 / DEF 100  
0 ↓ 2000

「さあこれでラストだ！ 『ヴォルカニック・ギア・ガイ』で『ジェネティック・ワーウルフ』を攻撃！ ムスピン・ファイア・キック！」

回し蹴りの姿勢を取り、高速回転を始めた『ヴォルカニック・ギア・ガイ』。やがてその回転は紅蓮の炎を伴って赤色となり、『ジェネティック・ワーウルフ』を蹴り飛ばした。

『『ジェネティック・ワーウルフ』撃破！』

「ぐわっ！」

取巻：LP1900↓1000

「だ、だがまだライフは残っている……！」

『『ヴォルカニック・ギア・ガイ』のモンスター効果。相手モンスターを戦闘破壊した時、そのモンスターが攻撃表示なら、元々の攻撃力の半分をダメージとして与える！ 2000の半分は1000、アンタのライフポイントと同じだ！』

「そ、そんなああああああああああつ！」

取巻：LP1000↓0

黎：WIN

取巻：LOSE

「すごい！ 黎が勝った！」

ピョンピョンと飛ぶファイオ。ボーイツシュだが少々子供っぽい一面があるようだ。  
「なあ、アンタ」

万丈目が『リビングゲテッドの呼び声』を使っていた。時間が無いな。  
「クツ、アンティールだ。これを受け取れ」

そうやって取り巻きはカードを一枚取り出した。が、俺はそれを断る。

「いや、恐らく俺のデッキコンセプトに合わない。その代わり一つ質問がある」

「……何だ」

情けと見られたのかも知れないが、そんな事は知らない。悔しかったら今度は勝てば良い。

人の下に付くんじや無く、自分の力で強くなって、な。

「ミヤコつて女を知ってるか？ 恐らく茶髪のロングなんだが」

「……いや、知らん」

期待はしてなかったが、落ち込むな、流石に。

「大変！ ガードマンが来るわ！ 時間外の使用がばれたら危険よ！」

「クツ、行くぞお前達！ どうやらコイツがクロノス教諭に勝ったのはマグレだったらしいな！」

「はい万丈目さん！」

「覚えてろよ4番、次はオレが勝つ！」

ドタドタと万城目&取り巻きズが退散する。つかガードマンが来るつつつてんに、騒ぐんじやねえよ。

「十代、俺達も危険だ。撤収するぞ！」

「いやーだーっ！ 俺はアイツと決着をつけるんだあ！」

「ええい、ワガママ言うな！ 肝心の相手はもういねえんだよ！」

「でもよおっ」



チツ、埒が明かん！ 仕方ねえ！

掌を十代の脇腹に当てる。そしてそのまま充電して……。

「ゴメン、十代！」

バチイッ！

という派手な音を立てて、十代は崩れ落ちた。

俺は十代を、そのまま担いで走り出す。

「逃げるぞ！」

「分かったわ」

「ハイッス！」

そしてそのままガードマンの目をやり過ぐし、校舎の外への逃走に成功した。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 4：十代が勝っていた可能性

## SIDE：黎

上手く屋外に脱出した俺達。外に出て一息ついているタイミングで十代が目を覚ました。

その後は原作通り。明日香の言葉に大した事無いと答えた十代。

十代が次に、つまり自分のターンで引くはずだったカード『死者蘇生』。自分または相手の墓地からモンスター1体を特殊召喚する魔法カード。

「へへっ！ こいつで『フレイム・ウィングマン』を復活させれば俺の勝ちだったぜ」  
十代が誇らしげに宣言する。

「ふふっ、不思議な人ね」

「流石アニキッス！」

「強いんだね、十代は」

万丈目の場には貫通能力を持つレベル5モンスター『ヘルジュエネラル地獄將軍・メフェイス』がいた。確かに攻撃表示モンスターを倒せば実質ダイレクトアタックの『フレイム・ウィングマ

ン」を出せれば、残りライフ1500の万丈目では耐えられなかっただろう。  
しかし……。

「あー、盛り上がってるトコ悪いんだが……」

「何だ？」

『フレイルム・ウイングマン』に限らず、『E・HERO』の融合モンスターは融合召喚以外での特殊召喚は出来ないんじゃないじゃなかったっけか？」

「え!？」

殆どの融合E・HERO共通の効果。それは融合召喚以外の特殊召喚が出来ないという事。基本的に融合E・HEROは強力な効果を持つ（マッドボールマンは除く）。墓地からホイホイ蘇生されてはバランス崩壊するのだろう。

「ホントだ……。融合以外じゃ召喚出来ないのか……」

「じゃあ、アニキは負けてたって事ツスか？」

翔が落胆したように言う。が、俺はそうは思えない。

「いや、そうとも限らない。十代、『死者蘇生』の次のカードをめくってみろ」

「おう」

引いたカードは……『強欲な壺』。2枚のカードを引けるドロースースだ。

「もう2枚引いてみてくれ」

「えーと、『戦士の生還』と『ミラクル・フュージョン』だ」

！ なんと！ そこでその組み合わせを引き当てるか。

「……『死者蘇生』で『クレイマン』を準備表示で復活させれば十二分に勝てただろうな。いや、むしろ勝っていた可能性の方が高い」

「どういう事ツスか？」

ちよつと説明が長くなりそうだな、こりや。

「万丈目のミスも絡んでるが、『戦士の生還』で『E・HEROフレイム・ウイングマン』を選択するんだ。すると、『フレイム・ウイングマン』は融合モンスターだからエク……融合デツキに戻る。すると、『ミラクル・フュージョン』で墓地の『フェザーマン』と『バーストレディ』を除外融合する形で『フレイム・ウイングマン』を出せるんだ」

『戦士の生還』は墓地の戦士族モンスター1体を手札に戻すカード。ただし融合モンスターは融合デツキに戻る。『ミラクル・フュージョン』は場と墓地のE・HEROを融合させるカード。

つまり、再び『フレイム・ウイングマン』を召喚できる、という事だ。

「なるほど……」

「万丈目くんのミスってのは？」

そっちは簡単だぞ、明日香。お前が分からないとは思えんのだが？

『ヘルソルジャー地獄戦士』は受けたダメージを相手にも与えるカード。つまり、引き分けにだって持ち込めるカードだ」

ま、万丈目はプライドが高いから、引き分けは許さないとか、その辺も絡んでるかもな。

「十代のライフは550だった。対し万丈目は1500。『地獄戦士』の攻撃力は1200だ。ここまで言えば分かるよな、オベリスクブルーの女王様？」

ちよつとイヤミっぽく言う。

案の定明日香はムツとしたが、理解したのか納得顔になった。

「攻撃力2700未満のモンスターで攻撃したら十代は負けていた？」

「そう。1750未満なんて数値のモンスターを出せば次のターンの反撃でアウトの可能性が高い。逆に攻撃力1750から2700未満なら反射ダメージでこれもまたアウト。無論、棒立ちさせても自爆特効でこれまたジ・エンドになる」

『地獄戦士』は自分より相手の方がライフが少ない時、驚異的な壁モンスターになる。『原子ホタル』や『ユベル』と同じように相手の足止めに見える有効なモンスターだ。

「万丈目のミスってのはここまで言えば分かると思うが、『地獄戦士』を場に残さなかった事。だけじゃなく、攻撃力1800の『メフェイス』なんて中途半端なモンスターを出したのも失敗だったね」

レベル5、6なら最大で攻撃力2600のモンスターが出せる。ダメなら別のモンスターを壁用を増やしても良い。

「まあ、そんな奴の行動が、十代の勝ちを俺に確信させたんだが」

「え、え、え？」

翔も十代もチンプンカンプンつつー顔だな。明日香とフィオも良く分からないと言った感じだ。

まあ、その辺は心理的な推理だから、解らなくても仕方ない。寧ろ15かそこらの子供が理解できたなら怖いよ。

「たったの攻撃力1800のモンスターを態々召喚したって事は、万丈目の手札にはレベル4以下のモンスターがいなかったって事だよ」

「[?」

「分かんないかな？ 普通にレベル4モンスターを出せば次のターン、『地獄戦士』と一緒に上級モンスターを呼び出す素材に出来た」

ダメージが怖ければ守備表示で出すか、最悪『地獄戦士』で引き分けにすれば良い。

「なのに『リビングゲデッドの呼び声』を使ってまで『メフィスト』を出したって事はつまり……………」

「そっか、『メフィスト』しか召喚出来なかったんだ！」

十代、ご名答。

「恐らく万丈目の手札は上級モンスターと魔法、罠カードで占められていた。レベル7以上のモンスターには2体のリリ……、もとい生け贄が必要。場ががら空きの万丈目には出来ない」

そう、推測に過ぎないが、恐らくあの状態で手札の中で出せる唯一のモンスターが『メフィスト』だったのだろう。

「レベル5か6で1800つてのは非常に心許無い数値。にも関わらず出さなくてはいけなかったと考えれば、万丈目は次のターンになっても蘇生された『クレイマン』を破壊出来なかっただろうね。後はさっきのコンボを決めれば十代の勝ちだ」

『おお〜！』

『地獄戦士』を残すといった妥協案を呑まなかったアイツは、上級モンスターの召喚を1ターン待つという事は出来なかった。結果、『メフィスト』という中途半端なモンスターを出さざるを得なかったんだ。

同じ攻撃力で貫通持ちなら『マッド・デーモン』がいる。俺的にはあっちの方がオススメかな（この時代にあるかどうかは知らんが）。

『クレイマン』の守備力は2000ジャスト。1800の『メフィスト』じゃ倒せないし、装備カードを使ってもモンスターをもう1体出すか、攻撃力を2550以上にしない

くちやいけない。

なんにせよ、容易く出来るモンじゃ無い。

俺の知っている限りでは「ヘル」と名のつくモンスターで『クレイマン』を倒せるのは『炎獄魔神ヘルバーナー』ぐらいか。それでも攻撃力2000以上のモンスターのリリースが必要なので、有り得ない。

「結局、何が言いたかったんすか？」

翔、一応説明はしたぞ？ 十代も明日香もフィオも理解してるつつーのに。

「要は、俺は多分勝っていたって事さ」

「ま、必ずじゃないがね」

得意気に言う十代に釘を刺しておく。

「万丈目がモンスター破壊のカードを引き当てたり、『はたき落とし』を伏せてたりしたら、結局はお前の負けだったぞ？」

「ええー……！ 負けてたのか……？」

ガツクリと肩を落とす十代。

躁鬱の激しいやつぢやな。可能性の話だつーの。

「気落ちすんな、十代。例え負けても次勝てば良い、だろ？」

「……、そうだな！」



「今回は決着はつかなかったけど、次、きつと近い内にまたデュエルする機会はあるって。そんな時に勝ちや良いだけさ」

「ああ！」

ニカツ、と十代は笑った。

第3期終了時、そして第4期にはクールというかニヒルな感じになるので、この陽気な十代は今の内にしか見られない。そういう意味でも仲良くしておいて損はないだろう。

こうしてこの後、明日香とフィオを途中まで送り届け、俺達も寮へと帰って行った。流石に、ちつと眠いかな。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 5：偽ラブレター事件

SIDE：黎

十代から翔の様子がおかしい、と相談を受けた。

なるほど確かに。言われてみれば昼過ぎから翔が気持ち悪い。というか、奇行が目立つ。

ほら、今だって体育の時間ですつ転んだのにニヤニヤしている。

ハッキリ言おう。キモイ。

「翔、大丈夫か？」

「黎くん、すみませんねえ、僕だけこんな幸せを享受しちゃって♪」

♪じゃねえよ、♪じゃ。

あ、もしかして偽ラブレター事件？ 时期的にも間違つてないし。

ふむ、カマかけてみつか。

「ラブレターでももらったか」

「(ブフウツ!) なななななななななななあああななななあああななななあああななななあああつ!？」

驚きすぎだバカ。「はい、そうです」って言ってるみたいなモンだぞ？

「ま、幸せは幸せの内に嘸み締めとけ（後でマジメに不幸が襲いかかって来るから）。幸せだと思ってるウチが華だぜ？」

「ん〜？ 嫉妬スか？」

殴っていいか、コイツ。

つーかヒトのアドバイスを『嫉妬』の一言で片づけるな。

「ふっふふふ〜ん♪ あはははは〜♪」

絶賛トリップ中で翔はどこかへ行ってしまった。トリップしすぎると痛い目見た時の落胆やダメーじ大きいぞ（作者体験談です）。

……？ 今妙なテロップが流れたような……？

「黎、どうだった？」

「十代、スマン。現実世界こっちに引き戻せんかった」

いやまあ、半日もすりゃ強制的に現実を知るんだがな。

ふっふっふ、現実の厳しさを思い知れ。

「黎、顔が怖いぞ」

おっと、邪悪な心を持って翔を現実世界に連れ戻そうと思ってたら、いつの間にか顔まで邪悪になっていたか。

「つと、三沢か。何時からそこに？」

「今さっきだ」

通称『空気』『スリースワンプアース』などの異名を持つ（持たれている）三沢。この頃から空気っぽい…。

一応勘づけるように感覚の幅を広げてはいるんだが、イマイチ反応が悪い。

むう、精度落ちたかな？

「で、バスケ、どうだった？」

「俺と三沢のコンビで圧勝だったぜ！」

「十代が俺の計算通りの動きをしてくれたから、こちらも動きやすかったよ」

体育の授業でレッドとイエローの混成バスケ。十代は運動神経は良いが単純らしい。

俺？ 一回戦敗退。はは、笑えないか。

「何言ってるんだよ、お前一人で30点以上入れたじゃないか！」

「しかも内26点がダンクシュート。君はMVPに選ばれても文句は無い」

……、チームの所為でしたか。

まあ、俺の運動神経に、というか身体の機能についていくのは普通の人間には無理だから仕方ないか。

——その日の夜

「黎、大変だ！ P D Aのメッセージで翔が攫われたって！」

「……ソイツあ穏やかな話じゃねえな」

なーんてね、原作知ってるから演技ですよ〜つと。

ま、原作云々言ったら何起こるか分かんないし、黙ってるケドね。行き方と行き帰りのボート漕ぎぐらいはやってやろうか。

「で、何で俺んトコに【P i P i P i P i P i P i !】つとワリイ。メッセージだ」  
なんだ？ 俺もお呼び出し？

人物像は出てなかったが、声はどっかで聞いた事があった。

『やあ、遊馬崎 黎くん。君の友人はコチラでアズかっている。返してほしければ女子寮まで来るんだな、ハハハハハハハッ！ ゲホッゴホッ！』

……。言いたい事が2つある。

「友人の名前挙げろ、行き辛くさせてるから」

名前を挙げてくれないと、罠だという猜疑心が強くなる。ここは名前を挙げるのが正解だ。中々のバカだぞ、送り主は。

「後モザイク機能使え。無理してノド枯らすようなマネすんな」

どういう訳だかこのPDA兼生徒手帳（逆かな？）、メッセージの送信時にモザイク、というか非通知設定にした時、砂嵐の画像と音声変化を送る事が出来る。使わない、という事は……。

「えーと、送り主は……『神山フィオ』。あいつか……」

非通知にすればモザイクは必ずついて来る。こいつ、機能を熟知してない？

「ふい、フィオがこんな事したのか!？」

「1枚噛んでる、が正しいだろう。俺には名前明かしてお前には明かさないってのは変だからな」

で、呼び出されたので、二人して女子寮に行く事になった。

あとフィオが意外と又けてる事も分かった。

——湖上

「いた。あそこだ」

湖畔に停めてあったボートを漕いで女子寮へと向かう。そして湖に面した入口で女子を複数名、そして縛られた翔を確認。

「翔を返せ！」

「早っ！」

岸に飛び降りるなり十代は女子に向かって叫ぶ。せめて事情を聞くとかねえのか。

「来たわね、十代、黎。そういう訳にもいかないわ」

「俺の友人が何かしたのか？」

明日香なら冷静だし、こいつはそもそも十代の実力が知りたいが故にこの事態を利用

したからな、虚偽は混ぜんדרろう。

ちなみに答えは違う奴から返って来た。

「こいつ、女子寮のお風呂を覗いたのよ!」

ももえ（黒髪の方。覚えにくかったら黒桃で覚えると意外と忘れない）が叫ぶ。

「覗いてないツス! 僕は手紙で呼び出され「ちと黙つてろ、翔」黎くん!」

「事情は署で、もとい後で聞く」

「明らかに僕が犯人前提ツスよねえ!」

「何を言う。お前が覗いたなんて事、信じてるに決まつてるじゃないか」

「やっぱ犯人扱いツス!」

「違う。お前の身の潔白を疑つてるだけさ」

「同じツスよおおおおおおおおおおお!!」

ま、このバカ弄るのはこの辺にしとくか。仮にも被害者だからな。

「手紙つてのは?」

「これよ」

明日香が手紙を手渡して来た。本当は差出人を知っているが、あえて知らないフリをしとく。

「きつたねえ字。しかも十代宛て。翔、まず疑え。つっ—かヒトの手紙に勝手に応対す



んな。バチが当たったんだよ」

「あうう……」

「ま、こんなんで呼び出せるのは恋愛事に疎い奴かそのバカぐらいだな」

こういうのを「連木で腹を切る」と言う。要は到底不可能、という事だ。

ちなみに勿論恋愛事に疎い奴ってのは十代の事だ。

「で、そいつが覗いたか否かはさて置き」

「いや置いとかないでツス」

「(無視!) わざわざ呼び出したんだ、要件は?」

そこで俺はチラリとフィオを見やる。さつきから一言も喋っていない。逆に何かを腹の内に持っていそうだ。

と、俺の視線に気付いたフィオ。ボーイツシユな感じも湯上りだと色気が変わる。

「デュエルでどうかしら? 2連勝でこの子は解放。1敗でもしたら……」

「通報?」

「そ、そんな不平等な!」

「キミを無条件で突き出しても良いんだけど?」

「ヒイツ!!」

フィオの言葉には刺があったようにも思えたが……。諦める、翔。分が悪い。

罨ではあるが、お前を弁護できる材料がその手紙1つじゃ弱い。ここは要件を呑むしか無いんだよ。

にしても……。

「神山、そんなゲテモノを見るような眼で見てやるな。美人さんが台無しだぜ？」

「だ、誰が美人よ!?!」

「文脈で分かれ、お前つきやいねえよ」

「(ボンツ!) う、うるしやひつ! 相手の戦力を削ぐ作戦か!?!」

いや、可愛い系の女の子だつてのは正直な感想なんだけど……? ?

翔が僕の弁護とか言つてるけど、無視。女子が肢体を見られてないという保証は無いから君のジャツジは保留だ。

「わわわわわ、わたし、が相手つ、すつる! いいいいいいいい、良いよね、あすきやつ!」

「少し落ち着きなさい。カミカミじゃないの」

「落ち着け、どもりまくりだぞ?」

褒められ慣れて無いらしいな、コイツ。顔が『美人』の一言で真っ赤になるヤツなんて早々いねえぞ? ?

「じゃあ、十代の相手は私ね」

「おう、来い明日香！」

「手加減無しだ、神山」

「ぜ、全力で叩き潰してやる！」

「『ポルテイツク・サンダー』！」

「きゃあああああああ！」

明日香：LP 0

初戦はこちらら、十代VS明日香。原作と何一つ変わらず十代が勝利を収めた。

「ガツチャー！ 楽しいデュエルだったぜ！」

「やった、まず一勝ツス！」

翔、喜びすぎ。しかしお前さつきから思ってたんだが……。

「人身売買されてるみてえ……」

「ヒドイツス!？」

あ、声に出てたか。

「く、う……」

「明日香様！」

「明日香さん！」

「明日香！」

お、見事に煙が上がってるね。どつかにいるクロノス先生も同じ目に合ってるだろうな。

「許さない……！ わたしが相手だ！ 明日香の敵は討たせてもらうよ！」

「フィオ……、私死んでないわよ……？」

フィオが本気の怒りを表す様にディスクを構える。ジユンコとももえも苛立ちの視

線を向けて来た。

あのね、キミ達……。

「こつちも真剣勝負、手加減を期待する方が間違っている」

『う……』

「第一、レッドがブルーに勝つとか生意気とか思っていないか？ レッドがブルーに勝つてはいけないなんてルールはねえし、そもそも女子は全員ブルーだろうが。明日香は本物の実力があるが、マジにブルーに匹敵するだけの実力者は何人いる？」

「わたし達が弱いつて言うの!？」

「アンタねえ……っ!」

つとと、言葉選びをミスったか。

「すまん、言い方が悪かった。違うんだ。ブルーだレッドだの階級に囚われて勝ち負けに拘り過ぎなんだ。レッド相手にも全力出せ。明日香は手を抜いていなかったが負けた。先の戦いの二の舞になりたくなくなったら手加減するな」

「……っ、分かってる!」

ま、安い挑発はこの位でいいか。

「さつてと、俺達も始めようぜ?」

「死んでも負けてやるもんか!」

いや、命は大切にね？ 一回死んだお兄さんからの忠告だよ？

『デュエル！』

黎：LP 4000

ファイオ：LP 4000

「俺の先攻！ ドロー！」

さて、今回のデツキは、今更な宣言ではあるが「F・S」のデツキではない。

あの正体不明の激痛が何なのかを探るため、そしていつの間にか俺の部屋に届けられていた元の世界のカードの性能を確かめるため、まずは試運転だ。

何より、俺はあのカードの配達にファイオが何か絡んでいる可能性があると思ってる。イレギュラーにはイレギュラー、直接関わっていなくても何かの要因くらいはある筈！

「俺は手札から魔法カード『予見通帳』を発動。このカードはデツキの上からカードを3枚、裏のまま除外。3ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える」

予見通帳

【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1) : 自分のデッキの上からカード3枚を裏側表示で除外する。

このカードの発動後3回目の自分スタンバイフェイズに、この効果で除外したカード3枚を手札に加える。

「タイムラグはあるけど3枚ドロウできるって事か、良いカードだね」

「どうも。それじゃあデッキトップを3枚除外するぜ?」

『あれ黎君、除外するカード見てるけど良いんすか?』

『何言ってるのよ、除外するカードは裏でも自分で確かめられるルール知らないの?』

『……知らなかったツス』

『呆れますわね』

「更に『クリッター』を守備表示で召喚」

DEF : 600

場に屈んだポーズで現れる三つ目の毛玉妖怪。守備表示で出せるというのは良い。アニメならではの素晴らしい特権だ。先攻ドロウもありだしね。

「カードを3枚伏せて、ターンエンド」

黎：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：クリッター（DEF：600）

：伏せカード3枚

「手堅いね、面白くない」

「次のターンから面白くなるさ。今は下準備だ」

つまらなさそうに口を尖らせるフィオに、俺は肩を竦める。

最初のターンから飛ばす事も出来るが、生憎とこの手札じゃ無理。

それに俺は初代DMの頃からのプレイヤーで、あの当時の何ターンもかかるデュエルが好きだったんだ。今の1〜2ターンで終わるようなのは好きじゃないね、あんなのデュエルの名を借りた一人遊びだ。



「ふーん？ それじゃ、その前にオベリスクブルーの力を見せてあげようか。わたしのターン、ドロー！」

「この学園に来て、やっとまともなブルーとのデュエルだ。お手柔らかにしなくて良いぜ？」

「当然だ、遠慮は無しさ！ まずは手札の『ヘカテリス』の効果発動！ このモンスターを墓地に捨てて、デッキから永続魔法『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加える！」

おっと、【天使族】か。

宣告者がいなければ良いんだがな……。

ヘカテリス（効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1500／DEF 1100

(1)：自分メインフェイズにこのカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デッキから「神の居城―ヴァルハラ」1枚を手札に加える。

神の居城―ヴァルハラ

## 【永続魔法】

(1)：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する。

この効果は自分フィールドにモンスターが存在しない場合に発動と処理ができる。

「そして発動！ このカードは1ターンに1度、自分の場にモンスターがいなければ、手札の天使族モンスターを特殊召喚できる。出でよ、『The splendid VE

NUSS』！」

『Aaaaaaa!』

ATK：2800

「げ、いきなりコイツかよ……」

「このモンスターがフィールドにいる限り、全ての場の天使族以外のモンスターの攻守は500ポイントダウンする。これで君のモンスターは雑魚同然！」

クリッター DEF：600↓100

「もう一丁! 『勝利の導き手フレイヤ』を召喚!」

『ファイ、オー!』

「『フレイヤ』がいる限り、全ての天使族の攻撃力と守備力は400ポイントアップ! これで攻撃力の差は900ポイント広がる!」

「しかも、味方モンスターに天使族がいる限り、攻撃対象にされない……!」

勝利の導き手フレイヤ ATK:100↓500

The splendid VENUS ATK:2800↓3200

「ひいつ、攻撃力3200!」

The Splendid VENUS (効果モンスター)

星8

光属性/天使族

ATK 2800/DEF 2400

(1):このカードがモンスターゾーンに存在する限り、天使族以外のフィールドのモン

スターの攻撃力・守備力は500ダウンし、自分フィールドの魔法・罠カードの効果の発動及びその発動した効果は無効化されない。

勝利の導き手フレイヤ（効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 1000／DEF 1000

自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択する事はできない。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターは攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

「狼狽えるな翔、まだどうとでもなる」

「それは君に次のターンが来た時の話だ」

「え？ でも神山さんはもう通常召喚したじゃん？」

「いや、まだ何か狙ってるっぽいぜ、翔」

十代の読みは恐らく合っている。『フレイヤ』を召喚したって事は……。

「正解だよ遊城くん。永続魔法『コート・オブ・ジャスティス』！ 自分フィールドにレベルーの天使族モンスターがいる時、1ターンに1度だけ手札から天使族モンスターを特殊召喚できる！ 出ておいで、『豊穣のアルテミス』！」

ATK : 1600 ↓ 2000

「うげ、【エンジェルパーミッション】かよ!？」

「え、えんじえ……?！」

「この時代にアレは鬱陶しいぞ!？」

「れーい、そのパーミってのは何なんだ?！」

「えーとだな、天使族とカウンター罠の混成デツキだ。天使族の中にはカウンター罠と相性の良いのが何体かいるから、それを有効活用するのが軸になる。主にドロー加速やライフ回復をメインに、墓地のカウンター罠を回収したり相手の動きを荒らすのが得意なデツキだ。」

……翔、十代、少しくらいデツキの研究しなさい。敵を知り己を知れば百戦危うからずって言葉は知ってるだろう?！」

「何それ?！」

「美味しいのか？」

「……」

「……」

「……」

「……ウチの馬鹿共がごめんなさい」

本当にごめんなさい。

コート・オブ・ジャスティス

### 【永続魔法】

このカード名の（１）の効果は１ターンに１度しか使用できない。

（１）：自分メインフェイズに発動できる。

手札から天使族モンスター１体を特殊召喚する。

この効果は自分フィールドにレベル１の天使族モンスターが存在する場合に発動と処理ができる。

「さ、さあ行くよ、バトルだ！ まずは『フレイヤ』で『クリッター』を攻撃！」

「この攻撃が通れば、場のモンスターはいなくなるぞ！」

「攻撃力の合計は4000を超えてるッス！」

「流石、明日香様と並ぶオベリスクブルー女子の双壁ですわ」

「さあワンキルだ！」

握り締めた拳で毛玉にチアガール天使が殴りかかって来る。

確かにこれを通せば敗北だが……、チエックメイトにはまだ早いぞお嬢さん。

「そうはさせない。罨発動『くず鉄のかかし』！ 相手モンスターへの攻撃を1度だけ無効にする！」

「何?！」

毛玉の前に、スクラップで出来た案山子が割り込んで攻撃を弾く。1ターンに1度だけ使える永続罨のような立ち位置として、非常に優秀な防御札だ。

鉄塊を殴って手を痛めたのか、青髪の天使は痛そうに掌を振りながら元いた場に戻って行く。

「発動後、このカードは墓地に送らず、自分フィールドの同じ魔法・罨ゾーンに再度セットされる」

「罨カードは伏せたターンには発動できない、1ターンに1度使える効果って事か」

「正解。パーミッションデッキなだけあって、罨カードの扱いには詳しいな」

くず鉄のかかし

【通常罠】

(1)：相手モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃を無効にする。

発動後このカードは墓地へ送らず、そのままセットする。

「なら、『アルテミス』で『クリッター』を攻撃！」

「それは防げない」

光の砲弾が放たれ、俺のモンスターが消し飛ぶ。防御カードはあれだけなので、この破壊は通すしかない。

「だがこの瞬間、『クリッター』のモンスター効果発動。フィールドから墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを1体手札に加える。攻撃力1500の『トランス・デーモン』を手札へ」

「構うものか！ 更に『VENUS』でダイレクトアタック！ ホーリー・フェザー・シャワー！！」

「ぐっ！」



黎 : LP 4000 ↓ 800

「れ、黎君のライフが一気に800に!？」

「やったわね、もう一息よ!」

「うん! どうだい、これがブルー女子の実力だ!」

ツテエ……。一発良いの貰ったな。

羽の雨が俺のライフをぐっすり削り、湖の荒波を立てる。遠くでクロノス先生が波に揉まれているが、知らん。

それに、デュエルはここからだ!

「ハッ、粹がるのはまだ早いぞ?」

「負け惜しみかい? 次のターンでトドメを差してやるから覚悟しなよ!」

「そいつは無理だな。何故なら俺のライフは、お前と並ぶ事になるからだ! 毘発動『フ

リッグのリンゴ』!」

「何!?!」

黎 : LP 800 ↓ 4000

「ライフが回復した!？」

「このカードは俺が直接攻撃でダメージを受けた時に発動でき、そのダメージ分だけ回復してくれる」

「何だって!？」

「更に、その回復した数値と同じ攻守を持つ、『邪精トークン』を特殊召喚する!」

フリッグのリング

【通常罫】

(1)：自分フィールドにモンスターが存在せず、自分が戦闘ダメージを受けた時に発動できる。

受けたダメージの数値分だけ自分のLPを回復し、自分フィールドに「邪精トークン」(悪魔族・闇・星1・攻/守?) 1体を特殊召喚する。

このトークンの攻撃力・守備力は、この効果で自分が回復した数値と同じになる。

『キへへへへ!』

邪精トークン ATK : 3200

癒しの波動が放たれ、俺のライフは丸々回復する。3200も回復するんだから痛み  
の1つでも治れば良いのに、ダメージを受けてフィードバックした肉体は大して変わ  
らない。

代わりと言うべきか、俺の場には虹色に輝く炎の精霊が生み出された。トラップ1枚  
で32打点なら上出来だろう。

「くっ、折角削ったライフが！ でもそのトークンは悪魔族、なら攻撃力はダウンする  
！」

邪精トークン ATK : 3200 ↓ 2700

「わたしはカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

ファイオ : LP 4000

手札 : 0枚

フィールド

：The splendid VENUS (ATK：3200)、勝利の導き手フレイヤ (ATK：500) 豊穡のアルテミス (ATK：2000)

：神の居城―ヴァルハラ (永続魔法)、コート・オブ・ジャスティス (永続魔法)、伏せカード1枚

「俺のターン、ドロ―！」

「うう、黎君、僕の事はもう良いから逃げて……。あんなの勝てっこ無いよお……」  
「おいおい何を女々しい事言ってるんだよ」

まだ往復1ターンしか経ってないのに、もう負けた気でいるのかこのチビ眼鏡は。

「まだ勝負はこれからだろうが」

「で、でも攻撃力3700のモンスターが必要なんすよ!? そんなのどうやれってるんすかー！」

「慌てるなって。それに、勝負はこれからだぜ？ あれ見ろよ」

「あれ？」

俺が指差す先にいるのは、対戦相手の神山フィオ。

茶髪を短く切り揃えた女の子であり、デュエルディスクを構えているが――

「……何も無いじゃん」

「そう、無いんだよ。手札が！」

「え？」

「あ!？」

「あいつは前のターンで手札を全部使った。このターンで切り返せば、勝率は十二分にある。手札不足、それが大型モンスターを展開する戦術の切り離せない弱点さ！」

フィオの伏せカードは恐らくカウンター罠。そしてそれに連動して『アルテミス』の効果で1枚ドロウできる。

それでも次のターンの手札は2枚。果たしてこの時代のカードプールで、2枚ぼっちで巻き返せるかな！

「魔法カード『闇の誘惑』を発動。デッキから2枚ドロウし、手札の闇属性モンスター1体を除外する。出来ない場合、手札は全て墓地へ吞まれる。2枚ドロウし、『トランス・デーモン』を除外！」

「先んじてコストを用意してあったか……」

### 闇の誘惑

#### 【通常魔法】

(1)：自分はデッキから2枚ドロウし、その後手札の闇属性モンスター1体を除外する。

手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。

「俺は手札から『死者蘇生』を発動！ 墓地のモンスターを特殊召喚する！ 俺は『クリッター』を特殊召喚！」

『キキイツ！』

ATK：1000↓500

死者蘇生

【通常魔法】

(1)：自分または相手の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。

このターンに切るのはデュエルモンスターの代名詞。

エジプトの十字架アंकを象ったエンブレムが、墓地から再び毛玉モンスターを呼び起こす。

「さて、人質君。君はさつき攻撃力3200をどう倒すかって泣いていたね」

「う、人質君って僕の事ツスよね……」

「その答えはこれだ！ 俺は『クリッター』をリリ……、生贄に『邪帝ガイウス』を召喚！」

『ゴアアアアア！』

ATK : 2400 ↓ 1900

いかんいかん、うっかりリリースって言いかけた。用語が変わる前だから、注意しないとな。

「それは帝モンスタ―!? ウルトラ級のレアカードじゃないか!!」

『『ガイウス』の効果発動！ 召喚成功時、フィールドのカードを1枚除外する！ 失せろ、金ピカ天使!』

『『VENUS』!?』

「同時に『クリッター』の効果で、デッキから攻撃力600の『ネクロ・ガードナー』をサーチ！」

場に新たに現れた黒い悪魔の波動で、空間に穴が開く。

真つ黒な、ぽっかりと開いた穴はそのまま近くにいた金色の天使を吸い取り、やがて

プツンと消えてしまった。

クリッター（効果モンスター）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 600

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードがフィールドから墓地へ送られた場合に発動する。

デッキから攻撃力1500以下のモンスター1体を手札に加える。

このターン、自分はこの効果で手札に加えたカード及びその同名カードの発動ができない。

邪帝ガイウス（効果モンスター）

星6

闇属性／悪魔族

ATK 2400 / DEF 1000

（1）：このカードがアドバンス召喚に成功した場合、フィールドのカード1枚を対象と



して発動する。

そのカードを除外し、除外したカードが闇属性モンスターカードだった場合、相手に1000ダメージを与える。

「マジかよ、あのデカイ天使が一撃で消えちまった……」

「攻撃力がいくら高くとも、効果で除去されたらそれまでだ。パワーだけで勝てる程、デュエルは甘くないって事だよ」

モンスター、魔法、罫、その全てを複合的に組み合わせる事でデュエルは成立する。

たった1枚のカードで戦況を握れる程、ヌルいゲームじゃないのさ。

「さあ行くぞ？ バトルだ！ やれ、『ガイウス』！ 『アルテミス』を攻撃！」

「既に『VENUS』の効果は消えて、攻撃力が戻っている！ 『ガイウス』の方が攻撃力が上だ！」

「そこにトークンで攻撃されれば、追加で2700の大ダメージですわ!!」

邪帝ガイウス    ATK : 1900 ↓ 2400

邪精トークン    ATK : 2700 ↓ 3200

「さあ、使うなら使えよ、『攻撃の無力化』を！」

「つ、わたしの伏せカードが分かってたのか!? なら発動だ、『攻撃の無力化』！」

俺の悪魔が、敵の天使を打ち倒さんと黒いエネルギー波を放つ。しかし敵の生み出した蛍光色のバリアで攻撃を弾かれてしまい、失敗に終わった。

しかしやはり『攻撃の無力化』だったか。魔法カードにも召喚にも、モンスター効果にも無反応だったし、当然と言えば当然か。

「この瞬間、『アルテミス』の効果発動。カウンター罠が発動した時、カードを1枚ドロウできる！」

### 攻撃の無力化

【カウンター罠】

(1)：相手モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃を無効にする。

その後、バトルフェイズを終了する。

「凄いだか。まあこのくらいはやって貰わないと面白くない。」

俺はこれでターンエンド。さて、そっちは中々に不利な状況だが、どう対処する？」

黎：LP 4000

手札：2枚（内1枚は『ネクロ・ガードナー』）

フィールド

：邪精トークン（ATK：3200）、邪帝ガイウス（ATK：2400）

：伏せカード2枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）

「無駄が無い、良い戦術しているよ。デッキの完成度も高い」

「お褒めに預かり光栄です」

「でも、容赦はしない！ わたしの、ターン！ 魔法カード『天使の施し』を発動！」

天使の施し

【通常魔法】

自分のデッキからカードを3枚ドロース、その後手札を2枚選択して捨てる。

あー、そうかあれも現役か。今の環境じゃとてもじゃないけど復帰できないぜ。ちよつと禁止・制限を見直さないと、手を抜き過ぎるような形は嫌だしな。

「デツキから3枚ドローして2枚捨てる！」

目を凝らして相手の捨てたカードを確認すると、『光神機—轟龍』と『透破抜き』だった。取り敢えず安全か。

アニメなんかじゃ墓地に行ったカードは無視されやすいが、第2の手札をシカトできる程、俺は凶太くは無いのだ。

「更に『コート・オブ・ジャステイス』の効果発動、手札の『光神テテユス』を守備表示で特殊召喚！」

DEF:1800↓2200

「『アルテミス』、『フレイヤ』を守備表示に変更。カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

ATK:2000↓DEF:2100

ATK:500↓DEF:500

ファイオ：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：勝利の導き手フレイヤ（DEF：500）豊穣のアルテミス（DEF：2100）、  
光神テテユス（DEF：2200）

：神の居城―ヴァルハラ（永続魔法）、コート・オブ・ジャスティス（永続魔法）、伏  
せカード1枚

「防戦に入ったツスね」

「仕方ないわ。相手の場に『くず鉄のかかし』がある以上、攻撃できるモンスターが2体  
は必要だもの」

「このままだとジリ貧ですわ……!」

「俺のターン、ドロ―! どうした、ブルー女子の実力はこんなもんか?」

「そんなワケあるか、天使は悪魔になんて負けない!」

「……俺は悪魔族統一じゃないんだがな。まあ良い。」

俺は『潜入!スパイ・ヒーロー』を発動。デッキからカードを2枚墓地に送り、相手  
墓地の魔法カードを1枚コピーする。『天使の施し』、俺にも使わせて貰うぜ?」

潜入！スパイ・ヒーロー（アニメオリジナル）（独自解釈テキスト）

【通常魔法】

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送り、「潜入！スパイ・ヒーロー」以外の相手の墓地の通常魔法カード1枚を対象として発動できる。

このカードは対象のカードと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。

こちらはアニメGXで十代が使用していたカード。かなり緩い条件で相手の魔法カードを盗めるコイツは、相手が使った『強欲な壺』や『天使の施し』での手札増強にピッタリの1枚だ。

デッキの上からカードを2枚めくって墓地へ送り——『ダーク・クリエイター』と『強欲な壺』だった、悲しい——相手の『天使の施し』を複製する。

「そしてその効果により3枚ドロし、2枚を捨てる。捨てるカードの1枚は当然、『ネクロ・ガードナー』だ」

「やっぱりそれを捨てるか……」

「こいつは墓地にいてこそだからな」

もう一丁！

「装備魔法『早すぎた埋葬』を発動。ライフを800払い、たった今墓地に送った『マッド・デーモン』を攻撃表示で特殊召喚！」

『ヒャハハハハハハー!!』

ATK : 1800

LP 4000 ↓ 3200

「この『マッド・デーモン』には貫通能力がある！」

「貫通能力!？」

「そうだ、バトルした守備モンスターの守備力より攻撃力が上なら、その数値分だけ戦闘ダメージを相手に与える効果を持つ！」

「つて事は、黎は天使族モンスター2体を倒した後『フレイヤ』を攻撃すれば、1300のダメージを与えられるつて事か」

「そういう事だ。バトル！ 『邪精トークン』で『テテユス』を攻撃！ そいつを残すワケにはいかねえんだ！」

虹色に光る炎の精が、ファイオの天使へと体当たりをしかける。

あのモンスターの効果はドロウ加速、残しておいてこっちの特になる事なんて何も無い。早めに倒しておくべきだ。

「そうはさせるか！ リバースカード、オープン！ カウンター罠『アンガロス・ミラー』！」

自分の墓地のカウンター罠1枚と同じ効果を得る！ 私は『攻撃の無力化』をコピーし、バトルフェイズを終了させる！」

アンガロス・ミラー（オリジナル）

【カウンター罠】

（1）：自分フィールドに天使族モンスターが3体以上存在する場合に発動できる。

自分の墓地からカウンター罠カードを1枚除外し、除外したカードと同じ効果を発動する。

「チツ、また中断させられたか……！ 上手く躲すじゃねえの」

「素直に受け取っておくよ。そして『アルテミス』の効果で1枚ドロウ！」

知らないカードだな……。やはりデュエルの本家本元の世界、俺の世界には伝わっていないカードなんていくらでもあるのだろう。元々持っていた知識だけで対抗するの



は危険かも知れん。

「……来た！」

「！」

「わたしは『テテユス』の効果発動！ ドローカードが天使族モンスターだった時、それを相手に見せる事でもう1枚ドローできる！」

「良い引きだな。しかも追加ドローが天使族なら、その効果は何度でも繰り返し返す事ができる」

「そうとも！ 引いたカードは『ハーブの精』！ ドロー！」

光神テテユス（効果モンスター）

星5

光属性／天使族

ATK 2400 / DEF 1800

（1）：自分がカードをドローした時、そのカードが天使族モンスターだった場合、そのカードを相手に見せて発動できる。

このカードがフィールドに表側表示で存在する場合、自分はデッキから1枚ドローする。

ハーブの精（通常モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 800／DEF 2000

天界でハーブをかなでる精霊。

その音色はまわりの心をなごませます。

「2枚目は……、天使族じゃない」

「残念だったな」

「良いよ、『強欲な壺』を発動したとでも思っておくさ」

俺の皮肉に、相手は肩を竦める。

デッキが40枚のカードの塊である以上、運の要素はどうしても付きまとう。クヨクヨ悩んだり地団駄踏んだりするだけ無駄なのだ。

「そういう前向きな発想ができる子は好きだよ、俺は」

「むう……」

そう思って素直に賞賛したのだが、何が気に食わないのか、ファイオは微妙な表情を

作った。

え、何、そんな変な事を言った？

「俺はモンスターをセットして、ターンエンド」

黎：LP 3200

手札：1枚

フィールド

・邪精トークン（ATK：3200）、邪帝ガイウス（ATK：2400）、マッド・デーモン（ATK：1800）、セットモンスター1体

・伏せカード2枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）、早すぎた埋葬（装備魔法・『マッド・デーモン』に装備）

「普通、女子にサラッと好きとか言う？」

「他意は無さそうですが……」

「もしかしてジゴロの才能あるツスカ」

「翔、お前実はかなり冷静だな？」

さて、結局『テテユス』は倒せなかった。次のターンで相手の猛攻に耐えられるかど

うか。下手すると『オネスト』なんかをドローされて形勢逆転されちまう可能性もあるからな……。

「わたしのターン、ドロー！」

「……」

「……良し！」

勢いよく引いたカードをファイオはゆっくりと裏返すと、小さくガッツポーズを取る。

やはり引いたか、天使族を。

「『光神テテュス』のモンスター効果発動！ わたしがドローしたカードは、『アテナ』！」

「ー」

「続いてドロー！ 『神聖なる魂』ホーリーシャイン・ソウル！ ドロー、『コーリング・ノヴァ』！ ドロー、『智

天使ハーヴェスト』！ ドロー、『マシユマロン』！ ドロー、『宣告の狂信者』デクレアード・デイヴオーティ！

ドロー、『デュナミス・ヴァルキリア』！ ドロー、『スケル・エンジェル』！ ドロー、

『ハイロウ・ブースター』！ ドロー、……ここで終わり！」

おーおー、引いたなあ。聞き覚えの無いカードも含めて10枚か。随分とモンスターカードが固まっていたようで。

まあ特殊召喚を封じる『クリスティア』や、奇襲性の高い『トリアス・ヒエラルキア』がないだけマシか。

「ひいつ、一気に手札が12枚になったツス!?」

「おお、すつげえ!!」

「ふふふ、ねえキミ」

「黎だ。遊馬崎黎」

「ああ、そうだった。黎、このデュエル、楽しかったよ」

「そうかい? そいつぁ重畳」

「——でも、わたしの勝ちだ!」

仕掛けて来るか!

「まずは魔法カード『予約カウンター』を発動! 手札のカウンター罫を1枚捨てて、このターンの終わりにデッキからカウンター罫を2枚手札に加える! わたしは『魔宮の賄賂』を捨てる!」

予約カウンター(オリジナル)

【通常魔法】

(1): 自分の魔法・罫ゾーンに裏側表示でカードが存在しない場合、手札のカウンター罫を1枚捨てて発動できる。

このターンのエンドフェイズに、デッキからカウンター罫を2枚まで手札に加える



ンスターを揃えるとは、こっちの攻撃を2度も防いだ事を考慮しても中々やるな。

「この瞬間、『アテナ』の効果発動！ フィールドに天使族モンスターが召喚・特殊召喚・反転召喚された時、相手に600ポイントのダメージを与える！ 喰らえ、アサルトル・シャイン！！」

「ぐっ！」

黎：LP 3200↓2600

女神の槍が光を放ち、俺を真正面から力強く射貫く。

だがこれは序の口。下手をすると4000ライフをバーンで根こそぎ持つて行かれる事になる……！！

「続けて『宣告の狂信者』の効果発動！ 召喚に成功した時、手札から攻撃力より守備力が高い天使族を2枚まで捨てて、その枚数だけカウンター罫を墓地か除外ゾーンからセットできる！」

私は『ハーブの精』と『マシユマロン』を捨てて、効果発動！ 『魔宮の賄賂』と『攻撃の無力化』をセット！ そしてこれらのカードはセットしたターンでも発動できる！」

「ほう、お前も無駄が無いな。更に墓地から『轟龍』を蘇生させる算段か」  
「！」

「『アテナ』の効果、知らないとも思ったか？」

アテナ（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2600／DEF 800

（1）：iターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールドの表側表示の天使族モンスター1体を墓地へ送り、「アテナ」以外の自分の墓地の天使族モンスター1体を対象として発動できる。

その天使族モンスターを特殊召喚する。

（2）：このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、このカード以外の天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された場合に発動する。

相手に600ダメージを与える。

宣告の狂信者（効果モンスター）（オリジナル）



星2

光属性／天使族

ATK 300 / DEF 500

このカードは特殊召喚できず、このカード名の(1)の効果はデュエル中1度しか発動できない。

(1) : このカードの召喚に成功した時、手札から攻撃力より守備力が高い光属性・天使族モンスターを2枚まで捨てて発動できる。

自分の墓地に存在する、または除外されているカウンター罫を2枚まで、自分の魔法・罫ゾーンに伏せる。

このターン、自分は魔法・罫カードを伏せる事はできない。

(2) : 自分フィールドの裏側表示のカウンター罫が相手によって破壊された時に発動でき、

墓地からこのカードを除外し、破壊されたカードを自分フィールドにセットする。

(3) : このカードの(1)(2)の効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動でき、フィールドを離れた場合除外される。

「手の内はバレてるか、なら遠慮無く！ 『アテナ』は1ターンに1度、場と墓地の天使



DEF : 5000 ↓ ATK : 500

「行くよ！ わたしは『轟龍』で『邪精トークン』を攻撃！ 喰らえ、  
〃ジャイニング・キャノン〃！」

「トラップ、発動！ 『くず鉄のかかし』！ 相手モンスターの攻撃を無効にする！」

「カウンター罠、オープン！ 『魔宮の賄賂』！ 相手の魔法・罠の発動を無効にして破壊！ そして相手に1枚ドロウさせる！」

### 魔宮の賄賂

【カウンター罠】

(1) : 相手が魔法・罠カードを発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

相手はデッキから1枚ドロウする。

俺の手札が1枚増える代わりに、ジャンクで作った案山子が透けて消える。

攻撃は当然無効にできなくなり、光の砲弾は過たず炸裂した。

しかし。

『テテユス』の効果で1枚ドロー！ 引いたのは『クリスティア』！ ドロー……、天使族じゃない！ 攻撃続行！』

「こちらドロロー！ 俺はバトルステップに『ネクロ・ガードナー』を除外して効果発動、この攻撃を無効にする！』

『オオオオ……！』

続けて闇の鎧武者が立ちほだかり、別途攻撃を防御してくれた。

これで相手フィールドにトークンより攻撃力の高いモンスターはいない、俺の負ける確率はグッと低くなったと言える。

「さっきのモンスターか！ カウンター罠の後に発動できるなんて！』

「生憎だったな。攻撃宣言時の後に、実はワンステップ挟んでるって事を学ぶ良い機会だったろう？』

「むう、ならば『アテナ』で『ガイウス』を攻撃！ //アイギス・スピア！』

「こちらはこのバトルステップに、手札から『ジュラゲド』を特殊召喚！ その効果でライフを1000回復する！』

『オオオオオオオッ！』

ATK：1700

LP 2000↓3000

手札から増援に現れた、巨爪の怪物を前に、天使の攻撃が一時停止する。

敢えて攻撃表示で出したこのモンスターはダメージステップにリリースエスケープができるため、疑似的に攻撃を無効にできる美味しい効果があるのだ。

「こつちのモンスターが増えて、お前は攻撃対象を選び直せる。さあ、どうする。槍の切っ先を変えず貫く未来か、決意と共に穂先を変えるか!!」

「黎君、どうして攻撃表示で出すんすか!?!」

「神山さん、そんな雑魚モンスター蹴散らしてしまいなさい!」

「ふん、見え透いた罠だ! 『ガイウス』への攻撃続行!」

ほう、攻撃対象を変えないか。

だがそのルートもまた罠だ!

「俺はこのダメージステップに『ジュラゲド』の効果発動! 自身を贄とし、味方モンスターの攻撃力を1000アップさせる! そしてダメージステップに相手モンスターが消えても、攻撃対象を変える事はできない!」

『ゴオオオオ!』

ATK:2400↓3400

ジウラゲド(効果モンスター)

星4

闇属性/悪魔族

ATK 1700/DEF 1300

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1):自分・相手のバトルステップに発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、自分は1000LP回復する。

(2):このカードをリリースし、自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力を次のターンの終了時まで1000アップする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

鉤爪の悪魔が消え、漆黒の巨漢の全身に力が漲る。これで相手モンスターより攻撃力は上になった。

「振り返ちにしろ、『ガイウス』!」  
「ダーク・ネフェリアス・デストラクト!」

「させるか！ 手札から『ハイロウ・ブースター』の効果発動！ このモンスターと手札の天使族モンスターを捨てる事で、レベルの合計×100ポイント自分の天使族の攻撃力をアップさせる！ 私が捨てるのは『大天使クリスティア』、レベルの合計は12だ！」

「何だ?!？」

ハイロウ・ブースター（効果モンスター）（オリジナル）

星4

炎属性／天使族

ATK 0 / DEF 0

このカード名の（1）の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：自分モンスターが戦闘を行うダメージステップに、このカードと手札の天使族モンスターを捨てて発動できる。

捨てたモンスターのレベルの合計×100ポイント、ターン終了時まで自分フィールドの天使族モンスターの攻撃力をアップさせる。

（2）：フィールドのこのカードを除外して発動できる。

相手の墓地にあるカウンター罫を自分の場にセットする。

勝利の導き手フレイヤ ATK:500↓1700

豊穡のアルテミス ATK:2000↓3200

光神テテユス ATK:2800↓4000

アテナ ATK:3000↓4200

光神機—轟龍 ATK:3300↓4500

おいおいおいおい、マジかよ!? 打点の低さが課題になる天使族が、そんな簡単に全体1200強化とかされるのかよ!?

しかも4000オーバーが2体!? この時代のカードにしちゃあオーバーパワー過ぎないか!?

「さあこれで再び攻撃力はこつちが上だ! 行けえ!」

「ぐおおおつ!!」

黎:LP 3000↓2200

くっつそ、打点巻き返されてモンスター破壊された上に、折角回復したライフも持つて



かかれた！ やるなコイツ、油断した俺が悪かったか！

「更に『テテユス』で『邪精トークン』を攻撃！」

「っ、ううう！」

黎：LP 2200↓1400

続けて虹色に煌めく炎も消える。

ちよつとこれはマズい、冗談抜きにマズいぞ！

「そして『フレイヤ』で『マッド・デーモン』を攻撃！ さつきテキストを確認したよ、

そのモンスターは攻撃されると守備表示になるってね！」

「！」

マッド・デーモン ATK：1800↓DEF：0

青髪天使の飛び蹴りにより、骨の悪魔も掻き消える。

だがそれどころじゃない。彼女は今、何と言った……!?

マッド・デーモン（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1800 / DEF 0

（1）：このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

（2）：攻撃表示のこのカードが攻撃対象に選択された場合に発動する。

このカードを守備表示にする。

「更に『アルテミス』で裏守備モンスターにアタック！」

「このカードは『ライトロード・ハンター ライコウ』だ！ リバースした時、相手モンスターを破壊する！ 俺は『テテユス』を破壊！」

クソツ、聞き出したいがその前にデュエルを続けないと！

「その後デッキの上からカードを3枚、墓地に送る」

『アテナ』を破壊したい所だが、正体不明の手札1枚とカウンター罠がまだ相手に残っている以上、ドローブーストの方を優先的に潰しておきたい。

俺のライフは1400ポイント、まだ2回までならバーンを受けても負けないしね。

【墓地に送られたカード】

『異次元からの埋葬』

『聖なる魔術師』

『神の宣告』

うーん、デッキのご機嫌が斜め過ぎて草も生えない。

「これでお前の攻撃できるモンスターはいなくなつた。制約が課せられているから魔法・罫をセツトする事もできない。さあ、どうする？」

「どうするかつて？ こうするよ！ 速攻魔法『エンジェル・リンガーネーション』発動

！」

「！」

ここで速攻魔法だと!?

さつき『魔宮の賄賂』を発動した時に、『豊穣のアルテミス』の効果で引いたカードか!?

「自分の場か手札の天使族モンスターを任意の数だけ墓地に送り、そのレベル合計が同じ天使族モンスター1体を墓地から特殊召喚する！

わたしが墓地に送るのはレベル4の『智天使ハーヴェスト』『デュナミス・ヴァルキリア』！ よってレベル8の『大天使クリスティア』を墓地から呼び戻し、このカードを装備する！ カムバック、『クリスティア』！ そして攻撃力が400アップだ！」

「速攻魔法の装備カードだど!?!」

アニメにあつた『銀河再誕』<sup>リギャラクシー</sup>と同じ効果!?

カードの分類の区分は守れよ!?

エンジェル・リンガーネーション（オリジナル）

### 【速攻魔法】

(1)：自分の墓地の天使族モンスター1体を対象として発動できる。

自分の場か手札からレベルの合計がそのモンスターと同じになるように天使族モンスターを墓地に送りそのモンスターを特殊召喚し、このカードを装備カード扱いとして装備する。

この効果で特殊召喚されたモンスターが相手に与える戦闘ダメージは半分になる。

(2)：装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。

(3)：装備モンスターが破壊以外の方法でフィールドを離れた場合、自分は1000LP

回復する。

大天使クリスティア     ATK : 2800 ↓ 3200

「そして天使族を特殊召喚したから、600のダメージ！」  
「ぐっ！」

LP     1400 ↓ 800

「最初のターンから伏せているそのカード、今までずっと発動していなかったね！ つまりそれはブラフ！ このデュエルはわたしの勝ちだ！     “セイント・ジャツジメント

“！”

「……」

「今度こそトドメだ！」

「黎っ！」

「勝負ありね！」

「これで退学確定ですわ」

「びえーん、黎君負けないでー!？」

迫る大天使が光を放出して来る。少々離れたこの位置からでも熱気を感じるの、さながらあればビームの予兆といった所だろう。

ブラフ、ブラフね、成程そう考えるか。

「悪いが、俺はそんなに甘くないぞ！ お前が侮ったこのカード、今こそ発動する時！」  
「何?! まさか、今までずっと温存していたと言うの?!」

「そうだ！」

このカードは取って置きの一枚。

前世で俺のデッキを長年支えてくれた切り札にして、どんなモンスターも問答無用で排除するパワーカードだ！

「罨カード『次元幽閉』発動！ 相手モンスターの攻撃宣言をトリガーに、そのモンスターを消去する単体除去トラップだ！」

「無駄だ！ 『エンジェル・リンガーネーション』の効果で破壊は無効！」

「破壊じゃない、除外して貰う！」

空間が小石を投げられた湖面のように歪み、ビームをチャージしていた天使が掻き消える。たった数瞬の出来事だけで、追撃を狙った天使はこの世界から消滅した。

「は、破壊されないモンスターが消えたツス?!」

「破壊じゃなく、除外ですわよ。ゲームから取り除かれたのです」

「成程、あれなら破壊されない効果も無視できるわね。しかも再利用も難しい」

「うへえ、『死者蘇生』で呼び戻せないって事かよ」

「まさか、そんなカードをずっと伏せていたとはね……!」

「こいつは取って置きの一枚でね、お前に押し負けそうな時まで取っておいたんだよ。お陰で助かった」

「くつ、だがまだデュエルは終わっていない! 『エンジェル・リンガーネーション』の効果! 装備モンスターが破壊以外の方法で場を離れた時、ライフを1000回復する!」

ファイオ：LP 4000↓5000

「更にメインフェイズ2で、手札の『神聖なる魂』の効果! このモンスターは墓地の天使族を2体除外して特殊召喚できる! わたしは墓地の『ヘカテリス』と『ハープの精』を除外! 出でよ、『神聖なる魂』!」

「そしてまた『アテナ』の効果で600ダメージが発生するワケか! つぐう!」

神聖なる魂 ATK : 2000↓2400

黎：LP 800↓200

「クツソ、いい加減ウザいなこれ！」

「そしてエンドフェイズ、『予約カウンター』の効果により、デッキからカウンター罠を2枚手札に加える！ わたしがサーチするのは『神の宣告』と『魔宮の賄賂』！ これでターンエンド！ 天使達の攻撃力は元に戻る！」

光神機—轟龍 ATK：4400↓3200

勝利の導き手フレイヤ ATK：1700↓500

豊穡のアルテミス ATK：3200↓2000

アテナ ATK：4200↓3000

ファイオ：LP 5000

手札：4枚（『コーリング・ノヴァ』『スケル・エンジェル』『神の宣告』『魔宮の賄賂』）  
フィールド

：アテナ（ATK：3000）、光神機—轟龍（ATK：3200）、神聖なる魂（ATK：2400）、豊穡のアルテミス（ATK：2000）、勝利の導き手フレイヤ（A



TK : 500)

：神の居城―ヴァルハラ（永続魔法）、コート・オブ・ジャスティス（永続魔法）、伏せカード1枚（攻撃の無力化）

「どうだい、これで君のライフは風前の灯火！ 場のカードはゼロ！ しかも次のターン、わたしは新たに2枚の強力なカウンター罠をセットできる！ 逆転できるモンならやってみろ！」

「良いだろう」

堂々と啖呵を切るフィオ。

成程、中々に壮観な光景だ。デュエルを締め括るには相応しい。

だが……。

「神山」

「フィオで良い。苗字だと堅苦しいでしょ」

「ならばフィオ。……今のターンで仕留め損ねたのは、失敗だったな！」

お前に次のターンは無い！

「俺のターン、ドロー!!」

「馬鹿な、手札2枚で何ができるのさ！」

「2枚？ 違うな、5枚だ」

「え？」

「さて問題。」

このデュエルで俺が最初に発動したカードは、何でしょう？」

水面に波紋が広がり、墓地から発動が遅れたカードが姿を現す。

これこそ俺が1番目に使った、3枚のカードを未来に飛ばす魔法カード。

「し、しまった『予見通帳』!？」

「そうだ、今この瞬間、約束された3ターン目が巡って来たのさ！」

除外されていたカード3枚が手札に加わり、俺の手札はこれで5枚。

さて、それではファイナーレといきますか！

「除外されていたカード1枚目！ 魔法カード『死者転生』発動！ 手札1枚を、墓地のモンスター1体と交換する！ 俺は『魔宮の賄賂』でドロウした『終末の騎士』をコストに、『ダーク・クリエーター』をサルベージ！」

死者転生

【通常魔法】

(1) : 手札を1枚捨て、自分の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

「そして『ダーク・クリエイター』は通常召喚できないが、自分フィールドにモンスターがおらず、墓地に闇属性モンスターが5体以上いる時に特殊召喚できる！ 来い！」

『オオオオオオオオオオオッ！』

ATK : 2300

『『ダーク・クリエイター』の効果発動！ 1ターンに1度、自分の墓地から闇属性モンスターを1体除外し、別の闇属性モンスターを蘇生できる！ 俺は『終末の騎士』を除外し、『邪帝ガイウス』を特殊召喚！』

『ボルウアアアアアアッ！』

ATK：2400

手早く場に現れる、闇の創世神とヤギ角の悪魔。

どちらも黒ベースのボディである事からか、夜の湖の上では怪しい存在感を醸し出している。

ダーク・クリエイター（効果モンスター）

星8

闇属性／雷族

ATK 2300 / DEF 3000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に闇属性モンスターが5体以上存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合に特殊召喚できる。

1ターンに1度、自分の墓地の闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、自分の墓地の闇属性モンスター1体を選択して特殊召喚する。

「一気に上級モンスターが2体！でも残念、『神聖なる魂』は相手ターンのみ、相手モ



ATK：2800

間欠泉のように噴出する黒い霧。それらは無秩序に広がったかと思うとドラゴンの形へと姿を一瞬で変える。全身真っ黒なカラーリング、ドリルやブレードの生えた機械仕掛けの装甲、万物を破壊せしめんとする禍々しい邪気。

まさにダークモンスターのリールサルウエポンに相応しい、暗黒世界の覇者としての佇まいである。

「な、何が出るかと思えば、攻撃力はたった2800じゃないか！ それじゃあ『アテナ』は倒せないし、何よりわたしの場には『攻撃の無力化』がセットしてある！ その程度のモンスターじゃわたしは倒せないよ！」

「無駄な強がりはやせ。デュエリストの勘は、もう分かってるんだろう？ 負けた、つてな！」

「っ！」

『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果発動！ 自分の墓地から闇属性モンスターを1体除外し、フィールドのカードを1枚破壊する！」

ダーク・アームド・ドラゴン（特殊召喚・効果モンスター）  
星7

闇属性／ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 1000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の闇属性モンスターが3体の場合のみ特殊召喚できる。

（1）：自分の墓地から闇属性モンスター1体を除外し、フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

「俺はこの効果により、『ジュラゲド』を除外し『アテナ』を破壊する！ さつきからいい加減チクチクと鬱陶しいんだよ、失せろ！」

墓地ポケットからカードが1枚排出され、闇の破壊龍の手に邪悪なエナジーが集まる。回転をかけられたそれはやがて鋭い刃に変じ、丸鋸のような形で投擲された。

「ダーク・ジェノサイド・カッター！」

「あ、『アテナ』!？」

投擲された黒刃はそのまま戦女神を切り裂く。盾と槍で防ごうとした女神だったが、火花を散らす事すらできず即座に両断されてしまった。

「これで次のターン、アサルト・シャインで俺を倒す事はできない。まあ、次のターンなんて無いがな」

「くっ！」

「次弾装填、『マッド・デーモン』を除外！」

「え!？」

「生憎、ダーク・ジェノサイド・カッターに1ターン内の制限回数は無い! 『轟龍』を破壊する!」

続けて再度黒刃を射出。これで、彼女の戦術の基盤はおおよそ崩れたと言って良い。

「そして3枚目! 『クリッター』を除外し、お前がさつき伏せた『攻撃の無力化』を破壊する!」

そして伏せカードも切り刻む。カウンター罠は初動が遅く、自分で自分を守れないのも欠点の1つだ。

「やった、これでもう攻撃は止められないっす!」

「ぐう! だがこの瞬間、墓地の『宣告の狂信者』のモンスター効果発動! このカードを墓地から除外し、たった今破壊された『攻撃の無力化』を再セットする! このカー



ドはセツトしたターンに発動できる！」

「えー!? そんなのインチキツスよー!!」

「うるっせえぞ、翔。ギヤラリーが逐一口を挟むな」

それとインチキは無いだろう、ちゃんとカード効果として発動しているんだからな。

その辺、お前さんの今後の課題だ！

「これで君の墓地の闇属性モンスターは全部消えた、もう『ダーク・アームド』の効果は使えない！ 次のターンでわたしの勝ち揺るがない！」

「甘いぞ、足りないのなら増やせば良い！」

それじゃあ『予見通帳』で除外したカードの3枚目、ご覧に入れようじゃないか！

「俺は『ヴェルズ・オランタ』を召喚！」

『ガアアッ!』

ATK : 1650

「このカードは、自分を贄として相手モンスター1体を破壊する事ができる！ そして

こいつは闇属性だ！」

「な、それって!?!」

「そうとも！ モンスター効果発動！ 『神聖なる魂』を破壊する！」

ヴェルズ・オランタ（効果モンスター）

星4

闇属性／炎族

ATK 1650／DEF 1250

このカードをリリースして発動できる。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

光に包まれるこちらのモンスターとあちらのモンスター。

これで邪魔なモンスターは減り、墓地に闇属性モンスターが1体増えた。つまり。

「もう1度『ダーク・アームド』の効果発動！ 最後の弾丸だ、『攻撃の無力化』を破壊する！」

闇の丸鋸が再び伏せカードを切り刻む。これであのカードは除外され再利用できない。そして伏せカードもこれで完全に無くなった。

「これでお前を守るカードは無くなった」

「くっ！」

「お前の場のモンスターの攻撃力の合計は2500」

勝利の導き手フレイヤ ATK : 500

豊穣のアルテミス ATK : 2000

「対する俺のモンスターの攻撃力の合計は7500」

ダーク・アームド・ドラゴン ATK : 2800

ダーク・クリエイター ATK : 2300

邪帝ガイウス ATK : 2400

「そしてお前のライフは残り5000、この意味は分かるな？」  
「っ!？」

黎 : LP 200

ファイオ : LP 5000

「さっきの十代のデュエルと同じだな、残りライフ2000からの逆転ジャストキル」  
 「わたしが、まさか……!」

「これで終わりだ! バトル! 『ガイウス』で『アルテミス』を攻撃! ダーク・ネ

フェリアス・デストラクト!」

「ぐ、ううう!」

ファイオ：LP 5000↓4600

「これで『フレイヤ』を守るモンスターはいなくなった! 続けて『ダーク・クリエ

ター』で攻撃! ダークライトニング!」

「がはあっ!」

『あばばばばばばば!』

ファイオ：LP 4600↓2800

暗黒の波動と闇の雷が、2体の天使を打ち破る。

電撃が湖を通電してクロノス教諭の悲鳴が聞こえた気がするが無視。どうせ『サン

ダー・ジャイアント』の時も受けたし、1回も2回も変わらないでしょ。

「覚悟は良いか? 『ダーク・アームド・ドラゴン』でダイレクトアタック!!」

「こんな、こんな事が……!」

「ダーク・アームド・バニツシャー!!」

そしてトドメの一撃。

暗黒龍の手に溜まった破壊のエネルギーが砲弾状に固められ、ハンドボールのようにファイオに投げられる。小舟の上でそれから逃れられる術があるワケも無く、ライフポイントと同じ数値の威力はそのまま直撃し――

「ぎゃああああああああ!!?!」

ファイオ：LP 2800↓0

過たず、彼女のディスクから敗北を知らせるブザーを鳴らせたのであった。

黎：WIN

ファイオ：LOSE

「——約束通り、翔くんは返すよ」

「むくれんな。可愛い顔が歪むぜ？」

「う、うっさい！」

「こいつ面白いなあ。Sじゃないのにイジめたくなってくる。危ないなあ。」

「じゃ、お気をつけて。油断したトコをこのバカみたいなのが狙ってるかもしれない

ぜ?。」

「黎くんヒドイツス!」

「そうね、気をつけるわ」

今、俺達はボートを漕いでそれぞれの寮に帰ろうとしている。

どうでも良いけど湖の上でボートに立ちながらデュエルする意味ってあったのかな?  
?

「ああ、そうだ。そのレディ4人?」

「はは、変な呼び方するね。わたし達の事?」

「ん。『ミヤコ』って女の子、知らないか? 多分ブラウンの長髪なんだが」

思案顔の4人。だが、芳しい答えは返ってこなかった。

「残念ながら」

「知りませんわ」

「ゴメン、あたしも」

「ごめんなさいね」

「……そっか。いや、気にしないでくれ」

収穫無し、か。今まで色んな人達に聞いて来たけど、何一つ有力な情報は得られてない。流石にちよつと意気消沈だ。

「キミの恋人？」

「ん？ いや違う」

いきなり踏み込んで来たねフィオ。

……何で微妙そうな顔してんだいジユンコとももえ。明日香もかい。

「ならどうして探してるんだい？」

「……、たった一人の、家族だから。それじゃ答えにならないか？」

「ゴメン。踏み込んだじゃったね」

「いや、そんな深刻な家庭状況じゃ無いさ。俺とあいつが、ただ単に親を親と認めてないだけだ」

もつと微妙な顔すんなオメエら。

あ、おい十代と翔！ お前からまでなんだその我が伕つ子を見るような目は！

ええい、さつさと帰るぞ！

「ほら撤収だ！ 早くしないと、いくら大徳寺先生でも看過してくれないぞ」

「おう」「了解ッス」

「オメエら漕がせるぞ！」

なんてやりとりをしながら、もちろん手を振る事も忘れずに俺達は湖を後にした。

これにて、偽ラブレター事件は閉幕！



S I D E : フイオ

なんなんだよ、アイツ。わたしの事を可愛いとか。

冗談じゃないよ。わたしのどこが可愛いのか。こんな蓮っ葉で男勝りなヤツなんて。

「フイオ、どうしたの？」

「え、いや何でも無いよ！」

そう、何でも無い。何でも無い筈なのに、どうしてこんなに顔が熱いのさ！

誰か教えてよ！





t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

# STORY 6 : 月一試験一序・雷VS炎

SIDE : 無し

今、オシリスレッドの一室で試験勉強が行われている。メンバーは4人。部屋の持ち主でGX主人公の十代、一番の成長株の翔、コアラみたいな感じの隼人、そして隣室の黎だ。

といっても、まともに勉強しているのは隼人と黎だけだ。

なんでも隼人は、流石にテストの最低ラインはクリアしないと、留年している身だからいつ退学になるのか分からないという。

「ま、理由は何でもいいさ。テストは勉強する理由まで問わないからな」

「教えてくれてありがとうなんだな。オレ、頭あんまし良くないから、大助かりなんだな」

「お安い御用だ」

黎は転生前の高校では学年次席の頭脳の持ち主で、更に大学も国立にストレートで合

格した大学3年生。高校1年生の勉強はもう復習程度でしかない。

で、十代と翔が何をしているのかと言えば……。

「ぐがぐ、すこく。ぐがぐ、すこく」

「神様……。どうか、どうか僕に奇跡を！」

「……………、お前から真面目にやる気無えだろー！」

十代はベッドで爆睡。翔はひたすら魔法カード『死者蘇生』に向けて祈りを捧げていた。

十代は実技で少なくとも留年・退学は無いとして、翔は1分でも多く勉強をした方が良いのではないかと黎は思う。

ピン！ と黎は1つ面白い事を閃いた。

「翔、翔？」

「何スか、僕は今忙しいんス！」

「(祈りに時間を割くなよ……) この10枚のカードの内からどれか1枚引いてみな。運勢を占ってやる」

「やるー！」

神頼みなのだから占いにも頼りたいのだろう。思いっきり喰い付いて来た。

バツ、とデュエルモンスターズの10枚のカードを手札に持つ形で広げる。

「んんんんんんんん………、コレ！」  
少々悩み、そして手にしたカードは……。





『降格処分』

「ぎゃあっ！」

翔は泡を吹いてぶっ倒れた。

「そんなシヨックか……」

「翔、大丈夫かあ？」

因みに残ったカードは……

『天使の施し』

『奇跡の降臨』

『奈落の落とし穴』

『強烈な落とし穴』

『終焉の王デミス』

『あまのじゃくの呪い』

『ヘイト・バスター』

『門前払い』

『墓場からの呼び声』

5分の4の確率で酷い結果だったのは秘密である。

SIDE：黎

「はい、そこまでなのニヤー」

月一試験は大きく分けて筆記と実技がある。筆記は主要五教科。つまり国・数・英・社・理だ。

俺と十代は遅れて来た。勿論、トメを手伝ったからだ。因みに俺と十代は隣同士（翔は俺の反対側）なので、せめて名前と1問目くらいは記しておくように忠告しておいた。

『レアカードオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』↑翔の他、多数の生徒達

「張り切ってるなあ、翔のヤツ」

「すか〜」↑十代

「また寝てるし……」

そう、今日はレアカードが入荷される日。多くの生徒が入荷されるレアカードを求め

て購買部へ殺到する。

行かないのは無駄である事を知っている俺、そもそも興味の無いファイオ、デツキの事を信頼している十代と明日香、デツキのバランスが崩れるのを恐れた大地エアーマンぐらいだ。

……………? 大地の所に何か変なテロップが流れたような?

ま、いつか。気のせいっしょ!

「十代、起きろ。購買にお昼買いに行くんだろ?」

「ん? う、ああ。そだっけ」

半分寝てんな、コイツ。

トポトポと帰って来た翔を引き連れて購買へ行くと、トメさんが俺達用にパックを残しておいてくれた。ラッキー!

中身は……、む。ポピュラーだが良いカードだ!

大抵のデツキには合うし、投入しても問題無い。さっそくデツキに差すか!

## ——試験会場

実技試験。十代は万丈目とのデュエルに『E・HERO フェザーマン』で止めを刺して見事に勝利した。

いいなあ、『進化する翼』。コストはデカイが強いからなー。

で、俺が呼ばれて会場に下りて来ました。すでに着いていた筋肉質な相手の服は青色でした。

「で、十代と同じ理由だとは思いますが一応聞いときます。何故レッドの俺が、ブルーの生徒と戦わなくちゃいけないんですか？」

「もちろん、実力が同じ生徒オが、オシリレッドにいないからなのーネ。だから、オベリスクブルーの生徒オとデュエルするのーネ」

「……、分かりました」

ま、どうせレッドの中でも実力のある奴を叩こうとかいう魂胆なだろうけど。

誇張とか、そういうものでも何でもなく俺は強い。というか、この学園の生徒達ってポーカーフェイス下手過ぎ。畏張ってるのバレバレだし、ブラフだってモロ分かり。正直、ヘタなイエローやブルーに余裕で勝てるくらいだ。

「遅えぞ、後輩でドロップアウトの分際で。オレ様はここで5分近く待ったぞ」

悪かったな。俺が呼ばれたのは1分前なんだよ。文句なら呼び出した人あたりに

言ってくれ。

「ところで、ドロップアウト。おめえ珍しいカード持ってたってな」

「ん、まあ」

「寄越せ。今すぐのだ」

……、コイツ頭大丈夫か？

「んだとゴラア！」

「あ、声に出ってたか。まあ、こんな筋肉ゴリラもどきに謝る言葉なんて持ち合わせて無いがな」

いやはや、すみませんねえ。いきなり寄越せだなんて言われて驚いちやいました。

「……多分、思ってる事と喋ってる事が逆になってるのーネ」

「あれ？」

ま、いつか。こんな頭悪そうなヤツに差し出すカードなんざねえし。

「こんの、クソがああああああああああああああああああああああつ！」

「おーおー、怒るとよりゴリラっばい」

「コロスツ！」

殴りかかって来たが、ヒョイと避けて逆方向に流す。

「やーい筋肉ダルマー。殴る事しか脳にねえのかー」



「アンティールルだ。オレ様が勝ったらそのデッキ丸ごと寄越しやがれ」

「……アンティは校則違反でしょうが」

「知るか。だったら譲れ」

コイツの頭が本気で心配になってきた。奪うのはダメだからといって勝ったら譲る形で相手に差し出せというのか。そんなのカツアゲと同じだろうが。チクられたら終わりだぜ？

クロノス教諭を見るとそつぽを向かれた。黙認するつもりらしい。

大徳寺先生、鮎川先生、鮫島校長と、エリート意識無く生徒に接する教師は結構いるんだぞ？ 実技の最高責任者がそれで良いのか。

……ん、待てよ。良いチャンスだ。

「いいでしょう。ならばそっちも何か賭けてもらいましょう」

「意味の無え仮定だな。オレ様が負けるとでも思ってるのか、テメエ」

「賭けるモノ決めないなら俺もデッキを賭ける訳にはいかない。」

お互いが賭けるモン決めて初めて賭けは成立するもんだ。そんな事も分からないのなら、アンタはエリートの本質がまるで無いというこったな」

「チッ！ なら俺はこれをくれてやる！」

そういうと、男が出したのは『隠された魔導書』や『龍炎剣の使い手』といったこち

らでは中々手に入らないカード達だった。

隠された魔導書

【罠カード】

自分のターンでのみ発動可能。自分の墓地の魔法カード2枚を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

龍炎剣の使い手（効果モンスター）

星4

炎属性／戦士族

ATK 1800 / DEF 1200

自分フィールド上に「龍炎剣の使い手」以外のモンスターが召喚された時、そのモンスターレベルを1つ上げ、このカードの攻撃力をエンドフェイズ時まで300ポイントアップする事ができる。

つーか、少なくとも『龍炎剣の使い手』は未来のカードなのでは？ レベルがどうこう書いてあるし。



「いいでしょう。それで手を打ちましょう」

「へっ、後悔すんなよ?」

『デュエル!』

黎 : LP 4000

ゴリラブルー : LP 4000

「先攻はくれてやる。精々足掻いて見せる、ドロップアウト!」

「アンタこそ、ピエロにならないようにな! ドロー!」

さて、当たり前だが相手はどんなデッキか分からない。先攻は意外と不利なパターンでもある。

ならここは安全に防衛策を張るべし。

『F・S 鬼火のウィisp』を準備表示で召喚! リバースカードを1枚伏せて、ターン終了!」

F・S 鬼火のウィisp : DEF 700

黎：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：F・S 鬼火のウイisp（DEF 700）

：伏せカード1枚

「オレ様のターン、ドロロー！」

今回のデッキはこれまで避けていたが、ここで再び精霊のカードを投入する事にした。

いくら謎の激痛が走るとはいえ、いつまでも無視はできない。慣れておかないとね。

さてどう来る？

「はっ、防固めるだけだあな、随分と臆病者だぜ！ オレは『コストダウン』を発動！手札の『雷電娘々』を墓地に送って、手札の『充電池メン』をレベル3にし、召喚！」

充電池メン：☆5↓3 / ATK 1800

！ 電池デツキか！

コストダウン

【通常魔法】

手札を1枚捨てる。

自分の手札にある全てのモンスターカードのレベルを、発動ターンのエンドフェイズまで2つ下げる。

充電池メン（効果モンスター）

星5

光属性 / 雷族

ATK 1800 / DEF 1200

このカードの召喚に成功した時、自分の手札またはデツキから「充電池メン」以外の「電池メン」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

このカードの攻撃力・守備力は、自分フィールド上に表側表示で存在する雷族モンス

ターの数×300ポイントアップする。

「こいつのモンスター効果を発動！ デッキから『電池メン—単三型』を特殊召喚！  
『はっ！』」

電池メン—単三型：ATK 0

っ！ 『電池』シリーズのスーパータッカー！ こいつを呼んだって事は……！

「次は『地獄の暴走召喚』か？」

「おうよ！ 『地獄の暴走召喚』発動！ 俺は『電池メン—単三型』を2体追加！」

「俺のモンスターはデッキに1体しかない。特殊召喚はできない」

「そうか、残念だったなあ！」

電池メン—単三型：ATK 0

電池メン—単三型：ATK 0

「1ターンでここまで並べるとはね。しかも『単三型』は自身の効果でパワーアップす

る」

「その通り。『単三型』はオレ様のフィールド上の同じ表示形式の『単三型』の数だけその表示形式の数字が1000上がる。

つまりオレ様の場の『単三型』はこうなる！」

電池メン―単三型：ATK 0↓3000

電池メン―単三型：ATK 0↓3000

電池メン―単三型：ATK 0↓3000

電池メン―単三型（効果モンスター）

星3

光属性／雷族

ATK 0／DEF 0

自分フィールド上の「電池メン―単三型」が全て攻撃表示だった場合、「電池メン―単三型」1体につきこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

自分フィールド上の「電池メン―単三型」が全て守備表示だった場合、「電池メン―単三型」1体につきこのカードの守備力は1000ポイントアップする。

## 地獄の暴走召喚

### 【速攻魔法】

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

電池メン―単三型の体が赤く光り、巨大化する。『5D $\boxtimes$ S』の『占い魔女』でもこんな感じだったなあ（カーリーさんがアルカディア・ムーヴメントに潜入した時のヤツ）。「そして『充電池メン』はオレ様の場の雷族モンスター×300ポイント攻撃力と守備力がアップする！」

充電池メン：ATK 1800↓3000 / DEF 1200↓2400

「さあーキル達成だ！ 死ぬ、  
“テトラ・プラズマ・キャノン”!!」

4体の電池型モンスターが頭上に電気の塊を作成。それを1つに纏めると、巨大なビームにして射出した。

「生憎、デュエルはパワーだけじゃ勝てない。リバーズカードオープン！」

発動するのは、さっきのパックに入っていたあのカード。さあ、思いやりの力を見るがいい！

「『聖なるバリアー——ミラーフォース——』!!」

「なんだと!？」

雷の如きビームは半透明のシールドにぶち当たると、4つに分かれ、それぞれの電池型モンスターに跳ね返った。

1：4交換、3枚のアドバンテージになったから、これは十二分に良い結果を残してくれたな。

「はい全滅。せっかく苦労したのに残念でした」

「まだだあ! 『闇からの奇襲』を発動! このターン墓地に送られたモンスターを復活させてもう1度バトルフェイズを行う!」

げ、未OCGカード!?

闇からの奇襲（未OCGカード）

【魔法カード】

発動ターンに破壊されたモンスターをフィールドに特殊召喚し、プレイヤーはエンドフェイズにもう一度バトルフェイズを行う。

電池メン—単三型：ATK 0↓3000

電池メン—単三型：ATK 0↓3000

電池メン—単三型：ATK 0↓3000

充電電池メン：ATK 1800↓3000

ウワーオ。なんてこったー！

なんてな！俺に主人公補正かかっているの知らねえだろ（誰も知れない）！

「『充電電池メン』で攻撃！『バッテリー・キャノン』！！」

「『F・S 鬼火のウィスプ』は攻撃力1900以上のモンスターとのバトルでは破壊されず、ダメージも発生しない！」



F・S 鬼火のウイスプ（効果モンスター）（オリジナル）

星2

炎属性／戦士族

ATK 800 / DEF 700

このカードは攻撃力1900以上のモンスターとのバトルでは破壊されず、いかなるダメージも発生しない。

守備表示のこのカードがバトルを行った時、このカードを攻撃表示に変える事で、相手フィールド上のモンスターの表示形式を2体まで変更できる。

「更にモンスター効果発動！ 『ウイスプ』を攻撃表示にし、相手モンスターの表示形式を2体まで変更できる！ 俺は『電池メンー単三型』1体と『充電池メン』の表示形式を逆にする！ 『リバース・ブルーフレア』!!」

ウイスプが手から飛ばした青白い炎は、2体の電池を包み込み、熱さにやられたのか、『電池メン単三型』は守備表示に変わった。

「表示形式が変更された事で、『単三型』の能力値が変化する」

電池メンー単三型：ATK 3000 ↓ 0

電池メンー単三型：ATK 3000 ↓ 0

電池メン—単三型：ATK 3000↓DEF 0

充電池メン：DEF 2400

『ウイスプ』は攻撃力1900以上のモンスターとのバトルでは破壊されないし、ダメージも発生しない。残ったモンスターでは何もできないが、どうする？」

「……、ターンエンドだ！」

ゴリラブルー：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：電池メン—単三型（ATK 0・ATK 0・DEF 0）、充電池メン（DEF 2400）

：伏せカード無し

「俺のターン、ドロ—！ 俺は『F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃表示で召喚！」

新しいF・Sをフィールドに呼び出す。ゴツい歯車を肩と足に装着したパワードスーツのような男で、全体的に赤いカラーリングをしているアメコミヒーローのような出で立ちだ。

見てるだけで幼い頃に誰もが見たスーパー戦隊やライダーを思い出すだろう。

「バトル！ 『ヴォルカニック・ギア・ガイ』で守備表示の、『ウィスプ』で攻撃表示の『単三型』を攻撃！ 喰らえ、青色の炎弾」、スピン・ファイア・キック！！」

身を伏せていた電池型モンスターは青い炎と火炎の蹴りで焼かれ、吹き飛んだ。毎度のことながら、なんか熱いのは気のせいだろうか。

「『電池メン—単三型』撃破！ 更に『ヴォルカニック・ギア・ガイ』のモンスター効果発動！ 相手の守備表示モンスターを破壊した時、貫通ダメージを与える！」

「なんだとお!? あつ、づあああああつ！」

ゴリラブルー：LP 4000↓3200↓1300

「1枚カードを伏せて、ターンエンド」

電池メン—単三型：DEF 0↓1000

充電池メン：ATK 1800↓2400

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：F・S 鬼火のウイスプ（ATK 800）、F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ

（ATK 1900）

：伏せカード2枚

「く、このお。ドロップアウトの分際で……！ ドロー！ 『強欲な壺』を発動し2枚ドロー！」

さて、『単三型』を2体破壊したのは失敗だったかな？ 残ったモンスターで反撃され

たら2体ともやられちゃうなあ。

まあ、『充電池メン』狙っても『ヴォルカニック・ギア・ガイ』は破壊されたし、あん

まし変わらないかな？

実際相手は戦局が思い通りに進まなくて歯噛みしている。

「カードを1枚セットする。オラお返しだ！ 喰らえ、2体のモンスターの攻撃！」

ダブル・エレクトリック・ショック！！

「伏せカードの警戒ぐらいしろつての！ 『ブルー・オン・ブルー』を発動！ お前の2体のモンスターはお互いを攻撃しあう！」

「なあにいつ!？」

あ、なんか聞いた事あるリアクション。お餅が突きたくなってきたなあ。 // 男は黙って！ // てヤツ。

「当然ダメージ計算は適用する。攻撃力の差の1100ポイントのダメージだ」

「ぎゃあつ!？」

ブルー・オン・ブルー（未OCGカード）

【通常罫】

相手フィールド上にモンスターが2体以上存在する場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上の攻撃モンスター以外の表側攻撃表示モンスター1体を選択する。

選択したモンスターと攻撃モンスターを戦闘を行いダメージ計算を行う。

ズドドオオオン！

はい、自爆。またガラ空きだね。

ダメージ計算もついているからタチ悪いんだよ、これ。

ゴリラブルー：LP 1300↓200

「ぐっ、魔法カード『ご隠居の猛毒薬』を2枚発動！俺のライフを合計2400ポイント回復してターンエンドだ！」

ご隠居の猛毒薬

【速攻魔法】

以下の効果から1つを選択して発動する。

●自分は1200ライフポイント回復する。

●相手ライフに800ポイントダメージを与える。

ゴリラブルー：LP 200↓2600

ゴリラブルー：LP 2600

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

「というかコイツ何なのさ？ 先日の万丈目の取り巻きの奴の方がまだ強かったんだけど？ クロノス先生が刺客として送って来たワケだから、少しは腕が立つと思ったんだけど……。とんだ期待ハズレだな。」

「ドロー。魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを2枚ドロー」  
へえ、こいつが来たか。

「おっと、伏せカードの『スケープ・ゴート』を発動！ 羊トークンを4体特殊召喚！」  
『メエー』

あ、ちよつと可愛い。

関係ないけど、スケープとエスケープって語源同じかな？

つーかそれ以前に少なくともダメージステップ時に発動するべきでは無いだろうか？ そうすれば少しは戦況がまともになりそうなんだが。

(これでこのターンは大丈夫だろう。貫通ダメージを受けても)

「貫通ダメージを受けてもライフが残る、か？ 甘いな」

「なにい!？」

「『F・S マグマドラゴン』を召喚!」

F・S マグマドラゴン：ATK 1800

モンスターの数に悩んだ時はコイツです。援軍を呼ぶのに最適!

「モンスター効果で、デッキから『F・S フレア・チアガール』を特殊召喚!」

『ふあい、おー!』

F・S フレア・チアガール：ATK 300

出現するのはボンボンを持ったフレアスカートを履いたチアリーダー風の女の子。



多分“炎”のフレアと、スカート下の“ヒダ”を表すフレアが掛かっているんだろう。

『おおーっ』

おいこら、喰い付くな男子。女子に白い目で見られてっぞ？

まあ可愛いとは思うけどサ。

ちなみにこの子の能力は『勝利の導き手フレイヤ』とおおよそ同じ。

「『フレア・チアガール』のモンスター効果を発動！俺のフィールド上の『F・S』と名のつくモンスターは攻撃力と守備力が500ポイントアップする！」

「は、はあああああああああ!?!」

『フレフレツみんな、頑張れ頑張れみんな、オー！』

多分あのゴリラブルーを始め、殆どの人には見えてないとは思いますが、『フレア・チアガール』は今、手持ちのボンボンを使って皆の応援をしている。リズム良く踊り、こっちまで力が湧いてきそうだ（スカートの下にはちゃんとスパッツを履いています。そういう意味では無いですよ?）。

F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK 1900↓2400

F・S 鬼火のウィスパ：ATK 800↓1300

F・S マグマドラゴン：ATK 1800↓2300

F・S フレア・チアガール：ATK 300↓800

「俺は魔法カード『融合』を発動！ 手札の『F・S バーナーズ・キャノン』と場の『F・

S ヴォルカニック・ギア・ガイ』を融合！

融合召喚！ 燃え上がれ、『F・S ブレイジング・ナイト』!!」

『てえい、やあつ!』

入試試験以来の再来、銀色の鎧を身に纏った騎士が降臨。炎を具象化した模様が雄々しさを連想させる。

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900

「バトル！ モンスター全員で羊トークンに総攻撃！

『青色の炎弾』!!

『ボルカニック・ブレス』!!

『チアリング・スパークキング』!!

『空破炎撃斬』!!」

俺の掛け声の共に青い火の玉、灼熱の息吹、火花の弾丸、業火の剣が次々と羊に決まる。ゴウゴウと火の手が上がり、羊は一匹残らず消し炭になった。

貫通ダメージで勝つても良かったんだが、こういう奴はいつペン痛い目を見て貰わないとね！

「そしてリバーズカード、オープン！ 速攻魔法『融合解除』!! 『F・S ブレイジン  
グ・ナイト』の融合を解除し、現れる『F・S バーナーズ・キャノン』、『F・S ヴォ  
ルカニック・ギア・ガイ』!!」

『はあっ!』

『てやあっ!』

F・S バーナーズ・キャノン：ATK 1500

F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK 1900

「さて問題。俺の場には攻撃力1500と1900のモンスター。アンタはこの攻撃を受けると、ライフはどうなる?」

「ぜ、ゼロ……」

「<sup>せいかい</sup>玉手。『バーナーズ・バズーカ』! 『スピン・ファイア・キック』!」

まず、『バーナーズ・キャノン』の肩のバズーカ砲から白い炎が噴き出た。羊トークンを焼いたら骨も残らなさそうだ。

「どっ、あっちゃああああああああああっ！」

ゴリラブルー：LP 2600↓1100

そして再び灼熱の回転キックが決まり、ブルーを蹴り飛ばす。かと思いきや、炸裂した瞬間爆発した。

毎度毎度、逐一爆発するねえ、アクション薄そうなモンスターがやられる時とか、すごい威力の技が炸裂した時とか。

「ぎゃああああああああっ！」

ゴリラブルー：LP 1400↓0

黎：WIN

ゴリラブルー：LOSE

はい、俺の勝ち。明日までに何で負けたか考えて来てね。  
ま、考えて答え出してもまた俺とデュエルするかは分からないけど。

——デュエル終了後

「すっげえな、黎！ ブルーにノーダメージで勝ったぞー！」

リングを降りると、十代が駆け寄って来た。

「はは、マグレだよ。十代だって。残りライフ10000の万丈目を、丁度攻撃力10000で削りきるとか、あのピンチを魔法カード1枚で覆すとか、凄過ぎだろう」

「ははは、2人ともバケモノツス……」

ちなみに十代の隣で空笑いしている翔はギリ勝ちだったらしい。テストも途中で寝ちやたし、ま、今回は昇級は諦めな。

「うむ、また1つ『F・S』への見聞が広まったよ」

「お疲れ様、二人とも。ブルーに勝つなんて凄いわね」

「これなら二人のイエローへの昇級は間違いないんだな」  
「ふふ、キミの強さには惚れそうだよ」

少し遅れて大地と明日香、隼人にフィオもやって来た。そんな凄いかな？ ノーダメに拘らなければ、伏せカードを警戒しないアイツなんて、結構容易く倒せるぞ？

「ま、カードはもらったし？ 得るモンは大きかったよ」

そう。この時はそう思っていた。月一試験が終わって、帰って、明日からまた学園生活の再開。  
リストア

それで終わりだと思っていた。

その予想は、この後180度どころか、540度引つ繰り返される事となった。

ブウンという音と共に、巨大なモニターに鮫島校長が映った。

『皆さん、お疲れ様でした』

昇級のお話かな？ 十代は多分断るだろうし、俺もそのつもりだけど。

『さて、カードを最後まで信じ続けて見事勝利した遊城 十代くん、そして鮮やかなタクティスで上級生のブルーをノーダメージで倒した遊馬崎 黎くん。君達のライイエローへの昇格を認めたいと思います』

『おめでとう』

『おめでとう！』







突如、会場の方で悲鳴と爆発が起きた。

「な、何だ一体!」

すぐに俺は視覚を鋭くし、爆発箇所をチェックした。

幸い、重傷を負った人はいないらしく、悲鳴も爆発に驚いただけらしい。

「人……?」

煙の中に一人、誰かがいる。煙が邪魔で巧く見えないが、小柄で髪が長い。

やがてその何者かは煙の中から姿を現した。

「……………!? お、い……、嘘、だろ……っ?」

出てきたのは一人の少女。茶色のロングは腰まで伸びている。

フィオも同じ茶髪だが、彼女は赤つぼいのに対し、こちらは黒つぼい。ハーフか

日本人かの違いだろう。

解りやすく言えば、フィオの髪はレンガ、煙の中から出て来た少女は腐葉土の色と考

えれば、同じ茶色でも違いが分かるだろう。

少女はゆつくりと顔を上げた。その顔は、若干の俺と同じく変化があったが、見間違

いようが無かった。

「ミ……、ヤコ……!」

そう、俺が探していた少女、ミヤコ、遊馬崎都だ。ゆまさきみやこ

久々の再会。だが、素直に喜べなかつた

「(ニタァ……)」

彼女の笑い方が凄く気にかかったからだ。

何故? 何故そんな笑みを浮かべる?

何がお前に起こつた?

『な、なんだねキミはっ!』

焦りを浮かべた鮫島校長は誰何の問いを投げかける。

やはり、都はニタニタと笑っている。

「ふふふ……? あたし……? あたしはねえ、ユマサキ ミヤコお……」

『ゆ、ユマサキ!? 遊馬崎って、あのさっきの昇格蹴つた奴と同じ!?』

『え、い、妹さんか何か!』

「黎、あいつなんなんだよ! お前と同じ名字だぞ!」

「キミに何か関係があるの!?!」

十代とファイオが投げかけて来た質問に対し、俺は静かに答えた。  
「ああ。あいつは俺の、」

「義妹だ」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

# STORY 7 : 月一試験一次・爆炎の義兄と暗黒の義妹

SIDE : 無し

義妹。

その言葉は会場の全員に聞こえた。

『義妹!?! 義理の妹!?!』

『なんだそのギャルゲーもどきの設定!?!』

『というか、あの爆発、何やったのあの子!?!』

当然、リングの上から降りていた黎のそばにいた皆、十代、翔、隼人、大地、フィオ、明日香にも聞こえている。

「れ、黎! 確かお前妹はいないって!」

「義妹はいないとは言っていない」

「いやそうだけどき!」

屁理屈だ。妹と義妹の差は、精々血縁関係程度。妹とおおよそ変わりはない。



“ ともと言えるんだよ、お義兄ちゃん？”

「……………」

“昇った？”

“墮ちた”と対をなす言葉のつもりなのだろうか？

ゆらあ、と都が黎の方へと歩く。黎も静かに都に歩み寄る。

二人は対面する形で向かい合い、立ち会う。

ニイ、と都が笑う。

ムツ、と黎が表情を消す。

向かい合い、沈黙し、そしてその静寂を破ったのは黎だった。

「俺に用か、都？」

「うん、えつとねえ」

「死んで?」

次の瞬間、真つ黒な剣が黎の心臓を貫通し、黎の鮮血が飛び散った。

S I D E : フ イ オ

「え……………?」

わたしは最初、それを認識できなかつた。

黎の胸部を黒い剣が貫通している事とか、パタパタと血が滴り落ちている事とか。つまり黎が死んだ事を頭が認めなかつた。



「あ、ああ、あああああああああああああああああああああつー！」

でも、時間と共に黎の死は脳の隅々まで染み渡った。つい1分前まで生きていた友人はもういない。

命を落としてしまった。

死んでしまった。

「れ、黎！ れええええええええええええええええい！」

「黎ー！」

『うわあああああああああああああああああああああ、殺人だあああああああー！』

騒ぎ始めた周りの声も耳に入らない。ただただ、仲の良かった男子が死んだ。それが頭の中を支配し、リアクションが取れない。

「あ、か、は……………つ！」

「フィオ!? しっかりして！」

苦しい。呼吸が上手くできない。混乱は呼吸器官にまで影響を及ぼしているらしい。

「フィオ!? どうした!？」

「神山くん！」

「フィオが、フィオが呼吸が上手くないかない所為で窒息しそうなの!!」

遊城くんや三沢くんが何かを言ってる。明日香が何かを叫んでいる。

でも聞こえない。何を言っているのか理解できない。

ひよっとしたらわたしは黎の事が好きだったのかも知れない。自分でも分からない程の淡い恋心を持っていたのかも知れない。

でも、確かめられない。彼はもう死んでしまったのだから。

「酷い事をするな、都」

え？

我が耳を、きつとわたしを含む誰もが疑ったはずだ。

死んだ人が、元気な時と変わらない声で喋っているんだから。

S I D E : 無し

「俺じゃなかったら死んでいたぜ？」

「お義兄ちゃんだからヤツたんだけど？」

胸部を剣で串刺しにされた黎は、しかし、ピンピンしていた。

ダークシングナーの様な黒い眼からは本意が読み取れない。

「……、義兄ちゃん前に言ったよな。無意味に人を傷つけるような娘（コ）になるな、つて」

「くふふ……。だから『死んで』って言ったんだけど？ ほら理由がある」

これも屁理屈だ。

少なくとも出会い頭に『死んで』の一言で胸に刃をぶつ刺す理由にはならない。

「……吸収できない。鉄じゃないのか」

「あはは！ 当たたり〜！ 邪神様の力で作り上げた魔剣だよ？」

邪神『様』。都がそう言ったのを黎は聞き逃さなかった。

「なるほど」

だから「昇った」か。

邪神に対する信仰でも植えつけられたのだろう。機会は幾らでもあった。黎が転生してから既に一ヶ月少々。十分な時間だ。

（そしてコイツは、それだけの長い間、俺がいない空間で敵の手中にいたってワケか）

ギジユリ……。黎は胸から剣を引っこ抜き、放り投げながら自分を責めた。

ピチャツ、と少量の血が滴り落ち、剣は黒い霧に変わって消えた。

もっと早く動けば良かった。或いはまだ転生し切っていないタイミングで邪神の所へあの神様に送ってもらえば……………。

ギリリ、と歯を軋ませる。だが、手遅れだ。

「シナリオは最善と最悪を考える。それがお義兄ちゃんの考え方だったよね」  
で、これはどう？

解つてる癖に、都は尋ねた。これが最善なハズが無いのに。

黎の目に血が集まる。怒りの証拠だ。

「最悪だよ……………」

黎はそう言いながら半歩右に動いた。一刹那後に心臓があつた場所を黒い槍が通過した。

そのまま左腕を振り降ろし、金属音を出して槍を叩き壊した。

「そっか、にひひ…………。じゃ、改めて死んで、お義兄ちゃん？」

「組み手で1度でもお前が勝つた事あつたか、義妹？」

嘲る様子も無く、淡々と黎は聞く。

その問いに都はチツチツチツ、と指を振る。

「組み手じゃなくて殺し合いだよ」

「上等。バトルスタートだ」

今は戦うしかない。今のこの少女は自分の知っている遊馬崎 都ではない。別の何者かだ。

殴つてでも目を覚まさせてやるしかない。どの道、コイツは殺しても死なない奴だ。多少本気を出しても大丈夫だろう。なんだったら心臓や脳を抉り出して直に電流を流して元に戻しても良い。

「行くよ、お義兄ちゃん？」

「今のお前に義兄あにと呼ばれたくは無いな、都」

都の振った剣を、黎は左手で受け止めた。

ガギン！ 金属音が鳴り響き、黎の振り降ろした右手を都は黒い盾で受け止める。

一旦距離を跳んで取り、二人は走って離れた距離を詰め合った。

「うおおおおおおおおおおおっ！」

「はあああああああああああああっ！」

黎の蹴りと右の拳が、都の黒い双剣の刃と交差し、ぶつかり合った。

ガツギイイイイイイイイイイイインッ！

SIDE：十代

俺達は今信じられないモノを見ている。

突然爆発が起きたと思っただら女の子が出て来て、しかもその子は黎の義理の妹さんだったんだ。

更にその義妹さんに心臓を貫かれたハズの黎がピンピンしていて、いきなり喧嘩が始まっちゃったんだ。

まだまだ信じられない事は続いているぜ？ 黎の体がいきなり真っ黒くなったり、火を吹いたり、義妹さんの剣を素手で受け止めたりしてらんだ。

なんだか、黎が人間じゃ無く見えてきた……。

こういうのは多分、三沢や明日香、フィオに聞けば詳しい事が分かると思うんで聞いてみる事にした。

あ、そうそう。フィオは黎が生きてるって分かったら息が元に戻ったぜ？

「み、三沢、明日香、フィオ？」

「悪いが十代。俺にもこの状態は説明できない……」

「とうかアノ2人は何者なの？ 明らかに人間じゃ無い動きをしてるわよ……？」

「わ、わたし夢でも見てるの……？」

確かに。主にその動きは黎がやってるんだけど……。空中で方向転換したり、踵でり

ングにヒビ入れたりとか、人間技じゃ無いよな……？

「黎くん、キミは一体何者なんスか……？」

「オレ、自分の常識が疑わしくなってきたんだな」

『クリクリ〜！』

そんな中、俺の相棒、『ハネクリボー』だけは義妹さんを見て唸っていた。まるであの義妹さんが危険だと言って言ってるみてえだ。

「相棒……？」

『クリクリ〜！』

何を言ってるのかは分からねえ。でも、威嚇してる。

相棒、あの子はそんなに危ないのか……？

今この時は相棒の言葉が人間の言葉じゃ無い事を残念に思った。

SIDE：黎

「スキャッター・ダーク！」

「かあっ！」

都の掌から吹き出した闇を、俺は炎を吐いて相殺する。

「『ナイトメア・パンチ』！」

「おっと！」

炎の壁を突っ切って撃ち出された拳型の闇は全身をタンクステンで覆ってガード。

「『ブラック・シザー』！」

「遅い！」

続いて生み出された巨大な黒いハサミを跳躍で躲す。

「はっ！」

「がっ!？」

そして懐に潜り込み、肘打ちで肋骨を押し折る。

バキバキ、と折れる感触はあるが、その中にシユワシユワ、という炭酸のような音が聞こえた。

随分と早くなってるな。

「どうした。こんなんで俺を殺せるとでも思ったか？」

はっ、と嘲る。

実際さつきから都の攻撃は初撃の不意打ち以外ダメージになっていない。

「うーん、やっぱりタンクステン合金を相手するのは骨が折れるね」

「当然だ。戦車装甲にも使われる超合金だぞ？」



重金属タングステンは、重量や硬度という点に於いて鉄やチタンよりも勝る。放射線を防ぐ為の防護服にもこの金属が使われているぐらい原子密度が高いのだ。

さて、あの黒いヤツの正体が何なのかは分からないが、分かった事が幾つかある。

まず、あれは壊れる上に鉛程度の硬さしかない。しかも展性も延性も無いから拳で簡単に叩き壊せる。

次に、一定時間が経つと自壊する。長い事この世界に存在はできないらしい。

それから形は不定形。変形に時間は少々必要だが、形に囚われてしまうと足を掬われる。

最後に、アレは都の手を離れると壊れる。

ここまでは俺が有利に進めて来た。

だが、これで終わる程、あいつは甘くない。絶対に何か策を持っているはずだ。

そして、それは的中した。

「うーん、それじゃ次の手を使うよ」

やっぱりまだ何かあったか！

ばっ！ と都が掌を俺に向け、そして観客席に向けた。

まさか!?

「はあっ！」



「あひやつ、一撃入ったあ！」

幸い、攻撃の後逸は防げた。ただ、今の一撃で左手が吹き飛ばされた。

……、あそこか。

「れ、黎……！腕が……！」

ファイオか。大丈夫、心配いらない。

キレイに跳んだ自分の腕を傷口に押し当てて言う。

「直ぐに付く」

ジジジ、と血管、骨、筋肉の繊維を元々くつついていた組織同士で繋いでやる。

我ながら人間じゃないと思いつつも、同時に仕方がないとも思う。生きる為にこの身

体が手に入れた防衛手段だ。否定してもしようがない。

最後に皮膚を蛋白質の糸で縫合してやり、修復完了。この間、2秒。

「黎、キミは一体、何者なんだ……!?!」

「それ以前に人間なの……!?!」

大地に明日香が尋ねる。

それに関しちや、もう答えはこの身体を手に入れた5歳の時から用意してある。

「一応人間だよ。ただ、かなりヒトの範疇から外れているがな」

ゾゾゾ、と掌からチタン合金の刀を取り出す。

「はははっ！」

都が放った弓矢を叩き落とす。アイツから黒いアレが離れてから自壊するまでにはタイムラグがある。その隙を狙って放ったか。

「ダークネス・ブロウ！」

「火力最大！」

さつきとは比べ物にならない程の闇は最大まで威力を上げた炎を吐いて受ける。

業火が闇を照らし、消し去った。

『に、人間なのか……？』

『バケモンだ……』

『あいつと同じ教室だったのか……』

陰口を叩かれるのも慣れたモンだ。俺はな。

でも都は慣れてない。陰口を叩かれた時、よく俺を頼って来た。心の優しいアイツは人一倍親切で、人一倍傷付き易かった。

そしてそのアイツは、いつしか陰口に敏感になっていた。

「バケモン……？」 あはははははははははっ！ そうだよお？

どう？ どう!? この能力！ あたしもお義兄ちゃんも、人間だけど人間じゃない！

それを証明するこの疎ましい能力はどうだって聞いているんだけどお、観客さんっ！！！！

!!

『ひっ!』

力を手にしたアイツは陰口を叩き、自分を化物扱いする奴を徹底的に憎んだ。アイツは博愛主義者じゃ無いから、自分を疎むヤツにまで向ける優しさは無い。

ギラリとダークシングナーの様な黒い眼で観客席を睨みつける。

怯えて何人かが逃げ出そうとしている。それを俺は声を拡散・増幅して止めた。

「逃げるな!」

『!?!』

驚いて皆が止まる。危険から逃げるなどか言われても困るだろうが、こつちにとつてはそつちの方が都合だ。

「逃げたら守りきれない! 傷一つつけさせないから逃げるな!」

ざわ、皆が騒めき止まる。

よし、足が止まればそれで解決だ。

「ここまでされると、俺も本気で行かざるを得ない。ガチで行くぞ都」

あれで本気じゃなかったのか。そんな声が聞こえた。

「ははあつ! じゃあ守ってみ「前口上を言う暇があるのか」なほ、あつ!」

いい加減、アイツの高笑いに虫唾が走っていたトコロだ。そろそろ口を塞いでやって

も良いだろう。

高く蹴り上げ、顎を蹴り砕く。そのまま返す刀ならぬ踵で頭蓋骨を陥没させる。

「ぜえいやあつー！」

「はあつー！」

観客席に向けられた黒い霧は、手を下に向けさせてアイツ自身を反動で吹き飛ばさせる。ロケットの要領だ。

そのまま髪を鎖に変え、先端に刺付き鉄球を拵える。

完成したモーニングスターを投げ、空中で身動きの取れないアイツを撃墜した。

「次からは翼も用意するんだな」

鎖を鉄球を髪に戻しながら吐き捨てる。ま、無傷じゃないし、頭に直撃したから多少は動けないだろう。

「黎」

タイミングを見計らっていたのか、リングの陰から十代達がやって来た。そんな近くに隠れていたのか。危ないじゃん。

能力の説明を強いられると思うので、こっちから説明してやる。

「これはバイオ・フィードバック現象。身体の隅々まで俺の意思で操る力だ」

「な、なんでそんな事出来るんスカ……？」

「ま、ちよつと生まれがダークだね。詳しくは聞かないでくれると助かる」

彼らが息を呑む音が聞こえる。ヘビーだったか？

俺の能力はONE PIECEのCP9のクマドリ生命帰還をイメージすると近くだらう。とかああれのパワーアップ版だ。

髪の毛、骨、血管、神経、生体電流と俺の体内で操れないものは無い。金属を口にすればそれで自ら自身の身体の一部として扱える。刀の精製、組織を金属に置き換える、体内の不要な可燃物質の燃焼は金属粉を混ぜるとやり易い。

少ない栄養の温存や、凶悪な野生動物から身を守る為に必要だった技術。体温を保つものにも、出血を瞬時に止めるものにも役に立ってくれた。

「では、お前の義妹も……？」

「いや、アイツは自動再生。病気にも殆どならないし傷の治りが異常に早いんだ。これも聞かないでくれよ」

再び息を呑む音が聞こえた。やっぱりヘビーだったか？

あつちは化物語の暦くんや忍ちゃんを連想すると良い。

あいつは幾度も幾度も殴られ、蹴られ、斬られた。火傷を負い、凍傷を負い、裂傷を負った。されど、死にかけても医者には連れて行かれなかった。その必要が無かったから。

「とにかく、俺達義兄妹は、一般人の範疇からかなり外れた体を持っていると考えてくれれば良いよ」

「はは……、信じきれねえ……」

十代、気持ちは分かるよ。

「〃オクテット・オブ・ダークランス〃！」

「!?」

背後から黒い槍が8本飛んで来た。咄嗟に髪を延長させて掴み、更に金属化させて槍を握り潰す。

髪の延長は炭素を二酸化炭素から取って補充すれば良いし、金属だったら経口摂取で体内に大量に保存してある（だから俺の体重は400キロを超える）。

ゆらり、と立ち上がった都に大きなダメージは見られない。

「くひひ……」

「ノーダメか。流石に焦るぞ?」

軽く言ってるように聞こえるだろうけど、内心は本当に焦ってる。

今まで何度か都との組み手はやって来たが、その治癒の速度は遅い。骨折を治すのに一晩かかる、と言えれば分かるだろうか（それでも充分に早いが）。

だが、今は確実に骨を折った感触があっても、次の瞬間には既に完治している。あの



炭酸みたいなシユワシユワ音は、傷や骨折を治療する時の音だ。

再生がいつまで続くのか分からない以上、長期戦になれば体力（なんて言うけど、これが尽きるのは筋肉の損傷がこれ以上は危険だという信号が発されるだけ。メーターみたいなモノじゃ無い）までも回復するアイツに分がある。

お互い、怪我を治すにも、新たに武器を作るのにも（能力を使用するのに）栄養、というかカロリー（エネルギー）が要る。

しかしアイツは邪神の力を得ている。それがエネルギー源になっていると考えれば、底を尽きるのは俺の方が遥かに早いはずだ。

短期決戦に持ち込むしかない。だが出来るのか？ アイツを傷つける事を未だ俺は心のどこかで躊躇している。だから連続で攻撃を浴びせられないし、心臓や脳を斬る事もできない。

チツ。守るとかカツコイイ事言っちゃったが、避難してもらわうべきか？

せめてアイツみたいに何か精霊の力が使えればな……。

その時、精霊界で出会い、力を貸してくれた『ヴォルカニック・デビル』の言っていた事を思い出した。

『炎の力の結晶じゃ。お主の戦い、デュエルに役立つじやろう』

ハッ、と気付いた。腰のベルトのデッキホルダーからデッキを取り出す。

『ダンナ。気付いたか』

デッキを携えた俺の傍に『鬼火のウイスプ』が半透明になって現れた。その後から続々と『F・S』達が現れる。

『ヴォルカニック・デビル殿からの言伝である。「力の扱いには気をつけよ』

『マグマドラゴン』が唸り声を上げて威嚇しながら忠告を入れる。

『ひゃっはあ！ ま、マスターが命ずるなら何でもやるけどね！』

『それがワタシ達の役目です！』

ハイテンションな『レゲエ』と『チアガール』が構える。

『邪神とか言ったか？ 奴を潰す為におれ等はいるんだ、力ア貸すぜ？』

肩のバズーカの照準を合わせつつ『バーナーズ・キャノン』が言う。

『精霊の底力、思い知らせてやりましょう』

『叩っ斬ってやる……！』

臨戦態勢に入った『ヴォルカニック・ギア・ガイ』と『ブレイジング・ナイト』が不

敵に笑う。

『……。いざ参る』

寡黙ながらも『バーンクロス』が決意を示す。

続々と続く精霊達がコクリと頷く。

「皆の炎よ、今俺に力を……！」

デツキは再びあの宝玉へと戻り、俺の中へと潜り込んで行った。不快感は無く、力が体の底から湧き上がって来る。

俺の周りを紅蓮の焰が渦巻く。それに合わせて炎を具象化した模様が俺の素肌に浮かんだ。

はは、厨二病臭さも、ここまで来るとなんか逆に格好良いな。

「さあここからが本番だ！」

ダツ、と駆ける。足の裏で小爆発を起こして推進力を生み出し、2歩で間合いを詰め切る。

都是すぐに反応するが、それでももう手遅れだ。

「うっ！」

「遅い！」

ガツ、と燃える右ストレートを打ち込み、続いて炎の左ローキックを放つ。間髪入れずに炎を零距离で吐いて追撃を入れる。

「く、かあ……！」

都是全身を炎で包まれ、片膝をついた。

火傷の治りが想像以上に遅い。恐らくは精霊の力だからなのだろう。

「はっ！」

チリツ、と火の粉を放つ。それは都に触れると、爆発を起こした。

「うわ、アアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

炎の力を最大限に圧縮した攻撃。とあるマンガに出て来た小さいが大爆発する炎の玉をイメージしてみたが、成功したみたいだな。

「止めだ！」

業火を纏った拳で殴って止めを刺す。邪神の心は、まあ、精霊になんとかしてもらおう。策が無いなら誰かを精霊界へ送って調べてもらおうのも良いかも知れない。

そう思った時だった。

「痛い、痛いよお……………、お義兄ちやあん……………」

後数センチの所でパンチを止めてしまった。

心の隅にあった『義妹を攻撃している』という後ろめたさが、俺に一瞬の間隙を作ってしまった。

「くひひ……………、甘いなあ！　　カオス・ビッグバン！」  
甘い。確かに甘い。

心を鬼にして都を殴っていたのに、結局は躊躇って止まってしまった。

黒い竜巻。それが俺の印象だった。俺を取り囲んだ闇は俺を中心に回転し、その間俺は目に見えない闇のエネルギーのダメージを受け続けた。

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああああつ!!!」  
 竜巻が終わると、俺は地に倒れ伏した。

『うあああああつ、遊馬崎イ!』

『おい、ヤベエぞ!』

『アタシ達を守ってくれるヒトいなくなっちゃったよ!』

『レイイ! 起きろ! 起きるんだあ!』

『黎(くん)!』

呼びかけてくれている声も聞こえたが、身体がもう動かない。ぐつ、ダメージをあの一発で限界まで一気に蓄積したというのか……!?

「あは、ははははははははははっ! 非情になりきれなかったねえ!」

「その時俺は都の高笑いの奥で何かが聞こえた気がした。

違う、聞こえている! これは……!」

「それじゃ、会場ごと吹っ飛ばして終わりにしよっか」

「アイツのセリフに重なって聞こえて来るこれは……!」

「じゃ〜ね〜? “ヘルズ・ライトニング”!」

なるほど。そういう事か！

俺の納得の一瞬後、黒い雷が会場を蹂躪せんと四方八方に撃ち出された。

S I D E : フイオ

「黎！・レエエエエエエイツ！」

「フイオ、危険よ！　ここにいたら危ないわ！」

でも黎が！　黎があ！

明日香の忠告を聞かず、わたしは叫び続けた。

そんな中、わたしの心境に1つの変化があつたのを自覚した。

憎い。例え彼の義妹でもアイツが憎い。

わたしの心に憎悪の炎がメラメラと燃えていた。

義兄妹じゃ無いの!?　お義兄さんは君を探す為にあっちこっちに探しに行っていたんだよ!?　人に聞き、休む暇無く島中を歩き回り、何一つ手掛かりが無いって落ち込んでいたんだよ!?　それなのにどうして君は平気な顔してそれを踏み躪る事ができるの

!?

「レエイ！ 起きろ！ 起きるんだあ！」

『黎（くん）！』

必死に離れた所から呼びかけてもピクリとも動かない。くっ！

そして、歯噛みするわたし達を嘲笑うかのように義妹さんの手から黒い雷が放たれた。

「来い！ わたしは逃げない！」

「ファイオ、危ねえ！」

「逃げてえ！」

嫌だ！

黎が死ぬんだったら、わたしも死ぬ！

黒い雷を受けて、黎と一緒に死ぬんだあ！







見てみると、黎の掌から何かコードの様な物が伸びていた。あれも自力、というかバ  
イオ何とかで作ったんだらうか？

「俺の制御下にあるワイヤーを地下を経由してお前の足元に配置した。起爆するぜ、そ  
れ？」

なるほど、確かに義妹さんがいた所から細いワイヤーが顔を覗かせている。爆発した  
のはアレか。

ともあれ、義妹さんは立ち上がるのに苦労している。傷の治りが何故か遅くなってい  
るみたいだ。

「決着はついたな」

スタスタと黎が歩み寄る。

「この勝負は俺の勝ちだ。色々ときかせてもらおうぞ？」

色々の中身が気になるけれど、取り敢えずまあ、一件落着かな。

ス、と黎が都さんを連れて行こうと手を伸ばした。





「申し訳無いが、それはこちらが許可できない」

伸ばした手は蹴り飛ばされ、黎は地面に叩き付けられた。

S I D E : 無し

「が、あ……!?!」

突如の乱入者に、黎は地を舐めた。

乱入者は黒い服を着用し、黒いマントを羽織り……、要するに黒尽くめの男だった。テンガロンハットの所為で表情は読めないが、不気味な感覚だけは伝わって来た。

「姫、今の内に帰還なさって下さい」

「く、分かった」

「――」

黎としてはそれは避けたい事だった。

次いつ会えるのか分からず、或いは二度と会えないというのに、袂を分かっってしまうのは永遠のさよならに等しいとも言える。

ダン！ と起き上がる。右腕に爆炎を宿し、自爆覚悟の突進を仕掛ける。

自分の体は耐火性の緊急のコーティングを施す。都はどんな致命傷でも簡単に治してしまおうので考える必要は無い。つまりこの一撃が決まれば大ダメージを受けるのは黒い男だけだ。

「おおおおおおおおおおおおおっ！」

「はっ！」

だが、その一撃は、脆くも崩れ去った。

黒い男の右手が正面から黎の正拳突きを受け止めた。本来なら起こる筈の大爆発も起きず、メラメラと灯っていた赤い焰がどンドン勢いを失っていく。

「炎では私には勝てない。消えなさい、不適合なる義兄よ」

右手を乱暴に放ると、男は黒い刀を2本携え、X字状に黎を斬りつけた。

ザシュツッ！ ズシヤツッ！

血飛沫が派手に飛び散り、黎は膝をついた。

「さ、お早めこ」

「うん」

「」

血を流しながらも顔を向ける。その時瞳が映し出した光景は、黒い穴に都が入って行く所だった。

他の皆はあの超人決戦に巻き込まれたくないのか、全く動かない。

「！、！、！」

「ぐぼ、があ……。チツキ、シヨウ……！」

口からもダクダクと血を流し、あの声を聞きながら、黎は動かない身体に必死で鞭を打った。しかし、努力も空しく、起き上がると同時に都は黒い穴と共に消えてしまった。(み、やこ……。こんなダメな義兄ちゃん、ゴメン……。お前を、助けてやれなかった……。！)

ヒューヒューとおかしな呼吸をしながら、人から外れた義兄は、ただただ義妹の消えた方向を見つめていた。

t o b e c o n t i n u e d



## 『集中豪雨地帯』

SIDE：無し

ぜえぜえと荒い息を吐きながら、ふらつく足で立つ黎。その視線の先には黒服の男が立っている。

ギツ、と黎は男を睨みつけた。傷だらけで流血している筈なのに、その気迫は消えていない。

「はあ……、はあ……、俺の、義妹を、どこにやった……っ！」

黒い男は全く意に介さず答える。

「私たちの城に帰還いたしました。今や姫はあなたの義妹という立場より私たちの主の元にいらつしやる事を望んでおられるのですよ」

ククク、と嘲笑う。黎の気迫が会場を揺るがす動の力なら、この男の存在は如何なる物事にも動じない静の存在。力押しは通じないだろう。

「しかし、いずれ私たちの主が完全に目覚めれば、姫は用済みとして廃棄されるでしょ

う。姫はあくまで主が復活するまでの仮の器なのですよ」

「デメエ……………っ!」

「無論、廃棄された者の行方など知った事ではありません。死か、或いは想像もつかない事になるでしょうね」

しかし、と男は続ける。

「主は罪の象徴である邪神。より多くの罪を求められております」

「……………罪を生み出す人間を減らすと、弱る、か?」

「その通り。1人2人減った所でどうという事はありませんが、それでも源は1つでも多く確保しておきたいところです」

そして絶望も必要なのです、とも続けた。

絶望? と黎が問うと男が答える。

「主に限らず、意思を持ちし邪神は人の心の闇、つまりネガティブな部分を力の源といたします。ほら、一生懸命頑張ったのに義妹を救えなかつた義兄なんて、絶望の力が凄そうでしょう?」

「……………はっ、お笑い種にもならねえぜ」

「ククク、まあそう仰らずに。私はチャンスを差し上げましょうと申しておるのです」

「チャンスだと?」

「ええ。どうです、デュエルで勝てば貴方を主の城に案内し、更に姫を解放できる機会を差し上げましょう。そして貴方が負けても何も要求しませんよ？」

尤も、ただのデュエルではありませんがね。ポツリと呟いたのを黎は聞き逃さなかった。

だが、敢えてスルーをする。深く突っ込む気力はまだ戻ってないし、怖気づいたと思われたく無かったからだ。

「良いだろう。そのデュエル、受けて立つ！」

ガシン！ とディスクが展開する。デツキを引き抜いて念入りにシャツフルし、互いにセツトする。

そうだ、と男は何かを閃いた。右手を高く上げると、淡い光が飛び散り、黎と都との戦いによって壊れたリングや壁が修復されていく。

「サービスですよ。壊れたままではこちらの気分が悪いですから。ちなみにこれはあらゆるモノに対して無害です」

「……、一応礼は言っておく。半分は俺が壊したからな。ありがとう」  
「いえいえ」

ニヤリ、と男は笑った。

「こうまでされて負けたら、貴方は立つ瀬が無いでしょう？ また一つ追い詰められま

したね」

「……………」

黎はこれ以上話す事に危険を感じ、言葉を発するのを止めた。この男は先刻から自分の絶対勝利を前提として話している。

この男に絶対の自信があるからなのか、或いはこちらを挑発する為にやっているのかは分からないが、怒りにまみれてしまえば冷静な判断力を失い、さっきのゴリラブルーの様に敗北するだろう。

勝てば手掛かり、負ければ何も無い。ならば勝たなくてはならないだろう。

義妹を取り戻すために、そして精霊界と人間界を狙う邪神を撃ち破るために、ここで敗北を喫する訳にはいかない。

身体の修復がおおよそ終了したのを感じ、気合を入れ直す。

「『騎士』の魂、遊馬崎 黎。世界を守る為に、全力で参る！」

「七つの大罪の内が一つ、『傲慢』のプライド。いざ勝負！」

名乗りを上げ、デイスクを展開させてスイツチを入れる。

『デュエル！』

S I D E : 明日香

何だか大変な事になっちゃったみたいね。

黎の義妹の登場。義兄妹の身体の秘密。邪神。七つの大罪。

いろんな事が一度に起きて流石の私も頭の整理が追いつかないわ。

「三沢くん、この状況……」

「天上院くん、言いたい事は分かるんだが……。済まない、正直俺も理解するだけで精一杯なんだ。まだ、説明出来る程理解はしていない」

そう。三沢くんでも出来ないのなら、十代やフィオに求めても無駄でしょうね。十代は筆記テストじゃ無くして実技での成績に物を言わせている訳だし、フィオの頭はぶつちやけると悪いから。どのくらいかっていうと……。そうね試験番号、十代が110番ならフィオは109番かしら？

「……明日香、今何か失礼な事考えなかった？」

「気のせいよ」

さらつと言っておく。

余計な事考えてる場合じゃなかったわね。あのプライドという男と黎のデュエルが始まる。実力は未知数だけど、相当強いつて事は伝わって来るわ。

黎、頑張つて！

## SIDE：黎

「俺のターン、ドロー！」

ぶっ倒す！ 俺の全力で！

もう少しだけ待っててくれ都！ 義兄ちゃんが今行くから！

「『F・S マグマドラゴン』を召喚！ そしてモンスター効果発動！ 如何なる召喚においても、『マグマドラゴン』が場に出た時、デッキか手札からレベル4以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚できる！」

俺はデッキの『F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ』を選択！」

『ガオアアアア！』

『トオツ！』

F・S マグマドラゴン：ATK 1800

F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK 1900

「魔法カード『融合』を発動！ 手札の『F・S 鬼火のウィスプ』と『F・S バーン

クロス』を融合！ 融合召喚！ 斬り開け『F・S ブレイジング・ナイト』!!』  
『ハッ！』

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900

融合

【通常魔法】

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「まだまだあつ！ フィールド魔法『スピリッツ・ワールド』を発動！」

フィールド中に淡い光が溢れ始めた。これで例え相手が強力なアタッカーを出して来たとしても、1000ポイントのパワーアップができる。

ワンキルの心配は無いだろう。

「1枚カードを伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：F・S マグマドラゴン（ATK 1800）、F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ（ATK 1900）、F・S ブレイジング・ナイト（ATK 2900）  
 ：伏せカード1枚、スピリッツ・ワールド（フィールド魔法）

悪しき敵と戦うために用意された精霊の力、ここで働かずしていつ働く。頼りにしているぞ。

さあ、かかって来い！

「私のターンです、ドロー」

SIDE：十代



観客席の十代だ（誰に説明してるんだ、俺は？）。

すっげえな、黎は。1ターンでモンスターを3体も揃えやがった！

とまあ、少し前の俺だったら何も考えずにはしやぎまくったんだけど……。湖でのあのデュエルの時に黎が言ったあの言葉、アレが気に掛かっている。

“手札不足”

そう、黎は今のターンで手札を全て使い切った。三沢に聞いたんだけど、ハンドアドバンテージってのは今後の展開に重要なんだってさ。

俺は気にしないかな。いざって時にはちゃんとデッキが応えてくれるから、手札不足にはあんまり悩んだ事は無い。

でも、黎が今相手している男、プライドとかいう奴は俺でも分かるくらいにヤバイ奴だ。

「アニキ……、黎くん、勝つツスよね……？」

「あ、ああ……」

翔が不安そうな顔で聞いてくる。当たり前だろ、と答えられない自分をちよつと責め

る。

「こういう時はビシツと言うモンだろ!? 俺のバカ!

「……、相手の出方次第だな。次のターンにフィールドを一掃したら逆に不利になる」  
「厳しいわね。普通の人間相手なら黎は負けないでしょうけど……」

「相手は多分、人間でも普通の相手でも無い」

三沢の状況判断、明日香の推測、ファイオの結論が俺の不安を加速させる。

油断するなよ、黎。

S I D E : 無し

「私のターンです、ドロロー!」

プライドがカードを引く。引いたカードを見て、彼はニヤリと不気味な笑いを浮かべた。

「どうやら、私のこのターンでこのデュエルの勝者は決まってしまったようですね」

「何だと……!?!」

キーカードを引いた。その事をデュエリストの直感で感知した黎は声を上げる。



F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900↓1450

「これは……!?!」

雨が黎の場のモンスターに当たっていくにつれ、彼らの体からどんどんエネルギーが奪われていく。赤い光がしぼんでいき、炎の戦士達は辛そうに顔を歪めている。

『ち、力が入らぬ……!』

『何だっつてんだ、こりゃあ……!』

『ぬうう……!』

「『集中豪雨地帯』は場の全ての炎属性モンスターの攻撃力、及び守備力を半分にします。更に手札の水属性モンスターのレベルを1つ下げます。

私はこの効果で『ジェノサイドキングサーモン』を攻撃表示で召喚します」

ジェノサイドキングサーモン（通常モンスター）

星5

水属性／魚族

ATK 2400 / DEF 1000

暗黒海の主として恐れられている巨大なシヤケ。  
その卵は暗黒界一の美味として知られている。

ジエノサイドキングサーモン：☆5↓4

「まだまだありますよ？ 『集中豪雨地帯』は私の場の水属性モンスターの攻撃力と守備力を2000ポイントアップさせます」

200  
ジエノサイドキングサーモン：ATK 2400↓2600 / DEF 1000↓1

「ちい……、要は『アトランティス』に対炎属性のメタ能力を付与したカードか……！」  
「まあ、効果はまだもう一つありますがね。」

では行きますよ。『ジエノサイドキングサーモン』で『F・S マグマドラゴン』を攻撃！ 喰らいなさい！」

ゴウツ！ と巨大な鮭が突進を仕掛ける。『マグマドラゴン』は然したる抵抗も出来

ずに吹き飛ばされた。

「ぐっ！」

ゴブリ……！ と黎の口元から赤い鉄の味の液体が流れ出た。

「血……、闇のゲームか！」

「正解です。ただのデュエルでは無い、と申したでしょう？」

黎：LP 4000↓2200

ザワザワと観客席から騒めきが上がる。人がソリッドヴィジョンで血を流した。しかも闇のゲームという怪しい単語とセットで。それでも生徒も教師も逃げ出さない。

何故か。理由は恐いもの見たさだろう。

黎は口の端から流れ出る血を指で拭くと、真剣な表情でプライドに向き合った。しかし、その内心は非常に焦っている、というのを本人とプライド、そしてフィオ達は理解していた。

当然だ。手札を全て注ぎ込んでボードアドバンテージを稼いだのに、こうも易々と逆転されてしまったのだ。今、デュエルに主要な三つのアドバンテージは全てプライドが握っている。

(……………結構マズいか)

チロリ、と舌舐めずりをして黎はディスクを構え直した。

S I D E : 黎

「初っ端から飛ばし過ぎたか。1ターン目だから攻撃はできないってのは解り切っていたのに、心のどこかにあつた逸<sup>はや</sup>る心が表面化したか。

「リバースカードを2枚セット！ ターンエンドです」

プライド : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

: ジエノサイドキングサーモン (ATK 2600)

: 伏せカード2枚、集中豪雨地帯 (フィールド魔法)

「俺のターン、ドロロー！」

引いたカードは……、逆転の一手！

「『F・S バーナーズ・キャノン』を守備表示で召喚！」

『むん！』

F・S バーナーズ・キャノン：DEF 1200↓600

F・S バーナーズ・キャノン（効果モンスター）（オリジナル）

星4

炎属性／戦士族

ATK 1500／DEF 1200

1ターンに1度、相手フィールド上の魔法・罠カードを1枚破壊できる。この時、相手プレイヤーに300ポイントのダメージを与える。

「フィールド魔法が邪魔だ！ 『バーナーズ・キャノン』のモンスター効果で破壊させて



もらう！　《バーニング・ショット》！！

白炎がバズーカから噴き出す。上空へ向けて放たれたそれは、雲に直撃すると、雨雲は瞬時に霧散した。

プライド：LP　4000↓3700

「ふ、ふふふふ……」

「つ、何かあるみたいだな、その笑いは」

必殺のフィールド魔法が消滅し、俺の場のモンスターは全てその能力値が元に戻った。しかしプライドはダメージを受けたというのに、薄気味悪い笑みを浮かべている。

その理由はすぐに分かった。

「!？」



ザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!

「雨が、止んでない!?!」

破壊したハズのフィールド魔法が、再び場に効力を発揮していた。

「ふふふ、申したでしょう? 『集中豪雨地帯』には後1つ効果があるってね」

「バカな……、破壊されない効果なら、ダメージも発生しない……。一体何なんだ!」

『バーナーズ・キャノン』のバーンダメージは「相手のカードを破壊した時」にしか発生しない。カード効果で破壊されないのなら、ダメージを受けるのはおかしい。

「破壊はされましたよ。しかし、『集中豪雨地帯』は破壊された時、デッキから同名カードをサーチし、発動させる効果があるのです」

「なんだと!?!」

なんつー効果だ……。最低限後2回は破壊しないと、この鬱陶しい雨からは解放されないのか……。!

集中豪雨地帯（オリジナル）

【フィールド魔法】

このカードのカード名は「海」としても扱う。

自分の手札とフィールド上の水属性モンスターはレベルが1つ少なくなる。

自分フィールド上の水属性モンスターは攻撃力と守備力が200ポイントアップする。

このカードが墓地に送られた場合、デッキに存在する「集中豪雨地帯」を発動させる事ができる。

「場の全てのモンスターを守備表示にし、ターンエンド！」

黎：LP 2200

手札：0枚

フィールド

：F・S バーナーズ・キャノン（DEF 600）、F・S ヴオルカニック・ギア・ガイ（DEF 600）、F・S ブレイジング・ナイト（DEF 1350）  
：伏せカード1枚

くつ、マズイ状況だ。万が一の警戒で『バーナーズ・キャノン』を守備表示で出したのは正解だったぜ。お陰で戦闘ダメージは無いだろう。貫通ダメージは恐いが。

「私のターン、ドロー」

またレベルを下げた形での召喚が来る。す、と腕を交差させ、来るべき衝撃に備えた。

「出て来なさい、『暗黒大要塞鯨』」

『グガアアアアアアアアアアッ！』

出現するのは、背中に要塞を背負った巨大なシャチ。その効果は単発では使えないが、もし伏せているカードの内、どちらかがアレなら話は変わって来る。

0  
 暗黒大要塞鯨：☆5↓4 / ATK 2100↓2300 / DEF 1200↓140

「そして罨カード『魔の海域レベル3』を発動します」

「やはり、伏せてあったか……！」

魔の海域レベル3（アニメオリジナル）

【通常罨】

フィールド上に「海」が表側表示で存在する場合に発動する事が出来る。

レベルの合計が3になるように手札から水属性モンスターを特殊召喚できる。

「私は『魚雷魚』と『砲弾ヤリ貝』を特殊召喚！」

『暗黒大要塞鯨』の能力はあの2体がいないと使えない。いつてみれば『暗黒大要塞鯨』は銃身で残る2体が弾丸だ。

暗黒大要塞鯨（効果モンスター）

星5

水属性／海竜族

ATK 2100 / DEF 1200

自分フィールド上の「魚雷魚」1体を生け贄に捧げる事で、フィールド上のモンスター1体を破壊する。

自分フィールド上の「砲弾やり貝」1体を生け贄に捧げる事で、フィールド上の魔法・罾カード1枚を破壊する。

魚雷魚（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 1000 / DEF 1000

「海」がフィールド上に存在する限り、このカードは魔法の効果を受けない。

砲弾やり貝（効果モンスター）

星2

水属性／水族

ATK 1000 / DEF 1000

「海」がフィールド上に存在する限り、このカードは魔法の効果を受けない。

魚雷魚：☆3 ↓ 2 / ATK 1000

砲弾ヤリ貝：☆2 ↓ 1 / ATK 1000

アニメでアナシス（海の底にアカデミア作ろうとして、潜水艦で十代攫った奴）がやったのと同じ戦法か……ッ！

『魚雷魚』と『砲弾ヤリ貝』を生け贄に貴方の場のモンスターと魔法・罠カードを1枚ずつ破壊します。私は伏せカードと『バーナーズ・キャノン』を選択」

「その効果にチェーンさせてもらう！ 『ガード・ディザーブ』！ 1度だけ『S』と名スベリッのついたモンスターを対象にした戦闘かカード効果を無効にする！」

ガード・ディザーブ（オリジナル）

【通常罠】

自分フィールド上に存在する「S」と名のついたモンスターを対象とする戦闘、また魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする。



『暗黒大要塞鯨』が撃ち出した『魚雷魚』と『砲弾ヤリ貝』は、薄緑色のバリアにて弾かれる。

仕組みは『魚雷魚』は『ガード・ディザーブ』で防御し、『砲弾ヤリ貝』は不発。コストとして払ったカードやモンスターは、その効果が不発しても戻ってこない。覚えておこう（誰に言ってるんだ、俺は？）。

それとコストは効果では無いので、『禁じられた聖杯』や『スキルドレイン』で無効化出来ない事も要チェックだ（だから誰に言ってるんだ？）。

「では、『暗黒大要塞鯨』で『F・S バーナーズ・キャノン』を、『ジエノサイドキング サーモン』で『F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃！」  
「くっ！」

シャチの背中の砲台の集中砲火、そして巨大なシャケの突進が俺のモンスターを軽々と粉砕する。

完全にナメてやがる。攻守の最も高い『F・S ブレイジング・ナイト』を場に残しやがった。

因みに『ナメる』は古語の“甘く見る”という意味の『なめし』が語源だ（誰に言ってるんだって……？）

「ターンエンドです。さあ、貴方のターンですよ?」  
 「言われなくても……、解っている!」

プライド：LP 3700

手札：1枚

フィールド

・ジエノサイドキングサーモン（ATK2600）、暗黒大要塞鯨（ATK 2300）  
 ・伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺の、ターン!」

気合い一閃、カードを引き抜く。引いたカードは……ドローソース!

「魔法カード『火炎の魅力』を発動! デッキから3枚ドロし、そこから炎属性モンス  
 ター1体を墓地に送る! ただし、この時炎属性モンスターを送らなかつた場合、手札  
 を全てゲームから除外する!」

これは賭けだ。俺のこのデッキは殆どが炎属性。だが、『ネクロ・ガードナー』などの  
 汎用性の高い奴も入っているし、魔法や罠だけしか来ない場合も考えられる。

何も来なければ俺の負け。さあ、デッキよ、答えてくれ!

「1枚目！」

モンスターカード『フェイク・ガードナー』か！

「2枚目！」

魔法カード『強欲な火山口』！かざんこう 次で最後だ。

「頼むぞ……、3枚目！」

引いたカードは……『F・S』！

「『火炎の魅力』の効果で手札の炎属性モンスターを墓地へ送る！そして今送った『F・

S バック・ドラフトマン』の効果を発動！

このカードが手札かデッキから墓地に送られた時、手札に加えるかライフを回復でき

る！俺は1つ目の効果を選択！ COME BACK、『バック・ドラフトマン』！」

火炎の魅力（オリジナル）

【通常魔法】

自分のデッキからカードを3枚ドロ―し、その後手札の炎属性モンスター1体を墓地に送る。

手札に炎属性モンスターがない場合、手札を全てゲームから除外する。

F・S バック・ドラフトマン（効果モンスター）（オリジナル）  
星3

炎属性／炎族

ATK 1300 / DEF 1300

このカードがデッキまたは手札から墓地に送られた時、以下の効果から1つを選択して発動する。「F・S バック・ドラフトマン」の効果はデュエル中2回まで使用できる。

●このカードを手札に加える。

●ライフポイントを500ポイント回復する。

「そして、手札に戻った『バック・ドラフトマン』をデッキに戻してシャッフルし、『強欲な火山口』を発動！ ドロー！」

強欲な火山口（オリジナル）

## 【通常魔法】

手札の炎属性モンスターを1体デッキに戻して発動する。デッキからカードを2枚ドロウする。

不思議だ。状況は明らかに俺が不利だというのに、俺の心は静まっている。アイツに勝てると思っている。

そうだ、冷静になれ。落ち着いてプレイングすれば、勝機は見逃さない！

「速攻魔法『融合解除』を発動！ 『F・S プレイジング・ナイト』の融合を解除し、墓地の『F・S 鬼火のウィスプ』と『F・S バーンクロス』を特殊召喚！」

F・S 鬼火のウィスプ：DEF 8000↓4000

F・S バーンクロス：DEF 20000↓10000

「そしてモンスターを1体セット！ ターンを終了する」

黎：LP 2200

手札：2枚

フィールド

：F・S 鬼火のウィスプ（DEF 400）、F・S バーンクロス（DEF 1000）、セットモンスター1体

：魔法・罨無し

「ふふふ、私のターン」

つさあ、来い！ この布陣は簡単には破れないぞ！

「成程、確かに『F・S 鬼火のウィスプ』は攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊もダメージもありません。ですが、これはいかがでしょう？ 伏せておいた

『サルベージ』を発動！ 効果で『魚雷魚』と『砲弾ヤリ貝』を手札に加えます」

チツ、また来る！

サルベージ

【通常魔法】

自分の墓地に存在する攻撃力1500以下の水属性モンスター2体を手札に加える。

「そして『魚雷魚』を召喚！」

魚雷魚：DEF 1000

「今召喚した『魚雷魚』を生け贄に『暗黒大要塞鯨』の効果を発動。『鬼火のウイスプ』を破壊します！」

放たれた魚雷は『ウイスプ』に直撃した。大爆発を巻き起こし、『ウイスプ』は一瞬で吹き飛んだ。

「くっ！」

「そして『バークロス』とセットモンスターに攻撃！」

『グガアアアッ！』

『ギジャアアアッ！』

再び集中砲火と突進。俺の場にいたモンスターはたった1ターンで全滅した。

「……（キッ！）」

「ターンエンドです」

プライド：LP 3700

手札：3枚（内1枚は『砲弾ヤリ貝』）

フィールド

：ジエノサイドキングサーモン（ATK 2600）、暗黒大要塞鯨（ATK 2300）

：集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロロー！」

問題はあいつの手札の中の『砲弾ヤリ貝』だ。カードを伏せてもアレの前じゃ行動が制限されてしまう。使いどころを奴に握られているのと同じだ。

ここはとりあえず……。

「魔法カード『天使の施し』を発動。デッキからカードを3枚ドロローし、手札2枚を墓地に送る」

引いたカードは『ネクロ・ガードナー』、『大木炭18』、『F・S バック・ドラフト



マン』。意外と早く帰って来たね、『バック・ドラフトマン』。

取り敢えずこれとこれを送って……、と。

「今墓地に送った『バック・ドラフトマン』の効果発動。ライフを500回復する」

黎：LP 2200↓2700

「モンスタートリバースカードをセットし、ターンエンド」

黎：LP 2700

手札：1枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚

「ふふ、万策尽きましたか？ 私のターン」

「万策尽きたかどうかは、お前の眼で確かめろ」

「そうさせていただきますよ。『ギガ・ガガギゴ』を召喚！」

『ギガアアアッ！』

ギガ・ガガギゴ：☆5 ↓ 4 / ATK 2450 ↓ 2650 / DEF 1500 ↓ 1700

現れたのは、『コザツキー』によつて改造を施されたトカゲ。防腐処理の施してある金属の鎧を着こんでいる、らしい。

『『暗黒大要塞鯨』で裏守備モンスターを攻撃、そして2体のモンスターでダイレクトアタックです』

巨大なシヤチが三度背中の砲台を傾ける。そうはさせない！

『畏発動！ 『次元幽閉』！ 『暗黒大要塞鯨』をゲームから除外する！』

攻撃力の低い『暗黒大要塞鯨』で砲撃して来る事は分かっていた。コイツを除外してしまえば、奴の手札に残った『砲弾ヤリ貝』はただのザコに成り下がる！

セツトモンスターの前の時空が歪んで砲撃を呑み込み、やがて集中砲火ごと『暗黒大要塞鯨』を呑み込んだ。

## 次元幽閉

## 【通常罫】

相手モンスターへの攻撃宣言時に発動する事ができる。

その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「くっ、ならば『ジエノサイドキングサーモン』、やりなさい！」

『グジョアアアアアアアアアッ！』

「墓地の『ネクロ・ガードナー』をゲームから除外して、その戦闘を無効化させる！」

ネクロ・ガードナー

星3

闇属性／戦士族

ATK 600 / DEF 1300

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

半透明の黒い鎧武者が現れると、巨大シヤケの突進を受け止めた。

『ネクロ・ガードナー』はフィールドに出すと攻撃を2回ガードできるが、意表を突けない。出さずに捨てるか攻撃を1回しかガードできないが、意表を突ける。少々悩ましい効果だ。

「ちよこさいですね……！ ならば『ギガ・ガガギゴ』！ パワード・クラツシャー！」

グオン！ と振られた爪がセットモンスターを斬り裂く。細長いバルーンを持った道化師が破壊された。

「いつまでもそんな小細工が通用すると思うなよ……！ 1枚カードを伏せて、ターンエンドです！」

プライド：LP 3700

手札：手札2枚（内1枚は『砲弾ヤリ貝』）

フィールド

：ジエノサイドキングサーモン（ATK 2600）、ギガ・ガガギゴ（ATK 26

50)

：伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

……………？ プライドの言葉が一瞬だけ乱暴になった？

どういう……………、まさか！

「俺のターン、ドロー！」

SIDE：大地

——観客席

今現在、科学では証明できないような不思議な出来事が勃発している。

まず、どこからか黎の義妹さんが現れた。そのまま超人大戦を二人はおっ始め、決着が着いたと思ったら、黒服の男、プライドが乱入し、義妹さんをどこかへと連れて行った。

そしてデュエルに勝てば義妹さんを解放するという条件で黎とデュエルをやっているんだが、このデュエルも普通では無い。

闇のゲーム、というそうさ。近くにいた大徳寺先生が昔少しだけかじった事があるら

しいが、デュエルのダメージが現実となり、敗者にはとんでもないペナルティが科せられるらしい。

現に、黎は先の攻撃で吐血した。すぐ止まったが、彼の異質な身体でなければ致命傷だっただろう。

そして現在に至る。

「防戦一方だな……………」

十代が苦々しく言う。それは俺も同感だ。俺の炎のデッキでもあのフィールド魔法相手では歯が立たない。

だが、アレで終わると思えない。

「三沢くん、あのプライドという男、さつき言葉使いが変わらなかつた？」

天上院くん。それは俺も思っていた。

「仮説でしかないが……………」

一応前置きしておく。何の証拠も無い推理は妄想と同じだと、かのシャーロック・ホームズも言っていたからな。

「あの男は名前の通り、プライドが高い、或いは傲慢な男なのではないかと思う」

「確かに、言葉は丁寧だけどどこかで負けるワケが無いと思ってる節はありそうね」

恐らく想像以上に黎が粘っているから焦りが募り始めているのだろう。焦りはスト

レスを呼び、結果、冷静さを失う。つまり本性が見え始める、という事だ。頑張れよ、黎。防戦から攻撃に転じるタイミングを誤るなよ……！」

SIDE：黎

ストレスが溜まってきているのか。恐らくあの言葉使いこそが奴の本性。

なら、タイミングを見計らって攻撃に転じれば、奴の戦術を挫ける！ タイミングを見誤るなよ、俺！

「魔法カード『強欲な壺』！ デッキからカードを2枚ドロロー！」

引いたカードは『カップ・オブ・エース』と『逆転の明札』。そして手札のこのモンスターを使うと……。

行ける！

「魔法カード『カップ・オブ・エース』を発動。コイントスを1度行い、表なら俺が、裏ならお前がカードを2枚ドロローする。コイントス！」

ここで、ズルとは分かっているながらも、俺は視覚神経に働きかけ。動体視力を底上げし、どのタイミングで手を被せれば裏になるかを判断する。

「裏！ 従ってアンタがドロローだ！」

「ふふふ、残念でしたね」

『あちやあく、デイスアドだ〜!』

『フン、所詮は奴の実力などこの程度だ』

ちなみに今のは前が誰か。後が万丈目。

もしもし? 運をそうホイホイ掌中に収められたら苦労はありませんよ、万丈目さん?  
?

「それでも無いぜ? アンタのドロイーにチェーンして手札の『F・S サニーハットキテイ』の2番目の効果を発動! コイツを墓地に送って、手札の通常罠を発動する!」

「手札から罠カードですと!」

「俺は『逆転の明札』を発動! 相手がドロイーフェイズ以外でドロイーした時、俺の手札の枚数が相手と同じになるようにカードをドロイーする!」

カップ・オブ・エース

【通常魔法】

コイントスを1回行い、表が出た場合は自分のデッキからカードを2枚ドロイーし、裏が出た場合は相手はデッキからカードを2枚ドロイーする。



逆転の明札（アニメオリジナル）

【通常罫】

相手がドローフエイズ以外にカードを手札に加えた時、自分の手札が相手の手札と同じ枚数になるようにドロースする。

F・S サニーハットキティ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

炎属性／獣戦士族

ATK 2000／DEF 900

デュエル中1度だけ墓地に存在するこのカードを手札に加える事ができる。

このカードを手札から墓地に送る事で以下の効果を得る。「F・S サニーハットキティ」のこの効果はデュエル中1回しか使えない。

●自分のターンに墓地に送った場合、手札から通常罫カードを1枚発動できる。

●相手のターンに墓地に送った場合、このカードと墓地に存在するレベル4以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚できる。

半透明の麦わら帽子を被ったネコミミ少女が手札の罫カードを手に取り、出現する。

半透明の姿が消えると、残された罫カードは正常に発動していた。

「アンタの手札は4枚。対して俺は1枚。従って3枚のカードをデッキからドロ―！」  
「まさか、デイスアドバンテージを見越していたとは……」

これで手札は補充できた。

さあ、反撃開始だ！

待つてろよ、都。もうちよつとで助けに行けるからな！

t o b e c o n t i n u e d

STORY 9 : 月一試験—終・反撃封殺。黎、万事休す

SIDE : 黎

黎 : LP 2700

手札 : 4枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罠無し

プライド : LP 3700

手札 : 手札4枚 (内1枚は『砲弾ヤリ貝』)

フィールド

: ジエノサイドキンググサーモン (ATK 2600)、ギガ・ガガギゴ (ATK 26

50)

：伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

俺の義妹、都を攫った邪神の手先（と思われる）、プライドとデュエルを行っている俺。奴のフィールド魔法『集中豪雨地帯』は非常に厄介。デツキのほぼ全てのモンスターが炎属性である俺は、あのカード1枚で戦略の大半を潰されてしまう。

だが、デュエルはモンスターだけで制するに非ず、だ。モンスターが駄目なら別の方面から攻め込めば良い！

「魔法カード『火炎査問』を発動！俺は墓地から炎属性モンスターを1体で特殊召喚し、相手はそれよりレベルが2つまで高いモンスターを手札か墓地より特殊召喚できない。俺は『F・S 鬼火のウイスプ』を特殊召喚！」

ちなみに、この効果ではモンスター効果は無効化され、守備表示にする事もできない！  
『はあっ！』

F・S 鬼火のウイスプ：☆2 / ATK 800 ↓ 400

「ならば私は墓地の『魚雷魚』を選択！」

魚雷魚：☆3↓2 / ATK 1000

来た来た。レベル2より2つまでレベルが高い奴はレベル4。そして恐らく奴のデッキにはレベル4なんて素直なレベルのモンスターはいない。『集中豪雨地帯』の効果で上級モンスターの召喚の手間を省くのがプライドのデッキのコンセプトのハズだ。

手札の枚数は、奴は4枚。この後も高速で上級モンスターを展開していくなら、1枚でも枚数は多い方がよい。

だから俺はプライドが召喚するのは『魚雷魚』だという事を読んでいた。水属性専用ドローソース『強欲なウツボ』の存在を考えると、手札の『砲弾ヤリ具』は取って置くだろうからな。

強欲なウツボ

【通常魔法】

自分の手札から水属性モンスター2体をデッキに戻し、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

## 火炎査問（オリジナル）

### 【通常魔法】

自分の墓地に存在する炎属性モンスターを1体攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手の墓地または手札に存在する特殊召喚したモンスターのレベル+2までのモンスターを1体攻撃表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、表示形式の変更もできない。

「『鬼火のウィスピー』を生け贄に『F・S フレア・デーモン』を召喚！」

F・S フレア・デーモン：ATK 2400↓1200

『ゴアアアアアアアアアッ！』

「む、だが、その程度、次のターンで破壊し、ダイレクトアタックに？げれば！」

「甘い！『フレア・デーモン』は生け贄素材に『F・S』と名のついたモンスターを使用した場合、そのモンスターを特殊召喚できる！」

「なんですと!?!」

赤い炎を背負う悪魔が地面に向けて火を吹くと、その炎はやがて形を成し『鬼火のウイスプ』となった。

『復活!』

鬼火のウイスプ：DEF 800↓400

「バトル! 『F・S フレア・デーモン』で『魚雷魚』を攻撃! 喰らえ ムデヴィルズ・

ヒート!!」

『ゴアアアアア、ガアツ!』

『フレア・デーモン』は背中の翼を羽ばたかせて熱風を起こすと、『魚雷魚』を吹き飛ばした。

「むぐう……、づ熱あああああつ!」

プライド：LP 3700↓3500

「まだまだ『フレア・デーモン』の効果は続く! こいつが相手モンスターを破壊した時、

墓地のカードを1枚、このターンに召喚・発動できない事を条件に手札に加える！」  
俺が加えるのは『強欲な壺』だ。ドロソースはあつて困る物じゃ無いだろう。

F・S フレア・デーモン（効果モンスター）（オリジナル）

星6

ATK 2400 / DEF 1300

炎属性 / 悪魔族

このカードが「F・S」と名のついたモンスターをリリースしてアドバンス召喚された時、リリース素材となったモンスターを特殊召喚できる。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、自分の墓地に存在するカードを1枚手札に加える事ができる。

この効果で加えたカードは、加えたターンに場に出す事はできない。

「ターンエンドだ！」



黎：LP 2700

手札：2枚（内1枚は『強欲な壺』）

フィールド

：F・S フレア・デーモン（ATK 1200）、F・S 鬼火のウイСП（DEF 400）

：魔法・罨無し

『F・S 鬼火のウイСП』は攻撃力1900のモンスターとのバトルでは破壊されないし、戦闘ダメージを始め、貫通ダメージや効果ダメージも受け付けられない優秀な壁モンスターだ。容易くこの防御壁は突破できないだろう。

「私のターン！」

——観客席

「なんとか持ち直したツスね、黎くん」

「ああ、だがあの防壁も突破されるのは時間の問題だろう」

翔の胸を撫で下ろすような言葉に同意しつつも、大地が油断ならないと釘を刺す。正

論だぜ、大地？

「黎……、頑張つて！」

分かつてるよ、フィオ。ここが踏ん張り所だからな。

——デュエルリング

「私は『強欲なウツボ』を発動！ 手札の『砲弾ヤリ貝』と2枚目の『魚雷魚』をデッキに戻してシャツフルし、カードを3枚ドロウします！」

やはり、手札にあったか、『強欲なウツボ』！

どんなカードが飛び出すんだ!? 何が来るんだ!?

カードを3枚手札に加えたプライドはニヤリ、と笑った。

この守りの陣を突破できるカードを引いたのか!?

「私は『伝説のフィツシャーマン』を召喚します！」

!?! しまった、攻撃力1900以下のモンスター!!

伝説のフィツシャーマン：☆5↓4 / ATK 1850 / DEF 1600

伝説のフィツシャーマン

星5

水属性／戦士族

ATK 1850 / DEF 1600

フィールド上に「海」が表側表示で存在する限り、このカードは魔法の効果を受けず、相手モンスターはこのカードを攻撃対象にする事はできない。

「さて、ここで総攻撃を仕掛ければ私の勝ちです。覚悟は宜しいですか？」

「ッ、ぐー！」

「まずは『伝説のフィッシュャーマン』で『F・S 鬼火のウイスプ』を攻撃です！」

鮫(?)に乗った男が手にした銚もりを投擲する。『ウイスプ』が炎のバリアを展開するよりも早くその攻撃が『ウイスプ』の身体を貫通した。

『ぐあああつー！』

『ウイスプ』！』

『F・S 鬼火のウイスプ』撃破！ 続いて『ジェノサイドキングサーモン』で『F・S

フレア・デーモン』を攻撃！』

「ぐあつー！」

巨大なシャケが突進を仕掛ける。

ジェノサイドキングデーモン

本家をを超える攻撃を喰らい、追い打ちとば

かりに鋭い牙が悪魔を噛み砕く。成す術無く『フレア・デーモン』は破壊され、爆発。そ

の衝撃が強力な突風となって俺を吹き飛ばした。

黎：LP 2700↓1300

「グボツ!？」

壁に叩きつけられ、口の中に鉄の味が広がる。体内を探してみると、成程、内臓が幾つか、今の衝撃で破裂している。

破裂という言葉で風船を思い浮かべるかも知れないが、別にあんな派手に飛び散る訳では無く、穴が衝撃で空けば充分に破裂だ。

『マズイ！ ダイレクトアタックが通ったら負けだ!』

『黎!』

『キバれえ!』

『頑張れエ!』

グッ、頭も打ったか……？ グラグラするぜ……!

「止めです。『ギガ・ガガゴ』で直接攻撃。死になさい、*“騎士”*の魂よ!」

『グガアアアアアッ!』

鋭い爪が俺を斬り裂かんと振り上げられ、トカゲもどきが突進して来る。喰らえば、

体はザツクリと斬られるだろう。

だがな、プライド。

俺は都を取り戻すまで、死んでも死にきれないんだよ！

「ぼ、墓地の『フェイク・ガードナー』の、モンスター効果！ プレイヤーがダイレクトアタックを受ける時、墓地からこのカードを、特殊召喚できる！」

墓地から白い光を発せられ、フィールドに細長いバルーンを持った道化師が現れる。

フェイク・ガードナー：DEF 2000

「攻撃対象をそのモンスターに変更です」

『グジョオオオオオオオッ！』

鋭い爪の一撃で、道化師は斬り刻まれた。

再び爆風が俺を襲う。

フェイク・ガードナー（アニメオリジナル・効果モンスター）

星4

地属性／戦士族

ATK 0 / DEF 2000

このカードが自分の墓地に存在する場合、相手モンスターが直接攻撃時に自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚されたこのカードが破壊された場合、ゲームから除外される。

「ぐっ……！……！……ぐぐあつ……！……！」

ぐ……、マジイかも。出血が止まらない。肉体は俺の制御下にある筈なのにコントロールが効かない。それだけ弱ってる証拠か。うぐ……っ！

「しぶといですが……、身体の方は限界ですか？」

「ホザけ、アホンダラがあ……！ まだまだ俺は、負けてねえよ！」

「そうですか。では死ぬまで傷つき続けなさい。リバースカードを1枚伏せ、ターン終了です」

プライド：LP 3500

手札：3枚

フィールド

：ジエノサイドキングサーモン（ATK 2600）、ギガ・ガガギゴ（ATK 26

50)、伝説のフィッシュャーマン(ATK 1850)

：伏せカード2枚、集中豪雨地帯(フィールド魔法)

「俺の、ターン……」「黎！ もう止めるんだ！……、ファイオ？」

デッキトップに手をかけ、次のカードを引こうとした矢先、ファイオがストップをかけた。

「もう、止めて……！ キミの体はもうボロボロだ！ これ以上続けてたら本気で死んでしまう！ お願いだから……、もう、デュエルを、止めて……ッ！」

その言葉は涙と共に紡がれた。本気で俺を心配してくれている。

とても嬉しい。この異形の能力の所為で俺達義兄妹は人々から忌み嫌われていた。話しかけようとする物好きも殆どいなかった。故にこうして心配してくれる人なんて誰もいなかった。

ボロボロと零れる涙は演技じゃない。悲痛な声は偽物じゃない。

でも、だからこそ、止める訳にはいかない。

「……………、ドロー！」

「黎！」

「俺を、信じて……ッ！」

でも俺は、ただそのくらいしか言えなくて。

だから背中では語る。俺は大丈夫だって！

「俺は、モンスターをセット……！ リバースカードをセットして、ターンエンド……！」

黎：LP 1300

手札：1枚（『強欲な壺』）

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚

「ふふ、は、ははははははっ！ 今度こそ成す術無しですか！ 行きますよ、ドロロー！ 私は魔法カード『浮上』を発動。墓地のレベル3以下の魚族・海竜族・水族モンスターを1体、表側守備表示で特殊召喚します。」

出でよ、『魚雷魚』！」

魚雷魚：DEF 1000



わざわざモンスターを特殊召喚したって事は、来る！ 上級モンスターが！

「そして今特殊召喚した『魚雷魚』を生け贄に捧げ、『海リハイアドラゴン 龍—ダイダロス』を生け贄召喚！」

——ッ！ よりにもよってフィールドを一掃するモンスター!?

アレを防ぐ為の手段はいくらでもあるが、今の俺には無い！

海龍—ダイダロス（効果モンスター）

星7

水属性／海竜族

ATK 2600 / DEF 1500

自分フィールド上に存在する「海」を墓地に送る事で、このカード以外のフィールド上のカードを全て破壊する。

「ふふふ、さて、このモンスターと我がフィールド魔法『集中豪雨地帯』の相性、分かりますよね？」

「……………『ダイダロス』の能力は、フィールド魔法にまで影響する。それを見越して『マインフィールド』なんかを場に出しておくモンだ。だが……………」

そう、『集中豪雨地帯』は『海』としても扱い、その破壊は自分のカードでも相手のカードでも発動する。

「そう。私のデッキにはもう一枚『集中豪雨地帯』が眠っています。つまり、こちらの痛手は少なくて済むのです」

マインフィールド（効果モンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1500 / DEF 1500

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードがフィールド上から離れた時、自分の墓地に存在するフィールド魔法カード1枚を手札に戻す事ができる。

「ふふふ、さて、お別れです。この状況では、その効果も不必要でしょう。せめて、あの世でああなたの義妹と再会する事を願うんですね。

『ギガ・ガガギゴ』でセットモンスターを攻撃！」

「ううっ！」

爪が四度煌く。盾を持った男が斬り裂かれた。

『海龍―ダイダロス』、ダイレクトアタック！ 止めです “リヴァアイア・ストリーム”

！！

東洋の龍の口から発せられた怒涛の水流が押し寄せる。流されれば粉碎骨折では済まないだろう。

だが、幕引きにはまだ早いぜ？

ジャック・アトラス曰く『主役のセリフ無しに舞台の幕は下りない。そして主役はこのオレだ！』。

「リバースカード、オープン！ 速攻魔法『異次元からの埋葬』！ 除外された、モンスターを、3体まで墓地に戻せる！ 今我が元に、『ネクロ・ガードナー』、『フェイク・ガードナー』！」

異次元からの埋葬

【速攻魔法】

ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に

戻す。

「『ネクロ・ガードナー』のモンスター効果で、その戦闘を無効にする……っ！」

2度も悪いな、『ネクロ・ガードナー』。

再び黒い武者が現れ、激流を防ぐ。

「『ジェノサイドキングサーモン』！ これなら例え『フェイク・ガードナー』を出しても『伝説のフィツシャーマン』の攻撃で止めが刺せます！」

確かに、『フェイク・ガードナー』の守備力は2000だ。『フィツシャーマン』では破壊出来ないが、『ジェノサイドキングサーモン』で突破すればフィニッシュの一撃が通る。

「蘇れ、『フェイク・ガードナー』！」

「叩き潰しなさい、『ジェノサイドキングサーモン』！」

『へっへえ〜！』

『グジャアアアアアッ！』

再び現れた道化師。手にしたバルーンを膨らませて攻撃を受ける緩衝材にしようとする。

ジェノサイドキングサーモン：ATK 2600

フェイク・ガードナー：DEF 2000

『駄目だ！ 突破される！』

『危ない、黎！』

『レイイ！』

！  
心配無用だぜ！ さっきアイツ自らがこの状況を突破できるカードをくれたからな

「墓地の『シールド・ウォリアー』のモンスター効果、発動！ 墓地のこのカードをゲムから除外し、モンスターの戦闘破壊を、無効にする！」

シールド・ウォリアー（効果モンスター）

星3

地属性／戦士族

ATK 800 / DEF 1600

戦闘ダメージ計算時、自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する事ができる。

自分フィールド上に存在するモンスターはその戦闘では破壊されない。

コイツは『ギガ・ガガギゴ』であいつがこのターン最初に攻撃して破壊したモンスター。止めを刺す機会を自分で潰す事になるとは皮肉だな、プライド。

盾を持った戦士が道化師の前に半透明の姿で現れ、巨大なシヤケの突進を受け止めた。

うーむ、流石主人公の使うモンスターズ。優秀な連中ばかりだ。

「はあ……、はあ……、どうする……？ 残った『伝説のフィツシヤーマン』じゃあ、『フェイク・ガードナー』は、倒せないが？」

「……………ツ、本っ当にどこまでもしぶとい男だなあ！ ターンエンド！」

プライド：LP 3500

手札：2枚

フィールド

：ジエノサイドキンググサーモン（ATK 2600）、ギガ・ガガギゴ（ATK 2650）、海龍―ダイダロス（ATK 2800）、伝説のフィツシャーマン（ATK 1850）

：伏せカード3枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「お、れの、ターン……………」

デツキのカードに手をかけ、そこで俺の視界はグルリと回った。倒れた、と気がついたのは痛みを認識した時だった。

チクシヨウ……。ダメージが通らなくてもモンスターが破壊された時の衝撃が身体に堪え始めているのか……………！

ググ、と身体を無理矢理起こす。ここで無茶しなくていつ無茶するんだ！

「黎！ どうしてなんだ！」

ファイオが後ろから叫び声をあげた。

「妹っていつても義理なんだろう!!? 血は繋がってないんだらう!!? どうしてそこまでボロボロになってまで助けようとするんだ!?!」

それともキミにとつては命よりも彼女が大事なのか!?! 笑ってキミや皆を傷つけたあの娘の事が！ 自分の命も大切にする余裕が無い程なのか！ ねえ！」

……量は少ないが、口どころか体中から出血しているのが分かる。恐らく今の俺は血ダルマだ。今倒れた事も相まって見ればきつと、俺がもう戦えない程傷ついているように見えるんだろう。そしてそれは、正しい。

いくら身体を修復しても、出血やダメージからは逃れられない。ましてや闇のゲーム。物理的なダメージから免れる事はできないし、今の俺のダメージの総量は常人なら死んでいてもおかしくないくらいだ。

「ドロー……！」

「黎！ 聞いてよ！」

「聞いているっ！」

フィオに負けなくらい声を張り上げて、俺も言う。これは、俺にとっては譲れない一線だから。

「今、無茶しなくて、いつするんだ……！ それに、血が繋がってるとか、繋がってないとか、んなモン、関係、無エんだよッ！」

人が、誰かを助けるのに『助けたいから』以外の、理由が要るのか！」

「！」

「そうじゃなくとも……、例え、義理であつて、も、兄や姉が、弟や妹を助けるのは、先に生まれた者として、当たり前前の事だろ！」



喉が裂け、血が出るのを感じる。やはり修復が間に合っていない。

でも、止めない。アイツが、フィオが俺の事をどう思っているのかは知らない。都が俺をどう思っているのかも知らない。だが、そんな事俺にとってはどうでもいい。あの日の誓いを破る事は自分が許さない。

「それに、同じ血は繋がっていないが、同じ血なら通っている！」

「え!？」

「魔法カード『強欲な壺』を、発動！ デツキからカードを2枚、ドローするッ！ う、

ごぶぐツ!!」

ビシャッ！ と血を吐く。体内での血の生成が追いつかない。材料も足りなくなっ  
て来ている。

知った事か！

「続いて、『貪欲な壺』を発、動ッ！ 墓地のモンスターを、5体選択してデツキに戻し、  
シャッフル。その後、カードを2枚、ドロー！」

俺は、墓地の『鬼火のウイスプ』、『マグマドラゴン』、『バーナーズ・キャノン』、『バー  
ンクロス』、『フレア・チアガール』を、選択、っ！」

強欲な壺

## 【通常魔法】

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

## 貪欲な壺

## 【通常魔法】

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。  
その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

これで4枚のカードを補充できた。『貪欲な壺』は墓地からの再生を放棄するが、モンスターを再利用できるという利点も兼ね備える。デッキのコンセプトによって使われるか否かが分かれるカードだ。

「……………」

俺は引いた4枚のカードを静かに見つめる。

1つ1つが光のラインで繋がり、勝利への方程式を構成する。

『F・S マグマドラゴン』

『F・S グリル・ゴーレム』

『炎の大津波』

『威嚇する咆哮』

問題は『グリル・ゴーレム』だ。効果では無い。その種類だ。

F・S グリル・ゴーレム（チューナー・効果モンスター）

星3

ATK 1300 / DEF 1100

炎属性 / 岩石族

このカードをシンクロ素材にしたシンクロ召喚に成功した時、墓地のカードを1枚手札に加える事ができる。

そう『チューナー』だ。あの炎の力はどういう仕組みか、シンクロモンスターも、エクスシーズモンスターも入っていた。まあ存在だけなら、少なくとも5000年前の時点で『地縛神』と『スターダスト・ドラゴン』達シンクロモンスターが戦っていたんだか

ら不思議では無いだろうけど。

しかし、シンクロモンスターとエクシーズモンスターは未来の力。こんな大観衆の元で使つていいものなのか。

いや、迷っている暇は無いな。『グリル・ゴーレム』はシンクロ素材にしないと効果を発揮できない。それに、今やるべきなのはプライドを倒す事。なら、躊躇つてはいけない！

修復がなんとか形を成して来たしな！

【BGM：遊星のテーマ】

「俺は、チューナーモンスター『F・S グリル・ゴーレム』を召喚！」

『ゴゴオツ！』

グリル・ゴーレム：DEF 1100↓550

「『チューナー』!? 何それ!？」

『ち、チューナーって、聞いた事ねえぞ!？』

『何なのかしら、アレ？』

「続いて速攻魔法『炎の大津波』を、発動！ このカードは、自分の場の、炎属性モンスターの攻撃力の合計が、相手のモンスターの攻撃力の合計を下回る時、手札の『F・S』を1体特殊召喚し、相手の場の炎属性以外のモンスター1体を、破壊する！ 俺は、『海龍—ダイダロス』を、選択ッ！」

「クッ！ ならば私はリバーズカードの『リボーン・パズル』を発動！ これで『ダイダロス』を蘇生します！」

炎の大津波（オリジナル）

【速攻魔法】

自分フィールド上の炎属性モンスターの攻撃力の合計が、相手フィールド上の炎属性以外のモンスターの攻撃力の合計を下回っている時発動可能。

相手フィールド上の炎属性以外のモンスター1体を破壊し、手札の炎属性モンスターを1体特殊召喚する。

相手フィールド上に炎属性モンスターが存在する場合、このカードは発動できない。

リボーン・パズル

## 【通常罫】

自分フィールド上のモンスター1体のみが

カードの効果によって破壊された場合、その1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

紅蓮の巨壁が押し寄せ、瞬時に『ダイダロス』を呑み込み、焼き尽くした。しかし、光と共に復活を果たされる。

チツ、できればこれでフィールドを制圧したかったんだが……。

「そして『F・S マグマドラゴン』を特殊召喚、する！ 更に、効果で、『バーナーズ・キャノン』を、特殊、召喚ッ！」

さあ、これで役者は揃った。

まずは厄介なフィールド魔法を潰す！

『バーナーズ・キャノン』のモンスター、効果、発動！ 1ターンに1度、相手の魔法か、罫を1枚、破壊して、300ダメージを与える！  
「バーニング・シヨット」！  
対象は『集中豪雨地帯』！」

肩のバズーカが白い炎を吹く。この光景の説明も飽きてきたな。

プライド：L P 3500 ↓ 3200

「ま、学ばない方ですね！ デッキから同名カードをサーチして発動！」

「だが、ダメージは通る上に、もう同名カードは、無いッ！」

「!? しまった!?!」

これでサーチは封じた。『海龍—ダイダロス』は迂闊に効果を使えなくなったというワケだ。

「さあ、LADIES AND GENTLEMEN !! 特別にこの召喚を見せてやる! 目エ見開いて見逃すなよお!!」

『(ザワザワザワザワ……!!)』

おードヨめいてるドヨめいてる。

ちなみにこのディスクに有効なのは夜中に試して実証済みだ!

「俺は、レベル4の『F・S マグマドラゴン』に、レベル3の『F・S グリル・ゴーレム』を——、チューニング！」

『チューニング?』

『何だそりゃ!?!』

光輝いた『グリル・ゴーレム』が3つの星となって虚空へ登り、そして3つのエメラ

ルドグリーンリングのリングとなって並ぶ。そしてその中へと『マグマドラゴン』が飛び込み、輪郭線と4つの星を残して姿を消し、やがて星だけになる。

「な、何が起こっている!?!」

『何だコレ! すっげえワクワクする!』

『これは……』

『黎、キミはやっぱり……!』

「燃え盛る焰、水面を斬り裂く剣とならん! 希望が溢れる明日となれ! シンクロ召喚!!」

灰塵に帰せ! 『F・S バーニング・ブレードガイ』!!」

『ハアツ!』

『おおおおおおおおおっ!』

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 2800

光と共に飛び出した騎士は銀ではなく美しい青の軽い鎧を装着していた。鋭く長い



剣を持ち、頑丈な盾を持たずに両手で剣を構えている。

「これが、未来の召喚方法の内の一つ、シンクロ召喚だ！」

「で、ですが、そのモンスターも炎属性なのでしょう！ ならば『集中豪雨地帯』の影響

で攻守が半減します！」

「いや。生憎と『バーニング・ブレードガイ』は相手のコントロールする魔法・罠カード

の効果を受け付けけない！」

「何ですと!?!」

「そして『グリル・ゴーレム』をシンクロ素材にしたシンクロ召喚に成功した時、墓地のカードを1枚、手札に加える！」

F・S バーニング・ブレードガイ（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星7

炎属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 1700

「F・S」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは相手の魔法・罠カードの効果を受けない。

「厄介な……。しかし『ダイダロス』で場を一掃すれば問題はありません」

「まだ終わってない！ さあ、2つ目の未来の召喚を見せてやる！」

「何ですと!? しまった！ さっき奴は『1つ目の召喚』と……!」

『まだあるんですの!?!』

『凄い……。彼って何者?!』

「俺はレベル4の『フェイク・ガードナー』とレベル4の『バーナーズ・キャノン』を、オーバーレイ！」

『オーバーレイ!? 今度は何が起こる!?!』

『ワクワクが止まらないぜ!』

オレンジと赤色の光と化した『フェイク・ガードナー』と『バーナーズ・キャノン』が1つに混ざり、銀河の様な渦を構成する。

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

渦の中心から光が発せられ、眩い光が辺りを包む。その中に何者かがいるのが、光越しに分かる。

「灼熱の棘を携え、曇天を穿て！ エクシーズ召喚！ 現れる！」

『F・S ヒート・ステインガー!!』

『ハアツ、テリヤアツ!』

『オオオオオオオオオオオオオツ!』

F・S ヒート・ステインガー：ATK 2200↓1100

光の中から手の指の間に赤い針を持った上裸の男が現れる。筋肉質な体にポロポロの長ズボンを穿いている。

「俺は『ヒート・ステインガー』のモンスター効果発動! このカードは1ターンに1度、自身のオーバーレイ・ユニットを1つ墓地に送る事で、2体までの相手モンスターの攻撃力を800ポイント下げ、効果を無効にする!」

「お、おーば……?」

「エクシーズ素材となったモンスターは墓地には送られず、エクシーズモンスターの下に置かれる。コイツを使って効果を発揮するのさ」

俺が墓地に送るのは『フェイク・ガードナー』だ。自身の効果での蘇生がリセットされたので、ゲームからは除外されない。そもそも『フェイク・ガードナー』の除外は破壊された時だけだからね。

F・S ヒート・ステインガー（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）  
 ランク4

炎属性／戦士族

ATK 2200 / DEF 2000

「F・S」のレベル4モンスター×レベル4モンスター

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を墓地に送る事で、エンドフェイズまで2体までの相手モンスターの攻撃力を800ダウンさせる事ができる。対象となったモンスターの効果はエンドフェイズまで無効となる。

ORU : 2 ↓ 1

「対象は『海龍―ダイダロス』と『伝説のフィッシャーマン』だ！  
 フアアア・ニードル！！」

『我が灼熱の棘、その身を以て味わうが良い！』

『ヒート・ステインガー』の針が紅の焰に包まれる。その針を投擲すると、刺さった針が燃え始めた。当然モンスターも、だ。

海龍―ダイダロス：ATK 2800↓2000

伝説のフィツシャーマン：ATK 1850↓1050

「む、効果を無効にされては『フィツシャーマン』も攻撃の対象にされてしまう！」

「そういう事だ！ 行け！ 『バーニング・ブレードガイ』で『海龍―ダイダロス』を攻撃だ！ 『フレイルム・スラツシャー』!!」

煉獄を宿し、巨大な炎を上げる剣を掲げ、一気に突進する『バーニング・ブレードガイ』。『海龍―ダイダロス』は水流を吐き応戦しようとするがヒラリと躲し、正中線で真つ二つに斬り裂いた。斬られたその断面から炎が吹き出し、『ダイダロス』を火ダルマにして焼き尽くす。

巨大な海へビもどきは真つ黒な消し炭になり、消滅した。

「ぐわあつ！ つてか熱ッ！ アチャ、アチヂヂヂッ！」

プライド：LP 3200↓2400

「続けて『ヒート・ステインガー』で『伝説のフィツシャーマン』を攻撃！」

// ねっしんげき  
熱針撃 //

!!

『ヒート・ステインガー』の持っていた針の内一本が太い炎の槍となり、投擲される。『伝説のフィッシュヤーマン』は回避しようとするが間に合わず、胸元をザックリと貫通した。

途端に全身が灼熱の業火に包まれ、大爆発を引き起こした。

「うぐあつ！ だ、熱いイッ！」

プライド：LP 2400↓2350

「更に『グリル・ゴーレム』の効果で手札に加えた魔法カード『強欲な壺』を発動！ これでカードを2枚ドロウする！

……リバースカードを2枚セットし、ターンエンドだ」

黎：LP 1300

手札：2枚

フィールド

：F・S バーニング・ブレードガイ（ATK 2800）、F・S ヒート・ステインガー（ATK 1100）

：伏せカード2枚

勿論伏せた内の1枚は『威嚇する咆哮』。これで次のターンまでの身の安全を確保するつもりだ。

【BGM終了】

これで巻き返せる。そう思っていた。

「私のターン……………ッ！ く、ククク……………、く、クカカカカカカアッ！」

「!?」  
何だ？ トチ狂ったか？

いや、違う。多分、キレたんだ。来る！

「カカカカアッ！ 手を抜いて甘いプレイングをしていたのが間違いだった！ 最初か全力で行けば良かったんだ！ エンドフェイズに罠カード『フィッシュャーチャージ』を

発動しておいた！ 私の場の魚族モンスター1体を生け贄にフィールド上のカード1枚を破壊し、場のカードを1枚破壊イ！」

『威嚇する咆哮』が！」

しまった！ 効果発動の前のタイミングで潰されちゃ攻撃を止められない！

威嚇する咆哮

【通常罨】

このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

フィッシュヤーチャージ

【通常罨】

自分フィールド上に存在する魚族モンスター1体をリリースして発動する。

フィールド上のカード1枚を破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「サーモンをコストにした事でカードを1枚ドロウ！」

まずったな、フリーチェーンのカードだから自在に使えるって事は相手にもあてはまる。あっちもフリーチェーンのカードを伏せていたとはね……。クソツ！ 攻撃が来





超古深海王シーラカンス（効果モンスター）

星7

水属性／魚族

ATK 2800 / DEF 2200

手札を1枚捨てる。

1ターンに1度だけ、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃宣言をする事ができず、効果は無効化される。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが魔法・罫・効果モンスターの効果の対象になった場合、自分フィールド上の魚族モンスター1体を生け贄に捧げる事でその効果を無効にし破壊する。

超古深海王シーラカンス：ATK 2800 ↓ 3000

『攻撃力3000!?!』

観客が驚く。この世界じゃ3000でもデカイ方か。元の世界じゃ1万オーバーな



クソツ！ 攻撃力が2000程度のモンスターでも、今はとんでもない強敵だ……！  
 しかも『オイスターマイスター』は場にトークンを残す誘発効果持ち。『超古深海王  
 シーラカンス』との相性がバツチリのモンスターだ。

オイスターマイスター（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 1600／DEF 200

このカードが戦闘によって破壊される以外の方法でフィールド上から墓地へ送られた時、「オイスタートークン」（魚族・水・星1・攻／守0）1体を特殊召喚する。

レインボーフィッシュ（通常モンスター）

星4

水属性／魚族

ATK 1800／DEF 800

世にも珍しい七色の魚。捕まえるのはかなり難しい。



ガード・ブロック

【通常畏】

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

『ヒート・ステインガー』が水流に押し流され、しかし俺に直撃しかけたそれは白く光るバリアで防がれた。だが衝突と同時にヒビが入ったのだからあの吐き出した水の威力は凄まじいものだったのだろう。

「つと、危ない……!」

「危機を脱したと思うのか?」

「何?!」

『超古深海魚シーラカンス』が戦闘で相手モンスターを破壊した時、私は手札の速攻魔法『深海の超水圧』を発動!

このカードは私のレベル5以上の魚族モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時に発動する! そのカード以外の私の魚族モンスターの戦闘を放棄し、その数だ

け、相手の手札、場、墓地のカードをゲームから除外する！

私が除外するのは手札2枚、場の『F・S バーニング・ブレードガイ』、墓地の『フェイク・ガードナー』！」

緑のカードが発動した。バトルフェイズ中でも発動できる速効魔法。そのイラストには『シーラカンス』を筆頭とした数々の大型の水棲モンスターがペシヤンコにひしやげている姿があった。

「だが、『バーニング・ブレードガイ』は相手のコントロールする魔法・罠カードの影響を受けない！」

「残念ながら、『深海の超水圧』が発動した時、全てのカード効果は無効となるのだよ！」

「何だと!?!」

『深海の超水圧』のイラストから並々ならぬ量の水流が流れ出て来る。『バーニング・ブレードガイ』は剣を斜めに構えて持ち堪えるが、やがてその水量に負けて押し流された。

更にその激流は止まる事無く俺に襲いかかった。

「そして除外したカード1枚につき相手に300ポイントのダメージを与える！」

「うぐわ、ああああああああっ！」

深海の超水圧（オリジナル）

【速攻魔法】

自分フィールド上のレベル5以上の魚族モンスターが相手フィールド上のモンスターを戦闘で破壊した時に発動できる。

発動ターンに戦闘を行っていない自分の場の魚族モンスターは戦闘を行えず、行えない魚族モンスターと同じ数だけ相手の手札、場、墓地のカードをゲームから除外する。除外したカード1枚につき、相手に300ポイントのダメージを与える。

この効果が発動した時、相手の魔法・罠・効果モンスターの効果は無効となる。

黎：LP 1300↓100

激流が俺をリングから押し出す。咄嗟に金属化した腕を交差して衝撃を和らげようとするが、努力も空しく威力は致命傷の域を脱さない。場外へと吹き飛ばした水流はそのまま壁に俺を叩きつけ、圧縮でもするかのように止まない。

「おい……………、ぐぐぶ……………ッ！ がっ！」

壁にヒビが入って身体がめり込む。ミシミシと腕が軋む。それでも水流は増水した川のように止まらない。



更にとんでもない事が聞こえた。

「パワーアップだ」

プライドのその指示と共に水の柱は更に勢いを増し、太く、強くなる。

そして、体の内側でベギツ、という嫌な音が聞こえた。

「うぐがば、ア……………ッ！」

身体の内側から血が凄いい勢いで噴き出したのを感じ、俺の意識はそこで真っ黒な世界に落ちて行つた。

S I D E : 無し

ピチャ、ピチャ、と水滴の落ちる音以外、何の音もしない、静まり返つた会場。

黎は、ヒビ割れた壁の前に俯せに倒れていた。焦点の合わない、瞳は虚ろで、何も映していない。

激流は1分あまり続いた。深海の水圧を語るその強さは重機ですらひしゃげる程。無論、人間が耐えきれぬ訳が無い。

黎は人間の姿を保っているが、辺りの血の池となり、彼の皮膚は裂け、骨が覗いている部分もある。意識は無いだろう。死んでいるかも知れない。

「ふふふ……」

プライドが見下したような瞳で遠くに俯せで倒れている黎を見る。

「デュエル続行不能につき、私の勝ちで宜しいですか？」

そう言った後、首を横に振った。

「ああ、もう聞こえてませんか。ははは……」

シン、と静まり返った会場に、その言葉は無情に響き渡った。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 10：月一試験―了・諸刃の爆撃

SIDE：無し

リングではプライドが黎を嘲笑っている。フィールドの端で俯せに倒れ、ドクドクと血を流している黎の瞳には光が差し込んでいない。腕からは赤い血が塗ってある白い骨が覗く。

観客達は茫然としている。デュエルで人が死ぬ。その事実を受け止めきれず、脳がフリーズしているのだろうか。

「黎、黎！ 死んじゃダメだ！ レエエエエイツ！」

「起きろ！ 起きてくれエ！」

「黎くん、目を開けて下さいッス！」

「死ぬなあ黎！ こんなトコで死んだら、オレよりカッコ悪いゾ！」

「天上院くん、担架を！」

「分かったわ！ 黎、死んだら許さないからね！」

その傍らで必死に黎を揺り起こすフィオ達。しかし、反応は無い。完全に意識を失い、或いは死んでいるかも知れない。

それでも少女達は懸命に少年に呼び掛けた。彼が生きている事を信じ、再び瞳に光が差すその瞬間を求めて。

そして果たして、その努力は結ばれた。

「ぐ、おお、お……………つー！」

「これはこれは……………。よもや生きていて、デュエル続行の意思まであるとは…………！」

ガクガクと痙攣する腕で産まれ立ての小鹿の様に必死に立ち上がる黎。誰が見ても痛々しいその姿で、血を吐きながらも立ち上がる。

少しでも負担を軽くする為、軽金属で血管や皮膚を治し、重金属を鉄球にして地に放る。

なけなしの体力を掻き集め、鉛の如く重い左腕を持ち上げる。

「れ、黎！ もうデュエルは止めよう！ これ以上は本気で死んじゃう！ 早く、早く治

療を……！」

フィオのその言葉に、黎は黙って首を横に振った。

「ど、どうしてさ!? 命が危険なんだよ!？」

「セーフティ、ライン、なら……。既に、割っている……。次、意識、を、手放した、時  
が、俺の、最期だ……」

「そんな!」

愕然とした表情をするフィオ達。

「プライ、ド……! 俺は、まだ、死んで、無い……! 決着、を、つけるぞ……!」

「はっ! その体で何ができる! 私の場合には『超古深海魚シーラカンス』がいる!

『集中豪雨地帯』もあれば壁モンスターもいる! 貴様のライフは100フラット、対し  
私は2000以上残っている! 足掻けるモノならば足掻いてみる!

第一何故そこまでする! 所詮は義理の妹、命を賭ける義理があるのか!？」

「……、血が、繋がってる事が、そんなに、偉い、のか……?」

俺達は、絶対、に、幸せ、に、なる、って、誓ったんだ……! あいつ、が、不幸、な、  
まま、死んで、しまうなら……、俺は、幸福も、命も、いらねえ……っ!」

「……ターン終了!」

プライド：LP 2350

手札：0枚

フィールド

・超古深海魚シーラカンス（ATK 3000）、レインボーフィッシュ（ATK 2000）×2、オイスターマイスター（ATK 1800）×2

：集中豪雨地帯（フィールド魔法）

SIDE：黎

……、都。悪い。

どうやら俺は、ここまでらしい。ゴメンな。

助けに行くとか誓っておいて、こんな情けないカタチで死んでしまう。

世界は、どこまで行っても、俺達の事が嫌いなのか、な。

「はあ、はあ……、俺、の」

グルン！

視界が暗転しかける。飛びかけた意識を辛うじて引き留める。

まだ、死ねない！　せめて、アイツだけでも、倒す！

俺の為に、都の為に、精霊界の為に、友の為に。そして、フィオの為に！  
ははっ、何時の間にかアイツの存在がでつかくなってやんの。

「黎。戦うんだね」

「ああ」

フィオの短い問い掛けに、俺は静かに答えた。

……？　どこかで聞いた事ある声のような気がするような……、しないような？

グイ、と右肩が持ち上がる。フィオが肩を貸してくれているのか。

だけじゃ無い。体のあちこちが十代達の手によって支えられている。

お前ら……。

「お、重いね、キミ……」

「平時で、400キロ、今でも、1000キロは、超える……」

「体の内側に、金属でも、仕込んでるのかい……？」

「ああ」

重いはずだよ、とボソリとこぼす。悪いな。

「頑張れえ！　遊馬崎い！」

「負けるなあ！」

『義妹いもうとさんを取り返して!』

へへ……。皆の応援が、心地良いなあ……。

「行く、ぞ。これが、俺、の、俺達の、ラストターン……ッ!」

『ドロー!』

自然と、皆と呼吸が合った。

最期に引いたカード、それは……。



「魔法カード、発動……………! 『天よりの宝札』……………!」

「こ、このタイミングで最強のドロソース!?」

「化物を、ナメるなよ……………!」

ははっ、壊れカードも、自分が引き当てると頼もしいな。

天よりの宝札（アニメ・漫画効果）

【通常魔法】

互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードを引く。

俺もプライドも手札は零。引くカードは6枚。さあ、勝負だ！

へへっ、ありがとよ。

「俺は、『F・S ボム・ボム・レゲエ』を、召、喚……………っ！」  
『ヒヤッハー！』

F・S ボム・ボム・レゲエ：ATK 400↓200

「一気に、終わらせて、やる……！ 速攻、魔法……、『焼夷弾』を、発動……っ！

場の『F・S』1体を、ゲーム、から、除外して、互いのプレイ、ヤーは、手札と場のカードを、全て、捨てる……」

『ひゃっはあ！ 一世二代の、このドでかい花火を受けてみるお!!』

「ぬ！ これでは……、『シーラカンス』の効果が使えない!？」

そう、この効果は『全ての手札と場のカード』という不特定のカードを対象に選ぶ魔法カード。『シーラカンス』は自分を対象にするカード効果しか無効にできない為、その効果は使えない。

だけじゃ無いぜ？ こいつには追加効果がある。

とある、諸刃の効果が、ね。

「……………そして、自分が、送ったカード、1枚に、つき……、300ポイント、の、ダメージを、受ける……!？」

「な!？」

「俺は、手札、4枚、だから……、1200ダメージ……!？」

「わ、私はモンスター5体、フィールド魔法に手札6枚……、計12枚で……、3600ダメージだとお!？」



黎 : LP 100 ↓ 0

プライド : LP 2350 ↓ 0

黎 : DRAW

プライド : DRAW

当然、引き分けという形で。



「明日香さん、十代くん、手伝って！」

「はい！」

ぐっ、どうやら世界は、俺の事を見捨てた訳じゃねえらしいな。

「くくく……、まさか、引き分けとは言え、私のライフポイントが尽きるとはね」

「引き分けの時の条件、つけて、いなかっただな」

現在、鮎川先生が持つて来た大量の輸血パックと点滴を体中に刺し、俺は何とか一命を取り留めている。普通に喋るくらいはできるが、横になっていないと正直辛い。フィオヤ十代の介抱も必要だ。

ついでに言うとな、全身点滴や輸血パックの針だらけ。今ならハリネズミとでも呼べるかも知れない。

ククク、とプライドは黒煙を体中から上げながら笑う。

「二応、メタを組んだこのデッキ相手にあそこまでやれたのだ、我らお前の義妹の城の姫に会わせる

事は出来ないが、ヒントくらいはくれてやるさ」

「ヒント……?」

「そうだ。我らが邪神様復活の手順だ!」

ゲタゲタと笑いそうな雰囲気醸し出し、プライドはその鋭い眼を大きく見開いて俺達を睨む。

「我らが邪神様は姫の体を依り代に闇の力を取り込む! 人の身で耐えられるギリギリまで闇の力を蓄え、依り代の肉体が崩壊し次第自身で吸収の作業に取り掛かる!」

つまり、お姿を現した時、貴様の大切な義妹はこの世には既に存在していないのだよ!」

「闇……」

「肉体がどれほど頑丈でも、闇は更にその上を行く! 葬式も挙げられぬ体になるとは、

不憫だなあ!」

「……、止められるんだな?」

「ほう、何故そう思う?」

「勘だ。それに、邪神が力を蓄えきる前に都を取り戻して邪神を引っぱがせば、都は無事、だろう?」

「ふふふ……。正解だ」



ニタア、とプライドは笑う。まるで絶好の獲物を見つけたかのように。

少なくとも、好敵手や邪魔者を見る目ではない。

「私を含め、七つの大罪は文字通り7人いる。我らの役目は、邪神様の護衛。」

その7人が闇のゲームで敗北し、命を落とせば邪神様をお守りする者が不在となり、邪神様自らが戦いの場に赴きなされる。そこで更に闇のゲームに勝利すれば、或いは、な」

要は不確定、という事か。

一口に闇のゲームと言っても、その中身は様々。肉体的にダメージを与えるものや、ダメージと同時に体が闇に喰われていくもの、敗北した後の罰ゲーム。色々だ。

もし、敗者の精神を破壊するものならば、都に勝利し邪神の人格を破壊できたならば、まだ希望はある。

だが、闇のゲームを展開するのは恐らく敵側。多少でも知能があれば、負けた時のデメリットを考えれば、敵がその類を仕掛けてくるとは考え辛い。

「まあ、せいぜい足掻き、絶望を糧として我らに喰われるのだな。ははははは！」  
クルリ、とプライドは背を向ける。

また来る。そう言い残して、奴の姿は消えた。

「都、ゴメンな……。義兄ちゃん、助けてやれなかった……。！ ゴメンな、本当にゴメンな……。っ！」

静寂を帯びた会場で、俺の静かな懺悔の泣き声が響き渡った。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 11 : 痛感する力不足

## SIDE : 黎

「だから、このデツキの特徴を活かしたいのなら、もう少しモンスターを抜いて……」

現在、俺は医務室のベッドの上で上半身を起こして、一人のイエロー生のデツキ構築の相談を受けている。

プライドとの戦いの後、俺は医務室のベッドの1つを丸々一晩占拠。400キロの体重をよく支えられた物だと感心したが、髪の毛がベッドの淵から垂れ下がっていた。最後の爆撃の時に金属を髪の毛に集中したので、こうして髪だけベッドに乗せなければベッドに壊れる程の負担はかけないという訳か、と納得したのは余談だ。

あの戦いの後、このアカデミアを去ろうかと本気で考えた。何故かって？

当然だろう？ こんな人間じゃ無い化物を仮にも教育機関においておく訳にもいかないでしょうが。教師は生徒の安全を図る以上、俺みたいなモンスターを排除する風に考えるのが普通だし、生徒だって人間じゃ無い奴と仲良くしたり、机を並べたりするのは嫌だろうしな。





——夜・廃寮

「ぬううううう、バレてしまつてえは、仕方が無いいいいいいつ！ 逃げるのみだあ！」

今？ タイタンと十代のデュエルの途中。で、イカサマがばれてタイタンが逃亡図るトコ。十代、そして原作と違って俺も排除の対象らしい。

目的は十代を止める事。逃亡を許せばタイタンが闇に飲まれる事も無いだろう。

うん、若本ボイス？ 俺は好きだけど今は関係無いよ。

「待てえ！」

「待つのはお前だ、十代」

追い駆けようと走り始めた十代の肩を掴む。

「な、何でだよ、黎！」

「深追いする必要は無い。明日香は無事だし、お前の『フェザーマン』はあいつが走り出した時に地面に落ちた。」

追い駆けても得なんざ無い。ここは明日香をつれてこの廃寮から撤収しよう。見つかるかと面倒だ」

「……、分かったよ」

よし、タイタンもこれで安全だろう。セブンスターズに代わりに誰かが入るだろうが、それならそいつを倒せば良い。十代主人公タッグと俺で、な。

そう思った時だった。

ゴウツ！

『!?!』

眩いばかりの光が部屋中に満ち溢れ、ウジヤド眼が発生した。

何?! 何故だ！ 何故、闇の世界への扉が開く！

「のわああああああああああっ！」

「うわああああああああああっ！」

って、考えている場合じゃ無い！ 十代とタイタンが闇の世界に引きずり込まれち

まった！

「十代！」

「アニキ！」

しようがない、プラン2に変更だ！

「どりゃああああああああああっ！」

フアイト一発、俺も闇の中に飛び込んだ。





「な、何だこいつら!？」

飛び込んだ場面、それはあの『ダブルコストーン』みたいな黒い奴らで周囲が埋め尽くされている所だった。

ダブルコストーン（効果モンスター）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 1700 / DEF 1650

闇属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「十代！ どけえ、『ダブルコストン』もどき共がああああつ！」  
「黎！」

素早く体にあの炎の力を流し込み変身すると、赤色の炎でウネウネ動く何かを焼き払った。ついでにタイタンの口のの中に入ろうとしていたヤツも焼く。

「うあぢいやあああああああああああああつ！」

「我慢しろ、大の大人が！」

「このくらいは自業自得なので、勘弁願うぜ？」

「黎！」

「遊ぶ馬崎い黎い！」

「何してんだ！ さつさとデュエルの続きをやりな！ 多分こいつらはイカサマの闇のゲームに対して怒っているんだ！ だったらデュエルが終われば、少なくともどつちかは解放される！ 負けた方は俺がどうにかする！ 早く続きを！」

こいつらが襲って来る理由はどちらかと言うと、闇のゲームの研究の残滓みたいなも

のがデュエルに反応して出て来たんだと思うんだが……、今は説明している暇が無え！  
「う、分かった！」

「パワ―・エツジ・アタック!!」  
「ぬおおおおおおおっ！」

タイタン：LP  
0

十代のE・HEROの最上級アツカー『エッジマン』のブレードにより、タイタンの『スカル・デーモン』を戦闘破壊。その貫通能力でフィニッシャーとなり、デュエルが終了した。

途端、グネグネグネグネと黒いアレ（ゴキに非ず by 黎）がタイタン目掛けて動き出し、十代の後ろに光る出口が発生した。

「十代、その出口から脱出を！」

「黎は!？」

「あのイカサマ師を助ける！」

十代をゲートの方へ押し遣ると、俺はタイタンの方に走る。

「く、来るなあ！ 来るなあああああつ！」

尻餅をついたタイタンは必死に黒いアレを払っているが、ジワジワと包囲網は狭まってくる。

悪いが、黒いの。そいつをテメエらのエサにする訳にやあいかねえんだよ！

「そこまでだ、つてな！ 喰らえ、ばくがめつりゆうけん爆牙滅龍拳！！」

グワッ！ と焰の拳を振るい、紅蓮の炎で作った拳であの黒いのを殴り飛ばす。技名が無いのも寂しいので、ちよつとした遊び心でつけてみたんだが、これはハマりそうだ

な。

「お、おう？ 助けてくれたの、かあ？」

「後にしてくれ！ 今は脱出が先決だ！」

「分あかつたあつ！」

タイタンを強引に引っ張り起こし、『ダブルコストーン』もどきを炎で牽制しつつ、やや小さくなったゲートへ向かう。

その時だった。

『グビョオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

「!?」

俺とタイタンの間に黒いのが集まり、デツカイ『ダブルコストーン』もどきになった。テメエらはドラ○エのスライ○か！ そんであのデツカイのはキング○ライムなのか！

「つとと、ツツコミ入れている場合じゃ無えな。タイタン、先に脱出してくれ！」

「お、お前は どうするのだあ」

「後から行くよ！ はあつ！」

腕から炎を噴出し、デカイ黒い奴の注意を引き付ける。

タイタンがゲートから脱出するのを見届けると、俺は右に跳び込み前転の要領で身を投げた。

だが、このデカイのは俺をターゲットと見定め、口からヘドロみたいな黒い塊を吐き出して来た。

「おつと危なっ！　こんの……、ラァッ！」

咄嗟に踵からジェットのように炎を噴出して回避する。そしてそのまま炎の槍を投擲。しかし、効果が薄い。

怯まずに連続して炎を噴出。隙を見てはゲートに近づくが、デカイのもモゾモゾと動いて進行方向を邪魔してくる。

……どうやらコイツは俺を外に逃がしたくないらしいな。上等！　だが倒す必要は無し、逃げるのみだ！

『黎！　もう出口が！』

『黎くん！』

『黎い！』

十代達の悲痛な悲鳴に光の扉を見れば、半ば閉じかけている。急がないと！  
「かえんせんしゅう火炎旋襲<sup>カ</sup>！！」

素早く二本の刀を生み出し、炎を纏わせて縦回転で跳び上がりながら斬りつける。そのまま勢いを利用してゲートの前に着地する。

『ジヨオオオオオオオオオオオオオオオッ！』







「レエイ！」

『クリクリイ〜！』

じゅ、十代!?

突然十代がパートナーのハネクリボーを率いてゲートから飛び出して来た。大きくなっても怖いらしく、ビッグ『ダブルコストーン』もどきは十代とハネクリボーに近寄れない。

「早く！ 出口が無くなっちゃう！」

『クリ〜！』

「助かった、ありがとう十代！」

押し開けたらしく、また広がったゲートを俺達2人と1匹は急いでくぐり、闇の空間から脱出する事に成功した。

フー、やれやれ。どうなるかと思っただぜ……。

——明け方・廃寮前

「何故、私を助けたあ……………」

夜が明けた廃寮の前、地面に座り込んだタイタンが力無く問いかけて来た。  
「ん、とつても簡単な事だと思うんだがなあ。」

「何故って、誰かを助けるのに『助けたい』以外の大それた理由がいますか？」

「違う、私はお前達に危害を加えたいわば敵だ。何故『助けない』などと思えるのだあ！ 第一、お前は危うく死にかけてたでは無いかあ！」

んー、そんな事言われたって、確固たる理由も崇高な目的もあつたモンじゃ無いんだぜ？

確かに十代が助けに来てくれなかつたら俺はあの闇の空間でタイタンの代わりにセブンスターズになつてもただけどサ。

「別に深い考えは無い。ただ何と無く、理屈抜きに『助けない』と思つただけです。誰かを助ける動機なんて、そんなモンで十分でしょう？」

「……、フフフ。甘いな、アマちゃんだなあ、遊馬崎黎よお」

はは、甘い、か。

「確かに、命を捨てて誰かを助ける理由が『助けない』だなんて、アマちゃん以外には無いわね」

「あ、明日香……」

「というか、アニキが助けに行かなかつたら黎くん危なかつたんすよ！ 解つてるんすか!？」

「翔……、解つてるよ」

お前ら……。

「済まない、心配懸けたらしいな。そして十代、ありがとう」

「私からも礼を言わせてくれえ」

のそり、とタイタンが立ち上がった。カチリ、と仮面を取りポケットにしまう。

中からは中年の男の顔が出て来た。ゴツいが、表情は優しい。

「お前達のお陰で目が覚めた、ありがとう」

「タイタン……」

「お嬢さん、遊城十代、危害を加えてしまつてすまない」

意外にもしおらしくなつたタイタン。いつの間にか俺達か彼のパラダイムシフトになつてしまつたようだ。

悪だけの悪人はおらず、善だけの善人はいない、という訳か。

ちよつと、嬉しいかな。

「このサギ師のビジネスはあ、たつた今を以つて終了とするう！」

「うん、それが良いと思います」

パンパン、と服の埃を払い、ポケットから一枚の紙を取り出した。そしてペンを使つて何かを書き加えた。

「これを持って行くと良い。今回の依頼人の名前が記された請求書だあ」

「どうも。えーつと、

『クロノス・デ・メデイチ殿

今回の依頼料、給料3ヶ月分頂き仕る。次第であつたが、こちらの都合により仕事は中断。以降の接触を一切断つものとする。

なお、依頼料の支払いは不要と致す。

元・闇のゲーマー タイタン』

『クロノス先生?!』

「クロノス先生がコレを仕組んだのか?!」

曖昧な原作知識と照らし合わせると、『元』がついていたり、『仕事は中断』なんてのが加えられている。

「ではなあ」

「縁があれば、またどこかで!」

俺は朝靄の中を立ち去って行くタイタンに手を振った。どこかで、もつといい奴になつたアイツに出会える事を信じよう。

その一方で、明日香が十代の隣で憤慨する。

「信ツじられない、あの教師! 生徒をこんな危険な目に合わせたつていうの!」

「有り得ない話じゃ無いよ、明日香」

「え?」

「明日香が巻き込まれたのは偶然だろうが、俺や十代を狙う理由だったら分かる。

あの先生は最後まで俺の味方をする先生方に難色示してたし、元々持っていたエリート思考の所為で十代の事をあんまし良く思ってたみないだしな」

皆が肩を落として黙り込む。クロノス先生に対しての印象がガラガラと崩れていつてるのだろう。

やがて、十代がポツリと呟いた。

「ちよつとシヨックだけど……、やっぱ俺、クロノス先生を軽蔑なんてできねえよ……」

「十代！ 分かっているの!? 貴方は下手したらもつと酷い目にあっていたのかも知れないのよー!」

ふふ、お人好しの十代と真面目な明日香らしいな。

この頃から二人の間柄は比較的他の異性よりかは近かったんだな。

「まあまあ、明日香。十代は別に間違っちゃいないよ」

「黎、あなたまで!」

「信じる、信じないは人それぞれだし、或いはクロノス・デ・メデイチの名を騙った偽物かも知れない。」

それにこういうお人好しの十代の性格は悪い物じゃ無いさ」



それは、そうだけど……。と口籠る明日香。やれやれ、このまま言い合っていても実入りは無さそうだ。話を切り替えるのが得策だな。

「それはそうと、この写真、お前の兄さんのモンか？」

「え？」

「！これは兄さんの写真!？」

懐から俺が取り出したのは茶髪の男性が写っている写真立て。ポケットには入らないのでワイヤーを生み出してお腹の部分に括り付けておきました。

「IOJOIN、つまり十を<sup>テン</sup>tenと読めば、こいつは『天上院』と読める。埃被つていたが写真は古くはないし、顔も何処と無く似ていたから、若しかしてとは思ったんだが……。ビンゴだったな」

「黎、ありがとう……」

「写真を見つけたのは十代だよ。お礼ならアイツに、な？」

「そう、ありがとう、十代」

「良いつて良いつて！」

チュンチュン、と小鳥の囀りが聞こえ始めた。あらら、もう朝か。

「十代、翔、隼人。夜が明けちゃった。流石にコイツを見逃してくれる程大徳寺先生は甘くないぞ。帰ろうぜ？ではまた学校で！」

「うわつ、ヤツベエ！」

「早く帰るツスよ、アニキ、隼人くん！」

「そ、それじゃあなんだな！」

パタパタ、と帰宅する俺達。

その後ろでの会話を、俺はしっかりと聞いていた。

### S I D E : 明日香

全く、面白い男ね。

片や、子供のように無邪気で人を惹き付ける。

片や、大人のように冷静で未知の力を持つ。

「遊城十代に、遊馬崎黎、か」

「明日香〜！」

呼ばれて振り返ると、中等部からの友人のフィオが駆けて来た。

マリンプルーの瞳にライトブラウンの髪。そして、遊馬崎黎に思いを寄せている子。尤も、本人は気付いて無いだろうけどね。

「どうしたのさ。一晩中帰って来て無いつて聞いたけど」

「ううん、何でも無い。ちよつとトラブルに巻き込まれただけよ」

「十分何でもあるからね、それ」

そうかもね、とここは適当に誤魔化しておく。

さて、帰りましょう。今日も授業があるからね。

「寮に戻りましょう？ 朝ご飯に間に合わなくなるわ」

「あ、ちよつと明日香あ！」

## SIDE：黎

「ん、ぐうぐう……っ」

グツ、と体を伸ばす。ざつと1時間ちよつとは眠れたかな。その気になれば3、4日は眠らないで済むから、睡眠時間としては十分だ。

「はあ……」

にしても、力不足を痛感せざるを得なかったな、アレは。

俺がもつと強かったら、或いは炎以外の別の力を持つていたら、十代に助けてもらおう事無く、自力で脱出できただろうな。

この先、あんなラッキーが訪れる可能性は無に等しい。十代に頼りっぱじゃ原作に影響が出るだろう。そうしてその辻褃合わせや余波がこちらに来たら取り返しがつかなくなるだろう。そうなれば都を取り戻す事はますます難しくなる。テメエの弱さの所為でゲームの難易度上げるとか、笑えねえっつもの。

……やっぱり、パワーアップだよなあ。単純に炎のデツキを強化するんだったら『ネクロ・ガードナー』みたいな別のカードを入れてやるっていう方法がある。でも、飽くまでデツキの主体が“炎”ならそれじゃ解決策にはならない。主力を抑えられたらデツキの力は格段に下がる。

炎以外の力が必要だというのは確実だろうな。

ところで、何か忘れているような気がするんだが……。

ゴンゴン！

『査問委員会だ！ 遊馬崎黎、そこにいるのは分かっている、大人しく出て来い！』  
朝っぱらから煩い声が響き渡る。

ああ、そっか。忘れていたのはこれか。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 12 : 「シャキツとしやがれ！」

## SIDE : 黎

「ドアを開けろ！ さもなくば爆破すブツ！」

「き・ん・じよ・め・い・わ・く・だ・ろ・う・がっ！」

はい、皆さんこんにちは。今作の主人公の遊馬崎黎です。1時間程の睡眠の後、こうして査問委員会の連中に押し掛けられ、『朝っぱらから煩い』の苛立ちの下に扉ごと蹴り飛ばしてやりました。モチ反省無しです。

キイキイ、と扉が悲しく鳴るが、元々ボロいので気にしない。

「今、何時だと思ってる。7時前だ。まだ寝てる奴もいるんだぞ……！」

「ぐっ、スマナイ、配慮不足だった……」

「俺に謝るな。それと爆破したらしたで、その後の責任はどう取るつもりだったんだ？」

「せ、責任……？」

……、こいつら、爆発物の免許持ってんのか？ それとも爆破云々はハツタリか？

「あのなあ、爆破したらこんな古い寮じゃあ他に影響出るだろうが。」

もしも柱なんかが衝撃で折れたら？ 爆破した時に扉の向こう側に誰かいたら？

壁が崩れて風が入り、大切なカードが飛んで行ったら？ そういう時、どうやって責任を取るつもりなんだ、ええ？ お・ね・え・さ・ん？

まさか身体で払うなんてベツタベタな事、言わねえよなあ？」

「ぐっ、ぐぐぐぐぐ………っ！」

良し。正論は鬱陶しいモンだが、こうやって相手を言い負かす事には役立つ。そしてこいつらは恐らくこうやって反論される事を想定していない。傲慢な連中は相手にバカにされる事を嫌い、見下される事を嫌悪する。故に相手より常に上にしようとするのだ。

ならば話は簡単。重箱の隅を楊枝で穿る様な真似は正直嫌だが、こうやって相手の足元につけ込み、上から引き摺り下ろす。

うん、我ながら意地が悪い。

「と、兎に角、連行する！」

ガチャリ、と俺の手に手錠が掛けられた。

「この手錠ワツバは俺へのプレゼントかい？」

「そうだ」

にひひ、それなら遠慮なく……。

「頂きます♪」

「は？」

ガリツ！ バリバリガガギバギヨバギヨムギヤムギヤ……………。

ゴクン！

「て、手錠を、食べた……!?!」

いやー。この間、都とぶつかつた時に金属があつちこつち傷んじまつてねえ。修復や不足分の補充に困っていた所だつたんだよ。ありがたいなあ。

「あ、おかわり」

『無い!』

チツ、ケチな奴らだ（↑違う）。



『退学う』

「?!?」

「その通り。本日未明において遊城 十代以下5名は閉鎖・立ち入り禁止となつていて  
 廃寮へ無断で侵入。よつて遊城 十代、丸藤 翔、遊馬崎 黎を退学処分とする！」

「隼人と明日香は!?!」

「前田 隼人くは1度留年となつていたため、いつでも退学にできるといふ点をかゝ  
 ら大目に見て反省文と一週間の謹慎処分とするのゝネ。

「シニョーラ明日香は、成績優秀でオベリスクブルー、更にくは何かしらの被害に合つ  
 たという事を考慮して、無罪放免とするのゝネ」

「チツ、エリート鼻根が。」

「な、何でも言う事聞くからさあ、チャンスくれよお！」

「どうか機会を！」

十代が悲鳴に近い声を上げ、俺もそれに乗る。

「むくむく。それでハ、別のペナルティを提案するのネ。制裁デュエルなのネ  
！」

「制裁……?」

「デュエル……?」

「ドロ……、もとい遊城 十代と丸藤 翔はタッグ、遊馬崎 黎はシングルでデュエルを  
行うノ！ 勝てば学園に残り、負ければ即退学なのネ」

「乗った！」

「分かった！」

「対戦相手ハ、追って連絡するのネ」

では、とクロノス先生が話を締め括る。

さて、デュエルにおいて相手がエンド宣言をすればこちらのターン、というのは常識  
であり、恐らくはどんなターン制のゲームでもそれは共通、だと思う。

そんなじゃ、次は俺のターンだ。

「校長先生、宜しいでしょうか？」

「おい貴様、立場を弁えビビビビビビビビッ!」

「ちよいと黙っててくれ」

何をやったかって? 靴下とズボンの隙間の肌から細いアースを伸ばして査問委員会の女の肌に巻きつかせて電流を流したのサ。夜のリングから逃げる時に十代に使ったスタンガン代わりの掌から流した電流と同じくらいだから、人間が喰らったら気絶するぜ?

「言いたい事がいくつかあります」

「ん、む。言ってみなさい」

同時に相手を怖がらせる効果もある。俺は正体不明の化物、という認識が皆の心の底にこびり付いている。それを利用して『要求を蹴ったら次は自分の番だ』という恐怖の感情を与えるのだ。

どんな人間も、恐怖に立ち向かう為には勇気がある。そしてその勇気は、相手の恐怖の根源に対抗し得るだけの力量——この場合はリアルファイト——が無ければ生まれ  
ない。

「まず、生徒手帳に『廃寮は立ち入り禁止』とは書いてありますが、『入った場合は退学』とは書かれていません。従ってこの退学処分は不当であると言えます」

「むむ」

「次に、調べが速すぎます。確かに俺達は廃寮に行きました。しかし、俺達が廃寮から出

たのは今朝の5時過ぎ。そして査問委員会がやって来たのは午前7時前。

明らかにたつた2時間弱で全員分の証拠を揃え、こうして連行できる、という事は何者かが我々を見ていた、という事か、廃寮へと誘導したという事だと思われます。そうでなければ我々が廃寮に入つて行つたのを黙つて見過ごしたものと推測されます」

「むむむ」

「最後に、これを」

パサツ、と俺は懐からあの請求書を取り出す。

「クロノス先生宛てです。廃寮にて明日香に危害を加えた男が持つていた物です。彼は依頼されたと言っていました。」

もし、犯人が我々を何らかの方法で廃寮へ誘導。そして査問委員会に報告したとすれば2つ目と3つ目の俺の主張に説明がつかます。

つまり、今回の一件はクロノス先生、またはクロノス先生を騙つた何者かが裏で糸を引いている、と言えます」

「(ままままままま、マズイのゝネ!)で、でも、そんな都合良く行くものなのゝネ?」

ああ、動揺してる動揺してる。

それじゃ何か一枚噛んでいと言っているようなモンだぜ?

「確かに、今回は大徳寺先生が廃寮の話をしたが故に廃寮に行きました。しかし、別に何

でも構わないですよ。

大徳寺先生に誰か伝いで廃寮の話をするように頼んでも良いし、レッド寮の中に廃寮にレアカードが眠っている、という噂を流しても良い。

兎に角廃寮へと誘導し、それを確認すれば終わり。報告して俺達は連行」

「ぐゝぬぬぬぬぬぬ。結局、何が言いたいのゝネ!」

「別に。退学云々も呑んでしまった後だから何も言いが無いです。

ただ、以降、廃寮へと入った人への処分を寛大にしてほしいのです。それと、クロノス先生かクロノス先生の名前を騙った奴にも罰を」

「分かりました」

おし、お終い。俺が卒業した後もきつとこういうバカする奴は出てくるだろうからね。先輩からのちよいとした贈りも「ちよつと待った!」……、チツ、もう目が醒めたか。

俺の行動が癪に障ったのか、それとも自分の思い通りにならなかった事に腹を立てたのか、兎に角俺が気に入らないらしく、大声で彼女は捲し立てる。

「このバケモノがつ! 貴様などデュエルを待たずして退学だ、退学!」

「お前にそんな権限あるのか? もう俺が制裁デュエルに勝てばここに残れる事が確定している。この結論を覆したいのであるならば、大多数の教師を納得させられる理屈が

必要だ。私怨以外にそれができる理由はあるのか？」

「そんなもの、お前がバケモノであるという理由で十分だ！　ここは人間様の居場所だ、人間でない貴様に居場所があると思うなゴミめ!!」

「あゝ？」

「怪物は怪物らしく、怪物の巣に帰れオブツ！」

……気が付いたら、俺は右腕を金属化させ、あの女の鼻っ柱をぶん殴っていた。

この後の記憶は殆ど無い。気が付いたらあの女が全身血だらけで、俺はその胸倉を掴んでいた。

「テメエは化物を怒らせるとどうなるか、分かってねえらしいなあ、おい！」

「ひ、が……」

「ぼ、暴力反対なの〜ネ！」

「ウルセエ！」

「ヒイツ！」

「ああ、俺は化物さ。だから何だ？ 化物がここデユエルアカデミアに通っちゃいけないなんて校則あったか？」

「い、ぎい……」

「化物だ何だつて言つて、元々俺は人間だったんだよ。化物だから俺が傷付いても構わないつてか？ お前のその考えこそが化物と言うべきなんじゃねえのか!？」

「あ、ぐ……」

「何とか言えよ、おい！」

「そこまでだよ、黎」

フシユー、と怒りが抜けていくのが分かった。肩を誰かに掴まれたのだと自覚するのに数秒の時を要した。

そして掴んだ人物とは……。

「フィオ……！」

そう、フィオだ。

「何故ここに？」

「事情は明日香から聞いた。真相を確かめるべくここに来ただけけれど、その様子じゃ元気そうだね」

「ん、まあな」

沈静化した俺から制裁デュエルの話聞いたフィオは納得した様に頷いた。

「分かった。わたしも協力しよう。キミがこんな形でここを去るなんて後味悪いだろっからね」

「ありがとう」

そして俺は鮫島校長へと向き直る。啞然とした表情をしているが、俺の視線が自分に向いた事を認識すると、すぐに俺に注意を向けた。



「この女を血ダルマにした事に關してはどういたしましょう?」

「う、む。彼女の言い方にも問題があつた事ですし、反省文と奉仕活動でどうでしょう」  
「奉仕活動?」

反省文は兎も角として、何だそりや? 普通は謹慎とかじや無いのか?

「キミの能力を恐れている人は大勢います。そこでキミが怖い化物では無いという事を、ボランティアを通じて知ってもらうのです」

成程。部屋の中に閉じ込めても、訳の分からない能力で密かに脱出される可能性がある。だったら、目の届く範囲で行動してもらい、尚且つ今後『化物』呼ばわりによる傷つく人を減らす算段か。

つと。そこまで邪推しなくても良いか? どうも人の腹を探るクセがついてるな。

「それで良いのなら。ご用があれば何なりと」

その一言の後、俺とフィオは部屋を後にした。

—  
海岸沿いの道・昼過ぎ

「ゴメンねえ、黎ちゃん。こんなに手伝ってもらっちゃって」

「いえ、この程度は準備運動にもなりませんよ」

早速ボランティア。第1号は俺が化物だと知っても何の変化も無く接してくれた購買のトメさん。良い人だなあ。

トラックに荷物に乗せるのだが、如何せんダンボールの数が多く、しかももう一人の購買部員のセイコさんもいなかった為に困っていたらしい。

重いヤツは少なかつたし、トラックの荷台に乗せれば良かっただけなので、髪と腕に荷物を持ち、2〜3回往復しただけで全部運べた。

「ご用があればまたどうぞ」

「ありがとう。はい、お駄賃」

ニッコリ笑ってくれた。きつとこれがミス・デュエルアカデミアの由縁、笑顔の素敵な人だ。美人はいくつになっても美人、か（年上好みじゃ無いからね?）。

おまけにお駄賃としてドロップン（余り物じゃ無いよね?）もくれた。後で食うべよつと♪

トラックが発進したのを見届けると、俺は寮の方へと歩く。新しい力を手に入れるのならまた精霊界へと向かう事になるだろう。

炎が強化するのか、水や風の力を手に入れる事になるのかは分からないが、人目につ

かない場所から行った方が良いだろうな。

そんな事を考えていた時だった。

「レーイー！」

「十代？」

後ろから十代が駆けて来た。何やら焦っているようだが……。

「翔を見なかったか？」

「いや」

「くっ、あいつどこ行ったんだ!？」

「落ち着け、十代。何があったか話してみろ」

「ああ、実は……」

【事情説明中】

「成程……、『パワーボンド』か」

封印された機械族専用の融合カードか。そういえばそんな事があったな。

「鍵を握るのは『カイザー』の異名を持つ男。俺も探す」

「ありがとう！」

「十代は海岸沿いをこのまま探してくれ。俺は森の中を行く」

翔の成長イベントだな。これを逃すと十代達は退学。そうなると本気でヤバい。これ以降も十代の力を借りる時が来るかも知れないし、何より主人公を失えば第3期と4期は確実にマズい。いっちょよ行きますか。

ダツ、と二人して駆け出す。俺は森の中の木々を飛び移り、途中で炎の精霊達を呼び出す。

よく枝が折れないなって？ 重心や跳び方にコツがあるんだよ。コツさえ掴めば体重が400キロ程度なら大丈夫。

「翔っていう水色の髪に丸眼鏡の小柄な少年を探している。島中に散開し、一緒に探してくれ！ 何かあったら花火弾を上げろ！」

ヒュン、と一瞬で赤い精霊達はあちらこちらへ飛び散る。

夕方になれば多分イカダと一緒に海にいるんだが、それ以前の行動は分からない。こういう所が原作知識の不便な所だな！

## —— 海岸・夕方

「いた！ 翔！」

「ツ、黎、くん……！」

岩をタンタンタン、と飛び降り、翔の近くに行く。その後ろで『バック・ドラフトマン』が信号弾を空中に放つ。直に他の皆もやって来るだろう。

「事情は十代から聞いた。が、お前は何をしているんだ、イカダなんざ作って?」

「……、分かつてるクセに……」

ボソリ、と翔が呟く。ああ、その通りだよ翔。俺は分かかっていてこう言っているんだ。だが、ソレはお前の口から発されなくてはいけない。黙っていては自分の中で誤魔化されてしまうからだ。

「僕は……、島を出るツス」

「何故? 十代のダッグデュエルのパートナーだろうが」

「……それは、その役目は、黎くんに譲るツス」

「?」

翔は悲しげに目を伏せる。

「僕じゃあ、アニキの足を引っ張るだけツス。だったら二人退学になるより僕だけが退学になった方が良い」

「……………」

「じゃあ、アニキに宜しく伝えて欲しいツス」

イカダに翔は向き直る。上手な出来とは言えないが、近くの港や島に行くのなら十分だろう。

「止めないで下さいツスね、サヨナラだけが人生だから」

じゃあ、と手を振りイカダに乗ろうとした翔の行く手に、俺は髪の毛を伸ばし、その先端に形成したブレードを突き刺した。

ガガガガガガガッ！ と何本もの黒い剣が柵の様に立ちはだかる。

「れ、黎くん……？」

「まだ、俺は言いたい事を言っていないぞ」

そうだ、こいつは勝手な理屈を押しつけて困難から逃げようとしている。そんな好い加減な臆病者を臆病者のままで帰す訳にはいかない。

髪を元に戻しつつ俺は極力冷やかに言う。ここは心を鬼にするべきだ。

「なんだかんだ言つて、結局お前は、十代を見捨てるんだな」

「な、違うツス！」

「違わない。足を引つ張らないためにとか言うが、お前がいなくなったら十代は2対1で戦う事になる。それこそ足手纏いだらう」

「黎くん、組んでくれないんすか……？」

「俺はもうシングルで決定している。手持ちのカードを十代とのタッグ用にしたらシングルでデッキが回らなくなる。逆にシングル用に組んだらタッグでのデッキの回り具合が悪くなるだろうな。」

恐らくは黒幕のクロノス先生の事だ。ブルーの中でも1、2を争う実力者か……、或



いは外から腕のある奴を連れて来るだろう。そんな奴相手に中途半端なデツキを使えば、いくら俺でも勝つ事はできません」

これは真実。今から俺の手持ちのカードで上手く戦えるデツキをもう一つ構築する事はできない。それにクロノス先生が翔の事を聞いたら済し崩し的に十代は不戦敗の可能性がある。

「他でも無い、お前の力が十代には必要なんだよ、丸藤 翔。俺でも隼人でも明日香でも無い、お前が、な」

「……ッ、弱い僕の代わりなんていくらでもいるツスよ！ でも、アニキの代わりはいないツス！ だから、アニキだけは退学になつちや駄目なんスよ！」

「ふざけんなッ！」

今のは怒ったぞ、翔！

「人間は機械の部品じゃねえんだよ！ お前の、十代の友達の代わりなんざどこ探したっていねえんだ！

第一、聞いていなかったのかっ！ お前が十代のパートナー出来んのはお前だけなんだよ！

俺がタツグに回ればシングルがヤバくなる！ 決定事項の都合上、隼人も明日香もタツグを組む事はできないんだよ！

それに、俺はさっきから考えていた事がある。

「もし、お前がこのまま島を去ったとしても、俺は十代のパートナーやらねえし、隼人も明日香も同じだろうよ」

「で、でも……」

ああ、もう！ 何時までもウジウジウジと！

「この分ならず屋！ 敗北の責任から逃げるんじゃないやねえよ！ 男ならシャキツとしやがれ！」

「黎の言う通りだぜ、翔」

不意に後ろから声がし、振り向くと、十代を始めとした面々が揃っていた。

む、原作より多いな。

「アニキ、隼人くん、三沢くん、明日香さん、浜口さんに枕田さん、神山さんまで……」

「皆がお前を探してくれたんだぜ、感謝しろよ？」

多分『バック・ドラフトマン』の上げた信号弾に十代か隼人か『ハネクリボー』が気付いたんだろう。『ハネクリボー』が自力で翔を見つけたのか、それとも？

翔の俯き具合が大きくなる。後ろめたいのだろうか。

「アニキ……………」。僕とタッグなんて止めて欲しいッス。僕が足を引つ張つて負けるだけッスから。どうにか交渉して隼人くんや明日香さんと組んで、学園に残つて欲しいッス」

「イヤだ！」

翔が紡いでいった自責の言葉を十代は一言でぶつた斬つた。

「俺のパートナーはお前だ！ 他の誰でもねえ！」

「な、何でッスか!? 何でそこまで僕に拘るんスか!?!」

「お前、俺の弟分名乗るんだつたら、もつと本気見せてくれよ！ 本気出せないでここを去るなんて悲しいぜ？」

「アニキ……………」

うん、と皆も頷いてくれる。

翔の顔に光が戻り、決意の表情を新たにした。

「うん、僕頑張るッス！」

「その意気だ、翔」

そう言ったのは十代でも誰でも無かった。

「亮！」

それは丸藤 翔の兄、*“カイザー”*の異名を持つサイバー流の男、丸藤 亮だった。

「貴方が、カイザー亮」

「そうだ」

ピン！ と閃いた。原作にもあつた気がするが、覚えてないので自分の案にしておこう。

「カイザー、十代とデュエルをしてくれませんか？」

「ほう？」

「翔に見せてあげて下さい、貴方の皇帝と呼ばせるまでのデュエルタクティスを。弟さんに欠けている何かを見せてあげて下さい」

ふっ、とカイザーが笑う。

「俺は別に構わない。そちらは？」

「俺もオツケーだぜ！ くー、学園ナンバー1とのデュエル、楽しみだなあ！」



## ——波止場付近・夜

「来い！ カイザー！」

「ああ。行くぞ、『サイバー・エンド・ドラゴン』で『マッドボールマン』を攻撃！  
エターナル・エヴォリション・バースト”!!”」

”

サイバー・エンド・ドラゴン（融合・効果モンスター）

星10

光属性／機械族

ATK 4000 / DEF 2800

「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」

このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

E・HERO（エレメンタルヒーロー） マッドボールマン（融合・効果モンスター）

星6

地属性／戦士族

ATK 1900 / DEF 3000

「E・HERO バブルマン」＋「E・HERO クレイマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

カイザーの切り札『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃が、三つ首から放たれる光

線が強固なる守備力を持つ『マッドボールマン』を呑み込み、そのまま十代を襲った。

十代：LP 0

「強いな……。十代が敗れるとは……！」

「これが、学園最強……！」

大地とジュンコが感心する。十代の引きは凄まじい。ピンチになればなるほどそれは強くなる。

だが、カイザーはその上を行った。十代が防御を固め反撃に移る前に、彼を倒したのだ。

そして……。

「欠けていた何かは掴めたか、翔？」

「うん！」

大した男だ。この短いデュエルの中で弟に足りないものをしっかりと分からせやがった。ただ強いだけじゃ無い。タクティクスのみならずメンタルの方も強い。

「なら、デュエルの方は大丈夫だな？」

「大丈夫ツス！」



ふふっ。もう元気を取り戻したか。なら、タツグデユエルは安心だな。

「ああっ!」

『!?!』

つとと、ビックリしたなあ。

突然、十代が何かを思い出したかのように声を上げた。

「寮の夕飯の時間、間に合わなくなる!」

「確実に間に合わないと思うが」

だつて真つ暗だもん。冬が近いからつてこの暗さじゃあ夕飯の時間は過ぎてい  
思うぞ。

「ああ、晩御飯食べ損ねてしまいましたわ……」

「そう言えばお腹空いた……」

ももえ&ジュンコもか。

ま、しゃーない。ここは一肌脱ぎますか!

「俺の部屋の台所に食材があったから、あれを使って何か振舞おう」

「黎くん、料理できるんスか!?!」

「黎が!?!」

……、コイツら失礼だな。

「今時、男でも料理の1つや2つできないと社会でやって行けねえからな」

「意外なんだな……」

「黎、キミの料理って一般人でも食べられる、よ、ね………?」

……フィオ、人をゴキブリみたいに言わないでくれないか?

なまじ自分が人間じゃ無い事を自覚しているから、凄まじく傷つくんだけど。

「それとも、化物の作った食事を食うなら、一食抜いた方がマシか? なら俺の分だけで良いかな」

『食べる、食べます、食べさせて!』

「俺も良ければ、ご相伴に預からせてくれ」

おっと三段活用。

皆、食欲には勝てないみたいだね。カイザーも相伴する事になったし。



## ——レッド寮食堂・夜

「ウメエ！ スツゲエ美味い！」

「い、一流シエフ並み……………」

「黎、キミは何者!？」

「あー、それ僕のツス」

「早い者勝ちなんだな！」

食材が思ったよりも買つてあつたので、ちゃんと振舞えた。

しかしオーバーだな。別に高級レストランで出るようなフレンチとかじゃ無く、普通の一般家庭料理なんだが…………。

「そこまで言われると、作り甲斐があるよ。機会があればまた振舞おう」

「そ、その時は教えて下さいませっ！」

「あ、アタシも！」

「わたしも！」

「良ければ私も…………！」

あちら、男を掴むには胃袋からく、とか言う諺があつたが、逆もありか？ 女性陣が

皆喰い付いて来た。

「ふむ、俺も良ければ頼むよ」

「おっと……、大地、どっから沸いた？」

「きやつ！ み、三沢さん、いつからそこに!?!」

「今さっきだ！ ついでに言うとなをゴキブリやボウフラみたいに言うな！」

むー、この頃から空気男の片鱗が……？

因みにボウフラは漢字で書くと『子子』になる。意外と覚えやすそうだな。

こうして、俺達の夜は更けて行く。

暫く後に待つ、制裁デュエルに向けて。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 13 : もつと前に進まなくてはいけないから

「フオーチユーン・テンペスト」オ!!」

「ぬあああああああああああああああつ!」

迷宮兄弟 : LP 0

迷いを振り切った翔の兄直伝の必殺カード『パワーボンド』で推参した『ユーフォロイド・ファイター』の放った光線が、戦闘破壊されない『ダーク・ガーディアン』を呑み込み、そのまま迷宮兄弟を襲った。丁度十代がカイザーと戦った時の構図を再現するかのように。

ユーフォロイド・ファイター (融合・効果モンスター)

星10

光属性 / 機械族

ATK ? / DEF ?

「ユーフオロイド」＋戦士族モンスター

このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードの元々の攻撃力・守備力は、融合素材にしたモンスター2体の元々の攻撃力を合計した数値になる。

闇の守護神―ダーク・ガーディアン（アニメオリジナル）（効果モンスター）

レベル11

闇属性／戦士族

ATK 3800 / DEF 3500

このカードは通常召喚できない。

「ダーク・エレメント」の効果でのみ特殊召喚する。

このカードは戦闘では破壊されない

ダーク・エレメント（アニメオリジナル）

## 【通常魔法】

自分の墓地に「ゲート・ガーディアン」が存在する場合に発動する事ができる。

ライフを半分支払う事で自分のデッキから「闇の守護神―ダーク・ガーディアン」を特殊召喚する。

このカードを発動する場合、このターン他のモンスターを召喚・特殊召喚する事はできない。

あの時は戦闘破壊されないモンスターではなかったが、場のカードでは破壊できなかった。それを『パワーボンド』で融合召喚した機械族モンスターでフィニッシュとなった点は一致する。

## パワーボンド

## 【通常魔法】

手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、機械族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。



このカードによって特殊召喚したモンスターは、元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする。

発動ターンのエンドフェイズ時、このカードを発動したプレイヤーは特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

何にせよ翔が完全に兄の呪縛から解放されたみたいで良かった。発破かけた身として、これで負けられると後味が悪い事この上無い。

どうでも良いが、『ユーフォロイド・ファイター』で『ユーフォロイド』の上に乗ってる奴は融合素材によって違うのだろうか？

「あ、有り得ないのゝネ！ 伝説のデュエリストが、あんなドロップアウトボーイズに負けるなんて！」

リングの端の方では事を仕掛けたクロノス先生が混乱している。最下位の寮の生徒に負ける事を一切想定していなかったのだろう。

ふふ、誤算だったね、クロノス先生。

「フッフ、ウチの生徒も中々強いでしょうニヤ？」

「ん？ ネ〜コ!? 猫嫌い〜ノ、カプチ〜ノ！」

その後ろから大徳寺先生が猫のフアラオを連れてクロノス先生に話しかける。猫が苦手なクロノス先生は近付けられたフアラオを見て更に取り乱す。

クロノス先生の誤算は3つ。

- 1つ、迷宮兄弟の実力。確かにあの二人は伝説のデュエリスト、武藤 遊戯氏と城之内 克也氏とデュエルを行い追い詰めた事がある。だが、当時の二人はまだ成長途中。現在でも張り合えるかと聞かれれば、その答えはNOだろう。何せあの二人はペガサス・J・クロフォード氏や海馬 瀬戸氏も認める（瀬戸氏だって克也氏の最低限の実力ぐらい認めている）天性のデュエリスト。あの高みに辿り着けるのはほんの一握りだ。
  - 2つ、翔の現状。呪縛、或いはトラウマを解消し『パワーボンド』の制限を解いた彼の心は飛躍的に進歩した。大方、翔が十代の足を引つ張るとでも思ったんだろが、失敗だったね。フィニッシャーである翔はしっかり歩むべき道を見つけていたんだから。
  - 3つ、十代の引き。主人公補正とでも言うべきデイスティニードローは、時にパートナーのドローにも影響を与えるのだから。翔が『シールドクラッシュ』や『ユーフォロイド』を引けたのもあれが原因だろう。
- さて、長ったらしい説明はこれくらいにしよう。次は俺の番だ。俺もキツチリ勝つて、皆でレッド寮に帰ろう！

と、思った時だった。

P i P i P i P i P i P i !!

「クロノス・デ・メデイチなの〜ネ」

いきなりクロノス先生の携帯電話が鳴った。何かを話し、突然クロノス先生が大声を発した。

「そ、それは困るの〜ネ! もう貴方がデュエルをする事で決まっちゃったの〜ネ!」  
 『せやから悪い言うてるやる!! 急用が入ってしもうたんや、ギヤラと信頼考えたらこつち断るしか無かったんや。堪忍してえな』

「そ、そんな事言われて〜も、ペペロンチ〜ノ!」

『ほな、ワイも急いでるから、また今度な!』

「え、あ、ちよつと〜!」

プツツ、ツ、ツ……。

「……、ガツクリンチヨ」

今の声……、あの恐竜使いか?

まあ、それは兎に角として、あの恐竜くんはうっかりダブルブッキングをやっちゃってしま、そしてこつち側の予定を蹴る事にしたのだろう。バカだなー。

クロノス先生はガツクリと肩を落としている。

うーん、流石に哀れだし、俺だけ制裁無しってのもな。

ふむ、妙案が閃いた。これならきつとクロノス先生も彼らも呑んでくれるだろう。

「クロノス先生、クロノス先生」

「……………何です〜ノ？」

「どうやら俺の相手は来ないみたいですね」

「うっ!」

凶星か。きつと『だったら俺の不戦勝』なんて言葉が続くと思っているのだろう。ふふ、甘い。俺はそんな根性捻じれた奴じゃ無いよ。

「だったら、代案があるんですが、聞いてくれますか? 多分先生の協力が必要ですか」

「聞くの〜ネ。でも、不戦勝はダメなの〜ネ、ペスカトーレ」

「言いませんよ。俺の代案ってのは、



『調子コいてるんじゃないやねえぞ!』

『な、なんて無茶な提案を……!』

「本気なの〜ネ? 言っておくけれど、負けたら退学なの〜ネ」

「百も千も承知ですよ。少々俺の提案する変則ルールに乗ってもらおうつもりですがね」

「ん〜ムムム……」

暫くクロノス先生は悩んでいたが、退場しようとしていた迷宮兄弟の所へ駆け寄ると何事か話して二人を連れて戻って来た。

「その変則ルールとやらを話すの〜ネ」

「簡単ですよ。まず、ライフは互いに8000、ただし俺は単独、迷宮兄弟は共有。

次にターンは俺から回す。そして二回目の俺のターンが来るまで互いに攻撃はできない。

最後に、フィールドと墓地は共有しても構いませんが、迷宮兄弟は計10枚まで出せる。つまり、片方がモンスターを5体出していても、もう片方も5体出せる。兄のモンスターで弟は攻撃できるし、弟の罫カードを兄は発動できる、という訳です」

「ふむ、よろしい。では、お任せします〜」

クロノス先生が一礼して下がると、橙と緑の拳法の道着を来た二人組が前に出る。

「はっ、とっ、はあっ!」

「やつ、ていつ、はっ！」

そのままアクロバットな動きを披露し、シユタツ、と俺の前に線対称の形でポーズを決める。

「我ら流浪の番人、迷宮兄弟」

「先程は負けたが、今度はそうは行かぬ」

「お主に恨みは無いが、訳あって相對する」

「我らを倒さねば道は開けぬ」

「最早油断は無い！」

「覚悟は良いか！」

『いざ、勝負！』

バン！ とセリフごとにポーズを変え、ピシッ！ と宣言する。

そんな彼らに俺は一言。

「甘いな」

ダン！ と空中に高くジャンプし、体を捻る。そのまま思いつく限りの見栄えの良いアクロバティックな動きを披露した。

「相手は人外。驚かせたいならこれくらいは、な。

俺は【黒鬼の騎士】遊馬崎 黎。俺もまた恨みは無いが、ご相手致そう！」

「むう！」

ニイ、と意地悪い笑みを浮かべる。自分達の十八番（おはこ）をとられちゃ唸りもするだろう。

つーか、『油断したから負けた』とか『今度は負けない』とか、モロに三流小悪党のセリフだな……。

さて、それはさておき、改良を加えたこのデッキでの初勝負、いざ！

「いざ、尋常に勝負！」

「参る！」

「行くぞ！」

『デュエル！』

黎VS迷宮兄弟

LP 8000 VS LP 8000

「先攻は俺のターン、ドロー！」

引いたカードは……！



「『ゴゴゴゴレム』を、守備表示で召喚！」

『ゴゴゴゴ〜!』

セリフとしては『ゴ・ゴ・ゴ・ゴレム』に近い感じですよ。

ゴゴゴゴレム（効果モンスター）

星4

地属性／岩石族

ATK 1800 / DEF 1500

フィールド上に表側守備表示で存在するこのカードは、1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

ゴゴゴゴレム：DEF 1500

「カードを2枚セットし、ターンエンド」

黎：LP 8000

手札：3枚

フィールド

：ゴゴゴゴレム(ATK 2100)

：伏せカード2枚

SIDE：ファイオ

——観客席

「『ゴゴゴゴレム』……?」

? あれ、黎のデッキって確か……。

「『<sup>ファイア</sup>F・<sup>スピリッツ</sup>S』を主軸にした炎属性のデッキじゃ無かったっけか?」

思わず隣の明日香に聞く。

炎属性以外には『ネクロ・ガードナー』の様な精々補助系統のモンスター程度。でもあのモンスターがそれに属するとは思えない。炎属性にも見えないしね。

「私の記憶が正しければね。あのモンスターが黎のデッキにシナジーするとは思えないんだけど……。何であんなカードを入れたのかしら？」

「間違つて入った、とか？」

「いや、ほぼ間違い無く自分の意思で入れたカードだ」

わたしの推測を否定したのは三沢くん。イエローだけれどブルーの上位に匹敵する実力の持ち主。最大の持ち味は相手のデッキを細かく分析して、確実に弱点を狙つて来るという知能。そして持っているデッキも細部まで計算し尽くされた完成度の高いものだ。

「何故そう思うのかしら、三沢くん？」

明日香の問いに、三沢くんは「種族だよ」と簡潔に述べた。

「黎のデュエルは何度か見た事があるが、炎属性以外のモンスターはそのカードで完結するような効果のものばかりだった。黎のようなデュエリストが『ゴゴゴゴレム』という岩石族を偶然入れているとは考えにくい」

「黎のようになって、どういう事？」

「彼は使えるカードを粗方詰め込んだ後、そこからシナジーや連携を考えていつてデッキを構築・使用する、幅広いシナジーを見込んだデッキの使い手だ。」

例えば、あの『F・S』のデッキだつて、炎系のモンスターを入れた後に、それを補

助するカードを入れたり、プレイに無理が出ないようにカードを抜いたりしたデッキ。つまりはあのデッキはこれまで彼が使っていたものでは無く、改良を加えた、或いは全く別のデッキだ」

流石だね、三沢くん。数度彼のデュエルを見ただけでプレイスタイルやデッキの組み方を見抜くなんて。

それなら黎、君の新しいデッキの力、見せてもらおうよ！

S I D E : 黎

——デュエルリング

「私のターン、ドロー！」

迷宮兄弟の兄がビツ、とカードを引く。

へへっ、すっかり聞こえていたぜお前達。もちろん、大地の推測は正しい。このデッキは改造と改良を加えに加えまくって、以前の面影を殆ど残さず、けれどもしっかりと俺のデュエルスタイルに合わせたものにしてある。

先日起きた時、宅配便で届いた段ボール箱に前世で使っていたカードが詰め込まれていたんだから驚いたぜ。

「私は『ヒゲアンコウ』を召喚！」

迷宮兄弟の兄が召喚したのは長い髭を生やした不気味な鮫鰐。水属性用のダブルコ  
ストモンスターだ。目が退化している様に見えるからきつと深海魚だろう。

ヒゲアンコウ：DEF 1600

最初の一巡目は目立った行動はできないから、本領を發揮し始めるのは二巡目になる  
な。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

迷宮兄弟（兄）：LP 8000

手札：4枚

フィールド

：ヒゲアンコウ（DEF 1600）

：伏せカード1枚

「私のターン、ドロー！」

どうでも良いが、掛け声まで同じなんだな。

「私は『地雷蜘蛛』を召喚！そして魔法カード『デュアルサモン二重召喚』を発動！兄者、『ヒゲアンコウ』を頂くぞ」

「うむ。『ヒゲアンコウ』の効果発動！水属性モンスターを生け贄召喚する時、1体で2体分の生け贄素材となれる！」

ヒゲアンコウ（効果モンスター）

星4

水属性／魚族

ATK 1500／DEF 1600

水属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

兄の快諾と共に、迷宮弟がディスクにモンスターを出す。現れるのは、青き足の部分  
を担う魔神。

「出でよ『水魔神―スーガ』！」

『ゴオオオオオオオオオッ！』

水魔神―スーガ：ATK 2400

「申し訳無い兄者よ。兄者のモンスターを使ってしまった」

「何、お前の為なら犠牲にもなろう」

「いやいや、礼をしなくては私の気がすまぬ。

私は魔法カード『闇の指名者』を発動！ 指名するのは『雷魔神―サンガ』だ！」

「フッフ、ありがたい。勿論我がデッキにそのカードは入っている。加えさせてもらおうぞっ。」

闇の指名者

【通常魔法】

モンスターカード名を1つ宣言する。

宣言したカードが相手のデッキにある場合、そのカード1枚を相手の手札に加える。

一連のやり取りは十代と翔の時に見せた。どうやら二人にとってはお決まりの行動らしいが、俺にとっては至極どうでも良い。

にしても、ああいう使い方って良いのかねえ？

「さあ、我らの連携の前に、一人で立ち向かった事を後悔するが良い！」  
「カードを2枚伏せてターン終了！」

迷宮兄弟(弟)：LP 8000

手札：1枚

フィールド

：水魔神—スーガ(ATK 2500)、地雷蜘蛛(ATK 2200)  
：伏せカード2枚



「俺のターンー！」

さて、彼らの場には『スーガ』『地雷蜘蛛』の2体。どちらも弟のモンスター。兄を攻撃すればダイレクトアタックが決まる。

だが、『スーガ』がOCGと異なる。攻撃を封じる。能力だったら、その攻撃は不発に終わる。かと言って今の手札では『スーガ』以上の攻撃力のモンスターを召喚する方法は無い(『スーガ』以下だったら攻撃を止められた後に倒される)し、その効果を突破できるとは無い。

ならばここは、守備！

「俺は『シールド・ウイング』を守備表示で召喚！ ターンを終了する」  
『ギヒョッ！』

シールド・ウイング (効果モンスター)

星2

風属性 / 鳥獣族

ATK 0 / DEF 900

このカードは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない。

シールド・ウイング：DEF 900

ゴゴゴゴレム：ATK 2100↓DEF 1800

黎：LP 8000

手札：3枚

フィールド

：ゴゴゴゴレム（DEF 1800）、シールド・ウイング（DEF 900）

：伏せカード2枚

「私のターン！ フフフ、少年よ、守備に回っても、その程度のモンスターでは太刀打ち出来んぞ？」

「ハン、なら試してみるが良いさ」

「良かろう！ 魔法カード『生け贄人形<sup>ドール</sup>』を発動！ 弟の『地雷蜘蛛』を生け贄に『雷魔神—サンガ』を特殊召喚！」

『ゴグワワアアアアッ！』

生け贄人形

【通常魔法】

自分フィールド上モンスター1体を生け贄に捧げて発動する。

手札から通常召喚可能なレベル7のモンスター1体を特殊召喚する。

そのモンスターはこのターン攻撃できない。

雷魔神—サンガ：ATK 2600

「感謝するぞ、弟よ。お陰で『サンガ』の召喚に成功した」

「何、お安い御用だ」

「ふふふ、更に『融合』を発動！ 手札の『ギガテック・ウルフ』と『キャノン・ソルジャー』

を融合し『迷宫の魔戦車』を融合召喚！」

機械の狼と砲台を持った機械の戦士が時空の渦に呑み込まれ、青い装甲の赤いドリルを装備した戦車が出現した。

迷宫の魔戦車（融合モンスター）

星7

闇属性／機械族

ATK 2400 / DEF 2400

「ギガテック・ウルフ」＋「キャノン・ソルジャー」

「そして『暴風小僧』を召喚！」

『ヘェ〜イ!』

出て来たのは風属性専用のダブルコストモンスター。決して強くは無いが、アレで次に何をして来るかは想像に難くない。

## 暴風小僧 : ATK 1500

成程。『サンガ』はこのターン攻撃できない。俺の場のモンスターを潰して直接攻撃は弟のターンに任せ、という形か。

「行くぞ！ 『暴風小僧』で『シールド・ウイング』を攻撃！」

『イエーイ！』

突風に乗った『暴風小僧』が高く飛び上がり上空からライダーキックを決める。だが、『シールド・ウイング』は固い翼でその攻撃を受け止めた。

「何!？」

「『シールド・ウイング』は片翼で1度ずつ攻撃を受け止める事が可能。つまりコイツは2回まで攻撃に耐えられるってワケだ」

「ならば『迷宮の魔戦車』で『ゴゴゴゴレム』を攻撃！」

ギヤリギヤリギヤリ! とドリルが轟音を上げて突進して来る。因みにこの形だと岩盤にドリルが突き刺さった時にマシンの方が回転してしまう為、現実的では無いそう  
だ。

ならば何故こんなドリルがイメージとして先行しているかという点、これは地下を掘るドリルではなく、トンネルを掘る時に活躍するタイプのドリルであり、初期のドリル

がこれだったからである。

岩盤用のドリルは“掘る”よりも“削る”事を目的としており、分厚い岩を何日もかけて削る。一方でトンネル用のドリルは無論だが土を“掘る”事が目的なので、とにかくデカイ穴を空ける事が優先されるのである。

突進して来た殺人兵器を『ゴゴゴゴレム』は身体を真っ赤に光らせて正面から受け止めた。

「またか!？」

「守備表示の『ゴゴゴゴレム』は1ターンに1度、バトルでは破壊されないんでね」  
ここで俺はハツ、と笑う。

「守備に回っても太刀打ち出来ない、だったか？　だが、太刀打ち出来なかったのはそっちの方だったな！」

「ぐ……。ターンエンド！」

迷宮兄弟（兄）：LP　8000

手札：0枚

フィールド

：雷魔神―サンガ（ATK 2600）、迷宮の魔戦車（ATK 2400）、暴風小僧（ATK 1500）

：伏せカード1枚

「おのれ……私のターン！」

さてと、見栄を切ってはみたが、俺の方も反撃の手段は無いし、その上にライフも減っていない。このターン、彼がどう動くかで俺が次のターンに取るべき行動が決まる。

「兄者『暴風小僧』を使うぞ！」

「うむ、持っていていけ！」

って、おい！ もう最後の奴が揃ってたのか！?

面倒だなあ。

「『暴風小僧』は風属性モンスターを召喚する時に1体で2体分の生け贄となれる！ さあ出でよ！ 『風魔神―ヒューガ』よ！」

暴風と共に最後の魔神が現れる。風を纏う丸い生物、それが最もな印象だろう。

暴風小僧（効果モンスター）

星4

風属性／天使族

ATK 1500／DEF 1600

風属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「更に速攻魔法『禁じられた聖杯』を発動！ 攻撃力が400ポイント上がる代わりに、そのモンスターの効果はエンドフェイズまで消滅する！ 対象は『シールド・ウイング』だ！」

虚空から大きな杯が現れたかと思うと、いきなりそれは逆さまになり、中身が『シールド・ウイング』にぶちまけられた。聖杯の中身を浴びた『シールド・ウイング』は色褪せてしまい、その場にへたりこんでしまった。

ちよ、あの中身って何だったんだよ!?



禁じられた聖杯

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。

シールド・ウイング：ATK 0↓400

『ぎゅ〜……………』

『シールド・ウイング』！」

「これで攻撃が通る！ 行けえ！ 『ヒューガ』で『シールド・ウイング』を攻撃イ！」  
ビュウ！ と突風が巻き起こる。その圧力に耐え切れず、『シールド・ウイング』は吹き飛ばされてしまった。

「ターンエンドだ」

迷宮兄弟(弟)：LP 8000

手札：0枚

フィールド

：風魔神―ヒュウガ(ATK 2500)

：伏せカード2枚

「俺のターン。さて、遊びもそろそろ終わりにしようか。ここから本気で行くぜ！」  
『何い!?!』

巡って来たカードを見て、思わずニヤける。正にこの状況に最適なカードだ。

「俺は『F・S サニーハットキティ』を召喚！」

『ミャー!』

F・S サニーハットキティ(効果モンスター)(オリジナル)

星4

炎属性/獣戦士族

ATK 2000 / DEF 900

デュエル中1度だけ墓地に存在するこのカードを手札に加える事ができる。

このカードを手札から墓地に送る事で以下の効果を得る。「F・S サニーハットキティ」の効果はデュエル中1回しか使えない。

●自分のターンに墓地に送った場合、手札から通常罠カードを1枚発動できる。

●相手のターンに墓地に送った場合、このカードと墓地に存在するレベル4以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚できる。

勢い良く飛び出したのは麦わら帽子に猫耳の少女。黒い長髪が小麦色に焼けた肌にマツチしている。

F・S サニーハットキティ：ATK 2000

「更に『カゲトカゲ』を特殊召喚！ コイツは通常召喚できないが、レベル4モンスターが場に現れた時に、手札から特殊召喚できる！」

続いて影だけの蜥蜴が現れる。フィールドにその姿を現すと、赤い目だけが宙に浮い

た。

『……………！』

カゲトカゲ（効果モンスター）

星4

闇属性／爬虫類族

ATK 1100 / DEF 1500

このカードは通常召喚できない。

自分がレベル4モンスターの召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードはシンクロ素材とする事はできない。

カゲトカゲ：ATK 1100

「俺はレベル4の『サニーハットキティ』と『カゲトカゲ』をオーバーレイ！ 2体のモ

ンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

「オーバーレイ!?!」

『サニーハット』が赤、『カゲトカゲ』が灰色の光となって1つの光の渦に飛び込む。生まれた銀河はやがて光を発して爆発した。

☆4＋☆4＝★4

「エクシーズ召喚！ 現れる、『F・S ヒート・ステインガー』!!」

『はあっ!』

シユタツ！ と降り立つ上裸の戦士。針を指の間に持っている。

因みに針といっても裁縫に使うようなものではなく、もっと太いメリケンサックにでもつければ心臓や脳を貫けそうな太く長いものである。

『出たあ、エクシーズ召喚!』

『また見れた! また見れた!』

『カックイー!』

「『ゴゴゴゴレム』を攻撃表示に変更！」

更に『ヒート・ステインガー』の効果発動！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニツ

トを1つ使い、エンドフェイズまで相手の場のモンスター2体までのモンスター効果を無効にし、攻撃力を800ポイント下げる！ 行け！」

F・S ヒート・ステインガー：ORU 2↓1

俺の指示と共に炎の針が『スーガ』と『ヒューガ』に突き刺さり、相手ごと大炎上する。

風魔神—ヒューガ：ATK 2500↓1700

水魔神—スーガ：ATK 2400↓1600

「バトル！ 『ゴゴゴゴレム』で『スーガ』を攻撃！ //ゴゴゴブロー！！」

『ゴゴ〜！』

ブウン、と重い風切り音と共に青い拳が振るわれる。しかしそれは雷の壁で防がれてしまった。

「『サンガ』の効果発動！ 1回のみモンスターの攻撃を無効にする！」

バジバジッ！ と火花がスパークキングし、拳が弾かれる。だが……！

「『ヒート・ステインガー』で攻撃！ “熱針撃”!!」

『テエイヤツ!』

今度は防げない。雷の防壁は1回しか使えないのだ。

炎の大槍は水の魔神に突き刺さり、『スーガ』が炎上。爆発を引き起こした。

「先制攻撃、成功ってな」

『むう!』

迷宮兄弟 : LP 8000 ↓ 7400

「1枚セットして、ターンエンド!」

黎 : LP 8000

手札 : 0枚

フィールド

: F・S ヒート・ステインガー (ATK 2200)、ゴゴゴゴーレム (ATK 1800)

: 伏せカード3枚

「私のターン。ほう、これは良いカードが巡って来た」

む、何が来た？ 手札は全員0。今1枚引かれたから迷宮兄だけ1枚。さて、何のカードが来る事やら……。

「魔法カード『天よりの宝札』を発動！ お互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにデッキからカードをドロウする！」

成程。手札不足のこの状況には最高のカードだ。

全員これで6枚補充。あの中に『死者蘇生』や『ゲート・ガーディアン』がいてもおかしくは無い。

「伏せカードの『リビンググデッドの呼び声』を発動！ 私は『スーガ』を蘇生する！」  
『グオオオオオオッ！』

水魔神—スーガ：ATK 2400

来たか！



リビンググデットの呼び声

【永続罫】

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。  
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「そして3体の魔神を生け贄に！」

「出でよ、我らが守護神！」

『ゲート・ガーディアン!!』

兄弟がポーズを取り、ゴゴゴ、という重低音と共に巨大な（三魔神が肩車しただけの）  
モンスターが現れる。

つーか、こんな奴が守護神って、趣味悪いなあ。

ゲート・ガーディアン（効果モンスター）

星11

闇属性／戦士族





『ゲート・ガーディアン』を倒し、あんた達に勝つ！ 俺はもつと、もつと前に進まなくちやいけないんだ、強くならなくちやいけないんだ！」

ビシイ！ と巨大な敵を指を差して見据える。

さあ、行くぞ『ゲート・ガーディアン』！ テメエが俺が進むべき道の扉を守護するというのなら、テメエを踏み倒してでも前に進ませてもらおう！

t o b e c o n t i n u e d

# STORY14：扉の先へ

SIDE：黎

黎：LP 8000

手札：6枚

フィールド

：F（ファイア）・S（スピリッツ） ヒート・ステインガー（ATK 2200・0

RU：1）、ゴゴゴゴレム（ATK 1800）

：伏せカード3枚

迷宮兄弟（兄）：LP 7400

手札：5枚

フィールド

：ゲート・ガーディアン（ATK 3750）、迷宮の魔戦車（ATK 2400）

：魔法・罨無し

迷宮兄弟（弟）：LP 7400

手札：6枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード2枚

「我らの『ゲート・ガーディアン』に勝つだど!？」

「思い上がりも甚だしい!」

逐一ポーズを決める迷宮兄弟。だが、そっくりそのまま返させてもらう。

「マジでそう思うなら、かかって来い! 計算もできないプレイングミス野郎共に負けるつもりは無い!」

「良からう! 行けい『ゲート・ガーディアン』、『ヒート・ステインガー』を攻撃!

魔神衝撃波” あ!!”

掛け声と共に大量の水を巻き上げた旋風が雷を纏って放たれた。巨壁ですら粉々にされそうだが、そう簡単に通す訳にはいかない！

「<sup>トラップ</sup>罠 発動！ 『くず鉄のかかし』 !! 相手モンスター1体の戦闘を無効にする！」

屑鉄を寄せ集めて作った案山子が出現、青いバリアを張って巨大な竜巻を弾いた。誰が作ったんだらうね、こんな高性能なの。不動遊星の作品って言ったら信じるぜ、俺？

くず鉄のかかし

【通常罠】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

衝撃波が止むと同時に会場が騒めく。

『何い！ 防ぎ切っただとお!？』

『でもやっぱバカだ、オシリスレッドだ!』

『1回限りの罠で防いだぐらいでピンチが消えるワケじゃ無いものねえ』

くくく、どうやら『くず鉄のかかし』が御不満なようで。御安心あれ奥さん！

「だが罨は使い捨て！ 次は無い！」

「それはどうかな!? 『くず鉄のかかし』は発動後、墓地には送られず、再びフィールドにセットされる！」

「何だと!?!」

『い、インチキだろ!?!』

インチキとは失礼な！ 立派なカード効果です！

案山子はカードの絵柄の中に戻ると、パタリ、と倒れてセット状態に戻った。

「ならば『迷宮の魔戦車』で『ゴゴゴゴーレム』に攻撃イ！」

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ！ とドリルが回転。『ゴゴゴゴーレム』の装甲を砕いて貫通した。

「ぐっ！」

黎：LP 8000↓7400

「はっ、たった600ダメージたあな！」

「何?！」

「あんたらはミスを犯した『ゲート・ガーディアン』を特殊召喚するのはメインフェイズ



2、つまりバトルの後のの方が良かったんだよ！」

あの状態でモンスターは『サンガ』『スーガ』『魔戦車』の3体、対する俺は2体。攻撃を仕掛けられたら俺の場はガラ空き。次の弟のターンで与えられるダメージはダイレクトアタックのものだった。

だが、彼らは『ゲート・ガーディアン』に拘った。その結果、大ダメージのチャンス逃してしまったのだ。

「くっ、カードを1枚伏せてターンを終了する！」

迷宮兄弟（兄）：LP 7400

手札：4枚

フィールド

：ゲート・ガーディアン（ATK 3750）、迷宮の魔戦車（ATK 2400）

：伏せカード1枚

つつても、ダメージを受けた事に変わりはない。ちよつと油断したか？

「兄者のエンドフェイズに速攻魔法『終焉の焰』<sup>ほのお</sup>を発動！ 私のフィールドに『黒焰トーカーン』を2体特殊召喚！」

黒焰トークン：DEF 0×2

終焉の焰

【速攻魔法】

このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。自分フィールド上に「黒焰トークン」（悪魔族・闇・星1・攻/守0）2体を守備表示で特殊召喚する。

このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためにはリリースできない。

「そして私のターン！ 手札と場の魔法カード『生け贄人形』を2枚発動！ 『黒焰トークン』2体を生け贄に手札の『水魔神―スーガ』と『風魔神―ヒューガ』を特殊召喚！」  
ほう。『終焉の焰』は発動ターンにモンスターを場に出す事を封じる。だがそれは相手ターンなら話は別。自分のターンに回って来たならその制限は解除されている。

しかも魔法カードのコストだから闇属性以外のリリース素材にはできないという制約も関係が無い。

水魔神—スーガ：ATK 2400

風魔神—ヒューガ：ATK 2500

「永続罨発動！ 『血の代償』！ これで500ライフを払う度に通常召喚権を1回分得る事ができるのだ！ 更に魔法カード『強欲な壺』を発動！ デツキからカードを2枚ドロ—！」

『ゲート・ガーディアン』は重いからな。あれで少しは軽くしようという試みなのだろう。

でも正直『ファントム・オブ・カオス』とかを使った方が良いと思う。

血の代償

【永続罨】

500ライフポイントを払う事で、モンスター1体を通常召喚する。

この効果は自分のメインフェイズ時及び相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

ファントム・オブ・カオス（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

自分の墓地に存在する効果モンスター1体を選択し、ゲームから除外する事ができる。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカードはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同名カードとして扱い、選択したモンスターと同じ攻撃力とモンスター効果を得る。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このモンスターの戦闘によって発生する相手プレイヤーへの戦闘ダメージは0になる。

「続いて『名推理』を発動。相手はレベルを1つ宣言し、モンスターカードが出てくるまでデッキからカードを捲る。

最初に出て来たモンスターが宣言通りのレベルなら墓地へ送られ、異なるなら特殊召喚できる！ さあ、選べ！」

「7だ」

『早！』

左手で4、右手で3を示す。

どっかで誰かが突っ込んだが、正直これが正しい選択だと思う。もし既に出ている魔神なら兎も角『サンガ』が出て来たら2体目の『ゲート・ガーディアン』が召喚される可能性が高い。

そうなると、デッキに仕込んだ攻略法がどこまで通じるか怪しくなって来るからな。手札のコレだけじゃ対処し切れるかも疑問だし。

名推理

【通常魔法】

相手プレイヤーはモンスターのレベルを宣言する。

通常召喚が可能なるモンスターが出るまで自分のデッキからカードをめくる。

出たモンスターが宣言されたレベルと同じ場合、めくったカードを全て墓地へ送る。

違う場合、出たモンスターを特殊召喚し、残りのカードを墓地へ送る。

「では行くぞっ！」

そう言つてカードが捲られて行く。

1枚目：『アヌビスの裁き』

2枚目：『壺盗み』

3枚目：『クロスソウル』

4枚目：『コストダウン』

次々と墓地に送られるカード達。

そして5枚目にモンスターカードが巡つて来た。

何故見えるかつて？ そんなの眼球と視神経イジつて視力を鷹並みに上げたからに決まつてるじゃん。

「引いたカードは『カイザー・シーホース』、レベル4だ！ 従つて特殊召喚！」

『はあっ！』

つちや、読み間違えたか。

カイザー・シーホース（効果モンスター）

星4

光属性／海竜族

ATK 1700 / DEF 1650

光属性モンスターを生け贄召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「そして『カイザー・シーホース』は光属性用ダブルコストモンスター！ こいつを生け贄に、出でよ『雷魔神―サンガ』よ！」

げ、もう手札にあったのか……。こいつらも中々引き運があるな。

「ミスが何なのか話したのは失敗だったな！ 3体の魔神で攻撃だあ！」

う、確かに。弟のターンの事忘れてたな。

青い魔神、緑の魔神、黄金色の魔神が一斉に若干の時間差をつけて攻撃を放つ。

「まずは『スーガ』で攻撃！」

「済まない『ヒート・ステインガー』、その攻撃は通す！」

押し寄せる水流に『ヒート・ステインガー』が流される。

「ぐうっ！」

黎：LP 7400↓7200

「そして『ヒューガ』と『サンガ』でダイレクトアタック！」

〃風魔衝撃波〃 あ！！

『マズイ、あれを喰らったら大ダメージだ！』

『黎！』

『フハハハッ！ 奴も直、終わりだあ！』

内部に雷を孕んだ竜巻が放たれる。

大地の言う通り、これが通ったら合計で5100ダメージ。残りライフが2100にまで落ちる。そうなりやこのパワーバカ共にやられちまう。

だが、そう上手く行かないのが世の中ってモンだぜ、万丈目！

「手札から『速攻のかかし』を墓地に送り、ダイレクアタックを無効化する！」

機械的な案山子が描かれたカードを墓地に送ると、半透明のゴーグルをかけた案山子がターボエンジンのジェットノズルを蒸かして攻撃の正面に立ちはだかり、バリアで風と雷を防ぐ。

速攻のかかし（効果モンスター）

星1

地属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。



その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「この効果が発動した場合、バトルフェイズは強制終了される。『天よりの宝札』で俺の手札も補充したのは失敗だったな」

「ぬう、私はライフを500支払い、『ディフェンス・ウォール』を守備表示で召喚。ターンエンドだ」

迷宮兄弟：LP 7400↓6900

ディフェンス・ウォール（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星4

地属性／戦士族

ATK 1000／DEF 2100

このカードがフィールド上に表側守備表示で存在する限り、相手はこのカード以外のモンスターを攻撃対象にすることはできない。

ディフェンス・ウォール：DEF 2100

迷宮兄弟(弟)：LP 6900

手札：2枚

フィールド

：雷魔神―サンガ(ATK 2600)、風魔神―ヒューガ(ATK 2500)、水

魔神―スーガ(ATK 2400)、デیفエンス・ウォール(DEF 2100)

：血の代償(永続罫)

ふう、ちよつとふざけ過ぎたか。最初から全力全開で行けばもうちつとやり易かったかな？

ま、今更過ぎた事を気にしても仕方無いし、今からでも遅くないっしょ！

「俺のターン！」

手札は6枚。OK！ 十分逆転できる！

「魔法カード『ビッグバン・シュート』を『ゲート・ガーディアン』に装備！ このカードを装備したモンスターの攻撃力は400ポイント上がり、更に貫通効果が付与される」

こいつは一見すれば中々のパワーカード。ただし、こいつは大きなデメリットを抱え

ている。

ゲート・ガーディアン：ATK 3750 ↓ 4150

『あいつバカじゃねえの？ 相手をワザワザ強くするなんてよ』

『やつぱりオシリスレッド、ですわ』

ひひひ、そう思うよな？ こいつのデメリットを知らない奴は誰だってそう言うもんだ。

「更に『ゴブリンドバーグ』を召喚！」

『へへへへへへ〜！』

ゴブリンドバーグ：ATK 1400

「モンスター効果発動！ 発動後に守備表示になるが、手札のレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚できる！ 俺は『F・S マグマドラゴン』を選択！」

『ヌーン！』

ゴブリンドバグ：ATK 1400↓DEF 0  
 F・S マグマドラゴン：DEF 1500

ゴブリンドバグ（効果モンスター）

星4

地属性／戦士族

ATK 1400／DEF 0

このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果を使用した場合、このカードは守備表示になる。

残念ながら『マグマドラゴン』の効果の特殊召喚は「場に出てすぐ」なので、『ゴブリンドバグ』の「守備表示になる」という効果が挟まってしまい使えない。これが「タイミングを逃す」という奴だ。

「1枚カードを伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 7500

手札：2枚

フィールド

：ゴブリンドバグ（DEF 0）、F・S マグマドラゴン（DEF 1500）

：伏せカード3枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）、ビッグバン・シユート（装備魔法・『ゲート・ガーディアン』に装備）

「私のターン、ドロー！ どういうつもりかは知らぬが、行くぞ！」

まずは『迷宮の魔戦車』で『マグマドラゴン』を攻撃！」

「『くず鉄のかかし』で防御させてもらおう！」

真つ赤なドリルの進撃を金属の案山子が正面から受け止める。

「そして『ゲート・ガーディアン』で『ゴブリンドバグ』を攻撃！ // 魔神衝撃波 !!」

貫通効果を持つ水・風・雷が赤い飛行機に乗ったゴブリンを巻き込み、吹き飛ばす。貫通ダメージとは名ばかりと言わんばかりのダイレクトアタック並みの威力がライフから差し引かれた。

迷宮兄弟：LP 6900 ↓ 2750

「な、何が起こった!？」

「我らのライフが減っただど!？」

黎：LP 7200

『おい、バグか!? あいつのライフ減ってねえじゃんか!』

『きつと何かイカサマしやがったんだ!』

『卑怯ですわ!』

「何なのくネ!? 何が起こっているのくネ!? ワタシには何がなんだかサツパリ分かりません、かっぱ○びせん!!」

色々と言われているな。悪いがズルでも何でも無いぞ？

それとクロノス先生、貴方一応実技の最高責任者でしようが、カードテキストぐらい把握しておこうぜ? しかもかっぱえ○せんって……。

「『ビッグバン・シユート』は確かに貫通効果を発生させる。でも、その貫通ダメージを受けるのは『ビッグバン・シユート』をコントロールしているプレイヤーから見た相手だ。」

つまり、今『ビッグバン・シユート』をコントロールしている俺の相手、アンタ達が

ダメージを受けるんだ」

これ、意外と間違えるらしい。

こういう貫通装備カードは相手に装備させて守備モンスターで場を固めると、相手の攻撃を止められる抑止力になる。自分のモンスターに装備するか相手モンスターにするかはその時の戦局次第なので、巧く使い分けるのが上級者への近道だ。

ビッグバン・シユート

#### 【装備魔法】

装備モンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

「なんと……！ くつ、私はこれでターンを終了する！」

迷宮兄弟（兄）：LP 2750

手札：5枚

フィールド

：ゲート・ガーディアン（ATK 4150）、迷宮の魔戦車（ATK 2400）

：伏せカード1枚

「よもや『ゲート・ガーディアン』の攻撃を逆手に取るとは……！」

「中々やりおる……！」

「私のターン！」

ビツ！ と切られるカード。さて、ご自慢の攻撃、片方は封じた。もう片方はどう出てくる？

「私は『サンガ』で『マグマドラゴン』を攻撃する！」

「うわっ！」

黄金色の魔神が雷を放ち、灼熱の龍を攻撃する。その威力に『マグマドラゴン』は真っ黒な炭になってしまった。

「続いて『ヒューガ』で直接攻撃！」

「『くず鉄のかかし』！」

後続で放たれた突風を金属の案山子が作ったバリアで防御する。何の意味が？ す



ぐ分かる。

『『スーガ』で直接攻撃!』

最後に放たれた激流は『ウイスプ』自身の青白い炎の結界で防いでもらう。

「何!?!」

「わざわざ防いだんだから突破できるとでも? 『スーガ』の攻撃に合わせて罠カード『線香花火』を発動した。デッキからレベル3以下の炎属性モンスターを特殊召喚できる。」

『F・S 鬼火のウイスプ』は1900以上の攻撃力を持つモンスターとのバトルじゃ破壊されないんでね」

わざわざ防いだのは『スーガ』を守備表示にさせない為。次のターンに反撃しやすいような基盤作りだ。

線香花火（オリジナル）

【通常罠】

デッキまたは手札からレベル3以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターは相手の魔法・罠カードの効果では破壊されない。

この効果で特殊召喚されたモンスターはアドバンス召喚のためにはリリースできない。  
い。

F・S 鬼火のウィスプ：DEF 700

「ならば私も『雷魔神―サンガ』『風魔神―ヒューガ』『水魔神―スーガ』を生け贄に！」  
「出でよ！ 我らが守護神！」

「『ゲート・ガーディアン』！」

ゴゴゴ、という音と共に三魔神が縦に重なった巨大なモンスターが現れる。

2体目か。成程、これなら『スーガ』に攻撃させた意味が無くなっちゃったな。

「カードを1枚セットし、ターンエンドだ」

迷宮兄弟（弟）

手札：0枚

LP 2750

フィールド

：ゲート・ガーディアン（ATK 3750）、ディフェンス・ウォール（DEF 2100）

：伏せカード1枚、血の代償（永続罫）

「俺のターン！」

お、『拘束解放波』だ。よし、これならあいつらを退場させられる！

「魔法カード『拘束解放波』を発動！ 自分フィールド上の装備魔法1枚を墓地に送って相手の場の魔法・罫カードを全て破壊する。俺は『ビッグバン・シユート』を墓地に送る！」

更に『ビッグバン・シユート』が装備モンスターより先に場を離れた時、装備モンスターをゲームから除外する！」

「な！ さ、させぬ！ リバースカード『神秘の中華なべ』を発動！ 『ゲート・ガーディアン』を墓地に送り、その攻撃力だけライフを回復する！」

あらら、チェーンされたか。上手く通るとは思っていなかったが、ライフ回復をされるとはね。

拘束解放波

## 【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在する装備魔法カード1枚を選択して発動する。

選択した装備魔法カードと相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを全て破壊する。

神秘の中華なべ

## 【速攻魔法】

自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。

生け贄に捧げたモンスターの攻撃力か守備力を選択し、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

迷宮兄弟：LP 2750↓6900

『ビッグバン・シユート』が破壊されると風が生まれ、その風は迷宮弟の場のリバーズカード『ダメージ・コンデンサー』を破壊した。

「魔法カード発動、『魂霊の呼び声』！ デッキから『<sup>スレリッ</sup>S』と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる！ 俺は『F・S バック・ドラフトマン』を手札に加える。

更に魔法カード『火炎の魅力』を発動！」

魂霊の呼び声（オリジナル）

【通常魔法】

デッキから「S」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

火炎の魅力（オリジナル）

【通常魔法】

自分のデッキからカードを3枚ドロウし、その後手札の炎属性モンスター1体を墓地に送る。

手札に炎属性モンスターがない場合、手札を全てゲームから除外する。

「俺はカードを3枚引き、手札の『バック・ドラフトマン』を墓地に送る。そして『バック・ドラフトマン』の効果で、こいつを手札に戻す」

F・S バック・ドラフトマン（効果モンスター）（オリジナル）

星2

## 炎属性／炎族

ATK 1300／DEF 1300

このカードがデッキまたは手札から墓地に送られた時、以下の効果から1つを選択して発動する。「F・S バック・ドラフトマン」の効果はデュエル中2回まで使用できる。

●このカードを手札に加える。

●ライフポイントを500ポイント回復する。

『すごい……、デイスアドバンテージを回避した……』

『レッドのクセに、良い腕とカード持つてるじゃん』

『あいつ本当にレッドか……？』

『つてか、あいつこの前昇格蹴ったヤツじゃね？』

これで手札は4枚。ちやちやつと行くぜ？

「魔法カード『火炎融合―ファイア・フュージョン』を発動！こいつは『F・S』と名のついたモンスターを融合召喚する時、デッキから融合素材を選択して墓地に送る事ができる！手札の『エターナル・ランプ』とデッキの『ボルカニック・ギア・ガイ』を融合！全てを焼き斬れ、『F・S ブレイジング・ナイト』！」

『はあっ！』

火炎融合ーファイア・フュージョン（オリジナル）

【通常魔法】

「F・S」と名のついたモンスターを融合召喚する時のみ発動可能。

デッキから融合素材となるモンスターを選択して融合素材とする事ができる。

この時、手札またはフィールドのモンスターを融合素材としない場合、融合召喚したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける。

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900

今回も登場して頂きました、銀の甲冑の騎士。良い感じの効果があるから中々使いやす  
すい。

『バック・ドラフトマン』を通常召喚！

『いきま〜す〜！』

F・S バック・ドラフトマン：DEF 1300

「魔法カード『種火』を発動。場の『F・S』と名のついたモンスター1体をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローする。俺は『バック・ドラフトマン』をデッキに戻す！　そして2枚ドロー！」

更に魔法カード『強欲な火山口』を発動。手札の炎属性モンスター『F・S　バーナーズ・キャノン』をデッキに戻して、追加でカードを2枚ドローする」

これで、手札（の内容）不足を解消。やつぱり2対1だところこうして手札不足を補っていかないと、戦術が詰まるからね。尤も、デッキ切れには注意だけど。

種火（オリジナル）

### 【通常魔法】

自分の場に表側表示で存在する「F・S」と名のついたモンスター1体をデッキに戻して発動する。

デッキからカードを2枚ドローする。



「バトル！ 『ブレイジング・ナイト』で『ディフェンス・ウォール』を攻撃！ 『ブレイジング・ナイト』はモンスターを戦闘によって破壊した時、その攻守の合計の半分のダメージを与える！」

対象の『ディフェンス・ウォール』の攻守の合計の半分は1550！ 受けろ！  
空破炎撃斬”！！ ”ファイア・フォース”！！

「ぬおおおおおおおっ！」

迷宮兄弟：LP 6900↓5350

「まだまだ！ メインフェイズ2に移行！」

このままじゃあ『ブレイジング・ナイト』がやられてダメージを受ける。今回のデツキは炎を基軸の1つとしたロックやパーミッションの性質を帯びたものだ。

行くぜ！ 対『ゲート・ガーディアン』用（本当は面倒な敵対策）カード第2段！

「装備魔法『疫病ウィルス ブラックダスト』を『ゲート・ガーディアン』に装備！ かつて装備したモンスターは攻撃が出来ず、相手の2回目のエンドフェイズ時に破壊される！」

疫病ウィルス　ブラックダスト

【装備魔法】

このカードの装備モンスターは攻撃できない。

装備モンスターのコントローラーの2回目のターン終了時に、装備モンスターを破壊する。

この効果が成功した場合、このカードは持ち主の手札に戻る。

ゴボゴボゴボゴボ……、と気色の悪い音を立て、『ゲート・ガーディアン』の体が変わっていく。まるで腐食したかのように全身が青黒くなり、膨れ上がる。

この時代なら発動の遅いこのカードも十二分に脅威だ。

「本来なら、こいつは2ターン待つ必要がある。だが、この変則式のデュエルでは……」

「くっ、私がエンド宣言をするのと同時に破壊される！」

弟が歯噛みする。正解だよ。

「俺はこれでターンエンド！」

黎：LP　7500

手札：2枚

ワールド

・F・S 鬼火のウィスプ (DEF 700)、F・S ブレイジング・ナイト (ATK 2900)

・伏せカード3枚 (内1枚は『くず鉄のかかし』)、疫病ウィルス ブラックダスト (装備魔法・『ゲート・ガーディアン』に装備)

「私のターン、ドロロー！」

青ざめた顔でデッキトップからカードを引く迷宮兄。切り札である『ゲート・ガーディアン』が全く歯が立たない相手だ。よく分かる。

が、兄は引いたカードを見るとニヤリ、と笑った。む、あれを引いたか？

「永続魔法『魔力儉約術』を発動。これにより、魔法カード発動時のコストが消滅する！」  
また微妙 (一長一短) なカードを……。

あえてライフコストを払うってのもできないから意外と使いづらんだよな、アレ。魔法カード限定だから『神の宣告』のコストも無効にできないし……。

魔力儉約術

## 【永続魔法】

魔法カードを発動するために払うライフポイントが必要なくなる。

## 神の宣告

## 【カウンター罫】

ライフポイントを半分払って発動する。

魔法・罫カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか一つを無効にし破壊する。

「ふふふふ……。お主に最強の『ガーディアン』を見せてやろう！」

「！ 来る！」

『また見れますか、あの闇の守護神が！』

『校長、席に戻って下さいくノ……』

『大ピンチだ！』

『黎、頑張れえ！』

迷宮兄がフィールドに出したのは黒い煙を発する、反転モンスターを出すあのカード。

「魔法カード『ダーク・エレメント』を発動！ 本来ならライフを半分支払う必要があるが、『魔力儉約術』の効果で不必要となる！」

ダーク・エレメント（アニメオリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地に「ゲート・ガーディアン」が存在する場合に発動する事ができる。

ライフを半分支払う事で自分のデッキから「闇の守護神―ダーク・ガーディアン」を特殊召喚する。

このカードを発動する場合、このターン他のモンスターを召喚・特殊召喚する事はできない。

「出ですよ！ 『闇の守護神―ダーク・ガーディアン』!!」

『ボワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

闇の守護神―ダーク・ガーディアン：ATK 3800

『おおおお、また見れるとは感激です!』

『ですから席に戻って下さい〜ノ!』

『こりやヤバいぜ……!』

『お前も終わりだな! 遊馬崎 黎!』

『まだだ! 黎はまだ負けていない!』

蜘蛛のような下半身と足(ただし6本)、筋骨隆々の上半身。鈍く光る鋭い斧を装備した巨大な怪物が黒い瘴気と共にズシン、ズシン! と足音を立てて現れた。

「これぞ、我らの究極の僕しもべ!」

「『ダーク・ガーディアン』!」

「さあ、どうする!」

「良いから来い。そんなザコの『ゲート・ガーディアン』に毛が生えた程度のモンスター、俺の敵じゃ無いね」

ザワザワザワザワ…………………………!

『ザコつて、アイツ……!』

『チョーシこいてんじやネエぞ、クズレツド!』

『黎、君はそれほどまでに自信があるというのか……!』

『何故かな? 黎だったらあのモンスターをすぐに片付けてしまいそうな気がするよ』

もちろん本心では無い。確かに『ゲート・ガーディアン』は重いが、その攻撃力は単

体で十分に高い。要するに頭の使い方なのだ、こういう高レベルモンスターの召喚は。

「我らの守護神と究極モンスターを」

「ザコ扱いするとは！」

「言われても仕方ないとは思うが？ 1体目は危うく除外されかけて回復の為に墓地行き。2体目だつて『ブラックダスト』の影響で動けない。

これをザコと呼ばぬのならば、あんたらの腕前が俺より下だという事だわな？」

「ぬう……！」

俺のアレは挑発によるプレイングミス誘発。実際あの兄弟は苛立ち、俺を睨みつけている。クールにならなければ、ミスを連発するのはどこに行つても常識だ。

「ならば受けよ！ 『ダーク・ガーディアン』の攻撃、ダーク・シヨック・ウェーブ！！」

「リバースカード、オープン！ 罨カード『くず鉄のかかし』！」

ブオン！ と斧の一振りで生まれた三日月状の衝撃波は金属製の案山子を立ててバリアを張り、防ぎ切る。

どうやら本当に冷静さを欠いているようだ。『くず鉄のかかし』がセットされているつてのに。

ちなみに便利な『くず鉄のかかし』は再利用できるといってお得な効果を持つが、逆に

それは相手に「場の特定の位置に『くず鉄のかかし』がある」という事を知らしめてしまいう事につながる。

要するに『サイクロン』系で除去されやすいのだ。一長一短なのはどんなカードにも付き物だな。

「はっ、『くず鉄のかかし』がある事は前々から分かっていたはずだが？」

「ぬ、ぬぬう……！ 『迷宮の魔戦車』を準備表示に変更！ カードを1枚伏せ、これでターンエンド！」

迷宮の魔戦車：ATK 2400 ↓ DEF 2400

迷宮兄弟（兄）：LP 5350

手札：3枚

フィールド

：闇の守護神―ダーク・ガーディアン（ATK 3800）、迷宮の魔戦車（DEF 2400）

：伏せカード1枚、魔力儉約術（永続魔法）



「私のターン！」

さて、好い加減に終わらせないと、読者の方々も飽きが回ってくるだろうね。弟さんの手札は0だ。どう来るか見物だな。

「手札から魔法カード『アドバンスドロー』を発動！」

アドバンスドロー

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するレベル8以上のモンスター1体をリリースして発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「これで『ゲート・ガーディアン』を生け贄にカードを2枚ドロー！」

「チツ、これにより、『ブラックダスト』は墓地に行く」

手札不足を補いつつ、カードの再利用を封じる。良い手だ。

にしても、やっぱり『ブラックダスト』は少々使い辛いかな？ 今度別のカードに入れ替えてみよう。

「兄者、すまぬ。『ゲート・ガーディアン』を……」

「なに、あのままではマズい状況へと一直線だった。お前の判断は正しい」「かたじけない。しかし、タダでは終わらせぬ！ 手札から速攻魔法『サイクロン』を發動し、『くず鉄のかかし』を破壊する！」

そして私も『ダーク・エレメント』を發動！」

竜巻が突如としてフィールドを突き進み、金属製の案山子を吹き飛ばした。

あちや、破壊されたか。まあ、2回か3回使えば良いって考えが普通だし、グダグダ考えていてもしょうがないか。見方を変えれば、別のカードを守る罠——案山子になっただって事だしな。

サイクロン

### 【速攻魔法】

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

「さあ、出でよ我らが究極の僕！」

「『ダーク・ガーディアン』！」

ズモモモモモ、と2体目の『ダーク・ガーディアン』が登場。いやはや、こういうデカブツが2体も並ぶと、流石に圧巻だねえ。

『ダーク・ガーディアン』が特殊召喚されたターンは他のモンスターを場に出す事はできぬが、今の私は手札が無い為、関係無い。

行くぞ！ 『ダーク・ガーディアン』で『F・S ブレイジング・ナイト』を攻撃！ //

ダーク・シヨック・ウエーブ！！

「攻撃にチェーン！ 速攻魔法『融合解除』を発動！ 『ブレイジング・ナイト』の融合を解除し、『F・S ボルカニック・ギア・ガイ』と『F・S エターナル・ランプ』を墓地から特殊召喚する！」

『はあっ！』

『へっへへへ……！』

F・S ボルカニック・ギア・ガイ：DEF 1200

F・S エターナル・ランプ：ATK 500

肩に金属製の歯車を装着した男と、鎖に繋がった紫の目が点っているランプを持った男が復活する。

「ならば『エターナル・ランプ』を攻撃！」

『およよよよ!? もしかして、闇?』

しめた、かかった!

『エターナル・ランプ』のモンスター効果発動! こいつが闇属性モンスターとバトルを行った時、ダメージ計算を行わずにそのバトルを終了し、更に相手に800ポイントのダメージを与える!

「なんと!?!」

『へッへへへ〜! へエ〜ッ!』

『エターナル・ランプ』は三日月状の衝撃波をヒラリと躲すと、鎖をブンブンと振り回して投げつけ、先端のランプ(多分生きている)を『ダーク・ガーディアン』に叩きつけた。その際、炎がランプから噴き出し、『ダーク・ガーディアン』ごと迷宮兄弟を焼いた。赤紫の火炎の中から全身から黒煙を上げて『ダーク・ガーディアン』が復活する。

F・S エターナル・ランプ (効果モンスター) (オリジナル)  
星1

炎属性/天使族

ATK 500 / DEF 300

このカードが闇属性モンスターとバトルを行った時、ダメージ計算を行わずにそのバトルを終了し、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、そのターンのエンドフェイズまで自分フィールド上のモンスターは永続魔法、永続罫の影響を受けない。

『エターナル・ランプ』は比較的採用率の高い闇属性モンスターとのバトルにおいてほぼ無敵を誇るモンスター。特にほぼ全員が闇属性である「B F」が相手なら無双と  
ブラックフェザー  
 いつでも過言じゃないだろう。

ただし、破壊できないし、その能力値も低い。

迷宮兄弟：LP 5350↓4550

「くっ、これでターンを終了する！」

「だが、我らの前に！」

「敵は無し！」

「さっきは負けたクセに……」

「うっ！」

迷宮兄弟（弟）：LP 4550

手札：0枚

フィールド

：ダーク・ガーディアン（ATK 3800）

：血の代償（永続罠）

俺の手札は今2枚。勝利を収めるのにはちよいと心許無い。次のドロウで何を引くか、だな。

「俺のターン、ドロロー！」

引いたカードの絵柄は……、ドロソース！

「魔法カード『命削りの宝札』を発動！ 5ターン後、手札を全て捨てる代わりに手札が5枚になるようにデッキからドロロー！」

よし！ 巡って来たカード達よ、感謝するぞ。これで行けるからな！

「チューナーモンスター、『F・S グリル・ゴーレム』を召喚！」

『ゴオオオッ！』

F・S グリル・ゴーレム：ATK 1300

フシユーツ！ と全身から蒸気を上げる赤い石像。腕はまるで象の足のように太い。合計レベルは1+2+3+4で10。1つ多い。

だが、俺の手札の壊れカードを使えば、問題は無い。

「速攻魔法『レベル詐称』を発動！ 自分の場の『S』と名のついたモンスター1体のレベルをエンドフェイズまで1から12の中から好きな数字に変更できる！」

ただし、この効果の対象になったモンスターがフィールドにエンドフェイズまで残っていた場合、ゲームから除外され、プレイヤーはその攻撃力分のダメージを受ける。

『ボルカニック・ギア・ガイ』のレベルを4から3に変更！」

レベル詐称

【速攻魔法】

自分フィールド上に存在する「S」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターのレベルを1から12の中から好きな数字に変更できる。

この効果を適用したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーは攻撃力分のダメージを受ける。

デメリットはあるが、中々の壊れカードだろう。一回フィールドを離れちゃえばダ





紅蓮の鎧を纏い、三対の翼を羽ばたかせ、優しくも厳しい表情で降臨する熾天使<sup>してんし</sup>。両手には何も持っていないが、それが逆に彼が高位の天使である事を彷彿とさせる。

『グリル・ゴーレム』の効果で墓地の『速攻のかかし』を手札に加える』

『出た！ シンクロ召喚！』

『『融合』を使わない融合召喚！』

『この前とは違う奴だ！』

「な、なんなのだこの召喚は！」

ふむ、良い機会だ。説明しておこう。

「説明がまだだったな。シンクロ召喚はレベルの足し算だ。チューナーとそれ以外のモンスターのレベルの合計と同じレベルのシンクロモンスターをエクストラデッキから特殊召喚する、それがシンクロ召喚。

対し、エクシーズ召喚は同じレベルを揃える方法。素材となったモンスターは墓地には送られずにエクシーズモンスターの下に置かれ、効果発動時なんかは初めて墓地に送られるんだ。

双方共に未来の召喚方法。だが、この間皆の前で使ってしまったんでね、躊躇はしないさ」

まあ、説明としてはこんなモンが妥当だろう。

「中々の攻撃力！ だがしかし！」

「我らの『ダーク・ガーディアン』には及ばぬ！」

相も変わらずバン！ とポーズを決めて（ポーズは変わってますよ？）セリフを吐く迷宮兄弟。

ふふふ、甘いな！

「ならばこれでどうだ!?」 HEROにはHEROの戦う場があるように精霊には精霊の戦う場所がある！

フィールド魔法『スピリッツ・ワールド』、発動！

そしてそこには俺の戦い方がある！ 伏せていた速攻魔法『ディバイド・マニユファクチュア・パワー』を発動！

『スピリッツ・ワールド』が自分の場にある時、攻撃対象の攻撃力を半減させ、自身の『S』1体の攻撃力を1000上げる！」

ディバイド・マニユファクチュア・パワー（オリジナル）

【速攻魔法】

「スピリッツ・ワールド」が存在する時のみ発動可能。

発動ターン攻撃を行う「S」と名のついたモンスターが異なる種族・属性のモンスター

とバトルを行う時、1度だけダメージステップ終了時まで相手モンスターの攻撃力は半分になり、攻撃を行う自分のモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

F・S ヴオルケーノ・セフィラム：ATK 3100↓4100

闇の守護神 ダーク・ガーディアン：ATK 3800↓1900

『『ダーク・ガーディアン』を上回った!』

「そしてモンスター効果発動! 『ヴォルケーノ・セフィラム』はシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材に使用したチューナー以外のモンスターの数が攻撃回数となる。つまり、こいつの1ターンの攻撃回数は3回!」

F・S ヴオルケーノ・セフィラム(効果モンスター)(オリジナル)

星9

炎属性/天使族

ATK 3100/DEF 2250

このカードはシンクロ召喚以外の方法で特殊召喚できない。

このカードは、シンクロ素材に使用したチューナー以外のモンスターの数だけ攻撃で

きる。

「ターンに1度、手札を1枚捨てる事で、自分の墓地から炎属性モンスター1体をモンスター効果を無効にして特殊召喚できる。」

「なあに!?」

「これで、終わりだ! 行くぞ、『F・S ヴォルケーノ・セフィラム』の攻撃!」

爆ばくてんしょうれんほうげき天掌煉砲撃・三連打”ア!!”

バサリ、と紅の翼を広げて大きく飛翔する『ヴォルケーノ・セフィラム』。両掌に灼熱のエネルギーを籠めると、急降下で『ダーク・ガーディアン』に接近する。

「一! 俺は絶対にも!」

右手を突き出し、業火の衝撃波を炸裂させる。

「二! もう誰にも!」

左手を突き出し、紅蓮の太陽を叩き込む。

「三! 負けない!」

両手を突き出し、煉獄で全てを焼き払う!

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!」

「俺の、勝ちだあああああっ!」

黎 : WIN  
迷宮兄弟 : LOSE

迷宮兄弟 : LP  
4  
5  
5  
0 ↓  
2  
3  
5  
0 ↓  
1  
5  
0 ↓  
0



るのが当然と思われていたのだろう、故にそのギャップがこの熱狂を呼んだ。

「ありえないくノ、背中痒いくノ、頭も痒いくノ!」

「彼もまたここデュエルアカデミアの生徒であるという事ですかニヤ、ファラオ?」

「ニヤ……」

クロノス先生は2度の迷宮兄弟の敗北に頭をハゲなりそうな勢いで掻き毟り、大徳寺先生は愛猫のファラオと和んでいる。

というか、クロノス先生の言語センスは相変わらず独特だね。真似できねえ。

そして未だ項垂れている迷宮兄弟に十代のように俺も一言言わせてもらう。

「礼を言う。御仁達のお陰で俺はまた一つ強くなれた。新たな扉を開く道が見えた気がしたよ」

ペコリと軽く会釈してからリングを飛び降りる。下で十代達と一緒に鮫島校長のところへ行く。

「3人とも勝利しました。退学は取り消しで良いですか?」

「はい、文句無い勝利でした。退学の件は取り消しとしましょう」

「やった!」

「ここで俺は十代と翔の肩をグイ、と引つ張る。

(お前ら、ちよいと耳貸せ)

(?)(?)

「ご丁寧に揃って疑問符を頭の上に浮かべる二人。おいおい、もちつと頭の回転早くしろよ……。」

「このまま話を聞き続けたらレポート提出とかの話が出てくるぞ、これは退学取り消しだけが条件のデュエルだからな」

(うげ、マジ?)

(に、逃げるツス、黎くん!)

(なら俺に任せろ!)

ガシツ、と二人の腰に腕を回す。これで問題無いだろう。

「では、校長先生、ここにもう用事はないので……、さようならっ!」

「あ……、逃げられましたか……。」

ビュン! と音を立てるくらいの速さで撤退する俺。このくらい造作も無い。ついでに言うのとレポートは嫌いだ。

更にリングの去り際にファイオ、明日香、大地、隼人の傍を通って通告。音残しと名付けたこの技は、自分の声をその場に残し、メッセージを伝えるもの。"トリコ"のゼブラが使う音の鎧はその纏った人物の体に残り続けるが、あれを真似たものだと思ってくれば良い。



尤も、鎧にはならないし、そんな遠くまで飛ばないけどね。

『レッド寮で打ち上げするから、俺の作った夕飯が食いたかったら来い』

きつとビツクリしているけれど、俺だから有り得るとでも思ってくれるだろう。

『おお、黎は本当に何でもありだな』

『また黎のご飯が食べられるんだ、行こう明日香！』

『ええ、ジュンコやももえも誘いましょうか』

『オレ、もう腹が減ってきたんだな』

ま、何はともあれ一件落着。この後、俺は持てる技術と知識をフル動員して豪華な晩御飯を作り、皆から大好評を貰ったのであった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 15：底辺に生きる男と底辺へ落ちる男

## SIDE：黎

「俺は『F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ』で守備表示の『ハイパーハンマーヘッド』を攻撃！ “スピン・ファイア・キック”！ 貫通ダメージでフィニッシュだ！」

ハイパーハンマーヘッド（効果モンスター）

星4

地属性／恐竜族

ATK 1500／DEF 1200

このモンスターとの戦闘で破壊されなかった相手モンスターは、ダメージステップ終了時に持ち主の手札に戻る。

「ぐああああああああああつ！」

黎：LP 2950

ブルー生：LP 300↓0

黎：WIN

ブルー生：LOSE

「約束通り、カードは返してもらおうぞ」

「ぐ……」

「それとも、ブルーのエリートでありながら、自分も同意した約束を破る気か？ エリー

トなのにな？」

「分かったよ！ ほら！」

迷宮兄弟との戦いから、俺の知名度がどうやら本格的に広まったらしい。クロノス先生を倒した十代と合わせて『オシリスレッドの双璧』なんて呼ばれる事もあるとか。

で、その腕を見込まれて今はカードをブルーから取り返してるところ。レッドが主な依頼主なのだが、たまにイエローも来るし、一度だけブルー女子も来た（明日香の辺りにでも頼めよ……）。

「はい、『サイコ・ショッカー』のカード。これで当たてる？」

「ああ！ ありがとう！ 父さんのくれた大切なカードなんだ！」

「ふふ、またいつでも来てくれ」

パタパタと手を振ってレッド生が走り去る。もう取られるなよ、と笑いながら俺も手を振って見送る。

「ところで、もう出てきたらどうだ？」

ジツ、と鋭い視線を廊下の角にくれてやると、一人のブルーの男子生徒が姿を現した。尖った鼻にトサカのようなヘアスタイル、一部では鳥頭と呼ばれる所以だ。

「やっぱお前か、万丈目」

「万丈目さんだ」

「これは失礼、万丈目スリー」

「そのサン（3）じゃ無い！」

はっはっは、と笑って俺は万丈目の抗議を受け流す。良いじゃん、お前三男坊だし。

それはさておき、だ。

「何の用だ？」

「遊馬崎 黎、あまり調子に乗るなよ……!!」

「？」

「好い気になってヒーローやってると、足元を掬われると言っているんだ！」

は？

「そうやってレッドやイエローやブルー女子の人気を上げようとしているんだろう！」

「言いがかりだ。俺はただ単に、自分と同じような悲しみの人生を味わう人を少しでも減らしたいんだ。不幸と絶望の味を知り尽くすのは俺と都だけで十分だ」

これは本心だ。明日をも知らぬ身だった者として、誰かが悲しむ様子は昔の俺と重なって(シャドーイングして)しまう。俺が手を貸すのは悲しんでいる人の為であり、ひいては自分自身の為でもあるのである。

どうやらこいつは俺が皆の注目の的であるのが気に食わないらしい。だからこうして俺に突っ掛かって来ているのだろう。

「第一、貴様とあのミヤコとかいう女との関係が本物かどうかは知らんが、邪神だど!」

御伽噺も大概にしる! 悲劇のヒーロー気取りか! そうやって皆の同情を引く作戦か!」

「その辺にしるよ、エリート気取りの小僧が」

気がつくくと、俺は万丈目の胸倉を掴み上げていた。自分では分からないが、きつと憤怒の形相をしている事だろう。

「お前に俺の何が分かるとは言わない。だがな、人の心の踏み込んではいけない部分をそうやって土足でズカズカ上がり込んで踏み荒らして行くのは我慢できねえな！」

ブン、と万丈目を放り投げる。

ふう……、と息を吐いて自分を落ち着かせる。この間の査問委員会の女にしたみたい  
に血ダルマにしなくて良かったぜ。

と、後ろで誰かの靴の音が聞こえた。

「貴方達、何をしているの？」

「明日香！」「天上院くん！」

万丈目に気を取られて背後への配慮が足らなかつたらしい。金髪でとても15才とは思えないプロポーションの彼女は、オペリスクブルーの女王（クイーン）と呼ばれる程の腕前の持ち主であり、その実力はブルー男子に引けを取らない。間違いなく男女問わずブルーの中でも屈指の実力者だ。

「別に、万丈目に因縁つけられただけだ」

「だけって……」

「この程度で悲観してしよぼくれるほどナイーブじゃ無いさ」

はあ、と明日香が溜息を吐いた。ジトツ、とした目で俺を見る。

違う、視線の延長線上に俺がいない。彼女が見ているのは俺の後ろの万丈目だ。

「万丈目くん、貴方いくらなんでも八つ当たりはどうかと思うわよ」

「八つ当たり？ どういうこった、明日香？」

「や、八つ当たりなんかじゃ無い！」

「嘘ね。貴方が十代に月一試験で負けてから戦績が思うように振るわなくてイライラしていた事ぐらい知っているわ」

ああ、『ハネクリボー』が初めてパワーアップしたあれか。同時に都、プライドと戦った日でもあるな。

「それで苛立ちの矛先を俺に向けたと」

「ち、違う！ オレはただヒーロー気取りで有頂天になっているこいつに忠告しようとしただけで……」

「見苦しいわよ！」

明日香が万丈目を一喝する。どちらか言うとも明日香は今俺の味方だし、普段の堂々としていたあいつと比べて言い訳だらけのこいつに怒ったのだろう。

「そんな建て前で私を納得させられるとも思った!!」 他のブルーみたいに恐喝紛いの事はしてないけど、それでもイチャモンつけてレッドやイエローの人達にデュエルけし

かけて恥ずかしくないの!？」

「それは、うう……」

「その辺にしてやんな、明日香」

流石に可哀想になってきたので、手で明日香を制して止めてやる。

「万丈目、要するにお前は最近負けが続いており、しかも気に食わない俺がいたからこうして苛立ちをぶつけて来たんだろ？」

「……………」

恒例の『さんだ』が無いところを見ると、凶星なんだな。

「なら、俺とデュエルだ。理屈は言わずしても分かるな？」

「ッ、良いだろう！ 受けてやる！」

——デュエルリング

廊下のど真ん中でやるワケにはいかなないので、俺達はリングに移動する事にした。

周囲には観客は疎らだが、明日香が呼んだのか十代やファイオといったメンツがいる。

暇なのか、デュエルの優先事項が高いのか……。ま、別に良いけど。



「行くぞ、万丈目！」

「さんだ！ 来い、ドロップアウト！」

『デュエル！』

黎VS万丈目

LP 4000 VS LP 4000

「オレの先攻で行くぞドロップアウト！ ドロー！ 魔法カード『天使の施し』を発動！

そして『死者蘇生』で墓地に送った『X―ヘッド・キャノン』を特殊召喚！ 続いて

『Z―メタル・キャタピラー』を召喚！」

X―ヘッド・キャノン（通常モンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 1800 / DEF 1500

強力なキャノン砲を装備した、合体能力を持つモンスター。

合体と分離を駆使して様々な攻撃を繰り出す。

Z―メタル・キャタピラー（ユニオンモンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 1500／DEF 1300

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「X―ヘッド・キャノン」「Y―ドラゴン・ヘッド」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は600ポイントアップする。

（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

X―ヘッド・キャノン：DEF 1500

Z―メタル・キャタピラー：ATK 1500

黄色いキヤタピラだけを取ったマシンに、肩に二門の砲身を装着した青い機体が現れる。て事は『VWXXYZ』のデツキか。ハッ、『おジャマ』の入る前ならこいつを倒す事はそこまでの労は要さねえよ。

「更に永続魔法『前線基地』を発動！ 1ターンに1度、手札のユニオンモンスターを1体特殊召喚できる！ オレは『Yードラゴン・ヘッド』を呼ぶ！」

### 前線基地

#### 【永続魔法】

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札からレベル4以下のユニオンモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

Yードラゴン・ヘッド（ユニオンモンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 1500 / DEF 1600

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「X―ヘッド・キャノン」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが戦闘によつて破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。)

Yードラゴン・ヘッド：ATK 1500

お、早いな。もう合体できるのか。流星は原作キャラ、ドロ―運も良い。

「そして合体！ 来い、『XYZードラゴン・キャノン』！」

XYZードラゴン・キャノン (融合・効果モンスター)

星8

光属性／機械族

ATK 2800 / DEF 2600

「X―ヘッド・キャノン」+「Yードラゴン・ヘッド」+「Z―メタル・キャタピラー」  
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能(「融合」魔法カードは必要としない)。

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

手札のカードを1枚捨てる事で、相手フィールド上のカード1枚を破壊する。

XYZードラゴン・キャノン : ATK 2800

「これでターンエンドだ！」

万丈目 : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

: XYZードラゴン・キャノン (ATK 2800)

: 前線基地 (永続魔法)

合体と言っても縦に3体重なっただけなんだけどな。あー、でも『Yードラゴン・ヘッド』の翼は取れたし、一応合体になるのか？

「さあ、貴様のターンだ！」

「解ってるよ。俺のターン、ドロロー」

怒りでも興奮状態にある万丈目に対し、俺は冷静さを保つ。今のこいつに熱さで立ち向かってても効果は薄い。戦意が薄れたタイミングで着火するのが正しいだろう。

「俺は『ゴゴゴゴレム』を準備表示で召喚」

青い巨体が現れる。背中についているノズルから煙が噴き出すところを見ると機械仕掛けなのかも知れない。

『ゴゴゴゴ〜！』

ゴゴゴゴレム：DEF 1500

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：ゴゴゴゴレム(DEF 1500)

：伏せカード2枚

『黎くん落ち着いてるツスね』

『今の万丈目相手に熱くなってもムダさ。相手のプレイングミスを誘うつもりなのだろう』

『まあ、今の彼には良い葉ね』

上から順に翔、大地、明日香。二人の分析は正解。自分は必死に戦っているのに、相手が飄々としていれば怒り、焦るものだ。

「オレのターンだ！ 『強欲な壺』を発動し2枚ドロウ、そして『Vータイガー・ジェット』を召喚！」

Vータイガー・ジェット（通常モンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 1600 / DEF 1800

空中戦を得意とする、合体能力を持つモンスター。

合体と分離を駆使して立体的な攻撃を繰り返す。

V—タイガー・ジェット：ATK 1600

「更に『前線基地』の効果で『W—ウイング・カタパルト』を特殊召喚！」

W—ウイング・カタパルト（ユニオンモンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 1300／DEF 1500

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分の「V—タイガー・ジェット」に装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている時のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが戦闘によつて破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。）

W—ウイング・カタパルト：ATK 1300



か。  
 虎の頭のジェット機と青い翼付きのカタパルトが現れる。おやおや、もう2体揃うの

「合体！ 来い、『VW—タイガー・カタパルト』！」

VW—ウイング・カタパルト（融合・効果モンスター）

星6

光属性／機械族

ATK 2000 / DEF 2100

「V—タイガー・ジェット」＋「W—ウイング・カタパルト」

自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。

手札を1枚捨てることで、相手フィールド上モンスター1体の表示形式を変更する。

（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）

VW—タイガー・カタパルト：ATK 2000

それにしても、ユニオンした方が合体よりもお得なのはどうか。

「これでワンターンキル達成だ！ 『XYZードラゴン・キャノン』の効果発動！ 手札を1枚墓地に送って相手モンスターを破壊する！ オレは『メカ・ハンター』をコストに『ゴゴゴゴレム』を破壊する！」

「そうは行くか！ 永続罫発動、『デモンズ・チェーン』！ モンスター1体の効果と攻撃を封印する！」

ガコン、と『XYZ』の砲身が『ゴゴゴゴレム』に狙いを定めるが、表向きになったカードから伸びた赤黒い鎖に絡め取られて動きを封じられた。

デモンズ・チェーン

【永続罫】

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは攻撃する事ができず、効果は無効化される。

選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

『グオオオオツ?!』

「ならば『VW―タイガー・カタパルト』の効果で攻撃表示になつてもらう！ 手札を1

枚捨てて、そのゴーレムを攻撃表示に変更！ 捨てるのは『黙する死者』だ！」

ゴゴゴゴーレム：DEF 1500↓ATK 1800

平たい戦闘機から放たれた光線を浴びたゴーレムが交差していた腕を解いて立ち上がった。いけない、守りの布陣が壊される。

「攻撃だ！」

『くず鉄のかかし』を発動！ モンスターの戦闘を無効にする！」

なーんてな。そんな攻撃、金属製の案山子が張った防壁で弾き返してやったさ。

「ぐっ！ 忌々しいカードを！」

「効果は解っているようだな。発動後、こいつは墓地には送られず、フィールドに再セットされる」

罨カードはセットしたターンには使えないので、要するにこのカードの効果は1ターンに1度攻撃を防ぐ永續罨みたいなものだと思うってくれば良い。

「ならばメインフェイズ2に移り、更なる合体を行う！ 出でよ『VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン』！」

今度は本格的な変形合体を行う。二足歩行の巨大ロボに変形し、『Zーメタル・キャタ

『ピラー』の足が腕になったり、『Xーヘッド・キャノン』の砲身が胸部に移動したりとさっきまでの重なるだけとは違った本当の合体だ。

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン（融合・効果モンスター）

星8

光属性／機械族

ATK 3000／DEF 2800

「VWータイガー・カタパルト」＋「XYZードラゴン・キャノン」

自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードを必要としない）。

1ターンに1度、相手フィールド上のカード1枚をゲームから除外する。

このカードが攻撃する時、攻撃対象となるモンスターの表示形式を変更する事ができる。（この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。）

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン：ATK 3000

「モンスター効果発動だ！ 1ターンに1度、相手フィールドのカードを1枚除外でき

る！ 『くず鉄のかかし』をゲームから除外！」

「ぬー！」

ズギャン！ と胸部の砲身からビームを放ち、リバースカードを焼き払う。あつちや、やられちまった。

こいつは合体前と違って手札コスト不要なんだよね。

「ターン終了だ！」

万丈目：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：VWXYZドドラゴン・カタパルトキャノン（ATK 3000）

：前線基地（永続魔法）

「サレンダーするなら今のうちだぞ、ドロップアウト！」

「悪いが断る。俺のターン、ドロロー！」

さてと参った。合体前に倒しておくべきだったのに、合体されちまった。どうするべきか……。

「俺は『F・S マグマドラゴン』を召喚し、その効果でデッキから『F・S 鬼火のウイisp』を特殊召喚」

F・S マグマドラゴン：DEF 1500

F・S 鬼火のウイisp：DEF 700

「『ゴゴゴゴレム』を守備表示に戻して、ターンエンド」

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：F・S マグマドラゴン（DEF 1500）、F・S 鬼火のウイisp（DEF 800）、ゴゴゴゴレム（DEF 1500）

：デモンズ・チェーン（対象不在）

「オレのターンだ！ 『WXYZ』の効果でその仮面モンスターを除外！」

「く、『ウイisp]！」

「そして『VWXYZ』で『ゴゴゴゴレム』を攻撃！ この瞬間、モンスター効果発動！ 攻撃対象となったモンスターの表示形式を変更する！ 喰らえ、VWXYZ―アルティメット・デストラクション！！」

「っ！」

LP 4000↓2800

連続砲撃で俺のモンスターは一瞬で焼き払われていく。

くっそ、これじゃ2回攻撃されてるようなモンだぜ……！ しかも『ウイスプ』が攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘でダメージを通さない効果を把握してやがる……！

『にしても、厄介な効果だね。毎ターン除外効果が発生するなんて』

『十代、貴方に勝ったんでしょ？ 何か攻略方法とか無いの？』

『いやー、あの時は『ハネクリボー』が頑張ってくれたから……』

『除外効果は『LV10』に進化させて回避し、攻撃は自身の効果で反射させた。その両方を黎にやれというのは些か酷な話だ』

『万丈目さんの場にリバースカードはありませんから、せめてバトルで破壊か、相撃ちに

持ち込めれば良いのですけれど……』

皆の言う事は尤もだ。『スピリッツ・ワールド』か『レッド・シンボル』を引ければ戦局を覆せる可能性はあるが……。

「いつまでその場凌ぎが続くか、見物だな！ カードをセット、ターンエンド！」

万丈目：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：VWXYZドドラゴン・カタパルトキャノン（ATK 3000）

：伏せカード1枚、前線基地（永続魔法）

確かに。今のままじゃその場凌ぎだ。このままじゃ確実にやられてしまう。

次のターン、万丈目が追加戦力のモンスターを出したら防御の布陣が崩される。そうなれば後はズルズルと敗北ルートだ。

手札は3枚、だがその中にモンスターカードは無い。次のターン、モンスターを引けるかどうか、それがお互いに課せられた運だ。

「俺の、ターン！」



引いたカードは……!」

「魔法カード『種火』を発動! フィールドの『マグマドラゴン』をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロー!」

チラ、と引いたカードを見る。行ける!

「魔法カード『火炎融合―ファイア・フュージョン』を発動! このカードは融合モンスターの『F・S』を召喚し、更に融合素材にデッキのモンスターを使用できる!」

火炎融合―ファイア・フュージョン (オリジナル)

【通常魔法】

「F・S」と名のついたモンスターを融合召喚する時のみ発動可能。

デッキから融合素材となるモンスターを選択して融合素材とする事ができる。

この時、手札またはフィールドのモンスターを融合素材の内の1体としない場合、融合召喚したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける。

「俺はデッキの『F・S サニーハット・キティ』と『F・S フレア・チアガール』を融合! 来い、『F・S ブレイジング・ナイト』!」

『行くぞ!』

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900

「ただし、この効果で手札か場のモンスターを融合素材に指定しなかった場合、このターンのエンドフェイズに『ブレイジング・ナイト』はゲームから除外され、俺は2900ポイントのダメージを受ける事になる」

「フン、攻撃力は『VWXYZ』に劣り、エンドフェイズにダメージだと? どこまでバカなのだ貴様は!」

「ならその前に叩き斬ってやる! フィールド魔法発動! 『スピリッツ・ワールド』!」  
「な、ここぞだとお!」

地面に六芒星の魔法陣が生まれ、フィールド中に温かな光の粒が地面から立ち上り始める。その光の玉は俺の場の『F・S』の体に吸収された。

しかし、俺にもデイスティニードローつてのがあんのかねえ。『火炎融合』も『スピリッツ・ワールド』も『種火』で引き当てたんだぜ? 普通にドローしてたらいい感じの巡りじゃ無いなんて感想抱くつつのに。

「バトル! 『ブレイジング・ナイト』、そのデカブツを溶断しちまいなあ!」

「させるか！ 速攻魔法『エネミーコントローラー』！ 貴様のモンスターを守備表示にする！ どうだこれで手も足も出ないだろう！」

「！」

炎の大剣を構えた剣士が、その場で片膝をついて屈む。

成程な、これでターンの終わりに俺はモンスターを失い、大ダメージを受けるってワケか。

だが慌てるなよ、万丈目。まだ俺は手の内を出し尽くして無いぜ？

「チェーンするぞ、『融合解除』を発動！ この効果で墓地の『サニーハット・キティ』と

『フレア・チアガール』を特殊召喚！」

『呼ばれて飛び出て！』

『参上です！』

F・S サニーハット・キティ：ATK 2000

F・S フレア・チアガール：ATK 300

『わあ！ 可愛い女の子達ッス！』

いやいやいやいや。翔、キミはそういう反応なのか。

片やチアガール、片やネコ耳獣っ娘。確かに可愛いかな否かで問われたら、可愛いの方だとは思うが。

それはさておき。

『フレア・チアガール』の効果を発動。俺の場の『F・S』と名のついたモンスターの攻守を500ポイントアップさせる」

『フアイト、オー！』

フレアスカートをはいたチアガールが手にしたボンボンを振って応援を開始すると、場に赤色の闘気が満ちる。闘気はオーラとなって『サニーハット・キティ』と『フレア・チアガール』に纏わりついた。

F・S フレア・チアガール（効果モンスター）（オリジナル）

星2

炎属性／天使族

ATK 300／DEF 300

このカードが場に表側表示で存在する限り、自分の場に存在する『F・S』と名のついたモンスターの攻撃力と守備力は500ポイントアップする。

1ターンに1度、このカードを対象とした戦闘を無効にする。

F・S サニーハット・キティ：ATK 2000↓2500 / DEF 900↓1400

F・S フレア・チアガール：ATK 300↓400 / DEF 300↓400

「攻撃力はお前のモンスターより下だが……、2000は超えた。この意味が分かるよなあ?」

「くっ!」

「これで逆転だ! 『F・S サニーハット・キティ』で『VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン』に攻撃! 『フレアカット・クロウ!』」

『燃えちやえー!』

「そしてこの瞬間『スピリッツ・ワールド』の効果で『サニーハット・キティ』の攻撃力が1000ポイントアップする!」

F・S サニーハット・キティ：ATK 2500↓3500

赤く発光した爪がクロス、5つずつの平行した閃光が計10本の斬撃を生み出し巨大

な機械を斬り裂き、焼き尽くした。

「ぐおああああつー！」

万丈目：LP 4000↓3500

「更に『フレア・チアガール』でダイレクトアタック！

“チアリング・スパークキング”

！」

「うおおおつー！」

万丈目：LP 3500↓2700

「これでターン終了だ」

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：F・S サニーハット・キティ(ATK 2000)、F・S フレア・チアガール

(DEF 300)

…スピリッツ・ワールド(フィールド魔法)、デモンズ・チェーン(対象不在)

「形勢逆転だな、万丈目」

「さん、だ！ ドロー！」

さて、『スピリッツ・ワールド』が場に存在する限り『サニーハット・キティ』の攻撃力は3500、『フレア・チアガール』の攻撃力は1800まで上がる。今の所は安全だろうが……。油断はできないな。

「オレは魔法カード『アカシック・レコード』を発動！ これで手札を補充だ！」

「この局面で……！」

アカシック・レコード(アニメオリジナル)(自己解釈テキスト)

【通常魔法】

(1): テツキからカードを2枚ドローする。

ドローしたカードはお互いに確認し、デュエル中に使用されたカードがある場合、それをゲームから除外する。

原作キャラが手札を補充するのは危険のサインだ。強力な反撃、若しくはワンターンキルが達成する予兆だからだ。

奴が引いたのは……、『打ち出の小槌』と『闇の量産工場』、どっちも使われてないカードかよ！

『闇の量産工場』を発動！ 墓地から通常モンスター2体を手札に戻す！ オレは『メカ・ハンター』と『バトルフットボーラー』を回収する！」

『バトルフットボーラー』……、『天使の施し』で捨てたもう1枚はそれか。

守備力2100を壁にしつつ、機械族通常モンスターのサポートカードを共有する狙いで入れたな？

「魔法カード『打ち出の小槌』！ このカードと任意の枚数の手札をデッキに戻してシャッフルし、戻した枚数分カードをドロウする！ 俺は手札2枚をデッキに戻す！」

打ち出の小槌（アニメ効果）

### 【通常魔法】

発動しているこのカードと手札を任意の枚数選択し、デッキに戻しシャッフルする。その後、デッキに加えた枚数分のカードをドロウする。



これで手札は0枚から3枚になった、来るか！

「魔法カード『大嵐』を発動！ 全フィールド上の魔法・罫を全て破壊する！」  
「しまった!？」

大嵐

【通常魔法】

フィールド上に存在する魔法・罫カードを全て破壊する。

『ヤバい！ 戦局が引つ繰り返される!』

『黎!』

マズい、『スピリッツ・ワールド』とくず鉄先生が破壊された! 『ハリケーン』が来たら『デモンズ・チェーン』も回収しようと思っていたのに!」

「装備魔法『早すぎた埋葬』を発動! ライフを800支払って『VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン』を特殊召喚!」

早すぎた埋葬

【装備魔法】

800ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。

このカードが破壊された時、装備モンスターを破壊する。

万丈目：LP 2700↓1900

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン：ATK 3000

「そして『VWXYZ』の効果で『フレア・チアガール』を除外する！ これでパワーアップ効果は無くなったぞ！」

『きやあああああああ！』

「『フレア・チアガール』！」

チイツ、『チアガール』の攻撃無効効果を理解してやがる……！！

F・S サニーハット・キティ：ATK 2500↓2000 / DEF 1400↓

900

「攻撃力が下がったな！ 喰らえ！ 『VWXYZ』で『サニーハット・キティ』を攻撃！  
 『VWXYZ』アルティメット・デストラクション“！”  
 『ミャアアアアア！？』  
 「ぐっおおおおおおおおっ！」

黎：LP 2800↓1800

「ク、ククク！ カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

万丈目：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン（ATK 3000）

・伏せカード1枚、早すぎた埋葬（装備魔法・『VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン』に装備）

（伏せたカードは『マジック・シンダー』。これなら奴が『VWXYZ』を倒せるカードを出しても

オレの勝ちだ！)

「……、俺のターン！」

伏せカードを見てニヤニヤ笑う万丈目。攻撃や召喚に対する反応型と見るべきか。

厄介なのはあれが『奈落の落とし穴』や『魔法の筒』だった場合だ。折角『VWXYZ』を倒せるカードを召喚してもこちらを不利にしかねない。

魔法の筒

【通常罫】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

奈落の落とし穴

【通常罫】

相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。

その攻撃力1500以上のモンスターを破壊しゲームから除外する。

「……よし、魔法カード『強欲な壺』を発動！ デツキからカードを2枚ドロー！」  
この罫カードは……！

「更に『天使の施し』！ デツキから3枚引いて2枚捨てる！ そして2枚カードをセツトし、『F・S グリル・ゴーレム』を守備表示で召喚！」

F・S グリル・ゴーレム：DEF 1100

「更に『死者蘇生』を発動、墓地から『サニーハット・キティ』を特殊召喚。これでターンを終了する」

『ミャーオ！』

F・S サニーハット・キティ：DEF 900

黎：LP 3000

手札：0枚

フィールド

：F・S グリル・ゴーレム（DEF 1100）、F・S サニーハット・キティ（DEF 900）

：伏せカード2枚

「オレのターンだ、ドロー！ ククク、ここまでのようだな！」

「そう思うなら、やってみろよ」

さて、この状況は確かに奴の圧倒的有利。

伏せカード2枚のバックに対して、奴が取る行動は恐らく――

「言われなくともなあ！ まずは『VWXYZ』の効果発動！ 右の伏せカードを除外する！」

そら来た！ 待ってたぜ！

「俺は墓地の罨カード『スキル・プリズナー』の効果発動！」

「墓地からトラップだと!?!」

『墓地から!?!』

『トラップカード!?!』

お約束の反応、ありがとさん。

スキル・プリズナー

【通常罫】

自分フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

このターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする。

また、墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

このターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。

「このカードを除外し、自分フィールドのカード1枚を対象に効果発動！ このターン、

そのカードを対象とした相手モンスターの効果の発動は無効となる！」

「な、除外できないという事か!？」

「(づ)名答」

狙われた俺のカードが魔法の光でコーティングされ、巨大ロボのビームから守られる。

相手ターンでも使えるつてのがこのカードの利点だね。

「ならばオレは『巨大化』を発動！」

「！」

いかん、攻撃力が倍になるカードだ！

VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン：ATK 3000↓6000

巨大化

【装備魔法】

(1)：自分のLPが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の倍になる。

自分のLPが相手より多い場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力の半分になる。

「ハツハハハハハッ！ 少々予定は狂ったがこれで終わりだつ！ 『VWXYZ』で『サニーハット・キティ』を攻撃だあ！ //WXYZーアルティメット・デストラクション！ こいつは相手モンスターに攻撃する時、その表示形式を変更する効果を持つ！」

ガゴン、と巨大ロボの胸部の砲身がこちらへ向く。させねえよ！



「罨カード『緊急同調』を発動！ このカードはバトルフェイズ中に1度だけ、シンクロ召喚の権利を与える！」

「何だと!？」

### 緊急同調

#### 【通常罨】

このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。  
シンクロモンスター1体をシンクロ召喚する。

「レベル4の『F・S サニーハット・キティ』に、レベル3の『F・S グリル・ゴーレム』をチューニング！」

『グリル・ゴーレム』が3つの緑のリングに変わって一列に並び、その中を『サニーハット・キティ』がくぐる。

「燃え盛る焰、水面を斬り裂く剣とならん！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆3 + ☆4 || ☆7

「シンクロ召喚！ 灰塵に帰せ、『F・S バーニング・ブレードガイ』!!」  
 『はあああああああああつ、てやつ!』

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 2800

光の中から現れたのは、青い軽鎧に身を包んだ戦士。細く長い剣を両手で持っている。

「更に効果で墓地のカード1枚を手札に!」

「だが、それがどうした! 攻撃対象をそのモンスターに変更だ!」

『ダメだ! 止まらない!』

『ここまでかあ……!』

確かに、攻撃力の差は6000マイナス2800で3200と、俺の残りライフ1800を削り切れる。だが、それならこれでどうだ!

「リバースカード、オープン! 罠カード『ハイ・アンド・ロー!』」

『『ハイ・アンド・ロー!』?』

『高いか低いか、というギャンブルの一種だが……』

「このカードは、自分の場の攻撃力2000以上のモンスターが攻撃される時に発動で

きる。デッキからカードを引いて、それがモンスターだった場合、そのモンスターの攻撃力分、自分のモンスターの攻撃力がアップする！

ただし、この効果は3回まで使用できるが、相手より攻撃力が高くなった時自分のモンスターは破壊される！」

これは最終回で『シューティング・スター・ドラゴン』と『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』が引き分けた印象深いカードだ。あの時、遊星は失敗率の高い状況で攻撃力が相手と同じになるカードを引き当てた。

ハイ・アンド・ロー（アニメオリジナル）

#### 【通常罫】

自分フィールド上に攻撃表示で存在する攻撃力2000以上のモンスターが攻撃対象に選択された時、相手攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象となったモンスターよりも高い場合、攻撃対象となったモンスター1体を対象に以下の効果を発動する。

●デッキからカードを1枚めくり墓地へ送る。そのカードがモンスターだった場合、その攻撃力の数値分だけ対象モンスター1体の攻撃力をアップする。

この効果を3回まで任意でくり返す事ができる。

この効果によって対象モンスターの攻撃力が相手攻撃モンスターの攻撃力を超えた

場合対象モンスターを破壊する。

俺にもし、デイスティニードローの才能があるのなら、力を貸してくれ！ あのバカに勝ちをくれてやる訳にはいかないんだ！

これから底辺へと落ちて来るあいつには、何一つとして輝かしいものなど無いだろう。だからせめて、この底辺よりも暗い底に生きている身として、あいつにこの世界の苦しさと、勝ち上がった時の喜びを知ってもらわなくちゃいけない！ ここで負けたら、それも無くなる！

「行くぞ、1枚目！」

引いたカードは、爆弾を手を持った悪戯坊主！

「攻撃力400、『F・S ボム・ボム・レゲエ』！」

「ハハハハハッ！ それじゃあまだ届かないぞ！」

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 2800↓3200

『クツ、でも後2回効果が使えるよ！』

『その2回で攻撃力の差を1800未満にできれば、少なくとも敗北を免れる事ができ

る……』

『魔法や罨を引く可能性も看過できないわ。何にせよ、運の要素が強いわね』

フィオの歯噛み、大地の冷静な分析、明日香の緊張が伝わる。それを聞きながら2枚目に俺は手をかけた。

「2枚目、ドロー！」

引いたカードは、着物を羽織った赤色の少年！

「攻撃力1300、『F・S バック・ドラフトマン』！」

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 3200↓4500

「クッ、ここまで縮めただと！」

『ヤタツ！ ライフはギリギリ残るよ！』

『これならまだ希望はある！』

ああ、確かに。だが、ここで立ち止まっただけでは、俺もあいつも『この程度』止まりだ！

「俺は『ハイ・アンド・ロー』の3回目の効果を使用する！」

「何!?!」

『攻撃力1500を超えたモンスターを引いたらアウトだぜ!』

『賭けに出たな。ダメージが少なくなるか、それとも負けてしまうか……』

『危険だけど、黎ならきつと……!』

デッキトップのカードに手をかけ、ニヤリと万丈目に笑う。

「さあ、何が出て来るかな? ここで攻撃力が1500ジャストのモンスターを引いた

ら引き分けになる。もしそうなったら面白いよな!」

「バカな! そんな簡単に引けるものか!」

「じゃあ引くぜ? 3枚目、ドロロー!」

ピッ! と軌跡を描いてカードを引き抜く。これが攻撃力1500オーバーのモン

スターなら俺の負け。それ以外ならゲーム続行。

ああ、ビリビリ来るねえこの駆け引きの緊張感! 堪らねえよ! さあ、来い!



チャット、と表を向けたカードはモンスターカード。

そしてそこに描かれていたのは——！

「最後の1枚は『F・S バーナーズ・キャノン』！ 攻撃力15000！」

「何だとお!？」

『ほ、本当に引き当てた……!』

『なんて運の良いヤツなの……!』

『すつげえ、すつげえぜ黎!』

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 4500↓6000

「行け! 『バーニング・ブレードガイ』!」

「む、迎え討て! 『VWXYZードラゴン・カタパルトキャノン』!」



ゴウツ！ と放たれた光線の中を突っ切り、『バーニング・ブレードガイ』はその長刀を巨大ロボの胸部に深々と突き刺した。ロボは爆発し、鎧剣士は力尽きて倒れる。

即ち、相撃ちだった。

「な、あ………！」

「どうする？ まだ何か手はあるか？」

「が、ぐ………っ！」

ギリリ、と歯を軋ませる万丈目。あの様子だと、手札には好ましいカードが無いようだな。

「オレはターンエンドだ！（大丈夫だ！ まだ『魔法の筒』がある！ 防御は問題無い！）」

デッキトツプに手をかけて俺はニヤ、と笑う。大方、頭の中で説明でもしてるんだろうが、生憎とそれは敗北フラグだぜ？

「なあ、万丈目」

「万丈目さん、だ。何だ一体」

「月一試験の時、お前は残りライフ1000を丁度の攻撃力で削り切られたんだっただな」

「ああそうだ！ それがどうした！」

「お前のライフは1900フラット。ここで俺が1900ジャストのモンスターを引い

たら面白くないか？」

「ぎ、戯言を……！ そんな偶然が何度もあつて堪るか！」

「まあ確かに。俺のデッキに入っている攻撃力1900のモンスターは記憶が正しければ『ヴォルカニック・ギア・ガイ』と『ゴゴゴゴースト』の2枚。それを引ければ一気に俺の勝ちだ」

そう言つて俺はデッキトップのカードに手をかけた。

万丈目：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚（『魔法の筒』）

「行くぜ俺のターン！ ドロー！」

引いたカードを見て、俺はニヤリと笑う。

この勝負、俺の勝ちだ！

「俺は『F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ』を召喚！」

『本当に引き当てた!?!』

F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK 1900

「止めだ！ // スピン・ファイア・キック」！

「させるかあ！ 『魔法の筒』を発動だああつ！」

『ああ!?!』

『マズい!』

『この局面であのカードを……!』

「……ここでそのカードを出して来るとは恐れ入るよ。反撃の可能性も考えて伏せたのだらう。」

だが、予測してないとも思ったか！

「手札からカウンター罠発動、『レッド・リブート』！」

「今度は手札からだとお!?!」

『手札から!?!』

『カウンター罫だつて!?!』

お約束の反応ありがとね、ホント。

「ライフを半分払い、このカードは手札から発動できる! 相手の罫の発動を無効にし、再セットする!」

「くっ!?!」

「そして相手はデッキから新たに罫カードを伏せる事ができる代わりに、このターン相手は罫カードを発動できない!」

レッド・リブート

【カウンター罫】

このカードはLPを半分払って手札から発動する事もできる。

(1)：相手が罫カードを発動した時に発動できる。

その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする。

その後、相手はデッキから罫カード1枚を選んで自身の魔法&罫ゾーンにセットできる。

このカードの発動後、ターン終了時まで相手は罫カードを発動できない。

フィールドに現れた2本の筒が地面に潜り込み、2枚のカードに化ける。  
これで奴に防御の手段は無くなったぜ！

黎：LP 1800↓900

こいつは『天使の施し』で捨て、『グリル・ゴーレム』の効果で回収されたカード。最初から捨て札は2枚とも利用するつもりだったのさ。

「もう、分かるよな？ 攻撃は通る！」

「あ、あああああああああああああつ！」

「喰らいやがれえ！」

炎を纏った廻脚が万丈目を蹴り飛ばす。そして数センチ吹っ飛んだところで大爆発を起こした。

「ぐあああああああああああああああつ！」

万丈目：LP 1900↓0

黎：WIN

## 万丈目：LOSE

「このオレが、また負けた……！　こんな、ドロップアウト如きに……！」

ズーン、と沈みながらブツブツ呟く万丈目。そのまま彼はどこかへとフラフラ歩いて行ってしまった。そんなにシヨックか。

「やったね、黎！」

「すげえぜ！　あそこで攻撃力を揃えるなんて！」

「何、偶然さね」

「うむうむ、黎と十代、カイザークラスの人間がこの学校に二人もいるのか。凄いな」

止めてくれ大地。俺はそんな帝とか呼ばれるような実力じゃ無い。

大喜びする皆を尻目に、俺はちよつと考え事をしていた。

「（このままじゃ、やっぱダメだな。弄った所でやっぱり『F・S』、炎のデツキだ。今度はプライドに負けちゃうな）」

その呟きを聞いていたのは、きつと俺だけだっただろう。

皆の勝利ムードに水を差したく無いので、俺も暗い考えを振り切ってその輪の中に加わる事にしたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 16 : 水の強襲！

——レッド寮から約700メートルの位置・PM 20:30

## SIDE : 黎

「これで大丈夫だろう」

俺が今いるのは森から二十歩程度、奥へ歩いた場所だ。冬が近い為既に外は真つ暗。大徳寺先生に許可を貰い、破損した材質集めと偽つてこの肌寒い中表に出ている。ボランティアもやると言つてあるので、明日の朝までに帰れば問題は無いだろう。

何故嘘を吐いてまで外出するのか。その理由は至極単純、人に見られる訳にはいかな  
いからだ。

目的は精霊界へと行く事。先日のプライドとの戦いで力不足を実感した黎は精霊界  
で何か新しい力かヒントを得に行くのだ。

『精神同調、安定。世界位相、リンク完了』



赤い宝玉から言葉が流れるようなイメージが脳裏に刻まれる。次いで地面に赤い魔法陣が現れ、外周を縁とするように淡い光の柱が立つ。どうやらこの魔法陣全体が入口のようだ。

「じゃあ、行くか！ 開け、精霊界の扉……！」  
ヒュオン！ という音と共に俺は光に包まれた。

## ——精霊界

光が止むと、周囲は一変した。

転送前は森だったが、今は赤い岩の荒れ地だ。結構暑いのは、この岩の赤さが熱を持つている事による発熱反応だからだろうか（要するに岩が赤くなるくらい暑い）。

『ここはほのおのさとのはずれですね』

「炎の里？」

『はい、なのあるほのおけいモンスターのしゅうらくです』

額の汗を拭い、身体を耐熱式に組み替えていると、『バック・ドラフトマン』が辺りを見渡し、領きながら説明する。

人間界では不可能だった精霊との意志疎通も、精霊界なら可能なようだ。

「名のある炎系……。なるほど」

『にしても、誰もいないな……。』

『ヴォルカニック・ギア・ガイ』が首を傾げる。確かに、文字通り人（？）っ子一人いない。

近くには壊れた『ブレイズ・キャノン・トライデント』があった。こいつは『ヴォル

カニツク・デビル』を呼ぶのに必要なカード。つまり少なくともここに彼がいる事は確かかなようだ。

……、壊れている？ いや、壊れているのは良いんだが……。

「何だ、この壊れ方……!」

通常の経年劣化によるものではない。これは何者かが外部から攻撃を加えた結果による損傷の破壊だ!

よく見ると、『キャノン・トライデント』が濡れていた。

「水……?」

『それは変だな』

手で触れ、その液体が純粋な水である事が分かった。それを不審がったのは『ブレイジング・ナイト』だ。

「どういう事だ?」

『この炎の里には少量だが確かに水はある。だが、『トライデント』は壊れても非常に高い熱を持つというのに主殿は“湯”では無く“水”と言った。つまり……』

『ブレイズ・キャノン・トライデント』が冷め切ってしまう程の、本来は無い大量の水があった」

『左様』

奇妙な話だ。

そして、もう一つ気になった事がある。

「微弱だが、何で邪神の気配がするんだ？ まだ復活してないんだろ？」

『そのハズ、なのだが……』

都、プライドとの戦い以降、黒い気配が感じ取れるようになった。邪神の気配だと気付くには時間は要らなかった。

顎に右手を添えて考える。分かった事は3つ。

- 1、ここには無い筈の大量の水。
- 2、不自然な壊れ方をした『ブレイズ・キャノン・トライデント』。
- 3、邪神の微弱な気配

この3つが導き出せる結論はただ一つ。

「急ぐぞ、皆！ 邪神が人間と精霊の世界の両方を進撃して来た！」  
Yes, Sir  
 『了解！』

再び皆を宝玉に戻し、炎の力を纏う。周囲をサーチすると、邪神の僅かな気配がとある一方だけ僅かに強い。恐らく気配の主はそっちへ向かったのだろう。足に点火してブースターの代わりにし、飛び出そうとした時だった。

『「んー、黎はてつきり手品師かと思っただけど……、違ったみたいだね」』

聞き慣れた声。半実体化した精霊と一緒に思わず振り返ると、そこにいたのは……。

「フィオ、どうしてここに……!」

「やー、あはははは……」

後頭部を掻きながらバツが悪そうに苦笑いするオベリスクブルーの少女。汗を掻いているのは暑いせいだけでは無いだろう。

友人である神山 フィオは視線を逸らしていたが、観念したのか、事情を話し始めた。

「オベリスクブルーの門限つてさ、9時なんだよ」

「知っている。レッドが8時、イエローが8時半だつて事も知っている」

不公平、とは言わない。成績が悪い奴が集うのがオシリスレッドだ。他より早いのは当然だろう。

にしても、女子までそんな遅くまで許して大丈夫なのだろうか？ 島とは言え孤島では無い。現に影丸理事長は空から、サイキック流は海から島にやって来た。良からぬ目的で誰かがやって来ないとは限らないのだ。

「でさ、ちよつと散歩してたんだ。

その帰りに森の中から赤い光が漏れててさ、何だろうって思ってた近付いたら光に包ま

れて……。で、気が付いたらここにいたってワケ」

それは良いんだが……。気になる事が一つある。

「何故最初から声をかけなかった？ 俺は転移してから殆ど場を動いてないし、足音も聞いていない。つまり俺とお前の転移後の初期位置は大して離れていない事になる。

この辺りに障害物は無い。つまり最初から俺が見えていたはずだが？」

「えーと、ほら、手品とかドッキリを見る時ってさ、驚かないのが鉄則じゃん？ これもてつきりそういうのかと思って……」

しどろもどろに言うが、怪しい。

そもそも俺の感覚器官は転送前には目一杯広げておいた。可能な限り広げれば、その感覚は1キロ先の会話をクリアに聞き取る事ができる（尤も、他の器官は潰さなくてはいけないが）。

だというのに、俺は彼女の存在を感知できなかった。どういう事なのか説明はつかないが、とにかく奇妙だ。

まあ良いや。今は追及している時間は無い。

「良いや。元の世界に送るから、少し待ってろ」  
「待った。わたしも行くよ」

はい？

「何か大変な事が起きてるみたいだし、わたしだって多少腕に覚えはある。デュエルだって明日香程じゃ無いけど強いし、護身術ぐらいなら身につけてるよ」

「アマイ。人間の体術で相手できるか怪しいし、デュエルでどこまで通じるかも疑問だ」  
「でも」

「でもじゃねえ。ゲート開くから帰んな」

冷たい言い方だが正直な話、俺一人では彼女と自分を守りきれないだろうし、帰すのが正しい選択肢だろう。こんな所で死なれても困るし悲しい。

『あー、ダンナ?』

「何さ『ウイスプ』?」

なんとかして説得を試みていたが、『ウイスプ』に肩を叩かれ、振り向く。

『時間が無い。その娘ごと連れて行って、誰かと一緒に避難してもらおうぜ?』

言われてハツとする。確かに、この事態が今も進行しているのなら余裕は一切無い。ゲートを開くとは言ったものの、すぐに開ける訳でも無い。先のあれとて、座標を固定して門を開くのにそれなりの時間がかかった。

……、仕方ないか。

「分かった。ただし、良いって言うまで俺の傍を離れるなよ?」

「オツケー!」



「とりあえず、お前の体に簡易的な耐熱効果を持たせる」

「オツケー、え?」

同じ調子で返したフィオ。だが、直後にOKを出してはいけなさと悟ったのか、サツ、と青ざめ距離を若干取る。

それに構わず俺は彼女に詰め寄り、爪と髪を可能な限り細く長く伸ばす。

「れ、黎! ちょっとタンマー!」

「待った無しだ! 自家製耐熱型体組織変形ワクチン! 注・入!」

「ひぎゃあ!」

プスッ! と小さな音を立ててフィオの全身という全身に爪と髪を突き刺す。蚊の

針のように細いので痛みは無い、ハズ。

「れ、黎くッ!」

「これで2、3日は暑さに強くなったハズだ」

「乙女の体を勝手に好き勝手すんなあつ!」

「語弊のある言い方をするな! ほら、行くんだろ、乗れ!」

不満そうだったが、観念したらしいフィオを背中に乗せると、足元に炎を逆噴射し、バーナーの形で推進力を得る。どこへ行くべきかはおおよそ分かっている。

「しっかり掴まってる!」

「大丈夫！」

「よし来た！」

低空飛行で気配が濃い方へと向かう。何が待っているかは分からないが、きっとその先にこの一件の鍵がある筈だ。

そして、その先に邪神に繋がる手掛かりも。行くぞ、邪神！ 首洗って待ってやがれ！



——炎の集落から西へ約300メートルの地点

飛んでいる内にだんだんと見えて来た小さな集落。そこでは悪夢のような惨劇が巻き起こっていた。

『うわあああああつ！』

『キヤアアアアアツ！』

三々五々に逃げ惑う炎の里の皆。それを嘲笑うかのように追撃を仕掛けるのは水属性モンスターだった。

『ギヤハハハ、逃げ惑え！ 泣き叫べ！ もつと、もつと絶望を！』

『死ねえ！ テメエら全員ぶつ殺してやるよお！』

先頭で指揮を執っているのは『半魚獣・フィッシュャービースト』と『水陸の帝王』だ。片や剛腕を振り回し、片や太い尾を振り回している。その他には『軍隊ピラニア』や『海賊船スカルブラッド号』が逃げ遅れた精霊を襲っている。

今のところは『炎獄魔人ヘル・バーナー』や『絶対服従魔人』といった強豪が反撃したり攻撃を防いだりしているが、全員異常な程に弱っている。今も『タイラント・ドラゴン』が地にゆっくりと倒れ伏した。

水陸の帝王（通常モンスター）

星5

水属性／爬虫類族

ATK 1800／DEF 1500

大きな口から四方八方に炎をはく、爬虫類のばけもの。

半魚獣・フィッシュャービースト（通常モンスター）

星6

水属性／魚族

ATK 2400／DEF 2000

陸では獣のように、海では魚のように素早く攻撃する。

軍隊ピラニア（効果モンスター）

星2

水属性／魚族

ATK 800DEF 200

このカードが相手プレイヤーへの直接攻撃で与える戦闘ダメージは倍になる。

海賊船スカルブラッド号（通常モンスター）

星4

水属性／戦士族

ATK 1600／DEF 900

船首に赤い骸骨をかたどった海賊船。

あらゆる海域に神出鬼没に現れ、旅客船や貨物船を襲撃する。

炎獄魔人ヘル・バーナー（効果モンスター）

星6

炎属性／悪魔族

ATK 2800／DEF 1800

このカードを除く自分の手札を全て墓地に捨て、さらに自分フィールド上の攻撃力2000以上のモンスター1体を生け贄に捧げなければ通常召喚できない。

相手フィールド上モンスター1体につきこのカードの攻撃力は200ポイントアップする。

このカード以外の自分フィールド上のモンスター1体につき、このカードの攻撃力は500ポイントダウンする。

タイラント・ドラゴン（効果モンスター）

星8

炎属性／ドラゴン族

ATK 2900 / DEF 2500

相手フィールドにモンスターが存在する場合、このカードはバトルフェイズ中にもう1度だけ攻撃する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードを対象にする罠カードの効果を無効にし破壊する。

このカードを他のカードの効果によって墓地から特殊召喚する場合、そのプレイヤーは自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター1体をリリースしなければならない。

絶対服従魔人（効果モンスター）

星10

炎属性／悪魔族

ATK 3500 / DEF 3000

自分フィールド上にこのカードだけしかなく、手札が0枚でなければこのカードは攻撃できない。

このカードが破壊した効果モンスターの効果は無効化される。

「ヒドい……」

背中でフィオが呟く。まだあそこまで距離がざつと300メートルはあるのに、よく見えたな。

「うわっ！」

『ゲヒヒヒヒ！』

遠くで『逆巻く炎の精霊』が『レクンガ』の触手によって転ばされる。まずい、非力な攻撃力である彼には『レクンガ』のような下位中級アツカーですら脅威だ。

あの『レクンガ』の振り上げた触手が、彼にとってどれ程の凶器か……！

逆巻く炎の精霊（効果モンスター）

星3



炎属性／炎族

ATK 1000 / DEF 2000

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

直接攻撃に成功する度にこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

レクンガ（効果モンスター）

星4

水属性／植物族

ATK 1700 / DEF 500

自分の墓地の水属性モンスター2体をゲームから除外する度に、自分フィールド上に「レクンガトークン」（植物族・水・星2・攻／守700）を1体攻撃表示で特殊召喚する。

『ギへへエエエッ!』

「うわああああん! パパ、ママア!」

音を立てて振り下ろされる触手。泣き叫ぶ『逆巻く炎の精霊』。させるか!

「『くず鉄のかかし』!」

ガギン！

間一髪、ディスクにセットした『くず鉄のかかし』が『レクンガ』の攻撃をガード。俺が到着するまで時間にして僅か数秒間に合わなかったが、どうにかなったようだ。

にしても、勘が当たって良かった。カードが全て実体化する世界だからこそ成し得た荒業だ。

「ぼうや、大丈夫かい!？」

「早く逃げた方が良いよ!」

「あ、はい!」

ピューツ、と駆け足で逃げて行く。おお、早い。達者でな!。

「にしても、もう順応したのか、フィオ」

「否定していても仕方ないよ。非日常つてのは受け入れて乗り越えないと、あつと言う間に呑み込まれてジ・エンドさ」

遅いな。

他の水属性モンスター達は俺の登場に警戒しているのか、炎の民への攻撃を中断。その隙に炎の民は逃げ切ったらしく、もう炎属性モンスターは殆ど見当たらない。

倒れていた『タイラント・ドラゴン』は『絶対服従魔人』が運んだらしく、遠くに赤い巨体が巨竜を担いで走っているのが見えた。

『グルアアアアッ!』

「さあ、お前の罪を数えろ……」

フィオが背後で「それなんて仮面ラ○ダー?」と言っていたが、気にしない。実際のセリフが合いそうなくらい俺は怒っている。

『ジェエイヤアアアアッ!』

奇声と共に『レクンガ』が触手を俺に向けて伸ばす。

アマイ。軌道ぐらい読んでいる。

(前方から2本、左右から1本ずつ、上から3本。だが本命は土の中を通る残る4本。全て俺の今いる座標を目掛けて放たれている。ならば!)

触手の数ぐらい対面すれば分かる。真ん中を突っ切り、剥き出しの目玉に蹴りをプレセントだ!

俺の蹴りにワントンポ遅れて触手が俺が一秒前までいた場所を攻撃する。

「おらよっ!」

『ギギウツ!』

派手に『レクンガ』は吹っ飛ばされ、地面に倒れてノビた。

「さて、次はどいつだ?」

「この小僧!」

「ブチ殺ス！」

「ザケんな！」

俺の挑発に青い熊の『グリズリーマザー』、槍を持った半魚人『ニードル・ギルマン』、骨つぽいどちらかと言うとマグロのような特徴の『深海王デビルシャーク』が乗り、憤りを露わに爪や牙で襲いかかって来た。

グリズリーマザー（効果モンスター）

星4

水属性／獣戦士族

ATK 1400 / DEF 1000

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の水属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

ニードル・ギルマン（効果モンスター）

星3

水属性／海竜族

ATK 1300 / DEF 0

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する魚族・海竜族・水族モンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

深海王デビルシャーク（効果モンスター）

星4

水属性／魚族

ATK 1700 / DEF 600

このカードは1ターンに1度だけ、対象を指定しないカードの効果では破壊されない。  
い。

ヒュツ、と息を吐き、迎撃の構えを取る。隙だらけだ。山で相对した熊の方がよっぽど強かったぜ？

「おらっ！」

「ぐあっ！」

一番手の『グリズリーマザー』は爪を潜って顎を殴り、

「はっ！」

「ゲブツ！」

二番手の『ギルマン』の槍を鋼質化した腕で受け止めて脇腹を蹴り飛ばし、

「せいやあつ！」

「アブがつ！」

三番手の『デビルシャーク』は浮いている所を下から鉄の棍で突き上げる。

ちなみにコイツに見られる特徴はマグロのような遊泳魚に見られるモノらしく、鯨に近い特徴は見受けられないらしい。

ドサドサドサ、と急所を突かれて3体が倒れる。

「次は、どいつだ」

ザワ、と殺気立つ。数にして50前後。俺の敵じゃない。

この程度、あのプロボクサー崩れ十人との地下デスマッチに比べたらなんて事無い。殺気も微風程度にしか思えないな。

ま、正直フィオの護身術も大したモンだ。飛びかかって来る敵を片っ端から投げて殴って絞めて蹴り飛ばしている。無駄な動きを削いだ良い動きだ。男子より体力面で劣り易い女子が戦う事を想定した戦い方であると言える。

ジャリ、と誰かが地を踏みしめた。来るか？

そう思った時だった。

「待てや」

「その場で待機だ」

奥からやって来たのは戦闘指揮を執っていた『フィツシャービースト』と『水陸の帝王』だ。

他のザコとは違ってしつかりとした気迫を感じる。

「へえ、ようやくボスのお出ましか」

「ザコの相手も疲れたしね」

余裕の笑みを浮かべる俺。そして飄々とした物言いのファイオ。

「けっ、良い腕してんじゃねえか」

「リアルファイト、デュエル。両方とも相当の使い手だとお見受けした」

キュイイイイン、と『フィツシャービースト』の腕にディスクが装着された。『水陸の帝王』は腕が無いので装着できない。きつと半透明のカードが展開したり、石板が降つて来たりして戦うのだろう。

「デュエル、か？」

「おーよ！ 力に在る者はデュエルも強いってのが精霊界コツチの常識でな！」

「力と知能、双方を兼ね揃えてこそ、真の猛者なのだ」

ふーん、成程。そう言えば、随分と昔からデュエルモンスターズは存在していたらし

いね。宇宙の始まりは一枚のカードだって、ダークネスも言っていたし。

どうやら精霊は人間よりも昔から生きていたのかも知れない。

それはさて置き。

「了解だ。だが、時間が無い。二人纏めて相手してや「待った!」る……、フィオ?」

デイスクを展開。時間短縮を目論んで2対1をやるうとした俺にストップをかけたフィオ。何を……?」

「キミはこの後も戦うんだろう? だったら少しでも体力を残した方が良い。」

折角のボス戦も、ピンチのまま迎えたらボコられて終わりだよ」

例えばゲームっぽいけど、どうやら片方を引き受けてくれるらしい。

成程、彼女の言う事も最もだ。ラストの相手はこいつらじゃ無い。ここで体力使い切ったらアウト。

「分かった。片っぱ頼む」

「オツケイ! 『水陸の帝王』、アンタの相手はわたしだ!」

「てこたあ、俺の相手はテメエか、『半魚獣・フィッシュャービースト!」

「少女とはいえ、容赦はせぬ!」

「叩き潰してやるよお!」

俺と『フィッシュャービースト』が戦った後、フィオが『水陸の帝王』とやる事になっ



た。あまり大きな通りがある村では無いし、まだ逃げ遅れた奴がいる可能性も考慮してこいつらから目を離すワケにもいかない。

ガシャン、とディスクをセットし、フィオと『水陸の帝王』から距離を取る。二人から十分に離れたら、スタートだ。

「行くぞー!」

「来いやあ!」

『デュエル!』

黎VS半魚獣・フィツシャービースト

LP 4000 VS LP 4000

「俺のターン、ドロー!」

手札は悪くない。次のターンの反撃で大きくライフを削れるか、否か。そこが最初の勝負だな。

「モンスターを守備表示で召喚!」

バチバチッ、と電子音と共に裏側表示でモンスターが現れる。

「更にカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード2枚

「おれのターン！ フン、いきなり2枚も伏せるとはな！」

うっせえ、ほっとけ。

つーか、それはそれだけ警戒するべきカードが増えたって事だぞ？ 分かってんの

か、コイツ？

「魔法カード『古のルール』を発動！ おれは手札の『コスモクイーン』を特殊召喚！」  
『はああああああっ！』

古のルール

【通常魔法】

自分の手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

コスモクイーン（通常モンスター）

星8

閨属性／魔法使い族

ATK 2900 / DEF 2450

宇宙に存在する、全ての星を統治しているという女王。

コスモクイーン：ATK 2900

む、良いモンスターだ。通常モンスターだが、閨属性で魔法使い族。サポートカードは豊富にある。

「更に、『ゴ布林突撃部隊』を召喚！」

『グウエエエエアッ!』

ゴ布林突撃部隊（効果モンスター）

星4

地属性／戦士族

ATK 2300 / DEF 0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

ゴブリン突撃部隊： ATK 2300

次は初代デメリットアタッカーか。当時は革新的だーなんて騒いでたなあ。

でも、毎度毎度カードのイラストじゃあロクな目に合って無いんだよな、こいつら。完全にやられ役ってヤツ。

「まずは、『ゴブリン突撃部隊』でセットモンスターを攻撃！　// パワーブロー!!」

ブンブンブン！　と三連続で鉄の棍棒が振るわれる。しかしそれは、ヘリポートによつて受け止められた。

「生憎、『マツシブ・ウオリアー』はその程度じゃあやられないんでね！」

マツシブ・ウオリアー（効果モンスター）

星2

地属性／戦士族

ATK 600 / DEF 1200

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

マッシュ・ウォリアー：DEF 1200

「更に攻撃を行った事で、『突撃部隊』は守備表示になる！」

元の場合に戻った『突撃部隊』はそれぞれの武器を斜に構えて低姿勢になるように屈む。

ゴブリン突撃部隊：ATK 2300 ↓ DEF 0

「破壊に耐性を持つモンスターか！ ならば『コスモクイーン』で追加攻撃！ //

ミツク・ノヴァ>//」

ギョオオオオオオオオ！ と闇の粒子が集まり球体を作る。そしてそれは野球のボールのように放たれた。はっ、通すかよ、そんな攻撃！

「リバースカードオープン、『くず鉄のかかし』！ 1度だけ相手の攻撃を防ぎ、ファイ

ルドに再度セットする！」

毎度御馴染みくず鉄先生のご登場です。今回もバリアを張ってエネルギー弾を弾くという名に恥じぬ良い働きです。

ちなみに間違っても『突撃部隊』の方に『くず鉄のかかし』を使つてはいけない。攻撃そのものを無効化してしまうので、守備表示にならないのだ。

攻撃力2300の壁は意外と七面倒臭い。相手にダメージを1ポイントでも多く与えたいのならともかく、基本この手のデメリットアタッカーの攻撃は受けて反撃に繋げるのが定石だ。

「チィッ！ 1枚カードをセットし、ターン終了だ！」

半魚獣・フィッシュャービースト：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：コスモクイーン（ATK 2900）、ゴブリン突撃部隊（ATK 2300）

：伏せカード1枚

「俺のターンだ。ドロロー！」

さて、あの伏せカードは何だろうか。攻撃を封じたり、対象を変更したりするカードならまだしも、入学実技のあれだと厄介だ。今手札にいるこいつの攻撃力は奴のモンスターへの攻撃力を下回る。

チツ、普段なら下位上級アタッカーとして活躍できるつてのに。

ここは、もつと後で出す予定だったこいつに出てもらうか。

「俺は『マッド・デーモン』を召喚！」

『グルアアアアアッ!』

マッド・デーモン（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1800 / DEF 0

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、このカードの表示形式を守備表示にする。

マッド・デーモン：ATK 1800

肩に牛の頭骨、腹に大きく開いた口を持つガリガリの悪魔がニヤニヤ笑いながら現れる。

「『マッド・デーモン』は貫通効果を持つ！」

行くぞ！ 『マッド・デーモン』で『ゴブリン突撃部隊』を攻撃！ ボーン・スプラッ

シュッ！！」

『グイイイアアアアアアアアッ！』

腹の口で中の人間の頭蓋骨をバリバリと噛み砕き、その破片をバババツ！ と吐き出す。小さい子が見たら怖がりそうだな、この攻撃方法。

「永続罨発動！ 『最終突撃命令』！」

「ッ、やはり伏せていたか！」

低レベルデメリットアタッカーの大抵は攻撃後に守備表示になる効果を持つ。逆を言うとう守備表示を封じてやればデメリットは消滅する。

最終突撃命令

【永続罨】



このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

ゴブリン突撃部隊：DEF 0 ↓ ATK 2300

マツシブ・ウオリアー：DEF 1200 ↓ ATK 600

「ならばチェインして速攻魔法『突進』をオープン！『マッド・デーモン』の攻撃力を700ポイント上げる！」

「何!?!」

突進

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで700ポイントアップする。

マッド・デーモン：ATK 1800 ↓ 2500

骨片を撃ち返そうとする『突撃部隊』だったが、欠片の量が突如として増加し、全員に突き刺さった。

半魚獣・フィッシュャービースト：LP 4000↓3800

「ぐああああつ！」

「やった！ 黎が先制した！」

「1枚カードを伏せ、ターンエンドだ」

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：マッド・デーモン（ATK 1800）、マツシブ・ウォリアー（ATK 600）  
 ：伏せカード2枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）

「ナメるな！ おれのターン！ 『死者への供物』を発動！ 次のドローフエイズをコストに『マツシブ・ウォリアー』を破壊！」

「っちゃん、頼もしい壁モンスターが……。ダメージまで無くしてくれるから結構期待していたんだが……。」

死者への供物

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。  
次の自分のドローフェイズをスキップする。

さて、『マッド・デーモン』は自力で守備表示になれる攻防兼ね揃えた優秀な貫通アタッカーだ。だが、この状況下では守備表示になってもすぐに攻撃表示に戻されてしまふ。さて、どう転ぶか……。

「『スピア・ドラゴン』を召喚！」

『クキョオオオオツッ!』

スピア・ドラゴン（効果モンスター）

星4

風属性／ドラゴン族

ATK 1900 / DEF 0

守備表示モンスターを攻撃した時にその守備力を攻撃力が越えていけば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。

スピア・ドラゴン：ATK 1900

またデメリットアタッカー!?

こいつのデツキはデメリットアタッカーのビートダウンか？ だが、それだと『コスモクイーン』は何なのだろうか？

……、ゴチャゴチャ考えていても仕方ないか。まだ始まってから4ターン目だ。

『スピア・ドラゴン』で『マッド・デーモン』を攻撃い!」

「悪いが読んでいる! 畏カード『ヘイト・バスター』を発動!

こいつは俺の場の攻撃対象となった悪魔族モンスターと攻撃を行う相手モンスターを破壊し、攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを与える!」

「んだとお!」

ヘイト・バスター

【通常罠】

自分フィールド上に表側表示で存在する悪魔族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。

相手の攻撃モンスター1体と、攻撃対象となった自分モンスター1体を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

赤く発光した『マッド・デーモン』が『スピア・ドラゴン』を巻き込んで爆発。こちら側は『マッド・デーモン』の張ってくれたバリアのお陰で爆風に巻き込まれずに済んだが、当然相手はモロに喰らう。

「ぬああああああっ!」

半魚獣・フィッシュャービースト：LP 3800 ↓ 1900

「凄いじゃないか、黎!」

「ザマネえなあ! もうライフが半分切ったぞ!」

「う、うるせえ! 『コスモクイーン』でダイレクトアタックだ!」

ふふ、こいつは焦ってるな、確実に。

『マッド・デーモン』は必ず守備表示になってしまい、その守備力は0。だからこうして自分のモンスターごと破壊してしまう『ヘイト・バスター』と組み合わせる事で更なるダメージを相手に与える戦法が有効なのだ。

悪魔族に破壊のデメリットを回避できたり、破壊された方が都合良かったりするモンスターはそこまで多くない。自分のカードの方が相手より多く墓地に送られてしまうカードはデュエリストの腕が試される。

『くず鉄のかかし』！

「しまった、また……！」

再び闇のエネルギー弾を弾く金属製の案山子。やー優秀だね、本当に。  
また俺のターンかと思った時だった。

バギイイイイイイイン！

「わぐ！」

エネルギー弾の消滅と同時に案山子が碎け散ったのだ。一陣の旋風が後に残った土台を搔つ攫って行く。

『サイクロン』!？」

「ハズレだア!」

そう答える『半魚獣・フィッシュャービースト』は先刻と比べて何か様子がおかしかった。

なんだ、あの黒い模様……?」

「速攻魔法『邪神に渦巻く風』! このターン、モンスターの攻撃を無効化された場合、カードを1枚破壊して攻撃を無効化されたモンスターはもう1度攻撃できる!」

邪神のカード!? やはり、こいつらも何か持っているんじゃないかと薄々予想はしていたが……!」

邪神に渦巻く風(オリジナル)

【速攻魔法】

自分フィールド上の攻撃が相手のカードによって無効にされたモンスター1体を指定して発動する。

相手の場のカードを1枚破壊する。

攻撃を無効にされたモンスターはこのターンもう1度バトルを行える。

「したがってもう1度攻撃！　〃ゴズミック・ノヴァ〃！！」  
「ぐああああああああああつ！」

黎：LP　4000↓1100

「黎！」

「動くなア！」

吹き飛ばされた俺に駆け寄ろうとしたフィオに、同じく様子の変化した『水陸の帝王』がグオン！　と尾を振り降ろす。くっ、吹っ飛んで距離が開いている所為で助けに行けない！

「フィオオオオオツ！」





『危ない、マスター！』

それを突き飛ばして回避させたのは、光と共に現れた一人の少女だった。

青いショートカット、チアガールのような衣装。小顔だが、整っている顔立ち。そう

か、この少女は……!」

「助けてくれてありがとう、なんだけど……、キミは……う?」

「お前の精霊だよ、ファイオ。『勝利の導き手フレイヤ』の、な」

「初めまして、マスター」

ニコツ、と笑う『フレイヤ』。

「うん、よろしく!」

『『フレイヤ』、ファイオを頼む』

「はい! マスターには傷一つ付けさせません!」

キュイイイイイン、と青くマーブル模様にも光る結界が張られる。『水陸の帝王』はそれに噛み付いたり尾を叩きついたりしているが、ビクともしない。やはり精霊の力は攻撃力が全てでは無いようだ。

ゴシツ、と口元の少量の血を拭う。

何故だか体の底から力が湧いてくる。これが何なのかは分からないが、今ならこの程度の奴に負ける気はしねえ!

「続けようぜ、『フィツシャービースト』。全力で叩き潰してやる!」

「返り討ちだア!」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

STORY 17 : 「我は未来を渴望せし者」

黎 : LP 1100

手札 : 2枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罠無し

半魚獣・フィッシュャービースト : LP 1900

手札 : 1枚

フィールド

: コスモクイーン (ATK 2900)

: 最終突撃命令 (永続罠)

## SIDE：黎

さて、どうしたモンか。闘志はメラメラと燃えてはいるが、それでどうにかなるんだったらデュエルは苦勞しない。ライフもフィールドもアドバンテージを取っているのは相手だ。手札は辛うじてこちらが上だが、それがたった1枚じゃあ雀の涙と形容されても文句の言いようも無い。

「おれの最後の手札はモンスターカードだ。ターン終了」

半魚獣・フィツシャービースト：LP 1900

手札：1枚

フィールド

：コスモクイーン（ATK 2900）

：最終突撃命令（永続罫）

「俺のターン！ 俺は『ジエネクス・ニュートロン』を召喚！」

ジエネクス・ニユートロン：ATK 1800

フィールドに現れるのは機械仕掛けの兵士。本当なら守備表示で出したいけど、『最終突撃命令』で攻撃表示を強制されちゃうからな……。

「更にカードを1枚伏せ、このエンドフェイズに『ジエネクス・ニユートロン』の効果でデッキから機械族のチューナーを手札に加える」

ジエネクス・ニユートロン（効果モンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 1800 / DEF 1200

このカードが召喚に成功した場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分のデッキから機械族のチューナー1体を手札に加える事ができる。

「これでターンエンド」

黎：LP 1100

手札：2枚

フィールド

：ジェネクス・ニュートロン（ATK 1800）

：伏せカード1枚

アニメなんかじゃライフが3ケタになると主人公勢は鉄壁のライフスキルを發動していたな。後少しなのにライフを削れなかったり、回復されたりといったものだ。

が、俺にそんな便利機能は無い。そもそも今の俺のライフは4ケタ、条件には合わない。

「おれのターン。『死者への供物』の効果でドロワーはできない」

にしても、さつきから『フィツシャービースト』と『水陸の帝王』の様子がおかしい。黒いオーラのようなものを出し、目も本来の色から漆黒の闇のような色になっている。おまけに体の黒い唐草模様。邪神の気配はしないし、あれは一体何なんだ……？



「『不屈闘士レイレイ』を召喚！」

『うおおおおおおおっ！』

まだ出て来るのか、デメリットアタッカー。

この状況下では結構な脅威だな。

ATK : 2300

「バトル！ 『コスモクイーン』で『ジェネクス・ニユートロン』を攻撃！ 攻撃力の差はピツタリ1100、これでジャストキルだあ！」

「トラップ発動、『レインボーライフ』！ 手札を1枚コストに、このターン受けるダメージを全て回復に変換する！ 俺は『スケープ・ゴート』を捨て、ダメージを回復に変える！」

「何い!？」

黒いエネルギー弾が放たれると同時に虹色の障壁が出現。宇宙の女王のエネルギー弾はアンドロイドを破壊こそしたが、障壁を通過した途端に虹色の粒子に変わり、俺の体を癒していった。

これで追撃しても俺を回復させるだけ。このターンは取り敢えず凌げたか。

レインボー・ライフ

【通常罨】

手札を1枚捨てる。

このターンのエンドフェイズ時まで、自分が受けるダメージは無効になり、その数値分ライフポイントを回復する。

黎：LP 1100↓2200

「くぐうつ！ ターン終了了！」

半魚獣・フィッシュャービースト：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：コスモクイーン（ATK 2900）、不屈闘士レイレイ（ATK 2300）

：最終突撃命令（永続罨）

「俺のターンー！」

……これじゃない。

「俺は『マスマティシヤン』を召喚！」

『ふおつふおつふお〜！』

ATK : 1500

「このモンスターを召喚した時、デツキからレベル4以下のモンスターを墓地に送る事ができる。俺は『ゾンビキヤリア』を選択」

マスマティシヤン (効果モンスター)

星3

地属性 / 魔法使い族

ATK 1500 / DEF 500

(1) : このカードが召喚に成功した時に発動できる。

デツキからレベル4以下のモンスター1体を墓地へ送る。

(2) : このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時に発動できる。

自分はデッキから1枚ドローする。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

黎：LP 2200

手札：1枚（機械族チューナー）

フィールド

：マスマティシヤン（ATK 1500）

：伏せカード1枚

「おれのターン！」

どう来る、さあどう来る！

このターンの奴の動きが勝負だ！

「魔法カード『壺の中の魔術書』を発動！ 互いにカードを3枚ドロー！」

互いの手札はこれで3枚。恐らく、相手にもアドバンテージを与える事を差し引いても手札の増強をしたいのだろう。

そして奴の表情……。来る、このターンに決めにかかりに！

壺の中の魔術書（マンガオリジナル）

【通常魔法】

お互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドロウする。

「『邪法召喚の手引き禁書』を発動！ 墓地からモンスターを特殊召喚するカードを1枚除外し、同名カードをデッキから発動！ 更に召喚されたモンスターのレベル×100ライフをお前から奪い取る！」

「何?！」

「これにより2枚目の『古のルール』を発動！ 今回はおれ自身を選択し、折角なのでおれが場に出よう！」

ザツザツ、と水かきのついた足で他のモンスターの横に並ぶ。

んー、ステータスはそこそこなんだが、イマイチなんだよなあ、『フィッシュャービースト』って。

半魚獣・フィッシュャービースト：ATK 2400

「おれのレベルは6、喰らえ600ダメージをお！」  
「ぐっ！」

黎：LP 2200→1600

半魚獣・フィッシュャービースト：LP 1900→2500

クソツ、ライフ逆転された。

そこまで大きなダメージじゃないのが幸いか。

邪法召喚の手引き禁書（オリジナル）

### 【速攻魔法】

（1）：自分、または相手の墓地から「モンスターを特殊召喚する」効果を持つカードを1枚除外して発動する。

自分のデッキから同名カードを発動する。

その後、特殊召喚されたモンスターのレベル×100ダメージを相手に与え、その数値分LPを回復する。

「そして『ゴブリンエリート部隊』を召喚！」

ゴブリンエリート部隊（効果モンスター）

星4

地属性／悪魔族

ATK 2200 / DEF 1500

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。  
次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

ATK : 2200

出たか、微妙なデメリットアタッカー！ 並みのモンスターやリクルーター、ガジェット系じゃ歯が立たない守備力という低デメリットを持つパワーアタッカー！  
……に見えるけど結局1500程度しかないし、2300には1000足りないから『帯に短し褌に長し』なやられ役！

成程な。恐らくこいつのデッキはデメリットアタッカーと上級モンスターを組み合わせたハイパワーな混成式のビートダウン。デメリットアタッカーの守備表示は『最終

突撃命令』で潰し、上級モンスターを通常モンスターで固めて通常モンスターのサポートカードを使うのか。

召喚は『古のルール』のような補助カードで行い、恐らくいざとなれば『血の代償』のようなカードでサクリファイス・エスケープ（今はリリース・エスケープ）を行うのだろう。スキドレもあるかも知れない。

### 血の代償

#### 【永続罫】

5000ライフポイントを払う事で、モンスター1体を通常召喚する。

この効果は自分のメインフェイズ時及び相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

「おら行くぞー！ 『コスモクイーン』でその爺を攻撃！　　“ゴズミック・ノヴァ”！！」  
「があっ!?!」

再び放たれる黒いエネルギー弾。それは髭の生えた小さい数学者を粉々に砕くと、そのまま俺も撃ち抜いた。

いつてえ……、1400ダメージでこんな痛いのかよ……!!



黎 : LP 1600 ↓ 200

「れ、黎っ!!」

「大丈夫だ! 『マスマティシャン』の効果発動、破壊された時に1枚ドロウする!」

——このカードは!!

「最早関係無いわ! おれ自身でトドメだあ!!」

水掻きで殴り掛かって来る緑色の魚人。

殴られれば俺の負けだが……、そうはさせない。相手にドロウさせる事の危険性を教

えてやる!

「その攻撃、『速攻のかかし』で受け止める!」

手札の1枚を切つて墓地に送ると、機械仕掛けの案山子がブースターを点火させて俺の前面に飛び出した。魚人の拳をその身で受け切つて弾き飛ばすと、そのままフェードアウトした。

速攻のかかし (効果モンスター)

星1

地属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。  
その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「ンギイッ！」

悔しそうに『フィッシュャービースト』が地団太を踏む。

それを見て内心でほくそ笑む。あいつがデメリット覚悟で俺に引かせた3枚のカードはしっかりと俺に逆転の手を与えてくれたのだから。

「さあ、どうする？ 手札はゼロ、もう攻撃もできないが？」

「クッ、ソオオオオオオオオオオッ！ ターン終了だ！」

半魚獣・フィッシュャービースト：LP 2500

手札：0枚

フィールド

：コスモクイーン（ATK 2900）、ゴブリンエリート部隊（ATK 2200）、

半魚獣・フィッシュャービースト（ATK 2400）、不屈闘士レイレイ（ATK 23

00)

: 最終突撃命令 (永続罨)

「だが、この状況を逆転できるものか！ 残りライフはたった200、モンスターも場がない！ くたばり損ないなんだよテムエは!!」

「それはどうかな。俺のターン、ドロー!」

俺の手札は5枚。元々持っていた機械族チューナー『ジェネクス・コントローラー』、奴が引かせてくれた3枚、今ドローした1枚。

これだけあれば十二分だ!

「相手の場にモンスターが存在し、自分の場には存在しない時、手札の『バイス・ドラゴン』は特殊召喚できる! ただし、この時ステータスは半分になる」

『グガアア!』

バイス・ドラゴン : ATK 2000 ↓ 1000

「更に手札の『パワー・ジャイアント』は手札のレベル4以下のモンスターを墓地に送り、送ったモンスターのレベル分、自身のレベルを下げる事で特殊召喚できる! 『ジェネ

クス・コントローラー』を墓地に送って特殊召喚！」  
『オオオオオオオッ！』

パワー・ジャイアント（効果モンスター）

星6

地属性／岩石族

ATK 2200 / DEF 0

このカードは手札からレベル4以下のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚した場合、手札から墓地へ送ったモンスターのレベルの数だけこのカードのレベルを下げる。

また、このカードが戦闘を行う場合、そのダメージステップ終了時まで自分が受ける効果ダメージは0になる。

ジェネクス・コントローラー：☆3

パワー・ジャイアント：☆6 ↓ 3 / ATK 2200

紫の筋肉質な竜に続き、カラフルなクリスタルのゴーレムが飛び出す。どちらも緩い条件で手札から出て来る優秀な半上級モンスターだ。

もう一丁！

「リバースカード、オープン！ 永続罫『強化蘇生』！ たった今墓地に送った『ジエネクス・コントローラー』を特殊召喚する！」

「ンだど!？」

「この効果で復活したモンスターはレベルが1つ上がり、攻守も1000上昇する！」  
「凄い、手札コストを逆手に取ってモンスターを並べる布石にした！」

ジエネクス・コントローラー ATK:1300↓1400/☆3↓4

手札から墓地を経由し、チューナーをフィールドへ。どんなピンチもコストも必ず転用する。それがデュエリストの必勝法だ。

「さあ行くぜ、こっからが本番だ！ 俺はレベル5の『バイス・ドラゴン』にレベル4となった『ジエネクス・コントローラー』をチューニング！」

「シンクロキター!!」

「我は未来を渴望せし者！ 巨蟲の進行阻みし戦士、輝く明日へのレールを敷かん！」

希望が溢れる明日となれ！」

☆5＋☆4＝☆9

「シンクロ召喚！ 煙滅せよ、『レアル・ジエネクス・クロキシアン』!!」

『ポオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

レアル・ジエネクス・クロキシアン：ATK 2500

警笛音と共に光の柱の中からレールが飛び出し、真っ黒な蒸気機関車がランプを照らしながら走って来た。モンスターゾーンに到着するとレールは消失し、ガシシガシシ、と二足歩行のロボットに変形を遂げた。

レベル9で攻撃力2500、更にはシンクロ素材に縛りがあつてはその能力値は低く感じるだろうが、その苦勞に見合う良い能力を持っている。

「モンスター効果発動！ シンクロ召喚に成功した『クロキシアン』は相手の場の最もレベルの高いモンスター1体のコントロールを奪取できる！ 『コスモクイーン』は貰ったぞ！」

「んだとお!？」

レアル・ジエネクス・クロキシアン（シンクロ・効果モンスター）

星9

闇属性／機械族

ATK 2500 / DEF 2000

「ジエネクス」と名のついたチューナー+チューナー以外の闇属性モンスター1体以上  
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するレ  
ベルが一番高いモンスター1体のコントロールを得る。

ポオオオオオオツ！ と再び警笛が鳴り響くと『クロキシアン』は機関車に変形。そ  
のまま『コスモクイーン』の前へと走り、いつの間にか連結していた客車に『コスモク  
イーン』を乗せた。

そのままこちらへと走って戻り、『コスモクイーン』を降ろすと、またロボットの姿に  
なった。

この能力は『クロキシアン』が場から離れても継続する上に、また『クロキシアン』を  
シンクロ召喚すれば更に奪えるというお得効果だ。ただし、効果の対象を選べないとい

う欠点があるので注意。

「こ、『コスモクイーン』が!？」

これでお互いのモンスターの数は3対3で並んだ。

もう1体モンスターを追加し、このターンで押し切る!

『ネクロ・ガードナー』召喚!

『ゴジャアツ!』

「そして墓地の『ゾンビキャリア』の効果! 手札を1枚デッキトップに戻し、墓地から

蘇る!」

『ヴォアアア……!』

今度はフィールドに闇の落ち武者と丸々太ったゾンビを呼び出す。

これで手札は使い切った、最後の増援を呼び出させて貰おう。

「レベル3の『ネクロ・ガードナー』にレベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング!」

病の媒介者が空中に飛び上がって光の星になると、その星は円を描いて緑の幾何学的なサークルを2つ生み出した。

そしてそのサークルの中へ落ち武者が入り、3つの光る星になる。

「我は未来を渴望せし者! 巨蟲の進行阻みし戦士、闇の正義の威を示さん! 希望が

溢れる明日となれ!」



☆3 + ☆2 || ☆5

「シンクロ召喚！ 破滅の浄化、『<sup>アーリー・オブ・ジャステイス</sup>A・O・J カタストル』！」

『キィアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

A・O・J カタストル（シンクロ・効果モンスター）

星5

闇属性／機械族

ATK 2200 / DEF 1200

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

A・O・J カタストル： ATK 2200

白いボディ、カマキリのような出で立ち、節足動物のような足に頭の奇妙なモニユメ

ント。使用頻度の高い【剣闘獣<sup>グラディアルビースト</sup>】や【ライトロード】相手に強い力を発揮するモンスターだ。

「黎、そのデッキは炎の精霊のものじゃ無い？」

「今頃気がついたか」

そう、あれから色々カードを工面したりして新しいデッキを作り上げたのだ。

炎だけじゃあまた負ける。かといつてテキストなカードでも然り。

必要なのは生前の知識と腕と勘。そのために試験的に生み出したデッキがこれなのである。

「さて、これで布陣は整った……！」

黎のフィールド

：A・O・J カタストル（ATK 2200）、リアル・ジェネクス・クロキシアン（ATK 2500）、パワー・ジャイアント（ATK 2200）、コスモクイーン（ATK 2900）

：魔法・罫無し

半魚獣・フィッシュャービーストのフィールド

：ゴブリンエリート部隊（ATK 2200）、不屈闘士レイレイ（ATK 2300）  
 半魚獣・フィツシャービースト（ATK 2400）

：最終突撃命令（永続罨）

「た、たった1ターンで、形勢を完全に逆転させた……」

「シンクロを、ナメるなよ……？ このターンで終わりだ、バトル！ 『コスモクイーン』  
 でお前自身を攻撃！ // コズミック・ノヴァ”!!」

「グアアアアアッ！」

半魚獣・フィツシャービースト：LP 2500↓2000

黒いエネルギー弾が筋骨隆々の半魚人を吹き飛ばす。ゴロゴロと転がり、プレイヤー  
 が元々いた場所で止まった。

「次は『クロキシアン』で『エリート部隊』を攻撃！ // SLナツクル”！」

『ポオオオオオオオオオオオオオッ！』

「ぬおおおおおおおっ！」

半魚獣・フィツシャービースト：LP 2000↓1700

黒煙を上げた『クロキシアン』が騎士装束のゴブリン達を纏めて殴り飛ばす。その余波が『フィツシャービースト』を襲っているハズなのに、『フィツシャービースト』はその土煙の中で笑っていた。

(しめた! ヤツはミスを犯した! 残ったモンスターの攻撃力は両方とも2200!  
『レイレイ』には届かない! このターンを凌げばまだ勝機は残っている!)

とか何とか考えているんだろうな、きつと。

悪いが、それはウチの切り札カタストルの力を知らないだけだ。このターンで終わる事に変更りは無い!

「更に『A・O・J カタストル』で『不屈闘士レイレイ』を攻撃! ダーク・ポイン  
ト・レーザー!」

「バカめ、返り討ちだ! 『不屈闘士レイレイ』、パワー張り手! でぶちのめせ!」  
『キイイイイイイイイイイイッ!』

『ウホアアアアアアアアアッ!』

黒いエネルギーを溜める『カタストル』に向けて『レイレイ』が両腕と両足を使って走り寄る。大きく空中に跳び上がってそのまま掌を叩きつけようとするが、チャージを

完了させた『カタストル』がレーザーを放って『レイレイ』を寸分変わらず撃ち抜く。

レーザーが貫通した胸部から『レイレイ』は黒い粒子となり、消滅した。

「なんだと!？」

「悪いな、『カタストル』は闇属性以外のモンスターと殴り合った時、相手だけを破壊する効果があるんだ」

「す、すごいインチキ効果……」

「ま、負けるのか……? このおれが……、このおれがあ!」

「ああそうだとも! 最後だ! 『パワー・ジャイアント』でダイレクトアタック!」  
クリスタル・ダスト・パンチ!」

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

「ギイヤーアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

半魚獣・フィツシャービースト : LP 1700 ↓ 0

キラキラと輝きながら鉱石の拳が『フィツシャービースト』をぶつ飛ばす。派手に錐揉みしながら真上に飛ばされ垂直に地面に落下し、勝敗が決した。

黎：WIN

半魚獣・フィツシャービースト：LOSE

「あれは……」

突然、倒れて動かなくなった『フィツシャービースト』の体から黒い霧が立ち上って行った。

「これは!」

「ああ!?!」

そしてそれはまた『フィツシャービースト』の中に入り込もうとしている。

「させるか!」

咄嗟の判断で炎の力を行使して黒い霧を焼き払う。一瞬で霧は灰も炭も残さずに消滅した。

「黎さん、あれって……」

「分かってる」

「どうやらフレイも気がついたようだ。これで、パズルのピースが1つ埋まった……」

「まさか、『フィツシャービースト』が敗れるとはな」

「黎、お疲れ様ー!」

「白目を剥いて気絶している『半魚獣・フィツシャービースト』を端に部下に運ばせる『水陸の帝王』。」

「一方で解除された結界から出て来て俺に駆け寄るフィオと『フレイヤ』。ケガは無いようでも何よりだ。」

「フレイ、ありがとう。助かったよ」

「いーえ、これがわたくしのやるべき事ですから」

「フレイ、というのは恐らく『フレイヤ』の名前だろう。安直かも知れないが、覚えや

すくて助かる。

「ザツ、と大地を踏み締めてファイオは『水陸の帝王』に向き合った。

「さて、わたしの準備は良いよ、『水陸の帝王』。次はわたし達のデュエルだ！ 新しく改良したデツキの力を見せてやる！」

「良からう！ 容易く倒せるとは思わぬ事だ！」

S I D E : フイオ

「ガシンン！ とデツキをセットしたディスクが展開する。『水陸の帝王』は石板を自分の前に5枚展開した。多分あれが手札なんだろう。

「デツキは見当たらないが、こちらがデツキ切れを起こす前に勝敗を決すれば問題無い。」

「心臓が早鐘を打っている。緊張している……。」

「ふふ、わたしが緊張だなんて、珍しい。この人外のわたしが！」

「ファイオ」

「精神を落ちつけていると、黎が話しかけてきた。」

「何？ 言っておくけど、わたしは引き下がるつもりは無いよ」



「違う。さっき俺のデュエルを見ていたから分かるとは思うが、このデュエルではダメージや衝撃が現実のものとなる」

それは分かっている。『コスモクイーン』の攻撃で黎は派手に吹っ飛ばされ、地面を転がった。口からは僅かだけ血を流していた。最初から普通のソリッド・ヴィジョンのデュエルだとは思っていない。

「残念ながら一対一だから助太刀はできない。だが、こいつを受け取ってくれ」

そういつて黎が差し出したのは一枚の罨カードだった。

驚いた事に、今回組み直したわたしのデッキのコンセプトにピッタリのカードだった。

「良いの？」

「構わない。まだ持っているからね」

これ以上持つていても腐ってしまうだけだよ、と黎は苦笑いした。

その困ったような笑い顔にちよっぴりトキめいてしまったのは内緒だよ？

さあ、余談はこれくらいにしようか。

始めようか、決闘<sup>デュエル</sup>を！

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 18 : 太陽光線

SIDE : フィオ

〈神山フィオの荒筋！〉

いつの間にかデュエルモンスターズの精霊界にまでやって来てしまったわたし。でも、そんな事を悩むより前に炎属性のモンスター達が水属性のモンスター達に襲われていた。しかもこいつら、途中から何か様子がおかしくなった。

更に更になんかわたしの精霊まで出て来ちゃった。うーん、わたしが普通の人間だったら確実に頭パンクしてたね。

あ、勿論デュエルで決着をつける事になったよ。結果はまず黎の勝利。だから次はわたしの番。さあ、行くよ！

「マスター、頑張って下さい！ わたくしは先にデッキに戻ってますー！」  
「うん、また後で」

『勝利の導き手フレイヤ』ことフレイ（あれ、逆？）が声援をくれて、姿が消える。きつ

とデッキの中のカードに戻ったんだろう。

このデッキは以前、黎と戦った時は全くの別物。元々持っていた微調整用のカードも片っ端から詰め込んで、友人の明日香達との実戦で完成したものだ。回らない時は本格的に回らないけれど、回ればどんな奴だって怖くない！

「行くぞ、『水陸の帝王』！」

「来い、少女よ！」

『デュエル！』

ファイオVS水陸の帝王

LP 4000 VS LP 4000

「先攻は貰うよ！ わたしのターン、ドロー！」

来た来た。今回の回し方はこうなるのか。

「わたしは『豊穡のアルテミス』を守備表示で召喚！」

豊穡のアルテミス：DEF 1700

光の中から仮面を被った白い天使が降臨する。

え？ 『アルテミス』が出て来たんだから「エンジェルパーミッション」以外に無いだろうって？

豊穰のアルテミス（効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1600 / DEF 1700

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度に自分のデッキからカードを1枚ドローする。

ふふ、アマいよ。

「更にカードを3枚伏せ、ターン終了」

言ってる割には3枚も伏せているじゃないかって？ 仕方ないじゃんか。

最初の手札は『アルテミス』と今伏せた罫カード3枚、残りは上級モンスターと永続魔法なんだよ。これ以外打てる手はないの。

ファイオ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：豊穡のアルテミス（DEF 1700）

：伏せカード3枚

「こちらターンだー・ドロロー！」

ドシンン！ と石板が落ちて来た。び、ビックリしたなあ。あれがドロローか……。

じゃ、まずは1枚目、行きますか！

「カウンター罫『強烈なはたき落とし』を発動！ いかなる形でも相手がカードをドロローした場合、引いたカード1枚を墓地に送らせる！」

「ぬっ！」

ガラガラガラ、と石板が碎けて崩れる。あれで墓地に送った事になるんだね。

強烈なはたき落とし

【カウンター罠】

相手がデッキからカードを手札に加えた時に発動する事ができる。  
相手は手札に加えたカード1枚をそのまま墓地へ捨てる。

「更に『アルテミス』の効果でカードを1枚ドロ―！」

「ならばこちらは魔法カード『二重召喚』を発動！」

石板の1枚がグルン、とこちらを向いた。石でできてはいたけれど、確かにわたしのよく知っている『二重召喚』のイラストだった。

「まずは『レッド・ガジェット』を召喚！ その効果でデッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加える！」

レッド・ガジェット（効果モンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1300 / DEF 1500

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」1

体を手札に加える事ができる。

イエロー・ガジェット（効果モンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1200 / DEF 1200

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「グリーン・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

グリーン・ガジェット（効果モンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1400 / DEF 600

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「レッド・ガジェット」1体を手札に加える事ができる。

レッド・ガジェット : DEF 1500

石板から赤い歯車に手足の生えたモンスターが現れる。色違いの歯車をサーチするモンスターだ。

「そして『レッド・ガジェット』を生け贄に、『機械王』を召喚！ 『機械王』は自身を含めた自分の場の機械族モンスターの数1体につき攻撃力が100ポイント上昇する！」  
『ギギギギギギギギギギ………』

機械王（効果モンスター）

星6

地属性／機械族

ATK 2200 / DEF 2000

フィールド上に表側表示で存在する機械族モンスター1体につき、このカードの攻撃力は100ポイントアップする。

機械王： ATK 2200 ↓ 2300

「そして手札の『マシンナーズ・フォートレス』と『イエロー・ガジェット』を墓地に送



り、今墓地に送った『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚！  
機械族が増えた事で『機械王』の攻撃力が更に上がる！」

マシンナーズ・フォートレス（効果モンスター）

星7

地属性／機械族

ATK 2500 / DEF 1600

このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。

マシンナーズ・フォートレス：ATK 2500

機械王：ATK 2300 ↓ 2400

く、なるほど。こいつのデッキは「ガジェット」か。3種類あるガジェットがそれぞれをリクルートし、それを使って手札コストや壁モンスターを補ったりするデッキ!

しかも、機械族で固めてあるから恐らく『リミッター解除』みたいな豊富にあるサポーターカードも手札にある可能性が高い!

ついでに言えば『マシンナーズ・フォートレス』は破壊された時に場のカードを1枚破壊する道連れ効果がある。これで迂闊に踏み込めなくなったね……。

「カードを1枚伏せて、バトル! 『機械王』で『アルテミス』を攻撃! / ロケット・パンチ!!」

「くっ!」

その攻撃名はどうかと。

バシユツ! と飛んで来た腕が『アルテミス』を殴り飛ばそうと襲い掛かる。そうはさせないよ。

「カウンター罠『攻撃の無力化』! バトルを終了させる! そして1枚ドロー!」  
「むむむ、こちらにはもう手札は無い。ターンエンドだ」

水陸の帝王:LP 4000

手札:0枚

フィールド

：機械王（ATK 2400）、マシナーズ・フォートレス（ATK 2500）

：伏せカード1枚

「わたしのターン！」

さて、状況ははつきり言つて非常にマズい。今のわたしの手札は永続魔法2枚に上級モンスター1体。そして罠カードが1枚。

このドローで通常召喚できるモンスターを引き当てないと、次のターンに直接攻撃を喰らつてお終い。それに仮に召喚できたとしても相手がリクルータークラスのモンスターを出した時点で終了。呆気無さ過ぎる。

さあ、デッキよ、応えて！ 無残に倒れていく炎の里の皆を守りたいんだ！

「ドローー！」

これは……。

「手札から魔法カード『天使の施し』を発動！ カードを3枚ドローし、2枚捨てる！

………、！」

来た！

ありがとう、皆。信じてたよ！

「このデュエル、わたしの勝ちだ！」

「何だと!？」

「私は『勝利の導き手フレイヤ』を攻撃表示で召喚！ 行くよ、フレイ！」

『行つきまゝす！』

勝利の導き手フレイヤ：ATK 100

光の中からチアガール天使が飛び出す。フレイとはあの結界の中ですっかり意気投合した間柄だ。

「その効果でわたしの場の天使族モンスターの攻撃力と守備力は400ポイントアップ！」

豊穡のアルテミス：ATK 1600 ↓ 2000 / DEF 1700 ↓ 2100  
 勝利の導き手フレイヤ：ATK 100 ↓ 500 / DEF 100 ↓ 500

まだまだ行くよ！

「永続魔法発動！ 『コート・オブ・ジャスティス』！ 自分の場にレベル1の天使族モ

ンスターが存在する時、1ターンに1度、手札の天使族モンスターを無条件で特殊召喚できる。手札の『アテナ』を特殊召喚！」

ATK : 2600 ↓ 3000

「ここで『アテナ』のモンスター効果発動。1ターンに1度、わたしのフィールドと手札の天使族モンスターを入れ替える事ができる。フィールドの『アルテミス』を墓地に送り、さつき捨てた『光神機—轟龍』を呼び戻す。戻って来て！」

『キイイイイイイ！』

ATK : 2900 ↓ 3300

『アテナ』の更なる効果発動！ わたしの場に天使族モンスターが現れる度に相手に600ポイントのダメージを与える！ “ホーリー・ジャツジ！”

アテナ（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2600 / DEF 800

1ターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター1体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する

天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに600ポイントダメージを与える。

「ぐおっ!？」

水陸の帝王：LP 4000 ↓ 3400

先制パンチ入った!

さて、もう気が付いた人もいるんじゃないだろうか? 主流な天使族デッキは大きく

3種類に分かれる。

1つ目は重量級天使族モンスターで回す【ビートダウン】。

2つ目はカウンター罠を主軸に置く【エンジェルパーミッション】。

3つ目は『アテナ』の効果ダメージを利用する「エンジェルバーン」。

でもわたしの今のデッキはこれらを混ぜ合わせたものだ。何を馬鹿な、なんて思うかも知れない。でも、これが思ったよりも回る回る。

例えば『アテナ』はビートで戦えるくらいの戦力はあるし、『アルテミス』の蘇生にも役立つ。

それからカウンター罠はあって困るものは少ないし、『アルテミス』は2枚あれば大丈夫。いざとなれば壁にできるし、『轟龍』とかの召喚時に生け贄に捧げても良い。

『フレイヤ』は天使族デッキでは汎用性がある。『アルテミス』と一緒に場に出せば下級アタッカーじゃあ越えられない壁になる(『フレイヤ』を2体出してもロックを掛けられないのは残念だけど)。

ただし、カードの配分を少しでも間違えると重大事に繋がる。正直な話、このデッキは1枚でもカードが変わったら確実に戦えない程、緻密な構築が必要なんだ。だから今も微調整中。

「行きます！ 『轟龍』で『機械王』を攻撃！ シヤイニング・キャノン！」  
「ぬぐうつ！」

水陸の帝王：LP 3400↓2500

光の砲弾がロボットを木端微塵にする。うーん、なんか無慈悲。『轟龍』って本当に天使なの？

「追撃はしません。残ったそのモンスターは、破壊された時に道連れ効果があつた筈ですからね」

「その通り。そちらが『フォートレス』を破壊したら『アテナ』の破壊を目論んでいた」  
だが、と『水陸の帝王』は続ける。

「それでは倒せまい？ 次のこちらのターンでどんでん返しが起こるかも知れんぞ？」  
それに対し、わたしは余裕の笑みで返す。

ディスクの魔法・罨カードを発動させるスイッチに手をかけながら。

「いいえ、言つた筈。わたしの勝ちだ、ってね」

ピッ！ とボタンを押し、さつき黎から貫つたカードがオープンする。緻密な構築を必要とするわたしのデッキに入れてしまった事にちよつと不安を感じていたが、こうなつたんだから問題無いのかな？

「罨カード『ソーラーレイ』を発動！ わたしの場の光属性モンスター1体につき、相手プレイヤーに600ポイントのダメージを与える！」

「なあんだとお!？」



ソーラーレイ

【通常畏】

自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターの数×600ポイントダメージを相手に与える。

天空に18の光の球が浮かぶ。一発につき100ダメージという事なのだろう。

んー、『ソーラー「レイ」』と彼の名前、『遊馬崎「黎」』がかかっているから渡してくれたのかな。

違うよね、きつと。

「わたしの場の光属性モンスターは『アテナ』、フレイ、『轟龍』の3体！ したがって……！」

「1800ダメージだとお!? だがまだライフは残る！」

「残さない！ 速攻魔法『エンジェル・リンガーネーション』をチェーン発動！ 手札から天使族を墓地に送り、合計レベルが同じ天使族を呼び戻す！ レベル4『ハーブの精』をコストに『アルテミス』を呼び戻す！ そしてアテナの効果で600ダメージ！」



「さて、吐いてもらおうぞ。テメエら、何の目的でこんな事してやがるー」

真っ黒に変色した腕で『ソーラーレイ』で黒焦げになった『水陸の帝王』を締め上げる黎。きつとパワーアップした姿なんだろう。あの大きな『水陸の帝王』を軽々と持ち上げるなんて、プロレスラーやプロのボディビルダーでも無理だろう。

にしても、勝ったら吐くなんて約束してたっけ？

「ぐぐぐ、良かろう。その様な契りを交わした覚えは無いが、吐こう……。だから下ろせ、正直な話、窒息しそうだ」

確かに、黎が右手で握りしめているのは首だ。とんでもない握力で締めたら呼吸が苦

しくもなるだろう。

ドサツ！ と黎が手を離れたせいで『水陸の帝王』が落ちる。ゲホゲホと咳き込みながら、彼は事情を話し始めた。

「自分とて、詳しい事は分かん。ただ」

「ただ？」

「水の里の長である『超古深海王シーラカンス』殿がどこからか引き連れて来た『ウオーター・ドラゴン』殿と共に急に炎の里に進撃すると言い出したのだ。

あの方は普段は温厚で、眠っておられる事が殆ど。しかも『ウオーター・ドラゴン』殿とは不仲であった。

抵抗しようと思ったが、何か邪悪なモノに邪魔され意思に自由がきかなかつたのだ。んー、と考える。それってやつぱりあの黒い模様が何か関係しているのかな？ 『水陸の帝王』からも倒れた後、黒い何かが空に昇って消えて行ったし。

「それも分からん。だが、もう消滅したあの黒い何かは確実に皆の中に入り込み、この侵略に駆りたてたものだ」という事は確かだ」

「その二人は今どつちに？」

考え事をしていて黎とフレイが口を開く。

「『ヴォルカニック・デビル』殿を仕留めに行くと、ここから、西の方角に……」

「それだけ聞ければ十分だ」

「マスター、黎さん、早く行きましょう！」

ええ？ ええ？

何？ 何が分かったの？

「ね、ねえ黎。ちゃんとわたしにも分かるように説明して！ 何が何だか分からないよ！」

「説明は移動しながらする。フレイはカードの中に戻ってくれ。フィオを背負って移動するから」

「はい」

ヒュン、とフレイが消える。

もー、ワケ分かんないよおー！

SIDE : 黎

現在、背中にフィオを背負い、足のブースターを噴出させて移動中。

襲撃に出っていた部隊は『フィッシャービースト』と『水陸の帝王』以外が率いていたのは全滅したらしく、残った連中が撤退と後片付けに追われているようだ。

「ねえねえ、どういう事なのか教えてよお！」

「背中を叩くな、バランス崩れて落ちるぞ」

ポコポコと可愛く叩いてくるフィオがいじらしい。しかし、あれだけ情報があつてまだ分からないのか？

「しゃーないな。良いか、良く聞けよ？」

「うん」

「ここから解説タイムです。」

「まず十中八九、『シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』を操っているのは邪神だ」

「え、でも邪神の気配はしないんでしょ？」

「そうです。そこが1つのポイントなのです」

半実体化したフレイが俺達の近くを飛びながら言う。実際はカードから遠く離れられないという特性を利用して引っ張られているのだろうけど。

俺はプライド戦で邪神の気配を知った。それを頼りに里にまで行ったが、気配を放っている者は一人もいなかった。

そこで前にプライドが言っていた事を思い出して欲しい。『邪神は人の負の感情を食い物にする』という言葉を。

「彼らは心の中にある闇を利用されたんだ」

「闇?」

「心の中が清い事だけで構成されているヤツはどこを探してもいない。必ず劣等感や嫉妬なんかを抱えている。」

そしてもし、邪神がそれに干渉できるとして、それを増幅したら? そしてそれに使われていたのがあの黒い模様だったとしたら?」

「!」

「気配が無いのは当然。黒い模様の気配は残り香程度の痕跡だったんだからな」

デュエルに勝った後、『水陸の帝王』から黒い何かが霧状になって空へ向かって行き、空中に霧散して消えた。

『フィッツシャービースト』に勝った時、あの黒い霧に注意していなければ、きっと残り香の気配には気付けなかっただろう。

「恐らく、邪神は『シーラカンス』か『ウォーター・ドラゴン』のどちらか、或いは両方を洗脳した。更にそこから間接的に水の民を操っていたんだ。」

大元なら比較的強く残っているだろうが、そこから枝分かれした先には痕跡が殆ど残っていない。だから気が付けなかったんだ」

「辛うじてわたくしと黎さんが気付けなかったら、無策で戦う事になっていました」

「黎は一度戦った事があるから、フレイは精霊だから気が付いたんだね」

そういう事。そしてもう一つ。

「推測だが、最初から邪神は水の民を襲うつもりだったんだ」

「え？」

「理由は2つある。『シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』の不仲さ、つまりそこにあるマイナスの感情を利用して洗脳する為。

もう1つは、『シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』のモンスター効果を利用する事だ。2体の効果は知っているか？」

えーと、とファイオとフレイが頭を掻く。おいおい、『シーラカンス』はこの間その目で見ただろうが。

「『シーラカンス』は手札コスト1枚でデッキから条件付きで可能な限り魚族モンスターを呼び出す能力。『ウォーター・ドラゴン』は敵味方問わず炎系モンスターの攻撃力を0にする能力だ」

「そ、それって！」

「『シーラカンス』で兵力を補給し、『ウォーター・ドラゴン』で強い炎系モンスターを制圧する。この組み合わせは炎系モンスター相手には余りにも有効だ」

そう、この能力と二人の不仲を知っていれば、炎の里を襲うのは理に適い過ぎている。

この他にも『せいなるあかり』みたいな特定の属性を封じるモンスターが存在する。



仮に俺がそういう立場なら、絶対にそういう奴を押さえて優位を確保。そこからメタの上にメタを張りまくって進撃する。これなら反撃を許さずに征服できる。

「邪神の気配が強くなって来ました……」

フレイが前方をキツと見据えながら呟く。ああ、俺にも分かるぜ？ このまるで粘土の泥に浸かったかのような感覚。背中に走る悪寒や殺気とはまた異なる真つ黒な何か。吐き気を催しそうになるくらいの気持ち悪い感触。

本格的に間違いない。かなり近い！

頼むから無事でいてくれよ、『ヴォルカニック・デビル』……………！

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 19 : 水の龍と炎の巨人

SIDE : 無し

「ぜえ、ぜえ……………」

灯った炎の勢いも弱く、『ヴォルカニック・デビル』が音を立てて倒れ伏した。

その眼前には真っ黒に変色した『超古深海王シーラカンス』と『ウォーター・ドラゴン』がいた。

火山の近くだというのに、その周囲は大量の水がぶち撒けられていた。

「ぐ、何故、このような事をする……………！ 民は、無関係のはずだあつ！ 何故、何故このような殺生な事ができるのだあ！」

瞳の光は、死にかけてであつても強い。血を吐きながらも気高に吼えるその姿は数日前にプライドと戦っていた黎の姿を彷彿とさせる。

「答える義理は無いな」

「耳障りだロートル」

それを軽く一蹴する水の里の長と龍。双方共に口内に大量の水を溜める。あれが放

たれ、直撃したら、最早立つ事すらできない『ヴォルカニック・デビル』は確実に死んでしまうだろう。

「死ね！」

同時に放たれる水の巨柱。水圧も滝とは比較にならないだろう。

(……)までか……。濟まない皆……。ワシは、炎の長失格だな……)

目を静かに閉じ、最期の時を受け入れる。心の中で、走馬灯の中で自分と関わり合った全ての人に謝りながら。

「フオビドウン・ゴスペル」！

「カメラリア・ストーム」！

「マグネット・ソード」！

突如として思わぬ援軍がやって来た。

光り輝く歌が、椿の花の嵐が、磁力の斬撃が飛来し、水の柱を防ぎ切ったのだ。

ゆつくりと『ヴォルカニック・デビル』が首だけ動かして後ろを見ると、そこには三人の精霊が、里の長がいた。

一人は、アメリカの先住民のような格好をし、白い鳥の被り物をした女性。

一人は、椿の大輪の下半身を持つ、美しい女性。

一人は、三体の磁石マグネット・ウオーターの戦士が変形合体した岩の剣士。弱々しい声で『ヴォルカニック・デビル』が彼らの名を一人ずつ呼ぶ。

『ガーディアン・エアトス』殿……」

「大丈夫ですか？ 不穏な気配を察知して来たのですが」

『椿姫つばきテイタニアル』殿……」

「どういう事なのか、彼らには説明してもらいたいわねえ」

『『マグネット・バルキリオン』殿……」

「間に合って何よりでござる。某、恩義を返せないのはお断りでござるからな」

「ザコがまた集まって来やがったか」

「構わん。今の我らに敵は無い」

三対二という状況で感情一つ揺れ動かない『シーラカンス』と『ウオーター・ドラゴン』。

一方で三人は走り寄って『ヴォルカニック・デビル』を近くの岩陰に寝かせると、己の剣を引き抜いて対面した。

『エアトス』は神秘的な片刃の細身の剣（レイピア）を。

『テイタニアル』は柄に椿の柄をあしらった日本刀を。

『バルキリオン』は磁力を帯びた短剣<sup>グラディウス</sup>を。

「余す事なく、全部吐いてもらいます」

「さてと、覚悟は良いかしら？」

「汝ら、神妙に致せ！」

それを見て水の長と龍も構えなおす。

「もののついでだ。貴様らも葬って風、木、地の里も攻め入ってくれろ！」

「俺様達に刃向った事を後悔して死ねえ！」

剣と水が交錯し、戦いの火花が散り始めた。

ヴォルカニック・デビル（効果モンスター）

星8

炎属性／炎族

ATK 3000 / DEF 1800

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する「ブレイズ・キャノン・トライデント」を墓  
地に送った場合に特殊召喚する事ができる。

相手ターンのバトルフェイズ中に相手フィールド上に攻撃表示モンスターが存在する場合、

相手プレイヤーはこのカードに攻撃をしなければならない。

このカードがモンスターを破壊し墓地へ送った時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊し、相手ライフに1体につき500ポイントダメージを与える。

超古深海王シーラカンス（効果モンスター）

星7

水属性／魚族

ATK 2800 / DEF 2200

手札を1枚捨てる。

1ターンに1度だけ、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚することができる。

このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃宣言をする事ができず、効果は無効化される。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが魔法・罠・効果モンスターの効果の

対象になった場合、自分フィールド上の魚族モンスター1体を生け贄に捧げる事でその効果を無効にし破壊する。

ウォーター・ドラゴン（効果モンスター）

星8

水属性／海竜族

ATK 2800 / DEF 2600

このカードは通常召喚できない。

「ボンディングH2O」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、炎属性と炎族モンスターの攻撃力は0になる。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「ハイドロゲドン」2体と「オキシゲドン」1体を特殊召喚する事ができる。

ガーディアン・エアトス（効果モンスター）



星8

風属性／天使族

ATK 2500 / DEF 2000

自分の墓地にモンスターカードが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードに装備された装備魔法カード1枚を墓地へ送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを3枚まで選択し、ゲームから除外する。

この効果でゲームから除外したモンスター1体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は500ポイントアップする。

椿姫ティタニアル（効果モンスター）

星8

風属性／植物族

ATK 2800 / DEF 2600

自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター1体をリリースして発動する。

フィールド上に存在するカードを対象にする魔法・罠・効果モンスターの発動を無効にし破壊する。

磁石の戦士マグネット・バルキリオン（効果モンスター）

星8

地属性／岩石族

ATK 3500 / DEF 3850

このカードは通常召喚できない。

自分の手札・フィールド上から、「磁石の戦士α」「磁石の戦士β」「磁石の戦士γ」をそれぞれ1体ずつリリースした場合に特殊召喚する事ができる。

また、自分フィールド上に存在するこのカードをリリースする事で、自分の墓地に存在する「磁石の戦士α」「磁石の戦士β」「磁石の戦士γ」をそれぞれ1体ずつ選択して特殊召喚する。





## SIDE : 黎

スラスターを最大限に吹かして、つまり全速力で前進しているのに、『シーラカンス』も『ウォーター・ドラゴン』も全く見えてこない。

「ちっ、これ以上はスピード出ねえぞ……」

無茶な加速は制御が利かなくなり、逆に到着を遅くしかねない。

と、少し距離のある火山の向こう側で大きな爆発があった。途端に周囲に水が飛び散り、赤い椿の花が飛んで来たり、突風が吹いたりした。

「わわ、わわわわっ！」

「フィオ、手え離すなよ！」

更にはバランスや方向の感覚もおかしい。どうやら磁力も発生しているみたいだ。

「れ、黎！ もしかしてあそこ……！」  
「言われずしても！」

何故花や風が飛んで来たのかは分からないが、少なくともあそこで戦いが起こっているのは確か。しかもかなりハッキリと邪神の気配がする。

一度空中で停止を掛けて方向転換すると、俺は一気にそちらへ向かって加速した。

—— 火山の麓

「これは……」

その状況はまさに惨劇と呼ぶに相応しかった。

岩陰では『ヴォルカニック・デビル』がグツタリした様子で横になっており、少々遠くには三本の剣が突き刺さった『超古深海王シーラカンス』が倒れている。

そして何故か炎の里にいないハズの属性、地属性の『マグネット・バルキリオン』、風属性の『ガーディアン・エアトス』と『椿姫ティタニアル』が血だらけで『ウォーター・ドラゴン』と対峙していた。

そして感覚に間違いは無かったようで、『シーラカンス』はもう残り香程度だが、『ウォーター・ドラゴン』からはハッキリと邪神の気配を感じた。

「「はあ……、はあ……、はあ……っ！」」

「ふん、長といっても所詮はこの程度か」

息も絶え絶えの三人に対し、『ウォーター・ドラゴン』には目立った傷（水の体なので見えないだけかも知れないが）は無い。

「おぷっ……っ！」

「大丈夫か？」

隣でファイオが口元を押さえる。無理も無えだろうな、あまりにも血の臭いが濃過ぎる。血腥ちなまぐさいなんて言葉では言い表しえない程だ。血の臭いに慣れた筈の俺だっこれはキツイ。しかも一人では無く複数人分の血だから余計タチが悪い。

「ファイオはここで待ってる。俺はあの惨状を止めに行く！」

「う、ぷっ！ ゴメン…………っ！」

近くの岩陰にファイオを隠すと、俺は『エアトス』達と『ウォーター・ドラゴン』の間に割り込んだ。

丁度水の塊を吐き出そうとしていたところで、『ウォーター・ドラゴン』は俺の姿を認めると水塊を飲み込んだ。

「そこまでにしてもらおうか？」

「ほう、騎士の魂か」

「……」

『ウオーター・ドラゴン』の問いに答える代わりに炎の力を体に纏う。これで返事になるはずだ。

「ククククク、まさかそちらからやって来るたあな。手間が省けたぞ！　ゴアアツ！」  
「知るか。何をしたのかはさて置き、キツチリ罪は清算してもらおう」

セリフの最後で吐き出された水をタングステン合金のシールドで受け流しながら宣言する。

「第一、最初から俺を狙っていたなら何故炎の里を狙った。あそこは関係無い筈だ」

「はっ！　知らねえのか、テメエ」

「あ？」

「あの宝玉の力つてのはなあ、それぞれの里をエネルギーの媒体にしてるんだよ。つまり、里を潰すと力の供給が止まり、宝玉の力が極端に弱くなる。」

そこを叩けば楽に殺せるだろ？　何か間違ってるか？」

ギリ……、と歯を軋ませる。邪神に取り憑かれると都みてえに性格が変わっちゃうみたいだな。いや、捻くれると言うべきか。

黙って俺は変身を解除して宝玉をカードに変えると、ガシャリ！　とディスクに差し込んだ。

「肉弾戦も吝かじゃあ無えが、ここはデュエルで決着をつけようじゃねえか」



「くかかか！ ここでのデュエルは肉体にもダメージが通るといふのか？ 良いだろう！」

『デュエル！』

黎VSウォーター・ドラゴン

LP 4000 VS LP 4000

俺がデッキからカードを5枚手札に加えたのに対し、『ウォーター・ドラゴン』は自分の前に浮いている半透明のカードを5枚揃えた。こいつは『水陸の帝王』みたいな紅蓮の悪魔のしもべタイプでは無く、『サイコ・シヨツカー』タイプか。

「俺様のターンだ！ 出でよ、『オキシゲドン』！」

『ビギャアアアアアアアッ！』

オキシゲドン：ATK 1800

半透明のカードが表側に引つ繰り返り、発せられた光から緑の大气の翼竜が現れる。

「見するとドラゴン族だが、実は恐竜族だ。」

さて、必要経費と割り切るか、別の手を探すか。

「更に取りバースカードを2枚セットし、ターンエンド！」

ウォーター・ドラゴン：ATK 4000

手札：3枚

フィールド

：オキシゲドン（ATK 1800）

：伏せカード2枚

「俺のターン！ 良し、ファイアスピリッツ『F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃表示で召喚！」

『先陣行くぞ！』

F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ：ATK 1900

（ここは必要経費として割り切る！）

「バトル！ 『ヴォルカニック・ギア・ガイ』で『オキシゲドン』を攻撃！ //

スピリン・ファ

「イア・キックッ！」

『てえいやあー!』

炎の廻脚が空気の翼竜に炸裂。いつも以上の大爆発を巻き起こした。

『オキシゲドン』は炎属性モンスターとの戦闘で敗れた時、お互いのプレイヤーに800ポイントのダメージを与える！」

「こっちも『ヴォルカニック・ギア・ガイ』の効果ダメージを受けてもらおう！」

まずは爆発。両者を巻き込む大爆発が襲いかかる。

「くっっ！」

「むっっ！」

オキシゲドン (アニメ効果)

星4

風属性 / 恐竜族

ATK 1800 / DEF 800

このカードが炎属性モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、お互いのライフに800ポイントダメージを与える。

黎&ウォーター・ドラゴン：LP 4000↓3200

『ヴォルカニック・ギア・ガイ』の効果で超過ダメージ100ポイントに『オキシゲド  
ン』の元々の攻撃力の半分の900ポイント分のダメージが加算される！」  
「ぬあああつー！」

ウォーター・ドラゴン：LP 3200↓2200

残念ながらジャスト1000なので更なる追加ダメージは無い。

F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）  
星4

炎属性／戦士族

ATK 1900／DEF 1200

（1）：このカードが戦闘を行い、ダメージ計算終了時までに相手に与えたダメージが1

000ポイント未満の時、相手プレイヤーは自分の手札1枚につき400ポイントのダメージを受ける。

(2) : このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した時、そのモンスターの表示形式によって以下の効果を得る。

● 攻撃表示 : 破壊した相手モンスターの元々の攻撃力の半分の数値分のダメージを与える。

● 守備表示 : 相手の守備力をこのカードの攻撃力が上回った分だけ相手プレイヤーにダメージを与える。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

黎 : LP 3200

手札 : 4枚

フィールド

: F・S ヴオルカニック・ギア・ガイ (ATK 1900)

: 伏せカード1枚

「俺様のターン、ドロロー！」

こいつのデッキは『オキシゲドン』を召喚した所を考えれば十中八九「ウォーター・ドラゴン」だ。『ハイドロゲドン』や『オキシゲドン』が分類される恐竜族を強化しても、『ウォーター・ドラゴン』は海竜族だから旨味は薄い。その逆もまた然りだ。

来い！ 今の俺に『ウォーター・ドラゴン』なんざ敵では無い！

「魔法カード『テラ・フォーミング』を発動し、サーチしたフィールド魔法『ウォーターワールド』を発動！」

しまった！ 水属性強化系の魔法カード！

「そして『ハイドロゲドン』を召喚！」

ウォーターワールド

【フィールド魔法】

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、守備力は400ポイントダウンする。

ハイドロゲドン（効果モンスター）

星4

水属性／恐竜族

ATK 1600 / DEF 1000

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから「ハイドロゲドン」1体を特殊召喚する事ができる。

ハイドロゲドン：ATK 1600 ↓ 2100 / DEF 1000 ↓ 600

「今度は俺様の番だ！ 『ハイドロゲドン』で『F・S ヴォルカニック・ギア・ガイ』を攻撃！ 『ハイドロ・バズーカ』!!」

「！ 通せば二体目が来る！ 罠カード発動、『くず鉄のかかし』！」  
バズウウウウン！ と金属製の案山子が水を弾き飛ばす。ギシギシ鳴りながらも大して堪えてはいないようだ。

「ならばリバースカードを1枚セットし、ターン終了！」

ウォーター・ドラゴン：LP 2200

手札：1枚

フィールド

：ハイドロゲドン（ATK 2100）

：伏せカード3枚、ウォーターワールド（フィールド魔法）

「俺のターン！」

「ピッ！」とカードを引き抜く。この世界のカードは紙ではあるが、特殊な材質も使っているらしく、多少荒事に使っても全く痛まない。

「魔法カード『種火』を発動。『ヴォルカニック・ギア・ガイ』をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロロー！」

引き当てたのは『融合』と『ミッド・ピース・ゴーレム』！

「相手の場にのみモンスターが存在する時、『バイス・ドラゴン』はリリース無しで手札から特殊召喚できる！ ただし、この時のその能力値は半分になる！ 攻撃表示で特殊召喚だ！」

『グオオオオオオッ！』

バイス・ドラゴン（効果モンスター）

星5

闇属性／ドラゴン族



ATK 2000 / DEF 2400

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

バイス・ドラゴン：ATK 2000 ↓ 1000 / DEF 2400 ↓ 1200

「更に魔法カード『融合』を発動。手札の『ビッグ・ピース・ゴーレム』と『ミッド・ピース・ゴーレム』、『スモール・ピース・ゴーレム』を融合！ 来い、『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』！」

『ヌウウウウアッ！』

ヴァラエティ・ピース・ゴーレム（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星8

地属性 / 岩石族

ATK 3000 / DEF 2300

「ビッグ・ピース・ゴーレム」+「ミッド・ピース・ゴーレム」+「スモール・ピース・

ゴーレム」

このカードは上記のカード以外で融合できない。

自分のターンの終了時、このカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地から融合素材となったモンスターをフィールド上に特殊召喚できる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

このカードは魔法・罠カードの効果では破壊されない。

ヴァラエティ・ピース・ゴーレム：ATK 3000

現れたのは『マルチ・ピース・ゴーレム』より更に一回り大きなゴーレム。4本の腕を持ち、頭頂部には短い角が生えている。

「行くぞ！ まずは『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』で『ハイドロゲドン』を攻撃！  
『オールサイズ・プレッシャー』!!」

「リバースカード、オープン！ 『聖なるバリアーミラーフォースー』！ これで貴様のモンスターは全滅だ！」

聖なるバリアーミラーフォースー

【通常罫】

相手モンスターに攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「無駄だ！ 『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』は魔法・罫カードでは破壊されない！」  
「だが『バイス・ドラゴン』は破壊させてもらおう！」

『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』が大きな腕を振りかぶって殴りかかると、白い障壁が現れその衝撃を流す。『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』には傷一つ付かないが、後方で待機していた『バイス・ドラゴン』は爆発し、やられてしまった。

済まない、『バイス・ドラゴン』。

「『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』の攻撃は通るぞ！」

「かあつ！ 『ガード・ブロック』を発動！ ダメージを無効にして1枚ドロウする！」

……おかしい。

あいつが使ったリバースカードは1番左とその隣のカード。その2枚は最初のターンに伏せられたものだ。

何故『ヴォルカニック・ギア・ガイ』の攻撃時に使わなかった？ そうすれば、ダメー

ジはもっと少なかったはずだ。こつちが大型モンスターを出すのを待っていたのか？  
「……ターンエンド」

黎：LP 3200

手札：0枚

フィールド

：ヴァラエティ・ピース・ゴレム（ATK：3000）

：伏せカード1枚（『くず鉄のかかし』）

兎に角、あのデッキの主戦力が『ウォーター・ドラゴン』だと仮定するなら、しばらくは問題無い筈だ。『ゲート・ガーディアン』ほどじゃ無いが、あれも呼び出すのに中々手間の掛かるモンスター。この状況で出て来るとは思えない。

「俺様のターン！ 魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロ―！」  
手札を増やした、来るか！

ククク、と『ウォーター・ドラゴン』が笑う。……不味いか？

「罨カード『戦線復帰』を発動！ 墓地の『オキシゲドン』を特殊召喚！」

『クオオオオオオッ！』

オキシゲドン : DEF 800

### 戦線復帰

#### 【通常畏】

(1) : 自分の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。  
そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

お、おいちよつと待て！ まさか、呼び出すのか!?

「更に二体目の『ハイドロゲドン』を召喚！ そして『死者蘇生』で最初の『ハイドロゲドン』を特殊召喚！ この状況が何を意味するのか、分かるよなあ、小僧？」

「アンタの手札にはもう『ボンディングーH20』がある、違うか？」

「その通りよ！ 『ボンディングーH20』、発動！ 俺様の場の『オキシゲドン』と2体の『ハイドロゲドン』を墓地に送り、『ウォーター・ドラゴン』、俺様自身を特殊召喚！」

ボンディングーH20

#### 【通常魔法】

自分フィールド上に存在する「ハイドロゲドン」2体と「オキシゲドン」1体を生け贄に捧げる。

自分の手札・デッキ・墓地から「ウォーター・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

ウォーター・ドラゴン：ATK 2800↓3300／DEF 2600↓2200

どうやらこの世界では自分と同じモンスターが召喚された時は自分自身が場に出るものらしく、『ウォーター・ドラゴン』もそうやって場に出て来た。

おいおいおいおい、マジで召喚してきやがった！

「行くぞ！ 俺様自身で『ヴァラエティ・ピース・ゴレム』を攻撃！ アクア・パニツシャー！！」

「く、『くず鉄のかかし』い！」

バツシャアアアアアアアアアアン！

金属製、否、最早それは金属装甲の案山子と言えるだろう。バリアを張った案山子が激流を弾き、俺を守る。ザアアアア、と水飛沫が雨と呼べる程の量と強さで降つて来た。

こんなの真面に喰らったらと思うと、背筋が寒くなるな。思わずあのプライド戦の

『深海の超水圧』で内臓も骨も破壊された事を回顧する。

「ターンエンドだ！」

ウォーター・ドラゴン：LP 2200

手札：0枚

フィールド

：ウォーター・ドラゴン（ATK 3300）

：ウォーターワールド（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロロー！」

マズいなあ。『ウォーター・ドラゴン』は全フィールド上の炎属性と炎族モンスターハイドロゲドンの攻撃力を0にする効果がある。しかも、戦闘破壊された時に墓地の元となった水素2オキシゲドン体と酸素1体を復活させる効果があり、壁には事欠かない。

そして『ボンディングH2O』は墓地の『ウォーター・ドラゴン』も対象にできる。つまり、『ウォーター・ドラゴン』は高い再生能力を持ったモンスターという訳だ。

しかもレベル8だから『トレードイン』にも活用できる。改めて考えると恐ろしいモンスターだ。

「俺は『ネクロ・ガードナー』を守備表示で召喚し、『ヴァラエティ・ピース・ゴーレム』の効果発動！ このカードをエクストラデッキに戻し、墓地の融合素材を特殊召喚する。これでターンエンド」

ネクロ・ガードナー：DEF 1300

ビッグ・ピース・ゴーレム：DEF 0

ミッド・ピース・ゴーレム：DEF 0

スモール・ピース・ゴーレム：DEF 0

ここは持ち堪えるしか無い。『ネクロ・ガードナー』が来てくれたのは幸いだった。これなら『くず鉄のかかし』と併用して、後6回まで攻撃に耐えられる。

黎：LP 3200

手札：0枚

フィールド

・ネクロ・ガードナー（DEF 1300）、ビッグ・ピース・ゴーレム（DEF 0）、

ミッド・ピース・ゴーレム（DEF 0）、スモール・ピース・ゴーレム（DEF 0）



：伏せカード1枚（『くず鉄のかかし』）

「俺様のターンだ！ 魔法カード『邪天使の施し』を発動！ このカードは互いのプレイヤーはカードを3枚ドロシー、相手だけが手札を2枚捨てる！」

「ハア!?! 何だそりゃ!?!」

邪天使の施し（オリジナル）

【通常魔法】

お互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドロシーする。

その後、相手プレイヤーは手札を2枚墓地に送る。

くそっ！ あれも邪神の作り出したオリジナルカードか……。

「更に速攻魔法『邪神の頭脳戦』を発動！ 貴様の場の裏側表示の魔法か罠カードを1枚、種類を選択して破壊し、正解なら相手に500ダメージ、不正解なら俺様のライフが500回復する！」

「またメリット尽くしのカード!?!」

邪神の頭脳戦（オリジナル）

【速攻魔法】

相手フィールド上の魔法・罨ゾーンに存在する裏側表示のカードを1枚選択する。

選択したカードが魔法カードか罨カードかを宣言し、当たった場合はそのカードを破壊して相手に500ポイントのダメージを与え、外れた場合は自分のライフポイントを500回復する。

「選択するのは罨カード、『くず鉄のかかし』だあ！」

しまった、『くず鉄のかかし』のメリットを完全に利用された!?

黒い雷が伏せカード『くず鉄のかかし』を焼き尽くし、別の雷が俺に当たった。

素早く絶縁体を体の表面に回して感電を防がなかったら命が危険だったかも知れない。

「ぐあああああああつ！」

黎：LP 3200↓2700

「れ、黎……！」

ようやく回復したフィオがヨタヨタと歩きながら俺の名を弱々しく呼ぶ。俺は痺れる手を何とか伸ばして彼女に制止をかける。

「だ、い、じょう、ぶだ！」

「で、でも……」

「そんな、フラフラの状態でも来られても困るよ。俺は、大丈夫だから、もう少し待っている……！」

まだ血の臭いは辺りに強く充満している。密閉空間じゃ無いどころか完全に開けたこの火山の麓で臭いが残っているのは、風が吹かないだけでは無く、地面に血が染み込んでしまっている事もあるのだろう。

「そして自分の場にレベル7以上の水属性モンスターが存在する事により、『イーヴィル・マリントルーパー』を特殊召喚！」

『デアアツ！』

イーヴィル・マリントルーパー：DEF 600

「効果発動！ このカードを生け贄に捧げる事で、生け贄に捧げた時のこのカードと同じ表示形式のモンスターを全てゲームから除外する！」

「ああ!？」

め、滅茶苦茶だ！ 守備モンスター全滅!?

イーヴィル・マリントルーパー（効果モンスター）（オリジナル）

星5

水属性／悪魔族

ATK 400／DEF 600

自分フィールド上にレベル7以上の水属性モンスターが存在する時、このカードは特殊召喚できる。

自分フィールド上のこのカードをリリースする事で、その時のこのカードと同じ表示形式の相手フィールド上のモンスターを全てゲームから除外する。

その後、お互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドローする。

真つ黒な海難救助隊員が消滅し、俺の場のモンスターが次元の歪みに捕まる。そのまま歪みに取り込まれ、こちらも消滅した。

クソツ！ これじゃ『ネクロ・ガードナー』の効果が使えない！

「そして、互いにカードを1枚ドローだ」

「くっ！」

！

「止めだ！ 俺様自身で直接攻撃！ アクア・パニツシャー！」

激流が放たれる。俺に向かって放たれたそれはもう柱とか壁とか、そんな次元のものでは無く、一種の巨大な生き物のように見えた。

「危ない、黎……ッ！」

辛うじて振り絞ってくれたフィオの声が聞こえなければ、圧巻されたまま馬鹿正直に喰らっていただろう。

心配してくれてありがとよ、フィオ！

「手札から『速攻のかかし』を墓地に送り、その攻撃を無効にする！」

登場するのは御馴染になって来た機械仕掛けの案山子。毎度毎度、お世話になります。

「『速攻のかかし』のモンスター効果で、バトルフェイズは強制終了される」

「ぬぬぬ、ならばメインフェイズ2に移るまでだ。俺様は墓地の『イーヴィル・マリントルーパー』をゲームから除外し、『邪神教徒の鏡』を召喚！」

次元に亀裂が走り、黒い海難救助隊員がその亀裂に飲み込まれたかと思うと、その亀裂は、ヒビの入った鏡だった。

黒く縁取られ、入ったヒビが不気味だ。禍々しい装飾が邪神を崇めるものだという事を宣言しているように見える。悪魔崇拝サタニズムとどちらがマシか、思わず考えてしまう。

邪神教徒の鏡：ATK ？

「こいつは墓地の攻撃力1000以下のモンスターを1体、ゲームから除外しなければ召喚できねえ。そしてこいつは除外したモンスターのレベル×1000の攻撃力と守備力を得る」

「レベル5を除外したって事は……」

「こいつの攻守は5000だ！」

ファイブゴッドドラゴン  
『F・G・D』クラスだと!?

邪神教徒の鏡：ATK ？↓5000 / DEF ？↓5000

邪神教徒の鏡（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性 / 機械族

ATK ? / DEF ?

このカードは墓地の攻撃力1000以下のモンスターを1体ゲームから除外しなければ召喚できない。

このカードの攻撃力と守備力はこの効果で除外したモンスターのレベル×1000となる。

壊れ過ぎだろう、邪神カード……。どうやれば良いんだっての！

「ターンエンド」

ウォーター・ドラゴン：LP 2200

手札：1枚

フィールド

：ウォーター・ドラゴン（ATK 3300）、邪神教徒の鏡（ATK 5000）

：ウォーターワールド（フィールド魔法）

「頑張つて、黎……」

「まだだ……。まだ終わっていない！俺のターン、ドロ！『天使の施し』を発動

！ デッキから3枚引いて2枚捨てる！」

なんて意気込んでみたものの、手札のカードじゃ太刀打ちできない。『巨大化』や『収縮』でもあれば『邪神教徒の鏡』だけでも無力化できるんだが……（元々の攻撃力に関係した効果を持ち、？も0として扱うので、パワーアップがりセットされる）。

賭けるか……。

「俺は『F・S スチーム・エクスペローダー』を守備表示で召喚」

『チツ、初陣が壁役かよ』

「俺様自身の効果で攻撃力は0になる」

「解っている」

F・S スチーム・エクスペローダー：ATK 1700↓0 / DEF 1300

「『スチーム・エクスペローダー』は自分の場にモンスターが存在しない時に召喚された時、手札を1枚デッキに戻し、デッキからカードを1枚ドロウできる」

『蒸気ナメんなや！』

ピイイイイイイッ！

背中に蒸気機関を背負った男は、汽笛を鳴らしながらその煙突から蒸気を大量に吹き



出し、カード1枚をその中から俺に授け、代わりに俺の手札がいつの間にか光に変わって消えていた。

「!」

良いカードだ。取り敢えず、急場は凌げそうだ。

「1枚カードを伏せて、ターンエンド」

黎：LP 2700

手札：0枚

フィールド

：F・S スチーム・エクスプローダー（DEF 1300）

：伏せカード1枚

さあ来い! 踏み込んで来た時が勝負だ!

「俺様のターン、ドロー!」

何のカードを引いた。それで勝敗を決する事ができる!

「行くぞ! まずは俺様自身で『スチーム・エクスプローダー』を攻撃!

”アクア・パ

ニッシャー!”」

「リバースカード、オープン！ 罨カード『火炎バリア』！」

ゴウツ！ と炎の壁が立ち塞がり、押し寄せる水が蒸発する。

「相手が炎属性以外のモンスターで攻撃し、俺の場の攻撃対象となったのが炎属性モンスターの時、このターンのみ俺の場の炎属性モンスターは破壊されない！」

「チツ！」

火炎バリア（オリジナル）

【通常罨】

自分の場の炎属性モンスターが攻撃の対象となった時に発動できる。

相手の攻撃を行うモンスターが炎属性以外の時、発動ターン自分の場の炎属性モンスターは破壊されない。

「ならば俺様は手札の『ニードル・ギルマン』を墓地に送り、『イーヴィル・デスタートル』を召喚！」

こいつは手札の水属性モンスターを墓地に送る事で、攻撃力を1500上げて召喚できてる！」

真つ黒な甲羅の紫のカメが地中から飛び出す。口には『ニードル・ギルマン』が咥え

られていて、完全に召喚しきるとバリバリと食われてしまった。  
うえ……。ちっちゃい子には見せらんねえな。

イーヴィル・デスタートル（効果モンスター）（オリジナル）

星3

水属性／魚族

ATK 1400 / DEF 300

このカードは手札の水属性モンスターを1体墓地に送らないと召喚できない。

この効果で召喚された時、このカードの攻撃力は1500ポイントアップする。

1ターンに1度、自分の場の水属性モンスター1体のレベル4だけデッキからカードをドロウできる。

イーヴィル・デスタートル：ATK 1400 ↓ 2900 ↓ 3400 / DEF 30

0 ↓ 0

「そして効果発動！ 1ターンに1度、場の1体の水属性モンスターのレベルマイナス4枚、デッキからカードをドロウ！ 選択するのは当然俺様だあ！」

ほんつとにデタラメな効果持ちのモンスターばかりだ！

『ウォーター・ドラゴン』のレベルは8、つまり4枚のドロ―！

ウォーター・ドラゴン：☆8

「クククク、更にこのカードは自分の場に闇属性モンスターと水属性モンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる！ 出でよ、『ダークシー・アルガー』―」

アルガー、海藻か！

成程確かに真つ黒な海藻でできた怪人だ。

ダークシー・アルガー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

水属性／植物族

ATK 1000／DEF 1200

自分の場に水属性モンスターと闇属性モンスターが存在する時、このカードは手札から特殊召喚できる。

このモンスターがフィールドに存在する限り、相手のライフは回復しない。

ダークシー・アルガー：ATK 1000 ↓ 1500 / DEF 1200 ↓ 800

「そして手札の『カオスホーン・ホエール』をゲームから除外して効果発動！ ライフを500払い、『ダークシー・アルガー』の攻守は4倍になる！」

「はあああああつ!?」 4倍って、デタラメにも程があるだろー！  
今更ながら、こんな怪物相手に戦っていた四人の長を尊敬する。

カオスホーン・ホエール（効果モンスター）（オリジナル）

星6

闇属性／魚族

ATK 0 / DEF 0

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードが守備表示になった時このカードを破壊し、コントローラーは800ポイントのダメージを受ける。

手札に存在するこのカードをゲームから除外し、ライフを500ポイント支払う。

自分フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスター1体の攻撃力・守備力は4

倍になる。

ダークシー・アルガー：ATK 1500 ↓ 6000 / DEF 800 ↓ 3200  
 ウォーター・ドラゴン：LP 2200 ↓ 1700

「リバースカードを2枚セットし、ターンエンドだ」

ウォーター・ドラゴン：LP 1700

手札：0枚

フィールド

・ウォーター・ドラゴン（ATK 3300）、邪神教徒の鏡（ATK 5000）、イー  
 ヴイル・デスタートル（ATK 3400）、ダークシー・アルガー（ATK 6000）  
 ・伏せカード2枚、ウォーターワールド（フィールド魔法）

「う、わ………！」

「どこの地獄絵図だよ………！」

相手モンスター全員が攻撃力3000オーバー。しかもその内2体は5000と6

000という普通に考えても殴り勝つ事が不可能な相手。

そして相手の場には伏せカードが2枚。こんなピンチなんて、元いた世界でもあり得るのだろうか……。

「でも……」

静かに視線を背後に移す。

片膝をついた『ガーディアン・エアトス』が、自分がボロボロなのにも関わらず『ヴォルカニック・デビル』の治療をしている。

その横で『椿姫ティータニアル』がファイオの背中を優しく擦っている。横で剣を構えて余波に備えているのは『マグネット・バルキリオン』だ。

全員、俺の事を見守っている。俺の勝利を信じている。

目を閉じる。瞼の裏には炎の里の皆が浮かび上がった。無事に撤退できただろうか。

それからアカデミアの皆の姿が。アニメのキャラクターとかそんなの関係無い。彼らはあそこで確実に生きている。二次元上の登場人物では無い。

そして、大切な友人のファイオと、最愛の義妹の都。

『黎！』

『お義兄ちゃん！』

『『頑張って！』』

………、ああ！

「俺は、諦めない」

皆が俺を信じていてくれるから！ 化物だけど、心があるから！

「ふん、気に食わねえな、その俺様に勝てる気であるその目はよお！」

「だったら、どうにかしてみな！」

デッキトップのカードに、全てが懸かっている。

【BGM：遊星のテーマ】

「俺の、ターン！」

！

「手札から魔法カード『物語の始まり』を発動！ 手札の残り枚数に応じて、このカードは効果が変化する！」

0枚なら場のカード1枚をデッキボトムに戻してカードを5枚ドロ。1枚から3枚なら墓地のカードをデッキに戻して、その枚数×100ライフを回復。4枚以上ならデッキから好きなカードを1枚手札に加える！」



物語の始まり（オリジナル）

【通常魔法】

このカードの効果はこのカード以外の手札の枚数によって、以下のように変わる。

●0枚：自分の場に存在するカード1枚をデッキの1番下に戻し、カードを5枚ドロースする。

●1枚以上3枚以下：自分の墓地のカードを任意の枚数デッキに戻し、戻した枚数1枚につきライフを100ポイント回復する。

●4枚以上：デッキからカードを1枚選択して手札に加える。

「今の俺の手札は0枚！これにより、『スチーム・エキスプローダー』をデッキボトムに戻してカードを5枚ドロース！」

引いたカードは、まさに逆転を導くためのカード達だった。

皆が俺を信じている。俺もデッキを信じている。それが、この結果を呼んだのか！

「俺は速攻魔法『ツインツイスター』を発動！1枚手札を捨て、魔法・罠カードを2枚破壊する！お前の伏せカード、2枚とも潰させて貰うぞ！」

「ん何っ!?!」

墓地に『灰流うらら』が呑み込まれると同時に、2枚のリバースカードが突風で吹き飛

ばされ砕け散る。

破壊されたのは『魔法の筒』と『奈落の落とし穴』か、危ない。

「だが俺様達の圧倒的攻撃力は健在、やられはせん！」

「手札から『F・S マグマドラゴン』を召喚し、効果でデッキからチューナーモンスター

『F・S グリル・ゴーレム』を特殊召喚！」

『ハアアアアアッ！』

『ゴオオオオオッ！』

F・S マグマドラゴン：ATK 1800↓0

F・S グリル・ゴーレム：ATK 1300↓0

「レベル4の『マグマドラゴン』にレベル3の『グリル・ゴーレム』をチューニング！  
燃え盛る焰、水面を斬り裂く剣とならん！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆4+☆3=☆7

「シンクロ召喚！ 灰燼に帰せ！ 『F・S バーニング・ブレードガイ』！」

『はあっ！』

F・S バーニング・ブレードガイ（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）  
星7

炎属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 1700

「F・S」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは相手の魔法・罠カードの効果を受けない。

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 2800 ↓ 0

「ムダだ！ 炎は俺様の前に無力と化す！」

「黎……！！」

「まあ安心して見てな！ 『グリル・ゴーレム』の効果で墓地の『F・S バーナーズ・キャノン』を手札に加える！ そして『スチーム・エクスペローダー』の効果で特殊召喚！」

F・S スチーム・エクスペローダー（効果モンスター）（オリジナル）（改訂）  
星4

炎属性／機械族

ATK 1700／DEF 1300

このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、この自分の場にカード以外にモンスターが存在しなければ、手札を1枚デッキに戻し、カードを1枚ドロウできる。

このカードが魔法カードの効果でフィールドを離れたターン、1度だけ手札の「F・S」モンスターを特殊召喚扱いとして召喚できる。

F・S バーナーズ・キャノン（効果モンスター）（オリジナル）

星4

炎属性／戦士族

ATK 1500／DEF 1200

1ターンに1度、相手フィールド上の魔法・罠カードを1枚破壊できる。この時、相手プレイヤーに300ポイントのダメージを与える。

F・S バーナーズ・キャノン：ATK 1500↓0

「効果発動！ このフィールド魔法を焼き払え！」

「何だ?!？」

『ウォーターワールド』がフィールドにカードとして姿を現し、それが砲塔から放たれる炎によって消える。同時に周囲に満たされた水は蜃気楼のように消え去っていく。

……水場を蒸発させる火炎地獄を期待したのは内緒だ。

ウォーター・ドラゴン：ATK 3300↓2800

ダーク・シー・アルガー：ATK 6000↓5500

「そしてお前に300ダメージを与える！」

「ぐうっ！」

ウォーター・ドラゴン：LP 1700↓1400

「更に魔法カード『火炎融合ーファイア・フュージョン』を発動！ デッキの『F・S 鬼火のウィスプ』と『F・S フレア・チアガール』を融合素材にし、『F・S ブレイジング・ナイト』を融合召喚！」

『てやあつ！』

火炎融合ーファイア・フュージョン（オリジナル）

【通常魔法】

「F・S」と名のついたモンスターを融合召喚する時のみ発動可能。

デッキから融合素材となるモンスターを選択して融合素材とする事ができる。

この時、手札またはフィールドのモンスターを融合素材の内の一体としない場合、融合召喚したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける。

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900↓0

「行くぞ、これで最後だ！ 魔法カード『ミラクルシンクロフュージョン』を発動！ 俺の場の『バーナーズ・キャノン』と『バーニング・ブレードガイ』、『ブレイジング・ナイト』を除外融合！」

「更に融合するだ?!？」

ミラクルシンクロフュージョン

【通常魔法】

自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

また、セツトされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、

自分はデッキからカードを1枚ドローする。

「出でよ、炎帝の巨人兵！ 『F・S

はえんきよけんし 覇炎巨剣士

ルージュ・グラン・サーブル』！」

『ウオオオオオオオオオオオオッ!』

次元が振じ曲がって『バーニング・ブレードガイ』と『バーナーズ・キャノン』、『ブ

レイジング・ナイト』が1つになる。そして爆炎が燃え盛り、その中から出て来たのは斬馬刀を携えた巨人。地縛神や三幻神ほどでは無いが、十分に大きい。

F・S 覇炎巨剣士 ルージュ・グラン・サーブル（融合・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星10

炎属性／戦士族

ATK 3200 / DEF 3000

「F・S」と名のついたレベル7以上のシンクロモンスター＋「F・S」と名のついたレベル7以上の融合モンスター＋炎属性・戦士族モンスター

（1）：このカードは融合召喚以外の方法で特殊召喚できない。

「ミラクルシンクロフュージョン」の効果でのみ融合召喚できる。

（2）：このカードは融合素材に使用したモンスターの種類に応じて、以下の効果を得る。

● フィールドのSモンスター：このカードは相手の対象を取らない効果を受けない。

● フィールドの融合モンスター：このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、破壊したモンスターの元々の攻撃力の半分だけ相手のLPを減らす。

● フィールドの通常召喚された炎属性・戦士族モンスター：このカードは効果では破

壊したモンスターの元々の攻撃力の半分だけ相手のLPを減らす。



壊されず、コントロールも変更されない。

「でけえ！」

「大きい……！」

F・S 覇炎巨剣士 ルージュ・グラン・サーブル：ATK 3200

「俺様の能力が通用してない!？」

「『ルージュ・グラン・サーブル』は対象を取らない効果を受けない！」

「くっ！」

「これで最後だ、バトル！ 『ウオーター・ドラゴン』に攻撃！」

//ダンセ・ド・ルージュ 赤色の剣舞踊//!

『テエヤアアアアアアアアアアアアッ!』

『ギイイイイイイイイイイイイアアアアアアアアアアアッ!』

赤色超えた赤色、最早橙や白とも見れるその爆炎を纏った剣で『ルージュ・グラン・サーブル』は『ウオーター・ドラゴン』を斬り裂く。水の体だというのに『ウオーター・ドラゴン』は激しく燃え上がり、悶え苦しんだ。

ウォーター・ドラゴン：LP 1400↓1000

「最後に『サーブル』の効果で『ウォーター・ドラゴン』の元々の攻撃力の半分、1400ポイントのダメージだ！」

『ルージュ・グラン・サーブル』が剣を一振りすると、火の玉が無数に放たれ、『ウォーター・ドラゴン』に追撃の炎を喰らわせた。

「ぐあああああああつ！」

ウォーター・ドラゴン：LP 1000↓0

黎：WIN

ウォーター・ドラゴン：LOSE

【BGM終了】

デュエルに勝利し、ソリッド・ヴィジョンがスウ——、と消えていく。



## STORY 20 : 桜色の女性

## SIDE : 黎

黒い何かを焼き払った後、なんとか体を起こした『シーラカンス』と『ウォーター・ド  
ラゴン』が深々と謝罪する。

「どうやら未熟な儂らが、とんでもない事を招いてしまったようさな」

「謝罪の言葉も無いツス！」

いや、そんな事言われても……。

「俺達に謝られても困る」

「そうですよ、謝罪するなら炎の里の方々にして下さい」

「と言うより彼らが謝る必要であるのかしら？」

「同感じゃよ。悪いのは邪神であってお主らでは無い」

「左様でござるな」

順に俺、『エアトス』、『テイタニアル』、『ヴォルカニック・デビル』、『バルキリオン』  
が言う。確かに指揮をしたのも、四人の長を攻撃したのもこの二人だ。だが、要するに

彼らは操られ利用されていたのだ。それをどうして咎められようか？

「しかし……」

「でも……」

まあ、加害者の心理としては何か償いをしたいだろうな。恐らくだが死人も出ているだろうから。

「まあ、そこまで言うのならば」

と『ヴォルカニック・デビル』が言い出した。

「里の復興を手伝ってくれんかのう？ メチャメチャにされて、こちらだけで人手が足りるかどうか……」

「喜んで手伝わして頂きます」

「お、オイラもツス！」

あーあー、心理につけこんじゃって……。それとも優しさかな？ つーか『ウオーター・ドラゴン』の喋り方って……。

それから彼らは今後をどうするか長同士で話し合いを始めた。

何もする事は無くなってしまったので、俺は離れた場所でフレイに背中をさすつてもらっているフイオに近付いた。気分も血と臭いが洗い流されて大分良くなったらしく、顔色も戻って来ている。

一応、デュエルが終わって『エアトス』が風で血の臭いを吹き飛ばしてくれている間に、自分で調合した薬（体内でやった事は秘密です）を渡しておいた。精神を安定させ、副作用も無いに近しい形にしたものだ。

作るのすんごい難しかった……………。

「大丈夫か、ファイオ？ 渡した薬、飲んだ？」

「うん、飲みやすかったよ。ありがとう」

「そっか、何よりだ。フレイもありがとな、お前がいなかったらファイオの命は危なかった」

「いえいえ、これがわたくしの役目ですから」

健気な良い子だ。主の為に戦う事を厭わないなんて。

ところで、とファイオが話を切り出す。

「黎はここに新しい力を貰いに来たんじゃないの？」

「あー！」

そうか、そうだった、忘れていた！ すっかり頭から抜け落ちてた！ デュエルに人命救助にリアルファイトと、色々とあつて当初の目的を危うく果たせずに人間界に帰るところだった！

「ありがとう、忘れてた」

「いえいえ、ノーサンキューだよ」

……、フィオ。『ノーサンキュー』は『お礼はいらぬ』的な意味じゃ無く、『それは結構です』『要りません』みたいな強い遠慮や拒絶の言葉だ。

「マジで？」

「マジだ」

ちよつと落ち込んだフィオをフレイに任せ、俺は再び五人の長の元へ行つた。

「ちよつと、すみません。良いですか？」

「おお、騎士殿。丁度こちらの話し合いも終わったところじゃ」

そりゃ何より。

「で、何か用かの？」

「先日、プライドという邪神の手先と戦つたんですが……」

【事情説明中】

「という訳なんです。炎のデツキをいくら改良しようとも限界がありますし、炎以外で戦えば邪神の力は祓えません。『フィツシャービースト』戦ではこちらが焼き払う方が速かつたですが、次も同じように行く保障は皆無です。」

「お願いします。あいつらに対抗する為にも、新しい力を授けてください！」

「ふーむ、と『ヴォルカニック・デビル』以外が考える。う、もしかして信用されてない？」

「私は良いと思いますよ？ タクティクスも十分ですし、嘘では無さそうです」

「そうねえ。何より、彼が間に入らなかつたらアタシ達、『ウォーター・ドラゴン』に殺されていただろうし」

「某は大丈夫だと思うでござるよ。この男は『デビル』殿の言っていた少年と見て間違いは無さそうでござるからな」

「是非も無い」

「ほつ。『エアトス』の言葉を始めとして『ティタニアル』と『バルキリオン』も俺を信頼してくれるらしい。どうやらお願いを聞いてくれるみたいだ。」

「私は彼に風の力を授けます。御三方はどうしますか？」

「手の間に集めた風を『ガーディアン・エアトス』が黄色の結晶にしながら言う。  
「オツケイよくん。アタシも木の力をあげちゃうよ。」

「何より中々良い男だし、と『ティタニアル』が付け加える。それ関係あるのか？」

「胸元から赤い椿の花を一輪取り出し、フツ、と息を吹きかけると、それは緑色の結晶に変わった。」



「某、恩義には報いるのが流儀。憑かれていた『ウォーター・ドラゴン』殿の止めから救って頂いた事の報いとなるなら、この地の力を」

『バルキリオン』はどこからか拳大の岩を手に取り、それは瞬時に茶色の結晶となる。意外と侍風だと思つたのは心の中だけの秘密だ。

「儂にも反対する理由は無いさね。この惨劇に終止符を打つてくれたおマイさんにならこの水の力を渡せるさな」

老練な姿と言葉で神妙に笑う『シーラカンス』。ポワツ、と口から吐き出した水泡は光を放つて青い結晶に変わった。

四つの力は俺の元に飛び、目の前で停止した。フヨフヨと空中で浮かんでいる。俺はそれを手に取り、声高々に宣言する。

「我が名、遊馬崎黎！ 今ここにこの身をもって、世界の平和を守り、巨悪を打ち倒す為に戦う事を誓う!!」

パアアアアアアア、と結晶は光を放つ。と、俺の体の中から炎の結晶も出て来て、まるで共鳴するかの様に光り始めた。美しい5色の光が辺りを照らし、輝きが収まると、俺を取り囲むかのように無数のカードが周囲に浮かんでいた。

あ、ちよつと前回と違う。

「こうやって、黎のカードが生まれたんだね。納得したよ。うんうん、とファイオがフレイに背中を擦られながら、俺の背後で納得していた。」

「それじゃあ、お世話様でした」

「また次の機会に！」

そう長たちに言い残してゲートをフィオと共に潜る。一瞬だけ眩い光に包まれ、次の瞬間には人間界に戻っていた。

「うし、戻って来た！」

念の為、ワープの圏外に置いておいたデジタル時計を見てみる。時刻は朝の六時。日付は翌日。

横で感慨深げにフィオが零した。

「はー、まさかあんな事に巻き込まれるとは思わなかったよ」

「ははは、しかも半日で解決。それに巻き込んで悪かったな」

ワープに巻き込んでしまい、しかも戦いに参加してもらった。これが俺のせいで無くて何なのだろうか。

「いや、いいよ別に。わたしが連れて行ってって言ったんだし」

それに新しい友達もできたし、と繋げる。

首を傾げる俺にフィオは、フレイの事、と短く言った。

「精霊が見えるなんて、この学校に何人いるかなあ？」

「さあね」

肩を竦めて答えをはぐらかす。実際、俺が知ってるのは今の時点で十代ぐらい。隼人はもう少し後だし、万丈目だっで見えるようになるのはノース校辺りだから今頃だけでも、まだ確認する術は無い。

「さて、寮まで送るよ。夜帰って来なかった理由なら俺に何か相談してる内にうつかり寝ちまったとでも言っとけ」

「ありがと。ゴメンね、色々と」

「構いやしないさ。友達だろ、俺達。……違ったか？」

そうだね、とフィオが笑う。俺も何となく、それにつられて笑った。

さて、今日は日曜日。早速新しいカードでデッキを作ってみよう！

——アカデミアの屋上・夕方

「でね、黎と一緒に精霊の世界に行っただ！ しかもパワーアップしたんだよ！」

「精霊ねえ。俄かには信じられないけど、嘘には聞こえないわね」

「精霊はいるぜ、なあ相棒？」

『クリクリ』

「ほら、相棒もそう言ってる」

「十代、そう言われても多分皆分らないぞ?」

昼からこの場を殆ど動かずやってきた一応の構築も終わって、残りはまた明日にでもしよう。俺はカードを一纏めにして腰にあるホルダーに差す。

「それは若しかしなくてもデートなのではありませんこと?」

「うわー、あたしフィオに先越されちゃったあ!」

アカデミアの屋上で、夕日を浴びながら軽く背筋を伸ばす。

パキパキ、と好い感じの音が背中から鳴った。

「デートって……、そんなんじや……!」

「顔赤いんだな、神山さん」

「リア充羨ましいツス……!」

そしてスタスタとフィオの背後に歩み寄り、そのやや小さめの頭を少し強めに力を込めて鷲掴みにした。

会話の輪に参加していた全員（十代、明日香、翔、隼人、大地、ジュンコ、ももえ）が顔を青くする。

「あつだだだだだだだつ!?!」

「な・に・べ・チャ・ク・チャ・喋ってやがる! 変な噂が流れたらどうするんだ! 俺

に“化物”と“シスコン”以外に“不純異性交遊”と“電波系”のレッテルまで張り・付・け・る・気・か!

「ご、ごめんなさい〜!」

そう、“化物”はまだしも、俺は何人かから“シスコン”なんて呼ばれている。一応否定はしないが(しないんだ…… byファイオ)、だったらお前ら異性の兄弟姉妹が困っていても手を差し伸べないのかって話だ。

まあ、今ペラペラ喋ってたこいつに悪気は無いみたいだし、このくらいで離してやる。頭蓋を粉碎しちまったら死んじまうだろうからな。

「ホントにごめんなさい……」

「ったく……。まあ、幸い皆以外、誰も聞いてないから良いけどさ」

「それはどうかな」

『!?!』

軽く睨んでから許してやると、すぐ近くで聞き慣れない声が出た。

「っ、そこ!」

素早く硬質化した髪の毛を一本引き抜いて、槍投げの要領で投擲する。明日香と十代の間をすり抜けて、声の主の方に向かう。

「うわっ!」

「きゃつ!」

「ッ、チ!」

カン! と音を立てて髪は地面に落ちた。叩き落とされたのか、防御されたのかは分からないけど、そこにいた人物に皆の視線が集まった。

「黎く、危ないだろ!?!」

「もつと別の方法無かったの!?!」

「あ、いや、悪かった」

前言撤回。十代と明日香は怒りで俺の方を向いてる。

声の主はローブで全身を覆っているが、声からすると恐らく女性。身長は160弱、既にその細めの手には細身の剣、レイピアが引き抜かれている。ローブの端から垂れている桜色の髪の毛が印象的だ。

「邪神の、手先か?」

「語る言葉が欲しいなら、私を倒してみせろ」

「、上等だ」

口の中から取り出す要領で刀を精製。同時に皆を庇う立ち位置に移る。左手を盾と一体化させ、相手の一挙一投足を見逃さないように集中する。

が、これが無駄だと知る。



「遅いー！」

ローブの女性は一瞬で十メートルはあった間合いを詰め、レイピアを突き込んで来たのだ。

「！」

何とか反応が間に合った。盾を使って刺突を受け止める。

そして彼女が距離を取ったのを見届け、盾を収納する。

「何の真似だ」

「お前相手に盾は通じないと踏んだ。あれば逆に俺の手を遅くする枷になりかねない」

盾はこいつ相手にはただの重しだ。プラスチック 刀も硬度をできるだけ落とさないようにしながら

軽量化する。

「はん、どこまで通じる？ 貴様とは戦いに赴いた経験の量が違うのだぞ？」

「場数だけが勝敗を決するワケじゃない」

ならば勝ってみろ。その言葉と同時に彼女は再び踏み込む。

最初に横薙ぎに振るわれたレイピアをしゃがんで避け、刀を突き上げる。これを彼女はレイピアを使って横に払う。そこから来た振り下ろしは左に半歩よけて回避。

互いの左ストレートの拳が交錯して軌道が逸れ合い、続いて刀とレイピアがぶつかって小さな火花が散った。一旦距離を取って、再び攻め込む。刃と刃がぶつかり合い、蹴

りと蹴りが攻撃と防御を同時に行う。

相手のハイキックを背中を反らして避け、左フックをお見舞いする。だが、それをローブ女はレイピアの腹で受け止め、股を蹴り上げて来た。

「つと危な!?!」

マジでヤバいトコ狙って来やがった!?!

『三沢くん、あれって当たったらそんなに痛いのか?』

『ああ、凄まじく痛い。そして凄まじく効く』

『あの痛みは、女の人には生涯分らないツス……』

『分かっちゃダメなような気がしますわ……』

『アレ女性でも凄い痛いんですよ』

『知りたくなかった精霊からの豆知識』

後ろで明日香やももえが何か言っているが、気にする余裕は無い!

「ふむ」

いきなり彼女はレイピアを腰の鞘に納めた。

「どういふつもりだ」

「何、このままでは決着もままならないと思ってな。こいつでカタを付けるのはどうだ?」

ローブ女はそのローブの内側から見覚えのある機械を取り出した。

「デュエルディスク……」

「そうだ。貴様らと同じ奴を態々調達して来た」

ガシャン！ と彼女は左腕にディスクをはめる。キュイイーン、と起動音がしているところを見ると、どうやらデュエルをやるのは本気のようだ。

「分かった。今のデッキは調整中だから、いつものこつちでやらせてもらう」

カードを空中に広げ、必要な精霊のカードを既存のカードと組み合わせてデッキを作る。こちらもディスクを展開し、デッキをセット。この間、僅か四秒足らず。

「行くぞー！」

「来いー！」

『デュエル！』

黎VS女性

LP 4000 VS LP 4000

「先攻行くぞー！ ドローー！」

俺は『引きガエル』を守備表示で召喚！  
『ゲコツ！』

引きガエル（効果モンスター）

星2

水属性／水族

ATK 1000／DEF 1000

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする事ができる。

引きガエル：DEF 1000

どこからどう見てもヒキガエルが現れる。こう表現するしか無いのだから仕方ない。「そして魔法カード『苦渋の選択』を発動！ デッキから「デッキから5枚のカードを選んで相手に1枚選ばせ、その1枚を手札に、残りを墓地に送る」説明は不要か」「さっさと来い。悠長にしてられる程、私はノンビリ屋じゃないんでね」

苦渋の選択

【通常魔法】

自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せる。

相手はその中から1枚を選択する。

相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードを墓地へ捨てる。

「俺はこのカード達を選択する」

『魔法の筒』

『大嵐』

『灼熱ゾンビ』

『ボルト・ヘッジホッグ』

『フェイク・ガードナー』

「私は『灼熱ゾンビ』を選ぶ」

「OK、残りは墓地行きだ」

ディスクの窪みの所にカードを置き、自動で4枚のカードが飲み込まれて行く。

灼熱ゾンビ（効果モンスター）

星4

炎属性／炎族

ATK 1600／DEF 400

このカードが墓地から特殊召喚した時、このカードのコントローラーはカードを1枚ドロローする。

「これでターンエンド」

黎：LP 4000

手札：5枚（内1枚は『灼熱ゾンビ』）

フィールド

：引きガエル（DEF 100）

：魔法・罫無し

「黎の奴、なんで『大嵐』や『魔法の筒』なんてカードを墓地に送らせたんだ？」

「私もそれが疑問なのよ。黎のタクティクスはそんな低いものじゃ無いはずなのに」

後ろで十代と明日香が首を傾げる。ふふ、墓地肥やしの言葉を知らないんだね。

「あの黎の行動「俺の行動は『墓地肥やし』と言って、墓地で効果を発揮したり、その方が都合なカードを墓地に送るんだ。」

『フェイク・ガードナー』や『ボルト・ヘッジホッグ』は墓地で効果を発揮するし、『灼熱ゾンビ』は墓地に行かないと効果を発揮しない。そしてそれを警戒して『大嵐』や『魔法の筒』を選んでも自分が不利になる。

このカードはこうやって欲しいカード5枚を選んだり、墓地に落とした方が都合が良  
いカードを選んで使うものなんだ」……」

あ。

「大地、ゴメン」

「いや、良いんだ。こっちも同じ説明をしようと思っていたから……」

シヨボーン、と大地が肩を落とす。本当にゴメン。

「茶番は済んだか？ 私のターンだ！」

おっと切り替えだ、切り替え。

彼女はどんなデッキでどんなカードを使って来るんだ？

「私は『フェニキシアン・シード』を召喚！」

フェニキシアン・シード：ATK 800

『フェニキシアン・シード』だと!？」

「攻撃力800? また随分と低い攻撃力ツスね」

「弱いモンスターには弱いモンスターで十分、という事かしら?」

「いや、あのモンスターは……!」

「そしてこのカードをリリースし、手札の『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を特殊召喚!」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス：ATK 2200

「リリース?」

「種が花になつたんだな!」

「なるほど、上級モンスターを誘発する効果か」

「皆が各々の感想を言っているが、それぞれころじや無い。こいつは今「リリース」って言った。何故? この時代はまだその呼び名は無かった筈だ。」

「上級モンスターの召喚だけでは無いぞ? このモンスターの力をもつと別にある!」

『クラスター・アマリリス』で『引きガエル』を攻撃! “フレイム・ペタル”!」



「くっ！」

高く飛び上がった『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』が炎を吐き出し、『引きガエル』が黒焦げになる。

『引きガエル』の効果で、デッキからカードを1枚ドローする！」

「こちらも攻撃を行った事で『クラスター・アマリリス』は破壊され、貴様に800ポイントのダメージを与える！　　”スキッター・フレイム”！」

「ぬあっ！」

更に自身を炎に変えてそれをばら撒く。

黎：LP 4000↓3200

「黎！」

「大丈夫だ、闇のゲームじゃないらしい」

周囲に焦げ跡も見つからないし、俺自身、炎に焼かれた感触は無い。

「良いカードだが、効率は悪いな。彼女のフィールドにモンスターが存在しなくなってしまう」

「それは違う。あのモンスターの真骨頂はこの後だ」

そう、それこそが不死鳥、フェニックスの名を冠する最たる理由。

「カードを1枚セット。そしてこのエンドフェイズ、墓地の『フェニキシアン・シード』をゲームから除外し、守備表示で『クラスター・アマリリス』は復活する！ ターンエンドだ」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス：DEF 0

「ええ!？」

「当然、ダメージ効果もあるぞ」

「なんて恐ろしいモンスター……。墓地のモンスターを除外して何度も蘇るなんて!」

女性：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：フェニキシアン・クラスター・アマリリス（DEF 0）

：伏せカード1枚

フェニキシアン・シード（効果モンスター）

星2

炎属性／植物族

ATK 800 / DEF 0

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送って発動する。

自分の手札から「フェニキシアン・クラスター・アマリリス」1体を特殊召喚する。

フェニキシアン・クラスター・アマリリス（効果モンスター）

星8

炎属性／植物族

ATK 2200 / DEF 0

このカードは「フェニキシアン・シード」またはこのカードの効果でしか特殊召喚できない。

このカードは攻撃した場合、ダメージ計算後に破壊される。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、8

00ポイントダメージを相手ライフに与える。

自分のエンドフェイズ時にこのカードが墓地に存在する場合、自分の墓地に存在する

植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から守備表示で特殊召喚する事ができる。

「黎……、大丈夫……?」

「ああ、今のところはな。俺のターン、ドロロー!」

さて、あの邪魔つけない彼岸花をどうやって片すかな。

あいつ相手に防戦をやったらず確認に負ける。800ポイントの効果ダメージはライフ4000のこの世界じゃキツ過ぎる。

ここはセオリー通りに除外かな。

「相手の場のみモンスターが存在する時、『レベル・ウォリアー』はレベル4のモンスターとして特殊召喚できる!」

『てやあ!』

レベル・ウォリアー（効果モンスター）

星3

光属性／戦士族

ATK 300 / DEF 600

フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはレベル2モンスターとして手札から召喚する事ができる。

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはレベル4モンスターとして手札から特殊召喚する事ができる。

レベル・ウオリアー：☆3↓4 / DEF 600

赤い星のマークのついたスーツを着たヒーローが出現。顔の部分についているマスクの星、その上（つまり頭の上）にもう一つ、一回り大きな星が現れた。

「チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！ その効果で『引きガエル』を、効果を無効にして守備表示で特殊召喚する」

『はっ！』

ジャンク・シンクロン（チューナー・効果モンスター）

星3

闇属性／戦士族

ATK 1300 / DEF 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

ジャンク・シンクロン：ATK 1300

引きガエル：DEF 100

眼鏡を掛けてエンジンに背負った戦士、それに続いて先刻のカエルが飛び出す。

「レベル4となった『レベル・ウォリアー』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

『ジャンク・シンクロン』が腹部のリコイルスターターを引く張ると、背中のバックパックのエンジンがかかる。そして3つの光となって空に消えると、3つの緑の輪になって戻って来た。

輪は一列に並び、その中を『レベル・ウォリアー』が通過。半透明になり、4つの星になる。

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！ 光差す道となれ！」

☆4 + ☆3 || ☆7

「シンクロ召喚！ 貫け、『ジャンク・アーチャー』！」  
『はあっ！』

ジャンク・アーチャー：ATK 2300

橙色の鎧に身を包んだ射手が光の中から現れる。隻眼に見えるが、もう片方の目は隠れているだけで、ちゃんとある。

「おー！」

「新しいシンクロモンスターですわ！」

『ジャンク・アーチャー』の効果発動！ 1ターンに1度、相手の場のモンスター1体をエンドフェイズまでゲームから除外する！ ヌデイメンジョン・シユート“！”

『ジャンク・アーチャー』が青白く光る矢を放ち、『クラスター・アマリリス』に当てると、その姿が歪んで消えて行った。

「巧い！ これならダメージ無しで戦える！」

ジャンク・アーチャー（シンクロ・効果モンスター）

星7

地属性／戦士族

ATK 2300 / DEF 2000

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動することができる。

選択したモンスターをゲームから除外する。

この効果で除外したモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に同じ表示形式で相手フィールド上に戻る。

「そして『ジャンク・アーチャー』で直接攻撃！　　＼スクラップ・アロー！」

よし、これで大ダメージが通る。「詰めはアマイな」何!?

「罠カード『レインボー・ライフ』を発動。手札1枚を墓地に送り、このターンに発生するダメージは全て回復になる」

「しまった!?!」



レインボー・ライフ

【通常罫】

手札を1枚捨てる。

このターンのエンドフェイズ時まで、自分が受けるダメージは無効になり、その数値分ライフポイントを回復する。

女性：LP 4000↓6300

「くっ、俺はリバーズカードをセットして、ターンエンド」

「このエンドフェイズ、『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』が戻る」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス：DEF 0

「クソッ！」

黎：LP 3200

手札：4枚（内1枚は『灼熱ゾンビ』）

フィールド

：ジャンク・アーチャー（ATK 2300）、ボルト・ヘッジホッグ（DEF 80）

：伏せカード1枚

「私のターンだ」

恐らく、あいつの『レインボー・ライフ』は回復じゃなく、コストの方が目的の可能性が高い。あれで植物族を捨てれば『クラスター・アマリス』の蘇生コストになる。

「魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを2枚ドロウ。続いて『フェニキシアン・クラスター・アマリス』を攻撃表示に変更」

フェニキシアン・クラスター・アマリス：DEF 0 ↓ ATK 2200

「そして『死者蘇生』を使い、『イービル・ソーン』を特殊召喚！」

「いつの間に!?!」

「普通に『レインボー・ライフ』のコストしか無いぞ!?!」

十代の驚きにつつまむ。お前そこまでバカじゃ無いだろう!?!

イービル・ソーン：ATK 100

『イービル・ソーン』は自身をリリースする事で、相手に300ダメージを与える。喰らえ、イービル・バースト！！」

イービル・ソーン（効果モンスター）

星1

闇属性／植物族

ATK 100／DEF 300

このカードをリリースして発動する。

相手ライフに300ポイントダメージを与え、自分のデッキから「イービル・ソーン」を2体まで表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した「イービル・ソーン」は効果を発動する事ができない。

「ぐっー！」

黎：LP 3200↓2900

「そして同名モンスターを可能な限り、デッキから攻撃表示で特殊召喚する」

イービル・ソーン：ATK 100

イービル・ソーン：ATK 100

「恐ろしいですわ……。ダメージに増殖なんて……」

「しかも、あれを墓地に送れば、またコストの元が増える」

「またリリースって言ったんだな」

驚愕のジュンコに説明係になっている大地。そして隼人、その事は俺も引っかけた  
いたんだ。

一体あいつは、何者なんだ……？

「私は2体の『イービル・ソーン』をリリースし、『クロロフィル・ジェネラル』をアド  
バンス召喚！」

アドバンス召喚まで!?

クロロフィル・ジェネラル：ATK 3000

「攻撃力3000……！」

果たして俺はこの強大な敵に、立ち向かえるのか……？

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 21 : 「認めさせてみる」

黎 : LP 2900

手札 : 4枚 (内1枚は『灼熱ゾンビ』)

ファイルド

: ジャンク・アーチャー (ATK 2300)、引きガエル (DEF 100)

: 伏せカード1枚

女性 : LP 6300

手札 : 2枚

ファイルド

: フェニキシアン・クラスター・アマリリス (ATK 2200)、クロロファイル・ジエ

ネラル (ATK 3000)

: 伏せカード1枚

## SIDE : 黎

「……………ッ」

結構ヤバい状況だぜ、こりや。『クラスター・アマリリス』の効果ダメージは1回につき800、初期ライフの1/5だ。後喰らえる回数は最大で3回。途中で500以上のダメージを受けたら回数が更に減る、つまりは負ける可能性が高くなる。

「覚悟は良いな? 『クロロファイル・ジエネラル』で『ジャンク・アーチャー』を攻撃!」  
 // 陽光斬月破 // !」

「ぬうあつ!」

黎 : LP 2900 ↓ 2200

緑色の重厚な鎧騎士が大剣を振るい、その斬撃の衝撃波で『ジャンク・アーチャー』が真つ二つにされる。

話した傍から700ダメージだぜ!

『クラスター・アマリリス』で『引きガエル』を攻撃! // フレーム・ペタル // !」

『ピヒョオオオオオオオオオオオッ!』

『ゲコオツ!?!』

「くっ!」

「そして破壊され、モンスター効果で800ダメージだ。//スキッター・フレイム//」

「づうううっ!」

黎：LP 2200↓1400

「だがここで『引きガエル』の効果発動! カードを1枚ドロ!」

「このエンドフェイズ、墓地の『イービル・ソーン』をゲームから除外し、『クラスター・アマリリス』を特殊召喚する」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス：DEF 0

また復活した……。あいつの墓地には『イービル・ソーン』が後2体眠っている。つまり後2回の復活が少なくとも可能だという事だ。



「そして『クロロフィル・ジエネラル』の効果発動！」

「な!?!」

「私の場に植物族モンスターが特殊召喚される度に相手の墓地のカードを3枚までゲムから除外し、相手に400ポイントのダメージを与える！」  
ゾーラー・レーザー”  
!”

『クロロフィル・ジエネラル』が右手の盾から黄金色の光線を墓地に向けて放つ。そのままその衝撃は俺を襲い、墓地のカード『引きガエル』、『ボルト・ヘッジホッグ』、『フェイク・ガードナー』を墓地から吐き出させた。

「ぐあああつ！」

黎：LP 1400↓1000

クソツッ！ 除外されたらこいつらは効果が使えない。除外ゾーンはディスクには無いので、空っぽのカードホルダーに収納する。

「ターン終了」

女性：LP 6300

手札：2枚

フィールド

：フェニキシアン・クラストー・アマリス（DEF 0）、クロロフィル・ジエネラル（ATK 3000）

：伏せカード1枚

「強い……、黎がここまで一方的に押されるなんて！」

「ああ、しかもどの行動にも無駄が無い。高いデュエルタクティクスを持っている」

「アニキ、黎くん勝つつすよね……？」

「当たり前だろ！ 黎を信じろよ！」

フィオと大地が彼女の實力に目を剥く。確かに、俺自身、同じデッキを回してあれと同じ事ができるかどうか……。

一方で翔の言葉に十代が答える。ありがとよ、十代。

「心強いぜ！ 俺のターン！ 『天使の施し』を発動！ デッキから3枚ドロし、その後2枚を捨てる！」

良し、これなら行ける！

『融合』を発動！ 出でよ、『ブレイジング・ナイト』！

『やるぜー！』

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900

「融合素材として送られた墓地の『バック・ドラフトマン』の効果発動！ 手札からこのカードが墓地に送られた時、手札にこのカードを戻す！

そして墓地の『ブースターマン』の効果も発動！ 墓地のカードを1枚デッキに戻す！ 俺が選択するのは『天使の施し』！

そして自分の場にレベル6以上の炎属性モンスターが存在するのならば、手札を1枚墓地に送って墓地から特殊召喚できる！ 俺は手札の『バック・ドラフトマン』を墓地へ送る！ 蘇れ、『ブースターマン』！」

F・S ブレイジング・ナイト：☆9

F・S ブースターマン：ATK 1500

「コストとして墓地に送った『バック・ドラフトマン』の効果でライフを500回復する」

黎：LP 1000↓1500

「そして『ブースターマン』は自分の場の炎属性モンスター1体にユニオンできる。『ブレイジング・ナイト』にユニオン！」

F・S ブースターマン（ユニオン・効果モンスター）（オリジナル）（改訂）

星3

炎属性／悪魔族

ATK 1500／DEF 1300

このカードの（1）の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：自分の場にレベル6以上の炎属性モンスターが存在する場合、手札を1枚墓地に送る事でこのカードを墓地から特殊召喚できる。

（2）：このカードが破壊以外の方法で墓地に送られた場合に発動できる。

自分の墓地のカード1枚を選択してデッキに戻す。

（3）：1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の炎属性モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力・守備力は600ポイントアップし、1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。)

F・S ブレイジング・ナイト：ATK 2900↓3500 / DEF 2700↓  
3300

「これで攻撃力はこつちが上だ！ 『ブレイジング・ナイト』で『クロロフィル・ジエネラル』を攻撃！ 『空破炎撃斬』!!」

『我が炎の剣を受けてみよ！』

銀の鎧に身を包んだ騎士が炎を纏った剣で、緑の鎧騎士に斬りかかる。そのまま真っ二つになって、破壊——、

「破壊されてない!?!」

緑の甲冑の騎士は肩当てに当たった剣を鬱陶しそうに払うと、蹴りを『ブレイジング・ナイト』の腹部に叩き込んで後退させた。

「破壊耐性か……………」

モンスターの中には戦闘破壊に対して何かしらの効果を持つている奴がいる。それは絶対的に破壊されなかったり、ボードライン以上または以下の攻撃力相手に破壊されなかったり、1ターン内に破壊されない数が決まっていたりと、バラバラだ。

『クロロフィル・ジエネラル』は私の場にこいつ以外の植物族モンスターがいれば、破壊されず、ダメージも発生しない」

「そんな、戦闘ダメージまで防ぐなんて!？」

「成程、あのモンスターは黎の使う『鬼火のウイisp』の亜種という訳か」

……、メンドい相手だな。

クロロフィル・ジエネラル（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星8

光属性／植物族

ATK 3000 / DEF 2400

（1）：このカードが場に存在する時、自分の場に植物族モンスターが特殊召喚される度に相手の墓地からカードを3枚ゲームから除外し、400ポイントのダメージを与える。

既に同じレベルの植物族モンスターがこのターンに特殊召喚されている場合、この効

果は適用できない。

(2) : 自分の場にこのカード以外の植物族モンスターが表側表示で存在する限り、このカードは戦闘では破壊されず、発生するダメージも0になる。

(3) : このカードがゲームから除外された時、デッキからカードを3枚墓地に送る事で、エンドフェイズ時にこのカードを特殊召喚できる。

「俺はリバースカードを2枚セットして、ターンエンド」

黎 : LP 1500

手札 : 1枚

フィールド

: F・S ブレイジング・ナイト (ATK 3500)

: 伏せカード3枚、F・S ブースターマン (ユニオンモンスター・『F・S ブレイ

ジング・ナイト』に装備)

「私のターンだ」

このターン、『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』の攻撃で800、更に『ク

ロロファイル・ジエネラル』の効果で400、合計して1200のダメージが通る。ライフは何とか残るが……。

片方の伏せカードは残念ながらブラフ。モンスターを蘇生して攻撃を止める役割はあるが、それ以上に相手に強力なモンスタートークンを渡してしまうという欠点がある。墓地にいる該当モンスターは、渡してしまうトークンより攻守が低いので現段階では逆にデメリットカードだ。

もう片方はバトルフェイズにしか使えない、戦闘補助のカードだ。

「私は『バトルトリマー』を召喚」

『キュイツキュキューツ！』

バトルトリマー：DEF 2200

緑の髪の毛が飛び出す。枝切り用の長いハサミを両手に一本ずつ持っている。どうやって切るつもりなのだろうか。

大丈夫、落ち着け。あのモンスターが相手じゃこの防壁は突破されない。『クラスター・アマリリス』と『クロロファイル・ジエネラル』の効果ダメージが発生するだけだ。が、嫌な予感はある。この局面で能力の無いモンスターを出すとは考え辛い。あいつ



にも何かがあると見るべき、か？

「バトル！」

「この瞬間罨カード『ダメージ・ダイエツト』を発動！ このターン中に受ける全ダメージを半分にする！」

ダメージ・ダイエツト

【通常罨】

このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。

また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、

そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる。

「構うものか、『クラストター・アマリリス』で『ブレイジング・ナイト』を攻撃！」

「返り討ちにしろ、『ブレイジング・ナイト』！」

「『ブレイム・ペタル』！」「『空破炎撃斬』！」

吐き出された炎を掻い潜って炎を纏った剣で燃える彼岸花を斬り裂く。途端に火の粉が周囲に飛び散った。

女性：LP 6300↓5000

「効果ダメージだ。スキャッター・フレイルム！」

「『ダメージ・ダイエット』でダメージは半減する！ うあつ！」

黎：LP 1500↓1100

来る。『バトルトリマー』の効果を含んだつたら、ここかエンドフェイズだ！

「そして『バトルトリマー』の効果を発動。私の植物族モンスターが相手を戦闘破壊できなかった場合、その相手モンスターを破壊する」

げげ!?

バトルトリマー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／植物族

ATK 1500／DEF 2200

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分の場の植物族モンス

ターが相手モンスターを戦闘によって破壊できなかった時、攻撃対象となった相手モンスターを破壊する。

「ユニオンモンスターを破壊する事で、『ブレイジング・ナイト』の破壊を回避する！」  
「だが、攻撃力は下がるぞ」

F・S    ブレイジング・ナイト：ATK    3500↓2900 / DEF    3300↓  
2700

「これで攻撃が通るな。『クロロフィル・ジェネラル』で攻撃！」  
「『ぐあああああつ！』」

黎：LP    1100↓1050

「このエンドフェイズに『イービル・ソーン』を除外して『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を復活させる。そして『クロロフィル・ジェネラル』の効果で400ダメージ  
ジだ！」

「うっ！」

墓地から『大嵐』、『F・S ブレイジング・ナイト』、『ダメージ・ダイエツト』が除外される。チツ、墓地から除外できる効果も把握済みか……！

フェニキシアン・クラスター・アマリス：DEF 0

黎：LP 1050↓850

「ターン終了。次のターンが、お前の最後になるな」

女性：LP 5000

手札：2枚

フィールド

：フェニキシアン・クラスター・アマリス(DEF 0)、クロロフィル・ジエネラル(ATK 3000)、バトルトリマー(DEF 2200)

：伏せカード1枚

「は、あ……。は、あ……。っ！」

超マズい。手札のカードじゃ逆転はできない。

「黎くん……」

「黎……」

後ろではフィオオや十代を始めとした8人の仲間達が俺を見守ってくれている。

無様な姿は晒せないと分かっているが、状況は絶望的。

「(ハハ)まで、か……」

「諦めるのか」

その言葉を放ったのは、誰でもないローブ女自身だった。

「貴様はこの程度で膝を折り、敗北を認める男か」

「……………」

「何の為に貴様は戦う。何の為に貴様は我らの力を手にした！ そのような腑抜けた輩

に、我らは力を貸し与えるつもりは毛頭無い！」

そのままバツ、と彼女はローブを脱ぐ。

その下から出て来たのは桜色の長髪をポニーテールで束ね、騎士装束に身を固めた、美女と形容すべき女性。幼いとも大人ともとれる、どこか神秘的な女性だ。

そして、彼女の姿は、つい一時間あまり前に見たばかりだった。

「！」

「分かるか？ 戦う為だけに生み出された我らの心が！ 貴様に全てを委ねなくてはならないという思いが！ 自分では満足に戦えないというこの屈辱が！ 貴様が本当に我らの主に相応しい男か否か確かめに出て来たというのに、そのザマでは力を持つ資格も、扱う資格も無いぞ！

この私に、私達に、貴様の實力を認めさせてみる！」

『チエリー』……………」

パン！ と頬を両手で挟むようにぶっ叩く。

「悪い、ちつとネガになってた。こっから真剣に、死ぬ気で行くぞ！」

「来い、騎士よ！」

「黎、頑張れ！」

「キバれえ！」

「負けるなよ、黎！」

「おうよ！ 俺のターン、ドロー！ 魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードドロー！

そして『壺の中の魔術書』を発動！ 互いに3枚引く！」

相手にも3枚引かせてしまうが、この際それは目を瞑ろう。今はドローに賭けるのみ

！

……よっしゃ、来てくれたか！

「俺は『ツイン・ブレイカー』を召喚！」  
『でやっ！』

ツイン・ブレイカー：ATK 1600

「『ツイン・ブレイカー』は貫通効果に加え、守備モンスターが残っていれば二回目の攻撃を可能とする！『ツイン・ブレイカー』で攻撃！  
//ダブル・アサルト//!!」

「ダメだ！『アマリリス』に攻撃したら……！」

「自滅か？それともその攻撃に何か意味があるのか？」

「マゲのような髪、三枚刃のブレードを両腕に装着した男が左右同時に剣を振り下ろす。」

過たず振り下ろされたその剣は、剪定鋏に受け止められた。

「え?」

「『バトルトリマー』を対象にしただど!」

「俺は1度でも『アマリリス』を対象にするとはいってないぞ?」

「だが、攻撃力より守備力が高いぜ!」

十代、お前の言う事は正しい。実際、今攻撃は弾かれて『ツイン・ブレイカー』は定位置に戻って来た。



ツイン・ブレイカー：ATK 1600

バトルトリマー：DEF 1600

黎：LP 850↓250

そう、一見すれば無意味な攻撃。

だが、これが戦略に必要だったら？

そう言つて、手札のカードを1枚抜く。

「このカードは、自分の場の戦士族モンスターがバトルで相手モンスターを破壊できなかった時、手札から特殊召喚できる！ 行くぜ、『ソード・マスター』！」

『たあっ！』

ソード・マスター：ATK 1200

「『ツイン・ブレイカー』よりも攻撃力が低いッス！」

「何のつもりだ……！」

「慌てんなよ。ここでリバースカードオープンだ！ 罠カード『緊急同調』！ バトルフェイズ中にシンクロ召喚を行える！」

「おおー！」

「なるほど、これの為に……！」

ツイン・ブレイカー（効果モンスター）

星4

闇属性／戦士族

ATK 1600／DEF 1000

このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、もう1度だけ続けて攻撃する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ソード・マスター（チューナー・効果モンスター）

星3

地属性／戦士族

ATK 1200／DEF 0

自分フィールド上に存在する戦士族モンスターの攻撃によって相手モンスターが破壊されなかったダメージステップ終了時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

また、このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

### 緊急同調

#### 【通常罫】

このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。

シンクロモンスター1体をシンクロ召喚する。

「レベル4の『ツイン・ブレイカー』に、レベル3の『ソード・マスター』をチューニング！」

アラビアの双剣士のような『ソード・マスター』が3つの光の星になって空へと舞い、それはグルリと円を描いて緑の輪になる。『ツイン・ブレイカー』がその中を通り、輪郭線と4つの光の星に変わった。

「正義と忠義、二つの刃は誠の剣！ 来たれ万事に引かざる新たな刃！ 希望が溢れる

明日となれ！」

☆4＋☆3＝☆7

「シンクロ召喚！ 我に仕えよ、『不退の荒武者』！」  
『ヌエエイツ！』

不退の荒武者：ATK 2400

「おおおおおおつ！ なんかカツケエ！」

「ちよつと怖いわね、アレ」

「一体彼は何枚シンクロモンスターを持っているんだ……？」

ボサボサの銀の長髪。口元を覆う藍色の布。傷だらけの鎧に長さも形も違う二本の  
剣。

その血走った目から伺える気迫は歴戦の猛者のものだ。

「バトルだ！ 行け、『不退の荒武者』！ 『バトルトリマー』を攻撃！ 斬り捨て御免

“！”

斬斬！

2連続でくすんだ光を放つ剣が振るわれ、剪定士を斬り裂く。

「カードを2枚伏せて、『命削りの宝札』を発動！ ハンドレスからカードを5枚ドロ  
だ！ ターンエンド！」

黎：LP 250

手札：5枚

フィールド

：不退の荒武者（ATK 2400）

：伏せカード3枚

心に、熱いものが流れこんで来る。

情熱。喜び。希望。

どれもこれも転生前には感じなかった。

化物は、幸せを貰っちゃいけないんだと思っていた。

絶対に「人間」を守れないと思っていた。

何をやってても蔑まれ、排除されるだけだと思っていた。

はは。世界が狭かったのは、自分で区切っていたからか。

「行くぞ、私のターン！」

「来い、『チェリー』！」

「私は『オーバー・ブロッサム・デーモン』を召喚！ このカードは私の場に植物族モンスターが2体以上いる時、手札からリリース無しで通常召喚できる！」

こいつの正体が本当に『チェリー』であるなら、「リリース」や「アドバンス召喚」の事を知っているのも頷ける。この大樹が悪魔のようになった、半上級モンスターも、な。

オーバー・ブロッサム・デーモン：ATK 2200

「そして『オーバー・ブロッサム・デーモン』は1ターンに1度、次の私のスタンバイフェイズまで攻撃力を600ポイント上げる！」

オーバー・ブロッサム・デーモン：ATK 2200↓2800

「おいおい、『アマリス』の効果で十分潰せるつての。そこまでやるか？」

「念には念だ。貴様の場の3枚のリバースカード」

ぬつ、と『チェリー』が指を差す。1枚はブラフだが、残る2枚は本物の罠だ。

「その内1枚は少なくともバトルに関して旨味のある効果とは思えん。だが、残る2枚はまだ確信が持てぬ。故に、保険をかけた。

『オーバー・ブロッサム・デーモン』は植物族モンスターが相手の魔法・罠の効果で破壊された時、そのモンスターを墓地から蘇生する効果がある。無策で罠に突っ込むのは、戦士の行いではあるまい？」

「正解。古い1枚はブラフ。バトルでは何の得にもならない」

「ふふふ。私の勘も捨てたものでは無いな。さあバトルだ！ 『アマリリス』で『不退の荒武者』を攻撃！」

「悪いが、もう通す訳にはいかねえな！ 罠カード『次元幽閉』を発動！ 攻撃を行って来たモンスター、『アマリリス』を除外する！」

### 次元幽閉

#### 【通常罠】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

オーバー・ブロッサム・デーモン（効果モンスター）（オリジナル）  
星5

闇属性／植物族

ATK 2200 / DEF 400

自分の場に2体以上植物族モンスターが存在する時、このカードはリリース無しで召喚できる。

自分の場に植物族モンスターが存在する時、1ターンに1度、このカードの攻撃力を次の自分のスタンバイフェイズ時まで600ポイントアップできる。

この効果は自分のターンのメインフェイズ時にしか使えない。

自分の場の植物族モンスターが相手の魔法・罫カードの効果で破壊された時、墓地からそのモンスターを自分の場に特殊召喚できる。

空間が突如として歪み、『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』は光と共に消えてしまった。

「上手いぞ！ 除外には『オーバー・ブロッサム・デーモン』の効果は対応していない！」  
「そういうこった。どうする、まだやるか？」

「ククツ、楽しくなってきた。ここは臆さず攻めるのみ！ 『オーバー・ブロッサム・デー」



モン』で攻撃！　『ブランチ・ハンマー』！」

「これが通つたら黎くんの方はガラ空キツス！」

「と言うか残りライフ250じゃ超過ダメージで負けるわよ！」

はは。心配無用だぜ、翔、ジユンコ！

『『不退の荒武者』の効果発動！　『不退の覚悟』！　アード、『ガード・ブロック』発

動！　ダメージをゼロにしてカードを1枚ドロロー！」

ブウン！　と振り下ろされた巨木の腕。それを荒武者は双剣をクロスして受け止め

ると、逆にザツクリと本体ごと斬り捨てた。

「なっ！」

『『不退の荒武者』は攻撃力が自分よりも高い相手とバトルを行った場合、ダメージ計算後に相手モンスターを破壊する！』

不退の荒武者（シンクロ・効果モンスター）

星7

地属性／戦士族

ATK 2400 / DEF 2100

戦士族チューナー＋チューナー以外の戦士族モンスター1体以上

このカードの攻撃力よりも高い攻撃力を持つモンスターから攻撃を受けた場合、このカードはその戦闘では破壊されず、戦闘を行った相手モンスターをダメージ計算後に破壊する。

『帝』や『サイコ・シヨツカー』みたいな同じ攻撃力のカードには太刀打ちできないという欠点があるが、『騎士道精神』を使えばその弱点を克服できる。『スピリット・バリア』を加えた日には、まず戦闘では安心と言える。

ただし、自爆特攻は普通にやられてしまうので、攻撃を躊躇させる抑止力にしたり、『バトルマニア』や『立ちほだかる強敵』とセットで使うべし。

「追撃は不可能か」

ふう、と『チェリー』が溜め息を吐く。そして1枚のカードを魔法・罠ゾーンにセットした。

いや、違う。あれは発動だ！

「魔法カード『夜桜酒宴』を発動！ このカードは自分の場の植物族モンスターと魔法・罠カードを1枚ずつゲームから除外し、それ以下のレベルの相手モンスターを全て破壊する！」

『クロロファイル・ジェネラル』が空間の歪みの中に消え去り、桜吹雪が突風という形で

襲いかかった。『不退の荒武者』を吹き飛ばし、俺の場には手札にいたはずの『憑依するブラッド・ソウル』が、相手の場には『ギガント・セファロタス』がいた。

「？」

『夜桜酒宴』で相手モンスターを破壊した時、互いのプレイヤーは手札の守備力1500未満のモンスターを1体特殊召喚しなければならない。貴様の手札にはそいつ以外いなかったのだろう」

憑依するブラッド・ソウル：DEF 800

ギガント・セファロタス：DEF 700

夜桜酒宴（オリジナル）（改訂版）

【通常魔法】

（1）：自分の場に存在する植物族モンスターと魔法・罠カードを1枚ずつゲームから除外して発動する。

相手フィールド上に存在する、除外したモンスター以下のレベルのモンスターを全て破壊する。

その後、お互いのプレイヤーは手札に存在する守備力1500未満のモンスターを1

体特殊召喚できる。

(2)：墓地のこのカードを除外して発動できる。

ゲームから除外されている自分の植物族モンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターはこのターン効果を発動できない。

「エンドフェイズ時、私はデツキからカードを3枚墓地に送って、除外された『クロロファイル・ジエネラル』を特殊召喚！」

チツ！ やっぱ蘇生系の効果があったか！

あいつを除外するとは、何かあったと思っただがな！

しかもこの効果は『アマリリス』のコストにも合う。『神秘の中華なべ』なんかで墓地に送ってもいいし、何かリリースしなくてはいけないものに対して墓地に送って、それで除外。再び復活というサイクルを繰り返す事ができる……！

クロロファイル・ジエネラル：ATK 3000

「ターンエンドだ！」

チェリー：LP 5000

手札：3枚

フィールド

：クロコファイル・ジェネラル（ATK 3000）、ギガント・セファロタス（ATK 1850）

：魔法・罠カード無し

手札のカードなら「状況を引つ繰り返す」事はできる。だが、それは「勝利できる」事では無い。俺が状況を引つ繰り返せるように、もしかしたら次の相手ターンにもう1度引つ繰り返るかも知れない。

なら、このドロローだ。もう既にデッキの枚数は半分以下。望んだカードが来る確率は良くて半々。

来い……。お前らにも、あいつの叫びが伝わったのなら、力あ貸してくれよ！

「俺のターン、ドロロー！ 『天使の施し』を再び発動！」

「先刻、デッキに戻したカードが巡って来たか」

来るか……!?!?



………来た！　ありがとう、皆。

『F・S　マグマドラゴン』を召喚！』

『ガアオオ！』

「そしてその効果で『F・S　グリル・ゴーレム』を特殊召喚！』

『トオツ！』

F・S マグマドラゴン：ATK 1800

F・S グリル・ゴーレム：ATK 1300

「『バーニング・ブレードガイ』が召喚できるツス！」

「でも、それじゃ彼女のモンスターには対抗できないよ！」

翔の言葉にフィオが否定する。ふふ……。

「誰が『ブレードガイ』を出すって言った？」

「え、でも……」

「別にこいつらは『F・S』以外のシンクロ素材にできない訳じゃ無いんだぜ？」

「「?!」」

「俺はレベル4の『F・S マグマドラゴン』にレベル3の『F・S グリル・ゴーレム』をチューニング！」

王者の叫びが木霊する！ 勝利の鉄槌よ、大地を碎け！」

☆4＋☆3＝☆7



「シンクロ召喚！ 羽ばたけ、『エクスプロード・ウイング・ドラゴン』！」  
『ギョオオオオオオオオオオオッ！』

エクスプロード・ウイング・ドラゴン：ATK 2400

雄叫びと共に群青色の龍が飛び立つ。背中に大きな瘤があるのが目を引く。

そう、炎の精霊で呼び出せるのは、炎のシンクロモンスターだけでは無い！

「成程、『F・S』以外のモンスターも呼び出せるのか」

「こいつはこいつでカッコいいな！」

「更に罨カードオープン！ 『リバイバル・ギフト』！ 自分の墓地からチューナー1体を効果を無効にして特殊召喚する！ 俺が呼び戻すのは『ブースターマン』のコストにしたコイツだ！ 蘇れ、『ダーク・スプロケッター』！」

墓地の光と共に自転車のスプロケット（ギアチェンジのあれ）に目玉のついた黒いモンスターが飛び出て来る。『手札断殺』で墓地に送ったのは正解だった。

ダーク・スプロケッター：ATK 100

「そして相手の場に『ギフト・デモン・トークン』を2体特殊召喚する」

ギフト・デモン・トークン：ATK 1500

ギフト・デモン・トークン：ATK 1500

リバイバル・ギフト

【通常罫】

自分の墓地に存在するチューナー1体を選択し特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

相手フィールド上に「ギフト・デモン・トークン」（悪魔族・闇・星3・攻／守1500）

0）2体を特殊召喚する。

「ちよつと、モンスターを相手に渡すなんて何考えてるのさ！」

「大丈夫だ！ 『憑依するブラッド・ソウル』の効果発動！ こいつをリリースする事で、

相手の場のレベル3以下のモンスターのコントロールを奪う事ができる！」

憑依するブラッド・ソウル（効果モンスター）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 1200 / DEF 800

このカードをリリースして発動する。

相手フィールド上に表側表示で存在する全てのレベル3以下のモンスターのコントロールを得る。

「よっしゃ！ これでトークンは頂きだ！」

「ほお、デメリットを逆に利用してきたか……」

「レベル3の『ギフト・デモン・トークン』2体に、レベル1の悪魔族『ダーク・スプロケッター』をチューニング！」

『ダーク・スプロケッター』が体に巻きついたチェーンを伸ばして『デモン・ギフト・トークン』を捕まえると、空中に投げつけた。そのまま1つの光になって緑の輪を描くと、落ちてきたトークンがその中に入って、合計6つの星になる。

「新たな王者の脈動、混沌の内より出でよ！」

☆3 + ☆3 + ☆1 || ☆7

「シンクロ召喚！ 誇り高き、『デーモン・カオス・キング』！」  
 『ヌアアアアアッ！』

デーモン・カオス・キング：ATK 2600

威風堂々とした姿で降り立つ悪魔の王者。名前に見合わないスラリとした姿に、腕と足についた炎を纏ったブレード。攻守ともに同じ数値という珍しいモンスターだ。

「もう一丁！ 手札からレベル1のモンスターを捨てて『パワー・ジャイアント』を特殊召喚！ 効果でレベルが1つ下がる！」

『オオオ！』

「そして『死者蘇生』を発動！ 墓地の『F・S グリル・ゴーレム』を特殊召喚！」

パワー・ジャイアント：ATK 2200 / ☆6 ↓5

F・S グリル・ゴーレム：ATK 1300

「レベル5の『パワー・ジャイアント』に、レベル3の『グリル・ゴーレム』をチューニ

ング!

王者の決断、今赤く滾る炎を宿す真紅の刃となる! 熱き波濤を超え、現れよ!」

☆5+☆3=☆8

「シンクロ召喚! 炎の鬼神、『クリムゾン・ブレード』!」

『タアッ!』

このターン最後に出すモンスターは触覚の生えた焰の双剣士の戦士。

クリムゾン・ブレード: ATK 2800

「し、シンクロモンスターが3体も並んだ……」

いやー、俺もこんなにシンクロモンスターを並べるのは久しぶりだな。

「さあ、『チェリー』、いや……」

いつまでも『チェリー』じゃなか他人行儀だな。こんな俺の為に表に出て来て、しかも鍛えてくれた。なら、せめて名前を君に授けよう。それが今の俺に出来る、精一杯

の親愛の証だから。

「桜さくら。安直やすちだけど、君の名前だ」

「桜、か。悪くないな。真名は変えられぬが、これからは私はその名を語ろう」

名を授けてくれた事に感謝する、そう言つて彼女は微笑した。後ろで「ハウッ！」とかいいう眼鏡の声があったが、まあ良い笑顔だと言つておく。

「行くぞ、桜あ！ バトルだ！」

「来い、主よ！ 受けて立つ！」

「このターンで終わらせる！ 『デーモン・カオス・キング』はバトルを行う時、エンドフェイズまで相手の場の全てのモンスターの攻守の数値を逆にする！」

デーモン・カオス・キング（シンクロ・効果モンスター）

星7

闇属性／悪魔族

ATK 2600 / DEF 2600

悪魔族チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードの攻撃宣言時、相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスター  
の攻撃力・守備力をバトルフェイズ終了時まで入れ替える事ができる。

クロロフィル・ジェネラル：ATK 3000 ↓ 2400 / DEF 2400 ↓ 3000

ギガント・セファロタス：ATK 1850 ↓ 700 / DEF 700 ↓ 1850

『デーモン・カオス・キング』で『ギガント・セファロタス』を攻撃！  
 『炎の点った腕のブレードを一閃。大口を開けた植物は真つ二つになり、炎上した。』  
 『アイ・ソード』！

『更なる攻撃名は『ファイア・ソード』なんだけれど、何となくもの寂しいので付け足してみた。』

『更に『エクスプロード・ウィング・ドラゴン』で『クロロフィル・ジェネラル』を攻撃！』

『相撃ち狙いか?!』

『黎らしくないね……』

『『キング・ストーム』！』

続いて群青色の龍が爆炎の暴風を吐き出す。緑の鎧騎士は剣の腹で受け止めようとしたが、そのまま呑み込まれた。

桜：LP 5000↓2600

「くっ！ 何が起きた……!?」

『エクスプロード・ウイング・ドラゴン』は自分以下の攻撃力のモンスターとバトルを行った時、ダメージ計算を行わずに相手モンスターを破壊し、その攻撃力分のダメージを相手に与える！」

エクスプロード・ウイング・ドラゴン（シンクロ・効果モンスター）

星7

闇属性／ドラゴン族

ATK 2400 / DEF 1600

チューナー＋チューナー以外のドラゴン族モンスター1体以上

このカードの攻撃力以下の攻撃力を持つ、フィールド上に表側表示で存在するモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える事ができる。



「攻撃力2400以下のモンスターじゃ勝てないって事か」

「しかも恐らく、守備モンスターも意味を持たないカードですわ」

「ああ。おまけに『デーモン・カオス・キング』の効果で攻守が逆転している。実質、守備力2400超えという高い守備力のモンスターを攻撃表示で出す事を必要とする」

「止めだ！ 『クリムゾン・ブレード』でダイレクトアタック！ // レッド・マード  
“！”

クリムゾン・ブレード（シンクロ・効果モンスター）

星8

炎属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 2600

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、次の相手ターン、相手はレベル5以上のモンスターを召喚・特殊召喚する事ができない。

赤い鬼神が剣に炎を灯し、双剣を振り下ろす。プレイヤーをギリギリ掠める双剣は爆発を起こし、桜のライフを削り切った。

「見事だ……」

桜：LP 2600↓0

黎：WIN

桜：LOSE



「ふう、負けた。貴方は我らの主に相応しいようだ」

「桜も十分強かったよ。下手したら負けてたさ」

敗北を認めただからか、呼び方が「貴様」から「貴方」に変わった桜。その体は透け始め、向こう側の沈む夕日と少しばかりの星が見えている。

「お前、体が……」

「死ぬ訳では無い、実体化を解いたからな。カードに戻る時は、こういう風に光に変わっていくものなんだ」

キラキラ、キラキラともう半分以上消えている。色彩も薄くなり、表情の判断も難しくなってきた。

「なに、今生の別れでは無い。初めて実体化した後の半実体化までには2、3日かかるが、そしたら他の連中と同じように前線に立たせてもらう」

ま、いつでも役に立てるといふ保障は無いがな。そうやって彼女の姿は完全に光の中にとけていった。

——貴方の事を、私は信じているぞ。

そんな声が聞こえ、最後に一枚のカードが残った。

ヒラリ、とカードは俺の手の中に収まる。

桜はカードの中で、騎士装束とはまた違った服で、こちらを向いて不敵に笑っていた。構えている銀色に輝く剣が、彼女の威風堂々とした姿に映える。

「黎！」

「黎くん！」

呼び声に気付いて振り返れば、皆がこつちに駆け寄って来たところだった。

これがあいつだ、と言って手の中のカードを皆に見せる。

リリースやアドバンス召喚を知っているのも当たり前。こいつをデッキに組み込もうと構築を試行錯誤していた時、何度もそれを呟いていたんだから。

「あれが精霊なのね。始めて見たわ」

「あ、アタシもです、明日香さん」

「まあ、普通は一生見なかったり、オカルトで終わる人が殆どだからね」

「へへっ、あれが黎の精霊か。今度会うのが楽しみだな、相棒！」

『クリ』

「わたし、次に会った時は強さのコツとか聞きたいな」

『女性同士だから話もハズむと思います』

「美人だったツス……」

「確かに。故郷で人気のあった近所の姉ちゃんに少し似てたんだな」

「遊馬崎さんの新しい力……、興味が湧いてきましたわ！」

「炎の他にも色々と研究しなければならぬようだ」

上から順に明日香、ジユンコ、俺、十代と『ハネクリボー』、ファイオとフレイ、翔、隼人、ももえ、空気男大地だ。

？ テロップが一部妙だったような気が……。気のせいかな。

夕日がもう沈んでいく。その眩しい山吹色と紺色の混ざる光景に向き合いながら、手にした一枚のカードに語りかけた。

「俺は、もっともつと強くなる。誰にも負けないくらいの高みに行く。だから、さ」

それまでこの不甲斐無いバカに付き合ってくれないか？

そう言うと、カードの中の桜は少しだけ笑ったような気がした。

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 22 : 来客

SIDE : 黎

「ラストアタックだ！ 『潜航母艦エアロ・シャーク』で『鎧武者ゾンビ』に攻撃！  
ビッグ・イーター！」

『ジョガアアアアアアアアアアアッ！』

「ぬわあああああつ！」

潜航母艦エアロ・シャーク : ATK 1900

鎧武者ゾンビ : ATK 1500

黎 : LP 3300

ブルー生 : LP 350 ↓ 0

「勝者、遊馬崎黎！」

〃

「ふう、勝った」

現在、月一試験の実技の方が終わったところ。日付で言えば、桜とのデュエルから三日後だ。

予め校長先生には昇進は進級するまでは、と断つてある。十代もきつと断る事だろう。

さて、フィオと大地、明日香も完封勝利。翔と隼人も俺がしつかり教えて筆記は問題無いし、実技も辛うじて勝った。ジュンコとももえは実技がダメだったらしい。そう言えばあの2人、プロ相手に2対1のハンデ戦でボコボコにやられていたな。今度アドバイスしてあげよっかな？

「さて、材料買って帰るか。夕飯、また作るぞ？」

「行く行く！」

「やったー！ 黎のメシだあ！」

「教えてね？」

購買のトメさんが学生用のスーパーに何が入荷して何が旬で何が安いかを知らせてくれるので（元が同じらしく、情報はすぐに入ってくる）、今日は挽き肉とナツメグを買ってハンバーグを作ろうかなあ、隠し味はマヨネーズにしてみようかなあ、とか考えていると、アナウンスが入った。



【オシリスレッド1年生の遊馬崎 黎くん、至急教員閲覧室まで来て下さい。繰り返し  
ます。オシリスレッド1年生の……】

「呼び出し？ あなた何かやったの？」

「んにや。心当たりは無いが……」

「兎に角、行ってみたらどうだろうか」

大地の言う事ももつともなので、リングの上の方に設置されているガラス張りの部屋  
へと俺は歩を進めた。



「Nice to meet you, Mr. Yumasaki!」(始めまして、ミスター遊馬崎!)

「Nice to meet you, too sir!」(こちらこそ、お会いできて光栄です!)

「Huh, this man is that man, isn't it?」  
(ふん、こいつが例の男か?)

「That man? What is it? I do not understand such a thing.」(例の男? 何の事かサツパリ分かりませんが……?)

「綺麗な発音ねえ……」

「キングス・イングリッシュか。しかし、これは日本人が普通に英語をやっても身につくものじゃ無いぞ?」

「つて事は黎つて、アメリカ育ちだったり?」

「神山さん、キングスはイギリスのものツス」

「帰国子女つてヤツか?」

「生まれはこつちで育ちは向こう、という事も考えられますね」

俺が呼ばれてガラス張りのボックス席にやって来た時、そこには鮫島校長と2人の男

の姿があつた。

片や、赤色のスーツに身を包んだ銀髪の男性。年齢は不明だが、片目が隠れているのが印象的だ。

片や、白を基調としたスーツに包んだ傲岸そうな男性。短い茶髪に碧眼だが、顔立ちは日本人のもの。

二人とも、デュエルモンスターズに深く関わっている大人物だ。

「なあ」

「ん?」

後ろで十代が大地に話しかける。

「あの二人って、誰だ?」



「まだ分からんか。つまりこの二人がいるからこそ、現代のデュエルモンスターズは存在できるの。簡単に言えばデュエルモンスターズのお父さんだよ」

「へえ〜」

おい、今の説明で納得するのか十代。一緒にいた面々は（ペガサスさんや海馬さんも）かなり微妙な顔してるぞ？

とりあえず、俺は二人に向き合い直す。まだ本題に入っていないのだ。

「えーと、で、自分に何の御用でしょうか？」

「オーウ、すっかり忘れてました〜」

「こちらもだ。全く、態々時間を割いてやって来たというのに、この体たらくではな」

「……え、俺の所為ツスか？」

ヒドイなあ。

コホン、と二人が咳払いで状況を元に戻す。

「それで、ユーが未来の異世界から来たというのは本当なのですか？」

「見た事も無いカードを使っているそうだな」

「見た事も無いカード……。ああ、こいつらですか」

そう言つて精霊のカードを縦横無尽に展開させる。表側を相手に見せる形で俺の周りに張り巡らし、スローで少しずつ動いている。

「ワンダフル！ ユーはワタシ達の想像を遥かに超えていマース！」

「ほう、これが……」

千年アイテムの元所持者と古代エジプトから神に近い存在だった男達だ。このカード達の特異性には既に気付いたか。

既に百枚を大きく超えたカード達を見ていたが、二人は首を横に振った。

「バット、ワタシ達が見たいのはこの精霊のカードではありません〜ン」

「俺達が見たいのはシンクロとエクシーズというモンスターだ」

じゃあこつちか。

展開していたカードを一旦しまい、腰のエクストラデッキ用のホルダーから適当に2枚取り出してテーブルの上に置いた。

「どうぞ。あげませんよ？」

「黒いカードと白いカードか……」

「宝石や星空のように美しいカードデ〜ス」

取り出したのは『潜航母艦エアロ・シャーク』と『ジャンク・アーチャー』だ。もつとあるが、とりあえずこの2枚で十分だろう。

二人はじっくりとカードを見ていたが、満足したのか両方とも俺に返してくれた。

そして海馬さんは不敵に、ペガサスさんは柔らかに笑った。満足して頂いてありがた

……、

「どこまで有用なのか、知りたくなってきたな」

ん？

「ワタシも同じでス」

んん？

何か妙な流れになってきてないか？

「このカード達を実際に出すのはかなり先にはなると思いまゝス。バット、今の段階で調べておかなければ、それまでのスパンは更に長くなるでしよウ」

「フン、どのような召喚をするのかの確認も必要だろう」

そして海馬さんとペガサスさんは同時に言った。

「遊馬崎 黎」

「黎ボーイ」

「俺（ワタシ）とデュエルだ（でゝス）！」

「やっぱりかあああああああああああああああつ！」

何？ この世界の人達はどんだけデュエルが好きなの!? 一日一回デュエルやらなきや死ぬの!? そういうウィルスが蔓延してるの!?

いや俺もデュエル好きだけど！ でも一国一城の主が学生程度にわざわざ挑戦す



るー!!?

「くー、羨ましいぜ、黎！」

「ぼ、僕はちよつと遠慮したいツス……」

「あー、馬が合うね……」

「あの二人のデツキは大凡知つてはいるが、実物を見るのは初めてになるな」

「テメエら！ 傍観者気取りかあ！（や、実際傍観者だし？ by ジュンコ）

「というか、お二方を一度にはムリですよ」

「ならばペガサス、今回は貴様がやれ」

「オーウ、良いのですか海馬ボーイ？ 次のチャンスはいつになるのか分かりませう」

「構わん。その内実技試験の相手としてやれば良い。オーナー権限でな」

それは大人として、つーか社会人としてどうかと。

「では、デュエルリングへどうぞ。準備は整っています」

「あ、居たんですか鮫島校長」

「……、最初からいましたよ？ そして呼び出したのは私です」

済みませんスツカリ忘れてました。

— デュエルリング

S I D E : 大地

しかし、まさかこんな所であの二人に出会うとはな。一生縁は無いと思っていたんだが。

黎とペガサス氏がリングで対峙している。そしてそれを見る為にどこからともなく生徒が沢山集まって来た。観客席は全部埋まってしまったと言っても過言では無いだろう。

彼らがデュエルをすると決まってからまだ三十分も経ってない上に今は放課後。だと言うのに、この集まりよう。ペガサス氏の人気とこのデュエルに皆、余程興味があるようだな。

黎の使うカードにはまだ解明し切れない謎が数多くある。それは恐らくはあの日襲ってきた邪神と名乗るヤツに対抗するための手段なのだろう。

俺は別にヒーローに対する憧れは無いが、ああいう特殊なシチュエーションには憧れるな。

さて、黎。キミの実力が彼らの世界にどこまで通じるか、見せてもらおうぞ。

S I D E : 黎

「黎ボーイ」

ディスクを展開し、今回使うデッキを選択してセット。それと同時にペガサスさんが話しかけて来た。

「何でしょう?」

「ユーの瞳の奥には何か悲しく、強い決意が見えまゝス。報告にあつた義妹さんの事ですネ〜?」

校長、アンタ何喋った。人のプライベートな部分をベチャクチャ喋るなよ。

「ワタシも昔、大切な人を失いましたタ。だから言いまゝス。何があつても闇に心を染めないで下さ〜イ」

そう言えば、この人は婚約者か恋人だったかを亡くしたんだったか。そして俺も下手をすればたった一人の大切な家族を失う。

きつと掛け替えの無いものを失う悲しさを知っているからこそ言えるんだろう。道を踏み外した恐怖を知っているからこそ言えるんだ。

「ありがとうございます。胸に、刻んでおきますよ」

「OKでゝス。曇りが少しだけ無くなりましタ〜。それでは……」

『デュエル!』

黎VSペガサス

LP 4000 VS LP 4000

「先攻はワタシがもらいまゝス」

「どうぞで」

「ドロロー。ワタシは『トウーン・アリゲーター』を召喚しまゝス」

トウーン・アリゲーター：DEF 1600

最初は「トウーン」の名を冠しながらもトウーンモンスターじゃない緑のワニか。コミカルな見た目だが、手にした斧が余計にその存在をコミカルにしている。

トウーン・アリゲーター（通常モンスター）

星4

水属性／爬虫類族

ATK 800 / DEF 1600

アメリカンコミックの世界から現れた、ワニのモンスター。

「これでターンエンドでス」

ペガサス：LP 4000

手札：5枚

フィールド

：トウン・アリゲーター（DEF 1600）

：魔法・罠カード無し

1ターン目は様子見か……。堅実だな。

「俺のターン！俺は『スピード・ウォリアー』を召喚！」

『ハアッ！』

スピード・ウォリアー：ATK 900

こちらはクリーム色のアーマーの戦士。レギュレーターとゴーグルを着用し、ローラースケートを履いている。

「『スピード・ウォリアー』は召喚されたターンのバトルフェイズのみ攻撃力が倍になる。バトル! 『スピード・ウォリアー』で『トウーン・アリゲーター』を攻撃! ソニック・エッジ!」

スピード・ウォリアー：ATK 900 ↓ 1800

『ハアアアアツ、テヤツ!』

『ギミヤアアアアアツ!』

逆立ちしてからのスピニング（カポエラーとか言うんだっか?）で見事に蹴り飛ばし、コミカルなワニは吹っ飛んで行った。

さて、これからが問題だ。『スピード・ウォリアー』は召喚されたターンこそ頼もしいアタッカーだが、それ以降は少々残念な能力値に戻ってしまう。

スピード・ウォリアー：ATK 1800 ↓ 900

とりあえずの応急処置を……。

「カードを1枚セットし、ターンエンド」

黎：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：スピード・ウォリアー（ATK 900）

：伏せカード1枚

ここまででは順調。ここからどう展開していくか、だな。

デュエリストの腕前で何より要求されるのがデッキ構築ともう一つ、応用力だ。手札のカードでいかに戦況を切り開くか、相手の戦術を崩すか。それがカギになってくる。

「ブラボ〜。見た事の無いカードで〜ス。ますます興味が湧いてきました〜」

「それはどうも」

「全力で行きま〜ス！ ドローー！」

手札から魔法カード『トウーンのもくじ』を発動しマ〜ス。これでデッキからトウーン”と名のついたカードを1枚手札に加えま〜ス！」

来たか、トウーン”のサーチカード！ あれで再び『トウーンのもくじ』を引つ張つてくれば、『王立魔導図書館』や『神聖魔導都市エンディミオン』にカウンターが3つも



乗る。1ターン内の使用回数制限が無い、『魔力掌握』や『精神統一』には無い利点を持つカード！

トウーンのもくじ

### 【通常魔法】

自分のデッキから「トウーン」と名のついたカード1枚を手札に加える。

### 魔力掌握

### 【通常魔法】

フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。

その後、自分のデッキから「魔力掌握」1枚を手札に加える事ができる。

「魔力掌握」は1ターンに1枚しか発動できない。

### 精神統一

### 【通常魔法】

デッキから「精神統一」を1枚手札に加える。

このカードは1ターンに1度しか使用できない。

「これでサーチした永続魔法『トウーン・キングダム2』を発動でゥス！ デツキからカードを7枚ゲームから除外し、『トウーン・ワールド』として扱いまゥス！」

「来たか！」

「トウーン」。それはペガサスさんしか持つていない、特殊なカード。一切の攻撃を受けず、直接攻撃も可能とする、制圧性の高いカード群。

あれが出て来るとなると、ライフ4000のデュエルでは厳しいな。

「確か、トウーンとは完璧な生命体を意味する言葉でしたか。破壊されず、すり抜け、一方的に殴り勝つ、成程強い。これはモタモタしてられませんね」

「フフフ、ワタシは『トウーン・マーメイド』を召喚でゥス！」

トウーン・マーメイド：ATK 1400

トウーン・マーメイド（トウーンモンスター）

星4

水属性／水族

ATK 1400 / DEF 1500

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に「トウーン・ワールド」が存在する場合のみ特殊召喚できる（レベル5以上はリリースが必要）。

このカードは特殊召喚したターンには攻撃できない。

このカードは500ライフポイントを払わなければ攻撃宣言できない。

相手フィールド上にトウーンモンスターが存在しない場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

存在する場合、トウーンモンスターを攻撃対象に選択しなければならない。

フィールド上の「トウーン・ワールド」が破壊された時、このカードを破壊する。

「トウーンモンスターはダイレクトアタックができまゝス！ 『トウーン・マーメイド』で攻撃でゝス！」

「畏カード発動！ 『ガード・ブロック』！ 戦闘ダメージを無効にして、カードを1枚ドロロー！」

勢いよく放たれた矢はエネルギーを纏って俺に襲いかかるが、白い半透明のバリアがそれを弾き飛ばした。

本来はもつと後で使いたかったが、次のターンに攻撃力1200以上のトウーンが後続で出て来たらアウトだからね。

「オウ、防がれてしまいましたか」

「初撃から通せるほどアマクはありませんよ」

「なるほど、カードを1枚セットして、ターンを終了しまゝス！」

ペガサス：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：トウーン・マーメイド（ATK 1400）

：伏せカード1枚、トウーン・キングダム2（永続魔法）

「俺のターン！」

さて、どう攻略しようか？

SIDE：ファイオ

「コミカルで可愛いけど、能力は凶悪だね」

ペガサスさんのオリジナルモンスター、"トゥーン"。三沢くん聞いたところ、戦闘破壊もできない相手らしい。

「破壊を免れれば次のターンは再び直接攻撃。恐ろしい能力ね」

「だけど、ダメージは通る上に『トゥーン・キングダム2』さえ破壊できれば、まだ勝機はあるぜ」

明日香に続いて十代くんが言う。この二人は中々良い感じと言うか、息が合うと言うか。とりあえず付き合ってますと言われてもそんな違和感はないかも？

まあ、実際には十代くんはとつてもニブいし、明日香は色恋沙汰には興味が無い。自分、あるいは一生無い話ね。

違う。わたしは何の話をしているんだ。

"トゥーン"に攻略方法があるとしたら道は二つ。1つは超過ダメージ。もう1つは『トゥーン・キングダム2』の破壊や除外。

黎、キミだったら、どうする？

SIDE : 黎

「俺は手札の『グローアップ・バルブ』を墓地に送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

『はっ！』

クイック・シンクロン：DEF 1400

青い信号機の上の部分だけ取ったような胴体。ガンマンのハットと二丁拳銃を持った小柄な「シンクロン」の一体が飛び出す。

「レベル2の『スピード・ウォリアー』に、レベル5の『クイック・シンクロン』をチューニング！」『クイック・シンクロン』は、「シンクロン」と名のついたチューナーの代用ができる！」

『クイック・シンクロン』の前に『ジャンク・シンクロン』達「シンクロン」が円状に並んでルーレットのように回転し出す。クイックドローでその内の1枚、『ジャンク・シンクロン』が撃ち抜かれた。

クイック・シンクロン（チューナー・効果モンスター）

星5

風属性／機械族

ATK 700 / DEF 1400

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。

このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とすることができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついたチューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！ 光差す道となれ！」

☆2 + ☆5 || ☆7

「シンクロ召喚！ 貫け、『ジャンク・アーチャー』！」  
『ホアッ！』

ジャンク・アーチャー：ATK 2300

「おう、さっきのモンスターでス」

“トウーン”は破壊されない。ならば、一時的にでも退場してもらおう！

「更に『ハリマンボウ』を召喚！」

『アボボボボボボッ！』

ハリマンボウ：ATK 1500

「『ジャンク・アーチャー』は1ターンに1度、相手モンスター1体をエンドフェイズまでゲームから除外する！」

「上手い！ あれなら攻撃が通る！」

「行つけええ、『ジャンク・アーチャー』！」

「破壊がダメでもこれは効くだろ、“ダイメンジョン・シユート”！」

『ぬえいつ！』

青白く光る矢が貝に命中し、その中にいる人魚を貝ごと次元の彼方へ吹き飛ばす。

「これでガラ空き！ 『ジャンク・アーチャー』でダイレクトアタック！ “スクラップ・

アロー”！」



これが通れば、一気にざっくりとライフを削り取れる。届くか……？

「罨カード『攻撃の無力化』を発動で〜ス！」

鉄の矢尻が次元の穴に吸い込まれる。ちっ、通らなかつたか。

「リバースカードを1枚セット。そしてこのエンドフェイズ、『トウーン・マーメイド』がフィールドに復活する」

トウーン・マーメイド：ATK 1400

「ターンエンド」

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ジャンク・アーチャー（ATK 2300）、ハリマンボウ（ATK 1500）

：伏せカード1枚

「ワタシのターン、ドロ〜！」

クツソ、これで大型トウーンが出て来たらヤバイぞ……。

「ワタシは『トウーン・マーメイド』を生け贄に捧げ『トウーン・デーモン』を召喚デース！」

『ギャハハハハッ！』

トウーン・デーモン：ATK 2500

青白いやはりコミカルな悪魔が現れる。ボディビルダーのように自身の筋肉を見せびらかすようなポーズを次々にとっている。

トウーン・デーモン（トウーンモンスター）

星6

閻属性／悪魔族

ATK 2500／DEF 1200

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に「トウーン・ワールド」が存在する場合のみ特殊召喚できる（レベル5以上はリリースが必要）。

このカードは特殊召喚したターンには攻撃できない。

このカードは500ライフポイントを払わなければ攻撃宣言できない。

相手フィールド上にトゥーンモンスターが存在しない場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

存在する場合、トゥーンモンスターを攻撃対象に選択しなければならぬ。

フィールド上の「トゥーン・ワールド」が破壊された時、このカードを破壊する。

「このままモンスターを召喚しても、除外されてはダメーじが溜まってしまいまゝス。そこで、『ジャンク・アーチャー』には退場を願いましょ〜ウ。攻撃でゝス！」

『ギツハハハハハ！』

背中の翼から放たれた雷が、橙色の射手を消し炭にする。済まない、『ジャンク・アーチャー』……。

『『ジャンク・アーチャー』撃破でゝス！』

黎：LP 4000↓3800

「くつ、流石ですねペガサス会長。破壊せず除外する事の恐ろしさに一発でちゃんと気

付いている」

「当然デウス、ワタシはデュエルモンスターズの生みの親。例え顔も知らないモンスターであろうと、我が子の能力はすぐに把握できマゝス！」

「成程。ならばこれでどうでしょう！」

その言葉と共に光がフィールド上に放たれ、クリーム色のアーマーの戦士が飛び出した。

スピード・ウオリアー：DEF 400

「ワッツ!? 何故『スピード・ウオリアー』がいるのですか!？」

「貴方の攻撃に合わせて永続罫、『シンクロ・リサイクル・システム』を発動しました。この効果で自分の場のシンクロモンスターがバトルで破壊された時、墓地に存在するチューナー以外のモンスターを1体、特殊召喚できます」

シンクロ・リサイクル・システム（オリジナル）

【永続罫】

自分の場のシンクロモンスターがバトルで破壊された時、墓地に存在するそのシンク

口素材となったチューナー以外のモンスターを1体、自分の場に特殊召喚できる。

このカードが3回効果を発動した時、このカードを墓地に送る。

「オウ、流石でス！ ユーのプレイングには光るものがあります」

「あなたに言われるとは、光栄です」

「フッフ、やはりこうで無くては面白くありません。ターンを終了します」

ペガサス：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：トウーン・デーモン（ATK 2500）

：トウーン・キングダム2（永続魔法）

「俺のターン！」

さて、フィールドには逆転のカードは無い。『リサイクル・システム』の使える回数は残り2回。引いたカードは……『ビッグ・ジョーズ』か！

ビッグ・ジョーズ（効果モンスター）  
星3

水属性／魚族

ATK 1800 / DEF 300

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時にゲームから除外される。

行ける！

「『ビッグ・ジョーズ』を召喚！」

ビッグ・ジョーズ：ATK 1800

「レベル3の『ハリマンボウ』と『ビッグ・ジョーズ』をオーバーレイ！ 2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆3＋☆3＝★3

「エクシーズ召喚！ 現れる黒き槍兵、『ブラック・レイ・ランサー』！」

『テエエエエツ、ハッ!』

ブラック・レイ・ランサー：ATK 2100

「WONDERFUL ! シンクロ召喚とエクシーズ召喚を両方みられるとは感動で  
スー!」

「ふふ、両方を一度のデュエルで出させたあなたの実力ですよ」

黒い槍を装備した大柄な戦士が、ビッグバンの中から飛び出す。大柄、というよりも  
巨大というべきか。恐らく大ききだけなら社長の嫁、もとい『青眼ブルーアイズ・ホワイトドラゴンの白龍』とタメ

を張れるだろう。

周囲を惑星（正しくは衛星）のように回っている光の玉はオーバーレイ・ユニットの  
残り数を示している。今はまだ使っていないから、2つの玉がクロスする軌道で周回し  
ている。

「効果発動! 1ターンの1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、相手モンス  
ター1体の効果を無効にする! ブラック・パラライザー!」

ブラック・レイ・ランサー：ORU 2↓1

槍を斜に構えた『ブラック・レイ・ランサー』が、翼から紫の輪が連なった光線を放つ。それを正面から浴びた『トウーン・デーモン』は眼を回してフラフラし始めた。

『成程、モンスター効果を封じられてしまえば、いかにトウーンモンスターといえども攻撃は通る』

『流石ッス！』

ブラック・レイ・ランサー（エクシーズ・効果モンスター）

ランク3

闇属性／獣戦士族

ATK 2100 / DEF 600

水属性レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

「よっしゃー！ これで攻撃が通るぜー！」



「でも、攻撃力が……」

「心配無用だぜ、ファイオ！ 今オーバーレイ・ユニットとして墓地に送った『ハリマンボウ』の効果発動！ こいつが墓地に送られた時、相手モンスター1体の攻撃力は500ポイント下がる！」

ハリマンボウ（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 1500 / DEF 100

このカードが墓地へ送られた時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

トウーン・デーモン：ATK 2500 ↓ 2000

『ブラック・レイ・ランサー』で攻撃！」

『タアアアアアアッ、タアッ！』

「ア〜ウツ!!」

ペガサス：LP 4000↓3900

投擲した黒い槍が青白い悪魔の胸部を貫通。大爆発が起きて、悪魔の体のパーツが（ここでもコミカルに）吹っ飛んで行った。元からバラバラになれますよ、とでも言うてるみたいに笑いながら『トウーン・デーモン』は消滅した。

『グイッハハハハハッ!』

「何?！」

バカな!? 『トウーン・デーモン』は確かに破壊したはずだぞ!?

「ソ〜リー、黎ボーイ。『トウーン・キングダム2』の効果でデッキのカードを1枚ゲムから除外しました。これでワタシのトウーンモンスターは破壊されませ〜ン」

「しまった……。破壊を無効にするのは後ろの城の方だったか!」

迂闊、勘違いしていたか。トウーンモンスター共通の効果は『相手がトウーンモンスターをコントロールしてなければ直接攻撃できる』『トウーン・ワールド』が無ければ存在できない』の2つだった。

効果を封じれば勝てると思ったが、アマかった。『トウーン・キングダム2』の効果を

失念していた！

トウーン・キングダム2（オリジナル）（改訂版）

【永続魔法】

（1）：自分のデッキの上からカードを7枚除外して発動する。

このカードはフィールド上に存在する限りカード名を「トウーン・ワールド」として扱う。

（2）：自分フィールドの「トウーン」モンスターが戦闘・効果によって破壊される場合、代わりに自分のデッキの上からカードを1枚除外し、無効にする事が出来る。

（3）：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、「トウーン」と名のついたモンスターはライフを支払わず、特殊召喚されたターンに攻撃できる。

「カードを1枚セットして、ターンエンド！」

黎：LP 3800

手札：1枚

フィールド

：ブラック・レイ・ランサー（ATK 2100）、スピード・ウォリアー（DEF 400）

：伏せカード1枚、シンクロ・リサイクル・システム（永続罫）

強い……。いや、この場合は「トゥーン」に翻弄されていると言うべきか。

除外でデッキ切れを狙いたいが、1回の攻撃で除外されるデッキのカードは1枚。ドローと合わせても2枚だ。効率が悪すぎる。

へへっ、燃えて来たぜ。

俺は諦めない。ゲームセットには、まだなつて無い！

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 23 : トゥーンを攻略せよ! 切り札は「未来 を切り開く右腕」

SIDE : ジュンコ

黎 : LP 3800

手札 : 1枚

フィールド

：ブラックレイ・ランサー (ATK 2100・ORU : 1)、スピード・ウオリアー  
(DEF 400)

：伏せカード1枚、シンクロ・リサイクル・システム (永続罫)

ペガサス : LP 3900

手札 : 3枚

フィールド

：トゥーン・デーモン (ATK 2000)

：トウーン・キングダム2（永続魔法）

あ、アタシがナレーション？

コホン、オベリスクブルーの枕木ジュンコです。

なんと、あのペガサス・J・クロフォードさんと海馬瀬戸さんが、遊馬崎黎のシンクロモンスターとエクシーズモンスターを見るために、遙々このデュエルアカデミアにまでやって来ました、キャー！

じゃなくて。それで実用性を確かめる為にペガサスさんと遊馬崎がデュエルをする事になった。なんとか遊馬崎は善戦しているけれど、流石にダイレクトアタックし放題のモンスター相手じゃキツイみたいね。

「黎、勝てるよね……」

「当たり前だろ！」

「大丈夫、彼を信じましょう」

明日香さんの中等部時代からの友達（アタシとももえもだけど、彼女と知り合ったのは高等部に入ってから）、神山フィオがしよぼくれた声を出し、明日香さんとオシリスレッドの遊城十代が励ます。

まあ、あいつの実力は皆知っている。血ダルマになってデッドラインを超えても尚、

義理の妹を取り返すためにデュエルを続けようとしていた強い精神力の持ち主だ。

アタシはあの後聞いた。何で死ぬまで戦うのか、って。そしてらあいつはこう答えた。

『たった一人の、大切な家族を取り戻したいから。例えば俺が無理でも、誰かにそれを託したかった。少なくとも、死なせたくなかったんだ』

その言葉にはシスコンとか、化物とか、そんな言葉は当てはまらなかった。そこにいたのは純粹な、一人の妹思いな兄。

ま、応援くらいはしてあげるわ。頑張りなさい!

S I D E : 黎

「ワタシのターンで〜ス」

どう来る? 伏せたカードで1回は攻撃を止められるが、所詮は1回止まり。それに攻撃を『ブラックレイ・ランサー』に向けられたらどちらで使うかも問題になってくる。ダメージを優先するか、モンスターを優先するか……。

『ここはダメージを防ぐんだ』

「!？」

突然どこからか声がした。

『こつちだ』

声は左から。そこにいたのは、桜色のドレスとホワイトの鎧を着た、お姫様のような騎士。そうか、あれからもう三日経ってるもんな。

「桜！」

「あ、この間の女の女なんだな」

「あ、ホントだ。桜さんだ」

「え、どこどこ？」

「むう、見えないのが悔しいな……」

『ふん、貴方が随分と頼りないから出て来てやったぞ？』

「悪かったな」

『フフフ、して我が主はどう出る？ 相手が手札から一枚場に出してくるぞ』

『『トウン・ジェミニナイエルフ』を召喚しまゝス』

『『キャハハハッ！』』



トゥーン・ジエミナイエルフ：ATK 1900

飛び出るのはコミカルな双子のエルフ。悪戯好きな姉妹だそうだ。

「『トゥーン』は確かに破壊されませ〜ん。バット、その為にカードを除外して行き続ける、良いカードまでもが消えてしまいマ〜ス。さっきも『ブルーアイズ・トゥーンドラゴン』が除外されてしまいました〜」

「(ビキッ!)」

あ、どこからか(というか海馬氏のいるボックス席から)フラストレーションが一気に溜まり過ぎて血管が何本か切れた音が……。

「ワタシの大切な家族達を守りたい。そこで、まずはユーの強力なモンスターを倒す事にしましタ〜」

そう来たか。

確かにこのまま行けば単純計算で俺の倍以上の速さでペガサスさんはデッキを消費する。彼のデッキを最大枚数60枚と仮定しても、既に50枚は少なくとも切っている。このペースで消費を続ければ確実にデッキ破壊という形で自滅する。

俺だったらそれを避ける為に相手モンスターを破壊するか、速攻で攻める。この人は前者を選んだか。

「魔法装備カード『トウーンソウル』を『トウーン・デーモン』に装備します。これで、デッキからカードを1枚除外し、『トウーン・デーモン』の攻撃力は1000ポイントアップです」

トウーンソウル（オリジナル）

#### 【装備魔法】

「トウーン」と名のついた魔法カードが場に存在する時発動可能。

自分のデッキの1番上のカードをゲームから除外し、「トウーン」と名のついたモンスターに装備する。

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

このカードを装備したモンスターが破壊された時、装備モンスターの攻撃力を800ポイントアップして自分の場に墓地から特殊召喚する。

トウーン・デーモン：ATK 2000↓3000

「『トウーン・デーモン』で『ブラックレイ・ランサー』を攻撃です！」

黎 : LP 3800 ↓ 2900

つくう! また地味にライフが削られた。これで残り2900……。

「そして『トゥーン・ジエミナイエルフ』でダイレクトアタックでス！」

『今だ!』

『その罠を!』

「おう! 『くず鉄のかかし』を発動! その攻撃を無効化する!」

ガキギン! と双子エルフのダブルキックを弾いたのはお馴染みの金属案山子。毎度アリガトです。

「またもや見た事の無いカード……。素晴らしいデウス! 最早ワタシは勝敗の事を通り越し、このデュエルに意味を見出してまゝス！」

「光栄至極!」

「さあ、最高のデュエルをしましょウ！」

「勿論です!」

「ねえ、いつから黎は熱血スポ根キャラになったのかな?」

「多分十秒くらい前から」

「ワタシはカードを1枚場に出します。そして魔法カード『トウーン・リバース』を發動します。『トウーン』と名のついたカードによってゲームから除外されたカードを10枚、デッキに戻す事ができます」

トウーン・リバース（オリジナル）（改訂版）

### 【通常魔法】

（1）：「トウーン」と名のついたカードの効果によってゲームから除外されているカードを10枚、デッキに戻してシャッフルする。

（2）：墓地のこのカードを除外して発動する。

除外されている「トウーン・リバース」以外の「トウーン」カードを1枚手札に加える。

この効果はこのカードが墓地に送られたターンには発動できず、対象のカードが裏側表示でも手札に加える事ができる。

成程、除外効果のアフターケア用カードか。

除外されていたカードが戻って行く。視力を上げて見ると、その内1枚が『トウーン・

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン』だったのは黙っておこう。海馬氏が脳溢血で倒れてしまいかねない。

「これでターンエンドでス」

ペガサス : LP 3900

手札 : 2枚

フィールド

: トゥーン・デーモン (ATK 2500)、トゥーン・ジェミニエルフ (ATK 1900)

: トゥーン・キングダム2 (永続魔法)

「俺のターン!」

ドロソースか!

「魔法カード『天使の施し』を発動! カードを3枚引いて2枚捨てる! 更に『強欲な壺』を発動。これでもう2枚、手札を追加できる!」

手札はこれで3枚。

捨てたのは『ボルト・ヘッジホッグ』と『メテオ・ストライク』。墓地は中々順調には

肥えないようだ。

手札を改めて見る。さつき手札に加わった『ジャンク・シンクロン』が目に入った。いや、ダメか。これじゃ戦えない。

パツと頭に浮かぶのは『ジャンク・シンクロン』で『ボルト・ヘッジホッグ』を蘇らせ、かつ『グローアップ・バルブ』を復活させ、『スピード・ウオリアー』と一緒にシンクロ召喚だ。

これでレベル8のモンスターが呼び出せる。この場で有効なのは破壊効果を持つ『ジャンク・デストロイヤー』。

『ジャンク・デストロイヤー』を出し『トゥーン・キングダム2』を破壊する、という戦法。だが、それじゃ制圧は精々1ターンか2ターン。あの人が“トゥーン”の使い手なら、その程度の事態を見越していないとは考えにくい。

落ち着け。もつと別のモンスターを引っ張り上げる戦法も取れる。

墓地にいるモンスターは……。

『グローアップ・バルブ』

『クイック・シンクロン』

『ジャンク・アーチャー』

『ビッグ・ジョーズ』

『ハリマンボウ』

『ブラックレイ・ランサー』

『ボルト・ヘッジホッグ』

今回は意外と溜まって無いな。『ジャンク・シンクロン』で呼べるのはこの内『グローアップ・バルブ』と『ボルト・ヘッジホッグ』の2体。この組み合わせで何を呼べる? 『スターダスト・ドラゴン』? ダメだ今回は意味が無い。『トゥーン・デーモン』に攻撃されてお終いだ。

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』? これも意味が薄い。パワーで押し切れる程アマイ相手じゃ無い。

『クリムゾン・ブレイダー』? 『A・O・J カタストル』? 『ジャンク・バーサーカー』?

参ったな、エクシーズの方はバリエーション薄いんだよな……。

ここは次のターンに持ち込むか……。

いや待て! これがあつた! さっき『強欲な壺』で手札に加わったこれなら、行ける!

「1枚カードをセット! ターンエンド!」

「黎(くん)!?」

黎：LP 2900

手札：2枚

フィールド

：スピード・ウォリアー（DEF 400）

：伏せカード2枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）、シンクロ・リサイクル・システム  
（永続罠）

これは賭けになるだろうな。このターン、ペガサスさんの行動が予測通りならまだ勝機はある。だが、予想が外れば負けだ。

どう出る？ さあ、勝負だ！

「ワタシのターン。そろそろ終わりにしましよウ。楽しかったですガ、時間は有限デス」

「……、ええ。どこからでも！」

『トウン・デーモン』でダイレクトアタックでス！」

『ギャツハハハハハハアハハハ！』

バリバリバリ！ と青白い悪魔の白い雷が迸る。



「これが通れば残りは0!」

「レイ!」

「ククク、奴もここまでだ!

そのまま負けて恥を晒せえ!」

「この賭け、俺の勝ちだ！」

「手札の『速攻のかかし』を墓地に送り、ダイレクトアタックを無効にする！」

猛スピードで走ってきた案山子が正面から雷を受け止める。真っ黒に焦げてしまっただが、俺は見事に無事だった。

「この効果が発動した時、バトルフェイズは強制的に終了される」

「オウ。ではこれでターンを終了でス」

「チッ！ 忌々しい……」

「ホッ。無事だった……」

「やるじゃん、あいつ」

「レッドにしとくのが勿体無いな」

ペガサス : LP 3900

手札 : 3枚

フィールド

：トゥーン・デーモン (ATK 2500)、トゥーン・ジェミニナイエルフ (ATK 1900)

：トゥーン・キングダム2 (永続魔法)

これで、『速攻のかかし』が墓地に行つた。パズルピースは、完全に整つた。

「俺のターン!」

引いたカードは……、『ジャンク・アタック』!

「ペガサスさん、このデュエル、俺の勝ちです!」

「ワッツ!」

「ええ!」

「バカな!」

「黎、キミならやれると信じてたよ!」

「流石だぜ！」

様々な声が耳に入る。それを聞きながら、1ターン前に『強欲な壺』の効果で引いたカードを手札からフィールドに出す。

「チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」  
『ハッ！』

ジャンク・シンクロン：ATK 1300

桜とのデュエルでも出て来た、眼鏡をかけたエンジニアが光と共に現れる。背中に背負ったエンジンが特徴的だ。

「その効果で、墓地の『速攻のかかし』を蘇生する！ 更に『ボルト・ヘッジホッグ』は自分の場にチューナーがいる時、自身の効果で特殊召喚できる！」

『ウイイイイリアッ！』

『ミイイイイイツッ！』

速攻のかかし：DEF 0

ボルト・ヘッジホッグ：ATK 800

「更に、デッキトップのカードを墓地に送る事で、チューナーモンスター『グローアアップ・バルブ』は1度だけ墓地から特殊召喚できる!」

デッキの1番上のカード、『破天荒な風』が墓地に送られ、逆に地面からツタに覆われた花と目玉が現れる。あんまし可愛くないな。

グローアアップ・バルブ：ATK 100

「ワオ! またシンクロ召喚が見られまゝス!」

「ご期待通りに行きます! レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』にレベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング!」

腹のスターターを力強く引っ張り、『ジャンク・シンクロン』がエンジンに点火する。そして光の玉、緑の輪になり、2つの星となった『ボルト・ヘッジホッグ』と共に眩い光を放つ。

「集いし願いが、新たな力を呼び覚ます! 光差す道となれ!」



速攻のかかし : ATK 0

ジャンク・ウォリアー : ATK 2300 ↓ 3300

「攻撃力3300!」

「ですが、その攻撃力でも、このターンに決着をつける事はできません」

「いえ、まだです! まだ俺はバトルの準備を終わってません!

続いてレベル1の『速攻のかかし』と、レベル2の『スピード・ウォリアー』に、レベル1の『グローアアップ・バルブ』をチューニング!

花が完全に開花し、1つの光を吐き出すと、『グローアアップ・バルブ』は姿を消した。その光は緑の輪を描くと、『スピード・ウォリアー』と『速攻のかかし』がその中に入り、3つの星になった。

「集いし刃が、未来を切り開く右腕となる! 光差す道となれ!」

☆1+☆1+☆2||☆4

「シンクロ召喚! 飛び出せ、『アームズ・エイド』!」

アームズ・エイド：ATK 1900

「あのレッド、何をやる気だ……」

「ハツタリに決まってる！」

「黎、キミの戦術、見せてもらおうよ……」

俺の場にはこれで青色の拳闘士『ジャンク・ウオリアー』と鋭い爪を持つ右腕『アームズ・エイド』が並ぶ。これで、残る手順は2つ！

「素晴らしいで〜ス！ どんなミラクルでこのデュエルに勝利するのが楽しみで〜ス！」

「ええ、ミラクルはまだ途中です。その目に嫌というほど焼きつけて下さい！ 『アームズ・エイド』の効果発動！ 自分の場のシンクロモンスター1体の装備カードとなり、攻撃力が1000ポイントアップする！」

ガキーン！ と『ジャンク・ウオリアー』の右腕に装備され、少々不格好なアームに変わる。

ジャンク・ウオリアー：ATK 3300↓4300



「攻撃力4300!？」

「ちよつと奇妙な外見ですわね……」

「なんつーか、変？」

「面白い見た目ですニヤァ」

「オヨヨヨ! これは凄いいーノ!」

「フン、俺の『究極龍』アルティメットドラゴンには敵わんな」

観客席にはいつの間にか教師陣と海馬氏が移っていた。あれ? ボックス席にいたんじゃ……。

「『アームズ・エイド』を装備したシンクロモンスターが相手モンスターをバトルで破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与えます!」

「バット、ワタシのトゥーンモンスターは破壊されませうン」

「やっぱどこまで行ってもレッドはレッドだ」

「カードの効果を忘れるなんて、クズレッドにはあのカードは相応しくないわね!」

「今度皆で殴りこんで頂こうぜ! いくら化物でも人海戦術には勝てはしねえだろ!」

「で、先頭攻撃せ夫は誰がやるんだ?」

「…………… (ブンブンブン!)」

オメエら、その認識はレッドじゃ無くて記憶力悪いヤツだぞ。

数十人単位で首を激しく振っている奴らを睨みつけると、連中はガタガタと震えだした。

「ま、まさか聞かれた?!」

「この距離だぞ?! 50メートル以上は離れてるのに?!」

「化物を自称するだけはあるわね……」

「(ガタガタガタガタ!)」

さてと、最後のピースを埋めますか。『ジャンク・アタック』を使っても良いけど、流石にオーバーキルは、ね。心証悪くしちゃいけないし。

「リバースカード、オーブン! 『無限泡影』! ターン終了時まで『デーモン』の効果  
を再び無効にする!」

「しかし、今『トウーン・デーモン』の効果は無効にしても意味はありません!」

『アイツやつぱりバカだ!』

『さつきと同じ失敗するなんて、進歩が無いのね』

『カスレッドには勿体ねえカードばつかだぜ!』

「バット、狙いは他にある事くらい予想できマゝス!」

「その通り! 更にコイツと同じ縦列にあるカードは、このターンのみ効力を失う!」

「ワッツ!? 同じ縦列にあるのは——!?!」

「そう、貴方の『トゥーン・キングダム2』だ！」

無限泡影

【通常罫】

自分フィールドにカードが存在しない場合、このカードの発動は手札からでもできる。

(1) : 相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

セットされていたこのカードを発動した場合、さらにこのターン、このカードと同じ縦列の他の魔法・罫カードの効果は無効化される。

「フゥー！ これではトゥーンモンスターが！」

「ええ、これで心おきなく倒せます！ 行け、『ジャンク・ウオリアー』！ 『トゥーン・デーモン』を攻撃！」

背中のスラスターを点火し、空中で横に一回転しつつ『アームズ・エイド』の装備された右腕を振りかぶる。

「ッパワー・ギア・フィスト」オ！」

その右手は青白い悪魔を殴り倒し、その余波で相手プレイヤーをも吹っ飛ばした。  
「エ〜クセレンンンンンンントツ！」

ペガサス：LP 3900↓0

黎：WIN

ペガサス：LOSE

「素晴らしいデュエルをありがとうございました」

「こちらこそ。とても楽しかったです」

当面は十分なデータが取れた、と海馬さん。二人とも結構予定が押しているらしく、そろそろ出発しなくてはいけないらしい。

握手をガツシリとし、拍手喝采に包まれる。何人か妬ましそうな眼で見ているが無視しよう。特別になりたいなら、お前らも努力しろ。

努力もまた才能だ。それができないなら別の道を探せ。方法は星の数程ある。取得できるかどうかは自分次第だよ。才能が無い人間なんていないさ。他人と比べて劣つても、それが長所である事に変わりは無いのだから。

「ワタシ達はこれでサヨナラでゝス」

「次は俺とデュエルだ。その時を楽しみにしてるぞ」

「はい、次の機会にまた」

こうして、シンクロとエクシーズを世に知らしめる最初の一步がこの日に踏まれた。

もしかしたら、遊戯王の世界の、シンクロとエクシーズの存在は、俺のような転生者イレギュラーがもたらした物なのかも知れないと、静かに思った。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 24 : SALは間違いでSLAが正しい

SIDE : ももえ

あ、皆さん、こんにちは。

デュエルアカデミア女子オベリスクブルー1年生、浜松ももえですわ。

私がナレーションのようですね。はい、与えられた仕事ですもの。しっかりとやりますわ。

月一試験（結果は聞かないで下さい）から数日が経過した先日の事です。万丈目さんが三沢さんと退学を賭けてデュエルを行いましたわ。結果は三沢さんの勝利。『ウォーワードラゴン』の一撃で万丈目さんの残りライフを一息で削りきったあれは今思い出しでも背筋が痺れますわ。ああいうのを『バニツシャー』と言うのでしょうか（え、違うのですか？ 『フィンツシャー』？ それは失礼致しました）。

そして学園最強になるまでイエローで居続けるという理由で、ブルーへの昇格を蹴つてしまわれました。恐らくカイザー様が認めたというデュエリスト、遊城 十代さんが次のターゲットなのでしょう。

頑張つて下さいまし、応援していますわ!

そしてその翌日、敗れた万丈目さんの姿がどこを探しても見えないのです。まさか本当に退学になり、この島を去ってしまったのでしょうか……?

事の真相を確かめるべく、明日香様、ジユンコさん、フィオさんと共に外に出たのですわ。

そして今、正門からこつそりと抜け出して……。

……、どうして壁の下の方に空いている穴から声がしますの?

あれは……?

「げ、明日香!!」 それにジユンコにももえにフィオまで!」

あらら、噂(?)をすれば何とやら。2ヶ月前に偶然にも明日香様に勝利した遊城さんではありませんか。後ろにいらつしやるのは以前の覗き事件の犯人さんとお二人の同室の……、どちら様でしたっけ? お名前を伺った覚えさえ無いような……?

「ヒドいっす!」

「酷いんだな!」

「「?」」

地の文に突っ込まないで下さいな。一応これは私の心理描写なのですよ? それともテレパシーの持ち主でしたか?



ヒュウウウウウウウウウウウウウウツ、ドシイイイイイイイイイン！

「きやつ！」

「うわっ！」

何事ですか!?! 何か上から降って来たような……!?

「考える事は、皆同じか」

「全くだ」

あらら、またもや噂をすれば、ですわ。

「黎！」

「三沢くんも！」

「よう、サボタージュか？」

「キミ達も万丈目の行方が気になるんだね？」

今度は真上からですわね。まさかそんな所から参上とは思いませんでした。

件の三沢さんと、心優しい化物とブルー女子の中で意外と評判の遊馬崎 黎さんです

わ。人間の範疇から外れているとは聞きましたが、まさかあの窓の開いている3階から

三沢さんを背負って飛び降り……?!

まあ、兎に角、皆さん目的は『万丈目さんを見つucker』という共通したもので、このまま行動を共にする事になりました。

さて、面喰いなジュンコさんの為にも、あのイケメンさんの行方を捜して差し上げないと。

では、ナレーションの仕事はここまでです。後はどなたかお願いしますわ。

S I D E : 黎

オツケ、ナレーションのバトンタッチは完了だぜ、ももえ。

こんにちは皆さん。現在俺達は行方不明となった万丈目を探す為に、皆で授業をサボタージュしているところだ。まあ、彼がどうなったかは知っているから無駄と言えは無駄なんだが、そこはまあ、ノリで。

ちなみに大地を連れているのは仲間外れにしたくないからだ。この間の桜戦以降、なんとというかこのメンバーが固定っぽくなってしまったのだ。今度万丈目が帰って来たら加えてあげようかな？

にしてもあいつ、俺（イレギュラー）のせいでもどつかで野垂れ死んだりしねえよな？ もしそうだったら嫌だなあ……。

死んでたらまあ、骨くらい拾ってやらねえと。

違う。死んでる事前提に話すな。

まあ、この森のどこかで迷っている可能性もあるし。探しておくか。

ちなみに俺は万丈目VS三沢のデュエルは見えない。あの後精霊界からお呼び出し喰らって雷の力を受け取ったのがその日だったからだ。

俺の目の前にいきなり『双頭のサンダー・ドラゴン』が出て来て、「この間は力になれなかった。せめてものお詫びに。これを受け取ってほしい」だとさ。

だから俺の胸中には新しい、紫の結晶から生まれた雷の精霊の力が眠っているのだ。

なんて回想に耽っていると、明日香が隣で大声を出した。

「万丈目くうううううん！ デュエルに負けたくらいで雲隠れなんて、みつともないわよおっ！」

明日香の大声が森中に響く。ふむ、俺もやるか。

スウウウウウウウウウウウウ、と大きく息を吸い込む。バカなら女性の胸と思うのではないかと言える程に胸部が目一杯に膨れる。

その光景をあんぐりと口を開けていた皆は、これから想定される大声を予期し、一斉に耳を塞いだ。ありがたい。鼓膜が破れたら治すの大変だからね。

「くうおらあああああつ！ 万丈目エエエエエエツ！ 出えて来やがれこのプライドだけのお坊ちやんがあああああああつ！ 人の事さんざつばらバカにしてい、自分が負けたらバカにされるの怖いかゴラアアアアアアアツ！ 悔しかったら何か言ってみやがれこのクソツタレのバカガキがああああああああああつ！ ああああああつ！」

ビリビリビリビリ、と周囲に声の波動が伝わる。明日香の時は何羽かの鳥が飛んで行ったが、俺の時は森の木々が揺れ、鳥の大群が飛んで行った。

耳から手を離れた皆が、怒ったように俺に詰め寄る。

「なんつー大声出すんスか！」

「鼓膜が破れるかと思っただぞ！」

「つーかどっかで木が倒れる音したからな！」

「もう少し加減というものを知りませんの!？」

「まだ耳がキンキンするんだけど!？」

「うー、音がまだ良く聞こえないんだな……!？」

「貴方何かあつたら責任取れるの!？」

「うー、しまった。やり過ぎたか。昔から人には「加減を知らない」とよく怒られていたなあ。」

「あーその……、ごめんなさい」

「とりあえず謝っておこう。」



の森にはいないと見るべきだろうな」

そう言つて変身を解除する。スルリ、と胸元から黄色の宝玉と紫色の宝玉が出て来て手の中に収まった。意外と二つ同時の変身もできた。さつきは炎と風を掛け合わせられたし、今度何が良くて何がダメなのか調べておこう。

と、近くの草むらからガサガサと音がした。

「万丈目か？」

「しまったな、この近くは探知してねえや」

背の低い草むらだが、人が隠れるにはまあ十分だろう。

「ほら万丈目くん、隠れてないで出て来なさい！」

「いつものあの態度はドコ行つたの？ もっと堂々としなよ！」

明日香に続いてフィオがそう言った瞬間だった。

「ウツキイ——————ツ！」

『うわああああああああっ!!』

草むらから飛び出して来たのはほんだ……、もといデュエルザル。

「さ、サル!？」

「あー!? あのサル、デュエルディスクをつけてるぞ!」

腕や頭、胴の部分などに機械を取り付けてあるが、十代の言う通り、まさしくサル、英語で言うモンキーだった。

「ウツキイイ——ツ!」

「うわわわっ!?!」

突然、そのおサルくんは俺達に向かって飛びかかって来た。これはしつかりと覚えていたのでサツ、と俺は横に回避し、回し蹴りを叩き込む。

だが、向こうもサル者、違った、然る者であり、ピョンと軽くジャンプして躲すと逆に顔を踏み台にされてしまった。

「へぶっ!」

「黎?!」

そのままバランスを崩した俺はもんどりうって後頭部で地面に頭突き。柔らかい草地だったので一刹那だけ頭が揺れただけで、すぐに起き上がった。

「んなるお!」

このサルが! 化物ナメんなやあつ!

この時点でもう原作がどうこうはすっかり頭の中から抜け落ちていた俺である。

皆の中で暴れて人質を取ろうとしたサルに向けて俺は走り出した。



「喰らえー！」

流石に森の中で炎はマズいので、両手を金属に変えて殴りかかった。ヒラリと躲されてしまったが、それを予期していた俺は、避けた先に髪を伸ばして動かし、捕まえる。

「Capturing complete !」（捉えた！）

「ウキツ!？」

「やたっ！」

「ナイスだぜ、黎！」

へっ！ どんなモンだい！

が、サムズアップで十代達の方を向いてしまったのが失敗だった。

「ウキウキ、ウツキイ——ツ！」

「黎くん、サルが逃げてるツス！」

「へ？ あー！」

髪の毛を硬質化させるのを忘れていたせいで、あつという間に髪を引き千切って脱出してしまった。

「へ？ きゃあつ！」

しかもジュンコを連れて行かれた。クソツ！ 完全に油断した！

「スマン、油断した！」

「謝るのは後！ 今はジュンコを追いかけるのが先よ！」

「分かった、空から追跡する！ 十代、乗ってくれ！」

再び黄色の結晶を取り出して合体し、翼を生やす。背中に一人くらいなら乗せられる。

「お、俺?!」

「イザって時、お前は頼りになる！ 早く背中に！」

「わ、分かった！」

十代を背負うと翼を大きく羽ばたかせ、上空に一気に飛び立つ。木の高い所を移動しているの、見つけるのは容易だった。

「いた！ 皆、こつちだ！」

しかし、俺の言葉に答えたのは明日香達じゃ無かった。

「ぬう、あのサルを追うのじゃ！」

「はっ！」

例の研究所の所長と麻酔銃を持った黒服二名だ。チツ、奴らに見つかりと面倒だな。先に崖のトコまで行くか。

「飛ばすぜ、十代！」

「頼む！」



「ここまでだな、おサルくん」

「大人しくジユンコを返せ！」

海岸に先回り、したつもりだったが、残念ながら僅かに遅れてしまった。海岸にせり出した一本の木の上ではジユンコが「いや〜！ 助けてえー！」と叫んで暴れている。おいおい、バランス取らないと危ないぞ？

「レーイー！」

「十代！」

少し遅れて明日香達があの研究者のジジイと一緒にやって来た。

「何としてもあのサルを捕らえるのじゃ！」

「はっ!」

「人質はどうしますか?」

「構わん。あの小娘ごと撃て」

「ジャキン!」とポンプ音がして銃を構える黒服二人。

ジュンコに構わず麻醉銃を構えるその姿には少々怒った。

黒服が引き金に指を添えるよりも速く、俺は踵で銃を蹴り飛ばし、手に作り出した刃で麻醉銃を切断した。

ふうましようげつか  
「風魔昇月華!」

「うあつ!」「ぐあつ!」

切断されて4つの破片になった銃を拾って一呑みにすると、ギロリ、と殺気を込めて黒服とジジイを睨みつけた。

「オイコラ……、一般人巻き込むたあどういう了見だ、おい? 事と次第によつちやあ、テメエら……」

生きて帰さねえぞ?

「ゴ、極道ツスか!?!」

おっと、やり過ぎたか。反省。

それはまあ兎に角として黒服とジジイは殺気に脅えて動けないので、今の内に事態に収拾つけとかないと。

「おサルくん、俺の実力は今ので分かったハズだ。人質を帰してくれば穩便に済ます。さあ、彼女を返してくれないか」

動物は本能的に火と実力が確実に上の者を怖がる。それは自分の身を守るために必要なスキルだからだ。

「ひいひい……………」

「ウ、ウキキツ!」

だが、あのおサルくんはその本能を捻じ伏せてまで逆らった。彼の後ろのジュンコが恐怖を感じている事から殺気を感じていないワケでは無いのだろう。

「……………」

成程。そう言えばこのおサルくんは仲間の元に帰りたくて研究所を脱走したんだつたな。帰属意識が恐怖を乗り越えた、という訳か。

俺は静かに殺気をしまうと、十代を呼び寄せた。

「十代、ちよつと」

「ん?」

「(あのおサルくんの腕にはデュエルディスクがついている。つまり、デュエルで条件を呑ませる事ができる可能性があるんだ。俺とお前で彼とデュエルをやつて……………」

ボソボソと耳打ちをして作戦会議。納得したのか十代も囁き返す。

「(だつたらさ、こういう条件はどうだ? もしあいつが俺達の内どつちかにでも勝つたらあいつは自由。二人に負けたら人質は返す)」

「(名案だ。研究所に返さないあたりが特にな。実力行使は俺に任せな)」

そして二人してザツ、とおサルくんに向き合う。

「サル! 俺達とデュエルだ!」

「ルールはイージー。俺達二人と一回ずつデュエルを行い、俺達が二人とも勝つたら君の負け。人質は解放してもらおう」

「俺か黎、どつちかがお前に負けたら、お前は自由だ!」

「そのマシンを外すオマケもつけよう!」

「ちよ、何それえ! 意味分かんないんですけど?」

あー、悪いなジュンコ。一番平和的に解決する方法がこれなんだよ。

「ど、どうしますか?」

「構わん。良いデータが取れそうだ」

「データ？ どういう事だ？」

後ろの黒服達の会話に興味を持ったのは大地だ。

ジジイが早速説明を開始する。

「知っておるか？ 人間よりサルの人間よりサルの方が、デュエルモンスターズの精霊の力を感知しやすい、という説があるんだ。恐らくあのおサルくんはその為にそのジジイ共の研究施設に連れ去られ、精霊の力を具現化、或いは検証する為の実験動物にされていたんだろな。」

俺達の言葉がさつきから明確に伝わっているように見えたのは恐らくその実験過程でデュエルをおサルくんがやる必要性が発生し、その為に色々とされたか機械で思考回路を補助されているんだろ……そういう事だ」

「所長！」

「おつとスマヌ。つい喋ってしまった。まあそれであの名前をSuper Anima Learning、略してSALと名付けたのだ」

「まんまじゃん」

翔、ナイスツツコミ。

にしてもこのジジイ、口軽いな。



「ジジイ、その英文法は間違いだ。超学習動物とでも言いたいのなら、Super Learning AnimalかSuper Learned Animal、つまりSLA<sup>スラ</sup>とでも名付けるべきなんだ」

「ゴロを優先したのだ」

「あつそ」

そろそろ恐怖で精神が参つたらしく、木の上でジュンコが「早く助けてつてばあああああああああつ！」と叫んでいる。

喉潰すぞ？ というツツコミは置いておき、十代に先を促す。

「十代、先頼む。あのジジイ共にシンクロやエクシーズを見せたくない。お前がやってる間にデツキを急いで調整する」

「分かった。勝てるデツキを作ってくれよ」

「無論。デュエルにおいて、俺は妥協の二文字を用いない」

さあ、やろうか。猿芝居にならないお芝居を！

「『捨て身の突進』の効果で、『クレイマン』の守備力分のダメージを受けてもらう！」

「ウツキイ——ツ！」

サル：LP 0

「ガツチャ！ 楽しいデュエルだったぜ！」

改めて十代のデュエルセンスには惚れ惚れする。原作通りだったが、最初に『スパークマン』を出し、戦闘ダメージを低く抑えた事。返しのターンで『フレイム・ウィングマン』を出し、大きなダメージを与えた事。最後に『クレイマン』の高い守備力を利用してフィニッシュした事。全てが高いレベルのタクティクスだ。

「お疲れ様、十代」

「やったー！ アニキが勝ったツス！」

「まずは一勝なんだな」

互いに視線を合わせてパチリとウィンクする。それで十分に伝わったのか、十代は後ろに下がった。

草陰では他のサルが不安気に事態を見守っている。

「ウキイ……」

「ほらほらおサルくん、落ち込んでいる暇は無いぞ。まだ俺に勝つっていう道が残って

るぜ？ 仲間の元に帰りたいんだろ？」

「ウゝ、ウキッ！」

「その調子だ」

ガシン、とディスクが展開する。デッキをセットしたら、準備完了だ。

「おサルくん、行くぞ！」

「ウツキイ！」

『デュエル！』

黎VSサル

LP 4000 VS LP 4000

「先攻はもらおう！ ドロー！」

お、良いカードが来たな。

「手札のモンスターカードを1枚墓地に送り、『パワー・ジャイアント』を手札から特殊召喚！ この時、送ったモンスターのレベル分だけコイツのレベルは下がる。『ミスティック・パイパー』のレベルは1、よってレベルは5になる！」

『ヴォオオオオオ！』

パワー・ジャイアント：ATK 2200 / ☆6 ↓5

一番槍を任せるのはカラフルなクリスタルのゴーレム。攻撃力は申し分無いし、何よりももう一手を仕込むのに最適なカードだ。

「続けて手札から『金華猫』を召喚！」

『フニャアアゴ！』

「このモンスターを召喚した時、墓地のレベル1モンスターを蘇生させる事ができる。

蘇れ『ミステイック・パイパー』！」

『へッへエ〜！』

金華猫：ATK 400

ミステイック・パイパー：DEF 0

「ちよつとお！ マジメにやってよお！」

「やっているよ！ モンスター効果発動！ このモンスター自身をリリースする事で、

デッキからカードを1枚ドロウする。そしてそれがレベル1のモンスターカードの場合、相手に見せる事でもう1枚だけドロウできる！」

ポン、と笛吹きの方が光となって消滅し、デッキトップのカードが光る。これでドロウが許可されたという事なのだろう。

……ところでディスクじゃなくてカードが光るってどういう原理なんだろうね。

ミステイック・パイパー（効果モンスター）

星1

光属性／魔法使い族

ATK 0 / DEF 0

このカードをリリースして発動する。

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

この効果でドロウしたカードをお互いに確認し、レベル1モンスターだった場合、自分にはカードをもう1枚ドロウする。

「ミステイック・パイパー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「ドロウ。引いたのはレベル1の『ワタポン』。したがってもう1枚ドロウ！」

『ミステイック・パイパー』は召喚権を失い、かつ場に残らないという少々難しいモンスター。だが、場に防御の布陣を引き、『金華猫』を使えば1ターンに1枚という強力なドロースーツに化ける。

ちなみに2枚目がレベル1のモンスターでも3枚目は引けないので注意。

「ドロロー。そして手札に加わった『ワタポン』の効果を発動。通常ドロロー以外のドロローで手札に加わった時、場に特殊召喚できる！」

『ワタポン！』

ワタポン（効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 200／DEF 300

このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚することができる。

ワタポン：DEF 300

「もう一丁！ 同じレベルのモンスターが2体、俺の場にいる時『スロワースワロー』を特殊召喚！」

『はいー！』

「自身をリリースしてモンスター効果発動！ 次の俺のターン、通常ドロローを2倍にする！」

“ハーメルンの笛吹き”のような男の次は、綿を集めて作ったような生命体。そして最後には一瞬だけ登場した肩掛けカバンを下げた青いツバメ。

これで陣形は整った、後は迎え撃つのみ。

スロワースワロー（効果モンスター）

星1

風属性／鳥獣族

ATK 1000 / DEF 1000

このカード名の（1）の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

（1）：フィールドに同じレベルのモンスターが2体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

（2）：このカードをリリースして発動できる。



次の自分ドローフェイズの通常のドローは2枚になる。

「カードを伏せて、ターンを終了する。スピリットであるため『金華猫』は手札に戻る」  
 「成程、これで毎ターン通常召喚権をドローに変換できる寸法か。『パワー・ジャイアント』で失った手札もすぐに回復した。やはりやるな、黎」

「本来なら強力なモンスターを召喚できないデメリットになるけど、そこはさっきのよう  
 うに手札から特殊召喚しやすいモンスターでカバーするのね」

金華猫（スピリット・効果モンスター）

星1

闇属性／獣族

ATK 400 / DEF 200

このカードは特殊召喚できない。

（1）：このカードが召喚・リバースした時、自分の墓地のレベル1モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは除外される。

(2) : このカードが召喚・リバースしたターンのエンドフェイズに発動する。  
このカードを持ち主の手札に戻す。

黎 : LP 4000

手札 : 3枚 (内1枚は『金華猫』)

フィールド

: パワー・ジャイアント (ATK 2200)、ワタポン (DEF 300)

: 伏せカード1枚

「ウキッ！ 私のターン！」

さて、あのデツキはシヤレなのか何なのかサルを中心<sup>に</sup>作られたものだ。多くは知らないが、一発で状況を覆せるようなカードは記憶していない。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。……、猿が出るか？

「私は『怒れる類人猿』を召喚！」

『ゴガアアアッ！』

怒れる類人猿 : ATK 2000

荒々しいゴリラ（どう見ても教科書なんかに乗っている類人猿には見えない）が飛び出したか。あいつ、カードのイラストじゃ火い吐いてんだよなあ。

怒れる類人猿（効果モンスター）

星4

地属性／獣族

ATK 2000／DEF 1000

このカードが表側守備表示でフィールド上に存在する場合、このカードを破壊する。

このカードのコントローラーは、このカードが攻撃可能な状態であれば必ず攻撃しなければならない。

「更に装備魔法『ビッグバン・シユート』を装備！ これで『怒れる類人猿』は攻撃力が400アップし、更に貫通ダメージを相手に与えられる！

まだ終わらない！ 魔法カード『ダブルアタック』と『野性解放』を発動！ 『怒れる

類人猿』は守備力分パワーアップし、2回攻撃できるウツキー！」

「げげ!？」

ATK 2000↓2400↓3400

ちよ、おま、待て待て待て!?

いきなり貫通持ちの2回攻撃かよ!? つーか合計ダメージ4300じゃねーか!?

ビッグバン・シユート

### 【装備魔法】

装備モンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

ダブルアタック

### 【通常魔法】

自分の手札からモンスターカード1枚を墓地に捨てる。

捨てたモンスターよりもレベルが低いモンスター1体を自分フィールド上から選択

する。

選択したモンスター1体はこのターン2回攻撃をすることができる。

### 野性解放

#### 【通常魔法】

フィールド上の獣族・獣戦士族モンスター1体を選択して発動できる。

選択した獣族・獣戦士族モンスターの攻撃力は、そのモンスターの守備力分アップする。

この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「『怒れる類人猿』で『ワタポン』を攻撃！」

『ゴアアアアアッ!』

『ワタアアアアアッ!』

「続けて『パワー・ジャイアント』にも攻撃！」

『ガアアアアア!!』

『グオオオオオ!!?』

力任せに振られる剛腕。それは『ワタポン』と『パワー・ジャイアント』を断末魔の

悲鳴と共に殴り飛ばした。

「くっ！ 罨カード『スキル・サクセサー』発動！ 『パワー・ジャイアント』の攻撃力を4000アップだ！」

パワー・ジャイアント：ATK 2200↓2600

黎：LP 4000↓900↓100

「ひいー!? しつかりしてよ、ギリギリじゃないのー!?」

「悪い、油断があった！」

間一髪で強化した数値により、俺のライフは残った。場は空っぽになったけど、ギリギリセーフ。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド！ この瞬間、『野性解放』の効果を受けたモンスターは破壊される！」

『ゴガアアアア!?』

「やった、これでガラ空キツス！」

「これで直接攻撃のチャンスですわ！」

グガガ、と強すぎる力を得たゴリラが突如として苦しみ、ポリゴンの欠片として爆散

する。ちなみに「野性」であって「野生」じゃない点には注意。

さて確かにチャンスに見える、だが奴の墓地には……！

「獣族モンスターが効果で破壊されたこの瞬間、墓地の『森の番人グリーン・バブーン』の効果発動！ ライフポイントを1000支払う事で特殊召喚できる！」

「いつの間にな!?」

「やはり『ダブルアタック』の時に捨てていたのはそれか！」

LP 4000↓3000

ATK 2600

森の番人グリーン・バブーン（効果モンスター）

星7

地属性／獣族

ATK 2600／DEF 1800

(1)：このカードが手札・墓地に存在し、自分フィールドの表側表示の獣族モンスターが効果で破壊され墓地へ送られた時、1000LPを払って発動できる。

このカードを特殊召喚する。

サル：LP 3000

手札：0枚

フィールド

：森の番人グリーン・バブーン（ATK 2600）

：伏せカード1枚

砕け散ったゴリラの後から生まれたのは、棍棒を担いだ巨大な狒々。ライフコスト1000で26打点はこの時代だと脅威だな。

やるな、おサル君。良い戦術だ。

「一発良いヤツ貰っちゃったよ、俺のターン！ 『スロワースワロー』の効果で2枚ドロロー！」

手札はこれで5枚、こっから挽回だ。

「もう1度『金華猫』を召喚！ 効果で蘇れ、『ミステック・パイパー』！」

『ミャオ！』

『ホオッ！』



ATK 400

ATK 0

「リリースして効果発動！ カードを1枚ドロウする！ 引いたカードはレベル1の

『グレイブ・スクワーマー』！ よってもう1枚ドロウ！」

「よし、良いぞ、順調にデッキを掘り進んでいる」

「黎の得意技、デッキを削って墓地に溜めていく戦術だな。俺も真似しようつと」

おーっし、デッキの回転も順調。このまま押し込む！

「手札1枚を墓地に送り、『THE トリツキー』を特殊召喚！ 『グレイブ・スクワ-

マー』を墓地へ！」

THE トリツキー (効果モンスター)

星5

風属性／魔法使い族

ATK 2000 / DEF 1200

(1) : このカードは手札を1枚捨てて、手札から特殊召喚できる。

ATK 2000

『グリーン・バブーン』の攻撃力は2600！ 『トリツキー』より高い！』

「慌てるなエテ公、俺は装備魔法『災いの装備品』を発動！ これを『グリーン・バブーン』に装備し、その攻撃力を俺のモンスター1体につき600ダウンさせる！』

「ウキツ!？」

災いの装備品

【装備魔法】

装備モンスターの攻撃力は、自分フィールド上に存在するモンスターの数×600ポイントダウンする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択してこのカードを装備する事ができる。

森の番人グリーン・バブーン：ATK 2600↓1400

「攻撃力が『トリツキー』を下回ったッス！」

「もう一丁！ 速攻魔法『速攻召喚』発動！ 手札からモンスター1体を召喚できる！  
来い、『クリバンデット』！」

『バンデット!!』

「俺のモンスターが増えた事で、『グリーン・バブーン』の攻撃力は更に600ポイント  
下がる！」

クリバンデット：ATK 1000

森の番人グリーン・バブーン：ATK 1400↓800

いやあ便利だねえ『速攻召喚』。速攻魔法つてのが特に良い。

怪しいオーラの鎧で攻撃力が下がった狒々に対し、こちらは奇術師・毛玉・妖猫の3  
体。勝負アリだ。

「バトル！ まずは『トリツキー』で『グリーン・バブーン』を攻撃！」

「リバースカード、オープン！ 罨カード『パワーウォール』！ バトルダメージ10  
0ポイントにつき1枚カードを墓地に送り、そのダメージを無効にする！」

「何だと!?!」

パワー・ウォール（アニメ効果）

【通常畏】

自分が受ける戦闘ダメージ計算時に発動できる。

デッキの上から任意の枚数分墓地へ送り、自分が受けるダメージを墓地に送ったカードの枚数×100ポイント少なくする。

〈墓地に送られたカード〉

『アクロバットモンキー』

『DNA改造手術』

『ボルテック・コング』

『怒れる類人猿』

『サルベージ』

『スクラップ・コング』

『落とし穴』

『闘争本能』

『森の番人グリーン・バブーン』

『魂の解放』

『礫岩の霊長—コングレード』

『天使の施し』

指の間に挟まれたナイフが投げられ、大猿が打ち倒されるも、障壁でデュエル猿のライフを削るには至らなかった。

しまった、アニメ効果か。一気に12枚も墓地に落とさせちまったな……。というか今、ネタ枠混ざってなかった？

「続けて『金華猫』と『クリバンデット』でダイレクトアタック！」

「キッ！」

サル：LP 3000↓2000↓1600

クツソ、墓地の『スキル・サクセサー』と合わせてこのターンで終わらせるつもりだったのに！

仕方ない、何とか耐えるしかないか。幸いにもおサル君の手札は0枚、何とかなる筈。「バトル終了。カードを1枚伏せる。そしてエンドフェイズに『金華猫』と『クリバンデット』の効果発動。まず前者は手札に戻る。そして後者は自身をリリースしてデッキ

からカードを5枚めぐり、その中にある魔法・罨1枚を手札に加えて残りを墓地に埋葬する」

一瞬で俺のモンスターは2体とも煙のように立ち消え、俺の手札の2枚に変化する。さて、リバースカード1枚だけで耐えられるか……？

クリバンデット（効果モンスター）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 700

（1）：このカードが召喚に成功したターンのエンドフェイズにこのカードをリリースして発動できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

その中から魔法・罨カード1枚を選んで手札に加える事ができる。

残りのカードは全て墓地へ送る。

「俺は……『ワン・フォー・ワン』を手札に加え、残りは墓地に送る。ターンエンド！」  
墓地に行ったカードは『ダーク・バースト』『無抵抗の真相』『ワンチャン!』『ジェス

ター・コンファイ。いやあ酷いこつて、普通に來たら事故ですわコレ。

黎：LP 100

手札：2枚（『金華猫』『ワン・フォー・ワン』）

フィールド

：THEトリツキー（ATK 2000）

：伏せカード1枚

「私のターン！ 私は『強欲な壺』を発動！ デツキから2枚ドロ―！」

ここでドロ―ソースか、引きが良いのか俺がデツキを削らせたせいか……。

「『怒れる類人猿』を召喚！」

「3体目だど!？」

おいおいおいおい、研究者さんよ。いくら何でもアレを3積みは無いだろ!? もつと

良いカード無かったの!?

さてどうする、残りの手札1枚でどう動く。『トリツキー』と『類人猿』の攻撃力は互

角……、いや待てまさか……。

「行くぞ、バトル！ 私は『怒れる類人猿』で『THEトリツキー』を攻撃！ //

アクロ

バット・ゴリラ!!」

『アクロバットモンキー』の時と言い、もっと良い技名にしてやれよ! 迎え撃て、トリック・キリング!!」

激怒するゴリラと? 面の奇術師の拳がぶつかり合い、爆炎と共に弾け飛ぶ。

これで互いのモンスターはいなくなったが……。

「相撃ち狙いだったのかしら?」

「いや、恐らく奴の最後の手札は——」

「この瞬間、手札の『森の狩人イエロー・バブーン』のモンスター効果! 自分獣族モンスターが戦場で破壊された時、墓地の獣族モンスター2体を除外し、特殊召喚できる!」  
「やはりか!」

森の狩人イエロー・バブーン (効果モンスター)

星7

地属性/獣族

ATK 2600/DEF 1800

自分フィールド上に存在する獣族モンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する獣族モンスター2体をゲームから除外する事で、このカー



ドを手札から特殊召喚する。

おサル君の墓地から『怒れる類人猿』2枚が吐き出され、代わりに召喚の光と共に弓を持った狒々が登場した。

これはもう暫く後の時代に登場した「バブーン」の動きか……！ 十代の時はデッキを掘り進められず出て来なかったんだな!?

ATK 2600

「バカな、ここに来て攻撃力2600のモンスターだと!？」

「トドメ! 『イエロー・バブーン』でダイレクトアタック!!」

「黎のライフは残り1000!」

「この攻撃を受けたら終わりよ!」

「イイヤアアアアツ!？」

ギチギチと弓が引き絞られ、俺の心臓目掛けて今にも矢を放たんとする。

良い腕だ、おサル君。こんな形じゃなければ、君ともつとデュエルを堪能したかった。だが、この俺に敗北は許されない!

「トラップ発動、『ガード・ブロック』！ 戦闘ダメージを打ち消して1枚ドローする！」

ガード・ブロック

【通常畏】

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「ふう、危ない危ない。それで、どうする？」

「……私はこれでターンエンド！」

サル：LP 1600

手札：0枚

フィールド

：森の狩人イエロー・バブーン

：魔法・畏無し

間一髪でバリアを展開しダメージを消したが、状況は全く芳しくない。このデツキ【金華猫】は打点が無いから、攻撃力2600と上級モンスターには物足りない数値でも、今の俺には中々に致命的である。

自分の手札を見る。

『金華猫』

『ワン・フォー・ワン』

『バトルフェーダー』

当然ながら、これじゃあ勝てない。1ターン引き延ばすくらいは可能だが、ジュンコをいつまでも怖いままにするワケにもいかないだろう。勝負はこのターンのドローク次第だ。

嗚呼、学友のピンチだというのにワクワクする。この勝敗をかけて血潮を滾らせるこの瞬間、堪らない、堪らない堪らないッ!!

「俺の、ターン！ 三度出番だ『金華猫』！ そして『ミステイック・パイパー』！」

ATK 400

ATK 0

またまた登場する黒い猫と笛吹きの子。

流石に3度目は疲れたのか、どこかげんなりしてる。

悪いね、もうちよい頑張ってくれ。

『『ミステイク・パイパー』の効果発動！ リリースして1枚ドロ！』

……来たぜえ！

「悪いがおサル君」

「ウキ？」

「俺の勝ちだ」

「キキツ!?」

このデッキは打点が確かに足りない。

足りないのなら……、用意すれば良い！

「このカードは、墓地の光属性モンスター1体を除外する事で、手札から特殊召喚できる

！ 出でよ、『暗黒竜 コラプサーペント』！」

『ジャアア！』

ATK 1800

暗黒竜 コラプサーペント（特殊召喚・効果モンスター）

星4

闇属性／ドラゴン族

ATK 1800 / DEF 1700

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地から光属性モンスター1体を除外した場合のみ特殊召喚できる。

この方法による「暗黒竜 コラプサーペント」の特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

（1）：このカードがフィールドから墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「輝白竜 ワイバースター」1体を手札に加える。

墓地の『ワタポン』が吐き出され、緑眼を光らせた黒鱗のワイバーンが手札から現れる。

これで準備完了！

「そしてこのカードは、自分フィールドの獣族と闇属性ドラゴン族モンスターを1体ずつリリースする事で、『融合』魔法を使わずに特殊召喚できる！」

「『融合』無しで!？」

「融合召喚だ?!」

周囲が薄暗くなると同時に赤色と青色の渦が産まれ、浮かび上がったそこに黒い竜と猫が溶け合う。

「久遠を齎す妖猫よ、黒き冥空の竜よ! ここに一つに重なりて、新たな力を生み出さなさい!」

さあお披露目といこうか、とくと拝んで砕け散りやがれ!

「融合召喚! 出でよ、野獣の眼光りし獰猛なる龍! レベル8! 『ピーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』!」。

『キュアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

ATK 3000

召喚の渦から現れたのは、赤い鱗に黄色の鎧、青い毛並みを持つ大型のドラゴン。『金華猫』素材じゃちつと物足りないが、今はこれで十二分!

勿論、こつそり『ワイバースター』をサーチしておくのは忘れない。

ちなみに「融合召喚」とは言ったが、これ実は融合召喚扱いじゃなかったりする。

「ここで俺は、墓地の『スキル・サクセサー』の効果を発動。墓地からこのトラップを除

外し、俺のモンスターの攻撃力をターン終了時まで800アップさせる！」

「ウキ!? 墓地から罫カード!」

「墓地から!」

「トラップが発動した!」

お約束サンキュー皆、そういうトコ好きだよ。

ATK 3000↓3800

「う、ウキ……!」

「バトルだ! 行け、『ビーストアイズ』! 『イエロー・バブーン』を攻撃! //

「イブバースト!」

「ガアアアツ!」

「ゴオオオオ!」

野獣の眼光を持つ龍の吐き出した炎で黄色い狒々が焼き尽くされる。

手軽に出せる攻撃力3000を更に底上げしたのだ、この時代にこれを防ぐ手段は無い筈だ。

そして、これで終わりではない。

「ウツキイ!？」

LP 1600↓400

「まだだ、まだ私のライフは残っている!」

「残らない! ここで『ビーストアイズ』の効果発動! 相手モンスターを破壊した時、融合素材に使用した獣族モンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える! 『金華猫』の攻撃力は400、そしてお前のライフもまた400!」

「って事は!」

「ジャストキルね!」

「これで終わりだ、<sup>ズ</sup>ビーストソウル・バーン!!」

「ウキイイイイイイイイイイイ!!?」

野獣の炎は狒々を焼いただけで留まらず、猫の形を取って相手に向かう。  
灼熱の炎、そして猫の魂の突撃がおサルくんを襲い、そのライフを削り切った。

LP 400↓0



黎：WIN

サル：LOSE

スキル・サクセサー

【通常畏】

自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで400ポイントアップする。

また、墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択した自分のモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで800ポイントアップする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できず、自分のターンにのみ発動できる。

ビーストアイズ・ペンデュラム・ドラゴン（融合・効果モンスター）

星8

地属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2000

ドラゴン族・闇属性モンスター+獣族モンスター

このカードは融合召喚及び以下の方法でのみ特殊召喚できる。

●自分フィールドの上記カードをリリースした場合にエクストラデッキから特殊召喚できる（「融合」は必要としない）。

(1)：このカードが戦闘でモンスターを破壊した場合に発動する。

このカードの融合素材とした獣族モンスター1体の元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

「これで俺達の2勝だ」

「さあ、ジュンコを返してもらおうぜ！」

俺達がそう言うと、おサルくんはトポトポと木の上に向かい、ジュンコを丁寧に地面に下ろした。パタパタパタ、とジュンコが急いでこちらに走って逃げる。

「ひいん、怖かったです明日香さあーん！」

「ああ、よしよし。もう大丈夫よ。後で2人にお礼を言いなさいね」

「さて、おサルくんちよつと」

「ウキ？」

ジュンコが安全に内陸に逃げたのを確認すると、スタスタとおサルくんに近づく。装着されたマシンを軽く調べると、どういう構成なのかが大まかに分かった。

「( )をこうして……。ほい一丁上がり」

「ウキキ？」

ガキン、と伸ばした爪を上手く機械の接合部に合わせておサルくんの体から引き剥がしてやる。そのまま放置するのも何なのでペロリと呑み込む。

「ほら、群れにお帰り。君はもう自由だ」

「ウキ……、ウツキ！」

「おい食ったぞあいつ、メカ食ったぞ」

「今更ですわ」

「僕らはもう悪食は見慣れたツス」

最初は状況がよく解らなかつたのか首を傾げていたが、呑み込むと嬉しそうに群れの方へと走って行つた。群れの仲間も嬉しそうにハシヤいでいる。

ちなみにデュエルディスクはそのままにしておいた。お土産だ。

「ちよつと待ちたまえ！ そのサルを逃がすというのか！」

「SALは我々の研究の成果だ！ 返してもらおう！」

後ろのジジイ共が煩い。面倒だがこのままではおサルくんの群れに飛び込んで乱獲しかねないので、再び殺気を纏って振り返る。

「あ？ 寝呆けた事ほざいてんじゃねえぞ、オイ？」

「ヒイツ！」

武器を持ってない事を確認して殺気をしまう。それから十代の方を向き、アイコンタクトで呼吸を合わせる。

「だってなあ、十代。俺達の出した条件は『こっちの2勝で人質の解放』と『あつちの1勝で自由の身』だぜ？」

「ああ。『研究所に返す』なんて一言も言っただけもんな」

ぬう！　と言葉に詰まるジジイ&黒服2名。は、いい気味だ。もつとちゃんと条件は確認しておかないと、保険とかで痛い目見るぜ？

「な、ならば群れごとで構わん！　力尽くで」

「力尽くつつーんなら、相手になるぜ……？」

ベキリ、と袖捲りをした右腕が音を立てて変形する。サイズは二倍、三倍と膨らみ、指先には鋭利な爪が生えた。

色も変える。黄色人種らしいベージュ色の肌からドス黒い赤へ。さながら悪魔とでも呼べる腕に変化した。

「ヌーン！」

ゴシャッ！　と近くの岩を拳で殴って粉碎する。デモンストレーションとしてはこれで十分だろう。

「どうする……？　丸腰でも良いって言うんなら、止めねえぜ……？」

「ヒー！」

「こ、怖いッス……！」

「黎の底が知れない……」

「か、解剖学でも学んでみようか……」

皆が何か言っているが、気にしない。案外傷つく事を言っているケースが多々あるので、こういうのは無視するのが処世術のコツです。

腰を抜かしたジジイ共は、慌てて後ろ向きに後ずさる。そして一人の足に当たった。

「な、なんじゃ!?!」

『大徳寺先生！』

スラリとした長身、グレーの長い髪、細長い目に「ニャー」が口癖の錬金術教師、大徳寺先生だ。

後のアムナエルでもあり、『アームド・ドラゴンLV7』や攻撃力が倍になった『サイバー・ブレード』相手に勝利を収めた猛者でもある。腕や膝の上で「ニャー……」と時折眠たげに鳴く、デップリと太った愛猫アラオがトレードマークとも言える。

「はい黎君、その辺にしておくのニャー。君まで悪くなつてしまうのニャー?」

「む、分かりました」

そう言われては仕方がない。腕を元の人間の物に戻すと、捲った袖を元に戻した。

続いて大徳寺先生はジジイ共を見て「あなた達もですニヤ」と続けた。

「事が公になれば、マズいのはあなた達ですニヤー？ 動物虐待で訴えられてしまいますよ？」

そう言われて何も言い返せなかったジジイ共は、踵を返してどこかへ帰って行った。

あいつらみたいな奴らに虐げられる動物が一匹でも多く減る事を、俺は切に願うのだった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 25 : 「もうあの時の俺じゃない」

——港の灯台付近

SIDE : 黎

「海に？」

「はい。私もあれから気になって万丈目くんの行方を調べていたんですニャ」

そしたら今朝のうちにこの島を出て行ったそうですニャー。そう大徳寺先生は続けた。

そうか、無事に原作通りに進んだか。

海の果てに一隻の船が見えた。この距離では残念ながら俺でもよく見えないが、あれがそうなのかも知れない。そんな事を少しでもだけ考えた。

「きつと万丈目もどこかでこの空を見ているさ」

「アニキそれはちよつとクサ過ぎツス」

「あはは、やっぱりそうか？」



あはははは、と笑いが漏れる。この平和を、俺は享受したかった。でも、今は目の前にあるこの平和を受け取っても、嘔み締めてはいけない。

俺は今、世界の為に、そして何より都を取り戻す為に戦っている。あいつが苦しい思いして待っているのに、俺だけこんなところで笑って過ごす訳にはいかない。

だから俺は一步後ろに下がった。その場に留まっていたら、きつと幸せに包まれてしまうから。世界に復讐する前に、この幸せを受け取ったら、もう復讐の事なんて考えられないだろうから。

そして、この一步がこの後の明暗を分けたのかも知れなかった。

「！」

突然に感じた、あの気配。ネットリして生温かいスライムのような、胃の中に溜まったドブ川の汚水のようなこの不快な感触。

近い！

辺りをキョロキョロと見回していると、不審に思ったファイオが俺に話しかける。

「黎？ どうしたの？」

『マスター、近いです！』

「え!? い、いや黎から2メートルくらい離れて……」

『違います! 邪神の気配です!』

そのフレイの言葉でやっと俺の行動に合点がいったのか、ファイオも感覚を研ぎ澄ませて周囲を見回す。

流石に二人も何かを探す行動をすれば疑問に思ったのか、皆もこつちを向いた。

そして、とうとうその場所が分かった。

「ニヤ? 黎くん、何を探して」

「大徳寺先生、伏せろおおおおおおつ!」

「い、ヒイイツ!」

ブウン! と気合一閃、生み出した刀が空を斬る。タツチの差でしゃがんだ大徳寺先生の頭のあつた場所で俺の黒い刀とあの黒い双刀がぶつかり合った。

ガキーン!

「チツ! 外しましたか、死に損ないの分際で邪魔してくれませぬ!」

「不意打ち、しかも俺自身を狙わないとはね。ご大層な名前のクセして誇りとかは全然無いんだな、プライド!」

「い、言ってくれますね……! こつちは貴方を殺せば良いんです、正々堂々やる必要性は全く無いのですよ!」

そう、空間からいきなり飛び出し、大徳寺先生ごと俺を斬殺しようとしたのはあのプライドだった。

今日も黒いテンガロンハットに黒いマント、黒目黒髪と、全身真っ黒だ。

「あああつー！」

「お前はー！」

「この間黎を殺そうとした奴ー！」

翔、十代、フィオの叫びにプライドは不気味に笑って正解、と答える。

「ククク、この間までは別にほつといっても良かったんですがねえ。ですが先日、精霊界に侵攻した時、貴方が邪魔してくれたお陰で邪神様の消費した力に見合う結果を得られなかったのですよ。」

おまけに新しい力も得た。これでは我々の邪神様が復活するのに邪魔である以外の何者でも無い。故に……」

「排除しに来た、か？」

「その通りです」

はん、それなら話は早い。

油断無く俺は双刀を生み出して構える。

「フフフ、私に剣技で敵うとでも？」

「減らず口を利く前に構えたらどうだ？」

挑発には挑発で返す。この男にはそれが一番良く効く。

そつと後ろを向き、皆にウィンク、更に顎で港の入口の方を指し示す。これで大体伝えたい事は伝わったはず。

(コクリ)

どうやら伝わったようだ。大地と明日香が頷き、皆をそつと誘導する。OK、ありがとうな。

(明日香!?! どうして逃げるの!)

(シッ! 静かに。ここにいたい気持ちには分かるけど、それは彼の邪魔になるだけよ)

明日香が今にも飛び出しそうなフィオを押し留める。

(天上院くんの言う通りだ。黎はこのままプライドと真つ向勝負に持ち込むつもりなんだ。ならあそこにいいても人質が関の山だ)

(なるほど、さっきの大徳寺先生みたいになっちゃう訳ね)

(酷いニヤア! 私是人質になつてないニヤア!)

(黎くんが助けてくれなかったら、今頃先生首から上が無かつたツスよ!)

ジュンコの言葉に大徳寺先生が涙目になつて抗議するが、翔の言う事も最もだと思つたのか、押し黙ってしまった。

「ふ、今度こそ冥土に送っておげますよ！」

「断る！ 死ぬんだつたらテメエが死んどけ！」

プライドは双刀を1つに重ね合わせ、1本の分厚い剣に変えた。双剣同士の戦いでは決着をつけにくいと判断し、ああして別の武器にしたのだろう。

邪神復活が遠のき、焦っている証左だ。得意の分野で確実な勝負を持ち込まず、目先の勝率に手を伸ばした。

「ぬえやー！」

気合を込めてプライドが真上から剣を振り下ろした。

これを俺は後ろに引いて回避すると、右の刀を振るう。体をのけ反って回避されたので続けて左も振るう。

「はっー！」

「らっー！」

左の刀を跳んで躲したプライドは真上から重量を込めて剣を叩くように振り下ろす。これは双刀をクロスさせてガード。

そのまま交差を解く段階で跳ね飛ばし、距離を一気に詰める。右の刀と剣がぶつかり合つてまた距離が離れ、今度は再び刃同士が均衡を保つ。

至近距離で互いを睨み合う。改めて見るとこいつの顔は吐き気がする。嫌味でも何

でもなく、生理的嫌悪感を呼び出すような顔の作りだ。いかにも「オレ様は偉いんだから敬え愚民」とでも言っているかのように見える。

「はあっ！」

再び跳ね飛ばし合って、今度は俺が斬りかかる。狙いは奴の頭。

だがプライドはこれをしゃがんで回避し、逆に俺を空中に蹴り飛ばした。空中コンボのように連続で俺の体が空中で蹴られて踊る。つてか、空中コンボ決めるヤツなんて21年生きてて初めて見たぞ、俺。

「ぐっ！」

全て金属で覆った皮膚でガードしたが、落下のダメージまでは殺しきれなかった。

撃墜した俺を、一瞬遅れて着地したプライドが冷ややかに見る。

ペツ、と口の中に入った砂粒を唾液ごと吐く。

「やるな」

「褒めても何も出ませんよ」

「元より期待して、いない！」

ブン！ と左の刀を空振ってフェイントし、逆の腕で持つ本命の刀、つまりは右の刀を目一杯振るう。

ギユオオオオオオオオオオ！ と空色の閃光が放たれ、ビーム砲のように至近距離で



こいつはただの鞭じゃ無い。細かい爆薬が仕込んである爆弾でもある。

これを「風破閃斬」に奴が怯んでいる隙に炎の力に交換した精霊の力を使って爆発力を強化した。俺の手元から少しづつ強くなる小爆発が起こり、奴の元に向かう頃には岩をも吹き飛ばせる大爆発になっているという寸法だ。

「見下すのは勝手だが、それで痛い目見てちやあ世話ねえな」

「ぐ、こんのお……!」

ギン! と殺気を込めた視線で睨みつけるプライド。こちらも殺気を込めて睨み返す。

「そつちがその気なら、私も奥の手です!」

スウ、とプライドが大きく息を吸い込むと、その体が大きく膨らむ。2倍、3倍、4倍……。更に体の形まで変わって来た。細く、長く、目は8つに増え、赤く凶暴な光を宿している。

背中には翼が生え、腕と足がトカゲや蛇のそれに変わる。ついでに角も生えた。

そして若干浮いているようだ。翼は動いていないので飾りかも知れない。

それは見上げる程大きな、赤黒い竜だった。

「……古来より竜は東洋においては神聖視され、西洋においては邪悪なものとされた。成程、お前らの由来がキリスト教における「原罪」なら、竜という邪悪な姿を持ってい



るのも領ける」

何よりの特徴はその翼だ。二対四枚の大きな翼は、まるで闇に染まった天使の羽根だった。

「世界創造の時、熾天使ルシフェルは天界に刃向ってその座を剥奪され、大天使から墮天使に墮ちた。そして悪魔になったそうさ。故にルシファアは悪魔の王でありつつも墮天使。そして七つの大罪の一角、傲慢を司る。お前のその四枚の翼が、自分がそういう存在であると物語っているよ」

多少自分なりの見解が混ざっているが、概ね間違った事は言っていない。

プライドはその発言を無視して語る。

『覚悟は宜しいかな?』

「冗談。俺はまだ死なねえし、後ろの皆も」

短く切ると、俺は灯台を踏み台にして高く跳び上がった。奴が吐いた炎を体を振じって回転しながら躲すと、身の丈を超える大斧を取り出した。

「死なせない!」

斬! 一閃して奴の額を叩き割る。言葉にできないような悲鳴を上げ、プライドが苦しむ。

そのまま風の力を使って空高く舞い上がる。



フィオを始めとした皆が手を振りながらこちらにやって来る。

「へへへ、勝ったね、黎」

「デュエルじゃ無かったけどな」

「アタシ、生まれる世界間違えたのかしら……？」

「大丈夫ツス。きつと神様のちよつとした悪戯ツスよ」

「悪戯それで済むとは思えないですわ……」

「さつきはありがとうですニヤー」

「ニヤー……」

皆が皆、一切の怪我無く俺を賛辞する。ファラオの眠たげな声も、今は平和の象徴みたいで気分が「おんのれ、このクソがあああああああああつ！」……、一気に悪くなつたよ。

海中から水気を吸って重くなった服を着つつもピンピンして生還を果たしたって、こいつ人間じゃねえ！ あ、人間どころか生き物かどうかも怪しいのか。

「プライド、生きていたか」

「勝手に殺さないでほしいですね！」

しかもまだ理性は健在。

「ぜえ、ぜえ……。奥の手を使ってこれとは……。まあ構いません。貴方がデュエルで

勝たなければ、私は何度でも生き返ります。私が負けさえしなければ事態は進展しない。然るに、私がデュエルを受けなければ、貴方は義妹の所に辿り着けない！」

「だが、お前は俺を殺さなくてはいけない。リアルファイトじゃ無理だった以上、闇のゲームで勝つて命を奪わなくちゃいけない。違うか？」

「うー！」

「プラス、このままスゴスゴと帰れば、邪神や他の七つの大罪に合わせる顔が無い。かと言つてデュエルで負ければお前は命を失うからできれば避けたい」

「ぐー！」

俺の指摘は確実に的を射ているらしく、プライドの気味の悪い笑顔がドンドン引き攣っていく。

俺はそれを内心で笑いながら止めを刺す。

「要するにお前は勝敗に関わらず、俺とデュエルするしか選択肢は無い訳だ」

「ぬううううっ！」

ダンダンダンダン！ と地団太を踏むプライド。今回の心理戦はどうやら俺に有利に傾いているようだ。奴は今完全に理性を失っており、プライド（ややこしいが、こっちは「誇り」と訳せる方）にけしかけてやればこいつはますます取り乱すだろう。

「この！ このこのこの！ 人間の分際で！ 化物の分際でっ！」

「人間の視点で見ればお前も十分に化物だ」

「キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！」

地団太を踏むペースと強さが1段階ぐらいアップした。

暫くは何も聞こえないだろうと思いい、今は冷やかな目で見下す。今まで人を見下した事なんてあいつら以外になかった。だが、俺は今、ハッキリとこいつを見下す。分かる、こいつには尊敬できる点なんて何も無い！

やがて、少々落ち着きを取り戻したプライドは虚空に手を伸ばした。

ギユオオオオオオオオオオオオオオオオッ！ とその掌に闇が集まる。集まった闇は見覚えのある形を成した。ディスクとデツキだ。

「殺す！ 殺します！ 殺して差し上げます！ 私の闇のデュエルで、骨肉も塵芥も残さずにぶつ殺して差し上げますよ！」

ガジャン！ と展開したディスクは、どこか禍々しい。デツキからもとんでもない邪気、というか邪神の気配を感じた。正直、精神の弱い人間なら吐き気どころか狂乱しかねないぐらいだ。

「クラクラして来ましたわ……」

「アタシも……」

「僕もツス……」

現に後方10メートル以上離れているももえ、ジュンコ、翔には影響が出ている。

恐らく俺に影響が無いのは精霊の加護みたいなものがあるからだろう、結晶を秘めた胸の内側が少し熱い。

「もう少し離れよう?」

「奴の影響は、ここにいてももあるようだ。実際、俺も少々気分が悪い」

幸い、フィオと大地が更に奥の方へと誘導してくれた。精霊持ちの十代や気の強い明日香には変化が見られないが、他の皆は多少なりとも顔色が悪い。

プライドが空中に白いガラス玉のようなものを打ち上げた。風船くらいの大きさだろうか。上空10メートルくらいのところで停止する。

「無様な姿を島中に晒しなさい!」

懐のPDAの動画受信の着信音が鳴る。そこには俯瞰的な視点で俺とプライドがリアルタイムで映し出されていた。

どうやらあの球体はビデオカメラのようなものらしい。仕組みはよく分からないが、深く考えても仕方がないので、考えるのはやめておく。どうせ科学では証明できないし、物理と化学は文系の俺には上手く扱えない。

「さあ、デュエルです!」

「受けて立つ」

ガシャン！ とこちらもディスクを起動させる。そしてホルダーに入れておいたデッキを差し込んだ。

「ククク、前回、あれだけ痛い目にあったクセに、まだ私に勝てると思ってるらっしやるのですか。哀れ！ あまりにも哀れですなあ！」

「言ってる。俺はもうあの時の俺じゃない。皆から力を分けてもらい、何段階も強くなった。もうお前如きには負けはしない！」

「ならば証明してみなさい！」

「望むところだ！」

パチンツッ！ とプライドが指を鳴らすと周囲に薄暗い闇が立ち込める。見通せない程じゃ無いが、それが逆に恐怖心を煽り立てる。

闇のゲームの、スタートだ。

『デュエル！』

t o b e c o n t i n u e d

STORY 26:「貴方は生まれて来てはいけなかったの  
ですよ!」

SIDE:黎

『デュエル!』

黎VSプライド

LP 4000 VS LP 4000

「私のターン、ドロー! 手札からフィールド魔法『集中豪雨地帯』を発動です!」  
「いきなり来たか!」

再び始まった俺とプライドの闇のゲームによる一騎打ち。先攻を取ったプライドは早速お得意の豪雨を降らせる。こいつには前回かなり酷い目に遭わされたな。



集中豪雨地帯（オリジナル）（フル表記改訂版）

【フィールド魔法】

- (1) : このカードのカード名は「海」としても扱う。
- (2) : 自分の手札とフィールド上の水属性モンスターはレベルが1つ少なくなり、攻撃力と守備力が200ポイントアップする。また相手フィールドの炎属性モンスターの攻撃力と守備力は半分になる。
- (3) : このカードが墓地に送られた時、デッキに存在する「集中豪雨地帯」を発動させる事ができる。

見た目冷静そうだが、相当頭に来ているのは確かかのようにだ。先攻1ターン目で場持ちの悪いフィールド魔法カードを使って来たとなると、まだ怒り心頭なのだろう。

「そして『伝説のフィッシャーマン』を召喚します!」

伝説のフィッシャーマン : ATK 1850

1番手はシャチ（サメかも?）に乗った漁師。手にした銚は外国製では先が丸い布に変わっているらしい。どうやって戦うんだっての。

伝説のフィッシュャーマン（効果モンスター）

星5

水属性／戦士族

ATK 1850／DEF 1600

フィールド上に「海」が表側表示で存在する限り、このカードは魔法カードの効果を受けず、相手モンスターはこのカードを攻撃対象にする事はできない。

「これでターンを終了しましょう。さあ、まずは小手調べです。精々無様に踊って見せなさい！」

どうせ力を手にしてから一週間も経って無い。負ける炎のデッキか不慣れな別のデッキかは存じませんが、貴方は私に勝つ事はできないのですよ！ 永遠にね！」  
チツ！ 逐一イラつく野郎だぜ……。

だがここで反応しちや駄目だ。それじゃ奴の思う壺、戦略を崩されないようにしないと、こいつらを使いこなせない。

プライド：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：伝説のフィッシュャーマン（ATK 1850）

：集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺のターン!」

お、これならアレができるな。

奴がこのデツキをどう考えているのかは知らんが、少なくとも、負けるデツキじゃ無いって事をテメエの空っぽのドタマン中に叩き込んでやつから覚悟しやがれ!

「相手の場にのみモンスターが存在する時、『バイス・ドラゴン』は特殊召喚できる!」  
『ガアアアアアアッ!』

バイス・ドラゴン（効果モンスター）

星5

閻属性／ドラゴン族

ATK 2000 / DEF 2400

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しな

い場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

「ただしこの効果で場に特殊召喚した時、能力値は半分になる」

バイス・ドラゴン：ATK 2000 ↓ 1000 / DEF 2400 ↓ 1200

デイスクにカードをセットすると、光の中から紫色のゴツイ竜が現れた。

こいつは本来ならアドバンス召喚の為にリリースしたり、チューナーを出してシンクロ素材にしたりするんだが……、今回は別の道を使わせてもらう！

「更に、『マジック・ホール・ゴーレム』を守備表示で召喚！」

マジック・ホール・ゴーレム：DEF 2000

次に出て来るのは青いリング状のゴーレム。OCGじゃ使いどころねーなんて叫んでいたが、こつちなら表側守備表示で出せるから問題無い。

「行くぞ！ 『マジック・ホール・ゴーレム』の効果発動！ 自分の場のモンスター1体

を選択し、そのモンスター以外の攻撃を放棄する代わりに、選択したモンスターは攻撃力をエンドフェイズまで半分にする事で、ダイレクトアタックの権限を得る！俺は『バイス・ドラゴン』を選択!」

マジック・ホール・ゴーレム（効果モンスター）

星3

闇属性／岩石族

ATK 0 / DEF 2000

1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターはエンドフェイズ時まで攻撃力が半分になり、このターン相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

バイス・ドラゴン：ATK 1000 ↓ 500

『マジック・ホール・ゴーレム』が体を大きく広げ、その胴体の穴を『バイス・ドラゴン』が潜り抜ける。その穴は次元が捻じれており、同じく次元が捻じれたプライドの真ん前に『バイス・ドラゴン』が躍り出た。

「な!?!」

「マジック・ファイア!」

『グオオオオオオッ!』

プライド：LP 4000↓3500

「熱チチチッ!」

赤紫の炎が『バイス・ドラゴン』の口から放たれる。プライドはその炎に焼かれ、黒いマントがチリチリと焼けた。

「よし、先制は貰ったぜ……!」

「リバーズカードを2枚セットし、ターンエンド! 『マジック・ホール・ゴーレム』の効果は切れる!」

バイス・ドラゴン：ATK 5000↓1000

黎 : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

： バイス・ドラゴン (ATK 1000)、マジック・ホール・ゴレム (DEF 2000)

： 伏せカード2枚

「やった、黎が先制した!」

「先制できれば、場の流れは作れる。とりあえずは大丈夫だろう」

「でも、攻撃力1000のモンスターが場に残っちゃってるツス……」

「まだまだ油断はできないわね」

遙か後ろのフィオがはしやぎ、大地が満足気に頷く。一方で翔が不安気に呟き、明日香が神妙な顔で言う。

分かってるよ、そのくらい。

「私のターン! 攻撃力1000を場に残すとはナメられたモノですね!」

ギリギリとした目で俺を睨みつけつつ、裂けるんじゃないかと思うくらいに笑うプラ

イド。手札からカードを1枚引き抜き、ディスクに力一杯叩きつけた。

「『暗黒大要塞』を召喚らん！」

『ギョボボボボボボッ！』

暗黒大要塞：ATK 2100↓2300

背中に要塞を背負った巨大なシャチが飛び出す。

こいつがあいつの現在出せる中での最高攻撃力か。『キガ・ガガギゴ』や『ジェノサイドキングサーモン』の存在を考えると、若干汎用性は劣るコイツを採用するあたり、俺の事をまだナメてるな。

「魔法カード『ブラック・ベル』を発動！ デツキからモンスター1体をゲームから除外し、相手はカードを1枚ドロ―！ そして次の私のスタンバイフェイズに手札に加える！ 私が選択するのは『ゴギガ・ガガギゴ』！ この効果で加えたモンスターのレベルは1つ下がります！」

ブラック・ベル（オリジナル）

【通常魔法】



デッキからモンスターカードを1枚選択してゲームから除外し、相手はカードを1枚ドロースする。

この効果で除外されたモンスターは、次の自分のスタンバイフェイズに手札に加わり、レベルが1つ下がる。

『暗黒大要塞鯨』で『バイス・ドラゴン』を攻撃い！」

背中の砲身が全て紫の竜に向かう。させるか！

「畏発動！ 『くず鉄のかかし』！ 1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃を無効にし、フィールドに再セットされる！」

砲身が連続で火を吹き、弾丸やらビームやらが唸りを上げて撃ち出される。それを鉄パイプの案山子がバリアを張って全てガードする。

ガガガガガガッガガッガガッガガガガッ！

全弾防御を完了すると、カードのテキストから有刺鉄線が飛び出して案山子を絡め取り、テキストの中に引き戻してパタリと倒れた。

『速攻のかかし』といい、『くず鉄のかかし』といい、お前達案山子には世話になるね。『ぐつぎい……い！』 『伝説のフィッシュャーマン』で攻撃い！」

「リバースカード、オープン！ 『月の書』！ モンスター1体を裏側守備表示にする！」

「無駄です、『伝説のフィッシュャーマン』はフィールド魔法『海』が存在する限り、魔法と攻撃を受け付けません！そして『集中豪雨地帯』は『海』として扱う！」

空中に現れる青い古文書。記されている三日月が神秘的だ。

古文書が発した光が、1体のモンスターを裏側表示にパタリ、と変える。

「悪いが俺は1度たりとて『伝説のフィッシュャーマン』を対象にするなんて言っていないぜ？」

「何ですと!?!」

「三沢くん、どういう事?」

「簡単な話だ。『月の書』の効果の対象にでき、かつこの場面で有効なモンスターがもう1体だけいる」

遠くで大地が1体のモンスターを指差す（皆が心配なので後頭部に第三の目を作りました。髪で隠れているけど、彼らには秘密だ）。

「そう、彼が選ぶのは、」

「そう、俺が選ぶのは、」

「『バイス・ドラゴン』だ!」

グググ、と『バイス・ドラゴン』が裏側表示になり、横向きのカードになる。

## 月の書

## 【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、裏側守備表示にする。

これで、こいつ自身の能力である能力値半減がリセットされた。

「リバース状態になった事で、ダウンしていた能力値は元に戻る!」

攻撃を受ける段階でセットモンスターは表側守備表示になる。この時リバース効果が使えたりするのだが、今は関係無い。

バイス・ドラゴン：DEF 2400

伝説のフィッツシャーマン：ATK 1850

「魔法カードの影響を受けない事が裏目に出たな! 反射ダメージを喰らえ!」

「むうっ!」

防御の姿勢を取った『バイス・ドラゴン』が腕を交差し、『フィッツシャーマン』の銛を頑強な鱗で受け止める。そしてそのまま炎を吐いて押し返した。

プライド：LP 3500↓2950

速攻魔法『月の書』の使い方は自分に使うか、相手に使うかで利用方法が分かれる。自分に使えばリバーズ効果をもう1度使えたり攻撃表示を守備表示に変えたりできる。

逆に相手に使えば裏側守備表示に変える事で高い攻撃力に立ち向かう必要が無くなった。そのモンスターへの攻撃を強制的に終わらせる事ができたりする。

以前俺が使った『皆既日食の書』はそれにデメリットを付与させた拡大版だ。

「オノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレ……！」  
「どうした？ まだお前のターンだぞ？」

グツグツと怒りの炎を燃やすプライドに対し、俺は挑発するように飄々と言う。

バギツ！ とあいつの口の中で何か音がしたかと思うと、プライドはペツ！ と白い小さな物体を吐き出した。

「歯を駄目にするくらいに怒るか。あーあー、もう生えてこないんじゃねえの？」  
「うるさいっ！ リバーズカードを1枚セットし、ターンエンド！」

プライド：LP 2950

手札：3枚

フィールド

：伝説のフィッシュャーマン（ATK 1850）、暗黒大要塞鯨（ATK 2300）  
 ：伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺のターン！」

「今のところは、黎が押しているな」

「油断はできないよ。次の瞬間とんでもないカードが飛び出して来るかも」

恐らくファイオが言っているのは『ウォータードラゴン』が使ったカードだろう。攻守四倍とか除外モンスターのレベル×1000とか有り得ねえが、今後そういうのを相手しないといけないんだらうな。憂鬱だ……。

「手札の『レベル・ステイラー』を墓地に送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！ 更に『レベル・ステイラー』を『クイック・シンクロン』のレベルを1つ下げて特殊召喚！」

『ハッ！』

クイック・シンクロン：☆5↓4/A TK 700

レベル・ステイラー：ATK 600

「続いて『シールド・ウォリアー』を召喚！」

シールド・ウォリアー：DEF 1300

「レベル3の『シールド・ウォリアー』とレベル1の『レベル・ステイラー』に、レベル4となった『クイック・シンクロン』をチューニング！」

今回『クイック・シンクロン』が撃ち抜くのは『ロード・シンクロン』だ。

「集いし希望が、新たな地平へ誘う！ 光差す道となれ！」

☆1+☆3+☆4=☆8

「シンクロ召喚！ 駆け抜けろ、『ロード・ウォリアー』！」  
『テエヤアッ！』

ロード・ウォリアー：ATK 3000

「効果発動！ 1ターンに1度、デツキからレベル2以下の機械族または戦士族モンスターを1体特殊召喚できる！ カモン、『ボルト・ヘッジホッグ』！」  
『ミィー！』

ボルト・ヘッジホッグ：DEF 800

ロード・ウオリアー（シンクロ・効果モンスター）

星8

光属性／戦士族

ATK 3000／DEF 1500

「ロード・シンクロン」+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、自分のデツキからレベル2以下の戦士族または機械族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ボルト・ヘッジホッグ（効果モンスター）

星2





プライド：LP 2950↓2250

「カードを1枚セット。ターンエンド!」

黎：LP 4000

手札：0枚

フィールド

・ロード・ウオリアー (ATK 3000)、ボルト・ヘッジホッグ (DEF 800)、  
 バイス・ドラゴン (DEF 2400)、マジック・ホール・ゴーレム (DEF 2000)  
 0)

・伏せカード2枚 (内1枚は『くず鉄のかかし』)

「やるわね、あのレッド。ううん、うまさき馬崎」

「おいしいね、漢字にすると尚更。ゆまさき遊馬崎だよ」

「これで黎くんが2回続けてダメージを与えたツス」

「ああ、だが敵の様子をみてみる」

後ろの岩陰やコンテナの陰で状況をジックリと観察している皆。ジュンコ、お前のそ

の間違えは中々に厳しいぞ。

そしていつの間にか解説役になっている大地がプライドを指差す。

「ゴノ……、ゴミクズがア……！」

プライドは体中から赤とも黒とも白ともつかない煙を上げ、全身で怒りを表現している。

【BGM：ENEMY ATTACK】

何か分からんが、猛烈にヤバい状況みてえだな……。

「絶対に許さん！ 私のターン、ドロロー!! このスタンバイフェイズ、『ゴギガ・ガガギゴ』を手札に加えます！ 更に私は『フィツシャーマン』をリリースして『超古深海王シーラカンス』をアドバンス召喚！」

「あ、あいつもリリースとアドバンス召喚って言ったぞ!？」

十代が驚く。俺だって驚きだよ、十代。

「都の記憶をあさりでもしたか？」

「ゴ」名答

超古深海魚シーラカンス：ATK 2800

「『集中豪雨地帯』の効果で攻撃力と守備力がアップ!」

0  
超古深海魚シーラカンス：ATK 2800 ↓ 3000 / DEF 2200 ↓ 2400

「更に魔法カード『海流突破』を発動! 自分の墓地の魚族、水族、海竜族モンスターを1体ゲームから除外し、デッキからカードを4枚ドロー! 墓地の『暗黒大要塞鯨』を除外!」

「4枚で……!」

クソ! こんなチート相手にどうしろと!

海流突破 (オリジナル)

【通常魔法】

自分の墓地の魚族、水族、海竜族モンスターを1体ゲームから除外する。

デッキからカードを4枚ドローする。

自分の場に水属性モンスターが存在しない場合、10000ポイントのダメージを受ける。

「自分の墓地の水属性モンスターを1体ゲームから除外し、『渦潮のエディギヤング』は特殊召喚できる！ 『フィツシャーマン』、負け犬なりに役立て！」

『オラツ！』

「更に自分の場に『海』が存在するため、ライフを700ポイント回復！ 『集中豪雨地帯』は『海』として扱う！」

渦潮のエディギヤング（効果モンスター）（オリジナル）

星4

水属性／悪魔族

ATK 2200 / DEF 300

自分の墓地に存在する水属性モンスターを1体ゲームから除外する事で、このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードが特殊召喚された時、自分の場に「海」が存在していれば、ライフポイン

トを700回復する。

渦潮のエディギヤング：ATK 2200↓2400／DEF 300↓500  
 プライド：LP 2250↓2950

「手札の『深海の超水圧』を墓地に送り、『超古深海王シーラカンス』の効果発動！ デッキから『レインボーフィッシュ』と『スペース・マンボウ』を特殊召喚！」

レインボーフィッシュ：ATK 1800↓2000／DEF 800↓1000  
 スペース・マンボウ：ATK 1700↓1900／DEF 1000↓1200

「更に『スペース・マンボウ』をリリースし、罫カード『黒い呼び水』を発動！ このカードは自分の場の水属性モンスターを1体リリースする事で発動できる。私はもう1度通常召喚できる！ 『レインボーフィッシュ』をリリースし、『ゴギガ・ガガギゴ』をアドバンス召喚ッ!!」

黒い呼び水（オリジナル）

【通常畏】

自分の場の水属性モンスターを1体リリースして発動する。

発動したターン、プレイヤーはモンスターを2体まで通常召喚できる。

この発動と効果は無効化されない。

ゴギガ・ガガギゴ（通常モンスター）

星8

水属性／爬虫類族

ATK 2950 / DEF 2800

既に精神は崩壊し、肉体は更なるパワーを求めて暴走する。

その姿にかつての面影はない…。

ゴギガ・ガガギゴ：ATK 2950 ↓ 3150 / DEF 2800 ↓ 3000

「攻撃力3150!?!」

「メチャクチャなカードのオンパレードッス！」

次々と飛び出すモンスター軍。巨大なシーラカンスに続いて渦潮の下半身を持つギャングに、鋭い爪の暴虐な鎧の爬虫類が現れる。

「まだまだだ！ 『邪神の頭脳戦』を発動！ 貴方の伏せている魔法・罠カードを1枚種類を指名し、正解なら貴方に500ダメージ、外れなら私が500回復だ！」

「あれは……！」

『ウォータードラゴン』が使っていたカード！」

邪神の頭脳戦（オリジナル）

【速攻魔法】

相手フィールド上の魔法・罠ゾーンに存在する裏側表示のカードを1枚選択する。

選択したカードが魔法カードか罠カードかを宣言し、当たった場合は相手に500ポイントのダメージを与え、外れた場合は自分のライフポイントを500回復する。

「罠カード、『くず鉄のかかし』を指名します！」

「くっ！ 同じ手を喰うとは……！」

真つ黒な何かが考え事をしている絵柄から紫のビームが発射される。それは『くず鉄のかかし』を破壊し、その爆発は俺を襲った。

「ぐあつー！」

黎：LP 4000↓3500

「黎ー！」

「大丈夫だ！」

瘦せ我慢では無く本当にダメージは無い。理由は俺が搦んでいるモノだ。

「盾……？」

「ああ。地の力を流し込んで強化した特別製。そんなくらいの爆発じゃビクともしないぜ」

咄嗟に思いついたんだが、案外上手く行くもんだ。とりあえずはミサイルでも来ない限りは物理的なダメージは無いだろう。

「ぬう。ですがこの一斉攻撃で貴方の場のモンスターを蹴散らして差し上げます！ まずは『ゴギガ・ガガギゴ』で『ロード・ウォリアー』を攻撃！ ダーククロウ・スラッシュャーッー！」

「リバースカード、オープン！ カウンター罠、『攻撃の無力化』！」

真っ黒に発光した爪が黄金色の騎士に伸びるが、突如として発生した渦状の風に阻ま



れた。

「リバースカードを2枚セット。ターンエンドです!」

プライド : LP 2950

手札 : 0枚

フィールド

・ゴギガ・ガガギゴ (ATK 3150)、渦潮のエディギヤング (ATK 2400)、

超古深海王シーラカンス (ATK 3000)

・伏せカード2枚、集中豪雨地帯 (フィールド魔法)

SIDE : フィオ

「い、一気にフィールドを制圧され返された……」

唾然と、わたしはプライドのフィールドを見た。ハイパワーなモンスターが並び、手札は無いものの、それはお互い様。そして伏せカードは2枚。どう見ても罠だ、突っ込むのは無謀過ぎる。やはり、確信は無かったけど、あの『ウォータードラゴン』の使っていたチートカードは邪神が与えたカードだったってワケか……!」

対し、黎のフィールドは『ロード・ウォリアー』以外守備モンスター。その守備力だつて攻撃を阻める程高いものじゃ無い。

「これは厳しいな……」

「キバれえ、黎……」

「いくらなんでもデタラメなカードばかりというのはメチャクチャですわ……」

「勝てよ、黎……！」

順に三沢くん、前田くん、ももえ、十代くん。

「頑張れ、黎！」

彼らに触発されて思わず、大きな声でわたしは応援していた。

S I D E : 黎

「俺のターン！ 魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロ！」

頼む、何か来てくれ……、……！

「まずは『ロード・ウォリアー』の効果でデッキから『スピード・ウォリアー』を守備表示で特殊召喚！」

スピード・ウオリアー：DEF 400

『マジック・ホール・ゴレム』の効果発動! 『ロード・ウオリアー』の攻撃力を半分にしてダイレクトアタック!」

「黎!?!」

「ッライトニング・クロー!」

黄金色の騎士が青い石像の胸の穴を潜り抜けてプライドの前に躍り出ると、雷を纏った爪を振り上げた。

焦ったかとも思ったが、今の場合、これがベストだ。

「畏カード発動、『アブソプシヨンドロー』! 相手モンスターがダイレクトアタックを仕掛けて来た時、その攻撃を無効にし、攻撃モンスターの元々の攻撃力700ポイントにつき1枚ドローできます!」

チイツ、搾取されたか!

アブソプシヨンドロー(オリジナル)

【通常畏】

相手モンスターがダイレクトアタックを行う時に発動できる。

ダメージを無効にし、攻撃を行ったモンスターの元々の攻撃力700ポイントにつき1枚カードをドローする。

『ロード・ウォリアー』の元々の攻撃力は3000、つまりまた4枚ドローか。一気にハンドアドバンテージまで持ってかれたな。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

黎：LP 3500

手札：1枚

フィールド

：ロード・ウォリアー（ATK 1500）、ボルト・ヘッジホッグ（DEF 800）、

バイス・ドラゴン（DEF 2400）、マジック・ホール・ゴレム（DEF 200

0）、スピード・ウォリアー（DEF 400）

：伏せカード1枚

「私のターン! 『レインボーフィッシュ』を攻撃表示で召喚!」

頼む、来い、そのまま殴って来い……!」

レインボーフィッシュ : ATK 1800 ↓ 2000 / DEF 800 ↓ 1000

「そして『ゴギガ・ガガギゴ』で『ロード・ウォリアー』を攻撃！」

よっし来たか！

迎撃用罨じゃ無いが、このターンを凌ぐには問題無い！

「罨発動、『シンクロ・バリアー』！ 自分の場のシンクロモンスター1体をリリースし、

このターンに発生する俺への戦闘ダメージは全て消滅する！」

『ロード・ウォリアー』が空中に飛び上がると8つの幾何学模様の輪になり、俺の場の前に壁状に展開した。

シンクロ・バリアー

【通常罨】

自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体をリリースして発動する。

次のターンのエンドフェイズ時まで、自分が受ける全てのダメージを0にする。

「ですが、破壊はさせて頂きます！ 『超古深海王シーラカンス』で『バイス・ドラゴン』

を、『渦潮のエディギヤング』で『マジック・ホール・ゴーレム』を、そして『ゴギガ・ガガギゴ』で『ボルト・ヘッジホッグ』を、『レインボーフィッシュ』で『スピード・ウオリアー』を攻撃！」

「くっ！」

「これ以上の追撃は無意味ですね。ターンエンドです」

プライド：LP 2950

手札：4枚

フィールド

：ゴギガ・ガガギゴ（ATK 3150）、超古深海王シーラカンス（ATK 3000）、渦潮のエディギヤング（ATK 2400）、レインボーフィッシュ（ATK 2000）

：伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロー！」

「な、なんとか凄いだッス……」

「だが、代わりに壁となるモンスターは全滅してしまった。これは相当危険な状況だ」

「相手の場には上級モンスター2体に中級モンスター2体。リバースカードの事を考えると、かなり黎の不利な状況ね」

手札を見る。これは罠カード『ガード・ブロック』。戦闘ダメージを無効化し、1枚のドローを可能にするカード。

そしてもう1枚……。これは逆転を可能にするカードだ。

「プライド」

「何でしょう」

「俺の本気を、テメエに見せてやる。脅しても何でも無い、このデッキの真の力を」

「ほう、言ってくれますね、化物風情が」

「テメエも化物だろ」

「違うんですね、と笑いながらプライドは言った。

だが、それに続いた言葉は、俺を少々怒らせた。

「私は生まれながらの化物です。化物であり、化物たらんが為の存在。」

ですが、貴方は違う。化物でありながら人間であろうとする、我々化物から見れば異端とも言える存在。素直に化物である事を受け止め、人間を遠ざけようとすれば貴方の義妹もまだ生きる道はあったでしょうに」

「(ギリッ!) ……、テメエに俺と都の、何が分かる！」

「分かりますとも！ 何せ我々はあの方の依り代の記憶を見たのですから！」  
記憶を見た。

それはつまり俺達の過去を見られたという事。

その一言に、俺の転生する前の記憶が激流のように流れ込んだ。幸せなんて殆どゼロと言つても良い、あの苦痛と不幸だけで構成された毎日が。

「貴方達義兄妹は化物でありながら人間として生きる道を探し、二人で手を取り合つた。しかし人間は自分達と異なるモノを排除する。その矛先が貴方達二人に向かい、結果として貴方達は死んだ！」

せめて義妹いもうとさんだけでも化物として生かしておけば死ぬのは貴方一人だけだったのにねえ！」

ドクン、と心臓の鼓動が、心を蝕む。

「黎、よせ！ 奴の言葉に耳を傾けるな！」

誰かの言葉が、届かない。

「貴方は生きて来た中で何人に迷惑をかけました？ いったい何人が貴方の所為で泣きました？ 義妹さんが死んだのはそういう怒りの矛先が向いたからではないのですか？ ？ そういう点を考慮すると、義妹さんが死んだのは貴方の所為ではないのですか？」

そうだと言うのに、死んだ原因である貴方が彼女を救うだなんて言うのはおかしいと



は思いませんか？」

俺の、所為だと……!?!

「違う！ 例え黎の所為でも、義妹さんを救う権利はある！」

どうして、プライドの言葉は響くのに、皆の言葉は、届きさえしない……。

「ひよつとしたら、貴方達の所為で死んだ人がいるかも知れませんか？」

、！

「っ！」

後ろで皆がそんな事無いとか、君の所為じゃ無いとか言ってくれている。でも、それは俺にとつてとても遠い所からの無責任な励ましに聞こえた。

都が死んで、こんな悲惨な目に、合っているのは、俺の、所為……!?!

「これだけ言ってもまだ分かりませんか」

やれやれと肩を竦めるプライド。

「黎、聞くなああああっ！」

冷やかな目、誰かの叫び。俺には、届かない。

「貴方の所為で、貴方が生きて存在するだけで何人もの人が被害を被っている。いいですか？ 義妹さんが死ぬのも、こんな苦境に置かれるのもたった一点に尽きるのです。

要するに——」



「貴方は生まれて来てはいけなかったのですよ！」

その言葉は、俺の胸に深々と刺さり、致命傷を与えた。  
ガクリと膝が折れ、目の前が真っ黒になった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 27 : 丸い卵も切りようで四角

黎 : LP 3500

手札 : 2枚

フィールド

: モンスタ―無し

: 魔法・罨無し

プライド : LP 2950

手札 : 4枚

フィールド

: ゴギガ・ガガギゴ (ATK 3150)、超古深海王シーラカンス (ATK 3000)、渦潮のエディギヤング (ATK 2400)、レインボーフィッシュ (ATK 2000)

: 伏せカード1枚、集中豪雨地帯 (フィールド魔法)

S I D E : 無し

黎の膝が、ガクンと崩れ落ちた。

プライドの放った止めの言葉が、心にととても深く刺さった証だ。

——貴方は生まれて来てはいけなかったのですよ！

もちろん黎として転生前は21年も艱難辛苦の中で生きて来た男。存在価値が平等で無くとも、命個々には貴賤は無く、全てが無意味のものでは無いという事ぐらい知っている。

「俺、は……」

だが、どんな強靱な人間でも、追及されたく無い事や秘めておきたい事、突かれたく無い事ぐらいある。

黎の場合、それは義妹を死なせてしまった事だった。

心のどこかでずっと考えていた。もしかしたら遊馬崎 都は自分が原因で死亡し、

義兄自分の事を嫌っているのでは無いか、黎の手で救われるのを望んでいないのでは無いか、と。

そんな事無い、都是俺の助けを待っている筈だと、黎は幾度もそう考えて己を鼓舞し、立ち上がり、戦つて来た。

だが、プライドの言葉は正鵠を射過ぎていた。

「あ、あ……………」

何人の人が自分の所為で…………。

そう考えると、黎は巨大な自責の念に押し潰されそうになった。

実際、他人の事なんて殆ど考える余裕は無かったのだ。今を、明日を生きていくので精一杯。都を守り、自分の身を守り、それでいて他人を気遣うなどできなかった。できるのは聖者やヒーローのような、プラスの方向に人間から外れている者だろう。黎や都のようにマイナスの方向に人間から外れている者には、到底不可能な話だった。

「うう……………」

痛い。胸が、心が、思いが。

戦う理由を、目指す場所まで駆ける心を、砕かれた。

根こそぎに。

木端微塵に。

一片の欠片も残さずに。

完膚無きまでに。

虚ろにされるまでに。

そんな事を自覚し、されど誰かを気遣う事ができない自分は、どこまでも愚かだった。  
「マズい！ 今の一言で完全に黎の心が折れた！」

「レエーイ！」

十代とフィオが駆け寄ろうとするが、それを明日香と大地が後ろから羽交い絞めにして押さえる。

「何すんだよ！」

「十代、落ち着け！ 俺達が行ってどうなるんだ！」

「離してよ明日香！」

「三沢くんの言う通りよ、フィオ！ あの中に突っ込むっていうの!？」

黎とプライドの周りを渦巻く真つ黒な霧。姿を見通せるという事が、逆にそれが恐ろしいものだど直感させる。

下手に呐喊したらどうなるか分かったものではない。

「確かに、何の対抗策も無いよ、だけど……！」 黎！

「（見捨てる事なんか、できるかあ！）気をしっかり保つんだ！」

明日香も十代も大地もフィオも、そして固唾を呑んで静観している翔、隼人、ジュンコ、ももえだつて駆け寄りたい。だが、それが原因で自分達が負傷してしまつては更なるショックを彼に与えてしまい、逆効果になりかねない。

「相棒、これ、どうにかならないか!?!」

『クリイ!』

パアアアア、と茶色い毛に覆われ、背中に羽のついた『ハネクリボー』が光を発する。だが、黒い霧は全く消えない。

『クリクリ〜……』

「くっそお!」

十代がパートナーの『ハネクリボー』に霧を退かしてもらおうとしたが、効果が無い。自分達に打てる手は無いのだろうか。

「黎（くん）……………」

「遊馬崎（さん）……………」

そもそも黒い霧を突破できるかどうかすら怪しいし、仮に突破できたところで、プレイヤーが黙つて見逃すとは思えない。

無力な自分達にできるのは、ただただ見守る事だけなのだ。







心が痛い。

頭がイタイ。

どこもかしこも痛くて堪らない。

俺の所為だったのか？

俺が悪かったのか？

俺は生まれて来なければ良かったのか？

都。

義兄ちゃん、どうしたらお前に償えるんだ……？

「サレンダーなさい」

プライドが唐突に告げた。

「最早勝つても貴方に得る物はありません。ならば兄妹揃って大人しく死になさい。あの世で許しを請い、尚も貴方の罪に苛みなさい」

それが貴方の救われる道なのです。

その言葉は、宗教嫌いな俺にとって、神様嫌いな俺にとって、何故か心の奥まで滲み込んだ。

自分の罪を認めて負ける、か。

それが、最善の道なのかもな。

或いは、最初から俺みたいな化物に、ヒーローの真似事（世界を救う）なんて不可能だったのかも知れない。

全てが救われるのなら、命の1つや2つ、喜んで投げ出す。でも、俺が死んでも何も救われない。

だからと言って、生き続けてどうなるというのか。この心を塗り潰す真つ黒な絶望に、俺はもう抗う術を持たない。抗えない。毎日を廃人として生きろというのか。

もう希望も義妹も、何もかも失った俺に、戦い抜く事なんて、無理だ。

俺はそつと、デツキの1番上に掌を伸ばした。



「止めんか愚か者が！」

デッキトツプに手をかけようとしたその瞬間、俺は背後からいきなりぶん殴られた。  
「だっ!？」

目の前がチカチカと明滅し、星が舞う。

「何をしみたれた事をしているのだ貴方は！ 敵の術中にまんまと嵌り、あまつぎ剩れ自分の意思で敗北を認めようとするなんて、正気か！」

殴った張本人が耳元で怒鳴る。

「さ、桜……」

ピンクの髪に軽鎧、ポニーテールにエメラルドグリーンの瞳を持つ女性、桜だ。

この霧の中でも動けるのか。この霧は邪神の気配の塊に近い。慣れてない奴や心身が弱い奴なら一発で体調を崩すだろう。

「奴の言っている事は確かに正論だ！ 貴方はこれまで何人もの人に迷惑をかけ、泣かせたのだらう！ それが原因で貴方達は命を落としたのかも知れない！ 人間になろうとした事は悪だったのかも知れない！」

一方的に怒鳴り散らす桜。だが、フツ、と優しい顔になった。

「だが、それがどうした？」

「え？」

「人に迷惑をかけたなり、泣かせたりなんて誰でもやる事だ。例え貴方や貴方の義妹君いもうとぎみが他人の排他的な考えが原因で命を落としたとしても、それは貴方の所為では無い」

何より、貴方は心から人間であろうとした。

プライドの言葉同様に、否、それ以上に、桜の優しい言葉は俺の心を打った。

「人間であろうとする事の何が悪い、化物が人間と同居して何が悪い？ 私はカードの精霊だが、そのくらいは解る。貴方は、義妹君は、何一つとして悪くない！ 化物だから何だ、どうせならばそれを誇ってみろ！」

その言葉が胸に響いた時、もう俺は桜の手を取って立ち上がった。

ディスクを構え、ダン！ と足を踏み鳴らす。

「その意気だ」

「ありがとう、桜。お陰で立ち直れた」

「何、どうという事は無い」

先にデツキに戻つて出番を待っている。そう言い残して、桜は消えた。そして俺は、憎悪と敵意の感情を持ってプライドに向き直る。

「プライド……！」

「っ！」

言葉はいらない。ただ殺気を込めて睨みつけてやるだけだ。

そして気迫はそのままに、皆の方を振り向く。

「悪いな、心配かけた！」

その言葉に、皆の不安そうな顔が明るくなった。

「よっしゃ！ 黎の復活だぜ！」

「頑張るツスよ、黎くん！」

「ここからが見せ所なんだな！」

「勝てよ、黎！」

「また一緒に学校に行こう、黎！」

「負けたら承知しないわよ！」

「頑張りなさい！」

「応援致しますわ！」



そして手札から魔法カードを1枚引き抜く。

「手札から魔法カード『生誕の種』を発動！ このカードは自分の場にモンスターが存在せず、相手の場にのみモンスターが存在する時、デッキから植物族モンスターを1体、召喚条件を無視して特殊召喚できる！」

生誕の種（オリジナル）（改訂版）

【通常魔法】

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない時に発動できる。

デッキからレベル4以下の植物族モンスター1体を選択し、召喚条件を無視して特殊召喚できる。

デッキからガシン、と1枚の、望んだカードが吐き出され、それをモンスターゾーンに置いた。

『リーフ スピリッツ L・S ウォーター・バイト・ツリー』を召喚！』  
 『ウオオオオオオツ！』

L・S ウォーター・バイト・ツリー：ATK 1500

地面からメキメキと光と共に巨木が現れる。太い枝が腕の代わりとなっており、何本もの根がタコの足ののように蠢く。

「な、ファイア スピリッツ『F・S』では無いのですか！」

「阿呆が！ メタ組まれていると分かかって誰が使うか！」

リーフ・スピリッツ。

草木の精霊。

つまり『椿姫ティタニアル』から貰った緑色の結晶から生まれたカード達だ。

「ですが、その程度の攻撃力では我がモンスター達には届きません！」

「そいつはどうか！ 『ウォーター・バイト・ツリー』で『レインボーフィッシュ』を攻撃！」

「迎え撃ちなさい、『レインボーフィッシュ』！」

「『アクアブレイク』！」「『虹突進』！」

猛スピードで突撃する『レインボーフィッシュ』。自慢の牙を突き立てようとしたその瞬間、いきなり『ウォーター・バイト・ツリー』の体が倍の大きさになった。

L・S ウォーター・バイト・ツリー：ATK 1500↓3000 / DEF 14  
00↓2800

「な!?!」

いきなり開いた攻撃力差に敵う筈も無く、『レインボーフィッシュ』は『ウォーター・バイト・ツリー』に噛み砕かれた。

「ば、バカな!?! 一体何が!?!」

プライド：LP 2950↓1950

『ウォーター・バイト・ツリー』は水属性モンスターとバトルを行う時、ダメージ計算終了時まで、攻撃力と守備力は2倍になる!

「なんですと!?!」

L・S ウォーター・バイト・ツリー（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）  
星4

地属性／植物族

ATK 1500／DEF 1400

（1）：このカードが水属性モンスターとバトルを行う時、攻撃力と守備力はダメージ計算終了時まで倍になり、戦闘では破壊されない。

（2）：このカードが表側表示で存在する限り、相手フィールドのEXデッキから特殊召喚されたモンスターは水属性としても扱う。

「これが、黎の新たな力なんだね」

「くうー、カツコイイぜ！」

草木は木<sup>も</sup>火<sup>つか</sup>土<sup>ど</sup>金<sup>かね</sup>水<sup>みづ</sup>の五行<sup>ごぎょう</sup>において「木」の役割だ。その存在は五行<sup>ごぎょう</sup>相克<sup>さうこく</sup>において「土」に打ち勝ち、五行<sup>ごぎょう</sup>相生<sup>せうじやう</sup>において「水」から力を得る。要するに木は水に強いって事だ。

L・S ウォーター・バイト・ツリー：ATK 3000↓1500／DEF 28

00↓1400

「1枚リバースカードをセットし、ターンエンド!」

黎 : LP 3500

手札 : 0枚

フィールド

: L・S ウォーター・バイト・ツリー (ATK 1500)

: 伏せカード1枚

さて、と。随分人の心んにズカズカ土足で入ってくれたモンだ。

「覚悟しろよ……」

テメエは俺を、怒らせた!

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 28 : 一刀両断・桜吹雪

黎：LP 3500

手札：0枚

フィールド

：L・S ウォーター・バイト・ツリー（ATK 1500）

：伏せカード1枚

プライド：LP 1950

手札：4枚

フィールド

：ゴギガ・ガガギゴ（ATK 3150）、超古深海王シーラカンス（ATK 300

0）、渦潮のエディギヤング（ATK 2400）

：伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

## SIDE : 黎

二回目のプライド戦、木の力を使って戦っている俺は、凄まじいまでの怒りをプライドに感じていた。

あいつは俺達義兄妹の過去を利用して俺を糾弾し、サレンダーをさせようとした。

許さない。汚いやり口もそうだが、何より触れられたくない過去を見られた上に利用されたという事が、俺の怒りの火に油を注ぐ。

「許さねえ……！ 絶対に許さねえ！」

「私ですよ！ こんな屈辱を与えた貴方を許すつもりは毛頭ありません！ ドロー！」

「どうやら、互いに怒りを抱き合っているみてえだな。だが、お前みたいな身勝手な怒りに負けるつもりはねえ！」

「私は『邪天使の施し』を発動！ 互いにカードを3枚ドロし、手札を相手だけ2枚捨てる！」

「良いだろう」

邪天使の施し（オリジナル）

【通常魔法】

お互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドロウする。  
その後、相手プレイヤーは手札を2枚墓地に送る。

奴の手札はこれで7枚。何をするにしても十分過ぎる枚数だ。

「水属性モンスターを従えている事により、私は『ポイズニック・シャーク』を特殊召喚  
！」

『ボババババババ！』

突然太い水の柱が立ち上り、その中から毒々しい紫のサメが飛び出した。『ビッグ・  
ジョーズ』のように大きくはないが、その細いデザインと刺々した全身が逆に凶暴性を  
主張している。

「効果発動です！ 相手の場に水属性モンスターがいない時、攻撃力は相手モンスター  
1体のレベル×1000ポイントアップします！」

ポイズニック・シャーク（効果モンスター）（オリジナル）



星5

闇属性／魚族

ATK 1100 / DEF 1800

このカードは、自分の場に水属性モンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる。相手の場に水属性モンスターが存在しない時、相手モンスター1体を選択して発動する。

攻撃力は選択したモンスターのレベル×1000ポイントアップする。

ポイズニック・シャーク : ATK 1100 ↓ 1300 ↓ 5300 / DEF 1800  
0 ↓ 2000

「攻撃力5300ですって!？」

「データラメ過ぎだろ!」

「そして『ブラック・バブルマン』を守備表示で召喚!」

ブラック・バブルマン : ATK 1600 ↓ 1800 / DEF 1600 ↓ 1800

飛び出したのは真っ黒な……

「あれって『バブルマン』じゃねえか!？」

そう、十代の持つ『E・HERO』の内の1体、水のヒーロー『バブルマン』にそっくりな男。全体的に真っ黒だが、カラーリングが違うだけで見た目は同じと言っても過言では無い。

ブラック・バブルマン（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星3

闇属性／戦士族

ATK 1600 / DEF 1600

(1)：このカードが手札から召喚された時、手札のモンスターカードを1枚墓地に捨てる事で、その攻撃力分だけLPを回復する。

(2)：このカードが手札から特殊召喚された時、自分の空いているモンスターゾーンの数だけ相手は手札を捨てる。

「効果発動！ 手札のモンスターを捨てて、ライフポイントを攻撃力分回復する！ 私

が捨てるのは『ギガ・ガガギゴ』、攻撃力は2450!」  
 「くっ!」

プライド：LP 1950↓4400

「更に魔法カード『不当強化』を発動。手札のモンスター1体を除外し、その攻撃力の倍の数値を自分のモンスター1体にターン終了時まで与えます。この効果は無効化されません。私は手札の『マザー・ブレイン』を除外し、攻撃力を4800アップさせる!」  
 「何だと!」

不当強化（オリジナル）

【通常魔法】

(1)：自分フィールドのモンスター1体を選択して発動する。

手札からモンスターカードを1枚除外し、ターン終了時までその攻撃力の倍の数値を選択したモンスターに与える。

選択したモンスターと除外したモンスターの属性が同じ場合、この効果は無効化されない。

ゴギガ・ガガギゴ ATK:3150↓7950

「さて、この全軍攻撃で終わりです！ 『ウォーター・バイト・ツリー』には驚かされましたが、所詮は人間と精霊の力！ 我らが偉大なる邪神様には敵わないのですよ！」

「それはどうかな！ やってみなくちゃ分からねえ！」

「ならば身を以て知りなさい！ 『ゴギガ・ガガギゴ』で攻撃！」

「黎！」

「心配無用、『ネクロ・ガードナー』！」

紫に光る牙が『ウォーター・バイト・ツリー』に届く寸前、黒い鎧武者が現れて攻撃を防ぐ。

「『邪天使の施し』の時に捨てていたのか！」

「アメリカットをメリットに変えるのも、デュエリストの基本だぜ？」

「ならば『ポイズニック・シャーク』で『ウォーター・バイト・ツリー』を攻撃！

イズン・ファング！！」

「次は『シールド・ウォリアー』と『ガード・ブロック』だ！」

真つ黒に発光した爪を、大きな盾でガードする。

超過したダメージは結界で防御だ。

「今度は『ロード・ウオリアー』のシンクロ素材!？」

「どうした？ さつきまでの自信はよ！」

「ならば相撃ちでも破壊します！ 『シーラカンス』！ デイープ・アクア・パニツ

シャーッ！」

「ッアクアブレイクッ！」

キャノン砲のように吐き出された水を『ウオーター・バイト・ツリー』が吸収し、肥大化する。そしてそのまま頭から『シーラカンス』を噛み砕いた。

L・S ウォーター・バイト・ツリー：ATK 1500 ↓ 3000 / DEF 14  
00 ↓ 2800

超古深海王シーラカンス：ATK 3000

「バカな!? 攻撃力は同じのハズなのに!？」

「残念だったな！ 『ウォーター・バイト・ツリー』は水属性モンスターとバトルを行う時、破壊されないんでね！」

これで厄介な『シーラカンス』は消えた。大体のあいつの戦い方は崩れたハズだ。

『ポイズニック・シャーク』が闇属性だから少し焦ったが、何とかなって良かった。

L・S ウォーター・バイト・ツリー：ATK 3000↓1500／DEF 28  
00↓1400

ギリギリと歯軋りするプライド。もう一本歯をダメにするぞ、お前。

「カードを1枚セットし、『エディギヤング』を守備表示に変更！」

渦潮のエディギヤング：ATK 2400↓DEF 500

「ターンエンド！」

プライド：LP 4400

手札：1枚

フィールド

：ゴギガ・ガガギゴ（ATK 3150）、渦潮のエディギヤング（DEF 500）、

ポイズニック・シャーク (ATK 5300)、ブラック・バブルマン (DEF 1800)

：伏せカード2枚、集中豪雨地帯 (フィールド魔法)

「俺のターン！」

手札は3枚。

これなら行ける！

「更に魔法カード『カード・フリッパ』を発動！ 手札の『クリッター』を墓地に送り、相手の場のモンスターの表示形式を全て逆にする！」

「あー！」

ピュン！ と閃光が飛び出し、それに応じてプライドの場のモンスターの攻守が逆になる。

ゴギガ・ガガギゴ：ATK 3150 ↓ DEF 2800

ポイズニック・シャーク：ATK 5300 ↓ DEF 2000

渦潮のエディギャング：DEF 500 ↓ ATK 2400

ブラック・バブルマン：DEF 1800↓ATK 1800

カード・フリッパ

【通常魔法】

手札を1枚墓地へ送って発動する。

相手フィールド上に存在する全てのモンスターの表示形式を変更する。

「上手い！ 攻守が逆転すれば、倒せない程のハイスペックも崩れる！」

「そして『貪欲な壺』を発動！ 墓地の『スピード・ウオリアー』、『バイス・ドラゴン』、

『ロード・ウオリアー』、『クリッター』、『マジック・ホール・ゴーレム』をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドロロー！」

貪欲な壺

【通常魔法】

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドロローする。



よし、いいカードが来た！

「自分の場に『L・S』と名のついたモンスターが存在する時、『L・S マザーリリー』はリリース無しで召喚できる！」

『ハアッ！』

L・S マザーリリー：ATK 2000

「『マザーリリー』のモンスター効果発動。自分の場に『L・S』と名のついたモンスターが存在する時、全ての俺の場のモンスターの攻守は600ポイントアップする！」

L・S マザーリリー（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星5

光属性／天使族

ATK 2000／DEF 1300

（1）：自分の場に『L・S』と名のついたモンスターが存在する時、このカードはリリース無しで召喚できる。

（2）：自分の場に『L・S』と名のついたモンスターが存在する時、自分の場の全ての

モンスターは攻撃力・守備力は600ポイントアップする。

(3)：通常召喚されたこのカードが自分の墓地に存在する時、墓地の植物族モンスターを5体ゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する表側表示の魔法・罠カードを全てゲームから除外する。

その後、このカードをデッキに加えてシャッフルする。

L・S ウォーター・バイト・ツリー：ATK 1500↓2100／DEF 1400↓2000

L・S マザーリリー：ATK 2000↓2600／DEF 1300↓1900

白いユリの花をあしらったクラウン、そしてユリ模様のドレスを着た神秘的な女性がゆっくりと降臨し、俺の場合全体を清らかな白い光で照らす。

能力値はそこまで高く無いが、魔法・罠を全滅させる能力は強い。更にこのモンスター自身が『L・S』なので、パワーアップ効果は実質、召喚と同時に発動となる。

残念な点は、こいつは天使族である事。除外に必要な植物族を別に用意しなくてはいけないからね。

「行くぜ！ 『マザーリリー』で『ゴギガ・ガガギゴ』、『ウォーター・バイト・ツリー』で

『ポイズニック・シャーク』を攻撃！

“ホワイト・アロー” & “アクアブレイク”！

『マザーリリー』が作り出した白い光の弓から放たれた光の矢が装甲で身を固めた爬虫類を、大樹の牙(?)が毒々しいサメを仕留める。

「くっ、おのれ！」

「そして『マザーリリー』のレベルを1つ下げて『レベル・ステイラー』を特殊召喚！」

L・S マザーリリー：☆5↓4

レベル・ステイラー：ATK 600↓1200 / DEF 0↓600

「ターンエンド！」

黎：LP 3500

手札：1枚

フィールド

：L・S ウォーター・バイト・ツリー (ATK 2100)、L・S マザーリリー

(ATK 2600)、レベル・ステイラー (DEF 600)

：魔法・罨無し

後ろでフヒャー、と溜め息を吐く音が聞こえた。

「持ち直したツスね」

「ああ。場の流れも掴み取り、完全に黎が優位に立った」

「でも、油断はできないんだな」

「うん、さつきみたいな反則丸出しのカードがまた来るかも知れないし」

「私のターン！ ……、もう容赦はしねえ！」

「！」

言葉使いが変わった！ 来る！

【BGM：DARK TUNING】

「リバースカード、オープン！ 『アーキタイプ・ゲート 黒式』！ 自分の墓地の同じモンスターを2体ゲームから除外する事で、デッキから除外したモンスターより攻撃力の低い闇属性モンスターを1体特殊召喚できる！ 私は墓地の『レインボーフィッシュ』を2体ゲームから除外し、『DダイクテューナーT キラーホエール・シップ』を特殊召喚！ 更

にカードを1枚ドロー!」

「! ダークチューナーだと!」

アーキタイプ・ゲート 黒式(オリジナル)

【通常畏】

自分の墓地から同じ名前前のモンスターを2体ゲームから除外して発動する。

除外したモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ闇属性モンスターを1体デッキから特殊召喚する。

その後1枚ドローする。

DT キラーホエール・シップ(ダークチューナー・効果モンスター)(オリジナル)  
星7

闇属性/水族

ATK 50/DEF 100

このカードがダークシンクロモンスターのシンクロ素材となった時、相手の場のカードを2枚までゲームから除外できる。

この効果で除外したカード1枚につき、相手プレイヤーは1000ポイントのダメージ

ジを受ける。

DT キラーホエール・シップ：DEF 100

出現するのは真つ黒なシャチ型の大きな船。背中に乗っているのは『ダークシー・レスキュー』なんかで見る悪魔っぽい奴らだ。

「レベル2となった『ブラック・バブルマン』に、レベル7の『DT キラーホエール・シップ』をダークチューニング！」

『ダークチューニング!?!』

来るか、ダークシンクロ!

シャチ型の船が7つの黒い星になると『ブラック・バブルマン』の体内に潜り込む。『ブラック・バブルマン』は途端に苦しみ始め、体内で光る2つの白い星と黒い星がぶつかり合って弾け飛んだ。

残った5つの黒い星が『ブラック・バブルマン』の輪郭線を弾き飛ばし、不気味に宙に浮かぶ。

「闇と絶望重なりし時、傲慢なる冥府の扉が開かれん！ 光無き世界へえ！」

5つの闇の星が円を描くように回り、放たれた稲妻が中心部に真つ黒な闇の柱を作り

出した。

☆2―☆7Ⅱ☆―5

「ダークシンクロ！ 凍れ、『氷結のフィッツジェラルド』！」

氷結のフィッツジェラルド：ATK 2500↓2700／DEF 2500↓27

00

「な、なんスか、あの気味の悪いモンスター……」

翔が直感的にダークシンクロモンスターの不気味さを見抜く。

闇の中から現れたのは空中浮遊する氷の塊に目と、翼（腕？）を取り付けたもの。あの世からやって来たそれは、この世に生きる俺達にとつて真の意味で対の存在。

面倒な……、ありやバトルで潰しても蘇るヤツじゃねえか。

氷結のフィッツジェラルド（ダークシンクロ・効果モンスター）

星―5

水属性／悪魔族

ATK 2500 / DEF 2500

チューナー以外のモンスター一体／ダークチューナー

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを發動する事ができない。

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時に自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、このターン「氷結のフィッツジェラルド」を攻撃したモンスターをバトルフェイズ終了時に全て破壊する。

「き、気味が悪いですわ」

「ああ、しかも見ろよ。レベルがマイナスだ」

「黎のエクシーズモンスターの表記と似ているが、あの黒さは何だ？ まるで冥界の闇のようだ……」

「星の部分も青いけど……、あの青さ、普通じゃないわね」

しかし、記憶を覗いたとは言っていたが。



「ダークシンクロモンスターを引っ張り出すとはな、恐れ入るよ」

「くくくく、死の世界の力を見るが良い!」

「黎、あれは何なの!? レベルマイナスってどういう事!?!」

後方でフィオが大声を出して質問を飛ばす。

「DTつつー闇のチューナーのレベル分、他のモンスターのレベルから差し引く。つまりレベルの引き算だ。シンクロモンスターがこの世の力ならば、ダークシンクロモンスターあの世の力。こっちの道理も通じ辛い面倒臭いモンスターだよ」

「カカカ! 『DT キラーホエール・シップ』の効果発動! 貴様の場の『ウオーター・バイト・ツリー』と『マザーリリー』をゲームから除外し、除外した数×1000ポイントのダメージを与える!」

「2000ダメージ!? ぐあああああああああつ!」

黎 : LP 3500 ↓ 1500

レベル・ステイラー : DEF 600 ↓ 0

巨大な戦艦とも見えるシャチ型の大型船が大木の化身と白いドレスの女性を突進で吹き飛ばし、そのまま俺を撥ねる。倉庫の壁にめり込み、ヒビが壁に入った。

咄嗟に盾を構えて後ろに跳ばなかったら死んでいたな、これ。

「つつ、ててて……」

「黎、大丈夫!?!」

「問題無い。今回はキツチリガードしたからな」

とは言え、ノーダメージでは無い。肋が何本か折れたし、内臓のダメージも大きい。だが血の味がしないところを見ると、どうやら自然治癒に任せておいても大丈夫なようだ。

俺の場はこれで『レベル・ステイラー』以外のモンスターがいなくなった。それに  
対し奴の場のモンスターは2体。これは危険だな……。

「そして魔法カード『死者蘇生』を発動! 甦れ、『暗黒大要塞鯨』!」

暗黒大要塞鯨：ATK 2300↓2500

「更に『ジェノサイドキングサーモン』を召喚!」

ジェノサイドキングサーモン：ATK 2400↓2600

更に追加で要塞を搭載したシヤチと巨大な鮭が飛び出す。

これで4体か……。

「これで終焉だあ！ 『渦潮のエディギヤング』を攻撃表示にし、『レベル・ステイラー』を攻撃！」

「うぐっ！」

「止めだあああつ！ 全軍一斉攻撃いいいいいいいいいいいっ！」

放出されるレーザーと砲弾、鮭の口から放たれる衝撃波、無数に降り注ぐ氷の弾丸が前方から一斉に押し寄せる。

まだだ、まだ終わらない！

「墓地の『L・S グレイブ・ココローチ』の効果発動！ 手札を1枚墓地に送ってダイレクトアタックを無効化し、バトルフェイズを強制終了させる！」

L・S グレイブ・ココローチ（効果モンスター）（オリジナル）  
星1

風属性／昆虫族

ATK 300 / DEF 200

このカードが墓地に存在する時に発動できる。

手札を1枚墓地に送り、ダイレクトアタックを無効にし、バトルフェイズを終了させる。

「L・S グレイブ・コカローチ」の効果はデュエル中1度しか使えない。

ブウン、と空中にカードの形の盾を持ったコオロギが墓地が放った光と共に現れ、一斉攻撃を、盾を巨大化させて防ぎ切った。

にしてもマズいな。今捨てたのは『シールド・ウイング』。次のターンに守備表示で出して場を持たせようと思っていたのに……。

そして『ゴギガ・ガガギゴ』ではなく『暗黒大要塞鯨』を出したという事は、恐らく『砲弾ヤリ貝』や『魚雷魚』を出す手立てが揃っているのだろう。かなりマズいな……。「なんとか防ぎ切ったツスね……」

「うん。でもこれで黎は、真正正銘の丸裸。墓地に送られたカードにはもう防御系のカードは無いし、手札も場のカードもゼロ」

「絶体絶命ですね……」

「クツソオ！ 負けんなあ、黎い！」

フィオの指摘が痛い。墓地に送ったカードで使えるのはもう残っていない。手札にも場にもカードは無い。次に引くカードが全て、か。

「次のターンが貴様の最期だ！ ターンエンド！」

プライド：LP 4400

手札：1枚

フィールド

・氷結のフィッツジェラルド（ATK 2700）、渦潮のエディギヤング（ATK 2400）、ジェノサイドキングサーモン（ATK 2600）、暗黒大要塞鯨（ATK 2500）

・伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

【BGM終了】

「俺のターン！」

気になるのは奴の伏せカード。ここまで発動していない。

発動条件が限定されているのか、それともフリーチェインが出し惜しみしているのか……。

何にせよ、カードを引かない事には始まらない。

頼む、来い！

「ドロー！」

『天使の施し』か……。運を天に任せろって事か？

「魔法カード『天使の施し』を発動！ デッキからカードを3枚ドローし、手札を2枚墓地に送る！」

その時、プライドは確かにデイスクのボタンを押そうとした。が、止めた。

つまりは汎用性が高いフリーチェーンか、魔法やドローに適用されるカードか……。

いや、後者は無いな。次のターンに終わりだと言っていたのに、発動タイミングが限られているヤツをここで出し惜しみするのはおかしい。

同じ理由は前者にも言えるが、邪神は人の負の感情を求める事を考えると、恐らくこのターンの逆転の一手にチェーンして使い、絶望に染まりきったタイミングで止めを刺す、と考えれば辻褃は合う。

引いたカードを確認する。お、『フェイク・ガードナー』がいる。これなら行けるか？  
「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 1500

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

「く、万策尽きたか……」

「せめて、最期は看取ってあげるべきッス……」

「三沢くんも丸藤くんも見捨てない！ まだ黎の眼は諦めてないよ！」

翔と大地が諦めムードの中、フィオは俺の事を信じてくれている。

そうだ。この罨カードに、全てがかかっている。

あれが俺の予測通りのカードなら、まだチャンスは1回だけ残っている。逆を言えば、俺の予想が外れならばジ・エンド。

「私のターン！ 魔法カード『強欲な壺』を発動！ これにより2枚ドロ―！」

そして『二重召喚』を発動！ これによりこのターン、モンスターを2度通常召喚可能となる！ まずは『魚雷魚』を召喚！」

魚雷魚：DEF 1000

「そして『魚雷魚』、『渦潮のエディギヤング』、『暗黒大要塞鯨』をリリース！」

「3体だど!?!」

何が来る……? と、嫌な感覚に気がついた。

この感触、邪神の気配がいつにも増して強い。プライドの気配以上の何かが来る！

「出でよ……」





『セブンクラ  
七罪士』

プライド』

オオオオオオオオオオオオオオオオオツ！』

っ！ 自分自身!?

七罪士 プライド：ATK 3600

バチバチバチ、と闇色の稲妻が迸り、その中から出て来たのは刺々しい真つ黒な鎧に身を包んだプライド自身。邪神のオーラが異様に増大し、ともすれば俺を呑み込んでしまふほどの圧迫感を放っている。

「クククク。どうせならば、私の最高にて最強の姿で葬つてやろうと思つてねえ！ここまで私を梃子摺らせたんだ、せめてもの手向けだあつ！」

そう言つてブウン！ と巨大な双刀を振り下ろして来た。

「ギガツイン・プライド・エツジ」 イイイイイイイイイイッ！」

『天使の施し』の効果で墓地に送つた『フェイク・ガードナー』を特殊召喚！  
『ヘツヘエ〜!』

フェイク・ガードナー：DEF 2000

バルーンを膨らませた道化師が出現する。こいつにも結構世話になつてたりする。

「無駄だあ！ 罨カード『暗雲の接收』を発動！ 魔法・罨・モンスター効果の発動、及びモンスターの召喚・特殊召喚・反転召喚を無効にしてゲームから除外し、相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える！ 更にこのカードに対してカウンター罨を発動する事はできない！」

「な、うぐあつ！」

暗雲の接收（オリジナル）

【通常罨】

魔法・罨・モンスター効果の発動、モンスターの召喚・特殊召喚・反転召喚を無効にして破壊し、ゲームから除外する。

相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。

このカードの発動に対し、カウンター罨を発動する事はできない。

『神の宣告』の上位互換か?! デメリットまで消してダメージとか酷過ぎだろ!?

黎：LP 1500↓500

「切り札は最後まで取っておくものだ！ 死ねえ！」

ギロチンのように勢いをつけて俺の首を狙う2枚の刃。それは過たずに直撃した。



桃色の小鳥の張った、小さな、されど堅固な防壁に。

ガキイイイイイイイイイイイイイイイイイン！

「!?」

「罨カード『戦線復帰』だ。これで『ロードランナー』を呼び出したのさ。そして『ロードランナー』は攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない！」

「バカな……！」

直前に『天使の施し』が来てくれて助かった。お陰で良いカードを墓地に仕込む事ができた。

戦線復帰

【通常罨】

(1)：自分の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

ロードランナー（効果モンスター）

星1

地属性／鳥獣族

ATK 300 / DEF 300

このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

「切り札は最後まで取っておく、だったか？　だが、出し惜しみが敗北を招く事もあるんだぜ？」

「ぐぬうつ！　ターンエンド！　だが、終わったと思うなよ！　私の効果はこちらの攻撃力が2000上昇するというものだ！　更に魔法・罫では破壊されない！　そして貴様がレベル6以上のモンスターを召喚する度に1000ポイントのダメージを与えるのだ！」

セブンクワイム  
七罪士 プライド（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星10

闇属性／戦士族

ATK 3600 / DEF 3300

（1）：このカードは特殊召喚できず、自分の場のモンスターを3体リリースしなければ



アドバンス召喚できない。

(2) : このカードが表側表示でフィールド上に存在する限り、バトルフェイズ中自分のフィールドのモンスターの攻撃力は2000ポイントアップする。

(3) : このカードは魔法・罠カードによっては破壊されない。

(4) : このカードが表側表示でフィールド上に存在する限り、相手がレベル6以上のモンスターを召喚、特殊召喚、反転召喚する度に相手プレイヤーは1000ポイントのダメージを受ける。

プライド : LP 4400

手札 : 0枚

フィールド

：七罪士 プライド (ATK 3600)、ジェノサイドキングサーモン (ATK 2600)

：集中豪雨地帯 (フィールド魔法)

「レベル6以上って、それじゃシンクロは封じられたも同然じゃない！」

「希望はエクシーズ召喚だが、果たして上手く行くかどうか……」

「しかも『ロードランナー』はレベル1、ランカー1のエクシーズモンスターなんて、底が知れているツス！」

「そして残り500のライフじゃあ『プライド』の効果を一回食らったら終わりですわ！」

「万事休すか!?!」

皆好き勝手行ってくれるなあ。

まあ、俺もこのドローでキーカードを引けなかつたらアウトだが。

「黎……」

遠くでフィオが俺への信頼と不安をない交ぜにした視線を送ってくる。

フィオ、もう少し見ていてくれ。

逆転して、見せるから！

「俺の、ターン！」

引いたカードは……、『埋葬呪文の宝札』！

「魔法カード『埋葬呪文の宝札』を発動！ 自分の墓地の魔法カードを3枚除外する事で

2枚ドローできる！」

「このタイミングで手札増強だど!?!」

## SIDE : フィオ

「このタイミニングで手札増強だ?!」

黎が土壇場で引き当てた魔法カード『埋葬呪文の宝札』。

これにより墓地から『カード・フリッパー』『天使の施し』『月の書』が吐き出され、2枚の手札と入れ替わった。

「これが、デイスティニードロー……」

「え?」

ポツリ、と呟いた言葉に明日香が反応した。

「ちよつとだけ聞いた事があるんだ。ピンチになればなるほど、キーカードを引く可能性が上がり、或いはデッキに入っていないカードですらドローで引き当てる天性の才能。それが……」

「運命の引き……」  
デイスティニードロー

「成程、黎や十代に備わっているアレか」

「黎は前に、十代くとデュエルする時最も怖いのは『引きの強さ』だって言っていた。土壇場で手札の増強や一発逆転のカードを引き当て、ピンチであればある程強力な反撃が来る、って」

黎には元々備わっていたのか、それとも後天的なものなのかは分からない（後天的に手に入るのかどうかは知らないけど）。でも、その力は味方であればとても頼もしい。このターンで決着をつけよう、黎！

埋葬呪文の宝札（アニメオリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地に存在する魔法カード3枚をゲームから除外して発動する。  
自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

SIDE：黎

ピッ！ と2枚のカードを引く。

その内の1枚は、とても見覚えがあり、馴染み深く、そして感謝しても仕切れない、あのカード。

【BGM：BELIEVE IN NEXUS】

「桜!」

『ああ、来たぞ主殿。存分に戦ってくれ!』

「おう! 俺はマジック発動『死者蘇生』! 効果で俺の墓地から蘇れ、『クイツク・シンクロン』!」

『ハッ!』

『ハッ!』

クイツク・シンクロン : ATK 700

「自分の場にチューナーモンスターが存在する時、場を離れたら除外される事を条件に、

『ボルト・ヘッジホッグ』は墓地から特殊召喚できる!」

『ミイツ!』

ボルト・ヘッジホッグ : DEF 800

連続して場に蘇るガンマンスタイルのロボとネジを背負ったネズミ。

最後はこいつだ!

「そして『L・S レストア・チェリー』を召喚! 行くぞ、桜!」

『任せてくれ!』

剣を構え、盾を持ち、ドレスと鎧を合わせたような姿の麗しきポニーテールの女性、桜が威風堂々とした姿で現れる。

L・S レストア・チェリー：ATK 1800

「この間の人ツス!」

「お、本当だ!」

『効果発動!』

「桜が場に推参した時、ライフを700ポイント回復する!」

『「キュア・ブロッサム」!』

L・S レストア・チェリー（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）  
星4

風属性／戦士族

ATK 1800／DEF 1600

（1）：このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、プレイヤーのライフを700ポイント

ト回復する。

(2) : 1ターンの1度、手札を1枚墓地に送る事で、プレイヤーのライフを500ポイント回復する。

墓地に送られたカードが「L・S」モンスターの場合、ターン終了時にそのカードを手札に戻す。

(3) : このカードは同じ攻撃力のモンスターとのバトルでは破壊されない。

黎 : LP 500 ↓ 1200

桜が剣を天へと向けると切っ先から光が降り注ぎ、俺の体へと吸い込まれた。

痛みが僅かばかり軽減され、呼吸も楽になっていく。彼女の本質は戦い打ち倒す事よりも癒す事のようなだ。

「やった！ これで上級モンスターが出せるッス！」

「行つけえレエエエエエエエエエ！」

「おう！ レベル1の『ロードランナー』とレベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル5の『クイック・シンクロン』をチューニング！」

『クイック・シンクロン』が『ジャンク・シンクロン』のカードを撃ち抜き、5つの星

に変わる。

その星は5つの幾何学模様のリングに変わり、その中をピンクの小鳥とボルトを背負ったハリネズミが通る。

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！ 光差す道となれ！」

☆1+☆2+☆5=☆8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』！」  
『アエヤツ！』

ジャンク・デストロイヤー：ATK 2600

光の柱の中から出て来たのは4本腕の魔人。全てを破壊するエネルギーを身の内に秘めた废品パーツの巨人。

「フン！ そんなモンスターで何ができる！ 喰らえ、傲慢なる鉄槌！」

「出来るさ！ //タイダル・エナジー！」

『プライド』が闇の塊を頭上から落とす。俺はそれを盾で防ぐ（腕からミシミシ音が



鳴っていたが、気にしない)のと同時にこちらの効果も発動する。

黎：LP 1200↓200

『ジャンク・デストロイヤー』の胸元のコアが輝きを放ち、青いエネルギーが津波のよう押し寄せて巨大な鮭とプライドを押し流した。

「ぼっ!? ガバガババツ!」

『ジャンク・デストロイヤー』はシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材にしたチューナー以外のモンスターの数だけ場のカードを破壊できる。

今回は『ロードランナー』と『ボルト・ヘッジホッグ』の2体、したがって2枚のカードを破壊させてもらった!」

ジャンク・デストロイヤー(シンクロ・効果モンスター)

星8

地属性/戦士族

ATK 2600/DEF 2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊することができる。

さあ、仕上げだ！

「これでお前の場に壁となるモンスターは存在しなくなった。更に迎撃用の魔法・罠カードも無い。

桜の攻撃力は1800、『ジャンク・デストロイヤー』は2600。合計4400の攻撃力がお前の残りライフに直撃したらどうなるか、分かるよな？」

「ば、ばかな！ 馬鹿な莫迦なバカなあ！ この私が、人間如きに負けるといふのかあ！」

「ああそうだ！ 散々バカにした人間に、お前は負けるんだ！」

「行つけえええええええええええつ！」

「やっちまえ、黎いいつ！」

「これで最後だあああああああつ！ 『ジャンク・デストロイヤー』でダイレクトアタアアック！ ㊦デストロイ・ナックル㊧！」

高く跳び上がった『ジャンク・デストロイヤー』が全ての拳に破壊のエネルギーを込

め、それを殴るモーションで砲弾のように飛ばす。4発全てがプライドに命中し、一発一発が大爆発を引き起こした。  
「ぐおおおおおおおおおっ！」

プライド：LP 4400↓1800

「止めだあああつ！ 桜あ！」

『ああ！ この必殺の一太刀、受けてみよ！』

「喰らえ！」

『〃一刀両断〃！』

『〃桜吹雪〃！』

斬！

華麗な剣閃が煌めき、プライドが宙に舞う。桜の花びらが、まるで任侠モノや時代劇



「この、私が、負けるとは……!」

ジジジ、と電子ノイズのような音を出して時折姿が霞むプライド。深々と斬られた胸部からは依然としてドス黒い血が流れ出ており、焦点の合わない瞳で虚空を見上げている。

「さて、今度こそ吐いてもらおうぞ。どうすれば都を取り戻せる」

だが、こいつがどれだけボロボロであっても関係無い。胸倉を掴み上げて睨みつける。霧ももう晴れていて見通しが良いので、逃げ出してもすぐに捕まえられる。

「ク、クク……。良いだろう、教えて、やる……」

「さっさと吐け」

プライドは大きく息を吸い込む。

「スロウス、ラスト、エンヴィー、グリード、グラトニー、ラーズ！ 異空間に逃げなさい！」

「て、テメエ！」

「クカカカカカカ！ 我ら大罪を全員倒さなくては邪神様の依り代の所へとは辿り着けぬ！ そして残る6人はたった今全員、こことは異なる世界へと逃げ込んだ！ 最早接触する手立ては無い！ 貴様は永遠に義妹いもうとには会えず、この世界は滅亡へと一直線に進むのだよ！

そしてこの世界を起点に全ての平行世界と異世界を食らい尽くし、我らが邪神様があらゆる世界の神として君臨する新たな混沌に満ちた世界を生み出すのだあああつ！」  
それだけ言い残すと、プライドは黒い塵になつて消滅した。

「クソッ！」

歯噛みし、地団太を踏み、それでも悔しきは拭えない。



## STORY 29 : 手掛かり

## SIDE : 黎

プライドとの戦いの後、俺が真つ先に取った行動は精霊界へ調べに行く事だ。どうせ人間界には大した資料なんて無いのだから、探したって無駄だろう。ならば餅は餅屋、という事で精霊界に来た。こちらなら何かあるのでは無いかと期待を込めて。

こちらにやって来た時俺はまず1番資料のある場所を探し、それがこの『王立魔導図書館』、という訳だ。

細かい資料を見るためには王や政府の許可が必要という事で、コンタクトの取れる主に紹介状を書いてもらったのだ。王は快く許可してくれたが、ここからが問題だった。

書庫の奥、約1万冊の本を片端から読み漁るのは並大抵の労力ではなく、3日かけてようやく読み終えた。が、残念ながら有力な情報を得る事は出来なかった。

「くはー……、これじゃ『テイタニアル』や王様に会わず顔が無いつてモンだぜ……」

「確かに。しかし主殿の気持ちも分かるが、見つからなかったのは貴方の所為では無い」それはそうだ。しかし手掛かりが消えるというのは思いの外メンタルに堪えるもの



だ。

カラン、と炭酸水を入れたグラスの中の氷が音を立てる。

「はあ……」

「調べ物は上手く行かなかったようだな」

突然、後ろから威厳のある声がかげられた。

バツ！ と振り向くと、威風堂々を身に纏ったかのような巨漢がいた。

「え、『エンデイミオン』王!？」

ローブを羽織り、鎧こそ着ていないが、正しく魔導都市の王がそこにいた。

神聖魔導王 エンデイミオン（効果モンスター）

星7

闇属性／魔法使い族

ATK 2700 / DEF 1700

このカードは自分フィールド上に存在する「魔法都市エンデイミオン」に乗っている魔力カウンターを6つ取り除き、自分の手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する魔法カード1枚を手札に加える。

「ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。」

「王様……」

「今はただの『エンデイミオン』だよ。店主殿、私にも彼と同じものを」

恐縮した様子で、酒場の主が炭酸水と氷の入ったグラスを出す。これ、美味しく無いんだけど……。どっちかって言う舌が痺れる程の炭酸と微かっつーか僅かな塩っぱい味を楽しむモンだから。本来ならジューズと組み合わせるものだし。

が、王様はそんな事は関係無しにグビツと一口、口に含む。

「その様子では、ヤツの資料は見つからなかったようだな」

「すみません。見つかったのはいつの時代に封じられたとか、レリーフに彫られた見た目とか、そんなのばっかりで……」

「謝るのは寧ろ私の方だよ、〃騎士〃よ。すまなかった」

「何故謝りますか。何一つとして悪くは無いというのに」

「いや、私も一国の王でありながら、君に協力できるのは精々図書館の閲覧許可と、こうして酒場にやって来て来て君に謝る事だけ。情けないと自分でも思っている」

「この人は……」

どっち向いても精霊界つてのは人徳者ばっかがリーダーやってんのな。

「十分過ぎますよ。こうして相談に乗ってくれると気分が楽になりますし、貴方の許可が無かったら、『コレ』は見つかりませんでしたから」

そう言うのと、俺は懐から一枚の紙を取り出した。

「これは……」

「確かに『有力な』手掛かりは手に入りませんでした。『一切の』手掛かりを失ったと言った覚えはありませんよ?」

パサ、と王様が紙を慎重に広げる。そこには幾何学的な魔法陣が描かれていた。

「これは……」

「古文書の中に挟まっていたのを書き写したものです。古文書とは違う文字なので何が書かれているのかは分かりませんが、これ」

紙の右上に描かれた奇妙な生き物を指差す。

この世のあらゆる生命体に似通った特徴を持たず、されども何故か人間に近しくも見えるその姿は、他の資料にあった邪神のレリーフ像と全く同じものだった。

「明日から、古今東西あらゆる言語と照らし合わせて解説を行います。今度こそ手がかりになる事を願ってますとも」



——デュエルアカデミア・昼過ぎ

「それで、見つかったの?」

「ああ。3種類の言語を古代言語にした後に3語ずつ後ろにズラし、更に鏡文字にしたものだった」

「うわぁ陰湿」

茜色に染まる廊下を、俺とフィオが歩く。

羊皮紙を調べたところ、邪神に関する有力な手掛かりは記載されていなかった。だがその代わりに連中の居場所を見つける為の特殊な魔術を解読できた。

「おジャマカントリー第2言語とヒーローズタウンのVヴァイジョン言語は解読が楽だったんだけど、もう滅んだ終焉世界の言語は流石に骨が折れたよ」

辞書はすぐに見つかったものの、3種類の言語を混ぜた言い回しに四苦八苦してし

まった。解説ができたのは開始から4日、搜索から1週間もかかってしまった。

こつちとあつちは時間の流れがおおよそ同じらしいので、結局無断で1週間の休みになつてしまい、校長先生と大徳寺先生に怒られたよ。

「あはは、笑えねえ……」

「そういや夕方から遊戯さんのデツキの公開チケットの販売だっけ?」

「おう。そしてそのチケットはここに」

ぬ、と懐から2枚のチケットを取り出す。

「え、ちよ、何で!? 何で黎が持つてるの!? 販売は夕方だよ!」

「ああ、トメさんに譲ってもらった」

今朝こちらに帰つて来た俺は、校長&大徳寺先生のダブルのお説教の後、また困つていたトメさんを助ける事になった。そこでトメさんがお礼にとくれたのがこのチケットらしい。

『もう2枚、こつそり発行しておくからフィオちゃんと一緒にデートしときなさい』  
だつてさ」

「デ!?!」

「デート」

「違う、聞きなおしたんじゃないよ! わたしと黎はそんな関係じゃ無いのに貰つて来

「ちゃったの!？」

「うん。否定すんのも面倒だから『ありがとうございます』って言うておいた」

「うわあああああああああつ!」

「そんなに嫌か……」

ブンブンと抱えた頭を振りまくる茶髪少女。

流石にシヨックだぞ、フィオ。

「い、嫌とかそんなんじや無くて、その……」

「?」

「う、良いよ別に! 黎のバカ!」

スマンな、フィオ。残念ながら俺は鈍感な部類だ。お前が俺に抱いている感情がどんな物なのか、俺にはサツパリ解らん。声に、言葉に出して告げてくれないと、このおバカな化物くんには伝わらないのです。ゴメン。





—— 購買前・夕方

SIDE : フイオ

「お、やってるやってる」

購買部の前では、最近自信と実力をつけてきた丸藤くんがラーイエローとデュエルを行っていた。

「十代くん、三沢くん」「十代、大地」

「黎、フイオ!」

「お、神山くんに黎か」

丁度近くにいた十代くんと三沢君に話しかける。

事態を聞くと、どうやらチケットのラスーを賭けて二人がデュエルを行っているようだ。

「あのイエローくんは誰、三沢くん?」

「彼は神楽坂。クロノス先生のコピーデッキを使う」

「へえ、あれが……」

『アンティーク・ギア・ゴーレム古代の機械巨人』で攻撃なの〜ネ！  
〃アルティメット・パウンド〃！

『マジック・シリンダージエット・ロイド』の効果で、手札の『魔法の筒』を発動！

「あ、決着ついた」

黒い拳の影が赤い筒の片方に吸い込まれると、もう片方の筒から神楽坂くんに向けて発射された。翔くんの勝ちだね。

ジエット・ロイド（効果モンスター）

星4

風属性／機械族

ATK 1200／DEF 1800

このカードが相手モンスターの攻撃対象に選択された時、このカードのコントローラーは手札から罠カードを発動する事ができる。

「アニキ〜！ 勝ったツスよ〜！」

「お、やったじゃねえか！」

「ナイス戦略だった。『古代の機械巨人』の効果はモンスター効果には及ばない事を上手く利用したな。百点だ」

「やった！」

十代くんのためにもう一枚チケットを入手した翔くんの後で、敗北した神楽坂くんは、何か尋常ではない程に悔しがっていた。

レッドとかイエローとか、階級では無い何かには彼は苛立ちを感じていたようだった。

「？  
今から？」

「うん。十代くん達は既に行つたよ。明日香ももう行つたし、後はわたしと黎だけ」  
「お前がこんなルール違反をするたあな。良いだろう、乗つた！」

夜も更けた頃、わたしは黎を誘いにこつそりと寮を抜け出して彼の元へやって来た。狙いは今晩にはもう展示されている武藤遊戯さんのデツキ。デュエリストキングと名高い彼のデツキは、恐らくわたし達の物とは一線を画すだろう。正直な話、決闘者の端くれとして、明日の展示開始まで、待ちきれない。

黎もわたしが来なかつたら自分から誘いに行く予定だつたらしく、すぐに賛成してくれた。

「(で、バカやる奴がいるんだよな)」

「?」

「いや、何でも」

展示室の前で、明日香達と合流した。メンバーは十代くん達いつものメンバー。

待ちきれないのは皆同じだったみた「マンマミ〜ア〜!?」い…………?

「クロノス先生の声だ!」

「嫌な予感がする。急ぐぞ!」

扉は鍵が掛かつてなかつたらしくすぐに開いた。奥の方では金髪おかつぱ頭の実技最高責任者であるクロノス・デ・メデイチ教諭が頭を抱えていた。

視線の先には割られた円筒のガラスケース。プレートには「デュエリストキング 武藤遊戯のデッキ・レプリカ」と書かれて……………。

ええっ!!?

「デュエリストキングのデッキが盗まれたの!」

「まさかクロノス先生が!」

えええっ! !

確かにエリート思考でどっかイヤな人だとは思っていたけど、まさか犯罪行為に手を染めるような人だったなんて! 見損ないました!

(マスターも大概口悪くなりますよね)

(ほっとして)

「ち、違うのゝネ! 私はやって無いのゝネ!」

「教諭、ケースの鍵は?」

「こ、ここにあるゝノ!」

黎の問いかけに先生がチャラリ、とポツケから鍵を取り出す。

「ふーむ、じゃあ教諭がやったワケじゃあ無さそうだ」

「黎、この鍵が何の証拠になるのさ」

「分からないか? 鍵があるのにケースを壊したりはしねえ。デッキをくすねて後は知

らぬ存ぜぬで押し通し、鍵穴の周りに傷でも付けときやあつという間に架空のピッキング犯の完成だ。ガラスを割ったらその音で勘付かれる可能性があるからな。

だが、ガラスケースは音が鳴る事を厭わず何者かに破壊された。これは鍵が無い奴がデツキを盗む為にやる事だ」

「プラス、クロノス先生はここにいて悲鳴まで上げた。少なくとも俺が犯人ならそんな自ら犯人と名乗り出るようなマネはしない」

ほへー。

黎と三沢くんの説明はもつともだね。

……て事は、犯人は別にいるって事？

「そうなるな。このままじゃ朝にはチケット買った連中がやって来てデツキが無い事がバレル」

「そうしたら、クロノス先生は責任を問われて……」

「せ、先生はクビになっちまうって事か!？」

「ク!？」

ギョツとした顔になる先生。今まで思いつかなかつたの？

「お、お願いなの〜ネ！ デツキを探してほしい〜ノ！ ワタシ、クビはイヤなの〜ネ  
!」

「切り捨てるのは簡単だが、そうすつと後味悪そうだな」

「俺、クロノス先生がクビなんて嫌だぜ」

「クビ云々はさて置き、デュエリストキングのデツキが盗まれた事は看過できない。協力します」

「中身も気になるしね」

皆が協力する気満々なので、わたしも一応名乗り上げておこうかな。

「頼むのゝネ！ シニョール・シニョーラ達が頼りなのゝネ！」

「教諭は一度この近くを搜索して下さい、まだ近くにいるかも知れない。俺達は外へ」  
かくして、盗まれたデツキの搜索が始まったのである。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 30：偽物VS化物（前編） 闇VS星

## SIDE：黎

「再確認する。クロノス先生はここら一带を調べた後、外へ。俺達は最初から外を探索する。」

相手はかの武藤遊戯氏のデッキを所持しているだろう。故にデュエルをやるなんて流れになったら負ける可能性も充分に有り得る。そこで、今回やるのは人海戦術だ」

早口で捲し立てながらも、皆に伝わっている事を再確認する。指揮官の立場にいつの間になつてはいるが、今はそんな事を気にしている余裕は無い。

「デュエルの流れになつたら卑怯でも何でも多人数で当たれ。いくら伝説のデュエリストのデッキでも、扱っているのは本人では無い。そこに隙ができる。」

俺は上空から探す。翔、隼人は十代と大地、ジュンコとももえは明日香とフィオと一緒に行動してくれ。要するに男女別だ。

相手がもし極悪非道な悪漢だったら、正々堂々は今回は敗因になりかねない。美学よりもデッキの奪還と身の安全を優先。良いか？」



「ああ」

「おう」

「分かったツス」

「ええ」

「はいはい」

「うむ」

「分かったのゝネ」

「分かりましたわ」

「オツケー」

「十全だ。それじゃ行くぞー！」

ダッ！ と皆が駆け出す。俺は風の力を流し込んで窓のサッシを蹴って空高く飛び上がった。夜風が気持ち良いが、今は置いておく。

さて、原作ではガケって事ぐらいしか分かっていない。そしてこのアカデミアにガケだなんて腐る程ある。つまり、誰かが接触するまでは全く分からないって事だ。

『主殿』

突然、聞き慣れた声が横からかけられた。隣で半透明でフワフワ浮いている彼女、桜は前方を険しい顔で見つめている。

キツ、とブレーキをかけて空中静止。彼女の話を書く事にする。飛んでいるまま聞いたらポイントを逃しかねない。

「桜か。どうした、急に」

『前方約165メートルの地点のガケ。そこでデュエルが行われているようだ。微弱な精霊の反応と近くに『ハネクリボー』と『デスコアラ』の気配が混ざっている。あそこで何かが起こっている』

『『ハネクリボー』と『デスコアラ』?』

十代と隼人の精霊だな、そりゃ。て事は……。

「行くぞ、桜。多分そこに犯人がいる」

『承知』

バサリと翼を羽ばたかせて岩場に向かう途中、翔の悲鳴が聞こえた気がした。



「さあ、フィニッシュだ！」

『有翼幻獣キマイラ』で丸メガネ、『翻弄するエルフの剣士』でコアラ似、『砦を守る翼竜』で茶髪、『クリボー』で黒髪にダイレクトアタック！」

「うわああああっ！」

「きゃああああっ！」

翔：LP 2000↓0

隼人：LP 100↓0

ジュンコ：LP 1400↓0

ももえ：LP 300↓0

敵：WIN

翔・隼人・ジュンコ・ももえ：LOSE

有翼幻獣キマイラ (融合・効果モンスター)

星6

風属性 / 獣族

ATK 2100 / DEF 1800

「幻獣王ガゼル」+「バフオメット」

このカードが破壊された時、墓地にある「バフオメット」か「幻獣王ガゼル」のどちらか1枚をフィールドに特殊召喚する事ができる。

(表側攻撃表示か表側守備表示のみ)

翻弄するエルフの剣士 (効果モンスター)

星4

地属性 / 戦士族

ATK 1400 / DEF 1200

このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

岩を守る翼竜（通常モンスター）

星4

風属性／ドラゴン族

ATK 1400 / DEF 1200

山の岩を守る竜。天空から急降下して敵を攻撃。

クリボー（効果モンスター）

星1

闇属性／悪魔族

ATK 300 / DEF 200

相手ターンの戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てて発動する。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

岩場に降り立つと、翔達が吹っ飛ばされた所だった。近くにはバラバラに飛び出したハズの皆がいる。

「ゴメン、黎。負けた……!」

「フィオ……」

十代と明日香が見当たらないが、それ以外の皆はいる。岩場に横一列に並ぶのは翔を  
始め、隼人、ジュンコ、ももえの4人。

対面にいるのは赤茶けた尖った髪にライイエローの服を着た男。やはり、あいつか。

「神楽坂……」

「ああ。十代と天上院くんは一旦別行動になってしまったが、それでもこの人数ならな  
んとかなると思ったんだ……」

「それがこのザマだよ。わたしと三沢くんのタッグでも、四対一の勝負でも全く勝てな  
かった……」

なんてヤツだ。奪ってからまだ一時間も経ってないというのに、これ程まで使いこな  
すとは……。

「ふはははははっ! 凄い! このオレが、こんなにも強い!」

「くっ! アニキさえいてくれれば!」

「明日香さんがいてくれたら、こんな奴……!」

神楽坂の高笑いに、翔とジュンコが歯噛みした。

悔しいが俺だつて遊戯氏のデッキ相手に勝てる保証は無い。偽物が扱っていても勝

てないという事が悔しさを加速させる。

奴は腕のある大地とファイオのタツグを降し、四対一という状況でも勝利を収めた。ここは大人しく十代と明日香の到着を待つのが得策だ。十代に任せるか、せめて彼らと組んで戦うべき……。

「無駄だ！ 例えカイザーであろうとも、最早このオレを止める事はできん！ この最強のデュエリストを倒す事は何人たりとて不可能だ！」

「皇帝が無理なら、化物はどうだ？」

ドシン！ と翔達の前に跳躍して着地する。

そして着地してから気付く。何をしているんだ俺は。十代達が来るまで待つつもりだったのに。

「黎（くん）！」

「遊馬崎（さん）！」

「へえ、化物、シスコン、鬼、無敵、不死身、正義の味方、オシリスレッドの双壁の異名を持つ男が相手か」

チクシヨウ、変なあだ名が増えてやがる……。

「だが、オレには勝てん！ このデュエリストキングのタクテイクスを持ち、デツキを手にしたオレには最早死角は無い！」



「寝呆けるな。所詮は他人の作ったテメエの魂の籠もっていないデツキ。そんなん回し続けてもいつかは絶対に負ける。」

今までもそうじゃ無かったのか？ カイザー亮、クロノス教諭、海馬瀬戸氏、武藤遊戯氏の戦略をトレースし、そして一時的な連勝を収めはしていた。だが、いつかは連敗が回って来る。夕方の翔とのデュエルだってその一環だったんじゃないのか？」

「う、煩い！ 再現が不完全だったただけだ！ このデュエリストキングのデツキがあれば最早オレに負けなんか存在しない！ お前も、カイザーも倒してこのオレの実力を皆に知らしめてやる！」

段々と俺の内側に煮え滾るマグマのような感情が湧き上がって来たのが分かった。さつき飛び出したのはこれが原因だろう。

グツグツと音を立てているのが分かる。この感情は間違いなく怒り。何故？ 知らない。今はどうでも良い。このバカをぶっ飛ばすのが先決だ。

「知らしめて、どうなる」

「は？」

「お前は俺の二つ名を幾つも呼んだ。お前もきつとこう言われるだろうな、『王者の偽物』と」

「！」

「分からないのか？ お前は目の前の力を欲するがあまり、デュエリストとしてやってはいけない。他人のデッキで強さを己の証明する。事をしてしまった。お前のハリボテの強さは認める。だが、それはきつと事情を知らない他の人達からは批難され、後ろ指を指され続けるものだ。

「ただだけ他人を真似て模倣しても、所詮それはオリジナルには勝てない。元が少しでも変わればすぐに敗北を喫する。オリジナルより腕が劣れば実験台練習台になり、劣化コピーと揶揄される。この道を究めるのは愚劣な事だと知れ」

「ならば……、ならばどうすればいいと言うんだ！ 何をどうやっても他人のデッキのコピーになってしまふこのオレは！ どう頑張つても一定の強さにはなつても、強くなれない。オレは！ お前みたいな恵まれた環境にはいないんだよ、一般人は！」

「恵まれた……？」

神楽坂の咆哮を黙つて聞いていた俺は、その言葉に反応する。

「この俺が恵まれていると本当に思っているのならそれは虚像だ」

「ウソなもんか！ 現にお前は誰も持つていないカードを自由自在に操り、誰も知らない未来の召喚を行う！ 相手がイエローだろうがブルーだろうが連戦連勝！ その強さと生い立ちと境遇に女子の中じゃファンクラブまであるって噂だ！ 恵まれたと言わずして何と言うんだよ！」

「報いだ」

神楽坂の悲しみと怒りの声に、俺は努めて冷静に怒らないようにしながら答える。口の中が怒りで乾き始め、自分でも声が怒り始めているのが分かる。紅のマグマは既に噴射の限界点に達している。

ビリビリと足元の岩だけが殺気で震える。

「お前、親はいるか？」

「何？」

「愛情を注いでもらった事はあるか？ 仲の良い友達はあるか？」

「当然だ！」

「理不尽な暴力を振るわれ死にかけた事は？ 身を引き裂かれ八つ裂きにされそうな痛みと熱を感じて、それでも病院に行けなかった事は？ 泥を啜り、虫を食み、欠片も希望の無い、地獄のような毎日を生きた事は？ たった一人の大切な存在を守る為に五十を超える研究機関の人間を廃人にした事は？ そんな艱難辛苦の数々を味わっても、一切の苦悩を顔に出す事すら許されない日々を過ごした事はあるか！」

「……無いに決まっているだろう！」

「分かったようだな」

そうだな。これが俺の21年間の人生の片鱗。総量の僅か一割にも満たない苦闘は、誰

がどう見ても幸せな人生では無かっただろう。

「俺が手に入れた力はその戦いと不幸と苦難でのみ構成された毎日を生きる為に手に入れたもの、天性のものじゃ無いんだ！」

力が欲しくば努力か才能しか無いんだよ！ テメエは誰でも無いお前自身になる努力を怠り、手中にある才能を使えないものとして放棄している！

俺はテメエみたいなクズに負けはしない！ 踏んで来た場数も、やってきた努力も、何もかも違うんだよ！ 吼えるだけが能なら今すぐこのアカデミアから消え失せろ、クソガキが！」

ああ、そっか。俺は神楽坂に怒っていたワケじゃ無いんだ。きっと、今まで一度も悲鳴を上げず、血反吐を吐いても心が死ななかつた事を密かに自慢していたクセに、都を守れなかつた自分に怒っているんだ。

心のどこかで自分を底辺にまで卑下し、虚栄の強さだけで自分を保って来ていた自分とアイツが重なっていたんだ。

自己嫌悪。

或いは、同族嫌悪。

「オレは……！」

「構えろ！ 強さってモンが何なのか、テメエの足りねえ頭に叩き込んでやる！」

「、良いだろう！ このデュエルキングが相手だ！」

『デュエル！』

黎VS神楽坂

LP 4000 VS LP 4000

「俺のターンから行くぞ、ドロー！ 俺は『ボルト・ヘッジホッグ』を召喚！ カードを1枚伏せてターンエンド！」

ボルト・ヘッジホッグ : DEF 800

黎 : LP 4000

手札 : 4枚

フィールド

: ボルト・ヘッジホッグ (DEF 800)

## ：伏せカード一枚

「お、オレのターンだ！」

「黎ー！」

「こちらに声と共に駆けて来る二つの影があつた。言わずもがな十代と明日香だ。

「神楽坂!? あいつが犯人だったのか！」

「この様子だと、黎以外は全滅のようね……」

端つこの方に退場していた翔達が十代と明日香の所へと駆け寄る。翔達から細かい事情を聞くと、十代と明日香は声を張り上げた。

「おい、神楽坂！ 何でこんな事するんだ！」

「そうよ！ こんなの間違つてるわ！」

「煩い！ おお、お前達みたいな奴らに、オレの悩みが分かるモンかあ！」

声を張り上げ返した神楽坂は、手札を3枚抜き取つて俺に公開する。

「魔法カード『融合』を発動！ 手札の『幻獣王ガゼル』と『バフオメット』を融合！  
出でよ、『有翼幻獣キマイラ』！」

幻獣王ガゼル(通常モンスター)

星4

地属性/獣族

ATK 1500 / DEF 1200

走るスピードが速すぎて、姿が幻のように見える獣。

バフオメット(効果モンスター)

星5

闇属性/悪魔族

ATK 1400 / DEF 1800

このカードが召喚(反転召喚)に成功した時、「幻獣王ガゼル」をデッキから1枚手札に加える事ができる。

次元が歪み、角を持った獅子と四本腕の悪魔が一つに混ざり合う。歪みからはその二つの頭を持った一対の翼を持つ魔物が現れる。

出やがったな、あのデッキの切り込み隊長! 戦士族や魔法使い族を起用しているつうののに、よくもまあ回るモンだよ。それだけあの王様とカード達との絆が強いつて事

か？

有翼幻獣キマイラ：ATK 2100

「気をつけて！ 僕達はそのモンスターだけにやられたみたいなのモンツス！」  
「分かった」

ス……、と目を細めて再び神楽坂を睨む。思案顔だが、恐らく『ボルト・ヘッジホッグ』に攻撃すべきかどうかを悩んでいるのだろう。

『ボルト・ヘッジホッグ』は墓地に行かないと効果を発揮しない。だが、それで攻撃を躊躇して次のターンに上級モンスターを呼ばれるのもまた避けたいだろう。『キマイラ』の攻撃力は2100と上級モンスターに張り合えるものではない。

俺ならここは攻撃する。『キマイラ』の能力なら壁を残せるからだ。少なくとも致命傷の心配は無い。

「ここは攻撃する！ 『有翼幻獣キマイラ』で『ボルト・ヘッジホッグ』を攻撃！ キマイラ・インパクトダッシュ！」

「その攻撃は通す！」

強烈な突進がネズミを吹っ飛ばす。これで俺の場にモンスターはいなくなっただか。



「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

神楽坂 : LP 4000

手札 : 1枚

フィールド

: 有翼幻獣キマイラ (ATK 2100)

: 伏せカード2枚

「翔、神楽坂はどんな戦い方をしたんだ？」

「えーと、それがほぼ『キマイラ』の力押しと何枚かの補助カードにやられちゃったもんで……」

「ボロ負けしたせいで殆ど分からないのね」

「あうっ！」

ザクッ！ と翔が胸を押さえる。明日香、言い過ぎじゃねえの？

「神楽坂は、その人並み外れた記憶力を駆使して、誰かのデッキを真似して戦う」

「恐らくは今までそれが原因で敗北していた。でも……」

「ああ。デュエリストキングのタクティクスをトレースした神楽坂に、デュエルキングのデッキが揃えば、こんなにも恐ろしい事になるとは……」

無視する。精神状態は未だそつちに的確な反応を入れられる程安定はしていない。

「俺のターン！」

墓地のカードは『ボルト・ヘッジホッグ』1枚のみ。だが、この手札なら問題無い。

「俺は攻撃表示で『マックス・ウオリアー』を召喚する！」

『テヤツ！』

マックス・ウオリアー：ATK 1800

ドシン！ と飛び出すのは僧正のようなモンスター。袈裟を羽織り大粒の数珠を首に掛けていて、手にはサスマタのような武器がある。

『マックス・ウオリアー』で『有翼幻獣キマイラ』を攻撃！

「な、攻撃力はこちらが上だぞ!？」

「解っている！ 『マックス・ウオリアー』の効果発動！ モンスターとバトルする時、攻撃力は400ポイントアップする！」

「何だと!？」

マックス・ウオリアー：ATK 1800↓2200

「グスイフト・ラツシュッ！」

シユババババ! と残像ができる程に高速で繰り出される連続の突き。

猛ラツシュに耐え切れず、『キマイラ』は消滅した。

「ぐああっ！」

神楽坂：LP 4000↓3900

「ただしモンスターを戦闘破壊した『マックス・ウオリアー』は次の俺のスタンバイフェイズまで攻守とレベルが半分になる」

マックス・ウオリアー (効果モンスター)

星4

風属性／戦士族

ATK 1800 / DEF 800

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が400ポイントアップする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、次の自分のスタンバイフェイズ時までこのカードのレベルは2になり、元々の攻撃力・守備力は半分になる。

マックス・ウオリアー：☆4 ↓ 2 / ATK 2200 ↓ 1800 ↓ 900 / DEF 800 ↓ 400

「この瞬間、『キマイラ』の特殊効果発動！ 墓地から『バフォメット』を特殊召喚だ！」

バフォメット：DEF 1800

（よし、あの攻撃力なら次のターンに突破できる！）

「生憎、こんな狙って下さいなんて言ってるようなモンスターを放置する程アまくない」「何!?!」

「相手がバトルフェイズ中にモンスターを特殊召喚した時、速攻魔法『チャージ・クラス

「タ」を発動！ デッキから攻撃力1500以下で、自分フィールドのモンスター1体と同じ種族のモンスターを手札に加える！」

そして自分の場の戦士族モンスター1体をリリースする事で、『ターレット・ウオリアー』は特殊召喚できる！ 『マックス・ウオリアー』をリリース！ 来い、『ターレット・ウオリアー』！」

ターレット・ウオリアー：ATK 1200

『マックス・ウオリアー』が背後の光のゲートに消え、そこから代わりに飛び出したのは城壁のような鎧に身を包んだ戦士。肩にはリボルバーガンがセットされており、リリースした戦士族モンスターがその装甲を着ているとも見れる。

「だが、攻撃力1200程度なら……！」

『ターレット・ウオリアー』の効果発動！ リリースした戦士族モンスターの元々の攻撃力分だけ攻撃力がアップする！」

「えーと、『マックス・ウオリアー』の攻撃力が1800だから……」

「攻撃力は3000になるね」

チャージ・クラスタ（オリジナル）

【速攻魔法】

相手がバトルフェイズ中にモンスターを特殊召喚した時、自分フィールドのモンスター1体を対象として発動できる（ダメージステップでも発動可）。

そのモンスターと同じ種族で攻撃力1500以下のモンスターを1体、デッキから手札に加えるか特殊召喚する。

タレット・ウオリアー（効果モンスター）

星5

地属性／戦士族

ATK 1200／DEF 2000

このカードは自分フィールド上に存在する戦士族モンスター1体をリリースし、手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚したこのカードの攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力分アップする。

タレット・ウオリアー：ATK 1200↓3000

「攻撃力3000だと!？」

「ターンエンドだ」

黎 : LP 4000

手札 : 3枚

フィールド

・ターレット・ウォリアー (ATK 3000)

・伏せカード1枚

「凄い……、わたし達が束になっても敵わなかった神楽坂くん相手に全く引いてない……」

「それだけ黎が強えって事か」

「だけじゃない。タクティクスにもムダが無く、相手のカードの特徴を読んで一手先の戦術を繰り出している。神楽坂の戦術を抑え込むとは……」

「お、オレのターン！ オレは『THE トリツキー』を手札を1枚墓地に送って特殊召喚する！」

THE トリツキー：DEF 1200

神楽坂が手札を1枚墓地に送ると、「？」のついたマスクを被った道化師が現れる。デッキのコンセプトによつて『バイス・ドラゴン』や『クイツク・シンクロン』と相互互換で投入されるカードだ。

だが、問題はそこじゃ無い。今あいつが墓地に送ったカード、あれは……。

「ターンエンド！」

神楽坂：LP 3900

手札：0枚

フィールド

：バフォメット（DEF 1800）、THE トリツキー（DEF 1200）  
：伏せカード2枚



「俺のターンー！」

いいだろう、乗ってやる！ 伏せカードが2枚ともそれだったとしても、『ターレット・ウオリアー』には敵わねえからな。

「俺は『終末の騎士』を召喚！ このカードを召喚した時、デッキから闇属性モンスターを墓地に送る！」

デッキから『レベル・ステイラー』を墓地に送る。闇属性というのはサポートカードが多いから便利だ。

「この瞬間、罨カードオープン！ 『黒魔族復活の棺』！ 相手の場にモンスターが現れた時、そのモンスターとオレの場のモンスター1体を生け贄に、墓地から我が最強の僕しもべを復活させる！」

やはり、そのカードを伏せていたか……。

「オレは『バフオメット』とお前の『終末の騎士』を生け贄に捧げる！ 出でよ、我が最強の僕にて黒魔術師最強の魔導師！ 『ブラック・マジシャン』！」

『ハアアアアアアッ、テアアッ！』

ブラック・マジシャン：ATK 2500

紫の魔導衣に特徴的な杖、凜とした表情に長い髪。黒魔導最高の男がそこにいた。

ブラック・マジシャン（通常モンスター）

星7

闇属性／魔法使い族

ATK 2500／DEF 2100

魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

その恐ろしさは攻守よりもサポートカードの豊富さにある。

海馬瀬戸氏の『青眼の白龍』が力を司るなら武藤遊戯氏の『ブラック・マジシャン』が司るのは技。双方共に三千年も前のエジプトから主人と共に鎬を削り合った仲であり、『白』龍と『黒』魔術師という風に名前も対になっている。

「『ブラマジ来た——ッ！』」

「煩えよ！」

2チャンネルみてえな発言すんな。

ゴホン、それはともかくとして。

「どうだ。これこそ最強の魔術師にして我が最強のモンスター！ 恐れ入ったか「ア

ホカ」何だと!？」

「言いたい事は2つ。1つ、俺は『ブラック・マジシャン』が『黒魔族復活の棺』で呼び出される事ぐらい予測していた。『THE トリツキー』のコストで墓地に送られたのが見えたからな。」

2つ、それは『お前』の最強モンスターじゃ無い。『武藤遊戯』の最強モンスターだ。お前という名の空っぽの器が、ただ単に今はそのデッキの中に入っていた『ブラック・マジシャン』を召喚できたというだけだ」

「ぐっ! 言わせておけば……!」

そして忘れてないか? まだ俺のターンだという事に!

「『ターレット・ウォリアー』で『ブラック・マジシャン』を攻撃だ! リボルビング・シヨット!」

ダカダカダカダカダッ!

肩の回転砲が火を噴き、無数の楕円形の弾丸がバラ撒かれる。全てが命中すればパワーで劣る『ブラック・マジシャン』は吹き飛ばが……。

「リバースカード、オープン! 罨カード『幻想の呪縛』! モンスター体の効果を封印し、攻撃力を500ポイント下げる!」

「『光と闇の洗礼』じゃ無い!」

ブウン、とウジャド眼が描かれた魔法陣が『ターレット・ウォリアー』を取り囲む。火を噴く肩のリボルバーの勢いが弱まり、『ブラック・マジシャン』の張った結界に阻まれる。

幻想の呪縛（漫画オリジナル）

【通常罫】

相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は500ポイントダウンし、モンスター効果は無効化される。

ターレット・ウォリアー：ATK 3000↓700

「ブラック・マジック黒・魔・術！」

「ぐあっ！」

黒い魔術。俺の目にはそうとしか認識できなかつた。一瞬で場を制圧したそれは、『ターレット・ウォリアー』を塵に変えるが如く吹き飛ばした。

黎：LP 4000↓2200

ミスったな……。先に『レベル・ステイラー』を『ターレット・ウオリアー』のレ  
ベルを下げて場に出しておくべきだったか。そうすれば壁が残っていたのに……。  
手札を確認する。これはもう少し後で使いたかったんだが……。

「カードを2枚セットし、魔法カード『愚かな埋葬』を発動。デッキから『ネクロ・ガ  
ドナー』を墓地に送る。ターンエンド」

黎：LP 2200

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード4枚

「あれも墓地肥し、なんだね」

『ネクロ・ガードナー』は墓地じゃないと効果が使えないからな」

「フィールドは神楽坂くんが有利だけど、黎くんの場合には伏せカードが4枚。きつと大丈夫ツスよね」

ネクロ・ガードナー（効果モンスター）

星3

闇属性／戦士族

ATK 600／DEF 1300

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

思ったよりも強敵だな、神楽坂。

ただのコピーじゃない、タクティクスもしつかり記憶している。恐らく似た状況を用意に頭が検索し、その打開策を想起しているんだ。俺みたいな奴じゃなく伝説と呼ばれた人々の戦術を。

「オレのターン！ オレは魔法カード『天よりの宝札』を発動！ これで互いに手札が6枚になるようにカードをドロウする！」

ここで最強のドロースースか……。

漫画内の存在としては1度使われただけで記憶には留まらないだろうが、アニメではオリジナル展開で何度も色々なキャラが使っていたからな。

互いに大きなチャンスを与えるあの夢のカード、何故OCGであそこまでの弱体化が図られたし。

「更に、通常ドロロー以外でデッキからドロローされたため、『ワタポン』を特殊召喚！」  
『ワタポンッ！』

ワタポン：DEF 300

「そして『ワタポン』を生け贄に捧げ……、出でよ『ブラック・マジシャン・ガール』！」  
『ハアイ♪』

ブラック・マジシャン・ガール：ATK 2000

ピンクの綿毛の塊が光に変わると、代わりに元気よく飛び出したのはご存じBMG。青い衣装に超ミニのスカート、可愛さ満点の笑顔と、デュエルモンスターズを深く知ら

ない人でも知っているモンスターの代表格だ。

きつとここにパソコンがあれば『BMG k t k r !』とでも打っていただろう。俺としても彼女の登場は若干嬉しい。

ワタポン（効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 2000／DEF 300

このカードが魔法・罫・効果モンスターの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

ブラック・マジシャン・ガール（効果モンスター）

星6

闇属性／魔法使い族

ATK 2000／DEF 1700

お互いの墓地に存在する「ブラック・マジシャン」「マジシャン・オブ・ブラックカオス」1体につき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。



「うっひゃあああつ！ 『ブラック・マジシャン・ガール』だ！ 僕、黎くんには勝つてほしいッスけど彼女の事は応援しちゃうッス！」

「翔、何言ってるんだな！」

「だって、ブラマジガールは遊戯さんのデッキにしか入ってないんだよ！ 今夜限りの恋かも知れないんだよ！」

後ろで見ている中で一番の狂喜乱舞しているのは翔。他の皆も多少なりとも喜んでいるが、彼はもう別格と言つてもいいだろう。ちよいキモいと思つたのは内緒だ。

「ちなみに厳密には遊戯氏のデッキに入っている以外は公式に確認されていないだけで、世界に1枚つてワケじゃ無いぞ、翔。それだと『青眼の白龍』<sup>ブルーアイズ・ホワイトドラゴン</sup>以上のレアになるぞ。

「行くぞ！ 『ブラック・マジシャン』でダイレクトアタック！ 黒・魔・術！！」<sup>ブラック・マジック</sup>

「墓地の『ネクロ・ガードナー』をゲームから除外し、攻撃をブロック！」

黒い鎧武者に防がれた黒い魔導弾。

世話になるね、『ネクロ・ガードナー』。それだけ俺が下手な証拠か。

「なら『ブラック・マジシャン・ガール』で攻撃だ！ 黒・魔・導・爆・裂・破！！」<sup>ブラック・マジック・バースト</sup>

「なんの！ 『くず鉄のかかし』を発動！」

ピンクの爆裂系の魔導弾を金属の案山子が防ぐ。こいつも毎回毎回出てくるな。いやこのカード好きだから構わないけど。

「どうした、こんなモンか?」

「ふふふ、やるな、このデュエルキングにここまで張り合うとは! リバースカードを2枚セットしてターンを終了するぜ!」

神楽坂：LP 3900

手札：2枚

フィールド

：ブラック・マジシャン（ATK 2500）、ブラック・マジシャン・ガール（AT

K 2000）

：伏せカード2枚

「俺のターン!」

状況を未だ燃える頭で整理する。

相手の場には攻撃力のあるモンスターが2体。こっち側はセットカードが4枚で、その内1枚はもう明かした。

『ネクロ・ガードナー』はもう使っちゃったし、『シールド・ウォリアー』も『フェイク・ガードナー』もまだ来ていない。さて、この手札でどうする？

いや、これが使えるか？

「手札から魔法カード『調律』を発動。俺はデッキから『クイック・シンクロン』を手札に加え、デッキトップのカード1枚を墓地に送る」

調律

【通常魔法】

自分のデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。

その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

げ、『ミラーフォース』が落ちた。最悪だ……。

いや、今は目の前の敵に集中だ。

「手札のモンスター1体を墓地に送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！そして墓地から『ボルト・ヘッジホッグ』と『レベル・ステイラー』を特殊召喚！更に『ロードランナー』を召喚！」

クイック・シンクロン：☆5↓4 / DEF 1300

ボルト・ヘッジホッグ：DEF 800

レベル・ステイラー：DEF 0

ロードランナー：DEF 300

「レベル1の『レベル・ステイラー』とレベル1の『ロードランナー』、レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル4となった『クイック・シンクロン』をチューニング！

集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！ 光差す道となれ！」

「レベルは、えーと、8ツスね！」

「この前口上……、あいつが来る！」

☆1+☆1+☆2+☆4 || ☆8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』！」  
『デヤッ！』

ジャンク・デストロイヤー：ATK 2600

ガシンン！ と着地する4本腕の巨人。破壊のエネルギーが全身に満ちている。

「とうとう出たか、シンクロモンスター……！」

「出た、『ジャンク・デストロイヤー』！」

「プライド戦の功労者なんだな！」

「これで神楽坂さんのフィールドを一掃できますわ！」

「あれ、でもちよつと待って……。今回破壊できるのは3枚だから……！」

後ろで指折り何かを数える翔。そしてギョツとした顔になる。まあ、何考えてるのは大体分かるよ。

「行くぞ、『タイダル・エナジー』！ 対象は右のリバースカード、『ブラック・マジシャン』、そして『ブラック・マジシャン・ガール』！」

「ああああああ、やっぱいいいいいいいい！！！」

ゴオオオオオオオオオオッ！ と波が押し寄せる。二人の魔術師とリバースカードはもれなく流されていった。

『うおおああああつっ！』

『きやあああああつ！』

「あああああ、さようなら、『ブラック・マジシャン・ガール』……。一夜限りの恋だったツス……」

勘弁な、翔。魔人に殴り殺されなかつただけでもマシと思ってくれ。

『『ジャンク・デストロイヤー』でダイレクトアタック！ 〓デストロイ・ナツクル〓！』  
「ぐうっ！」

神楽坂：LP 3900↓1300

「ターンエンド！」

黎：LP 2200

手札：3枚

フィールド

：ジャンク・デストロイヤー（ATK 2600）

：伏せカード4枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）

ふう、取り敢えず持ち直したな……。

「オレのターン、ドロロー！」

神楽坂の手札は俺と同じ3枚。しかしこのターンで何か仕掛けるのならば更にハンドアドバンテージを失う結果になる。さあ、どうする……？

「リバースカード、オープン！ 『リビングデッドの呼び声』！ 甦れ、『ブラック・マジシャン』！」

『ハッ！』

ブラック・マジシャン：ATK 2500

リビングデッドの呼び声

【永続罫】

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「ダイレクトアタックの壁に使えた方法で、わざわざ『ブラック・マジシャン』を甦らせ

たつて事は、あるな？ あの神の抜けた穴を埋めるカードの内の1枚が……！」  
 「そうとも！ オレは魔法カード『光と闇の洗札』を発動！ 『ブラック・マジシャン』を生け贄に、『混沌の黒魔術師』を特殊召喚だ！」

カードから出て来た黒い帯に『ブラック・マジシャン』が引き込まれ、代わつて飛び出すのは全身にベルトを巻いた黒魔術師。『マジシャン・オブ・ブラックカオス』のリメイクモンスターでもあり、その凶悪性から禁止カードにもなっていたカードである。

光と闇の洗札

【速攻魔法】

自分フィールド上の「ブラック・マジシャン」を生け贄に捧げる事で発動する事ができる。

自分の手札・墓地・デッキの中から「混沌の黒魔術師」を1体選択して特殊召喚する。

混沌の黒魔術師（効果モンスター）（エラッタ版）

星8

闇属性／魔法使い族

ATK 2800 / DEF 2600



このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが召喚・特殊召喚に成功したターンのエンドフェイズに、自分の墓地の魔法カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを手札に加える。

(2) : このカードが戦闘で相手モンスターを破壊したダメージ計算後に発動する。

その相手モンスターを除外する。

(3) : 表側表示のこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。

混沌の黒魔術師 : ATK 2800

「効果発動！ 召喚時に墓地の魔法カードを手札に戻す！ オレは墓地の『天よりの宝札』を手札に戻すぜ！」

エラツタ前は速効性があつて良いなあ……。

「そして『死者蘇生』を発動！ 『ブラック・マジシャン』を再び特殊召喚！  
『テヤツ！』」

ブラック・マジシャン : ATK 2500

三度現れる黒魔術最高峰の魔導師。少し疲れているように見えるな、お疲れ様です。

「そして『天よりの宝札』を発動！ カードドロ―！」

「こちらもドロ―！」

「よし！ 魔法カード『サイクロン』を発動！ 『くず鉄のかかし』を破壊する―！」

ビュゴウツ！ と旋風が巻き起こり裏側表示のカード『くず鉄のかかし』を吹き飛ばす。

しまった、防御の要が。

「『混沌の黒魔術師』で『ジャンク・デストロイヤー』を攻撃！ 『デス・アルテマ』―！」

「ぐあつ―！」

黎：LP 2200↓2000

「効果により、『ジャンク・デストロイヤー』はゲームから除外される！ そして『ブラッ

ク・マジシャン』でダイレクトアタック！ 『黒・魔・導』―！」

「黎―！」

「罨カード発動、『ガードブロック』！ 戦闘ダメージを無効化して1枚カードをドロ―

！」

ブウン、と真つ白なバリアが黒い魔術を弾き飛ばす。

「防いだか」

「通してやるほど、アマクはない」

「カードを1枚伏せて、魔法カード『光の護封剣』を発動！ これでお前は3ターンの間、

攻撃できない！」

光の護封剣

【通常魔法】

相手フィールド上に存在するモンスターを全て表側表示にする。

このカードは発動後、相手のターンで数えて3ターンの間フィールド上に残り続ける。

このカードがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上に存在するモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

シユカカカカッ！ と周囲に檻のように光る剣が突き刺さる。

チツ！ 面倒な……！

「ターンエンドだ！」

神楽坂：LP 1300

手札：3枚

フィールド

：ブラック・マジシャン（ATK 2500）、混沌の黒魔術師（ATK 2800）  
：伏せカード1枚、光の護封剣（通常魔法・残り3ターン）

！  
いいぜ、神楽坂。怒りとは別に闘志が燃えて来た……！ 全身全霊でぶっ潰してやる

t o b e c o n t i n u e d

STORY 31 : 偽物VS化物(後編) 舞いて飛び立て、

『L・S ドラゴ・チエリー』

黎 : LP 2000

手札 : 7枚

フィールド

: モンスター無し

: 伏せカード2枚

神楽坂 : LP 1300

手札 : 3枚

フィールド

: ブラック・マジシャン (ATK 2500)、混沌の黒魔術師 (ATK 2800)

: 伏せカード1枚、光の護封剣(通常魔法・残り3ターン)、リビングデッドの呼び声

(永続罠・対象不在)

## SIDE：黎

コピー。

大地は神楽坂のことをそう言った。どうデッキを組んでも高い記憶力が邪魔をして誰かのデッキに似てしまう。

つまり今俺は模擬的な武藤 遊戯氏と戦っているという事だ。これを越えられなければ絶対に本物には勝てない。恐らくこの先に待っているであろう邪神達との戦いにも負けるだろう。

そして何より、神楽坂に怒りを抱いているのと同時に彼を救いたいという感情があった。俺化物と同類なのを、自分自身で許せないのだ。

「俺のターン！」

これで手札は8枚。何をするにも十分な枚数になった。

まずは、この鬱陶しい剣をどかす！

「こちらも手札から魔法カード『サイクロン』を発動！ 対象は『光の護封剣』！」  
辺り一帯を旋風が包み込み、光る剣は粒子に変わって消滅した。

『光の護封剣』は発動後3ターンの間フィールドに残る特殊なカード。だが、こうして破壊してしまえば問題は無い!」

これは逆にフィールドに残り続ける事を利用して『ハリケーン』や『霧の谷のファルコン』の能力で手札に戻し続ける戦法が使える。破壊されるまで一方的に相手の攻撃を封じる事ができるといふ優れた戦術だ。

「相手フィールドにのみモンスターが存在する時、『バイス・ドラゴン』は攻守を半分にして特殊召喚できる!」

『グオオオッ!』

バイス・ドラゴン：ATK 2000 ↓ 1000 / DEF 2400 ↓ 1200

「レベル5のモンスターをいきなり!」

「カイザーだって似たようなの持つてるぜ? 続いて『ジャンク・シンクロン』を召喚!

効果で『ロードランナー』を特殊召喚!

『ハッ!』

『グエーッ!』

ジャンク・シンクロン：ATK 1300

ロードランナー：DEF 300

「そして『バイス・ドラゴン』のレベルを1つ下げて、『レベル・ステイラー』を特殊召喚！」

バイス・ドラゴン：☆5↓4

レベル・ステイラー：DEF 0

「たった1ターンで4体のモンスターを並べるとは……」

「各々は大した能力値じゃ無いがな。」

レベル4となった『バイス・ドラゴン』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

『ジャンク・シンクロン』が腹部のスターターのワイヤーを引いて背中中のエンジンを動かし始めると、3つの星になる。星は緑の幾何学的な模様のリングになると、『バイス・ドラゴン』がその中に入った。

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！ 光差す道となれ！」



『バイス・ドラゴン』が輪郭線と4つの星になり、やがて光に包まれる。

☆3+☆4||☆7

「シンクロ召喚！ 貫け、『ジャンク・アーチャー』！  
『テリヤツ！』」

ジャンク・アーチャー：ATK 2300

「こいつで『混沌の黒魔術師』は潰させてもらう。効果発動！ 1ターンに1度相手モン  
スター1体をエンドフェイズまでゲームから除外する！  
//  
「しまった!?!」  
//  
「ディメンジョン・シユート

青白く光る矢が放たれ、『混沌の黒魔術師』を次元の彼方へと吹き飛ばす。その時空の  
歪みは本来のものよりも更に大きくなり、ベルトだらけの黒魔術師は消滅した。

ジャンク・アーチャー（シンクロ・効果モンスター）

星7

地属性／戦士族

ATK 2300／DEF 2000

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動することができる。

選択したモンスターをゲームから除外する。

この効果で除外したモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に同じ表示形式で相手フィールド上に戻る。

『混沌の黒魔術師』は場から離れた時、ゲームから除外される。『ジャンク・アーチャー』の効果はエンドフェイズまでだが、除外効果が適用されて除外されたタイミングで自身の効果に上書きされた。よってエンドフェイズになっても『混沌の黒魔術師』は戻って来ない！」

「だが、『ブラック・マジシャン』には勝てないぞ！」

「ならばこうするまでだ。魔法カード『シンクロキャンセル』を発動。『ジャンク・アーチャー』をエクストラデッキに戻し、素材となった『バイス・ドラゴン』と『ジャンク・

シンクロン』を墓地から特殊召喚する！」

『ジャンク・アーチャー』が光となって消滅すると、7つの星が場に残り、それらは4つと3つに分かれる。

3つの星は『ジャンク・シンクロン』に、4つの星は5つに増えて『バイス・ドラゴン』に変わった。

シンクロキャンセル

【通常魔法】

フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻す。

さらに、エクストラデッキに戻したこのモンスターのシンクロ召喚に使用したモンスター1組が自分の墓地に揃っていれば、この1組を自分フィールド上に特殊召喚することができる。

ジャンク・シンクロン：ATK 1300

バイス・ドラゴン：ATK 2000

「ま、まさか別のモンスターを!？」

「そうだ。レベル5の『バイス・ドラゴン』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

再び星が変わる2体。今度はレベル8だ。

「集いし願いが、新たに輝く星となる！ 光差す道となれ！」

☆5＋☆3＝☆8

「シンクロ召喚！ 飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」

『クオオオオオオッ!』

スターダスト・ドラゴン：ATK 2500

キラキラと光を放ちながら夜空に飛び立つ白い龍。遊星のエースモンスターであり、ジャックの『レッド・デーモンズ・ドラゴン』とは永遠のライバルだ。

ほう、と思わずその美しさに溜め息が出る。『レッド・デーモンズ』が雄々しきや猛々しさを表すならこちらは優雅さや美しさを表すのだろう。

「キレイ……」

「美しいですわ……」

「カッコイイなあ……」

スターダスト・ドラゴン(シンクロ・効果モンスター)

星8

風属性/ドラゴン族

ATK 2500/DEF 2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

見とれるのも良いが、次の行動に移らないと。

「手札から速攻魔法『突進』を発動！ これで『スターダスト』の攻撃力を700ポイントアップさせる！」

突進

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで700ポイントアップする。

スターダスト・ドラゴン：ATK 2500↓3200

『ブラック・マジシャン』を上回っただど!？」

「攻撃だ！ 響け、ブラック・マジック シューティング・ソニック！」

「ぶ、ブラック・マジック 黒・魔・導！」

初代主人公のエースと3代目主人公エースが白と黒の攻撃をぶつけ合う。星の煌めきが黒い魔術を押し返すと、そのまま呑み込んだ。

「グッウウウ！」

神楽坂：LP 1300↓600

「俺はこれでターンエンド！」

「リバースカード、オープン！ 永続罫『正統なる血統』！ 墓地の通常モンスター1体を攻撃表示で特殊召喚！ 戻って来い、『ブラック・マジシャン』！」

ブラック・マジシャン：ATK 2500

クツ、『蘇りし魂』と対をなすカードか。

にしても4回目だからか好い加減疲弊の色が顔に現れているな。本当にお疲れ様です。今回の過労死さんは『ブラック・マジシャン』だな。

正統なる血統

【永続罫】

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

蘇りし魂

【永続罫】

自分の墓地から通常モンスター1体を守備表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。  
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

スターダスト・ドラゴン：ATK 3200 ↓ 2500

黎：LP 2000

手札：3枚

フィールド

：スターダスト・ドラゴン（ATK 2500）、ロードランナー（DEF 300）、

レベル・ステイラー（DEF 0）

：伏せカード2枚



「凄い……、なんてハイレベルなデュエルなの……」

「お互いに一步も引かない上に、次々と高レベルモンスターを繰り出している。全てのアドバンテージが瓊末なもの見えるくらいだ」

「くうう、俺もやりたかったなあ！」

「オレのターン！ 魔法カード『強欲な壺』を発動！ デツキからカードを2枚ドロロー！」

「ここで『強欲な壺』か……。」

その5枚の手札で何をして来る……？

「手札の『磁石の戦士 $\alpha$ 』、『磁石の戦士 $\beta$ 』、『磁石の戦士 $\gamma$ 』を墓地に送り、『マグネット・バルキリオン』を特殊召喚！」

「ここで『バルキリオン』だと!？」

マグネット・バルキリオン：ATK 3500

マジイな。攻撃力なら『究極竜騎士』、『アルカナ』に続く、あのデツキで第3位の

モンスターだ。

「今度はこつちの番だ！ 『マグネット・バルキリオン』で『スターダスト・ドラゴン』に攻撃！　　『マグネット・ソード』！」

「うああっ！」

黎：LP　2000→1000

「更に『ブラック・マジシャン』で『ロードランナー』を攻撃！」

「クソッ！」

チツ、蘇生が容易い『レベル・ステイラー』はやはり狙わないか……！

「ターン終了だぜ」

神楽坂：LP　600

手札：1枚

フィールド

：ブラック・マジシャン（ATK　2500）、マグネット・バルキリオン（ATK　3500）

：正統なる血統（永続罫・『ブラック・マジシャン』に対して発動中）、リビングデッ

ドの呼び声(永続罨・対象不在)

「さ、流石にヤバくない? 攻撃力3500って」

「確かに。今まで黎のデュエルを何度も分析したが、攻撃力が3000を上回るようなモンスターはいなかった。完璧にマズい状況だ」

「頑張れえ! 勝って! 勝つんだ、黎!」

「分かってる! 俺のターン!」

とは言え、攻撃力3500つつーのは厳しいな。極界の三星神や『スカーレット』や『シューティング・クエーサー』、『ハルバード・キャノン』、『セイヴァー』クラスじゃな  
いと太刀打ちは不可能だ。

「魔法カード『強欲な壺』を發動し、デッキからカードを2枚ドロ! ……:…:…:来たか、桜!」

『押されているな、大丈夫か?』

大丈夫、とは言えないな。

どうする? どうすれば良い?

……ふつ、決まってる。悩む必要も無し!

「桜、今回もフィニッシャーを頼む」

『任せろ』

「俺は『マジック・ストライカー』を召喚！」

『あ、私は次のターンなのか』

「(ゴメン)」

マジック・ストライカー：ATK 600

「『マジック・ストライカー』は相手プレイヤーにダイレクトアタックができる！」

イレクト・ストライク<sup>〃</sup>！」

「これが通れば黎の勝ちだぜ！」

「行つけえ！」

「アマいぞ！ 手札の『クリボー』を墓地に送り、ダメージを無効化する！」

『クリ〜』

半透明の茶色い毛の塊(こう表現せざるを得ない程フサフサなのです)が攻撃を防ぐ。やはり、その手札は『クリボー』だったか。

マジック・ストライカー(効果モンスター)

星3

地属性/戦士族

ATK 600/DEF 200

- (1) : このカードは自分の墓地の魔法カード1枚を除外し、手札から特殊召喚できる。
- (2) : このカードは直接攻撃できる。
- (3) : このカードの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

クリボー(効果モンスター)

星1

闇属性/悪魔族

ATK 300/DEF 200

相手ターンの戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てて発動する。  
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

「ありがとう、『クリボー』。流石は数千枚のカードの中からオレが選んだ1枚だ」

『クリ〜……』

「いや、お前が選んだワケじゃ無いし」

あーあー、『クリボー』困ってるぞ？

「カードを2枚セット。ターンエンド！」

黎：LP 1000

手札：2枚

フィールド

：マジック・ストライカー（ATK 600）、レベル・ステイラー（DEF 0）

：伏せカード4枚

「オレのターン！ フン、万策尽きたか？」

「それは、お前の目で確かめろ」

「良いだろう！ 『貪欲な壺』を発動！ 墓地の『ブラック・マジシャン・ガール』、『T

he トリック』、『幻獣王ガゼル』、『バフオメット』、『有翼幻獣キマイラ』をデツキ

に戻してシャッフルし、カードを2枚ドロ―!」

### 貪欲な壺

#### 【通常魔法】

自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドロ―する。

よくもまあ、ああもクルクルデッキを回せるもんだ。デッキと一緒にドロ―運も手に入れたのか、それとも他人でも回せるようにしてあるのか……。

「そして墓地の『ワタポン』と『クリボー』をゲームから除外する!」

『『ワタポン』と『クリボー』……、っ!』

「気がついたか!」

『ワタポン』は光属性、『クリボー』は闇属性。この効果で場に出せるモンスターは3体。その内、あのデッキに入っているのは……!」

「三沢くん、どういう事?」

「墓地の光と闇を除外する事で特殊召喚できるモンスターが存在するんだ。その内1体は、余りにも強すぎて禁止カードに指定された『混沌帝龍―終焉の使者』!」

カオスエンペラードラゴン

こっちではまだ禁止カードか。歴代で2番目に早い禁止指定だったな、確か。

混沌帝龍—終焉の使者（特殊召喚・効果モンスター）（エラッタ版）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地から光属性と闇属性のモンスターを1体ずつ除外した場合のみ特殊召喚できる。

このカードの効果を発動するターン、自分以外の効果を発動できない。

(1)：1ターンに1度、1000LPを払って発動できる。

お互いの手札・フィールドのカードを全て墓地へ送る。

その後、この効果で相手の墓地へ送ったカードの数×300ダメージを相手に与える。

「そしてバトルを飛ばして相手モンスターを除外する『カオス・ソーサラー』。だが、あのデッキにその2枚は入っていないだろう」



「何故分かるのかしら?」

『カオス・ソーサラー』の効果を拡大したモンスターがいるからだ。神楽坂、お前が出すのはそいつなんだろ?」

「その通りだ! 出でよ、『カオス・ソルジャー—開闢の使者—!」  
『ヌウ……、ハアツ!』

カオス・ソルジャー—開闢の使者— : ATK 3000

ここで来やがったか、『カオス・ソルジャー』のリメイクモンスター!

カオス・ソルジャー—開闢の使者— (効果モンスター)

星8

光属性/戦士族

ATK 3000 / DEF 2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除外して特殊召喚する。

自分のターンに1度だけ、次の効果から1つを選択して発動することができる。

●フィールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外する。

この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。

●このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

「『カオス・ソルジャー——開關の使者——』はモンスターを戦闘破壊した時、もう1度攻撃できる！　つまりお前のモンスターは2体ともこいつ1体で屠る事ができるのだ！」

「な!?!」

「それって黎が負けるって事!?!」

「……………」

「デュエルキング相手によくここまで戦ったと褒めてやろう！　だがここまでだ！」

『カオス・ソルジャー』で『マジック・ストライカー』に攻撃！　//開關双破斬//！」

『マジック・ストライカー』との戦闘では、俺はダメージを受けない！」

「だが相手モンスターを戦闘破壊した事で、『カオス・ソルジャー』はもう1度攻撃できる！　次は『レベル・ステイラー』を切り裂け！　//時空突刃・開關双破斬//!!」

俺のモンスターが2体とも斬撃によって破壊され、後にはチリも残さず消え去る。

これで俺の場はガラ空きか……。

「これでトドメだ! 『マグネット・バルキリオン』でダイレクトアタック!」

「リバースカード、ダブルオープン! 罠カード『波動再生』! 速攻魔法『非常食』!」

「何!?!」

「『非常食』の効果で、俺は『波動再生』をコストに1000のライフを回復する!」

黎:LP 1000↓2000

「たかがその程度の回復!」

「そして『波動再生』の効果! 相手のダイレクトアタックによるダメージを半分にする

! つぐううううう!」

「何だと!」

黎:LP 2000↓250

「そして攻撃モンスターのレベル以下のモンスターを、墓地から呼び戻す! 今一度飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』!」

『キュウアアアアアアアアアア!』

スターダスト・ドラゴン DEF:2000

波動再生

【通常畏】

相手モンスターの直接攻撃宣言時、その攻撃モンスターのレベル以下のレベルを持つシンクロモンスター1体を自分の墓地から選択して発動する。

その時の攻撃によって発生する自分への戦闘ダメージは半分になる。

そのダメージステップ終了時、選択したシンクロモンスターを自分の墓地から特殊召喚する。

「くっ、『ブラック・マジシャン』で攻撃!」

「すまん、『スターダスト』ッ!」

電磁石の巨剣は俺自身で、黒い魔術は星屑の龍で受けきる。

これで奴の攻撃可能なモンスターはいなくなつた。

「しつぱつこな……!」

「化物がそう簡単に死んでたまるかよ」

「ならば永続魔法『未来融合―フューチャーフュージョン』を発動！ 融合デツキから『アルカナ ナイトジョーカー』を選択し、その素材である『クイーンズ・ナイト』、『キングス・ナイト』、『ジャックス・ナイト』を墓地に送る！ これで2ターン後のオレのスタンバイフェイズ、『アルカナ ナイトジョーカー』を特殊召喚できる！」

「上級エースが揃い踏みになるってワケか……」

「デュエルキングに勝つ事はできん！ ターンエンドだ！」

神楽坂：LP 600

手札：0枚

フィールド

・ブラック・マジシャン (ATK 2500)、カオス・ソルジャー―開闢の使者― (ATK 3000)、マグネット・バルキリオン (ATK 3500)

・未来融合―フューチャーフュージョン (永続魔法・『アルカナ ナイトジョーカー』を指定・残り2ターン)、正当なる血統 (永続罫・『ブラック・マジシャン』に対して発動中)、リビングデッドの呼び声 (永続罫・対象不在)

「『アルカナ』ってどんなモンスターなの？」

「『アルカナ ナイトジョーカー』とは『アルカナ ナイトジョーカー』とは絵札の三銃士の融合した姿だ。攻撃力3800を誇り、なおかつ1ターンに1度、自身を対象にしたカード効果を、同じ種類のカードを手札から捨てる事で無効化する。更に光属性で戦士族であるが為に多数の補助系のカードの恩恵を受けられる。融合素材の縛りを差し引いても、十分強力なモンスターだ」……、黎……」

あ。

「ゴメン、大地」

「いや、良いんだ。俺の役回りだ……」

シヨボーン、と落ち込む大地。ああ、また空気男への道を……。

アルカナ ナイトジョーカー（融合・効果モンスター）

星9

光属性／戦士族

ATK 3800 / DEF 2500

「クイーンズ・ナイト」＋「ジャックス・ナイト」＋「キングス・ナイト」

このカードの融合召喚は上記のカードで行えない。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが、魔法カードの対象になった場合は魔法カードを、罨カードの対象になった場合は罨カードを、効果モンスターの効果の対象になった場合はモンスターカードを、手札から1枚捨てる事でその効果を無効にする。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「と、とにかく黎のピンチがより一層深まる事には違いないんだね?」

「ああ。アレが出て来たら流石の俺も勝率はゼロに近くなる」

因みに前世ではお気に入りカードだった。召喚までの手順が面倒だったが、当時は場に出せばもう無双に近い存在だった。

「黎……」

「フィオ、大丈夫だ」

漲る闘志と収まり始めた怒り。それを右手に込め、心配そうに俺を見るフィオに笑う。

「出て来る前にどうにかすれば良いだけさ」

「そう、だよね!」

「随分とデカイ口を叩くな、この無敗の王者に対して」

「……お前は1つ勘違いをしている」

何?! と構える神楽坂に対して俺は告げる。

「遊戯氏だつて徹頭徹尾常勝無敗だつた訳じゃ無い。敗北は少なくとも公式記録に数回あるし、始めたばかりはきつと負けもあつたハズだ。負けて負けて負けまくつて、それで今いる伝説の位置にいるんだ。最初から最強でも無いし、お前みたいに楽しむ心を失つたヤツでも無いハズだ!」

「何故、そんな事が分かる!」

「逆に聞くよ。お前には聞こえないのか、カード達の心の叫びが!」

「カードの心だ?!」

「純粹に楽しむ事を忘れ、勝つ事にのみ執心したせいで最早戦いの道具と化してしまつた彼らの悲痛な声が!」

俺には聞こえる。『ブラック・マジシャン』が、『マジシャン・ガール』が、『バルキリオン』が、『カオス・ソルジャー』が、『アルカナ』が、『キマイラ』が、『クリボー』が悲しんでいる声を!

幻聴かも知れない。だが、この前『ティタニアル』や桜が言つていた。「自分達にとつて主が楽しくデュエルをする事は嬉しい事」と。

「デュエルは戦い、それは認める。だが戦う事だけのモンじゃねえ! 楽しむ事こそ



デュエルの本領。それを忘れ、勝つ事だけを目的にデツキを盗んだお前に、王者を名乗る資格なんざ無い!!」

ビッ! とデツキの1番上からカードを引く。鮮やかな軌道を描いて引き抜いたカードが舞う。

「俺の、タアアーン!」

【BGM:遊星のテーマ】

行くぜえっ!

『L・S レストア・チェリー』を召喚! 頼むぞ、桜!

『承知!』

L・S レストア・チェリー: ATK 1800

「あ、桜さんだ!」

「おお、桜あ!」

「こんばんは、なんだな〜」

精霊が見える3人（フィオ、十代、隼人）が手を振ると、桜は軽く笑って手を振り返す。固そうに見えるが、案外そうでも無かったりするのだ。

「その効果で、ライフを700ポイント回復する！　「ギユア・ブロッサム」！」  
『我が剣よ、主に力を！』

黎：LP　250↓950

桜の掲げた刀身から光が放たれ、俺の体に降り注ぐ。癒しの光は俺の体力を少しだけだが回復してくれた。

「準備完了！　永続トラップ発動、『強化蘇生』！　自分の墓地からレベル4以下のモンスターを特殊召喚！　更にそのレベルを1上げて、攻撃力と守備力も100アップさせる！　戻って来な、『マックス・ウオリアー』!!」

『トアツ！』

「続けて俺は墓地から『レベル・ステイラー』を、『マックス・ウオリアー』のレベルを下げて特殊召喚！」

マックス・ウオリアー　ATK：1800↓1900／☆4↓5↓4

レベル・ステイラー DEF:0

「そんなモンスターで何が出来る！」

「出来るさ、出来るとも！」

俺の場にいるのは、いずれも攻撃力2000にも満たないモンスター達。神楽坂のモンスターを撃破するには足りないだろう。

だがそれがどうした。

デュエルは1体のモンスター、1枚のカードで雌雄を決するものじゃない。1枚1枚の組み合わせの先にある勝利を目指す事こそがデュエル。それをお前に、そのためのデッキ構築をしなかったお前に、教えてやる！

「俺はレベル4の『マックス・ウォリアー』に、レベル4の桜をチューニング！」

「桜さんを使ったシンクロか！」

「そうか、彼女はチューナーなのか！」

「深緑の恵みが青嵐を駆け抜け、青空へと飛翔し大いなる翼となる！ 希望が溢れる明日となれ！」

桜が4つの光の輪となり、僧兵を巻き込み光を産む。

その中でも彼女の呼吸を感じる、ふわりとした桜の花の香りがしたような気がし

た。

☆4＋☆4＝☆8

「シンクロ召喚！ 舞いて飛び立て、『L・S ドラゴ・チェリー』！」

『ハアアアアアッ！』

『グオオオオオッ！』

L・S ドラゴ・チェリー：ATK 2500

光の中から舞い降りたのは緑の鱗の龍に乗った桜。騎士の物々しい甲冑に身を包み、彼女の身の丈程もある剣と盾を携えている。

『これが、私の新たな力と姿……！』

「なかなか決まってるぜ、桜」

『感謝致す』

龍をモチーフとした鎧でドラゴンの首に乗った桜が答えてくれた。モンスターとしての主体は桜なのかも。

「効果発動！ 特殊召喚された時、ライフを10000ポイント回復する！」  
 『『フオレスティ・リザレクト』！』

黎：LP 950↓1950

バサッ！ と翼を折り畳んで龍が着地する。桜の構えた剣が龍の額の角と反応して緑色のエネルギーを増幅させ、俺に力を分け与えてくれた。

「さあ、終いにするぜ神楽坂！」

「く！ だが、その程度の攻撃力のモンスターに何ができる！」

「できるさ、こうすればな！ バトルだ！ 桜で『ブラック・マジシャン』に攻撃！」

『偉大なる黒の魔術師よ、その胸お借り致す！ いざ！』

緑の龍が夜の夜空へと飛翔し、一気に急降下。そのまま黒い魔術師を擦れ違いざまに両断せんと桜が大剣を振り被る。

「攻撃力は互角！ 相撃ち狙いか！」

「いいや、こうする！ トランプ発動『スノーマン・エフェクト』！ このカードは自分のモンスター1体に、味方モンスター全ての攻撃力を集約する!!」

「何だとお!？」

その銀色の巨剣に、俺の場に残った天道虫のエネルギーが付与される。紅色のオーラはそのまま剣の切れ味を増加させ、光の剣へと進化させた。

L・S ドラゴ・チエリー：ATK 2500↓3100

「このオレが、負けるのか……!?!」

『これで』

「止めだあつ! 『ドラゴ・チエリー』で、桜で攻撃!」

『行くぞ!』

「奥義!」

『『はおうしやうりゆうざん 覇桜昇龍斬!』』

「うあああああああつ!」

神楽坂：LP 600↓0

「俺の、勝ちだ!」

黎：WIN

神楽坂：LOSE

強化蘇生

【永続畏】

(1)：自分の墓地のレベル4以下のモンスター1体を対象としてこのカードを発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

そのモンスターのレベルは1つ上がり、攻撃力・守備力は100アップする。

そのモンスターが破壊された時にこのカードは破壊される。

スノーマン・エフェクト

【通常畏】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、そのモンスター以外の自分フィールドのモンスターの元々の攻撃力の合計分アップする。

このカードを発動するターン、対象のモンスターは直接攻撃できない。

「ま、けた……。オレは、やっぱり弱いまま、なのか……」

「神楽坂……」

「最強のデッキと戦術をもつてしても、やはり負ける。オレは所詮、誰かの劣化コピーなのか……」

「そりやまあ、落ち込むわな。手にした最強の座がこうもあっさりつぶち壊されたんだから。」

「自分に勝った相手から情けをかけられるつてのは屈辱でありプライドを傷付けられる行為だ。だから俺は優しい言葉なんてかけてやらない。」



「そうだ。今のお前はどこまで行っても劣化コピーだ」

「っ！」

「だが、それが何だ。劣化コピーだとしても、それにも有効活用する方法ぐらいあるぞ」

「なん、だと……？ そんな、バカな……」

優しい言葉はかけてやらないが、発破はかけてやる。

まあ、これまでのこいつの経験の事考慮してやると信じられないわな。

「なあ、どうしてお前は劣化コピーなんだと思う？」

「オレの、さだめ運命だからか……？」

「違う。研究し尽くすからだ」

劣化コピーになる為にはオリジナルを正確に精密に寸分の狂いも無くコピーしなくてはいけない。強くなる為<sup>に</sup>こいつは努力に努力を重ねて、その目的として誰か強い奴の戦術を真似た。

当然ながらその人の戦術はその人の使うデッキ専用のものだ。そして他の強い奴とは同じ系統でない限り絶対<sup>に</sup>似つかない唯一無二のデッキ。だからこいつは戦術を研究すればする程、その当人のデッキを模さなくてはいけなくなってしまう。

なおかつ、コピーしたデッキは丹精込めて自分で作ったデッキでは無い。自分で作れば内容の把握も戦術の理解もできるし、信じていれば勝利への道を作ってくれる。が、

模造品は『同じ物』なだけ。信じる心は、デツキでは無くオリジナルの実力に向くし、細かい把握は論理的な理解となつてしまふ為、ピンチになればどうしても心理的な『負けたくない』『絶対勝ちたい』という心が生まれぬ。

「これがお前が劣化コピーたる所以であり、勝つ事のできないカラクリだ」  
「戦術を模倣し過ぎたと、いう訳か……」

「そうだ。模倣ではどう頑張つても確実な勝利を掴み続ける事はできない」  
ガツクリ、と肩を落とした神楽坂。

その背中を俺はボン、と優しく叩いてやる。

「勝ちたいのなら、自分だけのデツキを組め。これまで分析した色々な戦術、様々なデツキ、全てを叩きつけた。お前だけのデツキを構築するんだ。お前ならそれができる、いやお前にしかできない」

「オレだけにしか、作れないデツキ……」

「世界中ドコ探したつてお前はたった一人だ。戦術も構築のバランスも、最上級のものを知っているお前ならではのデツキを見せてみる」

その時は、改めてまたデュエルしようぜ？

そう言つて俺は岩場を跳んでその場を離れた。

パチパチパチパチ！

「へ？」

『スプレンドイ〜ド!』

『すっげえデュエル見せて貰ったぜ!』

『二人ともいいデュエルだったよ!』

『青春最高だあ!』

『ナイスファイト、神楽坂あ!』

『良い戦いだった』

あー、しまったなあ。皆見てたんだっけか。

「黎くん、よくぞ勝って頂きました」

「校長先生……。神楽坂の処置なんですが……」

「分かっていますよ。私もまたデュエリストの端くれ、こんな素晴らしいデュエルを見せ  
てくれた生徒を退学にするのは勿体無い。今回は可能な限り穏便に済ませましょう」

次は擁護するのは難しいでしょうけどね。そう鮫島校長は言った。

大丈夫、きつとまだまだ模倣は終わらないだろうけど、彼はきつと別の道を進む。ただの劣化コピーでは、もう終わらないさ。

——翌日

「神楽坂、今度は俺と十代のマネか？」

「ああ。お前達の戦術も習得したいからな、まずはカッコからだ。そして思い付いた。すぐには無理だろうから、まずは似ているデツキを組み合わせ、コピーとコピーの掛け合わせを作る！ それを繰り返していけば、いつか必ず“自分だけのデツキ”が見える筈だ！」

俺はこいつのパラダイムシフトに……、なったのかな？

今度構築に付き合おうと思う俺であった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 32 : 恋する乙女

## SIDE : 黎

「ありがとう。お陰で新しいデツキの影が見え始めた気がする」

「ああ、力になれてこちらも光栄さ」

お昼を奢ってもらう事を条件に神楽坂のデツキ構築を手伝った帰り、すっかり真っ暗になった空を見上げながら俺は口笛を吹く。明るいメロディが星空の下でBGMとして響き渡る。

「あいつも元氣そうで何よりだ。……そう言えば解析はそろそろ終わる頃かな」

一週間の謹慎も、新たな可能性を前にしたあいつにはあまり堪えないようだ。

一方で、魔法陣の解析を精霊界の研究者に任せつきりというのは少々申し訳ない気がするが、どうせ俺らが見てもチンプンカンプンなので、細かい事は専門の人に任せるべきだ。

都の事を考えると焦りが募る。でも、打開策が見つかった今、以前の様に空回る程の焦りは無くなった。これは良い進歩なのだと言い聞かせつつ、俺は寮の自分の部屋の扉

に手をかけた。

ガチャ。

「へ？」

「は？」

部屋の中に、人がいた。

パチパチ、と目を瞬かせる。俺が使っている部屋は3人まで入れるが、入学した生徒の数の関係なのか一人で使っていた。要するに誰かが居る筈が無いのだ。

落ち着け。こういう時、取り乱したら生き残れない事は既に学び取ったはずだ。

まずは相手の容姿を観察。

髪は黒。ただし何故か室内でも被っている帽子のせいで殆どヘアスタイルは分からない。小柄で肌の色は白。日焼けしていないというか、地で白いのだろう。

「えーと……」

声は高い。変声期前の児童といった印象を受ける。顔立ちも幼いし、どうやら結構年下の子が俺の部屋にいるようだ。

それでは改めまして。

「君は誰だ？」

「君もレイつてのいうのか。奇遇だな」

「えーと、はい……」

「そうか、カイザーの追っかけの子がやって来る時期か。」

「改めて自己紹介と行こうか。俺は遊馬崎黎。この部屋に一人で住んでいた」



「わ、ボクは早乙女 礼と申します……!! あの、レイって呼んで下さい」

「はいはい。宜しくね、レイちゃん。女の子がこんなヤローばつかのトコに来るなんて珍しい事もあるモンだ」

「え!」

あ、どうして分かったのって顔だ。

まあ、会ってからまだ十分も経ってないし、驚くのも当然かな。

ちなみに俺は原作の正体が明かされていない段階で女の子って気が付きました。バレバレですよ。

「声はまだ幼い女子のモンだし、顔立ちだって女の子のモンだ。それならまだ女の子っぽい少年かとも思えるが、極めつけはこれだよ」

ヒョイ、と帽子を取る。バレツタで止めた長髪が現れた。

「あー!」

「キミくらの年代の男の子はここまで髪の毛を伸ばさないし、伸ばせない。キミの年代の男子は女子扱いされる事を嫌うし、伸びる速度も遅いからね。」

室内でこんな大きな帽子を取らないのはキミが頭部の何かを隠したい証拠であり、こんな膨らんだ帽子を被るって事は隠したいのは長い髪の毛って事だ。声、顔、髪の毛の全てを統合して考えればキミが男でない事ぐらい丸分かりだよ」

うう、と一切の反論を封じられて押し黙るレイちゃん。ちよつとやり過ぎたか？

「で、キミがここに来た目的は？ 親兄弟や親戚にでも会いに来た？ それともカイザー辺りを追っかけて来たのかな？」

「はうっ！」

「凶星か……。まあ定期船が出るのももう暫く先だし、それまでこの部屋にしていると良い  
ヤ」

変な事はしねえから安心しろ。そう言つて俺は自分の使わないベッドに布団を敷いてあげた。

「どうして……」

「んっ？」

「どうして初対面のボクにここまで優しくしてくれるんですか……？」

「どうしてって、んー……」

まあ、都の影を重ねているつてのもあるけど、やっぱ性格かな。

「誰かを助けるのに、その理由が『助けたいから』じゃダメなのかな？」

「ダメじゃ、ないですけど……。でもやっぱりおかしいです、秘密にしても何のメリットも無いのに……」

「メリットどうこうで動いていたら人助けは満足に出来ないよ。」

どうしても知りたいのなら、明日誰かに俺の事を聞いてみな？　なんとなく分かったら、それはきつと正解だ」

夜ももう遅い。彼女の成長を阻むワケにもいかんし、続きはまた明日だ。

ああ、眠い。ここ最近夜の間中精霊界で色々と修行だの調べ物だの何だのとしていたからなあ、まともに寝たのは何日前だっけか……？

そんな事を考えながらベッドに入り、俺は眠りの渦の中に落ちて行った。あまり寝なくて良い化物の体でも、眠い時は眠いのだ……。

## SIDE：無し

翌日、レイは早速黎の事を調べてみる事にした。

『遊馬崎黎？ ああ。あの化物か。まあひどい人生を歩んで来たみてえだな』

『義理の妹さんをよく分からないけど悪い人達に奪われちゃったらしいわ』

『そーそー、しかも操られて殺し合いの相手にさせられちゃったんだよね』

『不幸だらけの人生だったらしくってさ、それでこの有様なんだから、同情するよ』

『未来人らしいよ？ 未来の召喚方法とか知ってたし』

『ようやく義妹さんを助けられるかってなったら、悪い奴らに封じられたんだよね』

『うんうん、カギを持つてる人達が会えないようにされたとか何とか』

『とつても優しい人だよ？ 困った時は相談に乗ってくれるし？』

『ブルーにカード取られた時、取り返してくれたんだ。お礼はいらねってさ。カッコイー！』

成程、とレイは納得した。黎の義妹の存在を知った彼女は、彼がどうして自分に優し

いのかを瞬時に理解した。根っからの性格が優しい上に、自分に義妹の存在を重ねているのだろうか。不幸に満ちた人生を歩んだが故に、他人に優しくなれる。荒んでもおかしくないのに、自分と同じ不幸にさせたくないから何のメリットが無くとも誰かを助ける。

「すい……」

パソコンで彼が命を賭けたデュエルの画像を見て、レイは思わず呟いた。

血ダルマになっても尚戦う精神力、それを支えてくれる仲間、よく分からないけど人間離れた能力と、彼は自分達とは一線を画した領域の存在のように見えた。

彼だったら、もしかしたら………。

S I D E : 黎

「で、追っかけてたらレイが女の子って事を知ったと」

「ああ。もうビックリだったぜ」

あのバカが……。

「だが十代、レイはまだ帰って来ていない。帰って来たら知らせるよ」

「サンキュ」

ボタン、と扉が閉まる。と後ろの天井に一番近いベッドの布団の中から二人の少女が出て来た。

茶髪のショートカットと帽子を被った黒髪。フィオとレイだ。

フィオにレイが女の子である事を話し、彼女が生活する上で必要なものを分けてもらっていたのだが、そこに十代がやって来た時は正直肝を冷やした。ノック無しで入ってくるんだからなあ。ベッドの上で「女の子同士の会話」とやらをしていなかったら多分見つかったであろうな。

「まったく、見つかったらまんか」

「ごめんなさい……」

「見つかったモンは仕方ないさ。親御さんは明日の定期便で帰って来るように言われたんだろ?」

「うん」

「なら十代は俺が言い包める。フィオは明日香と一緒にカイザーを呼び出してほしいんだ」

計画を早く実行しないと。どの道今日にはやる予定だったんだから、それが駆け足になつた程度だ、問題無い。

やり方はこう。まずは十代にレイについて話があると言って夕方に海岸に呼び出す。

予めレイの事を口止めしておくのも忘れない。

そしてカイザーを同じ場所に呼び出し、レイのデュエルを見て貰う。後は野となれ山となれ、カイザーの返答次第だ。勿論、乙女心をぶった斬るようなマネをしようものなら俺がぶん殴る。

だったら時間が無いね、そう言うと、フィオは急いで部屋から出て行った。

「レイ、デツキを見せてみな」

「え？」

「お前さんがカイザーにアピールしたいんだったら、実力を示してやるのが一番だ。多少力になる事はできる」

強い事が分かったらカイザーも惚れるかもな、その一言を放ったら素直にデツキを差し出してくれた。

「んん、やっぱり『恋する乙女』を中心にしたコントロール奪取系のデツキか。」

「だが……。」

「ど、どう？」

「レイちゃん、キミは何年生だい？」

「えと、小学5年生です……。」

「11歳前後か。その年でこれだけ出来てりや大したモンだ。だが、残念ながらまだま

だ、というのが正直な感想かな」

「そ、そんな……」

「なんつーかワガママなんだよな、このデッキは」

え、とレイちゃんが面食らった顔になる。

このデッキ、コントロールを奪う事にだけ特化し過ぎている。

「これだと奪ったモンスターや『恋する乙女』への戦闘ダメージですぐにライフが尽きてしまう。たった400しかない攻撃力を補えるカードが無い」

「で、でもその前に倒しちやえば……」

「並みのデュエリスト相手ならそれで行ける。だが、お前が夕方戦う事になるだろう十代やフィオ、明日香や俺はそんなのは通じないくらい強い」

「う……」

「カイザーにしたってそうだ。最強モンスター『サイバー・エンド・ドラゴン』は攻撃力4000に加えて貫通効果があるし、時折その攻撃力を2倍3倍に平気で上げてくる。いくら戦闘では破壊されないからって、能力値が低かったら、そんなのただの殴りたい放題の格好の的だよ」

例えば戦闘破壊されないモンスターの代表格には『マシユマロン』がいる。セットされている状態で攻撃を受けたら1000ダメージを相手に与えるが、攻守は僅か300



／2000とかなり低い。

ジエネックスの時は万丈目が貫通ダメージで、卒業前のデュエルでは攻撃表示のところを十代が三連続攻撃でそれぞれ相手を倒した。

また2回まで攻撃を防げる『シールド・ウイング』もいるが、あれだつてそうだ。遊星がジャックとのデュエルの時に出したが、複数回の貫通ダメージを与える為の格好の標的になってしまった。

「ダメージを回復するカードは何枚か入っているトコを見ると、少なくともその辺りは理解しているみたいだね」

「うん……」

「このデッキは『勝つデッキ』というよりか、『恋する乙女』活躍用のデッキ。なんだ」

恋する乙女（効果モンスター）（未OCGモンスター）

星2

光属性／魔法使い族

ATK 400／DEF 300

このカードはフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り戦闘によっては破壊されない。

このカードを攻撃したモンスターに乙女カウンターを1個乗せる。

年相応にまだまだアマイ。そしてそれを見過ごせない俺もまたアマイ。

俺はトランクに詰め直したカードの中から2枚のカードを取り出した。

「これは？」

「永続罫『スピリットバリア』。モンスターが自分の場にいれば戦闘ダメージを発生させないカードだ。これなら戦闘破壊されない『恋する乙女』と組み合わせれば鉄壁のライフガードになる」

破壊耐性を持つモンスターの大半は攻守が低い。それを補うのがこの『スピリットバリア』だ。『恋する乙女』の自爆特攻もサポートできる優れ物であり、攻撃表示にせざるを得ないという欠点を克服できる。

スピリットバリア

【永続罫】

自分フィールド上にモンスターが存在する限り、このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

「でも、これじゃ『キューピッド・キス』の効果が使えなくなっちゃう……」  
 「ああ。そこでこつちの『霞の谷のファルコン』ミストバレーを使うんだ」

霞の谷のファルコン（効果モンスター）

星4

風属性／鳥獣族

ATK 2000 / DEF 1200

このカードは、自分フィールド上に存在するカード1枚を手札に戻さなければ攻撃宣言をする事ができない。

攻撃を行う為には自分の場のカードを1枚手札にバウンスする必要があるカードだ。これで『スピリットバリア』を自分のターンに手札に戻し、相手ターンで再び発動させる。これなら相手からのダメージを防ぎつつコントロールを奪える。

場に残り続ける『光の護封剣』を連続使用したり、『ビッグバン・シユート』で連続除外を狙ったりと、使い方次第で非常にエグいモンスターになる。下級モンスターの中でも高い攻撃力を持ったため容易くやられないというのもポイントだ。

『霧の谷のファルコン』がやられた時用に『ハリケーン』と『トラップ・スタン』もあ

げるよ。これで、このデッキは更にパワーアップしたハズ」

「あ、ありがとうございます！」

「それから戦闘ダメージを相手に押しつける『ウォールバリア』とか、手札1枚で全ダメージを回復に変える『レインボー・ライフ』とかがあるが……、まあ後は実力と運次第だね。頑張れ！」

「うん！」

細かいデッキ調整をやって十代を呼びに行こうとした所で、フィオが成功したと知らせに来てくれた。

後はキミ次第だぜ、レイちゃん？



「へへっ！ 強いな、レイ！」

「恋する乙女は強いんだから！」

十代：600

手札：4枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罠無し

レイ：LP 4500

手札：0枚

フィールド

：恋する乙女（ATK 400）、E・HERO（エレメンタルヒーロー） フェザー

マン（ATK 1000・乙女カウンター：1）、E・HERO スパークマン（ATK

1600・乙女カウンター：1)

：キューピッド・キス（装備魔法・『恋する乙女』に装備）、スピリットバリア（永続罨）

キューピッド・キス（未OCGカード）

【装備魔法】

乙女カウンターが乗っているモンスターを装備モンスターが攻撃し、装備モンスターのコントロールが戦闘ダメージを受けた場合、ダメージステップ終了時に戦闘ダメージを与えたモンスターのコントロールを得る。

「ここまでは上々。さてさて、これで終わらないのが十代の恐ろしい所だ……」

「絶対反撃来るもんね、この後」

「そうね。と言うか、来なかつたら怒るわよ、私」

レイちゃんの一斉攻撃を『攻撃の無力化』で防御した十代。『ファルコン』はやられたものの、レイは魔法や罨でライフを初期値以上に回復してみせたが……。

フィオと明日香も今後の展開が分かっているみたいだな。

「行くぜ、俺のターン！ 俺は『E・HERO バーストレディ』を召喚！」  
『ハアツ！』

E・HERO バーストレディ：ATK 1200

紅のスーツに身を包んだ女性ヒーローが現れる。黒いマスクに金色のヘルメットをし、黒い長髪を持つている。

『何をしている、そんな小娘の色仕掛けに惑わされおつて……！ それでもヒーローか！』

『ハツ！ 確かに、オレは何をしていたんだ……！』

『クソウ！ ヒーローの名が泣くぜ！』

「ねえ黎、『バーストレディ』が怒ってるように見えるんだけど……」

「奇遇、俺もだ」

んー、アニメ版唯一の女性ヒーローだけあるね。女としての誇りとか矜持とか、そういうのが子供に負けたのが許せないのかねえ。

「女って怖い」

「女で一括りにされるとちよつと困るんだけど……」



女心は一生かかっても男にや理解できなさそうだ。

「魔法カード『バースト・リターン』を発動！ 自分の場に『バーストレディ』がいる時、『バーストレディ』以外のE・HEROは全て持ち主の手札に戻る！」

バースト・リターン

【通常魔法】

「E・HERO バーストレディ」が自分フィールド上に表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。

フィールド上の「E・HERO バーストレディ」以外の「E・HERO」と名のついたモンスターを全て持ち主の手札に戻す。

緑と黄色の光になって『フェザーマン』と『スパークマン』が十代の手札に戻る。

あらら、こりや決まったな。

「で、でもまた『恋する乙女』で奪えば良いモン！」

「いやレイちゃん、キミの負けだ。十代はまだ切り札を出していない」

「え？」

そう、それは十代の代名詞とも言えるカード。

「魔法カード『融合』を発動！ 手札の『フェザーマン』と場の『バーストレディ』を融合！ 来い！ 『E・HERO フレイム・ウイングマン』！」  
 『はああつ、てやあつ！』

E・HERO フレイム・ウイングマン：ATK 2100

「更に『融合回収』を発動！ 墓地の『フェザーマン』と『融合』を手札に加えて、もう1度『融合』！ 来い、『E・HERO サンダー・ジャイアント』！」  
 『ぬううう、はあつ！』

E・HERO サンダー・ジャイアント：ATK 2400

次元の渦から飛び出す融合戦士達。鳥の片翼を持つ風と炎の魔人と、雷を司る黄色の巨体が現れる。

手札に『クレイマン』がいたのか。相変わらぬ鬼引きだ……。

「う、でも『スピリットバリア』があるからダメージは通らないよ！」

「そいつはどうかな！ 『サンダー・ジャイアント』の効果発動！ 融合召喚に成功した

時、元々の攻撃力が『サンダー・ジャイアント』より低い相手モンスター1体を破壊する！  
 ヴェイパー・スパーク！！」

「え、ウソ、きやああつ！」

ズガアアアアン！ と『サンダー・ジャイアント』の胸部のコアから放たれた蒼い雷が悲鳴と共に『恋する乙女』を焼き尽くす。これだけ見ると悪者は完全に『サンダー・ジャイアント』だな……。

「モンスターが場になくなった事で『スピリットバリア』は効果を発揮できない！」

『サンダー・ジャイアント』と『フレイム・ウイングマン』でダイレクトアタック！  
 ボルティック・サンダー！！ フレイム・シユート！！」

『ハアアアアア、ハアアツ！』

『タアアアアア、タアアツ！』

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

レイ：LP 4500↓0

十代：WIN

レイ：LOSE

「お疲れ、レイちゃん」

「黎さん、負けてしまいました……」

まあ、相手が悪かったとしか言いようが無いな。十代に勝ちたいんだったら本当に伝説級の實力とハイレベルに構築されたデツキが必要だ。彼に勝利したのは海馬氏のデツキを使う『カイバーマン』、プロのエド・フェニックス、学園最強のカイザー亮の3人ぐらい。しかも十代は、エドには再戦時に勝利を収めたし、カイザーとは引き分けた。そんな奴が相手なら戦って勝利するのはまず難しい。

大地だつて十二分に分析したというのにHEROデツキの更なる隠された戦術に敗れた。あのデツキは確かに融合モンスターを中心にしたものではあるが、それが敗れた時を想定し、融合以外の戦術だつてちゃんと組み込まれている。

俺だつて正直、シンクロとエクシーズを毎ターン出して恐らくは漸く互角といった所だろう。これで二期には『ネオス』達ネオスペーシアンが、四期には実際には殆ど出てないが『ユベル』が参加する事を考えるとこいつに勝利するのは並大抵どころか一流

デュエリストでも無理だろう。

それはさておき、俺は隣で、レイちゃんには見えない位置からデュエルの勝敗を見守っていたカイザーに話しかけた。

「で、カイザー。どうします？ 貴方を探してたつた一人の女の子がこのアカデミアにまでやって来ました。学園最強以前に一人の男として何か言う事があるのでは？」  
「う、む」

ここで俺は僅かに、感覚の鋭い人間ぐらいにしか感じられないくらいの量の殺気を放つ。野生動物ならば感じられるだろうが、平和ボケした人間相手なら無理だ。

カイザーくらいならギリギリ相手が怒っているくらいに感じるだろう。

(年下の女性にアマいな、俺は)

長い事、都以外の女性とは長く深く接した事が無かったので、どうも女性との付き合い方は経験から相手優先になってしまう。今度フィオと明日香に接し方を享受してもらおう。

「りよ、亮サマ！ ボ、ううん、私は！」

「レイ、お前の言いたい事はよく分かる。お前がここに来た事は俺の部屋に落ちていた髪留めで分かったし、遊馬崎から力とカードを借り、神山が俺をここまで呼び出した事も分かった。そして年齢を偽り年不相応な試験にまで受かった。それは並大抵な努力

ではないだろう。

だが、敢えて俺は言う。お前の気持ちを受け取る事はできない」

「そんな……!」

「カイザー、あんた……!」

「今の俺は確かに皇帝カイザーなどと呼ばれている。だが、それはデュエルだけだ。恋愛事に関して俺は全くの素人だ。そしてデュエルでさえまだ修行中の身でもある」

だからそちら側に意識を振り分ける事はできない。そう言つてカイザーは謝罪の意を込めて頭を下げた。

む、こつとも誠意を込めた謝罪をされたら怒るモンも怒れねえな。

だが、揚げ足取りは生憎と得意分野なんでね。

「亮、サマ……」

「泣くな、レイちゃん。まだチャンスは残つてるよ」

「え?」

ポン、と彼女の頭に手を乗せて優しく撫でてやる。

『修行中だから付き合えない』つて事は『修行が終わつたら君に構う事ができる』つて事だよ」

「な、遊馬崎?!」

「彼がプロに行つて修行を終える頃には君は大人になつて、今の何倍も魅力的な女性になつてゐるだろう。その時に改めて彼に告白したらどうか。時間はまだまだ山のようにある、今泣いて諦めるのは早いよ」

「……………（パアツ）！ はい！」

「か、勝手に話を進められた……………」

「諦めるべきね、亮。好きになられた時点で貴方はもう詰んでるのよ」

目元の涙を拭つて輝かしい笑顔を放つレイちゃんに対し、若干青ざめた顔で落ち込むカイザー。女の子は大切にね。

「ところでレイはアカデミアには通えないのか？」

「文脈で察せアホ」

普通に1年生の自分よりも年下だつて事くらい解れ。

—— 黎とレイの部屋・夜

「ごめんなさい、負けちゃいました」

部屋に帰ると、レイちゃんがぺこりと頭を下げた。単独で孤島へと来ると言うアグ

レッシュヴさを披露した彼女だが、やはり小学5年生だ。この辺は素直である。

「謝る必要は無いよ。君は最善を尽くしたし、俺はその協力をした。そもそも、十代が相手だったからね」

十代が相手というのは非常にマズい対戦カードだ。まず俺でもほぼ勝てん。要するに彼女ではムリ。

確実に勝ちたいならロックの上でそれを守るロックをかけるぐらいの事をする必要があるが、それは生前にはロックやメタを得意としていた俺でも不可能に等しい。

それぞれの時代の主人公に備わっている能力は「デイスティニードロー」だ。デュエルの腕は素人同然の4代目主人公、九十九遊馬にも備わっているんだから困り物である。それに勝つ為には強い引きが回ってくるよりも早く倒すか、完全にメッタメタに構築したデッキを用意しないといけない。

まあ、長つたらしく話してしまったが、勝ちたいなら120%を通り越して2400%彼に勝利できるデッキが必要だと結論を下しておく。

「それに、折角手伝ってもらったのに、その、フラれちゃったし……。うう……。」  
自分で言っただけでショックが戻って来たのか、レイちゃんは再び涙目になる。

ううん、やっぱり小さな女の子だな。こういう子は、俺みたいが強さが他者とは一線を画す存在が守るべきなんだろうな。



「そう落ち込むな。大きくなってからまた告白しなおせば良いさ。何も相手一人につき告白のチャンスが一回限りって訳じゃないんだからさ」

初恋は失恋の味、なんて言葉をふと思いつく。これも言おうかと思つたが、俺自身は色恋沙汰に目を向ける余裕が無かつたのを思い出し、真実味が分からないので言うのをやめる。

何より、この小さな少女には残酷過ぎる言葉だろうから。

「でも、手伝ってもらつて、カードももらつて、それでこの結果つてのは……、グスッ」  
「はいそこまでだ。それ以上言うなら、怒るよ?」

「え?」

「何時までもデュエルの勝敗でウジウジしないの。俺は気にしないって言ってるんだから。後はキミが心の中でどうケリをつけるか、だよ」

これで話はお終い、と俺はお説教を終わらせる。

黙つて俺の言葉を聞いていたレイちゃんだったが、俺の話が終るとボロボロと涙を零し始めた。

「黎さん……、ボク……、ううん、私……つ! デュエルに負けて……、恋にも負けて……つ! すつごく、悔しいよお……!」

「泣きたいなら思いつ切り泣くと好いよ。涙を流した数だけ、人は強くなれる。その為

なら俺の胸くらい貸してやるさ」

レイちゃんが俺の胸元に顔を埋め、声を押し殺して泣き始めた。

やつぱり、まだ十歳ぐらいの繊細な女の子には、失恋は厳しかったかな。

「うえぐ、ふられちゃったよお……！ ううつ！ ううつ！ うえああああああああああああああああああああああああああああああああああん……っ！ うわああああああああああああああああああああああああああああああああんっ！」

声をあげるのを我慢していた少女は、堪え切れなくなり、大声で泣き始めた。

俺は静かに風の力で部屋に防音処理を施し、彼女が泣き止むまで付き合う事を決めた。どうせ数日は寝ないで済む体だ、明日の朝までトコトン慰めてあげよう。

その夜は、月が天頂を過ぎるまで少女の涙を聞きながら俺はサラサラの黒髪の頭を撫で続けた。

レイちゃんが泣き疲れて眠った時には既に、真夜中を過ぎていた。

—— 港・翌日

「じゃあ、これ。少ないけどカード。もつともつと強くなりな。君の目指す高みは遙か

彼方にある。でも君の才能なら日々精進を怠らなければきつと何時かは辿り着けるはずだ」

「ありがとうございます！」

彼女に関わった数名でレイちゃんに乗船を見送る。メンバーは俺、フィオ、十代、明日香、カイザー、翔、隼人だ。

後に出て来る彼女はもつと別のデッキを使っていた筈なので、汎用性の高い『ダメーシ・コンデンサー』や『月の書』、『攻撃の無力化』等十枚程を包んで餞別(?)として彼女にあげた。年下と女性には優しくがモットーです。

ポオ——————ッ! と汽笛を鳴らして船が出港する。こちらに向けて手を振る彼女に手を振り返す。

「また来ます! 待ってて下さいね、亮サマ、十代サマ、黎サマアツ!」

「俺も!」

知らない間に彼女とのフラグを立ててしまったようだ。

やいのやいのと皆は港から立ち去り、後には困惑しきった俺と十代が残されたのであった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 33：騎士の在り方

SIDE：黎

「ヒツヒツヒ、これで解析は完了でゴザいます」

「ありがとうございます」

精霊界の研究施設にて。俺は例の羊皮紙の解読終了の報せを受けてそこにやって来た。

怪しい笑みを浮かべて『コザツキー』が言う。どうも胡散臭いが、どうもこれがこいつの素らしい。

「邪神のシモベどもを追いかけけるには、この魔法陣を使えば問題アリマセン」

ありがとう、と再び礼を言い、俺は魔法陣についての諸注意や使い方が乗っている紙の束を受け取った。これで連中を追いかけられるな。

ですが、と『コザツキー』の隣にいた『ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―』は付け足した。

「確かにこれで追いかける事はできる。どの次元に飛んで戦おうとも、元の次元では

精々数時間しか過ぎん。しかし、この魔法陣は重大なデメリットを抱えている」

「デメリット?」

「ああ」

言い辛そうにしていた『ブラッド・マジシャン』だったが、やがて少し低めの声でそのデメリットを告げた。

それを聞いた俺は、真っ青になった。

「マジ、かよ……」

「嘘偽りは無い。事実だ。避けようとするれば更に多くの人が巻き込まれる」

「クソツッ!」

近くの柱を生身の手で殴りつける。金属製の柱を力一杯殴りつけた所為で拳からは血が滴るが、内心で沸々と怒っている今の俺には気にもならなかった。

無関係の人を巻き込むなんて、これを記した人は何を考えているんだ……!」

「要は勝てば良いんだろ……? 勝てば邪神の手下は滅び、巻き込まれた人も元に戻る」

「その通り」

「負けるつもりはハナからねえ。絶対に、誰も死なせねえよ!」

方法をメモした紙を受け取ると、俺はその部屋を後にした。

——アカデミア校長室・PM 16:03  
「停学届け、ですか」

「すみません、ノース校との戦いも近いのに……」  
「いえ、貴方にとって重要なのでしょうか？」

授業が終わった日の夕方。俺は鮫島校長に停学届けを提出した。

恐らく邪神の手下との戦いには大量の時間を要する。その為の停学届けだ。

「1日で足りるのですか?」

「足らなきや追加で申請します。連戦になるかと思いますが、転移は一日ずつ休みを挟みながらやる予定です」

「ふむ……」

「こんな言い方もどうかと思うが、事情が事情だ。普通ならまかり通らないだろうが、へたな手を打てば世界の命運が大きく傾く事ぐらい校長先生は分かっているハズだ。

「分かりました、受理しましょう」

「ありがとうございます」

やっぱりこの人は良い人だ。俺はニッコリ笑って頭を下げた。

「ただし、1つ約束して下さい」

「約束ですか?」

「無理せず、ちゃんとこのアカデミアに帰って来る事です。貴方の正体が何であろうと在学している間は、貴方は我が校の生徒なのですから」

なんだ、そんな事か。

「分かっていますよ。まだ奉仕活動の義務も継続中ですからね」



そんな冗談めかした言葉を残して、俺は校長に背中を向ける。  
ウーンという音と共に扉が開いた扉から、校長室を俺は去った。

「黎、戦いに行くんだね？」

「お前ら……！」

校長室を出て直後、背後から声をかけられた。

そこにいたのは、いつものメンバー。

「無茶するなよ、黎」

「大地……」

「命あつての物種なんだから、危なくなったら逃げる事だつて大切よ」

「明日香……」

「俺、まだ黎とデュエルしてねえからさ。帰って来たら楽しくデュエルしようぜ」

「十代……」

「お前ら……」。

「つたく、物好きどもが……。こんな化物と仲良くして、何の得が有るつてんだ」

「メリットの有無じゃ友達なんてやってけないツスよ」

「少なくとも、アタシはあんたと遊城に助けられたんだし、借りは返さないと気が済まないタチなのよ」

「翔、ジュンコ……」

「わたくしはブルーですけど、遊馬崎さんの帰りを待ってます」

「黎の勝利を祈ってるんだな」

「ももえ、隼人……」

ふう、欲しかったモンは——損得勘定抜きの友達は、もうあったのか。

童話の青い鳥、その教訓は『真の幸せは身近にあり、でもそれには中々気がつかない』  
だった。ふふ、本当に気付かないものだな。

欲しかったバズル幸せは、後ピースが一つあれば埋まる。

最後のピース、それを求めて俺は戦う。

「ああ、分かった。行つて来る！」

『いつてらっしゃい！』

『そうは行かん!』

この声は……!

『ぬえい!』

『させぬ!』

中空から突如として振られた緋色の杖の刃。それを桜が剣で受け止めてくれた。

「桜!」

「無事か!」

そして襲撃者をキツと睨みつけた。

杖と同じ色の帽子と鎧にダークブルーのマント。青白い肌は不健康そうだが、人型の精霊の中には肌の色が青や緑の者もいるのでアテにはならない。

とがった帽子はとある最高位の黒魔術師のもとの形がよく似ている。

「何故だ……、何故俺達を襲う! 『ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―!』」

そう、襲撃者は研究所で俺に忠告をくれた男、『ブラッド・マジシャン』だった。

ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―（効果モンスター）

星4

炎属性／魔法使い族

ATK 1400／DEF 1700

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

このカードに乗っている魔力カウンターを任意の個数取り除く事で、取り除いた数×700ポイント以下の攻撃力を持つフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

「うんやー！」

怒号と共に『ブラッド・マジシャン』は杖から魔力の刃を発して刃を強化し、槍かハルバードのように構えると、こちらに突き込んで来た。

「チッ！」

「加勢する！ 皆下がつてろ！」

槍を盾で受け止めた桜の横から『ブラッド・マジシャン』のこめかみに向けて回し蹴

りを放つ。

体を屈めて避けられてしまったが、槍は桜の盾から離れた。

ここがチャンスだ。こいつの腕は速度や迷いの無さから並大抵のモンじゃないと分かった。桜とタッグなら倒せるが、無傷というワケにもいかない。ならば今の数倍の実力で振じ伏せる！

「桜、合体だ！」

「どこのアニメのセリフかは知らんが、分かった！」

桜が緑色の光の球になると、俺の体の中に溶け込む。瞬間、体中に緑色の模様が浮き出た。

ちなみにこの間知ったが、髪と瞳の色も体内に流した力と同じ色になるらしい。複数（というか2つ）流したらグラブレーションとオッドアイだそうだ（色は順不同らしい）。ちなみに全部伝聞系なのは自分で注視した事が無いから。

「はあっ！」

竹槍を構えて跳びかかる。槍の攻撃は先端の穂先でしかできないと思われがちであり、接近戦には強くないとされるのが一般人の認識だが、それは間違いだ。

槍の攻撃は穂先とは別に、石突きという刃の反対側の二つに分かれる。近づいた相手にはこの石突きでの強力な一撃を鳩尾に叩き込む。わざわざ分かりやすい弱点を晒し

続けているのに、昔からよなく使われる武器のハズが無い。

この植物の力で生まれた竹槍は重金属よりも頑丈であり、しなるから打撃にも強い。かつ軽くて鋭いので使いやすいのだ。

軽いという事は打撃の威力が劣るといふ事だが、同時に振り回しても消耗する体力が少ないという事であり、打ち所さえ間違えなければ打撃でも十分な威力を有するのだ。

「緑、植物の力か！　ならば好都合！」

竹槍を避けた『ブラッド・マジシャン』はそう叫ぶと、杖に巨大な炎を纏わせて放った。恐らくこちらを焼き払う算段なのだろう。巨大な炎は背後で見守るフィオ達をも貪欲に呑み込もうとする壁のようだ。

確かに植物に対して炎は有効だ。だが、それを予測してなかったとも思ったか？

なんだってお前は『煉獄の魔術師』なんだからな！

「燃え尽きろ！」

「だが断る！」

ゴウツ！　と燃える炎の壁の中を突っ切って俺が飛び出す。赤い火炎は俺達にもあいつにも視界を遮る遮蔽物になる。つまりあいつは自分からこちらを突っ込ませる用意をしてくれたという事だ。

「なっ!?!」

「じゆじゆとうきやく樹剛濤脚!」

「ぐあつー!」

鋼鉄の硬度を木が纏わりついた誇る足刀が鎧越しに『ブラッド・マジシャン』を蹴り飛ばす。追撃で細い枝が何本も飛び、『ブラッド・マジシャン』のヒビの入った鎧に刺さった。

「何故、俺が炎の中を通り抜けられたか、知りたいか?」

「ぐつ……、ああ。あの炎の壁は生身で通り抜けられる程生易しい物じゃ無い……。何故だ……」

「容易い。炎では絶対に燃やせないもので炎の壁を遮っただけだ」

そう言うと、俺は腕に炎を纏わせた。

近くの窓ガラスでは左目が赤く、緑と赤のグラデーションの髪の毛の俺が映っている。

「炎で、抜け道を作ったのか……!」

「そうだ。炎で炎は燃やせない」

後ろでは炎の壁に炎のトンネルがあった。俺の潜り抜けた抜け道だ。

自分の右手で自分の右手は握れない。

自分の左足で自分の左足は踏めない。

自分の銃で自分の銃は撃てない。

最初から燃えてる物を、燃やす事はできない。

全て同じ理屈だ。対象を行動の主自身にする事は、不可能だ。

「だが、お前のお仲間が黒焦げだ……！」

「悪いけど、全員無事だよ」

炎の壁の向こうから、否、とある緑の植物の壁の向こう側からファイオの明るい声が聞こえた。

植物は燃える。だが、全てが全て炎に弱いワケじゃ無いんだぜ？

「草木に炎を阻まれただど?!」

「サボテンは知ってるか？ 内部に大量の水分を蓄えている植物だ」

炎でトンネルを作るのと同時、俺は廊下に目一杯のサボテンを群生させた。厚さ約1メートルの緑の壁は半分くらい焼けてしまったが、しっかりと皆を守ってくれたようだ。炎は水気タツプリの植物を燃やすのに力を使い切ってしまったらしく、廊下に若干の焦げ痕が残っているくらいで、影も形も見当たらなかった。

ちなみにサボテンは感じて書くと「仙人掌」と書く。どの辺りが掌たなひらなのか全っ然分からねえ。

片膝をつく『ブラッド・マジシャン』に俺は変化を解除してゆっくり近付く。

こちらでも片膝について目線の高さを合わせて話しかけた。



「どうしてなんだ、『ブラッド・マジシャン』。何で俺達の邪魔をする。邪魔立てする理由は無いらズだ」

「理由なら、ある……」

「何？」

「危険過ぎる……。お前を、わざわざ死地へと赴かせる事は、私の流儀に反する……！」  
「それは承知している。だがここで俺が行かなかつたら誰が行くんのだ？」

「こいつが俺の事を心配してくれていた事は分かった。でも、その心配は状況を悪化させかねない。」

「プライドはデュエルで敗北しない限り死なないと言っていた。つまりどんな高性能な兵器を開発しても邪神の護衛を倒す事はできないという事だ。」

「何より、俺が行かなくてはいけない。これは俺のやるべき務めだからだ。」

「俺が行かなければ誰が世界を救う？」

「俺が行かなければ誰が都を助ける？」

「俺が行かなければ誰が見知らぬ誰かを守る？」

「全て、俺がやるべき事なんだ。」

「俺以外の誰にもできない。だから俺がやる。」

「俺が助けなくちゃいけない。だから俺が行く。」

俺の生きている意味でもある。だから俺が赴く。

俺は逃げるつもりは微塵も無い。だから俺が戦う」

ここで逃げたらフィオが、十代が、明日香が、皆が死ぬ。それだけでは済まない。全く別の世界の転生者達、デュエルに関係を持たない人々。そんな人達も邪神によつて滅ぼされてしまう。

1つの世界の持つエネルギーの総量は計り知れない。今いるこの世界を落とされたらもうどんなスーパーヒーローでも、最強主人公でも太刀打ち出来なくなってしまうだろう。

マンガなんかで分かりやすい例えは『鋼の錬金術師』だろう。敵の大将は数十万の人の命を吸って無限の命とノーモーションでの錬成、数百万の命で小型の太陽を作り上げた。力の源は多ければ多い程に強くなる。

もっと分かりやすく言うなら乾電池で作った電気回路だ。回路の繋ぎ方で変化はあれど、乾電池の個数が少ない方よりも多い方が明るかったり長持ちしたりする。

何より、俺達が転生した理由は邪神復活による世界崩壊の阻止だ。言わばこの世界におけるアイデンティティ。辞めてしまえば、もうそれは俺ではなくなってしまう。

「悪いな、『ブラッド・マジシャン』。血反吐を吐こうが全身麻痺になろうが、俺はこの歩みを止める事はできないんだ。俺は行くよ」

「ならば、せめて我を倒せ！ お前を死地に行かせたくは無いんだ！ どうしてもと言うのなら、その覚悟を示してみろ！」

すつく、と立ち上がった『ブラッド・マジシャン』は、自分の杖をディスクに変化させる。

そこまで本気か、『ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―』。

「良いだろう、お前の心は分かった。だが、廊下は些か手狭だ。この先にあるデュエルリングでやろうぜ？」

「構わん」

覚悟の炎を燃やしながら、互いにリングへ向けて歩き出した。



「いやこのサボテンどうにかしてよ」  
「あ、忘れてた」

## ——デュエルリング

## SIDE：フィオ

「結構人が残ってるね」

「しかも何だか集まって来たツス……」

黎が異世界に行く準備が整い、さあ救いに行くぞ！ というタイミングで現れたデュエルモンスタースターの精霊、『ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―』。

どうやら黎が危険に突っ込むのを見かねて止めに来たみたい。

「でも、それだと何かしつくり来ないんだよね……う？」

黎が行かなければ確実に世界はお終い。行って助かる保障は皆無だけど、どっちかを選べってなら、わたしは……、あれ？ どっちを選ぶだろう？

「んん、『ブラッド・マジシャン』の言い分も分かる気がしてきた」

「どういう事だ、フィオ？」

「世界は後ちよつとで終わつちやうかも知れないだろうか？　ここoの皆はそれ程大きな事とは思つてないみたいだけど、わたし達は事実である事を知っている」

「それは、まあ」

「残り僅かな時間を黎と一緒に過ごすのと、死ぬかもしれないけれど黎に戦ってもらふのと、どつちが良いかなつて思つたら……」

「選べない？」

「うん……」

我ながら身勝手な意見だとは思ふ。でも死ぬかも知れない、ううん、死ぬだろう場所に彼を行かせるのはわたしはイヤだ。

「黎……」

勝つてほしい。でも負けてほしい。

二つの矛盾した思いを抱えながら、わたしは始まつたデュエルに視線を向けた。

S I D E : 黎

『デュエル！』

黎VSブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―

LP 4000 VS LP 4000

「先攻は我だ！ ドロー！ 魔法カード『苦渋の選択』を発動！ 我はデッキから『魔導雑貨商人』、『闇王プロメテイス』、『ゴブリン陽動部隊』、『ダークネスソウル』、『スナイプストーカー』を選択！」

さて、始まったからには集中しないとな。

選択したのは闇属性モンスター4体と魔法カードか……。

「『ダークネスソウル』を選択だ。墓地から戻されると厄介だからな」

「選ばれなかったカードは墓地へと送られる」

苦渋の選択

【通常魔法】

自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せる。

相手はその中から1枚を選択する。

相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードを墓地へ捨てる。



ダークネスソウル（効果モンスター）

星7

闇属性／爬虫類族

ATK 2000 / DEF 1500

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスター以外のモンスターを全て破壊する。

次善の策かも知れないがな。だが、あれがもし闇属性のデツキなら何故『ダーク・ホルス・ドラゴン』や『ネクロ・ガードナー』を選択肢に挙げなかったんだ？

それともこの間俺がやったのと同じ戦法か……。残しておきたいカードを有力なカードの中に紛れ込ませ、相手に強力なカードを捨てさせたように錯覚させ真の意図を隠す。

或いはただの墓地肥しか……？

「更に『闇の誘惑』を発動。デツキから2枚ドロし、『ダークネスソウル』を除外する」  
「欲しかったのは除外要員つてワケか」

「我はカードとモンスターを1枚ずつ伏せ、ターンを終了する」

ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚

「俺のターン！俺は『マッド・デーモン』を召喚！」

『グガッ！』

マッド・デーモン：ATK 1800

敵のフィールドは典型的なT字配列。何が仕込まれているか全く分からない。

こういう時は考えても無駄、殴って確かめるのみ！

「セットモンスターを攻撃！」

『ギイッ！』

ズダダダダ！ と骨片を吐き出し、裏側表示のカードを撃ち抜く悪魔。裏側表示だった三つ目の毛玉モンスターは体に大きな風穴を開けられた。

クリッター：DEF 600

『クリッター』か！

「そうだ。効果でデッキから攻撃力1500以下のモンスターを1体手札に加える！  
選択するのは『終末の騎士』！」

「だがこちら『マッド・デーモン』の効果で貫通ダメージを与える！」  
「ヌッ！」

ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―：LP 4000↓2800

入ったが、デカイダメージじゃ無えな。

ここは慎重に防御を。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：マッド・デーモン（ATK：1800）

：伏せカード2枚

「我のターンだ！ 我は手札から魔法カード『トレード・イン』を発動！ 手札のレベル8以上のモンスターを1体墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロウする！」

手札で腐った上級モンスターを捨てるカード……。実質2対2の交換だから手札増強の旨味は薄いが、新たな戦法を得るには十分か。

トレード・イン

### 【通常魔法】

手札からレベル8のモンスターカードを1枚捨てる。

自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「我が送るのは『ダーク・ホルス・ドラゴン』だ！」

ク…………ツ！ 蘇生制限の無いダークモンスター……………！

途端、『ブラッド・マジシャン』がニヤリ、と不敵に笑った。何だ…………？

「これで、5体だ……………！」

「な、まさか！」

「そうだ！ 自分の墓地に闇属性モンスターが5体以上存在し、自分の場にモンスターが存在しない場合のみ、『ダーク・クリエーター』は特殊召喚できる！」

ダーク・クリエーター：ATK 2300

ズズズズ、と闇の中から、黒い翼を持った巨人が現れる。

なるほど、こいつのデッキはやはり「ダーク」か。しかも最悪の場合、このターンでダークの最終兵器リリサル・ウエボンを出される可能性がある！

『『ダーク・クリエーター』の効果を発動！ 1ターンに1度、墓地の闇属性モンスターを1体ゲームから除外し、別の闇属性モンスターを1体墓地から特殊召喚できる！』

ダーク・クリエイター（効果モンスター）

星8

闇属性／雷族

ATK 2300 / DEF 3000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に闇属性モンスターが5体以上存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合に特殊召喚する事ができる。

自分の墓地の闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、自分の墓地の闇属性モンスター1体を特殊召喚する。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「我は『ゴブリン陽動部隊』を除外し『ダーク・ホルス・ドラゴン』を特殊召喚！」

闇に堕ちた神は右手でゴブリン達を握り潰すと、背中のリングに放り込む。瞬間、闇がその場に満ちた。その真つ黒なリングの中から闇色の翼を持った黒い翼竜がズズズとまるで這いずるかのような音を立てて現れた。

……ゴブリン達は今日も不憫のようで。

『クヒョオオオオオオオオオオッ！』

ダーク・ホルス・ドラゴン：ATK 3000

『攻撃力3000だっ!?』

『ノーコストに等しい形であんな上級モンスターを……』

『なんて恐ろしい効果だッス!』

ノーコストでは無いがな。だが、手札やライフに比べれば比較的失ってもあまり痛くないコスト元というのは確かだ。

ダーク・ホルス・ドラゴン（効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 1800

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手のメインフェイズ時に魔法カードが発動された場合、自分の墓地からレベル4の闇属性モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「更に自分の墓地に存在する闇属性モンスターが3体のみの場合、『ダーク・アームド・ドラゴン』は手札から特殊召喚できる！」  
 げ、出やがった!?

ダーク・アームド・ドラゴン：ATK 2800

闇の中から重い足音を響かせてノツシノツシと歩いて来たのは、全身にドリルやミサイルを搭載して武装している巨竜。禍々しい瞳でこちらを睨みつけるその姿は、相手プレイヤーにチェックメイト宣言をしているかのようだ。

ダーク・アームド・ドラゴン（効果モンスター）

星7

闇属性／ドラゴン族

ATK 2800／DEF 1000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する闇属性モンスターが3体の場合のみ、このカードを特殊召喚す



る事ができる。

自分のメインフェイズ時に自分の墓地に存在する闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

『ダーク・アームド・ドラゴン』、通称『ダムド』。ダーク系モンスターの中でも特に恐ろしい効果を身に秘める凶悪モンスターだ。その分召喚条件が厳しいが、その程度はどなたでもするのがデュエリストだろう。

『デケエ!』

『こ、怖いかも……』

十代とジュンコが声を上げる。至極最もだが、もう少し何か無いのだろうか。

「効果発動!」 『ダーク・アームド・ドラゴン』は自分の墓地の闇属性モンスターを1体ゲームから除外する度に、相手の場のカードを1枚破壊できる! 対象はその伏せカードだ!」

『そうか、これの為に墓地に闇属性モンスターを送っていたのか!』

『何てえげつない効果……!』

『そんなのズルいッス!』

これが『ダムド』が必殺カードの由来! 墓地に闇属性が溜まれば溜まるだけ制圧力

が強くなる！

ギユギユギユツッ！ と音を立てて『スナイプスターカー』が『ダーク・アームド・ドラゴン』の腕の中で圧縮され、丸鋸の刃のような黒い高速回転する円盤になった。

「ダーク・ジェノサイド・カッター！」

「させるか！ 罨カード『スキル・プリズナー』を発動！ フィールド上のカード一枚を対象にモンスター効果が発動した場合、それを無効にする！」

刃を投げつけようとした『ダムド』だったが、突如として地中から伸びて来た黒い鎖に全身を絡め取られて動きを封じられた。同時に投擲に失敗した丸鋸がバキーン、と碎けて消滅する。

スキル・プリズナー

### 【通常罨】

自分フィールド上のカード一枚を選択して発動できる。

このターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする。

また、墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上のカード一枚を選択して発動できる。

このターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。

「ほう、然らば次は『マッド・デーモン』を破壊する！　　<sup>〃</sup>ダーク・ジエノサイド・カッ

ター<sup>〃</sup>！」

「くっ！」

しかし次は失敗しないと言わんばかりに次弾が放たれ、俺の骨の悪魔を切り刻む。『クリッター』を弾丸にした一撃は、俺の場のカードをまた一枚減らした。

『スキル・プリズナー』は優秀だが、制限回数のない効果にはやはり弱いな……。

「バトル！　『ダーク・ホルス・ドラゴン』でプレイヤーを直接攻撃！　　<sup>〃</sup>ブラック・メ

ガ・フレイム<sup>〃</sup>！」

キユイイイイン、と黒い翼竜が口元に黒い炎を集める。集まった炎は柱のように太く、マグマの様な高温で吐き出された。

『あれ喰らったらヤバいんじゃないの!?!』

『ダメージ3000は危険だぞ!』

「<sup>〃</sup>心配無く十代、大地！　何のためにこの伏せカードを守ったと思ってる！

『ピンポイント・ガード』、発動！　墓地から『マッド・デーモン』を守備表示で復活させ、このターンのあらゆる破壊から守る！」

『ガアアア!』

マッド・デーモン DEF:0

黒い炎が俺に当たる直前、墓地から蘇った悪魔が防壁を張ってそれを防いでくれた。これでこのターン、俺が負ける事は無い。

「これ以上の追撃は不可能か。ターンを終了する」

ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―:LP 2800

手札:3枚+『終末の騎士』

フィールド

:ダーク・クリエイター(ATK 2300)、ダーク・ホルス・ドラゴン(ATK 3000)、ダーク・アームド・ドラゴン(ATK 2800)

:伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー！」

面倒だな。ダークの上級が3体も居やがる。それにダークの何より恐ろしい所は……。

『何とか防いだんだな』

『しかしもう『ピンポイント・ガード』の効果は切れている。『マッド・デーモン』だけじゃ次のターンで終わりだ』

『それに気付いてる？ 相手は実質2枚のカード消費で上級モンスターを3体も揃えた。墓地の条件が整っていたとは言え、この展開力は脅威だよ』

そう、フィオの言う通りだ。墓地に闇属性が居ればバンバン展開できる。これがダークモンスターの特徴だ。場を1ターンで制圧され返され、敗北なんて事も有り得る。

さて、この状況は本来なら『ブラック・ローズ・ドラゴン』のあたりで一掃したいが、今回のEXデッキには入れてない。

次のターン再び『ダーク・アームド・ドラゴン』が起動し、こちらの場を荒らしてくる。今の時点で弾丸は2発分。1枚は墓地の『スキル・プリズナー』で守れるが、それだけだ。

チツ、につちもさつちも行かねえや、どうすりや良いんだよ……！

『悩んでるツスね』

『この状況を破る事は決して容易くは無いだろっからな』

俺の手札は4枚。

ええい、男は度胸だ！

「俺は手札の『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地に送り、チューナーモンスター『クイック・

シンクロン』を特殊召喚！」

『ハッ！』

クイック・シンクロン：ATK 700

「墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』を自身の効果で蘇生し、更に『レベル・ステイラー』を通常召喚！」

『チイツ！』

ボルト・ヘッジホッグ：ATK 800

レベル・ステイラー：ATK 600

「レベル1の『レベル・ステイラー』とレベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル5の『クイック・シンクロン』をチューニング！」

「えーと、1足す2足す5だから……」

『合計で8！ あれが来る！』

「集いし闘志が、怒号の魔人呼び覚ます！ 光差す道となれ！」

☆1+☆2+☆5=☆8

「ここを打開するにはこいつしかない！ 頼むぞ！」

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』！」

『デエヤツ！』

ジャンク・デストロイヤー：ATK 2600

『出た！ 黎くんの必殺カード！』

『今回も活躍しちゃって！』

「その効果で、素材となったチューナー以外のモンスターの数だけ相手の場のカードを





成程、手札コストが必要なカードはダークモンスターと相性が良い。墓地に闇属性を好きなだけ溜められる。

『そんな、やられちゃった……』

『あんなアツサリ倒されるなんて……』

『賭けは失敗に終わった事になるな』

「俺はこれで、ターンエンド！」

黎：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：マッド・デーモン (DEF：0)

：魔法・罨無し

「私のターン！ 我は『天使の施し』を発動！」

チツ、この局面でまた厄介なカードを！

「効果でカードを3枚ドロ―し、2枚捨てる！ 捨てるのは『キラ―トマト』と我自身

『ブラッド・マジシャン』！」

『マズい、どちらも闇属性モンスターだ！』

『あいつ強いツス！』

「そして『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果を発動！ 墓地の我を除外して『マッド・

デーモン』を破壊だ！ 〃ダーク・ジエノサイド・カッター〃！」

「クツ！」

ギユギャン！ と丸鋸が勢い良く俺の場のカードを切断し切り取って行く。これで

ガラ空きか……！

「これで終わりだ！ 総攻撃！」

『黎！』

『危ない！』

『ここまでか……！』

「〃ダーク・アームド・パニツシャー〃！ 〃ダーク・メガ・フレイム〃！ 〃ヘルズ・

ジャツジメント〃！」

この総攻撃の合計ダメージは8100! OCGの8000ライフを削り切る攻撃かよ!

だが、まだ負けられないんだ!

『速攻のかかし』を墓地に送ってバトルフェイズを強制終了だ!」

まだ終わりじゃ無いんだぜ?

「止められたか……」

「生憎、生半可な実力じゃ無いんでね」

「ならばカードを1枚セットし、『テイク・オーバー5』を発動。デッキからカードを5枚墓地に送る」

【墓地に送られたカード】

『コスモクイーン』

『サイクロン』

『D・D・R』

『キラートマト』

『悪シノビ』

「そして『ダーク・クリエイター』の効果発動。墓地の『キラートマト』を除外し、『コスモクイーン』を蘇生する。これでターンエンド」

あー、ウザってえな！　また墓地とフィールドに闇属性が増えやがった！

コスモクイーン　ATK：2900

ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―：LP　2800

手札：2枚

フィールド

：ダーク・クリエーター（ATK 2300）、ダーク・ホルス・ドラゴン（ATK 3000）、ダーク・アームド・ドラゴン（ATK 2800）、コスモクイーン（ATK 2900）

：伏せカード1枚

『これって、かなりヤバくない？』

『ああ、もう攻撃を防ぐ手立ては無いぞ！』

『次のドロローが最後ッス……』

ク……、好き勝手言いやがって。いやまあ俺もそう思うが……。

『大丈夫』

『俺もそう思うぜ』

フイオ？ 十代？

『あれは黎が心を込めて作ったデツキだ。きっと黎の心に応えてくれる！』

『ああ、デツキは信じれば必ず応えてくれるぜ！』

そんな二人の声が聞こえた。

つたく、分かったよ。諦めなければ良いんだろうが！

「行くぞ！」

「まだやるのか」

「当然！ ドロー！」

！

「手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！ デツキからカードを2枚補充する！」

「ほう。手札がゼロのお主には、渡りに船というワケか」

「何とでも言え！ ドロー！」

「ここで『ダーク・ホルス』の効果発動。相手ターン中に自分または相手が魔法カードを発動した時、墓地からレベル4以下の闇属性モンスターを特殊召喚する」

ダーク・ホルス・ドラゴン（効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 3000／DEF 1800

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手のメインフェイズ時に魔法カードが発動した場合、自分の墓地のレベル4の闇属性モンスター1体を選択して特殊召喚できる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「蘇れ『終末の騎士』！　そしてその効果でデッキから闇属性の『ダーク・グレファア』を墓地に送る」

DEF：1200

ここは耐えるしか無い。『魂の解放』や『王宮の鉄壁』が無い以上、引きに頼るしか無い。

「そして『テイク・オーバー5』を発動！」

頼む、上手く良いカードよ落ちてくれ……！

【墓地に送られたカード】

『絶対王 バック・ジャック』

『超電磁タートル』

『埋没神の救済』

『リバースエンジンアリング』

『L・S レストア・チェリー』

あー!? 桜、お前俺を見捨てるのか!?

だが良いカードが落ちた、後で蘇生できたら蘇生するから勘弁してくれよ!

「っ、ヨシ! この瞬間、墓地に送られた『バック・ジャック』の効果発動! このカードが墓地に送られた時、デッキの上からカードを3枚確認し、それを好きな順番で入れ替える事ができる!」

絶対王 バック・ジャック（効果モンスター）

星1

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：相手ターンに墓地のこのカードを除外して発動できる。

自分のデッキの一番上のカードをめくり、そのカードが通常罠カードだった場合、自分フィールドにセットする。

違った場合、そのカードを墓地へ送る。

この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる。

(2)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

自分のデッキの上からカードを3枚確認し、好きな順番でデッキの上に戻す。

「モンスターをセット。ターンを終了する」

これで、耐えきれるか……!?

黎：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：セットモンスター1体



: 魔法・罨無し

「私のターン、ドロロー！ このスタンバイフェイズ、『テイク・オーバー5』を除外する事でもう1枚ドロローする！」

奴の墓地にはこれまでのプレイで潤沢かつ高速で多くの闇属性モンスターが溜められた。しかも手札は4枚。

こいつのデッキ、完成度が本当に高い！

「何をしようとも無駄だ、お主の敗北は免れぬ！ 我は『コスモクイーン』を贄とし、手札の『コスモブレイン』を特殊召喚！」

『ホアアアアア！』

「このカードは通常モンスターを墓地に送って殊召喚でき、そのレベル×200攻撃力がアップする！ よって攻撃力1600アップ！」

コスモブレイン（特殊召喚・効果モンスター）

星7

闇属性／魔法使い族

ATK 1500 / DEF 2450

このカードは通常召喚できない。

手札及び自分フィールドの表側表示モンスターの中から、効果モンスター以外のモンスターを墓地へ送った場合に特殊召喚できる。

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードの攻撃力は、このカードを特殊召喚するために墓地へ送ったモンスターのレベル×200アップする。

(2)：自分フィールドの効果モンスター1体をリリースして発動できる。

手札・デッキから通常モンスター1体を特殊召喚する。

ATK：1500↓3100

「攻撃力3100だど!?!」

「更に我は罨カード『闇霊術―「欲」』を発動。『終末の騎士』をリリースし、2枚ドロウする。本来ならば魔法カードを貴様が見せればこれは無効になるが……」

「俺の手札は0枚、見せる事はできない」

「然り！ そして『ダーク・クリエーター』の効果発動！ 墓地の『悪シノビ』を除外し、

『ダーク・グレファア』を呼び戻す！」

ダーク・グレファア：ATK 1700

「チッ！ また墓地肥やしモンスターか！」

「その通りだ！ 効果で手札から『キラー・トマト』墓地へ送り、デッキから『トリック・デーモン』を墓地に送る！ そして『トリック・デーモン』がカード効果で墓地に送られた時、デッキから『デーモン』と名のついたカードを手札に加える事ができる！ 選択するのは『デーモンソルジャー』！」

クソ！ また墓地に闇属性が……！ しかも手札とモンスターが入れ替わったのに  
ハンド5枚かよ！

ダーク・グレファア（効果モンスター）

星4

闇属性／戦士族

ATK 1700 / DEF 1600

このカードは手札からレベル5以上の闇属性モンスター1体を捨てて、手札から特殊

召喚する事ができる。

1ターンに1度、手札から闇属性モンスター1体を捨てる事で、自分のデッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。

トリック・デーモン（効果モンスター）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 0

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが効果で墓地へ送られた場合、または戦闘で破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「トリック・デーモン」以外の「デーモン」カード1枚を手札に加える。

「まだ終わらぬ！ 魔法カード『魂の解放』を発動！ 貴様の墓地からカードを5枚除外する！」

「何?！」

「『テイク・オーバー5』で『超電磁タートル』が墓地に送られた事を見逃しはせんで！」

「ならばチェインして『スキル・プリズナー』の効果発動！ 伏せモンスターをモンスター効果から守る！

更に相手ターン中に墓地の『バック・ジャック』を除外し、効果発動！ デッキから1枚ドロし、通常罠だった時それをセットできる！ そしてこの効果で伏せたカードは、このターンに発動できる!!」

俺の墓地ポケットが青白く輝き、中から5枚のカード『超電磁タートル』『テイク・オーバー5』『絶対王 バック・ジャック』『埋没神の救済』『リバースエンジニアリング』が除外される。

クツソが！ 折角良い感じに墓地が肥えたつてのに！ しかも『埋没神の救済』と『リバースエンジニアリング』とかいう超マイナーカードをよく知ってたな！

埋没神の救済（アニメオリジナル）

【速攻魔法】

相手の攻撃宣言時に発動できる。

このターンのバトルフェイズを終了する。

また、相手モンスターの攻撃宣言時にこのカードが墓地に存在する場合、このカードを含むカードを5枚選択してゲームから除外して発動できる。

このターンのバトルフェイズを終了する。

リバースエンジニアリング（アニメオリジナル）

【通常罨】

（１）：相手の魔法&罨ゾーンにセットされたカード１枚を対象として発動できる。

そのカードを確認し、元に戻す。

その後、その確認したカードと同名のカードを、自分のデッキ・墓地から１枚選んで手札に加える事ができる。

（２）：墓地のこのカードを除外し、このターンに破壊された自分の墓地の罨カード１枚を対象として発動できる。

そのカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる。

「ドロー！ 引いたカードは通常罨『聖なるバリアーミラーフォースー』！ よってこれを伏せる！」

「無駄だっ！ 『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果発動！ 『闇王プロメテイス』を除外し、それも破壊する！」

「くうっ!!」

「ここまでだ! バトル、『ダーク・アームド・ドラゴン』で裏守備モンスターを攻撃!」

SIDE : 十代

黎と『ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―』のデュエル、相手の場に闇属性のモンスターが並んでいるのに対し、黎の場には裏側のモンスターだけ。

すっげえ強えなあいつ。俺もデュエルしてみてえけど、今はそれどころじゃ無い。

相手の場にいるのは墓地から蘇生するモンスターと、除外してカードを破壊するモンスター。しかもどれも上級モンスターだ。

ハッキリ言つてこれは俺でもヤバいかもしんねえ。『フレイム・ウィングマン』や『サnder・ジャイアント』を出したつて次のターンにはいなくなっちゃうなんて、ムチャクチャだぜ!

『ダーク・アームド・パニッシャー!』

巨大な黒いドラゴンのパンチが裏側表示モンスターに迫り、そのまま壺のようなクリチャーを粉碎した。

これで壁モンスターがいなくなっちゃった!

『この瞬間、『メタモルポット』のリバース効果発動！ 互いに手札を全て捨てて、5枚ドロウする！』

『無意味だな、最早貴様に次のターンは無い！ 『ダーク・グレフアア』でダイレクトアタック!!』

メタモルポット（リバース・効果モンスター）

星2

地属性／岩石族

ATK 700 / DEF 600

(1)：このカードがリバースした場合に発動する。

お互いの手札を全て捨てる。

その後、お互いはデッキから5枚ドロウする。

黎に迫る黒い剣。これを防ぐ事もできず、アイツはダメージを負ってしまった。まっずいぜ、まだ攻撃可能なモンスターは3体もいるぞ！

黎：LP 4000 ↓ 2300



『ぐっ!』

『トドメだ! 『ダーク・クリエイター』でダイレクトアタック!!』

最後の黒い雷が襲い掛かり、友達の全身を焼き尽くす。

これでライフポイントはピツタリゼロ……、くっ、強いなアイツ……!

『まだだ!』

黎 : LP 3500

チエックサム・ドラゴン DEF : 2400

えっ!? 黎の場に赤いドラゴンがいる上にライフが回復してるぞ!?

『プレイヤーがダイレクトアタックを受ける時、『チエックサム・ドラゴン』は手札から特殊召喚できる。そしてその守備力の数値の半分、ライフを回復できる!』

マジで終わったかと思っただけ……。すげえな、防いじまった。

これで攻撃できるアイツのモンスターは残り2体、そんで攻撃力3500以上のモンスターはいないって事は、あいつはダイレクトアタックを受けても負けない!

これでこのターンは何とかなる!

チェツクサム・ドラゴン（効果モンスター）

星6

闇属性／ドラゴン族

ATK 400／DEF 2400

（1）：相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

その後、このカードの守備力の半分だけ自分のLPを回復する。

（2）：攻撃表示のこのカードは戦闘では破壊されない。

「よっしゃ、これで行けるぜー！」

「そうとも限らないわ」

な、何でだよ、明日香？

「黎は確かにこのターン生き残るわ。でも生き残るだけ。次のターンで再び『ダムド』が動き出せば、今度こそ黎の負けよ」

あ、そうか。もう『スキル・プリズナー』は無いんだっけ。

「黎……！」

「信じましょう、彼が救世主となる事を」

信じてるからな、黎。

SIDE : 黎

「ええい、邪魔だ！ 我は『ダーク・ホルス』で『チエツクサム・ドラゴン』を攻撃！  
 そして『コスモブレイン』でダイレクトアタック！ “コズミック・ブラスト”！」  
 「ぐああああああああつ！」

黎 : LP 3500 ↓ 400

黒い炎は身を挺して守ってくれたドラゴンだったが、続く宇宙の波動までは防いでくれなかった。これでライフは残り10分の1、これが遊戯王シリーズでよく使われる“風前の灯火”ってヤツか……！

だが『メタモルポット』で捨てられたカードは『カードガンナー』『デーモンソルジャー』『可変機獣ガンナー・ドラゴン』『ダークバースト』『闇次元の解放』、どれも墓地では発動しない。運命はまだ決まってなんかいない！

「運の良い奴め」

「運びやねーさ、『バック・ジャック』の効果で『チエックサム』は確認できたからな。最初から何重にも重ねておいた防御策が上手く行ったってだけだ。

これまでのデュエルでお前の堅実な性格は推測できていた。なら攻撃力の低い順に殴つて来る事も想定した範囲内さ」

「ふん、予定調和とでも言うつもりか。ならば装備魔法『デーモンの斧』を発動。『ダーク・グレファアー』に装備し、攻撃力を1000ポイントアップさせる」

ダーク・グレファアー ATK:1700↓2700

この局面でわざわざ攻撃力を上げた……？

迎撃を警戒するにしても、このタイミングでやるのか？

「カードを1枚伏せる。我はこれでターンエンドだ」

煉獄の魔術師：LP 2800

手札：3枚

フィールド

：ダーク・クリエイター（ATK 2300）、ダーク・ホルス・ドラゴン（ATK 3000）、ダーク・アームド・ドラゴン（ATK 2800）、コスモブレイン（ATK 3100）、ダーク・グレファアー（ATK 2700）

：伏せカード1枚、デーモンの斧（装備魔法・『ダーク・グレファアー』に装備）

「諦めたらどうだ？ もうお主に勝ち目は無い。このままズルズル引き摺っていつでも無様な姿を晒すだけに過ぎんぞ」

「ナメるな。十代だって、翔だって、最後の最後で逆転のカードを引き当てた！ ここで俺が降参して何になる！ あいつらに対する申し訳の無さと、都を救えず世界の終りを迎える事以外の何が残る！」

「負けを認める事もまた強さであり戦いだぞ」  
「最後まで諦めない事だって重要だ」

この世界に俺達義兄妹がやって来た理由、それは世界の崩壊を止める事。それはきつと他の誰にもできないからこそ、俺達に託されたんだ。

今、片割れである都はいない。イレギュラーであるフィオや主人公の十代、ヒロイン





——良し、『死者蘇生』だ！

「来たぜえ！」

「何を引いたか知らぬが、させるか！ トラップ発動、『闇のデツキ破壊ウイルス』！ 攻撃力2500以上の闇属性モンスターを媒体に、魔法・罠のどちらかを3ターン破壊する！ 我は『ダーク・グレファア』をリリースし、魔法カードを選ぶ！」

つ、『デーモンの斧』はこれが狙いか！

『デーモン』カテゴリーとしてピン刺ししてるだけじゃなく、ウイルスの触媒にする意味もあつたのか！

「これで逆転は最早有り得ん！ 貴様の敗北だあつ！」

声高に——或いはどこか焦っているように、『ブラッド・マジシャン』は言った。

そこには優勢から生まれる慢心も余裕も無く、ただただ勝利への渴望が……、いや義



務感のような物がある。

だからこそ、俺は。

負けられない。

「手札からカウンター罠『レッド・リブート』発動！ このカードはライフを半分にする事で、手札から発動できる！」

「何い！」

『手札からカウンター罠?!』

『いやあれこないだ使ったでしょ!?!』

黎：LP 400↓200

「相手の罠の発動を無効にして、伏せカードの状態に戻す！ そして相手はデッキから罠カードを1枚セットできるが、このターンに罠は使えなくなる！」

「おのれ……！ 我は『魔のデッキ破壊ウイルス』を伏せる！」

闇のデッキ破壊ウイルス

【通常罠】

(1)：自分フィールドの攻撃力2500以上の闇属性モンスター1体をリリースし、カードの種類(魔法・罠)を宣言して発動できる。

相手フィールドの魔法・罠カード、相手の手札、相手ターンで数えて3ターンの間に相手がドロートしたカードを全て確認し、その内の宣言した種類のカードを全て破壊する。

レッド・リブート

【カウンター罠】

このカードはLPを半分払って手札から発動する事もできる。

(1)：相手が罠カードを発動した時に発動できる。

その発動を無効にし、そのカードをそのままセットする。

その後、相手はデッキから罠カード1枚を選んで自身の魔法&罠ゾーンにセットできる。

このカードの発動後、ターン終了時まで相手は罠カードを発動できない。

「これで俺は安全に魔法カードが発動できるってワケだ」

「ナメるな！ たかが1回トラップを奇策で切り抜けた程度！ 貴様の劣勢に変わりは

ない！」

確かに状況は俺の圧倒的不利。

奴のモンスターは4体、いずれも大型で協力的な攻撃力を持つものばかり。耐性が無いのが幸いか。

更に墓地には『ネクロ・ガードナー』がいる。戦線は固い。

だが。

「悪いな」

「何？」

「もう勝負はついているんだ」

「馬鹿な!？」

俺の手札は5枚。

5枚あれば逆転なんて容易いんだよ！

「魔法カード『死者蘇生』！ 蘇れ、桜！」

『いざ、主殿のために!』

「効果で俺のライフを700回復する！」

「こちら『ダーク・ホルス』の効果により、墓地の『終末の騎士』を蘇生！ そしてデッ

キから2体目の『ネクロ・ガードナー』を墓地に送る！」

黎：LP 200↓900

終末の騎士：DEF 1200

おっと2体目のネクガか。

だが寧ろ手間が一つ省けた！

「そして手札から『魔導戦士ブレイカー』召喚！ 効果で自分に魔力カウンターを置き、攻撃力300アップ！」

『トアッ！』

魔導戦士ブレイカー：ATK 1600↓1900

さあ、今回のフィニッシャーのお披露目だ！

「俺はレベル4の『ブレイカー』に、レベル4の桜をチューニング！」

王者の咆哮、今天地を揺るがす！ 唯一無二なる覇者の力をその身に刻むがいい！」

☆4+☆4=☆8



「何だと!？」

時代の流れとでも言うべきか、守備モンスターを根絶やしにする効果は、格下のモンスターを殲滅する効果に進化した。

圧倒的な破壊力と制圧力、全てを黒焦げにするまさに破格の存在だ。

「だ、だが私の場のモンスタースターは5体、そして『コスモブレイン』の攻撃力は貴様のモンスタースターより高い！ よって我が受けるダメージは4体分の2000に留まる！ やられはせん!!」

「だったらこれでどうだ！ 魔法カード『精神操作』！ このターン攻撃できず、リリースできない代わりに、相手モンスタースター体のコントロールを奪う！ お前の『ダーク・クリエーター』、借りるぞ！」

そして貰った『ダーク・クリエーター』の効果発動！ 墓地の『チェックサム・ドラゴン』を除外し、『マッド・デーモン』を復活させる!!」

「何い!？」

魔法カードから妖しい糸が伸び、敵の黒い巨神を奪う。

寝返った黒い巨神は墓地から赤い殻の竜を引きずり出して背中リングに放り込むと、中から骨の悪魔を場に呼び戻した。

マッド・デーモン：ATK 1800

『成程、恐らくあのモンスターは味方モンスターでも条件が合えば破壊できる。自分で破壊するモンスターを増やし、ダメージを増しするつもりなのだろう』

『でもまだ攻撃力3000以下のモンスターは5体しかいませんわ』

『確かに、後1体だけ足りないんだな』

『いや……、黎がそんなミスをするワケが無い！』

おーおー、フィオからの信頼度が何故か高いねえ俺は。

勿論、もう1体用意する準備はあるとも！

「で、最後にこれの順番。装備魔法『早すぎた埋葬』！ ライフを800支払い、墓地のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！ さあ、もう一働きしてくれ『ブレイカー』！』  
『ハアッ！』

黎：LP 900↓100

魔導戦士ブレイカー：ATK 1600

これで互いの場のモンスターは8体。効果を発動する『スカーライト』と、攻撃力が





レッド・デーモンズ・ドラゴン・スカークライト（シンクロ・効果モンスター）  
星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2500

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1) : このカードのカード名は、フィールド・墓地に存在する限り「レッド・デーモンズ・ドラゴン」として扱う。

(2) : 1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

このカード以外の、このカードの攻撃力以下の攻撃力を持つ特殊召喚された効果モンスターを全て破壊する。

その後、この効果で破壊したモンスターの数×500ダメージを相手に与える。

「負け、たか……っ」

「これで、俺達を止めたりしねえよな」

「それが取り決めだったからな……」

両手両膝について頂垂れる『ブラッド・マジシャン』。丁度Orzという感じだ。

「何故だ、『ブラッド・マジシャン』。何故そうまでして俺達を止めようとした？ 引き止めれば世界が危ない事ぐらい知っているハズだ」

俺の問いに『ブラッド・マジシャン』は暫く黙っていたが、やがて意を決したように顔をあげ、理由を話し始めた。

「お前が『騎士』の魂の持ち主だからだ」

「それだけでか？」

「……邪神はかつて封印されていた、という事は知っているな？」

「ああ」

神様の話じゃ、封印が弱まっているっつゝ話だったからな。

「つまりそれは昔、何某なにがしかが彼奴きやつに封を施したという事だ」

「ああ、そこまでは分かる」

「そしてその封を施した一族は、今は分散し、姿も名も変わってしまったている。そしてその内の一人の末裔が……」

「お前という事か」

「そうだ」

「……までは理解できる。だが、まだ俺達を止める理由にはならない。

「そしてその一族の全ては『騎士』の魂の持ち主だった……！」

「え!？」

「本来なら稀有である『騎士』の魂。それが一族に集まっていたのは他でもない。一族は持ち主のみを集めた屈強な戦士団だったからだ。

もともと魂の型は受け継がれないから自分は既に違うが。とこぼす『ブラッド・マジシャン』。

「分かるか？ 勇敢なる戦士達と封魔の力を持つてしても、封印が精一杯だったのだ。お前一人に行かせて何になる。何一つ成し得ず命を落とすのが関の山だ、我が友人のようにな！」

「!?」

友人!?

「私の友人も『騎士』の魂だった! 解け始めの封印に誰よりも早く気が付き再封印を施しに行ったらそれきりだ! 後日変わり果てた姿で、辛うじて原型が分かる遺体で見つかるまでな!」

それが、理由……。

魂の型が同じという事は、考え方や話し方が似るといふ事だ。つまり、その誰かと型が同じ誰かの面影が似るといふ事に他ならない。

つまりこいつは、死んだ友人に似た俺を同じ死因で亡くしたくないのだろう……。

「友人はハッキリ言えば、精霊界全般の中でも指折りの実力者だった! だがそれが敗れたのだ! 言いたい事が分かるか!？」

「行くな、と?」

「そうだ! これ以上、もうこれ以上……!」

我の前から、邪神の所為で居なくならないでくれ……。

そんな弱々しい声を聞き取る事が、騒然とした会場の中で聴覚を強化してないのに何故かできた。

それはきつと、彼の心の底からの叫びだったからだろう。

でも……。

「悪いが『ブラッド・マジシャン』、それは聞き入れる事はできない」

「な……!?!」

何たってな、俺は転生者だぜ？ 違う世界からこの世界の危機を救う為に参上したヒーローだぜ？ ヒーローは、悪を目の前にしたら退かないし負けない。

「何故なら俺は、キツチリ勝って帰って来るからな！」

既に200を超える俺の精霊が、そしてこちらの世界に残る心強い仲間達がいる。

「俺は一人じゃない。仲間がいる、友達がいる、心がある、未来もある。希望もあれば力もある！ 一人じゃ成し得ないけど、皆がいるなら出来る！ 俺を信じろ、絶対に勝つ！」

そうだ。もう都を救う為だけじゃ無いんだ。

友達も仲間も守りたい。

まだ見ぬ、俺達の事を快く思ってくれる人々を、殺させたくない！

「大丈夫だ。なる<sup>ケ</sup>よう<sup>セ</sup>になる<sup>セ</sup>さ」

ガシツと『ブラッド・マジシャン』の肩を掴む。俺にはそれしかできない。でも、彼はそれで納得してくれたようだ。或いは呆れ、諦めたのかも知れない。

「これだけ言って聞き入れないのならば、もう我に言う事は何も無い」

行くが良い。そう言って『ブラッド・マジシャン―煉獄の魔術師―』は姿を消した。来た時同様にワープしたのだろう。

「ありがとう、心配してくれて」

虚空へと向けて、俺は静かに彼に対して礼を言った。

—  
レ  
ッ  
ド  
寮  
か  
ら  
北  
へ  
約  
5  
0  
0  
メ  
ー  
ト  
ル  
の  
位  
置  
・  
P  
M  
  
1  
9  
:  
4  
4

『行くのか』

「ああ」

『ブラッド・マジシャン』との戦いから一時間、俺は森の中の小さな広場で転送の準備を終えた。

赤、青、黄、緑、紫と色とりどりの光を放つ直径5メートルあまりの魔法陣。その中心部に俺の血を垂らせればワープの準備は完了する。

桜に補助を頼んで作ったこの円に囲まれた六芒星からは、ただならぬ大きな力を感じる事ができる。

さて、グズグズしている暇は無い。早く行かないと、最悪この魔法陣を無力化されてしまう。或いは更に別の次元へと逃げられてしまうだろう。

髪の毛を一本、硬質化させて針状にし、左の親指に刺す。

「ッ！」

ツウ、と血が流れて滴り落ち、魔法陣の中央に落ちた。

ポタ……。



ボウツ！

『！』

これまでは仄かな、蛍のような光の強さだった魔法陣だったが、強烈な光を放つようになる。思わず桜も俺も目を覆って隠す。森の中じやなかったら繁華街のネオンより眩い光で安眠妨害になっていただろう。

中心からは光の柱が空へと伸びている。これが入口なのだろう。

「これで、行けるな」

『主殿』

桜が神妙な顔で話しかけて来た。

『気をつけてくれ。恐らく、既存のデッキでは負けるぞ』

「解ってるよ」

プライドの水のデッキは俺が炎ばかりを使っていたから用いられたのだろう。そしてそれは再戦時まで木のデッキを一切使わなかった事で証明できる。もしも木のデッキに対するメタを張っていたら俺が使った事の無いデッキでも奴らに知れている事になる。

だが、プライドは相変わらず炎に対するデッキだった。即ち、あいつらは何でもかんでも知っている訳では無いという事だ。ならば、これまで一度も使った事の無いデッキや戦術で立ち向かえば、勝機はある。

例え既存のカードで作ったデッキでも、コンセプトがまるまる異なれば戦えるだろう。

「そう考えれば、案外この欠点も利点になるのかもな」

『かも知れない』

そんな感じでリラックスしながら、俺と桜は、沢山の精霊達と一緒にゲートを潜った。

【TRANSMISSION:to ENVY】

【With YU AMAZORA】

【With ARISU KANZAKI】

【With YURI AMAZORA】

このゲートが抱える欠点、それは――





—— 並行世界の誰かを一緒に、転送先の世界へと飛ばしてしまう事だった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 34 : 天空一家との邂逅 ★

## SIDE : 黎

光のゲートを潜り終えると、そこは一面の砂浜だった。

背後にはジャングル、前方約100メートル先には青々とした海が広がっている。

「ここが最初のステージか」

「その様だな」

「って、桜お前、いつの間に実体化を!？」

「ふむ、言われてみれば確かに実体化しているな。よっ!」

掛け声と共に桜は再び半実体化をするが……。

「なんか、姿が随分と濃いな、お前」

『むう……』

普段は若干向こう側が透けているのだが、今は実体化と変わり無い。少々古めのカラータレビに映った姿みたいだ。

『普段我々が行動している世界とは違うからな、こちらの理は通じないのだろう』

そんなものなのだろうかと疑いたくなるが、ここで問答をしたところで始まらない。なのでここでそれについての追求はお終いだ。

しゃふ、しゃふ、と砂を踏む度に音がする。白砂がキラキラと日光を浴びて輝く様は美しい。本当にここに邪神の手下がいるのかどうか疑ってしまうくらいだが、考えてみれば、連中はあくまでここに逃げたのであって、ここを作ったワケでは無い。

アカデミアでプライドとは戦ったが、あそこだってアイツからやって来た訳であり、別段その場とは何の関係も無いのだ。

『ふむ、こういういた場所には馴染みが無いな。私にとっては新鮮だ』

「桜は海に来た事が無かったのか？」

『ああ、ずっと森の奥で、一人で暮らしていたからな。一、二度行った事はあるが、景色を堪能した覚えは無いな』

「ふーん」

桜の話では、俺の精霊は全て結晶石から生まれた訳では無いらしい。表舞台に立っていない、要はカード化していない精霊も何体か抜擢され、力を与えられたという形で結晶石の精霊になった、との事だ。尤も、それは全体の僅か1%程度だそうだが。会話もできないので、本格的に守護霊とか背後霊みたいな感じである。

「お、誰かいるぞっ！」

『ふむ、一人では無いな』

「邪神の気配はしねえな。多分、今回のワープに巻き込まれた、並行世界の誰かだろう」  
ここから凡そ200〜300メートル先の砂浜にいた人数は3人。1人は男、2人は女だ。年齢は内男女2人が十代半ば、残った女1人は10歳くらいか。

近くに邪神の気配は無い。どうやらここに居る邪神の護衛よりも早く接触できたらしい。

良かった、彼らが俺同様に奴らと格闘術で戦う術を持つとは限らない。と言うか、多分無い。だからこそ、並行世界の人達とより早く合流する必要があった。殺されたり、敵側に引き込まれたりでもしたらアウトだからな。

そして、俺単独で護衛相手に勝利を収められる保証は無い。どう転んでも、俺は必ずここに飛ばされてしまった人と合流する必要があるのだ。

距離が150メートル程に近付くと、彼らの話し声が聞こえて来た。



「状況を整理するぞ」

少年が腕を交差させながら言う。

短い黒髪に落ち着いた物腰。横顔はスラッとしていて、アイドルとは違う形の美形だ。

「俺達は海で遊ぶという案の元、こうして水着を持って砂浜にまでやって来た。が、突然変な光に巻き込まれて気が付いたらここにいる。ここまでは良いな？」

「うん、大丈夫だよ」

「はい」

神妙な顔で二人の少女が答える。

少年と同じ年と見える少女は赤みがかった桃色のロング。ボーイッシュな感じで、芯の強そうな雰囲気醸し出している。背丈は少年より頭一つ分弱程低いくらいか。

そして唯一年の離れた少女は黒髪。赤髪の子と同じくロングの髪で、その顔立ちも赤髪ロングの少女とよく似ている。遠目、素直で良い子といったところだろう。

「で、ここはドコだろうな？」

「さあ……」

少年の問いに赤髪少女が首を傾げる。まあ、俺だつてどこかと問われても正確な答えは出せないんだ、いきなり連れて来られたあつちが答えなんて持ち合わせているワケが

無い。

と、黒髪少女が俺の接近に気付いた。

「あ、誰か来たよ！」

さて、異世界交流といきますか。

「やあ、始めまして。君達が今回ここに連れて来られた並行世界のデュエリストか」

「……」

「俺は遊馬崎黎。君達は？」

「私は主殿の精霊で桜と申す」

「……………」

フレンドリーに話しかけてみたが、失敗。警戒心バリバリで睨まれた。

「私は<sup>あまぞら</sup>天空有里ゆりです！ 始めまして！」

「はい、始めまして」

ニツコリ笑顔で答えを返してくれたのは黒髪少女だ。

うん、この子は素直で良い子だな。

「有里、敵かも知れない奴に名前を教えるな」

「え、でもパパは『名乗られたら名前を教えろ』って教えてくれたよ？」

「確かにそうだが、時と場合に」

「僕は神かんざき有栖ありすだよ！ よろしくね！」

「よるって、おい！ 人の話を聞け……っ！」

「はい、よろしく」

「お前ら……！！」

あらら、怒り心頭？

「安心してくれ、俺は敵じゃねえ。つつーか寧ろ、3人の力を借りたい存在だ」

例え憎み合う間柄でも、呉越同舟になるとは思っけどな。

「と言うか、寧ろこうしなくちゃいけねえんだらうな」

俺はそう言っつて膝を折り、頭を下げた。

協力を頼む立場なんだ、これくらいはしないとね。俺の頭一つで済むのなら、安い代価だろう。

「お願いします。どうか、俺に3人の力を貸して下さい」

「ほら、ああして頭下げてまで言ってるんだから、せめて自己紹介しなきゃ!」

「チツ、分かったよ」

赤髪少女、有栖が少年を促す。渋々といった感じで少年は自己紹介を始めた。

「俺はあまぞらゆう天空優。優で良い。この場に天空姓は二人いるからな」

「じゃ、僕も有栖で」

「私も有里でお願いします」

「はい、よろしくお願いします。なら俺も黎で良いかな」

「私には苗字が無いからな、最初名乗った通り桜で頼む」

ニコニコと笑う少女2名に対し、まだ優は訝しげな表情を浮かべている。そんなに信用ならんか……。

「まあ、そうムスツとしないでくれ、優。同じ転生者同士仲良くしようぜ?」

「! お前もか……!」

目を見開く優。有栖や有里も驚いたような表情をしている。

「何故、俺がそうだと分かった?」

優のその問いに俺は一言、気配だよ、と答えた。

「お前からは俺と同じ気配、異世界の気配がした。有栖や有里からしたのはこのデュエルモンスターズの世界なのにお前は違う。つまり、お前が違う世界から転生してきたって事だ」

「……………」

「それに、精霊がいる。悪いヤツじゃ無さそうだ」

「ー」

優の後ろに半透明で浮かぶ巨大な龍。その姿は例えて言うのなら『スターダスト・ドラゴン』、『シューティング・スター・ドラゴン』、『シューティング・クエーサー・ドラゴン』の3体を丁度それぞれの特徴を残しながら1つに混ぜ合わせたかのような、暖かい光を放つ白い龍。

「大きくて優しい存在だ。大切な誰かを守りたい、そういうお前の思いが籠められているのがよく分かるよ」

暫く優は黙っていたが、後ろの龍が静かに口を開いた。落ち着いた、そして優しい声だった。

『我が主、彼から邪気や敵意は感じられません。味方と見て良さそうです』

「ふ、どうやら、敵じゃなさそうだな。転生者同士が敵対する理由は無い」

ようやく信用してくれたか。

「こいつは『シューティング・ブレイザー・ドラゴン』。俺の精霊だ」  
『始めまして』

「それはさて置き、〃転生者〃 って事は俺と同じで死んでこつちに来たという事か？」  
「ああ」

「で、俺達の力を借りたっていうのはどういう事だ？」

「掻い摘んで説明する事になるけど……、厄介な敵がいてね」

本当は厄介どころか破壊神も良いトコなんだが。

「そいつがこの異空間に逃げ込んだんだ。でも多分、俺一人じゃ倒せない。だから力を貸して欲しいんだ、ここに居る敵を倒す為に」

「……、そいつを倒す事に何か意味があるか？」

「ある。俺の義妹の命と世界が救える」

タイムリミットがいつまでかは知らないが、タイムオーバーになればまず都は死ぬだろう。そして後は時間が経つごとに例外無く世界は壊れていく。復活した邪神がどれ程の強さを持つかは知らないが、恐らくは異世界の俺みたいな転生者組と主人公勢が揃い踏みになって勝率 5 割にも満たないだろう。

俺の答えを聞いた優はニヤリ、と笑った。

「それを聞ければ充分だ。俺も戦おう」

「ずるいよ、僕だつて！」

「有里も、有里もおー！」

ありがたいな、皆。こんな見ず知らずの奴を助けてくれるなんて。

その後、俺達は当たり障りの無い身の上話を始める事となった。

「ところで、有里ちゃんは優の妹さんか何か？ 苗字は同じだが、顔立ちは有栖にそつ

くりなんだが……」

「いや、もつと濃い血縁関係だ」

「？」

更に濃い？

有栖がエへへ、と幸せ満面にはにかみながら説明する。

「有里はね、僕と優の間の子供なんだよ」

「へえ、娘さんか。……………、なにい!？」

娘!?! その年で!？」

「3人とも何歳だよ……………?」

「俺は転生者だから、この世界で過ごした時間は精々が1年だ」

「僕は15だよ」

「私は10歳です！」

「……、俺も転生してから1年経ってねえ。それはさて置き、て事は有栖が『頑張った』つーワケじゃねえのか？」

「当たり前だ。1年足らずで10歳の子供ができれば生物学その他が根本から引つ繰り返るわ」

「ごもつとも。」

「それじゃあ、どういう存在だ？」

「時を超えたんだと」

W H A T ?

「俺と有栖の未来の子供なんだとよ。有里から聞いた情報はほぼ俺達の人物像と一致するから、間違いないだろう」

「イリアステルの未来組み立てえなモンか。」

「納得した俺に今度は華やかな笑顔で有栖が話しかけて来た。」

「ふふふ、有里の存在は、僕の輝かしい未来の証明なんだよ」

「何で？」

「だって有里がいるって事は、僕と優は将来、結婚するって事でしょ？」

まあ、そうなるわな。もしそういう関係にならなかつたら、優は好きでもない女を孕



ませる自制心も理性も無いケダモノって事になるだろう。

「ふふふ、僕は最初に優を見た瞬間から彼を愛してしまっただよ！ そう、1万と2000年前からそういう運命が定められていたんだ！」

「どこの創聖の物語だ……」

「僕の心の中に雷が鳴り響き、彼に心の全てを盗まれてしまっただよ！ さながら華麗なる怪盗のように！」

「ああ、始まつちまつた……」

嬉々として語る有栖を尻目に、優はげんなりとした顔で呆れ返った。

「有里ちゃん、なんかママさん壊れちゃったよ？」

「いつもの事だから大丈夫だよ、黎おじさん」

「おじ……」

「有里、もう少し外見で年齢の判断ができるようになりなさい……」

まあ、彼女の年からしてみれば、21も16も十分おじさんか……。

その後およそ15分に渡って有栖は——優と有里曰くいつもの事——妄想をダダ漏れにし続けた。

本人の名誉その他を守る為に、取り敢えず当たり障りの少ない（無い、ではないのがポイントだ）ヤツをピックアップしてみると、『本当は自己紹介の時に天空姓を名乗った

かった』とか、『一姫二太郎と言うから、今度の子は男の子が好い』とか……。

……これも十分アウトかな……？

「ああ、優！ 君はいつたい僕をどこまでメロメロにすれば」

「もうその辺にしておいてくれ」

「気がすムウツ?!」

何時までも続くんじゃないかと心配し始めた15分目、顔どころか耳まで赤くした優が掌で有栖の口を押さえ、彼女の妄想シアターは終了した。

どうして最初から止めなかったのかと聞けば、彼は苦笑いで『惚れた弱み』だ、と言。きつと聞く事にはしたが、最後まで聞くには根気が足りなかったのだろう。

……、頑張れ。

この世界の時間の流れは俺達の世界よりも遅いようだ。出会った時には天頂にあつた太陽はまだ殆ど傾いていない。

「まあ、俺達の身の上話はこんなトコだ」

「お前も苦労してるんだな」

「なに、惚れた弱みってヤツさ」

優はケロリとそう言っただけだ。

少し、羨ましい。俺には誰かに惚れるとか告白するとかいうのは本当に無縁だったからな。

「じゃ、次は俺の方だな。何から話したものか……」

！

「そうだな、取り敢えず……」

この闇討ちしか能の無いカス共の話からかね」

そう言つて俺は真横から飛んで来た棒状の何かをしつかりと握り止めた。

「ど、どこから飛んで来たんだ……!?!」

「どこから? んなモン……」

飛んで来た全長4メートル前後の真っ黒な棒——よく見ると槍だ、コレ——を持  
ち直すと握り潰さないように注意しつつ、投擲の構えを取る。

「海の中から……」

目一杯肩を引き絞って力一杯足を踏み込む。既に気配で居場所は割れている！  
「決まってる！」

ダン！ と足元の砂が爆散し、轟音をあげて槍は海中へと一直線に飛んだ。

ギユウン！ と空気が裂かれる音がし、派手な水飛沫を上げて槍は海中へと潜り込む。さながら魚雷のようだ。

と、ザパアン！ と海の中から、飛び魚の様に何者かが飛び出した。何者かは空中で姿勢を変え、そのまま落下の勢いを利用して踵落としを叩き込むつもりらしい。影で判断できる。

「ふっ！」

バック宇宙の要領で後ろに飛ぶと、攻撃を外した相手が地面に着地した。

チッ！ 砂が緩衝材になって俺の踏み込みと奴の踵落としの反動を弱めたか……！

砂が派手に宙にバラ撒かれ、弾幕のように相手の姿を隠す。

その砂のカーテンを利用して相手が踏み込んで来た。手にしているのは投げられた物と同じ黒い槍。突き込まれたそれを俺は取り出した2本のブレードでいなし、木の力を纏った重い蹴りをお見舞いしてやった。

「樹剛濤脚じゆうたうせうく！」

「ぐげっ！」

鋼の硬度の木で蹴りつけ、おまけの細い枝の針を全身に突き刺してやる。どうだ、ちったあ効いたろ。

が、枝は全て砂浜に突き刺さっており、それに驚愕するのと同時に俺の右側の砂が爆ぜた。

「死ねえ！」

「！」

右に回られた!? ダメだ、間に合わない!?

と、その敵の突撃に横入りした人物がいた。

「はっ！」

「ゲヴツ！」

優だ。横入りした優は力任せに敵の顔を殴り飛ばしたらしく、敵は地面でワンバウンドしながらベチャ、と地面に落ちた。

それでも事も無げに起き上がるのだから、こいつらは本当にタフだ。

「こおの、名乗る前から……! ボクを誰だと思っている! ボクこそは邪神様の」

「せえの!」

「ぐえゴブツ！」

バシヤゴン! と奇妙な音を立てて再び敵が倒れる。砂と石がぶつけられたようだ。

投げたのは石が有栖、砂が有里ちゃん。コラコラ、人に向けて投げるモンじゃ無いよ？

「あいつは黎を殺そうとした。だったら敵だよ。仲間に手をかける奴に情けをかけられる程、僕は強くないよ」

「悪い人なんだよね？ だったらこのくらいはしても大丈夫だって、パパもママもいつも言ってるもん」

「お前からはあいつの正体を聞いて無い。それに易々と殺されても困るんだよ、寝覚めが悪くなる」

三者三様の答えが返って来た。ま、そういう事にしておきますか。

ユラア、と敵が立ち上がる。

「下がってな、荒れるぞー！」

俺は3人にそう言うのと、立て直す隙を与えまいと接近戦に持ち込む。

「桜、援護をー！」

「了解！ せいっ！」

垂直に蹴り上げると、桜がそれに合わせて刃で上から一閃する。

落ちて来た所を肘打ちで狙い、桜が廻脚で攻撃後の俺の隙をフォロー。

更に阿吽の呼吸で掌打の攻撃を合わせ、敵を海の上へと吹き飛ばした。





「うし、一丁上がり！」

「「おぉー！」」

翼を折り畳んで再び海岸に着地。これで暫くは時間が稼げるだろ。

「お前、凄いな……」

「凄かった！ 優の次くらいにカッコよかったよ！」

「黎お兄さんすごい！」

「ありがとう。だが、別に俺はカッコつける為に奴をぶっ飛ばしたワケじゃ無い」

有里ちゃんの俺の呼称が変わっていた事に突っ込むヒマは無いだろうな。

「なあ、3人はどうしてこの異世界に来たか、知りたくないか？」

「確かに、それはずっと疑問だったな。知ってるのか？」

知ってるも何も、俺が原因だからな。

だが、長つたらしい説明をしている余裕は無い。少し強引かと思っただが、俺は髪の毛を三束伸ばして掌状にすると、3人の頭を掴んだ。

「わわわ！ 何コレ、何なのコレ!?!」

「説明してる時間が惜しい、直接俺の記憶を流すからそれを見て分かってくれ」

慌てる有栖を尻目に、俺は髪に微弱な電流を流す。脳の記憶を司る部分にイメージや映像として映る信号を送った。



女を救う方法……。そしてここに逃げた邪神の護衛を追う過程で自分達は巻き込まれたのだと知った。

そして最後に流れて来た映像、それは……。

「っ！」

「酷い……………」

「おうえ……………」

顔をしかめた優、思わず息を呑んだ有栖、吐き気を抑える有里。

最後に流れて来たシーンは、彼の転生前の日常だった。

ある日は、凶悪な脱獄した殺人犯と殺し合い（黎は素手なのに対し、相手は武器を持っていた）。

またある日は、手と足の指の全てを太い釘で打ち付けられて何処かの床にはりつけにされ。

違う日には、真っ赤に焼けた鉄を素手で掴まされ。

別の日には、持参した弁当をまるごと引つ繰り返されて床ごと食わされ。

あくる日には、大槌で血達磨になっても大人数に殴られ続け。

とある日は、斧で根本から腕と脚を切り落とされ。

異なる日には、母を名乗る不審な女にタバコで片目を焼かれ。

そしてまた違う日には、機関銃で背中を蜂の巣にされた揚句、大口径の銃で脇腹を大

大きく抉られていた。

化物と周囲から義兄妹揃って罵られ、それでも人間の世界に居続けた。闇の中の僅かな光を求めて。人間を憎む事に疲れ、攻撃は敢えて浴び、それでも人間でいようと努力し続けた。

だが、彼らは人間に殺された。転生しても、唯一の家族である義妹を奪われ、好い様に使われて殺されようとしている。

「悲惨、過ぎる……！」

優がポツリと呟いた。

黎の転生前の記憶の中には「幸せ」とか、「嬉しい」とか、そういった単語が殆ど存在しない。あるのは「絶望」、「痛み」、「苦しみ」、「悲しみ」、「不幸」。

「真つ黒だ…………！」

有栖が言の葉に込めた思いは何なのか。

黎の毎日の記憶の中には、安らぎという言葉が無い。常に危険と向き合い、義妹である都と一緒に時ですら、その心は常に周囲の敵に気を配っていた。

「酷い、よお……っ」

有里はそれだけしか言えなかった。

どれだけ頑張っても、化物である彼らは報われなかった。ただ純粹に生きようと懸命

な彼らに、帰って来る報いは痛みと苦しみだった。

「俺達の過去に同情は要らない。ただ俺は、今を幸福に生きたい。人並みの幸せが欲しい。でも、たったそれだけを叶えられない、叶えさせてくれない。それだけだった」

沢山努力して、沢山人の為に動いて。それなのに、そんな些細な幸せすら与えられなかった。

「あつちで死んで、俺達はこつちに転生する筈だった。だが、邪神に勘付かれて都を奪われた。どこまで行っても不幸が背後霊みてえについて来やがる」

「じゃあ、まさか厄介な敵つてのは……!」

「ああ。三邪神よりも更に昔に封印された4番目の邪神、そして吹っ飛んでったヤツは、邪神復活まで器となった都を護衛する七つの大罪。俺が戦うのは、俺のいる世界を含めた全ての世界を喰らう、破壊神みてえな奴だ」

嘘を吐くつもりは最初から無かった。ただ、最初から話せばきつと怖がつて協力してくれなくなる。そんな恐れがあったのだ。

「放置すれば、都や俺の居る世界が死ぬだけじゃ済まない。俺の居る世界の全エネルギーを吸収して、優達の、そして全ての世界という世界を喰らい尽くすだろうな」

「そうなたら……有里達は、どうなるの……?」

「死ぬだろうな。ほぼ間違いない」

「う……………」

誤魔化す事に意味が無い事を悟ったのか、突き放す様に黎は言う。

ジワ、と有里は目元に涙を浮かべた。優。有栖、黎の3人は慌てて彼女に駆け寄った。

「有里！」

「ゴメン、泣かせるつもりは無かった！」

憤怒の感情を込めて黎を睨む天空夫妻。黎は有里を慰めようとするが、有里はその前に首を横に振った。

「ヒグツ、違うの……………、違うんです……………！」

「え？」

「だって、世界を食われちゃったら、ヒクツ……………、パパもママも、皆死んじゃうって……………」

！ それで私、とつても、悲しくって……………っ！」

「有里ちゃん……………」

S I D E : 黎

この子は本当に、真つ直ぐで、素直で良い子に育てられたんだな。愛情を沢山注がれて、他人思いの優しい子に育ったんだ。

自分が死ぬ事よりも父と母が死ぬ事の方が怖い、か。お父さんとお母さんの事が心の底から、嘘偽り無く大好きなんだな。

俺も本当はこんな感じの、優しい子になりたかった。でも、今更それはできない。だからこそ、悲劇の主人公にもなれない怪獣映画の端役だからこそ、この子の未来を守ってあげる必要がある。

「大丈夫。死なせはしない」

それだけは確約する。

例えこの命が無残に散る事となろうとも、まだ明るくて輝かしい未来を持っている皆を守る。それが化物である俺の義務だから。

「俺が死なせはしない。この命と引き換えになつてもだ」

「ヤダー！」

な!?

俺の約束に、有里ちゃんは大声をあげて強く否定した。

「黎お兄さんも！ お兄さんも生きてなきやヤダー！ 黎お兄さんが死んだらヤダあ！」

「っ！」

こいつ、嬉しい事言ってくれるじゃねえか……！

「俺も有里の意見に同意だな。俺はお前の命を食い物にしてまで生きたくは無い」

「僕も。君が死んだら悲しいよ」

お前ら……。

ありがとう。そう伝えようとした時だった。

ドズン！ と胸部から衝撃が走った。

「ぐっ！」

しまった、もう戻って来たか……！

「黎！」「黎お兄さん！」

「大丈夫、この程度で、化物は死なないっ」

突き刺さった槍を無理矢理引き抜き傷口を塞ぐ。口から流れた血は親指で拭う。

ギン！ と海上を睨みつければ、そこに確かにあいつがいた（そっぴや名前聞いてねえな）。

腐臭と瘴気を混ぜ合わせたような不快感、汚泥で作ったスライムのような嫌悪感。それでいて宵闇よりも暗く、黒い。



さつきは問答無用でぶん殴ったから察知してなかったが、こいつプライドよりも強いな……!」

「つ、雷で殴られたのに生きてるなんて……!」

「ふ、ふふ! このエンヴィー、雷で殴られたぐらいじゃ死なないよお!」

あ、名前判明。

エンヴィーは上空へと跳び上がると、無数の槍を召喚した。

その数は軽く300をオーバー。く、全ての穂先がこちらを向いている!

「で・も! キミ達人間なら、貫かれれば死ぬよねえ? 死になよ、おおうそつ大雨槍突き!」

槍の雨。青かった空はあつという間に黒一色に染まる。

これは俺が盾になるとか、そんな次元じゃねえ! 防がねえと優達が死ぬ!

だが、どうすれば良い!? タングステンタングステンの盾でどこまで耐えられる、いやそもそも4

人分を庇える大きさにしたら十分な厚みが無くなって防げなくなる!

精霊の力を使うおうにも何を使えば良いのかが分からない! 炎や水で防げるのか!

「有栖! 有里! せめて俺の後ろに居ろ! 多少は盾になる!」

「ヤダよ! だったら僕が二人の盾になる!」

「パパもママも止めてよ! 誰が盾になるとかそういうの止そうよ!」

! それだ!

「有里ちゃん、ありがとう！ お陰で閃いた！」

「ふえ!?!」

そして早速、俺はそれを実行に移して……。

数秒後、槍の雨が降り注ぎ真っ赤な血が辺りに飛び散った。

S I D E : 無し

「く、くくく！ 死んだ！ 死んだ！ ボクが仕留めた！」

ゲタゲタと高笑いするエンヴィー。その真っ黒な長いボサボサの髪が、潮風に揺れ

る。

左右で異なる目の大きさと色、鉤鼻に薄い唇。恐らくは世界中の人間に聞いても誰一人として『かつこいい』とは表現し得ない見た目だ。

灰色のタンクトップに同じ色のホットパンツ。ガリガリに痩せ細った四肢に、骨ばった腹は肋骨が浮き出ている。よくもまあ立てるものだと、4人は心の中で感心していた。

「あーあー、ツマンナイなー！　こんなに呆気無くやられちゃうなんて！　やつぱ人間ってのは弱っちいなあ！　後ろに誰も居なけりや避けられたかもなのにー！　アツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

「そうか、ならば面白くしてやろう」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ……、は？」

どこからともなく発された声。その途端、エンヴィーの背後の砂が爆ぜた。

「おおおおおおおおお、はあっ！」

「は、はあああああああああああああっ!？」

背後から飛び出したのは、右腕にドリルを装着した黎。黎は飛び出した勢いを殺さず、右手のドリルでエンヴィーの薄い腹を貫いた。

「『マインドリル・インパクト』！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

過たず貫通したドリルの回転に巻き込まれ、エンヴィーの肉体は上下に千切れて吹き飛んだ。

元々肉付きが本格的に無かったのだ、高速回転する金属を受け止められる訳が無かった。

「アホが、あの程度で死ぬとでも思ったか」

肩から出血しながら黎が努めて冷静に言う。

槍の雨は攻撃と同時に黎達の姿をエンヴィーから隠す弾幕にもなってしまうた。黎は有里の『誰かが盾になるべきでは無い』という発言から回避を思いつき、そしてその時点での絶対的な安全圏である地中へと3人と共に潜ったのだった。

地の力を取り込んで右腕を皮膚の下に仕込んである金属を基盤に変化させ、ドリル化。急いで穴を空け、その中に3人を纏めて放り込み、入口は金属板を生み出して塞いだ。盾の面積を広げれば防御力が落ちるのなら、狭い面積に皆を押し込めれば良い。もともと、その際に数本の槍が鉄板を貫通して肩を貫いたのだが。

「喜ぶんだったら、殺した事を確認してからの方が良いぜ？ 隙ができる上にぬか喜びになるからな」

服が血で染まるが、痛みを感じている様子は無い。肩を槍で貫かれた程度の痛みでは

彼を止める事はできないのだ。

エンヴィーが動かなくなったのを確認すると、黎は自分が出て来た穴に向けて声をかけた。

「もう出て来ても大丈夫だよ」

その一言を皮切りに、優、有栖、有里の3人が穴から出て来た。厳密に言うと、最初に優が外の様子を確認しながら出て来て、その後に残る二人を引っ張り上げた。

「うわ、派手にやったな……」

引き攣った顔で優が言う。上半身と下半身が千切れた死体など、普通はお目にかかれないだらう。

子供に見せるものじゃ無いと、有栖は有里の目を塞ぎ、自分もそのグロテスクな光景を見たくないのか目を瞑っている。

「まあな。だが、この程度、というかこれでは死なない」

「これで死なないのか……?」

「こいつらを物理的な手法で殺す事は不可能だ。奴らの展開する闇のゲームで勝たねえと」

と、黎は後ろから殺気を感じた。

「黎、後ろだ!」



「チッ！ 骨折も数秒たあ、都並みの再生能力だな！」

黎は小さく舌打ちするが、そもそも物理的に殺す必要は無い事を思い出す。

「どうだ、エンヴィー？ 格の違いつてモンが解ったか？」

「ザケンじゃ、ねえよおっ！ このボクがお前よりも格下な訳があるかあ！」

嘲る様に笑う黎に対し、エンヴィーは空っぽの根拠で吠える。

特殊な能力を持たない3人を守りながらも不敵に笑う黎に対し、攻撃が悉く決定打にならないエンヴィー。どちらが優位かは傍目からでも明らかだった。黎が上だ。

「で、どうする？ お前としてはここで俺を殺しておきたいんじゃないか？ 別にお前が構わないつつーなら、俺は他の邪神の護衛がいる次元に飛ぶ。優達はそれで元の世界に戻るだろうし」

ギジギジギジ、と不快な音が響く。エンヴィーが歯軋りしているのだ。

黎の駆け引きは正直、なかなか危ない橋だ。エンヴィーが自棄を起こすか姿を晦ましてしまえアウト。彼らは邪神復活まで逃げ切れれば良いのだから2度とデュエルはできないだろう。

「黎お兄さん……！」

「大丈夫だ、あいつを信じよう」

だからこそ黎はエンヴィーを挑発して冷静な判断力を奪っているのである。敢えて

『他の次元に飛べる』という事を示して『ここで仕留めなければ自分以外の他の護衛が相手をする事になる』という強迫観念を植え付ける。これでエンヴィーを戦いの方向へと誘導しているのだ。

果たして、この目論見は成功した。

「ンギギギッ！ だったらデュエルだあ！ 闇のゲームでミンチ肉にしてやる！」

「そう来なくっちゃ」

「ブジュワアッ！ とエンヴィーの右腕に闇が集まり、不気味な、或いは醜い見た目のデュエルディスクを生み出した。

「ふ、俺はついこの間プライドをたった一人で倒したんだぜ？ サシで戦おうなんざ、大した度胸だなと褒めてやるよ」

「プライドみたいなザコと一緒にしないで欲しいね！ アイツは七罪の中じゃ一番弱かったんだから！」

「そうかい。……とところで」

興味無さげな様子から一変して真面目な表情となり、黎は優、有栖、有里の方を向いた。

「どうする？ こいつが仕掛けて来るのは闇のゲーム。ハッキリ言って命の保障はしかねる。今なら逃げてても構わないが？」



そんな黎の忠告に最初に答えたのは優だった。

冗談はよせ、と口の端を上げて笑っている。

「こいつを倒し、邪神の復活止めねえと俺達の世界まで危ないんだろ？ だったら、ここでやる。戦わなかったが故に滅ぶ可能性が上がる今の安全、戦うが故に滅ぶ未来を回避出来るかも知れない今の危険。ならば俺は後者を選ぶ」

何より、と優は怒りの表情を浮かべてエンヴィーを睨みつけた。

「俺はまだまだやり残した事が腐る程ある。有栖と一緒にもつと沢山の時間を過ごしたいし、有里の成長を見守ってやりたい。そんな未来をぶち壊すような腐れ野郎を見逃せる程、俺はバカじゃねえんでな！」

そう言つてガシン、とディスクが展開する。

その横で有栖も同じデザインのもの、有里は近未来的なディスクを展開し、デツキをセツトした。

「僕も同じだよ。優ともつと沢山の幸せを感じたい。それに、友達を見捨てるなんてできない。僕は頭悪いから上手く言えないけど、こいつは今ここで倒しておかないとマズいって事ぐらいは解るよ」

「私だつてそうです。私もパパとママみたいな素敵な恋がしたいし、色んな人とデュエルがしたい！ だから皆の世界の未来を壊そうとする人は許せません！ ここでパパ

とママと一緒に倒します！」

フツ、と黎は少しだけ笑い、デツキをホルダーから引き抜いてセット。スイッチを入れるとディスプレイがレーンに沿って展開し、電源ランプが赤く、ライフカウンターが青く光った。

「だそうだ、エンヴィー。ここにいる奴は全員、お前の敵だそうだ」

「ガー！ 妬ましいね、その人が集まるセンスは！ ぶっ殺してあげるよ！」  
かくして、戦いの火蓋が切って落とされた。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 35 : VSエンヴィー 凶悪ロックを打ち破

れ! ★

SIDE : 黎

海岸に立つ5人の戦士。

1対4のデュエル。

海側から見て左側に立つのは、鉤鼻でボサボサの長髪。邪神の護衛で7つの大罪の内  
の1つ、嫉妬を司る敵、エンヴィー。

海側から見て右側に立つのは森側から順番に俺、優、有栖、有里ちゃん。

デッキは他愛も無い身の上話の中で出て来たが、今回は俺は『L・S』と『F・S』の  
混成デッキ。まるで違うタイプのカードが何故かしっくりシナジーする不思議なデッ  
キだ。

優は『シューティング・ブレイザー・ドラゴン』を出しやすいように改良した、彼曰  
く『流紅極炎星』というデッキらしい。恐らくあのデッキの主軸は『シューティング・  
スター』、『スカーレット・ノヴァ』、『極星』の三極神を主軸にしたデッキ。かなり高い

レベルの構成を要するが、恐らく彼ならできらるだろう。

有栖は『マシンナーズ・フォートレス』を主軸に三種の『ガジェット』でコストを補強する「マシンガジェット」。引き運が良い為、戦略に困る事は無いという。エクストラデツキは無いが、『フォートレス』や『一族の結束』、『リミッター解除』を利用して戦うので、大抵は何とかなるらしい。

有里ちゃんは『シンクロン』と『マシンナーズ』の合成版、通称「マシンナーズ・シンクロン」。『スカーレット・ノヴァ』をエース格においた展開力に富むデツキだ。父と母のデツキを上手く噛み合わせた、彼女の溢れる才能を現したデツキと言えるだろう。

ルールはイージー。ターンはエンヴィー ↓ 俺 ↓ 優 ↓ 有栖 ↓ 有里ちゃん ↓ エンヴィーの順で回す。ライフはこちらはそれぞれ4000で、エンヴィーがその合計値の16000となる。

一周して二回目のエンヴィーのターンまで攻撃できない。

そして何より奴の示した破格の条件。フィールド及び墓地は共有、非共有を本人の意思で好きなタイミングで切り替えられる。ただし、仲間のモンスターで攻撃は不可能。

「随分とナメてるんだな。例えばプライドがテメエより弱いとは言え、あの時は1対1、今は1対4だぞ？」

「ふ、ふふふふ。このくらいはハンディキャップだよ」

チツ、完全に見下してやがるな。

俺はエンヴィーを睨みつけながらも後ろ手でコツソリと細工する。

ポワ、と光る球体を生み出して、本人達にも気付かれないように、俺以外の味方3人にそれを投げた。これで大丈夫。

「さて、死ぬ準備はできたかあい？ ま、できてなくても殺すけどね！」

「ほざけ、テメエもプライドと同じように真つ黒な塵に変えてやるよ！」

「有栖と有里を守る為にも、お前には負けられない！」

「僕はもうあの日の事を繰り返したりしない。二度と優だけに辛い思いはさせない！」  
「帰るべき場所があつて、大切な家族がいる。私達の未来へのパズルは壊させない！」

『デュエル!』

エンヴィーVS黎&優&有栖&有里

LP 16000 VS LP 4000×4

開始と同時にブワア、と黒い霧が周囲を覆い尽くす。闇のゲームのスタートだ。  
「先攻はボクのターン！　ボクは『レス・ルーマー』を召喚！」

レス・ルーマー：ATK 2500

ギジギジギジ！　とまるで何かが捻じれるかのような音と共に、不気味な笑みの悪魔が降り立つ。真つ黒な顔の中、赤い髪とダークゴールドに輝く目が恐ろしさを醸し出している。

「1ターン目から攻撃力2500……！」

「更に永続魔法『ライトニング・タイル』を発動！」

続いて表側になったのはシヨートしているリノリウムの床の絵。何だ？

「このカードが表側表示で存在する限り、互いのプレイヤーは自分のエンドフェイズ時に自分の場に存在する『ライトニング・タイル』以外の魔法・罠カードを全て破壊しなくてはいけない！」

「な!？」

「そ、それじゃ罠が使えないよ！」

チ、ロック系のカードか……！

「更に永続魔法『キリギリスの復讐』を発動! このカードは、相手のターンの終了時に相手の空いている魔法・罨ゾーン1ヶ所につき、500ポイントのダメージを与える!」  
 「な!?!」

「毎ターンのエンドフェイズごとに、2500ポイントのダメージが入るって事だね……!」

「厄介な……! 速攻で片づけるかどっちか潰さないと2ターンで負けるぞ!」

ああ、だが俺の手札には『サイクロン』は無い。3人の内の誰かがそうする事を期待するか……。

「フッフ、悪いけど、ボクの場のカードを『サイクロン』みたいなカードで消す事はできないよ?」

「何!?!」

『レス・ルーマー』のモンスター効果! こいつが場に表側表示でいる限り、ボクの場の表側表示の魔法・罨は破壊されない! そして相手プレイヤーは魔法カードを手札から発動する事はできない!」

「何だとお!?!」

ち、『宮廷のしきたり』と『魔封じの芳香』を内蔵してるって事か。自分のカードすら破壊する『ライトニング・タイトル』と『キリギリスの復讐』を組み合わせたのはそれが

あつたからか。

衝撃を受けたが、優は手札を見て笑う。

「なら、そいつをどけちまえば良い。俺のターンに『ジャンク・デストロイヤー』を特殊召喚すれば問題無い」

「悪いけど、それもムリだよお！」

「……、どういう事だ」

『レス・ルーマー』が場に表側表示で存在する限り、君達が出せるモンスターの数は、ボクの場のモンスターの数――になる。つまり、『レス・ルーマー』以外のモンスターが存在しなければ、ボクは一方的に君達を殲り殺せるってワ・ケ！」

「ンだ?!」

「き、汚いよ、そんなカード！」

「データラメ具合が上がってやがるぜ……！」

「そんなの倒せないよお！」

「アツヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハアアハハハハハハアアハハハハハハアツ！」

無様に殴り殺されて死ぬ、人間！」

く、完全に封じられた！ 魔法も罠も、モンスターまで使えないなんて！



レス・ルーマー（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星3

闇属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 2000

（1）：このカードがフィールド上に存在する限り、相手プレイヤーは魔法カードをセットしなければならない発動できず、セットしたプレイヤーから見て次の自分のターンが来るまで発動する事はできない。

（2）：このカードが自分の場に表側表示で存在する限り、自分の場の表側表示の魔法・罠カードはカードの効果では破壊されない。

（3）：相手の場に存在できるモンスターの数は、このカードの元々のコントローラーのフィールドのモンスターの数より1体以上少なくしてはならない。

（4）：このカードは墓地から特殊召喚する事はできず、墓地から手札、デッキへ加える事もできない。

ライトニング・タイル（オリジナル）

【永続魔法】

お互いの場に存在する魔法・罠カードは、そのコントローラーのエンドフェイズごと

に全て破壊される。

キリギリスの復讐（オリジナル）

【永続魔法】

相手のターン終了時、相手の空いている魔法・罫ゾーン一ヶ所につき、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える。

『レス・ルーマー』の効果でボクのカードは『ライトニング・タイル』の効果では破壊されない！ ターンエンド！」

エンヴィー：LP 16000

手札：3枚

フィールド

：レス・ルーマー（ATK 2500）

：ライトニング・タイル（永続魔法）、キリギリスの復讐（永続魔法）

「俺のターン！」

「アヒヤヒヤヒヤッ! 諦めたらどうかかな、この状況で何ができるんだい? パーフエクトなロックの前には何もできないんだから、無駄に苦しむ必要は無いと思うけど?」  
エンヴィーがゲタゲタと不快な声で笑う。なまじ少年っぽい喋り方なのに見た目おっさんっぽいから余計に不愉快だ。

それに、ロックにパーフェクトなんて無い。必ずどこかに隙ができるものだ。崩せるかどうかはその人のデツキ次第だが……。

が、俺の手札には既にこの状況を打破できる術が揃った。

「悪いがその『パーフェクトなロック』、潰させてもらおう」

「お前、このロックを崩せるのか!?!」

「バカな! このロックのどこに死角があるんだ!」

優とエンヴィーが驚く。問題無い、要はあの悪魔もどきを潰せば良いんだろ? そうすれば今引いた『大嵐』で2枚の永続魔法を破壊できる。

「俺はお前の『レス・ルーマー』をリリース!」

「は?」

『ヴォルカニック・クイーン』を特殊召喚!

ゴウツ! と炎に悪魔もどきが包まれる。次の瞬間その炎は蛇のようにうねり、頭頂に炎の女性を持つ火炎の蛇が生まれた。

ヴォルカニック・クイーン（効果モンスター）

星6

炎属性／炎族

ATK 2500／DEF 1200

このカードを手札から出す場合、相手フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げて相手フィールド上に特殊召喚しなければならない。

1ターンに1度自分フィールド上に存在するこのカード以外のカードを1枚墓地に送る事で、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。

また、自分のエンドフェイズ毎にこのカード以外のモンスター1体を生け贄に捧げなければ、このカードのコントローラーは1000ポイントダメージを受ける。

このカードを特殊召喚する場合、このターン通常召喚できない。

ヴォルカニック・クイーン：DEF 1200

「なるほど、『ラヴァ・ゴーレム』の縮小版か」

優が感心の声を上げる。正解だ。



『レス・ルーマー』はコストとして墓地送りにされた。コストはチェーンブロックを作らないため、この一連の動きを阻害する事は不可能だ。

更に手札から魔法カード『大嵐』を発動。フィールド上に存在する全ての魔法・罨は吹き飛ばす！」

俺はどこまでも冷静に事を進める。ゴウゴウと吹き荒れる突風がエンヴィーの場のカードを巻き上げ、光の欠片へと砕いた。これで、鬱陶しいロックは完全に消えたな。

## 大嵐

### 【通常魔法】

フィールド上に存在する魔法・罨カードを全て破壊する。

『ヴォルカニック・クイーン』を特殊召喚したターン、俺は一切の通常召喚権を失う。カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード2枚

『ヴォルカニック・クイーン』や『ラヴァ・ゴーレム』のモンスターリリースは優秀だが、そのターン内は通常召喚できないというデメリットもある。これは「通常召喚権を使う」では無いので『二重召喚』や『血の代償』を使っても無意味だという事を覚えておこう。

「凄いよ、黎。たった1ターンであの絶望的なロックを完全に解除した……」

「ああ、俺もそう思う。あの壊れカード軍団を相手に、全く動じなかった」

「黎お兄さんスゴイ！ 有里、尊敬しちゃう！」

「ありがとう。連中の事だからな、ロックやバーンで攻めて来る事も考えて投入しておいたのさ」

俺は転生者だからな、元々の世界じゃロックを始めとしたバーンやハンドレスといったデッキを渡り合って来た身だ。寧ろビートが比較的下火であった元の世界<sup>あつち</sup>では、『マクロコスモス』等のメタカードを封入した「メタビート」が俺の最も得意とするデッキだった。

故に、連中がどういったタイプのカードを使うかを予測し、何のカードを入れれば有

効か、よく分かる。

「例えば相手がデタラメでインチキ効果なカードを使つたとしても、それは必ず『デュエルモンスターズ』という枠の内側で、ルールに沿って使われる。なら、そのルールを利用すれば対策を講じる事はそこまで難しくは無いって事だ」

「成程」

「勉強になつたよ」

納得した、といった表情の優に感心した顔の有栖。有里ちゃんはキラキラと目を輝かせている。

ま、今後の助けになれば何よりだ。

「待たせたな、エンヴィー。行くぞ、俺のターン！」

次のターン、確実に『ヴォルカニック・クイーン』を使つてエンヴィーは何か仕掛けて来るだろう。攻撃力は2500と高い。おまけに相手に効果ダメージを与える能力まである。

さて、俺にできたのはそこまで。残りはお前らの仕事だぜ？

「俺は『ボルト・ヘッジホッグ』を守備表示で召喚」

『チイツ！』



ボルト・ヘッジホッグ：DEF 800

「更にカードを2枚伏せて、魔法カード『調律』を発動。デッキから『ジャンク・シンクロン』を手札に加え、デッキトップのカードを墓地へ送る」

優のデッキトップが落ちる。横目で見たところ、落ちたカードは『グローアップ・バルブ』だ。

良いカードが落ちたな。あれは墓地にいつて初めて効果が使える。

調律

【通常魔法】

自分のデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。

その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

「ターンエンド」

優：LP 4000

手札：3枚（内1枚は『ジャンク・シンクロン』）  
 フィールド

：ボルト・ヘッジホッグ（DEF 800）  
 ：伏せカード2枚

「今度は僕の番だね。ドロロー！」

次は有栖のターンだな。ここまでは順調。下手な手を打つてくれるなよ……。

「僕は『レッド・ガジェット』を召喚！ 効果でデッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加えるよ」

レッド・ガジェット：DEF 1500

有栖の1番手は赤い歯車を模した機械族モンスター。色違いをデッキからサーチするカードだ。その能力から様々でデッキで手札コストとして扱われる。

「そつちが永續魔法を使うなら僕も永續魔法を使うよ！ 手札から『マシンナリーズ・フロストライン機甲部隊の最前線』を発動！ このカードは1ターンに1度、僕の機械族モンスターがバトルで破壊された時に同じ属性で攻撃力がそのモンスターより低い機械族モンスターをデッキから1体

特殊召喚できるんだ」

上手いな。『レッド・ガジェット』がやられれば『イエロー・ガジェット』をリクルートできる。『ガジェット』は通常召喚と特殊召喚に対応した能力だから更に『グリーン・ガジェット』をサーチできる。

あのデッキを使いこなせている証拠の一端だ。

「そしてカードを3枚伏せる。これでターンエンドだよ」

有栖：LP 4000

手札：2枚（内1枚は『イエロー・ガジェット』）  
フィールド

：レッド・ガジェット（DEF 1500）

：伏せカード3枚、機甲部隊の最前線（永続魔法）

「最後は私のターンです！ ドロー！」

有里ちゃんがあの年頃特有の元気で力強いドローを見せる。年下ながらも頼もしいな。

「魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動します！ 手札の『ボルト・ヘッジホッグ』

を墓地へ送り、『デッキからレベル1の『チューニング・サポーター』を特殊召喚！』  
『タツ！』

チューニング・サポーター：ATK 100

ワン・フォー・ワン

【通常魔法】

手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。

手札またはデッキからレベル1モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

チューニング・サポーター（効果モンスター）

星1

光属性／機械族

ATK 100／DEF 300

このカードをシンクロ召喚に使用する場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができる。

このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自

分はデツキからカードを1枚ドロ―する。

勢いよく飛び出たのは頭に中華鍋と思しき何かを被った小型の人型機械。英語版じゃ何でも鍋の名前を冠しているらしい。

「更にチューナーモンスター、『ジャンク・シンクロン』を召喚！  
『ハッ！』」

ジャンク・シンクロン：ATK 1300

「効果で墓地から『ボルト・ヘッジホッグ』を、効果を無効にして特殊召喚します！  
『ミイツ！』」

ボルト・ヘッジホッグ：DEF 800

眼鏡をかけたエンジニア戦士。その横に空いた穴から背中の針がボルトに変わったハリネズミが飛び出す。

「行きます！ レベル1の『チューニング・サポーター』とレベル2の『ボルト・ヘッジ

ホッグ』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

『ジャンク・シンクロン』が腹部のリコイルスターを引張って背中の中のバックパツクのエンジンを起動させる。3つの星に変わったエンジニアは幾何学的な3つの緑の円となり、その中を鍋もどきを被った機械とボルトを背負ったハリネズミが潜る。

「6の星が集う時、疾風が吹きすさび、鋼の盾を持つ守り人が目覚める！」

☆1＋☆2＋☆3＝☆6

「シンクロ召喚！ 皆を守って、『ジャンク・ガードナー』！」

『トアアツ！』

ジャンク・ガードナー：DEF 2600

ほう、オリジナル、というべきかね、あの前口上は。独創性があつて個人的には面白いと思う。

現れたのは両腕に大きな盾を装備した機械の巨兵。ジャンクの鉄壁とも呼べる特殊な能力を備えている上に、守備力だって生半可な物モンスターじゃ超えられない。

「墓地の『チューニング・サポーター』の効果が発動します。このカードがシンクロ素材になった場合、デッキからカードを1枚ドロウします。

リバースカードを2枚伏せて、ターンエンドです」

有里：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ジャンク・ガードナー（DEF 2600）

：伏せカード2枚

さて、一巡目は皆あまり大きくは動かなかったな。

だが、次のエンヴィーのターンから場は荒れる。腹あ括れよ、皆が思っているよりもこの場は厳しい戦いになるだろうからな……。

「ボクのターンだ！ ボクはカードを1枚伏せて、『ヴォルカニック・クイーン』の効果を発動！ 自分の場のカード1枚を墓地へ送り、相手に1000ポイントのダメージを与える！ 今伏せたカードをコストに、天空優に1000ダメージだ！ ヴォルケーノ・カノン！！」

「優！」

「パパ！」

「クツ！」

リバースカードが光となって消え、その光が『ヴォルカニック・クイーン』の口へと集まり、炎の砲弾を充填させる。

「させねえよ！ カウンター罠『ダメージ・ポラリライザー』を発動！ それを無効にし、互いに一枚カードをドロー！ 優、カードを！」

「ああ！」

ガキン！ と半透明のシールドが発生。巨大な火炎弾を弾き飛ばした。

ダメージ・ポラリライザー

【カウンター罠】

ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。

その発動と効果を無効にし、お互いのプレイヤーはカードを一枚ドローする。

そして悪いが、『ヴォルカニック・クイーン』はもう退場の時間だ。

「くっ！」



「更に伏せていた罨カード『強制脱出装置』オープン！ フィールドのモンスター体を  
持ち主の手札へ戻す！ 『ヴォルカニック・クイーン』は返してもらおうぞー！」

「ああっ!？」

仰々しい機械が炎の蛇を吸い込み、空高くへと打ち出した。つて、おい！ どこ行くんだ！

なんてツツコミも入れる暇も無く、カードは俺の手札に加わった。……………、どういう理屈だ？

### 強制脱出装置

【通常罨】

フィールド上に存在するモンスター1体を持ち主の手札に戻す。

「な、なら墓地に送った罨カード『ブラックコインケース』の効果を発動！ このカードをゲームから除外し、デッキからカードを2枚ドロロー！」

む、コストを利用してきたか。効果ダメージを与える効果は無駄撃ちさせてカードのロスを増やす狙いだったんだが、失敗したな。

ブラックコインケース（オリジナル）

【通常罫】

フィールド上に存在する永続罫を1枚デッキに戻して発動する。

デッキからカードを1枚ドロウする。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを2枚ドロウできる。

「更に『ラスト・デビル毒錆の悪魔』を特殊召喚！」

『ギギギギギギギギ……』

錆びついた音を立てながら鉄色の悪魔が、地の底から這い上がる。

さて、今度は何がやって来るかね。もう「召喚したら勝利」とか、そんなヤツが出て来ても驚かない自信があるぜ……。

毒錆の悪魔：ATK 1900

「このカードは、自分の場の攻撃力2000以上のモンスターが場を離れた時、手札から特殊召喚できるのサ。」

更に『毒鏑の悪魔』をリリースし、『猛毒の孤独神』をアドバンス召喚！ 闇属性モンスターをリリースして『猛毒の孤独神』がアドバンス召喚された時、カードを1枚ドロイだ！」

猛毒の孤独神：ATK 2500

今度はゴボゴボと全身から腐臭を放つ、真つ黒いローブ姿の男が現れた。おお、毒々しい。

『猛毒の孤独神』の効果発動！ 1ターンに1度、カードを1枚ドロイし、それがレベル4以下のモンスターなら、場に特殊召喚できる！」

む、戦力を増やす能力か。

ラスト・デビル  
毒鏑の悪魔（効果モンスター）（オリジナル）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 1900 / DEF 350

自分の場の攻撃力2000以上のモンスターが場を離れたターン、このカードは手札

から特殊召喚できる。

自分の場に闇属性モンスターが2体以上存在する時、この効果は使用できない。

ゴッド・オブ・ベノムアローン  
猛毒の孤独神（効果モンスター）（オリジナル）

星6

闇属性／悪魔族

ATK 2500 / DEF 1900

このカードが闇属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚された時、デッキからカードを1枚ドロローする。

1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドロローできる。

ドロローしたカードがレベル4以下のモンスターだった場合、自分の場に特殊召喚できる。

「ドロー！ 引いたカードはレベル3の『デビル・エッジ』！ 特殊召喚！」

デビル・エッジ：ATK 0

「更に『デビル・エッジ』の効果で、デツキからレベル3以下のモンスターを1体特殊召喚できる! ボクは『忍び寄るデビルマンタ』を特殊召喚!」

忍び寄るデビルマンタ：ATK 1300

デビル・エッジ（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

（1）：このカードが自分フィールド上に特殊召喚された時、自分のデツキから同名以外のレベル3以下のモンスターを1体特殊召喚できる。

忍び寄るデビルマンタ（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 1300 / DEF 1200

このカードが召喚に成功した時、罨カードを発動する事はできない。

刃で全身が覆われた悪魔に、真つ黒なマンタか……。ガラ空きから既に3体のモンスターを揃えた。何か来る……！

「チツ、もう3体も出しやがった」

「何か来るよ……」

「な、何でも来い……！」

「ボクはレベル3の『デビル・エッジ』と『デビルマンタ』をオーバーレイ！ 2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

『ギギィ〜！』

『ムア〜〜』

☆3+☆3=★3

刃の悪魔が紫色の、どす黒い水のマンタが黒の光に体を変える。

2つの光は螺旋を描いて飛び上がり、銀河系のように混ぜ合わさった。

「エクシーズ召喚！ 出でよ『No. 30』、滅びを司りし猛毒の巨人、『破滅のアシッド・

ゴレム』！」

『グオオオオオオオオオオオッ!』

ブシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウッ! と全身から紫の煙を上げながら、青い人型が地の底から這い上がる。あちこちから酸を垂れ流すその姿は、まるで文字通り破滅を運んで来たかのような視線でこちらを貫く。

No. 30 破滅のアシッド・ゴーレム : ATK 3000

「攻撃力3000!? そ、そんな……! ランク3で攻撃力が『青眼の白龍』と同じなんて……!」

「2体のダイレクトアタックを喰らったら、黎がやられちゃうよ!」

特殊能力こそ自滅モノだが、ランク3で攻撃力3000は高い。大抵のモンスターなら初期値で殴り倒せる。

「ハハハハッ! まずはお前だ! 遊馬崎黎! 『アシッド・ゴーレム』と『猛毒の孤独神』でダイレクトアタック! 死ねえ!」

「させません! 『ジャンク・ガードナー』の効果発動! 1ターンに1度、相手モンスター1体の表示形式を変更できる! 『アシッド・ゴーレム』には守備表示になります!」

『猛毒の孤独神』は俺がやる！ 『くず鉄のかかし』を発動！ 攻撃を無効にする！」  
殴りかかって来た青いゴーレムと黒いローブ男。

横から割り込んで来た盾を持った戦士が巨人の攻撃を弾き飛ばす。怯んだゴーレムは防御の体勢をとって追撃に備えた。

ジャンク・ガードナー（シンクロ・効果モンスター）

星6

地属性／戦士族

ATK 1400 / DEF 2600

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、表示形式を変更する事ができる。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた場合、フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、表示形式を変更する事ができる。

No. 30 破滅のアシッド・ゴーレム：ATK 3000 ↓ DEF 3000



続いてローブ男が骨張った大きな拳を振り下ろして来たが、金属製の案山子がそれを受け止めた。流される猛毒も、金属製の無生物ならば平気というワケか。

「クソツ！」

「簡単に通しはしない。黎は仲間だ」

「殺させない、絶対に！」

落ち着いた表情の優に、敵意を向ける有里ちゃん。

ありがとうな、二人とも。

「このおお……！ ボクはカードを3枚伏せて、ターンエンドだ！」

エンヴィー：LP 16000

手札：3枚

フィールド

：猛毒の孤独神（ATK 2500）、No. 30破滅のアシッド・ゴーレム（DEF 3000・ORU：2）  
 ：伏せカード3枚

「さて、と。ヤツのターンがまた回って来る前に、ちやちやつとやりますか。俺のターン！」

よし。これなら行ける。

『アシッド・ゴーレム』は自分のスタンバイフェイズごとにオーバーレイ・ユニットを消費しなくてはダメージを受けるという呪われたモンスター。が、それを逆利用して相手に送りつけてやればかなり強い。オーバーレイ・ユニットがゼロの状態なら攻撃もできないしな。

更にはダメージ効果と同時にコントローラーに特殊召喚を封じさせる効果もある。コストかりリリース素材にしないと自発的に場から離す事はできないというワケだ。

No. 30 破滅のアシッド・ゴーレム（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク 3

水属性／岩石族

ATK 3000 / DEF 3000

レベル 3 モンスター × 2

自分のスタンバイフェイズ時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除くか、自分は2000ポイントダメージを受ける。

このカードのエクシーズ素材が無い場合、このカードは攻撃できない。

このカードがフィールド上に存在する限り、自分はモンスターを特殊召喚できない。

「手札から『融合』を発動！ 手札の炎族モンスター『ヴォルカニック・クイーン』と機械族モンスター『ボルト・ヘッジホッグ』を融合！」

今更だが、『ボルト・ヘッジホッグ』の使用率が高いな。

「融合召喚！ 『起爆獣ヴァルカノン』！」

『ギイオオアアアアアアアアアアッ！』

起爆獣ヴァルカノン：ATK 2300

「そんなモンスターで何ができる！」

「そのセリフは敗者へのフラグだと知るが良い！ 『ヴァルカノン』は融合召喚に成功した時、このカードを墓地へ送って相手モンスターを1体破壊し、その攻撃力だけ相手にダメージを与える！ 失せろ、『アシッド・ゴレム』！ ビッグ・エクスプロード  
“！”

重装甲ながらも宙に浮く巨大な金属の獣。尾の導火線に火をつけて『アシッド・ゴ-

レム』に組みつくと、大爆発を巻き起こした。

起爆獣ヴァルカノン（融合・効果モンスター）

星6

地属性／機械族

ATK 2300 / DEF 1600

機械族モンスター＋炎族モンスター

このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター1体を  
選択して発動する事ができる。

選択した相手モンスターとこのカードを破壊して墓地へ送る。

その後、墓地へ送られた相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「ぐあああああああああああああああああああああつ！」

エンヴィー：LP 16000 ↓ 13000

よし、デカいダメージが通った! 次はこいつで行く!

「魔法カード『フュージョニック・カウント』を発動! 墓地の融合モンスター、素材となったモンスターを1体ずつゲームから除外し、2枚ドロして1枚をデッキに戻す!

更に『L・S ジャベリン・ビー』を召喚だ!」

L・S ジャベリン・ビー：ATK 600

「効果でダイレクトアタックを仕掛ける! 喰らえ、<sup>ポイズン</sup>ポイズン・スマッシュ!」

『キキッ!』

「グオツ!」

エンヴィー：LP 13000↓12400

「エンドフェイズ、『ジャベリン・ビー』は攻撃表示から守備表示になる」

フュージョニック・カウント(オリジナル)

【通常魔法】

自分の場の融合モンスターが墓地に送られたターンに発動できる。

その融合モンスターと素材となったモンスターの内、攻撃力の高いモンスター1体をゲームから除外し、カードを2枚ドロートし1枚をデッキに戻す。

L・S ジャベリン・ビー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

風属性／昆虫族

ATK 600 / DEF 2000

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

エンドフェイズにこのカードが攻撃表示で自分の場に存在する場合、このカードは守備表示になる。

この効果が発動した次のターン、このカードとの戦闘によって発生するダメージは半分になる。

L・S ジャベリン・ビー：ATK 600 ↓ DEF 2000

「ターンエンド」

黎 : LP 4000

手札 : 0枚

フィールド

: L・S ジャベリン・ビー (DEF 2000)

: 魔法・罠無し

ライフは削ったし、壁は残した。

さあ、繋げてくれ!

「今度は俺のターンだ、ドロ。俺は『レベル・ステイラー』を墓地へ送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚」

『ハッ!』

クイック・シンクロン : ATK 700

「レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル5の『クイック・シンクロン』をチューニング!」

小型のガンマンハットを被った青い機体が、手にした銃で回転する5枚のカード『ジャンク・シンクロン』・『ターボ・シンクロン』・『ドリル・シンクロン』・『ロード・シンクロン』・『ニトロ・シンクロン』の内、『ジャンク・シンクロン』のカードを撃ち抜く。

5つの星へとその姿は変わり、ボルトを背負ったハリネズミがその中を潜る。

「7つの星々が輝く時、次元を射抜く弓が射られる！」

☆2＋☆5＝☆7

「シンクロ召喚！ 蒼穹の彼方へと矢を放て、『ジャンク・アーチャー』！」  
『テヤツ！』

ジャンク・アーチャー：ATK 2300

オレンジの装甲、固めを隠す尖った兜を被った弓兵が、光の中から飛び出す。大きな弓には次元を貫く力が宿っている、優秀な除去モンスターだ。

「墓地の『レベル・ステイラー』を、『ジャンク・アーチャー』のレベルを1つ下げて  
特殊召喚」



レベル・ステイラー：DEF 0

ジャンク・アーチャー：☆7↓6

「更に『ジャンク・アーチャー』の効果発動。1ターンに1度、相手モンスター1体をエンドフェイズまでゲームから除外する！」  
 “デイメンジョン・シュート”!

「しまっ!?!」

臭気を噴き出す孤独な神に向けて、青白く輝く矢が放たれ次元の彼方へ吹き飛ばす。これで、ガラ空きだ。

「チャンスだよ、パパ!」

「行つけえええええ!」

「伏せカードが気になるが……、ここは臆さず攻める! 喰らえ、スクラップ・アロー!」

放たれた鋼の矢、通るか……!?

「うあっ!」

通った! あの伏せカードはブラフか!

エンヴィー：LP 12400↓10100

よし、ライフは後1万「リバースカード、オープン！」だ……!?

「罠カード『ヘドロパレード』！ このカードは2000ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時に発動できる。相手モンスターを全てゲームから除外し、自分の場の空いているモンスターゾーンに『ヘドロトークン』を可能な限り特殊召喚っ！」

ヘドロトークン：ATK 3000

ヘドロトークン：ATK 3000

ヘドロトークン：ATK 3000

ヘドロトークン：ATK 3000

ヘドロトークン：ATK 3000

『攻撃力3000（だと）!?!』

ベチャリ、とヘドロが上空から降り、人型をとる。醜い外見のワリにやあ随分な攻撃力と守備力だな。

同時にこちらの場のモンスターが一瞬で時空の渦に吞まれ、全滅。断末魔の悲鳴すら

無いとはまたエグい効果だ。

ヘドロパレード（オリジナル）

【通常罠】

2000ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時のみ発動できる。

相手の場のモンスターを全てゲームから除外し、自分の場の空いているモンスターゾーン全てに「ヘドロトークン」（アンデッド族・水・星4・攻／守 3000）を特殊召喚する。

この効果で除外したモンスターはエンドフェイズに相手の墓地へ送られる。

「くー！ 除外じゃあ『ジャンク・ガードナー』の効果が使えないよー！」

「攻守共に3000なんて……！」

「それが5体。海馬社長とデュエルした時とどっちがマシだか……」

「つたく、折角こつちのペースになったと思っただらコレか。飽きねえな、おい」

上から順に有里ちゃん、有栖、優、俺。社長とデュエルした事あるんだ、という感想はさけて置き。

これを片付けるのは至難の業だな。しかもヤツの場にはまだリバースカードが2枚

残っている。あれが『神の宣告』とか『魔宮の賄賂』ならまだ良い。問題なのはこちらの行動を妨害しつつ、何のデメリットも無いカードの可能性が高いという事だ。イヤ、それ以上にヤツにメリットを与えつつ、こちらにデメリットを与えるなんてカードだったら尚ヤバイ。

『大嵐』はさつき使っちゃったし、どうしたモンか……。

「く、俺は『巨大ネズミ』を守備表示で召喚。エンドフェイズ、フィールドが埋まっている為、『猛毒の孤独神』は帰還できない。ターンエンドだ……！」

「エンドフェイズ、除外された君達のモンスターは墓地へと送られる」

巨大ネズミ：DEF 1450

優：LP 4000

手札：2枚（内1枚は『ジャンク・シンクロン』）  
フィールド

：巨大ネズミ（DEF 1450）

：伏せカード2枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）

流石の優もこの状況は簡単には覆せない、か。

「僕のターン、ドロートッ！ 魔法カード『強欲な壺』を発動！ デツキからカードを2枚ドロートッ！」

さつきまでは自信に満ちつつもどこか余裕を持っていた有栖も、今は焦りが前面に出ている。落ち着け、それこそ奴の思う壺だ。

「僕は『マシンナーズ・ギアフレーム』を召喚！ 更にモンスター効果を発動！ デツキから『マシンナーズ・フォートレス』を手札に加える！」

マシンナーズ・ギアフレーム：ATK 1800

橙色の機械兵、『マシンナーズ』専用のサーチャーか。ユニオンモンスターでもあり、すぐさま次の展開に繋がられる。

マシンナーズ・ギアフレーム（ユニオンモンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1800 / DEF 0

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレイム」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。)

「行くよ、必殺コンボ！ 手札の『イエロー・ガジェット』と『マシンナーズ・フォートレス』を墓地へ送り、今墓地へと送った『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚！ 更に永続魔法発動！ 『一族の結末』！ 僕の墓地にいるのは機械族のみ！ よって僕の中の機械族モンスターは攻撃力が800ポイントアップする！ プラス、『ギアフレイム』を『フォートレス』に装備！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 2500 ↓ 3300

「攻撃力が『ヘドロトクン』を上回っただとお!？」

「行くよ! 『フォートレス』で『ヘドロトクン』を攻撃!」

上手いな、『ギアフレーム』に能力値のアップダウンは無いが、それでも破壊耐性はつく。それでいて攻撃力3300だ。あっちにとっては堪ったものではないだろう。

ギリギリギリ、と戦車タンクに搭載されている砲身が人型ヘドロに狙いを定める。ダゴオン! という轟音、そして薬莖の排出と同時に敵を吹き飛ばした。

エンヴィー : LP 10100 ↓ 9800

「この、アマガあ……!」

「ナイスだ有栖、残りライフが1万を切ったぞ」

「へへへ、ありがとう! ターンエンド!」

有栖 : LP 4000

手札 : 0枚

フィールド

：マシンナイズ・フォートレス（ATK 3300）

：マシンナイズ・ギアフレーム（ユニオン・『マシンナイズ・フォートレス』に装備）、  
機甲部隊の最前線（永続魔法）、一族の結束（永続魔法）

「さすがママ！」

「へへーん！」

「私も負けてられないよ、ドロー！」

有栖の明るさが、場の空気を変えた……。

さっきまで震えていた有里ちゃんが既にエンヴィーを恐れていない。たった1ターンの行動が、空気を変える。

人間ってのは、単純で複雑で、頼もしいな。

「行くよ！ リバースカード、オープン！」 『ロスト・スター・デイセント』！

このカードは、自分の墓地からシンクロモンスターを1体、レベルを1つ下げ、守備力を0にして守備表示で特殊召喚できる！ 『ジャンク・ガードナー』を守備表示で特殊召喚です！」

『トアツ！』

眩い光の柱が天空から差し込み、それを取り囲むように6つの星が踊る。その内の1



つが柱に吸い込まれると、盾を持った戦士に姿を変えた。

ジャンク・ガードナー：☆6↓5 / DEF 2600↓0

「ただし、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃表示に変更できず、効果は無効となります」

ロスト・スター・デイセント

【通常罫】

自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、レベルは1つ下がりに守備力は0になる。

また、表示形式を変更する事はできない。

「更にチューナーモンスター『フレア・リゾネーター』を召喚！」

『ヘエッ!』

炎を背負い、手に音叉を持つ悪魔が登場。ニヤツ、とした笑いが敵に対して不吉さを告げているように見える。

フレア・リゾネーター：ATK 300

「レベル5となった『ジャンク・ガードナー』に、レベル3の『フレア・リゾネーター』をチューニング！」

キュイン！ と手にした音叉を悪魔が叩くと、波状に音と炎の波が広がり3つの星へと変わった。3つの星は緑の輪に変わり、そこを盾を構えた戦士が潜り抜ける。

「8の星が集う時、全てを破壊する魔龍が放たれる！」

☆3+☆5=☆8

「シンクロ召喚！ 全てを薙ぎ払って、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」  
『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

レッド・デーモンズ・ドラゴン：ATK 3000

燃える炎のエフェクトが現れ、その中から紅蓮の炎を掌に灯す、悪魔の龍が飛び出す。ヤギのように曲がった三本の角、赤と黒で構成された身体、黄金色に輝く瞳と敵対するモノ全てを薙ぎ払う力の権化だ。

『グゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオウツ!』

「くっ!」

凄まじい咆哮に怯むエンヴィー。

「だが、攻撃力はトークンと同じ3000だ! 出来て相撃ち! ならば次のターン、残りのトークンで総攻撃をしかけるまで!」

「残念だけど、それは無理だよ」

何? とエンヴィーは訝しげに眼を細める。

有里ちゃんは背後の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を指差した。

レッド・デーモンズ・ドラゴン: ATK 3000 ↓ 3300

ゴウツ! と炎が滾り、閻魔の龍へと集束。全身を巡る炎の鎧と化した。

「攻撃力が上がっただお!」



炎の拳が一閃、泥の塊を蒸発も凝固もさせるヒマ無く焼き払い殴り飛ばした。「これでターンエンドです!」

有里 : LP 4000

手札 : 1枚

フィールド

: レッド・デーモンズ・ドラゴン (ATK 3300)

: 伏せカード1枚

よし、行ける! こっち側のライフは全く減ってないのに対し、ヤツのライフは直に半分! この勝負、勝てる!

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 36 : 神すらも超越



黎 : LP 4000

手札 : 0枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罨無し

優 : LP 4000

手札 : 2枚 (内1枚は『ジャンク・シンクロン』)

フィールド

: 巨大ネズミ (DEF 1450)

: 伏せカード2枚 (内1枚は『くず鉄のかかし』)

有栖 : LP 4000

手札 : 0枚

フィールド

：マシンナーズ・フォートレス (ATK 3300)

：マシンナーズ・ギアフレーム (ユニオン・『マシンナーズ・フォートレス』に装備)、  
機甲部隊の最前線 (永続魔法)、一族の結東 (永続魔法)

有栖：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：レッド・デーモンズ・ドラゴン (ATK 3300)

：伏せカード1枚

エンヴィー：LP 9500

手札：3枚

フィールド

：ヘドロトークン (ATK 3000) × 3

：伏せカード2枚

## SIDE：黎

敵ライフは既に10000アンダー、初期値から6000ポイント以上も削れている。途中で痛い出費もあつたが、概ね問題無いと言えるだろう。

さて、問題はここからだ。エンヴィーのターンが回つて来る。俺は手札にも場にもカードが無い。墓地にも防御系のカードが無い為、要するに丸裸だ。ここを狙われたら危険、というよりもアウトだろう。

3人が防御してくれる事を願うしか無いが……、いつまでも頼つてちゃいけないな。

「クソ人間どもがあ……！ ゴミクズのクセして生意気なんだよお！」

「悪いが、俺達はゴミでもクズでもねえ」

「そうそう、相手を隅々まで見下しているからそうやって足元掬われるんだよ」

「ギイツ！ ボクのターン！ ボクは『ヘドロトークン』2体をリリースし、『傾き悪魔の天秤』をアドバンス召喚！」

傾き悪魔の天秤：ATK 3000

「？ 攻撃力が同じモンスターを態々アドバンス召喚した？」



「どういう事なのかな?」

有栖と有里が首を傾げる。

恐らく、こいつには何かしらの効果が備わっているんだろうな。

天秤の皿は左右で大きさが違っており、大きい右の方に傾いている。腕（皿と皿を繋ぐ棒）の中央にはドス黒い悪魔が象っており、土台には蜘蛛のような足が付いている。

描写するとキモいな、こいつ。

「効果発動! このカードがアドバンス召喚に成功した時、手札を1枚切ればボクのライフを20000ポイント回復する!」

「ンだとお!」

「に、にまん……!」

きったねえ! クロウ風に言うんだったら『インチキ効果も大概にしやがれ』だ!

エンヴィー:LP 9500↓29500

「更に1ターンに1度、3つある効果の中から1つ、効果を使用できる! ボクは1つ目の効果、デッキからカードを2枚ドロウを選択!」

傾き悪魔の天秤（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星9

地属性／機械族

ATK 3000 / DEF 3000

（1）：このカードのアドバンス召喚に成功した時、手札を1枚捨てる事で、ライフを20000ポイント回復する。

（2）：このカードをバトルを行うモンスターの効果は無効となり、攻撃力が1000ポイントダウンする。

（3）：墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、相手の墓地に存在するカードを1枚ゲームから除外する事ができる。

（4）：1ターンに1度、以下の中から1つ効果を使用できる。

● デッキからカードを2枚ドローする。

● このカードをゲームから除外し、自分の場のこのカード以外のモンスターを1体リリースする。リリースしたモンスターの元々の攻撃力の2倍の数値分、相手にダメージを与える。

● 墓地のカードを2枚選択し、1枚を手札に加え、もう1枚をデッキに戻す。

「ドロー！ 更に速攻魔法発動、『グラティス・リソース』！ このカードは、デッキからカードをドローした時に発動可能。デッキからカードを4枚ドローできるのサ！」

「合計で6枚だなんて……！」

「ノーコストで『命削りの宝札』以上かよ……！」

グラティス・リソース（オリジナル）

### 【速攻魔法】

自分が通常ドロー以外でドローした時に発動できる。

デッキからカードを4枚ドローできる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、「グラティス・リソース」以外の除外された、または墓地に存在するカードを3枚選択してデッキに戻し、カードを2枚ドローできる。

この効果はこのカードが墓地に送られた次の自分のスタンバイフェイズまで使用する事はできない。

2枚の手札が……、あつと言う間に8枚になりやがった！

「アヒヤツヒヤハハハハ！ 手札から魔法カード『邪天使の施し』を発動！ お互いに

デッキからカードを3枚ドロし、相手だけ2枚捨てる！」

「な!? 相手だけって……!」

「そうだな、ボクはお前を効果の対象に選ぶほうか、天空優!」

「チツ、分かった……」

これで更に10枚……。手札補充が強みのデッキだろうと、ああはいかないぞ……。優は黙ってカードを3枚引き、2枚を捨てる。何の感慨も無く行うその姿に苛立ったのか、エンヴィーは舌打ちしながら手札のカードを引き抜いた。

「ボクは『ヘドロトークン』をリリースし、『パンデミックユニット』を発動! このカードは手札を1枚墓地へ送り、自分の場の閥属性モンスターをリリースして発動できる! 自分の場に『病原体トークン』を3体特殊召喚だあ!」

病原体トークン：ATK ?

病原体トークン：ATK ?

病原体トークン：ATK ?

「このトークンの攻守は、リリースしたモンスターの攻守プラス500となる! よつて……!」

病原体トークン	: ATK	? ↓ 3500	/ DEF	? ↓ 3500
病原体トークン	: ATK	? ↓ 3500	/ DEF	? ↓ 3500
病原体トークン	: ATK	? ↓ 3500	/ DEF	? ↓ 3500

『攻撃力3500が3体?!』

「そ、そんな……! 折角召喚した私の『レッド・デーモンズ』より上だなんて……!」

「い、いくら何でもメチャクチャ過ぎるよ!」

「どう戦えっつーんだ……」

「で、デタラメ過ぎる……!」

モワモワとした空中に浮く、ウジの足みたいな物が生えた汚れた緑の球体。見た目としては『ジャイアント・ウィルス』みたいだが、凶悪性はあれを遥かに上回りすぎ……。『更に、『病原体トークン』の攻撃力が3000ポイントを上回った時、相手の場のモンスターを1体破壊する! 死ぬ! 『レッド・デーモンズ・ドラゴン』!」

「きゃっ!」  
 「れ、『レッド・デーモンズ』が!」  
 くっ! 攻めの起点を崩された!

パンデミックユニット（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場の闇属性モンスターを1体リリースし、手札を1枚墓地へ送って発動する。

自分の場に「病原体トークン」（植物族・闇・星7・攻？／守？）を3体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたトークンの攻撃力と守備力はリリースした闇属性モンスターの元々の数値より500ポイント高い値になる。

この効果で特殊召喚したトークンの攻撃力が3000ポイントを超えた場合、相手モンスターを1体破壊する。

「さて、覚悟は良いかな？ 『病原体トークン』で『巨大ネズミ』を攻撃い！」

「『くず鉄のかかし』い！」

ガギン！ と鉄パイプやドライヤー、ヘルメットなど、雑多な物で構成された案山子が巨大ウィルスの触手を受け止める。

「なら2体目だあ！」

「2回目は私が！ 『ミラーフオース』を発動！」

有里ちゃんがオープンした罠は聖なる結果。相手の攻撃表示モンスターを全員潰す強力なカードだ。

一安心できると思ったが、エンヴィーはそれを鼻で笑いやがった。

「おおっと！ 罨カード『暗雲の接収』を発動！ 『ミラーフォース』の発動を無効にし、チビガキに1000ポイントのダメージだあ！ 更にこいつにはカウンター罨は使えない！」

「え、きやあああああああああつ！」

有里：LP 4000↓3000

虹色に輝く八角形のシールドがウイルス体の攻撃を阻むが、突如として出現した黒い雲がシールドを侵食して破壊。砕け散り、その破片が有里ちゃんに降り注いだ。

「有里（ちゃん）！」

「アツハハハハアツ！ バツカじゃないの！ 人間、それも無力なガキのクセに、ボク相手に張り合おうとするからそうなるんだよ！」

「テメエ！」

「他人の心配をしてるヒマは無いよお!? 2体目の『病原体トークン』の攻撃は通る！」

有里ちゃんが膝を折っている最中、巨大ウイルスが青いネズミを腐敗させる。後に残ったのはネズミの骨と、その手に握られていた人の頭骨だけだった。

「お、オオオオオオオッ！ 『巨大ネズミ』の効果で、デッキから2体目の『巨大ネズミ』を特殊召喚！」

巨大ネズミ：ATK 1400

「3体目の攻撃い！」

「ぐあああああああああああああああつ！」

優：LP 4000↓1900

「優！」 「パパ！」

「ま、まだだ……！ チェーンして、手札の『極星獣タングニョースト』を守備表示で特殊召喚！ 更に3体目の『巨大ネズミ』を特殊召喚！」

極星獣タングニョースト：DEF 1100

巨大ネズミ：ATK 1400





## 【永続罨】

このカードは発動後モンスターカード（岩石族・光・星4・攻10000／守1800）となり、自分のモンスターカードゾーンに特殊召喚する。

このカードがフィールド上にモンスター扱いとして存在する限り、このカード以外のモンスター扱いとした罨カードが相手によって破壊され自分の墓地へ送られる場合、墓地へ送らず魔法&罨カードゾーンにセットする事ができる。

このカードは罨カードとしても扱う。

## 「チツ！」

本来ならあれは罨モンスター2枚を同時発動し、発動↓破壊↓セット↓発動、というサイクルを繰り返すものだが……、仕方が無いな。

「カードを5枚伏せて、ターンエンド」

エンヴィー：LP 29500

手札：3枚

フィールド

：傾き悪魔の天秤（ATK 3000）、病原体トークン（ATK 3500）×3

：伏せカード5枚

「優、有里、大丈夫……?」

「俺は平気だ。何か、全然痛くねえ。有里は?」

「私も大丈夫だよ。服も切れてないし」

心配そうに二人を見る有栖。しかし、優も有里ちゃんもピンピンしている。文字通り怪我一つ負っていない。

「バカな……、何故!」

「それはな……、こういうことだ!」

エンヴィーの理解できない、という風な表情を心の中で楽しみながら、俺は隣にいた優に向けて火の粉を放った。

「うわ、ちよ、おま……、え? 熱くない?」

キラキラと輝くスノウホワイトのオーラが、優の体を覆っていた。そのオーラが火の粉を跳ね返し、寄せ付けない。

「プロテクター。俺のデュエルエナジーと精霊のエネルギーを混ぜて作ったバリアだ。ぶち壊したいなら隕石かミサイルでも持って来い」

ま、衝撃は殺しきれねえけどな。と肩を竦めてみせれば、エンヴィーはギリギリと歯

軋りしている。

「この、クソ人間が……!」

「そのクソ人間に翻弄されてるのはどこの邪神の護衛だ？　この分だと、お前らが守っている邪神も、大した事なさそうだな」

「ああ!?!　何だ?!?　今何だった!」

「俺のターン、ドロロー!」

「聞けや!」

無視!

【BGM：ジャックバトル】

「俺は手札の『L・S　実りのナッツ・キャッチャー』の効果を発動!　相手の場にのみモンスターが存在する時、このカードを手札から墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロローできる!　更に今引いた『強欲な壺』を発動!　デッキから2枚ドロロー!」

L・S　実りのナッツ・キャッチャー（効果モンスター）（オリジナル）

星1

地属性／植物族

ATK 1000 / DEF 1000

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札からこのカードを墓地へ送る事で、デッキからカードを2枚ドロウできる。

これで手札は3枚、行くぜ！

「俺は『チューニング・サポーター』を召喚！」

『タツ！』

チューニング・サポーター：ATK 1000

「魔法カード『機械複製術』を発動！ このカードは、自分の場の攻撃力500以下の機械族モンスター1体を選択し、同名モンスターを可能な限りデッキから特殊召喚する！  
更に2体の『チューニング・サポーター』を特殊召喚だ！」

チューニング・サポーター：ATK 1000

チューニング・サポーター：ATK 1000

まだまだ！

「このカードは、レベル2以下のモンスターの特殊召喚に成功したターンに手札から特殊召喚できる！ カモン、『F・S 溶接スパーカー』！」

『トアッ！』

F・S 溶接スパーカー（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星1

炎属性／機械族

ATK 500 / DEF 500

自分の場にレベル2以下のモンスターが特殊召喚されたターン、手札のこのカードは特殊召喚できる。

F・S 溶接スパーカー：DEF 500

『チューニング・サポーター』の効果で、2体の『チューニング・サポーター』のレベルを2として扱う。行くぞ、レベル1の『チューニング・サポーター』1体と、レベル

2として扱う『チューニング・サポーター』2体に、レベル2の『F・S 溶接スパーカー』をチューニング!

燃え盛る焰、水面を斬り裂く剣とならん! 希望が溢れる明日となれ!

☆1+☆2+☆2+☆2||☆7

「シンクロ召喚! 灰燼に帰せ、『F・S バーニング・ブレードガイ』!」  
『どおりいやあああつ!』

F・S バーニング・ブレードガイ: ATK 2800

光の中から飛び出した、青い鎧の騎士。鋭く長い剣を両手で正眼に構えている。

上級シンクロモンスターを相手に、エンヴィーはニダア、と笑う。

考えている事はおおよそ分かるからこそ言つてやる。ムダだぜ?

「悪いけど、さっさと消えてもらおうよ! 罨カード『灼熱の落とし穴』を発動! 攻撃力500以上の相手モンスターが場に現れた時、それを破壊してゲームから除外し、相手にその攻撃力分のダメージを与える!」

「ご生憎！ 『バーニング・ブレードガイ』はテメエの魔法も罨も効かねえのさ！」  
 「んだとお!？」

「これが、黎のシンクロモンスターか……」

F・S バーニング・ブレードガイ（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星7

炎属性／戦士族

ATK 2800／DEF 1700

「F・S」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは相手の魔法・罨カードの効果を受けない。

灼熱の落とし穴（オリジナル）

【通常罨】

相手の場に攻撃力500以上のモンスターが召喚・特殊召喚・反転召喚された時に発動できる。

そのモンスターを破壊してゲームから除外し、相手にその元々の攻撃力分のダメージを与える。



「更に『チューニング・サポーター』の効果発動！ このカードがシンクロ素材となった時、デッキからカードを1枚ドロワーできる！ 今回素材となった数は3体！ よってカードを3枚ドロワー！」

相手はカードを発動させる様子は無い。オーケー、効果やドロワーに反応するカードを伏せている訳では無いようだ。

引いたカードは……、お！

「手札より魔法カード『シンクロキャンセル』を発動！ 『バーニング・ブレードガイ』のシンクロを解除し、その素材となったモンスターを場に特殊召喚できる！ 来い！

『溶接スパーカー』！ 『チューニング・サポーター』達！」

『ゼヤツ！』

『ヤツ！』

『ハツ！』

『タツ！』

F・S 溶接スパーカー：ATK 500

チューニング・サポーター：ATK 100

チューニング・サポーター：ATK 100

チューニング・サポーター：ATK 100

「そして再びチューニング！ 『バーニング・ブレードガイ』をシンクロ召喚！ 効果で3枚ドロード！」

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 2800

「だが！ 攻撃力2800で何ができる！ こっちの攻撃力は3000と3500だ！」

「ならば底上げするまでだ！ フィールド魔法発動！ 『スピリッツ・ワールド』！」

キュウイイン、と六芒星の魔法陣が生まれ、フィールド中に蛍火のような光が漂い始める。この光は魔法陣から無尽蔵に生み出され、上空へと消えてはまた地面から新しいのがポワポワと漂い出す。

「うわあ……！」

「あつたかい……！」

「これで『バーニング・ブレードガイ』は相手より攻撃力が低ければ攻撃力が1000上

がる！ バトル！ 『病原体トークン』を攻撃！  
 「ぐあちやあつー！」  
 〃フレイム・スラッシュャー！」

地面から湧き出ていた淡い光が『バーニング・ブレードガイ』に纏わりつき、赤く変色して光の鎧となった。

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 2800↓3800

光の鎧は身体能力を強化し、剣を構えて走る騎士を補助。巨大なウイルスが触手を伸ばして捕えるよりも速くにその球状の敵を真つ二つに斬り裂いた。

エンヴィー：LP 29500↓29200

「よし、1体破壊した！」

「やった！」

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

F・S バーニング・ブレードガイ：ATK 3800↓2800

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：F・S バーニング・ブレードガイ（ATK 2800）

：伏せカード2枚、スピリッツ・ワールド（フィールド魔法）

「俺もボヤボヤしてられないな、俺のターン！」

優が力強くドローする。良いぞ、仄かな温かい光と強大なトークンの破壊が、こちら側に風を吹かせている！

「俺は『極星獣タングニョースト』を守備表示から攻撃表示に変更。この瞬間に『タングニョースト』の効果を発動、こいつが守備表示から攻撃表示になった時、デッキから『タングニョースト』以外の『極星獣』と名のついたモンスターを1体特殊召喚できる。俺はデッキからチューナーモンスター『極星獣グルファクシ』を特殊召喚！」

『ンメエエエエエエエエエエエエエエエエツ！』

『ヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイヒイッ！』

極星獣タングニョースト：DEF 1100 ↓ ATK 800

極星獣グルファクシ：DEF 1000

険しい瞳の山羊が高らかに吠えようと、どこからともなく蹄の音が響き始めた。すぐ  
 優の後ろから勢いよく黒い毛並みの馬が飛び出し、『タングニョースト』の横に並んだ。

極星獣タングニョースト（効果モンスター）

星3

地属性／獣族

ATK 800 / DEF 1100

自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、  
 このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、フィールド上に守備表示で存在するこのカードが表側攻撃表示に  
 なった時、自分のデッキから「極星獣タングニョースト」以外の「極星獣」と名のついで  
 たモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

極星獣グルファクシ（チューナー・効果モンスター）

星4

光属性／獣族

ATK 1600／DEF 1000

相手フィールド上にシンクロモンスターが表側表示で存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「魔法カード『下降潮流』を発動！ その効果で『巨大ネズミ』のレベルを4から3に変更！」

下降潮流

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、1から3までの任意のレベルを宣言して発動できる。

選択したモンスターのレベルは宣言したレベルとなる。

巨大ネズミ：☆4↓3

「レベル3の『極星獣タングニョースト』とレベル3の『巨大ネズミ』に、レベル4の『極星獣グルファクシ』をチューニング！」

黒い毛並みの馬が空高く跳び上がり、4つのリングへと姿を変える。その中を勇ましい雄叫びをあげながら山羊とネズミが潜り抜けた。

「10の星々が輝く時、この世と星界を繋ぐ扉が開かれる。古の武神よ、大いなる魔槌を携え、轟く轟雷と共にその姿を世に知らしめせ！」

☆3 + ☆3 + ☆4 = ☆10

「シンクロ召喚！ 出でよ、星界の三極神の1体『極神皇トール』！」  
『ハアアアアアアアアアアツ、ハアツ！』

極神皇トール：ATK 3500

極神皇トール（シンクロ・効果モンスター）

星10

地属性／獣戦士族

ATK 3500 / DEF 2800

「極星獣」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンの1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効化できる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する「極星獣」と名のついたチューナー1体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功した時、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

「出た！ 『極神皇トール』！」

「極星の三極神か……！」

身の丈もある大槌、”トールハンマー”を携えた巨人。その全長は見上げて止まない程の大きさを誇り、威風堂々とした姿は敵を威圧し、全てを制する戦神のもの。

「更に俺は『極星霊ドヴェルグ』を通常召喚！」

『ホヒー！』

DEF 1000



「呼びかけに応じてオレンジ色の霊がドロン！」と現れる。青い気弱そうな瞳に蓄えたヒゲが特徴的だ。

「『ドヴェルグ』は召喚に成功した時、もう1体“極星”と名のついたモンスターを召喚できる。その効果で『極星霊リョースアールヴ』を召喚！」

『へヒー！』

極星霊リョースアールヴ：ATK 1400

「そして『リョースアールヴ』の効果発動。このカードが召喚に成功した時、自分の場のモンスター1体を選択。そのモンスターのレベル以下の“極星”と名のついたモンスターを手札から特殊召喚できる。

俺は『トール』を指定。よってレベル10以下の極星モンスターを特殊召喚できる。出でよ『極星霊デッキアールヴ！』

『フヒー！』

極星霊デッキアールヴ：ATK 1400

極星霊ドヴェルグ（効果モンスター）

星1

地属性／戦士族

ATK 1000 / DEF 1000

このカードが召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて1度だけ「極星」と名のついたモンスター1体を召喚することができる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、自分の墓地から「極星宝」と名のついたカードを1枚選択して手札に加える。

極星霊リョースアールヴ（効果モンスター）

星4

光属性／魔法使い族

ATK 1400 / DEF 1200

このカードが召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動することができる。

選択したモンスターのレベル以下の「極星」と名のついたモンスター1体を手札から

特殊召喚する。

極星霊デッキアールヴ（チューナー・効果モンスター）

星5

闇属性／魔法使い族

ATK 1400 / DEF 1600

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「極星」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える事ができる。

「レベル1の『極星霊ドヴェルグ』とレベル4の『極星霊リョースアールヴ』に、レベル5の『極星霊デッキアールヴ』をチューニング！」

笑いや哀愁を漂わせる3体の霊体が空へと浮き上がる。色の霊は5つの星から緑の幾何学的なリングへと姿を変え、残る2体はその中心を潜った。

「10の星々が輝く時、星界より気まぐれなる神が舞い降りる。その知恵と共に全てを射抜け！」

☆1+☆4+☆5=☆10

「シンクロ召喚！ 出でよ、星界の三極神の1体『極神皇ロキ』！」  
『へへえ〜っ！』

極神皇ロキ：ATK 3300

極神皇ロキ（シンクロ・効果モンスター）

星10

闇属性／魔法使い族

ATK 3300／DEF 3000

「極星霊」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、自分のバトルフェイズ中に相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊する事ができる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する「極星霊」と名のついたチューナー1体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する罨カード1枚を選択して手札に加える事ができる。

不気味に笑う口元、不自然に細い腰。奇術師のような帽子に紫の肌と、神話で悪の権化とされた神が降り立つ。真っ赤な目が相手を見下す視線を放っている。

「1ターンの2体も、大型のシンクロモンスターをシンクロ召喚とはな……」

「やっぱりパパは凄いよ!」

「ありがとな。『ドヴェルグ』の効果で、デッキから「極星宝」と名のついたカードを1枚手札に加える」

優のボード・アドバンテージは今、確立された。2体とも大型モンスター。しかもやや限定的だがモンスター効果と魔法・罨を打ち消す効果も備えている。

「だが! それでもボクの場のアドバンテージは崩れない!」

「くっ!」

確かに。だが!

「優、突っ込め! 『トール』と『ロキ』で『病原体トークン』を攻撃しろ!」

「!? ……、分かった。お前を信じる」

一瞬、驚愕の顔をした優だったが、すぐに笑って攻撃指令を飛ばした。

「バトル！ 『極神皇トール』で『病原体トークン』を攻撃！ 『サンダーパイル』！」  
 「バカめ！ 罠カード『犯バッド・カウンター撃』を発動！ 攻撃して来たモンスターを破壊し、相手にそのモンスターの攻撃力の倍のダメージを与える！」  
 「そうは行くか！ 『ロキ』は1ターンに1度、こっちから攻撃する時に相手の魔法・罠の発動を無効化し破壊できる！」

バッド・カウンター  
 犯撃

（オリジナル）

【通常罠】

相手モンスターが攻撃してきた時に発動できる。

攻撃を無効にして攻撃を行うモンスターを破壊し、相手にそのモンスターの攻撃力の倍のダメージを与える。

振り下ろされた雷を纏った大槌が、不気味な顔の描かれた鉄板に受け止められるが、横合いから影の手が伸ばされて握り潰される。そのまま神の鉄槌は巨大ウィルスを粉々に打ち砕いた。

「バカな！ 攻撃力は互角のハズなのに！」

「悪いな、攻撃にチェーンして速攻魔法『インスタント・スピリッツエナジー』を発動し

た。このターンのみ攻撃力が互角でも自陣のモンスターは破壊されず、更に『S』と名のつかないモンスターも『S』と名のつくモンスターとして扱う事ができる！」  
もつとも、500ライフを払わなくちゃいけないけどな。そう言っただけ俺は肩を竦めた。

インスタント・スピリッツエナジー（オリジナル）

【速攻魔法】

ライフを500払って発動する。

発動したターンのみ自分の場のモンスターは攻撃力が同じモンスターとの戦闘では破壊されず、「S」と名のつかないモンスターを「S」と名のついたモンスターをして扱う事ができる。

黎：LP 4000↓3500

「ぐ、おのれ……！」

「成程、これで気兼ね無く残ったトークンを破壊できるワケだ。『ロキ』で最後の『病原体トークン』を攻撃！ ヴァニティ・バレット！」

極神皇ロキ：ATK 3300↓4300

地面の魔法陣から湧き出て来た光が、『ロキ』の体を覆って黒く発光する鎧を生み出す。

「バカめ、『ロキ』の効果はもう使えない！ 罠カード発動、『ダーク・クリーニング』！  
相手が自分の場の闇属性モンスターを攻撃して来た時、そのモンスタアの攻撃力を0にする！」

「そうはさせねえ！ カウンター罠『沈静の精霊術』を発動！ 『S』と名のついたモンスタアが攻撃を行う時、相手が発動した魔法・罠カードの効果を無効にし、破壊！ 更にデッキから互いにカードを1枚ドロード！」

闇色の霧が生まれる。霧は『ロキ』を呑み込もうとするも、突如として響き渡った無音の音楽に掻き消された。

奇術師の姿の悪神が右手の人差指と中指を伸ばしそれ以外を折る、即ち指鉄砲の形を取る。指先にスパークリングする黒いエネルギーを集めて放つと、巨大ウィルスはド真ん中を撃ち抜かれて爆発した。

このターンのみ『ロキ』と『トール』は『S』と名のついたモンスタアとして扱うの



で、この効果は有効だ。

「ぎゃあああっ！」

エンヴィー：LP 29200↓28400

ダーク・クリーニング（オリジナル）

【通常罠】

相手が自分の場の闇属性モンスターを攻撃して来た時に発動できる。  
相手モンスターの攻撃力は0となる。

沈黙の精霊術（オリジナル）

【カウンター罠】

自分の場の「S」と名のついたモンスターが攻撃を行う時に相手が発動した魔法・罠を無効にし、破壊する。

その後、お互いにカードを1枚ドロウする。

「助かった、ありがとう」

「何、お互い様さ」

「ふ。カードを1枚セット」

極神皇ロキ：ATK 4300↓3300

「ターン終了だ」

優：LP 1900

手札：1枚

フィールド

：極神皇トール（ATK 3500）、極神皇ロキ（ATK 3300）

：伏せカード2枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）

「良いぞ、優。押している！」

「ああ。このまま押し込めば、ライフ2万を削り切る事も可能だ！」

「有里、優に続くよ！」

「はい！」

「僕のターン、ドロロー！」

奴の場に残るモンスターは1体のみ。このまま押せば有里ちゃんのダイレクトアタックが決まる！

「僕は速攻魔法『リミッター解除』を発動！ このターンだけボクの機械族モンスターは攻撃力が倍になる！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 3300↓6600

「バトル！ 『マシンナーズ・フォートレス』で『傾き悪魔の天秤』を攻撃！」

「おっと、それを通したら危険だね！ 永続罠『有刺鉄線拘束術』を発動しておこう！ 対象モンスターは戦闘破壊されない代わりに攻守が5000ポイントダウンだ！」

「させるか！ 『極星宝グングニル』を発動！ 俺の場の『極神皇ツール』をゲームから除外し、『有刺鉄線拘束術』を破壊する！」

オープンした罠カードから発せられた無数の有刺鉄線がタンク戦車を絡め捕るが、横から『ツール』が変化した破魔の槍がワイヤーを切断。無事に射出された砲弾が天秤を破壊した。

有刺鉄線拘束術（オリジナル）

【永続罨】

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは攻撃する事ができず、効果は無効化され、攻撃力は5000ポイントダウンする。

選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

極星宝グングニル

【通常罨】

自分フィールド上に表側表示で存在する「極神」または「極星」と名のついたモンスター1体をゲームから除外し、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。

選択したカードを破壊する。

発動後2回目の自分のエンドフェイズ時に、この効果を発動するためにゲームから除外したモンスターを表側攻撃表示でフィールド上に戻す。

「だ、だが『傾き悪魔の天秤』と戦闘を行うモンスターは攻撃力が1000ポイントダウン

ンするー！」

「それでも十分破壊できるー！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 6600↓5600

「うぎやあつー！」

エンヴィー：LP 28400↓25800

「エンドフェイズに『リミッター解除』の影響を受けた機械族モンスターは破壊されるけど、装備された『マシンナーズ・ギアフレーム』を破壊して『フォートレス』の破壊を防ぐよ。ターンエンド！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 5600↓3300

有栖：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：マシンナーズ・フォートレス（ATK 3300）

：機甲部隊の最前線（永続魔法）、一族の結末（永続魔法）

「ぐ、ぎい！ クソアマがあー！」

「さ、道は開けたよ。後はお願い！」

「うん！ 私のターン！」

有里ちゃんが力強くドロローする。閉じた瞳は、全てのカードの中から解決策を探す為に時々デュエリストがやる高速演算の姿勢だろう。

「私は『マシンナーズ・ギアフレーム』を召喚！」

マシンナーズ・ギアフレーム：ATK 1800

「その効果で、デッキから『マシンナーズ・フォートレス』を手札に加える！ そして手札の『フォートレス』と『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地へ送り、『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚です！ 更にママの『一族の結末』を適用して攻撃力アップ！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 2500↓3300

成程な。エンヴィーの出した場の共有・非共有の切り替え時に、墓地も含めるとは言っただけだった。どちらも好きなタイミングで可能な為、有里ちゃんの墓地は影響しない、という訳か。

「行け！ 2体のモンスターでダイレクトアタック！」

「そうはさせないよ！ 罠カード『ダーク・バリア』を発動！ このターンに受けるダメージは相手が受ける！」

「悪いが『ロキ』の効果で無効にさせてもらう！」

ダーク・バリア（オリジナル）

【通常罠】

このターン発生するプレイヤーへのダメージは全て相手が受ける。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事でデッキからカードを1枚ドローできる。

暗黒の渦が砲撃を受け止め、撥ね返そうとしているところで奇術師が横入りする。ど

ここから取り出した玩具のハンマーで渦のバリアを砕くと、有里ちゃんの攻撃が通った。

「ウゲバギイ！」

エンヴィー：LP 25800↓21200

「『ギアフレーム』を『フォートレス』に装備させて、ターンを終了します」

有里：LP 3000

手札：0枚

フィールド

：マシンナイズ・フォートレス（ATK 3300）

：マシンナイズ・ギアフレーム（ユニオン・『マシンナイズ・フォートレス』に装備）

「オツケー！ 良いぞ皆！ このまま行けば勝てるぞ！」

「当然だな。俺と有栖と有里がいるんだ、負ける筈が無い」

「えへへ、僕も優と有里がいるから頑張れるよ」



「パパとママが有里を守ってくれるから、有里も勝てる気がするよ！」

和気藹々、勇氣凜々と結束が強まっていく。目の前で俺達を憎々しげに睨みつけるエンヴィーの気迫だつて怖くもなんとも無い。

「オ、ノレ、クソニンゲンガアア！」

！

「ニクイネエ……、コロシタクナルネエ……、オマエラミタイナメグマレタヤツラガ、ボクハダイキライダー！」

プライドと同じように様子が変わった！ 来る！

【BGM終了】

「ボクのターン！ ボクは伏せていた魔法カード『死者蘇生』で『傾き悪魔の天秤』を復活！ 効果でカードを2枚ドロ！ 更に墓地の『ダーク・バリア』を除外し、カードを1枚ドロだ！」

う、除外してドロってのはよくよく考えると狡いな。ほぼノーコストじゃねえか。

傾き悪魔の天秤：ATK 3000

「手札から魔法カード『アドバンスドロー』を発動！ 自分の場のレベル8以上のモンスター1体を墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロー！ 墓地へ送るのは『傾き悪魔の天秤』！」

速い、なんていう高速の手札補充だ……。あつという間に5枚のカードを補充した……。

ニイ、とエンヴィーが笑う。何か引き当てたか……！

「ボクはフィールド魔法『飢餓枯渴国家』を発動！」

温かい光が消え失せ、フィールドの様子が変わる。

石造りの家々が立ち並ぶ、中世の国家の街道へと姿を変える。だが、その様子は華やかなものではない。

あちこちにガリガリに痩せ細った人が倒れたり壁にもたれ掛ったりしており、生えている木々も茶色く、細く枯れている。文字通り、何もかもを敗戦で失った、飢えに苦しむ国だった。

（『集中豪雨地帯』と同じタイプか……？）

「これは……！」

「っ！」



上から順番に有栖、有里ちゃん、俺、優。攻撃力3500は、正直な話キツイ。

「更に手札から魔法カード『黒次元』を発動！ ゲームから除外されているカードを3枚選択してデッキに戻し、カードを1枚ドロー！ ボクは『極神皇トール』、『ブラックコインケース』、『ダーク・バリア』を選択！」

「しまった!?!」

黒次元（オリジナル）（改訂版）

【通常魔法】

（1）：ゲームから除外されているカードを3枚持ち主のデッキに戻す。

デッキからカードを1枚ドローする。

この効果は無効にならない。

マズイ。『グングニル』で『トール』が帰還する条件は、2ターン後のコントローラーのエンドフェイズまで除外されている事だ。エクストラデッキに戻されたら帰還できない！

「そして『サイクロン』を発動！ 『くず鉄のかかし』を破壊！」

「くっっ！」

「バトルだあ！ 『バーサーク・デッド・ドラゴン』は相手の場の全てのモンスターを攻撃できる！ 『バーニング・ブレードガイ』、『極神皇ロキ』、『マシナーズ・フォートレス』2体を攻撃い！ 『バーサーク・デスブレイズ』！」

グオウ！ と黒い火炎弾が放たれ、青い鎧の騎士と奇術師が焼き払われる。

「ぐあああつ！」

「くつううつ！」

黎：LP 3500↓2800

優：LP 1900↓1700

熱い。思わず膝をつく。全身から炎に焼かれて黒い煙が立ち込める。

「れ、黎!? お前まさか、自分にはプロテクターを……!」

「ああ、生憎と、3つ作るの、精一杯だったんで、ね……!」

俺は万能では無い。エネルギーだって底があるのだ。

膝をついた俺を蔑むような視線で見ながら、エンヴィーが攻撃を続行する。

「ふふふ！ 更に攻撃だあ！」

「きやああああああああつ！」

「有栖！」 「ママ！」

有栖：LP 4000↓3800

「ま、『マシンナーズ・フォートレス』の効果発動！ 戦闘によって破壊された時、相手の場のカードを1枚破壊できる！ 『バーサーク・デッド・ドラゴン』を破壊する！」  
 「おっと！ 手札から速攻魔法『違法ログアウト』を発動！ このターンのみ、場と墓地のモンスターは効果は無効だ！」

「な!?!」

違法ログアウト（オリジナル）（改訂版）

【速攻魔法】

（1）：発動ターンのエンドフェイズまで、相手のフィールドと墓地に存在するモンスターの効果は無効となる。

この効果は装備カード扱いとなっているユニオンモンスターにも適応される（装備カードの状態は継続される）。

この効果は特殊召喚された攻撃力1500以下のモンスターには適応されない。

(2) : モンスターが戦闘によつて破壊され効果が発動する場合、このカードはダメージステップでも発動できる。

「く、『機甲部隊の最前線』の効果で『グリーン・ガジェット』をデッキから特殊召喚！効果でデッキから『レッド・ガジェット』を手札へ！」

グリーン・ガジェット : DEF 600

「そのまま攻撃して破壊！」

「くっ！」

「そしてもう1体の『マシンナーズ・フォートレス』も攻撃！『ギアフレーム』の身代わり効果も使えない！」

「うわああああああああっ！」

「有里(ちゃん)！」

有里 : LP 3000 ↓ 2800

「有里ちゃん、大丈夫、か……?」

「私は大丈夫です……。私よりも、黎お兄さんが……!」

「ああ、自分の心配してろ、黎」

「俺は、平気だ……」

クソ、一瞬で全滅……! こんな事が……!

おまけに『ロキ』の復活まで封じられた!

「カードを4枚セット! そしてこのエンドフェイズ、『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力が下がる!」

バーサーク・デッド・ドラゴン：ATK 3500↓3000

よし、これならなんとか倒せるボードーラインだ……。

デーモンとの駆け引き

【速攻魔法】

レベル8以上の自分フィールド上のモンスターが墓地へ送られたターンに発動する事ができる。



自分の手札またはデッキから「バーサーク・デッド・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

バーサーク・デッド・ドラゴン（効果モンスター）

星8

闇属性／アンデット族

ATK 3500 / DEF 0

このカードは「デーモンとの駆け引き」の効果でのみ特殊召喚が可能。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃が可能。

自分のターンのエンドフェイズ毎にこのカードの攻撃力は500ポイントダウンする。

「更に、『飢餓枯渇国家』の効果を発動！ 自分のターンのエンドフェイズ時、3つある効果の内、どれかを選択しなくてはいけない！」

「3つの、効果？」

有栖が訝しげに目を細める。

「1つ、デッキからカードを2枚墓地に送る。2つ、ライフを500失う。3つ、自分の場のモンスター1体の攻撃力を500下げる。ボクはライフを500払おう」

エンヴィー：LP 212000↓207000

「ターンエンド！」

エンヴィー：LP 20700

手札：4枚

フィールド

フィールド

：バーサーク・デッド・ドラゴン（ATK 3000）

：伏せカード4枚、飢餓枯渴国家（フィールド魔法）

自分からライフを削った……？

「俺のターン！」

何にせよ、攻撃力が下がったこのタイミングで仕留めないと、後が支える。

「俺はチューナーモンスター『F・S マグマドラゴン』を召喚！ その効果で、デッキからレベル4以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚する。出でよ『F・S グリル・

『ゴーレム』！』

『ガアッ！』

『ぬん！』

F・S マグマドラゴン（効果モンスター）（オリジナル）

星4

炎属性／ドラゴン族

ATK 1800 / DEF 1500

このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、デッキまたは手札よりレベル4以下の炎属性モンスターを1体特殊召喚できる。

F・S グリル・ゴーレム（チューナー・効果モンスター）

星3

ATK 1300 / DEF 1100

炎属性／岩石族

このカードをシンクロ素材にしたシンクロ召喚に成功した時、墓地のカードを1枚手札に加える事ができる。

F・S マグマドラゴン：ATK 1800

F・S グリル・ゴーレム：ATK 1300

「レベル4の『F・S マグマドラゴン』にレベル3の『F・S グリル・ゴーレム』を  
 チューニング！」

王者の叫びが木霊する！ 勝利の鉄槌よ、大地を砕け！」

☆3+☆4=☆7

「シンクロ召喚！ 羽ばたけ、『エキスプロード・ウイング・ドラゴン』！」

『ギョオオオオオオオオオオオオオッ！』

エキスプロード・ウイング・ドラゴン：ATK 2400

「『グリル・ゴーレム』の効果で、墓地から『強欲な壺』をサルベージ！ そしてそのま  
 ま発動！ カードドロワー！」

……よし！

「速攻魔法『突進』を発動！ 『エクスプロード・ウイング・ドラゴン』の攻撃力をエンドフェイズまで700ポイントアップする！」

エクスプロード・ウイング・ドラゴン：ATK 2400↓3100

「攻撃力が『バーサーク・デッド・ドラゴン』を上回った！」

「バトル！ 『エクスプロード・ウイング・ドラゴン』で『バーサーク・デッド・ドラゴン』を攻撃！ 〴〵キング・ストーム〴〵！」

ギュゴオウ！ と灼熱の爆風が吐き出される。相手のライフをモンスターの攻撃力ごと削り取る強力な一撃だが……！！

「罨カード発動、『攻撃の無力化』！ バトルは強制終了だ！」  
チッ！ 止められたか。

「カードを2枚セット。エンドフェイズ、『飢餓枯渴国家』の効果でデッキからカードを2枚墓地へ送る。ターンエンドだ」

送られたカードは『カードガンナー』と『神の宣告』。

コラ、カードを落とすお前が落ちるな。そして『神の宣告』が落ちたのは痛い。

エクспロード・ウイング・ドラゴン：ATK 3100 ↓ 2400

黎：LP 2800

手札：1枚

フィールド

：エクспロード・ウイング・ドラゴン（ATK 2400）

：伏せカード2枚

「俺のターン！」

できれば、今の一撃で『バーサーク・デッド・ドラゴン』を潰し、3人の総攻撃でライフを大幅に削って欲しかったが……。

「落ち込むな、黎」

「優？」

「思い通りにならないからこそ、デュエルには戦略が必要なんだ。運と戦略を手にしてこそ、デュエルに始めて勝てる。だろう？」

「……、そうだな！」

「その意気だ。俺は『貪欲な壺』を発動。墓地のモンスター5体をデッキに戻し、カードを2枚ドロー」

優の墓地から『極神皇ロキ』、『極星獣グルファクシ』、『極星獣タンクニヨースト』、『極星霊デックアールヴ』、『巨大ネズミ』が吐き出される。この内『ロキ』はエクストラデッキに戻る為、実質デッキに戻ったのは4枚だ。

「更に『極星天ヴァルキュリア』を通常召喚」

『ハッ！』

極星天ヴァルキュリア：ATK 400

「効果発動。相手の場にモンスターが存在し、自分の場に『ヴァルキュリア』以外のカードが存在しない場合、手札の『極星』と名のついたモンスター2体をゲームから除外し、自分の場に『エインヘリアル・トークン』を2体特殊召喚できる。

俺は手札の『極星獣タングリスニ』と『極星天ヴァナディース』を除外」

エインヘリアル・トークン：DEF 1000

エインヘリアル・トークン：DEF 1000

極星天ヴァルキュリア（チューナー・効果モンスター）

星2

光属性／天使族

ATK 400／800

このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にこのカード以外のカードが存在しない場合、手札の「極星」と名のついたモンスター2体をゲームから除外して発動する事ができる。

自分フィールド上に「エインヘリアル・トークン」（戦士族・地・星4・攻／守1000）2体を守備表示で特殊召喚する。

「レベル4の『エインヘリアル・トークン』2体に、レベル2の『極星天ヴァルキュリア』をチューニング！」

キュイン、キュイン、と『ヴァルキュリア』が持っていた剣を二振りすると、自分の周りにその軌道に合わせた形で白く輝くリングが現れる。『ヴァルキュリア』はそのまま姿を消し、後ろからやって来た鎧姿の騎士がその白のリングの中を潜り抜ける。

「10の星々が輝く時、星界の神々を束ねし王よ、今こそその全知全能なる力を示せ！」



☆2+☆4+☆4+☆10

「シンクロ召喚！ 出でよ、星界の三極神を束ねる最高神『極神聖帝オーデイン』！」

極神聖帝オーデイン：ATK 4000

極神聖帝オーデイン（シンクロ・効果モンスター）

星10

光属性／天使族

ATK 4000 / DEF 3500

「極星天」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。

このカードはエンドフェイズ時まで魔法・罫カードの効果を受けない。

また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によつて破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する「極星天」と名のついたチューナー1体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚す

る。

この効果で特殊召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする事ができる。

突如として暗雲が立ち込め、その雲の狭間からゆつくりと降り立ったのは、北欧神話における最高神。赤い法衣を羽織り、厳めしい杖を構えている。その姿は敵も味方も平定する、正しく絶対なる神。

「効果発動、自分のメインフェイズ時に『オーデイン』はターン終了時まで相手の魔法・罠の効果を受け付けないようにできる」

「上手い！ これなら遠慮無く戦える！」

「パパ、行つけえ！」

『『極神聖帝オーデイン』で『バーサーク・デッド・ドラゴン』を攻撃！』  
「ヘヴンズ・ジャツジメント！」

「キュオオオオオン！」と杖にエネルギーが収束される。それはやがて光の柱となり、半ば腐敗している龍を一瞬の内に焼き尽くした。

「ぐつくうううううううううっ！」

エンヴィー：LP 20700↓19700

これでガラ空き。次の有栖と有里ちゃんのターンで大ダメージを叩き込める！

「リバースカード、オープン」

「何？」

「『デーモンとの駆け引き』い！」

2枚目だど!?

『ギイヤアアアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

バーサーク・デッド・ドラゴン：ATK 3500

「そ、そんな……!」

「く! ターンエンド! 『飢餓枯渇国家』の効果でデッキからカードを2枚墓地へ送る

!」

優：LP 1700

手札：0枚

フィールド

：極神聖帝オーデイン（ATK 4000）

：魔法・罨無し

「僕のターン、ドロー！」

状況は非常に芳しくない。攻撃力では僅かに『オーデイン』の方が上回っているが、たった500では覆されるのも時間の問題だ。

「ふい、フィールド魔法『ガイアパワー』を発動！これで『飢餓枯渴国家』を破壊し、場の地属性モンスターのパワーアップを……」

貧困に塗れた国は一瞬で巨木に取って代わられる。が、次の瞬間、再び貧困に塗れた国家に場は様変わりした。

「え!？」

「残念でした！『飢餓枯渴国家』は墓地に送られた時、デッキから同名カードを引って張って発動できるのサ！」

飢餓枯渴国家（オリジナル）（改訂版）

【フィールド魔法】

(1) : このカードが墓地に送られた場合、デツキに存在する「飢餓枯渴国家」を発動させる事ができる。

(2) : このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いのプレイヤーは自分のターン終了時に以下の効果の中から1つ選択して発動しなくてはならない。

この効果は2ターン以上続けて同じ効果を選択する事はできない。

- 自分のライフを500ポイント払う。
- デツキからカードを2枚墓地へ送る。
- 自分の場のモンスター1体の攻撃力を500ポイント下げる。

やはり『集中豪雨地帯』と同じ効果のカード！

飢えに困る国の中じゃ少しずつ身を削っていかないとな身が成り立たない、ということか。

「く、『レッド・ガジェット』を守備表示で召喚し、効果でデツキから『イエロー・ガジェット』をサーチ。『レッド・ガジェット』の攻撃力を500下げて、ターンエンド……」

レッド・ガジェット : ATK 1300 ↓ 800 / DEF 1500

有栖：LP 3800

手札：1枚（『イエロー・ガジェット』）

フィールド

：レッド・ガジェット（DEF 1500）、グリーン・ガジェット（DEF 600）

：機甲部隊の最前線（永続魔法）、一族の結束（永続魔法）

「私のターン、ドロー……！」

有里ちゃんも流石に覇気が無い、か。

「魔法カード『貪欲な壺』を發動します。墓地の『チューニング・サポーター』、『ボルト・ヘッジホッグ』、『ジャンク・シンクロン』、『マシンナーズ・フォートレス』、『マシンナーズ・ギアフレーム』をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローです……！」

『レッド・デーモンズ』を戻さないのは、恐らく『死者蘇生』のようなカードで復活させる為だろうな。レベル8のシンクロモンスターだから、あいつは重い。

「カードを1枚伏せて、デッキからカードを2枚捨てます。ターンエンドです……」

モンスターを、引けなかったか……！

有里：LP 2800

手札：1枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

『バーサーク・デッド・ドラゴン』は、その特性上、ダイレクトアタックとモンスターへの攻撃を両立させる事はできない。だが、有里ちゃんのライフは残り2800、『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃で尽きてしまう。

鍵は彼女の伏せカード。あれで全てが決まる。

「ボクのターン！ アヒヤヒヤ！ 万策尽きた？ 手札から魔法カード『底無しの毒沼』を発動！ 君達の場の魔法・罫は全て消滅！ 更にコントローラーに1枚につき800ポイントのダメージを与える！」

「な!？」

「えっ!？」

「うくっ!？」

「きやああっ!？」

俺達の魔法と罫カードがズブズブと沈んでいく。優の場に魔法と罫は無いが、それで

も仲間の、特に娘の窮地だという事は分かるのだろう、顔を歪めている。

沼の底へ俺の『シンクロン・リフレクト』と『ガード・ブロック』、有栖の『機甲部隊の最前線』と『一族の結束』、有里ちゃんの『ウイキッド・リボーン』が沈む。クソッ！

黎：LP 2800↓1200

有栖：LP 3800↓2200

有里：LP 2800↓2000

「有栖！ 有里！ 黎！」

「く、これは痛いね」

「マズい、かな……」

「防御の手段を、失ったか……！」

底無しの毒沼（オリジナル）

【通常魔法】

相手フィールド上の魔法・罨カードを全て破壊する。

自分の場の破壊されたカード1枚につき、相手は800ポイントのダメージを受け



る。

うう、毎度毎度汚いカードばかりだ……。それがオンパレードとかなると、もうイヤになるぜ……。

ピッ！ と一枚のカードをエンヴィーが場に叩き付けた。

「このカードは、墓地の闇属性モンスター2体を除外する事でのみ召喚できる！ 墓地の『デビル・エッジ』と『レス・ルーマー』ゲームから除外！ 出でよ！ 『ギガント・ゾンビゴーレム』！」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

ギガント・ゾンビゴーレム：ATK 4100

「デケえ！」

「攻撃力4100だと!？」

「ゆ、優の『オーデイン』を……」

「上回った……!」

グジュグジュとあちこちが腐敗した巨人が、地面に開いた穴から這い出す。石ででき

ているのか生身なのかよく分からない姿だが、その全長は『オーデイン』並みにデカイ。  
 「アヒヤヒヤヒヤ！」 『ギガント・ゾンビゴーレム』で『極神聖帝オーデイン』を攻撃い  
 ！ “終魔腐敗拳”！

「ぐあああああああああああつ！」

『ゴウオオオオオオオオオオオオオッ！』

『ぐおあああああああああつ！』

大きく振りかぶった拳が赤い法衣の神を殴り倒す。その衝撃は数値にして僅か100ポイントながらも、優を大きく吹き飛ばした。

優：LP 1700↓1600

「ぐはっ！」

10メートル前後先の木に体を大きく打ちつける優。

く、プロテクターは衝撃までは殺せない。今ので打撲系の致命傷を受けてなければ良いんだが……！

「優！」「パパ！」「大丈夫か！」

「さあ、フィニッシュだあ！ 『バーサーク・デッド・ドラゴン』で天空 優にダイレク

トアタツク！」

黒い炎が吐き出される。マズい！ あれを喰らったらアウトだ！

「優！」「パパ！」

「『バーサーク・デスブレイズ』ウ！  
優！」

t o b e c o n t i n u e d

★  
STORY 37 : 切り札敗北 一縷の光にかける希望

黎 : LP 1200

手札 : 1枚

フィールド

: エクスプロード・ウイング・ドラゴン (A 2400)

: 魔法・罨無し

優 : LP 1600

手札 : 0枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罨無し

有栖 : LP 2200

手札：1枚 (『イエロー・ガジェット』)

フィールド

：レッド・ガジェット (DEF 1500)、グリーン・ガジェット (DEF 140

0)

：魔法・罨無し

有里：LP 2000

手札：1枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罨無し

エンヴィー：LP 19700

手札：4

フィールド

：バーサーク・デッド・ドラゴン (A 3500)、ギガント・ゾンビゴーレム (A

4100)

：伏せカード2枚、飢餓枯渇国家（フィールド魔法）

S I D E : 黎

「さあ、フィニッシュだあ！ 『バーサーク・デッド・ドラゴン』で天空優にダイレクトアタック！ 『バーサーク・デスブレイズ』ウ！」

真つ黒な炎が優を目掛けて撃ち出される。マズイ、優の残りライフは1600、『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力3500を直撃されたら負ける！ このデュエルは闇のゲーム、ライフが尽きる事は即ち死だ！

だが、俺の手札にあいつを守る手段は無い。万事休すか!?

デーモンとの駆け引き

【速攻魔法】

レベル8以上の自分フィールド上のモンスターが墓地へ送られたターンに発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「バーサーク・デッド・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

バーサーク・デッド・ドラゴン（効果モンスター）

星8

闇属性／アンデット族

ATK 3500 / DEF 0

このカードは「デーモンとの駆け引き」の効果でのみ特殊召喚が可能。  
相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃が可能。

自分のターンのエンドフェイズ毎にこのカードの攻撃力は500ポイントダウンする。

「優ー！ 優うーっ！」

「ママ、大丈夫！ パパは私が守る！」

俺が諦めかけ、有栖が喉が裂けるくらいに叫ぶ中、有里ちゃんは冷静に事を判断し、残った手札を墓地へ送った。

途端、機械仕掛けの案山子が優の前にジェットノズルを全開に吹かして飛び出し、黒炎を受け止めた。

これは……！

「その攻撃、『速攻のかかし』で受け止める！ パパは殺させない！」

「チイツー！」

あ、危ない。成程、有里ちゃんは二段構えで迎撃の姿勢を取っていたのか。

「ならば装備魔法『黒鍍くろめの毒鎧』を発動！ 『バーサーク・デッド・ドラゴン』に装備！」  
カードから流れる煙に死龍が包まれると、『バーサーク・デッド・ドラゴン』の全身が黒光りする金属で覆われた。

何だ？ 何か旨味のある効果なら攻撃前に装備させるものだが……？

「カードを一枚伏せ、エンドフェイズ、『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力を自身と『飢餓枯渴国家』の効果で500ずつ下げる」

バーサーク・デッド・ドラゴン：ATK 3500↓4500

「バカな、攻撃力が上がっただど!？」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ！ 『黒鍍の毒鎧』を装備したモンスターは、攻撃力がダウンする効果をアップする効果に変えられるのサ！ ターンエンド！」

な!?! て事は、あいつは少なくともエンドフェイズごとに攻撃力を500ずつ上げて行くって事か!?!



黒鍍の毒鎧（オリジナル）

【装備魔法】

このカードを装備したモンスターの攻撃力と守備力がカード効果によってダウンする場合、攻撃力と守備力は下がらず、その数値分だけアップする。

このカードが墓地に送られた時、上がっていた数値分、攻撃力と守備力はダウンする。

「このエンドフェイズ、墓地の『極星天ヴァルキリア』をゲームから除外し、『極神聖帝オーデイン』を特殊召喚！」

極神聖帝オーデイン：ATK 4000

「ムダア！ 『ギガント・ゾンビゴーレム』の効果発動！ 1ターンに1度、墓地からモンスターが特殊召喚された時、そのモンスターを持ち主のデッキに戻す！」

「なっ！」

く！ キーカードが次々と……！

ギガント・ゾンビゴーレム（効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／岩石族

ATK 4100／DEF 0

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の闇属性モンスターを2体、ゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

1ターンの1度、墓地からモンスターが特殊召喚された時、その特殊召喚を無効にし、そのモンスターを持ち主のデッキに戻す。

このカードは墓地からの特殊召喚ができず、守備表示の時に攻撃対象に選択された場合、ダメージ計算終了時にコントローラーは1000ポイントのダメージを受ける。

エンヴィー：LP 19700

手札：2枚

フィールド

・バーサーク・デッド・ドラゴン（ATK 4500）、ギガント・ゾンビゴレム（ATK 4100）

・伏せカード3枚、黒鍍の毒鎧（装備魔法・『バーサーク・デッド・ドラゴン』に装備）、飢餓枯渴国家（フィールド魔法）

「悪い冗談で、あつてほしいね……」

「正論だな。毎ターンごとにパワーアップする全体攻撃持ちなんざ対処しきれん。おまけに墓地からの特殊召喚も封じられた」

「唯一の救いは『飢餓枯渴国家』の3つの効果が、2ターン以上連続で使えない事。実質的にパワーアップは500と1000を繰り返す形になるんだね」

「次のターンは500上昇して5000だ。攻撃力6000になる前に叩き潰さない  
と、まず対抗できねえぞ」

上から順番に有栖、優、有里ちゃん、俺。

『バーサーク・デッド・ドラゴン』は全体攻撃持ち。即ち壁モンスターを揃えても無駄、という事だ。俺達のライフは1番多くて有栖の2200。半上級、或いは中級モンスター  
の攻撃でノックダウン。

2回。次のターンに奴がそれに相応するモンスターを出せば、後2回エンヴィーに  
ターンを回すだけで終わる。

「パパ、ママ、黎お兄さん……、私、死にたくないよ……、皆に死んでほしくないよ！」  
「それは、俺も同じだ！俺のターン、ドロロー！」

『天使の施し』か、この状況で手札交換は有難い。

「魔法カード『天使の施し』を発動！ デッキからカードを3枚引き、2枚捨てる！」

「これなら逆転、できるか……？」

「この瞬間、墓地に送られた『L・S ヤドリギの式神』のモンスター効果発動！ このカードが墓地に送られた時、自分フィールドのモンスター1体をデッキに戻す事で、墓地から特殊召喚できる！」

俺は『エクスプロード・ウイング』をデッキに戻し、『ヤドリギの式神』を特殊召喚！」

『ゴゴゴッ！』

「『ヤドリギの式神』の更なる効果！ この蘇生効果を破壊以外の方法で使用した場合、デッキからレベル3以下の『L・S』を特殊召喚できる！ 現れる、『ハウリング・バット』!!」

ト」

『キキィ〜！』

L・S ヤドリギの式神：DEF：1500

L・S ハウリング・バット：DEF 600

「レベル4の『ヤドリギの式神』に、レベル3の『ハウリング・バット』をチューニング！」

キュイン！ と緑の翼の蝙蝠が超音波を放ち、3つの星へと変わる。星は輪となり、青い人型の式神がその中心を通る。

「深緑の恵みが祈りと奇跡の笑顔を守り抜く！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆3 + ☆4 = ☆7

「シンクロ召喚！ 幻影を打ち砕け、『L・S 鉄壁のグレイプヴァイン』！」  
『でえいやっ！』

L・S 鉄壁のグレイプヴァイン：DEF 3300

光の柱から飛び出したのは山葡萄の房を体中に纏った盾使い。大きな盾にも葡萄の絵が描いてある。

紫の髪が風に揺れ、大地の恩恵をその身に体現している。

「効果発動！ 1ターンに1度、攻撃の権利を放棄して相手の場のカードを1枚破壊する！ 俺は『黒鍍の毒鎧』を破壊！」

「おっと永続畏発動！ 『悪順貫』！ モンスター効果の発動を無効にしてゲームから除

外する！」

「そう上手くは行かぬえぜ！ 素材となった『ハウリング・バット』の効果！ こいつをシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃と効果は無効化されない！」

L・S ヤドリギの式神（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／植物族

ATK 0 / DEF : 1500

このカードが墓地に送られた場合に発動できる。

自分フィールドのモンスターを1体デッキに戻し、このカードを特殊召喚する。

このカードが破壊された以外の方法でこの効果を発動した場合、更にデッキからレベル3以下の「L・S」を1体特殊召喚できる。

L・S ハウリング・バット（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星3

風属性／鳥獣族

ATK 400 / DEF 600

このカードをシンクロ素材とする場合、光・闇属性のシンクロモンスターの素材とする事はできない。

このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃と効果は無効化されない。

L・S 鉄壁のグレープヴァイン（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星7

地属性／戦士族

ATK 2600 / DEF 3300

「L・S」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体

1ターンに1度、相手の場のカードを1枚破壊できる。

この効果を使用したターンのバトルフェイズはスキップされる。

このカードが破壊された時、相手の場のカードを2枚まで破壊できる。

悪順貫（オリジナル）

【永続罫】

効果モンスターの効果が発動した時に発動できる。

その効果を無効にしてゲームから除外する。

このカードが手札から捨てられた時、墓地には送られずゲームから除外され、相手に1000ポイントのダメージを与える。

盾から発せられた閃光が一度は黒い渦に止められかけるが、そこに緑の翼の蝙蝠の発した超音波が当たって砕け散る。これで黒い渦に止められる事なく、閃光が死龍の黒い鍍を吹き飛ばした。

バーサーク・デッド・ドラゴン：ATK 4500↓2500

「鍍が剥がれたな。ダウンをアップに変えるカードを失った影響で攻撃力が下がったぜ？」

「つぐう！」

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！ エンドフェイズ、俺は『グレイプヴァイン』の攻撃力を500下げる」

L・S 鉄壁のグレイプヴァイン：ATK 2600↓2100



黎：LP 1200

手札：0枚

フィールド

：L・S 鉄壁のグレイプヴァイン（DEF 3300）

：伏せカード2枚

「俺のターン、ドロロー。やるな、あの状況を引つ繰り返す基盤を作るとはな」

「考えてみればこつち4人がターンを回してからあいつのターンになる。つまり、チャンスは単純計算で奴の4倍はあるっていう計算になる訳だ。なら、誰かが逆転の兆しを見せてもおかしくねえだろ？」

「ふ、確かにな」

「ならば俺もその兆しを見せるとしよう。そう言つて優は手札から魔法カードを1枚発動させた。」

「このタイミング、来る！」

「魔法カード『天よりの宝札』を発動！ この効果で互いに手札が6枚になるようにカードをドロローだ！ 俺はこの効果で俺と有栖の手札を補充！」

最強のドロースースによって、一瞬で優と有栖の手札が潤う。

タツグデュエルで『闇の指名者』を相手では無くパートナーに使う事ができる、という事は、つまり“お互い”や“相手”に味方を選ぶ事も可能だという事だ。そのポイントを上手く利用したな。

「俺はチューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚。モンスター効果発動、『デブリ・ドラゴン』が召喚に成功した時、墓地の攻撃力500以下のモンスターを1体守備表示で、効果を無効にして特殊召喚できる」

デブリ・ドラゴン（チューナー・効果モンスター）

星4

風属性／ドラゴン族

ATK 1000 / DEF 2000

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

また、他のシンクロ素材モンスターはレベル4以外のモンスターでなければならぬ。

「優、俺の墓地にいる『カードガンナー』、使うか？」

「使わせてもらう。その効果で墓地からレベル3の『カードガンナー』を特殊召喚」

デブリ・ドラゴン：ATK 1000

カードガンナー：ATK 400

「更に自分の場にチューナーがいる時、墓地から『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚。続いて墓地からモンスターを特殊召喚できた時、手札の『ドツペル・ウオリアー』は特殊召喚できる。来い！」

時空に穴が二つ開き、それぞれからボウガンを構えた黒い影の戦士と、ボルトを針の代わりに背中に装備したハリネズミが現れる。

ボルト・ヘッジホッグ：DEF 800

ドツペル・ウオリアー：ATK 800



2体の『ドツペル・トークン』を特殊召喚できる」

ドツペル・トークン：ATK 400

ドツペル・トークン：ATK 400

ドツペル・ウオリアー（効果モンスター）

星2

闇属性／戦士族

ATK 800 / DEF 800

自分の墓地に存在するモンスターが特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分フィールド上に「ドツペル・トークン」（戦士族・闇・星1・攻／守400）2体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「更にお前の場の永続罠『悪順貫』をコストに『トラップ・イーター』を特殊召喚」  
『ギョオッ!』

トランプ・イーター：ATK 1900

「レベル1の『ドッペル・トークン』とレベル3の『カードガンナー』に、レベル4の『トランプ・イーター』をチューニング！」

ギョロ目で角の生えた悪魔が4つのリングへと変わる。その中心を銃の腕を持つ小型マシンと小さな影の戦士が潜り抜ける。

「8つの星々が集う時、万象一切を破壊する魔龍が放たれる」

☆1+☆3+☆4=☆8

「シンクロ召喚！ 森羅万象を焼き尽くせ、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン：ATK 3000

続いて飛び出すのは閻魔の龍。ヤギのように曲がった三本の角に黒と赤の体。炎を

体現する翼に黄金色に輝く瞳。娘さんが使っていたのと同じモンスターだ。

「更に墓地の『グローアップ・バルブ』の効果を発動！ デッキトップのカードを墓地へ送って特殊召喚！」

グローアップ・バルブ：ATK 100

「レベル1の『ドッペル・トークン』にレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング！ 2つの星々が輝く時、新たな境地へ導く風を吹き起こす……」

☆1+☆1=☆2

「シンクロ召喚！ シンクロチューナー！ 『フォーミュラ・シンクロン』！  
『ヤッ！』」

フォーミュラ・シンクロン：DEF 1500

優の連続シンクロ。三番手はレーシングカーの胴体を持った機械戦士。F1カーの

体からは腕と足が生え、運転席からは頭が生えている。

フォーミュラ・シンクロン（シンクロ・チューナー・効果モンスター）

星2

光属性／機械族

ATK 2000 / DEF 1500

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。

また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

『フォーミュラ・シンクロン』はシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローできる、ドロー！ 更に自分の場にレベル8以上のシンクロモンスターが存在する事により、手札の『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚！』

『へエッ！』



クリエイト・リゾネーター：ATK 800

背中にプロペラを背負った悪魔が現れる。"リゾネーター"シリーズの中で唯一アニメ版から効果が変更されたモンスターだ。

クリエイト・リゾネーター（チューナー・効果モンスター）

星3

風属性／悪魔族

ATK 800 / DEF 600

自分フィールド上にレベル8以上のシンクロモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。手札の『シンクロン・エクスペローラー』を墓地へと送り、デッキからレベルの『アンノウン・シンクロン』を特殊召喚！」  
『シンクロン』

アンノウン・シンクロン：ATK 0

最後の場を埋めたのは、頭に2本のアンテナの生えた丸い浮遊機械。真ん中にある赤い目？が不思議感を醸し出す。

この組み合わせ……、本気だな？

「行くぞ。レベル8シンクロモンスター『スターダスト・ドラゴン』に、レベル2シンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング！」

白き龍とレーシングカーの戦士が虚空へと飛び上がる。『フォーミュラ・シンクロン』は2つのエメラルドグリーンに輝くリングへと姿を変え、そこを『スターダスト・ドラゴン』が目にも映らぬ速度で潜る。

……、Dホイールに乗ってなくても行けるんだ。

「星屑の竜よ。光を超えた速さを得て、更なる限界の境地へ達せよ！」

☆2+☆8||☆10

バシユン！ と星屑の龍の姿がかき消える。

「消えた！」

「来る……！」



以下の効果をそれぞれターンに1度ずつ使用できる。

●自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃することができる。

その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。

●フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。

●相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「まだまだだ！ レベル8の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に、レベル1の『アンノウン・シンクロン』とレベル3の『クリエイト・リゾネーター』を、ダブルチューニング！」

背景に炎を背負い、燃える瞳で威風堂々と敵を見据える。

赤と黒の魔龍た8つの、チューナー達はそれぞれ1つと3つの、紅蓮の炎のリングに包まれる。



スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（シンクロ・効果モンスター）  
星12

闇属性／ドラゴン族

ATK 3500 / DEF 3000

チューナー2体＋「レッド・デーモンズ・ドラゴン」

このカードの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナーの数×500ポイントアップする。

このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。

また、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』は、自分の墓地のチューナー1体につき攻撃力が500ポイントアップする。

墓地には俺の『ジャンク・シンクロン』、『クイック・シンクロン』、『デブリ・ドラゴン』、『グローアップ・バルブ』、『トラップ・イーター』、『フォーミュラ・シンクロン』、『アンノウン・シンクロン』、『クリエイト・リゾネーター』。

有里の『フレア・リゾネーター』。

黎の『溶接スパーカー』、『マグマドラゴン』、『ハウリング・バット』の合計12体！  
よって攻撃力は……」

スカールレッド・ノヴァ・ドラゴン：ATK 3500↓9500

「ば、ばかな?! 攻撃力9500だと?!」

恐らく『ジャンク・シンクロン』は『邪天使の施し』の時に捨てたんだろ。うな。

にしても攻撃力9500とは、なかなか驚異的な数値だ。味方で良かったぜ。

「更に『シユーンティング・スター・ドラゴン』の効果発動！ デツキからカードを5枚めくり、その中のチューナーの数だけ攻撃できる」

ビッ！ と優はジャスト5枚のカード一度にめくる。

めくったカードは『THE トリツキー』、『極星獣グルファクシ』、『サルベージ・ウオリアー』、『トラップ・スタン』、『ジャンク・シンクロン』。

「チューナーの数は2枚！ よって『シユーンティング・スター・ドラゴン』のこのターンの攻撃回数は2回だ！」

今、優の場には最上級のモンスターが並んでいる。これなら、行ける！





エンヴィー：LP 19700↓14300

凄い、一気に5000以上もライフを削り取った！

「更に『シューティング・スター・ドラゴン』で攻撃！ “スターダスト・ミラージュ”  
2連打あ！」

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

後続の流星の龍が彗星と見紛う速度で2体に分裂して突進。赤色の分身は死の龍の胴体を貫き、橙色の分身がエンヴィーを吹き飛ばした。

エンヴィー：LP 14300↓10200

「ターンエンド！ エンドフェイズ、俺は『飢餓枯渇国家』の効果でライフを500支払う。クツ……」

優：LP 1600↓1100

優：LP 1100

手札：0枚

フィールド

：シューティング・スター・ドラゴン（ATK 3300）、スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（ATK 9000）  
：魔法・罠無し

「僕のターン！ 流石だね、優。たった1ターンでライフを1万近くも削り取った。あのライフ3万弱の状況から、漸く後3分の1にまで来られた。優のお陰だよ！」

「……、別に俺だけじゃない。有栖も、有里も、黎もここまで頑張つて来たからこそだ」「ふふ、ありがとう」

クールな優だが、有栖の褒め言葉には照れている。娘の有里もそれを横からにこやかに眺めている。きつと、この一家は何があつても結束し続けられる強い家族だ。固い絆で結ばれているからこそ、惜しげもなく褒められるのだろう。

少し、羨ましい、かな……。

「僕は『スクラップ・リサイクラー』を召喚！ その効果で、デッキから『マシンナーズ・フォートレス』を墓地へ送るよ！」

スクラップ・リサイクラー（効果モンスター）

星3

地属性／機械族

ATK 900 / DEF 1200

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキから機械族モンスター1体を選択して墓地へ送る事ができる。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する機械族・地属性・レベル4モンスター2体をデッキに戻す事で、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

スクラップ・リサイクラー：ATK 900

「そして墓地のレベル4、地属性、機械族の『レッド・ガジェット』と『イエロー・ガジェット』をデッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドロウ！」

これで、デッキにガジェットが戻った。有栖のデッキはガジェット達を使って初めて機能する。そのため、デッキの9枚のガジェットが切れると恐ろしく脆い一面がある。その為の『スクラップ・リサイクラー』の投入なのだろう。

「場の『レッド・ガジェット』と『グリーン・ガジェット』を攻撃表示に変更し、『一族の結束』を2枚発動！ 僕の場の機械族モンスターの攻撃力は1600ポイント上がる！」

レッド・ガジェット：DEF 1500↓ATK 800↓2400

グリーン・ガジェット：DEF 600↓ATK 1400↓3600

スクラップ・リサイクラー：ATK 900↓2500

「まだ終わりじゃ無いよ！ 手札の『マシンナーズ・フォートレス』と『スクラップ・リサイクラー』を墓地へ送り、今送った『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚！ 更に『イエロー・ガジェット』と『レッド・ガジェット』を墓地へ送り、もう1体『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚！ 一族の結束の効果で更にパワーアップ！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 2500↓4100×2

す、スツゲえ……！ 機械族にはサポートカードが豊富にあるけど、まさか1ターンで上級、最上級クラスを5体並べるとは……！

「全軍、一斉攻撃だあー！」

5体の機械族モンスターが攻撃を仕掛ける。合計攻撃力は16700、エンヴィーの残りライフを削りきるには十分な数値だ！

「おっと、そうはさせないよ。手札から『アタック・アブゾーバー』の効果発動！ このカードを手札から墓地へ送る事で、このターンにダイレクトアタックで受けるダメージは全て消失する！」

突如としてペラペラした人の影のようなモンスターが現れる。クソッ！ 何故いつも後少しのトコで止められる！

アタック・アブゾーバー（効果モンスター）（オリジナル）

星2

闇属性／アンデッド族

ATK 1000 / DEF 1100

このカードの属性は「光」としても扱う。

相手プレイヤーの直接攻撃が宣言された時このカードを手札から捨てる事で、そのターン中発生するプレイヤーへの戦闘ダメージは全て無効化される。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキから闇属性モンスター

を1体手札に加える事ができる。

「ターンエンド。エンドフェイズに、僕はデッキからカードを2枚、墓地へ送る」

有栖：LP 2200

手札：0枚

フィールド

：レッド・ガジェット（ATK 2400）、グリーン・ガジェット（ATK 360

0）、スクラップ・リサイクラー（ATK 2500）、マシンナイズ・フォートレス（A

TK 4100）×2

：一族の結束（永続魔法）×2

チラ、とデッキの残り枚数を見る。俺は良くて残り20枚か。優は15枚強、有栖と有里ちゃんは10枚前後。対してエンヴィーはデッキが減っている様子が無い。物理的に見えないだけかも知れないが、もし奴のデッキが無限の枚数ならば状況はかなりヤバイ。デッキを削って行くのもそろそろ辛くなるし、かといって攻撃力やライフだってバンバン削れるものじゃ無い。

そろそろ決着をつけないと、デッキかライフが切れて負ける！

「私のターン！ 手札から魔法カード『壺の中の魔術書』を発動！ 私とママはデッキからカードを3枚ドロウできる！ ドロウ！」

「ドロウ！ ありがとう、手札が切れちゃって困っていたところなんだ」

「えへへ、どういたしまして、です。魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を復活させます！」

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

レッド・デーモンズ・ドラゴン：ATK 3000

「チューナーモンスター『グローアップ・バルブ』を召喚！ 更にチューナーモンスター『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚します！」

グローアップ・バルブ：ATK 100

クリエイト・リゾネーター：ATK 800

チューナーが2体に『レッド・デーモンズ』。この娘もやる気か！





スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（優）：ATK 3500↓10500

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（有里）：ATK 9500↓10500

「攻撃力10500だとお!？」

「行ける！ エンヴィーのライフを上回った!」

「これで止めです! 『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』でダイレクトアタック!」

バーニング・ソウル!」

ゴオウツ! と紅蓮の炎を纏った突進。これが通れば……!

「罨カードオープン! 『ブラック・ライフガード』! 戦闘ダメージを無効にし、ライフを攻撃モンスターの元々の攻撃力分だけ回復! 更にカードを1枚ドロ!」

ブラック・ライフガード（オリジナル）

【通常罨】

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動できる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0となり、攻撃モンスターの元々の攻撃力だけ自分のライフを回復する。

その後、カードを1枚ドロウする。

クソ！ 防がれた！

エンヴィー：LP 10200↓13700

「ご、ごめんなさい……」

「謝る必要は無いよ、有里ちゃん」

「ああ、あの場で攻撃を仕掛けるのは間違いじゃ無い」

「一回二回、防がれたぐらいで凹まないの。元気出して！」

シヨボン、としよぼくれる有里ちゃんだったが、俺達の励ましを聞いて元気を取り戻したのか、しっかりと前を見つめ直した。

「はい！ エンドフェイズ、私はライフを500支払います。くうっ！」

有里：LP 2000↓1500

辛そうな顔をする有里ちゃん。やはり、彼女はまだ俺達よりも幼い。物理ダメージを

緩和するプロテクターがあってもキツいか。

早くケリをつけねえと、有里ちゃんも衰弱して倒れちゃうな、こりや。

「はあ、はあ……、ターン終了っ！」

有里：LP 1500

手札：0枚

フィールド

：スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（ATK 10500）

：魔法・罫無し

現状は俺達が圧倒的に有利。エンヴィーの場にはフィールド魔法以外のカードは存在せず、奴の手札はたった2枚。それに対してこっちには攻撃力1万オーバーが2体。更には破壊されれば相手の場のカードを巻き込むカードが3枚に、自身を除外して攻撃を無効にするモンスターが3体もいる。

だが、この安心できない心の状況は何だ？ まるで、火縄銃で最新式の爆撃機と対面したかのような、こちらの体勢の全てが無意味のような、この感覚は……？

「ボクの、ターン！ アヒャ……」



DT ナイトメア・コクーン : ATK 1400

「出やがったな、DT……!」

現れたのは真つ黒な球体。コクーンと言うからには繭なのだろうけれど、残念ながら、外見ではただの黒いボールにしか見えない。目玉ですら無いのだからその辺は許してほしい。

「更に墓地の『グラティス・リソース』をゲームから除外! これでボクは墓地の『パンデミックユニット』、『暗雲の接收』、『凶悪なるバリアーバッドフォース』をデッキに戻し、カードを2枚ドロウする!」

もう4枚に手札が潤った上に、厄介なカードがデッキに戻りやがった……。クツソ、これでよくもまあ俺は単騎でプライドを倒せたモンだよ。我ながら天晴だ。

「更に『DT ナイトメア・コクーン』の効果発動! 1ターンに1度、自分の手札を1枚墓地へと送り、自分の場にレベル1の『黒幼虫トークン』を特殊召喚できる!」

黒幼虫トークン : ATK 0

DT ナイトメア・コクーン（（ダークチューナー・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星7

闇属性／昆虫族

ATK 1400 / DEF 0

（1）：自分フィールド上にモンスターが存在しない時、このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚されたこのカードは戦闘では破壊されない。

（2）：1ターンに1度、手札を1枚墓地に送って発動できる。

自分の場に「黒幼虫トークン」（昆虫族・闇・星1・攻／守 0）を1体特殊召喚する。

（3）：このカードと「黒幼虫トークン」のみでシンクロ召喚されたモンスターの効果が発動した時、相手はカードの効果を発動できない。

「来るぞ、ダークシンクロ！」

「あの時の『ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン』や『氷結のフィッツジェラルド』みたいなモンスターが来るんだね！」

「レベル1の『黒幼虫トークン』に、レベル7の『DT ナイトメア・コクーン』をダー



象にされた時の効果は発動できない！」

「ああ!？」

シュツッ! と下のクモが口から糸を吐いて青い戦車を奪い取る。そのまま盾のように自分の前に持つて行つてしまった。

地底のアラクネー(ダークシンクロ・効果モンスター)

星—6

地属性/昆虫族

ATK 2400/DEF 1200

チューナー以外のモンスター1体—ダークチューナー

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。

1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備する事ができる。

このカードが破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

「そして手札から魔法カード『武器交換再装填』を発動! 自分の場の表側表示の装備



カード1枚をゲームから除外し、墓地または除外ゾーンのモンスター1体を特殊召喚！  
蘇れ、『猛毒の孤独神』！」

次元の彼方へと『フォートレス』が消える。そして再び腐臭を放つローブ男が現れた。

武器交換再装填（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場に表側表示で存在する装備カード1枚を墓地へと送って発動する。

墓地または除外されているモンスター1体を自分の場に特殊召喚できる。

「武器交換再装填」は1ターンに1度しか発動できない。

猛毒の孤独神：ATK 2500

「『猛毒の孤独神』の効果でカードを1枚ドロ―！」

引いたカードはレベル4以下のモンスターでは無かったらしく、エンヴィーは舌打ちした。が、すぐにニヤリ、と笑った。

「そして墓地の『アタック・アブゾーバー』を除外し、デッキから闇属性モンスターを手札へ加える！」

……。  
 ダークシンクロの『ワンハンドレッド・アイ』と同じような効果だな。何を加えた

「更に手札から魔法カード『ダーク・リチューン・ドロー』を発動！ 自分の場のダークシンクロモンスターを1体リリースし、デッキからカードを3枚ドロー！ 更に自分の場に『D S トークン』を2体特殊召喚！」

ダーク・リチューン・ドロー（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場のダークシンクロモンスターを1体リリースして発動する。

デッキからカードを3枚ドローする。

その後、自分の場に「D S トークン」（悪魔族・闇・星3・攻900／守800）を2体特殊召喚する。

D S トークン：D E F 800

D S トークン：D E F 800

黒い塊が現れる。さつきまでいた『ナイトメア・コクーン』みたいに目も口も無い、

真つ黒なボールだ。

「さて、質問だよお “騎士” の魂？」

「……、何だ？」

「君の隣の男の魂の型は？」

「“ハルバート”。斬、突、搔、打と破壊の用途に満ちる、扱える者の数少ない性能の高い武器。美術品としても価値がある、正しく騎士の武器だ」

「その横の赤毛の女は？」

「“ルビー”だ。寶石言葉は『情熱』や『純愛』、或いは『熱情』。語源はラテン語で“赤”を意味する “<sup>ルベウス</sup> rubeus”」

「チビガキは？」

「“ハナシヨウブ”になる。花言葉は“優しい心”や“あなたを信じます”。大きく分けて3種類になり、一般に知られている菖蒲湯のシヨウブとは異なるものだ」

「正解。さて、ボクのこれから出すモンスターは何でしょう？」

脈絡無いな。ま、分かるけどな。

「お前自身だ」

「大正解！ 正解者にはあ、地獄への片道切符だあ！」

バシン！ と『アタック・アブゾーバー』の効果でサーチしたカードがディスクに叩

きつけられた。その瞬間、周囲から闇が集まる。濃密度の闇がエンヴィーを取り囲んだ。

「これは……！」

「来るか……！」

「……っ、優、有里……！」

「パパ、ママ……！」

「ボクは『猛毒の孤独神』と『D S トークン』2体をリリースッ！ 出でよ……、



つ、やはり出て来たか！

エンヴィーが闇色の光の中から現れる。その姿はプライドの時同様に禍々しい鎧を身に纏い、こちらを呑み込みかねない程の邪神のオーラを放っている。唯一異なる点と言えばプライドの武器は双剣だったのに対し、エンヴィーは身の丈の倍以上の長さの長槍だという事くらいか。

七罪士 エンヴィー：ATK 3900

「更に永続魔法『ネガティヴ・オブ・ネガティヴ』、『殺人レーザー検問装置』、『ウィルス爆弾』を発動！」

エンヴィーが槍を一先ず砂地に刺し、腕のディスクにカードを新しく発動させる為に読み込ませる。途端にこちらの足元を蛇のような黒い霧が覆い、網の目状のレーザーが壁のように立ち塞がる。そしてその周囲には膨らんだ爆弾が無数に漂い始めた。

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ！ 君達に絶望をあげる為にこのカード達の効果を説明してあげ

るよ！

『ネガティブ・オブ・ネガティブ』は君達が攻撃を行う場合、1体につきライフを2000ポイント支払わないと攻撃できないカード。

『殺人レーザー検問装置』は、攻撃宣言を行ったモンスターを破壊し、破壊されれば相手に3000ダメージを与えるカード。

『ウィルス爆弾』はスペルスピード3として扱い、ボクのカードに対するカード効果の発動を無効にしてゲームから除外するカードさ！」

「何!？」

これじゃ攻撃も効果も封じられちゃまったじゃねえか！

ネガティブ・オブ・ネガティブ（オリジナル）

【永続魔法】

相手プレイヤーは、ライフを2000ポイント支払わない限り攻撃宣言を行えない。

殺人レーザー検問装置（オリジナル）

【永続魔法】

攻撃を行った相手モンスターはダメージ計算終了時に破壊される。

このカードが相手によって破壊された時、相手プレイヤーは3000ポイントのダメージを受ける。

ウイルス爆弾（オリジナル）

【永続魔法】

このカードが表側表示で存在する限り、自分の場のカードを対象に含む、または自分の場のカードに対して相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし除外できる。

このカードの効果はカウンター罠に対しても発動できる。

このカードに対してカウンター罠以外のカードを発動させる事はできない。

「くっ……！」

伏せてあるカードは『攻撃の無力化』と『デストラクト・ポーション』。両方とも通常罠だ。しかも片方は相手を対象を取るカード、『ウイルス爆弾』で潰される！

「更にボク自身の最初の効果を発動！」

「最初の、効果だと……！」

……、最初って事はまだ効果があるって事だ。しかも恐らくだが3つ以上。2つなら



最初なんて言い方はしないからだ。

「1ターンに1度、墓地のモンスターを1体ゲームから除外！ そのモンスターの効果を次のボクのエンドフェイズまでボク自身の効果として使用できる！」

「！ 2ターンの間、墓地のモンスター効果のコピー！」

「しかも、次のターンはもう1つ効果を重ね掛けできるぞ！」

『ファントム・オブ・カオス』か、こいつは！

墓地から吐きだされたのは、散々俺達を苦しませた『バーサーク・デッド・ドラゴン』。

っ！ 全体攻撃持ち！

『バーサーク・デッド・ドラゴン』を除外し、このターンのみボクは相手モンスター全てに攻撃できる！

さあ、覚悟はできたかい……？」

「っ！」

「く……！」

莫大なエネルギーがエンヴィーの槍の穂先に集まる。槍が黒い炎に包まれ、倍以上の長さの炎の槍が生まれた。

「まずは『鉄壁のグレイプヴァイン』を攻撃い！ エンヴィーズ・デッドランス！」

「ぐあっ！」

葡萄の戦士は盾で黒い炎を防ぐ。しかし熱で脆くなっていたのか、続いて突かれた槍によつて貫通。心臓を一突きにされてしまう。

クソ！ 『ウィルス爆弾』の効果があるんじゃないや、『グレイプヴァイン』の破壊効果が使えない！

「次は『シューティング・スター・ドラゴン』を攻撃い！」

「この瞬間、俺は『シューティング・スター・ドラゴン』の効果発動！ このカード自身をゲームから除外し、その攻撃を無効にする！」 『デイメンション・ザ・ガード』！

振り回された黒い槍が当たるよりも速く、流星の白竜はその姿を光の中へと消す。よし、これなら破壊されない！

「アツマあい！ ボクの2つ目の効果を発動！ 戦闘を行う相手モンスターの効果は無効になる！ 『デリート・エフェクト』！」

「何!？」

エンヴィーの槍の炎の勢いが増大し、次元の彼方に消えた流星の白竜が炎で焼かれる。弱つて異次元へと姿を隠す事ができなくなった白竜は、そのまま槍で真つ二つにされてしまった。

「ぐあああああつ！」

優 : LP 1100 ↓ 500

「更に『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』にも攻撃だあ！」

「く、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』にも同じ効果が備わっている！ デイメン

シヨン・ザ・ガード！」

「無駄無駄無駄無駄あ！ 攻撃力アップ能力と一緒に潰される！ デリート・エフェ

クト！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン : ATK 10500 ↓ 3500

紅に燃える炎の中に姿を消そうとする紅蓮の魔龍。しかしその炎を掻き消し、本来燃えない筈の炎を焼き尽くす黒炎が、そのまま魔龍を焼き払った。炎の化身とも言えるあのモンスターを焼き払うとは、凄まじい火力だ……！

「くつ、うおああああああああああつ！」

優 : LP 500 ↓ 100

「優！ しつかりして！」

「パパ！ 大丈夫!？」

「他人の心配してるヒマは無いよお！ 今度は『レッド・ガジェット』、『グリーン・ガジェット』、『スクラップ・リサイクラー』を攻撃い！」

合計ダメージは……、3200!？ 有栖の残りライフじゃ耐えきれない！

「……は、仕方がないか！」

「俺は罠カードを発動する！ 『デストラクト・ポーション』！ その効果で『レッド・ガジェット』を破壊し、元々の攻撃力1300ポイント分のライフを回復！ 『レッド・ガジェット』は有栖のモンスターの為、ライフが回復するのは有栖になる！」

「バギン！ と赤色の歯車が砕け散り、そこから生まれた光が有栖の体を包み込む。」

回復量なら『グリーン・ガジェット』の方が僅かに多いが、『一族の結束』で強化されているとはいえフィールド魔法の効果で攻撃力が下がった『レッド・ガジェット』を攻撃される方が結果的にライフが減ってしまうんでね。

有栖：LP 2200↓3500

「だったら残りのモンスターに攻撃！」

「うわあああああああああああつ！」

有栖：LP 3500↓1800

鉄色のカゴ型機械と緑色の歯車戦士が炎で焼き払われる。だが、まだ有栖の場にモンスタースターは残っている。逆転の機会は、まだある！

「そしてチビガキの『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』に攻撃！」

「きゃあああああああああああああつ！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン：ATK 10500↓3500

斬！ 紅蓮の魔龍が炎の中へと攻撃を回避するよりも速く、その姿は槍で真つ二つにされる。

有里：LP 1100↓700

「まだまだあ！ バトルフェイズ終了時に3つ目の効果を発動！」

「ま、まだあるの!？」

「相手フィールド上に存在するモンスター1体を指定! そのモンスターを持ち主のデッキへ戻し、そのレベル×200ポイントのダメージを与える! 当然戻すのは『マシナーズ・フォートレス』!」  
「バッドバック・ペイン!」

「うわあああああああああああああああああああああああああああつ!」

有栖：LP 1800↓400

たった一瞬で『フォートレス』が黒い光となつて消え、その光が弾丸となつて有栖を襲った。

彼女が『フォートレス』の効果を使わないのは恐らく除外を防ぐ為か、それともあれは対象を取らない効果なのか。

「更にメインフェイズ2に4つ目の効果を発動!」

「ま、まだ来るのかよ……!」

「メインフェイズ2の時点で相手のライフが1000ポイントを上回っている場合、相手に1000ポイントのダメージを与え、自分のライフを1000ポイント回復する!

「サープラス・デザイア!」

「ぶ、プライド以上にデタラメ過ぎる！　ぐあああああああああつー！」  
 ブオン！　と槍が降られ、暴風が巻き起こる。隣に居た優が受けたのは余波程度だったのがせめてもの救いか。俺は背後のヤシの木を押し折る威力で吹き飛ばされてしまった。

「ぐぼあつー！」

クソ、口の中が鉄の味でいっぱいだ。この感覚は内臓をやっちまったか……！

黎：LP　1200↓200

エンヴィー：LP　13700↓14700

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！　このエンドフェイズ、デッキからカードを2枚墓地へ送る」

「だが、『バーサーク・デッド・ドラゴン』の効果をコピーしているため、攻撃力は下がるぞ……！」

「ご生憎様だね！　ボクの5つ目の効果で、僕の攻撃力は元々の攻撃力より低い数値にはならないのさー！」

「くっー！」

エンヴィー：LP 14700

手札：0枚

フィールド

：七罪士 エンヴィー（ATK 3900）

：伏せカード2枚、ネガティヴ・オブ・ネガティヴ（永続魔法）、殺人レーザー検問装置（永続魔法）、ウイルス爆弾（永続魔法）、飢餓枯渇国家（フィールド魔法）

「ぜえ……、ぜえ……、ぜえ……っ！」

「はあ……、はあ……、はあ……っ！」

く、なんてヤツだ。たった1ターンでこっちのモンスターが全滅させられるとは……！ おまけに再び強力なロックをかけてきやがった！ 攻撃も魔法も罠も通じない以上、こちらにできるのは防戦のみ。だが、次のターンにエンヴィーが貫通効果を持つモンスターの効果をコピーして攻撃を仕掛ければ、3ヶタである全員のライフは確実に尽きる。おまけに5つ目の効果の影響で、『収縮』の系統は効果がねえ。



今ライフが1番少ないのが優の100、次に俺が200、有栖が400で、有里ちゃんが700と最も多い。

だが、この程度では雀の涙。

或いは、焼け石に水。

効果はこれでもかと言う程に薄い。というか、無い。

なんとという事だ。主人公格どころかイレギュラー格4人で相手しているのに、ここまで追い詰められるなんて……！

有栖以外に手札は無い。優が有栖に視線を送るが、首を横に振る。逆転の一手は彼女の手札には無い、か。クソツ！

ゴメンな、都。義兄ちゃん、お前を救えないかも知れない……。

済まない、フィオ。俺、生きて帰れないみてえだ。

……………。



『例え、今が真つ暗でも、もしかしたら一歩進むだけで光が見えるかも知れない』  
！

『一歩先が崖でも、動かなければ、現状は変わらない。もしかしたら崖の下に道があるかも知れない』

このセリフは……！

『やらずに後悔するよりも、やって後悔した方が良い。なんて言いはしないさ。でもな』

あの時の……！

『やらなかったら、後悔はもつと積もる。だったら、例え後悔するなら新しい後悔に身を  
悩ませる』

そうだ、やらなかったら……。

『それがこの俺、遊馬崎黎の生き方だよ、都。全てが終わるまで、俺は諦めない』  
何も、始まらない。

「まだ、終わってない……………」

「へえ、まだ立ち上がるんだ……。希望なんて微塵も残ってないのに、人間ってこれだからバカなんだよねえ！ アヒヤヒヤヒヤヒヤッ！」

「何とでも、言うが良い！」

ギチ、と筋肉が軋む。ミシ、と骨が悲鳴をあげる。それでも俺は、エンヴィーを睨みつける。

その瞬間、有栖と有里ちゃんのエクストラデッキから強い光が放たれた。

t o b e c o n t i n u e d

STORY 38 : 結束の切り札 ★

STORY 38 : 結束の切り札 ★

黎 : LP 200

手札 : 0 枚

フィールド

: モンスタ―無し

: 伏せカード1枚 (『攻撃の無力化』)

優 : LP 100

手札 : 0 枚

フィールド

: モンスタ―無し

: 魔法・罨無し

有栖：LP 400

手札：3枚

フィールド

：モンスター無し

：一族の結束×2（永続魔法）

有里：LP 700

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罠無し

エンヴィー：LP 14700

手札：0枚

フィールド

：七罪士 エンヴィー（ATK 3900）

：伏せカード2枚、ネガティブ・オブ・ネガティブ（永続魔法）、殺人レーザー検問装

置（永続魔法）、ウィルス爆弾（永続魔法）、飢餓枯渇国家（フィールド魔法）

SIDE：有栖

こっちの手は、全て封殺されてしまった。

唯一場に残っていたボクの『マシナーズ・フォートレス』はデツキへと戻された。

手札のカード『大嵐』で場のカードを一掃したいところだけど、相手の『ウィルス爆弾』の効果で破壊しようとした瞬間にゲームから除外されてしまう。

万事休すつて、こういう状況を言うのかな……。

横目でチラリ、と愛しい人と頼もしい仲間を見る。汗を流して苦しそうな表情をしている。

次に反対側にいる大切な娘を見る。こっちは沈んだ顔で絶望している。

つまりそれは、ボクも皆も打開策が無いという事。

つまりそれは、この闇のゲームに僕ら全員が負けて、死んでしまうという事。死ぬ。

そう考えた瞬間、ボクの胸は張り裂けそうになった。

嫌だ。

ボクはもっと優と一緒にいたい！ 君と幸せな家庭を築きたい！ 彼を死なせたくない！ 娘だつてできる事が分かつているのに、そんな輝く未来をここで壊されたくない！ ボクはあいつに勝ちたいんだ！

狂おしい程愛しくて堪らない彼との思い出が、走馬灯が頭の中を駆け巡る。

優、君は最初はボクの事を警戒していたよね。君の事を利用する為に近づいたんじゃないかって。

君は違う世界から来たつて事を隠していたよね。本当の事自分の正体がバレたら居場所も友達も失うんじゃないかって。

ボクを守る為に、闇のゲームでボロボロになった事もあったよね。あの時は2週間も眠り続けて、ボクは本当に心配でどうにかなりそうだった。

君の代わりに黒蠍盗掘団とデュエルをして倒れた時、君はボクの事を看病してくれたよね。とても嬉しかったよ。

影丸理事長に啖呵を切つた時に言ってくれたよね、ボクが大切な人だつて。あの時、ボクの心はとっても温かかったんだ。

そして君は、セブンスターズとの戦いが終わつたら、ボクに告白してくれたよね。あの時はとっても嬉しくて死んじやいそうだったんだよ？

セブンスターズとの戦いが終わった後だったよね、有里が来たのは。君と結婚できる



んだって分かったら、ボクは目に映る全てが輝かしい未来へのレールに見えたんだよ。思い返してみると、君との思い出はとつてもキラキラと輝いているよ。いつまでもボクの宝物で、大切な過去だから。

一万二千年前から愛していたんだ、なんてバカバカしい事は言わない。

ボクはただ、君と有里を守りたい。この世界の全ての悪意から、君を憎む全ての敵から。

君が傷つく姿を、もう見たくないから。

幸せな未来を、壊されたくない！

ボクは、負けたくない！

そう思った瞬間、存在しないハズのエクストラデッキから強い光が放たれた。

S I D E : 有里

現状は、ピンチと言う以外に無いと思う。

ママ以外、手札にカードは無いし、伏せカードだって黎お兄さんの分しか無い。そしてそれがさっきの攻撃で使われなかったって事は、戦闘で効果を発揮しないか『ウィルス爆弾』で無効化されて除外されてしまうかのどちらかという事。

パパもママも黎お兄さんも、苦しそうな表情を浮かべている。

私の最強モンスター『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』はやられてしまったし、ライフポイントだって皆あまり残っていない。デッキ枚数だって、もう半分を切っていると思う。

勝てない。つまりは、負ける。

闇のゲームを体験するのはこれが初めて。でも、パパとママから話は聞いた。負けると死ぬって。

死。

それを自覚した瞬間、私の胸は張り裂けそうになった。

嫌だ。

私は、死にたくない！

パパにも、ママにも、黎お兄さんにも死んでほしくない！

もつとパパとママと一緒にいたい！ 色んな事を教えてほしい！ もつともつと

デュエルだってしたい！ ケンカもした事はあったけど、それでも仲直りできた！ 友達ともまた会いたい！ もっと家族で遊びたい！

物心ついた時からパパとママの事は大好きだった。だって、綺麗なママと格好良いパパだから。

ママの事をパパは大好きで、ママはパパの事を大好きで。私はそんな二人がとっても大好きで、二人も私の事が大好きで。

怒られた事もあったけど、優しくしてくれた事もあった。

今日初めて会った黎お兄さんは、とっても悲しい過去があつて、でも私達と仲良くなった。普通は私達を憎んでも可笑しくないのに。

そして、黎お兄さんは口から血を吐いている。パパもママも、これまで受けたダメージで辛そうにしている。私も辛い。

でも、辛くても苦しくても、皆、諦めない。過去も未来も、皆大切なものだから。

私にある過去は少ない。でも、全部キラキラと輝いて色褪せていない。どれもこれも、私の大切な宝物。

パパの事は大好き。ママも大好き。黎お兄さんは尊敬できる。でも、どれだけ頑張ってもやっぱり人間。死ぬ時は死んでしまおう。

ママは大きな愛でパパを包み込んだ。パパは広い胸でママを受け止めた。そしてそ

ここに今は私もいて、初めて天空（あまぞら）という家族ができています。

この家族を、壊させはしない！ 絶対に一緒に帰るんだ！ パパとママは、私が守る

！

あんな自分勝手なオジサンごときに砕かれてたまるか！

勝ちたい！ 勝って幸せにもう1度戻る！

私は、負けたくない！

そう願った時、エクストラデッキから強い光が差し込んだ。

S I D E : 優

眩い光を放つ有栖と有里のエクストラデッキ。有里は兎も角として、有栖にはエクストラデッキは無かった筈だ。一体、何が起きているというんだ……？

「これは……！」

「マジかよお……い……こんなトコで奇跡とか、ご都合主義にも程があるだろう！ インチキ能力も大概にしとけよ！」

俺は目を丸くして驚く。一方でエンヴィーは憤怒の形相で叫ぶ。

エンヴィー、デタラメなカードばかり使うお前に言われたくはないぞ。

『主よ』

（『シューティング・ブレイザー』？）

後ろから俺の精霊、『シューティング・ブレイザー・ドラゴン』が話しかけて来る。

『この光は、私の覚醒の時と同じものです。あの二人に、新たな力が目覚めたのです』

（新しい、力……）

『行けます。この状況を打破できる力が目覚めます！』

不思議と、心の中に勇気が湧いて来た。

初めて有栖と会った時、あいつは手紙で灯台へと呼び出して来た。その時は俺の名前の後ろの敬称に「君様殿」なんてトンチンカンな物をつけていた。あれはきつと彼女なりの精一杯だったのだろう。

それから、彼女とは沢山の思い出ができた。笑って、泣いて、戦って……。彼女の愛を沢山受け、俺はいつの間にか彼女の事が好きになっていた。いつも彼女は俺の隣で笑っていて、俺に惜しげ無く愛情を注いでくれた。

告白した時、彼女と両想いになれた事はとても嬉しかった。やつと気持ちがいっつになれたと思った。

キスをした事も嬉しい思い出だ。あいつの思いが、直接伝わって来る。

自分には無感動な面があるが、有栖と一緒にいると心の中に沢山の色が生まれる。俺という画板に彼女という絵の具で風景が描かれていくかのように。

有里がやって来た時、俺は驚きを隠せなかった。あいつと俺の子供だと分かった時、素っ気ない態度をとってしまったが、内心は嬉しさのあまりに跳ね回っていた。

ああ、そうか。ゴチャゴチャ考える必要は無いだ。

ただ『家族』を守りたい。たったそれだけ。

なら、俺の持てる力を全て使うまで。皆で帰ろう。そして黎に悲しい思いをさせないように、全力でエンヴィーを倒そう。

(『シューティグ・ブレイザー・ドラゴン』、戦えるか?)

『無論です』

(なら、力を貸してくれ。奴を全身全霊でぶっ潰すぞ!)

『御意!』

エクストラデッキに、あの優しくも力強い光が差し込んだ。

## SIDE : 黎

天空一家のエクストラデッキが光り輝いている。力が、覚醒している。

『主殿』

(桜?)

『戦おう。彼らの未来を、我らの明日を守るために!』

(おう!)

「つたく、お前ら好い加減に諦めろよな? どうせ虫ケラの命、邪神様に食われるのが幸せってモノさ!」

「俺達が虫ケラの命なら、テメエの命は無以下だ。存在しない無の命、そんな奴が有の命に刃向うなんざ可笑し過ぎてヘソが茶沸かすってんだ」

「グツギギギギギギ……!」

呆れたように言うエンヴィー。俺はそれに冷たく返す。

「ええい、往生際が悪いね! 知っているぞ! “騎士”、お前は転生する前は人間に蔑まれていた化物だったんだろ! それがどうして今、そこにいる純正の人間に好かれてるんだい!」

「……、何が言いたい」

「ハッ、どうせ同情を誘うような事を言ったり見せたりしたんだろ？ 例えばその服の下」

「ビ、と俺を指差す。」

「ヒヤハ、知っているぞ。その服の下には無数の傷跡があるんだろう？ そりや、あんな正常な皮膚が欠片も残っていないさそうな状態じゃ心配しない方がおかしいよな、アツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

「!!?」

「……………、奴の言いたい事は大凡理解した。」

「随分と……………」

「随分とお粗末な作戦だな。いや、急場凌ぎか？」

「何？」

「おおかた、有栖と有里ちゃんに状況を打開する力が覚醒した事に危機を覚えて、絆を揺さぶりにかかったんだろ？ 生憎、そんな小手先三寸の手法が通じるとでも思ったか、忸怩たる思いでも抱えている」

「シン、と静まりかえる。波の音ですら聞こえない。」

「俺は黙って、普段から長袖で隠している腕の内、右側の袖を肘までめくった。」

「あ！ と3人が声を揃える。」



「傷だらけだ……」

有里ちゃんの声には、何の感情が籠っているのか。

エンヴィーの言う事は誇張だが、実際俺の全身の中で、無事である皮膚なんて半分も無い。顔立ちや体格、年齢は多少の変化があったが、それでも転生前と比べて俺の体に大凡差異は無い。

そんな身体の中では手や顔くらいだ、まともなのは。それでも手はグローブで覆わないといけないし、顔だって半分を髪で隠す必要がある。

罵ってくれても構わない。もう、そんなので傷つく俺じゃ無い。慣れてしまったよ。この傷を見れば、大体の人は怖がる。当たり前前だ、ヤクザだってこんな派手な怪我をしてる人は稀だろう。

「アヒヤヒヤ、何その傷跡！ 醜いなあ！ そんな傷じゃあ真面な友達も仲間もいなかったんでしょ？ あーあー、そこにいる3人もどーせ騙すか同情を誘って共同戦線組んだんでしょ？ 悪人だ「ふざけんなあっ!!」ね……？」

エンヴィーの悪口を聞き流していた俺。多少は堪える程度だったが、そろそろ言い返そうと思った時、優が大声をあげた。……冷静を地で行くこいつが、怒鳴った……？

「さっきから聞いていれば醜いだの騙しただの、胸糞悪いんだよ teme me ! 俺達は俺達の意味でこいつの味方をしている、黎は騙してなんかいいえ！ それに傷跡が何だ！

この傷はこいつが今まで命がけで戦つて来た事の証だろうが！ 他人を貶めて蔑むだけが能のテメエに貶される筋合いはねえんだよ！」

「優の言う通りだよ！ あんたなんか黎を貶す資格なんて無い！ 人の頑張りや過去を嘲笑う奴に、誠実な心に唾吐く奴に、人の事を馬鹿にする権利なんて無い！」

「パパとママに同意だね！ おじさん、こつちが羨ましいのかな？ 悪いけど、おじさんみたいな性格悪い人を仲間にできる程、私達は心広く無いんだよ！」

お前ら……。

「良いのか、奴の言っている事が正しくて、俺はお前らを騙しているのかも知れないぜ？」

「知るか。俺達はお前の仲間だ。第一、少なくともあいつは俺達を殺そうとしたのに対し、お前は俺達を守ってくれた。それで充分だ」

「そうそう。小難しい理屈なんて要らないよ。ボクと優、そして有里は君に味方するつて決めたんだから。悲しさも苦しさも一緒に背負つてあげるから、ね？」

「うん、独りで苦しむ必要なんて無いんだよ、黎お兄さん。仲間つてそういうものではない？ 仲間だつて思つたらそれで仲間なんだよ！」

つたく、お人好しどもが……。

だが、力がどこから湧いて来た。誰かを守る力が、誰かと戦うになつて……？

新しい気力が、満ち溢れている！ 新しい幸せの欠片が、胸に溢れて来る！

これなら、戦える。これなら負けない！

「行くぞ、エンヴィー！」

「く！ 往生際が悪いね！」

「言い換えれば最後まで諦めないって事だからな！」

「ええい、どうせ邪神様には敵わないんだ！ さつさと降参しろよ、この生まれて来るべきじゃ無かった化物が！」

「もうそんな言葉で動揺する程、俺は脆くない！ 俺のターン！」

化物の役割、それは正義の味方が出て来るまで場を引つ掻き回し、偽りの正義を打ち砕く事だ。そして最終的に正義の味方に倒される。ヒーローだなんて『ブラッド・マジシャン』には言ったが、そんな大層なモンじゃねえ、ただの偽善者さ。

いいだろう、その役割を全うしてやろう！ 真の平和が来るまで、偽の平和を木端微塵に砕いてやる！

「ドロー！」

まずは手札補充だ！

真のデュエリストは、次に引くカードを思うがままに創造する！

「俺は手札から魔法カード『火炎の魅力』を発動！ デッキからカードを3枚ドローし、

手札の炎属性モンスターを1体墓地へ送る！　ただし送らなかった場合、手札は全てゲームから除外される！」

「バカな！　炎属性専門のデッキじゃあるまいし、そんな事できるものか！」

「やれるさ……、やってやる！」

さあ、行くぞ、俺のデッキ！

「1枚目！　チューナーモンスター『クイック・シンクロン』！　風属性だ！」

最初は特殊なガンマンスタイルのチューナー。

「2枚目！　通常魔法『調律師の施し』！　魔法カード！」

次は光へと消えていく『ジャンク・シンクロン』と『ダーク・リゾネーター』のイラストのカード。

「3枚目！　『F・S　ボム・ボム・レゲエ』！　こいつは炎属性！　よつてこのカードを墓地へ送る！」

最後は爆弾ファクションの少年。

次は更なる手札補充！

「魔法カード『調律師の施し』を発動！　手札のチューナーを1体デッキへと戻し、カードを3枚ドロ！　ただし、引いたカードの中にチューナーが存在しない場合、手札2枚をデッキへと戻さなくてはいけない！　ドロ！」

「く、今度こそ失敗しろ！」

「俺の呼び掛けに、応えてくれ！」

調律師の施し（オリジナル）

【通常魔法】

手札に存在するチューナー1体をデッキに戻してシャッフルし、カードを3枚ドロースする。

この時ドロースしたカードの中にチューナーが存在しない場合、手札2枚をデッキに戻してシャッフルする。

3枚のカードを引き抜き、確認。中であつたチューナーは、俺の相棒とも言えるあいっだ。

「チューナーの存在を確認！ 更に今引いたチューナーモンスター『L・S レストア・

チェリー』を召喚！」

『ただいま推参！』

「お前の、精霊か……」

L・S レストア・チエリー：ATK 1800

シユタツ！ と現れたのは凛々しい表情の桜色のポニーテールの女性。ドレスと鎧を組み合わせたかのような服を着て、右手に鋭利な剣を、左手には軽くて頑丈な盾を装備している。

「ば、かなあ……っ！」

ギリ、と齒軋りをしたエンヴェイはいきなり怒鳴る。

「テメエ！ どんなイカサマしやがった！ こんな都合良くカードが巡って来るワケがあるかあ！ テメエはデュエリスト失格だ、この卑怯者があ！」

「イカサマなんざしてねえよ。ただ、デツキが、カード達が俺に、俺達に力を貸してくれているだけだ」

極めてクールに俺は受け流す。

お前みたいなヤツには分からないだろうよ、カードを信じて未来へと歩み続けるこの人間特有の心は。第一、お前に卑怯だなんだと言われたくはないし、俺が失格ならお前は最初から資格すら無かったと言ってやるよ。

さあて、と。

「桜、治療を頼む！」

『任せてくれ！』

「桜の効果発動！ 場に現れた時、俺のライフを700ポイント回復する！」

『〃キュア・ブロッサム〃！』

桜が呪文を唱えると剣が緑色に発光し、その光が俺を包んだ。

L・S レストア・チェリー（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星4

風属性／戦士族

ATK 1800 / DEF 1600

（1）：このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、プレイヤーのライフを700ポイント回復する。

（2）：1ターンに1度、手札を1枚墓地に送る事で、プレイヤーのライフを500ポイント回復する。

墓地に送られたカードが「L・S」モンスターの場合、ターン終了時にそのカードを

手札に戻す。

(3)：このカードは同じ攻撃力のモンスターとのバトルでは破壊されない。

黎：LP 2000↓900

「自分と相手の場の魔法・罫カードを1枚ずつ墓地へ送り、『L・S ファーティライズ・スネイル』は手札から特殊召喚できる！ 俺はセットしてある『攻撃の無力化』とお前の場の『ウィルス爆弾』を墓地へ！」

「バカめ！ 『ウィルス爆弾』の効果でそのモンスターを除外してやる！」

ジジジ、と空中にプカプカ浮いていた黒い小型爆弾の導火線に火がつく。が、一瞬で巨大なカタツムリに丸呑みにされてしまった。

ボムン！ と腹の中で爆発したようだが、カタツムリは全く堪えてないようだ。  
『ム〜』

L・S ファーティライズ・スネイル：ATK 900

「ば、バカな！ 何故『ウィルス爆弾』が効かないんだ！」



「悪いが、今の墓地へと送る行動はコストだ。コストはチェーンブロックを作らない為、『ウィルス爆弾』でも防げない！」

L・S ファーティライズ・スネイル（効果モンスター）（オリジナル）  
星4

水属性／水族

ATK 900 / DEF 1700

このカードは通常召喚できない。

自分と相手の場に存在する魔法・罠カードを1枚ずつ墓地へ送った時、手札から特殊召喚できる。

この時墓地に送る相手のカードは表側表示でなければならない。

大きな殻を背負ったカタツムリがソツ、と相手を見る。感情は読み取れないが、何となく怒っているようにも感じる。

「俺はレベル4の桜と『ファーティライズ・スネイル』をオーバーレイ！」

『行くぞー！』

俺の掛け声に応じて桜はピンク、『ファーティライズ・スネイル』は裏葉柳色うらばやしなみの光に代

わり、上空へと互いに螺旋を描きながら登って行く。

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

そして2つの光の帯は、地面にできた銀河系のような渦へと一気に飛び込んだ。

☆4＋☆4＝★4

「エクシードズ召喚！ 今こそ出でよ、南風に吹かれし堅固なる使者、『L・S ココナツツ・ハンマー』！」

『ぬええええええええええええええええええええええいやつ！』

L・S ココナツツ・ハンマー：ATK 2000

ドシンン！ とアロハシャツに頭にヤシの木を生やした大男が飛び出す。手にした大きな木槌はきつとヤシの木が原材料なのだろう。

キュインキュイン、と周囲を2つの光の玉が旋回が旋回する。俺はその光の玉に向けて話しかける。

「桜、気分はどうだ？」

『悪くないな。というより、平素と何ら変わりはない』

「そっか」

そりや何よりだ。

と、エンヴィーがこっちの状況に苛立ったのか、怒鳴り声をあげた。

「ええい、そんなモンスターが何だっていうんだ！ お前は攻撃をするだけのライフも

残って無いんだぞ！ どの道八方塞がりだ！」

「なら、道を押し開けるまで！ 俺の役割は3人が通れるようにお前の防壁を可能な限

りぶち壊す事だ！」

行くぞ！

『ココナッツ・ハンマー』の効果を発動！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、自分か相手の場のカードを全て裏側表示にする！ 対象は当然お前の

場のカード！ “リバーシング・プレッサー”！

『ぬえい！』

「ぐえっ！」

L・S ココナッツ・ハンマー：ORU 2↓1

パシユン！ と木槌に光の玉が1つ吸い込まれ、大男が木槌を地面に向けて振り下ろす。その衝撃に合わせて上から巨大なヤシの実が降って来て表側表示のカードに押し掛かる。カード達はその重量に耐え切れずに裏側表示になってしまった。

途端、レーザー光線も蛇のような霧も消失し、周囲の状況も貧困に苦しむ国の街頭から美しい浜辺へと様子を変えた。

L・S ココナッツ・ハンマー（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）  
 ランク4

地属性／植物族

ATK 2000 / DEF 2300

「L・S」と名のついたレベル4モンスター×2体

1ターン に1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、自分か相手の場の、このカード以外の表側表示のカードを全て裏側表示にする（モンスターの表示形式はそのまま裏側表示にする）。

この効果で裏側表示になったカードは、次のコントローラーのエンドフェイズまで表側表示にできない。

まだまだ。『ココナッツ・ハンマー』では『エンヴィー』は倒せない。表示形式は変更していない為、殆ど見られない裏側攻撃表示だからだ。

攻撃力は3900、こっちは2000と、倍近い差がある。

だから俺は残った最後の1枚の手札をオープンした。

「そして手札から魔法カード『物語の始まり』を発動！ このカードは、手札の発動時の枚数に応じて効果が変動する！」

物語の始まり（オリジナル）

#### 【通常魔法】

このカードの効果はこのカード以外の手札の枚数によって、以下のように変わる。

●0枚：自分の場に存在するカード1枚をデッキの1番下に戻し、カードを5枚ドロースする。

●1枚以上3枚以下：自分の墓地のカードを任意の枚数デッキに戻し、戻した枚数1枚につきライフを100ポイント回復する。

●4枚以上：デッキからカードを1枚選択して手札に加える。

さあ、もう1度始め直そう。このクソツタレなシナリオに書き換えられた世界を、正

しい方向へ導く為に！

「俺の今の手札は0枚！ よって自分の場の『ココナッツ・ハンマー』をデッキへ戻し、カードを5枚ドロー！」

「く、なんだってそんなドローソースがバシバシ当たるんだよ!」

パキン！ と大男が光となって消え、周囲を旋回していた星も消失する。

済まない、桜。この場はこうするしか無いんだ。

「ドロー！」

これなら、行ける！

「魔法カード『早すぎた埋葬』と『死者蘇生』を発動！ 甦れ、『L・S レストア・チェ

リー』、『L・S ジャベリン・ビー』！ くっ……!!」

『再び推参！ キュア・プロツサム!!』

「効果で俺のライフを700回復！」

L・S レストア・チェリー：ATK 1800

L・S ジャベリン・ビー：ATK 600

黎：LP 900↓100↓800

ぐ、ライフコストが体に負担をかける感覚が分かる……。体の疲労が、ダメージがそろそろ蓄積し始めた頃だ。

……知った事か。俺は自分の命に何の価値も見出した憶えは無い。皆無だ。自分の命なんて、何と比べようとも些事だと思っていた。

でも誰かを、俺以外の誰かを守るのなら、この命を粗末にはしない。それだけの価値があるのなら、その資格があるのならば、俺は戦い続ける！ その意義を完遂するまで生き長らえてやるよ！ 文句があるなら、今すぐ殺しに来やがれ、世界！

「レベル4の『ジャベリン・ビー』に、レベル4の『レストア・チェリー』をチューニング！」

剣を天高く掲げた桜は4つの桜色の星へと姿を変える。その星は緑の幾何学模様の輪となつて一列に並ぶ。

輪の中心を擬人化した槍使いのハチが潜る。輪郭線を残して槍使いは姿を4つの白い星へと姿を変え、やがてその輪郭線も消える。残った4つの星は規則正しく一列に並んだ。

「深緑の恵みが青嵐を駆け抜け、青空へと飛翔し大いなる翼となる！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆4+☆4=☆8

「シンクロ召喚！ 舞いて飛び立て、『L・S ドラゴ・チェリー』！」

『ハアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

L・S ドラゴ・チェリー：ATK 2500

バサッ！ と翼を広げて緑の龍が飛び立つ。背中には騎士の甲冑に身を包んだ桜が座っており、身の丈程もある剣と盾を構えている。

「桜、治療を頼む！ お前の大技で一気に決めるぞ！ 『ドラゴ・チェリー』の特殊召喚に成功した為、俺のライフを10000ポイント回復する！」

『任せてくれ、ライフコスト分の数値は補う！ 緑の恵みよ、風となりて彼の者に祝福を与えよ！』

『『フオレスティ・リザレクト』！』

黎：LP 8000↓1800



「チイツ！ また回復されたか！」

剣と龍の額の角が共鳴するように光輝く。その薄紅色の光は俺を包み、体に蓄積していたダメージと削られたライフを回復してくれた。

まだまだだ！

「マジック装備カード『ブレード・ウイング』を桜に装備！」

龍の翼が銀色の金属に覆われ、骨格の上皮部分に鋭い刃が装着された。

攻撃力は変化しないが、後々の、優達の行動のために必要だろう。

「更に桜のモンスター効果、発動！ 1ターンの1度、自分のライフを1500ポイント支払って発動する！ う、くう……！」

黎：LP 1800↓300

ズシツ、と体全体に大きく負担がかかる。プロテクターに力を注いで維持を続けているから、自分の体の方はほったらかしだ。

『主殿っ！』

「大丈夫、だ……！ そして、自分と相手のライフの合計数値分だけ、攻撃力をアップさ

せる!」

「なんだとお!?!」

L・S ドラゴ・チェリー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）  
星8

風属性／ドラゴン族

ATK 2500／DEF 2100

「L・S レストア・チェリー」＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードの効果は無効化されない。

(1)：このカードの特殊召喚に成功した時、LPを1000回復する。

(2)：1ターンに1度、LPを1500支払って発動する。

このターンのバトルフェイズ終了時まで、自分と相手のライフポイントの合計値分だけ攻撃力がアップする。

この効果は相手の場にモンスターが存在しない場合は発動できない。

(3)：このカードが効果で破壊された時、LPを1000回復する。

(4)：自分のLPが回復した場合、(2)の効果は相手ターンでも発動でき、LPを1500回復して発動する効果になる。

「これが、黎お兄さんの精霊の力……!」

「ライフコストはデカいが、その分強力だな」

「俺の残りライフは300、お前は14700、よって攻撃力は15000ポイントアツブだ!」

L・S ドラゴ・チエリー：ATK 2500↓17500

「こ、攻撃力17500だとお!? テメエ、インチキ効果も大概にしやがれ!」

「ライフをデタラメな数値にまで回復させたテメエの自業自得だと知るが良い!」

『貴様の力、そのまま跳ね返してくれる!』

『『フレグランス・チャージャー!』』

俺のダークグリーンのオーラとエンヴィーの鈍色のオーラが龍と騎士に伸び、全身を覆う。

おお、パワボンリミ解の『サイバー・エンド』を超えた。

まあハツキリ言つてエンヴィーの自業自得だな、こんな攻撃力を相手にするのは。あいつがデタラメな程にライフを回復させたからこうなつたんだ、誰の所為でも無い。

「バトル！ 『ドラゴ・チェリー』で裏側攻撃表示の『七罪士 エンヴィー』を攻撃！」  
 「喰らうが好い！ 我が必殺の一太刀！」

『極・霸桜昇龍斬』！』  
きよく はおうしやうりゆうせん

上空から急降下する龍、その勢いを利用して桜は大剣を振ってエンヴィーに斬りかかった。

「行けえ！」

「届くか!？」

「く、僕の6つ目の能力を発動！ 僕の6番目の効果は、自分の場の僕以外のカードを墓地へ送る事で僕の戦闘破壊を無効にし、発生するダメージをゼロにするのさ！」

エンヴィーは槍の柄で攻撃をギリギリのタイミングで受け止める。が、力の差は歴然としており、そのまま槍は胴体ごと真つ二つに切断された。

次の瞬間エンヴィーは切断された槍の穂先を伏せ状態になった『ネガティヴ・オブ・ネガティヴ』のカードを向ける。リバースカードはその拍子に塵となって消え、エンヴィーの体と槍を構築し直した。

七罪士 エンヴィー（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星10

## 闇属性／戦士族

ATK 3900 / DEF 3600

(1) : このカードは特殊召喚できず、自分の場のモンスターを3体リリースしなければアドバンス召喚できない。

(2) : 1ターンに1度、墓地のモンスター1体を除外する事で、次の自分のエンドフェイズまでその除外したカードの効果を得る。

(3) : このカードが戦闘を行う時、相手モンスターの効果はバトルフェイズ終了時まで無効となる。

(4) : バトルフェイズ終了時、相手の場のモンスター1体を指定して発動する。

そのモンスターを持ち主のデッキへ戻し、そのレベル×200ポイントのダメージを相手に与える。

(5) : このカードがバトルで相手モンスターを戦闘破壊したターン、相手ライフが1000を上回っていれば、相手に1000ポイントのダメージを与える。

(6) : このカードの攻撃力と守備力は元々の数値より低い数値にならない。

(7) : このカードが戦闘によって破壊される時、このカード以外の自分の場のカードを墓地へ送る事で破壊とダメージを無効にできる。

またこのカードがバトルで破壊された時にプレイヤーが受けるダメージは半分にな

る。

「チツ、これで決めたかったんだがな」  
流石にそう上手くは行かないか。

L・S ドラゴ・チェリー：ATK 17500↓2500

「一筋縄では行かないってか？」

「クソが！ リバースカードオープン！ 罠カード『デビル・バインド』！ 発動後、このカードは相手モンスター1体の装備カードとなる！ 装備モンスターはこれ以降攻撃に参加できず、モンスター効果も無効となる！ 更にコントローラーはエンドフェイズごとに装備モンスターの攻撃力の10倍のダメージを受ける！」

「そうは行くか！ 装備している『ブレード・ウイング』の効果を発動！ 装備モンスターが戦闘を行ったターン、相手の場の魔法・罠カードを1枚破壊できる！ 『デビル・バインド』を破壊！」

ブレード・ウイング（オリジナル）

## 【装備魔法】

風属性モンスターのみに装備可能。

このカードを装備したモンスターが攻撃を行ったターン中1度だけ発動できる。

相手の場の魔法・罠カードを1枚破壊する。

この効果を使用した次のターン、この効果を使用する事はできない。

この効果はバトルフェイズ中には発動できない。

デビル・バインド（オリジナル）

## 【永続罠】

このカードは相手ターンのバトルフェイズ中には発動できない。

発動後、このカードは相手モンスター1体の装備カードとなる。

このカードを装備したモンスターの効果は無効化され、攻撃できない。

装備モンスターのコントロールラーは自分のエンドフェイズごとに装備モンスターの攻撃力の10倍のダメージを受ける。

ビュン！ と刃の翼がカマイタチを巻き起こす。風のブレードはそのまま伸びて来た悪魔の手をキレイな切り口で切断した。

『飢餓枯渴国家』はセット状態となったので効果は発動できない。墓地にも送られて無いので、デッキから同名カードをリクルートする事も不可能だ。

「更にカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 300

手札：0枚

フィールド

：L・S ドラゴ・チェリー（ATK 2500）

：伏せカード2枚、ブレード・ウイング（装備魔法・『L・S ドラゴ・チェリー』に  
（装備）

「大したモンだよ、黎。僅か1ターンでここまで形勢を逆転させた」

「なんだか、僕達にも希望が見えて来たよ！」

「俺じゃ無い。それは皆が諦めなかったからだ」

諦めない心は、時に奇跡を呼び起こす。その証明の一端を、俺は手伝ったに過ぎない。「さあ、奇跡を起してみろ！ お前らが本当にデッキを信頼し、信頼されるデュエリストなら、奴を倒せる！」



「おおー」「はい！」「うんー！」

俺にできる事は全てやった。後は野となれ山となれ、だ。頼むぞ、3人も！

「俺の、ターンー！俺は手札から魔法カード『命削りの宝札』を発動！デッキから手札が5枚になるように互いに互いにカードをドロウする！ただし5ターン後、手札を全て捨てなくてははいけない！ドロウー！」

瞬時に優の手札が補填される。

「魔法カード『ミラクルシンクロフュージョン』を発動！墓地から『デブリ・ドラゴン』と『フォーミュラ・シンクロン』を除外融合！出でよ、『フュージョン・シンクロン』！」

フュージョン・シンクロン（融合・チューナー・効果モンスター）（ZET先生オリジナルカード）

星2

光属性／機械族

ATK 300 / DEF 700

シンクロモンスターのチューナー＋チューナー

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが融合召喚に成功した時、自分の手札を任意の枚数、墓地に捨てて発動することができる。

捨てた枚数分だけ、除外されたモンスターを墓地へ戻す。

1ターンに1度、自分の墓地に存在するモンスター1体を除外し、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のレベルをエンドフェイズ時まで除外したモンスターレベルと同じにする。

フュージョン・シンクロン：ATK 300

「な、なんだそのモンスターは!？」

「まだ終わりじゃ無い。効果で手札を2枚捨てて『フォーミュラ・シンクロン』と『デブリ・ドラゴン』を墓地へ戻す。更に『ジャンク・シンクロン』を召喚！そして効果で『フォーミュラ・シンクロン』を蘇生する！」

『タツ!』

『ヤツ!』

ジャンク・シンクロン：ATK 1300

フォーミュラ・シンクロン：DEF 1500

瞬時に展開する3体の“シンクロン”。内1体は、きつとあのモンスターへの布石だろう。

さあ、見せてみる、お前の奇跡を！

「手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！ 復活せよ、『シューティング・スター・ドラゴン』！」

『キュオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

シューティング・スター・ドラゴン：ATK 3300

「く、だがそんなザコを何体並べようとも無意味だ！」

「そのセリフは俺の相棒を見てから言うんだな！ 最後に俺は『フュージョン・シンクロン』の効果を発動！ 『邪天使の施し』の時に墓地へと送った『サルベージ・ウォリアー』をゲームから除外し、エンドフェイズまで『シューティング・スター・ドラゴン』のレベルを『サルベージ・ウォリアー』と同じ5に変更する！」

シューティング・スター・ドラゴン：☆10↓5

合計のレベルは……、12！

「レベル5となったアクセルシンクロモンスター『シューティング・スター・ドラゴン』に、レベル3のチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』、レベル2のシンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』、レベル2の融合チューナー『フュージョン・シンクロン』を……、デルタチューニング！」

「で、デルタチューニング!? 何だあそりや!?!」

オレンジのエンジニアがスターターを引っ張り、レーシングカーの戦士がタイヤが真っ赤になるまで回転数を上げ、融合チューナーが神秘の力を全身に満ちさせる。

そして合計で7つの星となる。それぞれ白が3つ、黄色が2つ、薄紫が2つずつ。色違いの7つのリングは一列に並び、その中を光輝く流星の龍がその中を高速で潜り抜けた。

「流星よ、光を超え……、次元を超え……、更なる高みへ上り……、その輝きで世界を照らせ！」

「来る、優の最強モンスター！」

「パパの相棒！」

「優の最強にて最高のモンスターか……」

『見せてもらうぞ、お主の力を』

☆2 + ☆2 + ☆3 + ☆5 || ☆1 2

「シンクロ召喚！ 舞い降りよ、『シューティング・ブレイザー・ドラゴン』ツ!!!」

『さあ、私が相手をしましょう、邪神の眷属よ!』

シューティング・ブレイザー・ドラゴン（シンクロモンスター）（ZET先生オリジナ

ル)

星12

風属性／ドラゴン族

ATK 5000 / DEF 4000

融合モンスターチューナー1体+シンクロモンスターのチューナー1体+チューナー1体+「シユールティンク・スター・ドラゴン」

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果の発動を無効にし、破壊する。

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のフィールドまたは墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスターを除外する事で、1体につき攻撃力を300ポイントアップし、除外したモンスターのモンスター効果を得る。

このカードがフィールドから離れた時、「セイヴァー・スター・ドラゴン」1体をモンスター効果を無効化にして、エクストラデッキから特殊召喚する。

キラキラと、光の粒を散らしながら雲の果てから降臨する龍。神と崇められてもおか

しくない存在であり、邪の存在であるエンヴィーと対極に位置する力を放っている。

シューティング・ブレイザー・ドラゴン：ATK 5000

「攻撃力5000、『F・G・D』と同じだとお!？」

「これで終わりじゃないぞ! 『シューティング・ブレイザー・ドラゴン』の効果を発動!  
! 自分の場と墓地のドラゴン族シンクロモンスターを任意の枚数ゲームから除外し、  
その数×300ポイント攻撃力がアップする! 俺は墓地の『スターダスト・ドラゴン』、  
『シューティング・スター・ドラゴン』、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』、『スカ  
レット・ノヴァ・ドラゴン』を除外し、攻撃力を1200ポイントアップさせる!」  
『さあ、戦士達よ、今一度私と共に!』

シューティング・ブレイザー・ドラゴン：ATK 5000↓6200

「更に除外したモンスターの効果を使用できる! まずは『スカーレット・ノヴァ・ドラ  
ゴン』の効果で、墓地のチューナーモンスター1体につき攻撃力を500ポイントアッ  
プさせる!」

俺達の墓地にはこれまでの14体に加えて『ジャンク・シンクロン』、『フュージョン・シンクロン』、『レストア・チェリー』の合計17体となった。よって攻撃力は8500ポイントアップ！」

『漲って来ました、戦士達の魂が！』

シューティング・ブレイザー・ドラゴン：ATK 6200↓14700

空中に浮かぶ17体のチューナー達。その1体1体が光へと姿を変え、光の龍へと収束していった。

「攻撃力14700だとおおっ?！」

「そして『シューティング・スター・ドラゴン』の効果を適用! 1ターンに1度、デッキからカードを5枚めくり、その中のチューナーの数だけ攻撃を行える!」

「バカめ! お前のデッキは後何枚ある!? その中にチューナーが何体あるのかは知らないが、精々が1枚だ! 最悪1枚も引けずに攻撃できないんだぞ!!」

確かに、エンヴィーの言う通り優のデッキは残り10枚を切っている。ここからチューナーを複数枚引き当てる確率は非常に低いだろう。

だがな……。



「エンヴィー、知ってるか？ 真のデュエリストは、デッキに入っていないカードですら呼び寄せ、新たなカードを創造するそうだ」

「な、貴様が真のデュエリストだと!? 冗談も大概にしろよ!」

「それはこつちのセリフだよ!」

エンヴィーの激昂に対し、有栖が叫び返す。

彼女の背後には、何か灰色の大きな生物が見えた。

「優は真のデュエリストだよ! ボクが保証する!」

「私だって保証するよ! パパは最高のデュエリストだ!」

「少なくとも、お前のような、感情だけで1人を集中攻撃するようなカスとは違う」

俺の言葉にエンヴィーは驚いたように目を見開く。

「俺が気付いてないとでも? お前は俺か優を、全体攻撃の回以外は常に攻撃の対象に

選んでいる。一度だけ有里ちゃんを攻撃対象に選んだが、それも優に対する精神攻撃だった」

憎いんだろう? 俺の問いかけにエンヴィーは沈黙した。それはつまり肯定の意味。

「お前の名はエンヴィー。和訳すれば“嫉妬”を意味する。だからお前は本来なら真っ先に仕留めるべき、邪神の敵である俺だけでなく幸福な交際関係を持つ優も同時に狙ったんだろう? 自分の中の“嫉妬”の炎の意思に従ってな」

「くっ……」

「成程な、そういう事なら遠慮はいらねえな。シャイニング・ドロリーなんて持つてないが、デツキがデュエリストの思いに応えてくれれば、奇跡は起こる。その証明を、今からしてやる！」

『さあ未だ眠りし同胞達よ、我らに力を貸したまえ！』

チャツ、と優がデツキトップに手を乗せる。その瞬間、デツキトップがキラリと光ったような気がした。

「行くぞ、まずは1枚目！ チューナーモンスター『クイック・シンクロン』！」

1枚目は、ガンマンスタイルの汎用性“シンクロン”チューナー。半透明の姿で俺の上で待機する。

「続いて2枚目！ チューナーモンスター『極星獣グルファクシ』！」

2枚目は、黒いタテガミの屈強な馬である“極星”チューナー。赤色の瞳を爛々と輝かせながら優の傍らで半透明の姿で待機。

「次は3枚目！ チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』！」

3枚目は、オレンジ色のエンジニアスタイルの“シンクロン”チューナー。汎用性が同じく高く、眼鏡を光らせながら有栖の前で半透明になって待機している。

「更に4枚目！ チューナーモンスター『ダーク・リゾネーター』！」

4枚目は、背中に共鳴装置のドラムを背負った悪魔。笑って音叉を響かせながら、有里ちゃんの周囲を半透明で浮いて待機中。

ここまででチューナーのカードは4枚。優、もしお前が真のデュエリストなら、5枚目のカードも……！

「そして、5枚目え！ チューナーモンスター『トラスト・ガーディアン』！」

5枚目は赤い帽子を被った天使。白い羽を羽ばたかせながら俺達4人の上で半透明で飛びつつ待機した。

成程、これは俺達4人の姿の一端を表しているのか。

俺は変幻自在、というより多数の種類のカードへの進化を示し。

優はその最強の力、神域の一端を表し。

有栖は機械族のエキスパートの象徴を具象化し。

有里ちゃんは『スカーレット・ノヴァ』繋がりからあのパワーの象徴を示唆し。

そして俺達の結末を、あの天使が証明するかのように舞う。

「チューナーの数は5体！ よって攻撃回数は5回だ！」

「ば、バカな……！ そんなバカな事があ！」

「行くぞ。『シューティング・ブレイザー・ドラゴン』で『七罪士 エンヴィー』を攻撃！  
『シャイニング・ブレイズ・ストライカー』五連打アアアアアアアアアアアアッ！」



ソウトレス・リロード（オリジナル）

【速攻魔法】

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送る。

自分の墓地からモンスターを、召喚条件を無視して可能な限り守備表示で特殊召喚する。

特殊召喚したモンスターの攻撃力と守備力は0となり、モンスター効果は無効となる。

この効果で特殊召喚したモンスターはカード効果では破壊されない。

「蘇れ、『バーサーク・デッド・ドラゴン』、『地底のアラクネー』、『アシッド・ゴーレム』、『傾き悪魔の天秤』！」

『ジイオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

『キヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

『ムウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

バーサーク・デッド・ドラゴン：ATK 3500 ↓ 0 / DEF 0

地底のアラクネー：ATK 2400 ↓ 0 / DEF 1200 ↓ 0

No. 30 破滅のアシッド・ゴーレム：ATK 3000 ↓ 0 / DEF 3000

↓ 0

傾き悪魔の天秤：ATK 3000 ↓ 0 / DEF 3000 ↓ 0

チツ！ コスト要因を確保されたか！

「ならばそのまま攻撃だ！」

『消えなさい！』

五条の光の矢が死の龍、クモ女、酸の巨人、黒い天秤を直撃し、跡形も無く消し飛ばす。最後の一撃を受けたエンヴィーは槍で辛うじて受け止め、伏せていたカードに手を伸ばす。

「セツト状態の『殺人レーザー検問装置』をコストに、ダメージと破壊を無効にする！」  
黒い霧が再び発生し、エンヴィーの傷を癒す。

これで、優の攻撃は終了。手札も無い以上、彼に打てる手はもう無いだろう。

『く、う！ まさか私の最大級の力を』

「っ！ 『シユールティング・ブレイザー』でも、ダメなのか……っ!？」

「いや、そうでも無い」

歯を軋ませて悔しがる優に、俺はそう答える。

「お前のお陰で、エンヴィーの破壊無効のコストはもう1枚しか残っていない。『飢餓枯渴国家』の効果で同名カードをサーチされても、残り2回だ。それに、そんな上手く行ったら面白く無いだろ?」

「……、そうだな。ターンエンド!」

優 : LP 100

手札 : 0 枚

フィールド

: シューティング・ブレイザー・ドラゴン (ATK 14700)

: 魔法・罨無し

「さて、優も黎も頑張ったんだ、ボク達も頑張ろう、有里?」

「はい!」

「いい返事だね。ボクのターン、ドロー!」

【BGM：創聖のアクエリオン】

「ボクは手札の『イエロー・ガジェット』と『マシンナーズ・ギアフレーム』を墓地へ送り、『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚！ 『一族の結束』の効果でパワーアップ！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 2500↓4100

何度目か分からないが、勢いよく飛び出すタンク戦車。機械だから過労死の心配は無い、ハズ。

「更に手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！ 優の墓地から『アンノウン・シンクロン』を特殊召喚！ 更に黎の墓地から『ボルト・ヘッジホッグ』を自身の効果で特殊召喚！」

アンノウン・シンクロン：ATK 0

ボルト・ヘッジホッグ：ATK 800

シューティング・ブレイザー・ドラゴン：ATK 14700↓14200



「有栖……………」 「ママ……………」

「見てて！　これが、ボクの起こす奇跡だから！」

ス、と有栖が空へと掌を伸ばす。

チューナー、『ボルト・ヘッジホッグ』、レベルの合計は10……。覚醒したカードは恐らく……………」

「レベル7の『マシンナーズ・フォートレス』と、レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル1の『アンノウン・シンクロン』をチューニング！」

赤目の丸い機械が1つの緑の輪に変わり、その中を輪郭線だけの戦車とハリネズミが潜り抜ける。

「愛の奇跡、ボク達を守る光の盾となれ！　無限の希望よ、強大なる悪を撃ち滅ぼせ！」

☆1+☆2+☆7=☆10

「シンクロ召喚！　煌めく砲撃の王者、『マシンナーズ・ブラスタ・ドラゴン』！」



このカードはフィールド及び墓地に存在する時、「ドラゴン族」としても扱う。

(1) : S 召喚されたこのカードは破壊されない。

(2) : このカードが相手によって墓地に送られた時、相手のフィールド・手札のカードを4枚まで破壊できる。

(3) : 墓地のこのカードを除外して発動する。

「マシンナーズ・フォートレス」1体を墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚した場合、このターン機械族モンスターは破壊されない。

マシンナーズ・ブラスター・ドラゴン : ATK 3800 ↓ 5400

シューティング・ブレイザー・ドラゴン : ATK 14200 ↓ 14700

「やった、出来たよシンクロ召喚！」

「やるじゃねえか、有栖」

「へへへ！ 何かクセになるかも！」

重低音を響かせながら機械の龍はエンヴィーを睨みつける。赤色に光る瞳が敵を捕らえ、照準を合わせる。

「さあ行くよ！ 『マシンナーズ・ブラスター・ドラゴン』で攻撃！」

「ううう……っ！」

『TARGET , LOCK ON .』

「未来の僕達の、愛に溢れる家庭を壊す奴は消えちやえば良いんだあつ！ 必殺う……」

！ アルティメット・フルブラスター・デストロイヤー！」

『ULTIMATE FULL BLASTER DESTROYER“ FIRE  
!』

機械の合成音と共に、機械龍の砲門が全て開く。口からは高出力のビーム砲が、脇腹からは高熱のレーザーが、翼のミサイルは次から次へと射出され、爪のブレードも射出装置で撃ち出された。

更に腹部が開いて中からガトリング砲が出て来て火を噴き、膝の砲門がカノン砲の引き金を引き、肩のブラスターガンは強力な熱線をぶちかます。

正しく、仇成す敵を木端微塵に粉碎する為の集中砲火だった。

「くっ！ だが、セット状態の『飢餓枯渴国家』をコストに破壊とダメージを無効にする！ 更にデツキから『飢餓枯渴国家』を発動！」

そう、エンヴィーはこの砲弾やレーザーの雨の中でもピンピンしているのだ。だが、それならばこうするまでだ！

「だったら！ 有栖、俺の左の伏せカードを使うんだ！」

「OKだよ！ 僕は黎の左の伏せカードをオープン！」

「速攻魔法『リベンジ・アタック』！」

マシンナーズ・ブラスター・ドラゴン：ATK 5400 ↓ 6400

「な!？」

「このカードは、僕のモンスターがバトルで相手モンスターを破壊できなかった時に発動できる！」

「戦闘破壊に失敗した自分のモンスターは攻撃力を1000ポイントアップさせ、更なる攻撃の権利を付与される！」

リベンジ・アタック（アニメオリジナル）

【速攻魔法】

バトルで相手モンスターを破壊できなかった時、攻撃を行ったモンスターの攻撃力を1000ポイントアップし、もう一度バトルする事が出来る。

「悠久の愛の力をもう一度受けてみる！ “アルティメット・セカンド・フルプラス

ター・デストロイヤー”！」

『ULTIMATE SECOND FULL BLASTER DESTROYER  
R“FIRE”!』

再び響く重低音。残っている弾丸も砲弾もレーザーやビームのエネルギーを全て注ぎ込んだ集中砲火が爆炎と煙をあげてエンヴィーに降り注いだ。

「ぎゃあああああつ！ き、『飢餓枯渴国家』をコストに無効にするっ！」

シユウウウウ、と砲門が煙をあげてオーバーヒートを訴える頃には、全身がポロポロになり始めていたエンヴィーがそこにいた。

マシンナーズ・ブラスタードラゴン：ATK 6400↓5400

「つちや、仕留めきれなかったか……」

『しぶといな』

『But, theres already no card in order  
to pay cost. (ですが、もうコストとして払えるカードは存在しません)』

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだよ」

有栖 : LP 400

手札 : 0枚

フィールド

: マシンナーズ・ブラスター・ドラゴン (ATK 5400)

: 伏せカード1枚、一族の結末 (永続魔法) ×2

「ギ、ギイツ！ このクソどもがああ！」

「ナイスファイトだぜ、有栖！」

「良いぞ、後一歩だ」

「有里、止めを！」

「はい！ 行きます、これが私達のラストターン！」

『ドロー！』

シャキン！ とカードが煌めいた。

「ママ！」

「オツケー！ リバースカード、オープン！ 永続罠『リビングゲットの呼び声』！」

掛け声と共に表側表示になる罠カード。母娘の息が合わさった一瞬だ。

「蘇って! 『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』!」  
『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン：ATK 3500↓12000

「こ、攻撃力、12000?!」

「有里ちゃん、俺の伏せたカードが分かるのなら、君の手札は“あのカード”のハズだ。なら、遠慮無くやっちゃいな!」

「はい! 魔法カード『融合』を発動します! 場にいる4体のドラゴン族シンクロモンスターを融合!」

『行くぞ!』

『参ります!』

『FUSION MODE , STAND BY !』

『グガオオオオオオオオオオオッ!』

次元が捻じ曲がる。桜は桃色、『シューティング・ブレイザー』は白、『マシンナーズ・キャノン』は銀色、『スカーレット・ノヴァ』は赤い光に包まれ、時空の渦の中で1つになつた。



「治癒の龍よ！」「星光の龍よ！」「鋼鉄の龍よ！」「獄炎の龍よ！」  
「二」「今こそ一つに重なり新たな姿に生まれ変われ！ 融合召喚!!」「三」

「これが私達の絆の証しです！ 光臨せよ、『シューティング・シャイニング・ドラゴン』  
！」

『キィオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

青い光に包まれ、4対8枚の翼を織りなす、コバルトブルーの龍が舞い降りる。

サファイアブルーの瞳で敵を見るその姿は優しくも勇ましくあり、『シユテーイング・クエーサー・ドラゴン』のように二本足で青空に浮いている。

シユテーイング・シャイニング・ドラゴン：ATK 6000

「こ、攻撃力6000だとお!？」

「『F・G・D』を上回るとは……………!」

「凄……………!」

「これが、結束の力の証明か……………!」

キラキラと輝く孤高の光、されども温かく、力強い意志が、俺達の中へと満ちていく。

「これでフィニッシュにしましょう! 『シユテーイング・シャイニング・ドラゴン』で

『七罪士 エンヴィー』を攻撃!」

「『光天断罪撃』!」

「『スターライト』!」

「アサルト・！」

「ブレイカー」アアアッ！」

キュイイイイイン！ と青い龍の口元に神々しい光が集まる。光天断罪撃 ス

ターライト・アサルト・ブレイカー」の光は一条の矢となり、エンヴィーを襲った。

「させるかあ！ 『ソウトレス・リロード』の効果で墓地へ送られた『イーヴィル・デیفエンサー』の効果発動！ 墓地の同名カード3枚をゲームから除外して攻撃を無効化！ そして攻撃モンスターをデッキへ戻すう！」

イーヴィル・デیفエンサー（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星1

闇属性／魔法使い族

ATK 1000 / DEF 1000

（1）：このカードが戦闘によって破壊された時、お互いのプレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。

（2）：相手の攻撃宣言時、このカードを墓地から除外して発動する。

墓地に存在する同名カード3枚をゲームから除外して相手モンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターをデッキへ戻す。

この効果は1ターンに1度しか使えない。

(3)：このカードがゲームから除外された時に発動する。

自分フィールドの全てのモンスターは以下の効果を得る。

●このカードは1ターンに1度戦闘では破壊されず、戦闘によつて発生するダメージも0になる。

「僕は『飢餓枯渴国家』を全て除外し、『シユーツィング・シャイニング・ドラゴン』をバウンスだあ！ 消えろよ、紛い物の絆が僕に勝てるワケが無いんだよ！」

光線を受け止めた不気味に笑う魔導師が放つ閃光を浴びる『シユーツィング・シャイニング・ドラゴン』。だが、閃光が止むとそこには青い龍が当然のように浮いていた。

『シユーツィング・シャイニング・ドラゴン』は相手のカード効果を受け付けません！

私達の本物の絆は、貴方の罪なんかには負けはしない！  
「なんだとおっ?」

シユーツィング・シャイニング・ドラゴン（融合・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

光属性／ドラゴン族

ATK 6000 / DEF 6000

レベル8以上のS召喚されたドラゴン族Sモンスター×4体以上

このカードの融合召喚成功時にお互いは魔法・罠・モンスターの効果を発動できない。

(1) : このカードは融合召喚以外の方法で特殊召喚できず、融合召喚されているこのカードは相手の効果を受けない。

(2) : このカードは1ターンに2回まで戦闘では破壊されず、このカードが相手のカードの効果でゲームから除外された時、相手の場と手札のカードを全てゲームから除外する。

(3) : 相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

(4) : このカードに「融合解除」が適用された場合、素材となったモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚できる。

「だ、だが、それでもこっちは『イーヴィル・ディフェンサー』の効果で健在！ 次のターンに引くカード次第でまだ戦局は引つ繰り返せるぞ！」

「いえ、このターンで終わりです」

「な、フザけんな！ お前らに何ができるんだよ！ もうそのチビガキには手札は無い！ 赤髪女の伏せカードだって使ったし、その横の男には魔法も罫も伏せて無い！ そして“騎士”の場だつ、て……………、はっ!?」

ふ、気付いたようだな？

「そうだ。俺の場にはまだリバースカードが1枚だけ残っている。お前はそれを失念していたんだよ」

「あ、あああああああああああああああああああああああああああつ  
！」

俺の伏せたこのカードを今回はデッキに入れた覚えが無い。だと言うのに巡って来たという事は即ち、このカードを使う機会がやって来ると来るという事。

果たして、その予想は大当たりだったという訳だ。

「これで、終わりだあ！ 速攻魔法発動！」

「『融合解除』！」

瞬時に青い龍の融合が解除される。

青い光は桃色、白、銀色、赤の光へと分かれ、それぞれ元となった龍が有里ちゃん  
の場に現れた。

『再び推参だ！』

『さあ、終わりにしましょう！』

『FINAL MODE , SET UP !』

『ゴガアアアアアアアアアアアアッ!』

L・S ドラゴ・チェリー：ATK 2500

シューティング・ブレイザー・ドラゴン：ATK 5000

マシナーズ・ブラスター・ドラゴン：ATK 3800↓5400

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン：ATK 3500↓12000

さあ、フィニッシュだ!

「まずは桜さんの効果でライフを回復します!」

『治癒術は任せてくれ。はあっ!』

有里：LP 700↓1700

「バトルです! 私の『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』で『七罪士 エンヴィー』を攻撃!

どんな真つ暗な未来でも明るく照らす! 私達の希望の光で! バーニング・ソウル!」

















「邪神様あ！ 申し訳ございませんっ！ 邪神様、万歳！ 万歳、万歳、ばんざあああ  
あああああああああああああああああああああああああああああ  
いっ  
！」

最後の攻撃で派手に吹き飛んだエンヴィーは、空へと向かって手を伸ばしながら叫ぶ



と、プライドとおなじように真っ黒な塵となって消え去った。

「ぜえ……、ぜえ……っ！ これで、後5人……っ！」

「動くな、まだ休んでいろ」

思っていたよりも俺の身体は既にギリギリだったらしく、アチコチが悲鳴をあげている。

そんな俺に、優と有栖が包帯を巻いたり（俺が持参した）、桜が治療術をかけてくれたりしているのが現状だ。

「あ……」

「カードが……」

有栖と有里ちゃんの声聞いてそちらを振り向くと、『マシナーズ・プラスター・ドラゴン』と『シューティング・シャイニング・ドラゴン』が光を発し、真っ白な無地のカードになっていた。

「大丈夫だよ。きつとピンチになった時、再び力を貸してくれる」

だって、絆がそう簡単に消えたりするハズ無いじゃないか。

そう言うと、3人は納得したように頷いた。

「それにしても、ありがとう。お陰で一人、邪神の護衛を倒す事ができた」

「気にしないでよ。ボク達のためでもあるし、何より君を助けたかったからね」

「未来を守るといふ点では、俺達は同じ志の元で戦った。お互い様だ」

「水臭いですよ、黎お兄さん？ 私達、友達で仲間じゃないですか」

有栖がニコツ、と笑う。好い女性特有の素敵な、眩しい笑顔だ。彼女を貫える優は幸せ者だな。

それに対し優は薄く、ニヒルに笑う。しかし、その小さな表情の変化には優しい思いやりの心が込められている。

そして有里ちゃん心の心からの発言。きつと未来の二人に真つ直ぐに、素直な子に育ててもらったのだろう。幸せな家庭である証拠だ。

「それでも、ありがとう。命まで危険に晒して、俺を助けてくれて」

ふう、眩しいなあ。こういう幸せは見ているだけで眩しくて仕方が無い。

俺も、こんな幸せが欲しかった。

普通の家庭に生まれ、普通の生活をし、普通に恋に落ちて結婚し、普通に死にたかった。

でも俺は普通の家には生まれず、普通の暮らしをできず、恋にすら落ちず、死に方も普通じゃ無かった。

「本当にありがとう」

普通も、幸せも、俺とは縁遠い。

だからこそ、俺は無い物を求めない。求めれば、それを取れない人が出て来るだろうから。

世界はどこまで行っても不公平で、異端には冷たい。だからこそ、俺はこんな「普通」の人達が俺達の領域（バケモノ）に来るのを止める必要がある。異端に、させてはいけないから。「もう……。そうだ、PDAで写真撮ろう？ 思い出を保存する為に！」

「悪くないな」

有栖の案の元にパシャリ、と写真撮影が行われる。セルフタイマーで優、有栖、俺のPDAのメモリーに4人（+精霊2体）の写る画像が保存される事となった。

「有里、もう少し右だ」

「パパとママの間じやダメかな？」

「桜さん、顔が切れてる。」

『『シューティング・ブレイザー』、もう少ししやがまないと、足しか……』

ピピツ、パシャ！ 軽快な音と共に画像が1つ追加される。

そこには、幸せそうな三人家族とその友人が、そして精霊が写っていたのであった。

この一刹那は閃きの間に消え去る。されども、今の一瞬の思い出は俺達と写真が確かに存在した事を証明している。

幸せの欠片が、また1つ手に入った気がした。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 39 : 黎の決意の正体

——レッド寮から北へ約500メートルの位置・AM 5 : 19

SIDE : 黎

「ふう、戻って来たか」

異世界でエンヴィーを撃破し、俺は元の世界へと帰って来た。私は帰って来た！ と  
か言いません。故郷じゃねえし？

天空一家との別れは寂しいが、避けられない事だ。きつと彼らも向こうでまた楽しく  
も輝かしい毎日を過ごす事だろう。俺にはそれを止める権限は無い。

気を取り直してワープの範囲外に置いておいた電波時計を見ると、ちょうどワープの  
翌々日の早朝だった。どうやら向こうで過ごした時間はこっち換算で数時間でも、ワー  
プする際に時間がかかるようだ。時間にしてぎつと1日半、停学として申請した日にち  
をジャストで消費した計算だ。

本来なら一日なんて時間を休学扱いにはできないのだが、その辺は校長先生の辺りが取り計らつてくれるらしい。優しい先生だ。

「ん……っ」

パキパキ、と骨を伸ばす。今日は平日なので授業がある。早く自分の部屋に戻つて支度をしないとな。

——アカデミア教室・AM 8:02

「おはよう、皆！」

『おはよう(ご)ございます(ツス)(なんだな)！』

教室に着くと、十代達は既に席に着いていた。

こういうやりとりは青春時代ならではの、だ。今の内に堪能しないと、大学ではこんな事はほぼ有り得ないからな。

「黎、大丈夫？ 包帯巻いてるけど」

「大丈夫。出血はもう止まってるし、痛みも無い。昼には取れるさ」

授業が始まるまでまだ暫く時間がある。皆が興味津々といった様子なので、俺は早速、エンヴィーとの戦いを大まかに纏めて話した。

「と、まあこんな感じ」

「頑張ったんだね、偉いよ」

「ガキ扱いは止めてくれ、フィオ。これでも元々は21だったんだぜ？」

「遊馬崎さんはよくそんなデタラメなカードを相手にできましたわね」

「はは、オレだったら根をあげていただろうな。研究しても勝てるものじゃなさそうだ」

「流石だな、黎！」

「ありがとな。2つ目の鍵は開いたし、明日の夕方にまた出発する予定」

キュイン、と右掌からホログラフが現れる。魔法陣の円に5つの門のような物がある。その見た目は、エンヴィーを倒した後、こちらに戻って来て暫く経った時に現れたもの。門が差さりそうな跡が2つ存在する事から、恐らく護衛を1人仕留めることに1つ外れる仕組みなのだろう。

何故今まで現れなかったのかは不明だが、もしかしたら転送用の魔法陣が関係しているのかも知れない。『コザツキー』や『ブラッド・マジシャン』のお陰なら、菓子折りでも持つて行くべきなのかな？

「はあ、僕達がいる世界以外にもデュエルモンスターズが……」

「もしかしたら、あっちにも十代や翔がいたりしてな」

「おっ！ そりや面白そうだな！ 俺自身かあ……、デュエルしてみてえな！」

「アンタ、いつもそればかりなのね……」

「まあ、それが十代なんだな」

少年のワクワクの心で目をキラキラさせる十代にジユンコが半眼で突っ込む。隼人のフォローも入るが、微妙になつてないような……。

キーンコーンカーンコーン

「お、授業が始まるぞ」

「席に着きましよう」

明日香の言葉に、俺達は三々五々、席へと着きに行つた。

今日の6時限目は大徳寺先生の錬金術だ。



化学の基礎となった錬金術は、やっている事こそ中世のそれだが、同時進行で現代の化学もやっている。

卑金属、つまり銅や鉄を金や銀に変えるのが錬金術。馬鹿にするなかれ、中世のその試みが無ければ現代化学は確立しなかったのだ。

キーンコーンコーン

と、ここで授業終了のチャイムが鳴る。

「それでは、これで今日の授業は終わりなのニヤ。宿題は無いので、しつかり復習するようにして下さいニヤ」

大徳寺先生の言葉に、クラスの委員長が号令をかける。

「気をつけ。礼ー」

『『『ありがとうございましてー』』』

これで、本日の授業はお終い。鞆の中に教科書とノート、筆箱その他をしまう。と、こちらに何人かが歩いて来た。

「こんにちは、遊馬崎くん。今日もお願います」

深緑の短髪にワインレッドのフレームの眼鏡の少女。学年委員の委員長と風紀委員を務め、見た目からも役職からも通称は「委員長」、原麗華。

「ボウヤのお陰で色々強くなれた、いつでもシマシマしよう？」

藤色のツインテールに色々とアダルティな発言。体の成熟具合も、一部のファン層の言葉を借りれば「大人のお姉さん」。『ゆきのん』のあだ名を持つ、藤原雪乃。

「え、と、じゃあお願ひします」

おろおろした話し方で常に自信無さげ。ショートカットでやや影が薄いというのが目下の悩みのタネである恐竜使い、宇佐美彰子。

この他、人気ランキングの上位ランカーである爽やか系（後に英語を混ぜたイヤミ系）ブルー男子の田中康彦や誤解の多い正統派ツンデレキャラ（本人は否定）のツアンディレ、明るく朗らかなブラウンのショーカット少女の加藤友紀など、様々なメンバーが俺の周りに集まって来た。

放課後の教室の使用は自由だったし、それじゃあ。

「オーケー、始めよう」

始める、といっても別に如何わしい事をする訳では無い。というか、カタブツで融通が利かない委員長がそんな事を承認する事は有り得ない。

ちなみにこの事を本人に言うと、

「確かにそうですね。まあ百歩譲って、行為そのものは自己責任として見逃しますかも知れませんが、校内では絶対に認めません」

との事だ。思ったよりも融通が利くんだね。

そしてこの後、

「私にも好きな人くらいできるでしょうからね。自分の首を絞める役職である事は認めますが、絞めすぎて窒息死してしまつては本末転倒ですから」

らしい。序に言うと、この後「乙女に何を言わせるんですか／＼／＼」と怒鳴られた。いや、自爆ですよ原さん？

そんな彼女であるが故に、風紀を無視する藤原や協調性の無い（というか素直に協力姿勢を取れない）デイレとは相性が悪い。

さて、話がズレたが、何を始めるかと言えば、自習だ。

「つまり、儀式モンスターや融合モンスターは、正規の方法で1度特殊召喚しないと、墓地から特殊召喚はできない。この制限を『蘇生制限』と言います」

そう言つてディスクのプロジェクターの映像を拡大（勿論、普通のディスクにはこん

な機能は無い。自力で改造した）して説明する。

事の始まりはプライドとの初戦の後、デッキ構築のアドバイスやカードについて色々な人に享受していたところ、授業に復帰した際の放課後にも教えてほしい人が殺到。保健室に入室制限がかけられていたらしく、本当はこんなに教えてほしい人がいたのかと、あの時は少々度肝を抜かれたものだった。

で、俺からアドバイスを貰った人達が次々とデュエルで好成績を収めているため、俺に教わる $\parallel$ 強くなれるという方程式が生まれ、いつの間にかかなりの人数の教え子ができてしまったのである。

そんなワケで、1日に30分程、男女や階級の区別無く俺はこうしてカードの講義をしているのです。いやはや、生前にwikiを何度も見ていたお陰で色々知識がついたよ。うん、wiki万歳。

「それじゃ、今日最後の問題は昨日やった『王宮のお触れ』についてです」

### 王宮のお触れ

#### 【永続罫】

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外のフィールド上の罫カードの効果は無効にする。

「ご存じの通り、このカードは一切の罍の効果を無効にします。これと魔法カードを封印するモンスター効果を組み合わせたデッキが強力なロックです。加藤さんや石原さんが使っているのがそうですね」

皆の視線が加藤友紀と石原周子に集まる。加藤は『サイレント・ソードマン』を利用した【お触れサイレント】または【お触れビート】、石原は『ホルスの黒炎竜』を利用した【お触れホルス】のデッキを使用する。

これがハマリやすく困る。僅か数ターンでロックが完成し、こちらの動きが完全に封じられてしまう事もある。

俺自身、彼女達の前に何度辛酸を舐めた事か。それでも『ならず者傭兵部隊』や『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』なんかを引き当てる毎度勝利する俺は褒められても良い。

「そして、こちらは『裁きを下す者ーボルテニス』と『冥王竜ヴァンダルギオン』。どちらもカウンター罍をトリガーに場に特殊召喚できるモンスターです」

ここまでは皆、理解できているらしく、理解の目をしている。

「実は、この2枚のカードの中で『王宮のお触れ』発動中に自身の効果で場に特殊召喚できるモンスターがいます」

この俺の言葉と同時に「え?」、「マジで?」、「知らなかった」、「相変わらずの博識だ

な」という言葉が返って来る。まあ、カードテキストに注目してその差異を知らないと知らない事だから当然だろう。

「さて問題です。どっちができると思います？ それとも両方可能でしょうか？ 或いは両方不可能でしょうか？」

ニヤ、と挑戦的に笑う。あつちこつちで騒めきが生まれ、喧々諤々の論議が進む。

耳に入るのは「きつと引つ掛けで両方ムリだ」、「いや、逆の可能性も……」、「誰か、『ポルテニス』と『ヴァンダルギオン』持つてない？」、「誰今アタシのお尻触ったの！」、「何故オレを殴る！」、「普段の行いを考えなさい！」、「難しいですわね……」などなど。

……何か痴漢がいなかったか？ 或いは痴話喧嘩。

「それじゃ、そこまで！ 自分が正解だと思ふ物に手を挙げて下さい！」

教室に響き渡る俺の号令に、少しずつ喧騒が収まって行く。静まり切ったタイミングを見計らって4択の内の1択目を出す。

「〃両方できる〃と思う人！」

パパパ、と数人が挙手。

結果として〃両方できない〃が半数以上、〃『ポルテニス』が可能〃と〃『ヴァンダルギオン』が可能〃が残りを半数ずつ分けた結果となった。

具体的にパーセンテージで言うと、こんな感じ。

両方できる

5%

両方できない

55%

『ボルテニス』ができる

20%

『ヴァンダルギオン』ができる

20%

なお数字は適当なので、悪しからず。(エ

「正解は “『ボルテニス』のみ可能” です!」

プロジェクトに拡大した『王宮のお触れ』、『ボルテニス』、『ヴァンダルギオン』のテキストを映し出す。

裁きを下す者—ボルテニス(効果モンスター)

星8

光属性/天使族

ATK 2800 / DEF 1400

自分のカウンター罠が発動に成功した場合、自分フィールド上のモンスターを全て生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した場合、生け贄に捧げた天使族モンスターの数まで相手フィールド上のカードを破壊する事ができる。

冥王竜ヴァンダルギオン（効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 2500

相手がコントロールするカードの発動をカウンター罫で無効にした場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、無効にしたカードの種類により以下の効果を発動する。

- 魔法：相手ライフに1500ポイントダメージを与える。
- 罫：相手フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。
- 効果モンスター：自分の墓地からモンスター1体を選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

「ここに記されている通り、『王宮のお触れ』はあくまで「罫カードの効果」を無効にするカードです。『ヴァンダルギオン』は「カウンター罫で相手のカード効果を無効にする」事が特殊召喚の条件なのに対し、『ボルテニス』は「カウンター罫を発動する」事が



条件です」

教室を見渡すと、納得して頷いている人と、首を傾げている人がそれぞれ半々といったところか。

『『王宮のお触れ』は“効果”は無効にしますが、“発動”に干渉する事はできません。つまり、“発動”そのものがトリガーの為、『ボルテニス』は例えカウンター罠を無効にされても特殊召喚できる、というワケです』

このセリフで漸く納得してくれたのか、あちこちで感心の声が上がった。

時間を見ると、開始からざつと30分。良い頃合いだな。

窓の外もカラスが鳴いている感じの夕焼けとなつているし、もう締め括つても大丈夫だろう。

「それじゃ、今日はここまで〜！」

「起立！ 礼！」

『『ありがとうございました』』

……言うまでも無いとは思うが、号令をしてくれたのは委員長こと原麗華嬢だ。俺は別に先生じゃないから、こんな改まった号令は要らないと思うんだけど……？

ワラワラと皆が席を立つ。この授業もどきで友達ができた人もいるらしく、俺に感謝して来る人もいた。

ま、俺みたいな化物が誰かの役に立てるのなら本望さ。俺の事を拒絶しない人達がここにいる。原、藤原、デイレ、加藤、田中、勿論の事十代や翔、フィオだって。

ちよつとだけ、幸せだ。

だから俺はこれ以上の関係に進むのが怖い。これ以上先に何が待っているのかが全く分からないからだ。

得体の知れない物や未知には誰しも恐怖する。俺とて例外では無い。

臆病者と罵つてくれて構わない。俺はそれでも怖いと思ひ続ける。

違うな。未知の何かと戦う事は怖くない。俺が本当に恐れているのは幸せに馴染む事だ。

今、俺は都を救う為に動いている。でも、もし今のこの幸せな状況に俺だけが甘んじ続けられ、この絶望と不幸で凝り固まった決意はすぐに崩れてしまうだろう。

人の心は、性格は過去の経験の産物。俺は他人を不幸にさせたくないが為に動く。でも、それは回り回って俺にやって来る幸運を享受したいからという打算の裏返しでもあるのだろう。

言い換えれば、俺は自分が幸せになりたいが為に他人に親切にしている。

でももし、今俺が欲しかった「普通の人になれる」という幸せを手にしてしまえば？ そうなれば決意は揺らぐ。所詮、人間は自分の身が可愛い存在だ。自らに危険が及べ

ば弱腰になって身を守ろうとするだろう。

俺がもしそうなれば、都を助けるなんて夢のまた夢。否、その夢の中の幻の蜃気楼。実体は無く、掴む事も叶わず、記憶する事すら叶わない。

……俺の決意なんて、所詮は砂の城だ。水で固めただけの、蹴り飛ばせば跡形も無く崩れて消え去る、脆いものだ。

そもそも、俺がこんな決意をしたのは、人に親切にしようと思ったのは、世界を呪ったからだ。

『何であたし達ばかりがこんな目に合うの！』

都と手を取り合って、傷を舐め合っていた毎日。互いを守り合うだけの力も無く、ただただ怯えて、脅して、吼えて、血に塗れて。

『俺達が何をしたって言うんだ！ そんなに俺達が憎いかよ！』

世界に向かって吼えて、呪って。それでも現状が変わるはずも無く。

無気力になりかけていた、ある日の事だった。

『ありがとう、お兄ちゃん、お姉ちゃん！』

何でそんな事をしたのか、今でも分からない。

あの日、俺は近所の女の子が空高くへ飛ばしてしまった風船を、都は車道に落してしまつた人形を車に轢かれる寸前で取つてあげた。その時、髪の毛を伸ばして風船を取り、都に至つてはすぐに治つたものの片腕の肉の一部が欠けていた。

それでもその少女はお礼を言つてくれた。俺達が化物だと理解した上で。

伸びる髪で、尋常じゃ無い速さで治る体で、それでも彼女は恐れずに俺達に感謝してくれた。

『お義兄ちゃん』

『ん?』

『温かいね、心』

『ああ。俺達のやる事、見つかつたな』

たつた一言の感謝で、俺達は生きる道を見つけた。あの暖かい感触の為に、世界に復讐する為に、俺達は色々な人達を助けてあげて来た。

だというのに、世界は俺達に非情な死をもたらしした。あの時、俺の心は完全に死んだ。朽ちて滅び、悲しみすら感じない程に打ちひしがれた。

1度死んだ時、誰かに優しくしようという思いは消えた。色々な人に優しくして、親

切にして、時には文字通り命や身を削って、それでなお俺達は報われなかった。あの先、もし一命を取り留めて生き続けていたとしても、俺達に待つのは不幸だけだっただろう。

何故？ 俺達はあれだけの事をやって、何故恩を仇で返す様なマネをしたんだ、世界よ。

苦しかった。

ただ、救われたかっただけなのに、何一つ報われずに死んだ。

生まれは確かに悪かっただろう。人間として成立しない化物のそれだったのだろう。

育ちだっただけで決して良くなかっただろう。都も俺も、何度この手を血で染めたか。

それでも俺達は全てが悪ではなかったのだ。

だから俺達は善意に善意で返す事を決めた。

なのにたった1度、人生に失敗した程度で、化物の寿命が尽きた程度で、俺の決意は崩壊した。当たり前かも知れない。化物と俺は同一だったのだから。

だからこそ、俺は転生したら、とことんまで人に冷たくし、孤立しようと考えてもした。その証拠に、当初俺は都さえ見つければ、あいつさえ助ければ、こんな世界どうなっただけで良いと思っていて、だから世界平和は二の次だった。ヘラヘラと軽薄に、面倒事が起きたら逃げよう……。

でも、こつちの皆は温かくて、俺はついここに心の拠り所を見出してしまった。当初は利用するだけ利用し、切り捨ててる事も考えていたのに。

俺の決意は、いつも脆い。新しい決意は消え去り、また誰かに優しくするという弱い心の元に生きる事となつてしまった。

俺は、どうすれば良いんだ？

答えが出るはずも無い問いは、虚しく、そして儂く俺の心の中へと散っていく。

俺は物思いに耽る事を止め、現実世界に目を向ける。ちょうど一人が扉に手をかけた瞬間だった。

「おらあ！ 邪魔するぞー！」

「うわあつー！」

突然、乱暴に扉が開かれ、数人の男子ブルー生が入り込んで来た。そりやもうズカズカという言葉がピッタリと合うくらいに。

「いた！ テメエ、遊馬崎！」

あん？ 俺が目的か？

唐突な乱入者に皆の視線が集まる。

「誰だ？」

「誰だ、だとお？」

ブルー連中の癪に障ったのか、連中の顔が怒りの色に染まる。

はて？ 会った事あつたような……、いや無かつたな。デュエルした相手や、カツアゲを咎めた相手は片端から記憶してるんだが……。

「どなたですか、だろうが！ レッドのクセして何で敬語使わねえ！」

そっちかい。

「凶に乗るなよ、化物風情が！」

「言いたい意味が理解できん」

突然キレられても困る。何に対して怒っているのかハッキリしてくれないと、こつちとしては対処のしようがない。

「うっせえ！ ンだこの場合は！ 教師気取りかゴラー！」

「別に。教えてほしいと頼まれて断らなかつただけだ。効率を考えればこの方法が最も大人数を相手にする事が可能であり、容易い。たったそれだけの理由だ。それに人の上

に立つ存在になつた覚えは無い」

熱い相手には冷静に返す。こつちまで熱くなれば相手を論破する事は難しいからだ。が、俺のこの冷静さが気に喰わなかつたらしく、奴らは更に逆上した。

「テメエ、その言い方ムカつくんだよ！ 化物が、とつとこのアカデミアから立ち去れ！」

「死ねよ、今すぐ！ お前に生きる権利なんて無いんだよ！」

「化物は化物らしく、どつかで首でも掻き斬られて野垂れ死んでろ！」

「醜いカスが！ 人間様に刃向うんじゃねえ！」

「今すぐ化物の巢に帰れ！ アカデミアに化物の居場所はねえんだよ！」

おーおー、酷い言われ様だな。

俺はもう慣れてるのでサラツと受け流すが、他の皆は耐えられなかつたらしく、ガラの悪いブルーに対して言い返している。

「言い過ぎだぞ！ 遊馬崎に謝れよ！」

「その言い方は看過できませんね！」

「ボウヤ達、言つて良い事と悪い事の区別もつかないのかしら……！」

「同じブルーとして恥ずかしいぞ！」

「人に向かつてそんな簡単に死ねとか言うなよ！」



「君達には心つていうモノが無いのか！」

こちらの生徒は総勢で50人前後。対して乗り込んで来たブルーは10人に満たない。数の差は歴然。

が、彼らは階級というものを武器に楯突いた。

「黙れよ、レッドのクズ！ イエローのザコにブルーの恥晒し共が！」

「大した実力も無いカス共がブルーのエリートであるオレ達に刃向うんじゃねえ！ 身の程を知れや！」

喧々諤々、瞬時に教室内は俺に教わっていたチームとガラの悪いブルーのチームに分かれて大喧嘩が始まった。

「第一人間として恥ずかしくねえのかよ！ このロン毛は化物だぞ！」

「それが何だ！ 黎は仲間だ！ 化物とか関係ねえ！」

「黙れよレッド風情が！ 化物に味方するテムエも人間じゃねえ！」

「貴方達には気品というものが無いようですね！ それでエリートとは片腹痛いです！」

「ハン、女にエリートが分かるか！ 女は男に媚び諂ってれば好いんだよ！」

「待て！ それは同じ男として聞き捨てならないな！ この場の全ての女性に謝れ！」

「必要ねえな！ 女は片端からブルーだ！ どうせ全員レッド並みの実力のクセによ

！

「あら、なら貴方達はレッド以下ね。着色すら烏澁がましい存在だわ」

「ふざけんな！ オレ達はブルーのエリート！ 選ばれた存在だぞ！」

「何を以て選ばれたというの！ 人を見下す事しか能の無い奴らが威張らないで！」

俺は教壇で黙つてその喧騒を聞き届ける。が、次第に雲行きが怪しくなつて来た。双方の間の溝がマツハで広がり、深まつている気がする。

それでも俺が介入すれば余計に拗れると思つて静観を続けていたが、苛立った田中が1人のブルーの胸倉を掴み上げた。

「同じブルーとして恥ずかしい限りだ！ どうしてお前達はそうやってイエローやレッドの彼らを見下す事しかしないんだ！ 挙句の果てに善意で俺達に教鞭を取つてくれる彼の事とことんまで蔑む！ お前達にそんな権利があるのか！」

「黙れよ田中、このリア充野郎が！ お前こそ選ばれた人間気取りでよお！ 女にキヤーキヤー言われて嬉しいかよこのクソが！ テメエこそ、ブルーのクセにレッドやイエローに味方しやがつて！ 恥を知れ、恥を！ つーか離せボケがつ！」

お互いにヒートアップした状態、胸倉を掴まれたブルーが田中の顔を殴り飛ばした。

「うぐっ！」

地面に強かに体を打ちつけ、そのまま段差を転がり落ちる。

流石にこれは黙って見ていられなかった。

「田中！ 大丈夫か!？」

すぐに駆け寄ると同時に、ブルー生が「うぼっ!」という間抜けな声をあげた。

「よくも田中くんを!」

「許さねえ!」

田中の友人やファンがお返しと言わんばかりに殴ったブルーを殴り返したのだ。

「高田!」

「テメエらよくもやりやがったな!」

「先に殴ったのはそっちでしょ!」

「自業自得よ!」

マズいと感じ取った俺は桜を呼び出す。

「桜、田中の治療を頼む」

「御意のままに」

場は睨みあいから殴り合いに発展しかける瞬間だった。俺は水の力を使って指先から冷凍光線（というか固体化した窒素）を放ち、両勢力の間に大きく分厚い氷の壁を生み出した。

「うわあっ!?!」

「冷たっ!? 何コレ!？」

「こ、氷だ……!」

突如として出現した氷の壁に、皆が驚愕する。

一通り驚愕すると、髪の毛と瞳が青色に変色し、氷の壁に向かって指を差している俺に、皆の注目が集まった。肌の表面に出ている青い唐草模様も気を引く一因だろう。

「口喧嘩なら見逃した。が、殴り合いになるのなら話は別だ。それ以上は看過できねえぞ」

桜に目配せをして、田中を背負う。そしてガラスの悪いブルーの連中の前に立つと、殺気を込めて睨みながら言い放つ。

「ああ、俺はお前らの言う通りの化物さ。心臓貫かれても死なねえし、体だつて気持ち悪いくらいに改造できる。だが、それと彼らは関係無い。俺を恨んでここに居る皆に手を出すのはお門違いだ」

ビリビリビリビリ、と殺気による空気の振動が伝わり、机や椅子が震える。田中を後ろにいた桜に預けると、青色の髪と目のまま言い放つ。

「俺が憎いのなら直に俺の所に来い。他人に手を出すな」

暗に皆を傷つけるなど言う。俺は自分がどれだけ傷つこうが構わない。だが、彼らが傷つくのは我慢ならねえな!

それに。

「第一、ここはデュエルアカデミアだ。白黒着けるんなら、コレデュエルだろ？」  
ガチャツ、と左腕のデュエルディスクを相手に見せる。アカデミアデュエリスの生徒として、こ  
れは常に持ち運んでおかないと。

蔑むような視線を受けながら、

「18時に屋内のデュエルフィールドに來い。相手してやる」  
自信満々に、己の絶対性を信じ、俺は宣戦布告をした。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 40 : チーム黎 VS エリート軍団

——デュエルアカデミア デュエルフィールド・PM 16:54

SIDE : 無し

アカデミアのデュエルリングと言えば全ての出入り口の上に『オベリスクの巨神兵』のレリーフがある事が特徴の1つとして挙げられるだろう。これはオーナーである海馬コーポレーションの若社長、海馬瀬戸が嘗て所持していた神のカードと同じである事から、彼の好みで設置されたと推測する者は数少なくない。

それはさて置き、アカデミアのデュエルリングは授業や行事で使用される。全校生徒全員が座れる立体型の観客席に、入場ゲートも付いている。

ただし1度にできるのは1組分のデュエルなので、月一試験のような1度に大多数の数のデュエルが行われる場合はこのデュエルフィールドを使用するのである。

この他、施設としては体育館、武道場、プール、温泉、グラウンド、巨大図書館、コ

ンピュータルーム、冷暖房完備、自動ドア配置などが挙げられる。

アカデミアは私立であるが故に、この様に施設が取り揃っているのだ。

ならば何故、オシリスレッドの寮がボロ屋とまで形容される程古い建物なのか。それは海馬オーナーが『オシリスの天空竜』や赤色の事が嫌いだから、では無い。

元々オシリスレッドとは、成績が退学の危機に瀕する程に悪い生徒が所属する物である。対し、ライエローは成績がそれなりに良好、オペリスクブルーは最上級の成績の者が所属する。ならばある程度はランクが低い寮でも文句は言えない。文句があるのなら成績を向上させろ、という話だ。

ただし、レッドにもメリツトが存在する。レッドに所属する生徒は出席日数に関係無く進級・卒業ができるのである。

もう理解しただろうか？ レッドだけが出席日数を問わない理由、それは出席しない日々を実力の研鑽に充てて欲しいという教師の願いである。

しかし設立当初なら兎も角、現在ではその願いは届いていない。レッド生はその位に満足、或いは挫折し、向上心の一切を失ってしまったのである。結果として、レッドは永遠にレッドである、という卑屈な方程式が生まれてしまったのだ。

また、ブルーやイエローが格下の寮の生徒を蔑む事の背景には“状況の力”という物が存在する。これは如何なる人でも陥ってしまう危険な力だ。

これは大きく「権威への服従」、「非個人化」、「非人間化」の3つに分かれる。

即ち「上（この場合は上級生や既卒生、または一部の教師）が蔑むのだから自分も蔑まなくてはいけない」という意識が生まれ、「自分だけでは無く皆やっている」と責任が分散し、「格下の寮生は自分よりも劣る存在だから蔑んでも一切問題無い」と相手の尊厳を無視する流れに身をおいてしまうのである。

これは都合の良い言い方をすれば「場の空気を読む」である。日本人で無くとも陥るこれは「ジンバルドの実験」というスタンフォード大学で嘗て行われた実験を、または「ES」というドイツの映画を見ればその恐ろしさの末端が理解できるであろう。

さて、その風潮が色濃く存在する男子ブルー。田中康彦の様に寮に関わらずに相手に接する人物はかなり少ないと言え、その風潮が理解できるだろう。

即ち、大多数のブルー生が威張り散らす人間だと思えば良い。

そしてそんな彼らが威張る元となっているのがデュエルの腕。これがあるからこそ空威張りにならないで済むのだ。デュエルが世界の根幹と深く結びついているからこそその理由であると言える。

当然、そんな彼らにとってデュエルが自分達よりも強い格下の寮生とは我慢ならぬ存在である。だからこそ彼らは集団で強い格下の寮生を襲う。

時に暴力で、時に禁止されているアンテイで。兎に角強い格下の寮生の力を削ぎ取る



ように動く。

黎の所へ乗り込んで行ったのもそれが原因である。

彼ら曰く、「出席しないクセに強い奴らは許せない」「レッドやイエローは這い蹲つていればいい」「成り上がりでブルーになった奴は排除するべきだ」との事。中には同じブルーでも女子を蔑んでいる者までいる。寮長のクロノス教諭までこの風潮に流されかけているのだから始末が悪い。

しかし、弱者だつて何時までも弱者では無い。窮鼠猫を噛むの諺通り、一矢報いる事だつて有り得る。

そして報いる事を目的とした生徒達が、黎を中心として集まっていた。

SIDE : 黎

「モノログが長いぞ、作者」

「何言つてるの、黎?」

「あ、いや、何でも無いよ、フィオ」

駄作者の長いモノログに付き合っていただけ、ありがとうございます。

それはさて置き、ここ、デュエルフィールドとデュエルリングは夜までなら自由に使

用できる場所だ。そして今、俺達はさつき殴り込んで来たガラの悪いブルー連中を迎え撃つ為にここで待機している。

本当は俺一人でやろうと思つたんだが……、

「わたしも行く。黎の事をバカにされつぱなしじゃ、腹の虫が治まらない」

「彼らには礼儀というものが著しく欠如しています。風紀委員として、看過できません」

「僕だつてやればできるんだ。それを証明するツス！」

「俺は友達を侮辱されてヘラヘラしてられる程、子供じゃ無いぜ」

「同じブルーとして、はじめはつけさせてもらおうよ」

「思いついたボウヤをイジめるのつてゾクゾクしちゃうのよねえ……。貴方の為にも

させて頂戴、ね？」

「私、恩を仇で返せる程薄情な人間じゃ無いよお？ 無視もきつと仇になつちゃうから

ね」

「オレだつて、黎には感謝しているんだな。少しはお返しさせてほしいんだな」

「別に、アンタの為じゃ無いわよ。ただ単にあいつ等がムカついたから、他意は無いんだ

からね！」

「ええと、その、頑張りますっ」

と、皆やる気なのです。止めるのも申し訳無いので、着いてきてもらう事にした次第

である。

ちなみに上から順にフィオ、原、翔、十代、田中、藤原、加藤、隼人、ディレ、宇佐美。義理固いな、皆。

この他のメンバーとして明日香やジュンコ、ももえ、大地もいるし謹慎明けの神楽坂もいる。

意外と、俺には味方が沢山いたんだな。

都、お前が戻って来たなら、きつと沢山の友達ができるぞ。もう寂しい思いをしなくても、泣かなくても済むんだ。へへ、嬉しいな。

「！ 黎、来たよ」

「お、漸くか」

入口からやって来たのは、先刻のガラの悪いブルー生を始めた数十名のブルー。おっと、万丈目の元取り巻きもいるな。

「多いね」

「この機会に俺達みたいな奴を潰そうつつー魂胆なんだろうな」

ギラギラした敵意が伝わって来る。もつとも、ここにいる全員そんなモン堪えてないがな。心がしつかり据わっている。俺という大将がいるからか、それとも心が結束しているからか。何れにせよ、頼もしい。

数の全体が露わになる。こっちの人数は30人弱。あつちは50〜60人くらいか。

「ノルマは1人につき最低1勝、仕留めた奴が次の奴を相手に。早い者勝ちだな」

「だね」

1人につき2人を倒せば良いが、そこまでは求めないとも。出来る事を出来る奴がやれば良い。

そんな俺とフィオオの会話が聞こえたのか、先陣を切っていたブルー（確か高田、とか呼ばれてたな）が大声をあげて怒鳴る。

「随分と余裕だな、レッドの分際で！」

それに対して俺は余裕の表情と声で返す。

「お前らに負けるとでも？ 後ろにいる皆には、俺が知っている事、分かっている事、全てを叩き込んだ。中途半端な覚悟と知識のお前らが敵う相手じゃねえよ」

ギリリ、と歯軋り。歯を駄目にするからオススメはできない行為だ。

「テメエ！ だがその余裕もここまでだ！ 見ろ、この圧倒的な数を！ このブルーはただのブルーじゃねえ！ ブルーの中でも上位に位置する58人を集めた上位ランカーズだ！ レッドやイエロー、女で混成されたテメエらクズが敵う相手じゃねえんだよ！」

「御託は結構。数で物を言わずとは粗末な思考回路ですなと言っておいてやろう。」



「止せ、挑発に乗るな」

明らかな挑発に乗る十代とフィオ。それを諫めるのは大地だ。

「熱くなるのは構わないが、度を過ぎれば正しい判断を下せずに負けるぞ」

「ぐ、悪い」

「ゴメン……」

実の所、挑発に乗らないかと心配していたが、どうやら大丈夫のようだな。この人数なら全員の心が全く同じ方向へと動く事は無い。誰かが怒り狂っても別の誰かがそれを止められる。

「ホラホラ、どうした？ 逃げるならさっさとしろよ」

「冗談だろ。大将が逃げたらチームは終わりだぜ？」

「そんな安い挑発で戦力を削りに来るとは、ナメられたものね」

「こんな所で逃げたら、度胸が無いと思われてしまいますわ。女は度胸、ですもの」

相も変わらず神経を逆撫でする言い方だが、ならば冷静なメンバーで返せば良い。そうすれば怒りは収まる。

ちなみに順に俺、明日香、ももえ。

「さて、好い加減この押し問答にも飽きて来たな。どうせ口じゃ勝敗を決する事は不可能。ならば、そろそろ始めようぜ？」

ジャキツ、とデッキをディスクにセットする。更にディスクの起動ボタンをオンにし、ディスクのエッジがレーンにそって移動。収納されていた残りの部分が飛び出す。これで準備は完了だ。

「主殿、助太刀致す」

「桜、頼む。ちよいと向こう側の方が多いいみたいだね」

「承知」

「わたくしもいますよー！ 本気のデッキを出すまでも無さそうですが！」

「フレイ、お願い！ 頑張ろうね！」

「勿論です！」

桜とフレイも飛び出し、彼女専用のディスクを展開。それぞれ薄桃色と水色のディスクが第三世代のディスクの様にオープンする。周囲の人間は突然現れた彼女に驚いているようだが、味方だと分かると安心したようだ。

さて、双方共に、もう準備は万端の様だな。

「凶に乗りやがって……！ 後悔させてやる！」

「どっちがする事になるかね？ さあ、行くぞ、皆！」

『おお！』『はい！』『ええ！』『うん！』

「クソ生意気な奴らを叩き潰せえ！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！』

こうして、後に第1次アカデミア大戦と呼ばれない大規模な衝突が始まったのであった。

俺の相手は高田と呼ばれた男だった。既にアチコチでデュエルが始まっており、皆一進一退の攻防を繰り返している。

「高田、と言ったな。覚悟は良いか？」

「オシリスレッド如きが気安く名前を呼ぶんじゃないやねえ！ それと覚悟するのはテメエだ！」

「御高説結構。なら、始めるぞ」

「叩き潰してくれる！」



『デュエル!』

黎VS高田

LP 4000 VS LP 4000

「先攻はオレだあ! オレのターン、ドロ! オレは『コーリング・ノヴァ』を召喚!」  
 先手は天使族のリクルーターか。見た目としてはクリスマスなんかで飾る葉っぱの  
 輪っか、リースに天使の羽根が生えた、とても言えば良いだろうか。

リクルーターをわざわざ攻撃表示で場に出す、この時代ならナメプや雑魚の戦術にも  
 見られるが……。

コーリング・ノヴァ : ATK 1400

「カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

高田 : LP 4000

手札 : 4枚

フィールド

：コーリング・ノヴァ（ATK 1400）

：伏せカード1枚

あのモンスターは『天空の聖域』が存在していれば『パーシアス』をリクルートできただったな。だが、そのフィールド魔法は無い。という事は、狙いは『パーシアス』のリクルートではなさそうだ。

コーリング・ノヴァ（効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1400／DEF 800

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の天使族・光属性モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、代わりに「天空騎士パーシアス」1体を特殊召喚する事ができる。

「俺のターン」

「さあ、来いよ！ シンクロだろうがエクシードだろうが叩き潰してやるぜ！」

「そうか、ならば望み通りに出してやるよ。俺は『切り込み隊長』を召喚！」

『ハッ！』

「このカードを召喚した時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる。出て来い、『ゾンビキャリア』！」

『ヒッヒッヒッヒ……』

ATK：1200

ATK：400

「レベル3の『切り込み隊長』に、レベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング！」

いぶし銀な騎士が空へと跳躍し、遅れて太った死体が2つの星になる。2つの星は緑のリングに変化し、その中を通る騎士を光の柱へと変えた。

「我は未来を渴望せし者！ 巨蟲の進行阻みし戦士、闇の正義の威を示さん！ 希望が溢れる明日となれ！」



自分フィールド上にモンスターが存在する限り、このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

真つ黒なレーザーに貫かれたリースはボロボロと黒い塵へと朽ち果てていく。余波を防ごうと結界が張られるが、結界にはエネルギーの欠片ですら届かなかった。

本来なら戦闘ダメージの発生時にモンスターはまだ戦闘破壊されていないから『スピリットバリア』は確かに有効だが……、今回においては全くの無意味だ。

「更に『コーリング・ノヴァ』の効果でデッキから2体目の『コーリング・ノヴァ』を特殊召喚だ！」

デッキから新しいカードを取り出した高田は、そのままそのカードをモンスターゾーンに置くが、瞬間にビー！ ビー！ とディスクがエラー音を鳴らした。

「な!？」

『カタストル』が今やったのは効果破壊だ。戦闘破壊では無いため、『コーリング・ノヴァ』のリクルート効果は発動しない。もともと、ダメージも無いが」

「こゝ、効果破壊だど!？」

『A・O・J カタストル』は闇属性以外のモンスターとバトルを行った時、そいつをダメージ計算無しで効果破壊する。リクルーターにとっては天敵と言えるだろうな」

A・O・J カタストル（シンクロ・効果モンスター）

星5

闇属性／機械族

ATK 2200 / DEF 1200

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

「て、テメエ!」

「どうした、シンクロを出せと言ったのはお前だぞ? 要望に応じてやったというのに、

まだ何か不満があるのか?」

「ぐっ……」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：A・O・J カタストル（ATK 2200）

：伏せカード1枚

出だしは上々。さて、彼はどう来るかな？

「オレのターン！ 『天使の施し』を発動！ デッキから3枚ドロウし、2枚捨てる！」  
墓地に送られたカードは……、『残骸爆破』と『巨大ネズミ』か。

「ぬ……」

何やら悩み始めた高田。

時間がかかると踏んだ俺は周囲に視線を配る。

「行け！ 『スチームロイド』で『牛鬼』を攻撃ツス！」

「フフフ、『名推理』で引いた『モイスチャー星人』のレベルは9、貴方の宣言した8より1つ高い。よって特殊召喚！」

「『ビッグゴアラ』で『サイコ・シヨツカー』を攻撃するんだな！ 必殺 ッユーカリ・ボムッ！」

「リバースカード、オープン！ 『メテオ・プロミネンス』！ 手札2枚をコストに貴方に2000ポイントのダメージを与えます！」

うん、皆大丈夫そうだ。

「ダハハハハ！ 『メテオ・ストライク』を装備した『ゴ布林突撃部隊』で『クレイマン』を、『切り込み隊長』で『魔界の足枷』を装備した『テンペスター』を攻撃！」

「うわっ！」

「『ボマードラゴン』の効果で『サイレント・ソードマンLV7』を破壊だあ！ そして『エメラルドドラゴン』で『コマンドナイト』を攻撃！」

「キャッ！」

でも無い!?

戦いの要である十代と加藤が押されている!?

「くっ、強え……………」

「ヤバい、かも……………」

「落ち着け！」

負けそうなら、叱咤してやるのがリーダーの責任ってモンだろ。

十代、加藤、諦めるのはまだ早いぞ！

「お前らのデツキを信じる心はそんなモノか!? 十代、『突撃部隊』は守備表示になる、アタックチャンスだ！ 加藤、攻撃力2400ぐらい超えて見せろ！ レベル5と6のボーダーラインだ！」



「……、おうー！」

「うん、そうだよね！」

良し、元気が戻った。「余所見してるヒマがあるのか！」いけね。俺もデュエルの真っ最中だった。

「オレはモンスターをセットし、『太陽の書』を発動！ 『魔導雑貨商人』をオープンだ！」

魔導雑貨商人：ATK 200

表側表示になったのは4本の手に様々な商品を持ったコガネムシ。キキキ、と笑いながら高田のデッキトップに手を伸ばす。

「その効果でデッキから魔法か罫が出て来るまでモンスターを墓地へ送る！」  
デッキからカードを捲っては墓地へ送る事を繰り返す高田。

魔導雑貨商人（効果モンスター）

星1

光属性／昆虫族

ATK 200 / DEF 700

リバース：自分のデッキを上からめくり、一番最初に出た魔法か罠カード1枚を自分の手札に加える。

それ以外のカードは墓地へ送る。

順に『メタモルポット』、『キラートマト』、『アイミッドラゴン軍隊竜』、『マスケッドドラゴン仮面竜』、『キラートマト』、『シャインエンジェル』、『グリズリーマザー』、『魔導雑貨商人』、『ドラゴンフライ』、『ジャイアント・ウィルス』……。

その数10枚をオーバーしている。随分とデッキの残り枚数が減ったようだ。

「俺が手札に加えるのは『サイクロン』！ これをそのまま発動！ テメエの伏せカードを破壊させて貰うぞコラ！」

高田のカードにより暴風が巻き起こり、こちらの伏せたカード『次元幽閉』が除去された。

ああ、お前もミラフォオのように働かないと言うのか。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだぜ！」

高田：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：魔導雑貨商人（ATK 200）

：伏せカード1枚、スピリットバリア（永続罫）

奴が伏せたカードは1枚。恐らく『魔導雑貨商人』を守るか、新しいモンスターを呼び出すカードの可能性が高い。

ならば！

「俺のターン！俺は『スピード・ウォリアー』を召喚！」  
『ハッ！』

スピード・ウォリアー：ATK 900

空中に勢いよく跳び上がるのはクリーム色のアーマーを着込んだ、通称“過労死”。靴底にローラーがついているというのに、よくもまああんな派手にジャンプできるものだ。

倒され、墓地に送られて尚アドバンテージに繋がりがやすいこいつで、攻撃を仕掛ける！

「バトル！ 『スピード・ウォリアー』で『魔導雑貨商人』を攻撃！ 『スピード・ウォリアー』は召喚されたターンのバトルフェイズのみ元々の攻撃力が倍となる！」

スピード・ウォリアー：ATK 900↓1800

「ソニック・エッジ！」

勢いをつけたカポエラの蹴りがコガネムシの頭を捉えようとした瞬間、高田が伏せカードを開けた。

「速攻魔法発動！ 『月の書』！ 『魔導雑貨商人』にはもう一働きしてもらおうぜ！」

蹴りが当たる瞬間、『魔導雑貨商人』が裏側表示になる。一周させて下段の蹴りに切り替えて蹴り飛ばすが、その瞬間『魔導雑貨商人』が再び高田のデッキへと手を伸ばした。

「さて、今度は何枚墓地行きになるかなあ？ 1枚目は『素早いモモンガ』！ 2枚目は……、『スピリットバリア』!? チッ！」

危ない。ダブリが来てくれて助かった……。

スピード・ウォリアー：ATK 1800↓900

「『カタストル』！」

『キキイツ！』

「ぐおっ！」

高田 : LP 4000 ↓ 1800

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

黎 : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

: A・O・J カタストル (ATK 2200)、スピード・ウォリアー (ATK 900)

: 伏せカード1枚

出来れば、このターンで致命傷まで行きたかったんだがな。腐ってもブルー、そう上手くないか。

「オレのターン、『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロ―！」

2枚のカードを引く高田。引いたカードを見た瞬間、ニヤ、と笑った。

まさか!? 確かにこれだけデッキを圧縮すれば来る可能性もあるが、このタイミングでだど!?

「ハハハハ！ テメエはもう終わりだ！ オレの勝ちはたった今確定したあ！」

「来たか、『カオス・ネクロマンサー』！」

「その通り！ 『カオス・ネクロマンサー』を召喚！」

カオス・ネクロマンサー：ATK ？

黒いマントを羽織った闇の、否、死を司る戦士が現れる。

ここでコイツか……！

「更に『死者蘇生』を発動！ 墓地の『カオス・ネクロマンサー』を特殊召喚！」

カオス・ネクロマンサー：ATK ？

もう1体来ただど!? 『強欲な壺』で引いたのはその2枚か！

『カオス・ネクロマンサー』は自分の墓地のモンスターの数×300ポイント攻撃力が上がる！ オレの墓地には合計で19体のモンスターがいる！ よって攻撃力は……」

カオス・ネクロマンサー：ATK ? ↓5700

カオス・ネクロマンサー：ATK ? ↓5700

カオス・ネクロマンサー（効果モンスター）

星1

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在するモンスターカードの数×300ポイントの数値になる。

「攻撃力5700……！」

「終わりだな！ 『カオス・ネクロマンサー』は闇属性！ 『カタストル』の効果は通じねえ！ この圧倒的な攻撃力の前じゃ、テメエみてえな化物でもゴミカスだな！」

だが、と高田は前置きする。





「止めだあ！ 2体目の『カオス・ネクロマンサー』で攻撃い！」

「黎！」

「遊馬崎っ！」

「クズはクズのままで、一生を終えるんだよお！」

2体目の死の攻撃。無数のエネルギー弾が炸裂して俺のライフは……、残るんだよなあコレが！

「『けっるい血涙のオーガ』を特殊召喚！」

『ゴガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

血涙のオーガ：ATK 0

「今更攻撃力0のモンスターが何の役に立つ！」

「そいつは『血涙のオーガ』の効果を見てから言うんだな！  
ブラッディ・ペイン  
フオース”！」

血涙のオーガ：ATK 0 ↓ 5700

「何?！」

「2回目のダイレクトアタックを受ける時、手札から『血涙のオーガ』を特殊召喚できる。この時、『血涙のオーガ』の攻撃力は1回目を受けたダメージと等しくなり、相手はこのカード以外のモンスターと戦闘を行えない!」

血涙のオーガ（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

相手ターンに1度のバトルフェイズ中に2回目の直接攻撃が宣言された時、このカードを手札から特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚に成功した時、このカードの攻撃力・守備力はこのターンに1回目の直接攻撃を行った、フィールド上に表側表示で存在するモンスターと同じ数値になる。

このターン、この効果で特殊召喚したこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手はこのカード以外のモンスターを攻撃対象に選択する事はできない。

「だ、だったらそいつに攻撃だ！」

血の涙を流す鬼が、闇の戦士に殴りかかる。無数のエネルギー弾を浴びつつも強力な拳が突き刺さり、闇の戦士は倒れる。同時に、蓄積したダメージに耐え切れずに血の涙を流す鬼も倒れた。

「ぐ、この……！」

「ありがとう、『血涙のオーガ』。助かった」

「く、だが、墓地のモンスターが増えた事で、攻撃力が更に上がる！」

カオス・ネクロマンサー：ATK 5700↓6000

「ゴミカス風情が、一丁前に耐えやがって生意気なんだよ！」

「お褒めに預かり恐悦至極だ」

「チッ！ リバースカードを1枚伏せて、ターンエンドだぜっ！」

高田：LP 1800

手札：0枚

フィールド

：カオス・ネクロマンサー（ATK 5100）  
：伏せカード1枚、スピリットバリア（永続罫）

あつぶねえ。奴が欲を掻いてくれたお陰で『血涙のオーガ』の効果は逆に通つたぜ……。

俺の残りライフは500、奴は1800、差は1300とそこまで大きくは無い。だが、ライフアドバンテージは比較的軽視されやすいため、この場合は言及しない。

そしてハンドアドバンテージは俺が上、ボードアドバンテージは高田が上。

今の手札は2枚、手札のカードは『簡易融合』と『マジック・ストライカー』。どちらも逆転には繋がらないとなれば、勝負は次に引くカードだ。

どうすれば良い？ 大将になった手前、負ける訳にはいかない。クソ、どうすれば……!?

……、何を迷っている？ 俺は何を迷う必要がある？

俺がすべき事は邪神を倒し、世界に今最も近い滅びを回避する事。何故、連中が滅びを齎すのかは知らない。

そんなのはどうでも良い。奴らは、俺の家族に手を出した。戦う理由はそれで十分。あいつらに勝つためにも、こんなトコで立ち止まり、敗北するワケにやあ、いかねえ

な!

ゴチャゴチャ考えるのは、カードを、最後の望みを引いてからだ!

「俺の、ターン!」

引いたカードは……、!

「この勝負、俺の勝ちだ!」

「なんだと! この攻撃力6000を倒せるとも言うのかよ!」

「そうだ、俺は手札から『マジック・ストライカー』を召喚!」

『ヤッ!』

ATK : 600

「そんな雑魚モンスターに何が出来る!」

「雑魚とは酷いな、こいつは墓地の魔法カード一枚という緩いコストで特殊召喚できるしダイレクトアタックもできる。更に戦闘ダメージを俺に通さない優秀なモンスターでもあるんだ、お前より万倍マシだぜ?」

「あ、あ!? このオレがそいつより劣ってるってのかよ!」

「そう言ってるつもりだが? ま、今回は効果を使わず素材にするから、お披露目は次の

機会について事で。

続けて墓地の『ゾンビキャリア』の効果発動。手札を1枚デッキの1番上に戻し、墓地から特殊召喚できる。ただしフィールドを離れた時、ゲームから除外される」

『ア』

ゾンビキャリア（チューナー・効果モンスター）

星2

闇属性／アンデット族

ATK 400 / DEF 200

（1）：このカードが墓地に存在する場合、手札を1枚デッキの一番上に戻して発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

手札の『簡易融合』を戻し、墓地から蘇生される腐乱死体。

これで準備は整った。

「さて、覚えてるよな？ こいつはチューナーだ」

「またシンクロか！ クドいんだよカスが！」

「そのシンクロを出せって言ったのはお前だよ！」

ダブルスタンダードな奴め、社会に出てから苦労するぞそういうのは。

「俺はレベル3の『マジック・ストライカー』に、レベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング！」

紫のずんぐりした亡骸が2つの輪に化け、その中に杖を持った小柄な戦士が潜る。合計3つの星は光の柱となり、新たなモンスターを産み出した。

「始まりと終わりの狭間に生きる幻影が、姿無き悪魔となる！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆2+☆3=☆5

「シンクロ召喚！ 生誕せよ、レベル5！ 『幻層の守護者アルマデス』！  
『トアツ！』」

ATK : 2300

現れたのは炎と氷のような幻影を携えた守護者。神々しきを感じる白い衣をまといながらも、その相貌は悪魔と呼ぶに相応しい。

これで準備完了、後は勝つだけだ。

チラ、と周囲を見渡す。

「行け、『フレイム・ウイングマン』！ 『カオス・ソルジャー』を攻撃！」 スカイスク

レイパー・シュート「！」

「サイバー・エンジェル―弃天―」でダイレクトアタック！」 エンジエリック・ター

ン「！」

「サブマリノイド」は相手プレイヤーに直接攻撃できる！ 行け、オーシャン・デ

ス・ミサイル「！」

「お前が攻撃したのは『デスコアラ』！ リバース効果でお前の手札1枚につき400ポ

イントのダメージを受けてもらうんだな！」

「このスタンバイフェイズ、『黒蛇病』の効果で互いに1600ポイントのダメージです。

しかし、私の場には『デス・ウォンバット』が存在しますので、ダメージを受けるのは

貴方だけになりますわ！ お喰らいなさい！」

「ハーピイレディ3姉妹」で『ニードリア』を攻撃！」 トライアングル・エクスタシーX・ス

パーク「！」





十代：LP	100
明日香：LP	1300
翔：LP	2250
隼人：LP	700
ももえ：LP	2600
ジュンコ：LP	1400
ファイオ：LP	2000
大地：LP	1700
友紀：LP	500
雪乃：LP	4000
康彦：LP	900
麗華：LP	3500
神楽坂：LP	1100
彰子：LP	4000
ツアン：LP	2400
桜：LP	3000

ブルー生達：LP 0

十代・明日香・翔・隼人・ももえ・ジュンコ・フィオ・大地・友紀・雪乃・康彦・麗華・神楽坂・彰子・ツアン・桜：WIN

ブルー生達：LOSE

よし、皆順調に勝っているみたいだな。

教師気取りと言われた後で恐縮な感想だが、やっぱり俺が教えた生徒が勝利するのは嬉しいものだ。

「さて、俺もそろそろ終わらせるかな」

「ナメんな！ たかが攻撃力2300ぼっちのクソカスゴミ雑魚モンスターに何が出来るってんだ！」

「本当に口悪いな、お前。ま、そんなお前の元を集ったんだから、連中の腕もお察しよ」「てんめええっ!!」

まさに類は何とやら、所詮お前もまたその程度ってワケだ高田。

「行くぞ、バトルだ！ 『アルマデス』で『カオス・ネクロマンサー』を攻撃！」

「ハッ、ならこれでも喰らってな！ 『魔法の筒』マジックシンダー発動だぜ！ このカードは相手モンス

ターの攻撃を無効にして、攻撃力分のダメージを与える！ くたばりなあ！」

『アルマデス』のモンスター効果！ このカードがバトルする時、相手はカードの効果を発動できない！ よって『魔法の筒』は発動できない！」

「ンだとお!？」

幻層の守護者アルマデス（シンクロ・効果モンスター）

星5

光属性／悪魔族

ATK 2300 / DEF 1500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・効果モンスターの効果を発動できない。

「だ、だがそれがどうしたあ！ こっちの攻撃力は6000だ！ 2300で勝てるワケがネエ！」

「本当にそう思うのなら、『カオス・ネクロマンサー』の攻撃力をよく見てみな！」

「あ!? テメエ、何寝呆けた事を——」

カオス・ネクロマンサー：ATK 6000↓400

「な、何だと!? 何しやがった、テメエ!」

ニイ、と俺は笑って最後の手札のカードを示す。それは緑色の、魔法カードだ。

「速攻魔法『禁じられた聖杯』。エンドフェイズまでモンスター1体の攻撃力を400ポイントアップさせる代わりに、モンスター効果を無効にする。

『カオス・ネクロマンサー』の爆発的な攻撃力は効果で得た物。ならばそれを無効にしてしまえば、後に残るのは低スペックなステータスのみって寸法だ」

モンスター効果の無効化は意外と重要だ。『魔王 ハ・デス』や『ブラック・ローズ・ドラゴン』の様なこつちにとつて不利になるモンスター効果は勿論の事、『神獣王バルバロス』のようなデメリットアタッカーや今回同様『カオス・ネクロマンサー』の能力を打ち消せばデュエルを有利に進められる。

しかも今回は『アルマデス』の効果でカウンターを許さない状態にしてやったから、安心して相手の効果を潰せるってワケです。

禁じられた聖杯

## 【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。

「攻撃力の差は1900ポイント。それが残り1800のお前のライフから差し引かれれば、どうなるか解るよな？」

「ぜ、ゼロ……」

その通りだ。

「そうだよ、エリート。大正解だ！　〃ミラーージュ・ストライク〃！」

「うぎゃあああああああああああああああああつ！」

高田：LP 1800↓0

黎：WIN

高田：LOSE



「『スターダスト・ドラゴン』で『パンサー・ウオリアー』を、そして『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『魔導戦士 ブレイカー』を攻撃！ 響け、〃シューティング・ソニック〃！ 轟け、〃アブソリュート・パワーフォース〃！」

「ぐあああああああああああつ！」

黎：LP 4000

ブルー生①：LP 450↓0

ブルー生②：LP 1300↓0

「『テンペスター』で『コスモ・クイーン』を攻撃！ 〃スカイスクレイパー・テンペスト！ 〃そして『融合解除』！ 『スパークマン』、『フェザーマン』、『バブルマン』でダイレクトアタック！」

「ぎゃあああああああああつ！」

十代：LP 25



ブルー生③ : LP 800↓0

ブルー生④ : LP 3200↓0

黎、十代 : WIN

ブルー生達 : LOSE

「よし、終わり！」

「最後の一人、打ち取ったぜ！」

煌めき白い光の粒を散らす衝撃波と業火の鉄拳が相手を吹き飛ばす。隣で十代もヒーローの連続攻撃で敵を打ち倒した。これで、最後のブルー生も敗北を確認。

要するに……。

「俺達の、勝ちだあ！」

「ぐ、うううううっ！」

結果、58戦中13戦がノーダメージの完勝。ただ翔やももえ等が2人目のブルーとの戦いで敗北してしまった。その辺のスタミナは課題だな。

それでも文句の付けようの無い、俺達の勝利だと言える。

「い、イカサマだ！ こいつらイカサマしやがった！」

「何……？」

悔しさのあまりか、高田の奴がそんな事をほざき始めやがった。

それにつられて他のブルー（負け組）もそうだそうだ、と喚く。こいつら、見苦しいにも程があるぞ。

他の皆がその負け惜しみに対して怒りで飛び出しそうな所を手で制して止め、俺が前に出る。

「おいおい、一体何を以てイカサマ呼ばわりするんだ。悪いが、それは敗者の言い訳であり、そんな事をする奴は自分のデッキを信じきれてない奴だ。こつちにそんな奴はいねえよ」

「ふざけんな！ そうじゃ無かったらオレ達が負ける訳がねえだろうが！ この似非デユエリスト共が！ おめえら全員アカデミアから消えやがれ！」

「また随分と酷い言い草だな。お前らが負けたのは純然たる力量不足だ。それに俺達が似非ならお前らも似非だよ、この似非エリート、略して似非ート共が」

「テ、メエ！ 言わせておけば！ 我らエリートを愚弄する気か！」

「第一、イカサマをしていると気付いた時点でお前らは指摘しなかった。それは何故だ？」

「ぐ、それは……」

「俺達がイカサマなんてしてなかったから、だろう？」

「う、ぐ……………、そ、そういう訳じゃ」

「遅い。すぐに反論できない時点でそれはもう言い訳だ。それに……」

ジリ、と下がるブルー軍団。

俺は殺気を強めに込めて、ドシン！ と脚を踏み下ろす。

野生動物ならこの殺気に危険を感じて逃げ出すが、本能を半ば失っている人間には危険と分かっても逃走には結びつかない。

「まだ何かするつつーなら、俺がリアルファイトで相手になるぜ…………？」

「う、うわあああああああああああああああああああつ！」

その言葉で、ブルー生達は一目散に逃げ出した。これで解決だ。

後で床に入ったヒビを修繕したのは別の話である。

ふう、と一息吐き、皆が解散し始めようとした頃。

「遊馬崎くん」

「遊馬崎さん」

「田中？ 原？」

「済まなかった」

「済みませんでした」

はい？

もしかして同じブルーとして代わりに謝罪してる訳？

「彼らと同じブルーの人間として、謝罪する。本当に申し訳無い」

「化物扱いさせてしまい、申し訳ありません」

「アホ」

ピシピシ、と軽く指で額を弾く。威力の調整を間違うと頭蓋骨にヒビが入りかねないので、その辺は細心の注意を払っている。

「アダツ!?」

「痛いっ!?!」

「あいつらはあいつら、お前らはお前ら。代わりの謝罪なんざ何の意味も持たねえよ。」

それに、半分は俺の責任だよ」

「え？」

目を点にして聞き返す二人。

「俺みたいな人ならざる者が皆に物事を教えていたから、今回みたいな一件が起きた。奴らの逆恨みの原因は、俺だ。だからこそ、俺が謝るべきなんだ」

「そ、そんな事無いですよ！ 遊馬崎くんの教えで私は、いえ、私達は今までよりもずっと強くなれました！」

「そうだ！ 感謝こそすれ、君を恨む理由なんて無い！ そうだろう、皆！」

田中の呼びかけに、皆が首肯する。

俺は、思わずそれに笑ってしまった。

「ありがとうな、皆。化物として、人間から外れた身として、幸いだよ」

ツ、と頬を塩分を含んだ液体が流れる感触がした。



——レッド寮から北へ約500メートルの位置・翌日の夜PM 20:33

『本当に良い仲間を持ったな、主殿』

「ありがとう、桜」

再び休学の申請を出し、俺は森の中の広場へと歩を進めた。

魔法陣の展開は既に完了済み。護衛の1人の位置も細くしてあるし、後は踏み出せば良いだけだ。

俺は、何を思って彼らに物を教えていたのだろうか。

多分だが、ブルーに勝てる人を作るため、では無いだろう。

邪推かも知れないが、誰かが俺の死んだ後に遺志を継いでくれる事を期待したのでは無いだろうか。だからこそ、自分の持っている知識を全て叩き込み、俺亡き後も戦える戦士を育成していたのではないだろうか。

憶測の域は出ない。だが、全くの間違いでも無いハズだ。

俺は、一体この世界で何がしたいのだろうか？

邪神を倒す事は使命だ。都を助ける事は目的だ。

ならば果たして、俺の成し遂げたいと願う欲の対象は、何なのだろうか？  
人間として、否、生物として生きていて良いのだろうか。時にはそんな疑問ですら頭をもたげる。

〔TRANSMISSION : to SLOTH〕

〔With MANA HIRAGI〕

微妙にスッキリしない気分で、俺はゲートを潜るのであった。

そんな俺の心情を察してくれたのか、桜が言葉をかけてくれる。

『主殿、深く考える事は時に害悪だ』

「？」

『アカデミアの生徒達は、主殿が教えを授けていた彼らは主殿の味方だ。そして主殿はまだこの世に生を授かり21年、己の身の全てを考え決めるには若すぎる』

……、そういう物なのだろうか？

『私はこの世に生まれて数百年経つが、自分が何をすべきであり、どうすれば良いかなど未だ解らない事の方が多い。』

それに、人間の世界に居場所が無くなったら精霊界にある私の家に来ると良い』



歓迎するぞ？ と桜は笑った。

ふ、ありがとな。お陰で元気が出たよ。

『私の言いたい事は、伝わったか？』

「ああ。ゴチャゴチャ考えるのは後回しだ。今は目の前にある事をやるし、居場所だったら暫くは考える必要は無いしな。何をしたいか、それは戦いが終わってから考えるさ」

『ならば、負ける訳にはいかないな』

「当然。護衛も邪神も全員ぶっ潰す！」

人間というのは、単純で複雑だ。言葉一つで、行動一つで変わる。今だってそうだ。クヨクヨ悩んでいた事が桜のアドバイスで吹っ飛んだ。本当に不思議なものだ。

心の中に立ち込めていた暗雲が晴れて行くのを感じながら、俺は異世界へと転送されて行った。

t o b e c o n t i n u e d

## 閑話 ☆6のクセに生意気だ

SIDE：桜

「精霊に会いたい奴らが妙な儀式をした？」

「ああ」

エンヴィーを討伐してから十数日。冬休みに入り帰省する者も多い中、我々はアカデミアに残っていた。

主殿は大怪我を負っている上に帰る家は無いからな、この島を離れる理由も無いのだ。

そんなある日の夜、厨房に立つ私に十代殿が話を持ち掛けて来た。

「もうそれで2人消えてるって」

「ふむ、見慣れぬ奴がいると思っただが、そういう経緯か」

生贄を要求するタイプか。

相当高位な精霊を呼び出そうとしたのだろう。

我々デュエルモンスターズの精霊は人間界に来る際、生贄が必要——という話は無

い。行こうと思えば旅行感覚で行けるし、帰ろうと思えば帰れる。逆説、生贄が必要な程に強い精霊となると本当に神、または神に匹敵する類というワケだ。

そんな私は自分と主殿のために雑煮を作っている最中だ、生贄は要らぬが腹は減るのである。ちなみに醤油ベース。

「して、そ奴らは何を用いて何を呼び出そうとしたのだ？」

「えーと、ウィジャ盤を使つて……、何だっけ？」

「サイコ・シヨツカーだった筈なんだな」

「……何？」

思わず鍋をかき回す手を止める。

「え、何？ 俺そんな変な事言つた？」

「言つた」

火を止め、エプロンを近くの椅子に掛ける。

何がおかしいかと言えば、全てだ。

ウィジャ盤で機械族モンスターを呼び出して、レベル6の分際で生贄を3人も要求し、しかもそれをやったのはオカルト性も神性さも一切無いモンスター。これは言つてみれば『自動販売機からパンジャンドラムが出て来てしかも喋り出した』くらいおかしい事だ。

「ふうむ、迸る程きな臭いな」

精霊にも悪しき者はいる、交信してしまったのはそいつらという事だろうか。

ただのオカルトと思つて精霊に手を出し、手痛いしつぺ返しを喰らう。昔から儘ある話だ。

そんな話を聞き、食堂の隅で雑煮を待っていた主殿が口を開いた。

「悪い精霊でも、掴まされたか？」

「主殿、まだ傷が癒えていないのだ、首を突つ込むのはよせ」

「もう平気だつてば、ほら」

包帯を巻いてふらふらとしながら言う主殿、是非とも『説得力』という単語を辞書で調べて貰いたい。

件の『高寺オカルトブラザーズ』なる愚行を犯した主犯の高寺は『サイコ・シヨツカー』じゃなくてミイラが出たあー!?』と怯えてる。

「いや本当に平気なんだつてば。少し足元覚束ないだけで」

「それを平気と言うなら足元がしつかりしている我々は何だ」

「本当なら入院ものツスよ！」

「え、えーと……」

痩せ我慢を美德と勘違いするのは日本人の悪い癖だ。

焼きたての餅で口を塞いでやろうか、そう思った時だった。

ブツン、と寮の食堂が真っ暗になった。

「む、停電か」

「少し待ってろ、すぐ明かりを——」

「ひいっ!!」

そしてやや遅れて響く悲鳴。聞き覚えの無い声という事は、今のは高寺という男のか。

「高寺!」

「高寺クーン!」

そしてコートをまとい顔を隠した怪しい男がいきなり現れ、高寺を担いで逃げ出す。

精霊のクセに魔術も幻術も無く、現地にある装置を使って肉体労働とは、ますます怪しい。

「逃がすか!」

『!』

素早く主殿が炎を練って鞭状にし、それを不審者の脚に巻き付ける。

だが推定『サイコ・シヨツカー』は炎の鞭で足止めされたと分かるや否や、手から光線を放って主殿を狙った。

「させん！」

素早く盾を召喚し、それを防ぐ。

しかし光線はそのまま炎の鞭へと照準を移動し、そのまま焼き切り逃げてしまった。

「しまった……！」

「奴め、怪我人、しかも私の主を撃つとは良い度胸だ」

私とて騎士の端くれ、剣を捧げた主を狙われ傍観を決め込むつもりは無い。

「チツ、追うぞ！」

「おう！」

「あいよ！ それと十代、これを！」

怒りを鎮めようと心を落ち着けつつ走り出す私の後ろで主殿が何かを渡していたが、今の私にそのような事はどうでも良かった。

あの下郎め、そも6つ星のクセに生贄を3人も捧げろとは生意気な、折檻では済まさん！

不審者が行き着いたのは、アカデミアの送電施設。ここから島全体に電気を送っているとの事。

そして突如電流が一ヶ所に集まり、倒れていた高寺の傍らに機械仕掛けの大男が現れた。

今にも雨が降りそうな程にどんよりした雲、そして見るからに怪しいロボット。私が警察官なら迷わず手錠をかけているシチュエーションだ。

「ひいひい！」

「で、出たにや！ 本物だにや、実際に見るのは初めてだにやー!？」

「待て私も本物だが!？」

「そうでしたにやー！」

全く、精霊について教えている教師が何を怯えているのだから……。

「おい『サイコ・シヨツカー』！ 高寺達を返せ！」

気炎を吐いている十代殿を見習って欲しいものだ。

『……』

「そんなに復活したいのなら俺を生贄にしろー！」

「その必要は無いで、十代殿」

「桜さん!? けど高寺達が!」

「彼らを見殺しにしろと言っているのでは無い。あのような三流以下の木っ端精霊の贅になる必要など無いと言っているのだ」

『ほう……』

「ここで初めて奴が喋る。」

後ろでは翔殿が「喋った!」と驚いている。いやだから私も精霊だし最初から喋っているのだが。

「桜、三流以下ってのはどういう事だ」

「では問おう主殿。私は誰かを生贄にしたか? 人間界に現れる際、電気を使って仮初の肉体を得たか?」

「……そういう事か」

「然り。彼奴は人間3人を生贄に要求し、しかもこの高圧電流を使って自身を呼び出した。ある程度力のある精霊なら全く無用な手順だ。これだけで奴の底が知れるというものであるろう? しかも見ろ、あの半透明の姿を。確りとした肉体を持つ私と大違いだ、自分を維持するどころか、この世界に現出させるための基礎エネルギーすら持っていない。これを三流と呼ばずして何と呼ぶ」

「成程ツス、高寺クン達はハズレを引いたって事ツスね」



「ハズレで済むとは思えないなあ、俺は。寧ろ罰ゲーム？」

「ははっ、罰ゲームか！ 良い例えだ！」

『黙れ、人間に与する愚か者め！ 私はこの生贄を以て復活の儀とするのだ！』

「私が愚か者なら貴様は精霊の面汚しだクスめ！」

ハッキリ言おう、私は奴が嫌いだ。

精霊とは有史より人間と共に歩み、競い、戦い、愛し合い、憎み合い、そして笑い合つた幽かそけし命。

贄を要する者もいるだろう、雷を己が礎とする者もいるだろう。

だが『サイコ・シヨツカー』は違う。奴程度の精霊が現れるのに人間の生贄は要らぬ。機械族ではあるが雷を源とするのでも無い。

そんな輩が我が物顔で人間と関わり合い恐怖を与え、復活を求む？ 自惚れにも程が

あろう！

「構えろ、『サイコ・シヨツカー』」

『何？』

「私とデュエルしろ。既にこの世界に現れている精霊だ、喰らえば人間3人より潤沢な魔力が得られるぞ？」

「桜……!?!」

「案ずるな主殿、この程度に敗れるようなら私は貴方に仕える資格なぞ無いだけだ」  
後ろを見ずとも分かる、我が主がやれやれ顔で呆れているのが。

「はははは、すまぬな。私はこういう奴なのだ。曲がった事は嫌いだし、無益な恐怖を  
与えて悦に浸るような奴も嫌いなのだ。」

「……勝てよ、俺の騎士」

「無論」

「悪いな、こんな怪我どうって事は無いんだが……。怒るだろお前」

「それも無論」

「なら、任せた」

「ちよつと待った！ なら俺も参加するぜ！」

「十代!？」

「兄貴!？」

ほう、気骨があるな。

恐怖を感じていない……。いやそれ以上にデュエルが好きなのだろう。

「おい『サイコ・シヨツカー』、このデュエル俺も参加するぜ！ お前が勝ったら俺を生  
贄にでも何でもしやがれ！ だが負けた時は高寺達を返して貰う！」

『良いでしょう。ククク、今日は良き日だ、精霊と3人分の生贄に加え、君のように常人

を遥かに上回るエナジーと波動を持つ人間まで手に入る……。我が復活はここに祝福されたという事だ!』

捕らぬ狸の皮算用だ、と私は心の中で吐き捨てた。

我々にデュエルが始まる前から勝った気では、随分と腕に自信があるらしい。その鼻っ柱、真つ二つにへし折ってやろう。

『だが2対1では私の不利。よって……、ツハア!!』

声を上げて気合いを入れた『サイコ・ショッカー』は、その場で2人に分裂した。

ほう、思っていたよりかは器用なものだ。

「ひいつ、増えたツス!」

「狼狽えるな、ここの電気を奪ってアバターを複製したに過ぎん」

「へえ、スッゲーな! これなら2対2だぜ!」

『さあ行くぞ、我が生贄達よ! 今日我が復活の祝賀祭だ!』

「俺は生贄じゃねえ! オシリスレッドの遊城十代だ!」

「私は桜、貴様の命を桜吹雪の如く散らす騎士である!」

『デュエル!』

十代&桜：LP 8000

サイコ・シヨツカー：LP 8000

☆

『ルールはタッグフォースルールで行われる』

「受けて立つ」

薄暗い送電施設の地面に、ほの明るい10マスの盤面が向かい合うように浮かび上がる。

成程、1対1なら兎も角2対2となるとカードの配置も少々分かり辛くなる。その点の配慮というワケか。

「たつぐふおーするーる?」

「この間授業で習ったぞ、翔」

「確か、フィールドと墓地、それからライフを共有する、だった筈なんだな」

「簡単に言えば君と十代君がやったのは別のルールだにや」

「へえ」

……翔殿はもう少しちゃんと授業を受けるべきではなからうか。

おっと、いかんいかん、デュエルに集中しなくては。

『先行は私だ、ドロー!』

相手の前にシールドのように半透明のカードが裏側で展開される。

実体が無いアバターだから、ああいうプレイスタイルになるのだろう。

『私は『怨念のキラードール』を召喚!』

『ギイイイ!』

ATK：1600

『更に永続魔法『エクトプラズマー』を発動! このカードの効果により互いのプレイヤーはエンドフェイズに自分のモンスター1体を生贄に捧げねばならない!』

「だが代わりに、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。そして『キラードール』は永続魔法の効果で贄となった場合、次の自分のターンに復活する」  
『その通りだ』

怨念のキラードール（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1600／DEF 1700

このカードが永続魔法の効果によってフィールド上から墓地に送られた場合、自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地から特殊召喚する。

エクトプラズマー

【永続魔法】

お互いのプレイヤーは、それぞれ自分のエンドフェイズ時に1度だけ、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選び、そのモンスターをリリースし、リリースしたそのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

「つ、つまりどういう事ツスか?」

「アイツは毎ターンこちらの800ダメージを与えるつて事だろ」

「だけではない、『エクトプラズマー』の効果で毎ターンこちらは1体のモンスターを失うという事でもある」

『キラードール』は復活効果を持つ、つまり奴は毎ターンモンスターの消費が実質的に無いって意味もあるぜ」

「そ、そんなのズルいッス！」

悪くない戦術だ。

『エクトプラズマー』は互いにモンスターの消費を強いるカードだが、『キラードール』を絡める事で疑似的にこちらだけに消費を押し付けているワケだ。

『エンドフェイズに『エクトプラズマー』の効果発動！『怨念のキラードール』を生贄に、貴様らに攻撃力の半分のダメージを与える！ 喰らえ800ポイントのダメージを！』

「ぐああっ！」

「くうっ！」

十代&桜：LP 8000↓7200

「桜！」

「兄貴！」

「問題無い、たかが800だ！」

「まだまだこれからだぜ！」

斧を持った不気味な木製人形から魂が抜け、こちらを襲う。

掠り傷とはいえ800は800、毎ターン受け続けるワケにもいかない。

早めに対処しないと。

サイコ・シヨツカー：LP 8000

手札：4枚／5枚

フィールド

：モンスター無し

：エクトプラズマー（永続魔法）

「今度はこつちの番だ！ 先に行くぜ、桜さん！」

「任せた！」

「カードドロロー！ よっし！」

ほう、1ターン目から良いカードを引いたらしい。この引きの強さ、主殿が以前に驚異的と言っていた事があつたが、成程確かに。

「黎！ お前から貰ったカード、早速使わせて貰うぜ！」



「ああ、思い切り行け！」

「俺は手札から『E・HERO エアーマン』を召喚！」

『トアツ！』

ATK：1800

「おお、新しいヒーローなんだな！」

「『エアーマン』の効果発動！ 召喚に成功した時、デッキから仲間のヒーローを手札に加える事ができる！ 俺が選ぶのは『エッジマン』だ！」

E・HERO エアーマン（効果モンスター）

星4

風属性／戦士族

ATK 1800 / DEF 300

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●このカード以外の自分フィールドの「HERO」モンスターの数まで、フィールド

の魔法・罠カードを選んで破壊する。

●デッキから「HERO」モンスター1体を手札に加える。

十代殿が初手で呼び出したのは送風機が付いた翼を持つヒーロー。サーチ効果を使い、デッキの回転を円滑にする能力は何年経っても有用だ。

……ところで一瞬、三沢殿が見えた気がしたのだが気のせいだろうか？

「行くぜ！ 『エアーマン』でダイレクトアタック！ “エアラッシュ”！」

『ぐおおおおお！』

サイコ・ショッカー：LP 8000↓6200

鋼の翼についたファンが疾風を起こし、『サイコ・ショッカー』を襲う。

さてまだ終わらぬぞ？

「カードを伏せる。そしてお前の『エクトプラズマー』の効果を俺も使わせて貰うぜ！

『エアーマン』の魂を喰らえ！」

『ぐあああああ!?!』

『おおおお、おのれえ！』

サイコ・シヨツカー：LP 6200↓5300

「やったー！ 大ダメージだ！」

「合計2700ダメージ、さっきの3倍以上なのですにや」

「相手のフィールドがガラ空きなのを見逃さず、相手のカードの効果も使う。上手い戦術なんだな！」

「……だが、今度は十代達の場合がガラ空きになったぜ」  
「あつ」

十代&桜：LP 7200

手札：4枚＋『E・HERO エッジマン』／5枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

『私のターン、ドロー！』

さて主殿の指摘通り、我々の場には伏せカードが1枚あるのみ。これでどう敵の攻撃を凌ぐか、腕の見せ所だぞ十代殿。

「このスタンバイフェイズ、永続魔法効果で墓地に送られた『怨念のキラードール』は復活する！」

『ギゲエエ！』

ATK：1600

これでまず1体、直接攻撃と合わせれば2400ダメージを受ける。残るとはいえ、結構ライフが削られる数値だ。

『魔法カード『闇の誘惑』を発動。デッキから2枚ドロウし、手札の闇属性モンスターを1枚除外する。除外するのは『ミストデーモン』だ』

ミストデーモン（効果モンスター）

星5

闇属性／悪魔族

ATK 2400 / DEF 0

(1) : このカードはリリースなしで召喚できる。

(2) : このカードの(1)の方法で召喚されている場合、エンドフェイズに発動する。  
このカードを破壊し、自分は1000ダメージを受ける。

自壊デメリットを持つ闇属性モンスターか。成程、攻撃力2400で相手を殴りつつ、自爆する前に『エクトプラズマー』で射出して自分に返るダメージを踏み倒すのが狙いの採用だな。

『魔法カード』『デビルズ・サンクチュアリ』を発動！ 私のフィールドに『メタルデビル・トークン』を特殊召喚する！』

ATK : 0

『そしてこれを生贄に『グラビ・クラッシュドラゴン』を召喚する！』  
『オオオオオオオオッ！』

ATK : 2400

金属質な人形を贄に巨大な二足歩行のドラゴンが呼び出される。

あれは確か永続魔法をコストにモンスターを破壊できるカードだったか。『エクトプ  
ラズマー』を自分で処理する方法もすっかり備えてあるワケだ。

デビルズ・サンクチュアリ

### 【通常魔法】

(1)：自分フィールドに「メタルデビル・トークン」(悪魔族・闇・星1・攻/守0)1  
体を特殊召喚する。

このトークンは攻撃できず、このトークンの戦闘で発生するコントロールへの戦闘  
ダメージは代わりに相手が受ける。

このトークンのコントロールは自分スタンバイフェイズ毎に1000LPを払う。  
または、LPを払わずにこのトークンを破壊する。

グラビ・クラッシュドラゴン(効果モンスター)

星6

闇属性/ドラゴン族

ATK 2400/DEF 1200

(1)：自分フィールドの表側表示の永続魔法カード1枚を墓地へ送り、相手フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

その相手モンスターを破壊する。

『行くぞ、バトルだ！』『グラビ・クラッシュドラゴン』でダイレクトアタック!!』

「マズいですよこれは、全部のダメージを通したら大ダメージなのにや!」

「兄貴!」

竜の鉄拳が我々目掛けて振り下ろされる。

さてどう凌ぐ。

「リバースカード、オープン! 罫カード『ヒーロー見参』! 相手が攻撃してきた時、俺の手札を1枚選ばせ、それがモンスターカードなら特殊召喚できる! 俺の手札は5枚、さあ選べよ『サイコ・シヨツカー』!」

ヒーロー見参

【通常罫】

(1)：相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

自分の手札1枚を相手がランダムに選ぶ。

それがモンスターだった場合、自分フィールドに特殊召喚し、  
違った場合は墓地へ送る。

『……それだ』

「このカードは……『E・HERO ブレイズマン』だ！」

十代殿の手札の1枚がスパークし、燃える拳のヒーローに姿が変わる。どうやら奴はハズレを引いたらしい、良い気味だ。

欲を言えば『エツジマン』を選んで欲しかったが……、こればかりは運だからな。

DEF:1800

『『ブレイズマン』の効果発動！ 召喚に成功した時、デッキから『融合』を手札に加える！』

E・HERO ブレイズマン（効果モンスター）

星4

炎属性／戦士族



ATK 1200 / DEF 1800

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「融合」1枚を手札に加える。

(2)：自分メインフェイズに発動できる。

デッキから「E・HERO ブレイズマン」以外の「E・HERO」モンスター1体を墓地へ送る。

このカードはターン終了時まで、この効果で墓地へ送ったモンスターと同じ属性・攻撃力・守備力になる。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分は融合モンスターしか特殊召喚できない。

『ならばそのモンスターを攻撃!』

『つく、サンキュー『ブレイズマン』! 助かったぜ!』

『何が助かっただ! 私の攻撃は終わっていない! 『怨念のキラードール』で今度こそダイレクトアタック! グラッジ・アックス!』

『ぐああああつ!』

『チイツ!』

十代&桜：LP 7200↓5600

『カードを2枚セット！そして『エクトプラズマー』の効果を食べらうが良い！再び魂を使わせろ、『キラードール』！』

「ぐううう！」

「つつう……！」

十代&桜：LP 5600↓4800

「ごめん、防ぎきれなかった」

「ダメージを軽減しただけでも十二分だ。それにデュエルは終わっていない、奴の次の行動に注意しろ」

「っ、おう！」

息を吐かせぬ連続攻撃、とまではいかぬが、それでもライフの4割が消えた。

それでも『ヒーロー見参』が無ければこのライフは更に減っていたのだ、文句を言う必要は無い。

サイコ・シヨツカー：LP 4800

手札：4枚／1枚

フィールド

：グラビ・クラツシユドラゴン（ATK：2400）

：伏せカード2枚、エクトプラズマー（永続魔法）

手札を見る。私の手札は初期手札故に5枚、問題無く戦える。

「ギヤアツ！ 兄貴、桜さん、体が！」

「何？」

「こ、これは!？」

翔殿の悲鳴を聞き、己の体を見ると、足元から腰回りあたりまで半透明の映像のよう  
に消えていた。

「成程、これが贄か。我々のライフは残り6割、肉体の無事な部分も6割というワケだ」

『その通り。私が復活するための生贄として、君達の肉を半分程頂戴した』

「ふざけるな！ 俺達は生贄になんてなるものか！」

「その意気だ十代殿。折れぬハートは無敵の武器となる、最後まで屈してはならんぞ」

私達の体を4割、1人分の8割を持って行ったというのに奴の体から感じるエネルギーは一切増えていない。やはり三流以下のポンコツ精霊か。

「行くぞ、私のターン！ 私は『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！」

ATK：500

「このモンスターは私のフィールドの植物族モンスターをリリースする事で、デッキから植物族モンスターを1体特殊召喚できる」

『ならば私は手札から『増殖するG』を捨て、そのモンスター効果を発動！ このターン、相手がモンスターを特殊召喚する度に1枚ドロウする！』

「構うものか！ 『ローンファイア・ブロッサム』自身をリリースして効果発動！ デッキから出でよ、『ギガプラント』！」

『『増殖するG』の効果で1枚ドロウする！』

『GAAAAAAAAAAAAAAAAA！』

ATK：2400

燃える花によって導かれたのは巨大なツタ植物の怪獣。本来なら山のように大きいのだが、デュエルの中では人間の数倍程度のサイズで納まっている。

「このモンスターはデュアルモンスター、よって今は通常モンスターだ」

「でゆあるもんすたー?」

「通常モンスターと効果モンスターの側面を併せ持つモンスターの事だにや。通常モンスター専用のサポートカードを受けつつ、2回召喚すれば効果モンスターに変化するのですよあ」

「更に装備魔法『スーベルヴィス』を発動! これをデュアルモンスターに装備した時、装備モンスターは再召喚した状態になる!」

そして効果を得た『ギガプラント』の特殊能力により、1ターンに1度、手札または墓地の植物族・昆虫族モンスターを特殊召喚できる! 蘇れ、『ローンファイア・ブロッサム』!」

ギガプラント(デュアル・効果モンスター)

星6

地属性/植物族

ATK 2400 / DEF 1200

(1) : このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。  
 (2) : フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚できる。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

自分の手札・墓地から昆虫族または植物族のモンスター1体を選んで特殊召喚する。

『ドロー！ 再びそのモンスターが現れたという事は——』

「無論！ 『ローンファイア・ブロッサム』をリリースして効果発動！ デッキから『桜姫おうひ」

タレイア』を特殊召喚する！」

『ハアツ！』

「このカードの攻撃力は私の場の植物族モンスターの数×100アップする！」

『ならばこちらも更にドロー！』

桜姫タレイア（効果モンスター）

星8

水属性／植物族

ATK 2800 / DEF 1200

(1) : このカードの攻撃力は、自分フィールドの植物族モンスターの数×100アップする。

(2) : このカードがモンスターゾーンに存在する限り、このカード以外のフィールドの植物族モンスターは効果では破壊されない。

ATK : 2800 ↓ 3000

『攻撃力3000だど!?!』

「おーおー、回るねえ回るねえ。回り出した植物族は強いぞー」

炎の花から今度は和風衣装の桜の花の化身が現れる。

彼女の提供する団子は絶品なのだが、デュエル中なので自重だ。

「永続魔法『世界樹』を発動!」

世界樹

【永続魔法】

フィールド上の植物族モンスターが破壊される度に、このカードにフラワーカウン

ターを1つ置く。

また、このカードに乗っているフラワーカウンターを任意の個数取り除いて以下の効果を発動できる。

- 1つ：フィールド上の植物族モンスター1体を選択し、その攻撃力・守備力をエンドフェイズ時まで400ポイントアップする。
- 2つ：フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。
- 3つ：自分の墓地の植物族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

「行くぞ、バトルだ！ まずは『ギガプラント』で『グラビ・クラッシュドラゴン』を攻撃！」

「相打ちツス！」

「いや、今回はただの相打ちじゃないぜ」

「『パワーウィップ』！」

『『マグナハンマー』！』

巨竜が拳を、巨花がツタをぶつけ合い殴り合う。怪獣映画さながらの迫力なインファイトは、互いに互いの頭を殴り飛ばした事で終結した。

「植物族モンスターが破壊された事により、『世界樹』の効果発動。フラワーカウンター



を1つ乗せる」

フラワーカウンター：0↓1

『ぐううう、私のモンスターが……！　だがこれで残るモンスターは1体、ターン終了時に『エクトプラズマー』で貴様のモンスターも全滅となる！』

「それはどうかな？」

『何?!』

「この瞬間、装備魔法『スーパーヴィス』の効果！　このカードが墓地に置かれた事で、墓地の通常モンスターを特殊召喚する！　蘇れ、『ギガプラント』！」

『GUIOOOOOOOOO!』

ATK：2400

『ど、ドロー！　バカな、そのモンスターは効果モンスターの筈だ!』

「戯け、このモンスターはデュアルモンスターだ。よって墓地では通常モンスターとして扱う！」

『なん、だと……!?!』

「おお、こんな方法があるのか！ スツゲエ！」

知識不足、実力不足、経験不足。

そのような奴、私の敵では無いわ！

スーペルヴイス

### 【装備魔法】

デュアルモンスターにのみ装備可能。

(1)：装備モンスターはもう1度召喚された状態として扱う。

(2)：表側表示のこのカードがフィールドから墓地へ送られた場合、自分の墓地の通常モンスター1体を対象として発動する。

そのモンスターを特殊召喚する。

「さあ行け『ギガプラント』、今度は奴を直接叩き潰せ！  
　　パワーウィップ・セカンド

レイド!!」

『ガアアアアアア!?!』

『ぬおおおおおお!?!』

サイコ・シヨツカー：LP 5300↓2900

「これで貴様のライフは『タレイア』の攻撃力を下回った。覚悟は良いな？」  
『ぐう………！』

「これでトドメだ！ 『桜姫タレイア』でダイレクトアタック！  
// ほまっおっらんぶ 萌桜嵐舞 // ！」

「行つけえ！」

「これで決まるか………？」

桜の花びらが嵐のように吹きすさび、『サイコ・シヨツカー』を襲う。

これで終わりだ、外道！

『そうはさせせん、永続罫『女神の加護』を発動！ 私のライフを3000回復する！』  
「何!？」

女神の加護

【永続罫】

自分は3000ライフポイント回復する。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードがフィールド上から離れた時、自

分は3000ポイントダメージを受ける。

『ぐおあああああああ！』

サイコ・シヨツカー：LP 2900↓5900↓2900

ちいつ、差し引きゼロにされたか。これで決めたかったのだがな。

相手の手札は4枚にまで回復されてしまった、このままターンを回しても2ターン程余裕があるが、ハンドアドバンテージを与えてしまったのは痛い。

「うう、決まったと思っただんすけど……」

「しぶといんだな」

「だが『女神の加護』は消滅と同時に3000ダメージを受ける。あれを除去できれば自滅させられる」

「カードを1枚伏せる。そして『エクトプラズマー』の効果が強制発動。私は『タレイア』の魂を使い、貴様を殴る！ 喰らえ！」

『ぐおっ！』

サイコ・シヨッカー：LP 2900↓1500

「ターンエンドだ」

十代&桜：LP 4800

手札：3枚+『E・HERO エッジマン』、『融合』/2枚

フィールド

：ギガプラント(ATK：2400)

：伏せカード1枚、世界樹(永続魔法・フラワーカウンター：1)

『私のターン、ドロロー！ たかが人間と人間に与する屑精霊が、私をナメるな！』

「御託は良い、さっさとターンを進めろ！」

『スタンバイフェイズ『怨念のキラードール』が復活！』

ATK：1600

『そして『強欲な壺』を発動！ デッキから2枚ドロローする！ まだだ、『天使の施し』も

発動！ デッキからカードを3枚ドロし手札2枚を捨てる！ 私が捨てるのはこの2枚だ！』

奴が見せた捨て札は『ネクロ・ガードナー』と『冥界の使者』。

ここで手札を増強したか。

さて、どう足掻く。どう出る。

『く、ククク……』

『！』

『とうとう来た！ いやいよ我が復活の時だ！』

「来るか！」

『私は手札から『プルーフ・プルプラス』を召喚！』

『ミャオウ！』

ATK：100

む、あのモンスターは！

「へっ、何だよそんな黒猫！ 怖くないぜ！」

『このモンスターを召喚した時、私は通常の召喚とは別に生贄召喚を続けて行う事がで

きるー!』

「何?!」

プルーフ・プルフランス（効果モンスター）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 1000

このカード名の（1）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：特殊召喚されたモンスターが自分フィールドに存在しない場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分はモンスターを特殊召喚できない。

（2）：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

モンスター1体をアドバンス召喚する。

「その召喚にチェインし、罫カード『魍魎跋扈』を発動！ 手札からモンスター1体を通

常召喚する！ 出でよ、『ローズバード』！」

『ピピイーン！』

A T K : 1 8 0 0

『そんなモンスターで何ができる！』『プルーフ・プルフランス』を生贄に、出でよ私自身！』

明かりの無い宵闇を、突如として電気の光が眩く切り裂く。

これは……、実体化をする気か。成程この送電施設まで逃げ込んだのは、アバターのエネルギーを工面するためでは無かったというワケだ。

「うわああ!?!」

「何にや何にやー!?!」

眩い電気は蒼雷となつて周囲の闇を照らし、『サイコ・ショッカー』を覆うように降り注ぐ。

奴の姿は一瞬で消え失せ、落雷の消滅と共にフィールドのモンスターカードゾーンに出現した。

「称えよ、恐れよ！　これが私自身、『人造人間―サイコ・ショッカー』だ!!」

人造人間―サイコ・ショッカー　A T K : 2 4 0 0



「ククク、フハハハハハ！　とうとう我が復活の時が来た！　私がフィールドに存在する限り、罨カードは発動できず効果も無効となるのだ！　苦し紛れに『プルフランス』の召喚時に罨を発動しようだが無意味だ！」

「ほう、先までのノイズ交じりの声とは違い随分とクリアに喋れるようになったな。流石の三流精霊も、自身召喚をすれば多少マシにはなるといふ事か」

「その強がりもここまでだ、最早貴様らに勝ち目は無い！　魔法カード『二重召喚』を発動！　モンスターをもう1体を召喚する！　私はこの効果により、手札から『ランサー・ドラゴニユート』を召喚！」

『グガアッ！』

ATK：1500

「これで奴のモンスターは3体！　来るぞ、十代殿！」

「ああ！」

人造人間―サイコ・ショッカー（効果モンスター）

星6

闇属性／機械族

ATK 2400 / DEF 1500

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにフィールドの罠カードの効果が発動できず、フィールドの罠カードの効果は無効化される。

ランサー・ドラゴニユート（効果モンスター）

星4

闇属性／ドラゴン族

ATK 1500 / DEF 1800

(1)：このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

魍魎跋扈

【通常罠】

(1)：自分・相手のメインフェイズに発動できる。

モンスター1体を通常召喚する。

二重召喚

【通常魔法】

(1)：このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

「戦いだ！ 私自身で『ギガプラント』を攻撃！  
      <sup>サイバ</sup> 電脳エナジーショック！！」

「ッパワーウィップッ！！」

再び激しい爆発が起き、両者のモンスターが爆散する。

「『世界樹』の効果でフラワーカウンターが1つ増える！」

フラワーカウンター：1↓2

これで我々のモンスターは1体、奴の場にはまだ攻撃できるモンスターが2体残っている。だが攻撃力はこちらが上、さてどう出る事やら。

それにしても召喚した自身をそのまま玉砕させるとは、見上げた気骨だ。

『リバースカードオープン！』

しかし爆煙の中で再び奴のノイズまみれの声が届き、場に残っていた最後の伏せカー

ドが展開された。

『永続罨』『リビンググデッドの呼び声』！ たった今破壊された私自身を復活させる！』

『貴様の相打ち戦術、私も使わせて貰った！』

「……………」

先程『ギガプラント』と『スーベルヴィス』でやった事を真似したという事か。

悪くない戦術だ、奴自身の効果で『リビンググデッドの呼び声』の効果も無効になり、完全な蘇生になる。

ATK：2400

奴の場の2枚の永続罨『リビンググデッドの呼び声』と『女神の加護』が暗灰色に陰りスパークしている。これでは破壊してもこちらが徒に消耗するだけか…………。

「フハハハハア！ どうだ、これが私の実力！ これが私の真の力だ！」

「何が真の力だ！ さっきの桜さんのをパクっただけじゃねえか！」

「ほざけ！ 私自身の攻撃を受けろ！ 喰らえ、電脳エナジーショック！！」

「つくう！」

十代&桜：LP 4800↓4200

フラワーカウンター：2↓3

「ハアアハハハハッ！ 『ローズバード』撃破！」

「何の……！」

「桜さん、どうして攻撃表示で出したツスカ!? 守備表示ならダメージも無かったのに！」

「攻撃表示でなければ駄目な理由があるからだ。ここで『ローズバード』のモンスター効果発動！ 攻撃表示のこのモンスターがバトルで破壊された時、デツキから植物族のチューナーモンスターを2体、特殊召喚する！ 現れる『プチトマボー』、そして『スポーア』！」

「チューナーだと!?!」

『きゆうく!』

『ぼぼーん!』

プチトマボー DEF：400

スポーア DEF：800

ローズバード（効果モンスター）

星4

風属性／植物族

ATK 1800／DEF 1500

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが相手モンスターの攻撃によつて破壊され墓地へ送られた時、デッキから植物族チューナー2体を表側守備表示で特殊召喚できる。

プチトマボー（チューナー・効果モンスター）

星2

闇属性／植物族

ATK 700／DEF 400

このカードが戦闘によつて破壊され墓地へ送られた時、デッキから「トマボー」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚できる。

このターン、この効果で特殊召喚したモンスターはシンクロ素材にできない。

スポーア（チューナー・効果モンスター）

星1

風属性／植物族

ATK 4000 / DEF 8000

このカード名の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

（1）：このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地からこのカード以外の植物族モンスター1体を除外して発動できる。

このカードを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードのレベルは除外したモンスターのレベル分だけ上がる。

600ダメージで2体モンスターが増えたのなら釣りが来るといふもの。

胞子型のモンスターとミニトマトの頭を持ったモンスターで場を固めた、突破できるものならやってみろ！

「これで壁が増えましたにや。彼女はこの効果を使うために、敢えてダメージ覚悟で攻撃表示で召喚したというワケだにやー」

「そういう事だ。さてどうする『サイコ・ショッカー』？」

「そんなモンスター、全て薙ぎ払ってくれる！ 『怨念のキラードール』で『スポーア』を攻撃！」

『ぼあー!?!』

「そして『ランサー・ドラゴニユート』で『プチトマボー』を攻撃！ このモンスターの攻撃は貫通能力を持つ！」

『とまー!?!』

「ッ！ 2体の植物族モンスターが破壊された事で、『世界樹』のフラワーカウンターが更に2つ増える！」

フラワーカウンター：3↓5

LP 4200↓3100

「更に『プチトマボー』が戦闘によって破壊された事で、モンスター効果発動！ デツキから『トマボー』モンスターを2体まで特殊召喚できる！ 現れる、2体の『プチトマボー』！」

DEF：400



DEF:400

「ただしこのターン、こいつらをシンクロ素材にはできない」

「私はカードを2枚伏せる。そして『エクトプラズマー』発動！ 『怨念のキラードール』、発射ア！」

「ッ！」

「ぐあっ！」

十代&桜:LP 3100↓2300

いい加減チクチクと鬱陶しいなこれも！

サイコ・ショッカー:LP 1500

手札:0枚/4枚

フィールド

・人造人間―サイコ・ショッカー(ATK:2400)、ランサー・ドラゴニユート(A

TK:1500)

・伏せカード2枚、リビンググデッドの呼び声（永続罫・『人造人間―サイコ・ショッカー』を対象に発動中・効果無効）、女神の加護（永続罫・効果無効）、エクトプラズマー（永続魔法）

「俺のターン……、ドローツ！」

「場は残した。頼むぞ十代殿」

「ああ！ 行くぜ『サイコ・ショッカー』、覚悟しろ！」

ライフがかなり減らされてしまった。やってくるじゃないか、ガラクタめ。

事前に合わせもしないデッキでは、やはり歩調を合わせるのに時間がかかるな。

「俺は桜さんが残してくれた2体の『プチトマボー』を生贄に、『E・HERO エッジマン』を召喚！」

『トアツ！』

ATK：2600

「攻撃力が私より上だと!？」

「まだだ！ 更に魔法カード『融合』を発動！ 手札の『フェザーマン』と『バーストレ  
ディ』を融合！ 現れろ、マイフェバリット！ 『E・HERO フレイム・ウィングマ  
ン』!!」

『ハアアア、ハアツ!!』

ATK：2100

「もう一丁！ マジック発動、『死者蘇生』！ これで俺は墓地から『エアーマン』を特  
殊召喚！」

『ヌウン!』

ATK：1800

おお、一気に3体のヒーローを召喚したか。

黄金に輝く刃の英雄、風と炎を操る摩天楼の英雄、仲間を呼び込む大気の英雄。1  
ターンで並べられるとなれば悪くない布陣だ。

「俺は『エアーマン』のモンスター効果を発動するぜ！」

「またヒーローを手札に加えるつもりか！」

「いや、『エアーマン』には隠れた能力がある！ こいつを召喚した時、仲間のヒーローの数だけ魔法・罠を破壊できるのさ！」

「何!？」

「ターゲットはお前の右の伏せカードと、永続魔法『エクトプラズマー』だ！」

ビュゴウ！と竜巻が発生し、奴のカードに突き刺さる。

本来サーチ効果を優先的に使う『エアーマン』だが、こういう状況ならこちらの効果の方が有効だ。

「ぬううう、ならば私は狙われた速攻魔法『不朽の特殊合金』を発動！ このターン、私の場の機械族モンスターは効果では破壊されない！」

そして伏せカードをオープン、『非常食』！ 私の場の全ての魔法・罠カードを墓地に送り、ライフを4000回復する！」

サイコ・ショッカー：LP 1500↓5500

旋風がカードに刺さり引き裂こうとするが、それより早く奴のカードの効果により光の粒に変わった。

やれやれ、空振りにされてしまったか。まあ、デュエルでは良くある事だろう。

「マジかよ、回復されちゃった……」

『不朽の特殊合金』か。『世界樹』にはフラワーカウンターを2つ取り除きフィールドのカードを破壊する効果があるが、これでは使えないな」

不朽の特殊合金

【速攻魔法】

(1)：自分フィールドに「人造人間―サイコ・ショッカー」が存在する場合、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●自分フィールドの全ての機械族モンスターはターン終了時まで、相手の効果では破壊されない。

●自分フィールドの機械族モンスターを対象とする魔法・罠・モンスターの効果が発動した時に発動できる。

その効果を無効にする。

「あらら、これは中々面白い状況ですよ」

「面白がつてる場合じゃないツスよ大徳寺先生！」

「2人の体はもう半分以上消えてる、長引かせるのは危険なんだな十代！」

「分かってるさ！俺は永続魔法『世界樹』の効果発動！フラワーカウンターを3つ使い、墓地の植物族モンスターを復活させる効果を使うぜ！蘇れ『桜姫タレイア』！」  
『はあああ！』

フラワーカウンター：5↓2

ATK：2800↓2900

ほう、植物族デツキでもないのに思い切って使ってくれるじゃないか。

いや結構結構、気風の良い使い方は嫌いじゃないぞ。

「悪い桜さん、カウンターかなり使った！」

「気にするな、踏み込め！」

「ああ！行くぜ、『フレイム・ウィングマン』で『ランサー・ドラゴニユート』を攻撃  
！ フレイム・シュート！！」

『フレイム・ウィングマン』は破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えるツス！」

「決まれば大ダメージだ！」

「させん！ 『ネクロ・ガードナー』を除外し、それを無効にする！」

黒い鎧武者がこちらの炎を受け止め掻き消す。

だが攻撃できるモンスターはまだいるぞ。

「防がれたツス!？」

「だったら『エツジマン』で攻撃！ 〃パワー・エツジ・アタック〃！」

「ぬぐああああああ!？」

LP 5500↓5300

胴体で真つ二つにされた『サイコ・ショッカー』。そのまま実体は爆散し、半透明のアバターが再び現れた。

「更に『タレイア』で『ランサー・ドラゴニユート』を攻撃！ 喰らえええ！」

『ぐおおおおお!？』

LP 5300↓3900

「最後は『エアーマン』でダイレクトアタックだ！」

『ぐううう!!』

LP 3900↓2100

4体の攻撃で3400ダメージか。粘るな、機械男め。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「ふむ、カウンターは残したか」

「万一に備えて温存しておいたんだ。……駄目だったかな？」

「さてな、それはデュエルの結果が物語るだろう。次のターン、カウンターを3つ使う効果を使うとすれば、2つ残しておくのも妥当だ。しかしここで攻撃力アップの効果、『タレイア』に使わなかった事で敗北した、という事も有り得る。全ては結果が出てからだ」

「ああ!」

十代&桜：LP 2300

手札：0枚／1枚

フィールド



：E・HERO エッジマン（ATK：2600）、E・HERO フレイム・ウイン  
 グマン（ATK：2100）、E・HERO エアーマン（ATK：1800）、桜姫タ  
 レイア（ATK：2900）

：伏せカード1枚、世界樹（永続魔法・フラワーカウンター：2）

さて、状況は圧倒的にこちらが有利だ。

しかし今の猛攻で倒せなかったのは痛いな、攻撃に力を入れた分、返しのターンの防  
 御は疎かになりやすい。特に先のターンで私が手札を補充させてしまったせいで、次の  
 アバターの手札はこのドロローで5枚になってしまっからな。

『私のターン、ドロロー！』『怨念のキラードール』、『復活！』

ATK：1600

そろそろ休ませてやって欲しい。

『そして『キラードール』を生贄に『モンスターゲート』を発動。デッキをめくり続け、  
 最初に出た通常召喚できるモンスターを特殊召喚する』

モンスターゲート

【通常魔法】

(1)：自分フィールドのモンスター1体をリリースして発動できる。

通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキの上からカードをめくり、

そのモンスターを特殊召喚する。

残りのめくったカードは全て墓地へ送る。

ここで運頼みか。

今『サイコ・シヨツカー』を出された所で、私達のフィールドには攻撃力2900の『桜姫タレイア』と2600の『エッジマン』がいる。余程のカードで無ければ問題は無いだろう。

『では、カードをめくる』

1枚目、『スピリット・バリア』。罫カードのため墓地に行く。

2枚目、『レアメタル・ドラゴン』。モンスターだが通常召喚できない制限があるため

墓地に送り処理が続行となる。

3枚目、『電脳増幅器』。装備魔法のため処理は止まらない。

4枚目、『リミッター解除』。良いカードが落ちてくれた、機械族はあれがあると怖い

からな。

5枚目、『エクトプラズマー』。まだモンスターは出ない。

6枚目、『人造人間―サイコ・ジャッカード』。通常召喚可能なモンスターだ。つまり。

『私はこのカードを特殊召喚する、出でよ『人造人間―サイコ・ジャッカード』！』

人造人間―サイコ・ジャッカード ATK:800

奴の場に出たのは太いケーブルをドレッドヘアのように接続している人造人間。

あれだけでは何もできんが……。

『ククク、ハハハハハハハハ！ これで勝利は我が手中に収まった！』

『光栄に思え、貴様らは私が復活するための生贄になるのだ！』

『何勝手な事言つてやがる！ 俺は生贄になんてならねえ！』

『そうツス！ そんな攻撃力800のモンスターで何ができるツスカ！』

『ならば見せてやろう、私の本当の力をな！ 速攻魔法『地獄の暴走召喚』！ 私の場に攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時、同じ名前のモンスターをデッキ・手札・墓地から特殊召喚できるのだ！』

「でも、『サイコ・ジャッカード』をもう2体呼んでどうするつもりなのかにや？」

「いや……、違う！」

「——まさか！」

『さあ現れよ、私自身よ！』

人造人間—サイコ・シヨツカー ATK：2400

人造人間—サイコ・シヨツカー ATK：2400

人造人間—サイコ・シヨツカー ATK：2400

人造人間—サイコ・シヨツカー ATK：2400

墓地から1体、そしてデッキから3体分の光がフィールドに降り立ち、それが奴ら自身を形作る。

攻撃力2400が4体か、こうして並べられると中々どうして壮观だな。

「ど、どうして『サイコ・シヨツカー』が出て来るんだな!? あいつが特殊召喚したのは『サイコ・ジャツカー』の筈なのに!?!」

「『サイコ・ジャツカー』の効果だ、奴はフィールドにいる時に名前が変わる！」

「如何にも! 『サイコ・ジャツカー』はカード名を『サイコ・シヨツカー』として扱う能力を持つ！」

「そんなの有リツスか!？」

人造人間―サイコ・ジャツカー（効果モンスター）

星4

闇属性／機械族

ATK 800 / DEF 2000

このカード名の（2）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードのカード名は、フィールド・墓地に存在する限り「人造人間―サイコ・シヨツカー」として扱う。

（2）：このカードをリリースして発動できる。

デッキから「人造人間―サイコ・ジャツカー」以外の「人造人間」モンスター1体を手札に加える。

その後、相手の魔法&罨ゾーンにセットされたカードがある場合、それらを全て確認する。

その中の罨カードの数まで手札から「人造人間」モンスターを特殊召喚できる。

「そして貴様らは自分の場のモンスターを指定し、同名モンスターを可能な限り特殊召

喚できる」

「クソツ、俺のデツキに『エアーマン』と『エッジマン』は1体だけ、『タレイア』もない……。俺は『フレイム・ウィングマン』を選択！」

「墓地に同名モンスターは無く、『地獄の暴走召喚』ではエクストラデツキからの召喚は出来ん。よってこちらのモンスターの数は変動しない」

「ククク、良いぞ。やっと生贄らしくなってきたではないか」

言ってくる。

ノイズ交じりの半透明とクリアな実体を行き来する無様を何度も晒している分際でほざくか！

だが、何だ？ 何故奴はこうも勝利を確信している？ 『リミッター解除』でも握っているかと思っただがあれは墓地に行ってしまったし……。

「私の『タレイア』の攻撃力は2900、攻撃力2400の貴様でどう立ち向かう！」  
「俺の『エッジマン』だって2600の攻撃力がある！」

「こっやっただ！」

内心で首を傾げる私に、奴は——とんでもない事を言っただけだ。

「私はレベル6の『サイコ・シヨツカー』2体でオーバーレイ！」

「なっ!?!」

「にいい!?!」

「エクシードだと!?!」

「2体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築!」

☆6×☆6∥★6

2体の奴の分身が紫色の光となり、銀河の渦に飛び込み爆発を起こす。

愚かな……、それが何を意味するのか分かっているのか貴様!

「我が力の結晶よ」

爆発の中から現れたのは、一見衣装を変えただけに見える『サイコ・ショッカー』。

「愚劣な人類を礎石に」

だが金属質な衣装はより硬質化し、緑色を基調としていた色も濃紺をベースとなつて  
いる。

「真なる姿となりて君臨せよ!」



何より異質なのはこれまでより一回りも二回りも巨大化している点だろう。大男程度の体格が、巨人と呼ぶべくまでになっていた。

「エクシーズ召喚！ これぞ我が奥義！ ランク6、『人造人間―サイコ・レイヤー』!!」

ATK：2400

そしていつの間にか、2人いた筈の『サイコ・ショットカー』のアバターが消えている。あの『サイコ・レイヤー』に統合された、否、あれが復活する筈の本当の姿という事か。

レベル6の召喚に1体、素材が2体だから2体分……。ううむ、それでも3人分の生贄というのはやはり取り過ぎだ。

「エクシーズ……。マジか……。!」

「で、でも攻撃力は変わってないッス！」

「確かに、だが無意味に召喚をする筈が無いぜ！」

「私は真の私自身、『人造人間―サイコ・レイヤー』の効果を発動！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で相手モンスター1体のコントロールを得る！ 貴様の『タレイア』は、私のモノだ！」

「何!？」

「ザキツク・マインド・コントロール!」

人造人間―サイコ・レイヤー（エクシーズ・効果モンスター）

ランク6

闇属性／機械族

ATK 2400 / DEF 1500

レベル6モンスター×2

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードのX素材を1つ取り除き、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る。

この効果でコントロールを得たモンスターは効果を発動できず、攻撃宣言できない。

(2)：フィールドに罠カードが存在する場合に発動できる。

自分フィールドのモンスター1体をリリースし、フィールドの表側表示のカード1枚を選んで破壊する。

ORU : 2 ↓ 1

「私の『タレイア』が!？」

「だがこの効果で奪ったモンスターは攻撃と効果の発動は禁じられ、ターンの終わりに相手フィールドに戻る」

無意味に奪う筈が無い、奪ったモンスターを使う方法がある筈!

「手札から永続魔法を発動! 『宇宙との交信』! この効果により私は奪った相手モンスターである『タレイア』を墓地に送り、墓地の機械族モンスターを復活させる! さあ蘇れ『人造人間—サイコ・シヨツカー』!」

「!」

宇宙との交信

【永続魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1):元々の持ち主が相手となる自分フィールドのモンスター1体を墓地へ送って発動できる。

自分の手札・墓地から機械族モンスター1体を選んで特殊召喚する。

(2)：自分フィールドに「人造人間―サイコ・シヨツカー」が存在し、相手ドローフェイズに相手が通常のドローをした時、カードの種類（モンスター・魔法・罫）を宣言して発動できる。

ドローしたカードをお互いに確認し、宣言した種類だった場合、このカードを墓地へ送り、自分はデッキから1枚ドローする。

ATK：2400

「ひいつ、『サイコ・シヨツカー』がまた増えたツスー!？」

「けど『エツジマン』がまだ残っているんだな!」

「甘い! フィールド魔法『ダークゾーン』発動! 全ての闇属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップする!」

「むっ!」

人造人間―サイコ・シヨツカー ATK：2400↓2900

人造人間―サイコ・シヨツカー ATK：2400↓2900

人造人間―サイコ・シヨツカー ATK：2400↓2900

人造人間―サイコ・レイヤー ATK:2400↓2900  
人造人間―サイコ・ジャッカー ATK:800↓1300

「どうだ、これで『エッジマン』の攻撃力を上回ったぞ？」

「くっ！」

よもや、まさかこんな事が……!?

「これで終わりだ！ バトル！ まずは3体の『サイコ・ショッカー』で邪魔な英雄気取り共を攻撃！ 『電腦エナジー・トリプルショック』!!」

「十代殿、私の後ろに！ つくう！」

「桜さん!？」

エネルギー弾が3発撃ち出され、3人の英雄が粉碎されてしまった。

爆風は盾を召喚して防ぎ十代殿を庇うが、衝撃までは殺しきれず思わずたたらを踏む。

『グオオツ!』

『ぐああつ!』

『うおおつ!』

「『エッジマン』！ 『エアーマン』！ 『フレイム・ウイングマン』！」

十代&桜：LP 2300↓2000↓900↓100

これでこちらのライフは残り僅か……、万事休すか!?

「これでトドメだ、私の生贄となれ! 『人造人間―サイコ・レイヤー』でダイレクトアタック!」

くっ、ここまでか!

すまない主殿、私の失態だ……!

「『脳エナジーブラスタ』!!」

眼前に迫る赤い衝撃波。これを受け、私のライフは尽きる。

情けない、さんざ見下した奴に後れを取り、更には共に戦う人間1人守れないとは。

私は、なんと弱い――! 畜生……っ!!

『  
ク  
リ  
ク  
リ  
〜  
!』

え？

『クリ〜！』

「残念だったな『サイコ・ショッカー』」

いつまで経っても攻撃が届かないどころか寧ろ新しく声が聞こえた。

見れば、羽が生えた栗色の毛玉が敵のエネルギー波を受け止め、こちらをバリアで保護してくれていたのだ。

「俺は速攻魔法『クリボーを呼ぶ笛』を発動したのさ！ これでデッキから相棒の『ハネクリボー』を特殊召喚した！」



「そして『ハネクリボー』は破壊された時、そのターンに受けるダメージをゼロにできるッス！」

なんと……。十代殿が残ったりバースカードを使い私を守ってくれた、という事か。

召喚されたのは彼の精霊。人語は喋れないが高位の精霊であり、昨今の学説では神に準じる何某への供物や女神が裁定に使う羽の持ち主だとも言われている。

「貴様、それは精霊……！」

「そうだ、こいつは俺の相棒、俺の精霊！ 本当の精霊に生贄なんて必要無い！ 心と心を通じ合えば、いつだって会えるんだ！」

心と心、か。

やれやれ青臭い事を。

だが——忘れていたよ、そういう青臭い事こそ、デュエルには大切だと！

かたじけ  
「忝い十代殿、お陰で助かった」

「へへっ、お安い御用さ。それにお礼なら相棒に言ってくれ」

『クリク〜！』

「ふ、そうだったな。助かったよ『ハネクリボー』、君は命の恩人だ」

『クリッ！』

「おのれ……！ 私『サイコ・ジャッカー』の効果発動！ このカードを生贄に捧げる

事で、デツキから『脅威の人造人間―サイコ・シヨツカー』を手札に加える！　そして相手フィールドか墓地に罠カードがある時、このカードはレベルを1下げて特殊召喚できる！」

驚異の人造人間―サイコ・シヨツカー　ATK：2400↓2900／☆7↓6

後続の『サイコ・シヨツカー』か。

我々の墓地には『ヒーロー見参』と『魍魎跋扈』がある、ピンチを救ったカードが手に利用されるのは儘あるが、こういう使われ方は初めてだな。

「そして永続魔法『機甲部隊の最前線』マシンナイズ・フロントライン発動！　1ターンに1度、自分の機械族モンスターが戦闘によって破壊された時、それより攻撃力が低い同属性の機械族モンスターをデツキから特殊召喚できる！　これで我々の布陣は盤石、最早敗北は無い！　ターンエンド！

驚異の人造人間―サイコ・シヨツカー（効果モンスター）

星7

闇属性／機械族

ATK 2400 / DEF 1500

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分または相手のフィールド・墓地に罫カードが存在する場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードのレベルはターン終了時まで6になる。

(2)：自分・相手のメインフェイズに、このカードをリリースして発動できる。

自分の手札・墓地から「人造人間―サイコ・ショッカー」1体を選んで特殊召喚する。

その後、相手フィールドの罫カードを全て破壊できる(そのカードがセットされている場合、めくって確認する)。

### 機甲部隊の最前線

#### 【永続魔法】

(1)：1ターンに1度、機械族モンスターが戦闘で破壊され自分の墓地へ送られた時に発動できる。

墓地のそのモンスターより攻撃力が低い、同じ属性の機械族モンスター1体をデッキから特殊召喚する。

サイコ・シヨツカー：2100

手札：0枚／0枚

フィールド

：人造人間―サイコ・レイヤー（ATK：2400・ORU：1）、人造人間―サイコ・シヨツカー（ATK：2400）×3、脅威の人造人間―サイコ・シヨツカー（ATK：2400）

：宇宙との交信（永続魔法）、機甲部隊の最前線（永続魔法）、ダークゾーン（フィールド魔法）

「桜、大丈夫か」

「情けない所を見せたな、主殿。私は、未熟者だ」

「ならさつさと挽回しないとな」

「ああ」

さて、敵の場のカードは8枚、こちらは『世界樹』のみ。

大人として、ここはしっかり働かなくてはな。

「謝罪しよう、『サイコ・シヨツカー』よ。私はどうやらお前を見下し過ぎていたらしい、結果がこの体たらくだ。……もう少し、本気を出してやろう」

「ほぎけ、死に損ないめ！」

「ふっ、死に損ないか。ならばその死に損ないの力を見るが良い！」

この状況を引つ繰り返す手は揃っている。

だが引つ繰り返した次が無い、このドロー次第だ。良いカードよ、来い……！

「私のターン……、ドロー！」

「ここで永続魔法『宇宙との交信』の効果！ 相手が通常ドローを行った時、カードの種類を宣言してそれを確認する！ 当たっていればこのカードを墓地に送り1枚ドローできる！」

ピーピングとドローを兼ねた効果か。

「良かろう、当ててみる」

「私は魔法カードを宣言する！」

右手でデッキから引いたカードを公開する。

カードのフチの色は……緑。

「当たりだ！ よって『宇宙との交信』を墓地に送り、私は1枚ドロー！ ククク、これで分かっただろう、貴様らに勝ち目はもう残っていないと」

さて、汚名返上と行こうか。

「私は『プリベントマト』を召喚！」

『とまー!』

プリベントマト ATK:800

「そんなモンスターで何ができるー!」

「慌てるな、『サイコ・シヨッカー』。ここで、墓地に存在する『スポーア』の効果を発動。デュエル中1度だけ、墓地の植物族モンスターを除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚できる。この時『スポーア』のレベルは除外したモンスターのレベル分だけアップする。

私が墓地から除外するのはレベル4の『ローズバード』、したがって『スポーア』をレベル1から5に上げて特殊召喚!」

『ぼあー!』

スポーア DEF:800/☆1↓5

アメフトのヘルメットを被ったトマト、5倍程に膨らんだ胞子。

それぞれでは大した力は持っていない……、だが掛け合わせる事でモンスターは無数

の進化先を得る。それがデュエルだ！

「確かこのモンスターはチューナー、って事は！」

「然り！」

【BGM：十六夜バトル】

「私はレベル2の『プリベントマト』にレベル5となった『スポーア』をチューニング！」  
「レベルの合計は7、って事はあれか……！」

緑の胞子型のフワフワ生物が5つの星に分解され、その星は緑のリングになる。

連なったリングの中をヘルメットを被ったトマトが潜り、その身を輪郭を残して2つの星に変じさせる。5つの輪と2つの星はやがて一筋の光の柱となり、周囲を先の電光のように明るく照らした。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む！ 漆黒の花よ、開け!!」

☆2＋☆5＝☆7

「シンクロ召喚！ 咲き乱れよ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』!!」

『クオオガアアアア!』

ATK：2400

白亜の輝きから生まれたのは、黒と赤の花びらを鱗のように持つ薔薇の龍。

周囲に薔薇の花弁をまき散らしながら、金色の瞳で『サイコ・シヨツカー』を睥睨している。

『サイコ・シヨツカー』よ、貴様がエクシーズモンスターを使うと言うのなら、私はシンクロモンスターで相手をしてやろう! このモンスターは墓地の植物族モンスターを1体除外する事で、相手の守備表示モンスターを攻撃表示にして更に攻撃力を0にする事ができる!」

「それがどうした、攻撃力は私より下! そしてこちらに守備モンスターはいない! ならばそのような雑魚モンスターは私の敵ではないわ!」

ほう、言ったな?

この黒薔薇の龍を雑魚と言ったな?

ならその対価は今すぐ支払って貰おう!

『ブラック・ローズ・ドラゴン』の更なる効果! シンクロ召喚に成功した時、自身を



含めたフィールドの全てのカードを破壊する！  
 “ブラック・ローズ・ガイル”！

「何だとお!？」

吹き荒ぶ黒薔薇の大旋風。その暴風に敵の場の全ての機械も、永続魔法も、闇にて全てを覆うフィールド魔法も、自身すらも、破壊の威力を以て粉碎していく。

奴ら自身は耐えようと踏ん張ろうとしていたが、結局は大風の勢いに負けて光の粒子へと返って行つた。

『ぬあああああああああああああつ!!?』

「ひええ、凄い風ツス！」

「こ、これは強力なりセット効果なのにや！」

「一気に7枚の敵のカードを破壊した、このアドバンテージは大きいぞ」

『ば、莫迦な……、こんな事が……』

『しかしこれで貴様のモンスターも失われた、手札も無い！ 最早打つ手はあるまい！』  
 「それはどうかかな？」

黒薔薇の花弁を巻き込んだ嵐が収まり、フィールドの状況も元に戻つた。

そしてそこには――

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK:1800

多少攻撃力を落としたが、未だ健在な龍が1体。

『な、何が起こったのだ!?!』

「貴様、先程開示した私のカードをもう忘れたのか? 『宇宙との交信』と御大層な名前のカードを使っているも、使用者の頭が残念では、なあ」

第一、モンスター1体を召喚しただけなのに2枚あった手札が無くなってる時点で気付けない話だ。

仕方なくディスクを操作し、先程発動した魔法カードを墓地から取り出して見せてやる。

「私は『ブラック・ローズ・ガイル』にチェインして速攻魔法『禁じられた聖衣』を発動した。この効果でモンスター1体は攻撃力を600ダウンする代わりにカード効果では破壊されず、効果の対象にもならなくなる。よって『ブラック・ローズ・ドラゴン』は自身の効果では破壊されなかったというワケだ!」

『なん、だと……!?!』

「おお、こういう手もあるのか。自分ごと吹っ飛ばすってのはちよつと勿体無い気がしたけど、流石は桜さんだぜ!」

「デメリットをどうリカバリーするか、それもデュエリストの腕の見せ所という事だ、十

代殿」

ブラック・ローズ・ドラゴン（シンクロ・効果モンスター）

星7

炎属性／ドラゴン族

ATK 2400 / DEF 1800

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：このカードがS召喚に成功した時に発動できる。

フィールドのカードを全て破壊する。

(2)：1ターンに1度、自分の墓地から植物族モンスター1体を除外し、相手フィールドの守備表示モンスター1体を対象として発動できる。

その相手の守備表示モンスターを表側攻撃表示にし、その攻撃力はターン終了時まで0になる。

禁じられた聖衣

【速攻魔法】

(1)：フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

ターン終了時までそのモンスターは、攻撃力が600ダウンし、効果の対象にならず、効果では破壊されない。

「行くぞ、バトルだ！ 私は『ブラック・ローズ・ドラゴン』でダイレクトアタック！  
焼き尽くせ、ブラック・ローズ・フレア！」

『又オオオオオオオオオ!?!』

『ギャアアアアアアア!?!』

サイコ・ショッカー：LP 2100↓300

「私はこれでターンエンド。『禁じられた聖衣』の効果は消える」

ATK：1800↓2400

奴らを黒い炎が直火焼きで焦がし、ライフを更に削る。

攻撃力を下げるデメリットの所為で仕留め損ねた、次のターンが勝負か。

桜&十代：LP 100

手札：0枚／0枚

フィールド

：ブラック・ローズ・ドラゴン（ATK：2400）

：魔法・罨無し

『おのれ、おのれおのれおのれえ！ たかが人間が！ たかが人間程度の味方をする  
霊のゴミめが！ 私のターン、ドローツ!!』

手札はお互いにゼロ、あのドロローで勝負がどう転ぶかが決まるが……。

『……ククク』

！

『マジックカード『終わりの始まり』を発動!』

「何だとお!？」

「(ここ)でかよ!？」

「ま、マジかにや!？」

よもやこのタイミングでそのカードを!？」

不味い！ 奴らの墓地には4体の『サイコ・シヨツカー』を始め、既に大量の闇属性

モンスターが存在している！

終わりの始まり

【通常魔法】

(1)：自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合、その内の5体を除外して発動できる。

自分はデッキから3枚ドローする。

『自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合、その中から5体を除外する事で3枚ドローする！ 私が除外するのはこの5枚！』

【除外されたカード】

『ランサー・ドラゴニユート』

『冥界の使者』

『グラビ・クラツシュドラゴン』

『人造人間―サイコ・シヨツカー』

『人造人間―サイコ・シヨツカー』

奴の墓地ポケットの代わりに地面に紫の魔法陣が開き、その中から5枚のカードが飛び出す。

飛び出したカードは蜃気楼のように揺らいで消失すると、3枚の裏向きのカードに変化した。

『ハハハハハ！ 良い手札だ！ 魔法カード『おろかな埋葬』を発動！ デッキからモンスターカードを1枚墓地に置く！ 私は『人造人間―サイコ・リターナー』を選択する！』

「チツ、いかん！」

『この瞬間、『サイコ・リターナー』のモンスター効果！ 墓地に送られた時、私自身が復活する！ 蘇れ、『人造人間―サイコ・シヨッカー』アツ!!』

ATK：2400

「またかよ！」

「いい加減しつこいッス！」

「タチ悪いストーカーかテメエは！」

「戯言もそこまでだ！ 速攻魔法『サイキック・ウエーブ』発動！ 私の場に機械族モンスターが存在する時、デッキから私を墓地に送る事で600ダメージを与える！」

「やべっ!？」

「避ける、桜！」

人造人間—サイコ・リターナー（効果モンスター）

星3

闇属性／機械族

ATK 600 / DEF 1400

(1)：このカードは直接攻撃できる。

(2)：このカードが墓地へ送られた時、自分の墓地の「人造人間—サイコ・ショッカー」1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは自分エンドフェイズに破壊される。

サイキック・ウエーブ

【速攻魔法】



このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分フィールドに機械族モンスターが存在する場合、手札・デッキから「人造人間」サイコ・ショツカー」1体を墓地へ送って発動できる。

相手に600ダメージを与える。

(2)：自分メインフェイズに墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の機械族モンスター1体を対象として発動できる。

デッキから「人造人間」モンスター1体を墓地へ送り、対象のモンスターを手札に加える。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。

む、我々のライフは残り100ポイント。たった600でも受ければアウトだ。

ならば。

「そうはさせない。墓地の『プリベントマト』のモンスター効果を発動。相手ターン中に除外する事で、このターンに受ける効果ダメージをゼロにする」

「何っ!？」

『トマトマトマ、トオー!』

魔法カードから放たれたビームを地面から飛び出したトマト達に受け止めて貰う。

植物族は手札や墓地で誘発する効果に乏しい、特に効果ダメージを長めに遮断してくれるこのモンスターは非常に有難い存在だ。『超栄養太陽』に対応しているからと気軽に入れた一枚だが、いやはや命を救われる日が来るとは。

プリベントマト（効果モンスター）

星2

地属性／植物族

ATK 800／DEF 800

墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

このターン、自分が受ける効果ダメージは0になる。

この効果は相手ターンにのみ発動できる。

「び、ビビったぜ……」

「ははっ、これで貸し借りは無しで頼むぞ」

「おうー」

十代殿は良い奴だ。

根深く無く、快活で、サバサバしている。人付き合いをする上で一番付き合いやすい

性格だ。成程、人間でない主殿の友人になれるのも道理だろう。

「さてどうする、『サイコ・シヨツカー』。確か『サイコ・リターナー』の効果で蘇生したモンスターはターンの終わりに破壊されるんだったな？」

「ぐぬぬぬ、ならば勿論バトルだ！ 私自身で『ブラック・ローズ・ドラゴン』を攻撃！

〃電脳エナジーシヨツク〃!!」

「迎え撃て『ブラック・ローズ・ドラゴン』！ 〃ブラック・ローズ・フレア〃!!」

怪しい色の光線と黒と赤の炎が正面からぶつかり合う。両者の攻撃は1ミリたりとも後逸を許さず、やがて中間地点で爆発を起こした。

「つくー！」

「うわあああああ!!」

「ニャー!?!」

「翔、大徳寺先生、オレを盾にしないで欲しいんだなー!?!」

「スゲエ爆発だ!?!」

「相打ちか……」

爆煙が収まれば、そこにモンスターは勿論、あらゆるカードが残されていない。

まさに真つ新、デュエル開始時と同じ状態になっていた。前のターンに一掃する効果を使つたとは言え、ここまで綺麗サツパリ何も無いといつそ清々しいな。

ゴキリ、と肩を回す。節々が痛むが大した程じゃない、まだ大丈夫だ。

「感謝する、『ブラック・ローズ・ドラゴン』。お前のお陰で助かった」

『お、おの……れ……！』

一方で『サイコ・ショッカー』は2人に分けていたアバターもいつの間にか1つに戻っており、その半透明の姿も声もかなりノイズが強くなっている。

当然だ、奴は精霊に於ける不文律を破った。私が破って良いのは主殿というイレギュラーあつてこそ、それが無い奴がああなるのは当然の結果だ。

『私はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！』

サイコ・ショッカー：LP 300

手札：0枚／1枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

【BGM終了】



E・HERO バブルマン ATK：800  
 人造人間―サイコ・シヨツカー ATK：2400

「私は死なぬ、私は負けぬ！ 絶対に、私を見出したあの方のためにも！ あの闇の中にいた私に力を授けてくれた恩義のためにも！ 私は勝つ！ 貴様らは生贄になるのだあああああつ！」

慟哭にも等しい叫びをあげる『サイコ・シヨツカー』。

だがいくら『バブルマン』が攻撃表示でフィールドに出たとは言え、バトルフェイズではなくこんなタイミングで発動するとは、焦っているにも程があるな。

「……へへ、それはどうかな」

『何?!』

「悪いけど、勝つのは俺達だけ！ マジックカード『融合回収』フュージョン・リカバリーを発動！ 融合召喚に使用した『融合』とモンスター体を手札に戻す！」

『融合』と『フェザーマン』の2枚が墓地ポケットから吐き出される。言わずもがな『フレイム・ウイングマン』の召喚素材だ。

『バブルマン』と『フェザーマン』、という事は彼が狙っているのは……！

「そして『融合』を発動！ 場の『バブルマン』と手札の『フェザーマン』、『スパークマ

ン』を融合！ 水よ、風よ、雷よ、我が最強のヒーローになれ！ 現れろ、『E・HERO  
O テンペスター』!!」  
『トアッ！』

E・HERO テンペスター ATK:2800

呼ばれたのは嵐を産み出す英雄。雷電を、疾風を、大雨を以て敵を打ち倒す豪傑だ。  
効果はイマイチだが攻撃力だけなら十分高い。

E・HERO テンペスター（融合・効果モンスター）

星8

風属性／戦士族

ATK 2800／DEF 2800

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO スパークマン」＋「E・HERO  
バブルマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカード以外の自分フィールド上のカード1枚を墓地に送り、自分フィールド上の

モンスター1体を選択する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、選択したモンスターは戦闘によつては破壊されない。(ダメージ計算は適用する)

『テンペスター』の攻撃力は2800、『サイコ・シヨツカー』は2400、その差は400だ！」

「対して貴様のライフは残り300、受けきれんぞ」

「ば、バカナ……、バカナバカナバカナバカナバカナあつ!？」

「これで終わりだ『サイコ・シヨツカー』! 闇から産まれた悪しき精霊よ、混沌の嵐によつて吹き飛べ！」

嵐の英雄が右手の銃を構え、エネルギーを充填する。

奴の手札はゼロ、フィールドと墓地に防御カードは無い。

「カオス・テンペスト！」

そうして撃ち出された純白のビームは過たず奴を飲み込み。

「が、ぎつ、ぬあああああああああああああああつ!？」

サイコ・シヨツカー：LP 300↓0



そのライフを今度こそ削り切った。

十代&桜：WIN

サイコ・シヨツカー：LOSE

「やった、やったー！ 兄貴達が勝ったー！」

「高寺君達も無事のようにや」

ボロボロと、或いはモロモロと、倒れた機械人間が黒い粒子となって散って逝く。まるで砂の城が崩れるかのように、泥が雨で流されるかのように。

私はそれを冷たい目で見下していた。

「お疲れ、桜。よくやった」

「いや、私もまだまだ修行が足りん」

「向上心があるなら大丈夫だ」

「……それにしてもエクシーズモンスターを持ち出すとは、な」

主殿の目は「そういう事なのか？」と訊ねている。

私は首肯により「恐らくは」と返した。

言うまでも無いが、人間界より精霊界の方がモンスターカード（というかモンスター）の種類は多い。

これらが人間と接触する事で時に石板やカードになり、或いはインスピレーションという形を以てイラストになってカードに変化する。

それは融合や儀式といった召喚法も然り。精霊界には当然ながらシンクロモンスターやエクシーズモンスター等も存在する。ただ人間界で召喚法が確立していないために、カードになっていないだけなのだ。

そして人間が召喚できないという事は、時代がそれらを受け入れる下地を持っていないという事に等しい。

素手で湯を受ければ火傷するように。

炎に氷を落とせば溶けてしまうように。

何かをその環境に落とし込むには、相応の受け皿が必要だ。

今のこの時代、この環境に於いては、まだシンクロもエクシーズも『それ以上』も、顕現するための礎は存在しない。無理に呼び出すのなら対価を支払う必要がある。

「それがこいつの末路つてワケなのか」

「その通りだ、主殿」

私が『ブラック・ローズ・ドラゴン』を召喚してもピンピンしているのは主殿の精霊、つまりイレギュラーの要素を受け継いでいるから。

主殿は特例として強大な力に対抗するために、この時代に無い能力を振るう事が許されている。誰が許しているのかと言えば世界であり、運命であり、神たる何かだろう。詳しくは知らぬ、興味も無い。

しかし『サイコ・ショッカー』は何者か——恐らく邪神によってカードを与えられ、召喚の方法を教わっただけ。自分の肉体を守る術までは与えられなかった。結果、反動を受けてこいつの体は時代に拒絶された。復活という餌に目が眩み、精霊として破つてはいけないルールを失念していた末路だ。

邪神も意地が悪い、最初から『サイコ・ショッカー』を贄として吸収するため、わざと自滅するように仕込んだのだろうよ。

「要するに、世界に怒られ罰を受けたと」

「如何にも」

目を閉じ、黙禱するように黙りこくる主殿。

その脳裏にあるのは『サイコ・シヨツカー』への冥福か、或いは世界に消される己という未来像か。

どちらにせよ、私に出来る事は無い。

故にせめて、彼がそのような未来を迎えなくとも済むよう、今一度修行をやり直す事を私は決意するのであった。

t o b e c o n t i n u e d

★  
STORY 41 : 森の中ではクマさん以外にも出会う

SIDE : 黎

パシユン！ と光のゲートが閉じ、俺は次の戦いのステージに飛び出した。

辺り一面に木、木、木……。要するに森の中だった。しかも結構鬱蒼と茂っている。

「海の次は森か……。 案外、山の中だったりしてな」

『さて、な。 私からは何とも言えん』

今回は桜は実体化していない。森の中だから、草木の精霊であるこいつは喜びそうなものだが。そう尋ねると、珍しく不機嫌に（唇を尖らせているようにも見える。クールなこいつにしては、マジで珍しい）、

『見飽きた。 森の中で何百、何千という月日を暮らしていたからな』

との事だ。

さて、それはさて置き、今の所、俺のサーチの範囲内には人間大の生物は、何も引つ

かかっていない。実を言うとコレ、かなりマズい。何せ、ワープした相手が何処にいるのか、何をしているのか、危険な目に遭っていないか、全く分からないのだから。

早く探しに行かない『うにゃあああああああああああああああああああつ  
！』と……。

「手間が省けたな」

「言っている場合か！ 早く行くぞ！」

桜からツツコミを貰いつつ、俺は悲鳴の聞こえた方角へと走り出した。

S I D E  
: : :  
? ? ?

「いやあああああああああああああああああああああつ！」  
はい、どれも皆さん！ ナレーター代わりましたあつ！

「避けるなあよお、メンドクセエじゃねえかあ……！」

ってそんな場合じゃ無いんです！ うわー！ 死ぬ！ 死んじやいますう！

何ですかあの巨人は！ 腕の一振りでも木が押し折れるとか、人の腕力じゃないよお!?  
わあ、またメシメシ言いながら倒れて来たあ！

うわああああああああああああん！ アタシ運動できないんですう！  
ひいーん！ こんな拷問だよお！

「というか、ハア、何で、アタシを殺しに来てる、ハア、ん、ですかあ！」

「あー、それは……」

せ、せめてこのくらい知っておかないと死ぬに死ぬません！ 若しかしたらあの巨人  
さんの勘違いかも知れないし！

「あー、いや、メンドクセエ」

「どんだけ、ハア、やる気、無いんです、ハア、かつ！」

あー、ダメだ。ツツコミもままならない。

つてか、アタシは何でこんな事してんのおおおおおおおおおつ！

光にいきなり巻き込まれて気が付いたら森の中で……。アタシが何したっていうん  
だあああああああああつ！

ふと思いつくのは誰もが知っている童謡、『森のくまさん』。あれで出会ったのは確か  
心優しい熊。まあ、実際あんな熊さんがいる訳が無いので、実際に出会うのは嫌だなー、





ヒーン、倒れてくれません！

他の皆の攻撃が何十発と命中しているのに、なんなのあの人の頑丈さはあ！

『マスター、この先は崖です！ こつちへ逃げましょう！』

「あ、ありがとう、ハア、フレア！」

こつちへ行けば逃げられるらしい。追い詰められてたまるかあ！

「ヒミヤツ!？」

痛い!? 木の根に躓いた!? ウソん、こんな局面で!?

「あー、避けるなよお!？」

ぐわっ! と振り上げられる腕には、さつきまで無かったドデカいハンマーが!?

どつから取り出したのそれえ!?

こんなトコで人生終わりですか!? アタシまだ16年しか生きてないんですけど!?

神様ヒドいですう!!

『マスター!』

『キュキュー!』

「うわーん、まだ死にたくないよお! お兄ちゃあん! 薙冴先ばあい! 響くん!

明日香さん、アキさん、十代くん、遊屋くん、クロウくん、翔くん、みんなあああああ

あああああああああああああつ!」

アタシの悲鳴も虚しく振り下ろされる大槌。ああ、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃん、ゴメンナサイ。先立つ不孝を、お許し下さい。

ぎゅ、と目を瞑って……。

その後聞こえたのは、グエ、というカエルの断末魔のような声だった。

S I D E : 黎

「え……?」

不思議そうに少女が俺を見上げて来る。この森は魔術の生成を妨害する素粒子が漂っているらしく、桜が実体化に苦労したと不満気に呟いていた。それ故だろう、俺がこの少女と邪神の護衛のサーチに時間がかったのは。

だが、この子の悲鳴と派手な破碎音で方向を割り出す事ができた。サーチ魔法は使い辛かったが、方向を絞れば問題無く作動した。

「えと、どちら様でしょうか?」

「俺の名前は遊馬崎黎。君と同じ転生者だ」

ほえ、と少女が間の抜けた声を出す。

ブラツクのセミロングに、夜色の瞳。中肉中背で、眼鏡つ子を挙げると言われたらま

ずこの子の見た目が挙がるだろう。要するに普通の眼鏡女子だ。

が、容姿は良い。小顔で脚と腰回りはスラッとしていてキレイだし、胸はまあ、聞く  
なつて感じだが、顔の造形だつて誰が見ても可愛い部類に入るだろう。

そして、天空一家の優から感じたのと同じ、こことは違う世界の気配。間違い無く、こ  
の子も転生者だ。

加えて、彼女の後ろには沢山の精霊がいる。その数10人。皆、俺を警戒している。  
まあ、さつきまであのデカいのに追い回されていたんだ、無理も無いだろう。

だが、何よりも気になるのは、サーチした瞬間に気がついたあの――  
「う、ぐあ、イテ……」

チツ、起きたか。粉碎するぐらいの威力でこめかみを蹴り飛ばしたんだが。随分と頑  
丈だな。プライドやエンヴィーなら、頭ぶつ飛んでいるだろうに。

邪神の気配を漂わせる、3メートルを超える大男。手にした大槌はこいつと同じかそ  
れ以上のデカさだ。刺々しいデザインに、これ見よがしに描かれているドクロマーク。  
こいつに殴られていたら間違いなく重機でもペチャンコだな。よくてスクラップだ。

適当に短めに切り揃えられた髪に、中途半端な長さの黒の服。ダーク系の服はこいつ  
らのトレードマークなのだろうか？

「うー、《騎士》の魂い……！」

「好い加減、名前くらい覚えてほしいな。遊馬崎黎だつっの」

「何でもいいや、メンドクセエ……。オデはただ、お前を殺してそつちの女も殺すだけえ」

「ああ……、そうかい！」

次の瞬間、奴がハンマーを振り上げるよりも速くに俺は踏み込む。炎と地の力を融合してマグマを纏った拳で顔面を殴りつける。ジユウツ！ と対象が融解しつつも焼ける音がする。

「アジイツ!?」

「早い反応もできるんだ、な！」

瞬時に炎と地の能力を解除。能力回路を風一本に絞る。強力な風圧を口の中に溜め、破碎する振動と共に、射出する！

「BREAK SHOUT A LOUD!!」

「グベバツ!!」

キュイイイイイン！ とジェット機のタービンの様な音を響かせてデカブツが吹き飛ぶ。

大槌は碎け散ったが、こいつ自身は無傷だろうな。

ノソツ、と立ち上がった奴を相手に俺は嘲笑をくれてやる。

「どうだ、少しは堪えたかスロウス？」

「ぐ、何故オデの名前をお……？」

「言動だ。プライドとエンヴィー、そして七つの罪。ならそこから生み出せる結論はただ一つ」

これまで相手した奴は「傲慢」を意味するプライド、「嫉妬」を意味するエンヴィー。

この2つはモンスター状態の時についていた「七罪士」から分かるように、原典に記されている「七つの罪」つまり「原罪」だ。

そしてその名前に沿うかのようにプライドの言動は完全に俺達を見下したものであり、エンヴィーは家庭を持つ（予定である）優に嫉妬して集中攻撃を仕掛けた。

そして、七つの罪の中で、未だ出て来ていないのは五つ。

そして先刻からの言動、怠慢具合から推測できるのはただ一つ。「怠惰」を意味するスロウスだ。

残る罪は「強欲」のグリード、「暴食」のグラトニー、「色欲」のラスト、そして「憤怒」のラース。しかし、こいつの言動はその四つの内のどれにも当て嵌まらない。

消去法でも、推論でもこいつはスロウスで間違い無いだろう。

「ぐう……」

「悪いけど、この子は殺させない。この子は、この戦いにおける希望だ」

「うう、メンドクセエ……。でも、ここで殺さなかつたらもつとメンドクセエ。だったら、しょうがねえから、ここで殺すう……」

「コミュニケーション取る気無しか！」

思わずツツコムが、迎撃を忘れたワケじゃ無い。新しい大槌を奴が作り出すよりも速くに地面を踏みつける。

「『砂塵の鉄壁』！」

「うぶっ!？」

スロウスの回りから砂が壁のように吹き上がる。目眩ましにはなるだろう。

さて、今の内だ。

「お嬢ちゃん」

「あ、<sup>ひいらぎまな</sup>真奈ですっ！ ええと、デユエルアカデミア1年女子オベリスクブルーで

……」

「自己紹介は後々。今はここから撤退する方が先だ。精霊達もついて来い！」

テンパって自己紹介する少女、柊ちゃんをお姫様だつこの形で抱え、俺は森の木を枝から枝へと移動した。

## — 森の外れ

「さつきも言ったとは思いますが、俺は遊馬崎黎。君と同じ転生者だ」

『主、黎殿の精霊、桜と申す』

「あ、えーと、柊真奈です。こつちがアタシの精霊達で、『ブラック・マジシャン』のルーンに、『ブラック・マジシャン・ガール』のフレア」

『始めまして』

『宜しくお願ひします！』

「『夜薔薇の騎士』のナイトに、『ブラック・ローズ・ドラゴン』のラブ」

『ナイトです』

『ギャウツ！』

「そしてフォーチュンレディの六人姉妹達です」

『チャオ！』

『宜しく……』

『始めましてってね！』

『どうも』



『始めまして』

『宜しく頼む！』

森の外れまで避難した俺と少女——真奈ちゃん。状況を説明するよりも、（スロウスの追跡も暫くは無いだろうという事もあって）まずは自己紹介という事になった。

ちなみにフォーチュンレディの挨拶は上から順に『ライティー』、『ウォーテリー』、『ウインディー』、『アーシー』、『ダルキー』、『ファイリー』。挨拶一つで性格が表れるのだから礼儀は大切だ。

「さて、自己紹介も済んだ事だし、この状況を説明したいと思うのだが、良いかな？」  
「どうぞです」

然したる疑問も挟まないか。中々純情というか、天然というか。

まあ、説得する手間が省けると考えれば良いか。

「さて、俺がこれから話す内容に嘘偽りは一切無い。だからどんなに怪しくても、真つ向から疑ってかからないでほしい」

SIDE : 真奈

「まあ、絶望しか無かったよ。何やっても何一つ報われなかった。幸せなんて絶対に手

の届かない夢物語だと思っていた」

「それは、大変だったんですね……」

「転生してからも報われてねえなあ。たった一人の家族を邪神共に奪われちゃった。お陰であいつと殺し合わなくちやいけなかった。あの時は、とても辛かった」

「どうして、邪神は黎さんの義妹いもむすこを？」

「連中、太古に封じられた四番目の邪神は、人の負の感情を食い物にして強化される。俺は絶望だけを食って生きて来たみてえなモンだからな。俺から搾り取る序でに依り代にするつもりだったんだろう」

「……………」

「だけじゃ無い。邪神は自らの力をまだ発揮できないから半ば無防備と言っても過言じゃない。不死に近い体をもった都は、それだけで好都合な存在。時が来るまであいつの体の中で待機し、体を食い破った後は、世界を呑み込む。そしたら後はその力を使って他の世界全てを喰らうという寸法だろうな」

「て事は……」

「話にもあつた通り、連中の使うカードは、デタラメやインチキも良い所だ。そんな奴らに世界一つつ分なんて莫大なパワーが加われば、もう止める事は絶対的に不可能だ。物理的ダメージで死なない以上デュエルで仕留めるしか無いんだが、そのデュエルにだって

問題があるんだから困り物だな」

あ、どうも皆さん。現在、アタシはスロウスという巨人から逃がしてくれた男性、遊馬崎黎さんから今回の事情を聞いています。

彼の前世、浚われた義理の妹さん、どうして邪神と戦っているか、負ければどうなるか。

でも、アタシにとっては邪神云々よりも――

「まあ、平たく言えば、邪神さえ止められれば万々歳。世界は救われますよ、というワケだ。ここまで分かってくれた――」

「うう、グスツ、ヒツグ！ うえええええんっ！」

「かって、ちよ、何故泣く!?!」

だ、だって！ こんな話、泣かない方がムリですよ！

「何なんですか！ 毎日の不幸の上にこの仕打ちって！ 死んでなお家族を洗脳されて、命懸けで戦って！ 何で黎さんは何も報われないんですか！ 理不尽過ぎますよお！」

見せてもらいました、黎さんの服の下。半袖のシャツの上からでもハッキリと分かった凄い数の傷跡。多分、アタシがこんな数の傷を受けていたら、間違い無く途中で死んでいた。

そしてこの人の過去も、映像で。頭に手を置かれたかと思つたら、いきなりヴィジョンが流れて来るから驚いた。でも、こんな悲惨な過去を持つ人が、こんな報われない現在を送っているなんて、あっちゃいけないと思う。

そしてそれでも、人間を憎む事も、関わりを切る事もできたのに、そうしなかつた。もしアタシが黎さんだったら、他人に対してこんなに優しくならなかつたと思う。きっと、スロウスに襲われていた時でも助けになんか入らなかつたし、よしんば入つたとしても利用するためだから『この子は、この戦いにおける希望だ』なんて言わない。

「ううう、アタシは、こんな人がいるなんて知らなかつた！ 助けてあげる事もできたかも知れなかつたのに、できなかつた！ アタシは、アタシはあつ！」

「そこまでだ」

ポン、と頭に乗る、優しくて温かい感触。

黎、さん？

「悲しんでくれるのはありがたい。でも、過ぎた事だ。泣こうが喚こうが、どうにもならないよ。それに、お互いがお互いを知らなかつたんだ、自分を責めたつて何も生まれない」

君みたいな子に、生きてる内に会いたかつたかな……。

そう呟いた黎さんの目は、とても寂しそうだった。

グシ、と涙を拭う。今アタシがするべき事は泣く事じゃ無いと気がついたから。

こんなトコで泣いたって、黎さんは喜ばないし、何も変わらない。何より、アタシ達がこうしていられるのはスロウスがやって来るまでという制限時間がついている。

時間の無駄遣いはできない。

「泣いてくれて、ありがとな」

「いいえ」

アタシには、それぐらいしか、できないから。

協力して、少しでもこの人に幸せをあげたいから。

「今度は、アタシの身の上話ですな」

アタシは一言一句違わないように、自分の現状を話始めた。

後ろで精霊達が、見守ってくれている事を感じながら。

S I D E : 黎

「アタシの転生は、車に轢かれたとか、突然死んだとか、そんなんじや無いんです」

光に巻き込まれた。彼女はそう言った。

成程、一口に転生を言っても種類は様々だ。彼女の場合、死というよりは憑依や転

移が近いだろう。

何でも、彼女は突然にGXの世界へと飛ばされてしまったらしい。

「で、そこには本来なら5D $\square$ sの住人である遊星達のチーム5D $\square$ sや、シンクロがもう存在した、と」

「はい。エクシーズは無かったんですけどね……」

不思議な事もあるものだ。が、何より耳を疑ったのは、彼女よりも先にその世界へと転生していた人がいる、という事だった。

「薙沓先輩って言って、物凄くデュエルが強いんです。ハンディキャップ無しで戦ったら、もう誰も勝てません……」

「ハンデ有りでも強そうだな、その人は」

「で、神様みたいな人が、薙沓先輩、先輩と一緒にいたりアさん、アタシ、そして遊星くん達がGXの世界にいる理由を話してくれたんです」

「七究神<sup>しちきゅうじん</sup>」、と彼女は説明した。

「アタシ自身、そんなよくは解ってないんですけどね。何でも7000年前、神々——この場合は「三幻神」や「赤き竜」の類だそうですね——と悪魔の戦いがあった、その中にいた7人の最高位の神様の事らしいんです。悪魔は倒したんですが、傷ついた神様も眠りについたそうです」

「ふむ」

「で、時間が経てば消滅する悪魔をワザワザ封印したんです。アカデミアの地下に」  
「!？」

「ええ。『三幻魔』や『ユベル』事件で掘り起こされる地下です。三年後、確実に封印が解除されるそうです」

「……。で、その最高神と何の関係が？」

「悪魔を封印した場所はアカデミアの地下。そして神様の封印場所は、別の次元へ飛ばした人の魂、鍵は大きなエネルギーをもったものだそうです」

「じゃあそれが……」

「はい。アタシの中に神様が、そしてその鍵がシグナーの元である赤き龍だそうです」

成程、そして何かしらの理由があつて彼女と薙冴先輩という人物はGX時代へと飛ばされた。そしてその鍵であるシグナー達も。かつ、彼らが遺憾無く戦えるようにシンク口が流通した世の中になっている、と。

向こう側で何が起きているのかは知らないが、こつちと同じようにロクでも無い事が起きようとしているワケか。

「そして、神様の封印が人の魂なら、鍵の封印場所は大きなエネルギーを持つものなんです。アタシの鍵の『赤き竜』、『千年パズル』、『オレイカルコス』、『地縛神』……」

「待て。どこに封印している」

この他、“三幻魔”や“破滅の光”なんかもそうらしい。んなトコに封印するな。昔の神様はどんだけアホなんだ。

「それで、世界の1つが“地縛神”と鍵の反応で消滅したそうです。幸い、人間の方は無事らしいんですけど、何をトチ狂ったのか、アタシの世界に転移させてしまつて……。それに反応して他の神様もアタシのいる次元に集まり始めていて、アタシも共鳴の関係上、覚醒がじきに始まるとか」

「覚醒すると、どうなる？」

「今のままでは、神様は莫大なエネルギーだけの姿なので、解放しても世界が吹き飛ぶだけです。なんでも、姿として器を作る必要があるとか」

今はまだ何も思いつかないですけどね。そういつて真奈ちゃんは頭を掻く。

成程。つまり情報を整理すると。

1. 7000年前に神と悪魔の戦いがあった
2. 悪魔はアカデミアの地下、神は人の魂の中へ封印
3. 神を復活させる鍵は“赤き竜”を始めとした膨大なエネルギーを持つ精神体その他

4. その内1つが“地縛神”と反応。鍵は無事だが、現在真奈ちゃんがいる次元へ集



合し始めている

5. 神が集まれば悪魔と神の復活及び全次元崩壊の可能性大。その前に神の姿を固定し、力を自分のものにしなくてはならない

こんな感じか。

「えーと、そんな感じだと思います」

「こつちはこつちで一大事だが、そつちはそつちでヤバそうな雰囲気だな」

「あ、あはは……でも、黎さんの状況に比べたら、こんなはどうって事無いと思います。そりゃ、家族や親友と引き離されてツライですけど……。でも、薙冴先輩達もいますし、黎さんの方が苦しいですし……」

真奈ちゃんはその言つて、俺を必死に元気づけようとしてくれた。

この子は……。

「アホ」

「ピヤツ!？」

パシツ、と軽めに頭をはたく。

「不幸の比べ合いなんざ不毛なだけだ。君には君の苦しみが、俺には俺の苦しみが。それを比較する事は大きな間違いだ。どっちがより苦しいとか悲しいとか、比べ何になる？ 気休めぐらいにしかないし、現状は打開されない」

「あう……」

「21年、四半世紀に満たない時間しか俺は生きていないけど、俺はその短い生涯の中で多くの事を学んだ。だからこそ君が元気づけようと必死なのは分かるけど、それはあまり効果的とは言えない」

シユン、と項垂れる真奈ちゃん。可哀想かも知れないけど、こういう逆風も必要だ。

その事も精霊達は分かっているのか、後ろで黙っている。

「でも、少し嬉しかったよ。ありがとう」

「あ、はいー」

ふ、と彼女の元気につられて俺もつい笑う。

「精霊達もありがとう。俺の事情に付き合ってもらって」

『構いません』

『マスターが望むのなら、何だってやりますよー！』

『それが我らの勤めです』

順に『ブラック・マジシャン』のルーン、『フォーチュンレディ・ライタイー』、『夜薔薇の騎士』のナイト。

他の真奈ちゃんの精霊達も、頷くなり微笑むなりで答えてくれた。

ありがとうな、こんな化物のために。

さて、と。

「真奈ちゃん、ちよつとこっちに」

「? はい」

自分の前に真奈ちゃんを座らせる。ちょうど彼女の額が座っている俺の目線に来る所を見ると、お互いの身長差が分かる。

ス、と手を伸ばした。

「これから戦う相手は、ハッキリ言つて次元の違う相手だ。これまでのデュエルとは確実に一線を画す」

「はい」

「だから奴に対抗するために、君の中に流れている“七究神”の力の流れを変える」

「流れ、ですか?」

「ああ。気の流れを気功術の達人が操れるように、俺もエネルギーの流れをある程度は弄る事ができる」

『危険ではないのですか?』

『ブラック・マジシャン』のルーンが言う。不安気な顔だが、杖をしっかりと構えている所を見ると、下手な事をすれば俺を攻撃するつもりなのだろう。

と言うか、この『ブラック・マジシャン』って女性なのね。

「問題無い。新しく流れを作るのでも、流れる力を増やすのでも無いからね。ただ少し、枠組みを弄るだけ」

『どちらかと言えば、整体に近いものだったか?』

「ああ」

表に出て来る機会がもつとも多い桜にも、以前同じ事をした事がある。

魔力の総量は変わらないが効率が上昇した、というのが彼女の言葉である。

「えーと、危険が無いようでしたらお願いします」

「つーかもう終わったよ」

「速っ!?!」

だから少しエネルギーの流れ方を変えるだけって言ったでしよ? それに〃七究神〃のエネルギーがどれ程のものか分からない以上、慎重にならざるを得ない。

結果として、まあドロー運が少し上がり、運動神経も上がった、といったトコか。

「速いんですね……」

「殆どいじってないからね。下手打って大爆発とか、笑えねえつつの」

「あ、あはは……」

乾いた笑いを浮かべる真奈ちゃんだが、彼女の中に眠るエネルギーを見た時、俺は正直言つて驚愕のあまりに叫ばなかつた自分を誉めてやりたい。

まず、量が違う。通常の精霊に流れているエネルギー量を100と仮定するならば、俺はざっと7000はある。誇張でも何でも無い、純然たる事実だ。当然、この量は歴代の精霊の中でも特に多く、五指に入る程らしい。

しかし、彼女の量は文字通り桁違いだ。数値にしておよそ2, 150万。具体的な数値なのは、自分の3000倍を大きく超えると判断した数値。恐らくもつと多いだろう。これで眠っているだけなのだから、本気で目覚めたら星どころか次元1つ消し飛ばすというのも頷ける。はつきり言って今の総量だけでも国1つが2, 3年は運営できるエネルギー量だ。

そして密度も違う。密度に使う単位は国際法に基づきkg/m<sup>3</sup>となる。重金属で合金にして戦車装甲にも使われるタングステンが19. 3で、メートル原器やキログラム原器に使われ王水にも溶けないイリジウムが22. 42となる。

金属の話をしてても無意味か。通常の精霊の単位立法（この場合は1立方センチ）のエネルギー密度を10と仮定すると、俺は約1940だ。これも歴代で五指に入るらしい。

対し、彼女は391, 050, 000と、驚異的な数値だ。

この密度の高さは魔法に換算した時の純度と魔力の高さに関係する。

普通、エネルギーはそのままでは使えない。体内で魔力に変換し、それで初めて魔法

に使える。

純度が高ければ低級な魔法でも威力が増し、そして魔力がそれだけ圧縮されている訳だから魔力の残量も多い。

複雑な計算式を用いて40分程時間をかけ、尚且つ答えもメチャクチャなものになるので詳しくは言わないが、俺と彼女のエネルギー差は総じて数潤倍かんになるだろう。

ちなみに潤とは10の28乗、兆の次の次の次の次の次の次になる。  
解りづらいか。一覧にすればこうなる。

10の68乗	無量大数	むりようたいすう
10の64乗	不可思議	ふかしぎ
10の60乗	那由多	なゆた
10の56乗	阿僧祇	あそうぎ
10の52乗	恒河沙	ごうがしや
10の48乗	極	ごく
10の44乗	載	さい
10の40乗	正	せい
10の36乗	潤	かん

10の—5乗  
 10の—4乗  
 10の—3乗  
 10の—2乗  
 10の—1乗  
 10の0乗  
 10の1乗  
 10の2乗  
 10の3乗  
 10の4乗  
 10の8乗  
 10の12乗  
 10の16乗  
 10の20乗  
 10の24乗  
 10の28乗  
 10の32乗

惚こつ  
 糸し  
 毛もう  
 厘りん  
 分・割ぶ・わり  
 一いち  
 十じゅう  
 百ひゃく  
 千せん  
 万まん  
 億おく  
 兆ちよう  
 京きよう(けい)  
 垓がい  
 予(予禾)じよ  
 穰じよう  
 溝こう

10の—6乗	微 び
10の—7乗	織 せん
10の—8乗	沙 しや
10の—9乗	塵 じん
10の—10乗	埃 あい
10の—11乗	紗(眇) びよう
10の—12乗	漠 ばく
10の—13乗	模糊 もこ
10の—14乗	逡巡 しゅんじゅん
10の—15乗	須臾 しゅゆ
10の—16乗	瞬息 しゅんそく
10の—17乗	弾指 だんし
10の—18乗	刹那 せつな
10の—19乗	六徳 りつとく
10の—20乗	虚 きよ
10の—21乗	空 くう
10の—22乗	清 せい



10の―23乗 浄 じょう

何が言いたいかって、まあ一言で言うなら、この子の内側には莫大とか膨大で済まないエネルギーが眠っている、という事だ。

「成程、だから『闇』か……」

「え？」

「人には魂の型がある。それは性格や生き方を左右する、まあ、一種の遺伝子だ」

この子の魂の型は『闇』。光と対極を成す存在であり、珍しい現象タイプの型。一般的には『神の救いの届かない場所』や『諸悪の根源』として、或いは『死』や『虚無』としても扱われる。

しかし、それだけでは無い。そしてその場合の魂の型は『暗黒』や『虚無』になる。『闇』が意味するのは自然的な対照を超えた『死と再生』の象徴や『時間の再生』などと深いつながりがある。

まあ要するに悪≡闇では無いという事さえ解ってもらえれば幸いだ。

闇は、深く先が見えない。

故に、このエネルギー量。

暗く、包み込むヴェール。

「頼もし〜」

「あ、はあ、ありがとうございます……？」

おっと、口に出していたか。

キョトンとした顔の真奈ちゃんと精霊達。何でもないよ、とお茶を濁しておく。

首を傾げる真奈ちゃんやフオーチュンレディズ。クスクスと笑うルーンと桜。ニコ

ニコと微笑むナイト。嬉しそうな顔のフレア。

そして飛んで来た巨木。

「いや、ちよつと!?!」

慌てて上に向けて蹴り飛ばす。

重力にしたがって落ちて来たら、今度は飛んで来た方へキツク!

『ぐげ……!』

鈍い声が聞こえ、少し離れた森の中で、何か大きなものが倒れる音がした。

「い、今のもしかして……!」

「ああ、間違い無い。スロウスの奴に追いつかれた」

メキメキメキ、と木の倒れる音がする。結構引き離れたと思ったんだがな。

まあ良いか。やっておきたい事は全てやったんだ。

のっしのっしとスロウスが森から出て来る。木々が薙ぎ倒されて道ができている所

を見ると、どうやら障害物は軒並み倒してやって来たらしい。とんだ面倒臭がり屋だ。

「ようやく見つけたあ……、ああメンドクセエ」

「真奈ちゃん、ちよつとゴメンよ」

「ひゃわ!」

スロウスの攻撃を予測。いくら真奈ちゃんの内側に力が眠っていようと、現段階ではまだ覚醒していない。つまりそれは火薬の詰まった木箱も同じ。下手な事をすればこの世界が吹き飛ぶ。

だったら今の彼女は守るべき存在だ。そう判断した俺は、彼女を俗に言うお姫様抱っこで抱え上げる。

「ルーン達、俺の合図で行動してくれ! 桜、ルーン達の援護を!」

『分かりました、マスターをお願いします!』

『散開!』

三々五々に散って行く精霊達。それと同時にブワツ、とスロウスが大槌が振り上げ、俺は真奈ちゃんを抱えて素早く跳躍して回避。

俺は跳びながら靴底に仕込んだブレードを飛ばす。

「あー、ウゼエ」

巨体には全く堪えないのか、肩に（スロウス対比で）小さくて細い刃が刺さっても無

視して再び大槌を振りかぶる。

かかった！

「グリーディング・エレキワイヤー！」

「は、びばばばばばばばあばあばあばあばあつ！？」

射出した刃には靴と直接繋がっているワイヤーがついている。そしてそこから流すのは紫の結晶石が生み出す高圧電流。生命体なら確実に死んでいる量を流して攻撃。

着地後は真奈ちゃんを抱えたまま休む暇を与えずに踏み込む。このデカブツ相手に休みなんてやったらダメージが一瞬でおシヤカになっちまうからな。

廻し蹴り、踵落とし、膝蹴り、爪先蹴り、踏み付け、飛び蹴り、膝裏による首の締め付け。腕が使えないので、足技の知っている限りのバラエティをお見舞いする。

「はっー！」

「のあ……」

追加で十六文キック。眉間に直撃し、俺は重力に従って地面に着地し、スロウスは数歩後退りの後に、何も無い空間に向けて腕を払う。

思った通り、こいつは反応は良くてもその後の行動に直に繋がっていない。

更に威力を強め、地の力による重量強化と硬度強化。額を重金属で覆って、無防備な鼻っ柱に目一杯の頭突きを叩き込む。

「んぬっ！」

「イデエツ……！」

踏鞴たたらを踏むスロウス。スロウスが森から出て来て来てからこの間、時間にして15秒足らず。

俺のモットーは“やられたらやり返す”。敵にアマイ顔はしません。

「ルーン、フレア、足元に攻撃！」

『了解、ブラックマジック黒・魔・導”！』

『任せて、ブラッククック・パーニング黒・魔・導・爆・裂・波”！』

「ぬお……！」

ズドン！ と黒色の魔導弾が最高位の黒魔術師から、ピンク色の魔導弾がその愛弟子から放たれ、スロウスがバランスを崩す。

このチャンスを逃すつもりは無い。流す力が変化した事で髪の色が紫から青に変色し、口元に冷気が収束する。

『ひょうけいとうせん氷慧凍閃”！』

「おっが……！」

青白い光線がスロウスの膝関節を凍らせる。膝が動かなくなった事でバランスがとれなくなり、スロウスはそのまま転倒。このまま続ける！

水の力を地の力に交換。その一点にエネルギーを絞り、強い重力場を生み出す。

「『グラヴィティ・ドライブ プラス』!」

「アゴゴゴゴゴゴッ!?」

地面に縛り付けるかのような過重力。これで倒れたまま動けないはずだ。本当ならブラック・ホール並みの重力場も出せるが、味方も巻き込みかねないので却下。

「『アーシー』、追撃!」

『うん、『カースド・スキュアー』!』

眼鏡をかけた橙の魔女が杖を回転させながら地面に叩きつける。ジャキジャキジャキジャキッ! と尖った鉄の刺が地面から突き出し、スロウスを串刺しにする。貫通する程の長さはスロウスに対しては足りなかったが、十分なダメージにはなった。

「うわ、派手に行きましたね……」

「説明の途中で言ったとは思いますが、物理ダメージじゃこいつらは死なない。刺そうが斬ろうが焼こうが、な」

現にスロウスは起き上がっている。背中に空いていると思われる穴はもう塞がっているだろう。

「ああ、痛がるのもメンドクセエ。でも、こいつらは殺さねえともつとメンドクセエ……。だから殺す、死ねえ……!」

「断る。竹槍林壁<sup>ちくそうりんへき</sup>」!

地面に足を叩きつけ、それを合図に先端が鋭利に尖った槍が地中から何本も飛び出す。過たず全てがスロウスの体を貫通し、血が噴き出す。

「ぐえ……っ!」

「う……」

「見なくて良い。『ファイリィー』、焼き払え!」

『はいよー! 喰らえ、<sup>デイスブライ・フレア</sup> 粛清の炎!』

気分悪そうに目を閉じる真奈ちゃん。普通の生活をして来たこの子にとって、こんなスプラッターシーンは馴染みが無いものだろう。

彼女の目をそつと髪で覆い、火炎の魔女に指示を飛ばす。赤色の魔女は巨大な火炎弾を飛ばして巨体を焼く。

「あじいつ!」

まだまだ終わりじゃ無いぜ?

「弾け飛べ、<sup>〃</sup>バンブー・バースト!」

「アポババツババババツ!」

パンパンパンパン! と竹の節の中の空気が熱膨張を起こして破裂する。特性の竹なので爆薬が炸裂したかのように激しい衝撃が襲っている事だろう。

「ぐえ、イテエ……………」

ドシン、とスロウスの巨軀がブスブスと黒い煙を上げて崩れ落ちる。

チャンスタイム、もらった！

「ナイト、ラブ、ゴー！」

『お願いします、皆さん！』

『ウキユアツ！』

ナイトが剣を一振りすると地面から様々なレベル4以下の植物族モンスターが生まれ、スロウスに攻撃をしかける。あるものは火を吹き、別の奴は突進を仕掛け、或いは毒液を吐いたりしている。

ラブとて負けてはいない。黒薔薇の花弁が飛び交う嵐を起こしてスロウスの動きを牽制し、ダークレッドの炎を吹いて焼き尽くす。勿論、味方の植物族モンスターは一切ダメージを負っていない。

グラア、と巨体がダメージで揺れる。ここで畳み掛ける！

『『ライテイー』、『ダルキー』、『ウインディー』、『ウォーテリー』！』

『『シャイニング・ショック』！』

『『ダーク・フェイト』！』

『『サイクロン・エクスキューション』！』



『「スプラッシュ・ストリーム」！』

光の衝撃波、闇の波動、突風の槍、水流の柱がスロウス目掛けて降り注ぐ。過たず全弾が直撃し、スロウスが轟音と共に吹き飛ぶ。

だが、それでもスロウスは倒れない。片膝をつきつつも着地する。それでも、隙だらけだ！

「桜！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおつ！」

ダン！ と跳躍した桜がスロウスの頭に剣を突き刺す。そのまま勢いに任せて90度横に倒し、フクロウのように首を捻じ曲げる。ゴグユギツ！ と嫌な音がしてスロウスの首が折れた。

「ぐう、おおおおおおおおおつ！」

『き、効いている？ これまで我々の攻撃は何一つとして通用しなかったというのに……』

痛みに悶絶するスロウスに対し、ルーンが驚愕の表情を表す。

「当然だな。奴は攻撃でダメージを負わない程の頑丈な体の持ち主だった。が、それだって表面が頑丈だってだけだ。体の内側は違う」

アルマジロ、ワニ、カメ、カタツムリ……。そういった体表が頑丈な動物はその内側

を守るために固い皮膚を持っている。言い換えれば、その固い表面は盾だ。盾の内側は当然脆い。

鱗だろうと甲羅だろうと、固い防御さえ破れば、後を突破するのは容易い。

「だからこそ、*「バンブー・バースト」*で皮膚を抉ったんだ」

『それで攻撃が通じるようになったのか。皮膚という防御層の内側に攻撃が届くようになったから』

ザツツライトだ、桜。

奴にダメージを与えられた箇所は、どこも皮膚、つまりは盾の内側だ。

『さあ止めを……』

「止めな、エネルギーの無駄使いだ」

血気盛んに『ファイリー』が杖に紅の炎を灯したのを見て、俺は彼女を止める。

『何故だ!? このチャンスを逃せと言うのか!?』

『あら、黎さんの話を聞いてなかったの? 邪神の護衛はどれだけ物理ダメージを与えても無意味だって?』

『う……、そう、だったか?』

『記憶してるべきですよ……』

食ってかかる『ファイリー』を止めたのはお姉さんキャラの『ダルキー』。そして渋い

顔で彼女を窘めるのは気弱な『ウォーテリー』だ。

『じゃ、じゃあどうするんだよ!』

『アンタ本当に記憶してないのね。デュエル、それも闇のゲームで勝つて黎さんは言っていたでしょうが』

『……全く、人の話を聞いていないのか?』

『だねー』

『だー、チクショー! ゴチャゴチャ煩えよっ!』

地団太を踏みそうな勢いの『ファイリー』の問いに答えるのは気の強い『ウインディー』。呆れ顔を浮かべているのは消極的な『アーシー』と陽気な『ライティー』だ。

……俺、ちゃんと話したと思ったんだけどなあ。

そんな事をやっている内に、視界の端でスロウスが起き上った。

「ぬがぁ、イデエ……!」

「解ったかスロウス? 肉弾戦で俺達は殺せない。ならどうやって殺すべきか、解るな?」

「デュールウだー、ああ、メンドクセエ」

乗せられやすく助かるぜ。

ノソ、と立ち上がるスロウスには、もう傷跡は見受けられなかった。こいつはこいつ

で再生が速いな。

ブジュツ、とスロウスの左腕に闇が集まり黒く、巨体に見合った大きなディスクが装着された。同時に、周囲に薄ら暗い霧が立ち込める。

「う、もしかしなくても闇のゲームですよね」

「逃げるなら今だが」

「大丈夫です、皆の命がかかっているんですから」

俺の茶化した言い方に、怯んでいた真奈ちゃんはどこか諦観した様子でディスクを構える。初代の形式であり、レーンに沿ってブレードが合わさって展開する。アカデミアのディスクの痕跡もあるので、向こうにいる遊星のあたりが作ったのかも知れない。

「気骨があるな、頼もしいぜ？」

「……アタシ、本当は不安なんです」

不安？

「この戦いにかかっているのはアタシの命だけじゃない。アタシのいるデュエルモンスターズの世界、元々居た世界、そして他の人や世界の命がかかっている。そんな重たいもの背負って、アタシは戦えない……」

『マスタ―……』

成程。確かに、この子はまだ16歳。それが世界の明日を背負わなくちゃいけない状

態なんだ、気負うのも無理はねえか。

「真奈ちゃん、別に世界のために俺は戦っている訳じゃない」

「え？」

「俺が戦っているのは大切な人を救い、守るため。無数の世界のためとか、そんな御大層な目的じゃ無いよ」

「大切な人を、守る……」

「思い出してほしい。君の親友、敬愛している先輩、切磋琢磨し合う友人、自分を慕ってくれる精霊。彼らを守るために戦えばいい。世界を守るなんてオマケだ」

「……フフ、そうですね。結果的に世界が救われる。それで十分ですね！」

真奈ちゃんの表情がパアツ、と明るくなる。吹っ切れて何よりだ。

俺もディスクを起動させる。スイッチをオンにし、レーンに沿ってブレードが走る。ライフカウンターが初期数値の4000を表示。同時に「デッキをセットしてください」というメッセージが出るので、それに従ってデッキを装填するべく、カードを周囲に展開する。

OK、今回はこれで行こうか。

「皆、行くよ！ 世界のためなんかじゃなく、大切な人達を守るために！」

『『イエス、マスター！』』

「そう。世界なんざどうでも良い、守りたい奴を守る。それで充分だ」  
『その通りだ。有象無象の某よりも己の大切な者の為に！』

と、そうだ。

「真奈ちゃん、ちよつと」

「何でしょう？」

ポワ、と光の玉を生み出し、彼女に放る。

衣服に触れた瞬間、光の玉は非常に淡い膜となつて彼女を覆つた。

「これは？」

「プロテクター。俺のデュエルエナジーと精霊の力を混ぜて作ったバリアみたいなものかな。例えばミサイルが直撃しても骨にヒビで済む」

もつとも、連中の仕掛けて来る攻撃はミサイル以上の威力のヤツがあるけど。

衝撃は殺しきれないという事、傷そのものはつかないという事、外側からの攻撃なら隕石の衝撃でも相殺すれば死なないという説明を簡潔にする。

「ありがとうございます。でも、黎さんは……」

「俺は化物、簡単に死にはしないさ」

さて、無駄話もこのくらいにしておかないと。

「さて、始めようじゃないかスロウス。俺達が勝つか、テメエが勝つか」

「勝負だ！」

「おおよお〜」

『デュエル！』

t  
o  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 42 : 絶望の竜の牙 ★

## SIDE : 黎

邪神の護衛とのデュエルはこれで3度目になる。

ルールは前回、天空一家と共闘した時と同じ。

スロウス ↓ 俺 ↓ 真奈ちゃん ↓ スロウスの順でターンを回す。スロウスのライフは共通では無いこちらのライフの合計値8000で、フィールド、墓地の共有・非共有を自由なタイミングで切り替え可能。ただし味方モンスターでの攻撃は不能。

スロウスの2回目のターンから攻撃ができる。

真奈ちゃんのデツキに、あの精霊達が入って行く所が見えた。植物族と魔法使い族の混成デツキかと思つたが、違うらしい。

デツキを編集している時に教えてもらったのだが、彼女のデツキは3つあり、それぞれ使用頻度の高い『フォーチュンレディ』をメインにした「フォーチュン・アポステレ未来からの使途」、植物族デツキで『ブラック・ローズ・ドラゴン』をエースにした「リバース・フラワー返り咲きの華」、『ブラック・マ



「ジシヤン」と『ブラック・マジシャン・ガール』を据えた魔法使い族デツキ  
ブラックマジック・テキスト  
 【黒魔術の教本】になるそうだ。

今回、彼女はその3つを（俺や精霊達のアドバイスを受けつつ）高次元で混ぜ合わせたデツキ【未来からの黒薔薇（フォーチュン・ブラック・フラワー）】という試作段階のデツキを完成させたという。と言っても、どちらかと言えば【黒魔術の教本】に残りの2つを混ぜ合わせた方が近いというのが彼女の弁だ。

俺のデツキは彼女が不安気に漏らしていた「手札事故が起きやすい」、「プレイングミスがよくある」という言葉を受けて攻めよりも守りを重視したデツキになっている。無論、攻めのギミックも搭載しているが、専守防衛なのは否めない。

「スロウス、最初に忠告しておくぞ？ 勝つのは、俺達だ！」

「ああ、メンドクセエ……」

「全然聞いてない……」

流石は怠惰の象徴。

「まあ良いか。叩き潰される覚悟は良いか？」

「柊真奈、行きます！」

「あくメンドクセエ。でも殺さなきゃいけないし、仕方ねえかあ……」

バキバキ、と手の関節を鳴らす俺、気合十分な真奈ちゃん、そしてあくまで怠慢なスロウス。それがいつでも俺達なんて仕留められるという余裕だというのなら、お前の目は節穴だと言つてやるよ！

『デュエル！』

スロウスVS黎&真奈

LP 8000 VS LP 4000×2

「オデのターン、ドロ」

ノソ、とカードが引かれ、そのまま場に出された。

「オデは『カードガンナー』を召かあ〜ん」

カードガンナー：ATK 400

最初に出て来たのは赤と青のボディの機械。脚部はキヤタピラ、顔の部分は宇宙飛行

士のヘルメットのような透明な球体で覆われ、腕の先は光線銃になっている。

カードガンナー（効果モンスター）

星3

地属性／機械族

ATK 400 / DEF 400

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。

このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする。

また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「効果でデッキからカードを3枚墓地に送りい、攻撃力1500アップウ……」

一見すると『カードガンナー』の効果は攻撃力アップにあるが、その神髄は墓地肥やしにある。1ターンで3枚も墓地送りにでき、パワーアップも兼ねるのだから強力であると言える。加えて破壊されれば1枚ドローできるといふ点も長所だ。

カードガンナー：ATK 400↓1900

スロウスがデッキからカードを3枚墓地送りにする。送られたカードは……、

『マグナ・スラッシュドラゴン』、『ドラゴラド』、『魔法石の採掘』……」

「え？ 見えるんですか？」

真奈ちゃんが素っ頓狂な声を上げる。確かに、あつちとこつちで10メートルあまり距離が開いている。普通の人間なら見えなかつただろうが、生憎と俺は一般人にカテゴライズされないんでね。

「忘れたかい？ 俺は化物、人間にはできない事も俺ならできる」

「あ……」

さて、彼女の反応は何を思ってたか。

それはさて置き、通常『カードガンナー』をデッキに投入する場合、墓地に送った方が良いカードか、サルベージしやすいカードをデッキに投入するものだ。が、今送られたのはどちらも当て嵌まらない。一体……？

「更にい、攻撃力が1900になった『カードガンナー』をゲームから除外しい、『ダークカードガンナー』を特殊召かぁん……っ！」

ダークカードガンナー：ATK 400

ギョルルル、と次元が歪んで『カードガンナー』が闇の中へと姿を消す。入れ替わり  
に真っ黒になった『カードガンナー』が地の底から出現した。

全身に排気パイプがついており、銃の腕も二本から四本に増えている。キャタピラも  
巨大化しており、「バイクと重機と人型ロボを足して3で割ったらこうなりました」とい  
う感じだ。

ダークカードガンナー（効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／機械族

ATK 400 / DEF 400

このカードは自分の場に表側表示で存在する攻撃力1900の「カードガンナー」を  
ゲームから除外する事で、手札から特殊召喚できる。

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。

このカードの攻撃力は、墓地へ送ったカードの枚数×1000ポイントアップする。  
このカードが破壊された時ゲームから除外され、デッキからカードを2枚ドロウでき  
る。

「効果発動おう。デッキからカードを3枚墓地に送り、攻撃力が1枚につき1000ポ  
イントアップするう〜」

更に墓地へ送られるカード達。送られるのは『サファイアドラゴン』、『マスクド・ドラゴン仮面竜』、『ポ  
ケ・ドラ』。

ダークカードガンナー：ATK 400↓3400

「攻撃力3400!?!」

横で真奈ちゃんが驚いているが、こんなのに驚いていたら身がもたないぜ？

「カードを2枚伏せて、ターンエンドオ〜」

スロウス：LP 8000

手札：2枚

フィールド

：ダークカードガンナー（ATK 3400）

：伏せカード2枚

「俺のターン！」

ビツ、とカードを引く。が、ここで俺は重要な点に気がつく。

「攻撃力が……」

「下がってない……!?!」

俺の言葉を真奈ちゃんが引き継ぐ。

そう、『ダークカードガンナー』の攻撃力がエンドフェイズになっても元に戻ってないのだ。

つまり、このままでは毎ターンごとに攻撃力が3000ずつ上がるモンスターが現れる計算になる。うえ、凶悪だ。

だが、俺の手札にはそれをどうこうできるカードは無い。ならばここは守備だ。

「俺はモンスターをセット！」

裏側表示で横向きのカードが、モンスターゾーンの内の一ヶ所を埋める。

「更にカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード2枚

「アタシのターン、ドロー！」

躍動感溢れるドローをする真奈ちゃん。だが、その表情には焦りが見える。

落ち着け真奈ちゃん。焦っても良い結果は出ないぞ。

そんな俺の心配を余所に、プレイングは進行する。

「フィールド魔法発動！『フューチャー・ヴィジョン』！」

ギユオン、と周囲の様子が一変。虹のように様々な色に輝きつつ、その全ての色がマーブル模様のように入り混じっている。

アクセントとしてあちらこちらに窓が存在し、不明瞭ながらもそこから何かの風景が見えている。



フューチャー・ヴィジョン

【フィールド魔法】

自分または相手がモンスターの召喚に成功した時、そのモンスター1体をゲームから除外する。

召喚したモンスターのコントローラーから見て次のスタンバイフェイズ時に、このカードの効果で除外したモンスターを表側攻撃表示でフィールド上に戻す。

「このカードは、互いのプレイヤーの通常召喚したモンスターをコントローラーの次のターンのスタンバイフェイズまでゲームから除外するカード！」

「続いてアタシは『フオーチユンレデイ・ライテイー』を攻撃表示で通常召喚！」  
「一番手、行つくよお！」

フオーチユンレデイ・ライテイー：ATK ？

女。ヒュンヒュンヒュンヒュン、と杖を振り回して場に降り立つのは光を司る黄色の魔女。

成程、この子の能力は『フューチャー・ヴィジョン』と完全にマッチする。

「通常召喚された為、『フューチャー・ヴィジョン』の効果でゲームから除外！」

『一時離脱します！』

虹色に輝く空間に溶け込む黄色の魔女。その瞬間、彼女の場に赤色の光が降りて来た。

「更にこの瞬間、『ライテーター』の効果を発動！ この子がカード効果で場から離れた時、デッキから『フォーチュンレディ』を一体特殊召喚できる！ 行くよ、『ファイリー』！」

『次鋒、出陣！』

フォーチュンレディ・ファイリー：ATK ？

赤色の光は瞬時に変化し、炎使いの赤い魔女になる。

カンフー映画のように杖を振り回し、その杖には紅の炎を灯している。

『『ファイリー』の効果発動！』『フォーチュンレディ』の効果で表側攻撃表示で特殊召喚された時、相手モンスター1体を破壊してその攻撃力分のダメージを与える！ 喰ら

え、デイスブライン・フレア 肅清の炎“！”

『喰らいやがれてんだ！』

ゴウツ！ と炎の砲弾が放たれる。

フォーチュンレディ・ライティー（効果モンスター）

星1

光属性／魔法使い族

ATK ? / DEF ?

このカードの攻撃力・守備力は、このカードのレベル×200ポイントになる。

自分のスタンバイフェイズ時に、このカードのレベルを1つ上げる（最大レベル12まで）。

このカードがカードの効果によってフィールド上から離れた時、自分のデッキから「フォーチュンレディ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

フォーチュンレディ・ファイリー（効果モンスター）

星2

炎属性／魔法使い族

ATK ? / DEF ?

このカードの攻撃力・守備力は、このカードのレベル×200ポイントになる。

自分のスタンバイフェイズ時に、このカードのレベルを1つ上げる（最大レベル12まで）。

このカードが「フォーチュンレイ」と名のついたカードの効果によって表側攻撃表示で特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

過たず直撃した火炎は黒い機械を焼き尽くし、そのままスロウスゴと消し炭にする、ハズだった。

ニイ、とスロウスが笑ったという事に気付いた時はもう遅かった。

「いけない、罠だー！」

「リバースカード、オープン。『恐怖のリバウンド』お。オデにダメージが発生した時い、そのダメージは0になり、相手は10倍のダメージを受けるう！ 更に『ダークカードガンナー』が破壊された事で、こいつを除外してカードを2枚ドロー」

「な!?!」

恐怖のリバウンド（オリジナル）

【通常罠】

プレイヤーに効果ダメージが発生した時に発動できる。

自分が受けるダメージは0となり、相手は発生した数値の10倍のダメージを受ける。

燃え盛る火炎弾が進行方向を180度変更し、巨大化して真奈ちゃんを襲う。

「きゃあつー！」

『マスター!?!』

発生するダメージは3400の10倍、34000。

そうはさせるか！

「畏発動、『ピケルの魔法陣』！ このターン、こちらが受ける効果ダメージは0となる！」

ピケルの魔法陣

【通常畏】

このターンのエンドフェイズまで、このカードのコントローラーへのカードの効果によるダメージは0になる。

キュウオン、と出現した幾何学模様と様々な記号の記された魔法陣がシールドとなつて炎の砲弾を弾き飛ばす。丸い盾は薄くあつても確実に防御の役割を果たした。

「あ、ありがとうございます」

「礼には及ばないさ。助け合うのがタッグの基本だろう？」

「それと軽はずみな行動でした……。折角伏せたカードを一枚無駄にしてしまつて……」

「そつちも問題無い。君の行動は間違つていない、奴が一枚上手だっただけ」

しよぼくれる真奈ちゃん。だが、彼女の行動は間違いで無い。あの場で『ダークカードガンナー』を破壊しなければ、次のターンで攻撃力は6400、まず単純な方法で倒すのは難しい。

もつとも、こういうカードがあるという情報は彼女にあげていたので、迂闊と言えは迂闊かも知れないが。過ぎた事だ、今更とやかく言つてもしょうがない。

「ほら、落ち込んで無いで、このままだと次のターンにやられちまうぜ？」

「あ、そうでした」

「フオーチユンレディ」の最大の欠点はその能力値にある。レベル5の『ダルクイー』と6の『アーシー』以外、その初期能力値は低い。だからこそ『フオーチユンレディ』を操る上で最も重要なのは如何にして彼女達を守りつつその能力を十二分に発揮するか、

という点になる。

『ファイリー』の攻守はレベル×200になる。今のレベルは2、よって攻撃力と守備力は400!」

フォーチュンレディ・ファイリー：ATK ? ↓400

たつた400、あまりにもロースペックだ。最大レベル12にまで上昇しても2400にしかならない。故に『ライティ』と『ファイリー』の能力は場に出た時と場から離れた時に限定されている。恐らく、早期の退場をしやすくする為だろう。自分から引き揚げさせなければ、次のターンに待っているのは大ダメージだからだ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

真奈：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：フォーチュンレディ・ファイリー(ATK 400)

：伏せカード1枚、フューチャー・ヴィジョン(フィールド魔法)

伏せカードで警戒を呼びつつ防御を固めるつもりか？ それじゃ駄目だ真奈ちゃん。こいつらはそんな小手先の技が通じる相手じゃない。

「オデのターン、ドロオー」

しかし、こいつのデッキのコンセプトは何だ？ プライドは【魚族】を、エンヴェイは【悪魔族】と【アンデッド族】の混成だった。だが、こいつの使ったカードは『カードガンナー』の様な機械族と、墓地に送られていたドラゴン族……。

……まさか!?

「オデは手札から永続魔法『未来融合—フューチャー・フュージョン』を発動おう。デッキから5体のドラゴン族を墓お地に送り、2ターン後のスタンバイフェイズにフレイブ・ゴッド・ドラゴン『F・G・D』を融合召喚するう!」

「く、やはり【F・G・D】デッキ!」

墓地に送られたカードは『スピア・ドラゴン』、『竜の尖兵』、『ハウンド・ドラゴン』、『スピリット・ドラゴン』、『神竜アポカリプス』。

未来融合—フューチャー・フュージョン（エラッタ前）

【永続魔法】



自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。  
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「だが、2ターンもオデは待たねえ。オデは手札から魔法カード発動う〜」

「まさか、『龍ドラゴンズ・ミューの鏡』が手札に!」

「違えよー。速攻魔法、『歪んだ未来』い〜」

『龍の鏡』じゃ無い!?

「ここのカードはあ、ライフを1000払って発どおう。『未来融合』で決められたモンスターを融合召喚するう。ああ、説明メンドクセエ……」

歪んだ未来（オリジナル）（改訂版）

【速攻魔法】

自分の場に「未来融合―フューチャー・フュージョン」が表側表示で存在する時、1

000LP払って発動できる。

(1)：「未来融合―フューチャー・フュージョン」の効果で指定された融合モンスターが自分の場に特殊召喚されていない場合、そのモンスターと同名モンスターをEXデッキから融合召喚扱いで特殊召喚する。

スロウス：LP 8000↓7000

「現れろ、『F・G・D』ん〜！」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

F・G・D：ATK 5000

出やがったか……！！

炎、水、闇、地、風の五頭を持つ巨大な竜。初期攻撃力だけならば、デュエルモンスターズの中で最も高いモンスターの中の1体だ。

F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）（融合・効果モンスター）

星12

闇属性／ドラゴン族

ATK 5000 / DEF 5000

ドラゴン族モンスター×5

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードは闇・地・水・炎・風属性モンスターとの戦闘では破壊されない。

そして何より、戦闘においては光属性以外とのバトルでは破壊されないという半ば凶悪な効果がある。光属性には専用の補助カード『オネスト』があるが、そもそもデッキに光属性が存在していない場合、このモンスターはハッキリ言って単純な手法では倒せない。

そして俺のデッキにも、真奈ちゃんのデッキにも、今回『オネスト』は疎か、光属性すら殆ど投入されていない。

融合以外で特殊召喚できないデメリットが可愛く見える。効果破壊ならどうにか行けるが、それを許してくれるとは思えない。

冷や汗を流す俺達を余所に、スロウスは更に手札を切る。

「魔法カード『邪天使の施し』を発動さう。互いに3枚カードを引き、相手だけ2枚捨て

る〜」

「な、何ですかその酷い効果!？」

「チツ、またそのカードか!」

邪天使の施し（オリジナル）

【通常魔法】

お互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドローする。

その後、相手プレイヤーは手札を2枚墓地に捨てる。

「手札を引けえ、*“騎士”*の魂い〜」

「好い加減に名前くれえ覚えろつての、ドロー!」

引いたカードは『ネクロ・ガードナー』、『ガード・マスター』、『拘束解放波』。ならばここはこれとこれを墓地へ送るべきか。

「そして『龍の鏡』を発動。場と墓地のモンスターをゲームから除外し、それを融合素材としたドラゴン族モンスターを1体融合召かあ〜ん」

「い、今引いたんですか!？」

「主人公レベルに負けず劣らずのチートドローだぜ……!」



「に、二体目!？」

「やると思ったぜ！」

スロウスの場に並ぶ同じ外見の巨大ドラゴン。

クソ、GXでミスターTがやったのより凶悪だぜ……！

「更に手札の『フックワイバーン』の効果を発動する。このカードをゲームから除外したい、デツキからドラゴン族を1体墓地に送るう。そして墓地の魔法1枚を手札へえ」

「魔法を1枚、まさか!？」

「オデは『龍の鏡』を手札に加え、そのまま発どお〜！」

赤い、尾が鉤になっている翼竜が吠える。咆哮に合わせてデツキから細長い奇妙な出で立ちの竜、『ミンゲイドラゴン』が半透明の状態で見えて消える。入れ替わりにその尾の鉤には1枚の鏡が引っ掛かっていた。

フックワイバーン（効果モンスター）（オリジナル）

星4

風属性／ドラゴン族

ATK 2100 / DEF 300

このカードを手札から除外して発動する。

デッキからドラゴン族を1体墓地へ送り、墓地の魔法カードを1枚手札に加える。

この効果を使用したターンは通常召喚できない。

「フックワイバーン」の効果は1ターンに1度しか使えない。

「オデは墓地の5体のドラゴン族をゲームから除外しい、『F・G・D』を融合召かあ〜ん〜」

『ギイイイオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!』

F・G・D：ATK 5000

『F・G・D』が……」

「さ、三体……!」

鏡の中に吸い込まれた『ドラゴラド』、『仮面竜』、『ポケ・ドラ』、『竜の尖兵』、『神竜アポカリプス』が五頭の龍を生み出す。

クソ、まさかこいつが3体も並ぶとは……!」

「これで終わりだあ〜」

「くー！」

『F・G・D』で『ファイリー』を攻撃い！」

ゴアッ！ と噴き出す5つのブレス。

(マズい、アタシの伏せカードは攻撃反応じゃない！ これじゃ防ぎきれない！)

『く、マスターッ！』

伏せカードが有効なものでは無いのか、真奈ちゃんはそれを表にする様子は無い。濃厚な敗北色を感じ取ったのか、『ファイリー』が両手を広げて真奈ちゃんを守ろうとする。しかし、彼女の能力値を考えればそれは無意味にも等しい事だろう。

そう、彼女単体なら、ね。

「諦めるなー！」

「え!？」

ジャキン、と俺の墓地から1枚のカードが吐き出される。

その瞬間、『ファイリー』の前に黒い拳法使いが現れ、演武を披露する。

『……成程、こうか!』

そしてその演武が終了すると、『ファイリー』は屈んで杖を斜に構え、防御の構えを取る。守備表示が変わった証だ。

同時に巨大な魔法陣を足元に展開し、自分を中心に渦巻く炎の竜巻で強力なブレス攻



撃を防ぎ切った。

フォーチュンレディ・ファイリー：ATK 400 ↓ DEF 400

「何イ!?!」

「す、凄い……!」

「墓地の『ガード・マスター』をゲームから除外した! これで場のモンスター1体を守備表示に変え、このターンのみバトルでは破壊されない!」

ガード・マスター（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星4

地属性／戦士族

ATK 0 / DEF 1700

このカードが自分の墓地に存在する場合、相手が自分フィールド上に存在する表側攻撃表示モンスター1体を攻撃対象に選択した時に発動する事ができる。

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、攻撃対象となったモンスター1体の表示形式を表側守備表示に変更する事ができる。

この効果で守備表示になったモンスターはこのターン戦闘では破壊されない。

強力なブレス攻撃は未だ続いているが、炎の防壁は威力を落とす事無く攻撃を防いでいる。

「凄いよ、『ファイリー』！」

『ありがとう、マスター。でもこいつあ思ったよりも魔力消費が激しい。そんなに長くは続かねえみてえだ』

とりあえず、これで安泰だろう。

そして破壊できないのならば、攻撃の矛先はこちらへ向かう！

「ならば2体目の『F・G・D』でセットモンスターを攻撃い〜！」

「セットモンスターは『マツシブ・ウオリアー』！ 1ターンに1度、バトルでは破壊されない！」

ブレス攻撃の対象はセットされたモンスターへ向かう。しかしその攻撃は岩の魔人が抱えているヘリポートによって受け止められた。

マツシブ・ウオリアー：DEF 1200

「3度目の攻撃いゝ！」

「畏発動『くず鉄のかかし』！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にし、フィールドに再セットする！」

三度放たれる五連ブレス。今度はボロ金属で作り上げた案山子が張ったバリアで完全にシャットアウト。バリアの表面でブレスが四方八方に散るもヒビ1つ入れる事はできない。流石はくず鉄先生だ。

「ターンエンドオ〜」

スロウス：LP 7000

手札：1枚

フィールド

：F・G・D（ATK 5000）×3

：伏せカード1枚、未来融合ーフューチャー・フュージョン（永続魔法、『F・G・D』を指定）

ふう、何とか防ぎ切ったか。だが窮地を脱したワケじゃ無い。このままじゃジリ貧で負けるのは火を見るよりも明らか。

『マツシブ・ウォリアー』の効果で防げる攻撃は1回、『くず鉄のかかし』を組み合わせても2回、破壊される事を考慮しても3回が限度。このターンで動かないとやられてしまう！

「俺のターン！」

引いたカードは、『アームズ・ホール』！

「魔法カード『アームズ・ホール』を発動！ デッキトップ1枚を墓地へ送り、デッキから装備魔法を1枚手札に加える！ ただし、このターン俺はモンスターを通常召喚できない」

アームズ・ホール

【通常魔法】

自分のデッキの一番上のカード1枚を墓地へ送って発動する。

自分のデッキ・墓地から装備魔法カード1枚を手札に加える。

このカードを発動するターン、自分は通常召喚する事はできない。

墓地へ落ちたのは『ビッグバン・シユート』。装備魔法だが、サーチしようとしていた奴では無かったので無視。

「そして今手札に加えた装備魔法『与奪の首飾り』を『マツシブ・ウオリアー』に装備！  
ヘリポートを背負った岩石の魔人の首に黒いペンダントが装着される。攻守の変化  
は無いが、ハンデスまたはドロー補助の効果がある。」

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：マツシブ・ウオリアー（DEF 1200）

：伏せカード3枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）、与奪の首飾り（装備魔法・『マツシブ・ウオリアー』に装備）

「アタシのターン！ 黎さんが繋いでくれた命、無駄にはしない！」

「人を勝手に殺すな」

死んで無いからな、俺。

「このスタンバイフェイズ、前のターンに除外された『ライティー』が帰還する！」

『ただいま、つて何この状況!?!』

『ライティイー』の攻守はレベル×200、今のレベルは1だから攻守は200!」

フォーチュンレディ・ライティイー：ATK ? ↓200

「更に『ライティイー』と『ファイリー』の効果を発動! 自分のターンのスタンバイフェイズごとにレベルを1つ上げる! レベルが変化した事で、攻守も上昇する!」

フォーチュンレディ・ライティイー：☆1 ↓2 / ATK 200 ↓400 / DEF 2

00 ↓400

フォーチュンレディ・ファイリー：☆2 ↓3 / ATK 400 ↓600 / DEF 4

00 ↓600

「続いてフィールド魔法『魔法都市 エンディミオン』を発動!」

マール模様の風景が消滅し、周囲の光景が魔法都市に変化する。賢明な王によって統治された魔法文化の街だ。

魔法都市 エンディミオン

## 【フィールド魔法】

自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

魔力カウンターが乗っているカードが破壊された場合、破壊されたカードに乗っていた魔力カウンターと同じ数の魔力カウンターをこのカードに置く。

1ターンに1度、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを取り除いて自分のカードの効果を発動する場合、代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを取り除く事ができる。

このカードが破壊される場合、代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事ができる。

「魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを2枚デッキからドロし、更に『エンディミオン』に魔力カウンターを1つ乗せる！」

緑の気味の悪い笑顔の壺が壊れると同時に光の粒が魔法都市へと散る。光の粒は一点に集まり、キラキラと輝く光の珠になった。

魔法都市 エンディミオン：魔力カウンター 0 ↓ 1

「そして『リチュアル・シスター』を守備表示で召喚！ そのモンスター効果でデッキから儀式魔法『黒魔術継承の儀式』を手札に加える！」  
『ハッ！』

現れたのは黒髪の踊り子。水色の衣装をはためかせて踊り、デッキからそれに呼応するようにカードが1枚飛び出した。

リチュアル・シスター（効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）

星3

水属性／魔法使い族

ATK 1000／DEF 1000

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから儀式魔法または儀式モンスターを1体手札に加える。

このカードが儀式魔法のためにリリースされて墓地に送られた時、自分フィールド上の魔力カウンターを任意の数だけ取り除き、自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスターの攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで、取り除いた数×10ポイントアップさせる。



リチュアル・シスター：DEF 1000

「まだまだ！ 魔法カード『影の結集』を発動！ このカードは自分のデッキから全て異なるレベルの魔法使い族モンスターを3体選択して手札に加える！ ただし、この効果で手札に加えたモンスターは次のアタシのスタンバイフェイズまで場に出す事はできず、手札から墓地送りになった場合、ゲームから除外される！」

影の結集（オリジナル）

【通常魔法】

自分のデッキから魔法使い族モンスターを3体選択して手札に加える。

この効果で手札に加えるモンスターは全て異なるレベルでなくてはならない。

この効果で手札に加えたモンスターは次の自分のスタンバイフェイズまでフィールドに召喚・特殊召喚できない。

この効果で手札に加えたモンスターが手札から直接墓地に送られた場合、墓地へは送られずにゲームから除外される。

デッキから3人の影が真奈ちゃんの手札へと加わる。更に漏れ出たエネルギーが魔法都市へと降り注ぎ、新たなエネルギーが満ちる。

魔法都市 エンデイミオン：魔力カウンター 1↓2

「アタシはこれでターンエンド」

真奈：LP 4000

手札：6枚（内1枚は『黒魔術継承の儀式』）

フィールド

・フオーユンレディ・ライティール（DEF 400）、フオーチュンレディ・ファイリー（DEF 600）、リチュアル・シスター（DEF 1000）

・伏せカード1枚、魔法都市 エンデイミオン（フィールド魔法・魔力カウンター：2）

ここまででは順調。俺の伏せカードは『くず鉄のかかし』だし、場のモンスターだつて十分な数が並んでいる。如何に『F・G・D』と雖もこの防壁を容易く突破する事はできないだろう。

だが、こういう鉄壁は原作では破られる傾向が強い。果たして、いつまでこの防御が持つか……。

「オデのターン、ドロー」

引いたカードを見たスロウス。表情の変化は乏しいが、あまり良いカードでは無かったようだ。

「あく、メンドクセエ。なあ、アレ使つて良いよなあ？ こいつら相手にすんのマジでメンドクセエ。本気出すのもメンドクセエしよお」

っ、やはり本気じゃ無かったか！ 『F・G・D』を並べる事だつて容易くできる事じゃ無いというのに……！

「オデはレベル12の『F・G・D』3体をオーバーレイ！」

「な!？」

「ら、ランク12つて事!？」

『来る、巨大な何か……!』

『なんと、邪悪な波動……!』

「3体のモンスターでえ、オーバーレイ・ネットワークを構築う！」

3体の五頭の龍が灰色の光へと変わり、螺旋を描きながら空高くへと昇つて行く。三条の光は地面に出来た銀河の渦の中へと飛び込み、爆発を起こした。



アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン：ORU 3↓2 / ATK 5000↓6000

バギン、と黒い星が砕け散る。その瞬間、無数の黒く太い針が黒龍から降り注がれた。絶望を体現したかのような、真っ黒な雨が視界を埋め尽くす。

『マスター、逃げてえ！』

『こんなの防ぎきれない！』

「で、でも！」

黒い豪雨が目前に迫り、真奈ちゃんと精霊二人が焦る。

確かにこのままではどちらかがやられる。しかもこいつの能力は後2回使える。だが、今の段階なら防げない訳じゃ無い。

「俺に任せろ！ 畏発動、『トライアングル・バリア』！ 同じ種族のモンスターが場に3体以上存在する場合に発動できる！」

トライアングル・バリア（オリジナル）

【通常畏】

自分の場に表側表示で同じ種族のモンスターが3体以上存在する時に発動できる。

ライフを800ポイント支払う事でこのターンのみ自分の場のカードはカード効果では破壊されない。

エンドフェイズに自分の場に存在するカード1枚につき自分はカードを1枚ドロウできる。

「その効果でライフを800支払い、このターンのみ俺達の場のカードはカード効果では破壊されない！ くっ……！」

黎：LP 4000↓3200

ズシ、と体に負担がかかる。だが、このくらいは必要経費だ！

同時に『ライテーター』、『ファイリー』、『リチュアル・シスター』の足元に大型の魔法陣が展開され、共鳴するように光る。

光はシールドを生み出し、強固なバリアは漆黒の針の雨を防ぐ。シールドに何本も刺さるが、貫通する気配は無い。防御成功だ。

スロウスはこちらのカードが破壊できない事を悟ると、攻撃に切り替えて来た。

「ぬあ、『マツシブ・ウォリアー』を攻撃い！」

破壊耐性のある『マツシブ・ウオリアー』を狙って来た!?

これは何かある可能性が高い。ならばその攻撃、防ぐまで!

「『くず鉄のかかし』、発動!」

壊れたドライヤーやヘルメット、使われなくなった鉄パイプやワイヤーで構成された案山子が飛び出す。ところが次の瞬間、再利用可能な金属案山子はカードのイラストから出て来た有刺鉄線に絡め取られてセット状態に戻ってしまった。

「何!?!」

マズい、この分だと破壊耐性も通じない!

「『ブラックマーダー・インパルス』う!」

降り注ぐのは極太の黒い槍の雨。『マツシブ・ウオリアー』は持っていたヘリポートで攻撃を受け止めるも、槍は易々とヘリポートを貫通し、その下にいた岩石の魔人を貫いた。

「ぐ、済まない『マツシブ・ウオリアー』……!」

「畏も耐性も通じないなんて……!」

「『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』には畏もモンスター効果も通じねえよお」  
鼻息を荒くしつつもスロウスが話す。得意気なのは気のせいじゃないだろう。

アボミナブル・ジエノサイド・ドラゴン（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）  
 ランク12

闇属性／ドラゴン族

ATK 5000 / DEF 5000

レベル12×3

1ターンに1度、このカードに存在するエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する。

このカードの攻撃力を1000ポイントアップし、相手の場に存在するカードを全て破壊する。

このカードが攻撃を行う場合、相手はダメージ計算終了時まで魔法・罫を発動できず、対象となったモンスターの効果は無効となる。

「だが、『マツシブ・ウオリアー』に装備されていた『与奪の首飾り』の効果でカードを1枚ドロー！」

与奪、つまり〃与える〃と〃奪う〃だ。俺に手札を〃与える〃か、相手の手札を〃奪う〃かの選択をできる点を見れば、与奪の権利を与えるカードだと言えるだろう。

与奪の首飾り



## 【装備魔法】

自分フィールド上の装備モンスターが戦闘によって破壊されこのカードが墓地に送られた時、次の効果から1つを選択して発動する。

- デッキからカードを1枚ドロウする。
- 相手の手札をランダムに1枚墓地に捨てる。

ここまでではどうにか防げた。が、スロウスは自分の優位性を疑っていない。

スロウスは手札のカードを1枚切った。

「オデは手札から魔法カード『環状の爆発』を発動う。自分の場の永続魔法か永続罫を1枚墓地に送りい、カードを4枚ドロウ。『未来融合』を墓地へ〜」

「うえ!! 多いだろ!!」

「か、カウンターは乗るけど……4枚って……」

うわ、やっぱその手のカードが来たか。

魔法都市 エンデイミオン：魔力カウンター 2 ↓ 3

環状の爆発（オリジナル）

## 【通常魔法】

自分の場に表側表示で存在する永続魔法または永続罫を1枚墓地に送り、カードを4枚ドローする。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキから手札が5枚になるようにドローできる。

「カードを2枚伏せて、タアーンエンドオ〜」

「く、このエンドフェイズ、自分の場のカード1枚につき、カードを1枚ドローできる！」  
 俺の場には伏せカードが2枚、真奈ちゃんの場合には『ライティー』、『ファイリー』、『リチュアル・シスター』、リバースカード、フィールド魔法『魔法都市 エンデイミオン』の5枚だ。

「ドローツ！」

スロウス：LP 7000

手札：3枚

フィールド

：アポミナブル・ジエノサイド・ドラゴン（ATK 6000・ORU 2）

: 伏せカード3枚

なんとかか、『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』の能力を防げた。が、あんなの  
その場凌ぎに過ぎない。『トライアングル・バリア』は、もう使えない。

「俺のターン！」

く、駄目だ。このカードじゃ状況を打破する事はできない！

「俺は『G・S』グランド スピリッツランチャー・トータス』を準備表示で召喚！」

『グゴオッ！』

G・S ランチャー・トータス：DEF 2200

俺が呼び出したのは背中に砲門を背負った陸亀。海亀は“タートル”なのに対し、陸  
亀は“トータス”という違いがあるのだが……、今はそんな豆知識を披露している場合  
じゃ無いな。

グランド・スピリッツ。『マグネット・バルキリオン』から譲り受けた地の精霊達だ。  
だが、この状況でどう、できる……。

「そうだ、この手があった！」

「俺は『ランチャー・トータス』の効果を発動！ 1ターンの1度、デツキから岩石族モンスターを1体墓地へ送り、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える！俺はデツキから『G・S バレット・アルマジロ』を墓地へ送る！」

G・S ランチャー・トータス（効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／岩石族

ATK 1000 / DEF 2200

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、1ターンの1度、デツキから岩石族モンスターを1体墓地へ送る事で、相手に500ポイントのダメージを与える事ができる。

「弾丸装填！ シュート！」

「ぬおっ!？」

スロウス：LP 7000 ↓ 6500

砲門から丸まった鉄色のアルマジロが射出される。加速して炎を纏い、回転を加えながらスロウスに直撃した。

「更に今墓地へ送った『バレット・アルマジロ』の効果発動！ このカードがデツキまたは手札から墓地送りになった時、同名モンスターを2体、場に特殊召喚できる！」

G・S バレット・アルマジロ（効果モンスター）（オリジナル）

星2

地属性／岩石族

ATK 400 / DEF 500

このカードがデツキまたは手札から墓地に送られた時に発動できる。

以下の効果から1つ選択して発動できる。

●同名モンスターをデツキから2体、自分の場に攻撃表示で特殊召喚できる。

●同名モンスターを1体、手札に加える。

G・S バレット・アルマジロ：ATK 400

G・S バレット・アルマジロ：ATK 400



デツキから融合素材となるモンスターを選択して融合素材とすることができる。

この時、手札またはフィールドのモンスターを融合素材の内の一休としな場合、融合召喚したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける。

「同時に『エンディミオン』にカウンター追加！」

G・S アーマード・エレファント：ATK 2500

魔法都市 エンディミオン：魔力カウンター 3↓4

「6体融合で攻撃力2500?」

「なあにが出て来るかと思えば、ザコモンスターかあ?」

ザコ? んなワケ無いっしょ。

こいつの能力見て、ビビるなよ……?」

『アーマード・エレファント』のモンスター効果発動! 1ターンに1度、自分の墓地の装備魔法1枚を選択してフィールドのモンスター1体に装備する! 俺は『アーム

ズ・ホール』の効果で墓地へ送られた『ビッグバン・シユート』を選択し、『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』に装備！」

ジャキン、と墓地の装備カードが吐き出され、黒龍に装備される。惑星をぶち抜く威力のエネルギーがオーラの様に纏わりつく。

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン：ATK 6000↓6400

魔法都市 エンディミオン：魔力カウンター 4↓5

「さて真奈ちゃん問題だ。『ビッグバン・シユート』を使ったコンボの中で最も凶悪なもののは？」

「除外！」

「正解！ 『拘束解放波』を発動だ！ 更に魔法カードが発動した事で『エンディミオン』にカウンターが乗る！」

魔法都市 エンディミオン：魔力カウンター 5↓6

自分の場の表側表示の装備魔法1枚をコストに相手の伏せカードを全て吹き飛ばす



このカード。本来なら良くて2:5交換だが、今回はそれだけじゃ済まない。

『ビッグバン・シユート』が装備モンスターよりも先に場を離れる場合、装備モンスタ―をゲームから除外する！」

これが『ビッグバン・シユート』の長所であり短所。本来、装備カードが剥がれても余り痛い思いはしない。が、このカードは別だ。強化+貫通の見返りとして、装備を失えば除外というデメリットが跳ね返って来る。

「ぬあらばリバースカード、オープウン。速攻魔法『闇色の半鐘』う。カード効果を無効にするう。対象は『拘束解放波』あ！」

闇色の半鐘（オリジナル）

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するカード1枚の効果をエンドフェイズまで無効にする。

ガンガンガン！ と黒い半鐘が鳴り響き衝撃波を弾こうとする。そうはさせるか！

「チェーンして『魔宮の賄賂』を発動！ 魔法・罫の発動を無効にして相手はカードを1

枚ドロ―する！」

「カウンター罨発動う。『恐怖の乖離』い！ カウンター罨の発動を無効にし、オデは2枚ドロウするう！」

バチバチツ、と半鐘をショートさせようとするが、突如として電気が分散。警鐘を止める事ができず、衝撃波は消滅した。

恐怖の乖離（オリジナル）

【カウンター罨】

カウンター罨の発動を無効にし、デッキからカードを2枚ドロウする。

魔法都市 エンディミオン：魔力カウンター 6↓7

オーケー、計算通り！ これで奴の伏せカードは減った、より安全に攻撃できる！

『アーマード・エレフアント』のもう1つのモンスター効果を発動！ バトルフェイズ中こいつの融合素材となったモンスター1体につき、相手モンスター1体の攻撃力と守備力を700ポイントダウンさせる！」

G・S アーマード・エレフアント（融合・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星7

地属性／岩石族

ATK 2500 / DEF 500

「G・S」と名のついたモンスター+岩石族モンスター1体以上（最大5体まで）

(1) : 1ターンに1度、自分の墓地の装備カードを1枚選択してフィールド上のモンスター1体に装備する事ができる。

(2) : このカードが攻撃を行う場合、バトルフェイズ終了時まで相手の場に存在する全てのモンスターの攻撃力と守備力は、このカードの融合素材となったモンスター1体につき700ポイントダウンする。

(3) : このカードが攻撃の対象となった時、このカードは守備表示となる。

「素材となったモンスターは6体！ よって攻守は700×6で4200ポイントダウン！」

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン : ATK 6400 ↓ 2200 / DEF 5000 ↓ 800



フィールド

：G・S ランチャー・トータス（DEF 2200）、G・S アーマード・エレファント（ATK 2500）

：伏せカード2枚（内1枚は『くず鉄のかかし』）

「アタシのターン、ドロー！」

さて、補足説明をするが、先刻の『トライアングル・バリア』の効果で真奈ちゃんの手札は潤沢すぎる程に増強された。その数、今のドローによつて加わったカードを含めて12枚。どう出る、真奈ちゃん？

「このスタンバイフェイズ、『ライティール』と『ファイリー』のレベルが更に上昇！」

フォーチュンレディ・ライティール：☆3↓4 / ATK 600↓800 / DEF 6

00↓800

フォーチュンレディ・ファイリー：☆4↓5 / ATK 800↓1000 / DEF

800↓1000

「ゴメンね、『ライティール』。アタシは『フォーチュンレディ・ライティール』をリリースし

て『フォーチュンレディ・アーシー』をアドバンス召喚！」

『はいはい、大丈夫ですよ。そんじゃ一足先に失礼しまゝす！』

『後は任せろ！』

『……私も、頑張るぞ！』

フォーチュンレディ・アーシー：ATK ？

光となって消失した黄色の魔女。入れ替わりにその光から眼鏡をかけた橙の魔女が現れる。司る力は地、6体の「フォーチュンレディ」の中では最も初期レベルが高い。

『『アーシー』の攻守はレベル×400。『アーシー』のレベルは6、よって2400！』

フォーチュンレディ・アーシー：ATK ？↓2400

「続いて永続罫『秘術の壺』を発動！ このカードはアタシが魔法カードを発動するたび魔力カウンターを1つ乗せる。1ターンに1度、カウンターを2つ取り除く事で、カードを1枚ドローできる！」

お、上手い。魔法カードを1枚使えば『秘術の壺』と『エンデイミオン』の両方にカ

ウンターが乗る。実質、1ターンに1枚の魔法カードがドロースースに化ける訳か。

秘術の壺一（湊クレナイ先生オリジナル）

【永続罫】

このカードが表側表示で存在する時、自分が魔法カードを発動する度にこのカードに魔力カウンターを1つ乗せる。

1ターンに1度、このカードに乗っている魔力カウンターを2つ取り除くことで自分のデッキからカードを1枚ドロウ出来る。

「更に『融合』を発動！ 手札の『ブラック・マジシャン』と『ブラック・マジシャン・ガール』を融合！」

『フレア、行きますよ！』

『りょーかいです、お師匠様！』

融合時の独特のエフェクトにより渦巻く空間。その渦の中へと黒魔術最高位の魔導師、そしてその弟子が呑み込まれて行く。黒と黒の力が合わさり、その渦の中心から新たな魔導師が生まれた。

「君臨せよ、『超魔導師―ブラック・カオス・マスター』！」

『参ります！　今こそ主のためにこの魔導を振るわんが事を！』

一見すると『ブラック・マジシャン』、されどその衣服は派手とも取れる黒い法衣であり、肌の色も白い。性別が女性なのは、まあ、素材となった二人が二人とも女性だからだろうか。

超魔導士―ブラック・カオス・マスター（融合・効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）

星8

光属性／魔法使い族

ATK 2800 / DEF 2000

「ブラック・マジシャン」＋「ブラック・マジシャン・ガール」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

1ターンに1度、自分のライフを半分払うことで自分の墓地に存在する魔法カードを手札に加える事が出来る。

この効果を使用したターン、自分はバトルフェイズを行う事が出来ない。

超魔導士―ブラック・カオス・マスター：ATK 2800



「カウンター追加！」

融合の余波が辺りに撒き散らされ、魔法都市にエネルギーが更に満ちる。光の珠の数が1つまた追加され、真奈ちゃんの足元に現れた小さめの壺の中にも光が落ちていった。

魔法都市 エンデイミオン：魔力カウンター 6↓7

秘術の壺：魔力カウンター 0↓1

「まだまだ！ 装備魔法『魔導の結束印』を『ブラック・カオス・マスター』に装備！ エクストラデツキかデツキから融合モンスターか効果モンスターを1体除外する事で、自分の場の魔法使い族融合モンスター1体は装備している間中、除外したモンスターと同じ効果を得る事ができる！」

魔導の結束印（オリジナル）

【装備魔法】

魔法使い族の融合モンスターのみ装備可能。

発動時にデッキまたはエクストラデッキから効果モンスターまたは融合モンスター1体をゲームから除外する事で、装備モンスターはこのカードを装備している限り、その除外したモンスターの効果を得る。

装備モンスター破壊される時、このカードを代わりに破壊することができる。

「アタシはデッキから『破竜魔導剣士 バスター・ブレイダー』を除外！ その効果で相手のドラゴン族モンスターを戦闘破壊するたびに自分の場のカード1枚に魔力カウンターを乗せる事ができる！」

破竜魔導剣士 バスター・ブレイダー（効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）

星7

闇属性／魔法使い族

ATK 2600 / DEF 2300

このカードはフィールドまたは墓地に存在する時、このカードは「バスター・ブレイダー」としても扱われる。

このカードがドラゴン族モンスターを戦闘で破壊した時、フィールドに存在する魔力カウンターを乗せる事が出来るカードの上に魔力カウンターを1つ置く事が出来る。

『バスター・ブレイダー』に紫の法衣を着せたようなモンスターが半透明となって、『ブラック・カオス・マスター』の胸元に現れた魔法陣に吸収される。全身に紫のオーラを纏った魔導師は、杖を改めて構えた。

「更にカウンターを追加！」

魔法都市 エンデイミオン：魔力カウンター 7↓8

秘術の壺：魔力カウンター 1↓2

「そして『秘術の壺』のカウンターを2つ取り除き、カードを1枚ドロ！」

秘術の壺：魔力カウンター 2↓0

壺からエネルギーが流れ、彼女のデッキトップが光る。ピッ！ と力強くそのカードは引かれた。

「来た！」

お、何かキーカードを引いたのか？

「アタシは『エンデイミオン』に存在しているカウンターを6個取り除き、手札の『神聖魔導王 エンデイミオン』を特殊召喚！ 効果で墓地から『強欲な壺』を手札に加え、そのまま発動する！」

『ぬうん！』

神聖魔導王 エンデイミオン（効果モンスター）

星7

闇属性／魔法使い族

ATK 2700 / DEF 1700

このカードは自分フィールド上に存在する「魔法都市エンデイミオン」に乗っている魔力カウンターを6つ取り除き、自分の手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する魔法カード1枚を手札に加える。

1ターンに1度、手札から魔法カード1枚を捨てる事で、フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

神聖魔導王 エンデイミオン：ATK 2700

魔法都市 エンディミオン：魔力カウンター 8 ↓ 2 ↓ 3

ズシーン、と黒い鎧を纏った魔法都市の王が君臨する。あの時はお世話になりました。

「効果発動！ 手札の魔法カードを1枚捨てて、場のカードを1枚破壊する！ 対象はモチ、セツトカード！」

『ぬえい！』

カアン！ と小気味良い音を立てて杖が地面を叩く。その瞬間、『エンディミオン』の足元に巨大な魔法陣が生まれ、そこから生まれた業火がスロウスの残ったカードを焼き払った。

「んぬ熱……っ！」

「よし、これでアタシ達の勝ちだ！」

このまま総攻撃を仕掛ければスロウスのライフは尽きる。勝った、そう思った時だった。

キュイン！

突如として真つ黒な魔法陣が生み出された。その大きさも複雑さも、先程『エンディミオン』の生み出したものとは比べ物にならない。

その魔法陣の中心部から、ブヨブヨした紫色の不定形の塊が現れた。サイズは兎に角巨大。大き過ぎて森の木が小さく見えるくらいだ。

「で、デケエ!?!」

「嘘!?! 何で!?!」

まさか……、破壊がトリガーのカードだったのか!?

「罨カード『毒の種』えく。セット状態で破壊された時、自分の場に『ポイズン・トークン』を特殊召喚するく」

毒の種一（オリジナル）

【通常罨】

相手の手札を1枚ランダムに選択し、相手のデッキの1番上に置く。

セットされた状態のこのカードが破壊された時、自分の場に「ポイズン・トークン」（悪魔族・闇・星10・攻 10000 / 守 10000）を1体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したトークンは攻撃できず、次の自分のスタンバイフェイズ時に破壊される。

ポイズン・トークン：ATK 10000

「攻撃力1万!?!」

「面倒な……!」

攻撃のためにエネルギーを溜めていた『エンデイミオン』と『ブラック・カオス・マスター』が杖を納める。ギリ、と歯軋りしたり顔を顰めたりと、悔しそうだ。

「……カードを2枚伏せて、ターンエンド!」

真奈 : LP 4000

手札 : 5枚 (内1枚は『黒魔術継承の儀式』)

フィールド

・フォーチュンレディ・ファイリー (DEF 600)、フォーチュンレディ・アーシー (ATK 2400)、リチュアル・シスター (DEF 1000)、超魔導士・ブラック・カオス・マスター (ATK 2800)、神聖魔導王 エンデイミオン (ATK 2700)

・伏せカード2枚、魔法都市 エンデイミオン (フィールド魔法・魔力カウンター:3)、融合の結東印 (装備魔法・『ブラック・カオス・マスター』に装備)、秘術の壺 (永続罫・魔力カウンター:0)

あんのウイルスもどき……、見た目の割に大した能力じゃねえの。

だが、スロウスのスタンバイフェイズに『ポイズン・トークン』は破壊される。そうすれば奴の場はガラ空き、次のターンの総攻撃で、或いは……。

「オデのターン、ドロロー。オデは速攻魔法『魔の降誕祭』を発動おう。このカードは、自分の場の閻属性モンスターを1体リリースして発動するう。デッキから、その攻撃力1000ポイントにつき1枚ドロローするう。『ポイズン・トークン』をリリースウ」

「何だと!？」

「攻撃力は1万、て事は10枚ドロロー!？」

魔の降誕祭（オリジナル）

【速攻魔法】

自分の場の閻属性モンスターを1体リリースし、その攻撃力1000ポイントにつき1枚デッキからカードをドロローする。

シユババツ、とスロウスの手札が瞬時に13枚という驚異的な枚数に変わる。ハンドアドバンテージ、取られ過ぎだろ……! !



「オデは手札から魔法カード『腐敗の神話』を発動おう。自分の場にカードが存在しない時、手札のモンスター1体を特殊召喚する。『ボーン・リザードマン』を特殊召喚だあ！」

『ギイオツ！』

ボーン・リザードマン：ATK 3100

何の前触れも無く飛び出した骨のトカゲ。その攻撃力は、デュエルモンスターズの最上級のラインを100だけ、されど100も上回っていた。

腐敗の神話（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場にモンスターが存在しない時に発動できる。  
手札からモンスター1体を特殊召喚できる。

ボーン・リザードマン（効果モンスター）（オリジナル）

星8

地属性／ドラゴン族

ATK 3100 / DEF 950

このカードは通常召喚できない。

このカードをリリースする事で、自分の墓地に存在する闇属性モンスター1体を、召喚条件を無視して特殊召喚できる。

「更に魔法カード『漆黒の大嵐』を発動だあ！ このカードはあ、お互いの場の魔法・罠を全て破壊するうゝ。この時に、相手の魔法・罠の効果は全て無効となるうゝ！」

「ぐー！」

「しまっ……い！」

ビュゴウツッ！ と黒い突風が吹き荒れ、魔法都市ごと魔法と罠カードが吹き飛ばされてしまう。く、『魔法都市 エンディミオン』の耐性も魔力カウンター受け継ぎ効果もこれじゃ使えない！

漆黒の大嵐（オリジナル）（改訂版）

【通常魔法】

（１）：自分の場に攻撃力3000以上の闇属性モンスターが存在する時に発動できる。

フィールド上に存在する魔法・罾カードを全て破壊する。

この時、相手の「破壊されない」効果は無効となる。

「だったらリバースカード、オープン！ 速攻魔法『収縮』！ エンドフェイズまで『ボーン・リザードマン』の元々の攻撃力は半分になる！」

「アタシもリバースカード、オープン！ 罾カード『スキル・サクセサー』！ エンドフェイズまで『エンデイミオン』の攻撃力を400ポイントアップさせる！」

ボーン・リザードマン：ATK 3100↓1550

神聖魔導王 エンデイミオン：ATK 2700↓3100

俺のリバースカード『くず鉄のかかし』と『収縮』、真奈ちゃんの『魔法都市 エンデイミオン』、『融合の結束印』、『秘術の壺』、そして伏せカードの『サイクロン』と『スキル・サクセサー』が消滅。これで、攻撃を防ぐ手段を失ったか……！

「オデは『ボーン・リザードマン』の効果発動だあく。こいつをリリースして、墓地の闇属性モンスターを1体特殊召喚するう。オデは『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』を特殊召喚かぁん！」

「うえ、また出た!？」

「面倒な……」

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン：ATK 5000

復活する黒龍。先刻の悪夢が、蘇る。

オーバーレイ・ユニットは存在していないが、その攻撃力とアンティーク・ギア「古代の機械」シリーズ同様の能力を備えているだけで十分な脅威だ。

く、『収縮』は無駄に終わったか！

「バートルウ！ 『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』で『フォーチュンレディ・アーシー』を攻撃い！ 〃ダークマードー・インパルス〃ウウツ！」

『うわあああああああああああああつ！』

「きやあああああああああつ！」

漆黒の槍が無数に降り注ぐ。

これが通れば2600ポイントのダメージ……、だがそれを通してやれる程、俺はアまく無いぞ、スロウス！

「墓地の『ネクロ・ガードナー』をゲームから除外し、その攻撃を無効にする！」

ガンギンゴンギンガンギンゴンツ!

黒い鎧武者が槍の雨を結界で防ぐ。『邪天使の施し』の時に墓地に捨てておいたのは正解だったな。

「チツ……」

「殺させはしない、絶対に!」

希望は絶対に、守り通す!

例え、この命に代えてでも、テメエらは根こそぎ殲滅する!

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 43 : 「アタシのせいだ」 ★

黎 : LP 3200

手札 : 3枚

フィールド

: G・S ランチャー・トータス (DEF 2200)、G・S アーマード・エレファント (ATK 2500)

: 魔法・罫無し

真奈 : LP 4000

手札 : 5枚 (内1枚は『黒魔術継承の儀式』)

フィールド

: フォーチュンレディ・ファイリー (DEF 600)、アーシー (ATK 2400)、リチュアル・シスター (DEF 1000)、超魔導士・ブラック・カオス・マスター (ATK 2800)、神聖魔導王 エンディミオン (ATK 2700)

：魔法・罨無し

スロウス：LP 5800

手札：12枚

フィールド

：アボミナブル・ジエノサイド・ドラゴン（ATK 5000）

：魔法・罨無し

SIDE：黎

さて、どうしたものか。『ガード・マスター』と『ネクロ・ガードナー』の能力は使っちゃまった。伏せカードは無し、つまりこれ以上スロウスの攻めを防ぐ事はできないという事だ。

「オデはカードを5枚セットオ〜」

うお、全伏せなんざこつち来て久々に見たぜ……！

「更にお前らの場にいる『ブラック・カオス・マスター』、『エンデイミオン』、『アーマー・エレファント』、オデの『アボミナブル・ジエノサイド・ドラゴン』をリリースして

『ライアー・ゾンビ』を特殊召喚だあ〜!』

『ぐ、くあああああつ!』

『ぬおあああああつ!』

『プオアアアアオンツ!』

黒い法衣の女性魔導師が、黒い鎧の魔法都市の王が、鈍色の鎧の巨大な象が地中から現れた巨大な包帯の巻かれた手によって地中に引き擦り込まれる。

入れ替わりに出て来たのは血に染まった包帯に身を包んだ大柄なゾンビ。あちこちの歯が抜けており、残った数本の歯もボロボロだ。指も5本すっかり揃っていない。どうやら随分と腐敗しているようだ。包帯を巻いているのは、ドロドロになってしまった体を保護するためだろうか。

ライアー・ゾンビ（効果モンスター）（オリジナル）  
星10

闇属性／アンデッド族

ATK 4500／DEF 3300

このカードは通常召喚できない。

相手フィールド上に存在するモンスターを3体と自分の場のモンスター1体をリ



リースした時のみ手札から特殊召喚できる。

このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。

このカードが場を離れた時、ゲームから除外される。

ライター・ゾンビ：ATK 4500

「攻撃力が『青眼の究極龍』と同じとはな……!」

「『ラヴァ・ゴーレム』よりも酷い効果……! 相手モンスターを利用した上に自分の場にモンスターを特殊召喚するなんて……!」

ジユクジユクと疼く腐肉。今も正体不明の液体が指先から垂れている。

気持ち悪い。嫌悪感を心の底から呼び出す見た目だ。精神衛生上宜しく無いというのはこういうのを言うのだろう。

「ターンエンド」

スロウス：LP 5800

手札：6枚

フィールド

：ライアー・ゾンビ（ATK 4500）

：伏せカード5枚

「俺のターン、ドロー！」

「諦めろお。お前らに勝ち目なんか無い」

「れ、黎さん……………」

スロウスが見下した顔でこちらを見る。隣の真奈ちゃんも表情が厳しい。

はん、悪いがなスロウス。プライドも、エンヴィーも……。

「そう言つて散つて逝つたんだぜ？ 最後まで諦めなかつた奴が勝利を掴み取る権利を得る。それが戦いの鉄則だ」

戦場で生き残れるのは、3種類の人間。

僅かな希望を見出して戦う、勇者。

自分の強さを信頼して勝ち続ける、猛者。

生きる事を望み続ける、臆病者。

誰が生き残るかなんて知らない。だが、途中で諦める事はリタイアと同義だ。

リタイアした奴には、その戦いにおける勝利の未来は絶対に待つてなんかいない。

「だから吼えろ、真奈ちゃん」

「ふえ？」

「吼えろ。最後まで叫べ。負けない、諦めない、勝負はまだついていない、つてな。勝利の女神が微笑み、奇跡を起こすのは、いつだって生きる事や勝つ事を諦めなかった奴のためだ」

諦めない事こそが希望への道。

その証拠に、俺は次の一手を得た。

まずは地盤固めだ！

『G・S ランチャー・トータス』の効果発動！俺はデッキから『マグネット・ウオリアーα』を墓地へ送り、相手に500ポイントのダメージを与える！ シュート！」

「おおっとお、『悪順貫』を発動おう。効果モンスターの効果を無効にして除外するう〜」

悪順貫（オリジナル）

【永続罫】

効果モンスターの効果が発動した時に発動できる。

その効果を無効にしてゲームから除外する。

このカードが手札から捨てられた時、墓地には送られずゲームから除外され、相手に1000ポイントのダメージを与える。

1枚目、開いた！

すまない、『ランチャー・トータス』。お前を囿にしてみました。

「俺は魔法カード『死者蘇生』を発動し、『マグネット・ウオリアーα』を蘇生！」

マグネット・ウオリアーα：ATK 1400

「畏発動、『灼熱の落とし穴』あゝ。攻撃力500以上のモンスターが場に現れた時、そいつを破壊して除外いゝ。それでもって元々の攻撃力分のダメージだあゝ」

「ぐあつー！」

ジュワツ！ とマグマが溜まっている落とし穴の中へ緑の岩石の剣士が落ちる。穴の中で残らず溶かされ、吹きあがる熱気が俺を襲う。

それが2枚目か！

灼熱の落とし穴（オリジナル）

【通常罫】

相手の場に攻撃力500以上のモンスターが召喚・特殊召喚・反転召喚された時に発

動でできる。

そのモンスターを破壊してゲームから除外し、相手にその元々の攻撃力分のダメージを与える。

黎：LP 3200↓1800

「俺はお前の場の『悪順貫』をコストに『トラップ・イーター』を特殊召喚！」  
『ギッ！』

トラップ・イーター：ATK 1900

「更に魔法カード『調律』を発動！ デッキから『クイック・シンクロン』を手札に加え、デッキトップを墓地へ送る！」

「速攻魔法発動、『遅延罰則』うゝ。デッキから手札に加わったモンスターをゲームから除外し、相手に800ポイントのダメージを与えるうゝ」

「チェーンして速攻魔法『リズミカル・フォーカス』を発動！ デッキから手札にカードが加わる効果が発動した時、そのモンスター1体を選択し、自分の場に存在するそれよ

りもレベルが1つ異なるモンスターをデッキに戻し、選択した手札のモンスターを1体特殊召喚する！」

遅延罰則（オリジナル）（改訂版）

【速攻魔法】

相手の手札にデッキからカードが加わる効果が発動した時に発動できる。

そのカードをゲームから除外し、相手に800ポイントのダメージを与える。

リズムカル・フォーカス（オリジナル）

【速攻魔法】

デッキから手札にモンスターが加わる効果が発動した場合、そのモンスター1体を選択して発動する。

自分の場に存在する、選択したモンスターよりもレベルが1つ高いまたは低いモンスター1体をデッキへ戻し、選択したモンスターを特殊召喚する。

その後、お互いのプレイヤーはデッキからカードを1枚ドロウする。

「カモン、『クイック・シンクロン』！ 対象となったモンスターが消えた事で『遅延罰

「則』は不発になる！」

『ハッ！』

「更に俺と真奈ちゃんまで一枚ずつドロー！」

「あ、ありがとうございます！」

クイック・シンクロン：ATK 700

手にした拳銃を撃ちながら、ガンマン風チューナーが現れる。

まだまだ！

「『チューニング・サポーター』を通常召喚！」

『ハッ！』

チューニング・サポーター：ATK 100

「レベル2として扱う『チューニング・サポーター』にレベル5の『クイック・シンクロン』をチューニング！」

集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く！ 光差す道となれ！」

## ☆2+☆5||☆7

「シンクロ召喚！ 貫け、『ジャンク・アーチャー』！」  
『テエイツ！』

ジャンク・アーチャー：DEF 2000

橙の鎧に身の丈程もある大弓を構えた戦士が上空から降り立ち、守りの体勢に入る。

この召喚にチェーンは……、オツケー、無い！

今の内に畳み掛けないと！

「『チューニング・サポーター』の効果で、デッキからカードを1枚ドロロー！ 今引いた『強欲な壺』の効果で更に2枚追加ドロロー！ 続いて魔法カード『トレード・イン』を發動！ 手札の『神獣王バルバロス』を墓地へ送り、カードを2枚ドロロー！ そして『天使の施し』を發動してカードを3枚引いて2枚捨てる！ 今捨てた『暗黒界の狩人ブラウ』の効果で1枚追加ドロロー！

更に『ジャンク・アーチャー』の効果發動！ 『ライアー・ゾンビ』をエンドフェイズ



までゲームから除外する！ 『デイメンジョン・アロー』！ 本来ならこの効果はエンドフェイズ時には解除されるが、『ライアー・ゾンビ』の効果でエンドフェイズになっても自身の効果の影響で帰還できない！」

「ぬう………！」

「す、凄い………っ！」

自分でも半ば驚きのカードラッシュ。手札切れから3枚へと一足飛びに補充したのも驚きだが、この長台詞を一息で言えたのも驚いている。普段から馴染んでいて忘れていたが、改めて俺は化物なのだ実感せざるを得ない。

チューニング・サポーター（効果モンスター）

星1

光属性／機械族

ATK 1000 / DEF 300

このカードをシンクロ召喚に使用する場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができる。

このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分ではデッキからカードを1枚ドロウする。

「更に『サイクロン』を発動！ スロウスの場の1番左の伏せカードを破壊する！」

「むがつ!？」

吹き飛んだのは『ブラックコインケース』。チツ、破壊するべきじゃ無かったカードか。

ブラックコインケース（オリジナル）

【通常罫】

フィールド上に存在する永続罫を1枚デッキに戻して発動する。

デッキからカードを1枚ドロウする。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを2枚ドロウできる。

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

黎：LP 1800

手札：0枚

フィールド

：ジャンク・アーチャー（DEF 2000）

：伏せカード2枚

「……………（ポカン）」

「ほら、君のターンだよ」

「（ハッ！）そうでした！ アタシのターン、ドロー！」

アングリと口を開けていた真奈ちゃん。何がそんなに驚きだったんだ？

「このスタンバイフェイズ、『ファイリー』と『アーシー』のレベルが1つずつアップする！」

『まだまだ漲るぞお！』

『地獄への、カウントダウンだ……！』

フォーチュンレディ・ファイリー：☆5↓6 / ATK 1000↓1200 / DEF

1000↓1200

フォーチュンレディ・アーシー：☆6↓7 / ATK 2400↓2800 / DEF

2400↓2800

「この瞬間、『アーシー』の効果発動！ レベルが上がる度に相手に400ポイントのダメージを与える！ ライジング・ニードル！」

『せえ、のおっ！』

フォーチュンレディ・アーシー（効果モンスター）

星6

地属性／魔法使い族

ATK ? / DEF ?

このカードの攻撃力・守備力は、このカードのレベル×400ポイントになる。

自分のスタンバイフェイズ時、このカードのレベルを1つ上げる（最大レベル12まで）。

このカードのレベルが上がった時、相手ライフに400ポイントダメージを与える。

ザザザザザッ！ と鋼の針が地面から飛び出し、スロウスを串刺しにする。

「イツデエ……………」

あまり効いているようには見えないが、ダメージは入った。これだけ奮闘してもまだ

半分以上ライフが残っている所を見ると、スロウスはスロウスで腕のあるデューエリストなのだろうか。

スロウス：LP 5800↓5400

「続いて『死者転生』を発動！ 手札の『終わりの始まり』を捨てて墓地の『ブラック・マジシャン・ガール』を手札に戻す！」

死者転生

【通常魔法】

手札を1枚捨て、自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。  
選択したモンスターを手札に加える。

「まだまだ！ アタシは『ファイリー』をリリース！ ゴメン、『ファイリー』！  
『バトンタッチだ！ 後は任せる！』」

「『ブラック・マジシャン・ガール』をアドバンス召喚！ お願い、フレア！」

『私の本気、痛いですよ〜！』

## ブラック・マジシャン・ガール：ATK 2000

炎の魔女が光の中へと消え、入れ替わりに出て来たのは知る人ぞ知る、デュエルモンスターズのアイドルだ。健康的なベージュの肌、露出度の高い青とピンクの衣装、師と同じ曲がった帽子に短めの杖と、これだけ見れば魔法少女のコスプレイヤーに見える。これであの大黒魔術師の一番弟子で、師もその実力に一目置いているというのだから、本当に人は見た目では計れないものである。

ちなみにエクシーズ化した姿はあまり人気が無いらしい。

「魔法カード『黒魔術の奥義―ソウル・サークル―』を発動！ 自分の場に『ブラック・マジシャン・ガール』が存在する時、墓地の魔法使い族モンスター2体につき1枚カードをドローできる！」

『そおれ！ 皆、力を貸して！』

これはビッグ2戦のデッキマスター能力を真似たカードか！

フレアが杖を一振りすると、二人の周囲にはこれまで戦いの場に赴いて来た魔法使い族達が現れた。

『ブラック・マジシャン』のルーン、『エンディミオン』、『ライティー』、『ファイリー』

が円を描くように降り立ち、彼女達を縁に置くように魔法陣が現れた。

黒魔術の奥義―ソウル・サークル―（湊クレナイ先生オリジナル）

【通常魔法】

自分フィールド上に『ブラック・マジシャン・ガール』が表側表示で存在するときのみ発動できる。

墓地に存在する魔法使い族モンスター2体につき、デッキからカードを1枚ドロウ出来る。

このカードを発動したターン、『ブラック・マジシャン・ガール』は攻撃する事が出来ない。

「そして儀式魔法『黒魔術継承の儀式』を発動！ 自分の場の『ブラック・マジシャン・ガール』と墓地の『ブラック・マジシャン』をゲームから除外！」

『我らの力、今こそ一つに！』

『師弟の力、結集せよ！』

『黒魔術結束の奥義、未来へと継承せん！』

『マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス』を儀式召喚！」

最高位の黒魔術の師弟が、巨大な魔法陣の上で杖を構える。魔法陣からは青い炎が立ち上がり、二人はその炎に身を包み、一つになる。

バサリ、と大きな翼をはためかせて降り立つ魔術師。否、大魔導師と言うべきか。『マジシャンズ・ヴァルキュリア』の衣装に派手さを加え、背中の羽も天使や鳥のものとは異なり、黄金の細長い菱形を複数集めてそれらしい形にしたものとなっている。

『参ります！』

黒魔術継承の儀式（湊クレナイ先生オリジナル）

【儀式魔法】

『マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス』の降臨に必要。

自分フィールド上に存在する『ブラック・マジシャン・ガール』と墓地に存在する『ブラック・マジシャン』を1体ずつゲームから除外することで、手札から『マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス』を特殊召喚出来る。

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス（儀式・効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）

星10



闇属性／魔法使い族

ATK 3500 / DEF 2500

このカードは通常召喚出来ない。

このカードは『黒魔術継承の儀式』の効果でのみ特殊召喚出来る。

1ターンに1度、手札の魔法カードを1枚除外することで除外されたまたは墓地に存在する「ブラック・マジシャン」、「ブラック・マジシャン・ガール」を選択し、デッキに戻す事で以下の効果を発動する事が出来る。

● 「ブラック・マジシャン」：墓地に存在する魔法カードを除外することで対象としたカードの効果をこのモンスターの効果として使用する。

● 「ブラック・マジシャン・ガール」：このターンのエンドフェイズ時まで、墓地に存在する魔法カード1枚につき、攻撃力と守備力を100ポイントアップする。

「ぬう、またメンドくさそうなモンスター〜」

「『ブラック・ガードス』、行くよ！」

「マスターの仰せのままに」

「……そういうの止めてって、前にも言ったんだけどな。まあ今はそれどころじゃ無いね！」 『ブラック・ガードス』の効果発動！ アタシは手札の『マジック・スタンプ』を

ゲームから除外し、除外された『ブラック・マジシャン』をデッキに戻す！

『ブラック・ガーデス』は戻したカードによつて効果が変化する！ ルーンを戻した時、墓地の魔法カードを除外し、その効果を『ブラック・ガーデス』の効果として使用できる！ アタシが除外するのは『終わりの始まり』！ よつてカードを3枚ドロ―！』  
ギユウオン、と真奈ちゃんの足元に大きな黒い魔法陣が一つ、その四隅？に小さめの黒い魔法陣が四つ現れる。

上手いな。本来ならこのカードは墓地の闇属性モンスターに関連した縛りとコストがある。だが、モンスター効果として“効果”を発動するのなら話は変わって来る。縛りもコストも効果では無いため、純粋なドロ―のみが適用される。確か『D―HERO　ダイヤモンドガイ』でも同じ事ができた筈だ。

マジック・スタンプ（湊クレナイ先生オリジナル）

### 【通常魔法】

手札の魔法使い族モンスター1体を指定して発動する。

自分フィールド上の魔力カウンターを1個取り除く度に、指定した手札のモンスターのレベルを1つ下げる。

D—HERO (デステニーヒーロー) ダイヤモンドガイ (効果モンスター)

星4

闇属性／戦士族

ATK 1400 / DEF 1600

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。

それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメイフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。

通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

終わりの始まり

### 【通常魔法】

自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に発動する事ができる。

自分の墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「伏せカードが怖いけど……バトル！　まずは『ブラック・ガーデス』でダイレクトアタック！　『ブラック・ブレイク・シユート』！」

杖の先端に集まる魔法エネルギー。それが収束して黒い大きな、スパークキングしている球体に変化すると同時に、『ブラック・ガーデス』の全面に巨大な魔法陣が出現。その魔法陣の中央部分に杖をかざすと、黒い球体はビームのように一直線に飛んで行った。

俺はいつでもカウンターできるように伏せカードに手を伸ばす。ここで10倍反射ダメージなんてやられたらアウトだからだ。

が、予想に反してスロウスは何もやらさず、黒いビームを正面から受けた。

「ぐおおおおおおおおおおおっ！」

スロウス：LP　5400↓1900

正面から、受けた……？　残りの伏せカードは戦闘では使えないのか？

ニイ、とスロウスは笑う。

違う、あれは罠だ！

「罠発動、『灰色の暴風俄か雨』ウ！　直接攻撃でオデがダメージを受けた時、相手モンスター1体を破壊し、その元々の攻撃力の倍のダメージを与えるう！　対象は『フォー



「カードを3枚伏せて、ターンエンド！」

真奈：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス（ATK 3500）、リチュアル・シスター  
（DEF 1000）

：伏せカード3枚

「ここまででは、何とかあったな」

「ええ。でも残ったリバースカードは……」

「あれは多分だけど、『灰色の暴風俄か雨』よりも効果の弱いものだ」

「みえ？」

別に俺は無根拠で言った訳じゃ無い。

邪神連中にとって、このデュエルで何が驚異的かと言えば、俺のサポートによる別世界のデュエリストのパワーアップだ。

ならばどうするか。簡単だ、先にどつちかを潰せば良い。こういう場合、性格や行動

からデュエルのクセを読む俺よりも、情報が殆ど無い別世界の人を潰しにかかるものだ。

そしてさっきのリバースカード、もつと凶悪なカードが伏せてあるのならばあのタイミングで使っていた筈だ。実際、先のエンヴィー戦でエンヴィーが使用したカードには『ミラーフォース』に反射ダメージを加えたカードや、1ターン内永続の『デイメンジョン・ガード』があつた。

なのに使つて来たのはそのどちらよりも勝るとは言えないカード。ハッキリ言えば劣っている。

となれば、残つたカードは戦闘に関係しないか、或いは『灰色の暴風俄か雨』より弱いカードだと推測できる。出し惜しみする理由が無いし、倍返しや十倍返しなんてカードはエンヴィー戦を見ていればザラだという事ぐらい想像がつく。

スロウスの場の伏せたカードは、使い切つた。これなら次のターンに動ける。

後はスロウスのターンだ。奴のターンで、全てが決まる。

「オデのタアーン。墓地の『ブラックコインケース』を除外し、カードを2枚ドロオ〜」  
頼む、大きなアクションを起こさないでくれ……！

「あゝ、もうメンドクセエやあ……。アレやるかあ……」

「……………」

「……………」

く、くつそお!

「相手フィールドにのみモンスターが存在するならば、『D（Dark）T（Tuner） マッド・メタル』は手札から特殊召喚できるう〜」

『ぐふうっ!』

DT マッド・メタル：ATK 1000

「更に墓地のドラゴン族モンスター『アボミナブル・ジエノサイド・ドラゴン』をゲームから除外しい、『死竜 デビヤマタ』を手札から特殊召喚ん〜!」

『ギイオツ!』

死竜 デビヤマタ：ATK 800

急いでディスクのデータを読み取り、スロウスが場に出した2体のモンスターのデータを読む。リアルタイムでシビアな戦いが進行しているため、普段のデュエルならこんな事をしているヒマは無いのだが、スロウスの動作は逐一遅いので読み取れた。



『マッド・メタル』のレベルは7、『デビヤマタ』は3！  
 「合計レベルは……マイナス4！　ダークシンクロが来るぞ！」

DT マッド・メタル（ダークチューナー・効果モンスター）（オリジナル）  
 星7

闇属性／機械族

ATK 1000 / DEF 3900

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

このカードがダークシンクロ召喚の素材となった時、ゲームから除外された自分のモンスター1体を選択し、召喚条件を無視して特殊召喚できる。

この特殊召喚に成功した時、自分のライフを特殊召喚したモンスターの元々の攻撃力分回復する。

死竜 デビヤマタ（効果モンスター）（オリジナル）

星3

闇属性／ドラゴン族

ATK 800 / DEF 800

このカードは自分の墓地に存在するドラゴン族モンスターを1体ゲームから除外する事で、手札から特殊召喚できる。

この効果で除外したモンスターの攻撃力が2000以上だった場合、以下の効果を得る。

●1ターンに1度、自分フィールド上に存在するモンスター2体の種族と属性をエンドフェイズまで任意のものに変更できる。

「オデはレベル3の『死竜 デビヤマタ』にい、レベル7の『DT マッド・メタル』をダークチューニンググウ〜！」

黒ずんだマール模様のドラム缶モドキが7つの黒い星となって禍々しい八つ首の竜の中へと取り込まれる。苦しむ八つ首の竜の体内で3つの白い星が黒い星と重なって砕け散り、4つの黒い星が闇の柱を生み出した。

「闇と絶望重なりし時、怠惰に溢れし冥府の扉が開かれん〜！ 光無き世界へえ〜！」

☆3—☆7—☆4

「ダークシンクロっ！ 陥れろお、『漆黒のズムウォルト』おっ！」  
 『グフオオオオオオオオオオオッ！』

漆黒のズムウォルト（ダークシンクロ・効果モンスター）

星—4

闇属性／悪魔族

ATK 2000 / DEF 1000

チューナー以外のモンスター1体—ダークチューナー

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードの攻撃宣言時、攻撃対象モンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、攻撃対象モンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時までこのカードと同じ数値にする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、相手のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

漆黒のズムウォルト：ATK 2000

「く、こいつで来たか！」

「素材となった『マッド・メタル』の効果発動であゝ！ 除外されたオデのモンスター、『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』を特殊召かあゝん！ 更にその攻撃力だけライフを回復するゝ！」

「げ、また出た！ ……、何か疲れてる？」

まあ、3度4度と呼び出されてるからね。

『ギョゴオオオオオオオオオオオオオオオオ……ッ！』

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン：ATK 5000

スロウス：LP 1900↓6900

「更に畏発動、『闇の水滴』い！ ダークシンクロ召喚に成功した時い、手札の闇属性モンスター1体を特殊召喚であゝ！ 『ダブルコストーン』を特殊召かあゝん！」

闇の水滴（オリジナル）

【通常畏】

ダークシンクロ召喚に成功した時に発動できる。

手札の闇属性モンスターを1体選択して特殊召喚できる。  
その後、相手は墓地からモンスターを1体特殊召喚できる。

『ヒヒヒヒ……』

ポチャン、と黒い水滴が地面に落ち、水面でも無いのに波打つように波紋が広がる。そしてその地面の波紋の中心から出て来たのは黒いスライム形態の2体のモンスター。どうやら2体で1セットのようだ。

細い目と口は下品とも取れる程に曲がって笑っており、尻尾に相当する部分が繋がっている。2体で1セットと表現したが、或いは頭が2つあるモンスターなのかも知れない。

ダブルコストン：ATK 1700

こいつは確か、闇属性専用のダブルコストモンスターだったな。

「ただしいく、女もモンスターを墓地から蘇らせる事ができるう〜」

「それならアタシは、墓地から『アーシー』を特殊召喚!」

『復活!』

フオーチユンレディ・アーシー：DEF ? ↓2400

「そしてオデは『ダブルコストン』をリリースだあ〜!」

内心、俺はこの言葉にホツとする。スロウスが自分を召喚する場合、恐らくは3体リリースだからだ。ダブルコストモンスターは飽くまで、2体分のリリース素材にできる。モンスター、つまりあいつ1体で3体分のリリースにはできない。

だが、油断はできない。こいつがどんなモンスターを出して来るか、ハッキリ言つて予測がつかない。何が来る……!!

「『ディジーズ・ワイバーン』をアドバンス召喚ん〜!」

『ギヒャアアアアアアアアアアアアアッ!』

ディジーズ・ワイバーン：ATK 2300

「2体リリースで、攻撃力2300?」

「気をつける真奈ちゃん。何が来るか分からないぞ?」

「あ、はい」

「羽ばたいて降り立つのは紫色の翼竜。左右の目は大きさがかなり異なり、尾は半ば朽ち、左の翼は皮膚膜に穴が開いている。どう見ても命に関わる病に侵されているようにしか見えない。」

「このままバトルだあ。まずは『デイジーズ・ワイバーン』で『ブラック・ガーデス』を攻撃い〜」

「自爆特攻!?!」

「いや、あれをよく見ろ!」

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス：ATK 3500↓0

「え!?!」

『く、力が、抜ける……っ!?!』

『『デイジーズ・ワイバーン』がバトルを行う時、相手モンスターの攻撃力は0になる〜』  
「な!?!」

「そして戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える〜!」

デイズ・ワイバーン（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）  
星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 2300 / DEF 1900

このカードは特殊召喚できず、このカードとの戦闘によって自分が受けるダメージは0となる。

（1）：このカードが戦闘を行う場合、相手モンスターの攻撃力はダメージステップ終了時まで0になる。

（2）：このカードがバトルで相手モンスターを破壊した場合、相手に破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。

「グヘイト・イルネス・ブレス」ウツッ！」

ブハア、と毒々しい息吹が放たれる。片膝について息を荒げている『ブラック・ガードス』は回避も防御もできない。

このまま攻撃が通れば合計で5800ダメージ！ 真奈ちゃんのライフが尽きる！

ここで、使うか！

「畏発動『シールド・ジャケット』！ このターンのみ、戦士族モンスターと魔法使い族



モンスターは破壊されず、発生するダメージは0になる！」

シールド・ジャケット（オリジナル）

【通常畏】

このカードが発動したターン、自分フィールド上に存在する魔法使い族・戦士族モンスターは破壊されない。

また、自分の場の魔法使い族・戦士族モンスターを介して発生するダメージは0になる。

瞬時にホワイトのジャケットが『ブラック・ガードス』達に装備される。ジャケットの胸元のペンダントが光り、魔法陣が展開。円柱状のバリアが発生し、醜悪なプレスを弾いた。

……『ジャンク・アーチャー』にも装備されているんだが、似合わないと思ったのは秘密だ。

「これで、このターンは安全だ。次のターンに巻き返せば問題無い」

「ふう、一安心……」

「更に『ズムウォルト』と『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』で『ジャンク・アー

チャー』を攻撃い〜！」

何?! 破壊できないと分かかっていて攻撃だど?!

再度魔法陣が展開して円柱状のバリアが墨のように黒い魔法と槍のように鋭い攻撃を防御する。

まさか、伏せカードに何かあるのか!

「畏発動〜」

「だと思つたさチクシヨウ!」

このまま終わるワケ無いとは思つたよ!

「『誘爆する不発弾』〜! 相手モンスターを戦闘で破壊できなかった時、コントロールに1000ポイントのダメージを与えるう〜!」

「く、だから『ジャンク・アーチャー』にも攻撃したのか!」

「コントロールは二人! つまりアタシ達2人にダメージを与えるために!」

ジボツ! と足元で音がした。視線を下へ向けて見れば、足元には小型の爆弾。丸い漫画表現のヤツでは無く、爆撃機が落とすような細長い爆弾だ。それが足元に出現した音だつたらしい。

こんな状況でも呑気に説明できるんだから、自分の神経の凶太さには呆れ返るものだ。

誘爆する不発弾（オリジナル）（改訂版）

【通常罠】

このカード名の（2）の効果は1ターンに1度しか発動できない。

（1）：相手モンスターを戦闘で破壊できなかったバトルフェイズの終了時に発動できる。

破壊できなかったモンスターの元々のコントローラーに1000ポイントのダメージを与える。

（2）：相手ターンのバトルフェイズ開始時、墓地のこのカードを除外して発動する。

自分墓地の通常罠カードを1枚選択してセットする。

この効果でセットしたカードは、セットしたターンでのみ発動できる。

そしてドガン！ と爆発する。俺は素早く全身を金属でコーティングしたし、真奈ちゃんは俺のプロテクターで守ってあるから大丈夫だとは思うんだが……。

黎：LP 1800↓800

真奈：LP 4000↓3000

「ぐ、おとおおっ」

「う、イタタタ……」

煙が晴れ、軽く痛がつている真奈ちゃんを発見。どうやら無事らしい。

俺のダメージも小さくは無いが大きくも無い。皮膚の表面を耐熱使用＋金属コーティングしたのが功を奏したようだ。

「真奈ちゃん、大丈夫かい？ どこか怪我してない？」

「アタシは大丈夫ですけど、黎さんが……。ライフだってもうあまり残って無いし……」  
「俺は平気だ。この程度で怯む程弱くねえさ」

とは言え、ライフが残り少ないのも事実。『スピードワールド2』が発動しているライディングデュエルだったらセーフティラインを切っている。

マジシャン・オブ・ブラック・ガードス：ATK 0↓3500

「カードを3枚伏せて、ターンエンドオッ」

スロウス：LP 5400

手札：2枚

フィールド

：漆黒のズムウォルト（ATK 2000）、アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン（ATK 5000）、デージェズ・ワイバーン（ATK 2300）

：伏せカード3枚

「俺のターン！」

兎に角、今はこの状況を打破しないと、マズい！

「魔法カード発動！ 『天よりの宝札』！ 俺と真奈ちゃんはデッキから手札が6枚になるようにカードを引く！ 俺はハンドレスから6枚だ！」

「アタシは2枚補充する！」

我ながら、ドロースーツを手札0枚で引くとはチートだ。或いは主人公補正、恐るべしとでも言うべきか？

取り敢えずライフの残量を補充しないと、次の瞬間にゼロになってました、なんて笑おうにも笑えない事が起きかねない。

「俺は速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動！ 『ジャンク・アーチャー』を墓地に送り、ライフを攻撃力2300ポイント分回復する！」

黎：LP 800↓3100

「更に俺は墓地の岩石族モンスター『ビッグ・ピース・ゴーレム』、『ミッド・ピース・ゴーレム』、『スモール・ピース・ゴーレム』、『バレット・アルマジロ』3体、『アーマード・エレファント』、『ロックストーン・ウォリアー』をゲームから除外し、『メガロック・ドラゴン』を特殊召喚！」

『グオオオオオオオオオオオオオオッ！』

メガロック・ドラゴン：ATK ？

『メガロック・ドラゴン』の攻撃力は、特殊召喚時に除外した岩石族1体につき700ポイント上昇する。今回除外したのは8体、よって攻撃力は5600！」

メガロック・ドラゴン：ATK ？↓5600

大地が隆起し、岩の塊が巨大な龍を形作る。その周囲で8体の岩石族モンスターが浮

かび、その体の中へと吸い込まれて行った。

大地の咆哮は地面を揺らし、ビリビリと地震のように振動した。

メガロツク・ドラゴン（効果モンスター）

星7

地属性／岩石族

ATK ? / DEF ?

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する岩石族モンスターを除外する事でのみ特殊召喚できる。

このカードの元々の攻撃力と守備力は、特殊召喚時に除外した岩石族モンスターの数×700ポイントの数値になる。

「更に『G・S サポート・シープ』を通常召喚！」

『メェ〜』

「自分の場に『G・S』と名のついたモンスターが存在する時、『G・S マックス・ユニオン』は手札から特殊召喚できる！」

『ヒヒィ〜ン！』

G・S サポート・シープ：DEF 1000  
G・S マックス・ユニコーン：ATK 1400

邪神は俺の戦いのクセを知っているだろう。だからこそ、俺の普段のデュエルパターン、*“パワー+メタ”*という戦いの裏をかけるようなカードを使用する。だが、そこに別の人が入るだけでもうそのメタデッキの力は半減する。

俺がこいつらとのデュエルでやるべき事はただ一つ。一緒に戦ってくれる人のサポートだ。

サポートに徹するのならば、あの邪魔つけないモンスターやリバーズカードを潰す必要があるな。

「バトル！ 『マックス・ユニコーン』で『デイズ・ワイバーン』を攻撃！」

「え!? でも攻撃力は0に……」

『マックス・ユニコーン』がバトルを行う時、相手モンスターの効果は無効になる！

更にバトルフェイズ中、自分の場に『マックス・ユニコーン』以外の*“G・S”*と名のついたモンスターが存在すれば攻撃力が1000ポイントアップする！」



G・S マックス・ユニコーン：ATK 1400↓2400

鋼の鎧で武装した一角の馬が全速力で走る。土煙を上げ、蹄を高く鳴らし、鋭い角で腐食している翼竜を貫いた。

G・S マックス・ユニコーン（効果モンスター）（オリジナル）

星5

地属性／獣族

ATK 1400 / DEF 1950

自分フィールド上に「G・S」と名のついたモンスターが表側表示で存在する時、このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードが相手モンスターとバトルを行う時、相手モンスターの効果はバトルフェイズ終了時まで無効となる。

このカードがバトルを行う時、自分の場にこのカード以外の「G・S」と名のついたモンスターが存在すれば攻撃力はバトルフェイズ終了時まで1000ポイントアップする。

「グラッシュ・ストライク！」  
「ぐお……！」

スロウス：LP 6900↓6800

G・S マックス・ユニコーン：ATK 2400↓1400

「まだまだ！ 『メガロック・ドラゴン』で 『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』を攻撃！」

岩石の龍が口の中に凄まじいまでのマグマのように熱いエネルギーを充填し始めた。

それに対抗するかのようにスロウスが手札を1枚切った。

「手札の『マレヴォレント』の効果を発動おう。自分の闇属性モンスターがバトルを行う時、このカードを手札から捨てるう。これで自分の闇属性モンスターは相手の攻撃力より攻撃力が500ポイント高くなり、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与えるう！」

！ 闇属性版『オネスト』か！

マレヴォレント（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1200 / DEF 2000

自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。

また、自分フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の差の数値分+500ポイントアップする。

この効果を受けた自分の場の闇属性モンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、相手に破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える。

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン：ATK 5000 ↓ 6100

「これで終わりだあゝ」

「アマいぞスロウス！ カウンター罠『透破<sup>すっぱぬ</sup>抜き』を発動！ 手札または墓地で発動するモンスター効果を無効にし、ゲームから除外する！ 『マレヴォレント』は手札から墓地

に捨てられ、対象のカードは発動時の手札には存在しないため除外はできないが、効果は無効になる！」

透破抜き

【カウンター罠】

手札または墓地で発動する効果モンスターの効果の発動を無効にしゲームから除外する。

アボミナブル・ジエノサイド・ドラゴン：ATK 6100↓5000

「ぬぁにいく!？」

「〃ハイパー・アースバスター!」

「グオオオオオオツ!？」

スロウス：LP 6800↓6200

放たれる灼熱の砲撃。黒い龍はその砲撃で跡形も無く焼き払われてしまった。後に

残るのは、焦げた地面と煙だけ。

厄介なモンスターは片付けたが、これで終わるのなら俺だって苦戦なんかしない。

「ぬう、異発動、『死者の復讐』う！ 自分の場のモンスターがバトルで破壊された時、相手モンスターを全て破壊し、1体につき2000ポイントのダメージを与えるう〜！」  
「んだとお!？」

死者の復讐（オリジナル）

【通常罫】

自分の場のモンスターがバトルで破壊された時に発動できる。

相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊し、1体につき2000ポイントのダメージを相手に与える。

周囲が突如として暗くなり、俺達のモンスター達が苦しみ始める。喉を掻き毟り、息も荒い。どんどん生気の無い顔色となっていく。

『マスター……!』

『アーシー?』

『真ん中の、伏せカードを……! 私を使って……つ!』

脂汗を流しながら必死に『アーシー』が主に求める。

「で、でも！」

『このままじゃ全滅する……！ だから、使って……！』

「……………っ、分かった！」

渋っていた、いや躊躇していた真奈ちゃんだったが、状況が状況だけに承諾したらしい。

「リバースカード、オープン！ カウンター罠『魔女の血判』！ ライフを5000払い、自分の場の攻撃力2000以上の魔法使い族モンスターを1体破壊する事で、相手のカードの効果を無効にできる！」

魔女の血判（オリジナル）（改訂版）

【カウンター罠】

自分フィールドに攻撃力2000以上の魔法使い族モンスターを対象に発動する。

（1）：LPを5000払い選択したモンスターを破壊する事で、相手の効果の発動を無効にして破壊する。

このカードの発動に対して、相手はカウンター罠を発動できない。

メガネをかけた地の魔女が消え、紅色の魔法陣が広がる。血のように赤い光が、不気味な程に暗い辺りを照らした。

キラキラと光に変わっていく『アーシー』の言葉だけが、その場に『アーシー』がいたという証拠だった。

真奈：LP 3000↓2500

『……ありがとうございます、マスター』

「ごめんね、『アーシー』……。でも、貴方の頑張りは無駄にしない！『アーシー』が破壊された事でアタシは罨カード『フォーチュン・インハーリット』を発動！」

フォーチュン・インハーリット

【通常罨】

自分フィールド上に表側表示で存在する「フォーチュンレディ」と名のついたモンスターが破壊されたターンに発動する事ができる。

次の自分のスタンバイフェイズ時に手札から「フォーチュンレディ」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚する事ができる。

「その効果で、アタシは次の自分のスタンバイフェイズに手札から2体まで『フォーチュンレディ』と名のつくモンスターを特殊召喚できる！」

「ぬう……っ！」

「ナイスだぜ、真奈ちゃん。カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 3100

手札：2枚

フィールド

：メガロック・ドラゴン（ATK 5600）、G・S サポート・シープ（DEF 1000）、G・S マックス・ユニコーン（ATK 1400）

：伏せカード1枚

「アタシのターン！ このスタンバイフェイズ、『フォーチュン・インハーリット』の効果で、手札から『フォーチュンレディ・ダルキー』と『フォーチュンレディ・ウォーテリー』を特殊召喚！」

『さあ、行きますよー！』



『出番、だよね……？』

シユタツ、と光の中から二人の魔女が地面に着地する。

片や闇を司り、片や水を司る。大人っぽい自信に溢れた紫の魔女は油断無く杖をの先端をスロウスに向ける形で構え、オドオドと弱気な青い魔女は杖を斜に守りを重視した構えである。

『『ダルキー』の攻守はレベル×400、『ウォーテリー』は300！ 『ダルキー』のレベルは5、『ウォーテリー』は4！ よって攻守は2000と1200！』

フォーチュンレディ・ダルキー：ATK ? ↓ 2000

フォーチュンレディ・ウォーテリー：ATK ? ↓ 1200

『『ウォーテリー』の効果発動！ 自分の場に『ウォーテリー』以外の『フォーチュンレディ』と名のついたモンスターが存在する時に特殊召喚に成功した場合、カードを2枚ドローできる！』  
 『アカア・サプリメント』！』

『水は流れる。悠久の時を超え、新たな力をマスターに……』

クルクルと回る青い魔女の杖。2つの小さな水の玉が生まれて真奈ちゃんのデッキに潜り込み、2枚のカードが宙に浮かんだ。

上手いな。『フォーチュン・インハーリット』の効果で減った手札が元に戻った。

フォーチュンレディ・ダルキー（効果モンスター）

星5

闇属性／魔法使い族

ATK ?／DEF ?

このカードの攻撃力・守備力は、このカードのレベル×400ポイントになる。

自分のスタンバイフェイズ時、このカードのレベルを1つ上げる（最大レベル12まで）。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「フォーチュンレディ」と名のついたモンスターが戦闘によつて相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分の墓地に存在する「フォーチュンレディ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

フォーチュンレディ・ウォーテリー（効果モンスター）

星4

水属性／魔法使い族

ATK ? / DEF ?

このカードの攻撃力・守備力は、このカードのレベル×300ポイントになる。

自分のスタンバイフェイズ時、このカードのレベルを1つ上げる（最大レベル12まで）。

自分フィールド上に「フォーチュンレディ・ウォーテリー」以外の「フォーチュンレディ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合にこのカードが特殊召喚に成功した時、自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「続いて『フォーチュンレディ・ウインディー』を通常召喚！」

『行くよー!』

通常召喚の形で時空の穴から飛び出したのは風を司る緑の魔女。杖の先端は下を向いているが、意気揚々とした表情が伺える。

『ウインディー』の攻守は『ウォーテリー』と同じレベル×300! レベルは3なので攻守は900!」

フォーチュンレディ・ウインディー : ATK ? ↓ 900

「続いて『ウインディー』の効果発動！ 召喚に成功した時、アタシの場の『フォーチュンレディ』1体につき1枚、相手の魔法・罠を破壊できる！ 、『ストーム・シヨット』！」

『喰らえっ！』

ゴウ！ と一陣の風が吹き、スロウスの場の伏せカードを空高くへ吹き飛ばした。

ここまで計算して『フォーチュン・インハーリット』を使ったのであったのなら、真奈ちゃんの計算能力はかなり高いものになる。直観でしか動かないノーマルデュエリストとは大違いだ。

フォーチュンレディ・ウインディー（効果モンスター）

星3

風属性／魔法使い族

ATK ? / DEF ?

このカードの攻撃力・守備力は、このカードのレベル×300ポイントになる。

自分のスタンバイフェイズ時、このカードのレベルを1つ上げる（最大レベル12まで）。

このカードが召喚に成功した時、自分フィールド上に表側表示で存在する「フォー

チュンレディ」と名のついたモンスターの数だけ、相手フィールド上に存在する魔法・罨カードを破壊する事ができる。

「魔法カード『魔術の施し』を発動！ デッキから3枚のカードを引いて2枚捨てる！」

魔術の施し（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場に魔法使い族モンスターが2体以上存在する時のみ発動できる。

デッキからカードを3枚引き、2枚を捨てる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、墓地に存在する魔法使い族モンスターを1体、自分の場に攻撃表示で特殊召喚できる。

「そして儀式魔法『カオス―黒魔術の儀式』を発動！ アタシは場の『リチュアル・シスター』と『ダルキー』をリリース！」

「主のためならば、この身、喜んで賛となりましょう」

「ごめんね……。『マジシャン・オブ・ブラック・カオス』を儀式召喚！」

『トアッ！』

マジシャン・オブ・ブラック・カオス：ATK 2800

大きな魔法陣の両隣に並ぶ、黄金色の壺。そこで燃えている炎が柱となって天へと昇り、黒い光が人の形を成す。

全身に黒いベルトを巻いた、黒魔術最高峰の魔術師の内の1人が、降臨した。

『リチュアル・シスター』の効果発動！ このカードが儀式素材となった時、自分の場の魔力カウンターを任意の数取り除き、その数×100ポイント、アタシの場の魔法使い族モンスター攻撃力を上げる！

チエーンして罨カードオープン！ 『漆黒のパワーストーン』！ 発動後、このカードに魔力カウンターを3つ乗せ、1ターンに1度、このカードの魔力カウンターを別のカードに乗せる事ができる！」

漆黒のパワーストーン

【永続罨】

発動後、このカードに魔力カウンターを3つ置く。

自分のターンに1度、このカードに乗っている魔力カウンター1つを取り除き、

フィールド上に表側表示で存在するこのカード以外の魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く事ができる。

このカードに乗っている魔力カウンターが全て無くなった時、このカードを破壊する。

漆黒のパワーストーン：魔力カウンター 0 ↓ 3

リチュアル・シスター（効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）

星3

水属性／魔法使い族

ATK 1000 / DEF 1000

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから儀式魔法または儀式モンスターを1体手札に加える。

このカードが儀式魔法のコストとして墓地に送られた時、自分フィールド上の魔力カウンターを任意の数だけ取り除いて、自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスターの攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで、取り除いた数×100ポイントアップさせる。

「『漆黒のパワーストーン』のカウンターを3つとも取り除き、攻撃力を300ポイントアツプさせる！ 同時にカウンターが無くなった事で『パワーストーン』を破壊！」

漆黒のパワーストーン：魔力カウンター 3↓0

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス：ATK 3500↓3800

マジシャン・オブ・ブラック・カオス：ATK 2800↓3100

フォーチュンレディ・ウォーテリー：ATK 1200↓1500

フォーチュンレディ・ウインディー：ATK 900↓1200

「凄いな、真奈ちゃん。だが……！」

「だががあ！ 『漆黒のズムウォルト』はバトルでは破壊されずう、相手のみを一方的に破壊できる効果を持つう。攻撃力なんて、無駄あゝ」

「そうだ。どれだけ攻撃力が高かろうとも、『ズムウォルト』の能力は『戦闘では破壊されない』、そして『攻撃を行う時、自分の攻撃力と相手の攻撃力を同じにする』だ。」

「戦闘破壊されないモンスターの中では特に能力値が高く、超過ダメージを狙っても倒



しにくい。現にスロウスの現在のライフは6200だ。超過ダメージを狙って倒すのなら8200の攻撃力が必要。

しかし、現在『ズムウオルト』の攻撃力を超えている『マジシャン・オブ・ブラック・カオス』と『マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス』の攻撃力の超過分の合計は2900、半分にも満たない。

だが、そんな心配を余所に、真奈ちゃんはニヤリ、と笑った。

「確かに、『ズムウオルト』はバトルでは破壊されない。でもそれは裏を返せば、それ以外なら破壊できるという事！」

「何い!?!」

「速攻魔法『ディメンション・マジック』を発動！ 自分の場の魔法使い族モンスターを1体リリースし、手札の魔法使い族モンスターを1体特殊召喚できる！ 更にその後、相手モンスター1体を破壊できる！」

ディメンション・マジック

【速攻魔法】

自分フィールド上に魔法使い族モンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースし、手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。

その後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。

「『ウインディー』をリリースし、『轟雷の破壊神―デビルホワイト』を特殊召喚！ ごめん、『ウインディー』！」

『大丈夫！ 行くよ！』

「更に『ズムウォルト』を破壊！」

轟雷の破壊神―デビルホワイト：ATK 2500

バチバチバチツ、と雷が鳴り響き、一人の少女が降り立つ。サイドポニーの茶髪で、端でクロスする形の髪留めで髪を留めている。紅い瞳が、強い意志を以てスロウスを見下す。視界の端では、ドロドロに溶けて原型を失った漆黒の魔術師がいる事だろう。

「『デビルホワイト』の効果発動！ 1ターンに1度、このカード以外のフィールド上の魔法使い族モンスター1体につき、攻撃力を400ポイントアップさせる！」

更に手札を1枚デッキへ戻してシャッフルし、カードを1枚ドロロー！」

『はあっ！』

轟雷の破壊神―デビルホワイト（オリジナル）

星7

光属性／魔法使い族

ATK 2500 / DEF 1500

このカードは墓地から特殊召喚できない。

1ターンに1度、手札を1枚デッキに戻してシャッフルし、カードを1枚ドローできる。

1ターンに1度、次の相手のメインフェイズ2まで、自分の場のこのカード以外の魔法使い族モンスター1体につき、このカードの攻撃力を400ポイントアップさせる事ができる。

轟雷の破壊神―デビルホワイト： ATK 2500 ↓ 3700

手にした赤い宝石を頂きに冠した杖が優しい光を発する。彼女の周囲に、7色の魔法の珠が無数に浮かんだ。

「さあ、これでフィニッシュだ！」

意気揚々と真奈ちゃんが宣言する。確かに、真奈ちゃんの場には攻撃力3000オーバーの魔法使い族モンスターが3体もいる。

だが、対するスロウスの表情はさっきまでの無表情とは異なり、笑っている。何かしかけている。だが、真奈ちゃんはそれに気付いている様子は無い。

「バトル！」

「墓地の『誘爆する不発弾』の効果発動う〜！ 『マイン・ハッキング』を墓地からセツトだあー！」

「構うものか！ 『ブラック・ガーデス』でダイレクトアタック！」

「この瞬間、『マイン・ハッキング』を発動するう〜！ お前らのモンスターを全て破壊し、1体につき800ダメージだあ〜！」

マイン・ハッキング（オリジナル）

【通常畏】

相手の攻撃宣言時に発動できる。

相手フィールド上のモンスターを全て破壊し、1体につき800ポイントのダメージを与える。

「っ！ 俺の場には3体いるから、2400ダメージ！」

「アタシは……、3200!？」

「マズい！ 真奈ちゃんのライフが尽きる！」

出し惜しみして余裕は、無いか！

「罠カード発動『鉄壁の石垣』！ 自分の場の岩石族か機械族を1体リリースし、発生する効果ダメージを1度だけ無効にできる！ 『サポート・シープ』をリリース！」

鉄壁の石垣（オリジナル）

【カウンター罠】

自分の場の岩石族または機械族モンスターを1体リリースして発動する。

このカードが発動したターンに発生するダメージを1度だけにできる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、このカードの効果でリリースされたモンスターをデッキに戻し、カードを1枚ドロウできる。

「真奈ちゃんに発生するダメージを無効にする！」

「え!？」

石でできた羊が消滅し、真奈ちゃんの回りを鉄色の岩が壁のように覆う。起爆するモンスター達、そして発生する爆炎と爆風。だが、真奈ちゃんは強固な石の壁で守られているので問題無い。

故に、ダメージを受けるのは俺だけだ。

「ぐああああああああああああつー！」

これは、キツイ……！ 1600ポイントダメージに減ったとは言え、残りライフの半分以上のダメージは厳しい。

熱い。炎が熱い。

痛い。全身が、痛いつー！

熱と痛みに押され、俺の頭はフェードアウトした。

ゆつくりと、地面に倒れる。

黎：LP 3100↓1500

「黎さんー！」

真奈ちゃんの声が、聞こえたような気がした。

## SIDE : 真奈

「アタシの、アタシのせいだ……！ アタシが調子に乗らなければ……！」

悲しい。悔しい。涙が、止まらない……っ！

自分の軽はずみな行動のせいだ、共に闘っている味方が傷つき、倒れてしまったのだ。そして気が付く。自分はまたプレイングミスをしてしまった。

「『神の宣告』……！」

さっきまで手札にあった、『魔術の施し』で捨てたカード『神の宣告』。これを前のターンに伏せ、『マイン・ハッキング』に対して使えば良かったんだ……！

ライフが半分になるのが、正直怖かった。黎さんに見せてもらった記憶の中で、黎さんは血塗れになりながらも戦っていた。

—— 怖い。

あの姿にアタシが抱いた感想は恐怖だった。闇のゲームは1度だけやった事がある。でも、それで受けたダメージは精々が鈍い衝撃。あんな殺し合いを体現したようなものじゃ無かった。

「アタシは……っ！ 我が身可愛さに……！」

そうだ。恐怖に負け、使えるカードを使わず、その結果として黎さんを傷つけてし

まった。生きているかどうかは分からない。  
違う、生きていてほしい。

岩の壁がダメージを防いでくれるのは1度だけ。アタシと黎さん2人分は、2回とカ  
ウントされて、守れるのは、どっちか片方。

自分の身を守るハズなのに、アタシを見捨てられるハズなのに、黎さんは、アタシ  
を守った。

自分よりも他人のために。転生前のあの人の行動が、アタシのバカさ加減を突き付け  
ているようにも思えて。そんな事無いと分かっているから、余計に惨めで。

惨めと思う資格も無いから、自分に腹を立てて。

自分の愚かさに、苛立ちが募った時、アタシの頭の中でブツン！ と何かがブチ切れ  
た音が、した。

t o b e c o n t i n u e d



STORY 4 4 : 「俺が悪い」 ★

SIDE : 黎

目が覚めたのは、果たして気を失ってからどれくらい経ってからなのだろうか。  
俯せのまま、フィールドを見る。

黎 : LP 1500

手札 : 2枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罠無し

真奈 : LP 2500

手札 : 1枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罨無し

スロウス：LP 6200

手札：5

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罨無し

「どうやら気絶していたのは1分にも満たない時間だったらしい。服がまだ煙を上げているし、状況も大きく変わっていない。」

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

真奈：LP 2500

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

ただ一つ変わっていたのは、真奈ちゃんの様子だった。

彼女の様子はまるで鬼気迫るようであり、気のせいか、背後に『ダーク・ネクロファイア』と『ウィジャ盤』が見えるような……。

「オデのターン、ドロロー。オデは『強欲な壺』を発動うぐ。2枚ドロローし、速攻魔法『グラテイス・リソース』を発動おぐう。通常ドロロー以外でカードをドロローした時、カードを4枚ドロローできるうぐ」

強欲な壺

【通常魔法】

自分のデッキからカードを2枚ドロローする。

グラテイス・リソース（オリジナル）

【速攻魔法】

自分が通常ドロワー以外でドロワーした時に発動できる。

デッキからカードを4枚ドロワーできる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、「グラティス・リソース」以外の除外された、または墓地に存在するカードを3枚選択してデッキに戻し、カードを2枚ドロワーできる。

この効果はこのカードが墓地に送られた次の自分のスタンバイフェイズまで使用する事はできない。

「チツ、インチキなカードばかり使いやがって!」

真奈、ちゃん?

妙だ。さつきと言葉使いが違う。『ウイジャ盤』の文字は最初の“D”を浮かべたままだが、うつすらと次の“E”が浮かんでいるように見える。

待てよ。確か本人がこれについて何か言っていたような……。

クソツ、頭がハッキリしないせいで、上手く働かない!

「このカードはあ、墓地の攻撃力1000以下の闇属性モンスターを除外して手札から特殊召喚できるう。『デイジーズ・ワイバーン』を除外しい『邪神教徒の鏡』を特殊召喚だあ」

邪神教徒の鏡：ATK ?

「攻撃力、不明……っ」

「『邪神教徒の鏡』の鏡の攻守はあ、除外したモンスターのレベル×1000になるう。『ディジーズ・ワイバーン』のレベルは8なので攻守は8000になるう」

邪神教徒の鏡：ATK ? ↓8000 / DEF ? ↓8000

あれは、『ウォータードラゴン』が使っていたモンスター！

やはり邪神のカードだったか！

「攻撃力、8000……っ！」

亀裂の入った黒い鏡。禍々しい装飾が、不気味さ加減を引き立てている。

「更に墓地の『死竜 デビヤマタ』と『ダブルコストーン』をゲームから除外しい、『ギガント・ゾンビゴレム』を特殊召かあくん！」

『ゴオオオオオオオッ！』

ギガント・ゾンビゴーレム：ATK 4100

次はエンヴィーの使っていたカードかつ！

マズいな。1ターンに1度とは言え、墓地から特殊召喚をハネるモンスターだ。これは厳しいぞ……！

ギガント・ゾンビゴーレム（効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／岩石族

ATK 4100 / DEF 0

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の闇属性モンスターを2体、ゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

1ターンに1度、墓地からモンスターが特殊召喚された時、その特殊召喚を無効にし、そのモンスターを持ち主のデッキに戻す。

このカードは墓地からの特殊召喚ができず、守備表示の時に攻撃対象に選択された場合、ダメージ計算終了時にコントローラーは1000ポイントのダメージを受ける。

「更に手札の『邪狂神の使い』をゲームから除外し、『イントクシケート・ソルジャー』は手札から特殊召喚できるうゝ」

イントクシケート・ソルジャー：ATK 500

邪魔神の使い（効果モンスター）

星3

闇属性／魔法使い族

ATK 600／DEF 1000

相手のスタンバイフェイズ時に1度だけ、自分の墓地に存在する闇属性モンスターを任意の枚数ゲームから除外する事ができる。

エンドフェイズ時まで、このカードの守備力はこの効果で除外したモンスターの数×500ポイントアップする。

「その効果で、オデのライフポイント分、攻撃力がアップするうゝ」

シユタツ、とローブで前進を覆った剣士が現れる。左右の眼の焦点は合っており、口元からはだらしなく涎が垂れている。きたねえ！

イントクシケート、intoxicatingとは「陶酔する」という意味がある。コントローラーに対してそうだと云うのなら、成程ライフがカリスマに直結しているのかも知れない。

イントクシケート・ソルジャー：ATK 500↓6700

イントクシケート・ソルジャー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

閻属性／戦士族

ATK 500／DEF 2300

手札の閻属性モンスターを1体ゲームから除外する事で、このカードは手札から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚された時、このカードの攻撃力は自分のライフポイント分アップする。

「次から次へと……！」

恐ろしい程のラッシュで、スロウスはモンスターを揃えて行く。しかもこいつはまだ



通常召喚を行っていない！

「オデは『リースト・デス』を通常召喚であ〜」

『ゲゲゲゲゲ……ッ』

リースト・デス：ATK 2000

ガリガリに痩せ細った死神が現れる。ドクロの仮面を額に着け、土気色の顔で不気味に笑う。

リースト・デス（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／アンデッド族

ATK 2000 / DEF 2000

このカードは特殊召喚できない。

1ターンに1度、手札の闇属性モンスターを墓地に捨てる事で攻撃力をエンドフェイズまで2000ポイントアップする事ができる。

この効果は相手ターンでも使用できる。

「更に自分の墓地のダークシンクロモンスターを除外する事でえ、『暗闇の同調者』は手札から特殊召喚できるう〜！ この効果で除外したモンスターの攻撃力分、攻撃力アップだあ〜！」

『クココココッ！』

暗闇の同調者（効果モンスター）（オリジナル）

星2

闇属性／魔法使い族

ATK 1000 / DEF 750

このカードは自分の墓地に存在するダークシンクロモンスターを1体ゲームから除外する事で手札から特殊召喚できる。

この効果で除外されたモンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力はアップする。  
このカードが攻撃を行う時、相手の発動した罠の効果は無効となる。

暗闇の同調者：ATK 1000 ↓ 3000

「手札の闇属性モンスター『暗黒界の狩人ブラウ』を捨てて『リースト・デス』の攻撃力を2000上げるう。同時にカードを1枚ドロ。」

更に墓地の『ブラックコインケース』を除外し、カードを2枚ドロ！」

リースト・デス：ATK 2000↓4000

あつと言う間にスロウスの場に攻撃力3000オーバーのモンスターが5体揃う。それでいて奴の手札は8枚と、ハンド・ボード・ライフの全てのアドバンテージを握られている状態なのだからタチが悪い。

「バトルウ。『暗闇の同調者』で『騎士』の魂にダイレクトアタックウ！」

「リバースカード、オープン！『和睦の使者』！『魔術の施し』で引いたカードだ！

このターンのみオレ達に発生する戦闘ダメージと戦闘破壊は無効化される！」

多分、俺が気絶している間に伏せたんだらう。用意が良いな。

和睦の使者

【通常畏】

このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0に

なる。

このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

「ムダア〜。『暗闇の同調者』がバトルを行う時い〜、相手の発動した罫は無効になるう〜!」

「な!?!」

キユガツ! と黒い霧の塊が音波を放ち、当たった『和睦の使者』のカードはポロポロと崩れる。張られようとしていた薄い青色の結界は、一瞬の内に砕け散った。

「死ねえ!」 // 騎士の魂“い〜っ!”

「黎さあああああん!」

黒い霧が全身から無数の黒い刺を飛ばす。当たったらハリセンボンなんてものじゃ無い。

痛む体を無理矢理叩き起こし、手札の内の1枚を、ディスクに叩きつけた。  
「『バトルフェーダー』を特殊召喚っ!」

バトルフェーダー：DEF 0

ボーン。

ボーン。

ボーン、ボーン。

ボーン。

ボーン。

ボーン！

時空の穴から飛び出して来たのは、鐘をぶら下げた小さな悪魔。ぶら下げている振り子を振って鐘の音を鳴らし、霧の針を弾き飛ばす。

『バトルフェーダー』は相手からダイレクトアタックを受ける時、手札から特殊召喚できる。そして、そのターンのバトルフェイズを強制終了する」

「チィ……」

特殊召喚後に除外という痛いデメリットがあるが、場に残るという中々お得な効果を持っている。『速攻のかかし』と使い分けるべし。

バトルフェーダー（効果モンスター）

星1

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。

このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

リリース・デス：ATK 4000 ↓ 2000

まだ体のそこかしこがズキズキと痛む。だが、この程度で参るようなヤワな体はしていない。ペキペキ、と腕を回し、体の調子を再確認する。

「黎、さん……」

『『和睦の使者』は、バトルフェイズの開始時に使うべきだったな』

「あう……」

「ま、無事で何よりだ」

場に『バトルフェーダー』を出せた。手札のカードは『貪欲な壺』。さて、どうなるかな？

高揚する気分を表に出さずにいると、真奈ちゃんが突然頭を下げた。いつの間にか、

『ウイジャ盤』の文字が消え、『ダーク・ネクロフィア』の姿も希薄になっている。

「ご、ごめんなさいっ！」

「ぬ？」

「我が身可愛さに『神の宣告』を捨てていたんです！ あれを使っていれば、きつと黎さんも余計なダメージを受けなかった！ 本当にごめんなさい！」

「ああ、気にしてないさ。それに、半分は俺が悪い」

「え？」

「君の行動にちゃんと横槍を入れるべきだった。プレイングミスが気になっているというのに、それを黙って傍観していた。だから半分は俺の所為さ」

彼女が『神の宣告』を手札に握っているのを、実は俺は知っていた。彼女に視線を向けた時に偶然見えたのだ。そしてそれを伏せられるタイミングで伏せていなかった事も。

多分だが、彼女は自分のライフを削る事を恐れたのだろう。デュエルにおいて、ライフが減る事は敗北へのカウントダウンが進む事でもある。そしてそれは、この闇のゲームでは死が近付く事でもある。要するに彼女の言った「我が身可愛さ」とは自分の死を近付ける事を拒んだという事だ。

別におかしい事でも何でも無い。己の死を恐れるのは生物としては当然の事だ。俺

のように死が身近であったり、自殺志願者のように自分の命を何とも思っていない奴なら兎も角、真奈ちゃんは普通の人間だ。

「仮に、何の躊躇も無く自分のライフを減らして、それでなお平然としていられたなら、俺は逆に責めていただろうね。『もつと自分の命を大切にしろ』って」

「……………」

「謝るな。君のやった事は何も間違っちゃいないんだから。失敗だと思ふのなら、もう1度やらなければ良いだけの話だしな」

「……………」、はいっ！」

「うん、良い返事だ」

さあて、反省会はお終い。デュエルの再開だ。

「オデはカードを2枚伏せて、ターンエンドオ」

スロウス：LP 6200

手札：6枚

フィールド

・邪神教徒の鏡（ATK 8000）、ギガント・ゾンビゴーレム（ATK 4100）、



イントクシケート・ソルジャー（ATK 6700）、リスト・デス（ATK 2000）、暗闇の同調者（ATK 3000）

：伏せカード2枚

真奈ちゃんに、随分と心配かけちまったようだな。反省だ。それに、これ以上スロウスの好きにさせる訳には行かない。

「真奈ちゃん」

「はい、何でしょう?」

「敬語は止めて? 俺達は仲間なんだ」

「え、あ、はい……?」

「それと、こつちが本題だ。ここから巻き返そう。攻めでも守りでも良い、これ以上アイツの思い通りにさせちゃいけない!」

「……、はい!」

「OK、行くぞ!」

「よっしゃ!」

【BGM: Supernova】

「俺のターン！ 魔法カード『貪欲な壺』を発動！ 俺は墓地の『マッシブ・ウオリアー』、『クイツク・シンクロン』、『チューニング・サポーター』、『ジャンク・アーチャー』、『暗黒界の狩人ブラウ』をデッキに戻し、カードを2枚ドロロー！」

引いたカードは……！ 来た、『ジェスター・コンフィ』！

「このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚できる！ 出でよ、『ジェスター・コンフィ』！」

『へへ〜！』

ジェスター・コンフィ：ATK 0

ブカブカの服を着た寸胴ピエロが飛び出す。相手のエンドフェイズまで持たせれば相手モンスター1体と共に手札へ戻る効果があるが、今回はその効果は使わない。

ジェスター・コンフィ（効果モンスター）

星1

闇属性／魔法使い族

ATK 0 / DEF 0

このカードは手札から表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚した場合、次の相手のエンドフェイズ時にこのカードと相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を手札に戻す。

「ジェスター・コンフィ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

「更に墓地の『サポート・シープ』の効果発動！ このカードをゲームから除外し、自分のデッキから『G・S』と名のつくモンスターを1体手札に加えるか特殊召喚できる！

俺はデッキから『G・S コソコソトカゲ』を特殊召喚！」

『コシヨコシヨ……』

G・S コソコソトカゲ：ATK 300

地面の中をモグラのように潜りながら、小さなトカゲが現れる。円らな瞳に細い胴体

と、本格的に頼りなさそうだ。が、それは見た目だけ。こいつは中々頼もしい効果を備えている。

『コソコソトカゲ』の効果発動！ このカードの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、相手フィールド上のカードを1枚選択し、ゲームから除外できる！」

「何だとお〜!?!」

「凄い……!」

「俺は『ギガント・ゾンビゴーレム』を選択！」

『コシヨコシヨ〜!』

G・S サポート・シープ（効果モンスター）（オリジナル）

星3

地属性／岩石族

ATK 1000／DEF 1000

墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

以下の効果の中から1つを選択して発動する。

●自分のデッキから「G・S」と名のついたモンスターを1体手札に加える。

●自分のデッキまたは手札から「G・S」と名のついた攻撃力1600以下のモンスター1体を特殊召喚する。

G・S コソコソトカゲ（効果モンスター）（オリジナル）  
星1

地属性／獣族

ATK 300／DEF 500

このカードの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを1枚選択して発動する。

選択したカードをゲームから除外する。

「コソコソトカゲ」の効果はデュエル中1度しか使えない。

このカードとの戦闘で発生するダメージは0となる。

ズガガガッ！ と地面の中を掘り進む小さなトカゲ。腐敗しかけた人肉の岩石の巨人の足をグルグル回るように掘る。

足下の土を根こそぎ掘って無くしたのか、『ギガント・ゾンビゴレム』は突如として空いた大穴に落ちて行つた。

まだまだ！

「俺はレベル1の『バトルフェーダー』と『ジェスター・コンフィ』と『G・S コソコソトカゲ』をオーバーレイ！」

『ボーン！』

『ヘツヘエ〜！』

『コシヨ〜！』

「3体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築!!」

振り子と鐘の悪魔が紫、寸胴なピエロが赤、小さなトカゲが茶色の光となつて上空へと螺旋を描いて登って行く。絡まる三条の光は地上へと落ち、銀河のような光の渦の中へと呑み込まれて行つた。

☆1×☆1×☆1||★1

「エクシーズ召喚！ 現れる『No. 83』、大いなる銀河を統べし黒白（こくびやく）の女王、『ギヤラクシー・クイーン』！」

『ハアッ!』

No. 83 ギャラクシー・クイーン : DEF 500

銀河の光の中から現れる、黒いドレスを纏った女王。背丈は2メートル近くあり、攻めと守りの双方で味方を支援する頼もしいモンスターだ。余談だが、攻撃表示になるとドレスの色が黒から白に変わる。

「続いて俺は『ゴゴゴジャイアント』を召喚!」

『ゴゴゴゴゴ〜!』

ゴゴゴジャイアント : ATK 2000

更に肩にノズルのついた、赤い岩石の巨人がズシン! と重低音を鳴り響かせて降り立つ。砂嵐を巻き起こしながらの登場だ。と重低音を鳴り響かせて降

アニメなどで先発で登場した『ゴゴゴゴーレム』よりかはスマートな作りである。

「このモンスターは……!」

『ゴゴゴジャイアント』のモンスター効果発動! こいつが通常召喚に成功した時、墓

地の「ゴゴゴ」と名のついたモンスター1体を選択し、守備表示で特殊召喚できる！  
俺は『邪天使の施し』の時に捨てられた『ゴゴゴゴレム』を特殊召喚！」

『ゴゴゴゴ〜！』

ゴゴゴゴレム：DEF 1500

地面の中から浮かび上がるように蘇る、青い人型の岩石兵。守りを固めているため、体の色が赤く染まっている。

「この効果を使用した『ゴゴゴジャイアント』は守備表示になる！」

『ゴ〜、シウアツ！』

ゴゴゴジャイアント（効果モンスター）

星4

地属性／岩石族

ATK 2000／DEF 0

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の「ゴゴゴ」と名のついたモンスター1



体を選択して表側守備表示で特殊召喚できる。

その後、このカードは守備表示になる。

また、このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

ゴゴゴジャイアント：ATK 2000 ↓ DEF 0

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 1500

手札：0枚

フィールド

：No. 83 ギャラクシー・クイーン (DEF 500・ORU:3)、ゴゴゴジャイ

アント (DEF 0)、ゴゴゴゴーレム (DEF 1500)

：伏せカード1枚

「アタシのターン！ 魔法カード『天よりの宝札』を発動！ アタシと黎さんはデツキから手札が6枚になるようにカードをドロー！」

「ありがとうな！」

「さっきのお返しだよ」

「ドローッ！」

真奈ちゃんのカードのお陰で潤う手札。このドローソースが巡って来るといふ事、それは風がこちらに向かって吹いて来ているという事だ。

「魔法カード『魔法使いのワルツ』を発動！ 自分の墓地の魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する！ 蘇れ、『マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス』！」

『再び参ります！』

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス：ATK 3500

「更に墓地の別の魔法使い族モンスター1体を選択し、エンドフェイズまでそのモンスターのレベル×200ポイント攻撃力と守備力がアップし、同名モンスターをして扱う事ができる！ 選択するのは『マジシャン・オブ・ブラック・カオス』！」

魔法使いのワルツ（オリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地に存在する魔法使い族モンスターを1体、召喚条件を無視して特殊召喚する。

更に自分の墓地の別の魔法使い族モンスター1体を選択する。

エンドフェイズまでこのカードの効果で特殊召喚した魔法使い族モンスターの攻撃力と守備力を選択したモンスターのレベル×200ポイントアップさせ、同名モンスターとして扱う事ができる。

『ブラック・カオス』のレベルは8！ よって攻撃力は1600ポイントアップする！  
真奈ちゃんのセリフを引き継ぐ形で俺も言う。

「同時にエンドフェイズまで『ブラック・ガードス』は『ブラック・カオス』としても扱われる！」

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス

↓マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス（マジシャン・オブ・ブラック・カオス）：  
 ATK 3500 ↓ 5100 / DEF 2500 ↓ 4100

「魔法カード『滅びの呪文―デス・アルテマー』を発動！ 自分の場に『ブラック・カオス』が存在する時、相手フィールド上のモンスターを全てゲームから除外し、除外したモンスター1体につき400ポイントのダメージを与える！」

「今、真奈ちゃんの場に『ブラック・カオス』は存在しないが、このターンのみ『ブラック・ガーデス』は『ブラック・カオス』として扱うため、このカードは有効！」

滅びの呪文―デス・アルテマー（湊クレナイ先生オリジナル）

### 【通常魔法】

このカードは自分フィールド上に「マジシャン・オブ・ブラック・カオス」が表側表示で存在する時のみ発動出来る。

相手フィールド上に存在するモンスターを全てゲームから除外し、除外したモンスター1体につき、相手に400ポイントのダメージを与える。



虚ろな鏡像（オリジナル）

【カウンター罫】

自分の墓地のカウンター罫を2枚ゲームから除外し、相手の発動した魔法・罫・効果モンスターの効果を無効にする。

このカードは罫カードの効果では除外できない。

ジャキンジャキン、と俺の墓地のカウンター罫『魔宮の賄賂』と真奈ちゃんの墓地の『神の宣告』が除外される。

スロウスの場から漂っていた奇妙な色合いの空気は、曇った鏡の放つ光によって雲散霧消した。

「あ」

「ありがとう。君の『神の宣告』のお陰で助かった」

人生万事、塞翁が馬。本当に何がどうなるのか分からないし、なるようになる、とはよく言ったものだ。

「これで『デス・アルテマ』は有効！」

『ハアッ！』

「又オオオオオオオオッ！」

スロウス：LP 6200↓4600

一瞬にしてスロウスの場の次元が歪み、4体のモンスターが消し飛ぶ。最初に墓地からの蘇生を邪魔する『ギガント・ゾンビゴレム』を除外しておいたのは正解だったようだ。

「更に『魔導戦士 ブレイカー』を攻撃表示で召喚！」  
『タヤッ！』

魔導戦士 ブレイカー：ATK 1600

「効果でこのカードに魔力カウンターを1つ乗せる！」

魔導戦士 ブレイカー（効果モンスター）

星4

闇属性／魔法使い族

ATK 1600 / DEF 1000

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大1つまで）。

このカードに乗っている魔力カウンターにつき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

また、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事で、フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を破壊する。

赤い鎧に身を包んだ騎士が、身の丈の半分程もある剣を構える。剣に赤い光が宿り、全身をオーラが包んだ。あの光が魔力カウンターなのだろう。

魔導戦士 ブレイカー：ATK 1600 ↓ 1900 / 魔力カウンター 0 ↓ 1

『『ブレイカー』の効果発動！ カウンターを取り除いて、スロウスの場に残った伏せカードを……（チラ）』

「（コクン）」



「破壊する！ マナ・ブレイク！」

一瞬だけ真奈ちゃんが俺の顔色を窺った。多分、先刻の『毒の種』のせいだろう。俺はそれに正直に頷く。場に残しておくより、破壊した方が得策だからだ。

ギユイン！ と赤い光が振り下ろされる剣の軌道に沿って三日月状の刃となつて飛び出し、スロウスの場の伏せカードを両断した。

魔導戦士 ブレイカー：魔力カウンター 1↓0 / ATK 1900↓1600

あいつのリバースカードは……『バッドフォース』！ オツケー、墓地や破壊では効果を発揮しない！

凶悪なるバリアーバッドフォース（オリジナル）

【通常罫】

相手の攻撃宣言時に発動可能。

攻撃を行う相手モンスターを破壊し、その攻撃力の10倍のダメージを相手に与える。



星2

闇属性／アンデッド族

ATK 100 / DEF 1100

このカードの属性は「光」としても扱う。

相手プレイヤーの直接攻撃が宣言された時このカードを手札から捨てる事で、そのターン中発生するプレイヤーへの戦闘ダメージは全て無効化される。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキから闇属性モンスターを1体手札に加える事ができる。

「くー！」

「真奈ちゃん、『ギヤラクシー・クイーン』の効果を！」

「了解！ 『ギヤラクシー・クイーン』の効果発動！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、スロウスのエンドフェイズまでアタシ達の場のモンスターは戦闘では破壊されず、貫通効果を得る！ ムフォース・オブ・ギヤラクシー！」

「我が子達よ、新たな力を差し上げましょう」

『ギヤラクシー・クイーン』が杖を高々と抱え、その杖の先端に光の珠が触れて弾ける。

フィールドのモンスター達に銀河の王女の魔力が送り込まれ、鎧のように全身を覆い、光る。

No. 83 ギャラクシー・クイーン（エクシース・効果モンスター）

ランク1

闇属性／魔法使い族

ATK 500 / DEF 500

レベル1モンスター×3

1ターンに1度、このカードのエクシース素材を1つ取り除いて発動する事ができる。

次の相手のエンドフェイズ時まで、自分フィールド上に存在するモンスターは戦闘では破壊されず、守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

No. 83 ギャラクシー・クイーン：ORU 3↓2

マジシャン・オブ・ブラック・ガードス（マジシャン・オブ・ブラック・カオス）  
↓マジシャン・オブ・ブラック・ガードス：ATK 5100 ↓3500 / DEF  
4100 ↓2500

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

真奈：LP 2500

手札：1枚

フィールド

：マジシャン・オブ・ブラック・ガードス（ATK 3500）、魔導戦士 ブレイカー

（ATK 1600）

：伏せカード2枚

【BGM終了】

「オデのターン、ドロ。オデは『フライング・スパイダー』を召かあくん」

フライング・スパイダー：ATK 1700

空を飛ぶ蜘蛛が現れる。虫の羽を背中につけたその姿はシユールを通り越してギャグとしか思えない。

「バトル」。『フライング・スパイダー』で『マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス』を攻撃いく。『フライング・スパイダー』は攻撃を行う時、相手モンスターの攻撃力分だけ攻撃力が上がる」

「何!？」

フライング・スパイダー（オリジナル）

星4

風属性／昆虫族

ATK 1700 / DEF 1600

このカードが攻撃を行う時、相手モンスターの攻撃力分だけこのカードの攻撃力を

アツプする。

フライング・スパイダー：ATK 1700 ↓ 5200

一難去つてまた一難か！

「させない！ リバースカード、オープン！ 速攻魔法『月の書』！ 『フライング・スパイダー』を裏側守備表示に強制変更！」

攻撃を回避するために真奈ちゃんが開けた伏せカード。そこから飛び出したのは三日月の記された青い新書。パラパラパラとページが捲れて青白い光が放たれ、羽の生えた蜘蛛は一枚の横向きのカードに変わった。

ゾク……！

一瞬、一瞬だけだが、背筋に寒気が走る。何だ？

「(ニイ……)」

スロウスが、笑っている……？

「こおれをオデは待つていたあゝ」

「何!?!」

「フィールド魔法、発動うゝ。『超過重力空間』んゝ」

ここでフィールド魔法の登場か!

ズジツ、と体全体に大きな負担がかかる。

「ぬ、ぐ……っ!」

「うあ、重い……?」

『ゴゴ……』

『これは……!?!』

そう、まるで重力に異常が発生し、体重が何倍にも膨れ上がったかのような……?!

No. 83 ギャラクシー・クイーン：DEF 500

ゴゴゴジャイアント：DEF 0

ゴゴゴゴーレム：DEF 1500

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス：ATK 3500

魔導戦士 ブレイカー：ATK 1600



モンスターのステータスに変化は無い。ならばこのフィールド魔法はいつたい、何だ？

「オデはカードを5枚セットオ〜」

「また、全伏せ……っ！」

「更に墓地の『グラティス・リソース』の効果発どお〜う。『グラティス・リソース』を除外しい、『グラティス・リソース』以外の、除外されたか墓地にあるカード3枚をデッキに戻しい、カードを2枚ドロオ〜」

スロウスの墓地から『邪天使の施し』、『強欲な壺』、『鈍いの欠伸』がデッキへ戻る。  
「ターンエンドオ〜」

スロウス：LP 4600

手札：2枚

フィールド

：セットモンスター1体（『フライング・スパイダー』）

：伏せカード5枚、超過重力空間（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロー！」

このフィールド魔法が何にせよ、決着を早めに着ける事に越した事は無い。別に耐えられない重量では無いものの、長く居ても良いものでも無いからだ。

幸い、前のターンに真奈ちゃんが『天よりの宝札』で俺の手札を補充してくれた。打つ手は十分にある。

「チューナーモンスター『G・S ヌンチャク・パンダ』を召喚！」  
『アチョ〜！』

G・S ヌンチャク・パンダ（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）  
星2

地属性／獣戦士族

ATK 900／DEF 750

このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから攻撃力1000以下の地属性モンスターを1体選択し、手札に加える事ができる。

このカードは1ターンに1度、カード効果では破壊されない。

G・S ヌンチャク・パンダ：ATK 900

ラーメンの器などで良く見る渦巻き模様が施された袴を履いたパンダが現れる。溢れる戦意を表わすように手にしたヌンチャクを振り回している。

「レベル4の『ゴゴゴジヤイアント』に、レベル2の『G・S ヌンチャク・パンダ』を  
チューニング！」

『ゴ、シャツ！』

『ア、チヨチヨチヨチヨツ！』

ダン！ と飛び上がるパンダ。2つの星に姿を変え、星は2つの緑のリングに変わる。リングは一直線に並び、その中心を赤色の岩石の巨人が潜る。

「大いなる大地の恩寵、鋼の爪にて敵を斬り裂く！ 希望が溢れる明日となれ！」

潜った赤色の岩石の巨人は輪郭線と体内の4つの星を残して消え、やがて輪郭線も消える。星は光の柱に呑み込まれ、大きく輝く。

☆4 + ☆2 || ☆6

「シンクロ召喚！ 斬鉄の剛爪、『G・S コンバット・ウルフ』！」

『ウオアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

G・S コンバット・ウルフ：ATK 2400

光の中から飛び出したのは武装した二本足で立つ狼。鋭い爪を持ち、ガツシリした肉付きだ。キラリと輝く鎧が眩しい。

「バトル！ 『コンバット・ウルフ』でセット状態の『フライング・スパイダー』を攻撃！  
！ 鋼斬りの爪！」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

『『コンバット・ウルフ』が守備モンスターを攻撃し、攻撃力が守備力を超えていた時、その数値分だけ相手に貫通ダメージを与える！』

斬！ 爪が一閃、伏せていた羽の生えた蜘蛛を斬り裂く。その斬撃の余波がスロウスを襲った。

「はぁ……」



このカードがバトルで相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上に存在する魔法・罠カードを1枚選択して破壊する。

ダーク・クリーニング（オリジナル）

【通常罠】

相手が自分の場の闇属性モンスターを攻撃して来た時に発動できる。  
相手モンスターの攻撃力は0となる。

だが、快進撃だと思えたのはここまでだった。

「これは……!?!」

『グ、グウウウウウウウ………ッ!』

50 G・S コンバット・ウルフ：ATK 2400↓1200 / DEF 1900↓9

攻守が半減しただと!?

苦しげに顔を歪ませる鎧姿の狼。地面にほぼ這い蹲っており、今にも潰されてしまいそうだ。

「これが、『超過重力空間』の効果か……!」

「その通りいゝ。この空間の中ではバトルを行ったモンスターはあ、次のスタンバイフェイズまで攻守が半分になるうゝ」

超過重力空間（オリジナル）

【フィールド魔法】

攻撃を行ったモンスターは、次のコントローラーのスタンバイフェイズまで攻撃力と守備力は元々の数値の半分になる。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、デッキから同名カードを選択し、発動できる。

つくう！ 重力が異常に働いている場所で激しい戦闘を行えば、自重を支える事すら

難しくなるという事か！

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

黎：LP 1500

手札：4枚

フィールド

：No. 83ギャラクシー・クイーン（DEF 500・ORU：2）、ゴゴゴゴレ  
ム（DEF 1500）、G・S コンバット・ウルフ（ATK 1200）

：伏せカード3枚

「厄介な……！ これじゃ攻撃しても次のターンにやられちゃう……！」

「しかも俺の経験則から言わせてもらえば、こいつは破壊されてもデッキから同名カードをサーチする効果がある。『転生の予言』と組み合わせられれば、いくら破壊してもキリが無いだろうな」

「そんな！ ……だったら、このターンで叩くまで！ アタシのターン！ アタシは『魔



導騎士 デイフェンダー』を準備表示で召喚！」

魔導騎士 デイフェンダー：DEF 2000

「モンスター効果発動！ 『デイフェンダー』が召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを乗せる！」

青い鎧に身を包んだ騎士が、身の丈の程もある盾を構える。盾の宝玉の部分に光が宿り、全身をオーラが包んだ。あの光が魔力カウンターなのだろう。

魔導騎士 デイフェンダー（効果モンスター）

星4

光属性／魔法使い族

ATK 1600／DEF 2000

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く（最大1つまで）。

フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスターが破壊される場合、代わり

に自分フィールド上に存在する魔力カウンターを、破壊される魔法使い族モンスター1体につき1つ取り除く事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

魔導騎士 デイフェンダー：魔力カウンター 0↓1

「続いて『ブラック・ガーデス』の効果発動！ 手札の魔法カードを1枚除外し、ゲームから除外されている『ブラック・マジシャン・ガール』をデッキに戻す！ これで『ブラック・ガーデス』はエンドフェイズまで墓地に存在する魔法カード1枚につき攻撃力と守備力が100ポイントアップする！」

墓地に存在する、合計45枚の魔法カードが『ブラック・ガーデス』の周囲に浮かぶ。1枚1枚が大きなエネルギーを持ち、その力が黒い魔導師に流れて行った。

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス：ATK 3500↓8000 / DEF 2  
500↓7000

「バトル！ 『ブラック・ガードス』でダイレクトアタック！  
 シュートッ！」

黒い砲撃が三度放たれる。スロウスの場にモンスターはいない。これが通れば仕留められるが……！

「トオッラップ発どおっう。『針ネズミ返し』いっ！ 攻撃モンスターの効果は無効となり、攻撃をする時、攻撃力は3000ポイントダウンッ」

「させるか！ 罠カードオープン、『トラップ・スタン』！ このターン、『トラップ・スタン』以外の罠カードは効力を失う！」

「速攻魔法発どおっう。『黒水氾濫』こくすいはんらんんっ。このターン、無効、および効果を受けない効果は全て無効になるっ」

「何!？」

針ネズミ返し（オリジナル）

【通常罠】

発動ターンのバトルフェイズ、効果モンスターの効果は無効となる。

効果モンスターが攻撃を行う時、攻撃力は3000ポイントダウンする。

トラップ・スタン

【通常罫】

このターンこのカード以外のフィールド上の罫カードの効果は無効にする。

黒水氾濫（オリジナル）

【速攻魔法】

発動ターン、このカード以外の「無効にする」および「効果を受けない」効果は全て無効になる。

このカードはカウンター罫に対して発動する事ができる。

シユウウウ、と『ブラック・ガーデス』の体が赤い光に包まれる。

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス：ATK 8000↓3500↓500

『く、私の力がここまで……!』

「ぬあ……」

スロウス : LP 3800 ↓ 3300

「これで、決めたかった……っ!」

真奈ちゃんが歯噛みする。確かに、このフィールド魔法の前ではどんな強いモンスターでも容易く弱体化してしまう。条件はスロウスも同じだが、奴の使うモンスターは強力である以上、弱体化した所を狙って仕留められる可能性がある事は否めない。

そして、フィールド魔法の効果で、弱体化が始まった。

マジシャン・オブ・ブラック・ガーデス : ATK 500 ↓ 7700 ↓ 3500 ↓ 1750 / DEF 6700 ↓ 1250

『く、うっ!』

『『ブラック・ガーデス』!』

必死になって自重を支える『ブラック・ガードス』。しかし、片膝をつき息も絶え絶えであり、いつ倒れてもおかしくは無い。

『マスター、私は大丈夫です！ 次の一手をつ！』

「く！ 『ギヤラクシー・クイーン』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、次の黎さんのターンまで貫通効果を与えられ、戦闘破壊されない！」

No. 83ギヤラクシー・クイーン：ORU 2↓1

「ターンエンド！」

真奈：LP 2500

手札：0枚

フィールド

：マジシャン・オブ・ブラック・ガードス（ATK 1750）、魔導戦士 ブレイカー  
（ATK 1600）、魔導騎士 デイフェンダー（DEF 2000・魔力カウンター：  
1）

：伏せカード2枚

正直、この状況は中々に厳しい。攻撃してもパワーダウン、殆どの行動にはパーミッションで返される。邪神の使うカードが滅茶苦茶だという事もあるが、こいつらのデュエリストとしての腕前もまた相当なものだという事もある。

スーパーヒーローなんかじゃ、こういった敵はバツタバツタと倒していくものなんだがな……。

「オデのターン、ドロー。魔法カード『異界の財宝』を発どおう。同じ種族のモンスターがゲームから5体以上除外されている時、デッキからカードを5枚ドローできるわう」

く！ 『龍の鏡』の効果で5体は既に除外されている上、こいつはさつきからコストその他で大量のモンスターを除外している！

異界の財宝（オリジナル）

【通常魔法】

自分の同じ種族のモンスターが5体以上ゲームから除外されている場合に発動できる。

デッキからカードを5枚ドローできる。

スロウスの手札が2枚から7枚へと潤う。

「畏発動、『怠け報酬』うゝ。自分の場にモンスターが存在しない時、手札1枚とデッキの5枚墓地に送って自分の場に『サボタージュ・トークン』を1体特殊召かあゝん。更にこのターン、オデはモンスターを2回通常召喚できるうゝ」

「何!?!」

「『二重召喚』と同じ効果!?!」

怠け報酬（オリジナル）

【通常畏】

自分の場にモンスターが存在しない時、手札を1枚捨てて発動できる。

デッキからカードを5枚墓地へ送り、自分の場に「サボタージュ・トークン」（悪魔族・



闇・星2・攻600/守400)を1体特殊召喚する。

このカードが発動したターン、プレイヤーは2回まで通常召喚できる。

サボタージュ・トークン：ATK 600

墓地に『アックス・ドラゴニユート』が捨てられ、奴の場にトークンが現れた。

5枚の墓地肥やしは恐ろしいな……。

「更に速攻魔法『ソウトレス・リロード』を発動であゝ。デッキの一番上を墓地におくりいゝ、墓地からモンスターを可能な限り特殊召かあゝん。

甦れえ、『ボーン・リザードマン』、『ミンゲイドラゴン』、『DT マッド・メタル』、『アックス・ドラゴニユート』おゝ」

ソウトレス・リロード（オリジナル）

### 【速攻魔法】

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送る。

自分の墓地からモンスターを、召喚条件を無視して可能な限り守備表示で特殊召喚する。

特殊召喚したモンスターの攻撃力と守備力は0となり、モンスター効果は無効となる。

この効果で特殊召喚したモンスターはカード効果では破壊されない。

ボーン・リザードマン：DEF 950↓0

ミンゲイドラゴン：DEF 200↓0

DT マッド・メタル：DEF 3900↓0

アックス・ドラゴニユート：DEF 1200↓0

「ただしこいつらは効果が使えず、攻守は0だあゝ」

「それでも……」

「ああ、5体のモンスターが並び、通常召喚がノーコストで3度も行える。脅威である事に変わりは無い」

奴の手札は2枚、どちらかに、或いは両方が強力なカードである可能性は高い！

「オデは『サボタージユ・トクン』と『アックス・ドラゴニユート』をリリースウ。  
 チューナーモンスター『ドクロ男爵』をアドバンス召かあくん！」  
 『カタカタカタカタ……』

ドクロ男爵（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星7

闇属性／戦士族

ATK 1500 / DEF 1400

このカードが墓地に存在する時に発動できる。

自分フィールド上に表側表示で存在する罫カード1枚を破壊し、ゲームから除外されている闇属性モンスターを1体墓地に戻す事でこのカードを墓地から特殊召喚できる。

この効果は1ターンに1度しか使えない。

ドクロ男爵：ATK 1500

「っ！ チューナーモンスター！」

「レベル2の『ミンゲイドラゴン』にい、レベル7の『ドクロ男爵』をチューニングウ〜」  
ゲタゲタと笑うボロボロの礼服を着た骸骨男。黒ずんだ7つの星に姿を変えると、7つの黒いリングに更に姿を変える。その中心を工芸品のような竜が通る。

「天空より落ちろ、獣の骨え！ 刃の音色よ、戦場に満ちろお〜！ 滅びの証明、ここにありい〜！」

☆2+☆7=☆9

「シンクロ召かあ〜ん。死と不死の狭間の者、『スカル・ソードジェネラル』ウ〜！」  
『コカカカカッ！』

スカル・ソードジェネラル：ATK 3400

骸骨。否、骨の塊。それがそのモンスターそのものを表す言葉だった。

人間だけで無く、各種の動物の骨を押し固め、できあがった巨大人骨型モンスターにムリヤリ鎧と剣を装備させた、といった感じか。

「更に永続罨『闇次元の解放』を発動う。除外されている『ダブルコストン』を特殊召かあ〜ん！」

### 闇次元の解放

#### 【永続罨】

ゲームから除外されている自分の闇属性モンスター1体を選択して特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊してゲームから除外する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

ダブルコストン：ATK 1700

「更に墓地の『アタック・アブゾーバー』を除外しい、デッキから闇属性モンスターを1体手札に加えるう〜」

黒い塊の生き物が現れる。更に薄い人型が虚空で消え、デッキからカードを1枚引き

寄せる。

っ！ このパターンは！

「オデは『ダブルコストン』を2体分のリリース素材にするう〜」

「来るぞ真奈ちゃん！ 奴自身が！」

「はい！」

「『ダブルコストン』と『ボーン・リザードマン』をリリースウ〜。出でよ……」

『セブンクライム  
七罪士』 スロウス』ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウツ!!」

やはり、出て着たか！

スロウスが闇の中から現れる。その姿はプライドやエンヴィーの時同様に禍々しい鎧を身に纏い、こちらを呑み込みかねない程の邪神のオーラを放っている。異なる点と云えばプライドの武器は双剣、エンヴィーは身の丈の倍以上の長さの長槍だったのに対し、こいつの持っているのは岩のように大きな頭の大槌を持つている点。

刺々しい鎧に、大槌に施されたドクロマーク。眠たげな目が、こちらを睨みつける。だが、何よりも……。

七罪士 スロウス：ATK 3500

「大きい……っ！」

「デケエ……っ！」

そう、巨大なのだ。プライドもエンヴィーも、普通の人間より少し大きいくらいだつ

た。それが真の姿を現しても、精々が2メートル前後。だが元々が3メートルオーバーの大男だったスロウスの真の姿は5メートルを超える。普通の街路樹が3〜4メートルくらいだと考えてもらえればその大きさが想像しやすいだろう。5メートルはビルの2階、小さなものなら3階に相応する。

だが、大きさなら神のようなモンスターもいるし、『眠れる巨人ズシン』や『サイバー・エンド・ドラゴン』のようなモンスターだって巨大だ。大きさでは全てを計れない。

しかし、恐らくだが、こいつはこの大きさに見合う能力を持ち合わせている。要するに、最悪だ。

「まだまだあく。墓地の『ドクロ男爵』の効果発動うく。『閻次元の解放』を破壊しいく、除外された『アボミナブル・ジエノサイド・ドラゴン』を墓地に戻し、特殊召喚だあく」  
『ケタケタケタツ!』

ドクロ男爵：ATK 1500

再度現れる礼服ドクロ。不気味な笑いが、こちらの焦りと恐怖を引き立てる。

「更にレベル7の『DT マッド・メタル』と『ドクロ男爵』をオーバーレイい〜! 2体のモンスターでえ、オーバーレイ・ネットワークを構築う〜!」



銀色のタルもどきが灰色、ボロボロの礼服を着たドクロが暗い青の光に変わり、螺旋を描いて上空へ飛び上がる。地面には銀河が渦巻いており、その中へと2つの光は飛び込んで行った。

☆7×☆7＝★7

「エクシーズ召かあ〜ん！ 無力の証、『新月の黒砲塔』う〜！」

新月の黒砲塔：ATK 3300

ズシンン！ と大きな黒い石を積み重ねた塔が現れる。塔の最上階には大きな大砲が四方向に二つずつ、合計八門取り付けられており、その塔の周囲を2つの星が周回している。

「攻撃力3000オーバーが3体も……！」

「まさか1ターンでアドバンス、シンクロ、エクシーズの全ての召喚をやつてのけるとはな……！」

スロウスのフィールド

：七罪士 スロウス（ATK 3500）、スカル・ソードジェネラル（ATK 3400）、新月の黒砲塔（ATK 3300）

：超過重力空間（フィールド魔法）

「『新月の黒砲塔』の効果発動おっけー！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、相手モンスター2体を破壊するわ。更にその元々の攻撃力分のダメージを与えるわー！」

「『ヴォルカザウルス』か！」

「効果は更に凶悪だよ！」

確かに、『ヴォルカザウルス』は相手モンスター1体。でもこいつは2体、明らかに凶悪度が上がっている。

「『デス・カノン』くっ！」

ウィイン、ガコオン！ と砲台の内のこちらに面した二門が砲身をこちらに下げる。スロウス並みにデカイもんだから完全に見下ろす形である。

対象は……、『ブラック・ガーデス』と『ゴゴゴゴレム』か！

ヤバイ、喰らえば二人ともお陀仏だ！

新月の黒砲塔（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）

ランク7

闇属性／機械族

ATK 3300 / DEF 0

レベル7×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

相手の場に存在するモンスターを2体選択して破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを与える。

「死ねえ〜！」

「だが断る！ 畏発動！ 『ダメージ・ダイエツト』！ このターン、俺達に発生するダメージは全て半減する！」

『ブラック・ガーデス』の破壊を『ダイフェンダー』の魔力カウンターを取り除いて無効にする！ “マナ・ダイフェンス”！」

ジャララララ、と俺と真奈ちゃんの前に蛇腹に折り畳まれていた半透明のシールドが広がる。

更に『デیفエンダー』の盾の宝玉が光り輝き、青白いバリアが現れた。

ダメージ・ダイエツト

【通常罫】

このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。

また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる。

『ヌンツ！』

『ゴゴ〜ツ！』

砲撃によって赤く変色した青い岩石の巨人『ゴゴゴゴレム』は破壊されるも、『ブラック・ガーデス』は『デیفエンダー』の展開したシールドによって守られた。

半透明の障壁越しに、爆風が俺を襲う。

「ぐ、ううっ!」

黎：LP 1500↓600

「しぶといなあ〜」

「大丈夫?」

「ああ、とりあえずは、ね」

取り敢えず、このターンはもう安全だろう。『ギャラクシー・クイーン』の効果でこのターンは戦闘では破壊されない。真奈ちゃんの『ブレイカー』は攻撃表示だが、ダメージは半分になるので、内一発を伏せた『シフト・チェンジ』で俺の『ギャラクシー・クイーン』と交代させれば2人とも生き残れる!

「オデは手札から魔法カード『邪天使の施し』を発どおう。対象はオデと女だあ〜」  
「2枚捨てるんだったね」

真奈ちゃんがデッキから3枚引き、2枚を捨てる。捨てたカードは『闇紅の魔術師』  
と『見習い魔術師』だ。ダークレッド・エンチャンター

ここでは2体とも使い所が無いからな。『見習い魔術師』の能力で魔力カウンターを乗せたところで意味合いは薄い。リクルートできるのは魅力だが、3体も並んでいる状

態では1ターンで全て吹き飛ぶのが関の山だ。

『闇紅の魔術師』はリリースが必要だし、ハンデスは今更と言った感じだしな。

見習い魔術師（効果モンスター）

星2

闇属性／魔法使い族

ATK 400／DEF 800

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。

このカードが戦闘によって破壊された場合、自分のデッキからレベル2以下の魔法使い族モンスター1体を自分フィールド上にセットする事ができる。

ダークレッド・エンチャンター  
闇紅の魔術師（効果モンスター）

星6

闇属性／魔法使い族

ATK 1700 / DEF 2200

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ置く。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

このカードに乗っている魔力カウンターにつき、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

1ターンに1度、このカードに乗っている魔力カウンターを2つ取り除く事で、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

「だが、手札を補充した所でこのターンに俺達が受けるダメージは半分。『ギヤラクシー・クイーン』の効果で戦闘破壊されない上、『ダメージ・ダイエツト』は墓地から除外して効果ダメージを半減させる効果があるから、勝負はまだつかねえぜ、スロウス」

「そおれはどうかなあ？ 魔法カード『倦怠の刻印』発どおう。相手の場のモンスターはあ、このターン破壊されない効果を無効化されるう」

「しまっ!?!」

倦怠の刻印（オリジナル）

【通常魔法】

発動したターンのみ、フィールド上に存在するモンスターは「破壊されない」効果を受けない。

すでに発動している場合はその効果は無効化される。

フィールドの地面に丸と四角で構成された単純な模様が描かれる。同時にシユウ、と光の鎧が消滅し、『ギヤラクシー・クイーン』の表情に苦悶が浮かぶ。

『何という事……、私の力が掻き消されて行く……!?!』

「更にオデ自身の効果発動おおう！ 墓地のモンスターを1体除外し、その攻撃力・守備力をオデの能力に加えるう。オデは『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』を除外い。『グレイブ・フォース』ウー！」

ジャキ、とスロウスの墓地からカードが吐き出されると同時に、スロウスの背後に黒い龍が半透明になって浮かぶ。半透明の龍はそのままスロウスの体内にスルリと溶け込むように入って行った。



七罪士 スロウス : ATK 3500 ↓ 8500 / DEF 3000 ↓ 8000

「攻撃力8500!？」

「元々の攻撃力でさえ、『ブラック・ガードス』と互角だったのに……!」

「だが、それでも『超過重力空間』の効果でパワーアップは無効化される。次のターンに畳み掛ければ、倒せない相手じゃ……」

「そして永続魔法『軽金属の正装』を発動おう。このカードがオデの場にある限り、オデの場のモンスターは『超過重力空間』の影響を受けない」

「クソッ!」

軽金属の正装 (オリジナル)

【永続魔法】

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上のモンスターは「超過重力空間」の効果を受けない。

このカードがフィールド上から墓地に送られた時、デッキから同名カードを選択し、

発動できる。

流石、と言うべきか。フィールド魔法のデメリットを受けないカードは抜け目無く投入されているという訳か……！

「バートルウ！ 『新月の黒砲塔』で『コンバット・ウルフ』を攻撃い〜！ ブラック・デス・シヨット〴〵オ！」

『ギャウツ!?』

「リバースカード、オープン！ 『虚栄巨影』！ 『コンバット・ウルフ』の攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

G・S コンバット・ウルフ：ATK 1200↓2200

「それでも破壊だあ〜！」

『ダメージ・ダイエツト』の効果で、このターンに受けるダメージは半分になる！ ぐあっ〜！」

黎 : LP 600 ↓ 50

あ、危ねえ！

「続いて『スカル・ソードジェネラル』で『ギャラクシー・クイーン』を攻撃であゝ！

『ボーン・スラッシュ』を！」

「黎さん、伏せたカードで『ディフェンダー』を！」

「ハア……、ハア……、く、分かった！ リバースカード、ハア……、オーブン！ 『シフト・チェンジ』！ 『ギャラクシー・クイーン』と、『魔導騎士 ディフェンダー』の位置を、交換するっ！」

一瞬で青い盾の騎士と黒い銀河の女王の居場所が入れ替わる。

骨の腕が振り下ろしたくすんだ色の剣を、青い騎士は受け止める。しかし想像以上の威力と重量にそのまま押し潰されてしまった。

『カタカタカタカタッ！』

『ぐおああっ！』

「きゃあっ！」

「更にオデ自身で『騎士』の魂に直接攻撃いゝ！ 『スロウリー・プレスハンマー』！」

「……っ、させない！ 『ガード・ブロック』を発動！ 黎さんが受けるダメージを1回

「だけ0にし、カードを1枚ドロする！」

巨大な大槌を、白銀のシールドでガードする。ヒビは入ったものの、割れる心配も、欠片が降って来る心配も無さそうだった。

この場合、真奈ちゃんが発動したので、カードを引くのは真奈ちゃんになるな。

「カードを3枚伏せて、ターンエンドオ」

スロウス：LP 3300

手札：3枚

フィールド

：新月の黒砲塔（ATK 3300・ORU：1）、スカル・ソードジェネラル（AT

K 3400）、七罪士 スロウス（ATK 8500）

：伏せカード3枚、軽金属の正装（永続魔法）、超過重力空間（フィールド魔法）

「ハア…、ハア…、俺のターン、ドロ、ッ！」

『主殿』

「桜、来てくれたか……!」

『状況は芳しく無いようだな』

芳しく無いどころか後が無い。俺のライフは僅か50。戦闘ダメージだけで削られて行ったと考えれば、最も低い数値に近い。ギリギリ、首の皮一枚で繋がっている、というのがピタリと当てはまる表現だろう。

真奈ちゃんだって、ライフは2500も余っているものの、スロウスの8500という攻撃力の前では吹けば飛ぶ数値と言えるだろう。

『ここで降参するつもりか?』

「冗談、だろ……」

だが、それでも俺のライフは僅かに残っている。手札にあるカードで、状況をしのぐ事は、一先ず可能だ。

「ハア……、ハア……、俺は、チューナーモンスター、『L・S レストア・チェリー』を、通常召喚っ!」

『推参っ!』

L・S レストア・チェリー : ATK 1800

「この人、黎さんの精霊……」

『主殿、今回復するぞ!』

「効果、発動! 桜が場に召喚、特殊召喚された時、俺のライフを700ポイント、回復するっ!」

『「キュア・プロッサム」!』

L・S レストア・チェリー（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

風属性／戦士族

ATK 1800 / DEF 1600

このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、プレイヤーのライフを700ポイント回復する。

1ターンに1度、手札を1枚墓地に送る事で、プレイヤーのライフを500ポイント回復する。

このカードは同じ攻撃力のモンスターとのバトルでは破壊されない。

黎：LP 50↓750

場に降り立つ、桃色のポニーテールの女性。騎士装束とドレスを折衷したような服装で威風堂々と敵を睨む。更に剣から発せられた桜色の光が俺を包み、傷を癒してくれた。呼吸も次第に整っていく。

ライフが極限まで減るであろう状況を予想して差しておいたんだが、正解だったな。

「更にモンスター効果発動！ 1ターンに1度、手札を1枚墓地へ送り、自分のライフを500ポイント回復する！」

『切り込む癒しが剣ならば、守る癒しは盾だ！』

『「グリーファイ・ハート」！』

黎：LP 750↓1250

手札のカード『トラップ・イーター』を墓地へ送る。桜の手にしていた身の丈の半分以上の大きさの盾に嵌め込まれていた赤い宝玉が光を放ち、その光が俺の体を癒す。

「更にカードを3枚伏せ、ターンエンド！」

黎：LP 1250

手札：0枚

フィールド

：L・S レストア・チェリー（ATK 1800）、No. 83ギヤラクシー・クイン（DEF 500・ORU：1）

：伏せカード3枚

「黎さん、大丈夫？」

「何とかね。それより真奈ちゃん」

「はい」

「このターン、君の思う通りに動け。アフターケアくらいならできる」

「了解！ アタシのターン！」

真奈ちゃんが力強くカードを引く。

『マスター』



「『ブラック・ガードス』？」

『私を場から退場させて下さい。このままでは効果ダメージを受け、マスターの敗北になってしまいます』

『ブラック・ガードス』が神妙に話す。

そう、真奈ちゃんはさつきブレイングミスを犯した。『シフト・チェンジ』で交換するのは『ブレイカー』か『ブラック・ガードス』にするべきだったのだ。

真奈ちゃんのライフはそれを行ったとしても何とか残る。あのデッキの事だ、『魔力掌握』の1枚や2枚、入っているだろう。それで『ライフエンダー』を残し、次のターンに来るかも知れない『魔力掌握』に備えれば、まだ場持ちも良かったかも知れない。

まあ、ダメージで正常な判断ができなかったとは言え、それを指摘できなかった俺も俺だが。

何にせよ、過ぎてしまった事だ。今更どうこう言っても仕方が無い。ミスをしたなら、それを取り返せば良いだけの事。やってみな、真奈ちゃん。

「……、分かった。ゴメンね、『ブラック・ガードス』」

『大丈夫ですよ』

「うん……。手札から魔法カード『アドバンスドロー』を発動！ 自分の場のレベル8以上のモンスターを1体リリースし、カードを2枚ドロウできる！ アタシは『ブラック・

「ガーデス』をリリース！」

『黎さん、後はお願ひします……。どうかマスターを……』

「ああ、任せろ」

アドバンスドロー

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するレベル8以上のモンスター1体をリリースして発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「ドロロー！ アタシは手札から魔法カード『魔力掌握』を発動！」

このカードは、自分の場の魔力カウンターを乗せる事ができるカードに1つカウンターを置き、デッキから同名カードをサーチできる！ ただし、『魔力掌握』は1ターンに1度しか発動できない。アタシは『ブレイカー』に魔力カウンターを乗せ、デッキから『魔力掌握』を手札に加える！」

## 魔力掌握

## 【通常魔法】

フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。

その後、自分のデッキから「魔力掌握」1枚を手札に加える事ができる。

「魔力掌握」は1ターンに1枚しか発動できない。

魔導戦士 ブレイカー：魔力カウンター 0↓1 / ATK 1600↓1900

「更に『ブレイカー』の効果発動！ カウンターを取り除き、『軽金属の鎧』を破壊する

！ マナ・ブレイク！」

『とうえいつ！』

三日月状の魔力刃が『ブレイカー』の剣の動きに合わせて生まれる。走るように放たれたそれは、過たずスロウスの場のカードを破壊しに行く。

魔導戦士 ブレイカー：魔力カウンター 1↓0 / ATK 1900↓1600

「カウンター罨発どおう、『引きずり落とす手』え。モンスター効果の発動を無効にしたい、破壊する。更に相手は手札を1枚選んで捨てるう」

「くっ！」

三日月状の刃は突如として地面を突き破って出て来た腕に阻まれる。そしてそのまま赤色の戦士は地面の中へと引きずり込まれてしまった。

「アタシは『魔力掌握』を墓地へ送る！」

引きずり落とす手（オリジナル）

【カウンター罨】

効果モンスターの効果の発動を無効にし、相手は手札を1枚選んで捨てる。

「アタシはモンスターを裏側守備表示でセットして、ターンエンド！」

真奈：LP 2500

手札：1枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚

「オアのターン、ドロ。『新月の黒砲塔』の効果発動おう。オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、相手モンスターを2体破壊い。その元々の攻撃力分のダメージを与えるい！ 『デス・カノン』！」

ガコン！ と二門の大砲がこちらへ向く。

オーケー、そのまま狙えよ……！！

「対象は『レストア・チェリー』とセットモンスターだあい！」

かかった！

「罨発動！ 『スターライト・ロード』！ 場のカードを2枚以上破壊する効果が発動し

た時、それを無効にして破壊し、エクストラデッキから『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚できる！」

「ぬぁにい〜!?!」

ドダダン! と砲弾が放たれた瞬間、一陣の風が吹き渡る。吹き渡った風は竜巻のように黒い大砲を搭載した塔を覆い囲み、塔を粉碎。その中から真つ白な龍が飛び出した。

スターライト・ロード

### 【通常罫】

自分フィールド上のカードを2枚以上破壊する効果が発動した時に発動できる。

その効果を無効にし破壊する。

その後、「スターダスト・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚できる。

「飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』!」

『キュオオアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

スターダスト・ドラゴン : DEF 2000

「どうだ！」

「黎さん、凄いい！」

「ぬう〜！ ならばオデは墓地の『F・G・D』を1体除外しい〜、その能力値分だけオデの能力をあげる〜！ ヽグレイブ・フォース“ウ〜！”

七罪士 スロウス : ATK 8500 ↓ 13500 / DEF 8000 ↓ 13000

「墓地の閻属性モンスターが除外された事により〜、『憎悪の剣豪』は手札からあ、リリース無しで召喚できるう〜！」

『ゼアツ！』

「この時、除外されたモンスターのレベル×100ポイント、攻撃力は上がる〜」

憎悪の剣豪 : ATK 3200 ↓ 4400

「チツ！ またその手のモンスターか！」

「バトル。『スカル・ソードジェネラル』でセットモンスターを攻撃い〜！ 〴〵ボーン・スラツシユ〜！」

「アタシのセットモンスターは『見習い魔術師』！ 効果でデッキから『見習い魔術師』をセット！」

ザシユツ！ と骨の塊が持つ剣で、紫のヴェールをつけた魔術師が真つ二つにされる。しかし、死に際に唱えた呪文が新しい仲間を場に呼び出した。

「ならばあ〜、『憎悪の剣豪』で『レストア・チェリー』を攻撃い〜！ 〴〵憎しみの一太刀！ い〜！」

「そうは行くか！ リバースカード発動！ 畏カード、『聖なる鎧—ミラーメール—』！ 相手の攻撃宣言時、対象となった自分の場のモンスターの攻撃力は、相手と同じになる！」

『はあつ！』

聖なる鎧—ミラーメール—

【通常罫】



自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。

攻撃対象モンスターの攻撃力は、攻撃モンスターの攻撃力と同じになる。

憎悪の剣豪：ATK 4400

L・S レストア・チェリー：ATK 1800↓4400

「だが、相撃ちであゝ」

「悪いが、桜は同じ攻撃力相手じゃ破壊されないんでね！」

「何いゝー！」

桜の体に、相手の姿を映し出す程に輝く鎧が、そしてその周囲には6枚の鏡が浮き、その全てが相手を映し出した。

憎悪の感情に支配された侍の刀と、桜の騎士の片刃の剣がぶつかり合う。一合、二合とぶつかり合う内に桜は相手の太刀筋を見切り、三合目には相手の袈裟斬りを見切つて胴体を上下に両断した。

『“一刀両断・夜桜の太刀”！』

「ナイスだ、桜！」

「ぬう、だが『憎悪の剣豪』がバトルで破壊された時、オデのライフは相手の攻撃力の10倍だけ回復する」

え？

憎悪の剣豪（効果モンスター）（オリジナル）

星9

闇属性／戦士族

ATK 3200 / DEF 1900

このカードは特殊召喚できない。

自分の墓地に存在するレベル4以上の闇属性モンスターがゲームから除外された時、このカードは手札からリリース無しで召喚できる。

この効果で召喚された時、その除外されたモンスターのレベル×100ポイント攻撃力がアップする。

このカードが戦闘によって破壊された時、相手モンスターの攻撃力の10倍だけ、自分のライフを回復する。

スロウス : LP 3300 ↓ 47300

「ら、ライフポイント……」

「4万7千3百だと……っ！」

なんて効果だ……！ パワーアップだけで無く、とんでもない量の回復効果まで備えていたとは……！

「そしてオデ自身で『レストア・チェリー』を攻撃だあく！ // スロウリー・プレスハン

マーグー！」

「暴発動！ 『ガード・デイズーブ』！ 1度だけ自分の場の // スピリッツ S “ と名のついたモン

スターを対象とした戦闘かカード効果を無効にできる！」

ゴガン！ とシールドがスロウスの振り下ろした大槌を受け止める。スロウスは諦めずに2度3度と振り下ろすも、通じないと分かったのか元の場所に戻って行った。

怠惰がアイデンティティの割に、粘ったな。

「オデはこれでターンエンドく」

スロウス：LP 47300

手札：3枚

フィールド

：スカル・ソードジエネラル（ATK 3400）、七罪士 スロウス（ATK 13500）

：伏せカード3枚、軽金属の鎧（永続魔法）、超過重力空間（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロロー！」

よし、持ち堪えた！ 壁も残っているし、まだ勝機はある！

「俺は魔法カード『鉄鉱石の採掘』を発動！ デッキと墓地の岩石族モンスターを2体ずつ除外する事で、デッキからカードを2枚ドロローできる！」

デッキから『パワー・ジャイアント』と『激昂のムカムカ』が、墓地からは『ゴゴゴゴーレム』と『ゴゴゴジャイアント』が除外される。

4つの岩石の欠片はデッキトップに宿り、新たなカードを引く権利を俺に授けた。

「俺は手札を1枚墓地へ送り、桜の効果でライフを500ポイント回復する！」  
『再び回復だ、グリーファイ・ハート』！』

黎：LP 1250↓1750

「更に今墓地へ送った『G・S サポート・シープ』のモンスター効果発動！ このカードを墓地から除外する事で、デッキか手札から『G・S』を1体特殊召喚できる！ 出でよ、『G・S ストーン・ラビット』！」

勢い良く飛び出したのは石造りのウサギ。ドン！ と重い音を響かせながらもピョンピョン飛び跳ねているのだから一体軽いのか重いのか分かったものではない。

G・S ストーン・ラビット：DEF 0

「カードを1枚伏せて、桜を守備表示に変更だ」

L・S レストア・チェリー：ATK 4400↓DEF 1600

「ターンエンド！」

黎：LP 1750

手札：0枚

フィールド

：L・S レストア・チェリー（DEF 1600）、No. 83ギヤラクシー・クイン（DEF 500・ORU:i）、スターダスト・ドラゴン（DEF 2000）、G・S ストーン・ラビット（DEF 0）

：伏せカード1枚

「アタシのターン、ドロー！ アタシはチューナーモンスター『ターボ・ウィザード』を通常召喚！」

『テヤッ！』

ターボ・ウィザード：ATK 1500

「モンスター効果発動！ 1ターンに1度、このカードに魔力カウンターを1つ乗せる事ができる！ 更に乗っている魔力カウンター1つにつき攻撃力と守備力は200ポイントアップする！」

『ぬえいや！』

ターボ・ウィザード：魔力カウンター 0↓1 / ATK 1500↓1700 / DE  
F 600↓800

ドルウン！ とエンジンを蒸かせる音と共に、フィールドに降り立つ橙色の魔導師。背中に背負った大型エンジンが唸りを上げ、エンジンに繋がったパイプから光の玉がフワリと飛び出る。そしてそれは首元のネックレスの玉の1つにスリリと入り込み、その玉に光が灯った。

「更に『見習い魔術師』を反転召喚し、効果発動！ このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、自分の場の魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く事ができる！ アタシは『ターボ・ウィザード』を選択し、魔力カウ

ンターを更に1つ置く！」

見習い魔術師：ATK 400

ターボ・ウィザード：魔力カウンター 1↓2 / ATK 1700 ↓ 1900 / DEF 800 ↓ 1000

表になった紫のローブを身に着けた魔術師。ボソボソと低い声で呪詛を唱え、大型エンジンを負ったオレンジの魔術師のネックレスに新たな光が宿る。

「そして『ターボ・ウィザード』のモンスター効果発動！ このカードは自身の魔力カウンターを2つ取り除き、エンドフェイズまで自分の場のモンスター1体のレベルを1つ変更できる！ 『ターボ・ウィザード』のレベルを4から5に変更！」

ターボ・ウィザード（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

風属性 / 魔法使い族

ATK 1500 / DEF 600



このカードの召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1つ置く。

このカードの攻撃力と守備力は、このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき200ポイントアップする。

このカードに乗っている魔力カウンターを2つ取り除くごとに、自分の場のモンスター1体のレベルを1つ上げる、または下げる事ができる。

ターボ・ウィザード：魔力カウンター 2↓0 / ☆4↓5 / ATK 1900↓15  
00 / DEF 1000↓600

「レベル2の『見習い魔術師』に、レベル5の『ターボ・ウィザード』をチューニング！」

『ソオイッ！』

『はっ！』

橙の魔術師が4つの星へ変わる。その星は空高く飛び上がると4つの幾何学模様の緑のリングとなつて戻つて来た。リングは一列に並び、その中を紫のローブを纏った魔術師が潜る。

「闇の名を課されし黒き魔導師よ、断罪の刃を以て万難の首を狩れ！」

ヴェールの魔術師は輪郭線を残して2つの星となる。やがて輪郭線すら消え、緑の輪の中を縁に光の柱が生まれた。

☆2+☆5=☆7

「シンクロ召喚！ 切り刻め、『ブラックサイズ・ウィザード』！」  
『はあああああああ、はあっ！』

ブラックサイズ・ウィザード：ATK 2600

光の柱から飛び出したのは黒い魔導師。大きな鎌を構え、重そうな鎧を着ている。羽織った青いマントが、風ではためく。

だが、スロウスはそれを見てニヤリ、と笑った。

「この瞬間、罨カード発ぞおう！ 『カラムיתי・ニードル』ウゥ！ 相手の特殊召喚されたモンスターを選択しい、そのモンスターのレベル×800ポイントのお、ダメージを与えるう〜！」

「な!？」

黒い鎌使いの体が赤色のオーラで覆われ、そのオーラが槍のように尖って真奈ちゃんを襲う。

「きやああああああああっ?！」

「そうはさせるか! カウンター罠『誤った指示』を発動! このカードは、相手が魔法・罠・モンスター効果を発動した時、別の正しい対象にそれを移し替える事ができる! 俺はその効果で『G・S ストーン・ラビット』を対象に選ぶ!」

カラミティ・ニードル (オリジナル)

【通常罠】

相手の場の特殊召喚されたモンスターを1体選択して発動する。

選択したモンスターのレベル×800のダメージを相手に与える。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを2枚ドロウできる。

誤った指示 (オリジナル)

## 【カウンター罠】

相手が魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時に発動できる。

その対象を別の正しい対象に変更できる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、1度だけ相手の発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし、ゲームから除外できる。

赤いオーラの槍は向きを変えて石造りのウサギに命中。そこからコントローラーである俺に命中する。

相手のモンスターを指定する以上、俺達の場のモンスターを選ばなくてはいけないが、仕方が無い事だ。

『G・S ストーン・ラビット』のレベルは2！ よって1600のダメージを俺が受ける！ ぐあああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああつ！」

「黎さあああああああああああああああああん！」

ボタツ、ボタボタボタ……、大量の血の流れる音が腹からする。音の発生源を見ると、腹に大穴が空いていて、そこから血が大量に流れ出ているようだ。

「う、は……………」

『主殿っ！』

これは、いくら頑丈な俺でも、少しヤバいな……。

桜、治療、を……………！

S I D E : 真奈

お腹に大きな穴を空け、アタシの身代わりになって倒れる黎さん。

それを見た瞬間、ブチッ！ 頭の中で何かギレる音がした。だが、そんなモンは今関係はねえ！

「おい、スロウス……………！」

「んあ〜？」

自分でも驚く程に低い声が出る。そしてスロウスの間延びした声が、オレの苛立ちを増長させている。

「テメエ……、覚悟はできてるんだろうなあ？ テメエは2回も、オレの仲間を傷つけたんだぞ……！」

オレがキレた時、図上に『ダーク・ネクロファイア』がいて、『ウイジャ盤』を操作している。そんな話を皆から聞いた事はある。最初は半信半疑だったが、今はハッキリと解る。確かに頭上にソレがある。

要するに、この野郎をぶち殺したくて堪らねえつつー思いが溢れ返って、はらわた腑が煮え繰り返りそうだし！

「んな事知らねえ。オデはただ、殺さねえと面倒臭えから殺すだけえ」

ブチブチッ！ 頭の中の血管が5本ぐらい弾け飛んだだろうが、関係ねえな！

見える……、頭の上に『ウイジャ盤』が。死を宣告する“DEATH”の内、もう既にDとEが浮かんでいる。

「テメエ……、んなフザけた理由で人を殺すのか……っ！」

「ああく？ 邪神様の復活の方が重要だし」

ブチッ！ Aを追加だ。

「そもそも人間の命なんて、ゴミ以下だし」

ブチブチブチッ！ Tも追加してやる。

「スロウス、最期の質問だ。テメエにとって、オレ達人間ってのは、何だ……？」

「あ〜ん？」ゴミ以下あ〜。存在価値なんてえ、邪神様の食事程度お〜」

ブツチイツ！

ふふ、スロウス……。テメエ、自爆スイッチを押した事に気付かねえとは、とんだマヌケ野郎だな！

最後の1文字、Hを追加だこのヤロウ！

「好いだろう、スロウス。ぶち殺してやるから覚悟しやがれ！

魔法カード『魔光の宝札』を発動！ 自分の場に攻撃力2000以上の魔法使い族モンスターが存在する時、墓地の魔法カードを1枚除外し、カードを2枚ドロウできる！  
更にオレは『ブラックサイズ・ウィザード』のモンスター効果発動！ 1ターンに1度、自分の墓地の魔法使い族モンスターを1体デッキに戻し、カードを1枚ドロウできる！」

ブラックサイズ・ウィザード（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）  
星7

闇属性／魔法使い族

ATK 2600 / DEF 1800

魔法使い族のチューナー+チューナー以外の魔法使い族モンスター1体以上

このカードはシンクロ召喚以外の方法で特殊召喚された場合、エンドフェイズに破壊される。

1ターンに1度、自分の墓地の魔法使い族モンスターを1体デッキに戻して発動する。

デッキからカードを1枚ドローする。

引いたカードが魔法カードだった時、相手に見せる事でもう1枚ドローできる。

このカードは元々の攻撃力より攻撃力が800ポイント以上高いモンスターとのバトルでは破壊されない。

「オレは『ライテイー』をデッキへ戻し、カードを1枚ドロー！」

『黎さんをよくも……！ 絶対に許さない！』

引いたカードは……、紫の、宝石で飾つてある壺！

「引いたカードは魔法カード『貪欲な壺』！ よつてもう1枚ドローだ！」

更に『貪欲な壺』を発動！ 墓地の『ファイリー』、『ウインテイー』、『ウオーテリー』、

『ダルキー』、『アーシー』をデッキに戻し、カードを更に2枚ドロー！」



『こんのヤロウ……、覚悟しやがれ!』

『私達の本気を受けてみなさい!』

『彼は、大丈夫でしょうか……』

『大丈夫ですよ。彼はこのくらいで死んだりはしません。そう信じましょう?』

『……桜さんが治療してくれている。私達は私達にできる事をするだけだ』

カードを、引く。

真のデュエリストは、思うがままにドロローの奇跡を引き起こす。

オレは自分がそうだとは言わねえ。だが、もしオレにその才能が欠片でもあるのなら、七鬼神が少しでも力を貸してくれるのなら、頼む、オレに味方してくれ!

「ドロロー!」

これは、オレが望んだ以上のカード!?

「手札から永續魔法『未来融合—フューチャーフュージョン—』、発動! デッキから6人の「フオーチュンレディ」を墓地に送り、2ターン後のスタンバイフェイズに『フオーチュンレディ・アルティ—』を融合召喚する!

だがオレは2ターンも待つつもりはねえ! 速攻魔法『歪んだ未来』を発動! ライフを1000ポイント支払い、『フューチャーフュージョン』の効果で指定した融合モンスターを融合召喚!」

『必殺!』

『フォーチュンレディ式魔術!』

『奥義!』

『究極融合!』

『その眼にしかと!』

『焼きつけよ!』

「現れよ、『フォーチュンレディ・アルティマー!』」

ヒュンヒュンヒュン、身の丈を超える長さの杖を振り回す音が鳴る。カラーリングは黒。意志の籠った目に、悪魔じみた翼に素材とは異なる長い髪。

これが、このデツキの最強モンスターだ!

真奈：LP 2500↓1500

フォーチュンレディ・アルティマー：ATK ?

『我、今ここに在り。我が使命、其は主に仇成す敵の排除なり!』

「『アルティマー』は特殊召喚に成功した時、オレのライフを1000削る」

真奈：LP 1500↓500

一気に2000もライフを使っちゃったのは痛えが、これで準備は整った!

「行くぞ!」 『フォーチュンレディ・アルティイ』は、融合素材とした「フォーチュンレディ」と名のついたモンスターの数で使える効果の数変動し、かつ、レベル×1000の攻守となる! 今、『アルティイ』のレベルは8! よって攻守は8000!」

フォーチュンレディ・アルティイ：ATK ? ↓ 8000 / DEF ? ↓ 8000

「『アルティイ』のモンスター効果発動! 4体以上を素材とした『アルティイ』は1ターンに1度、自分の場のカード1枚を手札へ戻し、ライフを1000ポイント回復する! この時、戻したカードの効果は無効になる!

オレは『フォーチャーフュージョン』を手札へ戻す! 本来なら場を離れた事により『フューチャーフュージョン』の対象である『アルティイ』は破壊されるが、効果が無効化されているため、破壊されない! “エンパイア・ヒール”!」

『マスター、今回復しますぞ!』

真奈：LP 500↓1500

「続いて3体以上を素材とした効果を発動！ 1ターンに1度、手札を1枚捨てて、フィールドのカードを2枚まで破壊できる！ 手札の『フューチャーフュージョン』を捨て、『スロウス』と右の伏せカードを破壊する！ ♪パニツシュ・ブレイク♪！」

「無駄あく。オデはカードを受けねえ〜！」

「チツ〜！」

三角形の砲撃。それが憎いあいつ自身と伏せカードを狙うが……。ニブいスロウスらしいな、まるで効いてねえ……。っ！

「だったら、2体以上のモンスター効果を発動！ エンドフェイズまでレベルを1つ下げ、カードを1枚デッキからドロ〜！ ♪スター・ドロ〜！」

フォーチュンレディ・アルティ（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星8

光属性／魔法使い族

ATK ? / DEF ?

「フォーチュンレディ」と名のついたモンスター×2体以上

このカードの攻撃力・守備力は、このカードのレベル×1000ポイントになる。

自分のスタンバイフェイズ時に、このカードのレベルを1つ上げる（最大レベル12まで）。

このカードの融合召喚に成功した時、プレイヤーは1000ポイントのダメージを受ける。

このカードはこのカードの融合素材に使用したモンスターの数に応じて以下の効果を得る。

●2体以上：1ターンに1度、このカードのレベルをエンドフェイズまで1つ下げ、デッキからカードを1枚ドロウする。

●3体以上：手札を1枚墓地に送る事で、1ターンに2枚まで場のカードを破壊できる。

●4体以上：1ターンに1度、場の魔法・罠カードを1枚元々の持ち主の手札に戻し、このカードのコントロールはライフを1000ポイント回復する。この時戻したカードの効果は一切発動できない。

フォーチュンレディ・アルティイ：☆8↓7 / ATK 8000↓7000 / DEF 8000↓7000

1枚引くが……、チツ、良いカードじゃねえか。

「バトル！ 『アルティイ』で『スカル・ソードジェネラル』を攻撃！ // アルティイマティ

ズム・デストラクション！」

『消し飛びなさい！』

これが入れば、奴に3600のダメージが入る。4万を超えたライフ相手には物足りないが、ダメージに変わりは無いだろ！

「罨発動う！ 『倍打（ばいだ）惰眠（だみん）』く！ 相手の攻撃でえ、対象モンスターがバトルで破壊された時の、ダメージをオデは受けず、倍のダメージを相手は受けるうく！」

「何だと!?!」

無限の破壊の光線が、スロウスに当たるハズの攻撃が、オレに跳ね返って来る。

マズい！ 黎さんの墓地の『ダメージ・ダイエツト』を除外しても、耐え切れない!?

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 45 : 覚醒する闇の神 ★

SIDE : 無し

真奈の最強モンスター、『フォーチュンレディ・アルティイ』の攻撃は、スロウスのモンスター、『スカル・ソードジェネラル』を巨大な光線で吹き飛ばす事に成功する。

しかし、スロウスの発動させた『倍打惰眠』の効果で、そのダメージは真奈に倍の数値となって跳ね返った。

倍打惰眠（オリジナル）

【カウンター罠】

相手モンスターの攻撃によって自分の場のモンスターが破壊された時にのみ発動できる。

その戦闘によって自分が受けるダメージは0となり、相手は発生したダメージの倍のダメージを受ける。

「チツクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

『おのれ邪神があああああああああつ！』

雨の如く降り注ぐ光線の雨。それを目前にして、真奈と『アルティ―』は打つ手無く叫ぶ事しかできなかつた。

そして、無数の破壊の雨が降り注ぎ、もうもうと土煙が舞つた。



「ぐうおおおおおおおおおおおおおおっ!?!」

スロウス : LP 47300 ↓ 43600

「え……?」

『一体、何が……？』

しかし、ダメージを受けたのはスロウスの方だった。

真奈は身を守るように前に出していた腕を下げ、何が起こったのか、目を見開いてその情景を見ている。

「墓地の、『誤った指示』を除外、した……。この効果で、1度だけ、カード効果を無効にし、除外できる……！」

よく見れば、バジバジバチツ！ と『倍打惰眠』のカードが赤いスパークキングを上げながら、機能不全を起こしている。そのまま空間の歪んで溶けてしまった。

それよりも、自分の隣でしたこの声。その持ち主は間違い無く……。

「れ、黎さん……！」

「悪い、心配かけた。今回は真面目にヤバかったよ……」

そう、彼女と共闘している少年、遊馬崎黎だった。

S I D E : 黎

「ありがとうな、桜」

『これが私の役割だからな』

桜の回復が間に合ったお陰で間一髪、補助カードの発動が間に合い、俺は胸を撫で下ろす。

そしてフィールドを一瞥する。

黎：LP 150

手札：0枚

フィールド

：L・S レストア・チェリー（DEF 1600）、No. 83ギヤラクシー・クイーン

（DEF 500）、スターダスト・ドラゴン（DEF 2000）、G・S ストーン

・ラビット（DEF 0）

：伏せカード1枚

真奈：LP 1500

手札：4枚

フィールド

：ブランクサイズ・ウィザード（ATK 2600）、フォーチュンレディ・アルティマー

（ATK 7000）

：伏せカード1枚

スロウス：LP 43600

手札：3枚

フィールド

：七罪士 スロウス（ATK 13500）

：伏せカード1枚、軽金属の正装（永続魔法）、超過重力空間（フィールド魔法）

「状況は好転せず、か」

「うう、すみません……」

さつきまで背中に浮かんでいた『ウイジャ盤』が消滅し、真奈ちゃんの全身から放たれていた覇気が消える。怒りのパワーが無くなったか収まったのだろうか。

桜の治療は服にまで影響するらしく、大穴の空いていた服ごと、俺の体は治っている。が、それとこれとは無関係。さて、どうしたら良いものか……。

頭をフル回転させて、打開策を考えていた時だった。

【その童と小娘、そして我が宿主よ】

「『!?!』」

どこからともなく聞こえて来た声。

どこだ？　そして、誰だ？

何より、この重くも優しい感覚は、気配は、何だ？

【妾わらわの声が聞こえておるか、その3人？】

「誰だ？」

「ど、どこにいるんですか？」

『姿を現してもらおうか？』

【それはまだできぬ相談じゃな。じゃが、名前を名乗るくらいはできる】

古風めかした喋り方。声は女性のものだが、年齢を推察させない、不思議な声だ。老婆とも、幼女ともつかない。或いは若い女性かもしれないし、ともすればボーイソプラノを持つ少年のように感じてしまう人もいるかも知れない。

クスクスと笑いながら声の主は語る。もしか、この声の主は真奈ちゃんの……。

【妾は七究神が一角。名はとうの昔に失われた、闇の神じゃ】

「闇の、神……」

【どうやらお主ら、彼奴を相手に苦戦きやっしているようじゃな。なんとも情けない】

『そう言われると、返す言葉も無いな』

【さて、この戦いに負ければ宿主の体は消える。そうになると、その魂の中で眠っておる妾も必然的に消えるワケじゃ】

提案があるのじゃが、そう闇の神は告げた。

提案？ と返す真奈ちゃんに、闇の神は言葉を返す。

【然様。この戦い、負ければこちらに利は皆無じゃ。故に、妾も力を貸すえ？】

「どうすれば、良いんですか……?」

【容易い事じゃ】

それはな、と勿体ぶる闇の神。固唾を吞んで俺達は言葉の先を待つ。

【妾を呼べ。さすれば後は、妾が全ての決着をつけてしんぜようぞ?】

!?

「正気か、七究神……。アンタの力は眠っているとされる今ですら、国が2〜3年は楽に運用できるエネルギーだ！それが覚醒なんてしてみる、この世界まるまる吹っ飛ぶ可能性だってあるんだぞ！」

【じゃが、もう打つ手はあるまい？】

「っ！」

【安心せい。まだ眠いが、その程度の力のコントロールもできぬようでは神は名乗れぬよ。何より、無意味に世界を破壊するような力を放出すれば、妾自身も危険じゃからう。】

……………信じて、良いんだな？

【言つたハズじゃ。負ければ妾も死ぬ、とな。妾はまだやるべき事がある故、死ぬ訳にはいかぬのじゃ。何より……………】

「何より？」

【この子を死なせてしまうのは、妾にとって避けたい事なのじゃ】

「あ、アタシですか？」

【妾はこの子が生まれる前から共にあつた。言うなれば我が半身じゃ】  
成程、半身を失いたくは無いと。

ま、筋は通つてるし、彼女？の言う事が真実なら、こつちにもデメリットは無い。○  
K、協力しよう。

【物分かりが良いのお、童。それで、妾を場に出す方法じゃが、ちと面倒での……………】  
闇の神は唐突に齒切れが悪くなる。



「今から言う素材をそれぞれ用意し、エクシーズ召喚するのじゃ。それで全てが完了する」

挙げられた素材を、俺は寸分違わずに記憶する。難しいが、やってできない訳じゃ無い。

「OK、覚えた」

「フッフ、頼むえ、*“騎士”*の魂とやら？ この子の未来、今暫くお主に預けるぞ？」

「任せてくれ。アンタにバトンを渡すまで、必ず守りきる！」

「その時はお願いします」

『我々への御助力、感謝します』

「クスクスクス、妾も丸くなったものよのお。では、また後で会おうぞ？」

フツ、と気配が消える。どうやらあの闇の神の気配だったらしい。

さて、やる事は決まった。後はそれを実行するだけだ！

「真奈ちゃん、目的は決まった。そこ目指して突っ走るよ！」

「はい！ アタシはカードを1枚伏せて、『ギヤラクシー・クイーン』の効果発動！

相手ターンのエンドフェイズまで、自分の場のモンスターはバトルでは破壊されず、貫通

効果を付与される！ ターンエンド！」

No. 83ギヤラクシー・クイーン：ORU 1↓0  
 フォーチュンレディ・アルティール：ATK 7000↓0↓8000 / DEF 70  
 00↓0↓8000

本来なら、バトルが終了した時点で『アルティール』の攻撃力と守備力は元々の数値の半分になる。つまり、元々の数値0の半分なので、0だ。しかし、エンドフェイズに新しく上塗りされたらどうだろうか。

先刻、『コンバット・ウルフ』の攻撃力は『虚栄巨影』で上昇した。つまり、あくまで『超過重力空間』の影響はあっても後から生まれた効果で上塗りする事は可能という事だ。それを皮肉にも、スロウス自身の攻撃を迎え撃つために俺が使ったカードで、つまり奴自身の行動が証明してしまった。

『アルティール』の効果でのレベルダウンはエンドフェイズに切れる。つまり、"攻守が攻撃をしたら元々の数値の半分になる"効果の後、"レベル×10000の攻守になる"効果が再び適応されたのである。

真奈：LP 1500

手札：手札3枚

フィールド

・ブラックサイズ・ウイザード (ATK 2600)、フォーチュンレディ・アルティマー (ATK 8000)

・伏せカード2枚

「オデのタ〜ン！」

場に伏せたカードは1枚。攻撃にもカード効果にも適応しないカードだ。が、このターンさえ乗り切れば、闇の神を召喚の布石を出す事で、勝利への流れを取れる！

「オデは墓地の『F・G・D』をゲームあら除外しい、パワーアップウ〜！」

七罪士 スロウス：ATK 13500↓18500 / DEF 13000↓18000

「攻撃力、18500……」

「まず、単純な戦闘で倒す事は不可能だな……」

攻撃力18500、こんな攻撃力はアニメだろうが原作だろうが滅多に無い。一応、無限大の攻撃力を持つモンスターが過去に何体かいたがこれは例外とカウントし、攻撃

力が1万を超えたモンスターは『サイバー・エンド・ドラゴン』か、『機皇帝グランエル』や『機皇神マシニクル∞・』、ゾーン戦の『スターダスト・ドラゴン』くらいしか思い浮かばない。

「更に魔法カード『ダブルバースト』を発動であらう。これでこのターン、オデの場のモンスター1体はあ、攻撃力が倍になって2回攻撃ができるうらうら！」

ダブルバースト（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場に存在する闇属性モンスターを1体選択して発動する。

エンドフェイズまで攻撃力は倍になる。

相手の場にモンスターが2体以上存在する場合、選択したモンスターはこのターン2回攻撃ができる。

七罪士 スロウス：ATK 18500↓37000

「攻撃力3万オーバーの2回攻撃だとお!?!」

「更にい、速攻魔法『イリーガル・レコンストラクション・エンジン』。長え、メンド

クセエ……」

イリーガル・レコンストラクション……、I l l e g a l R e c o n s t r u c t i o n  
違法改造!<sup>!</sup>

「このカードはあ、自分の場のモンスターの攻撃力が上がった時に発動できるう。攻撃力は更に倍になるう」

イリーガル・レコンストラクション・エンジン（オリジナル）

【速攻魔法】

自分の場のモンスターの攻撃力がアップした時にのみ発動できる。

そのターンのエンドフェイズまで、攻撃力は倍になる。

七罪士 スロウス：ATK 37000↓74000

『『攻撃力74000っ?!』』

その場にいたスロウス以外の全員が驚いたのは言うまでも無い事だ。

最初、スロウスの体が赤い光に包まれて倍に。そこから、どこからともなく現れたエンジンからのプラグが差し込まれ、更に倍に。結果、攻撃力は歴代でも見た事の無いくらいレベルになってしまった。



ATK 1900 / DEF 2300

(1) : このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の場のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

(2) : このモンスターが存在する限り、戦闘によって破壊されない効果、および戦闘ダメージを0にする効果は無効となる。

「バトル〜！ 『ペネトレーション・プテラザウル』で 『ストーン・ラビット』を攻撃〜！」

『ギイイイイイイイイイイイイイイッ！』

「そうはさせるか！ 『G・S ストーン・ラビット』のモンスター効果、発動！ このカードが攻撃の対象にされた時、こいつをリリースしてバトルフェイズを強制終了させる〜！」

G・S ストーン・ラビット (オリジナル)

星2

地属性 / 岩石族

ATK 500 / DEF 0

このカードが攻撃の対象に選択された時、このカードをリリースする事でバトルフェイズを強制終了する事ができる。

このカードを手札から捨てる事で、「G・S」と名のついたモンスターとの戦闘で自分に発生するダメージは0になる。

猛烈な勢いで突進する翼竜に、正面からぶつかる石のウサギ。ぶつかった瞬間に粉々にウサギは砕け散ったが、飛び散った石の破片が相手の場に降り注ぎ、動きを阻害した。「ぬうううううっ！ オデはカードを3枚セットオ〜！ 更に墓地の『環状の爆発』を除外しい、手札が5枚になるようにカードをドロ〜！」

無くなったと思ったスロウスの手札がまた装填される。

妙だ。これまででスロウスは40枚以上のカードを消費している。奴のデッキは少なくとも半分以下になってなくてはいけない。が、あいつのデッキの厚みはデュエル開始の時点からほぼ変わっていない。

最悪、奴のデッキは無限の枚数で構成されている可能性もある、か？ だとすると、デッキ破壊の使い手は相性がこの上なく悪いな……。

「これでターンエンド〜」



七罪士 スロウス : ATK 74000 ↓ 18500

スロウス : LP 43600

手札 : 5枚

フィールド

: ペネトレーション・ペテラザウル (ATK 1900)、七罪士 スロウス (ATK 18500)

: 伏せカード3枚、軽金属の正装 (永続魔法)、超過重力空間 (フィールド魔法)

「俺のターンだ」

さて、スロウスの攻撃は防げたものの、俺達の状況は一向に好転していない。

伏せたカードにはライフコストが必要だし、早めに発動しておく必要がある。デッキの残り枚数は30枚をとこの昔に切っている。ヘタしたらこのカードの発動でデッキが消える可能性だってありえるワケだ。

さて、デッキトップのカードをドロウするべき、か。最悪、こいつは『非常食』か何かのコストにでもしちまえば問題無いだろう。

「ドロー！」

っ、これは！

どうやら、運命とやらは俺にこのカードを使わせたいらしいな！

「手札から魔法カード『至高スプレマシー・ベリーの木の实』を発動！ このカードは、相手と俺、どちらのライフが下かで効果が変化する！俺が下なら2000ポイントのライフゲイン、相手が下なら1000ポイントのダメージを受ける！」

至高の木の实

【通常魔法】

このカードの発動時に、自分のライフポイントが相手より下の場合、自分は2000ライフポイント回復する。

自分のライフポイントが相手より上の場合、自分は1000ポイントダメージを受ける。

「お前のライフは43600なのに対し、俺のライフは僅か150！当然、俺の方が低い！よって俺のライフは2000ポイント回復する！」

黎：LP 150↓2150

さあ、逆転劇の始まりだ！

「畏カード、オープン！ 『活路への希望』！ このカードは、自分のライフポイントが相手のライフポイントよりも少ない時に発動できる！ ライフを1000ポイント支払い、ライフポイントの差2000ポイントにつき1枚、カードをドロウできる！」

黎：LP 2150↓1150

スロウス：LP 43600

「ライフの差は42450！ よってデッキからカードを21枚ドロウ！」

活路への希望

【通常畏】

自分のライフポイントが相手より1000ポイント以上少ない場合、1000ライフポイントを払って発動する事ができる。

お互いのライフポイントの差2000ポイントにつき、自分のデッキからカードを1

枚ドローする。

ジャジャジャツ、とデッキからカードを補充する。邪神の護衛連中が驚異的な枚数をドローするのはそろそろ慣れて来たものだが、まさか自分がこんな枚数をドローするとは思ってもよらなかったぜ。

デッキの残り枚数は目算でもはつきりと5枚を下回っている。セーフ。

チャツ、と手札を見ると、カード達意思を持ったかのように、最高のカード達が揃っていた。ありがとう、俺のデッキ。まあこれだけ引けば当然だろうとか言わない。野暮だよ。

「まずは手札を1枚墓地へ送り、桜の効果でライフを500回復！ 手札の『クイック・シンクロン』を墓地へ送る！」

『はあっ！』

LP 1150↓1650

「チューナーモンスター『G・S シールド・ゴリラ』を召喚！」

『ウホ！』

G・S シールド・ゴリラ：DEF 2300

「モンスター効果発動！ このカードが通常召喚に成功した時、自分の手札からレベル4以下の『G・S』と名のついたモンスターを1体特殊召喚できる！ 現れる、『G・S

ターボ・バッファロー！』

『ブモオオオオオオオオオオッ！』

G・S ターボ・バッファロー：ATK 1700

「レベル4の『ターボ・バッファロー』に、レベル4の『シールド・ゴリラ』をチューニング！」

両腕に、左右のそれを合わせれば全身が隠れそうな盾を持った。巨大なゴリラが空中へと飛ぶ。4つの星に姿を変え、更にその星は4つの緑の輪になる。一列に並んだ輪の中を、ジェットノズルを背負った水牛が潜る。

「大いなる大地の恩寵、穿ちて砕く鋼の剛槍！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆4＋☆4＝☆8

「シンクロ召喚！ 掘り進め、『G・S モール・ドリラー』！」  
『ヘエ〜イ！』

G・S モール・ドリラー：ATK 2800

ギユイイイイン！ と派手なドリルの音を立てながら、光の柱から出て来たのは擬人化したモグラだ。両腕に装備した掘削機が鈍い光を放つ。

「モンスター効果発動！ 1ターンに1度、このカードをゲームから除外し、除外されたモンスター1体を特殊召喚できる！ 更にこの時、手札を1枚捨てる事で、墓地のモンスターを1体、手札に加える事ができる！」

蘇れ！ 『G・S ランチャー・トータス』！ 更に手札の『マグネット・ウォリアーβ』を捨てて、墓地の『メガロック・ドラゴン』を手札に戻す！」

G・S シールド・ゴリラ（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／獣族

ATK 0 / DEF 2300

このカードは1ターンに1度、バトルでは破壊されない。

このカードの通常召喚に成功した時、手札に存在する「G・S」と名のついたレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚できる。

G・S モール・ドリラー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星8

地属性／獣戦士族

ATK 2800 / DEF 1900

「G・S」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、このカードを次の自分のターンのスタンバイフェイズまでゲームから除外する事で、ゲームから除外されたこのカード以外のモンスターを1体特殊召喚できる。

この時、手札を1枚捨てる事で、墓地に存在するモンスターを1体手札に加える事ができる。

ドリルを喰らせて地面に潜り込む人型モグラ（逆か?）。その穴からは入れ代わりに砲台を背負った陸亀が現れた。

更にその中へ『マグネット・ウォリアーβ』のカードが沈むように入って行くと、『メガロック・ドラゴン』のカードが入れ替わりに飛び出して来た。

G・S ランチャー・トータス：DEF 2200

「更に俺はレベル4の『ランチャー・トータス』に、レベル4の『レストア・チェリー』を、桜をチューニング!」

『グガッ!』

『さあ、その眼に焼き付けるが良い!』

「新緑の恵み、大いなる大地の恩寵、交わりて薫風が今こそ煌めく! 希望が溢れる明日となれ!」

☆4+☆4||☆8

「シンクロ召喚! 舞いて輝け!

『G・L・S』

『ダイヤモンド・チェリー!』



『テヤツ！』

G・L・S ダイヤモンド・チェリー：ATK 2500

キュイン、と降り立つ桜。ライトシアンの鎧はダイヤモンドのように輝き、手にした剣は剣呑な光を放っている。

この間、デツキを調整している時は驚いたものだ。本来ならば異なる“S”同士がシンクロ素材となる場合、片方は“チューナー以外のモンスター”としてカウントされる。だが、桜だけはこうして別の“S”とシンクロして新しい力になれる。彼女には何か特別なものがあるのかも知れない。

「更に魔法カード『痛み分け』を発動！ 自分の場のモンスター1体をリリースし、相手はモンスター1体をリリースしなくてはならない！ 『ギヤラクシー・クイーン』をリリースだ！」

オーバーレイ・ユニットを全て失った以上、『ギヤラクシー・クイーン』を場に残し続けるワケにはいかない。申し訳無いとは思いますが、御寛恕願おう。

痛み分け

## 【通常魔法】

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

相手はモンスター1体をリリースしなければならない。

「ちなみにこの効果はプレイヤーに直接かかるものだから、モンスター効果では防げない！」

「なあらば、罨カード発動であらう。『悪魔の笛』ええ。モンスターのリリース、リリースする効果を無効にして破壊しい、相手に1000ポイントのダメージを与える！」

「そうは行くか！ 『スターダスト・ドラゴン』のモンスター効果発動！ フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、このカードをリリースしてそれを無効にし、破壊する！ ヴィクティム・サンクチュアリ！」

「カウンター罨発どおう！ 『邪神罰』うう！ モンスター効果を無効にする！」

スターダスト・ドラゴン（シンクロ・効果モンスター）

星8

風属性／ドラゴン族

ATK 2500 / DEF 2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚できる。

悪魔の警笛（オリジナル）

【通常罠】

フィールド上のカードをリリースする効果、およびモンスターのリリースを無効にし、破壊する。

更に相手に1000ポイントのダメージを与える。

邪神罰（オリジナル）

【カウンター罠】

相手効果モンスターの効果を無効にし、ゲームから除外する。

このターン、相手はモンスター効果の発動および適応ができない。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、相手の効果モンスターの効果

の発動を無効にして破壊し、その攻撃力分のダメージを与える。

「うっ、クソ！」

こちら側の魔法カードの発動を止めようとしたスロウス。そのカードの発動を『スターダスト』で止めようと俺は考えた。最も、考慮してしかるべきだったが。

銀色の風は、一瞬で地の底から湧きあがった黒い雷に焼き払われてしまった。そのまま黒い雷は俺に直撃する。俺は咄嗟に絶縁体の盾で防ぐ。好い加減に慣れて来たものだ。

「ええい、畜生め……っ！」

『スターダスト』が……！」

地団太を踏み、雷を受け止める俺。だが、これで良いのかも知れねえな。

俺がするべき事は、ここに飛ばされてしまった誰かをサポートする事。ならば、スロウスの伏せカードを彼女が行動を起こす前に潰すのは得策だろうな。

黎：LP 1150↓150

「ならば俺は2枚目の『至高の木の実』を発動！ ライフを再び2000ポイント回復

！」

2枚積みしておいたのは正解だったぜ。

黎：LP 150↓2150

「魔法カード『魔法石の採掘』、発動！ 手札を2枚捨てて、墓地の魔法カードを1枚手札に加える！」

魔法石の採掘

【通常魔法】

手札を2枚捨て、自分の墓地の魔法カード1枚を選択して発動する。  
選択したカードを手札に加える。

「手札から『ギガストーン・オメガ』と『地球巨人 ガイア・プレート』を捨てて、墓地から『死者蘇生』を手札に加える！」

続いて『ギガストーン・オメガ』をゲームから除外し、『ギガンテス』を特殊召喚！  
『グゴオオオオオオオオ！』

ギガンテス：ATK 1900

地面が突如として罅割れ、そこから這い出す鬼。橙色の肌に赤い瞳、そして大きな木製の棍。パワーはそこそこ、能力もそこそこ。簡単に特殊召喚できるからという理由でデッキに投入していたのだが、役に立ったようだ。

ギガンテス（効果モンスター）

星4

地属性／岩石族

ATK 1900／DEF 1300

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の地属性モンスター1体をゲームから除外して特殊召喚する。

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、フィールド上の魔法・罨カードを全て破壊する。

「続いて『死者蘇生』を発動！ 蘇れ、『G・S ランチャー・トータス』！」

『ゴッ!』

G・S ランチャー・トータス：DEF 2200

「レベル4の『ギガンテス』と『ランチャー・トータス』をオーバーレイ！ 2体のモンスターを使って、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4×☆4＝★4

「エクシーズ召喚！ 鋼の拳でぶん殴れ！ 『G・S アイアン・カンガルー!』」  
『ハッハア!』

G・S アイアン・カンガルー：ATK 2300

「モンスター効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、攻撃力を10000ポイント下げて、このターン『アイアン・カンガルー』はダイレクトアタックができる！」  
『アイヤ〜! 燃えて来たぜえ〜!』

G・S アイアン・カンガルー：ORU 2↓1/ATK 2300↓1300

パン、と光の玉が、グローブを装着したカンガルーの額へと消える。全身に赤いオーラを纏ったカンガルーは体を若干小型化させながらも、代わりに俊敏な動きを手に入れた。

「バトル！ 桜で『ペネトレーション・プテラザウル』を攻撃！  
はおうごうしゅうざん 覇桜剛襲斬！」

『金剛石の一太刀、受けてみよ！』

斬！

シアンブルーに輝く剣が、空中に煌めく。空高く舞う剣は、過たずに翼竜へと届く。

「畏カード発動だあく。『ブラック・ライフガード』おく。オデがこのターンに受ける戦闘ダメージは無効になってえ、相手の元々の攻撃力だけオデのライフは回復く」

「何のために『アイアン・カンガルー』を出したと思ってる！ 『G・S アイアン・カンガルー』が俺の場に存在する限り、1ターンに1度だけ相手がバトルフェイズ中に発動した畏の効果は無効にできる！」

G・S アイアン・カンガルー（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）



ランク4

地属性 / 獣戦士族

ATK 2300 / DEF 1400

レベル4の「G・S」と名のついたモンスター×レベル4モンスター

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、1ターンに1度、自分のバトルフェイズ中に相手が発動した罠カードの効果は無効にできる。

1ターンに1度、エクシーズ素材を1つ取り除く事で、攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイント下げ、このターン相手に直接攻撃する事ができる。

斬！ 闇の盾ごと斬り裂いた桜の剣は翼竜のドス黒い血に塗れる事もなく、シユン、と一振りされる。

スロウス：LP 43600 ↓ 43000

『『ダイヤモンド・チェリー』の効果発動！ このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、そいつの元々の攻撃力か守備力分だけ俺のライフを回復する！』

『仇の血よ、我が主の力に！』 『ダイヤモンド・フォース！』

「おくとお。墓地の『邪神罰』を除外しいく、効果を無効にして破壊するく！」  
 「ご生憎だったな！ 『ダイヤモンド・チェリー』は相手のカード効果では破壊されず、効果を無効にされない！」

黎：LP 2150↓4450

「更に、このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、自分の場のモンスター1体の攻撃力を500ポイントアップさせる！ 対象は『アイアン・カンガル』！」  
 『仇撃ちし刃、我らに更なる力を！ エメラルド・シャープ』！』

G・L・S ダイヤモンド・チェリー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）  
 星8

地属性／戦士族

ATK 2500／DEF 2100

「L・S レストア・チェリー」＋「G・S」と名のついたモンスター1対以上

このカードは「G・S」と名のついたモンスターとしても扱う。

このカードの効果は無効化されない。

このカードは相手のカード効果では破壊されない。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力か守備力分、自分のライフポイントを回復する。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、自分の場のモンスター1体の攻撃力は500ポイントアップする。

G・S アイアン・カンガルー：ATK 1300↓1800

「お次は『アイアン・カンガルー』でダイレクトアタック！ //メタル・ナックル”！」

『アイ〜ヤツハアツ！』

「グオ……い！」

スロウス：LP 43000↓41700

バキィッ！ と拳が炸裂。アツパー気味の一撃を顎に受け、スロウスは体勢を崩す。

「速攻魔法『セベクの祝福』！ ダイレクトアタックに成功した時、その与えたダメージ分、俺のライフを回復する！ 1800ポイントのライフを回復だ！」

## セベクの祝福

## 【速攻魔法】

自分のモンスターが相手プレイヤーへの直接攻撃に成功した時に発動する事ができる。

その時相手に与えた戦闘ダメージの数値分だけ自分のライフポイントが回復する。

エジプトの伝承に名を残す、ワニの頭を持つ神が、光を振りまいて俺の傷を癒す。これで俺のライフは即死の危険性が減ったと考えると良いだろう。

黎：LP 4450↓6250

「だが、そいつらはあ、『超過重力空間』の効果で攻守が半減するうゝ」  
「解っている」

G・L・S ダイヤモンド・チェリー：ATK 2500↓1250

G・S アイアン・カンガルー：ATK 1800↓1150

『ぬう……っ！』

『重い……っ！』

片膝をつき、襲いかかる重量に必死で耐える二人。もう少しだけ頑張ってくれ！

「カードを5枚伏せて、このエンドフェイズ、『アイアン・カンガルー』の攻守が元に戻る」

G・S アイアン・カンガルー：ATK 1150↓2150

下がった分が戻っただけか、やはり。このフィールド魔法は攻守の再変動にまでは関与していない。

「ターンを終了する！」

黎：LP 6250

手札：6枚

フィールド

：G・L・S　ダイヤモンド・チェリー（ATK　1250）、G・S　アイアン・カ  
ンガルー（ATK　2150・ORU：1）

：伏せカード5枚

「アタシのターン！」

真奈ちゃんが気合一閃、カードを引く。

「真奈ちゃん」

「はい？」

「俺のデッキは今のドロウ加速で殆ど残っていない。残り枚数は1枚か2枚。加えて、次のスロウスのターンに奴の攻撃力は2万を超える。できればこのターンか、次のターンにはケリを着けたい」

俺は手札のカードの1枚を指す。

「手札カードの内、1枚は蘇生カードだ。これで俺のエンドフェイズに『アーシー』を蘇生できれば、比較的安全に素材の1体を確保できる。後は、君次第だ。

残念ながら、素材となるモンスターは俺のデッキには入っていないもんでね、君のサポートという形になってしまう。すまない」

「大丈夫だよ。アタシの伏せカードと組み合わせれば、まだ何とかなる、ハズ」

彼女の言葉に思わずハズかい、とツッコむ。

それに対して彼女はハズだよ、と返す。

「あんなカードばっかじゃ、例え薙冴先輩でも確実に勝つのは難しいだろうから……。でも、100%の可能性で勝つ事はできないけど、99%の可能性で勝つ事はできる！ 怠惰？ アタシが嫌いな言葉だ。何もせず、グウタラしてるだけなんてのは、性にも理念にも合わない！ アタシは、あいつに勝つ！ 怠けてる事が能の奴になんか負けない！」

行くよ、スロウス！」

「来おい！」

「このスタンバイフェイズ、『アルティ』のレベルが上がる！」

『ハアアアアアアアアアッ！』

フォーチュンレディ・アルティー：☆8↓9 / ATK 8000↓9000 / DEF 8000↓9000

「まずは『ブラックサイズ・ウィザード』の効果で、墓地の『見習い魔術師』をデッキへ戻し、カードを1枚ドロロー！ 引いたカードは魔法カード『二重召喚』！ よつてもう

「一枚ドロー！」

真奈ちゃんは勢い良く、手札からカードを一枚ディスクに叩きつける。

「更に場の2体のモンスターをリリース！ ごめん、二人とも！」

「無問題なり。この身、勝利のための贅となるのならば本望！」

「『ブラック・マジシャン』をアドバンス召喚！ ルーン、もう1度お願い！」

「再び参ります！」

ブラック・マジシャン：ATK 2500

バサツ！ とロープをはためかせ、黒魔術最高峰の魔導師が推参。険しい表情で杖を構えてスロウスを見据えている。

「更に魔法カード『二重召喚』を発動！ これでアタシはこのターン、2回目の通常召喚

ができる！ チューナーモンスター『夜薔薇の騎士<sup>ナイトローズナイト</sup>』を召喚！ ナイト、お願い！」

「テエヤツ！ 行きますす！」

夜薔薇の騎士：ATK 1000



ジャキン！ 剣を引き抜いて飛び出したのは小柄な剣士。黒い鎧に銀の髪が映える。シンクロを扱う植物族デッキなら一枚差さる、良モンスターだ。

「モンスター効果発動！ 手札から『ロードポイズン』を特殊召喚する！」  
『お願いします！』

ロードポイズン：ATK 1500

夜薔薇の騎士（チューナー・効果モンスター）

星3

闇属性／戦士族

ATK 1000 / DEF 1000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は植物族モンスターを攻撃対象に選択する事はできない。

このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下の植物族モンスター1体等特殊召喚する事ができる。

ロードポイズン（効果モンスター）

星4

水属性／植物族

ATK 1500／DEF 1000

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、自分の墓地に存在する「ロードポイズン」以外の植物族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

黒い鎧の剣士が剣を天に向ける。その切っ先からズルズルと這い出すように樹木が、否、毒々しい液体を滴らせた腕の映えた樹が出て来た。

これで終わらせないと言わんばかりに、俺は更に伏せたカードを表にする。

『『ロードポイズン』の特殊召喚にチェーン！ 罨カード『回転草』！』

このカードは、自分の場に植物族モンスターが特殊召喚された時、そのモンスターのレベル2つにつき1体の『タンブルウィード・トークン』を特殊召喚できる！」

回転草（オリジナル）（改訂版）

【通常罨】

（1）：自分の場に植物族モンスターが特殊召喚された時に発動できる。

「タンブルウィード・トークン」（植物族・地・星2・攻／守0）を2体、攻撃表示で特

殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたトークンとの戦闘で自分が受けるダメージは倍になる。

ポンポン、と西部劇でお馴染みの回転する枯れ草が現れる。デフォルメされた目が可愛らしい。

ロシアアザミとも呼ばれるアカザ科のこの植物は、最初から丸い。果実が成熟すると、風に乗ってコロコロ転がり、種子を撒き散らす。乾燥地や塩性に多く生息する植物である。

タンブルウィード・トークン：ATK 0  
 タンブルウィード・トークン：ATK 0

実の所、このデッキに入っている植物族モンスターは1体だけだ。ならば何故『回転草』を入れたのか。それは真奈ちゃんがエクストラデッキに『ブラック・ローズ・ドラゴン』を入れたのを知っているから。

あのモンスターをシンクロ召喚する際、最も相性の良いモンスターの内の1体が『夜薔薇の騎士』だ。そしてそれならば『回転草』で2体のトークンと呼べる。

まあ、彼女の精霊の内の1体が『夜薔薇の騎士』だった事も一因なんだけどね。

「行け、真奈ちゃん！俺がサポートするから、黒薔薇の嵐で全て薙ぎ払え！」

「了解！レベル4の『ロードポイズン』にレベル3の『夜薔薇の騎士』をチューニング！」

『我が力、見せてあげましょう！』

ジャキツ！とナイトが高く掲げた剣に光が宿り、そのまま三閃。剣の軌跡は緑の輪となり、ナイトはそのまま消えた。

一列に輪が並び、その中心を『ロードポイズン』が潜る。

「真紅の薔薇を纏いし黒き龍よ！数多の命を糧に深き眠りから目覚めよ！」

☆3+☆4=☆7

「シンクロ召喚！咲き誇れ、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！ラブ、セエツト・アアツプ！」

『ギャアウウウウウウウウウウツ！』

ブラック・ローズ・ドラゴン：ATK 2400

バサッ！ と広げられる、深紅の薔薇の翼。黒いからだに鱗のように咲く赤い薔薇。刺の生えた尾が振り上げられ、その存在感を周りに振り撒く。

「ラブのモンスター効果、発動！ シンクロ召喚に成功した時、場のカードを全て破壊する！ ブラック・ローズ・ガイル！」

「だがあ、オデは相手のカード効果を受けない〜」

「狙いはリセット効果じゃない！ 罠カード発動！ 『シンクロ・バリア・フォース』！」

シンクロ・バリア・フォース（アニメオリジナル）

#### 【通常罠】

フィールド上のカードを破壊する効果を無効にする。

この時、自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体につき相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える。

「この効果で、ラブの破壊効果は無効化され、自分の場のシンクロモンスターの数×500ポイントのダメージを与える！」

「今、俺達の場にいるシンクロモンスターは桜とラブの2体！ よって1000ポイン

トのダメージを受けてもらう！」

ギユウン、と赤い結界が俺達を覆う。

吹き荒れていた風と黒薔薇の花弁は収まり、スロウスのライフが削れる。

スロウス：LP 41700↓40700

「ぬお……」

「真奈ちゃん！」

「はい！ 最初の素材、揃った！」

「アタシはレベル7のルーンとラブをオーバーレイ！」

「ラブ、準備は良いですか？」

『ギャウツ！』

「2人とも、お願い！ 2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

『ハアツ！』

『ギユウツ！』

ルーンが紫、ラブが赤色の光に姿を変える。二筋の光は空へと勢い良く螺旋を描いて飛び上がり、普通とは異なる黒く輝く銀河の渦へと飛び込んだ。

☆7×☆7Ⅱ★7

「黒き魔導と漆黒の薔薇！ 交わりて美しき女神となれ！ エクシーズ召喚！ 舞い踊れ、『ブラック・ローズ・マジシャン』！」

『いぎ、出陣！』

ブラック・ローズ・マジシャン：ATK 2800

はためくのは、薔薇をモチーフにした深紅のドレス。薔薇の蔦がドレスに絡みついており、紅の宝玉が埋め込まれた『ブラック・マジシャン』の杖を自然体で構える。杖に彫られた薔薇が美しく、纏う数本の薔薇の蔦が、彼女を、ルーンを一輪の薔薇のように魅せる。

『この姿で話をするのは初めてやな。宜しゅう頼みますわ』

「いつも通りで大丈夫だよ。黎さん、次のターンに！」

「任せろ！」

「アタシはカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

真奈：LP 1500

手札：2枚

フィールド

：ブラック・ローズ・マジシャン（ATK 2800・ORU：2）

：伏せカード3枚

「オデのターン、ドロロー。そんなザコを出したってムダア。お前らはあオデ達には勝てない」

『それはどうやらな？ 人間の起こす奇跡つちゅーモンは、大昔から神だろうが魔王だろうが、片端から力のピラミッドを覆して来たんや。油断してナメ腐つとると、足元掬われて、死ぬで？』

スロウスの嘲笑に、ニヤリ、と冷静に、冷徹に言葉を返す『ローズ・マジシャン』。方言には突っ込まない。

「オデは手札から魔法カード『失意のミス』を発動だあ。相手の場のモンスターを全て破壊しい、その攻撃力分のダメージを与える」

『何やて!？』



「させるかよ！ カウンター罠『神の宣告』！ ライフを半分支払い、これでそのカードを無効にさせてもらおう！」

「カウンター罠発動おおう。『デッドカウンター』いく。『神の宣告』の発動を無効にしたい、相手のライフを半分にする〜」

「更にカウンター罠発動！ 『カウンター・カウンター』！ カウンター罠の発動を無効にする！」

失意のミス（オリジナル）

#### 【通常魔法】

相手の場のモンスターを全て破壊し、その攻撃力の合計値分のダメージを相手に与える。

この効果で破壊した相手モンスターの数が3体以下の場合、このターンのバトルフェイズをスキップする。

神の宣告

#### 【カウンター罠】

ライフポイントを半分払って発動する。

魔法・罨カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。

デッドカウンター（オリジナル）

【カウンター罨】

相手の発動したカウンター罨の効果が無効にし、ゲームから除外する。

その後、相手のライフを半分にする。

カウンター・カウンター

【カウンター罨】

カウンター罨の発動を無効にし、それを破壊する。

チェーンの逆処理が入る。

ライフコストが要らない、カウンター罨専用のカウンター罨が、スロウスのカードを掻き消す。

そして神話に出て来そうな神の威光が、更にスロウスのカードを滅ぼす。ライフ半分は痛い、汎用性の高いこのカードは便利だ。無制限時代の事を思い出すと、ゾツとす

る。

黎：LP 6250↓3125

「どうだ、スロウス？ 人間の力も、捨てたモンじゃねえだろ？」

「ぐぬう……」

ニヤ、と不敵な笑みをプレゼント。これで奴は伏せカードを全て使い切った。後は後続のモンスターと魔法カードに注意を払えば問題無い。

「オデは墓地の『F・G・D』をゲームから除外しいく、パワーアップだあく！」

七罪士 スロウス：ATK 18500↓23500 / DEF 18000↓23000

「更に『暗黒融合』を発動だあく！」

「『暗黒融合』!？」

「このカードはあ、融合素材がどこにいてもお、融合召喚ができるう！」

## 暗黒融合（オリジナル）

### 【通常魔法】

自分のデッキ・フィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを選択し、そのモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

この時、除外されたモンスターを選択することができる。

素材となったモンスターはデッキに戻る。

デッキから選択したモンスターは墓地へ送られる。

「オデは除外された『ダークカードガンナー』と『サファイアドラゴン』、墓地の『フライングスパイダー』をデッキへ戻しい、『ブラック・ドラゴスコープオン』を融合召喚だあ  
〜！」

ブラック・ドラゴスコープオン（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／風属性

ATK 3000 / DEF 2650

闇属性モンスター＋風属性モンスター2体

このカードは融合召喚以外の方法で特殊召喚できない。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、戦闘によって発生する自分へのダメージは相手が受ける。

ブラック・ドラゴスコピーオン：ATK 3000

「……黎さん」

「ん？」

「攻撃力3000って、高い方だよね？」

「ああ。一種のボーダーラインだ」

「高そうに見えない」

そりゃあ、ね？

見た目（サソリっぽい黒い竜）云々の話では無く、あんなデタラメなカードばっか出されりや、インパクトに欠けるわな。

「更に墓地の『スカル・ソードジェネラル』の効果発動おう。墓地の攻撃力2000以上の闇属性モンスターとこのカードをゲームから除外しい、デッキか墓地から闇属性モ

ンスターを2体、特殊召喚できるう〜」

スカル・ソードジェネラル（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）  
星9

闇属性／アンデッド族

ATK 3400／DEF 500

チューナー＋闇属性以外のチューナー以外のモンスター1体以上

墓地のこのカードと攻撃力2000以上の闇属性モンスターを1体ゲームから除外する。

デッキまたは墓地から同名の闇属性モンスターを2体、特殊召喚できる。

この効果は相手ターンでも発動できる。

黒く歪んだ空間に消え行く『スカル・ソードジェネラル』と『新月の黒砲塔』。入れ替わりに、スロウスが新たなモンスターを場に呼び出す。

「来おい、『死竜 デビヤマタ』ア！」

死竜 デビヤマタ：ATK 800

死竜 デビヤマタ：ATK 800

「更に2体の『デビヤマタ』をリリーススウ！ 『死神竜 ヘリング』をアドバンス召喚ん！」

死神竜 ヘリング（効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 3600 / DEF 3000

このカードのアドバンス召喚に成功した時、ゲームから除外されている闇属性モンスター1体を選択し、召喚条件を無視して特殊召喚できる。

『ヘリング』がアドバンス召喚に成功した時、除外された闇属性モンスターを1体特殊召喚できるウ。蘇れえ、『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』く！  
『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！』

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン：ATK 5000

スロウスも必死だな。真奈ちゃんの反撃準備を感じ取り、このターンで一気にたたみ掛ける算段か。

それと過労死乙。

「これでえ、お前らを殺せるう〜！」

「く……、1ターンでこれだけの大型モンスターを……！」

攻撃力2万オーバーと50000が1体ずつ、3000の大台が2体、これは厳しい。

「バートルウ！ オデ自身で『アイアン・カンガル』を攻撃い！」

「黎さん！」

「ここでやられるわけにはいかない！ 罨カード、オープン！ 『肥沃な土壌』！」

大きく振り上げられた大槌、それが下ろされる前に俺の場の回転草が土の中へと沈む。

「このカードは、自分の場の植物族モンスターを2体リリースして発動する！ このターン中に発生するダメージは全て無効となり、自分の場のモンスターは2体までバトルでは破壊されない！」

肥沃な土壌（オリジナル）



## 【通常罫】

自分の場の植物族モンスターを2体リリースして発動する。

このターン、プレイヤーに発生するダメージは0となる。

更に自分の場のモンスター2体を選択する。

選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されない。

フィールド中に、タンブルウィードを肥料として育ったツタが生える。桜と『ローズ・マジシャン』、そして俺と真奈ちゃんを覆ったツタは、戦闘破壊によって発生した衝撃から俺達を守ってくれた。

「これで、このターンに俺達が負ける事は無くなった」

「ぐ、ぬう……っ！」

スロウスは悔しさのあまりに地団太を踏む。

「オデはカードを4枚伏せて、ターンエンドだあくッ！」

スロウス：LP 40700

手札：0枚

フィールド

：七罪士 スロウス（ATK 23500）、ブラック・ドラゴスコピーオン（ATK 3000）、死神竜 ヘリング（ATK 3600）、アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン（ATK 5000）

：伏せカード4枚、軽金属の正装（永続魔法）、超過重力空間（フィールド魔法）

さて、と。俺の手札にある『リビングデッドの呼び声』。これで『アーシー』を蘇生させれば、俺の役目は終わりになる。

「行くぞー！ 俺のラストターン、ドローー！」

これで俺のデッキはゼロ枚。

そして最後に引いたカードは……、『異次元からの埋葬』！

「このスタンバイフェイズ、『モール・ドリラー』が復活する！」

『オレは帰って来たっ！』

「そして、桜のパワーが元に戻る！」

『まだまだ行けるぞー！』

G・S モール・ドリラー：ATK 2800

G・L・S ダイヤモンド・チェリー：ATK 1250↓2500／DEF 10

50↓2100

「手札から速攻魔法『異次元からの埋葬』を発動！ その効果で俺は除外された『ネクロ・ガードナー』、『ガード・マスター』を墓地へ戻す！」

異次元からの埋葬

【速攻魔法】

ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に戻す。

「更に魔法カード『原石の交換商法』を発動！ 手札の岩石族モンスター2体を墓地へ送り、墓地のカードを1枚手札に加える！」

手札の『マグネット・バルキリオン』、『マグネット・ウオリアー』を墓地へ送る。

そして墓地から吐き出されたのは『ヌンチャク・パンダ』。そろそろ、俺の役目は御免になる。

原石の交換商法（オリジナル）

## 【通常魔法】

手札の岩石族モンスター2体を墓地へ送る。

墓地のカードを1枚選択して手札に加える。

「そして俺は墓地の『ストーン・ラビット』、『ガイア・プレート』、『ランチャー・トータス』、『マグネット・ウオリアーβ』、『マグネット・ウオリアーγ』、『マグネット・バルキリオン』をゲームから除外し、『メガロック・ドラゴン』を特殊召喚！」

『ゴオオオオオオオオオオッ！』

メガロック・ドラゴン：ATK ? ↓4200

「チューナーモンスター、『G・S ヌンチャク・パンダ』を召喚！」

『ホアチャツ！』

G・S ヌンチャク・パンダ：ATK 900

「レベル7の『メガロック・ドラゴン』に、レベル2の『ヌンチャク・パンダ』をチュー

ニングー！」

『ゴガッ！』

『アチャッ！』

「大いなる大地の恩寵、汝が咆哮は金剛の砲門となる！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆2+☆7=☆9

「シンクロ召喚！ 打ち滅ぼせ、『G・S アースカノン・ドラゴン』！」

『ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

G・S アースカノン・ドラゴン：ATK 0

ドシイイイーン！ 光の柱の中から落ちて来た大地の龍。鋼拵えの鎧を装着し、赤色に点つた瞳でスロウスを睨む。ギラリ、と鉄色の牙が光る。

G・S アースカノン・ドラゴン（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星9

地属性／岩石族

ATK 0 / DEF 0

「G・S」と名のついたチューナー+「メガロック・ドラゴン」

このカードのシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロワーできる。

このカードの攻撃力と守備力は、除外されている岩石族モンスターの数×800ポイントの数値になる。

「このモンスターのシンクロ召喚に成功した事により、効果で1枚ドロワー！」

『アースカノン・ドラゴン』の攻撃力と守備力は除外された岩石族モンスター1体につき800ポイントアップする。除外された岩石族モンスターは22体、よってこいつの能力値は17600！」

G・S アースカノン・ドラゴン：ATK 0 ↓ 17600 / DEF 0 ↓ 17600

「攻撃力17600だとお〜?! だが、オデには届かねえ〜」

「分かっている！ リバースカードを3枚セットして、ターンエンド！」

黎 : LP 3125

手札 : 0枚

フィールド

: G・L・S ダイヤモンド・チェリー (ATK 2500)、G・S アースカノン・

ドラゴン (ATK 17600)、G・S モール・ドリラー (ATK 2800)

: 伏せカード3枚

「アタシのターン、ドロー！」

「真奈ちゃんはこのドローフェイズ、俺は1枚目のリバーズカードをオープン！ 『リビングデッドの呼び声』！ 蘇れ、『フォーチュンレディ・アーシー』！」

俺の伏せた1枚目は、汎用性の高い蘇生カード。

後はスロウス次第。残った2枚の伏せカードで、勝負は決まる。

『そろそろ、決着をつけるべきだ……！』

フォーチュンレディ・アーシー : ATK ? ↓ 2400

「そしてこのスタンバイフェイズ、『アーシー』のレベルが1つ上がり、パワーアップする！」

「更に、『アーシー』のレベルが上昇した事により、お前に4000ポイントのダメージを与える！」

『受けよ、ライジング・ニードル』！』

フォーチュンレディ・アーシー：☆6↓7 / ATK 2400↓2800 / DEF 2400↓2800

スロウス：LP 40700↓40300

復活した地の魔女が、杖を地面に叩きつける。大地から突き出た黒鉄の刺がスロウスの足を串刺しにし、スロウスは思わずバランスを崩す。

「イデ……」

「更に『ブラック・ローズ・マジシャン』のモンスター効果発動！ 1ターンに1度、オーバレイ・ユニットを1つ取り除き、相手の場のカードを全て破壊できる！ ブラック・ローズ・テンペスト！」

『これでも喰らいや！』



バシユーン！ と薔薇の杖に光の星が1つ吸い込まれる。その途端に黒薔薇の嵐が吹き荒れ出した。

ブラック・ローズ・マジシャン（エクシーズ・効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）

ランク7

闇属性／魔法使い族

ATK 2800 / DEF 2400

レベル7の「ブラック・マジシャン」×「ブラック・ローズ・ドラゴン」

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を取り除き、相手の場の全てのカードを破壊する。

その後、破壊した相手のカードの枚数と同じレベルのモンスターを自分の墓地から特殊召喚出来る。

だが、これを通るとは思えない。

「罨カード、オープン！ 『バトル・デストロイ』イ！ 相手モンスターの破壊効果を無効にしい、オデのモンスターとメインフェイズ中に強制的にバトルするう！」

「メインフェイズ中にバトルだど!？」

バトル・デストロイ（オリジナル）

【カウンター罠】

相手の効果モンスターが、フィールドのカードを破壊する効果を発動した時に発動でききる。

その効果を無効にし、メインフェイズ中にそのモンスターと自分のモンスター1体でバトルを行う。

この戦闘によって発生するダメージは0になる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、攻撃を行う相手モンスターを破壊できる。

スロウスの張ったシールドに防がれる黒薔薇の嵐。そしてスロウスは得物の大槌を『ローズ・マジシャン』目掛けて振り上げた。

「スロウリー・プレスハンマー！」

「く、<sup>ブラック・ローズ・マジック</sup>黒・薔・薇・魔・導！」

バチバチバチッ！ 大槌と黒薔薇の舞う魔術が拮抗したのは一瞬。瞬時に魔術は押

しつぷされ、術者ごと粉々にされてしまった。

『あかん！ ごめんな、マスター！』

「くつううううつ！ 大丈夫！ アタシは墓地の魔法カード『魔術の施し』をゲームから除外！ これでアタシは墓地から『フォーチュンレディ・ウォーテリー』を特殊召喚できる！」

『で、出番だよね……？』

「『ウォーテリー』の効果でカードを2枚ドロロー！ “アクア・サプリメント”！」

フォーチュンレディ・ウォーテリー：ATK ? ↓ 1200

オドオドした感じで現れるのは水の魔女。それでも能力はしっかりと発動する。

素材の2つ目に必要なのは確かに“フォーチュンレディ”2体。だが、レベルを揃える必要が……。

「リバースカード、オープン！ 速攻魔法『タイムパッセージ』！ エンドフェイズまでアタシの場の“フォーチュンレディ”1体のレベルを3つ上げる！ これにより、『ウォーテリー』はエンドフェイズまでレベル7となる！」

『パワーアップ、行きます……！』

F   1200↓2100  
フォーチュンレディ・ウォーテリー：☆4↓7／ATK   1200↓2100／DE

上手い！ これでレベルが揃った！

タイムパッセージ

【速攻魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在する「フォーチュンレディ」と名のついたモンスター1体のレベルをエンドフェイズ時まで3つ上げる。

「レベル7の『フォーチュンレディ・アーシー』と『フォーチュンレディ・ウォーテリー』をオーバーレイ！」

『行くぞ、ついて来い………！』

『あ、はい………っ！』

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

『アーシー』が橙、『ウォーテリー』が青の光へとその身を変え、上空へと飛び上がる。

地面に構成された銀河の渦へと2人は飛び込み、新たなる姿へとその姿を変える。

☆7×☆7＝★7

「双壁の魔導よ、星の導きにて輝け！ エクシース召喚！ 新たなる希望の星！  
『フォーチュンレディ・マテリアル』！」  
『たっぷりとお礼をさせて頂きますわ！』

フォーチュンレディ・マテリアル：ATK？

銀河の渦からフワリ、と舞い踊るように現れたのは、白いローブ姿の魔女。見た目は『ライティール』が最も近いだろうか。その周囲には黄、赤、緑、青、紫、茶といった様々な色に輝く光の玉がオーバーレイ・ユニットとは別に浮いている。

『マテリアル』の能力値は、アタシの墓地の『フォーチュンレディ』の数×600！  
アタシの墓地にいるのは『ライティール』、『ファイリー』、『ウインディー』、『ダルキー』、『アルティール』の5体！ よってその攻守は3000！』

フォーチュンレディ・マテリアル：ATK ? ↓ 3000 / DEF ? ↓ 3000

フォーチュンレディ・マテリアル（エクシーズチューナー・効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）

ランク7

闇属性／魔法使い族

ATK ? / DEF ?

レベル7の「フォーチュンレディ」と名のついたモンスター×2

このカードの攻撃力は自分の墓地に存在する「フォーチュンレディ」と名のつくモンスター×600ポイントとなる。

このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で墓地の魔法使い族モンスター1体を特殊召喚出来る。

「モンスター効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、墓地から『ブラック・ローズ・マジシャン』を特殊召喚！ “リボン・ゲート”！」

『眠りし戦士よ、わたくしの呼び声に応えなさい！』

パシユン！ と光の玉が吸い込まれ、『マテリアル』は空中に閃光を放つ。

するとゴゴゴゴゴゴ……、と重低音が周囲に鳴り響き、何もなかった空間に石造りの大きな扉が生み出される。

『ブラック・ローズ・マジシャン』は、その石の扉を潜って場に帰還した。

フォーチュンレディ・マテリアル：ATK 3000 ↓ 3600  
 ブラック・ローズ・マジシャン：ATK 2800

『復活や！ ありがとうーな！』

『お礼ならわたくしよりも、マスターにですわ』

精霊が素材となった為か、この二人にもハッキリした意思があるようだ。

つと、そんな場合じゃ無かったな。

「真奈ちゃん、次を！」

「あ、はい！ もう一度『マテリアル』の効果を発動！ 今度は墓地から『見習い魔術師』を特殊召喚！ ムリポーン・ゲートッ！」

『それでは、もう一度お披露目ですわ！』

再び出現する石造りの扉。飛び出すのは、紫のローブの魔術師だ。

フォーチュンレディ・マテリアル：ATK 3600 ↓ 4200

見習い魔術師：ATK 400

『見習い魔術師』が特殊召喚された時、場に魔力カウンターを乗せられるけれど、今は対象となるカードが無いので、関係無いです。更に永続罫『エンジェル・リフト』発動！ 墓地からもう1体『見習い魔術師』を特殊召喚！」

見習い魔術師：ATK 400

エンジェル・リフト

### 【永続罫】

自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。

これで、3つ目の素材が揃った。



「まだまだ行くよ！ レベル2の『見習い魔術師』2体で、オーバーレイ！ 2体のモンスターを使って、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

2体の紫のローブの魔術師が、ローブと同じ紫色の光に変わる。螺旋を描いて飛び上がった光は、地上に構築された銀河の渦の中へと飛び込んで行った。

☆2×☆2＝☆2

「神々の力よ！ アタシに誰かを助けられる力を！ エクシーズ召喚！ 具現せよ！  
エクシーズチューナーモンスター『ゴットコアードークネス』ッ！」

ゴッドコアードークネス：ATK 0

光の渦から飛び出したのは、一見するとただの黒い球体。されども、その表面には複雑な紫色の魔法陣が施されている。

「この瞬間ん、リバースカード、オープン！ 『マリシヤス・プレス』ウ！ 相手の場に攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時、そのモンスターを破壊するう！」

「無駄だ！ 『ゴッドコアードークネス』は相手のカード効果を受けない！」

ゴッドコアードークネス（エクシーズチューナー・効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）

ランク2

闇属性／幻神獣族

ATK 0 / DEF 0

レベル2の闇属性モンスター×2

このカードは相手のカード効果を受けず、エヴォルト召喚以外のコストにもならない。

1ターンに1度、このカードのオーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事でエンドフェイズまで自分の場のエクシーズモンスターのランクを任意の数値に変更出来る。

マリシヤス・プレス（オリジナル）（改訂版）

【通常罫】

（1）：相手の場にエクストラデッキから攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時に発動できる。

そのモンスターを破壊する。

(2) : 墓地のこのカードを除外して発動する。

相手の場の最も攻撃力の高いモンスターと、自分の場のモンスターでメインフェイズ中に戦闘を行う。

この戦闘によって発生するダメージは500ポイントアップする。

上から振り下ろされる、スロウスの大槌。しかし、黒い球体は自分で黒い結界を張ってその攻撃を防いだ。

「なあらばあ、『マリシヤス・プレス』を除外い！ その効果でえ、『マテリアル』と『ブラック・ドラゴスコープオン』でメインフェイズ中にバトルだあ！」

「またか！」

「更に『ブラック・ドラゴスコープオン』とのバトルでオデが受けるダメージは相手がかかるう〜！ そしてこの戦闘では発生するダメージは500ポイントアップするう〜！」

「な!?!」

『あかん！ これ通したら負けるで！』

『く、体が勝手に……!?!』

全身が赤いオーラに包まれる『マテリアル』。カタカタと不気味に体が動き、サソリの様な黒龍へと杖の先端を向けた。

悪いがスロウス、それは通らねえ。ご生憎と言ってやるよ！

「速攻魔法『突進』をオーブン！ これでエンドフェイズまで『ブラック・ドラゴスコアピオン』の攻撃力は700ポイントアップする！」

『あ、感謝いたしますわ！』

ブラック・ドラゴスコアピオン：ATK 3000↓3700

ふう、万丈目との取り巻きで同じ事をやっていたな、そう言えば。

本来ならばそのダメージは4200-3000+500で1700。だが、ここに突進が入ったため、4200-3000+700+500で1000だ。

これで、真奈ちゃんは生き残れる。

「これで、真奈ちゃんは死なない！」

「ありがとうございます！ 〃元素の流星―マテリアル・シューティングッ！」

フワフワと浮かぶ様々な色の光の玉が、一斉に黒龍へと降り注ぐ。発生した爆発は真奈ちゃんの方へと届いたが、プロテクターがしっかりと彼女を守ったらしく、真奈ちゃ

んは平然とした表情で立っていた。

真奈：LP 1500↓500

「残念だったな、スロウス？」

「ぐ、ぬうつ！」

「更にアタシは『ゴッドコアードークネス』のモンスター効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、『ゴッドコアードークネス』のランクをエンドフェイズまで2から6に変更！」

ゴッドコアードークネス：★2↓6/ORU：2↓1

これで、条件は整った！

「真奈ちゃん、スタンバイ・レディ？」

「イエス！ 行くぞ、スロウス！」

キュイン！ 突如として真奈ちゃんの足元と右手の甲に展開する魔法陣。

紫色のリングがフィールドを取り囲み、辺りを暖かい光が漂い始める。

「ねえ、闇の神様？」

「？ 何じゃ？」

「貴女は今、名前も姿も無いんだよね？」

「うむ。大昔の戦いで失ってしまった。これでは戦いたくとも戦えん」

「なら、アタシが新しい名前と姿をあげる」

「ほう？ 妾が彼奴に取り憑いて自爆するという作戦よりも素敵極まりなさそうじゃな」

「だから、あいつに勝って！」

「クスクスクス、無論じゃ。妾にとってその様な事、兎戯にも等しいわ！」

「オツケー！ セットアップ！」

「ビッ！ と真奈ちゃんが右手を前に突き出した。

「キュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！ と光が爆発する。

「うっ!!」

『くっ!!』

俺と桜は思わず目を覆う。恐らくスロウスもだろう。

そして光が収まった頃、真奈ちゃんは……。

「真奈、ちゃん……？」

「はい」

その姿は一変していた。

セミロングの黒髪は、透き通るような薄紫に。

漆のように黒い瞳は、アメジスト色に。

全身から噴き出るエネルギーは、莫大なものとなっていた。

「黎さん、最後までサポートお願いします！」

「、おうー」

一瞬、迷ったが、俺はこの子の味方だと思いつく。

見た目や生い立ちで差別しない。それが俺の信条だろうが。自分でできなくてどう

する。

すう、と真奈ちゃんが息を吸う。

さあ、この戦いも大詰めだ！

「アタシはランク7の『ブラック・ローズ・マジシャン』と『フォーチュンレディ・マテリアル』、ランク6の『ゴッドコアードークネス』で、オーバードライブ！」

その言葉と同時に、3人の戦士は光へと姿を変える。

『ブラック・ローズ・マジシャン』は紫の光へ、『フォーチュンレディ・マテリアル』は白、『ゴッドコアードークネス』は黒の、それぞれのランクと同じ数の星へ姿を変える。紫の光に包まれた黒い薔薇の魔女は、白と黒の星が姿を変えた白と黒の輪の中へと収まる。光の柱が登る銀河の渦の中心部に、魔女とリングは降り立つ。

『さあ、行くでスロウス！ 人間の力っちゅーモンをその目に焼き付けいや！』  
『わたくし達の主を傷つけた事、後悔させてあげますわ！』

★7+★7+★6||★20



「闇を司る究極の力！  
我が魂から現れ、  
真なる力を解放せよ！！



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

エヴォルト召喚！ 解き放て！ 『究極魔導神―テネブラエ』!!』

# STORY 46 : 『究極魔導神―テネブラエ』降臨 ★

黎 : LP 3125

手札 : 0枚

フィールド

・G・L・S ダイヤモンド・チェリー (ATK 2500)、G・S アースカノン・ドラゴン (ATK 17600)、G・S モール・ドリラー (ATK 2800)

・伏せカード1枚、リビングデッドの呼び声 (永続罫・対象不在)

真奈 : LP 500

手札 : 手札4枚

フィールド

・究極魔導神―テネブラエ (ATK 6000)

・伏せカード2枚

スロウス : LP 40300

手札：0枚

フィールド

・七罪士 スロウス（ATK 23500）、死神竜 ヘリング（ATK 36000）、

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン（ATK 50000）

：伏せカード2枚、軽金属の正装（永続魔法）、超過重力空間（フィールド魔法）

SIDE：黎

美しい。

その容姿においては、例えどれだけのボキヤブラリーを増やしたところで、そう表現する以外に無いだろう。

【BGM：pray】

『クスクスクス、妾が目覚めるにはまだ早いが、まあ良い。今回は特別じゃ、妾の力を使う事を許してやろう。存分にこの力を振るうが良いぞ？』

## 究極魔導神―テネブラエ：ATK 6000

古風な言葉遣いに、妖艶な表情。神々しいオーラに、絶大な力の波動。

透き通るような薄紫のロングヘアーに、アメジスト色の宝石のような瞳。

薔薇をモチーフにしたような紫のドレスの上から黒いローブを羽織っており、背中からは虹色の菱形がいくつも集まって構成された翼が生えている。

「ぬう、まあた妙なモンスターが出て来たあ。でもお、オデには勝てないい」

『クスクス、邪神の、それも護衛如きが妾に敵うと思うかや？ 片腹痛いのう』

クリスタルで出来た杖の先端にはアメジスト色の水晶が嵌め込まれている。女性版『ブラック・マジシャン』、ルーンにその見た目はある程度近い。

周囲を舞うオーバレイ・ユニットは全部で4つ。素材と、その素材のユニットを自身のオーバレイ・ユニットとしているらしい。

カードは左半分が黒、右半分が紫という奇妙な感じだ。

「テネブラエ、あいつに勝つよー」

『無論じゃ。この新たな名と体に懸けて、必ず勝つてしんぜようぞ？』

ふと真奈ちゃんの足元に光る破片が見えた。俺のプロテクターが、『テネブラエ』を呼ぶ際の衝撃に耐え切れずに壊れてしまったようだ。

隕石がぶつかっても壊れないアレが粉々になったのだから、改めて『テネブラエ』の恐ろしさや強さが分かる。

究極魔導神—テネブラエ（エヴォルト・効果モンスター）（湊クレナイ先生オリジナル）  
ランク20

闇属性／幻神獣族

ATK 6000 / DEF 6000

「ブラック・ローズ・マジシャン」＋「フォーチュンレディ・マテリアル」＋「ゴットコアーダークネス」

このカードはシンクロモンスター及びエクシーズモンスターとしても扱う。

このカードの種族はデッキ・手札・フィールド・墓地に存在する限り、魔法使い族としても扱う。

このカードは相手のカード効果を一切受けない。

このカードの特殊召喚はデュエル中1度しか行えず、エンドフェイズにゲームから除外される。

このカードのオーバーレイ・ユニットを全て取り除く事で次の効果を上から順に全て発動出来る。

●お互いの墓地から魔法カードを五枚選択してゲームから除外する。

この効果で除外した魔法カードの効果を手札から除外する。このカードの効果として任意のタイミングで発動出来る（ダメージステップ時にも有効）。

●自分の墓地に存在する魔法カード1枚につき、このカードの攻撃回数を増やす事が出来る。

●このターンのエンドフェイズまで、相手が発動する魔法カードの効果全て無効にする。

「だがあ、攻撃力6000じゃあオデには勝てないわ」

『クスクスクス、そこをどうにかするのがお主の仕事じゃろう、童？！』

「無論だよ。リバースカード、オープン！ 罨カード『シンクロ・アームズ・フォース』！ このカードは自分の場のモンスターを任意の数だけ指定して発動する！ 1体につき1000ポイントライフを払い、指定したモンスターを自分の場の別のモンスターに装備できる！

俺は自分の場の全てのモンスター、『G・L・S ダイヤモンド・チェリー』、『G・S モール・ドリラー』、『G・S アースカノン・ドラゴン』を選択！

ライフを合計で3000ポイント支払い、3体のモンスターをテネブラエに装備する



「！」

シンクロ・アームズ・フォース（オリジナル）（改訂版）

## 【通常畏】

自分フィールドにSモンスターが存在する場合、自分フィールドのモンスターを任意の数だけ選択して発動する。

（1）：選択したモンスターの数×1000のライフを支払う事で、選択したモンスターを自分フィールドの別のモンスターに装備カード扱いとして装備できる。

この効果で装備したモンスターは、装備カード扱いとなつているモンスターの元々の攻撃力と守備力分だけ攻撃力と守備力がアップし、そのモンスターの内1体のモンスター効果を可以使用できる。

（2）（3）（1）を発動したターン終了時に、装備カード扱いとなつているSモンスター以外のモンスターはゲームから除外される。

黎：LP 3125↓125

「く、うう……………、っ！」

流石に、闇のゲームで1度で3000ものライフコストは、厳しい。

そしてこれで真正正銘、俺の場にカードは無くなった。

あるのは対象のいなくなった『リビングゲッドの呼び声』だけ。

「黎さんー」

「だい、じょうぶ……だ！　これで、テネブラエの能力値が上がる！

攻撃力は桜の2500、『モール・ドリラー』の2800、『アースカノン』の0の合計値、5300ポイントアップ！

守備力は桜の2100、『モール・ドリラー』の1900、『アースカノン』の0の合計値、4000ポイントアップ！」

究極魔導神―テネブラエ：ATK 6000↓11300／DEF 6000↓1000

「そして装備扱いとなった『アースカノン』の効果で、除外された岩石族1体につき攻撃力と守備力は800ポイントアップする！　除外された岩石族モンスターのは数は変化していないため、攻守はそのまま17600ポイントアップだ！」

『クク、それで良い。お主の役目は妾のサポートじゃからのう』

究極魔導神—テネブラエ：ATK 11300 ↓ 28900 / DEF 10000 ↓  
27600

光の粒子となつた桜達が、テネブラエの中へと取り込まれて行く。

虹色のオーラが闇の神を覆い、その力を何倍にも跳ね上げた。

「こ、攻撃力28900うっつ!?!」

『クククク、言つたじやろう？ 貴様如きが妾に敵う訳が無いとな!』

「ア〜ンド! 墓地の『スキル・サクセサー』を除外し、攻撃力は更に800ポイントアツ

プする!」

「ぬあんだとお!?!」

究極魔導神—テネブラエ：ATK 28900 ↓ 29700

「ば、ばかなあ……、オデがパワーで負けるハズがあ……!」

スロウスは攻撃力5000を4体も除外したというのに、こちらはそれを軽く上回つた。驚くのも無理は無いというものだ。

「そしてアタシはテネブラエのモンスター効果発動！ オーバーレイ・ユニットを全て取り除き、3つのモンスター効果を発動！」

『さあ、もう終いにしようぞ。貴様のその下らぬ顔、長々と見られるものでは無いからかう』

『『ダークフォース・ストリーム』！』

パシユツパシユツパシユツパシユツ！ 4つの光り輝く星が杖に取り込まれ、テネブラエの周囲に、墓地に存在する魔法カードが展開された。

「1つ目の効果！ 全ての墓地から魔法カードを5枚選択してゲームから除外！ そしてそのカード効果をテネブラエの効果として使用できる！」 『カオス・マジスター』！

『古き魔よ、妾が今一度、その力を振るってやろう！』

総じて68枚の魔法カードの中から選び出される5枚のカード。

5枚の緑のカードは、テネブラエの胸元にある董色のペンダントに吸い込まれて行った。

「更に2つ目の効果！ アタシの墓地の魔法カードの数だけ攻撃できる！ 『レジエン

ダリー・エクストリーム』！」

『主の元に生れし魔術よ、妾に力を貸すが良い！』

68枚の中から、真奈ちゃんが使用したカード、23枚が浮き出て、残りが半透明になる。浮かんだカードは、テネブラエの杖の中へと溶け込んで行った。

「そして3つ目の効果！ このターン、相手の魔法カードは全て無効になる！ シーリング・コンストラクション！」

『下賤なる魔術など、見てるだけで不愉快じゃ。失せよ！』

バジバジバジバジッ！ と紫電が駆け抜け、スロウスの場を支配する。これで、スロウスはこのターン中に魔法カードを使用する事はできなくなった。

「行くぞ！ テネブラエの1回目の攻撃！ 対象は『アボミナブル・ジエノサイド・ドラゴン』！ ダーク・マテリアル・メテオ！」

『終焉と行くかや？ 消えい！』

「そうは行くかあ！ 罨カード発ぞおう！ 『ダーク・アーマー』！ このターン、オデの場のモンスターは守備表示となり、バトルでは破壊されなあい！」

ダーク・アーマー（オリジナル）

【通常罨】

自分の場のモンスター1体は守備表示となり、エンドフェイズまでバトルでは破壊されない。

エンドフェイズ、自分の場に守備表示で存在するモンスター1体につき、相手に1500ポイントのダメージを与える。

黒い龍が防御の姿勢を取る。

無駄だ、スロウス。真奈ちゃんが除外したカードの内の1枚は、お前のあのカードだ！

「テネブラエの効果で、除外した5枚の魔法カードの内の1枚の効果を発動！ 1枚目は『倦怠の刻印』！ そして伏せていた『メテオ・レイン』を発動！ これでこのターン、アタシの場のモンスターは破壊されない効果と守備力を貫通する効果を得る！」

メテオ・レイン

【通常罫】

このターン自分のモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時にその守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

究極魔導神—テネブラエ：ATK 29700↓59400

「これで『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』の破壊耐性は無効！」

「何だとおく!?」

皮肉だな、スロウス。テメエの使った魔法カードでテメエの首を絞める結果になったんだ。

「ぬあらばあ、墓地の『笑い漏斗』のモンスター効果発動であく。このカードをゲームから除外してデッキトップを墓地に送り、貫通ダメージを無効にするう！」

む、『ソウトレス・リロード』で墓地に送ったのか！

笑い漏斗（効果モンスター）（オリジナル）

星3

炎属性／機械族

ATK 1000 / DEF 1000

墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、デッキの1番上のカードを墓地へ送る。

除外されたターン、守備表示モンスターを攻撃する事によって自分に発生する戦闘ダメージは0となる。

ズツガアン！ と闇の流星が黒龍を貫く。

「そのまま『死神竜 ヘリング』に攻撃！」

『消えよ！』

「ぬおおおおおおおおおつ！」

スロウス：LP 40300↓14200

「まあだまだあ！ 畏カード発動う！ 『叛逆者の復讐』う！ オデが戦闘ダメージを受けた時、相手モンスターの攻撃力はこの分攻撃力が下がるう！ この効果は避けられないい！」

叛逆者の復讐（オリジナル）

【通常畏】

プレイヤーが戦闘ダメージを受けた時に発動できる。

相手の場の全てのモンスターの攻撃力は受けたダメージ分だけダウンする。

この効果は「効果を受けない」効果を持つモンスターにも適用される。



ギユバツ！ と怒気に満ちた波動がテネブラエを襲う。だが、無駄だぜスロウス？ 真奈ちゃんを除外したカードの3枚目は、俺が『天使の施し』で捨てた、あの速攻魔法だ。

究極魔導神—テネブラエ：ATK 29700 ↓ 28100

「なあにい!? 攻撃力が1600下がったただけだとお!？」

「テネブラエの効果で除外した2枚目のカードは、速攻魔法『禁じられた聖槍』！」

『小賢しいのう!』

テネブラエは怒気の波動を一瞥すると、虚空から輝く槍を取り出す。それを地面に突き刺すと、それを起点にシールドを張る。怒気の波動はそのシールドに阻まれ、霧散した。

「これで対象モンスターは攻撃力を800ポイント下げる代わりに、このカード以外の魔法・罠の効果を受け付けない！」

「ぬうっ!」

「本来『禁じられた聖槍』の効果で『テネブラエ』は他の魔法・罠の効果も受けない。だが、自身の効果で吸収した魔法効果は『テネブラエ』のモンスター効果に転写されてい

る、そっちは無効にならないぜ！」

正直、あのカードを捨てるのは少々勿体無かったが、ここに来て良い方向へ作用してくれたようだ。

禁じられた聖槍

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は800ポイントダウンし、このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。

「3回目の攻撃！　《ダーク・マテリアル・メテオ》！　対象は当然スロウス！」

『うぬ、よくも我が主を傷つけてくれたのう？』

「ぬ、うっ！」

『万死に値するわ！』

三度降り注ぐ闇の流星。だが、スロウスはそれを見てニヤリ、と笑う。

「オデ自身のモンスター効果発動おおう！　墓地の闇属性モンスターを4体除外しい、このターン相手より攻撃力が800ポイント高くなるう！」

セブンクライム  
七罪士 スロウス（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星10

闇属性／戦士族

ATK 3500 / DEF 3000

(1) : このカードは特殊召喚できず、自分の場のモンスターを3体リリースしなければアドバンス召喚できない。

(2) : このカードは相手のカード効果を受けない。

(3) : 1ターンに1度、自分の墓地の闇属性モンスターを1体ゲームから除外して発動する。

そのモンスターの攻撃力と守備力の数値分、このカードの攻撃力と守備力はアップする。

(4) : このカードが相手の攻撃対象となった時、自分の墓地から闇属性モンスターを4体ゲームから除外する事で、このカードの攻撃力を相手より800ポイント高い数値にする事ができる。

(5) : このカードが戦闘によって破壊された時、ゲームから除外されている自分の闇属性モンスターを、召喚条件を無視して可能な限り自分の場に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、戦闘によって発生するダメージは0になる。

「オデはその効果で墓地の『死竜 デビヤマタ』2体、『アボミナブル・ジエノサイド・ドラゴン』、『ブラック・ドラゴスコープオン』を除外い〜！ これでオデの攻撃力は28900だあ！ ヽデスエナジー・ソウル〃ウ！」

七罪士 スロウス：ATK 23500↓28900

「どおだあ！ オデの方が攻撃力は高い〜！」

「除外した3枚目のカード効果を発動！ 3枚目は黎さんの『虚栄巨影』！ 攻撃宣言時、モンスター1体の攻撃力は1000ポイントアップする！ このカードは速攻魔法だけど、今はテネブラエ自身の効果として扱うため、『禁じられた聖槍』の影響を受けない！」

究極魔導神―テネブラエ：ATK 28100↓29100



喚だあ！」

F・G・D：DEF 5000

F・G・D：DEF 5000

F・G・D：DEF 5000

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン：DEF 5000

スカル・ソードジェネラル：DEF 500

「そのまま攻撃続行！　『ダーク・マテリアル・メテオ』5連打ア！」

『好い加減に鬱陶しいのう！　消えよ！』

『笑い漏斗』の効果で貫通ダメージは無効となっているものの、連続攻撃でスロウスの場は次々と壊滅的な状況となっており、焼け野原は愚か、地盤ですら残っていないのでは無いかという程の勢いで焼き払われている。

「まだ終わっていない！　墓地の『スカル・ソードジェネラル』と『F・G・D』を除外い！　オデはその効果で墓地の『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』と『ワインド・ワイバーン』を特殊召かぁくん！　更に『ワインド・ワイバーン』の効果でデツキから闇属性モンスターを1体墓地へ送るう！」

アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン：DEF 5000

ワインド・ワイバーン：DEF 1000

す、スロウス……、そろそろ『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』を使うのは止めてやらねえか？ 好い加減過労死するぞ、そいつ？

それにしても、あのグネグネとミミズみたいに動く翼竜、恐らく『笑い漏斗』の効果で墓地送りにされたのだろうが、よくもまあそうホイホイと好みのカードを墓地へ送れるものだねえ。

「しつこい！ そのモンスターにも攻撃！」

『失せよ！ 無知蒙昧にて曖昧模糊の雑魚共が！』

ギユウン！ と闇の隕石で更に吹き飛ばす。

その途端、ミミズのような翼竜が炎上し、真奈ちゃんへ突っ込んで来た。

「『なげ！』」

『『ワインド・ワイバーン』の効果発動だあ！ バトルで破壊された時に、相手モンスター1体の効果を無効にするう！ そしてその攻撃力分のダメージを与えるう！』

ワインド・ワイバーン（効果モンスター）（オリジナル）  
星4

闇属性／ドラゴン族

ATK 1400 / DEF 1000

このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから闇属性モンスターを1体選択して墓地へ送る。

このカードが戦闘によって破壊された時、相手の場のモンスターの効果は無効となる。

その後、このカードを破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

赤々と燃え盛る炎。それは過たずテネブラエを、そして真奈ちゃんを包み込む。

『ぬあああああああああああああああああつ！』

『うわあああああああああああああああつ！』







「『なんちゃって♪』」

ペロツ、と舌を出す2人。燃える炎は2人の周りを包み込んではいないもの、全く届いていない。

「テネブラエは、相手のカード効果を受け付けない。『叛逆者の復讐』はテネブラエにも有効だった。でも、これは違う。残念でした♪」

『クスクスクス。妾をこのような児童戯で仕留めようとしたのかや？ まったく、頭のネジが緩いのお。最早小僧は怠惰と言うよりも欺瞞じゃな』

成程、『ワインド・ワイバーン』の効果は無効にした後にバーンダメージだ。相手の効果が無効にならない以上、その後のダメージは通らない。

「これで、お終い！ 、『ダーク・マテリアル・メテオ』！」

「まあまだまだあ！ オデは『ワインド・ワイバーン』の効果で墓地へ送った『次元王のランプ』のモンスター効果を発動するう！」

「ここのカードはあ、ダイレクトアタックを受ける時、墓地から特殊召喚できるう！」

次元王のランプ：ATK 0

「このカードの攻撃力はあ、特殊召喚された時に除外されているオデのモンスターの数

×3000となるう！」

スロウスの除外されたカードは確か……。

【スロウスの除外されたモンスターカード】

『ハウンド・ドラゴン』

『マグナ・スラッシュドラゴン』

『スピア・ドラゴン』

『スピリット・ドラゴン』

『フックワイバーン』

『ドラゴラド』

『仮面竜』

『ポケ・ドラ』

『竜の尖兵』

『神竜アポカリプス』

『ライアー・ゾンビ』

『デイズ・ワイバーン』

『死竜 デビヤマタ』×3

『邪狂神の使い』

『ギガント・ゾンビゴーレム』

『リースト・デス』

『邪神教徒の鏡』

『インクシケート・ソルジャー』

『暗闇の同調者』

『アタック・アブゾーバー』

『F・G・D』

『新月の黒砲塔』

『スカル・ソードジェネラル』

『笑い漏斗』

『ブラック・ドラゴスコピーオン』

に、27体！ て事は……！

次元王のランプ：ATK 0↓81000

プカプカ浮かぶ灰色に辺りを照らすランプが、巨大化する。そのサイズは周囲の木を大きく超えている。

攻撃力が圧倒的にテネブラエを超えた、だとお……!?

次元王のランプ（効果モンスター）（オリジナル）

星10

闇属性／炎族

ATK 0 / DEF 0

このカードは手札から召喚・特殊召喚できない。

相手モンスターがダイレクトアタックを行う時、このカードを墓地から特殊召喚できる。

このカードの攻撃力は、除外された自分のモンスター1体につき3000ポイントアップする。

「どおだあ、この圧倒的な攻撃力う！ 絶望しろお！ そして邪神様の贄となれえ！」  
確かに、この攻撃力を相手にするのは、ほぼ不可能だ。

普通のモンスターなら、な。

忘れたか、スロウス？ お前が相手にしているのは、神なんだぜ!?

「(ネタに走るようだけど……) 絶望はしない！ テネブラエの効果で除外した4枚目のカード『ダブルバースト』の効果発動！ これでテネブラエの攻撃力を倍にする！」

「なあに!?!」

『クスクス、げに皮肉な事じゃのう。お主の使った魔法が、そのままお主を苦しめるのじゃからなあ?』

ダブルバースト（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場に存在する闇属性モンスターを1体選択して発動する。

エンドフェイズまで攻撃力は倍になる。

相手の場にモンスターが2体以上存在する場合、選択したモンスターはこのターン2回攻撃ができる。

究極魔導神—テネブラエ：ATK 28100↓56200

「だがあ、まだまだこっちの方が攻撃力が」

究極魔導神—テネブラエ：ATK 56200↓112400

「上、だ……………」

「5枚目に除外したカードは『イリーガル・レコンストラクション・エンジン』。攻撃力が上昇したモンスターの攻撃力は更に倍になる！」



イリーガル・レコンストラクション・エンジン（オリジナル）

【速攻魔法】

自分の場のモンスターへの攻撃力がアップした時にのみ発動できる。

そのターンのバトルフェイズ終了時まで、攻撃力は倍になる。

『小僧、攻撃力が、どうしたかや？』

「ぐ、ぬう、あああああああああああああああああああああつ！」

攻撃力の差は歴然。

そしてその差分を耐えられるだけのライフは、スロウスには残っていない。

「これで、終わりだあ！」

『妾の主を傷つける輩は、排除させてもらおうえ！』

『ダーク・マテリアル・メテオ！』

轟音と共に降り注ぐ闇の流星。

ランプに一発残らず命中したそれは、ガラスを、土台を、中の油を、メッシュを、取手を木端微塵に粉碎し、スロウスごと、吹き飛ばした。



【BGM終了】



「ありがとう、真奈ちゃん。君のお陰で、奴に勝てた」

「ううん、黎さんのサポート、あつてこそ、だよ……」

スロウスが断末魔をあげ、最期の一言もあげる事無く消滅した後、真奈ちゃんは近く

の切り株に腰かけた。あれだけの力を持つ神を召喚したんだ、主の方にも大きな負担がかかるのだろう、既に彼女はグロッキーで、呼吸も荒い。

「いや、君のサポートしかできなかつた。結局は君のお陰だ——」

「う……」

「つ、真奈ちゃん!?!」

グラリ、と突然真奈ちゃんが倒れる。地面に頭を打ち付ける前に急いで彼女を支え、近くの草むらに寝かせる。安静にさせると同時に、透き通るような薄紫の髪の毛は、元の漆のように美しい黒髪へと戻って行った。

耳を澄ますと、クウクウという可愛らしい寝息が聞こえて来る。

「寝ているのか……」

『クスクスクス、妾を呼び出したのじゃ、このくらいは当然じゃのう』

「テネブラエ……」

フワリ、と浮かぶのは、デュエル終了によるソリッドヴィジョンの消滅と同時に姿を消した闇の神。『ブラック・マジシャン』に少し似た彼女は、アメジストと同じ綺麗な紫の瞳で微笑む。

『元々、妾がこの子の中で眠り封じられているだけで、この子は寿命の半分を消費していた。一時的であり、かつ本来の力の半分も出してなかつたとは言え、人間であるこの子

には厳しいものじやろう』

「そっか」

無意識か、それとも俺達に心配をかけないためかは分からないが、この子は疲弊を隠していた。が、並大抵のものでは無かつたらしく、僅かな時間の無理が祟つてぶつ倒れたのか。

健気だな、この子は。他人を大切にする心に溢れている。そう、丁度俺から過去を引き抜いたら、或いはこの子のようになるのかも知れない。

でも、俺は過去を捨てない。いや、捨てられない。  
だからこそ、光を歩む、この闇の少女を助けなくてはいけない。

今の俺にできるのは、この子を見守る事だけ。

「桜、この子の治療を頼む」

「御意」

桜が実体化し、掌から桃色の光を放つ。真奈ちゃんにそれを当てて、治療を図る。

『しかし、何故妾は目覚めたのかのう?』

「ん? 宿主がピンチだったからじゃねえの?」

『いや、妾は例え主がどれ程危険であっても、容易くは目覚めぬ。特にこの森は魔力の結合を阻害する粒子が漂つておる。妾が目覚めるには特に相性の悪い場所じゃ』

「だとしたら多分。真奈ちゃんの怒りが原因じゃないか？」

怒り？ とテネブラエが首を捻る。

「ブチ切れたから、って事」

『この子は6歳の時に“マジ切れモード”を体得してから幾度となくキレた事がある。其の度に妾が顕現していたら、この子は今頃生きておらんぞ？』

「確かに。が、今回は違うだろう」

今回、真奈ちゃんは本格的にキレる前に1度キレかけた。それは止まったのだが、ローギアで怒り続けていた。最初に“処刑人モード”に移行した後、物腰は元に戻ったものの、『ダーク・ネクロフィア』は消えなかった。つまりそれは、彼女の怒りが完全に消失していなかったという事だ。

「ローギアで怒り続け、更に爆発的な怒りを抱く。彼女の怒りがテネブラエの力と関連していたなら、エネルギー源になっても不思議じゃない」

自分がどれ程貶されようとも、真奈ちゃんは怒らない。だが、友達や家族を傷つける輩には一切の容赦はしない。この時、怒りの臨界点を超えると『ダーク・ネクロフィア』が『ウイジャ盤』を引き連れて彼女の頭上に現れる。これが“処刑人モード”。

このまま放置するか怒らせ続けると『ウイジャ盤』の文字が、つまり“DEATH”の文字が揃う。これが“マジ切れモード”。こうなると何でも島一つはリアルファイ



トで吹き飛ぶそうだと。

最初は冗談か、トリップパー特有の能力かと思ったが、この能力は彼女がトリップする前から存在した。

ならば彼女は一般人とは異なる『何か』があると考えるのが妥当だろう。

そしてその『何か』というのが……。

『妾というワケか』

「正解」

テネブラエの力は凄まじい。普通に話している今でも威圧感を感じるくらいだ。桜だつて傍に居るのは苦しいらしく、距離をおいている。

彼女が怒った際、テネブラエの力は彼女に流れると考えれば、島一つ吹き飛ぶという事象も説明がつく。今の段階でも恐らく、テネブラエは星の10分の1を楽に消し飛ばす事が可能な筈だ。10%も惑星が吹き飛ばせば公転や自転、磁場や重力に狂いが生まれ、その星に生きる生命体は全て死に絶える。要するにテネブラエは星中の人を人質に取れるのだ。

話が逸れたな。

つまり、本気でプチ切れる度にテネブラエの力が彼女へと流れるのであれば、テネブラエに対して真奈ちゃんの怒りのエネルギーが流れる可能性もあるという事だ。

そしてその仮説は正しかった。“憤怒”は俺が今戦っている“七つの大罪”の内の一つだが、決して悪いものではない。それは誰かの為を思う行動であり、大きな行動の源泉と成り得るからだ。

“傲慢”は自分の地位を支える自尊心。

“嫉妬”は他者を羨む欲であり願望。

“怠惰”は過度を防ぐ防壁。

“暴食”は力と成長を助ける源。

“色欲”は未来へと己の子を残す本能。

“強欲”は己に足らぬ物を欲する向上心。

“憤怒”は行動の起源となる力。

言い方一つ変えるだけで、モノは姿を変える。大罪は、人の根幹を成すものであり、悪じゃない。

もし悪ならば、彼女が誰かを思って怒る事は、罪悪か？  
否。

彼女は、俺の為に怒ってくれた。俺達を助ける為に怒ってくれた。

それは、罪じゃ無い。

それが罪ならば、世の中の主人公は、全員が大悪人だ。

また話が逸れたな。どうもこの手の話に俺は熱くなつてしまふ。

結局の話、テネブラエが一時的とは言え、復活できたのは真奈ちゃんに怒りが有つてこそだ。彼女の怒りのエネルギーがミドル↓ロー↓ハイとテネブラエへと流れ込んだ。

普通、怒りというのは「危険に晒された」という認識や意識に起因する。こうなると脳からアドレナリン、ノルアドレナリン、カテコールアミンといったストレス・ホルモンが分泌される。これは一時的なものもあれば、長期的に続く場合（これが機嫌が悪いと呼ばれる、一触即発の状態）もある。

興奮状態を促すホルモンは一時的にエネルギーが増加したように錯覚させ、事実として何か行動する際に於いて疲労や痛みを忘れさせる。これが精神的なエネルギーの増幅だとすれば、テネブラエに流れるエネルギーが通常よりも多くなる事ぐらい楽に想像できるだろう。

判断力を鈍らせるのは困り物だが、その発揮される力はバカにならない。チベットの高僧、チョギヤム・トウルンパによれば「抑えつけてはいけない。しかし流されてもいけない」らしい。

ま、平たく言えば、怒るのも結構だけど、自分を見失わないように気をつけろって、事だわな。

『ふむ、という事はこの子がもう一度、あの様に長い期間憤怒の感情を抱えれば、妾は出

て来れる、と?』

「どうだろう? 1度覚醒したんだし、召喚は兎も角、外の世界との接触くらいはもう容易なんじゃないか?」

『そうかのう?』

「何にせよ、ホイホイ出て来れるとは思えないけどな。僅か10分に満たない召喚で気絶だ。本格的な戦いが来るまで、無用な干渉は避けて、真奈ちゃんに一任するべきだろう」

『そうか』

「ああ」

「ん……………っ」

神妙な顔で頷くテネブラエ。その時、真奈ちゃんが呻き、体を起こした。

『む』

その瞬間、テネブラエは姿を消す。位置としては丁度真奈ちゃんの死角になっていたので、テネブラエの姿を見る事は無かっただろう。

『(妾はこれでお暇するえ。後の事は任せておく)』

くれぐれも妾の事は内密にの?

そうテレパシーで俺に伝えると、テネブラエの重くも優しい気配は消滅した。

「ふえ、う……………」

「お早う、真奈ちゃん」

「おはよう、ごございます……………」

フワ、と彼女の精霊達もその周囲に浮かび出す。

「う、ん…………、あれ……………」

「どうした？」

「……………！ そうだ、デュエル！ スロウスとのデュエルってどうなったっけ!？」

「……………はい？」

「この子、自分がフィニッシュャーだったのに覚えてないのか？」

『黎さん、私も覚えて無いのですが…………』

『途中から記憶がサツパリ無いんですぅ〜』

彼女の精霊達も口を揃えて言う。

「ここで漸くテネブラエの「自分の事は内密に」の意味が分かった。

「どうやらテネブラエの召喚の負担が大きさは俺の想像を超えていたらしく、テネブラエに関する記憶がその関係でサツパリ抜け落ちていくようだ。」

「えーと、生きてるって事は、勝つ、た、の……………」

「ああ、君のお陰だね」

「ふえ？」

完全に記憶が無いな。

「どの辺りから記憶が無い？」

「えーと、黎さんが『誤った指示』を除外してアタシを助けてくれたぐらいから、かな？」

「精霊の皆は？」

『私もそんな感じですね』

『ギャウツ！』

テネブラエが声をかける直前か。

俺は桜と視線を合わせる。

「(主殿、如何致す?)」

「(ん、まあテネブラエは内密には言ったが……)」

ポン、と俺は真奈ちゃんの頭に手を、10人の精霊の頭に髪を乗せる。

そしてそのまま、記憶の電流を操作する。

完全な封印から、一時的な催眠の忘却に。

「わにゃ!？」

『びっ!?!』

『ギャウウツ!?!』

「君達の中にある記憶を少しいじった。もう一度、絶体絶命の状態で“あいつ”が語りかけて来る状況になれば、自然とこの記憶は蘇る」

「あ、あいつって?」

「秘密」

テネブラエの性格の事だ、普通のデュエルどころか、闇のゲームでも彼女に力を貸すかどうか怪しい。

だが、逆を言えば彼女が真奈ちゃんに声をかけるといふ事は本当に命の危機だと言う事だ。その時になってこの記憶が無ければ不便だろう。

願わくば、彼女がそれまでにテネブラエと共に戦える程に強くなっている事を。

「それはそうと、ありがとう真奈ちゃん。君が居なかったら、スロウスに勝つ事はできなかった」

「あ、いえ、ここで黎さんが負けたらアタシ達も死んでたかもだし、その辺はお互い様だよ」

何ができたってという話だけだね、と真奈ちゃんは苦笑い。

「そんな事は無いさ。俺こそ、君のサポートに回らざるを得ない身だった。化物のクセに、情けない」

そして俺も苦笑い。

『黎さん、それは謙遜だ』

そんな俺に渋い顔で忠告して来たのは、フォーチュンレディ六姉妹の長女、『アーシー』だった。

「む？」

『我らは森の中、そしてデュエルの最中、スロウスにマスターが幾度となく殺されかけた時、何もできなかった』

『ええ。貴方はマスターの、そして私達の命の恩人です。何度も助けて頂き、本当にありがとうございます』

眼鏡を外して、橙色の瞳で『アーシー』が神妙な顔でそう言う。

それに続けて次女の『ダルキー』が微笑む。

『その、あの、黎さんは、凄いです……』

『うん。あんな大きな怪物相手に怯みもしなかったんだから、もつと自信持つて好いと思う！』

オドオドした三女の『ウォーテリー』が弱気に褒め、気の強い『ウインディー』が笑う。

『つーか、自分の事を化物だなんだって言うけどよお、こつちから見てみたらアンタは十分人間だぜ？』



『うんうん、少なくともスロウスよりずっと人間らしいよ！』

男勝りな『ファイリー』が領き、陽気な『ライティ』が励ます。  
お前ら……。

『貴方が何者であろうと、恩人に変わりはありませんよ』

『ギユツ！』

ナイト、ラブ……。

『いくら感謝しても、し足りないくらいです』

『同じ人間、同じ精霊、仲間だよ！』

ルーン、フレア……。

「お主達……」

「すまねえなあ……、本当にすまねえ……」

ツ、と涙の感触。

感動で涙を流すなんて、いつ以来だろうか……。

「黎さん？」

「いや、何でも無い」

「そうですか」

ゴシ、と涙を拭う。

まだ泣けない。あいつが辛い思いをしているのに、こんなトコで泣いているヒマなんざい無い。

「義妹さん、早く助けられると良いですね」

「君の方も、ゴタゴタが片付く事を祈っているさ」

「究極の神と共に戦う事は熾烈を極めるだろうが、お主ならば大丈夫だろう」

「ありがとうございます」

にこやかに笑った真奈ちゃん。でも彼女の瞳は……。

「何が悲しいんだい？」

「え？」

「君より俺は5年長く生きている。誤魔化せると思った？」

顔は笑っているけれど、目は笑っていない。愛想笑いの証拠だ。

普通笑うなら目から笑う。でも彼女は愛想笑いでよくやるように口から笑った。

「俺の悩みに、戦いに君を巻き込んだ。そのくらいの相談は受けるよ」

「……不安、なんですよね」

「何が？」

「未来、“七究神”、家族、色々です。

今のまま戦って悪魔に勝てるのか、その時になつて薙冴先輩やリアさんの足を引つ張

らないか、神様はアタシと一緒に戦ってくれるのか、響くんやお兄ちゃん達はどれくらい心配しているのか……」

はあ、と不安そうな顔で溜息を吐く真奈ちゃん。

俺はそんな彼女の頭を撫でてやるくらいしかできない。

「みや？」

「俺には、君の不安を取り除いてやる事はできない」

けれど、励ます事はできる。

「悪魔に勝てるか？ そんなに不安なら力をつければ良い。君はスロウスに対抗できるぐらいの実力はある。なら、更に研鑽を積めば勝てるようにはなる。悪魔と邪神、どっちが強いかなんて想像に易いだろう？」

足を引つ張らないか？ 逆に君が彼らを前に引つ張るくらいの事をすれば良い。未  
来は不確定だからこそ、希望に溢れている。ジェローム・K・ジェローム曰く、『毎分、  
毎秒、新しい生き方が始まる』だ。

神様が一緒に戦ってくれるか？ 逆に神様を従えるくらいの事をしてしまえ。自分  
はこんなにも一生懸命に戦っているんだから、寝てないで力を貸させてね。

心配してないか？ そりゃ心配しているだろうよ。家族が、親友がいなくなれば心配  
するのは当然だろう。だからこそ、君は悪魔に勝たなくてはいけない。悪魔に負け

ば、親友も、兄も、父も、母も、仲間も、全てを危険に晒す。敗北の許されない危険な戦いだ」

「……………」

「何故自分がこんな戦いをしなくてはいけないのかと疑問に思い、嘆く事もあると思う。なら逆に考える。大切な誰かがこんな危険な思いをしなくて済んだと。誰かが死ぬ可能性を自分が出る事で潰したのだと」

悲観すれば、全てはネガティブに映る。

楽観すれば、全てはポジティブに映る。

「君は状況を悲観と楽観のどちらかに偏って見るクセがある。良い方向を見ろ、否定するな、明るい光が差しているのならば、そこから目を逸らすな」

「でも、アタシにはそんな強さも度胸も無い……。黎さんみたいな不屈の心だつて……！」

「ならこれから育てれば良い。無いんだつたら自分が持っている物を武器にすれば良い。アーネスト・ヘミングウェイ曰く、『持つていないものではなく、持つているもので何ができるか考えよう』だ。無い物は無いんだつたら、作るか代用すれば良い」

絶望を感じた時は、絶望する時じゃない。真に絶望するのは、愛を、そして心の中に秘めた夢が奪われた時だ。

戦う術が無いのならば、万難の壁が行く手を遮るのならば、蹴散らし、薙ぎ倒せ！

その手が動くなら、カードが1枚でもあるのなら、希望はそこから繋がる。心が残っているのなら、絶望するには早い。

「持っている、もので……」

「偉そうな事言えた義理でも無いんだけどね。でも、ほぼ0%と0%は違うという事を覚えておいてほしい。例えばどれだけ微細でも、あるものはある」

繰り上げ続けて行けば、どんな極小の数値でも1にはなる。だが、0は何度繰り上げようと1にはならない。

1と0、違いは僅か、されど絶対の差がある。

無と有が違う事を、忘れないでほしい。

「『闇とは、世界の負を受け止め、全てに寄り添う影。故に闇とは全ての母』だ」  
「母……」

神妙な顔をする真奈ちゃんの傍ら、俺はテレパシーを試みる。

(テネブラエ……、お前今、俺のセリフに言葉重ねただろ？ 内密にとか言っておきながら、自分でバラすような事してんじゃねえよ)

(クスクスクス、良いではないか。そのくらいのお茶目、許されるじやろう?)

まったく。古い喋り方をするかと思えば、子供のような茶目っ気がある。

一口に神と言っても、色々といえるんだな。

「頼りになる神様が君の中にいるんだ、いざつて時は寄り掛かれ。頼りにされないのもまた、侮辱みたいなモンだ」

「……、はい！ ありがとうございます！」

ペア！ と太陽のように笑う、重い運命を背負った少女。闇の魂を持ち、されど明るい少女。この子もまた、過酷な運命の元に生まれて来た、健気な選ばれし者、か。願わくは、俺のような悲惨な生き様とならん事を。

「どうせだし、写真撮って行こうぜ？ PDAで」

「りょーかい！」

ピピッ、パシャ！ 軽快な音と共に画像が1つ追加される。

そこには、幸せそうな少女とその友人が、そして11人も精霊が写ったのであった。彼女との出会いは一時、されど思い出は永遠。

生は終わりがあれども、無限の螺旋の中を何時までも命はいる。今ここに俺達がいた証明と共に、心は悠久の時を過ごす。

幸せの欠片が、また1つ手に入った気がした。

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 47 : 不服VS闇

——レッド寮から北へ約500メートルの位置・AM 3:01

SIDE : 黎

バシユツ！ と再び足が地を捉える感触。元の世界への帰還に成功したようだ。

真奈ちゃんも無事、帰還できただろうか？ 彼女の不安や悩みを解消できただろうか

？

そんな悩んでも解決しない事を考えながら、俺は寮へと帰還する。

ああ、星が綺麗だな。

——デュエルアカデミア デュエルリング・PM 15:43

「流石だな、大地。ここまで追い詰められたのは何時以来だろうな！」

「君の行動パターンは完全に計算してある！ このデュエル、83.91%の可能性で俺の勝ちだ！」

黎：LP 400

手札：5枚

フィールド

：レベル・ステイラー（DEF 0）

：魔法・罫無し



大地 : LP 3000

手札 : 0枚

フィールド

ヴァニティ・ルーラー

・虚無の統括者 (ATK 2500)、ライオウ (ATK 1900)、ダーク・シム

ルグ (ATK 2700)

・生贄封じの仮面 (永続罫)、魔封じの芳香 (永続罫)、王宮の弾圧 (永続罫)、宮廷のしきたり (永続罫)

アカデミアにおける3度目の月一試験、対戦相手はラーイエローの最強にてオベリスクブルーに最も近いと言われる男、三沢 大地だった。

大地はどうやら対俺用のデッキを組んだらしく、何でも『これが対十代用の8番目のデッキに次ぐ、対黎用の9番目のデッキだ!』らしい。

その実態は特殊召喚封じの「アロマシムルグ」と「虚無の統括者」の混成デッキ。

何コレ普通に強いんですけど。

つか、十代がコレやられたら積むぞ……。

大地は俺のシンクロとエクシーズを警戒しているらしく、特に特殊召喚用のメタカー

ドを多く採用しているようだ。

最初のターンで『始皇帝の陵墓』を使用して『虚無の統括者』を召喚。更に『非常食』で支払ったライフの半分を回復しつつ俺に『始皇帝の陵墓』を使わせないように封印。返しのターンで『団結の力』で強化した『マックス・ウオリアー』で攻撃を仕掛けようとした所、伏せていた『攻撃の無力化』で攻撃を防がれる。

### 始皇帝の陵墓

#### 【フィールド魔法】

お互いのプレイヤーは、アドバンス召喚に必要なモンスターの数×1000ライフポイントを払う事で、リリースなしでそのモンスターを通常召喚する事ができる。

虚無の統括者（効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2500／DEF 1600

このカードは特殊召喚できない。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手はモンスターを特殊召喚

する事ができない。

更に返しのターン、『天使の施し』で大地は『ブラッド・ヴォルス』と『サファイアドラゴン』を墓地へ送って除外して『ダーク・シムルグ』を特殊召喚し、追加で『ライオウ』を召喚。『ダーク・シムルグ』の攻撃を『くず鉄のかかし』で防ぐも攻撃を食らう。

ライオウ（効果モンスター）

星4

光属性／雷族

ATK 1900 / DEF 800

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、お互いにドロウ以外の方  
法でデッキからカードを手札に加える事はできない。

また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送る事で、相手モ  
ンスター1体の特殊召喚を無効にし破壊する。

反撃を試みようとするも、『魔封じの芳香』で魔法を封じられ、伏せる事もできなくな  
る。実質的に魔法と罫を封じられた状況を脱出しようとするが、『生贄封じの仮面』と

『王宮の弾圧』で手札の『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』が腐る。

おまけに『宮廷のしきたり』を利用してその永続罫をガードするという用意周到ぶり。

ダーク・シムルグ（効果モンスター）

星7

闇属性／鳥獣族

ATK 2700 / DEF 1000

このカードの属性は「風」としても扱う。

自分の墓地の闇属性モンスター1体と風属性モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを手札から特殊召喚する。

手札の闇属性モンスター1体と風属性モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを自分の墓地から特殊召喚する。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手はフィールド上にカードをセットする事ができない。

魔封じの芳香

【永続罫】

このカードがフィールド上に存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットしたプレイヤーから見て次の自分のターンが来るまで発動する事はない。

生贄封じの仮面

【永続罫】

このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのプレイヤーはカードをリリースできない。

王宮の弾圧

【永続罫】

800ライフポイントを払う事で、モンスターの特殊召喚及び、モンスターの特殊召喚を含む効果を無効にし破壊する。

この効果は相手プレイヤーも使用する事ができる。

宮廷のしきたり

【永続罫】

フィールド上に表側表示で存在する「宮廷のしきたり」以外の永続罫カードを破壊する事はできない。

「宮廷のしきたり」は、自分フィールド上に1枚しか表側表示で存在できない。

必死に耐えるも、ついにこのターンの初めに『砂塵の大竜巻』で『くず鉄のかかし』が破壊されてしまう。

「さあ、これで終わりだ！ 『ライオウ』で『レベル・ステイラー』を攻撃！ 『ライトニング・バレット』！」

「くっ！」

「そして『虚無の統括者』でダイレクトアタック！ ヽヴァニティー・シヨック！」

雷の砲撃で黒焦げにされる巨大tentウムシ。

そして放たれる無色の魔術。その魔術の周囲の空間が歪んでいるため、その存在が辛うじて分かる。

「俺の勝ちだな、黎！」

「まだまだ！ 手札から『速攻のかかし』を捨てる！」

見えない魔術を、体を張って受け止める機械仕掛けの案山子。

本当にお世話になります。

「くう……、ターンエンドだ！　だが次のターンで全てが決まる、お前のラストターンだぞ黎！」

大地：LP　3000

手札：0枚

フィールド

：虚無の統括者（ATK　2500）、ライオウ（ATK　1900）、ダーク・シムルグ（ATK　2700）

・生贄封じの仮面（永続罨）、魔封じの芳香（永続罨）、王宮の弾圧（永続罨）、宮廷のしきたり（永続罨）

ふう、ギリギリで防いだが、この状況は芳しく無い。

手札のカードは、全て腐ってしまっている。

【黎の手札】

『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』

『大嵐』

『ライトニング・ボルテックス』

『巨大化』

『ガード・ブロック』

引くカードで、全てが決まる。

この状況を、引っ繰り返してくれ！

「俺のターン、ドロー！」

来た！

「俺は『スナイプストーカー』を召喚！」

「ここで『スナイプストーカー』だど!？」

スナイプストーカー：ATK 1500

『へへエッ!』

光線銃を持った黒い悪魔が、ニヤニヤと笑いながら小さな翼で浮遊する。

『スナイプストーカー』のモンスタ―効果、発動！ 手札を1枚捨てて、場のカードを

1枚選択し、サイコロを1度振る！ 2から5の目が出れば、選択したカードを破壊す



る事ができる！ 対象は『宮廷のしきたり』！」

手札の『ラヴァ・ゴレム』を捨て、悪魔の銃が永続罫に照準を定める。  
同時にその頭上にサイコロが回転し始め、やがて止まる。

スナイプストーカー（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1500／DEF 600

手札を1枚捨て、フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

サイコロを1回振り、1・6以外が出た場合、選択したカードを破壊する。

出た目は……！！

「出た目は4！ よって破壊！」

『キヒイ！』

「うわあっ！」

バシユン！ とレーザーが放たれ、大地のカードが消滅する。

これで終わりじゃ無いぜ？

「再び『スナイプストーカー』の効果を発動！ 今度は『魔封じの芳香』！」

こいつの効果に1ターン内の制限回数は無い。次に捨てるのは『ガード・ブロック』。再びサイコロが回り、出た目は2。成立だ。

「破壊成功！ そして魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動！ 手札の『大嵐』を捨て、お前の場のモンスターは全滅する！」

「な!？」

ライトニング・ボルテックス

【通常魔法】

手札を1枚捨てて発動する。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

ズツガアアアアアアアアアン！ と雷が降り注ぎ、一瞬で大地の場に滞在していたモンスター達が焼き尽くされる。

これで、ガラ空きだ。

「そして装備魔法『巨大化』を『スナイプストーカー』に装備して、バトル！」

スナイプストーカー：ATK 1500↓3000

巨大化

【装備魔法】

自分のライフポイントが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。

自分のライフポイントが相手より上の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

瞬時に倍の大きさになる、悪魔の狙撃手。未だにこれと『収縮』の裁定は難しい。

『スナイプストーカー』で大地にダイレクトアタック！ “ヘルスナイプ・シユート”  
！」

「どわあああああああああああつ！」

大地：LP 3000↓0

黎：WIN

大地：  
L  
O  
S  
E

「ふう……、アレはかなりヤバかったよ」

「ははは、まさかあれを破るとは……、俺もまだまだという事か……」

大地とのデュエルを終え、翌日の教室。大地と俺は反省会を開いていた。

ロックというのは便利だが、その逆、破れるカードにはかなり弱い。

魔法・罠・アドバンス召喚を封じたが、『スナイプストーカー』による効果は許してしまったのがあの状況。俺ならばあの状況に『デスカリバー・ナイト』を投入する。これでモンスター効果を封じられる。

『虚無の統括者』と『ダーク・シムルグ』の場を制圧する効果は永続効果なので、自壊を防ぐ事ができるって寸法だ。

死霊騎士デスカリバー・ナイト（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1900 / DEF 1800

このカードは特殊召喚できない。

効果モンスターの効果が発動した時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを生け贄に捧げなければならない。

その効果モンスターの発動と効果を無効にし、そのモンスターを破壊する。

これなら『ライオウ』の効果と『ダーク・シムルグ』の特殊召喚以外には反応しないから、更にロックが凶悪になっていた。危ない。

キーン  
キーン  
キーン

「今日の授業はここまでのニヤ〜」

大徳寺先生の錬金術の授業は、基本的に楽しい。それにサボろうがお喋りしようがあの先生は目くじらを立てたりしない。反省会には持って来いだ。

本来ならば、ここで授業が終わるのだが、大徳寺先生はここで待ったをかけた。

「ああ、遊城くん、遊馬崎くん、天上院くん、神山くん、それから 三沢くんは残って下さいニヤ〜」

俺とフィオと十代と明日香と大地？

それと先生、何故大地の名前を呼ぶ時に半角空けたんですか？

そんなどうでも良い疑問はさておき、先生から説明を受ける。

「今呼ばれた5人は、ノース校とのデュエルに出場するのですニヤ」

「ええ!?!」

「何だつて!?!」

「マジ!?!」

「何と……」

ちなみに上から順にフィオ&明日香、大地、十代、俺。

はて、ノース校とのデュエルは1対1だったハズでは……??

「アチラさんの意向で、5対5、しかも全員1年生という事になったのですニヤ」

「何と……」

同じセリフを繰り返すのは芸が無いと分かりつつ、やってしまう俺。

「というワケで、誰がどういう順番で出るか、決めてこの紙に書いて下さいですニヤ」  
期限は明後日らしい。1週間後にノース校とのデュエルがあるため、向こうとの連絡の兼ね合いもあるのだろう。

失礼しますニヤ、と大徳寺先生は相変わらず独特の言い回しでその場を去った。

「それはさて置き」

「何が？」

「独り言なんでお気になさらず。で、誰がどういう順番で出る？ 個人的には大将は十代か大地が良いと思うんだが」

あー。と俺と十代と大地を除く2人が納得する。

「えー、でもシンクロとかエクシーズが使えぬ黎が行った方が良いんじゃないやねえの？」

「確かに。奇襲性もあるし、何より相手に対策されている事を逆手に取るだけの力が黎にはある」

「ダブルで却下。あの後海馬社長とペガサス会長からアカデミア以外で不用意にシンクロとエクシーズを使わないように釘刺されてるんだ。他校の生徒が山ほどいる中で使えるワケがねえだろ」

万丈目があつちにいる場合、テレビカメラが回る事になっている。そうなれば確実に全世界の注目の的。良くてもあの二人に大目玉では済まないだろう。

「つーワケで、いっちゃん強い奴に俺はなれん。必然、俺に勝ち星を挙げられるであろう十代か、頭脳プレイができる大地が適任だろうな」

「俺はやめておこう。シンクロもエクシーズも使わなかったにも関わらず、先の月一試験は敗北した。となると、十代が良いと思う」



はい決定。

「待った」

フィオ？

「わたしは二人の実力は知っている」

「だろう？ だから実力の元であるシンクロとエクシーズを使えない状況じゃ……」

「でも、君がシンクロとエクシーズを使わない時の実力は知らない」

「……………」

「やってみて欲しい、十代くんとデュエルを。君の全力全開の戦いを」

「……………」、全てを出し切るとなると、シンクロとエクシーズを出さざるを得ない」

「なら、それでも良い」

ガシガシと頭を掻く。

こいつ、意外と頑固だからなあ。こうなるときつと梃子でも動かねえだろうなあ。

「あー、分かった。準備をしたいから、明日で良いか？ 明日の放課後18時、レッド寮

の前で」

「聞くんだったら、わたしじゃなくて十代くんにでしょ？」

呆れたような声を出す、フィオ、それは無用だ。

「俺は良いぜ！」

な？

十代だったらこう言うからさ。

「くうー！ 黎とのデュエル、考えてみっと初めてだぜ！」

「はいはい」

楽しそうですねー。

ま、やるとなったからにや仕方ない。以前から考えていた対十代用のデッキ、持ち出すかねえ。

——翌日の放課後 アカデミアの廊下・PM 16:01

「まあたお前らか。今度は何の要件だ？」  
授業が終わり、帰途の途中。

俺とはある連中に絡まれていた。

「俺はお前らと違つて暇じゃねえんだが」

「ナメんなよゴラ？ レッドの生徒の分際で生意気なんだよ！」

まあ、この一言で判ると思うが、俺に絡んでいるのはブルーだ。それも高田の様なキャラの。更に付け加えると、絡んでいるメンツは、前回の決戦の時に見た事のあるヤツばかり。根に持っていたのか、こいつら。

「今度は何が気に召さないんだ」

「白を切るつもりか、ノース校との友好試合の代表だ！」

あー、それか。

「ふざけんなよ、レッドやイエローの分際で！ 遊城といいテメエといい三沢といい！

代表にブルーが女しかいねえつてのはどういう事だ！」

「俺に言われても困るな。俺と十代はカイザーから、大地はクロノス教諭、フィオと明日香はアツチの代表に女子がいる事から公平性を保つために選ばれた。何一つとして不正は無い」

これは大徳寺先生から直接聞いた事だ。職員会議に出席していたので、これに間違いは無いらしい。

「第一、この間の戦い、テメエらは誰一人として勝利を収められなかった。そんな奴が代

表になれるとでも?」

「ぎっけんなあ!」

俺の正面に立っていたブルー、先日俺が破った高田が怒りのままに俺の顔を殴る。

ゴアン! と金属音が鳴り響いた。

「イツ、デエエエエエエエエエエエエエエエエツ!」

「アホ。俺が体の内側に金属を仕込んでいる事ぐらい有名だ。不用意に殴ったところでダメージを受けるのはお前の方に決まっているだろう」

不運にもこいつの拳が当たった顔面にはチタンが仕込んであった。二酸化チタンとする事で鉄の2〜4倍の硬度を持ち、かつ重量は鉄の60%前後に抑えられる。酸化もし難いというレアメタルだ。飛行機のような乗り物の外装に使われる事が多い。

ちなみに痛みにものたうつ高田に対し、俺は咄嗟に痛覚神経をカットしたので、痛くも痒くも無い。

「く、ぐあ……」

「おいおい大丈夫か、田山?」

「高田だ! 高田純二郎!」

「悪い、間違えたよ石田純二郎」

「オレは天気キャスターか!」

「鈴木順二郎だっけか？」

「探偵漫画に出て来る鈴木財閥のジイさんか！」

「ごめんヨ〜」

「謝り方に誠意が微塵も無いなあ！」

「あつしが悪うござんした、ボブ」

「誰だよ！」

と、俺の挑発に乗っている事に漸く気付いた高田はここで頭を振る。

チツ、もう少し遊べると思つたんだがな。

「で、何の話だったか？」

「テメエらオシリスレッドが代表つてのがおかしいつつつてんだよ！」

「そうだそうだ！ 教師を脅しでもしたか、この外道！」

「今から鮫島校長のトコに行つて、お前らを代表から外してもらうからな！」

「我らオベリスクブルーこそ、代表に相応しい！」

「覚悟しろよ、化物！ 有る事無い事騒いでお前も遊城十代も三沢大地も退学にしてやる！」

ギャーギャー騒がしいので聴覚をカット。

適当に聞き流し、掴んで来る胸倉を払い、多分俺を罵倒するブルー。

やがて、柳の様に動じず流す俺にやつかんでも埒が明かないと分かったのか、ギャーギャー騒ぎながら連中は立ち去って行った。

——10分後・校長室前

「よー、どうしたよ」

校長室の前、30人前後のブルー生が落ち込み、苛立ち、怒っていた。

「どーせ代表云々の事で言い負かされたんだろ？」

「ウツセエ！」

凶星か。

まあ当然だわな。鮫島校長はこんな連中の戯言に付き合ってられる程、暇でもガキでも無い。階級でしか人を見れないこいつらに、代表なんざ務まらん。人の上に立つのに必要なのは技量と人格だ。後者が欠如しているブルーに、そんな事ができるワケが無い。

「クソオ、テメエの所為で叱られちまったんだぞ！」

「俺の所為かい」

「誇り高きブルーの経歴に傷をつけやがって！」

「誇りの前に自分を磨け」

「脅迫してないのなら、どんなイカサマしやがった！」

「何もしていないが」

騒ぎたてるブルーを尻目に、俺はその場を立ち去る。

何故か？ それは「君達、嫌いぞ！」ヤバツ！

「まだやっていったのかね！」

『さ、鮫島校長！』

あいつらは場所を忘れていたのだろうか。現在地は怒られたばかりの校長先生の使う部屋の真ん前だ。当然、そんな場所で言い合いをしていれば気付かれる。

近くの廊下の曲がり角に素早く隠れた俺に対し、連中は固まっている上に扉の前に陣取っていた。逃げられるワケが無い。

鮫島校長から大目玉をあいつらが食らっている間、俺はコソコソと忍び足で逃げる事に成功したのであった。

—— 20分後・レッド寮へ向かう海沿いの道

「今日のメニューは……、エビが入ったからエビフライにしようか。カレー粉があった



から、エビフライカレーか……」

「黎、わたしも良いかな？」

「どうぞ」

大徳寺先生に頼まれて寮長室に持って行く資料を両手に、俺はフィオと一緒に寮へと向かっていった。

『……という事が先刻あったのだ』

『それは大変でしたね』

『大変だったのは主殿だがな。全く、連中は人間として、デュエリストとしての成長が無い』

マスター同士が会話をしている間、精霊同士でも会話が進む。

主だって表に出るのは、精霊としてしっかりとした体を持つ桜。他の皆は結晶石から生まれた存在であり、あまり長い事デュエル以外で外にいるのは好ましく無いらしい。

「今晚だったよね、十代ちゃんと黎のデュエル」

「ああ、見ていくか？ カレーの仕込みも手軽なのがあるし」

「良いの？」

「ああ」

あんま洒落たモンはねえけどな、と肩を竦める。

「最初から期待してないよ」

「これは手厳しいな」

——レツド寮 食堂の台所

「ももえ、ニンジンはいちヨウ切りで」

「はい」

「ああ、フィオ。その包丁の持ち方は危ない」

「こ、ことう?」

エビに下味をつけている間、俺は自身も調理しつつ、来ていた人達に料理を教えている。

「ジュンコ、包丁は押すものじゃない。それだと切れないぞ」

「う」

「明日香、お前……」

「何も言わないで……」

ちなみに明日香が思ったよりも不器用だった。

ジャガイモがかなりポロポロで、大きさも凄まじく不揃いだ。そういや、裁縫も苦手だつて言っていたな。家庭科も3より上を取った事が無い、とか何とか。

皮むきにピーラーを使ったのは正解だったな。

「大地、油引いた？」

「ああ。しかし大きな鍋だな」

「いや、そつちは最終的に煮込むだけ。フライパンの方にも引いてくれ。で、最初はガーリックを炒めてほしい」

「分かった」

大地が物珍しげに見るのは大きな寸胴。胴回りが一抱え近くあるそのサイズは、カレーだけで軽く40人前は行ける。

ちなみに具材を炒めるのにはフライパンを使います。あの巨大鍋で炒めるなんて無謀はしません。

「レ〜イ〜、は〜ら〜減ったあ〜」

「なら皿を並べてろ。ガキかお前は」

「黎く〜ん、コップが1つ足りないツス〜」

「こつちにもあるから取りに来てくれ」

「テーブル、これで足りるんだな？」

「足りないなら裏の物置の中に俺が作ったヤツがあるから、それを」

空腹を訴える十代に、甲斐甲斐しく手伝う翔と隼人。

ふう、なんかオカン氣質が身に付きそうだ。

と、ガラガラ！ と食堂の扉が乱暴に開いた。

あー、何か先の展開が読めた。

「ここにいたか化物野郎『帰れ！』メソボウ?!」

勢いよく乗り込んで来たしつこいブルーに、遠近両方の皆から飛び蹴り鉄拳その他が入りました。

「悪いが高田、料理中なんだ。帰れ」

「知るか！ テメエの所為でレポート提出の課題出されちまったじゃねえか！ どうしてくれるんだ！」

「それこそ知るか、だ。自業自得だ」

「テメエ……!」

ギリギリと齒軋りするブルー連中。

さて、一回目はあっちから立ち去って、二回目は鮫島校長が入って納まった。でも今回はそうはいかないようだ。あっちは相当頭に来ている。怒りで顔が赤とかそんな言

葉じや表現できない感じになっている。

無視するのは簡単だが、ここで暴れられるのは困る。折角用意した食器や食事が台無しになりかねない。

ふむ。

「で、お前らは何の用だ」

「テメエを叩き潰しに来たに決まってるだろうが！」

「そうだそうだ！ 丁度レッドとイエローのクセして代表になった野郎もここに居やがる！ いっそ腕を折ってデュエルできなくさせてやる！」

わー、見上げた腐った根性だな。

何て思つてはみるものの、連中の目は本気だ。そんな事されると双方共に困る。

ならば、あつちだけ痛い目見てもらいましようか。

「キツチンの皆、ゴメン、ちよつとここ空ける」

「黎？」

エプロンと三角巾を外し、置いてあつたディスクに手を伸ばす。

どうせこういう奴らが来る事は予測してあつたんだし、対十代用のデッキとは別の、ノース校用に組み上げて採用できなかったデッキの相手になつてもらいましようかね。

「おいブルー連中」

「何だよ」

「表出ろ。一人残らず相手してやる」  
ペキペキ、と掌を鳴らす。

「少し、頭冷やそうか？」





—  
レ  
ッ  
ド  
寮  
へ  
向  
か  
う  
海  
沿  
い  
の  
道  
・  
P  
M

1  
7  
:  
5  
5

## SIDE：無し

緑の髪に赤い眼鏡の少女、原麗華は、夜の道を歩いていた。

何をしているのかと言えば、パトロールだ。

法律家の親を持ち、風紀委員である彼女は、治安や風紀、規則に煩い。皆に守らせるだけでなく、彼女自身もこうして良い学園となるように尽力しているのである。

ふと、彼女は少し先のレッド寮に向かって何人も人が歩いているのを見つけた。

「おや、皆さん。お揃いでどうなさいました？」

「あ、皆さん」

そこにいたメンバーはいつの日かブルーの軍団と戦ったのとほぼ同じ。

田中、藤原、ツアン、加藤、神楽坂、宇佐美……。

更に彼女の後ろからも人の気配がした。

「やつほー、こんばんは〜」

そこには何人も人がいた。総数にして20人はいるだろうか。

麗華は頭を抱えた。

「皆さん、こんな時間に何をしていますか!？」

「え、何って、原さんと同じ」

？ と首を傾げた。自分と同じと言われても、ここにいるメンツの中に風紀委員はいない。

「田中くん、多分だけど原さんは風紀委員のお仕事で、私達とは違うと思うよ？」

「あ、そうか」

友紀に言われ、ポンと手を打つ康彦。

クスクスと笑う雪乃が説明する。

「この先のレッド寮で、黎のボウヤと十代のボウヤがデュエルをするんですって。オシリスレッドの双壁同士のデュエル、興味無いかしら？」

ああ、と今度は麗華が手を打った。そう言えばそんな話を聞いた覚えがある（忘れていたけど）。

つまりここにいるメンバーはレッド寮のデュエルを見に行くのだろう。

腕時計を見ると、時間はまだどの寮の門限にも程遠い。規則で縛られていない自由な時間帯だ。

夕飯の事を心配するが、きつと黎の事だから、夕飯を皆に振る舞うつもりなのだろう。何より、麗華自身も風紀委員である以前に一介のデュエリストだ。あの有名な二人のデュエリストのデュエルには非常に興味がある。そして否定する材料も無い。

つまり……。

「ええ、非常に興味があります。私も同行させて下さい」

「決まりね」

表面上クールに麗華は決めたが、正直胸の内側は躍っている。対戦する二人は学園の中でも飛び切りの有名人だったからだ。

片や、クロノス教諭を倒し、どんな相手でも確実に勝利を収める  
エレメンタル・ヒーロー  
 E・HERO“使  
 い、通称【稀代の英雄】遊城十代。

片や、人間離れたした身体を持ち、未来の召喚法を操る心優しき化け物、通称【黒鬼の騎士】遊馬崎黎。

どちらが勝つのか、予想はまったくできない対戦カード。どんな展開になるのかとウキウキ分っていたその時だった。

『うわあああああああああああああああつ！』

『ぎゃあああああああああああああああつ！』

『ぶくおあああああああああつ！』

『!?!?』

レッド寮の方から、何人分もの悲鳴が聞こえて来た。

「ふ、ふえ、何が起きたのですか!？」

「行ってみましょう！」

焦る宇佐美の手を引きつつ、麗華は駆け出していた。

何だかんだで、自分も行きたかったのではないかと、彼女は後で自問したという。

——レッド寮前の広場・PM 18:04

レッド寮の前で見た景色、それは正に一騎当千の戦いだった。

「バトル！ 『ヘルウェイ・パトロール』で『深海の戦士』を攻撃だ！ //ヘル・チエイ

サー！！！」

「ぐあっ！」

「そして『マッド・デーモン』と『ランサー・デーモン』でダイレクトアタック！ //ボー

ン・スプラッシュ！！ //デーモン・スピア！！」

「うおおおおおおおっ！！」

黎：LP 8000

ブルー生その26：LP 1600↓0

ブルー生その27：LP 400↓0

ブルー生その26：LOSE  
ブルー生その27：LOSE

「後、5人」

『ぐっ……!』

そこにいたのは、30人を超えるブルー寮の生徒。その全員が黎と多対一のデュエルを行っていた。しかし、黎はその内、既に20人以上を倒していたようだ。

タジ、と後退る数名のブルーに黎は飄々とした笑顔で嘲笑う。

「どうした? ハンデとしてライフを8000貰ったが、それでこのザマか? たった一人のレッド生に傷一つつけられないとは、落ちたもんだなあ?」

「ぎっけんなあ! オレのターン、ドロ! オレは『キラートマト』を召喚だあ!」

キラートマト：LP 1400

高田がディスクにモンスターカードを叩きつける。同時にドロ、と現れるのは赤

い、カボチャのランタンのようなトマトだ。

『キラートマト』で『ランサー・デーモン』を攻撃！」

「迎え撃て！」

『ギジャアアアアアアッ！』

『グオオオオオオオオッ！』

斬！ 紫と金の鎧を着込んだ悪魔の腕の刃で、トマトは真つ二つにされる。

ダメージを高田は受けるが、彼の戦術を知っている者は、彼が何をしたいかを瞬時に判断した。

「うおっ！」

高田：LP 4000↓3700

SIDE：黎

攻撃力の低い『キラートマト』で、僅か200とは言えダメージを受ける覚悟で攻撃して来た。しかも自身の能力で守備表示にならない『マッド・デーモン』を攻撃して来なかった。つまりそれは、奴の目的がリクルートだという事だ。

そして奴のデッキに存在する闇属性のエース、それは……！

「オレは『キラートマト』のモンスター効果を発動！ このカードが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスターを1体、攻撃表示で特殊召喚する！」

やはり！ そしてこいつが呼び出すのは当然……！

「こおいつだあ！ 『カオス・ネクロマンサー』を特殊召喚だぜ！」

カオス・ネクロマンサー：ATK 0

「オレの墓地のモンスターは28体！ こいつの攻撃力は8400だ！」

カオス・ネクロマンサー：ATK 0 ↓ 8400

「どうだ！ この圧倒的な攻撃力は！ テメエを潰すには十分だ！」

バトル！ 『カオス・ネクロマンサー』で『ランサー・デーモン』を攻撃！」

グアッ！ と飛び上がる死の戦士。

全く、本当に……。



「バカのーっ覚えだな」

「ンだとお！」

「リバースカード、オープン！ 罨カード『ディメンジョン・ウオール』！ この戦闘で発生するダメージを相手に押し付ける！ よってお前には6700ポイントのダメージを受けてもらう！」

「え、ぎゃあああああああああああああああああああああつ！」

高田：LP 2900↓0

ディメンジョン・ウオール

【通常罨】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

この戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは、かわりに相手が受ける。

高田：LOSE

「ば、バカな……、このオレが、偶然とは言え2度もオシリスレッド如きに……！！」



「落ち着け、神楽坂」

康彦が止めてくれた。

そう言えば、皆下の名前で呼んでくれつつ言っているけど、神楽坂の下の名前って知らないな……。

「助かったよ、康彦……」

「いや、俺もこの状況が不思議なんだが……、何なんだこの状況？」

「うんまあ、大量のブルーの連中に因縁つけられてさ……」

【状況説明中】

「で、一人で相手してた、と」

「ああ。今さっきPDAで大地から連絡があって、もう少してカレーができるらしい。後は俺がエビフライ揚げるだけだから、予定通り6時半に夕飯、7時にはデュエルだ」

「手伝って来るべきか？」

「ん。厨房の方は平気らしいから、テーブルの方を頼む」

「分かった」

皆の中に戻った康彦は事態を説明。呆れ顔の皆は、そのままテーブル準備の方に取り

掛かった。

「さて、と。俺のターン！」

残りは4人。ちやつちやつと片付けますか！

ちなみに大量虐殺とは言つたけれど、1度に30人以上を相手にはしていない。自分のターンが来るまで時間がかかり過ぎるからね。なので1度に5〜8人くらいをまとめて片付けてます。

「自分の墓地に闇属性モンスターが3体以上存在する時、その内2体をゲームから除外する事で、『ダーク・ネフティス』は手札から墓地に送る事ができる！ 墓地の『ランサー・デーモン』と『スカル・クラーケン』をゲームから除外！」

刃の腕の悪魔と黒いイカもどきが次元の彼方へと消える。

本来ならブルーの連中はこうやって即座に戦力にならないカードや、間接的に効果を発揮するカードを嘲るが、流石にこれまでのデュエルで学習したのか、顔が引き攣っている。何かを感じ取るだけの感性はあるようだ。

「ハッ、バカじゃねえの!?! 墓地のカードを除外して墓地送り!?! やっぱテメエはオシリスレッドだ!」

訂正。

高田だけはいつまで経ってもバカだった。

「更に、墓地の『ヘルウェイ・パトロール』のモンスター効果を発動。このカードをゲームから除外し、手札の攻撃力2000以下の悪魔族モンスターを1体特殊召喚できる！  
現れる、『ダメージ・イーター』！」  
『キッ！』

ダメージ・イーター：ATK 100

黄色い悪魔の攻撃力は僅か100、だがこいつはリリース要因なので問題無い。

ヘルウェイ・パトロール（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1600／DEF 1200

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターのレベル×100ポイントダメージを相手ライフに与える。

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、手札から攻撃力2000以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する。

ダメージ・イーター（効果モンスター）

星2

闇属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 800

相手がダメージを与える魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する事ができる。

その効果は、ライフポイントを回復する効果になる。

この効果は相手ターンにのみ発動する事ができる。

「更に『ダメージ・イーター』をリリースし、『邪帝ガイウス』をアドバンス召喚！」

『グオオオオオオオオッ！』

邪帝ガイウス：ATK 2400

ジユクジユクとした闇の中から這い出る、黒い魔王。ヤギのような角と、黒い鎧が禍々しい。

『ガイウス』のモンスター効果、発動！ このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールドのカードを1枚ゲームから除外する。それが闇属性モンスターだった場合、相手に1000ポイントのダメージを与える！ 対象はそのセットモンスター！』

「げー！」

この効果、相手のライフが1000以下なら『ガイウス』自身を除外する戦法も取れる。

除外されたモンスターは『執念深き老魔術師』。闇属性のリバースモンスターだ。

「闇属性だな。よって1000ポイントのダメージを受けてもらう！」

「ぎゃあっ！」

邪帝ガイウス（効果モンスター）

星6

闇属性／悪魔族

ATK 2400 / DEF 1000

このカードの生け贄召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を除外する。

除外したカードが闇属性モンスターカードだった場合、相手ライフに1000ポイン

トダメージを与える。

ブルー生その28：LP 1600↓600

「さて、降参するなら今の内だが？」

「ふ、ふざけんな！ クズレッド相手に誰が降参なんてするか！」

「そうだそうだ！ カス相手にサレンダーする訳あるか！」

「凶に乗るなこの野郎！ 勝つのはオレ達だ！」

「その通り、我らは選ばれしエリート！ ドロップアウトに降参など、あつてはならぬ  
！」

あつそ。

でも、そういうのは自分の置かれた状況を良く見てから言うべきだな。

黎：LP 8000

手札：4枚

フィールド

：マッド・デーモン（ATK 1800）、邪帝ガイウス（ATK 2400）



：伏せカード2枚

取巻太陽：LP 900

手札：1枚

フィールド

：ゴブリン突撃部隊（ATK 3300）

：愚鈍の斧（装備魔法・『ゴブリン突撃部隊』に装備）

慕谷雷蔵：LP 2500

手札：0枚

フィールド

：重装武者ベン・ケイ（ATK 4300）

：早すぎた埋葬（装備魔法・『重装武者ベン・ケイ』に装備）、デーモンの斧（装備魔法・『重装武者ベン・ケイ』に装備）、魔道士の力（装備魔法・『重装武者ベン・ケイ』に装備）、神剣―フェニックスブレード（装備魔法・『重装武者ベン・ケイ』に装備）、伏せカード1枚

白石光一：LP 1900

手札：4枚

フィールド

：天空騎士パーシアス（ATK 1900）

：魔法・罠無し

ブルー生その28：LP 600

手札：1枚

フィールド

：アステカの石像（DEF 2000）

：伏せカード1枚

「この圧倒的に俺に有利な状況で、どうするんだ？」

「ぐ……！」

「ま、バトルと行こうか。まずは『ガイウス』で『アステカの石像』を攻撃！ //

「イーヴィル・デストロイ！」

「そ、そうは行かねえぞ！ リバースカード、オープン！ 『弱体化の仮面』！ これで

『ガイウス』の攻撃力は700ポイント下がるぜ！　そして『アステカの石像』は反射ダメージを倍にする効果がある！」

ガシオン、と紫のミイラのような仮面が鎧を着た悪魔に装着される。

邪帝ガイウス：ATK　2400↓1700

成程、これなら600ダメージが俺に入る。だが、甘い。そんな程度で俺が屈するとも思ったか。

「速攻魔法、発動！　『突進』！　これで『ガイウス』の攻撃力を700上げる！」

邪帝ガイウス：ATK　1700↓2400

「さ、差し引き0だとお!?　ぐあっ！」

「そして『マッド・デーモン』でダイレクトアタック！　　//ボーン・スプラッシュ//！」

「うああああああああああっ！」

ブルー生その28：LP　600↓0

## 弱体化の仮面

## 【通常畏】

エンドフェイズ時まで、攻撃モンスター1体の攻撃力は700ポイントダウンする。

## 突進

## 【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで700ポイントアップする。

ブルー生その28：LOSE

「残りは3人！ カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 8000

手札：2枚

フィールド

：マッド・デーモン（ATK 1800）、邪帝ガイウス（ATK 2400）  
：伏せカード3枚

ブルー↓俺↓ブルー↓俺の順番で回しているので、次は取巻の番だ。

「クソツッ！ オレのターン！」

「スタンバイフェイズ、『愚鈍の斧』の効果で500ポイントのダメージを受けてもらう  
「わ、分かっている！」

取巻太陽：LP 900↓400

「オレは『ゴブリンエリート部隊』を召喚！」

ゴブリンエリート部隊：ATK 2200

「このままバトルだあ！ 『ゴブリン突撃部隊』で『邪帝ガイウス』を攻撃！」

「リバースカード、オープン！ カウンター罠『攻撃の無力化』！」

時空の渦に阻まれ、ゴブリン達の特攻が防がれる。

にしても、何で装備カード装備してるのは先頭の一人だけなのかね？  
 「く、クソツッ！ オレはカードをセット！ これでターンエンドだぜ！」

取巻 太陽：LP 400

手札：0枚

フィールド

：ゴブリン突撃部隊（ATK 3300）、ゴブリンエリート部隊（ATK 2200）

：愚鈍の斧（装備魔法・『ゴブリン突撃部隊』に装備）、伏せカード1枚

（良し！ 今伏せたカードは『聖なるバリアーミラーフォースー』！ テメエが攻撃して来たら、こいつで返り撃ちにしてやるぜ！）

とか何とか思ってるんだろな、こいつ。

思いつ切り負けフラグぶっ立てやがって、可哀想に。

ま、好いや。倒す戦術を考える手間が省けた。

「俺のターンだ。ドロロー」

このデッキがいくら60枚構成だとは言え、流石にドロソースなんかで手札を補っているから、そろそろ残り枚数が無くなって来ているな。

まあ、もうこいつらにはターンは回さないけどぬ。

「このスタンバイフェイズ、前のターンに墓地へと送った『ダーク・ネフティス』が、自身の効果で墓地から復活する！ 蘇れ！」

『クヒョオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

ダーク・ネフティス：ATK 2400

紅の炎を背負いながら、黒い鎧のような外骨格の大きな鳥が羽ばたく。

大きな泣き声を上げるその姿は、差し詰め不死鳥か。

「『ダーク・ネフティス』のモンスター効果発動！ このカードが特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法・罫を1枚選択して破壊できる！」

「何!?! (しまった、これじゃオレの『ミラーフォース』が……!!)」

「対象は、前のターンに——」

「うう……」

「俺が伏せたりバースカードだ！」

「……、は？」

「ヘルバーニング・シュート！」

「ゴオッ！ と黒い不死鳥の一撃が俺の場の伏せカードを破壊する。  
 「な、何のつもりだテメエ！」

「今に分かる。俺が今破壊したのは装備魔法『黒いペンダント』<sup>ブラック</sup>。このカードがフィールドから墓地に送られた時、相手に500ポイントのダメージを与える」

「な、何だと?! う、うわあああああああああああああああつー！」

取巻太陽：LP 400↓0

ダーク・ネフティス（効果モンスター）

星8

闇属性／鳥獣族

ATK 2400 / DEF 1600

自分の墓地に闇属性モンスターが3体以上存在する場合、その内2体をゲームから除外する事でこのカードを手札から墓地に送る事ができる。

この効果で墓地に送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズ時にこのカードを墓地から特殊召喚する。

このカードの特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在する魔法または罫カード1



枚を破壊する。

黒いペンダント

【装備魔法】

装備モンスターは500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

取巻 太陽：LOSE

「これで残りは2人だ」

「この、ドロップアウトが……!」

「己、オシリスレッドの分際で……!」

「手札から魔法カード発動、『死者蘇生』。これで俺は『トレード・イン』のコストで捨てた『ダークストーム・ドラゴン』を特殊召喚」

『グオオオオオオオッ!』

ダークストーム・ドラゴン：ATK 2700

出現するのは、下半身が黒い旋風に包まれた、漆黒の翼竜。

このデュアルモンスターなので、このターンの召喚権を使わないと効果が使えない。

「更に俺は『ダークストーム・ドラゴン』を再召喚！」

「さ、再召喚!？」

「このモンスターは召喚権を使用して再度召喚しない限り、或いは手札や墓地では通常モンスター扱いなんだ。こうしてもう一度召喚してやる事で、『ダークストーム・ドラゴン』は初めて効果モンスターとなる」

が、こいつの効果を使うにはもう一手必要だ。

「そしてリバースカード、オープン！ 永続罫『リビングデッドの呼び声』！ 蘇れ、『クリッター』！」

『キイツ!』

クリッター：ATK 1000

そして汎用性の高い三つ目の悪魔。毛だらけで愛嬌はあっても可愛くは無い。

別のカードのイラストだと割と可愛いめなんだがな……。

「さあ行くぜ、『ダークストーム・ドラゴン』のモンスター効果発動！ 1ターンに1度、自分の場の表側表示の魔法か罠を1枚墓地に送り、全フィールド上の魔法と罠を全て破壊する！ 『リビングゲテッド』を墓地に送り、効果発動だ！ //ダーク・テンペスト！」

「お、『大嵐』と同じ効果かよ！ うわあああああああつ！」  
「のおおおおおおおおおつ！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオ！ と黒い嵐が吹き荒れる。  
こいつらさつきから悲鳴ばっか上げてるけど、喉大丈夫かね？

ダークストーム・ドラゴン（デュアルモンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 2700 / DEF 2500

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する魔法・罨カード1枚を墓地へ送る事で、フィールド上の魔法・罨カードを全て破壊する。

「これで、『早すぎた埋葬』の効果で蘇生していた『ベン・ケイ』は破壊され、お前らの場はほぼ丸裸だな。ついでに『クリッター』の効果でデッキから『バトルフェーダー』をサーチしておいたぞ」

チェーンの順番は逆だけだな。

ま、良いか。こいつらチェーンの細かい処理なんて殆ど分かって無いだろうし。

「バトル！ 『ダークストーム・ドラゴン』で慕谷にダイレクトアタック！ //カオスハリケーン・バースト//！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

慕谷 雷蔵：LP 2500↓0

慕谷 雷蔵：LOSE

「そして更に『ガイウス』で『パーシアス』を攻撃！ //イーヴィル・デストロイ//！」

「ぬおっ！」

白石 光一：LP 1900↓1400

ズガン！ と闇の球体が天空の騎士を吹き飛ばす。

これで、相手モンスターは真正正銘の0体。さあ、ファイナーレだ！

「これで、終わりだ！ 『ダーク・ネフティス』でダイレクトアタック！

ニックス・バーニング”！」

「のうあああああああああああああああああつ！」

白石 光一：LP 1400↓0

白石 光一：LOSE

黎：ALL WIN

ブルー生32人：ALL LOSE

//カオス・フエ



「はあ、流石に疲れたぜ……」

十代とのデュエル前のウォーミングアップになるとは思ったが、思ったよりこいつら弱い！

疲れだけが溜まって、準備運動にもなりやしない。数で押して来た割にやあ、俺にダメージを与えられないとか何なんだよ！

あーあー、手札の『バトルフェーダー』と『闇の公爵ベリアル』が腐っちゃまった。墓地の『ダーク・アームド・ドラゴン』や『ダーク・クリエーター』、『ダーク・ホルス・ドラゴン』も結局殆ど日の目を見なかったし……。

こんなつまらないデュエルなんて、久しぶりだぜ。

ふう、闇か。

ダークデッキを構築してはみたものの、真奈ちゃんの操っていたテネブラエには何と違うか、インパクトが足りない。神と比べるのもどうかとは思いますが、それでもやはり、闇

の力については思う所があるのも確かだ。

まあ、今は良いか。後でまたゆっくり考えよう。

「気は済んだか？ ほら帰った帰った。俺もヒマ持て余してるワケじゃねえんだ」

「貴様……！ ブルーに対してその言葉使い……！」

「生憎、俺は敬意を払うべき人間にしか敬意を払わない。年だけなら誰にでも重ねられるんでね」

「我らが尊敬に値しないと言うのか！」

「そう言ってるんだが？」

「い、の……！」

P i P i P i P i P i P i !

おっと、PDAに通信が入った。

「はい、もしもし」

『レーイ！ いままでやってるの!?! (キーン)』

ぐあ、ファイオに怒られた。

「ちよ、丁度今終わったトコロだ……」

『早く来てよ！ もうカレー出来てるんだからね！ (ブツツ)』

ありやりや。



じゃあま、用事も済んだ事だし、行きますか。

「おい、どこへ行く！」

「厨房」

「ふぎけるな！ 勝ち逃げするつもりか！」

「勝ち逃げも何も、既に勝敗は決している。これ以上ここに留まって、俺に利益は無い。というか損益しか無い」

エビフライが揚げられないからね。

「貴様、エビフライ如きと我ら、どちらが重要なのだ！」

「エビフライ」

「即答か！」

「この野郎！ ナメるんじゃないやねえよ！」

「負け惜しみが煩いんだよ、この負け犬どもが！」

後ろでギヤーギヤーと騒がしい連中を地面を踏み砕いて黙らせると、俺はそのまま食堂へと向かった。

—  
レ  
ッ  
ト  
寮  
食  
堂  
の  
外  
・  
P  
M

1  
8  
:  
3  
2

「ゴホン。えー、皆さん。途中思わぬハプニングがあったりしましたが、無事に完成しました。これも一重に皆さんのご協力があったからです」

「お疲れ様〜」

「早く食いてえ〜」

「長いぞ〜」

「はい、長い挨拶は嫌われるので……、それでは皆さん、いただきます！」

『いただきます！』

カレーの入った台車を前に置き、その前でお礼をした俺の声に合わせて夕御飯が始まる。

食堂の外に出したテーブルで、レッド寮の皆、およびイエローやブルーの仲間達と一緒に食事を取る、なんて、きつとこの学園じゃ初めてだろうな。

俺も席に座って食事を始める。と、隣に座っていたフィオが話しかけて来た。

「にしても、凄いいね、黎」

「うん？ カレーくらい、余程酷い事をしなけりや誰だつて美味しくなると思うが？」

「いや、デュエルの方。いくら何でも、あの数をたった一人で倒すのはカイザーでも無理だよ」

そんなモンか？

「そうだな、流石にあの数ダメージ無しで倒すのは無理だろうな」

「おっと!？」

突然の斜め前からの声にビックリ。

そこにいたのか、カイザー!？」

「俺がいた事を知らなかったのか？」

「いや、来てたのは知っていたが、そこにいるとは知らなかった」

「そうか」

そう言ってカイザーは食事に戻る。

美味しい、そう静かに呟いてくれた。作り手冥利に尽きるね。

SIDE：フィオ

「ノーダメで勝利は凄いよ。やっぱり黎は強いね」

「そっか、ありがとうな。まあ、あんな奴ら、邪神の護衛よりずっと容易く倒せるから」  
その言葉で、ふと邪神のカードを思い出す。

伏せカードの種類を言い当て、正否に問わずメリット効果の『邪神の頭脳戦』。

カウンター罠でカウンターできない『暗雲の接收』。

同じ表示形式の相手モンスターを自分ごと除外する『イーヴィル・マリントルーパー』。

相手モンスターのレベル×1000ポイント攻撃力が上がる『ポイズニック・シャーク』。

お互い3枚引いて、こっただけが2枚捨てる『邪天使の施し』。

……………、うん。何だかブルー男子が怖くなくなってきた。

「だろ？」

あはは……………。

でも、それでも自信タップリにあの数に挑むんだから、君は凄いね。

「……………機関銃20丁相手に丸腰で挑んだり、ボクサー崩れ100人相手に地下ボクシングで殺し合いた事あるからね……………」

それはそれは……………。

しかも死因がそれじゃ無いって事は、それで生き残ったって事だよね……………。スペックは昔から高かったんだ……………。

にしても、モグモグ……。

「うん、美味しい」

「ありがとう」

「そして悔しい」

「それは俺に言われても困る」

解ってるよ。解ってるけどさあ！

女の沽券に関わるんだよ！ 男より料理が出来ないってのは女失格なの！

「いや、昨今じゃ女性の社会進出もあるから、男女のそういう区別は無くなって来ていると思うんだが……」

「それとこれとは別問題！」

「はい……」

わたしだつて夢見る乙女でもあるんだよ！

愛する旦那と子供に美味しい手料理を振る舞う！ これが将来の理想なんだよ！  
愛されている旦那に振る舞われるんじや無く！

「黎！」

「？」

「負けないから！」

「お、おう……」

こうなったら、毎日お弁当作って来て、黎に食べてもらう！ 絶対に黎に、心の底から美味しいって言わせてやる！

……、後でその事をももえに言ったら「それは何て奥さんですか？」と言われた。赤面してベッドの上でゴロゴロ悶えたのは秘密だ。

—— レッド寮前・PM 18:59

SIDE : 黎

食事を終え、とうとう、十代とのデュエルが目前に迫った。

食器洗いは後回しだ。

俺と十代は黙ってデュエルディスクを展開させた。エッジが、レーンに沿って動き、ライフカウンターが表示される。

少し離れた場所で、皆が、固唾を飲んで見守っている。

「十代」

「何だ？」

「この勝負、全力で行かせてもらう。お前も全力で来い！」

「おう、勿論だぜ！」

「油断するなよ？ 俺はお前に勝てるデツキを作ってきた！ だが、それでも勝てると思わない。土壇場での大逆転劇はお前の持ち味だからな」

「へへっ、俺だって、黎に勝てるとは思ってねえよ。何たって、黎だからな！」

「その高い評価には感謝する。さて、そろそろ行くぞ、十代！」

「来い、黎！」

ピッ！ と時計が小さく時報を鳴らした。



『デュエル!』

t  
o  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 48 : 主人公対決！ 黎VS十代

SIDE : 黎

『デュエル！』

黎VS十代

LP 4000 VS LP 4000

「先攻は俺がもらうぞ！ ドローー！」

オシリスレッドの双壁と謳われる俺と十代のデュエル。

これはただの代表決定戦における大将決めじゃ無い。お互いのデュエリストとしての全ての実力をぶつけ合う、真剣勝負だ！

故に、俺は十代を全力で叩き潰す覚悟で行く！

「俺は、『ピラミッド・タートル』を守備表示で召喚！」

ピラミッド・タートル：DEF 1400

1番手は、ピラミッドを背負った、大きな亀。

表側守備表示で出せるってのは良いよね。

ピラミッド・タートル（効果モンスター）

星4

地属性／アンデット族

ATK 1200／DEF 1400

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから守備力2000以下のアンデット族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「言っておくが十代、このデッキは先のブルーの時に使ったヤツとはまるで違う！ 覚悟しないと、勝利を逃すぞ！」

「分かっているさ！ 黎がそんなヘマをやらかすワケ無いもんな！」

「重畳だ！ カードを伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：ピラミッド・タートル（DEF 1400）

：伏せカード1枚

「行くぜ、俺のターン！ ドロー！」

さあ来い、十代。後攻を渡したんだ、何かやってみな！

「俺は『E-エマージェンシーコール』を発動！ デッキから『E・HERO ワイルドマン』を手札に加え、そのまま召喚！」

『ヌーン！』

E・HERO ワイルドマン：ATK 1500

十代の1番手は、大きな剣を背負った上裸の戦士。罨の効果を受けない孤高のモンス

ターだ。

「行くぜ、黎! 『ワイルドマン』で『ピラミッド・タートル』を攻撃! //

ワイルドス  
ラッシュ!」

『タアアアアア、タアツ!』

斬! 大きな剣が一閃、ピラミッドを背負った亀を斬り裂く。

『グジャアアアアアアッ!』

『『ピラミッド・タートル』、撃破!』

「……ふふ、十代。伏せたカードを罨だと踏んだようだな。だからこそ、罨の影響を受けない『ワイルドマン』を出した」

「ち、違うのか!？」

「ああ、外れだ。俺がそんな分かり易い罨を張っているとも思ったか? 俺は『ピラミッド・タートル』のモンスター効果を発動! 戦闘によってこのカードが破壊された時、デッキから守備力2000以下のアンデット族モンスターを特殊召喚できる」

E・HERO ワイルドマン (効果モンスター)

星4

地属性/戦士族



「こ、攻撃力2800!?!」

「デッキからいきなりそんなのアリなんスか!?!」

「だがあのモンスター<sup>の</sup>守備力は2000、何の問題も無い」

「流石だよ、黎。いきなりこんな大型モンスターを召喚するなんて」

普通ならリクルーターを倒しても出て来るのは弱っちいモンスターのみ。

だが『ピラミッド・タートル』は数あるリクルーターの中でも異質の守備力を参照するモンスター、だからこうした奇策も楽々打てるのである。

「く……っ!」

「教えたはずだ。追撃ができないのなら、無闇にリクルーターを攻撃しちやいけねえつてな」

「ならば俺は『テイクオーバー5』を発動! デッキから5枚カードを墓地に送る!」

テイクオーバー5 (アニメオリジナル) (自己解釈効果)

【通常魔法】

このカード名の効果は1ターンに1度しか発動できない。

またこのカードが墓地に存在する限り、自分のカードの効果でデッキからカードを墓地に送る効果は無効になる。

(1) : 自分のデッキの上からカードを5枚墓地へ送る。

(2) : このカードが次の自分のスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合に発動できる。

このカードと同名カードを手札・デッキ・墓地から全て除外し1枚ドロウする。

えーっと、墓地に行ったのは『スパークマン』『フェザーマン』『ヒーロー・ブラスト』『ヒーロー見参』『神秘の中華なべ』か。十代にしてはあんまり良くない落ちだな、序盤ならあんなモンか？ 後々になって響かないと良いんだが。

「ターンエンドー！」

十代 : LP 4000

手札 : 3枚

フィールド

: E・HERO ワイルドマン (ATK 1500)

: 伏せカード1枚

「俺のターン、ドロウー！」



さて、ここから一気に叩き込む。

十代のデッキは手札と墓地にカードがある程に力を発揮する。

言い換えれば……、墓地が肥えてない序盤は恐れる必要は無いって事だ!

「俺は手札から『デス・サムライ堕ち武者』を召喚!」

『ギジョオオオオ!』

堕ち武者：ATK 1700

「『堕ち武者』を召喚した事で効果発動、デッキからアンデット族モンスターを墓地に送る!」

『オ、オ、オオオオツ!』

「この瞬間、『ドーハスーラ』の効果発動! 自分以外のアンデット族モンスターが効果を発動した時、2つある効果の内どちらかを発動できる! 俺は相手フィールド・墓地のモンスターを除外する効果を選ぶ! 対象は当然『ワイルドマン!』」

「何だって!?!」

堕ち武者（効果モンスター）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 1700 / DEF 0

(1)：このカードが召喚に成功した時に発動できる。

デッキからアンデット族モンスター1体を墓地へ送る。

(2)：表側表示のこのカードが相手の効果でフィールドから離れた場合に発動できる。

デッキから「堕ち武者」以外のレベル4以下のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する。

死霊王 ドーハスーラ (効果モンスター)

星8

闇属性／アンデット族

ATK 2800 / DEF 2000

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：「死霊王 ドーハスーラ」以外のアンデット族モンスターの効果が発動した時に発動できる(同一チェーン上では1度まで)。

以下の効果から1つを適用する。

このターン、自分の「死霊王 ドーハスーラ」の効果で同じ効果を適用できない。

●その効果を無効にする。

●自分または相手の、フィールド・墓地のモンスター1体を除外する。

(2) : フィールドゾーンに表側表示でカードが存在する場合、お互いのスタンバイフェイズに発動できる。

墓地のこのカードを守備表示で特殊召喚する。

兜を被った頭蓋骨がデツキから『馬頭鬼』を墓地に送ると同時、冥府の衝撃波が野性の戦士を吹き飛ばす。これで壁モンスタ―はゼロ。

そして攻撃力の合計値は4500、ワンシヨットキルを狙わせて貰うぜ？

「バトルだ！ 俺は『ドーハスーラ』でダイレクトアタック！」

「リバースカード、オープン！ 『攻撃の無力化』！」

うげ、いきなりか。

これでバトルは強制終了、こっちで打てる手は無し。

さて『ドーハスーラ』の攻撃力は2800、純粋な打点勝負なら『スカイスクレイパー』を持って来る筈。効果処理なら……、『プラスマヴァイスマン』あたりか？

「魔法カード『予見通帳』を発動。デツキトップからカードを3枚除外、3ターン後に手

札に加える」

「あ、わたしの時に使ってたカードだ」

「タイムラグはあるが、『強欲な壺』より強いカードだからな。俺はこれでターンエンド」

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：死霊王 ドーハスーラ（ATK 2800）、堕ち武者（ATK 1700）

：伏せカード1枚

「へへっ、勝負はここからだぜ、黎！俺のターン、ドロー！ このスタンバイフェイズ、

『テイクオーバー5』の効果で、もう1枚ドロー！」

「互いに1ターンずつ経過、状況は十代の不利」

「だが十代はこうした逆境に特に強い、油断ならないぞ」

「……よっしゃあ！俺は『E・HERO エアーマン』を召喚！」

あっ。

「『エアーマン』の効果発動！デッキから『エッジマン』を手札に加える！」

そしてマジックカード『融合』を発動! 手札の『エッジマン』と場の『エアーマン』を融合! 現れる! 『E・HERO Great TORNADO』!』  
『ハアッ!』

あああああああつ! そうだった俺の馬鹿! ド馬鹿! クソ馬鹿!  
漫画版カードとか色々渡してたんだったあー!

E・HERO Great TORNADO : ATK 2800

『Great TORNADO』のモンスター効果発動! このモンスターを融合召喚した時、お前のモンスターの攻撃力を半分にするぜ!」

死霊王 ドーハスーラ : ATK 2800 ↓ 1400

堕ち武者 : ATK 1700 ↓ 850

E・HERO Great TORNADO (融合・効果モンスター)

星8

風属性 / 戦士族

ATK 2800 / DEF 2200

「E・HERO」モンスター+風属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

(1)：このカードが融合召喚に成功した場合に発動する。相手フィールドの全てのモンスターは攻撃力・守備力は半分になる。

突風によってステータスとスタミナを削られ、ぐったりと場に崩れ落ちる黒い蛇魔神と兜を被った頭蓋骨。

マジかよ、いくら初期手札が悪いからってこんなアツサリ形勢逆転とかアリか。

「行け、『ドーハスーラ』を攻撃！」「スーパーセル！」

「くうっ！」

黎：LP 4000 ↓ 2600

クソツタレめ、風で骨は風化するってワケかい。

「まだだ！ 速攻魔法『融合解除』！ 戻って来い、『エアーマン』、『エッジマン』！」

「マジか」

『トアツ!』

『ハアツ!』

E・HERO	エアーマン：ATK	1800
E・HERO	エッジマン：ATK	2600

攻撃力の合計値は4400、850に下がった『堕ち武者』だけじゃあ2600の俺のライフは守れない。

俺がワンキルを狙っていたように、十代もワンキルを狙う戦法を用意していたとはな!

『『エアーマン』で攻撃! “エアラッシュ”!』  
「ぐうっ!」

黎：LP 2600↓1650

「これで終わりだ! 『エッジマン』、 “パワーエッジアタック” だ!」

だがお前が防いでみせたように、俺だってこんな簡単に敗北するつもりはネエんだよ





「くつ、『エッジマン』じゃ勝てないか!」

あつぶねえ、いつにも増して殺意高いじゃねーの。『融合解除』による追撃とか原作でも殆どやった事無いのに。

やれやれ、シンクロだろうがエクシーズだろうが、結局はプレイヤーが操るカードに過ぎない。ああした主人公としての突出した補正を持つている奴を相手にするには、それに胡坐を掻いては駄目というワケか。

「俺はカードを2枚場に出して、永続魔法『悪夢の蜃気楼』を発動! これでターンエンド!」

「げ、ここにそれかよ」

十代 : LP 4000

手札 : 0枚

フィールド

・E・HERO エアーマン (ATK 1800)、E・HERO エッジマン (ATK 2600)

・伏せカード2枚、悪夢の蜃気楼 (永続魔法)

「凄い攻防ですわね……！」

「お互いがお互いの首を直に狙いに來てる、本気の潰し合いなんだ」

「俺の、ターン！」

「この瞬間、俺は『悪夢の蜃気楼』の効果で手札が4枚になるようドロウする！ 俺の手札は0枚、よって4枚ドロウだ！」

「ならこつちもドロウさせて貰おうか！ 『天使の施し』を発動！ デッキから3枚ドロウし、2枚捨てる！」

……よつしや來た來た、こいつが欲しかったのさ！

「今度はこつちの番だ、行くぞダチ公！」

「來い！」

「フィールド魔法発動、『アンデットワールド』！」

アンデットワールド

【フィールド魔法】

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上及び墓地に存在する全てのモンスターをアンデット族として扱う。

また、このカードがフィールド上に存在する限りアンデット族以外のモンスターのア

ドバンス召喚をする事はできない。

ブシューウウウウウツ、と紫の瘴気が吹き出る。

その瞬間、周囲に生きとする生物は全て死する生者へと姿を変え、青白い靈魂が飛び交う不気味な世界へと成り変わった。

「ひっ!」

「きゃああああああああああつ!」

「うわ……………」

「なんとまあ……………」

「おお!」

「アンデットのサポートカードか?」

観客席の反応は様々。怖がる人、ドン引く人、興味深げに見る人、様々だ。

ちなみに上から順番に雪乃、フィオ、隼人、ももえ、友紀、神楽坂である。

「このカードがフィールド上に存在する限り、お互いの場と墓地のモンスターは全てアンデット族になる!」

「な!?!」

「要するにお前は、『戦士の生還』のような種族で縛るカードを使えないわけだ」

十代のデッキは戦士族で縛ってある（『ダーク・カタパルター』や『カード・ガンナー』のような機械族もいるが）。アンデット族用のサポートカードは無いハズだ。

「ぎゃあつ！ アニキの場のモンスターが!?!」

仰天した翔が指差す先には十代のモンスターが。

ただし……。

「うわーお……」

「おえ……」

「きゃあああああああああああつ!?!」

アンデット族である。

腐敗し、皮膚は爛れ、目も零れている。骨が覗いたりハエが集ったりと、思わず俺も顔が引き攣る。ちなみに上から順に俺、十代、ツアン。

人殺しを経験した事はあるが、歩く死体とエンカウントした事は無い。精神衛生上非常に宜しく無いので、嫌がらせ目的以外では封印しましょうかね……。

「手札から魔法カード『アンデット・ネクロナイズ』を発動！ 俺のフィールドにレベル5以上のアンデット族モンスターが存在する時、相手モンスター1体のコントロールをターン終了時まで得る！」

アンデット・ネクロナイズ

【通常魔法】

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

(1) : フィールドにレベル5以上のアンデット族モンスターが存在する場合、相手フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る。

(2) : このカードが墓地に存在する場合に発動できる。

除外されている自分のアンデット族モンスター1体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。

ここで『エッジマン』を奪っても良いけど、防がれると十代の場に戻ってしまう。2

6打点の貫通持ちを強化されても面倒だし、ここは……。

「俺がコントロールを奪うのは『エアーマン』だ!」

「『エアーマン』ッ!」

「勿論、返さないぜ? 俺は『堕ち武者』の効果で墓地に埋葬された『馬頭鬼』のモンス

ター効果発動! このモンスターを墓地から除外し、自分墓地のアンデット族モンス

ターを墓地から復活させる！」

「アンデット族のモンスター効果が発動したという事は……！」

「そうさ！ 『ドーハスーラ』の効果発動！ お前の『エッジマン』をゲームから除外する！」

『グオオオオオオオ！』

「そんな、今度は『エッジマン』まで……！」

次元の狭間に消滅する金色の刃の英雄。これで打点の高いモンスターは融合召喚しなと出て来ない。

墓地にカードは溜めさせない。お前を本気で倒すために、俺は手を絶対に抜かない。

そのくらい気概も無くして、お前と対等にデュエルは出来ねえからな、十代。

「そして蘇れ、チューナーモンスター『ゾンビキヤリア』！」

『ヴァアアアア！』

馬頭鬼（効果モンスター）

星4

地属性／アンデット族

ATK 1700／DEF 800

(1) : 墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のアンデット族モンスター1体を対象として発動できる。

そのアンデット族モンスターを特殊召喚する。

ゾンビキャリア(チューナー・効果モンスター)

星2

闇属性/アンデット族

ATK 400/DEF 200

(1) : このカードが墓地に存在する場合、手札を1枚デッキの一番上に戻して発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

「チューナー、『天使の施し』で捨てていたのか……!」

「来るわよ、十代!」

「レベル4アンデット族となった『エアーマン』に、レベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング!」

腐臭を放つ大気の英雄が4つの星になり、病原体の塊が作り出した緑の輪の中を通っていく。

ヒーローが輪郭すら失った瞬間、輪の中を一筋の光が貫いた。

「黄泉に落ちし魔王が、不死の力を得てこの世に再び君臨する！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆2＋☆4＝☆6

「シンクロ召喚！ 復讐の時を誓え！ 『蘇りし魔王ハ・デス』！」

『ハッハハハハハアッ！』

蘇りし魔王ハ・デス：ATK 2450

光の柱から出て来たのは、黒い球体。それはやがて人型となり、くすんだボロボロの外套になる。そしてその人型は片方の角の折れた魔王となった。一度死んだ身、その姿は悪魔からゾンビに変わっている。

……アンデットに希望云々つてのもおかしな話だな。



「こ、こいつは『ハ・デス』!？」

「ただの『ハ・デス』じゃ無いぜ? こいつには『冥界の魔王ハ・デス』の時代にあった墓地から復活できない効果が消滅している! つまりこいつは墓地から再利用できるって事だ!」

そう、こいつには蘇生制限が無い。魔王時代よりグツと使いやすくなった、改良されたと呼ぶべきモンスターだ。

「バトルだ! 『蘇りし魔王ハ・デス』でダイレクトアタック!」

「速攻魔法『クリボーを呼ぶ笛』! デッキから『ハネクリボー』を特殊召喚する!」  
『クリクリ〜!』

「更に『非常食』を発動! 『クリボーを呼ぶ笛』と『悪夢の蜃気楼』を墓地に送り、ライフを2000回復するぜ!」

ハネクリボー : DEF 200

十代 : LP 4000 ↓ 6000

成程、そいつで防御するつもりか。

だが甘い!

「攻撃続行！　　『ネクロ・ペナルティ』！」

赤黒い雷を浴びせ、羽の生えた毛玉を焼き尽くす。

流石は魔王、マスコット相手にも容赦が無い。

「『ハネクリボー』の効果発動！　このカードが破壊されたターン、俺が受けるダメージはゼロになる！」

「無駄だ！　『蘇りし魔王ハ・デス』の効果で、俺の場のアンデット族モンスターがバトルで破壊したモンスターの効果は無効となる！」

「なっ!?!」

蘇りし魔王ハ・デス（シンクロ・効果モンスター）

星6

闇属性／アンデット族

ATK 2450 / DEF 0

「ゾンビキャリア」+チューナー以外のアンデット族モンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在するアンデット族モンスターが戦闘で破壊した効果モンスターの効果は無効化される。

「ちなみに良い事を教えてやるぜ、十代。『ドーハスーラ』もまた1ターンに1度、アンデット族モンスターが発動した効果を無効にする能力がある。そしてフィールドと墓地の全てのモンスターは今『アンデットワールド』の影響下にある」

「そ、それって……!」

「そう、お前のヒーローが活躍するステージは、この死者の世界には無いって事だ!

続けて『ドーハスーラ』でダイレクトアタック! エターナル・ドゥームバースト

“オ!”

「ぐああああああああああああああああ!」

十代 : LP 6000 ↓ 3200

回復されたのは少々痛い、たかが2000だ。1〜2発多く叩き込めばリカバリーできるだろう。

「俺はこれで、ターンエンド!」

黎 : LP 1650

手札 : 2枚

フィールド

：死霊王 ドーハスーラ（ATK 2800）、蘇りし魔王ハ・デス（ATK 2450）

：魔法・罨無し

「へへ、ワクワクするなあ黎！ お前のシンクロも！ エクシーズも！ それ以外のモンスターだって！ 何が出て来るか、どんな効果かも分からない！ だから物凄くワクワクするのが止められないんだ！」

「このデュエルジャンキーが……。だがそれは俺も同じ、この状況でお前がどう切り返して来るか、それを見たくて見たくて堪らない！ ははははははは！ 俺をもっと奮い立たせてみやがれ十代！」

言って気付く。

はは、はははははは！ 俺が！ この俺が！ こんなにもワクワクしている！

「何か2人とも、楽しそうッス」

「鎬を削る戦いっていうのはそういうものよ」

「自分が楽しんでこそ、周りの人達も楽しめる。デュエルとはそういうものなのじゃ」

「この俺がだ！ 化物で！ 誰かを殺めていくしか生きられなかったクソ以下の存在

が! こんなにも『人間』らしく生きている!

とんだ茶番だ、とんだ傑作だ! ああ、これがデュエルって奴なのか! ははは、最高に最低で、最低に最高すぎるだろ!

はははははははは! どんなフィクションだよ、罪人が楽しく遊べる世界って!

「俺のターン、ドロー! 『潜入! スパイ・ヒーロー』を発動! デッキからカードを2枚墓地に送り、相手墓地の魔法カードを俺のカードにする! 俺は黎の『天使の施し』を選び、そのまま発動!」

あー、腹痛い。

さて十代の手札は5枚に回復済み。ぶつちやけアイツ相手だと致命的なんだよな、しかも手札交換までしやがった。

えーっと、墓地に落ちたのは『Rーライトジャステイス』、『神の宣告』、『E・HERO クレイマン』、『E・HERO プリズマー』か。墓地の落ちが悪いって事は……。

「……来たぜ!」

ほらやつぱり。

パラレル・ワールド・フュージョン

「『平行世界融合』を発動!」

「嘘やん、考え得る限り最悪に近い手じゃん……!」

「除外されている俺のモンスターをデッキに戻し、それを素材にした融合召喚を行う!

俺は黎が除外した『エッジマン』と『ワイルドマン』を融合！」

平行世界融合

【通常魔法】

このカードを発動するターン、自分はこのカードの効果以外ではモンスターを特殊召喚できない。

(1)：除外されている、「E・HERO」融合モンスターカードによって決められた自分の融合素材モンスターをデッキに戻し、その融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚する。

「現れる！ 『E・HERO ワイルド・ジャギーマン』！」

『ハアア、トアツ！』

E・HERO ワイルド・ジャギーマン：ATK 2600

除外された英雄2人の魂が、日焼けした金色の鎧戦士に生まれ変わる。

どうしてこいつはこういう時にこうやって欲しいカードをサツと引けるんだろうな

……。あの鬼みたいなドロー運、デツキと神経繋がってるんじゃないの？

『ワイルド・ジャギーマン』は相手モンスター全てに1度ずつ攻撃する事ができる！これは発動する効果じゃないから、『ドーハスーラ』じゃ止められないぜ！

「だが攻撃力は2600! 『ドーハスーラ』は2800だ!」

「ならこうするまでだ! 『ヒートハート』を発動! 俺のモンスター1体に貫通能力と攻撃力500アップを与える!」

「マジか」

E・HERO    ワイルド・ジャギーマン : ATK    2600 ↓ 3100

攻撃力まで超えられちゃったよ。

笑うつきやねえ、さつきと違う意味で。

「もう一丁! 来い、『ダーク・カタパルター』!」

『ピピッ!』

ダーク・カタパルター : ATK    1000

「これで十代の場にはモンスターが2体！」

『ワイルド・ジャギーマン』で2体倒せば、直接攻撃で勝ちよ！」

「バトルだ！ 『ワイルド・ジャギーマン』で『ハ・デス』と『ドーハスーラ』を攻撃！」

「インフィニティ・エッジ・スライサー！」

「っ！」

黎：LP 1650↓1000↓700

「トドメだ！ 『ダーク・カタパルター』でダイレクトアタック！」

「墓地の『もののけの巣くう祠』の効果発動！ 自分フィールドにモンスターがいない時にこのカードを除外！ 墓地からモンスター効果を無効にして、アンデット族モンスターを特殊召喚する！ 復活せよ、『ドーハスーラ』！」

『GOOOOOOOOOOOOOOO！』

死霊王 ドーハスーラ：ATK 2800

死してなおも不滅、それがアンデットだ。何度でも蘇り、何度でも敵に喰らい付く。



1度や2度倒したくらいで勝った気になるのは滑稽だぜ、十代？

「これで『ダーク・カタパルター』は攻撃しても返り討ちだ！」

「だが『ワイルド・ジャギーマン』は相手モンスター全てに攻撃できる！ 行け、イン

フィニティ・エッジ・スライサー！」

「ぐうっ！」

黎：LP 700↓400

E・HERO ワイルド・ジャギーマン（融合・効果モンスター）

星8

地属性／戦士族

ATK 2600／DEF 2300

「E・HERO ワイルドマン」＋「E・HERO エッジマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をすることができる。

「ふ、踏み止まったんだな！」

「流石だ、この程度でやられる男じゃなかったか」

「ふふふつ、痺れるわねえ坊や達……！」

ザクザクと俺の場のアンデット族モンスターが細切れにされ次々と退場していく。

それでも何とか持ち堪えられた。『もののけの巣くう祠』に墓地から除外する効果が無ければヤバかったぜ……。

「今のターンで仕留められなかったのは失敗だったな、十代！ 『ドーハスーラ』はフィールド魔法が発動している時、お互いのターンのスタンバイフェイズに守備表示で復活する効果を持つ！ 『ワイルド・ジャギーマン』も次のターンで除外してやるよ！」

「へへ、ならば俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだぜ！」

E・HERO    ワイルド・ジャギーマン：ATK    3100 ↓ 2600

十代：LP    3200

手札：0枚

フィールド

・E・HERO    ワイルド・ジャギーマン (ATK    2600)、  
 ダーク・カタパルター

(ATK    1000)

：伏せカード2枚

手札5枚を潤沢に使いやがってコンニャロウめ。

こつちも反撃して仕留めないと、いい加減ヤバいか。『ダーク・カタパルター』をアタッカーにするレベルだし。

「俺のターン、ドロー! このスタンバイフェイズ、『ドーハスーラ』が墓地から復活! 蘇れ、〃エンドレス・デスライフ〃!」

墓地から暗い光が差し込み、地の底からラミアのような悪魔が――

「リバースカード、オープン! 『ヒーローズルールーファイブ・フリーダムス』!

お互いの墓地から合計5枚のカードをゲームから除外するぜ!」

「何ですとお!?!」

ヒーローズルールーファイブ・フリーダムス（アニメオリジナル）

【通常罫】

自分と相手の墓地から合計が5枚になるようにカードを選択し、ゲームから除外する。

復活しようとした『ドーハスーラ』を始め、墓地から『ゾンビキャリア』『ハ・デス』『墮ち武者』『ピラミッド・タートル』が除外される。

マジか、そんなカードまであったのか。しかもドンピシャのタイミングで引いて伏せられるとか、こいつのデッキ構築変態的過ぎるだろ。

「よし、上手いぞ！ これで黎のモンスターは復活できない！」

「そっか、除外に弱いのはアンデット族も同じなんだ」

「鋭い切り返し、100点です！」

「やるわね、あいつら……」

十代の攻めの一手に沸き立つ観衆。

面白い、一進一退の攻防こそデュエルの醍醐味よ！

「俺は『闇の誘惑』を発動！ デッキから2枚ドロし、手札の『地獄の番人イル・ブラッド』を除外！」

地獄の門番イル・ブラッド（デュアルモンスター）

星6

闇属性／アンデット族

ATK 2100 / DEF 800

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●1ターンに1度、手札・自分または相手の墓地に存在するアンデット族モンスター1体を特殊召喚することができる。

このカードがフィールド上から離れた時、この効果で特殊召喚したアンデット族モンスターを破壊する。

さて、ドロローしたカードは……、OK!

「ここで俺は墓地の『アンデット・ネクロナイズ』の効果発動。除外されているアンデット族モンスターをデッキに戻し、このカードを墓地からセットする。俺は『ゾンビキリア』をデッキに戻す」

除外されたカードをデッキに戻し、墓地ポケットからカードを1枚場に裏側表示で出す。

これで準備は整った。

「魔法カード『アンデット・リボーン』発動! デッキから同じ名前のモンスターを除外

する事で、墓地のアンデット族モンスターを特殊召喚できる！俺は墓地から『天使の施し』の時に捨てた『ゴブリンゾンビ』を蘇生させる！

『オ、オオオ……』

ゴブリンゾンビ：DEF 1050

墓穴を自分で掘り出し、醜い死体が地中から現れる。剣を持っているが、見た感じ全く強そうには見えない。

アンデット・リボーン

### 【通常魔法】

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。(1)：自分または相手の墓地のアンデット族モンスター1体を対象として発動できる。

自分のデッキ・EXデッキから、そのモンスターの同名モンスター1体を除外し、対象のモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。

(2)：このカードが墓地に存在する場合に発動できる。

除外されている自分のアンデット族モンスター1体を選んでデッキに戻し、このカー

ドを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。

「また十代のモンスターを奪う気か……?」

「でも、あのカードはレベル5以上のアンデット族モンスターが必要なんだな。『ゴブリ  
ンゾンビ』はレベル4、発動はこれじゃできないんだな」

「チツチツチツ、甘いぞ隼人。『アンデット・ネクロナイズ』はレベル5以上のアンデッ  
ト族モンスターがいる場所を問わない、つまり相手フィールドの『ワールド・ジャギー  
マン』がいれば条件は整う」

「何!?!」

「でも……、折角だから今回は自前で用意してやるよ! 俺はチューナーモンスター『ユ

ニゾンビ』を召喚!」

『ア、アアアア!』

『ラ、ア〜!』

ユニゾンビ：ATK 1300

醜い死体の隣には、細いのと太いゾンビだか骸骨だかがくっついた魔物が現れる。

雄叫びは一致していないし細い方のダミ声と太い方の良く通る声は不協和音だして、こいつらどうして合体したんだレベルである。

『ユニゾンビ』の効果発動！ デッキからアンデット族モンスターを墓地に送り、俺の場のモンスター1体のレベルを1つアップさせる！ デッキの『ゾンビキャリア』を墓地に送り、『ゴブリンゾンビ』のレベルを4から5に上げる！」

ゴブリンゾンビ：☆4↓5

「これでレベル5になったぜ、十代？」

「くっ！」

ユニゾンビ（チューナー・効果モンスター）

星3

闇属性／アンデット族

ATK 1300／DEF 0

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。



(1) : フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

手札を1枚捨て、対象のモンスターのレベルを1つ上げる。

(2) : フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

デッキからアンデット族モンスター1体を墓地へ送り、対象のモンスターのレベルを1つ上げる。

この効果の発動後、ターン終了時までアンデット族以外の自分のモンスターは攻撃できない。

『アンデット・ネクロナイズ』、オープン! お前の『ワイルド・ジャギーマン』をターン終了時まで俺のモンスターにする!」

俺のカードから放たれた紫色のオーラに囚われ、十代のモンスターが俺のフィールドに亡者のような風貌になって移動する。いやはや、自分で回しておいて何だがこれでガチデッキの欠片も無いんだから昨今のデュエルの環境は悍ましい。

「ただし墓地からセットされた『アンデット・ネクロナイズ』はフィールドを離れた時に除外される。再利用は一度きり、アンデットも死ねば今度こそ復活できない、つてな」  
「また兄貴のモンスターが盗られたツス!」

「何というカードのパフォーマンス……。都度都度手札を補充する十代に対し、黎は消

費を極限まで抑え込んでいるというのか……!」

「さあドンドン行くぞ? レベル5になった『ゴ布林ゾンビ』に、レベル3のアンデツト族『ユニゾンビ』をチューニング!」

二人三脚ならぬ二人二脚の亡骸が3つの輪に化け、剣を持った醜いがそこを潜る。

悪いがこのターンで決めに行かせて貰う!

「眠りし龍の亡骸が、万敵を屠る威光に輝く! 希望が溢れる明日となれ!」

☆5+☆3=☆8

「シンクロ召喚! 冥府の煌めきを示す龍!

『きよがいりゆう巨骸竜フェルグラント!』

『ゴアアアアアアアアアアアアアア!』

巨骸竜フェルグラント：ATK 2800

呼び出したのは、かつて神聖な輝きを放っていた筈の巨大なドラゴン。朽ちて肉体が黒ずんでなお、その威容は凄まじい。

「シンクロ素材として墓地に送られた『ゴ布林ゾンビ』の効果発動。デッキから守備力

1200以下のアンデット族モンスターを手札に加える。俺は守備力0の『ゾンビ・マスター』をサーチする。

更に『巨骸竜フェルグラント』の効果発動、特殊召喚成功時に相手モンスター1体を除外できる。俺は『ダーク・カタパルター』を除外!

「クソ、また除外された!」

「悪いな、墓地にモンスターを貯めさせるわけにはいかねえんだ、お前の場合」

ゴブリンゾンビ (効果モンスター)

星4

闇属性/アンデット族

ATK 1100/DEF 1050

(1):このカードが相手に戦闘ダメージを与えた場合に発動する。

相手のデッキの一番上のカードを墓地へ送る。

(2):このカードがフィールドから墓地へ送られた場合に発動する。

デッキから守備力1200以下のアンデット族モンスター1体を手札に加える。

巨骸竜フェルグラント (シンクロ・効果モンスター)

## 星8

光属性／アンデット族

ATK 2800 / DEF 2800

アンデット族チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが特殊召喚に成功した場合、相手のフィールド・墓地のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを除外する。

(2)：このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、墓地からモンスターが特殊召喚された場合、このカード以外のフィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

「さて奪った『ワイルド・ジャギーマン』だが、返す時は勿論死体だ」

「「言い方が酷い」」

「墓地の『ゾンビキャリア』のモンスター効果発動。手札を1枚デッキの1番上に戻し、このカードを墓地から特殊召喚できる。『ゾンビ・マスター』を戻して、特殊召喚！」

ゾンビキャリア : DEF 200

「自己再生能力!」

「『アンデット・ネクロナイズ』を再利用するためだけでなく、蘇生させるために『ゾンビキャリア』をデッキに戻したのね!」

「そのために『ユニゾンビ』を噛ませ、更にその効果を利用して『アンデット・ネクロナイズ』の発動条件とシンクロ素材の奪取を両立させた……! 全ての行動を繋がっている、黎はこれを狙っていたのか!」

「おまけに手札コストまで調達していましたわ……! この流れこそが勝利への布石なのでしょいか!」

「レベル8のアンデット族になった『ワイルド・ジャギーマン』に、レベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング!

今、もののふ武士の魂燃やし、あやかし妖を断つ無限の魂となる! 希望が溢れる明日となれ!」

☆8+☆2||☆10

「シンクロ召喚！ 抜刀！ レベル10、『炎神—不知火』ほむらがみ しらぬい ツ！」  
 『トアッ！ フッ！』

炎神—不知火：ATK 3500

念には念でもう1体。靈魂の力を宿した刀を持つ馬上の侍も呼ぶ。

攻撃力を見ても良し、効果を見ても良しで、こいつを召喚するのは間違っていない筈だ。

「攻撃力3500!？」

「これが黎の切り札というワケか……!？」

「モンスター効果、発動！ 除外されているアンデット族シンクロモンスターをエクストラデッキに戻し、同じ枚数相手のカードを破壊する！」

俺にはお前がわざわざ除外してくれた『蘇りし魔王ハ・デス』がいる。これをデッキに戻して、お前の最後の伏せカードを破壊するぜ！」

炎神—不知火（シンクロ・効果モンスター）

星10

炎属性／アンデット族

ATK 3500 / DEF 0

アンデット族チューナー+チューナー以外のアンデット族モンスター1体以上

自分は「炎神—不知火」を1ターンに1度しか特殊召喚できない。

(1) : このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。

自分の墓地のカード及び除外されている自分のカードの中から、アンデット族Sモンスターを任意の数だけ選んでエクストラデッキに戻す。

その後、戻した数だけ相手フィールドのカードを選んで破壊できる。

(2) : 自分フィールドのアンデット族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地の「不知火」モンスター1体を除外できる。

『不知火』の抜き身の刀に青白い焰が灯り、それが三日月状の斬撃波となつて炎と共に撃ち出される。

着弾と同時に爆発したそれは、派手な粉塵を巻き起こして過たず伏せられたカードを焼き尽くした。

「あ、兄貴のフィールドが完全に焼け野原にされたツス！」

「これが主殿の本気か、徹底した塵殺の果てには何も残らないというワケだ」

「うわあ、大人げないですねえ」

フレイ、余計なお世話だ。

「これで終わりだ、十代！ 『不知火』でダイレクトアタック！」

「っ！」

「ヒノカミノツルギ 焰尊靈劍・アヤカリフエ 妖落笛！」

火山噴火のように吹き上がる焰の刀が一直線に振り下ろされ、十代を捉える。

攻撃力は3500、対してアイツのライフは3200ポイント。

「兄貴イ！」

「この攻撃が通れば十代の負けだ！」

「決まったか！」

取った！





「へへっ」

十代：LP 3200

莫迦な、ライフが減ってない、だと……！

「一体何が……！」

「そろそろ煙が晴れて来るぜ、俺のフィールドをよく見てみるよ  
は？ お前のフィールドって言う……。」

『E・HERO フェザーマン』

『ヒーロー・ブラスト』

『ヒーロー見参』

「まさか、俺の破壊したカードは……！」

「そうさ！ お前が『不知火』で破壊したカードは、この『ブービーゲーム』だったのさ  
！」

うっそだろお前、この状況でそれを俺に破壊させたのかよ、どんだけ運が良いんだよ。

「ああ、これは仕留め損ないましたねえ」

「どういう事ツスカ?」

「主殿が破壊したあのカードは、破壊された時に墓地のトラップを2枚そのターンでも発動できる形にして場に戻す効果を持つ」

「最初のターンで墓地に落ちていた『フェザーマン』と『スパークマン』は警戒していたが、まさか罠カードそっに引つ掛かるとは思わなかつたよ」

「へへッ、お前に勝つには派手にスツゲエ事しねえと無理だろうって思ったからな、コイツを使わせて貰ったぜ」

### ブービーゲーム

#### 【通常罠】

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : モンスターが戦闘を行うダメージ計算時に発動できる。

その戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを0にする。

(2) : セットされたこのカードが相手の効果で破壊され墓地へ送られた場合、「ブービーゲーム」以外の自分の墓地の通常罠カードを2枚まで対象として発動できる。

そのカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる。

奇天烈にも程があるだろうがよ……。

バトルフェイズ突入と同時に『ヒーロー・ブラスト』で『フェザーマン』を回収、『ヒーロー見参!』で盾にしたってワケか。翼の生えた緑の英傑は燃やされて倒れたが、守備表示モンスターとの戦闘でダメージは発生しない。十代には文字通り傷一つ付けられずに終わった。

ヒーロー・ブラスト

【通常罫】

(1)：自分の墓地の「E・HERO」通常モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

その後、手札に加えたモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ相手フィールドのモンスター1体を選んで破壊する。

ヒーロー見参

## 【通常罨】

(1) : 相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

自分の手札1枚を相手がランダムに選ぶ。

それがモンスターだった場合、自分フィールドに特殊召喚し、違った場合は墓地へ送る。

「ならば『巨骸竜フェルグラント』でダイレクトアタックだ!      // フオビドウン・クリメ

イション!!」

「う、ぐあああああああああつ!」

十代 : LP      3200 ↓ 400

「ライフが並んだんだな!」

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

黎 : LP      400

手札 : 0 枚

フィールド

：巨骸竜フェルグラント（ATK 2800）、炎神―不知火（ATK 3500）

：伏せカード1枚

クソが、まさか土壇場で自分の首を絞めていたとはお釈迦様でも分かるまいよ。

しかしこっちのフィールドには大型モンスターが2体、十代は手札もフィールドも空っぽ。正真正銘、俺が完全有利な形で追い詰めた。

だと言うのに……、何だろうな、この感覚。まるでアイツがこれからどう逆転するのか楽しみで仕方ないみたいだ。

この俺が、負けたがっている？

「このドローに全てを賭けるぜ、俺は」

「来い、逆転のデイスティニードローってのを見せてみる」

「行くぜ、俺のターン……」

「……」

「……」

「……」

「ドローッ！」

いや違うな。

勝敗を超えた所にある『何か』を、俺は見たいと思っっているんだ。

アイツの起こす奇跡を、目の前という特等席で、直に。

「……俺はドロローしたこの『E・HERO バブルマン』を特殊召喚!」

「ハッ、やっぱそのカードか!」

『『バブルマン』の効果により、俺の場と手札に他にカードが無い事で2枚ドロローする!』

そして『強欲な壺』を発動! 更に2枚ドロロー!」

手札0枚から一気に3枚、流石だぜ十代。

「行くぜ、フィールド魔法発動! 『フュージョン・ゲート』! これで『融合』魔法を

使わずに融合召喚できる!」

げ、ヤベツ!

この時代はフィールド魔法が2枚は貼れないから俺の『アンデットワールド』が自壊しちまう!

ここはやむを得ないか!

「チェーンするぞ! トラップ発動、『リターン・オブ・アンデット』!」

「!」

「フィールドのアンデット族モンスターをゲームから除外し、持ち主の墓地から別のア

ンデット族モンスターを特殊召喚する！ 俺は『バブルマン』を除外し、『ハネクリボー』を特殊召喚！」

『グリー〜』

ハネクリボー：DEF 200

強欲な泡男が蜃気楼のように消え、羽の生えた毛玉がフィールドに戻す。アンデットの影響を受けているのか、黒いオーラを放っていて若干不機嫌のようだが、十代の発動したフィールドに切り替わった事で元に戻った。

フィールド魔法の共存ができないっての、忘れていたつもりは無かったが……。『メタバース』あたり入れておくんだったか？

リターン・オブ・アンデット

【通常畏】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：フィールドのアンデット族モンスター1体を選んで除外する。

その後、そのコントローラーの墓地からアンデット族モンスター1体を選び、その持



ち主のフィールドに守備表示で特殊召喚する。

(2) : このカードが墓地に存在する場合に発動できる。

除外されている自分のアンデット族モンスター1体を選んでデッキに戻し、このカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。

メタバース

【通常罫】

(1) : デッキからフィールド魔法カード1枚を選び、手札に加えるか自分フィールドに発動する。

「マジック発動、『闇の量産工場』! 墓地から通常モンスターを2体手札に戻す! 俺は『フェザーマン』と『スパークマン』を手札に戻すぜ!」

「だが『バブルマン』は消えた! お前の最強ヒーロー『テンペスター』は召喚できない!」

「なら教えてやるぜ黎! ヒーローは1人じゃない、皆の力を合わせて戦うからヒーローなんだ! 時にはこんな風にな! マジックカード『ヒーローマスク』を発動!

デツキから『E・HERO』を墓地に送り、このターン俺のモンスター1体は同じ名前のモンスターになる!

デツキから『バーストレディ』を墓地に送り、『ハネクリボー』に『バーストレディ』のマスクを被せるぜ!

「何……だと……!」

あ、負けた。

「フィールド魔法『フュージョン・ゲート』の効果! 手札の『フェザーマン』と場の『バーストレディ』を融合!」

『ハッ!』

『クリイ!』

「融合召喚! 現れろ、『E・HERO フレイム・ウイングマン』!」

『フウッ!』

E・HERO    フレイム・ウイングマン：ATK    2100

「もう1度! 今度は手札の『スパークマン』と場の『フレイム・ウイングマン』を融合!」

「融合モンスターを素材に!？」

「2連融合!？」

「融合召喚! 出でよ、『E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン』ッ！」

『ハアアアアア、トアアッ!』

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン：ATK 2500

フィールド魔法を利用した連続融合召喚。その次元の渦から生まれたのは、白く輝く光の大英雄。

『シャイニング・ネオス・ウィングマン』の登場で日陰に行つた感はあるが、やはりこのモンスターもまた強い。

シャイニング・フレア・ウィングマン（融合・効果モンスター）

星8

光属性／戦士族

ATK 2500／DEF 2100

「E・HERO フレイム・ウィングマン」＋「E・HERO スパークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき300ポイントアップする。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

『シャイニング・フレア・ウイングマン』は、俺の墓地の『E・HERO』の数×300ポイント、攻撃力がアップする。墓地の『E・HERO』は『バーストレディ』、『エアーマン』、『ワイルド・ジャギーマン』、『プリズマー』、『クレイマン』の5体。よって攻撃力は1500ポイントアップだ！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン：ATK 2500↓4000

参ったなあ、ここで攻撃力4000か。

除外に次ぐ除外、効果無効、高打点……。兎に角コイツに勝てそうなカードを組み込んで必死にデッキを構築したのに、やれやれだぜ。

「さあ、死者の国に帰る時間だぜ！」



死者は死者の国に、  
か。  
ハハツ。

「ガツチャー! 楽しいデュエルだったぜ!」

「こつちこそガツチャだよ。やっぱお前は強いな」

十代が右手の人差指と中指を合わせ、親指を下に添える。彼のいつもの勝利ポーズだ。

俺もそれを見てそれをマネする。ふふ、負けるなんて何時以来だろうな。

「また、デュエルしようぜ!」

「おう、今度は負けねえぞ!」

右の拳同士をぶつけ合う。

パチパチパチパチ、と拍手が鳴り響いた。

「お疲れ様!」「良いデュエルだったぞ!」「強いな、十代!」「黎も凄かったよ!」「流石ね!」「ガツチャー!」「お見事ですわ!」「痺れたぜ!」「アニキ、最高ツス!」「ナイスデュエル!」「えと、おめでとうございます!」「ふふ、私が見込んだだけはあるわね」

拍手喝采、そして皆の労いの言葉。

その言葉を受けて、俺と十代は暫くの間、感謝の言葉を紡ぎ続けたのであった。  
「さて、デザートがそろそろ冷えた頃かな」

今日のデザートはキンキンに冷やしたフルーツを使ったフルーツポンチだ。





——レッド寮から北へ約500メートルの位置・P M 22:07

「ふう、これで転送の準備は完了だ」  
『うむ』

本当に、俺は恵まれたな。

十代。お前は強いよな。それでいて、どこまでも人間であれる。

翔。これからお前はきつと強くなる。道を間違えるなよ？

隼人。真つ直ぐ前を見る。道は、そこにあるはずだ。

大地、明日香、ももえ、ジユンコ、神楽坂、康彦、有紀、ツアン、麗華、雪乃、彰子、そしてカイザー。友達になってくれて、ありがとう。

そして、桜。こんなダメな主に仕えてくれて、感謝の言葉が無いよ。

フィオ。俺に笑顔をくれて、ありがとう。お前の心は、俺を明るく照らしてくれる。都。もう少しだからな。もう少しでお前を助けに行けるから。

俺は、誰がどう弁明しても、人間の範疇に完全に収まりきる事はできない。この体が人間のものであると言うのは、かなりムリがある。

でも、心は人間だ。体はどれだけ人間であっても、心は人間。見た目がどうなっても、友人でいてくれる人達。

俺と同じ、転生やトリップでやって来たイレギュラーなメンバー。

優。

有栖。

有里ちゃん。

真奈ちゃん。

彼らは俺に惜しみなく協力してくれた。

だから、俺も戦う。

この体が動かなくなる最後の一瞬まで。

【TRANSMISSION : to GLUTTONY】

【With HIKARU ASAKURA】

【With AYUMI ITIJO】

【With NAMI ASAKURA】

人より勝る力を持つ、という事は、それが必要となった時に己が必要とされるといふ事であり、やらなくてはいけないという事でもある。

ならば、人より高いスペックの体を持つ俺の役目はただ一つ。アイデンティティでもある邪神を叩き潰す事だ。それこそが、俺の今の存在意義。奴を、完全に滅却する。その後の事は、その後に考えれば良い。

「主殿、新たなデツキの準備は良いか？」

「当然だろ？ 何のために半日かけて細かく組み上げたと思ってるんだよ」

パキパキ、と掌を鳴らす。

十代の時に感じた高揚とは別の高揚が、湧き上がる。  
さて、折り返し地点だ。4人目の護衛も、ぶっ飛ばさせてもらおう!

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 49 : 廃工場に飛ばされた家族 ★

## SIDE : 黎

光に包まれて異世界へと飛ぶ事にも好い加減に慣れて来た今日この頃。

今回俺を出迎えたのは無機質な金属の部屋だった。

「こういう場所は、私はあまり好かん」

「自然の中で生まれたからな」

広さにして三畳弱といったところか。四方八方が金属で覆われているが、暗くて細かいところまでは分からない。唯一、上から微かに光が差し込んでいる。

密室に飛ばされたかと思ひ、木と炎の力で松明を作ると、正面にあつたのは重厚そうな扉。半分以上が錆びついており、かなりの期間、手入れされていないようだ。

力を込めてその扉を押す。ギ、ギギ、と不快な金属音と共に扉が開く。

「む……」

ガゴ…、と開いた扉の先にあつたのは、大きくて広い廃工場の一室だった。

割れた窓ガラス、埃の積もった床、カビの臭いが辺りに漂っている。松明を消し、ところどころに残っている机の上の黄ばんだ資料らしき書類を手にすると、そこにあつたのは植物の遺伝子改良の企画書だった。ドイツ語で書かれているが、問題無い。

乾燥に強い野菜、長期間保存できる果物、水を貯め込む植物……。どれも理想的なもので、ばかりで需要もありそうだ。何故ここが寂れてしまったのか疑問を感じざるを得ないラインナップである。

「主殿、それは表の顔のようだぞ」

「ん？」

これを、と桜が差し出したのは別の資料。グシャグシャになっているが、読めないわけじゃない。

「成程な。コッチが本命か」

それは植物の兵器改造の計画書だった。

鋼のように固い砲弾になる椰子の実、爆弾が爆発しても傷一つ付かない樫の木、燃料になる油を捻出できる団栗、編み込めば刃物を通さない防刃性の植物繊維。起爆するリソゴや機雷になるアボガドなんてのもあった。

どうやら需要に合わなくなつたか、コストが嵩んだか、それともつと他の理由かは知らないがここは今は使われなくなつたらしい。窓の外にはここで栽培されていたと

思われる植物兵器が野生化したものが群生しているのが見える。

「全く、自然を何だと思っているのだ。人間のオモチャじゃ無いんだぞ！」

「ここで叫ばれても困るんだがな」

訴え先は不在です。

「ああ、済まない。私は長寿の桜の木から生まれた身でな、こういうのを見てると自分や自分の家族が汚されているようで胸糞が悪くなってしまうて」

「いや、憤る事には何も言つて無いよ。ただ、叫ぶなら俺じゃなくてちゃんとした相手につつだけさ」

怒る事には何も言わない。生きる上で必要な感情だからである。

度を越し過ぎる事が罪なのであって、行為そのものには何の問題も無いのだ。

「さあ、探索はこの辺で切り上げて、飛ばされたであろう並行世界の人を探しに行くぞ」  
「承知致した」





「ホアチャアツ！」

「ぐあつ！」

工場の中を探索する事10分余り、外から威勢の良い女性の声と鈍い男の声が聞こえて来た。

スツパアン！ と肌が張られる音が、響く。

「イグア……」

「とおりやああつ！ おりやおりやおりやおりやおりやあつ！」

バスバスバスツ！ 勢いは落ちる事無く人体にぶつかる音がする。

「主殿、あつちだ！」

「了解した、細かい位置をサーチする！」

打撃が当たる音が、味方の攻撃なら良いんだが……。逆に邪神の護衛の攻撃だとマズい。スロウスのような巨漢だったらペチャンコに潰されるだろうし、そうで無くてもこれまでの3人同様に武器を持っている可能性は高い。

急いで雷の力を体内に流すと、サメの持つ探査能力を起動させる。

「ッロレンチーニッ！」

バジツ！ と電気が弾ける。

サメの鼻先にある感覚器官は、生物の中を流れる生命電気を感知取る力がある。この生命電気はただ単に流れているだけでは無く、体の動きを脳から伝達もしている。つまり、これを感じる事ができればどこに誰がいるかだけで無く体のどの部位が動くかを数瞬先に察知する事が可能なのだ。

「……いた！ この壁の向こう側だ！」

「ぶち抜くより斬った方が速い！ 下がってくれ！」

殴り砕こうかと思った時に、桜がそう提案する。速いに越した事は無いので、俺は数歩後ろに下がった。

「はあっ！」

斬、斬斬斬、斬斬！ 壁が桜の剣で叩き斬られ、ガラガラと音を立てて崩れる。

穴が開くのもどかしく、俺は壁の向こうへと身を躍らせると……。

「いえす、あいむういなー！」

ぱちぱちぱちぱち……。

10代半ばから後半くらいの女性が、太った男の上で天を指差していた。傍らでは同年代の女性、いや、中性的な男性と10代前半から半ばくらいの少女が拍手をしている。

えーと、何事？

「主殿、敵は……、どいつだ？」

「……………一応、上に乗っかられている太った奴」

桜の困惑も分かる。人間に護衛が圧倒されているなんて、これまでの3人を見ても有り得ないと思うだろう。

と、鼻を異臭が突いた。これは、アルコールのにおい？

「原因はこれだな。先刻の資料の中に記載されていた酒の取れるメロンだ」

桜がヒョイと拾ったのは食べかけのメロン。

確かに、同じ皮の模様のメロン、*“バツカスメロン”* がさつき見た資料の中に記載されていた。

「いいぞお、かあさあくん」

「そのままやつちやいなさあ〜い！」

「いえー、あいむちやんぴおん！」

じゃ、何!?! あの3人は酔っぱらってるの!?!

「恐らくは」

酔ってて護衛を倒せるんだから、あの女性は凄い。

「ぐぬう！」

邪神の護衛は腕に装備した鉤爪で女性を斬り裂こうとするが、女性は素早くマウントポジションから下り、土を抉りながら(?! )蹴り飛ばした。

デブ護衛はそのキックをもろに食らって数十メートル（十数メートルでは無い）上空へと吹き飛んだ。

女性はそのまま空中で連続ジャンプ（!!?）を行って打ち上げられた護衛を追いかけると、空中コンボを決めるが如く、上へ下へと動き回り（!?!?）、踵落として護衛を地面に叩き落とす。そのまま落下の勢いを利用して横たわった護衛の腹に重量の乗った蹴りを力一杯叩き込む。

メグキョツ!

「ゴゲエツ!」

ヒキガエルの断末魔というものは聞いた事はないのだが、きつとあんな感じなんだろうなあ……。

「に、人間のクセにい……」

「愛する夫と娘のためなら、妻は万象一切を灰塵に帰せるのよ!」

それなんて総隊長?

「……桜、このカオスな状況をどうにかしたいんだが」

「……一応そこに、酔い覚ましのブドウがあるが?」

メロンと同じページに記載されていた、酔い覚ましに使われるブドウ、  
“。それが確かに植えられていた。  
アグレープ



本当に女性は男性の一步先を行くねえ……。

「女性で一括りにされると困るんだが……」

そう？

「おっけー、わたしさいきよー！」

「かーさんすごーい！」

「おー！」

女性が何であつても、この状況を納めるのが最優先事項かな？

そう思った俺はブドウをもぎ取ると、3人に近付いて口の中に無理矢理ブドウを押し込むのだった。

護衛を圧倒していた女性相手だけは、大苦戦したのは秘密です。





— 工場内部の寂れた応接室

「まだ頭が痛い……」

「貴女だけメロンを3つも4つも食べるからです」

前頭部を押さえる女性に中性的な男性が窘める。

あの場に落ちていた皮の量から判断するに、この場合の3つ4つとは玉の数だろう。

「えーと、取りあえず、あのカオスから救ってくれてありがとうございます」

「いや、こつちとしてもあのカオスから帰って来てくれないと話が進まなかったからね」

同じように頭を押さえる少女の言葉に俺は返す。

「自己紹介がまだだったな、俺は遊馬崎黎。呼ぶ時は黎で良い」

「その精霊、桜と申す」

桜が腰の剣に手を掛けながら礼をする。これはいつもの光景だ。

「朝倉輝あさくらひかるです。私も輝で結構ですよ」

最初に自己紹介をして来たのは中性的な男性。

長めの黒髪が、割れた窓ガラスから入って来た微風に乗って揺れる。

「念のために言っておきますが、私は」

「男性です、か？」

「っつー！」

俺のセリフに目を見開き、ふるふると震える輝。

何だ？

「しよ」

「しよ？」

「初見で私を男だと見抜いてくれたのは久し振りです！」

「それはそれは……」

まあ、見た目女性っぽくもあるし、髪もキレイで長いからな。パツと見、女性に見えるのも頷ける。

というか、そんな女扱いが嫌ならせめて一人称を僕とかに変えてみたらどうだろうか。

「感動です！ 本当に感動しました！ 貴方とは良い友になれそうです！」

「はい、そこまで。落ち着いて」

ぐぐい、と迫って来る輝を押しつけたのは、先刻護衛を叩きのめしていた女性。ブラウンのショートカットに、勝気な目をしているボーイッシュな感じだ。

「わたしは一条歩。将来の姓は朝倉」

ニカッ、と笑う歩。美人ではあるものの、取りあえず酒癖は悪いという事も脳内にメモしておく。

「将来か。随分と言い切るのな」

「いやいや、物的証拠があるよ」

「……まさかとは思うが」

本当にまさかとは思うが。

傍らにチョココンと座る小柄な少女を指差す。

「この子が二人の娘で、未来から来た、とか？」

「正解！」

……、まさか同じタイプのグループに2度も遭遇するとは。

「私は朝倉奈美<sup>なみ</sup>。未来から時間旅行の被験者としてやって来ました！」

「時間旅行……」

黒髪シヨートの少女がニコリと笑う。

優達のケースの時は、有里ちゃんがどうして、どうやって来たのかは全くの不明だつて言っていたな。有里ちゃん本人も口を噤んでいたし。

で、こっちはタイムトラベルか。正直、どっちもどっちだなあ。

「よろしく。しかし、転生者同士の夫婦とはまた珍しい組み合わせだな」

「え、て事は貴方も……」

「ああ、俺も転生者だ」

異世界に来る、と一口に言っても方法は色々ある。  
例えば異世界転生。

元より転生とは「生まれ変わる事」である。だから俺のように元の世界の体のままで新たな生を授かるのは厳密には転生とは言わない。

ただ正確な形の転生とは新しく生まれなおす事、つまり0歳からのスタートだ。そういう意味では俺や優の「転生」は、真奈ちゃんの様に元の世界から直接こちらにやって来たトリップ、「異世界転移」に近い。ただし、トリップは「死んでいない事」が条件の1つなので、厳密には「トリップ」では無い。

ちなみに「憑依」というものもあるが、こちらは文字通り他人の体に自分の魂が定着する事なので、前記2つとは違う。

「ま、俺は殺されたんだけどな。どんくらいいるんだ、遊戯王世界に殺されて転生って」  
「それは……」

「ハハツ、気にしないでくれ。自分の中じやもう整理くらいいついている」  
あの雨の日、都を守れなかったのは俺自身の所為でもある。その辺をへたに憐れまれても、困惑しかできない。

「私達の場合、普通の自動車事故ですからね」

交通事故を普通で表現するのもどうかと思うがな。

「あはは、あの時はゴメン……」

「歩、私は一度でも謝罪を求めた？　もう気にしてないから、謝罪するのはやめてくれな  
いかな。好きな人を過ぎた事で責められる程、私は強くないから」

「……うん／＼／」

甘い空気が、漂って来たな……。

父である輝の右隣にいた奈美ちゃんに俺はそつと囁く。

「(なんか良い雰囲気になって来たんだが……、平気かい?)」

「(あーまあ、このくらいの年頃なら普通じゃない?)」

なんと、奈美ちゃんは中学生くらいの割に随分と精神は大人だ。

「で、奈美ちゃんは普通にお腹痛めて生んだ子だど?」

「はい。少なくとも、私が河原で拾われたとか、養護施設から貰われて来たとかいう話は  
聞かないですね」

更にサバサバしてる。

「で、ウチには更に妹が1人、レイン恵ちゃんがいるんです。私はメグちゃんって呼んで  
るけど」

タツグフォースキャラが妹にいますか。

シンクロアンデット使いの銀髪娘だったな、確か。

「で、メグちゃんは今日用事で出かけていて、父さんと母さんが今度のテストの勉強会をして、私はその近くでヒマを持って余っていたんです。そしたらいきなり光に包まれてここに……」

何と言うか、ここまで何でも無いですよーみたいな感じに言われると、逆に罪悪感が沸いて来るんだが……。

「で、何が起こったか分からずに私と母さんは混乱して」

「そしたら近くにメロンがあったので、歩に手刀で切ってもらって食べました。落ち着く意味も込めて」

あ、旦那さんが戻って来た。

というか、手刀ですか……。

「で、気付いたら酔っ払っていて、あの太った人が『皆殺しだあ』とか言うんで『ふぎけるな、輝達は殺させない！』って母さんがキレちゃって……」

「リアルファイトでボコメキヨにした、と」

「はい……」

なんつーか、本当に……。

「謝れば良いのか、呆れれば良いのか……」

「謝る？ 何故？」



「3人がここに来たのは俺が原因だから。そして、それなのに俺に共に戦ってほしい事を望んでいるから」

俺は3人に簡潔に事の顛末を話す。転生してからも受け継いだ化物の能力の事、復活が始まっている邪神の事、依り代として選ばれた都の事、これまで倒した邪神の護衛、飛ばされて共に戦った4人の戦友、戦う事で回避できるかもしれない破壊の未来。

そして全てを話し終えて尚も半信半疑だった3人に、俺の過去に体験した映像を少しだけ、見せてあげた。

全てを知った彼らは、少しの間だけ黙っていた。

ややあつと、最初に口を開いたのは輝だった。

「貴方は……、辛くないのですか？」

「？」

「私は転生した前も後も、この見た目から、女性と間違われる事が多々あった。寧ろ貴方のように初見で男だと見抜く人の方が稀だった」

確かに。輝の髪は俺と同じで長いし、容姿は俺と違って中性的だ。髪を切れと言いたい所だが、さつきから歩が彼の長髪を後ろ手でコソコソと弄っている所を見ると、どうやら彼女は彼の長髪を気に入っているらしい。

「私は今、貴方の過去を見ました。当然、貴方が化物として気味悪がられ、忌避され、攻

撃されていた過去も。私も嫌な過去があるからその気持ちが少しだけ分かる。

普通なら貴方は世界を恨み、今ここにいる私達を殺しにかかっても何ら不思議では無いというのに、貴方は我々を安全な場所へと誘導した上に、戦いの助力を願っている。

何故？ 私にはそれが不可解であり不安要素です」

「そうだね、わたしも輝の言う事は正しいと思う。少なくともわたしが黎だったら、護衛ごとわたし達を殺していると思う」

「あー、確かに。父さんと母さんの言う事は最もだね」

……ふう、確かにな。

俺の過去を少しでも見れば、誰かに優しくする事は有り得ないと思うだろう。俺達義兄妹は、実際転生する前は誰からも優しくされなかった。親、他人、教師、大人、店員、その全てが俺達の敵だった。

接する者は容赦無く散って行った。俺達は何をするでも無く、彼らは周囲から散らされた。ただ単にそこにいるだけなのに、俺達は疫病神の様に扱われた。本当に何もしてないのに、だ。

いや、違うな。していたんだ。「そこにいる」という事を。

人間不信。

鬼気慟哭。

吠えて吼えて咆えて……。そこにいる、生きている事自体が罪にされて、でも簡単には死ねなかった。虚無感よりも怒りが強かったからだ。

俺達は常に復讐の機会を狙っていた。

世界に。

人に。

理に。

不条理に。

全てに。

だが、何をやっても空しかった。

半殺しにしようとして来た奴を半身不随にしても。

重火器を持って殺しに来た奴らを逆に殺しても。

モノとしか見てない研究者を残らず廃人にしても。

いい加減な采配で俺達を悪と決め付ける警官を病院送りにしても。

蔑み嘲笑う奴らの大切なものを徹底的に粉碎しても。

満たされない。

渴く。

飢えている。

当たり前だった。そんな事しても、傷が癒えるハズも無かったのだから。俺達に必要だったのはただ一つ、愛。七つの罪の正反対に位置するもの。

都を愛していなかったと言えばウソになるだろう。でも、それは家族に向ける愛でも、恋愛感情の愛でも無い。寧ろそれは愛では無く、哀。傷を舐め合って生きる、どこまでも醜い生き方。

助け合うのでは無い。傷を舐め合うだけ。

それは癒さないし、癒されない。どれ程の涙を流そうとも、心に負った傷は、体の傷と違って、治らない。自然治癒できない傷だつてあるのだ。

それが分かっているけど、俺達はその生き方をした。それしか、出来なかったから。

「確かに、俺はそういう生き方をして来た。でもな、恨むのも憎むのも、いい加減疲れたんだよ」

疲れた。

あの生き方は、疲れたんだ。

それよりも、何も知らない無垢な子が俺達に向けた笑顔が、俺達の絶対零度の心に一番を吹かせてくれる事に気付いた。

怖がり、恐れている人が、俺達に放ってくれる感謝の言葉が、凍りついた心を温かく溶かしてくれる事を知った。

空しさがあの時晴れた。だから俺達は人を、世界を、全てを恨むのを止めた。

傷を負ったままだったけれど、俺達は復讐の刃を振りかざすのでは無く、共存の道を辿る事を決意したのだ。

「ありがとう。小さな少女のそのたった一言で、俺達の生き方は変わったんだ」

辛かった世界に、暗かった世界に、光が満ちた。

救われる道があると知って、救われようと努力した。

でも救われなかった。

何も変えられず、俺と都はあの雨の日に、死んだ。

都を、目の前で殺された。

俺は、あいつを救う事ができず、殺した奴を死ぬより辛い目に合わせて、代償として深手を負って死んだ。

「呪っても、願っても、救われたいし、何も変わらない。だから正直、俺はもう呪うのも恨むのも止めたんだ。どっちをしても関係無いなら、どうせなら少しでも俺達を好印象

で覚えていてほしいからな」

こっちの世界に来て、仲間ができた。友達ができた。

信を寄せても、裏切らない人達がいた。

心安らぐ、場所が、21年間無かつた場所が、そこにあつた。

「俺は、都を兄として必ず取り戻す。俺だけが幸せを甘受するワケにはいかない。あいつにも同じ場所にいてもらつて、同じ幸せを分け与える。それが、あの日の俺の誓いだ」  
不幸は、俺が全て背負う。

幸せは、あいつに分け与える。

だから、俺はあいつと一緒にいる。

「やましい事なんて何も無い。ただ、幸せを壊す事に、敵で無い人の生を壊す事に意味が無い事を知つた。それだけだ」

「……わたし達が敵になつたら、殺しに来るつて、事……？」

「俺や俺の大切な人達に害をなす存在ならな」

その瞬間、歩の鋭い正拳突きが飛んで来た。

ゴン！ と俺の鼻から音が響いた。

「イタタタ………ッ！」

俺は鼻を、歩は右の拳をそれぞれ押しさえる。

鼻には重金属のタングステンを仕込んでおいてある。皮膚は薄めだが、それでも十分な防御力がある、ハズなのに痛み分けだ。歩、細身の女子に見えて腕力あるな。

「！」

鼻と拳の痛み、どちらが先に納まるかと言えば、当然拳だ。

歩は先刻とは違う左の拳を曲げるように打ち出す。左フックか。

これを俺は背中を反らして回避。続けて歩の繰り出して来た右の蹴りを背面跳びの要領で回避。

座っていたソファの背もたれを掴み、カポエラで蹴りを打ち込む。歩はこれを受け流してガード。

フワリと着地し、ソファを挟んで俺と歩は向かい合った。輝と奈美はいつの間にか部屋の隅に退避している。

「良い判断だ。受け止めていたら、骨にヒビくらいは入っていただろうな」

「伊達や酔狂で仕掛けたワケじゃ無いよ」

ふ、と笑う。彼女の自信は、どうやら本物のようだな。

が。

「ここで争っても無意味だ。戦いの前にムダに体力を消耗する事はお勧めできん」

「……でもアンタがあたし達を、輝と奈美を殺すかも知れないんだったら、ここで潰す」

「やれるモンなら、な！」

そのセリフと同時に俺の髪と目が変色し、独特の模様が肌に走る。

そのカラーは青と紫。水と雷の力だ。

歩、失念してないか？俺は、普通の人間どころか、一般的な生物ですら無いんだぜ

!?

「〃ミスト・エンド〃！」

「びっ!？」

霧が周囲を包み込む。生み出された霧は紫電を帯びており、静電気並みに弱いものからスタンガンのように強いものもある。

ちなみにこの霧の電気に死ぬまでの威力は無い。電気量というのは電流<sup>アンペア</sup> A × 電圧<sup>ボルト</sup> Vの値になる。たった数十Aのコンセントの電気が流れてしまうと人間は死ぬが、数万Vのスタンガンを浴びても死なないのと同じ理屈で、電気量が一定に満たなければ、電圧がどれだけ高かろうと、死ぬ事は滅多に無いのだ。

霧が帯びている電気は、電圧は高いが電流は低く設定してある。体の弱い人間でも痺れるくらいで何も影響は無い。

ただし、それはあくまで〃健康に影響は無い〃のであって、〃戦闘に影響は無い〃と



いうワケでは無い。

「みっ?! みゃっ! あうっ! しびびっ?!」

霧そのものに纏わせた電気は、大気中の水分を縦横無尽にかけている。電気を浴びた影響で体が反射的に動き、その動いた先の霧が帯びている電気が流れる。すると、再び体が動き、電気が流れる。霧も電気も俺が断続的に流しているから途切れない。

「歩! うっ?!」

「母さん! いっ?!」

しかも部屋全体に充満しているから、隅に逃げていた輝と奈美も動けば電気を食らう。隅の方の密度は薄い、それでも動きを阻害する事は可能だ。

ガクン、と歩の足が力を失う。

俺は、霧と雷を仕舞った。青と紫のカラーリングが、消える。

「く、……どういうつもり?」

「俺は敵じゃない。さつきも言ったハズだ、空しいってな」

怪訝な顔の歩にそう答える。

傷つけても、空しい。護衛の連中は、そしてあいつらを殴ればスカツとするけど、何の関係の無い人を殴っても、モヤモヤしたものが胸の内に残るだけだ。

……殺せば暗い喜びは芽生えるかも知れないがな。

「俺は、敵じゃない。歩達は、俺や俺の大切な人に害をなす存在じゃ無い。なら、俺が3人を攻撃する理由は無い」

「……さつきまで電気でいたぶっていたくせに」

「あれはそっちの動きを押さえるためだ」

あのまま異種格闘技戦に持ち込んだところで意味は無かっただろう。護衛がまたやって来た時に疲労困憊で相手するだけだ。それは避けるべき事である。

だったら一時的に相手を押さえ、再び会話できるように持ち込むしか方法は無い。

「済まなかった。桜、3人の治療を頼む」

「分かった」

フワア、とピンクの光が部屋全体を包み込む。程無くして膝をついていた3人は立ち上がる事に成功した。

「……敵になるんじゃないの?」

「共通の敵がいるんだったら、今は少なくとも手を組むべきだと思うが?」

「……………」

歩は暫くこちらを睨みつけていたが、観念したのか、溜息を吐いた。

その後は、輝や歩の世界観のお話だ。



「何だ!？」

「爆発音!？」

扉の向こう側から響く、火薬の炸裂音。

「この臭いは……、無煙火薬!？」

「ちよ、ここはいつから爆弾作る兵器工場になったんです!？」

「最初からだろうな!？」

爆発するリングやミカンを作る工場だ。何十年経った今でも、野生化したそれらは残っている。敵がそれを使っても不思議では無いかも知れない。

俺は扉に急いで数本の門と、それを固定する鉋を打ち込む。数瞬の後、扉が凹んだ。門で封をしていなかったら、吹き飛んでいたところだろう。

「皆、窓から脱出するよ!？」

「分かった、先に行け!？」

割れた窓に歩は近くにあつたソファを放り投げて（酔ってなくても力あるな、この子）完全な脱出口にし、3人は先に窓から脱出する。ここが1階で助かつたと思いつつ、俺

と桜も急いで窓から飛び出した。

飛び出した先は、イチゴ畑だ。ただし、ここイチゴは背がやや高いツルになってい  
る。イチゴは野菜の仲間なので本来なら地面の近くになるのだが……。

ちなみにイチゴの他にスイカも野菜の仲間だ。地面の近くにツルや背の低い節など  
になっている、或いは地中に埋まっているのが野菜、木の上になっているのが果物であ  
る。

クン、と鼻が異臭を感知する。

まさかこのイチゴは!?

「イチゴ畑ですか……、このイチゴもアルコールが入っているのかな？」

「いや、これ起爆するぞ?」

「「え!?!」」

植物兵器資料の中にあつたものの一つ、"ニトロイチゴ"だ。胃の中の酵素と反応して無害になるが、衝撃で大爆発を引き起こす。

「音ぐらゐは平気だ。が、強いショックで爆発する」

資料には一箱で鉄筋コンクリート4階建てのビルを木端微塵にする、と書いてあつた。

プラスチック爆弾100グラムが3階建てを吹き飛ばす威力なので、つまりそれ以上の威力となる。

ここに群生しているイチゴはどう見ても箱詰めにして二十箱を軽く超える量がある。1個でも爆発したら、残りのイチゴも誘爆してしまうだろう。そうなれば俺達は全員骨の欠片も残らない可能性が高い。

大急ぎで俺は髪を伸ばしてイチゴを刈り取り、一ヶ所に集める。小粒なイチゴなので、二十箱を超える量と言っても、そこまで大した量にはならない。

ドゴオン！

また大きな爆発音がし、直後に複数の重い金属音がした。

あ、ヤベ、門外れたっばい。

「見つけたぞお！」

そして窓から飛び降りて来る巨軀。スロウスの様にガタイの良い巨人人では無く、

横にデカイ、有体に、そして俗に言うデブ、というヤツだ。

差別用語だと批難されるだろうが、本格的にこいつは太っている。関取なんて目じゃ無いくらいに。ギネスには体重が500キロの人がいたそうだが、こいつはそれと同じかそれ以上にありそうだ。

「グヒヒ、〃ニトロイチゴ〃か……！ これは丁度良い！」

ジャキン！ と護衛が鉤爪を装備する。

マズい！ 衝撃を与えて爆破するつもりだ！

「させるか！」

「させない！」

「させぬっ！」

「おっとお！」

同時に飛びかかる俺と歩と桜。敵は俺の拳と歩の蹴り、桜の剣を器用に受け止める。

「うらあっ！」

更にその姿勢を崩す事無く護衛は足元の石を、山となったイチゴへ向けて蹴り飛ばす。

速い!? あの速度で当たったら……っ！ 防ぎたいが……、この距離じゃ間に合わな

い！





スカツ!

え?

「は?」

「ぬ?」

石が、外れた……??

というか、積み上げてあったはずのイチゴが、無い!?

「ご馳走様でした」

パン。と掌を合わせたのは輝だった。

「ご馳走様つて、まさか、お前……!?」

「輝、おま、あの量のイチゴを全部食べたのか!?」

「はい。食べれば爆発しないんですよね」

驚きで目を丸くする俺、桜、護衛。それに対して事も無げにケロリと輝は言い放つ。

口の端にイチゴの赤い果汁がついているから、少なくとも食べたのは間違い無さそうだが……。

「5キロは軽くあつたつーのに……」

「よもや、あの短時間、しかもたった一人で全てを食すとは……!」

「父さんは健啖家だからね……」

まだまだ食べたらない、といった表情の輝。その横で苦笑いしているのは娘の奈美だ。血の繋がった実の娘なら既知の事実なのだろうが、それでもあの表情を見るに彼女にとつての通常では無いようだ。

「このグラトニー相手に食で勝負か! ならばこの」

おっと名前発覚。やはり、あの体型は「暴食」のグラトニーか。

グラトニーは何も無い空間から大きな球体を取り出す。あれは……、スイカか?

「鉄球のように硬い『メタルスイカ』だ! 食べられるものなら」

「(バリボリゴリガリ……) 皮は食べておいたぞ。塩が欲しいな」

「中身は頂きました。塩は、持ち合わせて無いですね」

「うおう!？」

ペツ、と種を飛ばす輝。皮は硬くても中身は違つたらしいな。

グラトニーが次に取り出したのはナシだ。

「果汁が可燃性の油になる、油ナ」

「口にしても大丈夫ですよね、桜さん」

「毒では無いが……、食べた後で言うな」

「シッって、もう食べた後かつ!？」

その後もグラトニーは様々な果物を取り出すも、全て輝(一部俺や歩達)に食べられてしまった。

「まだまだ食べられるよ?」

「そろそろわたしはお腹が膨れて来たんだけど……、まだいけるよ」

「ぬうつ!」

暴「食」なのが災いしたな、グラトニー。持ち合わせの物は全て果物(一部野菜)、食べられるものならば、輝の前には無力らしいな。

一応、有害なものでも桜が解毒の魔法を心得ているし、俺にも血清があるからある程

度は問題無いのだが……。

「ぐう……」

「ネタ切れか、グラトニー？」

「でしたら、これはどうでしょう？」

輝はそう言うのと、懐からお弁当の包みを取り出した。

ゾク……ツ！

バカな、俺が、あのお弁当箱に、恐怖を感じている、だと……っ!?

「これを食べられますか？」

「食ってやるとも！」

「輝、それわたしが作ったヤツだよねっ!？」

ああ、歩の作ったヤツなのか。

それではどうぞ、と輝は包みの中からおにぎりを取り出し、差し出す。見た目は何の変哲も無い、普通の三角おにぎり。白い米を使っているし、海苔だって普通に長方形のものを巻いてあるだけ。においだって変なものはない。大きさは大人の男の拳より一回りから二回り程小さいぐらいの、要するに一般的な大きさだ。輝が一齧りするが、彼

自身に何の変化も見られない。

なのに、何故だ!? 俺は何故あのおにぎりを恐怖するっ!?

「アグツッ!」

ガブリ、とグラトニーはその大きな口でおにぎりに齧り付く。

その瞬間!

「アゲバシブベラゴエノブラベウギフォヴグリナバアツ!? Σ(・\_・)」

何か、飛んでも無い顔してぶっ飛んだ。もう錐揉みしながら、ド派手に。

序に言うと、片方の目が白目向いているし、もう片方は虚ろだ。そして両方の目がそれぞれ違う方向を向いている。器用なマネを……。

さて、桜、マイクあるか?

「どうぞ、マイクを」

「ありがとう」

俺が差し出した手に、桜がどこからか取り出したマイクを手渡してくれる。

電源は入っていないのだが、まあ、気分だ。

すう、と息を吸い込む。

せえの。

「いやいやいやいやいや!! 食べて断末魔っておかしいだろ!! おにぎり食ってそれって何事よ!! 普通何か食べたら「美味しい」か「不味い」に二択だよな、感想は!!? あ の見た目キレイなおにぎりでそうなたって逆に怖いぞ!!? それと食べただけで錐揉みしてぶっ飛ぶって何だよ!!? 一体どこからどういうダメージを受けてそうなたワケ!? 今も不気味な紫と緑の泡吹いてるし!!? 最早不味いとかいう次元じゃねえっつう事か!!? 何なんだよ何食べたんだよ何がおにぎりに化けてたんだよおおおおお お!!?」

ふう。

「歩、アレ、何?」

「何って、おにぎり……」

「歩の料理はABC兵器ですから」

「大量破壊兵器!!」

A || Atomic (原子爆弾)

B || Biological (生物兵器)

C || Chemical (化学兵器)

一応、ね。

最近じゃAは核爆弾のN (Nuclear) に、それから高性能爆薬のE (Explosive) と放射性物質のR (radiological) なんかを加えて、CBRNEなんて称されている。

「どう? 母さんの料理は凄いや!」

「嬉しくないから!」

「うん、虫の知らせがして用意してもらったのは正解でした」

「だから突然用意させたの!? 折角愛情込めたのにつ!」

「まあまあ、愛情を込めて作ってくれた。それだけで私は充分お腹一杯ですよ」

「う、うう……、それなら、つて、騙されるかあ! 乙女ナメんなあつ!」

はいはい御馳走様。

「グヒ、あぐあ……。あんな奇怪な食べ物は、有史以来、初めて、だぜ……」

「ヒドいつ!!? 普通そこまで言う!!?」

乙女心はズタズタよお! と歩は泣き崩れ、輝と奈美ちゃんがそれを慰める

ま、リアルファイトじゃこいつに勝ち目は無いな。大食い勝負？も輝がいればこっちに有利。そして歩の料理は食べられない。ほら、もう道は一つしか残ってない。

「どうする？ 尻尾を巻いて逃げるか？」

「な、ナメるな！ おいらは七つの大罪の内の一つ、『暴食』のグラトニー！ 人間如きに敗走なんざするかあ！」

あ、復活した。流石は頑丈さが取り柄の護衛。

「なら、構えな。お前が俺達に勝つには、それ以外方法は無い」

ジャキン、と俺のディスクが起動する。

今回は、少し趣向を変えてみるか。

更に朝倉一家にプロテクターを装備。説明は事前にしてある。

「うわ、あのデータメモカード軍団と戦うのか……。勝てるのかなあ……」

「ほら、輝！ TLOD事件を解決した英雄が弱気にならない！」

「父さん、頑張ろう？ 母さんと私もついてるから！」

「……分かりましたよ。まあ、元から逃げるつもりは無いですけどね！」

諦観と熱意を綯い交ぜにした輝がディスクを起こす。その背後には、沢山の、歴代メインキャラの精霊やエースが一瞬見えたような気がした。

「さ、て。輝を放って逃げるワケにもいかないし、いっちょやりますか！」



勇気凛々といった様子の歩がディスクを起こす。背後に映ったのは、漫画版の融合ヒーロー達。

「大好きな父さんと母さんを殺させないためにも、私だつてやるよ!」

真剣な表情の奈美ちゃんも、二人とは異なるディスクを起動させる。その周囲を、サイバー流の機械龍達を取り巻くのがハッキリと見えた気がした。

「流石に3人もやられてるんでね、油断はしねえぞお!」

「来いよ、今回もキツチリ勝ちをもぎ取つてやるからよ!」

ジユクジユクとした気味の悪い闇が、グラトニーの腕に集まり、ディスクを生み出す。

さあ来い、グラトニー! この【黒鬼の騎士】遊馬崎黎が相手してやる!

「覚悟しな、叩き潰してやる!」

「グヒヒヒ、おいらはこれまでの奴らとは一味違うぞ? ぶち殺すつ!」

「私達と黎達の未来のためにも、勝たせてもらいます!」

「輝と奈美はわたしが守る! アンタなんかに殺させない!」

「父さん、母さん、行くよ!」

『デュエル!』

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 50 : 凶食攻撃 ★

## SIDE : 黎

7人いる邪神の護衛との戦いも、とうとう折り返し地点に差し掛かった。

相手は「暴食」のグラトニー。水風船と見紛うようなタップタプの腹と頬、腕に足と、どこをどう見ても太っているとしか形容できない姿だ。

デュエルのルールはこれまでと何ら変わりはない。グラトニーから始まり、俺、輝、歩、奈美ちゃん、再びグラトニーの順番に回す変則デュエル。グラトニーのライフはこちらのライフの合計値16000で、こちらはフィールドと墓地の共有・非共有を任意のタイミングで切り替える事ができる。

味方モンスターの効果は使えるが、攻撃はできず、また自分の意思で仲間の伏せカードを開ける事はできない。ただし、既に発動しているカードは効果を適用可能。

攻撃は2回目のグラトニーのターンから。ただし、最悪凶悪なバーンで先攻ワンキルを食らう可能性もあるので、安心は一切できない。

輝のデツキは複数ある中でも安定力のある「魚族」。プライドを思い出す構成だった。文字通り魚族中心ではあるものの、臨機応変に戦うデツキ構成だ。

歩は「E・HERO」。漫画版の方なので、アニメ版よりも爆発力に長ける分、展開力はやや劣る。しかしその辺りは腕の見せ所だろう。

奈美ちゃんは「表裏サイバー」。特殊召喚が可能な『サイバー・ドラゴン』と、墓地のドラゴン族を装備する「サイバー・ダーク」シリーズで場の制圧を狙う。

俺は攻撃型の二人を輝と共にサポートするためのデツキ。防御主体のデツキだ。専守防衛、という言葉が合っているだろう。

ベロリ、とグラトニーが舌舐めずりする。ドロリ、と粘性の高い唾液が滴った。

「食ってやるぜえ、お前ら全員、おいらの腹の中に納めてやるぜえ！」

「そのセリフ、もつと痩せてから言うんだな。今にも自重で潰れちまいそうなくせに」

「申し訳ありませんが、確約されている幸福を差し出せる程、愚者では無いのです」「お断りだよデブ野郎！ アンタなんかに食われてたまるか！」

「仕留めさせてもらおうよ。今回はアンタじゃなくて、勝利をリスペクトするっ！」

『デュエル！』

グラトニーVS黎&輝&歩&奈美

LP 16000 VS LP 4000×4

「グヒヒヒヒッ！ おいらのターン、ドロ―！ おいらはモンスターをセット！」

バジジッ！ とグラトニーの場にモンスターが伏せられる。

デッキ内容を晒さない、堅実な一手だな。

「更にカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

グラトニー：LP 16000

手札：4枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚



ATK 1800 / DEF 300

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時にゲームから除外される。

「1枚カードを伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：ビッグ・ジョーズ（ATK 1800）

：伏せカード1枚

「私のターン、ドロー！」

サラツ、と輝の艶のある黒髪が踊る。

男でこの髪は反則だと思う。女子ならば迷わず飛びつく類だろう。

「私は『キララー・ラブカ』を、守備表示で召喚！」

『キラアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

キラール・ラブカ：DEF 1500

『ビッグ・ジョーズ』と同じ演出で飛び出すのは、細めの黄色い鮫。お互い除外する効果持ちだが、個人的にはこいつの方が優秀に思えてならない。

キラール・ラブカ（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 700／DEF 1500

自分フィールド上に表側表示で存在する魚族・海竜族・水族モンスターが攻撃対象に選択された時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

攻撃モンスター1体の攻撃を無効にし、その攻撃力を次の自分のエンドフェイズ時まで500ポイントダウンさせる。

「キラール・ラブカ」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「更にカードを2枚伏せて、ターンエンドです！」



輝：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：キラール・ラブカ（DEF 1500）

：伏せカード2枚

「今度はわたしのターンだね、ドロー！ わたしは『E・HERO エアーマン』を召喚  
！」

『トアツ！』

E・HERO エアーマン：ATK 1800

翼に装着されたプロペラを回転させつつ、飛び出す過労死ヒーロー。通称は空気男。

『エアーマン』のモンスター効果で、デッキからワイルドマンを手札に加える！ ター  
ンエンド！」

歩：LP 4000

手札：6枚（内1枚は『E・HERO ワイルドマン』  
 フィールド

：E・HERO エアーマン（ATK 1800）

：魔法・罫無し

「最後は私のターン、ドローー！」

味方ターンのラストを閉めるのは、短めの髪を振るう奈美ちゃん。

真つ黒な髪は、父親の性質を濃く受け継いでいる事を物語る。

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分の場にモンスターが存在しない場合、

『サイバー・ドラゴン』は手札から特殊召喚できる！ 行くよ、『サイバー・ドラゴン』さ

んー！」

『グオオオオオオオオオオッ！』

サイバー・ドラゴン：ATK 2100

銀色の蛇のような体を光らせ、黄色の瞳で敵を睨む機械の龍。『バイス・ドラゴン』と  
 属性や種族で互換されるモンスターだ。

「更に『ボマー・ドラゴン』くんを召喚！  
『ゴガアッ！』」

ボマー・ドラゴン：DEF 0

更に爆弾を抱えた黒い鱗の龍が、バサリと大きな翼を広げつつ降り立つ。

……モンスターにくん付けする人は珍しいな。ちゃん付けもあるのだろうか？

サイバー・ドラゴン（効果モンスター）

星5

光属性／機械族

ATK 2100 / DEF 1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

ボマー・ドラゴン（効果モンスター）

星3

地属性／ドラゴン族

ATK 1000 / DEF 0

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、このカードを破壊したモンス  
ターを破壊する。

このカードの攻撃によって発生するお互いの戦闘ダメージは0になる。

「カードをセット！ ターン終了！」

奈美：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：サイバー・ドラゴン（ATK 2100）、ボマー・ドラゴン（DEF 0）

：伏せカード1枚

これで一周。グラトニーのこのターンから攻撃が可能になる。

これまでの護衛連中は、この2回目の自分のターンから大きく動く。プライドは『暗  
黒要塞鯨』、エンヴィーは『アシッド・ゴレム』、スロウスは『F・G・D』。グラト

ニーは、何を出して来る？

セツトモンスターは、リバースモンスター効果か？

それとも、セツトモンスターをリリースしたアドバンス召喚？

魔法や罫？

何が、来る？

「おいらのターン、ドロー！」

こいつらに対して4対1はアドバンテージとして、薄い。

それはエンヴィーの『バーサーク・デッド・ドラゴン』やスロウスの『アボミナブル・ジェノサイド・ドラゴン』を思い出せば分かるだろう。

こいつらとの戦いに必要なのは数より質だ。

「さあ、行くぜえ！ フィールド魔法発動！」

来る！

「『強制肥沃土壌』っ！」

ガシン、とディスクがフィールド魔法カードを読み込む。

その瞬間、周囲の様子が一変する。

イチゴ畑と工場の壁が消え失せ、土の大地が広がる。どこまで行っても土、土、土。地平線の向こう側に僅かに森が見える。

だが、この土は間違いなく何か仕掛けて来る。ザツ、と構えなおすと、ボロボロと土が舞う。随分と、死んだ土だな。

「そしておいらはセットモンスターを反転召喚！ 『グラッジマジック・ホール・ゴーレム』！」

グラッジマジック・ホール・ゴーレム：ATK 2000

ジュワオア、と不気味な音を出しながら、地の底から這い出て来るモンスター。その姿は元となったであろう『マジック・ホール・ゴーレム』とは似ても似つかない。青かった姿は暗い紫に、輪っかだった体には虫の様な節を持つ4本の足、頭部には禍々しい角と、原型を留めていない。

「更にチューナーモンスター『X-セイバーエアベルン』を召喚！」

X-セイバーエアベルン：ATK 1600

ジャキン！ と両手の甲についた鋭い鉤爪が鈍く光る。獅子の顔を持つ戦士が鋭い眼光を向けてこちらを睨む。

チツ、チューナーである上に『グラビティ・バインド』と『レベル制限B地区』も擦り抜けられる優秀なハンデスモンスターじゃねえか。

X―セイバーエアベルン（チューナー・効果モンスター）  
星3

地属性／獣族

ATK 1600／DEF 200

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

「そして『グラッジマジック・ホール・ゴーレム』のモンスター効果発動！ 1ターンに1度、このカード以外の全てのモンスターは、攻撃力を半分にしてダイレクトアタックができる！」

「何!？」

グラッジマジック・ホール・ゴーレム（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／岩石族

ATK 2000 / DEF 2000

このカードは通常召喚する場合、裏側守備表示でなくてはならない。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカード以外のモンスターは、エンドフェイズ時まで攻撃力が半分になり、このターン相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードが破壊された時、デッキからカードを1枚ドロワーできる。

「お次は魔法カード『盗賊の極意』！ 自分の場のモンスター1体を選択し、相手に戦闘ダメージを与える度に1枚カードを捨てさせる！」

ハンデス用のカードか。

ハンデスデッキなのか？

盗賊の極意

【通常魔法】

メインフェイズ1でのみ発動する事ができる。



ワールド上に表側表示で存在するモンスターを1枚選択する。

このターン、選択したモンスターが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、相手はランダムにカードを1枚捨てる。

「バトル！ 『エアベルン』の攻撃力を半分にして、*“騎士の魂”*にダイレクトアタック！

更にこの瞬間、*「永続罠『追い剥ぎゴブリン』を発動！」*

追い剥ぎゴブリン

【永続罠】

自分ワールド上に存在するモンスターが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

「自分のモンスターが相手に戦闘ダメージを与えるたびに、相手はランダムに1枚、手札を捨てるう！」

「【追い剥ぎハンドス】!？」

やばい、伏せカードは攻撃反応の迎撃用じゃ無い！

X―セイバーエアベルン：ATK 1600↓800

「ぐっ！」

黎：LP 4000↓3200

斬！ 紫の輪を通つての斬撃が俺を斬り裂く。その余波が、俺の手札を1枚削り取つた。

「この瞬間、『強制肥沃土壌』の効果を発動！」

「！」

「手札をハンデスしたプレイヤーは、手札を1枚選んで捨てなくてはいけない！ 更に

『追い剥ぎゴブリン』と『盗賊の極意』の効果で2枚捨ててもらおう！」

「チツ！」

クツ、『エアベルン』の効果で1枚、『追い剥ぎゴブリン』の効果で1枚、『盗賊の極意』で1枚、『強制肥沃土壌』の効果が入って1枚、合計4枚か！

『強制肥沃土壌』の効果が『追い剥ぎゴブリン』にチェーンされないのは、恐らく発動回数が限られているからだろう。

だが、それよりも重要なのは……。

「たった1ターンで、4枚の手札を全て失った……!」

「何というハンデスコンボ……、ハンデスデッキでもこうは行きませんよ」

俺の手札、『深海王デビルシャーク』、『聖なるバリアーミラーフォース』、『禁じられた聖槍』、『地盤沈下』が一瞬で潰された。

クソ、まさか後攻2ターン目でもうハンドレスにされるとはな……!」

「グヒヒヒヒ、カードを2枚伏せて、ターンエンド!」

Xーセイバーエアベルン : ATK 800 ↓ 1600

グラトニー : LP 16000

手札 : 0枚

フィールド

: グラτζマジック・ホール・ゴーレム (ATK 2000)、Xーセイバーエアベルン (ATK 1600)

: 伏せカード2枚、追い剥ぎゴブリン (永続罫)、強制肥沃土壌 (フィールド魔法)



今は関係無いけどな。

「攻撃を行った『ビッグ・ジョーズ』はバトルフェイズ終了時にゲームから除外される」  
『ジョオオオオツズ!』

次元の彼方へと体が歪みながら消える大きなサメ。

アニメ版じゃ“魔法カードを使用したら特殊召喚”なんて効果だった。『エアロ・シャーク』といい『キラール・ラブカ』といい……。シャークさん、何故に貴方のカードはここまで弱体化してしまったのでしょうか。

つとと、今はそんな事を考えている場合じゃ無い。

「更にこの瞬間リバースカード、オープン! 罫カード『魔製産卵床』! 自分の場の表側表示の魚族・水族・海竜族モンスターが除外された時、デッキからレベル4以下の魚族・水族・海竜族モンスターを1体手札に加える事ができる!」

俺はデッキから『素早いマンボウ』を選択!」

『ビッグ・ジョーズ』の消えた次元の穴から、コトコト、と落ちて来た小さな卵達。その卵から沢山の稚魚が次々に孵化していくと、俺のデッキに潜り込んでいった。入れ替わりにデッキから一匹のマンボウがカードとなって俺の手札に入り込む。

「モンスターをセットして、ターンエンド!」

黎：LP 3200

手札：1枚

フィールド

：セットモンスター1体

：魔法・罫無し

「私のターンです、ドロー！」

セットしたモンスターは、恐らくこの場の誰にも判明していない。

俺は『素早いマンボウ』を手札に確かに加えたが、それをセットしたとは言っていない。ドローフェイズにドローしたカードがモンスターカードで、それを伏せた可能性だって有り得る。そう見せかけて、やっぱり『素早いマンボウ』かも知れない。故にこのセットモンスターが何なのか、誰にも分からないのだ。

『素早いマンボウ』かも知れないし、別のモンスターかも知れない。正体不明な点が、相手に攻撃を躊躇させる。

後は、『グラッジマジック・ホール・ゴレム』をどうにかできればありがたいのだが。「私は伏せていた『フィッシュヤーチャージ』を発動！『キラール・ラブカ』をリリースし、右の伏せカードを破壊します！更に1枚、デッキからドロー！」

黄色のサメが猛烈な突進を仕掛け、伏せカードを吹き飛ばす。

伏せてあったカードは……、『アブソプシヨンドロー』か！

危ない、ドローソースは連中にとっての反撃開始の合図だからな。

フィツシャーチャージ

【通常罠】

自分フィールド上に存在する魚族モンスター1体をリリースして発動する。

フィールド上のカード1枚を破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

アブソプシヨンドロー（オリジナル）

【通常罠】

相手モンスターがダイレクトアタックを行う時に発動できる。

ダメージを無効にし、攻撃を行ったモンスターの元々の攻撃力700ポイントにつき1枚カードをドローする。

「更に『ハリマンボウ』を召喚！」

『ギョボボボッ！』

ハリマンボウ：ATK 1500

地中から水面に躍り出るように飛び出すのは、ズングリした体のマンボウ。

ちなみに漢字では「翻車魚」と書くらしい。

追撃とばかりに、更に輝は手札からカードを1枚引き抜く。

「このカードは、自分の場に魚族・水族・海竜族モンスターが召喚・特殊召喚された時、手札から特殊召喚できる！ 現れよ、『シャーク・サツカー』！」

『シャアアアアクツ、サツクアアアアアアアアアアアッ！』

シャーク・サツカー：ATK 200

シャーク・サツカー（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 200／DEF 1000

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、この



カードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードはシンクロ素材とする事はできない。

『ハリマンボウ』の残した水面から、ユラリと魚影と共に現れる細いコバンザメ。シンクロ素材には出来ないが、このカードの特殊召喚自体に『シャーク・サッカー』を特殊召喚できる点はお得だ。

「私はレベル3の『ハリマンボウ』と『シャーク・サッカー』をオーバーレイ！」

『マンボオオオオオオオオオオッ！』

『サツツカアアアアアアアアアッ！』

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

青と水色の光に変わる2匹の魚。

この組み合わせだと出せるモンスターは色々あるから、何が来るのか全く予想がつかない。

光に変わった2匹の魚は、銀河の渦の中へと飛び込んで行った。

☆3×☆3 || ★3

「エクシーズ召喚！ 滅びを運べ『No. 30 破滅のアシッド・ゴーレム』！」  
『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

げ、よりにもよってこいつか!?

ジユクジユクと垂れ流される酸、紫の巨体に吹きあがる毒々しい蒸気。ナンバーズの中でも特筆すべき、呪われたモンスターだ。

No. 30 破滅のアシッド・ゴーレム：ATK 3000

「お前、これ出すとか、勇気あるな……」

「使いどころを間違えなければ、強力ですから」

顔が引き攣っているのを自覚する。実際俺はこれを過去に出した事があるが、ハツキリ言って使い辛い。返しのターンで『ジャンク・アーチャー』に除外され、合計で4300ダメージの致命傷を受ける事になった（それでもしつかり勝ったけどな）。

No. 30 破滅のアシッド・ゴーレム（エクシーズ・効果モンスター）

ランク3

水属性／岩石族

ATK 3000 / DEF 3000

レベル3モンスター×2

自分のスタンバイフェイズ時、このカードのエクシース素材を1つ取り除くか、自分は2000ポイントダメージを受ける。

このカードのエクシース素材が無い場合、このカードは攻撃できない。

このカードがフィールド上に存在する限り、自分はモンスターを特殊召喚できない。

「バトル、行きますよ！ 『アシッド・ゴーレム』で『グラツジマジック・ホール・ゴーレム』を攻撃！ ムアシッド・フィストッ！」

「リバースカード、オープンだ！ 『犯バッド・カウンター撃』！ これで『アシッド・ゴーレム』を破壊

し、その攻撃力の倍のダメージを与える！」

「な!？」

「な、なんてデタラメな！」

犯撃（バッド・カウンター）（オリジナル）

【通常畏】

相手モンスターが攻撃してきた時に発動できる。

攻撃を無効にして攻撃を行うモンスターを破壊し、相手にそのモンスターの攻撃力の倍のダメージを与える。

「まず一人、仕留めたあ！」

「そうは行きませんよ！ リバーズカード、オープン！ 『トラップ・スタン』！ このターン、このカード以外の全ての罠カードの効力は失われる！」

「な!？」

ビキビキビキ、バキンツ！ グラトニーのカードが石化し、砕け散る。これで、安心して攻撃ができるな。

『トラップ・スタン』は実質、コストの無いカウンター罠に近いから便利だ。

トラップ・スタン

【通常罠】

このターンこのカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「ぐおおおおおおっ！」

グラトニー：LP 15800 ↓ 14800

酸液を垂れ流す拳が、紫のリングモンスターを殴り、砕く。その破片がグラトニーを襲った。

脂肪がタツプリついているからか、素早い動きはできないようだ。

「だが、効果で1枚ドロッド！」

「私はこれで、ターンエンドです」

輝：LP 4000

手札：手札2枚

フィールド

：No. 30 破滅のアシッド・ゴーレム (ATK 3000・ORU:2)

：魔法・罫無し

フシユ、フシユ、と蒸気を吐きながら立つ、巨大な猛毒のゴーレム。しかし何だ、こうして見ると何というか、そこまで見た目は悪くないのな、こいつ。

でも特殊召喚封印ってのは痛いよな、このご時世。まあ、今は味方のモンスターゾー

ンを自分の場として認識しない事ができるので大丈夫だろう。

「わたしのターン、ドロロー！ 私はモンスターを裏側守備表示で召喚！」

このターン、歩は慎重に動くようだ。

セットモンスター、か。『ゴーズ』や『バトルフェーダー』の存在がある以上、例えばラ空きと雖も油断はならない。

さつき『ワイルドマン』を加えたからそれを召喚したり、或いは“E・HERO”お得意の『融合』を使用したりする手もある。だが、彼女がそれをしないところを見ると、手札に強く攻める為のカードが無いのだろうか。

「バトル！ 『エアーマン』でダイレクトアタック！ “エア・シユート”！」

「ぐううっ！」

グラトニー：LP 14800↓13000

ビュウツ！ と突風が双翼のプロペラから撃ち出され、柱のような風がグラトニーに直撃する。

しかし次の瞬間、風によって舞い上がった埃がいきなり一点に集まると、それは突如として雲のようなモンスターになった。

クラウド・フィーンド：ATK 2600

「何!？」

「いきなりモンスターを!？」

「このカードは、相手からダイレクトアタックを受けた時、手札から特殊召喚できる！  
そして、受けたダメージによって能力が変化する！」

クラウド・フィーンド（効果モンスター）（オリジナル）

星5

ATK 2600 / DEF 0

水属性 / 悪魔族

このカードは墓地から特殊召喚できない。

プレイヤーが直接攻撃によって戦闘ダメージを受けた時、手札から特殊召喚できる。

この時、受けたダメージによって以下の効果を得る。

● 2000未満：このカードが戦闘によって相手にダメージを与えた時、相手に50ポイントのダメージを与える。

● 2000以上：1ターンに1度、相手の場のカードを1枚選択し、元々の持ち主の手札に戻す。

「2000以上ならバウンス、2000未満なら戦闘ダメージに効果ダメージを付随させる！ 受けたダメージは1800！ よって戦闘ダメージに500ポイントの効果ダメージを追加させるぜえ！」

「攻撃力2600……。わたしはカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

歩：LP 4000

手札：4枚（『ワイルドマン』）

フィールド

：E・HERO エアーマン（ATK 1800）、セットモンスター

：伏せカード1枚

「私のターン、ドロロー！」

攻撃力2600か……。『サイバー・ツイン』でも出せば良いんだが。

「魔法カード『エヴォリューション・バースト』を発動！ 自分の場に『サイバー・ドラ



「ゴン』が表側表示で存在する時、相手の場のカードを1枚破壊できる!」

「お、良いカードだ。戦闘をスキップする代わりに1枚のカード破壊を行う魔法、コストはそこまで痛いものじゃないから、実質的には『サンダー・ブレイク』よりお得だ。」

「これで『クラウディー・フィード』を破壊すれば……!」

「対象は『追い剥ぎゴブリン』!」

「え!?!」

「永続罠の方を!?!」

「キュイイイイイイイイイン、と機械の龍の口に青白いエネルギーが蓄積していく。球体状になったそれは、炎のように吐き出されると、表側表示の罠を焼き尽くした。」

「グヒ、バカじゃねえのか、モンスターじゃなくて罠を破壊するなんて……。とは言わな  
いぜえ。何かあるんだろ、『クラウディー・フィード』を破壊でき、そしてダメージを  
通せるモンスターが? 手札がまだ3枚あるんだから、それくれえ余裕だよなあ?」

「正解だよ。流石に敗北フラグは立てないか」

「ピツ、とカードを1枚、奈美ちゃんが場に出す。」

「私は『ハウンド・ドラゴン』くんを召喚!」

『ガアアアアアアッ!』

ハウンド・ドラゴン：ATK 1700

黒い体、刃の牙を持つ小柄な龍が飛び出す。レベル3ドラゴンの中で最も攻撃力の高いモンスターだ。

ハウンド・ドラゴン（通常モンスター）

星3

閻属性／ドラゴン族

ATK 1700／DEF 100

鋭い牙で獲物を仕留めるドラゴン。

鋭く素早い動きで攻撃を繰り返すが、守備能力は持ち合わせていない。

「そして『ボマー・ドラゴン』くんを攻撃表示に変更！」

ボマー・ドラゴン：DEF 0↓ATK 1000

攻撃力僅か1000の『ボマー・ドラゴン』を？



グラトニー：LP 13000↓11300

決るような一撃がグラトニーの腹に炸裂。

よし、良い一撃が入った。

「ターンエンド！」

奈美：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：サイバー・ドラゴン（ATK 2100）、ハウンド・ドラゴン（ATK 1700）

：伏せカード1枚

ヤツの手札は0枚。そして場にはフィールド魔法以外残っていない。

真正正銘の無防備だ。

だが、これで引き下がる程度の實力じゃ無い事ぐらい分かっている。ピンチとチャンスは表裏一体。巻き返される事を覚悟しないとな……。

「やるなあ。おいらのターン、ドロー！ 魔法カード『戦刀食過』セントウシヨッカを発動！ 発動時、相手より手札が少なければ発動できる！ 相手の手札の枚数―1枚分、デッキからカードをドローできる！

「お前らの手札は合計で9枚、よって8枚デッキからドローだ！」

「な!?!」

「二度に8枚のカードをドローですか!?!」

#### 【通常魔法】

戦刀食過（オリジナル）

自分の手札が相手より少ない時のみ発動できる。

デッキから、相手の手札の枚数より1枚少ない枚数になるまでカードをドローする。墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、墓地に存在する魔法カードを1枚選択して、デッキの1番上に戻す事ができる。

「おいらは更に『アチャチャアーチャー』を召喚！」

『アチャチャッ!』

アチャチャアーチャー：ATK 1200

赤と白の兜を被った弓兵が現れる。

あ、『アチャチャアーチャー』だと……？ バカな、そんなメリツトの薄いカードを何故……？

『アチャチャアーチャー』のモンスタ―効果発動！ 召喚に成功した時、相手に500ポイントのダメージを与える！ 喰らえ、〃騎士〃の魂い！」

「名前覚えろ！」

『アチャチャチャツ!?!』

ボツ！ と番えた矢の先に点った炎。それに驚き熱がった弓兵はその矢を慌てて討つ。毎度火が着くんだから、好い加減慣れろという話だ。

「ぐっ！」

黎：LP 3200↓2700

ドン！ と熱と衝撃が走る。見ると、胸の部分を矢が貫通している。

「れ、黎!?!」

「チッ」

舌打ちを一つし、胸部を貫く矢を力任せに引き抜く。

この程度では死なない。やはり、いくら心は人間であっても体は化物。心と体は絶対に一致させる事はできない、か。

「この瞬間、『強制肥沃土壌』の効果を発動！ 効果ダメージを受けたプレイヤーは手札を1枚捨ててくれないけない！」

「っ、またハンデス……！」

生前、暗黒界デッキを相手にした事があるが、あれで何度もハンデスをされて負けた記憶がある。ハンドと墓地のアドバンテージを重要視する俺の戦術は、あの手のカードに弱い。それに負けないようにと勉強したのが、俺の「メタビート」の始まりだったな。

「更に、カード効果で手札が捨てられた時、もう1枚手札を捨ててはいけない！」

「だが、俺にはもう手札が無い！ その効果は適用できない！」

「その場合、お前は更に800ポイントのダメージを受ける！」

「な!？」

黎：LP 2700↓1900

パシツ、と俺の残った手札が捨てられる。更に土は貪欲にも俺から生命力を奪う。こ、の……！　なんつー強欲な土だよ……！

「グヒヒヒ、美味しいモンを作るためには、栄養が詰まった土が大切だからなあ！　まあ安心しろ。『強制肥沃土壌』の効果は同一チェーン上に乗る回数に制限があるからなあ！　だが、分かっているとは思うが、墓地送りになっても、デッキから同名カードをサーチできるぜえ！」

「くっ……！」

### 強制肥沃土壌（オリジナル）

#### 【フィールド魔法】

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、デッキから同名カードを選択し、発動できる。

自分の場にこのカードが表側表示で存在する限り、以下の効果を同一チェーン上で一回ずつ発動できる。

このカードの効果でカードを捨てない場合、800ポイントのダメージを受ける。

●効果ダメージを受けたプレイヤーは、手札を1枚選択して捨てる。

●カード効果によって手札を墓地に送ったプレイヤーは、手札を1枚選択して捨て



る。

クツソオ……、肥料与えれば作物が育つってモンでもねえだろうがよ……。

正しく、強制的に肥えさせられる土ってワケかい！

「おいらは更に『アチャチャアーチャー』、『アシッド・ゴレム』、『エアーマン』、『サイバー・ドラゴン』をリリース！ 『ライアー・ゾンビ』を特殊召喚っ！」

『アチャツ?!』

『ゴオオオオオオツ?!』

『ぬおああっ!』

『ギユオオオオオオオツ!』

『うおおああああああああああああああああ……っ!』

ライアー・ゾンビ：ATK 4500

ライアー・ゾンビ（効果モンスター）（オリジナル）

星9

闇属性／アンデッド族

ATK 4500 / DEF 3300

このカードは通常召喚できない。

相手フィールド上に存在するモンスターを3体と自分の場のモンスター1体をリリースした時のみ手札から特殊召喚できる。

このカードが場を離れた時、ゲームから除外される。

またこいつか……！

ジユクジユクという気味の悪い音を立てて、包帯を巻かれた巨大なゾンビが地の底から現れる。引き換えに、包帯を巻かれた腕によつて4体のモンスターが地の底へと引きずり込まれてしまった。

歯はところどころボロボロ、指だって5本揃っていない。血に染まった包帯が、指先から垂れる正体不明の液体が、気持ち悪い。

「ら、『ライアー・ゾンビ』……っ！」

「あ、あつという間にフィールドがガラ空きに……！」

残ったモンスターは僅か3体。内2体はセットモンスター、残りは通常モンスター。

そして何より危険なのは、輝の場にモンスターがいなくなっちゃった事だ。『ライアー・ゾンビ』の攻撃力は4500、攻撃1発でライフを根こそぎ持って行かれる！

「お、オーバーレイ・ユニットとなっていた『ハリマンボウ』の効果で、攻撃力は500ポイントダウンします！」

ハリマンボウ（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 1500 / DEF 100

このカードが墓地へ送られた時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

ライアー・ゾンビ：ATK 4500 ↓ 4000

バシユバシユバシユッ！ と地面に現れた紫の魔法陣の中心から無数の針状のミサイルが撃ち出される。それが腐った巨人に炸裂し、力を削いだ。

「それがどうした、バトル！ 『ライアー・ゾンビ』で女顔に攻撃い！」

“獄滅腐烈拳”

「輝!」「父さん!」

「仕留めたあ!」

『ネクロ・ガードナー!』

ガツキイイイイイイイイ!

「何い!?!」

「お前の『強制肥沃土壤』の効果で捨てた『ネクロ・ガードナー』のモンスター効果だ。このカードを除外し、1度だけ戦闘を無効にする」

ハンデスの最大の弱点は墓地で発動する効果だ。

手札を適当に捨てさせたところで、それが墓地で効果を発揮するカードならば逆効果になる。

「チキシヨウ……」

「殺させねえよ、絶対にな」

ギリギリだった。前のターンに『ネクロ・ガードナー』を引いていなかったら、そしてそれを捨てていなかったら、確実に輝はやられていた。

「勝利に急いだか……。ならばおいらは永続魔法『ゾンビの包帯』を発動!」

言い訳するように独り呟くグラトニーが発動したのは、永続魔法。

イラストには、ゾンビ達が包帯を巻いているシーンが映っていた。

「このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いのプレイヤーはデッキからドロウ以外の方法でカードを加える事と場に出す事はできず、墓地のカード効果は無効化され、墓地のカードを除外する事もできない！」

「な!？」

「これでは『キララー・ラブカ』の効果が使えませんね……!」

ゾンビの包帯(オリジナル)(改訂版)

【永続魔法】

このカードはメインフェイズ2の開始時のみ発動できる。

(1) : お互いのプレイヤーはドロウ以外の方法でデッキからカードを手札に加えることができず、場に出す事もできない。

また墓地に存在する魔法・罫・モンスター効果は無効となり、墓地からカードを除外することはできない。

なんてこった……。こいつは「ダーク」や「代行者」みたいなデッキに思い切り刺さるじゃねえか!

現状において、これは凄まじく厄介なパワーカードだ。セットされた『素早いマンボ

ウ』の効果も使えない……!」

「カードを3枚伏せて、ターンエンド!」

グラトニー：LP 11300

手札：2枚

フィールド

：ライアー・ゾンビ（ATK 4000）

：伏せカード3枚、ゾンビの包帯（永続魔法）、強制肥沃土壤（フィールド魔法）

く、ハンデスで、しかも行動を大きく制限されるとはな。

こいつは、かなり手強いぜ……!」

t o b e c o n t i n u e d

STORY 51 : 尽きる事無き食欲



黎 : LP 1900

手札 : 0枚

フィールド

: セットモンスター1体 (『素早いマンボウ』)

: 魔法・罨無し

輝 : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罨無し

歩 : LP 4000

手札：4枚（内1枚は『E・HERO ワイルドマン』  
 フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚

奈美：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ハウンド・ドラゴン（ATK 1700）

：伏せカード1枚

グラトニー：LP 11300

手札：2枚

フィールド

：ライアー・ゾンビ（ATK 4000）

：伏せカード3枚、ゾンビの包帯（永続魔法）、強制肥沃土壤（フィールド魔法）



## SIDE : 黎

「俺のターン！」

『強欲な壺』か。

手札0枚の状況じゃありがたいな。

「魔法カード『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを2枚ドロ！」

よし、これなら行ける！

「俺は『エアジャチ』を召喚！」

『ジャアアアアアアアアアッ！』

エアジャチ：ATK 1400

空中を切るように飛び出す、赤色のシャチ。いや、形状としてマンタに近いか。

魚形モンスターだが、こいつは風属性という珍しい種類だ。

「俺は『エアジャチ』のモンスター効果を発動！ 1ターンに1度、手札の水族・魚族・海竜族モンスターを1体ゲームから除外し、相手の場の表側表示のカードを1枚破壊する！ 手札の『スカイオニヒトクイエイ』を除外！」

「し、しまった!? 『ゾンビの包帯』は手札の除外は防げない!」

「その通り! どんなカードにだって死角はある!」 “エアール・クラッシュャー!”

キユイイイイイイイイイッ! と甲高い音が放たれる。その音波によってグラトニーのカードが木端微塵に吹き飛ぶ。

スカイオニヒトクイエイ(効果モンスター)

星3

風属性/海竜族

ATK 600/DEF 300

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードが直接攻撃を行ったバトルフェイズ終了時、このカードを次の自分のスタンバイフェイズ時までゲームから除外する。

「この効果を使用した『エアジャチ』は、次の俺のスタンバイフェイズまでゲームから除外される。だが、『エアジャチ』の除外に合わせて墓地の『ウイングトータス』のモンスター効果を発動! 自分の場の水族・魚族・海竜族モンスターが除外された時、手札か墓地からこのカードを特殊召喚できる!」

『ゴウオオオオッ!』

ウイングトータス：DEF 1400

バサ、と不格好な翼で降り立つカメ。二足歩行ができるようなフォルムだ。

一見、水属性というのは派手さに欠ける種族にも見える。だが、リチュアや氷結界の力を見れば分かるように、水の力は相手の力を削ぎ取り、自分にその流れを向ける事にある。風化のように、大きな岩を長い時間をかけて水流で削っていくようなイメージをすれば良いだろう。

エアジャチ（効果モンスター）

星3

風属性／海竜族

ATK 1400 / DEF 300

1ターンに1度、手札から魚族・海竜族・水族モンスター1体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

その後、このカードを次の自分のスタンバイフェイズ時までゲームから除外する。

ウイングトータス（効果モンスター）

星3

風属性／水族

ATK 1500 / DEF 1400

自分フィールド上に表側表示で存在する魚族・海竜族・水族モンスターがゲームから除外された時、このカードを手札または自分の墓地から特殊召喚する事ができる。

OK、これで何とか立て直した。

「ターンエンド！」

黎：LP 1900

手札：0枚

フィールド

・ウイングトータス（DEF 1400）、セットモンスター1体（『素早いマンボウ』）

：魔法・罨無し

「私のターン、ドロ。凄いですね。まさかあのカードを一瞬で消滅させるとは」

「無敵で万能なカードなんて存在し得ないからな。複数のカードが合わさって初めてデュエルは完成する以上、単体のカードには、必ずどこかに弱点がある」

歴代主人公の十代や遊星のデッキを見れば、それは一目瞭然だ。

1枚1枚のカードにはそこまで強い力はない。融合やシンクロを行う事で、個々に足りない力を補うスタンスが、彼らの戦い方だ。

逆にそのライバルポジションにいるサンダーやジャックは1枚1枚が力強いカードで戦う。ただし、そこにも必ず複数枚の連携が存在する。

「私も負けてられませんね。私は魔法カード『浮上』を発動します！ これで墓地の『ハリマンボウ』を特殊召喚！」

『ボウツ！』

ハリマンボウ：DEF 100

浮上

## 【通常魔法】

自分の墓地に存在するレベル3以下の魚族・海竜族・水族モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

「更に『オイスターマイスター』を召喚！」

『ハアッ！』

オイスターマイスター：ATK 1600

レベル3のモンスターが2体、再び来るか！

「私はレベル3の『ハリマンボウ』と『オイスターマイスター』をオーバーレイ！ 2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築します！」

『マンボオオオオオッ！』

『トオアアアアアッ！』

☆3×☆3＝★3

青と水色の光に変わった2体のモンスターは、上空へと螺旋を描いて飛び上がり、地表に生まれた銀河の渦の中に飛び込んだ。

「エクシーズ召喚！ 激流の龍よ、我らに力を！」 『No. 17リバイス・ドラゴン』！  
『グオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

No. 17リバイス・ドラゴン：ATK 2000

水の流れから生まれる、大きなヘビのような生物のトグロ。それはゆっくりと開いて行き、ヒレの生えた、大きな龍へと姿を変えた。

『リバイス・ドラゴン』のモンスター効果を発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、攻撃力を500ポイントアップさせます！ 同時に取り除いた『ハリマンボウ』の効果で『ライアー・ゾンビ』の攻撃力が、更に500ポイントダウンです！」

パシュツ！ と白い星が青い龍によって噛み砕かれる。

同時に、地下からズングリとしたマンボウが飛び出し、大きく裂けた口腔内から無数の針状のミサイルを射出した。

No. 17リバイス・ドラゴン：ATK 2000↓2500  
ライアー・ゾンビ：ATK 4000↓3500

だが、『リバイス・ドラゴン』はドラゴン族、『キラール・ラブカ』の効果は使えないから、攻撃を止める事はできないし、万一できても、それでは相撃ちになるだけだ。

どうするつもりだ、輝？

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドです！」

輝：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：No. 17リバイス・ドラゴン（ATK 2500・ORU：1）

：伏せカード1枚

カードを伏せたって事は、あのカードに『ライアー・ゾンビ』を止める秘策があるって事か？

雑談の時、最近『ミラーフォース』を発動できないってグチってたから、多分伏せ



たのは『威嚇する咆哮』や『和睦の使者』の様なフリーチェーン系の攻撃を妨害するカード。或いは『収縮』や『突進』の様なコンバットトリックに使うカードだろう。

「わたしのターン、ドロー！」

順番変わって歩のターンだ。

変幻自在の戦いがヒーローの持ち味だ。さて、どう戦う？

「わたしは手札の『沼地の魔神王』のモンスター効果を発動！ 手札からこのカードを捨てて、デッキから『融合』のカードを手札に加える！」

沼地の魔神王（効果モンスター）

星3

水属性／水族

ATK 500 / DEF 1100

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。

その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならぬ。

また、このカードを手札から墓地へ捨てる事で、デッキから「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

「更に魔法カード『融合』を発動！ 手札の『ワイルドマン』と『エッジマン』を融合！  
現れる、『E・HERO ワイルド・ジャギーマン』！」  
『シユアアアアアアアアッ、ハッ！』

E・HERO ワイルド・ジャギーマン：ATK 2600

上裸の男と黄金色の刃の戦士が時空の渦に呑み込まれる。二人の戦士が混ざり、渦の中から小金の刃を纏った戦士が飛び出した。

隆々とした筋骨、手甲に装着された三日月形の刃。緑色のレンズの嵌められた黄金色のゴーグルが、キラリと光る。

E・HERO ワイルド・ジャギーマン（融合・効果モンスター）

星8

地属性／戦士族

ATK 2600／DEF 2300

「E・HERO ワイルドマン」＋「E・HERO エッジマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる

「攻撃力2600程度で、おいらの『ライアー・ゾンビ』は倒せないぞお！」

「必要無い！ 魔法カード『精神操作』を発動！ エンドフェイズまで『ライアー・ゾンビ』のコントロールを奪う事ができる！」

「な!?!」

突如として歩サイドにつく腐敗した巨人。

成程、戦闘破壊する必要無く相手の場を空けたか！

「バトル！ 『ワールド・ジャギーマン』でダイレクトアタック！ インフィニティ・

エッジ・スライサー！」

「チツ、罠カード発動！ 『無茶喰い』！ 元々のコントロールが自分のモンスターを1体破壊し、次のおいらのスタンバイフェイズまで発生する戦闘ダメージを無効にする！

『ライアー・ゾンビ』を破壊する！」

無茶喰い（オリジナル）

【通常罠】

元々のコントロールが自分のモンスターを1体破壊し、次の自分のスタンバイフェイズ

ズまで自分が受ける戦闘ダメージを0にする。

光の粒子となって消滅する腐った巨人。キラキラと散った粒子は飛来した三日月状の刃を全て弾き返した。

「防がれた……」

「しかも、奈美のターンの攻撃まで防御して来ましたね……」

「グヒヒヒヒ、好い加減、一对多数の状況にも慣れて来たんでね。対策の1つ2つ打ってあるさー！ まあ、『ライアー・ゾンビ』は場を離れた時、除外されちゃうのは痛いかな」

ライアー・ゾンビ（効果モンスター）（オリジナル）

星9

闇属性／アンデッド族

ATK 4500／DEF 3300

このカードは通常召喚できない。

相手フィールド上に存在するモンスターを3体と自分の場のモンスター1体をリリースした時のみ手札から特殊召喚できる。

このカードが場を離れた時、ゲームから除外される。

「くっ、わたしはこれで、ターンエンド！」

歩：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：セットモンスター1体、E・HERO ワイルド・ジャギーマン（ATK 260

0）

：伏せカード1枚

「今度は私のターン！ ドロー！」

戦闘ダメージが通らない以上、このターンの攻撃は必然的に無意味。

どうするかな、奈美ちゃん。

「私は『ドル・ドラ』くんを、守備表示で召喚！」

ドル・ドラ：DEF 1200

ジジジジ、とカードがディスクに読み込まれ、場にカードが横向きで現れる。腕の先が龍の頭の、頭部が存在しない魔人が腕（首かも）を交差して屈んだ体勢で現れる。1度だけ復活できる自己再生モンスターだ。

「そして『ハウンド・ドラゴン』くんを守備表示に変更！」

ハウンド・ドラゴン：ATK 1700 ↓ DEF 100

「これで、ターンエンド！」

奈美：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ハウンド・ドラゴン（DEF 100）、ドル・ドラ（DEF 1200）

：伏せカード1枚

防御か、間違つてはいない。

彼女のモンスターは両方とも攻撃力が低い。ダメージを抑える目的でそうするのは

正解だが……。邪神の護衛は、そんな正攻法が通じるようなヤツじゃない。

「おいらのターン、ドロー！ おいらは魔法カード『失意のミス』を発動！ 相手モンスターを全て破壊し、その攻撃力の合計値分のダメージを与える！」

「いつ、やっぱそういうの来るか！」

「そうは行きません！ リバースカード、オープン！ カウンター罠『魔宮の賄賂』！ その発動を無効にして破壊します！ 更に相手はカードを1枚ドロー！」

失意のミス（オリジナル）

【通常魔法】

相手の場のモンスターを全て破壊し、その攻撃力の合計値分のダメージを相手に与える。

この効果で破壊した相手モンスターの数が3体以下の場合、このターンのバトルフェイズをスキップする。

グラトニーの魔法の発動を素早く潰す輝。ナイスだぜ。

だが、必殺のカードを潰されたというのに、グラトニーはニヤニヤと笑っている。

「グヒヒ、成程」

「?」

「今のカードの発動で、対応できるように反応したのはお前だけだった!　つまり、残った2枚の伏せカードは、カウンター系のカードじゃ無い!」

こいつ、まさかそれを調べるために一発空撃ちしたのか!?

「『大食いピラニア』を特殊召喚っ!」

『ギョオオオオッ!』

大食いピラニア：ATK 1800

ガバアツ!　と大口を開けて飛び出す土色のピラニア。血走った眼がギョロリとこちらを睨みつける。

「このカードは、自分の場にフィールド魔法が表側表示で存在する時、手札から特殊召喚できる!」

ゆ、緩っ!

大食いピラニア（効果モンスター）（オリジナル）

星4



水属性／魚族

ATK 1800 / DEF 1900

自分の場にフィールド魔法カードが表側表示で存在する時、手札からこのカードを特殊召喚できる。

このカードが破壊された時、デッキからカードを1枚ドロし、その後手札1枚をデッキの1番上か下に戻す。

「更に罨発動だぜえ！ 『黒い呼び水』！ 自分の場の水属性モンスターを1体リリースし、このターン、2体までモンスターを通常召喚できる！」

黒い呼び水（オリジナル）

【通常罨】

自分の場の水属性モンスターを1体リリースして発動する。

発動したターン、プレイヤーはモンスターを2体まで通常召喚できる。

あれはプライドが使っていたカード！

呼び水ってのは、井戸の水を汲み上げやすくするために使う、潤滑剤みたいなモンだ。

これで召喚を円滑にするっつーワケか……！

「『大食いピラニア』をリリース！ まずは『食パントマイマー』を召喚！」

食。パントマイマー：ATK 0

「『食パントマイマー』の効果発動！ このカードをリリースし、デッキからカードを5枚ドロロー！」

食。パントマイマー（効果モンスター）（オリジナル）

星3

闇属性／魔法使い族

ATK 0 / DEF 2450

このカードは墓地から特殊召喚できない。

自分の場に表側表示で存在するこのカードをリリースする事で、デッキからカードを5枚ドロローできる。

一斤の食パンの様な格好の道化師が、奇妙な踊りと同時に出現する。その体を本当に

食パンの様に5枚に切り分けると、切り分けられた体はカードに変化した。

クソ、こいつら手札消費が荒いクセして、カードをドロし過ぎなんだよ！

「墓地の『大食いピラニア』と『クラウディー・フィード』をゲームから除外し、『フェンリル』を特殊召喚！」

『ガウツ！』

「そして『デビルツコラ』を召喚！」

『ヒヒヒヒッ！』

フェンリル：ATK 1400

デビルツコラ：ATK 1400

大型のピラニアと雲の魔人が次元の彼方へ消失する。その次元から、赤い瞳の巨大な狼が飛び出す。

一方で地面から生えたホウレンソウのような植物、ルツコラが引き抜ける。その根が変化し、赤く裂けた口を持った悪魔の様な形相になった。

フェンリル（効果モンスター）

星4

水属性／獣族

ATK 1400／DEF 1200

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の水属性モンスター2体をゲームから除外して特殊召喚する。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、次の相手ターンのドロップフェイズをスキップする。

デビルツコラ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／植物族

ATK 1400／DEF 1400

このカードの召喚に成功した時、このカード以外の自分の場に存在する表側表示のモンスターを1体選択する。

選択したモンスターと同じレベルのモンスターをデッキから2体まで特殊召喚する。

このカードはデュエル中1度だけ、墓地から特殊召喚できる。

その時、このカードのレベルは1となる。

『『デビルツコラ』は召喚に成功した時、自分の場のこのカード以外のモンスター1体と同じレベルのモンスターを2体までデッキから特殊召喚できる。おいらはデッキから『フェンリル』と同じレベル4の『イグ挿鉢』と『イグ挿粉木』を特殊召喚！』

イグ挿鉢：ATK 1500

イグ挿粉木：ATK 1500

『『デビルツコラ』が根つこの腕を地中に伸ばすと、地中から2体のモンスターを引き上げた。

片方は挿鉢、もう片方は挿粉木棒のようなモンスターだ。2体とも細い手足が生えており、フラフラと奇妙なダンスを踊っているように見える。

『レベル4の『フェンリル』にレベル4の『イグ挿鉢』をチューニング！』

『ここでシンクロですか……！』

『来るぞー！』

挿鉢状のモンスターが4つの星に分かれ、その星が緑のリングになる。そのリングを青い狼が潜り抜け、光の柱が生まれた。

「噛み砕け、食らいつけ、貪欲なまでにその歯牙にかけろ！」

☆4＋☆4＝☆8

「シンクロ召喚！ 増殖しやがれ、『ドリリアドネー』！」

『キイイイイイイイイイッ！』

ドリリアドネー：ATK 3300

「攻撃力、3300っ！」

柱から出て来たのは、無数のアリ。焼けたチーズをかけた丼、ドリリアにアリの手足と頭をつけた、というのが正しいのだろうが、それにしても数が多い。その数は目算で30以上。一体一体が攻撃力100を備えていると仮定すると、その総数は33体になる。凄い数だ……。

本来、アリアドネは女神の名前なんだがな……。

「更にレベル4の『デビルツコラ』にレベル4の『イグ播粉木』をチューニング！」

「2連シンクロ……！」

「食む牙、引き裂く犬歯、肉を引き千切る強靱なる顎、ここにあれ！」  
 続いて播粉木状のモンスターが4つの星に分かれて緑のリングを生み出す。その中心を潜る、悪魔の根を持つ植物が4つの星になる。

☆4 + ☆4 || ☆8

「シンクロ召喚！ 貫き殺せ、『ハンバーガーディアン』！」  
 『ヌウウウウッ！』

ハンバーガーディアン：ATK 2900

ドシン、と地鳴りが響く。轟いた轟音の震源地にはハンバーガーを模した鎧を着こなした王国騎士がいた。

「二連続で、シンクロッ！」

「しかも両方ともレベル8。上級モンスターです」

「わたしとしては、素材となったモンスターの効果の方が気になるけどね」

「同感だ」

上から奈美ちゃん、輝、歩、俺。

と言うか、武装した騎士が虫の大群に力で負けるのはどうかと思うんだが。

「さて、シンクロ素材になった『イグ挿鉢』のモンスター効果発動！ シンクロ素材になったこのカードをゲームから除外し、デッキか手札からレベル6以下のモンスターを1体特殊召喚する！ おいらはデッキからレベル6の『ゴッド・オブ・ベムグロ猛毒の孤独神』を特殊召喚！」  
『ボアアアアアアアアアアアッ！』

全身から腐臭を放つ、毒々しいローブ男が現れる。ゴボゴボという音が、耳にへばり付く。

猛毒の孤独神：ATK 2500

「モンスター効果、発動！ 1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドロロー！ それがレベル4以下のモンスターだった場合、特殊召喚できる！」

猛毒の孤独神（効果モンスター）（オリジナル）

星6

闇属性／悪魔族



ATK 2500 / DEF 1900

このカードが闇属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚された時、デッキからカードを1枚ドロウする。

1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドロウできる。

ドロウしたカードがレベル4以下のモンスターだった場合、自分の場に特殊召喚できる。

「増殖効果ですか……!」

「ドロウ! 引いたカードはレベル2の『暗闇の同調者』! 特殊召喚!」

暗闇の同調者 : ATK 1000

暗闇の同調者 (効果モンスター) (オリジナル)

星2

闇属性 / 魔法使い族

ATK 1000 / DEF 750

このカードは自分の墓地に存在するダークシンクロモンスターを1体ゲームから除

外する事で手札から特殊召喚できる。

この効果で除外されたモンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力はアップする。  
このカードが攻撃を行う時、相手の発動した罠の効果は無効となる。

「1ターンで、4体もモンスターを並べた!？」

「恐るべき展開力ですね……、〃BF〃でもこうは行きませんよ……!」

「い、インチキ効果も大概にしなさい!」

「名ゼリフだな」

今度は順に歩、輝、奈美ちゃん、俺。

俺はもう慣れたモノだが、実際これは中々にインチキ部類だ。

グラトニーはそれを無視して進める。

「そして『イグ播粉木』の効果を発動! このカードをゲームから除外し、自分の場のモンスター1体のレベルを4つまで上げる事ができる! 『暗闇の同調者』のレベルを2から6に変更!」

イグ播鉢（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／植物族

ATK 1500 / DEF 0

墓地に存在するシンクロ素材となったこのカードをゲームから除外して発動する。

デッキからレベル6以下のモンスターを1体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはシンクロ素材にする事はできない。

イグ播粉木（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／植物族

ATK 1500 / DEF 0

墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

自分の場に存在するモンスター1体のレベルを4つまで上げる事ができる。

この効果の対象となったモンスターの効果は無効化される。

「レベル6が、2体!?!」

「おいらはレベル6の『猛毒の孤独神』と『暗闇の同調者』をオーバーレイ！ 2体のモ

ンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築う！」



『ステークキーター』のモンスター効果は1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除く事で、相手モンスター1体を除外し、そのコントローラーに1000ポイントのダメージを与える」

「な!？」

じよ、除外とバーンダメージを同時に!?

ステークキーター（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）

ランク6

闇属性／悪魔族

ATK 2800 / DEF 1900

レベル6の闇属性モンスター×2

このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、フィールド上の表側表示のモンスターを1体選択して発動する。

選択したモンスターをゲームから除外し、コントローラーに1000ポイントのダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使えない。

この効果はこのカードを特殊召喚したターンには発動できない。

「もつとも、この効果は特殊召喚されたターンには使えない。だが、お前らを仕留めるのには十分な攻撃力だ！」

「くっっ！」

「バトル！ 『ドリリアアドネー』で『ワイルド・ジャギーマン』を攻撃！ アントラツ シュッ！」

「り、リバースカード、オープン！ 『シフト・チェンジ』！ これでわたしの『ワイルド・ジャギーマン』とセットモンスターを交換する！」

「おおっとお！ カウンター罠、『アンチ・アンチドート』を発動！ 『シフト・チェンジ』の発動を無効にし、1000ポイントのダメージを与える！ 更にこのカードにはカウンター罠はチェインできない！」

「な、きやああつ！」

アンチ・アンチドート

【カウンター罠】

バトルフェイズ中に発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にして破壊し、相手に1000ポイントのダメージを与える。

このカードの発動に対して相手はカウンター罫を発動できない。

歩：LP 4000↓3000

「歩!」「母さん!」

「そして効果ダメージを受けたため、『強制肥沃土壌』の効果で手札を1枚捨ててもらおうぜえ!」

「く、『デブリ・ドラゴン』が……!」

「更にカード効果でハンデスされたプレイヤーは、更にもう1枚手札を捨てなくてはいけないが……」

「わたしにはもう、手札が無い……っ!」

「そうだ。手札を捨てられない場合、800ポイントのダメージを受けてもらおう!」「うわああああああああああっ!」

歩：LP 3000↓2200

なんて強力な効果だよ!

ただの効果ダメージがハンデスバーンに早変わりだ！

幸い、同一チェーン上に『強制肥沃土壤』の効果は1度ずつしか組めないから、彼女にこれ以上のダメージは無いが……！

「歩、大丈夫ですか!？」

「な、何とか、ね……っ!」

「そして攻撃は続行!」

「くっ、うううう……っ!」

無数のアリが群がり、逞しい体の戦士が呑み込まれる。断末魔の悲鳴と共に、戦士は消滅した。

歩：LP 2200↓1500

『ドリリアアドネー』のモンスター効果発動！ このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、次の相手ターンのスタンバイフェイズ時、相手は手札を1枚選んで捨てておくてはいけない！」

「って事は……っ!」

「次のターン、『強制肥沃土壤』の効果が発動。手札をハンデスし切れない歩は、800



ポイントのダメージを2回受けて、ライフが尽きる……!」

「そ、そんな! 父さん、黎さん、何とかならない!」

「私の手札のカードではムリだ! 黎、何かありませんか!」

「何とかなるんだつたら、とうの昔にそうしてるっつ! この『ドリリアリアドネー』のハンデス効果はフィールドに残存する! どうかするにはフィールド魔法を壊すしか無い! でも……っ!」

『強制肥沃土壌』は、破壊されても同じ名前のカードをデッキからサーチできる。まず一人、仕留めたぜえ!」

クツソ、どうにもならないのかよ!

ドリリアリアドネー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星8

炎属性／昆虫族

ATK 3300 / DEF 3300

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、相手は次のスタンバイフェイズ時に手札を1枚選んで捨てなくてはならない。

「放つておいても死ぬ奴を攻撃する必要は無いなあ。さて、『ハンバーガーディアン』で『リバイス・ドラゴン』を攻撃！　　“バーガー・スピア”！」

「ぐあああつ！」

輝：LP　4000↓3600

ザクツ！　ハンバーガーの騎士が手にした槍で、青色の龍が貫かれる。

「そして『ステークーター』で『ウィングトータス』を攻撃だあ！　　“ミディアム・フアング”！」

「チイツ！」

ガブリツ！　厚みのある肉が、翼の生えたカメを噛み砕く。

「グヒヒヒ、カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

グラトニー：LP　11300

手札：2枚

フィールド

・ドリリアアドネー（ATK 3300）、ハンバーガーディアン（ATK 2900）、  
ステーキーター（ATK 2700・ORU：2）

・伏せカード2、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

く、そ………！

こいつ、今までの奴もそうだったが、メチャクチャ強え！

「俺のターン、ドロロー！ このスタンバイフェイズ、『エアジャチ』が場に帰還する！」

『ジャアアアアアアアアッ！』

エアジャチ：ATK 1400

「魔法カード『壺の中の魔術書』を発動！ これで、俺と歩はデッキからカードを3枚ド

ローできる！」

「ありがとう………っ」

「これで、当面の敗北は免れましたね」

正直、これはありがたい。丁度ドロローに困っていたところだった。

「俺は、カードを2枚セット。更に『A・S <sup>アクア</sup> スピリッツ シャボン・ゴレム』を守備表示で通常

召喚！」

『ゴオオオツ！』

A・S シャボン・ゴーレム：DEF 1400

ポコポコポコ、とシャボンの泡を立てながら、水色のゴーレムが現れる。  
 アクア・スピリッツ。『シーラカンス』から貰った水の精霊の力だ。

これがどこまで通じるか……！！

「ターンエンド！」

黎：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：エアジャチ(ATK 1400)、A・S シャボン・ゴーレム(DEF 1400)、

セットモンスター1体(『素早いマンボウ』)

：伏せカード2枚

「私のターン、ドロー！ 私は『強欲な壺』を発動！ デツキからカードを2枚ドロー！」  
 「輝、可能な限り防御の布陣を敷いてくれ。手札の枚数は気にしなくて大丈夫だ」  
 「分かりました。私は『メタボ・シャーク』を守備表示で召喚します！」  
 『メツタアボオツ！』

メタボ・シャーク：DEF 500

『メタボ・シャーク』は召喚に成功した時、墓地の魚族モンスターを2体選択し、デツキに戻す事ができます！ 私は『ハリマンボウ』と『シャーク・サッカー』を戻す！」  
 ボコボコ、と泡を吹きながら胴回りがかかなり大きなサメが現れる。そのサメが尾を一振りすると、地中から海面を割るように二匹の魚が跳ね上がり、輝のデツキの中へと戻って行った。

「グヒヒ、足掻くねえ」

「ええ。むぎむぎ殺される筋合いは無いので。1枚カードを伏せ、ターンエンド！」

輝：LP 3600

手札：1枚

フィールド

：メタボ・シャーク（DEF 500）

：伏せカード1枚

「私のターン！ このスタンバイフェイズ、『ドリリアドネー』と『強制肥沃土壌』の効果で手札を1枚ずつ捨てる」

「やはり分かっているはいても、ハンデスは痛いですね」

「うん。でも、それを利用するのが一流のデュエリストだ！ 魔法カード『ミラクルフュージョン』を発動！ 墓地の『デブリ・ドラゴン』と『E・HERO ワイルド・ジャギーマン』を除外融合！

現れよ、疾風吹きすさぶ風の英雄！ 『E・HERO Great TORNADO』  
！』

『ハアアアアアアアア、トオアッ！』

E・HERO Great TORNADO：ATK 2800

ビュゴオオオオウツ！ 突風が吹きすさび、黒いローブを羽織り、大いなる竜巻を

纏ったヒーローが舞い降りる。下降気流を司り、相手の力を削ぎ落す力を持つ。

『Great TORNADO』のモンスター効果発動！ このカードが融合召喚に成功した時、相手の場の表側表示のモンスター全ての攻守を半分にする！ // タウンバースト“！”

E・HERO Great TORNADO（融合・効果モンスター）

星8

風属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 2200

「E・HERO」と名のついたモンスター＋風属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力・守備力を半分にする。

タウンバースト。それは下降気流の力。本来はダウンバーストだが、町一つ吹き飛ばせると解釈すれば強ち間違いでも無いかも知れない。

ビュゴアツ！ と凄まじい威力で吹きすさぶ下降気流が、相手を捉える。

ドリリアドネー：ATK 3300↓1650

ハンバーガーディアン：ATK 2900↓1450

ステークーター：ATK 2800↓1400

「よし、行けるぞ！」

「バトル！ 『Great TORNADO』で『ステークーター』を攻撃！ //

セル！！」

「そうは行くか！ 罠カード『ダーク・クリーニング』を発動！ おいらの場の闇属性モンスターが相手の攻撃対象になった時、相手の攻撃モンスターの攻撃力は0になる！」「させるか！ 罠発動！ 『トラップ・ジャマー』！ バトルフェイズ中に発動した罠カードの効果を無効にして破壊する！」

ダーク・クリーニング（オリジナル）

【通常罠】

相手が自分の場の闇属性モンスターを攻撃して来た時に発動できる。

相手モンスターの攻撃力は0となる。



トラップ・ジャマー

【カウンタースター】

バトルフェイズ中のみ発動する事ができる。

相手が発動した罠カードの発動を無効にし破壊する。

黒いローブを羽織ったヒーローが腕を振り下ろし、強力な風が巻き起こる。黒い渦が逆回転でその風を絡め取ろうとするが、その渦は突如として消滅し、鉄板に乗ったステーキモンスタースターは吹き飛ばされた。

上手く読んだな、歩。

「ぐぬうおあああああああああああああつ！ だが、『ハンバーガーディアン』のモンスタースター効果発動！ 戦闘によって自分の場のモンスタースターが破壊された時、発生する戦闘ダメージを0にする！」

「ダメージを無効に!?!」

「更に1000ポイントのダメージを相手は受ける!」

ハンバーガーディアン（シンクロ・効果モンスタースター）（オリジナル）（改訂版）

星8

閻属性／悪魔族

ATK 2900 / DEF 2800

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体

(1)：iターンに1度、このカードとの戦闘によって発生する戦闘ダメージを無効にし、相手に1000ポイントのダメージを与える事ができる。

この効果はこのカードが特殊召喚されたターンには発動できない。

(2)：このカードが戦闘によって破壊された時、カードを1枚ドロウできる。

「喰らええ、ピクルス・バレット！」

「不味い！ これを喰らえば『強制肥沃土壌』で捨てる手札が1枚足りず、1800ポイントのダメージを合計で受けてしまいます！」

「母さん！」

「バブル・パッケージッ！」

無数に飛んでくるピクルスを模した弾丸。それを横合いから発生した無数の泡が包み込み、止めた。

「何?！」

「俺を忘れるなよ、グラトニー。本来のお前の相手は俺だぜ？」

「ぐうっ！」

弾丸がエネルギーに変化すると、包み込んでいた泡が、ゆっくりと俺の場のモンスター、『A・S シャボン・ゴーレム』の元へと戻って行った。

「そのモンスターの効果ですか……」

「ああ。『シャボン・ゴーレム』は自身にバブル・カウンターを乗せる事で、発生する効果ダメージを無効にできるんだ」

A・S シャボン・ゴーレム（効果モンスター）（オリジナル）

星4

水属性／水族

ATK 1400 / DEF 1400

このカードが表側表示で存在する限り、このカードにバブル・カウンターを1つ乗せる事で、効果ダメージを無効にできる（最大8個まで）。

このカードに乗っているバブル・カウンターを3つ取り除く事で、このカードの攻撃力と守備力を500ポイントアップさせる事ができる。

このカードに乗っているバブル・カウンターを5つ取り除く事で、このカードの破壊

を無効にできる。

A・S シャボン・ゴーレム：バブル・カウンター 0↓1

「ふう、助かったよ」

「何て事は無いさ。助け合うのはお互い様だ」

ライフが尽きちゃ困る者同士だ。助け合わなきゃ、やっていけない。

しかし、ピンで刺さったな。これで『強制肥沃土壌』の効果を半ば無視できる。もつとも、片端から無効にしていったらカウンターを乗せ切れずにバーンダメージを受ける事になるから、注意が必要だが。

「1枚カードを伏せて、ターンエンド！」

歩：LP 1500

手札：0枚

フィールド

：セットモンスター、E・HERO Great TORNADO (ATK 280

0)

：伏せカード1枚

「私のターン！ 私は『デルタフタイ』くんを召喚！」

デルタフライ：ATK 1500

ブウウウウン、と羽音を響かせて飛び出す、小型のドラゴン。土色の体に、虫のよ  
うな羽を持ち合わせている。

「『デルタフタイ』くんは1ターンに1度、自分の場のこのカード以外のモンスター1体  
のレベルを1つ上げる事ができる！ その効果で『ハウンド・ドラゴン』くんのレベル  
を3から4にアップ！」

ハウンド・ドラゴン：☆3↓4

「レベル4の『ハウンド・ドラゴン』に、レベル3の『デルタフタイ』をチューニング！  
集いし雷爪が、栄えある勇氣にて敵を貫く！ 光差す道となれ！」

## ☆3＋☆4＝☆7

「シンクロ召喚！ 迸る電光、『ライトニング・ウォリアー！』  
『タアッ！』

ライトニング・ウォリアー：ATK 2400

バジバジッ！ と紫電が爆ぜる。小金色のタテガミが揺らめき、白銀の鎧が煌めく。雷の力を全身に纏った戦士が降り立った。

成程な。こいつの能力を使えば、グラトニーのフィールド魔法『強制肥沃土壌』と『ハンバーガーディアン』の効果を利用できる！

『ライトニング・ウォリアー』くんで『ハンバーガーディアン』を攻撃！  
ライトニング・パニツシャーッ！

「ぬううううっ！ だが、『ハンバーガーディアン』が破壊された時においらが受けるダメージは0となる！」

ああ、奈美ちゃんもその辺は分かっているだろうよ。

だが、グラトニー。『ライトニング・ウォリアー』のモンスター効果を、知ってるか？

「グヒヒヒ、更に1枚ドローできる！」

「こつちも『ライトニング・ウオリアー』のモンスター効果を発動！ 戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手の手札1枚につき、300ポイントのダメージを与える！」

「何い!？」

『ハンバーガー・ディアン』の効果は任意効果。だが、『ライトニング・ウオリアー』の効果は強制。強制と任意が同時に発動した場合、任意効果の方がチェーンブロックにおいて後に組み込まれる。

つまり、ドロー効果の方が先に処理されるって事だ！

「1枚ドローした事により、グラトニーの手札は3枚！ よって900ポイントのダメージを受けてもらうよ！ 『ライトニング・レイ』！」

グラトニー：LP 11300↓10400

白銀の鎧の騎士から放たれた雷が、グラトニーを直撃する。どこからか「こんがり焼けました〜」なんてアナウンスが聞こえてきそうだが、あんな油っこい奴は絶対に食べたくねえ。

「お前の発動した『強制肥沃土壌』の効果を忘れるなよ！ 手札を合計で2枚、捨ててもらう！」

「チイツー！」

バーンとハンドスー1回につき1枚ずつ、手札を強制的に捨てさせる効果。1000ポイントに満たない控えめのダメージだが、それにハンドスが付随するとなれば、どれだけ微細なダメージでも、この場合は強力だ。

「これで、ターンエンド！」

奈美：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ドル・ドラ（DEF 1200）、ライトニング・ウォリアー（ATK 2400）

：伏せカード1枚

「ふう、思ったよりも苦戦するなあ」

「当然だろ。お前らに世界を食わせるワケにやいかねえからな」

「その通りです。それに、黎の作ってくれたこのプロテクターもありますからね」



「ダメージの際、通常よりも強い衝撃が来るけど、耐えられるレベルだよ」

「これが無かったら、多分わたし達全員お陀仏だったね」

「グヒヒヒ、成程。こりや本腰入れなきやいけねえみてえだな。おいらのターン！」

「ビッ！ とグラトニーがカードを引き抜く。」

「俺の中の勘が訴えている。デカいのが、来る！」

「おいらは魔法カード『アドバンストロー』を発動！ 自分の場のレベル8以上のモンスターを1体リリースし、2枚カードをドロー！ 『ドリリアドネー』をリリース！」

アドバンストロー

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するレベル8以上のモンスター1体をリリースして発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「更に魔法カード『邪天使の施し』を発動！ お互いにデッキからカードを3枚ドローし、手札を2枚相手だけ墓地へ送る！」

「う、また来たか！」

「よくもまあ黎はこれまでこんな壊れカードを相手に勝つて来れたよね！」  
 「“騎士”の魂、カードを引け！」

「もう名前覚える気ねえだろ！ ドローー！」

俺の手札は0枚だったので、そのまま手札は差し引き1枚になる。

邪天使の施し（オリジナル）

【通常魔法】

お互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドロウする。

その後、相手プレイヤーは手札を2枚墓地に送る。

「『強制肥沃土壌』の効果発動！ 手札を墓地に送ったプレイヤーは、手札を更に1枚捨てなくてはいけない！」

グヒヒヒ、そして魔法カード『簡易融合』インスタント・フュージョンを発動！ ライフを1000ポイント支払い、エクストラデッキからレベル5以下の融合モンスターを1体、特殊召喚！ ただし、攻撃はできず、エンドフェイズには破壊されるがな！」

## 簡易融合

## 【通常魔法】

1000ライフポイントを払って発動する。

レベル5以下の融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃する事ができず、エンドフェイズ時に破壊される。

「簡易融合」は1ターンに1枚しか発動できない。

グラトニー：LP 10400↓9400

「出でよ、『ガラガラヘビール』！」

『ガラガラガラガララッ！』

ガラガラヘビール：ATK 1800

インスタントラーメンの容器のようなカップの口が光り、巨大な蛇が姿を顕わにする。尾の部分が缶ビールになっていて、全身がアルコール臭い。しかもどうやら酔っ払っているようだ。

「更にチューナーモンスター『酒樽のイカサマ王』を召喚！」

『グツへへへへッ！』

酒樽のイカサマ王：ATK 100

酒樽が空中に現れ、そこから頭と手足が生える。こちらも見ることから酔っ払った老人が出て来た。

「魔法カード『秘境のワイン蔵』を発動！ 自分と相手のモンスターの差が2体以上ある時、ライフを500支払い、自分の場に『ワイン・トークン』を1体特殊召喚できる！」

秘境のワイン蔵（オリジナル）

【通常魔法】

自分と相手のモンスターの数の差が2体以上ある時に発動できる。

ライフを500ポイント支払って、自分の場に「ワイン・トークン」（水族・闇・星3・



カルバドスパイダー：ATK 4000

ズシン、と重い音を響かせ、巨大なクモが姿を現す。

中には無数の酒瓶が乗っており、赤色の複眼が、こちらをギロリと睨みつける。

語源のカルバドスは、リンゴの発泡酒シードル、またはサイダーを蒸留した酒の事だ。ワインの蒸留酒ブランデーと同じような関係にある。

「攻撃力、4000か……っ！」

「グヒヒヒッ！ 素材となった『酒樽のイカサマ王』をモンスター効果発動！ このカードが闇属性モンスターのシンクロ素材となった時、デッキからカードを1枚選択し、手札に加える事ができる！」

酒樽のイカサマ王（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星3

闇属性／植物族

ATK 100／DEF 100

このカードが闇属性シンクロモンスターのシンクロ素材となった時、デッキからカ-

ドを1枚選択して手札に加える事ができる。

「デッキから魔法カード『僻地の寸胴』を手札に加え、そのまま発動！

このカードは、自分に墓地に存在する効果モンスター、シンクロモンスター、融合モンスター、エクシーズモンスターを各一種類ずつ以上、合計5体をゲームから除外し、その攻撃力が守備力分のライフを回復する！」

「5体分の合計値だ?!」

スロウス並みのパワーデッキでやったら2万を軽く超えるぞ、それ！

「おいらは墓地から『ガラガラヘビール』、『ステークーター』、『ハンバーガーディアン』、『ドリリアドネー』、『グラッジマジック・ホール・ゴーレム』をゲームから除外し、ライフを12800ポイント回復う！」

僻地の寸胴（オリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地に存在する効果モンスター、融合モンスター、シンクロモンスター、エクシーズモンスターを1種類以上ずつ、合計5体ゲームから除外し、その攻撃力または守備力の合計値分のライフを回復する。

グラトニー：LP 8900↓21700

「そ、そんな!？」

「折角ここまで削ったのに!？」

「初期ライフ以上に回復されるとは……」

チツ、ここで回復か……!？」

ハンデスやバーンのフィールド魔法を使う以上、相手にそれを逆に利用される可能性もある。こいつはそれを見越しているかというワケか……!？」

「まだまだあ! 除外された『ガラガラヘビール』のモンスター効果発動! このカードがゲームから除外された時、墓地のカードを6枚デッキに戻してシャッフルし、カードを3枚ドロ!」

ガラガラヘビール（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星5

闇属性／爬虫類族

ATK 1800／DEF 1400



闇属性モンスター+爬虫類族モンスター

このカードがゲームから除外された時、自分の墓地に存在するカードを6枚デッキに戻してシャッフルし、カードを3枚ドローできる。

グラトニーの墓地から『X-セイバーエアベルン』、『邪天使の施し』、『ゾンビの包帯』、『簡易融合』、『ダーク・クリーニング』、『無茶喰い』がデッキに戻る。

「魔法カード『黒次元』を発動！ このカードは除外されたカードを3枚持ち主のデッキに戻し、1枚カードをドローする！ 『ガラガラヘビル』、『ライアー・ゾンビ』、『ステークター』をデッキに戻し、カードを1枚ドロー！」

黒次元（オリジナル）

【通常魔法】

ゲームから除外されているカードを3枚持ち主のデッキに戻す。  
デッキからカードを1枚ドローする。

クツソ……。これだけ態勢を整えて、これかよ……。っ！

このターンだけでこいつは一体何枚のカードをドローしたんだっつうの！

「グヒヒヒヒッ！ これで『エアジャチ』を攻撃すれば、*“騎士”*の魂は終わりだ！」  
「黎！」

「バトル！ 『カルバドスパイダー』で『エアジャチ』を攻撃！  
*“スパイダー・ストライク”*！」

「ブシィッ！ と無数の糸が吐き出される。槍のように鋭い糸は空中に浮かぶジャチを確実に貫く——

「『黎（さん）！』」

「『タスケナイト』を特殊召喚っ！」

寸前、一刀の元に全ての糸が切断された。

ジャキン、と背中のお鞆に太刀が納刀され、大柄な戦士が『エアジャチ』の前に立ちはだかる。

タスケナイト：ATK 1700

「何い?！」

「『タスケナイト』は、このカードが墓地に存在し、相手が攻撃宣言をした時に俺の手札が存在しない場合、墓地から特殊召喚できる。そして相手のバトルフェイズを強制終了

させるー！」

「い、いつの間にそんなカードを……、『邪天使の施し』の時かつ!？」

「御名答」

都の記憶を読んだのなら知っているはずだぜ？ 俺が重視するのは手札と墓地のアドバンテージ。奇襲性と安定性の高さが、俺の持ち味だからな。

タスケナイト（効果モンスター）

星4

光属性／戦士族

ATK 1700 / DEF 100

このカードが墓地に存在し、自分の手札が0枚の場合、相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。

「タスケナイト」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「クソツ……。おいらはカードを2枚セットし、ターンエンド!」

「このエンドフェイズ、罠カード、オープン！ 永続罠『上昇気泡』!」

「何!？」

ポワポワ、と2つの泡が地面から浮かんで来た。浮かび上がった泡はパン! と弾け飛ぶと2枚のカードに姿を変えた。

「このカードは、カードの効果によって2枚以上手札を捨てたターンに発動できる。そのターン中に捨てた手札を2枚、墓地から手札に加える!」

上昇気泡（オリジナル）

【永続罫】

カードの効果によって2枚以上手札を墓地へ捨てた、または墓地へ送ったターンの終了時に発動できる。

そのターン中に墓地へ捨てた、または墓地へ送ったカードを2枚選択して手札に加える。

グラトニー：LP 21700

手札：3枚

フィールド

：カルバドスパイダー（ATK 4000）

：伏せカード3枚、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

「さあて、行くぞ。俺のターン！ 魔法カード『増援』を発動！ その効果で俺はデッキからレベル4以下の戦士族モンスター『A・S アイス・ウォールガイ』を手札に加える！」

増援

【通常魔法】

自分のデッキからレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加える。

「続いて魔法カード『手札抹殺』を発動！ お互いのプレイヤーは手札を全て捨てて、捨てた枚数分、デッキからカードをドローできる！」

「わざわざ手札に加えたカードを!？」

輝が驚きの声をあげる。

俺はアイコンタクト、というよりウイंकでそれに答える。これで良いんだよ。

「グラトニー、手札を捨ててもらおうぞ?」

「チツ」

俺は2枚、グラトニーは3枚のカードを捨て、その分だけドローする。

だが、グラトニーだけはそれだけでは済まない。

「そして、手札が捨てられた事により、互いに『強制肥沃土壌』の効果で手札を捨てなくてはいけないが……」

「そうか、黎は『シャボン・ゴーレム』の効果で捨てなくてもダメージを受けないのか！」「御名答！ 捨てるのはお前だけだぜ、グラトニー！」

「チッ！」

マジでピンで差さって大助かりだ。

このままカウンターをタイミングを見計らって乗せていけば、場持ち良く戦えるだろう。

A・S シャボン・ゴーレム：バブル・カウンター 1↓2

「更に俺は『A・S デイバイダー・シュリンプ』を召喚！」

『シシッ！』

A・S デイバイダー・シュリンプ：DEF 1200

ザッパアン！ と存在しないハズの水面から勢いよくエビが跳ね上がる。通常のエビとは違って全身に青色のラインが入っており、その背中には沢山の星を背負っている。

『『デバイダー・シユリンプ』は1ターンに1度、自分の場のモンスター1体のレベルを1つ上げるか下げる事ができる！』

A・S デバイダー・シユリンプ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

水属性／水族

ATK 5000 / DEF 1200

このカードが通常召喚に成功した時、以下の効果を得る。

●自分の場のこのカード以外のモンスター1体のレベルを1つ上げるか下げる事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使えない。

『『エアジャチ』のレベルを3から4へ変更！』

エアジャチ：☆3↓4

ポン！ とエビの背中中の星が赤色の巨魚の口の中に放り込まれ、『エアジャチ』は反射的にそれを呑み込む。

これでレベル4が3体。このターンで一気に畳み掛ける！

「レベル4の『ディバイダー・シユリンプ』、『タスケナイト』、『エアジャチ』をオーバーレイ！」

『シシィ〜！』

『ぬん！』

『ジャアアアツ！』

「3体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

大きなエビが青、大柄な戦士が灰色、赤色の巨魚が黄緑色の光となつて上空へ螺旋を描きながら昇っていく。

三条の光の帯は、地面に生まれた銀河の渦の中へと飛び込んでいった。

☆4×☆4×☆4＝★4





## STORY 52 : 「食い尽してやるよ！」



黎 : LP 1900

手札 : 1枚

フィールド

: A・S シャボン・ゴーレム (DEF 1400・バブル・カウンター : 2)、セツ  
トモンスター1体 (『素早いマンボウ』)、N.O. 32海咬龍シャーク・ドレイク (ATK  
2800・ORU : 3)

: 上昇気泡 (永続罠)

輝 : LP 3600

手札 : 1枚

フィールド

: メタボ・シャーク (DEF 500)、オイスタートークン (DEF 0)  
: 伏せカード1枚

歩 : LP 1500

手札 : 0枚

フィールド

: セツトモンスター、E・HERO Great TORNADO (ATK 280

0)

: 伏せカード1枚

奈美 : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

: ドル・ドラ (DEF 1200)、ライトニング・ウォリアー (ATK 2400)

: 伏せカード1枚

グラトニー : LP 21700

手札 : 2枚

フィールド



この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は1000ポイントダウンする。さらに、このバトルフェイズ中、このカードはもう1度だけ攻撃できる。

銀河の渦から飛び出した、赤色の巨体。

鋭い牙が口元でギリリと光り、1対2枚のヒレが横に伸びる。胴体に自身の象徴でもある『32』の数字が黄色に輝き、ヒレと見まがうような長い腕の先にある鋭い爪が凶悪に輝く。

周囲では、自身のオーバーレイ・ユニットである3つの星がクルクルと回転している。

No. 32 海咬龍 シャーク・ドレイク : ATK 2800

「バトル! 『シャーク・ドレイク』で『カルバドスパイダー』を攻撃!」

「ハン、攻撃力2800でどう『カルバドスパイダー』を攻略するつもりだ?」

「こうする! 速攻魔法『イージーチューニング』を発動!」

イージーチューニング

【速攻魔法】

自分の墓地に存在するチューナー1体をゲームから除外して発動する。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は、発動時にゲームから除外したチューナーの攻撃力分アップする。

「このカードは、自分の墓地のチューナーを1体除外し、その攻撃力分だけ自分のモンスター1体の攻撃力をアップさせる！ 奈美ちゃん墓地を自分の墓地として認識し、『デルタフライ』をゲームから除外！」

このカードの何が便利かというと、パワーアップ効果が永続であるという事だ。速攻魔法であるが故に奇襲性も高く、除外はコストなので『D・D・クロウ』に妨害されない。

D・D・クロウ（効果モンスター）

星1

闇属性／鳥獣族

ATK 100 / DEF 100

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

相手の墓地のカード1枚を選択し、ゲームから除外する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

比較的使用されるチューナー『ジャンク・シンクロン』ですら攻撃力を1300上げることが出来る。相手に自分のチューナーを蘇生されそうな時に使えば相手のカードの空撃ちにもなる。

『カイクウ』や『王宮の鉄壁』のような一部のカード以外ならおおそ対策できるといふのは、非常に心強いカードだ。攻撃力がリクルータークラスであってもチューナーがデッキに入っているのなら、1枚は投入してみるべきだろう。

……にしても、何故カードのイラストは攻撃力僅か300の『ニトロ・シンクロン』を描いているのだろうか？ 勿体無くねえか？

『デルタフライ』の攻撃力は1500、よって『シャーク・ドレイク』の攻撃力は4300!」

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク：ATK 2800↓4300

「攻撃力が『カルバドスパイダー』を上回っただど!？」

「これなら倒せます!」

「行っけえ！」

「喰らいやがれ！　『デプス・バイト』第一打ア！」

『ジャアアアアアアアアアアッ！』

バジュアアッ！　青白いサメの頭が口から吐き出される。巨大なクモの首筋に噛み付いたそれは、ベキメキという音を立てて『カルバドスパイダー』を噛み砕いた。

クモに骨は無いハズなんだが……？

「ぐおおおおおおっ！」

グラトニー：LP　21700↓21400

まだまだ終わらせないぜ！

『シャーク・ドレイク』のモンスター効果発動！　1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、このカードが戦闘で相手モンスターを破壊したモニスターの攻撃力を1000ポイント下げて相手の場に攻撃表示で特殊召喚できる！　更にこの効果をを使用した時、『シャーク・ドレイク』は2度目のバトルを行える！」

バキン！　と己の周囲を巡る星を噛み砕き、赤色の巨鯨がその頤を震わせて咆哮を上げる。その途端、地面から水の柱が渦巻きながら立ち上り、びしょ濡れになった巨大な



クモが弱った様子で復活する。赤色の複眼に差す光も鈍く、背中にあつた酒瓶も何本も割れている。

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク：ORU 3↓2

カルバドスパイダー：ATK 4000↓3000

「うう……っ!」

「もう一発受けてみな! 『デプス・バイト』 第二打ア!」

バギイツ! と再びエネルギー体のサメがクモを噛み砕く。

「ぐおおおおおっ!」

グラトニー：LP 21400↓20100

「そしてこのエンドフェイズ、『上昇気泡』の効果発動! 『手札抹殺』の効果で墓地へと送られたカードを2枚、手札に戻す!」

「成程、これがあるからこそ、黎は『手札抹殺』を使ったんだね」

「ああ」

『上昇気泡』の効果で、そのターン中捨てられたカードを回収できる。タイムラグはあ  
るものの、2枚以上の損失さえあればある程度まで手札を回復できる。

元々この水のデッキは手札コストを払う事を中心に組んだ。それが奴のハンデスに  
まで良い形で対抗できている。僥倖とはこういう事を言うのだろう。

「ターンエンド！」

黎：LP 1900

手札：2枚

フィールド

：A・S シャボン・ゴーレム（DEF 1400・バブル・カウンター：2）、セツ

トモンスター1体（『素早いマンボウ』）、N.O. 32海咬龍シャーク・ドレイク（ATK

2800・ORU：2）

：上昇気泡（永続罫）

「お見事です、黎。私のターン！」

「褒めても何も出ねえぜ？」

「それは、残念ですっ！ 私は『ハンマー・シャーク』を召喚！」

『グオオオオオオッ!』

ハンマー・シャーク : ATK 1700

水面を叩くように飛び出したのは、大槌の頭を持つサメ。モデルはシユモクザメなのだろうが、ハンマーの位置が横では無く縦だ。

加えて、元々のシユモクザメの様に横向きに突出した頭の先に目がついている。どういう進化をしたら、こんな姿になるのか、少々疑問だ。

「私は『ハンマー・シャーク』のモンスター効果を発動! 1ターンに1度、このカードのレベルを1つ下げる事で、手札のレベル3以下の水属性モンスターを1体特殊召喚でききる! 手札のレベル3の『ドリル・バーニカル』を特殊召喚です!」

ハンマー・シャーク : ☆4 ↓ 3

ドリル・バーニカル : ATK 300

ドリル・バーニカル (効果モンスター)

星3

水属性／水族

ATK 300／DEF 0

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与える度に、このカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

「私はレベル3の『ハンマー・シャーク』と『ドリル・バーニカル』でオーバーレイ！」

『シャアアアアアアアアッ！』

『ドルアアアアアアアアッ！』

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築します！」

輝の宣言に合わせ、大槌の頭を持つサメが群青色の、ドリルの生えたフジツボが水色の光に変わる。

二筋の光が螺旋を描き、天空に現れた光の渦へと飛び込む。

☆3×☆3＝★3

「エクシーズ召喚！ 行きますよ 『潜航母艦エアロ・シャーク』！」  
 『アアアアア、シャアアアアアアアアアアアアアアアアック!』

潜航母艦エアロ・シャーク：ATK 1900

天空から、文字通り海に潜るかの如く飛び出して来た二匹の巨大なサメ。鼻先を潜水艦の様なエッジで横に繋いでいる。

本来、こいつの能力は大した事が無いから使い辛く、15枚しか入らないエクストラデッキの良くて圧迫要員。だが、この状況下ではこいつの能力も、化ける!

『エアロ・シャーク』のモンスター効果を発動！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、除外されている自分のモンスター1体につき100ポイントのダメージを与える!」

今、仲間のモンスターも自分のモンスターとして扱う以上、その除外されたモンスターの総数は――

『ビッグ・ジョーズ』

『ネクロ・ガードナー』

『スカイオニクイヒトクイエイ』

『E・HERO ワイルド・ジャギーマン』

『デブリ・ドラゴン』

『デルタフライ』

その数6体！

そして今回は、それだけでは済まない！

「喰らえ、＼エアール・トルピード＼！」

「ぐおおおおおおおおおっ！」

潜航母艦エアロ・シャーク（エクシーズ・効果モンスター）

ランク3

水属性／魚族

ATK 1900／DEF 1000

レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。

ゲームから除外されている自分のモンスターの数×100ポイントダメージを相手ライフに与える。

バシユバシユバシユバシユツ! 6つのミサイル、或いは魚雷が射出され、弾幕を上げながらグラトニーに直撃する。

潜航母艦エアロ・シャーク：ORU 2↓1

そして忘れてはならないのが、こいつが効果ダメージだという事だ!

グラトニー：LP 20100↓19500

「この瞬間、『強制肥沃土壌』の効果が発動! 効果ダメージを受けたプレイヤーは、手札を1枚捨ててもらいます!」

「チツ!」

「そして手札が墓地に送られた事で、もう1枚捨ててもらおう!」  
「分かってるっつもの!」

これで、グラトニーの手札は0だ!

たった600ポイントのダメージが、2枚のハンデスに変わる。この状況では中々美味しい効果だと言えるだろう。

『メタボ・シャーク』を攻撃表示に変更して、バトルです!」

メタボ・シャーク：DEF 500 ↓ ATK 1800

『メタボ・シャーク』と『エアロ・シャーク』でダイレクトアタック! 〴〵メタリック・バイト! 〴〵ビッグ・イーター!」

「チツ、毘発動! 『豊作呪願』! デッキの上からカードを1枚墓地へ送り、自分の場に『稲穂トークン』を3体特殊召喚!」

稲穂トークン：DEF 500

稲穂トークン：DEF 500

稲穂トークン：DEF 500

フサ、と黄金色の稲穂が生える。

目も口もついていない、どう見ても稲穂です。



豊作呪願（オリジナル）

【通常罫】

デッキの1番上のカードを墓地に送って発動する。

自分の場に「稲穂トークン」（植物族・地・攻 0/守 500）を3体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したトークンはエンドフェイズまで相手のカードの効果では破壊されない。

「ならばそのまま攻撃です!」

「チイツ!」

ガブリ! ガブガブリ!

巨大な2匹（3匹?）のサメが稲穂を食い千切る。水棲生物が陸上の植物を食すとか、シニールだな。これもデュエルの特権か。

「私はこれで、ターンエンドです!」

輝：LP 3600

手札：0枚

フィールド

：メタボ・シャーク（ATK 1800）、潜航母艦エアロ・シャーク（ATK 1900・ORU：1）

：伏せカード1枚

「よし、良い感じだぜ、輝！」

「ありがとう」

「このまま押し切る！ わたしのターン、ドロロー！」

わたしはセットされているモンスターを反転召喚！」

チユイオン！ と横向きのカードが引っ繰り返る。

カードの絵柄から現れたのは、雪ダルマ！

『『スノーマンイーター』！ このカードがリバースした時、場に表側表示で存在するモンスターを1体破壊する！ “ハイデイ・ダイジェスチョン”！』

歩の指示を受け、雪ダルマの下に隠れていた凶暴な獣が飛び出し、稲穂を噛み千切った。

そこの肉食獣、植物食べると消化酵素が合わないから腹下すぞ？

スノーマンイーター (効果モンスター)

星3

水属性 / 水族

ATK 0 / DEF 1900

このカードがリバースした時、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を  
選択して破壊する。

スノーマンイーター : ATK 0

「魔法カード『融合回収』フュージョン・リカバリを発動! このカードは自分の墓地から使用された『融合』  
とその時に素材となったモンスターを1体手札に回収できる! 墓地から『融合』と  
『E・HERO ワイルドマン』を手札へ!」

融合回収

【通常魔法】

自分の墓地に存在する「融合」魔法カード1枚と、融合に使用した融合素材モンスター  
1体を手札に加える。

「今加えた魔法カード『融合』を発動！ フィールドの水属性モンスター『スノーマン  
 イーター』と手札の『E・HERO ワイルドマン』を融合！

現れよ、絶対零度の万難を排する氷の英雄！ 『E・HERO アブソルートZero  
 O』！」

『テヤツ！』

E・HERO アブソルートZero：ATK 2500

出たよ、生きる『サンダー・ボルト』。発動条件が凄まじく緩い、属性融合ヒーロー最  
 凶モンスター！

青白い鎧に身を包んだ、氷結を司るヒーロー。ここでこいつを出すとは、本気だな、歩  
 ？

E・HERO アブソルートZero（融合・効果モンスター）

星8

水属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 2000

「HERO」と名のついたモンスター+水属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO アブソルートZero」以外の水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

『アブソルートZero』は自分の場の自身以外の水属性モンスター1体につき500ポイント、攻撃力がアップする! 今、場の水属性モンスターは『シャーク・ドレイク』、『シャボン・ゴレム』、『メタボ・シャーク』、『エアロ・シャーク』の4体! よって攻撃力は2000ポイント上がる!」

E・HERO アブソルートZero : ATK 2500 ↓ 4500

ペキペキペキ、と腕に氷の刃が生える。

おお、凄い上昇値だ。十代とデュエルした時も出されたが、あの時は特に水属性モン

スターは居なかったからな。

「バトル！ 『アブソルートZero』でダイレクトアタック！ 瞬間氷結—Free

zing at moment—！」

『てえやあああああああつ！』

「ぐおおおおおおおおおおおつ！」

グラトニー：LP 19500↓15000

ジギユツ！ と氷がグラトニーを取り巻くように発生し、圧力と低温がグラトニーのライフを削り取る。

一気に4500の大ダメージ、これは良い攻撃が入った。

「ぐ、ううううつ！ 畏カード発動！ 『暗黒の漁火』！ おいらが戦闘でダメージを受けた時、受けたダメージよりも低い攻撃力を持つモンスターを2体、デッキから特殊召喚できる！」

その効果でデッキから『ベーコンドル』と『ホタテンジクネズミ』を守備表示で特殊召喚つ！」

『ガアッ！』

『ぬんー!』

ベーコンドル : DEF 500

ホタテンジクネズミ : DEF 2850

「チツ、2850か……!」

地味に片方は『Great TORNADO』より数値が高いな。

グラトニーの周りに点った黒い炎。それはすぐに別のモンスターとなった。

片や、1枚の肉を口に咥えた大きな猛禽類に。

片や、その身に不釣り合いな程に大きな貝殻を背負ったモルモットに。

漁火というのは、夜に魚を集める為に漁船が灯す炎や明かりの事だ。成程、ダメージを着火剤に自軍のモンスターを呼び寄せるというワケか。

「だったら、『Great TORNADO』で『ベーコンドル』を攻撃! //

セル“!”

『ぬえああつ!』

『ガアツ!』

シユガツ! と大竜巻がハゲタカの周りに発生する。

風圧で巻き上げられ、砂利と共に肉を啜えた猛禽は吹き飛ばされた。  
「これで、ターンエンド」

歩：LP 1500

手札：0枚

フィールド

：E・HERO Great TORNADO (ATK 2800)、E・HERO

アブソルートZero (ATK 4500)

：伏せカード1枚

「もう少し、ライフを削っておきたかったんだけどね……」

「一息で5000近くもライフを抉ったんです。十分ですよ」

「そうそう。私のターン！ 私は魔法カード『調和の宝札』を発動！ 手札の攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーを1体墓地に送り、デッキからカードを2枚ドロースるー！」

調和の宝札



## 【通常魔法】

手札から攻撃力1000以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。  
自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「手札から『ドラグニティーブランディストック』を墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロウ! カウンターを乗せてダメージ回避!

そして『サイバー・ダーク・エッジ』を攻撃表示で召喚! 行くよ、エッジちゃん!」  
『ギギイ〜!』

A・S シャボン・ゴレム：バブル・カウンター 2↓3

サイバー・ダーク・エッジ：ATK 800

ジャキン! と若干緑がかった漆黒の金属が起動する。不吉な刺のような翼を大きく広げ、暗い瞳でグラトニーを睨み付ける。

『サイバー・ダーク・エッジ』は女の子なのか……?」

「エッジちゃんの効果発動! 召喚に成功した時、自分の墓地からレベル3以下のドラゴン族モンスターを1体選択して装備できる! さつき墓地に送った『ドラグニティー

『ブランディストック』を装備！」

闇の刃の龍が雄叫びを上げると、地面に紫の魔法陣が出現した。その中心から水色の鎧を身に付けた小柄な龍が現れる。額には鋭い槍が角の様に生えており、金色の目がキラリと輝く。

『サイバー・ダーク・エッジ』は『ブランディストック』を、腹から生えた、人間で例えるのならば肋骨の様なアームで掴んだ。

「この効果で装備したモンスターの攻撃力分、エッジちゃんの攻撃力は上がる！そして装備したモンスターを破壊する事で、1度だけ戦闘破壊を回避できる！」

サイバー・ダーク・エッジ：ATK 800↓1400

「バトル！ エッジちゃんは攻撃力を半分にしてダイレクトアタックができる！ //

ウンター・バーン！」

『ギシャアアアアアアアッ！』

「ぬおおっ！」

サイバー・ダーク・エッジ（効果モンスター）

星4

闇属性／機械族

ATK 800 / DEF 800

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。

このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

その場合、このカードの攻撃力はダメージ計算時のみ半分になる。

このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

サイバー・ダーク・エッジ：ATK 1400 ↓ 700

グラトニー：LP 15000 ↓ 14300

ズバン！ 鋭い一撃がグラトニーに入る。

攻撃力半減というのは少々痛い。攻撃力は自身の力をもって最大でも2500、その

半分だから1250しか無い。

だが、この場合は、一味違うぜ、グラトニー？

「ぐ、この程度、掠り傷だ……！」

「そして装備されている『ドラグニティーブランディストック』のモンスター効果発動！

このカードを装備しているモンスターは2回攻撃ができる！」

「何だとお?！」

ドラグニティーブランディストック（チューナー・効果モンスター）

星1

風属性／ドラゴン族

ATK 600 / DEF 400

このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合、装備モンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

「というワケで、もう一発 “カウンター・バーン”！」

「ぐああっ！」

グラトニー：LP 14300↓13600

よし、通った!

「これで、ターンエンド!」

奈美：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：ドル・ドラ（DEF 1200）、ライトニング・ウオリアー（ATK 2400）、

サイバー・ダーク・エッジ（ATK 1400）

：ドラグニティーブランドイストック（『サイバー・ダーク・エッジ』に装備）伏せカード1枚

グラトニーのライフは残り13600、4人がかりなら1ターン、防がれても2ターンあれば倒せる!

仮にヤツが攻撃に転じた所で、俺のセットモンスターは『素早いマンボウ』。これでデッキから新しい『素早いマンボウ』をリクルートできる。

加えて、歩の場には「E・HERO」最強の『アブソルートZero』がいる。この陣営を1ターンで突き崩すのは、いくらグラトニーでも不可能だ。あいつの手札は0枚、ドローで1枚加わったとしても、容易く崩せるワケがない。

「おいらのターン、ドロー。魔法カード『闇の誘惑』を発動！ デツキからカードを2枚ドロ―し、その後、手札の闇属性モンスターを1体ゲームから除外する！ ただし、除外しなかった場合、手札を全て墓地へ送らなくてはならない」

### 闇の誘惑

#### 【通常魔法】

自分のデツキからカードを2枚ドロ―し、その後手札の闇属性モンスター1体を選択してゲームから除外する。

手札に闇属性モンスターがない場合、手札を全て墓地へ送る。

チャツ、とグラトニーがカードを引く。

引いたカードを見つめていたグラトニーだったが、溜息を吐くと、急に険しい表情になった。

「ふう、どうやらおいらはお前達の事をナメすぎていたようだ」

「何……?」

「どこかで見下していたんだろうなあ。だからこのザマだ。火力だけなら最強である『ライアー・ゾンビ』や『カルバドスパイダー』は破壊され、折角回復したライフも大きく持つて行かれた」

だが、とグラトニーは言葉を置く。

「ここからは本腰入れて、一切の気を抜かずに行かせてもらおう!」

突然、空気が変わった。

ビリビリと、大気が震える。これは、気迫なのか……っ!?

【BGM：恐怖と破壊】

「っ、来るぞー!」

「おいらはこのドローフェイズ、墓地の『ベーコンドル』の効果を発動! 手札が1枚以下の時、墓地のこのカードを除外し、自分の場のカードを1枚墓地に送る事で、デッキから2枚ドローできる! 『ホタテンジクネスミ』を墓地に送るう!」

ドロー加速か!

ベーコンドル（効果モンスター）（オリジナル）

星2

風属性／鳥獣族

ATK 500 / DEF 500

このカードが自分の墓地に存在し、ドローフェイズ終了時に自分の手札が1枚以下の時に発動できる。

墓地のこのカードを除外し、自分の場のカードを1枚墓地に送る事で2枚ドローする。

「続いてスタンバイフェイズ時、戦闘によって破壊された『カルバドスパイダー』の効果が発動！ 墓地のこのカードをゲームから除外し、デッキ、手札、墓地から、レベル4以下のモンスターを可能な限り特殊召喚できる！」

「な!?!」

「蜘蛛は子沢山でなあ！ 増殖するぜえ！」

半透明の姿で現れた酒瓶を背負った巨大蜘蛛。グラトニーの方へと向かって糸を吐き出すと、5枚のカードを糸にくっ付けて引き抜いた。

「さあ来い！ 『ミュージシャンパン』、『トマトンボ』、『ボクサーモン』、『ソラマメイジ』、



『センベイゴマ!』

ミュージシャンパン	: ATK	1500
トマトンボ	: ATK	500
ボクサーモン	: ATK	2200
ソラマメイジ	: ATK	1700
センベイゴマ	: ATK	900

「一気にモンスターを5体も……!?!」

「何ていう大量展開……」

「インチキカードにも程があるでしょ……」

カルバドスパイダー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）  
 星11

闇属性／昆虫族

ATK 4000 / DEF 50

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

相手ターン中に戦闘によってこのカードが破壊された場合、次の自分のスタンバイフェイズ時に発動できる。

墓地のこのカードをゲームから除外し、自分のデッキ・手札・墓地からレベル4以下のモンスターを可能な限り自分の場に特殊召喚できる。

「カルバドスパイダー」の効果はデュエル中1度しか使えない。

シャンパングラスを片手に酔いどれ状態の音楽家、トマトの胴体のトンボ、鮭の被り物をした拳闘家、文字通り豆サイズの魔法使い、煎餅でできたベイゴマ。

単純な見た目だけなら、大して恐ろしくは見えない。だが、こいつらを選んだという事は、グラトニーは確実にこいつらで勝負を仕掛けて来るといふ事だ！

『ミュージシャンパン』と『トマトンボ』をリリースし、ダークチューナー『DT ハングリーフパイ』をアドバンス召喚！」

DT ハングリーフパイ：ATK 1200

「だ、ダークチューナー!？」

「来やがったか……」

酒瓶を手にした酔っ払い音楽家と、トマトの胴体を持つトンボが虹色の光の中へ消える。

ポン! という間抜けな音を出し、葉っぱを模した形のパイが現れた。しかし、その見た目は凶悪。赤く裂けた目に、紫の不釣り合いな程に筋肉の付いた手足、ハロウインのカボチャのような口と、不気味さが押し出されている。

「更に墓地の『デビルツコラ』の効果を発動! デュエル中1度だけ、こいつのレベルを1にして、墓地から特殊召喚できる!」

デビルツコラ：☆4 ↓ 1 / ATK 1400

ベギ、と不気味な音が鳴る。

地面が罅割れ、悪魔の根を持つ植物が、再びその姿を現す。

「そして墓地の『ミュージシャンパン』の効果を発動! 墓地のこのカードをゲームから除外し、次のおいらのスタンバイフェイズまでフィールド上のモンスター1体の種族を変更できる!

これで『デビルツコラ』を植物族から獣族に変更!」

ミュージシャンパン（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）  
星4

闇属性／戦士族

ATK 1500 / DEF 1500

（1）：このカードが相手によって破壊された時に発動する。

相手の手札を1枚墓地に送る。

（2）：墓地のこのカードをゲームから除外して発動する。

次の自分のスタンバイフェイズまで、自分の場のモンスター1体の種族をコントローラーの宣言した種族に変更できる。

この時、元々の種族を宣言する事はできない。

デビルツコラ：植物族↓獣族

「レベル1の獣族となった『デビルツコラ』に、レベル8の『DT ハングリーファイ』をダークチューニング！」

「来るぞー！」

「合計レベルは……、マイナス7！」

バジジツ、と葉っぱ型のパイが弾けて8つの黒い星になり、悪魔の根の植物に潜る。輪郭線だけを残した植物は、体内に収めていた1つの白い星が黒い星と弾け合い、苦しみがきつつ消滅した。

「闇と渴望交わりし時、暴食に蝕まれし冥府の扉が開かれる！ 光り無き世界へえ！」

☆1—☆8—☆7

「ダークシンクロ！ 暗黒と負の覇者『猿魔王ゼーマン』！」

猿魔王ゼーマン（ダークシンクロ・効果モンスター）

星—7

地属性／獣族

ATK 2500／DEF 1800

チューナー以外の獣族モンスター1体—ダークチューナー

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。

相手モンスターの攻撃宣言時、自分の手札またはフィールド上のモンスター1体を墓

地へ送る事で、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

猿魔王ゼーマン：ATK 2500

「( )で『ゼーマン』ですか……っ！」

「また厄介なモンスターを……」

闇の柱から威風堂々とした姿で現れる、年老いた猿の魔導師。青色のローブを身に纏い、赤く燃える様な緋色の毛を持つ。

クソ、ダークシンクロモンスターは戦闘中の相手の魔法・罠の発動を封印する厄介なモンスター。これは厳しい相手だ。

「で、でも、攻撃力は2500！ 母さんのヒーローや、黎さんの『シャーク・ドレイク』には——」

「素材となった『ハングリーフパイ』の効果を発動！ このカードがダークシンクロの素材となった時、このカード以外の素材となったモンスターの元々のレベル1につき1000ポイント、このカードを素材としたダークシンクロモンスターの攻撃力を上げる！」

「な!？」

D T ハングリーフパイ（ダークチューナー・効果モンスター）（オリジナル）  
星8

闇属性／魔法使い族

ATK 1200 / DEF 0

このカードがダークシンクロ召喚の素材となった時、このカード以外の素材となったモンスター1体を指定して発動する。

このカードが素材となったダークシンクロモンスターは、指定したモンスターの元々のレベル×1000ポイント攻撃力がアップする。

「『デビルツコラ』の元々のレベルは、4!」

「つまり、4000ポイントも上がる!」

猿魔王ゼーマン：ATK 2500 ↓ 6500

「攻撃力6500っ!?!」

「更に墓地の『トマトンボ』の効果が発動! このカードをリリースしてレベル8以上の

モンスターがアドバンス召喚されたターン、おいらは後2度、モンスターを召喚できる！」

トマトンボ（効果モンスター）（オリジナル）

星1

炎属性／昆虫族

ATK 500 / DEF 100

このカードがレベル8以上のモンスターをアドバンス召喚するためにリリースされたターン、コントローラーは3回までモンスターを通常召喚できる。

クツ、『サモンチェイン』か、こいつは！

『『ナツクルトン』を召喚！』

『ウイツス！』

『『ナツクルトン』は召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローできる！』

ナツクルトン：ATK 0



クルトン——サイコロ状に切ったパンを焼いたり揚げたりしたもの——を手で弄ぶ男が現れる。拳にグローブをつけている所を見ると、ボクサーなのだろうか。

「そして『ボクサーモン』の効果を発動! 自分の場に戦士族モンスターが召喚された時、自分の場のモンスター3体のレベルを1から8の中から任意の数値に変更できる!」

「1度に3体も!?!」

ボクサーモン（効果モンスター）（オリジナル）

星5

水属性／魚族

ATK 2200 / DEF 0

このカードが自分の場に表側表示で存在し、自分の場に戦士族モンスターが召喚されたターンにのみ発動できる。

自分の場のモンスターを3体選択し、そのモンスターのレベルを1から8の中から任意の数値に変更できる。

この効果はデュエル中1回しか使えない。



ドツジイイイイン!

光の渦の中から、板チョコの肩当をした巨人が降り立つ。茶色の鎧に、錆びたような巨大な双剣。全体的に茶色の、巨大かつ強大な剣豪が現れた。

素材4体の、ランク5か……っ!

「更においらは『サルベージンジャー』を召喚!」  
『ハッ!』

サルベージンジャー：ATK 800

「『サルベージンジャー』は召喚時に除外されたモンスター1体を特殊召喚できる!」  
『闇の誘惑』で除外した『ギャンブラーメン』を特殊召喚!」  
『フッ!』

ギャンブラーメン：ATK 1100

生姜を背負う男が現れる。男は手にした鎖を空中に放り投げ、その鎖の先に何かを縛って引き上げた。

1ターン内に3度の通常召喚……。聞けばそれは魅力的。だが、逆を言えば、それは手札に3体のモンスターがあつて初めて成立する事だ。

クソ、こいつ、引くカードが分かつていたのか……。？ だからこそ、『サモンチェーン』ばりの効果を持つモンスターを『カルバドスパイダー』の効果で呼び出したと言うのか？

サモンチェーン

【速攻魔法】

チェーン3以降に発動する事ができる。

このカードを発動したターン、自分は合計で3回の通常召喚を行う事ができる。

同一チェーン上に複数回同名カードの効果が発動されている場合、このカードは発動できない。

「特殊召喚された『ギャンブラーメン』の効果が発動！ サイコロを1度振り、偶数が出ればその数だけデッキからカードを引き、奇数が出ればその数だけ相手は手札を捨てる！」

「はいい!？」

またヒドいカードだな!?

サルベージンジャー（効果モンスター）（オリジナル）

星2

闇属性／植物族

ATK 800 / DEF 800

このカードが召喚に成功した時、ゲームから除外されている自分のモンスターを1体選択して特殊召喚できる。

ギャンブラーメン（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／戦士族

ATK 1100 / DEF 1600

このカードが特殊召喚に成功した時、サイコロを1度振る。出た目によって以下の効果を発動する。

「ギャンブラーメン」の効果は1ターンに1度しか使えない。

● 1、3、5：出た目の数だけ相手は手札を墓地へ送る。

● 2、4、6：出た目の数だけデッキからカードをドローする。

ラーメン丼の体を持つギャンブラーが、サイコロを放り投げる。いや、どちらか言えば手も足も麵だし、顔も帽子で隠れているがナルトだし、ギャンブラーであるラーメン、というべきか？

カツ、コロコロコロ……。サイコロが地面に落ちる。奇数は出ないでくれよ……。この状況でハンデスされたら、打つ手がなくなる！

出た目は……。っ。

「出た目は6だ。よって、カードを6枚ドロー！」

！  
クツ、確かに偶数が出て欲しいとは願ったが、何も1番大きな数字が出なくても……

「更に、自分の場のモンスター1体のレベルを2つ下げる事で、『ピーマングース』は手札から特殊召喚できる！ 『ギャンブラーメン』のレベルを2つ下げる！ 来い！」  
『ガオオオオッ！』

ギャンブラーメン：☆4↓2

ピーマングース：ATK 0

井ギャンブラーの体から2つの白い光の玉が浮かび上がる。次の瞬間、その周囲の空間がいきなり渦状に捻じれ、中から細長い、イタチのようなネコ科の動物が、白い玉を噛み砕きながら登場した。尻尾の先には申し訳程度にピーマンがくっついている。

ピーマングース（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星2

闇属性／植物族

ATK 0 / DEF 0

このカード名の（1）の効果はデュエル中1度しか使えない。

（1）：自分の場のモンスター1体のレベルを2つ下げる事で、このカードは手札から特殊召喚できる。

この効果は相手ターンでも発動できる。

（2）：このカードが破壊された場合、相手に3000のダメージを与える。

「レベル2の『サルベージンジャー』、『ギャンブラーメン』、『ピーマングース』をオーバーレイ！」

『トアツッ!』

『ハアツッ!』

『ガアツッ!』

「3体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築!」

生姜を背負った鎖使いが紺色、サイコロを手にした井が赤、マングースが若苗色の光に姿を変え、銀河の渦の中へと飛び込む。

☆2×☆2×☆2 Ⅱ ★2

「エクシーズ召喚! 現れろ『No. 96』、漆黒の闇の中より出でし貪欲なる捕食者『ブラック・ミスト』オツッ!」

No. 96 ブラック・ミスト: ATK 100

「ここで『ブラック・ミスト』だとお!?」

「1ターンでここまでの展開をしますか……っ!」

ポコポコポコ、と黒いエネルギーが吹きあがり、それが人型を取る。



胸部に赤い炎が灯り、鋭い太い爪が指先に、凶悪なほどに大きな牙が腹部に、長い尾と頭部から横に伸びた角が、悪魔である事を彷彿とさせる。

マズいな。

ここまでの戦力をたった1ターンで揃えやがった。しかもそれで手札は6枚のフル。このままじゃ4人の内の誰かが負けちまう!

何とかならねえのかよ!?

「バトル! 『チョコレートルーパー』で『シャーク・ドレイク』を攻撃! // カカオ・パー  
スト!」

攻撃力が劣るのに攻撃して来た!?

何かあるな……。ここで切るしか無い!

「速攻魔法『ダーク・ストロンガー』を発動! モンスタアの攻撃力をそのレベルまたは  
ランク×400ポイントアップさせる!」

「チェーンして手札の『A・S アイス・ウォールガイ』のモンスタア効果発動! 手札  
のこのカードを捨てる事で、捨てたターンのみ、自分の場の水属性モンスタアは戦闘で  
は破壊されず、発生する戦闘ダメージは0になる!」

ダーク・ストロンガー(オリジナル)

## 【速攻魔法】

自分の場のモンスター1体の攻撃力を、そのモンスターのレベルまたはランク×40  
0ポイントアップさせる。

この効果が適応されたモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に50  
0ポイントのダメージを与える。

A・S アイス・ウォールガイ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

水属性／戦士族

ATK 1000 / DEF 1900

ダメージステップに手札のこのカードを捨てて発動する。

このターン自分の場の水属性モンスターは戦闘では破壊されず、発生する戦闘ダメージは0になる。

チョコレートパー：ATK 3000 ↓ 5000

ペキパキペキパキ！ と氷の壁が広がる。数メートルもの巨壁となった氷は、カカオ

豆の奔流をしつかりと受け止めた。

「手札を捨てた事で更に1枚手札を捨てなくてはならないが、俺はそれを拒否する! 『強制肥沃土壌』で受けるダメージはカウンターを乗せて回避だ!」

A・S シャボン・ゴーレム：バブル・カウンター 3↓4

「これでこのターン、場の水属性モンスターの戦闘破壊はできなくなった」

「ならば『猿魔王ゼーマン』で『サイバー・ダーク・エッジ』を攻撃! カースド・フレア!」

攻撃力差は……、5100!?

マズい、耐えられない!?

しかも『サイバー・ダーク・エッジ』は闇属性だから、『アイス・ウォールガイ』の効果で防御できない!?

「奈美っ!」

『ゼーマン』の効果は、攻撃中の魔法と罠の封印!? マズい、カバーできない!」

ゴオッ! と呪いの炎が放たれ、刃の翼を持つ漆黒の龍が焼き払われる。装備していた『ブランディストック』ごと……。

「きゃあああああああああああああああつ！」

「く、クツソオオオオオオオオオオツ！」

「奈美！ ナアミイツ！」

クツソオ！ 守れなかつたって言うのか！

俺じゃ、ダメだつて——

奈美 : LP 4000 ↓ 300

え…………?

「奈美ちゃん!」

「無事なの!」

「何とか…………」

「バカな…………。一体何が…………!」

「コレ…………」

彼女の場にはいつの間にかオーブンしていたカードが。それは…………。

「速攻魔法『リミッター解除』。バトルフェイズに入る直前に使わせてもらったよ。これで、エッジちゃんの攻撃力を倍にしたんだ」

サイバー・ダーク・エッジ : ATK 1400 ↓ 2800

ブスブスと黒い煙を上げながら、炎の中から、黒い龍が立ち上がる。

『リミッター解除』の効果で攻撃力が上昇したため、装備モンスターが外れても攻撃力が下がらない。

「まさか、一発で3700もライフを削られるとは思わなかったけどね……」

「生き残れたのなら、重畳だ」

シユウウウウウウ、と白煙が奈美ちゃんの体中から上がっている。プロテクター越しでも熱かっただろうに。

もう少し強い奴を作りたいところだが、3人分ともなると、これが限界だ。

クソツ、まったく自分の無能さ加減には呆れる。何が化物だ、人の形をした獣なだけだろうが。

（生き残ったか。できれば今ので仕留めたかったんだがよお。『ブラック・ミスト』の攻撃では仕留めきれねえ。ならば……）

『ブラック・ミスト』の攻撃では与えられるダメージは僅か100だ。どうする、グラトニー？

破壊を優先するか、攻撃力の上昇を優先するか……。

『ブラック・ミスト』で『アブルートZero』を攻撃！

「攻撃力上昇を優先したか！」

このターン、水属性モンスターが破壊されない事は分かり切っているはずだ。それで

も攻撃して来た。

1番攻撃力の高いモンスターを対象に、パワーアップを図る気か!

『ブラック・ミスト』の効果を発動! オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の半分を吸収する! “シャドーゲイン”!」

No. 96 ブラック・ミスト (エクシーズ・効果モンスター)

ランク2

闇属性/悪魔族

ATK 1000 / DEF 1000

レベル2モンスター×3

このカードが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時に1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

その相手モンスターの攻撃力を半分にし、このカードの攻撃力はその数値分アップする。

バジユン! と周囲を旋回する星の1つが腹にある口に呑み込まれ、同時に氷の英雄に蛇のような、『ブラック・ミスト』の足元から伸びていた影が纏わりつく。

「でも、このターン水属性モンスターは戦闘では破壊されず、わたしはダメージを受けないー！」

「だが、攻撃力は貰うぞお！」

No. 96 ブラック・ミスト：ATK 100 ↓ 2350

E・HERO アブソルートZero：ATK 4500 ↓ 2250

「瞬間氷結—Freezing at moment—！」

「ブラック・ミラージュ・ウィップ—！」

氷の波動と黒い衝撃波が正面から激突する。派手な音を立てて、両者の技は周囲に流れ弾を撒き散らしつつ、弾け飛んだ。

これで、取り敢えずこのターンでの敗北は無くなったか。

「おいらは更に魔法カード『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを2枚ドロロー！ 更に墓地の『戦刀食過』の効果が発動！ 墓地のこのカードを除外し、墓地の魔法カード『強欲な壺』をデッキの一番上に戻す！」

チッ！ ドローロックの効果のハズが、デッキを掘り進める効果になってやがる！



「カードを5枚伏せて、ターンエンド!」

「……このエンドフェイズ、『リミッター解除』が適用されたエッジちゃんは破壊される。ゴメンね、エッジちゃん……」

『ギイツ!』

申し訳無さそうに言う奈美ちゃん。

破壊される寸前、『サイバー・ダーク・エッジ』は『気にしないで良いよ』とでも言いたそうに、一声上げ、爆散した。

グラトニー：LP 13600

手札：1枚

フィールド

：猿魔王ゼーマン（ATK 6500）、チョコレートルーパー（ATK 5000）  
ORU：4）、No. 96ブラック・ミスト（ATK 2350・ORU：2）

：伏せカード5枚、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

「俺のターン!」

ヤベエな……。1ターンでこうも戦況が覆るとは。

こつちには『アブソルートZero』がいるが、恐らくこいつの能力は使えない。この数を「場を離れる」という非常に緩い条件で効果を発揮するモンスターを相手に展開するとは思えないからだ。

そして、奴の展開したモンスター相手では、『シャーク・ドレイク』はバトルで負ける。だつたら！

「魔法カード『エクシーズ・ギフト』を発動！ 自分の場にエクシーズモンスターが2体以上存在する時、オーバーレイ・ユニットを2つ取り除き、カードを2枚ドロウできる！」

エクシーズ・ギフト

#### 【通常魔法】

自分フィールド上にエクシーズモンスターが表側表示で2体以上存在する場合に発動する事ができる。

自分フィールド上に存在するエクシーズ素材を2つ取り除き、自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

『シャーク・ドレイク』の2つのオーバーレイ・ユニットがデッキに潜り込み、デッキ

の上から2枚のカードが光る。

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク：ORU 2↓0

「更に『シャーク・ドレイク』を守備表示に変更」

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク：ATK 4300↓2100

「カードを3枚伏せて、ターンエンド!」

黎：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：A・S シャボン・ゴレム（DEF 1400・バブル・カウンター：4）、セツ  
トモンスター1体（『素早いマンボウ』、No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク（DEF

2100・ORU：0）

：伏せカード3枚、上昇気泡（永続罨）

俺のやれる事は、これくらい。

「私のターン、ドロロー！」

輝も焦っているか。

この状況で焦らない方が難しい、かな。

ライフはばらついているが、あのモンスター達の猛攻を受けたら、それこそ一息でライフが消し飛ぶ。

慎重にならざるを得ないな。

「私は、『エアロ・シャーク』のモンスター効果を発動！ 最後のオーバーレイ・ユニットを取り除き、相手に除外された我々のモンスターの数×100のダメージを与える！

もう1度600ポイントのダメージを受けてもらいます！ //

「エアールピード」

「そうは行くかあ！ カウンター罠発動う！ 『アンチ・エクシード』！ 相手のエクシーズモンスターが効果を発動するためにオーバーレイ・ユニットを消費した時に発動できる！ 発動を無効にしてそのエクシーズモンスターを破壊し、自分のエクシーズモンスター1体のオーバーレイ・ユニットとして利用できる！」

「なっ！」

アンチ・エクシード（オリジナル）

【カウンター罠】

相手のエクシードズモンスターがモンスター効果を発動するためにエクシードズ素材を取り除いた時に発動できる。

その効果の発動を無効にして破壊し、破壊したエクシードズモンスターを自分フィールド上のエクシードズモンスター体の下に重ねてエクシードズ素材とする事ができる。

魚雷を射出しようとした『エアロ・シャーク』が、突如として光となる。光はそのまま星となり、『チョコレートルーパー』のオーバレイ・ユニットとなった。

チョコレートルーパー：ORU 4↓5

「ク……ッ!」

「インチキ効果もいい加減にしなさい!」

「名ゼリフを言っている場合か!」

「私は『メタボ・シャーク』を守備表示に変更!」

メタボ・シャーク：ATK 1800↓500

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

輝：LP 3600

手札：0枚

フィールド

：メタボ・シャーク（DEF 500）

：伏せカード2枚

「わたしのターン、ドロー！」

「歩！ 『アブソルートZero』を場から離せ！」

『Zero』を!?!」

「絶対に効果の対策がされている！ だったら、自分のターンに効果を使って、次の手を打ちやすくした方が良い！」

「……了解！」

伝えたい事は伝えたが、これでどこまで彼女が手を打てるか……。

「リバースカード、オープン！ 速攻魔法『融合解除』！ 『アブソルートZero』をエクストラデッキに戻し、素材となった『ワイルドマン』と『スノーマンイーター』を特殊召喚！」

『トオアツ！』

『グシヤアツ！』

E・HERO ワイルドマン：DEF 1600

スノーマンイーター：DEF 1900

「更に『アブソルートZero』の効果発動！ アンタのモンスターを全部破壊する！凍りつけえ！」

E・HERO アブソルートZero（融合・効果モンスター）

星8

水属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 2000

「HERO」と名のついたモンスター+水属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO アブソルートZero」以外の水属性モンスターの数×500ポイントアップする。

このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

時空が捻じれて氷の英雄の姿が上裸の筋肉質な男と雪ダルマを被った獣に戻る。同時に猛吹雪が吹き荒れ、グラトニーのモンスターが凍りつき始めた。

新しいルールだとEXデッキに戻ったモンスターの効果は使えないが、この時点でのルールならそれは許可されている。こいつで行けるか!?

「おおっと! 『チョコレートルーパー』の効果発動! 1ターンに1度、オーバーレイユニットを1つ取り除き、相手のカード効果の発動を無効にして破壊する!」

「何!?!」

「ビーター・バニッシュ!」

ドドドドドドド!

いきなり現れたチョコレートの津波が、吹雪を押し戻す。



防がれたか……!!

チョコレートルーパー：ORU 5 ↓ 4

「わたしは……、1枚カードをセット。『Great TORNADO』を守備表示に変更して、ターンエンドッ!」

E・HERO Great TORNADO：ATK 2800 ↓ DEF 2200

歩：LP 1500

手札：0枚

フィールド

：E・HERO Great TORNADO (DEF 2200)、E・HERO

ワイルドマン (DEF 1600)、スノーマンイーター (DEF 1900)

：伏せカード1枚

「私のターンッ! 私は『ライティング・ウォリアー』くんを守備表示に変更!」

ライトニング・ウオリアー：ATK 2400 ↓ DEF 1200

「更に『サイバー・ダーク・ホーン』を召喚！ 守備表示っ！」  
『ウウツっ！』

サイバー・ダーク・ホーン：DEF 800

「効果で墓地の『ハウンド・ドラゴン』をホーンくんに装備！」

サイバー・ダーク・ホーン（効果モンスター）

星4

闇属性／機械族

ATK 800 / DEF 800

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。

このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップす

る。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

サイバー・ダーク・ホーン：ATK 800↓2500

蜷局を巻いて暗い橙の龍が現れる。黒い龍は腹部にあるアームで、墓地から刃の顎を持つ龍を引き上げ、ガツチリとホールドした。

「手札から魔法カード『トレード・イン』を発動！手札のレベル8のモンスターフルアアリス、ホイトナイト、ドラゴン『青氷の白夜龍』を墓地に送り、カードを2枚ドロー！」

トレード・イン

### 【通常魔法】

手札からレベル8のモンスターカードを1枚捨てる。

自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

青氷の白夜龍（効果モンスター）

星8

水属性／ドラゴン族

ATK 3000／DEF 2500

このカードを対象にする魔法・罫カードの発動を無効にし破壊する。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、自分フィールド上に存在する魔法または罫カード1枚を墓地に送る事で、このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

「この瞬間、『強制肥沃土壌』の効果が発動！ 手札を1枚捨ててもらおうぜえ！」

「……分かってる。カードを2枚伏せて、エンドフェイズ、黎さんの『上昇気泡』の効果で、捨てた『青氷の白夜龍』と『DNA改造手術』を手札に戻す！ ターンエンド！」

奈美：LP 300

手札：2枚

フィールド

：ドル・ドラ (DEF 1200)、ライトニング・ウォリアー (DEF 1200)、サイバー・ダーク・ホーン (DEF 800)

：ハウンド・ドラゴン (『サイバー・ダーク・ホーン』に装備)、伏せカード2枚

「ぐひひひ、防戦一方とは、最早打つ手無しだな。おいらのターン! 『強欲な壺』を發動して2枚ドロ! さて、バトル!」

「く!」

『ブラック・ミスト』で『シャーク・ドレイク』を攻撃!」

「墓地の『キラール・ラブカ』のモンスター効果、発動! 自分の場の魚族・海竜族・水族モンスターが攻撃される時、墓地のこのカードを除外して攻撃を無効にする! そして次の自分のエンドフェイズまでその相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする!」

キラール・ラブカ (効果モンスター)

星3

水属性 / 魚族

ATK 700 / DEF 1500

自分フィールド上に表側表示で存在する魚族・海竜族・水族モンスターが攻撃対象に選択された時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

攻撃モンスター1体の攻撃を無効にし、その攻撃力を次の自分のエンドフェイズ時まで500ポイントダウンさせる。

「キラー・ラブカ」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「そうはさせねえぞ！ カウンター罠『腐食魅』ふしょくまを発動！ 墓地で発動する効果を無効にし、ゲームから除外する！ その後、カードを1枚ドロロー！」

腐食魅（オリジナル）

【カウンター罠】

墓地で発動したカードの効果を無効にし、ゲームから除外する。  
その後、デッキからカードを1枚ドロローする。

地面に現れた水面から黄色の小型の鮫が飛び出したが、相手に噛みつくよりも前に腐って消滅してしまった。

クツ、流石に読まれていたか!

「そして『ブラック・ミスト』の効果でオーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、攻撃力の半分を吸収する!」  
 “シャドーゲイン”!

No. 32 海咬龍 シャーク・ドレイク : ATK 4300 ↓ 2150  
 No. 96 ブラック・ミスト : ATK 2350 ↓ 4500 / ORU 2 ↓ 1

「『ブラック・ミラーージュ・ウィップ’!」  
 「クツ!’」

『ブラック・ミスト』の足元の影が伸び、赤色の巨鯨から力を奪う。黒い魔物の伸びた爪は鞭の様にしなり、『シャーク・ドレイク』を破壊した。

『ゼーマン』で『メタボ・シャーク』を攻撃! “カースド・フレア”!  
 「ううっ!’」

マズい! これで輝の場のモンスターが消えた!

『チョコレートルーパー』で女顔にダイレクトアタック! “カカオ・バースト”!  
 「罨発動! 『くず鉄のかかし’!」

咄嗟に俺が使うのは、よくお世話になる罨カード。何度でも攻撃を防げる便利なカー

ドだが……。

『チョコレートルーパー』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、『くず鉄のかかし』の発動を無効にし、破壊する！」

スマン、今回は使い捨てだ！

チョコレートルーパー：ORU 4↓3

「ダイレクトアタック続行だあ！」

「畏カード『リビングゲッドの呼び声』を発動！ これで『オイスターマイスター』を攻撃表示で特殊召喚！」

オイスターマイスター：ATK 1600

輝の場に復活する、牡蠣の怪人。『くず鉄のかかし』を破壊するために『チョコレートルーパー』は効果を使用してしまったため、『リビングゲッドの呼び声』は無効にできない！

輝なら何か対策を講じていると思ったぜ！



「モンスターの数変動した事で、バトルは巻き戻されます」

「ならばそのまま攻撃い! 超過ダメージ3400を受けてもらうぜえ!」

「罾カード発動! 『フィツシャーチャージ』! 『オイスターマイスター』をリリースして、場のカードを1枚破壊する!」

フィツシャーチャージ

【通常罾】

自分フィールド上に存在する魚族モンスター1体をリリースして発動する。

フィールド上のカード1枚を破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

上手い! 『オイスターマイスター』は魚族! しかもトークンが残る! これで行く!

「カウンター罾『悪魔の警笛』、発動! リリースを無効にして破壊し、相手に1500ポイントのダメージを与える!」

「させるか! カウンター罾『共同戦線』を発動! 同じレベルのモンスターが2体以上自分の場に存在する時、相手の発動した罾を無効にして破壊する!」

『シャボン・ゴレム』、『ワイルドマン』、『スノーマンイーター』は同じレベル4、『ド

ル・ドラ』と『サイバー・ダーク・ホーン』は同じレベル3だ。発動条件は満たしている！

悪魔の警笛（オリジナル）

【通常罠】

フィールド上のカードをリリースする効果、およびモンスターのリリースを無効にし、破壊する。

更に相手に1500ポイントのダメージを与える。

共同戦線

【カウンター罠】

自分フィールド上に同じレベルのモンスターが表側表示で2体以上存在する場合に発動する事ができる。

罠カードの発動を無効にし破壊する。

「チエーン3、『共同戦線』の効果で『悪魔の警笛』を無効にして破壊！ チエーン2、『悪魔の警笛』は不発！ よってチエーン1の『フィッシャーチャージ』は有効！」

『フィッツシャーチャージ』の効果で『オイスターマイスター』をリリースし、『チョコレートルーパー』を破壊します!」

「無駄だ! 『チョコレートルーパー』は効果で破壊される場合、オーバーレイ・ユニツトを身代わりに特殊召喚して盾にする!」

「何?」

水の本流によって突進をしかける牡蠣の怪人。しかし、茶色の巨人は双剣をクロスさせてそれを受け止め、弾き返した。

「破壊に失敗した……。だが、『オイスターマイスター』の効果で、『オイスタートークン』を特殊召喚! 更に1枚カードをドロ!」

オイスタートークン：DEF 0

弾き返され、弾け飛んだ牡蠣の怪人だったが、散り際に自身を覆っていた貝殻の1つが輝の場にモンスターとして飛んで来た。

オツケー、これで壁を確保だ!

「そのまま『オイスタートークン』に攻撃い!」

「クツ!」

斬！ 巨大な錆びた剣が、牡蠣の貝殻を両断する。

『チョコレートルーパー』のモンスター効果を発動！ 戦闘で相手モンスターを破壊したターン、オーバーレイ・ユニットを1つ消費して相手の場のカードを1枚破壊し、相手に1000ポイントのダメージを与える！」

「何だと!?!」

オーバーレイ・ユニットを消費する効果を2つ!? しかもそれぞれが独立かよ!

チョコレートルーパー（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

ランク5

闇属性／戦士族

ATK 3000 / DEF 3000

レベル5モンスター×4

このカードの（1）の効果は1ターンに1度しか使えない。

（1）：このカードのX素材を1つ取り除く事で、相手の発動したカードの効果を無効にし、破壊する事ができる。

（2）：このカードが効果によって破壊される場合、このカードのX素材となったモンスター1体を特殊召喚し、そのカードを破壊する。

(3) : このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊したバトルフェイズ終了時、このカードのエクシード素材を1つ取り除いて発動する。

相手の場のカードを1枚破壊し、相手に1000ポイントのダメージを与える。

クツ! 『アンチ・エクシード』で『ブラック・ミスト』じゃなくて『チョコレートパー』にオーバーレイ・ユニットを追加させたのは、カード効果を無効にする即時誘発効果だけで無く、追加で破壊する効果もあり、しかも消費が激しいからか!

『シャボン・ゴレム』を破壊する!」

「グツ、スマン!」

『ゴォ〜!』

投げつけられた大剣によって潰されるように泡と岩の巨人が崩れる。

チョコレートパー : ORU 3 ↓ 2

ク、破壊を無効にするには、後1つカウンターが足らねえか!

「1000ポイントのダメージを受けてもらおうぜえ!」

「それは断らせてもらおうか! 畏発動、『ピケルの魔法陣』! このターン、俺が受け

る効果ダメージは0になる！」

ピケルの魔法陣

【通常畏】

このターンのエンドフェイズまで、このカードのコントローラーへのカードの効果によるダメージは0になる。

シュキン！ と俺の周りに魔法陣が展開し、ダメージ与えるべく放たれた茶色の衝撃波を防ぐ。

こいつには結構お世話になっているな。

「グヒヒ、防いだか。魔法カード『オーバレイ・ダークチャージ』を発動。このカードを『チョコレートルーパー』のオーバーレイ・ユニットにし、更に1枚ドロー！」

「はあ……、はあ……、伏せた3枚のカードを全て使う事になるとはね……っ！」

「おまけに、私のカードも不発でした」

「わたしは狙われなかったけど、この陣形は……っ！」

「厳しいね……」

俺は手薄、輝はガラ空き。歩と奈美ちゃんは固めてはいるが、どこまで通じるか……。

「グヒヒヒヒヒヒッ! 恐怖しな人間! それは邪神様復活の糧となる!」

グラトニーの高笑いが、周囲に響く。

俺達に流れる汗が、状況を如実に表わしているだろう。

「我が名は『暴食』のグラトニー! その名の通りにテメエらを骨片の欠片も残さずに食い尽してやるよ!」

グヒヒヒヒヒヒヒッ!

その高笑いは、あいつの優勢を、寸分違わずに表わしていた。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 53 : 恐怖のカーニバル ★

黎 : LP 1900

手札 : 0枚

フィールド

: セットモンスター1体 (『素早いマンボウ』)

: 上昇気泡 (永続罨)

輝 : LP 3600

手札 : 1枚

フィールド

: モンスター無し

: リビングデッドの呼び声 (永続罨・対象不在)



歩 : LP 1500

手札 : 0枚

フィールド

: E・HERO Great TORNADO (DEF 2200)、E・HERO

ワイルドマン (DEF 1600)、スノーマンイーター (DEF 1900)

: 伏せカード1枚

奈美 : LP 300

手札 : 2枚

フィールド

: ドル・ドラ (DEF 1200)、ライトニング・ウォリアー (DEF 1200)、

サイバー・ダーク・ホーン (DEF 800)

: ハウンド・ドラゴン (『サイバー・ダーク・ホーン』に装備)、伏せカード2枚

グラトニー：LP 13600

手札：4枚

フィールド

：猿魔王ゼーマン（ATK 6500）、チョコレートルーパー（ATK 5000・ORU：2）、No. 96ブラック・ミスト（ATK 4500・ORU：1）  
 ：伏せカード4枚、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

SIDE：黎

「グヒヒヒ！ 魔法カード『エレメントスター』を発動！ 自分の墓地の魔法カードを1枚デッキに戻してシヤツフルし、相手の手札を1枚捨てさせる！ 墓地の『ゾンビの包帯』を戻す！ 女顔、手札を捨てろ！」

「地味に痛い効果ですね……。そして人のコンプレックスを痛く突いて来ます……」

エレメントスター（オリジナル）

【通常魔法】



輝：LP 2800↓2000

死んだ土が、貪欲なまでに輝から力を吸い取る。

クソツッ！ プロテクターは衝撃にしか対応してないから、こういうモンには意味が無い！

マズいな、輝も消耗して来ている……。

「輝、大丈夫!？」

「何、とか……っ」

「おいらはこれで、ターンエンド!」

グラトニー：LP 13600

手札：3枚

フィールド

：猿魔王ゼーマン（ATK 6500）、チョコレートパー（ATK 5000・

ORU：2）、No. 96ブラック・ミスト（ATK 4500・ORU：1）

：伏せカード4枚、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

「俺のターン！」

「どうにかして、あのモンスター達を叩かないとジリ貧で負けますよ……」

「解つてはいるが……」

『ブラック・ミスト』は後1度だけ効果を使える。『チョコレートルーパー』は2回だ。そして奴の場には4枚の伏せカード。あれが全て妨害系のカードだった場合、合計で6回、カードの効果を防がれる。

いや、防がれるだけならまだ良い。問題はそこにダメージを与えるカードがある場合だ。

全員、手札が尽き始めている。ここでバーンなんて喰らおうものなら、確実に敗北するだろう。どうすれば……。

ええい、まずは引いてからだ！

「ドローー！」

こう来たか……。

「魔法カード『貪欲な壺』を発動！ 墓地の『深海王デビルシャーク』、『ウイングトータス』、『シャーク・ドレイク』、『アイス・ウォールガイ』、『シャボン・ゴレム』をデッキに戻してシャッフルし、カードを2枚ドローー！」

……よっしゃ!

『A・S シェルター・スカロップ』を召喚!」

A・S シェルター・スカロップ：DEF 2000

ポコポコポコ、と泡が吹き出し、巨大なホタテが現れる。アコヤ貝を遥かに上回る大きさだ。

『『シエルター・スカロップ』のモンスター効果発動! このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、デッキの1番上のカードを墓地へ送り、デッキまたは手札からレベル4以下の“A・S”を1体、特殊召喚できる! ちなみにこの効果は無効化されない!』

「チッ!」

デッキの1番上のカード——『ガード・マスター』だった。良い落ちだ——を墓地のゾーンに吞み込ませ、デッキから別のカードを引き抜く。

『A・S プロテクション・タートル』を特殊召喚!」

『ゴオオオオッ!』

A・S プロテクション・タートル：DEF 2500

ノシ、ノシ、と大きな亀が現れる。背中の甲羅には奇妙な目の意匠が施されており、露出している頭や足にも金属製の鎧が装着されている。

『プロテクション・タートル』の効果発動！ このカードが“A・S”の効果で特殊召喚された時、デッキからカードを1枚ドロウする！」

「そうはさせねえぞ！ カウンター罠発動、『引きずり落とす手』！ モンスター効果の発動を無効にし、相手は手札を1枚選んで捨てる！」

『シエルター・スカロップ』のもう1つ効果発動！ 『引きずり落とす手』の効果を『500ライフを削る』効果に変更し、除外する！」

「か、カウンター罠にモンスター効果を!?」

「こいつは発動する効果じゃない、スペルスピードは関係無い！」

引きずり落とす手—（オリジナル）

【カウンター罠】

効果モンスターの効果の発動を無効にし、相手は手札を1枚選んで捨てる。

A・S シェルター・スカロップ（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星4

水属性／戦士族

ATK 600／DEF 2000

（1）：このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時に発動できる。

デッキの1番上のカードを墓地に送り、デッキまたは手札からレベル4以下の「A・S」モンスターを1体特殊召喚できる。

この効果は無効化されない。

（2）：このカードが表側表示で存在する場合、相手の発動した罠の効果は1度だけ以下の効果として扱われる。

●相手はLPを500失い、このカードを裏側表示で除外する。

「ぐ……うっー！」

黎：LP 1900↓1400









ATK 2800 / DEF 1100

「A・S」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：このカードが戦闘を行うダメージ計算時に発動できる。

このカードと戦闘を行う相手モンスターの攻撃力が元々の攻撃力より高い場合、その数値のアップとダウンを入れ替える。

(2)：このカードが戦闘によつて相手モンスターを破壊した時、「A・S」をテキストに含む魔法・罠カードを1枚デッキから手札に加える事ができる。

この効果で手札に加えたカードは、このターン発動できない。

ダメージ計算時、それはつまりカウンター罠以外の発動を封印するタイムミング。

ダメージステップ時なら『突進』の様なカードが使えるが、『チャリオット・ホエール』の効果が発動するのはその中にあるダメージ計算時。『突進』や『収縮』は使えない。どうにかするにはカウンター罠で直接効果を潰すしか無いのだ。

「攻撃力が4000上がる効果は、4000下がるに変わっていた、というワケだ。ダメージ計算時だから『チョコレートルーパー』の効果も使えないぜ？」

「チッ！」

「『チャリオット・ホエール』の更なる効果！ “A・S”を指定するカードをデッキか

ら手札に加える、俺がサーチするのは『アクア・リンケージ』！ カードを2枚セットして、ターンエンド！」

黎：LP 1400

手札：0枚

フィールド

：セットモンスター1体（『素早いマンボウ』）、A・S チャリオット・ホエール（A  
TK 2800）

：伏せカード2枚（どちらかは『アクア・リンケージ』）、上昇気泡（永続罫）

「私のターンです、ドロロー！ 凄いですね、黎」

「何が？」

「あの攻撃力6500のモンスターを倒した事ですよ」

ああ、まあ確かにオベリスクも真つ青（元から青いが）な攻撃力だったけど。でもまあ、攻撃力2万オーバーのスロウスを相手にした時点で、俺の中にある攻撃力についての定義が総崩れしたモンでね。

攻撃力が無限とかで無いかぎり、対して怖い存在には思えなくなっただけさ。感覚が

麻痺しちまったってただだから、尊敬されるような事じゃないよ。

「いえ、そうではありません。貴方はあの絶望的なまでの相手の布陣に対して、全く諦めていなかった。

私と言えば、もう打つ手無しで諦めていました。何がTLOD解決の英雄だ、好きな人を、大切な家族を守る事すらできないのかって」

「輝……」

「父さん……」

「でも、貴方を見ていて、もう1度勇気が湧いて来ました！ 私はまだ、負けていない！」  
「その意気だ」

少しの自己嫌悪で意気消沈。

少しの勇気で勇気澆刺。

人間というのは、かくも興に欠かないものだ。

【BGM：バカサバイバー】

「私は魔法カード『マジック・プランター』を発動！ 自分の場に表側表示で存在する永続罫を1枚墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドロロー！ 『リビングデッドの呼び声』

を墓地へ！」

「させねえ！ 罨カード『暗雲の接收』を発動！ その発動を無効にし、お前に1000ポイントのダメージを与える！ こいつにカウンター罨は発動できねえ！」

「輝の邪魔はさせない！ チェーンして罨カード『トラップ・スタン』を発動！ このターン中、全ての罨は無効になる！」

マジック・プランター

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在する永続罨カード1枚を墓地へ送って発動する。自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

トラップ・スタン

【通常罨】

このターンこのカード以外のフィールド上の罨カードの効果は無効にする。

暗雲の接收（オリジナル）

【通常罨】

魔法・罨・モンスター効果の発動、モンスターの召喚・特殊召喚・反転召喚を無効にして破壊し、ゲームから除外する。

相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。

このカードの発動に対し、カウンター罨を発動する事はできない。

「ナイス、母さん！」

「ありがとう、歩！」

「助け合おうのがチームでしょ！」

輝のカードの発動に誘発する形でグラトニーが妨害を入れる。しかし、そこに歩のフオローが入った。

残り回数が2回である以上、『チョコレートルーパー』の効果が無闇に使えば、待つているのは敗北。グラトニーはそれを感じてか、『チョコレートルーパー』の効果の使用はしなかった。

「(キーカード、来て下さい!) ドロー！」

引いた2枚のカードを見るや否や、輝は大きく目を見開いた。

何が来たんだ？

「魔法カード『サルベージ』を発動! 墓地の攻撃力1500以下の水属性モンスターを



2体、手札に加える！ 墓地の攻撃力2000の『シャーク・サッカー』と、攻撃力3000の『ドリル・バーニカル』を手札へ！」

「チツ、速攻魔法発動！ 『漁りの棲那貫鬼』！ 自分の墓地の水属性モンスターを1体ゲームから除外し、相手のカードの発動を無効にする！ 更に2000ポイントのダメージを与える！ 墓地の『ボクサーモン』を除外！」

「カウンター罠『アクア・リンケージ』を発動！ 俺の場に“A・S”のシンクロモンスターが存在する場合、魔法・罠・モンスター効果を無効にする！ このカードは無効にならない、『トラップ・スタン』の効果は効かない！」

サルベージ

【通常魔法】

自分の墓地に存在する攻撃力1500以下の水属性モンスター2体を手札に加える。

漁りの棲那貫鬼（オリジナル）

【速攻魔法】

自分の墓地の水属性モンスターを1体ゲームから除外して発動する。

相手の発動した魔法・罠カードの効果を無効にして破壊し、相手に2000ポイント

のダメージを与える。

アクア・リンケージ（オリジナル）

【カウンター罠】

自分フィールドにレベル8以上のEXデッキからS召喚された「A・S」Sモンスターが存在する場合に発動できる。

このカードの発動と効果は無効にならず、「発動できない」効果を受けない。

（1）：相手の魔法・罠・モンスター効果の発動を無効にする。

（2）：水属性モンスターの発動した効果が無効になる場合、無効にする代わりに墓地のこのカードを除外できる。

グラトニーのカードから発せられた鬼の咆哮が、輝のカードを阻害しようとする響き渡る。だが、そのカードは瞬時に赤くスパークキングして機能不全を起こすと、爆発し霧散した。

「後一手、足りなかったな」

「チッ！」

「私は更に魔法カード『強欲なウツボ』を発動！ 手札の『ドリル・バーニカル』と『シャー

ク・サッカー』をデッキに戻してシャッフルし、カードを3枚ドロロー！」

強欲なウツボ

【通常魔法】

自分の手札から水属性モンスター2体をデッキに戻し、自分のデッキからカードを3枚ドロローする。

良いぞ、『サルベージ』と組み合わせる事で2・3のアドバンテージを得られるカードだ。水属性モンスターは『サルベージ』に対応するかどうかで判断される事が多い。流石というべき優秀なカードを引いたな。

シャッ！ とカードを引き抜いた輝。3枚のカードを確認すると、彼は静かに笑う。  
「……来ましたか」

来たのか、この状況でも笑えるカードを！

「私のフィールドのモンスターが水属性のみ、またはモンスターが不在の場合、『ドリム・シャーク』は特殊召喚できます！」

『ジャアアアア！』

「そして私は手札からチューナーモンスター『貪食魚グリーデイス』を通常召喚！」

『ゴボゴボボッ!』

ドリーム・シャーク：DEF 2600  
 貪食魚グリーデイス：ATK 1000

「『グリーデイス』のモンスター効果発動！ 1ターンに1度、相手の手札の枚数以下のレベルを持つ魚族・海流族・水族モンスターを墓地から特殊召喚できる！ 貴方の手札は3枚、よってレベル3の『オイスターマイスター』を守備表示で特殊召喚します！」

オイスターマイスター：DEF 200

一瞬で呼び出された鰐顎の古代魚とオレンジの斑紋に紫の体色の鮫。そして前者が相手の手札に向けて目からビームを撃ち、墓地へとそれを反射させる。

3条に分かれてリフレクトされた光は別のモンスターを呼び出した。どういう仕組みかって？ 知ら管。

ドリーム・シャーク（効果モンスター）

星5

水属性／魚族

ATK 0 / DEF 2600

このカード名の(1)(3)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 自分フィールドのモンスターが、存在しない場合または水属性モンスターのみの場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

(2) : このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

(3) : このカードが墓地に存在し、自分にダメージを与える効果が発動した時に発動できる。

このカードを特殊召喚し、その効果で自分が受けるダメージを0にする。

この効果で特殊召喚したこのカードは、守備力が1000ダウンし、フィールドから離れた場合に除外される。

貪食魚グリーデイス(チューナー・効果モンスター)

星3

水属性／魚族

ATK 1000 / DEF 1000

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：相手の手札の数以下のレベルを持つ自分の墓地の魚族・海竜族・水族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン効果を発動できない。

(2)：このカードがS素材として墓地へ送られた場合に発動できる。

このカードをS素材としたSモンスターの攻撃力・守備力は、相手の手札の数×200アップする。

「レベルの合計は……111!」

「ハッ、させるか! リバースカード、オープン! 速攻魔法『イーター・ダーキー!」

相手の場のレベル4以下のモンスターを1体破壊し、その攻撃力と守備力の合計値分、おいらのライフを回復する! おいらは『グリーンデイス』を破壊するぜえ!」

イーター・ダーキー (オリジナル) (改訂版)

【速攻魔法】

このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果に対して発動する事ができず、相手はこのカードの発動と効果を無効にできない。

(1) : 相手フィールドのレベル4以下のモンスターを1体選択して発動する。

選択したモンスターを破壊し、その攻撃力と守備力の合計値分だけ自分のライフを回復する。

周囲に暗い闇が訪れる。訪れた闇は鰐顎の鮫を呑み込み、グラトニーの体に黒い光を降り注がせた。

が。

『ギョボボボボッ!』

「な、破壊されていないだど!?!」

『プロテクション・タートル』は水属性モンスターが破壊される時、身代わりにできる

! 破壊されなかった事で回復も発生しないぜ!

「ぐうっ!」

A・S プロテクション・タートル (効果モンスター) (オリジナル)

星4

水属性／水族

ATK 1000 / DEF 2500

このカード名の(1)の効果はデュエル中1度しか発動できない。

(1)：このカードが「A・S」モンスターの効果で特殊召喚された場合、1枚ドロースる。

(2)：水属性モンスターが効果によって破壊される場合、墓地のこのカードを代わりに除外する事ができる。

この効果を発動したターン、水属性モンスターは効果では破壊されない。

「ナイスです、黎！」

「お安い御用だ！」

これで奴の伏せカードは残り1枚、行ける！

私はレベル5の『ドリーム・シャーク』とレベル3の『オイスターマイスター』に、レベル3の『貪食魚グリーデイス』をチューニング！

吹雪よ！ 今ここに蘇りし龍の槍となり、絶対零度の威として万象を無に帰せ！」





2600

オイスタートークン：DEF 0

「クソオツ！ これじゃあ『チョコレートルーパー』の効果で『トリシューラ』の効果も無効にできねえ！」

「しかも破壊じゃないから逃げる事もできないよ！」

「私は『ブラック・ミスト』と『チョコレートルーパー』、そして最後の伏せカードを除外！」

氷結界の還零龍 トリシューラ（シンクロ・効果モンスター）

星1

水属性／ドラゴン族

ATK 2700 / DEF 2000

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがS召喚に成功した時に発動できる。

相手フィールドのカードを3枚まで選んで除外する。

(2) : S 召喚したこのカードが相手によって破壊された場合に発動できる。

自分のEXデッキ・墓地から「氷結界の龍 トリシューラ」1体を選び、攻撃力を3000にして特殊召喚する。

相手フィールドに表側表示モンスターが存在する場合、さらにそれらのモンスターは、攻撃力が半分になり、効果は無効化される。

強力な冷凍ビームが3本の頭から放たれ2体のモンスターと伏せカードが木端微塵に凍って砕ける。

これで奴のフィールドにカードは無くなった！ 行けるぞ！

「バトル！ 『氷結界の還零龍 トリシューラ』でダイレクトアタック！ ムアルティメット・フォース・ブリザード」オッ！」

「ぐがああああああああああああああああ！」

グラトニー : LP 10800 ↓ 7500

「私はこれで、ターン終了です」

輝：LP 2000

手札：1枚

フィールド

・氷結界の還零龍 トリシユーラ（ATK 3300）、オイスタートークン（DEF 0）

：魔法・罨無し

「やったよ、輝！ もう一息だよ！」

「ええ、後はお願ひします」

「よっしゃ！ わたしのターン、ドロー！」

今の敵のフィールドは焼け野原、叩き込め歩！

手札誘発が怖い、それを恐れて二の足を踏んで良い状況じゃない！

「私は魔法カード『壺の中の魔術書』を発動！ わたしと奈美はデッキからカードを3枚ドロー！」

「！」

「ありがとう母さん！ ドロー！」

「手札から魔法カード『ダブル・フュージョン二重融合』を発動！ ライフを500払ってこのターン2回攻

撃ができる！ く、ううううううううつ！

歩：LP 1500↓1000

「歩！」

「母さん！」

あのバカ！ 闇のゲームじゃライフコストでさえその身を削るつてのに！

「だい、じょうぶ……っ！ 皆、頑張ってる、のに……っ！ わたしだけ何もしいのは変だからね」

「……後でオハナシがあるよ」

「その後で、甘えさせてね？」

「……………はあ、考えておくよ」

不満そうな輝に、歩が明るく返す。

輝は溜息を吐くが、何だかんだで許すようだ。

娘の奈美ちゃんは、そんな彼らを微笑みながら見守っている。うん、いい家族だ。

二重融合（アニメオリジナル）（自己解釈効果）

## 【通常魔法】

500ライフポイントを払って発動する。

このターン、下記の効果を2回まで使用できる。

●手札：自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚扱いとして特殊召喚する。

「手札の『E・HERO シャドー・ミスト』と『リキッドマン』を融合！

影よ、海よ、明日への地図を広げ水平線へと旅立て！ 融合召喚！ 君臨せよ、『E・

HERO サンライザー』！」

『ホオオオオアアアッ！』

E・HERO サンライザー：ATK 2500

「この瞬間、『サンライザー』、『リキッドマン』、『シャドー・ミスト』の効果発動！

『シャドー・ミスト』の効果！ 効果で墓地に送られた時、デッキから『E・HERO』をサーチする！ わたしは『ワイルドマン』を選択！

続けて『リキッドマン』の効果！ 融合素材になった時、デッキから2枚ドロし、1枚手札を捨てる！ 今サーチした『ワイルドマン』を墓地へ！

そして最後に『サンライザー』の効果！ デッキから『ミラクル・フュージョン』を手札に加える！

す、凄いな……。融合召喚したのに手札が減ってない……。！

E・HERO シャドーミスト（効果モンスター）

星4

闇属性／戦士族

ATK 1000 / DEF 1500

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

(1)：このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「チェンジ」速攻魔法カード1枚を手札に加える。

(2)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「E・HERO シャドー・ミスト」以外の「HERO」モンスター1体を手札に加える。

E・HERO リキッドマン（効果モンスター）  
星4

水属性／戦士族

ATK 1400 / DEF 1300

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。  
(1)：このカードが召喚に成功した時、「E・HERO リキッドマン」以外の自分の墓地のレベル4以下の「HERO」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

(2)：このカードが「HERO」融合モンスターの融合召喚の素材になり、墓地へ送られた場合または除外された場合に発動できる。

自分はデッキから2枚ドローし、その後手札を1枚選んで捨てる。

E・HERO サンライザー（融合・効果モンスター）

星7

光属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 1200

属性が異なる「HERO」モンスター×2



このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカード名の(1)(3)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「ミラクル・フュージョン」1枚を手札に加える。

(2) : 自分フィールドのモンスターの攻撃力は、自分フィールドのモンスターの属性の種類×200アップする。

(3) : このカード以外の自分の「HERO」モンスターが戦闘を行う攻撃宣言時に、フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

「2回目の融合! 手札の『クレイマン』と輝の『オイスタートークン』を融合!

無限の氷結の果てにある、とこしえの零! 融合召喚! 凍り付け、『アブソルートZ

ero!』

『デェアアツ!』

E・HERO アブソルートZero : ATK 2500

「そして『ミラクル・フュージョン』を発動！ わたしの墓地の『Great TORN ADO』と、黎の墓地の『シエルター・スカロップ』を除外し、融合！」

英雄よ！ 翼を広げ、駆け出せ！ 夢と希望を握り締め、力の限りに突き進め！ 融合ッ！ 召喚ッッ！ 『Wake Up Your E・HERO』 オッ！」

Wake Up Your E・HERO (融合・効果モンスター)

星10

光属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 2100

「E・HERO」融合モンスター+戦士族モンスター1体以上

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

(1)：このカードの攻撃力はこのカードの融合素材としたモンスターの数×300アップし、その内の融合モンスターの数まで1度のバトルフェイズ中にモンスターに攻撃でききる。

(2)：このカードがモンスターと戦闘を行ったダメージ計算後に発動する。

そのモンスターを破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

(3)：融合召喚したこのカードが破壊された場合に発動する。

手札・デツキから戦士族モンスター1体を特殊召喚する。

続々と現れる融合ヒーロー達。

太陽の刻印を持った赤いアーマー。

再び吹雪をもたらす氷の化身。

そして『シャイニング・フレア・ウィングマン』『ワイルドジャギーマン』『バブルマン・ネオ』『ネクロダークマン』『ヒーロー・キッズ』『ハネクリボー』が一堂に集結した正義の象徴。

手札消費の荒い融合ヒーローでここまで展開するのか、流石。これが愛ってヤツなのか。

「さ、3連続融合召喚だど!?!」

『Wake Up Your E・HERO』の攻撃力は、その融合素材にしたモンスター1体につき300アップする! よって攻撃力は600アップ!

更に『アブソルトZero』は自身以外の味方水属性モンスターの数だけ攻撃力を500アップさせる! 『スノーマンイーター』と『チャリオット・ホエール』がいる事で、攻撃力は1000アップする!

そして『サンライザー』は自分の場の属性の数×200、味方の攻撃力を上昇させる

！ わたし達のモンスターは光、水、風、闇の4種類！ よって8000ポイントのアップとなる！」

Wake Up Your E・HERO：ATK 2500↓3900

E・HERO アブソルトZERO：ATK 2500↓4300

E・HERO サンライザー：ATK 2500↓3300

すげえバンプアップだ……。しかも『サンライザー』の強化は他のモンスターにも適用される、この陣形は固いぞ！

「バトル！ 『アブソルトZERO』でダイレクトアタック！」

「ここで除外されている『ドラゴンエッグ・ポーチ』の効果発動！」

「あれはさっき私が除外したカード！」

「相手の攻撃宣言時に除外されているこのカードを裏側表示にし、デッキから発動条件の正しい魔法カードを1枚発動する！」

ドラゴンエッグ・ポーチ（オリジナル）

【通常罫】

(1) : バトルフェイズ開始時に発動できる。

このターンに自分が受ける戦闘ダメージを半分にする。

(2) : (1) の効果を発動したターンの終了時、墓地のこのカードを除外して発動する。

このターン受けた戦闘ダメージを全て回復し、その数値以下になるようデッキからレベル3以下のモンスターを任意の枚数だけ特殊召喚する。

(3) : モンスターが3体以上EXデッキから特殊召喚されたターン、相手の攻撃宣言時に除外されているこのカードを裏側表示にして発動する。

デッキから魔法カードを1枚墓地に送り、その効果を発動する。

「これにより速攻魔法『ソウトレス・リロード』を発動！ デッキの一番上のカードを墓地に送り、墓地から攻守を0にし、効果を無効にしてモンスターを可能な限り特殊召喚！

蘇れ、『猿魔王ゼーマン』、『チョコレートルーパー』、『ブラック・ミスト』、『ソラマメイジ』、『センベイゴマ』！」

猿魔王ゼーマン : DEF 1800 ↓ 0

チョコレートルーパー : DEF 3000 ↓ 0

No. 96 ブラック・ミスト：DEF 1000↓0

ソラマメイジ：DEF 800↓0

センベイゴマ：DEF 150↓0

ツチイ！ 壁を増やされたか！

「だったら『センベイゴマ』に攻撃！ 凍り付けえ！」

『ハアアッ！』

『ギャアアッ！』

「続けて『サンライザー』で『ブラック・ミスト』を攻撃！ 焼き払え！」

『ぬうんっ！』

『ギョオオオオッ！』

吹雪と熱波が敵のモンスターを粉碎し、2枠分の空きが生まれる。

弱体化したモンスターでは、ヒーローの猛撃を止める事はできないってワケだ。

「更に『Wake Up』で『チョコレートルーパー』を攻撃！ この瞬間、『サンライザー』の効果発動！ 味方の『HERO』が攻撃する時、フィールドのカードを1枚破壊できる！ 『ソラマメイジ』を破壊する！」

「墓地の『ホタテンジクネズミ』の効果を発動！ 墓地のこのカードを除外して、破壊効

果を無効にして破壊する！」

ホタテンジクネズミ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／岩石族

ATK 3000 / DEF 2850

相手が「フィールド上に存在するカードを破壊する」効果を発動した時、墓地に存在するこのカードを除外して発動する。

その効果を無効にして破壊する。

この効果の発動に対し、相手はカウンター罫を発動する事はできない。

『サンライザー』が援護射撃でレーザーを撃つて更に敵の数を減らそうとするも、失敗。光線は反射され、撃ち手を逆に滅ぼす結果になってしまった。

同時にその消滅に伴い、800ポイントの強化も消える。

「く、ごめん『サンライザー』……！でも『Wake Up』の攻撃は通る！そして『Wake Up』はバトルした相手モンスターを戦闘ではなく効果で破壊し、元々の攻撃力分のダメージを与える！ 喰らえ、3000のダメージを！」

「ぐあああああつ!？」

グラトニー：LP 7500↓4500

「更に『Wake Up』は素材の数だけ攻撃できる！ 今度は『ゼーマン』を攻撃！

『Wake Up Your Heart』！」

「ぐがああああああああつ!？」

グラトニー：LP 4500↓2000

「ゴメン、トドメ刺せなかった」

「大丈夫だよ、母さん。寧ろ私にしてみれば都合が良いから」

「……ふうん？ カードを1枚伏せて、ターンエンド」

歩：LP 1000

手札：1枚

フィールド



：スノーマンイーター（DEF 1900）、E・HERO アブソルートZero（ATK 3500）、Wake Up Your E・HERO（ATK 3100）  
 ：伏せカード1枚

「私のターン！」

都合が良い……？

奈美ちゃんの言葉が引つ掛かる。相手の場にモンスターがいた方が良い……。

そうか！ あのカードを伏せてあるのか！

「リバースカード、オープン！ 永続罫『DNA改造手術』！ このカードはフィールド上の全てのモンスターの種族を私の指定した種族に統一する！ 私はその効果で機械族を選択！」

DNA改造手術

【永続罫】

種族を1つ宣言して発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターは宣言した種族になる。

フィールド上のモンスター達が光に包まれる。光が収まると、場にいたモンスターは全てサイボーグと化していた。

やっぱり。彼女が狙っているのは、アイツの召喚だ！

「更に私は『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』を召喚！」

場に現れたのはシャープなフォルムの機械龍。『サイバー・ドラゴン』より小さく、黄色のラインが入っており、頭のパーツは尖っている。

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ：ATK 1500

『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』くんは手札の魔法カードを相手に見せる事で、エンドフェイズまでカード名を『サイバー・ドラゴン』として扱う事ができる。手札の魔法カード『マジック・プランター』を見せて、カード名を変更！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ↓サイバー・ドラゴン

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（効果モンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 1500 / DEF 1000

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。

1ターンに1度、手札の魔法カード1枚を相手に見せる事で、このカードのカード名はエンドフェイズ時まで「サイバー・ドラゴン」として扱う。

また、このカードが墓地に存在する場合、このカードのカード名は「サイバー・ドラゴン」として扱う。

「行くよー！ フィールド上の『サイバー・ドラゴン』として扱う『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』、機械族の『サイバー・ダーク・ホーン』、機械族として扱う『スノーマンイーター』、『ドル・ドラ』、『ソラメイジ』を墓地に送り、『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』を融合召喚っ！」

「来たか、『フォートレス』！」

『グゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

キメラテック・フォートレス・ドラゴン：ATK 0  
 E・HERO アブソルútZero：ATK 3500↓3000

『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』を中心に複数の機械族モンスター達が一つに集まる。生み出された機械の龍は、まるで要塞の様に巨大。複数のドラムやホイールを集めたかのような背の低い円筒がいくつも連なった胴体をしており、紫の眼光が敵を射止める。頭は見えても尻尾は見えない程に長い。

ちなみにこいつには腕も足も翼も無いので、どちらかと言えば蛇に近いかも知れない。

「フォートレスさんの元々の攻撃力は、素材となったモンスターの数×10000ポイント。今回は5体が素材だから、攻撃力は5000になる！」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン（融合・効果モンスター）

星8

闇属性／機械族

ATK 0／DEF 0

「サイバー・ドラゴン」＋機械族モンスター1体以上

このカードは融合素材モンスターとして使用する事はできない。

自分・相手フィールド上に存在する上記のカードを墓地へ送った場合のみ、エクストラデッキから特殊召喚する事ができる（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードの元々の攻撃力は、このカードの融合素材としたモンスターの数×1000ポイントになる。

キメラテック・フォートレス・ドラゴン：ATK 0↓5000

『ライトニング・ウォリアー』くんを攻撃表示に変更して、バトル！』

ライトニング・ウォリアー：DEF 1200↓ATK 2400

屈んでいた守備の体制から立ち上がった白い雷の騎士。

行ける！ グラトニーの場合はガラ空きだ！ どっちかの攻撃が通れば勝てる！

『ライトニング・ウォリアー』くんで相手プレイヤーに直接攻撃！ ライトニング・パニッシャー！！』

白銀の雷をまとった一撃が、グラトニーを焼き払わんと喉元に迫る。

通れ……っ！

「手札から『マナイ・タイタン』を特殊召喚！」

「何!？」

「ダイレクトアタックがされる時、このカードを攻撃表示で特殊召喚する！」

『ア、アア!』

「そしてこのモンスターの攻撃力は、攻撃モンスターの攻守の合計値となある! 『ライ  
トニング・ウォリアー』の攻撃力は2400、守備力は1200! よって攻撃力は3  
600だあ!」

マナイ・タイタン：ATK 0↓3600

トドメの一撃は、頑丈な木の板の巨人に止められる。

木は電気を通さない、白銀の雷撃は完全に防がれて攻撃を通す事はできなかつた。

マナイ・タイタン（効果モンスター）（オリジナル）

星9

地属性／植物族

ATK 0 / DEF 0

(1) : 相手の直接攻撃宣言時、このカードを手札から攻撃表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚された場合、このカードの攻撃力は攻撃モンスターとの攻撃力と守備力を合計した数値になる。

(2) : このカードは攻撃できない。

「なら『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』で攻撃ッ！  
 “エヴォリユーション・リザルト・アーティレリー” 第一打！ 第二打！ 第三打！ 第四打！ 第五打アアアアッ！」

「どおあああああああああああああああああああああッ！」

巨大な機械の龍の胴体のドラムが開き、中から小型の機械の龍の首が4本出て来る。本体の巨大な口と中から出て来た5本の首の口腔内にエネルギーが溜められ、5連続のビーム光線として撃ち出された。

グラトニー : LP 2000 ↓ 600

「できればターンを渡したくなかったな……。魔法カード『マジック・プランター』を発

動。『DNA改造手術』を墓地に送ってカードを2枚ドロ。そして伏せカードを2枚セットして、ターンエンド」

奈美：LP 300

手札：4枚

フィールド

：ライトニング・ウオリアー（ATK 2400）、キメラテック・フォートレス・ド

ラゴン（ATK 5000）

：伏せカード3枚

【BGM終了】

「このまま行けば押し切れるぞ！」

「ええ、もう勝利は目前です」

「おいらのターン、ドロ」

奴のライフは残り600、手札は今の補充で4枚。場にあるのはフィールド魔法1枚のみ！



行ける！ このまま行けば勝てる！

だが、グラトニーの様子が一変している。

そう、まるで窮地に追い込まれた歴戦のデュエリストが浮かべる様な、窮地になればなるだけ、強くなる補正がされている様な……、そんな表情と様子を。

「やれやれ、まさかここまで追い込まれるたあな？　しょうがねえから……、最後の手段だ！」

「っー！」

「おいらは墓地の『ソラメイジ』の効果を発動。墓地のこのカードと闇属性モンスターを2体ゲームから除外し、デッキから好きなカードを2枚選択して手札に加える。この時、加えたカードは相手に見せる必要は無い。

墓地の『ブラック・ミスト』と『センベイゴマ』をゲームから除外」

ソラメイジ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／魔法使い族

ATK 1700 / DEF 800

自分のターンのスタンバイフェイズ、墓地に存在するこのカードと闇属性モンスター

を2体ゲームから除外して発動する。

自分のデッキからカードを2枚選択して手札に加える。

この効果で加えたカードは相手に見せなくても良い。

デッキからカードをサーチ!?

まさか……っ!?

「更に除外された『センベイゴマ』の効果が発動。このカードが除外された時、ライフを500支払う事で、自分の場に2体の『ゴマトークン』を特殊召喚できる」

グラトニー：LP 600↓100

ゴマトークン：DEF 0

ゴマトークン：DEF 0

センベイゴマ（効果モンスター）（オリジナル）

星2

闇属性／機械族

ATK 900 / DEF 150

このカードがゲームから除外された場合に発動できる。

500LPを払い、自分フィールドに「ゴマトークン」(植物族・地・攻/守 0)を2体特殊召喚する。

「更に墓地の罨カード『豆衣食苗』の効果発動。このカードを墓地から除外し、墓地の闇属性モンスターの効果と攻撃力を無効にして特殊召喚できる」

「ソウトレス・リロード」で墓地に落としたカードか！」

「蘇れ『ゼーマン』！」

猿魔王ゼーマン：ATK 2500↓0

豆衣食苗(オリジナル)

【通常罨】

(1)：モンスターが戦闘によって破壊された時に発動できる。

破壊されたモンスターを、召喚条件を無視して持ち主のフィールドに守備表示で特殊召喚する。

(2)：墓地のこのカードを除外し、前の相手ターンに戦闘によって破壊され墓地に送ら

れた自分のモンスター1体を選んで発動できる。

そのモンスターを墓地から攻撃表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は0になり、効果も無効となる。

場にモンスターが3体……っ！

そしてデッキからカードをサーチしていた。

ヤバい、あれが来る！

「おいらは『ゼーマン』と『ゴマトークン』2体をリリース！」

「来るぞ、気をつけろ！」

「行くぜえ……」



っ！　とうとう出やがったか！

七罪士　グラトニー：ATK　3700

噴き上がる闇の中に消えた姿を現すグラトニー。その全長はスロウスよりかは小さい。しかし、その禍々しいオーラはこれまでに戦った3人を大きく上回る。全身を黒い鎧で覆い、両の腕には鋭く長い爪が装着されている。放たれる邪神のオーラはこちらを既に呑み込んでいる。

軽く体を揺するだけで突き出た腹の贅肉が、そして地面が揺れる。

「とうとう、出やがったな……っ！」

「ここで相手自身が登場ですか……っ!」

「敵しい相手、かもね」

「攻撃力3700……」

順に俺、輝、歩、奈美ちゃん。

これまで戦って来た護衛本体は凄まじく強かった。こいつもまた強いのだろうな。

「グヒヒヒヒヒ……。本気を出してもこのザマなら、奥の手を使うしかねえよなあ?」

「クッ!」

「で、でも私のフォートレスさんは攻撃力が5000もあるんだ! 次のターンで終わ

りだ!」

「それはどうかな? さて、おいらのモンスター効果を使わせてもらおうか」

そう言うと、グラトニーはノッシノッシと『キメラテック・フォートレス・ドラゴン』

に歩み寄った。

そしてそのまま徐おもむろに鋼の蛇を驚掴みにすると、大口を開けてその頭おかしなに噛み付いた。

「いただきます」

「なっ!?!」

「フォートレスさん!」

『ギアアアアアアアアアアアッ!?!』

バリゴリバギグジャメギドグ……………。

金属の破砕音が響き、頭から機械の龍は食い尽されてしまった。

な、何なんだよ……………。

「こ、こいつ……………」

「フォートレスさんを……………」

「食べちゃった……………」

「なんと……………」

「グヒヒヒヒ、おいらの効果だ。

１ターンに１度、相手モンスターを１体選択して墓地に送る事ができる。そして、おいら自身にカーニバルカウンターを２つ乗せるのさ」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 0↓2

「の、ノーコストで墓地送りですか……………」

「『スターダスト』のような破壊無効のような効果も効かないっつーワケか……………」

なんて凶悪な……………。

「さて、攻撃と行こうか。対象は、そうだな…………『ライトニング・ウォリアー』だ」



「私のライフは残り300、攻撃力の差は1300……ッ！」

「ヤバい、耐えられないよ！」

「行くぜえ？」 グラトン・デススクラッチ「！」

「ブワッ！」 と振り下ろされる両手の爪。少女のライフを削り切って有り余る一撃だ。

「リバースカード、オープン！」 罨カード『精霊協奏—ソウル・スピリッツライズ—』！

相手の攻撃宣言時、対象となったモンスターの攻撃力に、俺のフィールドか墓地にいる別の<sup>スピリッツ</sup> S “ の攻撃力を加え、更に戦闘ダメージも2倍にする！」

「キュオオン！」 と発生する水色の結界。これで返り討ちにして勝利だ！

「無駄だあ！ おいらが攻撃を行う時、ダメージ計算終了時まで相手の魔法・罨は無効になる！」

「な!？」

グラトニーの爪が結界を一瞬でバターの様に斬り裂く。鉤爪が、結界を破る。

くっ、温存してる場合じゃねえ！ やむを得ないか！

「まず一人、仕留めたぞお！」

「歩！」

「母さん！」

『『ガード・マスター』、頼む！』

ガツキイイイイン!

黒い拳法家が緑の衣服を揺らしながら現れる。黒い長髪を風になびかせながら黒い地の英雄に防御の力を付与させた。

屈んで防御の力を手にした『ライトニング・ウオリアー』は、太い腕でその爪の攻撃を受け止める。

ライトニング・ウオリアー：ATK 2400 ↓ DEF 1200

「何……!?!」

「墓地の『ガード・マスター』をゲームから除外した。これで相手が攻撃対象にした攻撃表示モンスターを守備表示に変えて、戦闘破壊から守る事ができる!」

ガード・マスター（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星4

地属性／戦士族

ATK 0 / DEF 1700

このカードが自分の墓地に存在する場合、相手モンスター1体が自分フィールド上に

存在する表側攻撃表示モンスター1体を攻撃対象に選択した時に発動する事ができる。

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、攻撃対象となったモンスター1体の表示形式を表側守備表示に変更する事ができる。

また、この効果の対象になったモンスター1体は、このターン戦闘では破壊されない。

「た、助かった……。ありがとう、黎さん」

「どういたしましてだ。しかしまさか『古代の機械』アンティーク・ギアと同じ効果を持ち合わせているとはね」

本当にビックリだ。

これまで戦って来た護衛の能力は確か――

プライド：レベル6以上が場に出たら1000ダメージ

エンヴィー：何か色々効かないフィールドコントロール系

スロウス：墓地のモンスター除外でパワーアップ

あれえ？ 何か大した事無いような……。

待て待て、まだあったぞ。

プライド：バトルフェイズ中、自軍の攻撃力2000アップ  
エンヴィー：場のカード1枚をコストに自分の破壊無効  
スロウス：破壊されたら除外されたモンスターを特殊召喚

今更ながら、中々手厳しい相手だったんだな……。

勝てたのは一重に一緒に戦ってくれた皆のお陰か、本当にありがとうございます。

だが1ターンに1度とは言え、問答無用のモンスター除去は痛い。ぶっちゃけ2回攻撃とほぼ変わらないからな。

「おいらはカードを2枚伏せてターンエンド」

グラトニー：LP 100

手札：1枚

フィールド

：七罪士 グラトニー（ATK 3700）

：伏せカード2枚、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロー！」

これは！

オツケー！ 逆転開始だ！

「魔法カード『物語の始まり』を発動！」

物語の始まり（オリジナル）

【通常魔法】

このカードの効果はこのカード以外の手札の枚数によって、以下のように変わる。

●0枚：自分の場に存在するカード1枚をデッキの1番下に戻し、カードを5枚ドロースする。

●1枚以上3枚以下：自分の墓地のカードを任意の枚数デッキに戻し、戻した枚数1枚につきライフを100ポイント回復する。

●4枚以上：デッキからカードを1枚選択して手札に加える。

「このカードは発動時の俺の手札によって効果が変動する。俺の手札は今0枚。よって『上昇気泡』をデッキボトムに戻し、カードを5枚ドロース！」

頼む、逆転のカード、来てくれ！

引いたカードの中の1枚は、『デモンズ・チェーン』。よし、これでグラトニーの動きを  
 阻害できる！

「カードを2枚セット！ 更に魔法カード『深海の財宝』を発動。手札の水属性モンス  
 ターを1体ゲームから除外し、デッキからカードを2枚ドロロー！」

深海の財宝（オリジナル）

【通常魔法】

手札の水属性モンスターを1体ゲームから除外する。

デッキからカードを2枚ドロローする。

このカードが発動した次の自分のターンのメインフェイズ時、墓地のこのカードと手  
 札の水属性モンスターをゲームから除外する事で、デッキからカードを2枚ドロローでき  
 る。

「……モンスターをセットし、『チャリオット・ホエール』を守備表示に変更」

A・S    チャリオット・ホエール：ATK    2800↓DEF    1100

「ターンエンドだ」

黎：LP 1400

手札：2枚

フィールド

：セットモンスター2体（内1体は『素早いマンボウ』、A・S チャリオット・ホ  
エール（DEF 1100）

：伏せカード2枚

「私のターン！ ……ここは防御ですよね」

「少なくとも、俺はそう思う」

「了解です。『トリシューラ』、攻守変更！」

氷結界の還零龍 トリシューラ：ATK 3300 ↓ DEF 2600

「更にカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

輝：LP 2000

手札：0枚

フィールド

：氷結界の還零龍 トリシユーラ (DEF 2600)

：伏せカード2枚

「わたしのターン！」

「歩、防御を！」

「分かってる！ わたしは『Wake Up Your E・HERO』と『アブソル  
トZero』を守備表示に！」

E・HERO アブソルトZero：ATK 3000↓DEF 2000  
Wake Up Your E・HERO：ATK 3100↓DEF 2100

「わたしはこれで、ターンエンド！」

歩：LP 1000



手札：2枚

フィールド

：E・HERO アブソルートZero (DEF 2000)、Wake Up Yo

ur E・HERO (DEF 2100)

：伏せカード1枚

「(これだけの数を揃えて押されてる……) 私のターン！ 来て来て逆転のカード！ ド

ロー！

……ツク！ このカードじゃ無い！ 私は『サイバー・ダーク・キール』を守備表示

で召喚！」

サイバー・ダーク・キール：DEF 800

現れるのは最後の黒い機械龍。どことなく青色の印象を受ける。

これまでの2体とは異なり翼は無く、細長いので蛇の方が近いかも知れない。

「効果で墓地の『ハウンド・ドラゴン』をキールくん装備！」

サイバー・ダーク・キール：ATK 800 ↓ 2500

サイバー・ダーク・キール（効果モンスター）

星4

闇属性／機械族

ATK 800 / DEF 800

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下のドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。

このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに300ポイントダメージを与える。

このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

ジャキン、と肋骨の様なアームで、紫の魔法陣から出て来た刃の顎を持つ小柄な龍を、黒い蛇の様な機械龍がホールドする。

よし、これで1度だけ戦闘破壊から守る事ができる。

『ライトニング・ウォリアー』くんは守備表示のまま、ターンエンド!」

奈美：LP 300

手札：4枚

フィールド

：ライトニング・ウォリアー（ATK 2400）、サイバー・ダーク・キール（DEF 800）

：伏せカード3枚、ハウンド・ドラゴン（『サイバー・ダーク・キール』に装備）

一周回って再びグラトニーのターン。

ここでグラトニーがモンスターを召喚すれば、輝か奈美ちゃんのどつちかは確実にやられてしまう!

「おいらのターン、ドロー! まずはおいらの効果を発動! 『サイバー・ダーク・キール』を頂こうか! 『ビッグスト・克蘭チ』!」

やはり破壊耐性を持つモンスターを狙うか!

墓地に送る効果だから、『ハウンド・ドラゴン』を盾にして逃げる事ができない!

「いっただきまゝす！」

「そうはさせるか！ 永続罫発動！ 『デモンズ・チェーン』！ 相手モンスター1体の効果を無効にし、攻撃宣言を封印する！」

デモンズ・チェーン

【永続罫】

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは攻撃できず、効果は無効化される。

選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

ジャラララララララララララッ！

無数の鎖があちこちから撃ち出され、グラトニーの体に巻き付いて動きを封じる。効果も無効になるから、後はジックリと倒せば問題無い！

「そしてモンスター効果が無効になったため、カウンターも取り除かれる！」  
「ぬうー！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 2↓0

「何のカウンターかは分からないが、放置して良さそうなモンでも無さそうだしな」  
 「どうして？ カーニバルってお祭りの事でしょ？」

冷や汗を流す俺に、歩が首を傾げる。

「確かにそうだ。カーニバルはリオのサンバなんかに見られるように、カトリックみたいな西方教会の文化圏にある、復活祭までの46日間通して行われる祭りの事だ。

その語源には“肉を断つ”、“断食の前夜”、“山車”など色々言われているが、その内の1つに“食人”や“人食い”を意味する“カニバリズム”だと言われている」  
 「成程、大食いな彼に符合しますね」

語源であるラテン語では全く違うのだが、そのラテン語でも混同されたり区別されなかつたりする。

「やるな。効果を無効にした上に、カウンターを除去された……」

だが、これで終わる程、おいらはアまくねえぜえ？ おいらは『ライスナイパー』を  
 召喚！」

『ドラアツ！』

ライスナイパー：ATK 2000

鎖で動きにくい体を器用に動かしてプレイングを続けるグラトニー。

ジャキツ！ と肩にスナイパーライフルを担いだ男が現れる。頭の上で揺れる米の穂が長い頭髮の様に揺れる。

『『ライスナイパー』の効果発動！ エンドフェイズまで攻撃力を500下げる事で、相手の場の表側表示のカードを1枚破壊する！ 『デモンズ・チエーン』を破壊だあ！』

ライスナイパー（オリジナル）（効果モンスター）

星4

風属性／戦士族

ATK 2000 / DEF 200

エンドフェイズまでこのカードの攻撃力を500下げる事で、フィールド上に表側表示で存在するカードを1枚破壊できる。

このカードが特殊召喚に成功した時、このカードの攻撃力と守備力は0になる。

「ッウایت・パフォーマンスッ！」

「Wheatは麦だあ！ くっ！」

バンツ！ バンバンバン！ とライフフルが連続で排莢すると同時に、グラトニーを拘束していた鎖が次々に壊れて行った。

ライスナイパー：ATK 2000↓1500

「更にもう1000下げて『サイバー・ダーク・キール』と『ライトニング・ウォリアー』を破壊！」

『グガアアアアッ！』

『うおあああああああつ！』

「キールくん！ 『ライトニング・ウォリアー』くん！」

ライスナイパー：ATK 1500↓1000↓500

エンドフェイズには戻るとは言え、攻撃力をわざわざ1500も下げた！

その攻撃力が意味するのは、ただ1つ！

「グヒヒヒヒヒヒ、攻撃力はこれだけ下がっちゃったが、300のライフを削るには十分だなあ。バトル！」

やはりか！

こいつは奈美ちゃんを仕留めるつもりなんだ！

「メインフェイズ終了時にリバースカード、オーブン！ 永続罫『死霊ゾーマ』！」  
ゾゾゾゾ、と煙の様な生き物が表側表示になった罫カードから噴き出て来る。羽を持った蜥蜴のような生き物が、腕をクロスさせて場に居座る。

死霊ゾーマ：DEF 500

「発動後、このカードはモンスターカードになって自分の場に守備表示で特殊召喚される。

さあ、攻撃して来なよ。斬った瞬間、アンタの負けだよ」

死霊ゾーマ

【永続罫】

このカードは発動後モンスターカード（アンデット族・闇・星4・攻1800／守500）となり、自分のモンスターカードゾーンに守備表示で特殊召喚する。

このカードが戦闘によって破壊された時、このカードを破壊したモンスターの攻撃力



分のダメージを相手ライフに与える。

(このカードは罠カードとしても扱う)

上手い！ これなら残りライフ100のグラトニーが攻撃したら耐えられない！

よってグラトニーはこのターン奈美ちゃんを仕留められな「おいら自身で攻撃い！」  
いつ!?

「*グ*ラト<sup>ン</sup>・デススクラッチ<sup>ッ</sup>！」

「な!？」

「んだとお!？」

斬！ 鋭い爪で死霊が斬り裂かれる。

バカな!？ 効果ダメージに対処できるカードが既にあつたのか!？

「し、『死霊ゾーマ』の効果で3700ポイントのダメージを受けてもらうよ!」

「手札の『プリンセスナ』の効果を発動!」

プリンセスナ(効果モンスター)(オリジナル)

星1

光属性／魔法使い族

ATK 1000 / DEF 1000

手札からこのカードを捨てる。

発生した自分への効果ダメージを無効にし、相手に無効にしたダメージの10倍のダメージを与える。

「手札からこのカードを捨てて、おいらが受ける効果ダメージを10倍にして跳ね返すうー!」

「何だと!?!」

「伏せていたカードじゃ無い!?!」

プリンが描かれている小型飛行機に跨った小さなプリンセス。チビ姫は死霊の波動を受け止めると、奈美ちゃんに向けて跳ね返した。

「3700の10倍、37000のダメージを受けろお!」

「か、カウンター罠発動! 『フュージョン・ガード』!」

フュージョン・ガード

【カウンター罠】

ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。

その発動と効果を無効にし、自分の融合デッキからランダムに融合モンスター1体を墓地へ送る。

『プリンセスナ』の効果の発動を無効にし、融合モンスターを1体墓地に送る！」

バラバラッ！ と融合モンスターのカードが半透明で場に現れる。その内の1枚から光が発せられ、跳ね返って来た死霊の怨念を防ぐ。

光が収まると、光源であったカード、『F・G・D』が墓地に送られた。

良いカードが落ちたな。

「チツ、カウンター罠『抹茶フ』まっちゃんを発動！ このターン、おいらが受ける効果ダメージは0となり、無効にした効果ダメージ1回につきカードを1枚ドロウできる！」

抹茶フ（オリジナル）

【カウンター罠】

このカードが発動したターン、コントローラーが受ける効果ダメージは全て無効になる。

このターン、効果ダメージを無効にするたびに1枚カードをドロウできる。

「ブワッ！ と抹茶が辺りに散布され、三度打ち出された死霊の怨念がそれに阻まれて消滅する。」

「チツ、あれはチャフか。」

「1枚ドロ、そして『プリンセスナ』を捨てたから『強制肥沃土壌』の効果で1枚捨てる。そしてモンスターを戦闘破壊した事で、おいらにカーニバルカウンターが4つ乗る」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 0↓4

「さて……」

「う……！！」

「止めだあ！ 『ライスナイパー』でダイレクトアタック！ //稲穂連弾！！」  
ババババババババババババ！ 無数のライフルの銃弾が撒き散らされる。

「今度こそまじい！」

「くっ！ 罨発動！ 『パワー・ウォール』！」

パワー・ウォール（アニメ効果）

## 【通常罠】

相手フィールド上のモンスターの直接攻撃によって自分が戦闘ダメージを受ける場合、自分のデッキの上からカードを任意の枚数墓地に送る事で、自分が受ける戦闘ダメージを墓地に送ったカードの枚数×100ポイント少なくなる。

「このカードは自分のデッキからカードを1枚墓地に送るたびに、直接攻撃で受けるダメージを100ポイント軽減！」

デッキからカードを5枚墓地に送ってダメージを0にする！ ごめんなさい！」

「バツ！ と奈美ちゃんはカードを5枚、空中に放る。放られた5枚のカード、『聖なるバリアーミラーフォース』、『未来融合ーフューチャーフュージョンー』、『プロト・サイバー・ドラゴン』、『ドラグニティーフアランクス』、『奈落の落とし穴』が障壁を作り上げ、スパークキングしながらも青白いバリアで散弾を防ぐ。

……って。

「コラー！ カードをばら撒くな！」

「せつせと撒き散らしたカードを回収する奈美ちゃんに忠告する。風の強い所だったらどうするんだろうか？」

「あ、えーと、サイバー流じゃこれが普通だって……」

「何を教えているんだサイバー流っ！」

ヘルカイザーか!? ヘルカイザーを量産したいのか!? そっちじゃヘル化したのはエドの方だったろうが! リスペクトはどこ行ったんだ!

まあ、謝っているあたり、彼女も何かしら思う所はあるんだろうが……。

「永続魔法『未来融合ーフューチャーフュージョンー』を発動！」

つとと、まだデュエル中だった。

しかし、『未来融合』か……。スロウス戦のアレを思い出すなあ。

「この効果により、2ターン後のスタンバイフェイズ時に『F・G・D』を融合召喚する！」

「うげ!?!」

って、マジで『F・G・D』!?

「グヒヒヒヒ、ターンエンド!。そしてこのエンドフェイズ、『ライスナイパー』の攻撃力は元に戻る!」

ライスナイパー：ATK 5000↓2000

グラトニー：LP 100

手札：1枚

フィールド

：七罪士 グラトニー（ATK 3700・カーニバルカウンター：4）、ライセンスナイ

パー（ATK 2000）

：未来融合―フューチャーフュージョン―（永続魔法・『F・G・D』を指定・残り2ターンの）、伏せカード2枚、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

「クソッ！ 俺のターン、ドロ―！ 墓地の魔法カード『深海の財宝』の効果を発動！

手札の水属性モンスターと墓地のこのカードを除外し、デッキからカードを2枚ドロ―！

チッ、手札が3枚もあるのに、何もできねえ！

守備を固める以外、方法は無いか！

「俺は『A・S アペンド・ギンガム』を守備表示で召喚！

『ピイツ！』

A・S アペンド・ギンガム：DEF 400

苦し紛れに召喚されたのは、ギンガムチエックのマフラーを巻いたペンギン。  
これで壁モンスターは4体だが……、奴に通じるかどうか……！

「ターンエンド！」

黎：LP 1400

手札：2枚

フィールド

：セットモンスター2体（内1体は『素早いマンボウ』）、A・S チャリオット・ホ  
 エール（DEF 1100）、A・S アペンド・ギンガム（DEF 400）  
 ：伏せカード1枚

「私のターン！ 私はチューナーモンスター『ゾンビキャリア』を召喚！」

ゾンビキャリア：DEF 200

全身が腐敗した紫のゾンビが現れる。

輝のデッキは魚族だと思っていたが、種族で縛っているわけでは無いのか。



「黎、『アペンド・ギンガム』を使います！」

「ああ、持つて行け」

「レベル3の『アペンド・ギンガム』に、レベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング  
！」

このままじゃどんなモンスターだって壁の役目は障子紙同然だ。だったら、ここで彼  
に有効活用してもらった方が良いだろう。

「集いし力が不屈の戦士を呼び覚ます！」

☆2＋☆3＝☆5

「シンクロ召喚！ 味方を守りし戦士、『スカー・ウォリアー』！」

『ジェヤツ！』

スカー・ウォリアー：DEF 1000

光の柱から飛び出すのは、全身に包帯を巻き、右腕にダガーを装備した戦士。持つて  
いるのでは無く、手の甲に装着している形だ。

こいつは確か……!!

スカー・ウォリアー（シンクロ・効果モンスター）

星5

地属性／戦士族

ATK 2100 / DEF 1000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択する事はできない。

また、このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

『「スカー・ウォリアー」は1ターンに1度、戦闘では破壊されない。これで貴方はこのモンスターをどけるには効果を使用するしかない。ターンエンド!』

輝：LP 2000

手札：0枚

フィールド

：水結界の還零龍 トリシューラ（DEF 2600）、スカー・ウォリアー（DEF 1000）

：伏せカード2枚

「わ、わたしのターン！」

焦りも露わに、歩がカードを引く。

チツ、と舌打ちした所を見ると、望んだカードでは無かった様だ。

「1枚伏せて、ターンエンド！」

手を打たなかった。いや、打てなかったのか？

一応彼女の場には表側表示でモンスターが2体、更に相手守備表示で存在する。簡単に突破はできないと思うが……。

歩：LP 1000

手札：2枚

フィールド

：E・HERO アブソルートZero（DEF 2000）、Wake Up Yo

ur E・HERO（DEF 2100）

：伏せカード2枚

「私のターン、ドローツ！」

味方のターンの最後を飾る奈美ちゃん。しかし、彼女表情を見ると、打開策は無いようだ。マズいな……、このままじゃジリ貧だ。

どうにかして打開しないと、確実にアウトになる！ 特に奈美ちゃんは場にモンスターがいない！

「素直に通るとは思えないけど……、魔法カード『地砕き』！ 相手の場の最も守備力の高いモンスターを1体破壊する！ 消えろ、グラトニー！」

バギジツ！ 地面に亀裂が入り、断層が生まれる。入った罅はそのままグラトニーの足元へと走るが……。通るか!?

「無駄あ！ セイヤツ！ オーバーイート！」

だが、グラトニーは足元に向けて大腕を振り下ろすと、その亀裂を光に変えて呑み込んでしまった。

おい、まさかそんなものまで食べるのか……っ!?

「グヒヒヒヒ、おいらのモンスター効果だ。1ターンに3回までおいらの効果破壊を無効にし、カーニバルカウンター2つに変える事ができるのさ！」

「クツ……！」

チツ、まさか相手のこんな行動までもメリットに変えて来るとは……。

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 4↓6

「つ、だったら、『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚！」

『グオツ！』

サイバー・ドラゴン：DEF 1600

「更に『ブラック・ボンバー』を守備表示で召喚！」

ブラック・ボンバー：DEF 1100

ゴドン、と黒い鉄球が落ちて来る。落ちて来た鉄球は顔が描かれており、頭頂部には導火線がある。名前の通り黒い爆弾の様だ。

『ブラック・ボンバー』の効果発動！ 召喚に成功した時、墓地の闇属性で機械族、レ

ベル4のモンスター1体を、効果を無効にして特殊召喚！ 復活して、『サイバー・ダーク・エッジ』ちゃん！」

ブラック・ボンバー（チューナー・効果モンスター）

星3

闇属性／機械族

ATK 1000 / DEF 1100

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する機械族・闇属性のレベル4モンスター1体を表側守備表示で特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

サイバー・ダーク・エッジ：DEF 800

ググ、と体を屈めて、刃の翼を持つ機械の龍が現れる。橙がかつた黒いボディも、このピンチを表すかのようにくすんで見える。

「レベル5の『サイバー・ドラゴン』にレベル3の『ブラック・ボンバー』をチューニング！」

プレイヤーの掛け声に合わせて黒い爆弾が空中に飛び上がり、3つの星に変わる。星は緑のリングとなり、その中心を白銀の機械龍が潜る。

「集いし願いが、絆を紡ぐ大いなる翼となる！」

☆3+☆5=☆8

「シンクロ召喚！ 飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」  
『キュオオオオオオオオオッ！』

スターダスト・ドラゴン：DEF 2000

白く輝く翼を持つ龍が星屑をまき散らして輝きながら降り立つ。大きな翼を体の前へと回して防御の姿勢を取る。

これなら『ライスナイパー』の効果破壊を無効にできるが……。

「カードを1枚セット！ ターン、エンドッ！」

奈美：LP 300

手札：0枚

フィールド

：スターダスト・ドラゴン（DEF 2000）、サイバー・ダーク・エッジ（DEF 800）

：伏せカード1枚

「ハア、つまんねえな。おいらが切り札を出しただけでこのザマたあな」

「クソツ……」

「所詮、テメエら人間は、おいら達の主、邪神様に勝つ事は愚か、辿り着く事すら叶わねえつつー事か。おいらのターン！」

……悔しいが、グラトニーの言う通りだ。あいつがあいつ自身を召喚しただけでこのザマ。このまま押されるのが関の山だというのか!?

「このスタンバイフェイズ、『未来融合』でデッキから5体のドラゴン族モンスター、『ドラゴンゾーラチーズ』、『ドラゴン・アイ・ライチ』、3体の『ワイバーン・フルーツ』を墓地に送る！」

更に墓地の『ドラゴンゾーラチーズ』の効果を発動。自分のターンのスタンバイフェイズ時に、召喚・特殊召喚・反転召喚されていないこのカードが墓地に存在する場合、こ



のカードをデッキボトムに戻し、デッキからカードを2枚ドロー!

通常ドロー以外でカードをドローしたため、『グラティス・リソース』を発動! デッキからカードを4枚ドロー!」

ドラゴンゾーラチーズ（効果モンスター）（オリジナル）

星5

闇属性／ドラゴン族

ATK 2000 / DEF 800

自分のターンのスタンバイフェイズ時、召喚・特殊召喚・反転召喚されていないこのカードが自分の墓地に存在する時、このカードをデッキの1番下に戻す事でデッキからカードを2枚ドローできる。

この効果は自分の墓地に「ドラゴンゾーラチーズ」が2枚以上存在する場合、使用できな

グラティス・リソース（オリジナル）

【速攻魔法】

自分が通常ドロー以外でドローした時に発動できる。

デッキからカードを4枚ドローできる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、「グラティス・リソース」以外の除外された、または墓地に存在するカードを3枚選択してデッキに戻し、カードを2枚ドローできる。

この効果はこのカードが墓地に送られた次の自分のスタンバイフェイズまで使用する事はできない。

「1度に6枚の補充ですか……っ！」

「そろそろ感覚が麻痺しそうだよ……」

輝の険しい顔に、歩の困り切った顔。うん、俺はもう麻痺してる。

「おいらは『未来融合』を墓地に送り、『カマボコング』を特殊召喚！」

「『未来融合』を!？」

「グヒヒヒヒ、別においらは『ドラゴンゾーラチーズ』達を墓地に送りたかっただけだからなあ、『F・G・D』に用はねえのさ！」

「こいつ……、まさか『F・G・D』ですら切り札どころか捨て駒だとも言えるのか!？」

カマボコング：ATK 1100

「更に『カマボコング』をリリース！ 自身の効果で特殊召喚された『カマボコング』はダブルコストモンスターになる！」

カマボコング（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／獣戦士族

ATK 1100 / DEF 100

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する永続魔法を1枚墓地に送る事で手札から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚されたこのカードがアドバンス召喚のためのリリース素材となる場合、1体で2体分のリリース素材とする事ができる。

「『鏡王ミラー油』をアドバンス召喚！」

鏡王ミラー油：ATK 3200

カマボコを背負ったゴリラが虹色の光の中に消え、その中から別のモンスターが現れる。鏡を片腕に抱えた、ラー油の瓶の胴体を持つ大男。それがそのモンスターだった。

「攻撃力3200……！」

「グヒヒヒヒヒ！ 『鏡王ミラー油』の効果発動！ 1ターンに1度、次のおいらのスタンバイフェイズ時まで、自分の場か墓地のモンスター1体のモンスター効果をコピーできる！ 『ライスナイパー』の効果をコピー！」

「ちよ、ちよつと待て！ 『ミラー油』の攻撃力は3200って事は……っ！」

「6回、効果の発動ができる!?!」

鏡王ミラー油（効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／水族

ATK 3200／DEF 2000

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

1ターンに1度、次の自分のスタンバイフェイズ時まで、自分の場または墓地のモンスターを1体選択して発動する。

このカードは選択したモンスターと同じ効果を得る。

「マズいぞ……。『ライスナイパー』とグラトニーの効果を合わせれば、1ターンに突破できるカードの合計枚数は11枚！ 4人がかりでもそんな数は並べられねえよ！」

「加えて、グラトニーには実質、効果破壊が効かない！」

「グヒヒヒヒヒヒ！ 覚悟は良いか？」

グラトニーが不気味に笑う。

クソツッ！ このままじゃやられちまう！

「まずはおいらの効果で『スターダスト・ドラゴン』を墓地に送る！」

ガシツ、とグラトニーが白い龍の首を掴み、頭から咀嚼する。

断末魔の悲鳴を上げながら、星屑の龍は場から消えた。

『キユオオオオオオオオオツッ!』

「ゴメンね、『スターダスト』ちゃん！」

メスなのか、『スターダスト・ドラゴン』は……。

「そして『ライスナイパー』の攻撃力を合計で1500下げて、『サイバー・ダーク・エツジ』、『スカー・ウォリアー』、『チャリオット・ホエール』を破壊！  
// ウィート・パフォー

マンズッ！」

『へへエツッ!』

ガチャリコ！ と稲穂の狙撃手が弾丸を装填する。

ライスナイパー：ATK 2000↓1500

『ヒヤツハアツ！』

『ギョオオオオオツ！』

「エツジちゃん！」

ライスナイパー：ATK 1500↓1000

『ウイイヤアツ！』

『ぐおああああつ！』

「『スカー・ウオリアー』！」

ライスナイパー：ATK 1000↓500↓0

『ギイアツ！』

『ホエエエエエエエエエエツッ!』

「すまない、『チャリオット・ホエール』……っ!」

バシユバシユバシユ!

排莖と射出音はほぼ同時。凄まじい速度で3体のモンスターが破壊される。

「まだまだあ! 『ミラー油』の攻撃力を下げて『氷結界の還零龍 トリシューラ』を破壊する!」  
「ミラー・ウイト・パフォーマンス!」

『ヌフフフ……』

片腕に抱えた鏡の中から、ラー油の瓶の体の男がライフル銃を取り出す。

ガシャン! と弾丸が装填された。

鏡王ミラー油：ATK 3200↓2700

『ジャヒツ!』

『ドウオオオオオオオオツ!』

「くっ『トリシューラ』、すみません!」

黒く鋭い銃弾により狙撃され、氷の龍の胴体に穴が開く。

断末魔と共に絶命した『トリシューラ』。後続を出せる能力がこれで発動できるが

……。

「この瞬間、モンスター効果発動！ 『氷結界の還零龍 トリシユーラ』が破壊された時、EXデッキから『氷結界の龍 トリシユーラ』を、攻撃力3300にして特殊召喚する！ 更に相手モンスターの攻撃力を半減させ、効果も無効にする！」

「無駄だ！ 墓地の『ワイバーン・フルーツ』のモンスター効果発動！」

「なっ!？」

「直前で墓地に送ったモンスター!？」

「相手墓地でモンスター効果が発動した時、このカードを除外する事で無効にできる！」

ワイバーン・フルーツ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／ドラゴン族

ATK 1600／DEF 300

（1）：このカードが通常召喚に成功した時、自分の墓地のモンスターカードを1枚選んでゲームから除外できる。

次の自分のターンのスタンバイフェイズ、この効果で除外したモンスターを手札に加える。



(2) : 相手の墓地でモンスター効果が発動した時、墓地のこのカードを除外して発動できず。

発動された効果を無効にする。

墓地から放たれた光が新しいモンスターを呼び出そうEXデッキに差し込む。しかし次の瞬間、赤い膨らんだ胴体の翼竜が光を噛み千切り、氷の龍の連続召喚を遮断してしまった。

「こいつの効果に制限回数はネエ。つまり、そっちのヒーロー共も遠慮無く葬れるって寸法だ！」

「っ！」

「続けて効果発動！ 『Wake UP Your E・HERO』を破壊する！」

鏡王ミラー油 : ATK 2700 ↓ 2200

『ヒハッ！』

『ギイイイイイイッ！』

『『Wake Up』の効果ッ！』

『ワイバーン・フルーツ』の効果で無効にする！　そして更に『アブソルートZero』も破壊するぜえ！』

鏡王ミラー油：ATK　2200↓1700

『ヒュハハハアツ！』

『ドウアアアツ！』

「『Zero』まで……！　モンスター効果、発動！　相手モンスターを全て破壊する！」  
「それも『ワイバーン・フルーツ』で無効だあ！」

嘘だろ……。

『チャリオット・ホエール』、『トリシューラ』、『Wake Up』、『アブソルートZero』、『サイバー・ダーク・キール』、『スターダスト・ドラゴン』……。6体のモンスターがあつと言う間に全滅しやがった！

全体除去を使わず、単体除去の連打でだぞ！

くっそ、強い……。グラトニー……。認めたくないが、こいつ圧倒的に強いっ！

（だが、幸いにもあのモンスター効果は表側表示モンスターの除去のみ。俺のセットモンスターを破壊しなければ皆に被害は無い……！）

場の認識を任意のタイミングで切り替えられるルールはラッキーだ。  
額の汗を拭い、場の状況を再確認する。

黎：LP 1400

手札：2枚

フィールド

：セットモンスター2体（内1体は『素早いマンボウ』）

：伏せカード2枚

輝：LP 2000

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード2枚

歩：LP 1000

手札：2枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード2枚

奈美：LP 300

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

グラトニー：LP 100

手札：4枚

フィールド

：七罪士 グラトニー（ATK 3700・カーニバルカウンター：6）、ライスナイ

パー（ATK 500）、鏡王ミラー油（ATK 1700）

：伏せカード2枚、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

幸いにも俺のセットモンスターの片方はリクルーター。これなら、何とか防げるはずだ。

だが俺はこの認識が、何よりもアマかったと後悔する。

「なら、バトルだ。まずはおいら自身で古い方のセットモンスターを攻撃！ グラト

ン・デススクラッチ！」

斬！ 鉤爪によって、平たいマンボウが斬り裂かれる。

「セットモンスター、『素早いマンボウ』の効果を発動！ こいつが戦闘によって破壊された時、デツキから魚族モンスターを1体墓地に送り、別の『素早いマンボウ』を特殊召喚できる！」

素早いマンボウ（効果モンスター）

星2

水属性／魚族

ATK 1000 / DEF 100

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、自分のデツキから魚族モンスター1体を墓地へ送る。

その後、自分のデツキから「素早いマンボウ」1体を特殊召喚する事ができる。

「デッキから『キラララブカ』を墓地に送り、2体目の『素早いマンボウ』を特殊召喚！」

素早いマンボウ：DEF 100

「グヒヒヒヒ、この瞬間、おいらのモンスター効果発動！」

「何っ!？」

「自分のターンのバトルフェイズ中、相手の場にモンスターが召喚・特殊召喚された時、そのモンスターを攻撃対象に選択して、更に攻撃ができる！」

「ン・デススクラッチ！」

「何だと!？」

七罪士 グラトニー（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星10

闇属性／戦士族

ATK 3700／DEF 3500

（1）：このカードは特殊召喚できず、自分フィールドのモンスターを3体リリースしな

ければアドバンス召喚できない。

(2) : iターンに1度、相手の場のモンスターを1体選択して墓地に送り、このカードにカーニバルカウンターを2つ乗せる事ができる。

(3) : このカードはiターンに3回までカードの効果では破壊されず、相手のカードの効果で破壊されなかった時、このカードにカーニバルカウンターを2つ乗せる。

(4) : このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、このカードにカーニバルカウンターを4つ乗せる。

(5) : このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

また自分のターンのバトルフェイズ中、相手がモンスターを召喚、特殊召喚した場合、そのモンスターを攻撃対象に選択して通常の攻撃とは別に攻撃する事ができる。

(6) : このカードに乗っているカーニバルカウンターを1つ取り除く事で、このカードの戦闘による破壊とダメージを無効にする事ができる。

この効果を使用した戦闘では、このカードにカーニバルカウンターを乗せる事はできない。

(7) : iターンに1度、自分の場のモンスター1体を選択して墓地に送る事で、このカードにカーニバルカウンターを4つ乗せる事ができる。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

(8)：このカードは手札が1枚以下の時、フィールドまたは墓地から手札またはデッキには戻らず、ゲームから除外されない。

「モンスターを戦闘破壊したため、カーニバルカウンターを4つ追加し、追撃だあ!」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 6↓10

「ぼ、墓地の『キラララブカ』の効果発動! その攻撃を無効にして500ポイント、攻撃力を下げる!」

「させるかあ! カウンター罠『透破抜き』を発動! 手札か墓地で発動するモンスター効果を無効にし、ゲームから除外する!」

「っ!?!」

透破抜き

【カウンター罠】

手札または墓地で発動する効果モンスターの効果の発動を無効にしゲームから除外



する。

地面に現れた水面から飛び出した黄色いサメ。グラトニーの肩口に噛み付こうと飛びかかる。しかし、グラトニーの背後から吹いた突風によって吹き飛ばされ、空の彼方へと消えて行ってしまった。

「おうら！ もう1体破壊だ！」

「チツ！ だったら『ハリマンボウ』を墓地に送って最後の『素早いマンボウ』を特殊召喚！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 10↓14

素早いマンボウ：DEF 100

「更に今墓地に送られた『ハリマンボウ』の効果を発動！ このカードが墓地に送られた時、相手モンスター1体の攻撃力を500ポイントダウンさせる！ グラトニーを狙え、『ハリマンボウ』！」

『ボウッ！』

バシユバシユバシユ！ と針状のミサイルが撃ち出される。このパワーダウンに期

限は無いから、どうにかしてリセットしない限り、パワーダウンは続く。そして下手な事をすれば乗っているカウンターも消える！

これならどうだ！

「カウンター罨発動！ 『透破抜き』！」

「2枚目だど!?!」

再び吹き抜ける突風。針状のミサイルは推進力を奪われ、吹き飛ぶ。

「グヒヒヒヒヒ。どうせ、そんな事だろうと思っただけ。モンスター効果を正面から撃つても伏せカードで防ぐ事は容易い。ならば防ぎにくく、奇襲性の高い墓地で発揮する効果を使うのが定石だ！」

「こいつ……っ！」

これまでの奴らだったら馬鹿正直に喰らっていただろうに……っ！

間違い無い。今までの護衛とは格が違う！ こっちの行動を読んでやがる！

「デッキから『素早いマンボウ』を特殊召喚！」

素早いマンボウ：DEF 100

「そいつにも攻撃い！」

「チイツ！ デッキから『A・S アームズ・ソードフィッシュ』を墓地へ送る！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 14↓18

「クソ……ッ！」

これで残りは1体！ だが、『ライスナイパー』の攻撃力は500に落ちている！  
セットモンスターを破壊はできない！

「グヒヒヒヒ、墓地の『暗黒の漁火』の効果を発動！ このカードをゲームから除外し、自分の場のモンスター2体の攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

「何!？」

暗黒の漁火（オリジナル）

【通常罨】

直接攻撃によって戦闘ダメージを受けた時に発動できる。

受けたダメージより攻撃力の低いモンスターを2体、自分のデッキから守備表示で特殊召喚できる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分の場のモンスター2体の

攻撃力を1000ポイントアップさせる。

この効果は自分のターンのバトルフェイズ中にのみ発動できる。

この効果を受けたモンスターが攻撃を行う事で相手のライフが0になる場合、相手に発生するダメージは0になる。

ライスナイパー：ATK 500↓1500

鏡王ミラー油：ATK 1700↓2700

「ここで攻撃力アップかよ!？」

「バトル! 『ミラー油』でセットモンスターを攻撃!」

バキッ! 振り下ろされた鏡が、俺のモンスター、『ボルト・ヘッジホッグ』を破壊する。

クソ……ッ、これでがら空きか!

「そして『ライスナイパー』で女顔にダイレクトアタック!」

「うわあああああああああああああああああああああつ!」

輝：LP 2000↓500

「輝！」

「父さん！」

ライフルで撃たれて吹っ飛ぶ輝。プロテクター越しにダメージを受けている様子が見える。

だが、グラトニーはまだ猛攻を止めなかった。

「ここで墓地の『ドラゴン・アイ・ライチ』のモンスター効果発動！ 戦闘ダメージを相手に与えた時、墓地から特殊召喚できる！ 蘇れ！」

『ギギイツ！』

「ただし攻撃力は半分に下がる」

ドラゴン・アイ・ライチ：ATK 3200↓1600

あの果実みたいな胴体を持つギョロ目の龍も、『未来融合』で落としたカード……！

あいつ、前のターンで既にこの状況を想定して動いていたという事か！

「やれ、騎士の魂を噛み砕けえ！」

「墓地の『アペンド・ギンガム』の効果発動！ ダイレクトアタック宣言時、このカード

を特殊召喚！ 攻撃対象を自身に引き継がせる！」  
『キュイツ！』

A・S アペンド・ギンガム：DEF 400

「この効果で特殊召喚された場合、フィールドのモンスターに破壊されたらドロウする効果か、破壊された時に別のモンスターを蘇生する効果を与える！ 俺はドロウ効果を『アペンド・ギンガム』自身に与える！」

A・S アペンド・ギンガム（効果モンスター）（オリジナル）

星3

水属性／鳥獣族

ATK 1600／DEF 400

このカード名の（1）の効果は1ターンに1度しか発動できない。

（1）：相手の直接攻撃宣言時に発動できる。

手札・墓地のこのカードを特殊召喚する。

その後、フィールドの水属性モンスター1体を選択し、そのモンスターにターン終了

時まで以下の内どちらかの効果を与える。

- このカードが戦闘によって破壊された場合、カードを1枚ドロウする。
- このカードが戦闘によって破壊された場合、自分の墓地から名前の異なる水属性モンスター1体を、効果を無効にして特殊召喚する。
- (2) : フィールド・墓地のこのカードは相手の魔法・モンスターカードの効果を受けない。

ドラゴン・アイ・ライチ (チューナー・効果モンスター) (オリジナル)

星8

炎属性 / ドラゴン族

ATK 3200 / DEF 200

(1) : 相手が戦闘を受けた時に発動できる。

このカードの攻撃力を半分にして手札・墓地から特殊召喚する。

(2) : このカードが(1)の効果で特殊召喚されている場合、自分のターンのメインフェイズに発動できる。

自分の手札・フィールドのカードを1枚墓地に送り、相手の墓地のカードを1枚ゲージムから裏側表示で除外する。

この効果の発動に対し、お互いのプレイヤーはカードの効果が発動できない。

ギンガムチエツクのマフラーを巻いたペンギンを蘇生し、素早く壁にする。

辛うじてこれで敗北は免れた。バトルフェイズ中に蘇生したモンスターに追撃できるグラトニーの効果も、別のモンスターの攻撃時なら大して意味は無い。中断した攻撃は、別の攻撃を挟んだら再開できないからだ。

「邪魔だ、失せろ！」

『きゅうううっ!?!』

「『アペンド・ギンガム』の効果でドロロー！」

「これで、奴の攻撃は全て終了。まだ全員生きてる！」

「アメエー！ に速攻魔法『ダブル・ブレードーナッツ』を発動！ 自分の攻撃力1600以下の場のモンスター2体は、攻撃力を半分にしてもう1度バトルできる！ 『ライスナイパー』と『ドラゴン・アイ・ライチ』を選択！」

「何だどっ!?!」

ドラゴン・アイ・ライチ：ATK 1600↓800

ライスナイパー：ATK 1500↓750



ダブル・ブレードーナッツ（オリジナル）（改訂版）

【速攻魔法】

（1）：自分の場の攻撃力1600以下のモンスターを2体選択して発動する。  
対象モンスターはエンドフェイズまで攻撃力が半分になり、2回攻撃ができる。  
この効果で直接攻撃をする場合、相手のLPを0にする事はできない。

「“騎士”の魂とそっちの女に攻撃だあ！」

「ぐあああああああああああああああああああああつっ！」

「きゃあああああああああああああああああああつっ！」

黎：LP 1400↓650

歩：LP 1000↓200

「黎っ！ 歩っ！」

「黎さん！ 母さん！」

更なる追撃。場のモンスターを丸裸にされた上に、残りライフを3ケタにまで、減ら

された……っ！

駄目だ、強すぎる……っ！

おまけに、奴の手札はまだ3枚も残っていやがる……！

駄目だ……、ここまでなのか……っ！

「グヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ、追いつめたぜえ！」

奴の笑いが、今は死神の足音に聞こえる。

く、そ……！ 地面を磨る足も、土を掴むテメエの手も、感覚が鈍い……。蓄積した

ダメージがそろそろヤバくなって来やがったか……っ！

「グヒヒヒヒ、だが、念には念だ。ここでミスして負けてもつまらねえしなあ。

永続魔法『ネガティヴ・オブ・ネガティヴ』を発動！」

くっ、あれはエンヴィーが使っていたカード!?

ネガティヴ・オブ・ネガティヴ（オリジナル）

【永続魔法】

相手プレイヤーは、ライフを2000ポイント支払わない限り攻撃宣言を行えない。

「これでお前らはライフを2000支払わないと攻撃できねえ。そして一つ言っておく

が、おいらは自分に乗っているカーニバルカウンターを1つ取り除き、おいら自身の戦闘破壊とダメージを無効化できるのさ！」

な!? エンヴィーよりも性能高いのか、こいつ!?

蛇の様な黒い霧が周囲に立ち込める。まるでこちらの心を砕くかのように、その霧は啜う。

今、奴に乗っているカウンターは18個。それを全て攻撃で取り除くと仮定するのなら、戦闘破壊に必要なライフコストは総じて38000!

そして、その間もカウンターは蓄積していくから、更に多くのライフが必要になる! 「更に『ドラゴン・アイ・ライチ』の効果発動! こいつ自身を墓地に送り、お前の墓地から『ドリーム・シャーク』を裏にして除外!」

「っ!」

「カードを2枚セットして、ターンエンド! このエンドフェイズ、『ミラー油』と『ライスナイパー』の攻撃力は元に戻るぜえ!」

ライスナイパー : ATK 750 ↓ 2000

鏡王ミラー油 : ATK 2700 ↓ 3200

グラトニー：LP 100

手札：0枚

フィールド

：七罪士 グラトニー（ATK 3700・カーニバルカウンター：18）、ライスナイパー（ATK 2000）、鏡王ミラー油（ATK 3200）

・伏せカード2枚、ネガティヴ・オブ・ネガティヴ（永続魔法）、強制肥沃土壤（フィールド魔法）

「が、あ……」

「く、ここまで来たのに……」

「死にたく、ないよう……」

「父さん、母さん……っ」

俺の呻き声が、輝の悔しげな声が、歩の泣きそうな声が、奈美ちゃんの悲しそうな声が、虚空に力無く響く。

ここまで、なのか……っ！

一生懸命、命懸けで戦って来たっていうのに、ここで閉幕なのかよ……っ！

ちく、しょう……っ！

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 54 : 共鳴する魂 ★

SIDE : 無し

——某所・白い家

それは、未来のどこかの町。少し大きな、白い家。  
そこにはとある一家が住んでいた。

「どう、直りそう?」

「ああ、このくらいなら何とかなる」

赤い髪の女性が、ガレージにいる黒髪の男性に話しかける。精密なバイクが男性の手によって修理されていた。

二人の左手の薬指にはペアリングがはまっていた。紛う事無く夫婦である。

「30分もいらないだろう、あいつらにもそう伝えて来てくれないか?」  
「分かったわ」

男性は黄色の刺青のような模様の入った左の頬にまで垂れて来た汗を、首のタオルで

拭う。

女性は家の中へと戻り、ソファに座っている二人組——こちらも夫婦だ——に向かう。

「ジャック、カーリー。D—ホイールは1時間もすれば修理が終わるそうよ」

「そうか、流石は遊星と言った所か」

「良かった♪」

金髪で長身の男性——ジャック・アトラス——は、彼ならその程度はできて当然と  
いった態度で返し。

長い黒髪で眼鏡をかけた女性——カーリー渚——は両手を合わせてニッコリと笑った。

と、その時。

『ふみやあー！ ふみやあつ！ ふみやああつ！』

「あら、大変！」

彼らがいる部屋の隣の部屋から赤ん坊の泣き声が響きだした。

赤髪の女性はそれを聞くと、そっちの方向へとパタパタと駆けて行った。

「アキ姉ちゃんもすつかり母親だよな」

「ふふつ、龍亞もあのくらいしつかりしてくれば良いのに」

「なっ、悪かったな、龍可！」

そんな彼女を微笑ましく見守ったのは別のソファに座っていた双子の兄妹。

浅い緑の髪を若干短めに切り揃えた少年——龍亞。

その彼の隣で、兄と同じ色の髪のを長く綺麗に伸ばした少女——龍可。

「しっかしジャック、修理ならお前のトコのエンジニアに頼めよ」

部屋から退出したアキを見守りながら、箒の用に逆立った茶髪の男が言う。遊星よりも多くの刺青——犯罪者識別用に用いられていたマーカ——を持ち、全体的にやや痩せていて、革ジャンに身を包んでいる。

「遊星の方があいつらよりも腕が上なのだ。月一でメンテナンスに来たいレベルだ」

「そんなにレベル差があるのか？」

「月とスッポンどころか、太陽と小石と言ったら解るか、クロウ？」

そりやレベルが違うなんてモンじゃねえな、と苦笑いする痩せ気味の男——クロウ・ホーガン——を、ジャックは一瞥する。

「クロウ、デュエルは勿論、エンジニアとしての遊星の実力が分からないわけでもあるまい。率直に言えば、どれだけ世界中のライディングデュエリストを相手にしても、奴の腕前に匹敵するエンジニアを、今まで俺は聞いた事が無い」

「そうね。あたしもジャックについて行って色んなトコで取材したけど、未だに遊星以



上のエンジニアは聞いた事無いわね。きっと世界一の腕前なんだから！」

「ハハハ、違えねえな。それにしても」

とクロウが言葉を区切った所で、眠っている赤ん坊を抱えたアキと、修理を終えた遊星が戻って来た。

「こうして、皆の休みが重なるとはな」

「こういう偶然もあつて良いかもね」

タオルで額の汗を拭う遊星と、スヤスヤと眠る赤ん坊に微笑みを落としながらアキがそう言った時、部屋に赤い光が満ちた。

「これは!?!」

「何!?!」

皆が皆驚く中、6人の右腕に赤い模様が、痣が浮かび上がった。

それは嘗ての己の象徴であり、戦いを終えた今、その存在を消したはずの、シグナーの痣。

「赤き龍の痣!?!」

「ど、どうして!?!」

ドクンドクンと波打つような感覚を持つ、真紅の龍の一部を象つた模様。

何を意味しているのかは誰も分からなかった。されども、シグナーと呼ばれた皆は、

何をするべきかを直感的に理解した。

「カーリー、ちよつとこの子をお願い」

「え、あ、うん？」

アキは腕の中の子をカーリーに預けると、壁に掛けてあつた自分のデュエルディスクを手に取る。

他のシグナーだったメンバーも同様にデュエルディスクを左腕に装着した。

「行くぞ、皆！」

『おう！』

『はい！』

遊星の掛け声に応じて、皆が皆、己のシグナーの象徴たる龍を呼び出した。

「冷たい炎が、世界の全てを包み込む！ 漆黒の花よ、開け！ 現れよ、『ブラック・ロー

ズ・ドラゴン』！」

「黒き疾風よ！ 秘めたる想いをその翼に現出せよ！ 舞い上がれ、『ブラックフェ

ザー・ドラゴン』！」

「聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる！ 降誕せよ、『エンシエント・フェア

リー・ドラゴン』！」

「世界の未来を守るため、勇気と力がレボリユーション！ 進化せよ、『ライフ・ストーリー

ム・ドラゴン』！」

「王者と悪魔、今ここに交わる！ 荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！ 出でよ、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』！」

「集いし星が1つになる時、新たな絆が未来を照らす！ 光差す道となれ！ 進化の光、『シューティング・クエーサー・ドラゴン』！」

眩い光が部屋に満ち溢れ、様々な種類の龍が、窓の外に現れた。

『ゴガアアアアアアアアアアッ！』

『グウウウウウウウウウッ！』

『ギユオオオオオオオオオッ！』

『キュオアアアアアアアアアッ！』

『ガアアアアアアアアアアッ！』

『シユオオオオオオオオオッ！』

6体の龍は雄叫びをあげると、空の彼方へと飛び去っていく。

「誰かが、力を必要としていたのか」

「ふん、この俺様の『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』が行ったのだ、勝利は確定したな」

「世界の誰かを、助けてあげて……っ！」

青色の彼方へ、皆の思いを乗せて――。

――別の某所・赤い屋根の家

「うーん……」

とある家の屋根裏部屋では、一部だけ赤く跳ねた髪少年が、デッキ構築に頭を悩ませていた。

その隣では、青みがかつた白い体の幽体が金色の双眼で彼の構築を見ている。

「遊馬、そのカードをいれるのなら、こっちも入れた方が良い」

「だあーっ！ 今それについて考えているんだから少し黙っててくれえ、アストラル！」  
ガリガリガリ！ と頭を掻き巻る少年――九十九遊馬――は、2枚のカードを見比べる。片方を入れるともう片方が入り辛くなるようだ。

そんな彼の様子を静かに幽体――アストラル――が見守る。

そしてデッキの構築を半分程終えた時、突如として遊馬の首から下がっていた逆三角形のペンダント、皇の鍵から光が発せられた。

「これは……！」

「遊馬、『ホープ』を！」

「おうー！」

遊馬はエクストラデッキのホルダーから、白い騎士の描かれたカードを取り出す。

「誰かが、かっつとピングしているんだ！」

「遊馬！」

「ああー！ 行くぜ、アストラル！」

「今こそ現れよ！ 『No. 39』、光を希望に変える使者、『希望皇ホープ』！」

渦巻く銀河の如き光。その中から白と金で構成された巨大なオブジェがゆつくりと姿を現す。

オブジェは人の形を取る。コウモリのような翼は大きく開き、胸部の緑色のクリスタルに輝きが灯る。赤色の瞳に、強い力の籠った光が宿った。

肩の数字、39が、薄暗い夜の闇に輝く。

『『ホープ』、誰かを助けてやってくれ！』

『ヌーン！』

白い騎士は頷くと、背中の翼を広げ、どこかへと飛び去った。

「頼むぞ、『ホープ』……」

「新たな監察結果、この世界には、まだまだ我々の知らない力が隠されている……」

静かな夜の彼方へ、黒い騎士は、二人の思いを乗せて、飛び立ったのであった。

## —— 異世界の廃工場

SIDE : 黎

黎 : LP 650

手札 : 3枚

フィールド

: モンスター無し

: 伏せカード1枚

輝 : LP 500

手札 : 0枚

フィールド

：モンスター無し  
：伏せカード2枚

歩：LP 200

手札：2枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード2枚

奈美：LP 300

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

グラトニー：LP 100

手札：0枚

フィールド

：七罪士 グラトニー（ATK 3700・カーニバルカウンター：18）、ライセンス  
イパー（ATK 2000）、鏡王ミラー油（ATK 3200）

：伏せカード2枚、ネガティヴ・オブ・ネガティヴ（永続魔法）、強制肥沃土壌（フィールド魔法）

「あ、ぐあ……っ！」

「く、ううう……っ！」

「う、カハ……っ！」

「ハア……、ハア……ッ！」

現状、かなりフィールドは途轍もなく厳しい状況だ。

グラトニーの場には、攻撃力3700の奴自身がいるのに加え、それ以外にも高い攻撃力を持つモンスターが2体。



仮にこのターン守備に徹した所で、敗北は時間の問題。逆転しなくては確実に敗北する。

だが、どうやって？

手札は2枚、『早すぎた埋葬』と『A・S ラッシャー・エル』と『コーリング・スピリッツ』。

装備魔法『早すぎた埋葬』にはライフコストが800必要。だが、俺のライフは650、足りない。何より、グラトニーはカウンターを取り除いて戦闘破壊を無効にできる効果を持つ。墓地から強力なモンスターを呼び出した所で、そんなものは焼け石に水にもならないだろう。

『ラッシャー・エル』の攻撃力と守備力はたったの1400。セットして出しても破壊性は無いから壁としての意義は薄い。

『コーリング・スピリッツ』はサーチカード。しかし……、何をサーチすれば……っ！  
ドローク次第でデュエルの戦局は変わる。だが、何を引けば変えられるというんだ？

自慢じゃ無いが、俺はデッキの内容をほぼ完璧に覚えている。残ったカードの中で有効なのは精々『次元幽閉』や『皆既日食の書』といったところか？ だが、それだってその場凌ぎだ。

あいつの2枚の伏せカードの内のどちらかがカウンター系だった場合、そのカード

だつて不発に終わるだろう。

そして、攻撃するにはライフコスト2000が必要な永続魔法『ネガティブ・オブ・ネガティブ』がある。あれはグラトニーには作用しない。

ここまで、なのか……っ！

S I D E : 歩

簡潔に現状を説明するのならば、絶体絶命。

ここで、終わりなのかな……。黎と共に戦う事は自分の意思で了承したんだし、文句は無い。でも、やっぱりもつと人生を楽しみたかった。

眼を閉じると、最初に浮かび、最も鮮烈な衣装を与えるのは、やっぱりというか何と  
いうか、わたしの最愛の人、輝だった。

輝とは前世からの付き合いになるから、もう30年くらいは一緒つて事になるのかな。

彼と恋人同士になってから、わたしにはありとあらゆる物理法則を彼のためにだけなら無視できる力が備わった（理性が飛ぶのが欠点だけ）。でも、その力もあのデブ護衛の前では通用しない……。

ここで負ければ、全てが終わる。たった一縷の希望、黎がわたし達と一緒に負ければ、それは即ち世界の未来が消滅するという事だ。

それだけは何としても避けたい。でも、グラトニーに勝てない以上、避ける事なんてできない。

もつと人生を楽しみたかった。

子供が生まれるって分かっているのに、幸せが確約されているのに、それを手に入れる事が、できない。

ここで、終わりがあ……。

嫌だよ、そんなの……。

我儘でも良いから、皆を守れる力が、欲しい！

SIDE : 奈美

隣で母さんが絶望に負けて打ちひしがれているのが分かる。

最も、私にそれをどうこうする事はできない。実際に敗北の雰囲気は濃厚どころか、それしか無いような感じだ。

手札は、無い。

モンスターは0。

伏せカードはブラフだ。

デツキの主戦力である『サイバー・ドラゴン』さんは全て墓地に送られた。一応、サイバー・ダークの皆はデツキに2枚ずつ投入してあるから、攻撃力の面では、それなりに行ける。

でも、最大でそれは2500。『サイバーダーク・インパクト!』を引く事ができたとして、次のターンに攻撃力6000のモンスターを出せたところで、グラトニーを破壊できずに食べられちゃうのが関の山。

だったら、次のターンに引くべきカードは直接攻撃ができるエツジちゃんか、効果ダメージを与えられるキールくん。

でも問題なのは、このデツキにはそれ以外の、現状の逆転には使えないカードが入っているという事。ううん、寧ろこれまでに巡って来たカードの事を考えれば、そつちの方が可能性として高いと思う。

モンスターならまだ良い。

攻撃反応型の罠なら対応できる可能性がある。

『死者蘇生』みたいなカードでも行けるかも知れない。

でも、もし『エヴォリユーション・バースト』みたいな条件のついたカードや、上級

モンスターである『フェルグラン・ドラゴン』が来たら、その時点で終わる。

グラトニーの残りライフはたったの100、一息で削れる。

でも、その一息が、届かない。

攻撃力3700、戦闘ダメージを通さない。

そして伏せカード2枚に、攻撃にはライフコスト2000を要する永続魔法。

リバーズカードはこの状況でこれは使えない。

これ以上、戦えない……っ！

無理だよ、こんなの……っ！

父さん、母さん、ごめんなさい。

私じゃ貴方達を、助けられません……っ！

助けない、のに……っ！ 助ける力が、欲しいよお！

SIDE : 輝

「……まで、なのだろうか……」

ワールドの状況は最早制圧されたと言っても過言では無い筈。

攻撃は実質封じられ、場の味方モンスターはさっきの戦闘で全滅した。残っているの

は伏せカード数枚。

私の伏せた2枚のカードは攻撃にも効果の発動にも対応しないタイプ。だから実質ブラフなのだが、さっきの状況で使わなかったところを見られている以上、機能しないと思う。

手札は0枚。デッキの1番上のカードでどうなるかが変わる。

きつと十代みたいな人だったら最後の1枚に希望を託し、奇跡の大逆転を巻き起こすんだらう。でも、私にはそんな神の様な引きの能力は無い。

神と言え、私と歩が転生するきつかけを思い出す。

本来なら行くはずの無かった店へと行く事になった私と歩。それは転生後のGXの世界に現れたイレギュラーの影響を受けた事が最大の原因。

『マスター・ヒュペリオン』を操るあいつを倒した事によって破滅の光による世界の崩壊は免れた。

一般に私のお陰だと言われているが、それは間違いだ。

あの時私が勝てたのは、沢山の精霊が味方をしてくれたから。そしてブルーノのD—ホイール、《デルタ・イーグル》とアポリアさんの力でもある。

でも、その全ては今、ここには無い。

あるのは家族と仲間と、そして信頼できる自分のデッキ。

カチャ、とディスクが音を立てる。

軽い素材でできている筈なのに、今は途轍もなく重い。まるで、これ以上戦う事を体が拒んでいるかの様に。小刻みに体が、震える。

恐れているのだろうか、これ以上戦い続ける事を。

どうして!?! 負けたら全てを失うというものにつ!?

何が怖い!?! 歩と奈美を失う事以上に怖い事があるのか!?

私は、こんな所で、守りたいものを守りる事ができずに、負けて死ぬのだろうか。

死ぬ。

嫌だ!

歩と結ばれたのに! 奈美が生まれて、幸せな未来が確実に来るのに!

死にたくない! 一緒に笑って、泣いて、怒って、また笑いたい!

神様! もしも聞こえているらしたら、私の願いを聞いて下さい!

私のこの先の人生の奇跡を全部使っても構いません! だから今、あいつに勝つ力を

!

大切な人を守る力を、授けて下さい!

「嫌だ……っ!」

「ああん?」

「私は、負けたくないっ!」

それが、引き金だった。

次の瞬間、私の周りには、無数の精霊が現れた。

そして、私自身、白銀に光り輝いていた。

S I D E : 黎

「これは……!」

もう立つ気力ですら失いかけていた時、輝の体が銀色に輝き出し、その周囲に沢山の精霊が現れた。

その光は輝から歩、歩から奈美ちゃんへと伝播する。

何が起こっているんだ……?」

『主殿、聞こえるか?』

「桜?」

突然聞こえて来た声。それは、俺が今最も信頼する精霊の女性だった。



半透明の姿で、空中に浮かび上がるピンクのポニーテールの騎士。

「お前、デツキの中にいる時は会話するのは力の消費が大きいって……」

『そうだ。精霊としてその辺りが未熟な私にとって、デツキにいる状態で会話するのは大きく疲れてしまう』

その辺は『ハネクリボー』を見習いたい、と桜は苦笑いをする。

エネルギーの運用が上手くいかないらしく、こういった人工物にありふれた場所では、余程デツキの浅い所にいない限り外に出るのは止めているそうだ（その点アカデミアは自然が溢れているので、奥深くで眠ついても表に出るのに然程の苦労は無いらしい）。

力を無駄に消費すればデツキの巡りが悪くなる。デイスティニードローなどの神がかった引きは、精霊の力が深く関わっているらしい。だからこそ、勝利への貢献の為に、桜はデュエル中、デツキの中に残っている時は滅多に外に出て来ないのだ。

「桜、一体何が起こっているんだ？ お前が出て来るなんて？」

出て来れるのなら、前のターンのドロローの時には少なくとももう出て来られたはずだ。

桜は静かに、口を開く。

『魂の共鳴が起こっているんだ』

「魂の、共鳴?」

『波長の合う魂の持ち主同士心が強く結び付き合う事だ。個人の持てるエネルギー総量を大きく上回り、奇跡を起こす。溢れたエネルギーはこうして、私が実体化できる程に強力だ』

奇跡……。

『私ももう生まれて長い。だが、それ故に説明のつかない奇跡を何度も見た。その中で、この共鳴が起こった時、必ずデイスティニードローは起こった』

「勝てる、のか……?」

俺の質問に桜は苦笑しながら分からんと答えた。

『だが、共鳴している今こそ最大のチャンスだ! この状況ならば、希望はあるぞ!』

「……ああ!」

ドクン、ドクン、と3人の鼓動が聞こえる気がする。

魂の波打つ感覚が、俺にも伝わって来る!

『魂は今、4人全てが共鳴している。行くぞ、主殿!』

「おう!」

分かる。この一枚で、次に繋げる事ができる!

「俺のターン、ドロオーツ!」

つく、『スピリテッド・ギフト』か！ 駄目だこのカードじゃ逆転できない！

『慌てるな主殿。貴方は前のターンに何をした？』

「つと、そうだったな！ このスタンバイフェイズ時、前のターンにゲームから除外された『A・S 深海のヤリエソ』の効果を発動！ 自分のターンのスタンバイフェイズ時にこのカードがゲームから除外されていた場合、こいつ自身と除外された水属性モンスターを1体特殊召喚できる！

俺はその効果で『A・S リボルバー・トビウオ』を『ヤリエソ』と共に特殊召喚！」

『ボラツシヤアアアアアアアアアアアッ！』

『ヘイヘイツ!!』

A・S 深海のヤリエソ：DEF 0

A・S リボルバー・トビウオ：ATK 1900

ザツパン！ 海面を叩き割るように、2匹の魚が現れる。

片や、爬虫類を連想させる、鮎にも似た魚。

片や、拳銃を背負った、羽の生えた細身の魚。

「バカな……！ そんなカード、いつの間に……、『深海の財宝』か！」

「その通り！ 『リボルバー・トビウオ』の効果を発動！ このカードが特殊召喚に成功した時、相手は俺のフィールドの他の『A・S』の数だけ、手札を捨てなくてはならない！ 俺の場には『ヤリエソ』がいる！ よって1枚のカードを捨ててもらう！」

「だが、おいらにはもう手札がねえ。『強制肥沃土壌』の効果ダメージは手札を捨てた後にチェーンされる。捨てる手札が最初から無ければ、効果ダメージは発生しない！」

「その場合、お前の次のドローフエイズはスキップだ！」

「何だと!？」

A・S 深海のヤリエソ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

水属性／魚族

ATK 0／DEF 0

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードがゲームから除外されている場合に発動できる。

このカードと除外されている自分の水属性モンスター1体を特殊召喚できる。

この効果と特殊召喚は無効化されない。

A・S リボルバー・トビウオ（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）  
星4

水属性／水族

ATK 1900 / DEF 1500

（1）：このカードは魔法・罫の効果で特殊召喚できない。

（2）：このカードが特殊召喚に成功した時に発動できる。

自分フィールドのこのカード以外の「A・S」の数だけ、相手は手札を選んで捨てる。手札の枚数が捨てる枚数より少ない場合、手札を捨てずに次のドローフエイズをスキップする。

この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない。

これで、ロックはやった。

手順は次に移るぜ！

「手札の『A・S ラッシャー・エル』の効果を発動！  
“A・S”の特殊召喚に成功したターン、手札からこのカードを特殊召喚できる！」

A・S ラッシャー・エル（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

水属性／魚族

ATK 1400 / DEF 1400

自分の場に「A・S」と名のついたモンスターが特殊召喚されたターン、このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードが自身の効果で特殊召喚された時、相手に500ポイントのダメージを与える。

このカードの特殊召喚に対して、相手はカードを発動できない。

『シヤツ！』

『ラツシヤ・エル』は自身の効果で特殊召喚された時、相手に500ポイントのダメージを与える！」

「グラトニーの残りライフは1000！」

「行ける！」

「〃鰻野掘り〃！」

光と共に現れた赤色の鰻が水の砲弾を放つ。

通るか!?

「そうはさせねえぞ！ カウンター罠、『デーモンブラン・ガード』！ デツキの上からカードを5枚確認し、その中から闇属性モンスターを1体選択！ 選択したモンスタ―を墓地に送り、発動ターン、送ったモンスタ―の攻撃力より低いダメージは無効になる！」

デーモンブラン・ガード（オリジナル）

【カウンター罠】

デツキの上からカードを5枚確認し、その中に存在する闇属性モンスターを1体選択して墓地に送る。

発動したターン、送ったモンスタ―の攻撃力より低いダメージは全て無効となる。

「おいらのカードは……」。

1枚目は速攻魔法、『神秘の中華なべ』。2枚目は罠カード、『魔宮の賄賂』。3枚目、闇属性モンスターの『キラー・トマト』。4枚目は儀式魔法の『ハンバーガーのレシピ』。5枚目は魔法カードの『トークン収穫祭』！

よっておいらは『キラー・トマト』を墓地に送り、エンドフェイズまで1400未満のダメージを全て無効にする！」

「つちや、防がれたか」

エネルギーシールドを張ってダメージを未然に防ぐグラトニー。だが、これで終わりだと思ふなよ！

「諦める。例えおいらに勝つ事ができたとしても、邪神様に人間が勝つ事はできねえよ」  
「断る」

「何？」

「諦めるのは最後の手段だ！ 魔法カード『コーリング・スピリッツ』を発動！ デツキから『S』と名のついたモンスターを1体手札に加える！ 俺はデツキから『L・S レストア・チェリー』を選択する！」

『出番か、参る！』

「更にこのカードが発動した時、自分の場に『S』と名のついたモンスターが2体以上存在する場合、相手のカードを1枚バウンスするか加えたモンスターを特殊召喚できる！」

コーリング・スピリッツ（チエトリー先生原案オリジナル）

【通常魔法】



デッキから「S」と名のつくモンスターを手札に加える。

このとき、自分フィールドに「S」と名のついたモンスターが2体以上表側表示で存在する場合、以下の効果をどちらか発動できる。

- この効果で手札に加えたモンスターを特殊召喚する。
- 相手フィールドのカード1枚を持ち主の手札に戻す。

「選択するのはバウンス！ グラトニー、手札に戻ってもらおうぞ！」

「残念ながら手札が1枚以下の時、おいらはバウンスと除外を受けないのさ！」

「チッ！」

条件付きとは言え、そこにまで耐性を持つか！

「ならば俺は今手札に加えた『L・S レストア・チェリー』を通常召喚！」

『私、参上！』

L・S レストア・チェリー：ATK 1800

一陣の風と共に場に躍り出る、ピンクのポニーテールの騎士。輝く鎧に身を包み、鋭

い剣を鞘から引き抜く。セリフには突っ込まない。

「貴方の、精霊ですか」

「こんちわ、桜さん！」

「ここでエース登場だね」

「桜が場に現れた時、俺のライフを700ポイント回復する！」

『行くぞ、主殿！』

『『キュア・ブロッサム』！』』

黎：LP 650↓1350

桜の能力によって剣から緑色の光が放たれる。放たれた光は柔らかく俺の体を包み込み、傷を癒す。

もう一丁！

「マジック発動、『スピリテッド・ギフト』！俺の場に属性の違う『S』がいる時、自分の『S』モンスターの数だけカードをドロウできる！俺の場には風属性の桜と、水属性が3体！よって4枚ドロウ！」

これで手札は5枚、ピースは全て揃った！

L・S レストア・チェリー（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）  
星4

風属性／戦士族

ATK 1800 / DEF 1600

このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、プレイヤーのライフを700ポイント回復する。

1ターンに1度、手札を1枚墓地に送る事で、プレイヤーのライフを500ポイント回復する。

このカードは同じ攻撃力のモンスターとのバトルでは破壊されない。

スピリテッド・ギフト（オリジナル）

【通常魔法】

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：自分フィールドに種族・属性の異なる「S」モンスターが2体以上存在する時に発動できる。

フィールドの「S」モンスターの数だけドロウする。

「行かせてもらう！ レベル4の『深海のヤリエソ』に、レベル4の桜をチューニング！」

『さあ、決めるぞ！』

『シャシャシャ！』

「新緑の恵み、悠久の時を流れる水！ 交わりて青き世界に今日覚める！ 希望が溢れる明日となれ！」

桜が空へと跳び上がり、4つの星に姿を変える。4つの星は4つの緑のリングに変わり、その中心を『ヤリエソ』が潜る。その姿は瞬時に輪郭線と4つの星になった。

☆4+☆4=☆8

「シンクロ召喚！ 舞いて泳げ！」  
アクア リーフ スベリッツ  
 『A・L・S オーシャン・チェリー！』

『さあ、いい加減この戦いに幕を引こうじゃないか！』

A・L・S オーシャン・チェリー：ATK 2500

光を纏って新たなる姿で現れる桜。コバルトブルーの鎧に身を包み、空色の盾と幅の

広い大きな剣を手にしている。剣の柄尻からは細い鎖が伸びていて、どこか扇情的な感じで彼女の体に巻き付いている。

長い髪には貝殻の簪を差してシニヨンで纏め、鎧も薄めでどちらかと言えば水着の様な印象を受けた。

「似合ってるぜ、桜。今度水着買ってやろうか?」

『……考えておこう』

フイ、と桜が視線を逸らす。

これが照れ隠しだと気付かない程彼女との付き合いは浅くない。素直じゃ無い奴め。

「まだまだ! レベル4の『リボルバー・トビウオ』に、レベル4の『ラッシャー・エル』をチューニング!

悠久の時を流れる壮麗たる水、歌声を乗せて海原を揺蕩う! 希望が溢れる明日となれ!」

☆4+☆4||☆8

「シンクロ召喚! 熱帯の歌姫、『A・S 南海のマーメイド グッピー!」

『L a L a ~ ~ ~ !』

## A・S 南海のマーメイド グッピー：ATK 2600

光の柱から水飛沫が飛び散り、熱帯魚の下半身を持つ人魚が飛び出す。魚のモデルは名前の通り観賞魚の代表格であるグッピー。同じ種類であっても親の掛け方で色どころか尻尾の形ですら変わる。更にはその系統を維持し続けるたり美しい種を生み出すのは極めて難しいという点から『熱帯魚の飼育はグッピーに始まりグッピーに終わる』とまで言われる程に飼育の甲斐のある魚である。

胸はお約束と言うか何と言うか、大きな貝殻で覆っていた。世界中共通なのだろうか？ 最初に描かれた人魚は男だと言われているんだが……。

「チツ、そつちも連続でシンク口を……っ！ だが、『ネガティヴ・オブ・ネガティヴ』で支払うだけのライフコストには足らねえ！ そして、そいつらの攻撃力はおいらにはとどかねえ！」

「まだ終わりにじゃないぜ！ 魔法装備カード『早すぎた埋葬』を発動！ ライフを800ポイント支払って、墓地から輝の『ハリマンボウ』を特殊召喚！」

黎：LP 1350↓550

ハリマンボウ：ATK 1500

「ぐ、ううううう………っ！」

「黎（さん）!？」

『主殿!？』

「大丈夫、だ………！」

チツ、800のコストですら、もう厳しいか。

心臓が肋骨ごと罅割れて砕ける様な激痛、脳が爆散して頭蓋骨が焼ける様な熱、全身がバラバラになりそうな衝撃と負荷。

知った事か。

俺の命に、何の価値がある？

勝ってやる。

ファイオ達を守ってやる！

都を奪い返してやる！

『グツピー』の効果を発動！ 自分の場の魚族モンスターを1体墓地に送り、相手の場

のカードを1枚破壊する！ 対象は『ネガティヴ・オブ・ネガティヴ』！ ブレイカー

ズ・マーチ“！”

ズングリしたマンボウが光となって消滅する。同時に美しい人魚が人には聞きとる事すら困難な音域の歌を発する。超音波の域に達しているそれは、奴の場の永続魔法を木端微塵に砕いた。

A・S 南海のマーメイド グッピー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）  
星8

水属性／魚族

ATK 2600 / DEF 1900

「A・S」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードはフィールドと墓地に存在する時、魔法使い族としても扱う。

1ターンに1度、このカードは戦闘およびカードの効果では破壊されない。

このカード以外の自分の場に表側表示で存在する魚族モンスターを1体墓地に送る事で、相手の場のカードを1枚破壊できる。

「チイツ！ だがその程度で……」

「更に墓地に送られた『ハリマンボウ』の効果で『ライスナイパー』の攻撃力を500ポイントダウンさせる！」



「な、そ、そうはさせねえぞ！ おいらの効果を発動！ 1ターンの1度、自分の場のモンスターを1体墓地に送り、おいらにカーニバルカウンターを4つ乗せる！ ソニック・バイト！」

無数の針状のミサイルがバシユバシユバシユ！ と放たれるが、それよりも速く、グラトニーはライフル銃を担いだ男を、断末魔の悲鳴が響く間も無く丸呑みにしてしまった。

ターゲットを失ったミサイルが、空しく飛び去って行く。

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 18↓22

チツ、味方モンスターを丸呑みにしてまでするか！

だが、こちらのターンはまだ終わっていない！

「続いて桜の効果を発動！ 1ターンの1度、ライフを500ポイント支払って、墓地の魚族モンスター1体を特殊召喚できる！」

黎；LP 550↓50

「ぐが、アアアアアアアアアア………ッ！」

「黎（さん）っ！」

ビキビキキッ！

何の擬音なんだか……。もう感覚が好い加減怪しいな。

痛いのか、熱いのか分かったモンじゃねえや。

『主殿、無茶しすぎだ！』

「………ここで無茶しなきゃ、いつするんだ？ 『A・S アームズ・ソードフィッシュ』を

蘇生！」

『つたく……。ヒーラーの身にもなれ。『サルベージ・フィッシング』！』

自分の体に巻き付いていた鎖を外して大剣を地面に向かって投擲する桜。水面の陽に剣は地面に波紋を生んで潜り込み、すぐにカジキを鎖に巻き付ける形でキャプチャーして引き上げた。

A・S アームズ・ソードフィッシュ：ATK 0

鋭い刃の顎（鼻っぽいアレ）を持つカジキが場に躍り出る。

こいつは攻撃力こそ無いが、ユニオンモンスターだから問題無い。

「そして『アームズ・ソードフィッシュ』を桜に装備！ 効果で500ポイント、攻撃力がアップする！」

『来い！』

『ギッ！』

桜が大剣を背中に仕舞うと、刃のカジキと腕を一体化させる。顎の刃が鋭く伸び、肩から手までを魚の胴体が。青色のグローブを嵌めている掌には、青く鋭いレイピアが装備されていた。

A・L・S オーション・チエリー：ATK 2500↓3000

「このまま『ミラー油』とバトルだ！」

「攻撃力3000かあ……。だが、攻撃力はこつちには届かない「速攻魔法発動！」  
ぜえ!？」

「『虚栄巨影』！ 攻撃宣言時、バトルフェイズ終了時までモンスター体の攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

虚栄巨影



飛び上がったの大上段からの斬撃は凄まじい威力を持つているようだ。

「チツ！　だがこのターン、1400を下回るダメージは無効になる！」

「だが、これならどうだ！　桜、グラトニーに攻撃だ！」

『心得た！』

「な、何!？」

『『『 覇桜蒼龍斬 ！ 』』』

斬！　二撃目の斬撃が入る。

グラトニーは咄嗟に光を纏った爪でその一撃を受け止める。

「バカな……、何故2度目の攻撃が……!」

「桜！　もう1度だ!」

『御意!』

「な!？」

そして3度目の攻撃。グラトニーはこれを再び光らせた鉤爪で受け止める。

「な、何が起こつて……?」

「桜さん、凄くいい!」

『恐悦至極』

目を丸くする歩に、素直に称賛する奈美ちゃん。

シユタツ！ と着地した桜が不敵に笑う。

「ユニオンした『アームズ・ソードフィッシュ』の効果ですか？」

「正解、流石だな」

そして冷静に事を見守っていた輝が、正解に辿り着く。

『アームズ・ソードフィッシュ』を装備したモンスターは、自分の場の“A・S”の数だけ攻撃回数を追加できるんだ。俺の場には桜自身と『グッピー』がいる、よって攻撃回数は2回増えたってワケだ」

A・S アームズ・ソードフィッシュ（ユニオン・効果モンスター）（オリジナル）

星2

水属性／魚族

ATK 0 / DEF 0

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の「A・S」と名のついたモンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備したモンスターの攻撃力は500ポイントアップし、自分の場の「A・S」と名のついたモンスターの数だけ更に攻

撃回数を増やす事ができる。(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。)

「だ、だがもう攻撃はできねえぜ！ それに、おいらはカーニバルカウンターを1つ取り除いて戦闘破壊とダメージを無効にできる！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 22↓21↓20

「どうだあ！ もう何もできねえだろう！」

「アマイ！ 桜にはもう1つ効果がある！ 桜あ！」

『任せろ！ 〃コバルト・エナジー！』

俺の手札1枚と桜の装備していた魚のレイピアが消滅し、代わりに『グツピー』の全身に青色の神秘的なオーラが纏われる。

A・L・S オーシャン・チェリー：ATK 4000↓0

A・S 南海のマーメイド グツピー：ATK 2600↓4600

「何い!？」

「これが桜のもう1つの効果だ。ダメージ計算終了時、手札1枚と場のカード1枚をコストに、攻撃力を0にして別のモンスター1体の攻撃力をその時の攻撃力の半分だけ上げる!」

A・L・S オーシャン・チェリー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星8

水属性／戦士族

ATK 2500／DEF 2100

「L・S レストア・チェリー」＋「A・S」と名のついたモンスター1体以上

(1)：このカードの効果は無効化されず、自分のターンのスタンバイフェイズ時にこのカードが表側表示で存在する時、手札1枚につき500LP回復する。

(2)：iターンに1度、500LP払い、自分の墓地からレベル4以下の魚族モンスターを1体特殊召喚できる。

(3)：このカードが戦闘を行ったダメージ計算終了時、自分のフィールドと手札のカー



ドを1枚ずつゲームから除外して発動する。

ターン終了時まで自分フィールドの「A・S」モンスター1体の攻撃力をこのカードの攻撃力の半分だけアツプさせ、このカードの攻撃力を0にする。

ちなみに除外したカードは『神の警告』。ライフコスト2000で全ての召喚・特殊召喚・反転召喚、及びそれを可能とするカード効果を無効にできる。

もつとも、今はライフコストを払える余裕は無いのだが。

「まだまだ行くぞ! 『グッピー』でグラトニーに攻撃! “衝撃のソナタ”!」  
「か、カウンターを1つ取り除く! ヌウオオオオオオオオオオッ!」

七罪士 グラトニー:カーニバルカウンター 20↓19

歌の衝撃波がぶち当たり、更にカウンターが減る。

「バカな……! あの絶望的な状況から、どうしてここまでの反撃ができる……!?!」  
「お前に教える義理はねえよ」

これで俺にできる事は終わりだな。後は、アフターケアかな。

「おのれ……っ!」

「1度の攻撃が通じないのならば、死ぬまで殺し続けるまでだ。カードを2枚セットし、ターンエンド！　そしてこれで桜と『グッピー』の攻撃力は元に戻る！」

A・L・S　オーシャン・チェリー：ATK　0↓2500

A・S　南海のマーメイド　グッピー：ATK　4600↓2600

黎：LP　50

手札：0枚

フィールド

：A・L・S　オーシャン・チェリー（ATK　2500）、A・S　南海のマーメイ

ド　グッピー（ATK　2600）

：伏せカード3枚

「私のターン！」

「輝、行けえ！」

「はい！　私は魔法カード『天よりの宝札』を発動！　私と歩はデッキから手札が6枚になる様にカードをドロロー！」

ここでそれを引くか！ 正にシャイニング・ドロー！

瞬時に手札が潤沢となる輝。OK、ぶちかませ！

と、その時。

『ゴガアアアアアアアッ！』

『グウウウウウウウウッ！』

『ギユオオオオオオオッ！』

『キュオアアアアアアアッ！』

『ガアアアアアアアアッ！』

『シユオオオオオオオッ！』

『ホオオオオオオオオッ！』

『もけ〜』

『ギユオアアアアアアアアアアアッ！』

『クリクリ〜！』

シグナーの六龍に、『希望皇ホープレイ』!? それに沢山の精霊達!?

突如現れた七体のモンスターに輝は目を大きく見開いて驚くが、不敵に笑うとプレイングに戻る。頼もしいな、これだけの精霊が味方をするとは。

「魔法カード『調律』を発動！ デッキから“シンクロン”と名のついたモンスターを1

体手札に加え、デッキトップを墓地に送る！ 私は『アンノウン・シンクロン』を手札に！」

デッキトップのカードが落ち、手札にカードが加わる。落ちたカードは……『超古深海王シーラカンス』か。

「相手フィールドにのみモンスターが存在する時、デュエル中1度だけ『アンノウン・シンクロン』は手札から特殊召喚できる！ 更に『レインボー・フィッシュ』を通常召喚つ！」

アンノウン・シンクロン（チューナー・効果モンスター）

星1

闇属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「アンノウン・シンクロン」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

レインボー・フィッシュ（通常モンスター）

星4

水属性／魚族

ATK 1800 / DEF 800

世にも珍しい七色の魚。捕まえるのはかなり難しい。

アンノウン・シンクロン：ATK 0

レインボー・フィッシュ：ATK 1800

バジジツ、とカードがディスクに読み込まれ、丸い金属と虹色に輝く魚が現れる。

「輝の魂の型は『月』！ 日によってその姿を千変万化し、司るのは混沌と明瞭！ 陰と女性の象徴でもあり、その意味は『女神の加護』！」

「フッフ、魂の時点で私は女性決定ですか……。ですが、女神の力を持つのなら、邪神如きに家族を殺させてはいけないね。」

手札から装備魔法『戦線復活の代償』を発動！ 自分の場の通常モンスターを1体墓地に送り、墓地からモンスターを1体、このカードを装備させて特殊召喚する！」

戦線復活の代償



「『シーラカンス』の効果を発動！ 1ターンの1度、手札を1枚捨てて、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り特殊召喚する！」

超古深海王シーラカンス（効果モンスター）

星7

水属性／魚族

ATK 2800 / DEF 2200

手札を1枚捨てる。

1ターンの1度だけ、デッキからレベル4以下の魚族モンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚することができる。

このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃宣言をする事ができず、効果は無効化される。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが魔法・罫・効果モンスターの効果の対象になった場合、自分フィールド上の魚族モンスター1体を生け贄に捧げる事でその効果は無効にし破壊する。

「手札の『ニードル・ギルマン』を捨てて、デッキから『竜宮の白タウナギ』、『深海の大

ウナギ』、『メタボ・シャーク』を特殊召喚！」

「手札を捨てた事で、もう1枚捨ててもらおう！ これでお前の手札は残り1枚だ！」  
「承知の上ですよ」

竜宮の白タウナギ：ATK 1700

深海の大ウナギ：ATK 600

メタボ・シャーク：ATK 1800

竜宮の白タウナギ（チューナー・効果モンスター）

星4

水属性／魚族

ATK 1700／DEF 1200

このカードをシンクロ素材とする場合、他のシンクロ素材モンスターは全て魚族モンスターでなければならない。

深海の大ウナギ（効果モンスター）

星1



水属性／魚族

ATK 600 / DEF 100

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての水属性モンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで500ポイントアツプする。

白い大きなリュウグウノツカイが、大きな赤い鰻が、丸く太ったサメが現れる。リュウグウノツカイは頭に豪華な冠を被っているが、タウナギとは田の鰻の事であり、鰻でもリュウグウノツカイでも無い。

「レベル7の『超古深海王シーラカンス』に、レベル1の『アンノウン・シンクロン』をチューニング！」

赤い目を持つ浮遊機械が1つの星へと変わり、星は幾何学模様の緑のリングとなる。その中を巨大な深海魚が潜り抜け、輪郭線を残して7つの星へと姿を変える。

「集いし願いが、全てを包み込む翼となる！」

☆1+☆7=☆8

「飛翔せよ！ スターダスト・ドラゴン！」

『キュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

バサッ！

光り輝く粒子を散らしながら白い龍がボロボロの翼を羽ばたかせて舞い降りる。

「更に魔法カード『共振装置』を発動！ このカードは自分の場に存在する同じ種族・属性のモンスター2体のレベルを同じにする！ 場の水属性・魚族の『深海の大ウナギ』と『竜宮の白タウナギ』を同じレベルに！」

共振装置

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在する同じ種族・属性のモンスター2体を選択して発動する。

選択したモンスター1体のレベルはエンドフェイズ時まで、もう1体のモンスターのレベルと同じになる。

深海の大ウナギ：水属性／魚族／☆1

竜宮の白タウナギ：水属性／魚族／☆4 ↓ 1

大きな鰻とリュウグウノツカイが同じ色の光に包まれ、その間を電流が走る。2体の体からレベルと同じだけの星が出て、『白タウナギ』の方のみ、その内3つが弾け飛んだ。「レベル1の『深海の大ウナギ』に、レベル1の『白タウナギ』をチューニング！ 集いし思いが新たなる進化を導く！」

☆1 + ☆1 = ☆2

「シンクロ召喚！ 希望の光、『フォーミュラ・シンクロン』！」  
『トアッ！』

フォーミュラ・シンクロン：DEF 1500

光の柱を突き抜けて飛び出す、レーシングカーの胴体を持つ機械戦士。操縦席から頭が飛び出し、横からは腕、下部からは足が生えている。バイザーが光を反射し、輝のデックトップを照らした。

『フォーミュラ・シンクロン』がシンクロ召喚に成功したため、デッキからカードを1枚ドロロー！そして『大ウナギ』が墓地に場から墓地に送られたため、全ての水属性モンスターは500ポイントアップします！」

メタボ・シャーク：ATK 1800↓2300

A・S 南海のマーメイド グッピー：ATK 2600↓3100

A・L・S オーシャン・チェリー：ATK 2500↓3000

「更にレベル8の『スターダスト・ドラゴン』に、レベル2の『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング！」

星屑の龍が大空へと舞い上がり、F1レーシングカーの戦士が2つの緑のリングへとその姿を変える。高速で急降下した『スターダスト・ドラゴン』がそのリングを潜り、亜空間の中へとその姿を掻き消した。

「集いし絆と思いが、絶望を希望に変える力となる！ アクセルシンクロオオオオオッ！」

☆8+☆2=☆10

「シンクロ召喚！ 明日を導け、『シューティング・スター・ドラゴン』！」  
 『ヒュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

シューティング・スター・ドラゴン：ATK 3300

時空の彼方へとその姿を消した星屑の白い龍は、新たなる姿を以てして輝の後ろから再び次元を突き破って登場する。全身が白い装甲の様なものに覆われ、白銀の眼光がグラトニーを射竦める。

シューティング・スター・ドラゴン（シンクロ・効果モンスター）  
 星10

風属性／ドラゴン族

ATK 3300 / DEF 2500

シンクロモンスターのチューナー1体＋「スターダスト・ドラゴン」

以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。

● 自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。

● フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。

● 相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「魔法カード『貪欲な壺』発動！ 墓地の『スターダスト・ドラゴン』、『ニードル・ギルマン』、『超古深海王シーラカンス』、『竜宮の白タウナギ』、『アンノウン・シンクロン』をデッキに戻し、カードを2枚ドロロー！」

「ど、どこまでドロローすれば……っ！」

「そっちだって大量ドロローを何度もしたでしょう！ 更に魔法カード『波動共鳴』を発動

！ 場のモンスター1体のレベルを4にする！ 黎の『A・S 南海のマーメイド

グッピー』のレベルを8から4へ変更！ お借りしますよ！」  
 「ああ、持って行け！」

A・S 南海のマーメイド グッピー：☆8↓4

レベルを揃えたって事は……！

「レベル4の『グッピー』と『メタボ・シャーク』をオーバーレイ！」

『ハアアアアアッ！』

『ジャアアアアアッ！』

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

美しい人魚が青に、大きな鮫が水色の光にその姿を変え、歪な螺旋を描きながら上空へと飛び上がる。光は空にできた大きな銀河の渦の中へとその姿を躍らせ、大きな爆発を巻き起こした。

☆4×☆4＝★4

「出でよ、『No. 39 希望皇ホープ』！」

『ホオオオオオオプ！』

NO. 39 希望皇ホープ：ATK 2500

右肩に自身の数字、39を赤く光らせ、白と黄金に輝く鎧を身に付けた騎士が降臨する。白銀の翼を広げ、赤くその双眼を光らせる。

「まだまだあ！ 『希望皇ホープ』を、カオス・エクシーズ・チェンジ！」

「カオス・エクシーズ・チェンジだど!？」

光の騎士がその姿を塔のオブジェへと変える。白い翼を折り畳み、ギンガの渦の中へとその姿を潜らせる。

輝きは希望を映し、黒い輝きが未来を照らす。

「今こそ現れよ！ 『CNO. 39 希望皇ホープレイ』！」

『ホオウオオオオオオオツ！』

CNO. 39 希望皇ホープレイ：ATK 2500

銀河の渦の中から一回りスリムになった黒い塔のオブジェが現れる。39の数字を



赤く光らせ、青い宝玉が煌めく。

コウモリのような翼を広げ、黒と金の鎧に身を包まれた、赤い瞳の騎士がその姿を露わにした。背中の大剣のセーフティが外れて柄が飛び出し、額の宝石が青く光る。

「ぬ、ぬううううっ！ この土壇場でここまでの展開を……っ！」

「出た、『ホープレイ』！」

「行けえ、輝！」

「『希望皇ホープレイ』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使う度に、エンドフェイズまで500ポイント攻撃力をアップさせ、相手モンスター1体の攻撃力を1000ポイントダウンさせる！ 私は3つ全てを消費して、1500ポイント攻撃力をアップさせる！ 行きます、オーバーレイ・チャージ！」

C N o . 39 希望皇ホープレイ : A T K 2500 ↓ 4000 / O R U : 3 ↓ 0

肩に收容されていたもう一对の腕が伸び、背中の大剣を引き抜く。剣の中へと全ての星が吸い込まれ、全身を白いオーラが包み込んだ。黒い鎧が、白く光り輝く。

「これにより、グラトニーの攻撃力は3000ポイントダウンする！」

「ぬ、ぬうっ！」

C N o . 3 9 希望皇ホープレイ（エクシーズ・効果モンスター）  
 ランク 4

光属性／戦士族

A T K 2 5 0 0 / D E F 2 0 0 0

光属性レベル 4 モンスター × 3

このカードは自分フィールド上の「N o . 3 9 希望皇ホープ」の上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

自分のライフポイントが1000以下の場合、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力を500ポイントアップして相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を1000ポイントダウンする。

七罪士 グラトニー：A T K 3 7 0 0 ↓ 7 0 0

瞬時に暴食の体から力が吸い取られる。

だが、ここで終わらない！

「更に『シューティング・スター・ドラゴン』の効果を発動！ 1ターンに1度、デッキの上からカードを5枚確認し、その中のチューナーの数だけ攻撃できる！」

ギャンブル性の強い効果だが、その能力は強力だ。

何枚のチューナーが引き当てられる!?

「捲ったカードは『竜宮の白タウナギ』、『ジェネクス・ウンディーネ』、『スターブラスト』、『和睦の使者』、『ジェネクス・コントローラー』！ チューナーは『竜宮の白タウナギ』と『ジェネクス・コントローラー』の2体！ よって攻撃の回数は2回！」

「ぐっ！」

「行けえ、『希望皇ホープレイ』！ グラトニーに攻撃！」

腰に差していた剣の鞘が弾け飛び、その両手に収まる。黒い鎧を白く輝かせた騎士は、その両手と背中の中を力一杯振って斬りつけた。

通れえ！

「墓地の『ホウレンソーサラー』の効果を発動！ 相手の攻撃宣言時に墓地のこのカードをゲームから除外し、相手の最も高い元々の攻撃力を自分の攻撃対象モンスターに加算するう！」

「い、いつの間にな?！」

『ソウトレス・リロード』か『プリンセスナ』で捨てたんだろぅね!」  
 「その通り! 『ソウトレス・リロード』で墓地に送られたデッキトップさあ!」

ホウレンソーサラー（効果モンスター）（オリジナル）

星5

風属性／魔法使い族

ATK 2000／DEF 1950

このカードは1ターンに1度、戦闘またはカードの効果では破壊されない。

相手モンスターの攻撃宣言時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

相手の場に表側表示で存在する元々の攻撃力が最も高いモンスター1体の元々の攻撃力分、攻撃の対象となった自分のモンスターの攻撃力をエンドフェイズまでアップする。

『へへへへへ〜ッ!』

頭上にホウレンソウを生やした魔導師が半透明になって現れ、流星のドラゴンの力をグラトニーに流し込む。

七罪士 グラトニー：ATK 700↓4000

マズい！ 攻撃力は並んだが、グラトニーは自身の効果で破壊を回避できる！

「グヒヒヒヒヒッ！ グラトン・デススクラッチ！」

「ほ、ホープ剣カオススラッシュ！」

斬！ 斬斬！ 斬斬斬！

剣と爪が交錯し、互いに互いを斬り合う。

一瞬の間において、三刀流の騎士は地に伏し、倒れた。

「すみません、『ホープレイ』……」

「グヒヒヒヒヒ、カウンターを取り除いて破壊を回避だあ！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 19↓18

マズい、な、これじゃ『シューティング・スター』の連続攻撃が使えな「ならば『シューティング・スター・ドラゴン』で攻撃！」いい!?!

「ひ、輝!?!」

「父さん!？」

「バカなマネは止めろ！ 攻撃力差700はお前のライフ500じゃ受けきれねえ！」

「スターダスト・ミラージュ！」

トチ狂いやがったか!？

全身に煌めく粒子を纏って突進する『シューティング・スター・ドラゴン』。グラト

ニーはそれを受け止め、斬り裂いた。

「グヒヒヒヒ！ バカめえ！」

「父さん！」

「輝っ！」

あいつ、何を考えてこんなカミカゼ特攻を!？

流星の龍が破壊された衝撃が輝へと突き進み――

「罨発動！

『集いし願い』！」

「何い!？」

集いし願い（アニメ効果）

【通常畏】

自分フィールド上に表側表示で存在する「シューティング・スター・ドラゴン」が戦闘を行う場合、そのダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージを0にする。

そして「シューティング・スター・ドラゴン」が戦闘によって破壊された時、自分の墓地からシンクロモンスターカードによって決められたシンクロ素材をゲームから除外し、「スターダスト・ドラゴン」1体をシンクロ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は、自分の墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスター1体の攻撃力の合計分アップする。

さらに、自分の墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻す事で、相手モンスター1体を選択し「スターダスト・ドラゴン」と戦闘を行う。

「このカードは『シューティング・スター・ドラゴン』がバトルで破壊される時に受ける





「だ、だが、お前らの墓地にはドラゴン族のシンクロモンスターは2体しかいねえ！ 攻撃力は対して上がらねえ！ 更に『シューティング・スター・ドラゴン』を戦闘で破壊したからカウンターを追加だ！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 18↓22

確かに。墓地にいるシンクロモンスターは7体。だが、奈美ちゃんの『スターダスト・ドラゴン』と輝の『シューティング・スター・ドラゴン』以外、全てドラゴン族では無い。

だが、輝はそれに対し、不敵にニヤリと笑った。

「それは、どうでしょうか？」

スターダスト・ドラゴン：ATK 2500↓18400

「ば、バカな!? 一体何が!？」

「私の場のカードを見れば分かる」

「何……? つ、それは!？」

表向きになったカードは、一人の青年の顔の半分が機械となったイラスト。そのカラーリングは、赤。

巡り続ける輪廻を、独りの判断で決める。故にそのカードの名は――

「永続罫、『輪廻独断』です」

その効果は、墓地に存在する全てのモンスターの種族を自分で指定した一種類に変更する、つまりは墓地限定の『DNA改造手術』。

輪廻独断

【永続罫】

永続罫

(1) : 1ターンに1度、種族を1つ宣言して発動できる。

このターン、お互いの墓地のモンスターは宣言した種族になる。

「墓地のシンクロモンスターは『スカー・ウオリアー』、『フォーミュラ・シンクロン』、『ライトニング・ウオリアー』、『スターダスト・ドラゴン』、『A・S チャリオット・ホエール』、『A・S 南海のマーメイド グッピー』、『シューティング・スター・ドラゴン』の合計7体。さあ、行きますよー！」



『P i P i P i ! T A R G E T , L O C K O N ! !』

『A L L R I G H T ! L E T  S T A K E A N A S S O C I A T I O N  
! !』

『……奴が我らを食らうのならば、こちらも食い返すまでだ……!』

『魔の世界に轟く神の力、受けてみよ!』

A・O・J、ジェネクス、ワーム、魔轟神……っ!

『眠りし龍の力、封印を再びかけるのには弱らせる必要がある。絶好の敵がいたな』

『禁断の儀式、奴を滅するのには都合が良いか!』

氷結界にリチュア!

『グガアアアアアアアアアッ!』

『吠えるな、ウルセエ!』

ジュラック、Xーセイバー!

『パウカカカカカッ!』

『愉快そうだな。オレらも行くぜ、出遅れるなよ!』

そしてナチュルにフレムベルまで!

「一撃目! 『スターダスト・ドラゴン』で『七罪士 グラトニー』に攻撃! 響け、

シューティング・ソニック!」

「か、カウンターを取り除くっ！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 22↓21

バシユウツ！ 白銀に輝く閃光を、グラトニーが光る腕で受け止める。

「三撃目！ 『フォーミュラ・シンクロン』をエクストラデッキに戻して攻撃！ 轟け、  
シユータイング・フォーミュラ・ソニック”！」

スターダスト・ドラゴン：ATK 18400↓18200

「まだまだカウンターは残ってるぜえ！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 21↓20

続いて放たれるのはレーシングカーの力を宿した、緑の閃光。これも受け止められ  
る。

「三撃目！ 『グッピー』を戻す！ 鳴り響け、シユータイング・アクア・ソニック”

「！」

「アマいわあー！」

スターダスト・ドラゴン : ATK 18200 ↓ 15600

七罪士 グラトニー : カーニバルカウンター 20 ↓ 19

今度は人魚の力を宿した青い砲撃。

さてグラトニー。何時までお前は笑っていられるかな？

「四撃目！ 『スカー・ウオリアー』をエクストラデツキに戻します！ 貫け、  
”シユー

テイニング・スカル・ソニック”！」

「何度もウゼエんだよおー！」

スターダスト・ドラゴン : ATK 15600 ↓ 13500

七罪士 グラトニー : カーニバルカウンター 19 ↓ 18

更に続く閃光の咆哮。灰色に輝く一撃を、グラトニーは輝く爪で防ぐ。

後、18発！

「五撃目！ 『チャリオット・ホエール』を戻す！ ぶち抜け、  
 シューティング・マリ  
 ン・ソニック！」

「このガキ、調子に乗りやがってえ！」

スターダスト・ドラゴン：ATK 13500 ↓ 10700

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 18 ↓ 17

群青色の衝撃波も防がれる。

残り17回！

「六撃目！ 『ライトニング・ウォリアー』をエクストラデッキに戻して攻撃！ 煌めけ、  
 シューティング・サンダー・ソニック！」

「ぬうううっ！」

スターダスト・ドラゴン：ATK 10700 ↓ 8300

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 17 ↓ 16

黄金色の攻撃も防がれる。



残り16!

「七撃目! 『シューティング・スター・ドラゴン』を戻して攻撃! 輝け、  
シューティング・ミラーージュ・ソニック!」

「小賢しいつってんだよ!」

スターダスト・ドラゴン : ATK 8300 ↓ 5000

七罪士 グラトニー : カーニバルカウンター 16 ↓ 15

輝く一撃も防御される。

後15回!

「グヒヒヒヒッ、これ以上攻撃できねえだろ? 残った『スターダスト・ドラゴン』を戻しちまったら攻撃力は2500になっちまうからなあ!」

「クッ!」

グラトニーの指摘に歯を軋ませる輝。

確かに、その通り。だがな!

「これ以上攻撃する事はできね「速攻魔法!」エ!?!」

「『イージーチューニング!』墓地のチューナーを1体除外し、その攻撃力分モンス

タワー1体を強化する！ 桜っ！」

『問題無い。私の意思は既にこの『オーシャン・チェリー』に移っている！ 存分にやっ  
てくれ！』

「よし来た！ 墓地の『L・S レストア・チェリー』をゲームから除外し、1800ポ  
イント『スターダスト・ドラゴン』の攻撃力をアップさせる！」

イージーチューニング

【速攻魔法】

自分の墓地に存在するチューナー1体をゲームから除外して発動する。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は、発動時にゲーム  
から除外したチューナーの攻撃力分アップする。

「『受け取れえ！』」

「受け取りました！」

スターダスト・ドラゴン：ATK 5000 ↓ 6800

『キユオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

半透明の騎士装束の桜が、星屑の龍の内側へとその姿を同化させる。全身に桃色のオーラを纏った『スターダスト・ドラゴン』は、溢れ出る力を証明するかの様に雄叫びをあげた。

「輝！」

「はい！ 七撃目！ 奈美の『スターダスト・ドラゴン』をエクストラデツキに戻し、私の『スターダスト・ドラゴン』で『七罪士 グラトニー』を攻撃！ 行きますよ、皆さん！」

キユイイイイイイイイイイイイイイイイン！ とエネルギーが集まる。そこには様々な精霊のエネルギーが密集し、虹色に輝く光の球体が生まれていた。

「響き渡れ！ 龍<sup>シューティング・ソウルフルバースト・ソニック</sup>星精霊一斉爆裂波！！」

「ぬがあああああああああああああああああああああああああつ！」

スターダスト・ドラゴン：ATK 6800 ↓ 4300

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 15 ↓ 14

攻撃をこれまで耐えきっていたグラトニーだったが、この一撃は流石に響いたのか、十メートル程後ろまで吹き飛んでいった。

残り、14個。

「私はこれでターンエンド！ 『輪廻独断』の効果は終了、墓地のモンスターは元に戻ります！」

輝：LP 500

手札：0枚

フィールド

：スターダスト・ドラゴン（ATK 4300）

：輪廻独断（永続罫）

凄いな、輝。

僅か1ターンで7つもカウンターを減らした。途中で4つ増えた事を差し引いても、十分過ぎる。

奈美ちゃんが「あのカード」を引いてくれれば、勝利は確実。

だが、グラトニーの墓地にはカードがあるし、伏せカードだって1枚余っている。油断はできねえな。

「私のターン！」

とは言え、奈美ちゃんがそのカードを引く可能性は残念ながら低いだろう。禁止・制限されていないとは言え、3枚も積みめば確実に事故るカードだからである。

となると、歩のこのターンの行動がカギだ。

さあ、どう動く？ 手札は合計で7枚だ！

「歩の魂の型は『太陽』！ 熱く燃え盛るその姿は可能性の象徴となり、司るのは輝く未来と失敗！ 陽と男性の象徴でもあり、その意味は『明日への希望』！」

「だったら、わたしが皆を希望へ導く！ リバースマジック『アームズ・ホール』、『非常食』、発動！ デツキの1番上のカードを墓地に送り、『アサルト・アーマー』を手札に加える！ そして『アームズ・ホール』をコストにライフを1000ポイント回復する！」

2回攻撃カードをサーチしたか。これで手札は8枚、ライフも微量だが回復できた。

歩：LP 200↓1200

「マジックカード『二重融合』！ ライフを500払い、融合召喚を2度行う！ く……！」

歩：LP 1200↓700

「母さん！」

「歩！」

「大丈夫、ちゃんと回復したから、ちよつと圧迫感を感じたくらいだよ」

辛そうな表情を浮かべる歩を心配する輝。歩は強気に返すが、どう見ても空元気にか見えない。

「つたく、あのバカ。いくら回復できるとは言え……！」

「ふ、ふふ……。黎だつて、ライフが50しか残っていないよ……」

「俺は特別な体を持つているからこの程度どうという事は無い！ だがお前は違う！ お前は普通の人間だろう!？」

「そんな、脂汗流してる人が言つても、説得力、無いよ……っ！ それに、まだライフは十分残ってるっ！」

「そ、それはそうだが……。」

「1回目の融合！ 手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合！

現れろっ、疾風に轟く紅の業火の英雄！ 『E・HERO フレイム・ウイングマン』  
！」

E・HERO フレイム・ウイングマン（融合・効果モンスター）

星6

風属性／戦士族

ATK 2100／DEF 1200

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO バーストレディ」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

次元の渦が捻じれ、翼を持つ緑の英雄と赤いスーツを着た炎の女英雄が捻じれて一つに重なる。

大きな左の翼を持ち、赤い龍の頭を右の手に持つ、十代の永遠のフェイバリットが現れる。緑の体に黒い体毛を持つが、右肩から先だけは龍の頭と同じ様に赤い。

E・HERO フレイム・ウイングマン：ATK 2100

「そして2回目の融合！ 場の『フレイム・ウイングマン』と手札の『スパークマン』を融合！

白銀に輝き轟け！ 風と炎を纏いし雷の大英雄にて、最強の光の使徒よ！ 『E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン』！」

『はああああああ、ハアアツ！』

再び捻じれる次元の渦。風が荒れ、炎が燃え盛り、雷が轟く中、更なる進化を『フレイム・ウイングマン』が遂げて場に現れる。

白く輝く鎧で全身を覆い、鎧そのものも発光している。大きな翼を広げ、マスクによつて隠れた視線で敵を射竦める。自分の墓地の『E・HERO』の数だけ強くなる、終盤で活躍しやすいフィニッシュャー系統のアタッカーだ。

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン：ATK 2500

「十代以外で正規融合でこいつを出すとはな、恐れ入るよ、歩」



「そりゃ、どうも……っ」

本来、こいつは『ミラクル・フュージョン』か『スパークマン』＋融合素材代用モンスターで出すモンなんだが……。

歩の声も好い加減に辛そうだ。決着をつけないと、危険だな。

「『シャイニング・フレア・ウィングマン』はわたしの墓地の『E・HERO』1対につき300ポイント、攻撃力がアップする！ わたしの墓地に存在するヒーローは『エアーマン』、『エッジマン』、『ワイルドマン』、『シャドー・ミスト』、『リキッドマン』、『クレイマン』、『アブソルートZero』、『Wake Up Your E・HERO』、『フェザーマン』、『バーストレディ』、『スパークマン』、『フレイム・ウィングマン』の12体！ よって攻撃力は3600ポイントアップする！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン：ATK 2500↓6100

「こ、攻撃力6100だと!?!」

「まだまだ！ 装備魔法『アサルト・アーマー』を発動！ このカードは自分の場に戦士族モンスターが1体のみ存在する時のみ発動できる！ 攻撃力を300ポイントアップさせる！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン：ATK 6100↓6400

光り輝く英雄の体に、狂気の混ざったオーラが纏われる。

上昇値はたった300だが、このカードの真骨頂はそこでは無い！

「更に装備魔法とは……！　だ、だが僅か300ポイント程度だ！　それにおいらの力ウンターはまだ14個も残っている！　まだやられはしねえ！」

「更に装備されたこのカードを墓地に送る事で、装備モンスターはこのターン2回攻撃ができる！　『アサルト・アーマー』、解除！」

「何だとお!？」

アサルト・アーマー

### 【装備魔法】

自分フィールド上に存在するモンスターが戦士族モンスター1体のみの場合、そのモンスターに装備する事ができる。

装備モンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

装備されているこのカードを墓地へ送る事で、このターン装備モンスターは1度のバ

トルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

カードが光となって消え、オーラが消失する。しかし、光の英雄の両手には2発分の攻撃用のエネルギー体のスフィアがチャージされていた。

この効果は墓地に送った後にモンスターを増やしても問題無いという利点があるのがお得だ。

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン：ATK 6400↓6100

「バトル！ 『シャイニング・フレア・ウィングマン』でグラトニーに攻撃！ // シャイニング・シユート”2連打ア！」

「ぐ、ぐおおおおおおおおお！ 『ミラー油』を墓地に送り、カウンターを4つ追加！ そしてカウンターを取り除き破壊を無効にするう！」

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 14↓18↓16

ドゴオンドゴオン！ と光の砲撃が着弾し、グラトニーのカウンターを削る。

ダメージがそろそろ限界なのか、グラトニーの右の鉤爪に罅が入った。

「レエエイツ！」

「おう！ トラップ発動、『瀑流突破』！ このターン、モンスターを戦闘で破壊できなかった時、墓地の水属性モンスター3体を除外し、更に2回の攻撃回数を追加する！ ただしそのモンスターのコントローラーは600のダメージを受けねばならない！

俺は墓地から『デイバイダー・シユリンプ』と『グッピー』、『ギンガム』を除外！」

「ぐうううう……！」

「俺が発動しておいて何だが、お前……！」

「大丈夫、ライフは……、残るから！ ダメージを受けた事でフィールド魔法の効果により、手札を2枚捨てる！ わたしは『プリズマー』と『ブレイズマン』を墓地へ！ これにより更に600ポイント攻撃力アップ！」

歩：LP 700↓100

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン：ATK 6100↓6700

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン（融合・効果モンスター）

光属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 2100

「E・HERO フレイム・ウイングマン」＋「E・HERO スパークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「E・HERO」と名のついたカード1枚につき300ポイントアップする。

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

瀑流突破（オリジナル）

【通常罫】

(1) : 自分フィールドに水属性モンスターが存在し、相手モンスターを戦闘によって破壊できなかった時に発動できる。

自分の墓地からレベルの異なる水属性モンスターを3体除外し、攻撃を行ったモンスターに以下の効果のどちらかを適用する。

● 攻撃力を2倍にし、もう1度だけ攻撃できる。

この戦闘で発生するダメージは回復として扱う。

●自分は600ダメージを受け、続けて2回攻撃できる。

相手のカードを逆手に、攻撃力を上げる。確かにこれは強力だ。

だが……。

「お前、いくらライフが残るからって！」

「死にたく、ないから」

！

「わたしには、未来で待つてる赤ちゃんがいる！ 未来で好きな人と家庭を築く日々がある！ ここで死ぬ気でやらなくて、いつ死ぬ気でやるつてのよ！ わたしの全身全霊でコイツを倒せるのなら、魂の全てを燃やしてでもブツ倒す！」

……凄い覚悟だ。

これが、母親……。

「受け取れわたしの覚悟を！ “シャイニング・ハイバーシユート” オオオオ！」  
「カウンターを取り除き、破壊とダメージを無効にするう！」

連続で降り注ぐ光弾。それが敵の残機を確実に削り取り、決していく。まるで闇を光で浄化するかのよう、日光によって夜から昼へと明るさを取り戻すように。

七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 16↓14

「はあ、はあ……、わたしにできる事はこれで終わり！ ターンエンド！」

歩：LP 100

手札：1枚

フィールド

：E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン（ATK 6700）

：魔法・罫無し

【BGM：c h A n g e】

「私のターン！」

「ぐううう、何故だあ！」

「え？」

苦しげに、憎々しげにグラトニーが唸る。

何故？ 何がだ？

「何故お前らは希望を失わない！ あの絶望的な状況の中で！ 普通ならばサレンダーを考える様な状況だったはずだ！」

絶望しないで何故光ばかりを見られる！ 闇の存在を知っていながら何故！ 何故敗北を考えない！ 希望を何故捨てない！ 挫折しないのは何故だ！」

吠えるグラトニー。

それはエンヴィーの様なその場凌ぎの策では無く、本当に疑問で仕方が無いといった様子だった。

確かに、普通の人間なら、絶望的なあの状況、解決策を思いつくという事すら思い浮かばず、膝を折っていただろう。疑問に思うのももつともだ。

それに誰よりも先に答えたのは、最年少である奈美ちゃんだった。

「そんなの、簡単だよ」

「何……？」

「未来があるからだよ」

未来？

「今は絶望。でも、未来もそうだとは限らない。それにデツキだつて残っている」

「デツキだと……？」



「うん。デツキの中には自分で組んだ、信頼できるカード達がいる。そしてそこから無限の可能性が広がっている。自分でも思いもよらないコンボが生まれたり、考えもしなかった新しい突破口が見つかったりする。

だから、デツキがある限り、私達は絶対に諦めないんだよ」

その言葉を受けて俺は、そして輝と歩も、ディスクに収まっている自分のデツキを見た。

まったく、こんな年下の少女に教わるとは、俺は腑抜けていたらしいな。

無限の可能性は良い方にも悪い方にも向いている。だからこそ、人は良い方へと未来を動かすために戦う。

俺もまた、闇の中から針の穴程の光を見出そうと戦っていた身だったのに。温かい学園生活の中で、それを忘れていたか。

情けねえ……。

「希望が、まだあるってのか!」

「そうだよ。魔法カード『埋葬呪文の宝札』、発動! 墓地の『リロード』、『エヴオリューション・バースト』、『地砕き』をゲームから除外し、カードを2枚ドロ―!」

ピ、ピ、ピ、とカードが3枚、墓地から吐き出される。

「ここで、何を引くんのだ?」

頼むぞ、ここで引けなければ、グラトニーのターンで反撃されて、確実に敗北する！  
「ドローー！」

頼む、キーカード、来てくれ！

「奈美ちゃんの魂の型は『流れ星』！ 儂く夜空を散るその姿は願いの道標となる！」

その意味は『無現の可能性』！」

「可能性はどこまでも広がる！ その証左を今示す！ 魔法カード『サイバー・ダーク・インパクト！』を発動！」

「このタイミングでだどど！」

「自分の手札、場、墓地からホーンくん、エツジちゃん、キールくんをデッキに戻し、

『がいきりゆう鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン』を融合召喚する！」

サイバー・ダーク・インパクト！

【通常魔法】

自分の手札・フィールド上・墓地から、「サイバー・ダーク・ホーン」「サイバー・ダーク・エツジ」「サイバー・ダーク・キール」をそれぞれ1枚ずつデッキに戻し、「鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン」1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

「さあ、行くよお！」

『グオオオオオツ！』

『ガアアアアツ！』

『ギキイイイッ！』

墓地から光が発せられ、3体の“サイバー・ダーク”がその姿を現す。

ホーンが角を持った頭に、エッジが刃の羽を持った胴体に、キールが頭から尻尾までを貫く背骨になり、その姿は3つの黒が入り混じった漆黒の巨龍となった。

その黒い口から、世界を砕くような咆哮が漏れ出る。

『ウヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！』

鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン（融合・効果モンスター）

星8

闇属性／機械族

ATK 1000 / DEF 1000

「サイバー・ダーク・ホーン」＋「サイバー・ダーク・エッジ」＋「サイバー・ダーク・キール」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。

このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

また、このカードの攻撃力はフィールド上に存在する限り、自分の墓地のモンスターの数×100ポイントアップする。

このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン：ATK 1000

『サイバー・ダーク・ドラゴン』さんの効果発動！ 墓地のドラゴン族モンスターを1体装備できる！ 私は『フュージョン・ガード』の効果で墓地に送られた『F・G・D』を選択して装備する！」

地面に現れる紫の魔法陣。その中心の暗闇から、5つの属性を従えた首を持つ黄色いドラゴンが現れる。

漆黒の巨龍はアームを伸ばしてそのドラゴンを装備しようとするが、サイズは『F・G・D』の方が上なので上手くいかない。仕方無しに『F・G・D』は屈み、首の1つにアームを伸ばしてホールドする事で両者は落ち着いた。

鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン：ATK 10000↓6000

「更に攻撃力は墓地のモンスター1体につき100ポイントアップする！ 私達の墓地のモンスターの数は49体！ よって攻撃力は4900ポイントアップ！」

鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン：ATK 60000↓10900

「こ、攻撃力10900だとお!？」

「凄……まさか『サイバー・ダーク・ドラゴン』の攻撃力がここまで上昇するとは!」

「ぐ、グウ……(高い攻撃力なんざ目じゃねえ。カーニバルカウンターを1つ取り除いてダメージも破壊も無効にできるし、おいらの効果で墓地に送れる。だが、問題は……」

—— 永続暴発動！ 『デモンズ・チェーン』！

—— そしてモンスター効果が無効になったため、カウンターも取り除かれる！

効果を無効にするカードがあいつらの場や手札にあつた場合だ。カウンターが無くなれば、負ける！」

ギリリ、とグラトニーが歯軋りする。

それを見て奈美ちゃんは手札の1枚を手にし、ニヤリと笑った。

「さあ、わたしのバトルフェイズ——」

「！(間違いねえ！ あいつの残った手札は『禁じられた聖杯』！ 効果を無効にされたらおいらの負けだ！」

お、おとおおおおつ！ 墓地の『キャラメルラー』の効果が発動！ このカードと墓地のモンスターを2体ゲームから除外し、自分の場に存在する最も攻撃力が高いモンスターの攻撃力より上の攻撃力を持つ相手の場に存在するモンスターを1体選択！ 選択したモンスターを墓地に送る！」

キャラメルラー（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

閻属性／魔法使い族

ATK 1000 / DEF 200

(1) : 自分・相手ターンのメインフェイズに、このカードを含めたモンスター3体を墓地から除外して発動する。

相手の場に存在する、攻撃力が自分の場の最も高いモンスターの攻撃力よりも高いモンスター1体を墓地に送る。

「このカードと墓地の『ハングリーバーガー』、『キラートマト』をゲームから除外!

これで『サイバー・ダーク・ドラゴン』は墓地行きだあ!」

『ウヴオオオオオオオオオオオオツ!?!』

『サイバー・ダーク・ドラゴン』さんっ!」

ドロリ、と溶け出したキャラメルに呑み込まれ、漆黒の巨龍は地の底へその巨軀を鎮める。

クソ……。奈美ちゃんの残った手札は『禁じられた聖杯』の様なカウンター対策用のカードの可能性が高い。これじゃ「ふふふ……」あ?

「かかったね、グラトニー?」

「何……?」

「アンタはまんまと私のブラフに引つかかったって言ったんだよ。『サイバー・ダーク・ドラゴン』さんは最初から罠なんだよ」

「何、だと……う？」

『サイバー・ダーク・ドラゴン』が、罠……!？」

ニヤリ、と笑った奈美ちゃんは手札のカードを一枚、グラトニーに見せる。

見せたそのカードは——

「お、『オーバーロード・フュージョン』だとお!？」

オーバーロード・フュージョン

【通常魔法】

(1)：自分のフィールド・墓地から、

機械族・闇属性の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを除  
外し、

その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

正直、賭けだった。そう奈美ちゃんは言った。

「まあ、もしもあのハツタリに乗ってくれなかったとしても、このカードを発動させてい



たけどね。でもこれで、アンタの墓地の正体不明のカードは全部ハッキリした！ これ  
で心おきなく発動できる！

魔法カード、『オーバードロード・フュージョン』、発動おっ！」

ディスクがカードを読み込み、墓地のカードが連続で吐き出される。

今、素材にできるモンスターは——

『サイバー・ドラゴン』

『サイバー・ドラゴン』

『サイバー・ドラゴン』

『沼地の魔神王』

『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』

『カード・ガンナー』

『ボルト・ヘッジホッグ』

『ブラック・ボンバー』

『プロト・サイバー・ドラゴン』

『鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン』



無数の龍の首を従えた機械の巨体が現れる。首が次から次へと生まれ、中には首から首という中々に不気味な状態にもなっている。

金色に輝く瞳は爛々と輝いており、グラトニーに50対、100の瞳が向けられる。

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』さんの効果で、このカード以外の私の場のカードを墓地に送る！そして『キメラテック・オーバー・ドラゴン』さんの攻撃力と守備力は融合素材となったモンスターの数×800ポイントになる！』

キメラテック・オーバー・ドラゴン（融合・効果モンスター）

星9

闇属性／機械族

ATK ? / DEF ?

「サイバー・ドラゴン」＋機械族モンスター1体以上

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードが融合召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上に存在するカードを全て墓地へ送る。

このカードの元々の攻撃力・守備力は、このカードの融合素材としたモンスターの数

×800ポイントになる。

このカードは融合素材としたモンスターの数だけ相手モンスターを攻撃する事ができる。

「よって数値は——」

キメラテック・オーバー・ドラゴン：ATK ? ↓40000 / DEF ? ↓40000

「こ、攻撃力40000だとお!？」

「そして素材の数だけ相手に攻撃できる! よって攻撃回数は50回! 行つくよお!」

「ぐっ!」

「エヴォリユーション・リザルト・バースト!」

無数の首の中から3つがグラトニーに照準を合わせる。膨大なエネルギーの籠ったエネルギー粒子砲が放たれ——

「カウンター毘発動! 『キャピアルマゲドン』!」

「な!？」

「ここでカウンター毘!？」

「相手が攻撃宣言を行った時、相手の場のモンスターを全て除外し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与えるう！」

キャビアルマゲドン（オリジナル）

【カウンター毘】

自分のライフポイントが2000以下の時にのみ発動できる。

相手の攻撃宣言時、相手の場に存在するモンスターを全てゲームから除外し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

「この勝負、おいらの勝ちだあ！」

「そ、そんなっ!？」

空中に無数に浮く爆弾。攻撃によってそれは次から次へと爆発し、その爆発は俺達の場のモンスターをも巻き込む威力を持ち――





「カウンター罨発動！ 『神の宣告』！」  
「なんだとお!?!」

### 神の宣告

【カウンター罨】

ライフポイントを半分払って発動する。

魔法・罨カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する。



「自分のライフを半分払って、『キャピアルマゲドン』の発動を無効にし、破壊する！」

黎：LP 50↓25

その爆風は天空から降り注いだ神の雷によって、防がれ消失した。

だが、その代償は、俺のライフの半分。

「あが、グブツ!？」

ビギシベキツ、と骨が何本か折れた気がする。

血を大量に吐く事にもなった。体中が痛いし、そしてその痛みも鈍く、遠い。

「[[黎(さん)!!]]」

『主殿っ!』

だが、これで勝てる!

勝利の為なら、喜んで踏み台にも捨て駒にもされてやるっ!

「構うな、俺はまだ生きている! 行けえ、奈美ちゃんっ!」

「っ、はい! まず<sup>サアレンダ</sup>は三連打ア!

「ぐおおおおおおおっ!」

3連続で砲撃が直撃。



七罪士 グラトニー：カーニバルカウンター 6↓0

怒涛のエネルギー砲のラッシュがグラトニーを襲う。

カウンターを全て使っても防ぎきれぬ量では無く、全ての防御エネルギーを失ったグラトニーは、その衝撃を余さず全身で受け――

グラトニー：LP 100↓0

ライフを完全に失った。

黎・輝・歩・奈美：WIN

グラトニー：LOSE

【BGM終了】





「グヒヒヒヒ……、まさかおいらが人間に負けるとはな……」

「まだ生きてるのか、しぶといな……！」

全身ボロボロになり息も絶え絶えになりながらも、グラトニーは嘲笑う。

これまでの護衛は敗北後、最早五体満足とは行かなかつたし、1分も持たずに消滅していた。

やはり、こいつは今までの奴とは別格か……っ！

「グヒヒ、そうボロボロの体で身構えるな。安心しろ、もう暴れるだけの力はねえよ」  
ニヒルにグラトニーは笑う。

確かに、既に左腕が粒子になり始めていて、消滅が始まっているのが分かる。

「だが、一つ聞かせろ、女顔」

「何でしよう？」

「何故だ？ 4人の中でお前が最初に死と敗北を撥ね退けた。あの絶望的な状況で、何故死を受け入れず、抗う事を決めた？ それが不可解だ」

言われていれば確かに。

ボロボロのあの状況で、あいつが一番先に希望を取り戻した。

俺だってあの状況で逆転の手を思い浮かぶ事はできなかった。

「それは簡単な話だ。私には守るものがあるから」

「ぬ？」

「守りたい好きな人がいる。大切な娘がいる。今も未来も、私は貪欲なまでに欲しいと思っている。確約されている幸せがあると知っている。だから、こんなところで死にたくなかった」

たったそれだけ、そう言って輝は笑った。

グラトニーは納得したかの様に、そうか。と笑った。

俺は、それが少しだけ羨ましかった。

好きな人は、俺にはいない。

都を取り戻したいけど、きつと俺はその過程で死ぬ。死ななくても重傷を負うだろう。化物のこの体でも、どうしようも無いくらい酷い怪我を。

今だって……。

いや、止めておこう。

ウジウジ考える時じゃ無い。

「守りたいもの、か」

「ええ」

「ハッ、人間ってのは面白えなあ。たつたそれだけで強くなつて、力の差を覆す。つた、最後は油断したつもりは、無かつたんだがなあ……」

はあ、とグラトニーは嘆息する。

本当に悔しいと思つているのかも知れない。邪神のためじゃ無く、自分のために。

「ま、負けたモンはしゃあねえか……。強いおいらに勝つた褒美に、良い事を2つ、教えてやる……」

「良い事？」



「おう……。まず一つ。邪神様の復活は予定より大幅に、遅れている。お前が護衛を倒すスピードが、想定よりも、速いからな」

「って事は、このまま順調に行けば……。」

「ああ、復活前にお前は姫、義妹に会えるだろうよ」

「そしてもう一つ、とグラトニーが前置きする。」

「おいら達、護衛に、も、ランクが、存在する……。上級と下級の二つに、それぞれ分かれていて……。当然、上級護衛は、下級護衛よりも強い……」

「グラトニーの話では、これまで俺が倒した3人は下級、グラトニー自身は上級らしい。上級は3人、下級は4人おり、そしてその二つのランクの中でも強弱が分かれる。」

「エンヴィー、スロウス、プライドの順番に、ランクは下がる……。つまりお前が倒した3人は、弱い方だったつーワケだ……」

「あれで、弱い方かよ……。」

「グヒヒヒ、おいら自身は、上級護衛の中で強さは丁度、真ん中……。つまり、残った護衛の内2人は、おいらよりも弱い事に、なる……」

「確かに。護衛は残り3人。こいつの話を鵜呑みにするんだったら、下級1人に上級2人。グラトニーは上級で上から2番目だから、3人中2人はこいつより弱い。」

「当然、人間に容易くやられる程弱くはねえがな。だが、ぶつちやけその2人なんざどう

でもいい」

「本題は他にあると?」

「ああ。気をつけるべきなのは上級護衛最強、6人の他の護衛を統べる護衛のリーダーだ。奴の実力はおいら達とは別格。文字通り桁が違う」

「桁違い!?! グラトニー程の実力者を以てこう言わせるのか!?!」

「グヒヒヒヒ、気をつけろよ?」

「……何故、こんな事を俺達に教える? お前に何のメリットがある?」

「あん? 別にねえよ。おいらは『暴食』のグラトニー。腹一杯食えりや誰の元であろうともいいのサ」

こいつは、今までの奴らとは本当に別格だな……。

ああそうだ、とグラトニーは何かを思い出したかのように輝に視線を向けた。

その体はもう半分以上朽ちている。

「女顔、お前、何て……、名前だ?」

「……朝倉 輝」

「アサクラヒカル……、覚えてぜ……。なあ……、ヒカル」

「何でしょう?」

「今度、会う機会が、あったら……、正々堂々と、大食い勝負、しよ、う、ぜえ……」

「……私で良ければ、喜んで」

グヒヒヒ、とグラトニーは笑った。

何というか、とても嬉しそうだ。きつと、これが暴食たる理由。食べる事こそ、こいつの全て。故に他の事は眼中に無し。例え邪神の事であろうとも、こいつにとつてはアイデンティティと天秤にかけるまでも無いのかも知れない。

モロツ、と体が崩れた。

「ああ、もう時間か……。ふう、護衛は最期にこれ言わなきたいけねえんだよ……。邪神様、万歳」

そう言つてグラトニーの姿は真っ黒な塵に変わった。

『大食い勝負、約束だぜ?』

そんなグラトニーの言葉が、聞こえた気がした。

「ゼエ、ゼエ、ゼエ……、グツ……、ウツ！」

『だから言っただろう、無茶し過ぎだよ！』

グラトニーとの戦いが終わり、現在俺は中々の重傷。蓄積したダメージを今桜に治療してもらっている。桜、骨身に響くからもう少し静かに……。

「黎、これを」

「これは……？」

輝が差し出したのは大きめの瓶。

中には琥珀色の液体が入っている。

「冷蔵庫に貯蔵してあった滋養強壯の効果のある酒です。これで少しはマシになるでしょう」

「……一応未成年なんだが？」

「貴方には関係の無い話でしょう、二重の意味で」

ふ、そりゃ転生前の年齢とこの特異な体の事か？

取り敢えず無いよりマシな感じで口に含む。

「んぐ、んぐ……うっ！ んぐ……」

『主殿、今吐きかけたな？ しかも味覚では無く胃袋の問題でだ』

「(ギク!) まさか、そんなワケねえだろ？」

『誤魔化すな、分らないでか！ 胃が物を受け付けない程にダメージを負っているのだろぅ!? そんなの常人ならば命を落としているレベルだ！ もう少し自分の体を気遣え！』

しかし、そうは言ってもなあ……。

『闇のゲームで残りライフ50の状況で、『神の宣告』を使う愚か者がどこにいる！』

「だが……、あそこで使わなければ、全員、負けていた……」

『『神の宣告』を入れる事そのものが間違っていると云っているのだ！』

うがぁ……、だって使い勝手良いんだもん……。

『自重しろ!』

「ごめんなさい……」

いやマジで。

「まあまあ、桜さん、勝ったんですから、その辺で」

『しかしだな……』

「過ぎた事だよ。わたし達は実際、あの『神の宣告』が無ければ全滅してたんだし」  
「実際、あの連続攻撃に気づけたのは黎さんのセリフのお陰だし」

——『1度の攻撃が通じないのならば、死ぬまで殺し続けるまでだ』

あそこから皆気が付いたのか。

まさか、深く考えずに言ったあのセリフが、突破口になるとはね。

輝、歩、奈美ちゃんに説得されたのか、桜は不承不承、渋々といった感じで怒りを収めた。

『はあ、そこまで言うのならば仕方が無いな。良いだろう、今回はこれで終わりだ』

本当に、彼女には世話になる。

「私達は以前、世界の崩壊と戦いました。そして今もまた。前はアカデミアの仲間、今回は貴方に支えられました」

「？」

唐突に輝が語り出した。もつとも、彼が何を言いたいのかまったく分からないのだが。

「二人で戦っているような時でも、人は様々な人に支えられている。忘れないで下さい、貴方は、一人では無い」

「輝の言う通りだよ。君が倒れたら悲しむ人はいるんだよ」

「うん、自分を捨てる様なデュエルはしちやダメだよ」

お前ら……。

つたく、心配性どもが……。

俺が死んだって悲しむ物好きがいるのかよ。

例えいたとしても、そんなの時間が解決するだろうよ。

何十年も一個人の死を引き摺る事なんて誰にもできないんだからよ。

でも、今の悲しみを無視しても良いってワケじゃねえもんな。

「分かったよ、少しは自愛するさ」

「少し、では無くしつかりね」

『治癒も片手間でできるものでは無いのだ。こっちの事も考えてくれ』

苦笑いする俺に、しつかりと釘を刺す輝と桜。

ま、努力ぐらいいはしますかねえ。

「そうそう、写真撮らないか？」

「やらないか？」

「違う、撮らないか、だ」

歩のボケに突つ込む。

俺はノンケだ。

「PDAで写真を撮るんだよ。これなら、俺達が会った証拠が、残る」

「ふふ、妙案ですね」

「賛成！」

「お〜！」

ピピツ、パシヤ！ 軽快な音と共に画像が1つ追加される。

そこには、幸せそうな三人家族とその友人が、そして数え切れない程の精霊が写つていたのであった。

ここで戦つた証明はここにあり、心にある。

誰にも見えないものだからこそ、その信頼は絶大。絆を証明する事は誰にもできない事だからこそ、その繋がりには強固。

無限の時ですら侵す事叶わぬ、絶対にして確固たるそれは、人の力を何倍にも引き上



げる。

幸せの欠片が、また1つ手に入った気がした。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 55 : 蠢き出した闇

— レッド寮・黎の部屋 PM 16:38

SIDE : 黎

「つまり、墓地に送っておけば利用しやすくなる。尤も、その分相手にも利用する機会を与えてしまうし、デッキのカードを対象にするカードの範囲から外れてしまうが。だがそれを——」

「それをどうするかがデュエリストとしての腕の見せ所、でしょ?」

「正解」

グラトニー戦終了後、俺は傷ついた体を癒すため、部屋で休んでいた。

本当は授業に出たかったんだが……。

フィオ『その怪我で授業に出られるか! 休め!』

十代『休めよ……』

翔『今日はお休みにした方が良いと思うツスよ?』

フレイ『お休みする事を強く推奨しますよ……』

明日香『もう少し自分の体を労わったら?』

大地『いや、部屋で寝てろ……』

隼人『今日はゆっくりしていると良いんだな』

ジュンコ『アンタ休憩って言葉知ってる?』

ももえ『……ご養生した方がよろしいかと』

康彦『寝てた方が良いと思うよ?』

雪乃『坊や、無茶するのは別に大人じゃないわよ……』

麗華『寝てなさい!』

彰子『はうつ?! 怖いですよ!』

ツアン『いや流石のボクでも心配するよ、その姿は!』

友紀『あく、鮎川先生呼ばっか?』

神楽坂『お前、大丈夫か? 色々と』

とまあ、皆に心配された。

それでも授業に出たんだが、1時限目のクロノス先生、2時限目の大徳寺先生に続けて同じ事を言われたので、夕方まで仕方無く部屋で横になっていた次第だ。

クロノス『休むのゝネ!』

大徳寺『今日は欠席した方が良いと思うニヤ〜』

うーん、そんなに俺の姿は変か?

いつも通りの制服姿だったんだが。ゼアルのキャットちゃん回の遊馬みたいな変なカッコはしてないぞ。

「お前、自覚無いのか?」

「何が?」

大地が半眼で俺を見るが……、特に思い当たる所は無いなあ。

「……お前今ミイラだぞ?」

「だから?」

「……………」

ミイラ、と言われても顔の半分とほぼ全身に包帯を巻いているだけなんだが。

「それは十分ミイラなんだな……」

「はあ……?」

だから何だと言った感じなんだが?

「……黎くん、もしかして転生する前って、包帯だらけだったツスか?」

「んー、まあよくお世話になったな」

「……納得ツス」

「同じくなんだな」

何か、おかしいのだろうか?

『主殿…… (ホロリ)』

『クリリ (ホロリ)』

桜と『ハネクリボー』が何故か、泣いていた。

……俺にとつちや包帯は馴染みのある服みたいなモンなんだがな。

—— 異世界・廃墟の時計塔下

SIDE : 無し

そこは、誰もいない町。人がいた形跡はあつても、人影一つ無いゴーストタウン。その町の古びて動かなくなつた時計塔の下に、一人の男がいた。

「ふう、数年前に戦争で滅んだ町。まだ色濃く負の想念が残っている所を見ると、相当激しい戦いだったようですね」

ま、復活には好都合ですが。と男は笑う。

黒いテンガロンハットに黒いマント。上着もズボンも髪も目も黒という全身真っ黒な男だ。序に腰に佩いている二本の剣も黒い。

邪神の護衛にて、最初に黎に葬られた“傲慢”の罪を持つ男、プライドだ。

そんな彼の後ろで一人の男が、時計塔にもたれかかっている。

「さて、私に感謝の一つも寄越さないのは別に構いません。その程度で逐一目くじらを立てては時間の無駄ですからね」

「フン……」

そつぽを向いて鼻を鳴らす男。

漆黒のボサボサの髪に黒いタンクトップ。骨が浮き出て肉が全く無いようにも見える瘦せぎすの男。醜い驚鼻を持ち、傍らには身の丈を超える黒い槍が立てかけてある。

「で、エンヴィー、生き返つた感想はどうです?」

「ハッ、これで借りをきつちり返せるね」

八重歯をギリりと覗かせる痩せた男、*“嫉妬”*の罪を持つエンヴィー。

その傍らでは身長3メートルを超える大男が鼻提灯を膨らませながら眠っている。筋骨隆々でこちらもタンクトップを着用している。

「ゴガアアア……、ゴオオオオ……」

「相変わらず寝てばかりですね……」

プライドがジト目で睨むも、爆睡している本人は気付かない。

*“怠惰”*の罪を持つスロウスである。

「グヒヒヒヒヒ、まあそれがおいら達じゃねえの?」

「まあ、それを言われれば反論できませんがね」

その横で金属製の机を椅子代わりにして座るのは大きく腹の出た男。スロウス程の巨大さは無いが、それでも2メートル以上ある。

真っ白な健康的な歯を見せて笑う男、*“暴食”*の罪を持つグラトニー。消滅の直前で黎達にヒントを与えて消え去った、4人の中での唯一の上級護衛だ。

それはそうと、とプライドがグラトニーを睨む。

「グラトニー、どういう料簡です? あの男に対して有利な情報を与えるなどと、我らが主、邪神様への背徳行為に他なりませんね」

「あーそうそう、僕もそれが聞きたかったんだよ! お前、どういふつもりだよっ!」

睨むプライドと怒鳴るエンヴィーを、グラトニーはしかし鼻で笑う。

「ハン、おいら達護衛が何をどうしようと思われはしない。それが例え邪神本人やリーダーでもだ。

元々おいら達は人間の感情の塊。だからこそネガティブな感情が凝り固まり沈殿しているこの町が復活に適していた。そうこの場所を教えたのはおいらだぜ、プライド？」

「論旨を摩り替えないで頂きたいですね！ 第一、様はどうしましたか！」

「別に摩り替えてはいねえし、もう様付けする必要も無えよ。——負の想念は人の身勝手な感情だ。『アレがしたい』、『ソレは厭だ』、『コレが欲しい』……。そんな感情で作られたおいら達は、勿論身勝手だ。それを理解しているからこそ、おいら達は『邪神様の復活』を目標に行動する以外、邪神から何一つとして制限を受けねえ」

「グ……ッ」

「解るか？ 要するに邪神に直接刃向いでもしねえ限り、おいら達は何しようも勝手なのサ。おいらは『暴食』のグラトニー。食えるんだったら、誰の下でも良い」

要件は済んだとばかりにグラトニーは大きな欠伸をする。

プライドとエンヴィーは言い返したいが、グラトニーの言う事は正論。上手い切り返しが思いつかない。



ちなみにスロウスは未だ大きなびきをかきながら眠っている。

「つーワケで、おいらは適当にさせてもらうぜ。どっかのグルメ世界にでも転移して、邪神復活まで腹ごなしだ。その後は、まあ、野となれ山となれつてな。……ああ、それとあいつとの約束も果たしに行かねえとな」

腹を掻きながら、グラトニーはどこかへ立ち去ろうとする。

止められないプライドとエンヴィーは齒軋りをしてそれを見送る他無く――

「っ!？」

そして咄嗟に振り下ろされた斧を、グラトニーは間一髪で回避した。

「つとと、随分なご挨拶じゃねえか、リーダー?」

シユタツ、と肥満体に似合わない俊敏な動きで間合いを取り、獲物の鉤爪を装備する

グラトニー。

その視線の先には引き締まった体を持つ、リーダーと呼ばれた男がいた。

身長は180センチ前後、スポーツ刈りの黒髪に、肩に身の丈程もある大きな戦斧を担いでいる。

その気迫は周囲を震わせており、足元の砂がビリビリと振動している。

「貴様ら……」

「ヒッ!?!」

「ッ!?!」

「zzzz……、んごお?」

「おう、リーダー、どうした? いつも以上にブチ切れてんじゃねえの」

リーダーの言葉は怒りに満ちた低く重い音だった。

その噴き出した怒気に後退るプライドとエンヴィー、眠りから覚めたスロウス。それに対しグラトニーはあまり動じていない。ここが上級か下級かの違いなのだろう。

「いつも以上に、か。当然だな」

「へえ?」

「我は貴様ら全員に対して業腹だ」

ドシン! と手にした斧を傍らに置き、リーダーは4人を睨みつける。

「プライド」

「は、はい!」

「私の指令を無視して『騎士』と戦ったな？ 人間というのは論理では推し量れぬ生き物、2度も同じ手は通じぬと言ったはずだ！」

「う……」

1度目はリーダーの命令で黎とデュエルしたプライド。その時は黎のデッキは炎属性のデッキ。丁度水属性であり炎属性メタのデッキを所持していたプライドならば楽に勝てると踏んで彼と戦わせたリーダーであるが、結果は引き分け。

そして2戦目。リーダーが引き止めるのも聞かずにプライドは再戦を申し込み、敗北。その敗因は完全にプライドの慢心にある。

「エンヴィー」

「ぐっ！」

「何故『騎士』から潰さなかった？ あの場で『騎士』を最優先に殺せば、この様な失態は無く、今頃奴の様な脅威となり得る存在はバランスーだけであつたはずだぞ！」

「そ、それは……」

己の罪から天空 優を狙って攻撃したエンヴィー。しかしいくら護衛と雖も本能のみで動いているワケでは無い。あの戦いで感情では無く理性で戦っていれば黎は今頃恐らく生きてはいなかつただろう。

しかしエンヴィーは『妬ましい』という感情からゲスト参戦の優を集中攻撃。結果、

ライフを残す結果となり、敗北した。

「スロウス」

「んぐお……」

「攻撃力に慢心するなど普段から言つてあつたハズだぞ？ 己の使用したカードは相手にも利用される可能性があるという事を忘れたのか！ よりにもよつて世界構築者レベルの脅威を野放しにする結果を招きおつて！」

「うう……」

邪神とて万能では無い。例えどれだけ強くなろうともその強さにはどこか穴がある。世界を2，3個呑み込めばテネブラエが例え完全体となろうとも鎧袖一触で葬る事は可能だろう。しかし、あちらにはテネブラエと同じレベルの神が後6人残っている。最悪、その7人に敗北する可能性もあるのだ。

スロウスは持ち前の面倒臭がりな部分で攻撃力のみ頼つたデュエルを行つた。結果、その力を逆に利用され、跡形も無いレベルにまで吹き飛ばされたのだ。

「グラトニー」

「何だよ」

「貴様、余計な事をベラベラと喋りおつて！ 我らの目的は崇高なる邪神様を復活させる事！ その遂行を妨げる『騎士』の奴は我らにとって害悪！ それに対して有利な

ヒントを与えるとは何事だあ！」

「あ？ うっせえなあ」

「何だと!？」

リーダーはグラトニーにも視線を移すが、グラトニーはそれを鼻で笑う。

「おいら達が何しようとも、刃向う以外は一切関知しない。それがおいら達と邪神との間に結ばれた協定だろ？」

「貴様……っ！」

「おいら最初に言ったよな？ 腹を満たしてくれるなら誰の下でも構わねえつてよ。邪神はおいらの腹を満たしてはくれなかつた。産んでくれた恩義はあるが、もうそれも果たした。別に死ぬまで尽くしてやる義理はねえっつー話だ」

話は終わりと言わんばかりにグラトニーはくるりと背を向け、どこかへ歩き出す。

その足元へリーダーは獲物である巨斧を投げ付けた。

「危ねえなあ、おい。今度は何だ？」

「貴様らの不義理には怒り心頭だ……」

「はん、怒っているのはいつもの事でねえのかよ？ 護衛最強にしてリーダー、  
“憤怒”  
のラースよお？」

ギリ、とリーダーのラースは齒軋りをしてグラトニーを睨みつけた。

## — レッド寮・黎の部屋 P M 16:39

## SIDE:黎

ん、ナレーションが途中でどこかに移らなかつたか？

まあ好いや。俺の知った事じゃねえか。

「黎、このカードはどうしたら良いんだ？」

「ああ、これか？ これはなあ……」

さて、皆が集まって俺の部屋で何してるのかって話だが、簡単な話だ。来週のノース校とのデュエルに備えてのデッキ構築だ。

とは言え、シンクロモンスターやエクシーズモンスターを渡すワケにも行かないので、俺の手持ちのカードと組み合わせさせてデッキが元々持っていた力を底上げするしか無いワケだが……。

「大地、『トレードイン』を入れてみた感想は？」

「ああ、いい感じだ。『封印の黄金櫃』でサーチも効くからな、前より回しやすくなった」

大地のデッキは一番最初に構築されたという『ウォータードラゴン』のデッキだ。

『ウォータードラゴン』は『ボンディングーH20』の効果でしか特殊召喚できないという少々厳しいモンスターだが、逆を言えば相手に再利用されるのを防げるモンスターだと言える。この辺は十代の融合HEROと同じだな。

『ボンディングーH20』は墓地の『ウォータードラゴン』にも対応できるから、手札に来た場合でも問題無く手札コストにできる。

攻撃力は2800と『デビル・ドーザー』や『ニトロ・ウオリアー』レベル。簡単にはやられないだろう。

おまけに破壊されても素材が墓地から復活する。『魔法石の採掘』で『ボンディングーH20』を引っ張り上げれば復活は容易だ。

上手く対応できるフィールド魔法は『ウォーター・ワールド』くらいというのが惜しいが、攻撃力が500も上がれば一種のボウダーラインでもある攻撃力3000を超えるから上々だろう。

更には相手の炎属性モンスターの攻撃力を0にする効果があるから、『アームズ・ホール』で『幻惑の巻物』をサーチorサルベージして相手モンスターを炎属性にしてやれば、こつちの独壇場だ。

残念なのは味方モンスターはおろか、自身ですらその効果の対象となってしまう事。

『DNA移植手術』なんてものを使って炎属性を指定してしまうとこちらの攻撃力まで0になってしまおう。

「それと『巨大化』を入れるのは間違っていない判断だが、相手とのライフ差に気をつけて欲しい」

「分かった」

「それとデッキ枚数が膨らむからかなりシビアな調整が必須だが……、『ウォータードラゴン』とのコンボカードをいくつか用意した。相手に攻撃力0を押し付けるのと、自在に破壊されるカード、どっちが良い？ それとも両方にするか？」

「ほう、こういうカードもあるのか。これは計算のし甲斐がありそうだ」

大地のデッキ、「ウォータードラゴン」はそろそろ完成だな。

——異世界・廃墟の時計塔下

S I D E : 無し

ゴウン、と金属がたわみつつも弾かれる音がする。



ザザザツ、と砂の表面を滑る音がした後、二度三度とまた金属同士がぶつかり合う音が周囲の廃墟に鳴り響く。

「ぬんっ！」

「ラアッ！」

そして再び打ち合いを終え、距離を取るのは上級護衛の二人、ラーズとグラトニー。既にグラトニーの右の爪は使い物にならない程に大破し、しかしラーズの斧も既に切れ味を殆ど削り取られている。

「ハアッ！」

「があっ！」

そして気合いの入った一撃がぶつかり合い、残った爪とボロボロになった斧が砕け散った。

壊れた武器は黒い霧に姿を変え、そしてすぐに新たな破損していない武器に姿を変える。

「……時間の無駄だな」

「ハ、違えねえ」

だが、それは振るわれる事無く収納された。

両者は軽く上がった息を整えながら睨み合う。グラトニーは不敵に、ラーズは憎々し

げに。

「グラトニー……」

「何故だ、は無しだぜ？ お互い転生者同士なんだからよ！」

「!?」

交差する視線。そしてグラトニーのセリフに驚愕を隠せないプライド達3人。

「ど、どういう事ですか、グラトニー！ 貴方達が転生者というのは！」

「納得のいく説明をしてもらいたいねえ！」

「その通りいゝ」

騒ぎ立ててる3人を無視してグラトニーはラースとの会話を続ける。

「分かっているハズだぜ？ 下級護衛とは違っておいら達上級護衛には過去がある。人間としての過去がな」

「百も承知。だが、だからこそ我らは邪神様の護衛に選ばれたのだ。その事を誇り、任を遂行する事こそ至上では無いのか？」

ラースの言葉をグラトニーは鼻で笑う。

「ハン、それはお前の持論だろ？ おいらは違う。腹が満たされりやそれで万事オーケー、それが契約だった。だが、邪神はそれを全く履行してくれない。だったらこっちにも考えがあるって話だっつーの」

「ぬう……いー！」

「おい、グラトニーー！」

ラースを丸めこんだグラトニーは、背後で喧しく騒ぎ立てるエンヴィー達を見やると、溜め息を吐いた。説明するのも億劫という感じだ。

「あー、ったく。分かったよ、簡単な話だ。おいら達上級護衛はお前らみたいな下級護衛とは違って“無”から作られたワケじゃねえんだよ」

下級護衛は邪神の作り上げた核にその名前と同じ負の想念を押し固めて生まれた存在だ。つまりは人形と考え方としては似ている。

「対し、おいら達上級護衛は死んだ人間の魂に想念を固めて作り上げられた存在。死に行く魂を邪神がキャプチャーして生み出された存在だ」

「ば、バカな……っ！ ならば何故貴方達は邪神様の味方をするのです！ 元は人間ならば何故人間の世界を滅ぼす手伝いをする様な真似をするのです！」

「……魂に刷り込まれちゃったからだ。生まれる時にな、”こうであるべきだ”つつー刷り込みをされてな、それが行動原理にまで現れちゃうんだよ」

寂しそうにグラトニーは苦笑う。

だが、とすぐにその表情は厳しいものに変わった。

「一度消滅に再結成した今、その刷り込みは消滅した！ もう邪神の配下じゃねえ！」

おいらは生き返ったんだ！ テメエらの指図は受けないぞ！

「……そうか、ならばデュエルだ」

何？ とグラトニーが眉を顰める。

「おいおい、デュエル万能論か？ まさかデュエルで勝てばおいらが従うとでも？」

「否。よもや貴様ら、我が貴様らを迎えに来たとでも思うか？ 愚かな敗者である貴様

ら如きを」

瞬時にグラトニーは理解した。

「……」

「要するにお前はおいら達を消しに来たんだな？」

「名答」

「な！？」

その一言に、これまで静観を決め込んでいたプライド、エンヴィー、スロウスの3人が驚きの声をあげた。

「ど、どういう事だ！？ これから折角あの『騎士』の魂に復讐できるって時に！」

「元よりその様な事を頼んだ覚えは無い」

「なっ!？」

「我らは存在するだけで邪神様のお力を微量ながらも削り続ける。邪神様のカードを使

えば更に削られる。そして弱者に二度も負けさせる為にお力を割かせるなど無駄の極み。ならばここで邪神様の糧となるのが至高というものであるう」

そのラーズの言葉に、プライド達は反論する。

「いくら貴方の言葉といえど、それは聞けませんね！ 私達に復讐の機会すら与えないというのですか！」

「罪の存在ならば僕達の感情も分かかってしかるべきだと思っただけだよねえ！」

「そおの通りい。オデ達だつてえ、まあだ戦えるう」

「……………」

意見を叩きつける3人に、黙りこくるグラトニー。しかしラーズはそれを一喝して黙らせる。

「黙れ！ 貴様らの様な雑魚に護衛を任せたのがそもそもその間違い！ かくなる上は貴様らを打ち負かし、邪神様復活の贄にしてくれる！」

「っ！ やれるものなら！」

「やってみなよお！」

「お」

血が上った3人はデュエルディスクを展開。

漆黒の不気味なディスクが腕に装着されデッキがセットされる。

「ふん……」

「……仕方ねえか」

鼻でそれを嘲笑うラースに、諦観したグラトニー。2人の腕にもデュエルディスクが展開された。

「誰から行きます？ まあ、私は別に誰からでも構いませんが」

「僕も同じサ。あのムカつくリーダーを潰せれば万々歳だよ」

「ぬう、オデもだあ」

順番を決めかねている3人に、ラースは鼻で笑う。

「ああ、4人纏めてかかって来い」

「何ですとっ!？」

「何い!？」

「何、だとお……?？」

「チツ、やはりそう来るか!」

「ここで1人ずつやっても時間の無駄だ。ああ、ハンデは要らん。我と貴様ら4人のデュエルだ。ライフは各々4000ポイント、初期手札は5枚。デッキは40枚以上60枚以下。これでどうだ?」

それは、あまりにも大きなハンデイキャップ。

黎ですら32対1の時の初期ライフが80000だったし、数人ごとに区切つてという形だった。しかしレースは4対1で4000。寧ろこれは本来不利なレースがハンデを背負う形だだ。

「さあ、これが貴様らの最期のデュエルを楽しむと良い！」

「ナメた事してくれませぬ……っ！」

「僕達の本気を見せてやるよ！」

「見下した事をお、後悔させてやるう！」

「本気のようなだ……。こつちも全力で行かせてもらおう」

『デュエル！』

レースVSプライド&エンヴィー&スロウス&グラトニー

LP 4000 VS LP 4000×4

——レッド寮・黎の部屋 PM 16:44

## SIDE：黎

ん？ また視点が切り替わって……？

何が起こっているんだ？

「黎、こんな感じかしら？」

「ん？ ああ、良い感じだ」

次は明日香のデッキ。

最近では融合&儀式にしようと考えているらしい。なので俺にその構築を見せて来た。ぶっちゃけて言うと、この二つを両立させるのはかなり至難。

属性HEROみたいに素材の縛りが緩ければ行ける場合もある。或いは、E・HERO“みたいに素材が通常モンスターなら『高等儀式術』と両立させたりする事も可能だ。が、明日香の持っている融合モンスターは『サイバー・ブレイダー』のみ。素材の片方は通常モンスターだが、もう片方は効果モンスター。

しかもこの時代回りから儀式に必要なリソース要員はレベル合計が等しくなるようにしなくてはならないからレベルの調整がより難しくなってきた。

そこで明日香のデッキは融合よりも儀式に主眼を置く事にした。

主なキーカードは『機械天使の儀式』と『リチュアル・チャーチ』。



レベル6〜8の儀式モンスターを1体ずつ差し、手札の魔法カード1枚を墓地の儀式魔法と交換する『リチュアル・チャーチ』を3枚積む。かつ通常モンスターを3枚程投入し、『高等儀式術』を1枚入れる。

更に腐った時対策に『封魔の呪印』と『契約の履行』も投入。

そして万一『サイバー・ブレイダー』活躍の舞台となつた場合の為に『溶岩魔人ラヴァ・ゴレム』と『ミス・リバイブ』で相手モンスターの数を調整。

更にやや低めの攻撃力を補う為に『強者の苦痛』に『収縮』をぶつ差し、『所有者の刻印』で『ラヴァ・ゴレム』の奪還を目論みつつ、手札コストでパワーアップする『コールド・エンチャンター』を入れる。

勿論『ドゥーブル・パッセ』用に『ガード・ブロック』も入れる。

そしてエクストラデッキに余裕があつたので『ワイルドマン』を主軸にした属性融合HEROの『ノヴァ・マスター』と『ガイア』を投入。

これで大丈夫、と思つたんだが……。

「……デッキが大分膨らんじまつたな」

「……そうね」

「ごめん、欲張り過ぎた」

「良いのよ、私も止めなかつたのだし」

想像以上にカードが入っているため、枚数が60枚を超えてしまった。

使いたいカードや使えそうなカードを詰め込んで枚数調整をするつてのはデツキビルドの基本だが、限界をオーバーするのはやり過ぎと言えるだろう。

「……どれを抜こうか？」

「……どれにしましょうか？」

この後結局、『ワイルドマン』や『ラヴァ・ゴーレム』達を抜いて『サンダー・ブレイク』を入れる事にした。

更に儀式カードも抜き、融合系一本に絞る。大きな戦いを前に慣れない儀式カードを練習するだけの時間は無い。

十全な構築って難しいね。

——異世界・廃墟の時計塔下

S I D E : 無し

「先攻は我だ。ドロー」

大きなアクションを取らず、ラースがカードを引く。

オーバーアクションの意味を問う人もいるのだが、これは要は気合いを入れるための作業だと思えば良い。相撲で言う四股踏みのようなものだ。

「モンスターをセット」

ディスクがカードを読み込み、横向きで裏側のカードが場に現れる。

「更にカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

ラース：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚

ターンの順番が回り、プライドに出番が回って来る。

「私のターン！ 魔法カード『テラ・フォーミング』を発動！ デッキからフィールド魔法を1枚手札に加えます！ 手札に加えるのは『集中豪雨地帯』！ そしてそのまま発動！」

テラ・フォーミング

【通常魔法】

自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える。

集中豪雨地帯（オリジナル）

【フィールド魔法】

(1)：このカードのカード名は「海」としても扱う。

(2)：自分の手札とフィールド上の水属性モンスターはレベルが1つ少なくなり、攻撃力と守備力が200ポイントアップする。

また相手フィールドの炎属性モンスターの攻撃力と守備力は半分になる。

(3)：このカードが墓地に送られた時、デッキに存在する「集中豪雨地帯」を発動させる事ができる。

ディスクがカードを読み込むと、辺り一面にポツリポツリと雨が降り出す。

すぐに石材でできた地面には大きな水溜りが生まれ、5人は濡れネズミとなった。

「更に魔法カード『闇網』ダークネットを発動！ デツキから攻撃力1000以下の魚族モンスターを1体手札に加えます！ デツキから攻撃力200の『シャーク・サツカー』を手札へ！」

闇網（オリジナル）

【通常魔法】

デツキから攻撃力1000以下の魚族モンスター1体を手札に加える。

このカードが相手のカードの効果によって墓地に送られた時、デツキに戻る。

「自分の墓地の通常魔法カードを2枚ゲームから除外する事で、『青髭鯨』あおひげくじらは手札から特殊召喚できます！ 墓地の『テラ・フォーミング』と『闇網』をゲームから除外！ 現れなさい！」

『ボオオオオオオオッ！』

青髭鯨：ATK 1000↓1200



シャーク・サッカー（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 200 / DEF 1000

自分フィールド上に魚族・海竜族・水族モンスターが召喚・特殊召喚された時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードはシンクロ素材とする事はできない。

「まだ終わりではありませんよ！ 自分の場に水属性モンスターが存在するため、『ポイゾニック・シャーク』を特殊召喚！」

ポイゾニック・シャーク（効果モンスター）（オリジナル）

星5

水属性／魚族

ATK 1100 / DEF 1800

このカードは、自分の場に水属性モンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる。相手の場に水属性モンスターが存在しない時、相手モンスター1体を選択して発動す

る。

攻撃力は選択したモンスターのレベル×1000ポイントアップする。

ポイズニック・シャーク：ATK 1100↓1300

続けて小型のコバンザメと紫に変色したサメが現れる。

これでモンスターは3体だ。

『ポイズニック・シャーク』の効果を発動したい所ですが、貴方の場に表側表示のモンスターがいなかったため発動できません。

まあ無関係ですがね！ 私は3体のモンスターをリリース！ 出でよ、『七罪士<sup>セブンクライム</sup> プ

ライド』オ！」

七罪士 プライド：ATK 3600

怒涛のラッシュでモンスターの展開を繰り広げるプライドは3体のモンスターを糧に己自身を呼び起こした。

大地から吹き上がった黒煙を漆黒の鎧として身にまとい、禍々しい黒い双剣を手に



ラースを睨みつける。

七罪士 プライド（効果モンスター）（オリジナル）

星10

闇属性／戦士族

ATK 3600 / DEF 3300

（1）：このカードは特殊召喚できず、自分の場のモンスターを3体リリースしなければアドバンス召喚できない。

（2）：このカードが表側表示でフィールド上に存在する限り、バトルフェイズ中自分のフィールドのモンスターの攻撃力は2000ポイントアップする。

（3）：このカードは魔法・罠カードによって破壊されない。

（4）：このカードが表側表示でフィールド上に存在する限り、相手がレベル6以上のモンスターを召喚、特殊召喚、反転召喚する度に相手プレイヤーは1000ポイントのダメージを受ける。

「この変則デュエルでは、全てのプレイヤーは1ターン目では攻撃できません。カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

プライド：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：七罪士 プライド（ATK 3600）

：伏せカード1枚、集中豪雨地帯（フィールド魔法）

（伏せカードはモンスター効果反応型。前の『ジャンク・デストロイヤー』の時の二の轍は踏みませんよ？）

「アヒヤヒヤ！ 僕のターン、ドロー！」

プライドが伏せカードを説明するという敗北フラグを立てている中、エンヴィーにターンが回る。

「僕は魔法カード『腐敗の神話』を発動！ 自分の場にモンスターが存在しない時、手札のモンスターを1体特殊召喚できる！ 手札からレベル3の『デビル・エッジ』を特殊召喚！」

デビル・エッジ：DEF 0

ジャキン！ と刃の擦れる音と共に黒い悪魔が現れる。  
赤い目をギラギラと光らせ、黒い体が鈍く輝く。

『デビル・エツジ』は特殊召喚に成功した時、デッキからレベル3以下のモンスターを1体特殊召喚できる！ 2体目の『デビル・エツジ』を特殊召喚！ 更に2体目の効果で3体目の『デビル・エツジ』を、3体目の効果でデッキからレベル1の『物欲の男爵』を特殊召喚！」

デビル・エツジ：DEF 0

デビル・エツジ：DEF 0

物欲の男爵：DEF 400

1ターンに4体ものモンスターを揃えるという離れ業をやつてのけるエンヴィー。  
刃の悪魔に続き、涎を垂らす爵位を持つ男が闇の中から現れた。

腐敗の神話（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場にモンスターが存在しない時に発動できる。  
手札からモンスター1体を特殊召喚できる。

デビル・エッジ（効果モンスター）（オリジナル）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

このカードが自分フィールド上に特殊召喚された時、自分のデッキからレベル3以下のモンスターを1体特殊召喚できる。

物欲の男爵（通常モンスター）（オリジナル）

星1

闇属性／悪魔族

ATK 300 / DEF 400

全ての物を欲しがる貪欲な男。

特に珍しい物に目が無い。

「そして2体の『デビル・エッジ』と『物欲の男爵』をリリース！　これが僕の真の力だあ！　『七罪士 エンヴィー』イ！」

七罪士 エンヴィー：ATK 3900

プライドに続いて現れたのは大槍を持つエンヴィー自身。黒い鎧を装着し、ギラギラ光る眼でラースを睨む。痩せこけた体からは想像できない程に強い光を放っている。

七罪士 エンヴィー（効果モンスター）（オリジナル）

星10

闇属性／戦士族

ATK 3900 / DEF 3600

(1)：このカードは特殊召喚できず、自分の場のモンスターを3体リリースしなければアドバンス召喚できない。

(2)：1ターンに1度、自分の墓地のモンスター1体を除外する事で、次の自分のエンドフェイズまでその除外したカードの効果を得る。

(3) : このカードが戦闘を行う時、相手モンスターの効果はバトルフェイズ終了時まで無効となる。

(4) : バトルフェイズ終了時、相手の場のモンスター1体を指定して発動する。

そのモンスターを持ち主のデッキへ戻し、そのレベル×200ポイントのダメージを相手に与える。

(5) : このカードがバトルで相手モンスターを戦闘破壊したターン、相手ライフが1000を上回っていれば、相手に1000ポイントのダメージを与え、その数値分自分のライフを回復する。

(6) : このカードの攻撃力と守備力は元々の数値より低い数値にならない。

(7) : このカードが戦闘によって破壊される時、このカード以外の自分の場のカードを墓地へ送る事で破壊とダメージを無効にできる。

またこのカードが戦闘で破壊される時にプレイヤーが受けるダメージは半分になる。

「更に魔法カード『徴収の旋律』を発動！ 墓地の『物欲の男爵』を除外し、カードを2枚ドロロー！」

徴収の旋律 (オリジナル)

## 【通常魔法】

自分の墓地に存在する「物欲の男爵」を全てゲームから除外する。  
除外したカード1枚につきカードを2枚ドロウする。

新たに手札を仕入れたエンヴィーは、ニヤリと笑った。  
「更にカードを5枚セットし、ターンエンド！」

エンヴィー：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：七罪士 エンヴィー（ATK 3900）、デビル・エッジ（DEF 0）

：伏せカード5枚

「オデのターン、ドロオー」

スロウスののんびりとした間の抜けた声が響く。

「オデは永続魔法『絶望未来合成ーアポカリプス・フュージョンー』を発動だあく。デツキからドラゴン族モンスターを10体墓地に送りい、1ターン後のスタンバイフェイズ

に『F・G・D』を融合召喚する。更に魔法カード『龍の鏡』ドラゴンズ・ミラーを發動。墓地のドラゴン族を5体除外し、『F・G・D』を融合召喚だあ！

F・G・D：ATK 5000

半透明の姿で5体のドラゴン族モンスターが次元の渦に巻き込まれ、炎、水、岩、風、闇を司る巨大な龍が姿を現す。

絶望未来合成—アポカリプス・フュージョン—（オリジナル）

#### 【永続魔法】

（1）：自分のエクストラデッキの融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから2体分墓地へ送る。

次の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

F・G・D（融合・効果モンスター）

星12



闇属性／ドラゴン族

ATK 5000 / DEF 5000

ドラゴン族モンスター×5

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードは闇・地・水・炎・風属性モンスターとの戦闘では破壊されない。

龍の鏡

【通常魔法】

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「ククク、ここで僕の伏せカードをオーブン！ 『闇次元の解放』！ 除外された自分の闇属性モンスターを1体特殊召喚！ 除外された『物欲の男爵』を特殊召喚だ！」

闇次元の解放

## 【永続罨】

ゲームから除外されている自分の闇属性モンスター体を選択して特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊してゲームから除外する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

物欲の男爵：ATK 300

「さあ、やっちゃいなスロウスウ！」

「おお〜！ オデは『F・G・D』、エンヴィーの『物欲の男爵』、『デビル・エッジ』をリリースウ〜！」

オデ自身、『七罪士 スロウス』をアドバンス召喚だあ！」

七罪士 スロウス：ATK 3500

姿を現すスロウスの真の姿。

闇の鎧を纏い、髑髏の模様が描かれた鉄槌を手に、大地を揺らしながら眠たげな目を

開く。その全長は5メートルは超えているだろうか。

「更に墓地の『F・G・D』を除外いゝ。オデの攻撃力と守備力をアップいゝ。グレイブ・フォースいゝ！」

七罪士（セブンクライム） スロウス（効果モンスター）（オリジナル）

星10

闇属性／戦士族

ATK 3500 / DEF 3000

(1) : このカードは特殊召喚できず、自分の場のモンスターを3体リリースしなければアドバンス召喚できない。

(2) : このカードは相手のカード効果を受けない。

(3) : 1ターンに1度、自分の墓地の闇属性モンスターを1体ゲームから除外して発動する。

そのモンスターの攻撃力と守備力の数値分、このカードの攻撃力と守備力はアップする。

(4) : このカードが相手の攻撃対象となった時、自分の墓地から闇属性モンスターを4体ゲームから除外する事で、このカードの攻撃力を相手より800ポイント高い数値に

する事ができる。

(5)：このカードが戦闘によって破壊された時、ゲームから除外されている自分の閥属性モンスターを、召喚条件を無視して可能な限り自分の場に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、戦闘によって発生するダメージは0になる。

七罪士 スロウス：ATK 3500↓8500／DEF 3000↓8000

「カードを2枚セットしてえ、ターンエンドオ〜」

スロウス：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：七罪士 スロウス(ATK 8500)

：絶望未来合成ーアポカリプス・フュージョンー(永続魔法・『F・G・D』を指定・残り1ターン)、伏せカード2枚

「最後はおいらのターン、ドロー。魔法カード『マジック・プランター』を発動。エンヴィーの場に残った『闇次元の解放』を墓地に送り、デッキからカードを2枚ドロー」

マジック・プランター

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在する永続罫カード1枚を墓地へ送って発動する。  
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

最後にターンが回って来たグラトニー。

その姿勢は他の3人とは違って慎重極まりない。

「モンスターを1体、裏側守備表示で召喚」

「おいおい、どうしたんだいグラトニー？ 随分と慎重だねえ！」

「……………」

エンヴィーの挑発にも、グラトニーは無言だ。

「ターンエンドだ」

グラトニー：LP 4000

手札：6枚

フィールド

：セットモンスター1体

：魔法・罠無し

——レッド寮・黎の部屋 PM 16:51

SIDE：黎

「おかしい、さつきからナレーションが少しずつ飛んでいる……」

「何がだい、黎？」

「あ、いや、何でも無い」

今度はフィオのデッキを見る俺。

とは言え、彼女のデッキはかなり難しいバランス構成がされている。俺でも下手に弄れば確実に事故しか起きないデッキになる。

さて、彼女のデッキ枚数はざっと50枚ってトコか。ドロー加速をする以上、このく

らしいは必須だな。

と、俺はそこで気になる点を見つけた。

「フイオ？」

「何かな？」

「いや、お前『一族の結束』入れないのな」

「あー、まあね」

『一族の結束』、それはデツキを選ぶカードの内の1枚だ。

同じ種族で固めれば800ポイントも攻撃力が強化する永続魔法。重ね掛けも可能だから最大で2400も攻撃力が上昇する(場を3枚も圧迫するのでそこまでする必要も感じないが)。

「まあ、わたしのデツキを見れば分かるけど、事故率上げたくないからさ。カウンター罠って受動的だし」

「んー……」

確かにそうなんだが、それはそれで勿体無い気もするなあ。

パーミッション系の攻撃力で3000を超えるのは『黒の魔法神官』の3200くらいだし、あれはほぼ魔法使い族専用のカードだから基本天使族の彼女のデツキに入らない。

となると打点では2800の『ボルテニス』や『ヴァンダルギオン』が妥当なんだが……。装備カードやサポートカード次第でそれくらいはどうとでもなるしなあ……。

「うーん、攻撃力に頼るデッキじゃ無いってのは知っているんだが……」  
それでも火力不足ってのは否めない。

もしもパーミッション系のカードの回りが悪かったり、相手がゴリ押しで来たりすると、このデッキという名の牙城はあつという間に瓦解する。

だからこそ『魔法の筒』なんかを入れたりするモンだが……。

「あ、いや、待てよ？ これ行けるんじゃないか？」

「これは？」

「『天魔神エンライズ』と『天魔神インヴェイシル』。天使族ならこのカードを入れても無理は無いはずだ」

それから渡すのは『カオス・ソーサラー』。後は闇属性で使い勝手の良い『グレイブ・スクワーマー』や『バトルフェーダー』と『クリボー』だ。

「う、これで回すの？」

「その辺はかなりシビアな調整が要るだろうな。だからこそ俺がメンテナンスに付き合  
うんじゃねえか」

「ん、んん、分かった」



魔改造な気もするが。

「兎に角、火力勝負に持ち込まれると打たれ弱い点がある。特に『ダーク・シムルグ』みたいにセツトを封じたり、『人造人間サイコ・シヨツカー』みたいな罠を封じるヤツ相手だとあつという間に抑え込まれる」

「だからこそ、このカードかい?」

「ああ。『グレイブ・スクワーマー』は戦闘破壊時に場のカードを1枚、モンスターでも魔法でも罠でも破壊する。『クリボー』は神楽坂と同じ様にダメージを抑えるのに使えるし、『バトルフェーダー』は敗北防止にもコストにも使える。除外したモンスターを復帰させるんだったら『異次元からの埋葬』や『奇跡の降臨』がある」

となると、彼女のデツキは除外の要素が加わるワケか。

またややこしい構築になりそうだ。

「ビートを抜いて……、ああでも、こつちを……」

「これを削ってみるか? 取り敢えず試験的にデュエルを……」

ま、デツキの構築は楽しいけどな。

天使族軸にする事にはなりそうだが、隠し玉でエンタメるのも悪くない。

## ——異世界・廃墟の時計塔下

SIDE：無し

「我のターン、ドロロー」

ターンが回って再びラースのターン。

ここからモンスターによる攻撃が可能となる。

「はあ……………」

ラースは大きく溜息を吐いた。その様子は諦観では無く、彼の罪の通りの、怒り。

「正直、失望したぞ、貴様ら」

「何……………」

「よもやこの程度で我を迎え撃つ腹積もりか？」

“この程度”。ラースはたった今そう言った。

曲がりなりににも彼らは黎を苦しめたモンスターを並べている。それがラースにとっては取りに足りない状況だという事。

しかし、それを理解できたのはグラトニーのみ。残る3人はただの負け惜しみと捉えた。

「フン、この状態でどうするのです?」

「アヒヤヒヤヒヤ! 負け惜しみは見苦しいよお?」

「ああー、さっさと終わらせようぜえ?」

グラトニーは左側に並ぶ3人に侮蔑の視線を投げかけるも、3人は気付かない。

「ならば、今から宣言してやろう。プライド、エンヴィー、スロウス」

「む?」

「うん?」

「ああ?」

「貴様らは今から4枚のカードの前に敗北する」

「何、ですと……!?!」

それはプライド達にとって侮蔑に他ならない。怒り心頭といった様子の3人を無視してラーズはディスクのボタンに手をかける。

眉を顰めて睨む3人を無視し、ラーズは伏せカードをオープンした。

「罨カード、オープン。『クローズ・チェーン』。このターン、魔法・罨・モンスター効果の発動、攻撃宣言に対してチェーンする事はできない。無論、このカードにもだ」

「な、何だつて!?!」

クローズ・チェーン（オリジナル）

【通常罨】

このカードの発動に対し、お互いのプレイヤーは魔法・罨・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

エンドフェイズまでお互いのプレイヤーは魔法・罨・効果モンスターの効果、攻撃宣言に対してカードの効果を発動・適用する事はできない。

このカードが発動したターン、このカードのコントローラーはモンスターを特殊召喚できない。

「もつとも、我はこのターンモンスターを特殊召喚できないがな。

魔法カード『底無しの毒沼』を発動。貴様らの場の魔法・罨を全て破壊し、破壊したカード1枚につき800ポイントのダメージを与える」

底無しの毒沼（オリジナル）

【通常魔法】

相手フィールド上の魔法・罨カードを全て破壊する。

自分の場の破壊されたカード1枚につき、相手は800ポイントのダメージを受ける。

ズブズブズブ、と沈んでいくカード達。フィールド魔法も消えたため雨も上がり、瞬時に服と地面が乾く。

「さあ、ダメージを受けてもらおう」

「ぐうう、チェーンできない制約がなければあ、振り返ちだったのにいっ！」

プライド：LP 4000↓2400

エンヴィー：LP 4000↓800

スロウス：LP 4000↓1600

「ぐ、うううううううっ！」

「ギイイ、イイイイイイッ！」

「ぬおおおおお……っ!」

一瞬で魔法と罠が消失し、足元からエネルギーを吸い取られる3人。

唯一、警戒していてカードを伏せていなかったグラトニーだけが無事だった。

「アホ共が。このくれえ考えろ」

「チツ……」

憎々しげに舌打ちするプライドを余所に、ラーズは更に行動を進める。

「セットモンスターを反転召喚、『スカル・イーター』!」

スカル・イーター：ATK 0

裏側のカードが表向きになると、その中から現れるのは人の骨。頭から足まで200以上の骨が欠ける事無く揃っている。

骨だけなので表情は存在していないはずなのだが、何故か不気味な笑みを浮かべているように見えた。

「攻撃力0? そんなモンスターで何ができると言うのです?」

「否。『スカル・イーター』の攻撃力は相手の場の表側表示のモンスターの数×100となる。よって攻撃力は300だ」

スカル・イーター：ATK 0↓300

「それでもたった300！ ナメてるのかい、ラーズ!？」

「更に手札から『スカル・イーター』を対象に魔法カード『頭蓋骨の怨嗟』を発動。自分の場の攻撃力500以下のアンデット族モンスター1体は、このターン相手の場の表側表示のモンスターの数だけ攻撃ができる。

貴様らの場には貴様ら自身が3体。よって『スカル・イーター』はこのターン、3回攻撃が可能となる」

頭蓋骨の怨嗟（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場の攻撃力500以下のアンデット族モンスター1体を指定する。

発動ターン、指定したモンスターは相手の場の表側表示で存在するモンスターの数だけ攻撃できる。

「だったら何だあゝ」

「『スカル・イーター』は直接攻撃ができる」

「それがあ」

「そして相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の場の最も攻撃力の高いモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える」

「「え……!?」」

スカル・イーター（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星1

闇属性／アンデット族

ATK 0 / DEF 0

このカードを通常召喚する場合、裏側守備表示でセットしなければならない。

(1)：このカードの攻撃力は相手の場に表側表示で存在するモンスター1体につき100ポイントアップする。

(2)：このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、相手の場の最も攻撃力が高いモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。

(3)：このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

直接攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエ



ンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

——レッド寮・黎の部屋 PM 17:03

SIDE : 黎

「だから何でナレーションが飛ぶんだよ」

「？」

「あ、いや、何でもない」

十代のデツキを見ながら、俺は独り言をいつの間にか言っていたようだ。

さて、こいつのデツキだが、はつきり言って凄まじい難問だと言わざるを得ない。

「普通に考えれば、このままがベターなんだがなあ……」

「ええー」

ポツリと俺がもらした一言を、十代は聞き逃さなかった。子供の様に不満をありありと表す。

「分かってるって」

だが、実際分かってる「だけ」なんだよな。

戦士族主体のデッキだけど、『沼地の魔神王』とか入れたから『一族の結束』使えないし。

『増援』は良いけど、元々こいつのデッキには『Eーエマーゼンシーコール』が入っているから、あまり効果は無い。『マジック・ストライカー』なんかを呼べるが……。元々十代は鬼の様に引きが強いからなあ。

それにもし、万丈目があつちにいるんだったら、十代の戦術は読まれてるだろうし。でも今から別の戦術を叩き込んでも、十中八九意味合いは薄いだろう。

「ん、じゃあコレにすっかな」

俺が取り出すのは『ライオウ』と『スノーマンイーター』、そして『くず鉄のかかし』。その内の1枚、『くず鉄のかかし』を見て、十代は喜ぶ。

「あ、これ、黎のお気に入りのカードじゃねえか！ 良いのか!」

「ああ。2枚3枚と入れても回りを悪くするからな」

『くず鉄のかかし』。それは再利用可能な優秀な罠カード。場に再セットするから1ターンに1度という制限が実質存在するが、攻撃を確実に遮断できる。

だが、場を圧迫し続けるという欠点もある。2枚、3枚入れるのは、少々俺や十代のデッキじゃ相性が悪い。自分の意思で再セットを拒否る事もできんしな。

「お前のデツキをぎつと見たが、攻撃を止められるのは『ヒーローバリア』、『ミラーフォース』、『攻撃の無力化』、『ドレインシールド』の4枚。悪くはないが、やや使い勝手に難がある『ヒーローバリア』は入れ替えておきたいと思つてたんだ」

万丈目が大将であり、『アームド・ドラゴン』が登場する場合、『E・HERO』が場に存在する事が絶対条件である『ヒーローバリア』は使い辛くなる（一応フリーチェーンドが）し、『攻撃の無力化』じゃあ使い捨ての時間稼ぎにしかない。

だが、『くず鉄のかかし』は誰がどんなモンスターで来ても毎ターンほぼ確実に攻撃を潰せる。『攻撃の無力化』とは違ってバトルフェイズは終わらないし、1体しか止められないが、そこはコイツ自身に頑張つて貰うとしよう。

そして『ライオウ』と『スノーマンイーター』。

属性融合ヒーロー『E・HERO Theシャイニング』と『E・HERO アブソルートZero』の素材になるだけでは無く、それぞれが強力な効果を備えている。

片やサーチ封じ。

片や破壊持ち。

下級モンスターだがステータスも高いし、戦線を維持するには申し分無いモンスター達だ。

歩が『スノーマンイーター』を使つてたのを見て、十代のデツキに入れなくなったワ

ケではありません。断じて。

「済まねえな、十代。このくらいしか出来なくて」

「いや、十分さ」

「……正直、俺程度の腕じゃこれが限度だ」

謙遜でも何でも無い。こいつのデツキは本当に完成度が高い。

だが、正直言つてこいつのデツキを丸のまま借りたとして、確実に言える事がある。

事・故・る・わ！

何でこいつはこんなデツキを回せるの!? 『融合』来ないと回らないじゃんか!

作つてコンピュータでテストしてみたら遠慮無く1ターン目で事故つたよ! そのまま惨敗しかけた! ラストターンで『ミラクル・フュージョン』来なかつたらそのままやられてたつっの!

何であんなデツキが回るのかなあ!? マジでこいつデツキと神経繋がってるどころかカードが体の一部なんじゃねえの!?

「へへ、これでまた少し強くなつたぜ!」

「油断するなよ? 変な事すれば逆に弱くなる可能性だつてあるんだからよ」

「おう！ よつしや黎、デュエルだ！」

「オツケー。急拵えだが、皆に勝てるようにメタを張ったデツキを作つてある。それで行くぞ！」

——異世界・廃墟の時計塔下

S I D E : 無し

僅かな攻撃力の裏に隠された能力。それは、プライド達にとっては絶望を意味する、破滅の文章だった。

「バトル。『スカル・イーター』でプライド、エンヴィー、スロウスにダイレクトアタック。『ボーン・シヨック』！」

走り出す髑髏。その攻撃力はたかが300ぽっち。だが、その骸骨の攻撃は、プライド達にとっては処刑台のギロチンと同じだった。

「死ね、弱者よ！」

『ケタケタケタケタアッ！』

ブン！ と振られる細い腕。その一撃は間違いない無く3人の胴体に叩き込まれた。  
「ぐっ！」

プライド：LP 2400↓2100

「うぎっ！」

エンヴィー：LP 800↓500

「ぬうお！」

スロウス：LP 1600↓1300

「そして、貴様らの場の最も攻撃力の高いモンスター、即ち貴様ら自身の攻撃力分のダメージを受けてもらう」

「ば、バカな……っ！」

「僕達が、こんなあっさり……っ！」

「キルだとおくっ!？」

驚愕に顔を染める3人の体から赤色のオーラが立ち上り、天へと上る。上ったオーラは上空で180度旋回し、持ち主へと降り注いだ。

「ぐあああああああああああああつっ！」

「ぎゃあああああああああああつっ！」

「ぬあああああああああああつっ！」

プライド：LP 2100↓0

エンヴィー：LP 500↓0

スロウス：LP 1300↓0

プライド：LOSE

エンヴィー：LOSE

スロウス：LOSE

ドサツ、と3人が倒れる。

「バカ、な……。この私が、この、わた、し、がああああ……。っ！」

「ち、く、シヨウ……、絶対に、復讐して、やるううう……っ！」

「あー、ク、ソ、メンド、クセエ……っ！」

断末魔の叫びを残し、プライド、エンヴィー、スロウスが消滅する。

そして残るのは、護衛の長ラーズと……。

「お前は残ったな、グラトニー」

「警戒していたからな」

異色の元・護衛、グラトニー。

「ここから先は、我と貴様との一騎打ちという事だな」

「ああ、悪いが油断はしねえ。徹頭徹尾、全力で行くぞ！」

「フツ、面白い。かかって来い！」

t o b e c o n t i n u e d



STORY 56 : 激闘 憤怒VS暴食!

——異世界・廃墟の時計塔下

SIDE : 無し

グラトニー : LP 4000

手札 : 6枚

フィールド

: セットモンスター1体

: 魔法・罠無し

ラース : LP 4000

手札 : 3枚

フィールド

: スカル・イーター (ATK 0)

：魔法・罨無し

古びた時計塔の下で対立する、上級護衛のナンバー1と2の二人。  
ナンバー2のグラトニーは消滅し、黒い塵となったプライド、エンヴィー、スロウス  
を見る。

彼らのモンスターは、持ち主が敗北した時点で消滅していた。

「アホどもが……」

それを見たラーズは、少し意外そうに言った。

「ほう？　もう少し別の言葉をかけると思ったのだがな」

「別に。高い攻撃力と迎撃用のカードを場に仕込んだだけで勝った気になるようなバカ  
共にかける声なんざねえよ」

『サイクロン』や『神の宣告』を筆頭として、魔法や罨を除去したり無効にしたりする  
カードは豊富に存在する。

いくら強力なカードであっても、発動前に潰されたり、無効にされればそこで御陀仏。  
複数枚手札にそういうカードを所持していても何枚かは手札に温存し、後々に取ってお  
くのが正しい戦法だろう（余程追い詰められていなければの話だが）。

もつとも、手札のカードを『手札抹殺』の様なカードで捨てさせられる可能性もある

し、伏せる前に敗北というのも有り得るので、手札に温存しているかといって油断はできないのだが。

「第一、今のおいらはもう護衛じゃねえ。人間の敵であるあいつらに同情するつもりは毛頭ねえよ」

「そうか」

不敵に笑う二人。

そして再びディスクが構えられ、睨み合う構図が生まれる。

「攻撃を行った『スカル・イーター』は守備表示になる」

スカル・イーター：ATK 0 ↓ DEF 0

「そしてカードを1枚伏せて、我はターンを終了する」

ライフ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：スカル・イーター（DEF 0）

：伏せカード1枚

「おいらのターン、ドロロー！」

さて、とグラトニーは熟考する。

迂闊に攻め入れれば、どうなるか分かったものじゃ無い。

幸いと言うか何と言うか、邪神のカードはまだ手元にあった。故に条件は五分。だが、相手は最強。果たして勝てるのかどうか……。

そこまで考えてグラトニーは首を軽く振る。弱気になつてはいけない、メンタル面こそ、この戦いを制するに重要なフアクターなのだから。

「セットモンスターを反転召喚！ 『リバーズルメイカ』！」

そう思ったグラトニーは裏守備モンスターを表向きにする。絵柄から出て来たのは日干しにされたイカだ。

リバーズルメイカ：ATK 0

『リバーズルメイカ』がリバーズした時、相手の場の元々の攻撃力が1000以下のモンスターを1体破壊し、カードを1枚ドロローできる！ 攻撃力0の『スカル・イーター』

を破壊だ!」

リバーズルメイカ（効果モンスター）（オリジナル）

星1

水属性／魚族

ATK 0 / DEF 0

リバーズ：相手フィールド上に表側表示で存在する元々の攻撃力が1000以下のモンスターを1体破壊し、デッキからカードを1枚ドロウする。

触手の内の1本を伸ばしたスルメイカが屈んでいた骸骨を砕き、別の触手でグラトニーのデッキトップの1枚を捲る。

「更に『リバーズルメイカ』をリリースして『どら焼キリン』をアドバンス召喚っ!」  
『ヴォオオ〜』

どら焼キリン：ATK 2200

グラトニーの宣言と共にスルメが虹色の光の中へとその姿を消す。

ガカツ、と蹄を鳴らせて、どら焼きの体を持つキリンが現れた。どら焼きから首と足が生えているようにも見える。

ちなみに牛の仲間であるキリンは、実際に牛の様な声で鳴く。

「バトル！ 『どら焼きリン』でダイレクトアタック！ ヽジュラフ・スタンプ！」

「罠カード発動、『リバイバル・リベンジ』！ 自分の場のアンデット族モンスターが破壊されたターン中に攻撃宣言がされた時、自分の場に『骸骨トークン』を2体特殊召喚する」

リバイバル・リベンジ（オリジナル）（改訂版）

【通常罠】

（1）：自分の場のアンデット族モンスターが破壊されターン中に攻撃宣言がされた時に発動できる。

自分の場に「骸骨トークン」（アンデット族・闇・星4・攻 0 / 守 500）を2体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたトークンは「スカル」モンスターとしても扱い、次の自分のターン終了時に破壊される。

骸骨トークン：DEF 500

骸骨トークン：DEF 500

地面の中から出て来る、ボロ布を纏った骸骨。『ワイト』にも見えなくもない、かも知れない。

「ならば攻撃対象を変更！ 『骸骨トークン』に攻撃！」

『ヴォオオオッ！』

パキシツ、と間拔けな音と共に踏み潰される人骨。大型動物のキリンの前には、死した白骨死体は意味を持たなかったようだ。

「おいらはカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

グラトニー：LP 4000

手札：5枚

フィールド

：どら焼キリン（ATK 2200）

：伏せカード2枚

「我のターン！」

(……『強制肥沃土壤』の入っていないデッキで助かった。下手な事をすれば自爆ものだからな)

グラトニーは密かに心の中で安堵する。

先刻の『スカル・イーター』の事を考えると、メインデッキに恐らく攻撃力の高いモンスターは少ない。特殊召喚されたトークンがアンデット族である事も考慮すると、パワーで押すタイプなのでは無く、モンスター効果で翻弄するタイプなのだろう。

となると、バーン効果やハンデス持ちもいる可能性も十分有り得る。もしもそんなモンスターがいれば、それを利用するフィールド魔法は逆に自分にとって不利になる可能性も高い。

「我は『骸骨トークン』に装備魔法『代替の骨』を装備する。更に『スカル・ウルフ』を召喚！」

『ウワオアオオアオアオアオアオアアアアアアアアアアオオオオオッ！』

スカル・ウルフ：ATK 500

光のゲートを潜って登場する、骨だけの狼。ただしその大きさは一般的な狼の大きさ



とはかけ離れており、2階建ての家と同じくらいの大きさに見える。

「レベル4の『骸骨トークン』と『スカル・ウルフ』をオーバーレイ」

瞬時に黒い光に変わる白骨死体と、白い光に変わる骨の飢狼。

その光景にグラトニーは眼を見開いた。

「ば、バカな!?! トークンはエクシーズ素材にはできねえハズだぞ!」

「生憎『代替の骨』を装備したトークンは、『代替の骨』自身を素材としてエクシーズ召喚の素材にできるのだ!」

「そ、装備魔法で素材の代替だ?!」

代替の骨（オリジナル）（改訂版）

【装備魔法】

「スカル」モンスターのみ装備可能。

（1）：このカードを装備したモンスターがX召喚の素材となる時、このカードをX召喚の素材とする事ができる。

この時、このカードは装備モンスターと名前・レベル・種族・属性が同じカードとして扱う。

この効果を使用し、装備モンスターがX素材とならない場合、装備モンスターを破壊

する。

(2)：このカード以外の「代替の骨」を1枚除外して発動する。  
墓地のこのカードを手札に戻す。

「クツ、エクシーズ用のダブルコスト製造カードか……」

「今回の場合は、厳密に言えば『スカル・ウルフ』と『代替の骨』が素材になるのだがな。さて、2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築だ」

二筋の光が銀河の渦の中へと飛び込む。銀河は爆発を起こし、巨大なシルエットを生み出した。

☆4×☆4Ⅱ★4

「エクシーズ召喚！ その巨躯は滅びの宴、『スカル・ジャイアント』！」  
『ゴガガガアアアアアアアアアアアッ！』

スカル・ジャイアント：ATK 2600

シルエットは徐々に姿を現す。巨人としか形容できないその姿は、スロウスの完全体並みに大きい。

「装備魔法だけが素材となった事で、トークンは破壊される。ターンの終わりを待たずして消えろ、トークンよ。」

更に素材になった『スカル・ウルフ』の効果を発動。このカードが「スカル」と名のついたシンクロ・エクシーズモンスターの素材となった時、相手はエンドフェイズまで魔法・罫を発動できない」

「な、何だと!？」

スカル・ウルフ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 5000 / DEF 5000

このカードはデッキから特殊召喚する事はできない。

このカードが「スカル」と名のついたシンクロモンスターまたはエクシーズモンスターの素材となった時、エンドフェイズまで相手は魔法・罫を発動する事はできない。

「バトル。『スカル・ジャイアント』で『どら焼キリン』を攻撃」  
「ぬおっ！」

『ゴガアアッ！』

『ヴォオオッ！』

ブウン！ 柱の様に太い骨の腕が振るわれ、ラリアットの要領でキリンが吹き飛ばす。中身の餡子を散らしながらその巨体は吹っ飛んで地面に倒れ、消滅した。

グラトニー：LP 4000 ↓ 3600

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

ラース：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：スカル・ジャイアント(ATK 2600・ORU：2)

：伏せカード1枚

「クツ、おいらのターン、ドロー!」

引いたカードを見てグラトニーは内心舌打ちする。打開できるカードが手札に無いからだ。

攻撃力2200の『どら焼キリン』はあの時点で1番攻撃力の高いモンスターだった。それが破られた今、グラトニーに対抗する術は無い。

「相手フィールドにのみモンスターが存在する時、『鬼オニオン』は、手札から特殊召喚できる!」

光る穴から飛び出す、タマネギを手にした赤鬼。金棒を背負っているところを見ると、タマネギの方が彼?の中では優先順位が高いのだろう。

「ただし、この効果で特殊召喚した場合、次のおいらのスタンバイフェイズまでシンクロ素材にできず、リリースする事もできない!」

鬼オニオン（効果モンスター）（オリジナル）

星5

闇属性／植物族

ATK 1650 / DEF 1600

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しな

い場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚した場合、このカードは次の自分のターンのスタンバイフェイズまでシンクロ素材にできず、リリースする事もできない。

鬼オニオン：DEF 1600

「更にモンスターを1体セットして、ターンエンド！」

グラトニー：LP 3600

手札：4枚

フィールド

：鬼オニオン（DEF 1600）、セットモンスター1体

：伏せカード2枚

「私のターン、ドロロー。……グラトニー、少し失望したぞ？」

「何？」

怪訝そうに眉根を寄せるグラトニー。

「たかが攻撃力2600程度のモンスターを相手に梃子搦るとは、上級護衛の名が泣く」  
 「元・護衛だ。それにただの手札事故だっつーの、誰にでもあるだろうが」

「ふん、ならばせめて、この『スカル・ジャイアント』を倒してみるのだな。」

バトル! 『スカル・ジャイアント』で『鬼オニオン』を攻撃! アンデット・ラリアット!」

「チッ!」

バキヤッ! とラリアットが鬼を吹き飛ばす。

「更に『スカル・ジャイアント』のモンスター効果発動! 戦闘で相手モンスターを破壊した時、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、破壊したモンスターの攻撃力500ポイントにつき1枚カードをドロウできる!」

「ッ、ドロウ補助か!」

スカル・ジャイアント (エクシーズ・効果モンスター) (オリジナル) (改訂版)

ランク4

閻属性/アンデット族

ATK 2600 / DEF 1900

「スカル」と名のついたレベル4モンスター×2

(1)：このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、このカードのエクシース素材を1つ取り除いて発動できる。

破壊したモンスターの攻撃力500ポイントにつき1枚、カードをドローできる。

この効果は1ターンに1度しか使えず、このカードが特殊召喚されたターンには使用できない。

「破壊した『鬼オニオン』の攻撃力は1650だ。よつてカードを3枚ドロー」

スカル・ジャイアント：ORU 2↓1

「チイツ、手札1枚が4枚に……」

「所詮食物など屍の前では何の意味も持たん炭素の塊だ。我が力の前に平伏すが良い」  
「それを言うなら死体なんざ肥料にしかならねえよ。生きとする物の糧にしてやらあ」

フツ、と見下すラース。

ハン、と意にも留めないグラトニー。

互いに睨み合い、そして――

「貴様！ 前々から思っていたが、やはり護衛としては相応しくないな！ 最早生かし



てはおけん！」

「何度も言わせるな！ おいらはただ満腹になればそれでいい！ そういう契約をして破った邪神に責任がある！」

「殺す！ この万年空腹肥満体があ！ 自分の重みで潰れる！」

「上等だ！ この年中激怒狭量野郎があ！ 高血圧で血管切れる！」

互いに、叫んだ。

「魔法カード『スカル・コール』を発動！ 自分の場に存在する「スカル」と名のついたモンスター1体を選択し、それよりも攻撃力が低いアンデット族を1体、デツキから手札に加える！ 我は攻撃力0の『スカル・プリヴェンター』を手札に加える！」

スカル・コール（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場に表側表示で存在する「スカル」と名のついたモンスターを1体選択し、選択したモンスターよりも攻撃力が低いアンデット族モンスターを1体、デツキから手札に加える。

この効果で手札に加えたモンスターは、このターン召喚・特殊召喚できない。

グラトニーは眉根を蹙める。ラースが手札に加えたのは攻撃力が0のモンスター。つまりそれは、何かしらの効果を持っているという事だ。

主な攻撃力0の厄介なモンスターは、相手モンスターを奪う『サクリアイス』。バトルフェイズを強制終了する『バトルフェーダー』や『速攻のかかし』。相手にダメージを押しつける『ユベル』……。どれも油断ならないモンスターだ。

「1枚カードをセットし、ターンエンドだ！」

ラース：LP 4000

手札：3枚（内1枚は『スカル・プリヴェンター』）

フィールド

：スカル・ジャイアント（ATK 2600・ORU：1）

：伏せカード1枚

「おいらのターン、ドロー！ 『水飴ンボ』を召喚！」

水飴ンボ：ATK 900

水飴の塊が空中に生まれ、そこから飛び出す1匹のアメンボ。足はまだ水飴にくっついている。

「更に『デビルツコラ』を反転召喚！」

デビルツコラ：ATK 1400

「行くぞ！ レベル4の『デビルツコラ』に、レベル2の『水飴ンボ』をチューニング！」  
現れた悪魔の根を持つ草が飛び上がる。2つの星にばらけたアメンボが緑の輪を生み出し、その中へと悪魔の根の草が飛び込んだ。

「宴の準備は整った！ 飲んで食って騒いで歌え！ 今夜は無礼講！」

☆4+☆2=☆6

「シンクロ召喚っ！ 騒げ、『ブルート・ブルゴーニユ』！」

『ブモオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

ドシン！ と地面を踏み鳴らし、背中に酒瓶を背負った巨大な牛の魔人が現れる。

手にしている大槍は、真っ赤な血に濡れている。

ブルート・ブルゴーニュ：ATK 1800

「攻撃力1800か。さて、どう踊る、愉快で不愉快なピエロよ」

「ハ、こう踊らせてもらう！ 『ブルート・ブルゴーニュ』で『スカル・ジャイアント』に攻撃！ ブル・インパクト！」

『ブルアアアアアアアッ！』

槍を振り回して突進するダークブルーの牛。その攻撃力は明らかに届かないが……。

『ブルート・ブルゴーニュ』の効果発動！ このカードが戦闘を行う時、相手の属性が水以外なら、その攻撃力の半分を吸収する！」

「ほう、面白い効果だ！」

ブルート・ブルゴーニュ（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星6

水属性／獣戦士族

ATK 1800／DEF 2200

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが水属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、そのダメージ計算時のみこのカードの攻撃力は戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。

突進する牛の魔物が相手の力を吸収し、その筋骨隆々の巨軀を更に大きくさせる。

ブルート・ブルゴニユ：ATK 1800↓3100

そしてその鋭い一撃が叩き込まれ――

「だがアマイ！ 罨発動、『石灰散布』！ 相手モンスターが攻撃して来た時、その元々の攻撃力を半分にする！ 更にこの効果はチェーンされない！」

「迎撃!? 読まれていたか!」

石灰散布（オリジナル）

【カウンター罨】

相手が自分の場のアンデット族モンスターに攻撃をして来た時に発動できる。

相手の攻撃モンスターの元々の攻撃力は半分になる。

このカードの発動に対して相手はカウンター罨を発動できない。

バツ！ とカーテンの様にばら撒かれる白い粉。眼潰しの効果も持ったそれは、牛の魔人の突撃を止められず、しかし弱めるには十分なものだった。

ブルート・ブルゴニユ：ATK 3100↓2200

「反撃だ！ スカル・ラリアット！」  
「ぐおおおっ！」

グラトニー：LP 3600↓3200

突き抜ける衝撃。骨の大腕が振るわれ、牛が吹き飛ぶ。その後ろにいたグラトニーにも、当然その威力は突き抜ける。

その口の端から軽く血が流れる。

「く……（チツ、軽く内蔵中身をやったか……）」

「どうした、最初の威勢は？」

「フン……」

「更に『スカル・ジャイアント』の効果発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使い、破壊した相手モンスターの元々の攻撃力500ポイントにつき1枚カードをドローだ」

スカル・ジャイアント：ORU 1↓0

「……これで、ターンエンド！」

グラトニー：LP 3200

手札：4枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード2枚

「私のターン、ドロー」

グラトニーは表情では飄々とした態度を保っていたが、内心では場の状況に焦りを感じていた。

ラーズの場合には攻撃力2600のモンスターが1体。そして手札は今のドローで7

枚となった。あの手札次第ではこのターンでの敗北も有り得るだろう。

『『スカル・バスター』を召喚！』

『クカカカカカツ！』

スカル・バスター：ATK 1800

片腕にバズーカを携えた人骨が現れる。

リースのデッキは「スカル」という名のモンスターで統一してあるようだ。

『『スカル・バスター』は1ターンに1度、手札を1枚捨てる事で、カードを1枚ドロウできる。『スカル・プリヴェンター』を墓地へ送る。更にこの効果で捨てたカードがアンデット族だった場合、攻撃力は300ポイントアップする』

スカル・バスター（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 1800／DEF 400

自分の墓地にカードが存在しない場合、このカードは通常召喚できない。



1ターンの1度、手札を1枚捨てる事で、デッキからカードを1枚ドロウできる。  
この時捨てたカードがアンデット族モンスターだった場合、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

スカル・バスター：ATK 1800↓2100

「攻撃力2000オーバーが2体かよ……」

「お別れだグラトニー。バトル！ 『スカル・ジャイアント』でダイレクトアタック！

『スカル・ラリアット』！」

振られる巨大な骨だけの右腕。これが直撃すればグラトニーのライフは一気に消耗してしまいが……。

これをむぎむぎ喰らう程、グラトニーとて弱くない。

「リバースカード、オープン！ 『パーフェ・プロテクト』！ 自分の場にモンスターが存在せずに攻撃宣言がされた時、場に『パフェトークン』を相手モンスターと同じ数だけ特殊召喚する！ このトークンは特殊召喚されたターンのみ破壊されない！」

パーフェ・プロテクト（オリジナル）

## 【カウンター罫】

自分の場にモンスターが存在しない時に相手が攻撃宣言を行った時に発動できる。

自分の場に「パフェトークン」（魔法使い族・地・星2・攻0／守0）を相手の場に存在するモンスターと同じ数だけ特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたトークンはこのカードが発動したターンのみ破壊されない。

「お前の場にいるモンスターは2体！ よって2体の『パフェトークン』を特殊召喚！」

パフェトークン：DEF 0

パフェトークン：DEF 0

ポン、とコミカルな音と共に現れるパフェ。フルーツや生クリームをたつぷりと使用しており、その透明なガラスの器に漫画チックな目が浮かぶ。

パフェは大柄な骸骨に殴られるものの、軽く揺れるだけでビクともしていない。

「ふむ、ならばカードを1枚セット。これでターンエンドだ」

ライフ：LP 4000

手札：5枚

フィールド

：スカル・ジャイアント（ATK 2600・ORU：0）、スカル・バスター（ATK 2100）

：伏せカード1枚

「おいらのターン、ドロロー！」

引いたカードを見て、グラトニーは洗面を作る。

マズい。ハッキリ言って大ピンチだ。この状況を打開できる術が無い。だが、と手札のカードを1枚抜き出す。

このカードに賭ける。これならまだ逆転の手を打てる。

「魔法カード『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを2枚ドロロー！」

強欲な壺

【通常魔法】

自分のデッキからカードを2枚ドロローする。

ビッ！ と引かれた2枚のカード。それはグラトニーの頭の中に光のレールを生み出す。

1枚のカードから次のカードへ。次から次へと繋がり、そして――

「おいらは『パフェトークン』2体をリリースし、『ビッグ・ハンマーボー』をアドバンス召喚っ！」

『ホアアッ！』

ビッグ・ハンマーボー：ATK 2000

「更に永続魔法カード『ワイヤー疑似餌』を発動！ 発動後、自分の場にこのカードは特殊召喚される！ そしてそのレベルは自分の場のモンスター1体のレベルをコピーする！」

ワイヤー疑似餌：ATK 0 / ☆? ↓ 8

虹色の光の中にパフェが消え、入れ替わりに麻婆豆腐の器を頭の上に乗せた大槌使い

が現れる。更にその隣には小魚を模したプラスチック製品が出現した。

「そして『ビッグ・ハンマーボー』の効果発動！ 1ターンに1度、自分の場にレベル6以上のモンスターが特殊召喚された時、デッキから同じレベルのモンスターを1体特殊召喚する！」

ビッグ・ハンマーボー（効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／悪魔族

ATK 2000 / DEF 3100

このカードが自分の場に表側表示で存在し、自分の場にレベル6以上のモンスターが特殊召喚された時、自分のデッキからそのモンスターと同じレベルのモンスターを1体特殊召喚できる。

この効果は1ターンに1度しか使えない。

ワイヤー疑似餌（オリジナル）

【永続魔法】

自分の場に存在する攻撃力2000以下のモンスターを1体選択して発動する。

このカードは発動後モンスターカード（魚族・水・星？・攻／守0）となつて、自分の場に攻撃表示で特殊召喚される。

このカードのレベルは発動時に選択したモンスターと同じになる。

「その効果でおいらはデツキからレベル8の『白菜キツカー』を特殊召喚！」  
『トアッ！』

白菜キツカー：ATK 2650

巨大な大槌を振り下ろして空いた大穴。そこから飛び出したのは、大きな白菜。では無く、白菜の胴体から手足の生えた超能力者。デフォルメされた目が赤く輝き、額（らしき場所）のゴーグルを装着する。

「レベル8の『白菜キツカー』と『ビッグ・ハンマーボー』、『ワイヤー疑似餌』をオーバーレイ！ 3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

グラトニーの宣言に合わせて、白菜の超能力者が緑、大土使いが茶色、プラスチック製の小魚が浅黄色の光に変わり、上空へと螺旋を描きながら飛び上がる。

天に生まれた銀河の渦の中へと、3つの光は飛び込んで行った。

☆8×☆8×☆8〓★8

「エクシーズ召喚！ 来い、『ヨーグルトレイン』！」

『ポオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

どこからか警笛が鳴り響き、白煙を吹き上げながら巨大な蒸気機関車が走り寄って来た。石炭車と客車の後ろには申し訳程度にヨーグルトがカップごと車輪で走っている。足元には御丁寧なレールが敷いてある。

ヨーグルトレイン：ATK 3800

「こ、攻撃力3800だと!?!」

「これがおいらの切り札の内の一枚だ！ バトル！ 『ヨーグルトレイン』で『スカル・バスター』を攻撃！ ムルキー・スチーム・インパクト！」

乳白色の煙をあげて機関車がバズーカを携えた骸骨に迫る。

しかし、これを容易く通す程、ラースは弱くない。

「アマイな！ リバースカード、オープン！ 罨カード『凶悪なるバリアーバッドフォー

スー』！ 攻撃モンスター破壊し、その攻撃力の10倍のダメージを与える！ 更にこのカードの発動に対して罠を発動する事はできません！」

突撃する汽車の目の前に展開される漆黒の結界。

だがグラトニーとて元・上級護衛、7人いる護衛の中の元・ナンバー2。これでありやられるような輩では無い。

「アマいのはそつちだ！ 『ヨーグルトレイン』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、バトルフェイズ中に発動した罠カードの効果全て無効にして除外する！」

「何だと!？」

ヨーグルトレイン：ORU 3↓2

光る星がボイラー室に飛び込むと、汽車の警笛が一層強くなり、速度が上がった。張られた結界はその突撃に耐えきる事が出来なくなり、木端微塵に砕け散った。

「ぐ、おおおおおおおおおつー！」

ラース：LP 4000↓2300



機関車はそのまま人骨に直撃。背後にいたラースごと吹き飛ばした。

凶悪なるバリアーバッドフォースー(オリジナル)

【通常畏】

相手の攻撃宣言時に発動可能。

攻撃を行う相手モンスターを破壊し、その攻撃力の10倍のダメージを相手に与える。

このカードの発動に対して畏カードを発動する事はできない。

ヨーグルトレイン(エクシーズ・効果モンスター)(オリジナル)

ランク8

ATK 3800 / DEF 1000

闇属性 / 機械族

レベル8モンスター×3

このカードは融合素材にはできない。

バトルフェイズ中に畏カードが発動した時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り

除く事でその発動を無効にして除外する事ができる。

この効果はカウンター罠にも発動できる。

このカードにエクシーズ素材が存在しない自分のターンのスタンバイフェイズ時、このカードに墓地のレベル8のモンスターを1体選択してエクシーズ素材として下に重ねる事ができる。

この効果はこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り1度しか発動できない。

「おいらはこれでターンエンドだ！」

グラトニー：LP 3200

手札：4枚

フィールド

：ヨーグルトレイン（ATK 3800・ORU：2）

：伏せカード1枚

エンド宣言をした後、ふとグラトニーは生前の事を思い出した。

裕福でも貧乏でも無い、一般家庭の生まれである自分。特に取り柄も無く、ただただ食べる事が好きだった。

そのせいでかなりの肥満体だったが、持ち前の人の良さが味方して友人は多かった。そんな彼が何故死んだか。簡潔に言えば、自然の摂理とでも言うべきか。老衰である。

結婚して傾国の美女というワケでも無いが美人の妻を貰い、子や孫にも恵まれた。それなりに充実した人生だったと記憶している。

だが、彼には1つだけ心残りがあった。

——もう1度だけ、あいつの料理が食いたかったなあ。

妻は彼が亡くなる半年前に息を引き取っていた。何よりも美味であった彼女の料理をもう1度だけ食べたい、それだけが最期の願いだった。2度と絶対に、叶うはずも無い、夢い願ひ。

きつとその辺を邪神に付け込まれたのだろう。何とも皮肉な話だ、食べ物に執着したせいで、あろう事か、死んで転生したかも知れない彼女を殺そうとしていた。

それを止めてくれたのがあの4人だ。

彼らにはいくら感謝してもしたりないだろう。

「我のターン！」

だから、例え勝てなくとも、ラースに致命傷を与えるぐらいの事はしないとイケない。それが、もう1度会おうと約束した男としての義理だからだ。

「おのれグラトニー……っ！ 貴様、許さんぞお！」

「なら来いや！ 吠えるだけじゃ勝てねえぞ！」

「ならば望み通りにしてくれる！」 『スカル・ラット』を召喚！」

『チュウツ！』

スカル・ラット：ATK 0

光のゲートを潜り、骨だけのネズミが現れる。

齧歯類としての特徴である前歯はあるものの、尻尾が無いためモルモットの様な印象を受ける。

「攻撃力0か……。さて、どんな効果を持つ？」

「フン、焦るな。『スカル・ラット』は召喚に成功した時、カードを1枚ドロウできる。更に自分の場のモンスターを1体リリースし、そのモンスターの攻撃力分パワーアップす

る」

「何!?!」

スカル・ラット（効果モンスター）（オリジナル）

星3

闇属性／アンデット族

ATK 0 / DEF 0

このカードの召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローできる。

自分の場のモンスターを1体リリースする事で、このカードの攻撃力は次の自分のスタンバイフェイズまで、そのモンスターの攻撃力分アップする。

「その効果で『スカル・ジャイアント』をリリースし、攻撃力を2600ポイントアップさせる!」

スカル・ラット：ATK 0 ↓ 2600

骨の巨人が光となって消滅し、代わりに骨のネズミがその光を浴びて強化される。そ

してその大きさは最初の数倍になった、とは言え人間より一回り程小さいのだが。

「一気に攻撃力を爆発的に高めて来たか……。だが、それでもこっちの攻撃力には届かないぞー！」

「バトル！ 『スカル・ラット』で『ヨーグルトレイン』に攻撃！」

「何!?!」

「速攻魔法『骨雪崩』を発動！ 自分の場のアンデット族モンスターの攻撃力を倍にする！」

骨雪崩（オリジナル）（改訂版）

【速攻魔法】

自分のアンデット族モンスターの攻撃宣言時、そのアンデット族モンスターを対象に発動する。

（１）：選択したモンスターの攻撃力は倍になり、カード効果では破壊されなくなる。

このターンの終了時、自分は選択したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受け、そのモンスターは墓地に送られる。

『ヨーグルトレイン』はバトルフェイズ中に発動した罫は無効にできても魔法には無力

だろう！」

「チッ！」

スカル・ラット：ATK 2600↓5200

怒涛の勢いをつけて突進する骨のネズミ。背後からは1つの墓地を掘り起こしてもまだ足りない程の量の骨が雪崩れ込んで来ている。

これを喰らえばグラトニーのライフは1800となり、ライフが逆転してしまう。しかし、こんな単調な攻撃が通るとはラースも考えていないし、実際グラトニーは通さない。

「だったらこうするまでだ！ リバースカード、オープン！ カウンター罠『シチューンアップ』！ デッキの1番上のカードをゲームから除外し、除外したカードによって効果が変動する！」

シチューンアップ（オリジナル）

【カウンター罠】

相手の攻撃宣言時に発動できる。

デッキの一番上のカードをゲームから除外し、除外したカードの種類によって以下の効果を得る。

- モンスターカード：そのモンスターの元々の攻撃力と守備力分だけ、自分の場のモンスター1体の攻撃力と守備力がエンドフェイズまでアップする。
- 魔法カード：エンドフェイズまで相手の魔法・罠の効果は無効となる。
- 罠カード：バトルフェイズは終了となる。

「除外したカードは『マリシヤス・プレス』、罠カードだ！ よってこのターンのバトルフェイズは強制終了する！」

マリシヤス・プレス（オリジナル）

【通常罠】

相手の場にエクストラデッキから攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時に発動できる。

そのモンスターを破壊する。

その後、相手の場の最も攻撃力の高いモンスターと、自分の場の最も攻撃力の低いモンスターでメインフェイズ中に戦闘を行う。



この戦闘によって発生するダメージは500ポイントアップする。

ピタ、と止まるネズミ。これで仕留められる事は無くなった。

今度は逆にラースが窮地に立たされる事となる。エンドフェイズに『スカル・ラット』が破壊され、しかも召喚権を使用したからモンスターを召喚できない。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

『スカル・ラット』は消えて貰うぞ」

「分かっている。だが、『スカル・ラット』の元々の攻撃力は0だ。よってダメージは無い」

ラース：LP 2300

手札：3枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード2枚

「おいらのターン、ドロー！ このまま押し切るぜえ、バトル！ 『ヨーグルトレイン』で

レースにダイレクトアタック！　“ミルキー・スチーム・インパクト”！  
ポオオオオオオオオオオ！　と再び鳴る警笛。車輪が回転を始め、ヨーグルトカットの車両を牽引した機関車がレースを轢くために走り出す。  
対し、ガラ空きだったハズのレースの場には、いつの間にかモンスターが出現していた。

スカル・スライム：DEF　2400

「っ!?　いつの間に!?!」

「貴様のメインフェイズ終了時だ。バトルフェイズで無くては罠の発動を潰せないだろう?　永続罠『スカル・スライム』は発動後、モンスターカードとなって特殊召喚される。そして貴様は既に攻撃宣言を行っているぞ?」

「ッ、構うものか!　そのまま攻撃だ!」

警笛がより一層甲高く鳴り響き、機関車が突進する。

だが、骨と泥の塊はそれを正面から受け止めた。厳密に言えば、両者の間には一体のモンスターが挟まっていた。

「何!?!」

「速攻魔法『速攻召喚』だ。このカードは手札からモンスターを1体、通常召喚扱いで召喚する。手札の『スカル・デیفエンサー』を召喚した。

『スカル・デیفエンサー』が場に存在する限り、相手の攻撃対象をこのカードに私の意思で変更でき、またこのカードは1ターンに2度まで破壊されない」

速攻召喚（アニメオリジナル）

【速攻魔法】

手札のモンスター1体を通常召喚する。

スカル・スライム（オリジナル）

【永続罨】

このカードは発動後モンスターカード（アンデット族・水・星6・攻0／守2400）となつて、自分の場に守備表示で特殊召喚される。

（このカードは罨カードとしても扱う）

スカル・デیفエンダー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 0 / DEF 2250

このカードは1ターンに2回まで、戦闘およびカードの効果では破壊されない。

相手の攻撃宣言時、このカードが自分の場に表側表示で存在する時、このカードを相手モンスターへの攻撃の対象にする事ができる。

大きな白い盾が、列車の突進を受け止めた。

『ヨーグルトレイン』の効果はバトルフェイズ中の罠にしか通じない。本来ならば『次元幽閉』や『ミラーフォース』が通じない上に再利用も封じるといふ強力な効果が、裏目に出た形だった。

『ヨーグルトレイン』の効果は、『バトルフェイズ中』の『罠カード』にしか、通じないのだ。

「くっ……!」

「どうした、その程度か? さっきまでの威勢はどこへ行った?」

「っ、カードを1枚セットして、ターンエンドだ!」

グラトニー：LP 3200

手札：4枚

フィールド

：ヨーグルトレイン（ATK 3800・ORU：2）

：伏せカード1枚

「私のターン、ドロ。所詮、貴様はこの程度。1位と2位の絶対的な力の差の前に、平伏せ」

現状、フィールドはラースには優位とは言い難い。しかし、精神的な攻防は完全にラースに優位になっていた。

「行くぞ！ 我は『スカル・デイフェンダー』をリリースし、『スカル・サルベージャー』をアドバンス召喚！」

『コカカカカッ！』

スカル・サルベージャー：ATK 2000

盾を持った骸骨が崩れ、その骨の山の中から大きな縄を持った人骨が現れる。縄の先端は地中に繋がっていた。

『スカル・サルベージャー』がアドバンス召喚に成功した時、墓地のモンスターを1体、効果を無効にして守備表示で特殊召喚できる。『スカル・プリヴェンター』を特殊召喚  
 ！

スカル・プリヴェンター：DEF 3100

地中に繋がった縄を引き上げると、その縄にしがみ付く様に1体の人骨が地中から這い上がって来る。落ち武者の様に武装したその姿は、錆びた金属で全身を覆っている様にも見えた。

スカル・サルベージャー（効果モンスター）（オリジナル）

星6

闇属性／戦士族

ATK 2000／DEF 2000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、自分の墓地に存在するアンデット族モンスターを1体、効果を無効にして守備表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターは、表示形式の変更ができない。

「更に魔法カード『スカル・アッパー』を発動！ 自分の場に存在するモンスターが全て「スカル」と名のついたモンスターである場合、自軍全てのモンスターのレベルは3つまで上がる！」

「れ、レベルを一気に調整するカード!?!」

スカル・アッパー（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場に存在するモンスターが全て「スカル」と名のついたモンスターである場合に発動できる。

自分の場の全てのモンスターのレベルをそれぞれ3つまで上げる事ができる。

「その効果で、全てのモンスターのレベルを3つ上げる！」

スカル・スライム：☆6↓9

スカル・サルベージャー：☆6↓9

スカル・プリヴェンター：☆6↓9

「レベル9となった『スカル・スライム』、『スカル・サルベージャー』、『スカル・プリヴェンター』をオーバーレイ！」

骨と泥の塊が朱、縄を持った骨が灰、鎧を着た骨が黒の光となつて、螺旋を描きつつ飛び上がる。上空に生まれた銀河の渦に、三筋の光は飛び込んだ。

「3体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆9×☆9×☆9＝★9

「エクシーズ召喚！ 出でよ、白骨の集合体にして死の国からの絶望を齎せし恐怖の魔龍！ 『スカル・インフェルノ・ドラゴン』！」

『ジィビャアアアアアアアアアアゴギガアアオガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

スカル・インフェルノ・ドラゴン：ATK 4400

銀河の渦から、骨だけの翼を動かしながら現れるのは、やはり骨だけの白い龍。周囲には紫に光る星が3つ旋回しており、体中に人や牛、魚といった様々な種類の骨をくっ



つけて飛んでいる。

グラトニーはランク8に対し、ラーズはランク9、ある意味そこには彼らの間にある差を如実に語る何かがあった。

「攻撃力が『ヨーグルトレイン』を上回っただとお!？」

「更に速攻魔法『邪神の頭脳戦』を発動! 相手の場のセットされた魔法・罠を選択! それが魔法か罠かを選び、正解ならば破壊して500ポイントのダメージを与える! 逆に不正解ならば私のライフを500回復!」

邪神の頭脳戦（オリジナル）

【速攻魔法】

相手フィールド上の魔法・罠ゾーンに存在する裏側表示のカードを1枚選択する。

選択したカードが魔法カードか罠カードかを宣言し、当たった場合はそのカードを破壊して相手に500ポイントのダメージを与え、外れた場合は自分のライフポイントを500回復する。

「我がが選択するのは、罠カードだ!」

チュイオン! とグラトニーの伏せたカードが表になる。

リバーズカードは……、『聖なるバリアーミラーフォースー』。  
「当たったな。よつて『ミラーフォース』は破壊され、500ポイントのダメージを受け  
てもらおう」

「ぐつ、『ミラーフォース』が……っ！」

聖なるバリアーミラーフォースー

【通常罫】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

レースのカードから放たれた黒い雷が、グラトニーのカードを破壊。更に別の雷が、  
グラトニーに直撃する。

「ぐおあああああああああああああああああああつ！」

グラトニー：LP 3200↓2700

咄嗟に腕を交差して雷撃を防ぐものの、大きく後ろに下がる。腕からはタンパク質が

焦げたような臭いが漂い、黒く焼けている。

「これで、貴様は防御の策を失った」

「クッ！」

「更に一つ、教えておいてやろう」

ラースはそう言つて、笑う。

嗤う。

嘲笑う。

侮蔑の笑みが、浮かぶ。

『『スカル・インフェルノ・ドラゴン』はオーバーレイ・ユニットを一つ使う事で、モンスターを戦闘で破壊した時に相手に戦闘ダメージを与える代わりに、破壊したモンスターの元々の攻撃力と守備力の合計値分のダメージを与える事ができるのだよ』

「何だ?!」

『『ヨーグルトレイン』の攻守の合計値は4800ポイント。即ち——』

貴様の負けだ。

その宣告が辺りに響き……。

「バトル! 『スカル・インフェルノ・ドラゴン』で『ヨーグルトレイン』に攻撃! 消

えよ、グラトニー! “ヘルブレイズ・バースト” オ!」

「ぐあああつ！」

紫の焰が、蒸気機関車を焼き尽くし、そして――

『スカル・インフェルノ・ドラゴン』の効果発動！ 相手モンスターを戦闘破壊した時、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、戦闘ダメージを無効にし、その攻守の合計値分のダメージを与える！」

スカル・インフェルノ・ドラゴン（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

ランク9

闇属性／ドラゴン族

ATK 4400 / DEF 0

レベル9モンスター×3

このカードはX素材が2体でもX召喚できる。

その場合、このカードの元々の攻撃力は半分になり、光属性と戦闘を行う場合ダメージ計算を行わずこのカードを破壊する。

（1）：このカードとの戦闘で戦闘ダメージが発生し、また相手モンスターを戦闘によって破壊する場合に発動できる。

このカードのX素材を1つ取り除き、戦闘ダメージを0にする。  
このターンのバトルフェイズ終了時、相手に破壊したモンスターの攻撃力と守備力の合計値分のダメージを与える。

「止めだ! スカル・マードー・プレス!」

「うおおおおあああああああああああああああつ!」

黒い霧が突風のような勢いで、グラトニーを襲った。

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 57 : 暴食の意地 憤怒の咆哮

グラトニー : LP 2700

手札 : 4枚

フィールド

: ヨーグルトレイン (ATK 3800・ORU : 2)

: 魔法・罨無し

ラース : LP 2300

手札 : 0枚

フィールド

: スカル・インフェルノ・ドラゴン (ATK 4400・ORU : 3)

: 魔法・罨無し

『スカル・インフェルノ・ドラゴン』の効果発動！ 相手モンスターを戦闘破壊した時、

オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、戦闘ダメージを無効にし、その攻守の合計値分のダメージを与える！」

異世界の廃墟の時計塔の下で行われている戦い。上級護衛の1位と2位が鎬を削り合い、そして――

「止めだ！　　スカル・マードー・プレス！」

「うおおおおあああああああああああああああつ！」

巨大な、様々な骨の集合体である龍の吐き出した、黒の霧が、グラトニーを襲った。

破壊されたグラトニーのモンスター、『ヨーグルトレイン』の攻守の合計値は4800に対し、グラトニーのライフは2700ポイント。受ければ確実に、負ける。

だが、グラトニーの手札にも、場にもそれを防ぐ手立てが無い。

万事休す。そう思った時だった。

「――そうだ！　一番最初に送ったのは……！」

『ヨーグルトレイン』のオーバーレイ・ユニットとして、最初に消費したカードを思い出した。

慌てて墓地ゾーンに手を翳して目的のカードを取り出すと、それをモンスターゾーンに叩きつける様にして召喚した。

「墓地の『白菜キッカー』の効果が発動！　プレイヤーが1000ポイント以上の効果ダ

ダメージを受ける時、このカードを墓地から特殊召喚して、そのダメージを0にできる！」  
『トアツ！』

紫色の魔法陣が地面に発生し、その中心からゴーグルをかけた白菜が現れる。

白菜の体から生えた腕が、紫の霧を受け止めるバリアを生み出す。デフォルメされた目が睨むように細められ、踏ん張る足が地面を削るが、どうにか受け止め切る事に成功した。

「もつとも、この効果を使用した場合、エクシーズ素材にできねえ上に場を離れれば除外されちゃうし、攻撃力も2000ポイントダウンしちゃうがな」

白菜キツカー：ATK 2650↓650

白菜キツカー（効果モンスター）（オリジナル）

星8

地属性／サイキック族

ATK 2650／DEF 1900

このカードは反転召喚できない。

自分が1000ポイント以上の効果ダメージを受ける時、このカードを墓地から特殊



召喚する事で、そのダメージを無効にできる。

この効果でこのカードが特殊召喚された場合、攻撃力は2000ポイントダウンし、エクシーズ素材にする事はできず、フィールドを離れた時ゲームから除外される。

「しづとい男だ」

「容易く勝てる相手じゃねえ事くらい分かってるだろ」

「フン……、ターンエンドだ」

ラース：LP 2300

手札：0枚

フィールド

：スカル・インフェルノ・ドラゴン（ATK 4400・ORU：2）

：魔法・罨無し

「あ、危ないトコだったぜ……」

「悪足掻きをする奴だ」

「言ってる！ おいらのターン、ドロー！」

手札はこれで5枚。だが、ラーズの場合には攻撃力4400のモンスター。守備表示も無意味というバトルでは相手泣かせなモンスター。

だったら、バトルで破壊しなければ良いだけの話だ！

「魔法カード『チューインカンテーション・ガム』を発動！ 自分の場のモンスターを1体リリースし、そのレベル未満の魔法使い族モンスターを1体、手札かデッキから特殊召喚する！ おいらはレベル8の『白菜キツカー』をリリース！ デッキからレベル7の『キムチアガール』を特殊召喚！」

『ハアァー！』

キムチアガール：ATK 1700

虹色の渦の中へと白菜の超能力者は消え、代わりにキムチの柄が描かれている服を着たチアガールが登場。ピツピツ！ とホイッスルを吹いて、手にしたボンボンを振っている。

「更にチューナーモンスター『ノコギリノゴ』を召喚！」

『ウエイウエイ！』



「攻撃力4000か、それでは攻撃力4400の我が『スカル・インフェルノ・ドラゴン』には勝てな——」

「素材となった『キムチアガール』の効果発動！ このカードをシンクロ素材にしたモンスターは1000ポイント、攻撃力がアップする！」

「何だと!?!」

カルバドスパイダー：ATK 4000↓5000

「更に『ノコギリリング』が墓地に送られた時、相手モンスター1体の攻撃力を800ポイントダウンさせる！」

スカル・インフェルノ・ドラゴン：ATK 4400↓3600

赤い光が両者の体に纏わりつく。片方は強化に、もう片方は弱体化へと繋がる。

キムチアガール（効果モンスター）（オリジナル）

星7

光属性／魔法使い族

ATK 1700 / DEF 2300

このカードをシンクロ素材としたモンスターは、攻撃力が1000ポイントアップする。

またデュエル中1度だけ、このカードのレベルを2つ下げる事で、このカードを墓地から守備表示で特殊召喚できる。

ノコギリngo（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／植物族

ATK 0 / DEF 0

このカードが墓地に送られた時、相手モンスター1体の攻撃力を800ポイントダウンさせる。

「攻撃力が大きく上回っただろ!？」

「バトル! 『カルバドスパイダー』で『スカル・インフェルノ・ドラゴン』を攻撃!

“スパイダー・ストライク”!

「ぐ、おとおおおとおおおつ！」

ラース：LP 2300↓900

吐き出される無数の糸が、骨の龍を貫く。全身の骨を余す事無く貫かれた龍は、木端微塵に砕かれた。

さしものラースでも、手札にも場にも墓地にも迎撃用のカードが無い状況では、太刀打ちできない様だ。

ツウ、と汗を流し、攻撃が通った後も何も無い事を確認したグラトニーは、慎重に手札を1枚セットする。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

グラトニー：LP 2700

手札：2枚

フィールド

：カルバドスパイダー（ATK 5000）

：伏せカード1枚

「チイツ……、我のターン、ドロー！」

一気に窮地に立たされたラース。苛立ちながらカードを引き、それを確認する。

「(ほう、『強欲な壺』か……)魔法カード『強欲な壺』を発動！ デツキからカードを2枚ドロー！」

手札が0から2へ。

補充した手札を見て、ラースは笑った。

「手札から速攻魔法『ソウトレス・リロード』を発動！ 自分のデツキの1番上のカードを墓地に送り、墓地のモンスターを、召喚条件を無視して可能な限り守備表示で特殊召喚する！」

ソウトレス・リロード(オリジナル)

【速攻魔法】

自分のデツキの1番上のカードを墓地へ送る。

自分の墓地からモンスターを、召喚条件を無視して可能な限り守備表示で特殊召喚する。

特殊召喚したモンスターの攻撃力と守備力は0となり、モンスター効果は無効となる。

る。

この効果で特殊召喚したモンスターはカード効果では破壊されない。

「もつとも、この効果で特殊召喚したモンスターは、カード効果では破壊されない代わりに、攻守は共に0となり、モンスター効果も無効になるがな。さあ蘇れ、『スカル・イーター』、『スカル・ウルフ』、『スカル・バスター』、『スカル・ラット』、『スカル・デیفエンダー』ッ！」

スカル・イーター：DEF 0

スカル・ウルフ：DEF 500↓0

スカル・バスター：DEF 400↓0

スカル・ラット：DEF 0

スカル・デیفエンダー：DEF 2250↓0

瞬時に蘇る骨の軍団。人骨が、狼が、砲撃兵が、鼠が、盾が屈んで防御の姿勢を取りつつ、ラーズの前に壁となって防壁となる。

「更に今墓地に送られた罨カード、『ブラックコインケース』の効果を発動。墓地のこの



カードをゲームから除外し、デッキからカードを2枚ドロロー！」

ブラックコインケース（オリジナル）

【通常罫】

フィールド上に存在する永續罫を1枚デッキに戻して発動する。

デッキからカードを1枚ドロローする。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを2枚ドロローできる。

更に2枚。ターン開始時には0枚だった手札が現在は3枚にまで回復している。

手札に加えたカードを見て、ラースはニヤリと笑い、指を2本立てた。

「グラトニー、2ターンだ」

「何？」

「2ターンくれてやろう。その間に我に勝てなければ、貴様は負ける」

「っ！」

グラトニーは直感で判断した。

嘘じゃない。本当にラースは2ターン後に決着をつけるつもりだ。

「魔法カード『封印の黄金櫃』を発動！ 自分のデッキからカードを1枚ゲームから除外し、2ターン後のスタンバイフェイズ時にそれを手札に加える！」

### 封印の黄金櫃

#### 【通常魔法】

自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加える。

「我はデッキから『スカル・カノン』を除外する。……グラトニー、教えてやろう」

「何をだ？」

「攻撃力0のモンスターカード、『スカル・カノン』は、墓地の『スカル』を1体装備し、その攻撃力をコピーするカードだ。」

「私の墓地には攻撃力4400の『スカル・インフェルノ・ドラゴン』がいる。言いた  
い意味が、分かるな？」

「痛いぐらい分かる、それがグラトニーの感想だった。」

「要するに攻撃力4400のモンスターが復活するのだ。何かの制約がついていたとしても、それはあまりにも強力すぎる。」

「カードを1枚伏せ、ターンを終了するぞ」

ラース：LP 900

手札：1枚

フィールド

：スカル・イーター（DEF 0）、スカル・ウルフ（DEF 0）、スカル・バスター（DEF 0）、スカル・ラット（DEF 0）、スカル・デیفエンダー（DEF 0）  
 ：伏せカード1枚

「おいらのターン！」

焦るでも無く、グラトニーはカードを引く。

（ある程度は大丈夫だ。おいらの場には攻撃力5000のモンスターがいる。4400じゃ越えられない。だが……）

攻撃力の差は僅か600、『突進』で容易く埋められる。

加えて『カルバドスパイダー』には破壊耐性は無い。その手のカードで崩される可能性も高い。

何より、ラースがハツタリをかますとは思えない。何かその攻撃力の差を覆す策があ

ると見るべきだ。

幸いにもラーズのモンスターは全て守備力0。ここは攻める！

その前に。

「速攻魔法『サイクロン』を発動！ その伏せカードを破壊させてもらおう！」

サイクロン

【速攻魔法】

フィールド上の魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

グラトニーのカードから旋風が吹き荒れ、ラーズのカードを吹き飛ばす。

汎用性の高いカードであり、『ナイト・シヨット』や『大嵐』共々、伏せカードを狙うのに一役買っている、強力な除去カードだ。

「ぬ……」

伏せられていたカードは『ダーク・バリア』。ダメージを相手に押しつける罠カードだった。

モンスターが壁となっているこの状況ではあまり意味も無いが。

ダーク・バリア（オリジナル）

【通常罠】

このターン発生するプレイヤーへのダメージは全て相手が受ける。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事でデッキからカードを1枚ドロウできる。

防御カードが崩れた今、ラースには攻撃を防ぐ手段が無い。

しかし、グラトニーはそれでも嫌な予感が拭えずにいた。手札はまだ1枚残っていたのに、伏せカードは1枚だけ。モンスタードった可能性もあるが、もしも魔法か罠なら、『サイクロン』で除去される可能性を考えるのならば、同時に伏せるべきだった。

（それをしねえって事は、そいつは破壊されちゃ困るカードって事だ。こりやミスったな。ハンデスカードをもう少し入れておくんだった）

何でも良いから手札を捨てさせるカードを入れておくべきだった。だが、今更それを後悔したところでどうにもならない。

今は、今できるプレイングをするだけだ。

「バトル！ 『カルバドスパイダー』で『スカル・イーター』に攻撃！ スパイダー・ストライク！」

巨大なクモの吐き出した糸が、槍のように人骨を貫き、破壊する。

効果無効が取り消された場合、今最も厄介なモンスターが『スカル・イーター』だ。

他のモンスターは驚異的な効果は使えないが、『スカル・イーター』のみ自力で凶悪な効果を発揮する。

もし効果が発揮されれば、グラトニーが受けるダメージは4000ポイント、その一撃で敗北する。

今、手札で打てる手は無い。今できるのは、相手モンスターを1体でも多く減らす事だ。

「更に、モンスターを1体セットして、ターンエンドだ！」

グラトニー：LP 2700

手札：1枚

フィールド

：カルバドスパイダー（ATK 5000）、セットモンスター1体

：伏せカード1枚

「私のターン。『封印の黄金櫃』、1ターン目だ」

封印の黄金櫃：残り1ターンの

ギリリ、とグラトニーは齒軋りする。

次のターンに強力なモンスターが手札に加わる。そうならば、この戦況が引つ繰り返る可能性は高い。最悪、そのターン中に敗北するかも知れないだろう。

「行くぞ。レベル4の『スカル・ウルフ』と『スカル・デیفエンダー』でオーバーレイ  
！」

『ガルルルッ！』

『コガアアッ！』

「2体のアンデット族モンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

骨の狼が白、骨の盾が黒の光に姿を変え、銀河の渦の中へと突っ込む。

☆4×☆4||★4

「エクシーズ召喚！ 面を上げろ！ 『スカル・パペッター』！」

『キヘヘヘヘッ！』

スカル・パペッター：DEF 1300

姿を露わにするのは、巨大な人骨の上半身。周囲の建物並みにデカいが、背骨の途中でその姿は終わっている。

5本の指の先からは頑丈そうなワイヤーが垂れ下がっており、先端は地面の中へと潜っていた。

「守備表示か、随分と慎重だな。お前の性格を考えると、もつと強力なモンスターを呼び出してガンガン攻撃して来るもんだと思ってたんだが、おいらの勘違いか？」

「否。その考えは間違っていない。が、確約された勝利を放棄する程間抜けでも無い」  
チツ、とグラトニーは舌打ちする。

どの道、伏せたカードは『スカル・ウルフ』の効果で使えないが。

『スカル・パペッター』のモンスター効果を発動。1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ消費し、墓地の“スカル”と名のついたモンスターを1体、墓地から守備表示で特殊召喚する！」

スカル・パペッター（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）



ランク4

闇属性／アンデット族

ATK 2400 / DEF 1300

レベル4 アンデット族 モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、自分の墓地に存在する「スカル」と名のついたモンスターを1体、表側守備表示で自分の場に特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は、エンドフェイズまで無効となる。

「我はオーバーレイ・ユニットとして消費された、墓地の『スカル・ディフェンダー』を特殊召喚！」

スカル・ディフェンダー : DEF 2250

「レベル4が再び2体か……」

紫の星が巨大な人骨の額に吸収され、両手のワイヤーが勢い良く引き上げられた。そうしてワイヤーに括り付けられる形で骨の盾が復活する。

同じレベルのモンスターが揃えば、エクシーズ召喚が来る。そうグラトニーは思ってた身構えるが……。

「我はこれで、ターンを終了しよう」

「!？」

グラトニーはあっさりとターンを終了してしまった。

ラース：LP 900

手札：2枚

フィールド

：スカル・パペッター（DEF 1300）、スカル・バスター（DEF 0）、スカル・ラット（DEF 0）、スカル・ディフェンダー（DEF 2250）

：魔法・罨無し

何を企んでいる、とグラトニーは訝しむが、すぐに推測ができた。エクシーズ召喚をしなかった理由は2つあるのではないかと、と。

1つは、『ディフェンダー』を場に残すためだ。優秀な防御モンスターを場に残し、戦線を維持するつもりなのだろう。

もう一つは、もうランク4のエクシーズモンスターがいない場合だ。ランク4は出しやすいが、そればかりに頼るのも問題だからである。別のランクやシンクロ・融合モンスターを組み込んで、初めてエクストラデッキは一流になる、というのがグラトニーの持論。故にあちらのエクストラデッキにはもうランク4がないのではという推測ができる。

何にせよ、『スカル・ディフェンダー』を突破しないとこちらの攻撃は届かない。

「おいらのターン、ドロー！」

引いたカードを見る。

ドローしたのは、モンスターカード。

（——よし、これなら行ける！）

『コーンコンボーイ』を召喚！」

コーンコンボーイ：ATK 1800

フィールド上にカードが縦に現れ、その絵柄から光が発せられる。

発せられた光からは、トウモロコシを荷台に乗せたコンボーイが発進した。

「更にセットされていた『アスパライノ』を反転召喚！」

『ブモオオオッ!』

アスパライノ：ATK 1500

続いて横向きのカードが表向きになり、アスパラガスを薪の様に背負ったサイが現れた。

「ほう。3体の攻撃で『スカル・デイフェンダー』を破壊する算段か。だが、次のターンには再び『スカル・パペッター』の効果で復活するぞ?」

「誰がそんな事をするつつった!? 『アスパライノ』のリバース効果を発動! 相手の場のモンスター1体を選択し、持ち主の手札に戻す事ができる! ♪バツキング・ラツシュ!」

「何!?!」

アスパライノ（リバース・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星3

地属性／獣族

ATK 1500 / DEF 100

(1)：このカードがリバーズした場合に発動する。

相手フィールドのモンスター1体を持ち主の手札に戻す。

(2)：裏側表示のこのカードが効果によってフィールドから離れた場合、このカードをフィールドにセットする。

『スカル・ディフェンダー』にはご退場願おうか！」

「又ウツ！」

破壊に耐性があるのなら、バウンスすれば良い。戦術の基本である。

いかに強い効果でも、単体では限度がある。どこかに必ず穴が存在するものだ。

「バトル！ 『アスパライド』で『スカル・ラット』、『コーンコンボイ』で『スカル・バスター』、『カルバドスパイダー』で『スカル・パペッター』を攻撃！

『アスパラ・ホーン』！ 『エンジンブラスト』！ 『スパイダー・ストライク』！

「ぬ、おおおおおおおっ！」

サイの突進、コンボイの突撃、クモの糸が骨の軍団を突き崩し、掃討する。

4体のモンスターは、グラトニーのターンで全滅した。

「く、バカな……っ！」

「更に『コーンコンボイ』が戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に800ポイント

のダメージを与える！　「イエローシヨット！」  
 「な、ぬあああああああああつ！」

コーンコンボイ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／機械族

ATK 1800／DEF 1750

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、相手に800ポイントのダメージを与える。

このカードとの戦闘によって、プレイヤーが受けるダメージは0になる。

コンボイの荷台に搭載されたトウモロコシの粒がミサイル状に飛び出し、ラースに直撃する。一発残らず直撃し、トウモロコシのミサイルは起爆した。

ラース：LP 900↓100

「そして手札から永続魔法『パラッチーズ』を発動！　800ライフを発動時に支払う

事で、このカードが場に存在する限り、相手が自分の場の最も攻撃力の高いモンスター以外を攻撃する時、その攻撃力は0になる！」

パパラッチーズ（オリジナル）

【永続魔法】

このカードを発動する場合、自分のライフポイントを800ポイント支払わなくてはならない。

相手が自分の場のもっとも高い攻撃力を持つモンスター以外を攻撃する場合、相手モンスターの攻撃力は0になる。

このカードは発動してから次の自分のスタンバイフェイズまで、カードの効果を受けない。

発動後、5回目の相手ターン終了時にこのカードは墓地に送られる。

グラトニー：LP 2700↓1900

「これで追いつめたぞ！」

「くっ！」

残りライフを100にするまで追いつめる事に成功したグラトニー。更に『カルバドスパイダー』以外への攻撃を実質封じ、伏せカードが1枚。そして墓地には自己再生能力を持つ『キムチアガール』がいる。

対し、ラーズの場合にはモンスターは0、魔法・罠も無い。

ライフ差1800の状況で、グラトニーは完全に大勢を手中に収めた。

だが、グラトニーは油断しない。迎撃に打てる手はもう残っていないとは言え、次のターンに何かしらの手を打たれ、逆転する可能性も有り得るからだ。

最後まで油断せず、元・上級護衛は、相手を睨みつける。

「おいらはこれで、ターンエンド！」

グラトニー：LP 1900

手札：0枚

フィールド

・カルバドスパイダー（ATK 5000）、アスパライノ（ATK 1500）、コー

ンコンボイ（ATK 1800）

・伏せカード1枚、パラッチーズ（永続魔法）



「私のターン！ この瞬間、『封印の黄金櫃』の効果によつて、『スカル・カノン』が手札に加わる」

空中に突如として現れる、黄金色に輝く箱。蓋がゆっくりと開き、その中から一枚のモンスターカードがラースの手札に加わった。

（そう、ここで加わる。だが――）

『スカル・カノン』が加わったところで『カルバドスパイダー』の攻撃力には届かない。よしんば届いたところで、一撃で自分を仕留める事など不可能。仮にそれだけの出力が出た所で、伏せたカードで迎撃できる。そんな所か？」

「――ッ！」

「甘いぞ。我は魔法カード『屍の牙城』を発動！ 手札一枚を墓地へ送り、自分の墓地の『スカル』と名のついたエクシーズモンスターを一体復活させる！ 更に発動後、このカードはそのモンスターのオーバーレイ・ユニットとなる！ 『スカル・ディフェンダー』を墓地へ送る！」

屍の牙城（オリジナル）

【通常魔法】

手札を一枚墓地へ送り、自分の墓地の「スカル」と名のついたエクシーズモンスター

を1体守備表示で特殊召喚する。

発動後このカードは墓地には送らず、この効果で特殊召喚されたエクシーズモンスターの下に重ねてエクシーズ素材として扱う。

「蘇れ、『スカル・パペッター』！」

『ケヒヒヒヒヒッ！』

スカル・パペッター：DEF 1300 / ORU 0 ↓ 1

地面に現れる紫の魔法陣。そこからズズズズ、と指先にワイヤーをつけた巨大な上半身の人骨が復帰する。

更にラーズのカードが光の星となり、地面の魔法陣から現れたワイヤー使いの巨大骨の周囲を旋回し始めた。

『『スカル・パペッター』の効果を発動！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使用し、モンスター効果を無効にして墓地から“スカル”モンスターを1体守備表示で特殊召喚する！ 蘇れ、『スカル・ラット』！』

『ジイッ！』

スカル・ラット：DEF 0

ワイヤー使いが垂らした糸が勢いよく巻き取られる。その糸の先端に括り付けられる形で、地面の魔法陣から骨のネズミが引き上げられた。

「来るか……っ！」

「我は『スカル・パペッター』と『スカル・ラット』をリリース！ 『スカル・カノン』をアドバンス召喚！」

スカル・カノン：ATK 0

2体のモンスターが虹色の光の中へと消失し、逆に虹の中から別のモンスターが出現する。

全体的な姿は恐らく人なのだろう。四つん這いになっているが、シルエットは人のそれだ。が、背中には巨大な、自身以上の大きさを誇る白色の大砲が搭載されていた。空洞な筈の眼窩が、怪しい赤色に光る。

【BGM：カミューラのテーマ】

「その効果で墓地の『スカル・インフェルノ・ドラゴン』を装備し、その攻撃力分パワーアップする！」

スカル・カノン：ATK 0↓4400

キャノン砲に搭載される、骨の龍。砲台の上部が開き、そこにカタパルトの要領で龍が乗った。

「だが、攻撃力4400じゃあ『カルバドスパイダー』には敵わねえ！」

『スカル・カノン』の効果がそれだけだと思ったか？ 『スカル・カノン』のもう1つの効果を発動！ 1ターンに1度、装備されたモンスターを墓地へ送り、その攻撃力の半分のダメージを貴様に与える！ アンデット・ミサイルバースト！」

「何だと!?!」

スカル・カノン（効果モンスター）（オリジナル）

## 闇属性／機械族

ATK 0 / DEF 1600

1ターンに1度、自分の墓地に存在する「スカル」と名のついたモンスターを1体、装備カード扱いとして1体だけこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、装備したモンスターの元々の攻撃力分アップする。

1ターンに1度、このカードに装備されたモンスターを1体墓地に送る事で、送ったモンスターの攻撃力の半分だけ相手にダメージを与える。

このカードが破壊される時、このカードが装備したモンスターを代わりに破壊する。

ガゴン！ と砲身が動き、グラトニーに照準が定められた。

残りライフは1900、2200のダメージが通れば敗北は必至だ。

「くたばれ、グラトニー！」

「そうは行くか！ 罨カード、オープン！ 『ダメージ・ダイエツト』！ このターン、おいらが受けるダメージは全て半減する！ よっておいらが受けるダメージは2200の半分の1100ポイントにダウン！」

ダメージ・ダイエツト

## 【通常罨】

このターン自分が受ける全てのダメージは半分になる。

また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、そのターン自分が受ける効果ダメージは半分になる。

トリガーが引かれ、骨の龍が射出される。対し、グラトニーは半透明の結界を張って、その威力を半減させた。

そしてその体が遠慮容赦無く貫かれる。

「ぐ、があああああああああああああああああああつ!!」

グラトニー：LP 1900↓800

貫通した衝撃で吹き飛ばされるグラトニー。ゴロゴロと地面を転がり、苦悶の表情を浮かべて倒れる。

ジジジジ、と腹部に空いた穴が修復されるも、ダメージは消えない。相当な激痛が走り、しかし、グラトニーは静かに笑う。

「た、耐えたぜ、ラース……ッ！ これでもう、打つ手はねえだろ……っ！」



「な、何だよ、何が、おかしいんだよ……っ！」

「褒めてやるぞ、グラトニー。今のに耐えるとはな。だが、読みが一步足りんかったな？」

「何、だと……？ つ、しまった!? 手札はまだ!?」

「そう、我にはまだ一枚手札が残っている」

左手に持っていた一枚のカードを右手に持ち替え、更にラーズは嘲りの顔で話す。

「そしてグラトニーよ、我は『スカル・カノン』で、このカードで貴様を仕留めるなどと、一度たりとて言った覚えは無い！」

「ぐっ！」

そしてラーズのディスクに、一枚のカードが叩きつけられた。

「このカードは通常召喚できん。自分の場の『スカル』と名のついたレベル5以上のモンスターを一体リリースし、手札から特殊召喚する。『スカル・カノン』をリリース！」

そして吹き上がるのは、あまりにも不吉な気配。

光となって消えた髑髏の大砲が、嘲笑う様な表情を浮かべたのではないかと思える程に、嫌な雰囲気蔓延する。







で繋がる。日本の神話に出て来る八岐大蛇に相応する姿だ。

暗い眼窩に赤黒い光が灯り、開いた口から覗く牙からは無色の液体が垂れ、大地を溶かす。

『スカル・デストラクター・ヒュドラ』の攻撃力は、リリースしたモンスターのレベル×800ポイントとなる。『スカル・カノン』のレベルは9、よって『スカル・デストラクター・ヒュドラ』の攻撃力は――』

スカル・デストラクター・ヒュドラ：ATK ? ↓7200

「こ、攻撃力7200だとお!?!」

「本当の終わりだ、グラトニー。ダメージを半分に抑えても、貴様は最早耐える事は不可能だ!」

『カルバドスパイダー』の攻撃力は5000、『スカル・デストラクター・ヒュドラ』は7200、その差2200。『ダメージ・ダイエット』で半分にしても、受けるダメージは1100ポイント。そしてグラトニーの残りライフは800。

グラトニーの場や墓地にはもう防御カードが残っていない。そして手札は0枚。



グラトニー：LP 800↓0

グラトニー：LOSE

ラーズ：WIN

決着をつけた。

【BGM終了】

爆煙の色濃く立つ中、ラーズは静かに嘲笑った。

「惜しかったな、グラトニー。一手足りなかったな」

後少しだった。もう1枚、防御用のカードがあれば、負けていたのはこっちだった。

『スカル・デストラクター・ヒュドラ』は強力なモンスターだが、実はデメリットとし

て、エンドフェイズごとに500ダメージを受けてしまう。

スカル・デストラクター・ヒュドラ（効果モンスター）（オリジナル）  
星10

闇属性／爬虫類族

ATK ? / DEF 0

このカードは通常召喚できない。

自分の場のレベル5以上の「スカル」と名のついたモンスターを1体リリースして特殊召喚する。

このカードの元々の攻撃力は、リリースしたモンスターのレベル×800となる。

このカードが自分の場に表側表示で存在する限り、自分のターンのエンドフェイズごとに元々のコントローラーは500ポイントのダメージを受ける。

最後の一撃に耐えきれなかったら、敗北していたのはこっちだった。

だが、ラースは読み合いに勝った。

故に、啜う。

「本当に、読みがアマかったなあ？」

「ああ、そうだなー！」

「!?」

突然、帰って来るハズの無い返事がした。

プライド、エンヴィー、スロウスは既に闇の粒子として消滅し、邪神の糧となつたハズだ。そしてそれはグラトニーも同じ。ならば、誰だ？

「ハッ！」

「な!?!」

しかし、グラトニーはまだ生きていた。全身がポロポロになつて崩れ落ちながらも、右手に爪を装備し、完全に虚を突かれたラーズの胸に、その鈍色の爪を突き刺した。

「ガッ!?!」

「油断、したな、ラーズ……ッ！ 上級、護衛は、負けても、すぐには、消えないっ！」

「おの、れええ！」

「元、であつても、生き残れるみてえだな……っ！ “カオス・イクスプロード”！」

ガッ！ と発光する爪。グラトニーの右腕を中心として大爆発が生まれ、ラーズ共々吹き飛ばした。

「ぐ、おとおおおとおおとおおとおおとおおとおおっ！」

「ぬがあああああああああああああああつ！」

その爆発でグラトニーは右腕を、ラーズは胸部を大きく失し、吹き飛んで倒れる。

しかし、ラーズはそれを治せるのに対し、力を殆ど失ったグラトニーは、最早消滅を待つのみ。今ので寧ろ、それを早めてしまった程だ。

「お、おのれ、死に損ないがあ……！」

「悪いな、おいら、にも……、意地つつーモン、があるんだよ……つ。せめて、ちつとくれえは、致命傷、受けやがれ……つ！」

ボロ、とグラトニーの体が崩れる。ほほ黒い塵と化したグラトニーは、最期の言葉を紡ぐ。

「ハッ、邪神ごと、くたばれや……！」

それが今際の言葉となって、グラトニーは消滅した。

——後は、頼むぜ。

或いは、そんな言葉が聞こえたのかも知れなかった。そしてその場を、ラーズは睨みつけ、そして、吼えた。

「おのれ、おのれグラトニーイツ！ 許さんぞおおおおおつ！ 人間の分際で、裏切り者風情で、我らに刃向いおつてえ！」

おのれグラトニー！ おのれ「騎士」の魂！ おのれランサー！ おのれ精霊！  
断じて許さんぞお！ 必ず八つ裂きにしてくれる！ 生まれて来た事を泣いて謝罪



させて、冥府の果てまで後悔させてやる！ 復活し次第、邪神様のお力をもって、貴様らの魂を無限の煉獄に閉じ込めてくれる！ 安らぎは微塵も与えん！ この我を！

我らを！ 邪神様を愚弄した罪、永遠の時をもって贖わせ続けてやる！ 滅びなどとい

う生温い贖罪が通ずると思うな！ 必ず！ 必ず報復してやる！ 覚えていろおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおつ！」

周囲が、ビリビリと振動する。

砂が、塵が震え、家屋が揺れる。

ひとしきり吼えた後、ラーズは荒い息で、その場を後にする事とした。

しかし、その表情には、勝者には似つかわしくない、苦悶を浮かべていた。

「ぐ、うううう……。失った力と収集した力の釣り合いが取れん……。最後の一撃が思ったよりも堪えたな……。っ！腐ってもナンバー2のグラトニーというワケか……」

仕方が無いか、とラーズは転移魔法を開いた。

「目標は人界。力が足りんのならば、補給すれば良い。そう、例えば」

ニヤリ、とラーズは嗤う。

そして、邪神のものでは無い、もう1つの自分のデッキを取り出した。

——人間の敗者の魂とかな。

誰もいない世界に、その冷徹で無情な言葉が響いた。

それを聞き届け、彼の転移を見届けたのは、風と石の街だけだった。

t o b e c o n t i n u e d

閑話 スカツとするためにソリテイヤをするのは間違つ  
ているだろうか・序

S I D E : 黎

月1のテストは筆記と実技に分かれているのは皆もよく知つての通り。

筆記は文字通り知識を問われるもの。とはいえOCGプレイヤーたる俺からすればそこまで難しくはない。ただ時代が時代だからか、『森の番人グリーン・バブーン』が戦闘破壊に対応していたりとかエラツタ前の知識も必要で、満点は中々難しい。

とはいえまあそんな引つ掛け問題もどきはそこまで多くないので、90点以上のキープは然程の労苦にはならないのが現状だ。

後は国語だの数学だのの主要五科目とかそういうの。こちらも授業を受けて教科書の内容を理解していれば問題無い。

そして筆記の後に待ち構えているのは実技、つまり実際にデュエルをするテスト。

カードプレイング、残りライフ、デッキ構成その他を見て成績がつけられる。十代は

これの成績だけで退学を免れていると言っても過言じゃないだろう。

このテストの対戦相手は基本的に同じ寮の同じくらしいの戦績相手から選出される事が多い。だから人によつては何ヶ月も連続で同じ相手だったり、格上・格下の寮の何某だったり、時にはブルー女子だったりする。

十代も最初の対戦相手たる万丈目を始め、これまでイエローの第三席だったりブルー女子の上級生だったり相手で、レッド寮が相手になった事は一度も無い。

……勝敗？ H H H H H A、言う必要ある？

そしてそれは俺にも適用される。一応他の生徒とデュエルする時はシンクロもエクシーズも使わないが、それでもカードプールの差や単純な腕の差で、同じレッド寮の奴らでは相手にならないと判断されているらしい。

ちなみに俺と十代をぶつける、という案はあつたらしいが、最初にブルー生をぶつけてしまったせいで「それでは『ブルーじゃなくレッドの生徒じゃないと相手にならない』と、ブルー寮の看板に泥を塗るのではないですかにや？」と大徳寺先生が制してくれたそう。本当にありがとう先生。

そして今回のテストでもまた、俺の前にはブルー寮の生徒達がいた。

「フェイヴァー教諭、これはどういう事ですか」

「おっほん、勿論お前に対するテストだが？ それすら理解できんとは、やはりオシリス

レッドはゴミだな」

この男、フェイヴァーは海馬コーポレーションから派遣された教育実習生。

ワックスで固めたオールバックに加えて見るからにイヤミな表情をしていて、その人を見下すのが楽しいと言わんばかりの下劣な視線はサングラスでも一切隠れていない。

「俺に対するテストねえ。それが俺の前に並んでる目付きの悪いブルー男子達って事で？」

「チッ！ わざわざ説明しなくちやならねえのかよ、これだから無能オシリスレッドは！ あまりオレをイライラさせるんじゃない、蹴り殺されたいのか!? ア、ア!!」

短気過ぎる……。後、蹴っても良いけど足を痛めるだけだぞつと。

俺の今回の実技テストの相手はブルーの男子。レッドに対してブルーをぶつけるといふのは、俺と十代だけの特別措置と言える。

しかし相手の人数が問題だ。

「よおクス、また会ったな」

「へへへ、こりや頂きだぜえ」

「フェイヴァーセンセ、良いんだよな？」

「勿論だとも将来有望なブルーの諸君、君らはレッドを踏み潰して輝く義務があるのだからねえ？」

「うおっしやあー！」

「クッククック……！」

相手は何と5人。その内1人は俺と何度も衝突した高田だ。

成程、俺を実技試験の一番最初に持つて行ったのは見せしめってトコだろう。

さてさて、これは合法なのか否か。遅れてやって来たクロノス先生に聞いてみますか。

「クロノス教諭、良いんですか。俺だけ5人相手つてのは普通のルールとは違うのでは」

「むーむう、私としてーハ、勝手に実技テストの中身を変えられるのは遺憾なノーネ」

「では」

「しかーし！ 既に案は通っているノーネ、いくら私でもこれは引つ繰り返せませんー  
ノ。よって続行！」

あらら。

片目を顰める俺を余所にフェイヴアーは「身の程を知ったか」と言わんばかりの得意気な顔だ。

ま、しゃーないか。

フェイヴアーが優秀な成績を以て教師になればそれがそのままクロノス先生の箔にもなるし、俺が負ければ十代とセットで勢いがついている所謂『ドロップアウト』達

への牽制にもなる。

逆に俺が勝ってもそれは単なるフェイヴァーの暴走で済む。クロノス先生がさつき遅れて来た所を見るに、フェイヴァーの策略で何か用事を頼まれたって所か。それならクロノス先生がフェイヴァーの暴走を止める事はできず、責任を問うのは難しくなるワケだ。

どつちに転んでもクロノス先生には美味しい展開にしなければならない。

しかもこんな時に限って鮫島校長は嵐で足止めされて出張から帰って来れない。ここぞとばかりに、奴にとつては千載一遇の大チャンスというワケだ。

ハッ、良いじゃねえか。ならこつちにも条件つてモンがあるぜ？

「分かりました、ただし条件が3つありますよ、クロノス先生、フェイヴァー先生」

「3つもなノーネ？」

「口答えをする気かドロップアウト！ オレを怒らせるなど言つた筈だ！ ブチ殺されてえのか！」

「そうカッカしないで下さいよフェイヴァー先生、別に大した事は要求しません」

「認めん！ 罰として貴様はライフーで実技を受ける！ 身の程を知れボケカスが！」

うわあ、横暴。

自分の思い通りにならない事が許せないタイプだ、こういうの一番教師になったら駄



目だろ。

同じ事を考えたのか、クロノス先生も待ったをかけた。

「そこまでデスーノ、フェイヴァー先生」

「クロノス先生、しかし通せば秩序が！」

「まずは彼の提案を聞いてからにするノーネ、それからでも遅くはありませんーノ」

そうして小声で、俺だけに聞こえるように『これでデッキを盗まれた時の借りは返したノーネ』と呟いた。

成程、武藤遊戯デッキの事件で俺が庇った時の事か。レッドを見下してはいるけど、根はやっぱ良い人だよなアナタは。

「さ、早く条件とやらを言うノーネ」

「ええ。条件1、この実技試験は1対5ではなく、1対1を5連戦にして下さい」

「ア、？」

「だってそうでしょう、リンチなんて卑怯極まりない。そんなのをアンタ主導で仕掛けたとなれば、海馬コーポレーションが良い顔するとでも？」

「テメエがKCの何を知ってんだ！ オレは海場瀬戸の親友だぞ！ 先日だってなあ、穴場の高級おでんを食いに行っただぞ！」

はいダウト。どういう関係かは知らないけどあの気難しい社長にお前みたいな友人

がいて堪るか。ついでに言うのと社長はおでんが嫌いだからな。

「条件2、全てのデュエルで違うデッキを使わせて貰います。ま、エンタメ要素ってヤツです」

「エンタメならテメエがボロボロになれば良いんだよ！ 調子こくなクズが！ 自分が能無しの落第生だつて自覚しろや！」

「フェイヴァー先生、一々口汚く怒鳴らないで下さいーノ。話が進まないノーネ」

「逐一ギヤーギヤーと喚く奴だな。親のコネか何かで教師になったのか？ よくこんなので教師を試みようと思つたもんだ。」

ま、後ろに並んでる5人のエセエリート達も似たような反応してるし、ある意味ではこの学園の主流の考えに沿っているのかもな。

「条件3、以上の条件を以てするとリングを俺が独占する事になる。よつて実技試験は一番最後にして下さい。他の皆の邪魔になるんで」

「ふむふむ、尤もノーネ。私は特に異論は無いノーネ」

「レッドのクズが偉そうに……！ そんな条件無効だ！ ちよつとディスクを貸せ、魔法も罫もモンスター効果も反応しないようにしてやる！ お前なんてサンドバッグになつて負けてれば良いんだよ！」

キレたフェイヴァーが俺のディスクを奪い取ろうと手を伸ばす。だが俺はその手を



フエイヴァーの手が裂けて血が出てくるくらいだ。

それを見るからか、5人のブルー男子も手を出そうとしない。

「このっ！ 社会のゴミ風情が！ 逆らうなっ！ 自覚しろおっ！ クズが！ 畜生がああああ！」

「ああ、うるっせえなコイツ。一応授業の一環なのに叫ぶってどういう思考回路してんだか」

「ドロップアウトガイ、声に出てるーノ。それとその辺にするーノデス。過剰防衛というモノになるノーネ」

「ん、そうですか？ では」

流石に頭突きに加えて蹴りまで混ぜてきたあたりでクロノス先生がストップをかけて。まあ頭突きの反動で額は割れてるし歯も少し欠けた、これ以上は確かに駄目だろう。いくら衆人環視の中とはいえ、そろそろ入院案件だ。

なのでポイントとフエイヴァーを投げ捨てる。ドサリと尻餅をついたフエイヴァーは憤怒と憎悪の形相で俺を睨むが、涼しい顔を返したのは言うまでも無い。

「クロノス先生、こんな奴ア今すぐ退学です！ 教師に暴力を振るう不良ですよ不良！」  
「フエイヴァー先生、落ち着くーノです。彼は腕を掴んだダーケ、それはここにいる全員が見ているーノ」

「そうですねえ。実際に俺が何したかかって言う腕を掴んだだけで、寧ろ殴られの蹴られのされた側ですし」

「このクズが……っ！ クロノス先生！ 貴方はブルー寮の寮長でありながらこの落ちこぼれの味方をするんですか！」

「それはそれ、これはこれ、ナノーネ。客観的に見れば彼を悪者にするのは難しいだけデスノー。これだけの証人がいてハ、私個人で引っ繰り返すなんて不可能」

「くっ！ 大体あの目、人を殺してそんな冷たい目だ！ その長い髪もチャラチャラとしてて実に世間を穢している！ こんな奴、栄光あるアカデミアから叩き出してやりましょう！」

うわ、全校生徒が見てる中でこんな事を言うのかこいつは。

チャリりとクロノス先生を見るが、流石のエリート思考のクロノス先生もこの発言にはドン引きのようで苦々しい表情をしている。

「フェイヴァー先生、兎に角冷静になるノーネ。これ以上は職権乱用ナノーネ」  
「ですが！」

「それ以上暴言を吐くようデーハ、栄光あるデュエルアカデミアの教師に相応しくないと言わざるを得ませんノー。貴方はまだ実習生、それを忘れてはならないノーネ」

「……チツ」

コホン、とクロノス先生は咳払いをした。

「ドロップアウトガイ、さっきの条件は飲むノーネ。実技試験は一番最後、1対1を5回、毎度違うデツキを使う、全て問題無いノーネ」

「ありがとうございます」

「クロノス先生ッ!!」

「フェイヴァー先生、実技試験は本来1対1なのを5人がかりにした件は黙認してあげろ。しかーし、これ以上は越権なのを理解して下サーイ。私は責任ある立場として、試験で不正は許す事は出来ないノーネ」

「ぐっ、クソが……!」

「もつとーも、彼が5人相手で討伐できるかどうかまでーハ、私は保証できませんーガ。化物の底力は私も見た事が無いノーネ」

ま、これで不利な条件にはならないだろう。5人まとめて倒すとなると、ちよつとえげつないデツキ使わないといけないうし。

クロノス先生にだけ一礼をすると、俺は寮の部屋に小走りでデツキを取りに戻るのであつた。

取り敢えず難癖が飛んで来る事を考えて……、ソリティア出来る奴を中心に20個くらいあれば良いかな。

☆

S I D E : フ イ オ

「『ジェルエンデュオ』、『アテナ』、フレイをリリースした事でそちのフィールドは全滅した！ トドメだ、『裁きを下す者―ボルテニス』でダイレクトアタック！」

『オオオオオオオオオオオオ！』

「ぐあああああああああああああ！」

裁きを下す者―ボルテニス（効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2800 / DEF 1400

自分のカウンター罠が発動に成功した場合、自分フィールド上のモンスターを全て生け贄に捧げる事で特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した場合、生け贄に捧げた天使族モンスターの数まで相手

フィールド上のカードを破壊する事ができる。

裁きを下す者―ボルテニス：ATK 2800

ブルー生：LP 2800↓0

ファイオ：LP 300

「ふう、ヤバかった」

『お疲れ様です、マスター』

月1の実技試験、黎が何やら因縁をつけられていた。

彼と親しいわたしにも飛び火したようで、ガラの悪そうなブルー生が相手となりギリギリまで追い詰められてしまった。勝てたけど。

「フレイごめんね、勝つためとはいえ君を犠牲にしちゃって」

『何の何の、捨て石・囷・生贄バツチ来い、それがモンスターの務めです』

ヤダ、わたしの相棒メンタル強すぎ……。

なんて事を考えながら、観客席に移動する。

正直、今回のテストではわたし達こと黎陣営（今命名）はかなりの惨状だった。

わたしの前にデュエルをしていた丸藤君や明日香はコテコテのゴテゴテにメタを貼



られたため敗北。

三沢君は精神攻撃で残りライフ100にまで追い詰められ、わたしもトラップ封じのデッキにズタズタにされた。勝ったのは本当に奇跡としか言いようがない。

他にも原さんは『マテリアルドラゴン』を突破できず、ゆきのんは儀式魔法を発動した瞬間に『夜霧のスナイパー』というカードでメタられ、田中君は先行フルバーンでもできず敗北。黎陣営は手痛い敗北を喫した事になる。

マテリアルドラゴン（効果モンスター）

星6

光属性／ドラゴン族

ATK 2400 / DEF 2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、ライフポイントにダメージを与える効果は、ライフポイントを回復する効果になる。

また、「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、手札を1枚墓地へ送る事でその発動を無効にし破壊する。

夜霧のスナイパー

## 【永続罨】

モンスターカード名を一つ宣言する。

宣言したモンスターを相手が召喚・特殊召喚・リバースした場合、宣言したモンスターとこのカードをゲームから除外する。

原さんはバーンデツキだから『マテリアルドラゴン』は鬼門。ゆきのんの儀式デツキは儀式魔法を挟む都合上『夜霧のスナイパー』との相性は最悪。先行フルバーンはビートダウンである田中君を完封できる手札なら手も足も出ない。

ほかにも神楽坂君、ツアン、ウサミン、ゆりつぺと、腕利きのこちらの陣営が片端からメタカードの大群を相手に敗北を喫した。これは異常だ。

「ねえフレイ、気付いてる?」

『当然です。先程黎さんの相手と紹介された5名の内3名は、ももえさんと藤原さん、神楽坂さんの対戦者でした』

「やっぱり」

……これは、確実にわたし達を潰しに来てるね。ドロップアウト組が成長するのを見過ぎせないんだ。

『階級制度、そして差別というのはある意味では有効です。自分のストレスを格下の相

手に押し付け、最下層を固定。これで一番下以外はある程度の繁栄や成長、そして平穩が見込めます。けれど逆説それは最下層は見捨てている、という事でもあるのです」

「黎はそれが我慢できなかつた、だから十代君達のために細やかな教鞭を取つた。それがいつの間にか一つの、寮の枠を超えた勢力になつた」

クロノス先生はこれに対して目立つたアクションは取っていない。当然だ、クロノス先生はレッドを見下してはいるけど、見下しているだけだから。十代君にだけは裏工作で万丈目君に肩入れしたり鼻で嗤う事はあつてもそれ以上はしない、教師として一線をちゃんと引いている。それは当然の事、教師として生徒が成長する事を悲しむなんて、有り得ない。十代君に執拗に辛く当たるのは……、入学試験で負けたからかな？ どこかで和解できれば良いんだけど。

けれどあのフエイヴァーという教育実習生は違う、本気でわたし達を敵視して、積極的に潰しに来てるんだ。レッドとその仲間というだけで、本気で差別して良いと思つている。

「黎……」

『大丈夫だとは思いますがよ、彼はそれを見抜いているからこそ条件を提示したのですから』

そうかな？ そうかも？

もしそうだとしたら、彼は勝てるのだろうか。黎はデツキをいっぱい持つてゐるから簡単に対策は練られないとは思うけど……。

「彼が心配？」

「あ、鮎川先生」

不安そうな表情を見抜かれたのか、看護教諭にしてブルー女子寮長の鮎川先生に話しかけられた。フレイとの会話は精霊を見れないからかわたしの独り言と思われてるみたい。

クスリ、と笑う先生はどちらかと言うと苦笑いの表情だった。

「フェイヴァー先生、ちよつとやり過ぎよね」

「鮎川先生はフェイヴァー先生の事を知っているんですか？」

「昔、家が近所だったのよ。中学に上がる前にはいつの間にか引越しちゃつてたけど」

「幼馴染ですか」と聞くと「馴染みつて程の付き合いは無いわね」と返された。

苦虫を噛み潰したよう、という諺があるけど、鮎川先生はフェイヴァー先生の事を話す際は苦虫を100匹は噛み潰したような顔をしている。

「フルネームは鰐一郎・フェイヴァー、親の離婚でこんな苗字になつたけど一応日本人よ。理想が高い人でね、昔アカデミアの分校でブルーによる支配を見てから階級制度で一部を輝かせる事に執着しているの」

「階級制度……」

「勿論、そんなの良くないわ。多少の差は切磋琢磨には必要だけれど、彼のあれは単なる踏み台にする思想だもの。だから私と同じ年なのにまだ実習生なの。精神面で合格できてないのよ」

苦虫が1000匹になったかのように、更に苦々しい顔になる鮎川先生。

フェイヴァー先生は今回、どうやらコネを使ってアカデミアに来たらしい。どういったコネかは知らないけれど、KCから推薦を受けたのなら決して弱くないコネだ。

何事も無ければ、良いのだけれど。

『俺の場に機械族の『カードガンナー』が現れた事で、お前の『マッスルキラー』は自爆！』

『ば、馬鹿な!? E・HERO使いのクセに機械族だと!?!』

『これでお前の『パープル・ボンバー』と『呪いの融資』も破壊された、やつと融合召喚ができるぜ!』

マッスルキラー（効果モンスター）（オリジナル）

星9

闇属性／悪魔族

ATK 2900 / DEF 0

(1) : アドバンス召喚されたこのカードが存在する限り、相手が戦士族モンスターを攻撃表示で召喚・特殊召喚した時に発動と処理ができる。

そのモンスターを破壊する。

(2) : 相手が戦士族以外のモンスターを通常召喚した時に発動する。

このカードを破壊する。

パープル・ボンバー（オリジナル）

【永続罫】

(1) : 相手が融合モンスターを特殊召喚した時に発動する。

そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手に与え、攻撃力をターン終了時まで0にする。

(2) : フィールドから自分の墓地へモンスターカードが送られた場合に発動する。  
このカードを破壊する。

呪いの融資（オリジナル）

【永続魔法】

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか発動できない。

(1)：このカードの発動時、自分フィールドのレベル6以下の通常召喚されたモンスターを1枚ゲームから除外する。

除外したモンスターの元々のレベル分だけこのカードにカウンターを乗せる。

(2)：相手が効果ダメージを受けた時に発動する。

このカードのカウンターを1つ取り除き、相手のLPを半分にする。

(3)：このカード以外の自分の魔法・罠カードが破壊された時に発動する。

このカードを破壊する。

このカードにカウンターが乗っている状態で破壊された場合、乗っていたカウンターの数だけ自分のドローフェイズをスキップする。

『融合召喚！ 現れる、『サンダー・ジャイアント』！』

『ヒツ!?!』

『ヒーローは必ず勝つ！ ダイレクトアタックだ!』

『ぬわーっ!』

ブルー生：LP 4000↓2100↓0

お、十代君も勝った。

しかしライフ19とはまた一生お目にかかれなような稀少な数値を。150を3回半減した結果とはいえ、残りライフ38の時に『神の宣告』を躊躇無く使った時はビツたね。『呪いの融資』のカウンターがもう1個あつたら負けてたよ。

(これで、フェイヴァー先生が一番倒したいであろう生徒の1人は勝ってしまった)  
(黎さんと十代さんは目の上の瘤でしようからね)

観客席にいるフェイヴァー先生を見ると、明らかにその顔を憎悪に染めていた。憎んでいるのは十代君か、負けた名も知らぬ彼か。

そして、もう他に誰もデュエルをしていない事に気が付いた。つまり、一番最後に回して貰った黎の番が来たって事だ。

「自分が間違ってる事に気付くつて、思ってるより難しいの。フェイヴァー君は理解できないでここまで来てしまったわ」

苦虫が10000匹でも足りないくらい顔をやるブルー女子寮の担当教師。見捨てられないのだろうか、フェイヴァー先生を。

「黎が……」



「彼が？」

「黎が5人相手に勝利したら、少しは何か変わるでしょうか」

「そうね……、そうなって欲しいわ」

無関心では無い程度の相手なのだろうけれど、やっぱりそんな奴でも鮎川先生にとっては蛮行をされるのは心苦しいのかも知れない。

「ここは黎に踏ん張って貰わないと。」

「頑張れ、大将！」

S I D E : 黎

十代が去って伽藍がらんとしたリングに入場する。

ほぼ同時にフェイヴァーと5人のブルー生、そしてクロノス先生も登場。これで今日最後の役者は揃った。

「フン、怖気づいて逃げれば良いものを」

「おお怖い怖い」

包帯やガーゼで顔と手を覆ったフェイヴァーが吐き出す。正直、無力な小動物が威嚇しているようで気分が良い。

俺も大概性格が悪い奴だ。

「貴様のようなチャラチャラした不良がいるからアカデミアの治安が良くならないんだ！ オレが正式にここに勤務する事になったらあの重要だか甚大だかいう奴ごと退学にしてやる！」

……ひよつとするとそれって十代の事か？

そういう間違い方ってどうなんだ。

「ギヤースカ煩いな、発情期の犬猫でももう少し節度があるぜ？」

「ンだとゴラァー！」

「クロノス先生、マイクお借りできますか？」

「マイク、ナノーネ？」

キャンキャンと騒ぐフェイヴァーを無視し、クロノス先生からマイクを受け取る。

トントン、とヘッドを叩いて音量を確認すると、俺は落ち着いて語り出した。

「あーあー、皆さん、オシリスレッドの遊馬崎黎です。何故か5人相手をする事になりました、ご心配をおかけして申し訳ありません」

「貴様、何をしてるんだ！ ブチ殺すぞ！」

マイクを奪いに来るフェイバーをひよいひよいと避けつつ、演説は止めない。

伸ばした手は体を捻って空振りさせ、足払いは軽くジャンプ、体当たりは片手でフェ

イヴァーの頭を掴んで跳び箱のように上に回避。

客席からは「おぉー」という感嘆の声があがる。

「また今回の試験、何故か自分と親しい人達が苦戦したり敗北したりと苦しい戦いだつたようです。どうもメタデツキを相手にした人が多く、それが原因のようです」

「この、クソがつー！」

「しかしおかしいですねえ、まるで事前に対戦相手が知らされているかのような周到ぶり。メタが外れたらどうする気だったのでしょうか」

「黙れ！ 黙れっ！」

「誰かの陰謀だった場合、その責任は中心にいるであろう俺にあると思います。その点につきましても皆々様に深くお詫び申し上げます」

「あ、あああああああああああああつー！」

「そしてお詫びする点がもう一つ」

そろそろ鬱陶しいので、体重を乗せてタツクルしてきたフェイヴァーの足を引っかけ転ばせる。フェイヴァーは顔面から派手に床に転び、包帯から血を滲み出し始めた。

あーあ、傷口が開いちゃった。

ついでに床に小さな白い物が転がるが、あれは歯だろうか。

まあ俺にはどうでも良い。誰でも彼でも助けようと思う程、俺は正義の味方じゃな

い。

俺が助けるのは、助けたいと思えるような人だけ。冷たいだろう、ドライだろう、それが俺なのだ。

「今から5人を叩きのめしますが……」

「テメ……」

「レツド風情が！」

「誰が負けるってえ!?! ああん!?!」

ニツ、と出来るだけ邪悪な笑みを浮かべる。

「滅茶苦茶つまらないデュエルをしますから、眠くなったら寝ちやって下さい」

何かの集団を率いた覚えは無い。

だがそれでも俺を味方と思ってくれる皆がいて、俺が原因でこんな風に苦渋を舐めてしまうのなら。

「ちよーつと、調子乗ってる奴にはお灸を据えないとなあ」  
ボスとして威厳を示さないワケには、いけないだろ？

t o b e c o n t i n u e d

閑話 スカツとするためにソリテイヤをするのは間違つ  
ているだろうか・破

S I D E : フイオ

鮫島校長が留守の時を狙い、教育実習生の鱧一郎・フェイヴァー先生により仕組まれた実技テストでわたし達は手酷いダメージを負った。

敗北し、叩き潰され、まるで負け犬と言わんが如く劣勢を強いられる。

そしてそんなわたし達の中心である黎。彼にはなんと5人がかりでのデュエルが申し込まれた。

幸いにもサシの戦い5連戦になったけど、いくら黎でもキツイ筈だ。万一の事があつたらわたし達が助けにいかない。

——そう思っていた

『伏せておいた装備魔法『風魔手裏剣』の効果。お前のライフを700削る』

『は、ちよ、おま、こっちのライフは500って、ぐあああああー!?』

『まず一匹』

黎：LP 4000

ブルー生①：LP 500↓0

何と黎は、先行ターン目でアツサリとブルー男子を1人倒してしまった。

ボロボロにされたわたし達は、数少ない勝者の三沢君と十代君とわたしを中心に集まり、黎のデュエルを見守っていたが、どうにもいらぬ心配をしていたらしい。

「成程、これはツマラナイって言ったのも頷けるね」

「確かに相手にターンを渡さなければ、メタデッキは何の意味もありません」

「ましてや主殿は何種類ものデッキを用意した、あれではメタの張りようが無い」

最初のターンは攻撃できない、必然的に勝利するためには特殊勝利かデッキ破壊、後は効果ダメージしかない。

黎が選んだのは効果ダメージ……、ただし敵に与えたのは実質700ポイントのみ。

あまりにもソリティアすぎる流れに、丸藤君が目を丸くして説明を求めてきた。

「三沢君、黎君は何をしたツスか!? 何かゴチャゴチャしながら自分のライフを減らしていたら倒しちやつたツス!」

「あれは『大逆転クイズ』というカードを使った戦術だ。黎は【緑一色】リユウイチソクと言っていたな」  
そうして三沢君は丁寧に説明してくれた。

あれはフルモンスターの亜種で、魔法カードしか入れていないデッキだという事。

自分からライフをギリギリまで削る戦術を取るという事。

そして最後には『大逆転クイズ』を発動してライフを入れ替えるという事。

『大逆転クイズ』は発動時に手札と場のカードが墓地に行くため、墓地に送られたらダメージを与えるカードと組み合わせるという事。

「……そういう事なのね、だから黎は自分からライフをガリガリと削っていた」

「自爆に見せかけてのトリックプレイ、坊やったら趣味が悪いわ」

黎が何をやったのかと言えば、只管に魔法カードを発動しまくった事だけ。使ったカードは10枚を超える。

そうしてライフを残り500にした黎は『風魔手裏剣』を伏せて『大逆転クイズ』を発動。デッキが全部魔法カードだから外しようも無くライフは入れ替わり、勝利したというワケだ。



大逆転クイズ

【通常魔法】

自分の手札とフィールド上のカードを全て墓地に送る。

自分のデッキの一番上にあるカードの種類（魔法・罠・モンスター）を当てる。当てた場合、相手と自分のライフポイントを入れ替える。

風魔手裏剣

【装備魔法】

「忍者」という名のついたモンスターのみに装備可能。

装備モンスターは攻撃力が700ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地に送られた時、相手ライフに700ポイントダメージを与える。

彼の戦術について「えげつない」「あいつマジ怒ってる」と皆が囁く中、2戦目がスタート。今回も先攻だけどデッキを変えていたから「緑一色」では無いみたい。

『魔法カードを発動、『天使の施し』。3枚ドロローして2枚捨てる』

『デメエ……、まさかさつきみてえな事する気か！』

『お、早速来たな。『スモール・ワールド』を発動。まず手札のモンスター1体をお前に見せる。見せるのはこの『千眼の邪教神』。』

次にこれと攻撃力・守備力・種族・属性・レベルのどれか1種類だけが同じモンスターをデッキから見せる。選ぶのは『太古の壺』、こいつは『千眼の邪教神』と同じレベル1だ。その後、『千眼の邪教神』は裏で除外する。更に……』

『長エんだよ』

『そう言うな、まだ処理終わってねえんだ。そこでこの『太古の壺』でも同じ処理を行い、今度は手札に加える。同じ地属性の『トレジャー・パンダー』をサーチする』

スモール・ワールド

### 【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：手札のモンスター1体を相手に見せる。

見せたモンスターの種族・属性・レベル・攻撃力・守備力の内、1つのみが同じモンスター1体をデッキから選んで確認し、手札から見せたモンスターを裏側表示で除外する。

さらに確認したカードと種族・属性・レベル・攻撃力・守備力の内、1つのみが同じ

モンスター1体をデッキから手札に加え、デッキから確認したカードを裏側表示で除外する。

『そして見せた『太古の壺』もまた裏側表示で除外される。で、加えたこの『トレジャー・パンダー』を召喚』

『ホアイツ!』

トレジャー・パンダー：ATK 1100

汎用的な手札交換カードを使用した後、今回のデッキではモンスターを召喚した。『大逆転クイズ』は使わないデッキみたいだ。凄く複雑な事をしてたけど、要するにアレって『手札とデッキのモンスターと似たステータスのモンスターをサーチする』って事だね。

さて、あの探検家みたいなパンダで何を見せてくれるのだろうか。

『俺は『トレジャー・パンダー』の効果発動。自分墓地の魔法・罫カードを3枚まで除外し、その枚数と同じレベルの通常モンスターを1体デッキから特殊召喚する。』

墓地から『天使の施し』を除外し、デッキから『ダーク・プラント』を特殊召喚  
『フギアアアアアアアア!』

ダーク・プラント：ATK 300

は、え？ レベル1のバナラモンスター？ 何あれ、何をするデッキなの？

トレジャー・パンダー（効果モンスター）

星4

地属性／獣族

ATK 1100 / DEF 2000

(1)：自分の墓地から魔法・罫カードを3枚まで裏側表示で除外して発動できる。  
除外したカードの数と同じレベルの通常モンスター1体をデッキから特殊召喚する。

ダーク・プラント（通常モンスター）

星1

闇属性／植物族

ATK 300 / DEF 400

汚染された土と闇の力で育てられた花。

とても凶暴。

『更に『フレグランス・ストーム』を発動、『ダーク・プラント』を破壊して1枚ドロー。引いたカードは2枚目の『ダーク・プラント』、よってもう1枚ドロー。続けて『闇の誘惑』を発動し2枚ドローして『ダーク・プラント』を除外する。』

『トレジャー・パンダー』の効果発動。『闇の誘惑』を除外し最後の『ダーク・プラント』を特殊召喚。これを『フレグランス・ストーム』で破壊し1枚ドロー。』

再度『トレジャー・パンダー』の効果で『フレグランス・ストーム』を除外し『千眼の邪教神』を特殊召喚。これを対象に『ワンダー・ワンド』を装備し攻撃力を500アップさせる。そしてもう1つの効果により『千眼の邪教神』と共に墓地に送り2枚ドローする。』

もう1度効果発動。『ワンダー・ワンド』を除外し、デッキから『バニラ』を特殊召喚』

『くっ、こいつ1人でやってやがる……!』

『おいクソレッド、遅延行為はやめろ! 反則負けにするぞ!』

ドロー、ドロー、またドロー。更にドロー。またまたドロー。延々とドロー。そろそろ彼のターンが3分以上経過した頃だろうか。黎がやった事と言えば、『トレジャー・パンダー』の効果でモンスターを出してはドロースーツに変えるだけ。

更に先程『天使の施し』で捨てたカードをディスクで確認すると『ヘルバウンド』と『チェンジ・スライム』、雑魚モンスターだ。

まるでモンスターを使い捨てるような戦術に、皆は不快感半分、退屈半分で状況を見ている。

『もう一度『トレジャー・パンダー』の効果』

『おい！』

『しょうがないだろ、必要なカードが来ないんだから。墓地の『打ち出の小槌』を除外してデッキから『弾圧される民』を特殊召喚。これを『馬の骨の対価』のコストにして2枚ドロー』

やがて何度目かも分からなくなった手札交換をした瞬間、黎がニヤリと笑った。

これは、何かを引いたのか。

『ククツ、長く待たせすぎて悪かったな。今終わりにする』

『はあ、やつとかよ。これでオレの輝くステージが』

『速攻魔法『烏合無象』を発動。『トレジャー・パンダー』を墓地に送り、エクストラデッ

キから獣族モンスターを特殊召喚する。出でよ、『マスター・オブ・OZ』ッ!』  
『ヌンツ!』

マスター・オブ・OZ：ATK 4200

鳥合無象

【速攻魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：自分フィールドから元々の種族が獣族・獣戦士族・鳥獣族の表側表示モンスター1体を墓地へ送って発動できる。

元々の種族が墓地へ送ったそのモンスターと同じモンスター1体をEXデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、効果は無効化され、エンドフェイズに破壊される。

マスター・オブ・OZ（融合モンスター）

星9

地属性／獣族

ATK 4200／DEF 3700

「ビッグ・コアラ」＋「デス・カンガル」

「あ、あれって!」

「オレの切り札と同じカードなんだな!」

黎の呼び出したボクサー風の巨大コアラを見て、十代君の同室の2人が驚愕する。

確かに超レアでも何でもないカードだけど、同じカードを使う人が身近にいるってビックリするよね。

『攻撃力4200だと?!』

『ただしこの効果で特殊召喚したモンスターはターン終了時に破壊され、このターン攻撃できない。またモンスター効果も無効となるが……、こいつは元々効果が無いから今は関係無いな』

え、身動き取れないモンスターをわざわざ出したって事?

何を企んでるんだ、黎……。

『装備魔法『反目の従者』を『OZ』に装備して、更に『左腕の代償』を発動。手札2枚以上を除外する事で、デッキから魔法カードを手札に加える。このターン俺はカードを



伏せる事はできない。サーチするのは『シエンの間者』だ』

### 左腕の代償

#### 【通常魔法】

このカードを発動するターン、自分は魔法・罫カードをセットできない。

(1)：このカード以外の自分の手札が2枚以上の場合、その手札を全て除外して発動できる。

デッキから魔法カード1枚を手札に加える。

『そしてこれで本当に最後だ、サーチした『シエンの間者』を発動。これで『マスター・オブ・OZ』のコントロールをお前に移す』

『ハア？　とうとうイカれやがったか化物、それに何の意味が——』

『『反目の従者』を装備したモンスターのコントロールが変化した時、移された側に装備モンスターの攻撃力分のダメージを与える。よって4200のダメージを受けて貰う』

『え？　は？』

一瞬で巨大なボクサーコアラの姿が消え、相手フィールドに次の瞬間に移動する。

そして『マスター・オブ・OZ』は振り返って背後にいる相手プレイヤーに向け、強

烈な鉄拳をお見舞いしたのであった。

『そんなバカなあああああああああああ!?!』

黎：LP 4000

ブルー生②：LP 4000↓0

『嗚呼、我ながらつまらねえデュエルだ』

啞然、茫然、騒然。

また先攻でワンキルを叩き込んだ……。凄いな、彼の頭の中には何通りの戦術が入っているんだ……。

「三沢、あれって……」

「【モンスター転移】の戦術をワンショットキルのバーンに特化させた、といった所だろう。執拗にリクルートを繰り返していたのは欲しいカードを引っ張り出すためだったというワケだ。デッキレシピ次第ではドラゴン族を織り交ぜ『F・G・D』の召喚とて可能と見た。サルベージカードを採用すれば『エクゾディア』も行ける筈だ」

シエンの間者

## 【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

このターンのエンドフェイズ時まで、選択したカードのコントロールを相手に移す。

反目の従者

## 【装備魔法】

装備モンスターのコントロールが移った時、装備モンスターのコントロールに装備モンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。

ざわざわ、ざわざわ。

わたし達の周囲で色々な声が聞こえる。

大体が黎のデュエルに対する陰口。面白くないだの、卑怯だの、冷たいだの、何だの  
かんだの。

まあわたしも見てる分には面白くない。まるで壁打ちをしているかのように黎は  
淡々とデュエルをしている。エンタメ性の欠片も無い……、本気で相手をすり潰すため  
のデツキなんだと強く実感せざるを得ない。

流石にこの流れは良くないと思ったのか、クロノス先生が黎に苦言を呈した。

『あー、ドロップアウトガイ、少しこれは良くないノーネ』

『何故です、禁止カードもルール違反も無かったでしょう？』

『確かにそうデスーガ、これじゃあデュエルじゃないノーネ。できれば、彼らにターンが回るデュエルをしてあげて欲しいーノ』

『そうですか？』

『そうナノーネ』

『そうだこのクズ野郎が！ 実力で勝てないからと効果ダメージでいやらしく削りやがって！ 貴様の性根がゴミだと透けて見えるぞ！ リスペクトも知らねえ低能低学歴のヘタレカスが！ 幼稚園からやり直して来いや！』

『フェイヴァー先生、ややこしくなるから少し黙ってて下さいーノ』

そしてそこに便乗するフェイヴァー先生。

クロノス先生に任せれば良いのに、余計な事を言うんだから。

『はあ、クロノス先生がそこまで言うのなら特別ルールを設けましょう。次から俺が相手に与える効果ダメージは全部100として扱います。これなら問題無いでしょう？』

『ふーむ、ティラミス風味、それで良いノーネ？』

『構いません。ぶっちゃけ相手にターン回すのダルかっただけなんで』

『……デュエリストとは思えない発言ナノーネ』

『卑怯者に正々堂々を求める程、人間は出来てないんですわ』

☆

『融合召喚に成功した事で『デストロイ・シザー・タイガー』の効果発動。その素材に使用したモンスターの数まで場のカードを破壊する。素材になったのは5体、よつてお前のフィールドのモンスターを根こそぎ破壊する』

『んだと?!』

迎えた第3戦目、相手はブルー女子の中でも好感度ランキング最下位の高田。使うデッキは「リクルーター」で、普通に戦うと鬱陶しい相手だ。

これを黎はモンスター効果で対処。フィールドにいた『巨大ネズミ』『コーリング・ノヴァ』『ピラミッド・タートル』『グリズリーマザー』『龍骨鬼』は全滅。モンスターがいなくなつた事で『スピリット・バリア』の効力も切れた。

『クソツッ! だがこつちのライフは5000もある、まだやられねえ!』

『速攻魔法『融合解除』発動。戻つて来い、『エッジインプ・シザー』、『ファーンマル・オウル』、3体の『ファーンマル・マウス』』

『ハッ、雑魚の数を揃えた所で——』

『ファイニマル・オウル』の効果、ライフを5000払い融合召喚を行う。現れる、全てを噛み砕く荒野の魔獣、『デストーイ・シザー・ウルフ』。このモンスターは融合素材の数だけ攻撃できる』

『……は？』

『喰らいな、5連打を』

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

黎：LP 3500

高田純二郎：LP 5000↓0

『所詮、お前はその程度だ高田。弱そうな奴に威張り散らし、強い奴には袋叩き。そういうのを何て言うか知ってるか？ チンピラって言うんだよ、チンケで薄っぺらい下っ端って意味だ』

『テツ、メエ……ッ！』

これで3連勝。約束通り黎は2ターン程、高田にターンを渡してから勝利したためクロノス先生との約束は破っていないし、効果ダメージも1ポイントですら与えていない。

デツキを複数持ち、その全てで十二分以上に戦う。成程、彼が自分を化物というだけあつて、人間離れた実力だ。

デストーイ・シザー・タイガー（融合・効果モンスター）

星6

闇属性／悪魔族

ATK 1900 / DEF 1200

「エッジインプ・シザー」＋「ファーニマル」モンスター1体以上

（1）：「デストーイ・シザー・タイガー」は自分フィールドに1体しか表側表示で存在できない。

（2）：このカードが融合召喚に成功した時、このカードの融合素材としたモンスターの数まで、フィールドのカードを対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

（3）：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの「デストーイ」モンスターの攻撃力は、自分フィールドの「ファーニマル」モンスター及び「デストーイ」モンスターの数×300アップする。

デストーイ・シザー・ウルフ（融合・効果モンスター）  
星6

闇属性／悪魔族

ATK 2000 / DEF 1500

「エッジインプ・シザー」＋「フアーニマル」モンスター1体以上

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみ特殊召喚できる。

（1）：このカードは、このカードの融合素材としたモンスターの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃できる。

『つ、つええ』

『バケモノかよ』

『バケモノ自称してんじゃん』

『そうだったわ』

『つか自分でライフ削る事あってもダメージ受けてなくね？』

『確かに』

『最初の2人はターンすら貰えなかったですしお寿司』

『ウエーイ、あれと戦うとかテンションマジサゲぽよになりそうだわ』



『カッコイイかも……』

『え、ちよつとアンタ本気?』

『むう、さながら荒武者のごとき苛烈さだ』

『そんな可愛いモンかね、ありや修羅か羅刹の類よ』

彼に対する評価は、アカデミアでは多岐に渡る。

義理の妹のために死を恐れない勇者、どんな敵にも容赦しない無頼漢、気に入らない奴はぶつ飛ばすゴロツキ、人間の領域を超えた化物……。

それぞれがそれぞれ、彼に対する印象を以てここで彼の無双を評価している。これが終わったら果たして黎の評価はどうなってしまうのだろうか。

(大丈夫ですよ、マスター)

(フレイ?)

そんな風に不安になるわたしに、相棒は念話で優しく励ましてくれた。

(黎さんは元々、多くの人との繋がりを求めるタイプではありません。寧ろ孤独を愛し、誰とも一線を画す人です)

(それは、そうだけど……)

(何よりも……、あなたがいるじゃないですか。風聞も悪習も見ない、可愛い女の子が) (か、からかわないですよ!)

（ふっふっふー、からかつてなんていませんよー？　こう見えて凄くお婆ちゃんですかね、わたくしは。長い長い時間を生きてきたわたくしの目を信じて下さい。貴女の存在はきつと彼の助けになります）

そこまでフレイが言うのなら……、わたしに何ができるのかは分からないけど。

けれどわたしが彼の支えになれるのなら、出し惜しみはしないつもり。自分でも何でかは分からないけれど、ただ彼を助けたいと、そう思っている。

（ねえフレイ）

（はい）

（わたしがさ、人間じゃないって言ったら、軽蔑する？　黎と同類って言ったら、怖い？）

（最初から人外たるわたくしには愚問ですよ、マスター）

（……ありがとう）

どうして黎を助ける事に喜びを覚えるのか、自分が人間じゃないと思えるのか、それは分からない。

ただアカデミアに来てから少しずつ、何となくそんな感覚が日に日に増していった。自覚があるのはそれだけ、黎をどう思っているのかも、人間じゃないなら何の生き物なのかも、それすら一切合切分からないけれど。嗚呼、でも、だけでも、けれども、されども。

「レーイイー！ そのまま行っけえー！ 後2人だぞおーっ！」

あの優しい黒鬼を助けられるのなら、それは悪くない事なんだろうなあ。

「後2人！ あつとふったりり！ あつとふったりりっ！」

☆

S I D E : 黎

『後2人！ 後2人！』

『『あつとふったりり！』』

『『『あーとふーたりー！ あーとふーたりーっ！』』』

つまらないデュエルを続ける事3回、フェイバーの嫌がらせは完全に的を外し俺ではなく成績上位者のブルーに恥を搔かせる結果が続いている。

そんな俺を怖いものを見るかのように怯える皆。俺はそれに慣れたつもりだった。

俺は所詮、人間じゃない。

どこまで行っても俺は化物。

それで良いんだと、俺と人間が分かり合える事は無いんだと、ずっと思っていた。

けれども。

『頑張れー、レーイ!』

『もうちよつとだよー!』

『つまんねえデュエルすんなー!』

『ワクワクするデュエルを見せろー!』

最初は、フィオだった。

彼女が俺に大声で応援を送った。

そこから次第に、少しずつ輪が広がって行って。

ほんの数分、ブルーの残党とフェイヴァーが作戦会議をしている間に、観客席では俺を応援するムードが広がっていた。

(つたく、物好きが。人を嘯まない野獣なんていねえんだぜ?)

それは俺が縁を切っていた『温かみ』という、人の織り成す財宝。

決してこの手には掴めなかった、都と傷の舐め合いをするだけが精々だった、いくら金を積んでも手に入らないものだ。

拒むべきなんだろう。

怒るべきなんだろう。

でも、俺にそれはできなかつた。

あーあ、皆と触れ合う内に俺は弱くなつたみたいだ。こんなナヨナヨした微温湯ぬるまゆを喜んでいるなんて——、生前の俺が知ったらどんな反応をする事やら。怒るかな、困惑するかな、嘆くかな。

「先生、もう1度マイクをお借りします」

「どうぞナノーネ」

すう、と軽く息を吸う。

つたく、あいつらは本当に。

「おいお前らあ！俺みてえな化物を応援するつてのが何を意味するのか分かってんのかあ！」

出来るだけドスの効いた声で、脅すようにマイクに向けて喋る。

「食い殺されてから後悔しても遅いんだぞ！人間の味方とは限らないクリーチャーに肩入れして、血迷ったのか！」

それでも彼らは怯まない。

口々に「望む所だ」「脅してる時点で優しい」「人間の敵であつても私達の味方でしょ」と返してくれた。

十代が言葉を紡ぐ。「お前は俺の友達だ」と。

明日香が言葉を紡ぐ。「後悔なんて絶対にしないわ」と。



「2人まとめてブツ倒してやる、ハンデ付けてやつから2対1でかかって来い」

t o b e c o n t i n u e d

閑話 スカツとするためにソリティアをするのは間違っているだろうか・急

S I D E : 黎

「ルールは2対1の変則タッグデュエル、各プレイヤーは最初のターンは攻撃できない。俺のターンを最初にして貰うが、それが終わったらアンタ達のターン。つまり2人連続でターンが回るってワケだな。純粋に2人がかりで袋叩きにできる構図だ、悪くない提案だろうか？ ああ、勿論『俺の与える効果ダメージは一律100ポイント』ってのも有効だ」

5人がかりのデュエルもそろそろ終盤。

残る2人の底意地の悪そうなブルーを相手に、俺は飄々とした顔で提案してやる。

「ま、サシを望んだ俺がこんな事を言うのも朝令暮改みたいでアホっぽいけどな」

「テツメエ……、ナメヤがつて！ レッド如きが、その鼻っ柱へし折ってやらあー！」

「オレ達をこれまでの3人と思うな！ こちとら3年生、来年の春にはプロになる男だ



「！」

「プロ、ね。そいつは手強そうだ」

さてそれがどの程度強いのか、お手並み拝見といこうじゃあないか。

セミプロってのが口先だけでない事を祈るぜ？

「それじゃあ、始めよ「待てクソカス」……何ですフェイヴァー先生」

邪魔だなこいつ、感電させて黙らせてやろうか。

「さつきまでのデュエルを見る限り、お前の性根は腐っている。人間じゃねえ、デュエリストの風上にも置けねえゴミ野郎だ、今すぐ死んだ方が社会のためだつて事も理解してねえだろテメエ」

「そりゃ結構、俺は人でなしなんでね」

「開き直つてカッコつけたつもりか、クズが。お前のような卑怯者相手にその程度では正々堂々にはならない。こっちのライフを10万、お前のライフを1にしろ。そんで融合デッキは使用禁止、お前が戦闘・効果ダメージを与えた時はお前も同じ数値だけダメージを受け、更に毎ターン案田と犬山のライフを5万回復とする。言うまでもないが、デッキ破壊や『エクゾディア』のような特殊勝利も無しだ。これでやっとお前みたいな根性無しの卑怯者相手に公平になる、これ以外は認めんぞ！ 分かつたら『はい』とだけ返事して受け入れろクズが！」

「ナパ!? フェイヴァー先生、いい加減横暴デスーノ!」

「いいえこれこそが正しいのですクロノス先生! こういった人格も品性も最低に捻じ曲がつてるゴミカス野郎はね、自分がどれだけ卑劣な存在で、どれだけ価値の無い存在か痛みを以て思い知らせないといけないですよ! そもそも生徒としての価値も無いレッド寮如きが、栄光ある未来を掴むべき輝かしいブルー寮に勝つて事そのものが間違っている! それを教えてやるのが我々の義務です!」

「マンマミーア、階級制度の悪い所だけ煮詰めたような事を言うノーネ……」

ふーん? 成程成程、そういう事を言うんだ? あつそう?

ま、別に? 俺だって聖人目指してるワケじゃないし、寧ろ真逆の悪党だから何言われても構わないけど……。そういう言動を俺の友人やまだ見ぬ後輩にやる危険性があるのなら、俺にだって考えがあるんだぜ?

「全部は無理ですが一部なら構いませんよクロノス先生。代わりにクロノス先生の権限で認めて欲しい事が一つあります」

「わ、私の権限〜デ?」

「ええ、ちよいとお耳を拝借」

ひそひそと耳打ちすると、先生は怪訝そうに顔を歪めた。

ちなみにクロノス先生の身長は183センチ、俺は可変なのだが流石に先生より大き

いと面倒なので180くらいにしてある。

もう1つちなみに俺に対する翔からの初対面の印象は「浪人が留年してるかと思っ  
た」だった、「おいこらクソチビって呼ぶぞ teme」とドスを利かせて返しましたとも。

「ごによごによごによごによ……」

「ふむむ、ふむむむ、ふむむむのライム、ライムはイタリア語でもライム」

「良いですよ、入学試験の時とはいえクロノス先生ご自身もやってみましたし」

「そのくらいナーラ、問題ありませんー。でもそれで良いノーネ？」

「二言はありません」

「よろしい、ならばアナタの条件を飲みますー！」

でーは、今回限りの特別なルールの発表をするーノデスー！ ドロップアウトガイのラ  
イフは1000、ブルー男子3年生のシニョール案田とシニョール犬山は8000で  
デュエルを開始するノーネ！ 効果ダメージはドロップアウトガイが発動した効果の  
み100ポイント扱いし、デツキ破壊と特殊勝利は認めませんー！ 更にシニョール  
達は毎ターン自分のスタンバイフェイズごとにライフを500回復！ そしてシ  
ニョール達が手札0枚でドロウする時ーハ、特別に2枚ドロウできー！ 詳しくはあ  
のモニターに表示するノーデ、確認して下さいー！ ポチッとー！

ポチポチと手元の端末を操作するクロノス先生。

30秒もしない内に、天井付近の大型モニターにこのデュエル専用のルールが表示された。

俺にとってはそこそこ不利なハンディキャップデュエル、しかしフェイヴァーは心底気に食わないのかクロノス先生に食ってかかった。

「クロノス先生、こんな奴の味方をするんですか！ 落ちこぼれの意見を通して恥ずかしくないんですか！ どうしてこつちの意見を半分も通してくれないんですか、おかしいでしょう!? それでも栄光あるアカデミアの教師なんですか?!? こんなクソ生意気な不良、デュエル開始と同時に反則負けにするのが常識でしょうが!!!」

「そうです私は教師、このアカデミアの実技の責任者ですーノ」

「ならー！」

「だから、授業と試験に肩入れはすれども私情は挟まないノーネ。そして、既に彼らにはフェイヴァー先生、アナタがとつくに肩入れしてるーノ。これ以上はイジメなノーネ」

「イジメなんて下等な事はしていません！ これは選別、いえ区別です！ 栄光あるオベリスクブルーの生徒の未来をですな！」

「シヤラップ！ フェイヴァー先生、それ以上を口にする事はオススメしないノーネ。教師が積極的に特定の生徒を贖するだけなら多少は私もやってますーガ、他の生徒を

捨て石どころか生贄にするような真似は、教育現場に携わる者として論外ですーノ！」  
「……クソがー！」

やっぱアンタ、今はちよつと歪んでるけど良い先生だよ。そんな先生に恥じないデュエルをやらないとな。

となると使うデツキは……、これにするか。本当は「ドラゴンメイド」も考えたけど、化物である俺が使うと見た目がね。いやドラゴンメイドに罪は無いんだけど。

デツキを装填したら腕を前に突き出し、ディスクの衝撃スイッチを入れる。電源の入ったディスクはアームが伸び、収納されていたブレードが飛び出した。青いディスプレイには4000の数字が表示されたので、手で1000に変更する。

準備完了、粛正の時間だ。

「オシリスレッド1年、遊馬崎黎。トラウマ作ってやるから覚悟しな」

「オベリスクブルー3年、いぬやましようま犬山硝馬！叩きのめす！」

「同じく3年、あんだあきてる案田憲照！身の程を教えてやらあ！」

「頑張れ、黎……！」

「重いハンデだ、大丈夫か？」

「アイツなら出来る、俺はそう信じてるぜ」

『いずれにせよ私達にできるのは見守る事のみよ』

『さあ皆さん、応援行きますよ！　せーの！』

『『ファイト、ファイト、レイイ！　頑張れ、頑張れ、レイイ！』』

『ブツ潰せ犬山アー！』

『油断するなよ案田っ！』

『負けたら罰金だからな！』

『オレ達の仇を取ってくれえ！』

『力の差つてのを見せてやれよ！』

「「デュエル！」」

黎：LP　1000

犬山：LP　8000

案田：LP　8000

【特別ルール】

・黎のライフは1000、犬山と案田は8000で開始する

・黎が効果ダメージを与える場合、一律100ダメージとする

・ 犬山と案田は自分のスタンバイフェイズごとにライフが500回復する  
・ 犬山と案田のドローフェイズ開始時に手札が0枚の場合、通常ドローの枚数は2枚となる

・ 黎がデッキ切れを含めた特殊条件で勝利する事は認めず、黎の敗北として扱う  
・ ただしこれは黎が特殊勝利をした場合のみ。犬山と案田が自分からデッキを減らした、又は特殊条件によって敗北した場合は、通常通り敗北として扱う

「俺のターンから行かせて貰う、ドローカード！」

いくら俺でもガチハンデの1000vs8000×2でふざけるつもりは無い、早めに陣形を整えさせて貰おうか。

……先日の雑魚ブルーの群れ？ あれは遊びの延長みたいなモノだったし、本気になる必要なんて欠片も無かったし。だって高田の集めた連中だけ？

「魔法カード『おろかな埋葬』を発動。デッキからモンスターカードを1枚墓地に送る」「アア？ いきなり狂ったか？ ンな事して何になる」

鼻で嘲笑う案田。ま、この時代だとまだ墓地を肥やすつての軽視するよね。

墓地にカードを置いて、準備完了。墓地ポケットがカードを飲み込むと、そこから刃と棘付き首輪をぶら下げた奇妙なクリーチャーが半透明で現れた。

「この瞬間、墓地に送られた『悲劇のデスピアン』の効果発動。このモンスターが効果で墓地に送られた、または除外された時、デッキから『デスピアン』モンスターを手札に加える事ができる」

「チツ、この効果を使うためか！」

悲劇のデスピアン（効果モンスター）



星1

闇属性／天使族

ATK 400 / DEF 400

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。  
 (1)：このカードが効果で墓地へ送られた場合、または効果で除外された場合に発動できる。

デッキから「悲劇のデスピアン」以外の「デスピア」モンスター1体を手札に加える。  
 (2)：墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の「烙印」魔法・罫カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを自分フィールドにセットする。

「さあ、始めるぞ！ 俺は手札からたった今サーチした『デスピアの導化アルベル』を召喚！」

『へへへッ！』

デスピアの導化アルベル：ATK 1800

一番手でフィールドに出すのはこのデッキのエンジン、不気味な仮面を被った赤い法衣の男。

全身に絡みつく鎖のような紫色の菱形が生理的嫌悪感を掻き立てる。

『三沢、あのモンスターは……』

『分かん、俺も見た事が無い。全く新しいデッキだ』

「この召喚に成功した時、デッキから“烙印”と名のついた魔法・罨カードを1枚手札に加える事ができる。デッキからフィールド魔法『烙印劇城デスピア』をサーチし、そのまま発動！」

続けて不気味な劇場のような建造物を展開。

これで準備完了だ。

デスピアの導化アルベル（効果モンスター）

星4

闇属性／天使族

ATK 1800／DEF 0

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「烙印」魔法・罨カード1枚を手札に加える。

(2)：このカードが墓地に存在する状態で、自分フィールドの表側表示の融合モンスターが相手の効果でフィールドから離れた場合、または戦闘で破壊された場合、相手フィールドの効果モンスター1体を対象として発動できる。

このカードを特殊召喚し、対象のモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

### 烙印劇城デスピア

#### 〔フィールド魔法〕

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の手札・フィールドから、レベル8以上の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

(2)：融合モンスター以外の自分フィールドの表側表示の天使族モンスターが相手の効果でフィールドから離れた場合、または戦闘で破壊された場合、自分の墓地のレベル8以上の融合モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。



星8

闇属性／悪魔族

ATK 2500 / DEF 2000

「デスピア」モンスター＋光・闇属性モンスター

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：融合召喚したこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手は600LPを払わなければ、カードの効果を発動できない。

(2)：このカードが墓地に存在し、相手フィールドに儀式・融合・S・X・リンクモンスターがいずれかが存在する場合に発動できる。

このカードを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

この効果は相手ターンでも発動できる。

デスピアの大導劇神（効果モンスター）

星8

闇属性／天使族

ATK 3000 / DEF 1500

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：融合・S・X・リンクモンスターが特殊召喚された場合、フィールドの効果モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

(2)：手札・フィールドのこのカードが融合召喚の素材になり、墓地へ送られた場合または除外された場合に発動できる。

このカードを特殊召喚する。

赫灼竜マスカレイド：ATK 2500

デスピアの大導劇神：ATK 3000

フィールドに現れるのは、赤と黒の二色に彩られた龍と、墮落した聖職者。

召喚ゲートを潜って出て来た上級モンスター達に、相手はたじろいだ。

「いきなり大型モンスターが2体かよ……！」

「あ、慌てるな、オレ達なら敵じゃねえ！」

怖気づく案田に対し、犬山は強気のままだ。

何か策があるらしいな……。ではこちらも対策を打っておこう、『ラヴァ・ゴーレム』

みたいなリリリースは無理でも、守るカードは用意しておかないと。

「変則タッグデュエルでは、各プレイヤーは最初のターン攻撃できない。俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

黎：LP 1000

手札：2枚

フィールド

・赫灼竜マスカレイド（ATK 2500）、デスピアの大導劇神（ATK 3000）  
：伏せカード2枚、烙印劇城デスピア（フィールド魔法）

「さあ、化物退治のデュエルだぜ先輩さん達。返り討ちにならないよう気を付けてくれよー！」

「うるせえ後輩だ！ 案田、オレから行くぞ！」

「おう！」

「オレのターン、ドロー！ まずはスタンバイフェイズに特殊ルールでライフが500回復！」

犬山：LP 8000↓8500

1人目は犬山と呼ばれた丸刈りの男。どんなデッキか、プロに進むというブルーの実力を見せて貰おうか。

「マジックカード『天使の施し』を発動！ デッキからカードを3枚ドローし、その後2枚捨てるぜ！ オレが捨てるのは『ブレイン・クラッシュャー』と『賢者ケイローン』だ！ ぐ……っ?!」

犬山：LP 8500↓7900

勢い良くカードを発動させた犬山先輩。しかしその瞬間に赤いオーラに全身が取りつかれ、力の一部を奪われてしまう。

「な、何?! ライフが600も減っただど?!」

「効果ダメージは100になる筈じゃなかったのかよ!」

うんうん、確かに俺が与えるバーンは全部100になるルールだとも。

そう、バーンダメージは、な?!

「『マスカレイド』のモンスター効果。融合召喚されたこのモンスターが存在する限り、



相手はカードを発動するためにライフを600払わなくてはならない。これは効果ダメージではなくライフコストの強要、よって100にはならない」

「んだと!」

「相手にだけライフを払わせるとかふざけんな!」

「当然、ライフが600ジャストならその時点で敗北。600未満なら何のカードも発動できなくなる。慎重に行動して下さいね、パ・イ・セ・ン?」

「く、このっ!」

勿論、このデッキを普段使いするつもりは無い。ライフ4000の世界じゃ反則にも等しいし、何より味気ない。

今回のこれはお仕置きだ。下級生相手に袋叩きを目論むリンチ上等なクソブルーと、それを助長する教育実習生への、な。

『黒蠍―棘のミーネ』を手札から召喚!」

『ハアッ!』

黒蠍―棘のミーネ：ATK 1000

フィールドに出たのは盗掘団の一員。赤いスカーフを巻いた、鞭を操る女性モンス

ターである。

単体では然程強くは無いが、こちらのモンスターを薙ぎ払い次の『ミーネ』をサーチするため戦線を維持できる。それにライフ4000の世界ではたった1000でもダメージとしては脅威だ。

「更に1枚カードを伏せて、ターンエンドだぜ！」

『棘のミーネ』にバックが1枚、つて事はこいつのデツキは恐らく「ミーネ・ウイルス」。

『ケイローン』が入ってた事を考えると「ミーネゲドン」の要素を混ぜたか？  
 確か『死のデツキ破壊ウイルス』はDMの最終回より少し前に制限カード、ゴツズ<sup>5</sup>で禁止カードにされたから、この時代だとピン差しか。40枚の中の1枚を初手に持つとは、流星はアニメ世界の運命力だな。

黒蠍―棘のミーネ（効果モンスター）

星4

闇属性／戦士族

ATK 1000／DEF 1800

このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、次の効果から1つを選択して発動することができる。

● 「黒蠍」という名のついたカードを自分のデッキから1枚手札に加える。

● 「黒蠍」という名のついたカードを自分の墓地から1枚手札に加える。

死のデツキ破壊ウイルス（エラツタ前）

【通常畏】

自分フィールド上に存在する攻撃力1000以下の闇属性モンスター1体をリリースして発動する。

相手のフィールド上に存在するモンスター、相手の手札、相手のターンで数えて3ターンの間に相手がドロートしたカードを全て確認し、攻撃力1500以上のモンスターを破壊する。

犬山：LP 7900

手札：4枚

フィールド

：黒蠍―棘のミーネ（ATK 1000）

：伏せカード1枚

「次はオレのターンだ！」

「やったれ案田！」

「行くぜ、ドロー！ ライフ回復ウ！」

案田：LP 8000↓8500

次は案田と呼ばれた角刈りの小太り。お手並み拝見だ。

「オレは手札から『コストダウン』を発動！ 手札から『閃光を吸い込むマジックミラー』を墓地に送り、手札のモンスターレベルを2つ下げる！」

……『閃光を吸い込むマジックミラー』、そうかこいつが雪乃を倒したのか。

ハ、プロが云々言う割にあのクソ教育実習生に加担するたあ未来が見えるな。

「『マスカレイド』の効果により、ライフを600払って貰う」  
「ぐっ！」

案田：LP 8500↓7900

「ケツ、たかが600だ！ オレはレベル3になった『マジック・キャンセラー』を召喚

「！」

「何っ!?!」

マジック・キャンセラー：ATK 1800

げ、マズいな、この虫型ロボは融合を行うデッキとは相性最悪のモンスターだ。

「このカードが存在する限り、全ての魔法カードの効果は無効になる！ よってテメエのフィールド魔法の効果も無効だ！」

マジック・キャンセラー（効果モンスター）

星5

風属性／機械族

ATK 1800 / DEF 1600

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り魔法カードは発動できず、全てのフィールド上魔法カードの効果は無効になる。

ベキリ、とフィールド魔法によって出現した悪魔の城が灰色に石化し、効力を失う。

成程、こっちは多分「ジャマキャン」か。

ただでさえ魔法カードを封じられている上に『群雄割拠』を出されると、天使族と悪魔族の混成の「デスピア」にはちよつと辛い。

しかも「ミーネ・ウィルス」はウィルスカード主体だから、罠の比率を弄るだけでこのデッキとの相性を上げられる。

流石に口程にも無い、というワケにはいかなさそうだ。先日のアホブルーの群れよりは強そうだな。

それに儀式魔法が主体の雪乃とは殊更に相性が悪い。

「そしてカードを3枚伏せ、ターンを終了するぜ！」

案田：LP 7900

手札：0枚

フィールド

：マジック・キャンセラー（ATK 1800）

：伏せカード3枚

「このターンから全員攻撃できる。行くぞ俺のターン、ドロー！」

「リバースカードオープン！」

早速犬山が動いたか！

「罨カード『死のデッキ破壊ウイルス』！ 攻撃力10000の『ミーネ』を生贄に、お前の攻撃力1500以上のモンスターを全て破壊する！ これでテメエは地獄行きだあ！」

「『マスカレイド』の効果で600のライフコストが発生する！」

「うぐぐ、何のこれしき！」

犬山：LP 7900↓7300

俺のモンスターはどれも攻撃力1500以上だから、これを受ければ俺のフィールドは丸裸。

だがそうはさせない。

「そしてこちらもリバースカードオープン！ カウンター罨『レッド・リブート』！ 罨カードの発動を無効にし、伏せられた状態に戻す！」

「何!？」

「更に相手はデッキから罨カードを1枚セットできるが、相手はこのターン罨カードを

発動できない！　そう、相手はな！」

「つて事は……」

「くつ、オレもか！　これじゃあ『おジャマトリオ』と『自業自得』が使えねえ！」

「危ないなあ、トークンを出して1500ダメージ水増しが狙いかよ」

今度は相手の伏せられたリバースカードがフィールド魔法と同じように石化して使えなくなる。

犬山がライフを削って発動したカードがパタンと裏側表示に戻るが、しかし発動時のコストとなった『ミーネ』は戻らないため、奴は改めて触媒となるモンスターを用意しないとイケなくなつた。

そして「相手はターン終了時までトラップを発動できない」制約は2人相手に課されてる。これでこのターンは安泰だ。

ちなみに手札からも発動できる『レッド・リブート』だけど、ライフ10000は気軽に削つちやいけないからね。今回は伏せてから発動させて貰いました。

「オレは『レッド・リブート』の効果により、デッキから『リビングデッドの呼び声』をセツト！」

「俺は2体目の『デスピアの尊化アルベル』を召喚！　その効果でデッキから「烙印」と名のついた魔法・罫カードを手札に加える！　選択するのは『烙印開幕』！」



『ヘッヘエー!』

デスピアの導化アルベル：ATK 1800

悍ましい赫い悪魔が翼を広げ、デツキから新しいカードを手札に加える。準備完了、それじゃあ攻撃開始だ。

ガラ空きを倒しても良いけど……、まずは魔法カードを封じるデツキを使う方から叩く! それに『自業自得』を使わせるワケにはいかない!

「バトル! 俺は『デスピアの大導劇神』で『マジック・キャンセラー』を攻撃! エンドホール・ドラマツルギー!」

「ぐおおおー!」

強烈な闇の波動を飛ばし、アンテナを備えた四本足の虫のような機械を吹き飛ばす。

これで魔法カードが使えるようになった。防御札さえ無ければ、攻撃力1800程度は敵じゃない!

案田：LP 7900↓6700

「続けて『マスカレイド』でダイレクトアタック！ ノクターナル・ブレイズ！」  
「ギャアアアアア！」

案田：LP 6700↓4200

「もう一発！ 『アルベル』でダイレクトアタック！ ディーヴィアス・ナイトメア！」

「ぐはあっ!?!」

案田：LP 4200↓2400

更なる連続攻撃でライフを削る。いくら8000あっても無防備じゃ意味は無い。

「ぐ、が……、おのれ……!」

「大丈夫か案田!」

「ああ！ これで奴の攻撃は終了、反撃開始だ！ オレの場には『死者蘇生』が伏せてある、これで魔法カードをもう一度使えなくしてやるぜ！ 次のターンで今度こそトドメだ!」

ほう、角刈りの伏せカードの1枚は『死者蘇生』か。確かに『マジック・キャンセラー』の蘇生に使われると厄介だな。しかも特別ルールでドロローが2倍になるのもしつかり理解している。

使えればな！

「お前に次のターンは無い！ 手札から速攻魔法『赫あかの烙印』発動！ 墓地から『デスピアの導化アルベル』を手札に戻す！ そしてその後、素材モンスターは除外される代わりに融合召喚を可能とする！」

「何だとお?」

「手札に戻した『アルベル』と、フィールドの『大導劇神』を融合！」

悲劇を嗤え、喜劇を嘆け！ 虚ろなる騎士よ、姿なき亡骸と共に闇の底より産声をあげよ！」

再び闇の中へと消える赤い道化師と暗黒に魅入られた教皇。

赤と黒に染まった力は鎧へと姿を変え、重々しい金属音と共に場に降り立った。

「融合召喚！ 万象を穿て、滅びに染まりし聖槍！ レベル8、『デスピアン・クエリテイス』！」

『FOOOOOOOORRAAAAAAAAAA!』

デスピアン・クエリティス：ATK 2500

ズウン、という音と共に場に降り立つ、無人で動く黒い鎧。  
手にした槍も盾も、本来の神聖さは欠片も残っておらず、世界を滅ぼそうとする禍々  
しさが伝わってくる闇の武器だ。

デスピアン・クエリティス（融合・効果モンスター）

星8

光属性／悪魔族

ATK 2500 / DEF 2500

「デスピア」モンスター＋光・闇属性モンスター

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分・相手のメインフェイズに発動できる。

レベル8以上の融合モンスターを除く、フィールドの全てのモンスターの攻撃力は  
ターン終了時まで0になる。

（2）：表側表示のこのカードが相手の効果でフィールドから離れた場合に発動できる。

デッキから「デスピア」モンスターまたは「アルバスの落胤」1体を選び、手札に加

えるか特殊召喚する。

### 赫の烙印

#### 【速攻魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：自分の墓地の、「デスピア」モンスターまたは「アルバスの落胤」1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

その後、以下の効果を適用できる。

●自分の手札・フィールドから、レベル8以上の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを除外し、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン直接攻撃できない。

「ただし『赫の烙印』の効果で召喚されたモンスターはこのターン直接攻撃できない」

「お、驚かせやがって。なら安全だな……」

「何だ、忘れたのかよ？ この瞬間、融合素材になった『デスピアの大導劇神』は自身の

効果で蘇る！」

『フォツフォツフォツ！』

「あ、しまっ!?!」

「除外されても戻って来るのかよ!?!」

ATK 3000

「当然、こいつは一度場を離れて蘇ったから、再び攻撃できる。これで終わりだ、ダイレクトアタック！」

「ぐあああああああああああああああああああ！」

案田：LP 2400↓0

敵を嘲笑うかのように闇の神官が黒雷を撃ち、敵のライフを削り取る。

爆発と共に派手に吹っ飛んだ案田は、倒れたまま動かなくなった。

……生きてるよね？ 知らない間に闇のゲーム始まって、魂抜かれたとか無いよね

？



デッキからサーチするカード、どこで何のモンスターを融合するか、2人の内のどちらを先に倒すか。これらはデッキが自動ではやってくれない。もし同じデッキを持っていたとしても、同じように回せるかと言われたら……、正直わたしには自信が無い。踏んできた場数が違う、という事だ。

「ふふ、兎に角これで残り1人ね。あのハンデを物ともしない、流星は坊や」

「このまま行けば勝てるんだな！ 気張れえー！」

「その調子ですよ、遊馬崎くん！ タクティクスは100点満点です！」

「フアイトですよお、頑張つて下さあい〜！」

黎の場にはライフコストを強制するモンスターがいる。

たった600、されど600のライフの減少は、ジワジワと相手を削っていく。その上、攻撃力は2500もある。

今、プレッシャーを与えて精神的に優位にいるのは黎だ。

頑張れ、黎！ 最初からギリギリのデュエルで無双する、君の闇のエンターテインメントをもっと見せてくれ！ 相手の上級生は可哀想だけど、リンチを目論む奴に加担した時点で同情の余地無し！

S I D E : 黎



「あ、案田！ 大丈夫か、案田っ！」

「ちく、しょう……」

あ、生きてた。良かった。

「チクシヨウ、畜生畜生畜生ッ！ 負けただど!? オレが!? ゴミレッド如きに!? 何でだよ、どうなってんだよ!? 何でだあああああああああああああつ!!」

「あ、案田……」

「オレは、オレは……、くっそおおおおおおおおおおおおおー」

悔しいか、案田。そりゃあ悔しいだろうな、来年からプロ入りという誇りを持っているのに、明らかに格下、しかも年下相手に負けたのだから。おまけにかなり大きなハンデまで貰って。

だがそれが現実だ。デュエルは所持するカードの他は理論と経験、そして運の結晶。どれで負けたかは自分で判断して貰うとして、ただ1度ドロップアウトに敗北した程度で慟哭してたら、厳しい大人の世界ではやっていけないぞ。

もともと本人もそれを分かっているのか、叫んで心に整理をつけたのか起き上がって胡坐を搔くと、そこで静観の構えを取った。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド。この瞬間、『レッド・リブート』の効果は消

える」

黎：LP 1000

手札：1枚

フィールド

・赫灼竜マスカレイド（ATK 2500）、デスピアの大導劇神（ATK 3000）、  
 デスピアン・クエリテイス（ATK 2500）、デスピアの道化アルベル（ATK 1  
 800）

：伏せカード2枚、烙印劇城デスピア（フィールド魔法）

チラ、とフェイヴァーを見る。

わなわなと手を震わせながらクロノス先生に何か訴えているが、クロノス先生は黙って首を横に振った。俺のデュエルに不正は認められない、といった所か。

オシリスレッド、特に十代を敵視しているクロノス先生だが、本質は教師だ。先も言った通り、私情で試験を歪める事は許さないのだろう。そうでなければ迷宮兄弟や万丈目と十代がデュエルした時に物言いをつけて反則負けにでもしている。

「さ、エリートにして来年からプロの犬山センパイさん？ 相方がやられちゃいました

けど、まさかドロップアウトに2人まとめて負けるなんて有り得ませんよねえ？ 何せ  
 プロ入りするんですよねえ？」

「クソが！ ナメてんじやねえぞゴラ！ オレのターン、ドロー！ スタンバイフェイズに500回復だ！」

犬山：LP 7300↓7800

トラップ封印はここまで。さて手札は5枚だ、奴はどう打って出て来る。

「オレは『リビングゲッドの呼び声』を発動！ 墓地から『棘のミーネ』を攻撃表示で特殊召喚するぜ！」

「600ライフコスト発生だ」

「ぐぎぎ……！ たかがこのくらい！ 蘇れオレのモンスター！」

犬山：LP 7800↓7200

黒蠍―棘のミーネ：ATK 1000

「これで必要なカードは揃った！ テメエに地獄を見せてやらあ！」

「ならこちらも準備を整えよう、リバーズカード発動！ 速攻魔法『烙印開幕』！ このカードは手札を1枚捨てて、デッキから『デスピア』モンスターを手札に加えるか、守備表示で特殊召喚する！ 俺は手札から『死魂融合』ネクロフュージョンを捨てて、デッキから2体目の『悲劇のデスピアン』を手札に加える！」

ちなみに勘違いしやすいのだが、この手札を捨てる行為はコストではなく効果。今回は入れてないがシャドールや暗黒界なんかの効果もバツチリ発動できるのだ。

「ハッ、無駄だ！ トラップ発動、『死のデッキ破壊ウイルス』！ 攻撃力1000以下のモンスターを生贄に、お前の攻撃力1500以上のモンスターを全て破壊する！ 今度こそ地獄に落ちやがれえ！」

「再びアンタはライフを600ポイントを払う！」

「アガガガ……、ひ、必要経費だ！」

犬山：LP 7200↓6600

盗掘団の紅一点がどろりと溶け、暗い紫色の粒子が無数にこちらに飛来する。あれがウイルスなのか。

死の病原体はこちらのモンスターに感染していき、中央のモンスターゾーンにいた

『デスピアの大導劇神』が爆発したと同時に、俺の場の全てを巻き込む大爆発を起こした。

ちなみに手札の『悲劇のデスピアン』は攻撃力400なので破壊されない。

「ヒヤア！ 決まったぜえ！」

「それはどうかな？」

「何?!」

赫灼竜マスカレイド：ATK 2500

デスピアン・クエリテイス：ATK 2500

爆煙が晴れた時、俺の場にいたモンスターは4体の内2体が健在であった。

「な、何でテメエのモンスターは破壊されてネエんだよおっ！」

「墓地の『烙印開幕』は、融合モンスターが効果で破壊される時、身代わりになって除外される効果を持つ。俺は『マスカレイド』と『クエリテイス』がウイルスカードで同時に破壊される所を、『烙印開幕』で防いだ。つまりアンタはわざわざカード3枚とライフ1200を使って『大導劇神』と『アルベル』を破壊しただけに終わったのさ！」

「クソが！」

「どうした、地獄と言う割には随分とへぼいじゃねえか!」

### 烙印開幕

#### 【速攻魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の手札を1枚選んで捨てる。

その後、デッキから「デスピア」モンスター1体を手札に加えるか守備表示で特殊召喚する。

このカードの発動後、ターン終了時まで自分は融合モンスターしかEXデッキから特殊召喚できない。

(2)：自分フィールドの融合モンスターが効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

『黎はこのために前のターンで『烙印開幕』をサーチしておいたのか!』

『ウイルスカードがあるのは分かっておったからもう』

『8000ライフを削るために相手をギリ貧に追い込むモンスターを維持するのは理に叶ってるね』

『成程。あのデツキはフィールド魔法の効果で融合し、融合モンスターとその素材の効果を活かすデツキというワケか』

『怖く見えた目に合う、強くいモンスター達ですね〜』

『しかしまだ相手ターンです、油断はできませんわ』

『黎くん頑張れー！ その調子ツスよー！』

「さあ、まだアンタのターンだ。頼みのウイルスは半分しか作用しなかったけど、次の策はあるかな？」

「ナメてんじゃねえ！ まだこいつがいる！ 来い、『同族感染ウイルス』！」

う、そうかコイツが禁止カードになったのは2期で『ネオス』が出た後だったな。つまり今は制限カードだが現役だ。

同族感染ウイルス：ATK 1600

「モンスター効果発動！ 手札の『キラ！・トマト』を捨てて、悪魔族モンスターを全て破壊する！ テメエのモンスターは2体とも悪魔族！ そして『烙印開幕』はもう使えねえ！」

「600ライフを払って貰う！」

「知るかよ！ 消し飛んじまえ！」

同族感染ウイルス（効果モンスター）

星4

水属性／水族

ATK 1600／DEF 1000

（1）：手札を1枚捨て、種族を1つ宣言して発動できる。

フィールドの宣言した種族のモンスターを全て破壊する。

ぶじゆり、と紫色の膿の塊のようなモンスターから毒ガスが噴出し、俺のモンスターが2体とも消える。

成程な。【ミーネ・ウイルス】は攻撃力1500以上はウイルスカードで、それ以外はこうした汎用性の高いモンスターで潰すのか。当時恐れられた戦法が俺の目の前で再現されるとは。しかも『同族感染ウイルス』は攻撃力1600、1500未満しか生き残れない場なら純粋な殴り合いに持って行く事もできると来た。

犬山：LP 6600↓6000



うーん、もう少し削りたかったけど、まあこの時代で5回も発動したのなら良しとするかね。

「ヒヤア！ どうだ、これでテメエの場はボロボロだろ！」

「この瞬間、俺は墓地の『アルベル』の効果発動！ 融合モンスターが破壊された時、相手モンスター1体の効果を無効にして墓地から蘇る！ 復活しろ、『アルベル』！」

『へへへへへッ！』

デスピアの導化アルベル：ATK 1800

「ンだと!？」

「更に『クエリティス』の効果も発動！ カード効果で場を離れた時、デッキから『デスピア』アドリビトゥムモンスターをサーチまたは特殊召喚できる！ 俺は『デスピアの凶劇』を手札に加える！」

奴の手札は2枚消費して残り3枚。『同族感染ウイルス』の効果はこのターン無効だから……。いや、教えておいてやるか。

「二応言っておくぜ犬山パイセン。フィールド魔法『烙印劇城デスピア』は融合モンス



A T K 2500

しまった、余計な事を言ってしまったか。変に仏心を出さず、消費を強いるべきだった。

「モンスター効果発動！ レベル8以上の融合モンスター以外の攻撃力を0にするぜえ！」

『マズいわよ！』

『いけない！』

『ヤベエ！』

デスピアの導化アルベル：A T K 1800↓0

同族感染ウイルス：A T K 1600↓0

おっとこれは拙<sup>ます</sup>い。2500の攻撃力がそっくりそのままライフに通ってしまう。

「テメエのモンスターで終わりにしてやらあ！ 『デスピアン・クエリテイス』で『デスピアの導化アルベル』を攻撃！ 死ねえ！」

「トラップ発動、『分断の壁』！ 相手モンスター1体につき800ポイント、相手モン

スターの攻撃力をダウンさせる！ アンタの場のモンスターは2体、よって攻撃力は1600ポイントダウンする！」

「何っ!?!」

デスピアン・クエリテイス：ATK 2500↓900

黎：LP 1000↓100

邪悪な聖槍により俺の道化が破壊され、暴風が吹き荒れる。しかし直前で暴風は威力を落とし、俺のライフを削りきる前に止んでしまった。

危ない、ライフ1000にして貰って良かった。100じゃ流石に無理があると思っ  
て保険をかけておいたんだが、正解だったぜ。

数合わせに入れたこのカードも、まさか窮地を救ってくれるとは。塞翁が馬とはこの  
事か。

分断の壁

【通常畏】

(1)：相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

相手フィールドの全ての攻撃表示モンスターの攻撃力は、相手フィールドのモンスターの数×800ダウンする。

「フィールド魔法の効果により、墓地から『マスカレイド』が復活！」

『グジャアアアッ!』

「ただしこいつは融合召喚されていないため、600ポイントのライフコストを強いる効果は失われている」

赫灼竜マスカレイド：DEF 2000

よし、これでこのターンの敗北は無い。

攻撃力0のモンスターでは『マスカレイド』は倒せない。

「クソッ! マジでウゼエ真似しやがって! ぎっけんじゃねえぞコラア!」

「んな事言われてもな。世の中にデュエリストは山のようにいる。その中にはロツクやバーン、デツキ破壊の使い手もいるんだ。アンタはそんな奴ら全員に、鬱陶しい戦術だからやめろって言って回るのか?」

「うるせえ黙れ、生意気言うな! 屁理屈捏ねてんじやねえ!」

「やれやれ。それよりターン進めてくれよ、まだアンタのターンだぜ?」

「チイツ! リバースカードを2枚セットして、ターンエンドだ!」

「この瞬間『クエリティス』と『アルベル』の効果を終了、『同族感染ウイルス』の効果が元に戻る。だが『分断の壁』で下がった攻撃力は戻らない」

犬山：LP 6000

手札：0枚

フィールド

：デスピアン・クエリティス（ATK 900）、同族感染ウイルス（ATK 0）

：伏せカード2枚、リビングデッドの呼び声（永続罠・対象不在）

「俺のターン、ドロロー!」

「『死のデツキ破壊ウイルス』の効果で3ターンの間、テメエがドロローしたカードの中から攻撃力1500以上のモンスターを全て破壊する! さあ、引いたカードを見せな!」

「俺がドロローしたカードは……」

チャツ、と右手の指で持ったカードを開示する。



「『デスピアの凶劇』の効果発動！ 融合素材になった事で、除外されている『アルベル』を特殊召喚！」

『ヒイハアアアアアアアアア！』

全く関係の無い3体のモンスターが強制的に渦の中に入って混ぜ合わさり、魔獣と鷹と龍の頭を持った禍々しい黒い怪物へと姿を変えた。猫背の背中からはドラゴンのような翼と尻尾が生えており、しかし鱗は無く筋肉の付き方は魔獣のそれを彷彿とさせる。まさに合成獣の名に相応しい混沌を肉体に反映させたモンスターだ。

効果ダメージが100に固定されるので、今回『プロスケニオン』はお留守番。「絶望と嘲笑の殺戮劇よ、闇も光もその身に取り込み、混沌の底より終焉を導け！」っていう召喚口上も考えてはいたんだけどね。

デスピアン・プロスケニオン（融合・効果モンスター）

星11

光属性／悪魔族

ATK 3200 / DEF 3200

「デスピア」モンスター＋光属性モンスター＋闇属性モンスター

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。



(1)：自分・相手のメインフェイズに、相手の墓地の融合・S・X・リンクモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを除外するか、自分フィールドに特殊召喚する。

(2)：このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時に発動できる。

そのモンスターの元々の攻撃力と元々の守備力の内、高い方の数値分のダメージを相手に与える。

ガーディアン・キマイラ：ATK 3300

デスピアの導化アルベル：DEF 0

「こ、攻撃力3300だとお!? しかもレベル9って事ア『クエリテイス』の効果が通じねえのかよ!? おまけに唯一通じる『アルベル』は守備表示か畜生が!」

「このカードを融合召喚した時、フィールドから素材にした数だけ相手フィールドのカードを破壊し、手札から素材にした数だけドロウする! よって俺は1枚ドロウし、お前のフィールドのカードを2枚破壊する! このタイミングでは破壊するカードは選ばない!」

「ンだ?!」 ならば『威嚇する咆哮』を発動! このターンお前は攻撃できないっ!」

『デスピアン・クエリティス』と『同族感染ウイルス』を破壊する!」

3つ首は互いに風圧を孕んだ雄叫びをあげ、場に暴風をもたらす。同時に俺の手札を補充し、戦況を更にこちらへと傾けた。

デスピアの凶劇（効果モンスター）

星8

闇属性／天使族

ATK 1500 / DEF 2000

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分メインフェイズに発動できる。

フィールドの全てのモンスターの攻撃力は相手ターン終了時まで、自身のレベル×100アップする。

(2)：手札・フィールドのこのカードが融合召喚の素材になり、墓地へ送られた場合または除外された場合、自分の墓地のモンスター及び除外されている自分のモンスターの中から、『デスピアの凶劇』以外の『デスピア』モンスターまたはレベル8以上の融合モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

ガーディアン・キマイラ（融合・効果モンスター）

星9

闇属性／獣族

ATK 3300 / DEF 3300

カード名が異なるモンスター×3

このカードは手札と自分フィールドのモンスターのみをそれぞれ1体以上素材とした融合召喚でのみEXデッキから特殊召喚できる。

このカードの（1）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードが魔法カードの効果で融合召喚した場合に発動できる。

手札で融合素材としたカードの数だけ自分はデッキからドロウし、フィールドで融合素材としたカードの数だけ相手フィールドのカードを選んで破壊する。

（2）：自分の墓地に「融合」が存在する限り、このカードは相手の効果の対象にならない。

ここで『クエリティス』の効果発動、と行きたいが『クエリティス』の効果は相手効果によって除去された時のみ。

相手フィールドにいて俺の効果で消えたため、効果は使えないのである。

「『ガーディアン・キマイラ』の効果で1枚ドロウ。ウィルスチェック、このカードは……『融合解除』だ」

「チツ、マジックカードか」

「そして『アルベル』の効果により、デッキから『赫の烙印』を手札に加える」  
さて、このターンは攻撃できない。念のため、圧を加えておくか。

「『赫の烙印』を発動！ 墓地から『デスピアの大導劇神』を手札に戻し、フィールドの『アルベル』と除外融合！ 融合召喚！ 再び現れる、『マスカレイド』！」

『G A A A A！』

「チツ、またそいつかよ！」

「今度は融合召喚されているから、また600のライフコストを払う事になるぜ？ そして素材になった『大導劇神』を、自身の効果で特殊召喚！」

赫灼竜マスカレイド：DEF 2000

デスピアの大導劇神：ATK 3000

「リバースカードを1枚場に出して、ターンエンド」

黎：LP 100

手札：1枚（『悲劇のデスピアン』）

フィールド

：ガーディアン・キマイラ（ATK 3300）、赫灼竜マスカレイド（DEF 2000）、デスピアの大導劇神（ATK 3000）

：伏せカード1枚（『融合解除』）、烙印劇城デスピア（フィールド魔法）

ターンが明けてみれば、状況は圧倒的だった。

俺のライフは残り僅かだが、場には強力な3体のモンスター。一番攻撃力が低い『マスカレイド』は念のため守備表示にしてある。

対し奴は6000ライフを有するも、手札は空っぽで場は伏せカードが1枚。これなら何とかなりそうだ。

『よし、行ける行ける！ このまま制圧しちゃえ！』

『油断大敵だよ、最後までしつかりー！』

『やっちまえ、黎！』

『ファイトファイト、レエイ！ 頑張れ頑張れレエイ！』

「オレのターンだ！ 今のオレの手札は0枚、特殊ルールにより通常ドロワーは2枚となる！ ドローツ！ このスタンバイフェイズ、ライフが再び500回復する！」

犬山：LP 6000↓6500

「そして今ドロワーした『強欲な壺』を発動！ デッキからもう2枚ドロワー！」

犬山：LP 6500↓5900

ドロワースを発動したか、こういう時は巻き返して来る！

これで奴の手札は3枚、何が現れてもおかしくない！

「へ、へへ、来たぜえ！ オレの墓地には『キラートマト』と『棘のミーネ』と『ブレイン・クラッシュャー』がいる！」

む、いかん。

そのカウントが必要なモンスターは1体しかない。

「よって『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚だぜえ！ ヒヤアツ！ 出て来いやあ

！」

『VAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!』

ダーク・アームド・ドラゴン：ATK 2800

ここでダムドか……!

「モンスター効果発動! 墓地から『ブレイン・クラッシャー』を除外し、その鬱陶しいドラゴンを破壊する! 消えろ!」

『『マスカレイド』の効果で600ライフを払って貰う!』

「だがテメエのモンスターは破壊だア!」

犬山：LP 5900↓5300

再度コストを強制し、更に犬山のライフを削る『マスカレイド』。しかし闇の斬撃が直後に首を切り落とし、断末魔の悲鳴すらなく赤いドラゴンは消滅した。

「つ……! だがこの瞬間、墓地の『アルベル』の効果発動! 『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果を無効にし、特殊召喚!」

「させるか! 手札から『D・D・クロウ』の効果を発動! このカードを手札から捨て

る事で、相手墓地のモンスターを1体除外するぜ！」  
「何っ!?!」

D・D・クロウ（効果モンスター）

星1

闇属性／鳥獣族

ATK 1000／DEF 1000

（1）：このカードを手札から墓地へ捨て、相手の墓地のカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを除外する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

カードから不気味なカラスが飛び立ち、俺の墓地ポケットに飛び込む。直撃を受けた俺のディスクは『アルベル』を吐き出してしまった。

むう、『ミーネ・ウィルス』に『ダムドビート』を混ぜてあったのか。これでは『アルベル』を蘇生できない、特殊召喚できなければ効果も無効にできない。しかも墓地の闇属性モンスターが増えてしまった。



クソツタレ、これじゃあ残りのカードも斬られちゃうな、『喜劇のデスピアン』をサーチしておけば良かったか……!」

「これで思う存分ぶった切れるぜえ?　だがその前にオレは『マジック・プランター』を発動!　このカードは自分フィールドの永続罫を1枚墓地に送り、2枚ドロワーできる!　オレは対象のいなくなった『リビングデッドの呼び声』をコストにして2枚ドロワー!」

マジック・プランター

### 【通常魔法】

(1) : 自分フィールドの表側表示の永続罫カード1枚を墓地へ送って発動できる。

自分はデツキから2枚ドロワーする。

「行くぞ、『D・D・クロウ』を除外して邪魔なテメエのフィールド魔法を破壊する!」

やばっ!?　このデツキはフィールド魔法が無いと上手く動けないのに!?

「しまっ……!」

「もう一度モンスター効果発動! 『キラー・トマト』を除外し、そのドラマ何とかを破

壊する!」

ドラマトルギア

『大導劇神』っ!」

「更に『ミーネ』を除外し、その邪魔なデカブツも切り刻んでやる！ 喰らえエー！」  
 「リバースマジック『融合解除』発動！ 対象となった『ガーディアン・キマイラ』をエクストラデッキに戻し、素材となったモンスターを全てフィールドに特殊召喚する！  
 蘇れ、『マスカレイド』『凶劇』『超電磁タートル！』」

赫灼竜マスカレイド：DEF 2000

デスピアの凶劇：DEF 2000

超電磁タートル：DEF 1800

続けて更に2発、闇の丸鋸が飛ぶ。神官は真正面から受けてしまい真つ二つにされたが、黒いキメラは体を分離させる事で何とか難を逃れた。

これで奴の墓地から闇属性モンスターはいなくなり、こっちのフィールドにはモンスターが3体。まだ大丈夫だ。

しかし融合召喚をフィールド魔法に依存しすぎたな……。『融合』カードが無いから『キマイラ』の耐性も発揮されず、『融合解除』で逃がさざるを得なかったし。

さてこのまま行けば次のターンで戻した『ガーディアン・キマイラ』をもう1度融合召喚できるが……。

「それで耐えたつもりか、クツソ甘い考えだ後輩。リバースカード、オープン！ 速攻魔法『異次元からの埋葬』を発動！ 除外されたオレのモンスターを3体墓地に戻すぜえ！」

「なっ!？」

墓地に再び3体の闇属性モンスターが戻る。つまり、これは……!」

「もっぺん効果発動だぜ! テメエのモンスターを3体ともコマ切れにしてやらあ!」  
マジか。折角用意した壁が3体ともぶった切られてしまった。

更に投擲される闇の刃で、俺のモンスターが全滅。今度はこつちがガラ空きにされてしまうとは。

『え、ちよ、待ってこれヤバいんじや』

『ヤバいつつーか無防備だよ!』

『これじゃ壁モンスターがいらないから奴の攻撃をまともに!』

『終わりだ!』 『ダーク・アームド・ドラゴン』でダイレクトアタック! 　ダーク・アームド・パニツシャー!』

眼前に迫る闇巨龍の拳。これを正面から喰らえばライフは吹き飛ぶだろう。

だが、まだ終わらせるつもりは無い。

「墓地の『超電磁タートル』のモンスター効果! デュエル中1度だけ墓地のこのカード

を除外する事で、バトルフェイズを強制終了させる！」

超電磁タートル（効果モンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 0 / DEF 1800

このカード名の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

（1）：相手バトルフェイズに墓地のこのカードを除外して発動できる。

そのバトルフェイズを終了する。

直撃の瞬間、ドラゴンパンチは僅かに俺から逸れて通り過ぎた。磁力で退けられたように離れた拳は突風で俺の長髪を暴れさせるだけに留まり、ダメージを与えずに終わる。

ふう、ギリギリセーフ……！

「チツ、あの亀にはそんな効果が……」

『『超電磁タートル』はデュエルキングも使っていたカードだ、覚えておいて損は無いと思いますよ？』

「そうかよ、クソが。『ジャイアントウイルス』召喚！ 守備表示！」

ジャイアントウイルス：DEF 100

「リバースカードをセット、ターンエンド！」

犬山：LP 5300

手札：0枚

フィールド

：ダーク・アームド・ドラゴン（ATK 2800）、ジャイアントウイルス（DEF 100）

：伏せカード1枚

『ジャイアントウイルス』か、戦闘で破壊された時に500ダメージを与え増殖するモンスターだったな。

『死のデツキ破壊ウイルス』に対応し触媒も戦線も維持しやすい。ウイルス繋がりなだけあってあのデツキには最適なカード。そして効果が発動すれば俺のライフはゼロ

になる。

ハハッ、いくらハンデを付けたとは言え随分と追い詰められたなあ！ この時代のデュエリスト相手によお！ ゾクゾクするなあ、ピリピリするなあ！ この緊張感こそデュエルの醍醐味だぜ！

「さて、恐らくこれが最後のターン。中々やるじゃないか犬山パイセン？」

「ふんっ、当然だ。負けを認めねえその風前の灯火のライフ、次のターンで削り取ってやらあー！」

「ライフがーあれば敗北にはならねえんだぜ？ そして勝つのは俺だ、俺のターン！」

おっと、ここでこっちも『強欲な壺』か。

「『死のデッキ破壊ウイルス』の効果だ！ そのカードを見せろ！」

「こいつは『強欲な壺』だ！」

「だがそれでドローしたカードにもウイルスは適用される、それでも使うか！」

「使いますが、何か？ 『強欲な壺』を発動！」

手札で腐らせるくらいならここで使ってやるよ！

こいつがラストドロー！ 行くぜえ！

「ドロー！」

「ほう、大した胆力だ！ じゃあ引いた2枚を見せな！」

俺が引いたのは……、おっしやあ！

「来たぜ来たぜ来たぜえっ！ 2枚の内の片方は魔法カード、もう1枚は攻撃力2400のモンスター！」

「ならモンスターだけでも破壊する！」

引いたカードの片方が腐食するように黒ずみ、墓地へと消える。

悪いな『ロガエス』、今回は出番無しだ。

守護天霊ロガエス（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2400／DEF 2100

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分フィールドの天使族モンスターの効果が発動した場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

（2）：相手フィールドの表側表示のカード1枚と自分フィールドの攻撃表示モンスター1体を対象として発動できる。

その相手のカードを除外し、その自分のモンスターを守備表示にする。

(3)：フィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊された場合、フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

このターン、そのモンスターは戦闘では破壊されない。

さて、長くかかってしまったが……。

「犬山先輩」

「何だ」

「……楽しいデュエルをありがとう。良い腕だ、研鑽を怠らなければプロでも通じるでしょうよ」

「……そうかよ」

「でも今回の勝利は貰う！」

「このターンで決めるぜえ！」

「俺が欲しかったのはこっちだ！ 魔法カード『精神操作』！ エンドフェイズまで相手モンスター1体のコントロールを奪う！」

「だがそいつで奪ったモンスターは攻撃できねえ！ 『ダーク・アームド』を奪つても——」

「誰が『ダーク・アームド』を奪うと言った？」



シンクロ登場前なのでこいつはまだ制限が無い。俺としては有難い限り。

そして俺が狙うのはそっちじゃない。俺が対象にするのは、通常召喚されたそっちだ！

「俺が貰うのは『ジャイアントウイルス』だ！」

「なっ、ダメエー体何を!？」

「続けて『悲劇のデスピアン』を召喚！」

『ヒーハハハア!』

悲劇のデスピアン：ATK 400

まだまだ、もう一枚必要だ。

「ここで、墓地に存在する『悲劇のデスピアン』のモンスター効果を発動！」

「っ、そいつは最初のターンの……………」

「このカードを墓地から除外する事で、墓地の“烙印”と名の付いた魔法・罫カードをセットする事ができる！俺が選ぶのは『烙印劇城デスピア』！このまま発動！」

闇の武装龍に切り裂かれたフィールド魔法が復活し、再度周囲が禍々しくも享樂的なステージに変わる。

本当は『超融合』の方が良いんだらうけど、あれをGXで使う<sup>蛮勇</sup>勇氣はありません。それと『烙印追放』は単純に來なかつたよ……。

「フィールド魔法『烙印劇城デスピア』の効果！ 1ターンに1度、レベル8以上の融合モンスターを融合召喚できる！ 俺が融合するのは『悲劇のデスピアン』と『ジャイアントウィルス』！」

「てめ、オレのモンスターを！」

「滅びの香りを放つ美しき花よ！ 闇に溶け込みし花卉の奥より、地獄の毒牙を産み出さん！」

赤と青の渦に溶け行く2体のモンスター。それらはやがて毒の粘膜を滴らせる鱗になり、不気味な肉体の龍へと振じれて腐るように書き換わった。

「融合召喚！ 飢えた牙持つ毒龍！ 『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』！」  
『グオジャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

出現したのは禍々しい色合いのドラゴン。紫色の外骨格、緑色の毒々しい体、棘のよ  
うな細かい牙、金色の角、全身に毒の果実のように灯る赤と黄色の水晶体。まるで植物  
と邪龍が合成されたかのようなキメラの如きモンスターが、涎を垂らしながらフィール  
ドに降り立つ。

こいつが、俺の最後のモンスターだ！

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン：ATK 2800

「どうだ、こいつが俺の最後のモンスター！俺が化物だと、人外だと証明する怪物！こいつを見てまだ俺に勝てると思うか人間！」

「それがテメエの最後の切り札ってワケか……。だが攻撃力は互角！まだ決着は——」

『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』の効果発動！融合召喚に成功した時、相手フィールドの特殊召喚したモンスター1体の攻撃力をターンの終わりまで加える！」

「そ、そうか！だから通常召喚された『ジャイアントウィルス』を奪ったのか!？」

「そういう事だ！『ダーク・アームド・ドラゴン』の攻撃力2800を『スターヴ・ヴェノム』に加える！」

ダーク・アームド・ドラゴン：ATK 2800

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン：ATK 2800↓5600

「ご、ごせん、ろっぴやく……!?!」

『スターヴ・ヴェノム』の更なる効果! このターンの終わりまで、相手のレベル5以上のモンスター1体の名前と効果をこのカードにコピーする! 『ダーク・アームド』の攻撃力だけじゃ足りねえ! 名前も、効果も、使わせて貰う! プレデトリー・アブソプション!」

「なん、だと……!?!」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン（融合・効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 2000

トークン以外のフィールドの闇属性モンスター×2

(1) : このカードが融合召喚に成功した場合に発動できる。

相手フィールドの特殊召喚されたモンスター1体を選び、その攻撃力分このカードの攻撃力をターン終了時までアップする。

(2) : 1ターンの1度、相手フィールドのレベル5以上のモンスター1体を対象として発動できる。

エンドフェイズまで、このカードはそのモンスターと同じ、元々のカード名・効果を  
得る。

(3)：融合召喚したこのカードが破壊された場合に発動できる。  
相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て破壊する。

ドスツ、と黒い鎧竜に尾を突き刺す紫の毒龍。そのテールからボディに向けてエネルギーが流れ込み、『スターヴ・ヴェノム』は一回りも二回りも巨大に、禍々しい存在に膨れ上がった。

「早速奪った効果を使おうか、『スターヴ・ヴェノム』の効果発動！ 墓地の『マスカレイド』を除外し、その伏せカードを破壊する！」  
「ポイズン・ジエノサイド・カッター  
“！”

ダムドの真似をして掌にエネルギーを集め、丸鋸のように飛ばす『スターヴ・ヴェノム』。黒ではなく紫色のそれは一直線にリバースカードに届き、セットされていた『鳳翼の爆風』を切らずに溶かして消滅させた。

成程、手札コストが必要なカードか。ターンを明け渡していたら危なかったな。

## 鳳翼の爆風

## 【通常罫】

(1)：手札を1枚捨て、相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

その相手のカードを持ち主のデッキの一番上に戻す。

「もう1度効果発動！ 墓地の『デスピアの凶劇』を除外し、今度のターゲットはオリジナルのダムドだ！ っポイズン・ジエノサイド・カッター！」

再び飛来する毒の丸鋸。ダムドは両手をクロスさせて受け止めようとするが、圧縮された毒は腕に当たった瞬間アメーバのように鎧竜の全身を包み込み、ジュウジュウという音を立てて溶かし尽くす。

「これでアンタを守るカードは無くなった！」

「ち、くしようめ……っ！」

「犬山先輩、アンタ腕は良いよ。ああ、プロ入りするってのならそれに恥じない実力だ。だが！ 目の前にいる俺は人間じゃない！ 化物を相手に人間の対応していたら、負けるのは当たり前だ！」

「……っ！」

「バトル！ 『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

俺の指示と同時に、飢餓の毒龍の全身にある宝玉が怪しく光り輝き出した。1つ、ま

たーつと光を灯し、それに呼応して口の中に紫色のエネルギーがチャージされていく。溜まったパワーはそのままビームとして撃ち出され、そして――

「『悪食のヴェネミー・バースト』 オツ！」

犬山：LP 5300↓0

相手のライフを全て焼き払った。

「ぐ、くっそおおおおおおおおお！ マジかよ、負けちまったあああああ！」「ガツチャ！ 熱いデュエルをありがとうございました！」

黎：WIN

案田、犬山：LOSE



☆

「……本当に、負けちまったな、案田」

「どうやらそうらしいな、犬山……」

ふう、流石に疲れた。いくらデュエルが好きでも短時間で5回も6回もやれば流石に疲弊してしまう。十代みたいなデュエル馬鹿なら10戦、いや100戦くらい行けそう  
な気もするけど。

「クズレッドに負けたあ……、プロ入りの話を前に腑抜けてたぜ」

「違いねえや。フェイヴァー先生の話に乗ったのもミスだった」

「修行のやり直しだな」

「おうよ」

俺と戦った3年生はもう持ち直しているようだ。

腐つてもセミプロ、気持ちの切り替えが早い。

そして。

「これでご満足頂けましたか、フェイヴァー先生？ アンタの用意した5人の生贄、  
ちやーんと食い散らかしましたが、次のご注文は？」

「きつつつさまあああああああああ！ 不正か、不正をしがったな！ どんなイカ

サマをしやがった！ このデュエリストの恥晒しがあああああああああああ  
あ！」

「はあ……、お前教師向いてないよ」

それとは真逆に、俺への憎悪を更に滾らせるフェイヴァー先生。

ハ、その程度の怒りなんざ俺にはそよ風にもならねえよ。テメエの底の浅い理屈如きが化物に通じると思うな。

血管が何本もプチ切れている男を無視し、クロノス先生がマイクを使って放送する。

『あーあー、諸君。これにて今月のテストは終了するノーネ。良く出来た所、出来なかつた所、それぞれキツチリ見直して来月に活かして下さいーノ。では解散ナノーネ』

これで俺に絡む正式な理由は無くなったワケだ。

何か言いたそうにしているフェイヴァーを気に掛ける事も無く、俺はクロノス先生に一礼してその場を去ったのだった。

別に俺に何をしようが勝手だがな。

俺を理由に他人まで攻撃するのなら……、それを見逃すワケにはいかねえんだよ。

化物の口の中に頭を突っ込んだ対価は、いつか耳を揃えて払って貰うぜ？

T  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 58 : フレイの同人誌

SIDE : 黎

突然だが、俺は今、精霊界に来ている。

場所は『天空の聖域』。

天空の聖域

【フィールド魔法】

このカードがフィールド上に存在する限り、天使族モンスターの戦闘ダメージは0になる。

何故ここにいるのかと言えば……。

「黎さん、そのペンを取って下さい」

「どうぞぞ」

「ありがとうございます」

手元にあつた、細いペンをフレイに渡す。

まあ、フレイの、フィオの精霊の手伝いだ。

何でもこいつはもう何千年も前から生きている古参の精霊で、この聖域の街ができた頃から生きていますか。

それで、何故俺が彼女の手伝いをしているかと言えば、まあ、恩返し？

——2時間前 レッド寮の自室・PM 19:53

「黎さん、お怪我はどうですか？」

「ん、んー。大丈夫かな」

転移して皆のデッキ構築を手伝った日の夜。怪我を心配したのか、フレイが俺の部屋にやって来た。桜は現在、風呂に行っているため不在。

その時には怪我は、少なくとも自覚している範囲では治っていたし、多少の違和感はあるものの、まあ、転生前にもあつた事なので大丈夫だろうと返事しておいた。

が。

「ハッ！」

「うお!？」

突如として突き出されたフレイの掌底。体重の乗った良い一撃を咄嗟にガードするものの、受け止めた腕にビリビリと振動が伝わった。

「セイ!？」

「くっ!？」

続いて繰り出される上段の回し蹴り。これも受け止める。止めた掌が痺れる。

ちなみに彼女は今は『勝利の導き手フレイヤ』の格好では無く、朱色のシャツに青のジーンズを着用している。

「ふむ、やはり……。最初よりも遅くなってますね」

その後、数回の攻撃を繰り出すと、フレイは何かを考える様に顎に指を添えた。

「黎さん、貴方、怪我治ってませんよ?」

「え?」

何を言っているんだ? 損傷した細胞だったら全て治療してあるんだが?

「確かに、肉体的な怪我は完治してますが、中身はまだです」

「中身?」

「ええ。貴方の治癒は言ってみれば、桜さんのやる様な治癒では無く、細胞の再構築。治療では無く再生です」

「まあ、確かに」

「それに必要なのは大量のエネルギー、平たく言えばカロリー。だからこそ黎さんは、自分のだけ高いカロリーを摂取できるように、密かに調理方法を変えていたんでしょ？」

「ギクリ」

「擬音を口に出しても無駄です」

そう、俺はこの体を動かす都合上、毎日常人よりも多くのエネルギーが必要なのだ。考えてもみてほしい。俺の体重は本来70キロ程。それが400キロオーバー。差し引き330キロも何があるのか。無論、体中に仕込んだ金属だ。平時は皮膚の下に仕込んでいて鎧の代わりになり、いざという時は剣や盾になる。

武器を錬成する際にもやはりエネルギーが必要。だから俺は生前、武器よりも素手での格闘の方が得意だったし、今もそっちの方がやりやすい（勿論大抵の武器・凶器は扱える）。

さて、そんな大量の金属を使用するにはエネルギーが必要なワケで。

そして俺は生物である以上、経口摂取、つまり飲食でエネルギーを賄わなくてはならない。

だからこそ、俺のメニューだけ、可能な限りカロリーが高くなる様になっているし、暇

さえあれば鍛錬で体の栄養の消費の効率を上げたりもする。来るべき戦いに備えるの事だ。

そして恐らく、フレイが指摘しているのは……。

「黎さんでしたら、もう勘付いているとは思いますが。貴方の体は、これまでの無茶が蓄積して、ダメージが回復しきれていません。いくら再構築をしても、そこかしこにダメージが残っています。貴方の動きは、初めて会った時から、少しずつですが鈍くなつて来ています」

「……やはりか」

再構築を重ねても、前より強い細胞が生まれるとは言っても、細胞がダメージを受けて傷ついたという事実は変わらない。それは新しい物に交換しても、損傷を無かった事にしても、その過程プロセスそのものが「ダメージを受けたから交換する」という事を記憶している。

「人間が普通に生活していく上で基礎代謝というものがある様に、生きているだけで、体の各部位は微量なダメージを受けているのです。

歩けば足が。ペンを握れば手が。表情を変えれば顔が。呼吸すれば胸が。飲食すれば口や内臓が。動くという事は、その部位を使うという事。即ち、その部分の細胞にダメージを与えつつ動かしているのです。



ダメージを感じないのは、それよりも自己治癒が早く行われていて、怪我を感じる暇は無いから。しかし……」

「俺の場合、その治癒を無理矢理行使し、結果として逆に自然治癒力が低下。更に元々受けていたダメージも大きいから、日常生活ですら、最早俺の体を蝕む要因となっている」  
「その通りです」

ある種の抗生物質を服用し続ければ、体の免疫力が低下していくのと同じだ。元々の機能よりも高い性能の物を使用し続ければ、元のそれが劣化する。電気のある生活から、洞穴生活という原初の生活に戻った場合を想定すれば分かりやすいだろう。

タバコに中毒性があるのも同じだ。脳の伝達物質をニコチンは活性化する効果がある。しかし、長い間吸い続けられれば、伝達物質がニコチンに任せて怠け始める。ここで禁煙すると、ニコチン不足によって伝達が思うようにいなくなる。これがタバコ、ニコチンを求める理由の内の一つだ。

「だが、戦うのを止めろと言われても聞かんぞ」  
「でしようね」

俺は自分の主張を通そうとすると、フレイはあっさりと承諾した。

む？ 言い争いに発展する事を覚悟していたんだが……？

「黎さんがそう言う事くらい分かっていますよ。大人みたいな広く、客観的な考えが

できるのに、自分の事は遠くに投げ出して蔑ろ。そのクセ使命のようなものには意固地になる」

「う……………」

「自己犠牲や自己欺瞞は結構ですが、わたくし達にも無関係では無い事を理解して下さい」

「……………」

……………分かつてるよ、そのくらい。

でも、俺が戦わなくちや、誰が戦うんだ。

ファイオ？ 十代？ 桜？ フレイ？ 別の誰か？

駄目だ、闇のゲームのダメージに耐えられない。優や真奈ちゃん、輝達が無事でいられたのは、俺の作ったプロテクターでダメージを緩和したからだ。生身じゃあ一撃もらうだけであの世行きだ。

プロテクターは俺から離れすぎると効力が無くなる。世界を転移したら言わずもがな。無いも同然だ。

近くにいれば良いとも思ったが、それも駄目だ。護衛は複数対1で辛うじて戦える相手なんだ。俺が抜けた時、真奈ちゃんの時みたいに転移した味方が1人だった場合、1対1になってしまう。それに、できれば勝率は僅かでも上げておきたい。

「フレイ……」

「分かってますよ。貴方以外、護衛と戦える人はいない。だから無茶をしなくてはいけない。無茶をすれば貴方の体はまた壊れ、それを治すために自己治癒力が低下する。でも敵は残っているからまた無茶をする」

悪循環です。フレイはそう悲しそうに言った。

SIDE : フレイ

あ、初めてのナレーションなのです。

……黎さんの様子が、初めて会った時から少しずつ変わって来ていました。それも悪い意味で。

護衛との戦いを終える度に、彼の動きに違和感を覚えるようになったのです。

もうどれくらい生きているか忘れたこの身、趣味や実益を兼ねて色々と取得した資格。その中には人体に関する物も当然あります。そしてわたくしは記憶力には自信があるのです。1度覚えたら絶対に忘れない。

かつて読んだ本の中にあつた、黎さんと同じ体、バイオフィードバック使いについての本。その弊害の内の1つ、肉体改造における自己治癒力の低下。それと同じ現象が起

きている事が分かったのです。

ハッキリ言いましたよ。これ以上は危険です。

もし、もしも今回以上のダメージを次に負ったら、怪我が治らない可能性だって有り得ます。それ程までに、彼の体はボロボロなのです。常人よりかなり頑丈とは言え、致命傷を力尽くで抑えて来たのですから、当然です。

解決策は2つ。1つは黎さんが戦うのを止める事。でもこれは黎さんにとっては論外中の論外でしょう。

もう1つは敵を早く倒し切る事。大団円に持つて行くワケです。でもこれも理想論。敵は残り3人。そして最悪、都さんに乗っ取っている邪神とも戦わなくてはなりません。

そして、もう1つ、別の解決策。

正直オススメできません、が――

「……止むを得ませんね」

仕方がありません。1度くらいなら、黎さんの体なら大丈夫でしょう。

わたくしは転移の魔法陣をコールします。

「フレイ、どこへ？」

行き先は、天空の聖域の東3番地区。

「ついて来てもらいます」

わたくしの家の、前へ。

### S I D E : 黎

フレイの展開した白と水色の魔法陣の力で、俺は瞬時に精霊界にやって来た。座標特定もせずにこの速さとは、フレイは案外、高位の精霊なのかも知れない。

目の前にドーン！ と立っているのは、大きな家。白い壁に青い屋根、2階建てで、誰が見ても豪邸と評する事ができるだろう。

「……は？」

「わたくしの自宅です」

「え？」

「自宅です、わたくしの」

「お前の？」

「はい、さつきからそう言っています。ちなみに両親から受け継いだとかでは無く、自費で購入した、正真正銘わたくしの私物です」

「……マジで？」

こいつ、何者？

普段の言動からは同人誌好きとポワポワした丁寧語使いという事しか分からんが、もしかしくなくても、フレイって……。

「こう見えても、もう5000年以上生きてます。1万超えていたかも知れませんが、少なくとも桜さんよりも年上です」

おばあちゃんって呼んでみます？　なんて彼女は冗談めかして言うが、俺は開いた口が塞がらない。こいつ、俺よりも凄まじく年上のクセしてこの性格その他なワケ？  
と、その時だった。

「フレイ……！」

「ヒッ!?!」

ブワッ！　と吹き上がった殺気に、フレイは驚いて飛び上がった。

いつの間にか彼女の背後には、俺の信頼する相方、桜がいた。転移して来たのだろうか。

「さ、桜さん!?!」

「貴様、私のいない内に我が主を籠絡しようなどと、良い度胸だな……！」

「そ、そんな気は毛頭無いのですよ！」

「問答無用！」

剣を抜いて斬りかかる桜。フレイは掌に生み出した小型の魔力シールドでそれを防ぐと、続けて繰り出された桜の蹴りを反対側の腕で防御。

盾で桜は殴りかかるが、それを右足で蹴り飛ばし、フレイは距離を取る。

下段を払うように繰り出される桜の蹴りを軽く跳んで回避するフレイ。着地と同時に右ストレートを叩き付け、桜はそれを手首を払う要領で防御。

再び距離を取り、互いに睨み合う。

おお、桜と互角にやり合うか。つーか何故にマジ戦いしてるの？

「セイツ！」

「ハアツ！」

桜の剣と盾、乳白色に光るフレイの手がぶつかり合い、金属音が鳴り響く。2人はかなりの近距離で睨み合ったまま動かなくなった。

（フレイ！ 抜け駆けとは、随分と図々しい事をするものだな！）

（桜さんは何時でも黎さんと一緒じゃないですか！）

（私は主君と騎士のスタイルを崩した覚えは無いぞ！）

（わたくしだって今回は黎さんの治療のためにですねえ！）

（ならば薬だけ持ち出せば良からう！）

（細かい調査は自宅でないといけないですよ！）

(薬剤師の私をおいてけぼりか！)

(さつきまでいなかっただじやないですか！)

口元が動いているが、残念ながら聞き取れない。少し距離があるせいか。聴覚を鋭敏にしておかないといくら俺でも小さな音を聞き取る事はできない。

その後暫く睨み合っていたが、どちらとも無く武器をしまった。

「フレイ、信頼して良いのだな？」

「今回は」

「……良かろう」

???

何なんだ、一体？

——フレイ宅

「フレイと桜は薬剤師だったのか？」

「ええ。これも必要になる可能性を考えての事です」

「私は、家の近くに薬草になる草が多くあったからな。自然と詳しくなって、といった感じだ」



フレイは戸棚から取り出した瓶の中身を、桜はそれを計量した物を、それぞれ調査している。薬を作っているのだろうか。

「長い間生きていますと、趣味も多くなつてしまいました。300年くらい前の趣味ですから、結構新しいですよ？」

「そ、そっか……」

フレイ、趣味で医者やつてるの？ と聞けば。

免許持つてますよ？ と返すフレイ。何とも計り知れない女である。

「で、何してるんだ、2人共？」

「見て分かんか？ 薬を調査してるんだ」

「わたくしの秘伝のレシピです」

「いや、それは分かるんだが、何故に今？ 俺に何か関係あるのか？」

俺を家まで招いて薬を調査する理由が分からない。もしかしたら、別件の何かと並列させてやっているのだろうか？

そう考えたのだが、フレイは呆れた様に肩を竦めた。

「何言ってるんですか。これは黎さん用の薬ですよ」

「俺？」

「はい」

フレイは調合された粉薬を、桜が作った液体に混ぜ込む。

「黎さんは戦い続ける。でも体は既に耐えきれなくなり始めている。だったら、体の方を耐えられるようにするしかありません」

フレイは本当に呆れたといった表情で瓶に入った薬を差し出し、テーブルに置いた。

サイズとしては、風邪薬の瓶よりも小さい。成人男性の小指程度だろう。その中に7〜8割程の量の琥珀色の液体が入っている。

「これを飲めば良いのか？」

「はい。ただし」

「ただし？」

「これは劇薬です。常人ならば死んでもおかしくはありません」

「これが？」

一応薬毒についてある程度知識を持っている身だが、琥珀色のこの液体がそんなに危険だと言うのだろうか？

「薬は色だけでは区別できんだろう」

「ごもつとも」

「先に説明します。これは大昔、まだ天使族や悪魔族といった区切りが無かった頃の時代にあった薬。」

「当時は戦争が耐えなかったそうです。そんな折に開発されたのがこの薬です。この瓶一杯分、つまり今入っている量を飲めば千人力、いえ伝承によれば十万人分もの力を手に入れる事が可能だそうです」

「十万……」

「ただし、代償は高いです。お金の問題では無く。飲めば全身に激痛が走り、以降一時間は虚脱状態。更にはこれで確実に強化される保証もありません。ハイリスクハイリターンを地で行くのがこの薬なのです」

チャポン、と薬が波打った。

「わたくし達で調整し、強化されない事だけはありえなくしました。ですが——」

「激痛と虚脱状態は残っている、か？」

「はい」

申し訳無さそうにフレイが項垂れる。

彼女の意図は大凡読めた。要するにこの薬で俺の体を強化しておきたいのだろう。これで次の戦いに備えさせ、俺の回復力を底上げすると同時にまだ治っていない肉体の治療を行う。

なら——

「自分から出しておいて何ですが、オススメできる物ではありません。いえ、寧ろ止める

べき物ですね。医学・薬学の体制がハッキリしている今、これはもう毒でしかありませんから」

神妙な顔で話すフレイをよそに、俺は瓶の蓋（コルク製だった。凝ってるね、フレイ）を外し、中の液体を一息に飲んだ。

「そっか（グビッ）」

「ちよ!？」

「主殿!？」

薬を文字通り一飲みにし、嚥下する。コトリ、と瓶をテーブルに置き直す。

「あれ、黎さん!? 人の話を聞いてましたか!？」

「ああ。痛みと虚脱だろ?」

「常人ならアウトなレベルなんだぞ!？」

慌てるフレイと桜。

フツ、お前ら何言ってるやがる。

「おいおい、忘れてないか? 俺は化物、この体は人間じゃない。普通の人間には耐えられなくても、異常な化物には問題無いさ」

「そ、そういう話では……」

「諦めろ、フレイ。主殿はこういう性格だ」



































これがフレイが忠告した理由……。俺の死に方がアレじゃなかったら、確実にショック死していただろうな。良くても発狂していた。

す、凄いや痛かった……。普通に拷問なんて目じや無いレベルだぞ、あれ。

「収まりましたか？　後は1時間程怠いだけですから、もう大丈夫です」

「ああ……」

言われた傍から感じる倦怠感。ううむ、これは誰でも厭だなあ……。

(主殿)

(どうした、桜？　突然念話で?)

(口を開くのも億劫かと思つてな。参考までに聞くが、どの様な痛みだったのだ?)

どんな感じかつて?

そうだな……。

(例えるなら、うーん……。隕石と、機関銃と、地獄の業火と、リニアモーターカーと、レーザガンと、天の裁きと、鐘突き棒が同時に絶対零度の猛吹雪と一緒に俺にクリーンヒット。なおかつ、背中から真っ赤に熱せられた大樹の様に太い鋼の槍が何十本も貫通。更に体の内側で爆弾が無限に爆発しつつ、金属片が延々と乱反射して、最終的に五臓六腑が木端微塵に破裂してらってトコか)

(想像を絶するな)

(まあ、簡単に言えば、巨大な木材裁断機に巻き込まれたと思えば)

(全身ズタズタだな!?)

ダメージが体にフィードバックする暇も無く痛みは収まったものの、もう数秒続いたら確実にヤバかった。俺でこうなんだから、常人が飲めばどうなるか、想像に難くないだろう。

ま、それは兎も角。

(フレイ、ありがとう)

(いえいえ、善意ですから)

(それでも、だ。お礼と言ってはなんだが、俺にも何かできないだろうか?)

念話での俺の言葉に、フレイは少し唸った後――

「では、手伝ってほしい事があります」

俺にとある手伝いを要求した。

――現在

で、こうなったというワケだ。

フレイはどうやらその界限では有名な同人誌作家らしく、この家もそれで稼いだお金

で買ったらしい。

彼女曰く、「青空焰を知らない人はもぐりなのです！」だそうだ。

それともう一つ、知らなかった事が。

「桜」

「うぬ？」

「お前、フレイのアシさんだったんだな」

俺の横では視線を動かさずにベタ塗りをしている桜がいた。

「言ってなかったな、そう言えば。フレイとはそこそこ長い付き合いだな。2年程前から彼女のアシスタントに入っている」

「桜さんが来てから、作業が大分楽になりました。これまでは一人でやっていたもので」

ふーん、それで時々いなくなっていたのね。

閑話休題。俺が今手伝っている同人誌。ぶっちゃけると、R18だ。つまり『18歳未満はお断り。見ちゃダメです』なヤツ。勿論エロい方の。

自分で描いているワケだから、これを見て興奮云々はしないが――

「フレイ」

「はい、何でしょう？」

「お前、意外と……。いや、何でも無い」

そうですか、とフレイは作業に戻る。

同人誌の内容はSMもの。しかもかなりハードで男1人に女2人。

フレイの描いている表紙を参考に考えると、女性は片方が茶髪蒼眼、もう片方が金髪紅眼。両方ともロングヘア。表紙では茶髪女性がサイドポニー、金髪女性が髪を終わりの方で括っている。

男の方は、顔は中性的。大きめの丸い眼鏡をかけており、優しそうな顔。長い金髪を首の後ろの方で、緑のリボンを使って纏めている。

ストーリーをざっくり紹介すると、酔った拍子に3人は関係を持ち、金髪女性の持つマゾの性癖に茶髪女性も引きずられ、それに合わせる形で眼鏡男性がサドになっていく、といった感じだ。タイトルに3の番号が振つてある所を見ると、どうやらシリーズ物の3巻目らしい。

「フッフ、これでまた大儲けなのです」

参考までに見た前作・前々作はソフトだったが、今回はかなりハード。アダルトグッズや媚薬、三角木馬に鞭、縄……。しかもフレイを受けている女性2人がの顔が蕩けていたり、俗に言うアへ顔を曝したりしてる所を見ると、2人とも嫌々では無く、寧ろ嬉々としてこのフレイを受け入れているようだ。俺の担当しているページでは眼鏡の男性を「ご主人様」なんて呼んでいる。

隣の桜は最後の方のページを担当しているらしく、寝入った女性2人に布団をかぶせている男性が描かれている。下の方のコマでは自分がどんどんサドになっていく事に困惑している描写があつた。

うーん、自分の価値観倫理観が崩れそうだな、エロ漫画家のアシスタントって、後で桜にその事を相談してみると、

「私も最初はそうだった。が、今はそれでも無い。所詮は紙の上での出来事。現実では無い。三次元と二次元に分けて考えるだけの知能があれば、その考え方を手にするのはそう遠くないだろう」

だそうだ。

流石俺より長生きしてるだけはあるね。

そう返したら、

「女性に年齢関連の事を言うな！」

と殴られた。

籠手が付いていたままだったから、メツチャ痛かった。

どうでも良いが、籠手をしたままでは作業しにくくないのだろうか？



——3時間後

「終わりました!」

「お疲れ様」

「うむ」

漸く、同人誌を描き終わった。ちよつと腕が痛いけど、大丈夫。

あれからもう2冊、同人誌（勿論R18だ）を描いた。

片方の内容は黒い短髪の少年（鈍感なデフォルト）に5人の少女が思いを寄せていたが、互いに親友同士でもあったので、上手く動けずにいた。しかしある日、とうとうその膠着が解けてしまい、5人一斉に少年に襲いかかった（当然性的な意味で）。

黒髪ポニテの侍少女、金髪碧眼のロール髪お嬢様、スレンダーツインテールの活発ガール、金髪三つ編みのボクッ娘、銀髪眼帯オッドアイの軍人娘といった多種多様なヒロインズに、主人公が流れに流されていく、というストーリー。個人的には続編があつ

たら気になる場所である。

もう片方はやっぱりハーレムもの。フレイの最近のブームなのだろうか？ 洋菓子店、というよりケーキ屋の少年に思いを寄せた3人の少女とく、というやつ。ストーリーはさつきのとおよそ同じ。教会住まいのツンデレ少女、金髪幼児体型お嬢様、寡黙な天才猫系ガールというラインナップ。どうやら少年は3人から事前に告白されていたらしく、3人の内の誰かを選べずに四苦八苦していたらしい。それを見かねた3人は、いつその後腐れ無いように、という事で……。

これで本当に後腐れが無いのかどうか、甚だ疑問なのだが、まあ、当事者4人が幸せそうなので良しとしましょう。こっちも続編が気になる。

さて、後は印刷所なりに持つて行くなり、どこぞに委託販売するのが常らしいが……。フレイはどこか憂鬱な表情だ。

「ハア……」

溜め息まで吐く始末。一体どうしたのだろうか？

「フレイ？」

「あ、いえ、ちょっと……」

「乗りがかった船だ、相談に乗るぞ」

「そうですか……。うーん、でしたら実際に見に来て頂いた方が良いですね」

そう言うと、フレイは俺と桜をどこかへ案内し始めた。  
家の外では、乾いた風が吹いていた。

歩く事30分。着いた場所は小さなプレハブ小屋。看板を見ると、印刷所のようなだ。

「ここが、わたくしが普段鼻屑にしている印刷所なのです。なのですが……」

「何か問題が？」

「まあ、入れば分かるぞ、主殿」

ガラガラガラッ！ と引き戸を開けると、中には――

「グオオオオオオオオオオ、ガアアアアアアア……」

男が寝ていた。

赤茶色の、巨大な目玉のあしらわれた鎧。三又の槍。こいつは確か……。

「『死の沈黙の天使ドマ』？」

「はい」

死の沈黙の天使ドマ（通常モンスター）

星5

闇属性／天使族

ATK 1600／DEF 1400

死を司る天使。

こいつに睨まれたら、死から逃れられない。

唯一の闇属性・天使族の通常モンスターだ。初期は闇属性の天使族なんて画期的と思っていたが、現在は「墮天使」などの登場で、光属性に続いて多い闇属性の天使族というカテゴリーに収まっている。

印刷所の床に大の字になって寝ている『ドマ』は、右手に濁酒の大きな徳利を持っている。大軒をかきながら寝ているところを見ると、大爆睡真つ最中の様だ。

「で、フレイ。問題を話してほしい。この状況からじゃ推測がいくらでも立つ」  
「あ、はい。実は——」

#### SIDE : フレイ

あれは今から4日前の事です。出来上がった原稿を印刷してもらって、いつも通り帰ろうと扉の外に出た時でした……。

『ざっけんじゃねえぞゴラァ!』

いきなり聞こえた怒鳴り声。驚いたわたくしは慌てて印刷所に戻ったのです。

「テメエ、オレの原稿を印刷できねえっつーのかよ! ヒック!」

「さつきからそう言ってるじゃないか!」

そこではドマさんと、印刷所を経営している『光神テテユス』さんが言い合いをしています。

光神テテユス (効果モンスター)

星5

光属性／天使族

ATK 2400／DEF 1800

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分がカードをドロウした時、そのカードが天使族モンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で自分はカードをもう1枚ドロウする事ができる。

「僕は来る者拒まず去る者追わずの精神でここを営業しているけどねえ!」

「だつたら!」

「だからと言って、君の原稿を刷るワケにはいかないんだよ!」

喧々諤々と言い合いをしている2人でしたが、いつの間にか掴み合いに発展しかけていました。流星に見かねて、わたくしは2人の間に入り込みます。

「ストツプです!」

「ああ!?!」

「フレイちゃん!」

ドマさんの方は怒り、テテユスさんの方は安堵と驚きに表情を浮かべます。

取り敢えず場を収め事情を聞いたわたくしは、呆れてしまいました。

「ドマさん、貴方いくら何でもそれはないですよ」

「あんだと!？」

「わたくし達は原稿を刷ってもらっているのです。そして『テテユス』さんはそれでお金を貰っている。持ちつ持たれつの関係だと言うのに、ルールを守らない方が悪いのです」

ドマさんの問題は至極単純。こちらの印刷所の規定の原稿用紙を使用していない事。そしてトーンの問題でした。

規定の原稿用紙を使用しないと原稿の絵や文字が切れてしまいます。

もつとも、これは個人の責任になるので今回はあまり問題になっていません。

問題なのはトーンの貼り方です。重ね貼りは勿論の事、しっかりと貼られていない場合、トーンが剥がれてしまい印刷機械の方に問題が出来てしまいます（わたくしはデジタルを導入しているので無問題です。トーンは使っても印刷してもらうのはデジタルでコピーしたものののです）。これは印刷の品質を維持できない原因となってしまう。わたくし達作家にとっても、印刷する方々にとっても大問題です。

ドマさんの原稿を見ましたが、ハッキリ言つてダメダメです。絵やストーリーがでは無く。

ベタは薄いしトーンはメチャクチャ。ところどころ剥がれてもいます。これではと

でもではありませんが、印刷なんてできたものではありません。

事情を全て理解し、印刷できない理由も全てドマさんに話したわたくしは、厳然たる事実を突き付けます。

「やり直し、というヤツです。とても印刷できたものではないのですよ」

「フレイちゃんの言う通りだ。別に君自身を拒否しているワケじゃない。トーンとベタをしつかりとやってくれば、いくらでも印刷はするよ」

普通に良識のある方なら、これで退いてくれるものなのですが……。

「納得いかねえ！」

ドマさんは退いてくれませんでした。

今思えば、彼はお酒臭かったです。酔っ払っていたのでしよう、きつと。

彼は左腕を突き出し、デュエルディスクを装着。デュエルで決着をつけよう、という事なのでしよう。

「畜生共が、デュエルだ！ オレが勝ったら印刷してもらおうぜえ！ ヒック！」

まあ何という無茶苦茶な。と思いましたが、逆にチャンスです。

「ドマさん、君ねえ」

「構いませんよ、テテユスさん」

「フレイちゃん？」



「大丈夫です。その代わりなのですが、ドマさん。わたくしが勝ったら諦めてもらいますよ」

「おう！ かかって来いや、小娘があ！ ウイック！」

こうしてわたくしもディスクを装備。デュエルを開始したのです。

うーん、これでもわたくしは結構長生きなのですが……。わたくしよりも年上の方は両手で数えられるくらいですし、同じ年もそれくらいなので、ほぼ確実に彼の方がわたくしよりも年下だと思おうのですけど……。まあ、デュエルに年齢は関係ありませんね。

そして……。

「——でダイレクトアタックです！」

「ぐああああああああっ！」

死と沈黙の天使ドマ：LP 50↓0

フレイ：WIN

死と沈黙の天使ドマ：LOSE

わたくしはキッチンと勝ちました。  
ですが……。

「ち、チクシヨウ！ 納得行くかよ！ ヒック！ オレア印刷してくれるまでここを動かねえぞゴラア！」

有ろう事か、デュエル中も濁酒をガブ飲みしていたドマさんは負けた事を認めなかったのです。

そしてそのまま印刷所に居座り今に至る、という事です。

S I D E : 黎

成程ね。

フレイから事情を聞いた俺は頭を抱えた。

このアホ天使族、居座るだけでは無く、やって来た他の客にまで絡んでいるらしい。営業妨害じゃねえか、確実に。

つーか、何であの徳利の中身無くならないんだ？ こいつ寝ながら飲んでるぞ？

その疑問を呈すると、フレイがそれに答えた。

「彼の手に行っている徳利は『酒継ぎ丸』といひます。一度中に一定量のお酒を入れると、暫くの間は無限にお酒を提供してくれる、酒豪にとつては感涙ものマジックアイテムなのです」

「加えて、どうやら徳利の中身は養命酒の一種らしい」

「養命酒つて、滋養強壮のか?」

「ああ。どうやら相当強いものらしくてな。いくら精霊が人間よりも少ない栄養やカロリーで動けるとは言え、4日も酒だけで居座れるワケが無いというのに。このままでは当分の間、ここに居座り続けるだろうな」

本当に迷惑な話だ事!?

「諸事情ありまして、わたくしにとつてはここ以外で印刷するというのは考えられないのです」

フレイは本当に困ったような表情を浮かべている。

理由は聞かない。プライベートに踏み込むだけの度胸も資格も無いからだ。

さて、フレイには薬の恩もあるし……。

俺は寝ているドマの首を掴むと、アイコンタクトで桜に印刷所の引き戸を開けてもらった。

「お、ら、よつと！」

「グゴ、ガツ!!」

そしてそのまま、投石の容量で扉の外へ放り投げる。ゴロゴロと地面を転がり、目を回すドマ。合わない焦点でこつちを睨んで来るが、正直怖くも何ともない。

「だ、誰だ……! って、フレイヤ! テメエまたオレの邪魔をしに来たか!」

「お黙りなさいです!」

起きたドマが怒鳴るが、フレイはそれを一喝して黙らせる。

怯んだ一瞬を狙って、俺がドマの徳利を奪った。

「あ、オレの酒が! テメエ人間!」

「返して欲しくば、俺とデュエルだ、ドマ」

「ンだと?」

「事情はフレイから聞いた。デュエルに負けたというのに、酒に逃げてここに居座るその根性、許すワケにはいかねえ。俺が勝ったら今度こそここから退去してもらう。逆にお前が勝ったら、原稿を印刷。どうだ? 受けないのなら、徳利は返さない」

「チツ、良いだろう! ヒック! 人間が精霊であるオレに敵うと思うなよ!」

「御託は結構。グダグダ言わずにかかって来い!」

展開されるデュエルディスクがレーンに沿って動き、ライフカウンターがONにな

る。

来いよ。その酒に漬かった頭、正常に戻してやる！

『デュエル！』

黎VS死の沈黙の天使ドマ

LP 4000 VS LP 4000

「先攻は貰ったあ！ オレのターン、ドロー！」

さて、あの酔っ払いはどう戦うかな？

「オレは『切り込み隊長』を召喚！」

切り込み隊長：ATK 1200

先手はそいつか。

二種類の剣を両手に持つ、金髪の中年騎士。あっちこっちで苦勞している、武勇伝を

持つ勇士だ。

『切り込み隊長』の効果発動！ ヒック！ 召喚に成功した時、手札のレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚する！ オレは『デーモン・ソルジャー』を特殊召喚！」

デーモン・ソルジャー：ATK 1900

続いて紫の肌の、緑のマントを羽織った悪魔。ヤギのように曲がった角が特徴的だ。

切り込み隊長（効果モンスター）

星3

地属性／戦士族

ATK 1200／DEF 400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択できない。

このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる。

デーモン・ソルジャー（通常モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1900 / DEF 1500

デーモンの中でも精鋭だけを集めた部隊に所属する戦闘のエキスパート。  
与えられた任務を確実にこなす事で有名。

「更に手札から魔法カード『波動共鳴』を発動！ 場のモンスター1体のレベルを、エンドフェイズまで4にする！」

波動共鳴

【通常魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。  
選択したモンスターのレベルはエンドフェイズまで4になる。

「オレは『切り込み隊長』を選択して、レベルを3から4にする！」

切り込み隊長：☆3↓4

「レベル4が、2体……」

「早速登場ですか……！」

場と同じレベルのモンスターを揃えたって事は、やる事は限られて来る。1度デュエルをした事のあるフレイの反応から見ても、間違い無いだろう。

「オレはレベル4の『切り込み隊長』と『デーモン・ソルジャー』をオーバーレイ！  
やはりそう来るか！

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

金髪の戦士が橙色、マントを羽織った悪魔が紫色の光に変わり、赤く輝く銀河の渦の中へと飛び込む。

☆4×☆4||★4

「エクシーズ召喚！ 現れろ、『インヴェルズ・ローチ』！」

『ギギギギッ！』



インヴェルズ・ローチ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク4

闇属性／悪魔族

ATK 1900 / DEF 0

レベル4モンスター×2

このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、レベル5以上のモンスターの特殊召喚を無効にし破壊する。

インヴェルズ・ローチ：ATK 1900

銀河の爆発に合わせて現れる、レイピアを構える巨大な虫の戦士。全体的な印象はゴキブリみたいな節足動物が近いだろう。

成程、こいつか。

「ヒック！ どうだ、これがエクシーズ召喚だぜ！ こいつは同じレベルのモンスターを」

「説明はいらん。『インヴェルズ・ローチ』はオーバーレイ・ユニットを1つ使って、レベル5以上のモンスターの特殊召喚を無効にできる。」

さっさとターンを進めろ」

「ウイイック！ そりゃ悪かったな。手札から永続魔法『凡骨の維持』を発動！ ドローしたカードが通常モンスターなら、それを相手に見せる事でもう1枚ドローできるぜ！  
これでターンエンド！」

凡骨の維持

【永続魔法】

ドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で、自分はカードをもう1枚ドローする事ができる。

死の沈黙の天使ドマ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：インヴェルズ・ローチ（ATK 1900・ORU：2）

：凡骨の維持（永続魔法）

「俺のターンだ」

『凡骨の維持』、そして『デーモン・ソルジャー』って事は、こいつのデッキは通常モンスターでハンドアドバンテージを稼ぐタイプか。

問題無い。十分勝てる相手だ。

「俺は『G・S ランチャー・トータス』を守備表示で召喚！」

G・S ランチャー・トータス（効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／岩石族

ATK 1000 / DEF 2200

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、1ターンに1度、デッキから岩石族モンスターを1体墓地へ送る事で、相手に500ポイントのダメージを与える事ができる。

G・S ランチャー・トータス : DEF 2200

俺が最初に呼び出すのは、背中に砲門を背負った陸亀。

ズキン！

っ!? 何だ今の痛み……?!

ええい、まずは、先制攻撃だ！

『ランチャー・トータス』の効果発動！ 1ターンに1度、デッキから岩石族モンスターを1体墓地に送り、相手に500ポイントのダメージを与える！ シュート！」

「グアッ!」

死の沈黙の天使ドマ：LP 4000↓3500

「カードを1枚セットして、ターンエンド。目論見が外れたな？」

「こ、のお！」

黎：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：G・S ランチャー・トータス（DEF 2200）

：伏せカード一枚

「オレのターンだ！ 引いたカードは通常モンスターじゃ無えから『凡骨の維持』は使えねえ！ だがこれで突破できるぜ！ 装備魔法『デーモンの斧』を発動！」

デーモンの斧

【装備魔法】

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分フィールド上に存在するモンスター体をリリースする事でこのカードをデッキの一番上に戻す。

「こいつを『インヴェルズ・ローチ』に装備させて、攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

インヴェルズ・ローチ：ATK 1900 ↓ 2900

「ハハハハ、攻撃力が上回ったトコでバトルだぜ！ ヒック！ 『インヴェルズ・ローチ』

で『G・S ランチャー・トータス』を攻撃！」

人の頭蓋骨をあしらった斧で殴りかかる巨大な虫の戦士。

「つたく、この酔っ払いが……！」

「眠いデュエルをさせてくれるなよ！ 畏れ発動、『奇策』！ 手札のモンスターを1枚捨てて、その攻撃力分、相手モンスターの攻撃力を下げる！」

奇策

【通常畏】

手札からモンスター1体を捨て、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力は、捨てたモンスターの元々の攻撃力分ダウンする。

「俺が選択するのは『砂塵の騎士』！ 攻撃力は1400、よって『インヴェルズ・ロチ』の攻撃力は1500ポイントに落ちる！」

「ンだとお!？」

砂塵の騎士（効果モンスター）

星4

地属性／戦士族

ATK 1400 / DEF 1200

リバス：デツキから地属性モンスター1体を墓地へ送る。

インヴェルズ・ローチ：ATK 2900 ↓ 1500

振り下ろされた斧に反応し、大砲を背負った陸亀が首と手足を引っ込める。甲羅に斧の刃が弾かれ、飛び散った金属片が『ドマ』に当たった。

死の沈黙の天使ドマ：LP 3500 ↓ 2800

「クツ、オレは『ホーリーエルフ』を守備表示で召喚！」

ホーリーエルフ：DEF 2000

聖なる呪詛を唱えながら、膝をついた状態で空色の肌のエルフが現れる。金髪が風に

流れ、緑のローブが揺れる。

「ターンエンド！」

死の沈黙の天使ドマ：LP 2800

手札：2枚

フィールド

：インヴェルズ・ローチ（ATK 1500・ORU：2）、ホーリーエルフ（DEF 2000）

：凡骨の維持（永続魔法）

「俺のターン、ドロー」

はあ、この程度かよ……。

がっかりさせてくれるぜ！

「俺は『G・S ターボ・バッファロー』を召喚！」

『ブモオオオオッ！』

G・S ターボ・バッファロー：ATK 1700



蹄を鳴らし、ジェットノズルを背負った水牛が現れる。

ズキンツ！

っ、また……！

『ランチャー・トータス』の効果を発動。デッキから岩石族モンスターを1体墓地に送り、相手に500ダメージを与える！

「ぬっ！」

死の沈黙の天使ドマ：LP 2800↓2300

再度装填された弾丸で撃ち抜かれる『ドマ』。このまま押し切る！

「バトルだ！ 『ターボ・バツファロー』で『インヴェルズ・ローチ』を攻撃！ バイ  
ソン・タツクル！」

ジェットエンジンを噴火させ、鋭い角で黄色の虫を貫く水牛。衝撃はそこから更に背後の『ドマ』へと伝わる。

「ぐっ！ ヒック！」

死の沈黙の天使ドマ：LP 1900↓1300

「そして『ターボ・バッファロー』の効果を発動！ このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手の手札を1枚ランダムに捨てさせ、カードを1枚ドロウできる」

G・S ターボ・バッファロー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／獣族

ATK 1700／DEF 1100

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、相手はランダムに1枚手札を墓地に送る。

この効果が成功した時、デッキからカードを1枚ドロウできる。

「メインフェイズ2に移る。俺はレベル4の『ランチャー・トータス』と『ターボ・バッファロー』をオーバーレイ！」

『ガアッ!』

『モーツ!』

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築!」

☆4×☆4||★4

渦に飛び込む2色の光を見届けてから、俺はエクストラデッキのカードに手を伸ばす。

そして目的の「G・S」のカードを手にとって――

ズツギイイイ!

っ! また……!

何なんだ、さっきから走るこの痛みは。

チツ、無茶をする時じゃねえか。そう思った俺はそのカードをホルダーに戻し、別の

カード、*“G・S”*では無い一枚を取り出す。こっちは痛みを感じなかった。

「エクシーズ召喚！ 『No. 39 希望皇ホープ』！」

『ホオオオオオオオオオオプツ！』

No. 39 希望皇ホープ：ATK 2500

No. 39 希望皇ホープ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク4

光属性／戦士族

ATK 2500／DEF 2000

レベル4モンスター×2

自分または相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

このカードがエクシーズ素材の無い状態で攻撃対象に選択された時、このカードを破壊する。

自身の名前を叫びながら、白と金の鎧を着た騎士が現れる。

「攻撃力2500をメイン2でだと……？ ヒック」

訝しげな顔をする『ドマ』。まあそうだろう。攻撃力差が1400もあるんだ、メイン1で出していれば、『ドマ』のライフを500にまで削れた。

さて、ここであの痛みに気付かれちゃいけない。精神的な優位を取られたら、この酔っ払いは絶対に調子に乗るからな。ハツタリをかますべきだ。

「1ターンの猶予だ。次の俺のターンまでにどうにかできないんだったら、お前の負けだ」

「グッ、この、クソガキ……ッ」

「そのクソガキに負けかけてるのはどこのどいつだ？ カードを2枚セットし、これでターン終了」

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：No. 39 希望皇ホープ（ATK 2500・ORU：2）  
：伏せカード2枚

ギリリ、とドマが歯軋りし、俺を睨む。

「悔しいか？」

「あ？」

「人間の俺に見下されて悔しいかって聞いてるんだ」

「……………」

「分かるか、酔っ払い。酒に逃げてた自分の弱さが。敗北を認めず、子供の様に駄々をこねていた自分の矮小さが理解できるか？」

「て、テメェ！」

「今の、自分勝手に他人を慮らないお前じや、俺には勝てない。お前のデュエルの本質を、思い出せ」

「っ！」

俺の言葉に、あいつの目が大きく開いた。

「どうやら、目が覚めたらしいな。」

「チツ、言われねえでも分かっちゃあ！ オレのターン、ドロー！」

さあ、見せてみな、テメエの本気を！

「オレは『凡骨の維持』の効果を発動！ ドローした通常モンスターカードを相手に見せて、カードを1枚追加でドロー！ 引いたカードは通常モンスターの『ブラッド・ヴォルス』！ ドロー！ 『セイバーザウルス』！ ドロー！ 『ラビードラゴン』！ ドロー！ 『ヴェルズ・ヘリオロップ』！ ドロー！ 『アレキサンドライドラゴン』！ ドロー！ 『シーザリオン』！ ドロー！ 『ヴェルズ・ヘリオロップ』！ ドロー！ 『ジエムナイト・サファイア』！ ドロー！ 『パニーラ』！ ドロー！ 『異次元トレーナー』！ ドロー！ 『霞の谷の見張り番』<sup>ミスト・バレー</sup>！ ドロー！ 『エレキテルドラゴン』！ ドロー！ 『ネオアクア・マドール』！ ドロー！ 『デーモン・ソルジャー』！ ドロー！ 『タルワール・デーモン』！ ドロー！ 『ヒューマノイド・スライム』！ ドロー！ 『ハープの精』！ ドロー！ 『メカ・ハンター』！ ドロー！ 『ネオバグ』！ ドロー！ 『ブラッド・ヴォルス』！ ドロー！ 『アレキサンドライドラゴン』！ ドロー！ 『大くしやみのカバザウルス』！ ドロー！ 『セイバーザウルス』！」

おお、何枚引くつもりなんだ……？

驚異的な速さでカードを引いていく『ドマ』。やがて目的のカードが来たのか、それとも通常モンスター以外が来たのか、ドローは止まった。

「魔法カード『闇の誘惑』を発動！ デッキから2枚ドローし、手札の闇属性モンスター

を除外する！ 除外するのは『タルワール・デーモン』！ 行くぞ！ 魔法カード『最終戦争』！ 手札を5枚捨てて、場のカードを全て破壊する！」

「何!?!」

### 最終戦争

#### 【通常魔法】

手札を5枚捨てて発動する。

フィールド上に存在するカードを全て破壊する。

ドマのカードから放たれる眩い閃光。その光に当たった瞬間、断末魔の悲鳴も無く俺の場のカードは跡形も無く消滅。伏せておいた『ミラーフォース』と『奈落の落とし穴』も吹き飛ばされてしまった。

「クッ!」

「更にオレは『フロントム・オブ・カオス』を召喚!」

フロントム・オブ・カオス：ATK 0



『ドマ』が呼び出したのは、黒い霧状のモンスター。実体を持たず、眠れるモンスターをコピーする、影そのものだ。

『フアントム・オブ・カオス』のモンスター効果発動！ 1ターンの1度、墓地のモンスターを1体除外し、そのモンスターの名前、攻撃力、効果をコピーする！」

フアントム・オブ・カオス（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

自分の墓地に存在する効果モンスター1体を選択し、ゲームから除外する事ができる。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカードはエンドフェイズ時まで選択したモンスターと同名カードとして扱い、選択したモンスターと同じ攻撃力とモンスター効果を得る。

この効果は1ターンの1度しか使用できない。

このモンスターの戦闘によって発生する相手プレイヤーへの戦闘ダメージは0になる。

「墓地の『インヴェルズ・ローチ』をゲームから除外し、『ファントム・オブ・カオス』はエンドフェイズまで『インヴェルズ・ローチ』として扱う！」

ファントム・オブ・カオス↓インヴェルズ・ローチ（ファントム・オブ・カオス）

半透明の黄色の虫の戦士が影の中へと溶け込み、影がその姿を真似する。見た目だけは同じの、真っ黒なモンスターが生み出された。

さて、どうする？ 『ファントム・オブ・カオス』は名前はコピーできても種族や属性、カードの分類はコピーできない。オーバーレイ・ユニットが無いから効果を使う事はできないし、増やす事もできないぞ？

「続いて手札から魔法カード『黙する死者』を発動！ 墓地の通常モンスターを1体、守備表示で復活させる！ 蘇れ『ヴェルズ・ヘリオロップ』！」  
『オオオオオ……』

ヴェルズ・ヘリオロップ：DEF 650

ヴェルズ・ヘリオロープ（通常モンスター）

星4

闇属性／岩石族

ATK 1950 / DEF 650

ルメトモ ヨンエウユシ ツメハ イカハ ンネヤジルナウコウス

ノズルエウンイ イシマタノラレワ ルナクアヤジ テシニイスンユジ

恐らく『最終戦争』で捨てたカードが噴き出す闇の中から現れる、黒い大剣。それを掴むのは、緑と黒の鎧に包まれた大男だった。フレイバーテキストが逆から読まないという意味を持たない、珍しいモンスターである。

ん？ ヴェルズが、2体……？

っ！ まさか!?

「レベル4の『インヴェルズ・ローチ』として扱う『ファントム・オブ・カオス』と、『ヴェルズ・ヘリオロープ』でオーバーレイ！」

『フウオオオオオッ！』

『ギギギギギギッ！』

「2体の『ヴェルズ』モンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

虫を模した影が黒、緑と黒の鎧の剣士が紫の光に代わって上空へと飛び上がる。二筋の光は、螺旋を描きながら、天空に生まれた赤色の渦の中へと飛び込んだ。

☆4×☆4∥★4

「エクシーズ召喚！ 雄叫びを上げろ！ 『ヴェルズ・オピオン』！」

『グゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

銀河の渦の中から生まれるのは、闇の中へと堕ちて行つた『氷結界の龍 グングニー』。漆黒の鎧を身に纏い、氷の翼をはためかせて咆哮を響かせる。その轟音は、周囲の木々をビリビリと揺らした。

ヴェルズ・オピオン（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク4

闇属性／ドラゴン族

ATK 2550 / DEF 1650

「ヴェルズ」と名のついたレベル4モンスター×2

エクシーズ素材を持つているこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

お互いにレベル5以上のモンスターを特殊召喚できない。

また、1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。デッキから「侵略の」と名のついた魔法・罠カード1枚を手札に加える。

ヴェルズ・オピオン：ATK 2550

「ハハ」で、「こいつか……!」

厄介なモンスターが出て来やがったな。

こいつは『インヴェルズ・ローチ』とは違って特殊召喚を“無効にする”では無く、特殊召喚“できない”フィールドを作り上げる。かなり厄介な存在だ。

しかももし、こいつの手札に『決戦の火蓋』が補充されていた場合、非常に危険な状況が俺のターンに生まれる事になる。

勿論、『ミラーフォース』みたいなカードでも十分アウトなんだが。

決戦の火蓋

【永続罠】

自分の墓地のモンスターカード1枚をゲームから除外する事で、手札から通常モンス

ター一体を通常召喚する事ができる。

この効果は自分ターンのメインフェイズ時にのみ発動する事ができる。

「バトルだ！ 『ヴェルズ・オピオン』でダイレクトアタック！     ダーク・アイシクル・バースト」 オー！」

つとと、モノローグも良いが、こっちの集中を疎かにしちゃいけないな！

「アマイ！ 手札の『速攻のかかし』の効果発動！ ダイレクトアタック宣言時、このカードを手札から墓地に送り、攻撃を無効にしてバトルフェイズを強制終了する！」

速攻のかかし（効果モンスター）

星1

地属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。

その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

放たれた黒い氷の槍を、機械仕掛けの案山子で受け止める。『バトル・フェーダー』と

こいつには、よくお世話になるな。

「チ……ッ」

「そう簡単には通さねえつての」

「みてえだな。オレは魔法カード『封印の黄金櫃』を発動！ 自分のデッキからカードを1枚ゲームから除外し、2ターン後のオレのスタンバイフェイズにそのカードを手札に加える！ オレは『決戦の火蓋』を選択！」

### 封印の黄金櫃

【通常魔法】

自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加える。

む、サーチして来たか。

だが、ある意味助かった。これなら奴があれば発動するのに実質3ターンかかる。それまではまだ大量展開は無いという事だ。

「そしてエンドフェイズ、手札が6枚になるようにカードを捨てて！ ターンエンドだ！」

死の沈黙の天使ドマ：LP 2300

手札：6枚

フィールド

：ヴェルズ・オピオン（ATK 2550・ORU：2）

：凡骨の意地（永続魔法）

「なんだ、やればできるとねえの」

「フン、ざつとこんなモンよ」

こいつのデッキは『ヴェルズ』ってところか。しかも通常モンスターで固めてあり、同名カードが何枚もある所を見ると『レスキューラビット』を利用した『兎ヴェルズ』や『兎ラギア』の可能性もある。

レスキューラビット（効果モンスター）

星4



地属性／獣族

ATK 300 / DEF 100

このカードはデッキから特殊召喚する事はできない。

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外して発動する。自分のデッキからレベル4以下の同名通常モンスター2体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「レスキューラビット」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

手札は1枚。レベル7の「G・S」だ。

自身の効果で特殊召喚できるが、『ヴェルズ・オピオン』の効果でそれも封じられている。

次のドローが勝負だ。

もしも壁となるモンスターを場に出せなければ、次のターンの攻撃で俺は負ける。

「俺のターン……」

それに、さつき手札に握っている「G・S」のカードを右手で軽く触れた時、鈍い痛みがまた走った。

最初は薬の副作用かとも思ったが、違う。フレイがそれを隠すメリットは無い。

『速攻のかかし』を出す時、偶然触れただけでそれだ。もし、俺の考えている事が事実である場合、もう俺には時間が多くは残されてはいない事になる。

「ドロー！」

だから、もう護衛との戦い以外では“S”のカードは使えないだろう。

もつとも人間相手なら基本的には使われないがな。何せ精霊の下賜したカード、強力な効果を持つ。これをセルフで縛らないといけないと。

面白い。

他の皆と同じ条件で戦う。生前の俺なら考えられなかった事だ。

常に相手よりも優位に。

卑怯・卑劣は敗者の戯言。勝っていくらの殺生世界。

死んだら負け。負けたら死。

でも、闇のゲームじゃないデュエルは、負けても死なない。

敗北を恐れない事なんて、いつ以来だろうな！

「俺は！ 墓地に存在する『G・S サンド・アークバード』のモンスター効果を発動！」

ズギイッ！

ガ……、ぐ……っ！

耐えろ俺……、耐えろ……っ！ 死んでも、耐えろっ！

「そいつはデツキから墓地に送ったカードか！」

「自分フィールドにモンスターがいないメインフェイズ1の開始時、墓地のこのカードを除外！ 墓地から『G・S』を特殊召喚する！ 蘇れ、『ターボ・バツファロー！』」

『ブモモモモ！』

G・S ターボ・バツファロー：ATK 1700

「ただし効果は……、無効になるっ！ 続けて手札から『ゴゴゴゴレム』を召喚！」

『ゴゴゴ〜！』

ゴゴゴゴレム：ATK 1800

G・S サンド・アークバード（効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／鳥獣族

ATK 1800 / DEF 1800

(1) : 自分フィールドにモンスターが存在しない場合、メインフェイズ1の開始時に発

動  
で  
き  
る。

このカードを墓地から除外し、墓地から「G・S サンド・アークバード」以外の「G・S」モンスター1体を、効果を無効にして特殊召喚する。

(2)：このカードが破壊された時に発動できる。

デッキから「G・S サンド・アバード」を含む「G・S」モンスターを2体墓地に送る。

「お前もレベル4が2体か！」

くっそ、全身の痛みがヒデエ。俺でさえ意識を保ってデュエルするのがやっとだ。

「俺はレベル4の『ターボ・バツファロー』と『ゴゴゴレム』で、オーバーレイ！  
2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシース召喚！」

☆4×☆4||★4

「漆黒の闇より」

だが、それがどうした？

「愚鈍なる力に抗う、反逆の牙！」



ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク4

闇属性／ドラゴン族

ATK 2500 / DEF 2000

レベル4モンスター×2

（1）：このカードのX素材を2つ取り除き、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力を半分にし、その数値分このカードの攻撃力をアップする。

ヴェルズ・オピオン：ATK 2550 ↓ 1275

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン：ATK 2500 ↓ 3775

「ここ、攻撃力3775だと!？」

「バトルだ! 行け、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』! その牙で闇を貫け!」

攻撃力を半分奪うこの効果は非常に有効だ。実質、どんなモンスターにも勝って2500ダメージを与える効果と言って良い。

さあ、少々長引いたがこれでトドメだ！

「『反逆のライトニング・デイスオベイ』！」

輝く漆黒の龍の牙が、氷の翼を持つ黒龍の胴体を貫く。

鋭い一撃を以て命を刈り取った一撃は大爆発を巻き起こし、ドマのライフを削り尽くした。

「ぐおおあああああああああああつっ！」

死と沈黙の天使ドマ：LP 2300↓0

黎：WIN

死と沈黙の天使ドマ：LOSE

戦いが終わり、朝日をバックに、俺とドマは向き合い直す。

「気分は、どうだ？」

「ハッ、悪くねえや」



ニツ、とドマは不敵に笑った。

「オレの負けだ。お前の言う通り、最近は酒に逃げていた。上手く行かねえ事が多すぎて、最低の事をしちまった」

すまなかった、と彼はテテユスとフレイに頭を下げた。

「許してほしいとは言わない。2人以外にも色んな奴に迷惑かけた。これから覚えていく限りの奴に謝りに行く。同人誌も書き直す」

「そ、そうですか」

「ドマさん……」

「もう一度言う。オレが悪かった」

暫く頭を下げていたドマだったが、

「顔を上げて下さい」

そのテテユスの言葉に、頭を下げるのを止めた。

「今度は、ちゃんと規定に沿った原稿を持って来て下さい。喜んで印刷します」

「……ありがとう」

それだけ言うと、彼はその場を後にした。

そして、俺はそんな彼に言う。

「ドマ」

呼びかけられて、止まる。

「またデュエルしようぜ」

そして片手を、こつちを見ずに挙げて、そのまま立ち去って行った。

——翌日・レッド寮近くの森　PM　19:53

「それでは、お気を付けて」

「ああ、そつちも気を付けて帰ってくれ」

同人誌の一件の後、フレイの原稿は無事に刷られた。

問題解決のお礼にと、彼女の傑作とされる同人誌と、今回作成された同人誌をタダで貰った。R規制云々はさて置き、ストーリーや絵は気に入ったので、俺はありがたく頂く事にした。ただ当然ながら皆には秘密である。

そして、俺は再び異世界へと出発する。

フレイも今回は見送りに来てくれた。

「主殿」

「どうした、桜?」

「何故あの場で『G・S』をエクシース召喚しなかった? 何故『ホープ』を?」

「……別に深い意味は無いかな。ハイパワーモンスターに攻められた場合を想定して、守りの陣形を敷いただけ」

桜の疑問に、俺はそう答える。

実際は、違う。

『天空の聖域』から戻って来た後、テストで桜と『G・S』のデッキでデュエルを行った。その時にはもう痛みは無かった。だが、もしもそれが「痛みが無くなった」ではなく、「痛みを感じてないだけ」だったら?

抗生物質の時の例えと同じだ。慣れてしまえば、体はそれを感じなくなる。

結晶から生まれたデッキ、<sup>スレリッツ</sup>『S』。そのエネルギーの源は精霊界の力。つまり沢

山の精霊の生命エネルギーの余剰分だ。それを固めて凝固させたのが、今俺の体内にある6色の綺麗な、水晶の様な宝玉。

つまり、膨大なエネルギーの塊というワケだ。それを、例えば人並み外れた肉体であっても、一個人の中に納め続け、剩れ行使したら、どうなる?

答えは非常にイージー。体に反動が跳ね返って来る、だ。

最初、〃F・S〃を使用していた頃は、反動なんて無かった。だが、それが変わったのはプライド戦、いや、あの戦いでシンクロモンスターとエクシーズモンスターを使い始めた時からだ。

だが恐らく、シンクロやエクシーズを使った事は原因では無い。

『スターダスト・ドラゴン』達が少なくとも5000年前から存在した事は事実だし、ナンバーズ専用の補助カードの存在を考えると、ナンバーズか、それに準ずる何かも昔から存在していた可能性は高い。

デュエルモンスターの精霊の世界が存在し、それが古代エジプトの時代に人と関わり、石板に封じられたり、或いは石板を触媒に召喚された。人の心に巢食った者も居れば、人が生み出した者もある。そしてそれが現代になって蘇った。

つまり、シンクロ・エクシーズの概念かそれに近い何かは、大昔からあった、という事だろう。

だから、考えられる原因は2つ。

1つは、代償。〃S〃のカードを何度も使っているが故に、使用されるエネルギーが通過する度に俺の体にダメージが入っている、という事。車のエンジンを考えれば分かりやすいだろう。どれだけ効率良く回転させても、車のエンジンが次第に摩耗していくのと同じ理屈だ。

もう一つは、世界の意思。元々イレギュラーであった俺を、世界が排除しようとしている。だが、俺はもうこの世界の何十人という人に関わってしまった。だから世界が俺を「戦いによるダメージの蓄積」という形で殺そうとしている。正しい歴史（原作）から大きく外れる原因となった俺には、消えてもらった方が好都合なのだろう。

……何にしても、俺はもう長くないだろうな。

フィオ、色々と迷惑をかけた。

都、安心しろ、必ず助ける。

桜、支えて来てくれた事、感謝する。

フレイ、薬ありがとう。

【TRANSMISSION : to LUST】

【With RAI SORATOKI】

【With ELFY SORATOKI】

【With ALF SORATOKI】

【With LEO SORATOKI】

【With MERIOL SORATOKI】

「主殿、準備は良いか？」

「ああ」

後、3人。

もう少しだけ、耐えてくれよ、俺の体！

そう願って、俺は光のゲートを潜った。

S I D E : フレイ

マスターの部屋と歩いて帰りながら、今日の黎さんとドマさんのデュエルを思い出します。

デュエルの途中、黎さんは何度か、痛みを我慢するような表情をしていました。

何故でしょう？

薬の副作用？ 有り得ません。そんな副作用は無いはずです。

護衛とのダメージの蓄積？ こっちも疑問ですね。薬である程度ダメージを負ったとは言え、回復力は段違いに上昇しているはずです。

……嫌な予感しかしません。

わたくし個人のためにも、マスターのためにも、死んではなりませんよ、黎さん。

好きな人が死ぬのは、とても辛い事なんですから。

一体わたくしが彼に惚れたのは、いつからでしょうね？

何となく自嘲して、わたくしはマスターの部屋へと帰る足を、速めました。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 59 : 襲撃の炭鉱場 ★

SIDE : 黎

光が俺達を次に導いたのは、石切り場のような場所だった。

周囲に黒い石がゴロゴロと転がっており、その近くには古ぼけた横転した数台のトロツコがある。

と、そこで俺は認識を変えた。

「これ石炭か」

落ちていたのは、石炭だった。

転がっているトロツコにもいくらか石炭がある事を考えると、山積みには石炭を積んでいたトロツコが全て転がり、この石炭の山を作り上げたのだろう。

「主殿」

実体化した桜が話しかけてきた。

「どうした、桜?」



「あつちで人の気配がする。数は、5〜6人。それと銃声もだ」

「銃声？」

「恐らくは機関銃、銃声が絶え間無く聞こえているからな」

それ、ヤバくね？

一般ピープルがマシンガン持ってるとも考えづらいし、十中八九、護衛の武器だろうな。

耳を済ませると、確かに銃声が聞こえた。近いな。距離にして1〜2キロ。走って5分程度か。

火や雷で加速すれば、2分あれば着ける。

「桜、カードに戻れ。加速する」

「承知」

淡い桃色の光に変わった桜が、俺の体内に入り込んだ（誤解の無いように言っておくが、『L・S』である桜の本体は緑の宝玉であり、現在それは俺と一体化しているからこう言っただ）のを見届けると、素早くその場を後にした。

SIDE : 無し

そこは、駅のような場所だった。といつても電車が通るような場所では無く、ただ単に車両（トロツコ）を乗り降りするための場所なので、開けっ広げでうら淋しい場所ではあつたが。

そこでは6人の男女が交戦していた。ただし、5対1で。

「さあさあ、何時までかくれんぼできるかしらねえ！」

1人の方は真つ黒な、扇情的な服を着ていた。その両手には拳銃が握られており、そこから絶え間無く弾丸が射出されている。傾国の美人と称する事ができるが、その美しさは明らかに破滅へと続いている。

バシユツ！ とトロツコの内の1つが、爆ぜる。

その裏側に隠れていた少年が、慌てて隣のトロツコの陰に飛び込む。

「クソツ、弾切れがねえとか、なんつームリゲーだよっ！」

ざつくばらんに切りそろえた黒髪の少年が唸る。水色の瞳が苦悶の表情に歪んだ。

悪態を吐くものの、事態は好転しない。

「こつちのトロツコも、そろそろ限界かな……？」

水色の髪を短く切り揃えている中性的な少年——面影からすると、黒髪の少年の兄弟だろう——が苦笑いし、飛び出す準備をする。

「どうにかしないと、このままじゃジリ貧だよ……！」

別のトロツコの蔭へと飛び移った少女が呟く。金髪を肩の辺りで切り揃えている。女ガンマンを鋭く睨む碧眼と相まって、少々ボーイッシュに映る。

「どうにかつつてもなあ……」

少女の言葉に答えるのは、同じトロツコの蔭に隠れていた中年の男性だ。黒い短髪に黒い瞳。2人の少年の父親らしく、顔の造形も似ている。

「せめて飛び道具があれば良いんだけどね……」

額の汗を拭いながら、女性が言う。年齢を感じさせない容姿であり、水色の髪をポニーテールにしている。色合いから考えて、少年達の母親だろう。

「ほらほら、どうしたのかしらあ！ もっと抵抗してみなさいよ！ つまらないじゃない！」

丸腰の5人を相手に、無限の弾丸が供給される拳銃を乱射する女。赤い唇がギラリと引き裂かれるように開く。

次から次へと破壊されていくトロツコ。その数は、元々あつたであろう数の10分の1を下回っている。残りは10台。その内半数は半壊している。

「このままじゃ全員蜂の巣だぜ！」

「でももう盾にできるものなんて……！」

黒髪の少年が焦る言葉に、水色のポニーテールの女性が答える。

と、その時――

バギツ！ ブシツ！

「あがつ?!」

ポニーテールの女性の隠れていたトロツコが、被弾によつて文字通り蜂の巣のように穴あきとなつてしまった。

空いた穴からは次々と銃弾が到来し、素早く隣のトロツコの蔭へと移動したものの、その内何発かが彼女の身を掠めた。

「メリオル！」

「母さん！」



周囲に煙幕が立ち込めた。

「くっ!」

「何だ!?!」

周囲が困惑する中、煙幕の中を一人の影が現れてメリオルと呼ばれた女性を担ぐ。

「この女性を治療する。こっちだ、ついて来い!」

「お、おい!」

「蜂の巣になりたいのか?」

確かに、このままここにおいても銃で撃たれて風穴だらけになるだけだろう。

影の言葉が正論だと思った4人と担がれたメリオルは、何者かに従ってその場を後にした。

やがて煙が消え、その場には壊れた無数のトロツコと、二丁拳銃の女のみが残っていた。

「チツ、逃がしたか」

舌打ちが空しく、周囲に響いた。

が、すぐに笑みを浮かべる。

「まあ良いわ。どうせ奴らの狙いはこのワタシ。待つてれば向こうから来るでしょ。何より、時間を稼げば稼ぐだけ、邪神様の復活を目的とするワタシ達には有利だからねえ」

## SIDE : 黎

銃撃を受けていた5人を、俺は移動中に見つけた係員の詰め所のような場所へと誘導していた。到着と同時に水流で汚れは拭つてある。

しかし、俺の担いでいた女性は、移動中から次第に顔色が悪くなっていった。念のためにつけておくが、今回は普通に走った。常人に耐えられないような速度は出していない。そこで現在、薬学医学に精通しているという桜に頼んで、女性の診断をしてもらっている。

彼女と一緒にいた4人が心配そうに見守っている。

「桜、どうだ？」

淡いマゼンタ色の魔法陣で、横になっている水色のポニーテールの女性を照らしている桜に尋ねる。

魔法陣を消した桜は、渋い顔で言った。

「毒だ」

「え?」

「傷口から毒が侵入している。弾丸に塗ってあったのだろうか」

何?

見れば、確かに女性の右の手首が変色している。これは俺も受けた事があった、これは俺の記憶が正しければ……。

「これは掠ったら10分で死ぬ毒だぞ」

「やはりか……」

『『ええっ!?!』』

驚きの声は後ろの4人。

これは僅かな量で致命的となる、致死性の猛毒だ。

驚く程ではない、オーストラリアの海には刺されると5分で死ぬ猛毒の海月が生息していると言うのだから。

「な、何とかならねえのか!」

声を荒げるのは4人の中で唯一の中年男性。左手の薬指に、女性と同じ指輪をしているから、恐らくは夫婦だろう。

「か、母さんは助からないのか!?!」

「落ち着け。強い毒だが、ワクチンがあれば助かる」



「じゃあそのワクチンは!？」

「こんな鉱山に置いてあるとでも?。」

「そ、そんなあ!。」

順に黒髪の活発そうな少年、俺、水色の髪の中性的な少年、桜、金髪の少女。

突き放すような桜の言葉に少女は涙目だ。

「だ、だったら魔法的なモンでどうにかならねえのかよ!。」

「この毒には解毒の魔術は効果が無い。ワクチンを打つしか無い」

「で、でも無いんでしょ!？」

「いや大丈夫、俺が持つてる」

ただし、と俺は区切り、指を一本立てる。

「俺の今からやる行動に口出しするな。それが絶対唯一の条件だ」

『『やってくれ(下さい)』』

「即決か」

俺の条件をコンマ1秒の間も無く呑んだ4人。それだけこの女性が大切だということか。

はは、了解つと。

まずは傷口の近くを水で拭う。これでこれ以上余計な毒は入らない。同時に傷口付

近に残留している毒を血と一緒に抜き取る効果もある。

更に体内で必要な物質を掛け合わせて抗体を作り出す。過去に1度喰らった事のあ  
る毒だから、抗体はできている。

「自家製ワクチン・解毒版。注入」

両手の爪を鋭く伸ばす。

「つ、爪が……」

「伸びた!？」

そしてそれをそのままの皮膚に突き刺す。爪の中の細い管から、体内にワクチンを投  
入させてやる。

「くっ……」

「おい、何を」

「口出ししないのが条件だ」

「ぐ……」

苦しげに呻く女性を見て、何か言いたそうにした黒髪の少年を黙らせ、爪を抜く。

しかし抗体がすぐに毒に効力をハツキするかと聞かれれば、その答えはNOだ。だか  
ら今回は少し無理をさせてもらった。

ワクチンを大量に投入し、全身の血液を循環するようにする。傷口の近くは勿論、全

身十ヶ所の太い血管に打ち込んで、早く回るようにした。この毒は抗体には極めて弱いタイプだから、これなら効果があるはず……っ！

ズキッ！

「うぐ……、チイ……ッ！」

「主殿？」

「……何でもない」

クソ……。多めに抗体作るために少し体に無理させ過ぎたか……。

知るか。化物とこの人間の命、どっちが重要か考えろ。バカでも分かる筈だ。死ぬべき化物より、死にそんな人間の方が大切だって事ぐらい！

解毒はあつと言う間に終わりを迎えたらしく、女性の顔色は次第に良くなって来る。

「う……」

ワクチン注射から1分足らず。横になった女性の顔色は、完全に回復した。

「これでもう大丈夫だ」

「母さん！」

俺の宣言と同時に2人の少年が駆け寄った。

母である女性はそんな2人を抱き止め、優しく慈愛に満ちた笑顔を向けた。

ああ、これでいい。

こういった笑顔を守るために、俺は戦うんだから。

「ありがとう、母さんを救ってくれて」

「何度も言うようだが、この世界にお前から5人を巻き込んだのは俺だ。罵られこそされ

でも、感謝される筋合いは無い」

「それでもだ。俺達は危うく大切な人を失うところだった」

俺達は取り敢えず毒を受けた女性を安静にするために詰め所からまだ動かないでいた。立ち続けるのも何なので、皆そこにあつた椅子に座っている。

別に俺がやった事は、責任の一部を取っただけだ。目の前で人死にがでて寝覚めが悪いというだけでもある。善意とかでは無い、義務だ。

「そう卑屈になるなよ、坊主。お前さんは立派に俺の妻を救ってくれたんだ。誇れよ」

「坊主じゃ無いです。……そう言えば、名前をまだ名乗っていないかったな。俺の名は遊馬崎黎」

「その従者、桜と申す」

俺達の名乗りに合わせて、向こうも名乗って来る。

「空時そらときライってんだ、よろしくな」

「その弟、アルフです」

最初に名乗ったのは、母親に駆け寄った少年2人。

ライの方は黒い短めのぎつくばらんに切った髪に、恐らくは母親譲りの水色の目の持ち主。さばさばした性格というのが、今の一言で分かる。

逆にアルフは水色の髪と瞳。中性的な顔つきをしており、言っちゃあ何だが『男の娘』

を地で行くのが彼だろう。

「私は空時エルフィ。ライの彼女で、戸籍上はライの従姉妹になるよ」

次に挨拶をして来たのは金髪碧眼のボーイッシュな少女。短い金髪が、ライとは違って綺麗に切り揃えられている。スレンダー系の美少女だ。

「俺は空時レオ。こいつらの親父だ。でこつちが俺の妻の……」

「空時メリオル。助けてくれてありがとう」

そしてご夫婦。ライと同じく短い黒髪に、彼と違って黒い瞳のレオさん。好い感じに引き締まった体の持ち主だ。

母親のメリオルさんはアルフと同じ水色の髪と瞳。長い髪の毛をポニーテールで括っている。モデル並みというわけでは無いが、良い体型であると言える。

「それにしても珍しいな。前に合った組み合わせは転生者同士のカップル2人組とその娘だったが、今回は全員転生者で、しかも親子と来たか」

「ぜ、前回？」

「待って、僕達が転生者だって、どうして分かったんだい？」

俺のセリフにメリオルさんとアルフが突つかかかって来た。

ふむ、そうだな。その辺も話すとするか。

「だったら、その辺も話しましょう。精霊の皆も聞いておいて損は無いんじゃないか？」

『っ!?!』

俺のセリフに、周囲の空気が震えた。

「気配と姿を消しただけで隠れているつもりか？ 普通の精霊の見える“人間”なら隠れられただろうが、俺は生憎人間じゃ無い。そこにいる事ぐらい、分かるぞ？」

サーモグラフィが感覚として近いだろう。精霊の体を構築する独特のエネルギー、それを俺は肉眼で見える。だからその手の能力に余程長けてるヤツでも無い限り、人間に擬態しようが姿を消そうが、精霊がそこにいるという事実を俺の目は確実に捉えるのだ。

何故こんな能力があったのかは分からない。ただ、いつの間にか「ああ、ここに姿を消した『ハネクリボー』がいるな」とか、「桜はあっちの方にいるな」とかが感知できるようになっていた。

「こっちは精霊を紹介したし、今も姿を現している。そっちは、事が済むまで隠れ続ける気か？ この俺がお前らのマスターに危害を加えるかも知れないのに？」

『チツ、分かッたよ。出て来りゃ好いんだろうがよ』

『ピキーン』

その声と共に、次々と精霊が現れた。

黒い装束の騎士、赤い小さな機械、チアリーダー風の少女 e t c ……。

『よう。主の母親の件、ありがとよ』

『貴方が来て下さらなければ、我々はどうなっていた事か』

最初に現れたのは『冥府の使者ゴーズ』と『冥府の使者カイエン』だ。ライの後ろから出て来たから、たぶんライの精霊なのだろう。

ワンキル防止に役立つモンスターであり、トークンと生み親の種族・属性が違うという珍しいモンスターだ。

冥府の使者ゴーズ（効果モンスター）

星7

闇属性／悪魔族

ATK 2700 / DEF 2500

自分フィールド上にカードが存在しない場合、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・

光・星7・攻／守？）を1体特殊召喚する。



このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

●カードの効果によるダメージの場合、受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

冥府の使者カイエントークン（トークン）

星7

光属性／天使族

ATK ? / DEF ?

「冥府の使者ゴーズ」の効果で特殊召喚される。

このトークンの攻撃力・守備力は、「冥府の使者ゴーズ」の特殊召喚時にプレイヤーが受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

『ピー、ピキー』

『あの窮地からマスター達を救ってくれてありがとう、と言っております』

アルフの傍からは橙色の装甲を身に付けた人型機械『マシンナーズ・ギアフレーム』と、赤色の三輪車に頭を乗せたような小型機械『マシンナーズ・ピースキーパー』だ。

機械族、ユニオン、"マシンナーズ"で活躍するユニオンモンスター。有栖のデッキ

にも『ギアフレーム』が入っていたな。

マシンナーズ・ギアフレーム（ユニオンモンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1800 / DEF 0

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。）

マシンナーズ・ピースキーパー（ユニオンモンスター）

星2

地属性／機械族

ATK 500 / DEF 400

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからユニオンモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。)

『勘が鋭いね、エルの命の恩人さんは』

『まさか、気配を完全に断った我々に気付くとは……』

そしてエルフィの精霊であろう『勝利の導き手フレイヤ』と、紫の肌に漆黒の翼、青の鎧を身に纏った天使、『ダーク・ヴァルキリア』。

エルフィのデッキが天使族である事を容易く想像させる組み合わせだ。

勝利の導き手フレイヤ (効果モンスター)

星1

光属性／天使族

ATK 1000 / DEF 1000

自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択することはできない。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

ダーク・ヴァルキリア（デュアルモンスター）

星4

闇属性／天使族

ATK 1800 / DEF 1050

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードが表側表示で存在する限り1度だけ、このカードに魔力カウンターを1つ置く事ができる。

このカードの攻撃力は、このカードに乗っている魔力カウンターの数×300ポイントアップする。

また、このカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事で、フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。

『ふふふ、初めまして、メイと申します。宣告の救出劇、お見事でした。それとメリオルさんを助けてくれてありがとうございます』

最後に出て来たのは、青い衣装に身の丈程の大きさの鍵を持った妖精、『キーマイス』。レベル1の天使族であり、『コート・オブ・ジャスティス』や、『もけもけ』デツキで採用される。

キーマイス (通常モンスター)

星1

光属性 / 天使族

ATK 400 / DEF 300

とても小さな天使。

かわいらしさに負け、誰でも心を開いてしまう。

レオさんの上から出て来たから、多分レオさんの精霊。

でもって、メリオルさんとも仲が良い。そんな感じだろうな。

『オラ、お前の要望通りに出て来てやッたぞ。話す事とツとと話せ』

『ゴーズ！ 仮にも命の恩人相手に口が悪いですよ！』

「構わないよ、『カイエン』」

先を促す『ゴーズ』を窘める『カイエン』。

『しかしですね、黎さん』

「口調を気にしてるヒマは無い。ぐずぐずしてると、あの拳銃女が弾丸乱発して来るぞ」

それを聞くと、『カイエン』は不満そうに押し黙る。

俺は手短に、されども重要な点は何一つ逃さず、事の顛末を話し始めた。勿論、最初

に全員の頭にヴィジョンを送り込んでから。

「……これで、こっちの掴んでる情報は全てだ。質問があれば受け付けるが」

映像を流して説明するのは楽で良い。口頭での説明がすぐに終わる。

空時一家は暫く沈黙を保っていたが、やがてそれは破られた。最初に口を開いたのは、ライだった。

「アンタは、黎はどうして戦うんだ？」

「世界と義妹いもむすこが危ないからだ。それに俺のアイデンティティでもある」

「そうじゃ無い。アンタのやって来た事は、常人なら確実に数えきれないくらい死んでいる。それに、アンタだって重傷を何度も負った」

何で、投げ出さない？ そうライは問うた。

成程、戦う理由じゃ無く、戦い続ける事のできる理由が聞きたいのか。

そんなの、簡単じゃねえか。

「投げ出さないんじゃない。投げ出せないんだ」

「何？」

「俺が投げ出したら、誰がやるんだ？ 悪いが、見ず知らずの他の誰かに任せられる程、

この戦いにおける責任は軽くないんだ」

物語ではよく、世界を救うためとか、未来を守るためとか、数えきれない程の大勢の

ために主人公は戦う。俺もそれと同じケースだ。

だが、俺の場合は桁が文字通り違う。何せ全次元の今と未来の全てを食らおうとする存在が相手だ。1つの宇宙にいる命の何千、何万、何億倍もの命。数える事すら烏滸がましいだろう。

「邪神を葬るチャンスは今しか無い。グラトニー……、直前に戦った邪神の護衛からの情報じゃあ、邪神の復活は予定より大幅に遅れている。今の内に戦力を削ぎ取り、奴の所へ行つて倒せれば、全て万々歳。世界は平和になりましたで終わるんだ」

「でも、君はその顔も知らない無数の人のために死にかけているんだよ？」

「構わない」

アルフの問いに、俺はそう答える。

ふと、脳裏に昔読んだ漫画のワンシーンを思い出した。

「昔読んだ漫画にな、こんな言葉があつたんだ。『1人を殺して100人を生かすのでも無く、100人を殺して1人を助けるのでも無い。誰も死なせず、101人救う』つてな。良い言葉だと思わないか？」

「だが、それは理想論だ」

「いえ、実はある事実を加えてやるだけで、これは理想論では無くなるんですよ」

レオさんの言葉は確かに当たっている。理想論じゃ限度があるし、それで世界を救え



たら世話は無い。

別のラノベにも似たような言葉があった。

あつちは『100人助けるために1人を殺す。1人じゃ足りないんだつたら2人殺す』だった。どっちも間違いじゃ無い。ただ、自分の信じている物や目指している物が違うだけだ。

「どう、するんだ？」

「簡単ですよ。何ら特別な事じゃ無い、ただ単に——」

それを言った瞬間、俺はメリオルさんとエルフィに詰め寄られた。いや、2人だけじゃ無い。出遅れただけで、ライも、アルフも、レオさんもだ。

「君は正気なの!? そんな事をして誰が喜ぶというの!」

「俺ですよ。自己満足で自己欺瞞ですが、十分です」

「ふざけんな! 黎、君がやろうとしている事はヒーローの行いじゃない!」

「無問題だ。1度足りとて、ヒーローになろうと思つた事は無い」

メリオルさんとエルフィの言葉に、俺は冷静に返す。

『スターにはなれても、ヒーローにはなれないね』。これもとあるラノベの言葉だ。きつと俺はヒーローなんて勿論、スターにだってなれないだろう。

十分だ。

スター？ ガラじゃ無い。

ヒーロー？ 俺の、化物の対極の存在だ。

「黎、お前は大切な人を泣かそうとしていているんだぞ！」

「残念ながら、俺はそれを知る事はできんだろうな」

「最低のやり方だ！ そのせい色んな人がで何年悲しむと思うんだ！」

「だが時間はそれを解決する。時が経てば、涙の一粒も流れなくなる」

「お前はそれで良いのか!? 助かって喜ぶ顔を見ないで、後悔と苦痛だけの人生で！」

「前世は実際そうでしたよ。もう1度繰り返し返した所で、1回が2回になるだけです」

ライ、アルフ、レオさんの激昂にも俺は冷静だ。

『何も失わずに何かを得ようだなんて、心が豊かだから思えるのよ』。これはゲーム内の言葉だったな。何かを手に入れようとすれば、何かを失う。それは世界の理として、当然の事だ。リターンには必ずリスクが伴う。

そう、天秤に乗った命を両方とも助けたいのなら、捨てられる物は1つしか無い。

パンパン、と服についた埃を払い、俺は立ち上がった。

「さて、俺は話すべき事は全て話した。これからあの女を仕留めに行く。そっちは、どうする？」

逡巡は一瞬。

すぐに皆はついて来た。

「俺も行くぜ、自殺志願者」

「放っておいたら、絶対自爆特攻とかしそうだしね」

「ま、ライが信じるなら大丈夫でしょ」

「あの女には借りもあるしな」

「恩返しもしないし、私達の世界の危機でもあるしね」

理由は千差万別。

戦う心は、問わないさ。

歩いて例のトロツコ置き場まで行く途中、こつちもライ達から、向こうの事情を聞いた。

「酔っ払いを助けるために代わりに電車に轢かれた？　またテンプレな、つて人の事あんまり言えねえけどな」

「あ、あはは……」

電車のホームから落ちた酔っ払い2人組を助けるために飛び降り、助けたは良いが代わりに5人共電車にドーン！

で、神様現れて転生。その際、血縁関係の唯一無かつたエルフィは4人の親戚となつたらしい。

「悪いな、壮絶なドラマとか無くてよ」

「別にそんな物を求めた覚えは無いですけどね」

レオさんはそう謝るが、からかっているらしく、顔は笑っている。

特にでかい敵も無く、およそ原作通りに進んでいるらしい。まあ、アルフが闇に乗っ

取られたり、盗賊王がライの体に同居してるなんてのには驚いたが。

……と。

「着いた。まだあそこに居る」

最初にライ達が護衛とぶつかり合っていたトロツコ置き場に到着した。距離にして100メートル少々。まだあつちはこつちに気付いていない。

「でもどうするんだい？ 弾切れの無い銃相手なんて勝てっこ無いよ」

まあ、アルフの言う事も尤もだ。飛び道具つてのは距離があつて、しかも弾数があつて初めて相手より優位に立てる。だからこそ懐に潜り込んだり、弾切れを狙うのが、飛び道具相手の定石。

だが、接近戦云々は兎も角、弾切れが無いのは厳しい。

『ふむ、肉眼で弾道を見切れるか？』

「見切つて動き出す頃には当たつてるぞ」

桜も意外と抜けている。

さて、弾切れは無い。だったら。

「他にもやりようはあるさ」

「どうやるの？」

「どうやる」

体の中でスイッチを入れる。瞬時に髪の毛と瞳の色が紫に変色、更に皮膚に同じ色の唐草模様が走る。

『双頭の雷サンダー・ドラゴン 龍』、その真の姿たる『雷神龍—サンダー・ドラゴン』から貫つた雷の力だ。

「うわ！ 髪の色が変わった！」

「はっ！」

地面に掌を押し付け、そこから強い電流を流してやる。これで、トロツコ置き場付近に強い電磁場が生まれる。

視界の先でラストは軽くバランスを崩した。

これで、準備完了。

「さあ、これで大丈夫だ。欲しい武器はあるか？」

「刀二本で」

「籠手と脛当てとか無い？」

「エアガンとレイピア。できれば蛇腹剣」

「刀が一本欲しい」

「金属製の扇子つてある？」

順にライ、アルフ、エルフィ、レオさん、メリオルさん。

注文通りに鉄とチタンを錬成して分け与える。

ズキツ！

……っ！

このくらい……！

「……、精霊はカードに入ったか？」

「ああ」

「うん」

「大丈夫」

「こつちもオツケーだ」

「はい」

「OK、出来るだけ大きく散開して、ついて来い！」

「え、あ、おい！」

「ダツ！ と俺は痛みを誤魔化すために走り出し、すぐ後ろで皆が走り出す音を聞く。

「大丈夫なんだろうな！」

「任せろ！」

すぐ後ろを走るライにそう返す。

一方で向こうもこつちに気付いたようだ。最初は信じられないといった風に瞬きを何度かしたが、すぐに手にした銃を構える。

100メートル進むのに、一般的な足の速さで15秒弱。それだけの時間があれば、俺達全員を撃ち殺すくらいはできるだろう。

そう、当たればな？

「フッフ、この世界で最も美しい女、色欲のラストの凶弾にわざわざ撃たれに来るとは、とんだ酔狂ね。良いわ、蜂の巣におなりなさい！」

女、ラストの拳銃が火を噴く。左右の拳銃から無数の弾丸がマシンガンの如く撃ち出された。ラストの持っている拳銃はオートマチックの連射型。粗悪な品は弾詰まり<sup>ム</sup>を起こしやすい反面、種類とカスタマイズによつては33発もの弾丸を1度に内蔵できる。

見たところあいつの銃はグロック18C、その33発装填を可能にする一品であり、1分間に1200発もの乱射が理論上可能だ。最少装填数17発のそれが撃たれるという事は、例えばロードに時間がかかったとしても、1クールにそれだけの弾丸が飛んで来るといふ事だし、事実目で捉えられない数の弾が飛んで来た。

だが、一発たりとて、俺達には掠りもしない。



「ええっ!？」

慌てて更に撃つが、無駄だ。お前は真っ直ぐ撃っているつもりだろうが、弾道は俺達から大きく外れている。当たるワケが無い。

結局一発も当たらず、俺達はラストに接近できた。

「さつきはよくも母さんを！ 風雷流剣術、二の太刀！ 〃登竜閃〃！」

「な!?! うっ!」

斬斬！ ライの右順手の横薙ぎ、左逆手の斬り上げがラストを捉える。ジジジ、と傷が回復するのは想定済みだ。

風雷流、それは戦国時代を生き延びるために生み出された傭兵の武術。どれだけ汚くても生き延びる事を主眼においてある、その場にある全ての物を武器に戦う流派、らしい。俺は初めて見る物だから知らんが。

「こ、このガキ!」

ラストが銃口をライに向ける。

いかん、あの距離は当たる!

「させない! 風雷流、投げの型! 〃雷落とし〃!」

こつちの反応よりも速く動いたのはアルフだ。銃を向けた方の腕を掴み、一本背負いの要領で投げ飛ばす。少しでも武術その他に心得があるならば、背負う前に間接を固

め、叩き付けた後にその腕を押し折った事が分かるだろう。実際、ベキリ、という音がした。

「あがあっ!?!」

「へえ、やるじゃんか」

「風雷流を、ナメるなよ?」

「そら失礼!」

腕の治ったラストが二丁拳銃をこっちに向けて来る。が、遅い。

今度は俺の番だ!

「おらよ!」  
「渴殺<sup>かつさい</sup>」——

右の蹴り上げで左手の銃を蹴り飛ばし、そのまま回し蹴りをぶち込む。

「磔雷<sup>ぼんらい</sup>」!」

「グギッ!?!」

俺の足は雷の力で強化しつつ、地の力で硬化させてある。下手な鈍器よりか威力はあ  
るぞ?」

ベキベキ、と肋骨を押し折る感覚が脛に残っているのを感じる。やはり、こいつらの  
体の仕組みは人間に近い。

さて、俺がどこにお前を飛ばしたと思う? 出鱈目な方向に蹴り飛ばしたと思うなよ

? そつちには――

「エルフィ、メリオルさん、行ったぞ!」

「OK!」

「サンキュー!」

鋼の扇子と、蛇腹剣&エアガン（空き缶壊せます）で武装した2人がいるんだからな

!

「〃幻走連斬舞〃!」

バシィッ! レイピアの状態から鞭の状態へ。姿が瞬時に消え、鞭を振り回すエルフィ。俺でもその速度を捉えるのは難しい。次から次へと立ち位置を変え、全身余す箇所無く斬りつける。

「ハアッ!」

「が……っ!」

止めの一撃が炸裂。ズタズタになったラストを、今度はメリオルさんが狙う。

「〃風月〃」

静かな宣告、同時に両手に持った扇子が円を描く。

「う、ギャアアアアアアアアアアアアッ!」

「それだけポロポロになってるのを狙うのは気が引けるけど、これでお相子よ」

一瞬の交差で、メリオルさんの扇子がラストを撃った。ズバン！ という小気味良い音と、バギイ！ という肋骨の砕ける音が響いてラストが吹っ飛び――

「っ！」

「母さん！」

メリオルさんが片膝をついた。

「ああ、もう。毒はまだ抜けないのかなあ！」

「んな簡単に抜けたら世話無いですよ」

命に別条が無くなったとは言え、まだ毒は抜け切っていない。飽くまでもあれは毒性を抗体で中和しただけ。毒で受けたダメージは残ってるし、中和しきれてない毒だつて残っている。運動して血液の循環を早めればこうなる事ぐらい自明の理だ。

ゲームみたいにすぐ毒消滅、なんて風にはならないのだ。

心配して駆け寄った俺とエルフィ。そこにジャキリ！ という音が聞こえた。

「隙有りよお！」

マズい！ ラストの攻撃が来る！

盾は間に合うか!?

「俺を忘れてもらっちゃ困るな！ 〃爪竜連牙斬〃！」

斬！

盾の展開よりも先に、レオさんの斬撃が入った。くるくると円を描くように蹴りを時折混ぜる剣激が、ラストの銃撃を妨害したのだ。

「ふ、ぎいいいいいいいっ！」

あらら、ご自慢の美貌もザックザクだな。

「よ、よくもこのワタシの美しい顔をお！」

「私は造形的美醜には疎いが、貴様の美しさが真の美では無い事くらい分かるぞ？」

ザシュツ！ と桜の剣が更にラストを斬り付ける。

こうなると最早リンチの類だが、それを気にしちやダメだ。リアルファイトでボコらないと、デュエルには移行しない。デュエルでないと殺せない事を思い知らせ、初めて同じ土俵に乗れるのだから。

ラストの弾丸が当たらなかった理由の種明かし。それはこの土地の磁場の操作だ。

連中が人間の姿を取っているのは、多分ただの見せかけ。中身を抉った事があるから分かる。人間の見た目は、ただの入れ物、或いは真似をしたパチモノだ。だがそれだと瞬きをしたり、喋る際に口が動く事に説明がつかない。

だから俺はそこで発想を逆にした。

こいつらの人間の見た目は、見せかけだけでは無いんじゃないか、と。

だからこの土地の磁場を弄って、ラストの平衡感覚を狂わせた。地球が巨大な磁石で





弾丸の雨霰が髪の毛の壁に直撃する。

しかし神経を繋いでいないとはいえ自分の肉体の一部だ、壁がどんどん削れているのが伝わって来た。

「あまり長くは、保たないかもな……」

「ちよ、おいー!」

俺の分析にレオさんが顔を青くする。

実際、防壁がガリガリ抉られているのが、髪の毛の持ち主である俺自身よく分かる。放っておけば数分後には確実に貫いてくるだろう。

だが、どうする? 精霊に実体化して殴って来てもらうか?

ダメだ。ラストとの距離があり過ぎる。俺でも今の距離を詰めるのには3秒はかかる。奴が気絶でもしない限り、接近するのは不可能。第一、ラストの弾丸に当たれば、いかに精霊と雖もどうなるか分からない。なまじ人間と違う体をしているから、俺のワクチンが効く保障も無い。

かと言つて、皆を守るために張っている盾も限界が近付き始めている。リミットまで恐らく30秒弱か。

「ハ、ハのままじゃジリ貧だよー!」

「おいおいおい、蜂の巣なんて勘弁だぜ!」



あー、クソ、どうすれば……!!

『いたぞー! あつちだ!』

っ!

『発砲許可! 撃ち殺せ!』

この記憶は……!!

『市民に当たろうが構わん! 奴を殺す事を最優先しろ!』

あの時の……!!

『あの化物は害悪! 生きている事が間違っているのだ!』

何でこんな時に……!!

『存在そのものが罪悪の怪物め! 人間様のテリトリーに入るからこうなるんだ!』

そうだ、俺はあの時……。

『このガキはどうします?』

市街を逃げていて、そこにいた小さな子を庇って……。

『そいつも殺せ。どうせガキだ。いくらでも替えが効く国民共ゴミクスの内たった一人』

機関銃で撃たれて……。

『クソ以下の存在一匹消して、誰が困る？』  
それで……！

俺は髪を一時的に切り離した。切断部と合わせれば、また元の長さの俺の髪に戻る。

「黎？」

「……にいろ」

金属は全部髪に回した。俺の体重は今70キロ程度。身長と比較して、ちよつと多めだ。まあ、300キロオーバーの金属の存在を考えれば、体はかなり軽くなったように感じる。

さて、と。

「ねえ、何するつもり？」

「まだ防壁は保つ。外に飛び出したりするなよ？」

「お、おいちよつと待て。お前まさか！」

ライの制止も聞かず、俺は、跳ぶ。

防壁の、上へ。

「な!？」

「ちよ!？」

「あらあ?」

スタツ、と着地。そのまま弾雨の中を突っ切る。

当然ラストは、俺を狙って撃って来る。

「あらあら! わざわざ当たりに来るなんて、大したマゾ根性ね!」

『あ、主殿!』

「カードから出るな桜!」

ブシッ! バジググジュギジッ! ビシニジュツ!

一瞬で頭に、顔に、肩に、胸に、心臓に、腹に、足に、何十発と被弾する。

く、やっぱ弾丸は痛え……! だが痛覚遮断に割ける余裕は無い。どうせ蜂の巣になっても死なない体だ。今更銃創の1つや2つ、何て事は無い!

一步! 後、5メートル!

「しぶといわねえ!」

ビジッ! ビシヤッ!

血が、足りている間に辿り着けるか!?

「く、何故死なない! この、化物がああああああああつ!」

弾速が上がり、弾数も増える。まだだ、まだ走れる!

もう、ラストは目の前だ！

「死ね！ 死ね死ね死ねえ！ 死んでしまええ！」

「だが——」

腕が、額が、頬が、目が、足が、膝が、胸が、ラストの凶弾で抉られ、貫かれる。だがラスト、例えどれだけ風穴を穿たれようが！

「断る！」

俺は倒れん！

右ストレートがキレイにラストの顔面に決まった。

ゴバギイツ！

ブシブシブシツ、ベギシイツ！

グシャツ！ ガラガラガラ！

ラストの顔面が、俺の拳打で碎ける音。

俺の穴だらけになった腕から、大量の血が噴き出る音と、弾丸で穿たれて脆くなった骨が押し折れる音。

そしてラストが吹っ飛んで岩肌が崩れ、瓦礫の下敷きになった音が、銃撃戦終了のゴングとなった。

「ハア……、ハア……、ハア……、クソ、余計なダメージ食らったか……」  
「ダメージで済むか！ 致命傷だろ、確実に！」

パタタ、ポタポタ、と全身から血が滴り落ちる。体中穴だらけだ。だがまあ、問題無  
いだろう。傷がまた増えたただけだ。今更10や20増えた所で、何の問題があるだろう  
か。

だが、まあ、闇のデュエルが始まる前に、これだけのダメージを負ったのは問題、か？

「もう少し自分の体を労われ、主殿。フレイからも言われたハズだ。これ以上のダメージは命に係わると」

「……だが、突破する方法は、ハア……、あれ以外に、あつたか……？」

「それは……」

言いよどむ桜に、俺は更に言葉を重ねる。

「ハア……、ハア……、俺のやるべき事なんだよ、体を張るついているのは。ハア……、無駄に頑丈な、俺以外、誰もやれねえだろ……」

「だからと言って、ここままで無茶をする必要があるの!？」

「……ある」

エルフィの怒声にも、俺は冷静に答える。

呼吸が少しずつ、戻って来た。

「あれがあの場合のでの最前の策だった。それとも、お前は蜂の巣になって犬死にしたかったのか？」

「そ、そういうワケじゃ……」

「だったら、俺が出るしか無いだろう？ 適材適所、人には役割がある。俺は、ああやつ

て体張って、皆を守る盾になり、敵の注意を引き付ける困だ」

「……だが」

レオさんは反論する言葉が見つからないのか、そこでセリフを区切った。

「死ぬ？ 上等ですよ。1度は死んだ命、終わった人生。それが何の偶然か、こうして蘇っただけ。そして、不幸な目に逢っているのは、今は都だけ。だったら、あいつを助けるために体張る事ぐらい、普通でしょう」

「その張り方が普通じゃ無いっていうのよ。途中で死んだらどうするの」

「死なないですよ」

メリオルさんの言葉に、俺はバツサリ切り返す。

「俺は死なない。化物（モンスター）が死ぬのは、正義の味方によって殺される時だけ。悪同士の戦いでは、殺されやしません」

「それは物語の話だ！」

「例えそうでも、例え致命傷を負ったとしても、俺には——」

『これで終わりね、モンスター？ 流石のアンタも、全身が引き千切れたら死ぬでしょう？』

蘇える、あの時の、俺と都の断末魔。

『ウフフフフ、これで、人間様の正義の力ってヤツが良く分かったかしら?』  
そして不愉快な笑顔。

『詰らないわねえ。傷口を邪魔するだけで、不死鳥も死ぬんだから』

俺の、本当の化物の様な、怒号。

『な、んですってえ!?!』

そして、飛び散る、俺と、あの女の鮮血。

「黎?」

「いや、何でもない」

……どうも今日は、昔を思い出すな。

あの日の夜に使った、最初で最期のあの力。あれを出すような事態にならなければ、良いんだがな。

「ま、切り札の1枚くらい、取って置いてあるって事です」

「……それは、安全なのか?」

「さあ? まだ実戦では1回しか投入してないからなあ? ま、ライ達が安全だって事



くらいは保障するさ」

それを桜を含めた6人は聞いて渋い顔をする。

だがこつちとしても、そんな顔をされても困るんだが。

「ダラツシヤアアアアアアアッ！」

と、積み上がって墓石のようになった瓦礫の塊から、ラストが飛び出して来た。

「ほう、生きていたか。そのまま消滅してくれば楽だったつーのに」

「ゼエ……、ゼエ……、ゼエ……、ワタシ達がこんな者じゃ死なないって事くらい知ってるでしように……っ」

「ま、ごもつとも」

じゃ、まあいつも通りに。

「ラスト、俺達とデュエルと行こうじゃないか」

「ハン、お断りよ。この場で射殺した方が確実じゃないの」

「そうかな？ お前の銃じゃ俺達を殺せない。毒なら俺がワクチンを持っている。それとも、このままジワジワと消耗したいか？ 一晩あれば、流星に行けるだろう」

それで良いなら、相手してやるぜ？

そう言つて俺は再び構える。今度は周囲にはつきりと火花が見えるくらいに強い電気を纏つて。

自分の不利を知ったラストは、近くの洞窟の傍に止めてあつたトロツコ列車に飛び乗った。そのまま腰のホルスターから銃を引き抜き、こっちの足元に威嚇射撃。

「つとー！」

その踏み込めない一瞬を狙つて、ラストは列車を発進させた。

ラストが操縦席から高笑いをしながら、こちら側に宣告する。

「待て！」

「この鉱山を抜けた先の操車場で待つてるわ！　ワタシと戦いたいのなら、トロツコに乗って追つて来なさい！　アツハハハハハハハハハハハハハハハハアツ！」

ラストの乗った列車が、坑道の奥へと消えて行つた。

エコーの影響で、あいつの痢に障る高笑いが、長く長く響いていた。

「チツ、逃がした」

憎々しげに舌打ちする俺の横で、ライが首を傾げる。

「追いかけないのか？ この先で待つてると言葉が嘘でも、行き先は分かっているだろ？」

そう言つてライが、ラストの消えて行つた坑道の入り口を指差す。

ライ、お前なあ……。

「はあ……、兄さん、罨つて可能性は考えないの？」

「あ……」

アルフが頭を痛そうに溜息を吐いた。ライ、今気付いたのか？

レオさんとメリオルさんが、アルフの隣で冷静に分析する。

「態々誘つて来ている以上、何かあると見るべきだ。それにトロッコで追つて来いと奴は言つていた」

「つまり、トロッコかレールのどっちか、或いは両方に罨がある、つて事ね」

「そういう事です。無論、操車場に行つていないケースもあります」

だが。

「それでも行かなきゃ駄目だろうな。ここで立ち往生する訳にもいかない」

「だが」

「俺は行きますよ、誰が止めても」

今、この場にある乗れそうなトロツコは4く5台。ニコイチをすればもう何台かいけるかも知れないが、生憎、俺にはトロツコ修理に関する知識は無い。

「なら、俺も行く」

「兄さん！」

「借りの作りつ放しつてのは性に合わないんでな。それに、あいつは母さんを撃った。父さんとアルフ、もちろんエルファイも。一泡吹かせてやらねえと、気が済まねえ」

ライが怒りの炎を燃やしながら、前に出る。

「ほう、良いのか？ 俺は化物、人間じゃねえ。暗がりに誘い込んで頭から噛み砕くかも知れねえぞ？」

「お前はそんな事する奴じゃねえだろ？」

ふ、知った口を聞く。そうおどけて言うのと、ライはケースに入っていたデツキをデスクに差し込み、顔を笑って歪ませる。

「だったら、私も行く。ライだけ放っておいたら、何するか分かったモンじゃないし」

「なら僕も参加だよ。兄さんが信じるなら、黎は味方だ」

続いてエルファイとアルフが名乗り出る。

「レオさんとメリオルさんはどうします？」

「ゴメン、私は行けないかな。まだ気分が悪い……」

「だったら俺も居残りだな。メリオルを1人にするワケにも行かねえ」

対し、空時夫婦はパス。まだ毒が残っているせいで少し顔色の悪いメリオルさんに、その護衛という形でレオさんが付き添うのだろう。

「精霊さん達は どうする？」

「あ？ 行くに決まってるだろ」

「同行します」

「行かない理由もありませんしね」

『ピピ』

『マイレディを危険から守るのが仕事なので』

『ボクも行くよ』

順に『ゴーズ』、『カイエン』、『ギアフレーム』、『ピースキーパー』、『ダーク・ヴアルキリア』、『フレイヤ』。

『私は2人から離れる訳にも行きませんからね。ここに残ります』

一方で『キーマイス』のメイは居残り。まあ、マスターを放っておく訳にもいかんだろうし。

「決まりだな。それじゃ、これを見てくれ」

「これは？」

「この鉱山の路線地図だ。さっきの詰め所から一枚拝借した」

懐から俺が取り出したのは、鉱山に縦横無尽に張り巡らせてあるトロツコの線路図。

「現在地はここ、そしてラストの入って行った坑道の入り口はココ」

「ふむふむ」

「この路線は1周してここに戻って来るタイプだ。トロツコや、ラストの乗っていた列車にはエンジンがついている。所要時間は1周につき最低半時間」

この廃れた鉱山は、設備が中々整っている。

金属の錆具合からして、放置されてからざつと20〜25年。地図や、詰め所で目を通した資料を考えれば、かなり高い技術力を持った文明だったのだろう。燃料だつてまだ残っているし。だが、廃れた後の始末がされていない。

しかも石油系の燃料が放置されている。これじゃ誰かに使ってくれと言っているような物だ。

それはさて置き。

「トロツコ列車に乗ったつゝ事は、多分……」

「行き先に何かがあるのか？」

「恐らくはな。地図には操車場以外何も無いから、行き先に何かを隠していると見るべ

きだろう」

そう、誰が見ても罨だ。

でも行かなければ決着はつかない。

行くか、行かないか。

選択肢は2つに1つ、二者択一。

「黎は、どうするんだ？」

「行く。それ以外の答えは出さない」

近くにあったトロツコを1つ、線路に乗せる。サビてはいるが、油を差せばまだ動くだろう。

「そう言うと思ったよ。俺も参戦だ」

「私も」

「僕も」

「オーケー」

更に3つ、トロツコを追加。放置してあった燃料を入れて、整備用の油を差す。

ギシギシと鳴っていた煩い音が収まる。オツケー、行けるぜ！

と、その前に。

「プロテクター、展開」

掌に小さな光の玉を生み出す。

優しい白い輝きを持つそれは、ライ達の体に溶け込んで行った。

「これは？」

「プロテクター。隕石が衝突しても死なないバリアだ。連中の使うカードは、まあ俺の記憶を見たから分かると思うが、かなりえげつない上に物理的なダメージを伴う。それをしていないと、大型ダメージ発で死ぬ」

これは誇張じゃない、事実だ。

何度も連中の攻撃を受けた事があるから分かるが、あの衝撃は比べ物にならないレベルの物だつてある。生身で食らえば、確実に致命傷だ。

「死ぬって……」

「どうした、怖気付いたか？ 今ならまだ引き返せるが？」

「だ、誰が！」

ライが怒鳴り返す。なまじ闇のゲームを経験した事があるから、死の感覚を知っているんだろう。

「なら、行くんだな？」

「当然だろ！」

「強がりなら止めておけ。本気で死ぬぞ。お前がこれまで経験した事のある闇のゲーム



とは文字通り桁が違う。一撃一撃が瀕死クラスだ。下手な負けず嫌い根性で行くと、後悔しながら死ぬぞ?」

「つ、だがお前は、それに行くんだろ!」

「当然。俺の義務だ」

「だったら俺の意見は変わらねえ。お前1人行かせるワケにはいかねえよ!」

「どうやら、ライは本気のような」

視線をアルフとエルファイに向ければ、2人も頷く。レオさんとメリオルさんもだ。

「つたく、自殺志願者共が。」

「なら、俺がフォロー入れるつきやねえか。いざとなれば俺が守るし、ライ達だってそ

うホイホイやられるわけでも無いだろう。」

「……彼らには家族がいる。」

「ライには恋人と弟と親が。」

「アルフには兄と親が。」

「エルファイには恋人と親代わりの人が。」

「レオさんには妻と子が。」

「メリオルさんには夫と子が。」

この家族を壊しちゃならない。もう彼らは、1つの幸せの形を成しているんだから。」

何としても、守るんだ。  
例えこの命に、替えてでも。

「じゃ、行つて来るよ」

「行つてきます！」

「行つてきます」

「気をつけてな」

「ちゃんと帰つて来てね」

トロッコのエンジンを調整し、乗り込んだ俺達4人。

両親に軽い挨拶をして、ライ達はトロッコを動かし始める。

俺もトロツコのレバーを倒して、ブレーキを解除しようとして……。

「黎の坊主」

レオさんに呼び止められた。

レバーにかけた手をそのままに、俺はレオさんの方へと振り向く。

「何でしょう?」

「お前の事だから、きつと死んでもライ達を守るとか言うんだろう。だが、それは止める」

「……」

「あいつらはそんなヤワじゃねえよ。それに、仮にお前が死ぬ事であいつらが生きても、あいつらは良い顔しねえと思うぜ?」

「そうね。どうせなら、貴方も一緒に帰って来なさい」

レオさんに続くメリオルさん。

……………。

「貴方達は、恨まないんですか?」

「恨まない? 何をだ?」

「俺の事を、ですよ」

「何故?」

「俺が、貴方達家族を、死ぬかも知れない戦場に巻き込んだ。特に、メリオルさんはもう少しで死ぬかも知れなかったし、ライ、アルフ、エルフィはこれから過酷な戦いに赴く。仮にも家族であり、貴方達の子だ。普通なら、俺を恨むモノだと思うのですが？」

それが正常だろう。娘同然のエルフィに、実際にメリオルさんがお腹を痛めて生んだライとアルフ。

俺が同行するとは言え、あの3人は、或いはこれから死ぬかも知れないんだ。心穏やかでなんていられないだろう。

レオさんはそれに対して首を横に振った。

「お前の言いたい事はよく分かる。でもよ、このまま放って置いても、遠くない内に俺らの世界も危ないんだろ？ だったら、ここで止めるべきだろうよ。」

……本当は俺も行きたかったんだが、メリオルを1人にするワケにもいかねえしな」

.....

「だから、ライ達をお願いね、黎くん。4人揃って、ちゃんと帰って来るのよ？」

「……分かりました」

そこまで言われちゃ、死ぬ訳にもいかないな。

ま、努力はしましょうか。

俺は居残り組の2人に頭を下げて会釈すると、レバーを倒して、トロツコを出発させ

た。

S I D E : 無し

——操車場

坑道に入る事2分、薄暗い洞窟の先にあつた開けた場所に、黎は到着した。先に到着していたラストを始め、ライ、アルフ、エルフィの視線が彼に向く。

「遅いぞ、何してたんだよ」

「悪いな、ちよいとした野暮用だ」

それより、と黎はラストを睨みつけた。

「おつ始めようぜ、ラスト。世間話をしに来たワケでも無いんでな」

相も変わらず、邪神の護衛からは吐きそうなくらい不愉快な存在感が流れ出しているが、好い加減黎もそれに慣れて来ていた。

ディスクが起動し、レーンに沿ってエッジが動く。デッキを差し込みライフカウンターをONに。

「あらあら、せつかちねえ？ 嫌われるわよお？」

「元より人からは嫌われている。今更気にするモンでも無いさ」

「あつそう」

じゃ、独り寂しく死になさい？ ラストの言葉と共に、彼女の腕に漆黒のデュエルディスクが生み出された。ジユクジユクとした気味の悪い闇が原材料なのも毎度の事である。

「安心なさい、すぐに沢山の人を送ってあげるから寂しくないわよ？ ああ、でもアナタは化物なんだから、どの道敵が増えるだけよねえ？」

「不愉快な奴だ」

「全くだね」

こめかみを引き攣らせてライとアルフがディスクを展開する。

ライの後ろにはあの世から来た2人の剣士が。

アルフの後ろには赤と橙の意思あるマシンが半透明で浮かぶ。

「第一、死なせやしねえよ。俺達がいるんだからな！」

その横でエルファイもディスクを展開した左腕をラストに突き付ける。

「それに、私達、メリオルさんを撃つた事、まだ恨んでるって事をお忘れなく！」

こちらもラストを睨んでいる。

背後には、2人の天使。

その全ての視線を全身に受けながら、ラストは不気味に笑い――

「ふふふ、そう。そんなにワタシが恨めしいなら、ワタシに勝つ事ね！」

彼女の乗った列車が唐突に走り出した。

『な!?!』

慌てて4人もそれを追いかける。時速は30キロも無いだろうが、それでもそこそこの速度はあるだろう。

幸いにもすぐに追いついたが、ラストは操縦席にはおらず、何故か屋根の上に立っていた。

「フフフ、よく聞きなさい人間！ このままワタシとデュエルしてもらおうわよ！」

「何だと!?!」

「大して速く無いとは言え、この走行中のトロッコに乗ったままでか!?!」

「嫌なら構わないわよ? どこかでレーンを変えて適当なトコに逃げるだけだから!」

「ツ、やってやろうじゃねえの！」

このまま逃がす？ 冗談にも程があった。黎にとつては、ここで受けない、取り逃がすという選択肢は無かった。ここで逃がしたら遅れている邪神復活のアドバンテージが削られてしまうからだ。

「俺はこの誘いに乗ろうと思う。お前らは？」

「俺も乗った！ 面白そうだ！」

「僕も！ このまま逃がすのも何だしね！」

「なら私も同意しておく。あのトリガーハッピー、ぶっ飛ばしてやる！」

決まりだった。

「受けて立つぜ、ラスト！」

「フフ、ならここがお前らの死に場所よ！ 良い女に殺されるんだから、感謝なさい！」

「ほざけ！ 逆にテメエの墓場にしてやる！」

「僕達の未来を、壊させはしない！」

「良い女が何なのか、お前に教えてやる！」

『デュエル！』



## SIDE : 黎

デツキから全員、カードを5枚引く。

これで5回目の護衛との戦い。奴らが無茶苦茶なカードを使つて来る事ぐらい、好い加減理解している。そして、その對抗策も、頭の中でできている。

だが、それを続けるには、この体はそろそろ限界だ。

でも、構わない。都を助けて、世界を救う。1人の命と引き換えで、沢山の命が助かる。なら、1を切り捨てるのは間違いだらうか？ 否。切り捨てない方が、寧ろ間違いだと言えるだろう。

だが、もしも天秤の皿に乗った両方の命を助けたいと思うなら？

何かを捨てなければ、何も手に入らないのがこの世の理ならば、捨てられる物は1つしか無い。

右の皿には、都の命。

左の皿には、世界の未来。

両方、助けたい。

だったら、捨てられる物は、ただ1つ。



—  
俺下らないの、命ゴミだ。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 60 : デス・トロッコ・ゲーム ★

SIDE : レオ

あいつらが消えて行った坑道の先へと視線を移せば、そこにあるのは暗闇ばかりだ。対し、その近くの小屋にあった古ぼけたTVには、坑道を映す監視カメラの映像。そこでライディングデュエルよろしく、5人がデュエルを始めた。

正直、不安が隠せない。

黎の奴に任せたとはいえ、あつちは戦場みたいなモンだろうからな……。きっと、戦地に子を送り出す親の気持ちってのは、こんな感じだったんだろう。

「ライ、アルフ、エルファイ……」

「心配？」

「ああ……」

俺も行くべきだったのではないか。さつきからその疑問が浮いては消える。

駄目だ。俺はここに残るべきだ。メリオルの毒はまだ抜けて無い。こいつをここで

独りにしたら、何かあっても対応できない。

だが、あつちも心配だ。

黎は言っていた。「天秤の両方の命を助けたいのなら、自分の命を投げ出せば良い」。

つまりそれは、あいつが犠牲になって全てを救うっつゝ事だ。

黎、頼むから無茶な真似は止めてくれよ……。

犠牲が出る勝ち方なんて、気分が悪い。

S I D E : 黎

『デュエル！』

ラストVS黎&ライ&アルフ&エルフィ

LP 16000 VS LP 4000×4

トロツコに乗って始まったデュエル。

ルールはこれまでと同じ。だが、不確定要素が1つ、混ざって来た。トロツコだ。これが吉と出るか凶と出るか……。

ライのデッキは「悪魔族」。パワー&クラックを主軸にした、押せ押せゴーゴーな、正に一本気な彼をよく現わしているデッキだと言える。サポートカードも豊富だ。

アルフは逆に「マシンナーズ」を中心に添えた「機械族」。馬力と底力で押し込むが、緻密な戦術が求められる。冷静な彼向きだ。

エルフィは勿論「天使族」だ。パーミッション、ビートダウン、バーンと種類に事欠かない。反面、デッキの構築には手を焼かされる。底の読めない彼女らしい。

俺はパワータイプデッキ。だが、トリッキーな動きをする面も持ち、相手を縦横無尽に翻弄する。

ターンの周りは当然ラストから。以降、走り出したレールを右から順に、俺↓アルフ↓エルフィ↓ライ。5本あるレールの内、真ん中にラストが少し先行する形で走っている。

膝まで伸びた長い黒髪に、妖艶な黒の瞳。リングの様に赤い口。一見美女、だがその美貌の中に詰まっているのは、破滅だ。

攻撃できるのは2回目のラストのターンから。味方モンスターへの攻撃や、伏せカードのオープンはできないが、効果の適用は可能。

「ワタシのターンから行くわよ、ドローー！」

先攻ワンキルさえなければ、こいつは十分に戦える相手だ。こいつはあのグラトニー

よりも弱い。なら、決して勝てない相手では無い、はずだ。

さあ、どう来る？

「ワタシは『ガトリング・オーガ』を召喚よお！」

『ドオラア、ハハアッ！』

ガトリング・オーガ：ATK 800

「な!?!」

「『ガトリング・オーガ』だとお!?!」

ガトリング・オーガ（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星3

炎属性／悪魔族

ATK 800 / DEF 800

自分の魔法&罠カードゾーンにセットされたカード1枚を墓地へ送る事で、相手ライフに800ポイントダメージを与える。



最初にラストが呼び出したのは、ガトリングガン腹部に搭載した、赤いコートを羽織った鬼。左腕と肩の間に弾丸をセットするベルトがついている。ちなみにガトリングガンは複数ある砲身全てから同時に弾が発射されるのでは無く、回転して順繰りにそれぞれが1回身が1回転につき1回弾を撃ち出す。砲身が焼き付くのを防止するためだ。

こいつはセット状態の魔法・罠を墓地に送る度に800ダメージを相手に与えるというワンキルバーンモンスター。まさか……。

「“騎士”の魂は気付いたようねえ！」

「その5枚の残り手札、よもや……！」

「その通り！ 残った手札は全て魔法と罠よお！」

「何だ?!」

「そんな！」

やっぱりか！

ニタア、と笑うラスト。あれは妖艶なんてモノじゃ無い。相手の破滅に喜ぶ、サディストの笑いだ！

「さあて、弾をセットよおっ！」

ジャキジャキジャキジャキジャキ！ ラストがディスクにカードを伏せ、フィールドに同じ枚数、5枚のカードが伏せられる。

それと同時に、赤いコートの鬼にも弾丸が40発の弾丸が8発ずつ、5回に分けて装填された。

「さて、『ガトリング・オーガ』の能力でも、このターンに仕留められるのは1人が限度。誰から殺そうかしらあ……？」

チツ、手札にワンキル防止の策は無い。このターン、誰かがやられちまう。

品定めするように動いていたラストの視線が、止まる。その視線の先には――

「決めたわ、死になさい！ 空時エルファイ！」

「クッ！」

まずい、エルファイがターゲットだ！

「全弾、発射よおおおおおおおっ！」

「エルファイ！」

「まず1人、狩ったあ！」

『ガトリング・オーガ』の右手がハンドルに添えられ、そのまま回される。

バラバラバラバラバラバラバラ！ 回転する砲身が火を吹き、40発もの弾丸が

飛来して来た。

「マズい、これを喰らったらエルファイのライフが尽きてしまう！」

「死になさい！」

「そうは行かない！ 手札の『ハネワタ』の効果発動！ このカードを手札から捨てて、このターン中に受ける全ての効果ダメージを0にする！」

エルフィが1枚の手札を捨てる。その途端、墓地から光が発せられ、その光の中から、小さな羽根を生やした綿の塊のようなモンスターが現れた。

ハネワタ（チューナー・効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 2000／DEF 3000

このカードを手札から捨てて発動する。

このターン自分が受ける効果ダメージを0にする。

この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

現れた綿の天使は、自身の体を大きく膨らませて弾丸を防ぐ。ふかふかの体に弾丸は1発残らず受け止められ、勢いを殺されて地面に落ちた。

「あ、危なかった……！」

「チツ、運が好いわね……！ ワタシは墓地の『ブラックコインケース』の効果を発動！

墓地のこのカードを除外し、カードを2枚ドロー！」

ブラックコインケース（オリジナル）

【通常罫】

フィールド上に存在する永続罫を1枚デッキに戻して発動する。

デッキからカードを1枚ドローする。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを2枚ドローできる。

手札を補充されたか……。

ハンドレスの状況なら『ガトリング・オーガ』の攻撃力は僅か800、恐れるには足りない数値でラストもすぐに倒せるだろう。だが手札を補充された今、この考えは引つ繰り返さざるを得ない。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

ラスト：LP 16000

手札：1枚

フィールド

：ガトリング・オーガ（ATK 800）

：伏せカード1枚

「1ターン目からえげつない事してきやがるぜ……。俺のターン、ドロー！」

引いたカードは、『サンダー・ドラゴン』！

「俺は手札のモンスター、『サンダー・ドラゴン』のモンスター効果発動！ このカードを手札から捨てて、同じ名前のモンスターをデッキから2枚までサーチ！」

サンダー・ドラゴン（効果モンスター）

星5

光属性／雷族

ATK 1600 / DEF 1500

自分のメインフェイズ時に、このカードを手札から捨てて発動する。

自分のデッキから「サンダー・ドラゴン」を2体まで手札に加える。

緑の龍が描かれたモンスターカードを手札から捨てる。同時にディスクが自動的に

デッキをサーチし、同じ名前のカードを吐き出した。同名カードがデッキに1枚でも使えるという便利なモンスターだ。

本来だったら『融合』を使いたいんだが、手札に無い……。こうなると、レベル5とというのが逆に足枷だ。【サンダー・ドラゴン】系統のカードはEXデッキに入れてないな。

「更に『神獣王バルバロス』を妥協召喚！ このカードはリリース無しで召喚できるが、その時このカードの攻撃力は1900となる！」

『グガアアアアアアアッ！』

神獣王バルバロス（効果モンスター）

星8

地属性／獣戦士族

ATK 3000／DEF 1200

このカードはリリース無しで通常召喚する事ができる。

この方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は1900になる。

また、このカードはモンスター3体をリリースして召喚する事ができる。

この方法で召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。

神獣王バルバロス : ATK 3000 ↓ 1900

光のゲートを潜って、獅子の顔と下半身を持つ騎士が現れる。右手には鋭い赤色の突撃槍を、左手には丸い盾を構えている。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

黎 : LP 4000

手札 : 5枚 (内2枚は『サンダー・ドラゴン』)

フィールド

: 神獣王バルバロス (ATK 1900)

: 伏せカード1枚

取り敢えず、これが現状打てる最善の布陣だ。

残りは皆に任せるしかない。

「今度は僕のターン! ドロー!」

続いてアルフのターン。機械族の動きは多岐に渡る。さあ、どう動くか、見せてくれ

!

「まずは『カードガンナー』を召喚！」

『ブブブブブブブ！』

赤い胴体に宇宙服のヘルメットの機械が、キヤタピラを動かしながら現れる。両腕が銃になっており、墓地肥し、パワーアップ、ドロートと多彩な能力を備える素晴らしいモンスターだ。

カードガンナー（効果モンスター）

星3

地属性／機械族

ATK 400 / DEF 400

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。

このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする。

また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。



カードガンナー：DEF 400

「このカードはデツキの上からカードを3枚まで墓地に送り、その送った枚数1枚につき、500ポイント攻撃力がアツプする！ 僕は3枚のカードを墓地に送って、『カードガンナー』の攻撃力を1500ポイントアツプさせる！」

『ブブブブブブ』

カードガンナー：ATK 400↓1900

アルフのデツキが削られ、その分だけ小型マシンにエネルギーが充填される。

攻撃不能な1ターン目、しかも守備表示なら一見すると無意味な行動。だが、墓地にカードを送るという目で見れば、この行動には十分意味がある。

「更に魔法カード『アイアンコール』を発動！ 自分の場に機械族モンスターが存在する時、墓地のレベル4以下の機械族モンスターを1体、効果を無効にして特殊召喚する！

蘇れ、『レアル・ジエネクス・コーディネイター！』

アイアンコール

## 【通常魔法】

自分フィールド上に機械族モンスターが存在する場合に発動できる。

自分の墓地のレベル4以下の機械族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズ時に破壊される。

地面に紫の魔法陣が生まれ、その中心から紫のUFO染みた機械が現れる。よく見れば浮遊している機械の上に、別の人型の機械が乗っているようだ。

リアル・ジエネクス・コーディネイター（チューナー・効果モンスター）

星2

闇属性／魔法使い族

ATK 2000／DEF 1000

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、手札からレベル3以下の「ジエネクス」と名のついたモンスター1体を特殊召喚することができる。

「更に自分の場にチューナーが存在する事で、墓地の『ポルト・ヘッジホッグ』を特殊召

喚！」

『ミイツ！』

ボルト・ヘッジホッグ：DEF 800

「強いつて解つてるんだ、最初から手加減無しで行くよ！ レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』とレベル3の『カードガンナー』に、レベル2の『リアル・ジェネクス・コーダイネイター』をチューニング！」

線路を突き抜ける風の中、紫の円盤が2つの星に変わり、天へと昇る。昇った星は幾何学模様の緑の輪となって一列に並んだ。その中心部をボルトを背負ったハリネズミと赤の銃撃小型マシンが潜り、輪郭線を残して透明になる。透明になった体からは、自身のレベルと同じ数だけ白色に輝く星が生まれ、星もまた一列に並んだ。

「地、炎、光、三つの力をその身に秘めるジェネクスよ。その秘めたる力を今解放せよ！」

☆2+☆2+☆3||☆7

「シンクロ召喚！ 出でよ、『A・ジェネクス・トライフォース』！」

『トオオオオオオオオオ、ハアッ!』

A・ジエネクス・トライフォース（シンクロ・効果モンスター）

星7

闇属性／機械族

ATK 2500 / DEF 2100

「ジエネクス」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの属性によって、このカードは以下の効果を得る。

●地属性：このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫カードを発動できない。

●炎属性：このカードが戦闘によってモンスターを破壊した場合、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

●光属性：1ターンに1度、自分の墓地の光属性モンスター1体を選択して、自分フィールド上にセットできる。

光の柱から飛び出したのは、淡い水色の機体。橙色のバイザーで顔を覆い、右腕には

3つの球体が嵌め込まれている三角形のアームが装着されている。

『A・ジエネクス・トライアーム』はシンクロ素材にしたチューナー以外のモンスター属性によって効果が変化する。素材となった『ボルト・ヘッジホッグ』と『カードガンナー』の属性は地。地属性で得られる効果は攻撃する時に相手の魔法・罠を封じる！  
1枚カードをセットして、ターンエンド！」

アルフ：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：A・ジエネクス・トライフォース（ATK 2500）

：伏せカード1枚

「今度は私のターン、ドロロー！」

三番手はエルフィ。クセのある天使族をどう扱うかな。彼女だけは初期手札5枚が4枚からのスタート。天使族は手札消費が荒い面があるから、行動が制限されてなければ好いんだが……。

「永続魔法『神の居城―ヴァルハラ』を発動！ 1ターンに1度、私の場にモンスターが

存在しなければ、手札から天使族モンスターを1体、特殊召喚できる！」

神の居城―ヴァルハラ

【永続魔法】

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「私はこのモンスターを特殊召喚する！ 華麗なる金星よ、この場に降臨し光輝け！」

『The splendid VENUS！』

The splendid VENUS：ATK 2800

バサツ！ 金色に輝く翼と鎧が光と共に姿を現し、神々しい輝きを周囲に撒き散らす。プラネットに名を連ねる金星の天使が舞い降りた。

『VENUS』が場に存在する限り、天使族以外のモンスターは攻守が500下がる！」

ガトリング・オーガ：ATK 800 ↓ 300

神獣王バルバロス：ATK 1900 ↓ 1400

A・ジエネクス・トライフォース：ATK 2500 ↓ 2000

The splendid VENUS (効果モンスター)

星8

光属性／天使族

ATK 2800 / DEF 2400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する天使族以外の全てのモンスターの攻撃力と守備力は500ポイントダウンする。

また、自分がコントロールする魔法・罫カードの発動と効果は無効化されない。

天使族では実質攻撃力3300のモンスターとして主力となる1枚だ。蘇生その他に制限は無いから、墓地に落としても良し、今みたいに手札から出しても良しの良カードだ。

……っつて！

「エルファイ！ 俺達のモンスターまで弱体化してるぞお！」

「あ……、ゴメン。ついうっかり……」

本日判明、『VENUS』はタッグなんかじゃ微妙に相性悪い。

ああ、俺の『バルバロス』がリクルーターレベルにまで……。

「えと、カードを1枚セットして、ターンエンド！」

エルファイ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：The splendid VENUS (ATK 2800)

：神の居城―ヴァルハラ (永続魔法)、伏せカード1枚

「あっちゃあ……」

頭に片手を当てる、渋い顔のエルファイ。

「珍しいな、エルファイがこんなミスするなんて」

「ゴメン、こういう形式ってあんまりやった事無くて……」

「ま、挽回すれば良いさ。まだ始まったばっかだろ？」

「……うん。ありがとう、ライ」



「おう。俺のターン、ドロロー！」

ライの励ましが効いたのか、エルフィの顔が明るさを取り戻す。

いやまあ、フィールドの状況は変化しないんだがな？

「俺は『二重召喚』を発動！ このターン、俺はモンスタを2体召喚できる！ その効果で、『ダーク・リゾネーター』と『デーモン・ソルジャー』を通常召喚！」

『ヘエツッ！』

『ハアツッ！』

ダーク・リゾネーター：ATK 1300 ↓ 800

デーモン・ソルジャー：ATK 1900 ↓ 1400

「レベル4悪魔族の『デーモン・ソルジャー』に、レベル3悪魔族の『ダーク・リゾネーター』をチューニング！」

『ヘツヘエツッ！』

『ファッ！』

カアン！ と悪魔の持った音叉が鳴り響き、3つの緑のリングに変わる。一列に並ん

だそのリングの中心を、外套を羽織った紫の悪魔が潜り抜ける。  
「天頂に輝く死の星よ、地上に舞い降り生者を裁け！」

☆3＋☆4＝☆7

「シンクロ召喚！ 降臨せよ、『天刑王ブラック・ハイランダー』！」  
『ホオアアアア、ハアアッ！』

天刑王 ブラック・ハイランダー：ATK 2800↓2300

光の柱から姿を現すのは、巨大な鎌を手にした白銀の大男。黒い鎧と外套を身につけ、禍々しい大鎌を手にするその姿は、まさに死兆星。

シンクロと装備魔法に対するメタ能力を持つ、レベル7では最上級攻撃力を持つ半面、悪魔族で素材が縛つてあるという難点持ち。しかし、ライのようにデッキそのものが悪魔族で構築されているのなら、それも苦にはならないという事か。

天刑王ブラック・ハイランダー（シンクロ・効果モンスター）

星7

闇属性／悪魔族

ATK 2800 / DEF 2300

悪魔族チューナー＋チューナー以外の悪魔族モンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いにシンクロ召喚をする事ができない。

1ターンに1度、装備カードを装備した相手モンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターに装備された装備カードを全て破壊し、破壊した数×400ポイントダメージを相手ライフに与える。

「俺はこれで、ターンエンド！」

ライ：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：天刑王ブラック・ハイランダー（ATK 2300）

：魔法・罨無し

一周、これで回った。再びラストのターンになる。

取り敢えずの布陣は出来上がった。だが、これで安心できるワケが無い。それが分からない程、俺は経験が浅くない。

「ワタシのターン！」

だが、ラストの手札は今2枚。ドロースーツでも無い限り、取れる行動は限られているはずだ。

……説明フラグだったか？

「ワタシは魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを2枚ドロ！」

アウチ!?

「更に伏せていた速攻魔法『グラティス・リソース』を発動！ 通常ドロ以外でドロした時、更にカードを4枚ドロ！」

「何だ?!？」

「そんな!？」

うぎゃあ……。スマン、俺がフラグを立てたばかりに……。……。

グラテイス・リソース（オリジナル）

【速攻魔法】

自分が通常ドロー以外でドローした時に発動できる。

デッキからカードを4枚ドローできる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、「グラテイス・リソース」以外の除外された、または墓地に存在するカードを3枚選択してデッキに戻し、カードを2枚ドローできる。

この効果はこのカードが墓地に送られた次の自分のスタンバイフェイズまで使用する事はできない。

「フフフフフ、これで手札は7枚よお……」

「クソ……」

ドローフェイズにはたった2枚だった手札が、瞬時に5枚も補強された……。これだから連中の使うカードは……！

「魔法カード発動、『バニツシュ・ブラツシュ』！ カードを1枚ドローし、ワタシの場のモンスター1体を破壊する！」

「自分で自分のモンスターを潰すだと……？」

「『ガトリング・オーガ』を破壊！」

バニツシユ・ブラツシユ（オリジナル）

【通常魔法】

デッキからカードを1枚ドロ―し、自分の場に存在する最も攻撃力の高いモンスターを1体破壊する。

墓地に存在するこのカードを除外する事で、除外した時に自分の場に存在する全てのモンスターは以下の効果を得る。

●このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の場のモンスターは「攻撃宣言できない」、「攻撃できない」カードの効果を受けない。

バギャン！ とガトリングガンを装備した赤コートの鬼が消える。

1枚ドロ―のために自陣のモンスターを態々潰すとは考え辛い。となると、ラストの目的は破壊の方にある可能性が高い。

しかも、奴の場にカードは0枚。となれば手札から発動する効果だ。自分の場にモンスターがいては不都合なのか、それとも破壊がトリガーなのか……、っ！

「まさか……!?!」

「何がまさかなんだ、黎!？」

「気が付いたようね、“騎士”の魂? そう、ワタシはこのカードを特殊召喚するわあ  
!」

ラストが見せたカードには、黄色の機械が描かれていた。

ずんぐりした人型機械で、胸部には緑のエネルギーコアが除く窓が取り付けられている。魚のような左手にはビーム砲が備えられ、頭部では赤いライトが光っている。

「このカードは、ワタシの場のモンスターがカード効果で破壊された時、手札から特殊召喚できる! 来なさい、『機皇帝グランエル インフイニティ ∞』!」

「な!？」

ラストの呼び声と共に、橙色の機械が光のゲートを潜って現れる。

「『グランエル ∞』!」

ずんぐりした魚の様な胴体が。

「『グランエル トップ T』!」

エビの様に曲がった頭が。

「『グランエル アタック A』!」

エンジェルフィッシュみたいな平たい魚の様な銃の左腕が。

「『グランエル ガード G』!」

鮭の如く鋭い魚の様な盾の左腕が。

『グランエル キャリアー C』！』

貝の様な平たい脚が。

「起動しなさい、『機皇帝グランエル∞』！」

『ジュイイン！』

そして5つのパーツが合体し、巨大な戦車の様なマシンへと成り変わった。

絶望の戦士、アポリアに因縁のある機械族モンスター……！ 幼少期に家族を殺し、青年期に恋人を殺し、そしてZONEとの戦いで『アフターグロウ』をドロウすれば勝てた場面で引いた、皮肉にも彼自身をも殺したカード！

機皇帝グランエル∞（効果モンスター）

星1

地属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが効果によって破壊され墓地へ送られた時のみ手札から特殊召喚できる。



このカードの攻撃力・守備力は自分のライフポイントの半分の数値分アップする。

1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

また、自分のメインフェイズ時に、このカードの効果で装備したモンスター1体を自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚できる。

よりにもよって、『グランエル』と来たか……。火力が不安定ながらも、爆発的なパワーを秘めたモンスターだ。これは、厳しいな。

『『グランエル』の攻撃力と守備力はワタシのライフの半分になるわ！ よってその攻守はあ……』

機皇帝グランエル∞ : ATK 0 ↓ 8000 ↓ 7500 / DEF 0 ↓ 8000 ↓ 7500

「攻撃力7500だと!?!」

「これじゃ誰かがやられちゃうよ!」

確かに、エルフィの言う通りだ。

彼我の攻撃力差は、最大で6100（俺の『バルバロス』）。最低でも4700（エルフィの『VENUS』）。ライフ4000じゃ耐えられない。

だが、俺には伏せた罠カード『エレクトロン・プレート』がある。

このカードは相手の攻撃宣言時に手札の雷族モンスターを1体捨てて、攻撃力が守備力の低い方の数値より高い攻撃力を持った相手モンスターを全て破壊できる。これなら『グランエル』の攻撃にチエーンして破壊できる！

「更にワタシは速攻魔法『機皇大進撃』を発動お！ 自分の場に『機皇』と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚された時、手札の『機皇』と名のついたモンスターを任意の数だけ、召喚条件を無視して特殊召喚できる！」

「何だ?!」

「さあ来なさい、『機皇帝スキエル∞』、『機皇帝ワイゼル∞』、『機皇神マシニクル∞』！」

機皇大進撃（オリジナル）

【速攻魔法】

自分の場に「機皇」と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚された時に発動できる。手札から任意の数だけ、「機皇」と名のついたモンスターを召喚条件を無視して特殊召

喚で  
きる。

このカードを発動するターン、自分はデッキ・エクストラデッキ・墓地からモンスターを特殊召喚できない。

ラストの掛け声と共に、青と白の機械部品がそれぞれ現れる。

最初は青だ。

「『スキエル∞』！」

フクロウの頭の様な中枢が。

「『スキエルT』！」

小型の鳥の様な頭が。

「『スキエルA』！」

クジャクの様な主砲が。

「『スキエルG』！」

ダンゴムシの様な尻尾が。

「『スキエルC』！」

ナナフシの様な翼が。

「合体せよ、『機皇帝スキエル∞』！」

『キイイイイイイイイイイイイイイイイイッ!』

そして5つのパーツが合体し、巨大な始祖鳥を思い浮かべるような鳥型マシンへと変態した。

機皇帝スキエル∞（効果モンスター）

星1

風属性／機械族

ATK 2200 / DEF 2200

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが効果によって破壊され墓地へ送られた時のみ手札から特殊召喚できる。

1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外の自分のモンスターは攻撃宣言できない。

また、このカードに装備されたモンスター1体を墓地へ送る事で、このターンこの

カードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

機皇帝スキエル∞ : ATK 2200 ↓ 1700

そして白のパーツも順に現れ始める。

『ワイゼル∞』！』

鳥の頭の様な中枢が。

『ワイゼルT』！』

蛇の様な頭部が。

『ワイゼルA』！』

鳥の様な刃の右腕が。

『ワイゼルG』！』

陸亀の様な盾が。

『ワイゼルC』！』

ウサギの様な脚部が。

「出撃なさい、『機皇帝ワイゼル∞』！」

『ギュオン！』

そして5つのパーツが合体し、剣と盾を持った人型マシンに変形した。

機皇帝ワイゼル∞（効果モンスター）

星1

闇属性／機械族

ATK 2500 / DEF 2500

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが効果によつて破壊され墓地へ送られた時のみ手札から特殊召喚できる。

1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外の自分のモンスターは攻撃宣言できない。

また、1ターンに1度、相手の魔法カードの発動を無効にし破壊する事ができる。

機皇帝ワイゼル∞：ATK 2500 ↓ 2000

「そして降臨なさい、『機皇神マシニクル∞』！」  
『ヴィイン!』

最後に出て来たのは、白、青、茶の3つの卵型マシンを中心に構成された、超巨大マシン。ビームキャノンの腕に、『ワイゼル∞』、『スキエル∞』、『グランエル∞』の様なエネルギーギーコアの覗く胸部の窓。その大きさは他の3体とは比較にならない程に巨大。高層ビル並みの高さがある。

機皇神マシニクル∞ : ATK 3500

「ば、バカナ……!?!」 // 機皇帝 // を1度に召喚して並べたなんて……!?!」  
『ワイゼル』と『スキエル』は自分の場を開ける必要がある以上、同時に並べる事は基本不可能なのに……!?!」

機皇神マシニクル∞ (効果モンスター)

星12

光属性 / 機械族

ATK 4000 / DEF 4000

このカードは通常召喚できない。

手札から「機皇」と名のついたモンスター3体を墓地へ送った場合のみ特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。

また、自分のスタンバイフェイズ時に1度だけ、このカードの効果で装備したモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

たった1ターンで場に並ぶ、4体の機械の巨兵。だが、これだけで終わらなかつた。

「更にワタシの場に『機皇』と名のついたモンスターが3体以上存在する事により、『機皇神龍アステリスク』を特殊召喚！」

『キュウウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

巨大な咆哮と共にその姿を現す、白色の龍。名前の通り顔についた「アステリスク\*」の形の窓



から「機皇」モンスター特有のエネルギーコアが覗く。頭に生えた二本の触角が、走行する列車の風で揺れる。

『機皇神龍アステリスキ』の攻撃力は、ワタシの場の機械族モンスターの攻撃力の合計値と同じになるわ。よってこのカードの攻撃力は……」

機皇神龍アステリスキ（アニメ効果）

星10

闇属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

自分フィールド上に「機皇」と名のついたモンスターが3体以上存在する場合に手札のこのカードを特殊召喚する事が出来る。

このカードの攻撃力は自分フィールド上に存在する表側攻撃表示の機械族モンスターの攻撃力の合計の数値となる。

相手はこのカード以外の機械族モンスターに攻撃できない。

このカードが破壊される場合、自分フィールド上に存在する機械族モンスター1体を墓地に送る事で破壊を無効にする。

このカードが表側表示で存在する場合、シンクロモンスターを特殊召喚したプレイ

ヤーは、1000ポイントのダメージを受ける。

ラストの場にいる『機皇』モンスター達の体からエネルギーが流れ、『アステリスク』に吸収される。

チツ、アニメ効果の方が……！ 奴のフィールドにいる『機皇』モンスターは4体、その攻撃力の合計値は……。

機皇神龍アステリスク：ATK 0↓14700↓14200

「こ、攻撃力14200だとお!？」

「バカな……」

「確かに機械族はパワーインフレが特徴だけど……!」

「こんな攻撃力のパワーインフレがあつてたまるかっ!」

……パワボンリミ解サイバーエンド以下の攻撃力だという事は置いておこう。

だが、例えばどれだけ高い攻撃力だろうと、いや、高い攻撃力だからこそ、俺の伏せた『エレクトロン・プレート』は効果を発揮する。

手札の『サンダー・ドラゴン』をコストにすれば、攻撃力1500以上の相手モンス

ターを殲滅できる。ヤツの場のモンスターは最低ラインは1700、十分だ。

「更に魔法カード『オーバーホール・ストーム』を発動！ フィールド上の全ての魔法・罠を破壊する！ 更に相手はこのカードに対してカードの効果が発動できず、発動ターンのバトルフェイズ中、墓地と手札で発動するモンスター効果は無効となる！」

「何だ?!？」

「そんな!？」

オーバーホール・ストーム（オリジナル）

【通常魔法】

フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

このカードの発動に対し、相手はカードの効果が発動できない。

相手はこのターンのバトルフェイズ中に手札・墓地で発動する効果モンスターの効果を発動できない。

ネジやボルトを巻き込んだ大嵐が吹き荒れ、俺達の場のカードを吹き飛ばす。ラストの場には魔法・罠カードが無い状態なので、痛手を負ったのはこちらだけになる。

「く、ううううううっ！」

「うわあああああああつー！」

「きやあああああつー！」

「うあああああああつー！」

列車、というよりも乗っているトロツコが風で煽られる。必死に飛ばされないようにと踏ん張り、どうにか飛ばされなかったものの、俺の『エレクトロン・プレート』、アルフの『聖なるバリアーミラーフォース』、エルフィの『ヴァルハラ』と『攻撃の無力化』が消し飛んだ。

「ふ、ふ、ふ、ふ……」

「くー……」

耳につくラストの嘲笑。

これで迎撃の手段を失ったか……。

エルフィが『オネスト』、ライが『バトルフェーダー』、アルフが『速攻のかかし』を握っていたとしても、これじゃあ……！

だが、ラストの連撃はまだ止まらない。

「そして手札から魔法カード『偽造認証コード』を発動！ このターンのエンドフェイズまで、相手フィールド上のモンスターをシンクロモンスターとして扱ううううううつー！」

「!？」

偽造認証コード（オリジナル）

【通常魔法】

相手フィールド上に存在するモンスターは、エンドフェイズまでシンクロモンスターとして扱う。

神獣王バルバロス：効果モンスター↓シンクロ・効果モンスター

The splendid VENUS：効果モンスター↓シンクロ・効果モンスター

なん、だと……っ！

まさか強制的に相手モンスターの種類を変更して来るなんて!？」

「そして、相手の場のシンクロモンスターを吸収よお！」

巨大マシンの窓が開き、コアから触手が伸びる。伸びた触手はこちらのモンスターの四肢を拘束し、内部へと引きずり込んで行った。

『ワイゼル』で『バルバロス』を吸収！」

『グガアアアアッ!』

『バルバロス』ツ!』

機皇帝ワイゼル∞ : A T K 2000 ↓ 5000

『スキエル』で『ブラック・ハイランダー』を吸収!』

『ゴガアアアアアッ!』

『ブラック・ハイランダー』!』

機皇帝スキエル∞ : A T K 1700 ↓ 4500

『グランエル』で『トライフォース』を吸収!』

『ギギギギッ!』

『トライフォース』まで!』

機皇帝グランエル∞ : A T K 7500 ↓ 10000

「そして『マシンニクル』で『VENUS』を吸収よお！」

『ク、ウウウウウウウウッ!』

『VENUS』……ッ!』

機皇神マシンニクル∞ : ATK 3500 ↓ 6800

機皇帝ワイゼル∞ : ATK 5000 ↓ 5500

機皇帝スキエル∞ : ATK 4500 ↓ 5000

機皇帝グランエル∞ : ATK 10000 ↓ 10500

クソッ、これでこっちの陣営は全滅か……っ!

「そして『アステリスク』の攻撃力も当然上がるわよお？」

「ぐ……っ!」

機皇神龍アステリスク : ATK 14200 ↓ 27800

「こ、攻撃力が2万を超えた!」

「そんな、事って……!?!」

「バカな……!! 『リミッター解除』も使わずに……!!」

「クソツッ!」

有りかよ、こんなの!?

「だが『ワイゼル』と『スキエル』は互いに自分以外のモンスターの攻撃を封印する効果がある。この状態では奴は攻撃できない」

「御生憎様ねえ! 墓地の『パニッシュ・ブラッシュ』の効果発動! 墓地のこのカードを除外する事で、除外した時に存在したワタシの場のモンスターは『攻撃できない』、そして『攻撃宣言できない』カードの効果を受け付けられない!」

「何っ!?!」

クソ、これで奴のモンスターは攻撃封じが利かなくなつたワケか!

「しかも、このターン俺達は手札と墓地のモンスター効果を使えない……!! 俺の手札に『バトルフェーダー』の様なカードはねえけど……。アルフ、エルフィ、黎!」

「僕も同じく。『速攻のかかし』は無いよ」

「残念だけど、私も」

「俺もだ。迎撃用のカードは無い」

俺の手札は4人の中で誰よりも多い5枚。だがその内2枚は『サンダー・ドラゴン』。実質俺の手札は3枚と言ってもいいかも知れない。そしてその3枚の手札の中に攻撃



反応のカードは無い。

『バトルフェーダー』は、アツキに入っているものの、まだ手札には来ていない。

ライ達もだ。そして仮に手札にそれがあっても、今は『オーバーホール・ストーム』の効果でそれを使う事はできない。

よって、俺達は巨大ロボの攻撃を迎え撃つ事はできない。

「覚悟はいいかしらあ？」

「くっ！」

よく言うぜ。出来てようがいまいが関係無いくせに！

「まあ、攻撃はするけどねえ！」

ほらやっぱり！

『ワイゼル』で空時ライ、『スキエル』で空時アルフ、『グランエル』で空時エルフィ、『マシニクル』で『騎士』の魂を攻撃い！」

こういう時ですら名前呼んでくれんのかい！

「スペリオール・シルバー・スラッシュ！」      // スカイ・カーペット・エクスペロード

「！」      // グランド・スローター・キャノン！」      // ザ・キューブ・オブ・デイスペアー

「！」

ラストの宣言と共に、無情な攻撃が降り注ぐ。



STORY 61：襲撃！ 悪夢の機械軍隊！ ★

SIDE：メリオル

「ら、ライ！ アルフ！ エルファイ！ 黎君！」

私は、自分の目で見た物が未だに信じられなかった。

夫と2人、毒がまだ体を動かすのに邪魔している体で、職員の小屋にあるTVを見ていた。別に面白い番組を見ていたわけじゃ無い。鉾山のそこかしこに過剰とも言える数の監視カメラから中継される、息子達のデュエルを見ていたのだ。

「く、あいつら……っ！ あのアマ……ッ！」

「そ、そんな……！」

私とデュエリストの一員。ライ達の実力は評価しているし、黎君だつて弱くない事は何となく分かる。下手に手加減すれば負ける確率の方が高い。

でも、彼らはたった今、ワンターンキルを喰らった。

3種類の“機皇帝”と2種類の“機皇神”が並ぶという余りにもあり得ない状況で。

黎君の記憶の中では、邪神の護衛は有り得ない程の反則カードを使って来た。まさかそれを使って、こんな早くに……！

「メリオル」

「何？」

「あいつに、勝てるか？」

「……分からない」

レオの頭の中は、きつともう敵討ちでいっぱいだと思う。久々に見た彼の激怒の表情。きつと私も、同じ感情が顔に出てるはず。

正直、勝てる気がしない。でも勝たなくちゃいけない。

闇のゲームの敗者は命を落とす。息子のためにも、娘のためにも、黎君のためにも、必ず！

許さない。あの女は絶対に！ 必ず潰す！

『待つて下さい、お二人とも！』

殺気を込めてデッキの調整に入ろうとした所で、レオの精霊、『キーマイス』のメイが制止をかけて来た。

何かしら？ 私達はこれから敵討ちの準備をしなくちゃいけないのだけれど？

『まだ4人は生きてます！』

……え？

「め、メイ、今何だって？」

「もう1度言ってくれないかしら？」

『ですから、ラストの攻撃では4人とも死んでません!』

小さな妖精の指差す先。そのTVのモニターでは、煙の中から傷一つ負ってない4人が、トロツコに乗って飛び出して来た。

## S I D E : 黎

煙を抜けた俺達は、服に付着した埃を払いながら前を向き直した。

バチバチとスパークキングする、半透明のグリーンのパリアが俺達をラストの攻撃から守ってくれたからか、砂埃は殆ど服についてないが。

「ば、バカな、一体何が……!」

ラストの驚愕の声。

ニヤリ、と俺は笑う。まだまだ運命の女神とかいうヤツは、俺達を見放したワケじゃ無いらしいな。

黎：LP 4000

手札：5枚（内2枚は『サンダー・ドラゴン』）

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罨無し

アルフ：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罨無し

エルフィ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罨無し

ライ : LP 4000

手札 : 3枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罠無し

ラスト : LP 16000

手札 : 1枚

フィールド

: 機皇帝グランエル∞ (ATK 105000)、機皇帝スキエル∞ (ATK 5000)、機皇帝ワイゼル∞ (ATK 5500)、機皇神マシニクル∞ (ATK 6800)、機皇神龍アステリスク (ATK 27800)

: 神獣王バルバロス (効果モンスター・『機皇帝ワイゼル∞』に装備)、天刑王ブラック・ハイランダー (シンクロ・効果モンスター・『機皇帝スキエル∞』に装備)、A・ジェネクス・トライフォース (シンクロ・効果モンスター・『機皇帝グランエル∞』に装備)、The splendid VENUS (効果モンスター・『機皇神マシニクル∞』に装

備)

場はさつきと同じ。ライフだって傷一つ付いてはいない。

まだまだゲームセットには遠いっつー事だ。

「黎、一体何が……？」

一番遠いライが、俺に聞いて来る。

まあ、こんなトリックを使えるのは俺ぐらいだと思っただろうが、正解だよ。

「破壊された俺の罨カード、『エレクトロン・プレート』の効果だ。このカードが相手のカード効果で破壊されたターン、両者が受ける全てのダメージを0にする事ができるんだ」

エレクトロン・プレート（オリジナル）（改訂版）

【通常罨】

（1）：相手モンスターの攻撃宣言時に、手札の雷族モンスターを1体選択して捨てて発動する。

その捨てたモンスターの攻撃力が守備力のどちらかを選択し、相手の場に存在する選択した数値よりも高い攻撃力を持つモンスターを全て破壊する。



(2) : このカードが相手のカードの効果によって墓地に送られたターン、お互いのプレイヤーが受けるダメージは0になる。

(3) : このカードが効果を発動した次の自分のターンのスタンバイフェイズに発動できる。

墓地このカードをゲームから除外し、自分の墓地の雷族モンスターを1体デッキに戻す。

伏せカードを素直に破壊してくれて助かったぜ、除外やバウンスだったら効果を発揮できなかった。

「残念だったな、ラスト。これでこのターンはダメージ無しだ。『オーバーホール・ストーム』はモンスター効果は封印できても、魔法や罫は消せないだろう?」

「チッ!」

説明は敗北フラグ。そんな言葉を言ったのは誰だったか。

この言葉の意味は至極単純。「伏せカードや次の自分の一手を考えると、それを打ち破られたり、先手を打たれたりして敗北する」。ならばもし、敢えてそのフラグを俺が建てたのならはどうだろうか?

俺が説明した『エレクトロン・プレート』の効果は1つ目の破壊効果のみ。残る2つ

には見事に引つ掛からなかった。つまり説明フラグは裏を返すと「説明していない事は崩されない」という事だ。

故に俺はラストの序盤からの猛攻を想定し、敢えてリバースカードを潰させた。

結果は大成功。見事にラストは俺達を一網打尽にするチャンスを失ったワケだ。

「ワタシはこれで、ターンエンド!」

ラスト：LP 16000

手札：1枚

フィールド

：機皇帝グランエル∞ (ATK 10500)、スキエル (ATK 5000)、ワイゼル (ATK 5500)、マシニクル (ATK 6800)、アステリスク (ATK 27800)

：神獣王バルバロス (効果モンスター・『機皇帝ワイゼル∞』に装備)、天刑王ブラック・ハイランダー (シンクロ・効果モンスター・『機皇帝スキエル∞』に装備)、A・ジェネクス・トライフォース (シンクロ・効果モンスター・『機皇帝グランエル∞』に装備)、The splendid VENUS (効果モンスター・『機皇帝マシニクル∞』に装備)

さて、急場は凌いだものの、まだ安心はできない。

手札には、この状況を逆転できるカードは無い。

さて、どうしようか?

「俺のターン」

お。

「このスタンバイフェイズ、墓地の『エレクトロン・プレート』第三の効果を発動。このカードが効果を発揮した次の自分のスタンバイフェイズ時、こいつを除外すれば墓地の雷族モンスターを1体、デッキに戻す事ができる。戻れ、『サンダー・ドラゴン』!

続いて魔法カード『精神操作』を発動! 相手の場のモンスターを1体奪う! 『グランエル』は頂きだ!」

「つー、そうはさせないわよお! 『ワイゼル』の効果発動! 1ターンに1度、魔法カードの発動を無効にして、破壊するわ!」

空に現れた無数の糸を、白い人型マシンが目?から発したレーザーで破壊する。

そうだ、それで良い。

『グランエル』が退場すれば、『アステリスク』の攻撃力も大幅に下がる。1万も攻撃力が下がれば、機械族使いのアルフがいる以上、そこを突破口にされかねない。更にこ

れまで護衛を倒して来たという事実を見れば、自陣のモンスターが減るのは敗北へのフラグになりかねない事ぐらい分かっているだろう。

だからこそ、『精神操作』は空撃ち。本命は、こっちだ！

「更に速攻魔法『皆既日蝕の書』！ 場の全てのモンスターをセット状態に強制変更！」  
「し、しまった!?!」

「装備カードは裏側表示モンスターには装備できない！ よって装備対象を失ったため、俺達のモンスターは墓地に送られる！ 『バルバロス』は返してもらおうか！」

そう、*「機皇帝」*の弱点の内の一つ。装備するモンスターが存在しない状態では、その能力が半減する。

攻撃力然り、モンスター効果然りだ。

怪しい光を放つ書が中空に浮かび、その光を浴びたラストのモンスター達がカードの状態に戻る。

「カムバック、『バルバロス』！」

「お帰り、『トライフォース』」

「『VENUS』奪還！」

「『ブラック・ハイランダー』、戻って来い！」

さあ、次のステップだ！

「更に俺は『T・Sサンダー スピリッツ 蒼雷そうらいのテレグラマー』を召喚!」  
 『オラア!』

T・S 蒼雷のテレグラマー：ATK 1700

キイイイ! と青白い電流の中から現れる俺のモンスター。電流が仮面と鎧を装着しているとえばその全容は分かりやすいだろう。

サンダー・スピリッツ。雷のエネルギーを持った精霊の力。紫の宝玉から生まれた電気の戦士達だ。お披露目は初だから、読まれる心配も少ないだろう。

『テレグラマー』が召喚に成功した時、カードを1枚ドロウできる!」

引いたカードは……!」

「魔法カード『雷電融合―サンダー・フュージョン―! このカードは“T・S”専用の融合魔法! 融合召喚する時、デッキからも素材を選ぶ事ができる!」

雷電融合―サンダー・フュージョン―(オリジナル)

「T・S」と名のついたモンスターを融合召喚する時のみ発動可能。

デッキから融合素材となるモンスターを選択して融合素材とする事ができる。

この時、手札またはフィールドのモンスターを融合素材の内の1体としない場合、融合召喚したモンスターはエンドフェイズにゲームから除外され、プレイヤーはその元々の攻撃力分のダメージを受ける。

「手札の『サンダー・ドラゴン』2体と、デッキの『サンダー・ドラゴン』を融合！」

『『ギャゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』』』

飛び交う紫電の中、緑の鱗を持つ雷の龍が雄叫びを上げる。捻じれた次元の渦の中へと3匹の龍は消え、新たな雷の龍が姿を現した。

「現れる、紫電の咆哮！」 『T・S トライヘッド サンダー・ドラゴン 三頭の雷神龍』！」

『ギイオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

T・S 三頭の雷神龍：ATK 3400

降り注ぐ白銀の雷。その中心から姿を現す、黄金色の龍。三つの頭を持ち、輝く鱗の表面には電流が迸り、額の角からも火花が飛び散っている。その赤い瞳でラストを真正面から睨みつけている姿は、正に勇壮なモンスターと言えるだろう。

「攻撃力3400ですって!？」

「すげえな、黎ー!」

「まだまだ! 『蒼雷のテレグラマー』の効果発動! レベル5以上の雷族モンスターの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、カードを1枚ドロウできる!」

T・S 蒼雷のテレグラマー(効果モンスター)(オリジナル)

星4

光属性/雷族

ATK 1700/DEF 400

このカードは特殊召喚できない。

このカードの召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロウできる。

自分フィールド上にこのカードが存在する限り、レベル5以上の雷族モンスターが召喚・特殊召喚・反転召喚されるたびに、デッキからカードを1枚ドロウできる。

このカードが守備表示モンスターと戦闘を行った時、ダメージ計算を行わずに守備表示モンスターを破壊する。

「バトル! 『テレグラマー』でセット状態の『グランエル』を攻撃! ブルーサンダー・カノン!」

「おバカねえ！ 守備力はこつちが上よ！」

「生憎、『テレグラマー』は守備表示モンスターをダメージ無しで破壊できるんだよ！」  
「な!?!」

青色の雷の砲撃。柱の如き電流が橙色の巨大ロボを直撃し、木端微塵に破壊した。  
まず一匹！

「く、うううううううつ！」

「更に『三頭の雷神龍』で『ワイゼル』を攻撃！」

3つの頭の1つ1つが、その口腔内に雷の砲弾を蓄える。

雷の砲弾は直線でそれぞれ繋がり、それらを頂点とした電流の正三角形が生まれた。

「『アルティメット・サンダー・ブラスター』！」

「くあああああああああつ！」

吐き出された雷のトライアングルは、白い人型ロボをいとも容易く吹き飛ばす。

これで2匹！

「更に『三頭の雷神龍』のモンスター効果発動！ 戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手のセットされているカードを1枚選択して破壊できる！」

「な、何ですって!?!」

「その効果で、伏せ状態の『マシニクル』を破壊！ 『スマッシュ・スパーク』！」



「くううううっ!」

T・S 三頭の雷神龍（融合・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星10

光属性／雷族

ATK 3400 / DEF 2000

「サンダー・ドラゴン」+「サンダー・ドラゴン」+「サンダー・ドラゴン」

このカードは融合召喚以外の方法で特殊召喚する事はできない。

(1) : このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、相手の場の裏側表示のカードを1枚選択して破壊できる。

(2) : このカードが相手の魔法・罠の効果でフィールドを離れた時に発動できる。

カードを3枚ドロウする。

(3) : 自分のターンに1度発動できる。

フィールドに存在する全ての表側表示モンスターの効果を無効にする。

3匹!

これで3枚のカードを潰せた。

正直ラスト相手にドロークさせるのは厳しいかも知だが、このまま「機皇」をのさばらせておくよかマシだろう。

さて、最後のワンセッション。フィールド魔法を出されると厄介だからな。

「そしてフィールド魔法『クローザー・フォレスト』を発動！」

クローザー・フォレスト

【フィールド魔法】

自分の墓地に存在するモンスター1体につき、自分フィールド上に表側表示で存在する獣族モンスターの攻撃力は100ポイントアップする。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド魔法カードを発動する事はできない。

このカードが破壊されたターン、フィールド魔法カードを発動する事はできない。

展開される暗く閉ざされた森。トロツコが動くのに合わせて、この森も動いているようだ。森の奥から、不気味な獣の瞳がこちらを睨んでいるように感じ、時々荒ぶる獣の遠吠えも聞こえる。

墓地のモンスターの数だけ、場の獣族モンスターがパワーアップするカードだが、俺

のデッキには獣族モンスターはほぼ存在しない。だからこいつはフィールド魔法メタ用。これで少しは展開が遅れるハズ。

「俺はこれで、ターンエンド! エンドフェイズに裏側表示モンスターは表側守備表示になる! そしてその枚数分カードを引け!」

「チツ、2枚ドロロー!」

皆既日蝕の書

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て裏側守備表示にする。

このターンのエンドフェイズ時に相手フィールド上に裏側守備表示で存在するモンスターを全て表側守備表示にし、その枚数分だけ相手はデッキからカードをドロローる。

セット ↓ 機皇帝スキエル∞ : DEF 2200

セット ↓ 機皇神龍アステリスク : DEF 0

黎 : LP 4000

手札：1枚

フィールド

：T・S 蒼雷のテレグラマー（ATK 1700）、T・S 三頭の雷神龍（ATK 3400）

：クローザー・フォレスト（フィールド魔法）

「僕のターン、ドロロー！ 何というか、流石はエキスパートって感じかな、黎」

「何の？」

「護衛戦の、だよ！ 僕は『マシンナーズ・ギアフレーム』を召喚！」

マシンナーズ・ギアフレーム：ATK 1800

『参ります！』

「（後続の2人に繋げるなら、多少危険を冒してでも相手の場を一扫した方が良いはず）その効果でデッキから『マシンナーズ・フォートレス』を手札に加える！

そして手札の『ボルト・ヘッジホッグ』と『フォートレス』を捨てて、墓地から『フォートレス』を特殊召喚！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 2500

出た、〃マシンナーズ〃の連続展開!

橙のヒューマノイドに続いて青色の戦車が光のゲートから現れる。『ギアフレーム』は浮遊しているのに対し、『フォートレス』はキャタピラを使つて線路を走っている。

マシンナーズ・ギアフレーム（ユニオンモンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1800 / DEF 0

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場

合、代わりにこのカードを破壊する。)

マシンナーズ・フォートレス (効果モンスター)

星7

地属性/機械族

ATK 2500 / DEF 1600

このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。

「バトル! 『ギアフレーム』で『アステリスク』、『フォートレス』で『スキエル∞』を攻撃だ!」

『とおりやあああつ!』

「うがあああああああつ!」

ヒューマノイドの鉄拳で爆発する白い機械龍。そして戦車の砲撃で吹き飛ばす鳥型ロボ。ガジャツ! と排莢する音が響き、『スキエル』が爆発した。

「OK、後は頼むよ、2人共! 『ギアフレーム』を『フォートレス』にユニオンさせて、ターン終了!」

アルフ : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

: マシンナーズ・フォートレス (ATK 2500)

: マシンナーズ・ギアフレーム (ユニオン : 『マシンナーズ・フォートレス』に装備)

「ナイス、アルフ。これでライと私はスムーズに攻撃できる!」

「どういたしまして!」

「私のターン、ドロー!」

シヤラリ、と金髪が揺れてカードが引かれる。

さて、どうする?

「『ダーク・ヴァルキリア』を通常召喚! 行くわよ!」

『さっさと潰さないと、また厄介なモンスターを呼ばれかねません。できるだけ早く勝負を決めましょう!』

ダーク・ヴァルキリア：ATK 1800

呼び出されるのは彼女の精霊その1、紫の肌に銀の髪を持つ墮天使が飛び出す。表情こそ笑っているが、瞳に映る光は真剣そのものだ。

「バトル! 『ダーク・ヴァルキリア』でダイレクトアタック!」  
ダークヘヴン・インパクト!」

『喰らいなさい!』

放たれる闇のエネルギー弾。ラストの乗っている列車にそれは直撃し、列車が揺れる。

「だっ、とた……っ!」

ラスト：LP 16000↓14200

グラつきはしたものの、ラストの列車はそれまでと同じように動く。



しかし……。

『……外した。動きながら動く相手を狙うのは難しいです』

「いや、それよりもあれ見ろ」

『あれ?』

俺が指差した方を皆で見る。

既に過ぎた線路だが――

「線路が!?!」

アルフが驚きの声をあげる。

ラストの走っている路線の一部が、通れない程では無いにしても、破損し、歪んでいた。

『『ダーク・ヴァルキリア』の攻撃の余波でああなったんだろうな。攻撃力1800の余波でこれだ。もっと高い攻撃力が直撃したら、こんなボロトロッコなんぞ吹っ飛ばぞ』

『!?!』

全員が驚愕する。この錆びた路線で戦う以上、5人全員に当てはまる事だ。

ラストがさつき『アステリスク』で追加攻撃して線路を狙わなかった所を見ると、恐らくこの事は今あいつも知ったんだらうな。

「っ、私は一枚カードをセットして、ターンエンド!」

エルフイ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ダーク・ヴァルキリア（ATK 1800）

：伏せカード1枚

迂闊に攻撃して、自分の路線に被弾したらマズいな、こりや。

モンスターに攻撃しても、線路にダメージが無かった点を考えれば、考え無しに攻撃するのを止めるべきなのはダイレクタアタックのみってワケだ。

「下手な行動は逆効果ってワケか。俺のターン、ドロー！」

ライもそれを分かっているのか、手札と睨めっこ状態だ。

やがて打つ手が決まったのか、ライは手札を1枚切った。

「俺は『ゴブリンエリート部隊』を、通常召喚！」

『ウオオオオオオオッ！』

ゴブリンエリート部隊：ATK 2200

くすんだ灰色の鎧を着込んだ、緑の肌のゴブリンが現れる。これまでの部隊とは違い、真の精鋭が集っている、のだろうが、生憎サポートカードが少なすぎる。守備力1500も高いとは言い切れないし、アニメでもエド&ヘルカイザーにボコボコにされていた。どこまでいっても彼らゴブリンは不憫である。

ゴブリンエリート部隊（効果モンスター）

星4

地属性／悪魔族

ATK 2200／DEF 1500

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。  
次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。

「へッ、直接斬り込みや線路に被害はねえだろ！」

「お、上手く考えたな！」

「おうとも！ 行け、『ゴブリンエリート部隊』！ ダイレクトアタックだ！」

『ブウォオオオッ！』

ゴブリン達が腰から刃を引き抜き、先陣を走る。鋭いその斬撃がラストへと届く。  
「ぐっ！」

ラスト：LP 14200↓12000

ライの推測通り、線路に傷は無い。攻撃の余波で線路がダメージを受けるという事は逆を言えば余波の出ない攻撃、つまり近接武器を使用した攻撃ならば問題無いという事だ。

「よし、通った！」

「好い感じよ、ライ！」

「サンキュ！ 攻撃を行った事で『エリート部隊』は守備表示になる！」

ゴブリンエリート部隊：ATK 2200↓DEF 1500

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

ライ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ゴブリンエリート部隊（DEF 1500）

：伏せカード1枚

ダメージ4000か。もう少しダメージを与えたかったんだが、仕方無い。あの5体の機械軍団を1ターンで退けただけでも褒めてほしいものである。

「おのれ……よくもこのワタシの美しい美貌に傷をつけてくれたわねえ！」

「知るか。生憎俺はテメエみたいな年増に欲情する程、性欲有り余っちゃいねえよ」

「キイイイイッ！」

ちなみにこれは本当。

そういう欲望は自分でどうこうするよりも早く、殺し合いの場で発散されていた。欲求の昇華というヤツである。

……前世ではあいつを抱いた事もあったが。まあ、事情有りだ。男女間の恋愛感情云々は無かったとだけ言っておく。

俺の挑発に怒ったラストが、手札を1枚切った。

「もう許さない！ ワタシのターン、ドロー！ ワタシは魔法カード『メカニック・ド

ロップ』を発動！ デッキから同じレベルの機械族モンスターを5種類墓地に送り、デッキからカードを2枚ドロウする！

ただし、この効果で送ったモンスターは蘇生できないけどね！」

メカニック・ドロップ（オリジナル）

【通常魔法】

自分のデッキから同じレベルの機械族モンスターを5種類墓地に送る。

デッキからカードを2枚ドロウする。

この効果で墓地に送られたモンスターは墓地から特殊召喚する事はできず効果も発動できない。

「ワタシはデッキからレベル4の『アイアイアン』、『メカ・ハンター』、『機皇兵スキエル・アイン』、『機皇兵ワイゼル・アイン』、『機皇兵グランエル・アイン』を墓地に送り、カードを2枚ドロウ！」

手札を補充して来たか。だがどうする？ そいつらは蘇生できないんだろう？

ラストは更にカードを切る。

「更に魔法カード『次元建築』を発動！」

トンカントンカン……。

「何の音だ?」

突如として聞こえ出した正体不明の音。全方位から（俺だから）聞こえる音が、気味悪い。

目を閉じて耳を澄ます。この音は、そう、工事現場で金槌を振るう音のような……?」

「黎! フィールド魔法が!」

「何!?!」

エルフィの声に目を開けて見ると、暗い森がズルズルと歪み、消滅していったところだった。その代わりに周囲に灰色の工場が立ち並ぶ。工場の煙突からは漆黒の煙がモクモクと出ていて、実に環境に悪そうだ。

『「次元建設」の効果、それは墓地の機械族モンスターを3体除外してフィールド上に表側表示で存在する魔法・罠カードを1枚除外。そしてデッキからフィールド魔法1枚を発動できるわ! 墓地のレベルの『ワイゼル∞』、『スキエル∞』、『グランエル∞』を除外!」

しまった、除外されては『クローザー・フォレスト』のフィールド魔法の発動を制限できる効果が使えない!?

「ワタシが発動させたのはフィールド魔法『部品循環工場』!」

「うわ、環境に悪そ……」

「正論ね」

アルフとエルファイの感想もごもつともである。というか、俺も同じ感想だ。

次元建設（オリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地の機械族モンスターを3体除外して発動する。

フィールド上に表側表示で存在する魔法・罫カードを1枚ゲームから除外する。

その後、デッキからフィールド魔法を1枚選択して発動できる。

「更に『マックス・リペアラー』を召喚！」

『ゲギギギ！』

マックス・リペアラー：ATK 1000

ラストが呼び出したのは、丸い金属製の球体から、無数のアームが伸びた機械兵。それぞれの細いアームは修理用の工具を持っている。ボールの中心部分には、これまた丸



い頭。赤く輝く目が怪しく光る。

横から見れば不格好な鏡餅に見えたかも知れない。

『マックス・リペアラー』の効果発動! ワタシの墓地の機械族モンスターを1体ゲームから除外し、それよりもレベルの劣る機械族モンスターを1体、デッキか手札から特殊召喚できる!

「ちよ、あいつの墓地にはレベル10の『アステリスク』とレベル12の『マシニクル』がいるんだぞ?」

「ああ、実質何でも呼び出せるだろうな」

マックス・リペアラー（効果モンスター）（オリジナル）

星2

炎属性／炎族

ATK 1000 / DEF 1000

自分の墓地に存在する機械族モンスターを1体ゲームから除外して発動する。

デッキ、手札、墓地から除外したモンスターよりもレベルの低い機械族モンスターを1体、特殊召喚する。

この効果を使用したターン、このカードは攻撃できない。

このカードとの戦闘で発生するダメージは0になる。

「行・く・わ・よお？　ワタシは墓地のレベル12の『機皇神マシニクル∞』、レベル1

0の『機皇神龍アステリスク』、レベル4の『アイアイアン』をゲームから除外！　デッ

キからレベル5の『サモン・リアクター・AI』<sup>エイアイ</sup>、レベル4の『トラップ・リアクター・  
ダブルアール

R R』、レベル3の『マジック・リアクター・AI D』<sup>エイド</sup>を特殊召喚！」

ラストの墓地から吐き出された3体の機械族カードが時空の黒い渦に呑み込まれる。

そしてデッキから特殊召喚される3体の飛行機型モンスター。

1体目はくすんだ黄色の機体。肩の部分の翼に大きな白いプロペラがついている。

サモン・リアクター・AI（効果モンスター）

星5

閻属性／機械族

ATK 2000 / DEF 1400

このカードが自分フィールド上に存在する限り、相手フィールド上にモンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用する事ができない。

この効果を使用したターンのバトルフェイズ時、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。

自分フィールド上に表側表示で存在する、このカードと「トラップ・リアクター・R」 「マジック・リアクター・AID」をそれぞれ1体ずつ墓地へ送る事で、自分の手札・デッキ・墓地から「ジャイアント・ボマー・エアレイド」1体を特殊召喚する。

2体目は緑の機体。腕の部分の翼の先端に、鋭い爪がついている。前身については機関銃だろうか。

トラップ・リアクター・RR (効果モンスター)

星4

闇属性/機械族

ATK 800 / DEF 1800

相手が罠カードを発動した時に発動する事ができる。

その罠カードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

3体目は小豆色の機体。これまでの2機と違ってミサイルの搭載されている爆撃機だ。スタイルも人型では無く鳥か龍に近い。

マジック・リアクター・A I D（効果モンスター）

星3

闇属性／機械族

A T K 1 2 0 0 / D E F 9 0 0

相手が魔法カードを発動した時に発動する事ができる。

その魔法カードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

サモン・リアクター・A I : A T K 2 0 0 0

トラップ・リアクター・R R : A T K 8 0 0

マジック・リアクター・A I D : A T K 1 2 0 0

「『機皇帝』の次は『リアクター』シリーズか……っ！」

「これはこれで厄介な……」

空中を滑空する3体の色の違う戦闘機（1機だけ爆撃機）。

この3体は800ポイントもの効果ダメージを与えるという機械族モンスター。初期ライフ4000では致命傷となりかねない状況だが……。こいつらの本領はそこじゃない。

「更に『サモン・リアクター・AI』の効果発動！ 3体の「リアクター」を墓地に送り、デッキから『ジャイアント・ボマー・エアレイド』を特殊召喚するわあつ！」

やはりそう来るか！

三機の戦闘機が空高く飛び上がり、どこぞのロボットアニメのように変形合体。爆撃用のミサイルを下部に、プロペラを翼に、機関銃を先端に。ダークグリーンの機体を持った超弩級サイズの強襲爆撃戦闘機が、誕生した。

ジャイアント・ボマー・エアレイド（効果モンスター）

星8

風属性／機械族

ATK 3000 / DEF 2500

このカードは通常召喚できない。

「サモン・リアクター・AI」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

1ターンの1度、手札を1枚墓地へ送る事で相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

また、相手のターンに1度、次の効果から1つを選択して発動することができる。

●相手がモンスター召喚・特殊召喚に成功した時に発動することができる。

そのモンスターを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

●相手がカードをセットした時に発動することができる。

そのカードを破壊し、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

「やっぱり出た!」

「だろぅな!」

ゴウンゴウンと音を立てる強襲爆撃戦闘機。

正しくその姿は巨大の一言に尽きる。周囲の木々が爪楊枝の様だ。あれに乗ったらリアルに「人がゴミの様だ」発言ができるだろう。正に殺、爆、射、焼、人の命を奪うために生まれた超弩級の鋼鉄の化物だ。

ジャイアント・ボマー・エアレイド：ATK 3000



線路同士の間隔は5く6メートル。それでも揺らされるレベルの爆風なんて……！  
人が、いや人じゃなくても生きられるレベルじゃない！

よしんば生きられたとしても、乗っているトロツコは大破状態。一緒に戦う事なんて

……！

「1人、仕留めたあ！」

「黎、レイイイイイイイイイイツ！」

クツッ！ よもやデュエルに勝利せずに1人ずつ脱落させるつもりなのか、この人!?  
だとしたらなんて性格の悪い……！

「さて、次はアンタよお、空時エルフイ！」

「っ！」

『マイ、レディ……ッ！』

やばいかもね、こりや……。

ラストのヤツ、片端から爆撃で吹き飛ばす気なんだ……！

「さあ、〃騎士〃の次に葬ってあげる「勝手に殺すな」わあ……？」

え？

「俺はまだ、死んで無いつての！」

「黎！ 生きてたんだ！」



「取り敢えず、な」

灰色の煙から聞こえた彼の声。そのすぐ後に、黎が出て来た。全身が焼け焦げているけれども、トロツコ共々無事みたいだ。

「良かった……」

人死に出るのは、やっぱり気分が良くない。

それに、ハッキリ言って僕達だけじゃラストには勝てないと思う。

いきなり光に包まれて炭鉱場にやって来た時、ラストは警告一つせずに発砲した。

幸い命中はしなかったけれども、ラストからはハッキリとした、濃密な殺気が感じられた。しかし、殺気はあっても、彼女からは敵意も怒気も感じられなかった。

普通、殺意を向ける相手なら、その2つの感情を持つている。なのにそれが無かったという事は、ラストが僕達を殺す理由は極めて機械的であるという事。ヒットマンの仕事のように無感情で僕達を殺す。

正直、恐ろしい相手だ。敵意も怒気も無く襲いかかって来る、無人戦車のような敵。

戦い慣れしている黎がいるかないかで、大きく違う。

「心強いよ、黎」

「買い被り過ぎだ。俺はそんなご大層なヤツじゃねえ」

「それでもだよ」

もう彼は何度も経験している護衛との戦いのエキスパート。それだけでも十二分に心強い！

「おのれ……！ だったら『ジャイアント・ボマー・エアレイド』で『蒼雷のテレグラマー』を攻撃！ ムデス・エアレイド！」

放たれる、ペンの様な形の火薬の塊。1つじゃない。10かそれ以上だ。

あれは、ミサイル攻撃!?

「黎——」

S I D E : 黎

「黎——」

アルフが叫ぶ。

「解ってる——」

やり方はさつきと同じだ。

俺はトロツコの横にあるレバーに手を伸ばし、思い切り手前に引く。

車輪が火花を上げて減速し、俺のトロツコだけ3人から離される。

そしてミサイルが直撃する瞬間——

「ハッ!」

今度は逆に押す。

向こう側に倒し、トロツコにアクセルをかける!

減速が加速に変わり、『テレグラマー』に直撃しなかったミサイルを辛うじてかわす事に成功した。

「ツ……!」

黎 : LP 4000 ↓ 2700

とは言え、無傷ってワケでも無いか。

一発掠ったな。空気を高速で切り裂く大型の砲弾だ、直撃しなくても余波だけで簡単に人は死ぬ。

「黎、腕……っ!」

「慌てるな、エルファイ。大した出血じゃない」

その余波だけで腕がバツクリやられた。

俺じゃなかったらショック症状になっただけでもおかしくないだろう。

「ふふふ、しづといわねえ!」

「当たり前だ。容易くやられるとも思ったか」

「アハハハハハ、それもそうね！ そう来なくちや面白くないわねえ！ リバースカードを1枚セット！ ワタシはこれでターンを終了するわ！」

ラスト：LP 12000

手札：1枚

フィールド

：マックス・リペアラー（ATK 1000）、ジャイアント・ボマー・エアレイド（ATK 3000）

：伏せカード1枚、部品循環工場（フィールド魔法）

ターンが再び回って来た。

しかし……。

「随分と臆病だな、ラスト」

「何、ですって!?!」

「だってそうだろう？ お前は俺達をデュエルで勝てず、自分が死ぬ事を恐れている。このデュエルで俺達に負け、邪神復活を邪魔されると思っている。だからこそこうして

一見すると回りくどい方法で勝負を持ちかけたんだらう? デュエルに勝たなくとも、トロツコから放り出せば自動的に勝てるこの方法で!」

「こ、の……! 言わせておけばあ!」

「俺のターン、ドロ! 俺は魔法カード『強欲な壺』を発動! デツキからカードを2枚ドロ!」

そう、こいつはあのグラトニーよりも弱い。

言い換えれば、これまでで戦った中で一番強いヤツには及ばないという事だ。

なら、負ける道理は無い!

「更に、カードを1枚伏せる!」

「この瞬間に『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の効果を発動! 1ターンに1度、相手の召喚かセットしたカードを破壊し、800ポイントのダメージを与える!」

「シャープ・シューティング!」

バラバラバラバラ!

伏せられたカードに向けて巨大戦闘機が機関銃を乱射する。

「グッ!」

黎 : LP 2700 ↓ 1900

セットカードが潰され、消える。

だが、それは計画通りだよ、ラスト！

空間に穴が空き、その中からクリーム色のアーマーを着込んだ戦士が飛び出す。靴に装着したローラーでトロッコの横を並走している。

スピード・ウオリアー：DEF 400

「な?！」

「お前が破壊したのは『リミッター・ブレイク』！ 墓地に送られた時、『スピード・ウオリアー』を1体、特殊召喚できる！」

スピード・ウオリアー（効果モンスター）

星2

風属性／戦士族

ATK 900／DEF 400

このカードの召喚に成功したターンのバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる。

リミッター・ブレイク

【通常罠】

このカードが墓地へ送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から「スピード・ウオリアー」1体を特殊召喚する。

「更に、相手フィールドに存在するモンスターを2体リリースする事で、『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』は手札から特殊召喚できる!」

『グヴォア』アアアア——!』

「し、しまった!?!」

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム（効果モンスター）

星8

炎属性／悪魔族

ATK 3000 / DEF 2500

このカードは通常召喚できない。

相手フィールド上のモンスター2体をリリースし、手札から相手フィールド上に特殊召喚できる。

自分のスタンバイフェイズ毎に、自分は1000ポイントダメージを受ける。  
このカードを特殊召喚するターン、自分は通常召喚できない。

ドロドロと流れ出る溶岩。それがラストのモンスターを取り囲む。その中から出て来た手が『ジャイアント・ボマー・エアレイド』と『マックス・リペアラ』を握り潰し、ラストを檻で閉じ込める形で灼熱の悪魔が現れた。

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム：ATK 3000

「上手い！ 壁を作った上に厄介なヤツのモンスターを排除した！」

「お、おのれ……、この美しいワタシを檻に閉じ込めるとは……！」

「更にカードを1枚セットして、ターンエンド！」

黎：LP 1900

手札：0枚



フィールド

：スピード・ウオリアー（DEF 400）

：伏せカード1枚

「僕のターン！ 黎、やっぱり君がいれば勝てる！」

「ああ、このままジリジリと追いつめて……」

「いや、そうもいかない」

「え？」

納得できないといった感じの空時兄弟に説明してやる。

「さっきの『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の爆撃で線路が手酷いダメージを受けた。恐らく2度と通れんだろうな」

「って事は……」

「トロツコがこの炭鉱を一周するのに必要な時間は30分。タイムリミット付きというワケだ」

まったく、厳しい条件をつけてくれるぜ……。

「だ、だったらその前に倒すまでだよ！ 装備魔法『団結の力』を『マシンナーズ・フォー・トレス』を対象に発動！ 自分の場のモンスター1体につき攻撃力と守備力を800ポ

イントアップさせる！ 今僕達の場にいるのは4体！ よって3200ポイントアップだ！」

マシンナーズ・フォートレス：ATK 2500↓5700 / DEF 1600↓4800

「バトル！ 行け、『フォートレス』！ 『ラヴァ・ゴーレム』を攻撃だ！」

「おっと、そうは行かないわよ！ リバースカード、オープン！ 罠カード『砕け行く刃』！ 相手モンスターの攻撃宣言時に発動！ 相手モンスターを破壊してその攻撃力分だけ相手のライフを減らす！」

砕け行く刃（オリジナル）

【通常罠】

相手の攻撃宣言時に発動できる。

攻撃してきた相手モンスターを破壊し、その攻撃力の十倍分相手のライフを減らす。

このカードは発動後、墓地には送られずにゲームから除外される。

このカードが除外されたターンのエンドフェイズ時、自分のデッキから異なる名前の

罨カードを2枚選択して自分の場に裏側表示でセットする事ができる。

バシユツ! ラストのカードからビーム光線がキャタピラを唸らせる戦車へと向かう。相変わらずテメエら十倍とか好きだな、オイ!

「ダメージじゃ無いから防ぐのは至難の技よお! 砕けるお!」

「そうはいかない! 装備されている『ギアフレーム』の効果発動! 『ギアフレーム』を代わりに破壊する!」

『身代わりも仕事です! そりゃっ!』

外装になっていたオレンジのアンドロイドが戦車の前に飛び出してビームを代わりに受ける。照射が終わり、『マシンナーズ・ギアフレーム』はボロボロになっていたものの、見事に身代わりという大役を果たしたようだ。

成程、破壊されなければライフ減少は生まれない。ナイスだ、『ギアフレーム』。

『後は、お願いします……。先に墓地あの世で待っていますから……』

「それ僕達が負ける事が前提になってない!」

『はは、冗談です』

「君でも冗談を言うんだね……」

『さて大将さん、オイル一つ、大ジョッキで! 支払いはカードをお願いします!』

「墓地に居酒屋ってあったの!?　そしてゴールドカードだ!?」  
マジで?

「と、兎に角攻撃だ!　　“ヘヴィー・カノン・バレル”!」  
キチキチキチキチ……!

ドガアアアアアアアン!

『ヴォアアアアアア……』

移動要塞から打ち出された砲弾が溶岩の巨人に直撃する。真つ赤に溶けた岩石が人の形を保てなくなり、真下の檻ごと溶け出した。当然、檻の中にいるラストは逃げられず、全身に数百度、或いは千度を超えた高温の流動体を浴びる事となる。

「あ、っ、ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂッ!　アヂッ!　アツイ!」

ラスト:LP　12000↓9300

「そして『マシンナーズ・ピースキーパー』を攻撃表示で通常召喚!」  
『ピキーー!』

マシンナーズ・ピースキーパー:ATK　500

マシンナーズ・フォートレス：ATK 5700 ↓ 6500

光のゲートを潜り、赤い三輪の小型機械が飛び出す。平和維持の名の通り、武器らしいものは一切無い。

『ピースキーパー』を『フォートレス』にユニオン！ これでターン終了！』  
『ピピキーピー』

「ならばワタシは『砕け行く刃』の効果でデッキから『反逆者の復讐』と『魅惑のアロマシャワー』をセットするわ！」

マシンナーズ・ピースキーパー（ユニオンモンスター）

星2

地属性／機械族

ATK 500 / DEF 400

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからユニオンモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事がで

きる。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。)

マシンナーズ・フォートレス：ATK 6500↓5700

ガシン！ と赤い小型ロボが大型戦車に装着される。

明らかに覆う面積が足りないと思うのだが、取り敢えず無事に装備されているのでその辺は密に、密に。

一方でラストもカードをセット。片方はスロウスが使ったカードだが、もう片方は知らない。どんな効果なんだ……？

アルフ：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：マシンナーズ・フォートレス (ATK 5700)

：マシンナーズ・ピースキーパー (ユニオン・『マシンナーズ・フォートレス』に装備)、

団結の力(装備魔法:『マシンナーズ・フォートレス』に装備)

「私のターン、ドロー! 『ダーク・ヴァルキリア』、気を引き締めて行くよ!」

『イエス、マイレディ!』

「黎! 伏せカードの詳細分かる!」

「『反逆者の復讐』だけならな! 受けた戦闘ダメージの分だけ相手モンスターの攻撃力を永続的に下げる効果だ! 『魅惑のアロマシヤワー』は分からん! 初めて聞くカード名だ!」

それでも十分! と俺の情けない情報にも果敢に彼女は闘志を燃やした。

正直、申し訳無い気分が湧いて来ている。所詮、俺はこの程度だ。多少毛が生えた程度でエキスパートなどと、鳥澁がましい話だとしか言いようが無い。

「私は『ダーク・ヴァルキリア』をもう1度召喚!」

『行きます!』

「デュアルモンスターである『ダーク・ヴァルキリア』の効果発動! 1度だけこのカードに魔力カウンターを乗せて、攻撃力を300上げる!」

ダーク・ヴァルキリア: ATK 1800 ↓ 2100 / 魔力カウンター 0 ↓ 1

「このチャンスは逃さない！ 手札他に出せるモンスターがいらない以上、ここで追撃をしかけるしかない！」 『ダーク・ヴァルキリア』でダイレクトアタック！ //ダーク・パワーフィスト！！」

『伊達や酔狂で闇に堕ちたワケではありませぬ！ 喰らいなさい！』

紫に発光した拳で殴りかかる『ダーク・ヴァルキリア』。漆黒のエネルギーがラストを捉え、殴り飛ばした。自称美しい顔を殴りにかかったのだから彼女も相当容赦が無い。「ガギッ！」

ラスト：LP 9300↓7200

「上手いぞ。直接殴れば線路に被害は無い」

『精霊の特権です！』

成程、『ダーク・ヴァルキリア』の言う通りだ。明確な意思のある精霊ならば遠距離攻撃か直接攻撃かを選択するくらい可能なのかも知れない。

「カードを一枚伏せてターンエンド！」



エルファイ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ダーク・ヴァルキリア（ATK 2100・魔力カウンター：1）

：伏せカード1枚

一周するのに必要な時間はおよそ30分。経過時間を考えれば、あまり長い時間がかかるワケにもいかない。

「俺のターン! 『インターセプト・デーモン』を召喚!」

『オオリヤア、ハツハアツ!』

ライもそれが分かってるのか、攻めの手を急ぐ。

インターセプト・デーモン：ATK 1400

召喚したのは青い肌の悪魔。アメフト選手の防具とヘルメットを着用し、六本腕にバネの脛と何ともチグハグな見た目である。

「バトル! 『インターセプト・デーモン』でダイレクトアタック! ぶん殴れえ!」

『ゲツハツハハハツ！』  
「ギツ！」

ラスト：LP 7200↓5800

ダメージが再び通る。『エリート部隊』が守備表示でいなくてはならない以上、これ以上の追撃は望めないな。

ライは手札を見て笑う。何か秘策があるようだ。

「俺はこれで、ターンエン「リバースカード、オープン！」ド……ッ！」

このタイミングで!?

『誘惑のアロマシャワー』！ このカードは自分が戦闘ダメージを受けたターン終了時に発動できるわ！ 同じ種族のモンスターを2体、デッキから手札に加える！ 更にダイレクトアタックして来たモンスターのコントロールを奪う！」

誘惑のアロマシャワー（オリジナル）

【通常畏】

戦闘ダメージを受けたターンのエンドフェイズに発動できる。

同じ種族のモンスターを2体選択してデッキから手札に加える。

更に直接攻撃によるダメージの場合、攻撃を行った相手モンスターのコントロールを得る。

「ワタシは機械族の『ギミック・パペット―ネクロ・ドール』と『ギミック・パペット―ボムエッグ』を選択う! 更に『インターセプト・デーモン』は頂くわよお!」

「チツ!」

成程な、あのカードをライのターンで使ったのは奪ったモンスターを破壊される事を防ぐためか……。ライフを大きく削ってでも奪いに来たって事は、奪ったモンスターを利用するって事か。

しかもエンドフェイズに発動するカード、故に相手はほぼ対処できないというワケか。

ライ:LP 4000

手札:3枚

フィールド

:ゴブリンエリート部隊(DEF 1500)

## ：伏せカード1枚

さて、俺の経験則から言わせてもらおうと、こっちの猛攻撃の後には、必ずヤツの反撃つてのがパターン。

俺達の伏せカードでどこまで対処できるか……。

「ワタシのターン、ドロロー！ このスタンバイフェイズ、『部品循環工場』の効果を発動！ 自分のターンのスタンバイフェイズごとに除外された機械族モンスターをコントロールの墓地かデッキに戻し、墓地の機械族モンスターを1体蘇生するか手札に戻す！」

「何!?!」

部品循環工場（オリジナル）（改訂版）

【フィールド魔法】

（1）：このカードが墓地に送られた場合、デッキに存在する「部品循環工場」を発動させる事ができる。

（2）：自分のスタンバイフェイズ時に発動できる。

ゲームから除外されている機械族モンスターを持ち主の墓地またはデッキに戻す。

その後、自分の墓地に存在するゲームから除外されていなかった機械族モンスターを1体守備表示で特殊召喚するか、手札に加える事ができる。

「蘇れ、『マックス・リペアラー』!」

マックス・リペアラー：DEF 1000

チツ、除外軸の機械族デツキに使えば何度でも墓地アドバンテージを取り戻せるカードってワケか!

しかも『マックス・リペアラー』を除外しなければあいつは何度でも復活する! 大量展開には持って来いって事かよ……っ!

『マックス・リペアラー』の効果発動! 墓地のレベル10の『機皇帝マシニクル』とレベル3の『マジック・リアクター・AID』をゲームから除外! デツキからレベル9の『DデータTチューナー』デス・オイルタンカー』とレベル1の『チューニング・サポーター』を特殊召喚!」

D T デス・オイルタンカー：ATK 0

チューニング・サポーター：ATK 100

光るゲートが開き、そこから中華鍋を被った小さなロボット、そして漆黒のタンカーが現れた。空に浮くように進むDTの方は闇のオーラを漂わせており、腐敗した煙のような油を垂れ流しているようにも見える。

「ダークチューナーって事は、来るか！」

「行・く・わ・よ？ ワタシはレベル9の『チューニング・サポーター』に、レベル9の『DT デス・オイルタンカー』をダークチューニングウ！」

タンカーが闇に溶け込み、その漆黒のオーラが『チューニング・サポーター』を覆い込む。闇の中で悶え苦しむ小型ロボの中で星が弾け飛び、8つの星が巡回しながら闇のゲートを作り出した。

「闇と欲望交わりし時、色欲に溢れた冥府の扉が開かれる！ 光り無き世界よお！」

☆1—☆9—☆1—8

「ダークシンクロ！ 出撃し殲滅せよ、『ダーク・フラット・トップ』！」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 62 : 殺人絡繰人形 ★

黎 : LP 1900

手札 : 0枚

フィールド

: スピード・ウォリアー (DEF 400)

: 伏せカード1枚

アルフ : LP 4000

手札 : 1枚

フィールド

: マシンナーズ・フォートレス (ATK 5700)

: マシンナーズ・ピースキーパー (ユニオン・『マシンナーズ・フォートレス』に装備)

団結の力 (装備魔法・『マシンナーズ・フォートレス』に装備)



エルファイ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：ダーク・ヴァルキリア（ATK 2100・魔力カウンター：1）  
 ：伏せカード1枚

ライ：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：ゴブリンエリート部隊（DEF 1500）  
 ：伏せカード1枚

ラスト：LP 7200

手札：2枚

フィールド

：ダーク・フラット・トップ（ATK 0）、インターセプト・デーモン（ATK 1400）、マックス・リペアラ（ATK 1000）

：伏せカード1枚（『反逆者の復讐』）、部品循環工場（フィールド魔法）

ダーク・フラット・トップ（ダークシンクロ・効果モンスター）

星—8

閻属性／機械族

ATK 0 / DEF 3000

チューナー以外の機械族モンスター1体—ダークチューナー

1ターンに1度、自分の墓地に存在する「リアクター」と名のついたモンスターまたは「ジャイアント・ボマー・エアレイド」1体を召喚条件を無視して特殊召喚する事ができる。

このカードが破壊され墓地へ送られた場合、手札からレベル5以下の機械族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ダーク・フラット・トップ：ATK 0

SIDE：黎

ゴゴゴゴゴゴ………ッ！

噴出した夜よりも暗い闇から現れたのは、巨大な空母。

「ここでのモンスター召喚と来たか！」

闇のオーラを纏うこの超弩級巨大戦艦は、あの厄介な爆撃機を復活させるという忌々しいモンスターだ。

しかも攻撃力0なのに攻撃表示で出したという事は、何か策があるという事。奴がこのターンでゲームエンドに持ち込む可能性は高い。

『チューニング・サポーター』の効果でカードを1枚ドロ！。そして『ダーク・フラット・トップ』のモンスター効果発動う！。1ターンに1度、ワタシの墓地に存在する『リアクター』と名のついたモンスターか『ジャイアント・ボマー・エアレイド』を1体特殊召喚する！。復活しなさい、『ジャイアント・ボマー・エアレイド』！

ジャイアント・ボマー・エアレイド：ATK 3000

巨大空母の上に黒光りするゲートが生まれ、そこを通って復活する巨大爆撃機。

また、こいつが出て来るのかよ！

「まだまだあ！ 更に『ギミック・パペット―ボム・エッグ』を召喚！」

『ムルンツフツフツフ！』

ギミック・パペット―ボム・エッグ：ATK 1600

怒涛の召喚はまだ終わらない。橙色の卵型に細い手足を持った人形が、ピョンピョンと奇妙に踊りながら現れた。昔の爵位持ちのような髪型をしている上にそのリアルな目から考えれば、子供向けでは無いのは明らかだ。

『ボム・エッグ』の効果発動！ 手札を1枚墓地送りにする事で、1ターンに1度相手プレイヤーに800ダメージを与えるわ！ 手札の『ギミック・パペット―ネクロ・ドール』を捨てて、空時エルフィにダメージを与える！」

「ま、また私!？」

ギミック・パペット・ボム・エッグ（効果モンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1600 / DEF 1200

自分のメインフェイズ時に

手札から「ギミック・パペット」と名のついたモンスター1体を捨て、以下の効果から1つを選択して発動できる。

「ギミック・パペット・ボム・エッグ」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

●相手ライフに800ポイントダメージを与える。

●このカードのレベルはエンドフェイズ時まで8になる。

「パペットミサイル・ボム」!

『ムッフッフ! フハアツ!』

ラストの捨てたカードが半透明で卵人形の中へ潜り込むと、『ボム・エッグ』は大きく飛び上がる。そのまま体を真っ二つに開くと、そこから無数の爆弾をエルファイ目にかけて投下した。

「キヤアアアアアアアッ!」

「「エルファイ！」」

エルファイ：LP 4000↓3200

クツソ、このアマ、完全にエルファイを目の敵にしてやがる！

「大丈夫か、エルファイ！」

「な、なんとか……！でもこつちも線路をやられた、私にもタイムリミットが  
ちやつたよ……」

「っ」

クツ、そりやマズいな。

最初に線路にダメージを負ったのはラストだが、ダメージはこつちも同じ。長期戦は  
お互い望まない状況、か！

「さて、このまま『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の効果でカードを1枚破壊して  
も良いけど、それじゃ仕留めきれないし、残り少ない手札の浪費になりかねないわねえ」  
「……………」

「だから、ワタシはこうする！墓地の『DT デス・オイルタンカー』の効果を、ワタ  
シの場の閻属性モンスター『インターセプト・デーモン』をゲームから除外して発動！

ワタシの場に存在する攻撃表示の機械族モンスターは、次の自分のエンドフェイズまで効果が無効になる代わりに、自分の場に存在する機械族モンスターの攻撃力の合計値分、攻撃力がアップする！」

「何だと!?!」

DT デス・オイルタンカー（ダークチューナー：効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星9

閻属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

このカード名の効果はデュエル中1度しか使えない。

(1)：墓地に存在するダークシンクロモンスターのシンクロ素材となったこのカードと自分フィールドの閻属性モンスターを1体をゲームから除外して発動する。

次の自分のターンのエンドフェイズまで自分の場に表側攻撃表示で存在する機械族モンスターの攻撃力は、自分の場の表側表示の機械族モンスターの元々の攻撃力の合計値分だけアップし、効果は無効となる。

この効果は自分フィールドのモンスターの数が相手モンスターの数以下でなければ

適用されず、発動後ターン終了時までモンスターを特殊召喚できなくなる。

「ワタシの場の機械族モンスターは『ジャイアント・ボマー・エアレイド』、『ダーク・フラット・トップ』、『ギミック・パペット』ボム・エッグ』、『マックス・リペアラ』の4体。合計攻撃力は5600！ よって攻撃力は5600ポイントアップする！」

ジャイアント・ボマー・エアレイド：ATK 3000↓8600

ダーク・フラット・トップ：ATK 0↓5600

ギミック・パペット→ボム・エッグ：ATK 1600↓7200

マックス・リペアラ：ATK 1000↓6600

「攻撃力8600と来たか！」

「『ダーク・フラット・トップ』を攻撃表示で出したのはこのためだったんだね……っ！」  
『マックス・リペアラ』は守備表示だから攻撃できないが、他の3体の攻撃力を考えれば十分すぎる！」

「更にワタシは魔法カード『ジャンク・ページ』を発動！ ワタシの場の魔法か罠を1枚除外し、デッキからカードを2枚ドロース、相手の場の魔法か罠を2枚破壊する！」



「セットしてある『反逆者の復讐』を除外して空時エルフィの伏せカードと『団結の力』を破壊する！」

ジャンク・パージ（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場の魔法または罠カードを1枚除外して発動する。

デッキからカードを2枚ドロウし、相手の場の魔法または罠カードを2枚選択して破壊する。

自分のライフが3000以下の場合、このカードを発動する事はできない。

「きゃああ!？」

「うわっ!？」

バギン！ とエルフィの伏せカード『魔法の筒』とアルフの『団結の力』が破壊される。

マシンナーズ・フォートレス：ATK 5700 ↓ 2500

こいつ、好い加減に……っ！

「デメエ、好い加減にしやがれ！ さつきからエルフィばかり狙いやがって！ あいつが何をしたってんだ！」

「僕も言いたかったよそれを！ エルフィに何か恨みでもあるのか！」

俺が叫ぶ前にライとアルフに叫ばれた。だが、言いたい事は2人に行ってもらったので問題は無い。

ラストは俺達に対して鼻で笑った。

「恨み？ そんなモン無いわよ？ ただそいつが女だっただけよ！」

「!?」

「ワタシ達上級護衛はねえ！ 死んだ人間の魂を元に作られた、アンタらと同じ転生者の類なのよ！」

「何だと!?!」

「もつとも、この世に強い負の未練を残している事が条件だけどね！」  
ラストはそのまま自らの過去を話始めた。

SIDE：無し

ラストは元々、中世ヨーロッパに生きていた貴族だった。

その見目麗しい美貌で数多の男を魅了し、物を貢がせては高笑いし、男をとつかえひっかえしては遊び暮らしていた。

『あはははは！ ワタシの愛が欲しいのなら、もつと頂戴よ！』

例え交際相手がいようと無関係。その美しきで男を魅惑して破局させ、飽きたら捨てる。それで相手がどうなるうとも知った事ではない。その頃には新しい男が自分を守ってくれるのだから。

『あんな昔の男になんて興味無いわ。今のワタシには貴方だけ……』

両親は早年に没し、使用人達を男で占めた彼女は、しかし当然の事ながら務めを果たす事は無かった。

貴族というのは遊び暮らすだけが能では無い。その地方を治め、庶民の暮らしの平定を図るといふ役目がある。今で言う知事や村長、領主の様な役割を持っていた。

さて、どこにでもあるのは激烈な恋愛奇譚。彼女の不幸は、自身の治める地区でそれが存在し、剩えそれに手を出してしまった事だろうか。

そのアベックの男に手を出した彼女は、しかし手酷く振られてしまった。当然だ。美貌だけで全ての男は振り向かない。視線を集める事はできても、それが心をも惹き付けるかどうかは別の問題なのだ。

『すみません、自分にはもう好きな人がいますので……』

『な、何故!? ワタシの方が貴方にもっと素敵な暮らしをさせてあげてよ! それに美しさだってワタシの方が上よ! 一体何が不服だと言うの!?!』

しかも彼女にとつて更に不幸だったのは、既に領土内に彼女が男をほいほい乗り換える遊び人だという事が伝わりきっていた事である。

これではいくら美しくして位が高くても靡く男は稀だろう。

『自分は、本当に自分を愛してくれる彼女以外の元へ参るつもりはありません』

『ツキイイイイイイイッ! いいわ! それがアンタの答えだって言うのなら、こつちにも考えがあるわよ!』

キレたラストは私兵を使って2人を拘束し、無理矢理にでも男を手籠めにしようとした。

だが男は金で雇われたゴロツキ程度には負けなかった。それどころか彼には王宮にコネがあつたのだった。

結果、これまでの悪行の数々が王族の耳に入り、ラストは貴族としての位を剥奪。領主としての地位を追われた。

『こ、この美しいワタシが、何故こんな目に……! 有り得ない! こんな理不尽、有り得ない! 有ってはならない! 何時か絶対に返り咲いてやる!』

しかしこの時点で既にラストは40以上。おまけに自墮落的な暮らしを続けていた所為でその美貌も崩れ始めており、既に男を振り向かせる事は出来なかつた。

そして糊口を凌ぐような生活すらままならない状態が続いたある日、彼女は十人を超える女性に囲まれた。年齢は様々だが、皆が皆自分に敵意を持っていた。

『な、何よアンタ達！ このワタシを誰だと思つて——』

『黙れ！』

『アタシらアンタの所為で彼氏と破局したのよ！』

囲んだのは自分が破局させたカップルの片割れ。

それが恨みを持つて自分を包围しており——

S I D E : 黎

「その後ワタシはその女共に手酷い暴行を受けて死んだ。その時に誓つたのよ、今度はワタシ以外の女のいない世界を作つてやるつてね！ どう？ 悲劇でしょう？」

「全部自業自得だろ！」

全員一致である。

こいつの話からすればグラトニーもまた転生者だったのだろうか？

兎に角、酷く身勝手な理由でこいつはエルフィを集中攻撃しているという事が分かった。とんでも無い悪女だ。

こんな話をして同情を買えると思っっているこいつがある意味恐ろしい。

「さて、昔話もここまですよ！ バトル！」

「クッ！」

『『ジャイアント・ボマー・エアレイド』で『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃！ 』デス・

エアレイドグ！」

ガギン、と爆撃機に搭載された銃口が『ダーク・ヴァルキリア』を狙う。

「マズいよ、攻撃力の差は6500！ エルフィの3200のライフじゃ耐えきれない

！」

「防御、できないっ！」

『逃げて下さい、マイレディッ！』

「死ねえ！ ワタシの世界に、女はいらないのよお！」

ガガガガガガガガガッ！ 巨大戦闘機の機関銃が火を噴き、黒い堕天使を撃つ

た。

そのまま貫通した鋼の弾丸がエルフィに向かい――

「永続罨『孤高の守人』を発動！」

半透明のシールドが一発残らず弾丸を弾き返した。

墮天使は吹き飛んでも、エルフィには傷一つついていない。

「何い!?!」

『孤高の守人』は発動後にモンスター体の装備カードとなる! 装備モンスター以外を狙ったバトルではダメージは発生しない! よって、俺の『スピード・ウオリアー』以外を狙ってもダメージは遮断される!」

『グッジョブよ、黎!』

「だったら『ギミック・パペット・ボム・エッグ』で『スピード・ウオリアー』を攻撃! たかが守備力400のザコ如き、吹き飛ばしてやる! マシンガン・ボムミサイル  
“!”」

卵人形が再び爆弾を吐き出す。ミサイルのように無数に飛来した爆弾はそのまま俺の前を走るクリーム色のアーマーを来た戦士を直撃した。

「アツハハハハハ! これで邪魔者はいなくなっただわ!」

「それはどうかনা!」

しかし煙が晴れると、そこには変わらず足のローラースケートで走り続ける戦士がいた。

「バカな!?!」

『孤高の守人』のもう一つの効果を発動！ 装備されたこのカードを墓地に送る事で、装備モンスターの破壊を無効にする！」

「なんですつてえ!?!」

孤高の守人（アニメオリジナル）

【通常罫】

発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に存在するモンスター1体に装備する。

装備モンスター以外のモンスターの戦闘によって発生する戦闘ダメージは0になる。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合、このカードを墓地へ送る事でその破壊を無効にする事ができる。

「で・も！ 今度こそ空時エルファイへの攻撃は邪魔できないわよお！ 『ダーク・フラット・トップ』でダイレクトアタック！ 〃ダークミサイル・フルバースト〃！」

攻撃可能な最後のモンスターがミサイルを撃ち出す。チツ、もう防御手段は残ってないぞー！

「そうは行くか！ 彼女を守れないで何が彼氏だ！ 罫カード『ガード・ブロック』を発



動！ その攻撃によるダメージを無効にしてカードを1枚ドロロー！」

だが、ライは残っていた伏せカードを開けた。シールドでミサイル攻撃を完全に遮断し、手札を1枚補充する。

ナイスだ、ライ。

「ありがとう、2人とも！」

「無問題だ」

「どうって事無いさー！」

これで持ち直した。まだ戦える！

「チツ、ワタシはカードを1枚セットして、ターンエンド！」

ラスト：LP 7200

手札：3枚

フィールド

：ダーク・フラット・トップ（ATK 5600）、ジャイアント・ボマー・エアレイド（ATK 8600）、ギミック・パペット・ボム・エッグ（ATK 7200）、マックス・リペアラ（DEF 1000）

：伏せカード1枚、部品循環工場（フィールド魔法）

さて、またこつちに番が回って来た。

もう容赦はしねえ。この反省も後悔も無い淫売女に、人間の怒りつてモンを教えてやる！

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード『壺の中の魔術書』を発動！ 俺とアルフはデッキからカードを3枚ドロー！

続いて魔法カード『埋葬呪文の宝札』を発動！ 俺の墓地の魔法カードを3枚除外し、カードを2枚ドローする！ 墓地の『精神操作』、『皆既日蝕の書』、『壺の中の魔術書』を除外！」

来た！

「手札から更に魔法カード『死者転生』を発動！ 手札を1枚捨てる事で、墓地のモンスターを1体手札に戻す！ 俺が選択するのは『ラヴァ・ゴーレム』！

更にお前の場の『ジャイアント・ボマー・エアレイド』と『ギミック・パペットーボム・エッグ』を墓地に送り、再び『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』をお前の場に特殊召喚！」

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム：ATK 3000

爆撃機と卵人形を握り潰し、再びラストの場に現れるマグマの巨人。ラ○ユタの巨○兵みたいな見た目だが、決して早すぎたワケでは無い。

『オヴァアアアア……』

「く、またこのモンスターを!？」

「そして『スピード・ウォリアー』を攻撃表示に変更!」

スピード・ウォリアー：DEF 400 ↓ ATK 900

「攻撃力900を攻撃表示?」

アルフが首を傾げる。

確かに、この攻撃力はあまりにも頼りない。だが、それは俺の壁としての話。その答えは、ここに……

「魔法カード『強制転移』を発動! お互いのプレイヤーは、自分の場に存在するモンスターを1体ずつ選択してコントロールを交換する!」

強制転移

## 【通常魔法】

(1) : お互いのプレイヤーは、それぞれ自身のフィールドのモンスター1体を選ぶ。

そのモンスター2体のコントロールを入れ替える。

このターン、そのモンスターは表示形式を変更できない。

「俺は『スピード・ウオリアー』を選択！ さあ、お前も選べよ、ラスト！」

「ならばワタシは……、ッ!？」

気付いたか？

お前の場のモンスターは3体。『ラヴァ・ゴーレム』、『ダーク・フラット・トップ』、『マックス・リペアラー』。

この内2体をお前は渡す事はできない。片や大ダメージ回避の為に。片や今後の展開の為に！

仮に『ダーク・フラット・トップ』を渡したとしよう。そうするとこの場面でラストは4700もの大ダメージを受け、しかも『ジャイアント・ボマー・エアレイド』を復活させる事ができなくなる。

そして『マックス・リペアラー』を渡しても同じ事。大量展開ができなくなる。『部品循環工場』の効果で復活するのはスタンバイフェイズ。つまりラストが自分のターンに

なつて『マックス・リペアラ』を破壊しても、復活まで更に1ターン待たなくてはならない。

つまり、お前が渡せるモンスターは最初から1体だけという事だ！

「ぐ、ううううっ！ 『ラヴァ・ゴーレム』を選択！」

「OK、交換だ！」

互いのモンスターが光に変わり、それぞれの場所を入れ替える。クリーム色のアーマーの戦士はラストの場で相変わらず走り続け、マグマの巨人は俺を檻に閉じ込める形で俺の場に。

「バトル！ 『ラヴァ・ゴーレム』で『スピード・ウォリアー』を攻撃！ ゴーレム・ポ

ルケーノッ！」

『グヴォウアアアアアアアッ！』

吐き出された灼熱の息吹が焼き払うどころか溶かし尽くすばかりの勢いで『スピード・ウォリアー』を直撃し、後ろのラストを熱気で焼き尽くす。

「グギャアアアアアアアアッ！」

ラスト：LP 7200↓5100

すまない、『スピード・ウォリアー』……。お前を生贄にする形にしてしまった……。  
「魔法カード『アドバンスドロ』！」『ラヴァ・ゴーレム』をリリースしてカードを2枚ドロ！」

……、俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

黎：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード2枚

「タクティクスに無駄が無いね！ 僕のターン、ドロ！」

「そう言ってもらえるとは光栄だね」

「ふふ、僕は『レッド・ガジェット』を通常召喚！」

『タツ！』

レッド・ガジェット：ATK 1300

『レッド・ガジェット』の効果発動！ 召喚か特殊召喚に成功すれば、デツキから『イエロー・ガジェット』を手札に加える事ができる！

続いて手札から速攻魔法『バグ・ロード』を発動！ お互いのプレイヤーは、自分の場のレベル4以下のモンスターと同じレベルのモンスターを1体、手札から特殊召喚できる！ 僕は『レッド・ガジェット』と同じレベルの『豪腕特急トロッコロッコ』を選択！ 誰か、出したい人！」

「俺が出したい！ 俺は『ゴブリンエリート部隊』と同じレベルの『終末の騎士』を特殊召喚！」

豪腕特急トロッコロッコ：ATK 1800

終末の騎士：ATK 1400

赤色の歯車モンスターに続いて飛び出すのは、大型トロッコとゴグルをかけた漆黒の鎧の騎士。

片や牽引している貨物車両には石炭が積まれているディーゼル車であり、片や赤色のマフラーを風にたなびかせて剣を構えている。

「『終末の騎士』の効果で、デツキから『ダメージ・イーター』を墓地に送る！」

終末の騎士

星4

闇属性／戦士族

ATK 1400／DEF 1200

(1)：このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に発動できる。  
デツキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。

「行くよ！ 僕はレベル4の『レッド・ガジェット』と『トロツコロツコ』をオーバーレ

イ！」

『ギギイツ！』

『ピーツ！』

アルフの掛け声に合わせて赤い歯車が雄叫びを、小豆色の貨物列車が警笛を高らかに響かせる。

そのまま赤歯車が紅色、貨物列車が橙色の光に姿を変え、螺旋を描いて空中へと飛び上がった。



「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4×☆4Ⅱ★4

一二筋の光はそのまま天空にできた銀河の渦へと飛び込み、爆発を呼び出した。

「現れる！ ランク4、『超量機獣エアロボロス』！」

『キイイイイ！』

超量機獣エアロボロス：ATK 2200

キリキリキリ、とゼンマイが巻かれ、姿を光の中から見せる緑の機械魔獣。大空を滑空する鉄の妖鳥は機械的な鳴き声を響かせ、中空を羽ばたいて空気を切り裂く。効果はシンプルだが、中々に頼もしいモンスターだ。

「ふん、たった2200の攻撃力で何ができるのかしら！」

「2200じゃない！ 素材となった『豪腕特急トロッコロッコ』には、オーバーレイ・ユニットとなった時、エクシース召喚されたモンスターの攻撃力を800ポイントアップさせる効果がある！」

超量機獣エアロボロス：ATK 2200 ↓ 3000

「攻撃力3000!? 『ジャイアント・ボマー・エアレイド』の元々の攻撃力を上回ったですって!」

「まだまだ! 『エアロボロス』の効果発動! 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、モンスター1体を裏側守備表示にする!」

超量機獣エアロボロス（エクシーズ・効果モンスター）

ランク4

地属性／機械族

ATK 2200 / DEF 2400

レベル4モンスター×2

(1)：X素材が無いこのカードは攻撃できない。

(2)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除き、このカード以外のフィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを裏側守備表示にする。

このカードが「超量士グリーンレイヤー」をX素材としている場合、この効果は相手ターンでも発動できる。

(3) : 1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

自分の手札・フィールドの「超量士」モンスター1体を選び、このカードの下に重ねてX素材とする。

「対象は『ダーク・フラット・トップ』! ッリバース・レンチ!」

『ミイイイ、ミイイイイイイイイイイイイイイイッ!』

発条機甲ゼンマイスター : O R U    2 ↓ 1 / A T K    3 3 0 0 ↓ 3 0 0 0

緑の鉄鳥の背中に光る星が1つ吸い込まれ、その双翼から光が発せられる。発光は闇の空母を照らし出し、その姿を1枚の横向きのカードに変えてしまった。

ダーク・フラット・トップ : A T K    5 6 0 0    ↓ セット

「チツ、でも『ダーク・フラット・トップ』の守備力は3000! 『エアロボロス』の

今の攻撃力と同じ！ 倒す事はできないわ！」

残念だったわねえ！ とラストが高笑いする。だがアルフはそれを問題無い、と言つてのけた。

「何……？」

「エンドフェイズになれば分かる話さ。バトル！ 『フォートレス』で『マックス・リペアラ』を攻撃！ “ヘヴィー・バレル・カノン”！」

移動要塞戦車の砲身が動き、砲弾が射出された。砲弾を正面から浴びた『マックス・リペアラ』は跡形も無く吹き飛んだ。

ガゴン！ と空葉莖が排出されて次の砲弾が装填される。

「バトルフェイズ終了！」

「しかし、お前も遠慮無いね」

「うん？」

俺の呆れた声に、アルフは首を傾げた。

「いや、思い切り砲撃だろ今の。下手したら味方の線路おじやندぞ？」

「ははは、その辺調整くらいするさ」

あ、そうですか。

大人しそうなのは見た目だけかい。

「僕は魔法カード『ロジック・レンチ』を発動。フィールドに存在する裏守備モンスターの数だけドロウする。そしてエンドフェイズにそれらのモンスターのセット状態を解除し、全て表側攻撃表示にする。よって僕は1枚ドロウ」

「ハ、そんな効果に何の」

セットモンスター ↓ ダーク・フラット・トップ : ATK 0

「意味、が……。しまった!？」

「ターンエンド」

カードから再びその姿を現す『ダーク・フラット・トップ』。しかしそこには、もう既に強力な攻撃力は失われていた。

セット状態は効果や強化に対して有効な手段だ。しかも攻撃表示に戻した、これで戦闘ダメージが通る!

ロジック・レンチ (オリジナル)

【通常魔法】

(1) : フィールドに存在する裏側守備表示モンスターの数だけカードをドロウする。

このターンのエンドフェイズ、裏側守備表示モンスターは全て表側攻撃表示になる。

アルフ：LP 4000

手札：2枚（内1枚は『イエロー・ガジェット』）

フィールド

：マシンナーズ・フォートレス（ATK 2500）、超量機獣エアロボロス（ATK

3000・ORU：1）

：マシンナーズ・ピースキーパー（ユニオン・『マシンナーズ・フォートレス』に装備）

「グッジョブよ、アルフ！ 私のターン、ドロ―！ 私は『ヘカテリス』を手札から捨てて『神の巨城―ヴァルハラ』を手札に加える！ そしてそのまま発動！」

……『ヴァルハラ』が移動して……。本来なら戦い抜いた戦士の魂を迎える聖域なのに、良いのか？

エルフィの発動したカードを中心に、乳白色の大理石の柱と赤いカーテンが展開する。丁度彼女の横には玉座が存在し、天井の無い部屋の空では遠目に天使達が飛んでいるのが見えた。

「『ヴァルハラ』の効果発動！ 私の場にモンスターが存在しない時、1ターンに1度、手

札から天使族モンスターを1体特殊召喚できる！ 『エンジェルナイト天空騎士パーシアス』を特殊召喚

！』

『トオアツ！』

天空騎士パーシアス：ATK 1900

馬の蹄と共に空から舞い降りたのは白と青の鎧の騎士天使。白い翼を羽ばたかせ、兜の下からラストを覗む。

「バトル！ 行け、『パーシアス』！ 『ダーク・フラット・トップ』に攻撃！」

『ハアアアツ、テアアツ！』

「チッ！」

ラスト：LP 5100↓3200

斬！ 剣閃が炸裂し、戦艦を切りつける。

爆発が生まれて突風が吹きすさぶが、被害はラストのライフ以外に特には無い。

『『パーシアス』は戦闘ダメージを与えた時、1枚ドロウできる。ドロウ！』

天空騎士パーシアス（効果モンスター）

星5

光属性／天使族

ATK 1900／DEF 1400

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

また、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

引いたカードを見てエルフィは澁面を作った。望んでいたカードでは無いらしい。

「……私はいこれでターンエンド！」

エルフィ：LP 3200

手札：2枚

フィールド

：天空騎士パーシアス（ATK 1900）



：神の巨城―ヴァルハラ（永続魔法）

さて、エルフィの攻撃でラストのライフはほぼ残っていない。

「俺のターン、ドロ―！」

そしてターンプレイヤーのライの場にいるモンスターの攻撃力の合計は3600ポイント。3200しか残っていないラストでは耐えられない。

「これで片付ける！ 黎、伏せカードの警戒は!?!」

「この状況で警戒するか？ 一気に叩き伏せろ！」

「おっしやあ！ 俺は『ゴブリンエリート部隊』を攻撃表示に変更！」

ゴブリンエリート部隊：DEF 1500↓ATK 2200

「これで終わりだあ！ 『終末の騎士』でダイレクトアタック！」

「くっ！」

ラスト：LP 3200↓1800

「そして『ゴ布林エリート部隊』の攻撃で止めだあ！」

黒騎士の斬撃がラストのライフを削り、そして止めの連閃がラストを捉えた。

これで勝ったあ！

「よっしゃあ！ 直撃だ——」

ラスト：LP 1800

「ぜえ!?!」

「何!?!」

「そんな!?!」

ところがラストはダメージを受けていなかった。

それどころか、ヤツの場にはいなかったハズのモンスターが現れていた。トリツクアートのように空間が四角に凹んでいて、そこには歯車を組み合わせた、四角の機械の怪物がいた。

ギミック・ボックス：ATK 2200

「しまった、『ギミック・ボックス』か!」

ギミック・ボックス（アニメオリジナル）

【永続畏】

プレイヤーへの戦闘ダメージが発生した時に発動する事ができる。

そのダメージを無効にする。

発動後、このカードはモンスターカード（機械族・闇・星8・攻？／守0）となり、自分のモンスターカードゾーンに攻撃表示で特殊召喚する。

このカードの攻撃力は無効にした戦闘ダメージの数値と同じになる。

このカードは畏カードとしても扱う。

「ふふふ、惜しかったわねえ？」

「クソッ！」

仕留められなかったか！

しかも『ゴ布林エリート部隊』が守備表示に変わるし、ライの場には『終末の騎士』が攻撃表示でいる！

ゴ布林エリート部隊：ATK 2200↓1500

「クソツッ！ 俺はカードを1枚セットして、ターンエンドだ！」

ライ：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：ゴブリンエリート部隊（DEF 1500）、終末の騎士（ATK 1400）  
 ：伏せカード1枚

「ワタシのターン、ドロー！ 除外した機械族を墓地に戻すわ！」

「またモンスターが戻った……」

「更に墓地から『マックス・リペアラ』を守備表示で特殊召喚！」

マックス・リペアラ：DEF 1000

くそ、またこいつか……！

「ダメだ、何度やっても蘇るよ……」

「っ、ラッシュがまた来るよ！」

『マックス・リペアラ』のモンスター効果発動！ レベル1の『機皇帝ワイゼル∞』を墓地から除外し、墓地のレベル8、『ダーク・フラット・トップ』を特殊召喚する！」

ギギギギ、と鏡餅もどきがアームを動かしてゲートを生み出す。

悪いがラスト、そうはさせないぞ！

『マックス・リペアラ』の発動に罠をチェーン発動！ 『サンダー・ワイヤー』！ 相手が墓地のモンスターをモンスター効果の対象に選択した時、発動を無効にする！ そして対象になったモンスター、及びそれと同じ種族のモンスターを1体デッキに戻す！

『ダーク・フラット・トップ』と『ジャイアント・ボマー・エアレイド』にはお引き取り願おうか！

「しま?」

奴の墓地からカードが2枚吐き出され、デッキに戻る。しかし『ダーク・フラット・トップ』はダークシンクロモンスター。戻る先はエクストラデッキだ。

対して『エアレイド』は特殊召喚モンスター。再び呼び出すためにまた3体のモンスターを除外しなくてはならないのは効率が悪いだろう。

サンダー・ワイヤー（オリジナル）

【カウンター罠】

(1) : 墓地のモンスターが相手モンスター効果の対象になった時に発動できる。

その発動を無効にする。

その後、対象となったモンスターと、そのモンスターと同じ種族のモンスターを1体選び、持ち主のデッキに戻す。

(2) : 墓地のこのカードを除外して発動する。

手札の雷族モンスターを1体捨てて、デッキからカードを2枚ドロウする。

「良いぞ、黎！ これなら蘇生できねえ！」

「感謝は全てが終わった後だ！ まだヤツの行動は終わってないぞ！」

しかし、危ない所だった。レベルがマイナスだからレベル1のモンスターを除外しても蘇生できるのか。確かに自然数以下の値だとは言え、墓地にモンスターが存在する限り何度でも復活できる計算になるな。

「ならばワタシは墓地のレベル9の『デス・オイルタンカー』を除外し、デッキからレベル8の『ギミック・パペット―ネクロ・ドール』を特殊召喚！」

『フフフフ……』

ギミック・パペット―ネクロ・ドール : ATK 0

棺桶が開き、中からボロボロに傷ついたフランス人形が現れる。包帯を巻いているその姿には血が滲んでいる。

「奴の場にレベル8が2体……っ！」

「レベル8の『ギミック・ボックス』と『ギミック・パペット―ネクロ・ドール』をオーバレー！」

『ギギイイ！』

『フフフッ！』

トラップモンスターの『ギミック・ボックス』が赤紫、『ギミック・パペット―ネクロ・ドール』が棺ごと青紫の光に姿を変えて空に螺旋を描く。地上にできた銀河の渦に2つの光が飛び込んだ。

「2体のモンスターでオーバレー・ネットワークを構築！」

☆8×☆8＝★8

「エクシーズ召喚！ 出でよ『No. 15』！ 運命に導かれし琴線の使い手にて破壊を齎す暗黒の絡線人形！ 『ギミック・パペット―ジャイアント・キラ』！」



No. 15 ギミック・パペット・ジャイアント・キラー：ATK 1500

ここで出やがったか、この処刑機械め！

心臓を象った巨大な黒い塊が変形し、巨大な男の人形となる。その上にはその巨体を操る糸が垂れており、後ろでは人形を操る本体の人間がいる。自身の数字である15は、額のリングに刻まれていた。

ギョロリとこちらに向けられる目は無機質な顔付きと相まって非常に恐怖心を煽られる。

「ワタシは手札から魔法カード『フェイク・ドッグタグ』を発動！ 相手モンスター1体を選択し、フィールドか墓地に存在する限り、そのモンスターはエクシーズモンスターとして扱う！ 対象は『天空騎士パーシアス』！」

「何?！」

「アンタもしつこいねえ！」

フェイク・ドッグタグ（オリジナル）

【通常魔法】

相手モンスター1体を選択して発動する。

そのモンスターはエンドフェイズまでフィールド・墓地に存在する限りエクシーズモンスターとしても扱う。

このカードを発動したターン、手札のモンスターを通常召喚する事はできない。

天空騎士パーシアス：効果モンスター↓エクシーズ・効果モンスター

「さて、『ジャイアント・キラール』の効果は知ってるわね？」

「くー！」

「それじゃあ遠慮無く使わせてもらおうわよお！ 『ギミック・パペット』ジャイアント・キラール』のモンスター効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、相手の場の特殊召喚されたモンスターを1体破壊する！ それがエクシーズモンスターならば、その元々の攻撃力分のダメージを与える！ まずは『パーシアス』を対象に発動！」

No. 15 ギミック・パペット→ジャイアント・キラール：ORU 2↓1

パシュツ！ と15の数字が刻まれた額のリングに紫色の星が吸い込まれる。

そして巨人の腕が動き、そこから無数の糸が撃ち出され、騎士に巻き付いて絡め捕る。「度胸ねえヤツは目を瞑っとけよ！」

そして巨人の胸部が開いた。内臓されたローラーが回転しだすのと同時に糸が勢いよく巻き取られる。

『パーシアス』ッ！」

そしてそのままローラーの中へと引き擦り込み——

『ギャアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

「ぐ………！」

火花を散らしながら粉碎した。中でグロテスクな音が響き、血飛沫が飛び散る。その中から血のように真っ赤な砲身が姿を現す。

「そしてその攻撃力、1900ポイント分のダメージを受けてもらうわ！」

大砲にエネルギーが充電され、それがエルフィに向けて——

ズキッ！

『その化物は粉碎機の中に放り込みなさい。ミンチ肉にすれば流石に死ぬでしょう』  
つ、また昔の記憶を……！

『どうせ肉片で十分なんだから、生かしておく必要なんて無いわよ。あっちの妹の方はもう死んじやったしね』

これは、俺が……。

『え？ 妹の方はまだ死んでない？ だったら頭を千切りなさい。溶けた鉄も忘れんじやないわよ』

あいつが……。

『これでゴミ掃除完了。政府もこれで10億もくれるんだから、チョロイ仕事よね』

死んだ時の……、記憶っ！

『さて、肉片は保冷して宅配の手配をしなさい。後は掃除して帰って打ち上げよ。人間の敵を排除した記念にね。ワタシ達はヒーローになったわ。たった今から世界中の人から祝福される大英雄よ♪』

そうか、『ジャイアント・キラー』のローラーが木材粉碎機を連想して……。

『やっぱり、良い事をした後は気分が好いわねえ』

そしてあの女とラストにどこか通じるものを感じて……！

『は、半分ミンチになってもまだ生きてるとは、本当にゴキブリ並みの生命力ね！』

ズキン！

あの日の、あれを、繰り返し返してたまるか！

「……ッ、そうはさせるかよ！ ライ！ 『ダメージ・イーター』だ！」

「ああ、解ってる！ 墓地の『ダメージ・イーター』の効果を発動！ 相手ターンでのみこの効果は発動し、こいつを除外する事で効果ダメージを回復に変える！」

ダメージ・イーター（効果モンスター）

星2

闇属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 800

相手がダメージを与える魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する事ができる。

その効果は、ライフポイントを回復する効果になる。

この効果は相手ターンにのみ発動する事ができる。

墓地から除外された『ダメージ・イーター』がエルフィの場に登場。放たれたビーム砲を顎を有り得ないレベルにまで開いて飲み込み、そして彼女の体に光を振りかける。光はエルフィの体を静かに癒していった。

エルフィ：LP 3200↓5100

「ありがとう」

「礼にはまだ早いぜ、エルフィ」

そう、ライの言う通りだ。『ジャイアント・キラー』は1ターンに2回、効果を使える！

「ならば『ジャイアント・キラー』の効果をもう1度発動！ 今度は『エアロボロス』を狙わせてもらおうわよ！」

「2度目は俺がやる！ カウンター罠発動、『ダメージ・ポラリライザー』！ 効果ダメージが発生する効果の発動そのものを無効にする！ そしてお互い1枚ドロ！」

ダメージ・ポラリライザー

【カウンター罠】

ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。

その発動と効果を無効にし、お互いのプレイヤーはカードを1枚ドロウする。

ビュッ！ と再び吐き出された糸。それをゼンマイの戦士は鏡のように輝く盾で受け止める。結果、糸に捕まる事無く『ゼンマイスター』は場に残った。

「お、のれえ……！ 1枚ドロウ！」

「こつちもドロウだ！」

これは！

「だったらワタシは『マックス・リペアラ』の効果が発動！ 墓地のレベル5の『サムン・リアクター・A I D』を除外し、墓地からレベル4の『ギミック・パペッターボム・エッグ』を特殊召喚する！」

「ならば俺は手札から『増殖するG』を墓地に送り、そのモンスター効果を発動！」  
「何?！」

増殖するG (効果モンスター)

星2

地属性 / 昆虫族

ATK 500 / DEF 200

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できず、相手ターンでも発動できる。

(1)：このカードを手札から墓地へ送って発動できる。

このターン、以下の効果を適用する。

●相手がモンスターの特殊召喚に成功する度に、自分はデッキから1枚ドローする。

「エンドフェイズまで、お前がモンスターを特殊召喚する度に俺はカードを1枚ドローできる！ チェーン1の『マックス・リペアラ』の効果で、『ボム・エッグ』が復活する！」

『ムフフフ！』

ギミック・パペット・ボム・エッグ：ATK 1600

「これで1枚ドロー！」

ゾワゾワゾワ、とゴキブリが俺の墓地から無数に這い出し、俺のデッキに潜り込む。う、ソリッドヴィジョンと解かっけていてもやっぱり……。

「ふ、ふん！ それで特殊召喚を抑制するつもりかしら!? ワタシは更に墓地の『ギミック



ク・パペット―ネクロ・ドール』のモンスター効果を発動！ 墓地の『ギミック・パペット』モンスターを1体除外する事で、このカードを墓地から復活させる事ができる！ 同名モンスターを除外し、蘇りなさい！」

ギミック・パペット―ネクロ・ドール（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星8

闇属性／機械族

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できず、このカードをX召喚の素材とする場合、「ギミック・パペット」モンスターのX召喚にしか使用できない。

（1）このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地からこのカード以外の「ギミック・パペット」モンスター1体を除外して発動できる。

このカードを特殊召喚する。

再び棺桶の中からその姿を現す傷ついたフランス人形。カタリ、と首が揺れて、本来あつた美しさを不気味さに変えている。

ギミック・パペット―ネクロ・ドール：ATK 0

「『増殖するG』の効果で一枚ドロ―!」

「勝手に何枚でも引いてなさい! 『ボムエッグ』の効果発動! 手札の『ギミック・パペット―ナイト・ジョーカー』を墓地へ送り、『ボム・エッグ』のレベルを倍にするわ!」

ギミック・パペット―ボム・エッグ：☆4↓8

再びレベル8が2体か!

「レベル8の『ボム・エッグ』と『ネクロ・ドール』でオーバーレイ!」

『ムフフフフハハアツ!』

『ウフフフフフウツ!』

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!」

☆8×☆8∥★8

「エクシーズ召喚! 出でよ『No. 40』、魔界より遣わされし殲滅の音色、悲運なる運命を嘲笑う旋律の調べ! 『ギミック・パペット―ヘブンス・ストリングス』!」

光の爆発から出現する、巨大な片翼。そこから展開して人の形を作り出し、右手に大剣を持ち、左腕に40の数字が刻まれた片翼がある、黒光りする人形が現れた。『ジャイアント・キラー』と違って、こっちは操縦士がいない。

『ウオオオオ……』

No. 40 ギミック・パペット―ヘブンズ・ストリングス：ATK 3000

更にナンバーズを召喚と来たか……。

『増殖するG』の効果で、更に1枚ドロ―！』

「ふふふ、お好きにどうぞ？ でも、モンスターもリバースカードも無い今の状況で、最早それは無意味よお？」

っ、確かに。伏せていたカードはどちらも使ってしまった。手札にその手のカードが無く、ブラフですらも無い今の状況では、俺に攻撃を防ぐ手段は、無い。

更にラストはニタア、と嫌らしく笑い、カードを1枚引き抜く。

「装備魔法『エクシーズ・ユニット』を『ジャイアント・キラー』に装備。装備したエクシーズモンスターのランク×200攻撃力を上げ、オーバーレイ・ユニットの代用もできる。まあ、『ジャイアント・キラー』は1ターンに2度しか効果が使えない以上、こつ

ちは今は無意味だけどねえ。こいつのランクは8、よって1600ポイント攻撃力が上がる！」

00 No. 15 ギミック・パペットージャイアント・キラール：ATK 1500↓31

「攻撃力1500の『ジャイアント・キラール』が、3000オーバーの大型モンスターになっただ?!」

「このまま『騎士』にダイレクトアタックしたいとこだけど、他のモンスターを壁にされてもつまらないわね。だ・か・ら! 他のモンスターを先に潰させてもらおうよ!

バトル! 『ジャイアント・キラール』で『エアロボロス』を、『ヘブンス・ストリングス』で『終末の騎士』を攻撃! ヽデスウィップ・ダンス! ヽデステニー・エッジ  
“!”

チツ、フィールドを結合に変えていた事を見破られた!

赤色の鞭と鈍く輝く剣がライとアルフのモンスターを捉える。樹木のように太い鞭が黒騎士を張り飛ばし、自身の胴体程の大きさのある剣がゼンマイの戦士を一刀両断した。

「くっくううううっ!」

「うわああああっ!」

ライフ：LP 4000↓2400

アルフ：LP 4000↓3900

「どうしたのかしら? まさかこの程度とか言わないわよねえ!」

「くっ!」

「チイツ!」

「ワタシは更に魔法カード『ヘル・エクス・ケア』を発動! 自分の場に機械族のエクシズモンスターが存在する時に発動できる! 自分のエクシズモンスターのランク合計値×1000、ライフを回復する! ワタシの場にはランク8のモンスターが2体、よって16の10000倍、160000ポイント回復!」

「初期ライフの数値と同じだけ回復!」

ヘル・エクス・ケア (オリジナル)

【通常魔法】

自分の場に機械族のエクシーズモンスターが存在する時に発動できる。  
自分の場のエクシーズモンスターのランク合計値×1000ポイント、ライフを回復する。

ラスト：LP 1800↓17800

クソツ、折角ここまで削ったのに！

「そして魔法カード『邪天使の施し』を発動。ワタシと空時アルフはカードを3枚引き、空時アルフのみカードを2枚墓地に送る」

「またズルい効果だね、それは！」

邪天使の施し（オリジナル）

【通常魔法】

お互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドロウする。

その後、相手プレイヤーは手札を2枚墓地に送る。

つ、手札をまた補充された！

駄目だ、ラストはラストで充分強い！

「まだまだ！ 魔法カード『ラストィ・サーチング』！ 自分の機械族モンスターの守備力を1000下げ、デッキの上からカードを3枚確認、中から1枚を手札に加える！

そして加えた『錆ボルト』を発動！ 墓地の機械族モンスターを1体除外、それよりも低いレベルのモンスターを全て墓地に送る！ ワタシは墓地のレベル12の『機皇神マシニクル』を除外し、空時アルフのレベル7『マシンナーズ・フォートレス』、空時ライのレベル4『ゴブリンエリート部隊』を墓地に送る！」

No. 15 ギミック・パペットージャイアント・キラー：DEF 2500↓1500

ラストィ・サーチング（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：自分フィールドの機械族モンスター1体の守備力を1000ダウンさせて発動する。

デッキの上からカードを3枚めくり、中から1枚を選択して手札に加える。

錆ボルト（オリジナル）

【通常魔法】

自分のメインフェイズ2に自分の墓地に存在する機械族モンスターを1体除外して発動する。

相手フィールド上に表側表示で存在する除外したモンスターよりも低いレベルのモンスターを全て墓地に送る。

「くっ！ 装備された『ピースキーパー』は装備対象がいなくなったから破壊される！

そして破壊された事で、デッキからユニオンモンスターの『強化支援メカ ヘビー・ウエポン』を手札に加える！」

「勝手にやってなさい。カードを2枚伏せてターンエンド！ さあ、そっちのターンよ！」

ラスト：LP 17800

手札：0枚

フィールド

：マックス・リペアラ（DEF 1000）、No. 15 ギミック・パペットージャ



イアント・キラール (ATK 3100・ORU:0)、No. 40 ギミック・パペット  
 ーヘブンズ・ストリングス (ATK 3000・ORU:2)

：部品循環工場 (フィールド魔法)、エクシース・ユニット (装備魔法・No. 15  
 ギミック・パペットージャイアント・キラール』に装備)、伏せカード2枚

「俺の、ターンッ！」

味方モンスターを巻き込む『ヘブンズ・ストリングス』の効果は使わないか。次のター  
 ン、更に攻撃をしかけて来るつもりだな……。

手札は4枚。その中にある1枚、『サンダー・ヴェール』。これは、できればフレイと  
 の約束がある以上使いたくない。

「俺はチューナーモンスター、『T・S 磁力線ブーソル』を召喚！」

バチバチバチッ！ とディスクがカードを読み込む。

空中に磁力線の絵が浮かび、それが鎧の柄となって、磁石の鎧兵が現れた。

『ギギィ〜』

T・S 磁力線ブーソル：ATK 1500

『磁力線ブーソル』の効果発動！ 自分の場に他のモンスターが存在しない時にこのカードが召喚された時、墓地に存在する500以下の攻撃力を持ったモンスターを1体、効果を無効にして特殊召喚する！ 復活しろ、『カードガンナー！』  
『ブーブー』

カードガンナー：ATK 400

T・S 磁力線ブーソル（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／雷族

ATK 1500／DEF 500

このカードが召喚に成功した時、自分の場に他にモンスターが存在しない時のみ発動できる。

墓地に存在する攻撃力500以下のモンスターを1体、効果を無効にして特殊召喚する。

『死者転生』の効果で捨てておいたカードが復活する。

『デブリドラゴン』で復活できるから、こいつは中々便利だ（『ダンディライオン』には劣るがな）。

「更に『カードガンナー』の効果発動！ デッキからカードを3枚墓地に送る！ 効果が無効になっているため攻撃力は上がらないが、墓地に送るのはコストのため有効だ！」  
墓地に3枚のカードが送られる。送られたカードは『聖なるバリアーミラーフォース』、『ネクロ・ガードナー』、『強欲で謙虚な壺』……。3枚中2枚が痛え、つかひデエ……。

ええいチクショウ、次だ！

「レベル3の『カードガンナー』に、レベル4の『磁力線ブーソル』をチューニング！」

『ピピー！』

『トアツ！』

「天空に轟く雷、旋回し癒し撃ち抜く魔弾となる！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆3+☆4=☆7

「シンクロ召喚！ 迸れ、『T・S エレクトロン・ゲリール』！」

『行つくわよおっ！』

T・S エレクトロン・ゲリール：ATK 2700

走り抜ける紫電が一ヶ所に集まり、ピエロのような奇抜な衣装を生み出す。その服の内側から手足と頭が飛び出し、1人の紫の模様を顔に施した女性が生まれた。

「バトル！ 『マックス・リペアラ』に攻撃だ！」

『はいはい！ そりゃアツ！』

「つとー！」

指先から放たれた雷が、鏡餅機械を破壊する。

兎に角、次のターンで更に別の機械族を呼ばれるのを防がないと！

「魔法カード『テイク・オーバー5』！ デッキからカードを5枚、墓地に送る！」

テイク・オーバー5（アニメオリジナル）

### 【通常魔法】

自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送る。

自分のドローフェイズにこのカードが墓地に存在する場合、このカードをゲームから

除外する事で、デッキからカードを1枚ドロウする。

この効果は1ターンに1度しか発動できない。

送られたカードは『T・S オーム・ソルジャー』、『攻撃の無力化』、『地割れ』、『収縮』、『T・S ボルト・ナイト』。

おい、テメエら……っ！

「カードを1枚伏せて、エンドフェイズに『エレクトロン・ゲリール』のモンスター効果発動！ 俺の場の雷族モンスター1体につき700ライフを回復！ 今いるのは『エレクトロン・ゲリール』1体のみのため、700回復だ」

黎：LP 1900↓2600

「ターンエンド！」

黎：LP 2600

手札：1枚

フィールド

：T・S エレクトロン・ゲリール（ATK 2700）

：伏せカード1枚

「あらあ？ パートナーとケンカでもしたのかしらあ？ 回復は本来彼女の役目でしょ

う？」

「うつせえ！ ヒーラーはいても困らんだろうが！」

「はいはい、キレイない。僕のターン、ドロー！ 魔法カード『天使の施し』を発動！ ゲッツキから3枚引いて2枚捨てる！」

「まったく、ラストのヤツ、痛いトコ突いて来るぜ。桜が本来ならヒーラーでアタッカー。大体のデツキに噛み合う優秀なモンスター。だが、まだ彼女が来ない。今はこれで場凌ぎをするしか無い。」

ああ、いかん。冷静になれ。焦っても勝てるものじゃないだろう。

「(さて……、どうしようかな?)」

「アルフ、強力なモンスターを呼べるのなら躊躇はするな。俺が援護する」

「そう、信じて良いんだね？」

「任せろ」

「なら僕は手札から『太陽風帆船』を特殊召喚！ このカードは自分の場にモンスターが存在しない時、攻守を半分にして手札から特殊召喚できる！ 続いて『惑星探査車』を通常召喚！」

アルフが呼び出したのは2体の機械族モンスターだ。

1体目は紫色の帆船。ただし船底が存在せず、上下両方に大きな帆がいくつも張つてある。

2体目は緑色の單車。ソーラーパネルが搭載されている、文字通り惑星探査用の小型ビークルだ。

太陽風帆船：ATK 8000 ↓ 4000 / DEF 2400 ↓ 1200

惑星探査車：ATK 1000

「更に魔法カード『タンホイザーゲート』！ 自分の場の攻撃力1000以下の同じ種族のモンスターを2体選択し、その2体のレベルをお互いの合計値にする！ 『太陽風帆船』はレベル5、『惑星探査車』はレベル4。よって2体のレベルは9になる！」

太陽風帆船：☆5 ↓ 9

惑星探査車：☆4↓9

「レベル9となった『太陽風帆船』と『惑星探査車』をオーバーレイ！」

緑とオレンジの光になったアルフのモンスターが銀河の渦に飛び込む。ただし、地面では無く天空に、雲を割るようにして現れている渦に。

ランク9で機械族……、あいつが出て来る！

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆9×☆9||★9

「エクシースズ召喚！ 姿を現せ、大宇宙の巨大要塞！ 『No. 09 天蓋星ダイソン・スフィア』！」

空が真っ暗になった、と思った瞬間、そのモンスターの起動が始まった。それはまるで宇宙を覆い隠すかのような巨大要塞。これ程までに巨大なモンスターは、高層ビル並みの巨軀を持つ地縛神ですらも及ばないだろう。

コアのある中心部から、5枚の金属板の羽根が伸びている。羽根小さな光が沢山灯つていて、まるで街明かりのようにも見えた。



No. 09 天蓋星ダイソン・スファイア：ATK 2800

「ふふふ、『ジヤイアント・キラール』がいるのにエクシーズモンスターを召喚？ ふふふ、ヤケにでもなったのかしら？ それに攻撃力も及ばない！」

「そんなワケ無いでしょ！ 『ダイソン・スファイア』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、このカードは相手プレイヤーにダイレクトアタックができる！」

No. 09 天蓋星ダイソン・スファイア（エクシーズ・効果モンスター）

ランク9

光属性／機械族

ATK 2800 / DEF 3000

レベル9モンスター×2

(1)：このカードより高い攻撃力を持つモンスターが相手フィールドに存在する場合、自分メインフェイズ1にこのカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

このターン、このカードは直接攻撃できる。

(2)：X素材を持っているこのカードが攻撃されたバトルステップに1度、発動できる。

その攻撃を無効にする。

(3)：このカードがX素材の無い状態で攻撃対象に選択された時、自分の墓地のモンスター2体を対象として発動できる。

そのモンスターをこのカードの下に重ねてX素材とする。

バシユン！ と周囲を回る星の1つが『ダイソン・スフィア』の中心のコアに吸い込まれる。すぐに巨星はエネルギーの充填を開始した。

No. 09 天蓋星ダイソン・スフィア：ORU 2↓1

「ここ、攻撃力2800の直接攻撃ですって!?!」

「行け、『ダイソン・スフィア』! ギャラクシーライト・ブラスター!」

白い悪魔を連想するな、その攻撃名。

充填されたエネルギー砲は過たずにラストへと放たれた。

「チッ、ここで使う予定は無かったけど、リバーズカードを発動! 『アブソプシヨンドロー』! ダイレクトアタックによるダメージを無効にし、相手モンスターの元々の攻撃力700につき1枚カードをドローできる!」

アブソプシヨンドロー（オリジナル）

【通常畏】

相手モンスターがダイレクトアタックを行う時に発動できる。

ダメージを無効にし、攻撃を行ったモンスターの元々の攻撃力700ポイントにつき1枚カードをドローする。

「『天蓋星ダイソン・スフィア』の攻撃力は2800、よってカードを4枚ドロー！」

ありや、失敗か。

バリアに防がれて攻撃が失敗し、アルフは申し訳なさそうに顔を伏せた。

「ゴメン、敵にチャンス作っちゃった……」

「誰でもある事だ、気にするな」

「うん……、カードを1枚伏せてターンエンド」

アルフ：LP 3900

手札：0枚

フィールド

：No. 09 天蓋星ダイソン・スファイア（ATK 2800・ORU：1）  
 ・伏せカード1枚

「私のターン！」

「……状況的には、厳しいな」

「それでもどうにかしなくちゃいけないでしょ！

私は『神の巨城―ヴァルハラ』の効果

で『エンジェルブレイブ天空勇士ネオパーシアス』を特殊召喚！」

『タアツ！』

天空勇士ネオパーシアス：ATK 2300

天堂の門を潜り、白銀と蒼の鎧を身に纏った天の騎士が駆け抜ける。馬の蹄の音がしたかと思ったら、どうやら下半身が馬であるケンタウルスの類らしい。

天空勇士ネオパーシアス（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2300 / DEF 2000

このカードは自分フィールド上の「天空騎士パーシアス」1体をリリースし、手札から特殊召喚できる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

また、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、デッキからカードを1枚ドロウする。

フィールド上に「天空の聖域」が存在し、自分のライフポイントが相手より上の場合、その数値だけこのカードの攻撃力・守備力がアップする。

「更にチューナーモンスター『ブーテン』を召喚し、  
『ぶー』」

ブーテン：DEF 300

そして羽のついたデフォルメ仔豚が登場。サファイア色に澄んだ瞳で空を飛んでいる、正に愛らしいの一言に尽きる存在だ。

ブーテン（チューナー・効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 2000／DEF 300

自分のメインフェイズ時に、墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上のレベル4以下の天使族・光属性モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターはフィールド上に表側表示で存在する限りチューナーとして扱  
う。

「負けられない……!! レベル7、光属性の『天空勇士ネオパーシアス』に、レベル1の『ブーテン』をチューニング!」

仔豚天使が光のリングに変わり、その中を7つの星に変わりながら天の勇者が潜り抜ける。

潜った勇者は輪郭線を残して消滅し、光の柱となった。

「大空を駆け抜ける勇者よ、今こそ光の彼方からその姿を現し、穢れし魂に聖断を下せ

!」

☆7+☆1=☆8

「シンクロ召喚！ 裁け、『神聖騎士パーシアス』ホーリーナイト ツ！」  
『トアッ！』

光の中からその鋭い双眸を光らせ、白亜の翼がはばたく。鋭い剣と強固な盾を手にした巨軀の騎士が、馬の蹄を響かせて威風堂々と推参した。

神聖騎士パーシアス：ATK 2600

「ふん、2600程度の攻撃力で何ができるつてのよ！ こっちの攻撃力は3000と3100、全然足りないわね！」

「だったらこれならどう!? 『神聖騎士パーシアス』の効果発動！ 1ターンに1度、相手モンスター1体の表示形式を変更する！」

「何ですって!?!」

神聖騎士パーシアス（シンクロ・効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2600／DEF 2100

チューナー＋チューナー以外の光属性モンスター1体以上

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の表示形式を変更する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

『ジャイアント・キラー』を守備表示に変更！』

No. 15 ギミック・パペットージャイアント・キラー；ATK 3100↓DEF 1500

「な!？」

「これで攻撃が通る！ バトル！ 『神聖騎士パーシアス』で『ジャイアント・キラー』に攻撃！ 『天翔閃破斬』！」



斬！ 斬斬斬！ 斬斬斬斬斬斬斬ツ！

無数の剣閃が走り、黒の巨大人形を滅多斬りにする。全ての刃に捉えられた15番目のナンバーズはバラバラに斬られてその場に崩れた。

「更に攻撃力が相手の守備力を超えていけば、その数値の分だけダメージを相手に与える！」

「何ですつてえ!? ぐううううううううつ！」

ラスト：LP 17800↓16700

「よし！ いい感じに行ける！ カードを1枚セットして、ターンエンド！」

エルファイ：LP 5100

手札：0枚

フィールド

：神聖騎士パーシアス（ATK 2600）

：伏せカード1枚、神の巨城―ヴァルハラ（永続魔法）

「調子出て来たじゃんか、エルファイ！」

「まだキーカードは来ないけどね！」

「だったら、それまで保たせてやるだけさ！ 俺のターン、ドロー！ 容赦無しだ！ 俺

は『ヘルウエイ・パトロール』を召喚！」

『ウエイ！』

ヘルウエイ・パトロール：ATK 1600

トロツコに並走する形で走り出すバイク。乗っているのは黒い悪魔だ。ランプを点けて笑うその姿は、正しく地獄からの使者。

……声には突つ込まないぞ？ おのれディケ○ド！ とでも言っただけか？

「バトル！ 『ヘルウエイ・パトロール』で『ヘブズ・ストリングス』を攻撃！」

「攻撃力が下で攻撃して来たって事は……！」

「おう！ 速攻魔法『収縮』！ 相手モンスターの攻撃力を半減させる！」

No. 40 ギミック・パペットーヘブズ・ストリングス：ATK 3000↓1

500

「喰らえ、〃ヘル・チエイサー〃！」  
「チイツー！」

ラスト：LP 17800 ↓ 17700

バイクの突進、入った！

本来なら『ヘルウェイ・パトロール』には破壊した相手モンスターのレベル×100のダメージを与える効果があるが、ランク持ち相手じゃあこれは通じないな。

「おっしやあ！ ターンエンドだ！」

ライ：LP 2400

手札：2枚

フィールド

：ヘルウェイ・パトロール（ATK 1600）

：伏せカード1枚



ドはエクストラデッキとデッキからレベルとランクの等しい機械族を1体ずつ墓地に送り、カードを2枚ドロウする!」

ブラックライト・ファイバー（オリジナル）

【通常魔法】

自分のエクストラデッキからエクシーズモンスターを1体墓地に送る。

送ったモンスターのランクと同じ数値のレベルを持つ機械族モンスターをデッキから1体墓地に送り、カードを2枚ドロウする。

「ワタシはランク8の『No. 88 ギミック・パペット―デステニー・レオ』を墓地に送り、デッキからレベル8の『ジャイアント・ボマー・エアレイド』を送る! 2枚ドロウ!」

『デステニー・レオ』を送って来たか。流石にこの場面では使いつらいんだろうな。

「そして『トレード・イン』を発動! 手札のレベル8の『ギミック・パペット―ナイトメア』を墓地に送り、カードを更に2枚ドロウ!」

そして『ギミック・パペット―ギア・チェンジャー』を通常召喚!」

『キエツへへへへエツ!』

「そしてマジックカード『ジャンク・パペット』を発動！ 墓地から復活しなさい、『ギミック・パペット—ナイト・ジョーカー』！」

『ハッヘー！』

ギミック・パペット—ギア・チエンジャー：ATK 1000

ギミック・パペット—ナイト・ジョーカー：DEF 1600

また「ギミック・パペット」を場に!?

地面に現れた紫の魔法陣から浮かぶように現れる巨大な絡繰人形。それを操る糸を鎌で一閃して切断、漆黒の鎌使いが再び陣の中に叩き落とした。

それに合わせて頭部が四角い機械でできた人型マシンが現れる。

「『ギア・チエンジャー』は1ターンに1度、ワタシの場の「ギミック・パペット」1体と同じレベルにする事ができるわ！ 『ギミック・パペット—ギア・チエンジャー』のレベルを『ギミック・パペット—ナイトジョーカー』と同じ8にする！」

『キエヘヘヘッヘヘッ！』

ギミック・パペット—ギア・チエンジャー：☆1↓8

ジャンク・パペット

【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1) : 自分の墓地の「ギミック・パペット」モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。

ギミック・パペット—ナイト・ジョーカー (効果モンスター)

星8

闇属性／機械族

ATK 800 / DEF 1600

自分フィールド上の「ギミック・パペット」と名のついたモンスターが戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られた時、そのモンスターをゲームから除外して発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

「ギミック・パペット—ナイト・ジョーカー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

ギミック・パペット—ギア・チエンジャー (効果モンスター) (アニメオリジナル)

星1

闇属性／機械族

ATK 100 / DEF 100

このカードはデッキから特殊召喚できない。

1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上の「ギミック・パペット」と名  
のついたモンスター1体を選択して発動できる。

このカードのレベルは選択したモンスターのレベルと同じになる。

不気味な人形の腕が伸びて頭部の機械に接続されたレバーをガチャガチャと弄る。

唸りを上げて機械の中のギアが変換され、レベルがシフトした。

「レベル8が2体っ!」

「今回はこれだけじゃ終わらないわよお! 『マックス・リペアラ』の効果を発動!

墓地のレベル10の『アステリスク』を除外し、レベル8の『ネクロ・ドール』を蘇生  
!」

『フフフフ……』

ギミック・パペットーネクロ・ドール：ATK 0



「レベル8を3体揃えた!？」

リリース……、いやエクシーズか!

レベル3〜5のモンスターがいるんだ、もしも上級モンスターを呼び出すのならこんなレベルの高いモンスターを呼ぶ理由がない。

「レベル8の『ギミック・パペット―ナイトジョーカー』、『ギア・チェンジャー』、『ネクロ・ドール』をオーバーレイ!」

ラストの掛け声と共に、3つの機械が紫の光に変わる。濃淡をつけた三筋の光は空中へ飛び上がり、空の銀河の中へと飛び込んで行った。

『ギャハハハハッ!』

『ケヒヒヒヒッ!』

『クフフフフッ!』

「3体の閻属性モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築う!」

☆8×☆8×☆8∥★8

「エクシーズ召喚っ! あの生意気なクソガキ共を粉碎しなさい、『ダーク・ギミック・パペット―ブラック・マツシヤ』!」

『ゴガガガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

ダーク・ギミック・パペット―ブラック・マツシヤ―: ATK 3500

to be continued

STORY 63 : 女の意地 ★

黎 : LP 2600

手札 : 1枚

フィールド

: T・S エレクトロン・ゲリール (ATK 2700)

: 伏せカード1枚

アルフ : LP 3900

手札 : 0枚

フィールド

: No. 09 天蓋星ダイソン・スファイア (ATK 2800・ORU : 1)

: 伏せカード1枚

エルファイ : LP 5100

手札：0枚

フィールド

：神聖騎士・パーシアス（ATK 2600）

：伏せカード1枚、神の巨城―ヴァルハラ（永続魔法）

ライ：LP 2400

手札：2枚

フィールド

：ヘルウエイ・パトロール（ATK 1600）

：伏せカード1枚

ラスト：LP 17700

手札：2枚

フィールド

：マックス・リペアラー（DEF 1000）、ダーク・ギミック・パペット―ブラッ

ク・マッシュャー（ATK 3500・ORU：3）

：部品循環工場（フィールド魔法）、伏せカード1枚

## SIDE : 黎

「エクシーズ召喚っ！ あの生意気なクソガキ共を粉碎しなさい、『ダーク・ギミック・パペットーブラック・マツシャー』！」  
 『ゴガガガアアアアアアアアアアッ！』

ダーク・ギミック・パペットーブラック・マツシャー：ATK 3500

「『攻撃力3500!』」

傾斜45度という非常に高い急勾配の道を進み始めたラストとの戦いもそろそろ後半。そんな中、奴が召喚したのは闇に染まった絡繰機械、両手に巨大なメイスを手にしたゴーレム。周囲を3つの紫色の星が旋回する、漆黒の巨大人形だった。

「バトル！ 『ブラック・マツシャー』で『神聖騎士パーシアス』を攻撃！ デストロイ・ダークプレス〃ウツ！」

ブウン！ と振り下ろされる巨大なメイス。それは過たず翼を持った聖なる騎士を直撃し、木端微塵に粉碎した。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

エルファイ：LP 5100↓4200

「「エルフィツ!?!」」

「まだよ! 『ブラック・マツシャー』の効果発動! このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、そのレベルまたはランク1つにつき300ダメージを与える!

『パースィアス』のレベルは8、よって……」

「2400ダメージ!?! う、わあああああああああああああああああつ!」

エルファイ：LP 4200↓1800

更にその攻撃の余波がエルフィを吹き飛ばし、転倒したトロツコから彼女が放り投げられてしまった。

不味い、この勾配の速度で放り投げられたら重傷は避けられない!

しかも不運な事に、谷底は岩だらけで彼女は頭から落ちて行っている。武人とはいえ、最悪このケースは死に至るぞ!

「ッ!」

俺は慌ててワイヤーを作り出して射出し、彼女の腕に巻き付けた。更に髪の毛を最大限に伸ばし、引っ繰り返ったトロツコも元のレールに乗せて牽引する。

だが、すぐにエルファイに繋がっていたワイヤーが弾け飛んだ。

「そうはさせないわあ！ あのクソ女はこの場で殺す！」

「しまっ!?!」

狙撃されてワイヤーを切断された!? 直径2ミリに満たない鋼の糸を寸分違わずに拳銃で撃ち抜くとはなんてヤツだ!

更にワイヤーと髪の毛を伸ばしてエルファイの安全を確保しようとするが、距離を離され過ぎて届かない。

エルファイ!?

S I D E : エルファイ

意外と、世界はスロウリーになるんだなあなんて、場違いな事を私はしみじみと考えていた。

傾斜を移動する途中でワタシはトロツコから放り出された、つまり、このまま背後の谷底まで真つ逆さま。黎の救援ロープ（正体は考えない）も届かない。

谷底までの落下時間、私自身の体重、岩だらけの落下地点 e t c、死ぬるね、これ。あつちやあ、私の人生ここまでか……。

悔いは、残念ながらある。売れたら億万長者になれるくらいある。でもまあ、今ここで考えるのは場違いだろうか。

少しずつ落下しながら、前方でまだ走っているトロツコを見る。

大好きな人に、その弟に、頼もしい仲間。

やれやれ、恋人らしい事、あんまりあいつにしてやれなかつたなあ……。

なんて、ガラにも無い事を考えて目を瞑った。何となく、私が死ぬ直前の、あいつらの絶望した表情は見たくなかつたし。私は、死ぬ時は楽しい事を考えながら死にたい。最後の光景が大切な人達の悲しい顔だなんて、嫌過ぎる。

前世と今。家族と恋人。色々な光景がグジャグジャに混ざり、そして泡沫うたかたのように消える。人の一生は、そんな泡のように儚い。

「バイバイ、ライ」

最期に1番好きな人の名前を呟いて、私の人生は――



「バカ言ってるじゃねえよ！」

——終わらなかつた。

「え？」

「何とか、間に合つたみたいだな……」

温かくて、大きな何かに私は包まれている。目を開けて見ると、そこにいたのは私の

彼氏、ライだった。

S I D E : 黎

「ツラアー！」

「何のお！」

ドン！ドン！ババン！ガン！バキーン！ドシーン！

俺は必死になってラストの凶弾を自分で作った拳銃で撃ち落とす。ライがいきなりトロツコを逆走させ始めた時は驚いた。だが、その一瞬で彼の意図を察知した俺はラストの射撃を妨害し始めた。

「兄さん！」

「大丈夫だ！ エルフィも無事だ！」

「良いぞ！ さっさと戻って来い！」

要はライが落下したエルフィを助けただけの話。俺が彼女が飛んでいくのを僅か数秒、留めたお陰で彼は辛うじて追いつけたようだ。しっかりとお姫様抱っこで彼女を抱きとめている。

やがてライのエルフィを乗せたトロツコはこちらに追いついた。

牽引していたトロツコにエルファイが飛び乗ると、流石にラストも無駄弾を撃つのを止めた。

奴が銃を仕舞えばこつちも構える理由は無いら。銃口から立ち上る煙を吹いて飛ばし、収納する。

「問題無いか、エルファイ？」

「こつちは大丈夫だけど……、黎、その体……」

「ん？ ああ、十発くらい貰ったかな？」

エルファイが気にしたのは、多分俺の体だろう。

ラストの攻撃からライとエルファイを守るために、可能な限り弾丸をぶつ放したからな。ラストの注意がこつちを向いて、そして俺との銃撃戦になった。自由に動けないこじやあ全弾回避は無理だった。

結果、俺は数十発の弾丸を被弾。色の浅いシャツは俺自身の血で赤黒く染まってしまったというわけだ。

「黎……」

「気にするな。この程度、何て事は無いさ」

別に被弾するなんて事、珍しくも何とも無い。生前はよく狙撃銃だの機関銃だので狙われたものだった。

それでも何か言いたそうなエルフィだったが、止めたらしく前を向き直した。

「ラスト。こう見えて私には恋人がいるのよ」

「へえ？ それが何か？」

「あんたは私を殺そうとした。ライが私の死んだ後に新しい恋人を作るのは構わない。何時までも私に拘泥して暗い人生送ってもらうよりはマシだから」

でも、とエルフィは続ける。

「あんたみたいな身勝手な理由でヒトの男を奪うような奴に殺されて、黙ってる女はいないのよ！」

「あらあ、それだけじゃないわよ？ この後こいつらを殺して、あんたと空時ライの魂だけ復元する予定だったのよ？ 目の前で悔しがらるあんたを高笑いしながら、空時ライを寝取るためにねえ！」

「(ブチイ！)」

あ、脳の血管が派手に切れた音が……。

「……ライ、アルフ、黎」

「な、何だ？」

「……何かな」

「おう」

「レベル4のモンスターを3体揃えて。もう許さない！ 私はあいつを許さない！ ライフが0になっても徹底的に破壊し尽くしてやる！」

おお、おつかない。

「ふん、やれるものならやってみなさいよ、ブス！」

「私がブスならあんたはドブスよ、オバハン！」

「オバ……ッ!？」

「中世から生きていたなら十分オバハンでしょうが、この化石生物！」

「言ったわねえ、クソガキ！」

いきなり始まった口喧嘩。

場所も周囲も考慮しない派手なそれは、次第にエスカレートしていく。

「この×が！ ×の×を×ってなさいよ!」

「お断りよ、中古品の×××何百年も前の×のクセに！」

「キイイイッ!?!言×たわねえ、この×××叩き潰してやるわよ、××」

「やってみれば、×× どうせ途中で×が×××ってお終いよ！」

うん、女性が淫語を使うってのは、その手のシーンだと盛り上がる人もいるんだろう

が、こういうケースだと寧ろ、何て言うか、嫌だ。普通なら「言えないよ」とか言つて

口に出す事すら男でも憚るような言葉なんだがなあ。特に×とか×とか。

××

((女って怖いなあ……))

何時の時代も、女性には強いものである。

一通り口論が終わったのか、ラストは再びカードを切った。

「マジで叩き潰してあげるわ! 『ブラック・マッシャー』の効果発動! このカードが自身の効果で1000以上のダメージを相手に与えた時、オーバーレイ・ユニットを1つ消費する事で、相手の場のカードを1枚破壊する!」

ダーク・ギミック・パペット→ブラック・マッシャー(エクシーズ・効果モンスター)  
(オリジナル)

ランク8

闇属性/機械族

ATK 3500/DEF 2000

闇属性のレベル8モンスター×3

このカードはエクシーズ召喚以外の方法で特殊召喚する事はできない。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、そのモンスターのレベルまたはランク×300ポイントのダメージを相手に与える。

この効果で1000ポイント以上のダメージを与えた時、エクシーズ素材を1つ取り

除く事で、相手の場のカードを1枚選択して破壊できる。

「対象は『ダイソン・スファイア』！　“クラッシュインパクト”！」

巨人の投擲したメイスが巨大な人工星の中心部を捉える。瞬間、5枚の翼に走った回路が次々とスパーク、爆発し、光を失っていく。そして『ダイソン・スファイア』は力を失って墜落した。

「『ダイソン・スファイア』!？」

ダーク・ギミック・パペット→ブラック・マッシュャー：ORU　3↓2

「手札から魔法カード、『裏取引の調律』を発動！　墓地の機械族モンスターを1体除外し、それと同じレベルのチューナーを1体、デッキから特殊召喚する！」

裏取引の調律（オリジナル）

【通常魔法】

墓地の機械族モンスターを1体除外する。

除外したモンスターと同じレベルのチューナーを1体、デッキから表側攻撃表示で特

殊召喚する。

この効果で特殊召喚したチューナーをシンクロ素材としたモンスターは、特殊召喚されたターン攻撃できない。

「墓地のレベル4の『機皇兵スキエル・アイン』を除外し、デッキからレベル4の『ブラック・ガジェット』を特殊召喚！」

ブラック・ガジェット：ATK 1100

「更に『ブラック・ガジェット』の効果発動！ 召喚・特殊召喚された時、墓地からレベル3以下の機械族を1体復活させる！ 『チューニング・サポーター』、蘇りなさい！」

チューニング・サポーター：ATK 100

またモンスターを並べて来た！ こいつのデッキは本当に展開力が高いな！

「レベル2として扱う『チューニング・サポーター』とレベル2の『マックス・リペアラ』に、レベル4の『ブラック・ガジェット』をチューニング！」





ブラック・ガジェット（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／機械族

ATK 1100／DEF 200

このカードは罠・効果モンスターの効果では特殊召喚できない。

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地からレベル3以下のモンスターを1体特殊召喚できる。

このカードが機械族モンスターのシンクロ素材となった時、手札が1枚以下ならデッキから手札が5枚になるようにカードをドローできる。

「まずは『ブラック・ガジェット』の効果で手札が5枚になるようにドロー！　そして『チューニング・サポーター』の効果でもう1枚ドロー！」

「いい!?!　手札6枚!?!」

「カードを4枚伏せて、ターンエンド！」

ラスト：LP 17700

手札：2枚

フィールド

：マックス・リペアラー（DEF 1000）、ダーク・ギミック・パペット・ブラック・マツシヤ（ATK 4600・ORU：2）、ジャイアント・ダーク・ガジェット（ATK 3200）

：部品循環工場（フィールド魔法）、伏せカード5枚

「俺のターン！」

「黎！」

「分かってるっての！」

ハ、上等だよ、ラスト。

テメエはあの女によく似ている。見た目、喋り方、考え方……。案外テメエの子孫かもな。

だが、今はどうでも良い。

俺の仲間を殺そうとしたその罪、余す所無く清算してもらおうぞ！

【BGM：Revolution】

「ドロロー！ この瞬間、墓地の『テイク・オーバー5』の効果発動！ 効果を発動したこのカードをゲームから除外し、もう1枚ドロロー！」

レベル4が必要なんだったな。

ならば！

「俺は、『ガード・マスター』を召喚！」

『テヤアツ！』

ガード・マスター：DEF 1700

ガード・マスター（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星4

地属性／戦士族

ATK 0 / DEF 1700

このカードが自分の墓地に存在する場合、相手モンスター1体が自分フィールド上に存在する表側攻撃表示モンスター1体を攻撃対象に選択した時に発動する事ができる。

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、攻撃対象となったモン

スター1体の表示形式を表側守備表示に変更する事ができる。

また、この効果の対象になったモンスター1体は、このターン戦闘では破壊されない。

「カードを1枚伏せて『エレクトロン・ゲリール』を守備表示に変更」

T・S エレクトロン・ゲリール：ATK 2700↓DEF 1700

これでエルフィの要望通り、レベル4のモンスターを出せた。壁モンスターもいる。

そして今伏せたこのカードは、『サンダー・ヴェール』。

フレイ、悪いな。やっぱ俺は自分を労れないようだ。

「ターンエンド！ エンドフェイズにライフを700回復！」

黎：LP 2600↓3300

黎：LP 3300

手札：1枚

フィールド

：T・S エレクトロン・ゲリール（DEF 1700）、ガード・マスター（DEF 1700）

：伏せカード2枚

「僕のターン、ドロー！ 『グリーン・ガジェット』を守備表示で召喚！ 効果でデッキから『イエロー・ガジェット』を手札へ！」

『ハッ！』

グリーン・ガジェット：DEF 600

「これでレベル4は3体揃った！ ターンエンド！」

アルフ：LP 3900

手札：1枚（『イエロー・ガジェット』）

フィールド

：グリーン・ガジェット（DEF 600）

：伏せカード1枚

「私のターン！ 魔法カード『壺の中の魔術書』で私とアルフはカードを3枚引く！ 来た！」

レベル4のモンスターは『ガード・マスター』、『グリーン・ガジェット』、『ヘルウェイ・パトロール』の3体が揃っている。

さて、どうするんだ、エルファイ？

壺の中の魔術書

【通常魔法】

お互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドローする。

「私は『勝利の導き手フレイヤ』を『ヴァルハラ』の効果で特殊召喚っ！ 自身の効果で私の場の天使族の攻守を400上げる！」

『今度はボクの出番だね！』

更にエルファイが呼び出すのはチアガールコススの天使。青い髪を揺らして勇猛果敢に飛び出した。

勝利の導き手フレイヤ（効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 1000 / DEF 1000

自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択する事はできない。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

勝利の導き手フレイヤ：ATK 1000 ↓ 500

「そして私はレベル4の『ガード・マスター』、『グリーン・ガジェット』、『ヘルウェイ・パトロール』をオーバーレイ！」

『『トオオオオオオアアアアアアアアアアアッ！』』』

「3体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

緑の服を着た拳法士が土色、緑の歯車が橙色、バイクに乗って走る悪魔が藤色の光となつて飛び上がる。上空に生まれた銀河の渦の中へと、絡み合うが如く3つの光が飛び



込み、大きな爆発を生み出した。

天使族でランク4、そして素材3体って言えば、あいつが来るな。

☆4×☆4×☆4 Ⅱ★4

「エクシーズ召喚！ ディストピア 絶望郷よりの使者、『ヴァイロン・デイシグマ』！」

『ぬう、トアッ！』

光と共にこの場に刻まれるのは、理想を描いた絶望を司る戦士団員。輝く翼を持つて現れた機械天使。大きなアームを持ち、『ダーク・ガジェット』と良い勝負の巨体でラストを見下ろす。

ヴァイロン・デイシグマ：ATK 2500↓2900

「ハン、デカい口叩いた割にはその程度？ そんなんじや私の場のモンスターは倒せないわよ！」

「それはどうかしら!? 私は『ヴァイロン・デイシグマ』のモンスター効果を発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、相手モンスター1体を装備する！」

「何ですって!?!」

『ヘルウエイ・パトロール』を墓地に送って効果発動! 対象は『ブラック・マツシャー』

!」

ヴァイロン・デイシグマ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク4

光属性／天使族

ATK 2500 / DEF 2100

レベル4モンスター×3

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

相手フィールド上に表側攻撃表示で存在する効果モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する。

このカードが、この効果で装備したモンスターカードと同じ属性のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

シユン、パジイツ! と黄金色に輝く星が吸い込まれる。その瞬間、巨大な機械天使はアームを動かしてメイスを持った巨人を自身の体の中へと強引に取り込んだ。差し

詰め、序盤で見た『機皇帝』の焼き直しだろうか。

ヴァイロン・デイシグマ：ORU 3↓2

「もらったわよ！」

「ぬう！」

良しナイス！ これを狙ってエルファイはレベル4モンスターを呼んだのか！

「バトル！ 『ヴァイロン・デイシグマ』で『ジャイアント・ダーク・ガジェット』を攻撃！ 『デイストピア・ブライト』！」

「攻撃力が下のクセに攻撃して来たって事はー！」

「そう、モンスター効果発動！ 『ヴァイロン・デイシグマ』が自身の効果で装備したモンスターと同じ属性のモンスターとバトルを行う場合、ダメージ計算をすつ飛ばして破壊できる！ よって『ブラック・マッシャー』と同じ闇属性の『ダーク・ガジェット』は破壊！」

怪しさを感じさせる白い光で、歯車の巨人を狙い撃つ機械天使。

最初はその光線を、腕を交差させて受け止めていた巨人だったが、色が白から黒に変わった途端、腕が木端微塵に砕け散り、連鎖的に体も崩壊した。

だが――

「くううううっ！　だがこの瞬間、『ジャイアント・ダーク・ガジェット』の効果を発動！　１ターンに１度、表側攻撃表示のこのカードが破壊された時、墓地からこのカードを復活させる！」

「何ですって!?!」

ジャイアント・ダーク・ガジェット：ATK 3200

砕け散ったはずの体は、実はそれ程までに小さな部品だった。１つ１つのオブジェクトが意思を持つかの用に集まりだし、再び巨人の体を作り上げる。

「チツ……、１枚伏せて、ターンエンド！」

エルファイ：LP 1800

手札：1枚

フィールド

：ヴァイロン・デイシグマ（ATK 2900・ORU：2）、勝利の導き手フレイヤ

（ATK 500）

・伏せカード2枚、神の巨城―ヴアルハラ（永続魔法）、ダーク・ギミック・パペット  
 ―ブラック・マツシヤー（エクシーズ・効果モンスター）『ヴァイロン・ディングマ』に  
 装備）

「俺のターン！」

1ターンに1度、破壊されても復活できるのか……。

「ここは腕の見せ所だぜ、ライ！」

「俺は墓地の『ヘルウエイ・パトロール』の効果を発動！ 墓地のこのカードをゲームから除外し、手札から攻撃力2000以下の悪魔族モンスターを1体特殊召喚できる！」

手札から『マッド・デーモン』を特殊召喚！」

『ヒヤツハハハハ！』

マッド・デーモン：ATK 1800

マッド・デーモン（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1800 / DEF 0

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、このカードの表示形式を守備表示にする。

「リバースカード、オープン！ 永続罫『闇次元の解放』！ 除外されている俺の闇属性モンスターを1体、特殊召喚する！ 蘇れ、『ヘルウェイ・パトロール』ッ！」  
『ウウエエエイツ！』

ヘルウェイ・パトロール：ATK 1600

### 闇次元の解放

#### 【永続罫】

ゲームから除外されている自分の闇属性モンスター1体を選択して特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊してゲームから除外する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

ライが呼び出すのは2体の悪魔。

漆黒のゲートを通して場に出たのは牛の頭骨を肩に乗せた、不気味に笑う悪魔。

次元の狭間から飛び出したのは、先刻までフィールドを走行していた暴走族風の悪魔。

レベル4を2体か……。

「レベル4の『マッド・デーモン』と『ヘルウェイ・パトロール』をオーバーレイ！」

『ヒヤツハハハハ！』

『ウエイウエイッ！』

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4×☆4||★4

「エクシーズ召喚！ 闇から奏でるアンサンブル！ 『交響魔人マエストローク！』

『ハアッ！』

交響魔人マエストローク：ATK 1800

闇と闇が重なり、その狭間から神秘の音楽が流れ出る。

タクトを得意気に振り回し、楽団の衣装を身に纏った音楽界の巨匠が銀河の渦の中から姿を現した。

「攻撃力1800ねえ。その程度じゃあワタシの『ジャイアント・ダーク・ガジェット』は倒せないわよお？」

「問題無いさー！ 『交響魔人マエストローク』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、相手モンスター体を裏側守備表示にする！

ドゥー！」

「何?！」

交響魔人マエストローク（エクシーズ・効果モンスター）

ランク4

闇属性／悪魔族

ATK 1800／DEF 2300

レベル4モンスター×2



1ターンに1度、このカードのエクシース素材を1つ取り除き、相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを裏側守備表示にする。

また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上の「魔人」と名のついたエクシースモンスターが破壊される場合、代わりにそのモンスターのエクシース素材を1つ取り除く事ができる。

交響魔人マエストローク：ORU 2↓1

「確か『ダーク・ガジェット』の効果は表側攻撃表示じやなきやダメだったな？ つまり守備表示なら効果は使えないって事だ！」

「くっ！」

ジャイアント・ダーク・ガジェット：ATK 3200 ↓ セツト

楽団スタイルの悪魔がタクトを構え、振る。その動きに合わせて音楽が鳴り響き、黒歯車の巨人は1枚のカードへとその姿を変えた。

「そして魔法カード『マジック・プランター』を発動！ 対象を失った『閻次元の解放』を墓地に送り、カードを2枚ドロロー！」

マジック・プランター

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在する永続罫カード1枚を墓地へ送って発動できる。

デッキからカードを2枚ドロローする。

「更に『ランサー・デーモン』を召喚し、バトル！」

ランサー・デーモン（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1600 / DEF 1400

相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを攻撃対象とした自分のモンスターの攻撃宣言時に発動することができる。

そのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ランサー・デーモン：ATK 1600

『ランサー・デーモン』でセット状態の『ダーク・ガジェット』を攻撃！ 『ランサー・デーモン』は1ターンに1度、俺のモンスター1体に貫通効果を与える！ 当然『ランサー・デーモン』自身にも有効だ！ 『デモンズ・ランス』！』

『ギハハハッ！』

ザグリ！ 腕が突撃槍となった白骨悪魔が、黒い歯車を障子紙の如く貫く。

ジャイアント・ダーク・ガジェット：セット ↓ DEF 0

「グハア！」

ラスト：LP 17700 ↓ 16100

「良いぞ、ライ！」

「続けて『マエストローク』でダイレクトアタックだ！　　レクイエム・カストロファイ

ッ！」

「そうはいかないわよ！　畏発動！　『プロキシ・ショート』！　相手がダイレクトアタックして来た時、その攻撃を相手の別のモンスターへと逸らす事ができるわ！　更にその時のダメージの数値は倍になる！」

「何!?!」

プロキシ・ショート（オリジナル）

【通常畏】

相手モンスターの直接攻撃宣言時、相手の場にモンスターが2体以上存在する場合に発動できる。

そのモンスターの攻撃対象を相手の別のモンスターに変更できる。

この戦闘によって発生するダメージは倍になる。

「対象は『ランサー・デーモ』『カウンター畏発動』ン……?」

「『盗賊の七つ道具』！ 私のライフを1000支払う事で、罨カードの発動を無効にし、破壊する！」

エルファイ：LP 1800↓800

エルファイ、お前、自分の身を削って……！

「く、うううう……」

「エルファイ！」

「大丈夫……っ！ これで『プロキシ・ショート』は無効になる！」

「おっと、そうはいかないわ！ カウンター罨発動！ 『恐怖の乖離』！ カウンター罨の発動を無効にし、カードを2枚ドロロー！」

「させるとでも思った!? カウンター罨発動、『カウンター・カウンター』！ 『恐怖の乖離』の発動を無効にし、破壊する！」

盗賊の七つ道具

【カウンター罨】

罨カードが発動した時、1000ライフポイントを払って発動できる。

その罨カードの発動を無効にし破壊する。

恐怖の乖離（オリジナル）

【カウンター罨】

カウンター罨の発動を無効にし、デッキからカードを2枚ドロウする。

カウンター・カウンター

【カウンター罨】

カウンター罨カードの発動を無効にし破壊する。

「チエーンは無い？ なら破壊するよ！」

「な、なんて事……!?!」

バチイッ!

赤いスパークキングが走り、ラストのカードが2枚とも砕け散る。

お見事、ラストの伏せカードを見抜いていたのか。

そして、ラストの発動したカード効果が全て潰された今、『マエストローク』の攻撃は再び有効だ!

楽団衣装の悪魔が剣のようにタクトを一振りし、ラストに音の衝撃波を叩きつけた。  
「ぐぎやあつー！」

ラスト：LP 16100↓14300

「う、ぐう……、だがこの瞬間罨発動よー！」

「何っ!？」

「ワタシが発動させるのはカウンター罨『ブリキの行軍』！ワタシが戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨ててデッキの上からカードを5枚捲る。その中に存在するカードを2枚、手札に加えるわ！」

ブリキの行軍（オリジナル）

【カウンター罨】

自分のが戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて発動する。

デッキの上からカードを5枚めくり、その中に存在するカードを2枚選択して手札に加える。

この効果でめくったカードは相手に見せなくても良い。

5枚の中から2枚を手札に加えたラスト。だが、その顔は……。

「フフ、フフフフフ！」

笑って、やがる……！

「俺の経験則から言わせてもらうと、どうやら次のラストのターンが正念場みてえだ。凌げるか否かで勝敗が決する可能性が高い」

「要約すると？」

「めっちゃ凄いの来る」

「分かりやすいけど分かりやすくなかったな！」

ライの叫びが悲痛っぽい。

まあ、俺だって毎回相手してはいるものの、本当なら避けて通りたいポイントである。「カードを1枚セットして、ターンエンドだ！」

ライ：LP 2400

手札：1枚

フィールド

・交響魔人マエストローク（ATK 1800・ORU:i）、ランサー・デーモン（A



TK 1600)

：伏せカード1枚

ライのエンド宣言と共に、地獄が、始まる。

これをどう凌ぐかが、最大のポイントだ！

「ふふふふ……」

「早く、進めろよ……」

「言われなくてもやってやろうじゃないの！ スタンバイフェイズに除外されていた機械族が墓地に戻る！ 更に墓地の『マックス・リペアラ』を今回は手札に回収！」

!?

守備表示で特殊召喚しないのか!?

「まずは墓地の『ボムエッグ』を除外してもう『ネクロ・ドール』を特殊召喚する！」

『ふふふふふふ』

「そしてこのカードは、相手の場にモンスターが存在し、相手の場に『ギミック・パペツト』モンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる！ 来なさい、『ギミック・パペツト』マグネ・ドール！」

『マア〜グウ〜ッ！』

ギミック・パペット―ネクロ・ドール：DEF 1000

ギミック・パペット―マグネ・ドール：ATK 1000

「そして『ブリキの行軍』で捨てた『メタル・ライオン』の効果を発動！ 自分の墓地にこのカードが存在し、墓地から機械族モンスターが自身の効果で蘇った時、墓地からレベル合計が8になるように機械族モンスターを除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚できる！ 墓地のレベル4の『機皇兵ワイゼル・アイン』と『機皇兵グランエル・アイン』を除外！」

メタル・ライオン：ATK 0

メタル・ライオン（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星8

地属性／機械族

ATK 0／DEF 0

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できない。

(1) : 自分の墓地から機械族モンスターがそのモンスターの効果で特殊召喚されたターンの発動できる。

自分の墓地からレベルの合計が8になるように機械族モンスターを除外するし、墓地のこのカードを自分フィールドに表側攻撃表示で特殊召喚する。

この効果はデュエル中1度しか使えない。

紫の魔法陣から、何度目になるか分からない復活を遂げる人形。棺が開き、包帯を巻いた血染めのフランス人形が現れる。続けて細かな無数のパーツが集まり、橙色の人形が姿を現した。関節部分は球体、腕や足は細長い棒、胴は薄いプレート、頭はキノコのように膨れている。

そして最後には後続で更に金属製の獅子が飛び出した。

「レベル8がまた揃った!?!」

「ワタシはレベル8の『マグネ・ドール』、『ネクロ・ドール』、『メタル・ライオン』でオーバーレイ!」

『フフフフ!』

『キヘヘヘ!』

『ガアアア!』

「3体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆8×☆8×☆8＝★8

「エクシーズ召喚！ 目覚めよ！ 『処刑王のギロチン・ナイト』！」

処刑王のギロチン・ナイト：ATK 3800

紫の星を従えながら姿を露わにする、巨大な機械の騎士。両手にはギロチンを持って  
いる、即ち二刀流形式であり、灰色の西洋風の鎧には酸化して茶色くなった夥しい量の  
返り血が付着している。

……いい加減この手のモンスターも見飽きてきたな。

「ふふふ！ 教えてあげるわ！ 『ギロチン・ナイト』はカード効果では破壊されず、相  
手モンスターを戦闘で破壊する度にオーバーレイ・ユニットを1つ消費する事で相手に  
3000ポイントのダメージを与えるのよ！」

処刑王のギロチン・ナイト（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）

ランク 8

閻属性 / 機械族

ATK 3800 / DEF 3200

レベル 8 モンスター × 3

このカードはカードの効果では破壊されない。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、エクシーズ素材を1つ取り除く事で、相手に3000ポイントのダメージを与える。

このカードとバトルを行う効果モンスターの効果はダメージ計算時のみ無効となる。

「さあ、バトル！ 『ギロチン・ナイト』で『ヴァイロン・デイシグマ』を攻撃！ このカードとバトルを行うモンスターの効果は無効になるのよ！」

「て事は……!?!」

「『デイシグマ』の効果は無効になり、ダメージ計算が発生するぞ！」

「私のライフは残り800、戦闘が成立したら900ダメージを受けて、負ける!?!」

「死ねえ！ ヌ デスブラッド・ギロチン！」

血塗られたギロチンが機械仕掛けの天使へと振り下ろされる。

凶悪な光を放ちながら鈍色の鎧の腕が垂直に動き――

——その姿が幻影の如く消滅した。

「な!?!」

「破壊がダメなら除外するまでだ」

その原因は俺の罨カード。

遙か彼方、異なる次元へとその身を幽閉する。故にその名は……。

『次元幽閉』か!」

「正解」

次元幽閉

【通常罨】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「おのれ、*〃騎士〃*の魂い……!」

「忘れたのか、ラスト。元々の相手は俺だ。ここにいる俺以外の3人は、飽くまで今回限

りのゲスト参戦だぜ？」

そいつを忘れちゃあ、エンヴィーと同じ道を辿るだけだ。

既にラストの主戦力は半数近くが敗北。ここからマジになるか、それとも敗北へ一直線か。

「グギギギギ……！ 良いわ！ だったらワタシ自身で相手してやるわよ！」

来るか！

【BGM終了】

「メインフェイズ2で墓地の『ジャイアント・ダーク・ガジェット』の効果を発動！ このカードを墓地から除外し、手札からレベル3以下の機械族モンスターを1体特殊召喚する！」

ジャイアント・ダーク・ガジェット（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／機械族

ATK 3200 / DEF 0

機械族のチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

表側攻撃表示のこのカードが破壊された時、このカードを墓地から特殊召喚できる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、手札のレベル3以下の機械族モンスターを1体特殊召喚する。

「ジャイアント・ダーク・ガジェット」の効果は1ターンに1度しか使えない。

「当然『マックス・リペアラ』を特殊召喚するわ!」

マックス・リペアラ：DEF 1000

成程、最初から召喚できるアテがあったのか。

「更に『マックス・リペアラ』の効果で、墓地のレベル9『DT デス・オイルタンカー』を除外してレベル4の『トラップ・リアクター・RR』を、レベル8『マグネ・ドール』を除外してレベル1の『チューニング・サポーター』を、レベル5『サモン・リアクター・AI』を除外してレベル3『マジック・リアクター・AID』を特殊召喚っ!」

トラップ・リアクター・RR：ATK 800



チューニング・サポーター：ATK 100

マジック・リアクター・AID：ATK 1200

3体、それもレベルがバラバラでチューナーもないって事は、目的は1つしか有り得ない！

「ワタシはこの3体をリリースッ！ 現れよお！」



グルをかけて目を保護している。服装だってゴシック風のドレスから一変してアーミー系の、されどもより露出度の高いものになっている。色は黒で、胸元にはドクロの模様。

これまでの巨大化とは違って、見た目の変化がかなり顕著だ。明らかにこれまでの奴らとはパターンが違う。

何か悪い事が起こらなければ良いんだが……。

七罪士 ラスト：ATK 3400

「手札から魔法カード『戦乙女のオルゴール』を発動！ このカードはバトルフェイズ中に攻撃力2000以上のモンスターを失ったワタシのターンのメインフェイズ2で発動できる！ もう1度、ワタシはバトルフェイズを行う事ができるのよ！」

「何だと!？」

戦乙女のオルゴール（オリジナル）

【通常魔法】

バトルフェイズ中に相手のカードの効果によって攻撃力2000以上の自分の場の

モンスターが場を離れたターンのメインフェイズ2で発動できる。

メインフェイズ2の終了後、再びバトルフェイズとなる。

この効果でバトルフェイズに移行した場合、攻撃できるモンスターは1体となり、バトルフェイズ終了後にエンドフェイズとなる。

「よってもう1度バトルができるわ！ 更にワタシ自身の効果を発動！ ワタシが場に存在する時、バトルフェイズ開始時に墓地のモンスターを1体選択する。選択したモンスターレベル3つにつき1回、ワタシは攻撃できるのよ！」

「何だ?!」

「ちよ、あいつの墓地にはレベル12の『マシニクル』がいるんだぞ?!」

「って事は……」

「そう、ワタシは『マシニクル』を指定する！ そのレベルは12、よってワタシは4回の攻撃が可能なのよ！ 更にワタシが攻撃を行う時、ダメージ計算終了時まで、全ての相手モンスターの効果は無効となる！」

「くっ！ 攻撃力3400の4回攻撃なんて！」

「何てこった……。これじゃあ『ネクロ・ガードナー』の効果が使えないじゃねえか……っ！」



フレイ、ごめん……。

「死なせるくらいなら、俺の寿命を削ってくれるわ！ 永続罨、発動！ 『サンダー・ヴェール』！」

ガンギンガガガガンキンゴンカンケンコンゴンゲンガンガガガガガガガン！  
ブルーの電流が進る、エネルギー障壁がその全てを弾き返した。

「バカな、何が……！」

「俺の『サンダー・ヴェール』が発動しただけだ。こいつは自分の場に“T・S”と名の付いたモンスターが存在する時のみ使える永続罨。相手の攻撃を無効にする事ができる」

「何ですって!? 永続罨の『攻撃の無力化』!?」

黎：LP 3300↓2500

「ぐ……っ！」

う、くそ、力が抜けて、ぶっ倒れそうだ……！

「黎!?!」

「問題無い……っ！ 『サンダー・ヴェール』は使う度に、800ずつ俺のライフを削つ

て行く。それに、バトルフェイズは終わらない……!!」

「そ、そんなっ! それじゃ後3回分、2400もライフを払うの!」

「しかも、それを毎ターンだなんて、無理だろ!」

「だけじゃねえ……。『サンダー・ヴェール』が相手によつて場から離された時、俺のライフは3000ポイント削られる……」

サンダー・ヴェール（オリジナル）

【永続罫】

自分の場に「T・S」と名の付いたモンスターが表側表示で存在する時のみ発動できる。

ライフポイントを800支払う事で、相手の攻撃を無効にする。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によつて場から離れた時、コントローラーはライフポイントを3000ポイント失う。

はつきり言つて博打性の強いカードだ。

翔の持っていた『ライフ・フォース』は同じ永続罫。発動条件は無く、ライフコストは400で、場を離れてもデメリットが無い点を見ると、こいつは下位互換だろう。

もつとも、あつちはダメージを無くすだけ、こつちは戦闘そのものを取り消すのだから完全に劣っているワケでも無いが。

「ならばもう1度攻撃よ!」

『サンダー・ヴェール』の効果で無効にする!」

黎：LP 2500↓1700

「更に攻撃!」

『サンダー・ヴェール』の効果、発動っ!」

黎：LP 1700↓900

「まだもう1度攻撃ができるわよ!」

「まだ、まだあつ!」

黎：LP 900↓100



何度も射出されるラストの弾丸。それを俺は1発残さず、バリアで防ぐ。

代償として削られる俺の命に比例して、ライフも減っていく。

「ふふふ、上手く全弾防いだわね！ でも！ 次のターンでも同じ事ができるかしら!?  
ワタシはこれでターン終了！」

ラスト：LP 14300

手札：2枚

フィールド

：七罪士 ラスト（ATK 3400）、マックス・リペアラ（DEF 1000）

：部品循環工場（フィールド魔法）、伏せカード2枚

「はあ……、はあ……、俺の、ターン！」

「黎……っ！」

「大丈夫だ、今のトコはな……」

さて、どうしたら良いモンか……。

手札は1枚、『封狼雷坊』<sup>ふうらいぼう</sup>。これじゃ何もできない。

かと言って、このまま防戦をしたトコでジリ貧なのは明確。

ま、ドローしてから考えるか。

「ドロー！ 墓地の……『サンダー・ワイヤー』の効果ツ！ このカードを除外し、手札の雷族モンスターを捨てて……、ぜえ、ぜえ……、2枚ドロー！」

まだ、まだっ！ 魔法カード、『スパーク・ドロー』！ 手札の“T・S”を1枚捨てて、カードを2枚ドロー！」

スパーク・ドロー（オリジナル）

### 【通常魔法】

手札の「T・S」と名の付いたモンスターを1枚捨てる。

カードを2枚ドローする。

次の自分のターンのドローフェイズ時に効果を発動した墓地のこのカードを除外する事で、通常ドローの代わりにデッキからカードを4枚めくり、その中から1枚を選択して手札に加える事ができる。

これまで3枚のカードを引いた。だが、その中に望んだカードは無かった。

来い、あのカード！

「ドロー！」

!

望んだカードじゃ無いが……、ある意味それ以上だ!

「魔法カード『ミラクル・スピリッツ・フュージョン』! 手札・場・墓地から“S”と名の付いたモンスターを除外し、それを素材とする融合モンスターを融合召喚する! 俺は『テイク・オーバー・5』の効果で墓地に送られた『T・S ボルト・ナイト』、『オー・ム・ソルジャー』、そして今墓地に送られた『T・S アンペア・ウォリアー』を除外融合!」

ミラクル・スピリッツ・フュージョン (オリジナル)

#### 【通常魔法】

自分の手札・フィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「S」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「くう、ここに来てはまだ希望を持っているとは、化物の分際で何といやらしい!」

「言ってる! カモン、『T・S ワット・ソードマン』!」

『又ウン!』

空間の渦が現れ、その中へと巻き込まれて行く電気の戦士達。  
紫電が迸り、雷が渦巻く。体を弾き出した勢いでその電流を吹き飛ばして飛び出したのは、雷鳴の劍豪。

罅割れた兜から片目だけが覗き、紫の電流が走る斬馬刀を肩に担いでいる。

T・S    ワット・ソードマン：ATK    2800

さっきのお返しだ！

さあ、行くぜ！

「バトル！ 『ワット・ソードマン』でラストに攻撃！」

『ダアアッ！』

気合一閃、振り下ろされる大剣。馬ごと敵を斬り落とす事を目的としたその巨大な刃を鎧を着た雷の魔人が振り下ろす。

「攻撃力が劣るのに攻撃？ 随分とお間抜けさんねえ！」

「ならばこれでどうだよ!?!」

T・S    ワット・ソードマン：ATK    2800↓3500

「何?！」

『ワット・ソードマン』は、素材にしたモンスターの数によって得られる効果の数が変わる! 3体を素材にしたならば、ダメージ計算時のみ攻撃力が700ポイントアップするんだ!」

T・S ワット・ソードマン (融合・効果モンスター) (オリジナル)

星9

光属性/雷族

ATK 2800 / DEF 250

「T・S」と名の付いたモンスター×3体まで

このカードは融合召喚以外の方法で特殊召喚する事はできない。

相手によってこのカードが守備表示になった時、このカードを破壊する。

このカードの融合素材となったモンスターの数によって以下の効果を得る。

- 1体以上：フィールド上に表側表示で存在するこのカードは1度だけ除外されない。

● 2体以上：1ターンの1度、デッキからカードをドロウできる。この効果はこの

カード以外のレベル7以上の「T・S」と名の付いたモンスターがフィールドに存在しなければ発動できない。

●3枚以上：このカードがバトルを行うダメージ計算時、攻撃力が700ポイントアップする。また、このカードの攻撃力は元々の数値より低い数値にはならない。

「『雷豪絶剣』！」

そのまま電気を帯びた剣がラストを捉え……。

ガツキイイイイン！

「何!？」

そして何かに弾かれた。

剣を防御した何かは、まるで大きな蛇だった。\*のような顔をして、長い触角のようなものが頭から生えている。

あれは……!?

「『機皇神龍アステリスク』!？」

「ワタシ自身の効果よ！　ワタシがバトルを行うダメージ計算時、相手モンスターより

高いレベルかランクのモンスターを1体、墓地から除外する事でワタシはバトルでは破壊されず、ダメージも受けない！」

っ、そうか、『ワット・ソードマン』のレベルは9、だからレベル10の『アステリスク』を除外してダメージと破壊を無効にしたのか！

「俺は、カードを2枚伏せてターンエンド！ エンドフェイズに俺のライフが『エレクトロン・ゲリール』の効果で1400回復する！」

黎：LP 1000↓1500

黎：LP 1500

手札：0枚  
フィールド

：T・S エレクトロン・ゲリール（DEF 1700）、T・S ワット・ソードマン  
ン（ATK 2800）

：サンダー・ヴェール（永続罫）、伏せカード2枚

「僕のターン、ドロロー！ マズいね……。このままじゃ『サンダー・ヴェール』の効果が

「一度しか使えない上に、次のラストの連続攻撃を凌ぐ手段が無い……」  
「……諦めるのか？」

「誰がだい？ 冗談キツイよ！ 僕は手札の『イエロー・ガジェット』を捨てて『マシンナーズ・カノン』を特殊召喚！」

マシンナーズ・カノン：ATK 0

半透明の黄色の歯車が虚空中でバラバラに分解される。そのパーツを元に巨大なカノン砲が生まれ、そこに接合するようにヒューマノイドがコンバイン。

『マシンナーズ・カノン』は通常召喚できない代わりに、僕の手札から機械族モンスターを任意の数墓地に送って、手札から特殊召喚できる！ そして送った数×800ポイント、攻撃力はアツプする！

今送ったのは1枚！ よって攻撃力は800だ！

マシンナーズ・カノン：ATK 0↓800

「更に『リミット・リバーズ』をオープン！ 甦れ、『マシンナーズ・ピースキーパー』！」



『ピキーン!』

マシンナーズ・ピースキーパー：ATK 500

「そして魔法カード『タンホイザーゲート』を発動!」

「2枚目!」

「これで『カノン』と『ピースキーパー』のレベルはお互いの合計の10になる!」

マシンナーズ・カノン：☆8↓10

マシンナーズ・ピースキーパー：☆2↓10

レベル10が2体……。そして機械族ならば、あのフィニッシャーレベルのヤツが出て来る!

自信と焦りの縋い交ぜになった表情のアルフだが、決心したかのように声高々に宣言した。

「レベル10の『マシンナーズ・ピースキーパー』と『マシンナーズ・カノン』をオーバーレイ!」

『ピピピ！』

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆10×☆10＝★10

「エクシーズ召喚！ いざ出陣！ 『超弩級砲塔列車グスタフ・マックス』ッ！」

アルフが呼び出したモンスターが銀河の渦の中から出陣。その姿は一見すると塔。されども下部に車輪がついており、出現の完了と主に現れた身の丈程もあるであろう巨大な砲身を見れば、それが列車砲だという事は一目瞭然だろう。旧ドイツ軍のドーラと並ぶ世界最大級の一品だ。

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク10

地属性／機械族

ATK 3000 / DEF 3000

レベル10モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

相手ライフに2000ポイントダメージを与える。

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス：ATK 3000

これを出すだけでもフィニッシャークラスだが、アルフはそこから更に手札を切った。

「まだ終わらない！ 魔法カード『マジック・プランター』！ これで『リミット・リバー』を墓地に送り、カードを2枚ドロロー！」

よし来た！ 装備魔法『グラヴィティ・プラスター重力砲』を『グスタフ・マックス』に装備！ このカードは1ターンに1度、装備した機械族モンスターの攻撃力を400ポイントアップする！」

重力砲

【装備魔法】

機械族モンスターにのみ装備可能。

1ターンに1度、装備モンスターの攻撃力を400ポイントアップできる。

また、装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、バトルフェイズの間だけ

その相手モンスターの効果は無効化される。

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス：ATK 3000↓3400

「く、ワタシと並んだ……!」

「そして『グスタフ・マックス』の効果発動! オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、相手に2000ダメージを与える!」 発射オーライ ビッグキャノン!」

塔の内部から突き出した巨大な砲身がラストに狙いを定める。その先端には圧倒的な量のエネルギーが集束して行き……。

「発射あああああああつ!」

「うぎやあああああああつ!」

ラスト：LP 14300↓12300

見事にラストだけを器用に撃ち抜いた。

全身から真つ黒な煙を立ち上らせているが、腐つても護衛、まだまだ死ぬ心配は無い。

「こ、の程度で、ワタシは死なないわよお!」

「でも、『グスタフ・マックス』の攻撃でなら死ぬよね？」

「っ!？」

アルフの意地悪そうな言葉にラストの顔が歪む。

そうか、攻撃して来たモンスター以上のレベルかランクのモンスターを除外しなきゃいけないんだから、『グスタフ・マックス』の攻撃を防ぐためにはランク10以上のモンスターを除外しなければならぬのか。

だが、ラストの墓地に存在するエクシードモンスターはいずれもランク8、10には及ばない！

「退場してもらおうよ！ 『グスタフ・マックス』でラストを攻撃！ グスタフ・グラヴィ

ティバスター！ ツ！」

空に浮かぶユニットが列車の砲塔と同時にエネルギーのチャージを開始。

重力場すら巻き込んだ絶対的なエネルギー砲がラスト目掛けて放たれる。これが通れば相撃ちであつてもラストは倒せるが……！

「ナメんじゃないわよ、クソガキ共があ！ ワタシは伏せていた罠を発動するわ！ カウンター罠、『ヘビィ・スケアクロウ』！ 相手の攻撃宣言時、攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えて破壊する！」

「何!？」

やはり簡単には通らないか！

ヘビィ・スケアクロウ（オリジナル）（改訂版）

【カウンター罠】

（1）：相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えて破壊する。

発動後、このカードは墓地へは送られずにゲームから除外され、自分はLPを2000ポイント失う。

（2）：セットされたこのカードが相手によって破壊された時に発動する。

相手フィールドのモンスターを全て破壊し、破壊された数×5000のダメージを相手に与える。

その後、自分はLPを5000ポイント失う。

「もつとも、こいつは除外されちゃう上に2000もライフを削るけどね。で・も！ 3400のダメージを受けてもらうわよおおおつ！」

「うわあああああああああああああああああああああつ！」

ラスト : LP 12300 ↓ 10300

アルフ : LP 3900 ↓ 500

「アツハハハハハハハハハッ！ その程度じゃあワタシには届かないわ！」

「か、は……っ。これは、厳しいね……！」

「「アルフッ！」」

巨大な案山子に弾かれたビームが、『グスタフ・マックス』ごとアルフを飲み込む。その威力は計り知れない。ましてや、いくらプロテクターがあるとは言え、人の身であるアルフに、どこまで耐えられるか……！

既に彼の息は絶え絶え。全身もボロボロだ。こりや、リタイアか……？

と、その時。

『おい、変われ！』

どこからか、声が響いた。アルフのハスキーボイスを低めにしたこの声は……。

「ラルフ……」

やはり、アルフの話にあった彼の裏人格、ラルフか！

「でも、君に交代しても、ダメージが無くなるわけじゃ……」

『良いからさっさと交代しやがれ！ このまま気絶してえのか！』

「……分かった」

一瞬、アルフの雰囲気が変わったかと思うと、閉じていた目が開く。これまでの柔らかな様子が一変し、鋭いカミソリを思わせるような敵意をラストに叩き付けている。

「……っ、まだ負けて無いぞ、ラスト！」

「アハハハ！ 人格交代つてワケね！ それで、どうするのかしら？ アンタの場にいるカードは全滅。何ができるって言うの？」

「成せばなる、成さねばならぬ何事も、つてな！ 魔法カード『食欲な壺』を発動！ 墓地の『レッド・ガジェット』、『イエロー・ガジェット』、『グリーン・ガジェット』、『超量機獣エアロボロス』、『マシンナーズ・ギアフレーム』をデッキに戻し、カードを2枚ドロロー！」

（こいつが来たか……！）俺はカードを1枚伏せて、『レッド・ガジェット』を守備表示で召喚。効果でデッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加える」

レッド・ガジェット：DEF 1500

「ターンを終了だ」



ラルフ：LP 500

手札：3枚（内1枚は『イエロー・ガジェット』）  
フィールド

：レッド・ガジェット（DEF 1500）

：伏せカード1枚

「ラルフ、無茶したらダメだからね」

「ふん、この程度のダメージ、宿代の代わりだと思えば何て事あねえよ」

ターンが回って今度はエルフィの番。心配そうな彼女に対し、ラルフは飄々と答える。だが、その額には大粒の脂汗が浮かんでいる。

「ラルフ……」

「ほら、お前のターンだぞ」

「く……、私のターン、ドロー！ 魔法カード『エクシーズ・ギフト』を発動！ このカードは私の場にエクシーズモンスターが2体以上いる時、オーバーレイ・ユニットを2つ失う代わりに2枚ドロウできる！ 『ヴァイロン・ディシグマ』のオーバーレイ・ユニットを2つ取り除き、カードを2枚ドロウ！」

更に『非常食』をチェーン発動！ 『エクシーズ・ギフト』と『神の居城―ヴァルハラ』

を墓地に送り、ライフを2000回復する！」

エルファイ：LP 800↓2800

ラスト相手に『デイシグマ』は使えないと踏んだか。確かに、あいつに対象を取る効果聞くという予測は楽観的かも知れない。

『ヴァルハラ』を墓地に送るたあ、お前正気か？ そいつは上級天使の要じゃねえか」「いや、間違いじゃ無い」

俺の言葉にラルフが怪訝そうな顔をする。

『ヴァルハラ』は場が空じゃないと使えない。既に2体のモンスターがいる以上、実質的には腐っているも同然なんだ」

「はあん、成程」

そんな俺達のやり取りの横でエルファイが2枚引く。だが、顔は見るからに苦渋。あれは演技じゃない。本気で望んだカードが来ていないんだ。

「私は、『豊穡のアルテミス』を召喚、守備表示っ！ そして2体のモンスターを守備表示に変更っ！」

豊穰のアルテミス：DEF 1700

ヴァイロン・デイシグマ：ATK 2900↓DEF 2500

勝利の導き手フレイヤ：ATK 500↓DEF 500

エルファイが呼び出したのは、白い無機質な翼を羽ばたかせて舞い降りた覆面の天使。下半身がコマのように尖っており、両手は身を守るように体の前で交差している。

「カードを、1枚伏せる……っ！」

眉間に皺を寄せるエルファイ。

ちっ、世話が焼ける。本当なら、もう少し後まで温存しておく予定だったが、仕方ないか。

「エルファイ、俺の左の伏せカードを使え」

「え？」

「デツキの巡りが悪いって事は、裏を返せば後半になればなるだけ、望んだカードが来やすくなるって事だ。この場で大量にドロースれば、もしかしたら何か引けるかもな」

「……分かったよ。黎の左の伏せカードを発動！」

俺の伏せたカードが起き上がる。

そのイラストには2人の男が映っている。天空から降り注ぐ無数の金貨に手を伸ば

す、その魔法カードの名前は、ご存知最強のドロースース。

「『天よりの宝札』！ これで私と黎は」

「待った。俺の手札よりもこれからターンが回るライの手札を補強してやれ」

「OK、私とライは手札が6枚になるようにカードをドロースする！」

ビツ、と瞬時に2人の手札を補強する魔法カード。

欲しいカードが来たのかライは笑っているが、その反面エルフィは心配そうな顔をしている。

「黎、良いの？」

「何がだ？」

「これは元々は君の使う予定のカードだったんでしょ？」

何だ、そんな事か。

「構わんさ。どうせ皆が皆、手札が不足し始めた局面。誰か使いたい奴に使ってもらわなきゃだろ」

「……………」

「ほら、ターンを進めな」

「…………カードを追加で4枚セットして、ターンエンド！」

エルファイ：LP 2800

手札：2枚

フィールド

：ヴァイロン・テイシグマ（ATK 2900・ORU：3）、勝利の導き手フレイヤ  
（ATK 500）、豊穡のアルテミス（DEF 1700）

：伏せカード5枚

「俺のターン、ドローー！」

ライの手札はこれで7枚。

だが、それ以前にあいつの手札の内の1枚から、何か大きな気配がする。螺子曲がっていて、それでいて真つ黒な……。

これは、ラストの気配と似ている……？

「エルファイ、ラルフ！先に俺が行く！」

「！あれが来たのか!？」

「気を付けてね！」

「おう！」

ライがカードを一枚切る。

「俺は儀式魔法『闇の支配者との契約』を発動！ 場か手札から、レベルの合計が8以上になるようにモンスターをリリースする！ 手札のレベル8、『闇の公爵ベリアル』をリリース！」

紫の炎が灯った赤黒い魔法陣。その中心へと鳥のような翼を生やした大男が沈む。手にした大剣が地に突き立てられ、そしてそれを掴む者が代わりに現れた。剣を握り砕くように出現したその巨体は、紫の肌をしている闇の王者。

「降臨しやがれ、『闇の支配者—ゾーク』<sup>ダーク・マスター</sup> ツ！」

『ヴガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

闇の支配者との契約

【儀式魔法】

「闇の支配者—ゾーク」の降臨に必要。

フィールドか手札からレベルが8以上になるようカードを生け贄に捧げなければならぬ。

闇の支配者—ゾーク（儀式・効果モンスター）

星8

闇属性／悪魔族

ATK 2700 / DEF 1500

「闇の支配者との契約」により降臨。

フィールドか手札から、レベルが8以上になるようカードを生け贄に捧げなければならぬ。

1ターンの1度だけサイコロを振る事ができる。

サイコロの目が1・2の場合、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。

3・4・5の場合、相手フィールド上のモンスター1体を破壊する。

6の場合、自分フィールド上のモンスターを全て破壊する。

闇の支配者ーゾーク：ATK 2700

ギロリ、と闇の瞳でラストを睨み付ける闇の支配者。

違う、こいつじゃ無い。あの気配はもつと別のヤツのだ。

『ギャハハハハ！ オメエも相当切羽詰ってるなあ？ あいつを出すんだろ？』

「ああ。出なければ越した事はねえがな。『ゾーク』の効果発動！ 1ターンの1度、サ

イコロを1度振る。1か2が出れば相手モンスターを全滅、3から5なら相手モンスターを1体破壊し、6が出ればこっちの陣営が全滅する！　ダイスロール！」

どこからか高笑い（『ゾーク』のものじゃない。彼の中にいる盗賊王のバクラだろう）が響く。そして空中に大きなサイコロが現れた。コロコロと転がるダークブルーのそれは、やがて一つの目を示す。

「出た目は1！　よってテメエの場のモンスターを全て破壊する！」

『ヒヤハハハハ！　残念だったなあ！　よりもよってスーパークリティカル！　テメエにとつちや大ファンブルだあ！　邪神だか何だか知らねえが、闇の支配者の前に消し飛びやがれ！』

『『ゾーク・インフェルノ』！』

紫の魔人の手に膨大な闇が集う。これならラストごと相手モンスターを一掃できるが……。

「アマ〜い！　ワタシ自身の効果を発動！　手札を1枚捨てる事で、ワタシ自身が受ける相手の効果を無効にするわ！　『ガード・フェロモン』！」

やはり、中々落ちないか……！

片手で境界を張ったラストは、噴き出した闇を軽く受け流した。厄介な『マックス・リペアラー』を潰せたものの、やはり次のターン復活するのがオチだろう。



『チイツ、まさか片手で防がれるたあな……!!』

「だが、予想の範囲内だ! 墓地の『ヘルウェイ・パトロール』の効果を発動! こいつを除外し、手札の攻撃力2000以下の悪魔族モンスターを1体特殊召喚する! 来い、『デーモン・ソルジャー』!」

デーモン・ソルジャー：ATK 1900

ライが呼び出したのは効果を持たない悪魔族モンスター。『ゾーク』と同じ紫の肌を持ち、緑のマントを羽織っている。

しかし、攻撃力の劣るモンスターを出して、どうするつもりなんだ……?」

「行くぞ、ラスト……!!」

「!? な、何この気配……!!」

っ!? この感覚は……!!」

ライの呟きに合わせて、彼の周辺の雰囲気が変わる。より暗く、より重く……!!

「俺は3体のモンスター、『交響魔人マエストローク』、『闇の支配者ーゾーク』、『デーモン・ソルジャー』をリリース」

何か、来る……!!

「——汝に姿はあらず」

漆黒を超えた漆黒の中へと、3匹の悪魔が姿を消す。

「——常にその身は頂いただきに君臨し」

巨大な闇はやがて一点へと凝縮して行つて。

「——万象を超える漆黒の太陽となる」

暗黒が姿を変えたのかと思える程に、禍々しいその姿を露わにした。

「今こそ昇れ、常闇とこやみの太陽！ 『邪神アバター』！」

何者にも染められぬ、暗黒の太陽となつて。

邪神アバター（効果モンスター）

星10

闇属性／悪魔族

ATK ? / DEF ?

このカードは特殊召喚できない。

自分フィールド上に存在するモンスター3体を生け贄に捧げた場合のみ通常召喚する事ができる。

このカードが召喚に成功した場合、相手ターンで数えて2ターンの間、相手は魔法・罫カードを発動できない。

このカードの攻撃力・守備力は、フィールド上に表側表示で存在する「邪神アバター」を除く、攻撃力が一番高いモンスターの攻撃力+100ポイントの数値になる。

『邪神』……、『アバター』か……』

こいつか、俺が感じた気配の正体は……。

どうやらこいつはただのカードじゃ無さそうだ。ドス黒い、ラスト達とは似て非なる

闇の気配がビリビリ伝わって来る……！

『アバター』の攻撃力は、全フィールド上の最も高い攻撃力+1000になる！ よってその攻撃力はラストの3400に100を加えて……！』

邪神アバター：ATK 3500

「攻撃力3500ですって!？」

お見事。上手くヤツの攻撃力を利用した！

しかし、真つ黒なシルエットだけのラストだったのに、こっちの方が魅力的に見えるのは何故だろうか？

俺が特異な趣味の持ち主だから、なんて理由だったら嫌だなあ……。

「更に！ 今からお前のターンで数えて2ターンの間、魔法・罠カードを発動できない！」

「っ！ そうはさせないわよ！ リバースカード、オープン！ 罠カード『愚者のベルト』！ 手札を1枚捨てて、モンスター1体の装備カードになるわ！ このカードを装備したモンスターは効果が無効になって戦闘破壊されなくなり、毎ターン必ずワタシの場のモンスターを攻撃しなければならない！ これを『アバター』に装備する！」

!? いかん、『アバター』の効果は『ブリザード・プリンセス』のルール効果と違って誘発効果だから、カウンターされてしまう!

「マズい! 効果が無効になったら、アバターの攻撃力は0になってしまう!」

「しかも毎ターン攻撃を強制されるって事は、ライは3400のダメージを受けるって事か!? 2400しかライフが残ってないんじゃないぞ!」

愚者のベルト(オリジナル)

【通常罠】

手札を1枚捨てる。

発動後、このカードはモンスター1体の装備カードになる。

このカードを装備したモンスターの効果は無効化され、戦闘では破壊されず、直接攻撃できない。

このカードを装備したモンスターは、攻撃可能ならば必ず攻撃しなければならない。

「所詮は人間に従う下級生物! 我らが偉大なる邪心様の敵ではないわ!」

「くっ!」

「アハハハ! 今度こそ仕留め「カウンター罠、発動」たあ!」

『魔宮の賄賂』！ 『愚者のベルト』の発動を無効にし、相手は1枚ドローする！』

### 魔宮の賄賂

#### 【カウンター罠】

相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

相手はデッキからカードを1枚ドローする。

「チイツー！ 『天よりの宝札』で引いていたのね……！ 何と運の良い女……！」

「ゴメン、これドローフェイズで引いたカード。やー、普通に攻撃とかされたら堪らなかったけど、役に立って何より。そして『アルテミス』の効果で1枚ドロー」

あらま。それであんな表情だったワケね。

豊穰のアルテミス（効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1600／DEF 1700

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度

に自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「おのれ……！ こっちも1枚ドロウ！」

「つて事で、『アバター』の誘発効果は適用！」

「ナイスサポート、エルファイ！ バトル！ 『アバター』でラストに攻撃！  
 ス・ラストエイ・バレットラッシュュ！」  
 ダークネ

「チツ！ 墓地のレベル12、『マシニクル』を除外する！」

放たれた漆黒の弾丸を防御する白い巨体。毎ターンあれが来るんだから、ハツキリ  
 言つて面倒だな。『アバター』はレベル10だから、最低でもレベル12の『マシニクル』  
 とレベル10の『アステリスク』、2回攻撃をして防御を削らなくちゃならないっつーワ  
 ケだ。

しかもレベル8のモンスターがあいつの墓地に結構溜まつてるから、レベル9以上の  
 モンスターで殴らなくちゃいけない。そして魔法・罠の警戒。

これはこれで無理ゲー。

ま、伏せカードはエルファイの辺りに任せるつきやねえか。

「防がれたか……」

「フフフフ！ 『アバター』如きが我らが偉大なる邪心様に刃向う手助けをしようなど

不届き千万！ 所詮は格が違う！

更にワタシは『愚者のベルト』のコストで墓地に送られたモンスター、『鋼の番兵』の効果を発動！ このカードが墓地に存在し、墓地のモンスターがゲームから除外された時、墓地からこのカードを特殊召喚し、相手モンスターを1体破壊！ その元々の攻撃力分のダメージを与える！」

鋼の番兵（効果モンスター）（オリジナル）

星4

地属性／機械族

ATK 1300 / DEF 1000

このカードは自身の効果以外では特殊召喚できない。

自分の墓地のモンスターが除外された時、墓地に存在するこのカードを特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚された場合、相手モンスターを1体選択して破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

「墓地から甦りなさい、『鋼の番兵』させない！ カウンター罠、発動！」い！い！？」



「『透破抜き』！ 墓地か手札で発動するモンスター効果を無効にし、ゲームから除外する！」

透破抜き

【カウンター罠】

手札または墓地で発動する効果モンスターの効果の発動を無効にしゲームから除外する。

吹き抜ける一陣の風。その突風が紫の魔法陣をシールのように剥がして、彼方まで攫って行ってしまった。

……モノローグが復活する相手モンスターの描写もできないってのは問題じゃないだろうか。

『『アルテミス』の効果で1枚ドロ』

「こ、このアマア……！」

「女なのはアンタも同じ。ふふ、言ったでしょ？」

ペロツ、と舌を出してラストの憎しみの視線をエルフィは受け流す。

だが、瞬時にその表情は険しい物となった。

「徹底的に破壊し尽くす、ってね……!」

おお、女つてのは怖いねえ。

「女にもあるのよ、意地つてモンが」

女として、彼氏を寝取る宣言したヤツに負けるワケにはいかないのよ! エルフィは  
そう高らかに宣言した。

「さあ、かかって来なさいラスト! この私が正面から木端微塵に粉碎してやる!」

t o b e c o n t i n u e d

STORY 64 : 最凶兵器VS冥府の使者 ★

黎 : LP 1500

手札 : 0枚

フィールド

: T・S エレクトロン・ゲリール (DEF 1700)、T・S ワット・ソードマン (ATK 2800)

: サンダー・ヴェール (永続罫)、伏せカード1枚

アルフ (ラルフ) : LP 500

手札 : 3枚 (内1枚は『イエロー・ガジェット』)  
フィールド

: レッド・ガジェット (DEF 1500)

: 伏せカード1枚

エルファイ：LP 2800

手札：4枚

フィールド

：ヴァイロン・テイシグマ(DEF 2500・ORU：0)、勝利の導き手フレイヤ

(DEF 500)、豊穡のアルテミス(DEF 2100)

：伏せカード3枚

ライ：LP 2400

手札：1枚

フィールド

：邪神アバター(ATK 3500・『七罪士 ラスト』をコピー)

：伏せカード1枚

ラスト：LP 10300

手札：1枚

フィールド

：七罪士 ラスト(ATK 3400)

：部品循環工場（フィールド魔法）

S I D E : 黎

「さあ、私のサポートが上か、アンタが私の腕が上か、勝負よ！」

「小娘が……！」

ラストとの戦いもそろそろ終盤戦。漸く本領を發揮し始めたエルフィは不敵にラストを見る。その瞳は、勝利を確信した狩人の物だ。

「さあ、思いつきり動いて頂戴、皆！ 私が全力でサポートする！」

「おっしやあ！ 俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

ライ：LP 2400

手札：0枚

フィールド

：邪神アバター（ATK 3500・『七罪士 ラスト』をコピー）

：伏せカード2枚

ライの場に存在する『アバター』の効果で、2ターンの間はラストは魔法も罫も使えない。しかも永続効果じゃないから、『アバター』が退こうともそれは変わらない。行けるぞ。これならばこの優勢を保ったまま戦える！

「さあ、ラスト。処刑への秒読みだぜ！」

「ふん！ ワタシのターン、ドロー！」

……チツ、魔法も罫も使えないのは少々痛いわね！ 『部品循環工場』の効果で、除外された機械族を墓地へ戻す！」

『アバター』は飽く迄も発動を封じるだけ、既にフィールドにあったカードの効果までは潰せない。奴の展開の基盤であるフィールド魔法は押さえたいが……、この状況で贅沢は言ってもらえないな。

「そして『マックス・リペアラー』を復活！」

マックス・リペアラー：DEF 1000

過労死、乙。

「たかが魔法と罫を封じたくらいで凶に乗るんじゃないわよ！ 『マックス・リペア

ラー』のモンスター効果、発動！ 墓地のレベル3、『マジック・リアクター・AID』を除外して墓地のレベル1『チューニング・サポーター』を墓地から、レベル4『トラップ・リアクター・RR』を除外してレベル3『ジエネクス・コントローラー』をデッキから特殊召喚！」

チューニング・サポーター：ATK 100

ジエネクス・コントローラー：ATK 1300

「ワタシはレベル2として扱う『チューニング・サポーター』に、レベル3の『ジエネクス・コントローラー』をチューニング！」

吠え猛る牙、鋼に宿りて貪り喰らう！ 欲望のままに捕食せよ！」

☆2+☆3=☆5

「シンクロ召喚！ 食い破れ、『ヘルジャンク・タイガー』！」

ヘルジャンク・タイガー：ATK 2000

呼び出されたのは鋼の虎。鈍色の光る体で立ち塞がる。

『チューニング・サポーター』の効果で1枚ドロー！　そして『ヘルジャンク・タイガー』の効果発動！　このカードは特殊召喚に成功した時、相手の場のモンスター1体を破壊し、その攻撃力分だけワタシのライフを回復するか、攻撃力を上げる！　『邪神アバター』を選択！」

ヘルジャンク・タイガー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星5

地属性／機械族

ATK 2000 / DEF 2200

チューナー+チューナー以外の機械族モンスター1体以上

このカードは墓地から特殊召喚できない。

このカードが特殊召喚に成功した時、相手の場のモンスターを1体選択して破壊する。

その後、以下の効果の内どちらかを得る。

●破壊したモンスターの元々の攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする。



●破壊したモンスターの元々の攻撃力分、ライフポイントを回復する。

「消えなさい、下等邪神！　　*ム*デッド・プレシヤス・ファンク*ム*！」

「無駄だ！　カウンター罠発動！ 『闇の幻影』！　場の闇属性モンスターを対象に発動したカード効果を無効にし、破壊する！　俺の『アバター』もまた闇属性！　よって『ヘルジャンク・タイガー』の効果を無効にして破壊する！」

「何い!?!」

闇の幻影

【カウンター罠】

フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターを対象にする効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

鋼の虎がラストを模った黒い生物へと噛みつく。が、その瞬間に『アバター』の姿は蜃気楼のように消滅。鉄の獣は闇の向こう側へと消え去った。

「エルファイは『アルテミス』の効果で1枚ドローする」

「さんきゅ。ドローー！」

「く……っ！　まだよ、まだ終わりじゃないわ！　再び『マックス・リペアラ』の効果発動よ！　墓地のレベル8『マグネ・ドール』を除外して、レベル5の『サモン・リアクター・AI』を墓地から、レベル4の『機皇兵ワイゼル・アイン』を除外してレベル2の『ジェネック・ガンナー』をデッキから特殊召喚っ！」

サモン・リアクター・AI：ATK 2000

ジェネック・ガンナー：ATK 400

大量に展開される機械族。いくら倒しても何度でも蘇る鋼鉄の敵に、そろそろ俺も嫌気が差して来た。

元々、軍隊の一個師団と戦った事のある俺だが、あれにはキチンとしてゴールがあった。敵を殲滅したら勝ち。捕まるか殺されたら負け。敵は有限で沢山、こっちは孤独。無謀な戦いだっただが、勝利を取める事はできたワケだ。

全く、嫌になるぜ。

「レベル5の『サモン・リアクター・AI』にレベル2の『ジェネック・ガンナー』をチューニング！」

爆撃機が星に、紙飛行機みたいな小型戦闘機が幾何学模様のリングに変わる。

「1ターン内に一体こいつは何体のモンスターを特殊召喚するつもりなのだろうか？  
タッグフォースだったらそれだけで高得点を叩き出せそうだ。」

「牙剥け鋼の殺意、音を超えた境地にて我が怨敵を貫け！」

☆2+☆5||☆7

「シンクロ召喚！ 蜂の巣にしてやる！ 『ランページ・ガン』！」

ラストが呼び出したのは、無機質な長い銃。重量もありそうだし、明らかに片手どころか両手で持ち運んで戦うためのものじゃあ無いだろう。

どちらかと言えば、恐らく迫撃砲に近い物か。

ランページ・ガン：ATK 0

「攻撃力0だと……？？」

わざわざシンクロ召喚して、あの攻撃力？

「ワタシは『ランページ・ガン』の効果を発動！ 1ターンに1度、このカードはワタシの場の攻撃力1500以上のモンスター1体の装備カードになるわ。」

このカードを装備したモンスターの攻撃力は1000ポイント上昇し、貫通効果を得る。そして相手モンスターを破壊した時、攻撃力と守備力の合計値分のダメージを相手に与える！」

「何!?!」

「こいつをワタシ自身に装備よ!」

ランページ・ガン（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星7

闇属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体

1ターンに1度、自分の場に表側表示で存在する攻撃力1500ポイント以上のモンスター1体を選択してこのカードを装備できる。

このカードを装備したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を超えていればその数値の分だけ相手に戦闘ダメージを与える。

このカードを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、破壊

したモンスターの攻撃力と守備力の合計値分のダメージを相手に与える。

七罪士 ラスト：ATK 3400↓4400

邪神アバター：ATK 3500↓4500

「おいおいおいおい、ここで『インフェルノ・ウイング』以上の効果になるのかよ!?!」  
 「バートルツ! ワタシ自身で『アバター』を攻撃い! ワタシ自身の効果で墓地の『マシニクル』を選択して攻撃回数は4回、そして相手モンスターの効果を無効にする!」

邪神アバター：ATK 4500↓0

「げ、ヤベエ!?!」

「暴君の凶弾でくたばりなさあい! ムラスティ・バレットラッシュ!」

「カウンター罠、オープン! 『攻撃の無力化』!」

「何!?!」

攻撃の無力化

## 【カウンター罠】

相手モンスターに攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「相手が攻撃してきた時、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを強制終了する！ いくら対象を取る効果でも、アンタの効果は即時誘発効果、つまりはスペルスピード2。なら、カウンター罠には無力でしょ」

「おのれ、小娘え……！」

「そして私は『アルテミス』の効果でカードを1枚ドロウする」

「どこまでもどこまでも鬱陶しい！ これだから女はあ！」

「アンタも女でしょ。まさか手加減してくれるとでも思った？」

心強いな。流石はパーミツシヨン、回ると強い。

これなら防御面はエルフィに完全に一任できる。

「バトルフェイズは終了。『アバター』の攻撃力も元に戻るよ」

邪神アバター：ATK 0↓4500

「(ギリッ!) ワタシは『マックス・リペアラー』の効果発動! 墓地のレベル4『機皇兵スキエル・アイン』を除外してレベル1の『チューニング・サポーター』を、レベル9の『DT デス・オイルタンカー』を除外してレベル8の『ジャイアント・ダーク・ガジェット』を、更に『ギミック・パペット―ネクロ・ドール』の効果で同名カードを除外し、自身を墓地から特殊召喚!」

チューニング・サポーター：DEF 300

ジャイアント・ダーク・ガジェット：ATK 3200

ギミック・パペット―ネクロ・ドール：DEF 0

「ターンエンド!」

ラスト：LP 10300

手札：1枚

フィールド

：七罪士 ラスト(ATK 4400)、マックス・リペアラー(DEF 1000)、

チューニング・サポーター(DEF 300)、ジャイアント・ダーク・ガジェット(A

TK 3200)、ギミック・パペット・ネクロ・ドール (DEF 0)

：部循環工場 (フィールド魔法)、ランページ・ガン (ATK 0・『七罪士 ラスト』に装備)

「俺のターン、ドロー！」

魔法も罫も使えないこのタイミングが勝負だ！

「魔法カード『命削りの宝札』を発動！ デツキから手札が5枚になるようにカードをドロする！ 今俺はハンドレス！ よって5枚ドロー！」

『主殿！』

「来たか、桜！」

『うむ、このまま畳み掛けるぞ！』

「おっしやあ！ 俺は桜を、『L・S レストア・チェリー』を召喚！」

L・S レストア・チェリー：ATK 1800

ディスクがカードを読み込む。召喚の光に照らされて姿を現す、俺の相棒。ピンクのポニーテールに、剣と盾。ドレスの要素を取り入れた鎧。鋭い眼光には強い意志が籠っ



ている。

「そいつがお前の精霊か！」

「カッコいい！」

『恐悦至極。さて、私自身の効果を発動！』

「桜が召喚・特殊召喚に成功した事で、俺のライフを700回復する！」

『『キュア・ブロッサム』！』

黎：LP 1500↓2200

桜の剣から放たれる暖かい光が俺を包み、傷を癒す。無理矢理抑え込んでいた動悸も収まり、ギシギシ軋んでいた脳の動きが少しだけクリーンになった。

まだ、戦える。命は尽きてない！

「更に魔法カード『リボン・スピリッツ』を発動！ 墓地にいるまたは除外されているレベル4以下の『S』モンスターを1体特殊召喚する！ 復活しろ、『T・S オーム・ソルジャー』！」

『トオリヤアツ！』

「そして『オーム・ソルジャー』は特殊召喚に成功した時、除外されている雷族モンスター

を2体手札に加える！ その効果で『T・S ボルト・ナイト』と『T・S アンペア・ウオリアー』を手札にサルベージ！」

T・S オーム・ソルジャー：ATK 1550

リボン・スピリッツ（オリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地または除外されているレベル4以下の「S」と名の付いたモンスターを1体選択し、自分の場に特殊召喚する。

T・S オーム・ソルジャー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

光属性／雷族

ATK 1550／DEF 400

このカードが特殊召喚に成功した時、ゲームから除外されている雷族モンスターを2体まで手札に加える。

このカードがシンクロ素材となった時、自分の場に表側表示で存在するレベル8以下

のモンスター1体のレベルをエンドフェイズまで4つ上げる事ができる。

異次元の穴から雷が落ち、人の姿を取る。アルファベットのOを入れた青い鎧を身に着けた人型電気が現れ、そこから更に次元の穴が開き、Vの字とAの字が書かれた鎧を身に着けた人型雷がカードと化して俺の手札に加わる。

ドクン！

「(ぎい……っ！)」

チツ、こんな時に、またこの痛みかつ！

だが、以前よりかは酷くない。まだ行ける。こいつはわざわざ命を捨てるべき相手でも無い。

酷くなる前に、ケリをつけなくては！

「奴が態勢を整える前に、このまま押し切るぞ！」

『ああ。主殿、行くぞ！』

「レベル4の『オーム・ソルジャー』に、レベル4の桜をチューニング！ 天空に轟く雷、

紫電となり刃となり万象を裁く！ 希望が溢れる明日となれ！」

## ☆4＋☆4＝☆8

「シンクロ召喚！ 踊り裁け、サンダー『T・L・S』リフト スピリッツ ライトニング・チェリー』ツ！」

『さあ、罪を数えるがいい！』

天空に雨雲が渦巻き、一筋の轟雷が落ちる。淡い紫のバイザーをかけ、巨大な菜切包丁のような剣を持った桜が推参した。背中に盾は背負っているものの、あれでは構えられないだろう。首の黄色いマフラーが風にたなびき、黒い革靴が大地（空中だが）を踏み締める。

時折バチバチという音が聞こえるのは、彼女の体が帯電しているからだろう。電流が火花となつているのが見えた。

ちなみに何故か古風な雷様スタイルと似ている。虎柄の服、というヤツだ。別に露出が激しいワケじゃないぞ？

……もしかして、彼女はああいった服を着てみたいのだろうか？

だとしたら見繕うのも吝かじゃない。素直じゃないヤツは申し出もしないからなあ。

『邪推は止めてくれ』

心を読まれてしまった。

T・L・S ライトニング・チェリー：ATK 2500

「攻撃力2500ねえ？ そんなんじやあワタシは愚か、『ジャイアント・ダーク・ガジェット』すら仕留められないわよ！」

「好い加減攻撃力だけで判断するのは止めるんだな！ 素材になった『オーム・ナイト』の効果発動！ 『オーム・ナイト』がシンクロ素材になった時、俺の場のモンスター1体のレベルをエンドフェイズまで4つ上げる！ 桜のレベルを8から12に変更！」

T・L・S ライトニング・チェリー：☆8↓12

「だから、それが何だと——」

「なあラスト、こういう魔法の呪文、知ってるか？」

ラストの言葉を俺は遮る。

魔法の呪文？ と皆は首を傾げた。

そう、それはボチャミサンタイ（墓地闇3体：『ダーク・アームド・ドラゴン』）やボチヒカリヤミジョガイ（墓地光闇除外：『カオス・ソーサラー』、『カオス・ソルジャー』

開闢の使者―』、ボチテンションタイ（墓地天使4体：『大天使クリスティア』）といった感じの言葉。それは――

「ダメステイイデスカ、つて言うんだよ」

「――っ!?!」

『ほほう』

俺の手札の内容に検討がついたのか、ラストは顔が引き攣り、桜は関心したような口調になる。

「『エレクトロン・ゲリール』を攻撃表示に変更!」

T・S エレクトロン・ゲリール：DEF 1700↓2700

「バトル! 桜でラストを攻撃!」

『受けよ、我が紫電の一撃!』

「『はおうらいじゆうせん覇桜雷重斬!』」

帯電している巨大な刃を振り上げ、桜が大きく跳躍する。あのサイズの武器を持つているとは思えない敏捷さだ。

そして空中で海老反りになってから、カ一杯刃を、振り下ろす!

「ここで終わりじゃないぜ！」

「ダメージステップに手札の『オネスト』の効果を発動！ 自分の場の光属性モンスターがバトルを行うダメージステップ時、相手モンスターの攻撃力の数値を上乗せする！」

「ラストの現在の攻撃力は4400！」

「つまり、桜さんの攻撃力2500にそれが追加されて……」

「攻撃力は——」

T・L・S ライトニング・チェリー：ATK 2500↓6900

「攻撃力6900ですって!？」

「受けてみな！」

『新たな必殺の一太刀!』

『『覇桜雷重斬・誠』まこと!』

俺のカードあら放たれる光の支援を受け、桜の刃が力強くその輝きに呼応する。白く眩しい翼が彼女の背中に生え、紫の電気と白の光によって構成された巨大な剣がラスト目掛けて走った。

さて、ここでラストが取る行動は当然……!

「ぐっぎいいいいい！ 墓地の『マシニクル』を除外！」

「それを待つていたぜ！」

桜の二太刀が白い巨人の盾に防がれる。だが次の瞬間、桜はその盾を掻い潜つて二太刀目を繰り出していた。

「何?！」

「手札の『T・S ボルト・ナイト』のモンスター効果発動！ 自分の場の『T・S』と名の付いたモンスターがバトルで相手モンスターを破壊できなかった時、手札のこのカードを捨てる事で、もう1度そのモンスターはバトルを行える！ 桜は今、『T・S』としてもその名を扱う！」

T・S ボルト・ナイト（効果モンスター）（オリジナル）

星2

光属性／雷族

ATK 500 / DEF 500

自分の場の「T・S」と名の付いたモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊できなかった時、手札のこのカードを捨てる事で、自分のモンスターはもう1度だけ攻撃ができる。





ATK 3400 / DEF 3400

(1)：このカードは特殊召喚できず、自分の場のモンスターを3体リリースしなければアドバンス召喚できない。

(2)：このカードが相手の効果を受ける時に発動できる。

手札を1枚捨て、その効果を無効にする。

(3)：このカードの攻撃宣言時に自分の墓地のモンスターを1体選択して発動する。

選択したモンスターのレベル3つにつき1回、このカードは攻撃できる。

またこのカードが攻撃を行う時、相手のフィールドと墓地、手札のモンスターの効果は無効となる。

(4)：相手モンスターがこのカードに攻撃を行う時、ダメージ計算時に自分の墓地の攻撃を行う相手モンスターより高いレベルまたはランクを持つモンスターを1体除外する事で、その戦闘によって発生するこのカードの破壊と自分への戦闘ダメージを無効にできる(レベルまたはランク12のモンスターの場合、レベルまたはランク12のモンスターを除外する事で無効にできる)。

(5)：1ターンに1度、このカードが戦闘によって破壊される場合、手札を1枚捨てる事で戦闘ダメージを無効にできる。

その後、破壊されたこのカードを墓地から召喚条件を無視して特殊召喚する。

(6) : 戦闘によって破壊されたこのカードと自分フィールド上の表側表示のカードを1枚デッキに戻して発動できる。

除外されている自分のモンスターを1体選択して特殊召喚する。

この特殊召喚は無効化されない。

七罪士 ラスト : ATK 3400

邪神アバター : ATK 3500

「だが、装備カードが消滅した事により、お前の攻撃力は下がった!」

「くっ!」

『ワット・ソードマン』でラストに攻撃! 効果で攻撃力が700上がる!」

T・S ワット・ソードマン : ATK 2800 ↓ 3500

「まだ、まだよお! 墓地の『DT デス・オイルタンカー』を除外! その攻撃を無効にする!」

「チイツ!」

だが、終わらない！

「まだまだ！ 『エレクトロン・ゲリール』で『マックス・リペアラー』を攻撃！」

『そりゃっ！』

「チッ！」

おっと、これで終わりだと思ふなよ！

「バトルフェイズを終了！ そして桜のモンスター効果発動！ バトルで相手モンスターを破壊したターンのバトルフェイズ終了時、デッキからレベル6以上のモンスターを1体墓地に送り、相手の場のカードを1枚選択して除外する！」

「何ですって!?!」

T・L・S ライトニング・チェリー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星8

光属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 2100

「T・S」と名の付いたチューナー＋チューナー以外の「S」と名の付いたモンスター1体以上

このカードは「T・S」と名の付いたモンスターとしても扱う。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊したターンのバトルフェイズ終了時、デッキからレベル6以上のモンスターを1体選択して墓地に送る事で、相手の場のカードを1枚選択してゲームから除外できる。

この効果で墓地に送ったモンスターはデッキに戻るまで特殊召喚できない。

破壊されたこのカードが墓地に存在する時、手札の雷族モンスターを1枚捨てる事でこのカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚できる。

この効果は相手ターンでも発動できる。

この効果はデュエル中1度しか使えない。

また、1度だけ自分の墓地の「T・S」と名の付いたモンスターを3体除外する事で、エンドフェイズまでこのカードの攻撃力を相手モンスター1体の攻撃力と同じにできる。

「デッキからレベル6の闇属性、『め」

ガタン、と線路が傾いた。

うる覚え気味だが、この地形は確か到着地点であり、出発地点でもある操車場からもう1キロは離れていなかったはずだ。

一周するタイムリミットは残り3分残ってないだろう。

「ズ」を墓地に送って効果発動！ 対象は『ジャイアント・ダーク・ガジェット』！」  
『消えろ！』

「『ポルテージ・デイメンション』！』」

膨大な電気エネルギーを充填した大剣を桜は槍投げのように軽々と投擲。巨大な黒い歯車の巨人に突き刺さった瞬間、青白い閃光が発せられ、瞬く間に巨人は消滅した。

ビキビキツ！

く、もう少しだけ頑張ってくれ、俺の体っ！

「成程な。『ジャイアント・ダーク・ガジェット』は除外には対応していない」

「これでヤツの場のモンスターは2体、十分突破できるわ！」

「……最後にカードを1枚伏せて、ターンエンドだ。『エレクトロン・ゲリール』の効果で、ライフが2100ポイント回復する」

黎：LP 2200↓4300

黎：LP 4300

手札：2枚（内1枚は『T・S アンペア・ウォリアー』  
 フィールド

：T・S エレクトロン・ゲリール（ATK 2700）、T・S ワット・ソードマ  
 ン（ATK 2800）、T・L・S ライトニング・チェリー（ATK 2500）  
 ・サンダー・ヴェール（永続罫）、伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！ アルフ、まだ駄目か!？」

『もう少し……』

「分かった。きつちり回復するまで休んでろよ？ 俺は『トレード・イン』を発動！ 手

札のレベル8、『The big SATURN』を墓地に捨ててカードを2枚ドロ  
 ー！」

ほう、『The big SATURN』は手札とデッキから特殊召喚できないモンス  
 ター。だが、裏を返せばそれ以外の場所からなら自由に特殊召喚できるという事だ。墓  
 地や除外ゾーンからなら、闇属性であり機械族であるヤツは呼び出しやすい。

トレード・イン

【通常魔法】

手札からレベル8のモンスターカードを1枚捨てる。  
自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

「よし来た！ 魔法カード『臨時ダイヤ』！ 墓地の攻撃力3000以上の機械族モンスターを復活させる！ 蘇れ、『グスタフ・マックス』！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス：ATK 3000

エクシーズモンスターを復活させた？

何を考えている、ラルフ。お前が『トレード・イン』の効果で引いたカードは、この状況に当てはまるのか？

臨時ダイヤ

【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：自分の墓地の攻撃力3000以上の機械族モンスター1体を対象として発動できる。



その機械族モンスターを守備表示で特殊召喚する。

(2) : セットされたこのカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地の機械族・レベル10モンスター1体を対象として発動できる。

その機械族モンスターを手札に加える。

「行くぞ、アルフ！」

『何時でも良いよ、ラルフ！』

「俺は『レッド・ガジェット』と『グスタフ・マックス』をリリース！」

赤い歯車と巨大な大砲を乗せた列車が、黒く染まった地面の闇の中へと沈んで行く。

「冷たき暴君よ、影となりて具現せよ！ 『The tyrant NEPTUNE！』」

The tyrant NEPTUNE : ATK 0

プラネットの2体目!?

闇の中で、金色の瞳が輝く。ワニのような体を持ち、身の丈程もある大鎌を手にした巨大な生き物が、闇の中から現れた。

『NEPTUNE』は全てを奪い去る暴君！ こいつが奪うのはアドバンス召喚時にリ

リリースされたモンスターの攻守の数値！」

The tyrant NEPTUNE : ATK 0 ↓ 4300 / DEF 0 ↓ 4500

邪神アバター : ATK 3500 ↓ 4400

「更に名前とモンスター効果も奪えるが……、『グスタフ・マックス』の効果はエクシズモンスターでは無いため奪っても意味ネエし、『レッド・ガジェット』の効果は召喚成功時を過ぎているからこっちも意味がネエ。まあ一応『レッド・ガジェット』の効果と名前を奪つとくぜ」

The tyrant NEPTUNE (効果モンスター)

星10

水属性 / 爬虫類族

ATK 0 / DEF 0

このカードは特殊召喚できない。

このカードはモンスター1体をリリースしてアドバンス召喚する事ができる。

このカードの攻撃力・守備力は、アドバンス召喚時にリリースしたモンスターの元々の攻撃力・守備力をそれぞれ合計した数値分アップする。

このカードがアドバンス召喚に成功した時、墓地に存在するリリースした効果モンスター1体を選択し、そのモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。

The tyrant NEPTUNE ↓ レッド・ガジェット

「バトル! 『レッド・ガジェット』となった『NEPTUNE』でラストを攻撃! 喰らいやがれ、 // Sick<sup>シ</sup>kle<sup>ク</sup> of<sup>オブ</sup> ruin<sup>ル</sup>!」

『ギジャアアアアアアアッ!』

「チッ! 破壊を防ぐために、墓地の……っ!?」

「そうだ! テメエの破壊を防ぐためにはレベル11以上のモンスターが必要! だが、黎の攻撃から身を守るために、適合するモンスターは除外された! よってこの攻撃を防ぐ事はできない!」

「更によえば、墓地から復活するためには手札コスト必要! でもアンタには……」

「捨てられる手札が、無い……っ!」

大鎌がラストに迫る。だが、ラストにそれを防ぐ手立ては無い。

ラルフの笑い、エルフィの笑みが、ラストの焦りとコントラストを描く。  
そして……。

斬！

弧を描く軌道で振るわれた刃が、ラストを斬り裂いた。

「ぎゃあああああああああああああああつ！」

『七罪士 ラスト』、撃破！

ラスト：LP 10300↓9400

「どうだ！」

「こ、小癩なああああああつ！」

「カードを1枚セットして、ターンエンド！」

『ただいま戻りました！』

アルフ（ラルフ）：LP 500

手札：『イエロー・ガジェット』

フィールド

・The tyrant NEPTUNE (ATK 4300、カード名『レッド・ガ

ジェット』)

・伏せカード2枚

「私のターン、ドロー！」

そろそろ一周するな……。

ビキビキビキキイツ！

がっ!?

ぐ、クソが………つ。耐えろ、踏ん張れ……!

まだまだ、まだ倒れちゃいけないんだ！ デュエルも、殺し合いも、終わってねえんだよ！

「エルファイ、ライ」

「どうしたの、ラルフ？」

「早めに決着をつけてくれねえか？ 黎がヤベエ」

「!? ラルフ、……どうして、分かった」

ポーカーフェイスには自信があつたんだがな。

「テメエのツラ、鏡で見りや分かるんじゃないの？」

「鏡……？」

言われるままに、懐から小さな鏡を取り出す。

何で持つてるのかつて、意外と便利だから。碎けば武器になるし、光を反射するのにも使えるし。

「あー……」

で、見てみた。

成程、顔色は真つ青どころか土気色。脂汗も流しっぱなしだし、焦点も少々あつていない。

ライとエルファイが気付かなかつたのは、距離が少々ある上に横を見なかつたからか。「別に医学に精通してるワケじゃねえが、ハッキリ言つてそのツラは危険だろ」

「気遣い感謝だ」

とは言え、俺自身は体に異常を感じていない。だが、神経を張つて探つてみると、確かにもう限界値ギリギリだった。

痛みやら何やらに慣れちゃった、『辛い事こそ平常』となつてしまった障害だろうか。  
「つーワケで、頼む」

「オツケー！ 魔法カード『トレード・イン』！ 手札から『ライトニングギア光神機—轟龍』を墓地へ送る！ 更に私は『フォトン・サンクチュアリ』を発動！ 自分の場に守備力0のトークンを2体呼び出す！ このカードを発動するターン、光属性以外のモンスターを私は場に出せない」

フォトン・サンクチュアリ

【通常魔法】

このカードを発動するターン、自分は光属性以外のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚できない。

自分フィールド上に「フォトントークン」（雷族・光・星4・攻20000／守0）2体を守備表示で特殊召喚する。

このトークンは攻撃できず、シンクロ素材にもできない。

フォトントークン：DEF 0

フォトントークン：DEF 0

「そしてこのトークン2体をリリース！ 『アテナ』をアドバンス召喚つ！ このカードは光属性だから問題無く召喚できる！」  
『タアツ！』

アテナ：ATK 2600 ↓ 3000

エルファイが呼び出すのは、銀色の髪を持った女性。左手に小型の盾を持ち、右手に槍を持つ守りを司る戦の大天使。そのクセに守備力低いとか言っちゃいけない。

アテナ（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2600 / DEF 800

1ターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター1体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。



フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに600ポイントダメージを与える。

『アテナ』は1ターンに1度、場の天使族をコストに、墓地の天使族を復活できる！  
場の『ヴァイロン・デISINGマ』と墓地の『光神機—轟龍』を交換！

光神機—轟龍：ATK 2900 ↓ 3300

光神機—轟龍（効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2900 / DEF 1800

このカードは生け贄1体で召喚する事ができる。

この方法で召喚した場合、このカードはエンドフェイズ時に墓地へ送られる。

また、このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

『アテナ』が光のゲートを開き、そこから生まれる光の機械龍。

妥協召喚しては自壊してしまうが、それ以外なら天使族アツカーの要となるモンスターだ。

そしてこのモンスターは……。

「か、貫通持ち!?!」

「その通り。更にアテナの効果で600ダメージを受けてもらう!     // ジャツジメン

ト・レイヅ!」

「ギイツ!」

ラスト:LP   9400↓8800

「さて、私のターンで倒せなくとも、致命傷は受けてもらうわよ、ラスト!」

「く……っ! このワタシが、こんな小娘如きにつ!」

『アルテミス』と『フレイヤ』を攻撃表示に変更!」

豊穡のアルテミス:DEF   2100↓ATK   2000

勝利の導き手フレイヤ:DEF   500↓ATK   500

『何時でも飛び出せるよ、エル!』

『お願いね! バトル! まずは『轟龍』で『ネクロ・ドール』を攻撃! 貫通ダメージとは名ばかりの直接攻撃を受けてもらう!』

『ぎいいいいっ!』

ラスト:LP 8800↓5500

光の龍の光線が、不気味なフランス人形ごとラストを吹き飛ばす。光に飲み込まれ、全身からラストは煙を上げた。

『お、のれえ……!』

『更に『フレイヤ』で『チューニング・サポーター』を攻撃!』

『ボクでも攻撃する機会が来るとはね! それっ!』

『これでガラ空き!』

『フレイヤ』のアップパーカットがきれいに決まり、ラストの場にモンスターが存在しなくなつた。『アテナ』と『アルテミス』の攻撃が通つても倒す事はできないが、致命傷にはなる。

『アルテミス』でダイレクトアタック！  
「ぎいっ！」

ラスト：LP 5500↓3500

「そして『アテナ』でダイレクトアタック！ アイギス・スピア！」  
「がはあ!？」

ラスト：LP 3500↓500

良いぞ、これで残りライフは500！

「チェックメイトだよ！ カードを3枚伏せて、ターンエンド！」

エルファイ：LP 2800

手札：1枚

フィールド

・勝利の導き手フレイヤ（ATK 500）、豊穡のアルテミス（ATK 2000）、

アテナ（ATK 2600）、光神機―轟龍（ATK 3300）

：伏せカード5枚

「俺のターンだ、ドロー！」

「ライ、決めちゃって！ 私の頑張り無駄にしたら許さないからね！」

「任せろ、これで終わりにする！ 『アバター』の攻撃で止めだあ！」

ラストの残りライフは500、ライのモンスター『アバター』は現在『NEPTUNE』の姿をマネして4400の攻撃力を持つ。

通れば、勝てる！

「『ダーク・シクル・オブ・ルーイン』！」

「そうはいかないわ！ 墓地の『ジェネクス・ガンナー』の効果を発動！ 相手のダイレクトアタック宣言時、墓地のこのカードを除外する事で、除外されているワタシの機械族モンスターを守備表示で特殊召喚する！」

ジェネクス・ガンナー（効果モンスター）（オリジナル）

星2

闇属性／機械族

ATK 500 / DEF 500

相手の直接攻撃宣言時に、自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

ゲームから除外されている自分の機械族モンスターを1体選択し、召喚条件を無視して表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターの守備力は0になり効果は無効となる。

「除外されている『ジャイアント・ダーク・ガジェット』を特殊召喚!」

ジャイアント・ダーク・ガジェット：DEF 0

げ。

「スマン……、復活を警戒して、除外したんだが……」

「謝るんだったら死人顔をどうにかしろ。それにどっちにしろ俺はこのターン、別のモンスターは出せなかった。攻撃は防がれるっつゝ結果は同じだ

っゝわけで、『ジャイアント・ダーク・ガジェット』を攻撃!」

『ジャアアッ!』

爬虫類の姿を持った『アバター』の大鎌で黒菌車の巨人を破壊。

これで、ラストの場にはフィールド魔法が1枚のみ、モンスター・魔法・罨は無い。手札は0で魔法・罨はラストのエンドフェイズまで発動できない。

一見積んだように見える。だが……。

「カードを2枚伏せてターンエンド！（俺が伏せたカードの内の1枚は『奈落の落とし穴』。高い攻撃力を出した瞬間、そのモンスターを破壊して除外する。フラグが立とうとも問題ネエ。魔法も罨も使えないんだ、潰されはしない！）」

ライ：LP 2400

手札：0枚

フィールド

：邪神アバター（ATK 4400・『The tyrant NEPTUNE』をコピー）

：伏せカード3枚

「もう諦めたら？ そんな壊滅的な状況で、逆転ができるとは思えないけど？」

「確かに……。ドローできる1枚で、アドバンテージを、全て引つ繰り返せるとは、思え

ない……」

そしてその方が俺としても有難かったりする。

トロツコがトンネルに入る。短いトンネルで、すぐに表に出た。

出た先は操車場。つまりスタート地点だ。

ラストは何を考えたのか、そこでトロツコを止めて降りた。

俺達もそれに合わせてトロツコを降りる。

「ライ、アルフ〜！」

「エルフィー、黎くーん！」

ここつちに気付いたのか、ここで待機していたレオさんとメリオルさんも駆け寄って来る。

「つて、オイ!? 大丈夫か、黎!? 死相がかなりハッキリ見えるんだが!」

「大丈夫だ、問題無い……」

「エ○シャダイのネタはさて置き! 本気で死にかけに見えるんだけど!」

「問題無い……、と良いな」

「願望!」

俺の見た目はそんなにボロボロなのだろうか?

自覚は無いのだが。



そんなコントは無視し、ラストは不気味な笑いを浮かべている。

……あれは追い詰められた獲物の目じや無い。罠に相手を嵌めた策士、そして獲物を狩る寸前の肉食獣の目だ！

「ふ、ふふふふふふふふ……」

「？」

「ふふふふふふ……。褒めてあげるわ、人間のガキの分際で、ここまでワタシを追い詰めた事を！」

バカな、この状況でまだ何か逆転の一手があるつてののか!?

「このターンで貴様ら全員、ジ・エンドよ！　ワタシのファイナルターン、ドロロー！　『部品循環工場』の効果で除外された機械族が墓地に戻り、『マックス・リペアラ』を特殊召喚っ！」

一体何をしようつてんだ!?

マックス・リペアラ：DEF 1000

「更に墓地の『ギミック・パペット―ネクロ・ドール』の効果を発動！　ワタシの墓地に存在する、同じ名前のモンスターを除外して、このカードが墓地から復活する！」

『フッフ……』

ギミック・パペット―ネクロ・ドール：ATK 0

「続いてワタシは『ゾーク』からの効果を防ぐために捨てた『マルチプル・ボックス』の効果を発動！ このカードと墓地の通常魔法を1枚除外し、このモンスターの効果扱いとして除外した通常魔法を発動する！ ワタシが除外するのは“騎士”の魂からの攻撃を防ぐために捨てた『ジャンク・パペット』！」

マルチプル・ボックス（効果モンスター）（オリジナル）

星6

闇属性／機械族

ATK 1900／DEF 1400

自分の墓地に存在するこのカードと通常魔法カードを1枚ずつゲームから除外して発動する。

この効果を発動するために除外した魔法カードの効果を、このカードの効果扱いとして発動する。

「マルチプル・ボックス」の効果は1ターンに1度しか発動できない。

ジャンク・パペット

【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1) : 自分の墓地の「ギミック・パペット」モンスター1体を対象として発動できる。  
そのモンスターを特殊召喚する。

「このカードは墓地から『ギミック・パペット』と名の付いたモンスターを復活させる  
！ 甦れ、『ギミック・パペット・ナイト・ジョーカー』！」

『ギへへへッ！』

ギミック・パペット・ナイト・ジョーカー : ATK 800

「そして『マックス・リペアラ』の効果発動！ 墓地のレベル9『DT デス・オイル  
タンカー』を除外し、レベル8の『ギミック・パペット・マグネ・ドール』を特殊召喚  
！」

『マ〜グ〜』

ギミック・パペット―マグネ・ドール：ATK 1000

「更にレベル8の『ギミック・パペット―ナイトメア』を除外し、レベル1の『ギミック・パペット―ギア・チェンジャー』を特殊召喚！ その効果でレベルは『ネクロ・ドール』と同じ8になる！」

『キエツへへへへへ〜！』

ギミック・パペット―ギア・チェンジャー：ATK 0/☆1↓8

「バカな……、あの状況でレベル8のモンスターを4体揃えただど!」

「更にワタシ自身の効果を発動！ 墓地のワタシと場の表側表示のカードを1枚デツキへと戻し、除外されているモンスターを1体特殊召喚する！ この特殊召喚は無効化されない！ 『マックス・リペアラ』とワタシ自身を戻し、除外された『ギミック・パペット―ナイトメア』を特殊召喚！」

『ガガガガガガ……』

ギミック・パペット―ナイトメア ATK 1000

これで、ラストの場にはレベル8が5体揃った。

いずれも低ステータスで、戦闘には向かない。でもエクシース素材にはなる。

まさか、ラスト自身をも上回るモンスターが出て来るとも言うのか!?

「ワタシはレベル8の『ネクロ・ドール』、『ナイト・ジョーカー』、『マグネ・ドール』、『ギア・チェンジャー』、『ナイトメア』をオーバーレイ!」

『フッフッフ!』

『ギヤハハハ!』

『マアグウ〜!』

『キツヘヘエ!』

『ガガガガ!』

「5体の『ギミック・パペット』モンスターによって、オーバーレイ・ネットワークを構築するわあ!」

「素材5体だと!?!」

「そんな、ここに来て!?!」



吹き出す闇。その中から姿を現す、巨大な殺戮兵器。赤い一つ目がギョロリと光り、『ターレット・ウオリアー』のように両肩に砲身が——ただしどう見ても戦車のものより遙かに大きい——装備されている。

さしずめ『アトランタル』サイズの『ターレット・ウオリアー』と言ったところだろうか？ だがその大木よりも巨大な腕といい、象ですら踏み潰せそうな足といい、ハッキリ言ってその凶悪さは先刻のラストと比べても遜色無い。

ダーク・ギミック・パペット―ターレット・マードー：ATK 6000

邪神アバター：ATK 4400↓6100

「攻撃力6000だと!？」

こいつ攻撃力が、あのテネブラエと互角かよ……!？」

『ターレット・マードー』のモンスター効果発動! このカードがエクシーズ召喚に成功した時、自分の墓地のレベル8以上の機械族モンスターを1体のみ、このカードに装備できる! ワタシは『機皇神マシニクル∞』を選択するわ!」

「何をするつもりかは知らねえが、そうはさせねえ！ 罨発動、『奈落の落とし穴』！ 攻撃力1500以上のモンスターを相手が場に出した時、そのモンスターを破壊して除外する！」

奈落の落とし穴

【通常罨】

相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動でききる。

その攻撃力1500以上のモンスターを破壊しゲームから除外する。

「無駄よー！」

ライの発動した罨が光を発する。カード効果が発動する時は大体こうなのだ。

対し、ラストの声と共に『ターレット・マダー』の目から赤いレーザーが放たれる。レーザー光線は過たずライの罨を打ち抜き、粉碎した。

「何?！」

『ターレット・マダー』はオーバーレイ・ユニットがある限り、相手のカード効果を受け付けないし、効果と召喚も無効にならない！





AAAAAAAAAAAAAAAA!

火を噴く巨人の肩の砲台、つてちよ、待て!? 何だこの砲弾の雨!? つつーか流星群だろこれもう!

「こ、こんなモン喰らつてられるか! 畏発動、『ガード・ブロック』! バトルで受ける俺へのダメージを0にし、カードを1枚ドロウする!」

シールドで流れ弾を防ぐラルフ。だが、暴君の海王星はその勢いに耐え切れずに消し飛んでしまった。

「くつううううう! 俺の『NEPTUNE』が一瞬で吹き飛ばされちまった!」

「まだよ! これで終わりだなんて思わない事ね!」

「何い!」

『ターレット・マード』のモンスター効果発動! このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、相手の場のカードを全て破壊する! そして破壊したカード1枚につき、コントローラーに600ポイントのダメージを与える!」

ダーク・ギミック・パペッターターレット・マード (エクシーズ・効果モンスター)  
(オリジナル) (改訂版)

ランク8

闇属性／機械族

ATK 6000 / DEF 0

「ギミック・パペット」モンスター×5

(1) : このカードの特殊召喚に成功した時、自分の墓地のレベル8以上の機械族モンスター1体を対象として発動する。

そのモンスターをこのカードに装備カード扱いとして装備し、装備したモンスターの元々の攻撃力と守備力分、このカードの攻撃力と守備力をアップする。

このカードが破壊される場合、代わりにこの効果で装備されているモンスターを破壊する事ができる。

(2) : このカードの特殊召喚は無効にされず、このカードの下にX素材が重ねられている限り、このカードは相手の効果を受けない。

(3) このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

相手フィールドのカードを全て破壊し、破壊したカード1枚につき600ポイントのダメージをそのカードの元々のコントローラーに与える。

(4) : 1ターンに1度、自分のターンのスタンバイフェイズ時、または相手がこのカー

ドを攻撃対象に選択した時、このカードの下にエクシース素材が存在しない場合に発動できる。

自分の墓地に存在するレベル8の「ギミック・パペット」と名の付いたモンスターを2体選択し、選択したモンスターをこのカードの下にエクシース素材扱いとして重ねる事ができる。

ガゴン、と胸部からガトリングガンを取り出す『ターレット・マードー』。

1枚につき600ダメージ……！！

### 【フィールドの現状】

黎：LP 4300

手札：2枚（内1枚は『T・S アンペア・ウォリアー』）

フィールド

：T・S エレクトロン・ゲリール（ATK 2700）、T・S ワット・ソードマ

ン（ATK 2800）、T・L・S ライトニング・チェリー（ATK 2500）

：サンダー・ヴェール（永続罫）、伏せカード2枚

アルフ（ラルフ）：LP 500

手札：3枚（内2枚は『イエロー・ガジェット』と『マシンナーズ・ギアフレーム』）  
 フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

エルファイ：LP 2800

手札：1枚

フィールド

：勝利の導き手フレイヤ（ATK 500）、豊穣のアルテミス（ATK 2000）、  
 アテナ（ATK 2600）、光神機―轟龍（ATK 3300）

：伏せカード5枚

ライ：LP 2400

手札：0枚

フィールド

：邪神アバター（ATK 10100）、『ダーク・ギミック・パペッターレット』

『マードー』をコピー)

：伏せカード2枚

ラスト：LP 500

手札：1枚

フィールド

：ダーク・ギミック・パペッターレット・マードー(ATK 10000・OR  
U：5)

：部品循環工場(フィールド魔法)、機皇神マシニクル(『ダーク・ギミック・パペッターレット・マードー』に装備)

っ!?

俺は6枚だから3600ダメージ、ラルフは1枚で600ダメージ、エルファイが9枚で5400ダメージ、ライは3枚で1800ダメージ!?

「マズイ! ラルフとエルファイが耐え切れないぞ!」

「これで死ねえ! フアイナル・ヘルバレッツ・パレード!」

ダーク・ギミック・パペット―ターレット・マードー：ORU 5↓4

ガガガラガラガガガGAGAGAGAGAGAGAGAGAGAGAAA!

再び降り注ぐ弾丸の雨。ってかこれもう壁だろお!?

こんなんを喰らったら死ぬぞ!

しかもこの女、俺達の近くにいるレオさんとメリオルさんまで狙ってやがる!

ヤベエ、あの二人にプロテクターはついていない!

咄嗟に2人に向かって駆け出すと同時に、伏せていたカードをオープンする。

「全弾喰らってたまるか! リバースカード、オープン! 罫カード『ダメージ・ダイ

エツト』! このターンに発生する俺達へのダメージを半分にする!」

俺達のモンスター、そして伏せカードが被弾する。

俺の『緊急同調』と『ダメージ・ダイエツト』、ラルフの『激流葬』、エルフィの『盗賊の七つ道具』、『神の宣告』、『透破抜き』、『アヌビスの裁き』、『角笛砕き』、そしてライの『闇次元の解放』が全て消し炭と化した。

「つぐあああああああああああああああああああああ!」

「うあああああああああああああああああああああ!」

「きやあああああああああああああああああああああ!」

「がああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

黎：LP 4300↓2500

アルフ（ラルフ）：LP 500↓200

エルファイ：LP 2800↓100

ライ：LP 2400↓1500

「か……、は……っ!？」

「全滅、だと……!？」

一瞬で、フィールドの状況を引っ繰り返された……っ!

それに、頭に被弾した……。血で前が、よく見えない……。やば……。意識、消し飛び、そう……。

しぬのかな

おれ やくそく まもれないのか

いやだな

あ あ



あ  
あ

……

…

S I D E : 無し

地形が変化する程の一斉掃射の砲撃が周囲を嘗め尽くし、土煙が未だ漂う中、空時夫妻、レオとメリオルは必至に自分達に申し掛かる少年を呼び掛けていた。

「オイ、黎！ しっかりしろ！」

「死んじやだめ！ 意識を保って！」

「……」

焦点の合わない虚ろな瞳の黎。背中には無数の銃創があった。レオとメリオルを庇った時に被弾した物だ。

背中だけでは無く、頭や足にだって何発も受けている。致命傷と言っても過言じゃないだろう。

「れ、黎!？」

「お前、父さん達を庇って!？」

「ふふふ、予想通りね……！　後ろの二人にも攻撃が向っていると分かったなら、お前は絶対に底いに行くかと踏んだのよ。これでやっと死んでくれたわ！」

エルフィとライが驚く中、ラストが嘲笑う。

全てはラストの計算通りの出来事。黎の性格を考慮し、わざとレオとメリオルに攻撃を加えたのだ。

結果、黎は狙わずとも射線の上に飛び出して二人を庇って大ダメージを負った。最も厄介な敵が死んだ今、残った3人も労せずして殺せる。

「テメエ……！　黎を殺すために、わざとデュエルと無関係の二人を狙ったってのか！」  
「あら当然じゃない？」

「何だ?!」

「だってその男、殺しても殺しても、中々死んでくれないんですもの？　だったら勝手に死んでくれるよう仕向けるしかないじゃない。ゴミを排除するのに、わざわざ戦車を用意するヤツはいないのと同じよ」

それが能率つてモノよ！　ラストは嘲笑した。

明らかに黎を見下した発言。仲間へのその発言を許せる程、彼らは呑気な性格をしていない。

「ぎ、さまあああああああああああああああああああー！」

「慌てなくても今すぐ蜂の巣にしてあげるから、安心なさい！ 残りのアンタ達の相手をするのも面倒だしね！」

ガチャリ、と再び銃を取り出すラスト。ここで全員を射殺するつもりなのだ。どこぞのリアリストのような発想である。

しかし、危険なのは事実。今の状況ではラストに一撃入れる前に撃たれてしまう。

「さあ、“騎士”の魂と同じあの世に送ってあげるわ！ 精々全ての世界が滅ぶ様を見届ける事ね！」

「くっ！」

「くたばれえ！ “王屠魔血苦”！」

「“昇武甲爆破”！」

だが、ラストの攻撃は届かない。

全て爆風で弾き返されてしまった。

「何?！」

そしてその爆発を起こした人物とは、勿論……。

「勝手に、殺してんじゃねえぞ、クソ女……っ！」

黎だった。

## SIDE：黎

クツソ、フレイの薬で強化されてなきや、今頃死んでたぞ……。

本当なら今の技だつて、もつと当たり判定広いし、弾丸だつて失速するどころか巻き戻しみたいにラストの方に跳ね返つて行くつてのによお。

「黎！」

「大丈夫なのか!？」

「一応、な……。この程度で死ぬ、俺じゃ、ねえよ……」

そうは強がつてみたものの、実際ギリギリ。口の中は鉄臭さで満ちているし、どんどん体温が下がっている。血圧に負けて体中から血が噴き出ている。応急処置で蓋をしたのに効果が表れていない。

これ以上は危険だな。

「……フン！ ワタシはカードを一枚セットしてターンエンド！」

「エンドフェイズ、手札の『アンペア・ウオリアー』を捨てて、破壊された桜が、復活するっ！」

『タアッ！』

T・L・S ライトニング・チェリー：ATK 2500

ラスト：LP 500

手札：0枚

フィールド

：ダーク・ギミック・パペッターレット・マードー（ATK 10000・OR  
U：5）

：部品循環工場（フィールド魔法）、機皇神マシニクル（『ダーク・ギミック・パペッターレット・マードー』に装備）、伏せカード1枚

（本当ならワタシが伏せたこのカードをコストに、墓地の『エンコードの誤変換』発動するつもりだったんだけどねえ。『エンコードの誤変換』じゃあ一人しか仕留められないし、『ダメージ・ダイエツト』で半減させられちゃったからそもそも使えないし）

エンコードの誤変換（オリジナル）

【速攻魔法】

手札を1枚捨てて発動する。

このターン相手に与えた効果ダメージをもう1度与える。

墓地のこのカードと手札を1枚除外する事でもこの効果をもう1度発動できる。

この効果は与えるダメージが元々の数値より低かった場合、発動する事はできない。

「俺の……、はあ、はあ……、た、ターン、ドロ……ッ！」

「黎、大丈夫なのか……？」

「辛うじて……。スタンバイフェイズ、『アンペア・ウォリアー』の効果を、発動……。墓地のこのカードを除外し……。カードを2枚ドロウできる……」

T・S アンペア・ウォリアー（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星3

光属性／雷族

ATK 1000／DEF 1000

このカードは特殊召喚できない。

このカードが「T・S」と名の付いたモンスターの効果を発動するために捨てられた場合、次の自分のスタンバイフェイズに墓地のこのカードを除外する事でカードを2枚

ドローできる。

手札はこれで4枚。魔法カードが3枚で罠カードが1枚。

その1枚1枚がラインで繋がる。そしてその先には……！

「桜……」

『問題無い、やってくれ』

「……分かった。桜の最後のモンスター効果、発動つ！ 墓地の“T・S”を3体除外し、1度だけ桜の攻撃力を相手モンスター1体と同じにできる！ 墓地の『磁力線ブーソル』、『ワット・ソードマン』、『エレクトロン・ゲリール』を、除外！」

『発電エネルギー、フル稼働！』

T・L・S ライトニング・チェリー：ATK 2500↓10000

「攻撃力が並んだ!？」

「ラスト……、さっきのターンで、俺達を仕留められなかった事……、後悔するんだな」

ス、と指を5本出す。

「一手、二手、三手、四手、五手……。五手目で、お前は『ターゲット・マーカー』を破

壊されて……、敗北する」

「ハッ、戯言は死んでから言いなさい」

今の言葉が戯言か真実か、答えは愚かなお前の眼で確かめろ！

【BGM：JOINT】

「バトル！ 桜、頼む！」

『相撃ち上等！ 玉砕もまた我らの仕事也！』

『『「覇桜雷重斬」！』』

大きく桜が跳躍し、大きな刃を巨人に突き立てる。

閃光と電気を周囲に迸らせ、頭部に刃を刺したまま、桜は俺の目の前に着地した。

「くっ！ 相撃ちにはさせないわ！ 装備された『マシンクル』を代わりに破壊する！」

『思ったよりも硬かったな。だが……』

「ああ、これで道は作れた」

光となって消え行く桜。一方で殺戮の巨人は装備していた白い絶望の番人を盾にして破壊を免れた。

まず、一手だ。



ダーク・ギミック・パペッターレット・マードー：ATK 100000↓600  
 0/DEF 4000↓0

「ハア……、ハア……、カードを4枚伏せて、ターンエンド……」

黎：LP 2500

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード4枚

「俺のターン、ドローツ！ く……！」

『ラルフ、さっきのダメージ！』

「(ああ……、ちつとデカいのを喰らっちゃった。クソツ、情けねえぜ……、黎の事言えねえっての)」

『なら、交代だね』

「ああ、頼む」

と言いたい所だが、とラルフが区切った。

どうやらアルフと何かもめているらしい。

「(と言いたいが、この体は二人で一つ。お前が出てても変わりやしねえつての)」

『それは、そうだけど……』

「(そこで、一つ妙案がある)」

『妙案?』

ニヤリ、とラルフが笑った。

「(意識と体の主導権だけお前が得るんだ。痛みは暫く俺が引き受ける!)」

『で、できるの、そんな事!』

「(やらなきゃならねえんだよ! 実際、かなりの力技だ、このターンの間が精々……)。

ミスるなよ!)」

『……分かった!』

ラルフが瞳を閉じると同時に、纏っていた鋭い剃刀の様な雰囲気霧散する。

柔和な雰囲気に戻った、つまりアルフに再び人格を交代した彼らは、手札を一枚切る。

「(ここからは僕が相手だ! 魔法カード『死者蘇生』を発動! 墓地の『The big

S A T U R N』を特殊召喚!」

『ゴオオオオオオオッ!』

死者蘇生

【通常魔法】

自分または相手の墓地のモンスター1体を選択して発動できる。  
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

The big SATURN (効果モンスター)

星8

闇属性／機械族

ATK 2800 / DEF 2200

このカードは手札またはデッキからの特殊召喚はできない。

手札を1枚捨てて1000ライフポイントを払う。

エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

この効果は1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに使用することができる。

相手がコントロールするカードの効果によってこのカードが破壊され墓地へ送られた時、お互いにその攻撃力分のダメージを受ける。

## The big SATURN : ATK 2800

## SIDE : アルフ

満を持して場に現れた僕のデッキの切り札。灰色の体に土管のように太い腕、体の周りには土星の輪。でも、これで『リミッター解除』を使っても、攻撃力は5600。400ポイント足りない。せめて、この『イエロー・ガジェット』がライフ回復のカードだったなら良かったんだけど……。

「アルフ、ライフが欲しいか？」

「え？」

「手札の『イエロー・ガジェット』を召喚しろ。それで解決する」

本当に上手く行くのかは分からない。何せ黎はほんの数時間前に出会ったばかりの、赤の他人だ。

でも、彼の事を兄さんは信用している。そして今、その彼が解決方法を提示してくれた。ならば従わない道理は無いね。どうせこの手札がガジェットだってばれてるんだし！

『イエロー・ガジェット』を召喚！ 効果でデッキから『グリーン・ガジェット』を手札へ！』

イエロー・ガジェット：ATK 1200

「アルフ、俺の右から2番目のカードを使え」

「了解！ リバースカード、オープン！」

黎が伏せたカードが表向きになる。

移った絵柄は大きな中華鍋。様々な具材が炒められているその緑のカードの名前は……。

「速攻魔法『神秘の中華なべ』！ 場のモンスター1体をリリースし、そのリリースした時点の攻撃力または守備力の数値分だけライフを回復する！」

成程、これでライフを確保できる！ しかも『SATURN』の効果用の手札コストまでしっかり確保してある。

これを見越していたなんて、やっぱり彼は並大抵の腕じゃなかったね。

神秘の中華なべ

## 【速攻魔法】

自分フィールド上のモンスター1体を生け贄に捧げる。

生け贄に捧げたモンスターの攻撃力か守備力を選択し、その数値だけ自分のライフポイントを回復する。

「僕はその効果で『イエロー・ガジェット』をリリースし、ライフを1200回復する！」

アルフ：LP 2000↓1400

「ありがとう、これで効果が使える！」

「礼は、ヤツを倒した後だ……」

「それじゃそんなに改めて！ 『The big SATURN』の効果発動！ 手札を1枚捨てて、ライフを1000支払って発動！ 攻撃力が1000ポイントアップする！ 『グリーン・ガジェット』を捨てて、発動！ “DOUBLE IMPACT”！」

アルフ：LP 1400↓400

The big SATURN：ATK 2800↓3800

闇のゲームならではの重量感が僕を襲——……わない!?

まさか、ラルフ!?

『今更何言ってやがる……。俺が引き受けるつつたろ……。好いから進めやがれ、痛み感じさせないようにすんのも骨折れるんだぞ!』

(……後で話があるからね!)

黎もラルフも、どうしてこう無茶ばつかするかなあ!

後回しにするってのは不問に付すワケじゃ無いんだからね!

「バトル! 『The big SATURN』で『ターレット・マードー』を攻撃!

“end of COSMOS”!」

豪快に振るわれる、熱を持って赤く染まった巨人の腕。これだけじゃただの自爆特攻だけど……!

「ダメーjistテップに速攻魔法『リミッター解除』発動! これで『SATURN』の攻撃力は更に倍になる!」

リミッター解除

【速攻魔法】

このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターは攻撃力を倍にする。

この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

The big SATURN : ATK 3800 ↓ 7600

「喰らええっ！ // Hyper end of COSMOS！」

これで攻撃力の差は1600、ラストのライフは500。

通れば勝てるけど……！！

「そうはいかないわ！ 永続罫『オーバーレイ・ファイアーウォール』を発動！ このカードはワタシの場のオーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、1ターンの1度、機械族の破壊を無効にする！ 更に機械族越しに発生する500以上のダメージは通らない！」

オーバーレイ・ファイアーウォール（オリジナル）

【永続罫】

1ターンの1度、自分の場に存在するエクシーズ素材を1つ取り除く事で、このター



ン終了時までフィールド上に表側表示で存在する全ての機械族の破壊を、1体につき1度まで無効にできる。

この効果はダメージ計算時にも発動できる。

このカードが存在する限り、機械族モンスターとの戦闘で自分に発生する500ポイント以上の戦闘ダメージは無効となる。

『ターレット・マダー』のオーバーレイ・ユニットを1つ取り除き、全ての機械族モンスターは1度ずつ破壊されない！」

ダーク・ギミック・パペットターレット・マダー：ORU 4↓3

砲塔の巨人と土星の魔人の拳がぶつかり合う。赤く煙を吹く僕の魔人はその勢いを押し返して殴り倒すも、ORUを1つ潰すだけで破壊できなかつた。

ラストのヤツめ……、どこまでしぶといんだ！

「でも、『オーバーレイ・ファイアール』は僕のモンスターも影響を受ける！ よつて『SATURN』は破壊されない！」

「くっ！」

「これで、ターン終了！ 『SATURN』の攻撃力は元に戻る！」

The big SATURN : ATK 7600 ↓ 2800

アルフ : LP 400

手札 : 0枚

フィールド

: The big SATURN (ATK 2800)

: 魔法・罨無し

終了宣言と共にのしかかる重圧、痛み、疲労……。

ラルフ、君はこれを全て引き受けていたのか……!?

『感謝しろよ、相棒?』

「(後でお説教と一緒に、熨斗つけて進呈するよ、パートナー)」

僕のやれる事は全てやった。

後は、残りの2人と黎のサポートに賭けるだけだ……。

SIDE : エルフィ

「私のターン！」

手札はこれで2枚。

さて、私にできる事は……。

正直な話、今、私はとても怖い。

目の前にいるこの女相手に勝てるか、不安ではち切れそうなくらいに。

そして体が痛い。さっきの砲弾の雨（というか壁）であっちこつちが殴られたかのように痛い。この何倍も黎は痛いんだと思うと、ある程度痛み慣れている身でもゾツとする。

（でも）

横には、私の大好きな人がいる。

ライがいるなら私は死ぬわけにはいかない。そして私は彼を死なせるわけにもいかない。

手札は1枚、『次元合成師』（ディメンション・ケミストリー）。この状況では使えない。次の1枚のドロウで、全てが決まる。

さあデッキよ、答えて！ 私の思いに！

「ドローツ！」

引いたカードは……。

「ありがとう、私のデッキ……」

信じてたよ。

「私は魔法カード『死者蘇生』を発動！ 甦れ、『The splendid VENU

S』！」

『ハアアアアアッ！』

The splendid VENU S (効果モンスター)

星8

光属性／天使族

ATK 2800 / DEF 2400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する天使族以外の全てのモンスターの攻撃力と守備力は500ポイントダウンする。

また、自分がコントロールする魔法・罫カードの発動と効果は無効化されない。

The splendid VENU S : ATK 2800

黄金色に輝く光と共に現れる我がエースモンスター。

煌めく羽を青空へと伸ばし、強い意志を感じさせる瞳で砲撃の巨人を睨む。

「効果で天使族以外のモンスターの攻撃力は500下がる！」

The big SATURN : ATK 2800 ↓ 2300

ダーク・ギミック・パペット・ターレット・マードー : ATK 6000 ↓ 5500

序盤じやいきなり出して盛大にミスった挙句、相手に吸収されちゃったけど、今度はそうはいかない！

「黎、あるんでしょ。伏せカードの中に、『VENUS』で『ターレット・マードー』に勝てるカードが」

「鋭いな、正解だ。カバーしてやるから攻撃しろ！」

へえ、自身満々じゃないの。

そこまで言うのなら、乗ってやる！

「バトル！ 『VENUS』で『ターレット・マードー』を攻撃！

//ホーリー・フェザー！

シャワー！」

さあ、何を発動するの！

「リバースカード、オープン！ 永続罫『メタル化・魔法反射装甲』！」

メタル化・魔法反射装甲

【通常罫】

発動後このカードは攻撃力・守備力300ポイントアップの装備カードとなり、モンスター体に装備する。

装備モンスターが攻撃を行う場合、そのダメージ計算時のみ装備モンスターの攻撃力は攻撃対象モンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。

「このカードを装備したモンスターの攻撃力と守備力は300ポイントアップする！」

The splendid VENUS: ATK 2800↓3100 / DEF 2  
400↓2700

白銀のヴェールに包まれる私のエース。鋼の装甲を手に入れ、その銀色の身に相手の姿を映す！

「そして、攻撃する時、その攻撃力に相手モンスターの攻撃力の2分の1を追加する！」  
 「よって攻撃力は……」

The splendid VENUS：ATK 3100↓5850

「攻撃力5850ですって!？」

「シルヴァリック・ホーリー・フェザー・シャワー！」

受けなさい、退魔の力を持つ金属、鉄と銀の羽の雨を！

「何の！ 『オーバーレイ・ファイアーオール』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使って、破壊を無効にする！」

「でも発生するダメージは350！ よってこの戦闘ダメージは無効にできない！」

「ぐっ、ギャアアアアアアアアアアアッ！」

ダーク・ギミック・パペット・ターレット・マードー：ORU 3↓2

ラスト：LP 500↓150

破壊はできなくても、ダメージは通る。

その身に受ける！ 今を生きる女の、いや、人間の力を！  
「ターンエンド！」

エルファイ：LP 100

手札：1枚

フィールド

：The splendid VENUS (ATK 3100)

：魔法・罨無し

ふと、金属質になった『VENUS』を見る。鉱物のように冷たい光を宿す瞳には、私達を導く優しい温かさがあった。

うん、大丈夫だよ『VENUS』、素晴らしき金星。私はまだ、頑張れるから！

SIDE：ライ

さて、俺のターンだな。とは言え、手札は0枚。この1枚がキモか。

何が起こるかはドロウ次第。だが、皆ここまで頑張ったんだ、変なカード引かせるん



じゃねえぞ、俺のデツキ！

「俺のターン、ドロー！」

！

「ふ……」

「何が、おかしいのかしら？」

「いや、ちよつとな」

きつとアニメだったらここで『カン☆コーン！』とか鳴っていたんだろう。

主人公達を見ていて、チートドロ―羨ましいなあと思っていたんだが、俺もその一員だったってワケか！

「アルフ、エルファイ、力貸せ！」

俺が引いたたった一枚のカード、これと、もしも黎の伏せカードの中に反撃のカードがあるのなら、これで決められる！

「兄さん、引いたんだね？」

「そういう事なら！」

「僕／私達の力、受け取って！」

おう！

「俺はアルフの場の『The big SATURN』と、エルファイの場の『The s

Plendid VENUS』をリリース！」

さあ現れる、俺のデッキの最強に名を連ねる！一枚！

「汝は沈む事無く無限に出づる至高の太陽！」

それはプラネットの最高位であり、太陽でありなが闇。恒星であり惑星の頂に君臨する王！ 力を貸しやがれ！

「アドバンス召喚、『The supremacy SUN』っ！」

褐色の肌、黒い鎧、熱を持った激しい光。それは太陽系の中心にて頂点に君臨するに  
 相応しい、何者をも圧倒する力の象徴だ。

The supremacy SUN (効果モンスター)

星10

闇属性／悪魔族

ATK 3000 / DEF 3000

このカードはこのカードの効果でしか特殊召喚できない。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、次のターンのスタンバイフェイズ時、手札を1枚捨てる事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

The supremacy SUN : ATK 3000

「でも攻撃力は3000！ しかも『The splendid VENUS』がいなくなったお蔭で、『ターレット・マードー』の攻撃力も元通りよ！」

ダーク・ギミック・パペッターレット・マードー : ATK 5500 ↓ 6000

……確かに、攻撃力はジャスト倍。だが、モンスターの攻撃力だけじゃデュエルを制する事は不可能だ。

「黎！」

「分かってる！ 突っ込め、ライ！」

「おし来たあ！」

黎はここまで何枚ものカードで俺達をサポートして来た。

「ここで何もできないと考える方がおかしい。」

「行くぞ! 『The supremacy SUN』で『ターレット・マード』を攻撃! SOLAR FLARE ア!」

「攻撃宣言にチェーンして速攻魔法『バトル×2』<sup>バィツィ</sup>を発動!」

バトル×2 (アニメオリジナル)

### 【速攻魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターがその攻撃力の倍以上の攻撃力を持つ相手モンスターと戦闘を行う場合に発動する事ができる。

戦闘を行う自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力を倍にする。

「このカードは、バトルを行う自分のモンスターの攻撃力の倍以上の攻撃力を相手モンスターが持っていた場合、自分のモンスターの攻撃力を倍にできる!」

The supremacy SUN: ATK 3000 ↓ 6000



「残念だったわねえ！　これでアンタらのモンスターは全滅！　次のターンで終わりよ！」

確かに、今の戦闘で破壊されたのは俺の『SUN』のみ。

だがな……。

「ラスト、テメエまさか俺と黎がその事を忘れていたとも思ったのか？」

「何？」

「俺は言ったはずだ。五手目でお前は終わるってな」

桜の攻撃で一手目、『SATURN』の攻撃で二手目、『VENUS』の攻撃で三手目、そして俺の『SUN』の攻撃で四手目。

そして黎の場には伏せカードが1枚。

「……まさか、その伏せカードに何かあるっていうの!?　バカな……、ここまで来て、そんな有り得ない事が……」

「有り得ない話じゃねえさ。ここまで俺達は可能な限り戦って来たんだぜ？」

「それなら、デッキの枚数が少なくなっただけで望んだカードが来てもおかしく無いでしょ」

「まあ、そういう事だ。諦めろ」

有り得ない、絶対に有り得ないと呟き続けるラスト。

絶望がテメエらの糧だって言うのなら、自分らで勝手に量産してやがれ！

「黎いー！」

「おう……っ！ リバースカード……、ツ！ ……オープン！ 速攻魔法『冥月の階』！」  
めいげつ きざはし

さあ、これでチエツクメイトだ！

「自分の場の、モンスターがバトルで破壊されたバトルフェイズに、発動できる！ 墓地のレベル7の闇属性を2体除外し……、『冥府の使者ゴーズ』と『カイエン』を特殊召喚するっ！」

冥月の階（オリジナル）

【速攻魔法】

自分フィールドのモンスターが戦闘によつて破壊されたターンのバトルフェイズ中にのみ発動できる。

自分の墓地に存在するレベル7の闇属性モンスターを2体ゲームから除外し、デッキまたは手札から「冥府の使者ゴーズ」を1体特殊召喚する。

更に自分のフィールド上に「冥府の使者カイエントークン（天使族・光・攻2500 / 守2700）」を「冥府の使者ゴーズ」の効果で特殊召喚された扱いとして特殊召喚する。

自分の墓地に存在するこのカードをと光属性または闇属性モンスターを1枚ずつ

ゲームから除外し、以下の効果を発動する。

●光属性：「冥府の使者ゴーズ」の攻撃力はエンドフェイズまで除外した光属性モンスターの攻撃力分アップする。

●闇属性：「冥府の使者カイエントークン」の攻撃力はエンドフェイズまで除外した闇属性モンスターの攻撃力分アップする。

「バカな……貴様らの墓地にレベル7の闇属性モンスターは『ゾーク』1体のみ！ そのカードの発動条件が満たされるはずが……！」

「俺は、ライの墓地から『ゾーク』を、そして自分の墓地から……！」

墓地に手をかざす黎。

一体何を除外するんだ？

「『冥府の使者ゴーズ』を除外っ！」

「な、何ですって!?! そんなカードいつの間……、あの女の除外効果の時ね!?!」

「そうだ……。『ジャイアント・ダーク・ガジェット』を除外した時、デッキから送ったレベル6以上のモンスターが、こいつだったのさ……！」

お前、そこまで考えて、効果を使っていたのか!?!

「結果的に、ここまで追い詰められちゃった。だが、テメエらを潰せるんならいくらでも



「この身を削ってやる！」

「いの……！」

「黎……。『冥月の階』の効果で『ゴーズ』と『カイエン』を特殊召喚！」

『おらっしやあ！ 漸く出番だコラア！』

『シメは我々の様ですね。しくじれません』

冥府の使者ゴーズ：ATK 2700

冥府の使者カイエントークン：ATK 2500

黒と白の光によって導かれる俺の1番信頼するモンスター達。

さあ、お終いにしようぜ！

冥府の使者ゴーズ（効果モンスター）

星7

闇属性／悪魔族

ATK 2700 / DEF 2500

自分フィールド上にカードが存在しない場合、相手がコントロールするカードによつ

てダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」(天使族・光・星7・攻/守?)を1体特殊召喚する。

このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

●カードの効果によるダメージの場合、受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

冥府の使者カイエントークン(トークン)

星7

光属性/天使族

ATK ? / DEF ?

このトークンの攻撃力・守備力は、「冥府の使者ゴーズ」の特殊召喚する時にプレイヤーが受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

「で、でも攻撃力はこっちの方が上よ!」

「なら、上げるまでだ!」

「ぜえ……、ぜえ……! 墓地の『冥月の階』の効果発動っ! このカードと闇か光のモンスターを1枚ずつ除外し、除外した属性と逆の属性を持つ方の攻撃力を、除外したモンスターの攻撃力分上げる!」

「何ですって!?!」

「俺は黎の墓地から『T・S 三頭の雷神龍』を除外する! こいつは光属性で攻撃力は3400! よって『ゴーズ』の攻撃力は3400ポイントアップする!」

冥府の使者ゴーズ：ATK 2700↓6100

「こ、攻撃力6100ですってええええええええええええ!?!」

「確か、『オーバーレイ・ファイアール』の効果は1ターンに1回だけ破壊耐性を与えるんだったな? つまり、今『ターレット・マードー』に破壊されない効果は無いてワケだ」

『これで奴をぶった斬れるぜえ!』

「バトル! やれ、『ゴーズ』! 『ターレット・マードー』を攻撃! // 冥剣 陰の太刀

“!”

『オオオオオラアアアアアアアッ!』

高く、高く跳んだ『ゴーズ』が、右手に持った剣で大砲の巨人を頭から正中線で真っ二つにする。斬られた傍から巨人は紅色に発火し、爆発した。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

ラスト：LP 150↓50

さて、攻撃はまだ一回残っているぞ？

『マイスター』

「ああ、思いつきりやれ!」

一手目、『T・L・S ライトニング・チェリー』。

二手目、『The big SATURN』。

三手目、『The splendid VENUS』。

四手目、『The supremacy SUN』。

そして、五手目。『冥月の階』、『ゴーズ』、『カイエン』。

黎の宣言通り、これでフィニッシュだ!

「チェックメイトだ、ラスト」



ラスト：LP 50↓0

黎・ライ・アルフ・エルフィ・ラルフ：WIN

ラスト：LOSE

終了を知らせるブザーが鳴り響いた。

『「俺達の……」』

「僕たちの……」

「私たちの……」

「勝ちだあ！」

【BGM終了】

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 65 : 二人の上級護衛 ★

——アメリカ某所

SIDE : 無し

夜も更けたその路地裏で、デュエルが行われていた。

片や、サングラスをかけ星条旗をのバンドナを頭に巻いた男。機械族モンスターを操る元全米チャンピオンの「バンドット・キース」ことキース・ハワードだ。

もう片方は身長180センチ余りの男。スポーツ刈りに漆黒のスーツを着ている。しかしそれはビジネススーツでは無く、喪に服するための物だった。

「我のターン、ドローー！」

現在、喪服の男の手札は0枚。しかし……。

「魔法カード『食欲な壺』を発動。墓地のモンスター5体をデッキへ戻してシャッフル。そして2枚のカードをドローー」

「ここでドロースースだと!？」

男がカードを引く。

ニヤリ、と笑った。

「何がおかしいっ!」

「いや、私の勝利はたつた今確定した」

男は不敵に嗤った。

その眼に映る光は、余りにも残酷。

「まだ名乗っていなかったな、キース・ハワードよ。我が名はラース、いずれ世界を滅するお方に仕える者だ」

——異世界の炭鉱場

「やツタ……、勝つんだ……。うぐ、ガフツ!」

「分かったから喋るな、主殿! 傷口が開く!」

ラストとの戦いを終え、黎、桜、空時ファミリーは操作場の近くの小屋で休んでいた。戦いが終わって緊張の糸が切れたのか、その場に倒れた黎を治療するためだ。

メリオルを治療した時に比べて清潔さも広さも無いが、そんな事を気にする以前に黎



の傷が深刻だった。今も結構な量の血を吐いた。

桜はラストが黒い霞となって消滅しきるのを見届ける時間すら惜しみ黎に必死に回復術をかけて始めた。

「俺は、良い……。それより、アルフ達を……」

「止痛剤ならもう使った！ 全員の治療も終わっている！ 主殿が最後だ！」

全身の何ヶ所にも及ぶ銃創、特に頭部に三発、胸部に四発、その他には十発以上喰らっている。常人なら、いや、人の何十倍も頑丈な黎ですら致命傷だ。

ただでさえこの戦いの前からポロポロだったと言うのに、更に傷口が増えてしまった。

（ハハ、フレイに怒られちまうなあ……）

現在、必死になって桜が治療している。止血剤と造血剤を処方し、必死に治療術を行使。元気だったレオとメリオル、『ゴーズ』達精霊に頼んで先の詰め所まで備え付けのタオルなどを取りに行つて貰っている。

「黎……」

「案ずるなライ殿。主殿は頑丈だ、この程度では死なぬ」

心配そうな顔するライを桜が励ます。しかし、それが空つぽの根拠だと言う事は誰よりも桜自身が分かっていた。

(死んでくれるなよ、主殿……!!)

桃色の光が彼の傷口を消しているが、完治まではまだ時間がかかりそうだった。

——アメリカ某所

キース：LP 3000

手札：1枚

フィールド

：デーモニック・モーター・Ω (ATK 3600)

：一族の結束 (永続魔法)、エクトプラズマー (永続魔法)、伏せカード1枚

ラース：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罨無し

「勝利が決まったただあ？」

キースは鼻で笑った。

「バカ言ってるんじゃないよ！ 俺様の場合には攻撃力3000超えの『デーモニック・モーター・Ω』がいるんだぜ！ 対し、テメエの場合はガラ空き！ この状況でどう引つ繰り返すってんだ！」

しかも、現在キースの場に伏せられているカードは『リミッター解除』。下手に突っ込めば逆にラースがやられてしまう。

デーモニック・モーター・Ω（効果モンスター）

星8

闇属性／機械族

ATK 2800 / DEF 2000

自分のエンドフェイズ時に、自分フィールド上に「モータートークン」（機械族・地・星1・攻／守200）を1体攻撃表示で特殊召喚する。

1ターンに1度だけこのカードの攻撃力を1000ポイントアップすることができる。

この効果を使用した場合、エンドフェイズ時にこのカードを破壊する。

エクトプラズマー

#### 【永続魔法】

各プレイヤーは自分のターンのエンドフェイズ時に1度だけ、自分フィールド上の表側表示モンスター1体を生け贄に捧げ、元々の攻撃力の半分のダメージを相手プレイヤーに与える。

一族の結束

#### 【永続魔法】

自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

リミッター解除

#### 【速攻魔法】

このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。

この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

だが、ラースは余裕の笑みを崩さない。

静かに手札を一枚引き抜いた。

「こーやってだ。魔法カード『龍ドラゴンズ・ミラーの鏡』を発動。私の場と墓地からモンスターを除外し、その素材に見合ったドラゴン族融合モンスターを融合召喚する」

龍の鏡

【通常魔法】

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

ラースがディスクの墓地のゾーンに手をかぎす。

吐き出された『サファイアドラゴン』、『アレキサンドライドラゴン』、『スピアドラゴン』、『ストロング・ウィンド・ドラゴン』、『バイス・ドラゴン』を受け取ると、代わり



ねるモンスターだ。

「だ、だが問題無え！ 『リミッター解除』で返り討ちにしてやる！ そして手札の『死者蘇生』で『デーモニック・モーター・Ω』を復活してオレの勝ちだ！」

「バトル。『F・G・D』よ、その不格好な鉄屑のオモチャを攻撃しろ。『ギガ・デストロイ・バースト』！」

——このデュエル、貰った！

勝利を確信したキースはディスクのボタンに手をかけた。

——炭鉱場

小屋の中には相変わらず桃色の光が溢れている。治療開始から既に30分は経過しただろうか、しかし未だ黎の顔色は悪い。

『オイ桜ちゃんよお、こいつはマジメに治るんだらうなア!?』

「治すために、私が今治療しているのだ！ 余計な口を出さずに指示に従ってくれ！」

青い顔で必死に桜は治療術をかけ続けている。その効果がどれ程薄くても、桜は術を止めない。自分にできるのはこれくらいだからだ。

どれだけ黎に自分がついて行っても、所詮は一枚のカードの精霊。できる事には限界





桜の指示によって、『ゴーズ』達精霊がドーム状のバリアを展開する。強度を優先したため、全員を包める程度のサイズのだ。

次の瞬間、爆発によって小屋が吹き飛んだ。

「ぐおっ!？」

「きゃあっ!？」

結界のお蔭で中にいるライや桜達は全員無傷だが、小屋が綺麗さっぱり無くなってしまう。

もうもうと立ち込める煙の中、人影が一つ。

『ちよつと、冗談じゃ済まないよ、これは……』

腰まで届く、長い、漆黒の髪。

『もう一度戦うだけの力は残ってねエぞ!？』

ボロボロになり、より扇情的になった黒いドレス。

『このデュエルで負けた者は、死ぬと聞いていましたが……!？』

そして両手には拳銃。

『マズいですね……』

更に腰には手榴弾。これで小屋を吹き飛ばしたのだろう。

「何故、貴様は生きているのだ……」

そう、そこにいたのは……。

「答えろ、ラストツ！」

先刻倒したハズのラストだった。

——アメリカ某所

「『ギガ・デストロイ・バースト』！」

迫り来る最強のブレス攻撃。

それを見てキースは1枚の魔法カードを発動させた。

「バカめ！ リバースカード、オープン！ 速攻魔法『リミッター解除』！ これで『デーモニック・モーター・Ω』の攻撃力を倍にしてやる！」

デーモニック・モーター・Ω：ATK 3600↓7200

ガチン、という音と共に巨大な殺人マシンのエンジンが異常な回転数を弾き出し始める。限界値を強制的に振り切った事により、攻撃力が完全に『F・G・D』を上回った。

だが——

「温いな。速攻魔法『禁じられた聖槍』を発動。モンスター1体の攻撃力を800下げ、エンドフェイズまでこのカード以外の魔法・罠の影響を消滅させる」

「何だと!？」

禁じられた聖槍

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は800ポイントダウンし、このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。

「これにより、『リミッター解除』は当然の事、『一族の結束』の効果も適用されなくなつた。よって攻撃力は元々の数値へと戻り、更にそこから800下がる」

デーモニック・モーター・Ω : ATK 7200 ↓ 2000

「こ、こんなバカな事が……!？」

「貴様の負けだ、落ち武者」

エンジンの異音が消滅し、平常運転へと戻った『デーモニック・モーター・Ω』。その巨体を後ろにいたキースごと、炎、水、雷、地、闇のブレス攻撃が呑み込んだ。「ぐあああああああああああああああああつ!?!」

キース：LP 3000↓0

ラース：WIN

キース：LOSE

——炭鉱場

「ふ、ふふふふ、ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ……」

半ば虚ろな瞳で黎達を見るラスト。

体はノイズが走っているビデオのように時折揺らめき、フラフラと姿勢も安定していない。涎まで垂らしている。

「殺す……、コロす、ハ、ココロ……」

『!?!』

「キフヒヤハハハハハアハハハハハハハハハアア！ コロコロツロココロロロ  
 ロロシテヤルウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
 ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ」

「ここ、壊れやがったのか!？」

『来るぞで!』

「が い し ゆ う な い し ゅ 害銃亡業<sup>〃</sup> ウツ!

ラストの叫びと同時に、その拳銃が変化。二丁拳銃はサブマシンガンとなった。

『散れえ!』

「シネエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ」

引き金が引き絞られると同時に銃口が火を噴く。

全員がバラバラの方向へと飛び退く。

「ギギツギギギイ! ニガ、サナイツ!  
たいぎめいぶん 対犧冥分<sup>〃</sup>!」

ラストはそこから更に、五人に分身する。

そこからまるで鳥のようにジャンプしたラストは、手にしたマシンガンを標的という  
 名の獲物に押し付けた。

「何!?!」

「バカな!?!」

『追いつかれただど!?』

『死にかけのコイツのどこにこんな力が!?』

『ゴーズ』と『カイエン』に支えられたライの額に。

『ギアフレーム』と『ピースキーパー』に乗ったアルフの胸に。

『ダーク・ヴァルキリア』と『フレイヤ』と共に跳んだエルフィの腹部に。

『キーメイス』のメイと共にメリオルを抱えて走ったレオの頭に。

桜が背負った黎の背中に。

「チエツクメイトオオオオオオオオオオオオッ！」

無情なマズルフラッシュが、無人の炭鉱場に輝いた。

——アメリカ某所

「ク、クククク！ やはり良いな、欲の強い人間は。こうして惨敗すれば、悔恨の意を残す。それこそが邪神様の復活の糧になるとも知らずにな！」

スチャツ、と手の中にあるカードを見る。

イラストには鉄格子が嵌めてあり、その中では先刻戦っていたキースが絶望と怒りが緋い交ぜになった表情で格子を掴んでいた。無論、絵は動かない。

「これで、また一人……。最初からこうすれば良かったのかも知れんな。こっちの方が集まる力は強い。最も、デュエルで勝利した後のみという限定的な物だが」

まあ、一長一短か？ とラーズは嘲るように笑った。

こうしている間にも、邪神は世界中の負の感情を糧に復活へと進んでいる。既に護衛は2人にまで減ったが、これなら間に合うかも知れない。

「さて、ラストの反応が消えたが、つまりそれはあの売女ばいたが死んだという事。即ち……」

あの「騎士」は死ぬという事だ。

勝者の笑みを浮かべ、ラーズはその場を立ち去った。

——炭鉱場

無情に響く発砲音。だが、一滴の血ですら滴らない。

「アメモエんだよ……」

「!？」

銃口に対する感覚がいつの間にか無くなっている。

声のする方向には、数瞬前まで狙っていた全員がいた。

「バカナ!? ナゼ死ンデナイ!？」

「そんなん、俺が髪の毛で回収したからに決まってるだろ？」

確かに、黎の髪の毛には桜達精霊を含めて空時一家が巻き付かれている。

トリガーを引く瞬間は確かに銃越しに感覚があった。なのに今はいない。

(ソレほど早く、回収したとデモ言うの!?)

黎はさつきまで精霊に背負ってもらわなければならぬ程衰弱していた筈だ。実際今でもかなりフラフラで顔色が悪い。

「主殿……」

「ありがとよ、桜。お蔭で元気になった」

そんなワケが無い。桜は腰に回った黎の髪を掴みながら頭を振った。

さつきまで彼は半死状態の重傷だったのだ。如何に回復術と言えど、そんなすぐに全快する事は有り得ない。だから医療・医学が発展したのだ。

このまま戦えば、黎が致命傷を負う恐れがある。そんな桜の心配を他所に、黎は皆を下ろすと、ラストと向き合った。両手に赤い模様のある長刀を斜めに構える。

一方のラストも、マシンガンを捨てて大型のバズーカを構えている。小型の弾丸では無く、こちらの威力のある一撃で決めるつもりなのだろう。

「キイシノタマシイイイイイイイイイイイイッ！」

「ラストオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」



機関銃が火を噴き、鬼が地を蹴る。  
爆発が、起きた。

——アメリカ某所

「ラストに何か仕掛けでもしたんですかい、ラーズの旦那？」

独り嗤うラーズの背後から一人の男が現れた。

四角いサンングラスに尖った鼻。形の整った顔つきに細身ながらも引き締まった体躯。  
オールバックのダークブラウンの髪の毛。

「グリードか」

七つの罪の内の一人、*“強欲”*のグリードだった。

「何、ラストが敗北する事は織り込んであつてな」

「へえ？」

「奴が死んだらとあるプログラムが起動するようにしてあつたのだ」

「とあるプログラムってえのは何ですかい？」

「それはな」

それは？ と笑いながらグリードは尋ねる。もしかしたら見当がついているのかも

知れない。

「自滅プログラムだ」

「また何でそんなモンを？」

「上級護衛二位のグラトニーが勝てなかった相手に、三位のラストが勝てるでも思うか？ 我はあの売春婦が負けて散った時、一度だけ復活できるようにプログラムしておいたのだ」

「へエ、旦那はそんな事ができたんすか。良いなあ、プライドやグラトニーの奴らもそうしてもらえりや良かったのに」

グラードが肩を竦めて言う。

実際その通りだろう。そうすれば消滅する事無く、消耗した黎とまた戦えたのだ。グラードからしてみれば、寧ろ何故ラーズがそれを他のメンバーに施さなかったのかが疑問でならない。

だが、ラーズはそれに止めておけと答えた。

「世の中にそんな上手い話があるとでも？ デメリットくらい普通にあるぞ」

「デメリットですかい？」

「うむ」





軍配が上がる。例え戦国時代から続く半ルール無用の武道だとしても、現代の剣術その他の形式は時代の流れと共に、自然と取り入れられる。剣道で生まれた、より無駄の省かれた戦法を得て知らなければ、戦場で出会った「剣道を極めた」敵に勝つ事はできないからだ。

ライが固唾を呑んだのは、黎の戦い方だ。

無駄を極限にまで削り取り、殺す事だけを全ての行動の主眼に置いた、血腥い戦い。生き残る為に敵を殺す、ボロボロになっても戦う屈辱しない闘志。

「あれが本当の、殺し合い……」

殺人の技と雖も、殺す相手がいなければそれは「知識としての技術」に過ぎない。実戦で使い磨いて初めて「技」に昇華する。

故に、ライにとってはこれが初めての殺しの実戦。

「そうか、これが生き残るって事か……」

何をしてでも生き残る。風雷流のモットーを今一度、今度は前よりもはつきりと噛み締めた。

殺すという事を、当然ライは経験した事が無い。

(だから、ここに少しでも多くの事を見て学ぶんだ！)

大切な彼女を守るために。

何時の日か来るかも知れない、とてつもない巨悪に対抗するために。

「炎帝大熱錯撃刃えんていだいねつさくけきじん」んっ！

十字に刀が振るわれ、ラストの最早人としての原型を留めていない体が4つに切り裂かれる。更に大爆発が生まれ、分割されたその体は更に木端微塵に弾け飛んだ。

「はあ……、はあ……、はあ……っ！」

チャキン、と腰の鞘に双剣をしまい、黎はその場にドサリと膝をついた。

赤かった髪も元に戻り、顔に走っていた唐草模様も消えている。

「主殿！」

戦いが終わったのを見届けた桜が、黎に駆け寄り回復術をかけ直す。

「何という無茶を！ 一歩間違えれば死んでいたんだぞ！」

「……心配、してくれたのか。ありがとう、な……」

真つ青を通り越して土気色の顔でも、黎は笑う。そうする事が当たり前かのように。

それを見て桜は思う。

(やっぱりだ。この人の笑顔には中身が無い)

偽りの、相手を安心させるための、空っぽな喜び。そんなのしか浮かべられないなんて、なんて悲しすぎるのだろうか。

だからこそ桜は思う。守りたい、支えたい、この人を心の底から笑わせてあげたいと。そう心に再び強く決めた。

だから気付くのが僅かに遅れた。

「キシノタマシイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！」

ラストが大筒を構えてこちらに狙いを定めているのに。

「黎っ！」

「桜さん！」

ライとエルファイが気付いて叫ぶも、今から動けない黎を抱えての回避は間に合わない。  
い。

（不覚！ 今からでは結界も間に合わんか！）

黎を懐に抱き寄せて左手の盾を前に出す。防げるとは思えないが、無いよりかはマシになってくれるはずだ。

（桜、俺は）

（『俺は良いから、お前だけでも逃げろ』、か？）

（分かっているのなら）

（断る！ 主殿を見捨てて逃げる事などできぬ！）

せめて少しでも盾になろうと、桜が左手と足に力を込める。

「シネエー！」

トリガーが無情にも引かれ、砲弾は過たずに黎と桜へと向かった。

——アメリカ某所

「はあ!？」

思わずグリードは目を丸くした。

「マジですかい、ラースの旦那」

「大真面目だ。冗談でそのような事を言う程、捻くれた性格はしていない」

「いやだって、復活しても獣かガキ並みの知能で、しかも2度目の死で魂ごと消滅って、

笑えねえっしょ!？」

上級護衛は人間の魂を中核に作られている。それは下級護衛最強のグリードも聞いた事がある。護衛となる際にこの魂は邪神によって新しく作り変えられ、記憶と性格のみを引き継ぐ。

下級護衛にとって魂の消滅という言葉は危機でも何でもない。コアになる魂その物が無いからだ。操り人形が形として近いだろう。故にこの復活は恐怖するべきもので



は無い。戦闘能力が落ちる程度の認識だ。

一方の上級護衛は魔法で動く生きる人形に近い。魂が無くなれば、それはもう糸の切れた操り人形である。

「人間としての魂は、最早我らにとって何の意味も持たぬただの土台に過ぎん。のだが、この術式だけは別だ。何せ死を無理矢理無かった事にするのだからな」

「はあん、それで魂削って生きながらえらう？ 復活というより延命ツスね」

「そうだ。言っただろう、自滅プログラムだと。自食効果と同じ事だ」

オートファジーとは体内の栄養素が足りなくなつた際、自身の筋肉などを削って基礎代謝に必要なエネルギーを賄う働きの事である。本来は緊急手段であり、おいそれと使える物では無い。

組み込まれたプログラムの正体は魂を削る延命。存在その物を消耗して行くのだから、最早緊急よりも自滅プログラムと称されるのは領ける。

「更によえば、このプログラムは我らの残滓すら食い尽くす。我々は敗北しても、残っているエネルギーは邪神様復活の糧に使われる。だが……」

「これはそれすら無い？」

「うむ。ともあれ、あれが発動した以上、ラストが死ぬ事は避けられん。だが、奴とて雑兵では無い。それだけ「騎士」も消耗しているはずだ。そして一時的にでも復活した

ラストならば——」

「あの邪魔な野郎を殺せるって事ですかい？」

「その辺の悪知恵は働く悪女だからな。『騎士』の魂の仲間を狙うフリをして自ら当たりに行ってもらうくらいの事はしているだろう」

クククク、とラースが笑う。

夜の闇の中へと、不気味にその声は溶けていった。

——炭鉱場

ズドオオオオオオオオオオオオン！

炭鉱場に響く大爆発。だがその爆熱と爆風は、誰も傷つけなかった。

「ナニ!?!」

「『尖月』<sup>せんげつ</sup>。本来これは武器を突き上げて飛ぶ技なんだけど、ちよつと応用してタイミングを間違えなければ、こうして相手の攻撃を跳ね上げて狙いを逸らす事もできる」

灰色の煙を背景に、言い放つ。

黎が回収していなかった鉄扇を開き、毒の抜けきつた体で威風堂々と宣言する。

「ソラトキ、メリオルウ！」

年を経てもなおその美しさを失わないライ達の母、メリオルだ。

険しい瞳でラストを睨むメリオルは、ピシツ、と鉄扇をラストに突きつけるように構える。激しい怒りを内側に秘め、湧き上がらんばかりの闘気を込めて鉄扇を持つ手に力を込めた。

メリオルの敵対行為に対し、既に理性も知性も無くしたラストはその両の手にバズーカから持ち替えた拳銃を構える。砲弾は通じないと悟ったらしい。

だが、次の瞬間、その手ごと銃は無数の断片にされた。

「俺も、忘れるなよ！」

「グギイ……、ソラトキレオオツ！」

反撃に出された蹴りを華麗に回避し、クルクルと曲芸の様に刀を回しながら構える。メリオルの夫、レオ。こちらにも闘気と怒気を漲らせて戦いの構えを取る。短く散髪された髪が、その吹き上がる気迫によって騒めいているように見えた。

この二人に銃は効かないと察したのか、ラストは銃剣を取り出し、装着されているダガーを外して構えた。

一方でレオとメリオルも大地を踏み絞り、何時でも飛び出せるようにする。

「連携、行くぞ！」

「了解！」

「ガアアアアアアア！」

ダンツ！ と3人が走り出した。

——次元の狭間

ここは、邪神と護衛がアジトにしている、何処かであり何処でも無い黒い空間。RPGのボスのお約束のような居城が、何も無い空間にポツリと浮かんでいる。

「つたく、ここも随分寂しくなったモンだよなあ」

「7人いたのが今や2人だ、当然だろう」

「カーツ！ 旦那はドライだねえ。もつとこう、騒がしさとかさあ、そういうの欲しくねえのかよ？」

「要らぬ」

ラースはドライにグリードへと返した。

部屋の奥には祭壇があり、そこには真つ黒な球体が浮かんでいる。

ラースは懐から取り出したカードを祭壇の下に置く。すると、そこから黒いエネルギーが球体へと流れ込む。鼓動するように、球体もそれを吸収していく。

「前よりデカくなってんな」

「当然だ。この中に依り代の姫がいる。即ちこの球体は邪神様そのもの、差し詰め繭か蛹といったところか」

ニヤリ、とラーズは笑う。

ドクン、と鳴る度に、中で眠っている少女、都が苦悶の表情を浮かべる。

「ふふふ、経過は順調。人間の悔恨の念が最も強い瞬間の魂を封じたカードを集め続けられ、半年、否、数か月もしない内に復活は可能だ！」

フハハハハハハ！ と悪役らしい高笑いを上げるラーズ。それを見て勝者の笑みを同じく浮かべていたグリードだったが、ふと気になる事を思い出した。

「……ちなみに必要枚数は後何枚ツスか？」

「200枚程だな」

「……毎日5回はデュエルしても一ヶ月じゃ足りないんすけど、それでも？」

「当然だ」

下級護衛にとって、デュエルでの敗北は闇のゲームでは無くても厳しいものがある。ましてやいくら下級護衛最強とは言え、この人はその辺を考えた上で言ったのだろうか。もう少し労わって欲しいものである。

さつきだつてナグモコージとか言う不良をノシてカードに封印して来たばかりだと言うのに。その前にもモモノマスミとか言う属性キルを使うアンチデツキ使いを封じ

たのに。

存在するだけで邪神のエネルギーを消費し続けるというのに。

【ちよつと回想】

「『仮面魔獣デス・ガーディウス』と奪った『ダイヤモンド・ドラゴン』で直接攻撃！

『マスク・ダーク・シヨック』！ 『ダイヤバースト』！」

「このデツキの最強モンスターが……、ぎゃあああああああああー！」

グリード：LP 200

名蜘蛛：LP 3800↓0

「魔法カード『地割れ』！ これでお前の場はガラ空き！ 『メルキド四面獣』を召喚してダイレクトアタック！」

「闇属性にメタを張っていたのに、負けるハズがグハアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

グリード：LP 600

真澄：LP 1200↓0

【回想終了】

「厳しすぎねえ？」

「復活のためだ、我慢しろ」

グリードは今晚は泣き寝入りしようと思った。

寝るといふ行為そのものをしないのだが。

——炭鉱場

「もうごごうはざん猛虎豪破斬」「ごうまかいじんけん業魔灰燼剣」

うおおおおお、

「れつふうげつかしろう烈風月華衝」

うつ!!」

「らいじんげつえいか雷神月詠華」「えんかふうはくしやう炎華封爆衝」

はあああああ、

「りゆうそうせんくうは龍爪旋空破」

あつ!!」

「焼き尽くせ、紅蓮の刃あつ！」

これが俺の、

「さつげきぶごうけん殺劇舞荒剣」

つ！」

「冥府へと誘う、朧月の棺つ！」

これが私の、

「はおうろうげつそう霸王籠月槍」

つ！」

「まだまだ行くぜ！」

「特攻上等！ 機は熟したわ！」

「せんけんせんう がおうせんれつこう閃劍斬雨・駕王閃裂交” ウツ！”」

ぶぎいやあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああつ！

「凄え……」

ダガーで対抗、しようとしたのだろう、ラストは。

しかしレオとメリオルという阿吽の呼吸で動ける相手には、余りにも分が悪かった。  
瞬間間すら無くラストは斬られ、焼かれ、砕かれ、通電され、貫かれ、裂かれ、刻まれ、  
蹴られ、殴られ、斬り刻まれた。

相手が悪い。黎にはそうとしか見えなかった。

ただでさえ現在のラストは大きく消耗している。その上、完全な連携が取れるレオと  
メリオルが相手ではいくらなんでも勝算が無さすぎる。

実際、連携が開始してからレオとメリオルは目を合わせる事も、声で合図する事も無  
く息をパーフェクトに合わせている。攻撃と防御が常に一体となり、まるで二人で一人  
の武人の様な動きをする。心と心で繋がっている証拠だ。女性を見下し、絆を嘲笑うラ  
ストは、恐らくこの連携の秘訣を理解できない事だろう。



(これが、信頼か……)

黎は胸中でポツリと呟いた。

21年間、たった独りで殺しの世界で生きてきた彼にとつて、背中を預けるに足る信頼関係というのは理解し難かった。都という家族はいたが、彼女は安心できる心の拠り所であり、背中を預けられる仲間では無い。

きつと、こういう関係を、望んでいたのかも知れない。

背中を誰かに預けられる、そんな状況と仲間を。

「オニ” イイイツ！ ”メギツネ” エエエツ！」

ラストが叫ぶ。先刻からラストの顔は既にグチャグチャ。目鼻は愚か、顔の造形すら元の形を推測し難い。目だつてもう見えてないだろう。

そしてラストは理性を削り切ってしまった。彼女が叫ぶ言葉は、つまりそういう事だ。

隣で俺を支えているアルフが首を傾げた。

「”鬼”と”女狐” って？」

「魂の型の事だな。多分もう目が見えないからそう言っているんだろう」

ちなみにレオの魂の型は厳密に言くと”赤鬼”、メリオルは”葛葉<sup>くずのは</sup>”。

片や『泣いた赤鬼』に出るように、人を愛した心優しい存在。意味するのは”人の届

かぬ高みにいる猛者”と”人の優しさを持つ強者”。

片や『九尾のキツネ』として知られる大妖怪が人となった姿。意味するのは”人の届かぬ領域にいる美しさ”と”遙か高みにある強さ”。

ちなみに鬼Ⅱ人食いのイメージの元となった単眼鬼キクロプス（サイクロプスとも言う）ならば逆に”人をも食らう獰猛さ”に、九尾の狐も人では無く動物の姿ならば”人を騙して笑う悪女”になる。

「成程、父さんと母さんらしいね」

ちなみにこうして話しているうちにも二人のラツシユは続いている。メリオルは完全に毒が抜けきっており、反撃と言わんばかりの猛攻だ。

一方のレオもまた犬歯を牙のように向いて刀を振るっており、愛する者を傷つけられた事への怒りが燃えている。

しかし、見ている分には目は忙しくとも暇なので、黎は残る戦友三人の魂の型を説明し始めた。

「ライは”武士””。武に通じていて腕前のある奴に多い。巨悪を嫌うお前にはピッタリだな」

「へえ……。あ、ラストが微塵切りになった」

「アルフは”鏡””。外部装置を通さない二重人格の類は強制的にこの型になるそうだ。

表と裏で左右対象になるから、性格が違う二人が同居している事を示唆する事にもなる」

「成程。あ、ラストが木端微塵になった」

「そしてエルフィが海。どこまでも広く、果てが見えない。主に掴み所が無い奴がそんなんだが……、お前の場合は懐の広さと敵への容赦の無さだろうな。海難事故みたいな」

「う、ちよつと複雑……。あ、ラストがディスクを構えた」

何？ と黎が振り向く。

見ると、3人は既にデュエルを開始していた。

——次元の狭間

「さて、ラストもじきに消滅する頃合いか。グリード、貴様はこれからどうするのだ？」  
 「オレっちかい？ そうだな人間の魂集めながら、*“騎士”*の野郎が転移する頃合いを見計らって、こつちも別世界に行くってトコかねえ」

新たに出立の準備を整えながら、二人は会話する。また人の魂を閉じ込めるために行くのだろう。

「どうせ生贄になった人間の魂は邪神様の中でちつとずつ消化されていくんだ、焦らな  
いでもすぐに腹減ったりするワケでもねえんでしよう？」

「うむ。だが、復活が早まるという利点はあるぞ？ それに……」

ぬん！ とラーズはいきなり得物である戦斧を振った。身の丈程もある巨大な斧を、  
グリードは慌てて大鎌で受け流すように防いだ。

更に追撃とばかりにラーズは斧を両方の手にそれぞれ持ち、連続で振るう。まるで重  
量など最初から無かったかのように軽々と振るうが、ガードするグリードにしてみれば  
堪ったものではない。必死に右から上から左からと迫り来る刃を受け止め、流し、躲す。  
その暴力的な一撃の威力は、当たる度に真つ二つに折れるデスサイズが物語っていた。  
一発でも受ければシヤレにならないダメージを被るだろう。

暫く斧のラツシユは続いていたが、やがてピタリと止んだ。

「な、何すんでえ、旦那！」

「気付かぬか、グリード。貴様自身もまた強化している事に」

え？ とグリードは自分の体を見る。服のあちこちが激しく裂けている。

防いでいたと思っていた斧の攻撃は、どうやら何発も体に当たっていたらしい。

「あ、え？ 何で？ これだけ喰らったら復活まで時間かかるんじゃない……」

「今や護衛は我と貴様の二人。量産できる下級護衛を新たに生むよりも、貴様一人を強

化した方が良いと判断したのだろう。今の貴様は上級護衛に相当するだけの力を手に入れたのだ」

へえ！ とグリードは嬉しそうに鎌を振るう。言われてみれば確かに、並々ならぬ力を感じる。これならば誰が来ても勝てそうだ。

「だが、油断はするな。過信、慢心、油断、それがここまで我らが追い詰められた元凶だ。努々忘れ、怠るでないぞ？」

「分かってやす」

ならば良い、とラーズは手を振り、次元の扉を潜って行った。

残されたグリードも出発しようとし、ふと、後ろを振り返る。大きな黒い繭の中には「騎士」の魂の義妹が浮かんでいる。時折苦悶の表情を浮かべ、もがく所から見ると、苦痛を味わっているのだろう。

「キキキキキ、良いぜ「騎士」の妹さんよお？ お前の苦しみも邪神様の復活の糧だ。お前の不死身の体はあのお方の器にやピッタリだぜ！」

精々苦しめよ、とグリードは高笑いしながらその場を立ち去った。

ドクン、と都の姿が歪んだ。

## — 炭鉱場

レオ：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：ジャンク・ウオリアー（ATK 9300）、ジャンク・アーチャー（ATK 2300）

：強制終了（永続罨）、伏せカード1枚

メリオル：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：スクラップ・デスデーモン（ATK 2700）

：伏せカード1枚、リビンググデットの呼び声（永続罨・対象不在）

ラスト：LP 100

手札：1枚

フィールド

：フルアーマー・オーガ（DEF 1600）、ビッグ・キャノン・オーガ（ATK 2400）

：魔法・罨無し

ジャンク・ウオリアー（シンクロ・効果モンスター）

星5

闇属性／戦士族

ATK 2300／DEF 1300

「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力を合計した数値分アップする。

ジャンク・アーチャー（シンクロ・効果モンスター）

星7

地属性／戦士族

ATK 2300／DEF 2000

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動することができる。

選択したモンスターをゲームから除外する。

この効果で除外したモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に同じ表示形式で相手フィールド上に戻る。

スクラップ・デスデーモン（シンクロモンスター）

星7

地属性／悪魔族

ATK 2700 / DEF 1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

フルアーマー・オーガ（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星5

炎属性／悪魔族

ATK 1600 / DEF 1600



このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、墓地に存在する「ガトリング・オーガ」1体を特殊召喚する事ができる。

ビッグ・キャノン・オーガ（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星7

炎属性／悪魔族

ATK 2400 / DEF 2400

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に「フルアーマー・オーガ」が存在する場合に、自分フィールド上に存在する「ガトリング・オーガ」をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。

このカードが相手ライフに与える戦闘ダメージは2倍になる。

このカードが破壊された場合、自分の墓地に存在する「フルアーマー・オーガ」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

SIDE : 黎

ラストが残りの力を振り絞って挑んだレオさんとメリオルさんへのデュエル。

だがそれは、俺の目には無謀な挑戦にしか見えなかった。

「ライフが1ポイントも減ってねえ……」

「年期と才能の差、というヤツか。見事としか言いようが無いな」

「ワタシのターン、ドロロー！　ワタシは2体のモンスターをリリースし、『ロング・バレル・オーガ』をアドバンスシヨウカンツ！」

虹色の光の中へと消える2体のモンスター。

入れ替わりに出て来たのは自身の身長を遥かに超える長い銃を持った鬼だ。構造としては狙撃銃が近いかも知れないが、口径は明らかにキャノン砲のそれだ。

ロング・バレル・オーガ：DEF 3000

ロング・バレル・オーガ（効果モンスター）（アニメオリジナル）

星8

闇属性／悪魔族

ATK 1500 / DEF 3000

このカードは特殊召喚できない。

召喚・反転召喚に成功した時、守備表示になる。

相手フィールド上に存在する最も攻撃力が高い攻撃表示モンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択した相手モンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

この効果は1ターンに2度行う事ができる。

「オノレ、ニンゲン……！　ゼツタイに殺す！　『ロング・バレル・オーガ』、効果ハツドウ！　1ターンに2度、コウゲキリヨクの1番タカイ相手モンスター1体をハカイシ、ソノ攻撃力分のダメージをアタエル！　『グレートスナイプ・ファーストショット』！」

ガコン、と薬莢を排出して引き金を引く大鬼。ターゲットは攻撃力が大きく跳ね上がった『ジャンク・ウオリアー』。喰らえば4000ライフが一息で消し飛ぶレベル。

だが、それを喰らう程、あの二人はアマクねえハズだ。

「リバースカード、オープン！　罨カード、『シンクロ・バリアー』！　私の場のシンクロモンスターを1体リリースし、次の私のターンのエンドフェイズまで受けるダメージ

を全て0にする！ 『スクラップ・デスデーモン』をリリース！」

シンクロ・バリアー

【通常畏】

自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体をリリースして発動する。  
次のターンのエンドフェイズ時まで、自分が受ける全てのダメージを0にする。

青い戦士の腹を貫く砲弾。だが貫通した鉄の牙は、幾何学模様によって縁どられた7つのリングの盾によって防がれてしまった。

「グウウウウ！ ナラばモンスターだけでモ破壊スル！ グレートスナイプ・セカンドショット！」 対象は『ジャンク・アーチャー』！

「だが、ダメージは受けない！」

「クツ、ターンエンドッ！」

ラスト：LP 100

手札：1枚

フィールド

：ロング・バレル・オーガ（DEF 3000）

：魔法・罨無し

「俺のターン！」

「グブツ!?!」

レオさんがカードを引く。と同時にラストが血の代わりに真つ黒な闇を吐き出した。人間にやや近い構成をしているのならば、明らかに危険な状態だろう。が、ラストは口元を拭うと、ディスクを構え直した。

「おいおい、もうお前ヤベエンじゃないのか?」

「ウルさいツ！」

「ああ、そうかよ。なら遠慮は無しだ！ 永続罨『エンジェル・リフト』を発動！ 俺の墓地からレベル2以下のモンスターを1体、攻撃表示で呼び戻す！ 戻って来い、メイ！」

『はい!』

キーメイス：ATK 400

キーメイス（通常モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 400 / DEF 300

とても小さな天使。

かわいらしさに負け、誰でも心を開いてしまう。

カードからの光に導かれ、青い衣装の小妖精、レオさんの精霊のメイが現れた。身の丈程もある金色の鍵を勇猛果敢に振り回し、勇ましい目でラストと『ロング・バレル・オーガ』を睨む。

「更に装備魔法『下克上の首飾り』をメイに装備！」

『勝ちパターン行きますよ！』

続いてメイの首に瞳をあしらったアミュレットが掛けられた。

通常モンスターを軸にしたレオさんの【ローレベル】デッキでは八面六臂の活躍を確約してくれる1枚だ。

「バトル！　メイ、『ロング・バレル・オーガ』を攻撃だ！　ビッグ・キー・ブレイカー

“！”

「バカナ!? 攻撃力が遥かに劣るモンスターでコウゲキ!？」

『そう思うのならば、私の攻撃力をよく見る事ですね!』

大筒を構える鬼目掛けて鍵を振り下ろすメイ。それを受け止めようと鬼は大筒を横向きに構えた。

しかし、鍵と銃が接触した瞬間、メイの攻撃力が跳ね上がった。

キーマイス：ATK 400↓3900

レベル1のモンスターとは思えない攻撃力は、『下克上の首飾り』の力だ。

「歯ア食いしばれよ最強さいしやく、俺達の最弱さいじやくは——」

『——ちよつとぼつかし響きますよつ!』

跳ね上がった攻撃力に比例するかの様にメイの鍵が巨大化。高層ビルの如き巨大な鍵が、『ロング・バレル・オーガ』を跡形も無く押し潰し粉碎した。

下克上の首飾り

【装備魔法】

通常モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターよりレベルの高いモンスターと戦闘を行う場合、装備モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみレベル差×500ポイントアップする。

このカードが墓地へ送られた時、このカードをデッキの一番上に戻す事ができる。

『ロング・バレル・オーガ』、撃破！』

『やりました！』

「ば、バカナ……!?!? わたしの『ロング・バレル・オーガ』ガ、あんな雑魚モンスター如きニ……!?!?」

デュエルはモンスターの基礎攻撃力や能力値だけじゃ決まらない。前々から推測していた通り、邪神やその護衛は攻撃力や火力だけで戦局を判断している。そういった奴らが相手なら、トリッキーな戦術を得意とするレオさんの【ローレベル】デッキは非常に相手し辛いだろう。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！ どうだ、ラスト？ もう諦めた方が良くんじやねえの？」

「マダ、まだア！ エンドフェイズに手札の『スリープ・エスケーパー』のモンスター効果果をハツドウ！ ジブンのモンスターが戦闘にヨツテ破壊されたターンのエンドフェイズ、手札のこのカードをステテ、相手の場の伏せカードを1枚ハカイ！ そして破壊



されたモンスターを呼び戻す！」

スリープ・エスケーパー（効果モンスター）（オリジナル）

星5

ATK 1000 / DEF 2200

闇属性 / 機械族

自分の場のモンスターが戦闘によって破壊されたターンのエンドフェイズ時に、このカードを手札から捨てて発動する。

このターン戦闘によって破壊された自分のモンスターを全て自分の場に特殊召喚し、相手の場の裏側表示のカードを1枚破壊する。

この効果で特殊召喚したモンスターは次の自分のエンドフェイズまで効果を発動する事はできない。

プシューと煙が噴き出し、その中から復活する『ロング・バレル・オーガ』。それと同時にレオさんが伏せた『くず鉄のかかし』が破壊された。

レオ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：キーマイス（ATK 400）

：強制終了（永続罨）、下克上の首飾り（装備魔法・『キーマイス』に装備）、エンジェ  
ル・リフト（永続罨・『キーマイス』を対象に発動中）

「私のターン、ドロロー。……ラスト、アンタ本当に止めないのね？ 今ならサレンダーも  
認めるし、逃げるだけなら見逃してあげても良いのよ？」

「フザケルナア！ ワタシは誇り高きジャシンサマの護衛が内の一人、*“色欲”*のラス  
ト！ 人間如きに、人間のオンナ相手に屈スル事などアツテはナラヌのヨ！」

メリオルさんは優しく尋ねるのに対しラストは、最後まで強硬に突っぱねた。

その様にメリオルさんは呆れるでも怒るでも無く「そう」とただ呟いた。

「なら、誇りに縋りながら逝きなさい。私は手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！  
墓地のモンスターを1体特殊召喚する！ 蘇らせるのは私の『スクラップ・ドラゴン』  
！」

『ギギヤアアアアアアアア！』

スクラップ・ドラゴン：ATK 2800

軋むような錆びた金属の駆動音と共に、紫の魔法陣から金属のドラゴンが躍り出る。赤く光る機械的な眼は、生物的な要素は無いはずなのに、ラストに敵意を持っている様に見える。

『スクラップ・ドラゴン』のモンスター効果を発動。1ターンに1度、自分と相手の場のカードを1枚ずつ破壊する。私の『リビングデットの呼び声』と、『ロング・バレル・オーガ』を破壊！ スクラップ・プレスッ！」

機械龍がメリオルさんのカードに噛み付き、咀嚼する。バリゴリとカードを噛み砕いて行くに連れてその口腔内にはエネルギーが満ちて行く。

「発射あー！」

『ガアアアアアアアアアア！』

そして満ちたエネルギーは真っ赤な高熱のプレスとなって、大筒を構えた軍服鬼を焼き払った。

「クウッ！」

「これでアンタの場と手札は空っぽ。墓地のカードにも不明なカードは無い。もう防ぐ手段は無いわよ。何か言い残す事はある？」



「俺達の」

『「私達の」』

「勝ちだあ！」

「塵すら残らず、か……」

ラストの消滅。それは今までプライド、エンヴィー、スロウス、グラトニーの4人を見て来た俺にとっては見慣れた物になる、はずだった。

「敗北は死、その闇のゲームにおける本質を捻じ曲げてまで存在し、剩え2度目の敗北を喫したのだ。こうなるのは当然だろうな……」

桜が隣でしんみりと頷く。ラストの消滅は、これまでの連中とは全く違った。

これまでの4人は体がボロボロと黒い塵になって消滅し、最終的には黒い塵も目に見えなくなっていく感じだった。

ラストは違った。黒い塵になるのでは無く、まるで黒死病ペストに侵されるかのように全身が黒く染まって（服も髪も元から黒いが）、否、漆黒の闇に染まっていった。体は崩れるのでは無く、その染まった部分から呑み込まれるように消えて行った。

「当然の代償ってヤツか……」

闇のゲームとは命と命のやり取り。勝者には栄光を、敗者には死を。その理屈を捻じ曲げれば、それ以上の対価を払うのは当然というワケか。

ラストは終盤、発音の仕方や動作が不自然なものになっていた。あれも対価なのだろう。

そうまでして、ラストは人が、女が憎かったのだろうか？

だとしたら、その執念はハッキリ言って死者足りえない俺では計り知れない。

「いや、野暮なだけか」

俺とあいつは何もかもが違う。性別、生きた年代、価値観、何もかも。赤の別人が詮索した所で、何かが得られるワケでも無いか。

ギシギシと軋む体を無理矢理に動かし、俺は立ち上がった。目を閉じて体内を自己診察してみれば致命傷が複数箇所。

でも、まだ俺は生きている。死んでない。なら、まだ負けてない。

パンパン、と服についた土埃を叩き落とすと、俺は皆の方へと向いた。

「皆、ありがとう。皆のお蔭で無事に勝利できたよ」

「大ドアホ！」

笑いながら言った途端、レオさんとライに背中を力一杯ぶつ叩かれた。

パツシイイイン！

「いつてええええええええつ!」

何で!?

「この大馬鹿野郎!! 何が『無事に勝利できた』だ! お前はボロボロじゃねえか!」

「一回姿見でテメエの全身見てみやがれ! そんな血だらけの服に真っ青な顔で無事もクソもあるか!」

えー?

そんなん元は日常だったんだが。

「その日常は絶対におかしい!」

『……全面的に同意させてもらうぜエ』

『はい』

『です』

精霊にまで肯定されてしまった。

その後ろではメリオルさん、アルフ、エルフイ、マシンナーズと天使族のコンビも領いている。

頼みの綱とばかりに桜へと振り向くが、ぷいとそっぽを向かれてしまった。

アウチ。

「もう少し労われ。俺達を守るためつてのは分かってるけどよ。そんな戦い方じゃあ身



が持たないぜ？」

「護衛は後二人って事は、むこうも本腰入れるだろうな。ここで負けちまったら元も子もネエだろ？」

「ええ……。『百里を行く者、九十九里を半ばとす』、ここまで来たらもう気は絶対に抜けないですよ」

とは言え、この戦い方は変えようと思つてそうホイホイ変えられるモンでも無い。

後は、戦いの流れや相方になるであろう者の運、か。

ハ、笑えねえ。

寝るのも休むのも死んでからできるけど……、それやつたらもう、何も出来なくなつちまうからな。

「この程度で死ぬつもりは無いですよ、俺は」

目を閉じれば、今まで出会った色んな人達の顔が思い浮かぶ。

皆、俺の事を心配してくれている。その思いは、無碍にしちゃいけない。

「フフ、その意気よ」

「絶対に、その思いは最後まで忘れないでね？」

「変なトコで死んじや承知しないから」

順にメリオルさん、アルフ、エルフィ。

戦いを経る度に、増える仲間達。それはそのまま、絆が増える事でもある。

「そうだ、PDAで写真を撮ろう」

「お、そりや良いな。皆がいた証拠になる」

「私は賛成よ。皆はどうする？」

「俺も！」

「僕も！」

「当然、私も！」

ピピツ、カシャツ！ シャッターが切られて画像がまた一つ増えた。

そこには、円満な家族と友人、そしてそれを守護する頼もしい精霊の面々が写っていたのであった。

増えた絆は心の強さの証。それは即ち、共に戦った証明でもある。

心と心を繋ぐそれは、見えるけど見えないもの。何時までも仲間である事を保障し、未来永劫、その結末は壊れない。

時の螺旋の中、俺達は出会った。その確かな証が今、ここに刻まれたのだ。幸せの欠片が、また一つ手に入った気がした。

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 66 : 潜水艦と水龍

SIDE : 黎

ラストとの戦いを終えて眠っていた俺は、全身に走る痛みで目が覚めた。  
カーテンからは夕日が差し込んでいる。

「……知らない天井だ」

『レッド寮の自室だろう、何を言っている』

桜のツツコミが冷たいぜ。

『知るか。私は漫才の相手では無い』

アウチ。

まあ良いや。桜、俺は何日寝てたんだ？

『丸一日寝ていた。フレイヤフィオ殿が顔を真っ青にして看病していたぞ、後で礼を言  
いに行くべきだ』

「あいつらが？」

ふと、額の上に何かが乗っているのに気付く。手にしてみると、濡れたタオルだった。あいつら……。

ふわり、と桜が実体化してそのタオルを手に取り、近くのタライの中の水に浸して絞る。そしてまた俺の額に乗せた。

「今は寝ている。明日は大きな戦いなのだろうか？」

……そっか、今日は土曜日か。

明日の日曜日はノース校との交流戦。副将として、負けるわけにはいかねえな。

そう考えると、何となくプレッシャーみたいな物を感じて、それ以上に残っていたダメージのせいで眠くなってきているのに気付く。

重くなって来た臉を感じながら、俺はポツリと呟いた。

「……お休み、桜」

「ああ、お休み、主殿。良い夢を」

そう言えば、誰かに「お休み」なんて言われるのは初めてかも知れないな。

あつちじゃあ都の前ですら、誰かと寝た事なんてなかったから。

SIDE：無し

——日本・某所

「はあ……、はあ……、はあ……っ！」

「ふん、その程度か？ ガキを守ると言っておきながらその体たらく。所詮貴様の實力はその程度というワケか」

「くっ！」

町のとある場所、夜の帳がおり始めた時間。

二人のデュエリストが向かい合いながら、デュエルを行っていた。

片や、黒い喪服に身を包んだ男、ラース。

もう片方はポニーテールの二十歳前後の女性。頭に小さな王冠を乗せている。

「まだ、負けてないっさー！」

「そうか。だがこの戦況をどう覆すと言うのだ、なりのぶこ成田伸子よ」

ラース：LP 4000

手札：4枚

フィールド

500)  
：F・G・D (ATK 5000) × 2、メテオ・ブラック・ドラゴン (ATK 3

：魔法・罨無し

成田伸子：LP 500

手札：2枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罨無し

圧倒的に不利。その言葉しかその場には無かった。

近所の子供達と遊んでいた伸子であったが、突如として現れたラーズが子供達に暴行を振るう場面を見てデュエルによる静止をかけた。しかし、今になって思う。こいつの狙いは自分だったのだと。

このターン、自分の場にいたモンスターは全滅させられた。辛うじて踏み止まったが、次のターンで挽回しないと負けてしまう。この手の輩は勝利を盾に何をしてくるか分からない。そういった大人の汚い所は、同じ大人であっても伸子は嫌いだった。

「さあ、貴様のターンだ」

「妾のターン……」

この引きに全てを賭ける。

自分の持てる、全てを！

「ドロー！」

引いたカードは……、『オーバーロード・フュージョン』！

「手札から魔法カード『オーバーロード・フュージョン』を発動だモ〜！」

「ほう、ここでそのカードを……！」

お得意の動物の鳴き真似をしながらカードを発動させる伸子。墓地に手をかざし、出て来た2枚のカードを手取る。

「墓地の『リボルバー・ドラゴン』と『ブローバック・ドラゴン』をゲームから除外し、

『ガトリング・ドラゴン』を融合召喚するっさ！」

『ギオオオオオオオオオオッ！』

ガトリング・ドラゴン：ATK 2600

——デュエルアカデミア

SIDE：黎

一日明けた今、俺達は港でノース校を出迎えている。

潜水艦から数々の向こうの生徒が現れる。

「(……潜水艦って、航路とかの関係で中に色々機材詰め込む必要があるから、あんな何十、何百つて数はあのサイズには収納できないんだが)」

『(RPGで道具をどこに持つてるか疑問視してはいけないのと同じ事だ)』

出て来るあちらさんの男子生徒の中で、前にずいっと出て来るのが4人。どいつもガタイが良い。こいつらが、代表か。

……見える生徒の9割以上が男子だが、ノース校って男子校なのか？

そしてそれぞれが当たる相手と握手を酌み交わす。

「先鋒の三沢大地だ。よろしく頼む」

「うす、先鋒の点田三郎だべ」

「次鋒の、天上院明日香。よろしくお願いします」

「うおっしやあ、女の子！ 次鋒の水島標呉や！」

「中堅の神山フィオ。正々堂々、悔いの無い勝負をしよう」

「ふ、ふひひひひ。中堅の犬養通。ボーイツシュ萌えス」

「副将、遊馬崎黎。勝ち譲らないんで、よろしく」



「ケ、随分と強気なやつちゃ。副将の光前寺久良丸じや」

パシツ、と手と手が合つて握手。一部変なものもいたが、スルー。

そしてその後ろで十代がキョロキョロと周囲を見回している。

相手が見当たらないのがこのデュエル馬鹿には不安なのだろう。耐え切れなくなつたらしく、ノース校の校長、一之瀬氏に直接問いかけた。

「なあなあ、俺の相手は？」

「俺様だ！」

バン！ と潜水艦のハッチが勢い良く跳ね上げられ、中から飛び出したのは、ご存じ鳥頭。黒のややボロいコート状の服に袖を通し、以前の濁つたそれとは異なる、生命力に満ち溢れる目つきをしている。

「十代、貴様の相手はこの俺、ま」

「万丈目じゃねえか！ 久しぶりだな！」

「よお、スリー。生きてたのか」

ズザザザツ、とハッチからずっこけて落ちる万丈目。スリーの由来は万丈目“さん”だ！ と煩かつたから。

「テメエら！ 万丈目さんになんて事を！」

「おのれ、よくもワシらの代表に！」

「黙れ！」

騒ぎ立てる周囲を万丈目は一喝。

空へ向けて指を高く突き上げた。

「俺様の名を言ってみろ！ 俺様の名は、一！ 十！」

『百！』『千！』

『『『万丈目サンダーアーツ！』』』

その瞬間に巻き起こるサンダーコール。

ナマで見ると、結構圧巻だな。

と、その時。上空から数台ヘリコプターが飛んで来た。ヘリの腹には「万」の文字が刻まれており、何台かの扉からはカメラがこちらの様子を撮影している。

最初に着陸したヘリから若い男が二人降りて来た。双方ともに黒髪で、片やヒゲを蓄えた精悍そうな男性、片や刈り込んだ頭の神経質そうな男性だ。

「準ーっ！」

「に、兄さん達!?!」

二人ともが駆け寄りながら叫ぶと、ギョツとしたように未来のサンダー君は言った。

「どうしてここに!?!」

「お前が交流試合に出ると聞いて、すっ飛んで来たんだ！」

「既にTV放送の契約は取った！ 今日の主役はお前だ！」  
契約取るの早いな、あんたら……。

——日本某所

S I D E : 無し

伸子の呼びかけに応じて現れる、機関銃の龍。黒い金属でできた体には三つのガトリングの銃身が取り付けられている。

『ガトリング・ドラゴン』の効果発動！ 1ターンに1度、コイントスを3回行って、表が出たのと同じ数だけ、場のカードを破壊するんだメエ〜！」

3度投げられるコイン。その全てが表を現した。

「やた！ これでお前のモンスターは全滅！」

「ぬっ!？」

「そしてバトル！ 『ガトリング・ドラゴン』でダイレクトアタアアアアアアアアック！」

伸子は手札のカード、『リミッター解除』を見て確信した。

——勝った！

だが……。

『ぬん！』

機関銃の龍から放たれた無数の弾丸は、老人の展開した障壁によって阻まれてしまった。

いつの間にか、レースの場には龍の甲冑を身に着けた老人が座禅を組んでいたのだ。老人はバリアの爆発と共に消滅したが、レースは一切負傷していない。

「な!? 何なのさ、そのモンスターは!」

「我は手札から『霊廟の守護者』を特殊召喚させてもらった」

「わ、妾のターンで手札のモンスターを!」

霊廟の守護者：DEF 2100

「そうだ。このカードは私のドラゴン族モンスターが破壊された時、手札から特殊召喚できる。貴様の『ガトリング・ドラゴン』の効果で私のモンスターが破壊され墓地に送られた事で特殊召喚されたのだ」

「っ!?!」

「これで攻撃終了、貴様は成す術を失った。さあ、どうする」

「……カードを2枚、セッツ！ ターンエンド！」

霊廟の守護者（効果モンスター）

星4

闇属性／ドラゴン族

ATK 0 / DEF 2100

このカード名の（2）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、このカードは2体分のリリースにできる。

（2）：このカードが手札・墓地に存在し、「霊廟の守護者」以外のフィールドの表側表示のドラゴン族モンスターが効果で墓地へ送られた場合、または戦闘で破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

このカードを特殊召喚する。

墓地へ送られたモンスターが通常モンスターだった場合、さらに自分の墓地のドラゴン族の通常モンスター1体を選んで手札に加える事ができる。

成田伸子：LP 500

手札：0枚

フィールド

：ガトリング・ドラゴン（ATK 2600）

：伏せカード2枚

伸子が伏せたカードは『リミッター解除』とブラフの『魔法石の採掘』。『リミッター解除』で迎撃するつもりなのだ。

だが、真実や現実というのは、時にどんな物語よりも悲劇をこの世界にもたらす。

「私のターン、ドロロー。……無駄な事を」

「何!？」

「如何なる策を弄しようとも、私の前では無意味。一縷の希望ですら打ち砕き、踏みにじる現実の残酷さを教えてやろう」

バンツ！ とラースは手札を一枚、ディスクに叩き付けた。

「我は魔法カード『死者蘇生』を発動、墓地より『グランドタスク・ドラゴン』を特殊召喚する！」

『G u u u R a a a a a a a a a a a a a a a a ! 』

グランドタスク・ドラゴン：ATK 1400

フィールドに出現したのは大きな牙を持つ山よりも巨大なドラゴン。『未来融合』で墓地に送られ『龍の鏡』で除外、その後『異次元からの埋葬』で墓地に戻されたカードだ。

本来ならソリッドヴィジョンの関係でそこまでのサイズにはならない筈だが、闇のゲーム故の特性で本当に空を突くような大きすぎる龍になっている。

「このカードを召喚・特殊召喚した時、フィールドのカードを2枚まで破壊する。そしてその数×600の攻撃力を得る。我は貴様のリバースカード2枚を破壊！」

「クッ！ 速攻魔法『リミッター解除』発動！ これで機械族モンスターの攻撃力を2倍にするんだメェ〜！」

グランドタスク・ドラゴン（効果モンスター）

星8

地属性／ドラゴン族

ATK 1400 / DEF 2400

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、このカード以外のフィールドのカードを2枚まで対象として発動できる。

そのカードを破壊し、このカードの攻撃力は破壊した数×600アップする。

グラントダスク・ドラゴン：ATK 1400↓2600

ガトリング・ドラゴン：ATK 2600↓5200

巨大な黄色の龍によって粉碎される2枚の伏せカード。咄嗟に『リミッター解除』でガトリング砲を取り付けた機械龍を強化は出来たが、『魔法石の採掘』と共に消されてしまった。相手がこのまま何もしなくともデメリットで『ガトリング・ドラゴン』は破壊されてしまう以上、絶体絶命である。

それでも1枚だけドロウできる次のカードに未来を託せる。ふざけた語尾を操る女は冷や汗を流しながらも、そんな微か過ぎる希望にすがった。

「それで凌げたとも思ったか」

「何っ!?!」

だが、絶望とはそんな生易しく無いからこそ絶望なのだ、この日彼女は思い知る。

「手札から『ボマー・ドラゴン』を通常召喚」



「そ、そのモンスターは……!」

「バトルだ! 『ボマー・ドラゴン』、奴の『ガトリング・ドラゴン』に負けて来い!」

ラーズが召喚したのは爆弾を抱えた小さな龍。それがそのまま鋼鉄の魔龍にぶつかり、自爆した。

『ボマー・ドラゴン』の効果発動。このカードの攻撃で我はダメージを受けず、貴様のモンスターを道連れにする。失せろ、紛い物の鉄屑よ!」

『GuOooooooooo!』

「が、『ガトリング・ドラゴン』ツ!」

手持ちの爆弾によって消し飛んだ龍だったが、しかし頭から突進した事でその爆発は相手モンスターを巻き込むという自爆テロの様相となる。

これによりフィールドのモンスターは残り1体と化す。そしてそれは、ラーズのモンスターがまだ健在という事を意味していた。

「弱者には死あるのみ、強者以外は生きる価値無し! 『グランドタスク・ドラゴン』、あの雑魚女を噛み砕け!」

「うわあああああああああああああああああああああああああああああ  
!」

伸子：LP 500↓0

ラース：WIN

成田伸子：LOSE

——アカデミア・選手控室

SIDE：黎

「しっかし、万丈目の奴が相手の大将ってのは驚いたぜ！」

「海を渡ってノース校まで行ったのかしらね」

「ハハハハハハ、意外と根性あったんだね、万丈目君は」

現在、選手控室で俺達5人は待機中。

歓談に花を咲かせる十代、明日香、フィオをさて置き、俺と大地は部屋の間の方でヒソヒソ内緒話である。

「大地、万丈目の奴、グループの御曹司だったのか？」

「俺も初めて知ったよ。万丈目グループそのものは知っていたが、まさかあいつが本家

の血筋だとは思わなかった」

こつちの世界じゃあそんなにポピュラーな苗字なのか、万丈目。

「まあ、それは良い。戦うのは十代だし、あいつはそんな事に氣い遣うタマじゃねえしな。だが……」

「何かあるのか？」

「控室に来る前にな、偶然、十代と見たんだよ、万丈目の控室を」

—— 準、お前、前にこの学校を退学になったそうだな？

—— 金に糸目をつけずに手に入れたレアカードだ。これでお前のデッキを補強しろ！

—— 俺は金融界、正司は政界、お前はデュエル界を制せ！

—— 負けるのは許さん。お前が負けたら、我がグループの顔に泥を塗る事になるんだからな。

「あの二人が？」

「パツとスーツケースの中を見たが、パラレルレアで力強いカードばかりだった。本番直前でデッキを変えようとは考えづらいが……」

「分かった、一応十代には作戦を指示しておく」

「頼む。軍師はお前に任せられた方が良さそうだ」

「ああ」

そう言つて大地は、リラックスしている十代に話しかけた。

俺も俺で、デッキの最終調整に入る。

頭の中で何通りものカードの出方や相手のデッキをシミュレートし、不要なカード、必要なカードを分ける。

最初はバーンやデッキデスも考えたが、見栄えが良くないので止めた。鮫島校長に恥をかかせるワケにもいくまいて？

ちやつ、とデッキのキーカードを手取る。

『苦渋の選択』

『天使の施し』

『闇の誘惑』

『異次元からの埋葬』

『精神操作』

「つたく、禁止も制限も緩いと、強いデッキが組みやすいつたらありやしない」

少しは楽しませてくれよ？

## SIDE : 大地

「……それは本当か？」

「ああ、俺見たぜ？ トイレですつげえ悔しそうにしてたんだ」

ふむ、と俺は首を捻った。

十代がここ、控室に向かう途中のトイレで万丈目の奴を見たと言っていた。

——いっつもそうだ！ 俺はいつも兄さん達と比べられる！

——誰も、俺の苦勞なんて分かってはくれないんだ！

果たして、それはどういう意味か。

答えは一つしかない。兄から受けるプレッシャーだ。あの二人は大会社のリーダーと大物政治家。兄が優秀であるのなら弟もきつとそうだろう、世間からそう見られるのが一般的だ。

万丈目は万丈目なりに、兄に苦勞や心配をかけさせまいとして、世間に見栄えが良いようにしていたんだろうと俺は推測する。

だが、十代や黎に負け、俺に負けてイエローに格下げされた挙句にアカデミアを飛び出した。あいつの兄二人にしてみれば、十分スキャンダラスな事だろうな。

普通に考えればいくら交流試合に弟が出るとは言え、TV局まで引つ張つて来るのはおかしい。つまり二人の目的は、この晴れ舞台で万丈目の失墜した名声を回復すると共に、世界を掌中に納める第一歩にする事なのだろう。

少なくとも純粹に弟を心配した、という線は薄いと考えて良い。

「キナ臭くなって来たな……」

……黎に報告しておくか。

プライドという男と2度目の戦いが終わった後、俺達限られたメンバーにだけ、黎は自分のプライベートの一部を暴露してくれた。

異世界、死、転生、年上……。

どれもが現実と甚だしく乖離していたが、黎を見てみると、何となく説得力があった。シンクロもエクシーズもそれで説明がつくし、妙に大人びていたり知識が豊富だったりする点も理解できる。

そういう事を加味すれば、この一件も黎に報告して二人で考えれば心強い。

「あ、そういうえば万丈目の奴、精霊連れてたよな?」

「十代君も見たのかい? それなら私の見間違いつて線は薄そうだね」

……報告すべき事がもう一つ増えたな。

俺も精霊とやらを見てみたいものだ。

実体化した桜さんは、どちらかと言えば精霊よりも人みたいな感じだからな。

S I D E : 無し

——デュエルリング

試合が始まるという事で、黎達は控室から移動し、リングの傍に特設されたベンチで観戦すべく座っていたのだが……。

『フレ〜！ フレ〜！ アカデミア！ フレツフレツ・大地！ 頑張れ頑張れ・大地！ フォーツ！』

観客席の一番上の通路で、アカデミア本校の女子生徒達がチアガールコスで応援していた。

しかも。

「もつと声を大きくです！」

『はいっ！』

フレイがコーチについていたりした。

お堅い麗華や引っ込み思案の彰子は顔を真っ赤にし、ヤケツパチなツアンやノリノリの雪乃、張り切っている友紀など……。

黎は思わず桜の方を向いて、視線で聞いた。

——何だあれ？

——知らぬ。

そんなアイコンタクトを察したのか、ファイオがずい、と黎と桜の間に入って話しかけて来た。

「黎は休んでいたから知らないんだっけね。実は数日前、フレイが女子生徒集めて……」

『皆さん、チアガールをやりましょう！ 代表5人を応援するのです！ 可愛い恰好して応援すればきっと代表の方々はやる気を出してくれるハズです！』

「つて強引に話進めて……」

「こうなつたと」

あいつ、何がしたいんだ？

思わずフレイの方へと顔を向けると、フレイがウィンクを投げかけてきた。



———どうです、黎さん？ 皆、頑張ったんですよ？

そう語られているように黎には思えた。

知るか、と思わず黎は答えそうになった。

チアガール達の応援もやがて終わった頃、アナウンスのスイッチが入り、クロノスの声で放送が始まった。

『あーあー、静粛にいく。これより、デュエルアカデミア本校VSノース校の対抗試合を開始するの〜ネ！ うーん、わたくし〜が、テレビに映るなんて、夢のようなの〜ネ』

本人はマイクを切って言ったつもりのようなのだが、スイッチはオンになりっぱなしである。

それと放映の主演はデュエルする生徒であり、彼本人ではない。

『えー、コホン。それで〜は、まずは先鋒戦なの〜ネ！ アカデミア本校からはライイエロー在籍〜ノ、〃黄色の智将〃、三沢大地なの〜ネ！』

クロノスの紹介に合わせ、大地がベンチを立ってデュエルリングに上った。

頑張れ、という声援を受けて、大きく手を振って答えた。

『そしてノース校からハ、天獄の門、点田三郎なのネ！』

対する相手、点田も上がる。

頭は丸刈りにして背は大地よりやや低く、針金のように細く見える。それでも全体的に痩せている感じは無く、線が細いという印象しか与えない。

『ルール説明なのネ。先鋒、次鋒、中堅、副将、大将の順にデュエルをし、勝った方に1点が増えられるのネ！ただし、大将戦までに2点以上の差があつたら、大将戦で勝った方に5点贈呈されるのネ！』

ブウン、と電光掲示板に組み合わせが映し出された。

先鋒戦：三沢大地VS点田三郎

次鋒戦：天上院明日香VS水島標呉

中堅戦：神山フィオVS犬養通

副将戦：遊馬崎黎VS光善寺久良丸

大将戦：遊城十代VS万丈目準

『それでーは、二人とも構えるの〜ネ!』

「改めてよろしく、三沢大地だ」

「うす、点田三郎だべ。よろしく頼むべよ」

互いに向かい合い、軽く会釈。陰険な雰囲気はどこにも見当たらない。

そしてそのまま左腕に装着したデュエルディスクにデッキを挿入して起動スイッチを入れる。ライフカウンターがオンになり、レーンにそってエッジが走る。キュシン、ピン! という音が鳴り、準備が整った。

『先鋒戦〜……、開始!』

「デュエル!」

大地VS点田

LP 4000 VS LP 4000

「まずは俺のターンからだ、ドロ〜! 魔法カード『トレード・イン』を発動! 手札のレベル8のモンスターを1体墓地に送り、カードを2枚ドロ〜する! レベル8の『ウォーター・ドラゴン』を墓地へ!」

引いたカードを見ると、大地はニヤと笑った。  
最初のピースが来たからだ。

「魔法カード発動、『化石調査』！ デッキからレベル6以下の恐竜族モンスターを手札に加える！ この効果で『オキシゲドン』を手札へ！」

### 化石調査

#### 【通常魔法】

(1)：デッキからレベル6以下の恐竜族モンスター1体を手札に加える。

「俺は『オキシゲドン』を召喚！」

『グルルルルッ！』

オキシゲドン：ATK 1800

初手で大地が呼び出したのは、青緑色の翼竜。酸素をモチーフにした、彼のデッキの切り込み役だ。

オキシゲドン（効果モンスター）

星4

風属性／恐竜族

ATK 1800 / DEF 800

このカードが炎族モンスターとの戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、お互いのライフに800ポイントダメージを与える。

「更に魔法カード『封印の黄金櫃』！ デッキから『ボンディング―H2O』を除外して、2ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える！」

封印の黄金櫃

【通常魔法】

自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加える。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

大地：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：オキシゲドン（ATK 1800）

：伏せカード1枚

続いて、点田にターンが回る。

「ウス、オラのターンだべ！ ドローー！ 『ジャイアントウイルス』を守備表示で出すべよー！」

ジャイアントウイルス：DEF 100

対し、点田が呼び出したのは紫の巨大な病原菌。短く細い触手のようなものが無数に生えており、見る者に生理的な嫌悪感を呼ぶ。

ジャイアントウイルス（効果モンスター）

星2

闇属性 / 悪魔族

ATK 1000 / DEF 100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手ライフに500ポイントダメージを与える。

さらに自分のデッキから「ジャイアントウイルス」を任意の数だけ表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「カードを2枚伏せる!」

大地は高速で脳を動かす。『ジャイアントウイルス』の特性、ダメージと増殖。闇属性で悪魔族、豊富なサポートカード。低いレベル。『リミット・リバース』に対応。伏せの警戒レベルは中。

そして手札を見る。

(問題無い、次のターンに叩ける)

「ターン終了だよ!」

点田 : LP 4000

手札 : 3枚

フィールド

：ジャイアントウィルス（DEF 100）

：伏せカード2枚

「遅れは取らない。俺のターン！」

封印の黄金櫃：1ターン目

「俺は『テイク・オーバー5』を発動！ デッキからカードを5枚墓地に送る！」  
事前に墓地を肥やし、デッキを圧縮する事の重要性を黎から教わった大地は、以前なら投入を迷ったカードを発動する。

罨カードの『針虫の巣窟』と違って速効性があり、なおかつドロの補助もあるというありがたいカードだ。黎もこれに何度か救われたとの事。

テイク・オーバー5（アニメオリジナル）

【通常魔法】

自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送る。



この効果を発動した次の自分のターンのドローフイズ時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを1枚ドロローする。

「更に『ハイドロゲドン』を召喚！」

『グオオオオオオオオッ！』

ハイドロゲドン：ATK 1600

続いて大地が呼び出したのはリクルーターの天敵とも言えるモンスター。茶色く濁った水の、四足の恐竜だ。

ハイドロゲドン（効果モンスター）

星4

水属性／恐竜族

ATK 1600／DEF 1000

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから「ハイドロゲドン」1体を特殊召喚することができる。

そしてまだ終わらないと言わんばかりに、更に手札を切る。

「続けてフィールド魔法『ウォーターワールド』を発動！」

発動し、立体映像が現れると、そのカードのイラストから怒涛の波の如く水が流れ出した。青く清らかな水は、瞬時に辺りを水で多い尽くし、デュエルリングは一面海となった。

ウォーターワールド

【フィールド魔法】

フィールド上に表側表示で存在する水属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、守備力は400ポイントダウンする。

「これで、俺の『ハイドロゲドン』を強化する。攻撃力500ポイントアップだ！」

ハイドロゲドン：ATK 1600↓2100 / DEF 1000↓600

大地は考える。

『ハイドロゲドン』で攻撃を続け、『ジャイアントウイルス』を全て破壊すれば、相手に2200のダメージを与えられる。『オキシゲドン』の攻撃力は1800、4体目のダイレクトアタックが通れば、俺の勝ちだ！』

そして手札を見る。

（手札のカードは『攻撃の無力化』。例えこのターンで仕留め損なっても、最悪何とかな  
る）

布陣は手堅く、地道かつ派手にアドバンテージを重ねていく。

勝利の方法は多数あれど、アドバンテージの多い方が有利なのはデュエルの常だと、大地は黎から教わっている。

そしてそうしたギャンブル性や運に頼らない戦術は、彼の得意とする方針だ。

『バトル！』『ハイドロゲドン』で『ジャイアントウイルス』を攻撃！　『ハイドロ・バースト』！』

ドジャアツ！と吐き出された濁流が、紫色の菌を押し流す。しかしその瞬間、『ジャイアントウイルス』は風船が破裂するかの様に四散し、周囲に闇のエネルギー波を撒き散らした。

「ぐっ!?!」

『ジャイアントウイルス』がバトルで破壊された時、おめえに500ポイントのダメー

ジを与えるだ！」

大地：LP 4000↓3500

「更にデッキから、同じ名前のモンスターを攻撃表示で2体まで特殊召喚できるぞ！」

ジャイアントウィルス：ATK 1000

ジャイアントウィルス：ATK 1000

放たれた闇のエネルギー波が大地を襲う。

更にそれだけでは止まらず、点田の傍らにヘドロのように沈着し、新しい細菌生命体となって増殖した。

「だが、『ハイドロゲドン』の効果も発動する！ このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、デッキから同じ名前のモンスターを1体特殊召喚する！」

『ギオオオアアアアアアアアアアアアオオッ！』

ハイドロゲドン：ATK 1600↓2100

大地とて負けてはいない。

濁水の恐竜が声高々に咆哮し、増殖効果に対抗して増援効果を發揮。新たに仲間を呼んで戦力を増強した。

「行くぞ！ 2体目の『ハイドロゲドン』で『ジャイアントウィルス』を攻撃！ 今度はダメージが発生するぞ！」

「げぶっ！」

点田：LP 4000↓2900

「だが、おめえも5000ダメージを受けてもらおうべよ！」  
「分かっている。ぐっ！」

大地：LP 3500↓3000

先刻と同じ事が再び発生し、両者がダメージを負う。

「3体目の『ハイドロゲドン』を特殊召喚！」

『ガアッ!』

ハイドロゲドン：ATK 1600↓2100

だが、先刻と違うのは細菌が増殖しない事。

更にダメージも違う。大地の方が受けたダメージが圧倒的に少ない。

「行くぞ、攻撃だ!」

「ぐあっ!」

点田：LP 2900↓1800

「ダメージを受けるのはお互い様だよ!」

「っ! だが、受けるダメージはお前の方が多い!」

大地：LP 3000↓2500

三度繰り返される光景。しかし、既にその時点でライフポイントには700の差がつ

いていた。

「俺の場には攻撃力1800の『オキシゲドン』がいる。お前のライフも1800、これでジ・エンドだ！」

「そうはいかんべ！ オラは『ダメージ・コンデンサー』を発動するだ！ 自分がバトルダメージを受けた時に手札を1枚捨てて、デツキから受けたダメージ以下の攻撃力のモンスターを1体、攻撃表示で特殊召喚するべよ！」

ダメージ・コンデンサー

【通常罫】

自分が戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて発動する事ができる。

その時に受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1体をデツキから攻撃表示で特殊召喚する。

「オラはデツキから攻撃力1100以下のモンスター、『ハーブの精』を特殊召喚だ！」  
点田が手札を捨てて、罫カードを発動する。

デツキからカードが1枚吐き出され、それを場に出した。

ハーブの精：ATK 800

光のゲートを潜って出現したのは、身の丈以上にあるハーブを奏でる女性。金色のゆつたりとした服を羽織り、優しい音色を奏でた。守備力の高い天使族のため、フィオも使いやすい壁モンスターの1体として活用する事もあるモンスターである。

ハーブの精（通常モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 800／DEF 2000

天界でハーブをかなでる精霊。

その音色はまわりの心をなごませます。

「なら、『オキシゲドン』でそいつを攻撃するまで！  
 “オキシ・ストリーム”！」

「ぐえっ！」

点田：LP 1800↓800



優しげな女性モンスターであっても大地は容赦しない。翼竜に指示を飛ばし、強烈な気流で背後にいた相手ごと、美しい演奏者を吹き飛ばした。

『ブーブー!』

『BOOOOO!』

そして沸き起こる大ブーイング。ヴィジュアルと価値観という、何とも難しい問題である。

「(仕留めきれなかったか……) カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

大地 : LP 2500

手札 : 0枚

フィールド

: ハイドロゲドン (ATK 2100) × 3、オキシゲドン (ATK 1800)

: 伏せカード2枚、ウォーターワールド (フィールド魔法)

「オラのターン、ドロロー! 魔法カード『強欲な壺』! デッキからカードを2枚ドロローするべ!」

## SIDE：黎

アカデミアの交流戦、先鋒の戦いを有利に進めているのは大地だ。

「オラは魔法カード『鳳凰神の爆風』を発動！ 手札を捨てて、今捨てた墓地の『カオス・ソーサラー』をデッキの一番上に戻すべ！」

だが、どうも腑に落ちない。

今の相手の、点田の行動だつてそうだ。わざわざ『カオス・ソーサラー』をデッキトップに置くようなマネをして、何の意味があるのだろうか。

普通あれは『インフェルニティ・デーモン』によるサーチ効果や、『D・HERO ダイヤモンドガイ』の魔法効果を誘発するために使用されるコンボ。だが、どちらも奴が持っているとは考えにくい。

## 鳳凰神の羽根

## 【通常魔法】

手札を1枚捨てる。

自分の墓地からカードを1枚選択し、デッキの一番上に戻す。

点田のこれまで出したモンスターは、いずれも低ステータスで、入れようと思えば大体のデッキに投入できる。

奴は一体何のデッキなんだ？

【カオス】デッキかと一瞬考えたが、違うだろうな。それなら『カオス・ソーサラー』をデッキトップに戻す必要が無い。

「更に魔法カード『盗人ゴブリン』を発動！ おめえのライフを500、頂くべよ！」  
「うっ……！」

大地：LP 2500 ↓ 2000

点田：LP 800 ↓ 1300

盗人ゴブリン

【通常魔法】

相手ライフに500ポイントダメージを与え、自分は500ライフポイント回復する。

今度はライフ回復+バーン……？  
考える……。

奴が墓地に落としたモンスター、デッキトップに戻したカード、今のライフ回復……。  
何故ライフを回復した？ 多分ライフコストを確保するため。

何故デッキトップにカードを戻した？ 恐らく次のドロローを確実なものにするため。

ライフコストが必要で、次のドロローを確定させるカードは……。っ！

「マズい！ 大地が負ける！」

『え!?!』

同じベンチで観戦していたフィオ、十代、明日香が驚いたように反応した。

「どういう事だい、黎！ 三沢君が負けるって！」

「伏せカード次第じゃあ2300のダメージを受けて負けるって事だ！」

そう、恐らく点田が出そうとしているのは……！

S I D E : 大地

黎の言葉が聞こえた。

俺が負ける、だと……？

「ふふ、おめえの仲間が勘が良いべや。オラの手エ読んだんだからな」

「……まさか、俺が本当に負けると思っているのか？」

「当然だべ！」

奴の手札は今2枚。フィールドにはリバースカードが1枚あるのみ。攻撃にも召喚にも反応しなかった所を見ると、恐らくその手のカードじゃない。ブラフという可能性も有り得る。

だとすると、奴の手札にこそ形成逆転の1枚がある。

「オラがハツタリ言ってるでも思うべや？ このカード見たら、そんな事も言えなくなるべよ！」

そう言つて、予想通り点田は手札を1枚引き抜いた。

「このカードは通常召喚できねえ。オラの墓地から光属性・天使族モンスターを1体、闇属性・悪魔族モンスターを3体、ゲームから除外して特殊召喚するべよ！」

点田の周囲に、半透明の姿で現れる『ジャイアントウィルス』3体と『ハーブの精』

この召喚条件は……！

「出て来るべえ！ これがオラのデッキのエースモンスター、『天魔神ノーレラス』だあ！」

天魔神ノーレラス（効果モンスター）  
星8

闇属性／悪魔族

ATK 2400 / DEF 1500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性・天使族モンスター1体と闇属性・悪魔族モンスター3体をゲムから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。

1000ライフポイントを払う事で、お互いの手札とフィールド上のカードを全て墓地へ送り、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「くっ、こいつか!」

出現するのは、白い包帯を巻いた闇の天使。悪魔然とした翼を持ち、黒い全身のあちこちに拘束具のような革のベルトが巻かれている。白い顔に光る赤色の単眼が、こちらの恐怖心を増大させる。

成程、それでさつき『カオス・ソーサラー』をデッキトップに戻したのか。

天魔神ノーレラス：ATK 2500

『ノーレラス』の効果発動！ オラのライフを1000支払って、手札とワールドの全てのカードを墓地に送る！ そしてこれにチェーンして罠カード、『亜空間物質転送装置』を発動！」

「何?！」

「オラの場のモンスターを1体、エンドフェイズまで除外するべや！」

### 亜空間物質転送装置

【通常罠】

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、このターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する。

点田：LP 1300↓300

「オラのライフは300になっちゃったが、もう関係ねえ！ やるべ、〃天地創造・魔神烈波〃！」

強力な魔の波動を撒き散らす闇の天使。自身も飲み込みかねないそのエネルギー波

は、しかし当人は別の空間へと退避して回避してしまう。

当然、術者がいなくなった程度で波状攻撃が終わるはずも無く、お互いの場の全てのカードを深く暗い闇の中へと飲み込んで、漸く納まった。

「ぐっ！」

「そしてカードを一枚ドロウする！ まだだべ、オラは墓地の、『ダメージ・コンデンサー』の時に捨てた『ファントム・オブ・カオス』と、今墓地に送られた『シャインエンジンジェル』を除外し、『カオス・ソーサラー』を特殊召喚！」

くっ、これが黎の言っていた事の正体か！

『亜空間物質転送装置』で『ノーレラス』を守り、デッキトップを操作して『カオス・ソーサラー』を特殊召喚する手筈を整えた。

何て奴……。これが、この代表戦に選ばれるだけの實力……。

カオス・ソーサラー：ATK 2300

「おめえのライフは後2000！ この攻撃で終わりだべや！」

「……………」

『カオス・ソーサラー』でダイレクトアタック！ //闇と光の螺旋波動“！”



肌色の悪い、黒い鎧を着た魔術師の魔法が俺を飲み込む。

防ぐ手段を持たない俺は、その攻撃を正面からまともに喰らった。

「いよっしゃあ！ オラの勝ちだべ！」

だが、そう上手くは行かせない！

大地：LP 4000↓1700

「な、何だべえ!? 何でおめえのライフが0になってねえんだべよ!」

驚愕に目を見開く点田。まあ、そうだろうな。自分の必殺コンボで相手を仕留めきれなかったのだから。

だが、俺もアカデミアの代表。そう易々と負けるワケにはいかないんだ。

「お前が『ノーレラス』に『亜空間物質転送装置』を発動したように、俺も『ノーレラス』の効果に速攻魔法をチェーンして発動したんだ」

俺が見せるのは、ビスケットや缶詰のイラストを持った緑色のカード。

まさか、これに助けられるとは思わなかったよ。

「そ、そのカードは!？」

「速攻魔法『非常食』。俺の場の『非常食』以外の魔法・罫を墓地に送り、その数×1000ライフを回復する。『ウォーターワールド』と伏せておいた『攻撃の無力化』をコストに、2000ポイントのライフを回復したんだ」

「そ、それでライフが4000になり、止めを刺せなかったってワケベや……」

別に『攻撃の無力化』を『サイクロン』で狙われる確率を下げただけのつもりだったんだが、思わぬ形で救われたようだ。

とは言え、本当に今の一撃を凌いだけ。

次のターンにどうにかできなければ、俺のライフは尽きる。

「ターンエンド!。そして『ノーレラス』が帰って来るべよ!」

天魔神ノーレラス：ATK 2400

点田：LP 300

手札：0枚

フィールド

：天魔神ノーレラス（ATK 2400）、カオス・ソーサラー（ATK 2300）  
：魔法・罫無し

「俺のターン、ドロロー！ この瞬間、『テイク・オーバー5』と『封印の黄金櫃』の効果が発動する！ 『テイク・オーバー5』をゲームから除外し、もう1枚ドロロー！ 更に『封印の黄金櫃』で除外しておいた『ボンディング―H20』を手札に加える！」

「手札0から3枚だとお!?」

自分の手札を見て、ふとデッキをあーでもないこーでもないと組み上げていた時の事を思い返す。

黎は俺のデッキを見て、こうアドバイスしてくれた。

——『ウォーター・ドラゴン』は確かに強いが、召喚に手間がかかる

——万が一に備えて保険があつた方が良いだろう、何ならそつちで相手を仕留めても良い

——素材と足並みを揃えられる恐竜族と、切り札と同じ水属性……どつちが良い？

俺がその時に選んだカードが、このドロローによつて来てくれた。それら3枚のカード

が光のラインを紡ぐ。

1枚1枚が次のカードへと軌跡を繋ぎ3枚が4枚、4枚が5枚になり……。逆転の準備は、これで整った！

「俺は装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！ ライフを800払い、墓地から『ハイドロゲドン』を1体復活させる！」

『ゴアアア！』

「そして続けて『死者蘇生』も発動だ！ 蘇れ、もう1体の『ハイドロゲドン』！」「グオオオオ！」

大地：LP 1700↓900

ハイドロゲドン：ATK 1600

ハイドロゲドン：ATK 1600

1度は斃れた俺のモンスター達が墓地から蘇る。

濁流の蜥蜴達が戻り、点田とモンスターの数がこれで並んだ。

「ウーッハッハッハッハッ！ 攻撃力1600程度、悪足掻きだべよ！」

「慌てるな、まだ準備は終わっていない。ここで俺は墓地の『幻創のミセラサウルス』の

モンスター効果を発動。墓地のこのカードと恐竜族モンスターを好きな枚数だけゲームから除外し、その枚数と同じレベルの恐竜族モンスターをデッキから特殊召喚することができる。俺は墓地から合計4枚の恐竜族モンスターを除外し、デッキからレベル4の恐竜族モンスターを呼び出す！」

墓地から靈魂をまとうトリケラトプスの骨を始め、蘇生しなかった『ハイドロゲドン』と『オキシゲドン』、デッキから直接墓地に送られた『フロストザウルス』が吐き出され、光となって消える。

『フロストザウルス』は水属性かつ恐竜族、そして『化石調査』にも対応するという事で黎から譲り受けたモンスターの1枚。攻撃力もレベル6なのに2600もあるという超強力なカードであり、効果が無いバニラモンスターである事を補って余りあるカードだ。

どちらも『テイク・オーバー5』で墓地に送られたカードで、残りは『サイクロン』、『天使の施し』、『魔法の筒』。非常に痛いラインナップだが、勝利の対価として甘受しよう。

幻創のミセラサウルス（効果モンスター）

星4

炎属性／恐竜族

ATK 1800 / DEF 1000

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 自分・相手のメインフェイズに、このカードを手札から墓地へ送って発動できる。  
そのメインフェイズの間、自分フィールドの恐竜族モンスターは相手が発動した効果を受けない。

(2) : 自分の墓地からこのカードを含む恐竜族モンスターを任意の数だけ除外して発動できる。

除外したモンスターの数と同じレベルの恐竜族モンスター1体をデッキから特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される。

フロストザウルス(通常モンスター)

星6

水属性 / 恐竜族

ATK 2600 / DEF 1700

鈍い神経と感性のお陰で、氷づけになりつつも氷河期を乗り越える脅威の生命力を持つ。

寒さには滅法強いぞ。

俺が黎から教わった事。それはデュエルとは即ち “積み木” や “羊羹” であるという考え。

1つ1つを積み上げて高くする、1枚1枚は薄くとも最後には削り切る。そうした下拵えや下準備が、勝利を導くという事だ。

——けれどもやはり……、『ウォーター・ドラゴン』で、俺は勝ちたい

——我儘で非論理的だとは思うが、そこを曲げてはいけない気がするんだ

——よく言った、それでこそデュエリストだよ

——じゃ、そいつで勝てるように工夫しないと

「デツキから出でよ、新たな『オキシゲドン』！」

オキシゲドン：ATK 1800

「そんな雑魚モンスター、いくら並べた所で、オラのモンスターの敵じゃねえべ！」



嘲ったように笑う点田。

確かに、こいつらの攻撃力じゃあ『ノーレラス』も『カオス・ソーサラー』も倒せない。  
い。

だが知っているか？ 水素2つと酸素1つが組み合わさるとどうなるか！

「相手をするのはこいつらじゃない！ それに忘れたか、俺が『封印の黄金櫃』で手札に加えたカードの事を！」

「なぬ!?!」

「魔法カード『ボンディング―H<sub>2</sub>O』を発動！ 俺の場の『ハイドロゲドン』達と『オキシゲドン』をリリース！」

見せてやる、今この俺の出せる、最高のモンスターを！ 黎に無理を言っただけ揃えて貰ったカードでパワーアップした俺のデッキ、その最初のデュエルで躓くわけにはいかないんだ！

「出でよ、『ウオーター・ドラゴン』！」

『ギィオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

ウオーター・ドラゴン：ATK 2800

濁水と酸素が混ぜ合わさり、一つとなる。それは蛇のようにうねり、やがて神話に登場するミズチのような蛇然とした龍となった。

これが俺の、最強モンスターだ！

「こ、攻撃力2800!?!」

「そうだ。これがお前が莫迦にした『雑魚モンスター』の、真の姿だ!」

黎は言っていた。雑魚と侮辱するのは簡単だが、それはそいつらの真の力を知らない奴のセリフだ、と。

俺はその言葉に感銘を受けた。それは正しく、モンスターの本当の力を引き出せる、真の猛者の言葉だったからだ。

然るに、俺は点田の雑魚発言を聞いた瞬間に確信した。俺はこいつに勝てる。

奴には真のデュエリストたる資格は、無い!

「今回は俺の勝ちだ! 腕を上げてからまた来い!」

「ぐ、うう……!」

「バトル! 行け、『ウォーター・ドラゴン』! 『天魔神ノーレラス』を攻撃!」

「ア・パニツシャー!」

吐き出される激流。凄まじい勢いの清らかな水の柱は、闇に染まった天使を貫き

……。

「ぬ、ぐ、うおあああああああああああああああつ！」

点田：LP 300↓0

奴のライフを根こそぎ奪い取った。

『そこまでのな〜ネ！ 勝者、三沢大地〜！』

大地：WIN

点田：LOSE

SIDE：黎

——ベンチ

「ナイスデュエル、大地」

「ありがとう、黎。正直、お前が『非常食』を進めてくれなければヤバかった」

そう言つて大地は頭を掻く。

そう、『非常食』を差すように助言したのは、俺だ。

俺のいた世代は特殊召喚で強いモンスターを連打して来るのが王道。そういつたデッキに対抗するのなら『昇天の黒角笛』や『神の警告』、『サモン・リミッター』に『灰流うらら』を入れているのが常。

一方、この時代ではまだワンパワーな展開が多い。モンスター1体か2体の攻撃を凌げれば、少なくとも負けずに済む。だから大きくライフを回復できる『非常食』や『ドレインシールド』が役に立つのだ。

「これでまず一勝だな！ この調子で行こうぜ！」

「調子に乗らないの、十代。貴方が負けたら最悪。パーなんだからね？」

明日香が十代を窘めるように言う。

この5対5のデュエル、2点以上の差がついて大将戦を迎えた場合、大将戦で勝ったチームに5点が増えられる。つまり副将までの4人が勝つても、十代が敗北してしまうとアカデミア側の負けなのだ。

しかも副将まで4戦なので、引き分けに持ち込む以外1点差というのは有り得ない。

実質、全て大将戦にかかっていると云っても過言ではないのだ。

「じゃあ何で5対5にしたんだよ」

「黎、それ以上言っちゃダメ」

〈デュエルアカデミア交流試合〉

本校VSノース校

現在の戦績：1勝0敗

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 67 : 湿った土地の罨

——日本某所

SIDE : 無し

「クククク……」

喪服の男、レースが笑う。

手にしたカードの中には、先ほど封じた成田伸子の魂が封じられている。

「憎い相手に勝てなかった、これもまた負の想念の源となる。ククククク……！」

一人笑うレースだったが、しかし、突如として胸元を抑えて苦しみ出した。

「ぐ……っ、おのれグラトニー……、貴様、死してなお我らが道を遮るか……っ！」

そう、抑えた箇所は、以前グラトニーが刺し貫き、爆破した所。傷はまだ完全に癒え切っていないようだ。

苦々しい表情だったが、それでもレースは笑みを浮かべた。

そして虚空を見上げる。

「……まあ、良い。人間程度が相手ならば、これでも充分だ。今やグリードも上級護衛クラス、容易く負けはせんだろう」

——中東某所

「ヒヤハハハハハ！ ザマネえな！ それでよくプロだなんて名乗れたモンだぜ！」

夕方の路地裏、一目のつかない場所でグリードも一戦交え、勝利していた。

相手は当地のプロを名乗る男だが、グリードが事前に得たこのプロリーグに、今相対している男の情報は無かった。嘘か、アマチュアなのだろう。

「ヒヤハツ！ これで今日は4枚目、ちよろいモンだぜ！ 大した実力のネエ奴に限って無駄にプライドが高え！ ボロ儲けとはこの事だ！」

ゲラゲラと大笑いしながらカードを弄ぶグリード。今週に入って集めた枚数は約20枚。この調子で行けば、復活の遅れを取り戻すどころか予定より早くなる可能性が高い。

もつとも、早く集められる代わりに1枚1枚の力は弱いが。やはり相手の実力が低いとこうなのだろう。しかし強い相手だところらの消費する力が大きいので、数でカバー

するしかない。この星には何十億という数の人間がいるのだから、たかが1万2万減ったところで、何ら差し障りは無いはずだ。

「おっと、こうしちゃいらねえ。次の獲物を探しにいかないとな」

ヒャーハツハハハハツハハハ！ 夕焼けの中へと、漆黒の高笑いが消えていく。

——デュエルアカデミア

S I D E : 黎

先鋒の一回戦、大地が強力な相手のエースを打ち破って見事に勝利した交流戦。次鋒はブルー女子最強のツートップの内の1人、明日香だ。

ところで、俺には1つ気になっていた事があった。

「ところでフィオ」

「何？」

「リリースって言葉になってたよな？」

大地が『ボンディング―H2O』を発動した時、確かにあいつはリリースと言っていた。この時代ではまだ呼び方は生贄だったはず……？



「あ、そうか、黎は休んでて知らないんだっけ？ 昨日から呼び方が変わったんだよ。リリース、アドバンス召喚、エクストラデッキ、つてね」

「昨日？」

俺がラストとの戦いを終えた後の事か。流石に寝なくちやかなわねえレベルのダメージだったんで寝てたんだが、そうか、その時か。

いや待てや。

「ご都合主義にも程があるだろ」

「わたしに言われても困るんだけど」

フィオの言い分もごもつともである。

——控室

S I D E : 無し

明日香は、デッキと睨めっこをしていた。

と言っても別に文字通り顔を使って遊んでいたワケではない。デッキの最終調整だ。

「……………」

デッキ枚数や内容を考慮し、まだ使い慣れていない『サイバーエンジェル』の儀式デッキより、普段から使っていたプリマのデッキを使う事にしたのだが……。

「これで、良いのかしらね？」

不安が拭えないのだ。

何せ相手はノース校最強の5人の内の1人。自分が負けてもまだ3人いる、というのは分かってはいる。特に黎や十代が負ける姿なんて想像もつかない。

だが、先の大地とて、勝ちましたものの、ハッキリ言ってギリギリだった。もしあそこで『非常食』を伏せてなければ彼は負けていただろう。そういう勝つか負けるかの境界線の戦いが、この交流試合なのだ。これまで自分が体験してきたものとは、確実に一線を画す。

別に負けても何かしらペナルティがあるわけではない。それでも勝ちたいのだ。それがデュエリストの性というものだろう。

「うーん……」

「何だ、明日香？ もうじき始まっちゃうぞ？」

悩んでいると、チームの大將がやって来た。

明るい茶髪に赤い制服、何時も陽気で能天気、それでいてデュエルの神に守られているかのような強さ。自分を初めてこの学園で負かせた男、十代だ。

「お、デツキで悩んでるのか？」

「ええ。これで良いのかしらって思うと、止まらなくて……」

ふと、明日香はこの男に相談してみようと思った。

何故そんな事を思ったのかは分からない。でも、彼ならきつと、自分の思いもよらない答えを出してくれる。そんな予感がしたのだ。

「ねえ、十代。私、今すごく不安なのよ」

「不安？」

「これから私は皆を代表した戦いと直面する。これまでの校内の、勉強の延長みたいなものとは訳が違うわ、自分の本当の実力を出し切らなくちゃいけない、真剣勝負よ」

自分でも驚く程、明日香はスラスラと喋りだした。胸の内が、どんどんと流れ出していく。

「でも、私に本当にそんな実力あるのか、何もできずに負けるんじゃないかって思うと、怖気付いちやうのよ。……おかしいわよね、オベリスクブルーの女王だクイーンだなんて呼ばれていても、結局は井の中の蛙。学校の外で通じる保証なんてどこにもないのよ。笑いたければ笑いなさい、見下したければ見下しなさい。そうよ、どれだけ頑張ったって、私なんて所詮小さな世界の女王様。私なんて「ストップ！」十代……？」

不安をさらけ出していく内に、自分がどんどん暗くなっていくのを自覚した明日香。

そのまま心情を吐露し続けようとした時、十代は声を張り上げてそれを止めた。

「黎の奴が、明日香が不安がつているんじゃないか、つて言つて様子見て来いつて言つたけどよ、本当だったんだな。」

あのさ、明日香。俺、バカだから上手い事言えないけれど、これだけは分かる」  
十代はそこで一度区切つた。大切な事を伝えるために。

「お前は、強い」

「十、代……?」

「だつてよお、弱えヤツがオベリスクブルーのトップになれるワケねーじゃん? お前がそんな事言つてたら、お前より弱いヤツはどうなっちゃうんだよ? もつとしつかり自信持てよ! お前はフィオのヤツと同じで、女子の代表なんだろう?」

それに、もしまだ悩むんだつたら、黎の言つてた事思い出せよ」  
その言葉に、明日香はハツとなった。

この戦いの順番を決めたのは、黎だ。彼の言葉はこうだった。

『先鋒は大地だ。どんな状況でも、臨機応変に戦えるその腕、期待しているぞ?』

『次鋒を明日香、頼む。もし大地が負けた時、流れている悪い空気をそこでせき止めてくれ。大地が勝っていたなら、そのまま勢いに乗ってくれ』

そうだ、ここで自分がする事はウジウジ悩む事じゃない。今ある雰囲気に乗って、アカデミアの勝利に貢献する事だ。

そして十代はそれに付け加えるように言った。

「それに、そのデツキはお前の信頼したものと、俺達の友情が詰まったデツキだろ？ だったら、お前がそのデツキを信じれば、デツキはきつと答えてくれるさ！」

「十代……」

ニカツと十代は笑った。

何だか、これまで悩んでいた自分が、バカみたいだった。

「そうね。これで良いのよね？ 私、行ってくるわ！」

「おう！ しつかり応援するから、バッチリ勝って来い！」

——デュエルリング

SIDE : 明日香

すー、はー……。

深呼吸を一つして、落ち着く。バカ十代に励まされるとは思わなかったけど、お蔭で勇気がわいてきた。

自分一人じゃあプレッシャーに押し潰されて、こうはならなかっただろう。

彼に、否、誰かに励まされるとは、思いもしなかった。

今度、ジューズでも奢ってあげようかな。

それに。

『ゴーゴー明日香！ 頑張れ頑張れ明日香！ レッツゴー、ファイター！』

『明日香さーん、頑張つて下さーい！』

『明日香さまー！ ケチヨンケチヨンにしちやつて下さーい！』

皆が私を応援してくれている。

こんな私を慕ってくれるジュンコやももえのためにも、代表になれなかった皆のためにも、負けるわけにはいかない！

『それでーハ、次鋒戦なのーネ！ アカデミアからはー、オベリスクブルーのクイーンの異名を持つ、＼女王＼、天上院明日香なのーネ！』

……どうでもいいけど、あの厨二病チックな紹介、どうにかならぬかしらね。

『対するノース校からくハ、沼地の蟒蛇うわばみ、水島標呉しみづくー！』

私の相手、水島という男は、メガネをかけた男。さっきの点田とは違って、少々ガツシリした、それでも中肉中背の域を出ない体格。頭も普通のスポーツ刈りだけれど……。油断はできないわね、デュエリストは見た目じゃないもの。

「天上院明日香よ、女だからって、手加減はいらないから」

「水島標呉や。もちろん、そんな事するつもりはあらんから、安心してや」

そう、それなら良かった。

ディスクが起動し、私の頭にもエンジンがかかる。

今、私がすべき事は勝利だ！

『それでーは次鋒戦、開始くー！』

「デュエル！」

水島VS明日香

LP 4000 VS LP 4000

「先攻はもらうで！ ワイのターン、ドロー！ ワイは『天使の施し』を発動！ デッキからカードを3枚ドローして2枚捨てるで！」

いきなり手札交換ね。黎は確か墓地に行くカードも注意しておくように言ってたっけ。

墓地に送られたのは……『カエルスライム』と『フィールドバリア』？ 妙なラインナップね？

「そして『カエルスライム』を召喚！」

『ゲコツ』

カエルスライム：ATK 700

カエルスライム（通常モンスター）

星2

水属性／水族

ATK 700／DEF 500

カエルの頭の形をしたスライム。

ゲコゲコひどい歌を聴かせて攻撃。

緑色の、カエルの頭のような粘液が現れる（逆かしら？）。



低攻撃力のモンスターを攻撃表示して事は、明らかに罟。甘いわよ、あなたが伏せるであろうカードを処理してから、行動させて――

「ターン終了や!」

「……は?」

水島 : LP 4000

手札 : 5枚

フィールド

: カエルスライム (ATK 700)

: 魔法・罟無し

か、『カエルスライム』を放置した? 攻撃力700、効果も持たないモンスターを?

「どうしたん、姉ちゃん? そっちのターンやで?」

「……私のターン、ドロー!」

何を考えているのかは知らないけれど、私は全力で私のデュエルをするまでよ!

「私は『エトワール・サイバー』を召喚!」

『ハッ!』

エトワール・サイバー：ATK 1200

見せてあげるわ、プリマデッキの力を！

エトワール・サイバー（効果モンスター）

星4

地属性／戦士族

ATK 1200／DEF 1600

このカードは相手プレイヤーを直接攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。

「油断はしない！ バトル！ 『エトワール・サイバー』で『カエルスライム』を攻撃！」  
「ぐっ！」

水島：LP 4000↓3500

!?!? 手札に罟の一つでも張ってあると思っていたのに、本当に何も無かったですって  
!?!?

「あなた、何を考えているの……?」

「ヒヒヒ、さーな?」

「不気味な人ね……。カードを3枚伏せて、ターンエンド!」

明日香 : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

: エトワール・サイバー (ATK 1200)

: 伏せカード2枚

「ワイのターン、ドロー! ……姉ちゃん、ワイが折角あげたチャンス、無駄にしよつたな?」

「何ですって?」

チャンス、ですって……?」

「ワイは初見の相手には1ターンだけチャンスをあげるんや。初めてワイのデッキを相

手にする奴は決まって負けたからなあ、ワイなりの礼儀つちゅーやつちや」  
「初見殺し、というヤツね？」

「せや。でも、悔やんでももう遅いで。このワイのターンで一気に決めさせてもらうかならな！」

ワイは永続魔法『ウォーターハザード』を発動！ このカードはワイの場にモンスターが存在しない時、1ターンに1度だけ、手札から水属性モンスターを特殊召喚できるんや！ その効果でワイは手札の『未知ガエル』を特殊召喚！」

ウォーターハザード

#### 【永続魔法】

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札からレベル4以下の水属性モンスター1体を特殊召喚できる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

未知ガエル（効果モンスター）

星2

水属性／水族

ATK 1200 / DEF 600

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

未知ガエル : ATK 1200

呼び出したのは、槍を持ち、ゴーグルをかけた人型カエル。

確かあのモンスターには貫通効果があったハズ……。

「レベル2で攻撃力1200……！でも、攻撃力は『エトワール・サイバー』と互角よ  
！」

「甘いでえ？　ワイは続いて『スター・ボーイ』を通常召喚！」

スター・ボーイ（効果モンスター）

星2

水属性 / 水族

ATK 550 / DEF 500

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存

在する水属性モンスターは500ポイントアップし、炎属性モンスターの攻撃力は400ポイントダウンする。

スター・ボーイ：ATK 550↓1050

未知ガエル：ATK 1200↓1700

「こ、攻撃力が上がった!？」

「『スター・ボーイ』が存在する限り、場の水属性モンスターは攻撃力が500ポイント上がるんや!。そして『死者蘇生』を発動!。蘇れ『カエルスライム』!」

『ゲコォ!』

カエルスライム：ATK 700↓1200

く……!。でも、私の伏せた罠『ドゥーブル・パッセ』なら、『エトワール・サイバー』を守る事ができる!。『スター・ボーイ』と『カエルスライム』なら、『エトワール・サイバー』に勝つ事はできない!

そう思ったのだけれど……!

「更に手札からフィールド魔法『湿地草原』を発動！」

相手のフィールド魔法によって、場がいきなり変化する。

じめじめとした小雨が降り注ぎ、背の低い草が生い茂った。

——ベンチ

S I D E : 黎

「マズい、明日香の奴、伏せカード次第じゃあ負けたかも」

「お、おい、どういう事だよ、黎！」

敵の発動したフィールド魔法を見て俺が呟く。それを十代は聞き逃す事無く問うた。

「相手モンスターのステータスを見てみな？」

「え？」

未知ガエル : ATK 1700 ↓ 2900

スター・ボーイ : ATK 1050 ↓ 2250

カエルスライム : ATK 1200 ↓ 2400

「攻撃力が跳ね上がった!？」

「フィールド魔法『湿地草原』の効果だ。あれが場にある限り、全ての水属性・水族・レベル2以下のモンスターの攻撃力は1200ポイントアップする」

効果の対象には3つの縛りを持つフィールド魔法だが、単体でアップする能力値は現存するフィールド魔法の中では最も高い。更に複数枚のカードと組み合わせる事によつて得られる攻撃力は爆発的な物がある。

### 湿地草原

【フィールド魔法】

フィールド上の水族・水属性・レベル2以下のモンスターの攻撃力は1200ポイントアップする。

『カエルスライム』を出した時からもしやとは思っていたが……。マジでやりやがるとはな。

「更に手札から永続魔法『一族の結束』を発動！　ワイの墓地のモンスターの種族が一種利のみなら、ワイの場にいる同じ種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップす



る！

ワイの墓地には水族の『カエルスライム』1体のみ！ よってワイの場の水族モンスターは攻撃力が800ポイントアップや！」

一族の結束

【永続魔法】

自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

未知ガエル：ATK 2900↓3700

スター・ボーイ：ATK 2250↓3050

カエルスライム：ATK 2400↓3200

こ、攻撃力3000オーバーが3体だと!?

「どや、総攻撃力は9950、姉ちゃんの攻撃力1200のモンスター1体だけじゃあ防げへんで？」

「くっ……!」

「バトルや！ まずは『カエルスライム』で『エトワール・サイバー』を攻撃！  
不気味なカエルのような流動体が、ウエーブした髪を持つプリマへ迫る  
ゲームセットか!？」

——リング

SIDE：明日香

「そのままエロ同人みたいにしてまえ！ ムフイビアン・コマンド！」

ぐねぐねと嫌悪感を催す酸液の触手が『エトワール・サイバー』へと伸びる。

冗談じゃないわよ、色々な意味で！

「畏発動！ 『ドゥーブル・パッセ』！ 相手モンスターの攻撃宣言時、お互いのモンスターはそれぞれの相手プレイヤーを攻撃する！」

ドゥーブル・パッセ（アニメ効果）

【通常畏】

相手が自分の場のモンスターを対象に攻撃宣言を行った時に発動できる。

戦闘を行うお互いのモンスターは、それぞれのコントローラーから見た相手プレイヤーに直接攻撃を行う。

「これでお互いに直接攻撃を行う！」

「攻撃力3200の攻撃をライフで受ける気かいな?！」

水島が信じられない、といった感じで言う。

冗談、そんな愚を犯す奴が代表になれるとでも思った!?

「リバースカード、オープン！ 罠カード『ガード・ブロック』！」

ガード・ブロック

【通常罠】

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「このバトルで私が受けるダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

「何やと!?!」

半透明の白いシールドで、カエルもどきの触手を遮る。

これで終わりじゃないわよ！

「更に『エトワール・サイバー』はダイレクトアタックを行う時、その攻撃力を5000ポイントアップさせる！」

「何やとー！」

エトワール・サイバー：ATK 1200↓1700

「『アラベスク・アタック』！」

「ひでぶっ!？」

右目を赤い布で隠したバレリーナの蹴りが炸裂。ちよつとは堪えたかしら？

水島：LP 3500↓1800

エトワール・サイバー：ATK 1700↓1200

「ぐぬぬ、思った以上にやるな、姉ちゃん？」

「当然でしょう。私だって代表に選ばれたんだから」

それに、流石にこれくらいはできないと、オベリスクブルーの女王だなんて呼ばれない。

……『ガード・ブロック』は黎から先日貰ったものだけだ。『ドゥーブル・パッセ』と相性が良いだろう、って。

私のフェイバリットカードの事まで考慮してデッキ構築・作戦会議に付き合ってくれた黎に、心の中で感謝。

つと、まだデュエル中だったわね。

「せやけど！ 『未知ガエル』と『スター・ボーイ』の攻撃は防げへんやろ！」

水島は少々苛立ちを交えながら叫んだ。

そうね、そっちの攻撃は防げないわ。

「喰らいや、メンタクル・コマンド！」

単眼と触手を持った赤いヒトデから突き出される鋭い触手。それが過たず『エトワール・サイバー』を貫き蜂の巣のように穴だらけにする。

ゾツツ！ と嫌な、水つばい音を出し、私のモンスターは膝から崩れ、光になって散っていった。

……時々思うのだけれど、たまに妙にリアルよね。

明日香：LP 4000↓2150

「ひゃっはあ、どうや！　そして『未知ガエル』でダイレクトアタック！　フログ・スピア”！」

「明日香！」

「明日香さん！」

「明日香ア！」

そのカエルの槍を受けるワケにはいかなない！

「リバースカード、オープン！　罨カード『奇跡の残照』！　このターン戦闘で破壊された自分のモンスターを特殊召喚する！　蘇って、『エトワール・サイバー』！」

奇跡の残照

【通常罨】

(1)：このターン戦闘で破壊され自分の墓地へ送られたモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

エトワール・サイバー：DEF 1600

一度は斃れた私のバレリーナが、カエル兵士の前に復活して立ちほだかる。

それを無視するだけの知能が無かったのか、鋭い槍の一撃で壁モンスターを倒すだけでこのターンの攻撃を終えた。

ありがとう、お陰で助かったわ。

「せやけど『未知ガエル』には貫通能力がある、攻撃力が守備力を上回った分だけダメージを喰らって貰おかつ！」

「くううううううう！」

明日香：LP 2150↓50

「カアーツ、惜つしい！」

『エトワール・サイバー』が爆散して私のライフを爆風が削る。

危ない……。もう50だけステータスが違ったら私のライフが尽きていた、本当にギリギリね……。！

「せやけどワイの場には攻撃力3000オーバーが3体！ 対し、姉ちゃんの場合は空つ

ぼでライフも風前の灯火！ もう勝負は決まったようなもんやな！」

「……そうね、あなたの言う通り絶望的な状況ではあるわ」

「そうやろ、そうやろ！ 今ならサレンダーも「けどね」許、す……？」

「1つ、言っておいてあげるわ。さっきの『ガード・ブロック』のドローで、私の手札に勝利のためのコンボが揃ったわ。次の私の攻撃を全て遮断しないと、あなたの負けよ」

「……面白いやないか。そんなハツタリに騙される程、この水島標呉はマヌケじゃあらへんわ！ ターンエンドや！」

水島：LP 1800

手札：0枚

フィールド

：未知ガエル（ATK 3700）、スター・ボーイ（ATK 3050）、カエルス

ライム（ATK 3200）

：湿地草原（フィールド魔法）、一族の結束（永続魔法）

「私のターン、ドロー」

引いたカードは『融合』。でも今回は出番無し。



「……それじゃあ、覚悟は良いかしら？」

「は、ハン！　せやけど姉ちゃんがこのターンでワイに勝てへんかったら、逆にワイの逆転勝利やで！」

「残念だけど、それは有り得ないわ」

「何やと!?　どういう意味や！」

何故か？　答えは単純。

「このターンで、その布陣を崩すからよ。例えターンを渡す事になつたとしても、次のターンで私にトドメを刺す事はできない」

「くっ！　そんなに言うのなら、やってみいや！」

言われなくとも！

ふふ、血が騒ぐし、手に汗を握るわね……！　でもこんなの、デツキを試験的に回した十代や黎とのデュエルの時と比べれば、全然物足りないわ！

「行くわよ！　私は『サイバー・チュチュ』を召喚！」

『やあっ！』

サイバー・チュチュ：ATK 1000

「攻撃力10000? そんなザコモンスターで何ができるんや」

「あら、さっきの三沢君のデュエル、見てなかったのかしら? 攻撃力だけで判断したら痛い目を見るわよ。」

『サイバー・チュチュ』の効果、それは相手の場にこのカードより高い攻撃力を持ったモンスターのみ存在する場合、ダイレクトアタックができる!」

「何!?!」

サイバー・チュチュ (効果モンスター)

星3

地属性/戦士族

ATK 10000/DEF 800

相手フィールド上に存在する全てのモンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。

「あなたの場のモンスターは全て『サイバー・チュチュ』より攻撃力が高い、よってダイレクトアタックは可能よ」

サイバー・チュチュ : ATK 1000

未知ガエル : ATK 3700

スター・ボーイ : ATK 3050

カエルスライム : ATK 3200

「行くわよ、バトル！ 『サイバー・チュチュ』でダイレクトアタック！ //

ワントゥー！」

「あべしっ!？」

水島 : LP 1800 ↓ 800

竜巻を纏いながら、鋭い蹴りをお見舞いする私のモンスター。

いくら下にバレリーナの衣装を着ているとは言え、薄いスカートを履いているのだから蹴りはあまり良くないと思うのは私だけかしら？

「ぐぬぬ……、耐えたでえ？ 次のターンで『サイバー・チュチュ』を攻撃をすれば、ワ

イの勝ちや！」

「あら、それはどうかしらっ？」

言ったハズよ、次のターンの私の『全ての』攻撃を遮断しないと負けるって。

「速攻魔法『プリマの光』を発動！」

「こ、ここで速攻魔法やと!?!」

「私の場の『サイバー・チュチュ』をリリースし、手札かデッキから『サイバー・プリマ』を特殊召喚する！」

プリマの光（アニメオリジナル）

【速攻魔法】

自分の場の「サイバー・チュチュ」1体を生贄に捧げる。

「サイバー・プリマ」1体をデッキ・手札から特殊召喚する。

「来なさい、『サイバー・プリマ』！」

『ハアッ!』

サイバー・プリマ：ATK 2300

スポットライトの光を浴び、その姿を変えるショートボブの少女。ライトが消える

と、そこに現れたのは蝶のような仮面をつけた、長身のバレリーナだった。

「な、なんや攻撃力2300かいな……。それやったら、ワイのモンスターの方が攻撃力は上……」

「そう思うのなら、貴方のフィールドを見てみるのね」

「あん？」

未知ガエル：ATK 3700↓1700

スター・ボーイ：ATK 3050↓1050

カエルスライム：ATK 3200↓1200

「な!? ワイのモンスターの攻撃力が一気に2000も下がったやと!?」

『サイバー・プリマ』が特殊召喚に成功した時、フィールドの全ての魔法カードを破壊する! 『湿地草原』と『一族の結束』が消滅した事で、攻撃力が下がったのよ!」

サイバー・プリマ（効果モンスター）（アニメ効果）

星6

光属性／戦士族

ATK 2300 / DEF 1600

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法カードを全て破壊する。

「さて、『サイバー・プリマ』の攻撃力は2300、『カエルスライム』は1200でその差は1100。それがあなたの残りライフ800から引かれたら、どうなるか分かるかしらっ?」

「ぜ、ゼロ……!」

正解よ。

「これで止めよ! 〃終幕のレヴェランス!」

「ぐああああああああああっ!」

水島：LP 800↓0

明日香：WIN

水島：LOSE

「ガツチャ！ やったな、明日香！」  
「グツジョブ！ ナイスだったよ」  
「ありがとう」

デュエルを終えて控室に戻ると、十代とフィオが激励してくれた。

結構ギリギリだったけれど、何とか勝って良かった。もし負けたら、十代に申し訳が立たないもの。

「……………あら？」

どうして今、十代だけだったのかしら？

同じチームのメンバーであるフィオ、黎、三沢君の事も、アカデミアの仲間達の事もすっぽかして。

十代は確かに励ましてくれたけど、それは黎にそう言われたからで……………？  
どうして十代だけ？

「どうしたの、明日香？」

「……………」

「ねえ、明日香？」

「明日香？」

黙っている私を不審に思ったのか、十代が顔を覗き込んで来た。

よく見ると十代って、綺麗な目をしてるのね。宝石とかそういうんじゃないか、何と  
いうか、純粋な子供みたいなの……………。

そのままずっと見つめていると、自分の汚さが浮き彫りになる気がして、でも何時ま



でも見つめていたくて……。

……どうやら今日の私はおかしいらしい。

「ごめんなさい、整理する時間を頂戴」

「??」

そんな疑問まみれの顔をしないで。私だってこれが一体何なのか、皆目見当がつかないのだから。

S I D E : 黎

十代が明日香の顔を覗き込んだ前後から、何か明日香の様子がおかしい。

顔が微妙に赤いが、これって……。

(なあ、大地?)

(何だ、黎?)

(これはひよつとしたら、ひよつとするのか?)

(ひよつとしたら、ひよつとするのかも知れないな)

大地とヒソヒソ会話をするが、あっちも同じ事を考えていたらしい。

(どうする?)

(どうしようも無いだろう)

(それもそうか)

……本人が自覚するまで黙っておこう。

t o b e c o n t i n u e d



滅びへと誘うまで、後少し……！　ククククク、ハーハーハーハーハアツ！」  
「キツヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！　念願の絶望郷が目の前だぜえ！」

誰も知らない場所で、二人の高笑いが響いた。

繭の中の少女は、誰からの助けも得られず、人知れずその命を失っていく……。  
ドグン！　と繭が一際大きく脈打った。

——アカデミア・控室

S I D E : フ イ オ

控室の机の上で、自分のデッキからカードを5枚めくる。

黎に手を貸してもらい、新しく、より強くなった私のデッキ。

『トレード・イン』

『光神機——轟龍』

『ヘカテリス』

『盗賊の七つ道具』

『アテナ』

その手札を見た後、それらをデッキに戻してシャッフル。再び5枚めくる。

『攻撃の無力化』

『勝利の導き手フレイヤ』

『強欲な壺』

『豊穡のアルテミス』

『魔宮の賄賂』

更に同じ工程をもう1度。

『トレード・イン』

『The splendid VENUS』

『神の宣告』

『死者蘇生』

『コーリングノヴァ』

「……悪くない」

1 回目は『ヘカテリス』の効果で『ヴァルハラ』を、2 回目は『アルテミス』の効果でドロローを補助し、3 回目は『轟龍』を『トレード・イン』で捨てて『死者蘇生』で復活させる。先攻でも後攻でも、フレキシブルに動ける。

何をしているのかと聞かれれば、単なるイメトレだ。

試験前なんかには、わたしはよくこうやって、手札事故が起きないかどうかを確認する。テスト前日の夜なんかには100回以上チェックをする時もある。

今回、黎からもらったカードを入れ、以前とは少し違うものになったけど、問題は取り敢えず無さそうだった。

……3度やって、黎からもらったカードが来ないのは、まあ偶然だと思う事にしよう。わたしの担当は中堅戦、午前・午後と分けられる5回戦の内、真ん中の、午前最後の戦い。ここまで二勝を記録してはいるけれど、二人とも中々に厳しい勝利だった。負けるつもりはないけれど、勝てる保証も無い。

だからこそ、デッキを何度も確認・調整していた。

今、わたしのデッキを構成するテーマは全部で4つ。【アテナバーン】、【ヴァルハラ軸上級天使】、【エンジェルパーミ】、そして……。

「フィオ、そろそろだぞ」

「お、了解」

さて、出撃だ。

——デュエルリング

『ゴーゴーフィオ！ 頑張れ頑張れフィオ！ レッツファイト、フィオ！』

「応援ありがとう！」

リングに上がると、ブルー女子の仲間達がチアガールの姿で応援してくれた。わたしのデュエルの番なので、流石にフレイはデッキに戻っていて、そこにはいない。

と、件のチアガール天使の精霊が半透明になってわたしの後ろに現れた

（ファイトです、マスター！）

（サンキュー、フレイ。ここで負けるワケにもいかないしね！）

常人には見えないらしいので、視線を後ろに向けずにヒソヒソ会話だ。

（ふふ、負けられない、というのは黎さんのためですか？）

「ぶふうっ！」

思わず吹いてしまった。

キヨロキヨロと周囲を見回すが、誰も気付いていないらしい。対戦相手もまだ来ていない。

ホッと一安心して、ギロツとフレイを睨む。

（何で黎がそこで出て来るのさ！ わたしはこのデュエルアカデミアの代表なんだから、皆のためにも負けられないのも無様な戦いができないのも当然でしょうが！）

（……まあ、そういう事にしておきましょう）

ふ、含む所があるような言い方を……！

言いたい事があるなら、ハツキリ言いなよ！

（そうはいきませんね。今はデュエル直前、マスターのメンタルが乱れてはいけませんので）

（……デュエルが終わったら、言ってもらおうから）

（イエス、マイマスター♪）

ぐぬぬぬぬ……。腐っても年上、亀の甲より年の功、か……！

（1万年も生きてると、余裕の一つや二つ、生まれるものですよ）

年齢ネタも効果無しか！



『セニョール&セニョーラ！　これが午前最後のデュエル、中堅戦なの〜ネ！』

対戦相手がリングに上がり、フレイに翻弄された事を苦々しく思う傍ら、クロノス先生が司会を開始。以前、廃寮にて黎と十代君を襲うよう闇のゲーマーに手配した、個人的にいけ好かない先生だ。

でも黎は『被害者が出ていないんだから気にするな』なんて言うし、十代君も『大丈夫、次も何とかなるって！』と笑われた。

『デュエルアカデミア中堅〜ハ、オベリスクブルー所属、女王と並ぶ実力者、戦女神』  
神山ファイオ〜！』

被害者二名がそう言うのなら、わたし個人としては引き下がるしか無い。でも、今でも警戒対象だ。

『対するノース校から〜ハ、軍隊餓狼』、いぬかじこむる犬養通なの〜ネ！』

まあ、何時までもクロノス先生を睨んでいても始まらないので、対戦相手を見る。

犬養の見た目は、付けられた二つ名とは真逆だった。目つきはキモオタと表現できるくらいに脂ぎっているし、身体も誰がどう見ても太っていると表現できる。軍隊餓狼

“なんてどうやっても付けられるあだ名では無い。

いや、“戦女神”なんてのも初めて聞いたけどね。

「神山フィオ。良いデュエルにしよう」

「フヒヒ……、犬養通。希少なボーイツシユ少女とデュエルできるのなら、もう十分満足できるよ〜」

だったらそのまま棄権してしまえ。

それとどこからか「まだ満足できねえ！」とかいう声が聞こえた気がする。時空すらも越えて。気のせいだと思いたい。

『それで〜ハ、中堅戦……』

「全力で行くよ〜！」

レーンに沿ってエツジが動く。

こんなキモオタに負けた日には、学校の恥さらしだ！

「強気なトコも良いねエ〜。萌え〜」

ライフカウンターがポン、という音とともにONになる。

ええい、こいつは真面目にやるっていう思考回路は無いのか！

『デュエル開始なの〜ネ〜！』

全力でぶっ潰す！

「デュエル！」

ファイオVS犬養

LP 4000 VS LP 4000

手札を確認する。

「よし、『オネスト』と『ミラーフオース』がある！ どんなモンスターも、このカードで粉碎してやる！」

「先攻はオレ、ドロー！」

「あんな奴、わたしの敵じゃないもんね！」

「そう思ったんだけど……。」

「オレは魔法カード『手札抹殺』を発動！ お互いに手札を全て捨てて、その枚数分デッキからドローする！」

手札抹殺

【通常魔法】

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドロー

する。

ギンツ！ と犬養の顔付が変わった。オタク然とした顔から文字通り、獲物に餓えた狼のものに……！

「お前は今、オレの見た目で油断したな？ これだから見た目で判断するヤツは……」

「く……っ！」

『オネスト』を捨てさせられた……！

『ミラフオ』は仕事しないらしいから平気だけど、こっちは痛い！

「オレは『ジエネティック・ワーウルフ』を召喚！」

ジエネティック・ワーウルフ（通常モンスター）

星4

地属性／獣戦士族

ATK 2000／DEF 100

遺伝子操作により強化された人狼。

本来の優しき心は完全に破壊され、闘う事でしか生きる事ができない体になってし

まった。

その破壊力は計り知れない。

ジエネティック・ワーウルフ：ATK 2000

相手の1番手は白い人狼。通常モンスターの中では特に強い1枚だ。

あの攻撃力じゃあ、ちよつと厳しいかな。わたしのデッキは攻撃力の打点が二極化してるから、下級アタッカーがいない。

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

犬養：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：ジエネティック・ワーウルフ（ATK 2000）

：伏せカード1枚

——ベンチ

## SIDE：大地

なかなかの策士だ、と思わず唸る。

神山君の対戦相手、犬養は、その見た目から油断を誘う戦法を取るようだ。実際、ボーツとしたその見た目なら、大抵の相手は油断するだろう。

もつとも、そんな小手先の技が通じないと判断したのか、のっけから本性を現したが、そしてその隙に噛み砕く。狼というか、サギだ。

「大地、鳥のサギは『鷲』、騙すサギは『詐欺』だ」

「いや、すまん。自分でもつまらないと思った」

そしてよく俺の思考が分かったな。

——デュエルリング

SIDE：フィオ

「わたしのターン、ドロロー！」

正直に言おう。さっきの『手札抹殺』で主要カードが削られた。

初期手札は……。

『オネスト』

『アテナ』

『光神機—轟龍』

『聖なるバリアー—ミラー・フォース—』

『神の宣告』

もう酷いとしか言いようが無い。

でも、嘆いた所で始まりはしない。だったら、このままできる事をするまで！

「魔法カード『トレード・イン』を発動！ 手札のレベル8のモンスターを1体墓地に送り、デッキからカードを2枚ドロー！」

トレード・イン

【通常魔法】

手札からレベル8のモンスターカードを1枚捨てる。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

来た！

「手札の『ヘカテリス』の効果発動！ 手札からこのカードを捨てて、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加える！ そしてそのまま発動！」

ヘカテリス（効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1500／DEF 1100

このカードを手札から墓地へ捨てて発動する。

自分のデッキから「神の居城―ヴァルハラ」1枚を手札に加える。

神の居城―ヴァルハラ

【永続魔法】

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。



攻撃力2000なら、倒せる！

『ヴァルハラ』の効果発動！ 手札から『墮天使エデ・アールエ』を特殊召喚！

墮天使エデ・アールエ：ATK 2300

これが、わたしのデッキに組み込まれた新たな技法、“墮天使”。光属性のサポートは効かないし上級ばっかだしで少々扱いづらいけど、元々最上級レベルの天使族を多用するこのデッキには痛手にはならない。寧ろ、強力な効果が使いやすくて助かる。

……『エデ・アールエ』は墓地から蘇生しないと効果を使えないけど。

墮天使エデ・アールエ（効果モンスター）

星5

闇属性／天使族

ATK 2300／DEF 2000

このカードが墓地からの特殊召喚に成功した場合、以下の効果を得る。

●このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれ

ば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「でも、今は十分！ バトル！ 『エデ・アラーエ』で『ジエネティック・ワーウルフ』を攻撃！ ヽデス・クライシス！」

「ぬおっ！」

犬養：LP 4000↓3700

「どうだ！ カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

フィオ：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：墮天使エデ・アラーエ（ATK 2300）

：伏せカード2枚、神の居城―ヴァルハラ（永続魔法）

黎からはプレイングに関して『手札消費が荒い』と何度も言われた。そしてそれを狙

わかれて模擬戦では負けまくった。

だから手札のカードはできるだけ温存する。ここまで2勝、午前最後の試合を敗北で彩るわけにはいかない！

「オレのターン！ オレはこいつを召喚する！ 『炎妖蝶ウィルプス』！」

炎妖蝶ウィルプス：ATK 1500

犬養が呼び出したのは真つ赤な炎の羽を持つ蝶々。

あれは確か、黎のカードを見ていた時に段ボールの中にあつたヤツ！

「デュアルモンスター……！」

「その通り！ こいつは2度召喚しないと効果を発揮しない！ オレは『スーパーヴェイス』を『ウィルプス』に装備！ これを装備したモンスターは2度召喚した扱いになる！

そして『ウィルプス』の効果を発動！ こいつをリリースして、墓地の『炎妖蝶ウィルプス』以外のデュアルモンスターを1体、再召喚した形で特殊召喚する！」

炎妖蝶ウィルプス（デュアルモンスター）

星4

炎属性／昆虫族

ATK 1500／DEF 1500

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードをリリースする事で、自分の墓地に存在する「炎妖蝶ウィルプス」以外のデュアルモンスター1体を特殊召喚する。

この効果によって特殊召喚されたデュアルモンスターは再度召喚された状態になる。

「蘇れ、『エヴォルテクター・シュバリエ』！」

『トアツ！』

エヴォルテクター・シュバリエ（デュアルモンスター）

星4

炎属性／戦士族

ATK 1900 / DEF 900

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●自分フィールド上に表側表示で存在する装備カード1枚を墓地へ送る事で、相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

エヴォルテクター・シユバリエ：ATK 1900

燃える蝶が紫の魔法陣の中へと飛び込み、入れ替わりに出て来るのは赤い鎧を着た戦士。

よし、攻撃力1900なら、『エデ・アールエ』の敵じゃない。

『シユバリエ』はオレの場の装備魔法を1枚墓地に送り、相手の場のカードを1枚破壊できる」

「何!?!」

「更に墓地に送られた『スーペルヴィス』の効果を発動! このカードが場から墓地に送

られた時、墓地から通常モンスターを1体特殊召喚できる！ 選択するのは『フェニックス・ギア・フリード』だ！」

スーペルヴイス

【装備魔法】

デュアルモンスターにのみ装備可能。

装備モンスターは再度召喚した状態になる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して特殊召喚する。

フェニックス・ギア・フリード（デュアルモンスター）

星8

炎属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 2200

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する

事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

● 相手が魔法カードを発動した場合、自分の墓地に存在するデュアルモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

また、自分フィールド上に表側表示で存在する装備カード1枚を墓地へ送る事で、フィールド上に存在するモンスターを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

フェニックス・ギア・フリード：ATK 2800

墓地から連続して出て来る、戦士族モンスター。今度は巨大な剣と盾を携えた、炎を背負った大男。

くっ！ デュアルモンスターは墓地じゃあ通常モンスター扱い……！ 効果モンスターのフレームであっても蘇生は可能ってワケか！

「まだだ！ 装備魔法『ビッグバン・シュート』を『エデ・アラエ』に装備させる！

このカードを装備したモンスターは貫通効果を得て攻撃力が400ポイントアップする！」

墮天使エデ・アラーエ：ATK 2300↓2700

「でも、このカードには確か重大なデメリットが……!」

「その通り! 『シユバリエ』の効果発動! 『ビッグバン・シユート』を墓地に送り、左の伏せカードを破壊! そして『ビッグバン・シユート』の効果で装備モンスター、『エデ・アラーエ』をゲームから除外する!」

「わたしの、モンスターがつ?!」

しかも破壊されたカードは『リビングデッドの呼び声』。フィールドのモンスターもいなくなつたし、痛い出費だ。

ビッグバン・シユート

### 【装備魔法】

装備モンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。



「バトル！ 『フェニックス・ギア・フリード』でダイレクトアタック！ 不死鳥剣一

閃斬！！」

「リバースカード、オープン！ 『攻撃の無力化』！」

攻撃の無力化

【カウンター罠】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「チツ、魔法カード『泉の精霊』を発動！ このターン発動できない代わりに、墓地の装備魔法を1枚手札に加える！ 選択するのは当然『スーペルヴェイス』だ！」

泉の聖霊

【通常魔法】

自分の墓地から装備魔法カード1枚を手札に加える。

その装備魔法カードはこのターン発動できない。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

犬養：LP 3700

手札：1枚（『スーペルヴイス』）

フィールド

：エヴォルテクター・シュバリエ（ATK 1900・再召喚済み）、フェニックス・

ギア・フリード（ATK 2800）

：伏せカード2枚

「わたしのターン、ドロー！」

うーん、1ターンでずいぶんとやられたなあ。

手札の消費2枚で大型モンスター1体とアタッカー1体。しかも装備するだけで再召喚したのと同じ扱いにし、墓地に送れば通常モンスターを蘇生する『スーペルヴイス』は奴の手札に回収された。

こっちの手札は2枚。アドバンテージの差が正直大きすぎる。

取り敢えずここは……！

「魔法カード『強欲な壺』！ デッキからカードを2枚ドロー！」

強欲な壺

【通常魔法】

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

引いたカードは『死者蘇生』と……！

『マスター、来ましたよ！』

(フレイ、サンキュー！)

これなら墓地の『アテナ』と合わせて、このターンで決められる！

「わたしは永続魔法『ヴァルハラ』の効果を発動！ 手札から『勝利の導き手フレイヤ』を特殊召喚！」

『さあ、全力で行きますよ！』

勝利の導き手フレイヤ (効果モンスター)

星1

光属性 / 天使族

ATK 100 / DEF 100

自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択する事はできない。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

「その効果で、天使族モンスターの攻撃力を400上げる！」

勝利の導き手フレイヤ：ATK 1000↓500

「オホッ、可愛い天使ちゃん、萌えす！」

『デュエル中に言う事じゃありません！』

シリアス口調で何言ってるんだ、こいつは。

地か、あのオタクっぽいのが地なのか！

「更に魔法カード『死者蘇生』を発動！ わたしは墓地から『手札抹殺』の時に墓地に送られた『アテナ』を特殊召喚！」

死者蘇生

## 【通常魔法】

自分または相手の墓地のモンスター1体を選択して発動できる。  
 選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

アテナ（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2600 / DEF 800

1ターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター1体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに600ポイントダメージを与える。

アテナ：ATK 2600 ↓ 3000

まだまだだ！ こんなんじや終わらない！

【アテナバーン】の強さを見せてやる！

「続いて2体の光属性『光神機―轟龍』と『ヘカテリス』をゲームから除外し、ホリシヤイン・ソウル『神聖なる魂』を特殊召喚！」

神聖なる魂：ATK 2000 ↓ 2400

次元の狭間へと2枚のカードが消滅し、半透明の女性天使が現れる。絵柄にある男性は背景と同じ扱いらしい。

神聖なる魂（効果モンスター）

星6

光属性／天使族

ATK 2000 / DEF 1800

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する光属性モンスター2体をゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手のバトルフェイズ中のみ

全ての相手モンスターの攻撃力は300ポイントダウンする。

『アテナ』の効果発動！ 天使族が場に現れるたびに600ポイントのダメージを与える！  
「アサルト・シャイン」！

「ぐおっ！」

犬養：LP 3700↓3100

まだまだ！ まだまだ終わらない！

このデツキの神髄の一端を味わえ！

『アテナ』第二の効果！ 1ターンに1度、自分の場の『アテナ』以外の天使族を1体墓地へ送り、墓地の天使族を1体特殊召喚する！

『神聖なる魂』を墓地へと送り、『トレード・イン』の効果で墓地に送った『墮天使スピルベア』を特殊召喚！

槍と盾を持った女性が光のゲートを開く。ゲートの中へと『神聖なる魂』が消失すると、入れ替わるように別のモンスターが現れた。

墮天使スピルベア：ATK 2900↓3300

まるで壺のような胴体に、墮天の名に恥じない赤黒い翼。胴体にある単眼が、ギロリと相手を睨み付けた。

「な、何だこいつは!?!」

「天使族の特殊召喚に成功した事で更に600ダメージ!」

「ぐげっ!?!」

犬養：LP 3100↓2500

「そして『スピルベア』は墓地からの特殊召喚に成功した時、『スピルベア』以外の天使族モンスターを墓地から特殊召喚できる!

わたしはお前の『手札抹殺』で捨てられた『オネスト』を特殊召喚する!」

墮天使スピルベア（効果モンスター）

星8

闇属性／天使族



ATK 2900 / DEF 2400

このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「墮天使スペルビア」以外の天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

オネスト（効果モンスター）

星4

光属性 / 天使族

ATK 1100 / DEF 1900

自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。

また、自分フィールド上の光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

オネスト : ATK 1100 ↓ 1500

「更に600ダメージ！」

「たわらばっ！」

犬養：LP 2500↓1900

よし、ライフが並んだ！

そして『オネスト』は自分の効果で手札に戻す事ができる。その効果はダイレクトアタックと戦闘破壊を兼ねている、言わば相手モンスターの攻撃力を0にする能力。これで『アテナ』の攻撃が通ればわたしの「速攻魔法！」勝、ち……。

『デュアルスパーク』！ 自分の場のレベル4のデュアルモンスターを1体リリースし、『オネスト』を破壊する！ そしてカードを1枚ドローだ！」

「何?！」

デュアルスパーク

【速攻魔法】

(1)：自分フィールドの表側表示のレベル4のデュアルモンスター1体をリリースし、フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊し、自分はデッキから1枚ドロウする。

「『エヴォルテクター・シユバリエ』をリリース！」

『ぐおわあっ！』

ズツガアーン！ と雷が落ち、ローマ帝国の服装を着た天使が破壊される。

くっ、でもわたしの勝利への方程式は揺るがない！

「例え『オネスト』がいなくなろうとも、わたしのモンスターの総攻撃力は6800！  
2800のモンスター1体で防げるものか！

バトル！ 『スピルベア』で『フェニックス・ギア・フリード』を攻撃！  
ルシフェ  
ル・トラジエディッ！』

決まれえ！

「そうはいかん！ 畏発動！ 『ジャステイブレイク』！ 自分の場の攻撃表示の通常モ  
ンスターが攻撃された時、攻撃表示の通常モンスター以外のモンスターを全て破壊する  
！」

「な、なんだって!?!」

ジャステイブレイク

【通常畏】

自分フィールド上の通常モンスターを攻撃対象とした相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

表側攻撃表示で存在する通常モンスター以外のフィールド上のモンスターを全て破壊する。

雷に打たれるわたしのモンスター達。

『グイグイグイグイッ!』

『くああああああつ!』

『マスタアアアアアッ!』

「フレイ! 皆!」

断末魔と共に全員が消滅し、わたしの場には効果を使ってしまった永続魔法が1枚だけ残った。

対し、相手の場には攻撃力2800のモンスターが残っている。わたしのライフは残り1900、マズい……。

「わたしは、『コーリングノヴァ』を守備表示で召喚!」

コーリングノヴァ（効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1400 / DEF 800

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下の天使族・光属性モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、代わりに「天空騎士パーシアス」1体を特殊召喚する事ができる。

コーリングノヴァ：DEF 800

クリスマスのリースみたいなモンスターを場に出す。こいつはリクルーター、1ターンの間なら凌ぐ事はできるはず……!!

「ターンエンド!」

ファイオ：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：コーリングノヴァ（DEF 800）

：神の居城―ヴァルハラ（永続魔法）

「オレのターン、ドロー！ 『強欲な壺』！ デッキから2枚ドロー！」

く、ここでドローソースとは……！！

歯噛みするわたしを他所に、犬養はニヤリと笑った。

「オレの、勝ちだ！」

「何?！」

「オレは儀式魔法『合成魔術』を発動！ 場か手札からレベル合計が6以上になるようにモンスターをリリースする！ オレは場の『フェニックス・ギア・フリード』をリリース！」

合成魔術

【儀式魔法】

「ライカン・スロープ」の降臨に必要。

フィールドか手札から、レベルが6以上になるようカードを生け贄に捧げなければな

らない。

「現れる、『ライカン・スロープ』！」

『ワオオオオオオオオオオオンッ！』

ライカン・スロープ：ATK 2400

白と赤の騎士が光となり、入れ替わりに青い毛並に、コードをあちこちに繋いだ狼が飛び出す。

攻撃力2800をリリースして2400を儀式召喚だつて!?

「そして速攻魔法『エネミーコントロール』を発動。相手モンスター1体のコントロールをオレのモンスター1体を代償に奪うか、表示形式を変更させる！」

エネミーコントロール

【速攻魔法】

以下の効果から1つを選択して発動できる。

●相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、表示形式を変更

する。

●自分フィールド上のモンスター1体をリリースして発動できる。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、エンドフェイズ時までコントロールを得る。

「その効果で『コーリングノヴァ』を攻撃表示に変更だ！」

コーリングノヴァ：DEF 800↓1400

「で、でも攻撃力の差は1000！ 攻撃されてもまだライフは残る！」

「アマいな、バトル！ 『ライカン・スロープ』で『コーリングノヴァ』を攻撃！  
ルフ・クロウ！」

ザシュツ！ 青い狼の爪でわたしのモンスターが切り裂かれる。

ファイオ：LP 1900↓900

余波でわたしもダメージを受けるが、はつきり言つてワケが分からない。



何故攻撃力の低い方を出した？ 『フェニックス・ギア・フリード』のまま攻撃すれば、わたしのライフをまだ多く削れたのに。

でも、眉根を寄せるわたしを見て、犬養は笑った。

あれは、勝利を確信した時の笑み……!?

「この瞬間『ライカン・スロープ』の効果発動！ 相手に戦闘ダメージを与えた時、自分の墓地の通常モンスターの数×200ダメージを与える！」

「何?！」

ライカン・スロープ（儀式・効果モンスター）

星6

地属性／獣戦士族

ATK 2400 / DEF 1800

「合成魔術」により降臨。

このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分の墓地に存在する通常モンスターの数×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

くつ、デュアルモンスターは墓地じゃあ通常モンスター扱い……! !

でも、奴の墓地にいるモンスターは『ジエネティック・ワーウルフ』、『炎妖蝶ウィルプス』、『フェニックス・ギア・フリード』、『エヴォルテクター・シュバリエ』の4体！  
まだわたしのライフは1000残る！

「オレの墓地に存在する通常モンスターは4体、だから1000残る。そう思ってるな？  
アマいぞ！」

「何……？」

ソリッド・ヴィジョンによって映し出される半透明のカード。その枚数は……、5枚  
!?

これまでフィールドに出て来たモンスターに加えて、あれは……。

「『岩石の巨兵』!？」

「そうだ！ 『手札抹殺』で墓地に送ったカードは『フェニックス・ギア・フリード』、『エヴォルテクター・シュバリエ』、『蘇りし魂』、『決戦の火蓋』、そしてこの通常モンスター『岩石の巨兵』だあ！」

しまった、こいつの狙いはデュアルだけじゃなく、『ライカン・スロープ』による効果ダメージもあったのか！

岩石の巨兵（通常モンスター）

星3

地属性／岩石族

ATK 1300 / DEF 2000

岩石の巨人兵。

太い腕の攻撃は大地をゆるがす。

通常モンスターは5体×2000で10000ダメージ。わたしの、負けか……！

「止めだ！　〴〵シャドウ・ガスト〴〵！」

「う、うわあああああああああああああつ！」

ファイオ：LP 900↓0

犬養：WIN

ファイオ：LOSE

——ベンチ

SIDE：黎

「ゴメン、負けた……」

リングで派手に吹っ飛ばされ、トボトボとフィオが戻ってきた。

流石に2連勝の流れを止めたのは本人としても痛かったらしく、顔が沈みきっている。

「まあ、気にするな。誰だって負けの一つや二つ、経験するモンさ」

励ますようにワシワシと頭を撫でてやる。フィオはそれに気持ち良さそうに目を細めた。

「でも本当にゴメンね、皆。流れを持ってかれちゃったよ。ライフも半分くらいしか削れなかったし……」

「大丈夫だ、問題無い。黎と十代で取り返せる」

「そうよ。勝負は時の運っていうじゃない」

なおも謝るフィオ。それを大地と明日香が慰める。

まあ、こいつ個人としては俺から戦術やカードを受け取ってなお負けたのが悔しいの

だろう。

油断したって事もあつたかもだが……。

「やっぱり俺のせいかな、ゴメンな、フィオ」

「え、ちよ、どうして黎が謝るのさ!？」

何故って……。

「お前のデツキは元々、微調整が何度も必要な程にシビアな構成をしていたんだ。そこに重量のある、しかもクセの強い閥属性モンスターを突っ込んだ。事故るのは当然だ。だから——」

「タイム！ そうやってすぐ自分のせいにするのは黎の悪いトコだ。そもそもデツキの調整なんて自力でやるモンなんだから、いくら薦められたからって言って他人のせいになるワケ無いでしょ！ わたしは墮天使を入れる事を蹴る事だつてできた。でもそうしなかったんだから、結局は自分のせいだよ」

「フィオ……」

「だから自分のせいだ、なんて言うな。わたしは黎が一生懸命になつてカードを探して推薦してくれて嬉しかった。だから負けたとしても、黎を恨むなんて有り得ないし有っちゃいけない。例え誰が何と言おうとね！」

ストン、と腑に落ちる。彼女の言葉はいつも説得力があつて、俺の下らない妄想も想

像も粉碎してくれる。

何だか……。

「ありがとうな、俺の天使さん？」

「うえっ!？」

天使族デツキだし、暗い自分に光を差してくれるからそう言ったんだが……。

酷く彼女は狼狽した。照れとかそんなレベルじゃなく。

「どうした？」

「う、ううん、何でもない……」

(?)

(落ち着け、落ち着けわたし!)

その後、彼女は黙ってしまい、返事も暫くは上の空だった。

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 69 : 光VS闇 破壊と芳香

SIDE : 無し

お昼休憩を挟んで控室で黎は座禅を組んで瞑想していた。

外の音を全てシャットアウトし、これからのデュエルに集中する。呼ばれるまで、もう少しあるだろう。

頭の中でデツキを再確認し、何度も何度も回す。

「後攻1ターン目、貫通ダメージ、勝利」

ポツリと呟く。

シミュレーションの相手のデツキは毎度違うが、このデツキはこの時代の敵が相手ならほぼ確実に勝利できている。

「先攻3ターン目、ダイレクトアタック、勝利」

「先攻2ターン目、超過ダメージ、勝利」

「後攻5ターン目、効果ダメージ、勝利」

やがてフウ、と一息吐き、机の上のデッキを再確認する。

中身は間違いないく、今脳内で回っていたデッキそのものだ。

更に念のため、1度シャッフルし、手札を5枚引く。

『マッド・デーモン』

『魔法の筒』

『天使の施し』

『ヘイト・バスター』

『スワローズ・ネスト』

「ふふ、良いね、このデッキは。運が良ければ十代にも勝てる……！」

そう呟いてすぐに彼は首を振った。

「ダメだ、ロックの完成に時間がかかる可能性が高い。それに、奴のディスプレイモードならそのくらい破るだろうしなあ……」

発動までに『サイクロン』で潰される可能性があるし、完成後だって『マジック・ストライカー』と『アーマー・ブレイカー』のコンボがある。

あの奇跡の引きは歴代主人公の中でも破格だと思う黎であった。

マジック・ストライカー（効果モンスター）



星3

地属性／戦士族

ATK 600 / DEF 200

このカードは自分の墓地に存在する魔法カード1枚をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

アーマー・ブレイカー（ユニオンモンスター）

星3

地属性／戦士族

ATK 800 / DEF 800

1ターンに1度だけ自分のメインフェイズに装備カード扱いとして自分フィールド上の戦士族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊する。)

「まあ、このコンボが破れる奴なんて滅多にいないワケだしな。当面の目標は早くロツクを完成させる事、か」

ふむ、と顎に手を当てて黎が考えていると、大地が控室の中にやって来た。

「黎、そろそろ時間だ」

「あいよ」

どうやら出番らしい。

さて、対戦相手は彼のデッキの餌食になるのか、それとも逆に彼が餌食となってしまうのか。

——デュエルリング

S I D E : 黎

パキパキ、と手を鳴らしてリングの上に立つ。

このデツキならこの時代でも通用するし、何より強い。そこらのザコ相手ならライフを1も削らせずに勝てるだろう。

『レッツゴーレイ！ ファイト・ファイト・レイ！ ゴーゴー黎！』

「サンキュー！」

俺を応援してくれるチアガールにお礼を述べてから、今リングに上つて来た相手を見る。

「さあて、やったるわい！」

何とも妙な口調の相手が上がつて来た。土佐弁か？

光前寺久良丸こうぜんじくらまる、と名乗っていたが、実は……。

「ん、なんじゃ？ ワシの体見ても面白い事も何もないじやろ？ それともオメエ、貧乳好きか？ 変わったヤツじやのう」

そう、こいつは女だ。

なのに久良丸、なんて男の名前を名乗っていた所を考えると、世襲制で名前を引き継いでいるのだろうか。

それと俺は貧乳・巨乳で好き嫌いを分けた覚えは無い。

見た目は刈り込んだと思わしき短い髪の毛。昔の軍隊映画なんかに出て来る女兵なんかがこんな感じだろう。そして本人の言う通りペタンコな胸元。神様が何かの間違

いで性別を女にしてしまったような感じだ。

『セニョール&セニョーラ〜！ 午後最初のデュエ〜ル、副将戦をこれより開始するの〜ネ！』

まあ、どうでも良い事だ。

奴を倒す、それが俺の成すべき事なのだから。

『アカデミアから〜ハ、オシリスレッドの双壁、〃黒鬼の騎士〃、遊馬崎黎なの〜ネ！』  
相手がどんな奴で、どんなデツキか分からない、なんて何時もの話。重要なのは誰が  
どういうデツキで掛かって来ようとも叩き潰せるだけの実力が有るか否かだ。

姿がどんなのであっても関係ない。

『そしてノース校から〜ハ、〃閃光の大君〃、光前寺花子はなこなの〜ネ！』

「久良丸だつたじやろーがそのオカツパノツポ！」

『ヒイツ!?!』

……名前が何であつても関係ないっ！

「遊馬崎黎。精々楽しませてくれよ？」

「光前寺久良丸じゃ。そのツラ、泣き顔にされんよう気いつけや！」

『そ、それで〜ハ、副将戦……』

「泣き顔になるのはテメエだ。叩き潰してやるよ！」

「ほざけ、ザコじゃ代表になれん事を教えたるわい！」

『開始なのくネ！』

「デュエル！」

黎 VS 光前寺

LP 4000 VS LP 4000

「まずはワシの番じゃ、ドロー！ ワシは『聖鳥クレイン』を守備表示で召喚じゃあ！」

聖鳥クレイン：DEF 400

光前寺の一番手は白い鳥。聖の字を冠するだけあって神々しいような気もしなくも無い。でもどつちかと言うと鶴っぽいかも知れない。

聖鳥クレイン（効果モンスター）

星4

光属性／鳥獣族

ATK 1600／DEF 400

このカードが特殊召喚した時、このカードのコントローラーはカードを1枚ドロースる。

「そしてカードを1枚セットして、ターンエンドじゃー！」

リバースカードは1枚だけか……。

典型的なT字配列じゃあ一体何のデッキかは勿論、伏せカードの種類すら推測できんな。

光前寺：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：聖鳥クレイン（DEF 400）

：伏せカード1枚

「俺のターン、ドロロー！」

『クレイン』を守備表示か。攻撃力1600とは言え、その守備力は圧倒的に低い。確かあのモンスターは特殊召喚された時に1枚ドロローする効果があったはずだ。とすると、墓地からの特殊召喚狙いか？

それとも、伏せカードで守って上級モンスター狙いか……。

「ええい、考えていても埒が明かん！　ここは殴る！　『マッド・デーモン』を召喚！　『ウイツハハハハ！』」

マッド・デーモン（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1800 / DEF 0

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、この

カードの表示形式を守備表示にする。

マッド・デーモン：ATK 1800

こつちの一番手はドクロの鬼。腹の口の中には人の頭蓋骨が入っている。

「バトル！ 『マッド・デーモン』で『クレイン』を攻撃！ // ボーン・スプラッシュ」

！ 先に言っておくがこいつは貫通能力持ちだ！

「何?！」

バリゴリと頭骨を噛み砕き、勢いよく吐き出す。無数の骨片に貫かれた白い鳥はその場で爆発・霧散した。

光前寺：LP 4000↓2600

攻撃には反応しないか！

しかも『マッド・デーモン』の攻撃力に引っかけからなかったって事は、召喚反応型でも無い！

「ぐうううううっ！」



「更にメイン2! 『闇の誘惑』を発動! カードを2枚ドロウして、手札の闇属性モンスターを除外! 場にリバースカードを2枚伏せて、ターン終了だ!」

### 闇の誘惑

#### 【通常魔法】

デッキからカードを2枚ドロウし、その後手札の闇属性モンスター1体を選んでゲムから除外する。

手札に闇属性モンスターが無い場合、手札を全て墓地へ送る。

さあ、お手並み拝見と行こうか。

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：マッド・デーモン（ATK 1800）

：伏せカード2枚

「ワシのターン、ドロー！」

「お前のドローフェイズに2枚の永續罫を発動！」

「2枚ともじゃと!?!」

「1枚目、『魔封じの芳香』！ 2枚目、『闇次元の解放』！」

勘の良いヤツなら気付くだろう、俺が『闇の誘惑』の効果で除外したモンスターを。

「チェーンの逆処理だ。『闇次元の解放』の効果で、除外された俺の闇属性モンスターを1体特殊召喚する。『闇の誘惑』の効果で除外された『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！」  
『キヒョオオオオオオオオッ！』

ダーク・シムルグ：ATK 2700

「ここ、攻撃力2700じゃと!?!」

「更に『魔封じの芳香』の効果！ 互いのプレイヤーは魔法カードを1度セットし、次の自分のターンになるまでそれを発動する事はできない！」

そして『ダーク・シムルグ』が存在する限り、相手はカードを場にセットする事はできない！」

「チイツ！ 小賢しいロックを……っ！」

魔封じの芳香

【永続罨】

このカードがフィールド上に存在する限り、お互いに魔法カードはセットしなければ発動できず、セットしたプレイヤーから見て次の自分のターンが来るまで発動する事はできない。

闇次元の解放

【永続罨】

ゲームから除外されている自分の闇属性モンスター1体を選択して特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊してゲームから除外する。

そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

ダーク・シムルグ（効果モンスター）

星7

闇属性／鳥獣族

ATK 2700 / DEF 1000

このカードの属性は「風」としても扱う。

自分の墓地の闇属性モンスター1体と風属性モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを手札から特殊召喚する。

手札の闇属性モンスター1体と風属性モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを自分の墓地から特殊召喚する。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手はフィールド上にカードをセットする事ができない。

これがこのデッキの勝ちパターンの一つ、「アロマダムルグ」だ。これで実質相手は魔法も罫も使えない。

この時代はまだモンスター効果より魔法や罫の方が重視されていた。このまま進めば万々歳だが……。

「じゃが、もう伏せられてるカードには無力じゃろ！ 『リビングデッドの呼び声』を発動！ 墓地から『聖鳥クレイン』を攻撃表示で特殊召喚！ 更に『クレイン』の効果発動、特殊召喚された時に1枚ドロウできるんじゃ！

そして『クレイン』をリリース！ 『光帝クライス』をアドバンス召喚じゃー！

げ!?

光帝クライス：ATK 2400

マズい。光前寺が呼び出したあの金ぴかマントの巨人の効果は……!

『クライス』が召喚・特殊召喚に成功した事で効果発動! 場のカードを2枚まで破壊できる! ワシが選ぶのは『ダーク・シムルグ』と『魔封じの芳香』じゃ! シャイン・インパクト!”

——ベンチ

SIDE：フィオ

爆発音と共に消え去る黎のカード、漆黒の巨鳥と怪しい香りを放つお香。かなり凶悪なロツクで、わたしや十代君のデッキがほぼ完封されるものだったのに、あんな一瞬で

……!

(フレイ、『クライス』ってどんなモンスターなの?)

小声でわたしは相棒に尋ねる。

正直カードの知識は乏しい方だ。

『クライス』は帝シリーズの中でも『闇帝あんていデイルグ』と並んで異色のカードです。まず、アドバンス召喚でない召喚、および特殊召喚でも効果が使えます)

(帝なのにアドバンス召喚する必要が無いのか……。それから?)

(もう一つ、場に出たターンは攻撃できません)

て事は、このターンは黎は安全って事か。

(ええ、しかも『クライス』にはもう一つデイスアドバンテージがあります)

『だが、そいつの効果でカードを破壊されたプレイヤーは、その枚数だけカードをドロウできる! 俺が破壊されたカードは2枚、よって2枚ドロウだ!』

なるほど、あれは確かにデイスアドだ。

(本来なら自分のフリーチェーンのカードを破壊しつつそれを発動する、或いは使い終わったカードを破壊するというのがデイスアドの少ない活用方法なんですがね……)

この場合は致し方無し、です)

(これなら黎、勝てるんじゃないかな!)

(ええ、きつと勝てますよ!)

黎、フアイト!

光帝クライス（効果モンスター）

星6

光属性／戦士族

ATK 2400 / DEF 1000

（1）：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、フィールドのカードを2枚まで対象として発動できる。

そのカードを破壊し、破壊されたカードのコントローラーは破壊された枚数分だけデッキからドロウできる。

（2）：このカードは召喚・特殊召喚したターンには攻撃できない。

——デュエルリング

SIDE：黎

さて、早々にロックが崩された。流星にアレで完全に抑え込めるといえるのは甘い見通しだったか。

「さあどうする、光前寺。『クライス』はこのターン攻撃できないぞ」  
 「なら、こうするまでじゃあ！ ワシは『クライス』をリリースして『ターレット・ウオリアー』を特殊召喚じゃい！」

ターレット・ウオリアー：ATK 1200

光の王がゲートの中へと消失する。入れ替わりに出て来たのは薄茶色のレンガで全身を覆い、肩に砲塔を取り付けたモンスター。サイズはあまり変わってない所を見ると、被り物という印象を受ける。

「こいつは戦士族モンスターを1体リリースして特殊召喚できるんじゃない？」

「しかもこいつはリリースした戦士族モンスターの攻撃力分強化される……！」

ターレット・ウオリアー（効果モンスター）

星5

地属性／戦士族

ATK 1200／DEF 2000

このカードは自分フィールド上の戦士族モンスター1体をリリースして手札から特



殊召喚できる。

この方法で特殊召喚したこのカードの攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力分アップする。

ターレット・ウオリアー：ATK 1200↓3600

攻撃力3600……！ あれを超えられる攻撃力を持つモンスターは、俺のデッキにはいねえぞ！

「このままバトル！ 『ターレット・ウオリアー』で『マッド・デーモン』を攻撃！ さっきのお返しじゃ！ 『リボルビング・ショット』！」

「この瞬間、『マッド・デーモン』のモンスター効果発動！ このカードが攻撃の対象になった時、自身を守備表示に変更する！ よって俺への戦闘ダメージは0だ！」

マッド・デーモン：ATK 1800↓DEF 0

バラバララ！ とぶち撒かれる無数の砲弾の雨。ドクロの悪魔は低く身を屈めて身を守り、俺への超過ダメージを防ぐ。

サンキュウ、『マッド・デーモン』。

攻撃を防ぐ事に成功し、軽く安息する俺。それに対し光前寺は思うようにデュエルが進まない事に歯噛みしている。

「ぐぬぬぬ……！」

「どうした、光前寺。『ザコじゃ代表になれない』、そう言ったのはお前だぞ？」

「グギギギギ！ ワシはカードを2枚伏せてターンエンドじゃ！」

光前寺：LP 2600

手札：2枚

フィールド

：ターレット・ウオリアー(ATK 3600)

：伏せカード2枚、リビングデッドの呼び声(永続罫・対象不在)

「俺のターン、ドロー！」

これで再び俺の手札は6枚。場は空っぽだから文字通り振り出してワケだ。

「ここからが正念場だぜ。」

「魔法カード『テイク・オーバー5』を発動！ デッキの上からカードを5枚墓地に送る

！」

デッキの上から5枚のカードが俺の墓地に埋葬されていく。落とされたカードは『幻のグリフォン』、『終末の騎士』、『魔のデッキ破壊ウイルス』、『ツインツイスター』、『幻のグリフォン』。

ああ、2枚積みみの『幻のグリフォン』がどっちも墓地に行ってしまった……。

「俺は『ハーピー・クイーン』を召喚！」

『キアアアッ！』

過激な服の翼腕の女性がスリングショットのような細い服、青緑の長髪を持って奇声と共に飛び出す。モンスター効果は実質無いが、手札のこのカードと組み合わせで連続攻撃ができる。

ハーピー・クイーン（効果モンスター）

星4

風属性／鳥獣族

ATK 1900 / DEF 1200

このカードを手札から墓地へ捨てて発動できる。

デッキから「ハーピーの狩場」1枚を手札に加える。

また、このカードのカード名は、フィールド上・墓地に存在する限り「ハッピー・レディ」として扱う。

ハッピー・クイーン：ATK 1900

『ヒューー！ 過激なガールだぜえ！』

『やー、黎君も男ツスねえ〜』

『何だかんだ言ってもアイツもそうなのか』

『……黎は胸の大きい子が好きなんだろうか』

『マスター、あなたは十分に大きいでしょう……』

にしてもなんだか観客席の方が騒がしい。というか翔とフィオ、テメエらな……。

「行くぞバトルだ！ 『ハッピー・クイーン』で『ターレット・ウオリアー』を攻撃！」

「バカか！ 攻撃力が『ターレット・ウオリアー』の半分程度しかないモンスター如き、粉碎してくれるわ！」

「バカはテメエだ！ ダメージステップに速攻魔法『禁じられた聖杯』を発動！ モンスターの攻撃力を400上げて効果を無効にする！」

禁じられた聖杯

【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。

「対象は無論『ターレット・ウォリアー』だ！」

ターレット・ウォリアー：ATK 3600↓1600

「わ、ワシの『ターレット・ウォリアー』の攻撃力が……い、ぐおっ！」

光前寺：LP 2600↓2300

翼女の素早い蹴りが砲塔の巨人を粉碎、飛び散った瓦礫が相手のライフを削る。

OK、順調順調。

「ぐぬぬぬ！ まだまだ！ リバースカード『時の機械―タイム・マシン』を発動！」

破壊されたモンスターを1体特殊召喚するぞい！ 『ターレット・ウオリアー』、復活じゃー！」

時の機械―タイム・マシーン

【通常罫】

モンスター1体が戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

そのモンスターを、破壊された時のコントローラーのフィールド上に同じ表示形式で特殊召喚する。

ターレット・ウオリアー：ATK 1200

「攻撃力は下がってしまったが、次のターンに『クライス』に繋がれば問題無い！」

「そうはさせるか！ 速攻魔法『スワローズ・ネスト』！ 俺の場の鳥獣族モンスターを1体リリースし、同じレベルの鳥獣族モンスターを1体、デッキから特殊召喚する！」

カモン、もう1体の『ハーピィ・クイーン』！」

光前寺の場に戻った砲撃戦士。それを見逃す俺じゃない。

魔術で構築された燕の巣の中へ翼女が吸い込まれ、同じ見た目のモンスターが現れ

た。同名のリクルートに制限が無いのが有難い限りである。

スワローズ・ネスト

【速攻魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在する鳥獣族モンスター1体をリリースして発動する。

リリースしたモンスターと同じレベルの鳥獣族モンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する。

「バトルフェイズ中に更に特殊召喚じゃと!?!」

「もう一度『ハーピー・クイーン』で『ターレット・ウオリアー』に追撃! //クイーン

ズ・スクラッチ!」

「グハアツ!」

光前寺 : LP 2300 ↓ 1600

翼女は今度は鋭い爪で敵を切り裂き、木っ端微塵に爆散させた。素の攻撃力が低いの

は、こういう時にデメリットになりやすいものだ。

よし、着実に追い詰めている。このまま行けば、勝てる！

「カードを1枚伏せて、ターン終了だ！」

黎：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：ハーピー・クイーン（ATK 1900）

：伏せカード1枚

「ぬぬぬぬぬ！ ワシのターン、ドロー！」

自分の残った手札は『異次元からの埋葬』、この手札じゃ何もできん……。

もっと圧縮しやすくするべきだったか？

「魔法カード『手札抹殺』を発動！ 互いに手札を全て捨ててカードを捨てた枚数だけ引

くんじゃあ！」

ここで手札交換か。

正直有難いが……。果たしてこれがどう転ぶか。



視覚を強化して見ると、ヤツが捨てたカードは『ホーリー・エルフ』と『マジック・ス  
トライカー』。あの手札じゃ戦えないと交換に踏み切ったか。

「……うーし！」

「何か良いカードでも引いたか？」

「ククク！ ワシは墓地の『ホーリー・エルフ』をゲームから除外し、『ソウル・コンヴェイ靈魂の護送船』を  
特殊召喚！」

靈魂の護送船：ATK 1900

無数の魂魄を従えた木船が現れる。通常召喚できないが、コストは軽い上に攻撃力も  
高め。おまけにレベルも5だ。

靈魂の護送船（効果モンスター）

星5

光属性／悪魔族

ATK 1900 / DEF 1000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する光属性モンスター1体をゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。

「更に『靈魂の護送船』をリリースし、『光帝クライス』をアドバンス召喚！ 効果発動じゃ！」

「またそいつか……」

光帝クライス：ATK 2400

「その効果でワシの場の『リビングデッドの呼び声』と伏せカードを破壊！ 更にこれにチェーンして罨カード、『八汰鳥の骸』ヤタガラスむくろを発動しデッキから1枚ドロ！ そして『クライス』の効果で2枚を破壊し、2枚ドロ！」

八汰鳥の軀

【通常罨】

次の効果から1つを選択して発動する。

●自分のデッキからカードを1枚ドローする。

●相手フィールド上にスピリットモンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

手札が瞬時に3枚に……！

だがこつちのモンスターを除去しなかった。て事は、まだ何か策があるという事か。

「ワシは魔法カード『モンスターゲート』を発動するぞい！ 自分のモンスターを1体リリースし、デッキのカードを通常召喚可能なモンスターが出て来るまでめくる！ モンスターは特殊召喚し、それ以外は墓地に送るんじや！」

モンスターゲート

【通常魔法】

自分フィールド上のモンスター1体をリリースして発動する。

通常召喚可能なモンスターが出るまで自分のデッキをめくり、そのモンスターを特殊召喚する。

それ以外のめくったカードは全て墓地へ送る。

光前寺がカードをめくる。

1枚目『強欲な瓶』、2枚目『神の宣告』、3枚目『名推理』、4枚目『盗人の煙玉』、5枚目『デビルズ・サンクチュアリ』、6枚目『神剣―フェニックス・ブレード』。

そして7枚目は、『創世神』<sup>ザクリエスター</sup>。

「よっしやあ！ 『創世神』を特殊召喚じゃ！」

『オオオオオオ！』

創世神：ATK 2300

チツ、『創世神』は墓地から特殊召喚できないモンスター。だが裏を返せばそれ以外からなら特殊召喚できるという事だ。上手くやりやがったな。

しかしフェニブレはまだ禁止じゃない、いやアニメじゃ登場すらしてない頃だったか。今じゃあ悪用し放題だもんなあ、この時代のカードプールならはだ。

創世神（効果モンスター）

星8

光属性／雷族

ATK 2300 / DEF 3000

自分の墓地からモンスターを1体選択する。

手札を1枚墓地に送り、選択したモンスター1体を特殊召喚する。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

「『創世神』の効果発動！ 手札を1枚捨てて、墓地のモンスターを特殊召喚じゃ！ 手

札の『死者転生』を捨てて『光帝クライス』を特殊召喚！」

『ヌンツ！』

光帝クライス：ATK 2400

いい加減見飽きたぞ、そいつ。

「煩いわい！ 効果発動！ お前の場のカードを2枚とも破壊する！」

「ハッ！ ただでやられるとも思ったか！ 罨発動、『ゴッドバードアタック』！ 自

分フィールド上の鳥獣族モンスターを1体リリースし、場のカードを2枚破壊する！

当然テメエのモンスターを2枚とも破壊だ！」

「何、じゃと……!?!」

光の王によって放たれた光の弾。それが着弾するよりも早く『ハーピー・クイーン』が炎に包まれて突進。相手の場のモンスターを2体とも焼き払った。そして時間差で俺の罠カードが破壊される。

ゴツドバードアタック

【通常罠】

自分フィールド上の鳥獣族モンスター1体をリリースし、フィールド上のカード2枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊する。

『ゴツドバードアタック』が破壊された事により『クライス』の効果で1枚ドロー！」  
「チッ！ カードを1枚セットし、ターン終了じゃ！」

光前寺：LP 1600

手札：1枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

「このまま押し切らせてもらう！ 俺のターン、ドロロー！ この瞬間、墓地の『テイク・オーバー5』の効果発動！ このカードを除外し、もう1枚ドロローする！」

来た！

「俺は墓地の闇属性モンスター『マッド・デーモン』と、風属性モンスター『ハーピィ・クイーン』をゲームから除外！ 吹き荒れる漆黒の旋風！ 『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！」

『クヒョオオオオオオ！』

ダーク・シムルグ：ATK 2700

「そ、そいつは?！」

『『ダーク・シムルグ』は墓地の闇と風の属性を持つモンスターを1体ずつ除外し、手札から特殊召喚できる！』

奴の残りライフは1600、『ダーク・シムルグ』の攻撃力は2700、問題無くゼロにできる。

「バトル！ 『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！ これで止めだ、ダーク・タービュレント！」

巻き起こる闇の旋風。

「くああああああああつ！」

柱の様に太いそれが光前寺を過たず捉え、奴のライフを――

光前寺：LP 1600↓2800↓100

削り切れて無いだど!?

「速攻魔法『ご隠居の猛毒薬』じゃ！ これでワシのライフを1200回復した！」

「チツ、テメエのライフはそれで2800になり、僅かに届かなかったってワケか……！」

ご隠居の猛毒薬

【速攻魔法】



以下の効果から1つを選択して発動する。

●自分は1200ライフポイント回復する。

●相手ライフに800ポイントダメージを与える。

決めたかったんだがな。あのデッキじゃあ次のターンにまた『クライス』が飛んで来てもおかしくない、だが俺の手札にそれを防ぐ手立ては無い。

さて、ならば……。

「俺はカードを2枚伏せて、ターン終了だ！」

『ダーク・シムルグ』には悪いが、盾になってもらう。

『クライス』が破壊できる枚数は2枚まで。つまりどう足掻いても俺の場のカードは1枚残る。

そして攻撃力は『ダーク・シムルグ』の方が高い。必然、俺の伏せカードの内1枚と『ダーク・シムルグ』を狙わざるを得ない。

だが俺の伏せたカードは『くず鉄のかかし』と『次元幽閉』。両方当たりの罠カード。しかも仮に全て対処した所で俺のライフは4000、一撃では死なない。

さあこの布陣、破れるモンなら破ってみろ！

黎：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：ダーク・シムルグ(ATK 2700)

：伏せカード2枚(『くず鉄のかかし』『次元幽閉』)

……何かめがっさフラグをぶっ建てた気がする。

「ワシのターン、ドロー！」

「さあ、どうする？ 勝率は相当低い、お前に逆転できるか！」

「……やったらあ！ 魔法カード『強欲な壺』！ デッキから2枚ドロー！ 更にワシは墓地に存在する装備魔法『神剣―フェニックス・ブレード』の効果発動！ このカードは自分の墓地の戦士族モンスターを2体除外し、墓地からこのカードを手札に戻す事が出来るんじゃない！」

神剣―フェニックス・ブレード

【装備魔法】

戦士族モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

自分のメインフェイズ時、自分の墓地に存在する戦士族モンスター2体をゲームから除外する事で、このカードを自分の墓地から手札に加える。

「ワシは『マジック・ストライカー』と『光帝クライス』を除外！ 墓地から戻れい、『フェニクス・ブレード』！」

フェニブレは装備しても攻撃力は300しか上がらない、真骨頂は手札コストにしやすい点だ。それが悪用されまくって禁止カードになったが……、さて彼女は何をして来るか。

「装備魔法『D・D・R』！ 手札を1枚捨てて、除外されている自分のモンスターを特殊召喚！ そしてこのカードを装備するんじゃ！ 『フェニクス・ブレード』を捨てて蘇れ、『クライス』！ そしてその効果で自身と『D・D・R』を破壊する！」

む、成程。これで『D・D・R』は実質『強欲な壺』ってワケだ、しかも除外から帰還して『クライス』が墓地に戻った。

ここで連続ドローして来たか！ さあ、手札4枚でどう破る！

「魔法カード『死者蘇生』！ 墓地から『光帝クライス』を特殊召喚じゃ！」

光帝クライス：ATK 2400

本日の過労死、乙。

「モンスター効果発動！ 場のカードを2枚破壊じゃ！ ワシが選ぶのは……」  
さあ、どうする？ 下手なカードを選べば、その瞬間に敗北する。

フフフ、良いねこの感覚。勝利を掴もうと藻掻く、このギリギリのやり取り！

「その2枚のリバースカードじゃ！」  
「くっ！」

ドンドン！ と『くず鉄のかかし』と『次元幽閉』が木端微塵に消し飛ぶ。

伏せカードを狙って来たって事はつまり、攻撃力で圧倒する術があるという事か！

だが俺のライフを一撃で削るのに必要な数値は6700！ そんな数値、早々に出せるものか！

「カードを伏せる！ そして更に『クライス』をリリースし、もう1体の『光帝クライス』をアドバンス召喚っ！」

「2体目だど!?!」

「効果で今ワシがセットしたカードとお前の『ダーク・シムルグ』を破壊！」

「ぬあっ!?!」

『クヒョオオオオオツ?!』

すまん、『ダーク・シムルグ』!

これでガラ空きか、だが光前寺も伏せた『便乗』をドロソースに回すくらいには逼迫している、まだ終わってない!

「更に『ターレット・ウオリアー』を、『光帝クライス』をリリースして特殊召喚!」

ターレット・ウオリアー : ATK 1200 ↓ 3600

再び現れる砲塔の巨人。

うげげ、今の連続ドロで引き当てたのかよ……。

「もう一丁! 墓地の『フェニックス・ブレード』の効果発動! 『ターレット・ウオリアー』と『クライス』を除外し、このカードを手札に戻す! そして『ターレット・ウオリアー』に装備するんじゃ!」

ターレット・ウオリアー : ATK 3600 ↓ 3900

「攻撃力3900だと!?!」

「バトル！ 『ターレット・ウォリアー』でダイレクトアタックじゃ！ これまでのお返し、纏めて喰らえ！ ムリボルピング・シヨット！」

「ぐあああああああああああああああああつ！」

黎：LP 4000→100

ぐはっ！ あつぶねえ、これは油断したかも……！

「カードを1枚伏せて、ターン終了じゃ！」

光前寺：LP 100

手札：0枚

フィールド

：ターレット・ウォリアー（ATK 3900）

：神剣―フェニックス・ブレード（装備魔法・『ターレット・ウォリアー』に装備）、伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー！ ……光前寺」

「何じゃ」

「散々バカにして悪かった。認める、良い腕だ」

「そりやありがとうよ」

俺の謝罪にニカツと笑って答える光前寺。

ふ、何だ、そういうトコは普通の女の子じゃねえの。

「正直、もつと楽に行けると思った。だが蓋を開ければご覧の有様、まだまだ俺も修行が足りない」

「カカカ、そうじゃろう。人間誰しも、死ぬまで勉強と修行の積み重ねじゃ」

「違くない。そういうった意味じゃあ今回のデュエル、また1つ強くなれた。感謝する」

だが！

「このデュエルは俺の勝ちだ！」

「ほう！」

手札のカードを1枚切る。

「このカードは通常召喚できない！ ただし場にトークン2体を生み出し、手札から特殊召喚できる！ その効果で俺の場に『トーチトークン』2体を特殊召喚だ！」

トーチトークン：ATK 0

トーチトークン：ATK 0

「さあ来やがれ、『トーチ・ゴーレム』！」  
『オ、オオオオ……！』

トーチ・ゴーレム：ATK 3000

肩に丸鋸、腕に鉤爪を取り付けたダークグレーの丸い機械の巨体が現れる。

ただしそいつを従えるのは――

「な、何じゃあこいつは!？」

相手だ。

トーチ・ゴーレム（効果モンスター）

星8

闇属性／悪魔族

ATK 3000／DEF 300

このカードは通常召喚できない。



このカードを手札から出す場合、自分フィールド上に「トーチトークン」(悪魔族・闇・星1・攻/守0)を2体攻撃表示で特殊召喚し、相手フィールド上にこのカードを特殊召喚しなければならない。

このカードを特殊召喚する場合、このターン通常召喚はできない。

「何って、『トーチ・ゴーレム』だよ。安心しろ、デメリットはねえ。攻撃力3000のモンスターのプレゼントだ」

「な、何を企んでおる……!」

「慌てるな、すぐに分かる」

そして今度は別のカードを切る。

さあ見せてやる。このデッキのもう一つの勝ち筋!

「このカードもまた通常召喚できない。だが、俺の場のモンスター2体と墓地のモンスター1体を除外し、手札から特殊召喚できる!俺はフィールドの『トーチトークン』2体と、墓地の『ダーク・シムルグ』を除外する!」

次元の狭間へと小型の黒い機械と闇の巨鳥が消える。

瞬間、周囲の気が荒れ始めた。より強くより乱暴に渦を巻き、やがてそれは足に透明な球体を抱えた、一羽の大きな鳥へと姿を変えた。



再び吹き荒れる風。その風によってダークグレーの拷問機械巨人が吹き飛ばされ、『アトモスファイア』の抱えている球体の中へと納まった。

『The アトモスファイア』は、この効果で装備したモンスターの元々の攻撃力と守備力の数値分だけ、パワーアップする」

「何、じゃと……!?!」

The アトモスファイア：ATK 1000↓4000 / DEF 800↓1100

「こ、攻撃力4000!?!」

『クライス』の効果でドロウさせすぎたな！ お蔭でこいつらが一度に手札に回って来たぜ！」

The アトモスファイア（効果モンスター）

星8

風属性 / 鳥獣族

ATK 1000 / DEF 800

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在するモンスター2体と自分の墓地に存在するモンスター1体をゲームから除外した場合に特殊召喚することができる。

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備する事ができる。

このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターのそれぞれの数値分アップする。

さて。

「『The アトモスファイア』の今の攻撃力は4000、『ターレット・ウォリアー』は3900。その差は100と余りに小さいが……、お前のライフポイントをピツタリ削り取れる」

「くっ！」

「これでラストバトルだ！ 『The アトモスファイア』で『ターレット・ウォリアー』を攻撃！ テンペスト・サンクシヨズ！」

ビュゴウ！ と吹き荒れる竜巻。ビームのようにそれは横向きになって砲塔の巨人へと突き進む。巨人は弾丸をバラ撒いて必死にそれを止めようとするが、大樹のように太い風はビクともしない。

「この勝負、貰った！」

そう思った時だった。

「まだじゃ！ 罨カード『運命の分かれ道』を発動！」

「何!?!」

「、、ここでギャンブルカードだどっ!?!」

「今からお互いにコイントスを行う！ 表が出た方は2000ポイント、ライフを回復する！」

「だが逆に裏が出たプレイヤーは2000ポイントのダメージを受ける……!」

運命の分かれ道

【通常罨】

お互いのプレイヤーはそれぞれコイントスを1回行い、表が出た場合は2000ライフポイント回復し、裏が出た場合は2000ポイントダメージを受ける。

「さあ、コイントスじゃ！」

ソリッドヴィジョンによって浮かび上がる2枚のコイン、それが空中へと弾き上げられた。

今、お互いのライフはたったの100ポイント。裏が出た方は、負ける。  
頼む、両方表でも構わないから、裏だけは出てくれるなよ……！  
結果は……！

黎：裏

光前寺：裏

「両方裏じゃと!？」

「んなアホなあ!？」

引き分けかよおおおおお!?

「ぐあああああああああっ！」

「のわあああああああっ！」

黎：LP 100↓0

光善寺：LP 100↓0

黎：DRAW

光善寺：DRAW

——ベンチ

「すまん、勝てると思ったんだが……。本当に申し訳無い！」

「大丈夫だ、負けるよりはマシだろう」

「ええ、貴方はよくやったわ」

「負けたわたしよりは全然上だよ」

「そうそう、いいデュエルだったぜ！」

試合終了後、ベンチにすくすくこと帰って来た俺を、皆は温かく迎えてくれた。

「これで二勝一敗一分け……。次で勝たないと逆転されるか……」

「主殿、クヨクヨするな。そういう所は主殿の悪い所だ」

「そうですよ、もつと気楽になるべきです！」

なおも齒噛みする俺を精霊の二人が励ましてくれる。

「大丈夫だつて！ 後は俺が勝てば良いんだからさ！ 任せとけて！」

「十代……、スマン、頼む」

今日のデュエルを通して思った事。それはまだまだ俺も修業が足りないという事だ。

もつともつと強くなろう。誰が相手でも負けないくらいに。

そう、あの日の、俺達が死んだ日の悲劇を繰り返さないためにも。

t o b e c o n t i n u e d



# STORY 70 : 輝け、『シャイニング・フレア・ウイングマン』!

——邪神の根城

SIDE : 無し

ドクン、ドクン、と脈打つ漆黒の繭。その中に位置する黎の義理の妹、都。闇色の球体の中で膝を抱え、裸体で浮かぶその姿は、ある意味神々しさをも感じられる。

繭の外では残った二人の護衛、ラースとグリードが会話していた。

「なさけないぞ、グリード。邪神様によつて強化されたというのにその体たらく。少しは情けないとは思わんのか」

「悪かったって言ってるだろ、旦那。流星に1対5はやりすぎたと思ってる。反省してるっつーの」

肩を竦めて呆れるラースに対し、若干ボロツちくなったグリード。傷はほぼ癒えているようだが。

どうやら人の魂を掻き集めるために無茶な方法を取ったらしい。

「半日はここで待機だ。ここまで来て護衛が更に減ったなどという事になれば笑い事は済まされん」

「へいへい……」

「もし抜け出しでもしたらタダではおかんぞ」

グリードに入念に釘を刺すと、ラースは次元に穴を空けてどこかへと移動した。

S I D E : ???

暖かいような、冷たいような。でも汚濁に塗れた泥のような気色悪い物に包まれている。そんな奇妙な感覚に自分が覆われているのが最初に分かった感覚だった。

目の前は真っ暗で、それが目を閉じている所為だと分かった。鉛の様に重たい瞼を開くと、やっぱり周囲は暗い。でもこの闇のような色は半透明で、その向こう側に誰がいるのが見える。

一体ここは、どこだろうか。

『ここは、我が繭の中だ。今、貴様の体を我が依り代にするがために改造しているのだ』  
 (な、ちよ!? ふぎけんじやないわよ!)

叫んだつもりだったが、声が出ない。

というか、何故に自分は裸なのだろうか。

『魂から肉体を再構築した以上、服ができるワケないでござろう』

(は? 魂から?)

『あら、覚えてないのかしら? 貴女、一度死んだのよ?』

言われた瞬間、全てを思い出した。

そうだ、あたしは……、遊馬崎<sup>ゆまさきみやじ</sup>都は……、死んだんだった。

S I D E : : : ? : ? : ? ↓ 都

霞がかかっている所々不鮮明だけど、思い出せる。あたしはあの雨の日に死んだ。

あたしの身体は何が起こっても最も健康な状態に戻ろうとする、謂わば不死鳥のような体質。怪我や病気のレベルが大きい程にその回復・再生の速度は上がる。即死級の致命傷なら、死ぬより早くに回復する。そんな“老衰以外では決して死なない”肉体こそ、あたしの異能。

でも、これには1つだけ欠点がある。

再生する時に、怪我をした位置に障害物があると、治癒が止まってしまうのだ。

あたしはそれを突かれて殺された。

両腕と両足を切り落とされ、再生が始まるよりも早く、切断面に溶けた鉄を流された。鉄が障害物となつて治癒はストップ。

結果、怪我は治らず、多量失血と溶けた金属の熱によるショックで死亡。

あたしが最後に見たのは、義兄が木材粉碎機に呑み込まれながら、こつちに手を伸ばしているシーン。

(つてモノローグやっている場合じゃないね。さて……)

落ち着け、状況を確かめろ。

何とかして、ここから脱出を……。

『お主、随分と冷静じゃのう?』

(焦つたつて何もできない。お義兄ちゃんの言葉だよ。というかアンタ、喋り方安定させなさいよ。話し辛いつたらありやしない)

『ヒヤハハハ！ 剛毅な小娘だ！ ……そうだお前、チャンスが欲しくねえか?』

チャンス?

『ええ。貴女がここから脱出し、無事に義兄の所へと行けるかも知れないチャンスです』

な!?

——デュエルアカデミア・リング前

S I D E : 黎

アカデミアVSノース校の交流試合もいよいよ最終戦を残すのみとなった。

教師陣は引き分けがある事を想定していなかったらしく、この大将戦、勝った方に2点が追加されるらしい。

ここまでの戦績は2勝1敗1分け、つまりこつちが2点、相手が1点だ。実質、大将戦を制した方がこの交流戦の勝者となる。

……そこ、5戦やる意味無いじゃんとか言わない。

「くーっ! とうとう俺の番か! ワクワクするぜ!」

大将の十代はワクワクを抑えられないらしく、傍から見てもそわそわしているのがよく分かる。

「頼むぞ、十代。お前が勝つか負けるかでアカデミアの命運が決まる。テレビの前だからって緊張するな、思い切り、全力でやりな!」

「任せろ！」

「俺のカードはデツキに入れた、お前のセンスで回せるように調整もした！ 後はお前次第だ！ ブチかませ！」

「おう、全力で行くぜ！」

グツと親指を突き出して応援してやれば、十代はガツチャのポーズで返す。

「負けるなよ、十代」

「頑張つてね」

「信じる事が勝利の鍵、ファイト！」

俺に続いて皆も十代を応援する。

『フレーフレー、十代！ ファイト・ファイト・十代！ レッツゴー・ファイト・オー

！』

『はい皆さん、これがラストです！ 気合入れてもっと大きく！』

『フレツフレツ十代！ レッツファイト十代！ オーツ!!』

チアガールの方も気合が満々の様だ。

方々から応援され、十代は感激したようにガツポーズを取る。

「くーっ！ 俺こんなに応援されてデユエルするの初めてだぜ！」

そして行って来る！ と元気一杯に飛び出してリングに上がって行ってしまった。

さて、俺も……。

『主殿、どこへ?』

ん? ちよいと野暮用。いや野暮潰し、かな?

「透明化……、開始」

桜に見送られながらこつそり移動する事、ざつと一分。透明になってやって来たのは、サンダーの控え室。

そこにこつそりと5枚程のカードを置いておく。

カードが立てた微かな音に気付いて顔を上げたサンダーだったが、当然俺は目に映らない。

「これは、"アームド・ドラゴン"の魔法カードと罠カード!? 一体誰が、どうやって!」  
強力なカードに目を丸くする彼を尻目に、俺はこつそりと部屋を出たのであった。

十代にだけ肩入れするのも不公平だからな、これで条件はおよそお相子。後はお前ら次第だぜ、十代、サンダー。イレギュラーが原作キャラの確執を解きほぐす特権を持っているのなら、そうして手を加えた責任も取らないといけないだろうよ。

SIDE : 十代

『じゅ・う・だ・い！　じゅ・う・だ・い！　レッツウィン・十代！』

沢山の声援を受けながら、俺はリングに上がる。

好きなデュエルでこうやって応援される。嬉しいぜ！

つとと、でも真面目にやらないとな。勝つ事に拘りは別に無いけど、負けても構わないってワケでもないからな。

でも楽しいものは楽しい。今日は人生最高の日になるかもな！

「楽しそうだな、十代」

と、声をかけられた。

「万丈目……」

サンダー、と訂正を入れるのは俺の対戦相手の万丈目準。

以前はとでも嫌味な奴で、俺や黎をしょっちゅう目の敵にしていた（まあ俺は気にしてなかったけど）。黎曰く「比較的エリート意識が高い。自尊心は無駄に高い」奴だった。でもだんだんと成績が悪くなっていって、三沢に不正をしても負けた事から退学。アカデミアを立ち去って……。

「十代、俺はこのデュエルアカデミアに帰って来た。もう俺は以前の俺じゃない。今度こそ負けんぞ！」

大きくキャラが変わって帰って来た。分かる、あの万丈目は、前とは全然違う。バカ



だからこそ分かる。

楽しみみだぜ。きつと凄くワクワクするデュエルになるぜ!

『セニョール&セニョーラ! これが最後のデュエル、大将戦になるのくネ!』

クロノス先生の放送が入った。

ヤベエ、すつごく胸が高鳴ってる!

『デュエルアカデミアからくハ、ドロップア……もとい、オシリスレッド所属、〃稀代の英雄〃、〃神の引き手〃 遊城十代く!』

あ、俺だけ通り名が2つあるのか。

『そして、ノース校から——』

「いい、自分でやる!」

万丈目はそう言ってクロノス先生からマイクを引つ手繰った。

『アカデミアの生徒達よ! この俺を覚えているか! ザマア見ろと嘲った奴、自業自得だと呆れた奴、可哀想だと憐れんだ奴! 見ろ! 今ここに俺は宣言する! 俺はここに帰って来たと!』

俺様の名を言ってみろ! 俺様の名は! 一! 十!』

『百!』『千!』

『万丈目サンダーだあ!』

わあっ、とサンダーコールが起こる。

サンダー！ サンダー！ とチアガール達の応援すら掻き消し、会場一帯が万丈目を応援しているような感じになった。

『そうだ！ 俺は万丈目サンダー！ 今ここに、全ての雪辱を晴らすために帰って来た！ 俺は負けん！ 絶対に勝つ！ 万丈目サンダーの名に懸けてっ！』

わあああああああああああああああああああ！

(凄い人気だなあ……)

あそこまで人気を取れるっていうのは、きつとあいつの才能なんだと思う。

これまでそれを見られなかったのはきつと、それを披露する機会が無かったからなんだ。

へへへ、楽しみだぜ！

一通りサンダーコールが終わると、万丈目は先生にマイクを返した。

さあ、始まるぜ！

『それで〜ハ、大将戦……』

『行くぜ、万丈目！』

『サンダー！ 返り討ちだ、十代！』

『デュエル開始〜！』

「デュエル!」

準VS十代

LP 4000 VS LP 4000

「先攻は貰ったあ! 俺のターン、ドロー! 俺は『マスクド・ドラゴン仮面竜』を守備表示で召喚!」

『グオオオ!』

仮面竜:DEF 1100

万丈目の一番手は赤い鱗の仮面をつけたドラゴン。

守備力1100って事は、この後伏せカードで多分あのモンスターを守って来る。いくら下級E・HEROの攻撃力が低めとは言え、あのモンスターを倒すくらいはできる。それを万丈目が知らないわけが無い。

「ターンエンドだ!」

何!?

準：LP 4000

手札：5枚

フィールド

：仮面竜（DEF 1100）

：魔法・罨無し

「俺のターン、ドロロー！」

黎からデツキを調整している時に教えてもらった。能力値の低いモンスターを出していたり、攻撃力の低いモンスターで自爆特攻して来た時は警戒しろって。

「俺は『E・HERO エアーマン』を召喚！」

『トアツ！』

E・HERO エアーマン：ATK 1800

万丈目の場にはモンスターののみ。つまり罨はあのモンスター自体に張られているって事だ。

だったら、殴る！ 殴って道をこじ開ける！ 罨があつたらその時に考える！

『エアーマン』は召喚に成功した時、場の魔法・罫を破壊するか、デッキからE・HEROを手札に加える事ができる。俺は『E・HERO バブルマン』を手札へ!

E・HERO エアーマン (効果モンスター)

星4

風属性/戦士族

ATK 1800 / DEF 300

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●このカード以外の自分フィールド上の「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法・罫カードを選んで破壊できる。

●デッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「ふん、初めて見るE・HEROだが、油断はせんぞ!」

あ、そうか。『エアーマン』達を貰ったのは万丈目がここから出て行った後だったわけ。

どうでも良いけど、このカードを出す度に三沢が何かしら反応するのは何故だろう

か。

「バトルだ！ 『エアーマン』で『仮面竜』を攻撃！ “エア・ラッシュ”！」

風のヒーローが飛び上がり、翼に装着されたプロペラで巻き起こした突風でドラゴンを吹き飛ばした。

「くっ！ だがこの瞬間、『仮面竜』の効果発動！ こいつが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを1体特殊召喚できる！」

仮面竜（効果モンスター）

星3

炎属性／ドラゴン族

ATK 1400 / DEF 1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。

「俺は『アームド・ドラゴンLV3』を特殊召喚！」

アームド・ドラゴンLV3：ATK 1200

やっぱり効果持ちか!

万丈目が出したオレンジ色の、金属で体の一部を守っている龍……。ワクワクするぜ、どんな効果を持っているんだろうな!

「俺はカードを1枚セットして、ターンエンドだ」

十代：LP 4000

手札：5枚（内1枚は『E・HERO バブルマン』）  
フィールド

：E・HERO エアーマン（ATK 1800）

：伏せカード1枚

「行くぞ、俺のターン! ドロー! スタンバイフェイズに『アームド・ドラゴンLV3』の効果発動!」

「何?!」

「スタンバイフェイズ時にこのカードを場から墓地に送る事で、このモンスターは進化する!」

アームド・ドラゴン LV3 (効果モンスター)

星3

風属性/ドラゴン族

ATK 1200 / DEF 900

自分のスタンバイフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、手札またはデッキから「アームド・ドラゴン LV5」1体を特殊召喚する。

「さあ、来い! 『アームド・ドラゴンLV5』!」

『グオオオオオオオオオオオツ!』

アームド・ドラゴンLV5: ATK 2400

「こ、攻撃力2400!?!」

——ベンチ



## SIDE : フイオ

交流戦もいよいよ大詰めの大將戦。以前この学校を去った万丈目君の出して来たモンスターはドラゴン。確かレベルモンスターという特別な区切りで、一定条件を満たせばどんどん強くなるモンスターだったはず。

「ねえ、黎。『アームド・ドラゴン』ってどんな効果?」

わたしはあのモンスターの効果が知りたくて、隣にいるはずの友人に声をかける。

「……あれ、黎?」

ところがいると思ったはずの彼がいない。いつの間にか隣の席は空っぽだった。

一体どこに行っただろうか?

『主殿なら、野暮用とか言っただけかへ行ってしまったぞ』

わたしの疑問に答えてくれたのは半実体化した、彼の精霊の桜さん。ピンクのポニテにドレスと鎧を混ぜたような服、背中には盾を、腰には剣を下げている。

ちなみに半実体化の状態だと幽霊っぽい。

「野暮用?」

『うむ。まあトイレにでも行ったのだろう。主殿も大概デュエル好きだからな、この試

合に興味が無いとは思えん。戻って来なくともどこかで見ていると思うぞ』

「思うぞって……、君は彼の護衛だろう？ 傍にいないと良いのかい？」

『構わん。フレイが一緒だ』

なぬ？

『主殿はもちろん、フレイもまた強いからな。厄介事が起きても対処できるだろうし、もし無理でも私が異変に気付く』

「……フレイって、そんな強いのか？」

『何だ、知らんのか？ あいつのデュエルの腕も武術の腕も、ハッキリ言えば私以上だぞ？』

……マジ？

『大マジだ』

S I D E : 十代

レベルモンスター……、しまった、黎の部屋で“LV”って書いてあるカードを見た事あったのに、すっかり忘れてたぜ。

小さいオレンジの竜は、今や巨大な赤いドラゴン。顎や背中、腕とあつちこつちを金

属で覆って武装してる。

「行くぞ、十代! バトル! 『アームド・ドラゴンLV5』で『エアーマン』に攻撃!

アームド・バスター!」

「ぐあっ!」

十代 : LP 4000 ↓ 3400

ドラゴンパンチで俺の竜巻のヒーローが倒され、爆発。その熱風で俺のライフが削られた。

やるな、万丈目……。だがこつちだつてタダじゃやられないぜ! ヒーローの戦う意思は受け継がれるんだ!

「リバースカード、オープン! 『ヒーロー・シグナル』! 俺の場のモンスターが戦闘で破壊された時、デッキからレベル4以下のE・HEROを特殊召喚できる! 来い、

『E・HERO クレイマン』!」

『トアツ!』

E・HERO クレイマン : DEF 2000

天井に映し出されるHの文字。そこから岩のように固くて四角いボディの、大地のヒーローが登場する。

2番手頼むぜ、『クレイマン』！ お前の守備力なら簡単にはやられないぜ！

ヒーロー・シグナル

【通常罠】

自分フィールド上のモンスターが戦闘によつて破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター体を特殊召喚する。

万丈目の場にはもう攻撃できるモンスターはいない。このまま次のターンで反撃……。

「アマいぞ、十代！ 手札から永続魔法『武装魔法』アームド・ドラゴン・ライトニング『武装竜の雷霆』を発動！ このカードは自分の『アームド・ドラゴン』モンスターが効果で破壊される場合、身代わりになる！」  
「へえ、強力なドラゴンを更に守るカードか！」

「まだまだ、『武装竜の震霆』の更なる効果！ このカードは1ターンに1度、自分の「アームド・ドラゴン」の攻撃力を自身のレベル×100アップさせるか、墓地からそれよりレベルの低い「アームド・ドラゴン」を手札に戻す！ 俺は墓地から『アームド・ドラゴンLV3』を手札に戻す効果を発動する！」

アームド・ドラゴン・ライトニング  
武装竜の震霆

【永続魔法】

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 自分フィールドの「アームド・ドラゴン」モンスター1体を対象とし、以下の効果から1つを選択して発動できる。

● そのモンスターの攻撃力は、そのモンスターのレベル×100アップする。

● そのモンスターのレベル以下のレベルを持つ「アームド・ドラゴン」モンスター1体を自分の墓地から選んで手札に加える。

(2) : 自分フィールドの「アームド・ドラゴン」モンスターが効果で破壊される場合、代わりにこのカードを墓地へ送る事ができる。

「そして『アームド・ドラゴンLV5』の効果発動！ 手札のモンスター1体を捨てて、それ以下の攻撃力を持った相手モンスター1体を破壊する！」

「何?！」

「手札の攻撃力1200の『LV3』を墓地に送り、『クレイマン』を破壊だ！ ㊦  
トロイ・パイル”！」

背中から無数のミサイルが射出され、一瞬で俺のモンスターを爆発で吹き飛ばした。  
悪い、『クレイマン』……。

アームド・ドラゴン LV5 (効果モンスター)

星5

風属性／ドラゴン族

ATK 2400 / DEF 1700

手札からモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊したターンのエンドフェイズ時、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、手札またはデッキから「アームド・ドラゴン LV7」1体を特殊召喚する。

「カードを1枚セット!。そしてモンスターを戦闘破壊したターンのエンドフェイズ時、『アームド・ドラゴンLV5』は更なる進化を遂げる!。現れる、『アームド・ドラゴンLV7』!」

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ!』

アームド・ドラゴン LV7 (効果モンスター)

星7

風属性/ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 1000

このカードは通常召喚できない。

「アームド・ドラゴン LV5」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。

手札からモンスター1体を墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力以下の攻撃力を持つ、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

アームド・ドラゴンLV7 : ATK 2800

「こ、攻撃力2800だって!？」

攻撃力をアップする効果を使わなかったのは、捨てるカードを確保するためだけじゃなく、『LV5』がこのターンで消滅するためでもあったのか！

「ターンエンド！」

準：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：アームド・ドラゴンLV7（ATK 2800）

：伏せカード1枚、武装竜の震霆（永続魔法）

「俺のターン、ドロロー！」

やっぱ強いな、万丈目は……。

俺の場が空っぽになっちまった。でも、そう簡単に負けるつもりは無いぜ！

「魔法カード『テイク・オーバー5』を発動！ デッキの上からカードを5枚墓地に送る

！ 次の俺のターンに墓地のこのカードを除外すれば、ドロローフェイズに2枚ドロローで

きるー！」



テイク・オーバー5 (アニメオリジナル・自己解釈効果)

【通常魔法】

自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送る。

発動してから次の自分のターンのドローフェイズ時、墓地に存在するこのカードを外する事で、デッキからカードを1枚ドローできる。

「テイク・オーバー5」は1ターンに1度しか発動できない。

さて、『テイク・オーバー5』で墓地に送られたカードは……。

『E・HERO ブレイズマン』

『攻撃の無力化』

『フレンドツグ』

『E・HERO ネクロダークマン』

『E・HERO スパークマン』

お、良いカードが落ちてくれた!

「やはり、キーカードを引き当てるそのドロー力とドローの連打は脅威だな……」

「へへ、そいつは黎にも言われたぜ」

いざって時のドロローの強さは無視できない程強いつて、黎は言っていた。俺自身はよく分からないけれど、その注意を怠るヤツは絶対に負けるとも。

……でもそれって、こういう墓地肥しってヤツにも関係するんだらうか？

まあ、それはさて置き。

「俺は墓地に送られた『ネクロダークマン』の効果発動！ このカードが墓地に居る時、1度だけ上級E・HEROをリリース無しで召喚できる！ 行くぜ、『E・HERO エッジマン』を召喚！」

『ヌーン！』

E・HERO エッジマン：ATK 2600

墓地の赤い死を司るヒーローから力を借り、現れる金色の刃の戦士。

こいつが、俺のデッキの中では融合せずに出せる1番強いモンスターだ。

E・HERO ネクロダークマン（効果モンスター）

星5

闇属性／戦士族

ATK 1600 / DEF 1800

このカードが墓地に存在する限り1度だけ、自分はレベル5以上の「E・HERO」と名のついたモンスター1体をリリースなしで召喚する事ができる。

E・HERO エッジマン (効果モンスター)

星7

地属性 / 戦士族

ATK 2600 / DEF 1800

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「フーン! 攻撃力は俺様の『アームド・ドラゴンLV7』の方が上だぞ」

「なら上げるだけさ! 手札から魔法カード『H-ヒートハート』を発動! 『エッジマン』の攻撃力を500ポイントアップ! 更に貫通能力も与えるけど……、元々こいつには貫通効果があるから関係無いな」

E・HERO エッジマン : ATK 2600 ↓ 3100

H―ヒートハート

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

そのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

この効果は発動ターンのエンドフェイズまで続く。

「攻撃力が『アームド・ドラゴン』を上回っただど!?!」

行くぜ!

「バトルだ! 『エッジマン』で『アームド・ドラゴンLV7』を攻撃!     //     パワー・エツ

ジ・アタック!」

「ぐあああつ!」

準：LP   4000↓3700

おっしやあ、決まった!

「まだだ! まだ俺は負けてないぞ、十代!」

「おうとも! カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

十代 : LP 3400

手札 : 3枚 (内1枚は『E・HERO バブルマン』)

フィールド

: E・HERO エッジマン (ATK 2600)

: 伏せカード1枚

「俺様のターン、ドロロー! 俺は手札から魔法カード『レベル調整』を発動! 相手は2枚ドロローするが、自分の墓地から召喚条件を無視してLVモンスターを特殊召喚する!」

「お、2枚もドロローさせてくれるのか? それじゃ遠慮無く引かせてもらおうぜ!」

「その余裕も今の内だ! 復活しろ、『アームド・ドラゴンLV7』!」

レベル調整

## 【通常魔法】

相手はカードを2枚ドローする。

自分の墓地に存在する「LV」を持つモンスター1体を、召喚条件を無視して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン攻撃できず効果を発動及び適用する事もできない。

「本来なら『アームド・ドラゴンLV7』はレベルアップ以外で特殊召喚できないが、召喚条件を無視できるのなら話は別だ。

……もつとも、この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できず、効果も使えないがな」

え？ それじゃ完璧にお前が損してるじゃねーか。

自分でドローの力が脅威なんて言っておきながら、どうしちゃったんだよ？

「慌てるな、十代。確かに攻撃も効果も使えないが、こうする事はできる。『アームド・ドラゴンLV7』をリリース！ 現れる、『アームド・ドラゴンLV10』！」

光の中へと消える、鋼鉄の装甲のドラゴン。入れ替わりに現れた龍は全身がシルバーに輝いていた。赤い皮膚が全く見えない程に全身を武装しているらしい。

だが、俺はそれよりも1つの事を言いたかった。

「でっけえ……」

そう、デカイ。以前カイザーの『サイバー・エンド・ドラゴン』や黎の『ドーハスーラ』を見た事があるけど、こいつはそいつらと同じぐらいのサイズがある。

アームド・ドラゴンLV10 : ATK 3000

そして攻撃力も申し分無い。あの有名な『青眼の白竜』と互角だなんて……!

「ここで永續魔法『武装竜の雷霆』の効果発動! 墓地から『LV3』を手札に戻す!」  
「やっぱ進化前と同じ効果を持つてるよな! けど『エツジマン』の攻撃力は2600、1200しかない『アームド・ドラゴンLV3』を捨てても破壊できないぜ!」

「そいつはどうかかな? こいつの恐ろしき、たっぷり味わうが良い! 『アームド・ドラゴンLV10』の効果発動! 1ターンに1度、手札を1枚墓地に送る事で、相手の表側表示モンスターを全て破壊する!」

「何?!」

アームド・ドラゴン LV10 (効果モンスター)

星10

風属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2000

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「アームド・ドラゴン LV7」1体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。

手札を1枚墓地へ送る事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「『ジャイアント・ジエノサイド・カッター』！」

「うわあっ!？」

一瞬で微塵切りになる金色のヒーロー。

俺の上級モンスターが、こんな一瞬で……!？

「まだだ! 魔法カード『死者蘇生』を発動! 墓地から『アームド・ドラゴンLV5』を特殊召喚!」

アームド・ドラゴンLV5 : ATK 2400



万丈目の場に現れる赤い鱗の武装したドラゴン。

これで2体の攻撃を受けたら俺の負けになっちまう!

「これで俺様の勝ちだ! バトル! 『アームド・ドラゴンLV5』で十代、貴様にダイレクトアタック!」

「ぐあああああつ!」

十代:LP 3400↓1000

「止めだあ! 行け、『アームド・ドラゴンLV10』! ビッグ・アームド・パニツ  
シャー!」

——観客席

SIDE:無し

大将同士の決戦。

準による止めの一撃が今まさに放たれ、凄まじい衝撃波が十代を襲う。

ノース校の校長、一ノ瀬が薄い顎髭を擦りながら隣に座るアカデミア校長の鮫島に笑いかける。

「ふふ、どうやら今年はこちらの勝ちのようですね。賞品はこれで私の物……!」

それに対し鮫島は焦りを感じさせる事も無く答えた。

「果たして、それはどうでしょう? 何せ彼は神の引きを持つ少年ですから」

それに心優しい鬼もついていきますね、と心の中で付け加えておく。

「負け惜しみを……、彼のライフは今の攻撃で0ですよ」

「本当にそう思われるのなら、あれをご覧下さい」

「あれ……?」

十代：LP 1000↓4000

煙が晴れた時、そこにはライフが初期値に戻っていたの十代がいた。

場には表側表示で1枚の罫カードが存在していた。

『何、だと……っ!?!』

『残念だったな、万丈目。攻撃に合わせて俺は『ドレインシールド』を発動していたのさ』

!」

ドレインシールド

【通常畏】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

攻撃モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分だけ自分のライフを回復する。

「ほら、彼は負けてないでしょう?」

「ぐぬぬぬぬ……っ!」

とは言え、今の一撃を凌いただけに過ぎない。

早々にあの2体のドラゴンを倒さない限り、十代の勝利は難しいだろう。

「その調子だ、十代君! 勝て! 勝つのだ!」

だから鮫島は応援する。彼が勝つという事を心の底から信じて。

——デュエルリング

## SIDE：十代

取り敢えず今の攻撃は防げたけど……、次の攻撃を食らったらアウトだな。早く融合を手札に加えないと、上手くデッキが動かねえ！

「チツ、カードをセット！ ターンエンド！」

準：LP 3700

手札：1枚

フィールド

：アームド・ドラゴンLV5（ATK 2400）、アームド・ドラゴンLV10（A

TK 3000）

：伏せカード1枚、武装竜の雷霆（永続魔法）

「俺のターン、ドロー！ ここで墓地の『テイク・オーバー5』を除外し、もう1枚ドロー！」

「このドローで手札は7枚。まだ『融合』は来ない。」

「俺は『E・HERO バブルマン』を召喚！ 『バブルマン』が召喚された時、場に他

のカードが無いため2枚ドロー！」

よし来た!

「フィールド魔法『フュージョン・ゲート』を発動! このカードが存在する事で、『融合』無しで融合召喚が可能となる!」

「くっ! ここですそのカードを引くか!」

フュージョン・ゲート

【フィールド魔法】

このカードがフィールド上に存在する限り、ターンプレイヤーは手札・自分フィールド上から融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、その融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

「更に魔法カード『オーバーソウル』! 墓地から『スパークマン』を特殊召喚!」  
『トアツ!』

〇ーオーバーソウル

## 【通常魔法】

自分の墓地から「E・HERO」と名のついた通常モンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。

E・HERO スパークマン：ATK 1600

「行くぞ万丈目！ フィールド魔法の効果により、俺は場の『バブルマン』と『スパークマン』、手札の『フェザーマン』を融合！ 吹き荒れる嵐！ 来い、『E・HERO』テンペスター！」

『ヌウウウ、トオオオッ！』

E・HERO テンペスター（融合・効果モンスター）

星8

風属性／戦士族

ATK 2800／DEF 2800

「E・HERO フェザーマン」＋「E・HERO スパークマン」＋「E・HERO バブルマン」

このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカード以外の自分フィールド上のカード1枚を墓地に送り、自分フィールド上のモンスター1体を選択する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、選択したモンスターは戦闘によつては破壊されない。(ダメージ計算は適用する)

E・HERO テンペスター：ATK 2800

「攻撃力2800だと!？」

「まだまだあ! 更にもう1度融合するぜ! 今度の素材は手札の『ライオウ』と『ワイルドマン』だ!」

「何!? そんなモンスターを素材にするE・HEROがいるハズが!？」

へへ、確かに。以前の俺ならそうだった。でも今は、黎から貰ったカードで何倍にも強くなってるんだぜ!

「光輝け! 『E・HERO Theシャイニング』!」

E・HERO Theシャイニング：ATK 2600

どうだ！　これが俺と黎の絆の証、俺の新しいヒーローだ！

「こんなモンスターがいたとはな……。だがどちらも『アームド・ドラゴンLV10』に攻撃力は及ばない！　次のターンで消し去ってくれるわ！」

「それはどうかな！　『Theシャイニング』は除外されている自分のE・HEROの数だけ攻撃力を300ポイントアップさせる効果がある！」

E・HERO　Theシャイニング（融合・効果モンスター）

星8

光属性／戦士族

ATK　2600／DEF　2100

「E・HERO」と名のついたモンスター＋光属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードの攻撃力は、ゲームから除外されている自分の「E・HERO」と名のついたモンスターの数×300ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、ゲームから除外されている自分の「E・HERO」と名のついたモンスターを2体まで選択し、手札に加える事ができる。



「今除外されているのは『フェザーマン』、『バブルマン』、『スパークマン』、『ワイルドマン』！ よって攻撃力は1200ポイントアップする！」

E・HERO Theシャイニング：ATK 2600↓3800

「こ、攻撃力3800だとお?！」

「バトルだあ! 『Theシャイニング』で『アームド・ドラゴンLV10』を攻撃!」  
 // オプティカル・ストーム!」

輝く閃光。どこまでも鋭く貫くフラッシュの刃が巨大な鋼の龍を滅ぼす。

「ぐわああああああああああああああああああああああああああああああ!」

準：LP 3700↓2900

「まだまだあ! 更に『テンペスター』で『アームド・ドラゴンLV5』を攻撃!」  
 // オス・テンペスト!」  
 // カ

「ぐおおおおおおおおつ!」

準：LP 2900↓2500

続いて翼を羽ばたかせた嵐のヒーローが銃で残りのドラゴンも吹き飛ばす。

よっしゃあ、これで全滅だ！

「へへ！ どうだ万丈目！」

「ああ、効いたさ……。凄くな……」

ん？ 万丈目の様子が何か変だ……。

「兄弟はいるか、十代。兄弟みたいな付き合いのある奴でもいい」

「いや、いないけど……」

何だ？ 何が言いたいんだ？

「……十代、俺はな、ずっと2人の兄と比べられていた。何をするにしても兄より劣っているときれてきた。そんな俺の気持ち分かるか？ こういう、派手な場で……、名譽を挽回しなきゃいけない重圧が！」

「ま、万丈目……？」

「俺は！ 自分の力で！ 証明しなければならんだ！ 俺は決して！ 落ちこぼれでも！ 出来損ないでもないという事を！ 兄さん達の力を借りずにだあ！」

「万丈目……」

「準……」

『『サンダー……』』

俺には何故か、その言葉がとても重く聞こえた。それはきつとアイツの本心だったからだと思う。

万丈目の後ろで静かに見守っていたあいつの兄達も、客席で見ていた全ての観客にも今の言葉には何か思う所があったのかも知れない。

「行くぞ！ 罨カード発動！ 『誕生の竜骨船』！<sup>シツプ、オブ、ドラゴンボーン</sup> 自分の場のレベル5以上のドラゴン族モンスターが2体以上戦闘で破壊されたターンのバトルフェイズ時に発動できる！ 破壊された中でもっともレベルの低いモンスター2体を選び、そのレベル合計の半分以下のレベルを持ったドラゴン族モンスターを1体、俺の墓地から召喚条件を無視して特殊召喚する！」

誕生の竜骨船（オリジナル）

【通常罨】

自分の場のレベル5以上のドラゴン族モンスターが相手の攻撃によって2体以上破壊されたターンのバトルフェイズに発動できる。

破壊されたドラゴン族モンスターの中でもっともレベルの低い2体を選択し、その2体のレベルの合計の半分以下のレベルを持つドラゴン族モンスターを1体、自分の墓地から召喚条件を無視して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはリリースできず、エクストラデッキからモンスターを特殊召喚するための素材にもできない。

「破壊されたモンスターのレベル合計値は15！ よってレベル7の『アームド・ドラゴ

ンLV7』を特殊召喚!」

『グガアアアアアアアッ!』

アームド・ドラゴンLV7 : ATK 2800

「ま、また出やがった!」

クソ、手札は後3枚……!」

ここはこいつで防ぐしか無い。

「俺はカードを1枚セットして、ターンエンドだ!」

十代 : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

・E・HERO テンペスター(ATK 2800)、E・HERO Theシャイニ  
ング(ATK 3800)

・伏せカード1枚、フュージョン・ゲート(フィールド魔法)

万丈目のモンスターは効果で俺のモンスターを破壊して来る。いくら『The シャイニング』の攻撃力が3800もあるとはいえ、油断はできねえ……。

「俺のターン、ドロー！」 『天使の施し』を発動！ デッキから3枚ドロー！ そして手札の『武装竜の霹靂』と『シルフィード』を捨てる！」

アームド・ドラゴン・フラッシュ  
武装竜の霹靂

### 【速攻魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：デッキからレベル3の「アームド・ドラゴン」モンスター1体を守備表示で特殊召喚する。

手札を交換した、来るか！

「魔法カード『アームズ・リチャージャー』を発動！ 手札を1枚捨てて、墓地の『アームド・ドラゴン』を手札に戻す！ そして新たに1枚ドローする！」

アームズ・リチャージャー（オリジナル）

### 【通常魔法】

(1) : 手札を1枚捨てて発動する。

墓地から「アームド・ドラゴン」モンスターを手札に戻し、1枚ドロウする。

このターン、自分は通常召喚に加えて1度だけ「アームド・ドラゴン」を召喚できる。

(2) : 自分のターンのメインフェイズに、墓地からこのカードと風属性・ドラゴン族モンスター1体を除外して発動できる。

デッキから「アームド・ドラゴン」魔法・罠カードを1枚手札に加える。

この効果はこのカードが墓地に送られたターンには発動できない。

「俺は『L V 1 0』を回収し、1枚ドロウ！ む……」

『どーもー、アニキー。手札にやって来ちゃったわくん』

「何でお前が入ってるんだ……。お前をデッキに入れた覚えは無いぞ……!」

万丈目がドロウをしたら、首の後ろ辺りから黄色い生物が出て来た。

赤に白の水玉パンツをはいた……。一昔前のカタツムリみたいなエイリアンっぽいヤツだ。

あれってもしかして……。

「万丈目、その肩のトコにいるのって……」

「知らん」

「え、でも、お前今会話して……」

「知らんと言っている！」

『アニキ、そんな連れない事言わないでよ？ オイラの兄弟、ひよつとしたらこの島にいるかも知れないし、今度探してよお〜？』

「耳元で煩いわっ！」

仲が悪いのだろうか？

隣にいた相棒のハネクリボーとアイコンタクトで会話する。

「(あれって、やっぱ精霊だよな?)」

『クリクリ〜』

「(何か因縁でもあるのかな？ あんまりあの黄色いヤツの事、よく思っていないみてえだけど……)」

『クリイ〜、クリリリ〜！』

「(え？ ケンカする程仲が良い？ ああ、なるほど……)」

取り敢えず、今はあつちのターンなので、進めてもらわないと話にならない。

「万丈目〜。立て込んでいるトコ悪いけど、ターン進めてくれねえか？」

「ええい、分かっている！ お前は引つ込んでろ！」

『あー、ちよつとアニキ〜!』



「俺は『アームド・ドラゴンLV7』をリリースし、『アームド・ドラゴンLV10』を特殊召喚！」

アームド・ドラゴンLV10：ATK 3000

またそいつかよ！

さつき倒したばかりだったのに、もう戻って来やがった！

「カードを伏せる！　そしてモンスター効果発動！　手札を1枚墓地に送り……」

『あ、ちよつとアニキ、手札ってオイラしか……。オイラ手札コスト!?!』

「十代、貴様のモンスターを2体とも消し去ってくれ！　『ジャイアント・ジェノサイ

ド・カッター』！」

『ア〜レ〜!?!』

「うわあつ！」

再び消し飛ばす俺のモンスター達。

だが、こつちだつてタダじゃやられねえぜ！

「この瞬間、『Theシャイニング』の効果発動！　除外されている2体のE・HEROを手札に加える！　俺は『スパークマン』と『フェザーマン』を選択するぜ！」

「だが、貴様の場合はガラ空き！ 『アームド・ドラゴンLV10』の攻撃は防げまい！ 永続魔法『武装竜の雷霆』の効果発動！ 今度は『アームド・ドラゴンLV10』は自身のレベル×100ポイント攻撃力をアップさせる効果を使う！」

アームド・ドラゴンLV10：3000↓4000

「攻撃力4000……！」

「まだだ！ 更に墓地に存在する『嵐征竜―テンペスト』の効果発動！ 1ターンの1度、手札・墓地の風属性かドラゴン族のモンスターを2体除外し、このカードを特殊召喚できる！ ただし相手ターンの終わりに手札に戻る！」

いつの間に……、いやさっきの『アームズ・リチャージャー』で捨てたカードか！

万丈目の墓地から『仮面竜』と『シルフィード』の2体が除外され、暴風をまとったドラゴンが出現する。これで奴の場に大型モンスターが2体並んだって事か……！

嵐征竜―テンペスト：ATK 2400

「これでトドメだ、十代！ 『アームド・ドラゴンLV10』でダイレクトアタック！」

「ビッグ・アームド・パニツシャーグ！」

迫り来る武装竜の鉄拳を前に、俺はデュエルディスクのボタンを素早く押す。

なんの、まだまだ勝負はこれからだぜ!

「罨カード『ヒーロー見参』、発動! 俺の手札から相手は1枚選び、それがモンスターなら特殊召喚できる!」

俺の手札は4枚、この内2枚はさつき手札に戻したモンスター達。

さあ、選べよ万丈目!

「小癪な! ならばこつちから見て一番右だ!」

「このカードは……、こいつだ! 来い、『ヒーロー・キッズ』!」

「ヤツ!」

あいつが選んだのは宇宙服を着た子供のモンスター。

けど、こいつはこの状況じゃあ最適なモンスターだぜ!

「この瞬間、『ヒーロー・キッズ』の効果発動! このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから『ヒーロー・キッズ』を更に特殊召喚する!」

「タツ!」

「ハッ!」

ヒーロー・キッズ：DEF 600

ヒーロー・キッズ：DEF 600

ヒーロー・キッズ：DEF 600

ヒーロー・キッズ（効果モンスター）

星2

地属性／戦士族

ATK 300／DEF 600

このカードが特殊召喚に成功した時、デッキから「ヒーロー・キッズ」を任意の枚数特殊召喚する事ができる。

「邪魔だ、どけ雑魚共ッ！」

隊列を組み、俺の前に防衛ラインが敷かれる。頼もしいヒーローの卵達がドラゴンブレスで吹き飛ばすが、これで俺のライフは守られた。つしや、まだ負けてねえ！

「どうだ万丈目！ こんなワクワクするデュエル、終わらせるなんて勿体無いだろ！」

これであいつの手札は0枚。もう何もして来ないはずだ！

「くっ………！ これでターンエンドだ！」

準：LP 2500

手札：0枚

フィールド

：アームド・ドラゴンLV10（ATK 4000）、嵐征竜―テンペスト（ATK 2400）

：伏せカード1枚、武装竜の震霆（永続魔法）

「俺のターン、ドロー！」

改めて相手のモンスターを見る。

攻撃力4000のレベル10モンスター。『アームド・ドラゴン・ライトニング武装竜の震霆』の効果でアップさせた

攻撃力は、どうやら無期限に上がったままらしい。

もう1体は攻撃力2400のレベル7モンスター。何もしなければこのターンの終わりにあいつの手札に戻る。けどそれは『アームド・ドラゴンLV10』の効果で捨てるカードになるって事だ。出来ればここで叩きたい。

『万丈目すげえな』

『落ちこぼれたって聞いたが』

『ドロップアウトに耐えられなくて逃げたんじゃねえの?』

『武者修行だったのかも知れませんがね』

『これはマジで本校負けるかもな……!』

観客の皆も、この状況の悪さを把握している。

確かに俺は今、押されている。けれどそこを引つ繰り返すのがヒーローの役目ってモ

ンさー!

「マジックカード『融合』を発動!」

「とうとう来たか!」

「俺は手札の『E・HERO リキッドマン』と『フェザーマン』を融合! 風には風、

嵐には嵐だ! 現れろ、『E・HERO Great TORNADO』!」

『ヌウアツ!』

E・HERO Great TORNADO: ATK 2800

万丈目のカードはこれまでにないくらいパワーアップしている。

あれに対抗するには、俺も黎から譲られた新しいヒーローで戦うつきやない! 効果

で破壊できないのなら、バトルで叩くまで!

「また新しいヒーローか!」

「融合召喚に成功した事で『Great TORNADO』の、そして融合素材になった事で『リキッドマン』のモンスター効果発動! 『リキッドマン』が融合素材になった時、デッキから2枚ドロウして手札を1枚捨てる! そして『Great TORNADO』の効果でお前のモンスターの攻撃力と守備力を全て半分にするぜ!」

「何っ!?!」

「行けえっ、タウン・バースト!」

アームド・ドラゴンLV10 : ATK 4000 ↓ 2000

嵐征竜―テンペスト : ATK 2400 ↓ 1200

建物を吹き飛ばす程の風に煽られ、敵モンスターが力を落とす。

これでどっちのモンスターも倒せる!

「そして俺は『E・HERO スパークマン』を召喚!」

『トオツ!』

E・HERO スパークマン : ATK 1600

このターンじゃまだ倒せないけれど、『アームド・ドラゴンLV10』は次のターンに攻撃力が3000になり、『テンペスト』は手札に戻って捨てるためのカードになっちゃう。それは避けないと負ける！

「バトルだ！ 『スパークマン』で『テンペスト』を攻撃！ スパーク・フラッシュ」

！」

「ぐうううっ！」

準：LP 2500↓2100

「続けて『Great TORNADO』で『アームド・ドラゴンLV10』を攻撃！

“スーパーセル”！」

「があああああっ!？」

準：LP 2100↓1300

強烈な電撃と突風で万丈目のドラゴン達を吹き飛ばし、粉碎していく。ライフも12



00ポイントも削った、これで一気に勝負の流れはこつちに傾いたぜ!

「カードをセット、これでターンエンドだ!」

十代 : LP 4000

手札 : 0枚

フィールド

・E・HERO Great TORNADO (ATK 2800)、E・HERO  
スパークマン (ATK 1600)、ヒーロー・キッズ (DEF 600)

・伏せカード1枚、フュージョン・ゲート (フィールド魔法)

「ぜえ、ぜえ……」

「大丈夫か、万丈目」

「当然、だつ! まだ、俺は……、俺は負けてなんかいない! 俺のターン、ドロー!

『強欲な壺』を発動し、更に2枚ドロー!

リバースカード、オープン! 永続罫『アーミング・スケイル』! 自分の墓地から

召喚条件を無視して『アームド・ドラゴン』を特殊召喚する! 蘇れ、『アームド・ドラ

ゴンLV10』!

「げっ、またかよ!？」

アームド・ドラゴンLV10：ATK 3000

「安心しろ、十代。この効果で特殊召喚された場合、破壊効果は発動できない。つまり貴様のモンスターは効果で破壊できないって事だ」

アーミング・スケイル（オリジナル）

【永続罫】

(1)：自分の墓地から「アームド・ドラゴン」モンスター1体を選択し、召喚条件を無視して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターの「相手モンスターを破壊する」効果は発動できない。

このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは破壊される。

(2)：このカードが風属性・ドラゴン族モンスターの効果を発動するために手札から墓地に送られた場合に発動する。

墓地のこのカードを次の自分のスタンバイフェイズに自分フィールドにセットする。

この効果でセットされたこのカードがフィールドを離れた時、ゲームから裏側表示で除外される。

ただ単にパワー欲しさで呼び戻すワケが無い！　ここから万丈目が更に巻き返す筈！

「墓地の『アームズ・リチャージャー』の効果発動！　このカードと墓地の『テンペスト』を除外し、デッキから『武装竜の襲雷』を手札に加える！　更に『テンペスト』がゲームから除外された時、デッキから風属性・ドラゴン族モンスターを1体手札に加える！　俺が選ぶのは『パイル・アームド・ドラゴン』だ！」

い、一気に手札が4枚に増えた!?　あの台風ドラゴン、そんな効果もあったのか！　何てパワーだ、「アームド・ドラゴン」デッキ！

「『武装竜の襲雷』、発動！　ダイレクトアタックと召喚条件を無効にして、自分フィールドの『アームド・ドラゴン』と同じモンスターを特殊召喚できる！　デッキから2体目の『アームド・ドラゴンLV10』を特殊召喚！」

『ガアアアッ!』

「まだまだ！　続けて手札の『鎧竜―アームド・ドラゴン―』をコストに、『パイル・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」

『グルルルッ!』

「終わらんと、更に永続魔法『武装竜の震霆』の効果! 墓地から今捨てた『鎧竜—アームド・ドラゴン—』を手札に戻し、そのまま召喚!」

『ゴオオオッ!』

アームド・ドラゴンLV10	: ATK	3000
パイル・アームド・ドラゴン	: ATK	2800
鎧竜—アームド・ドラゴン—	: ATK	1900

ガラ空きの状態から、一気にモンスターが4体! 全部ゴツゴツした金属鎧のドラゴンの軍団!

スゲエ! スツゲエぜ万丈目!

嵐征竜—テンペスト(効果モンスター)

星7

風属性/ドラゴン族

ATK 2400 / DEF 2200

このカード名の(1)～(4)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

(1) : 手札からこのカードと風属性モンスター1体を墓地へ捨てて発動できる。

デッキからドラゴン族モンスター1体を手札に加える。

(2) : ドラゴン族か風属性のモンスターを自分の手札・墓地から2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

(3) : このカードが特殊召喚されている場合、相手エンドフェイズに発動する。

このカードを手札に戻す。

(4) : このカードが除外された場合に発動できる。

デッキからドラゴン族・風属性モンスター1体を手札に加える。

アームド・ドラゴン・ブリッツ  
武装竜の襲雷

### 【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン、自分はドラゴン族モンスターしか特殊召喚できない。

(1) : 自分フィールドの「アームド・ドラゴン」モンスター1体を対象として発動でき

る。

その同名モンスター1体を自分のデッキ・墓地から選び、手札に加えるか召喚条件を無視して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは直接攻撃できない。

パイル・アームド・ドラゴン（効果モンスター）

星7

風属性／ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 1000

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：風属性またはレベル7以上の、このカード以外のドラゴン族モンスター1体を手札から墓地へ送って発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

(2)：手札・デッキから「パイル・アームド・ドラゴン」以外の「アームド・ドラゴン」モンスター1体を墓地へ送り、自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

このターン、自分はモンスター1体でしか攻撃できず、対象のモンスターの攻撃力は

墓地へ送ったモンスターのレベル×300アップする。

鎧竜—アームド・ドラゴン— (効果モンスター)

星4

風属性/ドラゴン族

ATK 1900 / DEF 1400

(1) : このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時に発動できる。

手札・デッキから「鎧竜—アームド・ドラゴン—」以外のレベル5以下のドラゴン族・風属性モンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン直接攻撃できない。

マジでスゲエ……。モンスターがいない状態でターンが始まった筈のフィールドが、4体のドラゴンで埋まっている！これがアイツの本気、アイツの全力なんだ！こんな万丈目と戦えるなんて、俺は本当に嬉しいぜ！

「長かったデュエルもこれで終わりだ、十代！バトル！まずは『鎧竜—アームド・ドラゴン—』で『スパークマン』を攻撃！ドラゴンズ・クロウ！」

「ぐつ、『スパークマン』！」

十代：LP 4000↓3700

銀の鎧をまとった赤いドラゴンの爪で、電光のヒーローが切り裂かれる。

砕け散った俺のモンスターは、万丈目のフィールドに光となって集まった。

「この瞬間、『鎧竜―アームド・ドラゴン―』の効果発動！ バトルでモンスターを破壊した事で、レベル5以下の風属性・ドラゴン族モンスターを特殊召喚できる！ 出でよ、

『スピア・ドラゴン―！』  
『グウウー！』

スピア・ドラゴン：ATK 1900

「このターン『スピア・ドラゴン』は直接攻撃できないが、問題は無い！ やれ、『ヒーロー・キッズ』を粉碎しろ！ ヽスピア・クラッシュユ―！」

鋭い鼻先（昆虫みたいに顎かも知れない）を持った青い龍が吐き出す水の柱。子供の姿のヒーローにそれは直撃し、デカい爆発が起きた。



十代：LP 3700↓2400

「何!? 俺のライフが減った!」

『スピア・ドラゴン』は守備モンスターを攻撃した時、貫通ダメージを相手に与える！  
そして『スピア・ドラゴン』はバトル終了時に守備表示になる！」

スピア・ドラゴン：ATK 1900↓DEF 0

2体の攻撃で俺のライフが1600も減らされた。しかもまだ3体攻撃が残ってるのに、俺のモンスターは1体しか残ってない！

「直接攻撃できない方の『アームド・ドラゴンLV10』で『Great TORNADO』を攻撃！ 消し飛ばせ！」

「ぐあああああつ！」

十代：LP 2400↓2200

これで俺のモンスターは全滅……ッ！  
なのにまだ万丈目のフィールドには、攻撃力

2800と3000のモンスターがいる！

『パイル・アームド・ドラゴン』でダイレクトアタック！  
// ハードクラッシュ・パイル  
ル”！」

「リバースカード、『リビングデッドの呼び声』発動！  
墓地から『フレンドツグ』を攻撃表示で特殊召喚する！」

フレンドツグ：ATK 800

追撃を防ぐため、伏せておいた罠カードを発動する。

黎が言うにはライフに糸目はあまりつけない方が良いらしい。終盤で1ポイントでも惜しいなら兎も角として、こういった自分のライフを大きく上回る敵が並んでいるなら「ダメージを削る」事より「ダメージを受けてでも次の手に繋げる」事を意識した方が良いんだそうだ。

「しぶとい！ どけエー！」

「うっ、ぐうっ！ だが『フレンドツグ』がバトルで破壊された事で、墓地から『融合』と『フェザーマン』を手札に戻す！」

十代：LP 2200↓200

フレンドツグ（効果モンスター）

星3

地属性／機械族

ATK 800 / DEF 1200

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地から「E・HERO」と名のついたカード1枚と「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

「無駄だ！ 『アームド・ドラゴンLV10』のダイレクトアタックで終わりにしてやる！ ビッグ・アームド・パニッシャー！」

『十代！』

『アニキ！』

『遊城君！』

『十代君！』

「これで終わりだあ！」

巨大なドラゴンの腕の一振りで発生した衝撃波が俺を襲って……。

十代：LP 200

俺のライフは無傷だった。

「何イ!?!」

「残念だったな、万丈目」

「バカな、何が起こった!?!」

へへ、『リキッドマン』で予めコイツを墓地に送っておいたのさ……!」

墓地から吐き出されたカードは、長い白髪が生えた黒い鎧武者のカード。墓地にいないと何の意味も無いカードだ。

「そ、そのカードは!」

『ネクロ・ガードナー』さ。こいつを除外して『LV10』の攻撃を無効にさせてもらったぜ!」

ネクロ・ガードナー（効果モンスター）

星3

闇属性／戦士族

ATK 600 / DEF 1300

相手ターン中に、墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

このターン、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「運の良い奴め……。だが逆転のチャンスはやらんぞ！ 俺は手札から魔法カード『アームド・オーガナイズ鉄龍の部隊編制』を発動！ 自分の場に『アームド・ドラゴン』がいる時、ドラゴン族モンスターを任意の数だけ守備表示にして効果を無効にする！ そして守備表示に変えた数だけ効果を得る！ 俺は3体のドラゴンを守備表示に変更！」

アームド・ドラゴンLV10 : ATK 3000 ↓ DEF 2000

パイル・アームド・ドラゴン : ATK 2800 ↓ DEF 1000

鎧竜―アームド・ドラゴン― : ATK 1900 ↓ DEF 1400

「3体を守備表示にした事で俺は3種類の効果を得る！ 次のターン、守備表示のドラゴン族モンスターは1度だけ戦闘破壊されない！ そして俺はライフを守備表示にしたモンスターのレベル×100回復し、デッキから『アームド・ドラゴン・サンダーボルト武装竜の万雷』だ！」

あつちが守備表示になったって事は、しっかりと破壊効果が使えない方を攻撃表示で残したな。倒されても万丈目は次のターンで立て直しやすい、抜け目が無いぜ。

そして守備表示になったモンスターレベルは4と7と10だから……、21か。

アームド・オーガナイズ  
鉄龍の部隊編制（オリジナル）

### 【通常魔法】

自分フィールドに「アームド・ドラゴン」モンスターが存在する時、この効果の発動と処理ができる。

(1)：自分フィールドのドラゴン族モンスターを任意の数だけ守備表示に変えて発動できる。

守備表示に変えた数だけ、以下の効果を得る。

この効果で守備表示になったモンスター、及びそれと同名モンスターの効果は次の自分のスタンバイフェイズまで無効となる。

●1体以上：次の相手ターン、自分のドラゴン族モンスターは1度だけ戦闘では破壊されない。

●2体以上：この効果で守備表示に変えたモンスターのレベルの合計×100LPを回復する。

- 3体以上: デッキから「アームド・ドラゴン」魔法・罠カードを1枚手札に加える。
- 4体以上: 相手フィールドの表側表示のカードを全て破壊する。

アームド・ドラゴン・サンダーボルト  
武装竜の万雷

【通常罠】

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。  
(1): 自分フィールドの「アームド・ドラゴン」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力は、そのモンスターのレベル以下のレベルを持つ自分の墓地の「アームド・ドラゴン」モンスターの種類×1000アップする。

このターン、そのモンスターが相手に与える戦闘ダメージは0になる。

(2): 墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の「アームド・ドラゴン」魔法カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを手札に加える。

準: LP 1300 ↓ 3400

「『武装竜の万雷』は、『アームド・ドラゴン』の攻撃力を墓地のそれ以下のレベルの『アームド・ドラゴン』の数×1000アップさせる！」

「万丈目の墓地には既に『LV3』、『LV5』、『LV7』がいる……！　　つて事は3000アップか!?!」

「これをセット！　　ターンエンドだ！」

準：LP　3400

手札：0枚

フィールド

・アームド・ドラゴンLV10 (ATK 3000)、アームド・ドラゴンLV10 (DEF 2000)、パイル・アームド・ドラゴン (DEF 1000)、鎧竜—アームド・ドラゴン— (DEF 1400)、スピア・ドラゴン (DEF 0)

・伏せカード1枚 (『武装竜の万雷』、武装竜の震霆 (永続魔法)、アーミング・スケイル (永続罠・攻撃表示の『アームド・ドラゴンLV10』に適用中)

「ハハ、本当にマジでスツゲエな万丈目！　　こんだけ多くのモンスターを従えて、ライフまで回復した！　　しかもその伏せたカードでパワーアップまで出来る！　　守備表示の



ドラゴンに攻撃しても意味も無いし、カード効果で破壊する事も出来ない! めっちゃ  
 凄じじゃねえか!」

「そうだ! これが俺の執念! 俺の決意だ! お前にこれを超えられるか!」

「やってみせるさ! 俺のターン……」

万丈目の戦陣は盤石、このターンで何とかしなければ俺の負けだ。

守備モンスターを出しても『スピア・ドラゴン』で貫通を受けるし、『アームド・ドラ  
 ゴンL V10』で吹き飛ばされる。『ハネクリボーL V10』もあの陣形には効かない。

だからこそワクワクする、ドキドキする! これを倒すカードを、俺は引きたい!

観客の皆はもう俺に勝ち目が無いみたいな顔をしてるけど、俺は諦めねえ! 俺は絶  
 対にサレンダーも諦めもしない!

さあ来い、逆転のカード! 俺の運命の1枚!

「ドローッ!」

……来たあ!

「魔法カード『HEROの遺産』、発動! 墓地から融合ヒーローを2体、エクストラデッ  
 キに戻して3枚ドローする!」

「チイツ! ヽヽヽでそんなカードを!」

## HEROの遺産

## 【通常魔法】

「HEROの遺産」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：「HERO」モンスターを融合素材とする融合モンスター2体を自分の墓地からエクストラデッキに戻して発動できる。

自分はデッキから3枚ドローする。

墓地から『Theシャイニング』と『Great TORNADO』をデッキに戻し、手札が2枚から5枚に増える。

ここからが本番だぜ、万丈目！

「準備完了、行くぜ！俺はライフポイントを半分払って『ヒーローアライブ』を発動！

デッキからレベル4以下の『E・HERO』を特殊召喚する！現れる、『E・HERO

O プリズムマー』！

『フンツ！』

『プリズマー』の効果発動！デッキからモンスターを墓地に送り、そのモンスターの姿を自分に写し取る！俺は『E・HERO バーストレディ』を選ぶ、『リフレクト・チェンジ』！

十代 : LP 2000 ↓ 1000

E・HERO プリズマー : ATK 1700

ヒーローアライブ

【通常魔法】

(1) : 自分フィールドに表側表示モンスターが存在しない場合、LPを半分払って発動できる。

デッキからレベル4以下の「E・HERO」モンスター1体を特殊召喚する。

E・HERO プリズマー (効果モンスター)

星4

光属性 / 戦士族

ATK 1700 / DEF 1100

(1) : 1ターンに1度、エクストラデッキの融合モンスター1体を相手に見せ、そのモンスターにカード名が記されている融合素材モンスター1体をデッキから墓地へ送って発動できる。

エンドフェイズまで、このカードはこの効果を発動するために墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。

これで俺のライフは残り1000！

だが俺の場に『バーストレディ』になった水晶のヒーローが現れた、一気にブチ抜く！

「俺は『融合』を発動！ 手札の『フェザーマン』と、場の『バーストレディ』になった『プリズマー』を融合！ 現れる、マイ・フェイヴァリット！ 『E・HERO フレイム・ウイングマン』！」

『デヤアツ！』

E・HERO フレイム・ウイングマン：ATK 2100

「現れたか、貴様のエース！ だがこの状況では何の意味も無いわあつ！」

「魔法カード『戦士の生還』を発動！ これで墓地から『スパークマン』を手札に戻す！

そしてフィールド魔法『フュージョン・ゲート』の効果で、『フレイム・ウイングマン』と『スパークマン』を融合する！」

「に、2連続融合だとお!?!」

確かに、『フレイルム・ウイングマン』じゃあ勝てない。

けどアイツが俺に勝つために全力を尽くすなら、俺だつて自分が消し飛ぶくらいの全力で行くぜ!

俺の、黎に勝つた最強のヒーローでお前を倒す!

「翼よ、炎よ、朝日と共に究極の光を放つ英雄となれ! 輝け、『E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン』!」

『ハアッ!』

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン : ATK 2500

時空の渦に飲み込まれる2人のヒーロー。

火、風、雷の力を続べたその姿は白銀に輝く光、俺のデツキの最強モンスターだ!

「どうだ! これが俺のフェイバリットの進化形態だ!」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン (融合・効果モンスター)

光属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 2100

「E・HERO フレイム・ウィングマン」+「E・HERO スパークマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

(1)：このカードの攻撃力は、自分の墓地の「E・HERO」カードの数×300アップする。

(2)：このカードが戦闘でモンスターを破壊し墓地へ送った場合に発動する。

そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

「だが攻撃力は2500! 『アームド・ドラゴン』の敵では無い!」

「……『シャイニング・フレア・ウィングマン』は、自分の墓地の『E・HERO』の数×300ポイント、攻撃力がアップする」

俺の墓地にあるヒーローは『エアーマン』、『クレイマン』、『ネクロダークマン』、『エツジマン』、『フェザーマン』、『バーストレディ』、『プリズマー』、『リキッドマン』、『テンペスター』、そして『ブレイズマン』! 合計10体だ!

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン：ATK 2500 ↓ 5500

「攻撃力、5500……ッ! だが!」

「そう、お前の伏せた『武装竜の万雷』の効果で、お前の『アームド・ドラゴンLV10』の攻撃力は6000になる、5500じゃ倒せない」

「そうだ、『武装竜の万雷』を使うと貴様にダメージは与えられないが、それでも次のターンに直接攻撃すれば済む話!」

へえ、そんなデメリットがあつたのか。

けどさ、万丈目。まだ俺にも一手だけ打てる手があるんだぜ?

「なあ万丈目、知ってるか?」

「な、何だ……」

「ヒーローにはヒーローの戦うための舞台があるつて事を!」

「っ!」

俺の手札は5枚あつた。

『E・HERO フェザーマン』、『融合』、『戦士の生還』、『ヒーローアライブ』、そしてこれが最後の1枚。

「フィールド魔法発動! 『スカイスクレイパー』!」

融合の力が渦巻く世界は一瞬で消滅し、代わりに地面から伸びて来た高層ビルが周囲

を埋め尽くす。

ヒーローが戦うにはやっぱり、ここじゃないとな。

「このカードの効果は知ってるよな、万丈目」

「『E・HERO』が自分より高い攻撃力のモンスターと戦闘を行う場合、攻撃力を1000アップさせるフィールド魔法……！ これでは『武装竜の万雷』を発動しても更に攻撃力が上回るだけじゃないか!？」

摩天楼—スカイスケレイパー—

【フィールド魔法】

(1)：「E・HERO」モンスターの攻撃力は、その攻撃力より高い攻撃力を持つモンスターに攻撃するダメージ計算時のみ1000アップする。

「楽しかったぜ万丈目！ でもこれでゲームセットだ！ 『シャイニング・フレア・ウィングマン』、『アームド・ドラゴンLV10』を攻撃！」

「トラップ発動、『武装竜の万雷』！ 墓地の自分以下のレベルの『アームド・ドラゴン』の種類×1000ポイント攻撃力をアップさせる！」

「こっちも『スカイスケレイパー』の効果！ 『シャイニング・フレア・ウィングマン』の



攻撃力が『アームド・ドラゴンLV10』より下の時、攻撃力を10000ポイントアップする!」

アームド・ドラゴンLV10 : ATK 3000 ↓ 6000

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン : ATK 5500 ↓ 6500

「く、届かないかつ!」

「〴〵シャイニング・シュート!」

「ぐおおおおおおつ!」

準 : LP 3400 ↓ 2900

「この瞬間、『シャイニング・フレア・ウィングマン』の効果発動! 破壊した相手モンスター元の攻撃力分のダメージを与える! 『アームド・ドラゴンLV10』の攻撃力、3000のダメージを受けて貰うぜ!」

「うわあああああああああああああああああああああああああつ!」

準：LP 2900↓0

十代：WIN

準：LOSE

SIDE：黎

夥しい量の閃光と共に決着のついた交流試合。結果は俺達アカデミア側の勝利に終わった。

十代め、墓地リソースの味を占めたな？ デッキに寝かせておくだけじゃなく、墓地に落したり溜めたりして、それを利用する戦法は俺のやり方——もつと言えば前世の一般的なやり方——だ。アニメの“E・HERO”は通常モンスターが多いし、墓地のカードをブン回して利用する戦法は元々アニメでも十代は使っていた。そこに俺のカードリソースが加われれば……。ううむ、未恐ろしい。

『やりましたね、黎さん！』

「おう。これで3勝1敗1分け。俺達の勝ちだ」

隣にいた半実体化したフレイがガッツポーズをし、俺がそれに答える。

え、俺が今どこかって？ それは――

『準、貴様、情けないぞ!』

おっと始まった。

デュエルリングでは、勝利した十代が拍手を浴びていた。だが、突如として敗北したサンダーこと万丈目に兄から容赦の無い罵倒が浴びせられた事により、一気に静まり返っていた。

『貴様、よくも我がグループの顔に泥を塗ってくれたな! それにあのカード達は何だ! おれ達が金に物を言わせて手に入れたカードが1枚も入っていないかったじゃないか!』

『……俺は、自分の力で手に入れたこのデッキを信じ、戦った。今更新参のカードを入れたデッキなんか信じられるワケがない』

サンダーの言う事も最もだと思う。デッキを信じるといふ事はつまりメンタルを前に向けるという事でもあり、つまりそれは相手に屈さないという事でもある。この世界はデッキ構築や戦術だけで無く、精神もまたデュエルにおいて重要なファクターなのだ。

まあ、今更適当なカードを入れてデッキバランスが崩れるってのも一緒だが。俺もア

イツにこつそりカードを譲渡したけど、渡すカードはじっくり吟味したとも。

だが2人の兄の内次男の方、正司はそれを一喝した。

『黙れ！ そんな下らない事でカードを使わなかったのか！ 我々は世界を掌握するのだぞ！ ここで勝ちを逃すとは、やはりお前は落ちこぼれだ！ そんなだから学園を退学になるのだ！』

『……………』

流石に奴の言い方にムツと来た。

奴は結果しか見ていない。世の中結果が全てだと言うが、過程や努力の方が重視されるケースだつて有る。プロセスを見てないクセに、あいつの苦悩を知らないクセに、そんな勝手な事を言つてほしくは無いものだ。結果だけ欲しいなら、賄賂でもM&Aでもやつてろつてんだ。

そろそろ頃合いか、と手元のボタンに手を伸ばした。

『おいちよつと万丈目の兄ちゃん達！ サンダーの頑張りとか知らないくせに勝手な事を言うなよ！』

『煩い！ これは我ら兄弟の、そして万丈目グループの問題だ！ 部外者は黙っている！』

『十代、この問題には首を突っ込まない無い方が良い。兄さんもやめてくれ、こんな公衆

の面前で!』

『黙れ! 落ちこぼれは落ちこぼれらしく、ここで馴れ合つてろ、準! お前も有象無象のザコ共々、葬つてやる!』

ブチッ!

公開処刑、決・定・D A!

手元のスイッチを押し、マイクに口を近づける。念のため軽く指先で叩くとスピーカーからドンドン、とノイズの様な音が出た。

更に喉を軽くいじって声を変化。元々の俺のものとは全く異なる、重く低い声にする。間違つても遊馬崎黎とイコールで結びつける事はできないだろう。

よし、行ける。

『大体だな、準! 貴様は——』

「そこまですておいた方が良くぞ、万丈目正司」

『な、誰だ!?!』

そう、俺が居るのは……。

「名乗る程の者じゃない。ただちよいと放送室をジャックさせてもらっているだけの者だ」

『なん……、だと……?!?』

「ジャックしたのは大将戦が終わる少し前、『シャイニング・フレア・ウィングマン』が召喚されたあたりだ」

スタッフが待機していた放送室、厳密に言えば映像管理室だ。

本当ならフィニッシュの画を差し替えるのを阻止するだけのつもりだったが、気が変わった。

スタッフを弱い電気で気絶させた俺は、肌の表面に微弱な電磁波を纏って光の流れを捻じ曲げ透明化。これで監視カメラは俺を捉えられない。フレイは完全に実体化してないため精々モヤ程度にしか見えないだろう。

細かいカメラの操作なんかはフレイに指導してもらった。やはり亀の甲より年の功、ついて来てもらって正解だった。

さて、画面差し替えを阻止するだけだったが……。面白いモンがついでに撮れたな。「弟を世界征服の道具としか見ていないとは、大した兄ではないか。あまりに関心したものでな、バツチリと全国に生放送させてもらった」

『な!?!』

海馬コーポレーションインダストリアル・イデューション

「これでまた K C や I 2 社の後塵を拝す事になるな。人を見抜く力を磨かぬから何時まで経つても超一流企業の名を恣ほしいままに出来んだ」

『いい、言わせておけば……!』 数々のこの愚弄! 貴様、断じて許さんぞ! 我が万丈目

グループの全力を以て貴様を地獄の底へと叩き落としてくれるわ!」

『おいよせ正司! テレビが回ってるんだぞ!』

「兄、万丈目長作は分かっているようだな。……それに万丈目正司、貴様はどうやら万丈目準がデュエル界において全くの役立たずだと思っっているようだが、それは大きな間違いだ」

『それはどういう事だ! まるで意味が分からんぞ! 結果を出せていないのは事実だ!』

本気で分かってねえな。

教えてやるよ。人徳のねえ奴に、人は集まらねえつて事をな。

「会場にいる諸君! ノース校の大將は負けた! しかし、それは無残な事か、無様な事か! 否! 彼は勇敢に戦い、華々しく散った! 彼は立派なデュエリストだ! そうだろう!」

『『おう!』』

「そうだ! 彼の名は! 一!」

『『十!』』『『百!』』『『千!』』』

「万丈目サンダーだ!」

『サンダー! サンダー! サンダー!』『サンダー!』『サンダー!』『サンダー!』『サンダー!』『サンダー!』





長作氏の方はそれが分かっているのか、納得顔で正司氏の肩を叩いた。

『……正司、帰るぞ』

『兄者!? しかし!』

『腹の虫が納まらんのなら、お前一人でやれ。俺は満足した』

『くっ……、この借りは必ず返す! 待っている、デュエルアカデミア!』

おやおや、次男坊さんは随分と頑固者のようで。

まあこれにて一件落着、かな。

——ベンチ

ベンチに戻って十代を祝福している円の中にこっそり戻ると、丁度隣り合う位置にいたファイオが話しかけてきた。

「黎、あの放送ジャック、君でしょ?」

「はて、何の事だ? 確かに俺は放送時にお前の隣に居なかったが、それで俺だと決めつけるのは早計じゃないか?」

「……まあ、良いか。わたしもあの兄貴にはちよつとムカついたし。今回は見逃したげる」

「だから知らんつちゅーに」

鋭い上にしつこいな、こいつも。

……語るまでも無いが、『アームド・ドラゴン』シリーズは万丈目サンダーの手に残り。勝利の商品としてトメさんのキスが鮫島校長へと送られ。サンダーがレッド寮へと来る事になった、という3点をここに記しておこう。

——邪神の根城

S I D E : 都

邪神、説明してもらおうかしら。

あたしがここから出られて、お義兄ちゃんのとこに行ける？ そんな旨すぎる話、信じられると本気で思ってるわけ？

『クツクツク、まさか。だが他に手があるのか？ この城は次元と次元の狭間の裏の、更に隣にある』

(ごめん、分かんない)

『端的に言えば、人間である貴公が脱出する事は不可能という事である。しかし、某は違う。某はこの空間を作った身、故に貴公をここから解放する事も可能だ』

成程。そりゃ、アンタの話に乗るしか無いわね。

『さて、どうするんだ、オイ』

(……聞こうじゃん。あたしはどうすれば良いワケ?)

『何、容易い事じゃ』

一拍、邪神は置いた。

そんな事してもあたしと半分一体化してテンション共有しているんだから、別に必要無いと思うけど。

『グリードとデュエルして勝てば良い』

何ですと?!

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 71：都VSグリード 戦慄の旋律

——邪神の根城

SIDE：都

『グリードとデュエルして勝てば良い』

こいつ今、何て言った？ グリードとデュエルしろ、ですって？

あたしは邪神と半分一体化している。だから分かる、これまで5人の護衛を、義兄が仲間と共に悪戦苦闘しつつも辛うじて勝利をもぎ取って来たという事を。

あたしはお義兄ちゃんよりデュエル歴は短い上に弱い。お義兄ちゃんが護衛最弱のプライドに、情報アドの裏を搔いたとは言え勝利した時だって、残りライフはたった数百。いくらグリードが2番目に弱い上にダメージを負っているとは言っても、あたしが勝てる要素は無い。寧ろ負ける可能性の方が高い。

まどろっこしいから結論を言おうと。

無理、勝てない。

どつとはらい。

『随分と容易く諦めるのね』

(悪いけど、こんな有様でもアンタの貧相な企みくらいは見抜けるわよ)

『クククク、しかしそんな悠長な事を言ってるのなの?』

(どういう意味よ?)

『テメエ、何でこんなタイミングで目エ覚めたか、分かんねえのか? 偶然だとも思う

のか、オイ?』

……まさか。

『そのままか、だ』

アンタ、あたしを叩き起こしたのね!

何を企んでるかは知らないけど、その手には乗らないわ! どうせあたしが希望を  
持ってデュエルに勝利して約束を反故にするつもりなんでしょ! どうせ『そんな約束  
を守るとでも思ってたのか』とか言うつもりなんでしょ! アンタが人の絶望をエサに  
してるって事を、知らないとも思ってた!?

『疑り深いのか……』

(アンタとの口約束を信じる程、あたしはマヌケじゃない)

『だが、そんな事を言ってられるのも今が最後でござる』  
(!?)

『俺様の融合はそろそろ最終段階に入る。そうなればテメエの意識と記憶を残しておく必要ももうねえんだよ。これまで残しておいたのは、意識と記憶を消滅させると精神に無理な負荷がかかって、残った肉体が弱るからだ！ だがほぼ支配下に置いた今、その心配はもう無い！ 後少しでテメエの体は完全に俺様のモンになる！』

何……、だと……!?

『だ・が！ もしも吾輩のこの勝負を受けるのならば、解放してやっても良いぞ?!』  
(そんな……っ!)

もし勝負を受ければ、グリードとデュエルする。勝敗に関わらず、あたしは多分、邪神に取り込まれる。

受けなければこのまま邪神に飲み込まれてジ・エンド。あたしは消滅する。

選択肢なんて、最初から無いじゃないの！

(……分かった、そのデュエル、受けて立つわ)

『ククク、物分りの良いのは利点じゃ』

こいつ、絶対に許さない！

「は？ オレが生贄の小娘、もとい姫とデユエル？」

あたしが納得してから、近くで待機していたグリードに声をかけた。

奇妙な提案に、グリードが首を傾げる。

『そうだ。不服か？ 貴公が勝てば、更に力を与えよう。ラースをも上回る力を手に入  
れられるだろう』

「いや、そりゃ魅力ですぜ？ “強欲”のグリードとしては見逃せねえ。でも負けたら  
オレは消えちまうんでしょ？」

『当然じゃ。ただの一度の敗北も許されんのがこの邪神の護衛じゃ』

「で、姫は今まで邪神様と融合していた。どう考えても邪神様のお力が直に使える分、オ  
レが勝てる要素がねえんですが」

『否、その心配は無用なり』

どういう事？ と疑問に思う間も無く、ペツと黒い繭から吐き出された。

おいこら、素っ裸の二十歳の娘を放り出すな！

「……服、いるか？ 下着もあるぞ。マップの女に勝利しても嬉しくねえやい」  
「……何で持つてるんだか……。それはそうとして頂戴」

「いや、女デュエリストを消した時にな、バッグだけ残つてよ。その中身がそれなんだな、これが……」

「あつそ……」

あんまり聞きたくなかつたかも。

それと小柄なあたしには少し大きい。主に胸が。胸が！ どーせペタンコだよ畜生！

『グリードよ、今小娘と俺様を切り離した。これで思う存分、戦えるぞ』

「感謝します。……さて、邪神様のお力が使えないのなら問題ねえ！ デュエルだ！ デッキとディスクを創造しろ！」

何をいきなり……。

とは言え、あんな感じにできるかも知れない。何せあたしはさつきまで半分邪神だったのだから。

スウ、と息を吸う。分かる、エネルギーがあたしの周りに集まって来ている。

「ハアッ！」

黒い霧が集まり、ディスクとデッキが現れる。念のため確認すれば、それは生前、あ



たしが最も信頼していたデツキだった。

グリードに勝てる根拠は、無い。それでもデュエルをすれば、あるいは、もしかしたら、勝つて全てが丸く収まるかも知れない。ゼロよりは、賭ける価値があると思いたい。

「良いノリじゃねーか。もつとも、ノリで倒せる程、オレはアまくねえけどな！」

「語るならデュエルで、口でなら何とでも虚勢も見栄も張れる」

「キシキシキシシッ！ 泣いて後悔するが良い！」

「上等！ 返り討ちにしてやる！」

お義兄ちゃん、あたしのたった一人の家族。

今、そつちに行きます！

「デュエル！」

都VSグリード

LP 4000 VS LP 4000

「あたしの先攻！ ドロー！」

引いたカードは、『スノーマンイーター』！

見せてやる、『吹雪の魔女』と呼ばれた実力を！

「あたしはモンスターをセット!」

そして、もう一枚。

デッキが再構築された時、このデッキにはアニメオリジナルのカードや見た事の無いカードが入っていた。理屈は分からない。でも、今はどうでも良い。

今あたしがすべき事は、グリードに勝つ事だ!

「更にカードを一枚伏せて、ターンエンド!」

あたしがセットしたのは『スノーマンイーター』。リバーズした時、表側表示モンスターを破壊できる水属性モンスターだ。

まずはこれで様子を見る。

スノーマンイーター (効果モンスター)

星3

水属性 / 水族

ATK 0 / DEF 1900

このカードがリバーズした時、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

都：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：セツトモンスター

：伏せカード1枚

「オレのターン、ドロロー！ キシキシシ！ まずは軽めに行くぜ！」

「来い！」

「オレは魔法カード『死歌の大合唱』（しにうた）を発動！ オレの手札を3枚デッキに戻し、デッキの上から5枚カードをめくる！ その中に存在する『死歌』（しにうた）と名の付いたモンスターを全て手札に加える！」

死神の大合唱（オリジナル）（改訂版）

【通常魔法】

このカード名の（1）の効果は1ターンに1度しか発動できず、墓地に同名カードが存在する場合発動できない。

(1) : 手札を3枚デツキに戻して発動する。

デツキの上からカードを5枚めくり、その中に存在する「死歌」モンスターを全て手札に加え、残りはデツキに戻す。

(2) : 自分フィールドの「死歌」魔法・罠カードが相手の効果で破壊される場合、墓地のこのカードを除外できる。

その後、デツキから1枚ドローできる。

いきなりギャンブル性の高いカードを……。

グリードはこっちに絵を見せずにデツキにカードを戻してシャッフルする。ハンドの関係上、5枚手札に加えないとアドバンテージにはならない。

今、あいつの手札は2枚。何枚、引く……？

「……オレの引いたカードは——」

デツキの上の5枚のカードが開示される。

そのカード達は……。

「オレがめくったのは……、『死歌の邪神官 プレデュード』、『死歌の森人 メヌエツト』、『死歌の火山 ボレロ』、『死歌の湖畔 セレナーデ』、『死歌の影民 ノクターン』！」「ぜ、全部『死歌』ですって!？」

「全て手札に加えるぜ！ 更にオレは『死歌の邪神官 プレデュード』を召喚！」

死歌の邪神官 プレデュード：ATK 1100

死歌……、細かい効果は知らないけど、あれらは確か除外して真価を発揮するグリード専用のカテゴリりだったはず。

『プレデュード』のモンスター効果発動！ このカードをゲームから除外し、手札から同じレベルの死歌モンスターを2体特殊召喚する！」

死歌の邪神官 プレデュード（効果モンスター）（オリジナル）

星3

光属性／魔法使い族

ATK 1100／DEF 100

フィールドに表側表示で存在するこのカードをゲームから除外して発動する。

自分の手札から「死歌の邪神官 プレデュード」以外の「死歌」と名のついた同じレベルのモンスターを2体選択して特殊召喚する。

「死歌の邪神官 プレデュード」の効果は1ターンに1度しか発動できない。

「オレはその効果で『プレデュード』を除外し、手札からレベル3の『死歌の森人 メヌエツト』と『死歌の火山 ボレロ』を特殊召喚！」

次元の狭間に消える黒いローブの神官。

代わりに場には粗末な衣服に編み笠を被った骸骨と、全身が溶岩でできた大きな魔人が現れた。

死歌の森人   メヌエツト：ATK   500

死歌の火山   ボレロ：ATK   1700

「いきなりレベル3が2体……！」

「だけじゃねえ！ 『メヌエツト』はチューナーだ！」

「って事は目的は……！」

「オレはレベル3の『ボレロ』にレベル3の『メヌエツト』をチューニング！」

鳴らせ滅びの楽曲！ 死と絶望の狭間にて荒れ狂う嵐となれ！」

☆3 + ☆3 = ☆6

「シンクロ召喚！ 切り刻め！ 『死歌の大風車 ストーム』！」

『ヴォオオオアアアアアア……！』

お決まりのシンクロモーションから登場するのは、水汲みに使われる大きな風車に手足の生えた様な巨人。羽の回転軸に顔がついていて、岩でできた手足を後付け感バリバリで振るっている。

死歌の大風車 ストーム：ATK 2800

「いきなりレベル6で2800……！」

「バトルだあ！ やれ『ストーム』！ セットモンスターを蹴散らせえ！ // ダークネ

ス・サイクロン//！」

「くっ！」

凄まじい闇の嵐に晒されるあたしのモンスター。でも、タダで済むとは思わない事ね！

「この瞬間、『スノーマンイーター』の効果発動！ このカードがリバースした時、場の表側表示モンスターを1体破壊する！ 対象は当然『ストーム』！」

「ムダだあ！ 『ストーム』の効果発動！ このカードは攻撃力を次のオレのスタンバイフェイズまで500下げる事で、効果では破壊されない！ //ガード・ファン！！」  
 「何ですって!?!」

死歌の大風車 ストーム：ATK 2800↓2300

「更に『ストーム』は相手モンスターをバトルで破壊した時、相手に1000ポイントのダメージを与える！」

「な!?!」

死歌の大風車 ストーム（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星6

風属性／機械族

ATK 2800 / DEF 2500

チューナー＋「死歌」と名のついたチューナー以外のモンスター1体

このカードはS召喚以外の方法で特殊召喚できない。

(1)：S召喚されたこのカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に1000



ポイントのダメージを与える。

(2) : このカードが効果で破壊される場合、代わりに次の自分のスタンバイフェイズまで攻撃力を500ポイント下げる。

「きゃああああああああああっ!」

都 : LP 4000 ↓ 3000

い、痛い……! 邪神の事について多少は分かってたつもりなのに、ここまでなんて

……!

風で吹っ飛ばされて柱に叩き付けられて、全身碎け散りそう……っ! 不死身でも痛覚が消えないのにつ!

「カ、グブツ!」

ツ、血まで吐いちやった……。

「キシキシキシキシ! カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

お義兄ちゃん、挫けそうだよ……!

やつぱり、あたしじゃダメだったのかな……。

『都！ 今助けるぞ！』

っ！ 違う！ 挫けるな！

お義兄ちゃんは今だつて血を吐きながら頑張ってるんだ！ こんなトコで諦めちゃいけない！

「リバースカード、オープン！ 罨カード『リメイク・アイススタチュー』！」  
「ほう？」

「このカードは自分の場の水属性モンスターが戦闘破壊されたターンの終了時、破壊された中で1番攻撃力の低いモンスターを1体復活させる！ 蘇れ、『スノーマンイーター』！」

スノーマンイーター：ATK 0

「更に！ このターン相手が伏せた魔法か罨を1枚破壊する！ そのリバースカードを

破壊っ！」

「ぐ、『暗雲の接収』が!？」

リメイク・アイススタチュー（オリジナル）

【通常畏】

自分の場の水属性モンスターが戦闘によって破壊されたターン終了時に発動できる。

そのターン戦闘によって破壊された中でもっとも攻撃力の低い水属性モンスターを1体攻撃表示で特殊召喚する。

その後、相手の場のこのターンセットされた魔法・罨ゾーンのカードを1枚破壊する。

暗雲の接収（オリジナル）

【通常畏】

魔法・罨・モンスター効果の発動、モンスターの召喚・特殊召喚・反転召喚を無効にして破壊し、ゲームから除外する。

その後相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。

このカードの発動に対し、カウンター罨を発動する事はできない。

グリード：LP 4000

手札：3枚（内2枚は『死歌の湖畔 セレナーデ』、『死歌の影民 ノクターン』）

ファイルド

：死歌の大風車 ストーム（ATK 2300）

：魔法・罨無し

「あたしのターン、ドロロー！」

思い出すよ、死んだあの時の事。

あたしがもつと強かったら、格闘術の心得があつたら、あたしはあんな無残な死に方をしなかつたかも知れない。四肢を失い、最愛の義兄を失い、何もできないまま死んだ。思えば、あたしは、昔から義兄に頼ってばっかだった。

「あたしは、『ハリマンボウ』を召喚！」

つたく、二十歳の女が、1つ違いの男に縋らないと生きていけないなんて、笑えない。せめて、ここでグリードだけでも倒す！

ハリマンボウ：ATK 1500

「レベル3が2体……」

「あたしはレベル3の『スノーマンイーター』と『ハリマンボウ』でオーバーレイ！ 2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆3×☆3 Ⅱ★3

過去のあたしは甘えん坊だった。

甘えて甘えて甘えまくって、それが兄貴を殺したって言うのなら、あたしは義兄を、甘えん坊を卒業する！

「エクシーズ召喚！ Float before me！ 『潜航母艦エアロ・シャーク』！」

『ギユワワワワワワ！』

潜航母艦エアロ・シャーク：ATK 1900

「ここでエクシーズ召喚とはね。だが攻撃力は『ストーム』には及ばねえ！」

アマイよ。こいつはね……、アニメ効果なんだよ！

『エアロ・シャーク』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で今のあたしの手札1枚につき400ポイントのダメージを与える！」

潜航母艦エアロ・シャーク：ORU 2↓1

「今手札は4枚！ 喰らえ、*ッ*エア・トルピード*ッ*！」

潜航母艦エアロ・シャーク（エクシーズ・効果モンスター）（アニメ効果）  
ランク3

水属性／魚族

ATK 1900／DEF 1000

レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。

自分の手札の枚数×400ポイントダメージを相手ライフに与える。

「カット！ 1600も喰らってたまるか！ 墓地の『メヌエット』の効果発動！ 墓地の

こいつを除外し、効果ダメージを無効にする！　そしてその倍の数値だけライフを回復  
 ！」

「な!?!」

死歌の森人　メヌエツト（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星3

風属性／戦士族

ATK 500 / DEF 500

墓地のこのカードをゲームから除外して発動する。

相手から受ける効果ダメージを無効にし、その数値の倍の数値分ライフポイントを回復する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「オレが無効にしたダメージは1600！　よって3200ライフを回復！」

グリード：LP 4000 ↓ 7200

チツ、ここでお得意の大回復……。あいつらの使うのはインチキ効果ばっかだつてのは分かつてたけど、実際に戦う事になるとやっぱキツイわ。

でも効果ダメージは無効にされたけど、オマケの方は喰らってもらうわ！

死歌の大風車 ストーム：ATK 2300↓1800

「何!? いきなり攻撃力が下がっただど!?!」

「あたしがオーバレイ・ユニットとして墓地に送つたのは『ハリマンボウ』。このカードは墓地に送られた時、相手モンスター1体の攻撃力を500ポイントダウンさせる効果を持つ!」

ハリマンボウ（効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 1500／DEF 100

このカードが墓地へ送られた時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。



選択した相手モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

「これで『エアロ・シャーク』の攻撃力が『ストーム』を上回ったわ」

「ぐぬぬ……」

「バトル！ 噛み砕け『エアロ・シャーク』！ 『ストーム』を攻撃！ ビッグ・イー

ターッ！」

横に繋がった2匹の鯨がその巨大な牙で、風車の魔人を噛み千切る。風車はバラバラの破片になって飛び散り、グリードの頭の上へと降り注いだ。

「あいデアデアデアッ!?!」

グリード：LP 7200↓7100

「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

都：LP 3000

手札：2枚

フィールド

：潜航母艦エアロ・シャーク（ATK 1900・ORU:i）  
：伏せカード2枚

「オレのターン、ドロー！ ナメんなよ、人間の小娘の分際で！ オレは『死歌の湖畔  
セレナーデ』を召喚！」  
『ギアッ！』

死歌の湖畔 セレナーデ：ATK 1850

グリードが召喚陣から呼び出したのは大きなスライム。名の通り湖畔の水のように  
透き通っていて、でも内部にある赤い細胞体の様な本体がその美しさを根底から台無し  
にしている。

「流石にあの程度じゃ全然堪えないか……。でも、攻撃力じゃ『エアロ・シャーク』に劣っ  
ている。何をやるつもり？」

「こうするのさ！ オレは『セレナーデ』の効果を発動！ 1ターンに1度、自分の墓地  
の『死歌』と名のついたモンスターを1体除外し、手札から『セレナーデ』以外の死歌  
モンスターを1体特殊召喚する！ 墓地の『死歌の大風車 ストーム』を除外し、手札

の『死歌の影民 ノクターン』を特殊召喚だ！」

死歌の湖畔 セレナーデ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

水属性／魔法使い族

ATK 1850／DEF 1000

このカードは特殊召喚できない。

自分の墓地に存在する「死歌」と名のついたモンスターを1体除外する事で、手札の「死歌の湖畔 セレナーデ」以外の「死歌」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

「死歌の湖畔 セレナーデ」の効果は1ターンに1度しか発動できない。

『トアッ！』

スライムの内部から飛び出した、全身に包帯を巻いた大男。包帯の間から見える隻眼はこちらを威嚇している様に見える。

死歌の影民 ノクターン：ATK 0

「ンまだだ！ オレは墓地の『ボレロ』の効果を発動！ 墓地のこのカードを除外し、オレのデッキからレベル4以下の死歌モンスターを1体特殊召喚する！ オレが選ぶのは『死歌の謳歌 ラル』！」

死歌の火山 ボレロ（効果モンスター）（オリジナル）

星3

炎属性／炎族

ATK 1700 / DEF 200

自分の墓地のこのカードをゲームから除外して発動する。

自分のデッキからレベル4以下の「死歌」と名のついたモンスターを1体、攻撃表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力・守備力は0となり、ターン終了時まで効果は無効となる。

死歌の謳歌 ラル：ATK 0

更に呼び出される、白髪のお婆。鷺鼻で腰も曲がっていて、見るからに意地悪そうな

魔女だ。

これでレベル4が、3体……っ！

「レベル4の『セレナーデ』、『ノクターン』、『ラル』をオーバーレイ！」

『バグアツ！』

『トオツ！』

『キギイツ！』

「3体の『死歌』モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4×☆4×☆4＝★4

「エクシーズ召喚！ 死神を招く猛毒の化身よ、忌々しき敵をその巨剣で斬り刻め！」

現れる、『死歌の毒沼 ソナタ』！」

『ポゲルアアアアアアツ！』

死歌の毒沼 ソナタ：ATK 3000

「攻撃力3000!？」

ゴポゴポと不気味な音を出す毒沼が、人の形を成す。見上げ続ければ首が痛くなる程に巨大で、右手に大剣を、左手に大盾を構えている。

「キイツシシシシシシシ！ どうだ、これがオレの実力だ！ 『ノクターン』をエクシーズ素材にした『ソナタ』は魔法・罠の対象にはならねえ。更に1ターンに1度、対象を取らない効果では破壊されない！ これでその伏せカードも怖くねえぜ！」

死歌の影民 ノクターン（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 0 / DEF 0

このカードはシンクロ素材にできない。

このカードを素材とした「死歌」と名のついたエクシーズモンスターは、以下の効果を得る。

●このカードは相手のカード効果の対象にはならず、1ターンに1度だけ対象を取らない効果では破壊されない。

「さあ、警戒の必要がなくなった所でバトルだ！」

「く……っ！ 本当にそう思うなら、かかって来なさいよ！」

「ほう、なら遠慮無く！ 『エアロ・シャーク』をぶちのめせ『ソナタ』！ //ポイズン・

プリンガー！！」

「くっ！」

都：LP 3000↓1900

踊るようなステップによって振られた剣で両断されるあたしのモンスター。

その衝撃は止まる事無くあたしを襲った。

「この瞬間『ソナタ』の効果発動！ このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、破壊した相手モンスターを墓地から除外し、その攻撃力分『ソナタ』の攻撃力を上げつつ相手にダメージを与える！」

死歌の毒沼 ソナタ（エクシース・効果モンスター）（オリジナル）

ランク4

地属性／戦士族

ATK 3000 / DEF 1500

「死歌」と名のついたレベル4モンスター×3

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する。

破壊した相手モンスターをゲームから除外し、その攻撃力分このカードの攻撃力をアップし、相手にその数値分だけダメージを与える。

「これで終わりだあ！　　//ベノム・ウッドフォーリング//！」

死歌の毒沼　ソナタ：ORU　3↓2

パシユン！　と橙色の光の玉が剣に吸い込まれ、闇の波動があたしの墓地を射抜いた。

これを喰らえばあたしは1900のダメージを受けて負ける！

都：LP　1900

そう、喰らえばね？



「な、何故ライフが減らねえ!？」

「残念でした。あたしは罨カード『ゴースト・フリート・サルベージ』を発動しておいたの。このカードは水属性エクシーズモンスターがバトルで破壊された時、そのモンスターと召喚素材となったモンスターを墓地から特殊召喚できる」

ゴースト・フリート・サルベージ（アニメオリジナル）

### 【通常罨】

自分フィールド上の水属性エクシーズモンスターが戦闘によって破壊された時に発動できる。

そのエクシーズモンスター1体と、エクシーズ素材となったモンスターを2体まで墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化される。

「蘇れ、『エアロ・シャーク』、『スノーマンイーター』、『ハリマンボウ]！」

潜航母艦エアロ・シャーク：ATK 1900

スノーマンイーター：ATK 0

ハリマンボウ：ATK 1500

「チエーン2でこのモンスター達は蘇った。よってチエーン1で墓地から除外する事が出来ず、『ソナタ』の効果は不発ってワケ」

「だ、だが効果は無効になっっている上に、攻撃力は『ソナタ』の方が上だあ！ オレは速攻魔法『死神のト音記号』を発動！ このカードはオレの場に死歌モンスターが存在し、相手の場にモンスターが3体以上存在する時、自分の場の最も攻撃力の低い死歌モンスターに2度目の攻撃を可能にする！」

死神のト音記号（オリジナル）

【速攻魔法】

自分フィールド上に「死歌」と名のついたモンスターが存在し、相手の場にモンスターが3体以上存在するバトルフェイズ時に発動できる。

自分フィールド上のもっとも攻撃力の低い「死歌」と名のついたモンスターはこのターン2度攻撃できる。

んん、そう来たか！ これならあたしを今度こそ仕留められる。

でもそう簡単にやられて堪るもんですか！

『スノーマンイーター』に攻撃だ！ 〃ボイズン・ブリンガー〃！

「だったらこつちも畏発動！ 『フル・アーマード・エクシーズ』！ あたしの場にエクシーズモンスターが存在する時、相手ターンであつてもエクシーズ召喚を可能にする！」

「何、相手ターンでエクシーズ召喚だと!?!」

フル・アーマード・エクシーズ（オリジナル）

【通常畏】

自分フィールド上にエクシーズモンスターが表側表示で存在する時に発動できる。

エクシーズモンスター1体をエクシーズ召喚し、自分の場に発動時に存在していたエクシーズモンスターを装備カード扱いとして装備する。

装備モンスターの攻撃力は装備したモンスターの攻撃力分アップする。

装備モンスターが戦闘によって破壊される場合、代わりにこのカードの効果で装備したモンスターを破壊する。

「あたしはレベル3の『スノーマンイーター』と『ハリマンボウ』でもう1度オーバーレ

イ！ 2体の水属性モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

青と水色の光に姿を変え、銀河の渦へと飛び込む雪だるまに化したモンスターと巨大なマンボウ。光の渦にエネルギーが充填され、大きな爆発が起こった。

☆3×☆3 Ⅱ★3

「エクシーズ召喚！ Slash the darkness with red  
pear！ 『ブラック・レイ・ランサー！』」  
『ハアアッ！』

ブラック・レイ・ランサー：ATK 2100

ディスクに読み込ませた、黒い鎧の赤い槍使い。水属性を素材に要求するクセにこいつは闇属性で獣戦士族と来た。それはさて置き、反撃開始と行こうじゃないの！

ブラック・レイ・ランサー（エクシーズ・効果モンスター）

ランク3

閥属性／獣戦士族

ATK 2100 / DEF 600

水属性レベル3モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

「そして『エアロ・シャーク』を『ブラック・レイ・ランサー』に装備し、その攻撃力を合わせる！」

「んだとお!？」

空中で2匹に『エアロ・シャーク』が分離する。それぞれに分かれた鯨は黒い槍使いの肩に食いつくように着地し、比翼と頭が双肩に、残るパーツは胸部と腕と膝にアーマーとなって装着された。

ブラック・レイ・ランサー：ATK 2100 ↓ 4000

「こ、攻撃力4000だと!? チツ、攻撃は中止だ! カードを1枚セットして、ターン

エンド！」

グリッド：LP 7100

手札：0枚

フィールド

：死歌の独沼 ソナタ（ATK 3000・ORU：2）

：伏せカード1枚

「あたしのターン、ドロロー！」

あ、これはあたしの生前1番好きだったカード……。

このカードは最初に手に入れたカードで、それ以降、この子が活躍できるようなデッキを考えて構築してきたんだっけ。デュエルの世界なら、ひよつとしてこのカード、あたしの精霊になったりしてね。

「魔法カード『ナイト・シヨット』！ その伏せカードを破壊する！」

「ぐっ、『死神の遮音』が!？」

ナイト・シヨット

## 【通常魔法】

相手フィールド上にセットされた魔法・罫カード1枚を選択して破壊する。  
このカードの発動に対して相手は選択されたカードを発動できない。

「あたしは『氷結界の舞姫』を召喚！」  
『ハッ！』

氷結界の舞姫：ATK 1700

クルクルと舞い踊りながら飛び出す、氷の女ダンサー。雪の結晶を象った髪留めで藤色の髪をツインテールに括り、同じく結晶を模した盾を両手に携え、紫のマフラーを巻いている。

頼むよ、マイ・フェイバリット！

氷結界の舞姫（効果モンスター）

星4

水属性／魔法使い族

ATK 1700 / DEF 900

自分フィールド上にこのカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

1ターンに1度、手札の「氷結界」と名のついたモンスターを任意の枚数見せる事で、相手フィールド上にセットされた魔法・罫カードを見せた枚数分だけ持ち主の手札に戻す。

「バトル！ 切り裂け『ブラック・レイ・ランサー』！ 『ソナタ』を撃ち抜け！  
 ブ  
 ラック・ブライト・スピア アアッ！」

「ぐおおおおおおおっ!？」

グリード：LP 7100 ↓ 6100

黒い鮫と槍の巨人が闇のエネルギーで生み出した槍で敵を貫く。

「更に『氷結界の舞姫』でダイレクトアタック！ ブリザード・ステップ！」

「きゃんびっ!？」



グリード：LP 6100↓4400

よし、ここまででは順調！ このまま行けば勝算は十分にある！

でも油断はせずに……。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

都：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：ブラック・レイ・ランサー（ATK 4000・ORU：2）、氷結界の舞姫（ATK 1700）

：潜航母艦エアロ・シャーク（エクシーズモンスター・『ブラック・レイ・ランサー』に装備）、伏せカード1枚

「クソツ、オレのターン！ ナメんなよ！ オレは魔法カード『嵐の指揮棒』を発動！

こいつはオレの墓地から死歌モンスターを1体復活させる！ 更にこの効果で特殊召

喚したモンスターは効果が無効になる代わりにレベルは2つまで上がる！」

嵐の指揮棒（オリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地から「死歌」と名のついたモンスターを1体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、レベルを2つまで上げる事ができる。

「オレは墓地から『ノクターン』を復活させる！　そしてそのレベルを2つ上げて6にする！」

『ヴォオオオオ……！』

死歌の影民　ノクターン：DEF　0／☆4↓6

「んまだだ！　更に墓地の『死歌の謳歌　ラル』のモンスター効果だ！　墓地のこのカードを除外し、除外されている死歌モンスターの効果をこのカードの効果扱いで発動する！　オレは『ボレロ』の効果を使わせてもらおうぜ！」

死歌の謳歌 ラル（効果モンスター）（オリジナル）

星4

光属性／魔法使い族

ATK 0 / DEF 1800

除外されているこのカードを特殊召喚する事はできない。

自分の墓地のこのカードをゲームから除外して発動する。

ゲームから除外されている「死歌」と名のついたモンスター1体を選択し、そのモンスターの効果はこのカードの効果として発動する。

「デツキからレベル3の『死歌の駿馬 エピオ』を特殊召喚！」

『ブルルルッ！』

死歌の駿馬 エピオ：DEF 2000

「更にこの瞬間、『エピオ』の効果発動！ このカードが特殊召喚された時、こいつのレベルを2倍の6にするぜえ！」

「つ、『ボレロ』の効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効の筈！ それを通ったって事は……！」

「そうだ、コイツの効果は無効にならねえのよ！」

死歌の駿馬 エピオ（効果モンスター）（オリジナル）

星3

地属性／獣族

ATK 1500／DEF 2000

このカードは通常召喚できず、効果も無効にならない。

このカードが特殊召喚に成功した時、このカードのレベルを6にする事ができる。

フィールド上にこのカードが表側表示で存在する時、自分は攻撃宣言できない。

このカードを素材とした「死歌」と名のついたエクシーズモンスターは以下の効果を得る。

●このカードのエクシーズ召喚に成功した次の自分のドローフェイズ時、通常ドローを2回行う。

死歌の駿馬 エピオ：☆3↓6



死歌の氷山羊 ララバイ：ATK 3200

ぶるり、と急な寒さが発生し思わず身震いした。

地面から突然生えた巨大な氷柱を蹄で踏み砕き、荒々しく巨大なヤギが登場する。しかも全身のあちこちが凍り付いている。この寒さの原因は、こいつか……！

「オレは『ララバイ』の効果を発動！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、相手の場の今表側表示で存在するカードの効果全て無効にし、モンスター全ての攻撃力を相手ターンが終わるまで0にする！ //スノーヘッド・アイスストーム  
//！」

『ブメエエエエエエエツ！』

「うわあ!?!」

死歌の氷山羊 ララバイ：ORU 2↓1

ブラック・レイ・ランサー：ATK 4000↓0

氷結界の舞姫：ATK 1700↓0

青色の光の玉が角と角の間、額に吸い込まれ、猛烈な吹雪が生まれる。周囲を蹂躪す

る猛吹雪に晒されて、あたしの場のモンスターは雪と風を防ぐ間も無く氷像にされてしまった。しかも攻撃力は0、どっちかが『ララバイ』の攻撃を受けたらそこで積んでしまふ……っ！

「バトル！ 『ララバイ』、『氷結界の舞姫』を踏み潰せ！ スノウ・オーバーラッシュ  
“ー！”

「ストップ！ 畏発動！ 『アイス・デモリッシュ』！ 相手があたしの水属性モンスターを攻撃して来た時、自軍のモンスターを全て守備表示に変える！」

ブラック・レイ・ランサー：ATK 0 ↓ DEF 600

氷結界の舞姫：ATK 0 ↓ DEF 900

「更に、攻撃対象を別のモンスターに変更できる！ 攻撃対象を『ブラック・レイ・ランサー』に変更！」

「だが『ブラック・レイ・ランサー』は破壊だ！ 更に『ララバイ』は戦闘で相手モンスターを破壊した時、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える！ 2100のダメージを受けて負けろお！」

そんな効果まで!? ええい、そいつ一体でいくつ効果を持つてるのさ！

「させない! 『フル・アーマード・エクシーズ』第三の効果発動! 装備モンスターを代わりに破壊する! これで『ブラック・レイ・ランサー』は破壊されず、装備していた『エアロ・シャーク』は戦闘で破壊されたワケでは無いため、ダメージは受けない!」  
「チツ、しぶといな!」

死歌の氷山羊 ララバイ（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）

ランク6

水属性／獣族

ATK 3200 / DEF 1500

「死歌」と名のついたレベル6モンスター×2

このカードはエクシーズ召喚以外の方法で特殊召喚できない。

このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、ターン終了時まで相手の場に表側表示で存在するカードの効果全て無効にし、相手の場に表側表示で存在するモンスターの攻撃力を0にする。



「クソ……、手札がもうネエし、墓地で使える効果もネエ……。これでターンエンドだ！」

グリード：LP 4400

手札：0枚

フィールド

：死歌の氷山羊 ララバイ（ATK 3200・ORU：1）

：魔法・罨無し

さて、前のターンは何とか凌いだけど、そう何度も上手く行くワケが無いわね。早めに切り返さないと。

「あたしのターン、ドロロー！ 魔法カード『セブンスストア』！ 自分の場のエクシーズモンスターをリリースして1枚ドロロー出来る！ 更にオーバーレイ・ユニットがそのモンスターに残っていれば、その数だけドロローできる枚数を増やす！ 『ブラック・レイ・ラッサー』をリリースし、3枚ドロロー！」

セブンスストア（アニメオリジナル）

## 【通常魔法】

自分フィールド上のエクシーズモンスターを1体リリースし、カードを1枚ドロースる。

リリースしたエクシーズモンスターの下にエクシーズ素材が重ねられていた場合、その枚数だけ更にドロースする。

よし、この手札なら行ける！

「チューナーモンスター、『貪食魚グリーデイス』を召喚！」

『ギョボボボボ！』

貪食魚グリーデイス：ATK 1000

貪食魚グリーデイス（チューナー・効果モンスター）

星3

水属性／魚族

ATK 1000／DEF 1000

このカード名の（1）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 相手の手札の数以下のレベルを持つ自分の墓地の魚族・海竜族・水族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン効果を発動できない。

(2) : このカードがS素材として墓地へ送られた場合に発動できる。

このカードをS素材としたSモンスターの攻撃力・守備力は、相手の手札の数×200アップする。

「レベル4、水属性の『氷結界の舞姫』に、レベル3『グリーデイス』をチューニング！  
リミッター解放、レベル7！ レギュレーターオープン！ フリーズシステム、メン  
テナンスOK！ アクアサポート、オールクリア！」

細く鋭い顎の魚が3つの星に、更にそこから3つの幾何学模様の緑の輪に変わり一列に並ぶ。空中に浮かぶそのリングの中心に雪の結晶を模った盾を持った巫女が飛び込み輪郭線を残して4つの星に。やがてリングの中心を通る様に光の柱が生まれた。

☆4+☆3||☆7

「GO、シンクロ召喚！ The ice spear of dragon！ 『氷結界の龍グングニール』！」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

氷結界の龍グングニール：ATK 2500

眩い光と共に地面に巨大な氷柱が生まれ、それを砕いて赤い目の龍が現れる。青白い氷でできた体は絶対零度の暴力を龍という形で表していた。

本来『グリーデイス』は相手の手札を参照する効果があるんだけど……、グリードの手札は今ゼロだから仕方ないね。

『グングニール』のモンスター効果発動！ 手札を2枚まで捨てて、それと同じ枚数だけ相手の場のカードを破壊する！」

氷結界の龍グングニール（シンクロ・効果モンスター）

星7

水属性／ドラゴン族

ATK 2500 / DEF 1700

チューナー+チューナー以外の水属性モンスター1体以上

1ターンに1度、手札を2枚まで墓地へ捨て、捨てた数だけ相手フィールド上のカードを選択して発動できる。

選択したカードを破壊する。

「今回は手札を1枚だけ捨てて、アンタの場の『死歌の氷山羊 ララバイ』を破壊！」  
 ブリザード・ブレイク・ブレス”！」

「ぐおっ！」

ビュゴオツ！ と『グングニール』が口から猛吹雪を吐き出す。大気中の水分を巻き込んでより強力さを増したその息吹は、元々凍っていた巨大な山羊を更に凍りつかせ、木端微塵に砕いた。

「ら、『ララバイ』が!？」

「これでアンタのフィールドは空っぽ、手札も無し！ バトル！ 『グングニール』でダイレクトアタック！ ヽヘイル・ストリーム”！」

「ぐおおあああああああああああつ！」

グリード：LP 4400↓1900

「よし、ライフが並んだ！」

「ぐぬぬぬぬ……、小娘めえ……！」

「あたしはカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

都：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：氷結界の龍グングニール（ATK 2500）

：伏せカード2枚

さあ、ここからガンガン行くよ！

待っててね、お義兄ちゃん！ あたし、こいつを倒してすぐに会いに行くから！

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 72 : 絶対零度の爪牙

都 : LP 1900

手札 : 0枚

フィールド

: 氷結界の龍グングニール (ATK 2500)

: 伏せカード2枚

グリード : LP 1900

手札 : 0枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罨無し

SIDE : 都

何故が始まったあたしとグリードのデュエル。

手札はお互いに0、ライフは並んでいるけど、フィールドはあたしの方が圧倒的に有利。

でも油断はできない。邪神のカードはチート性能の権化、グリードだって例外じゃ無  
いはず。一瞬でも気を抜いたらそれが命取りになる……っ！

「オレのターン、ドロー！ この瞬間、前のターンにオーバーレイ・ユニットとなった『死  
歌の駿馬 エピオ』のモンスター効果発動！ 通常ドローを2回行う！」

くっ、いきなり手札を補充された！

「更に手札から魔法カード『グラランド・ホイッスル』を発動！ 自分の墓地から闇属性の  
死歌モンスターを1体除外し、デッキから3枚ドローする！ 墓地の『ノクターン』を  
除外！」

グラランド・ホイッスル（オリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地から「死歌」と名のついた闇属性モンスター1体を除外し、デッキから3  
枚ドローする。



そのグランドって「大地」じゃなくて「偉大な」の方なのね……。

「……キシキシシ！」

「！」

グリードが嫌らしく笑う。

あ、ヤバイ。このパターンは巻き返す流れだ。

「行くぞ、小娘！ オレは魔法カード『死神の四連刃』を発動！ このカードはゲームから除外されているレベル4の死歌モンスターを1体、攻撃表示で特殊召喚する！」

死神の四連刃（オリジナル）

【通常魔法】

ゲームから除外されている自分の「死歌」と名のついたレベル4のモンスターを1体、自分の場に攻撃表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターの攻撃力は0となり、効果は無効となる。

「オレはたった今除外した『死歌の影民 ノクターン』を特殊召喚だあ！」

死歌の影民 ノクターン：ATK 0

げ、あの厄介なヤツが復活した!?

蘇生したモンスターは攻撃力0……、て事はこの後こいつがやるのは……!

「まだまだあ！ 2体目の『死歌の影民 ノクターン』を召喚！」

死神の影民 ノクターン：ATK 0

いやあ!? そいつ積んでるの!?

「更に手札から速攻魔法『黄昏の貴公子』を発動！ 手札から死歌モンスターを1枚墓地に捨て、そのレベル分だけこのターン、オレの死歌モンスターのレベルを上げる！ オレは手札のレベル4の『死歌の神秘 タイム』を捨てるぜえ！」

黄昏の貴公子（オリジナル）（改訂版）

【速攻魔法】

（1）：手札の「死歌」モンスター1体を捨てて発動する。

自分フィールドの「死歌」モンスターは、ターン終了時まで捨てたモンスターのレベ

ル分だけレベルが上がる。

(2) : このカードの効果は相手によって無効になった場合、その無効になったカードを破壊する。

その後、デッキから1枚ドローする。

死歌の影民 ノクターン : ☆4 ↓ 8

死歌の影民 ノクターン : ☆4 ↓ 8

「やっぱりレベルを上げて来るか!」

「キシキシキシ! 当然だ! 更に墓地の『死歌の神秘 タイム』のモンスター効果発動! 墓地からこのカードを除外し、デッキからフィールド魔法を1枚手札に加える!」

死歌の神秘 タイム (効果モンスター) (オリジナル)

星4

地属性 / 魔法使い族

ATK 1300 / DEF 500

自分の墓地からこのカードを除外して発動する。

デツキからフィールド魔法を1枚手札に加える。

手札コストを上手く利用して来たね……！　　とうかこいつのデツキ、除外を軸にでもして抵抗しない限り、場と墓地で延々と効果を使われ続けるっ！

「デツキから『絶対音感地獄』を手札に加え、そのまま発動するぜえ！」

来た、あいつ独自のフィールド魔法！

グリードのディスクがカードを呑み込む。その途端に周囲に紫色の禍々しい音符が踊り出し、暗い色を中心として書かれた五線譜の楽譜が蛇の様にあたし達の周りを取り囲んだ。

「安心しろ、まだ効果は使わねえ」

「まだ”って事は、このターン中に使う予定があるんでしょ」

「キシシ、その通りさ！　　まずはオレのエクシーズモンスターを見てもらおうか！　　オ

レはレベル8となった『ノクターン』2体でオーバーレイ！」

『ヴォガガガアアアアッ！』

『ヴォオオオオオゴゴッ！』

「2体の“死歌”モンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」



『グングニール』ツ！ うぐう……っ！』

都：LP 1900↓100

「キシキシシッ！ オレのン熱血指導はここからが本番だぜ！ テメエのモンスターを戦闘で破壊したこの瞬間、『ボサノバ』のモンスター効果、発動！ オーバーレイ・ユニツトを1つ使い、オレの場に『ピラニア・トークン』を2体、守備表示で特殊召喚できる！ ピラニア・ベイッ！」

『『グゴゴゴゴッ！』』

死歌の渦大魚 ボサノバ（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）

ランク8

闇属性／魚族

ATK 4300／DEF 4300

「死歌」と名のついたレベル8モンスター×2

このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

自分の場に「ピラニア・トークン」（魚族・闇・星1・攻40000／守40000）2体を守備表示で特殊召喚する。

「ピラニア・トークン」はシンクロ素材にできず、リリースする事もできない。

このカードが墓地から特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「死歌」と名のついたエクシーズモンスターを可能な限り特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、攻撃力と守備力は0になる。

またモンスター効果は無効化され、フィールドを離れた時ゲームから除外される。

死歌の渦大魚 ボサノバ：ORU 2↓1

ピラニア・トークン：DEF 4000

ピラニア・トークン：DEF 4000

うわ、しかもキモい攻撃だけじゃなくて増殖までした！

「んまあまだまだあ！ 更にフィールド魔法『絶対音感地獄』の効果発動！ オレの『死歌

』モンスターが相手にバトルダメージを与えた時、相手ライフを半分にする！」

「な!?! きゃあああああああああああああああああああああつ！」

絶対音感地獄（オリジナル）（改訂版）

【フィールド魔法】

（1）：このカードが墓地に送られた場合、デッキに存在する「絶対音感地獄」を発動させる事ができる。

（2）：「死歌」モンスターが相手に戦闘ダメージを与えた場合、相手のLPを更に半分にする。

（3）：1ターンに1度、自分のメインフェイズ2に発動できる。

ゲームから除外状態の「死歌」モンスターを3体自分のデッキに戻し1枚ドロウする。

「キシシキシシシ、シンプルだが凶悪だろう？」

「グ、ゴボオツ!!」

うぐ……、また血い吐いちやった……！ しかも額とか切ったつばい。頭から血イ流してる。

流石にきつつい。血が無くなって来てるから再生力落ちて来てる……！

「キシシキシシシッ！ 良いね、その血達磨な姿！ さつきまでの小娘とは違って魅力があるぜ！」



こんの、ド変態が……! !

ペツ、と血の塊を吐いてグリードに向き合う。

「……こんな血だらけな女に魅力感じるとか、アンタ頭おかしいんじゃないの? !」

「キシキシキシシィツ! ! ンな事あ百も承知だぜ! ! だがさつきよりオレ好みなのも確かだ! ! 今なら抱いてやらん事も無いぞ? !」

「お断りだつつの。あたしは身も心も義兄に捧げている、アンタなんかやるモンは何も無い! !」

カウンター毘、発動! ! 『断熱氷塊—インシュレート・アイスバグ—! ! あたしのライフが相手のカード効果で半分以下に減った時、墓地から自分のライフより低い攻撃力を持った水属性モンスターを除外し、その守備力分ライフを回復する! ! 攻撃力0の『スノーマンイーター』を除外し、守備力1900をあたしのライフに加算する! !』

都 : LP 50 ↓ 1950

「そして自分の場にモンスターが存在しなければ、デッキから1枚ドロ—する! !」

断熱氷塊—インシュレート・アイスバグ—(オリジナル)

## 【カウンター罠】

相手のカード効果によって自分のライフポイントが半分以下になった時に発動できる。

自分のライフポイント以下の攻撃力の水属性モンスターを1体墓地から除外し、その守備力分だけライフポイントを回復する。

このカードの発動時、自分の場にモンスターが存在しなければカードを1枚ドロースる。

「これでライフは回復してアンタを上回った、しかも手札を増やして損失を軽減。あたしをザコとか思っていると、痛い目見るよ!」

「とか言うわりには随分いっぱい見えるが? どうせ痛みで立つてるのも辛くなつて来てるんじゃないの?」

う、確かに……。グリードの言う通り、全身に激痛が今も走っていて、正直ぶつ倒れそう。

でも、邪神を通してあたしは知っている。義兄、黎がどれだけ過酷な戦いを経験したのかを。毎度誰かを庇ったり盾になったり無茶な戦法取ったりして、その度に大怪我をしている。いくら頑丈でも、あれだけのダメージを何度も蓄積し続ければ危険過

ぎる。

こうして引き離されている今、あたしにできる事なんて何も無い。それでも、だからと言って何もしないのは間違つてると思うんだ。お義兄ちゃんがあたしを助けようと頑張るのなら、あたしもそれに応えなくちゃいけない。そう、せめてグリードをここで倒すぐらいの事をしないと！

「フン、オレは『絶対音感地獄』の効果を発動。除外されている『メヌエット』、『ストーム』、『ラル』をデッキに戻して1枚ドロ。更に『邪天使の施し』！ 互いに3枚ドロして相手だけ2枚捨てる！」

「わざわざ手札を補強してくれるワケ？ ドロ！。そして2枚捨てるよ！」

「こつちもドロ！。これでターンエンドだ！」

グリード：LP 1900

手札：3枚

フィールド

：死歌の渦大魚 ボサノバ (ATK 4300・ORU:i)、ピラニア・トークン (D

EF 4000)、ピラニア・トークン (DEF 4000)

：絶対音感地獄 (フィールド魔法)

「あたしのターン、ドロロー！」

良し……、あたしはまだ負けてない！

デツキに、墓地にカードが残っていれば、希望はそこにある。義兄は針の穴より小さな希望だつて信じて進んで来た。だつたら、あたしだつて！

「リバースカード、オープン！ 『リビングゲツドの呼び声』！ 『邪天使の施し』の効果で捨てた『氷結界の軍師』を特殊召喚！」

『トアツ！』

氷結界の軍師：ATK 1600

あたしが呼び出したのは、編み笠を被り扇を手にした老人。このデツキのドロローソースでもある。

『軍師』の効果発動！ 1ターンに1度、あたしの手札から氷結界モンスターを1枚捨てて、カードを1枚ドロローする！」

氷結界の軍師（効果モンスター）

星4

水属性／魔法使い族

ATK 1600／DEF 1600

1ターンに1度、手札から「氷結界」と名のついたモンスター1体を墓地へ送って発動できる。

デッキからカードを1枚ドロウする。

「更にチューナーモンスター『深海のディーヴァ』を召喚！ このカードは召喚に成功した時、デッキからレベル3以下の海竜族モンスターを特殊召喚できる！ デッキからレベル2の『氷弾使いレイス』を特殊召喚！」

深海のディーヴァ（チューナー・効果モンスター）

星2

水属性／海竜族

ATK 200／DEF 400

このカードが召喚に成功した時、デッキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚できる。

氷弾使いレイス（チューナー・効果モンスター）

星2

水属性／海竜族

ATK 800 / DEF 800

このカードはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

手札からこのターンあたしが呼び出したのはマーメイドの歌姫。その歌声に呼び寄せられて人型海竜の戦士が姿を現す。

まだまだ、もう一手！

「そして永続罫『デモンズ・チェーン』をオープン！ これで『レイス』の効果を無効にする！」

デモンズ・チェーン

【永続罫】

フィールド上の効果モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターは攻撃できず、効果は無効化される。

選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

「この局面で一見無意味な永続罫……、そしてその合計レベルは……！」

「YES, that's right! レベル4、水属性の『氷結界の軍師』に、レベル2の『氷弾使いのレイス』をチューニング！」

海竜人間が2つの幾何学模様の緑のリングに姿を変え、一列に並ぶ。その中心を、編み笠を被った参謀が潜る。

「リミッター解放、レベル6！ ブースターランチ、OK！ パワーネットワーク、ノイズクリア！ 氷の世界に君臨する吹雪の力、絶対零度の獣となりて咆哮せよ！」  
見せてやる、あたしのデッキの更なるエースを！

☆4+☆2=☆6

「GO、シンクロ召喚！ The gracious blue tiger! 『氷結界の虎王ドウローレン』！」

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

氷結界の虎王ドウローレン：ATK 2000

突如地面から現れる巨大な氷の柱の塊。それを噛み砕いて荒々しく青色の猛虎が登場した。

氷結界の虎王ドウローレン（シンクロ・効果モンスター）

星6

水属性／獣族

ATK 2000 / DEF 1400

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカード以外の自分フィールドの表側表示のカードを任意の数だけ対象として発動できる。

その自分の表側表示のカードを持ち主の手札に戻す。

このカードの攻撃力はターン終了時まで、この効果で手札に戻ったカードの数×500アップする。

「そして手札から装備魔法『魔導士の力』！ あたしの場の魔法・罨1枚につき500ポ



イント、攻守を上げる！」

魔導士の力

【装備魔法】

装備モンスター<sup>①</sup>の攻撃力・守備力は、自分フィールド上の魔法・罠カード1枚につき500ポイントアップする。

氷結界の虎王ドウローレン：ATK 2000↓3500

「ほう、攻撃力3500か。だがそれっぽっちじゃあオレの『ボサノバ』には……、いや違え！」

「気付いた？ 『ドウローレン』の効果発動！ 1ターンに1度、あたしの場の表側表示のカードを手札に戻し、その数×500ポイント、攻撃力を上げる！」

あたしは『リビンググデッドの呼び声』、『デモンズ・チェーン』、『魔導士の力』、『ディヴァ』を手札に戻し、攻撃力を2000ポイントアップさせる！  
// アイシクル・ハウリング！！」

『ガアアアアアアアアアッ！』

闇と音の空間に鳴り響く猛獣の雄叫び。それに合わせて場の4枚のカードが手札に戻る。

『魔導士の力』は『団結の力』に能力的には劣るけど、寧ろあたしの【氷結界セルフバウンス】みたいな魔法・罫を多用するデッキには逆に都合が良い。

氷結界の虎王ドウローレン：ATK 3500↓2000↓4000

「そしてカードを3枚伏せて『魔導士の力』をもう1度装備！」

氷結界の虎王ドウローレン：ATK 4000↓6000

「攻撃力6000だと!?!」

ふふ、驚いてる驚いてる。攻撃力4300をこんな簡単に越えられたらそりゃあ驚くよね。

「バトル！ 行け、『ドウローレン』！ 『ボサノバ』を噛み千切れえ！ ブリザード・フアング！」

「ぬおおおおおおおおっー!」

グリード：LP 1900↓200

巨魚を頭から豪快に食らい付く青い虎。抵抗する間も無く、赤黒いピラニアは骨ごと食い破られてしまった。

「へへん、どう? あたしはこれでターンエンド。エンドフェイズ時に『ドウローレン』の効果は消えて攻撃力は下がる」

氷結界の虎王ドウローレン：ATK 6000↓4000

都：LP 1950

手札：1枚 (『深海のディーヴァ』)

フィールド

：氷結界の虎王ドウローレン (ATK 4000)

：伏せカード3枚 (内2枚は『デモンズ・チエーン』と『リビングゲテッドの呼び声』)、  
魔導士の力 (装備魔法・『氷結界の虎王ドウローレン』に装備)

ここまでではOK、ライフも半分弱残っていて、しかも攻撃力4000のモンスターがいる。ワンパワーに頼ると危険だけど、少なくとも一瞬で致命傷を負う心配は無いはず。

次のターンにもう1度『深海のデーヴァ』を召喚し、デッキから『氷結界の輸送部隊』を特殊召喚すれば、危険だけど手札と壁を増やす事ができる。

氷結界の輸送部隊（効果モンスター）

星1

水属性／海竜族

ATK 500 / DEF 200

1ターンに1度、自分の墓地の「氷結界」と名のついたモンスター2体を選択して発動できる。

選択したモンスター2体をデッキに戻してシャッフルする。

その後、お互いにデッキからカードを1枚ドロウする。

そして伏せたデモチェとリビデがあれば攻撃を封じつつ、『邪天使の施し』の時に捨て

た墓地の『氷結界の守護陣』を特殊召喚し、グリードの攻撃をロックできる。

この陣営に、死角は無い！

「オレのターン、ドロー！ 凶に乗るなよ、小娘があ……！」

っ！ グリードから感じる気配が変わった！

「オレは手札から魔法カード『天空を指す剣』を発動！ このカードはオレのライフが1000を切っている時、デッキからレベル8以上の死歌モンスターを1体選択して墓地に送り、同じレベルのモンスターを手札に加える！」

天空を指す剣（オリジナル）

#### 【通常魔法】

自分のライフが1000ポイント未満の時に発動できる。

デッキからレベル8以上の「死歌」と名のついたモンスターを1体選択して墓地に送り、そのモンスターと同じレベルのモンスターを1体選択して手札に加える。

この効果で墓地に送ったモンスターはこのターン墓地から特殊召喚できず、ゲームから除外する事もできない。

「この効果で、デッキからレベル10の『死歌の昼夜 サニー』を墓地に送り、デッキか

らレベル10のオレ自身を手札に加えるぜえ！」

「で、でもアンタを召喚するにはリリースが3体必要！ アンタの場にいるモンスターは2体！ 召喚はできないよ！」

「アマいぜえ！ オレは場の『ピラニア・トークン』2体を除外し、『死歌の盗賊 レクイエム』を特殊召喚！」

『ハアッ！』

死歌の盗賊 レクイエム：ATK 0

「このカードは通常召喚できないが、オレのモンスターを2体まで除外して手札から特殊召喚できる！ そしてこのカードは除外したモンスター数分だけリリース素材扱いの数を増やす！ つまりこいつは今、1体で3体分のリリース素材にできるんだよ！」

「何ですって!?!」

「ついでに言えばこいつに罠カードは効かねえぜ！」

死歌の盗賊 レクイエム（効果モンスター）（オリジナル）

星10

光属性／戦士族

ATK 0 / DEF 0

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上のモンスターを2体までゲームから除外した時のみ、このカードは手札から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したこのカードをリリースしてモンスターをアドバンス召喚する場合、このカードは除外したモンスター＋1体分のリリース素材として扱う事ができ、フィールドを離れた時ゲームから除外される。

このカードは相手の罠の効果を受けない。

「トランプが効かないって、それじゃあデモチエで効果を無効に出来ないじゃん！」

「キシキシキシッ！ 行くぜ！」

『クフフフッ！』

「オレは3体分のリリース素材として扱う『レイイム』をリリース！」

焼けた肌のアラビアン風な盗賊が三筋の光となって消え、グリードの持つカードに吸い込まれる。

来る……！





とうとう来たかっ！

曲刀を2本背負った褐色肌で赤毛の女性が光へと消え、その中あら現れたグリードの本体。漆黒の鎧とローブを身に纏い、身の丈を超える巨大な処刑鎌デスサイズを2本構えている。全長はざっと3〜4メートルくらい、変身前は170程度だったのに、今じゃあ見上げる程の大男だ。

七罪士    グリード：ATK    3800

「攻撃力、3800……」

火力その物は『ドウローレン』の方が上だけど……っ！

「行くぜ！ オレの効果を発動！ 1ターンに1度、相手の効果モンスター1体の攻撃力を0にし、その元々の攻撃力をオレ自身にプラスする！ アヴェリシヤス・アブ

ソープッ！」

「何ですと!?!」

「当然対象は『ドオローレン』だ！」

鎌から怪しい光を放って青い虎を狙い撃つグリード。その光に当てられた瞬間、両者の攻撃力が変化した。

氷結界の虎王ドウローレン：ATK 4000↓0

七罪士 グリード：ATK 3800↓5800

「こ、攻撃力5800っ!?!」

「さあくらあくにい！ 超豪華特典として、オレのライフをその分だけ回復するぜえ！」

グリード：LP 2000↓2200

そ、そんな、折角ライフをあそこまで削ったのに!?

しかも攻撃力の差が5800って、1950しか無いあたしじゃあ耐えられない!

「さあ、お待ちかねのお、バトルだぜえ! オレ自身で『ドウローレン』を攻撃い!」

くっ! この攻撃を通したら負ける!

「畏発動、『バトル・ラッシュ』! 相手が攻撃して来た時、このバトルでの戦闘破壊を無効にし、あたしが受けるダメージを相手に移す!」

バトル・ラッシュ(アニメオリジナル)

#### 【通常畏】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動することができる。

自分フィールド上のモンスターはこの戦闘では破壊されない。

この戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは代わりに相手が受ける。

「5800のダメージは、そのままアンタに受けてもらおうわ!」

「無駄無駄無駄ア! オレの効果を発動! 1ターンに1度、相手の発動した魔法・畏を

無効にして破壊できる! 更にオレ自身の効果は無効化されず、この効果に相手は

チェーンできないっ! “オデイシヤス・スライサー”!」

「な!？」

斬！ 瞬時に振るわれた大鎌によって、あたしの罫が破壊されてしまった。

まさか『シエン』の効果の内蔵しているなんて……！

「だったら、バトルステップに『デモンズ・チェーン』を発動！ 効果はそのままでも、攻撃は止めさせてもらおうわ！」

「チツ、そいつを忘れてたぜ……」

……。あたしのカードから出た鎖が、グリードを縛り上げて辛うじて止める。危なかった……。

でも、グリードの効果は無効にできない。つまりそれは、『デモンズ・チェーン』で止められるのは攻撃だけという事。他に効果があったら、正直厳しい。

「……まあ良いさ、『絶対音感地獄』の効果発動。除外されている『ボレロ』、『レクイエム』、『タイム』を戻して1枚ドロ。更に魔法カード『ミラージュ・アワーグラス』を発動。次のターン、相手は2度通常召喚できる代わりに、デッキから死歌モンスターを3体選択して墓地に送る」

ミラージュ・アワーグラス（オリジナル）

【通常魔法】

自分のデッキから「死歌」と名のついたモンスターを3体選択して墓地に送る。

この効果の対象となったモンスターは次の自分のターンのスタンバイフェイズまで無効となる。

このカードを発動した次のターン、相手は通常召喚を2回行える。

効果を使つて来ないって事は……、つまりグリードにはもう使える効果が無い……？  
「効果でデッキから『ボレロ』、『ラル』、『ノクターン』を墓地に送り、ターンエンド！」

グリード：LP 2200

手札：2枚

フィールド

：七罪士グリード(ATK 5800)

：絶対音感地獄(フィールド魔法)

「あたしのターン、ドロ―！」

「キシキシキシ」

嫌らしく笑うグリード。あの目は絶対に何か企んでいる。しかも『サニー』はまだ効

果を使つてない。

とは言え、あたしには今、何かをされても打つ手が無い。

「あたしは『ディーヴァ』を準備表示で召喚！ 更に効果でデッキからレベル1の『氷結界の輸送部隊』を特殊召喚！」

深海のディーヴァ：DEF 400

氷結界の輸送部隊：DEF 200

「輸送部隊の効果発動！ あたしの墓地から『氷結界の舞姫』と『氷結界の風水師』をデッキに戻して互いに1枚ドロウする！ 続けて『ミラーージュ・アワーグラス』の効果により『氷結界の番人ブリズド』を召喚！ この子も準備表示！」

氷結界の番人ブリズド：DEF 500

氷結界の番人ブリズド（効果モンスター）

星1

水属性／水族

ATK 300 / DEF 500

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、デッキからカードを1枚ドロウする。

兎に角、ここは守りを固めるしか無い。下手に行動したら、返ってあたしが不利になりかねない。

このターンあたしが呼び出したのは前のターン呼び出した人魚の歌姫に、緑の大蜥蜴に乗った行商、そして猛禽を思わせる水色の怪鳥。

これで何とかするつきや無い。『プリズド』は戦闘破壊された時、1枚ドロウできる。これで逆転の一手を頼むしか無いね。

それに、手が何も無いワケじゃ無い。強化は相手の方が早く強いけど、それを少しだけ遅らせる事もできる。

「フン、守りを固めても無駄だ」

「それはあたしが決める事だよ。更に『リビングデッドの呼び声』！ 墓地から『ハリマンボウ』を特殊召喚！」

『ジュバババッ！』

ハリマンボウ：ATK 1500

「そして『ドウローレン』の効果発動！あたしの場の『リビングデッド』、『深海のディーヴァ』、『魔導士の力』を手札に戻し——」

これで『リビングデッドの呼び声』が外れ、『ハリマンボウ』は破壊され墓地に送られる。これで500ずつ攻撃力を下げに行けば、いずれあの高い攻撃力も低くなる！

そう思った次の瞬間だった。

『グオオオオオオオオンッ!?!』

「え!?!」

突如としてあたしのエースである青氷の猛虎が爆発し、消滅してしまった。

一体、何が……!?!

「ぎくんねんでしたく！オレの効果を受けたモンスターは、モンスター効果を発動したら自爆するんだよ！」

「何ですって!?!」

「更に追加特典として、元々の攻撃力とライフの差分だけ、ダメージを受けてもらおうぜえ！  
〴〵キリング・リトリビューション〴〵！」

「な、きゃああああああああつ！」



都 : LP 1950 ↓ 1900

や、やられた……！ だからドレイン効果は効果モンスター限定だったのか……！  
不幸中の幸い、『ドウローレン』の攻撃力がライフと近かったお蔭で大したダメージ  
じゃない。

七罪士グリード（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星10

闇属性／戦士族

ATK 3800 / DEF 3100

(1) : このカードは特殊召喚できず、自分フィールドのモンスターを3体リリースしなければアドバンス召喚できない。

(2) : 1ターンに1度、相手フィールドの効果モンスター1体を対象に発動できる。

そのモンスターの攻撃力を0にし、その元々の攻撃力だけこのカードの攻撃力をアップして自分のLPを回復する。

(3) : (2) の対象になったモンスターの効果が発動した時に発動する。

発動を無効にし破壊する。

その後、そのモンスターの元々の攻撃力と相手LPの差分だけ相手にダメージを与える。

(4)：自分のターンに1度、相手が魔法・罠の効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない。

(5)：このカードが相手によって破壊された場合、相手フィールドの全てのモンスターのコントロールを得る。

この効果でコントロールを得たモンスターは全て元々のコントロールを自分として扱う。

ダメージは少ないけど、あたしのライフはグリードよりも下だし、何よりエースがやられてしまった。

状況は圧倒的に不利……。ここは……。

「魔法カード『マジック・プランター』！ 自分の場の永続罠1枚をコストに、2枚ドロウする！ あたしは『リビングデッドの呼び声』を墓地に送り……。ドロー！」

ダメだ、これじゃ逆転できない……！

「更に『ハリマンボウ』の効果でアンタの攻撃力を5000下げる！」

七罪士グリード：ATK 5800↓5300

「ハッ、痛くも痒くもねえぜ！」

グリードは鼻で笑う。確かに、あの程度の能力値ダウンじゃあ意味合いは薄い。このままじゃジリ貧だ。

「あたしはカードを伏せて、ターンエンド」

都：LP 1900

手札：1枚

フィールド

：深海のディーヴァ（DEF 400）、氷結界の輸送部隊（DEF 200）、氷結界の番人ブリズド（DEF 500）

・伏せカード1枚、デモンズ・チェーン（永続罫・『七罪士グリード』を対象に発動中）

グリードの効果は無効にできなくても、攻撃は封じられている。そのお蔭で何とかあ

の火力を抑えられている。

でも、それは裏を返せば『デモンズ・チエーン』だけでこの状況を支えているという事。いつ壊れてもおかしくないこのフィールドの均衡、保つて精々が1ターンの。その間にどうにかしないとね……！

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 73 : 氷の世界に眠りし姫君

グリード : LP 2200

手札 : 3枚

フィールド

: 七罪士グリード (ATK 5300)

: 絶対音感地獄 (フィールド魔法)

都 : LP 1900

手札 : 1枚

フィールド

: 深海のダイブア (DEF 400)、氷結界の輸送部隊 (DEF 200)、氷結

界の番人ブリズド (DEF 500)

: 伏せカード1枚、デモンズ・チェーン (永続罫『七罪士グリード』を対象に発動中)

## SIDE:都

「オレのターン、ドロロー！ オレは『サイクロン』を発動！ 相手の場の魔法・罠を1枚破壊する！ 当然、『デモンズ・チエーン』を破壊！」

「くっ！」

グリードとのデュエル、奴自身の能力を前に、あたしのエースが粉碎されてしまった。氷結界の二龍が禁止になってから、あたしのデツキは改造を余儀なくされ、そこからセルフバウンス軸になったわけだけど、こいつの能力はハッキリ言って手強い。

最早敗北へのカウントダウンが開始されたと言っても過言じゃ無い。

辛うじて均衡を保たせていた『デモンズ・チエーン』もたつた今、壊された。

「更にオレ自身の効果発動！ 『氷結界の輸送部隊』の攻撃力を0にし、500ポイント攻撃力をアップさせライフを回復する！ ムアヴェリシヤス・アブソープ！」

氷結界の輸送部隊：ATK 500↓0

七罪士グリード：ATK 5300↓5800

グリード：LP 2200↓2700

これで『輸送部隊』も封印……。グリードの能力はドレインに加えて破壊とバーンも備えているから、次に効果を発動すればあたしは更に900のダメージを受けてしまう。実質、モンスター効果の無効に等しい。

「このまま行けばオレの勝ち揺るがねえ。だが、念には念だ……。『死歌の大翼 アウル』を召喚！」

『ホホウツ！』

死歌の大翼 アウル：ATK 1700

「このカードが召喚に成功した時、オレのデッキから3枚をめくり、その中に存在する死歌モンスター1体を手札に加える！」

死歌の大翼 アウル（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星4

風属性／鳥獣族

ATK 1700 / DEF 500

（1）：このカードは特殊召喚できない。

(2) : このカードの召喚に成功した時に発動する。

デッキの上からカードを3枚めくり、その中に存在する「死歌」モンスターを1枚手札に加える。

(3) : このカードを墓地から除外して発動する。

このターンに受けた効果ダメージの数値の合計値分だけ自分のLPを回復する。

「オレがめくったのは『アブソプシヨンドロー』、『失意のミス』、『死歌の録音機 スケアクロウ』！ よってオレは『スケアクロウ』を手札に加え、残りはデッキに戻す！」

アブソプシヨンドロー（オリジナル）

【通常罫】

相手モンスターがダイレクトアタックを行う時に発動できる。

ダメージを無効にし、攻撃を行ったモンスターの元々の攻撃力700ポイントにつき1枚カードをドローする。

失意のミス（オリジナル）

【通常魔法】



相手の場のモンスターを全て破壊し、その攻撃力の合計値分のダメージを相手に与える。

この効果で破壊した相手モンスターの数が3体以下の場合、このターンのバトルフェイズをスキップする。

「バトル！ オレ自身で『ブリズド』、『アウル』で『デューヴァ』を攻撃！」

「くっ！ 『ブリズド』の効果発動、デッキから1枚ドロロー！」

これで、あたしのモンスターは効果を使った瞬間に起爆する『輸送部隊』のみ。このままじゃあギリ貧で負ける……！

氷結界の神髄はロックと緩くも強い制圧性にある。でも、効果を使った瞬間に起爆してしまうんじゃない。寧ろデメリットにならんかねない。

……グリードの効果は恐らく永続効果には効かない。でもその一方で攻守を0にする効果がある。『守護陣』ならば寧ろ都合な効果だけど、それが通る相手じゃ無いはず。

氷結界の守護陣（チューナー・効果モンスター）

星3

水属性／水族

ATK 2000 / DEF 1600

自分フィールド上にこのカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが存在する限り、このカードの守備力以上の攻撃力を持つ相手モンスターは攻撃宣言できない。

「キシキシキシシッ！ オレはカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

グリード：LP 2700

手札：2枚（内1枚は『死歌の録音機 スケアクロウ』

フィールド

：七罪士グリード（ATK 5800）、死歌の大翼 アウル（ATK 1700）

：伏せカード1枚、絶対音感地獄（フィールド魔法）

……あたしの手札は今2枚。片方は高い攻撃力を持つモンスターだけど、倍にしたつてグリードには届かない。おまけにレベルも高い。もう片方は魔法カード、ドロワー効果を持つているけどこれだけじゃあ意味が無い。

次のドロワーが勝負。もしモンスターを引けても次のターンにあいすがモンスターを

召喚すれば壁は2体しかない以上、グリードのダイレクトアタックを受ければライフは尽きる。

こんな時、あのペンダントがあれば握りしめて勇気を貰えたのに……。

「あたしのターン……、ドロー！」

……、来たっ！

「魔法カード『浮上』！ 墓地からレベル3以下の水族・魚族・海竜族モンスターを1体、守備表示で呼び戻す！」

浮上

【通常魔法】

自分の墓地のレベル3以下の魚族・海竜族・水族モンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。

「復活せよ、『ハリマンボウ』！」

『ギョボボボボッ！』

ハリマンボウ：DEF 100

あたしの場に復活するずんぐりしたマンボウ。

これであたしの場のモンスターは2体、グリードを攻略する手段は整った！

「キシキシキシキシ！ そんなモンスターを出してどうする！」

「こうする！ あたしは『ハリマンボウ』と『氷結界の輸送部隊』をリリース！ 出でよ、

『氷結界の虎将ガンターラ！』

『トアツ！』

氷結界の虎将ガンターラ：ATK 2700

水面を思わせる光の中へと行商とマンボウが消え、隆々とした筋骨を持った僧兵が姿を現す。氷の様に透き通った水色の籠手を嵌め、ガツシリとした上裸の体で威風堂々と立っている。

「キシシッ！ で、攻撃力2700で5800のオレにどう立ち向かうんだ？」

「『ハリマンボウ』の効果発動！ アンタの攻撃力を500下げる！」

七罪士グリード：ATK 5800↓5300

「ぐ……、だがこの程度、焼け石に水！」

いや、良いんだよ。これで準備は整った！ まさか前のターンに手持無沙汰に伏せたこのカードが役立つなんてね。

「バトル！ 行け『ガンターラ』、グリードに攻撃！」

「何!? 自爆か!?!」

「そう思うなら、『ガンターラ』の攻撃力をよく見てみなよ！」

「あ?」

地面を力強く蹴って走り出す僧兵。グリードが訝しげに見る視線の先、一歩また一歩と地を踏み締めて突撃するその姿はやがて紅の炎に包まれ、速度と迫力が増していった。

氷結界の虎将ガンターラ：ATK 2700↓5400

「こ、攻撃力が倍になっただお!?!」

「『氷覇牙碎撃』！」

走る勢いを殺さずそのままに拳に乗せ、グリードのどてつ腹に叩き込む。氷と炎という正反対のエネルギーを内蔵した鉄拳は、そのままグリードの鎌も鎧も粉碎して吹き飛ばした。

「ぐおおおおおおおおおとおおおとおおお!?」

グリード：LP 2700↓2600

氷結界の虎将ガンターラ：ATK 5400↓2700

「ば、バカな……。一体何が……。っ!」

「罨カード『燃える闘志』! このカードは発動後装備カードになり、相手の場に元々の数値より高い攻撃力を持ったモンスターが存在する時、ダメージステップの間だけ装備モンスターの攻撃力を元々の倍にする!」

燃える闘志

【通常罨】

発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。

元々の攻撃力よりも攻撃力が高いモンスターが相手フィールド上に存在する場合、装備モンスターの攻撃力はダメージステップの間、元々の攻撃力の倍になる。

こいつはワンキルには使い辛い反面、いきなり攻撃力を跳ね上げるから相手の意表を突ける。グリードが自分の効果で攻撃力をアップしていたのを逆手に取り、かつ『ハリマンボウ』で攻撃力を上回れるギリギリの数値まで下げる。後僅かでも攻撃力が高ければあいつを倒す事はできなかった。

さて、これでエンドフェイズに墓地から『氷結界の守護陣』を復活させれば、攻撃力1600以上のモンスターの攻撃宣言を封じる事ができる。後はジワジワと追いつめて行けば……! !

強烈な腹パンが決まって蹲っていたグリードだったけど、顔を苦しそうに上げてニヤリと笑った。

「ぐう……! ! だが破壊されたこの瞬間、オレ自身のモンスター効果発動! 相手モンスター全てのコントロールを奪う! 〃ローバー・スピリット〃! !」

「な! !」

そんな効果まで! !?

怪しい光がグリードの手から放たれてあたしの場の僧兵に取り付く。赤い光が虹彩

を支配し、あたしのモンスターはグリードの場に移ってしまった。

「『ガンターラ』が……！」

これじゃあエンドフェイズに復活させる効果が使えない……！」

だったら！

「魔法カード『一時休戦』！ 互いに1枚ドロウして、アンタのターンが終わるまでに発生するダメージを0にする！ 更にカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

都：LP 1400

手札：0枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚、燃える闘志（通常罨・『氷結界の虎将ガンターラ』に装備）

「オレのターン、ドロウ！ フン、時間稼ぎだな。もう負けは決まったようなモンだ、さっさとサレンダーしちまえば楽になるつてのによお」

「最後まで諦めないのがデュエルだよ。デッキにカードが残っている限り、あたしは希望を、そして未来を信じて戦う！」



お義兄ちゃんもそうだった。絶対に諦めず、希望を信じて歩み続けた。信じる者は救われる、途中で諦めた人には希望も奇跡もやっつて来ない。それがあたしの持論だ。

「あたしは強くて偉大な義兄の背中を見て育って来た。あの人の光も、強さも、あたしの心の中にある。あたしを倒したいなら、義兄のくれた希望ごと打ち碎きなさい！」

「……ああ、そうかよ。ならその希望とやらに何時までも縋つてろ。ターンエンド！」

グリッド：LP 2600

手札：4枚

フィールド

：氷結界の虎将ガンターラ（ATK 2700）

：伏せカード1枚、絶対音感地獄（フィールド魔法）

「あたしのターン！ スタンバイフェイズ時に『軍師』の効果で捨てた、墓地の『氷結界の刀匠』のモンスター効果発動！ あたしの場にモンスターが存在せず、相手の場に攻撃力2000以上を含めたモンスターが2体以上存在する場合、このカードは墓地から特殊召喚できる！」

『トアツ!』

氷結界の刀匠：ATK 1200

「更にあたしの場の表側表示の魔法・罾を墓地に送り、デッキから装備魔法を1枚手札に加える事ができる! 『燃える闘志』をコストにし、この効果でデッキから選ぶのは『エクスリーズの宝冠』!」

氷結界の刀匠（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星4

水属性／戦士族

ATK 1200／DEF 700

このカード名の（2）の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：1ターンに1度、自分の場の表側表示の魔法・罾カードを1枚墓地に送って発動できる。

デッキから装備魔法を1枚手札に加える事ができる。

（2）：自分のスタンバイフェイズ時、自分フィールドにモンスターが存在せず、相手

フィールド上に攻撃力2000以上を含めたモンスターが2体以上存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚できる。

(3) : このカードをX素材にした水属性Xモンスターは以下の効果を得る。

●このカードがX召喚に成功した場合、デッキをシャッフルし、1番上のカードをこのカードの下に重ねてX素材とする。

そのカードが水属性モンスターだった場合、カードを2枚ドロウする。

水色のツナギを着た男が墓地から蘇る。更にあたしの場の罫カードを持っていた金槌で何度も叩くと、それは1枚の装備魔法に変わった。

手札はこれで2枚、『死者蘇生』と『エクシーズの宝冠』。この手札で出せるモンスターは数種類。その1枚1枚が光の線で繋がる。

その先にあるカード、そして結果は……、あたしの勝ちだ！

「このデュエル、貰ったよグリード！」

「んだと!？」

「魔法カード『死者蘇生』！ 墓地から蘇って、『エアロ・シャーク』！」

『ギュワワワワッ!』

## 潜航母艦エアロ・シャーク：ATK 1900

「ハッ、そんなザコ共に何ができる！」

「できるよ！ 装備魔法『エクシーズの宝冠』！ あたしの場のエクシーズモンスター1体に装備する！ 装備モンスターのランクはレベルになり、1体で2体分のエクシーズ素材になる！」

エクシーズの宝冠（アニメオリジナル・独自解釈効果）

## 【装備魔法】

エクシーズモンスターのみに装備可能。

装備モンスターのランクは同じ数値のレベルとして扱う。

装備モンスターはシンクロ素材にできず、エクシーズ素材にしてエクシーズ召喚を行う場合、このカードを装備モンスターと同じ名前・種族・属性・レベルとして扱うランクとして扱う事でエクシーズ素材とする事ができる。

このカードがエクシーズモンスターの下に重ねられている場合、墓地に送られる。エンドフェイズ時にこのカードを装備しているモンスターはゲームから除外される。

潜航母艦エアロ・シャーク：★3↓☆3

装備魔法を装備した事で、『エアロ・シャーク』の姿が2つに分かれる。後は伏せカードを開けてやれば、勝利はあたしの物だ！

「チツ、そんなカードまで……。だが！ テメエの場のレベルは3と4！ エクシーズ召喚はできねえぜ！」

「アマイね！ 畏発動、『ギブアンドテイク』！ あたしの墓地のモンスターを1体相手の場に守備表示で呼び出し、そのレベル分だけあたしのモンスター1体のレベルをこのターンの間中だけ上げる！」

あたしが選ぶのはレベル1の『ブリズド』！ よって『エアロ・シャーク』のレベルも3から4になる！」

氷結界の番人ブリズド：DEF 500 / ☆1

潜航母艦エアロ・シャーク：☆3↓4

「これは、まさか……！」

どうやらグリードはあたしの狙いに気付いたっぽい。

でも、今さら気付いても遅いよ！

「あたしはレベル4の『刀匠』と『エアロ・シャーク』でオーバーレイ！ 3体分のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4×☆4×☆4∥★4

「エクシーズ召喚！ 深き水底に潜みし鮫の王者、世界に牙剥き万象を噛み砕け！ B  
ite to crash nothing of clear！ 『No. 32 海  
咬龍シャーク・ドレイク』！」

『ギユウオオオオオオオオツ！』

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク：ATK 2800

巻き起こる銀河の渦、その中に青と水色の光に変わって飛び込んだ2体のモンスターを素材に巨大な鮫が姿を現す。血のように赤い鱗に覆われており、金色の目と乳白色の牙が鋭くギラリと光る。腕のようなヒレの先には爪が、背中にあるもう2枚のヒレは翼の様に広がり、2本足でガツシリと立っている。

「『刀匠』の効果発動、デツキを1度シャツフルし、1番上のカードをオーバーレイ・ユニットにする」

デツキトツプは……、ありや『安全地帯』だ。水属性ならドロウできたのに。

でもこれがラストバトル！

「行け、『シャーク・ドレイク』、『ブリズド』を攻撃！ “デプス・バイト” オ！」

ギユバツ！ と鯨の頭を模した光線を吐き出し、氷の猛禽を狙い撃つ赤い大鯨。過たずその一撃は命中し、サイズの関係から呑み込まんばかりの形で全身を噛み砕いた。

『ブリズド』ごめん！

「この瞬間、『ブリズド』のモンスター効果発動！ 戦闘で破壊されて墓地送りになった時、1枚ドロウできる！ 破壊された時はアンタのモンスターだけど、この効果は墓地発動だから、あたしの墓地で発動する！ よってあたしが1枚ドロウする！」

更に、『シャーク・ドレイク』のモンスター効果発動！ 1ターンに1度、戦闘で相手モンスターを破壊した時、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、破壊したモンスターの攻撃力を1000下げて、その時の場に特殊召喚する！」

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク : ORU 3 ↓ 2

氷結界の番人ブリズド : ATK 300 ↓ 0

「そしてこのターン、『シャーク・ドレイク』はもう1度攻撃できる！ さつきは守備表示だったけど、今度は攻撃表示だからダメージを受けてもらおうよ！」

「くっ！」

「追撃の『デプス・バイト』オッ！」

更なる追い討ちとして再び鯨の頭を模した光線が青い猛禽を噛み砕き、爆発を起こした。

今、『ブリズド』の攻撃力は0、『シャーク・ドレイク』は2800、その差は2800に対してグリードのライフは2600。

2800が2600から差し引かれる事によって、グリードのライフは0になった。

このデュエル、あたしの勝ちだ！

そう思っただけが晴れた時だった。

グリード：LP 2600

ら、ライフが減って無い!?



死歌の録音機 スケアクロウ：DEF 0

しかもグリードの場にはさっきまでいなかったハズの案山子型のモンスターまで存在していた。ジャック・オ・ランタンのようにギザギザの口で、赤い三白眼をギラリと光らせている。

「な、何でアンタ生きてるのよ!？」

「キシキシシッ! 残念だったな! オレは手札の『死歌の録音機 スケアクロウ』の効果を発動したのさ! こいつはオレが1000ポイント以上のバトルダメージを受ける時、そのダメージを0にして手札から特殊召喚できる!」

死歌の録音機 スケアクロウ（効果モンスター）（オリジナル）

星3

光属性／植物族

ATK 0 / DEF 0

自分が1000以上の戦闘ダメージを受ける時に発動できる。

その戦闘ダメージを0にし、このカードを手札から特殊召喚する。

このカードとの戦闘で発生するプレイヤーへのダメージは0になる。

## 死歌の録音機 スケアクロウ：DEF 0

「ダメージを、吸収されたって事ね……！ 『ブリズド』の効果で再びドロ！」

このターンで決められなかったのは痛いなあ……。まあ『ブリズド』の効果で2枚ドロできたけど、ライフ差は依然としてあるし、あたしのライフの1400なんて数値じゃあすぐに吹き飛びかねない。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

でも、グリードに限らず、邪神やその護衛のパターンは既に分かっている。なら恐らく次の行動は……。

都：LP 1400

手札：1枚

フィールド

：No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク（ATK 2800・ORU：2）

：伏せカード1枚

「オレのターン、ドロー！ オレは墓地の『死歌の昼夜 サニー』のモンスター効果を発動！ オレの場のモンスターを1体除外し、こいつを墓地から特殊召喚する！ オレは『ガンターラ』を除外！」

死歌の昼夜 サニー： ATK 2000

氷の僧兵が次元の彼方へと消え、カンテラを手にした幽霊が現れる。よく見ると後頭部にあたる部分にも顔があつて正面がムリヤリ漂白したかの様な白、背面が宵闇を溶いた様な黒い肌の顔をしている。

「こんにやろう……、人のモンスターをコストにしやがつて……！ おまけに除外されちゃあギミック仕込んで無いこのデツキじゃあ帰還なんて無理じゃないの！」

「更に『サニー』の効果発動！ このカードが自身の効果で特殊召喚された時、オレの場に存在する死歌モンスターのレベルをこのカードと同じ10にする！」

死歌の昼夜 サニー（効果モンスター）（オリジナル）

星10

光属性／アンデット族

ATK 2000 / DEF 2000

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターを1体除外する事で、このカードは墓地から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚された時、自分の場に存在する全ての「死歌」と名のついたモンスターレベルは10になる。

「死歌の昼夜 サニー」の効果は1ターンに1度しか発動できない。

死歌の大翼 アウル：☆4↓10

死歌の録音機 スケアクロウ：☆3↓10

「また高レベルモンスターが一瞬で複数体揃った……!」

「レベル10の『サニー』、『アウル』、『スケアクロウ』をオーバーレイ!」

『ケヘヘヘ!』

『ホッホウッ!』

『ギギギッ!』

「3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!」



死歌の双巨砂虫 エレジー（エクシース・効果モンスター）（オリジナル）  
 ランク10

風属性／昆虫族

ATK 5000 / DEF 5100

「死歌」と名のついたモンスター×2体以上（最大5体）

このカードは相手のコントロールする魔法・罠カードの効果を受けず、相手の場にモンスターが存在しない場合攻撃力は倍になる。

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードの下に重ねられているエクシース素材が1枚の場合、墓地に存在する「死歌」と名のついたモンスターを1体選択してこの下に重ねてエクシース素材にする事ができる。

また1ターンに1度、このカードのエクシース素材を以下の数だけ取り除く事で、このカードは以下の効果を得る。

●1つ：このカードがこのターン破壊される場合、代わりに相手に2000ポイントのダメージを与える。この効果は1度しか使えない。

●2つ：次の自分のターン終了時まで相手モンスターを戦闘破壊する度にそのターン

攻撃できる回数を1度増やす。

ランク10の名に恥じない効果持ちつつワケね……！

死歌の双巨砂虫 エレジー：ORU 3↓1

あたしの『シャーク・ドレイク』との攻撃力の差は2200、そして仮にそのダメージを消してもモンスターを破壊した事で2度目の攻撃を通す。その時の攻撃力は1万になり、残り1400のあたしのライフは尽きるってワケか。

「バトル！ 『エレジー』で『シャーク・ドレイク』を攻撃！ ヘルロック・ビルディング！」これで終わりだあ！」

螺旋を描くように突進して来る2匹のムカデ。赤鱗の鮫の目の前で上と下に分かれ、そのまま挟み撃ちを狙って来た。

確かにこれを受ければあたしの負けだけど……、まだアマイ！

「罨カード発動！ 『闇よりの罨』！ 自分のライフが3000以下の時、1000ライフをコストに墓地の通常罨を除外し、このカードの効果として発動する！」

闇よりの罾

【通常罾】

自分が3000ライフポイント以下の時、1000ライフポイントを払う事で発動する。

自分の墓地に存在する通常罾カード1枚を選択する。

このカードの効果は、その通常罾カードの効果と同じになる。

その後、選択した通常罾カードをゲームから除外する。

「バカめ！ 『エレジー』はテムエの魔法・罾の効果を受け付けねえんだよ！ ライフコストを払うだけ無意味だ！」

「バカはアンタだよ！ あたしは墓地から『バトル・ラツシユ』を除外する！ これは『エレジー』では無くプレイヤーと『シャーク・ドレイク』が影響を受ける効果！ よって発動は成立する！」

「何い!?!」

都：LP 1400↓400



「く、ううううううっ！」

ここまでライフも体力も減つてくると、1000コストは流石に堪えるね……！  
でも、これで良い！

『バトル・ラツシュ』の効果により、このバトルでのあたしへのダメージと『シャーク・ドレイク』の破壊を帳消しにし、その分だけアンタにダメージを与える！」

「げー、うぎゃあああああああああああああああああつ！」

グリード：LP 2600↓400

上下からのムカデの挟み撃ちをヒレっぽい腕（逆かな？）で受け止めて投げ飛ばす『シャーク・ドレイク』。自分の何倍も巨大な2匹の細長い虫は、天井をギヤリギヤリと削りながらグリードを下敷きにする形で地面に落ちて行った。

うわあ、あれ普通にペシャンコだよね。

「ぐう……、ンまだまだじゃあー！」

「チツ、まだ生きてたか」

でもお互いにライフは減って同じ400になった。

そして次のターン、あたしのあの手が炸裂すればグリードのライフを削り切り、勝て

る！

「チツ、オレはカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

グリッド：LP 400

手札：2枚

フィールド

：死歌の双巨砂虫 エレジー（ATK 5000・ORU：1）

：伏せカード2枚、絶対音感地獄（フィールド魔法）

「あたしのターン、ドロー！」

現状、攻撃力5000の『エレジー』を『シャーク・ドレイク』で倒す事はできない。

そう、『シャーク・ドレイク』では。

あのモンスターを呼べば勝てるけど……。問題はあの2枚の伏せカード。あれが曲者ね。あれが変な効果持ったヤツだと逆にやられかねない。

手札は2枚。その内の1枚は今は召喚できない氷結界の上級モンスター。

ここは慎重に……。

「魔法カード『エクシーズ・トレジャー』！ 場のエクシーズモンスターの数だけドロー

する！ 場のエクシーズモンスターは2体、よって2枚ドロー！」

エクシーズ・トレジャー（アニメオリジナル）

【通常魔法】

フィールドに表側表示で存在するエクシーズモンスター1体につき1枚ドローする。  
「エクシーズ・トレジャー」は1ターンに1度しか発動できない。

引いたカードに伏せ除去カードがあればと思つて引いてみたけど、残念ながらそう上手くは行かなかつたか。

でもこのターンのダメージさえ無ければ、返しのターンになつてもまだ耐えられそうね。

「そろそろ幕引きにするよ、グリード！」

「やれるモンならやってみやがれ！」

「あたしは『シャーク・ドレイク』をエクシーズ素材にして、カオス・エクシーズ・チェンジ！」

赤い鱗の鯨が、あたしの掛け声に合わせて登場前のヒレに姿を変えて行く。巨大な1枚のヒレは銀河の渦の中へと潜り込み、爆発を起こした。

★4↓★4

そして渦の中から出て来たのは真つ白な5枚のヒトデのようなヒレ。それが姿を変えて行き、より鋭い爪を、頭を、足を、腕を持った大きな鯨となった。

「出でよ、我が渾身の力！ The king of deep sea, come here and kill them all! 『CNo. 32 海咬龍シャーク・ドレイク・バイス』！」

『ギョオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

CNo. 32 海咬龍シャーク・ドレイク・バイス：ATK 2800

これがこのデツキの最強モンスターだ！

「そ、そのモンスターは!?!」

『シャーク・ドレイク・バイス』の効果発動！ 自分のライフが1000以下の時、オーバレイ・ユニットを1つ使い、墓地からモンスターを1体除外する事で、相手モンスター1体の攻撃力を0にする！」

C No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク・バイス（エクシーズ・効果モンスター）  
 ランク4

水属性／海竜族

ATK 2800 / DEF 2100

水属性レベル4モンスター×4

このカードは自分フィールド上の「No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク」の上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

自分のライフポイントが1000以下の場合、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、自分の墓地のモンスター1体をゲームから除外して発動できる。

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、その攻撃力・守備力を自分のエンドフェイズ時まで0にする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「あたしは墓地から『氷弾レイス』を除外し、『エレジー』の攻撃力を根こそぎ奪う！」  
 「し、しまった！ 『エレジー』はモンスター効果には対応してねえ!？」

C N o . 3 2 海咬龍シャーク・ドレイク・バイス：O R U 3 ↓ 2

死歌の双巨砂虫 エレジー：A T K 5 0 0 0 ↓ 0

バシユン！ と周囲を旋回していた青い玉を噛み砕き、青白い光線を口から放つ白い鯨。直撃した光線は巨大なムカデに直撃すると爆発し、腹部に大きな穴を開けた。

フィニッシュだよ！

「バトル！ 『シャーク・ドレイク・バイス』で『エレジー』を攻撃！ これでお終い！

「デプス・カオス・バイト」オオオオオツ！」

「どわああああああああああああつ!?!」

白い鯨が今度は紫色の光線を吐き出す。その太さはさっきの比では無い程。そして途中でビームは無数の鯨の頭を模したレーザーに姿を変え、次から次へと2匹の巨大ムカデの体を食い破る様に貫通し、やがて大爆発を起こした。

「よし、決まった！」

グリードのライフは残り400、今通ったダメージは2800。これであたしの勝ちだ！

グリード：L P 4 0 0 ↓ 2 0 0

「え!？」

ライフが半分減っただけ!? 一体何が!?

「キシキシシ! 残念だったな! オレは罠カード『死神のアンコール』を発動していたのさ!」

このカードはライフ半分为コストに墓地の「死神」と名のついた魔法か罠を選択し、その効果を発動できる!」

「くっ!」

死神のアンコール (オリジナル)

【通常罠】

自分のライフを半分払い、墓地に存在する「死神」と名のついた通常魔法・通常罠カードを1枚選択して発動する。

選択したカードの効果を発動する。

「オレが選んだのはお前が『ナイト・ショット』で割った『死神の遮音』! こいつはこのターン中にオレが受けるダメージを全て打ち消す! 更にこの時相手の場に存在す

るモンスターは表側表示で存在する限り効果を発動・適用できない！」

死神の遮音（オリジナル）

【通常罫】

相手ターンのみ発動可能。

発動ターン中に自分が受けるダメージを全て0にする。

この効果が発動した時に表側表示で存在した相手モンスターは、フィールド上に表側表示で存在する限り効果を発動および適用できない。

そんな……、仕留め損なっただけじゃ無く、あたしの最強モンスター『シャーク・ドレイク・バイス』の効果まで封じられるなんて……っ！

「あたしはカードを1枚セットして、ターンエンド！」

都：LP 400

手札：2枚

フィールド

：CNO. 32 海咬龍シャーク・ドレイク・バイス（ATK 2800・ORU：2）



：伏せカード1枚

「キシキシシシ、これで最早成す術無しか？」

「寢言は寝てから言いなよ。モンスターの居ないアンタが言っても説得力薄いよ」

「その強がり、中々にオレ好みだ。だがそれもここまで！ オレのターン、ドロロー！」

奴の手札は今3枚、伏せカードが1枚。今ドロローしたカード以外は攻撃と召喚には恐らく反応しないタイプ。ならあたしが負ける道理は無い。問題は今奴がドロローしたカードくらい。

でもあの強気はドロロー前からだった。つまりそれはあの2枚の手札か残りの伏せカードに何か仕掛けてあるという事だ。

油断はしない。次の瞬間負けるなんて未来はお断りよ。

「行くぜ！ オレは手札からレベル1の『死歌の魔仮面』を召喚っ！ このカードは自分の場にモンスターが存在しない時、リリース無しで召喚できる！」

『キキイツ！』

死歌の魔仮面：ATK 500

グリードが呼び出したのは紫を基調にした仮面。ハートの周囲に禍々しい棘を生やした、とでも言うべきか、大きなギョロリとした目玉が2つ付いていて、全体からドス黒いオーラを漂わせている。まるで、呪われたアイテムのような感じだ。

「更に手札から魔法カード『死者蘇生』！ 墓地から『死歌の渦大魚』ボサノバ』を特殊召喚！」

『ギョゴゴゴゴッ！』

死歌の渦大魚 ボサノバ：ATK 4300

「墓地から復活した『ボサノバ』の効果を発動！ オレの墓地から死歌エクシーズを効果を無効にして可能な限り特殊召喚するぜえ！」

オレは墓地から『ソナタ』、『ララバイ』、『エレジー』を特殊召喚！」

『ポゲラアアアアッ！』

『ブモオオオオオッ！』

『ギギギイイイッ！』

死歌の毒沼 ソナタ：ATK 3000↓0

死歌の氷山羊 ララバイ：ATK 3200↓0

死歌の双巨砂虫 エレジー：ATK 5000↓0

ま、また一気にモンスターを展開された!?

しかも『ボサノバ』の攻撃力は4300、効果を無効にされた『シャーク・ドレイク・バイス』じゃあ太刀打ちできない……!

でも、あたしの伏せたカードならまだ何とかなるかも知れない。賭けにはなるけど、やってやれない事は無いはず!

そう思ったけれど、グリードは更に絶望しそうなセリフを吐いた。

「キシキシシシ! 更にここからが本番だぜ!」

「何!?!」

「オレは『魔仮面』の効果を発動! このカードを素材にしてエクシーズ召喚を行う場合、オレの場のエクシーズモンスターを選択し、そのランクをレベル1にしてエクシーズ召喚を行う!」

「な!?!」

ら、ランクを強制的にレベルにする効果!?

「よってオレの場にはレベル1が5体いる計算になる。オレはレベル1の『魔仮





「死歌」と名のついたモンスター×2体以上（最大5体まで）

自分のターンのメインフェイズでこのカードのエクシード素材を1つ取り除いて発動する。

このターンが終了するまで自分の場に存在するモンスターは相手の効果を受けず、自分が受けるダメージは0になる。

死歌の舞踏魔仮面 ケシン：ORU 5↓4

「これでオレの場のモンスターはテメエの効果を受けない上にダメージも帳消しだ！」

「で、でも攻撃力は『シャーク・ドレイク・バイス』を完全に下回ってる！ 目的はその効果を使う事じゃないんでしよう!？」

「キシキシシ、その通り！ 墓地に送られた『死歌の魔仮面』の効果発動！ こいつがオーバレイ・ユニットとして墓地に送られた時、デッキか手札に存在するリンクアツプ・マジックを発動できるのさ！」

「リンクアツプ・マジックですって!？」

死歌の魔仮面（効果モンスター）（オリジナル）

星11

闇属性／悪魔族

ATK 500 / DEF 500

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリース無しで召喚できる。

このカードをエクシーズ素材として「死歌」と名のついたランク1のエクシーズモンスターをエクシーズ召喚する場合、自分フィールド上に存在するエクシーズモンスターを任意の数だけ選択し、レベル1扱いとしてこのカードを素材にしたエクシーズ召喚の素材にする事ができる。

このカードがエクシーズ素材として墓地に送られた時、デッキまたは手札から「RUM」と名のついた魔法カードを1枚発動する。

「オレはデッキから『RUMーイーヴィル・フォース』を発動！」

グリッドがデッキから取り出したのは或いはZEXALⅡやARCVでお馴染みの魔法カード。構図はあつちの『バリアンズ・フォース』に似てはいるものの、そこに描かれている紋章は赤い宝石の埋め込まれている鋭角的なフォルムでは無く、漆黒のオーラを放つルーン文字の様な禍々しいものだった。

「このカードは自分フィールド上のエクシーズモンスター1体をランクが1つ高いカオスエクシーズへとランクアップさせる！ 更に自分の墓地の元々の素材モンスターを全てオーバーレイ・ユニットに追加できる！」

な!?! オーバーレイ・ユニット復活効果!?

「オレの墓地の素材は『魔仮面』のみ。こいつを下に重ねるぜえ！」

死歌の舞踏魔仮面 ケシン：ORU 4↓5

「オレはランク1の『死歌の舞踏魔仮面 ケシン』でオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを再構築！」

★11↓★12

「カオス・エクシーズ・チェンジイツ！ キシキシシヤハアツハハアアハハアアアアアッ！」

闇の銀河の渦の中へと消えて行く仮面の魔人。紫の光が邪悪な輝きの中へと溶け込むと同時に名状しがたい闇の光による爆発が生まれた。無数のカードがその中心部の





在するエクシーズモンスター1体の素材を全て吸収し、奪った数×300ポイント攻撃力をダウンさせる！」

「何!？」

『シヤーク・ドレイク・バイス』の素材を全て頂くぜえ! 更に『イーヴィル・フォース』は墓地には送られず、カオス・オーバーレイ・ユニットとなる!」

RUM―イーヴィル・フォース(オリジナル)

### 【通常魔法】

自分の場のエクシーズモンスター1体を選択して発動する。

この時、自分の墓地にそのモンスターのエクシーズ素材が存在する場合、下に重ねてエクシーズ素材とする事ができる。

選択したモンスターと種族、属性が同じでランクが1つ高い「CX」または「CNo.」と名のついたエクシーズモンスター1体をエクストラデッキからエクシーズ召喚扱いとして選択したエクシーズモンスターの上に重ねて特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するエクシーズモンスター1体を選択し、その下に重ねられているエクシーズ素材を全て特殊召喚したモンスターの下に重ねる。

そのエクシーズモンスターは失ったエクシーズ素材1つにつき300ポイント攻撃力がダウンする。

発動後このカードは墓地には送られず、特殊召喚したモンスターの下に重ねてエクシーズ素材とする。

鞭の様に長い腕を持つ仮面の巨人。その周囲にある7つの赤い怪しい光を発する結晶体から光が放たれ、あたしの白い鯨に直撃する。

『ギユウオオオオオオオオッ!?!』

「『シャーク・ドレイク・バイス』ッ!?!」

その光に当てられて周囲を旋回していた水色の光の玉が相手の元へと吸い寄せられて結晶と化してしまった。

C N o . 3 2 海咬龍シャーク・ドレイク・バイス : O R U 2 ↓ 0 / A T K 2 8  
0 0 ↓ 2 2 0 0

C X 死歌の殺戮魔仮面神 マジン : C O R U 7 ↓ 9

く……っ、効果を無効にされている上に、オーバーレイ・ユニットまで奪われ、おまけに攻撃力まで下げられたっ！

「どうだ、オレは『強欲』のグリード！ この世の全てはオレのモノだ！ 全てを寄越せえ！」

「くう……！」

「キシキシキシシ！ ちったあ参ったか？ そんじや更に面白い事を教えてやるよ！

『マジン』の攻撃力はこいつのカオス・オーバーレイ・ユニットとなつているモンスターの攻撃力の合計値になる！ テメエから奪つた素材、『シャーク・ドレイク』と『氷結界の刀匠』の攻撃力を合計し、『マジン』の攻撃力は……！」

【カオス・オーバーレイ・ユニット】

死歌の毒沼 ソナタ：ATK 3000

死歌の氷山羊 ララバイ：ATK 3200

死歌の渦大魚 ボサノバ：ATK 4300

死歌の双巨砂虫 エレジー：ATK 5000

死歌の魔仮面：ATK 500

RUM—イーヴィル・フォース

死歌の舞踏魔仮面 ケシン：ATK 0

No. 32 海咬龍シャーク・ドレイク：ATK 2800

氷結界の刀匠：ATK 1200

CX 死歌の殺戮魔仮面神 マジン：ATK ? ↓ 20000

「こ、攻撃力2万!?!」

「どうだ! これがおレの最強モンスターの力だあ!

更におまけに教えてやる! こいつは相手のカード効果の対象にはならず、カード効果では場を離れない! そしてこいつは素材に『ケシン』がいる時、素材モンスターの効果をカオス・オーバーレイ・ユニットの消費無しで発動できるのさ!」

「なん、だと……っ!?!」

思わず呟いたが、きつと誰しもこのモンスターに直面したら呟いていたと思う。

素材9つというのも驚異的だが、それ以上に攻撃力2万というのもまた破格だ。

しかも効果の対象にならない上に場を離すには戦闘以外無いという。こんなモンスター、どうやって倒せつてのよ……っ!?!

CX 死歌の殺戮魔仮面神 マジン（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

ランク12

闇属性／魔法使い族

ATK ?／DEF 0

レベル12×2体以上

（1）：このカードの攻撃力はこのカードの下に重ねられているモンスターの攻撃力の合計値となる。

（2）：このカードは相手の効果の対象とならず、効果ではフィールドを離れない。

（3）：自分のエンドフェイズ時、このカードの下に重ねられているX素材を全て取り除く。

（4）：このカードの下に「死歌の舞踏魔仮面 ケシン」が重ねられている場合、このカードは以下の効果を得る。

●このカードのX素材は（3）の効果では取り除かなくても良い。

●このカードの下に重ねられているモンスターの効果をこのカードの効果として発動できる。

この時、X素材を取り除いて発動する効果の場合、素材を取り除かなくても良い。

無理だ、無理すぎる……!! お義兄ちゃんの言葉に『完璧なカードなんて無い』なんて言葉があるけど、これこそまさにその『存在し得ない完璧なカード』だよっ!!

「これでラストバトルだ! 『マジン』で『シャーク・ドレイク・バイス』を攻撃い!

ヘルデストロイ・スクリーチ・スピナー!」

歯医者さんのドリルの様な甲高い金属音を醸しながら残像すら見えない高速回転を始める『マジン』。回転に合わせて長い腕が振り回される。

攻撃力の差は絶対的。これを食らうワケにはいけない!

「罨カード発動! 『エクシーズ・リリーヴ』!」

「ムダだ! 『マジン』に罨は効かねえぜ!」

『エクシーズ・リリーヴ』は、自分の場にオーバーレイ・ユニットが無いエクシーズモンスターが存在する時に発動できる! このターン中に受ける全てのダメージを100に固定する!」

エクシーズ・リリーヴ (オリジナル)

【通常罨】

自分のライフが1000以下で自分の場にエクシーズ素材の存在しないエクシーズ

モンスターが存在する時にのみ発動できる。

このターン中に発生する全てのダメージは100になる。

「つまり『マジン』に効力を及ぼすものじゃないため有効！ くうっ！」

カードの効果であたしの周囲に半透明のハニカム構造のバリアが展開される。

その直後に大回転に弾き飛ばされた白い鯨が爆発。爆風の衝撃をバリアで緩和するも、やはり痛い。

都：LP 400↓300

ゴメン、『シャーク・ドレイク・バイス』……！ 折角呼んだのにフィニッシュャーにできなかつた！

「チツ、『エレジー』の効果を活用しておくべきだったか。だが、コピーした『ソナタ』と『ボサノバ』の効果を発動！ 『ソナタ』は相手モンスターを破壊した事でそのモンスターを墓地から除外し、その攻撃力分のダメージを与える！ 『ボサノバ』は自分の場に『ピラニア・トークン』を2体守備表示で生み出す！」

そして死歌モンスターとの戦闘でダメージを負った事により、フィールド魔法『絶対



音感地獄』の効果でライフを半分にする！ こいつはダメージじゃねえぜ！」

「でもチェーンの処理上、強制効果は若い数字になる！ よって『ソナタ』の効果が先に処理される！」

う、わあああああああああああああああああああつ！」

都 : LP 300 ↓ 200 ↓ 100

ピラニア・トークン : DEF 4000

ピラニア・トークン : DEF 4000

く……、辛うじてライフは残ったけど……、もう限界が近い……っ！ めっちゃ痛い……っ！

いくらあたしが不死鳥の様に肉体が無限再生するとは言え、流石に限度つてものがあ  
る。これ以上は危険すぎる……！」

「んまだだ、永続罨発動！ 『死神のアンサンブル』！」

「ま、まだ来るの!?!」

「手札を1枚除外し、効果発動！ 相手の手札を全て墓地に送り、その数だけライフを半  
減させ、オレのライフを倍化させる！ お前の手札は2枚！ よってライフは4分の1

と4倍だ！ 更にこれにチェインしてたつた今除外された魔法カード『タイム・エアリード』の効果発動！ こいつが除外された時、互いにカードを1枚ドロウする！ よってテメエの手札は1枚増えて8分の1と8倍だあ！」

「な!?! きゃあああああああああああああああああああつ!?!」

都：LP 100↓50↓25↓13

グリード：LP 200↓400↓800↓1600

「が、ガハ……ッ!?!」

衝撃波、そうとしか言えない。

頭が、凄いインパクトで……、真つ白に、なりそう……っ！ 全身からの、出血も、酷い……！

小数点切り上げなんて……、初めてだね……。

死神のアンサンプル（オリジナル）

【永続罫】

自分の場の「死歌」と名のついたモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊したター

ン、手札を1枚ゲームから除外して発動できる。

相手の手札を全て墓地に送り、送った枚数の回数だけ相手のライフを半分にし、自分のライフを倍にする。

タイム・エアリード（オリジナル）

【通常魔法】

デッキから1枚ドロースる。

このカードがゲームから除外された時、互いのプレイヤーは1枚ドロースる。

あた　ま　が　ぐらぐ　ら　する　……。

い　たい　よお　……。

かて　ない　よ　めの　まえが　くら　いよ　お　お　にい　ちや　……。

.....。

「キシキシキシ！　これでライフは13、風前の灯！　しかも手札は0、場にカードは無し！　デッキだつてもう目ぼしいカードは残つてねえだろ？」

最初からテメエ如きがこのオレに勝てるワケがねえんだよ！ キイシシシシシシッ！

……だが念には念だ、オレは手札から永続魔法『デス・ミラクルハット』を発動！  
こいつはオレの場に死歌モンスターが存在する時、1ターンに1度、相手の守備モンスターを攻撃する時、オレのモンスターに貫通能力を与える事ができる！」

デス・ミラクルハット（オリジナル）

【永続魔法】

自分の場に「死歌」と名のついたモンスターが存在する場合、自分の場の「死歌」と名のついたモンスターが守備モンスターを攻撃した時、攻撃力が守備力を超えていればその数値の分だけ相手に戦闘ダメージを与える。

この効果は1ターンに1度しか使えない。

「ターンエンド！」

グリード：LP 1600

手札：0枚

フィールド

：CX 死歌の殺戮魔仮面神 マジン (ATK 20000・ORU：9)

：絶対音感地獄 (フィールド魔法)、死神のアンサンブル (永続罨)、デス・ミラクル  
ハット (永続魔法)

.....。

「オイ、どうした？ 地面に倒れこんでピクリとも動かねえたあ、もうドローもでき  
ねえってか？ キシキシキシ！ ならオレの勝ちだな！」

く ら い …… な に も み え な い ……

い た い よ こ わ い よ お ……

た す け て お に い ……

……

……





……そっか、絆は死んでも断たれないもんね。ご丁寧に血まで再現してくれちゃって。

お義兄ちゃんがあたしを守ってくれたんだ。ペンダントにこびり付いた血があたしの血と混ざって、お義兄ちゃんのハイレベルな頑丈さと耐久力が少しだけあたしに引き継がれたんだ……。

「ありがとう、お義兄ちゃん。やっぱりお義兄ちゃんはあたしの最高の家族だよ」

「チツ、くたばり損ないが……!」

「行くよ、あたしのターン、ドロロー!」

エクストラデツキから、強い鼓動を感じる。目を閉じれば、分かる。あの子が力を貸してくれているんだ。

これがあたしの、ファイナルターン!

【BGM：紅蓮華】

「あたしはライフを半分支払い、魔法カード『氷結界の反魂香』はんこんこうを発動! うぐう……!」

都：LP 13↓7



ライフが一桁とはまた珍しい事になったね。

「自分の墓地から氷結界モンスターを手札に戻し、デッキからそれと同じ種族の氷結界モンスターを手札に加える！」

あたしが墓地から回収するのはアンタが『死神のアンサンブル』で墓地に送った『氷結界の交霊師』！ このカードは魔法使い族、よってデッキから同じく魔法使い族の『氷結界の舞姫』を手札に加える！」

氷結界の反魂香（オリジナル）

【通常魔法】

メインフェイズの開始時にライフを半分払って発動できる。

自分の墓地から「氷結界」と名のついたモンスターを1体手札に戻し、デッキからそれと同じ種族の「氷結界」と名のついたモンスターを1体手札に加える。

この効果が発動したターン、自分の場の「氷結界」と名のついたモンスターは1度だけ破壊されない。

「更に『氷結界の交霊師』を特殊召喚、『氷結界の舞姫』を通常召喚！ 『交霊師』はあた

しの場のカードが相手より4枚以上少ない場合、手札から特殊召喚できる！

！」  
 アンタの場のカードは6枚！ あたしの場のカードは0！ よって特殊召喚できる

『ハアッ！』

『タアッ！』

氷結界の交霊師：ATK 2200

氷結界の舞姫：ATK 1700

氷結界の交霊師（効果モンスター）

星7

水属性／魔法使い族

ATK 2200／DEF 1600

相手フィールド上のカードの枚数が、自分フィールド上より4枚以上多い場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は1ターンに1度しか魔法・罠カードを発動できない。

光のゲートをくぐり、本日2度目の登場となるマフラーを巻いた巫女。そして初登場となるゆったりとしたドレスを着た女性の口寄せ師。

「だがそいつらのレベルは4と7！ チューナーもいねえ上に攻撃力も届かねえ！ テメエに勝ち目はもう無いんだよ！」

「それはどうかな？」

「何!？」

一度は言ってみたいセリフだよな。

「あたしは同じく『死神のアンコール』の効果で墓地に送られた『氷結界の魔鏡』のモンスター効果発動！ 自分の場に2体以上氷結界モンスターが存在し、自分のライフが相手より1000以上少ない時、墓地からこのカードと水属性モンスターを1体除外し、あたしの氷結界モンスターのレベルをその除外したモンスターのレベルと同じにする！ 互いのライフ差は1593、よって効果は発動できる！」

氷結界の魔鏡（効果モンスター）（オリジナル）

星3

水属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

このカードは特殊召喚できない。

自分のライフが相手のライフより1000ポイント以上少なく、自分フィールド上に「氷結界」と名のついたモンスターが2体以上存在する場合、自分の墓地に存在するこのカードと水属性モンスターを1体除外して発動できる。

自分の場の「氷結界」と名のついたモンスター1体はこの効果を発動するために除外したモンスターと同じレベルになる。

「あたしは墓地からレベル7の『グングニール』を除外し、『舞姫』のレベルを7にする！」

紫の魔法陣から縁を雪の結晶を具象化した鏡が現れ、『舞姫』の姿を映し出す。続いて出て着た『グングニール』のカードが鏡面の中へと潜り込むと『舞姫』の鏡像の前に4つの星が現れ、次の瞬間それは7つに増えていた。

氷結界の舞姫：☆4↓7

これで、勝利への方程式は整った！

「レベル7が、2体……っ！」

「あたしはレベル7の『氷結界の交霊師』と『氷結界の舞姫』でオーバーレイ！」

『ハアッ！』

『トアッ！』

マフラーをはためかせながら『舞姫』が水色の、長髪を風に揺らしながら『交霊師』が青の光に姿を変え、コバルトブルーに輝く銀河の渦の中へと飛び込む。

「2体の『氷結界』モンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

これがあたしの、新しいエース！

☆7×☆7＝★7

「エクシーズ召喚！ 絶対零度の封印は解かれ、忌むべき三龍が解き放たれた！ 太古の世界から蘇り、今再び彼の邪魂を封印せよ、大いなる巫女姫！」

The prince of absolute! 『氷結界の巫女姫 ポーラ！』

『ハアアアアッ、トアッ！』

## 氷結界の巫女姫　ポーラ：ATK　2800

青い銀河はサファイアブルーの爆発を起こし、その中心部から猛吹雪の竜巻を巻き起こす。その中から巫女服を着た、髪の毛の長い女性が飛び出した。青い光の玉が周囲を2つ旋回しており、髪をサイドアップテールの形で2つに括っている。背中に差していた青い錫杖をグリードに突き付けて凜とした表情で敵を睨んでいた。

力を、貸してくれるんだね、ポーラ……！

「な、何が出て来るかと思えば攻撃力はたった2800！　そんなんじやあこのオレには、『マジン』には勝てねえよ！」

「自惚れるのは止めた方が良いよ。あたしは最後の力が無くなるまで一歩だつて下がない、偉大な義兄の背中を見て育つて来た。アンタじやあたしには勝てない！」

『ポーラ』の効果を発動！　オーバーレイ・ユニットを2つ使い、相手の全てのカード効果をこのターンが終わるまで全て無効にし発動させないようにする！　これは対象を取らない上にフィールドは勿論、手札や墓地、除外されたカード、更にデッキのカードの効果も無効する！　『アルティメット・アブソリュート』！」

「んだとお!?　オレの全てのカードの効果を無効にするだとお!?！」

『ハアアアアアアアアアッ!』

錫杖の先端に2つの青い光の玉が吸い込まれると、ビュゴウツ！ と猛吹雪が吹き出し、一瞬で『マジン』と2体のトークンが氷像と化す。周囲を浮いていた邪悪な音符も完全に凍り付いて地面に落ちた。

「そしてこのターン中のダイレクトアタックを封じる代わりに、効果発動時に存在したアンタの場のカード1枚につき攻撃力300ポイントアップ！ アンタの場のカードは6枚！ よって攻撃力は1800ポイントアップする！」

氷結界の巫女姫 ポーラ：ATK 2800↓4600/ORU 2↓0

「そしてアンタの『マジン』は効果が無効になった事で攻撃力は0となる！」「し、しまった!?!」

死歌の殺戮魔仮面神 マジン：ATK 20000↓0

凍結した鞭腕の大男の体に亀裂が入り、次から次へと崩れ始める。長い腕も肩口から、ハート形の胴体もボロボロと欠けて元の形が分からなくなってしまった。

氷結界の巫女姫 ポーラ（エクシース・効果モンスター）（オリジナル）  
ランク7

水属性／魔法使い族

ATK 2800 / DEF 2200

「氷結界」と名のついたドラゴン族以外のレベル7モンスター×2

このカードのエクシース素材を2つ取り除いて発動する。

ターン終了時まで元々のコントローラーが相手のカード効果を全て無効となり、発動  
および適用できない。

この効果を適用した時、相手の場に存在するカードの数×300ポイントこのカード  
の攻撃力がアップし、このターン相手プレイヤーに直接攻撃できない。

エクシース素材の存在しないこのカードは、1度だけカードの効果では破壊されな  
い。

これで、グリードは防御の手段を全て失った。

手札は無し、墓地に不明なカードも無しだ。

「念のため聞くけど、対抗策はあるかな？」

「ぐ、ぐう……！」





せるブザーが鳴った。  
「あたしの、勝ちだあ！」

都：WIN

グリード：LOSE

【BGM終了】



『クククク、良からう。あつちに繋がるゲートを開いてやるから暫し待て』  
邪神が何か、言ってるけど……、もう……、駄目だ。

地面にぶつかると共に、あたしの目の前は真っ暗になった。

S I D E : 無し

グリードがチリとなって消滅し、都が多量失血で気絶した城の広間。その柱の陰から喪服を着た男、最後の護衛ラーズが姿を現した。

「これで、よろしいですね、邪神様？」

『ああ、十全だ』

ニヤリ、と笑って問いかけるラーズに、同じく邪神が笑うような口調で返す。

「我々が復活を早めようとしているとは言え、邪神様は未だ本調子ならず。更に力を得るために、一度切り離れたグリードを再び吸収するとは、考えましたな」

『ギャハハハハハ！ 家畜と同じだ、太らせてから食う！ グリードに力をくれてやったのも、こいつの中で力が増幅し、与えた分以上のエネルギーになると踏んだからだ！』  
「して、実行してみた結果はどうです？」

『言うまでもねえ、大成功だ！ お蔭でこうして人格が固定されたんだからな！ ギャ

ハハハハハ！」

「全く、この女も愚かですな。負けて人格を失う可能性もあったというのに。フハ、フハハハハフハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

広間に2人の高笑い響いた。

何という事も無い、都とグリードのデュエルは最初からこの2人に仕込まれていたのだ。

都が負ければ彼女の人格は壊され、邪神の完全な器となっていた。

グリードが負ければこうして、邪神の栄養分にされる。

暫く大笑いした後、ラーズは邪神に気になる事を聞く事にした。

「して、この小娘はどうしますか？ お望みとあらば再生しなくなるまで首を撥ね続けますが」

『ギヤハハ、まあ待て。そいつにはもう少しだけ利用価値がある。人格はそのままに、浸食を続ける』

「まだ利用価値があると？ しかし一体どの様な？」

『ククク、聞きたいか？ 良いだろう。人間界へこいつを送るためのゲートを作りつつ、教えてやろう』

護衛達が人間界や精霊界へ行くのには特別な魔法を使用する。しかしこれは人間で



その不快な高嗟いに呼応する様に、邪神とその中の都が怪しく脈打つ。  
崩壊の序曲は、既に奏でられ初めていた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 74 : 来訪者ポローラ

——レッド寮・黎の部屋 PM 20:33

SIDE : 黎

「うゝぬうゝ……」

突然だが俺はとんでもなく困っている。

交流試合のあつた当日の夜、ややギンギン言う体を無理矢理動かし、いつも通り邪神の護衛を倒すべく転移魔法を発動させた。そこまでは良かった。

だが、俺は転移できなかつた。光に包まれても体はどこにも転送されず、その場に残ってしまった。

終いには魔法陣が消える始末だ。その場においても仕方が無いので、一先ず部屋に戻り、桜やPDAで通信しているフィオやフレイと共に頭を捻っている所だ。

『しかしどういふ事なんでしょうね、転移できないというのは?』



「俺にはさっぱりだ。何かしらの原因があるとしても、思い当たる節は無いしなあ……」  
冗談抜きにこれは真面目に困った事態だ。これでは護衛を倒して邪神の下へ辿り着く事ができない。となると、都を救う事もできない。……それと世界も救えない。

いや、個人的に世界なんざどうでも良いんだが、それを言ってしまうとこれまで一緒に戦ってくれた皆やここにいる仲間達まで見殺しになってしまう。あいつらの腕は疑っていないが、1つの世界を食ってパワーアップした邪神は恐らく人間や神の手には確実に余る。世界はどうでも良くても、そこにいる人々はどうでも良くない。

PDAの通信を切った後、ふと、俺は何の気無しに門の魔法陣を出現させた。最初は恐らく7つの門が差し込んであったであろうそれは、既に2つに……。

あれ？

「門が1つ減っている！」

「む、確かに！」

今朝確認した時は2つ残っていた扉の門が、既に残り1つになっていたのだ。

つまりこれは生き残っている護衛の内どちらか一方が何者かによって倒され、消滅したという事。俺達にとっては要するに吉報だ。

——つて……、

「だから転移できないんじゃない意味無えじゃんか……」

護衛はまだ一人残っている。全部倒さないと都を奪還できないんだし、世界も終わらんだから、何ら直接的な解決にはなっていない。

さて、どうしたら良いものか……。

隣で桜も難しい表情をして顔を顰めているあたり、彼女にも具体的な解決策は無いらしい。PDA越しに見えるフィオとポーラも同じだ。

クソツタレ……、こんな下らない理由でチェックメイトされてたまるかよ……。

そう思った時、部屋の中の空気が変わった。

「主殿……」

「おう……」

明確に具現化している桜が腰の剣を引き抜き、背中の盾を手取る。彼女の臨戦スタイルだ。どんな服装をしても装備一式は忘れないのが信条らしい。

こちらもナツクルダスターを生み出して装着する。レッド寮の狭苦しい部屋では寧ろ肉弾戦の方が良いだろうからだ。

部屋の中央に光が差し込み、円柱状のゲートが生まれる。これは何度か自分でもやった事のある魔法、転移魔法と同じものだ。

（誰だ……、誰が来た……）

邪神の残りの護衛か？ そいつが危険因子である俺を排除しにやって来たか？

或いは都か？ 何らかの方法であいつが脱出したのか？

光がやがて収束すると、その中心にいたのは俺の予想とは違う人物だった。

まず邪神の護衛から感じ取れる、生温かい汚泥を背筋に流し込まれるような気配が無い。故に護衛では無い。

次に都でも無い。あいつは髪留めを好かない。影が髪型をツインテールにして、それを雪の結晶の形の髪留めで纏めている時点で義妹という可能性も消えた。

「……到着」

現れた何者かはそう呟いた。雪原を思わせる低めで、それでいてよく透き通った声だ。

性別は女、身長は150センチ後半くらいか。藤色の長髪をサイドでツインに括り、紫のマフラーを巻いている。腰には雪の結晶を象った六角形（と行っても雪の結晶は全部六角形なのだが）の盾らしきものを二つ下げている。ワインレッドの服に白のタイツという組み合わせは、さながらアイススケートの選手を彷彿とさせた。

到着当初は瞑っていた目をゆっくりと開いた。サファイアのような神秘さを醸し出す、青い目がこちらを見る。

こいつは確か、『氷結界の舞姫』。氷結界のレベル4の中核の1体であり、都のフェイバリットでもあったカードだ。

「……………」

殺意も敵意も感じられないが、それでも警戒は解かない。そういった意思を隠して俺達に近寄って来た奴なんて腐る程いた。こいつがそうじゃない保証は無い。油断した次の瞬間に刺されるのはゴメンだ（刺されたぐらいじゃ死なないけどな！）。

「……………何者だ」

警戒心をバリバリにして『舞姫』を睨む。

『あの日』と同じ事を、桜に体験させるわけにはいかない。

「……………やっと会えた……………、お久しぶりです、サー黎」

「久しぶり？」

何を言ってるんだ、こいつは。

俺はこいつに会った覚えは無いぞ。

「……………語弊があった。……………私は以前から貴方を知っているけど、貴方と面と向かって会うのはこれが初めて」

「どういう意味だ」

「……………私のマイスターが数時間前に漸く私をデュエルで召喚した。……………我々精霊は、デュエルで召喚されないと明確な姿となって現世に顕現するのは困難。……………グリードとのデュエルに勝った事で、大きなエネルギー波が生まれ、私を吹き飛ばした。……………マ

イスターのペンダントを前世から届けるのは、骨が折れた」

グリード、ペンダント、前世……。それが意味するのは1つしかない。

「ポーラ？ ポーラなのか!？」

都はフェイバリットの『舞姫』にポーラという名前を付けて特別に気に入っていた。

ペンダントとは俺と都が互いに交換しあった、幸福を授けるという謂れのある一品の事だろう。こつちに来た時に衣服の一種と見なされて失ったものだから（こつちに最初に来た時？ 聞くな!）、それを知っているのは俺と都、そして向こうからの付き合いのある奴しか有り得ない。

「本当にお前、ポーラなのか!？」

「……貴方とイスターとは、本当に前世からお世話になっている」

都が自分の力で最初に手にしたカード、それが『氷結界の舞姫』。

まさか本人不在の状況でこうして精霊と出会うとは。

心の奥底で密かに驚いている俺を別に、ポーラは俺の後ろで待機している桜を見つめていた。

「……はじめまして、ポーラです」

「桜だ。主殿の精霊兼護衛、それとヒーラー兼見張り役をやっている」

待て、何だ見張りつて。

「文字通りの意味だ。主殿は目を離すとすぐに無茶をする。お目付け役がいなければならぬ。以前から何度も回復は万能では無い、術者も楽では無いと注意しているはずだが？」

「ぐう……」

言葉通りすぎて返す言葉が無い……。桜のジト目が肌を突き刺す、つーかもう貫くぜ……。

「……違う、自己紹介をしに来たわけじゃない」

「じゃ何しに来たんだ」

「……さっきも言ったけど、マスターがグリッドとデュエルをして私を召喚した」

マスター、つまり都が？

あいつのデュエルの腕は俺より若干低い。それが護衛の一角とサシで、だと……。何という無茶をするんだあいつは……！

内心の焦りを隠しきれず、俺はポーラに詰め寄った。

「結果は、どうなったんだ!？」

「……マスターの、勝利。……ただしマスターも重傷、今は気絶している」

「それなら何故貴殿は主殿の所へと来たのだ？ 精霊は普通、媒体となったカードから

遠く離れる事はできず、マスターの傍にいるものだ。私のようにある程度の修練を積み

「ば一個体として行動できるが、それでも都殿の所にいるべきではないのか？」

「……本当は私も、そうしたかった。……でも、邪神の根城は存在し得ない空間にあって、私じゃあそこには行けない。……精々カードの中に閉じこもるだけ、外には出られない」

それにチャンスを伝えたかった、とポーラは続けた。

「……邪神は今、何を考えているのか、大きな力を使ってこの世界への転移ゲートを作っている。……力が消耗されつつ、奴のアジトへと攻め込める。……即ち、マイスターを奪還する好機」

そこまで言い切ると、ポーラはフウ、と溜息を吐いてへたり込んでしまった。

「おい大丈夫か？」

「……平気。……普段あまり喋らないから、喋り疲れただけ。……それと、普段あんまり外に出ないから、紫外線にやられたのかも」

「今は夜だ、引き籠り」

「……酷い」

しかも新月、紫外線なんてほぼほぼ無い。あつても超微量だ。

「だがポーラ、俺の転移魔法は何故か働かないんだ。残りの護衛を潰さないと、邪神の所には行けないんじゃないか？」

「……合つてると思う。……マイスターのデッキの中で、奴らの会話を少しだけ盗み聞きしたけど、最後の護衛は、何を思ったのか、根城から移動してない。……多分そのワープ魔法は、奴らのアジトには行けないんだと思う」

成程、この魔法はあくまで『別次元にいる邪神の護衛の場所へ転移する』もの。『別次元』どころか『次元ですらない場所』には転移できない、というわけか。

「……だから、ここで貴方が行うのは護衛と戦う事では無く、自身の強化。……一目見るだけで、貴方の体はもうボロボロだと分かった。……最後の護衛にそれを見抜かれれば、命が危ない」

「よく……、そこまで分かるな」

「……サー黎が無茶をする性格だったのは、前世から見えていたから分かってる」

「そっか……」

まあ確かにそうだな。都も勘付いていて、わざと気付いていないフリしてたし。あつちでは姿は見えなかったけど、ずっと見ていたなら知られていてもおかしくない、か。……手榴弾を被爆して大火傷負った時とか、右腕まるまる無くした時とか、お腹に大きな穴が開いた時とか、マイスター都が寝静まつてから帰つて来て、密かに自分で治療してたし」

「そこまで見てたか」



「主殿……!」

「昔の話だ」

その後、フレイがポーラの転移を感知してこっちにフィオと共に（こっそり）やって来るまで、桜の追及を俺は躲さねばならなかったのであった。

——翌日の昼休み

「俺は地属性として扱い2体分のリリース素材となった『始源の帝王』と『E m エンタメイジ ハットトリッカー』をリリースし、『神獣王バルバロス』をアドバンス召喚!」

『ガアアアア!』

「このモンスターが3体のモンスターをリリースしてアドバンス召喚された時、お前のフィールドのカードを全て破壊する!」

「ン何イ!」

神獣王バルバロス：ATK 3000

「これでお前のフィールドにカードは無くなった! 行け、ダイレクトアタックだ!」

「のああああああつ!？」

高田：LP 50↓0

黎：WIN

高田：LOSE

夜も遅いとこの事で精霊界に行くのを断念した俺達（主に桜達の助言。俺は別に寝なくても平気）は、ポーラのやりたい事に付き合うため、俺、フィオ、桜、フレイのメンバーで昼を食べた後、彼女を屋上で待っていた。ちなみに本日も普通に授業がありました。彼女を待っている間にやって来たのはご存知、ブルーのエリート思考の塊とも言える男、高田。何かギヤースカ煩かったので、デュエルでボコってやっていた所だ。

神獣王バルバロス（効果モンスター）

星8

地属性／獣戦士族

ATK 3000 / DEF 1200

(1) : このカードはリリースなしで通常召喚できる。

(2) : このカードの(1)の方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は1900になる。

(3) : このカードはモンスター3体をリリースして召喚する事もできる。

(4) : このカードがこのカードの(3)の方法で召喚に成功した場合に発動する。

相手フィールドのカードを全て破壊する。

### 始源の帝王

#### 【永続罫】

(1) : このカードは発動後、効果モンスター（悪魔族・闇・星6・攻10000／守2400）となり、モンスターゾーンに特殊召喚する。

このカードは罫カードとしても扱う。

(2) : このカードの効果でこのカードが特殊召喚した場合、手札を1枚捨て、属性を1つ宣言して発動できる。

このカードは宣言した属性として扱い、このカードと同じ属性のモンスターをアドバンス召喚する場合、2体分のリリースにできる。

(3) : このカードの効果で特殊召喚されたこのカードが存在する限り、自分はこのカー

ドと同じ属性のモンスターしか特殊召喚できない。

Em エンタメージ ハットトリッカー（効果モンスター）

星4

地属性／魔法使い族

ATK 1100／DEF 1100

（1）：フィールドにモンスターが2体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

（2）：自分にダメージを与える魔法・罠・モンスターの効果が発動した時に発動できる。

このカードにEmカウンターを1つ置く（最大3つまで）。

その後、その効果で自分が受けるダメージを0にする。

（3）：このカードにEmカウンターが3つ置かれた時にこのカードの攻撃力・守備力は3300になる。

「ほら、満足したか？ こっちは人を待つてるんだ、そら帰った帰った」

「ち、畜生、オシリスレッドの分際で！」

「お前いい加減に寮のカラーで差別すんの止めろよ。最近じゃあブルーの中でも差別意



「……宝玉の持ち主は、私と旧知の間柄。……弱い人は彼には紹介できない」  
成程、俺の実力を計りたいと。

彼女の話では、光の宝玉は特別な理由があつて俺でも簡単には渡せないらしい。そこで彼女と『ヴォルカニック・デビル』達の紹介状を必要とするそうだ。

確かに、友人の顔に泥は塗れないわな。

納得したに俺に対し、桜は何だか不服そうだ。

「貴様、主殿の実力を疑うと？」

「……疑つてるわけじゃない。……でも、万が一不調という事もある。……それにここでデュエルをすればデュエルエナジーが高まって転移しやすくなる。……転移先は少し特殊な場所で、陣を開いても半日はワープできない」

「そういうわけなら、受けて立つぜ」

「主殿、良いのか？ この女、主殿を疑っている上に、本当に紹介するかも怪しいぞ」

「最初から全幅の信頼を寄せて来る奴よりかマシさ。適度に疑つてくれていた方が、こつちもやりやすい」

「むう……」

理解はしてくれたのか、一応まだ不満そうだが、桜は下がってくれた。

さて、使うデッキは……、さつきと同じで良いだろう。

デッキをシャッフルしてディスクにセットし直し、電源を入れる。エッジがレーンにそって移動し、ライフカウンターが4000を示した。

「さ、こっちは準備できてるぜ」

「……デュエルは万能」

キイン、と、青白いディスクを彼女も装着した。あのシールドっぽいのはディスクにならないらしい。ちよつと期待してただけに残念だ。

さ、気持ちを切り替えて……！

「デュエル！」

黎VSポーラ

LP 4000 VS LP 4000

「……先攻どうぞ」

「なら遠慮無く！ 俺のターン、ドロー！」

ふむ……、この手札ならあいつを呼べるが、相手の場が空っぽの時に出してもなあ。

「まずは『テイク・オーバー5』を発動！ デッキからカードを5枚墓地に送る！」

デッキの上からカードを連続で引き、5枚になった段階で墓地ポケットに置く。デイ

スクがカードを認識し、カードをそのまま呑み込んだ。

余談だが俺は親指をデッキの下から側面に沿ってこすり、必要な枚数だけピタリと抜き取るやり方が好きだ。すこぶる難しいけど。

「俺はモンスターをセット！ 更にカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

まずは様子見だ。大きく動いて完全なデイスアドバンテージになったら笑えない。

黎：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚

「……私のターン、ドロ。……手札から永続魔法『金剛真力』を発動。……相手フィールドのみモンスターが存在する場合、1ターンに1度、レベル4以下のデュアルモンスターを1体、手札から特殊召喚できる」

金剛真力



## 【永続魔法】

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札からレベル4以下のデュアルモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

そのカードを使うって事は、彼女のデッキはデュアル軸か。

『デュアルスパーク』を初めとしてクセはあるが強力なカードが多い。油断はできないな。

「……手札から『ナチュラル・ボーン・サウルス』を特殊召喚」

『ガアアアアアッ!』

ナチュラル・ボーン・サウルス：ATK 1700

……それ入れてるのか。

デカい肉食恐竜の骨格としか形容できないモンスターがポーラの一の手。俺には正直、こいつの上手い活用方法が分からないんだぜ……。

ナチュラル・ボーン・サウルス（デュアルモンスター）  
星4

闇属性／アンデット族

ATK 1700 / DEF 1400

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードは恐竜族・地属性になる。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、そのモンスターを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚されたモンスターはフィールド上に表側表示で存在する限りアンデット族として扱う。

「……更に『カードガンナー』を召喚し、効果発動。……デッキから3枚墓地に送って、攻撃力アップ」

カードガンナー：ATK 400 ↓ 1900

続いて制限カードを体験した小型マシン。キャタピラの脚部に光線銃のアーム、フェイスは透明なドームで覆われている。墓地肥し、ドロ、自己強化、レベル3と、優秀な能力を持ったモンスター。墓地を利用するデュアルデッキにはピッタリだ。

カードガンナー（効果モンスター）

星3

地属性／機械族

ATK 400 / DEF 400

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。

このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする。

また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドロする。

墓地送りにされたのは……。

『フェルグラントドラゴン』

『ガガガリベンジ』

『ギガプラント』

何？ 『ガガガリベンジ』に『フェルグラントドラゴン』だと？

こいつ、もしかすると単純なデュアルデッキじゃないな……？

「……バトル。『ナチュラル・ボーン・サウルス』でセットモンスターを攻撃。//ヘルダ  
イノ・クラッシュユ」

大きな顎で伏せてあるカードに噛みつく骨の恐竜。表側表示になったモンスターにその牙を突き立てるが、口の中に突っ込まれたヘリポートのせいで顎を閉じきる事ができなかった。

マツシブ・ウオリアー：DEF 1200

「俺のセットモンスターは『マツシブ・ウオリアー』！ 1ターンに1度、戦闘破壊されない！」

マツシブ・ウオリアー（効果モンスター）

星2

地属性／戦士族

ATK 600 / DEF 1200

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。  
このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

「……なら『カードガンナー』で追撃。 “マシンバレット・フルシューティング”」

「チッ！」

噛みつかれた事によって脆くなっていたのか、追撃として撃たれた銃弾がヘリポートを貫き、その後ろにいた本体を撃ち抜いた。

お疲れ、『マツシブ・ウオリアー』。

「……2枚セットして、私のターンは終わり」

カードガンナー：ATK 1900 ↓ 400

ポーラ：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：ナチュラル・ボーン・サウルス（ATK 1700・通常）カードガンナー（ATK 400）

：伏せカード2枚、金剛真力（永続魔法）

「俺のターン、ドロ―！　ここで『テイク・オーバー5』を除外し、更にドロ―！」

今度はこっちの番だ！

前のターンから出せたあいつを出すぜ！

「魔法カード『調律』！　デッキからシンクロンと名のついたチューナーを手札に加えてシャッフルし、デッキトップを落とす！　俺が選ぶのは『クイック・シンクロン』！」

調律

【通常魔法】

自分のデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。

その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

墓地に送られたカードは……。

『次元幽閉』

て、テメエまでニート組に行くつもりか『次元幽閉』イ!?

「手札のモンスターカード『クイツク・シンクロン』を墓地に送り、もう1体の『クイツク・シンクロン』を特殊召喚！ 更に墓地の『ポルト・ヘッジホッグ』を自身の効果で特殊召喚し、手札の『チューニング・サポーター』を通常召喚！」

クイツク・シンクロン（チューナー・効果モンスター）

星5

風属性／機械族

ATK 700 / DEF 1400

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚できる。

このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とする事ができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついたチューナーをシン

クロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

ボルト・ヘッジホッグ（効果モンスター）

星2

地属性／機械族

ATK 800／DEF 800

自分のメインフェイズ時、このカードが墓地に存在し、自分フィールド上にチューナーが存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

チューニング・サポーター（効果モンスター）

星1

光属性／機械族

ATK 100／DEF 300

このカードをシンクロ召喚に使用する場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができる。



このカードがシンクロモンスター、シンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分デッキからカードを1枚ドローする。

クイツク・シンクロン：ATK 700

ボルト・ヘッジホッグ：ATK 800

チューニング・サポーター：ATK 100

瞬時に俺の場に並ぶ3体のモンスター。個々のステータスは低いが、問題は無い。

「……レベル合計は、8！」

「レベル1の『チューニング・サポーター』とレベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル5の『クイツク・シンクロン』をチューニング！」

腰から銃を引き抜いた『クイツク・シンクロン』が半透明となって現れた『ジャンク・シンクロン』のカードを撃ち抜き、5つの星が変わる。

その星は5つの幾何学模様リングに変わり、その中を中華鍋を被った小型人型機械とボルトを背負ったハリネズミが通過した。

「集いし闘志が、怒号の魔人を呼び覚ます！ 光差す道となれ！」

☆1+☆2+☆5=☆8

「シンクロ召喚！ 粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』！」  
『デヤアツ！』

ジャンク・デストロイヤー：ATK 2600

光の柱の中から出て来たのは4本腕の、全てを破壊するエネルギーを身の内に秘めた  
廃品パーツの巨人。

様々な局面でお世話になる、強力なジャンク系シンクロモンスターだ。

「このモンスターは！」

「はい、プライドの時に出来て、場をこじ開けたモンスターです！」

『『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！ こいつがシンクロ召喚に成功した時、素材モンスターの数——1体分まで場のカードを破壊できる！』

ジャンク・デストロイヤー（シンクロ・効果モンスター）

星8

地属性／戦士族

ATK 2600 / DEF 2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上のカードを選択して破壊できる。

「対象はこつちから見て右の伏せカードと『ナチュラル・ボーン・サウルス』！ // タイダル・エナジー！」

わざわざあの使い辛いモンスターを呼んだって事は、何か策があるという事だろう。ならこのまま吹っ飛ばして押し切るまで！ お前のターンまで残らせるつもりは無い！

「……狙われたカード、速攻魔法『デュアルスパーク』を発動。……自分の場のレベル4デュアルをリリースし、場のカードを1枚破壊する。……私は『ナチュラル・ボーン・サウルス』をリリースし、『ジャンク・デストロイヤー』を破壊する」

「何?！」

「……貴方は少々深読みしすぎる。……もつと肩の力を抜かないと、こういう単純な罠にかかる」

デュアルスパーク

【速攻魔法】

(1)：自分フィールドの表側表示のレベル4のデュアルモンスター1体をリリースし、フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊し、自分はデッキから1枚ドローする。

ポララの骨恐竜が魔法カードの中に光と消え、そこから放たれた電撃に俺の魔人が破壊された。遅れて破壊の洪水がポララの間を押し流すが、残念ながら力を使った後の魔法カードが1枚砕けただけとなってしまった。

成程、『ナチュラル・ボーン・サウルス』はミスリードを狙ったモンスターというワケか。素材の段階で叩かなかったのは別途追加でモンスターを呼ばれる事を警戒したからだろう、『ジャンク・デストロイヤー』はシンクロ召喚時にしか効果が発動しないから、EXデッキに残しておく方が危険と判断したって所か。

「……更に1枚ドロー」

「やるな、『チューニング・サポーター』の効果で俺も1枚ドロー！」

だがお楽しみはこれからだ！

「罨発動、『ロスト・スター・デイセント』！ 俺の墓地のシンクロモンスター1体のレベルを1つ下げ、守備力を0にして守備表示で復活させる。カムバック、『ジャンク・デストロイヤー』！」

ジャンク・デストロイヤー：DEF 2500↓0

ロスト・スター・デイセント

### 【通常罨】

自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、レベルは1つ下がり守備力は0になる。

また、表示形式を変更する事はできない。

「ただしこの効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化され、表示形式の変更はできない。だがそれ以外には制約はついていない。俺は『ジャンク・デストロイヤー』をリリースし、『ターレット・ウオリアー』を特殊召喚！」

『トア!』

ターレット・ウオリアー（効果モンスター）

星5

地属性／戦士族

ATK 1200 / DEF 2000

このカードは自分フィールド上の戦士族モンスター1体をリリースして手札から特殊召喚できる。

この方法で特殊召喚したこのカードの攻撃力は、リリースしたモンスターの元々の攻撃力分アップする。

ターレット・ウオリアー：ATK 1200 ↓ 3800

動かなくなった廃品の魔人が光の中に消え、その中からレンガ作りの砲塔の戦士が現れた。中には誰もいません。

「……攻撃力3800!?!」

このカード、意外と使える。こうやって手札消費1枚でバニラ同然になった、或いは

何らかの理由で弱体化した戦士族をリリースすれば瞬時に出て来れる。装備魔法と違つて『サイクロン』を気にする必要も無いし、攻撃力900の『スピード・ウォリアー』ですら2100になる。

「バトル! 『ターレット・ウォリアー』で『カードガンナー』を攻撃!」  
 「リボルビン  
 グ・ショット!」

「……罠カード『ガード・ブロック』を発動。……ダメージを0にして、1枚ドロ」  
 「なぬ!?!」

「……『カードガンナー』が破壊されて私の墓地に送られた事で効果発動、もう1枚ドロ」

肩口の砲身からバラ撒かれた無数の銃弾の雨を、ポーラの周りに展開されたバリアがガードする。手前にいた小型の月面探査用のようなマシンは木端微塵に消し飛んだが、ポーラの方にダメージは通らなかつた。

ぬぬぬ、3400のダメージを打ち消されたか……。

できればここで致命傷を与えておきたかつたんだが……。

「俺はカードを1枚セットし、ターンを終了する」

黎 : LP 4000

手札：1枚

フィールド

：ターレット・ウォリアー（ATK 3800）

：伏せカード1枚

「……私のターン、ドロウ」

にしても、前のターンにあれだけのカードを消費したつてのに、このドロウで手札4枚とは参るね。

「……『金剛真力』の効果発動。……手札からレベル4の『炎妖蝶ウィルプス』を特殊召喚」

炎妖蝶ウィルプス：ATK 1500

紅に燃える炎の羽を持った蝶が現れる。確かあのモンスターはリリースして、墓地の同名以外のデュアルモンスターを再度召喚した状態で特殊召喚できたはず。

「……続いて『ゴブリンドバーグ』を召喚。……このカードは召喚された時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚し、守備表示になる。……効果で手札のレベル4の



『ガガガマジシャン』を特殊召喚」

ゴブリンドバグ：ATK 1400 ↓ DEF 0

ガガガマジシャン：ATK 1500

チツ、更にモンスターを増やすか！

炎妖蝶ウィルプス（デュアルモンスター）

星4

炎属性／昆虫族

ATK 1500 / DEF 1500

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードをリリースする事で、自分の墓地に存在する「炎妖蝶ウィルプス」以外のデュアルモンスター1体を特殊召喚する。

この効果によって特殊召喚されたデュアルモンスターは再度召喚された状態になる。

ゴブリンドバグ（効果モンスター）

星4

地属性／戦士族

ATK 1400／DEF 0

このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる。

この効果を使用した場合、このカードは守備表示になる。

ガガガマジシャン（効果モンスター）

星4

闇属性／魔法使い族

ATK 1500／DEF 1000

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に1から8までの任意のレベルを宣言して発動できる。

エンドフェイズ時まで、このカードのレベルは宣言したレベルになる。

「ガガガマジシャン」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。  
このカードはシンクロ素材にできない。

「これでレベル4が3体です!」

「……まだ終わらない。……魔法カード『黙する死者』。……墓地の通常モンスターを守備表示で特殊召喚。……『ギガプラント』、復活」

ギガプラント：DEF 1200

今度はカーガンの効果で墓地に送られたモンスターか……!!

だんだん読めて来たぞ、こいつのデッキ……! 恐らくポーラのデッキはレベル4を軸に数種類の高レベルエクシーズモンスターをデュアルやガガガの展開力で特殊召喚する、言うならば「エクシーズ軸ガガデュアル」!

『フェルグラントドラゴン』の存在が謎だったが、『ブラック・ブルドラゴ』とランク6のあのモンスターの存在で大体読めた。『ブルドラゴ』が墓地にいない場合、『トレード・イン』か何かで墓地に送り、復活させて戦う算段なのだろう。

「あれ、『ギガプラント』って効果モンスターだよね? この間桜さんがオフレコでブ

ルー撃退した時にモンスター効果使ってたし」

フィオ、オフレコ言うな。

「マスター、『ギガプラント』もまたデュアルモンスターなのです。あの類のモンスターはフィールドで再召喚しないと効果モンスターにならないのです」

「つまり、デッキ・手札・再召喚すれば効果モンスター、それ以外では通常モンスターとして扱われるのだ」

黙する死者

【通常魔法】

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを表側守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはフィールド上に表側表示で存在する限り攻撃する事ができない。

ギガプラント（デュアルモンスター）

星6

地属性／植物族

ATK 2400 / DEF 1200

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、

このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動できる。

自分の手札・墓地から昆虫族または植物族モンスター1体を選んで特殊召喚する。

「……私は『ガガガマジシャン』の効果発動。……1ターンに1度、ターンが終わるまで、レベルを1から8の中から好きな数字に変更できる。……これでレベルを6にする、”レベル・シフティング”」

ガガガマジシャン：☆4↓6

これで、レベル4と6が2体ずつ……。来る！

「……まずはレベル4の『炎妖蝶ウィルプス』と『ゴブリンドバーク』でオーバーレイ」

『へへへエ!』

『フウオツ!』

「……2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築」

☆4×☆4＝★4

「……エクシーズ召喚。……出でよ、『ジエムナイト・パール』」

『トアツ!』

ジエムナイト・パール：ATK 2600

出た、簡単に『ヴェルズ・オピオン』殴り倒せる心強い味方。

銀河の爆発から生まれ出でた正しく真珠のような白磁の、隆々とした筋骨を思い起こさせる体。力強い緑の瞳が俺を睨む。

「……続いて、レベル6の『ギガプラント』と『ガガガマジシャン』でオーバーレイ」

『ギシャアツ!』

『ガガツ!』

「……2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築」

☆6×☆6＝★6

「……エクシーズ召喚。……蠢け、『甲虫装機エクサビートル』  
『ギギイツ!』」

甲虫装機エクサビートル：ATK 1000

やはり、こいつを出して来たか……!

金色に輝くボディ、カブト虫の角を思わせる右腕のランスと尖った頭部、所々に走る赤いライン。ランク6の中でも変わり者の一体が登場し、その金色の瞳で『ジエムナイト・パール』と同じようにこちらを睨んで来た。

ジエムナイト・パール（エクシーズモンスター）

ランク4

地属性／岩石族

ATK 2600 / DEF 1900  
 レベル4モンスター×2

甲虫装機エクサビートル（エクシーズ・効果モンスター）

ランク6

闇属性 / 昆虫族

ATK 1000 / DEF 1000

レベル6モンスター×2

このカードがエクシーズ召喚に成功した時、自分または相手の墓地のモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力・守備力は、この効果で装備したモンスターのそれぞれの半分の数値分アップする。

また、1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、自分及び相手フィールド上に表側表示で存在するカードを1枚ずつ選択して墓地へ送る。

「……『エクサビートル』の効果。……エクシーズ召喚に成功した時、自分か相手の墓地のモンスター1体を装備し、その攻守の半分を得る。……『フェルグラントドラゴン』を



「装備」

0 甲虫装機エクサビートル：ATK 1000 ↓ 2400 / DEF 1000 ↓ 2400

ポーラの墓地からエネルギー体になった白金色の龍が現れ、金色の虫の戦士に纏わりつく。そう、これは「サイバードーク」や「巨神竜」でも再現できるコンボ。

「……更に『エクサビートル』の効果発動。……1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使い、自分と相手の場に表側表示で存在するカードを1枚ずつ墓地に送る。

……『フェルグランドラゴン』と『ターレット・ウォリアー』を選択」

「くっ！」

エネルギー体となったドラゴンがランスの穂先から撃ち出され、レンガ造りの砲塔戦士を貫いた。

本来『フェルグランドラゴン』は「フィールドから墓地に送られないと」特殊召喚できない。だが、それは「モンスターカードゾーンから墓地に送られる」事が条件では無い。即ち、装備カードとして魔法・罨ゾーンから墓地に送られても蘇生の条件を満たすという事！

0 甲虫装機エクサビートル：ATK 2400↓1000 / DEF 2400↓1000

「マズいね。これで黎の場にモンスターは0、2体の攻撃を通してもまだライフは残るけど……」

「違う、あのモンスターはただの踏台、この後に出て来るモンスターの素材に過ぎない。あいつが戦うワケじゃない!」

「……正解。……私はランク6の『エクサビートル』でオーバーレイ。……1体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを再構築。……エクシーズ・チェンジ」  
 「え、エクシーズモンスターを素材に!?!」

★6↓★7

「……貫け、『迅雷の騎士ガイアドラグーン』。……このカードは、ランク5か6のエクシーズモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚できる」

迅雷の騎士ガイアドラグリーン（エクシーズ・効果モンスター）

ランク7

風属性／ドラゴン族

ATK 2600 / DEF 2100

レベル7モンスター×2

このカードは自分フィールド上のランク5・6のエクシーズモンスターの上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

迅雷の騎士ガイアドラグリーン：ATK 2600

あつと言う間に上級モンスター相応の攻撃力が2体……！ 手札こそ使い切ったが、この2体の攻撃が通れば俺のライフは尽きる。

「……バトル。……2体のモンスターで、ダイレクトアタック。……この程度とは、呆気無い。……私の見込み違いだった。……」  
 「ドラグリーン・シエイバー」

「ハ、甘エよ！ 畏れ動！ こっちも『ガード・ブロック』だ！ 俺が受けるダメージを

0にし、1枚ドロースる！」

ガード・ブロック

【通常罠】

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロースる。

「……………なら『ジエムナイト・パール』で攻撃。……………パール・ナツクル」  
「ぐ……………っ！」

黎：LP 4000↓1400

炸裂する白色の鉄拳。一発目の螺旋エネルギーを纏った龍の槍は防げたが、こっちまではガードが間に合わなかった。

「……………ターンエンド」

ポーラ：LP 4000

手札：0枚

フィールド

・迅雷の騎士ガイアドラグーン（ATK 2600・ORU：2）、ジェムナイト・パール（ATK 2600・ORU：2）

：金剛真力（永続魔法）

「俺のターン！」

ちよつとデカイダメージを食らったが、まだ1000を上回っている。『簡易融合』だつて使えるレベルだし、余程下手な事をしなければ0になる心配も無い。

手札は3枚、今度はこつちから行くぜ！

「俺は『シンクロン・エクスプローラー』を召喚！」

『キイイツ！』

シンクロン・エクスプローラー：ATK 0

飛び出す赤いビーダマン……、もとい小柄な、胴体に大きな空洞がある赤い機械。丸

く、デフォルメされていて、空洞の奥は真っ暗で何も見えない。

「このカードが召喚に成功した時、俺の墓地から“シンクロン”と名のついたモンスターを1体選び、効果を無効にして特殊召喚できる！ 墓地の『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

『ハッ！』

クイック・シンクロン：ATK 700

シンクロン・エクスペローラー（効果モンスター）

星2

地属性／機械族

ATK 0／DEF 700

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「シンクロン」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

あいつの墓地には『フェルグラントドラゴン』がいる。記憶が正しければ、ポーラの

墓地にいる最も高いレベルは『ギガプラント』の6。つまり攻撃力2600以下を出す  
と確実に負ける。

『クイック・シンクロン』の素材代用効果はモンスター効果では無いから無効にならない。  
つまり出せるのはレベル7のシンクロンを素材にするモンスター。そしてこの状  
況と手札なら、出すべきモンスターはあいつしかない。

「レベル2『シンクロン・エクスペローラー』に、レベル5『クイック・シンクロン』を  
チューニング！」

☆2+☆5=☆7

「シンクロ召喚！ 燃え上がれ、『ニトロ・ウオリアー』！」  
『ハアッ！』

ニトロ・ウオリアー：ATK 2800

来た来た、レベル7最高水準の攻撃力！ 緑のボディに、火薬の詰まった太腕。悪  
魔然とした顔つきに背後に付属されたブースター。上手く行けば手札消費2枚で召喚

でき、更に追加攻撃と自己強化を持つ強力なアタッカーだ。

「凄い、攻撃力2800！ 相手の攻撃力を上回った！」

「バトル！ 『ニトロ・ウオリアー』で『ジェムナイト・パール』を攻撃！ 更にこの攻撃宣言時に手札から速攻魔法『エネミー・コントローラー』を発動！ これで『ガイアドラグーン』を守備表示にする！」

迅雷の騎士ガイアドラグーン：ATK 2600↓DEF 2100

「更にダメージ計算時に『ニトロ・ウオリアー』の効果発動！ 自分のターン中に魔法カードが使用された場合、1度だけ攻撃力を1000ポイントアップさせる！」

ニトロ・ウオリアー：ATK 2800↓3800

「……攻撃力、3800……！」

ニトロ・ウオリアー（シンクロ・効果モンスター）

星7



炎属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 1800

「ニトロ・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、このカードの攻撃力はそのターンのダメージ計算時のみ1度だけ1000ポイントアップする。

また、このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊したダメージ計算後に発動できる。

相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を選択して攻撃表示し、そのモンスターにもう1度だけ続けて攻撃できる。

「ダイナマイト・ナックル」!

「……くっ!」

ポーラ：LP 4000 ↓ 2800

緑のオーラを纏った両拳が、白い巨人を殴り倒す。

「まだまだ、ここからだ！ こいつの真骨頂を見せてやる！」

「相手モンスターを戦闘破壊したこの瞬間、『ニトロ・ウオリアー』のもう1つの効果発動！ 相手の場に表側守備表示で存在するモンスターを1体選び、そいつを攻撃表示にする！ そしてそのモンスターを相手に、続けて攻撃できる！ 〴〵ダイナマイト・インパクト〴〵！ 攻撃力は下がっちゃうが、『ガイドラグーン』を葬るには十分だ！」

迅雷の騎士ガイドラグーン：DEF 2100↓ATK 2600  
ニトロ・ウオリアー：ATK 3800↓2800

「〴〵ダイナマイト・ナックル・セカンド〴〵！」

「……………くうっ！」

ポーラ：LP 2800↓2600

再び拳を振るい、竜に乗った槍騎士が殴り倒される。

これでポーラの場合はガラ空き。手札も0だから圧倒的に俺が有利！ 逆転があつてもそう簡単にやられる状況じゃ無いぜ！

「カードをセット、ターンエンド！」

黎：LP 1400

手札：0枚

フィールド

：ニトロ・ウォリアー（ATK 2800）

：伏せカード1枚

「……私のターン、ドロー。……『天使の施し』を発動。……このカードの効果により

デッキから3枚をドローし、その後手札を2枚捨てる」

「……ここで手札交換か……」

彼女の手札は1枚、ここでポーラが何を手札に残したかで勝負が決まる。

さあ、何を引いた。

「……魔法カード『死者蘇生』を発動」

な!?

「何イ!?! ここで『死者蘇生』だとお!?!」

死者蘇生

【通常魔法】

(1)：自分または相手の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを自分フィールドに特殊召喚する。

「……私は墓地から『フェルグラントドラゴン』を特殊召喚」

『アングヤアアアアアッ!』

フェルグラントドラゴン：ATK 2800

ここでそのカードを引くとは驚きだぜ……! 金色に輝くその龍も、待つてましたとばかりに満を持して登場つてわけか。

「ふえ、『フェルグラントドラゴン』つて確か、フィールドから墓地に送らないと特殊召喚できないはずじゃあ……」

「送りましたよ、マスター。ええ、フィールドから」

「い、いつ!?!」

「送っただろう、『エクサビートル』の効果で、装備カードとして」

「あ、あれで良いの!？」

「うむ、あくまで『フィールドから墓地へ送る』事が条件だからな。何のカードとしては問わないのだ」

「で、でも攻撃力は『ニトロ・ウオリアー』と互角……!」

「……『フェルグラントドラゴン』の効果。……墓地から特殊召喚した時、私の墓地のモンスターを1体選び、そのレベル×200ポイント、攻撃力がアップする。……『グラ  
ンド・チャージャー』」

「そ、そんなのアリ!？」

ブウン、とポーラの墓地から『進化合獣しんかごうじゅうダイオーキシンのカードが半透明で現れる。

カードが8つの星が変わると、その星は金色の竜の中へと吸い込まれていった。

あれは直前の『天使の施し』で捨てていたのか。

フェルグラントドラゴン：ATK 2800↓4400

「……これで、『フェルグラントドラゴン』の方が攻撃力は高くなった」

「チィ……ッ!」

フェルグラントドラゴン（効果モンスター）  
星8

光属性／ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 2800

このカードは墓地からの特殊召喚しかできず、フィールド上から墓地へ送られていなければ特殊召喚できない。

このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、自分の墓地のモンスター1体を選択して発動する。

このカードの攻撃力は、選択したモンスターのレベル×200ポイントアップする。

しんかごうじゅう  
進化合獣ダイオーキシン（デュアル・効果モンスター）

星8

闇属性／悪魔族

ATK 2800 / DEF 200

(1)：このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

(2)：フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚できず。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードがモンスターゾーンに存在する限り、デュアルモンスターの召喚は無効化されない。

●1ターンに1度、自分の墓地のデュアルモンスター1体を除外し、相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

「……バトル。……『フェルグラントドラゴン』で『ニトロ・ウオリアー』を攻撃。……

『フェルグラント・バースト』！」

攻撃力の差はそのまま1600、俺のライフは1400、受ければ負ける！

「罨カードオーブン、『スキル・サクセサー』！ これで攻撃力を400アップさせるっ！  
ぐうおおおおおおおっ！」

ニトロ・ウオリアー：ATK 2800↓3200

黎：LP 1400↓200

力強いブレスによって燃え尽きる緑の爆薬戦士。

だが、俺のライフは辛うじて残っている。まだ俺は負けてない。  
「……ターンエンド」

ポーラ：LP 2600

手札：0枚

フィールド

：フェルグラントドラゴン（ATK 4000）

：金剛真力（永続魔法）

「まだ決着はついていないぜ、ポーラ。俺のターン！」

「……まだ戦うの？」

「あたぼうよ。まだライフは残っている、負けを認めるのは最後だってできる。諦めるのはまだ早いってワケさ」

それに、このデッキは俺が信じて丹精込めて作り上げたもの。俺が信じずしてどうする。

熱く、強い思いに、デッキは必ず応えてくれる。これまでの戦いでは、全てそうだった。負けたくない、勝ちたいという心に応じてデッキはカードを導く。だからデュエリ



ストは最後まで、どんな状況でも諦めてはいけないんだ。

一見するとそれはただの根性論。だが、根性というのはバカにならない。歴史を紐解いたって根性論が理論や緻密な戦略を打ち破った例は何度かある。

熱く燃える闘魂は、バカにならないのだ。

そう力説する俺を見て、ポーラは嘆息した。

「……サー、貴方は変わった。……昔はもつと暗くて、常に復讐や殺しの事ばかり。……今のサーの様に、希望に満ち溢れてなんていなかった。……もつとこう、絶望から生まれた、真つ黒でドロドロの、そう、殺人鬼みたいな感じだった」

「そつちの方が、お前は良かったのか？」

「……人としてなら、今の方が断然良いと思う。……でも……」

そこまで言って、彼女は首を振った。

「……今は、いいや。……デュエルを続けよう」

「分かった。ドロ―！」

「……貴方の手札は1枚、それで攻撃力4400は攻略できない」

「それはどうかな？」

「！」

デュエリストが誰もが1度は言ってみたいセリフを吐きつつ、俺は引いたカードを右

手に移した。

「ポーラ、このデュエル貰ったぞ！」

「……………」

「魔法カード『シンクロ・オーバーテイク』発動！ エクストラデッキのシンクロモンスターを相手に見せて、その素材モンスターを手札に加えるか特殊召喚できる！ 俺は『ジャンク・バーサーカー』を見せて、デッキから『ジャンク・シンクロン』を手札に加える！」

シンクロ・オーバーテイク

【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：EXデッキのSモンスター1体を相手に見せ、そのモンスターにカード名が記されているS素材モンスター1体を自分のデッキ・墓地から選び、手札に加えるか特殊召喚する。

このカードを発動するターン、自分はSモンスターしかEXデッキから特殊召喚できない。

「……それで出せるのはレベル5までのシンクロモンスター。……それじゃあ攻撃力4400は倒せない」

「ああ、だからこうする！　ここで墓地の『ラツシユ・ウオリアー』を除外して効果発動、墓地から『シンクロン・キャリアー』を手札に戻し、通常召喚！」

シンクロン・キャリアー：ATK 0

「……？　……通常召喚しなければ『ジャンク・シンクロン』の効果は使えない、このターンはシンクロモンスター以外をエクストラデッキから召喚も出来ない。……何のつもり？」

「『シンクロン・キャリアー』の効果で、俺は『シンクロン』を追加で召喚できる」

ラツシユ・ウオリアー（効果モンスター）

星2

風属性／戦士族

ATK 300 / DEF 1200

「ラッシュ・ウォリアー」の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の「ウォリアー」Sモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時、このカードを手札から墓地へ送って発動できる。

その戦闘を行う自分のモンスターの攻撃力は、そのダメージ計算時のみ倍になる。

(2)：墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の「シンクロン」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

シンクロン・キャリアー（効果モンスター）

星2

地属性／機械族

ATK 0 / DEF 1000

「シンクロン・キャリアー」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分は通常召喚に加えて1度だけ、自分メインフェイズに「シンクロン」モンスター1体を召喚できる。

(2)：このカードがモンスターゾーンに存在し、このカード以外の「シンクロン」モン

スターが戦士族または機械族SモンスターとのS素材として自分の墓地へ送られた場合に発動できる。

自分フィールドに「シンクロントークン」(機械族・地・星2・攻10000/守0)1体等特殊召喚する。

『『ジャンク・シンクロン』、出て来い！ 効果で墓地から『シンクロン・エクスペローラー』を特殊召喚！』  
『ハッ！』

ジャンク・シンクロン：ATK 1300  
シンクロン・エクスペローラー：DEF 700

金色に輝く『スピード・ウォリアー』の力で墓地から引き上げられ、場に出て来たクレイン車のような機械戦士。自身の通った召喚ゲートが閉じる前に腕のクレインをその中に伸ばすと、眼鏡をかけた調律者が飛び出した。

橙色の調律者は今度は自力で召喚ゲートを開けると、内側から赤いビー玉を撃ち出し、そうなるマシンを呼び出す。

これでこのターンに召喚すべきモンスターの素材は揃った！

ジャンク・シンクロン（チューナー・効果モンスター）

星3

闇属性／戦士族

ATK 1300／DEF 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地のレベル2以下のモンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「……まさか、手札0からモンスターが3体も出て来るなんて……！」

「俺はレベル2の『シンクロン・エクスペローラー』と『シンクロン・キャリアー』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！ 集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ！」

☆2＋☆2＋☆3＝☆7

腰のリコイル・スターターを引つ張つてエンジンをかけると、橙の戦士が3つの星に変わり、それが幾何学模様様の緑のリングとなる。

一列に並んだ緑の輪の中心にクレール車と玩具を模した小型機械が入り、輪郭線以外を残して消滅する。輪郭線の中にはレベルに応じた数の星があり、やがて輪郭線も消滅すると、合計4つの星だけが残り、大きな光の柱となった。

「シンクロ召喚！ 吠えろ、『ジャンク・バーサーカー！』」  
 『グオオオオ、ガアアアッ！』

ジャンク・バーサーカー：ATK 2700

光の柱から咆哮と共に現れる一本角の魔人。焰を模したような赤と黄色のアーマーに、身の丈を超えるギザギザの刃の大斧。緑の瞳が力強く輝き、悪魔のような翼がはばたく。

……そこ、アニメでの事は言うな。

『ジャンク・バーサーカー』の効果発動！ 自分の墓地から「ジャンク」と名のついたモンスターを1体除外し、その攻撃力分、相手モンスター1体の攻撃力を下げる！」

ジャンク・バーサーカー（シンクロ・効果モンスター）

星7

風属性／戦士族

ATK 2700 / DEF 1800

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

自分の墓地に存在する「ジャンク」と名のついたモンスター1体をゲームから除外し、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択した相手モンスターの攻撃力は、除外したモンスターの攻撃力分ダウンする。

また、このカードが守備表示のモンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

「俺は墓地から『ジャンク・シンクロン』を除外し、『フェルグラントドラゴン』の攻撃力を1300下げる！」  
「バーサーク・ハウリンググー！」

ガアアアアッ！ と地響きが海の果てまで届かんばかりに轟き、半透明の『ジャンク・シンクロン』が竜めがけて突進する。衝突した橙色のエンジニアは、そのまま金色の竜を弱らせた。



フェルグラントドラゴン：ATK 4400↓3100

「……く、でも攻撃力は『ジャンク・バーサーカー』の方が低い、倒される事は無い。……お互いに手札は0枚の今、次のターンに持ち越せば、ライフ200の貴方に勝ち目は無い！」

「何か勘違いしてねえか？」

「……え？」

「お前に次のターンは回って来ない！ 『ジャンク・バーサーカー』の効果発動！」

「な!？」

「墓地から『ジャンク・デストロイヤー』を除外し、2600ポイント、攻撃力を削り取る！ 『バーサーク・ハウリング』！」

フェルグラントドラゴン：ATK 3100↓500

再び響き渡る咆哮。自分の重さすら支えられなくなった金色の龍は、とうとう地面へたどり込んでしまった。

この弱体化効果、風変わりなコストを要求する反面、弱体化にタイムリミットが無い

上に1ターン内の制限回数も無い。中々面白い効果だと思っっている。

「攻撃力が500になっちゃった！」

「……でも、まだ」

「2700から500を引いても2200ダメージ、お前の2600ポイントのライフを削る事は出来ない。そう思ってるなら、お前はある事を忘れてるぞ」

ディスクを操作し、墓地のカードを1枚指定する。

墓地から取り除かれたその赤いカードが、効果を発動するためにフィールドに表示されると同時に、ポーラの目は分かりやすく見開かれた。

「墓地の『スキル・サクセサー』を除外し、効果発動。『ジャンク・バーサーカー』の攻撃力は800アップする」

ジャンク・バーサーカー：ATK 2700↓3500

「……あ、ああ……、あ……っ！」

「攻撃力の差はこれで3000、お前のライフを上回った。……お前言ったな、互いに手札0だって」

墓地に不明なカードは無い、伏せカードも無し。

フィニッシュだ。

「バトル！ 『ジャンク・バーサーカー』で『フェルグラントドラゴン』を攻撃！  
サーク・アックス！！」

斬！ 巨大な斧が一閃、金色の龍を正中線で真つ二つに切断する。

お約束の大爆発が発生し、ポーラを巻き込んで周囲を思う存分蹂躪した。

「く、あああああああああああああつ！」

ポーラ：LP 2600↓0

黎：WIN

ポーラ：LOSE

「俺の勝ちだな」

「やったね、黎！」

「お見事です！」

「鮮やかな逆転だった！」

デュエルが終了し、仲間3人が俺に賛辞を贈る中、ポーラは俯いて黙ったままだった。

「……どうした、ポーラ？」

「……何でもない。……どうでも良いけど、語頭に三点リーダーをつけると私と紛らわしい」

「知らんがな」

何をメタな事を言ってるやがる、この娘は。

「……ありがとう、貴方の実力は分かった。……夕方にはここに陣が開けるから、また来て欲しい」

「分かった」

チラリと時計を見ると、昼休みもそろそろ終わる。教室までギリギリといった所か。戻るか、と思った時、ポーラが俺を呼び止めた。

「……待って、サー。……一つだけ」

「何だ？」

「……私はこう見えて、占いなんかもやってる。……的中率はそれなりに高い」

ああ、舞姫だもんな。神楽舞台なんかで神を自分に降ろして、信託を伝えるのが役目だったか。

それがどうかしたか？ 死相でも見えたか？

荼化して聞くと、ポーラは何故か悲しげに首を振った。

「……私は、占いが100%当たる時はそうだと分かる。……サー黎、貴方の未来に見えたのは……」

地獄よりも苦しい絶望と、幸福を根底から覆す死よ。

そんな無慈悲な、或いは何処かで予想していた、いやそれ以上の未来を宣言された。俺は何故か、その予言に対し、安堵を憶えてしまっていた。

やつと、死ねるのか。やつと、全てに償えるのか。

そんな感情しか、湧いて来なかった。悲しみも戸惑いも、一切無かった。

t o b e c o n t i n u e d

## 閑話：問題児達を異世界から呼び寄せたようです 上

「どういう事ですか！」

どこでもない空間で、声を荒げる者がいた。

白くぼんやりと光る天使のような妙齢の女性だ。黎が死した後、都の魂が囚われた事を知らせたのもこの天使である。

「どうもこうも無い」

対するは、同じく光を放つ天使。

こちらは中年男性のようで、白い光も薄く黄色がかっている。女性の光がやや青白い感じがするのと対照的だ。

「あの世界について、邪神についてはわたしに一任されていた筈です！ 何故、一体どういう権限で貴方がそこに手を出すのですか！」

「何、半年以上経過しているのに討伐できていない君の遅さに失望してね。上に掛け合ってボクにも手助けを出来るようにして貰っただけだよ」

「勝手な事を……！」

彼らは神の眷属、或いは天使と呼ばれる存在。世界の均衡を監視し、或いは人間の手には負えない邪悪を打ち消し、時に人間として降り立つ力ある者達だ。

女性の天使はある世界に干渉して作業をしていた所、男性の天使に横槍を入れられたようである。

「しかも死ぬ予定では無かった人を無理矢理転生させましたね……！ 何を意味するか分からないとは言わせませんよ！」

「あーあー、知ってる知ってる。人間の転生は魂の調律や配分がくって奴だろう？ そこら辺はしつかり理解しているさ、君と違ってボクは優秀なんでね」

あまりにもあんまりな言い分に、女性の天使は言葉が詰まった。

本来、黎のように人間を気軽に転生させるのはタブーとされている。何故なら世界にはルールやバランスというものが存在するからだ。それを超えて好き勝手やってしまうと、目に見えないエネルギーや幸不幸の領域で不具合が起きてしまう。

不具合から世界を守るため、或いは調整するために自分達は存在するのであって、故に『バランサー』とも呼ばれるのだ。

女性の天使が黎を転生させたのは邪神討伐のための特例であり、また外部の手によつてだが都という近親者の前例が作られたから、被害が極微に抑えられるからでもある。それ故に黎は無問題では無くともスルーして構わない案件となり、かつ世界に不具合を



起こさない存在となる。

だがこの男の天使がやった事は違う。生きている命を天使の身勝手な理由で強制的に殺し、違う世界に移す。それはハッキリ言つて横紙破りや越権どころではない、明確な違反行為だ。

「……貴方には重い罰が下るでしょう」

「有り得ない。何故ならボクはこの一手で邪神を討つためのチェックメイトを果たすからだ」

☆

——某所の街中・夕方

ラースはその日も、邪神に捧げるための魂を狩るため人間の町を闊歩していた。

狙うは出来る限り自意識の高い、つまりプライドの高い人間。後は何かを守ろうとしている人間も良い。そうした輩は敗北した時とびきりの『悔しい』という感情を生み出し、それが邪神復活の上質な糧となるのだ。

喪服のような黒いスーツとテンガロンハットを身に着ける男は、今日の成果に眉をし

かめる。

「……この辺りは粗方狩り尽くしてしまったか。まったく、これだから人間は下等なのだ。我らが邪神様を復活させるための生贄にすらなれぬ哀れで薄っぺらい人生ばかり送っている」

凡百ほんひゃくの一般人ではコスパが悪い。

こうして現世で活動するのも、カードに封印するのも、決してタダでは無いからだ。

出来れば1人で2人分、可能なら10人以上に匹敵する程に自尊心が無駄に膨れた増上慢な人間が望ましい。

「止む無し、次の狩場を探すか」

とはいえ、簡単にそれと出会えれば邪神も封印なんぞ受けていなかっただろう。

そうした心が悪と見られ、批判され、正されて来たからこそ、邪神は人間にとっての邪神足り得るのだ。

はあ、と勝手に失望した嘆息を吐き捨て、ラーズは一步前に踏み出し……。

「ほう」

そこで止まった。

「男が2人に女が1人か、我に何用だ？」

「チツ、気付いてたのか」

「だから言つたつしよ、コソコソしても意味無えつて」

「まあまあ」

日が沈みかけている物陰から、3人の男女が現れる。

1人は粗暴そうな丸刈りの少年。年は15歳くらいか。

1人は派手な化粧に七色に波打つた色の髪を持つ女。二十歳前後だろう。

1人はスーツを着込んだ眼鏡の青年。若い事以外は見た目からは年齢は分からない。

「人間はこの時間帯を相手の姿が見えぬ故に『誰そ彼時』と呼び、やがて『黄昏時』となつたそうだな。何者だ貴様らは」

ラーズは一目で判断していた。こいつらは弱くない、と。或いは黎と互角かそれ以上に強い、と。

そして同時にこうも思っていた。『この3人、生贄として非常に適している』と。

「アア？　ンでテメエに名乗らねえとならねえんだよ」

「そう言わずに、これから倒される人の名前くらい覚えてから死んで貰いましょうよ」

「ウケる、冥途の土産つて奴？」

チンピラが1人、ギャルが1人、それをまとめているのが1人。

ニヤ、とラーズは笑った。

「成程、その男共の言う通りだ。我に名乗る必要も、名乗らせる必要も無い。墓も建て

られぬ死人に名前があつても意味は無かるうよ」

「物分かり良いじゃねえか」

「無論。だが敢えて我は名乗ろう、我はラース。邪神様の護衛の長にして最強の護衛、憤怒のラースである」

黒いテンガロンハットを脱いで一礼をし、被り直す。

邪悪な存在と思えない程の礼儀に、しかしガラの悪い男は鼻で嗤うだけだった。

「へッ、テメエがそうなのか。んじゃあどつとやろうや、テメエさえ片付ければテメエのボスまで一直線だからなあ！」

嘲うスキンヘッドの男がデュエルディスクを装着し、エネルギーリングが展開される。

「ほう……、変わった形のデュエルディスクだな」

ラースは知る由も無いが、『遊戯王VRAINS』で広く使用されている腕輪型のデュエルディスクだ。

「あーあ、アクファのキューインって奴の方が好きだったなアタシ」

「良いじゃありませんか、こちらの方が軽くてコンパクトですよ」

このタイプのデュエルディスクは、データとして内部にカードを所持しており盗難や紛失の恐れも無く、デツキの編集等も容易だ。

ソリッドヴィジョンのシステムさえあれば、こういった事も可能なのである。

「察するに、我が主の邪神様を討伐するため派遣された天の遣いの尖兵か」

「そうだ！ ここに来た転生者があんまりにもグズいんでな、別の神様がオレ達を呼んだんだよ！」

「ぶつちやけGX時代程度なら、アタシらで蹂躪できるしね。このままこの世界でデュエリストのキングになるのもアリじゃね？」

「良いですねえ。ではまず、目の前のこの害虫を退治しましょう。我々の栄光のロードはその先にしかありませんから」

ギャル口調の派手な女と、スーツを着た男も同様に腕輪型のデュエルディスクを起動した。

1対3でラーズを倒すつもりなのだろう。

だがしかし、黒服はそれを見て「フン」と鼻を鳴らして嘲笑した。

「驕るな、人間共。王将の前には歩、キングの前にはポーン、テレビゲームでもボスキャラの前には雑魚や中ボスが控えているものだ。我というボスキャラに挑みたくば、まずはこれらを相手にして貰おう」

ラーズはパチン、と指を鳴らした。途端に彼の影が悍ましい形に変化し波打ち、そして4つに千切れる。

千切れた1つはラースの影の形に戻り、分離した3つはそのまま立体化され人の形を取った。

「な、何これ!?!」

「これは……」

「今この場で作り出した私の分身、或いは眷属である。我と戦いたいのであれば、まずはこれを倒してからにして貰おう」

分身は漆黒の影法師、そこからやがて色を得て人として形が固まる。

1人は礼節の無い男の前に、軍人のような迷彩服を着て。

「グリーフ、身の程を教えてやれ」

「サー・イエツサー!」

1人は虹色に輝く髪を持つ女の前に、仮面を着けた女の姿で。

「ヴァニテイ、空洞を暴け」

「御意のままに」

1人はスーツの男の前に、肉の達磨のような見た目になって。

「ファイアー、徹底的に踏み躪れ」

「うおおおおおおおおおっ!」

3人の転位者の前に、3人の新たな急造の護衛が立ちはだかる。同時にデュエルがや

りやすいよう空間が広がり、狭かった筈の道がデュエルフィールドを3つ並べられる程に拡張された。

手下を生み出した黒服の男は、ニヤリと笑うと自らを狩りに来た者達に肅々と告げる。

「私の首が欲しくば、こやつらを討ち取ってからだ。これに勝てぬようでは我に挑む資格も無いと思え。ククク、その場凌ぎで作った故、デュエルをする以外には何も出来ん。命乞いも話し合いも脅しも、何もかも無意味だ。精々無様な敗北をせぬようになあ？」

そうしてふつ、とラーズは消えた。

風に吹かれた煙のように、最初からいなかっただかのように。

見下されていると感じた3人は、隠す事もせず憤慨した。

「あの野郎、ナメやがって！」

「アタシああいうスカした奴嫌いなんだよね」

「自分が狩られる側という事を自覚させてあげましょう」

スキンヘッドの少年は市街地でありながらも怒声を張った。彼はジュニア大会で優秀な成績を修めた男だった。

虹色に輝く女は憎々しげに顔を顰めた。彼女はインターネット大会で準優勝を果たした女だった。

努めて冷静にスーツの男は言った。彼は世界大会に進出できる程の猛者であった。

「グリーンフットたか？ 悪いがオレの敵じゃねえんだ、速攻でブツ殺す！」

「……」

「ヴァニテイ、ヴァニテイねえ？ マジでダサくない？」

「……」

「ファイアーか、暑苦しい見た目をしている。ボクの人生には要りませんね」

「……」

ラーズの「デュエル以外は何も出来ない」という言は本当だったらしく、3人のインスタンツト護衛は言葉を投げられても反応が無い。

これが生きている人間なら挑発に乗るなり相手の言葉遣いの悪さを注意したりする等々あるだろうが、グリーンフット達にはそういった能力は備えられていないようだ。

「壁打ちでもさせるつもりなんですかねえ、時間の不経済は嫌いなのです」

「コイツ見てつと、大会でオレを負かせたクソを思い出すぜ。殴つてやろうと思つたら逃げたあの腰抜けをよお」

「アタシは何でも良いし。それよか実はフブキングと会いたいからさあ、とつとと片付けよ」

フィールドに22マスのカードゾーンが3つ半透明で浮かび上がり、戦いが始まる。



『『バブエルー！』』

L P	4 0 0 0	v s	L P	4 0 0 0
L P	4 0 0 0	v s	L P	4 0 0 0
L P	4 0 0 0	v s	L P	4 0 0 0

☆

迷彩服の護衛グリーンフと相対するのはスキンヘッドの少年。名をしずいなげきと静稻檄人と言った。

「オレのターンから行くぞ！ オレは手札から『絶海のマーレ』を召喚！」

『ハア！』

絶海のマーレ：ATK 1500

眼前に配置された5枚のカードの内1枚を叩き、召喚のコマンドを指定。

檄人の初手は青い肌の人魚。ただし魚のそれではなくアンコウや鮫のように海底を歩く生物に上半身が生えているような姿である。

「モンスター効果発動！ デッキから水族モンスターを1体墓地に送る！」

デュエルディスクに光の輪が表示され、そこからカードが1枚排出される。

リングはすぐには消えずに回転し、排出されたカードは半回転程したリングの別口に呑み込まれた。

「この瞬間、墓地に送られた『ティアラメンツ・メイルウ』の効果発動！ 墓地のこのカードとワールドの『絶海のマーレ』をデッキに戻し、融合召喚を行う！ オレは『ティアラメンツ・キトカロス』を召喚！」

『フッ！』

ティアラメンツ・キトカロス：ATK 2300

そのまま墓地に落とされた麗しい人魚姫と共に2体のモンスターは神秘の渦で混ざり合い、新たな人魚姫へと姿を変える。

彼のデッキ【ティアラメンツ】では起点となり、また禁止カードにもなった強力なカードである。

「モンスター効果発動！ このモンスターを特殊召喚した時、デッキから『ティアラメンツ』カードを手札に加えるか墓地に送る！」

絶海のマーレ（効果モンスター）

星4

水属性／水族

ATK 1500／DEF 1600

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「絶海のマーレ」以外の水族モンスター1体を墓地へ送る。

（2）：自分エンドフェイズに、このカードをリリースし、「絶海のマーレ」以外の自分の墓地の水族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

ティアラメンツ・メイルウ（効果モンスター）

星2

闇属性／水族

ATK 800／DEF 2000

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

(2)：このカードが効果で墓地へ送られた場合に発動できる。

融合モンスターカードによって決められた、墓地のこのカードを含む融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から好きな順番で持ち主のデッキの下に戻し、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

ティアラメンツ・キトカロス（融合・効果モンスター）

星5

闇属性／水族

ATK 2300 / DEF 1200

「ティアラメンツ」モンスター＋水族モンスター

このカード名の(1)(2)(3)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「ティアラメンツ」カード1枚を選び、手札に加えるか墓地へ送る。

(2)：自分フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

自分の手札・墓地から「ティアラメンツ」モンスター1体を選んで特殊召喚し、対象のモンスターを墓地へ送る。

(3)：このカードが効果で墓地へ送られた場合に発動できる。

自分のデッキの上からカードを5枚墓地へ送る。

「オレは『ティアラメンツ・スクリーム 亘世壊を劈く弦声』をサーチし、そのまま発動！」

「……」

「ケツ、『増殖するG』も無し、『灰流うらら』も無し。終わってんなあ、こんな程度に苦戦するとか前任はよっぽど雑魚なんだな」

現代のデュエルはいかに相手をパーミッションやロック効果で制圧して展開を妨害するかに掛かっている。そのため先攻を取れなかったプレイヤーは手札誘発でどれだけ相手の動きを抑制できるかが勝負の鍵になる。それらが1枚も飛んで来ない状況であれば、檄人がグリーフを嘲るのも無理からん話と言えた。

「続けて手札から『ティアラメンツ・シェイレーン』の効果発動！ このカードを手札から特殊召喚し、手札1枚とデッキの上から3枚を墓地に送る！」

この瞬間、永続魔法『亘世壊を劈く弦声』の効果発動！ デッキの上からカードを3枚墓地に送り、ターン終了時まで相手モンスターの攻撃力を500ダウンさせる！」

ティアラメンツ・シェイレーン：DEF 1300

【ティアラメンツ】の欠点の1つとして、自分自身がかかる時間が非常に長い事がある。それだけ互いのターンで自由自在に、或いは節度も分別も無く動き回るカテゴリーなのだ。

しかしこの世界に転移した事で檄人は頭の回転が加速した事を実感していた。転生特典、というもののなのだろう。これなら普段よりずっと早くプレイを進める事が出来る。

更に大会ではないため、制限時間も無し。この場に【ティアラメンツ】の動きを阻害する邪魔なルールは、無い。

ティアラメンツ・シエイレーン（効果モンスター）

星4

闇属性／水族

ATK 1800 / DEF 1300

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分メインフェイズに発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、自分の手札からモンスター1体を選んで墓地へ送

る。

その後、自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

(2)：このカードが効果で墓地へ送られた場合に発動できる。

融合モンスターカードによって決められた、墓地のこのカードを含む融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から好きな順番で持ち主のデッキの下に戻し、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

ティアラメンツ・スクリーム  
壺世壊を劈く弦声

永続魔法

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：フィールドにモンスターが召喚・特殊召喚された場合に、自分フィールドに「ティアラメンツ」モンスターまたは「ヴィサスIIスタフロスト」が存在していれば発動できる。

自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

このターン、相手フィールドのモンスターの攻撃力は500ダウンする。

(2)：このカードが効果で墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「ティアラメンツ」罨カード1枚を手札に加える。

フィールドに次の人魚が現れ、2種類のカード効果でデッキが再び削られた。

合計7枚のカードが墓地に送られ、檄人はニヤリと意地悪く笑う。

「墓地の『シャドル・ビースト』の効果発動、デッキから1枚ドロロー！　そして『古衛兵アギド』と『古尖兵ケルベク』の効果も発動！　互いのデッキからそれぞれ5枚ずつ、合計20枚を墓地に送る！　ヒヤッハア！　絶好調だぜ！　オラア、10枚落ちろやあ！」

「こちらも10枚墓地へ送る」

「そして今、『ティアラメンツ・レイノハート』が墓地に行ったが……、今回は墓地に行った時の効果は使わないでおく」

古衛兵アギド（効果モンスター）

星4

地属性／天使族

ATK 1500／DEF 1300

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：手札・デッキからカードが相手の墓地へ送られた場合に発動できる。



このカードを手札から特殊召喚する。

その後、自分の墓地から「古衛兵アギド」以外の天使族・地属性・レベル4モンスター1体を選んで特殊召喚できる。

(2)：このカードが手札・デッキから墓地へ送られた場合に発動できる。

お互いのデッキの上からカードを5枚墓地へ送る。

その後、自分の墓地に「現世と冥界の逆転」が存在する場合、自分または相手のデッキの上からカードを5枚墓地へ送る事ができる。

古尖兵ケルベク（効果モンスター）

星4

地属性／天使族

ATK 1500 / DEF 1800

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札・デッキからカードが相手の墓地へ送られた場合、相手フィールドの特殊召喚されたモンスター1体を対象として発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

その後、対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。

(2)：このカードが手札・デッキから墓地へ送られた場合に発動できる。

お互いのデッキの上からカードを5枚墓地へ送る。

その後、自分の墓地に「現世と冥界の逆転」が存在する場合、自分の墓地から罠カード1枚を選んで自分フィールドにセットできる。

「まだまだあ！ 『ケルベク』の効果で『現世と冥界の逆転』が墓地に行った事により、追加効果によりオレは墓地の罠カードを1枚セットできる。墓地から『<sup>ティアアラメンツ・クライム</sup>壱世壊に澄み渡る残響』をセット！ これでテメエはカードを発動してもデッキに戻されるだけになったっつーワケだ！」

「……」

「ハッ、ほんつとつつまんねえお人形だなあ、オイ？ 『アギド』の効果で墓地に送られた『ティアアラメンツ・ハウフニス』の効果発動！ このカードと墓地の『沼地の魔獣王』をデッキに戻し、『ティアアラメンツ・ルルカロス』を融合召喚だ！」

『ハアッ！』

ティアアラメンツ・ルルカロス：ATK 3000

海原を割り、フィールドに飛び出したのは凛々しい人魚の剣士。  
 姫騎士という言葉がまさに合う、麗しの女戦士だ。

ティアラメンツ・ルルカロス（融合・効果モンスター）

星8

水属性／水族

ATK 3000 / DEF 2500

「ティアラメンツ・キトカロス」＋「ティアラメンツ」モンスター

このカード名の（2）（3）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカード以外の自分の水族モンスターは戦闘では破壊されない。

（2）：モンスターを特殊召喚する効果を含む効果を相手が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

その後、手札及び自分フィールドの表側表示のカードの中から、「ティアラメンツ」カード1枚を選んで墓地へ送る。

（3）：融合召喚したこのカードが効果で墓地へ送られた場合に発動できる。

このカードを特殊召喚する。

「そして『キトカロス』の効果発動！ 1ターンに1度、自分フィールドのモンスター1体を墓地に送る代わりに、それとは違う『ティアラメンツ』を手札・墓地から特殊召喚できる！ オレは墓地の『ティアラメンツ・レイノハート』を特殊召喚し、フィールドの『シェイレーン』を墓地に送る！」

『フツ！』

ティアラメンツ・レイノハート：ATK 1500

大地が一瞬で海面に変わり、その中からこれまでとは違う悪辣な表情をした青い男が飛び出す。

片手で真珠を弄び、刃のついた鞭を振るう、人魚世界の悪である。

「この瞬間、『レイノハート』と『シェイレーン』の効果発動！ まずは『レイノハート』の効果！ デッキから好きな『ティアラメンツ』カードを墓地に送る事が出来る！」

そして『シェイレーン』の効果で融合召喚を行う！ オレは墓地の『シェイレーン』と『破壊神ヴァサゴ』を素材に、『ミレニウム・アイズ・サクリファイズ』を融合召喚！」

『オ、オオオ……！』

ミレニアム・アイズ・サクリファイス：DEF 0

檄人のデツキから『テイアラメンツ・サリーク壱世壊に奏でる哀唱』が墓地に送られると同時に、フィールドに無数の目を生やした黄土色の肉体を持つ魔神が現れる。全身を覆うような硬質な翼を広げ、ギョロリとした単眼を突き付けるようにグリーンを睨み付けながら、それ以外の全身の目も続々と見開いていった。

テイアラメンツ・レイノハート（効果モンスター）

星4

水属性／戦士族

ATK 1500／DEF 2100

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デツキから「テイアラメンツ・レイノハート」以外の「テイアラメンツ」モンスター1体を墓地へ送る。

（2）：このカードが効果で墓地へ送られた場合に発動できる。

このカードを特殊召喚し、自分の手札から「テイアラメンツ」カード1枚を選んで墓

地へ送る。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

ミレニアム・アイズ・サクリファイス（融合・効果モンスター）

星1

闇属性／魔法使い族

ATK 0 / DEF 0

「サクリファイス」＋効果モンスター

(1)：1ターンに1度、相手モンスターの効果が発動した時、相手のフィールド・墓地の効果モンスター1体を対象として発動できる。

その相手の効果モンスターを装備カード扱いとしてこのカードに装備する。

(2)：このカードの攻撃力・守備力は、このカードの効果で装備したモンスターのそれぞれの数値分アップする。

(3)：このカードの効果で装備したモンスターと元々のカード名が同じモンスターは攻撃できず、その効果は無効化される。

「終わらねえぞお？ 墓地に送られた『ディアラメンツ・サリク 壱世壊に奏でる哀唱』の効果発動、デツキから

『ティアラメンツ・ハウフニス』を手札に加える！ 知ってるか雑魚野郎、『ハウフニス』はテメエのモンスターの効果が発動した時に特殊召喚してデッキを削る事ができる。つまりまた融合できるってワケだ！」

ティアラメンツ・ハウフニス（効果モンスター）

星3

闇属性／水族

ATK 1600 / DEF 1000

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：相手がフィールドのモンスターの効果を発動した時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送る。

（2）：このカードが効果で墓地へ送られた場合に発動できる。

融合モンスターカードによって決められた、墓地のこのカードを含む融合素材モンスターを自分の手札・フィールド・墓地から好きな順番で持ち主のデッキの下に戻し、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

「だが念には念、お前に何かさせて足を掬われるのも面倒だ。オレはラノベの無能な追

放野郎じゃねえ、徹底的にテメエの目を潰す！ 手札の『剣神官ムドラ』は、手札から別の地属性・天使族モンスターを捨てて特殊召喚できる！ 手札の『宿神像ケルドウ』を切つて特殊召喚！ そしてデッキから『墓守の罫』をオレの場に表側表示で置く！』

『ヌオオオ……！』

剣神官ムドラ：DEF 1800

剣神官ムドラ（効果モンスター）

星4

地属性／天使族

ATK 1500／DEF 1800

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：手札から他の天使族・地属性モンスター1体を捨てて発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

その後、デッキから「墓守の罫」1枚を選んで自分の魔法&罫ゾーンに表側表示で置く事ができる。

（2）：自分・相手ターンに、フィールド・墓地のこのカードを除外し、自分・相手の墓



地のカードを合計5枚まで対象として発動できる。

そのカードをデッキに戻す。

自分のフィールド及び墓地に「現世と冥界の逆転」が存在しない場合、この効果の対象は3枚までとなる。

宿神像ケルドウ（効果モンスター）

星4

地属性／天使族

ATK 1200 / DEF 1600

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札から他の天使族・地属性モンスター1体を捨てて発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

その後、デッキから「現世と冥界の逆転」またはそのカード名が記されたカード1枚を手札に加える。

(2)：自分・相手ターンに、フィールド・墓地のこのカードを除外し、自分・相手の墓地のカードを合計5枚まで対象として発動できる。

そのカードをデッキに戻す。

自分のフィールド及び墓地に「現世と冥界の逆転」が存在しない場合、この効果の対象は3枚までとなる。

### 墓守の罠

#### 【永続罠】

このカード名の(2)(3)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の墓地に「現世と冥界の逆転」が存在する限り、相手は墓地のカードの効果を発動できず、墓地のモンスターを特殊召喚できない。

(2)：お互いのメインフェイズに、手札を1枚捨てて発動できる。

デッキから「墓守」モンスターまたは天使族・地属性モンスター1体を手札に加える。

(3)：このカードが表側表示で存在する場合、相手ドローフェイズのドローの前に、カード名を1つ宣言して発動する。

通常のドローをしたカードを確認し、宣言したカードの場合、墓地へ送る。

「オレはレベル4の『ムドラ』と『レイノハート』でオーバーレイ！ 『深淵に潜む者』をエクシーズ召喚！」

『ギジャアアアアア！』

「水属性の『レイノハート』をエクシーズ素材としている事で、オレの場の水属性モンスターは攻撃力が500アップ!」

深淵に潜む者（エクシーズ・効果モンスター）

ランク4

水属性／海竜族

ATK 1700 / DEF 1400

レベル4モンスター×2

(1)：このカードが水属性モンスターをX素材としている場合、自分フィールドの水属性モンスターの攻撃力は500アップする。

(2)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

このターン、相手は墓地のカードの効果が発動できない。

この効果は相手ターンでも発動できる。

檄人の手は休まらない。

剣を構えた神官と人魚を銀河の渦で混ぜ合わせ、亀裂から青い龍を生み出す。

黒い岩の中から上半身を覗かせた海底の生物は青いオーラを放ち、咆哮と共に味方の

ステータスを補助した。

ティアラメンツ・ルルカロス：ATK 3000↓3500

深淵に潜む者：ATK 1700↓2200

これで敵人のフィールドのモンスターは4体。

融合モンスターが3体にエクシーズモンスターが1体、しかもモンスター効果を激しく制限する効果ばかり。

更に墓地には自身を除外して墓地のカードをデッキに戻すカードが眠っており、フィールドには相手だけ墓地の利用を大きく制限するカードと、伏せられたカウンター罫カードまである。

現代のデュエルでここまで大きく制限されれば、最早勝利は絶対に不可能だ。

「この世界に先に来た奴がどんなチートでハイレムチートでハイレム作ったかは知らねえが、この程度に負けるようじゃあ底が知れるってモンだ。当然それに苦戦してるお前らもだよ」

「……」

「クソが、何言っても全然返さねえ。怒りもしなければ笑いもしねえ、マジでクズみてえな人形だな、最近のAIの方が人間らしいんじゃないの？ オレはカードを1枚伏せ

て、ターン終了！」

静否檄人：LP 4000

手札：『ティアラメンツ・ハウフニス』

フィールド

・ティアラメンツ・ルルカロス（ATK 3500・向かって左のEXモンスターゾーンに配置）

・ティアラメンツ・キトカロス（ATK 2300）、ミレニウム・アイズ・サクリファイス（DEF 0）、深淵に潜む者（ATK 2200）

・伏せカード2枚（内1枚は『ティアラメンツ・ククライム壱世壊に澄み渡る残響』）、ティアラメンツ・スクリーム壱世壊を劈く弦声（永続魔法）、墓守の罫（永続罫）

「小官のターンであります、ドロー！」

「何をやろうが無駄だ、テメエはとづくに終わってんだよ！」

「メインフェイズに入る前に、発動しておきたいカードはありますか」

「無視かよ、超ムカつくぜ……。とつと足掻けよ、全部無駄だろうがなア！」

「では手札から『嘆きのガーゴイル』を召喚！」

『ゴガアアア!』

グリーンフが筋肉の塊のような腕を動かし、指の間に挟んだカードをディスクに配置する。

これにより召喚ゲートが開き、青い茨がまとわりついた石像が召喚された。

嘆きのガーゴイル：ATK 5000

「い、攻撃力5000だとい!」

「このモンスターは召喚ターンに自ら攻撃を仕掛ける事は出来ない。また効果も無効にならず、特殊召喚も不可能であります」

嘆きのガーゴイル（効果モンスター）（オリジナル）

星1

闇属性／悪魔族

ATK 5000／DEF 5000

このカードは特殊召喚できない。

(1)：このカードの効果は無効にならず、通常召喚したターンは攻撃できない。

(2)：このカードがゲームから除外された時に発動する。

フィールドの裏側表示のカードを全て裏側表示で除外する。

「チツ、虚仮脅しかよ驚かせやがって。そいつを盾にでもするつもりだろうが無駄だ、そんなモンいくらで潰せんだよ！」

【ティアラメンツ】は強い。そして【イシズ】や【クシャトリラ】を混成する事で更に強いデッキになる。

それは彼の参加した大会が証明していた。何せ一時期は大会参加者のデッキの殆どが【ティアラメンツ】デッキとなり、更に『【ティアラメンツ】に勝てるのは【ティアラメンツ】だけ』等という言葉まで生まれた程だ。

何故そこまで強いのかと言えば、主な理由は『アクセスの太さ』と『破壊がメリットになる』事の2種類がある。

多種多様なカードで自分・相手ターンを問わずに墓地に送る事ができる『ティアラメンツ』はそれだけで効果を発動でき、基本的に除去として使用される効果破壊でも別途効果を誘発する。戦闘破壊したくともフィールド魔法等で攻撃力がアップしていたり、強力なモンスターを出す前に対処したりと、妨害する事も容易い。更に混成される【イシズ】のカードは半ば墓地を封印する事ができるため、実質的にフィールドも墓地も握

れる極めて強力なデッキとなるのだ。

一応強力な火力を持つデッキや除外デッキには弱いが、それとて対抗手段を最初から備えているという破格のスペック。

故に彼が陣形を整えきつた状態で勝利を確信するのは至極当然と言える。  
ただし。

それは『元の世界』での話である。

『この世界』の話ではない。

☆

仮面を被った女、ヴァニティと対するは虹色の髪の女。彼女の名は高街歩恵莉<sup>たかまちふえり</sup>、地方の短大に通うデュエリストだ。言うまでも無いが彼女の頭髮が七色に波打つのは生まれ付きではなく、転移時に天使から貰った特典である。

「先攻はアタシよ、自分の場にモンスターがいらない時、リリカル・ルスキニア L L —ターコイズ・ワープラー』は特殊召喚できる！」

『とあつ！』

「この特殊召喚に成功した事で、手札から『セレスト・ワグテイル』も特殊召喚！」



『たあつ！』

「このカードを特殊召喚した時、デッキから“LL”カードを手札に加える効果を発動できる。アタシは『Lリカル・ルスキニア Lーバード・コール』を手札に加えるじゃん」

L Lーターン・ワーブラー：DEF 100

L Lーセレスト・ワグテイル：DEF 0

「アゲてくよ、ついて来い！ レベル1の『ターコイズ・ワーブラー』と『セレスト・ワグテイル』で『L Lーリサイト・スターリング』をエクシーズ召喚！ 効果で攻撃力と守備力がエクシーズ素材の数×300アップ！」

『ハアツ！』

女子大生が召喚したのは先までの小鳥より成熟した女性の姿の鳥人間。青いインナーカラーを持つ黒い翼を羽ばたかせ、フィールドに降り立つ。

『リサイト・スターリング』の効果発動。アタシは『ターコイズ・ワーブラー』を墓地に送り、デッキから『サファイア・スワロー』を手札に加える」

L Lーリサイト・スターリング：DEF 0 ↓ 600 / ORU 2 ↓ 1

リリカル・ルスキニア

L | L | ターコイズ・ワーブラー（効果モンスター）

星1

風属性／鳥獣族

ATK 100 / DEF 100

このカード名の（2）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

（2）：このカードが手札からの特殊召喚に成功した場合に発動できる。

自分の手札・墓地から「LL」モンスター1体を選んで特殊召喚する。

L | L | セレスト・ワグテイル（効果モンスター）

星1

風属性／鳥獣族

ATK 200 / DEF 0

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デツキから「LL」魔法・罠カード1枚を手札に加える。

(2)：このカードが墓地に存在する場合、自分フィールドの「LL」Xモンスター1体を対象として発動できる。

このカードをそのモンスターの下に重ねてX素材とする。

LL—リサイト・スターリング（エクシーズ・効果モンスター）

ランカー

風属性／鳥獣族／攻 0／守 0

レベル1モンスター×2体以上

(1)：このカードがX召喚に成功した場合、

フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力は、このカードのX素材の数×300アップする。

(2)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

デツキから鳥獣族・レベル1モンスター1体を手札に加える。

(3)：X召喚したこのカードの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは相手も受ける。

『サファイア・スワロー』は自分の場に鳥獣族モンスターがいる時、手札からレベル1

の別の鳥獣族モンスターとセットで特殊召喚できる。『サファイア・スワロー』と『コバルト・スパロー』を手札から特殊召喚!」

『はあっ!』

『たあっ!』

「やっべ、超可愛い! ソリッドヴィジョン最高じゃん! 『コバルト・スパロー』の効果で、デッキから『鉄獣戦線ナーベル』トライリゲードを手札に加えるっしょ!」

L L—コバルト・スパロー：DEF 100

L L—サファイア・スワロー：DEF 0

『バード・コール』『ナーベル』を含め手札4枚を残しながら3体の小鳥をモチーフにした少女が並ぶ。雀、燕、椋鳥ムクドリという小型の鳥をモデルにしているためステータスは低いが、L Lお得意の大量展開を得意として更に別の強いモンスターにバトンタッチしていく。

「アタシはレベル1の『サファイア・スワロー』と『コバルト・スパロー』で2体目の『リサイト・スターリング』をエクシード召喚。その効果で『コバルト・スパロー』を切つて、デッキから新しい『コバルト・スパロー』を手札に加える」

『フツ！』

L Lーリサイト・スターリング：DEF 0↓600/ORU 2↓1

これで黒い鳥の女性が2人並んだ。ステータスは低いが、それで終わるようなら、リカルルスキニアは歴史の闇に消えただろう。

「どうせこの世界に先に来た奴はヌルいデユエルしてたんでしょ、アタシが本当に強いデユエルつてのを教えてやるっしょ！ アタシはランク1のモンスター2体でオーバーレイ！」

『ハアアアア！』

椋鳥の女性2人が緑色の光になり、螺旋を描いて空高く飛び上がる。エクシーズモンスターに重ねるのではなく、エクシーズモンスターそのものを素材にする。本来なら有り得ない行為、されど極僅かな例外が存在する召喚。

彼女らの所持していたオーバーレイ・ユニットは消滅したが、二条の光は銀河に飛び込み新しい命を爆誕させた。

『F N O. O 未来皇ホープ』をエクシーズ召喚！

『ホオオオプツ！』

「そしてこれを素材にオーバレイ！ アタシの本気ブチか・ま・す・ぜえ〜！ 『FN  
0.0 未来龍皇ホープ』！」

『フツ！ ホオオオオオオオオオオオオッ！』

一度生まれた命はすぐに光に変わり、より大きく変化する。

翼は白く大きく輝き、剣は太く重く鋭くなり、龍皇の名に相應しい大柄な戦士が3つの光の星と共に女子大生の陣営に降り立った。

FN0.0 未来皇ホープ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク0

光属性／戦士族

ATK 0/DEF 0

「No.」モンスター以外の同じランクのXモンスター×2

ルール上、このカードのランクは1として扱う。

(1)：このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは0になる。

(2)：このカードが相手モンスターと戦闘を行ったダメージステップ終了時に発動できる。

その相手モンスターのコントロールをバトルフェイズ終了時まで得る。

(3)：フィールドのこのカードが効果で破壊される場合、代わりにこのカードのX素材を1つ取り除く事ができる。

FN0.0 未来龍皇ホープ（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク0

光属性／戦士族

ATK 3000 / DEF 2000

「N0.」モンスター以外の同じランクのXモンスター×3

ルール上、このカードのランクは1として扱い、このカード名は「未来皇ホープ」カードとしても扱う。

このカードは自分フィールドの「FN0.0 未来皇ホープ」の上に重ねてX召喚する事もできる。

(1)：このカードは戦闘・効果では破壊されない。

(2)：1ターンに1度、相手がモンスターの効果を発動した時、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

その発動を無効にする。

この効果でフィールドのモンスターの効果の発動を無効にした場合、さらにそのコントロールを得る。

「終わりにやしねえぜえい、『トライリゲード鉄獣戦線 ナーベル』を召喚！」  
『オラアッ！』

鉄獣戦線 ナーベル：ATK 0

「効果で墓地から『コバルト・スパロー』『サファイア・スワロー』『ターコイズ・ワープラー』を除外して、EXデッキから『王神鳥シムルグ』を召喚！」

『キヒヤアアアアアアッ！』

王神鳥シムルグ：ATK 2400

LM：左下・下・右下

5枚に増えた手札の1枚を指で弾き飛ばし、ペストマスクを装着した鳥人間を召喚ゲートから引きずり出す。3度もEXデッキから特殊召喚を行ったが、これでようやく



と通常召喚である。

鳥人間が墓地から動物達の魂を3つ釣り上げて中空に捧げると光が産まれ、その中からエメラルドグリーンに煌めく羽毛を持った巨大な鳥が飛び出した。

トライブリゲード  
鉄獣戦線 ナーベル（効果モンスター）

星1

風属性／鳥獣族

ATK 0 / DEF 2000

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分の墓地から獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターを任意の数だけ除外して発動できる。

除外した数と同じ数のリンクマーカーを持つ獣族・獣戦士族・鳥獣族リンクモンスター1体をEXデッキから特殊召喚する。

このターン、自分は獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターしかリンク素材にできない。

（2）：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「鉄獣戦線 ナーベル」以外の「トライブリゲード」モンスター1体を手札に加える。

王神鳥シムルグ（リンク・効果モンスター）

リンク3

風属性／鳥獣族

ATK 2400

【リンクマーカー：左下／下／右下】

鳥獣族モンスターを含むモンスター2体以上

このカード名の（3）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードはリンク素材にできない。

（1）：このカード及びこのカードのリンク先の鳥獣族モンスターは相手の効果の対象にならない。

（2）：このカードが戦闘で破壊される場合、代わりに自分フィールドの「シムルグ」カード1枚を破壊できる。

（3）：自分・相手のエンドフェイズに発動できる。

使用していない自分・相手の魔法＆罫ゾーンの数以下のレベルを持つ、鳥獣族モンスター1体を手札・デッキから特殊召喚する。

「そして手札からマジックカード『バード・コール』を発動。デッキから“LL”モンスター1体を手札に加えるか墓地に送り、それとは違う名前の“LL”を手札から特殊召喚できる」

リリカル・ルスキニア

L | L | バード・コール

### 【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：デッキから「LL」モンスター1体を選び、手札に加えるか墓地へ送る。

その後、そのモンスターとはカード名が異なる「LL」モンスター1体を手札から特殊召喚できる。

「デッキから『セレスト・ワグテイル』を手札に加え、先に手札に加えておいた『コバルト・スパロー』を特殊召喚」

コバルト・スパロー：DEF 100

展開は終わらない。1ターン内に制限回数無し特殊召喚を駆使し、更に更にモンス

ターは増えていく。

より強いモンスターや欲しいモンスターを呼び出すために。

「まだまだ爆盛りすつから。アタシは『コバルト・スパロー』と『鉄獣戦線 ナーベル』  
で、『鉄獣戦線<sup>トライブリガード</sup> 徒花のフェリジット』をリンク召喚！」

『ハアツ！』

「つしや来た来たマイフェイバリット！」

鉄獣戦線 徒花のフェリジット：ATK 1600

LMⅡ左・左下

登場したのは尖った猫耳を持つエンジニアの女性。彼女のデッキ【LL鉄獣】で比較的緩い素材と展開補助になる効果を持ったモンスターだ。

『ナーベル』が墓地に行った事で、デッキから『キット』を手札に加える。んで『フェリジット』は1ターンに1度、手札からレベル4以下の獣・獣戦士・鳥獣族モンスターを1体特殊召喚できる。アタシはこの効果で今手札に加えた『鉄獣戦線 キット』を特殊召喚、ウエーイ！」

『とおっ！』

鉄獣戦線 キット：DEF 1000

連続してモンスターが並ぶ歩恵莉のフィールド。

ピンク髪の猫耳少女の後ろに新たにその妹の猫耳の少女が登場し、戦線の数を維持する。

仲間を途切れさせない“LL”と“鉄獣戦線”の特徴を合わせた展開力だ。

鉄獣戦線 徒花のフェリジット（リンク・効果モンスター）

リンク2

地属性／獣族

ATK 1600

【リンクマーク：左／左下】

獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター2体

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分メインフェイズに発動できる。

手札からレベル4以下の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター1体を特殊召喚する。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分は獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターしかリンク素材にできない。

(2)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

自分はデッキから1枚ドローし、その後手札を1枚選んでデッキの一番下に戻す。

鉄獣戦線 キット（効果モンスター）

星2

炎属性／獣族

ATK 700 / DEF 1000

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の墓地から獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターを任意の数だけ除外して発動できる。

除外した数と同じ数のリンクマーカーを持つ獣族・獣戦士族・鳥獣族リンクモンスター1体をEXデッキから特殊召喚する。

このターン、自分は獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターしかリンク素材にできない。

(2)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「鉄獣戦線 キット」以外の「トライブリゲード」カード1枚を墓地へ送

る。

「つーかこれだけやって『ニビル』も『エフェクト・ヴェーラー』も無しとか後攻の手札としては駄目駄目の駄目じゃん。手札誘発はガンガン入れるのが基本っしょ」

「……」

「はあー、シカトとかマジガン萎えだわ。アタシは『キット』の効果発動。『セレスト・ワグテイル』と『ナーベル』を除外して、『戦華盟将—双龍』を特殊召喚」

『又ンッ!』

「続けてリンク2の『フェリジット』と『キット』で、リンク3の『銀弾のルガル』をリンク召喚」

『ガルルアアアッ!』

「そして『キット』の効果でデッキから『鉄獣トライプブリゲード・ランデブーの邂逅』を墓地に送り、『フェリジット』の効果で1枚ドローして1枚戻す」

腕輪から再び光のリングが現れ、カードが2枚排出された。片方は手札に加わり、もう片方は光のリングの別の口に呑み込まれる。そして歩恵莉は目の前に合計4枚のカードが並ぶと、中から1枚を指で軽く叩いて弾いた。

弾かれたカードはデッキに戻ったのだろう、デュエルディスクの腕輪に呑み込まれて

いく。

戦華盟将―双龍：ATK 1100 ↓ 1600

LM：左下・右下

鉄獣戦線 銀弾のルガル：ATK 2300

LM：右・下・右下

戦華盟将―双龍（リンク・効果モンスター）

リンク2

風属性／獣戦士族

ATK 1100

【リンクマーカー：左下／右下】

風属性の「戦華」モンスターを含む獣戦士族モンスター2体

このカード名の（1）（3）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードがリンク召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「戦華」カード1枚を手札に加える。

（2）：自分フィールドの「戦華」モンスターの攻撃力・守備力は500アップする。



(3)：自分の手札・フィールドからカード1枚を墓地へ送り、相手フィールドの表側表示のカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを持ち主の手札に戻す。

この効果は相手ターンでも発動できる。

鉄獣戦線 銀弾のルガル（リンク・効果モンスター）

リンク3

地属性／獣戦士族

ATK 2300

【リンクマーク：右／下／右下】

獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター2体以上

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：相手メインフェイズに発動できる。

自分の手札・墓地からレベル4以下の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター1体を選んで特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、エンドフェイズに持ち主の手札に戻る。

(2)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力はターン終了時まで、自分フィールドのモンスターの種族の種類×300ダウンする。

トライブリゲード・ランデブー  
鉄獣の邂逅

### 【速攻魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分フィールドのリンク状態の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターを任意の数だけ対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで700アップする。

(2)：自分フィールドのリンク状態の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

トライブリゲード・デッドライン  
「今引いた永続魔法『鉄獣の死線』を発動。それでもつて『ルガル』の効果、墓地からもう1度『キット』を特殊召喚。

『キット』と『ルガル』で『鉄獣戦線 凶鳥のシュライグ』をリンク召喚！『デッドライン』の効果で除外した『ナーベル』を手札に戻す！」

『ハアアッ!』

「くうく、かつけえ! チョーヤバイ! 『シユライグ』をナマで見れる日が来るなんて  
テンションあげみざわよいちよまるだわ!」

鉄獣戦線 凶鳥のシユライグ：ATK 3000

リンクマーク：左・右・左下・右下

鉄獣戦線 凶鳥のシユライグ（リンク・効果モンスター）

リンク4

闇属性／鳥獣族

ATK 3000

【リンクマーク：左／右／左下／右下】

獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター2体以上

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが特殊召喚に成功した場合、または自分フィールドにこのカード以外の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターが特殊召喚された場合に発動できる。

フィールドのカード1枚を選んで除外する。

(2) : このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

除外されている自分の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターの数以下のレベルを持つ獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター1体をデッキから手札に加える。

トライブリグード・デッドライン  
鉄獣の死線

### 【永続魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 自分フィールドに獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターが特殊召喚された場合、

除外されている自分の「トライブリグード」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

(2) : 自分の「トライブリグード」モンスターが相手モンスターと戦闘を行ったダメージ

計算後に発動できる。

その相手モンスターを持ち主の手札に戻す。

満を持して登場したのは大筒を構えた片翼の男。『ナーベル』同様にペストマスクで顔を隠し、しかし抑えきれない程のプレッシャーを以て圧倒的な存在感を放っていた。

ピースト系デッキでは対象を取らない除外効果で場を荒らし高い攻撃力も持つ、切り

札に相応しいモンスターである。

「カードを2枚伏せる。そして『王神鳥シムルグ』の効果発動、空いてる魔法・罠ゾーンの数以下のレベルの鳥獣族モンスターを特殊召喚する。レベル7の『霞の谷の巨神鳥』ミストバレーをデツキから特殊召喚！」  
きよしんちよう

『ピィヤアアアーツ！』

霞の谷の巨神鳥：ATK 2700

「ターン終了。こんだけ展開する相手に初手G無しとか災難にも程があるでしょ」

高街歩恵莉：LP 4000

手札：1枚＋『鉄獣戦線 ナーベル』

フィールド

：王神鳥シムルグ(ATK 2400・向かって右のEXモンスターゾーンに配置)

：FN0.0 未来龍皇ホープ(ATK 3000・ORU:3)、霞の谷の巨神鳥(A

TK 2700・『王神鳥シムルグ』の左下にリンク状態)、鉄獣戦線 凶鳥のシユライ

グ(ATK 3000・『王神鳥シムルグ』の下にリンク状態)、戦華盟将―双龍(AT

K 1600・『王神鳥シムルグ』の右下にリンク状態

：伏せカード2枚、鉄獣の死線（永続魔法）

並んだモンスターは全部で5体。

モンスターを除外する鳥男、どんなカードでもカウンターする金色の大鳥、決して破壊されずモンスター効果を無効にして奪う剣士、カードをバウンスする中華の武将、そして自身とリンク先の鳥獣族モンスターを対象に取らせない王の鳥。

発動中の永続魔法の効果で戦闘を行ったモンスターはバウンスされる他、正体不明の伏せカードも2枚ある。

ミスト・バレー  
霞の谷の巨神鳥（効果モンスター）

星7

風属性／鳥獣族

ATK 2700／DEF 2000

このカードの効果は同一チェーン上では1度しか発動できない。

（1）：魔法・罫・モンスターの効果が発動した時、自分フィールドの「ミスト・バレー」カード1枚を対象として発動できる。

その自分の「ミスト・バレー」カードを持ち主の手札に戻し、その発動を無効にし破壊する。

フィールドの状況はあまりにも圧倒的。1ターンの制限時間が無い事、そして古いカードプールの環境である事が、彼女の才覚をより光らせる。

レインボーカラーの頭髮という目を疑うセンスであつても、彼女の実力は真実一流であつた。

「下名かめいのターンでございます、ドロロー

「お、やつと喋つたじゃん。ダメ声だけど喉どーした、飴舐めるべ？ なんつってオメエに食わせる飴なんざ無いんだけどさ、マジウケる」

「ドロローフェイズとスタンバイフェイズを終了しますが、何かありますか？」

「シカトすんなしい。とつとと進めて」

「ではチューナーモンスター『無常を謳う一角獣』を召喚でございます。このカードはレベル5ですが、リリース無しで召喚出来るのでございます」

『オ、オオオ……』

ヴァニティが手札から出したのは濁った眼をした、イツカクと呼ばれる北極等に生息する哺乳類。

角の生えたジユゴンにも見えるが、実際には角では無く牙で、またハシビロコウのようにイツカクのみで属を構成している。

「妥協召喚した時、デメリットとして手札の魔法・罫を1枚捨てなくてはならず、また捨てたカードはこのターン効果が発動できません。下名は『貪欲な壺』を捨てます」  
「変なデメリット、ぶっちゃけ使い辛くねソレ？」

歩恵莉は鼻で嗤った。

自分フィールドに存在しているのは強力なモンスターが5体。例えば1体2体やられたとしても、それを補う手段はいくらでもある。あのモンスターはチューナーと言っていたが、他にモンスターがないこの状況下でチューナーだけを出されても怖くも何とも無い。

こちらの有利には変わらず、それは揺るがない。

彼女はそう考えていた。

実際、それは正しい。

寧ろ、これだけ効果を無効にするモンスターが溢れる状況で弱腰になる方が難しいだ



ろう。

相手が『普通のデュエリスト』であれば、だが。

☆

「ボクのターンから行かせて頂きます、構いませんか？」

「……………」

「やれやれ暑苦しいだけでなく会話もしないとは、何とも無礼な人だ」

細目を歪ませ、その奥から見下したような眼光を滲ませるスーツ姿の男。その名は阿玉春司。あだまはるし

一流の大学を卒業後に一流企業に入社し海外赴任が決まっていたエリートだが、デュエルも仕事も日常生活も他人より上に自分がいると安堵するための手段でしかない、典型的な誰も彼も見下すタイプの人間だ。

「じゃ、行きますよ？」

眼前の空間をなぞり、5枚のカードを表示させる。

良いカードが揃っていたのか、眼鏡の奥にある眼を喜悦に歪ませながら男は笑った。

「ボクは手札から『苗と霞の春化精』はるけししょうの効果を発動。このカードと手札のモンスターを1

枚捨てて、デッキから『丘と芽吹の春化精』を手札に加える。そして今捨てた『レッド・ガジェット』を特殊召喚します」

『ギギツ』

「効果で『イエロー・ガジェット』が手札に加わる」

レッド・ガジェット：DEF 1500

「続けて『丘と芽吹の春化精』の効果で、『イエロー・ガジェット』と共に捨てて『森と目覚の春化精』を手札に加える。そして今捨てた『イエロー・ガジェット』を特殊召喚します」

『ガガツ』

「そして『グリーン・ガジェット』を手札へ」

イエロー・ガジェット：DEF 1200

レッド・ガジェット（効果モンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 1300 / DEF 1500

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時に発動できる。  
 デッキから「イエロー・ガジェット」1体を手札に加える。

イエロー・ガジェット(効果モンスター)

星4

地属性／機械族

ATK 1200 / DEF 1200

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時に発動できる。  
 デッキから「グリーン・ガジェット」1体を手札に加える。

グリーン・ガジェット(効果モンスター)

星4

地属性／機械族

ATK 1400 / DEF 600

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時に発動できる。

デッキから「レッド・ガジェット」1体を手札に加える。

フィールドに並び立つ、赤と黄色の歯車型のモンスター。

古き良きガジェットデッキに用いられたカード達であり、その特性によりフィールドに2体現れながらも春司の手札の枚数を5枚にキープしている。

本来ならモンスターと並べてサーチしつつエクシーズ素材等にするカードだが、“春化精”の効果を使い実質的に消費無しで展開したのだ。

苗と霞の春化精（効果モンスター）

星3

地属性／天使族

ATK 400 / DEF 800

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードと、モンスター1体または「春化精」カード1枚を手札から捨てて発動できる。

デッキから「苗と霞の春化精」以外の天使族・地属性モンスター1体を手札に加える。

その後、自分の墓地から地属性モンスター1体を選んで特殊召喚できる。

このターン、自分は地属性以外のモンスターの効果を発動できない。

(2)：このカードがモンゾーンに存在する限り、「春化精」モンスター以外のフィールドのモンスターの攻撃力は600ダウンする。

丘と芽吹の春化精（効果モンスター）

星4

地属性／天使族

ATK 2000 / DEF 2000

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードと、モンスター1体または「春化精」カード1枚を手札から捨てて発動できる。

デッキから「丘と芽吹の春化精」以外の「春化精」カード1枚を手札に加える。

その後、自分の墓地から地属性モンスター1体を選んで特殊召喚できる。

このターン、自分は地属性以外のモンスターの効果を発動できない。

(2)：このカードがモンゾーンに存在する限り、自分フィールドの「春化精」モンスターは効果では破壊されない。

森と目覚の春化精（効果モンスター）

星4

地属性／天使族

ATK 900 / DEF 1800

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードと、モンスター1体または「春化精」カード1枚を手札から捨てて発動できる。

通常召喚可能な地属性モンスター1体をデッキから墓地へ送る。

その後、そのモンスターとはカード名が異なる地属性モンスター1体を自分の墓地から選んで特殊召喚できる。

このターン、自分は地属性以外のモンスターの効果を発動できない。

（2）：自分フィールドの「春化精」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで倍になる。

「レベル4のモンスター2体を素材に『御影志士<sup>ミカゲシ</sup>』をエクシーズ召喚します」

『トアッ!』

「……逐一五月蠅いな、モンスター共が。このボイスつてオフに出来ないのか?」

御影志士：ATK 2300

春司の前で銀河の渦が巻き起こり、その中に橙色の光に変わって飛び込んだ2体のモンスターを素材として武士の黒い石像が姿を現す。石像でありながら刀を構えて動いているが、ゴーレムの一種なのだろう。

『御影志士』の効果、『レッド・ガジェット』を消費して『ブロックドラゴン』を手札に加える」

御影志士（エクシード・効果モンスター）

ランク4

地属性／岩石族

ATK 2300 / DEF 1800

レベル4モンスター×2

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)このカードのX素材を1つ取り除き、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●デッキから岩石族モンスター1体を手札に加える。

●手札から岩石族モンスター1体を裏側守備表示で特殊召喚する。

「続けて『森と目覚の春化精』の効果で自身と『ブロックドラゴン』を墓地に送り、デッキから『リバイバルゴーレム』を墓地に送る。そして墓地から『レッド・ガジェット』を蘇生し、『イエロー・ガジェット』をサーチ。

更にデッキから墓地に送られた事で『リバイバルゴーレム』を墓地から、場に岩石族モンスターがいる事で『アダマシア・リサーチャー魔救の探索者』を手札から特殊召喚」

レッド・ガジェット：DEF 1500

リバイバルゴーレム：DEF 2100

魔救の探索者：DEF 2100

花崗岩の武士、赤い歯車の機械、岩で出来たゴーレム、赤い髪の探索者の少女とあつと言う間に4体のモンスターが並び、戦線を築く。

阿玉春司のデッキは【春化精アダマシア】。【地属性G グッドスタップS】や【地属性メタビート】とも呼ばれる、“春化精”と“アダマシア”の展開力を利用したデッキだ。



アダマシア・リサーチャー  
魔救の探索者（チューナー・効果モンスター）

星2

地属性／岩石族

ATK 1000 / DEF 2100

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分フィールドに「魔救の探索者」以外の岩石族モンスターが存在する場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

（2）：自分メインフェイズに発動できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

その中からチューナー以外のレベル4以下の岩石族モンスター1体を選んで特殊召喚できる。

残りのカードは好きな順番でデッキの一番下に戻す。

リバイバルゴーレム（効果モンスター）

星4

地属性／岩石族

ATK 100 / DEF 2100

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがデッキから墓地へ送られた場合、以下の効果から1つを選択して発動する。

●このカードを特殊召喚する。

●このカードを手札に加える。

『リサーチャー』の効果発動。デッキの上から5枚確認し、中からレベル4以下の岩石族モンスターを特殊召喚します」

ディスクの光のリングから5枚のカードが排出され、春司の前に展開される。

欲しかったカードを見つけた眼鏡の男は迷う事無くそれを指で力任せにタップした。

「出る、『コアキメイル・ガーディアン』」

『……』

「ふん、空気くらい読めるか。そうだ喧しくせず、ボクの指示に従っていれば勝てるんだ。無能な奴に限って五月蠅いと相場が決まっているからね」

コアキメイル・ガーディアン：ATK 1900

ズシン、と地響きと共に降り立った白い石巨人が何も言わないのを見て満足そうに頷く春司。

石の模擬生命なので口が無いだけなのだが、彼にとつては寧ろ好印象らしい。

「しかし貴方、何も手札を使いませんねえ。『無限泡影』の1枚すら飛んで来ない、手札事故ですか？」

「……」

「はあ、やれやれ。後攻は手札誘発を使って先攻を牽制するのがデュエルの義務だと言うのにそれを怠るとは、何たる雑魚か。この程度の連中に苦戦していたなんて、先に来ていた人はどれだけ頭が悪いのやら」

「……」

「ま、良いでしょう。楽な仕事で報酬が貰えるならそれに越した事も無いです。ボクは『コアキメイル・ガーディアン』『リバイバルゴレム』『御影志士』『レッド・ガジエツト』を素材に『鎖龍蛇さりゆうじや—スカルデット』をリンク召喚！」

『ギジャアアアアアアアアアア！』

「五月蠅い！」

鎖龍蛇―スカルデット：ATK 2800

LM：上・左下・下・右下

回路に4つの光が宿り、中から飛び出た鉄鎖のドラゴンが咆哮を上げるが、春司はヒステリックに怒鳴りつけた。

モンスターが召喚時に声を上げるのはよくある事なのだが、彼はそれが気に入らないようである。

「この世界のデュエル関連の企業は頭がおかしいんじゃないか、一々こんなに叫ばせて。ボクが世界を救ったらモンスターの声なんて全部削除してやる。そうすればコストもカット出来るし騒音に悩まされる事も無い。

……失礼、続けます。ボクは『スカルデット』の4枚ドロ―し手札3枚をデツキの底に戻す効果を使います。これにチェーンして手札から『コアキメイル・サプライヤー』を特殊召喚です」

コアキメイル・サプライヤー：DEF 1600

『サプライヤー』の効果発動、デツキから2体目の『コアキメイル・ガーディアン』を

手札に加えます」

デッキから合計5枚のカードを引き込み、手札3枚を戻す春司。

これで手札は6枚。中身もリフレッシュした事で展開の自由度も更にながった。

鎖龍蛇さりゆうじや—スカルデット（リンク・効果モンスター）

リンク4

地属性／ドラゴン族

ATK 2800

【リンクマーカー：上／左下／下／右下】

カード名が異なるモンスター2体以上

（1）：このカードは、このカードのリンク素材としたモンスターの数によって以下の効果を得る。

●2体以上：このカードのリンク先にモンスターが召喚・特殊召喚された場合に発動する。

そのモンスターの攻撃力・守備力は300アップする。

●3体以上：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

手札からモンスター1体を特殊召喚する。

● 4体：このカードがリンク召喚に成功した時に発動できる。

自分はデッキから4枚ドローし、その後手札を3枚選んで好きな順番でデッキの下に戻す。

コアキメイル・サプライヤー（効果モンスター）

星4

地属性／岩石族

ATK 1400 / DEF 1600

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分フィールドの表側表示の岩石族モンスターが墓地へ送られた場合に発動できる。  
このカードを手札から特殊召喚する。

（2）：このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。  
デッキから「コアキメイル・サプライヤー」以外の「コアキメイルの鋼核」のカード

名が記されたカードまたは「コアキメイルの鋼核」1枚を手札に加える。

「『アダマシア・リサーチャー魔救の探索者』がいる事で、ボクは手札から『アダマシア・シーカー魔救の追求者』を特殊召喚します」

『トオオオ、ハアツ！』

魔救の追求者：ATK 1200

「僕はレベル4の『コアキメイル・サプライヤー』にレベル2の『魔救の探索者』をチューニング。『氷結界の龍 ブリューナク』をシンクロ召喚」

『グルウアアアアアツ！』

「チツ、こいつらもか」

氷結界の龍 ブリューナク：ATK 2300

アダマシア・シーカー  
魔救の追求者（チューナー・効果モンスター）

星2

地属性／岩石族

ATK 1200 / DEF 1000

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分フィールドに「魔救の追求者」以外の「アダマシア」モンスターが存在する

場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

(2)：自分メインフェイズに発動できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

その中からチューナー以外のレベル4以下の岩石族モンスター1体を選んで特殊召喚できる。

残りのカードは好きな順番でデッキの一番下に戻す。

氷結界の龍 ブリューナク（シンクロ・効果モンスター）

星6

水属性／海竜族

ATK 2300 / DEF 1400

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札を任意の枚数墓地へ捨て、捨てた数だけ相手フィールドのカードを対象として発動できる。

そのカードを持ち主の手札に戻す。



「全く、どいつもこいつも騒ぐ事しか能が無い。無能は黙って有能に従っていれば良いのに、分かってないなあ。少しは有能過ぎて耳が鋭すぎるボクを思いやる気持ちとか無いのか」

「……」

「おっと、愚痴を失礼。続けます。魔法カード『アダマシア・サイン魔救の息吹』を発動、墓地から『リサーチャー』を特殊召喚します」

『ふうっ!』

「そしてデツキからレベル2の『どきどき怒気土器』をデツキの1番上に置きます。更に『シーカー』の効果発動、デツキの上から5枚確認し、1番上に置いておいた『怒気土器』を特殊召喚」

アダマシア・サイン  
魔救の息吹

【通常魔法】

(1)：自分の墓地の岩石族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

この効果で「アダマシア」モンスターを特殊召喚した場合には、さらにデツキからレ

ベル4以下の岩石族モンスター1体を選んでデッキの一番上に置く事ができる。

怒気土器（効果モンスター）

星2

地属性／岩石族

ATK 500 / DEF 500

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札の岩石族モンスター1体を捨てて発動できる。

そのモンスターと元々の属性・レベルが同じ岩石族モンスター1体を、デッキから表側攻撃表示または裏側守備表示で特殊召喚する。

「ボクは『怒気土器』の効果発動。手札から『コアキメイル・ガーディアン』を捨てて、デッキから『コアキメイル・オーバードーズ』を特殊召喚します」  
『ゴガッ!』

怒気土器：DEF 500

コアキメイル・オーバードーズ：ATK 1900



風属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2500

チューナー＋チューナー以外のSモンスター1体以上

(1)：iターンに1度、このカード以外のモンスターの効果が発動した時に発動できる。  
その発動を無効にし破壊する。

この効果でモンスターを破壊した場合、このカードの攻撃力はターン終了時まで、この効果で破壊したモンスターの元々の攻撃力分アップする。

(2)：このカードがレベル5以上の相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に発動する。

このカードの攻撃力はそのダメージ計算時のみ、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分アップする。

アダメンアライズ  
魔救の奇跡―ドラゴライト（シンクロ・効果モンスター）

星8

水属性／岩石族

ATK 3000 / DEF 2200

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分メインフェイズに発動できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

その中の岩石族モンスターの数まで相手フィールドのカードを選んで持ち主の手札に戻す事ができる。

めくったカードは好きな順番でデッキの一番下に戻す。

(2)：自分の墓地に水属性モンスターが存在し、相手が魔法・罠カードの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

「どうですか？ ボクのフィールドには1ターンに1度ずつ魔法・罠とモンスター効果が無効に出来るモンスターが並びました。しかも『スカルデット』のリンク先に特殊召喚された事で、攻撃力が300アップしています」

クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン：ATK 3000↓3300

魔救の奇跡—ドラライト：ATK 3000↓3300

「……」

「ノーリアクションは傷付きませぬ。ボクは墓地の『ブロックドラゴン』の効果発動。地属性モンスター3体を除外し、このカードを特殊召喚です」  
『ギョーンッ!』

ブロックドラゴン：DEF 3000

ディスクの光輪が回転し、“春化精”カード3枚が吐き出されて消える。それに続いてもう1枚カードが出て来ると、そこからレゴブロックで作られた龍が現れた。見た目は玩具だが、その能力は味方を守ったりサーチ能力を使ったりと制限カードにされた事もある程に強力だ。

「更に2体目の『シーカー』を召喚し、『ブロックドラゴン』にチューニング。『フルール・ド・バロネス』をシンクロ召喚します」

『ハアアアアア、タアアッ!』

『『スカルデット』のリンク先に召喚された事で、攻撃力が300アップ。そして『ブロッックドラゴン』が場から墓地に送られた事で、デッキからレベルの合計が8になるよう岩石族モンスターを手札に加えます』

フルール・ド・バロネス：ATK 3000↓3300

新たに召喚ゲートから飛び出す百合の騎士。凛々しい騎兵が出陣すると同時にデッキからカードが数枚排出され、春司はそれを静かに受け取った。加わったカードは宣言していないが、ファイアーがそれに言及する様子は無い。

フルール・ド・バロネス（シンクロ・効果モンスター）

星10

風属性／戦士族

ATK 3000 / DEF 2400

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：1ターンに1度、フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

(2)：このカードがフィールドに表側表示で存在する限り1度だけ、魔法・罠・モンスターの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

(3)：お互いのスタンバイフェイズに、自分の墓地のレベル9以下のモンスター1体を対象として発動できる。

このカードを持ち主のEXデッキに戻し、対象のモンスターを特殊召喚する。

ブロックドラゴン（特殊召喚・効果モンスター）

星8

地属性／岩石族

ATK 2500 / DEF 3000

このカードは通常召喚できない。

自分の手札・墓地の地属性モンスター3体を除外した場合のみ手札・墓地から特殊召喚できる。

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの岩石族モンスターは戦闘以外では破壊されない。

(2)：このカードがフィールドから墓地へ送られた場合に発動できる。

レベルの合計が8になるように、デッキから岩石族モンスターを3体まで選んで手札



に加える。

「僕は墓地から3体のモンスターを除外し、『ブロックドラゴン』を再び特殊召喚します」

『ギギギ』

「更に『スカルデット』の効果により、1ターンに1度手札からモンスターを特殊召喚可能。よって2体目の『リサーチャー』を特殊召喚します」

『タアッ!』

ブロックドラゴン：DEF 3000

魔救の探索者：DEF 2100

「レベル8の『ブロックドラゴン』にレベル2の『リサーチャー』をチューニング、レベル10の『相剣大公—承影』ショウエイをシンクロ召喚です」

『ぬううううんっ!』

「みたび三度、墓地から地属性3体を除外して『ブロックドラゴン』を特殊召喚」

『ギギガガガギ』

「『承影』の攻撃力・守備力は除外されたカードの枚数×100アップ、更に相手の攻守

を同じだけ下げる。ボクは3度『ブロッコドラゴン』を特殊召喚した事で合計9枚のカードを除外しました。よって……」

相剣大公―承影：ATK 3000↓3900

ブロッコドラゴン：DEF 3000

相剣大公―承影シヨウエイ（シンクロ・効果モンスター）

星10

水属性／幻竜族

ATK 3000／DEF 3000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(3)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：除外されているカードの数×100だけ、このカードの攻撃力・守備力はアップし、相手フィールドのモンスターの攻撃力・守備力はダウンする。

(2)：このカードが効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地のカード1枚を除外できる。

(3)：カードが除外された場合に発動できる。

相手のフィールド及び墓地のカードをそれぞれ1枚ずつ選んで除外する。

「如何です？　これがボクの実力です。強力なモンスターの軍団、相手より何枚も抜き出したアドバンテージ。原始人の君達には分からないでしょうが、デュエルとは即ちサーチとサルベージの効率化と相手の制圧力にあります。どちらも許した者には敗者以外の道はありません」

3種類の「ガジエツト」と「コアキメル」モンスター達がそれぞれ除外され、2度続けてレゴブロックのドラゴンが地面の中から這い出て来る。同時に天空から赤い大剣を持った鎧武者も現れ、春司の利用できるモンスターカードゾーン6ヶ所全てを埋め尽くしたのだった。

「ボクはカードを2枚セットしてターンエンド。圧倒的な実力差を前にしてサレンダーする事は恥ではありません、さあデッキに手を置きなさい」

阿玉春司：LP 4000

手札：2枚（どちらも岩石族モンスター）

フィールド

：鎖龍蛇―スカルデット（ATK 2800・向かって右のEXモンスターゾーンに

## 配置)

：ブロックドラゴン（DEF 3000）、相剣大公―承影（ATK 3900）、フルール・ド・バロネス（ATK 3300・『鎖龍蛇―スカルデット』の左下にリンク）、クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン（ATK 3300・『鎖龍蛇―スカルデット』の下にリンク）、魔救の奇跡―ドラゴイト（ATK 3300・『鎖龍蛇―スカルデット』の右下にリンク）

：伏せカード2枚

彼がターンを終えるのと同時期、檄人が4体、歩恵莉が5体のモンスターを並べボードアドバンテージを確立していた。

これが現代のデュエル。制限時間いっぱいを使ってモンスターを只管に並べ、カードを手練り寄せ、相手に何もさせないよう手配する。

高速化とカードプールの増加によって『カードで戦う』のでは無く『カードで制圧する』事を目的とした――謂わば勝負ではなく支配・壁打ち・一人遊び。それが彼らの住む世界での常識であった。

春司もまた然り。相手をどれだけ待たせようと自分の盤面を盤石にする事だけを考え、これを突破できない相手こそ悪く、長い時間を掛ける己こそ正義であると考えてい

る。

一応間違っではない。カードの種類が増えた以上、そうなってしまふのはどうしても仕方ないのだ。長寿ゲームの宿命と言っても良い。

「ワシのターン、ドロージャあああああああ！」

「っ、もう少し静かにしてくれませんかねえ。そんな大声出さなくても聞こえてますよ」

「メインフェイズに移るぞおおおっ！」

「ああもう五月蠅い！ さっさとしなさい！」

「手札から『オツレザン恐冷斬』を召喚ツツツ！」

『ヒヒヒヒヒエエエエエエエーッ！』

恐冷斬：ATK 0

筋骨隆々とした大男、ファイアーが召喚したのは彼とは真逆の痩せ細った小男。黒いローブと体格に見合わない大鎌が一般的にイメージさせる死神のようにも見えるが、あまりにも痩せすぎ過ぎて逆に滑稽にすら見えた。

「何のモンスターを召喚したとしても無意味ですよ。ボクの『クリスタル・ウィング・シンクロ・ドラゴン』がモンスター効果を、『ドラガイト』が魔法・罠を、『フルール・ド・

『バロネス』が全ての種類のカードの効果が無効にします。更に『ドラゴイト』と『ブロックドラゴン』は効果では破壊されない状態であり、『承影』は元々効果破壊に耐性があります。貴方の打つ手は全て潰せませす、それともカードをプレイするだけ無駄だと理解出来ないのでですか？」

現在、春司はファイアーの効果に対して3回までカウンターが可能となる。

仮にファイアーがカウンターを全て空振りにさせたとしても、ファイアーが使えるカードは3枚にまで減少してしまい、耐性を持つ高い攻撃力を持つモンスター達に対抗するためのリソースが減ってしまう。そしてターンをそのまま春司に渡せば、また展開して来る事は確実だ。

まさに制圧陣形、伏せカード2枚を控えた彼の戦線は完璧。仮に黎がここにいれば打つ手無しと判じて頭を抱え、降参するかも知れない。

ただしそれは『元の世界のカードのデュエル』の話。

『この世界のカードのデュエル』では無い事を、彼は分かっていたいなかった。

☆

姿を消して人造護衛のデュエルを見ていたラーズは、不敵に笑っていた。

成程、腕利きのデュエリストなのは認めよう。

恐らくあの男や姫君とは違う世界から呼び出した彼らは、強い。

純粋なデュエルの腕前は過去に護衛達が戦った誰よりも上であり、急造した眷属より遥かに優れている。全く同じデツキを持たせれば自分も「騎士」の魂も、何度戦つても勝てないと分かる。

それが彼らだ。

元の世界では『ガチデツキ』や『環境デツキ』、『Tier1』と呼ばれる類を使つていた猛者共だ。

この世界の一般社会に放り出せば、デュエルの価値観を書き換え、あらゆる大会を総ナメにし、優勝賞金だけで億万長者になる事は請け合ひである。

特にあの3人は勝利に対する執着心が強い。違う世界を渡るにあたり、自我の損耗が無い程に胴欲だ。

静稻<sup>しずいなぎと</sup>檄人、高街<sup>たかまち</sup>歩<sup>ふ</sup>恵<sup>えり</sup>莉、阿玉<sup>あたまはるし</sup>春<sup>はる</sup>司。彼らを指定して転移させた何某の眼は間違つていない。

「だが、それだけだ」

されども、1つだけ落とし穴がある事に彼らは気付いていなかった。

「所詮はお遊びの延長線上よ」

彼らは知らない。勝てるデツキでは勝てないという残酷な世界の真実を。

必要なのは愛着のあるデツキだと分かっている。

それが命運を分ける。

「ククク、残酷な事よ。世界を超えるために必要な強き我を持つ者にて増援としたであろうに、それが皮肉にも我らの糧となるのだからなあ」

t o b e c o n t i n u e d



閑話：問題児達を異世界から呼び寄せたようです 下

静しずい稲いな檄げき人：LP 4000

手札：『ティアラメンツ・ハウフニス』

フィールド

：ティアラメンツ・ルルカロス（ATK 3500・向かって左のEXモンスターゾーンに配置）

：ティアラメンツ・キトカロス（ATK 2300）、ミレニウム・アイズ・サクリファイス（DEF 0）、深淵に潜む者（ATK 2200）

：伏せカード2枚（内1枚は『ティアラメンツ・クックライム壱世壊に澄み渡る残響』）、ティアラメンツ・スクリーム壱世壊を劈く弦声（永続魔法）、墓守の罠（永続罠）

グリーンフ：LP 4000

手札：5枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：嘆きのガーゴイル（ATK 5000）

：魔法・罠無し

高街歩恵莉たかまちふえり：LP 4000

手札：1枚＋『鉄獣戦線 ナーベル』

フィールド

：王神鳥シムルグ（ATK 2400・向かって右のEXモンスターゾーンに配置）

：FNo. 0 未来龍皇ホープ（ATK 3000・ORU：3）、霞の谷の巨神鳥（A

TK 2700・『王神鳥シムルグ』の左下にリンク状態）、鉄獣戦線 凶鳥のシユライ

グ（ATK 3000・『王神鳥シムルグ』の下にリンク状態）、戦華盟将―双龍（AT

K 1600・『王神鳥シムルグ』の右下にリンク状態）

：伏せカード2枚、鉄獣の死線（永続魔法）

ヴァニテイ：LP 4000

手札：4枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：無常を謳う一角獣（ATK 1550）

：魔法・罨無し

阿玉春司あだまはるし：LP 4000

手札：2枚（どちらも岩石族モンスター）

フィールド

：鎖龍蛇―スカルデット（ATK 2800・向かって右のEXモンスターゾーンに配置）

：ブロックドラゴン（DEF 3000）、相剣大公―承影（ATK 3900）、  
 ルール・ド・バロネス（ATK 3300・『鎖龍蛇―スカルデット』の左下にリンク）、  
 クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン（ATK 3300・『鎖龍蛇―スカルデット』  
 の下にリンク）、魔救の奇跡―ドラガイト（ATK 3300・『鎖龍蛇―スカルデット』  
 の右下にリンク）

：伏せカード2枚

ファイアー：LP 4000

手札：5枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：オッレザン恐冷斬(ATK 0)

：魔法・罨無し

黎や都とは違う異世界から呼び寄せられた3人のデュエリスト。

素行こそよろしく無いが実力は確かであり、デュエルの腕は黎より上。

更に黎が好んで使う比較的低速なファンデッキとは異なり、文字通りのガチデッキである彼らは1ターン目から強力な制圧陣形を敷いている。

普通に考えれば、決着は既についていると見て良い。

普通なら。

普通では無いからこそ、彼らは邪神の眷属なのだ。

普通では無いからこそ、黎は精霊の力を借りて戦っているのだ。

☆

凶悪な「ティアラメンツ」モンスターを並べた檄人の前に出されたのは、このターン攻撃出来ない悪魔の石像。

それを見て貶されていると思った坊主刈りの少年は鼻を鳴らした。

「テメエまさかオレのモンスターをパワーで押し切るつもりか？ 確かに「ティアラメンツ」は圧倒的な火力を出せるカードは無い、素の最高打点は3000だ。だが、そいつを出す前に潰せるからこそ「ティアラメンツ」は強えんだよ！」

「小官は手札から魔法カード『邪神の泣き蜂』を発動であります」

「聞けや！」

「自分フィールドのモンスター1体を除外し、相手モンスター全ての攻撃力を2倍にしてコントロールを奪うのであります」

「ンだど!？」

茨が巻かれた石像が消滅し、カードから伸びた別の茨が4体のモンスターを絡め捕る。

“ティアラメンツ”のサポートカードはフィールドにそれらのモンスターがいなければ使えない欠点がある、彼に選択の余地は無い。

「チツ、カウンター罠『壺世壊に澄み渡る残響』！ そいつを無効にしてデッキに戻し、手札の『ハウフニス』を墓地に送る！

この瞬間、『ハウフニス』の効果発動！ 墓地のこのカードと『シャドール・ビースト』をデッキに戻し、『エルシャドール・ミドラーシユ』を融合召喚！

『ハアツ！』

エルシャドール・ミドラーシユ：ATK 2200

壺世壊に澄み渡る残響

【カウンター罠】

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。(1)：自分フィールドに「ティアラメンツ」モンスターまたは「ヴィサスⅡスタフロス」が存在し、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時に発動できる。

その発動を無効にし、そのカードを持ち主のデッキに戻す。

その後、自分の手札からモンスター1体を選んで墓地へ送る。

(2)：このカードが効果で墓地へ送られた場合、除外されている自分の「ティアラメンツ」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

エルシャドール・ミドラーシユ（融合・効果モンスター）

星5

闇属性／魔法使い族

ATK 2200／DEF 800

「シャドール」モンスター＋闇属性モンスター

このカードは融合召喚でのみEXデッキから特殊召喚できる。

(1)：フィールドのこのカードは相手の効果では破壊されない。

(2)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、その間はお互いに1ターンに1度しかモンスターを特殊召喚できない。

(3)：このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地の「シャドール」魔法・罫カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを手札に加える。

赤いカードを表向きにし、怪音波を放つ檄人。その罠カードは相手の魔法カードを破碎すると同時に、次元の歪みから黒い竜の傀儡に乗った魔導士の人形を生み出した。

「これでお互いにモンスターを1ターンに1体しか特殊召喚不可能！ テメエはとづくに終わってんだ、とつととサレンダーして道を開けやがれてんだ！」

檄人のモンスターはこれで5体。カウンター罠を使いはしたが、伏せカードはもう1枚ある。

更に彼の墓地には既に『シャドール・フュージョン』が墓地肥やしの際に落ちている。真つ先に除去したい『ミドラーシユ』だが、除去をしても次に繋げるカードは既に仕込まれていた。

彼の言う通り、普通なら打つ手は無い。

「ここで『嘆きのガーゴイル』の効果を発動であります。このカードが除外された時、相手の裏側表示のカードを全て裏のまま除外するであります。貴官の場の裏のカードはその伏せカード1枚のみ、それを除外するであります」

「テメ……！」

「更に魔法カード『背徳の慟哭』を発動するであります。このカードは相手が自分のカードに違う種類のカードをチェインしたターンにのみ発動できるカード。相手フィールドのモンスターはこのターン、モンスター効果を発動するためには手札を1枚捨てなく



てはならないのであります」

「ンだとお!!？」

瞬間、世界から音が無くなった。

それが人間が知覚出来ない程の轟音で他の音が消えたからだと分かったのは、5体のモンスターが動画が停止したかのように動かなくなつたからであつた。

「貴官の手札は0枚、よつて貴官のモンスターは効果を発動出来ないのであります」

「くっ!」

「ただしこのカードには欠点があるのであります。貴官のデッキからそのモンスターのレベルの2倍の枚数分だけカードを除外すれば、手札を捨てずに効果を発動出来るのであります」

邪神の泣き蜂（オリジナル）

【通常魔法】

(1)：自分フィールドのモンスター1体を除外して発動する。

相手フィールドのモンスター全ての攻撃力を倍にして可能な限りコントロールを得る。

背徳の慟哭（オリジナル）

【通常魔法】

自分の効果の発動に対し、相手が別の種類（モンスター・魔法・罫）の効果が発動したターンに発動できる。

（1）：ターン終了時まで、手札を1枚捨てなければ相手は自分フィールドのモンスター効果を発動できない。

手札を捨てられない場合、そのモンスターのレベルの倍の枚数だけデッキの上からカードを裏側表示で除外する事もできる。

マズい、と檄人は半歩後ろに下がった。

【ティアラメンツ】は自分のデッキを削る性質を持ち、またカテゴリーモンスターはデッキに戻る。迂闊にデッキを削れば致命傷を負ってしまう。しかも『深淵に潜む者』はレベルを持たないからデッキのカードを除外する措置も取れない。

幸い『サクリファイイス』はレベル1だから除外枚数も少なくて済むが、これで妨害札が減ってしまった。

「安心して欲しいであります」

「あ？」

「貴官がモンスター効果を使う必要は無いであります」

「どういう意味だ!」

「墓地の魔法カードを2枚除外し、魔法カード『邪道統合』を発動。除外されている自分のモンスター、及び相手フィールドのモンスターを裏にして除外し、融合召喚を行うであります」

「はあ!?! 何だそのクソチート!?!」

邪道統合（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：自分墓地の魔法カードを2枚除外して発動する。

表側表示で除外されている自分モンスター1体を裏側表示の除外状態にし、相手フィールドのモンスターを任意の枚数だけ裏側表示で除外する事で、それらのモンスターを素材扱いとして融合召喚を行う。

「小官は除外されている『嘆きのガーゴイル』を裏にし、同時に貴官の場に存在する5体のモンスター、即ち『ティアラメンツ・ルルカロス』『ティアラメンツ・キトカロス』『ミレニアム・アイズ・サクリファイズ』『エルシャドール・ミドラーシュ』『深淵に潜む者』

を裏側で除外して融合素材にするであります!」

「ぎっけんな、そんなカードが実在して堪るか!」

「実在するからこそ、こうして発動しているのですであります」

大地に漆黒の穴が開く。まるで怪物の口腔のようなそこに闇が渦巻き、その中へ人魚やドラゴン達が無慈悲に吸い込まれていく。

これを受ければ立て直しは無理だろう。彼に選択の余地は無い。

「クソが、『ルルカロス』の効果発動! 特殊召喚する効果の発動を無効にする!」

「では対価としてデツキからレベルの倍の枚数のカードを除外して頂くでありますよ」

「分かってらあ! オレはデツキの上から16枚を除外する!」

バラツとカードを鷲掴みにして空中に放り投げるスキンヘッドの少年。

そのカード達のエネルギーで人魚に力を供給しようとしたが……。

「この瞬間、手札の『悲しみのマリード』を除外して効果発動。相手のカードが除外された時、相手フィールドのカードを3枚まで選び効果を無効にするのであります」

「ンだとお!」

「小官は除外を軸にしたデツキを自作した以上、こういった手合いのカードが多いのは当然であります」

悲しみのマリード（効果モンスター）（オリジナル）

星7

闇属性／悪魔族

ATK 2800 / DEF 0

（1）：このカードが墓地から特殊召喚されて時に発動する。

除外されているカードを1枚選び、持ち主の手札に加える。

（2）：相手のカードが除外された時、手札・墓地のこのカードを除外して発動できる。  
相手フィールドのカードを3枚まで選び、ターン終了時まで効果を無効にする。

中東の強力な悪魔の力が場に巡り、人魚の全身がスパークしてその異能を封じる。

これで融合を防ぐ事はできなくなった。

「作った!? テメエ、まさかそのカードは自分で作ったつてのか! この反則野郎!」  
「……」

「何とか言えよ!」

「合計6体のモンスターを除外し、融合。現れよ『悪四牙あくしぎのウエンカムイ!」

『ZAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!』

現れたのは巨大なクマのような魔物。しかし身の丈は5メートルを優に超え、首が3



「アアアアア！」

静稻櫛人：LP 4000↓0

静稻櫛人：LOSE

グリーフ：WIN

☆

「下名は手札から魔法カード『チェーン・ペナルティ』を発動でございます。お互いに今から3ターンの間、相手のカード効果を無効にした場合、ライフを2500失う事になるのでございます」

「は？ 何そのカード？ ふざけてんの？」

「……」

「チツ、マジで人形だし！ 『霞ミストバレーの谷の巨神鳥』の効果発動！ このカードを手札に戻し、発動を無効にする！ そのカード自体を無効にすればライフが減る効果も無しっしょ

！」

ヴァニティの発動した魔法カードから伸びる鎖。禍々しいオーラを前に肌で危険性を感じた歩恵莉は、金色の大鳥の羽ばたきでそれを吹き飛ばした。

それと同時に彼女のフィールドにいた薄気味悪いイツカクも煙となって消えていく。

『チエーン・ペナルティ』が効果で破壊された時、フィールドの最も攻撃力の低いモンスターも破壊されるのでございます」

「ハ、『双龍』に50だけ足りない攻撃力とかマジでワロス。雑魚の末路的な？」

「永続魔法『ノイジー・キャン・ブラフ』を発動でございます。フィールドのモンスターが全てエクストラデッキから特殊召喚されている場合、場のモンスターの数が少ない方のプレイヤーは同じ数になるようエクストラデッキから召喚条件を無視して特殊召喚するのです。下名は4体のモンスターを特殊召喚でございます」

「ハア!？」

チエーン・ペナルティ（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：このカードの発動後、自分のターンで数えて3ターンの間、相手の効果を無効にしたプレイヤーはLPを2500失う。



(2)：このカードが相手によって破壊された時に発動する。

フィールドの最も攻撃力の低いモンスターを全て破壊する。

ノイジー・キャン・ブラフ（オリジナル）

### 【永続魔法】

このカード名の効果は1ターンに1度、フィールドのモンスターが全てEXデッキから特殊召喚されている場合にのみ発動と処理ができる。

(1)：フィールドのモンスターの数がそのプレイヤーから見えて相手フィールドのモンスターよりも少ない場合、デッキの1番上のカードを裏側表示で除外して発動する。

その差の数だけ、少ない方のプレイヤーは自身のEXデッキからモンスターを選んで召喚条件を無視して特殊召喚する（同名カードは1枚まで）。

このカードがフィールドを離れた時、この効果で特殊召喚されているモンスターはEXデッキに戻る。

続けて飛び出したのは騒音を鳴らしている空き缶の絵が描かれた緑のカード。モデルは恐らく『空の缶は五月蠅い』という西洋の諺だろう。日本にも『空き樽は音が高い』という似た諺が存在する。

だが効果は「中身が無い軽薄な人に限ってよく喋る」という虚しい意味に反して凶悪だ。これを通すワケにはいけない。

「チツ、『双龍』の効果発動！ 手札を1枚捨てて、『ノイジー・キャン・ブラフ』を手札に戻す！ 通したらガチテンサゲびえん展開じゃん、ナメるなし！」

墓地に手札から『BF—精鋭のゼピュロス』が葬られ、ヴァニティの魔法カードが消滅した。

何を召喚するつもりだったかは分からないが、いきなり4体も召喚されるのは危険性が高すぎる。通せば敗北色濃厚となるだろう。

「準備は整いましたでございます」

「ハ？」

ただし彼女は1つ忘れていた、「空撃ち」という概念を。

「下名はチューナーモンスター『暁のグライフ・バット』を通常召喚でございます。このカードは相手フィールドにのみモンスターが存在し、その数が2体以上である場合、通常召喚とは別に召喚できるのでございます」

暁のグライフ・バット：ATK 500

満を持して召喚されたのは、鳥の頭を盛った巨大な蝙蝠。

全身が血のように赤く、ギョロリとした目玉が上空から獲物を睥睨している。口から酸性の唾液を地面に落として溶かすその姿は、さながら今すぐ飛び掛かって食い散らかしたいと言わんばかりの獐猛さだ。

「うっわキモッ！」

「そしてこのモンスターは、相手モンスターをレベル1扱いとしてチューニングを致します。この効果はレベルを持たないモンスターにも有効となるのでございます」

「っ、させるワケ無いっしょ！ 『未来龍皇ホープ』の効果！ 素材の『リサイト・スターリング』をコストに発動を無効にして、更にそのコントロールを得る！」

『グライフ・バット』が素材として指定したモンスターの効果が発動した時、その効果は下名の墓地から魔法・罠カードを2枚除外する効果になるのでございます」

「なっ!？」

竜騎士が光を放って蝙蝠を撃ち落とそうとするが、鳥頭の蝙蝠は黒い暴風を起こしてその光を遮る。その風に煽られてヴァニティーの墓地から『チェーン・ペナルティ』と『貪欲な壺』が除外されたと同時に、希望の光は途絶えるのであった。

「だっいたらこれでどうよ！ 速攻魔法『鉄獣の咆哮』発動！ デツキから

『鉄獣の血盟』を墓地に送り、アンタのモンスターを手札に戻す！」

「チェーン致します。手札の『暴風クロー』のモンスター効果を発動でございます。このモンスター、及び手札1枚を同時に捨てる事により、相手が下名のカードを対象に取った効果は下名に2枚ドロウさせる効果となるのでございます」  
 「くっ！」

暁のグライフ・バット（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／獣族

ATK 5000 / DEF 2500

（1）：相手フィールドにモンスターが2体以上存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは通常召喚とは別に召喚できる。

（2）：相手モンスターを任意の数選んで発動できる。

そのモンスターを全てレベル1扱いとし、このカードを含めた素材としてSモンスター1体をS召喚する。

この時、選んだモンスターの効果は以下のものとなる。

●1ターンに1度、相手墓地の魔法・罫カードを2枚選んで除外する。

暴風クロー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

風属性／鳥獣族

ATK 2100 / DEF 1800

（1）：このカードを含めた手札を2枚捨てて発動する。

このターン、自分フィールドのカードを対象として発動した相手の効果は、自分が2枚ドローする効果となる。

この効果は相手ターンでも発動できる。

（2）：自分のモンスターが相手の効果によって破壊・除外される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

鉄獣の咆哮

【速攻魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

（1）：自分フィールドにリンクモンスターが存在する場合、デッキ・EXデッキから「トライブリゲード」カード1枚を墓地へ送り、フィールドの効果モンスター1体を対象として発動できる。

墓地へ送ったカードの種類によって以下の効果を適用する。

- モンスター：対象のモンスターの攻撃力はターン終了時まで0になる。
- 魔法：対象のモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。
- 罫：対象のモンスターを持ち主の手札に戻す。

### 鉄獣の血盟

#### 【通常罫】

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。  
 (1)：自分フィールドのリンクモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターとは種族が異なる獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター1体を自分の手札・墓地から選んで特殊召喚する。

(2)：自分フィールドに獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターがそれぞれ1体以上存在する場合、墓地のこのカードを除外し、相手フィールドの表側表示の魔法・罫カード1枚を対象として発動できる。

そのカードの効果をターン終了時まで無効にする。

希望の光を断たれた歩恵莉は、しかしそれで下がる事はせず猛獣の勝鬨を解き放つ。

耳鳴りのするような衝撃波を緑のカードから放って鎧の騎士を吹き飛ばさんとする。だがヴァニティは予測していたのか、慌てる事無く手札から風を操る梟を捨ててそれを防いだ。

梟には似つかわしくない太く鋭い嘴と黒い翼が風の結界を起こし、大声のショックウェーブを妨害したのである。

「び、ぴえん……」

「レベル1の『王神鳥シムルグ』『未来龍皇ホープ』『凶鳥のシュライグ』『戦華盟将―双龍』に、レベル4の『グライフ・バット』をチューニング致します。シンクロ召喚、レベル8『虚栄王 離狩弩腕リカルドワン』！」

『クツクククク、ハアツ！』

虚栄王 離狩弩腕：ATK 1800

女子大生のモンスターが勝手に光の星に化け、仮面の女が放った鳥蝙蝠の緑の輪に取り込まれる。輪と星は光の柱となり、その中から獅子の面を被った無駄に物々しい鎧の騎士が飛び出した。鎧の騎士と言っても凡そ真つ当なものとは見えず、見栄を張りたいだけの無意味に豪華な作りとなっている。

「チイツ、でも墓地に送られた『シユライグ』の効果発動！ 除外されているアタシのモンスターは4体の『L』、よってレベル4の『鉄獣戦線トライブリゲード フラクトール』を手札に加える！」

一方の翼持つ戦士も犬死はしない。

仲間の魂を力に変え、女に次の手を必死に授ける。

それを無感動な目で仮面越しに見ていたヴァニティは、右手を突き出し攻撃命令を下した。

「バトルでございませす。下名は——」

「まだまだ、言うてウチしか勝たんっしょ！ 罨カード『鉄獣トライブリゲードの抗戦』発動！ 墓地か

ら『銀弾のルガル』、『徒花のフェリジット』、『キット』を効果を無効にして特殊召喚！

そしてこれを素材にリンク召喚する！」

『ガルルアツ！』

『タアツ！』

『はっ！』

「召喚条件は獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター3体以上！ リーリンク召喚あーん！

現れる、リンク5！ 『鉄獣式強襲機動兵装改トライブリゲード Bu ce p h a i l u s II』！

『ふっ、ハアアアツ！』



## 鉄獣の抗戦

### 【通常罫】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：自分の墓地のモンスター及び除外されている自分のモンスターの中から、獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターを任意の数だけ選んで効果を無効にして特殊召喚し、そのモンスターのみを素材として「トライブリゲード」リンクモンスター1体をリンク召喚する。

鉄獣式強襲機動兵装改 “Bucephalus II” (リンク・効果モンスター)

リンク5

闇属性／鳥獣族

ATK 3500

【リンクマーカー：左／右／左下／下／右下】

獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター3体以上

自分の墓地の「トライブリゲード」魔法・罫カードが2枚以下の場合、このカードはEXデッキから特殊召喚できない。

このカード名の(3)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分がモンスターの特召召喚に成功した時には、相手は効果を発動できない。

(2)：モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

このカード及び相手フィールドのカードを全て除外する。

(3)：このカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

EXデッキから獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスター1体を墓地へ送る。

「キタキタキター！これがアタシの最強モンスター！ やつべ、このイケメンを見ただけでこの世界に來た意味があるっしょ！」

追い詰められた歩恵莉が逆襲すべく召喚したのは、より複雑な兵装をまとった『シユライグ』。絶大な敵と戦うために稲妻の力を借り、巨大な剣と屈強な大砲を強引に一纏めにした武器を構えた、片翼の最強戦士である。

このモンスターは相手のカードを全て除外する効果を持つが召喚の際に特殊な制約を持ち、2枚以下の時は『鉄獣の抗戦』でもリンク召喚出来ない。彼女の墓地には既に3枚あるため、幸いにも条件を満たしていたのであった。

鉄獣式強襲機動兵装改 // Bucephalus II : ATK 3500

L M II 左・右・左下・下・右下

『ブーケファルス』はモンスターの攻撃宣言時、自分自身と相手のカードを全部除外できる！ これでアンタは攻撃出来ない！」

「下名は改めてバトルと致します。『離狩弩腕』で攻撃でございます」

ダンツ、と地面を蹴って跳躍する鎧の騎士。重い金属の塊を纏っているとは思えない程のジャンプをした騎士は、『ブーケファルス』の目の前に降り立つと素早くその横を走って通り過ぎた。無論、その足が向かう先は相手プレイヤーである。

「っ、ダイレクトアタッカー!? だったら『ブーケファルス』の効果発動！ このカード自身とアンタのモンスターをゲームから除外するし！」

「下名は墓地の『暴風クロウ』を除外して、その身代わりに致します」

「何い!?!」

「これで除外されたのは『ブーケファルス』のみ、戦闘続行でございます」

斬！

「ぐっ!?!」

剣で叩き斬られた、と分かるより早く灼熱を伴う激痛が女子大生の体を襲う。

ワンテンポ遅れて剣の軌跡に沿った肉体から赤い液体が噴き出るのを知覚し、更にワ

ンテンポ後になってそれが自分の血であると理解した。

高街歩恵莉：LP 4000↓2200

「ぎっ、ぎゃあああああああ！ な、何で!? なん、つで、血が、血があ!?!」  
「闇のゲームでは当然でございましょう?」

「この、このっ！ 絶対に許さねえ！ 次のターンでブチ殺す!」

「再び『離狩弩腕』で攻撃でございます」

「は?」

再び振り下ろされる鉄剣。咄嗟にディスクで受け止めようとするが、その腕の動きより早くヴァニティのモンスターが肩の肉を切り裂いた。

「あ、が……っ?! やめ……たす、け……!」

「『離狩弩腕』で攻撃でございます」

「い、いやあああああああああああああああああああああああああ!」

高街歩恵莉：LP 2200↓400↓0

高街歩恵莉：LOSE

ヴァニティ：WIN

☆

「ワシはあ！ おおおお『オツレザン恐冷斬』の効果を発動おおお！ 相手モンスター1体を守備表示にし、そのコントロールを得るんじやああああ！ 『フルール・ド・バロネス』を対象にするぞおおおおお！」

「逐一うるっさい肉達磨だ。ならばボクは『フルール・ド・バロネス』の効果発動、発動を無効にして破壊します」

「痩せぎすの死神が鎌を振るい、おどろおどろしい怨霊を白百合の騎士に飛ばす。人間には発音出来ないような声を上げる幽霊は、しかし白銀の刃が一振りされただけで消滅した。」

「続けて魔法カード発動！ 『エクストラ・パッセージ』！ ワシはEXデツキからモンスター1体を墓地に送り、2枚ドロするんじやあああああ！ 更にドロした中にモンスターがいれば、その攻撃力の合計値分のダメージを与えるぞおおお！」

「『ドラゴイト』の効果発動、それを無効にします」

一々声を張り上げるファイアーに対し、淡々とプレイを進める春司。

彼のフィールドにはモンスターが6体。いずれも強力な効果を持つモンスターばかりであり、伏せカードも2枚残っている。これを対処する事は、如何に邪神の眷属と言えど簡単では無い。

「この瞬間！ 墓地に送られた『嘘利き山姥』うそききやまんばの効果を発動じゃああああ！ 手札を1枚捨てて、相手モンスター2体を除外するんじやあああ！ 手札から2枚目の『恐冷斬』を捨てるんじやいいいいいい！」

「だから叫ばないで下さいって、ジャツジがないのが悔やまれますね。ボクはカウンター罠『魔救共振撃』アダマシア・レゾナンスを発動してそれを無効にします」

### 魔救共振撃

【カウンター罠】

(1)：自分フィールドに「アダマシア」Sモンスターが存在し、モンスターの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

エクストラ・パッセージ（オリジナル）

【通常魔法】

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：EXデッキからカードを1枚墓地に送って発動する。

自分のデッキから2枚ドローする。

この効果でドローしたカードが2枚ともモンスターカードだった場合、その攻撃力の合計値分のダメージを相手に与える。

「墓地の悪魔族モンスター『恐冷斬』2体と『嘘利き山姥』を除外し、『ファイアフル・ナツクル・デビル』を特殊召喚！」

『ギヤツハハハハハハハハハハハアアアアア！』

「っ、本当に喧しい。生きる騒音発生装置ですか。『承影』の効果により、このカードの強化値と同じ分だけ弱体化して貰います。そして貴方がモンスターを更に3体除外した事で、その数値は300増える」

相剣大公―承影：ATK 3900↓4200

ファイアフル・ナツクル・デビル：ATK 2000↓800

「カードが除外された時に発動する効果は、今回は使いません」

「モンスター効果発動じゃあああ！ ワシの場のモンスターが相手より少ない時、このカードの攻撃力は相手モンスターの数×500アップ！ そして相手モンスター全てに攻撃するぞおおお！」

「ならばボクは『クリスタルウィング』の効果発動。発動を無効にして破壊し、更にその攻撃力分だけ攻撃力がアップします」

クリスタルウィング・シンクロ・ドラゴン：ATK 3000↓5000

重厚な手甲を装着した悪魔が場に出るが、水晶翼の龍によってそれが消し飛ばされる。

これで無効化効果が使えるモンスターは全て効果を使った。だがファイアーの手札も残り2枚、モンスター6体が健在の春司が圧倒的に優勢である事実は覆らない。

恐冷斬（効果モンスター）（オリジナル）

星4



## 闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

このカード名の(1)(2)の効果は、それぞれ1ターンに1度しか発動できない。

(1)：相手モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示にし、相手ターン終了時までコントロールを得る。

この効果でコントロールを得たモンスターはリリースできない。

(2)：このカードを含む「恐冷斬」が3枚除外されている場合、デッキの1番上のカードを裏側表示で除外して発動できる。

デッキから「恐嶺之冷闇水」1枚を選んで自分の魔法&amp;罠ゾーンに表側表示で置く事ができる。

嘘利き山姥 (シンクロ・効果モンスター) (オリジナル)

星6

## 闇属性／悪魔族

ATK 2400 / DEF 1300

悪魔族チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(3)の効果はデュエル中に1度しか発動できない。

(1) : このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。  
自分は1枚ドローする。

このターン、同じ種類のカード(モンスター・魔法・罫)の効果で特殊召喚されている場合、この効果は発動できない。

(2) : バトルフェイズ開始時に発動できる。

このカードを守備表示にし、このカードの攻撃力以上の相手モンスターを全て守備表示にする。

(3) : このカードが破壊以外の方法で墓地に送られた時、手札を1枚捨てて発動できる。  
相手フィールドのモンスター2体を選んでゲームから除外する。

ファイアフル・ナツクル・デビル(特殊召喚・効果モンスター)(オリジナル)

星7

闇属性/悪魔族

ATK 2000 / DEF 0

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地から悪魔族モンスターを3体除外した場合に特殊召喚できる。

(1) : 相手フィールドのモンスターが自分フィールドのモンスターより多い場合に発動

できる。

このカードの攻撃力は相手モンスターの数×500アップし、このターン相手モンスター全てに攻撃できる。

そしてファイアーは、残った手札を2枚とも躊躇い無く引き抜いた。

片方はディスクの魔法・罨ゾーンに、もう片方は光になって消滅させながら。

「自分の場にカードが無い時、手札を1枚除外する事で罨カード『脅迫恐喝享楽』は手札から発動できるんじゃない？」

「今時最早、罨カードを手札から発動できる程度では驚きませんよ」

「ワシはあー！ 3枚目の『恐冷斬』を除外！ そして貴様の場のカードを2枚、手札に戻すぞおおおおお！ その伏せカードと『ブロックドラゴン』を選択じゃあああああ！」

「ならばボクは対象となった『天地返し』を発動します。デッキの1番下のカードと手札1枚を交換します」

2枚のカードが突風に煽られ、光の粒となって消える。同時に春司の2枚あった手札の片方が別のカードに書き換わる。

書き換わったカードは『重力均衡』、これで新たにモンスター2体を蘇生する事ができるようになった。既に相手に打てる手は無いとは思いますが、万一に備えたりカバリー方

法は忘れないのがエリートというものだ。

天地返し

【通常罫】

(1)：自分のデッキの一番下のカードを手札に加える。

その後、自分のデッキからカード1枚を選んでデッキの一番下に置く。

重力均衡

【通常魔法】

このカード名はルール上「Gゴーレム」カードとしても扱う。

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の墓地のモンスター及び除外されている自分のモンスターの中から、地属性の同名モンスター2体を対象として発動できる。

その2体を攻撃力・守備力を0にし、効果を無効にして守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊される。

(2)：自分フィールドの「Gゴーレム」モンスターが戦闘または相手の効果で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

脅迫恐喝享楽（オリジナル）

【通常罫】

自分フィールドにカードが存在しない場合、手札を1枚除外する事でこのカードは手札から発動できる。

(1)：相手フィールドのカードを2枚選択して発動する。

そのカードを持ち主の手札に戻す。

(2)：手札0枚のドローフエイズ開始時に発動できる。

墓地のこのカードを手札に加える。

「全く往生際が悪い。これだけやってまだ諦めないとは」

「除外された『恐冷斬』の効果発動っ！ デツキから1枚除外し、装備魔法

『恐嶺之冷闇水』おそれのひやみずをデツキから発動おおおお！ これを貴様の『承影』に装備してコン

トロールを奪うんじやああああい！」

「いい加減に諦めなさい！ 『承影』の効果発動！ カードが除外された時、相手の

フィールドと墓地のカードを1枚ずつ除外します！ ボクは『恐嶺之冷闇水』と『エク

ストラ・パッセージ』を除外！」

恐嶺之冷閻水（オリジナル）

【装備魔法】

（1）：相手モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターは悪魔族となつて攻撃力は倍になり、そのコントロールを得る。

（2）：同じ名前の悪魔族モンスターが3体除外されている場合に発動できる。

墓地のこのカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたこのカードは、セットしたターンには発動できない。

「ふう……。これで真正正銘、もう使えるカードは無いでしょう。手札はゼロ、墓地で使えるカードも無く、フィールドも野晒し。さあ、ターンを終えて下さい。ここまで粘った褒美として、一息で倒してあげましょう」

怒涛の連続効果に、額から流れる汗を拭う春司。正直鬱陶しい連打だったが、終わってみれば呆気無い。元から制圧陣形を前に切り返すなぞ無理な話だったのだと、彼は自分の強さにほくそ笑む。

もうこれで敗北は有り得ない、この暑苦しい肉達磨を倒してこの世界で英雄となつてやろう。眼鏡をかけた青年は将来自分にもたらされる称賛が、今から欲しくて欲しくて

堪らなかった。

「どうしましたか、もう何も出来ないでしょう。さっさとターンエンドの宣言をして下さい」

「……何も出来ない？ 貴様、本当にそう思っちよるんかあ？」

何だ？と男は半歩後退った。

ここまでやってまだ、この巨漢は策があると言うのか。

有り得ない、もう手も足も出ない筈。

「まだ終わらぬ！ ワシは貴様のモンスター5体イ！ 即ち、『スカルデット』『承影』『フルール・ド・バロネス』『クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン』『ドラガイト』で、オーバーレイ！」

「何っ!？」

それは本当に有り得ない宣言。

レベルを持たないモンスターに加え、レベルが揃ってないモンスターまでもが光となつて渦に消える。それも全て自分のモンスターが。

どういう事だ、何が起きている。

「5体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！ 現れろ、『キルサードアイ・ルチフェロ・ドラゴン』オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ





なる」

「な………！　そ、そんな馬鹿げた効果のモンスターがいて堪るか！　大概にしなさい！」

「いるからこそ、こうしてテメエの目の前にいるわけじゃがあ？」

「っ！」

「そもそもワシらは邪神様の眷属、貴様ら人間の物差しで測るなああああああああああ  
あ！」

「ひいっ！」

「バトルツ！ 『キルソードアイ・ルチフェロ・ドラゴン』でダアアイレクトオア  
タアアアアック！」

自分はエリートで、天才的な頭脳で、スポーツも出来て、女に困った事もなくて、た  
だただ勝ち組の人生を歩んで来た。

その筈なのに。

一体、どうして。

「ぐっ、がああああああああああああああああ！」

阿玉春司：LP 4000↓0

こんな暑苦しいだけのウザい男に、負けてしまったのだろう。その答えが欲しくて、春司は割れた眼鏡越しに虚空に手を伸ばすのであった。

阿玉春司：LOSE

ファイアー：WIN

☆

世界が元に戻る。

広がった道も、突然現れた護衛の3人も、まるで最初からいなかったかのように。

幼児のような小さな体なら、道端についた奇妙な傷跡に気付くかも知れない。だが縮んだ道路につけられた傷は、他の傷と混ざって誰の目にも留まらなくなる。

「ふうむ、やはり急場凌ぎの護衛では限度があるか。文字通り影も形も残らん」

消えてしまったグリーンフ、ヴァニテイ、ファイアーを思うかのように顎に手を当てる  
ラース。その目は「怒り」の名に反して非常に穏やかだ。

「まあ良いか、使い物にならぬよりマシと考えるとしよう」

そうして、倒れ伏した3人を吸収した闇を見る。

中々上等な獲物であった。

ただただ強い腕だけで勝てるど踏んだ傲慢さが特に邪神復活の贄に相応しい。

「ククククク、カードに吸収して生贄にする前に1つだけ教えてやろう。何故貴様らが負けたのかをな」

「が、…………ぐっ」

「痛い、痛いよお…………」

「オリカとは、卑怯な…………」

「貴様らの元の世界がどうだったかは知らぬが、この世界はこの世界の法、そしてそれに反した悪法で動いている。元の世界の戦い方が万全に通じると踏んだ時点で、貴様らのやったのはお遊びカードゲームの延長でしかない」

黎の身を投じている戦いはゲームではあるが、同時に殺し合いだ。負ければ命は無い、非情な世界。

それを知ってはいただろうが、同時に彼らはナメていた。

どうせ昔の環境のデュエル、自分達ならどうにでも出来るだろうと。

確かに、カードプールが増えてコンボも増えて、10年20年昔の環境では確実に無双できるデッキも多くなった。

だがそれはOCG——ただのカードゲームだった場合の話。

この世界は精霊や精神がカードにリンクする。気合いの1つで運命が動き、心が折れば敗北に繋がる事すらある。

手にしたカードをただの紙切れとしか見ない彼らに、殺し合い／儀式として挑む者が負ける事は、無い。

「精神論、だと……。ふぎ、けた事、を……っ！」

「そのふぎけた理屈に貴様らは敗北したのだ。それすら分からぬとは、貴様らにとつてデュエルとは遊びの一種でしかなかっただけの事。我らや奴のように、命がけの戦いをする武器と認識していない時点で勝敗は決まっていた」

真剣勝負と捉える強者と、遊びだと慢心する強者。

並び立てばそこで覆しようのない優劣が産まれるのは当然だ。

もし彼らが最初から命がけの真剣勝負と心がけて挑んでいれば、ここまで無様な敗北にはならなかっただろう。勝利していた可能性も十分ある。

ただ知らなかったのだ。この世界で必要なのは勝てるデッキではなく、共に戦いたいと願えるデッキなのだ。

「敗者の末路だ、生贄となれ」

☆

「で、これのどこがチエツクメイトなのですか？」

「莫迦な、こんな事が……」

そうしてその顛末を見届けていた2人の天使もまた、その関係に優劣がついた。

片や、愚かしい状況を起こしてしまった者。

片や、その独断によって計画を狂わされた者。

「無断で人間3人を殺し、強制転移。その上で3人の命を敵の糧にさせた。罪状は無断殺人、世界線不正渡航、外患誘致ってトコですか。最早、厳しい処分が下る事は決定です。ご愁傷様です」

「ま、待つてくれ！ 頼む、弁護してくれ！ あの世界の未来を思つての事だったんだ！ 悪気は無かつたんだよ！」

「悪気の有無で罪の軽重が変わらない事はよくご存じの筈ですよ。それに」  
はあ、と青白い光は嘆息した。

「手遅れという事も知らないとは言わせません」

「ひつ、たすけ、ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

その断末魔は、およそ天使と呼ぶには相応しくないものであった。

「よりもよって異世界人のエゴの強い魂を食わせてしまったかあ……。何とかしたいけれど、過剰に運不運をイジるとキックバックがキツイ。彼に何とか頑張つて貰いたいけど、もうそっちも限界ギリギリだしなあ」

遠くを見上げるように顔を上げる白い天使。

光っていて分らないが、その相貌が憂慮に染まっているのは明らかだった。

「……償わないと、何としてでも」

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 75 : 武人ポーカー

SIDE : 無し

それは交流試合のあった日の、月夜の晩。とある洞窟に、複数の男女が集結していた。人数は6〜7人くらいか。それぞれが何やら怪しい気配を放っている。何かのグループの様にも見えるが、連携している感じは無い。

同一の目的の下、集った同志という所か。

月が雲に隠れ、洞窟に指す月光が遮られた時、どこからともなく老人の声が響いた。

『時、ここに満ちた……。お前達の力が我に約束し、運命のカードを運ぶ……。先陣を切る者は誰か……。』

どこか愉快そうなその言葉に、1人の男が立ち上がった。

「私が行こう」

『ダークネス……。』

ダークネスと呼ばれた男は、静かにデュエルディスクを腕に装着した。鼻から上を覆

う形で黒いマスクを装着しており、漆黒のコートを身に着けている。

表情を読み取り切る事はできないが、冷徹な雰囲気は無表情な気配。まるで冷血な暗殺者を思わせた。

面を上げたダークネスは、虚空に向けて問いかけた。

「しかし、どうする。鍵は7つ、我らは6人。お前は戦力に入れないのだろうか?」

『……………』

その奥で、虎を従えた大柄で日に焼けた女性が続ける。

「戦力は最低限同等にするのが戦いの鉄則。向こうも選りすぐりの戦力を用意してくるだろう。最悪、我々よりも格が上の可能性も有り得る。そんな戦いに赴いた所で、負け戦にしかならんぞ」

そんな彼女の懸念を、向かいの岩壁にもたれていた別の女性が嘲笑する。ルージユを濃く引いた口元から、牙とも形容できる八重歯が覗く。

「あーら、今からそんな弱腰? 下らない、何人来ようとも、この私が一匹残らず葬つてやるわ。小心者はそこでガタガタ震えてなさい?」

「何だ?! 貴様それは私が誇り高きアマゾネスの戦士だと知つての愚弄か! 良からう、そんなに言うのであるならば、貴様だけで戦地へ赴き、鍵の1つも取れずに無残に負けて散るが良い!」



「何ですってえ？ それは私が誇り高きヴァンパイア一族の生き残りと知っての事かしら？ 今ここで貴女をミイラみたいにカサカサにしてあげても良いのよ？」

「やれるものならやってみろ。その前に貴様の五体を引き裂いて焼いて灰にし、川に流してくれる！」

「何ですって！」

「何だ！」

ガルルルルル！と唸り声を上げそうな勢いで睨み合う二人。それを眼帯をつけた大柄で筋肉質な男と、ツタンカーメンのような金の装飾を身に着けた色黒な青年が苦々しい表情で見守っていた。

「先が思いやられるな、この光景は」

「うむ」

そんな寸劇（女性2人にとってはマジのケンカ）を繰り広げども、人数不足の問題は解決しない。

老人の声は依然として沈黙を守り、ダークネスも未だ虚空を睨み続けていた。

『戦力で困っているようだな？』

「！！！！！！！！！！」

そんな時、何も無い空間から別の男の声が響いた。武人を思わせるような中年ぐらい

の男性の声だ。

『何者だ?』

『人に名を聞く時は、まずは自分から名乗るのが礼儀だと聞いた事があるが?』

『……故あつて名乗れん』

『ならば我も名乗らぬ』

『……………』

『……………』

暫く沈黙が続き、やがて折れたのは老人の方だった。

『戦力に心当たりがあるようだな』

『そうだ。今すぐには無理だが、もう数日すれば、貴様の求める闇のデュエリストを1人

用意できそうだ』

『……何故、闇のデュエリストを求めていると分かった』

『そこにいるのは全員 “そう” だからだ。貴様の目的も分かっている。ならば、推測できても不思議ではあるまい?』

再び沈黙。だが、そこにいる全員は、この男の得体の知れなさに寒気を通り越して恐怖すら覚えていた。

こいつは何者だ。ここに全員が集まってからまだ時間は経ってない。なのに何故こ

うも易々と自分達の居場所を知り、正体を見抜き、剩え手を貸そうとしている。

『そう構えるな。我は貴様らを利用しようとしている、貴様らは私の用意した戦力を使う。ギブ・アンド・テイクだ。安心しろ、悪いようにはせぬ』

戦力を楽しみに待っている、それだけ言って、それっきり男の声は聞こえなくなった。後には、不気味な沈黙だけが残っていた。

——翌日の放課後 校長室前

S I D E : 黎

ポーラとのデュエルに勝利し、全ての授業が終わった後、俺を含めた数名は大徳寺先生によつて校長室へと呼び出されていた。

メンツは俺、十代、サンダー、大地、ファイオ、明日香、カイザー、大徳寺先生、クロノス先生の9人。それとカードの中で待機している精霊の桜とフレイを入れると11人、室内にいるはずの鮫島校長も含めれば12人だが……、まあ余談だろう。

「何で呼ばれたのさ〜?」

「さあ？ 実は私も呼ばれているのですニヤ」

不満を漏らす十代だが、呼び出した大徳寺先生には柳に風のようなだ。

「しかし、<sup>そうそう</sup>錚々たる顔ぶれですのーネ」

「確かにですニヤ」

「……テイラミス風く味、これは間違い探しですくノ？ 一人だけ仲間外れがいるのーネ」

クロノス先生が大徳寺先生の後ろにいた十代を見ながら、嫌味つたらしい笑みを浮かべる。

……仲間外れ、か。

「それなら俺って事でしようね、クロノス先生」

「ナパ？」

「ここにいるのは人間。俺は化物、怪物。ほら、幼児でも分かる仲間外れでしょう？」

「え、いや、そういう意味でくハ……」

「誤魔化さなくても結構です。どうせもう何年も言われ続けた事、今更傷付きはしない。まあ、不愉快だとは思いますが、一応自分も校長に呼ばれている身なんで、同席させて頂きますよ。不愉快だとは思いますが、どうか御寛恕下さい。まあ帰れと仰るなら帰ります」

そこまで言うと、クロノス先生は完全に黙ってしまった。

別に俺は嫌味で言ったわけじゃない。俺の心の中には本当に巢食っているのだ、化物が。

皆の事は仲間だと思いたい。だが、どう頑張っても俺は人間になれない。これは気持ちだけの問題じゃない、人間の最もデリケートな器官、脳の問題だ。これが今のままである限り、俺のこの異能の能力は消えない。

超再生を持つ都とて、脳を破壊されれば治癒に時間がかかる。桜がいなければ、今頃俺は死んでいただろうな。

心に巢食った化物は俺が人ならざる存在である限り、そこに居座り続ける。俺が今のままの心でいる限り、この考えは俺の根幹から消えないだろう。

「ま、つーワケです。それにデュエルでいっちゃん弱いのは俺でしょう」

「「ちよつと待った、黎！」」

「フィオ、大地、十代？」

「わたしは君に負けたんだ、過去何度も！ 君がこの中で最弱だってんなら、わたしは最弱以下って事かい!？」

「俺もお前の戦術を完全に計算し、それでも負けた！ 少なくともお前が最弱って事は俺が認めん！」

「そうだけ、黎！ 第一、俺だつてお前に負けかけた事があるんだ！ それつてほぼ互角つて事じゃないか！」

「「それに、君（お前）は仲間だ！ 人間であろうと無かろうと関係無い！」」  
お前ら……。」

つたく、本当に分かんねえな。何時どこで俺がお前らをこの異常な力で殺しに行くかも知れないつてのに、それでも俺を仲間と思つてののか？

「君はそんな事しないでしょ。君は命の重さを知っている。だから安易に命を投げ出し、敵には怒りをむき出しにし、誰かを助けようとする。それは死が恐ろしいものであるとも知つているから、皆に死が向かわないようにしてるから。違うかい？ わたしは君のそういうトコ、人間らしいと思うけど」

「……チツ」

そこまで言われたら引けねえじゃねえか。

ガシガシと後頭部を搔く俺の顔は、きつと真つ赤だつたに違いない。

——校長室

「三幻魔のカード？」

「そうです。この島に封印されている、古より伝わる3枚のカード……」

神妙な顔で語る鮫島校長。そうか、もうそんな時期か……。

三幻魔、それは精霊の力を根こそぎ吸い取る、文字通り『魔』のカード。アカデミアはそれらを封じるために、地下深くに埋められ眠っているカードの真上に建っている。「島の伝説によると、そのカードが地上に現れた時、世界は魔に包まれ、混沌が全てを覆い、人々に眠る闇が解放される。やがて世界は破滅し、無へと帰する。……それ程の力を秘めたカードだと、伝えられています」

「……………」

「破滅……………」

「良く分かんねえけど、なんか凄そうだな！」

「またロクでもないカードの上にこの学校はあつたんだな……………」

「幻魔……………、あまり良い思い出はありませんね」

「黙って聞いているの〜ネツッ！」

息を呑む明日香と大地、状況を理解していない十代、いつの間にか出ていた苦い顔をする桜とフレイ、注意するクロノス先生。

「そのカードの封印を解こうと、挑戦して来た者達がいるのです」

「……………七星門、通称セブンスターズ、か」

「！ 知っているのですか、遊馬崎君」

「せまい島だ、網を張ってりや自然と情報は入ってくるモンです」

実際、この島のあちこちで情報を集めていると、自然、奴らが浮かび上がる。

コソコソと隠れて行動しているから普通は見つけにくいし、実際情報戦をやった事のないヤツならば気付く事もできないだろう。

かなり見事な隠密の技術だと言える。

「謎に包まれた7人ですが、その内の2人が既にこの島、しかも片方はこの学園の中に紛れ込んでいるとされています」

「何……!?!」

既に2人、だと!?

おかしい、原作ではここでは1人、明日香の兄貴の吹雪ことダークネスだけのはず。

まさか俺がタイタンを救ったせいで、歴史が変わったのか……?!

「三幻魔は七つの石柱によつて封じられ、その石柱は七つの鍵によつて開かれる。これが、その七つの鍵です。鍵の持ち主がデュエルで敗北する事で封印は開錠される」

鮫島校長がデスクの上に革の箱を置く。

開けた中からは一枚の金の板を出来の悪いジグソーパズルのように分け、奇妙な模様を彫ったような物が現れた。

さて、この時点で鍵のシステムをバラすのは簡単だが問題がある。



七人目が誰なのか不明だと言う事だ。セブンスターズの連中は何かしらの理由があつてここに来る。破壊、強き者との戦い、一族の復活、復讐、依頼など……。

半数は事の顛末を話せば勝手に帰ってくれるし、残りだつてデュエルで勝てば良い。

しかし問題はその不明な1人。その不確定要素が俺の判断を迷わせる。

一体、誰だ？

いつ、この島に侵入した？

何処に、いる？

どうやって、倒せばいい？

チツ、イレギュラーつてのも良い事ばかりじゃねえな、畜生……。

原作に沿つて出て来るのを待ちつつ、戦うつきやねえ。

「彼らはデュエルでこの鍵を奪い、封印の石柱を開けて来るでしょう。恐らく戦いは危険を極めます。……貴方達の中にこの戦いに臨むだけの覚悟があるのなら、この鍵を取つて下さい」

「待たれよ、鮫島校長」「待つて下さい、鮫島校長先生」

「何でしょう、桜さん、フレイさん」

桜とフレイが実体化し、鮫島校長に詰め寄つた。

「主殿はこれまでの戦いで大きなダメージが蓄積している。私としては、主殿をこの鍵

を任せた戦いに参加させたくは無いのだが」

「わたくしのマスターを危険な目に合わせるわけにはいきません。鍵の守護が必要と言  
うのなら、わたくし達が故郷へ持ち帰り、更にバラバラの場所に隠します。それではダ  
メですか？」

成程、2人の考えはよく分かる。戦つてあつちが勝たないと鍵は手に入らないのだか  
ら、そもそも鍵を隠せば良い、という事か。

だが鮫島校長は首を横に振った。

「残念ながら、それはできません。鍵の封印が有効なのはこの島の中が精々、外に持ち出  
してしまえば、その鍵の効力は永久に失われてしまいます。それはつまり封印が自動的  
に解けるという事です」

「なら、私の能力で森の木の中に埋め込む！」

「鍵の気配はわたくしの魔法で消します、これなら……」

「……それも一理あるのですが、それでも連中の手に渡り仲間内で勝負されてしまえば、  
結局は負けて奪われたも同じ事。物理的にデュエリストの方々に守って頂くしか無い  
のです。幸いデュエリストが誰なのかは問わないため、誰か代理を立てる事は可能です  
が……」

「だが！」「ですが！」

「もうよせ、二人とも。お前らの気持ちは嬉しいけど、それ以上は場を混ぜ返すだけだ」  
 尚も詰め寄ろうとした2人を押しつけ、俺は鍵を1つ手に取る。

「まさかお前ら、俺が負けるとでも?」

「そういう訳では無くてだな、主殿……」

「黎さん、貴方ご自分の体の事、本当に分かってらっしゃるのですか!」

「それに……」

手にした鍵を、俺は大きく開けた口の中に入れてそのままに放り投げ、パクリと呑み込んだ。

ベツ、と舌を出せばその上に鍵。紐を取ってそれを皆に見せびらかす。

「こうして腹の中にしまっちゃまえば、大丈夫だろ。そんなじゃ」

「あ、ちよ、待ってよ、黎……」

そう言つて俺は再び鍵を呑み込み、校長室を後にした。

——アカデミア屋上・夕方

「来たぞ、ポーラ」

「……グッドタイミング。……丁度今さっき、ゲートが安定した」

あれから部屋に戻った時、突然全身を激痛が襲った。その強さたるや、悲鳴も呻きも

出せないレベルだ。

幸いじっくりと安静にしたからか、痛みは全て無くなった。

だがあれで終わりとは思えない。いよいよ体が限界を迎え始めている、という事だろうか。恐らく時間的猶予はもうほぼ無い。

さて、精霊界に行くという事で、今回鍵はイエローの神楽坂に預けてある。あいつなら易々とやられる事も無いだろうしな。

「……ゲートを開くと言ったし、私も同行するつもりだった。……桜の辺りがついて来る事も予想してた。……でも」

「[[[でも?]]]」

「……4人も、なんて聞いてない」

ムスツとした表情を作るポーラ。俺の後ろには桜に加え、フィオとフレイもいたのだ。

今回、桜とフレイは護衛、フィオは興味本位でついて来る事となった。

一応フィオには何度か思い止まらせるように言ったのだが、『1回も2回も同じでしよ』と聞く耳を持たなかったのだ。

「……一応、何故ついて来るのか、説明して」

「私は主殿の護衛だ。また何かあった時、そこで死なれては敵わんからな」

「わたしは興味があるから。それと黎が何か無茶しないか不安なんで」

「わたくしはマイスターの精霊ですので、同行するのは当然です。それと黎さんが以下略です」

「……サー」

「俺か!? 俺のせいか!?!」

弁解したいところだが、俺の体の事を突っ込まれるのがオチなので止めておいた。

——精霊界・光の里

見慣れて来た光のゲートを潜る。強いフラッシュが納まると、そこは何やら大きな広場のような場所だった。

「(っ)は?」

「……光の里、第3広場。……警備の都合上、外から転移するとここに着くようになってる」

「ふーん……」

グルリと周囲を見渡すと、住宅街では無く、どちらかと言えば市場のようだ。空は夕焼けなのに辺り一面の店が全て閉まっていて商品も無い所を見ると、恐らく朝市の類だろう。

しかしそれにしても人通りが全く無い。通りの向こう側から人の声らしき音が聞こえなかったなら、ゴーストタウンと見紛うくらいだ。

「ここは300年前から変わりませんね」

「フレイ、ここ知ってるの？」

「ええ、何と言つてもここはわたくしの第2の故郷ですから。当時まだ名も無い町、後の『天空の聖域』でわたくしは生まれ、この町で300年前まで暮らし、そして『天空の聖域』へと再び帰ったのです」

「そーなのかー」

「主殿、そのネタは分かり辛い」

「ですから、知り合いも多いのです。例えば……」

スツと振り向く。視線の先には一人の女性がいた。

い、いつの間にも!?

「相変わらずのステルススキルですね、『ルイン』さん」

「本来なら。接触するまで気付かないのに気付く。あなたも相変わらず」

そこにいたのは黒の法衣を身に纏った長い銀髪的女性。『破滅の女神ルイン』だ。

破滅の女神ルイン（儀式・効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2300 / DEF 2000

「エンド・オブ・ザ・ワールド」により降臨。

フィールドか手札から、レベルの合計が8になるようカードを生け贄に捧げなければならぬ。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

『ルイン』さん、さつき連絡した通り、宝玉の件ですが……」

「大丈夫。既に手配してある」

「ありがとうございます」

どうやら昼間の内にフレイが何やら手配してくれたらしい。彼女には薬の件と言い、感謝の言葉も無い。

「こちらへ」

無表情な『ルイン』が、俺達をどこかへと案内してくれるらしい。

これで7つ目の宝玉も手に入る。邪神達に明かしていないのは風の奴だけだったか

ら、これで対抗手段が増えるわけだ。

石畳の道なりに案内される事十数分、俺達は大きな宮殿、或いは城のような所へと出た。

「でっけえ……」

高さこそどこぞのタワーには全く及ばないが、体積で言えば、モン・サン・ミシエルにだって張り合えるかも知れない。

「ここは、『神の居城―ヴァルハラ』の分家みたいな所」

「分家？」

「暖簾分けみたいなものです。『ヴァルハラ』は当時こそ神の住まう城だったのですが、今では有名な観光名所になってしまいました。『ヴァルハラ』は確かに神聖な力が有り且つ大きいのですが、流石に年季の入った城に人が大量に押し入るのは問題が……。そこで苦肉の策として、外面と内面だけ似せた建物を別の場所に建てたのです」

勿論効果はありましたよ？ とフレイは笑う。

成程、中身を似せれば、自然、疑似的な物ではあるが中に籠る神聖な気もそこに宿る。偽物ではあれ、ここでも『ヴァルハラ』の役目がある程度果たす事は可能、というわけだ。

分かり辛ければキリスト教の教会の十字架を思い浮かべれば良い。キリスト教が殺



された時の十字架では無いが、それでも掲げているのは、そこに僅かながらの神聖な力が宿るからだ。神の力が膨大だと考えれば、ほんの数%でも宿れば、それこそ大きな力となる。

平たく言えば縁起担ぎ、というワケだ。

と、開けっ放しの城の入り口から、誰かがやって来た。左手に小さな盾、右手に大きな槍。地面にまで流れそうなプロンドの髪に、顔をすっぽり隠す程の被り物。そして白い法衣。『アテナ』だ。

アテナ（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2600 / DEF 800

1ターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター1体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに600ポイントダメージを与える。

「ようこそ、いらつしやいました、*「騎士」*の魂」

「初めまして、遊馬崎黎です。……『アテナ』さん、貴女がこの宝玉を守っているの  
?」

「いいえ、番人はこの奥です。さあ、どうぞこちらへ」

言われるがまま、俺達は城の中へと進む。

だが敷居から一步目を踏み込んだ時、俺の全身に変化が起きた。

ズキイツ!

「ガ、ア……、ギ……イツ!」

何だこれは……! この痛みは、何だ! これまで火傷に銃創、刀傷に打撲と色々な  
怪我を経験した俺だが、こんな痛みは経験した事が無い。一体何なんだ、これは!

そもそも今、どこが痛いんだ! 胸か! 頭か! 腹か! 目か!  
クツソ、こんなん、長くは耐えられないぞ……!

痛みを耐えて歩いていたが、とうとう耐えきれず、入り口から20メートル程の地点  
で思わず蹲ってしまう。

脂汗を全身から流してしやがむ俺に、皆が駆け寄った。

「ちよ、黎、大丈夫かい!？」

「主殿、しつかりしろ!」

「黎さん、どこが痛いんですか!？」

「……サー黎、しつかり!」

背中をさすってくれたり、治療術をかけてくれたりと、皆が献身的に介護してくれるが、何の効果もあがらない。痛覚も遮断したのに、痛みはまるで引かない。

一体どうなってるんだ!？」

『始まりましたね』

『彼が。この試練を乗り越えない限り。光の宝玉は渡せない』

遠くで『アテナ』と『ルイン』が何かヒソヒソ喋ってるが、そんなのに割くだけの余裕は無い。

結局俺は、一番背の高いポラの肩を借りて、無理矢理進む事にした。

「……サー、無茶しちやダメ。……ここで無茶したら、本末転倒」

「大丈夫だ……。体そのものにはどうやら異常が無い……。さっさとここでの用事を済ませちまおうぜ……」

実際、肉体には何も無い。痛覚神経からの信号は無いし、筋肉の裂傷や骨のダメージ

なんかも無い。

となるとこれの正体は心因的な物。催眠術なんかで無いはずの痛みや味覚を感じるアレだ。

痛覚に限らず、普通人間の伝達信号は、その神経からの電気信号を受けて脳が反応し、そう感じる。だが、時には脳がそう錯覚してしまったから痛みなどを感じるケースがある。

例えば、ストーブで手を火傷してしまった人が、火の点いてない冷たいストーブに触ったのに、大火傷を負ったのと同じ症状が出る場合がある。この場合も恐らくそれだ。

痛みを感じるから痛いのでは無く、頭が痛いはずだ、と錯覚したから痛いのだ。

問題は何故俺が痛みを感じるか、だ。頭がそう錯覚してしまう要因が、残念ながら全く無い。変化と言えば、この城に踏み入れた事ぐらいか。

……まさか、神域に化物が踏み込んだ事に、この城が拒絶反応を起こしているのか？  
だったら、長居は本気でできねえ……。

歯を食い縛って痛みを耐えるなんて、一体何時以来だろうな……。

案内されて着いたのは1階部分の奥、大きな部屋だ。玉座がある所を見ると謁見の間と言った所か。

美しいステンドグラスで天井と奥の壁が彩られているが、日が沈みかけなので光をあまり取り込めておらず薄暗い。昼間に来たらもつと綺麗な部屋だっただろう。

玉座には男が腰かけている。その人物は立ち上がると、こちらへ向けてゆっくり歩み寄って来た。

「お前が『騎士』の魂、遊馬崎黎だな？」

「如何にも……」

近くで見ると、その男は思ったより人間的なサイズだった。漆黒の髪に意志を感じさせる強く鋭い瞳。黒と金の鎧を身に着けており、腰には剣と盾が納められている。

絵札の三銃士の融合体、天位の騎士『アルカナ ナイトジョーカー』だ。

アルカナ ナイトジョーカー（融合・効果モンスター）

星9

光属性／戦士族

ATK 3800 / DEF 2500

「クイーンズ・ナイト」＋「ジャックス・ナイト」＋「キングス・ナイト」

このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。

(1) : 1ターンに1度、フィールドのこのカードを対象とする、モンスターの効果・魔

法・罨カードが発動した時、そのカードと同じ種類（モンスター・魔法・罨）の手札を1枚捨てて発動できる。

その効果を無効にする。

「噂は聞いているが、随分と消耗しているな」

「何故かは知らないが、さつきから体中痛くつてね……。今はマシになっているがな」

「ハッ、ここに来るまででそれでは、先が思いやられるぞ」

「痛み入るね」

「……サー、大丈夫？」

「ああ、ちよつと楽になった」

この部屋に来てから、体に走る激痛が大分和らいだ。とは言え、まだ痛いモンは痛いが。

にしてもコイツ、思ったよりフランクだな。

「どうやら強い痛みがあるようだな」

「……………」

「その痛みの原因を、オレは知っている。何故そんな激痛が走るのか、どうして他の奴らは平気なのかも」

「だが簡単に吐くつもりは、無さそうだな……」

「当然だ。そもそも何故、お前がここに来なくてはいけないと思う？ 何故オレが手渡ししないと思う？」

「さあ？」

「光の宝玉は、闇の宝玉同様に他の宝玉とは違い、より大きな力が宿るからだ。故にこの城に隠して悪漢から守り、手にせんとする奴には試練を与える。試練をクリアできない雑魚には宝玉は渡せないってワケだ」

「試練……、それがこの痛みだつての？」

「ハハハ、さあ、どうだろうな？ そもそも試練がいくつあるかも言つてねえぞ？」

「チツ、喰えん奴だ。こいつ、表情こそ笑つてやがるが、目の奥は俺の事を値踏みしてやがる。こういう奴は絶対に腹の中で何か企んでいるか俺を本当は疑っている。」

「ハナから信じる奴は確かに嫌だが、こういう信じるフリして疑う奴も俺は嫌いだな。いつ裏切るか分かつたモンじゃ無い。」

「さて、デュエルディスクを構えろ、遊馬崎」

「デュエルしろよ、つてヤツか」

「そうだ。弱い奴には宝玉は渡せねえ。お前の力、試させてもらう！」

「受けて立つ！」

面白い。デュエルすりゃあこの痛みもちつとは紛れるかもな。

悪いが潰させてもらおう！

「黎、頑張れ……………」

「気を抜くなよ、主殿」

「フアイトですよー！」

「…………見守っている」

「行くぞ、遊馬崎い！」

「来い、『ジョーカー』ア！」

「デュエル！」

黎VSジョーカー

LP 4000 VS LP 4000

「先攻はオレが貰う、ドロー！ オレは魔法カード『強欲で謙虚な壺』を発動。デツキからカードを3枚めくる」

初手を取ったのは『ジョーカー』。まずはサーチカードで来たか……。



強欲で謙虚な壺

【通常魔法】

自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中から1枚を選んで手札に加え、その後残りのカードをデッキに戻す。

「強欲で謙虚な壺」は1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン自分はモンスターを特殊召喚できない。

【めくられたカード】

『沼地の魔神王』

『戦士の生還』

『パラドックス・フュージョン』

「オレは『沼地の魔神王』を手札に加え、残りの2枚をデッキに戻す。この効果を発動したターン、オレは特殊召喚を行えない。

続いて手札の『沼地の魔神王』の効果発動。手札のこのカードを捨てて、デッキから『融合』を手札に加える。

更に『増援』を発動。これでデッキからレベル4以下の戦士族、『キングス・ナイト』を手札に加える」

早速デッキを圧縮してきたか。これで3枚の圧縮ができたわけだ。しかも今加わったカードとめくられたカードの事を考えると、こいつのデッキは恐らくこいつ自身を召喚するためのデッキ。攻撃力3800の耐性持ちは強い。

### 増援

#### 【通常魔法】

デッキからレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加える。

沼地の魔神王（効果モンスター）

星3

水属性／水族

ATK 500／DEF 1100

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。

その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならぬ。

また、このカードを手札から墓地へ捨てる事で、デッキから「融合」魔法カード1枚

を手札に加える。

「そしてオレは『クイーンズ・ナイト』を守備表示で召喚！  
『ハアツ！』」

クイーンズ・ナイト：DEF 1600

『ジョーカー』の一番手は赤い鎧を身に纏った、左利きの女性剣士。守備表示か……。ダメージを警戒したか、1500ラインの相撃ちを避けたか。それとも何か別の意図があるのか？

クイーンズ・ナイト（通常モンスター）

星4

光属性／戦士族

ATK 1500／DEF 1600

しなやかな動きで敵を翻弄し、相手のスキを突いて素早い攻撃を繰り出す。

「永続魔法『強欲なカケラ』を発動。カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

強欲なカケラ

【永続魔法】

自分のドローフェイズ時に通常のドローをする度に、このカードに強欲カウンターを1つ置く。

強欲カウンターが2つ以上乗っているこのカードを墓地へ送る事で、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

ジョーカー：LP 4000

手札：3枚（内2枚は『キングス・ナイト』と『融合』）

フィールド

：クイーンズ・ナイト（DEF 1600）

：伏せカード1枚、強欲なカケラ（永続魔法）

「俺のターン！」

クソ、頭が痛みで回らない。あれをどう対処すりや正解なんだか全くピンと来ない。

何にせよ、あのモンスターを場に残しておくのは危険だ。このターンで破壊しなくてはいけない。

例え蘇生されるのだとしても、それはつまり手札を1枚切らせるといふ事だ。『ジョーカー』の効果は手札コストを要求する。なら、1枚でもカードを減らせばそれだけ倒せる機会が増えるという事だ。

「俺は『ヴェルズ・マンドラゴ』を特殊召喚！」

コオン、と地面が白く光り、中から植物の苗が生える。更に周囲の地面に亀裂が走って砕けると、球根を人型にデフォルメしたモンスターが現れた。

ヴェルズ・マンドラゴ：ATK 1550

「このカードは、自分の場のモンスターの数が、相手モンスターの数より劣る場合、手札から特殊召喚できる！」

この条件、意外と楽に満たせる。

後攻1ターン目で出せるのは言わずもがな、シンクロやエクシーズなどを行う事で能動的に数を減らして特殊召喚する事も可能。

惜しむらくはその攻撃力のせいでリクルート等にギリギリ対応できない点か。まあ

闇属性でレベル4だ、そこまでの贅沢も言えないだろう。

「更に、チューナーモンスター『ゾンビキャリア』を召喚！」

『ヴァアアア……』

ゾンビキャリア：ATK 400

行け。【シンクロダーク】、起動開始だ！

ヴェルズ・マンドラゴ（効果モンスター）

星4

闇属性／植物族

ATK 1550 / DEF 1450

相手フィールド上のモンスターの数が自分フィールド上のモンスターの数より多い場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

ゾンビキャリア（チューナー・効果モンスター）

星2

闇属性／アンデット族

ATK 400 / DEF 200

手札を1枚デッキの一番上に戻して発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「レベル4『ヴェルズ・マンドラゴ』に、レベル2『ゾンビキヤリア』をチューニング！  
天を焼くシリウス、孤狼の蒼き瞳よ、地に縛られた牙無き犬共を噛み砕け！」

☆2+☆4=☆6

「シンクロ召喚！ 夜空に響く咆哮、『天狼王 ブルー・セイリオス』！」  
『ガアアアアアアッ！』

天狼王 ブルー・セイリオス：ATK 2400

光の柱から現れる、蒼い二足歩行の狼。腕も狼の頭となっており、背中には鋭く大きい棘が無数に生えている。

天狼王 ブルー・セイリオス（シンクロ・効果モンスター）

星6

闇属性／獣戦士族

ATK 2400 / DEF 1500

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は2400ポイントダウンする。

「このままバトルだ！ 『ブルー・セイリオス』、『クイーンズ・ナイト』を攻撃！  
 ルフ・ファング！！」

『グガッ！』

巨大な狼が赤いトランプの女騎士に牙を剥く。

だが、宣言して気付いた。これは悪手だ、と。『ジョーカー』の表情が変わったわけ



じゃ無い。普段ならすぐに気付いたはずなのに、今日は気付くのがこんなにも遅れた。「アマいな。リバースカード・オープン！ 速攻魔法『収縮』！ これで『ブルー・セイリオス』の攻撃力を半分にする！」

天狼王 ブルー・セイリオス：ATK 2400 ↓ 1200

ガギン！ と盾に牙が突き立てられる。が、貫通するどころか逆に先端が欠けてしまった。

「迎え撃て！ //エレガント・ハート！」

『ハアッ！』

『ギャンツ!?!』

狼のパワーがガクンと落ち、騎士の盾に弾かれる。更にそのまま回転しつつ上昇して斬り上げた裝飾剣によって追撃を受けてしまう。辛うじて急所は回避したが、その衝撃が俺へと伝わって来た。

「ぐううう！」

黎：LP 4000 ↓ 3600

クツソ、俺らしくもねえミスだ。ここは『ブルー・セイリオス』を守備で出して攻撃に備えるなり、素材のまま残しておくなり、他にも色々あっただろうに。つてか『ノー トウング』より何でこつちを出したんだ、俺！ 何でよりによつてこんな事をしちまうかな！

「バトルフェイズを終了してメインフェイズ2へ。魔法カード『封印の黄金櫃』を発動。デッキから『ダーク・アームド・ドラゴン』をゲームから除外し、2ターン後のスタンバイフェイズに手札に加える」

### 封印の黄金櫃

#### 【通常魔法】

自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。  
発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加える。

ダーク・アームド・ドラゴン（効果モンスター）

星7

闇属性／ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 1000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の闇属性モンスターが3体の場合のみ特殊召喚できる。

自分のメインフェイズ時に自分の墓地の闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！ 『ブルー・セイリオス』の攻撃力は元に戻る！」

天狼王 ブルー・セイリオス : ATK 1200 ↓ 2400

黎 : LP 3600

手札 : 2枚

フィールド

: 天狼王 ブルー・セイリオス (ATK 2400)

: 伏せカード1枚

俺が伏せたカードは『次元幽閉』。対象を取るカードだが、デッキにそう沢山の罫カードは入れないのが普通だ。だったら、このカードを『ジョーカー』が防げる可能性はそこまで高くは無いはず。

「オレのターン、ドロー！ この瞬間、『強欲なカケラ』に強欲カウンターが1つ乗る！」

強欲なカケラ：強欲カウンター 0↓1

「オレは前のターンに手札に加えた『キングス・ナイト』を通常召喚！」  
『トオツ！』

キングス・ナイト：ATK 1600

光のゲートを潜って現れる、黄色の老騎士。暗い黄色のヒゲを生やし、緑の瞳を光らせながらの登場だ。

「チツ、召喚を許したか……！」

「この瞬間、『キングス・ナイト』のモンスター効果発動！ このカードが通常召喚に成功し、その時オレの場に『クイーンズ・ナイト』が表側表示で存在する場合、デッキか

ら『ジャックス・ナイト』を特殊召喚できる！ 現れる、『ジャックス・ナイト』！』  
『テヤアツ！』

ガキン、と赤と黄色の騎士が剣を打ち合わせて甲高い音が鳴る。その音に導かれ、青い鎧を身に纏った、浅黒い肌の精悍な青年騎士が出現した。

ジャックス・ナイト：ATK 1900

キングス・ナイト（効果モンスター）

星4

光属性／戦士族

ATK 1600 / DEF 1400

自分フィールド上に「クイーンズ・ナイト」が存在する場合にこのカードが召喚に成功した時、デッキから「ジャックス・ナイト」1体を特殊召喚することができる。

ジャックス・ナイト（通常モンスター）

星5

光属性／戦士族

ATK 1900 / DEF 1000

あらゆる剣術に精通した戦士。

とても正義感が強く、弱き者を守るために闘っている。

「そして魔法カード『融合』を発動！ オレはその効果で、絵札の三銃士を融合させる！」

『ハアアアッ！』

『トオオオオッ！』

『オオオオオッ！』

「天位を授かりし騎士の長！ オレ自身、『アルカナ ナイトジョーカー』を融合召喚つ  
！」

アルカナ ナイトジョーカー：ATK 3800

次元の渦に呑み込まれる三銃士。赤、黄、青の色の三原色が一つとなり、紫の背の高い騎士、奴自身を召喚した。なお、『ジョーカー』自身は場に出していない。

融合

## 【通常魔法】

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「おいでなさったか……!」

「バトル! オレ自身で『ブルー・セイリオス』を攻撃!」

「この瞬間、罨発動! 『次元幽閉』! 攻撃宣言が行われた時、そのモンスターをゲームから除外する!」

「無駄だ! オレはオレ自身の効果を発動! 効果の対象にオレが選ばれた場合、それと同じ種類のカードを手札から捨てて、その発動を無効にできる! 手札の罨カード『スキル・サクセサー』を捨てて、罨カード『次元幽閉』を無効にする!」

何!?

## 次元幽閉

## 【通常罨】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

スキル・サクセサー

【通常畏】

自分フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで400ポイントアップする。

また、墓地のこのカードをゲームから除外する事で、自分フィールド上のモンスター1体を選択し、その攻撃力をエンドフェイズ時まで800ポイントアップする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できず、自分のターンにのみ発動できる。

『トオオオ、ハアツ!』

『グギヤアアアツ!』

斬!

鋭い剣閃が次元の歪みごと青い狼を正中線で両断。野性の断末魔を上げて爆発した。

黎：LP 3600↓2200



「ぐ、うううううっ！　だが戦闘で破壊されたこの瞬間、『ブルー・セイリオス』のモンスター効果発動！　相手モンスターの攻撃力を2400ポイント、ダウンさせる！　これは対象に取る効果だが、お前の効果は1ターンに1度しか発動できない。お前はさつき『次元幽閉』に対して効果を使ったため、この効果を潰す事はできない！」

「む……！」

アルカナ　ナイトジョーカー：ATK　3800↓1400

よし、これで攻撃力が大幅にダウンした。これなら次のターンに手札から『ネクロ・ガードナー』を召喚、更に墓地から『ゾンビキャリア』を復活させてチューニングし、『TG　ハイパー・ライブラリアン』をシンクロ召喚すれば、戦闘破壊する事は十分に可能だ！

「成程、二段構えってワケか。だが、そのくらい対処できるぞ。オレは速攻魔法『道化の宝札』を発動！　このカードはフィールド上に表側表示で存在する、元々の攻撃力より低い攻撃力を持ったモンスター1体を選択して発動する。オレはオレ自身を選択！」

「何!？」

「攻撃力を元々の数値に戻し、そのモンスターのコントロールは変化した数値1000ポイントにつき1枚、カードをドロウする！」

アルカナ ナイトジョーカー：ATK 1400↓3800

しまった!? 攻撃力が元に戻された!?

「ただしこの効果の対象となったモンスターは、次のオレのスタンバイフェイズまで効果が無効となり、発動できない」

道化の宝札（オリジナル）

### 【速攻魔法】

このカードはバトルフェイズには発動できない。

フィールド上に表側表示で存在する、元々の攻撃力より低い攻撃力を持ったモンスター1体を選択して発動する。

そのモンスターの攻撃力を元々の数値に戻し、この効果で変化した数値1000ポイントにつき1枚、そのモンスターの元々のコントロールはカードをドロウする。

この効果の対象となったモンスターの効果は次の自分のスタンバイフェイズまで無

効となり、発動できない。

「く……っ！」

「ナメるなよ？ これでもオレは光の宝玉を守る者、そんな粗雑な戦術が通じるワケが無いだろ。カードを2枚セットして、ターンエンドだ」

ジョーカー：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：アルカナ ナイトジョーカー（ATK 3800）

：伏せカード2枚、強欲なカケラ（永続魔法・強欲カウンター：1）

「俺のターン、ドロ―！ 『封印の黄金櫃』のカウントが進む！」

封印の黄金櫃：残り1ターン

クツソ、ダムドが来るまで後1ターンある。あいつが来れば『ジョーカー』を倒す事

ぐらいワケ無いってのに……!」

それに何なんだ、この違和感は。自分ではちゃんとした戦術を行っているつもりなのに、あいつにはまるで通じない。後で出来の悪いタクティクスだと気付くのに、何故その場で気付けない!？」

『おかしい、黎の戦法にしては雑すぎる。フレイ、どうしてだろう?』

『残念ながら分かりません。ただ、何かあるのは確かです』

『これも試練の一環なのか? だとしたら物言いをつけるわけにいかんが……』

『……何にせよ、良い兆候では無い』

「俺は手札から魔法カード『強欲な壺』を発動。これで2枚デッキからドロウする。更に

『ネクロ・ガードナー』を通常召喚!」

ネクロ・ガードナー（効果モンスター）

星3

闇属性／戦士族

ATK 600 / DEF 1300

相手ターン中に、墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

このターン、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

今は、集中しろ……！ 目の前の敵に、この試練に……！

自分のやるべき事を思い出せ！

ネクロ・ガードナー：DEF 1300

攻撃力3800は極めて驚異だ。まず戦闘での破壊は補助無しでは難しいと言っても過言じゃ無い。しかも対象に取る効果での対処はやや難しい。

だが戦闘破壊や対象を取る効果での除去ができないのならば、対象を取らない効果で退場してもらうだけだ。

「更に手札1枚をテックिटツプに戻し、墓地から『ゾンビキャリア』を特殊召喚！」

ゾンビキャリア：ATK 400

「レベル合計は5か、あいつを呼ぶ気だな？」

「御名答！ 俺はレベル3の『ネクロ・ガードナー』に、レベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング！」

私は未来を渴望せし者！ 巨蟲の進行阻みし戦士、闇の正義の威を示さん！ 希望が溢れる明日となれ！」

☆2+☆3||☆5

「シンクロ召喚！ 破滅の浄化、『アーリー・オブ・ジャステイスA・O・J カタストル』！」

『キィアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

A・O・J カタストル：ATK 2200

白いボディ、カマキリ染みた節足動物のような足に頭の奇妙な金色のモニュメント。このカードなら安全に『ジョーカー』を倒す事が可能だ！

「バトル！ 『カタストル』で『ジョーカー』を攻撃！」

「そのモンスターの効果は……！」

『カタストル』は闇属性以外のモンスターとバトルする時、ダメージ計算を行わずに相手モンスターを破壊できる！ この効果は対象を取らないから、お前の能力でも防げない！ ……もつとも、今お前に手札は無い上に効果も使えないけどな！」

A・O・J カタストル（シンクロ・効果モンスター）  
星5

闇属性／機械族

ATK 2200 / DEF 1200

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

「『ダーク・ポイント・レーザー』！」

漆黒のレーザー光線が放たれ、『ジョーカー』へ一直線に向かう。モンスターを闇の粒子に分解するこの攻撃、お前では防げまい！

「成程、悪くない戦術だ。が、読みがアマいんだよ！ 罠カード『ブレイクスルー・スキル』を攻撃宣言に合わせて発動！」

「何!?!」

「ターン終了時まで相手モンスター1体の効果を無効にする！ これでそいつはただの闇属性モンスターだ！」

ブレイクスルー・スキル

【通常畏】

相手フィールド上の効果モンスター1体を選択して発動できる。

選択した相手モンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

また、墓地のこのカードをゲームから除外する事で、相手フィールド上の効果モンスター1体を選択し、その効果をターン終了時まで無効にする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できず、自分のターンにのみ発動できる。

ジジジ、と白い巨体が色を失っていく。白はそのままだが、金や赤といった部分が見る間にくすみ、あっと言う間に白黒のモンスターになってしまった。

当然、そんなモンスターのレーザーで攻撃力3800を倒せるわけも無く。

「お返した、スラッシュ・スペード！」

「ぐあああああああつー！」

黎：LP 2200↓600



瞬時に間合いを詰められて真つ二つにされてしまった。

そこから発生したお約束の爆風が俺を襲う。

「どうした？ まさかこの程度とか言わないよな？」

「クツツ……！俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだつ！」

黎：LP 600

手札：1枚

フィールド

：モンスター無し

：伏せカード1枚

「オレのターン、ドロロー！強欲カウンターが更に乗る！」

強欲なカケラ：強欲カウンター 1↓2

「そして『強欲なカケラ』を墓地に送り、カードを2枚ドロローする！」

チツ、手札が増えたか……！  
落ち着け、落ち着くんだ。

『ジョーカー』の場には攻撃力3800の大型モンスターが1体。このターン『強欲なカケラ』の効果で2枚手札が増えて3枚。最悪、3回分の効果発動のためのコストを確保されたって事だ。

俺の場にモンスターは0、伏せカードは1枚。だが、このターンはまだ凌げる。

まず俺が伏せたカードは『聖なるバリアーミラーフォース』。これは対象を取らない罠カードだ。少なくとも『ジョーカー』の効果では対処できない。

次に墓地には『ネクロ・ガードナー』がいる。一発だけならこれで攻撃を防げる。腕のあるデュエリストはオーバーキルを狙う必要性が無い場合、それをする事はまず無い。あいつはハデ好きってワケでも無いだろうから、まずモンスターを追加せずに、あいつ自身でのダイレクトアタックで決めに来るはず。『融合解除』でも無い限り、追撃は警戒しなくても大丈夫のはずだ。

そして手札には『バトルフェーダー』。ダイレクトアタック宣言時に特殊召喚し、バトルフェイズを強制的に終わらせるモンスター。

この鉄壁の布陣ならばタータンくらいは防げるだろう。そして次のターンに『封印の黄金櫃』の効果で『ダーク・アームド・ドラゴン』が手札に来る。今、俺の墓地の闇属

性モンスターは『カタストル』、『マンドラゴ』、『セイリオス』、『ネクロ・ガードナー』の4体。相手ターンで『ネクロ・ガードナー』を除外すれば特殊召喚する条件は整う。

ダムドの効果は対象を取るが、『ジョーカー』は発動を無効にするだけで、破壊はしない。つまり1ターンに何度も使える効果は奴にとつて天敵。そしてダムドは、出せる時点で3回除去を行える。あの手札の中にモンスターカードがあっても防ぎきる事は不可能だ。

更に『ゾンビキャリア』の効果でデッキの1番上に戻したカードは速攻魔法『異次元からの埋葬』。これでダムドの弾を合計6発分確保した事になる。次のターンに『ダーク・アームド・ドラゴン』で場を一掃し、ダイレクトアタックが決まれば『ジョーカー』のライフは残り1200ポイント。次のターン奴が陣形を整えられるかどうかは賭けになるが、もし失敗すればダムドでカードを吹き飛ばして2発目をお見舞いすれば俺の勝ちだ。

『異次元からの埋葬』では念のため『ネクロ・ガードナー』を戻しておこう。そうすればもう1度攻撃を防げる。

気になるのは残りの伏せカードだが、仮にカウンター罠だったとしても『ミラーフォース』と『バトルフェーダー』の両方はカウンターできない。防御手段を全部注ぎ込む覚悟をしていれば十分に防御できる。

！  
これでこのターンでの俺の負けはまず有り得ない。勝負はこれからだ、『ジョーカー』

だが、『ジョーカー』はフツと不敵で憐れむような笑みを浮かべた。

「悪いが、このデュエル、オレの勝ちだ」

「何!?!」

「畏発動、『サンダー・ブレイク』！ 手札を1枚捨てて、場のカードを1枚破壊する！

対象はその伏せカードだ！」

「み、『ミラーフォース』が!?!」

相変わらず仕事しねえ！

「更に今捨てられた『おジャマジック』の効果発動。このカードが手札または場から墓地に送られた時、デツキからおジャマ3兄弟を手札に加える。捨てる行為もまた墓地に送る事に含まれるため、発動は有効だ！」

「何!?!」

サンダー・ブレイク

【通常畏】

手札を1枚捨て、フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードを破壊する。

おジャマジツク

【通常魔法】

このカードが手札またはフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから「おジャマ・グリーン」「おジャマ・イエロー」「おジャマ・ブラック」を1体ずつ手札に加える。

ズガツシャアアアン！ と雷が落ち、俺の伏せカードを木端微塵に砕く。

守りが1つ砕かれた……。だがこいつはまだ囷、今の手の中では最弱の防御手段だ。手札の『バトルフェーダー』こそが本命。対象を取らないこのカード、伏せカードも無い今、お前にこいつを突破する事は不可能だ。

「更に魔法カード『融合回収』フュージョン・リカバリー！ 墓地から『融合』と『クイーンズ・ナイト』を手札に戻す！」

「な、『融合』を戻したって事は……！」

「そうだ！ オレは『融合』を発動！ 手札の『おジャマ・イエロー』、『おジャマ・グリーン』、『おジャマ・ブラック』を融合し、現れる！ 『おジャマ・キング』！」

次元の渦が生まれ、そこに黄色、緑、黒のビキニパンツを履いた奇妙なモンスターが吸い込まれる。そして真っ白な（ビキニパンツはそのままの）丸い巨体が現れた。  
原作みてえな演出は無しかい。

おジャマ・キング：ATK 0

!? 攻撃力0を攻撃表示だど!?

「このカードが表側表示で存在する限り、相手モンスターカードゾーンは3ヶ所封印される。真ん中とその両隣を選択させてもらおうぞ」  
「くっ!」

おジャマ・キング（融合・効果モンスター）

星6

光属性／獣族

ATK 0／DEF 3000

「おジャマ・グリーン」＋「おジャマ・イエロー」＋「おジャマ・ブラック」

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手のモンスターカードゾー

ンを3カ所まで使用不可能にする。

バチバジイツ、とシヨートする俺のモンスターカードゾーン。ディスクの方にも禁止の字が浮き出る。だが3ヶ所だろうが4カ所だろうが問題無い。1カ所でも空いていれば、そこに『バトルフェーダー』を特殊召喚できる。

次のターンさえ来れば、俺にもまだ勝機はある。

(次のターンにダムドが来れば、問題無い。3ヶ所封じられるって事は――)

「3ヶ所封じられるという事は2カ所空いているという事。そこにダムドを呼び出せばこの布陣を突破しつつ勝てる、か？」

「っ！」

「アマイ。蜂蜜漬けのチョコレートのようにアマイぞ」

それはもう甘ったるくて不味いと言わなければならないだろうか。

「オレは永続魔法『地盤沈下』を発動！ このカードが存在する限り、相手のモンスターカードゾーン2カ所は使用不能となる！」

「何だ?!」

ガラガラと崩れる地面。残る2カ所ですら封じられたと……!?

「モンスターを出せなくされた……。でも、『おジャマ・キング』の攻撃力は0だし、

『ジョーカー』の手札はこれで0！ 黎の墓地にある『ネクロ・ガードナー』での防御は可能……」

「お前もアマイな、少女。オレは墓地の『スキル・サクセサー』の効果発動」  
「墓地から罠だつて!?!」

「このカードを除外し、オレのモンスター1体の攻撃力を800ポイントアップさせる。  
『おジャマ・キング』の攻撃力はこれで800に上がる」

おジャマ・キング：ATK 0↓800

く……。これで俺のライフを上回ったモンスターが2体に……。っ！ しかもダメステで発動しない……。、余裕を見せつけているつもりか……。！

黎：LP 600

次のターンのドローは『異次元からの埋葬』に確定していて、手札に加わるダムドですら出せない。くっ、これでは逆転なんて……。!?!

「バトル！ 『おジャマ・キング』でダイレクトアタック！ //

フライング・ボディプレ



スッ！」

それでも……、最後まで足掻く！

「墓地の『ネクロ・ガードナー』のモンスター効果発動！ このカードを除外し、その攻撃を無効にする！」

ガシッ！ とのしかかって来る白いエイリアンを、漆黒の鎧武者が受け止める。

交差した腕をそのままバネのように弾いて巨体を押し返すが……。

「まだオレの攻撃は残っているぞ！」

「ぐ……！」

「そしてもうお前に防御の術は残っていないだろ！ これで止めだ！」

天頂を貫くように真上へと『ジョーカー』の切っ先が掲げられる。その柄から赤、青、黄の3色の光が剣を覆い込み、それが振り下ろされた。

ギヤッ！ と鋭い閃光。そしてこちらに迫る、光の、斬撃の壁。

俺はただ、それを見ている事しかできなくて……。

「ッアルカナ・ジャックポット ロイヤル・ストレートフラッシュ」ッ！」

「ぐ、うあああああああああああああああああつ！」

黎：LP 600↓0

無残にも、惨めにも、無意味に守った残り少ないライフを、大技で削り取られた。

ジョーカー：WIN

黎：LOSE

「主殿が、ライフを1も削れなかったと……!?」

「あの黎が、手も足も出なかったなんて……!?」

「……強い」

「……………」

「俺も、落ちたものだな……っ」

「お前が何故負けたのか、その理由が分かるか？」

負けた理由……。今の一戦だけじゃあ単純な力の差、運、デツキの相性、色々考えら

れる。あれだけじゃあ残念ながら何も分からない。

「違うな」

「何？」

「実力の差は恐らくほぼ無い。事故も無かつただろう。相性だつて特に悪いわけでも無いはずだ。お前が負けた理由はもつと別にある」

『『ジョーカー』、その理由つてのは一体……』

ドツクン！

「ギ、イ……ッ!?!」

大きな自分の鼓動を感じると共に、全身を走る、身を引き裂き焼かれ砕き押し潰すよ  
うな、拷問すら生温く感じる感覚。まるで釣り針を体中に刺して、四方八方から引つ張  
られるような、耐え難い痛み。

クソ、またこの激痛かよ……!!

何なんだよこれは……っ!

「主殿、大丈夫か!?! 今回復術を……」

「それは無意味だ、  
“騎士”の護衛」

「何!? それはどういう事だ!」

驚愕するように問う桜。

『ジョーカー』はそれに対し、ゆつくりと返す。

「ここは『ヴァルハラ』のコピー、当然ながらその力の一部が使える。元よりヴァルハラというのは高潔な戦士の魂が死後に辿り着く場所だ」

「それが……、何だっけ言うんだ……」

「『騎士』の魂、お前は本当に自分が高潔だと思うか?」

「それは……」

正直、自分でもそんな事は思えない。

何せ俺は人殺し、そして化物……。高潔な戦士とは、最も縁遠い存在だ。

そういう意味では、やはりこのヴァルハラが異物として俺を排除しようとしている、のだろうか。

「それは違う。高潔と一口に言った所でその姿は時代や倫理によって移り変わる。過去にとつての野蛮が今の正義となる事もあれば、今の悪行が過去の正義になる事だって十分ある」

言われてみれば確かに。今と昔では価値観はまるで違う。古代においては師匠は殺して乗り越えるものだったし、自らの子供を役人の料理の食材にしたなんて事もあつ

た。魔女裁判のように体裁だけ取り繕った公開処刑なんかはその中でも最たる例だ。

そしてそんな昔の考え方が固定されていけば、現世において善人とされる人が弾かれる事もあるだろう。それはヴァルハラにとつても本意では無いはずだ。

「ならば……、何故……っ!」

「お前は、何のために戦っているんだ?」

「は……?」

「その力はどこから湧いて来る? 力の源は何だ? お前の信念は? 譲れない思いは

? そういったものは何だ? ここで答えられるか?」

「それは……」

目を閉じ、思い出を反芻する。

アカデミアに来た時。フィオと十代に会った。

女子寮前の湖。フィオとデュエルした。

プライドに都を目の前でまた浚われ、精霊の世界に行つてフレイと出会い、帰つて来たら今度は桜が現れた。海馬さんやペガサスさんと面識を持ち、輝やライといった仲間もできた。

そして、そんな全てを、邪神のクソツタレは壊そうとしている。そんな事、絶対に許せない。

俺の、俺の譲れない思いは……。

「俺は、邪神を屠つて都を取り戻すために戦っている。その力は、皆を守りたいという願  
いから生まれる。邪神如きに喰わせはしない。それが絶対に譲れないモノだ」

それが、俺の心だ。荒んだ前世からは想像もできないような、光や希望に満ち溢れた  
心。そして輝く未来、それを受け止めたい。だから俺はここまで進んで来たんだ。この  
言葉に嘘は無い。

だが……。

「ふう……。やっぱりか」

「え？」

「何か勘違いをしているな。それだからオレに負けたんだよ、お前は」

「え……？」

「教えてやる」

「お前の心には、光や希望は満ち溢れていない」

なん、だと……?」

「『ジョーカー』さん、それはやはり……」

「そうだ『フレイヤ』。お前の予想通りの事だ」

「……………」

光も、希望も、俺の心に無い……?」

「『騎士』、お前が負けたのは、己の心の内側に原因がある。光とはあらゆる闇を淘汰する希望の象徴。だから心の内側に闇の決意や信念があると、この城はそいつの心へと力を捻じ込み、その淀みを破壊しようとする。そして同時にそいつから幸運を奪い取る。痛みが強ければ強い程、その不純物の度合いは大きい。」

お前が感じていた痛みの正体は、そしてオレに負けた最大の原因の種は、それだ。……歩けない程に強力となると、どうやら随分と大きな闇を光の中へしまい込んでいるみたいだな」

「俺の心の光は、闇に劣っているってのか……!?!」

「それはオレにも分からねえ。だが、お前の過去を、オレは知っている」

て、てめえ、一体いつの間に!」

「ここは宝玉を授けるに相応しいかどうか、番人、つまりオレがそいつの過去を見る事ができる。」

……怒り、憎しみ、殺意、怨念、悲しみ、敵意。そして血と殺戮と悲鳴に満ち溢れているお前の記憶は、久々に嘗ての、9000年前の戦争の事を思い出させてくれたよ」

「……シリアルキラーに、光の力は渡せないってのか」

「違う。さつきも言っただろう、時代によって倫理観など移り変わる、つてな。お前が百人殺してようが百万人殺してようが、それは関係無い」

「じゃあ、どういう……」

「テメエの心の中にある闇と向き合え。それができないなら、テメエには未来永劫、光の宝玉の力は渡せない」

「く……」

闇とは何だ、その質問すら憚られるような雰囲気だった。

更に『ジョーカー』が手を一振りすると、俺の胸元から、赤、青、黄、緑、茶、紫の6色の光の玉が生まれ、『ジョーカー』の手の中に納まった。

「じよ、『ジョーカー』っ！ お前、俺の精霊の力を……！」

「悪いが、他の精霊の力は一時的に没収させてもらう。邪神を倒すために他の力に頼ってちやあこつちが困るんな。」

今日はもう帰れ。今のお前は、闇を見ないで強くなつたつもりでいる、ただの雑魚だ。そんな程度の実力で光の力を渡すわけにはいかねえんだよ」



「雑魚……!?!? 俺が……っ!」

「闇を見る。そこに光がある。……まずはその意味の理解から始めるんだな」  
 そう言うと、『ジョーカー』は城の奥へと、立ち去って行ってしまった。

俺の、闇……。

過去の光景がフラッシュバックする。

溢れ出る血、引き裂かれた自衛隊員の体、銃創だらけの研究者。雨のように血を浴び、それを無感動で眺め、殴られ、斬られ、潰され、殺されて……。

「……っ!」

分からない。あの時の事を思い出して、一体何が生まれるって言うんだよ。

ただただドス黒い闇と、血腥い時間があるだけじゃねえか。そんな所から……、大切な仲間を守るための信念が、生まれるわけねえだろうが……。

答えは何時まで経っても出ず、俺は痛みと共に地面にへたり込む事しかできなかった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 76 : 青髪の天使 前編

SIDE : 無し

「バトル！ 私の『デビル・ドージャー』で『炎霊神パイロレクス』を、ツアンの『紫炎』で『ラヴァルバル・チェイン』を攻撃！ そして麗華の『連弾の魔術師』でダイレクトアタック！」

「ぐ、あああああああああああああつ！」

雪乃 : LP 2000

ツアン : LP 4000

麗華 : LP 3500

黎 : LP 0

昼のデュエルアカデミアの屋上。日当たりも良く、兔に角だっ広い。出入り自由の

くせに手摺りなどは無いが、そもそも利用する人物などサボるか昼寝のために来ている奴くらいなので、余り問題は無かったりする。

そしてそこで今、一つのデュエルに決着がついた。

雪乃・ツアン・麗華：WIN

黎：LOSE

デュエルをしていたのは黎と、腕利きのブルー女子3名。結果は黎の大敗で終わっていた。

「ぐ……っ！ ライフを削る事すら叶わずかよ……！」

そう、黎はこのデュエルで3人のライフを1も削る事ができなかったのだ。雪乃のライフが減っているのは『デミス』の効果発動のために支払ったライフコスト、麗華は『火炎地獄』で自分から受けたダメージだ。

（くっそ……、何なんだ、闇を見る”つてのは！ 普通のデュエルで見えるものなのか？ それとも何かの比喩的表現なのか!?)

精霊の世界で『ジョーカー』に敗北した後、黎は自分のデュエルを見失っていた。思うようにプレイングができなくなり、次の自分の一手に自信が持てない。伏せカードを

警戒すべきか否か、このモンスターをここで召喚すべきか。全てが分からないのだ。

「黎の坊や、大丈夫？ 何時もの貴方らしくないプレイングだったけど……」

「何か不調？ 相談くらいなら乗れるよ？ 流石に君がそんなんだと調子が狂うよ」

「いつも満点のデュエルをする黎さんらしく無いですよ、何かあったのですか？」

そんな心配に対し、黎は空元氣と空笑いしか返せなかった。

「悪いな、ちよつと思うトコがあつてな……」

顔洗つて来る。そう言つて黎は階段を下つて行つた。

彼が立ち去ると同時に物陰からゾロゾロと黎の仲間達が現れる。

「おいおい、あいつは一体どうしちまつたんだ？ 何時もの覇氣が無いぞ」

「らしくも無いプレミばかりだったツス」

最初に開口したのはいつの間にか彼と和解していたサンダーこと万丈目準。同じく

心配するのは十代の弟分である翔だ。

他の皆も口を揃え、あの心優しい鬼の事を心配している。

「ねえ、皆。実はね……」

そんな中、ファイオが神妙な顔で、重い口をゆつくりと開いた。

「昨日、黎がデュエルして、それで……」

時と場所は変わってその日最後の授業、試験会場に使われる体育館兼デュエルフィールド。先日の交流試合を始めとして、大きな少人数デュエルをする時はデュエルリング。そして今回のようにそれ以外の大人数デュエルでは主にここが使われる。

その中で、数名のブルー同士でデュエルが行われていた。この日の最後の授業は、寮ごとに行われる実技の小テストだった。

さて、ブルーと言えば成績優秀者の集まりであり、かつ他の寮を見下している連中ばかりで有名。成績がブルーの全て、ブルーに所属しているが故にレッドやイエローを見下せるのだ。裏を返せば落第してしまえば面汚し扱いされ、村八分となって追放される。それこそがエリートがエリートであるが故に持つ特権にして規律。

もつとも、その風潮も暫く前のもの。今ではブルーもただ単に成績が良いというだけ

の括りになつており、他を蔑む事も少なくなり始めている。そしてそれを良しとしない者がいた。

「田中あ！ テメエの命運もここで尽きたな！」

「高田……、キミは敗北フラグというのを知っているかい？」

そう、高田純二郎である。元々差別意識とエリートへの憧れが強い高田にとつて、侮蔑の風習とは強い味方だった。この風習が有るからこそ彼はブルーの中でも相応の立ち位置が持てるわけで、無くなる事は彼がただの高慢なだけのいけない好かない男になる。そんなのは彼は御免だった。故にこの差別意識が無くなる事を拒み、抵抗している。

一方で差別意識が無くなる事を喜ぶ者もいた。それが高田とデュエルしている男、田中康彦である。中等部よりレッドから懸命になつて実力でのし上がった彼は、高等部に上がると同時に漸く念願のブルーになれた。故に彼は蔑まれる事の悔しさや悲しさを知っていた。だからこそ、この忌むべき因習をどうにかしたいと思つていたので。

この相反する考え方を持った2人は中等部で初めて会つた時から仲が悪かつた。虫が好かないと言うべきか、遺伝子レベルで相性が悪い。

「ケツ、テメエのライフはたつたの100！ そんな吹けば飛ぶようなライフで何ができるつてんだ！」

「100も残つてるんだ。そんな勝利宣言を決着前にかましてくれて、負けたら赤っ恥

だぞ」

この授業、レッドやイエローも観戦している。

そんな中で負ければブルーの恥晒し。更に1年とは言え差別肯定と否定派の筆頭ともなれば、その派閥の存続にも関わって来るレベルだ。

康彦 : LP 100

手札 : 2枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罫無し

高田 : LP 4000

手札 : 0枚

フィールド

: グリズリーマザー (ATK 5400)、共鳴虫 (ATK 1200)、UFOター

トル (ATK 1400)、シャインエンジェル (ATK 1400)、ジャイアントウイ

ルス (DEF 100)

：スピリット・バリア（永続罨）、団結の力（装備魔法・『グリズリーマザー』に装備）

「さあ、俺のターンだ、ドロ―！」

康彦がここまで追い詰められたが、まだ決着となつてはいない。

まさか『ミラーフォース』でこちらのモンスターを残らず吹き飛ばされるとは思わなかった。だが辛うじて前のターンに伏せておいた『スケープ・ゴート』で攻撃を耐えきつた、ここで逆転すれば人気も熱狂も康彦に向かうだろう。

『強欲な壺』を発動、更に2枚ドロ―！　そして手札から『サイクロン』を発動！　お前の『スピリット・バリア』を破壊する！」

「何い!？」

吹き荒ぶ突風によって、高田の守りの要が消滅する。これでデュエル開始時からずっとライフを削れなかった防壁を除去できた。

「魔法カード『死者蘇生』！　蘇れ、『ゴブリン突撃部隊』！」

「今更そんなクソ雑魚モンスターに何ができる！」

「まだだ！　『E・HERO ブレイズマン』を召喚！」

「え、エレメンタルヒーローだと!？」



ゴブリン突撃部隊：ATK 2300

E・HERO ブレイズマン：ATK 1200

康彦のフィールドに、金棒を持った3人のゴブリン兵と燃える拳のヒーローが現れる。

前者はただのやられ役だが、後者はその炎のエナジーをプレイヤーのデッキに与え、カード1枚を光らせた。

『ブレイズマン』は召喚した時、デッキから『融合』を手札に加える事ができる」

「テムエ……、ブルーのくせにE・HEROなんて使うのか！ そいつあレッドの反乱分子のカードだぞ！ ブルーとしての誇りはネエのか！」

「ヒーローは彼の特権じゃない！ そしてレッドやイエローからレアカードを巻き上げてる派閥の奴に言われたくもないな！」

「ナマ言いやがって……、エリートがクズをどうしようが自由だろうが！」

「ならお前もそのクズに仲間入りしてしまえ！ 魔法カード『融合』発動！ フィールドの地属性『ゴブリン突撃部隊』と炎属性『ブレイズマン』を融合！ 現れる、『鋼鉄の魔導騎士—ギルティギア・フリード』！」

『ハアアアア、トアアアアッ！』

鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード：ATK 2700

やられ役と炎の英雄が神秘の渦に吞まれ、新たな姿に変わる。

スラリとした頭身、紫色の外套と鎧、そして分厚い刃のハルバード。それらを備えた新たな戦士が、高田の前に降り立った。

「な、何だこのモンスターは……！」

「こいつは黎が俺に分けてくれた新たなモンスターだ。デツキのモンスターを戦士族に寄せて、『ブレイズマン』と『融合』を投入する事で使いやすくしたニューフェイスさ」  
「デメエ……ッ！ あのクソに、化物なんかを手助けされて人として恥ずかしくねえのか！」

「お前らと同類になるよりマシだ！ 俺は『ギルティギア・フリード』で『UFOタートル』を攻撃！ この瞬間、モンスター効果発動！ 『ギルティギア・フリード』はバトルの時、墓地の魔法カードを1枚除外して守備力の半分、攻撃力がアップする！」

鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード：ATK 2700↓3500

「攻撃力3500だど!？」

「行け、ソウルブレード!」

「ぐおっ!」

高田 : LP 4000 ↓ 1900

墓地から『サイクロン』が除外され、鋭利なハルバートに魔力が宿って切れ味が増す。

そして鋼の騎士の鋭い斬撃により、UFOを背負った亀を両断された。その衝撃は後ろに控えているプレイヤーまで伝わり、ライフを大幅に削り取った。

「だが『UFOタートル』が破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の炎属性モンスターを特殊召喚する! 来い、『UFOタートル!』」

UFOタートル : ATK 1400

高田も負けじと真つ二つになった亀をリニューアルして場に呼び戻す。

これで『グリズリーマザー』の攻撃力は5400をキープ、次のターンで確実にトドメを刺せる。それで終わりだ。

そう確信した。だが。

『ギルティギア・フリード』はフィールドのモンスターだけを融合素材にした場合、2回攻撃できる！」

「なっ!？」

鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード（融合・効果モンスター）

星8

光属性／戦士族

ATK 2700 / DEF 1600

属性が異なる戦士族モンスター×2

(1)：1ターンに1度、このカードを対象とする魔法・罠・モンスターの効果が発動した時に発動できる。

その効果を無効にし、フィールドのカード1枚を選んで破壊する。

(2)：フィールドのモンスターのみを素材として融合召喚したこのカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。

(3)：1ターンに1度、このカードが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時に、自分の墓地から魔法カード1枚を除外して発動できる。

このカードの攻撃力はターン終了時まで、このカードの守備力の半分アップする。

攻撃を終えた筈の鋼の騎士は、再び武器に魔力を充填する。倒して次が現れる形で補充された未確認飛行物体から生えた亀を狙い、重厚なハルバートを再び振るのであった。

「もう一度『UFOターゲット』を攻撃！ ソウルブレード・アゲイン！」

「ば、バカな……、この俺様が、レッドやイエローの肩を持つ面汚しに負けるってのか……！ ギャアアアアアアアアアア！」

高田：LP 1900↓0

康彦：WIN

高田：LOSE

「そこまで！ 勝者、シニョール田中ナノーネ！」

『キヤー！ 田中くーん！』

『カツコイー!』

『よくやったぞ、康彦おー!』

『ナイスデュエルだ!』

「ふう……。言つたら、勝つ前にそんな事言うど恥搔くつてな」

「ち、ちくしよおおおおおおおおおおおつ!」

派閥争い、勝負あり。反転して攻勢に転じるより早く、鋼の刃が再び斬撃を放つて決着を付けたのであった。

激戦を何とか勝利した事で、康彦は歓声の中で一先ず安堵する。一方であれだけ大言壮語したにも関わらずに負けた高田には非難と侮蔑の視線と言葉が投げかけられた。

——あいつまーた負けたぞ。何度負ければ気が済むんだろうな。

——もうダメだな、高田は。

——散々田中の事を面汚しだ何だつて言いながら、結局はあいつがそうだったんだな。

襲い掛かる罵倒と言う音の無いブーイング。劳いの言葉は一つも無い。酷かも知れないが、これが高田の望んだ階級制度による差別社会だ。そこから生まれるデメリット

は、他でも無い願った自分自身で背負わなくてはならないのである。

膝をついて敗北の悔しさを唇を噛んで堪えていると、そこに審判を務めたクロノス教諭が歩み寄って来た。

「クロノス、先生……」

同じ思想を持つ者同士、優しい言葉をかけてくれるのかと思いきや、返って来たのは非情な言葉だった。

「シニョール高田、貴方はこれまでの小テストや実技テストにおいて、ほぼ全てが赤点ナノーネ。もし次のテストもまた平均点以下の場合、成績不振としてイエロー寮に落第となってしまうから、気を付けるノーネ」

「な!?」

高田は勉強が極めて苦手だ（逆に康彦はできる。ここも折り合いの悪い原因の1つだろう）。

しかもここ最近の実技の小テストでは人数合わせなどの影響で対戦相手は全てレッド（実は十代）やイエロー（実は大地）、ブルー女子（実は明日香）とのデュエルであり、全てにおいて敗北している。

ブルーは成績優秀者の集まり。落第生を抱え込んでくれない。何より数合わせとは言え、ブルー同士でのデュエルで無い事が、彼の実力の低さを如実に物語っている。

同じ思想を持つクロノス教諭もまた、格下の寮生や落第には厳しい。これもまた、彼が望んだ学園生活によって生まれるデメリットだった。

——落第目前だつてよ、ダッセエ。

——当然だな。この間、あいつテストの点数一桁だつたぞ。

——マジかよ……。あれレッドの普段寝てる奴でも15点だつたらしいぞ？

——ああ、遊城とかいう奴？ うわ、情けねえ。

——マジ面汚しだな。とつとと降格しちまえば良いのに。

自分に向けられる侮蔑の嵐は、止まる事を知らない。やがて耐えきれなくなり、気付けば彼は、大粒の涙を零していた。

繰り返すが、この彼の心を突き刺す蔑視は彼自身が望んだ世界の産物。彼がこれを選ける事は許されない。



そして小テストも終わりに近付いて来た。

「クスレッドめ……。あいつみたいなのがいるせいで、妙な風習がブルーにまで広がっちゃまったじゃねえか……！」

観客席で目の周りを赤くしながら、高田が毒を吐く。レッド生の順番となった小テスト、そこでは黎が（クロノス先生の陰謀で）ブルー生とデュエルをしていた。この対戦相手のブルーもまた、高田同様に差別肯定派である。

黎：LP 300

手札：4枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罫無し

ブルー生：LP 4000

手札：2枚

フィールド

・モザイク・マンティコア（ATK 2800）、デビルゾア（ATK 2600）、偉大魔獣ガーゼット（ATK 5200）

：レアワールド・アーマー（装備魔法・『偉大魔獣ガーゼット』に装備）

このブルー生のデッキはシンプルなハイパワーモンスターの力押しタイプ。本来の黎ならば、戦略もへったくれも無いこの程度の相手など容易く倒せるものの、不調を患っている彼には十分な強敵となっていた。

ブルーは『デビルゾア』をリリースして『ガーゼット』を召喚。更に『死者蘇生』で『デビルゾア』が蘇り、『二重召喚』で前のターンからフィールドにいた『ゴブリン突撃部隊』と『ブラッド・ヴォルス』をリリースして『モザイク・マンティコア』を召喚される。

デビルゾア（通常モンスター）

星7

闇属性／悪魔族

ATK 2600 / DEF 1900

真の力をメタル化によって発揮すると言われているモンスター。

偉大魔獣ガーゼット（効果モンスター）

星6

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

このカードの攻撃力は、生け贄召喚時に生け贄に捧げたモンスター1体の元々の攻撃力を倍にした数値になる。

二重召喚

【通常魔法】

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

次のターンになれば、『モザイク・マンティコア』の効果でリリースされた2体が復活。しかも彼の手札には『ターレット・ウオリアー』と『フロストザウルス』がいる。このターンは『キラートマト』の効果で辛うじて凌ぎ切られたものの、次のターンが回って来ればブルー生には確実に黎を仕留められるだけの自信があった。

モザイク・マンティコア（効果モンスター）

星8

地属性／獣族

ATK 2800 / DEF 2500

このカードが生け贄召喚に成功した場合、次の自分ターンのスタンバイフェイズ時に、このカードの生け贄召喚に使用した墓地に存在するモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

この方法で特殊召喚されたモンスターのモンスター効果は無効化される。

そして、シーンは黎の最後となるターンから始まる。

「俺のターン、ドロロー……。俺は墓地から、光属性の『ライトロード・ハンター ライコウ』、闇属性の『キララー・トマト』2体を除外し、『混源龍レヴィオニア』を特殊召喚する……」

『ギイイイイイイイ！』

混源龍レヴィオニア：ATK 3000

「こ、攻撃力3000だど!?!」

「効果発動、相手のカードを2枚まで破壊する。俺は……、『モザイク・マンティコア』と

『デビルゾア』を……破壊する」

「くっ!」

混源龍レヴィオニア（特殊召喚・効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 0

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地から光・闇属性モンスターを合計3体除外した場合に特殊召喚できる。

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：この方法でこのカードが特殊召喚に成功した時に発動できる。

その特殊召喚のために除外したモンスターの属性によって以下の効果を適用する。

このターン、このカードは攻撃できない。

●光のみ：自分の墓地からモンスター1体を選んで守備表示で特殊召喚する。

- 闇のみ：相手の手札をランダムに1枚選んでデッキに戻す。
- 光と闇：フィールドのカードを2枚まで選んで破壊する。

黎の場に影の塊が現れる。影はその姿を白い鱗の巨龍へと変じて行き、やがて緑のエネルギーパイプが走る悪魔にも神にも見えるドラゴンが降臨し、緑のエネルギー波でモンスターを2体吹き飛ばした。

「クソツ、だがまだこっちには『ガーゼット』がいる！ 攻撃力は5200、テメエのモンスター如き足元にも及ばねえ！」

「フィールドのカードが効果で破壊された時、『カオス・ネフティス』を特殊召喚……」  
『キヒョオオ!』

カオス・ネフティス：ATK 2400

「たかが攻撃力2400で……!」

「そして『ガーゼット』と、墓地の『ゴブリン突撃部隊』、『デビルゾア』を除外する……」  
「んだと!?!」

カオス・ネフティス（特殊召喚・効果モンスター）

星8

闇属性／鳥獣族

ATK 2400 / DEF 1600

このカードは通常召喚できず、このカードの効果でのみ特殊召喚できる。

このカード名の（1）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードが手札・墓地に存在し、フィールドのカードが効果で破壊された場合、自分の墓地から「カオス・ネフティス」以外の光属性と闇属性のモンスターを1体ずつ除外して発動できる。

このカードを特殊召喚する。

（2）：このカードが特殊召喚に成功した場合、相手フィールドのカード1枚と相手の墓地のカード2枚を対象として発動できる。

そのカードを除外する。

続けて黎が繰り出したのは青とピンクの炎を金色の装甲でまとめて鳥型にした魔獣。墓地から『ワイバースター』と『コラプサーペント』が取り除かれると同時に、青い炎が相手の場と墓地を焼き払い更にカードを取り払った。

「莫迦な、こんな事が……!」

「効果を使ったターン、『レヴィオニア』は攻撃できない」

「な、何だよ驚かせやがって……。なら次のターンで……」

「……『レヴィオニア』をリリースし、『ダウンビート』を発動。デッキからレベル7・闇属性・ドラゴン族モンスターを特殊召喚する。『パンデミック・ドラゴン』を選択」

『キュアアアアアン!』

パンデミック・ドラゴン：ATK 2500

「あ、ああああああああつ!?!」

「2体で……、ダイレクトアタック」

「ぐばああああああああああああああああああああああああつ!」

灼熱の炎が怪鳥と巨竜から放たれ、ブルー生徒を直撃する。2色の火炎放射は大地に生きる全ての命を蹂躪し、ライフが無くなった事を告げるブザーが鳴るまで男子生徒を火達磨にし続ける。

ソリッドヴィジョンで良かったと、後に少年は恐怖を述懐するのであった。



ブルー生 : LP 4000 ↓ 1600 ↓ 0

黎 : WIN

ブルー生 : LOSE

SIDE : フィオ

「今日の黎、かなり危なっかしいデュエルだったんだな」

「それだけ敗北が響いているのだろう。神山君の話では自信の根拠を否定されたいから、恐らくそれも原因かも知れんな」

授業が終わり、放課後。黎はレッド寮の崖下で打ち寄せる波をボーッと見ている。或いは物思いに耽っているのかも知れない。ただその周囲の岩肌には、彼の拳や蹴りによる破壊の痕跡が色濃く残っている。

頭上ではわたし達がそんな彼を見守っているのだが、それに気付くだけの余裕すら黎

には無いみたいだ。

「これだけの人数が集まって見ているのに気付かないとは……。心の傷は相当な物のようじゃのう」

「うわあ、しかもメツチャ荒れてるツス……」

「それだけ黎の精神状態が不安定という事なのでしようね」

「風紀委員として、何より友として何とかしたいの山々ですが……」

「ん……？ 見ろよ、あそこに着地した時の足跡がついてやがるぜ」

「普段の彼なら、考えられないですわ。もっと衝撃を分散させるように着地する方でしたのに」

「主殿……」

「……しかも破壊の仕方も粗雑。……あれじゃあ手足を痛める」

会話文は上から順番に隼人君、三沢君、ゆりっぺ、翔君、明日香、麗華、準ことサンダー君、ももえ、桜さん、ポーラ。

皆が皆、黎の事を心配している。だが彼には自分達では想像も及ばないような凄まじい過去がある。迂闊に踏み込んでしまえば逆効果になりかねない……。

「こういう状況になると、本当に何て声をかけたら良いのか分からない自分が不甲斐ねえ……」

「しょうがないよ。悔しいけど、僕らじゃあできる事に限度があるわ」

『クリ〜……。……。クリ? クリリ〜!』

「あん? どうした、相棒?」

齒軋りしながら状況に悔しがる神楽坂君を慰めるツアン。そんな中、十代君が『ハネクリボー』が何かに気付いた事を知る。

その小さなフサフサな毛玉モンスターが指差す先には一人の青髪の女性が歩いていた。

『クリクリ〜!』

「んー……。? あれ、フレイか?」

「え、フレイ? さっきから姿が見えないと思ったら、何であんな所に!」

そう、わたしの精霊、『勝利の導き手フレイヤ』ことフレイだ。

わたしが驚愕する中、フレイはスタスタと黎の真横に歩み寄った。

SIDE : 無し

「黎さん」

「フレイか……」

「墮ちたものだ、と黎は思った。普段なら誰かが近付けばすぐに気配で分かるというのに、今は彼女が話しかけてくるまで分からなかった。一応、気配の正体は人体の発する微弱な静電気なので、精霊にそれが適応されるのかは疑問だが。」

「波打ち際なんて見て、何か面白いものでも？」

「いや、特には……」

「でしたら、いつまでそうやって落ち込んでいるつもりなのです？」

その言葉は、黎の胸に深々と突き刺さった。

昨日の『ジョーカー』戦以来、自分の中に何か欠落しているような気がしてならない。最初はあの城の力かと思ったが、体内に異物は感じられない。ならばこの感覚の正体は自分の中に元々あったもの、ずっと己が目を背けてきたものだ。

そして黎は、その感覚の正体に薄々勘付いていた。

「二度や二度の敗北、誰にだってある事です。わたくしだって生まれてこの方一万年程、無敗ではありません。それは実力をつけた後もまた同じです。ここから立ち上がって、もつと強くなりましょう——」

「なあ、フレイ。お前はさ……」

フレイのセリフをぶった切って、黎が問う。

「お前は、人を殺した事ってあるか？」

それは、黎の今もつとも彼女に聞きたかつた質問だ。

自分より、否、現存するあらゆる生き物よりも長寿の彼女の人生経験の中に、この複雑な感情の解決方法があるのではないか、そう願つての事だった。

「……………ええ、ありますよ。ずっと昔に、数えるのも億劫なくらいに」

果たして、望み通りの答えが返つて来た。

「ですが、それが何なのですか？ わたくしは戦争のあつた時代を経験した身。黎さんとは勿論違う人生ですから、何か参考になるとも思えないのですが……」

「違う……。俺が聞きたいのは、殺しのスタンスとかじゃない。人にそれで憎まれた事があるかつて事だ」

黎は、転生する前に人を大量に殺した経験があった。フレイの言葉を借りるのなら、『数えるのも億劫なくらいに』殺した。

目を閉じれば、前世の事で思い出すのは常に血だ。今でも時々、目の前に血溜まりがあるんじゃないかというくらい血の臭いを錯覚しそうだった。手が血で真つ赤になつてんじゃないかと思いかけた。耳の奥には老若男女の悲鳴と断末魔が時折鳴り響き、液体を口に含めば血の味を感じた気がした。

「ちよつと、身の上話になつちまうが、聞いてくれるか？ いや、聞かなくていい。一人で勝手に話すから聞き流してくれても構わない」

「……………」

「俺はな、最低で最悪の殺人鬼だったんだよ。都を守るために、何人も殺したし、何人も重い後遺症が残るレベルで傷付けた。悲鳴を聞きながら高笑いした事もあるし、不必要な残虐性を以て殺した事もある。拷問という名目で大の大人を痛めつけて涙目になるのを見て快感を覚えたし、命乞いをして手を伸ばした奴の腕を肩から蹴り碎いた事もあった。顎を引き千切った事も、正中線で真つ二つにした事も、生きてる人間の目を抉った事も、悲鳴を聞きながら生爪を剥がした事もあった。

仲間達に異世界で見せた俺の記憶なんて……本当に、俺の一部、それも比較的綺麗な部分だけ。俺達が被害者のシーンだけだったんだよ。だから皆は俺に協力してくれた

んだ」

「……続けて下さい」

「俺が自分の事を化物って言うのは、何もこの体を指してだけの事じゃあ無いんだ……。俺の心には巢食つちまってるんだよ、人間を痛めつけて殺して泣かせて踏みにじって蹂躪する事に快楽を感じる、正真正銘の、救いようの無い化物が。」

……汚いよな、俺って。歩やライにそれを見せたら、きつと悲鳴を上げて逃げたか俺の事を退治しに来ただろうよ。

エンヴィーと戦った時、あいつ言ってたんだ。『騙すか同情を誘って共同戦線を張ったんだろう』って。実際その通りさ。俺は皆を騙してた。

優、有栖、有里ちゃん、『シユートイニング・ブレイザー』、真奈ちゃん、テネブラエ、輝、歩、奈美ちゃん、ライ、アルフ、エルフィ、ラルフ、レオさん、メリオルさん、『ゴーズ』、『カイエン』、『ギアフレーム』、『ピースキーパー』、『ダーク・ヴァルキュリア』、『フレイヤ』、『メイ……』

目を閉じれば、彼らの事を鮮明に思い出せる。

笑顔も、真剣な顔も。

だがそれは、いつの間にか黎自身に向けられているような錯覚がした。

「全員だ！俺は都合の悪い事を伝えずに、あいつら全員を騙したんだ！」

「それから？」

「騙っていたのはあいつらだけじゃない。このアカデミアにいる皆もだ……。卑怯だよな、俺って。でもさ、今更こんな事話したらどうなるよ？ あいつら俺の事を嫌って遠ざけて行くに決まってる」

「そんな、決めつけなくても……」

「分かるんだよ、人の心の汚い部分つてのが。綺麗で清い部分つてのは人それぞれだけど、汚い部分つてのは本納や欲求に基づいてるから大体同じなんだ。異端を恐れ、排斥する。怖い物は排除し、人殺しは遠ざけ、極悪人は死を以て償わせる。それが有史以来から続く人のサガなんだ……。俺にもいずれ、そういう運命が『また』やって来る。殺した人の数だけ無残な死の罰を、それが人の世の有り方なんだよ」

だから、と黎は続けた。

「いずれ遠くない内に、俺はまた、そういつた理由で絶対に死ぬ……。ポーラが言つてたのもそういう事だと思ふ。その時は……」



パアンツ！

黎が己の心の内側を吐露しきる前に、周囲に乾いた音が響き渡った。

そこではフレイが平手を振り切っていて、黎の頬が赤く腫れていた。

「黎さん、本当の本気でそれを言ってるのですか!？」

「今更、何言ってるやがる。俺がその手の冗談を好かない事ぐらい、知ってるだろ……」

「なら余計にタチ悪いですよ！ 自分の命がどれだけの重さがあるのか知らないのですか!？ 貴方が死んだら悲しむ人がどれだけいると思ってるんですか!？」

黎の胸倉を掴み上げて怒鳴るフレイ。

力を失った鬼は、そんな天使の言葉に乾いた笑いを返した。

「都一人、だろうな……。俺の本性を知っちゃえば、誰も俺に寄り付かなくなるさ。戦隊物の悪役が死んでも誰も泣かないのと同じ事だ。元々俺の命の重さは無いも同然なんだ……」

「……………つ、救いようが無いアホですね！ それなら皆さんに直接聞きましょう!？」

キツ！ とフレイは眉間に皺を寄せて崖上を睨む。普段温厚な彼女からは想像もできない険しい視線に、皆は思わず体を竦ませた。

「皆さん、そこから降りて来て下さい！ どうせ今の話聞いていたのでしよう!? この救いようの無いおバカさんをどうにかしてあげて下さいよ！」

有無を言わせない強制力。それだけの気迫が今の彼女にはあった。

そして、黎もその時になって漸くこちらを仲間達が覗いている事を知ったのだった。崖下に降りて来る皆を、黎は無感動な瞳で見ている。そんな彼に、フィオが話しかける。

「黎……、わたしは……」

「下手な慰めはいらない。本音を語ってくれ。……………今更だが、俺は化物だ。お前らが想像している俺は偶像、偽物だ。沢山の人を傷つけ殺し、それを喜ぶ魔獣、モンスターなんだよ。ハハ、プライドの言葉通りさ。生まれきてはいけなかった”。まさにその通りだ……」

「そ、そんな事無いよ！ 君はこれまで何度も私達を色々な面で助けてくれたじゃないか！ 勉強も、デュエルも！ 君がいたから沢山の人が救われたんだよ！」

フィオの後ろで十代達がうんうんと頷いている。

実際そうだ。彼がいたから自分達の学園生活はこんなに充実していて、楽しい。彼が

いなければこの格差社会染みた学園での楽しみは半減していたかも知れない。それは否定できない、ちゃんとした事実だ。しかし彼は首を横に振った。

「それは俺の偽善の心から生まれた副産物、いや、不純物だよ」

「不純物って……」

「言い間違いじゃない。俺の本性は破壊と殺戮。それでも僅かばかりの良心があつて、殺した人達に何か償えないかと考えたもんさ」

「そうして思い至ったのが、わたし達の相談に乗ったり、デュエルや勉強でのサポートだって事？ 君が以前話してくれた、誰かのための善行もそうだって言うの!？」

「そうだ。……誰かを救えば罪は軽くなる、なんて不純な心でやってたんだ。考えてみりゃあ、そんなのに報いがあるワケが無い」

何時もそうだった、と彼は呟く。

火災現場に単身突っ込んで人を助けたのも、空へ飛んでいった風船を取ったのも、強盗を現行犯で捕縛したのも、不良に絡まれた人を庇ったのも、全てそういう理由だ。

共に戦った転生者達を身を呈して守ったのも同じ。死なれば、自分が殺したように思ってしまう。だから庇った。死なれると、困るから。

せせこましい助命歎願。害した人のためでなく、自己保身の延長。

「そう、まさに自分のためだったんだよ……」

そう言うと、彼は岩へ腰を下ろし、俯いた。

「もう良いだろ……。疲れたよ、俺は」

「黎……」

「何だよ、何だって言うんだよ……。何で俺や都にばかりこういう事が起きるんだよ。何で他の誰でも無い俺なんだよ……。もう……。戦うのも嫌になる……。止めたいよ……」

それは、彼が生まれて初めて言う、泣き言だった。

伏せた表情からは、感情は読み取れない。それでも顔から滴が次々に零れていくは誰の目にも明らかだった。彼は今、絶望に負けて泣いているのだ。

「黎……。戦うのを止める気かい……。？ そんなの許されるわけ無いだろう！ 君が戦う事を諦めたら誰が世界の人達を、何より都ちゃんを救うんだ！」

「分かってる！」

分かつては、いた。

それでも。

「俺はよ……。どうして『ジョーカー』に勝てなかったのか、どうして今もなお不調なのか。実はとつくの昔に見当ついてるんだよ……」

「……なら、それを改善すれば良いんじゃない」

「それができねえから困ってるんだよ！ 俺が勝てなかった理由はなあ、俺の戦う理由が『守りたい』だけじゃ無いからだ！」

憎いんだ、と黎は顔を上げて、立ち上がって呟いた。

「憎い？」

「全てが憎いんだ……。心の奥底にしまった恨みと憎しみと怨念でできた炎が、未だに消えずに、衰える事も無く燃え盛っているんだよ。こんな仕打ちを俺達にする世界が、俺達を化物と駆逐する人間が、こんな体に生まれた運命が、都を守れなかった俺自身がこの身が引き裂かれそうな程に許せないんだ！ 憎いんだ！ ああそうさ！ 希望なんて溢れてねえよ！ 捻じて狂って曲がったネガな感情、怒りや恨みだってあるんだ！」

「そんなの誰にだって……。っ！」

「なら、全員これを見ろや！」

そう言つて黎は髪を何束にも分けて伸ばし、全員の頭を掴んだ。

「きやつ!」「わ!」「何だコレ!」「主殿!」「……サー、何を!」「黎、何する気だよ!」「そこから流れる、電流。彼の記憶の中でも特に汚いと思えるシーンを送り込む。一つとして余さず、欠片も残さずに。」

そして記憶が皆の頭に流れ始めた瞬間、それは起こった。

「きやああああああああつ!？」

「うわああああああああつ!？」

「な、何だこれ!？」

「こいつは……つ!？」

「ひ、酷い……」

「黎、お前は!？」

まるで自分の記憶のように脳内で再生されるムービー。そこに溢れる血、血、血、血、血……!

死山血河、阿鼻叫喚、地獄絵図。そんな狂気の中で狂喜する黎。それは今までに皆が見た事の無かった、まさしくモンスターとしての彼だった。

気の弱い者は胃の中身を吐瀉し、強い者でも足元がふらついて上手く立てない。隣同士で肩を支えなければ、全員座り込んでいただろう。

「これが……、俺なんだよ」

人は一生の間に3つの絶望を知るといふ。

愛してくれる者を失う絶望、愛する者を失う絶望、愛さえいらなくなった絶望。都を失った事で、黎はその3つを一度に経験したのだった。

そしてその時彼は知った。自分はどう頑張っても幸せを掴めない。ならばもうこの

憎悪の煉獄を心の中に宿し続けようと。

「俺はそんな負の想念を喰って殺してきた、生きてきた！ だから俺は上辺だけ光を受け入れて来たんだ！ 奥に、中に、あるドス黒い炎を光に消されたら、もう俺は戦えないから、都を助けに行けないから！ 受け入れちまっても、俺は光を糧にできない！ 力を失うどころか、もう闇も手に入らない！」

俺に光は使えない！ 闇も手に入らない！ そうなっちまったら、俺は何を力にして戦えば良いんだよお！ 答えてみるよ、何とか言ってみるよおっ！」

闇の炎が無くなれば、それはもう遊馬崎黎では無くなってしまふ。これまで殺した人々に顔向けもできない。光の宝玉を手にはできなかつたのは、或いはそういう理由もあるのかも知れない。

黎はどこまで行つても、闇に生きる凶悪にて凶暴、邪悪な魔獣なのだ。

「俺は化物なんだよ……、光の中じゃあ生きられないんだ……い！」  
力尽きたように、再び黎は岩に体重を落とす。既に彼には、戦うだけの力は、残っていなかった。

「……そつとしておいて、あげましょう」

誰かがそう言った。それを皮切りに、皆がそこから離れて行く。黎にとつては都合が良かった。いつまでもこんな惨めな姿を晒し続けていたくは無かつたからだ。

あんな酷い事をしたんだ、きつと仲間達は彼を見捨てただろう。それで良かった。元々黎は独りだから。誰かが居る事こそ異常だったのだから。

皆が彼を見離すように去る中、フレイだけは彼の後ろに、姿と気配を消して残り続けていた……。

「黎の奴……、あんなに苦しんでいたのか……」

『クリクリー……』

「水臭いなあ、少しは相談してほしかったツス……」



「でも、人のデリケートな部分に踏み込むのも問題なんだな……」

皆は、黎の事を見捨てていかなかった。

確かに黎が己の地獄のような過去を見せたのには驚いたが、それでも、彼を見捨てる事はできなかった。あの光景が真実ならば、それだけ黎はさつき苦しんでいたという事なのだから。そんな人を見捨てる事なんて、誰にもできなかったのだ。

「うぶ……、口の中が酸っぱい……」

「う、うさみん、大丈夫？」

「うん。だって、それだけ彼が悲しいって事だから……、これくらいで泣き言吐いちゃいけないよ」

「立派じゃのう、うさみんも、あの男も……。あれは自分を曝け出すという勇氣ある行動か、それともただの自暴自棄か……。前者である事を祈ろうか」

「ジュンコ、ももえ、立って歩ける？ 私はまだ足がガタガタ言ってるわ……」

「こっちは何とか……。ったく、あのバカ！ 何で全部、自分で抱え込んでんのよ！」

「もしかしたら、あまり信頼されていないのかも知れませんが……。悲しいですわ」

「黎の経験を考えれば、有り得なくも無いでしょうね。誰も信じられなくなるっていうのは鍛え上げた軍人でも発症するらしいから……」

「主殿……。我々にできる事など、無いのだろうか……」

「……分からない。でも、こういう大きな壁に、人は必ずぶつかる」

「それも……、そうだな。うむ、私達で乗り越えるまで守ろう」

「……うん」

「悪いな、三沢。肩貸してもらつちまってよ……」

「俺もお前の肩を借りている、お互い様だ。部屋まで送るぞ、神楽坂」

「頼む……」

「坊やは、別の意味で坊やだったみたいね」

「何それどういう意味、雪乃？」

「他人を頼れない内はまだ子供って事よ。まあ、私に負ぶわれている貴女もかしらね、

ツアン」

「しょうがないじゃん、腰抜けちやつたんだから！ 張り倒すよ!？」

「フィオさん、彼は……」

「何も言わないで、麗華。黎だつて機械の心を持つてるワケじゃないんだから、こういう事だつてあるよ……」

「そう、ですね。そういった崩れるメンタルがあるんですから、彼もまた……」

「ん。……黎、どれだけ化物だ何だつて主張しても、君は、やっぱり人間なんだね」

皆それぞれ心配しつつ、今は『何かするために』、『何もしない』事をする。干渉し過

ぎる事もまた逆効果だと悟ったからである。

しかしそんな中、フレイだけはその真逆の選択をしたのだった。

「黎さん、何時までそうやって不貞腐れているおつもりですか」

海岸に一人残ったフレイは、黎を、酷でも無理矢理立ち直らせようと荒治療する道を取る。或いはその差が普通の人間と長寿の精霊の彼女との違いなのかも知れない。

「フレイ……、ほつといてくれよ……。俺は別に勇者でも英雄でもねえんだ……。無理だったんだよ、最初から」

「諦めたら、そこで試合終了です。ヒーローだろうとモンスターだろうと何だろうと、貴方には戦い続ける義務があります」

「何だよ義務って……。何の権利を俺は代わりに行使できるんだ」

「そんな事、わたくしは知りませんよ。兎に角、こんな所で止める事は認められません。立って下さい」

「もう好いじゃねえか……。お前も知ってるだろ、俺の体はもうボロボロだって事ぐらい。もうそんな気力も無い、力も無い、未来も無い。結局俺は、どこ行ってもこれだ。希望も夢も無く、死んでいく定めなんだよ」

「そんな今から諦めて、マスターや義妹さんや十代さんはどうなるんです！ 見殺しにするつもりですか！」

「ああ……。もう俺にはそんなくらいしかできやしネエよ……」  
「っ……………」

流星のフレイも、ここまで戦いを拒否されるのは誤算だった。

黎にとつての都とは、前世において己の全てをかけて守った存在ではなかったのか。そんな彼女を亡き者にしようとしている邪神どもを、欠片も残さず滅しようとしていたのではなかったのか。

それがどうだ、この腑抜けようは。これがあの、時に寒気すら覚えさせる熱くも冷たい戦士だと言うのか。

「それが、貴方の答えですか…………っ！」

「仕方無いだろ……。所詮、化物には世界は救えなかっただけの話なんだよ。きつとまた新しい、もつと『らしい』転生者とかが来て、何とかしてくれるさ……」

「黎さんなら……。また立ち上がってくれと信じてましたのに……！」  
「……………」

「本当に、貴方には失望しましたよ、『騎士』の魂っ！」

『騎士』の魂。フレイは今、黎の事を名前でなくそう呼んだ。それだけ彼女は彼に失望しているという事だ。

憤怒の表情を最早隠そうともしない青髪の子は、腕にデュエルディスクを召喚し

た。

「構えなさい！ その腑抜けて折れたヘタレ根性、このわたくしが叩き直してあげます！」

「……………」

「それとも何ですか、もうデュエルする事すら嫌になりましたか！ ならばカードを今すぐ捨てて、このアカデミアから立ち去りなさい！」

フレイが叫ぶ。それは荒治療の一環か、はたまた彼女の怒りの本心か。

黎は、黙って立ち上がった。

「…………カードは、捨てない。こいつらは…………、俺と都が一緒の世界から来たっていう、唯一の証明なんだ。だから…………、だから…………！」

「ならばデュエルです！ 貴方にまだデュエリストとしての魂が欠片でも残っているのなら、この申し出を受ける事です！」

フレイが吠える。眉間に寄った皺の深さが、彼女の内心を表明している。

デュエリストの魂が何なのか、それは黎には分からない。でもここで逃げるのは、何か嫌だった。

デツキをディスクに差し込み、スイッチを入れる。それを見てフレイも改めてディスクを構える。

「さあ、行きますよ！」

「ああ……」

「デュエル！」

「デュエル……」

黎 VS フレイ

LP 4000 VS LP 4000

「先攻はわたくしです！ ドロー！ わたくしは『ジエネクス・ウンディーネ』を攻撃表示で召喚！」

ジエネクス・ウンディーネ：ATK 1200

先手はフレイ。最初に召喚したのは水生生物を思わせる青い機械だ。

「このカードは通常召喚に成功した時、デッキから水属性モンスターを1体墓地に送り、デッキから『ジエネクス・コントローラー』を手札に加える事ができます。その効果で

『黄泉ガエル』を墓地へ！

ジエネクス・ウンディーネ（効果モンスター）

星3

水属性／水族

ATK 1200 / DEF 600

このカードが召喚に成功した時、デッキから水属性モンスター1体を墓地へ送って発動できる。

デッキから「ジエネクス・コントローラー」1体を手札に加える。

「更にカードを1枚伏せてターンエンドです」

フレイ：LP 4000

手札：5枚（内1枚は『ジエネクス・コントローラー』）

フィールド

：ジエネクス・ウンディーネ（ATK 1200）

：伏せカード1枚

「俺のターン……」

力無くカードを引く黎。相手のフィールドを見ながら、黎はフレイのデッキの内容を推測できないでいた。

『黄泉ガエル』を墓地に送ったという事は十中八九あれを利用するつもりなのだろう。レベルは1だから恐らくシンクロ素材かりリース素材。だが魔法・罠が自分の場にあつては『黄泉ガエル』は自身の効果で特殊召喚できない。

果たして彼女は次のターン本当に『黄泉ガエル』を利用するつもりなのか。あのリバースカードは罠か、ブラフか。フリーチェーンで空けてくる可能性もある。そう思つて突っ込んで来たこちらを迎撃するためかも知れない。

(駄目だ、思考が纏まらない……)

普段の自分ならどうしていただろうか、そんな事すら分からない。

悩み続ける黎に対し、フレイが見下したように鼻で嗤う。

「さあ、どうしました。戦う事を止めたくせに長考ですか」

「く……っ、俺は『アンノウン・シンクロン』を特殊召喚。このカードは相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、1度だけ手札から特殊召喚できる……」



アンノウン・シンクロン : ATK 0

「更に『フェイク・ガードナー』を召喚……」

フェイク・ガードナー : DEF 2000

「レベル4の『ガード・マスター』に、レベル1の『アンノウン・シンクロン』をチューニング……」

リミッター解放、レベル5。レギュレーターオープン、スラスタウオームアップ、オーケー……。アツプリンク、オールクリア……。G O、シンクロ召喚」

☆1+☆4||☆5

「カモン、『TG ハイパー・ライブラリアン』……」  
『ハアッ!』

TG ハイパー・ライブラリアン : ATK 2400

黎とて、いくら腑抜けていたとしても歴戦の戦士『だった』男。腕はまだある。シンクロ召喚で呼び出したのは白と黒の服を羽織った学者風の司書。左手に本を持ち、マントを翻して参上する。

アンノウン・シンクロン（チューナー・効果モンスター）

星1

闇属性／機械族

ATK 0 / DEF 0

「アンノウン・シンクロン」の（1）の方法による特殊召喚はデュエル中に1度しかできない。

（1）：相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

TG ハイパー・ライブラリアン（シンクロ・効果モンスター）

星5

闇属性／魔法使い族

ATK 2400 / DEF 1800

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1) : このカードがフィールドに存在し、自分または相手が、このカード以外のSモンスターにS召喚に成功した場合に発動する。

このカードがフィールドに表側表示で存在する場合、自分はデッキから1枚ドローする。

「バトル、『ライブラリアン』で『ウンディーネ』を攻撃……。『ブラスト・スナップ』  
「無駄ですよ。速攻魔法『月の書』を発動！『ハイパー・ライブラリアン』を裏側守備  
表示にします！」

TG ハイパー・ライブラリアン : ATK 2400 ↓ セット (DEF 1800)

闇のエネルギーを右手に纏った司書が、青いロボットへと殴りかかる。しかしフレイのカードによって月の魔力を浴びせられ、その場でカードの姿になってしまった。

## 月の書

## 【速攻魔法】

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、裏側守備表示にする。

「ぐ……い！」

「『黄泉ガエル』が墓地にいるのなら、この伏せカードがフリーチェーンである事ぐらい推測できるでしょう。闇雲に突貫するのは愚策です」

「う……。俺はリバースカードを2枚出して、ターンエンド……」

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：セットモンスター1体（TG ハイパー・ライブラリアン：DEF 1800）  
 ：伏せカード2枚

黎の額に嫌な汗が流れる。またつまらないミスをしてしまった。これではあの時と、『ジョーカー』と戦った時と同じだ。

あの時の事が頭をもたげ、惨敗を繰り返してしまうのではという恐怖が心を支配する中、ターンがフレイへと回った。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 77 : 青髪の天使 後編

フレイ：LP 4000

手札：5枚（内1枚は『ジエネクス・コントローラー』）

フィールド

：ジエネクス・ウンディーネ（ATK 1200）

：魔法・罠無し

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：セットモンスター1体（TG ハイパー・ライブラリアン：DEF 1800）

：伏せカード2枚

SIDE：無し

レッド寮近くの崖の下、岩肌の剥き出しになった場所で行われているデュエル。自信と希望を失った黎へと怒る、フレイのターンが始まる。

「わたくしのターン、ドロー！ このスタンバイフェイズに、墓地の『黄泉ガエル』のモンスター効果発動！ 自分の場に魔法・罠・同名モンスターが存在しない場合、このカードを墓地から特殊召喚できるのです！」

『ケロケロッ！』

黄泉ガエル：ATK 100

地面に現れた紫の魔法陣から現れる、羽の生えた黄色のカエル。このカードそのものは凶悪では無いが、コンボパーツとしては極めて強い立ち位置だ。

黄泉ガエル（効果モンスター）

星1

水属性／水族

ATK 100 / DEF 100

自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罫カードが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

「そしてこの『黄泉ガエル』をリリースし、『氷帝メビウス』をアドバンス召喚！」  
『ゴアッ!』

氷帝メビウス：ATK 2400

「帝モンスター……、『ジエネクス帝』か!？」

「今更気付いても遅いですよ! 『メビウス』のモンスター効果発動! アドバンス召喚に成功した時、相手の場の魔法・罫を2枚まで破壊できるのです! フリーズ・バー

スト!!」

「うおっ!？」



氷帝メビウス（効果モンスター）

星6

水属性／水族

ATK 2400 / DEF 1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上の魔法・罠カードを2枚まで選択して破壊できる。

カエルと入れ替わる形で現れるマントを羽織った氷の化身。それが両腕を突き出すと黎のリバースカード『次元幽閉』と『ピンポイント・ガード』を尖った氷の柱が貫いた。

「これで邪魔な伏せカードはなくなりました。更に速攻魔法『帝王の凱旋』を発動！ 自らの場にアドバンス召喚された攻撃力2400、守備力1000のモンスターが存在する時、このターン2度通常召喚できます！ その効果により、前のターンに手札に加えた『ジェネクス・コントローラー』を召喚！」

ジェネクス・コントローラー（チューナー・通常モンスター）

星3

闇属性／機械族

ATK 1400 / DEF 1200

仲間達と心を通わせる事ができる、数少ないジエネクスのひとり。  
様々なエレメントの力をコントロールできるぞ。

ジエネクス・コントローラー：ATK 1400

「まだまだあー！ 魔法カード『帝王の施し』を発動です！ アドバンス召喚された帝ス  
テータスのモンスター1体のレベルを半分にし、カードを1枚ドロロー！ これで『メビ  
ウス』のレベルを6から3にします！ ただしこの効果を受けたモンスターは攻撃でき  
なくなり効果も無効となります！」

氷帝メビウス：☆6 ↓ 3

帝王の施し（オリジナル）

【通常魔法】

自分フィールド上に存在する攻撃力2400 / 守備力1000のアドバンス召喚さ

れたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのレベルを半分にし、デッキから1枚ドロウする。

この効果の対象となったモンスターは表側表示で存在する限り攻撃できなくなり、効果も無効となる。

「帝王の施し」は1ターンに1度しか発動できず、このカードを発動した次のターンに「帝王の施し」をプレイする事はできない。

「レベル3が3体……!」

「行きますよ、今の腑抜けた貴方にこれが耐えられますか!? レベル3の『ジエネクス・ウンディーネ』とレベル3になった『メビウス』に、レベル3の『ジエネクス・コントローラー』をチューニング!」

「合計レベルが9つて、まさか……!」

「集え氷結世界の封印龍! 眠る龍に宿りし槍となり、魔の三都を貫け!」

☆3+☆3+☆3=☆9

「シンクロ召喚! 吹雪の権化、『氷結界の龍トリシューラ!」

『ギイイイイイオオオオオオオン!』

幾何学模様のリングと光る星から錬成された三つ首のドラゴン。吹雪を撒き散らしながら咆哮をあげ、金色に輝く眼を光らせた。

氷結界の龍トリシユーラ：ATK 2700

「シンクロ召喚に成功した事により、『トリシユーラ』の効果発動です! 相手の場、手札、墓地のカードを1枚ずつまで選んでゲームから除外できます! この効果は『選ばない』事を選択でき、そもそも手札に対して対象を取る行為は存在しないため、対象を取りません!

選ぶのはこちらから見て左の手札、裏守備となった『ライブラリアン』、墓地の『フェイク・ガードナー』です! 『アイスエイジ・トライブラスト』!

3つの首から放たれた氷の砲撃が3枚のカードを凍てつかせる。対象となったカードは音を立てて凍り付き、派手な音を立てて砕け散った。

氷結界の龍トリシユーラ（シンクロ・効果モンスター）

水属性／ドラゴン族

ATK 2700 / DEF 2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ1枚までゲームから除外できる。

『カードガンナー』が……！』

「これで身を守る物は完全に無くなりました！ バトル！ 『トリシューラ』でダイレクトアタック！ 『トライデント・アイシクル』！」

『バトルフェーダー』を特殊召喚……っ！』

ボーン、ボーン！ ボーンボーン！

先刻より更に強力な氷のキャノンが放たれる。だが鐘の音と共に現れた小さな悪魔の奏でる音色によってその攻撃は止められてしまった。

バトルフェーダー（効果モンスター）

星1

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「そつちを狙うべきでしたか……。わたくしはこれでターンエンドです。そしてこの瞬間、『帝王の凱旋』の更なる効果を発動！」

「何?！」

「この効果を発動したターン中に通常召喚が2度行われており、その2体のモンスターの攻撃力、守備力、レベル、属性、種族の全てが異なる場合、エンドフェイズに2枚ドローできるのです！」

「『二重召喚』を使わなかった理由はそれか……!！」

帝王の凱旋（オリジナル）

【速攻魔法】

自分の場に攻撃力2400 / 守備力1000で、このターンにアドバンス召喚された

モンスターが存在する時に発動できる。

このターン通常召喚を2回まで行う事ができる。

また発動ターンに召喚に召喚された2体のモンスターの攻撃力、守備力、レベル、属性、種族が全て異なる場合、エンドフェイズ時にカードを2枚ドロワーできる。

この効果を発動するターンにアドバンス召喚されたモンスターが効果を発動していない場合、相手も2枚ドロワーし自分のライフポイントの数値分、相手のライフを回復する。

「1度目に召喚された『メビウス』は攻撃力2400で守備力は1000、レベルは6で水属性水族。2度目に召喚された『ジエネクス・コントローラー』は攻撃力1400で守備力は1200、レベル3で閥属性機械族。全て合致しません。よって2枚ドロワー！これで正真正銘のターンエンドです！」

フレイ：LP 4000

手札：5枚

フィールド

：氷結界の龍トリシューラ（ATK 2700）

：魔法・罨無し

「俺のターン、ドロー……！」

恐ろしい。素直に黎はそう思った。

1万年という時の中を潜り抜けて来た実力。それが今、自分の目の前にいる。何より、あれだけ派手に行動しておきながら彼女の手札は5枚と潤沢にあるのだ。それがフレイという名の歴戦の戦士の実力を如実に物語っている。

「魔法カード『強欲な壺』……。2枚ドロー……。更に『テイク・オーバー5』を発動、デッキから5枚を墓地に送る……。！」

【墓地に送られたカード】

『チューニング・サポーター』

『ライトロード・ハンター ライコウ』

『サイクロン』

『ニトロ・シンクロン』

『聖なるバリアーミラーフォース』



「『バトルフェーダー』をリリースして『サルベージ・ウオリアー』をアドバンス召喚……！」

『トオアツ！』

サルベージ・ウオリアー：ATK 1900

鐘をぶら下げた悪魔が虹色の光となつて消える。光は球体となつて中線から2つに割れ、そこから筋骨隆々の、フックのついた鎖を下げた大男が現れた。

「このカードが召喚に成功した時、手札または墓地からチューナーを1体特殊召喚できる。俺は『テイク・オーバー5』の効果で墓地に送られた『ニトロ・シンクロン』を特殊召喚……！」

『ニイ〜！』

ニトロ・シンクロン：ATK 300

サルベージ・ウオリアー（効果モンスター）

星5

水属性／戦士族

ATK 1900／DEF 1600

このカードがアドバンス召喚に成功した時、手札または自分の墓地からチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

ニトロ・シンクロン（チューナー・効果モンスター）

星2

炎属性／機械族

ATK 3000／DEF 1000

このカードが「ニトロ」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用された墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「レベル合計は7、となれば……」

「レベル5の『サルベージ・ウォリアー』に、レベル2の『ニトロ・シンクロン』をチューニング……！ 集いし願いが、ここに新たな力となる……。光差す道となれ……！」

☆5＋☆2＝☆7

「シンクロ召喚……。燃え上がれ、『ニトロ・ウォリアー』……!」  
『グガアアアッ!』

ニトロ・ウォリアー：ATK 2800

咆哮と共に光を掻き切つて登場する緑の爆薬戦士。背部のブースターを吹かして場に降り立つ。

ニトロ・ウォリアー（シンクロ・効果モンスター）

星7

炎属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 1800

「ニトロ・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、このカードの攻撃力はそのターンのダメージ計算時のみ1度だけ1000ポイントアップする。

また、このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊したダメージ計算後に発動できる。

相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を選択して攻撃表示にし、そのモンスターにもう1度だけ続けて攻撃できる。

『ニトロ・シンクロン』がニトロモンスターのシンクロ素材になった時、カードを1枚ドローできる……。

そしてバトル、『ニトロ・ウォリアー』で『トリシューラ』を攻撃……。ダイナマイト・ナツクル“……!”  
「むっ！」

フレイ：LP 4000↓3900

緑のオーラを纏った拳によって殴り倒される氷の龍。衝撃はその背後にいたフレイにまで伝わるが、それは余りにも微弱すぎた。

「今、わたくしの体に何か触れましたか？ この程度のダメージでは倒す前に日が暮れてしまいますよ」

「俺は……、カードを1枚伏せて、ターンエンド……」

黎：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：ニトロ・ウオリアー（ATK 2800）

：伏せカード1枚

「わたくしのターン、ドロー！ スタンバイフェイズに『黄泉ガエル』が復活！」

『ゲコゲコッ！』

黄泉ガエル：ATK 100

再び姿を現す羽のついたカエル。フレイは更にニヤリと笑いながら手札を切る。

「更に『黄泉ガエル』をリリースし、手札から速攻魔法『ミラーージュ・タクティクス』を発動！ このカードは自分の場のモンスターを1体リリースし、それと種族及び属性が同じモンスター1体を効果を無効にし、墓地から守備表示で特殊召喚します！ ただし

この効果で呼び戻したモンスターは相手によつて場を離れる場合、それと同時にわたくしにその守備力分のダメージを与えますが、『黄泉ガエル』は水属性水族！ よつて墓地から『メビウス』を呼び戻します！」

『トアッ！』

「更にまだこれはスタンバイフェイズ！ 『黄泉ガエル』が再び復活です！」

『ゲコゲコッ！』

「こ、これじゃあ『死者蘇生』とほぼ変わらないじゃないか……!?」

氷帝メビウス：DEF 1000

黄泉ガエル：DEF 100

ゲートを此岸から彼岸へ再び潜る両生類。それと交代して氷の権化が腕を交差させて復帰。そしてその後を続くように羽の生えたカエルがまた場に現れる。

ミラーージュ・タクティクス（オリジナル）

### 【速攻魔法】

自分の場に表側表示で存在するモンスターを1体リリースし、そのモンスターと同じ

種族・属性のモンスターを1体自分の墓地から守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターは効果が無効となり、相手によって場を離れた時にその元々の守備力分のダメージを受ける。

「更に『黄泉ガエル』をリリースし、『邪帝ガイウス』をアドバンス召喚！」  
『ジャゴオオオッ!』

邪帝ガイウス：ATK 2400

再び墓地へと舞い戻る黄色の両生類。それを踏み台にし、山羊の角を持った紫の魔人が現れる。

1ターン内に何度も行き来するカエルに憐憫を覚えかねない。

邪帝ガイウス（効果モンスター）

星6

闇属性／悪魔族

ATK 2400 / DEF 1000

このカードの生け贄召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード1枚を除外する。

除外したカードが闇属性モンスターカードだった場合、相手ライフに1000ポイントダメージを与える。

「『ガイウス』……!」

「モンスター効果発動! 場のカードを1枚除外し、それが闇属性モンスターなら相手に1000ポイントのダメージを与えます!」

更に手札から『イリユージョン・スナッチ』を特殊召喚! このカードは自分がアドバンス召喚した時、手札から特殊召喚できます! 更にレベル、種族、属性はそのモンスターと同じになります! もっとも、レベル以外は『ガイウス』と同じですけどね」

イリユージョン・スナッチ (効果モンスター)

星7

闇属性/悪魔族

ATK 2400 / DEF 1000

(1):自分がモンスターのアドバンス召喚に成功した時に発動できる。



このカードを手札から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードの種族・属性・レベルは、アドバンス召喚したそのモンスターと同じになる。

イリユージョン・スナッチ：ATK 2400 / ☆7 ↓ 6

「そして『ガイウス』の効果で『ニトロ・ウオリアー』を除外！ 炎属性なのでダメージはありませんが、場はこれで空になります！」

「『ニトロ・ウオリアー』……！」

「これで再びガラ空き。ですが油断はしませんよ？ 魔法カード『帝王の世代交代』を發動です！ 自分の場の帝ステータスのモンスターを墓地へ送り、墓地からモンスターを1体、効果を無効にして特殊召喚します！ 『メビウス』を墓地へ送り、蘇って下さい、

『トリシューラ』！」

『キイイイイイ！』

氷結界の龍トリシューラ：ATK 2700

帝王の世代交代（オリジナル）

【通常魔法】

自分フィールド上に存在する攻撃力2400／守備力1000のモンスター1体を墓地に送って発動する。

自分の墓地からモンスター1体を、モンスター効果を無効にし召喚条件を無視して特殊召喚する。

「……………」

「さ、これで攻撃力の合計値は7500、初期値のほぼ2倍です。バトル！ 『ガイウス』でダイレクトアタックです！ 『イーヴィル・デストロイ』！」

「リバースカード、オープン……………！ 永続罫『快進撃の代償』……………！ 自分の場にモンスターが存在せず、相手の場に攻撃力2000以上のモンスターが2体以上いてダイレクトアタックが宣言された時に発動できる……………。自分の墓地からモンスター1体を除外し、その攻撃力分ターン内のバトルダメージをダウンさせる。攻撃力1900の『サルベージ・ウオリアー』を除外……………！ ただしダメージが0になった瞬間、このカードは破壊される……………」

黎の開けた赤いカードの中へ溶け込んで行く大きなフックとチェーンを持った戦士。

それにより障壁が発生し、プレイヤーへの衝撃を削った。

黎：LP 4000↓3500

「ぬぐう……!」

「ならば2体のモンスターで追撃します!」

「ダメージは削られる……、ぐああああああああああつ!」

黎：LP 3500↓3000↓2200

「仕留めたと思ったんですがねえ……。わたくしはこれでバトル終了です」

「バトルフェイズ終了時に、『快進撃の代償』の更なる効果発動……! 2回以上ダイレクトアタックを受けたバトルフェイズ終了時にこのカードを墓地に送る事で、受けたダメージの回数2回につき1枚をドローする……!」

快進撃の代償（オリジナル）

【永続罫】

自分の場にモンスターが存在する場合、このカードを破壊する。相手の場に攻撃力2000以上のモンスターが2体以上存在し、ダイレクトアタックが宣言された時に発動できる。

自分の墓地からモンスターカードを1枚ゲームから除外し、その攻撃力分だけそのターンのバトルフェイズ時に受ける戦闘ダメージをダウンさせる。

この効果は1ターンに1度しか使えない。

自分が受ける戦闘ダメージが0となる場合、このカードを破壊する。

また2回以上ダイレクトアタックを受けたターンのバトルフェイズ終了時にこのカードを墓地に送る事で発動できる。

ダメージを受けた回数2回につき1枚カードをドロウする。

「ダメージを受けた回数は3回、よって1枚ドロウする……!」

「まだわたくしのターンは終わってませんよ。レベル6の『ガイウス』と『イリユージョ・スナッチ』でオーバーレイ! 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!」

「エクシーズ召喚！ 聖なる力にて龍を象り、星雲の彼方より煌めけ、『セイクリッド・トレミスM7』！」  
メシエセブン

セイクリッド・トレミスM7：ATK 2700

フレイはどれだけ状況が推移しても油断する事はしなかった。状況を鑑みて更なる援軍、白と金に輝く機械のドラゴンを銀河の渦を経由して呼び出したのだった。

「わたくしは『トレミス』の効果を発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、自分もしくは相手の場か墓地に存在するモンスター1体を手札に戻します！ その効果で素材として消費した『ガイウス』をそのまま墓地から手札へ！  
 バウンド！！」

セイクリッド・トレミスM7（エクシーズ・効果モンスター）  
 ランク6

光属性／機械族

ATK 2700 / DEF 2000

レベル6モンスター×2

このカードは「セイクリッド・トレミスM7」以外の自分フィールド上の「セイクリッド」と名のついたエクシーズモンスターの上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

この方法で特殊召喚した場合、このターンこのカードの効果は発動できない。

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、自分または相手のフィールド上・墓地のモンスター1体を選択して持ち主の手札に戻す。

セイクリッド・トレミスM7：ORU 2↓1

「カードを1枚セット。これでターンエンドです」

フレイ：L P 3900

手札：2枚（内1枚は『邪帝ガイウス』）

フィールド

：氷結界の龍トリシューラ（ATK 2700）、セイクリッド・トレミスM7（AT

K 2700・ORU：1）

：伏せカード1枚

「俺のターン、ドロロー……。このドロローフェイズに『テイク・オーバー5』を墓地から除外し、更に1枚ドロローする……」

「これで貴方の手札は3枚。さ、どうします?」

「……………」

黎は必死に考える。今の手札で何ができるか。今の自分に何ができるのか。

デュエルとは1対1の真剣勝負。勝つか負けるかの2つに1つしか未来は無い。今の自分に、この強敵を倒す事は不可能だろう。だがそれでも、無抵抗に敗北するのは何か嫌だった。

それがデュエリストの魂、なのだろうか?

「俺は……。魔法カード『アイメンション・チューン』を発動……。自分の場にモンスターが存在せず、自分のシンクロモンスターが2体以上除外されている場合、攻撃力の一番低い奴を特殊召喚できる。『ハイパー・ライブリアン』を呼び戻す……!」

TG ハイパー・ライブリアン : ATK 2400

「ただしこの効果で復帰したモンスターは、このターン攻撃できずシンクロ素材にもエクシーズ素材にもできない……」

デイメンション・チューン（オリジナル）

【通常魔法】

自分フィールド上にモンスターが存在せず、自分のシンクロモンスターが2体以上ゲームから除外されている場合に発動できる。

除外されている自分のシンクロモンスターの中で一番攻撃力が低いモンスターを1体特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚されたシンクロモンスターはこのターン攻撃できず、シンクロ素材にもエクシーズ素材にもできない。

「更に『ジャンク・シンクロン』を召喚……」

『ハッ！』

「効果で墓地の『チューニング・サポーター』を、更に自身の効果で手札から『ジャンク・サーバント』を特殊召喚……！」



ジャンク・シンクロン：ATK 1300

チューニング・サポーター：ATK 100

ジャンク・サーバント：ATK 1500

ジャンク・シンクロン（チューナー・効果モンスター）

星3

闇属性／戦士族

ATK 1300／DEF 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地のレベル2以下のモンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される

チューニング・サポーター（効果モンスター）

星1

光属性／機械族

ATK 100／DEF 300

このカードをシンクロ召喚に使用する場合、このカードはレベル2モンスターとして

扱う事ができる。

このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分分はデッキからカードを1枚ドロウする。

ジャンク・サーバント（効果モンスター）

星4

地属性／戦士族

ATK 1500 / DEF 1000

自分フィールド上に「ジャンク」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「レベルの合計は8……！」

「レベル4の『ジャンク・サーバント』とレベル1の『チューニング・サポーター』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング……。」

集いし願いが、怒号の魔人と呼ば覚ます……。光差す道となれ……。」

☆1+☆4+☆3=☆8

「シンクロ召喚……。粉碎せよ、『ジャンク・デストロイヤー』」

ジャンク・デストロイヤー：ATK 2600

「ほう、ここでそのカードを……」

「シンクロ召喚に成功した事で、3体のモンスター効果が発動……。チエーン3『ジャンク・デストロイヤー』の効果で、2枚のカードを破壊する。対象は『トリシューラ』と『トレミス』、『タイダル・エナジー』」

破壊の廃品パーツの魔人の胸元が光り、そこから溢れ出る怒涛の波。それにより氷の龍と光の機械龍が押し流されていった。

ジャンク・デストロイヤー（シンクロ・効果モンスター）

星8

地属性／戦士族

ATK 2600 / DEF 2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上のカードを選択して破壊できる。

「更にチェーン2の『ライブラリアン』とチェーン1の『チューニング・サポーター』の効果で1枚ずつ、合計2枚カードをドロロー……」

手札が2枚補充され、2枚だった手札が2枚にまで回復する。

フレイはこっそり目を細めた。デュエルをけしかけたのは正解だった。真剣勝負の中で、黎の中にある闘争本能に火が点き、デュエリストの魂が沈んだ心にアドレナリンをぶち込んでいるかの如く活性化を、再生を、戦う事を促している。

細胞に刻み込まれたデュエリストとしての本能が、黎に再び戦う事を要求している。血潮の滾る熱い戦い、命を削る殺し合い、血飛沫の飛ぶ争い。遺伝子レベルにまで刻み込まれたその記憶が、彼を覚醒させようとしているのだ。

(ですが……、まだ足りません)

そう、これでは足りないのだ。この程度の熱いデュエルなら十代にでも頼めばできただろう。重要なのはその奥深くにある、彼の心の鎖。闇に囚われ外に出る事を恐れる化物を光でも生きられるようにしなければならぬ。それにはどうしても彼自身の意識の变革が必要だった。

(わたくしにできるのはその手伝いが精々……。後は黎さん本人の問題、他人がどうこう言つて解決する事では無いのです)

「バトル……。『ジャンク・デストロイヤー』でダイレクトアタック、ズデストロイ・ナツクル”……！」

「畏発動、『帝国の英断』！ プレイヤーがバトルダメージを受ける時、手札のモンスターを1枚捨てる事で2枚ドローできます！ 更にこれで捨てたモンスターが帝ステータスなら1枚ドローを追加し、ダメージが2000を超えるのなら更に1枚追加します！ わたくしが捨てるのは『邪帝ガイウス』！ そして受けるダメージは2600！ よつて合計で4枚をドローします！」

「なっ!?!」

帝国の英断 (オリジナル)

【通常畏】

自分が戦闘ダメージを受ける時に発動できる。

手札のレベル6またはレベル8のモンスターカードを1枚捨てて2枚ドローする。

この効果で攻撃力2400 / 守備力1000のモンスターカードを捨てた場合、カードを更に1枚ドローする。

また攻撃モンスターの攻撃力が2000以上の場合、更にカードを1枚ドロウする。

「うぐう……っ！」

フレイ：LP 3900↓1300

「自分でダメージを受ける事を前提にカードを大量にドロウした……!?!」

黎は驚愕した。フレイのデュエルのスタンスは帝、つまり自分のターンで攻めるタイプのものだ。相手からの攻撃などをカウンターするといった受動的な物では無かった。

そして思いつく。これには何か意味があるのだと。

果たしてその想像は正鵠を射た。

「これは……!」

いつの間にか、周囲には攻撃時に発生する灰色の煙とは別に、紫の霧が漂っていたのだ。そしてどこからともなく響く、カッンカッンという靴の音。霧の中に影が生まれ、やがてその影には質量が生まれた。

「自分の場が空でダメージを受けた事により、このカードは特殊召喚できません。現れよ、

『冥府の使者ゴーズ』！ 更にダメージが戦闘ダメージだった事により、『カイエントー

クン』を特殊召喚です！ その能力値はダメージと同じ2600となります！」  
 「し、しまった！ 『ゴーズ』を握っていたのか……!?」

冥府の使者ゴーズ：ATK 2700

冥府の使者カイエントークン：ATK ? ↓ 2600 / DEF ? ↓ 2600

質量を持った影にやがて色がつき、バイザーを装着し尖った黒髪を持った男になる。その後ろから続くように白い兜を被った女性が鋭い目つきで睨むように現れた。

「さ、どうします?」

「俺は……、『グリード・グラード』を発動。相手シンクロモンスターを破壊したターン、2枚ドローできる……」

グリード・グラード

【速攻魔法】

自分が相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスターを戦闘またはカードの効果によって破壊したターンに発動することができる。

自分のデッキからカードを2枚ドロウする。

冥府の使者ゴーズ（効果モンスター）

星7

闇属性／悪魔族

ATK 2700 / DEF 2500

自分フィールド上にカードが存在しない場合、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。

●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星7・攻／守？）を1体特殊召喚する。

このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

●カードの効果によるダメージの場合、受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

冥府の使者カイエントークン（トークン）



星7

光属性／天使族

ATK ? / DEF ?

このトークンの攻撃力・守備力は、「冥府の使者ゴーズ」の特殊召喚する時にプレイヤーが受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

ギリリ、と黎は歯を軋ませる。よもや自分の手がここまで裏目に出してしまうとは思わなかった。

『ゴーズ』と『カイエン』の基本的な戦術はワンキル防止、壁の量産、『カイエン』による相撃ち、シンクロ・エクシーズ素材など幅広い。フレイのターンになれば更なるラッシュが待っている事は明白だが、それを阻止するカードは手札には無かった。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド……」

黎：LP 2200

手札：1枚

フィールド

・ジャンク・デストロイヤー（ATK 2600）、TG ハイパー・ライブラリアン

(ATK 2400)

：伏せカード2枚

「わたくしのターン、ドロ―！」

チャツ、と引いたカードを見て頷く。中々の良カードだ。

(後少し……。後少しで黎さんの心が見える、そんな気がします)

デュエルとは魂と魂のぶつかり合い、そう聞いた事がある。戦っている中、フレイは黎の心の中にある、光を受け入れられない「闇」に少しでも触れた気がしたのだった。

(闇属性、破壊効果、ハイパワー、代償。これが黎さんの心を暗示するのならば、成程、ただの光では黎さんにとっては毒ですね)

闇と光は相反する存在だが、互いに嫌悪し排斥し合うわけでは無い。

だが彼は違う。彼は闇に住み、光を拒んでいる。その理由を、フレイはデュエリストの直感で何となく理解し始めていた。

即ち、内側に潜む破壊や嗜虐、殺戮などに対する衝動と快楽だ。それらが存在するだけならまだしも、彼の人生をこれまで支えて来た重要なフアクターとなってしまうのである。それを取り除くという事は、これまでの黎の人生を否定する事に等しい。それは辛い経験を多く背負ってしまったている彼の心を破壊する行為だ。

「『黄泉ガエル』、復活！」

『ケロ……』

黄泉ガエル：ATK 100

「魔法カード『エンペラー・リボーン』を発動！ 自分の墓地から帝ステータスのモンスター1体を除外し、わたくしの場のモンスター1体をリリースして発動します。墓地から属性の等しくレベルの異なるモンスターを2体特殊召喚するのです！」

『メビウス』を除外し、『黄泉ガエル』をリリース！ 墓地から闇属性の『ジエネクス・コントローラー』と『ガイウス』を呼び戻します！」

エンペラー・リボーン（オリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地に存在する攻撃力2400／守備力1000のモンスターを1体ゲームから除外し、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターを1体リリースして発動する。

自分の墓地から属性が同じでレベルの異なるモンスターを2体特殊召喚する。

このカードを発動するターン、自分は通常召喚できない。

このカードを発動したターン終了時に「帝」と名のついたモンスターを召喚・特殊召喚していない場合、自分のライフを半分にする。

「エンペラー・リボーン」は1ターンに1度しか発動できない。

邪帝ガイウス：ATK 2400

ジェネクス・コントローラー：ATK 1400

「またレベル合計が9に……！」

「レベル6の闇属性『邪帝ガイウス』に、レベル3『ジェネクス・コントローラー』をチューニング！」

宇宙の彼方より走る鉄路から、黒煙を上げて只今到着！ 裏切りの客車を引き連れ、変形せよ黒き機関車！」

☆6＋☆3＝☆9

「シンクロ召喚！ 走り抜け、『リアル・ジェネクス・クロキシアン』！」

『ポォ——ッ!』

光の中から線路が突如として伸び、その上を漆黒のSLが走り、フレイの横へ到着すると見る間に姿が変形していき、タンクを腹部にした人型のロボとなった。

レアル・ジエネクス・クロキシアン：ATK 2500

「そのモンスターは……!」

「ええ、ご存知ですよ。一度使ってるんですけど。『クロキシアン』の効果発動! シンクロ召喚成功時、相手の場の最もレベルの高いモンスター1体のコントロールを奪うのです! 『ライブラリアン』はレベル5、『デストロイヤー』は8、よって『ジャンク・デストロイヤー』は頂きますよ! ブラック・ローバー!」

「く……!」 だが『ライブラリアン』の効果も発動……! シンクロ召喚が行われた時、1枚ドロウできる……!」

汽笛が鳴り響き、『クロキシアン』が汽車の姿へと戻る。そして線路にそって廃品パーツの魔人に横付けすると、客車の中へと魔人を載せてフレイの場へと帰って行った。

再び汽車がロボの姿を取った時、客車に乗っていた魔人もまたフレイの場に悠然と立っていた。

レアル・ジエネクス・クロキシアン（シンクロ・効果モンスター）

星9

閻属性／機械族

ATK 2500 / DEF 2000

「ジエネクス」と名のついたチューナー+チューナー以外の閻属性モンスター1体以上  
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のレベルが一番高いモンスター1体のコントロールを得る。

「これでわたくしの場のモンスターは4体、いずれもハイパワーな重量級モンスター。  
今度こそ終わりですよ！」

バトル！ まずは『クロキシアン』で『ライブリアン』を攻撃なのです！ ブラッ  
ク・スチーム・クラッシュ！！」

「畏発動……、『陰謀の盾』……！ 自分モンスター1体に装備され、装備モンスターは  
攻撃表示でいる限り、1ターンに1度、戦闘では破壊されない……！ そして、自分が  
受ける戦闘ダメージを0にする……！」

カードから天馬と盾の模様が施された金縁の盾が司書に装備される。

ガウン！ と派手な音を立ててその盾は機関車ロボの攻撃をしつかりと受け止めた。

陰謀の盾

【通常罠】

発動後このカードは装備カードとなり、自分フィールド上のモンスター1体に装備する。

装備モンスターが表側攻撃表示で存在する限り、1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

また、装備モンスターによって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

「悪くないです。が、2度目はありません！ 『カイエントークン』で攻撃！ 冥剣

陽の太刀”！」

「ぐっ……！ だが破壊のチェックはダメージ計算の後に入る……！ よって『陰謀の

盾』の効果により戦闘ダメージは受けないっ！」

『ハアアッ！』

『グオアッ!?!』

再び攻撃を受け止める盾。しかし先刻の重量あるパンチを受け止めて脆くなってい

たのか、刃を受け止めると同時に砕け散った。防具を失った司書は、返す刀で一太刀浴びせられ、倒れた。

「ですがわたくしにはまだ2体、攻撃できるモンスターがいます。貴方のライフは2200、どちらかの攻撃を受ければそこでジ・エンド」

「……………」

黎：LP 2200

ジャンク・デストロイヤー：ATK 2600

冥府の使者ゴーズ：ATK 2700

「『ゴーズ』でダイレクトアタックです！ 冥剣 陰の太刀“！”」

「……………つ、速攻魔法発動！ 『スケープ・ゴート』ッ！ 『羊トークン』を4体、自分の場に呼び出す……………！」

スケープ・ゴート

【速攻魔法】

このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚できない。



自分フィールド上に「羊トークン」(獣族・地・星1・攻/守0) 4体を守備表示で特殊召喚する。

このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

羊トークン：DEF 0

羊トークン：DEF 0

羊トークン：DEF 0

羊トークン：DEF 0

カードの光の中から現れる、丸い4色の羊。それが冥界の剣豪の剣の軌道を邪魔し、攻撃を止めた。

「壁を量産しますか。ならば残る2体で赤と黄色の『羊トークン』に攻撃です!」

「くっ!」

「ふふふふ、血が騒ぐ戦いこそデュエルの真価。こうでなくては張り合いがありません! わたくしはカードを2枚伏せてターンエンド!」

フレイ：LP 1300

手札：2枚

フィールド

：リアル・ジエネクス・クロキシアン（ATK 2500）、冥府の使者ゴーズ（ATK 2700）、冥府の使者カイエントークン（ATK 2600）、ジャンク・デストロイヤー（ATK 2600）  
：伏せカード2枚

「俺のターンだ」

黎は伏せカードを睨んだ。

これまでフレイが出したりバースカードは相手ターンで発動するカードばかり。ならばあれもそうなのだろう。ならば迂闊な行動は寧ろ自分の首を絞める結果になりかねない。

しかもフレイは毎ターン大型のモンスターを並べてくる。一息で全て薙ぎ払わないと、こちらがギリ貧になるだけだ。

だが、どうすれば良い？ 今の最前の一手は何だ？ 悪手は何だ？

（ダメだ、分からねえ……）

完全に弄ばれている。ジョーカーに凶星を指され目を背けて来た真実、それを突き付

けられ弱った心では直観は働かない。

今は、自分の思う通りに動こう。そう決めた黎は、手札を1枚切った。

「俺は魔法カード『リバース・シンクロリズム』を発動……！ 自分の墓地からレベル6以下のシンクロモンスター1体を除外し、合計値がそのレベルの半分以下になるように墓地からモンスターを特殊召喚する……！ 俺は墓地のレベル5『ハイパー・ライブリアン』を除外……」

「『ライブリアン』のレベルは5、つまりレベル合計は2……」

「俺はレベル1の『アンノウン・シンクロン』と『チューニング・サポーター』を特殊召喚……！」

『ピピピ！』

『ヤアツ！』

アンノウン・シンクロン：ATK 0

チューニング・サポーター：ATK 100

リバース・シンクロリズム（オリジナル）

【通常魔法】

自分の墓地に存在するレベル6以下のシンクロモンスター1体を除外して発動する。レベルの合計値がそのモンスターの半分以下になるように自分の墓地からモンスターを攻撃表示で特殊召喚する。

自分の墓地に「リバース・シンクロリズム」が存在する場合、このカードは発動できない。

「そして『ネクロ・ガードナー』を召喚……」

ネクロ・ガードナー：ATK 600

「レベル3の『ネクロ・ガードナー』とレベル1の『羊トークン』2体、レベル2として扱える『チューニング・サポーター』に、レベル1の『アンウン・シンクロン』をチューニング……!」

「素材5体でのシンクロ召喚……!」

赤い一つ目の丸いマシンが1つの星になる。星は幾何学模様の緑のリングになり、空へ飛び上がる。黒の鎧武者、橙と青の仔羊、中華鍋を被った小型ロボが合計7つの星になって空中へ上り、一列になってリングの中に並んだ。

「復讐と怨念の権化よ……。憎悪と怨恨の黒き炎に巻かれ、超常の力と共に悪魔となれ……!」

☆1+☆1+☆1+☆2+☆3||☆8

「シンクロ召喚……。現れろ、『メンタルスファイア・デーモン』……!」  
『ギガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

メンタルスファイア・デーモン : ATK 2700

グジャン! と光を大きな爪が引き裂き、その中から現れる悪魔。白い外骨格に覆われ、大きな翼が周囲に旋風を巻き起こした。

「そして『チューニング・サポーター』の効果で1枚ドロ……」

「何だ、やればできるじゃないですか」

「え?」

フレイの言葉に、理解できないといった風で黎は返した。

「貴方の中にはデュエリストとしての闘志が、まだちゃんと残ってるんですよ」

「フレイ……」

「貴方は確かに闇の獣なのでしよう。ですが、それでもデュエリストです。ならばこの戦いの中で、自身の生き方を見極めていけば良いだけの話です」

それは、黎にこれまで無かった考え方だ。闇の獣である自分には他の生き方はできない。ずっとそう考えていた。だがそれは間違いだったのだろうか。生き方を狭めていたのは自分だったのだろうか。

そして何より、見極められるだけの自分が、本当にあるのだろうか。

今の黎には、何も分からなかった。

「納得、できませんか？」

「分かんねえ……」

「なら、デュエルを続けましょう。答えはその中にあります」

「ああ……。バトル、『メンタルスフィア・デーモン』で『ジャンク・デストロイヤー』を攻撃。『サイコスフィア・ストリーム』……!」

両腕を胸の前にかざし、その間に集まる闇のエネルギーを球体に固める。それはそのまま砲丸投げのように寝返った廃品パーツの魔人を襲った。

「畏発動、『魔法の筒』! 相手モンスター1体の攻撃を無効にし、更にその攻撃力分のダメージを与えます!」

『メンタルスファイア・デーモン』のモンスター効果発動……。場のサイキック族1体を対象にした魔法・罠の発動を無効にし、破壊する……!」

### 魔法の筒

#### 【通常罠】

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

攻撃モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

メンタルスファイア・デーモン（シンクロ・効果モンスター）

星8

闇属性／サイキック族

ATK 2700 / DEF 2300

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

また、サイキック族モンスター1体を対象にする魔法・罠カードが発動した時、10

00ライフポイントを払って発動できる。  
その発動を無効にし破壊する。

黎：LP 2200↓1200

エネルギー弾の前に立ちはだかる赤い2本の筒。しかし『メンタルスファイア・デーモン』の体が赤いオーラで覆われ、それと同じオーラに包まれると、本来なら攻撃を吸収するそれは、入り口の反対側を突き破られてしまった。

「うぐっ！」

フレイ：LP 1300↓1200

『メンタルスファイア・デーモン』の効果は「サイキック族1体」なので「サイキック族2体」や「サイキック族1体+魔法や罠」などを対象とされてしまうと対処できなくなってしまうのが欠点であるが、その分『次元幽閉』や『強制脱出装置』などには強い。「更に『メンタルスファイア・デーモン』の効果発動。バトルで相手モンスターを破壊して墓地に送った時、その攻撃力分だけライフを回復する……！」『ジャンク・デストロイ



ヤー』の攻撃力2600ポイントをライフに加算する……」

黎：LP 1200↓3800

これでライフは完全に逆転。しかも太刀打ちできるのは攻撃力が同じ『ゴーズ』のみであり、『ガイウス』や『ライザー』を出されても自身の効果で後3度無効にできる。これで一先ずは安心できると黎は判断するが、直後に目を見張った。

フレイ：LP 1200↓3800

何とフレイのライフもまた回復し、自分のライフと並んだのだ。しかもさっきまで2枚だった手札が3枚に増えている。

「っ!? どういう、事だ……!?!」

「わたくしは『ジャンク・デストロイヤー』の破壊に合わせて罨カード『帝王の慰問』を発動していたのですよ」

「何……!?!」

「自分の場のモンスターがバトルで破壊された時、墓地の帝を1体除外し、破壊されたモ

ンスターの攻撃力分だけライフを回復し、1枚ドロートできるのです。これで墓地から『ガイウス』を除外し、わたくしもまた『ジャンク・デストロイヤー』の攻撃力2600をライフに加算したという事です」

帝王の慰問（オリジナル）

【通常畏】

自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘によって破壊され墓地に送られた時に発動できる。

自分の墓地から攻撃力2400／守備力10000のモンスター1体をゲームから除外し、破壊されたモンスターの元々の攻撃力分ライフを回復する。

その後、デッキからカードを1枚ドロートする。

「さ、どうします?」

「俺は……、カードを2枚伏せて、ターン終了……」

黎：LP 3800

手札：1枚

フィールド

：メンタルスファイア・デーモン（ATK 2700）

：伏せカード2枚

「わたくしのターン、ドロロー！ ……お見事ですよ、黎さん」  
「？」

「自信も戦意も勇氣も希望も喪失していながら尚もこのタクティクス。決して良いとは言えませんが、そのメンタルでこれだけやれば上出来です」

ですが、とフレイは続けた。

「それもここまでなのです！ 行きますよ、耐えられるものなら耐えてみなさい！」  
「っ！」

「スタンバイフェイズに『黄泉ガエル』を特殊召喚！」

黄泉ガエル：ATK 100

「『黄泉ガエル』をリリースし、『地帝グランマーグ』をアドバンス召喚！」

『ゴオオオッ！』

地帝グランマーグ：ATK 2400

何度も墓地からの行き来を繰り返すカエルが光となって消滅。そして同時に地面を砕いて巨大な腕が突き出て来る。腕はそのまま地盤を割り、中から黄色の岩のようにガツシリとした魔人としての姿を現した。

『グランマーグ』の効果発動です！ アドバンス召喚に成功した時、場のセットカードを1枚破壊します！ 対象はこちらから見て右の伏せカードです！ アース・ダツシャー！！」

岩の魔人が腕を振り下ろすと、岩の槍が大地から突き出るように走る。断層のように列を成す尖った岩石は、そのまま黎の『シンクロン・リフレクト』を破壊した。

地帝グランマーグ（効果モンスター）

星6

地属性／岩石族

ATK 2400／DEF 1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上にセットされたカード1枚

を選択して破壊する。

「う……………」

「まだまだ行きますよ！ カードを1枚セットし、『二重召喚』を発動です！ これでこのターン、わたくしはモンスターを2度召喚できます！ 『地帝グランマーグ』をリリース！」

フレイの宣言とともに、『グランマーグ』の鎧に罅が走る。そしてそれが砕けると同時に、中から更に一回り大きな岩の魔人が、マントを登場時の風圧になびかせながら現れた。

「出ですよ！ 『剛地帝ごうちていグランマーグ』！」

『グゴオオオオオオオオオオツ！』

剛地帝グランマーグ：ATK 2800

「このカードはアドバンス召喚されたモンスター1体のリリースで召喚できます！」

「……で上級帝……………」

剛地帝グランマーグ（効果モンスター）

星8

地属性／岩石族

ATK 2800 / DEF 1000

このカードはアドバンス召喚したモンスター1体をリリースしてアドバンス召喚でき  
きる。

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上にセットされたカードを2  
枚まで選択して破壊する。

このカードが地属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した場合、その  
時の効果に以下の効果を加える。

●デッキからカードを1枚ドローする。

「モンスター効果発動！ このカードがアドバンス召喚に成功した時、場のセットカ  
ードを2枚まで選択して破壊します！ わたくしの伏せカードと黎さんの残りのリバ  
ースカードを破壊！

更に地属性モンスターをリリースして召喚された場合、1枚ドローできます！  
ランド・コンクエスト！！」

ガン！ と地面を殴る大地の巨人。次の瞬間、フレイの宣言した伏せカードは破壊され、砕け散った。

「つ……！ だが破壊された『リミッター・ブレイク』の効果で、デッキから『スピード・ウオリアー』を特殊召喚する……！」

リミッター・ブレイク

【通常罫】

このカードが墓地へ送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から「スピード・ウオリアー」1体を特殊召喚する。

スピード・ウオリアー（効果モンスター）

星2

風属性／戦士族

ATK 900 / DEF 400

このカードの召喚に成功したターンのバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。  
このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる

スピード・ウオリアー：DEF 400

「無駄な足掻きです。こちらも破壊された『エンペラー・ライトニング』の効果発動！

セットされたこのカードがモンスター効果でフィールドから離れた時、カードを1枚ドロ―して再セットできます！」

「何?！」

「そして効果によりそのまま発動！ 場に表側表示で存在するカードを1枚破壊します！ 消えなさい、『メンタルスフィア・デーモン』！」

更にフレイの場に砕け散ったはずのカードが現れる。その姿は火花が集まるように再構築され、イラストから超能力の悪魔へ向けて大樹のように太い稲妻が走った。

エンペラー・ライトニング（オリジナル）

【通常罫】

(1)：自分フィールドにアドバンス召喚されたモンスターが存在する場合に発動できる。

フィールドに表側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

(2)：セットされたこのカードがモンスター効果によってフィールドを離れた時、この



カードを再セットする。

この効果でセットされたこのカードは、セットされたターンに発動できる。

「く……！ ライフを1000払って、『エンペラー・ライトニング』の発動を無効にし、破壊する……！」

黎：LP 3800↓2800

パアン！ と弾け飛ぶ電撃。しかしフレイの狙いは『メンタルスファイア・デーモン』の破壊では無く黎のライフを削る事だろう。

ジリ貧だ。黎は素直にそう思った。フレイの言っている上出来の戦略とは、あくまで黎の鬱やスランプ、イツプスとも表現できるこの精神状態においての事だ。彼女レベルの強敵相手ではコンスタントに勝てるタイプの、在り来たりの戦術では抵抗しきれない。

「フフフ。さて、伏せカードも無くなった今、壁は『メンタルスファイア・デーモン』と『ネクロ・ガードナー』、『スピード・ウォリアー』の3枚ですね」

「……っ！」

「バトル！ まずは『ゴーズ』で『メンタルスフィア・デーモン』と相撃ちにさせます！

〃冥剣 陰の太刀〃！」

「〃サイコスフィア・ストリーム〃……！」

互いに向き合う冥界の剣豪と白い悪魔。放たれた黒いエネルギー球に向けて正面から突っ込んだ剣豪は、剣で正面から真つ二つにし、悪魔の心臓を貫く。しかし無理矢理突破した際にダメージを負ったのか、彼もその場で倒れてしまった。

『メンタルスフィア・デーモン』の効果は自身がフィールドにいないため、相撃ちでは使えません。続いて『クロキシアン』で『スピード・ウォリアー』を攻撃！」

クリーム色のアーマーを着込んだ戦士が、機関車ロボの拳によって殴り倒される。

これで黎の場にモンスターはいなくなった。

「更に『剛地帝グランマーグ』でダイレクトアタック！ パワード・アース・インパクト！」

「ぼ、墓地の『ネクロ・ガードナー』を除外し、その攻撃を無効にする……！」

続いて振り下ろされる鋼と見紛う程の質量と硬度を持った拳。しかしそれは黒い武者が半透明の姿で現れ、腕を交叉して防いだ。

ネクロ・ガードナー（効果モンスター）

星3

闇属性／戦士族

ATK 600 / DEF 1300

相手ターン中に、墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

このターン、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「最後に『冥府の死者カイエントークン』でダイレクトアタック！  
 “冥剣 陽の太刀”

！」

「ぐ、あああああああああああああああああああああああつ！」

黎：LP 2800 ↓ 200

3度の攻撃を辛うじて防いだ黎。だが4度目の攻撃は直撃してしまう。白く輝く剣で胸元を切り裂かれ、ライフを大幅に削られ、吹っ飛ばされた。

『メンタルスフィア・デーモン』の効果でライフを回復していなければ危ない所でしたね？」

「ぐうっ……」

「わたくしはこれでターンエンドです」

フレイ：LP 3800

手札：1枚

フィールド

：剛地帝グランマーズ（ATK 2800）、リアル・ジエネクス・クロキシアン（ATK 2500）、冥府の使者カイエントークン（ATK 2600）

：魔法・罨無し

残った1枚の手札をフレイは見る。先程『剛地帝グランマーズ』の効果で補充したのは『風帝ライザー』、バウンス効果持ちだ。次のターン『黄泉ガエル』をリリースして召喚すれば、黎の場の邪魔なカードを1枚退けられる。つまり黎はこのターンでどうにかしない限り、ほぼ勝ち目は無いという事だ。

（年甲斐も無く、ちよつとワクワクしてますね。黎さんはどんな手を打って来るんでしょうか？）

だが、黎は一向にカードを引こうとしない。吹っ飛ばされて倒れたまま動こうとしない。

「黎さん……？」

不審に思つてフレイが声をかけると、黎は信じられない事を口走つた。

「俺の、負けだな……。降参だ……」

それは、デュエリストとして有るまじき言葉。ドローをする前に負けを認める行為。

「黎さん、何を言ってるんですか、貴方のターンなんですよ!? デツキが空になったわけでも無いのに、何を諦めているんですか! ドローしなさいよ! まだ可能性は残ってるんですよ!」

「無理だよ……」

そう言つて黎は手札を見せた。

『ソウル・コンヴェイ霊魂の護送船』。墓地の光属性モンスターを除外し、手札から特殊召喚できる悪魔族モンスターだ。

「これでどうしろと？ 次のドロウで何を引けと？ やっぱり俺には無理だったんだよ。どう足掻いても、俺はここまでだったんだ……」

「黎、さん……」

ここで自分の失敗にフレイは気付いた。ライフ差は3600、圧倒的だ。まず普通のメンタルなら十代でもない限り、勝利を諦める。ここで自分のするべきタクティクスは、黎の自信を取り戻すためにも彼が優勢になるようにするべきだったのだ。

しかし手を抜けば或いは勘付かかっていたかも知れない。となると力を入れて戦うしか無い。だがそんな事をすれば黎が劣性になってしまいうだろう。

そもそもデュエルをする事自体が或いはまずかったのだろうか。

自分では彼を元氣付ける事は無理だったのか。

(いえ、いえ！ 諦めたら、それこそ黎さんを元に戻せません！)

ふるふると首を振る。

自分から進んで彼を挑発し、デュエルにまで持ち込んだのだ。ならば黎を少しでも立ち直らせる義務が、自分にはある。

「諦めちゃダメです、黎さん！ そのデッキは黎さんが信じて組み上げたものなのでしよう!?!」 なら、最後の最後まで信じて戦わなくてはいけないのです!」

「だが、どうすれば良いんだ？ 俺に何ができる……?」

「何だってできますよ！ 貴方はこれまで無茶や無謀ともいえる戦いに全部勝って来たじゃないですか！ 仲間もいたのでしょう！ でも、貴方もまた、戦っていたのです！ 貴方がいたからこそ勝てた！ 貴方のこれまでを無駄にしちやダメです！ 貴方はこんな所で終わらない！ 最後のカードを引くのです！」

「でも……」

「デモもストも無いです！」

必死にフレイは黎へ呼びかける。それでも黎の反応は鈍い。

だが彼女が次に発した言葉は、黎の心に強いショックを与えた。

「貴方はまた義妹さんを死なせるつもりなのですか！」

その言葉に黎は息を呑んだ。

「都が、また死ぬ……！」

「立ち上がって下さい！　まだ間に合うんです！　貴方が戦えば！　貴方が勝てば！

今度は死なないんですよ、黎さん！」

「俺が、戦えば、都も生きられる……！」

カッと目を見開き、黎は立ち上がった。

「……………っ、俺のターン、ドロー！」

「以前のような生き生きとした力強さは無い。それでも些かマシンになったように見えた。」

引いたカードは……、『貪欲な壺』！

「魔法カード発動！　困った時の『貪欲な壺』！　墓地のモンスターを5体デッキに戻してシャッフルし、2枚ドローするっ」

貪欲な壺

【通常魔法】



自分の墓地のモンスター5体を選択して発動できる。

選択したモンスター5体をデッキに加えてシャッフルする。

その後、デッキからカードを2枚ドローする。

墓地から『メンタルスフィア・デーモン』、『ジャンク・デストロイヤー』、『アンノウ  
ン・シンクロン』、『ジャンク・シンクロン』、『ニトロ・シンクロン』が吐き出され、デッ  
キに戻る。

そして2枚が手札に新たに加わった。

「魔法カード『ブラック・ホール』を発動、フィールドのモンスターを全て破壊する……

！」

「ここでそんなカードを!? きやつ！」

フィールドに重力異常が生まれ、その内部へと全ての生命が引きずり込まれて行く。  
モンスター達の必死の抵抗も空しく、冥界の女剣士も、機関車ロボも、大地の巨人も吸  
い込まれて潰された。

「更に魔法カード『増援』! デッキから『ジャンク・シンクロン』を手札に加え、その  
まま召喚する……! 更に自身の効果で『チューニング・サポーター』を特殊召喚つ」

ブラック・ホール

【通常魔法】

フィールド上のモンスターを全て破壊する。

増援

【通常魔法】

デッキからレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加える

ジャンク・シンクロン：ATK 1300

チューニング・サポーター：ATK 1000

「そして墓地の『ライトロード・ハンター ライコウ』を除外し、『靈魂の護送船』を特  
殊召喚……!」

靈魂の護送船（効果モンスター）

星5

光属性／悪魔族

ATK 1900 / DEF 1000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する光属性モンスター1体をゲームから除外した場合に特殊召喚  
する事ができる。

靈魂の護送船 : ATK 1900

「レベル合計は9……。さあ、来なさい黎さん！今の貴方の有りつ丈を全部、この攻撃  
に注ぎ込むのです！」

「ああ……。レベル5の『靈魂の護送船』とレベル1の『チューニング・サポーター』  
に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング……！」

大海に佇む巨岩の城が、鬼を象り歩みだす……。希望が溢れる明日となれえ！」

☆3 + ☆1 + ☆5 = ☆9

「シンクロ召喚……。起き上がれ、『鬼岩城』っ！」

鬼岩城：ATK 2900

光と共に海岸近くの海が割れ、中からコケの生えた岩が、否、岩の体を持った巨人が現れた。その大きさをたるや雲にまで届きそうなレベルであり、こちらを見下ろすその姿は正しく威風堂々のそれだ。

『チューニング・サポーター』の効果で1枚ドロップ！ 更に『鬼岩城』はシンクロ素材にしたチューナー以外のモンスターの数×200ポイント、攻撃力と守備力がアップするっ！

「素材の数はチューナーを合わせて3体、という事は……」

鬼岩城：ATK 2900↓3300 / DEF 2800↓3200

「攻撃力3300！」

「バトル！ 『鬼岩城』でフレイにダイレクトアタック！」

「海破岩烈撃<sup>かいはがんれつげき</sup>」イ！」

「ぎやあああああああああああつ！」

フレイ：LP 3800↓500

振り下ろされる海をも天をも割る一撃。鬼の力を宿した岩の拳が、フレイを襲い、周囲の地面にクレーターを作りながら彼女を叩き伏せた。

ちよつとやり過ぎたかと黎が心配する中、服に付着したホコリを手で払い落としながらフレイがゆつくりと立ち上がる。その顔には満足気でありつつ凜々しい表情を浮かべていたのだった。

「ふう……、中々の一撃でしたよ」

「フレイ……」

「でもこの力はわたくしの言葉に心が反応して生まれた一瞬のブースト。普段からこれが出せないのなら、貴方はまだ立ち直ったとは言えません。何より、まだわたくしのライフは残っていますからね」

「ああ……。俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

鬼岩城（シンクロ・効果モンスター）

星9

地属性／岩石族

ATK 2900 / DEF 2800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードの攻撃力・守備力は、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数×200ポイントアップする。

黎：LP 200

手札：0枚

フィールド

：鬼岩城（ATK 3300）

：伏せカード1枚

「わたくしのターン、ドロー！ スタンバイフェイズに『黄泉ガエル』が蘇ります！」  
『ゲコオ……』

黄泉ガエル：ATK 100

流石に何度も復活して疲れが溜まって来たのか、羽の生えた黄色のカエルがグツタリしながら登場する。

そんなカエルの状態に苦笑いを浮かべつつ、フレイは前のターンから左手で持っていたカードを右手に持ち替えた。

「すみません、『黄泉ガエル』。これで最後ですから……。わたくしは『黄泉ガエル』をリリースし、『風帝ライザー』をアドバンス召喚です！」

風帝ライザー：ATK 2400

やっと仕事が終わる、という風な顔をしつつ光となって両生類が消える。そして代わりに現れたカードから緑の魔人が登場した。魔人は風を引き連れており、鎧と同じ色のマントを自分を中心に渦巻く竜巻に乗せながら構える。

風帝ライザー（効果モンスター）

星6

風属性／鳥獣族

ATK 2400／DEF 1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード1枚を選択して持ち主のデッキの一番上に戻す。

「そのモンスターは……！」

『ライザー』のモンスター効果発動です！ アドバンス召喚に成功した時、フィールドのカード1枚を持ち主のデッキトップに戻します！ 対象は『鬼岩城』！」

「そうはさせるか！ カウンター罠『神の宣告』！ 自分のライフを半分払い、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚、魔法・罠の発動を無効にして破壊する……！」

黎：LP 2000↓1000

竜巻の範囲を広げる風の魔人。しかし突如として空に暗雲が立ち込め、そこから降り注いだ雷に打たれる。変化しにくい窒素を自然界で唯一変化させられるその威力の前に、オゾン臭と共に倒れた。

神の宣告

【カウンター罠】

ライフポイントを半分払って発動できる。

魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか1つを無効



にし破壊する

「召喚が成立しなかった事により、『ライザー』の効果は発動しない。つまり『鬼岩城』はバウンスされない……!」

このターン既にフレイは召喚権を消費した。場に帝ステータスのモンスターがない今、『帝王の凱旋』は使えない。そして残る手札は1枚。

(よし、このターンは何とか凌げそうだ。手札1枚で『鬼岩城』ごと俺を倒す事はまず不可能のはず……!)

だが、フレイの不適な笑みの前に、彼の思惑は崩れ去った。

「お見事。この場で『神の宣告』とは、中々の良いカードです。普通の相手ならば終わっていたでしょう。」

ですが、わたくしを相手にするにはそれだけではダメです」

そう言つてフレイは最後の手札を見せる。このターンにドロウされたカードだ。

そのカードの色は緑。イラストには濃紺の肌の手が描かれており、その掌の中心から紫色の煙が噴き出している。闇の中から悪魔を呼び出す、故にそのカードの名前は

……。

「——っ!」

「魔法カード発動、『ダーク・コーリング』です！ 手札か墓地の決められた素材モンスターをゲームから除外し、悪魔族モンスターを融合召喚します！」

ダーク・コーリング

【通常魔法】

自分の手札・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、「ダーク・フュージョン」の効果でのみ特殊召喚できるその融合モンスター1体を「ダーク・フュージョン」による融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

「わたくしは墓地の悪魔族『冥府の使者ゴーズ』と、岩石族『剛地帝グランマーグ』をゲームから除外！

これがわたくしの最後の切り札です！ 出でよ、『E—HERO ダーク・ガイア』！  
『ギジヨオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

E—HERO ダーク・ガイア：ATK ？

闇の渦に吞まれる岩石の巨人と冥界の剣豪。そしてその中から赤い翼を羽ばたかせ、白い装甲に包まれた猛々しい悪魔が現れた。

「このカードの攻撃力は素材モンスターの数値の合計になります。『ゴーズ』の攻撃力は2700、『グランマーズ』は2800。よって攻撃力は……」

E—HERO ダーク・ガイア：ATK ? ↓5500

「そ、そんな!? ここで攻撃力5500のモンスターだなんて!」

「黎さんはよく善戦しましたよ、貴方の精神状態を考えれば大したものです。ですが、これでフィニッシュなのですよ! 『ダーク・ガイア』で『鬼岩城』を攻撃! ダーク・カタストロフ!」

彼我の差にある圧倒的な力の差を悟り、絶望する黎。そんな彼を誉めるフレイ。悪魔が頭上に手を掲げ、その先で闇色に渦巻く大地の力が一点に圧縮されて放たれる。圧縮されたそれは巨大な砲弾となって暴力的なまでに威力が高まり、岩の城を粉微塵に粉砕した。

「うあああああああああああああああああああああああああああつ!」

黎：LP 100↓0

フレイ：WIN

黎：LOSE

E—HERO ダーク・ガイア（融合・効果モンスター）

星8

地属性／悪魔族

ATK ? / DEF 0

悪魔族モンスター＋岩石族モンスター

このカードは「ダーク・フュージョン」の効果でのみ特殊召喚できる。

このカードの元々の攻撃力は、このカードの融合素材としたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

このカードの攻撃宣言時、相手フィールド上に守備表示で存在する全てのモンスターを表側攻撃表示にできる。

この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。

「立てますか？」

「ああ……」

衝撃に吹き飛ばされて尻餅をついた黎の手を、フレイが優しく取った。それに縋るように黎は立ち上がろうとし、そこで動きを止めた。

「どうしました？」

「フレイ……。俺は本当に復活できるのか？」

気弱な質問だった。デュエルの途中で燃え上がった炎は、今は静まっているようだ。

「そんな事、わたくしには分かりませんよ」

「え……？」

「ただ、黎さんが力を失ったのは、自分の中にある闇の力に正直になれなかったからです。その力を肯定し、そして光の世界とも向き合う。それがミスター『ジョーカー』の

仰っていた。『闇と向き合う』事なのではないでしょうか？

ふと、黎は自分の胸へ視線を向けた。

心の中にある闇と向き合い、否定しない。この光の世界の中で、この嗜虐と殺戮と狂気の力を。

「元々、その3つの感情は大なり小なり人に元々必要だから備わったものなのです。己の身を守るため、誰かを助けるため。純粋な光や闇だけでは、そういった事はできないのですから。」

だからこそ、人はその2つを合わせたものを心の内側に持つのです。光と闇が混ざって生まれる混沌、カオス。それこそが人が最も人らしい感情と共に行動できる、とても重要な力の源なのですよ」

「カオス……」

「二種類の力ではすぐに限界が来ます。機械だって部品一つじゃ動きませんし、人間だって何種類もの栄養素が必要なと同じ事です」

「……………」

「わたくしにできるのはここまでです。後はご自分で、ね？」

光を受け入れ、闇も受け入れ、自分の中で力にする。2つを1つにするなんて、考えた事も無かった。

カオス。黎は何かが見えたような、そんな気がしたのだった。

「ふう、長生きも悪くはありませんが、先達者としてやる事が増えるのは大変です」  
黎と別れて主であるフィオの下へと向かう森の中で、フレイは独り言ちた。

彼女が生まれた時代、精霊界は正しく混沌と混乱の真ただ中だった。母の顔も知らず、そもそも自分が本当に母親のお腹から生まれたのかも知らずに戦士となり、戦争の

中を必死になつて生き抜いた。当時は戦う事が当然の事だと思つていたので。

時に敵陣に切り込み、時に塹壕に潜つて防衛線に徹し、時に医療班として治療を行い、時にスパイとして情報を流したりもした。

殲滅戦、電撃戦、打撃戦、防衛線、包圍戦、突破戦、退却戦、掃討戦、撤退戦。戦とつくものは粗方経験した。

平原、街道、塹壕、草原、凍土、砂漠、海上、海底、空中、泥中、湿原、火口。戦える場所やそこでのやり方も知り尽くした。

戦車も操つた、銃剣も手に取つた、爆弾も放り投げた、列車砲のスイッチも押した、軍服だつて着た、軍靴ぐんかだつて履いた。

一兵卒だつた事もある。中隊長だつた事もある。指揮官だつた事もある。敗残兵になつた事も、捕虜を拷問した事も、恐慌状態に陥りかけた事もある。

全ては9000年以上前の事でありながら、今でも鮮烈に思い出せた。

隣で銃を構えていた上官の頭が吹っ飛ばされた事。密かに慕つていた部下が刺殺された事。守ろうとした街が焼野原にされた事。友人が餓えて命を落とした事。

そしてそんな剣林彈雨の中で我武者羅にいくつもの功績を立て続け、いつの日か、一兵卒だつたはずのフレイは將軍となつていた。

「全部、昔の話です」



黎よりも多くの経験を、彼女は積んでいた。でもその時の自分は『軍隊』に所属し味方がいたのだ。彼は独りぼっちだった。この違いが何を意味するのか、それはフレイでも全てでは分からない。

でもだからこそ、彼が闇を抱えている事や享楽を恐れている事を理解できた。

「ダテや酔狂で一万年生きてるわけじゃ無いのですよ」

それでも、彼を完全に立ち直らせる事はできない。

自分がやったのは、彼に手を差し伸べただけ。この手を取って、彼が立ち上がるかどうかは分からない。これまで己の心を覆っていた殻を破る事は彼自身にしかできないのだ。

それでも、黎がああ強さを再び手に入れると信じて、フレイは歩く。やれる事は全部やった。後は黎次第と言える。

とその時、携帯端末に連絡が入った。

「おや、桜さんから連絡とは珍しい」

基本的に黎の傍にいて、彼を見守っているのが仕事と豪語するのが彼女だ。そんな彼女が仕事を放棄して電話とは思ひ、すぐに彼女もまたあの場から立ち去った一人だと思ひ出す。

ボディガードが何やってるんだ、と内心で突っ込みを入れつつ受信ボタンを押した。

「はいもしもし。どうしました桜さん？」

『フレイか？ 悪いが少々力を貸してくれ。厄介な事になりそうだ』

『……私達だけじゃ、人手が足りない。……後もう一人、力が必要』

電話口の桜は、やや焦っているようにも思えた。ポーラも一緒なのか声がするが、彼女の声も真面目なものだった。

「ふむ、穏やかでは無さそうですね……。その厄介な事とは？」

『合流してから話す。兎に角、私とポーラの気配を探してこつちに来てくれ。頼む！』

『……できれば大至急。……普段なら何て事無い案件なのに、今のサーの状態じゃあまズいかも知れない』

それだけ言うと、桜達は電話を切った。

通信を終えた画面を見てフレイが肩を竦める。

「やれやれ、まだ行くなんて、一言も言っていないんですがねえ……」

しかし黎に関する事というのならば放置はできない。

まあ惚れた弱みって事で、とフレイはフィオに帰宅が遅れる旨をメールで送り、桜とポーラの下へ向かうのだった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 78 : 精霊三銃士

SIDE : 無し

連絡を受けたフレイは、森の中を桜とポーラの気配だけを頼りに進んでいた。目印も無しという事は何か隠れる理由があるのだろう。そう考えたフレイは、地面から10センチ程浮いて移動している。小枝などを踏んで音を立てないためだ。

「ウキッ！」

「あら。こんにちは、お猿さん」

「ウキッキ！」

「え、あの薬草、そんな所に生えているんですか。ありがとうございます。今度またバナナ持って行きますね」

「ウキキキッ！」

「ええ、またデュエルしましょう。今度も勝ちますよー！」

「ウワツホオ、ウツキーー！」

「はい、また今度。さよなら、皆さんによりしくお願いします」

とまあ、以前実験体にされていた猿の仲間と道中会話しつつ、フレイは木の陰に隠れていた桜達と合流した。

「桜さん、ポーラさん、お待ちせしました」

「ああ、来てくれてありがとう」

「……早速だけど、アレ見て」

ポーラが指を差す先には、小さな森の広場があつた。位置的にはレッド寮から徒歩5分くらいか。女子寮へ向かおうとしたフレイからは随分遠く感じられたが、どうやらそうでも無かつたらしい。よく見れば黎が異世界へ転移する際に利用している空間だった。

そこにいたのは……。

「あれは……、ブルーの男子生徒？」

人数は6人。いずれも寮による差別を肯定し、それを利用して威張り散らしていた人物だと記憶している。

「うむ、森の中のあの広場でポーラとこれからを話し合おうと思つたら先客がいてな」

「……話をこっそり聞いていたら、剣呑な雰囲気だったから」

盗み聞きしたのか、とは突つ込まない。寧ろフレイも会話の内容を聞き取るべく耳を

澄ませた。

『つまり要約すると、あの化物野郎は今調子が出ないから、ボコボコにして晒し者にしようって事だな?』

『ああ。このタイミングで奴を叩き潰せばこのおかしな風潮も無くなる。俺様達の楽園が戻って来るって寸法よ』

『成程。あの男のせいでおれ達が手狭な思いをしていたのも確かだしな。その計画乗った!』

『ムカつく田中達にも一泡吹かせて、オレらの地位も安泰ってワケだ』

『ヒヒヒヒヒヒ、見てろよカスレッドにクズイエロー、ザコ女どもにブルーの面汚しが!』

お前らはもう終わりだぜ!』

「——成程。吐き気がする程に低能な連中ですね」

「だろう? こんな開けた場所で作戦会議などするから猶更だ」

「……本当に頭が良いのか疑わしい」

作戦内容はただの奇襲。黎を目立つ場所に誘い出し、そこでボコる。単純に過ぎる。

確かに晒し者にすれば効果的だろうが、生憎と黎の不調は仲間内に知れ渡っている。しかも幸か不幸か、黎の不調が心因性であり、極めて重症である事もだ。

これではただのリンチ程度にしか映らないだろう。結果として得られる効果は恐ら

く薄い。

呆れる3人の前で、6人の中で一人だけ顔を渡らせている男がいた。

『果たしてそれで良いのだろうか？』

『あ？』

疑問の声をあげたのは金髪の眩しい男、白石光一だった。ちなみに地毛らしい。

『ンだよ白石、テメエまで田中達に味方するつてのかよ』

『そうは言わぬ。……だが、我々のやり方が果たして合っているのかどうか、最近確信が持てないでいてな』

『オイ、チキツてるんじゃないやネエぞコラ？　ここで奴らを潰さねえとオレらが危ねえんだよ。腐ったリングも、腐敗させる虫も、早い内に駆除しねえと、優秀なモンまで腐っちゃまうじゃねえか。分かってんのかゴラ？』

『理解していないワケでは無い』

『なら——』

『だが正しいとも思えんのだ。私が所属している属性六人衆を見てみる。他の5人は最初から色に関係無く他者に接し、カツアゲから守っている。そしてその見返りとしてレッドやイエローから使われないカードを譲り受けたりトレードをしたりしている。そんなギブ・アンド・テイクの関係ではいかんのか？　私もその方法を取るようになって

暫く経つが、不便は全く感じていない。アカデミア以外の学校がどうなのかは知らんが、こんな差別制度そうそう有るものではないと思うぞ』

『白石、テメエ……！ 裏切るつもりか！』

『まあそう怒るな高田。私もまたこの階級制度から恩恵を貰っていた身。この作戦にぐらいは乗ってやろう。その後は……、知らん。私を引き留めたいのなら、努力してくれ』  
『お前は誰よりも輝きたいんじゃないかねえのかよ！ おれ達を裏切ってそんな輝きが手に入ると思うなよ！』

『私は寧ろ、お前達とツルんだ分だけ輝きが弱まると思うのだが……』

他の5人から睨まれても動じない白石。どうやら決別の覚悟はとうに済ませているようだ。

それを見ていた桜達は感心したように頷いた。

「ふむ、なかなかどうして気骨のある男だ。残りの連中は……、まあ愚かただけ言うておこうか」

「人を見下せばいつかしつぺ返しが来るのが人の世の定め。残りの5人が将来どうなるかは自明の理です」

「……きつと社会の荒波に揉まれて見下す相手もない、寂しい人生を送ると思う」  
鋭い毒舌で正鶴を射ている3人であった。

暫く様子を見ていた桜達だったが、やがてあちらも話が纏まったのか立ち上がり腕にデュエルディスクを装着した。

「そろそろわたくし達も出ましょう。スペース的には森の外に出たタイミングが良いですね」

「……彼ら全員を仕留めるのは、今のサーには難題。……だから私達がどうにかしなくちゃいけない」

「うむ。行くぞ、2人とも。しくじるなよ？ 我々が何としてでもここで止めるぞー！」  
ガサガサと藪を突き破り、森を出るブルーの前に、桜達が立ち塞がる。

桜は剣を、ポーラは雪の結晶の盾を、フレイは鋭く振り下ろした踵を地面に突き立てた。言外に「ここから先は通さない」と言っているのだ。

素手で勝てる相手では無い。そう直感しビビった男達だったが、自分達は誇りと名譽と栄光あるオベリスクブルーの生徒。たった3人女相手に退却など有り得ない。見栄を張つて脅し、無理矢理にでも通る事にした。

「な、何だお前ら！ そこをどけー！」

「断る。ここは通さん」

「なんだとお!? 貴様らには関係無いだろうが！」

「……関係ある。……サーに手は出させない」



「あ!? ってテメエら、あの化物とよく一緒にいる女達じゃねえか!」

「邪魔すんじやねえよクソアマ共が! オレらの用事が果たせねえじゃねえか!」

「その用事を邪魔するためにいるのですから、当然です」

「この……。誰に向かってんな口聞いてやがる!」

「つたく、五月蠅い連中だ」

「……話があるのなら」

「これで筋を通しなさい」

ジャキン、とデュエルディスクを展開する桜、フレイ、ポーラ。

「おい、デュエルしろ」

「……デュエルで決着つけよう」

「わたくし達とデュエルです!」

ニヤ、と3人が不敵に笑う。一瞬呆気にとられるが、すぐにこれなら暴力に訴えなくても良い——要するに負け戦にならないのだと理解した。

白石を除く5人はすぐに、白石は空気を読んで渋々とディスクのスイッチを入れる。

「上等だ女ア! 捻り潰してやらあ!」

「オレらに喧嘩売った事を後悔させてやる!」

「ま、俺様達の勝ちが決まっているがな!」

「おれらが勝つたらお前らに何させようかな……、グフフフフ！」

「ヒヒヒヒ、さあてレアカードを寄越す準備はできたか？」

（やれやれ……。これでこいつらが友人だと思おうと頭が痛い）

苦労性なのか、将来胃に穴が開きそうな白石にちよつと同情しかねなかった。

「形式は2対1を3戦同時に、変則タッグデュエルのルールで行う。貴様らの中で2人タッグを組み、こちらの1人と戦ってもらうぞ」

「ライフポイントはそれぞれ4000、こちらのライフかそちら2人のライフが尽きたら、その時点でデュエル終了です」

「……生き残った人のみ、この先に進める。……私達は勝者には手を出さない事を約束する。……逆に私達のライフを0にできなければ、ここで帰ってもらう。……以上」

「」「上等！」「」

「はあ……」

「行くぞ！」

「行きますよ！」

「……行かせてもらう」

「ぶっ潰す！」

「吠え面かきやがれ！」

「泣いても知らねえぞ！」

「この勝負貰ったぜ！」

「レアカードを寄越せえ！」

「頭と胃が痛い……」

「我が名は桜、参る！」

「俺様は高田！ おおし、行くぜえ！」

「白石だ。いざ！」

桜 VS 高田 & 白石

「フレイと申します。手加減はしませんよ！」

「襟山えりやまだ！ オレの強さの前に屈服しろお！」

「おれは糸杉いとすぎ！ ブルーの安寧のために潰させてもらおう！」

フレイ VS 襟山 & 糸杉

「……ポーラ。……語るのならデュエルで」

「座水ざすいつつーモンだ！ レアカードを全部ぜんぶ寄せせ！」

「古川ふるかわの名を覚えとけ！ グフフフフ！」

ポーラ VS 座水 & 古川

『『デュエル！』』』

桜・フレイ・ポーラ VS オベリスクブルー6人

LP 4000×3 VS LP 4000×6

SIDE：桜

「まずは私のターンから行くぞ、ドロー！」

バトルロイヤルルールでは各プレイヤーは最初のターン攻撃できん。

だが、この程度の連中相手ならばそれは足枷にはならない。教えてやろう、この私の実力というものを！

「私は手札から2枚の永続魔法『世界樹』と『種子弾丸』を発動！」

私のフィールドに2種類の植物が生える。片や見上げる程大きな大木、片やアザミのように刺々しい葉をつけた蕾。

『種子弾丸』は植物族が表側表示で場に現れる度にプラントカウンターを、『世界樹』は植物族モンスターの破壊される度にフラワーカウンターをそれぞれ1つずつ乗せる。

私は『イービル・ソーン』を召喚！そして『種子弾丸』にプラントカウンターが1つ乗る！」

イービル・ソーン：ATK 100

種子弾丸：プラントカウンター 0↓1

種子弾丸

【永続魔法】

植物族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚される度に、このカードにプラントカウンターを1つ置く（最大5つまで）。

フィールド上に存在するこのカードを墓地へ送る事で、このカードに乗っているプラントカウンターの数×500ポイントダメージを相手ライフに与える。

### 世界樹

#### 【永続魔法】

フィールド上の植物族モンスターが破壊される度に、このカードにフラワーカウンターを一つ置く。

また、このカードに乗っているフラワーカウンターを任意の個数取り除いて以下の効果を発動できる。

- 1つ：フィールド上の植物族モンスター1体を選択し、その攻撃力・守備力をエンドフェイズ時まで400ポイントアップする。
- 2つ：フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。
- 3つ：自分の墓地の植物族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

「更に効果発動！ このカードをリリースし、相手に300ポイントのダメージを与える！ 対象は貴様だ、高田！」

「うっ！」

高田 : LP 4000 ↓ 3700

起爆する棘のついた実。鋭いニードルが敵を襲い、ライフを微量だが削り取った。一方でその実をつけていた植物本体の方は枯れてしまった。

「ケツ、たつた300ダメージ！ 無駄な抵抗だな！」

「慌てるな、ダメージ効果はおまけだ。『イービル・ソーン』の更なる効果！ デッキから同じ名前のモンスターを2体特殊召喚する！ 現れる、2体の『イービル・ソーン』！」

イービル・ソーン : ATK 100

イービル・ソーン : ATK 100

種子弾丸 : プラントカウンター 1 ↓ 2

「何、モンスターが増殖しただと!?!」

「ただしこの効果で特殊召喚したモンスターは効果を発動できない」

イービル・ソーン (効果モンスター)

星1

闇属性／植物族

ATK 100／DEF 300

このカードをリリースして発動する。

相手ライフに300ポイントダメージを与え、自分のデッキから「イービル・ソーン」を2体まで表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した「イービル・ソーン」は効果を発動する事ができない。

「続いて手札から魔法カード『フレグランス・ストーム』を発動！ フィールドの植物族を1体破壊し、デッキから1枚ドロウする！ この効果でドロウしたカードが植物族なら、相手に見せる事で更に1枚ドロウできる！

『イービル・ソーン』を破壊！ そして同時に『世界樹』にフラワーカウンターが乗る！」

世界樹：フラワーカウンター 0↓1

フレグランス・ストーム



## 【通常魔法】

フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター1体を破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

さらに、この効果でドロウしたカードが植物族モンスターだった場合、そのカードをお互いに確認し自分はカードをもう1枚ドロウする事ができる。

引いたカードは……、よし！

「私が引いたのは『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』、植物族だ。よつて更に1枚ドロウ！」

更に永続魔法『超栄養太陽』を発動！ 自分フィールド上のレベル2以下の植物族モンスターを1体リリースし、それよりレベルが3つまで高い植物族モンスターをデッキから手札より1体特殊召喚できる！ レベル1の『イービル・ソーン』をリリースし、レベル3の『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚！」

ローンファイア・ブロッサム：DEF 1400

種子弾丸：プラントカウンター 2↓3

## 超栄養太陽

## 【永続魔法】

自分フィールド上のレベル2以下の植物族モンスター1体をリリースして発動できる。

リリースしたモンスターのレベル+3以下のレベルを持つ植物族モンスター1体を、手札・デッキから特殊召喚する。

このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。  
そのモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。

燃える太陽の中へと消える、爆破の能力を持たない棘の実をつけた植物。入れ替わりに花火玉をつけ火花を散らす蔦植物が現れた。

まだまだ私のターンは終わりにじゃないぞ！

「更に『ローンファイア・ブロッサム』の効果発動！ 1ターンに1度、私の場の植物族を1体リリースし、デッキまたは手札から植物族を1体特殊召喚できる！ 『ブロッサム』自身をリリースし、デッキから『フェニキシアン・シード』を特殊召喚！」

フェニキシアン・シード：ATK 800

種子弾丸：プラントカウンター 3↓4

「更に『フェニキシアン・シード』の効果発動！ このカードを墓地へ送り、手札から『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』を特殊召喚！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス：ATK 2200

種子弾丸：プラントカウンター 4↓5

目のついた種が発芽し、現れるのは燃える彼岸花。花卉の1つが鳥の顔のような形になっている。残りの花卉は翼といった所だろうか。

さて、そろそろこのターンでの行動を詰めるでしょう。

ローンファイア・ブロッサム（効果モンスター）

星3

炎属性／植物族

ATK 500 / DEF 1400

1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター1体をリ

リースして発動できる。

デッキから植物族モンスター1体を特殊召喚する。

フェニキシアン・シード（効果モンスター）

星2

炎属性／植物族

ATK 800／DEF 0

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送って発動できる。

手札から「フェニキシアン・クラスター・アマリス」1体を特殊召喚する。

フェニキシアン・クラスター・アマリス（効果モンスター）

星8

炎属性／植物族

ATK 2200／DEF 0

このカードは「フェニキシアン・シード」またはこのカードの効果でしか特殊召喚できない。

このカードは攻撃した場合、そのダメージ計算後に破壊される。

自分フィールド上のこのカードが破壊され墓地へ送られた時、相手ライフに800ポイントダメージを与える。

また、自分のエンドフェイズ時、このカード以外の自分の墓地の植物族モンスター1体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から表側守備表示で特殊召喚する。

「ザ、ザコモンスターが攻撃力2200のモンスターに化けただど!」

「花の成長は早いからな、ぼさつとしているとあつと言う間だぞ? 『種子弾丸』の効果発動! このカードを墓地に送り、乗っていたプラントカウンターの数×500ポイントのダメージを与える! 乗っていた数は最大値の5つ、よって2500のダメージを

高田、貴様に与える!」

「何だど!? ぐああああつ!」

高田 : LP 3700 ↓ 1200

私の場にかいつの間にか咲いていた五輪の橙色のアザミ。その花からマシンガンの如く無数の種が飛び散り、あのいけ好かない男に全弾直撃した。

これで残りライフは3分の1を切った。もう放置しても問題無いだろう。

「さあ、これで残りライフは1/3を切った。頑張れよ、エリート様？」  
「チイツ！」

「バトルロイヤルデュエルでは各プレイヤーは最初のターン攻撃できない。私はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

桜：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：フェニキシアン・クラスター・アマリス（ATK 2200）

：伏せカード1枚、世界樹（永続魔法、フラワーカウンター：1）

「さあ、貴様らのターンだ。どっちから始めても構わんぞ？」

「う……。た、高田……。この女、もしかかなり強いのでは……？」

「うっせえよ白石！ 女如きに負ける俺様達じゃねえ、エリートの実力を分かせてやるぞ！ 俺様のターン、ドロー！」

分かせてやる、か。

本当に私に、分かせてやるだけの力があれば良いのだがな。

「俺様は手札から『巨大ネズミ』を召喚！　そして装備魔法『団結の力』を発動！　これで攻撃力800アップだ！」

巨大ネズミ：ATK　1400↓2200

巨大ネズミ（効果モンスター）

星4

地属性／獣族

ATK　1400／DEF　1450

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、デッキから攻撃力1500以下の地属性モンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚できる。

団結の力

【装備魔法】

装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体につき800ポイントアップする。

「どうだ、これで攻撃力は互角だぜ！」

「フン、そういう自慢は、攻撃力が超えてからにするんだな」

「生意気言つてンじゃねえよ！ 『封印の黄金櫃』を発動！ デッキから『停戦協定』を除外し、2ターン後に手札に加えるぜえ！」

「このデュエルはバトルロイヤル形式、生憎と貴様の相方のスタンバイフェイズでは経過のためのカウントには使えんぞ」

「脳無しが、ならそれまで待てば良い！ そんなくれえ考えろや！ 更にカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

高田：LP 1200

手札：2枚

フィールド

：巨大ネズミ（ATK 2200）

：伏せカード1枚、団結の力（装備魔法、『巨大ネズミ』に装備）

「さあ白石、お前もやれえ！」

「……高田、お前は変わったな」



「何?」

「昔はそうじゃなかった。中等部の1年生の時、出会った当初はデュエルを純粋に楽しんでいた。だが今はどうだ? 今のお前には、デュエルはただ相手を踏み潰す道具ではないんじゃないか?」

「るせえ! さっさとやれよ!」

白石殿……。お主は……。

「私のターン、ドロロー! まあ、私とお前の仲だ、このデュエルくらいは付き合ってやろう。私は手札から魔法カード『トレード・イン』を発動! 手札からレベル8の『ラビードラゴン』を墓地に送り、カードを2枚ドロローする! 更に『創世者の化身』を召喚!」

創世者の化身 : ATK 1600

「リリースして効果発動! 手札の『創世神』ザ・クリエイターを特殊召喚!」

『ホオオオ!』

創世神 : DEF 3000

創世者の化身（効果モンスター）

星4

光属性／戦士族

ATK 1600 / DEF 1500

このカードを生け贄に捧げる事で、手札の「創世神」1体を特殊召喚する。

創世神（効果モンスター）

星8

光属性／雷族

ATK 2300 / DEF 3000

自分の墓地からモンスターを1体選択する。

手札を1枚墓地に送り、選択したモンスター1体を特殊召喚する。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードは墓地からの特殊召喚はできない。

思った通り、気骨のある男だ。以前見た時は高田同様の存在だと思っていたが、人は変わるものだな。

さあ、まずはこの雷を纏ったオレンジの巨神をどうにかしなくてはならん。

「私は『創世神』の効果発動！ 1ターンに1度、墓地のモンスターを1体選び、手札を1枚墓地へ送る事で、選んだ墓地のモンスターを特殊召喚する！ 私は手札の『エレキテルドラゴン』を墓地へ送り、墓地の『ラビードラゴン』を特殊召喚！」

ラビードラゴン：ATK 2950

「更に墓地の光属性モンスター『創世者の化身』をゲームから除外し、『靈魂の護送船』を特殊召喚！ そして魔法カード『死者蘇生』を発動、墓地の『エレキテルドラゴン』を攻撃表示で復活させる！」

靈魂の護送船：ATK 1900

エレキテルドラゴン：ATK 2500

白石殿のフィールドに並ぶ、ウサギの龍、魂を引き連れた幽霊船、雷を纏った龍。ほう、1ターンで4体のモンスターを揃えるとは……！

ラビードラゴン（通常モンスター）

星8

光属性／ドラゴン族

ATK 2950 / DEF 2900

雪原に生息するドラゴンの突然変異種。

巨大な耳は数キロ離れた物音を聴き分け、驚異的な跳躍力と相俟って狙った獲物は逃さない。

靈魂の護送船（効果モンスター）

星5

光属性／悪魔族

ATK 1900 / DEF 1000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する光属性モンスター1体をゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。

エレキテルドラゴン（通常モンスター）

星6

光属性／ドラゴン族

ATK 2500 / DEF 1000

常に電気を纏い空中を浮遊するドラゴン。

古代より存在し、その生態には未だ謎が多いものの、古のルールにより捕獲は禁止されている。

「このターンは攻撃できません。私はこれでターンエンド！」

白石：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：創世神 (DEF 3000)、ラビードラゴン (ATK 2950)、  
 靈魂の護送船 (ATK 1900)、エレキテルドラゴン (ATK 2500)

：魔法・罫無し

「へえ、やるじゃねえか白石」

「今の手札でできる最高のプレイングをしたただけだ。そもそもお前のデッキの展開が遅いだけだろう」

「あ?」

「事実を言ったただけだ。速攻で決めるとか言いながら後半戦に纏れ込まないと何もできん男に睨まれても怖くも無いぞ」

「て、テメエ……!」

また随分仲が悪い。友情に亀裂が入っているな、絶交も時間の問題か。

「私のターン、ドロロー! 『強欲な壺』を発動! ……よし、『サイクロン』を発動! その伏せカードを破壊する!」

『スピリットバリア』が!」

さて、このターンで仕留めるぞ。

「永続罨オープン、『アイヴィ・シヤツクル』! 自分のターンでのみ、相手モンスターは植物族となる!」

アイヴィ・シヤツクル

【永続罨】

このカードがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上に表側表示で存在する

全てのモンスターは自分のターンのみ植物族となる。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手の効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

巨大ネズミ：獣族↓植物族

創世神：雷族↓植物族

ラビードラゴン：ドラゴン族↓植物族

靈魂の護送船：悪魔族↓植物族

エレキテルドラゴン：ドラゴン族↓植物族

無数のツタで覆われる獣や龍達。

毎度思うのだが、あれで本当に植物族になるのだろうか。そんな事だったら探検隊などはもうとうの昔に植物族や昆虫族になってそうだな。

「更に魔法カード『フレグランス・ストーム』を発動し、これで『創世神』を破壊する！」「何?! 私のモンスターをだ?!」

「生憎だが『フレグランス・ストーム』は破壊するモンスターはどちらのモンスターなのかは問わないのだ。ドロー！ 引いたカードは植物族の『ローズ・テンタクルス』！」

もう1枚ドロロー！」

世界樹：フラワーカウンター 1↓2

「魔法カード『死者蘇生』を発動！ 墓地から蘇れ、『ローンファイア・ブロッサム』！」

ローンファイア・ブロッサム：DEF 1400

「更に『ローンファイア・ブロッサム』の効果発動！ 自身をリリースし、デッキから『ギガプラント』を特殊召喚！」

ギガプラント：ATK 2400

「装備魔法『スーベルヴィス』を『ギガプラント』に装備！ これでデュアルモンスターは再召喚された形となり、効果が発動できる！ 『ギガプラント』の効果発動！ 墓地の『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚！」



スーパールヴィス

【装備魔法】

デュアルモンスターにのみ装備可能。

(1) : 装備モンスターはもう1度召喚された状態として扱う。

(2) : 表側表示のこのカードがフィールドから墓地へ送られた場合、自分の墓地の通常モンスター1体を対象として発動する。

そのモンスターを特殊召喚する。

ローンファイア・ブロッサム : DEF 1400

「そして『ギガプラント』をリリースし、『ローズ・テンタクルス』をアドバンス召喚！」

ローズ・テンタクルス : ATK 2200

これで手札は使い切った。だが勝利への条件も揃った。

そんな私のプレイングを見て、高田は心底おかしいと言わんばかりに大笑いを始める。

「ブツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！　白石、わざわざ攻撃力を下げたぜあの女！　馬鹿だろ！」

「馬鹿は貴様だ高田！ 『スーペルヴィス』が墓地に送られたのだぞ！」

おや、どうやら奴は何も知らないようだな。知は力、無知は罪というものよ。

「その通りだ。『スーペルヴィス』が墓地に送られた事で、墓地の通常モンスター1体を蘇生できる。デュアルモンスターは墓地で通常モンスター扱い。よって『ギガプラント』が復活！」

「はあ!?!」

ギガプラント：ATK　2400

これが、私の植物族連続召喚コンボ。1度に2体の上級植物族、大口を開けた草のクリーチャーと、バラの頭とツタの触手を持った魔物を場に出してやった。これで勝敗は決まった。

ローズ・テンタクルス（効果モンスター）

星6

地属性／植物族

ATK 2200 / DEF 1200

このカードは特殊召喚できない。

自分のバトルフェイズ開始時に相手フィールド上に表側表示で植物族モンスターが存在する場合、このターンこのカードは通常の攻撃に加えて、その植物族モンスターの数だけ攻撃する事ができる。

このカードが戦闘によって植物族モンスターを破壊した場合、相手ライフに300ポイントダメージを与える。

「更に『世界樹』の効果発動！ フラワーカウンターを1つ取り除き、フィールド上の植物族モンスターの攻守をエンドフェイズ時まで400ポイントアップする！ 私は2つのフラワーカウンターを使い、『ローズ・テンタクルス』の攻守をそれぞれ合計800アップさせる！」

ローズ・テンタクルス：ATK 2200 ↓ 2600 ↓ 3000 / DEF 1200  
↓ 1600 ↓ 2000

「攻撃力3000だとお!」

「バトル!」と同時に『ローズ・テンタクルス』のモンスター効果! バトルフェイズ開始時に相手の場に表側表示で存在する植物族モンスターの数だけ、このターンこのカードの攻撃可能回数を追加する! 更にこのモンスターは相手の植物族モンスターを戦闘破壊する度に、相手に300ポイントのダメージを与える! 『アイヴィ・シャックル』の効果で貴様らのモンスターは全て植物族! その数は4体! よつて『ローズ・テンタクルス』はこのターン5回の攻撃が可能となる! 喰らえ、ゾーン・ウィップグオレンドウア五連打ア!」

「ひ、ヒイイイ!」

「ゾーン・ウィップ・ワン!」

振り下ろされる、巨大な植物の腕。

一度目の攻撃はウサギの龍を薙ぎ払う。

「ぐあっ!」

白石 : LP 4000 ↓ 3950 ↓ 3650

「ゾーン・ウィップ・ツー!」

二度目の攻撃は青い大きなネズミを叩き潰す。

「ぐえっ!!」で、デツキから『巨大ネズミ』を特殊召喚っ!」

高田 : LP 1200 ↓ 400 ↓ 100

巨大ネズミ : ATK 1400

「無駄な足掻きだ! ソーン・ウィップ・スリッ!」

「ギャアアアアアアアアアッ!」

そして三度目の攻撃が同じ姿のネズミを直撃し、後ろのプレイヤーごと吹き飛ばした。

高田 : LP 100 ↓ 0

「ば、バカな……! この俺様、が……!」

「高田あ!」

高田 : LOSE

「まだ私の攻撃は終わっていないぞ！　　〃ソーン・ウィップ・フォー〃！」  
 四度目の攻撃で幽霊船を木端微塵に破壊。

「ぐぶうっ!？」

白石：LP　　3650↓2550↓2250

「これで最後！　　〃ラスト・ソーン・ウィップ〃！」

そして五度目の攻撃が雷を纏った龍を締め上げて地面に叩き付けた。

「げべしっ!？」

白石：LP　　2250↓1750↓1450

五本のツタで攻撃を終えたバラの魔人は、暴れ済んだのか、その場で動きを漸く止めたのだった。

「これで貴様のライフは1450、もう止める術はあるまい？」

「く……………」

「止めだ！ 『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』でダイレクトアタック！  
フレイルム・ペタル！！」

「ぐあああああああああああああああつ！」

白石：LP 1250↓0

白石：LOSE

「弱い。その程度では我々を打ち取る事など夢のまた夢だぞ」

これで、私のノルマは終了だ。口ほどにも無い。

「主殿、挫折は誰でもある事だ。きつと辛く、苦しいだろう。だがその苦境を乗り越えて初めて、人は更なる成長を遂げる。貴方が戦えないというのならば、私が代わりに戦おう。だからまた立ち上がってくれ、それまで私は待っているから……」

桜：WIN

高田・白石：LOSE

## SIDE：フレイ

「わたくしのターン、ドロー！」

わたくしにとっては本日2度目のデュエルです。1日に何度もデュエルをするのは精神力を削ってプレイする関係上、あまりよろしくは無いのです。この辺は集中力が必要な他のゲームなんかでも同じ事が言えます。ですがまあ、この程度の相手なら問題無いでしょう。

「魔法カード『強欲で謙虚な壺』を発動です。デッキの上からカードを3枚めくり、中から1枚を選んで手札に加え、残りはデッキに戻します。またこのカードを発動するターン、わたくしはモンスターを特殊召喚できません」

## 強欲で謙虚な壺

## 【通常魔法】



自分のデッキの上からカードを3枚めぐり、その中から1枚を選んで手札に加え、その後残りのカードをデッキに戻す。

「強欲で謙虚な壺」は1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン自分はモンスターを特殊召喚できない。

【めくられたカード】

『死者蘇生』

『カードガンナー』

『帝国の英断』

「『カードガンナー』を手札に加え、残りはデッキに戻します。更に手札から『カードガンナー』を召喚！」

わたくしの両隣に光のゲートが現れ、機械族モンスター。金魚鉢のようなヘルメットを装着し、キャタピラで移動するマシン。腕の先にはノズルのようなガンキャノンが装着されています。

カードガンナー：ATK 400

「『カードガンナー』の効果発動、デッキからカードを3枚墓地へ送ります。そして送ったカード1枚につき攻撃力500ポイントアップです！」

【送られたカード】

『月の書』

『黄泉ガエル』

『ギガンテス』

カードガンナー：ATK 400↓1900

ふむ、落ちの具合は中々ですね。特に『黄泉ガエル』がそのまま落ちたのは、このデッキにすると有難い限りです。

「これでターンエンドです！」

カードガンナー：ATK 1900↓400

プレイ：LP 4000

手札：5枚

フィールド

：カードガンナー（ATK 400）

：魔法・罨無し

「さあ、無駄な足掻きを好きにだけすると良いのです」

「オレのターン、ドロロー！ ナメンじゃねえぞ、女ア！ オレは永続魔法『凡骨の意地』を発動！ これにより、オレがドロローフェイズにドロローしたカードが通常モンスターだった場合、相手に見せてもう一枚ドロローできる！ 更にフィールド魔法『フュージョン・ゲート』！ これで素材をゲームから除外する代わりに『融合』無しで融合召喚ができる！」

フュージョン・ゲート

【フィールド魔法】

このカードがフィールド上に存在する限り、ターンプレイヤーは手札・自分フィールド上から融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから

除外し、その融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

「手札の『砦を守る翼竜』と『フェアリー・ドラゴン』を融合！  
現れる、『カイザー・ドラゴン』！」

『ギジャアアアアアアアアッ！』

カイザー・ドラゴン：ATK 2300

「更に手札の『ギガテック・ウルフ』と『キャノン・ソルジャー』を融合！  
来い、『迷宮の魔戦車』！」

『ギギギギギギギギギ！』

迷宮の魔戦車：ATK 2400

んん、【凡骨融合】ですか。しかしそんな金びかなだだけの細い龍とゴテゴテした赤いドリルが付いているだけの青戦車でわたくしに勝つつもりとは、片腹痛いですね。

カイザー・ドラゴン（融合モンスター）

星7

光属性／ドラゴン族

ATK 2300 / DEF 2000

「岩を守る翼竜」＋「フェアリー・ドラゴン」

迷宮の魔戦車（融合モンスター）

星7

闇属性／機械族

ATK 2400 / DEF 2400

「ギガテック・ウルフ」＋「キャノン・ソルジャー」

「これで、ターンエンドだぜ！ さあ、オレのモンスターの前に平伏せえ！」

襟山：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：カイザー・ドラゴン（ATK 2300）、迷宮の魔戦車（ATK 2400）

：凡骨の意地（永続魔法）、フュージョン・ゲート（フィールド魔法）

「おれのターン、ドローだ！ おれは『古のルール』を発動！ 手札からレベル5以上の通常モンスターを1体特殊召喚する！ おれは『フロストザウルス』を特殊召喚！」

フロストザウルス：ATK 2600

「更に『ブラッド・ヴォルス』を召喚だあ！」

ブラッド・ヴォルス：ATK 1900

古のルール

【通常魔法】

手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

フロストザウルス（通常モンスター）

星6

水属性／恐竜族

ATK 2600 / DEF 1700

鈍い神経と感性のお陰で、氷づけになりつつも氷河期を乗り越える脅威の生命力を持つ。寒さには滅法強いぞ。

ブラッド・ヴォルス（通常モンスター）

星4

闇属性／獣戦士族

ATK 1900 / DEF 1200

悪行の限りを尽くし、それを喜びとしている魔獣人。手にした斧は常に血塗られている。

「そして永続魔法『絶対魔法禁止区域』を発動！ これでフィールドにいる通常モンスターは全て、魔法の効果を受けなくなる！」

氷に包まれたブラキオサウルスに、鋭い斧を持つ魔獣。こちらは【通常モンスター】の

ようですね。もう片方の彼が出した融合モンスターもこの恩恵を得られるので、タッグとしては悪くありません。

ですが、ヌルい。そんな程度でわたくしを仕留める事など不可能です。

### 絶対魔法禁止区域

#### 【永続魔法】

フィールド上に表側表示で存在する全ての効果モンスター以外のモンスターは魔法の効果を受けない。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだぜ！」

糸杉：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：フロストザウルス（ATK 2600）、ブラッド・ヴォルス（ATK 1900）

：伏せカード1枚、絶対魔法禁止区域（永続魔法）



（この伏せカードは『決戦の火蓋』だ。次のターンに手札の『闇の量産工場』と合わせて、更にモンスターを召喚してやるぜえ！）

やれやれ、大した事も無い連中のようなですね。これはハズレを引いたかも知れませんが。黎さんとのデュエルの後ですから、猶更物足りなさを感じます。

「わたくしのターン、ドロロー！　まずはスタンバイフェイズに『黄泉ガエル』が復活しますー！」

『ゲロゲー……』

黄泉ガエル：ATK 100

恨みがましい視線をこちらへ向ける羽の生えた黄色いカエル。

すみません、もうちょっとだけですっ！

「そして『カードガンナー』の効果発動！　再びデッキの上からカードを3枚墓地へ送り、攻撃力が1500アップするのです！」

【送られたカード】

『簡易融合』

『ミラクル・フュージョン』

『爆炎帝テストロス』

カードガンナー：ATK 4000↓1900

今度は酷いです……。流石に何度も良い落ちは来ませんね。

「そして『黄泉ガエル』をリリースし、『風帝ライザー』をアドバンス召喚です！」

『フオオオオオッ！』

風帝ライザー：ATK 2400

「み、帝モンスター!? 市場に数枚しか出回ってない、中には世界で1枚しかないとも噂される超レアカードじゃねえか! ヤツベ、超絶欲しいぜ!」

「あげませんよ? 『ライザー』の効果発動です! 場のカードを1枚持ち主のデッキトップへ飛ばします! 対象は『迷宮の魔戦車』! そのモンスターは融合モンスターなので、直接エクストラデッキに戻ってもらいます!」

「何!?!」

「そしてこれにチェインして『イリユージョン・スナッチ』を手札から特殊召喚！ 自分がアドバンス召喚した時、このカードは手札から特殊召喚できるのです！ そしてそのレベルはアドバンス召喚されたモンスターと同じになります！」

『ギギヤアム！』

イリユージョン・スナッチ：ATK 2400 / ☆7 ↓ 6 / 闇属性 ↓ 風属性 / 悪魔族  
↓ 鳥獣族

まだまだ行きますよ！

『『迷宮の魔戦車』が!?!』

『レベル6の『ライザー』と『イリユージョン・スナッチ』でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！』

☆6 × ☆6 || ★6

「エクシース召喚！ 灼熱の鉄塊を双腕に込め、標的を撃ち抜け！ 『ガントレット・シューター』！」

ガントレット・シユーター：ATK 2400

風の化身と姿を自在に変える白い悪魔を素材にして現れたのは、肩に六連リボルバー形式の排気口を備えた大型手甲を装備したモンスター。このカードも中々優秀なのです。

ガントレット・シユーター（エクシーズ・効果モンスター）

ランク6

地属性／戦士族

ATK 2400 / DEF 2800

レベル6モンスター×2

自分のメインフェイズ時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを破壊する。

『ガントレット・シユーター』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相

手モンスター1体を破壊します！ 更にこの効果の発動回数に1ターン内の回数制限はありません！

わたくしはオーバーレイ・ユニットを2つとも使つて、『カイザー・ドラゴン』と『フロストザウルス』を破壊！ “メタルアーム・ランチャー”！

ガントレット・シューター：ORU 2↓1↓0

『ギギヤアアアッ！』

『ブゴオオオオッ！』

「お、おれらのモンスターが!?!」

「こんなアツサリと!?!」

射出された大型手甲によつて体を貫かれる2体のモンスター。これで残るモンスターは『ブラッド・ヴォルス』1体のみです。

これで終わりじゃないですよ？

「更にランク6の『ガントレット・シューター』でオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを再構築します！」



「エクシース・チェンジ！ 天空の彼方より現れ出で、疾風迅雷の如く貫け！ 『迅雷の騎士ガイア・ドラグーン』！」

迅雷の騎士ガイア・ドラグーン：ATK 2600

来ました、ドラゴンに乗った二刀流の槍使い。ランク5と6はこのモンスターに繋がられるからお得ですね。

「そして魔法カード『鬼神の連撃』を発動なのです！ 自分の場のエクシースモンスター1体からオーバーレイ・ユニットを全て取り除き、そのモンスターはこのターン2回攻撃できます！ これで『ガイア・ドラグーン』は2度の攻撃が可能となりました！」

「攻撃力2600の2回攻撃だとお!? インチキ効果もいい加減にしやがれ！」

「知りませんよ、そんな事。わたくしの管轄外です」

迅雷の騎士ガイア・ドラグーン（エクシース・効果モンスター）

ランク7

風属性／ドラゴン族

ATK 2600 / DEF 2100

レベル7モンスター×2

このカードは自分フィールド上のランク5・6のエクシーズモンスターの上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える

鬼神の連撃

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するエクシーズモンスター1体を選択し、そのエクシーズ素材を全て取り除いて発動する。

このターン、選択したモンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

迅雷の騎士ガイア・ドラグーン：ORU 1↓0

「そして魔法カード『ダーク・コーリング』を発動します！ 墓地の『イリユージョン・スナッチ』と『ギガンテス』を除外し、『ダーク・ガイア』を融合召喚！」  
『オオオオオ……！』

E—HERO ダーク・ガイア：ATK ? ↓4300

「攻撃力4300だとお!?!」

これでわたくしの場に大型モンスターが2体に下級アタッカーが1体。  
仕留めるには十分でしょう。

「バトル! 『ダーク・ガイア』、そこの大馬鹿を蹴散らさない!」  
ダーク・カタスト  
ロフ!!」

悪魔の掌の中で圧縮された闇の熱と重力場。それがうねりをあげて対戦相手に直撃  
します。

ガードもロクにできず、吹っ飛びました。

「うぎやあああああつ!」

襟山：LP 4000 ↓0



襟山 : L O S E

「んなアホなあ……!!?」

「襟山あ!?!」

「余所見してる暇はありませんよ！ 続いて『ガイア・ドラグーン』の1回目の攻撃です  
！ 対象は『ブラッド・ヴォルス』！ “ドラグーン・シェイバー”！」  
「ぐえっ!?!」

糸杉 : L P 4000 ↓ 3300

風と雷を螺旋状に纏った突撃槍が、斧を持った魔人を貫き、その衝撃を後ろのプレイヤーにまで伝えます。

おっと、これで終わりじゃありませんよ？

「『ガイア・ドラグーン』で2回目の攻撃！ 今度はダイレクトアタックです！ “ドラグーン・シェイパー・ランバック”！」

「ぐぼっ!？」

糸杉：LP 3300↓700

「これで止めです！ 『カードガンナー』でダイレクトアタック！ マシンバレット・

フルシューティング”！」

「うぎやあああああああつ！」

糸杉：LP 700↓0

糸杉：LOSE

「他愛無いですね、半分寝ながらでもできましたよ」

全く、これなら今のスランプ状態の黎さんでもどうにかできたでしょうね。所詮は物量以外に頭の無い連中です、時間の無駄でした。

こんなんでよく成績優秀者だなんて言えましたね。この学校のレベルが知れます。……まあ、彼らが特別低いのだとも思っておきましょうか。

「黎さん、貴方の苦しみをわたくしは分かる事ができません。でも、心の中を知る事ができませんでした。涙を流す程に悔しい時、膝を折る程に辛い時、心が砕ける程に悲しい時、そんな時は誰かに頼って下さい。貴方はもう、一人では無いのですから」

フレイ：WIN

襟山・糸杉：LOSE

SIDE：ポラ

「……私のターン、ドロー」

サーを守るために始まった戦い。桜とフレイの様子を見るに、大した敵じゃあ無いみたい。でも油断は足を掬う。気を緩めないようにしないと。

……流石に地の文の頭に3点リーダーはほいほい付けない。

「……魔法カード『トレード・イン』。……手札のレベル8『ダークストーム・ドラゴン』を墓地に送り、2枚ドロウする。……もう1度『トレード・イン』。……レベル8『フェニックス・ギア・フリード』を墓地へ。……更に『テイク・オーバー5』を発動。……デッキからカードを5枚墓地へ」

私に限らずデュアルデッキでは墓地のカードが肝要。できるだけ墓地に溜め込んでおかないと。

さて、何が落ちるかなつと。

テイク・オーバー5（アニメオリジナル）

#### 【通常魔法】

自分のデッキの上からカードを5枚墓地に送る。

このカードが墓地に存在する限り、自分の「カードを墓地に送る」効果は無効となる。自分ターンのドローフーズ時に墓地のこのカードをゲームから除外する事で、1枚ドロウする。

#### 【送られたカード】

『デュアル・スパーク』

『デュアル・スパーク』

『デュアル・スパーク』

『黙する死者』

『貪欲な壺』

……うん。これで、大体のほしいカードは揃った。

泣いてない、泣いてないもん。良いカードばかり墓地に行っちゃったけど、泣いてないもん……。でもデュアスパ3枚は酷いと思う……。

「……モンスターをセット。……カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ポーク：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード1枚

「オレのターン、ドロー！ ケツ！ テメエ手札をあんだけ交換したってのに、出せるの

はその伏せモンスター1体だけかよ！ とんだザコだな！ そのデッキに入ってるレアカードが可哀想だぜ！」

「……耳障り。……そういうセリフは勝った時に言わないと、後で赤っ恥を搔く」

「ハ！ なら地べたに這い蹲らせてやらあ！ オレは『ゴブリン突撃部隊』を召喚！」

ゴブリン突撃部隊：ATK 2300

あっちの先手はやられ役が定着した緑の鬼の集団。そう言えばこの間、病院に入院していたのを見た事がある。やられ過ぎで包帯グルグル巻きだった。保険が効くと良いんだけど。

「更に『突撃部隊』に装備魔法『愚鈍の斧』、『ジャンク・アタック』、『ビッグバン・シュート』、『閃光の双剣―トライス』を手札の『神剣―フェニックスブレード』を墓地に送って装備！」

これで攻撃力は1000上がってモンスター効果は無効になり、戦闘で相手モンスターを破壊すればその元々の攻撃力の半分のダメージを与え、攻撃力が400上がり貫通能力を与えられ、攻撃力が500下がって2回攻撃ができる！」

愚鈍の斧

【装備魔法】

装備モンスターは攻撃力は1000ポイントアップし、効果は無効化される。

また、自分のスタンバイフェイズ毎に、装備モンスターのコントローラーに500ポイントダメージを与える。

ジャンク・アタック

【装備魔法】

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

ビッグバン・シユート

【装備魔法】

装備モンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

閃光の双剣―トライス

【装備魔法】

手札のカード1枚を墓地に送って装備する。

装備モンスターの攻撃力は500ポイントダウンする。

装備モンスターはバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

ゴブリン突撃部隊：ATK 2300↓3300↓3700↓3200

「……攻撃力3200」

「ハッハッハー！ どうだ、この圧倒的な攻撃力は！ 開いた口も塞がらないだろう！

ターンエンドだ！」

座水：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：ゴブリン突撃部隊（ATK 3200）



：愚鈍の斧（装備魔法・『ゴブリン突撃部隊』に装備）、ジャンク・アタック（装備魔法・『ゴブリン突撃部隊』に装備）、ビッグバン・シユート（装備魔法・『ゴブリン突撃部隊』に装備）、閃光の双剣―トライス（装備魔法・『ゴブリン突撃部隊』に装備）

この人は単純な【装備ビート】。でも手札1枚に対する割合が悪すぎ。手札5枚消費で900しか上がらないなんて、『突撃部隊』を2体並べた方がお得だったと思う。

「おれのターン、ドロ―！ おれは『切り込み隊長』を召喚！ こいつが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚できる！ 来い、『ネフティスの導き手』！」

『ハアツ！』

『タアツ！』

切り込み隊長：ATK 1200

ネフティスの導き手：ATK 600

2人目が召喚したのは軽鎧で武装された金髪の男性と、赤と金の法衣を纏った浅黒い肌の女性。

この陣形は確か……。

切り込み隊長（効果モンスター）

星3

地属性／戦士族

ATK 1200／DEF 400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択できない。

このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる。

ネフティスの導き手（効果モンスター）

星2

風属性／魔法使い族

ATK 600／DEF 600

このカードと自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

自分の手札またはデッキから「ネフティスの鳳凰神」1体を特殊召喚する。

「そして『ネフティスの導き手』の効果発動！こいつを含めて自分のモンスターを2体リリースし、手札かデッキより『ネフティスの鳳凰神』を特殊召喚できる！現れろ！」

ネフティスの鳳凰神：ATK 2400

やはり、『ネフティスの鳳凰神』。

効果破壊されると次の自分のスタンバイフェイズに自己再生して、フィールド上の魔法・罫を巻き込む『大嵐』内臓モンスター。

そこまで強くないけど、何度も場を荒らされると面倒な存在。

ネフティスの鳳凰神（効果モンスター）

星8

炎属性／鳥獣族

ATK 2400／DEF 1600

このカードがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズ時にこのカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する。

「フヒヒヒヒ！ 更にカードを1枚伏せて、ターンエンドだぜ！」

……『ネフティス』がいるのにカードを伏せた。つまりあれは自分から『ネフティス』を破壊するカードの可能性が高い。

ならば放置はできない。

「……リバースカード、オーブン。……『サイクロン』。……今伏せられたカードを破壊」  
「げっ!? 折角伏せた『激流葬』が!?!」

やはり、そういうカードだった。危ない。

でもこの二人、デッキ相性が悪過ぎ。『ネフティス』の効果で味方の装備カードまで巻き込んでしまう。タッグを組むのなら、ある程度デッキの調整や相性を考えないと。

### 激流葬

#### 【通常罠】

モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時に発動できる。  
フィールド上のモンスターを全て破壊する。

古川 : LP 4000

手札 : 3枚

フィールド

: ネフティスの鳳凰神 (ATK 2400)

: 魔法・罨無し

「……私のターン、ドロロー。……『テイク・オーバー5』を除外し、更に1枚ドロロー。……セツトモンスター、『チューンド・マジシャン』を反転召喚」  
『トオッ！』

チューンド・マジシャン : ATK 1800

裏側表示のカードから出て来たのは、緑のリングをフラフープみたいに腰につけた、眼鏡の魔法使い。素の攻撃力もそこそこ高いからありがたい。

チューンド・マジシャン (デュアルモンスター)

星4

風属性／魔法使い族

ATK 1800 / DEF 1600

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードをチューナーとして扱う。

「……更に『炎妖蝶ウィルプス』を召喚」

炎妖蝶ウィルプス：ATK 1500

「おいおい、そんなザコ2体で何ができるってんだよう?」

「……装備魔法『スーペルヴィス』を『チューンド・マジシャン』に装備。……これで装備されたデュアルモンスターは2度召喚された状態になる」

「だからその何が――」

「……『チューンド・マジシャン』は再度召喚された場合、チューナーになる」  
 「何!？」

見せてあげる。私の更なる切り札を。

「……レベル4のデュアルモンスター『炎妖蝶ウイルプス』に、レベル4の『チューンド・マジシャン』をチューニング。

……有と無の境界、ここに重なりて顕現する。……龍の姿となりて、世界を焼き払え  
 !」

☆4＋☆4＝☆8

「……シンクロ召喚。……目覚めよ、『ブラック・ブルドラゴ』!」  
 『グゴオオオオオオオオツ!』

ブラック・ブルドラゴ：ATK 3000

雄叫びをあげて堂々と登場する、隆々とした筋骨の体を持った黒い鱗のドラゴン。二本足で立ち、丸太のように太い腕で地面に手をつけて体重を支えている。これが私の

エースモンスター。

「攻撃力3000だとお!？」

「……更に装備されていた『スーパルヴイス』の効果。……このカードが墓地に送られた時、墓地のデュアルを復活させる。……蘇って、『フェニックス・ギア・フリード』」

フェニックス・ギア・フリード：ATK 2800

更に地面に紫の魔法陣が現れ、その中から炎を周囲に躍らせている白い鎧の騎士が現れた。

フェニックス・ギア・フリード（デュアルモンスター）

星8

炎属性／戦士族

ATK 2800／DEF 2200

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する



事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

● 相手が魔法カードを発動した場合、自分の墓地に存在するデュアルモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

また、自分フィールド上に表側表示で存在する装備カード1枚を墓地へ送る事で、フィールド上に存在するモンスターを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

「攻撃力2800だ?!? こんなモンスターまで墓地に送ってやがったのか!?!」

「……『ブルドラゴ』の効果発動。……手札の『ヘルカイザー・ドラゴン』を墓地へ送り、相手の場の魔法・罠を1枚破壊する。……手札の『ヘルカイザー・ドラゴン』を墓地へ送り、『ビッグバン・シユート』を破壊。……『ブラック・フレア・ブレイカー』」

ゴウツ! と黒い炎を吐いて装備カードを焼き払う黒い龍。普通なら『サイクロン』の代用程度だけど、今回はそれだけじゃ済まない。

様々な武器を持った緑の鬼の集団が、光となって歪んで消えた。

「……『ビッグバン・シユート』が装備モンスターより先に場を離れた事で、装備モンスターはゲームから除外される」

「しまった!?!」

「……更に魔法カード『死者蘇生』を発動。……『ダークストーム・ドラゴン』を特殊召喚」

ダークストーム・ドラゴン：ATK 2700

地面に紫の魔法陣が生まれて、その中から黒い風を従えた暗黒の翼竜が現れた。  
これでレベル8が2体。手を緩めるつもりは無い。

ダークストーム・ドラゴン（デュアルモンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 2700／DEF 2500

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する魔法・罫カード1枚を墓

地へ送って発動できる。

フィールド上の魔法・罫カードを全て破壊する。

「……レベル8の『フェニックス・ギア・フリード』と『ダークストーム・ドラゴン』でオーバーレイ。……2体の通常モンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

☆8×☆8＝★8

「……降り注ぐ雷、今その姿は龍となる。……エクシーズ召喚、『サンダーエンド・ドラ

ゴン』

『グオオオオオオオン！』

サンダーエンド・ドラゴン：ATK 3000

これがこのデッキに搭載されている2体のランク8の内の1体。青白い電流を纏った巨大な龍。デュアルが通常モンスターでもある点がおいしく活かせる優秀なカード。

ちなみにもう1体は『エネアード』。どうでも良いけど『アトウムス』は嫌い。この

デッキじゃ活用も難しいし。

サンダーエンド・ドラゴン（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク8

光属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2000

レベル8 通常モンスター×2

1ターンの1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する事ができる。

このカード以外のフィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「こ、攻撃力3000が2体!？」

「……『サンダーエンド』の効果発動。……オーバーレイ・ユニットを1つ使って、フィールド上の自分以外の全てのモンスターを破壊する。…… プラズマティック・ストーム」

『ギギギギギイイツ!』

サンダーエンド・ドラゴン：ORU 2↓1

金色に輝く光の玉を噛み砕く雷の龍。そしてその巨体を中心に巨大な雷の竜巻が発生し、フィールドにいる全ての命を焼き尽くした。

『ブルドラゴ』、ゴメン。

「ぐ……！　だが次のおれのスタンバイフェイズに『ネフティス』は蘇る！」

「第一こいつバカだぜ！　自分のモンスターまで巻き込んでやがる上に『突撃部隊』がいる時に使えば手札を減らさずに済んだつてのによお！　次のターンでテメエは終わらだぜ！」

「……問題無い。……このターンで全部終わらせる」

「何!？」

「……『ブラック・ブルドラゴ』のモンスター効果発動。……このカードが破壊された時、自分の墓地からデュアルモンスターを1体特殊召喚できる。……蘇れ、『ヘルカイザー・ドラゴン』」

『ギャオーン!』

ヘルカイザー・ドラゴン：ATK 2400

黒い龍の断末魔は墓地へと響いた。その轟いた叫びは墓場に眠っていた別の龍を呼び覚ます。節を白い骨格で覆った黒い翼竜が、同じ龍の無念に応えるように現れ咆哮をあげた。

「こ、こいつはぎつき『ビッグバン・シユート』を破壊するために墓地に行つたカード!」「クソツ、わざわざ手札を減らしたのはこれが目的だったのか!」

「……今頃気付いても、もう遅い。……『ブラック・ブルドラゴ』の効果で特殊召喚されたモンスターは再召喚された状態になる。……『ヘルカイザー・ドラゴン』は再召喚されている場合、1ターンのに2回攻撃できる」

「な、なんだってー!?!」

ブラック・ブルドラゴ（シンクロ・効果モンスター）

星8

炎属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2600

チューナー＋チューナー以外のデュアルモンスター1体以上

1ターンの1度、手札からデュアルモンスター1体を墓地へ送って発動できる。

相手フィールド上の魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

また、このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地のデュアルモンスター1体を選択して特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したデュアルモンスターは再度召喚された状態になる。

ヘルカイザー・ドラゴン（デュアルモンスター）

星6

炎属性／ドラゴン族

ATK 2400 / DEF 1500

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

「……まだ終わらない。……魔法カード『鬼神の連撃』。……『サンダーエンド』のオーバレイ・ユニットを全て消費し、このターン『サンダーエンド』に2回攻撃の権利を

与える」

「何い!? 攻撃力3000の2回攻撃だとお!？」

サンダーエンド・ドラゴン：ORU 1↓0

「……『サンダーエンド』でそつちの人に連続攻撃。……  
“ボルティック・プラスター”  
2連打」

「うぎゃああああつー！」

座水：LP 4000↓1000↓0

座水：LOSE

「ば、かな……。レアカード、万歳……」

「座水い！」

「……次はあなたの番」

「うっ！」



これで、フィニッシュ。

「……『ヘルカイザー・ドラゴン』でダイレクトアタック。……『ヘルズダブル・フレアプレス』」

「ヒッ！ アチヂヂヂャアアアアアッ!?」

古川：LP 4000↓1600↓0

古川：LOSE

「……手応えがまるで無い。……こんなお遊びに付き合ってもらえる程、サーは暇人じゃない」

タクティクス、コンビネーション、直観力、デッキの構成、全てが甘い。その程度のレベルじゃあサー黎に勝つ事は不可能。今のスランプのサーならどうかは分からないけど、少なくとも惨敗は無いと思う。

井の中の蛙、大海を知らず。彼らにはその言葉がピッタリ合う。

「……サー、貴方は沢山の苦しみを抱え背負い受け止めてきた。……私達は、そんな貴方の頼りになる姿を見て、任せきりにしていた、何もしなくて良いと思い込んでいた。」

……貴方一人に、負担をかけ過ぎていた。……今度は私達が、背負う番」

ポーラ：WIN

座水・古川：LOSE

「私達の……」

「わたくし達の……」

「……私達の……」

「「（……）勝ち（だあ）（です）！」「」

桜・フレイ・ポーラ：WIN

高田・白石・襟山・糸杉・座水・古川：LOSE

S I D E : 無し

桜は腕を組んで鼻で嗤った。弱い、あまりにも弱すぎる。

フレイは溜息を深々と吐いた。張り合いが無いにも程がある。

ポーラは蔑むような視線を送った。詰まらないデュエルだった。

「さ、これで貴様ら全員の負けは決まった。さっさと去れ」

「ぐ……………」

「仮にもデュエリストなんですから、約束は守りますよねえ？」

「うぐ……」

「ぬう……」

「……ザコに構っている暇は無い。……早く消えて」

「クツソ！ 畜生！ 栄光あるブルーなのに、クソツタレ！」

そんな侮蔑と軽蔑の視線を受け、敗北の屈辱を噛みしめていた白石を除く5人はその場から立ち去った。或いは栄光あるブルーの顔に泥を塗った事に対する責任でも感じたのかも知れない。

「覚えてろよ！」

「この屈辱は！」

「後で必ずっ！」

「百倍にして！」

「返してやる！」

そんな捨て台詞を残しながら走って行く5人を見ながら、頭痛でもするのか白石は頭を押さえながら立ち上がった。

「ふう、あれで懲りる連中なら私も楽なんだがな。ああ……、胃と頭が痛い」

見るからに顔色の悪い彼に、フレイがどこからか取り出した薬箱を片手に近寄り声を

かけた。

「大丈夫ですか、薬ありますよ？」

「ああ、すまない。……私は敵だと言うのに、そんなものを譲ってくれるのか？」

「構いません。貴方だけは最初から明確な敵意がありませんでしたから」

そう言つてニツコリ笑うフレイ。後ろで桜とポーラも領いている所を見ると、その辺は3人も分かり切つていたらしい。

薬を服用してある程度顔色の良くなった白石は、ゆつくりと立ち上がった。

「世話と迷惑をかけたな。すまなかつた」

「何、問題無い。この程度、片手間でできる」

「厳しい言葉だ……」

「主殿が復活したら、デュエルに関して教えを乞うのはどうだ？ 教え方も上手いし要

点も抑えているから分かりやすいぞ？」

「そうするとしよう」

それはそうと、と白石は話題を変えた。

顔付きも神妙なものになり、3人の顔を真剣に見据えている。

「……どうしたの？」

「頼みがある。……高田を止めてくれ」

「何?」

「信じられない話だとは思うが、高田は、あいつは最初はあんな高慢な奴じゃあ無かったのだ」

白石と高田はアカデミアの中等部、それも入学した時からの親友だ。

共に上を目指し互いに切磋琢磨しあつた仲であり、お互いに気の置けない存在である。

最初は純粹にデュエルを楽しみ、学年で誰よりも強くなろうとしていたものだった。

汗を流し、敗北に涙し、勝利に歓喜し、笑い合つた。どれも掛け替えの無い大切な思い出だ。

「だが奴は変わった。3年の始め辺りからか、他人を見下すようになっていったのだ。今にして思えば、この高等部のオベリスクブルーの見学に行つた直後だった」

恐らくブルーの影響をモロに受けたのだろう、と白石は分析した。

他人を見下し、傲り高ぶり、格下の者がレアカードを持つていればカツアゲする。昔はそんな方法を取つた事など一度も無かつたのに、この高等部に來てからは特にそれは顕著だと言う。

「私が何度言つてもあいつは聞く耳を持たん……。最近では化物、いやあの男の影響で差別意識も改善され始め、ブルー内でも彼の授業のお陰か成績が上がつて行く者も増えて

いる。対し高田は元々あまり出来なかつた勉強も足を引つ張つて落第寸前、村八分もそう遠くないかも知れん。

このままではあいつはダメになってしまう。イエローに落ちでもしたら、レットになつたらどうなるか分かつたものじゃない。発狂、自害、退学、引きこもり、自暴自棄……、何だつて考えられる」

そうなる前にどうにかしてほしい。それが白石の頼みだつた。

「勉強自体が嫌いだから、私がいくら教えても効果が薄い。方法は任せる、あのバカをどうにかしてくれ……。これ以上親友が落ち零れて行くのは見ていられん……。頼む！」

ダン！ と地面に正座をし、白石は両手を地面につける。そしてその手の甲に向けて額を下した。紛う事無き土下座の姿勢だ。それだけ彼が真面目に、心の底から高田を救つてほしいと願つている証拠でもあつた。

数瞬呆気にと取られた精霊トリオだつたが、ややあつてフレイが声をかけた。

「顔を上げて下さい、折角の綺麗な制服も汚れてしまいますよ」

そう言つてひよいと白石の体を右手で持ち上げると、地面に立たせた。

白石は決して軽くは無いはずの自分を片腕で持ち上げた事に驚きはしたが、それでもフレイの言わんとする所を察し、顔を綻ばせてフレイの両手を取つた。

「で、ではー」

「はい、引き受けましょう。と言つても、具体的に何をするかはまだ全然なんですけど……」

「いやそれでもありがたい！　ありがとう！　これで高田のバカも救われる！」  
そう言つて握手をするようにぶんぶん両手を上下に動かす。

喜びの剣幕に押されたフレイは、ただただ苦笑いをするしかできなかった。

「調子の良い男だ……」

「……でも嘘じゃなさそう」

「ありがとう！　本当にありがとう！」

「あははは……」

一方その頃、件の高田はと言うと、フレイ達の傍の木陰で顔色を衝撃に染めていた。

「ありがとう！　これで高田のバカも救われる！」

（白石、テメエ……！）

話は最初から最後まで聞いていた。

白石は純粹に彼の事を心配している。だが高田の心に生まれたのは、感謝でも喜びも無かった。



「ありがとう！ 本当にありがとう！」

（あの化物の仲間に俺様を更生してくれだなんて頼みやがって！ テメエまで俺を裏切る気か！）

高田の心の中に巢食う原罪、傲慢。プライドが真実を邪悪に歪めてしまった。

追い詰められた今の彼にとってはレッドとイエローと女子は奴隷、或いはゴミ程度の存在としか思えていない。道端に放棄されたポイ捨てされたゴミより劣る存在。さつさと廃棄されるべきもの。決して手に取ったり、剩え頼み事をしたりする存在では無いものだ。彼のような者は追い詰められても自分より更に下を作り下を見て、「まだ俺は人の上にいる」と安心させているのである。

確かに彼より実際に勉強やデュエルの腕が劣る者も多い。だが下を見ていてはキリが無いのだ。同じ見るのなら、同様にキリが無いのであっても上を見なければ、人の中の向上心は失われる。それは即ち墮落とイコールで繋がる。

（あいつらも、クロノス先生も俺の事を見捨てて、お前だけはと思っていたのに……！ お前は見捨てないと思っていたのに！）

一緒にいた4人とは去り際に別れた。彼らが最後に放った言葉は思い出すだけで涙が滲む。

——畜生、どういう事だ！ お前のせいでボロ負けしちまったじゃねえか！

——クソツタレ、お前の嘘情報に踊らされちまったよ！

——落第寸前のテメエの言う事を信じたオレらがバカだったぜ！

——二度と目の前に現れるな、とつとと落第しちまえドロップアウト野郎！

何だと言うのだ。自分達は同じオベリスクラブの仲間として楽しくやっていたのではなかったのか。

共にレッドやイエローを嘲り、レアカードをカツアゲして、実技最高責任者の後ろ盾の下で思う存分アカデミアの生活を謳歌していた仲だったと言うのに、この手の平返しはどういう事だ。

「白石、しだいじ……っ！」

強いはずの自分の地位はもう無い。このままでは青い制服も、元々持っていたレアカードも、親友も、何もかもを失ってしまう。

だが、打つ手は無い。自分の未来には落第しか無い。

焦りと怒りと悲しみが集い、高田は思わず走り出した。

「白石の、バカ野郎おーっ！」

そんな捨て台詞を、置き土産として。

驚いたのは白石だ。まさか今の会話を聞かれていたとは思わなかったのだ。

「た、高田!? 待て、私は純粹にお前の事が心配で……!」

声をかける暇も無く、高田は森の奥へと走り去る。

「マズいですね、今の聞かれてましたよ……」

「親友が我々に頭を下げた光景、奴の性格を考えれば……」

「……多分、この世の終わりにも等しい事」

「高田……」

ただただ虚空へと伸ばして、掴む相手のいない白石の手が空を切る。

親友のために良かれと思ってやった事が、思わぬ形で裏目に出てしまった。これからの事を思い、白石には途方に暮れる事しかできなかった……。

「畜生、畜生、畜生っ! どいつもこいつも俺様の事をバカにしゃがって! 俺様の事を虚仮にしやがって! クズレッドの分際で! ゴミイエローの分際で! カス女の分

際で！ 奴らに肩入れするブルーの面汚しの分際で！ 俺をバカにしやがってええええええ！」

いつの間にか降り出した雨の中、高田はひたすらに森の中を走り続けていた。止まったら、何かが崩れそうな気がしたから。自分を支える何かが壊れそうな気がしたから。ただガムシヤラに走り続けた。

「つづ！」

だから足元の石にも気付かずに、転んでしまった。

振り返って見れば、それは普通なら転ぶはずも無いくらい小さな石。それが、自分がバカにしてきた、小物と嘲って来た連中と重なる。

「クソッ！ どのつもこいつもこの俺を、この栄光ある偉大なオベリスクブルーの俺様を見下しやがって！ 俺様はオベリスクブルーなんだぞ！ この学園の最高のエリートなんだぞお！」

慟哭、それがその叫びには相応しい名前だった。

裏切って行く仲間達への怒りが、何もできない無力な自分に対する苛立ちが、彼の焦燥感を加速させる。そして人として禁じられた領域にすら彼は踏み込みだした。

「力が……、力が欲しい！ 何もかもを圧倒し叩き潰し捻り潰せるだけの力が！ そのためなら悪魔に魂を売っていい、どんな代償だって支払ってやる！ 誰でもいい、この





る。ククク、食われんように気を付けろよ？　では、記された時刻にまた会おう」

そうやって男は後ろを向いた。

男について何も知らないと気付いた高田は慌てて叫ぶ。

「ま、待ってくれ！　アンタ、名前は!？」

「我が名はラース。覚えておけ、小僧」

「ラース……。記憶したぜ、アンタは俺の大恩人だ！　俺様のもう一人の父さんだ！」

「クククククク、さらばだ」

ラーズの声と姿が夕闇の中へと溶け込む中、高田は一人、ほくそ笑んでいた。

これで全てを取り戻せる。これで何もかもが元通りになる。自分の未来が約束された事に、高田は内心で有頂天になっていたのだった。

この出会いが、何を呼ぶかも知らないで……。

「ん……？」

小雨の降る海岸に座り込んで今後の自分について考えていた黎は、ふと何かの気配を察知した。

一瞬、本当に一瞬だったが、それは確かに感じられた。背筋にスライムのような粘度の、生暖かい汚泥を流し込まれたような感覚。それは間違い無く邪神の配下の気配だ。

だがそれも一瞬の事。すぐに消えて無くなった。

しかし、確かにに黎は何かを感じ取った。気配の範囲ギリギリを通り過ぎたといったものではない。気配を消されたとしても言うのだろうか、それがピタリと当てはまるよう



な、そうで無いような。

島に異変は無い。無いのだが、先刻までとは何かが変わった気がする。純白のハンカチに一滴の黒いシミが生まれたような、異色の変化。

それを正しく例える方法を黎は知らない。

己の語彙を探し、やがて彼はこう呟いたのだった。

「風が変わった……」

今夜は、この雨は止みそうに無かった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 79 : 恐怖の無間地獄

SIDE : 無し

精霊三銃士にブルー6人がコテンパンにされてから数日後。

以前セブンスターズが集った水の滴る洞窟。そこに再び老若男女入り混じったメンバーが集結していた。ただ1つ、前回と異なる点がある。

『ほう、その男が君の言う戦力かね？』

『然り』

前は5人だった人影が6人に増えているのだ。

以前のメンバーはダークネスと呼ばれた細身の男、アマゾネス出身の女戦士、ヴァンパイアの貴婦人、眼帯をした大男にツタンカーメンのような少年。ここに今はいない男を含めて6人、それがメンバー編成だった。

新たに加わったのは少年。赤みがやや強い茶髪で年齢は15か16、オベリスクラブの制服を着用している。中肉中背で見た目だけで言うのならば一般的な男子高校

生の範疇から外れていない。

しかし、その目には異常なまでの闇が宿っていた。通常では考えられない、常人ならば抱えきれない程の膨大な漆黒の、ドス黒いドロドロの暗闇が、瞳の奥で渦巻いている。ラースに連れられてやって来た、高田だった。

『成程、尋常では無い量の闇を感じる……。我らセブンススターズに迎えるに相応しいだけの技量があるようだ』

『無論だ、我が島を駆け回って探しあてた逸材であるぞ?』

『又ハ、又ハハハハハ!』

『クク、クハハハハハ!』

互いに高笑いする2人分の声。周囲に邪悪な声が溢れる中、残る5人のメンツは新入りに対して眉を顰めていた。

「こんなありふれていそうな男がここまでの闇を。一体何があつたのだ」

「さあ? ま、タイプじゃないのは確かだけどね」

「誰も其方の好みなど聞いてはおるまい。しかし誠に凄まじい闇だな」

「しかもアカデミアの生徒だ。こんな闇を持った者までいるとは、最近の若僧は物騒だな」

「おっさん臭いぞ……。実際おっさんだが。しかし実際、一番手を切る身としては気が重

いな……」

皆が好き勝手言う中で、新たな仲間となった少年は最後のダークネスの言葉に敏感に反応した。

「おい、仮面のアンタ」

「私か」

「他に誰がいるんだよ。アンタがトップバッターだつてのか？」

「そうだ。まずは私からだ。標的は赤い服を着た少年が2人いると言うからそれいづらからだ。赤が一番ランクが低いからな」

「へえ……。そいつについて、モノは相談なんだがよお——」

ダークネスに耳打ちする高田。それを聞いていたダークネスはふむ、と頷いた。

「ほう、赤の少年2人は最強レベル。故に人質を取ると……」

「認めたくねえが、色で識別すると痛エ目に合うつてのも確かだ。だがこつちも負けるワケにやいかねえ。だったら、相手が全力出せないように人質でも取つてやろうつて寸法よ」

「成程、妙案だ」

ニヤリ、と鋭利なフォルムの仮面の下から覗く口が歪む。

しかしそれはすぐに元に戻った。

「が、断る」

「何!?!」

「確かに私は奴らを倒し鍵を集めるのが目的だ。だが、その途中にあるデュエルもまた目的なのだ。そんな全力の出せない弱い奴とデュエルしたところで、私の中の魂は満足などできない」

「チツ、とんだカス野郎だな。重要なのはクソ共をぶつ殺す事だろうが、勝つための手段を選んでる時点で負けてんだよ!」

「デュエリストとしての魂や誇りまで捨てた覚えは無い」

「ケツ! なら俺は俺でやらせてもらうぞ!」

そう言つて高田は懐からカードを取り出し、笑つた。

来る途中にラースから貰つたカードと、ここに来た時に老人の声から貰つたカードだ。

「これさえあれば、俺様は無敵だ……! 待つてろよクズ共め! この俺様が叩き潰して、元の栄光あるアカデミアの姿に戻してやる! 赤も黄色も女もいらねえ! 至高の青で学園を染め上げて、貴様ら全員を奴隷みたいに使い捨ててやる!」

そうだ、俺様は力を手に入れた! 誰ももう俺を見下したりしねえ! 誰も俺を見捨てたりしねえ! これでこの俺様こそが最強だ! 今まで散々この俺様をバカにしや



同じレベルのモンスター1体を手札から、攻守を0にし効果を無効にして特殊召喚できる。

俺は場のレベル7『瀑征竜―タイダル』を選択し、『焰征竜―ブラスター』を特殊召喚  
 ！

『ゴガアアアアッ！』

『ブオオオオオッ！』

瀑征竜―タイダル：ATK 2600

焰征竜―ブラスター：ATK 2800↓0

エクシーズ・レセプション

【通常魔法】

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターと同じレベルのモンスター1体を手札から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻撃力・守備力は0になる。

「更に墓地の地属性『カードガンナー』とドラゴン族『仮面竜』を除外して『巖征竜―レ

ドックス』を、墓地の風属性『マブラス』とドラゴン族『仮面竜』を除外して『嵐征竜—テンペスト』をそれぞれ手札と墓地から特殊召喚！」

嵐征竜—レドックス：DEF 3000

嵐征竜—テンペスト：ATK 2400

場にゲートを潜って登場する、四元素を司りし巨大な竜の軍団。滝の如く流れる怒涛の水の力、噴火のように荒れ狂う灼熱の炎の力、恩寵を与える無限に広がる地の力、吹き荒び全てを削り破壊する風の力が、ドラゴンの姿となって現れる。

「れ、レベル7が一瞬で4体だって!?!」

「これがフィールドを制圧するドラゴン、征竜の力だ」

デュエルをしているのはデュエルを申し込んで来たレッド生と我らが主人公、黎だ。

レッド生：LP 3400

手札：2枚

フィールド

：千年原人（ATK 2750）、ダンジョン・ワーム（ATK 1800）



：伏せカード1枚、メテオ・ストライク（装備魔法・『千年原人』に装備）

黎：LP 500

手札：0枚

フィールド

：瀑征竜―タイダル（ATK 2600）、焰征竜―ブラスター（ATK 0）、巖征竜―レドックス（DEF 3000）、嵐征竜―テンペスト（ATK 2400）

瀑征竜―タイダル（効果モンスター）

星7

水属性／ドラゴン族

ATK 2600／DEF 2000

自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族または水属性のモンスターを合計2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードと水属性モンスター1体を手札から墓地へ捨てる事で、デッキから

モンスター1体を墓地へ送る。

このカードが除外された場合、デッキからドラゴン族・水属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「瀑征竜―タイダル」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

焰征竜―ブラスター（効果モンスター）

星7

炎属性／ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 1800

自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族または炎属性のモンスターを合計2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードと炎属性モンスター1体を手札から墓地へ捨てる事で、フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

このカードが除外された場合、デッキからドラゴン族・炎属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「焔征竜―ブラスター」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

焔征竜―レドックス (効果モンスター)

星7

地属性/ドラゴン族

ATK 1600 / DEF 3000

自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族または地属性のモンスターを合計2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードと地属性モンスター1体を手札から墓地へ捨てる事で、自分の墓地のモンスター1体を選択して特殊召喚する。

このカードが除外された場合、デッキからドラゴン族・地属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「焔征竜―レドックス」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

嵐征竜―テンペスト (効果モンスター)

星7

風属性／ドラゴン族

ATK 2400 / DEF 2200

自分の手札・墓地からこのカード以外のドラゴン族または風属性のモンスターを合計2体除外して発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

特殊召喚したこのカードは相手のエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

また、このカードと風属性モンスター1体を手札から墓地へ捨てる事で、デッキからドラゴン族モンスター1体を手札に加える。

このカードが除外された場合、デッキからドラゴン族・風属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「嵐征竜―テンペスト」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

「で、でもそのモンスター達じゃあオレの『千年原人』には勝てないぞ!」

「なら、勝てるモンスターを用意すれば良いだけの話だ。俺は、レベル7の『タイダル』と『プラスター』で、オーバーレイ! 2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築!」

黎の掛け声に合わせて水の竜が青、炎の竜が赤の光に姿を変え、螺旋を描いて空高くへと飛び上がって行く。そしてそのまま上空で折り返し、地面に生まれた赤い銀河の二重円の渦へと飛び込んで行った。

☆7×☆7★★7

「エクシーズ召喚！ 現れろ、『No. 11』！ 幻惑の瞳を持つ支配者、『ビッグ・アイ』！」

生まれるのは、巨大な眼球。そこから延びる鮮血の色をした視神経に白い球体が次々に集まり、逆円錐の形を作り上げ、名前通り大きな瞳を持った不気味な無機物のような生命へと姿を変えた。

No. 11 ビッグ・アイ：ATK 2600

「攻撃力2600う？ お前計算もできなくなっちゃったのかよ？」

「慌てるな、何も攻撃力で勝つとは言っていない。続いてレベル7の『レドックス』と『テンプエスト』でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築

!

先程と同じように、地の竜が橙、風の竜が緑の光となつて螺旋を描き、銀河の渦の中へと突っ込む。

☆7×☆7∥★7

「エクシーズ召喚！ 出撃せよ鋼の龍、『幻獣機ドラゴサック』！」

幻獣機ドラゴサック：ATK 2600

続いて空を切つて現れるのは白い戦闘機。亀と竜を足して2で割り、そこに飛行機の要素を取り入れたような巨大な戦闘マシンだ。

No. 11 ビッグ・アイ（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク7

闇属性／魔法使い族

ATK 2600／DEF 2000

レベル7モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターのコントロールを得る。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

幻獣機ドラゴサック（エクシーズ・効果モンスター）

ランク7

風属性／機械族

ATK 2600 / DEF 2200

レベル7モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

自分フィールド上に「幻獣機トークン」（機械族・風・星3・攻／守0）2体を特殊召喚する。

自分フィールド上にトークンが存在する限り、このカードは戦闘及びカードの効果では破壊されない。

また、1ターンに1度、自分フィールド上の「幻獣機」と名のついたモンスター1体

をリリースして発動できる。

フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

「だから攻撃力が……」

「物覚え悪いな、お前。攻撃力は飾りだつての。『ビッグ・アイ』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手モンスター1体のコントロールを奪う！ ムテンブテーション・グランズ！」

大きな目の瞳孔が開き、怪しい光線を放つ『ビッグ・アイ』。その光にあてられた青い原人は、のそのそと歩きながら黎の場へと移動した。

「何、オレのモンスターが!？」

「これで『千年原人』は頂いた。ただしこの効果を使ったターン、『ビッグ・アイ』は攻撃できない。」

更に『ドラゴサック』の効果発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使って、俺の場に『幻獣機トークン』を2体生み出す！」

幻獣機トークン：DEF 0



## 幻獣機トークン：DEF 0

「そして『ドラゴサック』第二の効果！ 自分の場の『幻獣機』と名の付いたモンスターを1体リリースし、相手の場のカードを1枚破壊しつつ、このターン自身の攻撃を封じる。トークン1体をリリースし、その伏せカードを破壊する！ 『ドラグ・エアレイド・ボム』！」

『ミラーフォース』が!?!」

続いて場に半透明の戦闘機が現れる。2機あつた内の片方が母艦である『ドラゴサック』へと溶け込み、爆弾に姿を変えて降り注ぐ。灼熱と爆風に煽られた赤いカードは、それによって木端微塵になつてしまった。

「で、でもよお、お前のモンスターは2体とももう攻撃できねえんだろ？ だつたらまだ勝負はついて……」

「俺はオーバーレイ・ユニットとして墓地に送られた『焰征竜―プラスター』の効果発動」  
「何!?!」

「本来征竜の効果は1ターンに1度きり。だがこのターン、『プラスター』は破壊、サーチ、特殊召喚のどの効果も発動していない」

「しまった!?!」

「墓地の炎属性『クイーン・ドラグーン』とドラゴン族『レドックス』をゲームから除外し、墓地からこのカードを特殊召喚！」

『ブオオオオオッ！』

焔征竜—ブラスター：ATK 2800

翼を広げ、再び現れる灼熱の火炎竜。これで黎の場のモンスターの攻撃力の合計値は5550ポイント。

相手の場にいるのは攻撃力1800のモンスター1体のみ。伏せカードも無い。

「げげげ、オレの負けかあ……。不調って聞いたから勝てるかもって思ったんだけどなあ……」

「ハハ、これだけやれりやあ十分だよ。ナイスファイトだ」

「おうよ！ また頼むぜ！ 次は負けねえからな！」

「受けて立とう。それじゃあ、バトル！ 『千年原人』で『ダンジョン・ワーム』を攻撃！」

「ううっ！」

レツド生：LP 3400↓2450

「そして『ブラスター』でダイレクトアタック！ ヴォルケーノ・ブラスト”オ！」  
「うわああああああああつ！」

レツド生：LP 2450↓0

黎：WIN

レツド生：LOSE

「黎、調子戻って来たんじゃない？」

デュエル終了後、傍らで観察していたフィオが近寄って言った。

昨日のようなプレミもほぼ無く、淀みの無いデュエルを黎はできた。復活とは行かな

くとも、小康状態とは言えるのではないだろうか。

だが黎は、黙って首を横に振る。

「え？」

「【征竜】は環境トップ、つまり最強に名を連ねた事のあるデツキだ。下手な事しない限り何度でもハイパワーなドラゴンが飛んでくる以上、こいつで勝てたぐらいでは復調とは言いがたい。コンスタントにベタな勝利くらいはできても、こんな程度で本調子と言いつ張れるような腕は持ってないよ」

「そっか……」

「それに、これはエクシーズ召喚のデツキだ」

アカデミアで生活する中で、黎は1つの縛りを自分に課した。

即ちシンクロやエクシーズ、そしてそれに関連するカードは、この時代に生きている人達には使用しないと。

シンクロもエクシーズも未来のカード、それを使うという事は彼らの知らない・到達していない境地にあるカードで捻じ伏せる事を意味する。相手が悪党ならさて置き、それ以外が相手ではハンドが大きすぎてデュエルが成立しないと黎は考えており、それ故に彼は自分自身の意志でそれらを使う事を控えていた。

「でもまあ、昨日よかマシだ。心配してくれてありがとうな」

「ん……」

わしやわしやとフィオの頭をちよつと荒つぽく撫でる黎。フィオは猫か犬のように気持ち良さそうに目を細め、胸元の黎から預かった鍵がキラリと光る。

その光景を陰で密かに3人の精霊が見守っていたのだった。

『少しは、元気を取り戻したみたいだな』

『……やっぱり、暗い顔より明るい顔の方が好き』

『ま、辛気臭い状態よりはマシですしね』

『ところでフレイ、お前主殿に何かしたか?』

『……あの場で、貴女だけサーのトコに残ってた』

『はて、何の事でしょう』

「つて、子供扱いするなあ!」

「ハツハツハ! ほれ、かいぐりかいぐりつと」

「だからあ、ふにやく……。……ハツ!? レ〜イク!」

「アツハツハツハツハ!」

その晩、黎は部屋でデッキを編集していた。

彼の身の回りには、目算でも50以上の数のデッキがある。その全てが戦略に基づき、勝ち筋を複数持ったデッキだ。

「〔征竜〕、〔ラヴアル〕、〔海皇水精鱗〕、〔幻獣機〕、〔甲虫装機〕、〔次元ダーク〕、〔クイダ  
ンデブジャンド〕、〔バイスリゾネーター〕、〔植物パーミ〕、〔ロックバーン〕、〔デッキデ  
ス〕、〔ジエネクス〕、〔4軸ガガガ〕、〔ゴゴゴアンデ〕、〔電池メン〕、〔BF〕、〔チェーン  
バーン〕、〔カオスロード〕、〔フォトン〕、〔ヒーローアライブ〕、〔ダーク・ガイア〕、〔ア  
イスカウンター〕、〔ディフォーマー〕、〔カオスドラゴン〕、〔スキドレ墓守〕、〔シンクロ  
ダーク〕、〔インフェルニティ〕、〔上級スピリット〕、〔霞の谷の神風〕、〔スクラップ〕、〔エ  
レキ〕、〔ワーム〕、〔リサイキック〕、〔8軸リチュア〕、〔10軸リチュア〕、〔スタンダー  
ド〕、〔ドラグニティ〕、〔除外海産物〕、〔BK〕、〔ダムドビート〕、〔フルバーン〕、〔炎星〕、  
〔フルバーン〕、〔A・O・J〕、〔墓地BF〕、〔デュアル〕、〔獅子黄泉帝〕、〔スキドレバル  
バ〕、〔バスター・モード〕、〔エンディミオン〕、〔獣ジャンク〕、〔暗黒未開域魔轟神〕、〔マ  
シユルマック〕、〔デーモン〕、〔アロマダムルグ〕、〔マシンガジェット〕、〔フレムベル〕、  
〔ナチュルパーミ〕、〔レスキュー・ラビット〕、〔六武衆〕……」

名前を確認し、デツキをマルチで脳内で動かしていく。今、黎には精霊の力が無い。もし何かあった時に確実に相手を叩き潰せるだけの力が無ければ未来は無い。多少負担を頭にかけてでも、今は自分をギリギリまで強化するべきなのだ。

ジリジリと脳内のシナプスが焼けるような感覚を覚えながら、黎は必死にデツキを回す。

(まだまだ、まだ足りない。あの時、フレイとのデュエルの終盤で、俺は何かを知って体感した。あれを常に引き出せなければ、俺はまた負ける。もう負ける事は許されない、次こそ『ジョーカー』に勝つためには、あの感覚を俺のモノにしねえと……)

だがやり方が分からない。故にこんな無茶苦茶なやり方をしているのだ。

(デツキー、墓地から『ゴーズ』と『ライコウ』を除外して『カオス・ソーサラー』を特殊召喚。効果で相手の『ダーク・アームド・ドラゴン』を除外しつつ、場の『エレキテルドラゴン』とオーバーレイ。『トレミス』をエクシーズ召喚。

デツキ2、トークンをリリリースして『ライザー』をアドバンス召喚。『デモンズ・チェーン』を回収。更に『ダーク・コーリング』を発動。墓地の『ガイウス』と『グランマーグ』を除外し、『ダーク・ガイア』を融合召喚。

デツキ3、『ピンポイント・ガード』を発動し、墓地から『エレキングゴブラ』を蘇生。これで相手の『ジェネシス・デーモン』の攻撃をガード。次のターン、『エレキングゴブ

ラ』でダイレクトアタック。相手ライフ残り500ポイント。

デッキ4、手札から『ブラウ』を召喚し、手札に戻して墓地の『グラファ』を特殊召喚。攻撃。『魔法の筒』で妨害発生。罫カード『魔のデッキ破壊ウィルス』をチェーン。相手攻撃力1500以下を3ターンの間破壊し続ける。

デッキ5、レベル1の『チューニング・サポーター』にレベル5の『クイック・シンクロン』をチューニング。『ドリル・ウオーリアー』をシンクロ召喚。1枚ドロウ。攻撃力を半分にしてから『シンクロ・ストライク』を発動。攻撃力2200で直接攻撃。

デッキ6、『マッシュ・マック』の効果。『ミニマム・ガッツ』の効果で攻撃力が0になった『マシナーズ・フォース』を対象に……)

背中と額を嫌な汗が流れ、呼吸が乱れ始める。精神力をガリガリ削つての荒行だ、常人なら5分も続けれられない。黎だからこそできる荒業である。

本来なら人間の脳は2つも3つも同時に思考する事はできない。それを彼は自身の異能の力で脳を自己改造し、可能にしていた。無論、肉体に返つて来る反動は全て無視して。苦しい、気持ち悪い、だがそれがどうしたと不調を抑え込み、脳内でのシミュレートを繰り返し続ける。脳の悲鳴を意志の力で抑え込みながら。

吐き気を覚え、瞑っているはずなのに眩暈を感じたその時だった。

「……、またそうやって無茶する」



ポン、と背中を誰かに叩かれた。途端に呼吸が落ち着き、グラついていた感覚が元に戻る。

振り返ると、そこには2人の女性。見慣れた明るいセミロングの茶髪。そして青い同じくらしいの長さの髪。フィオとフレイがいた。

「駄目だぞ、黎。そうやって体ギリギリまで追い詰めたって、スポーツの特訓じゃあるまいし、君の体を壊すだけだ」

「ただでさえポロポロなのに、これ以上体を壊してどうするんですか。もうあの薬はリスク無しじゃ使えないんですよ」

「……、悪かった」

静かに頭を下げる黎。が、すぐに別の事に気付き顔を上げた。

「つてか、こんな夜更けに女が男子寮に来るのもどうかと思うんだが」

「大丈夫、フレイに頼んで色々誤魔化してもらったから」

「いや、男ばつかのトコつてのが問題なんだが」

「桜さんとポーラがいるじゃん」

「だからここは男子寮で」

「そう固い事言うものでも無いぞ、主殿」

「……そもそも私達を同じ部屋に泊めてる時点で、説得力が無い」

机の上のカードから桜とポーラが実体化し、フィオの援護に回る。

お前から寝る時とかカードだろう、とか突っ込みたかったが、泥沼になりそうな気がして止めた。

「で、何の用だ？」

「いやね、フレイが変な気配を感じたって言うから、君のトコに来たんだよ」

「変な気配？」

「ええ。プライドと少し似てますけど、まるで異質なんです。そう、見た目が似ているだけで中身が違う、『クリボー』と『屋根裏の物の怪』みたいな、たこ焼きとプチシューみたいな……。すみません、上手い例えが思い付かなくて」

「見た目だけ似ていて中身は違う……」

フレイの例えはさて置き、黎にはその気配の正体に1つだけ心当たりがあった。

先日、島の中で一瞬感じ取った邪神の気配。あれが何か関係しているのでは無かろうか？

それにセブンスターズの情報をこれまで集め続けているのだが、7つの星を名乗っておきながら、それらしい情報は今、6人分しか入っていない（タイタンに連絡を取ってみたが、今彼は手品師として各地を回っているらしく、候補から除外された）。となると恐らく、最後の1人は現地調達、最悪残りの護衛が手を貸している可能性まで出て来る。

その件を余す所無く、黎は皆に伝えた。

「成程、それは十分に考えられますね。もしかしたら、もうすぐそこにいるかも知れませんが」

「現地調達か……。鬱陶しいくらい下らない人間は、残念ながらブルーに掃いて捨てる程いるからな」

「……少なくとも、警戒は必要。……最悪、親しい誰かが相手をする可能性もある」

「別にわたしは誰が来てもそう易々と負けるつもりは無いけど、流石に護衛レベルは不安だね……」

むむむ、と4人が唸る中、黎はデッキを幾つかホルダーに収納した。

彼のおぼろげな原作知識の中では、最初の相手ダークネスは、鍵を渡した日の夜にやって来た。しかしそれはもう一週間近く前の事だ。それでも未だに動きは無い事に不気味さを黎は覚える。

明日香やカイザーは警戒を怠っていないし、大地もまた敵の策かと踏んでいる。一方で十代やサンダーあたりは呑気なもので、「俺に恐れをなしたか」とのたまっている始末である。

だが何時までも襲撃無しではいられないだろう。何時連中がやって来てもおかしくない。だからこそ、完成度を完璧に可能な限り近づけ、誰であろうとも勝てる可能性を

ギリギリまで上げたデッキをいくつも用意しているのだ。

(後は俺が、プレミさえしなれば……)

神妙な表情で左腕に装着したディスクを見つめる黎。その姿は、これまでのどんな姿よりも遙かに重く冷たく苦しそうなものだった。

まるで今にも潰れそうで、誰にも言えない責任に殺されそうで。そんな儂げで悲しげな姿に、フィオは思わず正面から彼に力強く抱き着いた。

「フィオ……?」

「大丈夫」

「え?」

「君はわたしが守る。何があっても、絶対に、傷つけさせたりしない」

ギユツ、と抱き着くフィオの体温が黎に伝わった。

「……」

何時以来だろうか、他人の体温をこんな近くに感じて、それを愛しい、失いたくないと思つてしまったのは。そんな自分を、嫌だと思えないのは。

そうだ、都が泣いて眠れない夜もこうだった気がする。フィオと都、2人は見た目も性格もまるで違うのに、どうしてこうも重なってしまうのだろうか。それは黎には分からなかった。

それでも、目の前にいるこの少女を大切にしたいくて、黎はそつと少女を抱擁した。

その瞬間、眩い光が周囲を包み込んだ。

「え!?!」

「何だっ!？」

「マスター!」

「主殿!」

「……2人とも!」

転移魔法の陣がこの部屋の床いっぱい描かれていると分かった時にはもう遅い。黎ですら目を開けられない程のフラッシュが部屋を満たしたのだった。

目も眩む閃光は、やがて静まる。そしてその時になつて気付いた。腕の中にあつた温もりが、無い……!」

「ファイオがいらない!」

「フレイもいないぞ!」

「……2人とも、どこへ……!？」

慌てふためく3人。やがて十代の部屋でも同じような事が起きていた事を、数分後に知る事となるのだった。

## SIDE : フイオ

黎の部屋にフレイと一緒にいた、筈だった。

でもいきなり強い光に包まれ宙に浮かぶような感覚を味わった後、気付けばわたしはどこか違う場所にいた。

「フレイ、いる？」

「はい、ここに！ どうやら敵の手によって強制的に転移させられたようです！」  
良かった、取り敢えず独りじゃあ無いらしい。

周囲を注意深く見回すと、どうやらここはアカデミアの火山の山頂近くらしい。満月の星空の下でも電球の下のように明るいのは、マグマの赤い熱の光が届いているから。ご丁寧に靴もちゃんと履かされている。

道が整備されているし学校もあるから噴火の恐れはまず無いだろうけど、流石にここまで近いとなるとやや不安だ。それと熱い。

「一体誰がこんなトコにわたし達を……」

「それなんですが……」

フレイがぬつと指でとある方向を指し示した。

「恐らくあの方ですよ。転移時に魔法陣から漏れていた魔力の波長が完全に一致します」

そこにいたのは、見慣れたオベリスクブルーの制服を纏った男子がいた。右腕にはエジプトのウジャド眼をモチーフにしたブレスレットが着けられていて、暗めの茶髪をオールバックに纏めている。

それだけならどこにでもいそうな感じの男子だけど、全身からはまるで泥のような暗い気配が漂っており、ここから見える瞳には復讐とか、憤怒とか、そんなネガティブな感情が凝り固まった漆黒のエネルギーが渦巻いていた。

わたしはその男子に見覚えがあった。過去何度かわたし達ブルー女子とも対立し、あ的大がかりなブルーとの戦いの中で黎と戦った、最近落第が噂されている少年。

「君は、高田君か……!」

「クククククククク……! 精霊ごと引つかかったみてえだな」



そう、彼だ。いけ好かない、ブルーの中でも特に他人から嫌われている男子。

でも彼は精霊が見えなかったはず。フレイや桜さん、ポーラが隣にいても前にいても何の反応も示さなかったのに……。

「マスター、気を付けて下さい。もしかしたら、数日前に現れたという邪神の護衛が接触したのが彼なのかも知れません」

「！」

もしそうだとしたら、マズい。一体どれだけのパワーアップがされているのか分かったものじゃ無い。

神妙に構えるこちらを見て、高田君は嘲笑った。

「ンだよ、鍵持つてる化物を釣ったつもりが、持つてンのはテメエらかよ、腰巾着とその精霊」

「腰巾着……」

「ケツ、あのクズをこの力で叩き潰してやるつもりが、テメエからとはな。……まあいいや、どの道、あいつはただじゃあ殺すつもりはネエ、まずはテメエからだ！」

殺す。今こいつはそう言った。シャレでも脅しでも無い、恐らく本気の、本音の一言だ。

「へえ、黎を殺す、か……」

「おうよ。つってもただ殺すだけじゃねえ。生まれて来た事を後悔するぐれえ無惨に、無慈悲に、徹底的に、完膚無きに打ちのめして、絶望に涙しているあいつを見下して、それからジツクリと時間をかけてぶち殺してやるのよ！ 楽には死なせねえぜえ？」

「君は……、黎に何をするつもりだ！ 彼はこれまでずっと苦悩と痛みの中にいたつてのに、君なんか黎の命を奪う資格があるとしても言うのか！」

「資格う〜？ ギャツハハハハハハハハハハ！ バカじゃねえの!? そんなモン誰にもありやしねえんだよ！ ただ殺したいから殺す！ たったそんなだけなんだよ！ 憎いから、恨めしいから殺す！ 人間つてのはそんなモンだろう？ あいつだつてそうなんだろ!? あいつだつて邪魔で鬱陶しい敵を、憎いから殺した！ 話は聞いたんだぜ！」

こいつ……、黎が怒りや憎しみだけで人を殺したと思つてるのか!?

ふざけた事を！ 黎は大切な家族を守るためにその手を汚したんだぞ！ お前なんかと一緒にするな！

「ハア？ 何かツコいい事言つちやつてるんだお前？ アレか？ あのカス野郎に変な妄想でも抱いてるのか？ うわマジで受けるぜ！ 所詮テメエも、あの化物に騙されてるんだよ！ あいつは人を騙してその中に溶け込んで、殺す機会をじつと待つてる最低のクズモンスターなんだよ！」

「黙れ！ お前に黎の何が分かる！ 何かを理解しようともしてないお前に、黎を貶

す権利なんて無い！」

「ギャハハハハハハハ！ 理解く？ したくもネエなあ！ 俺様は栄光あるオベリスクブルーの選ばれし人間様だぜえ？ あんなゴミみてえなクズレッドの化物の事なんざ理解したら、俺様の格が下がっちゃうぜ！」

「お前……！ それがお前を落第寸前にまで追いやったのがまだ分らないのか！ そんな風に他人を排斥し続けるから友達も誰もかも離れていつて独りになるんだ！ 誰にも何も与えない奴は、誰からも何も貰えなくなる！ だから白石君もクロノス先生も、もうお前の味方なんかじゃ無いんだぞ！」

「そいつは結構！ 元々の俺の事を理解できねえ奴は皆カスだ！ 生きてる価値も無い！ そんな奴はこの俺様がアカデミアの最強に返り咲いた暁にはボロボロになるまでぶちのめしてアカデミアから、いや人生そのものから叩き出してやる！ 今こそ、俺様最強伝説が幕を開けるのさあ！ ギャアツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハア！！」

チツ、駄目だ。こつちの言葉がまるで通じてない。こいつの中じゃあもう、こいつ以外の人がいないんだ。だから平気で他人を追い出して高笑いできる。

あまりにも哀れ。あまりにも愚か。こんな奴に、黎が負けちゃいけない。

ギリ、と奥歯を軋ませながら、わたしはペンダントみたいに首から下げた鍵を手

取って持ち上げた。

「……高田。お前はこの鍵が目当てでわたしをここに呼び出したんだろう？」

「ギャハハハ！ そんな感じだ。まあ、鍵はおまけだがな！」

「おまけ……？」

「おうよ！ 俺様の目的は復讐だ！」

復讐、だつて？

「俺様は入学当初は栄えあるブルーの一員、いずれはカイザーをも凌ぐ實力を持った、次世代のカイザーになる予定だったのよ。だがそれがどうだ!? あの忌々しい化物のせいで成績も実技もどん詰まり！ 輝かしい俺のロードはどんどん離れていつちまう！ 挙句の果てにはイエローに降格と来た！ それもこれも、全部あのクソが現れたからだ！ 化物が人間様の世界に現れて好き勝手やっているからだ！ だから決めたんだよ！ あいつの大事にしてるモンを残さず叩き壊して、あいつが絶望するサマを見届けながら殺してやるつてな！」

以前の俺ならそんな事もできなかっただろうが、今の俺には力がある！ あいつをぶち殺せるだけの圧倒的な力が！ クソはクソらしく、場末のごみ溜めでハエと戯れてるのがお似合いなんだよ！」

「お前、いい加減にしろよ！ そんなの逆恨みも良い所じゃないか！ あいつは今、色ん

な人のために文字通り骨身を削って戦ってるんだぞ！ 恩を仇で返す気か！」

「ギャハハハハハ！ 知った事じゃねえなあ！ 俺があいつを憎んでるから殺すんだよ！ 他人がどうだろうと関係ネエ！ 恨むんなら、俺様に恨まれるような事をしちまつたあいつを恨めよ！ 歴史にもあるだろ？ 王様や貴族の機嫌損ねて首刎ねられたつーバカみてえな話がよお！ ブルーは貴族！ それ以外は全部クズだ！ テメエらの生殺与奪の権利はこのオベリスクブルーにあるんだよ！」

「法治の行き届いた今の世に、人の命をどうこうする権利なんて誰にも無い！ 弱肉強食の世界でもあるまいし、人が人を殺す事は死刑以外ではあつてはならない！ そして裁判で死刑があるのは犯した罪を罰するためだ！ 生きていては償えない罪があるからこそ、当人の命を以て償わせるんだ！ それ以外に人が人の命を奪って良い条件なんて存在してはいけない！」

「ならあいつも罰せられるべきだよなあ！ なんだつてこの俺様の立ち位置を悪くしちまったんだ！ その罪は万死に値する！ ただ殺すだけじゃ足らねえ！ あいつの大切なモン全部あいつの目の前で叩き壊してやるぜ！ そうすりゃあ万死にはならなくとも五死ぐらいにはなるかもな！」

ああもう！ ああ言えばこう言う奴だ！

こんな堂々巡りみたいな事をしていたら夜が明けてしまうよ！

「もう良い！ お前の屁理屈は沢山だ！ これ以上聞いていたら気が狂っちゃうよ！」  
そう言つて腰のホルスターからカードの束を取り出してディスクに差し込む。デッキに反応したディスクに電源が入り、手元のスイッチを押すとブレードが展開してデュエルモードに変形した。

「ここでお前を倒す！ 黎には手を出させない！」

「ギャハハハハハハハハハ！ この俺とデュエルかあ!? 身の程を教えてやるぜクズ女！ 俺様はセブンスターズの高田順二郎！ まずはテメエを捻り潰してあのゴミを地獄へ叩き落としてやる！」

「わたしはオベリスクブルー一年女子、神山フィオ！ お前なんかにも負けるものか！」

「その精霊、『勝利の導き手フレイヤ』のフレイ！ 黙つて聞いてましたが、貴方は極めて身勝手です！ 貴方なんかが真の強さを手に入れられるのですか！」

「ギャハハハハハハハ！ 行くぜえ！」

「フレイ、行くよ！」

「はい！」

『デュエル！』

高田 VS フィオ

LP 4000 VS LP 4000

「先攻は俺様が頂くぜ、ドロー！俺は『シャインエンジェル』を召喚！」

シャインエンジェル：ATK 1400

高田が最初に呼び出したのは天使族のリクルーター。光属性サーチの能力を持っていたはずだ。

こんな所でわたしは負けられない。ここでこいつを叩き潰さないと、わたしは黎に顔向けできない！

「更に手札からフィールド魔法『幻魔の王城』を発動だぜえ！」

続いて発動するフィールド魔法。途端に火口への道だった周囲は、不気味な色を醸し出す巨大な城塞となった。わたし達は周囲を城壁に囲まれ、頭上高くに時計塔がある事を踏まえると、今いる場所は多分この城の中庭あたりか。

「このフィールドは一体……！」

『マスター、気を付けて下さい。凄まじく嫌な予感がします……!』

デッキから現れ半透明の姿で呟くフレイ。不気味なのはわたしの気のせいじゃ無いみたいだね。

「ククク、俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ!」

高田：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：シャインエンジェル（ATK 1400）

：伏せカード1枚、幻魔の王城（フィールド魔法）

「わたしのターン!」

でも、どんなカードを敵が使つて来ようとも、わたしのデュエルスタイルは変わらな  
い!

「私は手札から『ヘカテリス』の効果発動! このカードを手札から捨てて、デッキから  
『神の居城—ヴァルハラ』を手札に加える!

更に魔法カード『トレード・イン』を2枚発動! 手札からレベル8の『墮天使スペ



ルビア』と『The splendid VENUS』を墓地に送って4枚ドロ―!」

ヘカテリス（効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1500／DEF 1100

このカードを手札から墓地へ捨てて発動する。

自分のデッキから「神の居城―ヴァルハラ」1枚を手札に加える。

よし! 中々の手札!

「手札から永続魔法『神の居城―ヴァルハラ』を発動! 1ターンに1度、自分の場にモンスターがいない時、手札から天使族モンスターを1体特殊召喚できる! わたしは手札から『光神機―轟龍』を特殊召喚!」

『GAAAAAAA!』

光神機―轟龍 : ATK 2900

赤い垂れ幕を通して登場することのトップバッターは、長い胴体とドラゴンの頭を持った白い天使。貫通能力を持った優秀なモンスターだ。

神の居城―ヴァルハラ

### 【永続魔法】

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

光神機―轟龍（効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2900／DEF 1800

このカードは生け贄1体で召喚する事ができる。

この方法で召喚した場合、このカードはエンドフェイズ時に墓地へ送られる。

また、このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「高田あ！ お前が何を企んでいるかは知らないけど、ここでその企みは阻止させてもらう！」

「ハッ！ やれるモンならやってみろ！」

「やってやるさ！ バトル！ 『轟龍』で『シャインエンジェル』を攻撃！ 〃シャイン  
ング・キャノン〃！」

頭の先に光の砲弾を生み出し、射出する『轟龍』。これが決まれば1500ダメージだけど……。

「そうはさせるか！ 永続罫『スピリットバリア』を発動！ 自分の場にモンスターがいる時、俺は戦闘ダメージを受けない！ ダメージは戦闘破壊の前に入る！ モンスターが1体でもいれば、そいつとの戦闘ダメージであっても俺はダメージを受けないぜ！」

「それでも『シャインエンジェル』は破壊だ！」

スピリットバリア

【永続罫】

自分フィールド上にモンスターが存在する限り、このカードのコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

光の砲弾によって瞬時に蒸発する4枚羽の男天使。しかし衝撃波は半透明のバリアによって阻まれた。

やはり、そのカードを伏せてあったか。彼はこうやってリクルーターでダメージを最小限に削り、『ライトニング・ボルテックス』で場を薙ぎ払ってモンスターの総攻撃を仕掛ける。もしくは『残骸爆破』を連続で決めて無理矢理削り取る。正直言って長期戦を前提とした気の長い戦術。

対し、わたしは違う。重量級の天使族を軸に、カウンター罠や魔法を叩き込むパワー&トリックの戦術。キーカードが手札に来ればあんな専守防衛の戦い方を崩す事は容易い。

「さあ、『シャインエンジェル』の効果を使いたいなら使えば良い！」

「おう、使わせてもらおうぜ！俺は効果でデッキから『シャインエンジェル』を新たに特殊召喚だぜえ！」

光のゲートに導かれ、素足の4枚羽天使が再び姿を現す。

そんな事しても無駄だ！たかが攻撃力1400のモンスターで、わたしの上級天使が負けるわけが無い！

シャインエンジェル：ATK 1400↓1900

え!?

「攻撃力が上がった!？」

「こいつがフィールド魔法『幻魔の王城』の効果だ！ デッキから特殊召喚された元々の攻撃力が1500未満のモンスターは、攻撃力が500ポイントアップする!」

成程、リクルーターの攻撃力はほぼ1400。これならどうも下級アタッカーになれるってワケか……!」

しかしそれでも攻撃力は1900、『轟龍』の足元にも及ばない。なのにわざわざこのわたしにケンカ売って来たって事は、何か策があるって事か……。

ならここは……。

「わたしはモンスターを裏側守備表示で召喚し、ターンエンド!」

ファイオ：LP 4000

手札：3枚

フィールド

：光神機―轟龍(ATK 2900)、セットモンスター1体

：神の居城―ヴァルハラ（永続魔法）

伏せたモンスター守備力は1900より高い。これならこの戦線を突破する事は難しいはず……！

「俺様のターン、ドロロー！ ケヒヒヒ、教えてやるぜ、このフィールド魔法の真の恐ろしささぞー！」

「何だつて!?」

「こいつはただの強化魔法じゃねえつて事だ！ 俺はモンスターを召喚するぜ！ こおいつだあ！ 『コーリング・ノヴァ』を攻撃表示で召喚だぜ！」

コーリング・ノヴァ：ATK 1400

今度は羽の生えたクリスマスリースのような天使族リクルーター……。でも攻撃力1400で何を……。

「更に俺は『幻魔の王城』の効果発動！ 1ターンに1度、俺様の場のモンスター1体の持つ属性を1つ選び、それと違う属性のモンスターのこのターンの攻撃を封じる！」

バトル！ 『シャインエンジェル』で『轟龍』を攻撃！ “エンジェルス・ラリアット

“!”

「迎え撃て! シヤイニング・キャノン!」

筋肉質な右腕での打撃を目論んで突進して来る天使。こちらも光の砲弾を放って応戦する。

攻撃力の差は明確のはず……。一体何を?

『マスター、あれ!』

「な!?!」

フレイが横から指を差す。それを見た途端、わたしは息を呑んだ。

『トオオオ、ハアツ!』

『GYUUUUUUUUUUUU!?!』

なんと高田の天使が光の弾を突き抜け、その腕でわたしの天使を粉碎したのだ。

「きゃあつ!?!」

ファイオ：LP 4000↓3100

全身を突き抜ける衝撃。内臓を直接プロボクサーの拳で殴られて圧迫されたかのようなショックに、一瞬だけ呼吸が止まる。

「ケヒヒヒ、どうだ、闇のゲームの味は？」

「……………っ！」

これが、黎の体験していた闇のゲーム……。こんな衝撃をライフが尽きるまで浴びていたら、並みの人間じゃあ死んでしまう……。君はこんな無茶を続けていたと言うのか！

でも今は、それよりも何故攻撃力で勝るわたしのモンスターが破壊されたかの方が重要だ。

一体何が……。

「ギャハハハハハハ！ 何が起きたか分からねえってツラだな！ 俺様の『シャインエンジン』の攻撃力を見てみな！」

「何……………!？」

シャインエンジン：ATK 3800

「こ、攻撃力3800!? さっきの2倍じゃないか!？」

「そうだ！ これが『王城』の第2の効果！ 選択した属性のモンスターが同じ属性のモンスターとバトルする時、その攻撃力はバトル終了時まで2倍になる！」



2倍……、それで攻撃力が1900から3800に上がったという事か……！

マズいね、こっちのターンじゃ『スピリットバリア』に阻まれてダメージは通らず、あっちのターンでは攻撃力を2倍にされて撃ち落とされる。これまでの防御主軸の戦い方じゃない、攻めて攻めて攻め落とすガッツリした攻撃型のデッキになっている！

「更に『コーリング・ノヴァ』で裏守備モンスターに攻撃イ！」

突進して来るクリスマスリース型モンスター。それに合わせてわたしのモンスターが表側表示になる。

セットモンスター ↓ ハープの精：DEF 2000

「光属性だな！ なら『コーリング・ノヴァ』の攻撃力も2倍だあ！」

コーリング・ノヴァ：ATK 1400 ↓ 2800

突進に跳ね飛ばされ、黄色のロープを身に纏ったハープ引きの女性が倒れる。

く……、下級モンスター、しかもリクルーターに守備力2000の壁をこうも易々と突破されるなんて!?

ハーブの精（通常モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 800／DEF 2000

天界でハーブをかなでる精霊。

その音色はまわりの心をなごめます。

「ギャハハハハ！ 俺様はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

高田：LP 4000

手札：2枚

フィールド

・シャインエンジェル（ATK 1900）、コーリング・ノヴァ（ATK 1400）

・伏せカード1枚、スピリットバリア（永続罫）、幻魔の王城（フィールド魔法）

「わたしのターン、ドロロー！」

『マスター、このフィールドと言い、あの男の気配と言い、尋常では有りません』

「分かってる。でも、負けるわけにもいかない。全力で行くよ！」

『はい！』

「わたしは手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！ デツキからカードを2枚ドロ―！  
続いてわたしは『ヴァルハラ』の効果発動！ カモン、『アテナ』！」

アテナ：ATK 2600

「更に手札から『勝利の導き手フレイヤ』を通常召喚！ 頼むよ、フレイ！」  
「任せて下さい！」

勝利の導き手フレイヤ：ATK 100

「その効果により、わたしの場の天使族がパワーアップする！」  
「行きますよお！」

アテナ：ATK 2600↓3000

勝利の導き手フレイヤ：ATK 100↓500

わたしの場に現れる、小さな盾を持った戦女神と、パートナーでもあるチアガール風天使。

ここからがわたしのデッキの本領発揮だ！

「この瞬間、『アテナ』の効果発動！ 天使族モンスターが現れる度に、相手に600ポイントのダメージを与える！ ムアサルト・シャイン！」

戦女神の右手の槍が光り輝き、相手を突き刺さんとビームを放つ。

これでまずはジャブをお見舞いしてやる！

アテナ（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2600／DEF 800

1ターンに1度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター1体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する天使族モンスター1体を選択して特殊召喚する。

フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに600ポイントダメージを与える。

勝利の導き手フレイヤ（効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 100／DEF 100

自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択する事はできない。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターの攻撃力・守備力は400ポイントアップする。

「そうは行かねえぜ！ 永続罫『リクルート・ポイント』を発動！ こいつが存在する限り、俺様が受ける効果ダメージは半分になる！ あべしっ!？」

高田：LP 4000↓3700

くっ！ ダメージを削られたか！

「更に俺様が受けた効果ダメージ100ポイントにつき1つ、このカードにポイントカウンターを乗せる！」

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 0↓3

やるね……。でも、わたしはまだまだ本気を出し切っていない！

続いて手札を1枚切る。描かれているのは、半透明の女性の天使のモンスター。

「わたしは墓地の光属性『ヘカテリス』と『ハーブの精』をゲームから除外し、『ホーリーシャイン・ソウル神聖なる魂』を特殊召喚！ 『アテナ』の効果でダメージ！」

「だが『リクルート・ポイント』の効果で半減する！ ごぼあっ！」

神聖なる魂：ATK 2000↓2400

高田：LP 3700↓3400

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 3↓6

「まだだ！ 『アテナ』の効果発動！ 1ターンに1度、自分の場の天使族を1体墓地に

送り、墓地の天使族を1体復活させる！ 『神聖なる魂』を墓地に送って、『墮天使スペルビア』を特殊召喚！ 『アテナ』の効果でダメージを与える！ アサルト・シャイン  
“！”

「ダメージは半分になる！ ぐえっ！」

『JAGAAAAAAAAA!』

墮天使スペルビア：ATK 2900↓3300

高田：LP 3400↓3100

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 6↓9

『スペルビア』は闇属性、これで属性バトルに強い奴の優位点を揺らがせる事ができる。

「まだまだあ！ 更に『スペルビア』は墓地から特殊召喚された時、自分の墓地から天使族1体を特殊召喚できる！ わたしが呼ぶのは『The splendid VENU S』！ 更に『アテナ』の効果でダメージを受けてもらうよ！」

『トウッ！』

「ひでぶっ!?!」

The splendid VENUS : ATK 2800 ↓ 3200

高田 : LP 3100 ↓ 2800

リクルート・ポイント : ポイントカウンター 9 ↓ 12

ぬう……、思ったよりダメージが少なくなってしまうた……。ダメージが半分にさえなつてなければ、あいつのライフはもう半分を切っていたつてのに……！

神聖なる魂（効果モンスター）

星6

光属性 / 天使族

ATK 2000 / DEF 1800

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する光属性モンスター2体をゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手のバトルフェイズ中のみ全ての相手モンスターの攻撃力は300ポイントダウンする。



墮天使スペルビア（効果モンスター）

星8

闇属性／天使族

ATK 2900 / DEF 2400

（1）このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、「墮天使スペルビア」以外の自分の墓地の天使族モンスター1体を対象として発動できる。

その天使族モンスターを特殊召喚する。

The splendid VENUS（効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2800 / DEF 2400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する天使族以外の全てのモンスターの攻撃力と守備力は500ポイントダウンする。

また、自分がコントロールする魔法・罫カードの発動と効果は無効化されない。

「わたしは魔法カード『ホーリー・ドロー』を発動！ 手札がこれ1枚で、自分のレベルが同じ天使族モンスターが2体、このカードを発動するターン内に除外されている場合、除外されたモンスターのレベル1枚カードをドローし、デッキからカードをその枚数分墓地に送る！

このターン、除外された天使族は『ハーブの精』と『ヘカテリス』、レベルは4！ よつてカードを3枚ドローする！」

ホーリー・ドロー（オリジナル）

#### 【通常魔法】

手札がこのカード1枚のみで、このターン同じレベルの天使族モンスターが2体のみゲームから除外されている場合に発動できる。

このターンに除外された同じレベルのモンスターのレベル1枚カードをドローし、その枚数分だけデッキの上からカードを墓地へ送る。

このカードを発動するターン、天使族以外のモンスターを通常召喚・特殊召喚・反転召喚できない。

新たなカードが手札に加わり、『大天使クリスティア』を始めとしたカード3枚が墓地

へと送られて行く。

オーケー、良いカードを引いた！

「手札から装備魔法『エクステンジ・ガード・ローブ』を発動！ このカードをフレイに装備させ、攻撃力を500ポイントアップさせる！」

「ハアッ！」

勝利の導き手フレイヤ：ATK 500↓1000

フレイに装備された金色に輝くマント。これだけじゃあ数多の装備カードの中に埋もれてしまうけど、このカードの使い方は別にある！

「続いて手札から永続魔法『一族の結束』を発動！ このカードは自分の墓地に存在するモンスターの種族が一種類のみの場合、それと同じ種族の自分フィールド上のモンスターの攻撃力を800ポイントアップさせる！ わたしの墓地にいるモンスターは全て天使族！ よってわたしの場の天使族モンスターの攻撃力は800アップする！」

アテナ：ATK 3000↓3800

勝利の導き手フレイヤ：ATK 1000↓1800

墮天使スベルビア：ATK 3300↓4100

The splendid VENUS：ATK 3200↓4000

「こ、攻撃力4000クラスが2体だとお!?!」

「お前のモンスターの効果は確かに強力。でもその攻撃力は4000を超える事はできない!」

『幻魔の王城』の効果で攻撃力が500上がるのは元々の攻撃力が1500未満のモンスターののみ、つまり攻撃力の最大値は3998。本来のターゲットが黎だったって事は、デッキ内の属性を統一しているとは考えにくい。もし飛び出してくるとすれば、攻撃力0からモンスター効果で数値を跳ね上げる『カオス・ネクロマンサー』くらいだから、そつちだけを警戒すれば良い。そしてあのモンスターは闇属性。光属性しか場がない奴に、わたしのモンスターを倒すだけの大火力は、無い!

「マスター、この装備カードの効果を!」

「分かってる! 攻撃力が変化したこの瞬間、フレイに装備させた『エクステンジ・ガード・ローブ』の効果発動! 装備モンスターの攻撃力が、装備された『エクステンジ・ガード・ローブ』以外の効果で変化した場合、その変化した数値分のダメージを相手に与える! 800のダメージを受ける!」

「食らいなさい！」

「だがダメージは半分になるぜえ！ うおっ！」

高田：LP 2800↓2400

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 12↓16

フレイの羽織ったマントから放たれたビームが高田を撃ち抜く。こうやって攻撃力が変化するだけでダメージを与えられるんだから、このカードはコンボ前提だけど中々に強い。

「まだ終わって無い！ 続いて装備魔法『シャイニング・エンブレム』を発動！ このカードは自分フィールド上の光属性・天使族モンスター1体に装備され、墓地から光属性・天使族モンスターを1体除外して発動する。このカードを装備したモンスターの攻撃力を、除外したモンスターのレベル×200ポイント上昇させる！」

わたしは墓地からレベル8の『轟龍』を除外し、フレイの攻撃力を1600ポイントアップ！ と同時に、『エクステンジ・ガード・ローブ』の効果で、お前に1600のダメージだ！」

「それも半減させる！」

「でもダメージは受けてもらいますよー！」

勝利の導き手フレイヤ：ATK 1800 ↓ 3400

高田：LP 2400 ↓ 1600

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 16 ↓ 24

「ぐ、クソ……！」

更に放たれる金色のビームを受け、膝をつく高田。ダメージを半減させているとは言え、事実上、肉体に入ったダメージは2400になる。流石に1ターンでこれだけ浴びればキツいはずだ。

次は、デツキの中からリクルートできるモンスターを削る！

「バトル！ 『アテナ』で『シャインエンジェル』を攻撃！ アイギス・ランス！！」

光の槍で貫かれる男の天使。デツキを圧縮させる危険はあるけど、これ以上光属性のモンスターを場にのさばらせるワケにもいかない。

「『シャインエンジェル』の効果で、デツキから『コーリング・ノヴァ』を特殊召喚！」

「『アテナ』の効果でダメージも受けてもらう！」

「ぐぼおっ!？」

コーリング・ノヴァ：ATK 1400↓1900

高田：LP 1600↓1300

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 24↓27

「計算通り！ 『VENUS』で後続の『コーリング・ノヴァ』を攻撃！ //ホーリー・フェ

ザー・シャワー！！」

「デツキから最後の『コーリング・ノヴァ』を特殊召喚だぜえ！」

「『アテナ』でダメージ！」

「ひでぶっ!?!」

コーリング・ノヴァ：ATK 1400↓1900

高田：LP 1300↓1000

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 27↓30

「いくらでも出せば良い！ 『スペルビア』で攻撃力が高い方の『コーリング・ノヴァ』を攻撃！ //ルシフェル・トラジエデイ！」

「デツキから3体目の『シャインエンジェル』を特殊召喚！」

「ダメージを受けてもらう！」

「半分になるがなあ！　ぐばあつ！」

シャインエンジェル：ATK 1400↓1900

高田：LP 1000↓700

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 30↓33

「でもこれで光属性リクルーターは打ち止めだ！　フレイ！」

「ええ！　わたくしでの攻撃で最後のモンスターも撃ち落とします！　喰らいなさい、

チアリング・コンバット！」

輝く羽の雨、闇の波動、フレイの近接格闘術が順番に高田のモンスターを討ち取る。

これで光属性リクルーターは『ユーフォロイド』のみ。流石にレベル6のあのモンスターはいれてないでしょ。

「ぐう……！　だがこの瞬間、『コーリング・ノヴァ』のモンスター効果発動！　デツキから『エンシエント・ドラゴン』を特殊召喚だぜえ！」

ほらね。



それと、そのモンスターの特殊召喚は認めない！

「この瞬間『シャイニング・エンブレム』の更なる効果発動！ このカードを装備したモンスターがバトルで破壊したモンスターの効果は無効となる！ 更に相手モンスターを戦闘破壊した時、墓地からレベルの一番低い光属性・天使族モンスターを1体除外し、そのレベル×200のダメージを与える事ができる！

墓地の最も低いレベルを持ったモンスターはレベル6の『神聖なる魂』！ よって1200のダメージを与える！」

「それも半減だ！ ぐはああっ!?!」

高田：LP 700↓100

リクルート・ポイント：ポイントカウンター 33↓39

エクスチェンジ・ガード・ローブ（アニメオリジナル）（自己解釈効果）

### 【装備魔法】

このカードを装備したモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

装備モンスターの攻撃力が「エクスチェンジ・ガード・ローブ」以外の効果で変化した場合、その変化した数値分のダメージを相手に与える事ができる。

## 一族の結束

## 【永続魔法】

自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

シャイニング・エンブレム（オリジナル）

## 【装備魔法】

レベル4以下の光属性・天使族モンスターのみに装備可能。

発動時に自分の墓地から光属性・天使族モンスターをゲームから除外し、除外したモンスターのレベル×200ポイント装備モンスターの攻撃力をアップさせる。

このカードを装備したモンスター以外の表側表示で存在するモンスターがそのターンのバトルフェイズ中に戦闘を行っていない場合、装備モンスターは攻撃できない。

装備モンスターが戦闘で破壊したモンスターの効果は無効となる。

また装備モンスターが戦闘で相手モンスターを破壊して墓地に送った場合、自分の墓地に存在する最もレベルの低い光属性・天使族モンスターを1体除外する事で、そのレベル×200ポイントのダメージを相手に与える事ができる。

この効果はデュエル中1度しか使えない。

ここまでやってなおも残る高田のライフ……。ここまでで通算7800ポイントのダメージを叩き込んだ。この数値はわたしの覚えている中では、1ターン内で最高の数値。それでもそれは半減されてしまった。できれば決めたかったんだけどね……！

「クソアマガあ……！ やってくれんじゃねえか！ 図に乗ってんじゃネエぞー！」  
「……、わたしはカードを1枚伏せて、ターンエンド」

ファイオ：LP 3100

手札：0枚

フィールド

：アテナ（ATK 3800）、勝利の導き手フレイヤ（ATK 3400）、墮天使  
スベルビア（ATK 4100）、The splendid VENUS（ATK 4  
000）

：伏せカード1枚、一族の結束（永続魔法）、エクステンジ・ガード・ローブ（装備魔法・『勝利の導き手フレイヤ』に装備）、シャイニング・エンブレム（装備魔法・『勝利の導き手フレイヤ』に装備）

あいつのライフは100、対してわたしのライフは3100。一瞬で消し飛ぶような数値じゃ無い、けど……。

と、その時。

「フィオーツ！」

「黎!？」

麓に続く、わたしの背後にある道から、黎が桜さんとポーラを従えて走って来た。どうして……が……？

「嫌な気配を探って来たんだ。そしたら変なフィールド魔法が展開してな、ここに着いた」

「……それより、対戦相手！」

ポーラが指差す先。そこに視線を合わせた黎と桜さんは、険しい表情で睨みつけた。

「ああ、よもや貴様とはな、高田ア！」

「おのれ、そこまで腐っていたかあ！」

高田を睨む黎と桜さん。それに対し、高田は鼻で嗤った。

「へッ、誰に向かって口利いてやがんだ。俺様はオベリスクブルーで、セブンスターズの一員！ 様を付けろ様を！ テメエらみてえな低俗なゴミクス如きが本来なら話しか

けるどころか視界に入れる事すら許されねえ高貴な存在なんだぜえ？」

「黙れ！ 貴様、俺だけならまだしも、フィオにまで手エ出しやがって！ 絶対に許さん！」

「お前が俺を許すだあ？ つけ上がるンじゃねえよこのクズレツドが！ 俺様がテメエを許す・許さないの権利はあつても、テメエが俺を許す・許さないの権利はネエんだよ！ ゴミは黙って俺様に跪け！ 分かったかこのカス！」

「テメエ……！ 腐ってる腐ってると思つていたが、もう救いような無いレベルにまで腐り果てたみてえだな！」

「人としての恥じらいすら失うとは、呆れて物も言えんな！ 人間失格とは、欠陥製品とはこの事か！」

「……口も暫く合わない内に、大分悪くなってる。……孤独の原因にすら気付けない哀れな人間と成り果てた！」

「ああ!? ナメてんじゃねえぞコラ！ 口の利き方に氣イ付けやがれつつつてんだろぅが！ 調子乗つてんじやネエぞこのクズ野郎共が！ 殺されてえのか!? 殺されてえみてえだなあ、オイ!? ……良いぜえ？ この女を殺したら、次はテメエらだ！ 女2人はミンチ肉にして化物、テメエの口の中に突つ込んでやる！ 生まれた事を後悔するぐらいまで殺してやる！」

「俺達を殺すだど!?」　できもしねえバカげた事を口にするな!」

「黎、気を付けて!」　高田の馬鹿の奴、何かおかしい!」

「恐らく、最後の護衛に何かされたと思われれます。気配もカードも妙ですし、これまでとは明らかに違います!」

「ここまで来ると、もうこの異常さは何か薄ら寒い物すら感じさせるレベルだ。」

「本当に人はここまで荒々しく人を見下せる性格になるのか。人を見下して何が楽しいのか、わたしにはさっぱり分からないし、分かりたくも無い。」

「この男、もしかしたら最初から気が狂っていたのかとも思ってしまう。もうこいつは人間じゃ無い、悪魔に魂を売った魔物だ。」

「さあ、お前のターンだ!」

「分かってらあ!」　俺様のターン、ドロ!」

高田が引いたカードを見る。その途端、奴の表情が変わった。まるで勝利を確信したかのような、不気味な笑みに。

「な、何がおかしい!」

「クククク!」　俺は魔法カード『大嵐』を発動!　フィールドの全ての魔法・罠を破壊する!」

「何!?!」

ここでそんなカードを!?

緑のカードから風が吹き出し、フィールドを荒らし回る。その風によってわたしの場のカードは全て消し飛んでしまった。

折角伏せた『攻撃の無力化』が……! それに攻撃力もこれで元に……!

アテナ : ATK 3800 ↓ 3000

勝利の導き手フレイヤ : ATK 3400 ↓ 500

堕天使スperlビア : ATK 4100 ↓ 4000

The splendid VENUS : ATK 4000 ↓ 3200

「く……、力が……!」

「でも、これで奴の場にある魔法・罠カードも無くなった! この行動は寧ろ自分の首を絞めた!」

「そいつはどうかかな?」

「何……?」

風が止み、舞い散っていた砂埃が収まる。そして気付く。この不気味な城もまた『大嵐』で破壊されるべきなのに、依然としてその姿を保っている事、そして奴の2枚の永

続闘も場に残っている事に。

「俺は『幻魔の王城』の3つ目の効果を発動したのよ！ こいつが場にある限り、表側表示の俺様の魔法・罠は1ターンに1度、破壊されねえのさ！」

「何!?!」

「おっと、まだまだ行くぜえ！ 俺は更に『リクルート・ポイント』の効果発動！ 墓地の魔法1枚を除外し、このカードを墓地に送る事で、送った時に乗っていたカウンターの数×100、俺様のライフを回復！ 更にその数値分だけ相手にダメージを与える！

墓地の『大嵐』を除外い！」

「乗っていたカウンターは全部で39、って事は3900ポイントの回復とダメージですか!?!」

「わたしは『ホーリー・ドロー』の効果で墓地に送られた『ピクシーのシエルター』の効果発動！ 墓地のこのカードを除外し、除外された天使族1体を墓地に戻す事で、そのモンスターの攻撃力分、わたしが受ける効果ダメージを削る！ 選択するのは『轟龍』！ このカードの攻撃力2900ポイント分だけ、受けるダメージを減らす！

キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「マスター!?!」



高田 : LP 1000 ↓ 4000

ファイオ : LP 31000 ↓ 21000

一瞬で回復する高田のライフ。わたしは逆に初期値の半分近くに減らされてしまう。そ、そんな……。ここまで削ったライフを一瞬で逆転された……！

リクルート・ポイント（オリジナル）（改訂版）

【永続罫】

（1）：このカードがフィールドに存在する限り、相手によって自分が受ける効果ダメージを半分にする。

その後、受けた効果ダメージ1000ポイントにつき1つこのカードにポイントカウンターを乗せる。

（2）：自分のターンのメインフェイズ1で、自分の墓地の魔法カードを1枚除外しこのカードを墓地に送って発動できる。

このカードに乗っていたポイントカウンターにつき自分のライフを1000回復し、更にその数値分だけ相手にダメージを与える。

このターン、自分は効果ダメージを受けない。

ピクシーのシエルター（オリジナル）（改訂版）

【カウンター罠】

（1）：ダメージを与える効果が発動した時に発動できる。

自分が受ける効果ダメージを0にする。

（2）：自分が効果ダメージを受ける時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、除外されている自分の天使族モンスターを1体墓地に戻して発動する。

その効果ダメージを、戻したモンスターの攻撃力分ダウンさせる。

「ギヤハハハハハ！ 更に俺は魔法カード『リクルート・ヒール』を発動！ 俺の場の元々の攻撃力1500未満のモンスターを1体選択し、それと同じ属性の俺の墓地のモンスター1体につき、ライフを400ポイント回復する！ 俺は『コーリング・ノヴァ』を選択！」

「クツ、『コーリング・ノヴァ』を光属性です！」

「奴の墓地にいる光属性モンスターは5体！ って事は……！」

高田：LP 4000↓6000

「ライフがまた回復された!？」

「このままでは差が開く一方です!」

リクルート・ヒール（オリジナル）

【通常魔法】

自分フィールド上に存在する元々の攻撃力が1500未満のモンスターを1体選択する。

自分の墓地に存在する選択したモンスターと同じ属性のモンスター1体につきライフを400ポイント回復する。

このカードは自分のライフが2000以下の時には発動できない。

まずい。わたしのライフは2100、このままじゃあわたしが圧倒的に不利……!!

でも、奴の場には攻撃力1400の『コーリング・ノヴァ』が1体のみ。フレイには他に天使族モンスターをわたしが従えている場合、攻撃の対象から外される効果がある。そしてフレイ以外で最も攻撃力が低いのは3000の『アテナ』。

『コーリング・ノヴァ』は光属性・天使族しかリクルートできないから機械族であるリ

クルーターの『ユーフォロイド』を呼ばれる心配も無い。このデュエル、まだ負けたわけじゃ無い！

「ケケケケ、俺は『幻魔の王城』の更なる効果を発動！ 1ターンの1度、墓地に攻撃力1500未満のモンスターが2体以上存在する場合、その2体のモンスターをデッキに戻してシャッフルし、1枚ドロワーできる！ 墓地から2枚の『シャインエンジェル』をデッキに戻し1枚ドロワー！」

「な、何だつて!？」

「それじゃあほぼ無限にリクルート先を確保できるじゃ無いですか!？」

「ギャハハハハハハハハハ！ これが俺様の、幻魔の力だあ!！」

### 幻魔の王城（オリジナル）（改訂版）

#### 【フィールド魔法】

(1)：このカードの発動は無効化されず、フィールドに表側表示で存在する限り自分フィールド上の表側表示の魔法・罫カードは1ターンに1度だけ破壊されない。

(2)：このカードがフィールド上に存在する限り、相手はフィールド魔法を発動できない。

(3)：デッキから元々の攻撃力が1500未満のモンスターが特殊召喚された場合、そ

のモンスターの攻撃力は500ポイントアップする。

(4) : 1ターンに1度、自分のメインフェイズ1で発動できる。

自分フィールドのモンスター1体の持つ属性を1つ選択し、選択した属性のモンスターと同じ属性の相手モンスターと戦闘を行う場合、自分モンスターの攻撃力はダメージステップ終了時まで2倍となる。

このターンその属性以外を持つモンスターは攻撃できない。

(5) : 1ターンに1度、自分の墓地の攻撃力1500未満のモンスター2体を対象として発動できる。

そのモンスター2体をデッキに戻してシャッフルする。

その後、自分は1枚ドロウする。

「おっと、良いカードを引いたぜえ?」

「っ!」

「俺は手札から魔法カード『リクルート・ラッシュ』を発動! 自分フィールド上のリクルーター1体を手札に戻し、効果を無効にして同じ攻撃力を持った同名以外のモンスターを可能な限りデッキから特殊召喚する!」

リクルート・ラツシユ（オリジナル）

【通常魔法】

自分フィールド上の元々の攻撃力が1500未満のモンスター1体を手札に戻して発動する。

戻したモンスターと同じ攻撃力の同名以外のモンスターを自分のデッキから可能な限り特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になる。

「現れるー！ 『巨大ネズミ』、『シャインエンジェル』、『キラール・トマト』、『マスクド・ドラゴン仮面竜』、『ドラゴンフライ』！」

い、一気に5体のリクルーター!?

巨大ネズミ：ATK 1400↓1900↓1400  
 シャインエンジェル：ATK 1400↓1900  
 キラール・トマト：ATK 1400↓1900↓1400  
 仮面竜：ATK 1400↓1900↓1400  
 ドラゴンフライ：ATK 1400↓1900↓1400

場に次々と現れるモンスター達。青い大きな齧歯類、4枚羽の男天使、ジャック・オー・ランタンのようなトマト、仮面を着けた赤いドラゴン、巨大なトンボがゲートを潜って出現した。

確かにモンスターが破壊されて次のモンスターに繋げる特性上、こいつらが並び立つ事は有り得なくも無い。けどこんな簡単に、モンスターゾーンを埋め尽くすなんて……！

「だが攻撃力は『VENUS』の効果で500下がる！更に天使族を特殊召喚したから600ダメージを受けてもらう！トドメだあ！」

『リクルート・ポイント』の効果で、このターン俺様はダメージを受けない！  
「ぐ……い……！」

戦女神の槍から光が放たれ、高田を狙う。

だが高田はバリアを展開し光の攻撃を防いでしまった。

「で、でもそのモンスター達は全て属性がバラバラ！わたしのモンスターを相手に倒せる布陣じゃない！」

「ギャハハハハハハ！俺がいつ『リクルート・ラッシュ』を今引いたカードだと言った？俺様が引いたのはこいつだあ！手札から魔法カード『エレメント・ユナイト』を

発動！ 手札を1枚捨てて属性を1つ宣言！ ターンの終わりまで、フィールドにいる全てのモンスターは宣言した属性になる！ これが俺様の切り札よお！」

「な!?! ただでさえ同じ属性同士の戦闘に強いのに、属性を強制的に統一させるなんて!?!」

エレメント・ユナイト（オリジナル）

【通常魔法】

手札を1枚捨てて属性を1つ宣言する。

フィールド上に表側表示で存在するモンスターは、ターン終了時まで宣言した属性になる。

「手札に戻した『コーリング・ノヴァ』を捨てて光属性を宣言するぜ！ これでターンエンドまで全てのモンスターは光属性になる！」

アテナ：光属性↓光属性

勝利の導き手フレイヤ：光属性↓光属性

堕天使スペルビア：闇属性↓光属性



The splendid VENUS : 光属性↓光属性

巨大ネズミ : 地属性↓光属性

シャインエンジェル : 光属性↓光属性

キラール・トマト : 闇属性↓光属性

仮面竜 : 炎属性↓光属性

ドラゴンフライ : 風属性↓光属性

「そ、そんな……！　ここでこれだけの戦力を一瞬で揃えるだなんて……!?!」

「ギャハハハハハハハハ！　これが俺様とテムエの格の差だあ！」

く、悔しいけど、強い……！　冗談でも比喻でも無く、デタラメなパワーアップを遂げている……!?!

「これで最後だぜえ！　バトル！」

「フィオ！」「フィオ殿！」「……フィオ！」

「総攻撃で止めをさしてやるぜえ！」

マズい！　何とかしないとイケないのに、手札は無いし、伏せカードも消された……！

打つ手無し……、わたしの負け……！

「マスター、墓地の『エスクード・クルース』です！」

「え？ あ、そうか！ わたしは墓地の『エスクード・クルース』のモンスター効果発動！ このカードとカウンター罠を1枚ずつ墓地から除外し、このターン中にわたしが受ける戦闘ダメージを0にし、モンスターもバトルでは破壊されない！」

「何い!? そんなカード、何時墓地に送られたんだ！」

「『ホーリー・ドロウ』の効果で墓地に送られたカードの内の1枚が、これだったのさ！」

エスクード・クルース（効果モンスター）（オリジナル）

星7

光属性／天使族

ATK 1500／DEF 3200

このカードは特殊召喚された場合、そのターンの終了時に墓地に送られる。

手札・墓地に存在するこのカードと手札・墓地のカウンター罠カードを1枚ゲームから除外して発動する。

このターン自分が受ける戦闘ダメージは0となり、自分フィールド上のモンスターは戦闘では破壊されない。

この効果は相手ターンでも発動できる。





「2000ポイントのダメージを喰らいやがれえ！」

コンボ・マネジメント（オリジナル）

【速攻魔法】

自分フィールド上に元々の攻撃力が1500未満のモンスターが存在し、相手モンスターが発動ターン中に戦闘では破壊されなかった場合に発動できる。

このターン戦闘を行った相手モンスターを全て破壊し、その数×500ポイントのダメージを与える。

この効果で相手のライフが0になる場合、このカードは発動できない。

『ジャガアアアア！』

『トオオオオアツ！』

『グジョオオオオ！』

『ガアアアアア！』

『ジジジジジジ！』

攻撃が終わったと言うのに、再び突進をしかけて来る高田のモンスター達。

巨大齧歯類が盾ごと戦女神を噛み砕き、妖怪トマトが体当たりで壺型の墮天使を粉

砕。更に巨大トンボが金色の天使を食い千切り、赤い仮面のドラゴンが炎でわたしのパートナーを焼き払う。

「フレイ！」

「すみません、マスター……ッ！」

「ギャハハハハハ！ 死ねえ、ゴミ女ア！」

そして残った4枚羽の男天使が強烈なリアットをわたしの首に叩き込み、空高く、ゴツゴツした岩肌の露出している山肌の方向へと吹き飛ばした。

「グ、ガハッ!？」

フィオ：LP 2100↓100

血を吐いた瞬間、足が地面を捉えていない事に気付く。衝撃で空高く吹き飛ばされるのを感じながら、しかし意識は地上にいる黎に向いていた。

（あ、やば、これ人間の体じゃ死ぬわ……）

飛んだ先は空。下は固い岩に覆われた山肌で、この高さだと受け身も意味が無い。全てがスローモーションに見える、人生の最期の瞬間。

結局、高田の奴の言う通り、黎から大切な物を奪わせる結果になってしまった。

わたしも黎に近い内の一人、わたしが死んで悲しまない程、彼は冷淡では無い。……いや、冷淡ではなくなつてしまつた。

(まだ……、やらなきやいけない事が山のようにあつたのになあ)

なんて益体も無い事を、走馬灯を浮かべるでも無く、わたしは考えていた。

おぼろげだけど、1年くらい前からわたしの物だけどわたしの物じやない色んな記憶が泡沫のように現れ始めている。現実味は無いけれど、全て紛れも無い真実の記憶だ。他ならぬ自分自身で確信している。その記憶では、わたしこそが君ら義兄妹が不幸を味わう諸悪の根源だつた。だから2人揃うまでずっと手伝つて、それから謝ろうと思つていたんだ。

ああ、黎、ごめん。本当にごめんよ。わたしは、君と都ちゃんに謝らなければならぬ。誠心誠意を込めて土下座し切腹しても、決して償えない罪があるから。

でも、もうダメみたいだ。ゴメンね、死んで逃げちゃつて。

「フィオーツ！」

地上で叫ぶ黎。

喉に衝撃が直接入つた影響でか、声を出す事どころか呼吸すらままならない。ただゴポリと奇妙な音を立てて血が噴き出るだけ。

せめて、せめて一言、謝りたかつた。こんな事ならもつと早くに、曖昧な記憶であつ

ても謝るべきだったな……。

(黎、ゴメン)

心の中でわたしは謝り、目を閉じた。

そこでわたしの意識は暗い暗い、真つ暗で何も見えない闇の中へと沈んで行った。

ああ、君が体験した死っていうのは、こういう、こと、なのか、な……。

ごめんね、れい……。

きみを、ふこうにした、げんいんなのに、ちゃんと、あやまれなくて、ごめんなさい

……。

S I D E : 黎

気が付くと俺は、大地を蹴って走り出していた。

高田のモンスターのラリアットを食らって空高くファイオが飛ばされた時、どうしてだろうか、俺は都が死んだシーンを思い出していた。シチュエーションも死因も何もかも違うのに、何故か俺はファイオと都を重ねた。

頭の中の全てが俺に訴えていた。殺させるな、今度は助けろと。

放物線を描くように飛ばされたファイオは、あのままだと間違い無く地面に頭から着地



し、急な山肌を転げ落ちて行くだろう。いくらデュエリストの体が頑丈でも、そんな着地をしたら無事じゃ済まない。ほぼ間違い無く頭蓋か頸椎を骨折して死ぬ。

「そんなの、認めねえ！」

道の脇の岩を踏み台にせんと足を伸ばした。

だが果たして俺が届くのか？ 俺の助走有りの跳躍は幅が精々10メートル、高さは5メートルぐらい行けるが、それ以上どちらかを伸ばそうとするともう片方が犠牲になる。

フィオの位置にまで、それで届くのか!? 失敗したら俺が痛いだけじゃ済まないんだぞ!? 失敗したら、また俺は大切な人を失う！ だがもう確実な手段を取るだけの時間的余裕は無い、やるしか、やるしか無い。

そうだ、やるしか無いなら開き直るしかない。限界の果てまでかつ飛んでやる！ 諦めたら、何もかも無くなっちゃうんだ！

こういう絶対に諦めないチャレンジスピリッツを何て言うんだったか……。ああ、そうだ思い出した。

ダン！

岩を強く踏んで、踏み砕くぐらいの勢いで空へと大ジャンプ。そして、腹の底から叫ぶ。

「かっどピングだ、俺え！」

一瞬の逡巡がどうやら功を奏したようで、高く跳んだ俺はタイミング良く、見事にファイオの足を掴んで引き寄せせる事に成功した。

更に手首に直接アンカー付きのワイヤーを生み出して、まだ地面にいた桜とポーラに向けて投げる。

「2人とも、頼むー！」

「分かったー！」……任せて」

一瞬で俺の意図を察した2人は、そのワイヤーを掴んで俺達を力いっぱい引っ張ってくれた。

こっちもウインチで高速で巻き取り、鉄線が緩まないようにして地面にまで戻る事に成功したのだった。

着地した俺達の下へ桜とポーラが駆け寄る。すぐにファイオのダメージを察した桜が治療術をかけ始め、俺も髪の毛を変質させて注射針にし、鎮痛剤と強心剤を頸動脈に注入する。

「フィオ！ しつかりしろ、フィオ！」

必死に俺が呼びかけるものの、彼女の反応は無い。

隣では『仮面竜』の炎で黒焦げになったフレイが脈を計っている。

「脈はありますし、怪我也致命傷ではありません……。気絶しているだけですが……。くう……。つー！」

「フレイ、お前も休め！ 闇のゲームは精霊にだって悪影響があるんだろう!? そんな黒焦げな状態なんだから、自分の心配もしろよ！」

「情けない、です……。マスターを、守れなかった……」

「何言ってるやがる！ お前はいつもフィオの傍で頑張ってたじゃないか！ 皆知ってるぞー！」

「それでも……。こういう時に守れないのは、辛いですね……。ふふ、どうしてわたくしの攻撃力は1000しか無いのでしょうかね……」

後はお願います、とだけ言ってフレイはその場に倒れ、光となって消えた。これは桜と初めて会って消えた時と同じ、カードに戻ったのだろう。

「フィオ、フレイ……」

強いお前らが、こんなにポロポロになっちまって……。俺の代わりにセブンスターズと戦ったせいで……。俺が情けなかったから、弱かったから！

「ッー」

パアン！ と俺は頬を叩いて自分に喝を入れる。

もう俺は逃げない。俺が逃げて皆が傷つくのなら、俺は戦つてやる！ どこまでも血塗れになって、敵は残さず殺す！ 殺して殺して殺しまくつて！ 一匹残らず息の根を止めてやる！

「2人ともよく頑張つたな……。桜、ポーラ、ここ頼む」

「主殿……」

「……サー」

「後は全部、俺に任せろ！」

なあ『ジョーカー』。闇を見る事の本当の意味は、今でも分からない。

でももしフレイの言っていた通り、自分の中にある負の想念と向き合う事がそうだと  
言うのなら、俺はもうこの怒りや憎しみを肯定する事を躊躇わないし戸惑わない。

ずっと忘れていた。いや、忘れようとしていた。この憎悪の感情こそが、俺の本当の力の源。

「クヒヒヒヒヒ！ おい化物、別れの挨拶は済んだかあ？」

「高田、テメエ……！」

前の世界で手に入れた、闇の心。暗闇の殺意。

「お、おう……何だそのツラは……。び、ビビらせてるつもりか？ ケツ、オシリスレツドのクセしてチョーシこいてんじやねえぞゴラー！」

今の世界で手に入れた、光の心。明るい希望。

「テメエだけは、絶対に許さねえ……！」

両者は当然、相反する。だがそれらが俺の中に有るのなら、両方とも俺の力にしてやる！

殺意は否定しねえ。敵は全部ブチ殺す。綺麗事なんざ、最初から俺に似合うはずも無かったんだ！

だが希望だつて受け入れる。明るい明日を信じて、俺は歩き続ける！

「高田、俺とデュエルだ！ フィオとのデュエル、引き継がせろ！」

「何……？」

「ルールは通常のサシのデュエルだ。ただしテメエにはハンデを3つつけてやる」

「ほう、このパワーアップした俺様にハンディキャップとはな。身の程知らずめ！」

「ハンデーは、ライフだ。新しく俺が参加する分、つまり4000をテメエのライフに加え、お前のライフは1万とする」

この戦いは、新しく心を入れ替えた、俺の出発点を飾るデュエルになる。

テメエが相手じゃあ力不足にも程があるだろうが、どうでもいい。ここでテメエは

ぶっ飛ばす！

「ハンデ2、手札枚数。お前は今のデュエルで手札を使い切った。新しく5枚補充しろ。手札0じゃあ流石の1万ライフも数ターンで消し飛ぶ。んなデュエル、俺はゴメンだよ」

「ギャハハハハ！ マジで身の程知らずの命知らずだな！ 良いぜ、取り消しは却下だからな！」

その余裕、何時までも続くと思うなよ？

お前が見下していた腑抜けの俺はもういないんだからな。

「ハンデ3もライフ、ただし今度は俺のライフに関する事だ」

「ほう？ 俺が1万になったからテメエは4000かと思つたが、何だ、テメエも1万か？」

「ハッ、お前程度の雑魚相手に5桁も要るかよ」

ぬっと俺は右手の人差指を立てた。





「1だ、俺のライフは1ポイント。それでデュエルを開始する」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 80 : 1 VS 1万の戦い

SIDE : 無し

「1だ、俺のライフは1ポイント。それでデュエルを開始する」

高田は目を見張った。この男、今聞き違いじゃ無ければライフ1で戦うと言ったか。

しかも1万も相手に与えて。さっきまで戦っていたファイオのライフですらまだ100残っていた。その1%しかないライフで立ち向かえると本気で思っているのか。

「て、テメエ！ この俺様をナメてんのか！ たった1ライフたあ自殺志願者か！ ンなテメエをぶつ潰しても面白くも何ともネエんだよ！」

「自殺志願？ 違うな。俺はこう言いたいんだよ、『ライフ1でお前を倒す』ってな！」

「ああ!? この選ばれし栄光あるオベリスクブルーであり、セブンスターズの一員でもある俺様相手にライフ差99999で戦うつてののか!? 身の程知らずもいい加減にしやがれ、このクソ野郎が！」

自分は強くなった。そう確信したのに、この男もそれを見ていたはずなのに、何故黎

がこうまで高田を見下すのか、見下されている本人にはまるで理解できなかった。

高田の咆哮を、しかし黎は鼻で嘲笑った。

「身の程知らずはテメエだ高田。お前じゃ俺に1ダメージも与えられないって事を証明してやる。回復される事も無く、1度でもダメージを受ければその時点で敗北するスペランカー戦。お前じゃ俺に絶対勝てないって事を教える良い機会じゃねえか」

「この野郎、いい加減にしろよ!!」これだけパワーアップした俺を前にまだそんな減らず口が叩けるか! その目は節穴か!? 自信過剰もここまで来るとイライラするぜ!」  
「自信過剰? 減らず口? お前こそ身の程を弁えろ。ライフが1あればテメエを叩きのめすには充分だって俺は言ってるんだよ!」

ゴウ! と噴き出す黎の覇気に、高田は言葉が詰まった。

この男はもう、数日前の腑抜けとも、数分前の未熟者とも違う。それだけの気迫が黎にはある。強くなった、誰であつても叩き潰せるだけのパワーを手に入れた、そう確信したのに、この男の前には何故かそれすら霞んで見えた。

(ふ、ふざけんじゃねえぞ!)

栄光ある選ばれしデュエリストの自分が、こんな野卑で下劣な男相手に恐怖を感じるなどあつてはならない。そんな恐怖を与えるクソ生意気なゴミはここで叩き潰さなければ、後々のブルーの看板に泥を塗りかねないだろう。

「良いだろう、テメエのその条件で受けてやるぜ！」

「OK、後でやっぱ無しってのは却下だぜ？」

「クスが！ この俺様の實力の前に跪きやがれ！」

「断る！」

黎は持っていたデツキホルダーからデツキを一つ取り出した。

このデツキは属性がバラけている。他に持ってきたのは「炎星」、「海皇水精鱗」、「ガスタ」、「メガロツクワンキル」、「フォトン」、「スキドレ墓守」の6つ。

どれも属性が統一されてしまっているため、その属性のモンスターで攻め込まれると少々厳しい。

先刻の様子だと属性と種族でのリクルーターが高田のデツキには混在しているようだ。なら少なくとも2種類の同一属性があると考えるべきだろう。

デツキをディスクにセットし、ライフカウンターが起動。レーンにそってエツジが動き、手元のボタンを使ってライフを4000から1に書き換える。これでデュエルの準備が完了した。

「行くぞ、高田。この落とし前、たつぷりつけさせてもらおう！」

「ぶち殺してやる！ テメエの首を手土産に凱旋してやらあ！」

「頑張れ、主殿！」

「……サー、見守ってるから！」

『デュエル！』

黎 VS 高田

LP 1 VS LP 10000

高田：LP 10000

手札：5枚

フィールド

：巨大ネズミ（ATK 1900）、シャインエンジェル（ATK 1900）、キラール  
 トマト（ATK 1900）、仮面竜（ATK 1900）、ドラゴンフライ（ATK  
 1900）

：スピリットバリア（永続罨）、幻魔の王城（フィールド魔法）

黎：LP 1

手札：5枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・罠無し

S I D E : 黎

「行くぞ、俺のターン、ドロロー！俺は『ガガガマジシャン』を召喚！  
『フツ、ガガツ！』

ガガガマジシャン：A T K 1500

俺の一番手は黒いコートを羽織った銀髪の魔導士。背中には『我』の字がデフォルメされており、ヤンキーのような鋭い瞳で高田を睨み付けた。

「テメエ、忘れてネエか？もう1500程度の攻撃力じゃあ俺様のモンスターは倒せないんだよ！」

「知ってるさ。更に魔法カード『テイク・オーバー5』を発動、デッキトップを5枚墓地に送る！」

「デッキから5枚のカードを切り、それを墓地へと飲み込ませる。

送られて行くカード達を見て、俺は密かに笑った。

「更にカードを2枚セットして、ターンエンド」

黎：LP 1

手札：2枚

フィールド

：ガガガマジシャン（ATK 1500）

：伏せカード2枚

「ギャハハハ！ 俺様のターン、ドロ〜！」

さて、高田の性格のあの部分でもし変わっていないのであるならば、この後奴は同じ閻属性である『キラール・トマト』で攻撃を仕掛けて来る可能性が高い。しかも攻撃力を倍にして、な。

「勝てないと分かってザコを出すとはなあ!?! 結局テメエはクズレツドの化物、輝かしくブルーの人間様である俺には勝てねえって事だ！

もうカードを出す必要もネエ！ 『幻魔の王城』の効果で閻属性を選択し、バトル！

『キラール・トマト』、そのザコモンスターを蹴散らせえ！」

高田の宣言に応じて突進して来るトマトモンスター。

思った通りだ、性格の根本は変わってねえ！

キラール・トマト：ATK 1900 ↓ 3800

「これで終わりだあ！」

「ご生憎だな！ 畏発動、『マジック・ディフレクター』！ このターン中のみ、儀式・通常魔法以外の全ての魔法カードの効果が無効とする！ 当然、テメエの『幻魔の王城』の効果も無効となり、攻撃力は初期の数値に戻る！」

「何?！」

マジック・ディフレクター

【通常畏】

このターン、フィールド上の装備・フィールド・永続・速攻魔法カードの効果は無効にする。



キラール・トマト : ATK 3800 ↓ 1400

巨大ネズミ : ATK 1900 ↓ 1400

シャインエンジェル : ATK 1900 ↓ 1400

仮面竜 : ATK 1900 ↓ 1400

ドラゴンフライ : ATK 1900 ↓ 1400

「反撃だ、ガガガ・マジック！」

『ガア、ガッ！』

光の粒子が集まり、アンテナのようなパーツを付けた多脚機械が現れる。アンテナから怪しい電波を機械が飛ばすと、一時的に城に渦巻いていた薄気味悪い気配が消え、それと同時にモンスターも弱体化。顔面トマトは不良魔導士に突進するも、腕で弾かれてしまった。

「チッ！ だが戦闘ダメージは『スピリットバリア』の効果で受けない！ 更にデツキから新たな『キラール・トマト』を特殊召喚だぜ！」

キラール・トマト : ATK 1400

そう、それで良い。高田、お前のデッキはリクルート切れを防ぐために枚数を最大の60枚にしてある。だがデッキに入る同じ名前のカードは3枚。フィールド魔法でどんな相手でも倒せるように属性はバラけさせる必要があるだろうから、後続を含めると6枚、もしくは9枚。

一見すればそれはとんでもなく多いように見える。だが……。

「クソツ、油断したぜ。俺様はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

「ターンの終わりに『マジック・デフレクター』の効力は消えるが、フィールド魔法との因果関係が消滅したため、お前のモンスター攻撃力は1400のままだ」

「分かってらあ、ンな事！ クズの分際で逐一うるせえんだよ！」

高田：LP 10000

手札：5枚

フィールド

・巨大ネズミ(ATK 1400)、シャインエンジェル(ATK 1400)、キラァ・

トマト(ATK 1400)、仮面竜(ATK 1400)、ドラゴンフライ(ATK

1400)

・伏せカード1枚、スピリットバリア(永続罫)、幻魔の王城(フィールド魔法)

「俺のターン、ドロロー！ この瞬間、墓地の『テイク・オーバー5』を除外する事でもう1枚ドロローできる！」

高田、どうやらお前はまだまだ自分が完全に優位だと思っているみたいだな。

教えてやる、そのデッキが、そのフィールド魔法に頼る戦術が、どれ程までに頼りないかって事をな！

「俺は『ドドドウオリアー』を召喚！ このカードは攻撃力を500下げる事で、リリース無しで召喚できる！」

『ド〜ドド〜ッ！』

ドドドウオリアー：ATK 2300↓1800

地中から大地を叩き割るように砕いて、アックスとバツクラーを装備したバイキング風の巨漢戦士が姿を現す。こいつはリクルーターやサーチャーの天敵だ。もつとも、こいつのデッキ相手にはやや相性が悪いのも事実だが。

「バトル！ 『ドドドウオリアー』、『シャインエンジェル』を攻撃！

“！”

ドドドアックス

ブン！ と振り下ろされる斧。その一撃は金色の髪と羽を持つ天使を頭から正中線で真つ二つに切り裂き、お約束の爆発を起こした。

「ぐうっ！ だがダメージは『スピリットバリア』の効果で発生しねえ！ 更にバトルで破壊された事により、『シャインエンジェル』の効果発動！」

「無駄だ！ 『ドドドウオリアー』の効果発動！ このカードがバトルする場合、相手の墓地のカード効果はダメージ計算終了時まで無効となる！ つまりダメージ計算終了時には既に破壊されているリクルーターの効果は使えないって事だ！」

「ンだとおっ！」

ドドドウオリアー（効果モンスター）

星6

地属性／戦士族

ATK 2300 / DEF 900

このカードはリリースなしで召喚できる。

この方法で召喚したこのカードの元々の攻撃力は1800になる。

また、このカードが攻撃する場合、ダメージステップ終了時まで相手の墓地で発動する効果は無効化される。

「だ、だが俺様の場には闇属性の『キラール・トマト』も、地属性の『巨大ネズミ』も残っている！ 次のターンこそ、テメエの敗北だあ！」

「それはどうかな？」

「ああ!?!」

「早計だつつつてるのさ！ 俺はバトルを終了させ、『ガガガマジシャン』のモンスター効果発動！ 1ターンに1度、自分のレベルを1から8の中から好きな数値に変更できる！」

その効果で俺は『ガガガマジシャン』のレベルを4から6にする！」

ガガガマジシャン（効果モンスター）

星4

闇属性／魔法使い族

ATK 1500 / DEF 1000

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に1から8までの任意のレベルを宣言して発動できる。

エンドフェイズ時まで、このカードのレベルは宣言したレベルになる。

「ガガガマジシャン」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。  
このカードはシンクロ素材にできない。

ガガガマジシャン：☆4↓6

「れ、レベル6が2体?!」

「気が付いてももう遅い！ 俺はレベル6の『ドドドウオリアー』と『ガガガマジシャン』でオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

俺の掛け声に合わせて巨漢の斧戦士が橙、不良魔導士が紫色の光となり、螺旋を描いて空高く舞い上がる。そして地面に生まれた赤色の銀河の二重渦へと飛び込み、爆発を起こした。

☆6×☆6∥★6

「煮え滾るが如き赫々の魂を込め、その指先に敵を据えて撃ち抜け！ 暗闇をも貫く強き闘志！ エクシーズ召喚！ 出撃せよ、『ガントレット・シューター』！」  
『フオオツッ！』

ガントレット・シューター：DEF 2800

ガシン！ と重量感タップリにその場に降り立ったのは、赤いアーマーに鋭い爪を付けた手甲を装着した大柄な戦士。攻撃も守備も効果もバランスの取れている、突破や殲滅に向いたランク6モンスターだ。

「そ、そいつああの青髪の女の使っていた……」

「へえ、フレイも使ってたのか。ま、ランク6だしなあ。じゃ、効果の説明はいらねえな？」

「うう……い！」

『ガントレット・シューター』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを2つとも使つて、お前の『巨大ネズミ』と『ドラゴンフライ』を破壊する！  
 “メタルアーム・ランチャー”！

ガントレット・シューター：ORU 2↓1↓0

肩甲骨の辺りにある六連リボルバー形式の排気マフラーが火を噴き、赤い戦士が両手

を前に突き出す。それに合わせてガントレットが飛び出し、そのまま青い大きな齧歯類と緑のトンボの腹を貫いて爆発させた。

これで5体いたモンスターも残り2体、随分と減ったな。

ガントレット・シューター（エクシーズ・効果モンスター）

ランク6

地属性／戦士族

ATK 2400 / DEF 2800

レベル6モンスター×2

自分のメインフェイズ時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを破壊する。

「チイツ……!」

「これでお前のモンスターの数も半分以下。流石のリクルーター達も、効果を封じられたり効果で破壊されちゃったらお手上げだよなあ? どうした? ご自慢の強いモンスター達はよお?」



「うるっせえ！ やる事ねえならさっさとターンエンドしやがれ！」

よしよし……、バツチリだ。こいつの性格の根本にある排他的なエリート思想はやっぱり顕在。ならそこを煽ってやりやあ奴は冷静な判断力を失う。そうなったデュエリストがどうなるか、そんなの火を見るよりも説明フラグを立てるよりも未来は明らかだ。

「俺はリバースカードを1枚セットして、ターンエンドだ」

黎：LP 1

手札：2枚

フィールド

：ガントレット・シューター（DEF 2800）

：伏せカード2枚

「クツソ！ 俺のターン、ドロー！ 『幻魔の王城』の効果発動！ 墓地の『シャインエンジェル』と『巨大ネズミ』をデッキに戻してシャッフルし1枚ドロー！」

畜生め、手札の枚数が前のターンと変わってねえ！ なのに俺様のモンスターが3体もやられるとかアリかよ！」

地団太を踏んで高田が怒鳴る。

OCG環境の基本は『高速で展開して相手に何もさせない』だった。そのの良し悪しは今は置いておくとして、それに慣れてしまった身としては、お前らの戦術がヌルいようにしか感じないんだがな。

……尤も試しに向こうで言うガチデッキの【クシャトリラティアラメンツ】や【結界像ふわんだりいず】を組んだ所、全く動かないくらい事故を連発してしまったが。こつちの世界ではあつちのガチガチのガチデッキは使えないよう、宇宙意志みたいなのが働いているのかも知れない。

まあ個人的にはそんな一方的にカードを出すだけのデュエルは大嫌いなので願ったり叶ったりなのだが。

「だが、それもここまでだ！俺様は手札から魔法カード『チェンジ・トウ・フレッシュ』を発動！このカードは手札のモンスターを1体捨てて、デッキから同じ名前のモンスターを2体、攻撃力を500上げて特殊召喚する！俺は手札から『巨大ネズミ』を捨てて、デッキから『巨大ネズミ』を特殊召喚！『チェンジ・トウ・フレッシュ』と『王城』の効果で攻撃力合計1000ポイントアップだ！」

チェンジ・トウ・フレッシュ（オリジナル）（改訂版）



「ギャハ！ そうだ決めたぞお？ 俺様がテメエをブツ殺したら、1人1人レッド寮のゴミカス共を見せしめに殺してやるよ！ この学園に、いいや世界にクズは要らねえ！ レッドの次はイエロー、その次はクソ女共、そして最後はそいつらに肩入れしてたブルーの面汚しだ！ ギャツハハハハハハハハハハハハ！ 世界でこれで綺麗になると思うと、俺が正しいって思えて清々しいぜ！」

大声をあげて嗤う高田、焦る桜とポーラ。

大丈夫だ、これも既に想定してある。

「『王城』の効果で地属性を指定！ そしてバトル！ 1体目の『巨大ネズミ』でその目障りな『ガントレット・シューター』を攻撃い！ 消えろお！」

「そうはさせるか！ 罨発動、『逆さ眼鏡』！ このカードの効果で、ターンが終わるまで全てのモンスターの攻撃力を半分にする！」

「何っ!？」

### 逆さ眼鏡

#### 【通常罨】

フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時まで半分にする。

巨大ネズミ：ATK 2400↓4800↓2400

巨大ネズミ：ATK 2400↓4800↓2400

キラートマト：ATK 1400↓700

仮面竜：ATK 1400↓700

ガントレット・シューター：ATK 2400↓1200

「この効果で下がるのは攻撃力のみ！ つまり守備力は変化しない！ したがって『ガントレット・シューター』を『巨大ネズミ』は戦闘破壊できない！」

「グッ！」

突進するネズミを押し留めて投げ飛ばす『ガントレット・シューター』。

これでこのターンは防げた。だがこの行動は、単なる防御だけじゃ無い。もう一つ意味がある。

「どうした、高田？ フィオとの戦いで力を使い切ったか？ お前がザコだ何だと見下していたフィオも、実はお前の事を十分に翻弄できるレベルは持っていたって事だなあ？ それとも、強くなっただけなのは嘘か？」

「て、テメエ……！ ふざけんなあ！」

「ふざけんな？　おいおい、お前はこれまでターンが何度回って来た？　その度に俺を仕留める事ができないお前が強くなったなんて言われたって信じる方が難しいっての」  
「こつ、んのクソ野郎があ！　リバースカード、オープン！　罠カード『不正解雇』！  
このカードは相手の場の、このターンバトルで破壊されなかったモンスターを1体選択して破壊し、そのカードの守備力分のダメージを与える！　2800の守備力でテメエは終わりだあ！」

「アマイゼ！　カウンター罠発動、『プリヴェント・ヴァニシング』！　自分フィールド上に存在するモンスター1体が相手のカード効果で破壊される時、それを無効にして破壊する！　更にデッキから罠を1枚、相手に見せる事でそれをセットできる！　ただし相手は手札からカウンター罠を1枚捨てる事でセットを無効にし、そのカードを除外できる！」

不正解雇（オリジナル）

【通常罠】

このカードは自分ターンのバトルフェイズ終了時にのみ発動できる。

そのバトルフェイズ中に戦闘を行い、破壊されなかった相手の場の表側表示モンスターを1体選択する。

選択したモンスターを破壊し、その守備力分のダメージを相手に与える。

プリヴェント・ヴァニシング（オリジナル）

【カウンター罠】

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のみが相手のカード効果によつて破壊される場合に発動できる。

その効果を無効にして破壊する。

その後、デッキから罠カードを1枚相手に見せる事でそのカードをセットできる。

相手は手札のカウンター罠カードを1枚捨てる事で、そのカードのセットを無効にしゲームから除外する事ができる。

「俺は『リビンググデッドの呼び声』を選択！ さあ、どうする！」

「カウンター罠は……、捨てねえ……！」

「ならばセットは有効だ！」

「クソオツ！ 俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

良し良し、順調順調。

このまま行けば十分ペースを握れる。力の使い方を、手に入れ方を間違えたお前に俺

は倒せねえ。それを思い知らせてやる！

高田：LP 10000

手札：3枚

フィールド

・仮面竜（ATK 1900）、キラール・トマト（ATK 1900）、巨大ネズミ（ATK 2400）、巨大ネズミ（ATK 2400）、

：伏せカード2枚、スピリットバリア（永続罫）、幻魔の王城（フィールド魔法）

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード『エクシーズ・フェイク・アドバンテージ』を発動！このカードの発動ターン中に俺がエクシーズ召喚に成功すれば、その度にカードを1枚ドローできる！ただしこの効果で2枚以上カードをドローした場合、エンドフェイズに手札をその数だけ除外し、その倍の枚数分デッキトップから除外しなければならぬ！そして手札が除外できない場合、ライフは半分になる！」

エクシーズ・フェイク・アドバンテージ（オリジナル）（改訂版）

【通常魔法】



このカードは自分のLPが2000以上の場合、1000LPにつき1000LPを払わなければ発動できない。

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できず、このターン相手のLPは0にならない。

(1) : このカードが発動したターン、X召喚が成功する度に自分は1枚ドローする。

(2) : (1) の効果でカードを2枚以上ドローしているエンドフェイズに発動する。

ドローした枚数だけ手札を裏側表示でゲームから除外し、その倍の枚数分デッキの上からカードを裏側表示でゲームから除外する。

手札の枚数が足りない場合、手札を全て裏側表示で除外し、自分のLPを半分にする。手札を除外できない場合、または手札が存在しない場合、自分のLPを半分にする。

「あ、アドバンテージをボードとハンドの両方で稼ぐだど!? インチキ効果もいい加減にしるや!」

「対属性バトルで確実に有利になれる『幻魔の王城』に言われたくない。第一このカードを発動したターンじゃあお前のライフを0にする事はできねえし、エンドフェイズとや遅めだがデイスアドバンテージもあるぞ!」

「まったく、ガキかこいつは。いや、ガキだな。自分の手に入らない物があると駄々を捏

ねるクソガキだ。他人の力を奪い、足を引つ張り、誰かを見下して嘲笑う。救いようの無いクソガキだ。

別に俺は、子供は嫌いじゃ無い。小さい子には小さい子なりの理屈があるし、考えがある。そもそも誰かを慮って意見をフレキシブルに変えるという器用なマネはできない。そんな純粹とも言える姿は、どちらかと言えば好きだ。

それを否定し自分の考えを押し付けるのはバカな大人のやる事、そんな大人の方が寧ろ俺は嫌いだ。愛情を注ぎ、子供達の心を尊重しつつ間違つた方向へ行かないように誘導する、出来た大人のレオさんやメリオルさんの真逆と言えるだろう。

目の前にいるこいつがそうだ。他人を思うだけの頭脳があり、讓歩する技術を培えるだけの年月を重ね、それなのに誰かを踏みにじつて自分の居場所を確立する。そしてそれに心を痛めない。

こいつはガキだ。いや、ガキの皮を被つたクソだ。俺が大嫌いな人間だ。

俺はこいつを許さない。自分の墮落を誰かの所為にし、人の大切なモノを壊して憂さを晴らす。その度に誰かを傷付け、けれどそれを嘲つて他人事で済ませる。こんな奴に、負けて堪るか！

「俺は手札から『アステル・ドローン』を召喚！」

『キャハッ！』

アステル・ドローン：ATK 1600

五芒星を描きながらポップなスタイルの魔法使いが現れる。

「更に永続畏『リビングデッドの呼び声』を発動！ 蘇れ『ガガガマジシャン』！」  
『ガガッ！』

ガガガマジシャン：ATK 1500

続いて再登場する不良魔導士。

レベルを調整するこのカードは便利。アニメでは中々効果を使われずにレベル4モンスターとしか活用されないのが残念だ。

「レベル4が2体かよ……！」

「俺は『ガガガマジシャン』の効果発動！ 自分のレベルを4から5に上げる！」

ガガガマジシャン：☆4↓5

「何!? 折角レベルが揃っていたのに、わざわざ変えただど!?」

「続いて『アステル・ドローン』の効果! このカードはエクシーズ素材にする時、レベル5として扱う事ができる!」

「んだと!」

不良魔導士の腰のブローチに星マークが1つ増えると同時に、隣にいたポップな魔導士も空中に星を5つ描く。これでレベルを5として扱う事になるのだろう。

ちなみにレベルを1つ上げるワケでは無いので、レベルをいくら変更しようが素材時にレベル5扱いになるか、そのレベルにしかならない。

アステル・ドローン (効果モンスター)

星4

地属性/魔法使い族

ATK 1600/DEF 1000

(1):このカードをX召喚に使用する場合、このカードのレベルを5として扱う事ができる。

(2):フィールドのこのカードを素材としてX召喚したモンスターは以下の効果を得る。

●このX召喚に成功した場合に発動する。  
 自分はデツキから1枚ドロローする。

「行くぞ！ レベル5の『ガガガマジシャン』と『アステル・ドローン』でオーバーレイ  
 ！」

『ガアガガッ！』

『ハアッ！』

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！ 噴煙の滾る太古の世界よ  
 り、時を超えて目覚めよ燃え盛る恐竜！ 鼓動と絆を道標に咆哮せよ！」

☆5×☆5Ⅱ★5

「エクシーズ召喚！ 出でよ、『No. 61』！ 焼き払え、『ヴォルカザウルス』！」  
 『ギジャアアアアアアアアアアッ！』

No. 61 ヴォルカザウルス：ATK 2500

空中に出現する61の数字と共に、赤く滾る球体上の溶岩が現れる。卵のように溶岩は割れ、中から紅蓮の力を溢れさせる恐竜が姿を現した。

相棒の『フリーザードン』なんていなかったんだ……。

「この瞬間、『エクシーズ・フェイク・アドバンテージ』の効果で1枚、更にオーバーレイ・ユニットとなった『アステル・ドローン』の効果で1枚、合わせて2枚カードをドロウする！ 更に魔法カード『マジック・プランター』！ 『リビングデッド』をコストに2枚ドロウ！」

「ば、バカな!? 手札が逆に増えただど!?!」

「良いぞ、主殿！ 完全に本調子だ！」

「……サー、そいつを叩きのめして！」

「おうよ！ 俺は『ヴォルカザウルス』の効果発動！ 1ターンに1度、オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手の場の表側表示モンスター1体を破壊する！ 喰らえ、グマックス！」

No. 61 ヴォルカザウルス：ORU 2↓1

「対象は『仮面竜』だ！」

恐竜が赤い星を1つ噛み砕き、全身にマグマの力を充填させる。エネルギーがマツクスになった時、胸部の突起が2つに割れ、溶岩が柱のように噴き出して仮面を着けたドラゴンを焼き尽くした。

「更にそのモンスター元々の攻撃力分のダメージを相手に与える！」  
「ぐぎやああああああああああああああああああああああああああああああ！」

高田：LP 10000↓8600

「よし、初ダメージだ！」

「……完全にサーの本調子！」

マグマの奔流はドラゴン一匹を焼いた程度では止まらない。そのまま後ろにいた高田をも襲い吹き飛ばす。

タンパク質の焼ける焦げ臭さと、服の焼けた黒い煙によつて全く美味しくないデコレートをされた高田は地面に背面から叩き付けられた。

No. 61 ヴォルカザウルス（エクシーズ・効果モンスター）

ランク5

炎属性／恐竜族

ATK 2500 / DEF 1000

レベル5モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシース素材を1つ取り除き、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

選択した相手モンスターを破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

この効果を発動するターン、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できない。

「く、くそお……!」

「溶岩の平均温度は1000度。最低でも800度はあるが……、いくら本物では無いとは言え、それを正面から受けて立つとは大したモンだな」

「うるせえ! 俺が効果ダメージを受けたこの瞬間、罫カード『新調スーツ』を発動!

受けたダメージ以下の攻撃力を持ったモンスターを1体、デッキから特殊召喚してこいつを装備する! 俺様が喰らっちゃったダメージは1400! よってデッキから攻撃力1400の『仮面竜』を特殊召喚! そしてこの効果で特殊召喚されたモンスターがバトルで破壊された時、その元々の攻撃力分だけ相手にダメージを与える!」



新調スーツ（オリジナル）

【通常畏】

自分が効果ダメージを受けた時に発動できる。

受けた効果ダメージ以下の数値の攻撃力を持つモンスターを1体、自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。

この効果で特殊召喚されたモンスターが戦闘によって破壊された場合ゲームから除外され、その元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

仮面竜：ATK 1400↓1900

「どうだ！ テメエはライフが1しかねえ！ 次のターンに自爆特攻を仕掛けりやあ俺様の勝ちだ！」

「果たしてそれはどうかかな？」

「何!？」

「教えてやる！ ターンの終わりでも無いのに、 “次のターン” なんて宣言するのは自殺行為だ！」

俺は手札から『限界竜シユヴァアルツシルト』を特殊召喚！ このカードは相手フィールドに攻撃力2000以上のモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚できる！ お前の場には攻撃力2400となった『巨大ネズミ』が存在するため、発動条件を満たす！」

限界竜シユヴァアルツシルト：ATK 2000

限界竜シユヴァアルツシルト（効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 2000／DEF 0

相手フィールド上に攻撃力2000以上のモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

「レベル8を手札から特殊召喚だど!?!」

「そして手札から『死者蘇生』を発動！ 墓地のモンスターを1体呼び戻す！ 俺は『ヴォルカザウルス』のオーバーレイ・ユニットとして墓地へ送られた『ガガガマジシャ

ン』を復活させる!」

『ガガッ!』

ガガガマジシャン：ATK 1500

「『ガガガマジシャン』の効果発動! レベルを最大値の8にする!」

ガガガマジシャン：☆4↓8

瞬時に揃う高レベルモンスター。茶色い無限の記号を現すような姿勢の龍と、三度登場した不良魔導士が場に並ぶ。

「また高レベルが揃いやがった!? 何なんだそのデツキはあ!?!」

「これが『ガガガマジシャン』を軸に戦うこのデツキ、『ガガガエクシーズ』の基本戦術だからな。」

俺は閻属性レベル8の『シユヴァルツシルト』と『ガガガマジシャン』でオーバーレイ! 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!」

☆8×☆8＝★8

「その力は地平線をも粉碎し、あらゆる物を膝下へと傳かせる！ エクシーズ召喚！  
出でよ、『No. 22』！ 握り潰せ、『不乱健』！」

『ブオオオオオオオオオオッ！』

No. 22 不乱健：ATK 4500

銀河の渦から出現する、フードを被った巨人。腕が最早大樹のように太く、全身が筋肉によって固められている。顔は見えないものの、その中からは鋭い眼光が敵を射貫いていた。

「攻撃力4500だとお!？」

『エクシーズ・フェイク・アドバンテージ』の効果で1枚ドロ！

まだだ！ 俺はランク6の『ガントレット・シユーター』でオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを再構築！

★6↓★7

「その槍は天空を貫く疾風の力！ その咆哮は大地を砕く雷鳴の力！ エクシーズ・チェンジ！ 仇なす巨壁を貫け！ 『迅雷の騎士 ガイアドラグーン』！」

『ガアアアアアアアッ！』

迅雷の騎士 ガイアドラグーン：ATK 2600

天空へと光となって消えて行く手甲の戦士。空が割れるが如く強い閃光が生まれ、中から龍に下半身が結合した槍騎士が現れた。龍と共に赤い鎧が装着されており、両手に持った槍が空を鋭く切る。

「この召喚はエクシーズ召喚として扱うため、『エクシーズ・フェイク・アドバンテージ』の効果で更に1枚ドロロー！」

これで手札は再び5枚。

もう一丁行くぜ！

迅雷の騎士ガイアドラグーン（エクシーズ・効果モンスター）

ランク7

風属性／ドラゴン族

ATK 2600 / DEF 2100

レベル7モンスター×2

このカードは自分フィールド上のランク5・6のエクシーズモンスターの上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「俺は手札から『トイナイト』を特殊召喚！ 相手の場に存在するモンスターの数が自分のモンスターの数に勝る場合、このカードは手札から特殊召喚できる！ そしてこの効果で特殊召喚された場合、手札から同じ名前のモンスターを特殊召喚できる！ 来い、もう1体の『トイナイト』！」

『ギューン！』

『ギューン！』

トイナイト：ATK 200

トイナイト：ATK 200

花火を散らしながらレゴブロックのようなオモチャの兵士が2体現れる。  
 使い勝手の良いレベル4なだけに、デッキから特殊召喚できないのが残念だ。『ヴェ  
 ルズマンドラゴ』でも同じような事が言えるが……。

トイナイト（効果モンスター）

星4

地属性／機械族

ATK 2000 / DEF 1200

このカードはデッキから特殊召喚できない。

相手フィールド上のモンスターの数が自分フィールド上のモンスターの数より多い

場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、手札から「トイナイト」1体を特殊召喚  
 できる。

「こ、今度はレベル4が2体!？」

「レベル4の『トイナイト』2体でオーバーレイ!」

橙の光に代わって空へ不規則な曲線を描きつつ上るオモチヤの兵士達。二筋の光は地面に生まれた金色の銀河の渦の中へと飛び込んで輝く超新星爆発を巻き起こした。

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4×☆4∥★4

「夢と希望の金色に輝く戦士！ 心の光を双剣に宿し、暗鬱なる闇を切り裂け！ エクシーズ召喚！ これが未来への思い！ 『No. 39』！ 『希望皇ホープ』！」

『ホオオオオオオプツ！』

No. 39 希望皇ホープ：ATK 2500

金色の爆発光の中から姿を現すのは塔のような大剣。白く輝くその姿は刃を翼、内部の刀身を体に、青い宝玉を胸元に据えた戦士へと姿を変えた。

さ、頼むぜ四代目主人公のエースモンスターにして攻防一体の騎士よ。

No. 39 希望皇ホープ（エクシーズ・効果モンスター）



ランク4

光属性／戦士族

ATK 2500 / DEF 2000

レベル4 モンスター×2

(1) : 自分か相手のモンスターの攻撃宣言時、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

その攻撃を無効にする。

(2) : このカードがX素材の無い状態で攻撃対象に選択された場合に発動する。

このカードを破壊する。

『エクシーズ・フェイク・アドバンテージ』の効果で1枚ドロロー！」

「ば、バカな……！ たった1ターンで大型モンスターがこんなに……！ しかもまだ手札が4枚!？」

「まだまだ驚かせてやるよ。装備魔法『ジャンク・アタック』を『ガイドラグーン』に装備！ このカードを装備したモンスターがバトルで相手モンスターを破壊した時、その攻撃力の半分のダメージを相手に与える。当然これは効果ダメージだから『スピリットバリア』で防ぐ事はできないぞ？」

「ぐっ！」

「待たせたな、バトルだ！ やれ、『ホープ』、『ヴォルカザウルス』、『不乱健』、『ガイアドラグーン』！ 『巨大ネズミ』に連続攻撃！ 『ホープ剣スラッシュ』！ 『バーニング・ブレス』！ 『不乱拳』！ 『ドラグーン・シエイバー』！」

一斉に飛びかかる俺のモンスター達。腰から引き抜かれた片刃の剣が、灼熱のマグマと炎の息吹が、巨人の鉄拳が、龍の突進する勢いで突かれた槍が、青い齧齒類へ向けて放たれた。

あの軌道で攻撃したらそれぞれの技が当たるんじゃないだろうか、なんて益体の無い事を考えた時。

「凶に乗るなよクソが！ これでも喰らいやがれ！ 罨カード『聖なるバリアーミラーフォース』！ これでテメエのモンスターは全滅だ！」

高田は伏せてあったカードを開けて結界を張った。高密度のエネルギーに満ちたシールドが展開し、こちらの攻撃を阻む。攻撃が当たって衝撃の走ったバリアは守るだけでは止まらず、その衝撃をそのままカウンターするように跳ね返した。

悪いな、そいつに仕事はそうそう与えられないんだよ。

「俺は『不乱健』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使い、手札を1枚切って守備表示にする事で、相手フィールド上の表側表示カード1枚の効果を無効にする！」

No. 22 不乱健（エクシーズ・効果モンスター）

ランク 8

闇属性／アンデット族

ATK 4500 / DEF 1000

闇属性レベル 8 モンスター × 2

このカードはエクシーズ召喚でしか特殊召喚できない。

1ターンの1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、手札を1枚墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して発動できる。

このカードを守備表示にし、選択したカードの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

パシユン！ と周囲を旋回する紫の光の玉が巨人の顔へ吸い込まれて弾ける。それに合わせて手札の『ガガガール』をコストに『不乱健』の効果が発動した。

高田の張った結界全体にのしかかる様に覆い被さり、抱き締めるようにバリアを砕く。

No. 22 不亂健：ATK 4500↓DEF 1000/ORU：2↓1

「これでミラフォは無効。守備表示になったから『不亂健』はもう攻撃できないが、残りのモンスターは無事だ。てなワケで攻撃続行！」

高田の場にいる齧歯類が2体とも攻撃で吹き飛ばす。炎で焼かれ、隣の個体も槍で貫かれた衝撃で、高田は更にダメージを負った。

『『ガイアドラゴン』に装備した『ジャンク・アタック』の効果で破壊された『巨大ネズミ』の元々の攻撃力の半分、700のダメージを喰らえ！』  
「おぐああつー！」

高田：LP 8600↓7900

ジャンク・アタック

### 【装備魔法】

装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。

「この……!! 『巨大ネズミ』の効果発動! 来い、2体の『共鳴虫』!  
ハウリング・インゼクト」

共鳴虫 : ATK 1200 ↓ 1700  
 共鳴虫 : ATK 1200 ↓ 1700

「叩き斬れ、『ホープ』!」  
 『ホオオオプツ!』

後続で相手は煩く鳴き散らす鈴虫を呼ぶが、すぐに『ホープ』の剣によつて両断された。

「チイツ! まだだ! 『共鳴虫』を更に特殊召喚!」

共鳴虫 : DEF 1300

共鳴虫 (効果モンスター)

星3

地属性／昆虫族

ATK 1200 / DEF 1300

このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下の昆虫族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

その後デッキをシャッフルする。

ああ、何度でも呼べば良い。そうやってデッキを圧縮して行けばデッキの残り枚数は次第に少なくなっていく。『王城』の効果でデッキに戻せるのは1ターンに2枚まで。それ以上のペースで潰してリクルートさせれば、次第にリクルート先の確保は難しくなるはず。

リクルートが切れた時が勝負。その瞬間までは攻撃と防御に集中しつつ、相手の手を讀むんだ。高田の一步、いや、二歩、まだ足りない三歩、否、四歩、否々、五歩先を讀むんだ。それこそが俺の神髄、俺のやり方。相手の裏を、裏の裏を搔いて、戦術を崩すんだ！

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド。『エクシーズ・フェイク・アドバンテージ』の効果で手札を除外しなくてはならないが、俺の手札は今0枚。よってライフを半分にしなくてはならないが……」

「……サーのライフは1。……デュエルにおいて、数値は全て整数でなくてはならない」  
 「小数点以下は全て切り上げになる。つまり主殿のライフは……」

黎：LP 1→1

「ら、ライフが変わらないだとお!？」

「残念だったなあ?」

黎：LP 1

手札：0枚

フィールド

：No. 39 希望皇ホープ（ATK 2500、ORU：2）、No. 61 ヴォル  
 カザウルス（ATK 2500、ORU：1）、No. 22 不乱健（DEF 1000、  
 ORU：1）、迅雷の騎士ガイアドラグーン（ATK 2600、ORU：1）

：伏せカード2枚、ジャンク・アタック（装備魔法・『迅雷の騎士ガイアドラグーン』  
 に装備）

「俺様のターン、ドロ―！　クソ、何故だ！　何故これ程までに強くなった俺がテメエ如きにこうも苦戦する！　何故だ！　何故だあ！」

「ンなもん、お前が弱いからに決まってるだろうが」

地団太を踏んで叫ぶ高田。俺はそれに対し、どこまでも冷たく返す。

その返答が気に食わなかったのだろう、奴は更に怒鳴り声を上げて激昂した。

「ふ、ふつぎけんなあ！　俺はなあ、俺様はなあ、強くなつたんだよ、誰よりもな！　現にそこで倒れてる女は俺が潰してやった！　もう誰にもバカにさせねえ！　俺様は最強になるんだ！　裏切られて見限られて、やつと分かつたんだ！　人は怒りで強くなる！　この怒りが！　憎しみが！　恨みが！　呪いの怨念こそが、俺様を強くするつてなあ！

このクソ下らない、俺様をバカにした世界なんてぶち壊してやるぜ！　今度こそ、俺様が堂々と生きられる、誰にも捨てられない世界に生きて、その頂点に君臨してやらあ！

……ああ、そうか。だからこいつは心の闇に付け込まれたのか。

寂しき、傲慢、裏切られたと思つた悲しみ、そういつたモンが凝り固まつて、こいつの闇が構成されてしまつて居るのか。複雑に絡まっちまつたそれは、もう一個体に成り果てていると言つても過言じゃ無い。こうなつたらまず一筋縄じゃいかない。



なら、その歪んでしまった性根を叩き直してやるまでの事。解いて直すなんて面倒な事はしない。一篇転落して、ゼロからやり直して来いや！

「俺様は最強になる！ この力で、この屈辱に塗れた人生をやり直すんだ！ テメエらみてえなクソ下らない人生とは違う、栄光あるモンにしてやるんだよお！」

「お前、それは間違ってるぞ」

「何い!? 一体何が間違ってるってんだよー」

「どんな人生だつて、それはそいつの、一回限りのものなんだ。やり直す事なんざ出来やしない。けれどもどれだけ失敗を繰り返そうが、諦めなければ道は開ける。諦めた奴は自分の人生そのものに負ける。そして、負けた奴には人生をやり直す資格なんざありはしない」

そう、俺は前世で、何時しか生きる事を諦めていた。

その気になれば山にでも籠って一緒に暮らせたつてのに、それを拒んだ。

何故か？ それは俺が都と生きる事に疲れていたから、生きる事そのものをもう諦めていたから。その疲れきって病んだ心は捌け口として他人の悲鳴を求めていた。俺の手で傷付けて浴びる返り血、その温かさだけが俺の成果物だった。他人の命を奪うという低俗なマウントの取り方に、俺は酔っていたから。

——つまり、化物としての生き方に逃げていたんだ。

今だからこそハッキリ言える。諦めたら人は死ぬんだと。

「どんな人生もそいつのモンだ。大きい夢、小さい夢、デカイ野望、シヨボい願望。そんな目標を人生の目の前に添えて、人は生きていく。例えどんな内容だろうと、人が人の人生を笑う資格なんて無いんだよ。大切なのは笑われない人生にする事じゃない。人の上に立てる人生にする事でもない」

ドン、と俺は自分の胸を叩いた。

「自分の人生に胸を張って生きる事だ」

「胸を、張るだと……？　んなモン、惨めだったら張れねえよ！　張れるようにするからこうして強くなろうと……！」

「それは言い訳だ。お前が他人を見下したいがためのな！」

さあ、テメエのターンだ高田。

教えてやる、そんな曲がった力は役に立たないって事をな！

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 81：希望の未来　ホープ七変化

黎：LP　1

手札：0枚

フィールド

：No. 39　希望皇ホープ（ATK 2500、ORU：2）、No. 61　ヴォル

カザウルス（ATK 2500、ORU：i）、No. 22　不乱健（DEF 1000、

ORU：1）、迅雷の騎士ガイアドラグーン（ATK 2600、ORU：1）

：伏せカード2枚、ジャンク・アタック（装備魔法・『迅雷の騎士ガイアドラグーン』に装備）

高田：LP　7900

手札：4枚

フィールド

：仮面竜（ATK 1900）、キラール・トマト（ATK 1900）、共鳴虫（DE

F 1300)、共鳴虫(DEF 1300)

・スピリットバリア(永続罨)、幻魔の王城(フィールド魔法)、新調スーツ(通常罨)、『仮面竜』に装備)

## SIDE: 黎

中盤戦に差し掛かるハンディキャップデュエル。だが俺は絶対にこのデュエルには負けない。

さあかかって来い。テメエのその歪みに歪んだ野心、捻り潰してやる!

「この野郎、叩き潰してやらあ! マジック発動、『リクルート・エイジ・エンド』! デツキから特殊召喚された攻撃力1500未満のモンスターを1体墓地に送り、新たに2枚ドロウする! 『共鳴虫』を潰す!」

リクルート・エイジ・エンド(オリジナル)

## 【通常魔法】

(1): 自分のデツキからモンスター効果によって特殊召喚された攻撃力1500未満のモンスター(表側表示)1体を選択して発動する。

そのモンスターを墓地に送り、2枚ドロウする。

この効果で墓地に送ったモンスターの効果は発動できない。

「俺様は『カオス・ネクロマンサー』を召喚！ こいつの効果は知ってるよなあ！ 俺様の墓地のモンスターの数が攻撃力になるのよ！」

【高田の墓地のモンスター】

キラー・トマト

ドラゴンフライ

巨大ネズミ

仮面竜

巨大ネズミ

巨大ネズミ

共鳴虫

共鳴虫

「墓地のモンスターは8体、よって攻撃力は2400だあ！」

カオス・ネクロマンサー：ATK 0↓2400

いくらこいつが莫迦を極めに極めたバカ田だったとしても、計算が出来ないワケじゃない。

まだ攻撃力を上げてくる筈だ。

「更に『キラール・トマト』と『共鳴虫』をリリースし、『ビッグ・ソルトマン』を特殊召喚！」

ビッグ・ソルトマン：ATK 3000

カオス・ネクロマンサー：ATK 2400↓3000

ギリ貧のように追い詰められて行く高田。起死回生の策としてか、怪しく笑う死霊の魔導士と巨大な塩の魔人がトマトと鈴虫を握り潰して現れた。

「ギャハハ、リクルートの次はサラリーマンってな！ 知ってるか？ サラリーマンは給料男、サラリーとマン！ そしてそのサラリーの語源ってのはなあ——」

「元は塩を意味するラテン語の『salar』だ。塩は内臓の機能や精神状態の安定、更には

自己治癒力を一定に保つたためにも必要不可欠。古代ローマでは兵士の給料として塩が出されていた点からその重要性は古来から分かっていた事は明白であり、或いはその事がサラリーの語源でもあるとされる。古くは塩の採掘場所を巡って戦争が起こる事も珍しくなかったそう。その点は戦国武将の武田信玄と上杉謙信のやり取りから生まれた『敵に塩を送る』という諺からも分かるだろう。

その主成分は塩化ナトリウム、塩素とナトリウム。この内、人体に必要なのはナトリウムの方。主な採取方法は塩田に海水を撒いて採集、海水を煮詰める、岩塩からの採掘、塩湖から掬うの4種類。いずれも土地や資源に恵まれていなければ条件としては成り立たない。

生きていくのに欠かせないのならば、戦争の火種になったって何の不思議でも無いだろう。……で、俺の講義内容に付け足す事は？」

「チィ……………ッ！」

「無いらしいな。さっさとデュエルを進めろ」

「クソが！ 俺様は手札の『シャインエンジェル』を捨てて、魔法カード『ビル倒し』を発動！ このターン、俺様のモンスターが相手モンスターを戦闘破壊した時、その元々の攻撃力分のダメージを与える！」



ビル倒し（オリジナル）

【通常魔法】

手札を1枚捨てて発動する。

このターン、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、破壊されたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

このターンの戦闘によって自分のモンスターが破壊された時、その元々の攻撃力分だけ自分はダメージを受ける。

高田が発動したのは高層ビルが爆破によって崩壊するイラストを持った、緑のカード。

ビル倒しって、それは新人社員がビルの一階から最上階まで外回りに行く事だろうが……。

カオス・ネクロマンサー：ATK 3000 ↓ 3300

「バトルだあ！ 『仮面竜』、そのデカイ希望とやらに攻撃！ 『新調スーツ』の効果で貴

様は終わりだあ！」

「そうはさせるか！ 攻撃対象となった『希望皇ホープ』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを一つ取り除き、モンスター体の攻撃を無効とする！ ムーン・バリア！」

No. 39 希望皇ホープ：ORU 2↓1

吐かれる炎を、背中の翼を変形させて作り上げた盾で防ぐ『ホープ』。

さあ、もう一発来い！

「ただし、オーバーレイ・ユニットを全て失った状態で攻撃対象に選択されれば、『ホープ』は自壊してしまう」

「ならば『カオス・ネクロマンサー』で『ホープ』を攻撃イ！ ムネクロ・パペットシヨール！」

続いて青白い怨霊を大量に従えた死霊の魔導士が、その魂を金色に輝く戦士へと向ける。

「さあ、どうする？ 効果を使うか？」

「使わせてもらおう！ 『ホープ』、ムーン・バリアだ！」

星が胸部の緑の宝玉へ吸い込まれ、湾曲した翼の壁で幽霊の大群を防ぐ。オーバーレイ・ユニットは使い切ったが……、これで良い。

No. 39 希望皇ホープ：ORU 1↓0

「これで『ホープ』のオーバーレイ・ユニットは無くなったあ！ やれ、『ソルトマン』！  
その目障りな金ピカを攻撃！」

『ホープ』の効果発動！ 自分自身を破壊する！」

繰り出される3度目の攻撃。それが宣言された瞬間、白い騎士の内側から爆風が生まれ、呻き声と共に『ホープ』は爆散した。

「これでテメエの守りの盾は無くなった！ もう攻撃は防げねえ！」

「……………」

「主殿……………」

「……………サー！」

「さて、どいつを攻撃しても『ビル倒し』の効果で結果は同じだが、どうせなら……………」

値踏みするように動いていた高田の目が、一点に止まる。その視線の先には、低い守備力を曝け出している腐敗した巨人がいた。

「ダメージがデケエ方が良いよなあ、ええ!? 『ソルトマン』で『不乱健』を攻撃イ!  
 //禍塩砲射//ア！」

渦巻く燃える塩を吐き出す塩の魔人。紅の粒子の壁が腐敗した巨人を呑み込む。

タンパク質が焦げる独特の臭いが周囲に生まれ、破壊を確信したのか高田の高笑が響き渡った。

「ギャハハハハハ！ 死ねえ！」

「それはどうかな？」

「何い!？」

アマいんだよ。何で俺が伏せカードとかじゃなくて自壊の危険を孕む『ホープ』で攻撃を防いだのか、まるで分かってねえな。

ニヤリと笑う俺の視線の先では、膝立ち状態からしつかりと足の裏で地面を踏み締める巨人が塩の奔流を防いでいた。無論、表皮が焦げているだけで本体の方にはダメージは無い。元々死体人形なのだ、痛覚その他は無いのだろう。

NO. 22 不乱健：DEF 1000↓ATK 4500

「い、攻撃表示だと!？」

「俺はお前の攻撃宣言に合わせて罨カード『ガムシヤラ』を発動していたのさ！ こいつは俺の守備表示モンスターが攻撃された時、表示形式を攻撃表示に変更し、バトルを続行させる！ 攻撃力そのものは『不乱健』の方が上！ 迎え撃て！」

「バアン！ と両腕を弾いて塩の流れを弾くと、巨人はその大きな腕で塩の魔人を殴り倒した。」

「ソ、『ソルトマン』!?!」

「更にこの瞬間『ガムシヤラ』のもう一つの効果発動！ このバトルで相手モンスターが破壊された場合、そのモンスタアの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える！ 3000のダメージを喰らいな！」

「ンだと、ぐああつ!?!」

高田：LP 7900↓4900

ガムシヤラ

【通常罨】

自分フィールド上に守備表示で存在するモンスターが攻撃対象になった時に発動できる。

その守備表示モンスターの表示形式を表側攻撃表示に変更する。

さらに、その戦闘によって攻撃モンスターを破壊し墓地へ送った時、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「ぐ、クソ……!」

「分かってないなあ? 何で『ホープ』が破壊されたと思ってんだ? まさかテメエの実力だと思ってるんじゃないやねえよなあ?」

「ち、違うってのか!」

「おうよ。あれはな、わざとだ。わざと破壊させたんだよ。最初に『ホープ』の防御能力と自壊能力をチラつかせれば、お前はまずオーバーレイ・ユニットを全部剥ぎ取りに来る。そして『ホープ』がいなくなれば攻撃はほぼ確実に通るとお前の貧相な発想力は辿り着く。そうすればテメエのエリート意識と俺への敵対心から確実に守備表示の『不亂健』を狙うと思ったんでね。」

効果ダメージで止めを刺せる状況なら、まずデカイダメージを狙うって事ぐらい安易に予想できる。なら攻撃力が最も高く、そして守備力が低くて破壊しやすい『不亂健』を狙うだろう、ってな」

「テメエまさか、俺の攻撃の順番まで計算済みだったのか!」

「無論だ。それに『ソルトマン』の攻撃だけ『不乱健』で受けて、残りは『ホープ』で最初から防ぐ予定だったさ。順番が狂った所で誤差の範囲内、何の問題も無い」

そう、最初から計算済み。こいつの性格、攻撃の順番、どのモンスターがどのモンスターに攻撃するか。全てを演算してシミュレートした。『フェイク・アドバンテージ』で『ガムシヤラ』を最初に引いた時から、この流れは全て頭の中に入っていた。

もつとも、本当に描いた通りに動いてくれるとは思わなかったがな。

「要するにテメエは俺の手の上で踊らされていたってワケだ。差し詰め滑稽な人形だな」

「こ、の野郎……！ 『幻魔の王城』の効果発動！ 墓地から『共鳴虫』と『仮面竜』をデッキに戻してシャッフルし、1枚ドロウする！

そしてカードを2枚セットして、俺は『ソルトマン』の効果発動！ このカードが相手によって破壊された時、デッキからモンスターカードを1枚墓地に送り、墓地から特殊召喚できる！ デッキから『共鳴虫』を墓地に送って、現れる！ 更に墓地から『ソルトマン』が特殊召喚された時、攻撃力が2000上がってカード効果では破壊されなくなり、俺が受ける効果ダメージも0となる！」

ビッグ・ソルトマン：ATK 3000↓5000

カオス・ネクロマンサー：ATK 3300 ↓ 3600 ↓ 3000 ↓ 3300

再び現れる塩の魔人。ほう、中々優秀な効果だ。

だが、そんな手間のかかるモンスターじゃあ、俺相手に優位に立つ事はできないぞ。

ビッグ・ソルトマン（効果モンスター）（オリジナル）（改訂版）

星7

ATK 3000 / DEF 100

闇属性 / 岩石族

このカードは自身の効果以外で特殊召喚できない。

このカード名の（2）の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：相手フィールドにEXデッキから特殊召喚されたモンスターが存在する場合、自分フィールドのモンスターを2体リリースして発動できる。

このカードを特殊召喚する。

（2）：（1）の方法で特殊召喚されたこのカードが相手によって破壊された場合、そのターン終了時にデッキからモンスターカードを1枚墓地へ送って発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。



この効果で特殊召喚された場合、以下の効果を得る。

●元々の攻撃力は表側表示で存在する限り5000となる。

また相手のカード効果では破壊されず、表側表示で存在する限り自分が受ける効果ダメージは0となる。

「ターンエンドだぜ！」

高田：LP 4900

手札：0枚

フィールド

：仮面竜（ATK 1900）、カオス・ネクロマンサー（ATK 3300）、ビッグ・ソルトマン（ATK 5000）

：伏せカード2枚、スピリットバリア（永続罫）、幻魔の王城（フィールド魔法）、新調スーツ（通常罫・『仮面竜』に装備）

「俺のターン、ドロー！」

さて、効果破壊されないモンスターか。対象方法はあるが、まずは……。

「俺は『ヴォルカザウルス』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使い、『仮面竜』を破壊する！ “マグマックス”！ 効果破壊なら『新調スーツ』のダメージを受けない！」

No. 61 ヴォルカザウルス：ORU 1↓0

「そうはさせねえぞ！ 永続罠『クランプ・バインド』！ このカードが存在する限り、俺様の場のカードは1ターンの1度、相手の効果を受けない！」

赤い星を噛み砕き、胸部から灼熱のマグマを放出する恐竜。狙われた仮面のドラゴンは、しかし、無数の鎧に邪魔をされて火傷一つ負う事は無かった。

クランプ・バインド（オリジナル）

【永続罠】

このカードが表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在するカードは1ターンの1度だけ、相手のカード効果を受けない。

「どうだ！ もう『ホープ』はいねえし『ヴォルカザウルス』もオーバーレイ・ユニット

を使い切った！ これで次のターンに『仮面竜』で自爆特攻は確実に成功する！ そうすれば『新調スーツ』の効果で貴様は終わりだあ！」

「それはどうかな？」

「何い!？」

「俺は魔法カード『トラップ・ポーズ』を発動！ 相手フィールド上に今、表側表示で存在する罠カードをエンドフェイズまで全て無効にする！」

ベキベキベキツ！ と石版になる3枚の罠。

更にその内2枚、『スピリットバリア』と『クランプ・バインド』から光が飛び出し、俺のデッキに宿った。

「そしてこの効果で無効にした永続罠カードの枚数分、カードをドローする！ お前の場の永続罠は2枚、よって2枚ドローだ！」

「上手いな、これで『新調スーツ』は効果が無効になって装備状態を維持できない。『仮面竜』が場に残っていても破壊される！」

「……しかも、『スピリットバリア』が無効になった。……これで戦闘ダメージを与える事ができる」

「チィ……ッ！」

悔しがる高田を尻目に、更に手札を切る。



ず、モンスター効果は発動できなくなる！　そしてナンバーズを素材とした場合、1枚ドローする！」

ナンバーズ・リチャージ（オリジナル）

【通常魔法】

自分フィールド上にエクシーズモンスターが表側表示で存在する場合、自分の墓地に存在する「No.」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地から特殊召喚し、自分フィールド上に表側表示で存在する選択したモンスターよりランクの高いエクシーズモンスター1体とこのカードをその下に重ねてエクシーズ素材とする。

この効果で特殊召喚されたモンスターは、このターン攻撃できず、モンスター効果を発動できない。

またこの効果で「No.」と名のついたモンスターを下に重ねてエクシーズ素材とした場合、1枚カードをドローする。

「へ、へん！　あの厄介な盾野郎が戻ったかと思えば、効果が使えないんじゃないか、驚かせやがって！　おまけに俺様の場には攻撃力5000の『ソルトマン』がいるんだぜ

！ テメエの『不乱健』でも勝てやしねえ！」

「なら、これならどうだ？ 『ホープ』の神髄はこれだけじゃあ終わらない！ 俺はランク4の『希望皇ホープ』でオーバーレイ！」

翼を折り畳み、剣のオブジェへと姿を戻して行く『ホープ』。そして地面に生まれた金色の銀河の渦の中へと潜り込み、爆発の中で新たな姿を得る。

「1体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを再構築！」

★4↓★4

「カオス・エクシーズ・チェンジ！ 現れる、混沌を光に変える使者！ 闇の中より舞い出でし希望！」 『C.N.O. 39 希望皇ホープレイ！』

『ホオオオオオオオオプ、レイイイイイイイイイッ！』

無数の光輝く粒子とともに、漆黒の、よりシャープな剣のオブジェクトが螺旋を描いて姿を現す。白かったパーツは闇のように漆黒に染まっている。

銀河の中から完全に登り切ると、蝙蝠を思わせるような翼が開き、背中の大剣のセーフティ・ロックが外れた。そして額の緑の宝玉が光輝き、赤いルビーのような瞳に生命の明かりが灯る。

C N o . 3 9 希望皇ホーププレイ : A T K 2 5 0 0

「カオス、ナンバーズ……、だと!？」

「そうだ。より高貴であろうとする気高さ。そして誰かを憎んだりする激しい感情。その2つが合わさって生まれる誰かのために戦おうとする慈愛の心。それを現したのがカオス、即ち、カオス・ナンバーズだ!」

『ホオオオオ……!』

威風堂々と立つ『ホーププレイ』は、まるで俺の言葉に呼応するように気炎を吐いてくれた。お前もやる気満々ってワケか。頼もしいぜ。

これが俺の求めている、前世の闇と現世の光の集合体の一片。この力を極める事が、今後の俺の課題だろう。

『希望皇ホーププレイ』の効果発動! このカードは俺のライフが1000以下の時、オーバーレイ・ユニットを任意の数だけ使う事で、その数×500ポイント、攻撃力がアップする! 俺は3つ全てを使って、"オーバーレイ・チャージ!"

黎 : L P 1

C N o . 3 9 希望皇ホーププレイ：A T K 2 5 0 0 ↓ 4 0 0 0 / O R U 3 ↓ 0

「更に使用したオーバレイ・ユニットにつき1000ポイント、相手モンスター1体の攻撃力をダウンさせる！」

ビッグ・ソルトマン：A T K 5 0 0 0 ↓ 2 0 0 0

周囲を旋回する輝く星。それらが『ホーププレイ』の背中から伸びたアームによって掴まれ掲げられた大剣に灯ると、混沌の騎士の全身を白く輝くオーラが包み込み、漆黒の鎧を光り輝く純白に染めた。

その一方で塩の魔人は体中から煙が上がり、色が鈍る。消えていった白煙は恐らく力の源だったのだろう。

C N o . 3 9 希望皇ホーププレイ（エクシース・効果モンスター）

ランク4

光属性／戦士族

A T K 2 5 0 0 / D E F 2 0 0 0



光属性レベル4モンスター×3

このカードは自分フィールド上の「No. 39 希望皇ホープ」の上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

自分のライフポイントが1000以下の場合、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除く事で、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力を500ポイントアップして相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を1000ポイントダウンする。

「攻撃力が逆転されただど!? 畜生、攻撃力7000までなら最悪でも相撃ちかよ!」

「そういう事だ! バトル! 『不乱健』で『カオス・ネクロマンサー』を攻撃!」

「ぐおおお!」

高田 : LP 4900 ↓ 3700

「続いて行け、『ホープレイ』! 『ソルトマン』を攻撃! // ホープ剣・カオススラッシュ

!!」

素早く振り抜かれる三本の刃。右の一太刀が塩でできた左腕と下腹部を、左の一太刀が右腕と胸部を、そして背中のアームによって振り下ろされた大剣が、全身がバラバラ

になるよりも早く、魔人の体を正中線で真つ二つに切り裂いた。  
相変わらずの滅多切りだ……。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

高田：LP 3700↓1700

うん、戦闘ダメージが入るってのはやっぱり良いモンだ。

『ガイアドラゴン』で『仮面竜』を攻撃！ “ドラゴン・シエイバー”！ 『ジャンク・アタック』のダメージも受けてもらう！」

唸り上げる螺旋槍。それが仮面のドラゴンの胸を深々と貫き砕く。

砕かれた事によって生まれたその破片は空中を当て所無く飛んでいたが、突如として方向性を帯び、高田の方へ向けて高速で飛来し吹き飛ばした。

「で、デツキから『仮面竜』を特殊召喚！ ぐぼお!」

高田：LP 1700↓1000↓300

仮面竜：ATK 1400↓1900

ちよつと足りなかったか。だが大ダメージには変わり無い。残りライフ300なら、『ジャンク・アタック』のあたりですぐに削り取れるな。それがダメでも別に効果ダメージを与える方法ならいくらだってある。

「俺はカードを1枚セットして、ターンエンド。『ホーププレイ』の効果終了、攻撃力は元に戻る」

C N o . 39 希望皇ホーププレイ : A T K 4000 ↓ 2500

しかも『不乱健』にはまだオーバーレイ・ユニットが残っている。これで自爆特攻をしかけた所で、『スピリットバリア』を無効にしてやれば戦闘ダメージを与える事が可能だ。

これで八方塞がりつて所か、そろそろ決着だな。

黎 : L P 1

手札 : 1枚

フィールド

: C N o . 39 希望皇ホーププレイ (A T K 2500・O R U : 0)、迅雷の騎士ガ

イアドラグリーン(ATK 2600・ORU:i)、No. 22 不乱健(ATK 4500・ORU:1)

：伏せカード1枚

ターンが渡され、高田の順番が巡る。だが奴は寝転んだ状態のまま、まるで動こうとしない。

「どうした、お前のターンだぞ」

「なあ、遊馬崎。俺はどこで間違えたんだ……?」

「あ?」

いきなり何言ってるんだ、コイツ?

「俺はよう、ただ見返してやりてえだけなんだよ。テメエも、見捨てた奴も、教師も、何もかも。なのにこれは何だ? これだけ強くなったのに、俺は何で地面に這い蹲ってるんだ? 俺は、何を手に入れたんだ?」

「……………」

「力を折角手に入れたってのになあ……。……いや、違うな。俺はそんなモン求めてねえ」

ゴロリ、と高田は起き上がった。

「俺はブルーに居てえ。あそこが俺の居場所なんだ。だから強くなりたかったんだ」

「何故、ブルーに拘る？ イエローやレッドだつて、多少環境は悪くなるが良い所だぞ。住めば都だ」

「ちげえ、ちげえんだよ……。俺は、俺様は、エリートじゃなくちやいけねんだ……」

「高田……？」

「俺様は——、青くなくつちやならねえんだよおつ！」

その叫び声と共に、高田の右手が突如として黒く輝きだした。だが朝日のような温かいものも、月のように冷たくも穏やかなものでも無い。暗い、深淵の、深い、闇の輝きだ。光を反射しない光 黒く光るといふ科学的な理論に真つ向から喧嘩を売るような悍ましいナニカ。

あれは……。分かる、あれは、人の手の中にあつてはいけない！

「お、おお……？ 何だ、力が漲つて来るぞ！」

そして次の瞬間、奴の背後に黒尽くめの男が現れた。ガツシリとしてアスリート、いや、武道の達人のような体躯。年は中年か壮年くらいで背はかなり高い。しかし何故か半透明。

そして何より全身から漂う、これまでに感じた誰よりも濃密な邪神の護衛の気配。

「テメエが、最後の護衛か！」

『如何にも。我が名は最後にして最強の護衛、ラーズ。と言つても、ここに居る我はただ

の分身だな』

ッ、分身でこれ程の……！ 同じ上級護衛のグラトニーやラストとはケタ違いだ……

！

ラーズの幻影は俺への興味は最初から無かったのか、クルリと高田の方を向いた。『クククククク、貴様にそう易々と敗北されては困るのではな？ 助太刀してやろう』

「おお、ありがてえぜ！」

「高田、よせ！ その力を使うな！ その先にあるのはお前自身の破滅だぞ！」

「構うものかあ！」

俺の忠告も聞かず、高田はドス黒く輝く右手をデッキトップのカードに添えた。

「最強<sup>凶</sup>デュエリストのデュエルは、全て必然！」

な、何だその口上は!?

「あらゆる希望も命も絶望と死に染める！」

そんなのは、まるつきり……！

『ジエノサイド・ドロ』 オオオオオオオ！』

まるつきり、邪神の護衛と同じじゃないか！

「ギャハ、来たぜ！」

『ククク、当然だな。さあ、奴を殺し、貴様の実力を証明するのだ！』

「おうよ！ 俺は『仮面竜』をリリースし『ジェノサイド・グリム・リーパー』をアドバンス召喚！ このカードはレベル8だが、相手フィールド上に攻撃力2500以上のモンスターが2体以上存在する場合、リリース1体で召喚できる！」

俺の場のモンスターは3体、いずれも攻撃力は2500オーバー……！！

C N o . 39 希望皇ホープレイ：ATK 2500

N o . 22 不乱健：ATK 4500

迅雷の騎士ガイアドラグリーン：ATK 2600

ジェノサイド・グリム・リーパー：ATK 1000

あいつが呼び出したのは、黒いオーラを身に纏った死神。身の丈を大きく超える大鎌を携え、ドクロの面に黒いポロポロのローブ。正に誰もがイメージする死神。だが、そ



の全身からは腐臭にも似たあの嫌な気配が濃密に漂っていた。

『ジエノサイド・グリム・リーパー』の効果発動！ このカードがアドバンス召喚に成功した時、俺の墓地のモンスター1体につき500ポイント俺のライフを回復し、その数値分だけ攻撃力がアップする！ 更にこの効果は無効化されない！」

「何!? 『不乱健』の効果効かないだど!?!」

「俺様の墓地のモンスターは合わせて15体！ よって7500ポイントのライフと攻撃力を獲得だあ！」

ジエノサイド・グリム・リーパー：ATK 1000↓8500

高田：LP 300↓7800

「攻撃力8500！」

「何という滅茶苦茶な！」

「……これが、邪神の力！」

「更に『幻魔の王城』の効果発動！ 墓地から『カオス・ネクロマンサー』と『キラートマト』をデッキに戻してシャッフルし、1枚ドローする！」

再び邪悪なエナジーが高田の右手に集まる。

まさか、これからドロを全てそれでやるつもりか!?

「ギャハハハハハ! 『ジェノサイド・ドロ』!」

深い紫色に染まり、相手の手札に加わるデッキトップ。まずい、計算が狂い過ぎている! 奴の素の実力と『王城』だけならライフが1であつても抑え込めたのに、このままでは押し切られてしまう!

ジェノサイド・グリム・リーパー（効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／アンデット族

ATK 1000 / DEF 0

相手フィールド上に攻撃力2500以上のモンスターが2体以上存在する場合、このカードはモンスター1体をリリースして召喚できる。

このカードがアドバンス召喚に成功した時、自分の墓地に存在するモンスターの数×500ポイントライフを回復し、その数値分このカードの攻撃力をアップさせる。

この効果の発動と効果は無効化されない。

このカードがアドバンス召喚されたターン、自分は手札から魔法・罫カードをフィールドに出す事はできない。

「バトル！ やれ、『ジエノサイド・グリム・リーパー』！ その白黒を捻り潰せえ！

『地獄の断罪劇』！」

「っ、畏発動！ 『くず鉄のかかし』！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にし、フィールドに再セットする！」

腐臭と残像を放つ鎌を防ぐ鋼鉄製の案山子。今日もご苦労様です。

「チッ！ 俺はこれでターンエンドだ！」

高田：LP 7800

手札：1枚

フィールド

：ジエノサイド・グリム・リーパー（ATK 8500）

：幻魔の王城（フィールド魔法）、スピリットバリア（永続罫）、クランプ・バインド

（永続罫）

「俺のターンだ、ドロー！」

こうなったらもう容赦しねえぞ。これ以上長引かせれば確実に俺が不利。なら、ここ

は前のターンに温存しておいたこれを使うのみ！

「俺は手札から『RUMーリミテッド・バリアンズ・フォース』を発動！ このカードはランク4エクシーズを進化させ、ランク5のカオス・エクシーズを特殊召喚する！」

「何!?! エクシーズモンスターをランクアップだど!?!」

「俺はランク4の『希望皇ホープレイ』でオーバーレイ！ 1体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを再構築！」

漆黒の騎士がその姿を変化する前のシャープな剣のオブジェへと変える。次の瞬間、その姿は紫の光へと変わり、空高くに生み出された銀河の渦へと飛び込んだ。

★4↓★5

「カオス・エクシーズ・チェンジ！ 混沌より進化した赫焉の力！ 悠久の勇士が仮の姿となりて、今ここに現れる！ 『CNo. 39 希望皇ホープレイV』！」

『ホオオオオオオ！』

CNo. 39 希望皇ホープレイV：ATK 2600

銀河の爆発から生まれるのは奇怪な黒い塊。そこから触手が伸びて腕を構築し、棘が伸びて翼を形作る。黄色の星は金色に縁どられた赤い十字型のクリスタルとなり、皮膚の代わりに紫色のエネルギーを放出しながら浮遊するその姿は、闇のように黒い全身と相まって寧ろ悪役のそれだ。

「何が出て来るかと思えば、高々2600の攻撃力！ 俺様のモンスターの敵じゃねえよ！」

「なら吹き飛ばすまで！ 俺は『不乱健』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットと手札を1つずつ消費し、自身を準備表示に変更！ そしてこのターンの終わりまで『克蘭プ・バインド』の効果が無効にする！」

『ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

No. 22 不乱健：ATK 4500↓DEF 1000/ORU：1↓0

光の玉と手札1枚を吸収し、耳を劈く様な咆哮を上げる腐敗した巨人。その咆哮を受けて『克蘭プ・バインド』はベキベキと石化する。

「なぬ!?!」

「これで効果破壊も可能になった。『不乱健』を攻撃表示に変更！」

No. 22 不亂健：DEF 1000↓ATK 4500

「だが、攻撃力はこっちの方が上！ テメエには勝ち目は無いぜ！」

「それはどうかな！ 俺は『ホープレイヴ』のモンスター効果発動！ カオス・オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える！ 対象は『グリム・リーパー』！ 更にこのダメージの数値はフィールド上のものを参照する、よってテメエは回復した数値以上の、8500ポイントのダメージを受けてもらうぞ！」

「な、なんだとお!?!」

「受け取りな、Vブレード・シユート！」

CNo. 39 希望皇ホープレイヴ：CORU：1↓0

闇の騎士が腰から曲がった双剣を引き抜き、柄の部分を結合させる。それを右手に持ち替えて回転を加えると、剣は光り輝きながら円盤のようになり、投擲される。

投げられた円刃はうねりを上げて死神を撃ち抜いた。

「これで俺の勝ちだ！」

C No. 39 希望皇ホープレイV (エクシーズ・効果モンスター)

ランク5

光属性／戦士族

ATK 2600 / DEF 2000

レベル5モンスター×3

このカードが相手によって破壊された時、自分の墓地のエクシーズモンスター1体を  
選択してエクストラデッキに戻す事ができる。

また、このカードが「希望皇ホープ」と名のついたモンスターをエクシーズ素材とし  
ている場合、以下の効果を得る。

●1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、相手フィールド上  
のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライ  
フに与える。

「そうはいかねえよ！」

高田：LP 7800↓15300

「何?! ライフが減るところか回復したと?!」

「残念だったな! 俺様は手札の『ジエノサイド・サイエンティスト』の効果を発動したのさ! 手札からこのカードを捨てる事で、このターン俺様が受けるダメージを回復に変える事ができる!」

ジエノサイド・サイエンティスト（効果モンスター）（オリジナル）

星1

炎属性／戦士族

ATK 500／DEF 100

このカードを手札から捨てて発動する。

このターン自分が受けるダメージを無効にし、その数値分だけ回復する。

この効果は相手ターンのみ発動できる。

「く……!」



「残念だったな！ 『不乱健』の効果が健在なら、絶対効果で破壊してくると踏んでたぜ！ 効果ダメージのオマケつきでなあ！」

こいつ……、俺の戦法を読んでいたのか！

まずい、手札を使い切ってしまった……！ これじゃあ……！

「俺はこれでターンエンド！」

黎：LP 1

手札：0枚

フィールド

：CNo. 39 希望皇ホープレイヴ（ATK 2600・CORU：0）、迅雷の騎士ガイアドラグーン（ATK 2600・ORU：1）、No. 22 不乱健（ATK 4500・ORU：0）

：伏せカード1枚（『くず鉄のかかし』）

「俺のターン、『ジェノサイド・ドロウ』！ 『王城』の効果発動！ 墓地から『コーリング・ノヴァ』2体をデッキに戻し、もう1度『ジェノサイド・ドロウ』！」

ッ、また2連続で……！

「俺様は『ジェノサイド・ポイズンワーム』を召喚！」  
『ウオオオオオオオム！』

ジェノサイド・ポイズンワーム：ATK 1000

高田が呼び出したのは巨大な虫。芋虫やミミズのように長いが、胴体は人間よりも太い上に空中に浮いている。丸い口には牙が中心へ向けてズラリと並んでいるし全身から毒々しい体液を垂れ流していて、どう見ても大人しい類の虫では無い。

「そして装備魔法『殺戮の火薬』を装備！ これを装備したモンスターの攻撃力は、相手の場に存在するモンスターの中で元々の数値が最も高い攻撃力分アップする！ 攻撃力はこれで4500ポイントアップ！」

ジェノサイド・ポイズンワーム：ATK 1000↓5500

「……攻撃力5500!？」

「ぬう、デタラメな！」

「ヒイーヒャハハハハハ！ この圧倒的なパワー、最高だぜ！ バトル！ 『ポイズン

ワーム』で『ホープレイV』を攻撃だあ！」

「罨発動、『くず鉄のかかし』！」

火薬の詰まった樽を背負った巨虫の突進を阻む金属製の案山子。だが、これがある事を知っているながら攻撃したという事は……！

「この瞬間、『ポイズンワーム』の効果発動！ このカードが効果の対象になった時、デッキから1枚カードを墓地に送ってそれを無効にし、破壊する！」

「ツ！」

ジェノサイド・ポイズンワーム（効果モンスター）（オリジナル）

星3

ATK 1000 / DEF 1550

地属性 / 昆虫族

このカードが相手のカード効果の対象になった時、デッキの上からカードを1枚墓地に送り、そのカードの効果が無効にして破壊する。

この効果は1ターンに1度しか発動できない。

予想通り破られたか。ピッシリと生えた歯で食い千切られる金属製の案山子。毒液

を滴らせる虫はそのまま闇色の騎士に噛み付いた。

「取ったぜえ！」

「そうはさせるか！ 墓地の『ガード・マスター』の効果チェイン発動！ 俺の場の攻撃表示モンスターが攻撃された時、このカードを除外して対象モンスターの表示形式を守備表示にしつつこのターンのバトルによる破壊から守る！」

C N o . 3 9 希望皇ホープレイヴ：A T K 2 6 0 0 ↓ D E F 2 0 0 0

地面に落ちた傍から岩を溶かす毒を持つ牙。それが闇の騎士に突き立てられる。しかしその一瞬前に既に黒髪の拳法家による護身術の演舞は終了しており、それを受け継いだ騎士は毒に侵される事も無く攻撃を防いだ。

「じぶとく……！」

「褒め言葉だ。ゴキブリとでも言ってくれ」

飄々と返す俺に、高田は歯噛みする。

人生つてのは生きた奴の勝ちだ。どれだけ華やかであつても死んでしまったら栄誉も何も手に入らない。そこで終わりだ。命を失った時点で全てを失うんだ。死んで花実は成らない。どんなに無様でも、どんなに惨めでも、生き残れなかった奴は人生の、い

や、世界の負け犬だ。だから自分の命を守ろうとも思えない奴はクソだ。最後に地に足をつけない奴はクソの塊だ。世界に負けた奴が生きる場所は、この世には無い。

そういった意味じゃ俺もまたクソだ。誰がどれだけ悲しむのか実感が湧かないし、湧けない。死ぬ事に恐怖を抱かないし、抱けない。だから平気で身を捨てられるし、誰の盾にだってなれる。

けれど。

だけれども。

俺は化物、それで良いんだ。

少なくとも、それが平和なんだ。

「バトルフェイズ終了時に『殺戮の火薬』を装備したモンスターが戦闘を行っていた場合、破壊される。だがジェノサイドモンスターが破壊された場合、1枚ドロウできる！」

殺戮の火薬（オリジナル）

【装備魔法】

装備モンスターの攻撃力は相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの中でもっとも高い攻撃力分だけアップする。

このカードを装備したモンスターが戦闘を行った場合、バトルフェイズ終了時に破壊

される。

「ジェノサイド」と名のついたモンスターがこのカードを装備して破壊された場合、1枚カードをドロウする。

「『ジェノサイド・ドロウ』!」

更に邪悪なエネルギーでドロウを加速する高田。バーンして来ないのが幸いか……。

まあやった所で俺の墓地には『プリベントマト』が『テイク・オーバー5』の効果で存在するからある程度は耐えられるが……。

「へへ、または良いカードが来たぜ! 俺様は墓地の『ジェノサイド・グリム・リーパー』、『ジェノサイド・サイエンティスト』、『ジェノサイド・ポイズンワーム』を除外! 現れる、『ジェノサイド・ベノムスナイパー』!」

『ゲハアツ!』

次元の渦へ殺戮の名を持つモンスター達が消え、入れ替わりに現れた毒々しい狙撃手がGoogleを上げてこちらを見下すように嘲笑う。

今度は何の効果持ちだ。何が出て来ても驚かない自信があるぞ、もう。

「『ベノムスナイパー』はテメエのターンのエンドフェイズごとにテメエに1000ポイント、更に俺様のスタンバイフェイズごとに500ポイントのダメージを与える!」

更にこいつはバトルでは破壊されず、こいつとのバトルで俺は戦闘ダメージを受けない！　そしてこいつを攻撃したモンスターの効果は無効となる！」

「何、バトルで破壊されないバーン効果持ちだど?！」

ジェノサイド・ベノムスナイパー：DEF 4000

言ってる傍からバーン効果来ちやったよ！

しかも守備力4000！

ジェノサイド・ベノムスナイパー（効果モンスター）（オリジナル）

星7

闇属性／戦士族

ATK 0／DEF 4000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する「ジェノサイド」と名のついたモンスターを3種類ゲームから除外した場合にのみ特殊召喚できる。

このカードは戦闘では破壊されず、このカードとの戦闘で発生するコントローラーへ

の戦闘ダメージは0になる。

このカードが表側表示で存在する場合、相手ターンのエンドフェイズ時に1000ポイント、自分のターンのスタンバイフェイズ時に500ポイントのダメージを相手に与える。

このカードを攻撃したモンスターはダメージ計算終了時にモンスター効果が無効となる。

「……汚い！ ……あんなの、『不亂健』じゃないと倒せないのに、戦闘破壊ができないなんて……！」

「しかもこのターンの終わりと同時に『スピリットバリア』と『クランプ・バインド』が復活する。まずいぞ……！」

「ターンエンドだ！」

高田：LP 15300

手札：0枚

フィールド

：ジェノサイド・ベノムスナイパー（DEF 4000）



：幻魔の王城（フィールド魔法）、スピリットバリア（永続罫）、クランプ・バインド（永続罫）

「俺のターン、ドロー！」

リミットはこのターンが終わるまでか。それならどうとでもできそうだ

つたく、護衛連中との経験が無ければこんなに着いてデュエルなんて出来んかったろうな……。

果たしてそれは良い事なのか、それとも悪い事なのか。おっと、良いカードを引いた。「俺は手札から魔法カード『エクシーズ・トレジャー』を発動！ フィールドのエクシーズモンスターの数だけカードをドローする！ フィールドのエクシーズモンスターは3体！ よってカードを3枚、ドローする！」

チャッ、と引いたカードを確認。

……まだ運は俺を見離れたワケでは無いらしいな。

「行くぞ！ 俺は『RDM―ヌメロン・フォール』を発動！」

「ランクアップ・マジックの次はランクダウン・マジックだど!？」

「このカードは俺の場の『希望皇ホープ』系統のモンスターをより下のランクへとランクダウンさせる！」

俺はランク5の『希望皇ホープレイV』でオーバレイ！ 1体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを再構築！」

闇の騎士は俺の呼び声に応じ、腕を元の触手のような物質へと変換。更に不気味なエネルギーを放っていた翼も折り畳んで収納すると、新たに地面に構成された銀河の渦へと紫の光になって飛び込んだ。

★5↓★1

「ランクダウン・エクシーズ・チェンジ！ 新たな希望の原点にて始祖の雄叫び！ 天衣無縫の力を纏いて勝利へと突き進む！ 真なる光で勝利を照らせ！」 『No. 39 希望皇ホープ・ルーツ』！  
『ルウウウウウツツ！』

No. 39. 希望皇ホープ・ルーツ：ATK 500

見る者をホッとさせるような青白い輝きの爆発の中から姿を現すのは、『ホープレイ』を更に細くシャープにした姿。清純さを表す青い光沢と共に全ての希望へと姿・形を成

し得る薄い鎧と細い剣を持っている。

「ケツ、何が出て来るかと思えば高が攻撃力5000だあ？ ヤケにでもなったかよ！」

「まだ慌てる時じゃねえよ、高田。バトル！ 『不乱健』、『ベノムスナイパー』を攻撃！」

「バカが！ こいつは戦闘じや破壊されないつつてんだろうが！」

「だからもう少し大局を見据えろつて。攻撃宣言に合わせて『ホープ・ルーツ』の効果発動！ モンスターの攻撃宣言時、オーバーレイ・ユニットを1つ使い、攻撃を無効にする！」

No. 39 希望皇 ホープ・ルーツ：ORU 1↓0

走って狙撃手へ殴りかかる大男。しかし細身の戦士が剣で光の玉を打ち出して拳に当たると、攻撃はそこで止まった。

「自分で自分の攻撃を止めた!？」

「そして、この効果で攻撃を中断させられたモンスターがエクシーズモンスターである場合、このカードの攻撃力はそのモンスターのランク×500ポイントアップする！」

「何だと!？」

「『不乱健』のランクは、8！」

「……つまり8×5000で……」

No. 39 希望皇ホープ・ルーツ：ATK 500↓4500

「攻撃力4500!? だが『ベノムスナイパー』はバトルでは破壊されないぜ!」

「それはどうかな! 続いて『ホープ・ルーツ』で攻撃! “ホープ剣・ルーツ・スラツ シュッ!”」

両手で構えた剣を大きく振り下ろす青と白の希望の騎士。それが猛毒の狙撃手に触れた瞬間、禍々しい笑みを浮かべていたスナイパーは爆発して消し飛んだ。

「何い!? バカな、何故俺様のモンスターが破壊されたんだ!」

『ヌメロン・フォール』でランクダウンしたモンスターが相手モンスターとバトルする時、相手モンスターの効果を無効にする!」

「ンだとお!」

RDM―ヌメロン・フォール

### 【通常魔法】

自分フィールド上の「希望皇ホープ」と名のついたモンスター1体を選択して発動で

きる。

選択したモンスターよりランクが低い「希望皇ホープ」と名のついたモンスター1体を、選択した自分のモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

この効果でエクシーズ召喚したモンスターは以下の効果を得る。

●このカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、バトルフェイズの間だけその相手モンスターの効果は無効化される。

No. 39 希望皇ホープ・ルーツ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク1

光属性／戦士族

ATK 500 / DEF 100

レベル1モンスター×2

自分または相手モンスターの攻撃宣言時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

そのモンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターがエクシーズモンスターだった場合、このカードの攻撃力はそのモンスターのランク×500ポイントアップする。

さて、これで相手フィールドにモンスターはいなくなつた。

今度こそブチ込ませてもらう!

『ガイアドラグリーン』でダイレクトアタック! //ドラグリーン・シエイバー!』

「ギャバアアアアアアアア!?!」

高田：LP 15300↓12700

螺旋する疾風の槍で高田が吹き飛ぶ。

しかしこれだけ手間暇かけて2600ダメージか。効率が悪いな……。

「どうだ! これが俺の、エクシーズモンスターの、ナンバーズの力だ!」

「ぐ、クソ……!」

「俺はカードを1枚場にセットして、ターンエンド!」

黎：LP 1

手札1枚

フィールド

：No. 39 希望皇ホープ・ルーツ（ATK 4500・ORU：0）、迅雷の騎士  
ガイアドラグーン（ATK 2600・ORU：1）、No. 22 不乱健（ATK 4  
500・ORU：0）

：伏せカード1枚

さて、このターンも凌げるかな？

「クソツタレが！ 俺様のターン、『ジエノサイド』——」

再び邪悪なエネルギーを右手に集めてデッキトップへかざす高田。

だが——

「ド——、ツ!？」

ガクンッ！

「グ……!？」

突然、高田は地面に膝をついた。ドローもできず、空の両手を地面について体を支え

ている。その体にはさつきまでは無かったはずの脂汗が大量に浮かんでいる。おまけに呼吸も荒いし顔色も悪い。

あれは、スタミナが限界を訴え始めている時とよく似ている症状……！

「な、にが……？」

「バカ！ だから止めろつつつたんだ！ そんなエネルギーを大きく消費するドロローを続けてれば、お前の体の方が先に限界になるんだぞ！」

アニメで例えるのならターソンに2度のシャイニング・ドロローと同じ。主人公やボスキャラレベルなら兎も角、こいつは他人から能力を譲渡された一般人。何度も繰り返し返せば体が持たないのは当然の結果。如何に強化され、デッキがアブノーマルになろうが、中身がノーマルならばこうなるのは自明の理だ。

ガタつく足で立ち上がる高田に、俺は警告する。

「高田、これ以上はお前の体が壊れるぞ！ もう止めろ！ 勝敗が決する前に死ぬつもりか！」

「まだだ……！ まだ終わつちやいねえぜ……！ オオオオオオ！ 『ジエノサイド・ドロロー』ッ！」

「こいつはまだ……、まだやるってのか!？」

「魔法カード『殺戮の宝札』！ 自分フィールド上にモンスターが存在せず、テメエの場





……。しかし、どうやって？ 俺では奴の心に響かせる言葉は吐けない！

「高田、お前……！」

『ジェノサイド・オーガ』のモンスター効果、発動だぜえ！ このモンスターの儀式召喚に成功した時、フィールドのカードを全て破壊する！ そしてこの瞬間、墓地の『ジェノサイド・スライサー』のモンスター効果発動！ このカードを墓地から除外する事で、俺のモンスターはこのターン破壊されない！」

「何い!？」

殺戮の狂宴（オリジナル）

【儀式魔法】

「ジェノサイド・オーガ」の降臨に必要。

自分の手札の「ジェノサイド」と名のついたモンスターと自分フィールド上からカードを1枚ずつ墓地に送り、手札から「ジェノサイド・オーガ」を儀式召喚する。

ジェノサイド・オーガ（儀式モンスター・オリジナル）

星8

闇／悪魔

ATK 3000 / DEF 0

「殺戮の狂宴」により降臨。

このカードの儀式召喚に成功した時、フィールドに存在する全てのカードを破壊する。

このカードは墓地から特殊召喚できない。

このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

ジェノサイド・スライサー（効果モンスター・オリジナル）

星4

闇／戦士

ATK 1900 / DEF 1500

このカードと戦闘を行ったモンスターはダメージ計算終了時にゲームから除外される。

墓地のこのカードをゲームから除外して発動する。

このターン、自分フィールド上に表側表示で存在する「ジェノサイド」と名のついたモンスターは破壊されない。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「これでテメエのフィールドはガラ空き！　そして『ジェノサイド・オーガ』はバトルする間、テメエは魔法も罫も発動できねえ効果を持っている！」

俺の墓地を見る。先刻破壊されたカードは『エクシズ・リボン』、どの道使えるカードでは無かったが、それでもブラロにアルマデスを混ぜた効果は厳しい。

奴の攻撃力は3000、それを食らえばーしか無い俺のライフは消し飛ぶ。だが……。

「バトル！　これで今度こそ終わりだあ！　『ジェノサイド・オーガ』、そいつを叩き伏せろお！」

「温いわあ！　手札の『虹クリボー』のモンスター効果発動！　相手モンスターが攻撃して来た時、手札のこのカードを装備させる！　そしてこのカードが装備されているモンスターはバトルに参加できない！」

「何っ!?!」

防御の策は何重にも張り巡らせる、それが鉄則だ。

手札の青いボール型モンスターを魔法・罫ゾーンにセッティングすると同時、その虹色に輝く角を持ったモンスターが腐敗した大鬼の周囲を何度も巡回し、虹色の光が軌跡

を生み出す。その軌跡は枷となつて『ジエノサイド・オーガ』を拘束した。

魔法・罫が使えないという事はつまり、モンスター効果で対処しろという事だ。抜かつたな、高田。

虹クリボー（効果モンスター）

星1

光属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 1000

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：相手モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスター1体を対象として発動できる。

このカードを手札から装備カード扱いとしてそのモンスターに装備する。

装備モンスターは攻撃できない。

（2）：このカードが墓地に存在する場合、相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

「どうした、デカイ口を叩いておきながらこの程度か？」

「ぐ……、ターンエンドだ！」

LP 12700

手札：0枚

フィールド

：ジェノサイド・オーガ（ATK：3000）

：幻魔の王城（フィールド魔法）、スピリットバリア（永続罫）

「俺のターン、ドロ……魔法カード『強欲な壺』を発動！これによりカードを2枚ドロする！」

「……どうやら運命は言っているらしいな、「そろそろ幕引きにしろ」と。」

このターンで決める事は不可能。だが、奴の攻め手を無力化し、弱らせる事は可能だ。虎などの猛獣だつて相手を噛み殺すのでは無く、首を噛み締めて窒息させ、そして獲物を食らう。獲物を食うにはまず弱らせる。それが前提だ。

そしてこれが、貴様を弱らせる一手！

「テメエの顔も見飽きた。いい加減に決め手を打たせて貰おうか、高田！」

「ああ、!? やれるモンならやってみろや! 『スピリットバリア』の効果で俺は戦闘ダメージを受けねえ! そして攻撃力3000の『ジェノサイド・オーガ』をどうやって潰すつもりだ!」

「こうする! 俺は魔法カード『リ・エクシーズ』を発動! このカードは自分の墓地のモンスター一組を素材にして、墓地のエクシーズモンスターを1体エクシーズ召喚する!」

リ・エクシーズ（アニメオリジナル・自己解釈効果）

#### 【通常魔法】

自分の墓地に存在するエクシーズモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターの正しい召喚素材となるモンスター一組を自分の墓地から選択して自分フィールド上に特殊召喚し、そのモンスター一組を素材として選択した墓地のエクシーズモンスターをエクシーズ召喚扱いで特殊召喚する。

「俺は墓地のレベル4『ガガガマジシャン』と『アステル・ドローン』でオーバーレイ!

2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築!」

☆4×☆4||★4

「エクシードズ召喚！ 再び現れる、『No. 39』！ 全ての原点、夢を運ぶ白き翼！  
『希望皇ホープ』！ 『アステル・ドローン』の効果で1枚ドロー！」  
『ホオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

No. 39 希望皇ホープ：ATK 2500

地上に描かれる赤い銀河の渦から再臨する希望の象徴。これこそ友情と熱意を重ねた力の最初と最後を飾った勇者の原点だ。

そして俺の攻め手はここからだ！

「そして俺は手札から、『RUM|ヌメロン・フォース』を発動！」

「またランクアップ・マジックだ?!？」

「ランク4の『希望皇ホープ』で、オーバーレイ・ネットワークを再構築！」

★4↓★5



「カオス・エクシード・チェンジ！ 真の絆で勝利を掴め！ 神羅万象を今こそ網羅し、重なる思いで世界を変えろ！ 顕現せよ、『CNo. 39』！ 『希望皇ホープレイ・ヴィクトリー』！」

CNo. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー：ATK 2800

白き希望は更なる姿へと変わる。外部に赤を基調とした鎧を纏い、額の青い宝玉が、輪廻の渦を思わせる螺旋を得た赤き瞳が強い輝きを放つ。

そう、これは俺が得られなかった光の化身。絆を信じず、誰も認めず、ただ独りである事を望んだ、あの時の俺とは真逆の存在だ。だから今、俺はこいつの力が心の底から欲しい。昔の俺では、ジョーカーに勝てない。そして恐らく、控えている残りの邪神と護衛も。

『ヴィクトリー』の力は完全じゃないけれど、完全に俺が近づく事はできると思う。故に俺はこの勝利の力を得て、更なる勝利の高みへと突き進まなければならぬ！

『ヌメロン・フォース』第二の効果！ この効果でランクアップに成功した時、フィールドに表側表示で存在する、ランクアップしたモンスター以外の全てのカード効果を無

効にする！

よつてフィールド魔法『幻魔の王城』、永続罨『スピリットバリア』、装備カード状態となつている『虹クリボー』、そしてお前のモンスター『ジェノサイド・オーガ』の効果は無効！　そして装備効果が無効になつた事で、『虹クリボー』は墓地へと送られる！」

「ダニイ?!　全ての効果を無効にするだとお?!」

青く清らかな光が『ヴィクトリー』が現れた銀河から溢れ出る。その光によつて場のカードは浄化されて行き、不気味な城は姿を消し、鬼の拘束も消える。

「だが攻撃力は俺様の『ジェノサイド・オーガ』の方が上、負けやしねえー」

確かに攻撃力2800の『ホープレイ・ヴィクトリー』では、攻撃力3000の『ジェノサイド・オーガ』には普通にやつたんじゃあ勝てない。だが勝利の栄光はその程度では潰せない！

「バトル！　行け、『ホープレイ・ヴィクトリー』！　『ジェノサイド・オーガ』をぶつた斬れえー！」

「ハッ、バカめ！　とうとう血迷つたか！」

「バカは貴様の方だ！　『ホープレイ・ヴィクトリー』のモンスター効果発動！　このモンスターが攻撃する時、相手プレイヤーは魔法も罨も発動できない！　そしてオーバーレイ・ユニットを1つ使う事で更なる効果を発動！　相手モンスターの効果を無効に



LP 12700↓9900

いくつもの破片となってバラバラになった『ジェノサイド・オーガ』は起爆し、その後ろにいた高田は派手な縦回転で山道を横切り、頂上方面へと転がって行った。

RUM―ヌメロン・フォース

### 【通常魔法】

自分フィールド上のエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターと同じ種族でランクが1つ高い「CNo.」と名のついたモンスター1体を、選択した自分のモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

その後、この効果で特殊召喚したモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在するカードの効果全て無効にする。

CNo. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク5

光属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 2500

レベル5モンスター×3

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

また、このカードが「希望皇ホープ」と名のついたモンスターをエクシーズ素材としている場合、以下の効果を得る。

●このカードが相手の表側表示モンスターに攻撃宣言した時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

ターン終了時まで、その相手モンスターの効果は無効化され、このカードの攻撃力はその相手モンスターの攻撃力分アップする。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

デスクに残りの手札をセットし、俺の足元に裏側表示のカードのソリッドヴィジョンが生まれる。これでまだ十分に戦える。

だが――

「が、あ……っ!」

これまでのダメージと爆風で黒焦げになって尚も立ち上がる高田。これはもう俺の

言葉や行動では止められそうに無い。

となると……。

(ポーラ、聞こえるか?)

(え、サー? どうしたの?)

念話のチャネリングを開き、ポーラに接続する。

このバカを戻すためには、とある人物の力が必要不可欠だ。

(今から言う人達をここに連れて来て欲しい。方法は問わん、何が何でも連れて来る事を最優先事項にしてくれ)

(……分かった)

俺の指定した名前を聞くと、ポーラは地面に凍った道を作り出し、靴の裏に氷の刃をつけて滑って去る。差し詰めインスタントのスケートというワケか。

LP 1

手札：0枚

フィールド

：CNO. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー (ATK：2800・ORU：2)

：伏せカード1枚

頼むぞ、ポーラ。俺にこいつの心に響かせる言葉は紡げない。出来るのはデカい声で喚き、動けなくなるまで叩きのめすだけ。クソ、不甲斐無えなあ……。転生者だ何だつて言っても、俺に出来る事なんてこうも高が知れている。

「俺様の……、ターン……！」 『ジェノサイド・ドロー』……！」

ぐぐぐ、とフラつく体を叩き起こしながら高田がカードを引く。もう『ジェノサイド・ドロー』を行うだけの体力も無いクセに……。このままじゃあいつの体が本格的に危険だ！

「『強欲な壺』を、発動……！」 『ジェノサイド・ドロー』……！」  
そして、『マジック・プランター』を、『スピリットバリア』を墓地に送って発動し……。もう2枚ドロー、する……！」 『ジェノサイド・ドロー』ッ！」

何が……。何がお前をそこまで勝利へと、青い制服へと繋ぎ止めようとしているんだ。一体オベリスクブルーに何の因果があつてお前はそこまで執着すると言うんだ、高田！  
「ぐ……、手札から魔法カード『ジェノサイド・リターン・ヴァリー』……。除外されている『ジェノサイド・グリム・リーパー』、『ジェノサイド・ベノムスナイパー』、『ジェノサイド・ポイズンウォーム』、『ジェノサイド・サイエンティスト』を墓地に戻す……。！  
そして手札1枚をデッキに戻し、デッキから『ジェノサイド』の名を持つ魔法カード

を手札に加えるっ！

そして魔法カード『ジェノサイド・フュージョン』を発動……！ 墓地から5体のジェノサイドモンスターを除外し……、エクストラデッキから、『ジェノサイド・オミナス・ドラゴン』を融合、召喚……！」

『ギオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

ATK：3500

青い三つ首の龍を呼び出す高田。恐ろしい程のその執念に、正直な話、寒気すら感じる。

この執着心を、俺は知っている。あれは負けたくない、負けて全てを失うと知っている奴が見せる、貪欲なまでの精神の根底から生まれる念だ。

それが何を求めているのかまでは分からない。だが恐らく彼はエリート意識や見下し根性とは違う何かを以てこの勝負強さを発揮している。そんな気がする。

ジェノサイド・リターン・ヴァリー（オリジナル）

【通常魔法】



全てのゲームから除外されている「ジェノサイド」と名のついたモンスターを墓地に戻す。

その後、手札を1枚デツキに戻す事でデツキから「ジェノサイド・リターン・ヴァリー」以外の「ジェノサイド」と名のついた魔法カードを1枚手札に加える事ができる。

ジェノサイド・フュージョン（オリジナル）

【通常魔法】

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「ジェノサイド」と名のついた融合モンスター1体を融合デツキから特殊召喚する。

（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

『ジェノサイド・オナミス・ドラゴン』のモンスター効果発動……！ このモンスターは1ターンに1度相手のモンスター1体を選択して、このターンその数値分の半分だけ攻撃力をアップし、更にそれが攻撃表示ならば破壊できる……！ 俺は『ホープレイ・ヴィクトリー』を、選択……！ スクリーン・アブソプション“ッ！”

「そうはさせるか！ 畏発動、『パニック・シャッフル』！ 俺のフィールド上に存在す

るエクシードズモンスターが相手の効果対象になった時、全ての攻撃表示モンスターをターンの終わりまで守備表示にする！そして互いの墓地の魔法・罠カードは全てデッキに戻る！」

ジェノサイド・オミナス・ドラゴン（融合・効果モンスター・オリジナル）

星10

闇／ドラゴン

ATK 3500 / DEF 2000

「ジェノサイド」と名のついたモンスター×5

1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

エンドフェイズまで選択したモンスターの攻撃力の攻撃力の半分の数値をエンドフェイズまでこのカードの攻撃力に加える。

この効果で選択したモンスターが攻撃表示の時、そのモンスターを破壊できる。

この効果は相手ターンでも発動できる。

パニック・シャッフル（アニメオリジナル）

## 【通常罫】

自分フィールド上のエクシーズモンスター1体が相手のカードの効果の対象になった時に発動できる。

フィールド上に攻撃表示で存在する全てのモンスターの表示形式を守備表示にする。

その後、お互いのプレイヤーはこのターンのエンドフェイズ時までモンスターの表示形式を変更できない。

お互いのプレイヤーは墓地の魔法・罫カードを全て持ち主のデッキに戻す。

ジェノサイド・オミナス・ドラゴン ATK : 3500 ↓ DEF : 2000

C No. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー ATK : 2800 ↓ DEF : 2500

これでお互いの墓地の魔法・罫カードは全てデッキに戻った。そして守備表示となった事で、攻撃も封じ効果破壊の条件も満たなくなつた。これで何とかなるだろう。

だが寧ろ問題は、高田の体だ。今だつてかなり息が上がっているし、脂汗を大量に掻いている。

「ゼエ……、ゼエ……。俺は、永続魔法……、『コールカード』を、発動……」

『コールカード』……。確かフィールドに留まったターン数によって、デッキが墓地よりカードを手札に呼び込めるカードだったはず……。

コールカード（オリジナル）

【永続魔法】

このカードが存在する限り、お互いのプレイヤーのライフポイントは回復しない。フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送って発動する。経過した自分のスタンバイフェイズの数に応じて以下の効果を発動する。

- 1回：自分の墓地のカードを1枚選択してデッキに戻し、1枚ドロウする。
- 2回：自分の墓地のカードを1枚選択して手札に加える。
- 3回：デッキからカードを1枚選択して手札に加える。
- 4回以上：デッキと墓地からカードを1枚選択して手札に加える。

「はあ……、はあ……、ターンエンドだぜえっ！」

LP 9900

手札：0枚

フィールド

：ジエノサイド・オミナス・ドラゴン（DEF 2000）

：コールカード（永続魔法）、幻魔の王城（フィールド魔法）

「俺のターン、『強欲な壺』を発動、2枚ドロウする！　そしてエクストラデッキの『N O. 99 希望皇龍ホープドラグリーン』の効果発動！」

「エクストラデッキから、モンスター効果だと……!?!」

「このモンスターは手札のリンクアップ・マジック1枚をコストに、俺の場の『ホープ』系列モンスターを素材にエクシーズ召喚できる！　手札から『RUM―アージエント・カオス・フォース』をコストに、『ホープレイ・ヴィクトリー』、新たな進化を遂げろ！」

★5↓★10

「砕け散りし光の記憶。今、ひとつの星となりて、天命を貫く霹靂となれ！　現れよ『N O. 99』！　これがナンバーズの終焉にして頂点！　『希望皇龍ホープドラグリーン』！」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

ATK : 4000

「ここで墓地の『アージエント・カオス・フォース』の効果を発動！俺がランク5以上のエクシーズモンスターを特殊召喚した時、このカードを手札に1度だけ戻す事ができる！」

RUM—アージエント・カオス・フォース

## 【通常魔法】

自分フィールド上のランク5以上のエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターよりランクが1つ高い「CNo.」または「CX」と名のついたモンスター1体を、選択した自分のモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

また、このカードが墓地に存在し、自分フィールド上にランク5以上のエクシーズモンスターが特殊召喚された時、墓地のこのカードを手札に加える事ができる。

「RUM—アージエント・カオス・フォース」のこの効果はデュエル中に1度しか使用で

きない。

「更に『ホープドラグーン』の効果発動！ 俺の墓地からナンバーズ1体を効果を無効にして守備表示で特殊召喚できる！ 甦れ、『希望皇ホープレイ』！」

『ヌウン！』

DEF：2000

「もう一枚！ 魔法カード『ライズ・アンロウ・モーメント』を発動！ エクシーズモンスターを特殊召喚したターン、手札のランクアップ・マジックを相手に見せて発動！ デッキから新しいランクアップ・マジックを手札に加え、召喚したエクシーズモンスターはこのターンのみエクシーズモンスターとして扱わない！ 俺は『RUMーアストラル・フォース』をサーチする！」

No. 99 希望皇龍ホープドラグーン（エクシーズ・効果モンスター）

ランク10

光属性／ドラゴン族

ATK 4000 / DEF 2000  
 レベル10モンスター×3

このカードは手札の「RUM」魔法カード1枚を捨て、自分フィールドの「希望皇ホープ」モンスターの上にこのカードを重ねてX召喚する事もできる。

(1)：iターンに1度、自分の墓地の「No.」モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

(2)：このカードを対象とするモンスターの効果が発動した時、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

ライズ・アンロウ・モーメント（オリジナル）

### 【通常魔法】

(1)：Xモンスターを特殊召喚したターン、そのモンスターを対象に手札の「RUM」を1枚見せて発動できる。

デッキから見せたカードとは名前の異なる「RUM」を手札に加える。

このターン対象のモンスターはXモンスターとしては扱わず、見せた「RUM」も発





「ンだとお!？」

No. 39 希望皇ビヨンド・ザ・ホープ：ATK 3000  
 ジェノサイド・オミナス・ドラゴン：ATK 3500↓0

一瞬にして並び、そびえ立つ力強い戦士達。片や『ホープ』達よりも大きな体軀で金刃を携えた白亜の巨人。片やそれより更に巨大な、金に輝く皮膜の翼を持った同じく白亜の龍。

この時代や邪神の護衛は、モンスターより魔法・罫の効果を活かしたデツキが多い。だから『未来龍皇』とかは入れてない。

つまりこれこそが、俺の今出せる最強の陣形だ！

RUMーアストラル・フォース

### 【通常魔法】

自分フィールド上のランクが一番高いエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターと同じ種族・属性でランクが2つ高いモンスター1体を、選択し

た自分のモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

また、このカードが墓地に存在する場合、自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに、墓地のこのカードを手札に加える事ができる。

この効果を発動するターン、自分は「RUMIアストラル・フォース」の効果以外でモンスターを特殊召喚できない。

No. 39 希望皇ビヨンド・ザ・ホープ（エクシーズ・効果モンスター）  
ランク6

光属性／戦士族

ATK 3000 / DEF 2500

レベル6モンスター×2

このカードはルール上、「希望皇ホープ」と名のついたカードとしても扱う。

このカードがエクシーズ召喚に成功した時、相手フィールド上の全てのモンスターの攻撃力は0になる。

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

自分フィールド上のエクシーズモンスター1体を選択して除外し、自分の墓地の「希

望皇「ホープ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

その後、自分は1250ライフポイント回復する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「こ、攻撃力3000と4000だと……!?」

「バトル! 『ビヨンド』、そのドラゴンを切り裂けえ!」  
「ホープ剣・ビヨンド・スラッ

シュ!」

「エリートをナメるなあ! 『ジエノサイド・オミナス・ドラゴン』の効果発動っ! 互いのターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力を吸収し、そいつが攻撃表示ならば破壊できる! 消えろお、『ホープドラゴン』ッ! これで攻撃力は4000、返り討ちにしてメエは死ぬ!」

「この瞬間、『ホープドラゴン』の効果発動! このモンスターがモンスター効果の対象となった時、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、その発動を無効にし破壊する!」

希望の権化たる龍よ、その絶対なる存在の力にて、己が身に触れんとする愚者に裁きを!」  
「ドラグリーン・ハウリング!」

青い三つ首の龍がその両目から光線を発し、白亜の龍を射抜かんと唸りをあげる。そ

の鈍い輝きは夜の闇という事も相まって邪悪の二文字を連想させた。しかし『ホープドラグーン』は自身の周囲に白い雷を撒き散らすように旋風を起こすと、それらを束ねた雷撃で『ジェノサイド・オミナス・ドラゴン』の光線を遮る。そして薄暗く燃える炎を吐いて相手の龍を貫き、爆破して散らしてしまった。

「なん、だと……!?!」

「攻めの手を削るつもりが、逆に壁を失うとは逆効果だったな! 『ビヨンド』、今度はダイレクトアタックだあ!」 // ホープ剣・ビヨンド・スラッシュ!」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおっ!」

LP 9900 ↓ 6900

両手に持った3枚刃を重ね、一本の光の大太刀に変え、高田を切り付ける。

「まだだ、まだ終わりじゃない!」

「続いて、『ホープドラグーン』でダイレクトアタック! // ホープバースト・ドラグーンフレア!」

「うがああああああああああああああああ!」



「！」

LP 2900↓100

二重に描かれるV字に斬られ、吹き飛び倒れる高田。鮮血が周囲に飛び散り、そのダメージの大きさを物語る。だが俺の心はそれを見ても哀れとは思わない。寧ろ昔の、より血を求めて殺し合いをしていた時の、あの昂揚感を抑えるので必死だった。

体が、どんどんヤバくなつていつているんだろう。本能で自分の命の終わりが近づいている事を察しているのかも知れない。フレイの薬で治したが、それでも戦いは止まない。あの薬に二度目は無い以上、次が俺の最期。だからこそ昔の好戦的な感覚を呼び起こし、戦いに怯む事を、戦って体が壊れる事に怯える事を拒んでいるんだ。

きっと俺は、血の中に生きる化物だから。殺し合えなければ、俺は生きる意味を見失うんだろう。

「さあ、殆ど勝負はついたぞ、高田。もうお前のライフは残り僅か、いい加減に諦めな」「ぐ、が……！ ぎっけん……！ このエリートが、俺様が、テメエなんざに、サレんだーなんざ……、ウゲボオツ!!」

ビシヤビシヤベジャツ！

「もうよせ、高田。今の吐いた血の量は危険だ。度重なる『ジエノサイド・ドロ』、俺から受けたダメージ、もう人間の体では限界ギリギリのダメージが溜まっている。これ以上続けければ、本当に命に係わるぞ！」

全ては命あつての物種だ。死んでしまつては何もできない。プライドもへつたくれも無い。

だが……。

「断るっ！ テメエに、何が分かる……！ 世の中にはなあ、命より重てえモンがあるんだよ！ ここで負けるくらいなら死んでもテメエに勝つて榮譽を残してやらあ！ テメエのクソ以下の安い命と一緒にすんな、この人間以下のカス野郎が！」

「ふ……、つぎけんなあ！」

高田の強情さに、何よりその言葉に俺はキレた。

「テメエこそいい加減にしろ！ 死んだ事も、誰かを目の前で失つた事も無いクセに偉そうな事をほざくんじゃねえ！ 死んだら何も残らねえんだよ！ 残つていても分からねえ！ 生き物は死んだら後に残るのは骨だけなんだよ！ 榮譽も誇りもすぐに消えて無くなる！ それが分からないんだつたら、1度死んで次の人生でやり直して来い！」

「っ！」



「『テメエに何が分かる』だあ？ 分かるワケねえよ、俺はテレパシーなんざ持つて無えんだ！ だから人は互いに分かり合おうとする！ 頑張つて分かり合つて、100%は無理でも99%分かつとうとするんだよ！ 何も話さないクセに浅いセリフを吐くな、クソガキが！ 俺はこれでターンエンド！ さあ、テメエのターンだ、榮譽つてモンを残してみろよ！」

LP 1

手札：1枚（『RUM—エージェント・カオス・フォース』）

フィールド

：CNO. 39 希望皇ホーププレイ・ヴィクトリー（ATK：2800・ORU：0）、  
No. 99 希望皇龍ホープドラグーン（ATK：4000・ORU：1）

：魔法・罨無し

「俺様の、ターン……！」

ターンが移り、ガタガタになった体を何とか起こして立ち上がる高田。しかしその手にはもう力が入っていない事は明白。右腕は全くと言って良い程上がらず、顔色も半ば青白いどころか土気色だ。



「高田、お前……」

最早、俺にかける言葉も止める術も無かった。

そのままあいつが黒い光を纏った右手でドローしようとした、その時。

「もうやめろ、高田！」

静寂な真宵の火山道、そこに一人の男の声が響き渡る。

そこにいたのは、金髪の、俺達と同年代のオベリスクブルーの学生。

「し、白石……!?!」

高田の親友、白石光一だった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 82 : 光と闇をその手に

LP 1

手札 : 1枚 (『RUM—アージェント・カオス・フォース』)

フィールド

: CN 0. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー (ATK : 2800・ORU : 0)、  
 No. 99 希望皇龍ホープドラグーン (ATK : 4000・ORU : 1)

: 魔法・罨無し

LP 100

手札 : 0枚

フィールド

: モンスター無し

: コールカード (永続魔法)、幻魔の王城 (フィールド魔法・効果無効)

## SIDE：黎

「もうやめろ、これ以上の戦いに意味など無い！」

火山への道で行われているデュエル、決着が目前となった段階で割り込んだのは、対戦相手の親友である白石光一だった。

染めたのは地毛なのかは知らない短めの金髪を携えたそいつの横には――

「……サー、言われた通り、連れて来た」

「こ、これは一体何事ナノーネ？」

「遊馬崎君、彼女に連れられて来てみたが、状況について説明をしてくれませんか」

俺の仲間『氷結界の舞姫』のポーラと、アカデミアの教師クロノス先生、そして校長の鮫島先生がいた。合計3人、俺の注文通りのメンツだ。

「どうもこうも無いですよ、先生方。高田が力欲しさに魂を売ってこの学園に攻撃したんです。現に」

ぬつ、と左手に持った『RUM―アージェント・カオス・フォース』のカードで道端に倒れているフィオを指す。

「彼女、神山フィオとその相棒フレイはあの野郎との戦いで傷つき倒れました。鮫島校長、貴方が参加してくれと願ったセブンスターズが行う闇のゲームによってね」

「……闇の、ゲーム」

「ええ。ダメージが実際に発生する、下手したら死にかねない危険なモノです。その証拠に」

今度は同じ手で高田を指す。

「俺の攻撃で高田の野郎はボロボロ、次の攻撃で奴は最悪死に至る」

「何（ですート）（だど）!?!」

「嘘じゃあ無いのは、この周囲を見てくれれば分かるでしょう」

そしてカードで周囲を指し示す。

ヴォルカのマグマ攻撃、『ジャンク・アタック』で発生したデブリの流星群、互いのモンスターとの衝突で起きた衝撃波 e t c .

それらは全て、周囲の地面を抉ったり焦がしたりといった形で痕跡を残している。最早『闇のゲームなど妄想だ』などという言葉で言い逃れできる状況では無い。

「鮫島校長、貴方が参加して欲しいと願った戦いです。その果てに人死に出る事くらい、考えなかったワケでもありませんよね？」

「ぬ、ぬう」

「そして高田、お前の策は全て尽きた。頼みの綱たるジェノサイド・ドロウもその体力じゃあ使えない。いや、普通のドロウすら最早怪しい。諦めろ、お前では俺には勝てな

「い

「う、ぐ……」

「結果は必然、テメエが何を譲れないのかは知らんが、所詮チンピラではこの程度だったというだけの話。テメエの実力も、信念も、格もな。ターンエンドだ」

LP 1

手札：1枚（『RUM—アージェント・カオス・フォース』）

フィールド

：CNo. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー（ATK：2800・ORU：0）、

No. 99 希望皇龍ホープドラグーン（ATK：4000・ORU：1）

：魔法・罫無し

「俺の……、ター……」

フラフラな手と足で何とかドローを試みる高田。だがすぐに膝をつき、空っぽの両手を地面について崩れ落ちた。脂汗は相変わらず酷く、すぐにでも休息と治療が必須なのは万人の目に明々白々、火を見るより明らか。

されども高田は、生まれたての小鹿よりもガタガタと震える手足で必死にデュエル続



行の意思を見せる。

「ま、ただ……！ まだ俺のライフは……、残って、いる……！」

「だが墓地で使えるカードは0、フィールド魔法は無効、モンスターも0、手札も0、『コールカード』で2枚に増えて、どうするんだ？ まさか俺が効果ダメージ対策を怠っているなんて無駄な期待はしてねえよな？」

「それ、でも……、俺は……、ブルーに、いてえんだよおおおおおつ！」

夜中の火山に響く、たった一人の、孤独な少年の咆哮。もしかしたら今頃火口の中でデュエルしている十代達にも聞こえたかも知れない。

こいつの魂を青に縛り付けているのが何か、その正体は恐らく……。

「もうよせ、もう闘うな、高田！ これ以上はお前の体が危険だ！」

今、俺の後ろで叫び声をあげて奴を静止させようとしている、白石だ。

「だ、まれ白石……！ 裏切り者の、テメエに……、俺の何が、分かる……っ！」

「分かる、分かるさ、分かるとも！ 私も同じ、お前と共に中等部からアカデミアに来て青くなった者だ。赤や黄色に落ちるのは苦しいだろう！ だがそれがどうした！ ならばあの万丈目の様に這い上がって……」

「違い！ 俺は、そんな事を……、ゲブツ！」

ビジャビジャッ！

黒く染まった青から落ちる、俺の服と同じ色の鮮やかな血液。奴の肉体は、最早完全に限界を迎えている。

正直、奴が生きようが死のうが俺には興味は無い。そこまで親しい間柄でも無く、そして何より奴はフィオとフレイに手をかけた。

俺は大切な人に手をかける奴は全て敵だと思っっている。敵は、例え命乞いしようが殺す。生き残ればそいつの運だが、だからと言って容赦も見逃しもしない。

怨敵必殺。

見敵殲滅。

我敵全屠。

それが俺のやり方、そこに慈悲は無い。

……たった一つの例外を除いて。

「ならば何故……!」

「俺はよう、白石……。俺は嫌われ者だ……。こうしてやっていて、初めて気付いた……。今は、青にお前がいる……。でもよ……。俺は、お前以外に友達も、仲間もいねえんだ……。座水の奴らは単につるんでるだけ……。ゲボツ! ブルーじゃなくなったら、あいつらは簡単に手エ……。切るだろ……。」

イエローやレッドになっちまったら、俺はどうなる……。レアカードも、ブルーの栄

光も、お前との絆も……、全部無くなっちまう……。

いや、この際カードや栄光はどうでも良い……。俺は、お前との歴史を否定されたく、ねえんだよ白石……」

「た、かだ……」

「俺は……、お前の親友だと……、思ってた……」

そこまで言の葉を紡いで、高田から聞こえる音はゼロになった。

もう喋るだけの力も無いのか、気絶したのか、はたまた死んでしまったのか。

朦朧とする意識の中で吐露した真意、プライドを削いで日の目を見た奴の弱々しい本音。

成り行きを見守っていた俺達の視界の中で、白石が地毛らしい金髪を夜の微風に靡かせながら、高田の隣で跪いた。

「高田、莫迦だお前は……」

「……………」

「そんな程度で、私がお前を見限るとでも思ったのか」

白石は懐から紙を一枚取り出すと、持っていたペンで何かをサラサラと書き、それを鯨島校長に手渡した。

「校長先生、高田が降格した際にはこれの受理を」

「これは……」

「降格届けです」

降格届け……、それがもし休学届けや退学届けと同様の物であるならば、白石の意思は……。

「自分は、高田の親友です。属性デツキ六人衆よりも大切な存在、もし彼がブルーでいられなくなる事で私の友達で無くなるなら、私もブルーで無くなります。」

私にとって、高田という男は、階級よりも大切な存在なのです」

ペコリ、と頭を下げる白石。

地位よりも友情を取るその姿は、もしかしたらブルーの中では最も異端で、けれども人として最も輝かしい存在なのかも知れなかった。

そして白石は高田を肩で担ぎ上げながら俺に問う。

「遊馬崎、デュエルを取りやめる事はできるか？ これ以上は高田がもう限界なんだ」

「……そいつが仕掛けて来たゲームだ、そいつがぶつ倒れた今、このゲームは続行に難あ

りと認識されるだろう。すぐにこの闇の霧も晴れるだろうよ」

その言葉と共に、俺達を中心に渦巻く嫌な気配の黒い霧が、少しずつ消えて行く。

元々闇のゲームとは種類が多々あれども、その在り方は凡そにして『相手を地獄へ叩き落とすため』か『何某かへの生贄を捧げるための儀式』として利用される。今回は前者だ。故にホストたる高田の意識が途切れた今、もうこのゲームは成立しないのだから。

「鮫島校長、クロノス先生」

「はい？」「ナノーネ？」

「これが、階級制度の生み出した結果です」

俺の言葉に、2人は息を呑んだ。

今回はたまたま高田は助かった。だがしかし次もそうなるかと聞かれれば、答えは絶対に『NO』だ。

この一件は階級制度によって生まれた歪んだ人の心が源。『友を失う』という事がトリガーとなつて生まれた悲劇。犠牲者はごくごく僅か。されど無視して良いものでも無く、或いは死者が出ていたかも知れないのだ。教育者として、このデュエルアカデミアという法人団体の現地責任者として、何より子供を正しい方向へと導かなくてはならない大人として、責任は免れない。

「この件は海馬さんに報告させて頂きます。『オベリススクブルーの生徒一名が階級制度を苦に刃傷沙汰を起こした』とね。校長、そしてブルーの寮監たるお二人の責任は必ずです」

「そ、それは……」

「勘弁して欲しい？ 駄目です、責任逃れは大人としてどうなんです？」

「な、なんとかならないノーネ……？」

「弁護はしますが……、減俸で済めば良いですね」

正直、この一件、隠蔽させるつもりは無い。高田はどうでも良いが、フィオとフレイが負傷したのだ。それを知らぬ存せぬで通させるなら、俺の怒りは爆発しかねないだろう。

階級制度が諸悪の根源とは言わない。だが負の側面を上立つ教師が対処しないのなら、それは怠慢であり彼らの非だ。

「……そう、ですね。これは我々の監督不届き、責任は私達にあります」

「階級制度は確かに向上心を生み出します。しかし行き過ぎればもうそれは差別しか生みません。現状のように、ね」

「ナノーネ……」

自分の責任を2人が実感しつつ、高田を背負った白石を迎え入れようとした、その時。

『全く、使えん男だとは思っていたが、まさかここまでとはな！』

突如として地の底から、まるで背骨の中を直接這うように響く声。

この声は……！

「ラーズ、何の用だ……！ もう決着はついた、テメエの出る幕はもう無いぞ！」

先刻、高田に怪しげな力を渡した男、ラーズだ。

『フン、そうはいかない』

その言葉と共に黒い塵が俺達の前方に集い、同時に闇のゲームの根幹たる黒い霧も復

活して行く。塵はやがて黒いスーツへと姿を変え、筋骨隆々の男をその中へと作り出す。

スポーツ刈りのように短い髪、彫りの深い顔立ち、怒りを示す眼。最後の護衛、ラーズがその姿を露わにした。

「このデュエル、我が引き継がせてもらおうか」

ラーズ：LP 100

引き継ぎ……、チツ、ホストの権利が奴に移ってデュエルが続行されるわけか……!!

デュエルの引き継ぎ自体は俺がさっきやった事だから否定も物言いも出来ねえ!

「さて、貴様は既にターンエンドだったな?」

「クツ……!!」

「では行くぞ我のターン、『ジェノサイド・ドロー』! 魔法カード『邪天使の施し』を発動! 互いのプレイヤーはカードを3枚ドロし、貴様だけ2枚墓地に送る! トリプル『ジェノサイド・ドロー』!」

「ここで手札補強か……! 墓地へと呑み込まれて行く『RUM—アージエント・カオス・フォース』ともう1枚のカードを視界の端に収めながら、俺は歯噛みした。







「攻撃力、4600……!」

使えなくなったフィールド魔法を即座に切り捨て、新しいモンスターに書き換えるとは。

しかもあの三つ首の黒龍、攻撃力が高すぎる。素の打点で勝てるモンスターは俺のデッキにはいないぞ……。

「バトル! 『ジェノサイド・トライヘッド・ドラゴン』で『ホープレイ・ヴィクトリー』を攻撃!

この瞬間、オーバーレイ・ユニットを1つ消費し効果発動! 相手モンスターの効果を無効にし、攻撃力を0とする! そしてこの効果を受けたモンスターの攻撃力は元に戻らない! 更にこのカードは貴様のカード効果を受け付けない!」

「何?!」

「これで死ぬ! ムラース・トウキープ・フロムキリング!」

「させるか、俺は墓地の『超電磁タートル』の効果発動! このカードを墓地から除外し、バトルフェイズを終了させる!」

ジェノサイド・トライヘッド・ドラゴン (エクシーズ・効果モンスター) (オリジナル)

ランク10

闇属性／ドラゴン族

ATK 4600 / DEF 3900

レベル10モンスター×2

(1)：このカードは相手の効果を受けず、戦闘によって発生する自分へのダメージは0となる。

(2)：このカードの攻撃宣言時、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。攻撃対象となった相手モンスターの効果は無効となり、攻撃力は0となる。

超電磁タートル（効果モンスター）

星4

光属性／機械族

ATK 0 / DEF 1800

相手ターンのバトルフェイズ時に墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

そのバトルフェイズを終了する。

「超電磁タートル」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

ジエノサイド・トライヘッド・ドラゴン：ORU 2↓1  
 CNo. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー：ATK 2800↓0

ドラゴンの三つ口から巨大なビームが放たれ、俺のモンスターを狙う。咄嗟に電磁バリアを張ってこれを何とか攻撃は凌いだが……、『超電磁タートル』の効果は2度は使えない。

このままじゃあギリ貧で負けちまう。ハンディキャップデュエルを勝手に乗っ取られて、まさに『Laugh to keep from crying』だ。

「フン、その場凌ぎだな。我はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

ラース：LP 100

手札：1枚

フィールド

：ジエノサイド・トライヘッド・ドラゴン（ATK 4600・ORU：1）  
 ：伏せカード2枚

「俺の、ターン！」

……よし、来てくれたか！

グズグズしてると押し負ける、行くぜ！

【推奨BGM：柳の下のデュラハン】

「俺は『ホープドラグーン』の効果発動！ 復活せよ、『ヴォルカザウルス』！」

No. 61 ヴォルカザウルス：DEF 1000

「魔法カード『エクシーズ・トレジャー』を発動！ フィールドのエクシーズモンスターは今4体！ よって俺は、カードを4枚ドロウする！」

この4枚に賭ける。残ったライフは100、奴の盤面が整う前に潰す！

「手札から『アバンドン・バーン』を発動！ 自分フィールドのエクシーズモンスターを1体選んで墓地へ送り、その攻撃力分のダメージを相手に与え、フィールドのカードを1枚破壊する！ 俺は『ホープレイ・ヴィクトリー』を墓地に送り、お前の伏せカードを破壊しつつ、2800のダメージをテメエに叩き込む！ これで終わりだ！」

「温いわ！ カウンター罠、発動！ 『ジエノサイド・ミラーシールド』！ 効果ダメージの発生を無効にして破壊！ 更に貴様のモンスター全てはその攻守を0とし、我がジエノサイドモンスター1体の攻撃力をその数値分だけ上げる！」

「何!？」

アバンドン・バーン（オリジナル）

【通常魔法】

(1) : 自分フィールドに表側表示で存在するXモンスター1体を墓地に送って発動する。

相手にそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与え、フィールドのカードを1枚破壊する。

ジエノサイド・ミラーシールド（オリジナル）

【カウンター罠】

(1) : 発生した効果ダメージを無効する。

このカードの効果解決処理時、自分フィールドに「ジエノサイド」モンスターが存在する場合、全ての相手モンスターの攻撃力と守備力は0となり、その攻撃力の合計値分

だけ自分の「ジェノサイド」モンスター1体の攻撃力をアップさせる。

No. 99 希望皇龍ホープドラグーン：ATK 4000↓0

No. 61 ヴォルカザウルス：DEF 1000↓0

ジェノサイド・トライヘッド・ドラゴン：ATK 4600↓11100

「こ、攻撃力11100ナノーネ!？」

「……サー、頑張つて……!」

閃光となつて突進する『ヴィクトリー』。しかしその勢いは瞬時に鏡の盾に吸収されてしまった。

おまけに攻撃力アップに利用されるというおまけつき。だが……。

「大丈夫だ、計算の範囲内さ」

そう、目的はこつちだ!

「俺は『スパイラル・エクシード・アセンション』を発動! 自分の墓地とフィールドの同じリンクのエクシードズモンスター2体を素材とし、墓地の同じリンクのエクシードズモンスターをエクシードズ召喚する! 俺は墓地の『ホープレイV』とフィールドの『ヴォルカザウルス』でオーバーレイ!」



★5×★5Ⅱ★5

「エクシードズ召喚！ 万象を網羅し、再び勝利を掴め！ 『C N o . 3 9 希望皇ホープ  
レイ・ヴィクトリー』！」  
「チイツ！ 狙いはそつちか！」

C N o . 3 9 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー：A T K 2 8 0 0

スパイラル・エクシード・アセンション（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：自分の墓地とフィールドの同じランクのXモンスター2体を選択して発動する。  
選択した2体のモンスターを素材として、墓地の同じランクのXモンスター1体をX  
召喚扱いとして特殊召喚する。

再度姿を現す勝利の希望。こつちもライフーを守るためにいい加減に精神を消耗している。長期戦になればなる程、その戦いは不利へと傾く。

もう余裕は無いに等しい。このまま片を付けさせてもらおう！

「今度こそ最後だ、ラーズ！ 行け、『ヴィクトリー』！ 『ジェノサイド・トライヘッド・ドラゴン』を攻撃！ この瞬間、モンスター効果発動！ お前のモンスターの効果は無効にならなくても、魔法・罫は発動できず、攻撃力もアップする！ ヴィクトリー・チャージッ！」

「だが『トライヘッド・ドラゴン』とのバトルでは、我はダメージを受けぬ！」  
「それでも、破壊はさせて貰おうか！」

C N O . 3 9 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー：O R U 2 ↓ 1 / A T K 2 8 0

0 ↓ 1 3 9 0 0

『ホアアアアアアアアアアアッ！』

『ギャオオオオオオオオオオオッ！』

クツッ、上手く行ったと思っただがな……！

簡単には仕留められないか……！

「『ホープドラゴン』を守備表示に変更」

No. 99 希望皇龍ホープドラグーン : ATK 0 ↓ DEF 0

「俺はカードを3枚伏せて、ターンエンド！ 『ヴィクトリー』の攻撃力は元に戻る！」

CNo. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー : ATK 10200 ↓ 2800

黎 : LP 1

手札 : 2枚

フィールド

: No. 99 希望皇龍ホープドラグーン (DEF : 0・ORU : 1)、CNo. 39  
希望皇ホープレイ・ヴィクトリー (ATK 2800・ORU : 1)

: 伏せカード3枚

「中々やるな、“騎士”の魂」

「……」

「だが、所詮はここまでだ！ 貴様のターンの終わりに畏れ発動、『ジエノサイド・エクシズ殲滅の合星』！ このカードは自分のエクシズモンスターの破壊されたターンの終わりに発動できる。貴

様の場のエクシードズモンスター2体を召喚素材に、破壊されたモンスターよりランクが1つ上のエクシードズモンスターをエクシードズ召喚する！」

「何!?! 俺のモンスターを召喚素材にするだとう!?!」

殲滅の合星（オリジナル）

【通常罫】

このカードは自分フィールド上にモンスターが存在せず、自分のXモンスターが相手によって破壊されたターンの終了時にのみ発動できる。

(1)：相手フィールドに存在するXモンスター2体を対象として発動する。

その2体のモンスターをX素材として、破壊されたXモンスターよりランクが1つ高い「ジェノサイド」Xモンスターを1体、X召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

「我は、貴様の『ホープレイ・ヴィクトリー』と『ホープドラゴン』で、オーバーレイ  
!」

★5×★10〓★10+1〓★11



「……しかも、こんなナンバーズ、見た事無い！」

「107を超えるナンバーズ……！」

順に鮫島校長、白石、ポウラ、俺。

その姿、正しく聖書に出て来る悪魔そのもの。暗い赤で彩られた大鎌に、頭には山羊の頭蓋骨。黒いマントを羽織り、首には人の頭蓋骨で作られたネックレス。山羊の骨で顔は下半分しか見えないが、そのからは鋭い八重歯と称するには余りにも長い牙が口の端から、そして瞳孔からは赤くおどろおどろしい眼光が覗いていた。

だがその気配は余りにも異質。俺は邪神の気配を、背筋に流れる泥と表現するが、このモンスターは霧囲気もまたそれだ。

ナンバーズ、いや、数字を冠する事ですら鳥澁がましい、そんな存在……。異質の中の、異質……！

「我のターン、『ジェノサイド・ドロ』！ 消えろ、小僧！ 『モールトウース・ルキフェル』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手の場のカードを全て破壊する！ 更にこの効果に相手はチェーン発動できず、破壊されたカードの効果は無効となつて発動できなくなる！ 『ジェノサイド・ブレイズダウン』！」

「何だと?!」

No. 666 ジェノサイド・スカル モールトウース・ルキフェル（エクシーズモンスター・効果モンスター）（オリジナル）

ランキー

闇属性／悪魔族

ATK 4800 / DEF 4900

レベル11モンスター×2

相手プレイヤーはこのカードの特殊召喚、効果の発動に対し、カード効果を発動できない。

（1）：このカードのX素材を1つ取り除いて発動する。相手フィールド上のカードを全て破壊する。この効果で破壊されたカードの効果は無効となる。

（2）：このカードがフィールドに表側表示で存在する限り、相手プレイヤーは墓地のカードを除外できない。

振るわれる、巨木のように太く、それ以上の長い地獄の大鎌。それに伴って闇色の炎が俺の伏せたカード『リビングデッドの呼び声』、『逆さ眼鏡』、『神の宣告』を焼き尽くした。

これが、モールトウース・ルキフェル殲滅の悪魔の力か……！

「これで貴様を守る者はいなくなつた！ 『モールトウース・ルキフェル』でダイレクトアタックだ！ 今度こそ死ねえ！」

「化物をナメるなあつ！ 墓地の『虹クリボー』の効果発動！ ダイレクトアタックが宣言された時、このカードを守備表示で復活させる事ができる！」

「何!?!」

『クリクリ〜』

DEF：100

「ならばその雑魚を消し去ってくれるわあ！」

俺のディスクの墓地が光を放ち、青いボディに虹色に輝く角を持った球体モンスターが現れる。

『虹クリボー』は振り下ろされた鎌を七色に輝く障壁で防ぎきると、その姿を消した。

「助かつたぜ、『虹クリボー』！」

「ひ、ヒヤヒヤしたぞ、今のは……」

だが、この効果を使用すれば『虹クリボー』は除外される。

これで防御の手段をまた一つ失つた。



「フン、果たしてそれは天佑てんゆうか？ それとも死への更なる一歩か？」

「ハッ、テメエの破滅への一手に決まっているだろ！」

「ならば我と、この『モールトウース・ルキフェル』に勝ってみろ。カードを2枚伏せてターンエンド！」

ラース：LP 100

手札：0枚

フィールド

：No. 666 ジエノサイド・スカル モールトウース・ルキフェル（ATK：4

800・ORU：1）

：伏せカード2枚

「俺のタアーンツ！」

「諦めろ、どうやって我に勝つと言うのだ？」

「まだだ、まだ負けてなんかいない。」

「デツキは俺の信念に、俺の思いに、俺の心に応えてくれている！ なら俺が膝を折つてどうする！」

「俺のドロートしたカードは……、『RUM―七皇の剣』！」

「ほう、ここで新たなリンクアップ・マジックか。だが貴様の場にモンスターは存在しない！」

「不要だ！ 『RUM―七皇の剣』、発動！ このカードは、墓地かエクストラデッキから、101から107のナンバリングを持つナンバーズ、即ちオーバーハンドレッド・ナンバーズ1体呼び出し、カオス化させる！」

「何!? 墓地かエクストラデッキのモンスターをカオス化だと!？」

## RUM―七皇の剣

### 【通常魔法】

自分のドローフレイズ時に通常のドロートをしたこのカードを公開し続ける事で、そのターンのメインフェイズ1の開始時に発動できる。

「CNo.」以外の「No. 101」〜「No. 107」のいずれかをカード名に含むモンスター1体を、自分のエクストラデッキ・墓地から特殊召喚し、そのモンスターと同じ「No.」の数字を持つ「CNo.」と名のついたモンスターをその特殊召喚したモンスターの上に重ねてエクシード召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

「RUM―七皇の剣」の効果はデュエル中に1度しか適用できない。

「エクストラデツキから現れる、『No. 101』！ 満たされぬ魂を乗せた白き箱舟！  
 『S・H・Ark Knight』！」  
サイレント オナース アーク ナイト

俺の右手にあるカードから紫の光が天へと飛び出て、空中に101の水色の数字を浮かび上がらせる。

闇を切り裂くように2つの比翼がついた大きな舟が、赤いコアを持って姿を露わにした。

No. 101 S・H・Ark Knight : ATK 2100

「そしてランク4の『Ark Knight』で、オーバーレイ・ネットワークを再構築！ カオス・エクシーズ・チェンジ！」

★4↓★5

「満たされぬ魂の守護者よ、暗黒の騎士となりて偽りの光を貫き砕け！ 現れる、『CN

o. 101』！ 『S・H・Dark Knight』！」

箱舟の赤いコアから飛び出す、黒い装束の騎士。箱舟から渡されたエネルギーが腕を、足を、そして赤い豪槍を生み出し、右足のスパイクに1001の数字が光った。

これが俺のデッキの、最後の切り札だ！

C No. 101 S・H・Dark Knight : ATK 2800

No. 101 S・H・Ark Knight (エクシーズ・効果モンスター)  
 ランク4

水属性／水族

ATK 2100 / DEF 1000

レベル4モンスター×2

このカードのエクシーズ素材を2つ取り除き、相手フィールド上に表側攻撃表示で存在する特殊召喚されたモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターをこのカードの下に重ねてエクシーズ素材とする。

「No. 101 S・H・Ark Knight」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

また、フィールド上のこのカードが破壊される場合、代わりにこのカードのエクシーズ

ズ素材を1つ取り除く事ができる。

C No. 101 S・H・Dark Knight (エクシース・効果モンスター)  
 ランク5

水属性/水族

ATK 2800 / DEF 1500

レベル5モンスター×3

1ターンの1度、相手フィールド上の特殊召喚されたモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターをこのカードの下に重ねてエクシース素材とする。

また、エクシース素材を持っているこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に「No. 101 S・H・Ark Knight」が存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚できる。

その後、自分はこのカードの元々の攻撃力分のライフを回復する。

この効果で特殊召喚したこのカードはこのターン攻撃できない。

「ほう、そんなランクアップもあるのか……。だが攻撃力は2800、我が『モール

トウース・ルキフェル』には遠く及ばん！」

「デュエルにおいて、必ずしも相手に及ばせるのは攻撃力である必要は無い！ 『Dark Knight』の効果発動！ 1ターンに1度、相手ワールドの特殊召喚されたモンスター1体を吸収し、このカードのカオス・オーバーレイ・ユニットにする！  
 ダーク・ソウル・ローバー！」

「何!? 破壊も除外もバウンスも墓地送りもせず、ただオーバーレイ・ユニットとして吸収するだ?!」

黒き騎士の槍から放たれる赤い閃光が悪魔を射抜くと、その姿を金色に縁取った四芒星の菱形とも取れる星形の結晶へと変換した。

これで奴のモンスターはいなくなった。今度こそ……!!

「バトル！ 今度こそトドメだ！ 『Dark Knight』で、ダイレクトアタック！  
 トリリオン・フアントム・スピア！」

「そうはさせぬ！ カウンター罠、発動！ 『白骨の享樂』<sup>スケルトンバンクエツト</sup>！ 相手プレイヤーがダイレクトアタックを宣言した時、その攻撃モンスターをゲームから除外！ そして攻撃力の10倍の数値分ライフを回復する！」

「除外だ?!」

くつ、破壊じゃないから『Dark Knight』の復活効果も回復効果も使えな

い!?

白骨の享楽(オリジナル)

【カウンター罠】

(1) : 相手の直接攻撃宣言時に発動できる。

攻撃モンスターをゲームから除外し、その攻撃力の10倍の数値分だけライフを回復する。

リリース : LP 1000 ↓ 28100

「ククカカ、癒える癒える……。感謝するぞ、 “騎士” の魂? !」

「この、野郎……! メインフェイズ2で『召喚僧サモン・プリースト』を召喚! このモンスターは召喚と同時に守備表示になる!」

ATK 800 ↓ DEF 1600

「モンスター効果発動! 俺の手札から魔法カードを1枚墓地へ送り、デッキからレベ

ル4のモンスターを特殊召喚できる！ 出る、『アステル・ドローン』！  
『ハイツ！』

ATK 1600

ディスクが『ジャンク・アタック』を飲み込みつつ、デツキから星を描く魔法使いを呼び出す。

兎に角、少しでも戦況を引き寄せないと、マズい！

「レベル4の『アステル・ドローン』と『サモン・プリースト』でオーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4×☆4＝★4

「エクシーズ召喚！ 撃ち抜け、『ガガガガンマン』！」  
『ガガッ！』

ガガガガンマン：DEF 2400



膝立ちで銃を構えるカウボーイ。この場では苦し紛れにもならないが……！  
 『アステル・ドローン』の効果でカードを1枚ドロ！ 更に『ガガガガンマン』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使って、お前に800ポイントのダメージを与える！」

ガガガガンマン：ORU 2↓1

ガガガガンマン（エクシーズ・効果モンスター）

ランク4

地属性／戦士族

ATK 1500 / DEF 2400

レベル4モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

このカードの表示形式によって以下の効果を適用する。

●攻撃表示：このターン、このカードが相手モンスターを攻撃するダメージステップの間、このカードの攻撃力は1000ポイントアップし、その相手モンスターの攻撃力

は5000ポイントダウンする。

● 守備表示：相手ライフに800ポイントダメージを与える。

ガウン！ダウン！ と響く銃声。しかし体に穴が開く様子も無く、ラーズは涼しい顔をしている。

「フン、効かんな？」

ラーズ：LP 28100↓27300

「まだだ！ 魔法カード『埋葬呪文の宝札』！ 墓地から『スパイラル・エクシード・アセンション』、『七皇の剣』、『ジャンク・アタック』を除外し、2枚ドロウする！

そして『RUMーリミテッド・バリアンズ・フォース』を発動！ ランク4の『ガガガンマン』で、カオス・エクシード・チェンジ！」

★4↓★5

「死の恐怖よ、紋章の姿を得て仮初の姿となるが良い！ 『CNo. 69

デス・メダリオン  
紋章死神カオ

ス・オブ・アームズ』！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

C N o . 69 紋章死神カオス・オブ・アームズ : A T K 4000

暗い銀河の光から生まれる、禍々しい角の棘のような腕を持った死神。こいつは相手の攻撃宣言時に相手モンスターを全滅させる効果を持っているし、攻撃力も高い。時間稼ぎには最適だろう。

C N o . 69 紋章死神カオス・オブ・アームズ (エクシーズ・効果モンスター)

ランク5

光属性 / サイキック族

A T K 4000 / D E F 1800

レベル5モンスター×4

相手モンスターの攻撃宣言時、相手フィールド上のカードを全て破壊できる。

また、このカードが「N o . 69 紋章神コート・オブ・アームズ」をエクシーズ素材としている場合、以下の効果を得る。

●1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、相手フィールド上のエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。

エンドフェイズ時まで、このカードの攻撃力は選択したモンスターの元々の攻撃力分アップし、このカードは選択したモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。

これで、俺のエクストラデッキのモンスターは全部だ……。

【黎のエクストラデッキ】

『No. 39 希望皇ホープ』

『No. 39 希望皇ホープ・ルーツ』

『CNo. 39 希望皇ホープレイ』

『CNo. 39 希望皇ホープレイV』

『CNo. 39 希望皇ホープレイ・ヴィクトリー』

『No. 39 希望皇ビヨンド・ザ・ホープ』

『No. 99 希望皇龍ホープドラグーン』

『No. 61 ヴォルカザウルス』

『No. 22 腐乱健』

『CNo. 69 紋章死神カオス・オブ・アームズ』

『No. 101 S・H・Ark Knight』

『CNo. 101 S・H・Dark Knight』

『ガントレット・シューター』

『ガガガンマン』

『迅雷の騎士ガイアドラグリーン』

計15枚

『カオス・オブ・アームズ』は『CNo. 104 仮面魔踏師アンブラル』と迷った未の投入だ。攻撃抑制か魔法・罠破壊かだったが、リクルーターデッキを相手に想定していたため結局前者を選択させて貰ったワケである。

「俺はこれで、ターンエンド!」

黎：LP 1

手札：1枚

フィールド

：CNo. 69 紋章死神カオス・オブ・アームズ（ATK：4000・CORU：2）

：魔法・罨無し

【BGM終了】

「逐一鬱陶しい小細工だ。我のターン、『ジェノサイド・ドロー』！」

魔法カード『命数潰しの宝札』を発動。その効果で我は5枚カードをドローし、カード名を一つ宣言する。次の相手の通常ドローで引いたカードを確認し、カード名が宣言通りならば貴様に3000のダメージを与える。ただし不正解ならばターン終了時に我の手札は全てデッキに戻る」

「何!？」

「我が選択するのは『RUM—イーヴィル・フォース』だ、『ジェノサイド・ドロー』！」  
な、に……? バカな、俺のデッキにそんな名前のカードは入ってなんか……?」

「まあ慌てるな。まずは『死者蘇生』を発動。これで墓地から『No. 666 ジェノサイド・スカル モールトウース・ルキフェル』を復活させる」

『オ、オオ……!』

No. 666 ジェノサイド・スカル モールトウース・ルキフェル：ATK 48

「そして手札から『RUMイーヴィル・フォース』を、発動！ このカードは自分の場のエクシーズモンスターをカオス化させ、相手のオーバーレイ・ユニットを全て奪い、その数×300ポイント相手モンスターの攻撃力を下げる！ 更にこの時、このカード自身と墓地の召喚素材となったモンスターをオーバーレイ・ユニットにできるが……、後者の方は今回は墓地からの復活のため使われん」

「という事は、奴もカオス化させて来るのか！」

「正解だ。我はランクラーの『モールトウース・ルキフェル』でオーバーレイ・ネットワークを再構築！」

暗い、昏い、黒い、闇の光となり、世界を塗り潰す山羊の頭骨を被った悪魔。その闇は渦巻いて開いた次元の渦の中へと飛び込み、見るだけで鳥肌を立たせるような光と共に、姿を変える。

「カオス・エクシーズ・チェンジ！」

★111↓★112





C N o . 6 6 6 ジェノサイド・スカル イラムレクス・サタン : A T K 5 0 0 0

「攻撃力5000……!」

『サイバー・エンド・ドラゴン』に匹敵する攻撃力の『カオス・オブ・アームズ』を上  
 回るとは……!」

「そして『イーヴィル・フォース』はオーバーレイ・ユニットとなり、更に貴様の『カオ  
 ス・オブ・アームズ』のオーバーレイ・ユニットを全て吸収する!」

C N o . 6 6 6 ジェノサイド・スカル イラムレクス・サタン : C O R U 2 ↓ 4  
 C N o . 6 9 紋章死神カオス・オブ・アームズ : C O R U 2 ↓ 0 / A T K 4 0  
 0 0 ↓ 3 4 0 0

「まだまだ! 我は畏カード『邪神の買収』を発動! ライフを500支払い、貴様の墓地  
 からエクシーズモンスターを5体、我がカオスエクシーズのカオス・オーバーレイ・ユ  
 ニットにする!」

「な!?! 俺の墓地から素材を?!」

俺の墓地から5枚のカード、『希望皇ホープレイV』、『ヴォルカザウルス』、『Ark Knight』、『ガイドラグリーン』、『ガントレット・シユーター』が宙に浮いて奴の魔人の元へと飛び、結晶となった。

ラース：LP 27300↓26800

CNo. 666 ジェノサイド・スカル イラムレクス・サタン：CORU 4↓9

い、一瞬でこっちの墓地アドを潰しつつ5つもカオス・オーバーレイ・ユニットを補充しやがった……!?

「そしてこれが貴様を屠る手だ、手札から魔法カード『トリップ・チープチップ』を発動！ このカードはターンの終わりに我の墓地の魔法カードを1枚選び、貴様のデッキトップへ置く。そして次のターン、貴様はスタンバイフェイズに1枚ドロウできる。当然、我はその効果で墓地の『イーヴィル・フォース』を貴様のデッキトップへ配置する！」

「つて事は……!」

「次のターン、『命数潰しの宝札』の効果ーデ、彼は3000ポイントのダメージを受けて敗北してしまうノーネ！」

「だけでは無い！ 『命数潰しの宝札』の効果によるダメージは無効にもゼロにする事も回復へ変換する事も相手へ押し付ける事もできん！」

「……それじゃあ、サーは次のターンに……!?」

「まだ『トリップ・チップチップ』の効果は終わっていない！ その効果で、貴様の場のモンスターを1体、我がモンスターのエクシース素材として吸収する！」

「なん……、だと……!?」

命数潰しの宝札（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：デッキからカードを5枚ドロース、カード名を1つ宣言する。

次の相手ターンのドローフイズ時に相手が通常ドロースしたカードを確認し、宣言したカードであった場合、相手に3000ポイントのダメージを与える。

宣言したカードでは無かった場合、そのターンの終わりに自分の手札は全てデッキに戻る。

この効果で発生するダメージは無効にならず、0にもならない。

また回復に変える事もできず、別のプレイヤーへ与える事もできない。

RUMリーヴイル・フォース（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：自分の場のXモンスター1体を選択して発動する。

この時、自分の墓地にそのモンスターのX素材が存在する場合、下に重ねてX素材とする事ができる。

選択したモンスターと種族、属性が同じでランクが1つ高い「CX」または「CNo.」と名のついたXモンスター1体をエクストラデッキからエクシーズ召喚扱いとして選択したXモンスターの上に重ねて特殊召喚する。

（2）：この効果で特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するXモンスター1体を選択し、その下に重ねられているX素材を全て特殊召喚したモンスターの下に重ねる。

そのXモンスターは失ったX素材1つにつき300ポイント攻撃力がダウンする。

（3）：発動後このカードは墓地には送られず、特殊召喚したモンスターの下に重ねてX素材とする。

邪神の買収（オリジナル）

【通常罫】

(1) : ライフポイントを500払って発動する。

相手の墓地に存在するXモンスターを5体まで選択し、選択したモンスターを自分フィールドの「C」Xモンスターの下に重ねてX素材とする。

この効果で重ねたモンスターのカード名は、重ねられた「C」Xモンスターのテキストに記されているモンスターの名前として扱う事ができる。

トリップ・チープチップ (オリジナル)

【通常魔法】

(1) : 相手の場に表側表示で存在するモンスター1体を自分の場に存在するXモンスターの下に重ねてX素材とする。

このターンの終わりに自分の墓地に存在する「トリップ・チープチップ」以外の魔法カードを1枚選び、相手のデッキの1番上に置く。

相手は次の相手ターンのスタンバイフェイズにカードを1枚ドロウできる。

「これで次の貴様のターンに敗北は決定した」

「……………」

C N o . 6 6 6 ジエノサイド・スカル イラムレクス・サタン : C O R U 9 ↓ 1  
0

「だが念には念だ。我は『イラムレクス・サタン』の効果発動！ 1ターンに1度、カオス・オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、貴様の墓地・手札・場のカードを全て裏側表示で除外できる！ 貴様の抵抗の一切を我は許可しない、貴様に希望は一片たりとて残しはしない！ 無抵抗に殺されよ、クズ人間！ ジエノサイド・ダークバーン！」

「そうはさせるか！ 手札から『エフェクト・ヴェーラー』のモンスター効果、発動！ 相手ターンのメインフェイズにこのカードを墓地に送り、相手モンスター1体の効果を、ターンの終わりまで無効にする！」

「ぬ……！」

エフェクト・ヴェーラー（チューナー・効果モンスター）

星1

光属性／魔法使い族

A T K 0 / D E F 0

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上の効果モンスター1体を選択して発動できる。

選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

この効果は相手のメインフェイズ時にのみ発動できる。

闇のエネルギーを体の中心部にある赤いコアへと集める巨躯の魔人。それを放とうとした瞬間、半透明のヴェールを羽織った少女が光の膜で魔人を覆い隠し、エネルギー波を掻き消した。

C N O . 6 6 6 ジエノサイド・スカル イラムレクス・サタン : C O R U 1 0 ↓

9

「か、間一髪だったな……」

「だが、それでどうする？ 魔法カード『エフェクト・シャットアップ』を発動。これで無効化されているカード効果は全て復活し、2枚ドロロー。更に我は次のターンに1枚ドロローできる。」

さて、貴様にはもう手札は無い。モンスターも、魔法も、罫も無い。更に『イラムレ

クス・サタン』はバトルフェイズ中、モンスター効果の発動を許さず、墓地のカードも除外させない。そしてフィールドのカード効果も全て掻き消す。次のターンなど待たぬ！　ここで終わりだ！」

「主殿……………」  
「……………サー……………」  
「遊馬崎君……………」  
「遊馬崎……………」  
「ドロップアウトガ  
イ……………」

「っ……………」

エフェクト・シャットアップ（オリジナル）

【通常魔法】

（１）：自分フィールド上に存在する効果が無効になっているカード効果は全て無効化されていない状態になり、カードを２枚ドロウする。

次の自分のターンのドロウフェイズ時、通常ドロウで２枚ドロウする。

C N o . 6 6 6 ジェノサイド・スカル イラムレクス・サタン（エクシーズ・効果

モンスター）（オリジナル）

ランク 1 2

闇属性／悪魔族



ATK 5000 / DEF 5000

悪魔族またはアンデット族レベル12モンスター×3

このモンスターがフィールドに表側表示で存在する限り、相手プレイヤーは墓地のカードをゲームから除外できない。

(1) : このカードはカード効果では破壊されない。

(2) : このカードの攻撃宣言時、ダメージ計算終了時まで相手プレイヤーはモンスター効果・魔法・罠カードを発動できない。

(3) : このカードが「CNo. 666 ジェノサイド・スカル イラムレクス・サタン」をX素材にしている時、以下の効果を発動できる。

●1ターンに1度、X素材を1つ取り除いて発動できる。

相手の手札、フィールド、墓地のカードを全てゲームから裏側表示で除外する。

「さあ、今度こそ死ぬね! 『イラムレクス・サタン』で貴様にダイレクトアタック!」

「コルピトクエ・サングイネム・スピリチー  
穢血処刑 “ツ!”」

「主殿オ!」

「まだまだ……、まだ俺は負けるワケにはいかないんだ! 相手プレイヤーのダイレクトアタック宣言時、墓地の罠カード『ファントム・ナイツ幻影騎士団シャドーベイル』の効果発動! このカー

ドを罫では無くモンスターカード扱いとして、墓地から守備表示で特殊召喚する！」

「何!?! 墓地からモンスターとして扱って扱う罫の効果だど!?!」

「頼む、『シャドーベイル』!」

幻影騎士団シャドーベイル：DEF 300

迫り来る処刑鎌を前に、俺は急いでディスクのボタンを押し、墓地のカードを選ぶ。

吐き出されたカードを慌ててディスクに叩き付けるようにしてセッティングし、その瞬間、俺の場に新たな壁となるモンスターが現れた。

墓地から出て来るこの効果は『カードの発動』では無く『効果の適用』。ギリギリ『イラムレクス・サタン』の適用範囲外だ。

「く……、『邪天使の施し』で墓地へ送っていたか……! ならばその雑魚を攻撃イ!」  
振るわれ直される大鎌によって、灰色の馬に乗った幻影の騎士は文字通り幻影のように消え去った。

「つ……この効果を使った後、『シャドーベイル』は墓地へは行かずに除外される……!」

幻影騎士団シャドーベイル

## 【通常罫】

(1) : 自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力は300アップする。

(2) : このカードが墓地に存在する場合、相手の直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードは通常モンスター（戦士族・闇・星4・攻0/守300）となり、モンスターゾーンに守備表示で特殊召喚する（罫カードとしては扱わない）。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

これで、俺の墓地で発動できるカードは正真正銘使い切った。

エクストラデッキのカードも0、墓地発動も0、手札も0、フィールドも0。そして次のターン、俺の最初のドロローは確定していて、そのカードのせいで敗北は確定。

どう足掻いても、新たな手も、逆転の手も、無い。

デイスティニードローも、できない。

「無意味な悪足掻きだな。これだから人間は醜く低俗なのだ、決められた死を前に浅ましく喚く害虫以下のカスめ」

「俺は化物だ、人間じゃない。俺を見て人間の価値を計るのはやめろ」

「屁理屈を。我はカードを2枚伏せてターンエンド。さあ、貴様の敗北だ！」



自分の本当の名前と正体。

途切れ途切れだった、自分が人外である事の証明たる記憶。

邪神とわたし、そして黎と都ちゃんの因縁。

そして、黎に謝らなくてはいけない『あの一件』の全貌。

わたしは、バカだ。

かつて、アストラル界で出会った知人は言った。『人の欲を取り除けないのならば、ランクアップはできない』と。

わたしはそれに反論した。『ランクアップのためだけに何かを次々と切り捨ててしまつては、本当に大切なものまで捨ててしまふ』と。

なのにわたしは、『本当に大切なもの』を切り捨ててしまった。

勿論苦渋の決断、熟慮の末であつた事は言うまでも無い。それでも、わたしは数えきれない程の人を救うために、黎と都ちゃんを切り捨てた。

そしてその結果がご覧の有様。わたしは間違つていたとしか言いようが無い。

だから、償わないと。

面と向かつて、黎と、都ちゃんに、謝らないと……！

目を開けると、そこはデュエルの風景。

黎と向かい合うのはスポーツ刈りの筋骨隆々の男。そして傍らには鮫島校長、クロノ

ス先生、白石君、高田、桜さん、ポーラ。わたしの隣にはほぼ透明で横たわるフレイ。「我はカードを2枚伏せてターンエンド。さあ、貴様の敗北だ!」

言動から察するに、どうやらドローフェイズに何かあるらしい。

言う事を聞かない腕を何とか動かして電源が入りっぱなしのディスクをデュエルとリンクし、カードの詳細を確かめる。

……成程、ドローカードによる残存効果のバーンか。

それならば、わたしが力になれる。過去の闇と、未来の光。嘗ての怒りと憎しみと、これからの希望と夢。ならば君には、アストラル界が捨てたアレを、使いこなせるはずだ。

「……っ、お、おお……っ!」

「フィオ殿!」

ガタつく、貧弱な人間の足に鞭を打って何とか立ち上がる。

「さあ、どうして小僧。貴様のターンだぞ?」

「ぐ……!」

「れ……、い……!」

クソ、人間の喉じゃあ声はまだ掠れてしまうか……!

「フィオ、お前起きたのか!」

「……フィオ、まだ寝てないと!」

心配そうな目を向ける黎とポーラに、わたしは大丈夫だからと言う。

「だい、じょうぶ……。黎……。ドローを……！」

「だが……！」

「だいじょうぶ……。わたしを、信じて……。いつ、しよに……！」

「フィオ……」

よろよろと手を黎のデッキトップに導く。

わたしに残っている力よ……。彼に、この悲しき魔獣に、力を……！

S I D E : 黎

生まれたての小鹿よりも酷い足取りで俺の元へとやって来たフィオは、ゆっくりと俺のデッキトップ、『RUM—イーヴィル・フォース』に手をかける。

そんな事をして、『命数潰しの宝札』の効果で俺が負けるだけだ。

なのに、何故だろうか。俺はこの少女が輝かしい奇跡を起こすような気がしてならなかった。

何の根拠も無いのに、疑う気持ちだが、浮かばない。心の底から信じられる。そんな予感が。

そして、その予感は一

キイイイイイイイイイイイイン!

的中する。

「うおおお、何だこの忌々しい光はあ!？」

「ファイオ、お前……」

「今は、何も聞かないで欲しい……。全部、終わったら……」

「ファイオ殿、貴女は一体……」

「何と、神々しき光よ……」

「美しいノ〜ネ……」

突如として産まれた眩い光。それは明け始めようと東の空がだんだん橙色に染まろうとしているこの夜空を切り裂く、月や星とはまた異なる輝き。

「黎、君の中に、今新しき力が芽生えた」

「新しい、~~外~~……」

「我が名は~~×~~……。君に光と闇の未来を、託す者だ……!」

そう言つて~~×~~ファイオは空いた左手で俺の右手を掴み、デツキへと導く。丁度俺とファイオ



の右手が重なり、二人一緒にドロォーできる具合に。

「信じるんだ、君の未来<sup>光</sup>を。受け止めるんだ、君の過去<sup>闇</sup>を……！」

「光と、闇……！」

「黎、行くよ……、ドロォーだ！」

「……っ、おう！」

「俺と！」

「わたしの！」

「タァーンツツッ！」

カードを表向きにするが、そこには禍々しい模様のランクアップ・マジックがあるだけ。  
け。

それでも、分かる。奇跡は起こると。

「ク、カハハ、ただの虚仮脅しか！ 『命数潰しの宝札』の効果で3000のダメージを喰らい、貴様らは終わりだあ！」

高らかに宣言するラース。だが、俺とフィオは声を揃えて言い放つ。

「それはどうかな？」

「何!?!」

「重なった光と闇は、世界を、希望の未来に再構築する!」

『イーヴィル・フォース』が、光る……!」

リ・コントラクト・ユニバース!

瞬間、カードの表面が光の破片となって碎け散り、再度集まる。

そこには、全く絵柄も名前も違うカードが、あった。

「何イ!?! カードを書き換えただとお?」

「奇跡の光が卑しき闇を、正しき闇が忌まわしき光を払い、『RUM—イーヴィル・フォース』の、新たな姿を呼び覚ました!」

「怒りと憎しみの俺の過去、希望と夢の新たな未来!」

「憤怒と憎悪たる『イーヴィル・フォース』、そして幸運と運命たるわたしの力!」

「これが新たな『イーヴィル・フォース』の姿、『RUM—ケイオス・フォース』だ!」

そう、元々邪神のカードは奴らの力によって生み出された、歪んだ理。そこに現世の正しい力が触れて、本来あるべき、そして新しく進化した俺達の希望を導くに相応しい姿へと変わったんだ！

「スタンバイフェイズに俺はもう一枚ドロー！」

引いたカードは……、困った時の『貪欲な壺』！

「魔法カード『貪欲な壺』！ 墓地の『ホープ・ルーツ』、『トイナイト』、『ドドドウオリアー』、『ガガガマジシャン』、『アステル・ドローン』をデッキに戻してシャッフルし、2枚ドロー！」

新たに手札に加わったカードを見る。

そして、それらが全て、一本の光のラインで繋がった。

エクストラデッキからも、まるで呼応するかのようには、新たな力を感じられる。

「……ラース、俺の、いや俺達の勝ちだ」

「何をバカな!? 我がライフは26800! そして攻撃力5000の『イラムレクス・サタン』を前に、貴様に勝ち目などあるものかあ！」

「いや、勝つさ」

そのための第一歩！

「俺は『死者蘇生』を発動！ 墓地から復活せよ、『No. 39 希望皇ホープ』！」  
『ホオオオオプ！』

No. 39 希望皇ホープ：ATK 2500

再度姿を現す、希望の化身。

頼むぞ、俺の希望、未来の導き手！

「今更攻撃力2500を呼び戻したところで、何ができる！」

「見せてやるさ、俺の本当の希望を！ 俺は『RUM-ケイオス・フォース』を発動！

このカードは自分フィールドのモンスター1体を種族・属性が同じでランクが1つか2つ高いカオスエクシーズへと進化させる！」

俺はランク4の『希望皇ホープ』でオーバーレイ！」

『ホオオオオオオ！』

俺の掛け声に合わせて、『ホープ』がその姿を金色の光へ変え、新たな銀河の渦へと飛び込む。

「1体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを再構築！ カオス・エクシーズ・チェンジ！」

★4↓★6

そして、爆発の彼方から現れる、俺自身の、光と闇の、集大成。

「果てなき銀河の彼方から！」

ここから始まるんだ、俺の本当の闘いが、生きるという事が。偽りなどでは無い、この巡り会えた奇跡に感謝して。

「輝きと共に星の雲海を切り開け！」

四聖獣が如き白く、赤く、青く、黒く、黄色く、眩い鎧が暗示する未来と共に。願いが祈りになるこの瞬間、天地開闢に羽ばたき俺達の存在を証明するために。

「混沌を従える希望の化身！」

何時からか笑えなくなっていた、俺と都。

空へと溶けた金切り声と共に、地の底へと落ちる事の無かった涙と共に、俺に明日を  
教えてくれた皆を、優しさで守りたいから。

「降臨せよ、『C N O . 3 9 』！ 今、ここに我が混沌を証明する！ 『希望皇ホープレイ・  
ネビュラ』！」

『ホアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

C N O . 3 9 希望皇ホープレイ・ネビュラ：A T K 3 0 0 0

握りしめる拳。届かなかった叫び声を一纏めにした黒い翼。

緑に輝く瞳。絶望に染まっていた心のように顔を覆う五芒星のマスク。

威風堂々たる態度。まるで俺の涙を代わりに流したかのような赤く青い唐草のような模様。

白く眩い硬き鎧。あの時あいつから貰った笑顔を守るためのアーマー。

六本の鋭い刃。暗い運命を切り裂くための熱意を表す赤く白いブレード。

水色に光る39の数字。未来を照らし出す強い光の波動。

「……………これが、サーの新たな可能性……………」

『C N o . 3 9』…………、『希望皇ホープレイ・ネビュラ』…………。希望の光、銀河か…………。体躯の大ききこそ、『ネビュラ』は他のホープとそこまで変わらない。

だがそこから流れ出る混沌の気配は、他のカオスナンバーズとはまた何か違う気がした。

「ククククク、クーカカクカカハハハハッ！ 成程、ここに来てバランサーの能力が覚醒し新たな進化を遂げたか！」

「……………」

「だが、勝利するのは我だ！ 畏れ動、『ジェノサイド・レーザー・スコール』！ 貴様

がモンスターを特殊召喚した時、そのモンスターをデッキに戻し、攻撃力と守備力の合計値の20倍のダメージを与える！ 折角の進化も無意味！ これで貴様は終わりだあ！」

ジェノサイド・レーザー・スコール（オリジナル）

【通常罫】

（一）：相手がモンスターを特殊召喚した時に発動できる。

特殊召喚されたモンスターをデッキに戻し、その攻撃力と守備力の合計値の20倍のダメージを相手に与える。

このカードの発動と効果は無効にならない。

カードの輝きから放たれる赤い無数のレーザー。それが俺の新しい希望に次々と命中し、周囲を包み込み視界を閉ざす程の大爆発を生み出す。

「クカツハツハハハハア！ どうだ、貴様の新たな希望が簡単に踏み躪られる気分は！ これこそがデュエルの醍醐味！ これこそが生きる至高！ 人間の希望を絶望に塗り替える瞬間にこそ我が憤怒は晴れる！ 所詮下等な貴様らが何をしようが、何も変える事は出来ぬ！」



レースの煩い高笑いが響く中、煙が晴れて行く――

C N o . 3 9 希望皇ホーププレイ・ネビュラ：A T K 3 0 0 0 / O R U : 1  
黎：L P 1

「何!?! バカな、何故貴様のクズモンスターは無事なのだ!? 『ジェノサイド・レーザー・スコール』は効果も発動も無効にならないのだぞ!?!」

「確かに……、発動も効果も無効にならない、こちらの力が及ばないカードなのだろう」  
だが、『ネビュラ』の方ならどうだ?

『ケイオス・フォース』の効果で特殊召喚されたモンスターは、次の相手のターンが終わるまで、相手の如何なるカードの効果も受け付けけない! バウンスが通じなければ、ダメージも発生しない!」

「何、だと……!?!」

R U M ― ケイオス・フォース（オリジナル）（改訂版）

【通常魔法】

（1）：自分フィールド上のXモンスター1体を対象にして発動できる。

選択したモンスターと同じ種族・属性でランクが1つまたは2つ高い「C」モンスター1体を対象のモンスターの上に重ねてエクストラデッキからX召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターは、次の相手ターン終了時まで相手のカード効果を受けない。

「お前如きに砕く事なんて、できない」

「何?」

『ネビュラ』は、俺一人の力じゃ無い。俺と、都、桜にポーラ、フレイ。そして何よりファイオの力もある。たった1人だけだったら負けていたかも知れない。僅かな心のシミは人を弱く墮落させる、個人で頑張れる限界は簡単にやって来る」

だが。

「俺は今、独りじゃ無い! 友がいる、仲間がいる、家族がいる! お前如きが踏み躪つて壊れる程、ヤワじゃ無い!」

「ぐ……………」

「行くぞ、ラーズ! 『ホーププレイ:ネビュラ』のモンスター効果発動! オーバーレイ・ユニットを1つ使い……………」

C N o . 3 9 希望皇ホープレイ・ネビュラ：ORU 1 ↓ 0

「俺の墓地とエクストラデツキから、それぞれ1体ずつまで『ホープ』の名を持つエクシーズモンスターをターンの終わりまで除外できる！俺はエクストラデツキの『ホープ・ルーツ』と墓地の『ホープレイ・ヴィクトリー』を除外！

そしてこのターン、除外したモンスターの名前と効果をコピーし、更にバトルフェイズ中にオーバーレイ・ユニットが必要な効果を、消費無しで発動できる！」

「何イ!？」

「……つまり、『ヴィクトリー』のパワーアップ効果と！」

「『ルーツ』の攻撃無効効果が使えるワケか！」

「バトル！ 行け、『ネビュラ』！ 『イラムレクス・サタン』を攻撃イ！ この瞬間、コピーしてある2体の効果を発動！」

「させぬう！ 畏発動、『エフェクト・ダーティ』！ バトルフェイズ中にモンスター効果が発動した時、そのターンのバトルフェイズを終了させる！」

「無駄だ！ コピーした『ヴィクトリー』の効果により、『ネビュラ』が攻撃する時、相手は魔法も畏も発動できない！」

「何!?! 永続効果までコピーすると言うのか!?!」

「コピーした『ヴィクトリー』の更なる効果！ 相手モンスターの攻撃力を、自分の攻撃力に加える！ ヴィクトリー・チャージ！」

C N O . 6 6 6 ジェノサイド・スカル イラムレクス・サタン：A T K 5 0 0 0

C N O . 3 9 希望皇ホープレイ・ネビュラ：A T K : 3 0 0 0 ↓ 8 0 0 0

エフェクト・ダーティ（オリジナル）

【カウンター罠】

（1）：相手モンスターの効果がバトルフェイズ中に発動した時に発動できる。

バトルフェイズを終了する。

「そして『ホープ・ルーツ』の効果！ モンスターの攻撃を無効にし、それがエクシードモンスターならば、そのランク×500ポイント攻撃力がアップする！ ルーツ・チャージ！」

『ネビュラ』のランクは6、よって攻撃力は3000ポイントアップだ！」

C N O . 3 9 希望皇ホープレイ・ネビュラ：A T K 8 0 0 0 ↓ 1 1 0 0 0

「こ、攻撃力11000だと!? だが貴様のバトルは既に終わっている!」

「それはどうかな!」

「何!?!」

そう、これが『ホープ・ルーツ』をコピーした理由。

お前の26800ポイントものライフを一撃で削り取るために必要な、必殺のカード!

「速攻魔法『ダブル・アップ・チャンス』、発動! モンスターの攻撃が無効になった時、そのモンスターは攻撃力が2倍になり、再度攻撃できる!」

「何だとお!?!」

ダブル・アップ・チャンス

【速攻魔法】

(1) : モンスターの攻撃が無効になった時、そのモンスター1体を対象として発動できる。

このバトルフェイズ中、そのモンスターはもう1度だけ攻撃できる。

この効果でそのモンスターが攻撃するダメージステップの間、そのモンスターの攻撃

力は倍になる。

「行け、『ホーププレイ・ネビュラ』！ 『イラムレクス・サタン』に最後の攻撃だあ！ ここで再び『ヴィクトリー』の効果発動！ ヽヴィクトリー・チャージ！」

C N o . 39 希望皇ホーププレイ・ネビュラ：ATK 11000↓16000

「そして『ダブル・アップ・チャンス』により、ダメージステップで攻撃力は更に倍になるー！」

C N o . 39 希望皇ホーププレイ・ネビュラ：ATK 16000↓32000

「ここ、攻撃力32000、だと……ッ!?」

「これが俺達の、希望の力！ お前達邪悪なる存在を打ち破る奇跡！」

「あ、有り得ぬ、有り得ぬぞお！ この我が貴様らのような下等種族に負けるなど、あつてはならぬのだあ！

手札から『マレヴォレント』を墓地に送りモンスター効果発動！ 我がモンスターの

攻撃力は貴様のモンスターより500高い数値となり、更に貴様のモンスターを破壊すればその元々の攻撃力分のダメージを与える！ 手札も墓地のカードも使い切り、『ケイオス・フォース』の力もこのカードには及ばぬ！ 今度こそ最後だあ！」

マレヴォレント（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1200 / DEF 2000

（1）：自分・相手のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。

（2）：自分の闇属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送って発動する。

エンドフェイズまでそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力より500高い攻撃力となる。

この効果を受けた自分の闇属性モンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

確かに、これを食らえば普通は終わり。だが……！

「無駄だ！ 既に『ネビュラ』の効果は発動している！ バトルフェイズ中は相手プレイヤーはどこからであつても、モンスター効果を発動できない！ よつて『マレヴォレント』の効果は使えない！」

「そ、そんなバカな事が……?!」

C N o . 39 希望皇ホープレイ・ネビュラ（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）

ランク6

光属性／戦士族

ATK 3000 / DEF 3000

レベル6モンスター×4

このカードのX召喚に成功した時、重ねられたX素材に「ホープ」と名のついたXモンスターが存在しない場合、このカードをエクストラデッキに戻す。

(1)：このカードが表側表示で存在する限り、相手はバトルフェイズ中にモンスター効果を発動できない。

(2)：このカードのX素材を1つ取り除いて発動する。



自分の墓地とエクストラデッキからそれぞれ「ホープ」と名のついたXモンスターを1体ずつまでターン終了時まで除外する。

ターン終了時まで、このカードはそのモンスターと同じ、元々のカード名・効果をそれぞれ得る。

この効果は相手ターンでも発動できる。

(3) (2) の効果でX素材を取り除いて発動する効果は、バトルフェイズ中に発動する効果のみX素材を取り除かずに発動できる。

「これで、トドメだ!」

「う、うおおおおおおつ!」

山のように巨大な悪魔へと飛び掛かる輝く銀河の戦士。星のようなパーティクルを持つオーロラの光はそのまま4本の腕を模り、背中に差してあった6本組の剣の内4本を引き抜いた。

そして残った自前の腕で更に2本、合わせて6本の剣を抜いて斬りかかる!

「『ホープ』剣!」





## STORY 83 : ジョーカー再び

## SIDE : 黎

リースとのデュエルも無事に終了。朝日が差し込み始める中、俺は煙が晴れて行くのを見届ける。

視線の先には……、よし、何もいない。さっきの攻撃で奴は吹き飛んだようだな。

俺の隣では新たな進化の証明、『希望皇ホープレイ・ネビュラ』が少しずつ実体を失って透明となっていていつている。朝日に輝きながら俺を見下ろすその表情は、何かを伝えつつあるようにも見えた。

そんな『ネビュラ』に、俺は親指を立ててウインクをくれてやった。

——俺はもう、大丈夫だ

——ちゃんと都を取り戻すし、邪神はぶっ飛ばす

——だからまた、俺に力を貸してくれよ？

そして墓地のカードをデッキに戻すためにカードを手取る。その中で一枚だけ異彩を放つカードがあつた。

『RUM—ケイオス・フォース』……』

デュエル終了後も、このカードは俺の手元に残ったままだ。

まるで陰陽の両儀を示すように黒と白の二色の巴型の光が配置されており、その中心には配置を逆にして同様の光が存在している。

これはついさつきまで邪神のカードだった。今はあの背骨の裏側を得体の知れない軟体生物が這い回るような感触は無いが、代わりに俺の体に大きな負担をかけるようなオーラが漂っている。もう完全に別物と化したようだが、乱用は禁物か。

そしてこのカードの生成を成し遂げたのは……。

「くー……、すー……」

デュエル終了と同時に俺に向けて倒れて来た明るい茶髪の少女、神山フィオ。今も安らかな寝息を立てているこいつは一体何者なんだ？ カードを書き換えるなんて普通出来る事じゃ無い。ZEXAL体じゃあるまいし。

それともこいつはアストラル世界の住人だったりするのかな？ いや、それにしては人間以外の気配を感じないし、そもそも合体だつてしていなかった。ならば一体……？

「遊馬崎君」

そんな俺の後ろから鮫島校長が話しかけて来た。

「何でしょう」

「あれが、君の戦いですか？」

「序の口ですがね」

既にラーズの分身は影も形も見当たらない。だが、周囲に残った攻撃の爪跡がその破壊力を生々しく物語っていた。抉れた地面、薙ぎ倒された木々、砕かれた岩石、濁る大気……。

俺はもう感性が麻痺してるが、それでも常人の感覚はある程度推察できる。この威力を生身で受ければただの生類では一溜りも無いだろう。俺は化物、高田は闇の力、フィオはフレイという精霊の加護があつたからこそ生きているのだ。

もつとも、その無茶が過ぎれば俺だって包帯やらのお世話になるわけだが。

「君は……」

「何も言いつこナシです、校長。これは俺の問題、他の何某に首突つ込まれたくはありません」

「しかし……」

「大丈夫ですって。フィオとフレイは眠っただけ、俺は精神的に疲れただけ、桜とポーラ

は無傷、高田も休めば問題無いでしょう。それよりか……」

ぬ、と指を差す。その先には昇る朝日に照らされた火山の下り坂と、そしてそこに倒れている数名の男女。

「十代達の方が重傷です。俺よりあいづらをお願いします」

メンバーを見る限り、あつちも勝つたらしいな。ももえとジュンコもいるが、特に気しないでおこう。

急いで駆け寄る校長達の後ろ姿を見ながら、俺もちよつとだけ心配になって十代達のところへ――

ド  
ツ  
グ  
ン  
！

「――ッ！」

全身を走る、不快な激痛。肉が裂け、骨が砕け、魂が散り散りになるかのような錯覚。本当に、俺は限界が近いらしいな……。

「主、殿？」

「……サー、大丈夫？」

「あ、ああ……」

心配する桜とポーラに、俺は咄嗟に嘘を吐いてしまった。

だがこれが正しい答えだろう。最早猶予は無い。すぐにもラース達と戦えるだけの力を……！

視線の先で揺り起こされる十代や、すぐ傍で担がれる元・ダークネス、現・吹雪氏を見届けながら、俺は全身を駆け巡る強い痛みに耐える戦いを密かに独りで行っていた。

S I D E : フイオ

わたしは今、夢の中にいる。明晰夢という奴だ、自分が眠っている自覚がある。

大きなダメージを受けて、その上に『力』を使ったのだ、疲労で意識を失ったという事くらいの推測はつく。

しかし、勝利を得るためとは言え黎の目の前でカードの書き換えをしたのは不味かつたかな。黎は妙に鋭い所があるから、わたしの正体に勘付くだろう。そうで無くとも恐らくわたしの事を訝しんでいる。

でもそれはも仕方ない話。遅かれ早かれ、私は身の上話を彼に、そして彼の義妹いもうとにし



なくてはならなかった。

記憶を取り戻したらそうしようと、忘れる前のわたしは決めていたのだ。  
例えそれで殺されようとも、文句は言えないし、言うつもりも無い。

だって、黎と都ちゃんが死んだのは私の所為だから。

全てが終わったなら、或いは時が来たら、ちゃんと詫びよう。

その時までには、もう少しだけ君の味方でいさせてくれ、黎。どれだけ邪険に扱っても構わないし、わたしはそれを受け入れる。

それがこの神山フィオの、いや『』の務めだから。

まだ発音できない自分の真の名を呟きながら、わたしは意識が覚醒するのを自覚し始めた。

起きたわたしに、黎はどんなリアクションをするだろうか。

ダメージで彼が満足に動けず、フレイも同様の理由でぐったりしている事を知ったわたしは、もつとすっかりなくてはと気合を入れなおすのはそれから数分後のお話。

——数日後、第二のヴァルハラ

S I D E : 無し

高田、ラースとの戦いで傷を癒すため、黎達は暫く治療に専念した。

セブンスターズに与した高田の進退については、これから決めるらしい。

ただラースという邪悪な存在が影にいた事、アカデミアの制度という環境の悪影響があつた事等も加味されると鮫島校長は言っていた。彼にとって救いの無い未来だけは訪れない事を祈るばかりである。

セブンスターズと言えば、彼らが休んでいる間に湖から別の使者が現れクロノス教諭

とデュエルを行ったとの事。

部屋で休んでいた黎とフィオにはどのような敵かという事は愚か、勝敗や使用するデッキの情報すら入って来なかった。

怪我人を慮って、緘口令を敷いたのだろう。少なくともフィオはそう思っている。

幸か不幸か、授業に出られない程の重傷である事が、彼女に事実を確認させるための唯一の手段を遮断していた。

さて、光と闇の混在という答えが垣間見えた黎は、ポーラに頼んで再び精霊界に転送して貰った。勿論フィオ達も一緒である。

こつちの負担も考えて欲しいと彼女は愚痴ったのだが、それが聞き入れられる事は無かったらしい。

敵の攻撃をガードできずにモロに浴びたフレイを桜が背負い、同様に体を強打したフィオを黎が背負って、黎が苦い敗北を喫した城へと一同は向かう。

今回はアテナ達の案内は無いが、元々ここに居を構えていたフレイの案内もあつて迷う事は無かった。

「いゝつも済まないねえ」

「それは言わない約束でしょ、って老夫婦か」

「ハハハハハ、ナイスツッコミ」

フィオのギャグに適当に返している黎の隣では、フレイが浮かない顔をしていた。

「守れません、でした。1万年生きてるくせにマスター1人守れないとは情けないです」  
「仕方あるまいよ。デュエルの間中、我々はカードステータスに引つ張られるのだ。攻撃力1000ではできる事も限られようよ」

「それでも、ですよ。こんなザマでは嘗ての歴戦の軍人の名が泣きます」

ハア、と重苦しい溜息が桜の項をくすぐる。

1万年以上前の精霊界で勃発した大戦争、その最中にフレイは生まれ、軍人として活躍した。兄のような存在から様々な技や術を学び、百年が経過する時には英雄として、そして数百年を経た頃には最強として奉られていたのだった。

今でこそ退役し軍からは手を引いたものの、声をかければ軽く一個師団は集まる。それ程までにフレイの残した戦績は大きい。彼女の所属する光属性が戦時中最大の敵であった闇属性同様に大きな力を持っているのもそれが理由だろうか。

しかしやれ將軍だ英雄だ最強だと囃し立てられても、結局は一個人で攻撃力1000のモンスターカード。土俵が違えば強さも変わる。関取がハツカーの土俵ではプロに負けるのと同じようなものだ。

「そう落ち込むな、フレイ。何時しかお主も活躍できる日が来るさ」

「だと良いんですけどねえ、ハア……」

「溜息吐くと、幸せが逃げるぞ」

「ならわたくしの幸せはとつくの昔に空っぽですよ……」

気落ちしているフレイを、残念ながらも今は励ます術を黎達は持たなかった。そうするための言葉もキャリアもフレイには遥かに及ばなかったからだ。

さて、ポーラの作った転送ポータルからヴァルハラ城までは然程の距離があるわけでも無く、そんな無駄話をしている内に入口に辿り着いた。

前回とは異なりお出迎えが無かったため、扉は閉まっており前には門番が左右に2人並んでいる。それぞれ右が『魔法剣士ネオ』、左が『ガーディアン・オブ・オーダー』だ。

魔法剣士ネオ（通常モンスター）

星4

光属性／魔法使い族

ATK 1700 / DEF 1000

武術と剣に優れた風変りな魔法使い。

異空間を旅している。

ガーディアン・オブ・オーダー（効果モンスター）

星8

光属性／戦士族

ATK 2500／DEF 1200

自分フィールド上に光属性モンスターが2体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

「ガーディアン・オブ・オーダー」は、自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

こちらの姿を認めるや否や、『ネオ』と『オーダー』は手にした剣を交差して扉の前を塞いだ。

「何者ぞ。我らこの城門を守りし者」

「許し無き者近寄る事叶わず」

「危害を目論むならばその命を代償とせよ」

「さあ、立ち去れ。或いはここで命を失うか」

何やら早々に物騒である。中に入ってさっさとジョーカーに会いたいのだが、困った事に近くにはアテナもルインもジョーカーもない。見るからに話の通じなさそうな2人組をどう説得してやろうか黎が悩んでいると、唐突に桜の背中からフレイが話しか

けた。

「おやおや、ネオとオーダーじゃあないですか。早とちり癖はまだ直つて無いようですね」

「きよ、教官っ!? 何故ここに!?!」

「何故も何も、わたくし今はとある方の下で守護精霊やつてまして。ほら、彼の背中の少女の」

「でも」

フレイに指差され、フィオが片手を挙げて挨拶をする。

しかし何故か『ネオ』も『オーダー』もそんな気楽な言葉に反応する事もできないくらいに怯えていた。何が過去にあつた事やら。

「で、何者と問いましたね? 彼ら彼女らはわたくしの仲間です。以上。通してくれませぬ?」

「ハ、ハイお通りください!」

「フレイ、お前本当に名の知れた奴だったんだな」

「ええ、そこそこ凄いですよ、わたくしは」

ケラケラと笑っていた小柄な少女は、一転して門番の2人をギロリと睨み付けた。

「ところで。普通、知人だからと言つてすんなり通しますかねえ? んん? どうやら





「良いじゃねーの、その辺はフレイが一番よく分かってるだろうし」

フレイの一喝に萎縮した2人はそのままディスクを腕に嵌めた。

どうやらジョーカーの前に一戦あるようである。

昔のフレイの戦い方に興味があるのか、同行していた黎達4人はそのまま見守る事にした。

(ま、有難いな。まだ体がギシギシ言うし、もう少し体力回復の時間が欲しい)

ボソリと『ケイオス・フォース』の後遺症を呟くが、背負っているフィオにすら届く事は無かった。

青髪の天使がこちらを見てウインクしたのは、果たしてそういう意味だったのだろうか。残念ながらテレパシーを持つ者がいないため不明である。

「さ、て。リハビリがてら、嘗ての教え子の成長具合を見させて頂きましょうか」

「オーダー、オレとお前のコンビならきつと勝てなくても多少はできるハズや!」

「うう、ネオお、オラ自身無いべよ……。きつと教官に昔みたいに負けるべ……」

「デュエル!」『デュエル……』

フレイ VS ネオ&オーダー

LP 8000 VS LP 8000

「このバトルロイヤルデュエル、先攻は貰いますよ。わたくしのターン、ドロ。」

まずは手札から『汎神の帝王』を発動、〃帝王〃と名の付いた魔法・罠カードを1枚コストに2枚ドロします。墓地に『真源の帝王』を送り、2枚ドロです」

「フレイってどのくらい強いのか？」

「めっちゃ強い。あの2人の反応を見るに昔は鬼軍曹だったんじゃないか？」

「そして墓地から『汎神の帝王』を除外して効果発動、デッキから〃帝王〃魔法・罠カードを3枚選択、相手に1枚選んで貰いそれを手札に加えます」

### 汎神の帝王

#### 【通常魔法】

「汎神の帝王」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札の「帝王」魔法・罠カード1枚を墓地へ送って発動できる。

自分はデッキから2枚ドロする。

(2)：墓地のこのカードを除外して発動できる。

デッキから「帝王」魔法・罠カード3枚を相手に見せ、相手はそこから1枚選ぶ。

そのカード1枚を自分の手札に加え、残りをデッキに戻す。

「デッキから選ぶのはこの3枚です」

『帝王の深怨』  
しんえん

『帝王の深怨』

『帝王の深怨』

「うわ同じカードが3枚だ」

「……相手に選ばせるサーチなら、このくらいは当然。……欲しいカードは自分で掴まない」と

「しかも全てサーチカードだぞあれ」

「1枚分とはいえデッキ圧縮も兼ねているワケだ、抜かりの無い女め」

「さ、どちらが選択しても構いませんよ？」

「何の意味も無いっ！」

「はい、では『帝王の深怨』を1枚手札に加え、残りはデッキに戻します」

グルグルと回り始めたフレイのデッキ。先日使用していた【ジェネクス帝】より調子

が良さそうな所を見ると、あの時は手加減していたのかも知れない。

これでフレイの手札は7枚となる。『強欲な壺』にも等しい性能を発揮したこの効果は凶悪の一言に尽きる。

「そして発動、『帝王の深怨』。手札から『爆炎帝テストロス』を見せて、デッキから『真帝王領域』をサーチします。そしてそのまま発動します」

フレイのディスクがカードを読み込み、周囲に光が走る。

神殿や城ではなく黄泉の者の展開する領域なので、目に見えた変化が無いのだろう。

「フィールド魔法『真帝王領域』の効果発動。1ターンに1度、手札の帝モンスターと同じ攻守を持つモンスターのレベルを2つ下げます。さつき見せました『テストロス』をレベル6に変更です」

帝王の深怨

【通常魔法】

「帝王の深怨」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：手札の攻撃力2400／守備力1000のモンスター1体または攻撃力2800／守備力1000のモンスター1体を相手に見せて発動できる。

デッキから「帝王の深怨」以外の「帝王」魔法・罠カード1枚を手札に加える。

## 真帝王領域

## 【フィールド魔法】

(1) : 自分のエクストラデッキにカードが存在せず、自分フィールドのみアドバンス召喚したモンスターが存在する場合、相手はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。

(2) : 自分のアドバンス召喚したモンスターの攻撃力は、相手モンスターに攻撃するダメージ計算時のみ800アップする。

(3) : 1ターンに1度、自分メインフェイズにこの効果を発動できる。

自分の手札の攻撃力2800/守備力1000のモンスター1体を選び、そのモンスターのレベルをターン終了時まで2つ下げる。

「永続魔法『帝王の開岩』を発動し、続けて墓地の『真源の帝王』の効果。自分の墓地から別の「帝王」魔法・罫カードを1枚除外し、モンスター扱いとして自分フィールドに戻ります。『帝王の深怨』を除外し、特殊召喚します」

真源の帝王 : DEF 2400

「そしてこれをリリースし、『爆炎帝テストロス』をアドバンス召喚です」  
『オオオオオオッ!』

爆炎帝テストロス：ATK 2800

フレイのフィールドに灼熱の炎を背負った帝王が出現する。

燃え盛る焔は進化前より敵を焼くために磨かれたそれであり、フレイのデッキで敵の手を削るのには最適なカードと言えた。

『帝王の開岩』の効果発動。アドバンス召喚に成功した時、デッキから召喚モンスターとは名前の一致しない帝ステータスのモンスターをサーチできます。わたくしはこの効果で『烈風帝ライザー』を手札に加えます」

上手いな、と全員舌を巻いた。

手札コストに使ったカードの効果を利用したアドバンス召喚補助、召喚コストのために除外したのは墓地から発動する効果の無い魔法カード、先攻1ターン目で出されたハンドレスモンスター、次のターンに備えた巻き返し用のモンスター。流れるようにカードの連携が組み合わさっていく。しかも手札がこれでまだ5枚も残っている、恐るべきコ

ンボである。

『『テストロス』の効果発動、相手の手札を確認して1枚捨てます。ここういう場合は誰の手札をピーピングするか指定しますが……、今回はネオの手札にしましょうか』  
「ぐっ！ オレかア……！」

ネオの手札

『破 面 竜』

『コズミック・サイクロン』

『相剣師——莫邪』

『瑞相剣究』

『ナイト・ドラゴリッチ』

彼のデッキは「相剣」。幻竜族モンスターを用いたシンクロ召喚のデッキだ。

チューナーは殆ど存在せず、モンスター効果で特殊召喚されるトークンをチューナーに一任する、稀有な特性を持った強力なカテゴリ。モンスター効果の封印が致命傷になりやすい反面、シンクロ召喚に成功すれば素材モンスターとシンクロモンスターの両方で幅広いアドバンテージを得られるため、展開を許すと悲惨な目に遭う。

「その手札なら『莫邪』一択ですね。捨てて下さい」  
「くっ！」

「そしてモンスターカードが捨てられた場合、レベル×200のダメージを与えます」  
「ぐべあああああ！」

「あちちちちちち！」

ネオ&オーダー：LP 8000↓7200

真源の帝王

【永続罫】

「真源の帝王」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：1ターンに1度、自分の墓地の「帝王」魔法・罫カード2枚を対象として発動できる。

そのカードをデッキに加えてシャッフルする。

その後、自分はデッキから1枚ドローする。

(2)：このカードが墓地に存在する場合、このカード以外の自分の墓地の「帝王」魔法・罫カード1枚を除外して発動できる。



このカードは通常モンスター（天使族・光・星5・攻10000／守2400）となり、モンスターゾーンに守備表示で特殊召喚する（罨カードとして扱わない）。

### 帝王の開岩

#### 【永続魔法】

このカードがフィールド上に存在する限り、自分はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。

また、自分がアドバンス召喚に成功した時、以下の効果から1つを選択して発動できる。

「帝王の開岩」のこの効果は1ターンに1度しか発動できない。

● アドバンス召喚したそのモンスターとカード名が異なる攻撃力2400／守備力1000のモンスター1体をデッキから手札に加える。

● アドバンス召喚したそのモンスターとカード名が異なる攻撃力2800／守備力1000のモンスター1体をデッキから手札に加える。

爆炎帝テスタロス（効果モンスター）

星8

炎属性／炎族

ATK 2800／DEF 1000

このカードはアドバンス召喚したモンスター1体をリリースしてアドバンス召喚でき  
きる。

(1)：このカードがアドバンス召喚した場合に発動する。

相手の手札を確認し、その内の1枚を選んで捨てる。

捨てたカードがモンスターだった場合、そのモンスターのレベル×200ダメージを  
相手に与える。

このカードが炎属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚した場合、その時の効  
果に以下の効果を加える。

●相手に1000ダメージを与える。

「カードを3枚セット。バトルロイヤルデュエルでは各プレイヤーは最初のターン攻撃  
できません、わたくしはこれでターンエンド」

フレイ：LP 8000

手札：2枚（内1枚は『烈風帝ライザー』）

フィールド

：爆炎帝テスタロス（ATK 2800）

：伏せカード3枚、帝王の開岩（永続魔法）、真帝王領域（フィールド魔法）

「さあ、ネオ、オーダー。貴方達のターンですよ」

「わ、分かっています！ オレから行きます、ドロー！」

フレイの指摘に答えるネオだが、残念ながら勇んで行ったドローも手が震えては恰好がつかない。

「まずは手札から『コズミック・サイクロン』を発動！ ライフを1000払って、魔法・罫カードを1枚除外する！ 『真帝王領域』を除外です！」

ネオ&オーダー：LP 7200↓6200

返しの相手ターン。パーティクルをまとった竜巻を魔法カードから放ち、フレイのフィールド魔法が撃ち抜かれる。地面に満ちていた光はこれにより消滅し、再利用はほぼ不可能となった。

『真帝王領域』は相手のEXデッキからの召喚をロックする効果がある、シンクロに比

重を置くネオのデッキには、存在するだけでキツいたため真っ先に除去したいと考えるのは当然である。

コズミック・サイクロン

【速攻魔法】

(1)：1000LPを払い、フィールドの魔法・罫カード1枚を対象として発動できる。  
そのカードを除外する。

「そして魔法カード『大霊峰相剣門』を発動！ 墓地から『相剣師―莫邪』を特殊召喚します―！」

『ヌンツッ!』

「『莫邪』は召喚成功時、手札の『相剣』カードか幻竜族モンスターを見せて、チューナーのトークンを特殊召喚できる！」

相剣師―莫邪：DEF 1800

大霊峰相剣門

## 【通常魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 自分の墓地の「相剣」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

自分フィールドにSモンスターが存在する場合、代わりに幻竜族モンスター1体を対象とする事もできる。

(2) : このカードが除外された場合、自分フィールドの、「相剣」モンスターまたは幻竜族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターのレベルをターン終了時まで1つ上げる、または下げる。

相剣師—莫邪(効果モンスター)

星4

水属性/幻竜族

ATK 1700 / DEF 1800

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、手札の「相剣」カード1枚または幻竜族モンスター1体を相手に見せて発動できる。

自分フィールドに「相剣トークン」（幻竜族・チューナー・水・星4・攻／守0）1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したトークンが存在する限り、自分はSモンスターしかEXデッキから特殊召喚できない。

(2)：このカードがS素材として墓地へ送られた場合に発動できる。

自分はデッキから1枚ドローする。

フィールドに現れるのは、先刻墓地に落とされた青色の龍の力を宿す剣士。このままとあるシンクロモンスターに繋げる事で、手札を2枚増やす事ができる優れたモンスターである。

ネオの手札には既に『破面竜』『瑞相剣究』『ナイト・ドラゴリツチ』があり、チューナーの召喚に問題は無い。このまま手札から特殊召喚できるモンスターをサーチしてレベル10のシンクロを狙うのが【相剣】のよくある展開方法だが……。

「手札の『破面竜』を見せて、トークンを特殊召喚！」

「チェーンします。永続罫『連撃の帝王』を発動。相手ターンに1度、モンスターをアドバンス召喚します」

「何っ!？」

## 連撃の帝王

## 【永続罫】

(1) : 1ターンに1度、相手のメインフェイズ及びバトルフェイズにこの効果を発動でききる。

モンスター1体をアドバンス召喚する。

『テストタロス』をリリースして、手札の『烈風帝ライザー』をアドバンス召喚。このカードはレベル8ですが、アドバンス召喚されたモンスター1体を素材に召喚可能となります」

「っ!?!」

「チェーンの逆処理でトークンが召喚されるが……、『烈風帝ライザー』の効果は場合の任意効果、チェーン2で召喚されてもタイミングは逃さない」  
「そういう事です」

烈風帝ライザー : ATK 2800

相剣トークン : DEF 0

ネオとフレイのフィールドに同時に召喚されるモンスター。片や『莫邪』を模した龍の力を宿す剣士、片や暴風を操る緑色の巨人。前者はチューナーである以外に特色は無いが、後者は時に「ふわんだりいず」でも使用される強力なバウンス効果を持ったカードである。

「召喚成功時、『ライザー』と『帝王の開岩』の効果発動。まずはデッキから『冥帝エレボス』を手札に加えます。そして『ライザー』の効果でフィールドと墓地のカードを1枚ずつ持ち主のデッキの1番上に好きな順番で戻します。ネオの墓地の『コズミック・サイクロン』とフィールドの『相剣トークン』を選択しますね」

「……トークンに実体は無い、場を離れたら消える」

「うむ、『莫邪』の効果は召喚時のみに使える、これでトークンをもう1体用意する事は難しくなった」

「うげえ」

烈風帝ライザー（効果モンスター）

星8

風属性／鳥獣族



ATK 2800 / DEF 1000

このカードはアドバンス召喚したモンスター1体をリリースしてアドバンス召喚でききる。

(1) : このカードがアドバンス召喚に成功した場合、フィールドのカード1枚と自分または相手の墓地のカード1枚を対象として発動する。

そのカードを好きな順番で持ち主のデッキの一番上に戻す。

このカードが風属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した場合、その時の効果に以下の効果を加える。

● フィールドのカード1枚を対象として持ち主の手札に戻す事ができる。

先も述べたように、「相剣」デッキにとってモンスター効果の無効は完全に鬼門。またシンクロ召喚してから回転が始まる都合上、特にこうやって展開の初動を押さええられてしまうとリカバリーが非常に難しくなってしまう。このチューナー潰しもまた然り。ネオはその対策の一環として『ゴズミック・サイクロン』を採用していたのだが、フレイはそれを見越してもう1枚抑制用のカードを用意していたようだ。

「さ、次の手をどうぞで」

「……カードを1枚伏せて、ターンエンドです」

ネオ：LP 6200

手札：3枚

フィールド

：相剣師—莫邪（DEF：1800）

：伏せカード1枚

ターンが変わるタイミングで、ファイオが黎の背中から話しかけてきた。

「黎、ネオの使ってるあのモンスター何？ 変な種族だけだ」

「幻竜族モンスターだ。ドラゴン族が幻想化した、精神的或いは概念的な存在が所属している種族だ」

「へえ……」

「あれ以外にもサイキック族と言って、俺達の人間世界にはいない種族がある」

「機会があつたら見せてくれるかい？」

「問題無い」

伏せられたカードは当然『瑞相剣究』。墓地の“相剣”カードか幻竜族モンスターを

除外して自分のモンスターを強化する通常罫。しかしネオの墓地にいる該当するカードは1枚、帝モンスタアの前には焼け石に水だろう。

このオーダーのターンで何とか出来なければ次のターンに負ける可能性とてあった。

「お、オラのターン！」

「手が震えてますよ。もう軍属では無いのですから、罰則も無いというのに何を尻込みしているのですか」

「ぐう……。スタンバイフェイズに速攻魔法『サイクロン』を発動！ 『連撃の帝王』を破壊するっぺ！」

『連撃の帝王』はメインフェイズとバトルフェイズでのみ使える、スタンバイフェイズで叩くのは理に適っているな」

「更に『強欲な壺』を発動し、2枚ドロウするべ！」

ターンが回った上にドロウソースで手札を増やしたオーダー。しかしその表情は険しい。決して手札が悪いというわけでは無く、フレイの持つ気迫と、彼女との過去が彼に大きなプレッシャーをかけているようだ。

穴が開きそうな程に手札のカードを見つめ続けた彼は、やがて1枚の緑のカードを手札から切ってディスクに差し込む。

「オラは手札からフィールド魔法『転回操車』を発動！」

オーダーが発動したフィールド魔法により、周囲の風景が一変する。楚々とした、或いは荘厳な城は姿を潜め、代わりに薄暗い巨大な汽車や貨物列車がグルリと並ぶ操車場になっている。

『転回操車』の効果発動！ オラは手札から『スキル・プリズナー』を墓地へ送り、デッキから『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』をサーチだがや！」

### 転回操車

#### 【フィールド魔法】

「転回操車」の（１）（２）の効果は１ターンに１度、いずれか１つしか使用できない。

（１）：自分フィールドに機械族・地属性・レベル１０モンスターが召喚・特殊召喚された場合に発動できる。

デッキから攻撃力１８００以上の機械族・地属性・レベル４モンスター１体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターのレベルは１０になる。

この効果の発動後、ターン終了時まで相手が受ける戦闘ダメージは０になる。

（２）：自分の手札を１枚墓地へ送って発動できる。

デッキから機械族・地属性・レベル１０モンスター１体を手札に加える。

「そして今手札に加えた『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を召喚！ このモンスターは元々の攻撃力を0にしてリリース無しで召喚できるべ！」

更に地属性機械族モンスターが召喚または特殊召喚された時、ステータスを半分にして『重機貨列車デリツクレーン』を手札から特殊召喚できるんだす！ 現れる、『ナイト・エクスプレス・ナイト』、『デリツクレーン』！」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト（効果モンスター）

星10

地属性／機械族

ATK 3000 / DEF 3000

このカードはデッキから特殊召喚できない。

また、このカードはリリースなしで召喚できる。

この方法で召喚したこのカードの元々の攻撃力は0になる。

重機貨列車デリツクレーン（効果モンスター）

星10

## 地属性／機械族

A T K 2800 / D E F 2000

「重機貨列車デリッククレーン」の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分フィールドに機械族・地属性モンスターが召喚・特殊召喚された場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

(2)：X素材のこのカードがXモンスターの効果を発動するために取り除かれ墓地へ送られた場合、相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。そのカードを破壊する。

深夜急行騎士ナイト・エクस्प्रेस・ナイト：A T K 3000 ↓ 0

重機貨列車デリッククレーン：A T K 2800 ↓ 1400 / D E F 2000 ↓ 1000

オーダーの呼び掛けに応じ、現れるのは巨大な騎士の上半身の先頭部に乗せた急行列車と、クレーンを後部車両に乗せた黄色い貨物列車。流星に周囲の倉庫からは出て来な

かったが、元々の大きさが大ききなので長身の黎ですら首が痛くなる程に大きなモンスターが横に並ぶ事となった。

だがこれだけでは終わらない。オーダーは更に1枚手札を切る。

「そして攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚した事で『地獄の暴走召喚』は発動できる！ デッキから『デリックレーン』を更に2体、攻撃表示で特殊召喚！」

「何、ここで『地獄の暴走召喚』だと!?!」

「これは、少し不味いな……」

地獄の暴走召喚

【速攻魔法】

相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスター1体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。

相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

オーダーの手によって更に生み出されるクリーン貨物列車。

『デリックレーン』の用途を考えるとやや危険な状況なのだが――

「ではこちらも、デッキからもう1体『ライザー』を特殊召喚します。このデッキには2枚しか入っていないので、3体目は召喚できません」

当のフレイは冷静に沈着に、ディスクのシステムによって召喚されないカードを証明して淡々と進める。

黎の背中に冷や汗が流れ（ついでに背負われているフィオが若干の不快感を得て）行く中、オーダーは引き攣っているながらも不敵な笑みを浮かべてエクストラデッキのケースに手を伸ばした。

烈風帝ライザー：ATK 2800

「行くべよ、教官！」

「どこからでも来なさい」

「オラはレベル10の『デリックレーン』2体で、そして同じくレベル10の『ナイト・エクスプレス・ナイト』と『デリックレーン』でオーバーレイ！

4体のモンスターで2つのオーバーレイ・ネットワークを構築！」



☆100×☆100||★100

☆100×☆100||★100

「エクシーズ召喚！ まずは1体目、鉄路の彼方から地響きと共に出現せよ！ 『超弩級砲塔列車グスタフ・マックス』！」

そして2体目！ 出で『No. 81』！ 鋼路の果てより天空を劈き、怒涛の力を今振るえ！ 『超弩級砲塔列車スペリオル・ドローラ』！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス：ATK 3000

No. 81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドローラ：ATK 3200

「で、でかつ!？」

カード知識の薄いフィオが、あんぐりと口を開けて驚愕する。それもそのはず、さっきまでの列車達よりも更に大きな列車砲が二台も現れたのだ、無理も無い。片や、重そうな機体を3本のレールの上に滑らせる筒状のキャノン砲。そしてもう片方は無数の砲口に加えてまるで今にも変形ロボになって動き出しそうな巨体でもある。普通の戦

車や重機などより遥かに大きいだろう。

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス（エクシーズ・効果モンスター）

ランク10

地属性／機械族

ATK 3000 / DEF 3000

レベル10モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。  
相手ライフに2000ポイントダメージを与える。

No. 81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドローラ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク10

地属性／機械族

ATK 3200 / DEF 4000

レベル10モンスター×2

(1)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除き、フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターはターン終了時まで、そのモンスター以外のカードの効果を受けない。

この効果は相手ターンでも発動できる。

全身から煙を吹いて今にも動き出しそうな二台の巨大な兵器。オーダーはその雄々しき勇士に満足そうに頷くと、指令を出すべく大きく息を吸った。

「オラは『スペリ——」

だが、その言葉は最後まで紡がれない。突如として『グスタフ・マックス』と『スペリオル・ドーラ』が光に包まれたかと思うとそのまま消え去り、素材である4台の列車に戻ってしまった。

「な、何だべ!？」

「一体何が起きたんや!？」

「ソリッドヴィジョンは優秀かつ優しいですねえ。まさかプレイヤーにそんなファンサービスを提供するなんて」

くすくす笑うフレイの場には、1枚の赤いカードが表側表示で存在していた。イラストにあるのは不気味なオーラを放つ、白と黒のモトーンで描かれた1枚の絵画。

「わたくしは『地獄の暴走召喚』にチェーンして罠カード『グリザイユの牢獄』を発動し

ていたのですよ」

「何っ!?!」

『グリザイユの牢獄』は自分フィールドにアドバンス召喚、儀式召喚、融合召喚されたモンスターのどれかが存在する時に発動できません。次の相手ターンが終わるまで、お互いにシンクロ及びエクシーズ召喚は禁止され、それに属するモンスターの効果と攻撃も封印されるのです。よって、オーダーはエクシーズ召喚できず、フィールドに弱体化した素材モンスターが残ったというワケです」

### グリザイユの牢獄

【通常罫】

自分フィールド上にアドバンス召喚・儀式召喚・融合召喚したモンスターの内、いずれかが表側表示で存在する場合に発動できる。

次の相手ターンの終了時まで、お互いにシンクロ・エクシーズ召喚は行えず、フィールド上のシンクロ・エクシーズモンスターは効果が無効化され、攻撃できない。

「これでネオもオーダーもそれぞれ戦術は封印しました。大方、『デリックレーン』を消費しこちらのカードを2枚を破壊するつもりだったのでしようが、そうは行きません

よ。……さ、対抗策はありますか？」

ネオの【相剣】もオーダーの【10軸機械族<sup>車</sup>】もシンクロ・エクシーズを封印された今、機能不全である事は明白。『デリックレイン』がオーバーレイ・ユニットとして墓地へ送られた時に発生する破壊効果でフレイの場を荒らすつもりだったオーダーの表情には焦りがありありと浮かんでいた。

「ま、魔法カード『十種神鏡陣<sup>トクサシシキヨウジン</sup>』を発動！ レベルの合計が10になるようモンスターを墓地に送って2枚ドロウするんだす！ フィールドの『ナイト・エクспレス・ナイト』を墓地に送って2枚ドロウ！」

### 十種神鏡陣

#### 【通常魔法】

(1) : レベルの合計が10になるように、自分の手札・フィールド(表側表示)からモンスターを任意の数だけ墓地へ送って発動できる。

自分は2枚ドロウする。

「……オラは、カードを2枚伏せて、ターンエンドだべや！」

オーダー：LP 6200

手札：0枚

フィールド

・重機貨列車デリックレーン（ATK 1400）、重機貨列車デリックレーン（ATK 2800）×2

：伏せカード2枚、転回操車

（だ、大丈夫だ……。オラの墓地には『スキル・プリズナー』がある。対象を取るモンスターの効果、帝に有効なカードだべ！）

「わたくしのターン、ドロロー。永続魔法『冥界の宝札』を発動、2体以上リリースしてアドバンス召喚した時2枚ドロローします」

スキル・プリズナー

### 【通常畏】

自分フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

このターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする。

また、墓地のこのカードをゲームから除外し、自分フィールド上のカード1枚を選択

して発動できる。

このターン、選択したカードを対象として発動したモンスター効果を無効にする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。

冥界の宝札

【永続魔法】

2体以上の生け贄を必要とする生け贄召喚に成功した時、デッキからカードを2枚ドロウする。

「続けて速攻魔法『帝王の烈旋』を発動し、このターン1度だけ相手モンスター1体をアドバンス召喚のためのリリース素材にできます。ちなみに対象を取らず、何をリリースするかはアドバンス召喚時に改めて決めますので」

帝王の烈旋

【速攻魔法】

「帝王の烈旋」は1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン、自分はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。

(1)：このターン、アドバンス召喚のために自分のモンスターをリリースする場合に1度だけ、自分フィールドのモンスター1体の代わりに相手フィールドのモンスター1体をリリースできる。

ゾクリ、とネオとオーダーは戦慄した。

フレイの表情は今もニコニコとしているが、これは嘗て彼女の教官時代『国潰しの蒼い羅刹』や『微笑みの魔神』と呼ばれた時のものだ。つまりは目が笑っていない状況。腹の奥で密かに爪を研いでいる時の相貌なのである。

「手札から『天帝従騎アイデア』を召喚し効果発動、デツキから攻守の数値が同じモンスターを特殊召喚できます。おいでませ、『冥帝従騎エイドス』！」

『ヌンツッ!』

『フウツッ!』

天帝従騎アイデア：ATK 800

冥帝従騎エイドス：DEF 1000

天帝従騎アイデア（効果モンスター）



星1

光属性／戦士族

ATK 800 / DEF 1000

「天帝従騎イデア」の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「天帝従騎イデア」以外の攻撃力800 / 守備力1000のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する。

このターン、自分はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。

(2) : このカードが墓地へ送られた場合、除外されている自分の「帝王」魔法・罠カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを手札に加える。

冥帝従騎エイドス (効果モンスター)

星2

闇属性／魔法使い族

ATK 800 / DEF 1000

「冥帝従騎エイドス」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動する。

このターン、自分は通常召喚に加えて1度だけ、自分メインフェイズにアドバンス召喚できる。

(2)：墓地のこのカードを除外し、「冥帝従騎エイドス」以外の自分の墓地の攻撃力800/守備力1000のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

このターン、自分はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。

召喚ゲートを開き、登場するのは白い鎧をまとった細身の騎士。その登場に合わせて、隣に黒い刺々しい鎧の騎士が現れる。

白い方はどこか女性的なフォルムと優雅さを醸し出しているのに対し、黒い方は禍々しい悪魔のような印象を与えた。

『『エイドス』の効果でこのターン、通常召喚とは別にアドバンス召喚できます。わたくしは『アイデア』、そして『帝王の烈旋』の効果によりそちらの『莫邪』をリリースします』  
「ぐっ、オレのモンスターを!？」

「アドバンス召喚、『凍氷帝メビウス』。永遠に轟く氷河よ、無情の冷酷さを持ち大海を凍てつかせ君臨せよ!」

『ぬううううんっ!』

凍氷帝メビウス：ATK 2800

空中に現れた氷の塊の中から出現する氷河の皇帝。水色のマントを冷風に乗せ、見て  
いるだけで凍えそうなその存在に、体感気温は少なくとも下がったように思えた。

「なっ!?! 『エイドス』を召喚するんや無いんですかい!?!」

「おや、わたくし1度でもそんな事を言いましたか? この瞬間、『凍氷帝メビウス』、『冥  
界の宝札』、『帝王の開岩』、『イデア』の効果が発動します。

まずはチェーン4、『冥界の宝札』の効果で2枚ドロ。

次にチェーン3、『イデア』の効果で除外された『真帝王領域』を手札に戻します。

更にチェーン2、『帝王の開岩』の効果でデッキから『怨邪帝ガイウス』を手札に加え  
ます。

最後にチェーン1、『凍氷帝メビウス』の効果。アドバンス召喚成功時、フィールドの  
魔法・罫カードを3枚まで選択して破壊できます。そして水属性モンスターをリリース  
してアドバンス召喚された『メビウス』の選んだカードは発動できません、ブリザー  
ド・デストラクション!」

「ぐつ、まさか『莫邪』をそんな使い方するなんてえ！」

「この瞬間、墓地の『スキル・プリズナー』を除外して効果発動だべ！ チェーン5のこれで伏せカードの内の1枚を守る事で、『メビウス』の効果は無効になるんだがや！」

「リバースマジック、『禁じられた聖槍』。攻撃力を800下げ、『メビウス』は他の魔法・罠の影響を受けなくなります。よって『スキル・プリズナー』では無効になりません」

「何いっ！」

凍氷帝メビウス（効果モンスター）

星8

水属性／水族

ATK 2800／DEF 1000

このカードはアドバンス召喚したモンスター1体をリリースしてアドバンス召喚でききる。

このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上の魔法・罠カードを3枚まで選択して破壊できる。

このカードが水属性モンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した場合、その時の効果に以下の効果を加える。

●この効果の発動に対して相手は選択されたカードを発動できない。

禁じられた聖槍

【速攻魔法】

(1) : フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターはターン終了時まで、攻撃力が800ダウンし、このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。

「り、『リミッター解除』を更にチェーン発動！ これで機械族モンスターの攻撃力は倍になる！」

猛烈な吹雪が吹き荒れ、ネオとオーダーのカード『瑞相剣究』、『機関連結』、『リミッター解除』が破壊された。破壊から守れると踏んだカード達は、見事に全て凍って粉々にされたのであった。

『転回操車』は相手ターンでは発動できずターンの終わりにモンスターは全滅する。そして手札はゼロ。シンクロ・エクシース召喚はネオのターンまでできない。これでネオもオーダーも完全に八方塞がりである。

凍氷帝メビウス：ATK 2800 ↓ 2000  
 重機貨列車デリックレイン：ATK 1400 ↓ 2800  
 重機貨列車デリックレイン：ATK 2800 ↓ 5600  
 重機貨列車デリックレイン：ATK 2800 ↓ 5600

「おやおや、せめてもの壁にしては随分脆そうな。魔法カード『二重召喚』を発動、もう1度モンスターを召喚できます。墓地の『真源の帝王』の効果で、『帝王の烈旋』を除外してモンスター扱いで特殊召喚します」

真源の帝王：DEF 2400

「そして『真源の帝王』と『エイドス』をリリースし、先程手札に加えました『怨邪帝ガイウス』をアドバンス召喚です。暗き闇夜に蠢く怨念よ、万象の昏き闇を従え君臨せよ！」

『フッフッフッフ……、ハアッ！』

怨邪帝ガイウス：ATK 2800

その姿、まさに邪悪。黎達の目の前の空間にバギバギバギとヒビが入り、姿を覗かせた黒い帝王は放つ淀んだ覇気に、思わずネオとオーダーは身震いを隠し切れなくなり、足が震え始めた。

『怨邪帝ガイウス』の効果発動。フィールドのカードを1枚除外し、相手に10000ポイントのダメージを与えます。この時間属性モンスターを除外すれば、相手のフィールド以外の全ての場所から同名モンスターを除外でき、また召喚素材として闇属性モンスターをリリースしていれば、除外できる枚数が1枚増えます。よって攻撃力が高い方の『デリックレーン』を2体とも対象にします。

そしてここにチェーンして、『帝王の開岩』と『冥界の宝札』を発動。2枚ドローして、『剛地帝グランマーズ』をサーチします。そして『デリックレーン』2体を除外し1000ダメージを食らいなさい。ダスキー・エクスクルージョン！！」

ネオ&オーダー：LP 6200↓5200

「さて、これで残ったモンスターは1体のみですね」

渦巻く闇にクレーン列車が呑み込まれ、漆黒の衝撃波が2人を襲う。

これで残るカードはターン終了時に自爆する『デリッククレーン』1体のみ。ターンプレイヤーであるオーダーに手札も無い以上、防御の手は完全に消滅した。

「さて、これでわたくしのフィールドにはモンスターが3体、攻撃力の合計は7600。そちらには1体、攻撃力は2800。その差は4800と僅かにライフが残ります」

フレイが手札を1枚抜き取って見せる。『冥界の宝札』で引いたカードでも無く、『帝王の開岩』で引き寄せたカードでも無く、元々除外されていたフィールド魔法を。

「フィールド魔法『真帝王領域』を発動。これで、どうなるか分かりますよね」

「ひっ!」

「貴方達、もう一度訓練生からやり直して来なさい、バトル! 『怨邪帝ガイウス』で攻撃! 『デリーティング・ギガイーヴイル!』」

「ぐげえっ!」 「もるっばあ!」

怨邪帝ガイウス：ATK 2800 ↓ 3600

ネオ&オーダー：LP 5200 ↓ 4400

「これでトドメです。『凍氷帝メビウス』と『烈風帝ライザー』でダイレクトアタック!





底には、しかし何だか教え子達の成長を喜んでいるようにも黎達には見えた。

事実、フレイの表情は呆れているが、口調は全く怒つても嘆いてもいない。苦笑というのが一番合致するだろう。きっと彼らの成長が嬉しく、そして未だに自分を超えていない事に複雑な心境なのだろうか。

「……何をしている」

そんな時だった。城門が開いてジョーカーが現れたのは。

S I D E : フレイ

おや、ちよいとタイミングが不味い時に出て来られてしまいました。それともこのタイミングを見計らってましたかね。

「何をしていると聞いたんだよ、お前ら」

「えー……、ちよつと昔の教え子を鍛え直しました♪」

こういう時は大人の必殺技第一弾、苦笑い！

「ザっけんな！ 仮にも重要な建造物の前で何やらかしてやがる！」

失敗！

ならば処世術第二弾、責任転嫁と論旨すり替え！

「しかしジョーカー、わたくし一人にフルボッコにされるとは、門番として如何なものかと思えますよ」

「誤魔化したつもりか！ 第一、お前レベルの奴相手にフルボッコで済んでれば上出来だろうが！」

また失敗！

ここは第三弾、スルー！

「ビーでも良い事はさて置きジョーカー、黎さんが貴方にリターンマッチを申し込むそうです。受けてくれますよね？」

「その前に申し開きは無いのかお前は！」

またまた失敗！

だったたら——

「ええい、もう良い！ 昔からお前はそうだ！ 小さなミスは特に償おうとせずにより過ごす！ ちつとも変わってないな！」

「そりや三つ子の魂百まで、ですから。そう易々と変わると思ったら大間違いですよ！」

「や・か・ま・し・い！」

ドヤアとドヤ顔を見せつけてやると、いい加減キレたジョーカーは剣を抜いて構えましました。

おや、流石に挑発が過ぎましたかね。ですがそっちがその気ならこちらも……。

ゴウツ

「！」

「剣を仕舞って下さい、ジョーカー。ここは戦場ではありません故。お詫びは後で正式に致します」

「……チツ」

ふう、わたくしもまだまだ青い。

後でちゃんと頭下げないといけませんね。

S I D E : 黎

フレイの全身から吹き出た気迫、それは明らかに人や精霊が辿り着ける限界を超えていた。成程、これが1万の時を経て磨き上げられた実力か……。

その後、ジョーカーは渋々といった様子で俺達を城の奥地では無く、入口のエントランスとでもいうべき広い空間へと案内した。聖域の奥では無いからか、それとも克服し

たからか、例の激痛はやって来ない。

「精霊界は今、とある一つのデュエルの形式を試験的に導入している」

「……ある形式？」

和服美人のポーラが首を傾げた所を見ると、どうやらまだそんなに『試験的に導入された形式のデュエル』は広まっていないようだ。

「これだ」

ジョーカーがパチン、と指を鳴らすと石畳の地面に無数の光が浮き上がった。

よく見るとその造形は長方形の光の集まり、それも砂時計のように同じ群れの集まりを線対称にして組み合わせたものだ。

「これは……」

「ペンデュラムゾーンとEXモンスターゾーンを同時に採用したフィールドだ。通称は精霊式マスタールール、まだ正式には決まってない仮名だが、許せ」

マジかよ……。

ジョーカーは「ルールだ」とホログラムの取扱説明書を取り出し、俺達に投げ渡す。

ざっと見た感じではペンデュラムゾーンのある新マスタールールって所だろう。融合モンスターなんかはメインモンスターゾーンに召喚でき、ペンデュラムは不可。しかもEXモンスターゾーンがあるって事は……。

「もしお前が自らの闇と真実向き合えたと言うのなら、この挑戦を受けて立つよな？」  
ニイ、と笑うジョーカー。

この野郎、俺を誘ってやがる。未知のフィールドに俺がどう反応するのか、そして敵に有利な場で戦えるのか、と。

普通ならば躊躇う。何一つとして既知の存在が無い世界だ。尻込みしたって俺は少なくともそいつを責めない。

だが……。

「受けて立つ。ちよつとした縁でコレは知っているんでね」

「良いだろう」

ガシャン、と俺の左腕のデュエルディスクが展開しブレードが広がる。

一方でジョーカーもディスクを召喚し、剣と盾を背負って構えた。

「行くぞ、小僧。ここで負けたなら、もう貴様に挑む機会は与えられないと思え」

「上等。その上から目線の鼻っ柱、叩き折ってやるよ」

「フツ、行くぞ！」

「負けるなよ、主殿！」

「……サー、レッツリベンジ！」

「落ち着いて全力を發揮して下さいねー！」

「頑張れ、黎ー！」

「デュエル！」

黎 VS ジョーカー

LP 4000 VS LP 4000

to be continued

## STORY 84 : アーク VS サーキット

「デュエル！」

黎 VS ジョーカー

LP 4000 VS LP 4000

SIDE : 無し

「先攻はオレだ！」

「来い、全力でお前をブチ抜いてやる！」

神々しくも重々しい威厳を放つ城にて、光の結晶をかけたデュエルがとうとう開始された。黎にとっては嘗て苦い敗北を喫した雪辱戦。ジョーカーにとってはチャレンジャーの実力を測りつつも打ち倒す試練の戦い。それぞれが重大な責務を背負ったデュエルだ。



互いのフィールドに1ーマス、そして両者が使う事が出来る2マス。合計24マスのカードゾーンが淡い光を放つ。

「先攻はドローできない!」

「え、マジなの?」

「マジですねぇ」

「マジだ。先攻優位を崩すための措置だそうだ」

「オレは永続魔法『凡骨の意地』を発動! ドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターだった時、相手に見せる事で追加でドローできる!」

凡骨の意地

【永続魔法】

ドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターだった場合、そのカードを相手に見せる事で、自分はカードをもう1枚ドローする事ができる。

「続いてモンスターを守備表示で召喚! カードを2枚伏せ、ターンエンド!」

ジョーカー：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：セットモンスター1体

：伏せカード2枚、『凡骨の意地』

「俺のターン、ドロー！」

「先に言っておくが、このデッキは先日のとはワケが違う。貴様を本気で叩き潰し、2度とこの地を踏ませないために徹底的にブツ潰すためのデッキだ。腹括れよ？」

それを聞いた黎は、ニヤリと笑う。

「上等」

そう言つて手札のカードを1枚抜いてディスクに叩き付けた。

S I D E：黎

「俺の先陣はこいつだ！ 来い、『ゲートウェイ・ドラゴン』！」

『ギユウオツ！』

フィールドに六角形の金属板が現れて3枚の戸に分かれて開き、中から細い竜が現れ

る。

さて、このフィールドを使うのなら遠慮は無用。新しいデツキのお披露目だ！

『ゲートウェイ・ドラゴン』の効果発動！ 1ターンに1度、手札から闇属性・ドラゴン族・レベル4以下のモンスターを特殊召喚できる！ 俺は『スニツフイング・ドラゴン』を特殊召喚！』

『ギユウ〜！』

「この瞬間『スニツフイング・ドラゴン』の効果発動！ このモンスターの召喚・特殊召喚に成功した時、デツキから同名モンスターを1体手札に加える！」

ゲートウェイ・ドラゴン：ATK 1600

スニツフイング・ドラゴン：ATK 800

再び3枚の戸に分かれて開く金属板。亜空間に繋がるその中から、今度は蜥蜴のような赤い竜が二足歩行で飛び出した。

ゲートウェイ・ドラゴン（効果モンスター）

星4

## 闇属性／ドラゴン族

ATK 1600 / DEF 1400

このカード名の(1)の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

(1)：相手フィールドにリンクモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

(2)：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

手札からレベル4以下のドラゴン族・闇属性モンスター1体を特殊召喚する。

スニツフイング・ドラゴン（効果モンスター）

星2

## 闇属性／ドラゴン族

ATK 800 / DEF 400

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「スニツフイング・ドラゴン」1体を手札に加える。

さて……、始めるぞ。

俺は今からジョーカーを倒す。生き残るためでも、誰かを殺すためでも無い。ただデュエルに勝つために、ジョーカーを討つ！

「行くぞ、ジョーカー。俺の全力、全身全霊、全部をお前にブチ込んで打ち倒す！」

「やれるモンならやってみる！」

「おうよ！」

そうして俺は手を思い切り空に向けて。

「現れる、常闇とこやみに揺蕩たゆたうサーキット！」

紫電を飛ばし、銀色の回路を産み出した。

「これは！」

「む！」

「アローヘッド確認！ 召喚条件はレベル4以下のドラゴン族モンスター1体！ 俺は『スニツフィング・ドラゴン』をリンクマーカーにセット！」

銀の回路には8つの三角形が付属しており、指示した紅色の蜥蜴龍は、その内の左の矢印に飛び込み赤く光らせる。

条件が整い回路の中央にある召喚ゲートが白く光ると、中から新たなモンスターと

なって生まれ変わった。

リンクメーカー  
L M Ⅱ左

「リンク召喚！ 現れる、『ストライカー・ドラゴン』！」

『グオオオオオ！』

飛び出したのは青い翼竜。エネルギー体で作られた羽、鉄で出来た肉体、発火装置を思わせる銃のパーツ。これらを組み合わせたメカメカしい生命が、俺の前に降り立った。

「こ、これは、新しい召喚!?!」

「リンク召喚ですね、素材の縛りが非常に緩和されたシリーズです。基本的にあのEX  
モンスターゾーンにのみ召喚可能です」エクストラ

「守備力を持たず、リンクメーカーという矢印を活用して戦うモンスターだ。火力に難があるモンスターも多いが、効果は強力だぞ」

「……今まで出さなかったという事は、これは取って置きの筈。……出し惜しみしてない、サーは本気」

ジョーカーは言った。あのデッキは俺を叩き潰すためのものだ。

その時に放たれた威圧感に俺は――

『ストライカー・ドラゴン』の効果発動！ リンク召喚成功時、デツキからフィールド魔法『リボルブート・セクター』を手札に加える！ そのまま発動！」

――俺は喜びの感情を隠せなかった。

背筋が震える程の昂揚。痺れるくらいにの気迫。弱者を睨み殺す程の視線。

そう、これだ。この猛者と相対し、命云々を無視できる程の、全身の血潮が滾るような、互いの全ての心身を削り取るかの如き魂のぶつかり合い。

これが、欲しかったんだよ！

ストライカー・ドラゴン（リンク・効果モンスター）

リンク1

闇属性／ドラゴン族

ATK 1000

【リンクマーカー：左】

レベル4以下のドラゴン族モンスター1体

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードがリンク召喚に成功した場合に発動できる。



デッキから「リボルブート・セクター」1枚を手札に加える。

(2) : 自分フィールドの表側表示モンスター1体と自分の墓地の「ヴァレット」モンスター1体を対象として発動できる。

対象のフィールドのモンスターを破壊し、対象の墓地のモンスターを手札に加える。

リボルブート・セクター

### 【フィールド魔法】

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : フィールドの「ヴァレット」モンスターの攻撃力・守備力は300アップする。

(2) : 自分メインフェイズに以下の効果から1つを選択して発動できる。

●手札から「ヴァレット」モンスターを2体まで守備表示で特殊召喚する(同名カードは1枚まで)。

●相手フィールドのモンスターの数が自分フィールドのモンスターよりも多い場合、その差の数まで自分の墓地から「ヴァレット」モンスターを選んで守備表示で特殊召喚する(同名カードは1枚まで)。

フィールドの状態が切り替わり、大聖堂から金属的な倉庫風の場所になる。

『リボルブート・セクター』はとあるモンスターの胸部パーツを付け替えるための整備工場だと思っていたのだが、俺達がデュエルしやすいよう拡張してくれたようだ。

「フィールド魔法の効果発動、1ターンに1度 ヴァレット」モンスターを2体まで、手札から守備表示で特殊召喚できる！ 来い、『アネスヴァレット・ドラゴン』！ 『メタルヴァレット・ドラゴン』！」

『ギョオ〜！』

『グガア〜！』

『リボルブート・セクター』の更なる効果により、 ヴァレット」モンスターの攻撃力・守備力は3000アップする！」

アネスヴァレット・ドラゴン：DEF 2200↓2500  
メタルヴァレット・ドラゴン：DEF 1400↓1700

青色の電子情報から構成されたのは、頭が銃弾になっている黄色と青の鉄龍。

少し消費が大きいが、早速2対2交換と行こうか。

「再び現れる、常闇に揺蕩うサーキット！ 召喚条件は ヴァレット」モンスターを含む、ドラゴン族2体！ 俺は『ストライカー・ドラゴン』と『アネスヴァレット・ドラ

ゴン』をリンクマークにセット！ サーキット・コンバイン！」

LMⅡ左・下

「リンク召喚！ 撃ち抜け、『ソーンヴァレル・ドラゴン』！」  
『ヴォオオオオオ！』

ソーンヴァレル・ドラゴン：ATK 1000

回路の矢印を2つ光らせ、呼び出したのは猟銃のように2つ銃身が並んだ両腕の龍。そういうやりボ様ってこいつ2積みしてたんだよな、いや有用なモンスターだけど。

「あれ、攻撃力が変わってない？」

「……そういう事も、ある」

「リンクモンスターとはそういうものです」

『ソーンヴァレル』の効果発動！ 手札を1枚捨て、場の表側表示モンスターを1体破壊する！」

墓地ポケットにサーチした『スニッフイニング・ドラゴン』を落として飲み込ませる。

今ジョーカーの場にいるモンスターは裏側表示モンスターののみ。必然、俺が狙うカードは。

「俺は『メタルヴァレット』を破壊する！」

「自分のモンスターを?!」

「この瞬間、『メタルヴァレット・ドラゴン』の効果発動！ このモンスターがリンクモンスターの効果の対象になった時、自分自身を破壊する！ そしてその時に同じ縦列にあった相手のカードを全て破壊する！」

「同じ縦列にあるカードは……、裏守備モンスターと伏せカード1枚！」

「……これで一気に2枚のカードを破壊できる」

ソーンヴァレル・ドラゴン（リンク・効果モンスター）

リンク2

闇属性／ドラゴン族

ATK 1000

【リンクマーク：左／下】

「ヴァレット」モンスターを含むドラゴン族モンスター2体

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札を1枚捨て、フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。  
そのモンスターを破壊する。

この効果でリンクモンスターを破壊した場合、さらにそのリンクマーカーの数まで自分の手札・墓地から「ヴァレット」モンスターを選んで特殊召喚できる（同名カードは1枚まで）。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分はリンク2以下のモンスターをEXデッキから特殊召喚できない。

メタルヴァレット・ドラゴン（効果モンスター）

星4

闇属性／ドラゴン族

ATK 1700 / DEF 1400

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：フィールドのこのカードを対象とするリンクモンスターの効果が発動した時に発動できる。

このカードを破壊する。

その後、このカードが存在していたゾーンと同じ縦列の相手のカードを全て破壊す

る。

(2)：フィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズに発動できる。

デッキから「メタルヴァレット・ドラゴン」以外の「ヴァレット」モンスター1体を特殊召喚する。

ソートオフガンの龍の腕に飛び込んだ青色の銃弾龍が光り輝き、射出されて直線に突き進む。

これで2枚ともブチ抜く、何のモンスターをセットしたかは知らないが伏せたまま墓地に行つて貰うぞ。

「そうはさせるか、トラップ発動『マジック・プリズム』！ フィールドのモンスターを全て表側守備表示にし、このターン光属性モンスターの効果による破壊を無効にする！」

「何!?!」

「リンクモンスターは守備表示にはならないが、オレのセットしておいたモンスター『魔導雑貨商人』は表側守備表示になるぜ！」

魔導雑貨商人：DEF 700

ゲートウェイ・ドラゴン：ATK 1600 ↓ DEF 1400

プリズムの発した光によって横向きだったセットカードが縦になり、更には裏から表へ。現れたのは複数の腕に商品を携えたコガネムシだった。

コガネムシは水晶のバリアによって保護され、その表面に俺の銃弾龍が着弾しても掠り傷一つ負わずにジョーカーのデッキに手を伸ばす。

「リバー効果発動！ デッキの上から魔法か罠をめくるまで出てきたモンスターカードを墓地へ送る！」

魔導雑貨商人（効果モンスター）

星1

光属性／昆虫族

ATK 200 / DEF 700

リバーズ：魔法・罠カードが出るまで自分のデッキをめくり、そのカードを手札に加える。

それ以外のめくったカードは全て墓地へ送る。

手札を見る。『禁じられた聖杯』等ならリバースした瞬間に発動しモンスター効果を無効にできるが……、今の手札には無いか。

ジョーカーのデッキからカードが墓地へ送られる。『クイーンズ・ナイト』、『竜角の狩猟者』、『おジャマグリーン』、『沼地の魔神王』、『閃光の騎士』、『聖騎士アルトリウス』、『インペリアル・バウアー』、『エレキテルドラゴン』、『ドラコニアの獣竜騎兵』、『おジャマブラック』、『幻殻竜』……。

「……………」  
「『闇の量産工場』を手札に加える」

あれがあるって事は……、しかも……。

次の奴の手がいくつも浮かぶ。例えば次のターンでなくとも何時それが飛んで来るか分かったもんじやない。ライフ4000の世界でそれらを喰らったら間違いなく致命傷だ。

しかも奴のモンスターは破壊に失敗した、間違いなくこれは痛手と言える。

予測できる奴の次の手を破る方法は無い。ここは少しでも奴にダメージを与えておかないと。

「<sup>みたび</sup>三度現れる、常闇に揺蕩うサーキット！ 召喚条件はトークン以外のモンスター2体





次々と別のモンスターに切り替わるなんて」

「それがリンクモンスターの強みです、マスター。あのモンスター達は次から次へと姿を変えて、より強いモンスターに切り替わっていくのです」

「バトルだ！ 俺は『スリーバーストショット・ドラゴン』で『魔導雑貨商人』を攻撃！  
『スリーバーストショット』の攻撃は貫通効果を持つ！」

3つの砲門にエネルギーを漲らせ、敵の昆虫を狙う砲撃龍。

この攻撃を通せば奴に1700のダメージだ！

「リバースカードオープン！ 速攻魔法『ポラリス・スペクトル偏光分散』！ オレの光属性モンスターとの戦闘でダメージを受ける時、そのダメージを相手に与え、更に両者のモンスターを破壊する！」

やはりそこで打って来たか！

だが甘い、その程度は想定内の範囲内だ！

『スリーバーストショット・ドラゴン』の効果発動！ 1ターンに1度、ダメージステッ  
プに発動した効果を無効にする！ よって『偏光分散』の効果は無効となる！」

「何!？」

互いのモンスターの間に発生した分光器によってビームが乱反射される。しかし攻撃に耐えるだけの耐久性が無かったのか途中で分光器は碎け散り、『魔導雑貨商人』を守

りきる事はできなかつた。

「ぐおおおおおお！」

「どうだ、先制点は俺が貰ったぜ！」

ジョーカー：LP 4000↓2300

「ぐっ！ だが墓地の『偏光分散』のもう1つの効果を発動！ 戦闘ダメージを受けたバトルフェイズ終了時、このカードを除外する事で受けたダメージ以下の攻撃力を持つ光属性モンスターを墓地から手札に加える！ オレが受けたダメージは1700！ よって『クイーンズ・ナイト』を手札に戻す！」

スリーバーストショット・ドラゴン（リンク・効果モンスター）

リンク3

闇属性／ドラゴン族

ATK 2400

【リンクマーカー：上／左／下】

トークン以外のモンスター2体以上

(1) : 1ターンの1度、ダメージステップにモンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時に発動できる。

その発動を無効にする。

(2) : このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

(3) : このカードをリリースし、自分の墓地のリンク2以下のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

その後、手札からレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚できる。

この効果はこのカードが特殊召喚したターンには発動できない。

ボラライズ・スペクトル  
偏光分散 (オリジナル)

### 【速攻魔法】

(1) : 自分の光属性モンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージステップに発動できる。

その戦闘によって発生するダメージは、ダメージを受けない方が受ける。

その後、戦闘を行ったお互いのモンスターを戦闘破壊扱いで破壊する。

(2) : 自分の光属性モンスターとの戦闘によって自分が戦闘ダメージを受けたバトルフェイズ終了時、墓地のこのカードを除外して発動できる。

自分の墓地から受けたダメージ以下の攻撃力を持つ光属性モンスターを1体選び、手札に加える。

ダメージこそ与えたが……、『クイーンズ・ナイト』をサルベージさせてしまったか。状況は悪化したかも知れないな。

「俺はカードを1枚セット。そしてこのエンドフェイズに『メタルヴァレット・ドラゴン』の効果を発動。『ヴァレット・ドラゴン』モンスターは破壊されたターンの終わりに、デツキから名前の違う『ヴァレット』モンスターを特殊召喚する事ができる。俺はデツキから『シエルヴァレット・ドラゴン』を特殊召喚」

『ゴアイツ!』

「フィールド魔法の効果で、守備力が300アップする」

シエルヴァレット・ドラゴン : DEF 2000 ↓ 2300

青い弾丸龍によって別の弾丸龍が呼び出される。弾丸を縦に割ったような肩当の、黄

色の装甲のドラゴンが俺の場に蹲るような姿勢で現れた。

シエルヴァレット・ドラゴン（効果モンスター）

星2

闇属性／ドラゴン族

ATK 1100 / DEF 2000

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：フィールドのこのカードを対象とするリンクモンスターの効果が発動した時に発動できる。

このカードを破壊する。

その後、このカードが存在していたゾーンと同じ縦列のモンスター1体を選んで破壊し、その隣のゾーンにモンスターが存在する場合、それらも破壊する。

（2）：フィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズに発動できる。

デッキから「シエルヴァレット・ドラゴン」以外の「ヴァレット」モンスター1体を特殊召喚する。

「ターンエンドだ」

黎：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：スリーバーストショット・ドラゴン（ATK 2400）

：シエルヴァレット・ドラゴン（DEF 2300）

：伏せカード1枚、リボルブート・セクター（フィールド魔法）

フィールドは俺が巻き返し、モンスターが2体。

しかし奴の次のターンが問題だ、確実に更に巻き返される。

「オレのターン！ この瞬間、永続魔法『凡骨の意地』の効果発動！ ドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターの場合、それを開示して更なるドローを可能にする！ オレがドローしたのは通常モンスター『フリーコーの魔砲石』！ よって更なるドロー！ 『マンドラゴン』、ドロー！ 『ハロハロ』、ドロー！ 『ラブラドライドラゴン』、ドロー！ ……ここで終了だ。そして魔法カード『闇の量産工場』を発動！ 墓地から通常モンスターの『閃光の騎士』と『聖騎士アルトリウス』を手札に戻す！」

## 闇の量産工場

## 【通常魔法】

(1)：自分の墓地の通常モンスター2体を対象として発動できる。  
そのモンスターを手札に加える。

これでジョーカーの手札には通常モンスターが7体。

状況は、あまりよろしく無い。俺の手には一撃必殺を防ぐためのカードが無い。頼みの守りは伏せカード1枚のみ。運任せとは、何とも歯痒い。

そして奴のデッキは前回とは違い、本当の本気のデッキ。ゾクゾクして来たぜ。

「さあ、行くぞ小童！」

宣言と同時にジョーカーが2枚手札からカードを右手に持った。

来る……。

「オレはスケール2の『フーコーの魔砲石』とスケール7の『閃光の騎士』で、ペンデュラムスケールをセッティング！」

ディスクに配置される、砲口を持った大きな振り子と、光り輝く騎士。それぞれが青白い光を放つ柱にて上空まで送り出され、その足元に意匠化された2と7の数字を従え



る。

「これは、一体……!?!」

「……すぐに分かる。……成程、これは確かに前回と違って、本気」

「これでレベル3から6までのモンスターを同時に召喚可能！ 天に弧を描く光の共鳴よ、闇を従え魂を震わせよ！」

### ☆3 || ☆6

「ペンデュラム召喚！ 現れよ、オレのモンスター達！」

虚空にて円を描いた振り子。そのサークルの中から無数に飛び出す、モンスターの光。

「レベル3、『ハロハロ』！」

レベル4、『クイーンズ・ナイト』！」

レベル5、『マンドラゴン』、『フーコーの魔砲石』！」

レベル6、『ラブラドライドラゴン』！」

やはり一度に来たか、大量召喚！

ハロハロ：ATK 800

クイーンズ・ナイト：ATK 1500

マンドラゴン：ATK 2500

フーコーの魔砲石：ATK 2200

ラブラドライドラゴン：DEF 2600

紫の光と橙の光、そして金の光がそれぞれモンスターの姿を取る。魔女のローブを羽織った南瓜、赤い鎧の騎士に楽器を何故か改造させた悲しい龍、大砲を乗せた大型の振り子、そして白く光り輝く宝石を埋め込まれた龍。

厄介な、チューナーが2体も混ざってやがる。しかも閨属性を平然と混ぜているあたり、カオスモンスターの召喚まで視野の範囲内か。恐れ入る、こいつはデツキもタクティクスも半端じゃなくハイレベルだぜ。

おまけに特殊ルールで魔法・罨ゾーンを圧迫していない。

「な、何あれ!?!」 モンスターが一瞬で5体も現れた!?!」

「娘、これがペンデュラム召喚だ」

「ペンデュラム召喚?」

そうだ、とフィオに説明するためにジョーカーは静かに頷く。

「ペンデュラムモンスターという特殊なカードをペンデュラムカードゾーンに配置。そしてそのスケールの範囲内にあるレベルのモンスターを1ターンの1度だけ特殊召喚できる。この場合は2から7なので、レベル3から6を召喚可能だ」

「何、だって……!?!」

フィオ、そのネタはオサレなのかキバヤシなのかどっちだ。

「そしてフィールドから墓地送られるペンデュラムモンスターは墓地では無くエクストラデッキへ表側表示で加わる。当然、このエクストラへ加わったペンデュラムモンスターもペンデュラム召喚が可能だ」

閃光の騎士（ペンデュラム・通常モンスター）

星4

光属性／戦士族

ATK 1800 / DEF 600

【Pスケール：青7 / 赤7】

【モンスター情報】

神の振り子により新たな力を会得した騎士。

今こそ覚醒し、その力を解放せよ！

フリーコーの魔砲石（ペンデュラム・通常モンスター）

星5

闇属性／魔法使い族

ATK 2200 / DEF 1200

【Pスケール：青2／赤2】

（1）このカードを発動したターンのエンドフェイズに、フィールドの表側表示の魔法・罨カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

【モンスター情報】

夢幻の空間を彷徨う機械仕掛けの生命体、だったはずである。

一番の謎は、過去の記憶が殆ど残っていない・事だ。

その理由……なのか、……干渉……て拒……ている……？  
 ……消去……

「い、インチキ効果もいい加減にしろ！」

「インチキじゃあネエよ……。さて、行くぞ！」



クリムゾン・ブレード：ATK 2800

連続して出現する2体の大型シンクロモンスター、惑星すら超える巨大なドラゴンと焔の二刀流を持った大剣豪。

デカいな、種族も属性も何も関係無いシンクロモンスター同士であっても、素材を一気に並べられるのなら召喚も容易ってワケかよ……！

星態龍（シンクロ・効果モンスター）

星1

光属性／ドラゴン族

ATK 3200／DEF 2800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このカードのシンクロ召喚は無効化されず、このカードがシンクロ召喚に成功した時、魔法・罫・効果モンスターの効果は発動できない。

また、このカードが攻撃する場合、このカードはダメージステップ終了時まで、このカード以外のカードの効果を受けない。

クリムゾン・ブレード（シンクロ・効果モンスター）

星8

炎属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 2600

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1) : このカードが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送った場合に発動する。

次の相手ターン、相手はレベル5以上のモンスターを召喚・特殊召喚できない。

「大型シンクロモンスターが、2体!?!」

「召喚素材として墓地に送られたペンデュラムモンスターは、EXデッキに表側表示で加わる」

「エクストラに!?!」

「そしてペンデュラムスケール内のレベルであれば、エクストラデッキからペンデュラム召喚できる!」

「そんな、それじゃ戦線が途切れないじゃないか!」

「……あの途切れない戦力補充こそ、ペンデュラムの強み」

「まだだ！ オレは『増援』を発動！ デッキからレベル4以下の戦士族、『キングス・ナイト』を手札に加える！ そして召喚！」

「それを召喚したって事は……！」

「そうだ。『キングス・ナイト』を召喚した時、自分フィールドに『クイーンズ・ナイト』がいれば、デッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚できる！ 現れる、『ジャックス・ナイト』！」

キングス・ナイト：ATK 1600

ジャックス・ナイト：ATK 1900

これで合計攻撃力は11000、防ぎきれるか……!?

「バトルだ！ まずは『星態龍』で『スリーバーストシヨット・ドラゴン』を攻撃！  
スターベルト・バースト！」

「『スリーバースト』ッ！」

黎：LP 4000↓3200



「続けて『クリムゾン・ブレード』で『シエルヴァレット・ドラゴン』を攻撃！  
ド・マードー！」

「くっ！」

星空が降って来たような光線と、赤く燃える剣により、俺のモンスターが一瞬で消滅する。

これでガラ空き、奴にはまだ攻撃できるモンスターが3体残っていて、その合計値は5000！

『クリムゾン・ブレード』の効果により、お前は次のターンレベル5以上のモンスターを特殊召喚できない。だがこれで終わりなら関係無い！ 『クイーンズ・ナイト』でダイレクトアタック！ ソード・オブ・ハート！」

強力な踏み込みから放たれる分厚い鉄剣の一撃。それが眼前に迫ると同時に、俺はデュエルディスクのボタンを押した。

「畏発動、『リペア・チェンバー』！ 『リボルブート・セクター』を手札に戻し、墓地から効果を無効にして『ヴァレット』モンスターを特殊召喚する！ 来い、『アネスヴァレット・ドラゴン』！」

『グオオオオ！』

アネスヴァレット・ドラゴン：DEF 2200

ゴンツツ！と硬質な音を立て、黄色の麻酔銃弾の龍が攻撃を受け止める。一瞬派手なスパークが飛び散るが、その程度では俺のモンスターはビクともしない。

ジョーカーのフィールドで攻撃可能なモンスターに、こいつを倒せるのはいない。これで攻撃は実質終了だ。

「ならばオレは墓地の『マジック・プリズム』の効果を発動！ このターン『キングス・ナイト』は攻撃できないが、『クイーンズ・ナイト』の攻撃力にその数値を加える！ よって攻撃力は3100だ！」

「何だと!？」

マジック・プリズム（オリジナル）

【通常罫】

(1)：フィールドのモンスターを全て表側守備表示にする。

このターン、光属性モンスターは効果では破壊されない。

(2)：墓地のこのカードを除外し、自分フィールドの光属性モンスターを2体選択して発動する。

ターン終了時まで選択した片方のモンスターはこのターン攻撃できず、もう片方のモンスターの攻撃力は攻撃できないモンスターの攻撃力分アップする。

この効果で通常モンスターの攻撃力がアップし、またそのモンスターが相手の効果モンスターを戦闘で破壊した時、1枚ドロウする。

リペア・チェンバー（オリジナル）

【通常罠】

このカードの発動に対し、相手はカードの効果が発動できない。

（1）：自分フィールド、または除外状態の自分の「リボルブート・セクター」1枚を手札に戻して発動する。

自分の墓地から「ヴァレット」モンスターを1体、ターン終了時まで効果を無効にして特殊召喚する。

（2）：セットされたこのカードが相手ターンに破壊された場合に発動できる。

自分の墓地から闇属性・ドラゴン族のリンクモンスターを1体特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃力が半分になり、ターン終了時まで効果を発動できない。

クイーンズ・ナイト：ATK 1500↓3100

一度は止めた筈の攻撃の圧が強まり、麻酔銃弾龍の頭に食い込んで行く。そのまま包丁で南瓜を切るように、赤鎧の女騎士は敵を両断した。

『アネスヴァレット・ドラゴン』、撃破！　そして1枚ドロ―！　まだ攻撃は残っている、オレは『ジャックス・ナイト』でダイレクトアタック！

「ぐああああああああつー！」

黎：LP 3200↓1300

「黎ー！」「主殿！」「黎さん！」「サーー！」

くっそ、いつてえ……。

ライフは何とか残せたが、逆転されちゃった。もう一発喰らったら御陀仏か。

「黎、大丈夫!？」

「辛うじて、な……！」

フィオの言葉に返した通り、実際マジで辛うじてだ。こいつの実力は本当に計り知れない……！

「バトル終了、そして魔法カード『融合』を発動！ オレは場の絵札の三銃士を融合！」  
「来るか！」

「赤き鎧の心の騎士よ、金色の鎧の三葉の騎士よ、青き鎧の剣槍の騎士よ！ 渦巻く光と一体となりて、新たな姿をなるが良い！ 融合召喚！ 出でよ、レベル9！ スートを統べし紫の騎士！ オレ自身、『アルカナ ナイトジョーカー』！」

ATK : 3800

「ここで、とうとう奴自身の登場か……！ 今回は前回とは違い、あいつそのものがフィールドに出ている！」

「オレはカードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「このエンドフェイズ、破壊された『シエルヴァレット』と『アネスヴァレット』の効果が発動。デッキから同名以外の『ヴァレット』モンスターを特殊召喚する。出でよ『エクスプロードヴァレット・ドラゴン』、『ヴァレット・キャリバー』！」

『『ヴォウウツ！』』

「成程、『クリムゾン・ブリーダー』の効果で召喚制限が発生するのは次の貴様のターン。まだオレのターンであるなら、レベル7のモンスターも召喚できるってワケか」

「その通りだ」

エクスプロードヴァレット・ドラゴン：DEF 2000  
 ヴァレット・キャリバー：DEF 100

「なら改めてここでターンエンドだ。本来ならここで『魔砲石』のペンデュラム効果で相手フィールドの表側表示の魔法か罠を1枚破壊できるが、お前のフィールドに適合するカードが無いためこれは不発となる」

「そっか、さっきの『リペア・チェンバー』はこれを避けるためでもあったんだ」  
 「……効果が上手く噛み合った」

ジョーカー：LP 2300

手札：『聖騎士アルトリウス』

フィールド

：アルカナ ナイトジョーカー（ATK 3800）

：クリムゾン・ブリーダー（ATK 2800）、星態龍（ATK 3200）

：閃光の騎士（7）∥フーコーの魔砲石（2）

：伏せカード2枚、凡骨の意地（永続魔法）

「俺のターン、ドロロー！」

相手の場を見る。

魔法・罨ゾーンには伏せカードが2枚。メインモンスターゾーンには両端に大型シンクロモンスター。そしてこっちから見て左のエクストラモンスターゾーンには奴自身がいる。

中々に固い布陣だ、大技で吹っ飛ばさないと次のターンで押し負けるだろうな。

「俺は手札から『スクイブ・ドロロー』を発動！ 自分フィールドの『ヴァレット』モンスターを1体破壊し、2枚ドロローする！ 俺は『エクスプロードヴァレット』を破壊！」

スクイブ・ドロロー

【速攻魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：自分フィールドの「ヴァレット」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを破壊し、自分はデッキから2枚ドロローする。

……来た！

このターンで決める！

「フィールド魔法『リボルブート・セクター』、発動！ 相手フィールドに存在するモンスタ―が俺のモンスタ―より多い時、その差の数まで墓地から“ヴァレット”モンスタ―を特殊召喚できる！ 蘇れ『アネスヴァレット・ドラゴン』、『シエルヴァレット・ドラゴン』！」

『ガアツ！』

『グゴオツ！』

「『リボルブート・セクター』の効果で、攻撃力・守備力300アップ！ そして『トリガー・ヴルム』を通常召喚！」

『オ、オイツ！』

ヴァレット・キャリバー：DEF 100↓400

アネスヴァレット・ドラゴン：DEF 2200↓2500

シエルヴァレット・ドラゴン：DEF 2300↓2600

トリガー・ヴルム：ATK 600



「凄い、黎も一瞬でモンスターを複数並べた！」

「一歩も譲りませんねえ、お互いに。陣形を整えて攻め込んだかと思えば、すぐ立て直した相手から反撃を貰う。一度のミスが即致命傷になりますよ」

「現れる、常闇に揺蕩うサーキット！ 召喚条件は効果モンスター2体以上！ 俺は『ヴァレット・キャリバー』『アネスヴァレット・ドラゴン』『シエルヴァレット・ドラゴン』『トリガー・ヴルム』の4体をリンクマーカーにセット！」

また虚空に展開される回路。そこに呼応し、銃弾龍達と三日月型の蛇が光となって飛び込み召喚ゲートが開いた。

「吹き上がれ闇よ！ 永劫の破壊と絶望を取り込み、森羅万象を焼き払え！」

L M 上・左下・下・右下

「リンク召喚！ リンク4！ 君臨せよ、『トポジック・ボマー・ドラゴン』ツ！」  
『GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！』

トポジック・ボマー・ドラゴン：ATK 3000

橙色のボディ、無限や三葉の形を取り込んだ模様、全体的に丸くずつしりとした肉体のドラゴンが、重低音の地響きと共にフィールドに降り立つ。

敵が複数いるのなら、〃トポロジック〃の定番だ！ここで一気に薙ぎ払う！

「リンク4……！しかも攻撃力3000、エースの登場つてトコかな？」

『トリガー・ヴルム』のモンスター効果発動！このモンスターが閥属性リンクモンスターのリンク素材になった時、墓地からそのモンスターのリンク先に、攻撃表示で特殊召喚できる！」

トリガー・ヴルム：ATK 600

「この瞬間、『トポロジック・ボマー・ドラゴン』のモンスター効果発動！リンクモンスターのリンク先にモンスターが特殊召喚された時、フィールドのメインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊する！」

「何だ?!？」

「消し飛ば、フルオーバーラップ！」

ガチン、と撃鉄の落ちる音と共に丸い龍の翼が金色に輝き光線を四方八方に飛ばす。

破壊光線と化したそれは敵味方を問わず片端から死をまき散らし、〃ボマー〃の名を

表すように無差別に爆発を起こした。

「ぐおおおお！」

「自分のモンスターごと相手モンスターを吹き飛ばした!？」

「そして『トリガー・ヴルム』がリンクモンスターの効果で破壊・除外された時、1枚ドロートできる」

トリガー・ヴルム（効果モンスター）

星2

闇属性／ドラゴン族

ATK 600 / DEF 600

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが闇属性リンクモンスターのリンク素材として墓地へ送られた場合に発動できる。

墓地のこのカードを、そのリンクモンスターのリンク先となる自分フィールドに攻撃表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードはリンク素材にできない。

(2)：このカードがリンクモンスターの発動した効果で、破壊された場合または除外さ

れた場合に発動する。

自分はデッキから1枚ドローする。

トポロジック・ボマー・ドラゴン（リンク・効果モンスター）

リンク4

闇属性／サイバース族

ATK 3000

【リンクマーカー：上／左下／下／右下】

効果モンスター2体以上

(1)：このカードが既にモンスターゾーンに存在する状態で、このカード以外のモンスターがリンクモンスターのリンク先に特殊召喚された場合に発動する。

お互いのメインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊する。

このターン、このカード以外の自分のモンスターは攻撃できない。

(2)：このカードが相手モンスターを攻撃したダメージ計算後に発動する。

その相手モンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

手札を新たに1枚補充して、これで3枚。

そして奴にトドメを刺すためのカードは既に引いてある！

「一瞬で2体倒したか……！　だが、オレの攻撃力は3800！　攻撃力3000しかないお前の『トポロジック・ボマー・ドラゴン』では倒せない！」

「こういう手もある！　手札から永続魔法『リンク・プロテクション』を発動！　この効果により、俺の場のリンクモンスター1体を破壊とダメージから守る！」

リンク・プロテクション（アニメオリジナル）

#### 【永続魔法】

（1）：このカードが魔法&罨ゾーンに存在する限り、リンクモンスター以外の自分のモンスターは攻撃できない。

（2）：1ターンに1度、自分フィールドのリンクモンスター1体を対象として発動できる。

このターン、そのモンスターは戦闘では破壊されず、その攻撃で発生するお互いの戦闘ダメージは0になる。

その対象のモンスターが相手リンクモンスターを攻撃した場合、その相手モンスターはダメージ計算後に破壊される。

（3）：自分フィールドのリンクモンスターが破壊され墓地へ送られた場合、そのリンク

モンスター一体とフィールドのこのカードを除外して発動できる。

ターン終了時まで、相手フィールドのリンクモンスターの数が、その除外したモンスターのリンクマーカーの数以上でなければ、相手モンスターは攻撃できない。

「これで『トポロジック・ボマー・ドラゴン』は破壊されず、俺もダメージを受けない。バトルだ！『トポロジック・ボマー・ドラゴン』で『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃！『終極のマリシヤス・コード』！」

「効かねえなっ！」

真正面から浴びる光線を盾で防御するジョーカー。

一見すると無意味だが、この攻撃自体に意味がある。

「黎、一体何を……」

「この瞬間、『トポロジック・ボマー・ドラゴン』の更なる効果を発動！このカードが攻撃を行った場合、バトルした相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「ンだ?!？」

「お前の攻撃力は3800！それが2300のライフに直撃すれば、お前の負けだジョーカー！喰らえ、『エイミング・ブラスト』！」

再びチャージされる光線のエネルギー。至近距離で充填されたそれは、今度は全身か

ら衝撃波として放たれ、過たず紫の鎧の男に直撃した。

攻撃力分のダメージを直に与えるこの効果は強力無比、特に奴のような大型モンス  
ターなら猶更。これで終わりだ！

ジョーカー：LP 4200

回復している……、やはり耐えたか！

「チツ、そう簡単にはやられねえか。何を発動した」

「カウンター罠『リフレクティブ・エンハンス』だ。効果ダメージが発生した時、それを無効にし、その数値の半分だけライフを回復できる。更に回復した数値以下の攻撃力を持つ光属性モンスターを1体、デツキから手札に加える」

リフレクティブ・エンハンス（オリジナル）

【カウンター罠】

（1）：効果ダメージが発生した時に発動できる。

そのダメージを無効にし、無効にした数値の半分だけ自分のLPを回復する。

その後、回復した数値以下の攻撃力の光属性モンスターを1体デツキから手札に加える。



(2) : このカードが相手によって破壊された場合に発動できる。

このカードを自分フィールドにセットする。

奴の手札に2体目の『閃光の騎士』が加わり、俺のドラゴンの衝撃波も納まる。

これで倒せれば楽だったんだがな。

「俺はリバースカードを1枚伏せる。そして『エクスプロードヴァレット・ドラゴン』の効果発動、デッキから『シルバーヴァレット・ドラゴン』を特殊召喚！」

『グルウツ!』

「フィールド魔法の効果で攻撃力・守備力300アップ！」

シルバーヴァレット・ドラゴン : DEF 1000 ↓ 400

「ターンエンドだ」

黎 : LP 1300

手札 : 1枚

フィールド

：トポロジック・ボマー・ドラゴン（ATK 3000）

：シルバーヴァレット・ドラゴン（DEF 400）

：伏せカード1枚、リボルブート・セクター（フィールド魔法）

「オレのターン、ドロロー！ ……引いたカードは通常モンスターではないため『凡骨の意地』は使えねえ」

「……」

「だが永続罫『連成する振動』を発動！ 1ターンに1度、ペンデュラムカードゾーンのカードを1枚破壊し、デッキから1枚ドロローする！ オレは『フリーコー』を破壊し1枚ドロロー！」

連成する振動

【永続罫】

「連成する振動」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分のPゾーンのカード1枚を対象としてこの効果を発動できる。

そのカードを破壊し、その後、自分はデッキから1枚ドロローする。

改めて対面して分かる。こいつの実力はとんでも無く高い。

だが、だからこそ燃える。邪神の護衛との中で少しづつ研磨され続けた俺の力とこいつの力、どっちが本当に強いのか、魂と魂がぶつかり合うこの瞬間にこそ、戦いの中で生きた血が騒ぐ！

「この瞬間、『凡骨の意地』の効果発動！ ドローフェイズ中にドローしたのが通常モンスターなら、相手に見せる事で追加でドローできる！」

「えっ、通常ドローじゃなくても使えるの!？」

「オレが『連成する振動』でドローしたのは『ランスフオリックス』、よって1枚ドロー！ 続けて『ファイヤーオパールヘッド』、ドロー！ 更に『エンジェル・トランペッター』、ドロー！ こいつは通常モンスターではなくフィールド魔法のため、ここで効果終了だ！」

随分と、通常モンスターの比率が高い……っ！ だがそれ故に強力！ だがそれ故に確実！ 堅固な一手とカードで確実にこつちを追い詰めて来ている！

これで奴の手札は通常モンスターが4体に加え、正体不明のカード2枚、さつきサーチした『閃光の騎士』の合計7枚。厄介な……。

「フィールド魔法、発動！ 顕現せよ、『デイヴァイン・キャッスル』！」

攻めの手を緩めないジョーカーは、新たにカードを発動した。

周囲の煌めくばかりの大聖堂がより輝かしい石造りになり、一片であろうと邪悪な存在を許さないような眩い光が辺りを照らす。

「フィールド魔法が、2枚……!」

「新ルールでは、お互いがフィールド魔法を展開する事が可能なのです」

「一部のフィールド魔法は、単なる永続魔法の亜種になっていたからな。妥当な裁定だ」  
「このカードの発動時の効果処理として、墓地から効果を持たないモンスターを手札に加える。オレは『ラブラドライドラゴン』を選択!」

そしてスケール0の『ファイヤーオパールヘッド』と、セツティング済みのスケール7の『閃光の騎士』でペンデュラムスケールをセツティング!」

☆1||☆6

今度はスケール0! ジョーカーのデッキは「凡骨ペンデュラム」、火力をEXデッキのモンスターに任せた展開力の高いパワーデッキというワケか!

天空まで伸びた光の柱に浮かぶ燃える頭の恐竜と金色に輝く鎧騎士。従える数字は、0と7! 全く、笑えて来るよ、ここまで来ると!

ファイヤーオパールヘッド（ペンデュラム・通常モンスター）

星6

炎属性／恐竜族

ATK 2500 / DEF 1000

〔Pスケール：青0 / 赤0〕

〔モンスター情報〕

熱く燃えたぎる石頭の恐竜番長。

ダイナミックな動きと炎で敵を翻弄し、必殺のファイヤーオパールヘッドをお見舞いする。

「ど、どうしよう、さっきより数字の幅が広がってるよー！」

「だがそれで出て来るのは手札にいるモンスターだけだ、まだ絶望するには早い」

「え？」

「ペンデュラムモンスターをEXデッキから特殊召喚するには、リンクモンスターのリンク先か、EXモンスターゾーンでなくてはならないのです」

「……でも、EXゾーンは埋まっているし、リンク先は『トポロジック・ボマー・ドラゴン』のものしかない」

「特殊召喚しても、再び『フルオーバーラップ』が発動するだけだ」

そう、ペンデュラム召喚が強力だったのは一世代前の話。あまりにも連続で召喚される事でルール自体に規制が入った。

とは言え、ジョーカーの手札にはチューナーが2体。楽観視できる状態でもない。

「さて、ならこれはどうだ？ 天に弧を描く光の共鳴よ、再び闇を従え魂を震わせよ！  
ペンデュラム召喚！」

Pゾーンに存在する2体のモンスターの生み出す光の柱の間に開く召喚ゲート。そこから5つの光が発せられ、奴の場には再び大量のモンスターが出た。

「まずはエクストラデッキから、レベル3のチューナーモンスター『ハロハロ』！

そしてレベル5『マンドラゴン』！」

「なっ!？」

「手札からレベル4『閃光の騎士』！」

更にレベル6『ラブラドライドラゴン』、『ランスフォリンクス』！」

ハロハロ：ATK 800

マンドラゴン：2500

閃光の騎士：ATK 1800

ラブラドライドラゴン : DEF 2600

ランスフオリンクス : ATK 2500

ど、どうしてEXデッキから複数体ペンデュラムモンスターが出て来るんだ!?

「……、この瞬間、『トポロジック・ボマー・ドラゴン』の効果発動! フルオーバー

ラップ!」

強制発動する俺のモンスター効果により、フィールドが再び破壊の光に満ちる。

俺の『シルバーヴァレット』も吹き飛ぶが、奴のモンスターだって5体とも破壊されるのなら、対価としては充分だ。

「これでお前のモンスターは全滅だ!」

「それはどうかな?」

「!」

ハロハロ : ATK 800

マンドラゴン : 2500

閃光の騎士 : ATK 1800

ラブラドライドラゴン : DEF 2600

ランスフオリックス：ATK 2500

殺戮のエネルギー波が消えた時、消滅していたのは俺のモンスターだけだった。

これは……！

「それがお前の発動したフィールド魔法の効果か！」

「そうだ。フィールド魔法『デイヴァイン・キャッスル』の効果により、オレは通常モンスターに限りエクストラデッキからメインモンスターゾーンにペンデュラム召喚できる。これらのモンスターは攻撃権限を剥奪されるが、効果による破壊を受けなくなる！」

成程な、俺の『トポロジック・ボマー』の効果は暴発を誘導され、自爆させられたつてワケか。

ルールによって弱体化するカードは多々ある。それを補うカードを入れるのもまたデュエリストの宿命、奴はそれをよく理解している。

デイヴァイン・キャッスル（オリジナル）

【フィールド魔法】

(1)：このカードの発動時の効果処理として、墓地から効果を持たないモンスター1体





「ここで『牙王』だと!？」

「……しかも、まだ手札が4枚!？」

「そしてレベル5の『マンドラゴン』に、レベル3の『ハロハロ』をチューニング！ 殴れ豪傑の8連星！ 鋼の拳に戦友の血潮を宿し、不屈の闘志で敵を討て！」

☆5 + ☆3 = ☆8

「シンクロ召喚！ 奮い立てろ、レベル8！ 『ギガンテック・ファイター！』」  
『ぬんっ!』

ギガンテック・ファイター：ATK 2800

「まだだ！ 手札から『エンジェル・トランペッター』を召喚！」  
『キュアアアアア!』

エンジェル・トランペッター：ATK 1900

「レベル6の『ランスフォリンクス』に、レベル4の『エンジェル・トランペッター』をチューニング！ 立ち上がれ白銀の10連星！ 咲き狂う白百合の園にて革命の勝鬨を上げよ！」

☆6+☆4=☆10

「シンクロ召喚！ 出撃せよ、レベル10！ 『フルール・ド・バロネス』！」  
『ハアアアッ！』

フルール・ド・バロネス：ATK 3000

もう、ここまで来ると絶句しか無い。

白い鎧を纏った大きな赤獅子と、白亜の鎧を纏う拳闘士、そして百合の花を象った鎧の騎士。そして奴の手札には『聖騎士アルトリウス』と、正体不明のカードがもう一枚。クソツタレ、本当に強いなこいつ。こんなのと真正面から遠慮無く殴り合えてると実感すると、ゾクゾクが止まらない！

『ギガンテック・ファイター』の攻撃力は、お互いの墓地の戦士族モンスター1体につ

き1000アップする」

「俺の墓地に戦士族はいない」

「オレの墓地には『クイーンズ・ナイト』、『キングス・ナイト』、『ジャックス・ナイト』、『クリムゾン・ブリーダー』、『竜角の狩獵者』、『聖騎士アルトリウス』、『インペリアル・バウアー』の7体がいる。よって7000アップだ！」

ギガンテック・ファイター：ATK 2800↓3500

「……これ、かなりマズいんじゃない」

「ですね。『牙王』は相手のメインフェイズ2以外では黎さんの効果の対象から外されてしまい、『ギガンテック・ファイター』は戦闘破壊されても墓地の戦士族を復活できます。あのモンスター自身が戦士族のため実質不死身です」

「そして『バロネス』は1ターンに1度フィールドのカードを1枚破壊でき、1度だけカード効果の発動を無効化できる。制圧の陣形としては極めて強力だ」

神樹の守護獣―牙王（シンクロ・効果モンスター）

星10

地属性／獣族

ATK 3100 / DEF 1900

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは、自分のメインフェイズ2以外では相手のカードの効果の対象にならない。

ギガンテック・ファイター（シンクロ・効果モンスター）

星8

闇属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 1000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードの攻撃力は、お互いの墓地の戦士族モンスターの数×1000ポイントアップする。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分または相手の墓地の戦士族モンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚できる。

フルール・ド・パロネス（シンクロ・効果モンスター）

星10

風属性／戦士族

ATK 3000／DEF 2400

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：1ターンに1度、フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

(2)：このカードがフィールドに表側表示で存在する限り1度だけ、魔法・罠・モンスターの効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

(3)：お互いのスタンバイフェイズに、自分の墓地のレベル9以下のモンスター1体を対象として発動できる。

このカードを持ち主のEXデッキに戻し、対象のモンスターを特殊召喚する。

俺の前に立ちふさがる、強力なモンスター達。攻撃力3800、3500、3100、3000……。

どれか一発でも喰らえば俺のライフは消し飛ぶ、そして俺のモンスターは1体のみ。

敗北色濃厚、いや敗北以外有り得ない状況。普通のプレイヤーならサレンダーすら考えるだろう。

だが。

「ああ……」

俺は。

「嬉しいねえジョーカー」

「あ？」

「俺相手にこんな全力を出してくれるなんて、本当に嬉しいよ」

「……そうか」

心の底から震えていた。

こんな、こんなどうしようもない下らない悪党に、お前のような正義の騎士がぶつかってくれる事の何と嬉しい事か！ 俺という化物を駆除すべき害獣じゃなく、倒すべき敵と認めてくれる事の何と誇らしい事か！

「礼の代わりに攻撃前に言っておくぞ、ジョーカー。『リンク・プロテクション』はリンクモンスターが破壊された時、そのモンスターとこのカードを除外する事で、そのリンクマーカーの数未満しか相手フィールドにリンクモンスターがいなければ、そのターン相手の攻撃を封じる」

『トポロジック・ボマー』はリンク4、オレは4体リンクモンスターを揃えなければ追撃できないという事か。だがそれも、その効果が成立したらの話。『フルール・ド・バロネス』の効果で無効にすれば無意味だ」

「ならやってみろ！」

「良いだろう、その伏せカードで『バロネス』を対処できると読んだ！ ならこうするまでだ！ 『フルール・ド・バロネス』の効果発動！ 自分のターンに1度、フィールドのカードを1枚破壊できる！ オレはその伏せカードを破壊する、フルール・ド・セレナード！」

ギョントツ！と花騎士の剣先からビームが飛び、俺のリバースカードが焼かれる。

これで俺の場には裏側表示のカードが……無くならないんだよなあ、これが。

粉々の灰になった俺のカードが突如としてフィールドに眩い光をもたらす。本来なら墓地に消えた筈のそれが、紫の墓地魔法陣を経由してフィールドに舞い戻ったのだ。

「それを待っていた！ この瞬間、破壊された永続罫『ミラーフォース・ランチャー』の効果発動！」

「何い!？」

「セットされたこのカードが相手によって破壊された時、『聖なるバリア——ミラーフォース——』とこのカードをフィールドにセットできる！ この効果でセットした『ミ



「ラーフオース」は、セットしたターンに発動できる！」

「み、『ミラーフオース』専用のサポートカード!？」

ミラーフオース・ランチャー

【永続罫】

(1) : 1 ターンに1 度、自分メインフェイズに手札からモンスター1 体を捨てて発動できる。

自分のデッキ・墓地から「聖なるバリア——ミラーフオース——」1 枚を選んで手札に加える。

(2) : セットされたこのカードが相手の効果で破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

墓地のこのカードと自分の手札・デッキ・墓地の「聖なるバリア——ミラーフオース——」1 枚を選び、そのカードとこのカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる。

「ありがとうな、リボルバー先生。こいつを入れておいて良かったぜ。」

「さあ、どうするジョーカー?！」

『『バロネス』の効果は1度だけ、『ミラーフォース・ランチャー』に使えば『リンク・プロテクション』を止められなくなる……』

「しかし『リンク・プロテクション』に対応しようとするれば、その前に『ミラーフォース』の餌食になるのです」

「……彼に選択の余地は、無い」

「くっっ！」

良い顔だぜ、ジョーカー。

この丁々発止の、いや鎬を削るような戦いをしていると思い出すなあ、昔の事を。

まだ1年も経ってないのに、遥か遠い過去のように思える。血と断末魔の中にいた俺を。泥を啜り地を舐め骨が砕け、逆に敵を土に沈め空に突き刺し肉を裂いて……、そう、

あの時の俺は――

『『フルール・ド・バロネス』の効果発動！ お前の『ミラーフォース・ランチャー』の効果は無効にする！ “フルール・ド・ノクテュルヌ”！』

――執念と憎悪の塊だった。

『『ミラーフォース・ランチャー』の発動は無効になり、カードをセットする事はこれで

出来ない！」

「だが、『リンク・プロテクション』の効果も無効にできなくなった！」

「ク……ッ！ バトルだ！ オレ自身で『トポロジック・ボマー・ドラゴン』を攻撃！」  
「っっ！」

黎：LP 1300↓500

斬った。砕いた。殴った。蹴った。焼いた。溶かした。貫いた。落とす。殺した。

ハ、それが何だと言うんだ。所詮他人は他人、自分は自分。悲しみ罪を背負うなど欺瞞に過ぎない。

こんな風に俺のドラゴンが真つ二つにされようと、俺に出来るのは悼む事のみよ。

『リンク・プロテクション』の効果！ このカードと墓地の『トポロジック・ボマー・ドラゴン』を除外！ 相手の攻撃を制限する！」

「これでオレは攻撃を終了する！」

俺は、罪を背負っても謝らない。殺したあいつらは殺されて当然だった奴もいた。

刃を振りかぶった奴は斬り捨てた。

銃を構えた奴は撃ち抜いた。

そうして俺は都と共に生き残った。ああそうさ、開き直りだ。だが大なり小なり誰もが誰かを踏み台にしている。俺はそれがデカかったただだけだ。

本当は殺す必要が無ければ殺したくはなかった。殺したいと思った事なんてそんなに多くない。だがそれは言い訳。

憎かった。何もしていない俺達を殺そうとした奴らが。もう目は逸らさない。

嗚呼、そうだ。

俺は憎悪で戦った。

ヒーローなんかじゃない、ダークヒーローでもない。

ただの殺人鬼だ。

何の間違いかこうして生き延びてしまった死に損ないだとも。

ならば生きてやろう。クソ邪神になんぎに殺されてなるものか！俺の家族も、この

世界の友達も、仲間も！俺の生前培った全てを以て打ち倒し、完膚なきまでにブチ殺す！

「オレは魔法カード『フラッシュドロー』を発動。手札の『アルトリウス』を捨てて1枚ドロ―し、自分ワールドのモンスターは全て光属性になる。更に引いたカードが光属性モンスターならもう1枚ドロ―できる」

フラッシュドロロー（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：手札から光属性の通常モンスターを1体捨てて1枚ドロローする。

そのドロローしたカードが光属性モンスターだった場合、さらにそのカードをお互いに確認して自分はデッキから1枚ドロローできる。

この効果の発動後、次の自分のターン終了時まで自分フィールドのモンスターは光属性として扱う。

「ドロローしたカードは……、光属性モンスターではない。よって追加でドロローはできない。だが引いたカードは『ペンデュラム・ホルト』！ 自分のEXデッキにペンデュラムモンスターが3種類以上いる時、2枚ドロローできる！ オレのEXデッキには既に『閃光の騎士』『フリーコーの魔砲石』『ハロハロ』『マンドラゴン』がいる、よって発動条件は整っている！」

ペンデュラム・ホルト

【通常魔法】

（1）：自分のEXデッキの表側表示のPモンスターが3種類以上存在する場合に発動で

きる。

自分はデッキから2枚ドローする。

このカードの発動後、ターン終了時まで自分はデッキからカードを手札に加える事はできない。

「墓地に戦士族が増えて、『ギガンテック・ファイター』の攻撃力がアップ！ そしてカードを2枚セットして、ターンエンドだ！」

「このエンドフェイズ、破壊された『シルバーヴァレット』の効果発動！ デッキから『ヴァレット・トレーサー』を特殊召喚！」

ギガンテック・ファイター：ATK 3500↓3600

ヴァレット・トレーサー：DEF 1000↓1300

ジョーカー：LP 4200

手札：0枚

フィールド

：アルカナ ナイトジョーカー（ATK 3800）

：神樹の守護獣―牙王（ATK 3100）、ギガンテック・ファイター（ATK 3600）、フルール・ド・バロネス（ATK 3000）

：閃光の騎士（7）⇨ファイヤーオパールヘッド（0）

：伏せカード2枚、デイヴァイン・キャツスル（フィールド魔法）、連成する振動（永続罫）、凡骨の意地（永続魔法）

「俺の、ターン！ 『天使の施し』を発動！ デッキからカードを3枚ドロ―し、2枚手札を捨てる！」

全身が高ぶる。焦りが募る。指先が震え、なのに気分の高揚は限界に迫り着かない。一度負けた相手だと、こいつは強いと、ヤバいと、危険な相手だと、本能が、経験が、勘が、告げている。だからこそ。

――魂を焼き尽くすような感覚だからこそ！

――面白いと思える！

こんな状況、転生前はいくらでもあった。でも、負けても命を奪われない戦いなんて

初めてかも知れない。

不利？ 窮地？ クソ喰らえだ！

全部食い破って食い千切って食い殺してやる！

「ここからが本番だ、ジョーカーッ！」

「どこからでも掛かって来い！」

「俺は装備魔法『ヴァレル・リロード』を発動！ 自分の墓地から『ヴァレット』モンスターを復活させる！ 『シルバーヴァレット』を特殊召喚！」

『グゴオッ！』

シルバーヴァレット・ドラゴン：DEF 100↓400

「続けて『ヴァレット・トレーサー』の効果発動！ 1ターンに1度、自分フィールドの表側表示のカードを1枚破壊し、デッキから『ヴァレット』モンスターを特殊召喚する！ 俺は『シルバーヴァレット』を破壊し、デッキから『ヴァレット・リチャージャー』を特殊召喚する！」

『ギユウアッ！』

内側から爆発する形で銀の弾丸龍が消滅し、入れ替わるように別の弾丸龍が現れる。



この次から次へとガトリング砲のように弾丸が現れる戦術こそ、「ヴァレット」デッキの真骨頂だ！

「そして『ヴァレル・リロード』の効果発動！ 装備モンスターが破壊される事でこのカードが墓地に送られた時、俺はカードを1枚ドローする！」

ヴァレット・リチャージャー：DEF 2100↓2400

ヴァレル・リロード

#### 【装備魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の墓地の「ヴァレット」モンスター1体を対象としてこのカードを発動できる。

そのモンスターを特殊召喚し、このカードを装備する。

このカードがフィールドから離れた時にそのモンスターは除外される。

(2)：装備モンスターが破壊された事でこのカードが墓地へ送られた場合に発動できる。

自分はデッキから1枚ドローする。

ヴァレット・トレーサー（チューナー・効果モンスター）

星4

闇属性／ドラゴン族

ATK 1600 / DEF 1000

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分フィールドの表側表示のカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊し、デッキから「ヴァレット・トレーサー」以外の「ヴァレット」モンスター1体を特殊召喚する。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分は闇属性モンスターしかEXデッキから特殊召喚できない。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「現れる、常闇に揺蕩うサーキット！ オレは『ヴァレット・トレーサー』と『リチャージャ』をセット！」

L M Ⅱ 左下・右下

「リンク召喚！ 出でよ、『ブースター・ドラゴン』！」  
 『ガルルルルッ！』

ブースター・ドラゴン：ATK 1900

拡大鏡を頭に備えた竜が俺の場に現れ、ゆっくり着地する。

これで俺とジョーカーのモンスターの差は3体、フィールド魔法『リボルブート・セクター』の効果でその数だけ蘇生できる。差の枚数分だけ特殊召喚できる効果は極めて強力だ。

「続けてフィールド魔法『リボルブート・セクター』の効果発動！ 蘇れ、『ヴァレット・リチャージャ』、『メタルヴァレット・ドラゴン』、『シエルヴァレット・ドラゴン』！」

ヴァレット・リチャージャ：DEF 2100 ↓ 2400

メタルヴァレット・ドラゴン：DEF 1400 ↓ 1700

シエルヴァレット・ドラゴン：DEF 2000 ↓ 2300

さあ……。

「もつと熱いデュエルをやろうぜ、ジョーカー！」

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 85 : 緊迫の鏢迫り合い

ジョーカー：LP 4200

手札：0枚

フィールド

：アルカナ ナイトジョーカー (ATK 3800)

：神樹の守護獣―牙王 (ATK 3100)、ギガンテック・ファイター (ATK 3

600)、フルール・ド・パロネス (ATK 3000)

：閃光の騎士 (7) // ファイヤード・オパールヘッド (0)

：伏せカード2枚、デイヴアイン・キャッスル (フィールド魔法)、連成する振動 (永

続罫)、凡骨の意地 (永続魔法)

黎：LP 500

手札：2枚

フィールド

：ブースター・ドラゴン（ATK 1900）

・ヴァレット・リチャージャー（DEF 2400）、メタルヴァレット・ドラゴン（D

EF 1700）、シエルヴァレット・ドラゴン（DEF 2300）

：リボルブート・セクター（フィールド魔法）

S I D E：黎

血を滾らせろ。

「『ブースター・ドラゴン』の効果発動！ 1ターンに1度、自身以外のモンスターの攻撃力・守備力を500アップさせる！ この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない！ 俺は『メタルヴァレット・ドラゴン』を選択！」

魂を燃やせ。

「この瞬間、『メタルヴァレット』の効果発動！ このモンスターがリンクモンスターの効果の対象になった時、自身を破壊して同じ縦列にあるカードを全て破壊する！」

肉を、骨を、はらわた腑を、はらわた脳を。

「『メタルヴァレット』と同じ列にあるのは、お前自身と伏せカードの2枚！ 喰らえ！」  
全てを以て立ちほだかる敵を穿て。

「そうはさせるか！ カウンタートラップ発動、『シャイニー・クラッシュ』！ カードを破壊・除外する効果が発動した時、その発動を無効にする！ そして相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

その先にこそ。

「お前の攻撃表示モンスター『ブースター・ドラゴン』を破壊！ 更にオレの場の光属性モンスターの攻撃力の合計値が5000以上ならデッキから2枚ドロし、1枚を捨てる！」

俺の目指すべき闇の極致がある。

その果てに辿り着いてこそ、俺は闇を得られる。

闇を理解しきれてないのに光は手に入らない、それが俺という化物だ！

シャイニー・クラッシュ（オリジナル）

【カウンター罅】

(1) : 自分フィールドに光属性モンスターが存在する時、相手のカードを破壊、除外する効果の発動を無効にする。

その後、相手フィールドの光属性以外の攻撃表示モンスターを全て破壊する。

(2) : (1) の効果の発動時、自分フィールドの光属性モンスターの攻撃力の合計が50

00 以上の場合に発動できる。

デッキから2枚ドロ―し、手札を1枚捨てる。

墓地に『キングス・ナイト』を落としながら、ジョーカーはニヤリと笑う。

「残念だったな、これで不発だ」

「いいや、それを待っていた！」

「何!？」

カウンターされなければそれはそれでよし、カウンターされれば次の手を打つ。

お前と俺のデュエルが、一往復で済むような応酬で終わるワケ無いだろ！

「『ブースター・ドラゴン』の更なる効果！ リンク召喚されたこのモンスターが破壊された時、墓地の『ブースター・ドラゴン』以外のドラゴン族モンスターを特殊召喚する！

同時に『ヴァレット・リチャージャ―』の効果発動！ エクストラデッキから特殊召喚された闇属性モンスターが破壊された時、手札・フィールドのこのモンスターを墓地に送り、破壊されたモンスターとは別の闇属性モンスターを復活させる！」

「んだと!？」

「来い、『ソーンヴァレル・ドラゴン』、『スニツフィング・ドラゴン』！」



『ボオオオッ!』

『ギユウー!』

『スニツフィング・ドラゴン』の効果で、デッキから最後の『スニツフィング・ドラゴン』を手札に加える! 更にドラゴン族・闇属性モンスターが特殊召喚された時、『ノクトビジョン・ドラゴン』は手札から特殊召喚できる、来い!』

『グウウー!』

ソーンヴァレル・ドラゴン : ATK 1000

スニツフィング・ドラゴン : ATK 800

ノクトビジョン・ドラゴン : DEF 2800

ブースター・ドラゴン (リンク・効果モンスター)

リンク2

闇属性/ドラゴン族

ATK 1900

【リンクマーカー : 左下/右下】

【ヴァレット】モンスター2体

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：1ターンに1度、このカード以外のフィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力は500アップする。

この効果の発動に対して相手はカードの効果が発動できない。

(2)：リンク召喚したこのカードが戦闘・効果で破壊され墓地へ送られた場合、このカード以外の自分の墓地のドラゴン族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

ヴァレット・リチャージャー（効果モンスター）

星4

闇属性／ドラゴン族

ATK 0 / DEF 2100

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：EXデッキから特殊召喚された自分フィールドの闇属性モンスターが戦闘・効果で破壊された場合、手札・フィールドのこのカードを墓地へ送り、破壊されたモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターとは元々のカード名が異なる闇属性モンスター1体を自分の墓地から選んで特殊召喚する。

(2) : EXデッキから特殊召喚された闇属性モンスターが自分フィールドに存在する限り、相手はこのカードを攻撃対象に選択できない。

倒された筈の命は次の弾丸へ。ブースターを付けたドラゴンは両手が猟銃のドラゴンに、更に墓地から赤蜥蜴のドラゴン、手札から暗視スコープのドラゴンが蘇生ゲートと召喚ゲートを通って連鎖するようにフィールドに出る。

何度でも、何度でも俺は立ち上がる。こうして次に繋ぐこいつらのように、敵を食い千切って皆の所に帰るために！

「凄い！ カウンターされたと思ったら別のモンスターになった！」

「俺は『ソーンヴァレル』の効果を発動！ 手札を1枚捨ててモンスター1体を破壊する！ 俺が対象にするのは『ギガンテック・ファイター』！ 消し飛ばせ、クアッド・シユート！！」

「くっ！」

墓地に再び『スニッフィング・ドラゴン』を落とす、腕の銃口に火を噴かせる『ソーンヴァレル・ドラゴン』。白い巨人は心臓を過たず撃ち抜かれ、悲鳴1つ無く絶命した。

「チィ……、だがオレのフィールドにはまだモンスターが3体いる！」

「ならこのターンで全て潰す！ 今一度現れる、常闇に揺蕩うサーキット！」

確かに奴のモンスターは3体とも強力だ。

だが強力なモンスターを倒す方法なんていくらでもある、それをこのデツキのエアースで教えてやる！

「召喚条件は効果モンスター3体以上！ 俺は『スニツフィング・ドラゴン』、『ノクトビジョン・ドラゴン』、そしてリンク2の『ソーンヴァレル・ドラゴン』をセット！」

回路に充填される4つの光。銀色のサーキットが光り輝いた時、セクターに巨大な<sup>シリンドラー</sup>回転弾倉が現れた。

鉄の筒はキューブ状の光を集め、赤い装甲のボディを得る。より強く、より激しく、より禍々しく。巨大な龍の姿へと変わっていく。

「閉ざされし世界に吹きすさべ、絶望をもたらす闇の暴風！」

LMⅡ左・右・左下・右下



「リンク素材として墓地に送られた『ノクトビジョン・ドラゴン』の効果により、俺は1枚ドロ―」

ノクトビジョン・ドラゴン（効果モンスター）

星7

闇属性／ドラゴン族

ATK 0 / DEF 2800

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分フィールドにドラゴン族・闇属性モンスターが特殊召喚された場合に発動でき  
きる。

このカードを手札から特殊召喚する。

（2）：このカードがリンク素材として墓地へ送られた場合に発動できる。

自分はデッキから1枚ドロ―する。

（3）：自分フィールドの裏側表示のカードを対象とする魔法・罫・モンスターの効果を  
相手が発動した時、墓地のこのカードを除外して発動できる。

その効果を無効にする。

このターン、相手はその裏側表示のカードを効果の対象にできない。

「強そう……」

「あれが主殿のデツキのエースモンスターか」

「強力な効果を備えていますよ、上手く行けば逆転だって問題ありません」

「……私はサーを信じる、あれでこの局面を引つ繰り返せるって」

「攻撃力3000程度、オレの敵じゃない！」

「ならやってみるか！ バトルだ！ 『ヴァレルロード・ドラゴン』でジョーカーを攻撃  
！」

口腔内に仕込んであった大砲を展開し、ジョーカーへと狙いを定める。

攻撃力は『トポロジック・ボマー・ドラゴン』の時と同じく800も奴が上、だがさっきの攻撃を覚えているのならこれが普通の自爆じゃない事ぐらい理解している筈だ。

「何をするつもりかは知らねえが、効果ダメージでもコンバットトリックでも受けて立つ！」

「どっちも違うぜ？ 『ヴァレルロード』の効果発動、"ストレンジ・トリガー"！ 攻撃対象になったモンスターをこのカードのリンク先に移動させ、コントロールを奪う！」

「何だどつ!？」

ゴウツ！と射出された弾丸はアメーバ状になってジョーカーに覆い被さる。盾で防ごうとしたジョーカーの全身にへばり付いたそれは意志を持つように動き出し、俺のフィールドに移動してしまった。同時にジョーカー本人は弾き出されるように飛ばされ、本来のプレイヤーの立っていた場所に転がるように戻っていく。

「この効果でコントロールを得たモンスターは次のエンドフェイズに墓地に送られる」  
「クソツ、テメエよくもオレ自身を！」

「続けてお前自身で『神樹の守護獣―牙王』を攻撃！  
　　〃アルカナ・ジャックポット　口  
　　イヤル・ストレートフラッシュ　ッ！」

「ぐ、うあああああああああつ！」

ジョーカー：LP　4200↓3500

赤、青、黄色の光が集束した斬撃が飛び、鎧に覆われた巨獣を切り裂く。

前に自分がやられた攻撃を使えるってのは中々どうして悪くないものだな。

「だがこれで攻撃できるモンスターはいなくなつた！　俺のフィールドにはまだ『パロネス』がいる！　こいつで次のターンに……！」

『『パロネス』は1ターンに1度、フィールドのカードを1枚破壊できる上に、スタンバ





ヴァレルロード・F・ドラゴン：ATK 3000

【ヴァレット】デッキの恐ろしさは、こうした多岐に渡るEXデッキの豊富さにある。お前に予想できるか、何が出て来るのか、何をして来るのか。俺はその暗闇のような不透明さを以て攻撃するぞ、ジョーカー！

ラピッド・トリガー

### 【速攻魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：融合モンスターカードによって決められた自分フィールドの融合素材モンスターを破壊し、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはEXデッキから特殊召喚されたモンスターしか攻撃できず、EXデッキから特殊召喚された他のモンスターが発動した効果を受けない。

「そして『ラピッド・トリガー』で特殊召喚されたモンスターは、エクストラデッキから

「召喚されたモンスター以外を攻撃できない」

「成程、直接攻撃も封じられるから『バロネス』を残しておいたというワケか！」

「その通りだ！ 行け、『ヴァレルロード・F・ドラゴン』！ 『フルール・ド・バロネス』を攻撃！」

「攻撃力は互角、つて事は相討ち！」

「……違う、これは！」

口から同じように砲身を覗かせる紫と赤の龍。普通にやれば確かにファイオの言う通りお互いのモンスターが墓地に行くだけだが、俺はそんな甘い戦術を取る腑抜けじゃない！

『ヴァレルロード・ドラゴン』の効果発動！ 1ターンに1度、モンスター1体の攻撃力・守備力を500ダウンさせる！ この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない！」

「またチェーンさせない効果か！」

「アンチ・エネミー・ヴァレット！」

ヴァレルロード・ドラゴン（リンク・効果モンスター）

リンク4

闇属性／ドラゴン族

ATK 3000

【リンクマーカー：左／右／左下／右下】

効果モンスター3体以上

(1)：このカードはモンスターの効果の対象にならない。

(2)：iターンに1度、フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力は500ダウンする。

この効果の発動に対して相手はカードの効果が発動できない。

この効果は相手ターンでも発動できる。

(3)：このカードが相手モンスターに攻撃するダメージステップ開始時に発動できる。

その相手モンスターをこのカードのリンク先に置いてコントロールを得る。

そのモンスターは次のターンのエンドフェイズに墓地へ送られる。

紫色の光線を弾丸龍の王が撃ち、直撃した百合の騎士を弱らせる。

たかが500、されど500、その500の差が勝敗を分ける事もあるのがデュエルだ！

フルール・ド・バロネス：ATK 3000↓2500

「やれ、『フュリアス』！ 滅天のヴァレル・ブラスター！」  
「ぐおおおおおお！」

ジョーカー：LP 3500↓3000

強烈な熱線を浴びて騎士も消滅、これで文字通りジョーカーのフィールドは焼け野原になった。

ライフは俺の方が少ないがボードアドバンテージはこつちに引き寄せた、この状況ならそう簡単に負けやしない。

だがもう一押ししておく。

『ヴァレルロード・F・ドラゴン』の効果発動！ 俺のフィールドのモンスター1体と、相手フィールドのカード1枚を破壊する！ 俺は奪った『アルカナ ナイトジョーカー』と、お前のフィールド魔法『ディヴァイン・キャッスル』を破壊する！」

ヴァレルロード・F・ドラゴン（融合・効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2500

ドラゴン族・闇属性モンスター×2

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分フィールドのモンスター1体と相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

(2)：墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の闇属性リンクモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン効果を発動できない。

紫の龍が奴自身をエネルギーに変えて砲弾とし、フィールド魔法に向けてブツ放す。高貴な輝きを放つ白い城は一撃で瓦礫と化し、奴のカードがまた1枚減った。

残っているのは『連成する振動』とPカード2枚、そして伏せカードと『凡骨の意地』。

次のターンで『フュリアス』の効果を再び発動すれば――

ジャララララララ!

「何だ!?!」

だがそう思った瞬間、『フュリアス』は白い鎖に巻きつかれ動きを封じられてしまった。

「残念だったなあ? オレは速攻魔法『スパーク・リライト』を発動した! オレの場の魔法・罨カードが相手によって破壊された時、破壊されたカードを元の場所に戻す!」

読まれていたって事かよ……。破壊を防ぐんじやなく、破壊から戻すカードとはな。

バチバチツ、と奴のフィールドカードゾーンに紫電が走り、破壊した筈のフィールド魔法が復活してしまった。これ以上の大量展開は防ぎたいのに。

「更に相手フィールドの効果モンスターは全て無効になり、1度だけ破壊されなくなる!」

スパーク・リライト(オリジナル)

【速攻魔法】

(1)：自分フィールドの魔法・罫カードが相手によって破壊された時に発動できる。  
破壊された魔法・罫カードを元々のカードゾーンに、破壊された時の状態で戻す。  
その後相手フィールドのモンスターの効果は、次の自分のターン終了時まで以下のものとなる。

●このカードは1度だけ戦闘・効果では破壊されない。

クツソ、破壊から復活させただけじゃなく、こつちのモンスター効果まで書き換えやがった！ そんなんアリかよ！

「エンドフェイズ、『ラピッド・トリガー』の効果で破壊された『メタルヴァレット』と『シエルヴァレット』の効果発動！ デッキから『オートヴァレット・ドラゴン』と『マグナヴァレット・ドラゴン』を特殊召喚する！」

『『ギユオ！』』

オートヴァレット・ドラゴン：DEF 1000↓1300

マグナヴァレット・ドラゴン：DEF 1200↓1500

「ターンエンド！」



黎 : LP 500

手札 : 1枚

フィールド

：ヴァレルロード・ドラゴン (ATK 3000)

：ヴァレルロード・F・ドラゴン (ATK 3000)、オートヴァレット・ドラゴン

(DEF 1300)、マグナヴァレット・ドラゴン (DEF 1500)

：リボルブート・セクター (フィールド魔法)

「黎、伏せカードを出さなかったね……」

「手札がお互いに枯渇してきてますからね、いくら黎さんでも無い物は出せませんよ」

「オレのターン、ドロロー！ 永続魔法『凡骨の意地』の効果！ オレがドロローしたのは『マ

イルド・ターキー』、よってもう1枚ドロロー！ 次は『ライブラの魔法秤』、ドロロー！

……ぐっ！」

おうおう、どうした渋い顔して。通常モンスタージャやなかったか。

流石にあれだけ引いたんだ、いい加減デッキのモンスターも枯渇してきてるだろ。

「永続罫『連成する振動』の効果！ 『閃光の騎士』を破壊し、1枚ドロロー！ ……チツ

！」

「カードを引き過ぎだぜ、ジョーカー。自分からペンデュラムスケールを壊す効果も乱用は考え物だな」

「ナメるな！ 『天使の施し』を発動！ 3枚ドロし、2枚捨てる！」

墓地に落ちたのは……、『おジャマイエロー』と『クイーンズ・ナイト』か。

「オレはセッティング済みのスケール0の『ファイヤーオパールヘッド』と、手札のスケール7の『マイルド・ターキー』でペンデュラムスケールを再びセッティング！」

☆1Ⅱ☆6

ペンデュラムスケールが貼り直され、こんがり焼けたローストチキンと燃える恐竜が光の柱を形成する。

こいつはそう言うが所あるようだな。ペンデュラムゾーンのカードを自壊させるには、手札に次のPカードがある時のみ。そうしないと自分の戦術が崩壊するから。

「これでレベル1から6のモンスターを同時に召喚可能！」

「この瞬間、『増殖するG』のモンスター効果！ 手札からこのカードを捨てて、このターンお前がモンスターを特殊召喚する度に1枚ドロできるようになる！」

墓地にカードを1枚落とし、フィールド全体に黒いモヤが現れ俺のデッキに溶け込む。奴のデッキはペンデュラム召喚で素材を揃え、EXデッキの強力なモンスターに繋げる。これなら大量にドローも可能だ。

……流石のソリッドヴィジョンでもゴキブリが蔓延するようなフィールドは自重し  
たらしい。

「構うものか、ペンデュラム召喚！」

エクストラデッキから舞い戻れ！ レベル3 『ハロハロ』！

レベル4 『閃光の騎士』！

レベル5 『マンドラゴン』、『フーコーの魔砲石』！

レベル6 『ランスフォリンクス』！」

ハロハロ：DEF 600

閃光の騎士：DEF 300

マンドラゴン：DEF 2500

フーコーの魔砲石：DEF 2200

ランスフォリンクス：ATK 2500

マイルド・ターキー（ペンデュラム・通常モンスター）  
星4

炎属性／鳥獣族

ATK 1000 / DEF 2000

【Pスケール：青7 / 赤7】

（1）：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

サイコロを1回振る。

ターン終了時まで、このカードのPスケールを出た目の数だけ下げる（最小1まで）。

【モンスター情報】

ボウリングへの情熱に身を焦がすマイルドな七面鳥。

ストライクを取るべく鍛え上げられた体は、常に極上の香りを放つ。

まだ見ぬターキーを目指し、日々の練習を欠かさない。

また大量のモンスターが……。

こうなるとフィールド魔法を『フュリアス』で除去できないのが痛いな、アレのせいで奴の戦線が全く途切れない。

「ペンデュラム召喚は何体召喚しても1回カウント、よってドロウするのは1枚だけ。」

ドローー！」

「さつきはやってくれたじゃねえか、クソガキが。今度はオレの本気をブチ込んでやる！」

「来い！」

「オレはレベル5の『フーコーの魔砲石』に、レベル3の『ハロハロ』をチューニング！

さざめけ、青き龍脈の8連星！ 進化の奇跡をその身に刻み、封印から解き放たれよ！」

☆5+☆3=☆8

「シンクロ召喚！ 救済せよ、『アダマシア・ライズ魔救の奇跡ードラゴイト』！」

『Voooooooooo!』

チツ、ここで魔法・罫を潰す効果を持つモンスターか……。

「まだだ！ 魔法カード『黙する死者』を発動！ 墓地の通常モンスターを守備表示で特殊召喚する！ 復活せよ、『ラブラドライドラゴン』！ そして『ライブラの魔法秤』を通常召喚！」

ラブラドライドラゴン：DEF 2400

ライブラの魔法秤：ATK 1000

過労死、お疲れ様です。

ライブラの魔法秤（ペンデュラム・チューナー・通常モンスター）

星4

水属性／魔法使い族

ATK 1000／DEF 1000

【Pスケール：青5／赤5】

このカード名のP効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：1～6までの任意のレベルを宣言し、自分フィールドの表側表示モンスター2体を対象として発動できる。

ターン終了時まで、対象のモンスター1体のレベルを宣言したレベル分だけ下げ、もう1体のモンスターのレベルを宣言したレベル分だけ上げる。

【モンスター情報】

意思を持った天秤。

世の中の均衡を保っているが、しばしば間違った方に錘星を乗せてしまう。

「も、モンスターが6体！ エクストラモンスターゾーンを使えばこんな事もできるのか！」

「オレはレベル5の『マンドラゴン』にレベル6の『ラブラドライドラゴン』をチューニング！」

そしてレベル6の『ランスフォリンクス』に、レベル4の『ライブラの魔法秤』をチューニング！

響け、超越者の11連星！ 終焉の鐘と共に万死の罪を今裁け！

刻め、時空を司る10連星！ 願い集いて新たな時空を開け！」

緑の光輪と輝く星になり召喚の術式になるモンスター達。

E X デッキはほぼシンクロモンスターだけか、こいつ。ペンデュラムモンスターがE X に行かない事を警戒してるのか。

☆5 + ☆6 || ☆11

☆6 + ☆4 || ☆10

「シンクロ召喚！ 睥睨せよ、『サイコ・エンド・パニッシャー』！ 無限の光を拒め、『時械神祖ヴルガータ』！」

『Wuuuuuuuu!』

『フンッ!』

げ、ここで『ヴルガータ』かよ!?

不味い、こいつに好き勝手されたらこの陣形も一瞬で潰される!?

魔救の奇跡—ドラガイト：ATK 3000

サイコ・エンド・パニッシャー：ATK 3500

時械神祖ヴルガータ：ATK 0

今度は金色に輝くタイムロードに緑色の雷を操る白い装甲の龍、更に青い鉱石のドラゴンまで用意しおった。やり過ぎだろ、この布陣は。しかも奴の墓地には『魔導雑貨商人』の効果で水属性モンスターが既に落ちているし。

「シンクロモンスター3体と『ラブラドライドラゴン』が特殊召喚された事により、『増殖するG』の効果で合計4枚ドロ—」

「ひえええ、まだあんな大きなモンスターが出て来たよ!？」



「フレイ、この状況はマズいのでは」

「間違いなく。黎さんの敗北ですよ、普通に考えたら」

「普通、こういうモンスター達はフィニッシャーだ。複数並べるってのは容易じゃない。」

「だがジョーカーはペンデュラムの特性と補助カードを駆使してそれをクリアした。邪神の護衛とも戦えるくらい強いな、本当に！」

「バトル！ この瞬間、『サイコ・エンド・パニッシャー』の効果発動！ バトルフェイズ開始時に互いのライフの差分だけ攻撃力がアップする！ ブーストパス・リインフォース！」

サイコ・エンド・パニッシャー：ATK 3500↓6000

「攻撃力6000ですか……！」

「オレは『ヴルガータ』で『ヴァレルロード・F・ドラゴン』を攻撃！」

「迎え撃て！」

金色の天使が放つビームを、口の中の砲門から撃った炎で相殺する『フュリアス』。

あ、やべ。

「この瞬間、『ヴルガータ』のモンスター効果発動！ 相手フィールドのモンスターを全てゲームから除外する！」

「チイツー！」

「なっ!?」

「……ヤバい！」

光と炎の衝突は空間の歪みを生み、大爆発と共に俺のフィールドの真ん中に暗黒の時空の渦を生み出す。

ブラックホールと化したそれは俺の4体のドラゴン達を片端から貪欲に飲み干し、跡形も残さないという無情な蛮行を犯したのだった。

これじゃあ勝手に付与された破壊耐性があっても意味が無い……！

「この効果を使用した場合、ターン終了時までお前が受けるバトルダメージは半分になる」

「しかし、主殿のライフは……！」

「そう、残り500なら半分でも十二分！ 続けて『ドラナイト』でダイレクトアタック！」

ドラゴンの口にキュイイイイ、と青い光が集まる。背中に誰か乗っているし、あれで岩石族だからもしかするとゴーレムの生物なのだろう、ゴーレムなら腕とかで攻撃

して欲しいものである。

「この瞬間、俺は手札から『チェックサム・ドラゴン』を特殊召喚！ 相手の攻撃宣言時に手札から特殊召喚でき、その守備力の半分、俺のライフを回復する！」

チェックサム・ドラゴン：DEF 2400

黎：LP 500↓1700

青い岩龍が吐き出したビームを、丸い頭の赤い龍が防いだ。ドラゴンは爆散して消えたものの、ライフの回復も付いてるお得な防御だ。

「姑息な手を！ だが『サイコ・エンド・パニッシャー』の攻撃は防げねえぞ！」

「墓地に存在する『マッド・トリガー・ワイアーム』のモンスター効果を発動！ 自分の閻属性・ドラゴン族モンスターがバトルで破壊された時、このカードを特殊召喚する！」

『ヴォオオオ！』

「『天使の施し』で捨てていたか！ ならば行け、『サイコ・エンド・パニッシャー』！  
『カタストロフ・サイコバースト』！」

マッド・トリガー・ワイアーム：DEF 100

地面に紫の魔法陣が開き、中から大筒を背負った飛竜が飛び出し敵の前に陣取る。  
 巨大な黒々としたエネルギー球をぶつけられたが、その衝撃は俺へと後逸せず拡散していった。

『マッド・トリガー・ワイアーム』は自身の効果で特殊召喚されてフィールドを離れた時、ゲームから除外される。そしてデッキから闇属性・ドラゴン族モンスターを2体まで墓地に送る」

マッド・トリガー・ワイアーム（オリジナル）

星1

闇属性／ドラゴン族

ATK 100 / DEF 100

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか発動できない。

(1)：自分フィールドの闇属性・ドラゴン族モンスターが戦闘によって破壊された時に発動できる。

このカードを手札・墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードがフィールドを離れた時、ゲームから除外され

る。

(2) : このカードが除外された時に発動できる。

デツキから闇属性・ドラゴン族モンスターを2体まで墓地に送る。

この効果で墓地に送ったカードの効果は、次の自分のターンまで発動できない。

イカれた目をした翼竜の背負った砲門を経由し、デツキから『ヴァレット・シンクロン』と『リコシエット・ドラゴン』を墓地に落とす。

これでこのターンの攻撃は終わった筈だ、もうライフが減る心配は無い。

「やるな、仕留めたと思ったんだが」

『ヴルガータ』の効果で除外されたモンスターはターン終了時に戻って来る。さあどうする！」

「こうする！ 『サイコ・エンド・パニツシャー』の効果発動！ ライフを10000支払い、オレのモンスター1体と貴様のフィールドのカードを1枚ゲームから除外する！ オレは『ヴルガータ』と『リボルブート・セクター』を除外する！」

時械神祖ヴルガータ（シンクロ・効果モンスター）

星10

闇属性／天使族

ATK 0 / DEF 0

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1)：このカードは戦闘・効果では破壊されず、このカードの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

(2)：EXデッキから特殊召喚したこのカードが戦闘を行ったダメージステップ終了時に発動できる。

相手フィールドのモンスターを全て除外する。

この効果の発動後、ターン終了時まで相手が受ける戦闘ダメージは半分になる。

(3)：このカードの(2)の効果が発動したターンのエンドフェイズに発動する。

その効果で自分が除外したモンスターを可能な限り相手フィールドに特殊召喚する。

サイコ・エンド・パニッシャー(シンクロ・効果モンスター)

星11

光属性／サイキック族

ATK 3500 / DEF 3500

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

(1) : 自分のLPが相手のLP以下の場合、S召喚したこのカードは相手が発動した効果を受けない。

(2) : 1ターンに1度、1000LPを払い、自分フィールドのモンスター1体と相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを除外する。

(3) : 自分・相手のバトルフェイズ開始時に発動できる。

このカードの攻撃力は、お互いのLPの差の数値分アップする。

アダマシア・ライズ  
魔救の奇跡—ドラゴライト(シンクロ・効果モンスター)

星8

水属性/岩石族

ATK 3000 / DEF 2200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 自分メインフェイズに発動できる。

自分のデッキの上からカードを5枚めくる。

その中の岩石族モンスターの数まで相手フィールドのカードを選んで持ち主の手札

に戻す事ができる。

めくったカードは好きな順番でデッキの一番下に戻す。

(2)：自分の墓地に水属性モンスターが存在し、相手が魔法・罠カードの効果を発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

しまった、『ヴルガータ』の帰還効果は除外効果とは別だ。フィールドにいなければ発動しない。

これで俺のモンスター4体は除外されたまま、フィールド魔法も消えて展開の全てが封じられた。

ジョーカー：LP 3000→2000

不幸中の幸いなのは、奴のフィールド魔法の効果で『閃光の騎士』は攻撃できない事。あのフィールド魔法の効果でEXデッキから呼べる通常モンスターは必ずメインモンスターゾーンに召喚され、攻撃できない。

どちらかの制約が無ければ、この盤面を防ぐ事はできなかつた。



「メインフェイズ2に移動する。魔法カード『貪欲な壺』を発動。墓地のモンスター5体をデッキに戻してシャッフル、2枚ドロローする」

### 貪欲な壺

#### 【通常魔法】

(1) : 自分の墓地のモンスター5体を対象として発動できる。

そのモンスター5体をデッキに戻してシャッフルする。

その後、自分はデッキから2枚ドロローする。

奴のディスクの墓地ポケットから『フルール・ド・バロネス』『クリムゾン・ブリーダー』『星態龍』『エンジェル・トランペッター』『聖騎士アルトリウス』が吐き出され、デッキに戻った。そのまま2枚ドロローしたジョーカーは「ほう」と一瞬だけ笑みを浮かべる。「更に『閃光の騎士』をリリースし、永続魔法『アークライト・バリア』を発動！ 発動時にカウンターを1つ乗せ、更にリリースした光属性モンスターのレベルと同じ数だけこのカードにカウンターを乗せる！」

アークライト・バリア : カウンター 0 ↓ 1 ↓ 5

ここでカウンターを乗せるカードか。

何を狙っている？

「ターンエンドだ」

ジョーカー：LP 2000

手札：1枚

フィールド

：魔救の奇跡—ドラゴイト（ATK 3000）

：サイコ・エンド・パニッシャー（ATK 6000）

：マイルド・ターキー（7）||ファイヤーオパールヘッド（0）

：デイヴァイン・キャッスル（フィールド魔法）、連成する振動（永続罫）、凡骨の意

地（永続魔法）、アークライト・バリア（永続魔法・カウンター：5）

「行くぜ俺のターン、ドロ—！」

『サイコ・エンド・パニッシャー』はまたパワーアップするし、『ドラゴイト』のパフォーマンス能力も厄介。これ以上の放置は危険だ、このターンで何とか片を付けない

と。

幸いにも手札は5枚と潤沢。ジョーカーが何を狙っているかは知らないが、何があるうとブチ抜く。闇の凶弾を何発でもお見舞いしてやるぜ！

「マジック発動、『ヴァレル・アンド・カートリッジ』！ デッキトップを墓地に送る事で、効果発動！ エクストラデッキから闇属性・ドラゴン族リンクモンスターを墓地に送り、手札・デッキ・フィールド・除外ゾーンからそのリンクマーカーの数だけ名前の異なる闇属性・ドラゴン族モンスターを墓地に送る！ そして墓地の闇属性・ドラゴン族モンスターをリンク召喚扱いで特殊召喚する！」

「オレは『ドラゴイト』の効果を発動！ 1ターンに1度、自分の墓地に水属性モンスターが存在する限り、相手の魔法・罫の発動を無効にし破壊する！ アンメサイア・キヤスト！」

『ヴァレル・アンド・カートリッジ』で『ヴァレル』モンスターを2体以上墓地に送る場合、相手はチェーン出来無い！」

「小癩な！」

ヴァレル・アンド・カートリッジ（オリジナル）

【通常魔法】

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できない。

この効果により「ヴァレル」モンスターを2体以上墓地に送る、または墓地に戻す場合、このカードの発動に対して相手はカードの効果が発動できない。

(1): デッキの1番上のカードを墓地に送る。

その後、EXデッキの闇属性・ドラゴン族リンクモンスター1体を墓地に送り、そのリンクマーカーの数だけ闇属性・ドラゴン族モンスターを自分のデッキ・手札・フィールドから墓地に送る、または除外状態から墓地に戻す事で発動する(同名モンスターは1体まで)。

EXデッキから墓地に送ったモンスターとは元々の名前が異なる闇属性・ドラゴン族リンクモンスターを1体、リンク召喚扱いで自分の墓地からEXモンスターゾーンに特殊召喚する。

この特殊召喚に成功した場合、この効果でデッキから墓地に送ったモンスターの攻撃力の合計値の2倍のダメージを自分は受ける。

デッキトップの『死者蘇生』とEXデッキの『ヴァレルエンド・ドラゴン』が墓地に送られ、続けて除外されたドラゴン5体が墓石の下に消える。うーん、ここで『死者蘇生』が落ちるのは痛い。

一方で氷のような青い石の龍は冷気を吐いて俺のカードを凍らせようとすることも、吹雪が届く前に緑色のカードはバリアを展開してそれを防いだ。

「リンク召喚扱いで蘇れ、『ストライカー・ドラゴン』！ その効果でデッキから2枚目の『リボルブート・セクター』を手札に加える！」

『GYAAAAA!』

ストライカー・ドラゴン：ATK 1000

まだまだ、もう一丁！

「『ストライカー・ドラゴン』の更なる効果！ 自分のフィールドの表側表示モンスターを1体破壊し、墓地の『ヴァレット』モンスターを手札に戻す！ 俺は『ストライカー・ドラゴン』自身を破壊し、墓地の『ヴァレット・シンクロン』を手札に加える！」

「いつの間に……、いやさっきの『マッド・トリガー・ワイアーム』の効果か！」

「その通りだ！ そして俺は、『ヴァレット・シンクロン』を通常召喚！」

『ア、イツ！』

「このカードを召喚した時、墓地にいるレベル5以上の闇属性・ドラゴン族モンスター1体を効果を無効にして守備表示で特殊召喚する！ 来い、『エクスプロードヴァレット』

！」

『ギギイイイ!』

「この効果で特殊召喚したモンスターはターン終了時に破壊される」

ヴァレット・シンクロン：ATK 0

エクスプロードヴァレット・ドラゴン：DEF 2000

『ヴァレル・アンド・カートリッジ』は『ストライカー・ドラゴン』の蘇生だけが目的じゃない。デッキに眠っていたモンスターを墓地を経由して手札に加える意味もあった。

悪いが無効化効果を使えないまま『ドラガイト』ごとフィニッシュだ。

「俺はレベル7の『エクスプロードヴァレット・ドラゴン』に、レベル1の『ヴァレット・シンクロン』をチューニング！」

「シンクロだ?!」

「シンクロ召喚はお前だけの特権じゃないって事だ!」

青いどっしりした弾丸龍が緑の輪に、紫の炸裂弾の弾丸龍が7つの星となり光の柱を生み出す。

VRAINSの召喚エフェクトも好きだったけれど、やっぱり古き良きこちらも捨て難いものだ。

「雄々しき龍よ！ その獐猛なる牙を、今銃弾に変え撃ち抜け！」

☆1+☆7=☆8

「シンクロ召喚！ 制圧せよ、レベル8！ 『ヴァレルロード・S・ドラゴン』<sup>サページ</sup>！」  
『Gooooooooooooooooooooo！』

より大きなシリンダーを中心に白と赤いボディのドラゴンが構築されていく。より硬質な白亜の追加アーマーを装着した巨体が光によって組み立てられ、黒目の無い輝く眼で敵を見据えながら登場した。

『ハリファイバー』経由の Coyitz に何度プレイヤーは泣かされた事か、二度と『ハリファイバー』は帰って来ないで欲しい。マジで。

ヴァレルロード・S・ドラゴン：ATK 3000

「まさかお前もシンクロ召喚をするとはな。だが攻撃力は3000、オレのモンスター

は倒せねえ！」

『ヴァレルロード・S・ドラゴン』の効果発動！ このカードのシンクロ召喚に成功した時、墓地のリンクモンスター1体を装備カード扱いでこのカードに装備し、そのリンクマーカーの数だけヴァレルカウンターを置く。俺は『ヴァレルエンド・ドラゴン』を装備！

そして『ヴァレルロード・S・ドラゴン』の更なる効果！ このカードの攻撃力は、装備したモンスターの攻撃力の半分アップする！」

ヴァレルロード・S・ドラゴン：ATK 3000↓4750／ヴァレルカウンター  
0↓5

胸部のシリンダーのカバーが開き、弾丸代わりのエネルギー球が5つ装填される。

これで『ドラガイト』も怖くない！

「攻撃力4750だと!?!」

「そしてフィールド魔法『リボルブート・セクター』発動！」

『ドラガイト』の効果は今度こそ発動！ 『リボルブート・セクター』の発動を無効にし破壊する！」



「『サベージ・ドラゴン』の効果発動！ 相手のカード効果が発動した時、このカードのヴァレルカウンターを1つ取り除き発動を無効にする！ アンチ・エネミー・サベージング！」

「何い!?!」

「『リボルブート・セクター』の効果！ 蘇れ、『メタルヴァレット』！ そして速攻魔法『クイック・リボルブ』を発動！ デッキから『ヴァレット』モンスターを特殊召喚する！ 現れる、『マグナヴァレット』！」

『『ギューオ!』』

「フィールド魔法の効果で守備力300アップ！」

メタルヴァレット・ドラゴン	: DEF	1400	↓	1700
マグナヴァレット・ドラゴン	: DEF	1200	↓	1500

クイック・リボルブ

### 【速攻魔法】

(1) : デッキから「ヴァレット」モンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できず、エンドフェイズに破壊される。



再び顕現するシリندانーを中心に、今度は赤地に黒のボディが構築されていく。先の龍が猛猛さを求めた故の巨大であるならば、こちらはシャープかつスリムな肉体を構築していく。ダークカラーのボディが白いドラゴンの隣に降り、屈強な2種類の龍がそこに並び立った。

「シンクロ……、エクシーズ……！」

「これが黎の本気、か……！」

畳みかける！ 奴が強い事はもう十分身に染みた、ターンを回せば負ける！

『ヴァレルロード・X・ドラゴン』の効果発動！ アンチ・エネミー・エクスタチャー  
 ジェー！」

ヴァレルロード・X・ドラゴン：ORU 2↓1

「オーバーレイ・ユニットを1つ使い、モンスター1体の攻撃力を600ダウンさせる！  
 更にその後、墓地の『ヴァレル』モンスターを特殊召喚できる！ 喰らえ！」

魔救の奇跡—ドラゴイト：ATK 3000↓2400

自身の周囲を旋回する2つの光の玉、その片方を黒い鉄龍が噛み砕くと口の中から物々しいレーザー砲が姿を現し、青い石龍を的確に撃ち抜く。

『ドラナイト』は胸部に大穴が空き、更にそこが召喚ゲートとなつて墓地の赤紫色の鉄龍がこちらのフィールドに舞い戻つて来た。

「蘇れ、『ヴァレルロード・F・ドラゴン』！」

『J a a a a a a a a a a a a a a a a !』

ヴァレルロード・F・ドラゴン：ATK 3000

「この効果で特殊召喚したモンスターはターン終了時に除外される。そしてこのターン俺はダイレクトアタックできず、これ以降モンスターを特殊召喚できない！だがそれで十二分！」

ヴァレルロード・S・ドラゴン（シンクロ・効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(3)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードがS召喚に成功した場合に発動できる。

自分の墓地からリンクモンスター1体を選び、装備カード扱いとしてこのカードに装備し、そのリンクマーカーの数だけこのカードにヴァレルカウンターを置く。

(2) : このカードの攻撃力は、このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力の半分アップする。

(3) : 相手の効果が発動した時、このカードのヴァレルカウンターを1つ取り除いて発動できる。

その発動を無効にする。

ヴァレルロード・X・ドラゴン (エクシーズ・効果モンスター)

ランク4

闇属性 / ドラゴン族

ATK 3000 / DEF 2500

ドラゴン族・闇属性レベル4モンスター×2

(1) : X召喚したこのカードは他のモンスターの効果の対象にならない。

(2)：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除き、フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力は600ダウンする。

その後、自分の墓地から「ヴァレル」モンスター1体を選んで特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに除外される。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分はモンスターを特殊召喚できず、直接攻撃できない。

俺のフィールドに並び立つ3体のドラゴン。いずれも強力なシンクロ、エクシーズ、融合の力によって覚醒した破壊の化身が如き存在だ。

この布陣で決める！

「行くぞ、バトル！」

「今、黎のフィールドには攻撃力4750のモンスターがいる」

「ジョーカーのフィールドには攻撃力が2400に下がった『ドラゴイト』がいます」

「……更にライフは残り2000なのに対し、攻撃力の差は2350」

「行けるぞ！ これなら勝てる！」

おうフラグやめーや。『サベージ』のパーミッション効果は1ターンに1度だけなん

だぞ。

「これで終わりだ！ 『ヴァレルロード・S・ドラゴン』で『魔救の奇跡—ドラゴイト』を攻撃！」

強力なエネルギーをビームに変え、『サベージ・ドラゴン』が『ドラゴイト』を打ち砕く。

大爆発と共に青い石龍は粉々に砕け散り、その衝撃波は過たずジョーカーを襲った。砕け散れ、ジョーカー！ 迅雷のヴァレル・フレア！！

ジョーカー：LP 2000

だがまたしても、ジョーカーのライフに傷を付ける事はできなかった。

それどころかジョーカーは輝く障壁のようなものに守られ、爆風すら浴びていない。

「くっ、また防がれた!？」

「永続魔法『アークライト・バリア』の効果だ。このカードに乗っているカウンター一つにつき500、受けるダメージを減らす。よって2500以下のダメージをオレは受けなかっただけの話」

アークライト・バリア（オリジナル）

【永続魔法】

(1)：このカードの発動時の効果処理として、自分フィールドの光属性モンスターを1



体リリースする。

このカードにカウンターを1つ置き、更にリリースしたモンスターの元々のレベル分だけカウンターを置く。

(2) : 自分が受けるダメージはこのカードに乗っているカウンターの数×500ダウンする。

(3) : 自分がダメージを受けた、またはこのカードの効果によりダメージを受けなかった場合に発動する。

このカードのカウンターを1つ取り除く。

この効果でカウンターが0になった時、このカードは除外される。

(4) : カウンターの乗ったこのカードは破壊されず、相手の効果の対象にならない。

「ただしダメージを受けようが受けまいが、バリアのカウンターは1つずつ減る。よって次に軽減できるダメージは2000だ」

アークライト・バリア : カウンター 5 ↓ 4

成程な、2500以下のダメージを遮断されちゃあ意味が無い。返しのターンに俺に

やられる事を想定していたのか。

しかもこれは永続効果、『サベージ・ドラゴン』の効果では潰せない。

『ヴァレルロード・F・ドラゴン』の効果発動！ このカードと『サイコ・エンド・パニッシャー』を破壊する！」

「っ！」

奴のモンスターはこれでいなくなつたが、ペンデュラムスケールも、それを補助するフィールド魔法も健在。

かと言って『フュリアス』の効果で『サイコ・エンド・パニッシャー』を破壊しなければ次のターンに単純な火力で俺は負ける。

実力伯仲と言えば聞こえは良いが、ここまで状況が伍する相手にはその場凌ぎの対処しか出来ねえのは歯痒いな。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

黎：LP 1700

手札：1枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

・ヴァレルロード・S・ドラゴン（ATK 4750・ヴァレルカウンター：4）、ヴァレルロード・X・ドラゴン（ATK 3000・ORU：1）

・伏せカード2枚、ヴァレルエンド・ドラゴン（『ヴァレルロード・S・ドラゴン』に装備）、リボルブート・セクター（フィールド魔法）

「オレのターン、ドロロー！ 永続魔法『凡骨の意地』の効果、ドロローした『ジャックス・ナイト』を見せて一枚ドロロー！」

『サベージ・ドラゴン』の効果は……、使わない。ここで使ったらマストカウンターに対応できなくなる。

「……来たか」

くつ、判断ミスか。どうやら切り札を手札に引き込んだらしい。

「オレの勝ちだ」

「！」

「セッティング済みのペンデュラムスケールで、ペンデュラム召喚！ エクストラテックキから再び参上せよ！」

再びジョーカーの後ろに2本の光の柱が生まれ、その間に召喚ゲートが設立される。中から5つの光が飛び出し、不死身の兵士として隊列を組み俺の前に立ちはだかつ

た。

「レベル3、『ハロハロ』！」

レベル4、『閃光の騎士』！ 『ライブラの魔法秤』！

レベル5、『マンドラゴン』！

レベル6、『ランスフォリンクス』！」

ハロハロ：DEF 600

閃光の騎士：DEF 300

ライブラの魔法秤：DEF 1000

マンドラゴン：DEF 2500

ランスフォリンクス：ATK 2500

ええい、そろそろ休ませてやれそいつら！

顔が疲労困憊をこれでもかと訴えてるぞ！

「オレはレベル6の『ランスフォリンクス』にレベル4の『ライブラの魔法秤』をチューニング！

そしてレベル5の『マンドラゴン』とレベル4の『閃光の騎士』にレベル3の『ハロ

ハロ』をチューニング!」

なっ、ここでレベル12のモンスター!?

「再び立ち上がれ白銀の10連星! 咲き狂う白百合の園にて革命の勝鬨を上げよ! 刃を持って不動の12連星! 毀れずの剣を携え戦場いくさばにて大山の如く無双せよ!」

☆6+☆4||☆10

☆5+☆4+☆3||☆12

「シンクロ召喚! 今一度出撃せよ! 『フルール・ド・バロネス』!」

『トアツ!』

フルール・ド・バロネス: ATK 3000

「シンクロ召喚! 不動を示す権化! レベル12、『超ちようじゆうてんじん重天神マスラーO』!」

『ヌウン!』

超重天神マスラーO: DEF 4000

調律による光の柱から現れたのは先程倒した白百合の騎士と、白いボディを持った巨躯のロボット。大元の持ち主たる少年を彷彿とさせるそのモンスターは、剣を片手に座禅を組むような姿勢で地響きと共に場に躍り出た。

超ちようじゆうてんじん重天神マスラーO（シンクロ・効果モンスター）

星12

地属性／機械族

ATK 2100 / DEF 4000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名はルール上「超重武者」カードとしても扱う。

(1)：このカードは表側守備表示のまままで攻撃できる。

その場合、このカードは守備力を攻撃力として扱いダメージ計算を行う。

(2)：自分フィールドの「超重武者」モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わりに自分フィールドの「超重武者」カード1枚を破壊できる。

(3)：1ターンに1度、相手が魔法・罠カードの効果を発動した場合に発動できる。

自分は手札が3枚になるようにデッキからドロウする。

「続けて魔法カード『死者蘇生』！ 墓地から蘇れ、『ドラガイト』！」

「『サベージ・ドラゴン』の効果発動！ 『死者蘇生』の発動を無効にする！」

「『バロネス』の効果発動！ 自身がフィールドに存在する時、1度だけ効果の発動を無効にして破壊する！」

「くっ！」

『ガアゴオアアッ！』

魔救の奇跡—ドラガイト：ATK 3000

クソ、折角倒したのに復活しやがった。コイツはシンクロ召喚されてなくても無効化する効果が使えるのに。

おまけに攻めの要<sup>かなめ</sup>である『ヴァレルロード・S・ドラゴン』を破壊してしまった。『バロネス』の1度しか使えない効果はこれで消費させたが、支払った対価に釣り合っているとは言い難い。

『バロネス』の効果発動！ 1ターンに1度、フィールドのカードを1枚破壊する！ オレはこちらから見て左の伏せカードを破壊！」

「墓地の『ノクトヴィジョン』の効果！ 自分のリバースカードを対象にした効果を無効にする！」

「速攻魔法『アリス・ナインシグ接地電線回復』を手札から発動！ 相手が墓地の効果を発動した時、それを無効にする！ よって伏せカードはそのまま破壊だ！」

「『ミラーフォース』が!？」

「更にデツキから『アルカナ』を対象にするカードを手札に加える！」

アリス・ナインシグ  
接地電線回復（オリジナル）

【速攻魔法】

(1)：相手が墓地のカードの効果を発動した時に発動できる。

その発動と効果を無効に除外する。

その後、デツキから「アルカナ」融合モンスター、または「クイーンズ・ナイト」「キングス・ナイト」「ジャックス・ナイト」のいずれかをテキストに含む魔法・罠カードを1枚手札に加える。

飛来する斬撃が百合の騎士から放たれ、俺のカードが1枚砕かれる。先んじて存在を示唆されていた、輝く障壁を描いた赤のカードが役目を果たさずに消滅した。



『接地電線回復』は前のターンから手札にあった、って事は『ノクトヴィジョン』を使う事を最初から逆手に取るつもりだった……。

チツ、ここが使い所か！

「墓地の『リバースエンジニアリング』の効果発動！ このカードを除外し、墓地に存在するこのターンに破壊された自分の通常罫を1枚再セットする！」

「『天使の施し』で捨てたもう1枚のカードか！」

リバースエンジニアリング（アニメオリジナル）

【通常罫】

（1）：相手の魔法&罫ゾーンにセットされたカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを確認し、元に戻す。

その後、その確認したカードと同名のカードを、自分のデッキ・墓地から1枚選んで手札に加える事ができる。

（2）：墓地のこのカードを除外し、このターンに破壊された自分の墓地の罫カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動できる。

「俺は破壊された『ミラーフォース』をフィールドに戻す！ 更にこの効果でセットされたカードは、セットされたターンに発動できる！」

「させねえよ！ 『ドラガイト』の効果発動！ 墓地で発動した『リバースエンジンアリング』を無効にする！」

俺の墓地から赤い光が放たれ、紫の魔法陣から破壊されたカードが姿を現す。

しかし青い鉱石の龍が波動を放ち、光が中和されて『ミラーフォース』も幻影のように消えてしまった。

「これで『ミラーフォース』はセットされない！」

「……っー」

手を潰すのが本当に上手いなコイツ……！

奴のフィールドには復活した『ドラガイト』と再召喚された『バロネス』、そして新顔の『マスターO』までいる。これだけでもかなりの脅威。

しかしジョーカーはそれで収まる事はせず、手札から更に先程サーチしたカードをフィールドに出すのであった。

「そしてこれがテメエをブツ倒すオレの切り札！ 魔法カード発動、『超鬼札融合』

！」

あ、『アルカナ・ワールドフュージョン超鬼札融合』!?

「エクストラデツキからモンスター3体を除外し、効果発動! 手札、フィールド、墓地のモンスターを素材に融合召喚を行う! オレは墓地のオレ自身と『クイーンズ・ナイト』『キングス・ナイト』『ジャックス・ナイト』を除外し、融合!」

奴のエクストラデツキから『クリムゾン・ブレード』『邪竜星—ガイザー』『深淵の神獣<sup>ビースト</sup>デイス・パテル』が消滅し、墓地から絵札の三銃士と奴自身が除外される。そして赤、黄、青、紫の光が1つに重なり、神秘の渦の中で混ざり合って、輝かしいばかりの光の刃に構成されていった。

「天位の騎士よ! その剣に破邪顕正の力を宿し、雷轟電撃が如く闇を滅ぼせ!」



「融合召喚！ 輝ける刃が舞い、我が極致に馳せる！ 天位の究極騎士、『アルカナ  
ラディンジョーカー』！」

アルカナ パラディンジョーカー：ATK 5000

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 86：五濁悪世（ごじよくあくせ）を喰らう覚悟

黎：LP 1700

手札：1枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：ヴァレルロード・X・ドラゴン（ATK 3000・ORU：1）

：伏せカード2枚、リボルブート・セクター（フィールド魔法）

ジョーカー：LP 2000

手札：『ジャックス・ナイト』

フィールド

：アルカナ パラディンジョーカー（ATK 5000）

：フルール・ド・パロネス（ATK 3000）、超ちようじゆうてんじん重天神マスラーO（DEF 4

000)、アダマシア・ライズ魔救の奇跡—ドラガイト (ATK 3000)

：マイルド・ターキー (7) || ファイヤールポールヘッド (0)

：デイヴァイン・キャッスル (フィールド魔法)、連成する振動 (永続罫)、凡骨の意地 (永続魔法)、アークライト・バリア (永続魔法・カウンター：4)

S I D E : 黎

「融合召喚！ 輝ける刃が舞い、我が極致に馳せる！ 天位の究極騎士、『アルカナ パラディンジョーカー』！」

アルカナ パラディンジョーカー：ATK 5000

攻撃力、5000……。

とうとう奴の切り札を超えた切り札が出て来たか。

紫色をベースにした鎧はそのままだが、より強固に、よりシャープになっている。盾もバックラーのような小型のものじゃなく全身を隠すような大型のスクトウムに、剣もロングソードから本来なら重さ故に両手持ちのバスタードソードに変わっていた。

あれがアイツの本当の姿、ジョーカーが俺を討つために出した奥の手……！

『アルカナワイルドコージョン超鬼札融合』の効果で融合召喚されたモンスターはリリースできず、またオレ自身はコントロールが変更できない。打ち倒すなら真正面から来るしかないぞ！

「……」

コントロール変更とリリースの禁止。前者は『ヴァレルロード・ドラゴン』対策に、後者は『壊獣』や『ラヴァ・ゴーレム』対策になるワケか。

ハイパワーなモンスターにこの耐性は強いぞ……。

「まあ、このターンで終わるお前には関係無い話だがな！ バトル！ オレ自身で『ヴァレルロード・X・ドラゴン』を攻撃！」

宣言と同時にジョーカーは両手剣を右手でしっかりと握り、鏢から赤・青・黄色の光を流し剣にまとわせる。電子回路のような複雑なラインを描いた光は剣に満ち、一回りも二回りも剣が大きくなったかのように錯覚させた。

「……攻撃力の差は20000！」

「これを受けたら、黎さんの負けです！」

3色に輝く光をまとった剣で、ジョーカーが俺のドラゴンに斬りかかる。

あれを受ければ確かにアウト……。しかしその強烈な一撃が、用心深い性格が、お前を倒す！



「俺は『エクスタージ』を対象に、墓地の『リコシエット・ドラゴン』のモンスター効果を発動！ このターン戦闘では勝敗の因果が逆になり、相手に倍のダメージを与える！ ただし2500以上のダメージは与えられない！」

本来なら発生するダメージは4000になる、よってジョーカーにダメージは入らない。

だがここに例外がある。

「成程、ジョーカーの発動中の永続魔法『アークライト・バリア』の効果で4000ダメージは2000になる」

「ジョーカーの防御札が、逆に黎に有利になった！」

墓地から小型の金属質な龍が現れ、ジョーカーの重い剣を受け止める。硬質な音と共に衝撃波が発生した両者の激突は均衡を保つも、次第にジョーカーが押し返され始めた。

アイツのライフは2000、反射するダメージとピッタリ同じ。これで終わりだ！

リコシエット・ドラゴン (効果モンスター) (オリジナル)

星4

闇属性 / ドラゴン族

ATK 800 / DEF 1500

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できない。

(1)：墓地のこのカードを除外し、自分の闇属性・ドラゴン族モンスターを対象に発動する。

このターン1度だけ対象のモンスターとの戦闘で発生するダメージは倍となり、相手が受ける。

この効果で相手が2500以上のダメージを受ける場合、ダメージの数値を0として扱う。

またモンスターが戦闘によって破壊される場合、その破壊を無効にし、戦闘破壊されない方のモンスターを戦闘破壊する。

「そうはさせない」

ジョーカーは冷静にそれだけ呟くと、器用に残った手札の『ジャックス・ナイト』を左手で放って光に変えた。

「オレ自身の効果発動！ フィールド・墓地のカード1枚のみを対象に効果が発動した時、手札1枚を捨てる事でそれを無効にする！」

「じ、自分以外を対象にしても発動できる上に、手札コストの中身を問わないだ?!」

「更にこの効果でモンスターカードを捨てて相手モンスターの効果を無効にした場合、その両者のモンスターカードの攻撃力の合計の半分を、次のオレのターンが来るまでオレ自身に加える！」

「何だって!？」

俺の『リコシエット・ドラゴン』の効果を無効にしただけでなく、800と1900の合計値の半分、1350もバンプアップするだっつ!？」

アルカナ パラディンジョーカー：ATK 5000↓6350

一旦は押されていた紫騎士の大剣が今度は逆に押し込み始める。

赤色の金属龍は抵抗を続けていたものの、やがてその刃を受け止める頭ごと真つ二つにされ消滅してしまった。

『グゴオオオオオ!？』

「これでもう抵抗の術も無いだろ！」

「くっ！」

アルカナ パラディンジョーカー（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星10

光属性／戦士族

ATK 5000 / DEF 3800

「アルカナ ナイトジョーカー」+「ジャックス・ナイト」+「キングス・ナイト」+「クイーンズ・ナイト」

(1)：フィールド・墓地のカード1枚を対象にした効果が発動した時、手札を1枚捨てて発動できる。

その発動を無効にし、破壊する。

(2)：融合召喚されているこのカードが(1)の効果でモンスターカードを捨て、相手のモンスター効果を無効にした場合に発動できる。

次の自分のスタンバイフェイズまでこのカードの攻撃力は、手札から捨てたモンスターと効果を無効にしたモンスターの攻撃力の合計の半分アップする。

(3)：このカードのコントロールは変更できない。

(4)：このカードが相手によって破壊された時に発動できる。

墓地、または除外状態から自分の「アルカナ ナイトジョーカー」を召喚条件を無視して守備表示で特殊召喚する。



「ここまで喰らい付いたのに……！」

ただし首の皮一枚を繋げる形で。

黎：LP  
1700↓25

「あつ!?」

「これは……」

「何と!」

「……おお」

「耐えただと!?!」

爆発の煙が晴れ、やがてこちらの視界も明瞭に確保されていく。

そして俺の俺の前には、俺のライフをギリギリで残してくれたドラゴンが、その腕に装着した透明な盾をから煙を上げていた。

『ゴオオオオ……!』

シールドバリスタ・ドラゴン：DEF 2100

「何だと……!?!」

「はあ……、はあ……、はあ……っ! 手札の『シールドバリスタ・ドラゴン』は、戦闘ダメージを半分にして特殊召喚できる……。今発生したダメージは3350、だからその半分の1675が俺のライフから削られ……。ぜえ、ぜえ……。25だけライフが残ったってワケだ……。!」



「チッ！」

「更にッ！ 闇属性・ドラゴン族モンスターが戦闘により破壊された事で、自身の効果により『マッド・トリガー・ワイアーム』を墓地から……ぐっ……、特殊召喚……っ！」

「……『ヴァレル・アンド・カートリッジ』で戻しておいたカード」  
「これで壁が2体になりました」

マッド・トリガー・ワイアーム：DEF 100

破壊された大砲の龍に変わり、防弾シールドを持った龍とイカれた目をした引き金型の龍が現れ防衛ラインとなる。

まだ、俺は負けてない。まだ負けられない……！

「あの布陣を前に黎は諦めてない……。最後まで勝とうとしている！」

「……サーは生粋の負けず嫌い、敗北と死が同等だった以上は当然の諦めの悪さ」

「往生際の悪い奴め、だがだからこそか。ならば『マスラーO』、『ドラガイト』！ 邪魔な壁モンスターを蹴散らせ！ 『マスラーO』は守備表示のまま、守備力の数値で戦闘を行う事ができる！ 消えろ！」

「っ！」

白い鉄巨人と青い石龍が俺のモンスターを薙ぎ払い、粉碎する。

これで再び俺の場はガラ空きになった。

『マッド・トリガー・ワイアーム』の……、効果発動……！ デッキから闇属性・ドラゴン族モンスターを2体、墓地に送るっ！」

「だがその効果で墓地に送ったカードの効果はこのターン発動できない！　そしてオレにはまだもう1体攻撃できるモンスターが残っている！」

確かに、『マッド・トリガー・ワイアーム』の効果で埋葬されたモンスター効果はこのターン無効。

そして奴の場にはモンスターが4体いて、攻撃は3回しか終わってない。奴の途切れないペンデュラム召喚の戦線、まさかここまで脅威とはな。

「トドメだ！　『フルール・ド・バロネス』、奴のライフを削りきれ！」

『ハアアアアア！』

「トラップ発動、『カウンター・ゲート』！　ダイレクトアタックを無効にし……、ぐっ、1枚ドローツ！」

白百合の女騎士がジョーカーの号令に合わせて馬を駆り剣を振るう。

真正面から横薙ぎに振るわれる剣は確実に俺の首を捉えていたが、硬質な音と共に障壁の表面を削るだけに留まった。危ない。しかし『ガード・ブロック』よりこっちの方

がこのデッキには合ってると思ったけど、モンスターを引けなかったな。お陰で……。「オレは『マスラーO』の効果発動！ 1ターンに1度相手の効果が発動した時、オレの手札が3枚になるようドローできる！」

ご覧の通りジョーカーの手札が0枚から、一気に3枚になるまで補充されてしまった。

あの中にモンスターを追加で召喚するカードがあると不味い。『ガード・ブロック』なら適用されないタイミングだったのに、カードチョイスを完全にミスったな。

カウンター・ゲート

【通常罫】

(1) : 相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

その攻撃を無効にし、自分はデッキから1枚ドローする。

そのドローしたカードがモンスターだった場合、そのモンスターを表側攻撃表示で通常召喚できる。

「オレはこれでバトルを終了する」

……どうやら速攻魔法等で追加召喚するカードは引けなかったらしい。

「し、凌ぎ切ったあ……」

「首の皮一枚、いえ薄皮一枚ですかね」

「……超ギリギリ」

「まだ奴のターンは終わっていない、油断するには早いぞ」

後ろでへなへなと腰を抜かすファイオと、それを支えるフレイ。そして安堵の息を吐くポーラに、表情が険しいままの桜。

残りライフ25、フィールドもズタズタになり、奴の完全な優勢は明らか。しかも手札が3枚もある。やれやれ、追い込まれたな……。

「しぶといな、良い事だ」

「はあ……、はあ……、ふうー……っ。そうかい、ありがとよ」

「フツ。オレは魔法カード『タイマンソウル』を発動。この効果によりお前はオレ自身以外を攻撃できなくなり、バトルの間一切のカードを発動できなくなる」

タイマンソウル（オリジナル）

#### 【通常魔法】

このカード名の（1）（2）の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

（1）：自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象に発動する。

そのモンスターがバトルフェイズ開始時に存在する場合、相手は他のモンスターをそのターン攻撃できない。

またこの効果で選択されたモンスターが戦闘を行う攻撃宣言時からダメージ計算終了時まで、お互いにカードの効果が発動できない。

(2) : 墓地のこのカードを除外して発動する。

自分の墓地から通常モンスターを5体選択し、相手はそこから2枚を選ぶ。  
選ばれたカードを好きな順番でデッキの1番上に戻す。

やるな、これで俺は攻撃力6350のモンスターを攻撃しなくちやいけなくなった。

しかも奴はコントロール変更ができないし、リリースで除去もできない。対象を取る効果にも強い。更に1ターンに1度魔法・罫を無効にする『ドラガイト』がいて、手札補充の『マスラー0』もいる。実に盤石、鉄壁の戦線、あれを突破するのは困難を極める。

「更に墓地の光属性『聖騎士アルトリウス』と闇属性『幻獣竜』を除外し、『カオス・ソルジャー——開闢の使者——』を特殊召喚！」

『ハアッ!』

カオス・ソルジャー—開闢の使者—：ATK 3000

げっ、ここで『開闢の使者』かよ！

「そしてカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「この瞬間、墓地の『シールドバリスタ・ドラゴン』の効果発動！ 墓地のこのカードを除外し、このターンにバトルで破壊されたモンスターの効果が無効にし、攻撃力と守備力を0にして特殊召喚する！ 蘇れ『エクスチャージ』！」

ヴァレルロード・X・ドラゴン：DEF 0

シールドバリスタ・ドラゴン（効果モンスター）（オリジナル）

星5

闇属性／ドラゴン族

ATK 0 / DEF 2100

このカード名の（1）（2）の効果はデュエル中にそれぞれ1度しか発動できない。

（1）：自分の闇属性・ドラゴン族モンスターが戦闘を行うダメージ計算時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、戦闘ダメージを半分にする。

(2) : 相手ターンの終了時にこのカードを墓地から除外して発動できる。

このターンの戦闘で破壊された自分の闇属性・ドラゴン族モンスターを自分の墓地から1体選んで特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効となり発動できず、攻撃力・守備力は0となる。

地面に紫の魔法陣が開き、中から盾を装着した龍が姿を現した。『シールドバリスタ・ドラゴン』の背中が左右に開くと中から光を乗せた弩いしゆみが現れる。弩は弦を引き絞って装填された光を射出すると、その光は黒と赤の大砲の龍に成り代わった。

「……ではオレは改めてターンエンドだ。効果も使えず、攻撃力も守備力も無い。そんなモンスターで何ができるか、見せてみるが良い」

ジョーカー : LP 2000

手札 : 0枚

フィールド

: アルカナ パラディンジョーカー (ATK 5000)

: フルール・ド・パロネス (ATK 3000)、超重ちょうじゅうてんじん天神マスラーO (DEF 4)

000)、<sup>アダマンシアライズ</sup>魔救の奇跡ードラゴイト (ATK 3000)、カオス・ソルジャー―開闢の使者― (ATK 3000)

：マイルド・ターキー (7) Ⅱファイヤーオパールヘッド (0)

：伏せカード1枚、デイヴアイン・キャッスル (フィールド魔法)、連成する振動 (永続罫)、凡骨の意地 (永続魔法)、アークライト・バリア (永続魔法・カウンター：4)

確かに奴の言う通り、今の『エクスチャージ』は木偶の坊も同然。

敵はモンスターが5体、いずれも攻撃力3000を最低値にした大型モンスター。

対する俺のライフはたったの25、風前の灯火。ジョーカーは2000だが、永続魔法の効果で2000ダメージが遮断されてしまうので実質4000。

普通に考えればここから逆転する事なんてできやしない。

だが。

「これが俺のラストターンだ、行くぞ」

「来い」

こんな窮地、何度でも乗り越えて来た。

負ければ死ぬ状況なんて腐る程あった。

俺は、負けない。勝つんだ、光を超えて、闇を超えて、ただ純粹に、勝つ。



勝利して光の力を手に入れて、闇すらも掌中に納めてみせる。

「俺のターン」

燃える心を抑え、力強くデッキトップに手を伸ばした。

バチンッ！

「っ！」

な、何だ……？

カードに、指が弾かれた？

「随分禍々しいカードを使っているな」

「何？」

「ここは神聖なる領域、邪悪なものは存在すら許されない。お前のデッキの一番上のそ

のカード、お前が一瞬触れただけで悍ましいエナジーが膨れ上がった。

恐らくこの聖域によってカードの内側に封じられた力が、お前という逃げ道に入り込もうとしたからだ。警告してやる、そのカードをドロウするのはやめておけ。ああ、善意からの警告だとも。そいつを使ったら最後、お前がどうなるかはオレにも分からないぞ」

邪悪なカードか。つまり、このデツキトップの正体はあのカード。

……。

「お前は武勇を示した、誰も笑いはしない。敢闘を讃え——」

「うるせえよジョーカー」

「何？」

「俺のターン……」

再び指が弾かれるような衝撃を受けるが、腕と手の筋肉を硬直させ離す事を防ぐ。痛い、これまでに経験した事の無い痛みだ。

どう痛いのか、叩かれるような痛みでも斬られるような痛みでも、刺されるような痛みでもない。例えられないんじゃない、恐らくこの激痛は本当にこの世に無い、見つかっていないんじゃない。『存在しない』。これは文字に起こせない、起こしてはいけないものなのだろう。

痛覚神経をカットして痛みを遮断しようと試みるが、痛みは変わらず脳に訴えられ続けている。神経を介した電気信号じゃないのか。それだけでもこのカードの存在が人知を超えた悪しき異物だと示唆していた。

だが、それがどうした。

「ドロオーツ！」

俺はカードを指で摘まんだまま腕の動きだけでカードをドロウし、運命のカードを引く。

常人なら手が弾け飛ぶだろう。だが俺は化物、人間じゃない。髪の毛の一本まで自分の意志で操るヒトデナシ。爆ぜる手も、吹き飛ぶ指も、俺には存在しない。

「俺が引いたカードは『RUM—ケイオス・フォース』！ ぐ……っ！」

「黎?！」

聖域の中だから分かる。このカードからまるで蛇のように邪なナニカが這うように俺の中に入り込んで来ている。

ラースの時は恐らく余剰分が大気中に発散されたからここまでじゃなかった。だがこの場所ではそれが出来ない、だから俺に逃げ込もうとしているんだ。

使えば確実に、俺はこの黒いモノに犯され潰される。掴んでいるだけでも右指から右腕までがどんどん黒い瘴気のような存在に蝕まれている……！

(だったら)

けれど、それでも。

(だったら、何だ！ 何が問題だってんだ！)

それは俺が、このカードを使わない理由にはならない！

(俺は、このカードで破滅しようが、勝つために決闘たたかして来たんだ！)

腐りそうになる腕に力を籠める。筋肉に、骨に、血管に、神経に命令を下す。即ち『負ける事は許さない』と。

邪神が何だ、このカードの半分はフィオの力！ アイツが俺を破滅させるために仕込んだってのか？ ふざけるな！ 俺はフィオを信じる！ アイツが何を懺悔したいのかは知らねえよ！ だが、俺はボロボロの体で俺のためにこのカードを授けてくれたアイツを信じる！ 絶対にだ！

「ごっ、お、おとおおとおおっ！」

「お前……」

「行くぞジョーカーアーツ！ フィールド魔法『リボルブート・セクター』の効果発動！ 墓地の『ヴァレット』モンスターを特殊召喚する！」

モンスターの数の差は4体、4体蘇生できれば十二分！

「この馬鹿野郎が……。ならテメエには、力を発揮すら出来ない敗北をくれてやる！」

『ドラガイト』の効果発動、『リボルブート・セクター』の発動を無効にし破壊する！」  
 青い石のドラゴンが冷凍光線を吐き、俺のフィールド魔法を粉碎する。墓地からの召喚もこれで不可能となった。

よし、これで『ドラガイト』の効果はこのターン使用できない。

「更にオレはトラップ発動、『死魂融合』！ネクロ・フュージョン墓地からおジャマ達を除外し、『おジャマキング』を融合召喚！ その効果によりお前のメインモンスターゾーンは3ヶ所使用不可能となる！」

『おジャマアアアキングウウウウウ！』

「くっ、ここぞか……！」

ネクロ・フュージョン  
死魂融合

【通常罫】

(1) : 自分の墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを裏側表示で除外し、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃できない。

ジョーカーはこちらのカードを砕いただけでなく、更に3匹のモンスターを合成した

白い不気味な魔獣の能力でモンスターゾーン3ヶ所に罰印を置いてきた。

展開も封じられ、守備力3000の壁まで増やして……。ますます追い詰められて燃えて来るなあ！

ジョーカーの徹底した対策は、そのまま俺に対して感じる危険度！ アイツが俺を警戒している事の証左！ こんな俺を危険視して最大限に手を打つ、嬉しいねえ本当に！

おジャマ・キング：DEF 3000

「これでお前はモンスターをもう1体しか追加で召喚できない。諦めろ」

「そうはさせねえよ。1ヶ所空いてれば十二分、エクストラモンスターゾーンを使えば2体出せるって事だからな」

それに奴の手札は今0枚。『マスラーO』の効果は、俺がカードを発動させなければ使えない。『ドラガイト』で無効にした以上、手札補充は無しだ。

焼きつきそうな指を力業で動かし、俺は右手に持ったカードをジョーカーに突き付けた。

「行くぞ、これが俺の魂のカード！ 手札から『RUMーケイオス・フォース』を発動！

このカードは自分のエクシードモンスターを2つまでランクアップさせ、カオスエク

シーズを特殊召喚する！」

フィールドに現れる、黒と白の破滅的な紋様を写し取った魔法カード。

これこそが俺の切り札、俺の最後の手段。これで勝てなければ、俺の負けだ。

そして『ケイオス・フォース』を使って敗北するなんて事は、絶対に有り得ない！

「俺はランク4の『ヴァレルロード・X・ドラゴン』をランクアップさせ、新たなモンスターに進化させる！ 見せてやるよ俺の切り札、お前を打ち倒す最後の鬼札をな！」

「それはどうかな？」

「！」

「オレはオレ自身の効果を発動！」

莫迦な、奴に手札はもう無い筈!?

訝しむ俺の眼前に展開された魔法陣に黒く歪んだ空間が生まれ、中から光が飛び出す。現れた輝きは1枚の魔法カードになり、その場で除外エフェクトによつて分解された。

「墓地の『超鬼札融合』アルカナ・ワイルドフュージョンの効果発動！ 融合モンスターの効果で手札を捨てる時、代

わりにこのカードを除外する！」

「なん……だと……っ！」

アルカナ・ワールドフュージョン  
超鬼札融合（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：EXデッキの裏側表示のカードを3枚除外して発動する。

自分の手札・フィールドから、「アルカナ」融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、または墓地から除外し、その融合モンスター1体をEXデッキからEXモンスターゾーンに融合召喚する。

この効果で融合召喚されたモンスターはリリースできない。

（2）：融合モンスターが効果を発動するため、またはその効果によって手札を1枚捨てる場合、墓地のこのカードを代わりに除外できる。

この効果はこのカードが墓地に送られたターンには使用できない。

バギンツ！

ガラスか氷の割れる音かと一瞬思った。

そのくらい甲高い音がして、俺のカードがグレーアウトして砕けたのだ。

「俺の、ランクアップマジックが……!?!」

まさか手札を0枚にしたのは罠!? 俺がフィールド魔法を囮に本命を使う事を予想していた!? そうして俺が何かカードを発動した瞬間、墓地の『超鬼札融合』を除外す



る効果で俺の最大の一手を潰すつもりだったのか!?

「これでお前のカードは使えない」

「まだだ!」

「ほう?」

「マジック発動っ! 『リターン・ランク・アップ』! 墓地の『RUM』を手札に戻す!」

リターン・ランク・アップ (アニメオリジナル)

【通常魔法】

自分の墓地から「RUM」と名のついたカード1枚を選択して手札に加える。

墓地ポケットにいつの間にか収納されていた俺のRUMが吐き出され、それを手に取る。触れた瞬間、再び焼けるような、刻まれるような形容し難い、筆舌に尽くし難い痛みに襲われる。

知るか。痛いから何だ。苦しいから何だ。

このまま何もせずにいればいつか都が、フィオが、死ぬんだぞ。

それを俺のこの数刻の苦痛で防げるなら、あまりにも安い!

「『ケイオス・フォース』が手札に戻った！」

「……でも、これで」

「そうだ、『マスラーO』の効果発動！ オレの手札が3枚になるようドロウする！」

再びジョーカーの手札が補充される。

終盤にあの制圧は本当にキツい……！

「『RUM—ケイオス・フォース』、発動！」

「オレ自身の効果！ 手札を1枚捨てて、それを無効にする！」

『スキル・サクセサー』が墓地に落とされ、手札に戻った俺のランクアップマジックが再び割れて消滅する。

これで俺の手札は無くなった。フィールドに残っているのは効果も攻守も無いモンスターが1体のみ。

対する奴はモンスター6体を従えた制圧陣形。誰が見ても、もう俺に逆転の芽は残さ  
れていないと言うだろう。

「くつ、主殿がこれだけやってジョーカーはまだ2枚も手札が残っているのか！」

「そんな……、これじゃあ、黎は……！」

「最早打てる手が残っていません、ジ・エンドです」

「……彼は頑張った、褒めるべき」

フィールド魔法の展開もできない、オーバーレイ・ユニットが無いから『エクスタチャー  
ジ』の効果も発動できない。

「ここまでだな、貴様は良く戦った」

「……」

「だがもう終わりだ。大人しくターンを終えろ、無駄に引き延ばさず次でトドメを刺し  
てやるよ」

「……」

「なあ、時には勝てない絶壁があるって知っているだろう？」

「俺は……、墓地の『デフラドラグーン』の効果発動。墓地から同じ名前のモンスター3  
体を除外する事で、墓地から特殊召喚できる」

デフラドラグーン：ATK 1000

『スニツフイング・ドラゴン』が3枚消滅し、先程落としておいた赤い金属質な翼竜が  
墓地から復帰する。

確かに、もう壁モンスターを並べる以外に道は無い。それだって俺の場に出せるのは  
2体か3体まで。奴の6体のモンスターの猛攻は止められない。『おジャマ・キング』は

攻撃力0だが墓地に『スキル・サクセサー』が落ちたから実質800、僅か25だけのライフには致命傷……。

状況はあの時と同じ、いやそれ以上に悪化しているな。

デフラドラグーン（効果モンスター）

星3

闇属性／ドラゴン族

ATK 1000 / DEF 600

このカード名の、（1）の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできず、（2）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードは手札の他のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚できる。  
 （2）：このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地からこのカード以外の同名モンスター3体を除外して発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

「まだ足掻く気か？ お前なら『カオス・ソルジャー——開闢の使者——』の効果を知らないワケじゃないだろう」

「ああ、モンスターを戦闘破壊すれば2回目の攻撃ができる。つまり俺の『ヴァレルロード・X・ドラゴン』と『テフラドラグーン』はそいつだけで突破されてしまう」

しかも『テフラドラグーン』は攻撃表示だ、2000ダメージが通れば俺の負けになる。

「黎……」

「主殿……」

「黎さん……」

「……サー……」

だからこれが、正真正銘、本当に、最後の最後だ！

「ここで俺は、墓地の『スーパーリローダー・ドラゴン』のモンスター効果発動!」  
「何?!」

「ライフを半分支払い、墓地のこのカードとフィールドの閥属性・ドラゴン族モンスターを除外する! 俺は『デフラドラグーン』を除外!」

黎 : LP 25 ↓ 13

ぐ……、25から13つても珍しいけど、ここまで来ると体への負担も本当に重  
てえ!

「そしてこのターンに相手によって無効にされたカードと同じ種類のカードを、相手に

よって無効にされた回数と同じ枚数だけ墓地から手札に戻す！」  
「ンだとお!？」

このカードのモチーフはコンピューター用語で言う「スーパーリロード」。即ちデータベースの中に残っているキャッシュを無視して、強制的にWebページを再度読み込む方法である。

相手のカウンターというキャッシュの不具合を無視して、俺の望むカードを再度読み込ませるこいつは、こういう事を想定して1枚だけ突っ込んでおいた。

ジョーカーが狭い範囲ながらもカードを無効にする効果を持つている以上、無効化合戦がどこかのタイミングで発生するのは想定範囲内。ならば今こそ、その仮想の状況を現実に反映する時だ！

「……このターンに無効にされたのは『リボルブート・セクター』、それと『ケイオス・フォース』」

「二度墓地に落ちてから回収している以上、カウントは3枚扱いだ」  
「って事は……!？」

「墓地から戻れ、『死者蘇生』！ 『リターン・ランク・アップ』！ そして『ケイオス・フォース』！」



スーパードラゴンロード・ドラゴン (効果モンスター) (オリジナル)

星4

闇属性 / ドラゴン族

ATK 1800 / DEF 500

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できず、発動したターン自分はカードをセツトできない。

(1) : LPを半分払い、墓地のこのカードと自分フィールドの闇属性・ドラゴン族モンスター1体を除外して発動する。

このターン相手によって無効にされた自分のカードの枚数だけ、自分の墓地から無効にされたカードと同じ種類 (モンスター・魔法・罫) のカードを手札に戻す (同名カードは1枚まで)。

この効果で手札に加えたカードは他のカードを発動・特殊召喚するために手札から離す事はできない。

墓地ポケットから排出される3枚のカードを手にした瞬間、腕の中に何かがあるように感じる感覚が刺さった。

激しい痛み、筋骨を筆り取られるような不快感、電気信号をどうイジっても変えられ

ない世界のルールのようなそれを、俺は意志の力だけで抑え込む。

痛い？ 知るか。

苦しい？ だつたらどうした。

辛い？ 黙れ。

そんなものが何の役に立つ。俺に必要なのは、どんな敵も叩き伏せる圧倒的なパワーのみ！

「魔法カード『死者蘇生』！ 蘇れ、『フュリアス』！」

「『ヴァレルロード・F・ドラゴン』の効果は2体を対象にします、ジョーカーの効果じゃ防げません！」

「つまりジョーカーに選択の余地は無い！」

「チイツ！ オレはオレ自身の効果を発動！ 手札を1枚捨てて、『死者蘇生』を無効にし破壊する！」

「続けて『RUM—ケイオス・フォース』、発動！ 俺は、ぐつ！ ランク4の『エクスチャージ』でつ、お、オーバーレイ！」

「オレ自身の効果！ 手札1枚と引き換えにそれを無効にして破壊だ！」

俺の墓地に『死者蘇生』と『ケイオス・フォース』、ジョーカーの墓地に『地盤沈下』と『オールド・バウアー』が飲み込まれ、カードの応酬が一瞬で終わる。

俺の手札はこれで1枚、奴は0枚。

「はあ、はあ……っ。少し、ばかり、足りなかったな……！」

「……っ！」

「マジック……、発動！ 『リターン・ランク・アップ』！」

墓地から再びランクアップマジックが手札に戻る。

ふと、右腕を汗が伝う感覚がした。

視線をやればそこには、赤い血がドクドクと零れていくドス黒く変色した俺の右腕が。邪神の力に耐えられず、俺の腕の方が負けてしまったらしい。

痛みは……、あるけれど耐えられる。常人ならのたうち回る程の激痛も、俺にとって  
は些事だ。

「はあ、はあ……、すう、はあー……っ」

「れ、黎、腕が……」

「狼狽えんなよ、ファイオ。俺は化物、この程度でどうこうなるワケが無いだろ？」

痛覚遮断、失敗。

感覚遅鈍化、失敗。

筋骨修復、失敗。

既に右手は完全にイカれているみたいだ。切り落として一から生やすしか無いらし



「っー」

「俺は『RUMーケイオス・フォース』を発動！ 自分フィールドのエクシーズモンスターを2つまで高いランクのカオスエクシーズにランクアップさせる！ 俺はランク4の『ヴァレルロード・X・ドラゴン』でオーバーレイ・ネットワークを再構築！」

『ゴオオオッ！』

既に右手は思うように動かない、なのでカードを挟んだ指先ごと髪の毛を巻き付け操り人形のように外側から強引に動かす。もう少し耐えろ、俺の右腕。勝つんだ、負けちゃいけない。デュエルが終わるまで形を保て。邪神を討つまで朽ちるな。俺に今ここで死ぬ事は許されない。許されてはいけない。

俺のランクアップマジックが光を放ち、その光が『エクスチャージ』に受け継がれる。背中に二門の大砲を背負った赤と黒の龍はエネルギーの塊となって銀河の渦に再び飛び込んで爆発を起こし、新しい命を紡ぐかのように輝いた。

「カオス・エクシーズ・チェンジ！」

★4↓★6

最初に構築されるのは、翼。紅色だったレーザーウィングはより大きく、力強くなり、

色も赤と紫の二色に書き換わる。

「金輪奈落より産まれし雷轟、五濁悪世に満ちる時！」

背中の大砲は三門に増え、両肩と頭の上に構築されていく。伴ってより鋭い爪と牙、より禍々しい尾が明確な形を得た。

「三世十方を焼き尽くす曠患の炎が終焉を告げる！」

ボディは全体的に真っ黒になり、赤と紫の電子回路のような模様が刻まれた。そして背中には毒々しいまでの棘が無数に並ぶ。

「来臨せよ、ランク6！」

最後に目が白い輝きを得る。黒目の無いその眼は、漆黒のボディと相俟って闇夜に獲物を狙う獰猛な魔獣を思わせた。







ああ、痛みが薄まったと思ったたらこんなになつていたのか。よく見れば胴体に邪悪なエネルギーが侵入を始めている、時間をかけてられねえな。

ヴァレルオーバーロード・CX・ドラゴン：ATK 4000

「テメエ、腕一本の犠牲では済まねえんだぞ、そのカードは！」

「自覚しているさ。この邪神のクソ野郎は肺まで狙い始めやがった、ランクアップマジックはもう墓地に行ったのに『クロスエクスチャージ』に移り変わって俺に流れ続けてやがる。5分もすれば俺の肺はお陀仏、呼吸できなくなつて俺は死ぬ」

「！」

だが、お陰で分かった事が一つある。

そうか、そういう事だったんだ。

本当は俺だったんだ。

都じやなかつたんだ！

「決着と行こうじゃないか、ジョーカー！」

「やれるものならやってみる！ お前がEXデッキからモンスターを特殊召喚したこの瞬間、墓地の『オールド・パウアー』のモンスター効果発動！ デッキトップのカード

と墓地のこのカードを除外し、墓地から絵札の三銃士の内2体を手札に戻す！ オレは『キングス・ナイト』と『クイーンズ・ナイト』を選択！

オールド・パワー（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星3

地属性／戦士族

ATK 1000 / DEF 1000

（1）：このカードの召喚・特殊召喚に成功した時に発動できる。

デッキから「クイーンズ・ナイト」を1枚手札に加える。

このターン、通常の召喚とは別に「クイーンズ・ナイト」を召喚できる。

（2）：相手がEXデッキからモンスターを特殊召喚した時、デッキの1番上のカードと手札・フィールド・墓地のこのカードを除外して発動できる。

墓地に存在する「クイーンズ・ナイト」「キングス・ナイト」「ジャックス・ナイト」の中から2枚を選択して手札に加える。

奴の手札が2枚増えたか。で、除外されたデッキトップは……『おジャマジック』だな。

だが関係無い!

『ヴァレルオーバーロード・CX・ドラゴン』の効果発動!  
アンチ・エネミー・ク  
ロスエクスチャージ!”

今、俺は自分の運命を悟った。

十二分だ、俺がここに来た意味はあった。それで重畳。俺は、俺の人生を、見極めたのだ。

人生つてのは、そういうモノだろうか? 死を前にして自分の生まれた意味を知るものだろうか?

「ライフを半分払いオーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、墓地の『ヴァレル』リンクモンスター1体を対象に発動! そのモンスターを特殊召喚する!」

「オレ自身の効果発動! 相手がフィールドまたは墓地のカード1枚を対象に効果を発動した時、手札を1枚捨てる事でそれを無効にし破壊する! 手札の『キングス・ナイト』を捨てて、『ターンカット・オーダー』!」

奴の手札が1枚消え、剣先から波動を放ってこちらの効果を妨害してくる。

怪しげな電波のようなものを受けた大砲の黒龍はしかし、それを受けても平然としており、鬱陶しいと言わんばかりに弾き返した。

「無駄だジョーカー。俺のランクアップマジック『ケイオス・フォース』は特別製でね、

ランクアップしたモンスターは相手ターン終了時まで相手の効果を受けない。よって『クロスエクスチャージ』の効果は無効にされない」

「なん、だと……!?!」

ヴァレルオーバーロード・CX・ドラゴン：ORU 1↓0

黎：LP 13↓7

「さあ蘇れ、『ヴァレルロード・ドラゴン』！」

『G a a a a a a a a a a a a a a a!』

ヴァレルロード・ドラゴン：ATK 3000

「チツ、だがお前はオレ以外を攻撃できない！そしてオレは自身の効果でコントロールを奪えない！」

「更に！この効果でモンスターが特殊召喚された時、相手モンスター1体の効果は無効にして攻撃力・守備力を自分フィールドのリンクマーカー1つにつき600ダウンさせる！俺が対象に選ぶのは、当然お前自身だ！」

「ば、莫迦な……っ!?!」

ヴァレルオーバーロード・Cクロスエクスチャー X・ドラゴン (エクシース・効果モンスター) (オリジナル)

リンク6

闇属性 / ドラゴン族

ATK 4000 / DEF 4000

レベル6モンスター×3

このカードは「C」カオスモンスターとしても扱う。

このカードの(2)の効果を発動するターン、自分は1度しか攻撃宣言できない。

(1) : このカードは効果では破壊されない。

(2) : このカードが「ヴァレルロード・X・ドラゴン」をX素材としている場合、以下の効果を得る。

●1ターンに1度、LPを半分払ってこのカードのX素材を1つ取り除き、自分墓地の「ヴァレル」リンクモンスター1体を対象に発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

その後、相手フィールドのモンスター1体を選んでその効果を無効にし、攻撃力・守

備力を自分フィールドのリンクマーカーの合計×600ダウンさせる。

轟！ と新しく生まれた黒い龍が口腔内の砲門からビームを放つ。

ジョーカーは器用にそれを盾で受け止めるが、毒に犯されるかのようにその場で片膝をついた。

ヴァレルオーバーロード・CX・ドラゴン：ORU 1↓0

アルカナ パラディンジョーカー：ATK 6350↓5000↓200

「ぐ、ううう……！」

「エグツ!? 攻撃力が一気に200になっちゃった!？」

「これで攻撃力の差は3800!」

「ただしこのターン、俺は1回しか攻撃できない」

「だが永続魔法『アークライト・バリア』の効果でオレが受けるダメージは2000ポイント減る！ よってダメージは1800にダウンし、ライフは200残る！ 更に強化されたオレは破壊された時、元のオレ自身を特殊召喚できる効果がある！ それでお前は終わりだ!」

確かに次のターンに奴のフィールドには攻撃力3800の奴自身と守備力4000の『マスラーO』が存在する事になれば、そのどちらかの攻撃を受けたら俺は終わりだ。次のターンがあればな!

「お前、1つ忘れてるぞジョーカー」

「何!?!」

「『ヴァレルロード・ドラゴン』の効果発動! 1ターンに1度、モンスター1体の攻撃力を500ダウンさせる! “アンチ・エネミー・ヴァレット”! この効果の発動に対し、相手はカード効果を発動できない! 俺はお前自身を選択!」

「しまった!?!」

アルカナ パラディンジョーカー: ATK 200↓0

そして追加で赤い龍の援護射撃が突き刺さる。

側面から放たれたビームが盾に直撃し、強固な大盾は耐えきれずに砕けてしまった。

「ぐっ!」

「……攻撃力が、ゼロに!」

「これでジャスト2000ダメージだ、主殿!」

「行くぞ！ 『ヴァレルオーバーロード・CX・ドラゴン』で『アルカナ パラディン ジョーカー』を攻撃！」

三門の大砲を背負った龍が四つん這いのように大地に伏し、背中と口の中、更に装甲を稼働させて覗かせた肩や脇腹の砲門を構えて狙いを定めた。キャノン砲には黒い光が集い、禍々しいまでのビームを撃ち出す。

盾を壊されたジョーカーは大剣でそれを受け止めようとするが、しかしブラックビームの奔流はジョーカーの全身を過たず無慈悲に呑み込んだ。

「『こくえん黒焉のヴァレル・テンペスト』！」



「見事だ」

黒い光線を全身に浴びた騎士は、それだけを呟くと断末魔すら零さずに吹き飛んでいった。

ジョーカー：LP 2000↓0

黎：WIN

ジョーカー：LOSE

「……やった、の？ 黎が勝つたんだよね！」

「はい、文句無しの逆転勝利です！」

着ていた紫の鎧も砕け、地面に倒れるジョーカー。

右半身を犠牲にしつつも辛うじて勝利を得た俺。

今、雪辱は果たされ趨勢は決定された。

「やった……、やった、やったー！ 黎が勝ったあー！」

「大逆転、見事だった主殿！」

「やりましたね、黎さん！」

「……ぱちぱちぱちぱち」

取り敢えずは後ろでずつと俺の戦いを見守ってくれた彼女達に、一言お礼を言いたいな。

そう思つて痛む右腕を抱えつつ振り返り。

そこで俺の意識は途切れた。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 87 : 天使の嘆き／悪魔の笑み

SIDE : フィオ

「黎いー……」

気が付いたら一目散に走り出していた。

目の前で倒れる彼。

右腕から顔の右顎あたりまで黒いナニカに塗り潰されており、原形の無い彼の右腕が黒い蛇のように彼を呪い殺す幻想すら見える。

何が出来るのでも無いけれど、それでも何かしたいという衝動に任せて、わたしは彼に駆け寄り抱き上げた。

「しっかりして！ 黎！ 黎っ！」

返事は無い、完全に気を失ったらしい。肌は青白いとか土気色とかを通り越して気色悪い暗い色になっている。

呼吸も酷く浅く、空気が通る音が全く聞こえない。普通なら「はあはあ」とか「ぜえ

ぜえ」みたいな音がする筈なのに、そよ風のような弱さで息をしている証拠だ。

サツと自分が青褪めるのが分かった。ちよつと泣いているかも知れない。

わたしはこれまで彼が傷付く様子は何度も見て来た。プライドとの死闘でズタズタになった姿の彼も、他の護衛との戦いでミイラみたいな姿になった彼も見ただ。でもこれは違う。

悍ましい何かに体を浸蝕された状態。怪我ではない、病でもない、明らかにダメージとしては異質だ。

何だこれ。

何なんだこれ。

何が彼の肉体を破壊しているのか全く分からない。

ただただ死にかけている事だけが事実で、そんな弱った黎が生きている間に眼前に現れるなんて考えもしなかった。

こんな彼は、いや人間は見た事が無い。

「フレイ、黎を……黎を助けて！」

「分かっています！ 2人とも！」

「承知！」

「……ん！」

わたしが言うが早いか、フレイと桜さんとポーラは既に黎を助けるために動き始めていた。

桜さんは懐から植物の種を取り出して魔力を注ぎ急成長させ、ポーラさんは黎の肩関節を凍らせ痛覚を鈍らせる。そして。

「アッー」

フレイは手刀を一閃、黒く歪んだ黎の右腕を切断したのだった。

「わ、あ……」

そのまま血が噴き出るが素早く桜さんは急成長させた肉厚な葉を包帯のように巻き、ポーラは斬り飛ばした右腕を氷漬けにした。

確かに呪いの源になつて右腕を切り離すのは理に適つてとは思うけど、3人とも躊躇が無いなあ……。これが年の功かあ……。

「事前に魔法で掛け合わせたアロエとチドメグサの混合種、その葉で作った包帯だ。失血の心配は少なくとも不要だろう」

「……痛みもほぼ無かつた筈。……まあ、こんな状態では痛かつたとしても呻き声すら出せなかつたかも知れないけど」

「右肺を始めとして腕から先にも浸蝕されています。ただ幸いここは聖なる領域、ここですべて安静にしていればこの程度の余剰分は自然消滅するでしょう」

返り血を浴びた桜さんも表情を変えないポーラもしれつと言うなし……。

いやあ自分が小娘だつて思い知らされるね。

「念のため、ここで治療術をかけ続ける。問題無いな、ジョーカー卿？」

「ああ、構わねえさ」

「うわっ」

いつの間にかわたしの後ろには、さつきまで黎とデュエルをしていた武人がいた。紫色の鎧は砕けてしまったため、その姿は少し目付きがキツいだけの青年みたいになっている。

「黎、治るよね」

「その男は、産まれながらにして大いなる宿業を背負っている」

わたしの問いには答えず、武人は肅々と己の見立てを語った。

「宿業？」

「そうだ。オレの眼には見える、その男が腹に持つ闇が。怒り、憎しみ、妬み、恨み。そうした力と同時に、友愛や親愛、希望を持っている。己を支えてくれる者達への感謝の念だ」

感謝、か……。

あの時黎の見せてくれたビジョンは兎角酷かった。殺すために殺し、生きるために殺

し、その狭間で拷問をしたり拷問を受けた。死にたくないと懇願する相手も殺したし、殺したくない相手も殺した。そうしないと自分が、そして義理の妹さんが死んでしまうから。

そんな生活を都ちゃんは支えてくれたんだろうけれど、黎から感謝の心を削ったんだろう。人間社会で行動出来るよう仮面を被る日々が、彼の心を疲弊させた。

彼が自分達を狙う存在がないこの世界に転生したのは、この上無い僥倖なんだと思う。

なのにその隣にはたった一人だけの家族がない。

果たしてそれが彼にとって、どれだけ耐え難い事なのか。

故にこそ、黎は命懸けで戦っているんだ。命より大切な家族と友達を守りたいのだから。

「相反する光と闇が原動力となり、光を内に闇を外にした黒鬼が如き苛烈な騎士。それがその男だ。だから闇に傾いたなら、お前らで光に戻してやれ。どちらかに倒れば、そいつは死ぬぞ」

「へえ、優しいんだ」

「アホ抜かせ。……光の聖域に揺さぶられない精神は証明された、合格だ」

「え？」



「その男に伝えておけ、目が覚めたらオレの所に来い、ってな」

それだけ言ううとジョーカーはのっしのっしと建物の奥の扉に入行って行ってしまった。

☆

聖堂の床で黎が眠っている。

隻腕で、酷く衰弱した状態で。

それを精霊の3人が3種類の治癒術を使って回復しようとしている。

「……」

わたしに出来るのは、祈る事のみ。

力を使えば回復を促進できるかも知れないけれど、アレはデメリットが怖い。今は信じられる彼女達に任せるべきだろう。

「……」

正直、100%全てを思い出したワケじゃない。

わたしこと神山フィオは間違いなく神山一家に生まれた人間の少女だし、超能力者でも魔法使いでも妖怪でも無い、デュエルアカデミアの1人の生徒だ。

幼稚園の思い出も、小学校の記憶も、アカデミア中等部での経験もしっかりある。

でも同時に分かっているんだ。

この『わたし』は『わたし』だけれども、『私』でもある、と。

奇妙な感覚だ、二重人格に近いかも知れない。

わたしは神山ファイオだけれど、■■■■でもある。■■■■が地上に降り立ち赤

ん坊に生まれ変わったのが、わたし。確証は無いけど。

でも神様が人間に生まれ変わって目的を果たす物語は、この世にいくらでもある。

インドのラーマヤナなんかがそうだし、北欧のワルキューレは人間に恋をして人間に生きたまま零落する。神道では人間は神様の子孫という考え方だからある意味『人間』神様』と言えるんじゃないだろうか。中国の仙人も人間の赤ん坊に転生する秘術を持っているとか。

きつとわたしもそうなのだろう。

どうして人間になったのかは、そしてこの予想の真偽は、分からないけど。

「黎……、わたしは君を信じる。君はわたしを1度とて疑わなかった、だから君の信じるわたしである事を誓うよ」

ただただ彼のため、彼の願いを叶えるため、わたしは彼に助力したい。

自身の真実は分からなくとも、その思う心は真実だから。

「今の言葉、聞いてた？　いつかちゃんと答えてね。そのまま眠り続けたら、わたし怒る

からね」

なんて、ヒロインめいた事をボヤいてみたり。

わたしにそんな役割は似合わない。彼をこんな姿にした【元凶】なのだから。

ピシリ

「ん？」

その時、わたしの耳に小さな音が届いた。

フレイ達は……、回復魔法が奏でる小さな音に遮られて聞こえていないらしい。

ピシピシ、ピキキキ

だがわたしには聞こえる。

どこだ？ どこからこの音は鳴っているんだ？

ガラスがヒビ割れるようなこれは一体？

周囲を見渡すが聖堂のガラスの窓に異変は見られない。

ではガラスでは無いのだろう。

ガラスじゃなく、割れる時に高い音がして、しかも割れるようなものと言え——  
「黎の腕か！」

フレイが切り落とし、ポーラが凍らせた彼の右腕。完全に氷に閉ざされ、彼から数メートルばかり離れた所に放置された肉の塊。

それに視線をやれば、小さく蠢いているように見える。

慌てて近くに行くと。

ビキッ！

間違いない、音はここから発生している。

何か分からないけど、ヤバい。

そう判断したわたしは、咄嗟に思い切り凍った腕を蹴り飛ばした。

「うりゃあああつ！」

「マスター!?!」

「何か分からないけどヤバそうだった、ごめん！」

今日は分からない事ばっかだ、本当に。

そんな小言と同時に、彼の腕は氷の戒めからいきなり解き放たれた。

ガシャーンと景気の良い音と共に切り落とされた腕は別の生き物のように氷の中から飛び出し、黒いオーラのようなものをまといながら浮き上がる。

「……くっ、完全に停止させるために氷漬けにしたのに！」

「想定以上に厄介ですね、邪神というのは！」

「どういう事!？」

「主殿の右腕を乗っ取った邪神の残滓が、別の生き物に変生へんじようしたのだ！」

うわあ、何だそりゃ。

なんてツツコミを入れる暇も無く、黒いオーラは人型になっていく。

見た目は妙齢の女性。吸血鬼のように鋭い犬歯と爪を持ち、優雅なドレスを台無しにするような歪んだ顔をしている。オーラがそのまま人間の形に固まったようで、残念ながらカラーリングは不明。

まるで黎の右腕が心臓になったかのような、不気味な人造人間みたいだ……！

『ア、アア……、アアア……！』

「カミューラ……！」

「知ってるの、フレイ!？」

「古い知人ですよ。昔のヨーロッパでヴァンパイア一族として覇権を得ていたのですが、いつの間にか姿を消していました。邪神に姿を真似られるという事は生きてはいる

んでしようが……」

なおカミューラがセブンスターズの一員としてアカデミアに乗り込んで来た事、その時に高田と接触した縁で姿形が模倣された事、そして彼女が黎の勝利とほぼ同時刻に、『幻魔の扉』に吸収された事を、わたし達は戦いが終わってかなり経った後で知る事になる。そして「幻魔から魂が解放されたなら彼女もどこかで復活したでしょう」とフレイは後に語ったりする。

それはさて置き、次第に黒い人型は輪郭を明確にしていき、色以外は本物のヒトとなった。

「フフフフフ……」

「！」

「誇り高きヴァンパイア一族の再興のため、生贄となつて貰うわ！」

「デュエルディスク……、わたし達とデュエルがしたいって事か……！」

向けられるのは明らかな敵意。黎の右腕とはいえ、その実体化には邪神のエネルギーが使われている。敵対する理由はさて置き、敵と見て間違いない。

生贄って言うてるから、確実に敗者の命を奪う闇のゲームだ。

でもジョーカーはどっか行っちゃったし、フレイ達は治療に専念している。

今この場で戦えるのはわたしだけ。

勝てるのか、黎の右腕、そして邪神の力に。あの高田にすら勝てなかったわたしが。  
(迷っていられる状況じゃない)

ディスクの電源を入れてデュエル開始の準備をする。

起動からデュエルが出来るようになるまで10秒も要らない。その僅かな時間で腹を括れ、覚悟を決めろ、弱気な自分を切り捨てる。彼の背中を見て来たわたしなら出来る筈だ！

「マスター！」

「フレイ？」

「これを使って下さい！」

相棒の精霊が投げたのは革のベルト、そしてそこに付いているデッキケース。

的確に受け取ったそれを、わたしは躊躇い無く腰に装着してデッキを引き抜く。

「これは……」

フレイが投げ渡して来たのは新しい天使族のデッキ。

だがエクストラデッキに入っていたのは白や黒や青のカード……、つまり学校では絶対に手に入らないカード達だ。これでデュエルしろという事はつまり——、いや深く考える必要は無い。フレイはとてもし長生きな天使だ、わたしが心配するような事なんてとつづくに対策済みだろう。

ただ一つ、聞きたい事があった。

「フレイ、いつの間にこれを？」

「黎さんの部屋からパチツてきました」

てへぺろ、な表情で誤魔化すわたしの天使。

後で黎には謝ろう。パチるって可愛く言ってるけど、万引きと同じ泥棒だからね？

「待たせたね、吸血鬼さん。わたしが相手だ！」

デツキをディスクから抜き取り、ベルトのホルスターの物と交換。

中身を確認する余裕は無い、ぶつつけ本番だ。

髪をまとめる白いリボンを締め直し、気合い充填。行くよ！

「デュエル！」

ファイオ：LP 4000

幻影カミューラ：LP 4000

☆

デュエルが開始し、わたしのアカデミアから支給された白いディスクと、カミューラ



の蝙蝠の皮膜を思わせるような金色のディスクが起動する。同時にフィールドに合計26マスのカードゾーンが浮かび上がった。

これはさっきまで黎がやっていた奴……、同じ場所でデュエルをしているから同じフィールドを使うのか。ペンデュラムとやははこのデッキには入ってないっばいから、内2マスは完全に腐るけど。

「先攻は私よ。手札から『テラ・フォーミング』を発動！ デッキからフィールド魔法『ヴァンパイア帝国』<sup>エンパイア</sup>を手札に加え、発動！」

いきなりフィールド魔法か……。

聖なる神殿のような周囲が夜の草原に変わり、相手の後ろに白い城が筍のように地面から突き出す。それだけならヨーロッパの粹な風景だったかも知れないが、月光が赤い。吸血鬼の恐ろしさを知らしめるかのように。

ヴァンパイア帝国

【フィールド魔法】

フィールド上のアンデット族モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ500ポイントアップする。

また、1ターンに1度、相手のデッキからカードが墓地へ送られた時、自分の手札・

デッキから「ヴァンパイア」と名のついた闇属性モンスター1体を墓地へ送り、フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

「続けて魔法カード『テイク・オーバー5』を発動！ デッキの上からカードを5枚墓地に送り、次のターンに1枚ドロウする！」

【幻影カミュラのデッキから墓地に送られたカード】

『ハリケーン』

『ヴァンパイア・ロード』

『龍骨鬼』

『闇より出でし絶望』

『魔のデッキ破壊ウィルス』

「そして手札から『不死のワーウルフ』を召喚！」

『ウオオオオオオン！』

不死のワーウルフ：ATK 1200

「カードを1枚セット、ターンエンドよ!」

幻影カミュラ：LP 4000

手札：1枚

フィールド

：不死のワーウルフ（ATK 1200）

：伏せカード1枚、ヴァンパイア帝国（フィールド魔法）

「わたしのターン、ドロー!」

相手フィールドにいるのは緑のズボンを履いた銀色の毛並みを持つ狼人間。見た事が無いモンスターだけど、“不死”って事は破壊耐性か蘇生効果持ちって所かな。

だったら、その後ろにいるプレイヤーが死ぬまで打ち込むまで!

「マジック発動、『天空の聖水』! デッキから『天空の聖域』か、それをテキストを持つカードを手札に加える! 私が選ぶのは——」

デッキを抜き取り、カードを探す。

正直初手にこれが来て助かった、お陰である程度はデッキの中を見回す事が出来る。

「永続魔法『パースィアスの神域』！ このカードはデッキでは『天空の聖域』としては扱わないけど、フィールドや墓地では扱うため『天空の聖水』でサーチできる！ そのまま発動！」

「マスター、気を付けて下さい。『パースィアスの神域』の効果は相手にも及びます」「了解！」

天空の聖水

【通常魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：デッキから、「天空の聖域」1枚を発動するか、「天空の聖域」のカード名が記されたモンスター1体を手札に加える。

その後、フィールドまたは墓地に「天空の聖域」が存在する場合、自分フィールドの「ヒュペリオン」モンスター及び「代行者」モンスターの数×500LP回復できる。

(2)：「天空の聖域」のカード名が記された自分のモンスターが戦闘で破壊される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

パースィアスの神域

## 【永続魔法】

(1) : このカードのカード名は、フィールド・墓地に存在する限り「天空の聖域」として扱う。

(2) : このカードが魔法&罨ゾーンに存在する限り、フィールドの天使族モンスターの攻撃力・守備力は300アップし、フィールドにセットされた魔法・罨カードは効果の対象にならず、効果では破壊されない。

(3) : 1ターンに1度、自分の墓地の天使族モンスター及びカウンター罨カードの中から、合計3枚を対象として発動できる(同名カードは1枚まで)。

そのカードを好きな順番でデッキの上に戻す。

成程、『天使族を強化する』効果と『セットされたカードを守る』効果は別なのか。

アドバイスありがとう、相棒。

「わたしは手札から『創造の代行者 ヴィーナス』を召喚！」

『ハアッ！』

一番手として手札から出したモンスターが、わたしの右隣の召喚ゲートを通ってフィールドに現れる。

金色の髪と服、そして翼を持ち、赤・青・紫の球体を従える新しい天使。それがこの

デッキのお披露目に出せた、個人的には割と満足だ。

『『パースィアの神域』の効果で攻撃力・守備力が300アップ!』

創造の代行者 ヴィーナス：ATK 1600↓1900

「何、レベル3でありながら攻撃力1900ですつて!？」

『『ヴィーナス』の効果発動! このカードはライフを500払う事で、デッキから

『ホーリーシャイン・ボール神聖なる球体』を1体特殊召喚できる! この効果に発動回数制限は無い! よつ

てライフを1500払って、デッキから3体特殊召喚!』

ファイオ：LP 4000↓2500

神聖なる球体：DEF 500↓800

神聖なる球体：DEF 500↓800

神聖なる球体：DEF 500↓800

金色の天使が従える3つの球体が透き通り、そのままフィールドにモンスターとして出現する。

同時に全身に気怠さにも似た重み加わり、疲労感のような息切れが沸き上がった。「ぐ、つ、ううううう……！」

おつも……！　これが、闇のゲームでライフを払うって事か……！

それでも、ライフコスト1500でモンスターが4体並んだのならお釣りが来る！

創造の代行者　ヴィーナス（効果モンスター）

星3

光属性／天使族

ATK 1600／DEF 0

（1）：500LPを払って発動できる。

手札・デッキから「神聖なる球体」1体を特殊召喚する。

ホーリーシャイン・ボール  
神聖なる球体（通常モンスター）

星2

光属性／天使族

ATK 500／DEF 500

聖なる輝きに包まれた天使の魂。

その美しい姿を見た者は、願い事がかなうと言われている。

「行くよ」

すう、と息を吸う。

きつとこのデッキは元の世界では使えない。

黎や桜さんから聞いた、エクシーズを使った精霊が闇に吞まれて消えたと。黎や桜さんが使えるのは特例であり、多分わたしは特例側にいない。このデッキはきつと、条件を満たさない限りは精霊界以外では使えないんじゃないかな。

だから今ここで思い切りブン回す！

「現れる、天光の煌めくサーキット！」



上に向けて力いっぱい手を伸ばす。その指先から紫電が走り、黎がやっていたように銀色の円盤型回路が上空に産まれた。

大丈夫、出来る。黎が何度もやってたからやり方も覚えている。

「召喚条件は天使族モンスター2体以上！ わたしは『神聖なる球体』3体をリンクマーカーにセット！ サーキット・コンバイン！」

わたしの場に展開された3つのガラス玉のようなモンスターがエネルギーの鍍金になり、回路のマーカーに宿るため飛び込む。条件の揃ったサーキットは光を放ち、モンスターをその中心から呼び出すゲートと化した。

「燦々と輝く剣を携えし聖騎士よ、神罰の代行者を襲名すべく天馬を駆れ！」

リンクマーカー  
L M : 左下・下・右下

「リンク召喚！ 『セステイアルナイト天空神騎士ロードパーシアス』 ツ！」

「ハアアア、タアツ！」

「『パーシアスの神域』の効果で攻撃力300アップ！」

天空神騎士ロードパーシアス：ATK 2400↓2700

わたしの前に華麗に降り立つのは8本脚の馬の下半身を持つ天空の騎士。クリスタルのように美しくも逞しい馬の体と、神々しい神の騎士としての上半身を以て、闇を滅するがために剣を抜く。

ちなみにわたしのディスクにはEXモンスターゾーンは無いのだが、どういふ事か『ロードパーシアス』は右から2番目のモンスターゾーンより少し奥に支えも無く浮遊している。こういう所も、現世では使えない理由になりそうだ。陰になって見えなかったけど、もしかすると黎とジョーカーの戦いの時もこうだったのかも？

「わたしは『ロードパーシアス』の効果発動。手札を1枚捨てて、デッキから『天空の聖域』関係のカードを手札に加える。わたしはデッキから『神罰』を手札に加えるよ」

セレスティアルナイト  
天空神騎士ロードパーシアス（リンク・効果モンスター）

リンク3

光属性／天使族

ATK 2400

【リンクマーカー：左下／下／右下】

天使族モンスター2体以上

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札を1枚捨てて発動できる。

「天空の聖域」またはそのカード名が記されたカード1枚をデッキから手札に加える。

フィールドに「天空の聖域」が存在する場合、手札に加えるカードを天使族モンスター1体に行わせる。

(2)：自分フィールドの表側表示の天使族モンスターが墓地へ送られた場合、自分の墓地から天使族モンスター1体を除外して発動できる。

除外したモンスターよりレベルが高い天使族モンスター1体を手札から特殊召喚する。

ここで更にモンスターを加えて戦線を強化するのも手だけど……。問題は相手の場の伏せカード、あれの中身次第では返しの手ターンにやられる展開も有り得る。

闇のゲームは負けたら死ぬ、ここは慎重に……！

「バトル！ 『ヴィーナス』で『不死のワーウルフ』を攻撃！ ヽヴィーナス・フラッシュ

！」

「ファイールド魔法『ヴァンパイア帝国』の効果！ アンデット族モンスターはバトルの時、攻撃力が5000アップする！」

不死のワーウルフ：ATK 1200↓1700

「それでも『不死のワーウルフ』は破壊だ！」

「ぐううっ！」

幻影カミュラ：LP 4000↓3800

「『不死のワーウルフ』は破壊された時、デッキから同じ名前のモンスターを特殊召喚する！ 来なさい、『不死のワーウルフ』！」

「っ、リクルーターか!?!」

「この時攻撃力は5000アップする！」

金色の光が放たれ、凶暴そうな狼人間が焼き払われる。

しかし死んだ筈の魔獣は、再びその地に降り立った。

不死のワーウルフ：ATK 1200 ↓ 1700

攻撃力は『ヴァンパイア帝国』で強化しても『ロードパーシアス』の方が高い。

でもアイツを倒しても次の『不死のワーウルフ』が場に出て来てしまう。そうなるってツキの2枚分の圧縮に加えてモンスターも残るし、そこで相討ちに持ち込まれたらこっちの首が絞まってしまう。

だったら、あのモンスターをデッキに1枚残して腐らせた方がまだマシ。最善を選べないのなら、最悪を防ぐのが鉄則だ。

不死のワーウルフ（アニメオリジナル）（自己解釈効果）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 1200 / DEF 600

(1) : このカードが破壊された場合に発動できる。

デッキから「不死のワーウルフ」1体を特殊召喚する。

(2) : このカードが(1)の効果で特殊召喚された時、攻撃力は自分の墓地の「不死のワーウルフ」の数×500アップする。

「1枚カードをセット、わたしはこれでターンエンド！」

フィオ：LP 2500

手札：3枚

フィールド

：天空神騎士ロードパーシアス（ATK 2700）

：創造の代行者 ヴィーナス（ATK 1900）

：伏せカード1枚、パーシアスの神域（永続魔法）

「私のターン、ドロロー！ 墓地の『テイク・オーバー5』の効果を発動して1枚ドロロー！」

わたしの場に『神罰』があるって事は、あっちも分かかってる筈。迂闊に消費せず、マストカウンターを見極めないと。

これで相手の手札は3枚、果たしてどう出るか。

「場の『不死のワーウルフ』をリリースして『ヴァンパイア・グレイス』をアドバンス召喚！」

『フッフッフッフ』

ヴァンパイア・グレイス：ATK 2000

狼男が召喚の渦に消えて、代わりに如何にもな貴族の奥様が登場する。

優雅な濃紺のドレスを羽織っているが、手にした錫杖の宝石と同じ色の赤いドリンクが不気味さを加速させていた。

『ヴァンパイア・グレイス』の効果発動！ 1ターンに1度、相手のデッキからカードを1枚墓地に送らせる！ 罠カードを墓地に送りなさい！

ここだ、召喚権を使って1ターンに1度の効果ならカウンターするに相應しい！

「カウンター罠オープン、『神罰』！ 『天空の聖域』がある時、カードの発動を無効にして破壊する！」

「カウンター罠発動、『ヴァンパイアの支配』！ 私の場に同族が存在する時、相手のカードの発動を無効にして破壊する！」

「なっ!?!」

神罰

【カウンター罠】

(1)：フィールドに「天空の聖域」が存在し、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

ヴァンパイア・グレイス（効果モンスター）

星6

闇属性／アンデット族

ATK 2000 / DEF 1200

このカードが墓地に存在し、アンデット族モンスターの効果によって自分フィールド上にレベル5以上のアンデット族モンスターが特殊召喚された時、2000ライフポイントを払って発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

「ヴァンパイア・グレイス」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

また、1ターンに1度、カードの種類（モンスター・魔法・罠）を宣言して発動できる。

相手は宣言された種類のカード1枚をデッキから墓地へ送る。



ヴァンパイアの支配

【カウンター罠】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1) : 自分フィールドに「ヴァンパイア」モンスターが存在し、モンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時に発動できる。

その発動を無効にし破壊する。

その後、破壊したカードがモンスターカードだった場合、自分はその元々の攻撃力分だけLPを回復する。

神聖な赤い雷撃で相手の吸血鬼夫人を焼き尽くそうとする私のカード。しかし相手の場に蝙蝠の群れが突如現れ、それは防がれてしまった。

カウンター用のカードを元から伏せていた……、最初から『神罰』は通らなかつたか！

「これで『ヴァンパイア・グレイス』の効果は無効にならないわ！」

「……わたしはデッキから『神の宣告』を墓地に送る！」

「この瞬間『ヴァンパイア帝国』の効果発動！ 相手のデッキからカードが墓地に送られた事で、デッキから『ヴァンパイア』モンスターを墓地に送って相手フィールドのカー

ドを1枚破壊できる！ 私は『ヴァンパイア・レッドバロン』を墓地に送り、『ロードパーシアス』を破壊する！」

『ぐおおおおおっ！』

「ろ、『ロードパーシアス』が……！」

「まだよ！ 魔法カード『生者の書―禁断の呪術―』を発動！ アンタの墓地から『ロードパーシアス』を除外し、たった今墓地に送った『レッドバロン』が復活！」

「何っ!？」

ヴァンパイア・レッドバロン：ATK 2400

生者の書―禁断の呪術―

【通常魔法】

(1)：自分の墓地のアンデット族モンスター1体と相手の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。

その自分のアンデット族モンスターを特殊召喚する。  
その相手のモンスターを除外する。

抜かったかも……。一番強いモンスターを失っただけじゃなく相手のモンスターの復活まで手伝わせるなんて。

相手の召喚した黒い鎧の騎兵の攻撃力はフィールド魔法の効果で2900になる。わたしのモンスターは攻撃力1900のモンスターが1体だけ、これはかなり危ない。ところで『レッドバロン』と言っておきながら赤色なの馬のタテガミだけなんです……。。

「バトルよ！ 私は『ヴァンパイア・グレイス』で『創造の代行者 ヴィーナス』を攻撃！ フィールド魔法の効果で攻撃力500ポイントアップ！」

「ま、マスターー！」

「フィオ殿ー！」

「……フィオー！」

ヴァンパイア・グレイス：ATK 2000↓2500

錫杖から赤いオーラを産み、禍々しい槍に変えて飛ばす血の伯爵夫人。

これを受けたらわたしのフィールドはガラ空気になる、モロに喰らってたまるか！

「こつち向いてる暇があるなら回復に専念しろっ！ 墓地の魔法カード『天空の聖水』の

効果！『天空の聖域』に関わるモンスターがバトルで破壊される時、破壊を無効にしてこのカードを除外できる！」

「でもダメージは受けて貰おうかしら！」

「ぐっ、うううううう！」

ファイオ：LP 2500↓1900

「まだ終わってないわよ！ 続けて『レッドバロン』で攻撃い！」  
「ぐっ、うあああああああああああああ！」

ヴァンパイア・レッドバロン：ATK 2400↓2900

ファイオ：LP 1900↓900

いっつつ、たああああいつ！

めっちゃ痛い！ 高田の馬鹿の時より更に痛い！ 四方八方からプロボクサーに殴られてるみたいにあちこちが痛い！ 悲鳴をあげたけど全然足りない！ 痛みにのたうち回って泣きたいくらい痛い！ つか吹っ飛んだ衝撃で息ができない！ モ

ンスター越しのダメージなのにこんなに痛いのか!?

ってか何これ黎達はこんなのに耐えてたの、耐久力どうなってんの、本当に人間なのか!?! バカなの、死ぬのか!?! 死ぬよ、わたしが!!

高田の馬鹿とのデュエルの時もあったけど闇のゲームでの衝撃って下手するとライフより先に身体が駄目になるわ!

『レッドバロン』の効果発動! バトルフェイズが終わった時、戦闘破壊した相手モンスターを私のフィールドに特殊召喚する! お前の墓地の『ヴィーナス』は私のものよ!!

創造の代行者 ヴィーナス：DEF 0↓300

くっ、『パーシアスの神域』が奪われたモンスターまで強化しちゃった……。

この吸血鬼、強い!

「まだまだだよ! 私はレベル6の『ヴァンパイア・グレイス』と奪った『ヴィーナス』でオーバーレイ!」

「エクシーズ召喚!?! レベルが全く違うのに!?!」

「お勉強不足よ! 奪った相手モンスターをレベル6扱いにして、エクシーズ召喚でき

るモンスターがいるって教えてあげるわ！」  
 そ、そんなのアリか!?

☆6×☆3||★6

「赤き月夜よ！ 今ここに伝説の幕開けとなり世界を恐怖に染め上げろ！ エクシーズ  
 召喚！ 『アルダンヒール交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン』！」  
 『ハアツ！』

交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン：ATK 2600

ヴァンパイア・レッドバロン（効果モンスター）

星6

闇属性／アンデット族

ATK 2400／DEF 1000

（1）：1ターンに1度、1000LPを払い、相手フィールドのモンスター1体とこの  
 カード以外の自分フィールドの「ヴァンパイア」モンスター1体を対象として発動でき

る。

そのモンスター2体のコントロールを入れ替える。

(2) : このカードが戦闘でモンスターを破壊したバトルフェイズ終了時に発動できる。

そのモンスターを墓地から可能な限り自分フィールドに特殊召喚する。

交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン（エクシーズ・効果モンスター）

ランク6

闇属性／アンデット族

ATK 2600 / DEF 1000

レベル6モンスター×2体以上

元々の持ち主が相手となるモンスターをこのカードのX召喚の素材とする場合、そのレベルを6として扱う。

(1) : 1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除き、相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを墓地へ送る。

(2) : 1ターンに1度、フィールドのモンスターカードが、効果で相手の墓地へ送られた場合、または戦闘で破壊され相手の墓地へ送られた場合、このカードのX素材を1つ

取り除いて発動できる。

そのモンスター1体を自分フィールドに守備表示で特殊召喚する。

わたしのモンスターと吸血鬼の女貴族が銀河の渦に飛び込み、別のモンスターに生まれ変わる爆発を起こす。

光の中から出て来たのは金髪の高い吸血鬼。如何にも由緒正しい貴族様といった見た目だが、肩に乗ったしやれこうべが普通の人間じゃない雰囲気醸し出していた。

『シエリダン』の効果発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手フィールドのカードを1枚墓地に送る！ ……あら、残ってるのは『パーシアスの神域』しか無いわねえ！」

「わざわざらしい台詞をつ！ 『パーシアスの神域』はこれで墓地に送られる！」

吸血鬼—ヴァンパイア・シエリダン：ORU 2↓1

これでわたしのフィールドは文字通り丸裸。しかもこっちの墓地に『ヴィーナス』が戻らなかつたって事は、墓地に行ったのは『グレイス』の方。オーバーレイ・ユニット



はまだ1つ残ってる上に、攻撃力は実質3100だ。

対するわたしのライフは残り900、追い詰められたなあ。

「私はこれでターンエンド。さあ、吸血鬼一族復活の時は近いわ!」

何が復活の時だ、見た目だけ真似した偽物のクセに! せめて色を黒一色じゃなくオリジナルのにしてから言え!

幻影カミュラ：LP 3800

手札：1枚

フィールド

：交血鬼—ヴァンパイア・シエリダン（ATK 2600・ORU：1）、ヴァンパイア・レッドバロン（ATK 2400）

：ヴァンパイア帝国（フィールド魔法）

「わたしのターンだ!」

「諦めなさい、今ならサレンダーも許してあげるわよ?」

「断固拒否する!」

気炎を滾らせて吠えるが、状況は完全にこつちが不利。それでも諦めないのがデュエ

ルなんだよね。

さてさて、この恐ろしい吸血鬼をどうやって倒そうか。

「ドロー！」

……よし、この手札なら逆転できる！

「わたしは魔法カード『テラ・フォーミング』を発動！ デッキからフィールド魔法『天空の聖域』を手札に加え、そのまま発動！」

お互いの場の丁度境目で大地が分割され、その土地の様子が変化していく。

カミュラのフィールドは不気味な白い古城の庭のまま、わたしのフィールドは雲の上にある古代遺跡へと書き換わっていく。まるで2枚の絵を隣り合わせているように、わたし達の足元は断絶した。

「手札から『神秘の代行者 アース』を通常召喚！」

『ハアツ！』

神秘の代行者 アース：ATK 1000

「召喚成功時に効果発動！ デッキから新たな“代行者”を手札に加える！ ただし『天空の聖域』が存在する場合、『マスター・ヒュペリオン』を選ぶ事ができる！」

『マスター・ヒュペリオン』ですって!? でもそのカードの召喚には“代行者”を除外しないといけない、お前の唯一召喚した『創造の代行者 ヴィーナス』はまだオーバーレイ・ユニット! つまりその『アース』を除外する以外に無い!」

「わたしは墓地から『英知の代行者 マーキュリー』を除外し、『マスター・ヒュペリオン』を特殊召喚!」  
『又ウン!』

マスター・ヒュペリオン : ATK 2700

白い彫像のような天使に導かれ、赤く燃える大きな天使がフィールドに現れる。

太陽を背負ったかのような輝きを持つこのモンスターなら、吸血鬼という夜の種族を相手するに相応しい!

「いつの間に……!」

「仕込んでおいたんだよ、さつき『ロードパーシアス』の効果を使った時にね」

神秘の代行者 アース (チューナー・効果モンスター)

星2

光属性／天使族

ATK 1000 / DEF 800

(1)：このカードが召喚に成功した時に発動できる。

デッキから「神秘の代行者アース」以外の「代行者」モンスター1体を手札に加える。  
 フィールドに「天空の聖域」が存在する場合、手札に加えるモンスターを「マスター・ヒュペリオン」1体にできる。

マスター・ヒュペリオン（効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2700 / DEF 2100

(1)：このカードは自分の手札・フィールド・墓地の「代行者」モンスター1体を除外し、手札から特殊召喚できる。

(2)：1ターンに1度、自分の墓地から天使族・光属性モンスター1体を除外し、フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

フィールドに「天空の聖域」が存在する場合、この効果は1ターンに2度まで使用で

きる。

さて、『マスター・ヒュペリオン』はフィールドのカードを破壊する効果がある。でも攻撃力は『アース』と合わせても3700、相手のライフを削るには1000足りない。

次のターンでまたこっちのモンスターがやられてしまったら、残りライフ900のわたくしが生き残る事はほぼ不可能だろう。

ここはダメージよりも、盤面のアドバンテージを優先だ。

『マスター・ヒュペリオン』の効果発動！ 1ターンに1度、墓地の光属性・天使族モンスターを除外する事でフィールドのカードを1枚破壊する！ 更にこの効果は『天空の聖域』がある時、もう1度だけ使用が許可される！ 墓地から『神聖なる球体』を2体除外し、『ヴァンパイア・シエリダン』と『ヴァンパイア帝国』を破壊する！

「何ですって!?!」

『ヴィーナス』は返して貰うよ、バニシング・ブレイズ“!”

両手に炎のエネルギーを込めて火の玉を作る『マスター・ヒュペリオン』。小型の太陽のようになったそれを太陽神は大きく振り被って投擲し、金髪の吸血鬼と赤い月を背負う城を粉碎した。

「これで攻撃力は2400から上がらない！ 行け、『マスター・ヒュペリオン』！」

『ヴァンパイア・レッドバロン』を攻撃！　　“ソーラー・ブラスタ”！」

『ハアアアアア、タアアツ！』

『ギイヤアアアアアアアア！』

太陽神は続けて両手を互い違いに向き合わせ胸元に金色に輝く炎の玉を作り出し、そこから一直線に伸びる炎のようなビームを撃ち出す。

吸血鬼の騎兵を貫き一瞬で火達磨にした灼熱の熱線は、文字通り灰も残さずヴァンパイアを滅したのであった。

「まだ攻撃は残ってる！　続けて『アース』でダイレクトアタック！」

「ぐっ、おのれえっ！」

幻影カミュラ：LP　3800↓3500↓2500

これで相手のフィールドは丸裸、形勢逆転。

後は返しのターンに備えるだけ！

「わたしはレベル8の『マスター・ヒュペリオン』にレベル2の『神秘の代行者　アース』をチューニング！」

「リンク召喚の次はシンクロ召喚ですって!？」

白い天使が翼や服と同じ緑色の2つの輪になり空へと飛び立つ。緑のリングは上空で一列に整列すると、その中に赤い炎を携えた太陽神が潜り込み全身を輪郭と8つの星に変え、やがて一本の光の柱となった。

「革命の白百合！ 勝利をこの手にもたらすために今、咲き狂え！」

☆8+☆2||☆10

「シンクロ召喚！ 出でよ、『フルール・ド・バロネス』！」  
『ハアアッ！』

フルール・ド・バロネス：ATK 3000

現れたのは先程ジョーカーが使っていた百合の被り物をした白い騎士。

このカードなら相手が何をやっても1度だけ無効にできる。あの吸血鬼の手札は残り1枚、これで十分制圧可能だ。

エクストラデッキにはもう2枚レベル10のシンクロモンスターがいたけど、今回はこつちを選んだ。どのカードにも言える事だけど、破壊された後で相手に『死者蘇生』で

奪われないよう注意しないと。

「……ファイオ、本当にこの世界の人間？ ……リンク召喚もシンクロ召喚も、スムーズにやり過ぎ」

「彼女は主殿の近くでずっとデュエルを見ていた、やり方を自然と覚えていたのだろう」  
「ええ……、そうかも知れませぬね」

「リバースカードを1枚セット、わたしはこれでターンエンド」

ファイオ：LP 900

手札：1枚

フィールド

：フルール・ド・バロネス（ATK 3000）

：伏せカード1枚、天空の聖域（フィールド魔法）

フィールドは何かわたしの方に勢いの波を持って来た。

後はこのまま勝つだけ。

大丈夫だよ、黎。この吸血鬼さんが何を求めてるのか知らないけど、君を傷付けようとする奴はわたしがブツ倒す！



t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 88 : 夜が終わる光

ファイオ : LP 900

手札 : 1枚

フィールド

: フルール・ド・バロネス (ATK 3000)

: 伏せカード1枚、天空の聖域 (フィールド魔法)

幻影カミュラ : LP 2500

手札 : 1枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罨無し



「このカードは我が魂を捧げ、お前のモンスターを全て亡き者にする！　そしてお前の墓地からモンスター1体を強制的に私の下僕にするのよ！」

全体除去に加えて、わたしのモンスターを蘇生させるって事!?　何だそのデタラメ!?　でもここで『パロネス』を失うワケにはいかない。『パロネス』のパーミ効果はフィールドに存在する限り1度だけ、つまり蘇生されたら相手にも使えてしまう！　わたしの防御札は1枚だけ、通せば負ける！

『フルール・ド・パロネス』の効果発動！　1度だけカード効果の発動を無効にし、破壊する事ができる！」

『ハアツ！』

盾から光を放ち、扉から噴き出す突風を防ぐ『パロネス』。

時間切れになったのか石の扉はゆっくりと閉ざされ、やがて暴風も収まったのであった。

「よし、これで『フルール・ド・パロネス』は破壊されない」

「……代わりに、もう他のカードを無効にできなくなつた」

「それでも次の一手の壁にできるだけマシです」

「フフフ、マジックカード『ヴァンパイア・インスパイア』を発動！　墓地の『ヴァンパイア』カードを3枚除外し、2枚ドローする！　この時同じ種類のカードを3枚除外す

れば、追加でデッキから『ヴァンパイア・ジェネシス』を手札に加える事ができる！」  
「っ、どっちを通してても良かったってワケか！」

ヴァンパイア・インスパイア（オリジナル）

【通常魔法】

このカード名のカードは1ターンに1度しか発動できない。

(1) : 自分の墓地から「ヴァンパイア」カードを3枚除外して発動する。

デッキから2枚ドロウする。

同じ種類のカード（モンスター・魔法・罫）を3枚除外した場合、更にデッキから「ヴァンパイアジェネシス」を1枚手札に加える事ができる。

相手の墓地から『ヴァンパイア・グレイス』『ヴァンパイア・レッドバロン』『ヴァンパイア・シエリダン』の3枚が除外され、手札が3枚に潤う。

これで『バロネス』がこのターンに破壊されてもおかしくなくなった。

『ヴァンパイアジェネシス』の攻撃力は3000だけど、墓地から別のモンスターを蘇生させる効果がある。それを使われたら残りライフ900のわたしは終わりだ。

「続けて『天使の施し』を発動！ デッキから3枚ドロウし、2枚を捨てる！ 更に私は



ヴァンパイアジェネシス：ATK 3000

……等身大の人間サイズで、悪の組織の大幹部みたいな『ヴァンパイア・ロード』だったのに、真の姿は筋肉に覆われた巨大クリーチャーとか劇的ビフォーアフター過ぎない？ 面影無いよ？ 蝙蝠の皮膜みたいなマントが後ろにあるから辛うじて繋がりがあっても程度じゃない？ それだってマントからムササビの皮膜みたいになってるんですけど？ ダサ過ぎない？ イケメン吸血鬼返してくれます？

馬頭鬼（効果モンスター）

星4

地属性／アンデット族

ATK 1700 / DEF 800

（1）：墓地のこのカードを除外し、自分の墓地のアンデット族モンスター1体を対象として発動できる。

そのアンデット族モンスターを特殊召喚する。

ヴァンパイア・ロード（効果モンスター）

星5

闇属性／アンデット族

ATK 2000 / DEF 1500

このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、カードの種類（モンスター・魔法・罫）を宣言する。

相手は宣言された種類のカード1枚をデッキから墓地へ送る。

また、このカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズ時にこのカードを墓地から特殊召喚する。

ヴァンパイアジェネシス（効果モンスター）

星8

闇属性／アンデット族

ATK 3000 / DEF 2100

このカードは通常召喚できない。

自分フィールド上に存在する「ヴァンパイア・ロード」1体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、手札からアンデット族モンスター1体を墓地に捨てる事で、捨てた



アンデット族モンスターよりレベルの低いアンデット族モンスター1体を自分の墓地から選択して特殊召喚する。

「手札から永續魔法『ジェネシス・クライシス』を発動！ 『ヴァンパイアジェネシス』が存在する時、デッキからアンデット族を手札に加える！ そして『ヴァンパイアジェネシス』の効果！ 手札のアンデット族を捨てて、墓地からそれよりレベルの低いアンデット族を復活させる！ 今手札に加えた『竜血公ドラクレーアヴァンパイア』を捨てて、蘇りなさい『龍骨鬼』！」

『ガアオオオオオオ！』

龍骨鬼：ATK 2400

くつ、恐れていたコンボが！

「バトルよ！ 『龍骨鬼』、『フルール・ド・バロネス』に負けて来なさい！」

「振り返ちにしてやれ、『フルール・ド・バロネス』！」

「『龍骨鬼』の効果！ 戦士族かドラゴン族モンスターと戦闘を行った場合、相手モンスターを破壊する！」

「何?」

頭蓋骨を固めて作ったような鬼と龍のハーフのようなモンスターと、わたしの白百合の騎士が正面からぶつかり合う。知性の無さそうな骨の突進をひらりと躲した騎兵はその胴体にある赤い玉を一刀両断するが、途端に大爆発が起こりその熱波と爆風によって道連れにされてしまった。

幻影カミューラ：LP 2500↓1900

「これでお互いにモンスターを1体ずつ失ったけど、まだ私には『ヴァンパイアジェネシス』がいる! これで終わりよ!」

「させるか、トラップ発動『レベル・レジストウォール』! モンスターが破壊された時、レベルの合計がそのモンスターと等しくなるよう、デッキから効果を無効にしてモンスターを守備表示で特殊召喚する!」

ジェネシス・クライシス（アニメオリジナル）（自己解釈効果）

【永続魔法】

このカード名の（1）の効果は1ターンに1度しか発動できない。

(1) : 自分フィールドに「ヴァンパイアジェネシス」が存在する場合に発動できる。

デッキからアンデット族モンスターを1体手札に加える。

この効果で手札に加えたモンスターはこのターン召喚・特殊召喚できず、効果も発動できない。

(2) : 自分フィールドの「ヴァンパイアジェネシス」が破壊された時、このカードを破壊する。

龍骨鬼 (効果モンスター)

星6

闇属性 / アンデット族

ATK 2400 / DEF 2000

このカードと戦闘を行ったモンスターが戦士族・魔法使い族の場合、ダメージステップ終了時にそのモンスターを破壊する。

レベル・レジストウォール

【通常罫】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：自分フィールドのモンスターが戦闘または相手の効果で破壊された場合、そのモンスター1体を対象として発動できる。

レベルの合計がそのモンスターと同じになるように、デツキからモンスターを任意の数だけ選んで守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

破壊されたモンスターは幸いにもレベル10、これならかなり自由度の高い壁を設置できる。

デツキをディスクから抜いて扇形に広げ、中身をチェック。ここが恐らくターニングポイントだ、ここで特殊召喚するモンスターの選択をミスればわたしは負ける。召喚すべきモンスターは、壁か、布石か、火力か……。

「わたしはデツキから『イーバ』、『マジエスティ・ヒュペリオン』、そしてフレイを特殊召喚！」

「分身を飛ばします、コキ使ってください！」

イーバ：DEF 200/☆1

勝利の導き手フレイヤ：DEF 100/☆1

マジエスティ・ヒュペリオン：DEF 2700/☆8

ステレオタイプな宇宙人の小人、紫の炎を操る太陽神、そしてわたしの相棒が一列になり、屈んだ状態で召喚される。

効果が無効になってるからフレイの能力は使えない、けれど今はそれで十二分だ。

「小賢しい真似を！ ならば『ヴァンパイアジェネシス』で『フレイヤ』を攻撃！ 消えなさい！ 〃ヘルビシャス・ブラッド〃！」

「あああ、やっぱり効果が使えないとわたくし役立たずです、ごめんなさい！」

「平気平気！ 取り敢えず負けは無くなったからね！」

瘴気の突風で相棒の分身が消滅するが、わたしのダメージはゼロ。

壁モンスターとしての役割を果たしてくれたのなら文句なんてある筈も無いよ。

「リバースカードを場にセット、ターンエンドよ」

幻影カミュラ：LP 1900

手札：0枚

フィールド

：ヴァンパイアジェネシス（ATK 3000）

：伏せカード1枚、ジェネシスクライシス（永続魔法）

「わたしのターン！」

何とか凌げた……。取り敢えずあの毎ターン使える蘇生コンボは危険だ、このターンで処理しないと。

幸い手札は2枚あるしモンスターも2体残せた、このまま一気に叩く！

「現れろ、天光の煌めくサーキット！ 召喚条件は天使族2体！」

L M Ⅱ 右・右下

「リンク召喚！ 現れろ、『代行者の近衛 ムーン』！」

小人の宇宙人と日食の太陽神が赤い光になって回路に宿り、召喚ゲートを起動させる。

呼び出された鏡を持った天使は、金色の翼を広げてゆっくりと着地した。

ちなみにさつきの『ロードパーシアス』とは逆、わたしから見て左のEXモンスターゾーンに召喚してみたけれど、やっぱり謎パワーでディスクから離れた場所に浮いている。

代行者の近衛 ムーン：ATK 1800

『ムーン』をリンク召喚した時、デッキから『アース』を手札に加える事ができる。更にリンク素材として墓地に送られた『イーバ』の効果も発動。墓地から2体まで光属性・天使族モンスターを除外し、その同じ数だけデッキからレベル2以下の光属性・天使族モンスターを手札に加える」

代行者の近衛 ムーン（リンク・効果モンスター）

リンク2

光属性／天使族

ATK 1800

【リンクマーク：右／右下】

天使族モンスター2体

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがリンク召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「天空の聖域」またはそのカード名が記されたカード1枚を墓地へ送る。

フィールドまたは墓地に「天空の聖域」が存在する場合、代わりに自分のデッキ・墓地から「神祕の代行者 アース」1体を選んで手札に加える事ができる。

(2)：自分フィールドの天使族モンスター1体をリリースし、相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

イーバ（効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 500 / DEF 200

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが墓地へ送られた場合、このカード以外の自分のフィールド・墓地の天使族・光属性モンスターを2体まで除外して発動できる。

除外した数だけ、デッキから「イーバ」以外のレベル2以下の天使族・光属性モンスターを手札に加える（同名カードは1枚まで）。

墓地ポケットから最後の『神聖なる球体』とフレイが低い機械音と共に顔を出し、デッ



キから入れ替わりに2枚のカード『命の代行者 ネプチューン』と『宣告者の神巫』が手札に加わる。それらを相手に見せ、わたしの手札は『アース』を含め5枚に強化された。

「ごめんねフレイ、墓地にはできるだけ〃代行者〃を残しておきたいんだ。

「『アース』召喚！ 効果でデッキから『破壊の代行者 ヴィーナス』を手札に加える！」

神秘の代行者 アース：ATK 1000

しかし改めてモンスター効果で別のカードをサーチしたりサルベージしたりドロしたりするのは強いと思う。それだけで1枚分減った手札を埋め合わせる事ができるんだから。

「続けて手札から『命の代行者 ネプチューン』の効果発動！ このカードを手札から捨てて、手札か墓地の〃代行者〃モンスターか〃ヒュペリオン〃モンスターを特殊召喚できる！ 蘇れ、『マスター・ヒュペリオン』！」

『フウウウ……！』

「更に墓地の『マジエスティ・ヒュペリオン』は、〃代行者〃を1体除外する事で特殊召喚できる！ わたしは『ネプチューン』を墓地から除外して、蘇れ！」

『ホオオオ……!』

『ネプチューン』がゲームから除外された事で、デッキから『天空の聖域』を手札に加える」

命の代行者 ネプチューン（効果モンスター）

星1

光属性／天使族

ATK 0 / DEF 600

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードを手札から捨てて発動できる。

自分の手札・墓地から「命の代行者 ネプチューン」以外の「代行者」モンスター体を選んで特殊召喚する。

フィールドまたは墓地に「天空の聖域」が存在する場合、特殊召喚するモンスターを「ヒュペリオン」モンスター1体に行わせる。

相手ターン終了時まで、お互いにこの効果で特殊召喚したモンスターをリリースできない。

(2)：このカードが除外された場合に発動できる。

デッキから「天空の聖域」1枚を手札に加える。

マジエステイ・ヒュペリオン（効果モンスター）

星8

闇属性／天使族

ATK 2100 / DEF 2700

このカード名の（1）の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

（1）：このカードは自分の手札・フィールド・墓地の「代行者」モンスター1体を除外し、手札・墓地から特殊召喚できる。

（2）：自分の天使族モンスターの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは相手も受ける。

（3）：1ターンに1度、自分の手札・墓地から天使族モンスター1体を除外し、自分または相手の墓地のカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを除外する。

フィールドまたは墓地に「天空の聖域」が存在する場合、この効果は1ターンに2度まで使用できる。

マスター・ヒュペリオン：ATK 2700

マジエステイ・ヒュペリオン：ATK 2100

地球を司る天使に加え、太陽神と日食の太陽神も召喚される。

これでわたしのモンスターは4体、相手は1体。今度こそ仕留める！

「わたしは『マスター・ヒュペリオン』の効果発動！ 墓地の『イーバ』を除外し、『ヴァンパイアジエネシス』を破壊する！ 焼き払え！」

『グゴオオオオオオオ!?!』

「おのれ、よくもっ！」

「『ヴァンパイアジエネシス』が破壊された事で、『ジエネシス・クライシス』も破壊！」

赤い炎を操る太陽神が右手に金色の火炎を集め、強烈な右ストリートを繰り出す。筋骨隆々の不気味な吸血鬼を撃ち抜いた燃える鉄拳は、散らばった蝙蝠も焼き払うように周囲に熱波をまき散らして吸血鬼を焼き殺した。

「可愛くないわねえ！」

「捌り殺しにされるのが可愛いのなら、わたしは醜くて結構さー！」

可愛さで黎が救われるのなら、わたしは幾らでも自分を磨く。

でも彼を助けるのに必要なのは強さ、だったら例え醜くならうともわたしは敵を打ち

倒す！ 美貌を捨てる程度で黎を救えるならいくらでも持つて行け！

「小癩！ トランプ発動、『レベル・レジストウォール』！」

「同じカード!?」

「『ヴァンパイアジェネシス』はレベル8、よってレベル合計が8になるようデツキからアンデット族モンスターを特殊召喚する！ 現れなさい2体の『ピラミッド・タートル』！」

ピラミッド・タートル：DEF 1400 / ☆4

ピラミッド・タートル：DEF 1400 / ☆4

くつ、わたしのカードを利用された……。

出て来たのは王墓を背負ったリクガメが2体、しかもリクルーター。『マスター・ヒュペリオン』の効果は1回だけ使えるけれど、それじゃあ片方しか倒せない。『ムーン』の効果を使えば2体とも倒せるけれど、それを理解していない相手とも思えない。ならば。

ならば。

「わたしはレベル8の『マジエスティ・ヒュペリオン』に、レベル2の『アース』をチューニング！」

地球を司る天使がその身を2つの星に変えて上空に飛び去り、日食の炎をまとう神がその後を追うように跳躍する。先に飛んだ2つの星は2つの緑の輪となつて一列に並び、その中を太陽神が潜つて全身を輪郭だけに、そしてやがて8つの星に変えていく。そしてその8つの星は輪の中を通る光の柱に呑み込まれた。

「輝ける太陽の光その身に宿し、影を束ね無辺を両断する刃となれ！」

☆8+☆2=☆10

「シンクロ召喚！ 君臨せよ、『相剣大公—承影』！」  
ショウエイ

『ヌウウン！』

相剣大公—承影：ATK 3000

光の柱は輝きと共に縦に割け、その中から赤い大剣を持った鎧武者が現れる。

大きな髭と太い竜の尾を蓄えた、威風堂々たる姿が地響きと共にフィールドに降り立った。

「『承影』の効果発動！ このモンスターは除外されている全てのカードの数×1000攻

撃力と守備力をアップし、相手モンスターは同じ数値だけダウンする！」

「何ですって!」

「お互い、かなりの枚数を除外したよね。さて、除外されている枚数は……」

【ファイオの除外されているカード】

天空神騎士ロードパーシアス

天空の聖水

英知の代行者 マーキュリー

神聖なる球体

神聖なる球体

神聖なる球体

勝利の導き手フレイヤ

命の代行者 ネプチューン

イーバ

【幻影カミューラの除外されているカード】

テイク・オーバー5

ヴァンパイア・ロード

ヴァンパイア・グレイス

ヴァンパイア・レッドバロン

ヴァンパイア・シエリダン

馬頭鬼

「合計15枚！ よってステータスの変動値は1500だ！」

「おのれ……！」

相剣大公―承影：ATK 3000↓4500

ピラミッド・タートル：DEF 1400↓0

ピラミッド・タートル：DEF 1400↓0

「まだまだ除外するよ！ わたしは『マスター・ヒュペリオン』の効果を再び発動！ 墓

地の『ヴィーナス』を除外し、『ピラミッド・タートル』を破壊する！」

「チッ！」

赤い炎の太陽神が掌に炎を集め、球状にして王墓の亀に投げつける。



灼熱の塊はそのまま石も亀も灰も残さず焼き尽くした。

「この瞬間、『承影』の効果発動！ 1ターンに1度、カードがゲームから除外された時、相手のフィールドと墓地のカードを1枚ずつ除外する！」

「よし！ これでリクルートさせず、『ピラミッド・タートル』を処理できる！」

「……しかも合計で3枚、追加で除外される」

「わたしは『ピラミッド・タートル』と、墓地に存在する『天使の施し』で捨てられたカードを除外する！」

相剣大公―承影（シンクロ・効果モンスター）

星10

水属性／幻竜族

ATK 3000 / DEF 3000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(3)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：除外されているカードの数×100だけ、このカードの攻撃力・守備力はアップし、相手フィールドのモンスターの攻撃力・守備力はダウンする。

(2)：このカードが効果で破壊される場合、代わりに自分の墓地のカード1枚を除外で

きる。

(3) : カードが除外された場合に発動できる。

相手のフィールド及び墓地のカードをそれぞれ1枚ずつ選んで除外する。

除外されたカードが光を発し、竜の剣士に輝く粒子を振りまく。剣士は仮面をズラしてその口から青白い炎を吐き出すと、2枚のカードをまとめて焼却した。

これで相手の場にカードは無く、正体不明のカードも消えた。もうわたしの攻撃を防ぐ手段は無い。

『『ヴェイナス』、『ピラミッド・タートル』、そして墓地のカードが除外され、合計300ポイント攻撃力がアップする!』

相剣大公―承影 : ATK 4500 ↓ 4800

「バトル! これで終わりだ!」

黎の組んだデッキなだけある、カードのアドバンテージが尽きない。このターンでわたしはモンスターを5体も召喚したのに、まだ手札は5枚、相手に明かしていないカードに至っては2枚もある。

きっとこれが彼のいた世界では普通だった戦術、決して途切れない戦線。全く、末恐ろしい。

『相剣大公―承影』でダイレクトアタック！』

低い唸り声をあげ、わたしの胴体より幅のある大剣を振り下ろす竜の剣士。ダンプカーでも真つ二つにできそうなその一振りには過たず敵の頭を捉え

ガアンツ！

え、何この金属音!?

「惜しかったわねえ？ お前が私の墓地から除外したこのカードは『ノスフェラトゥ・コフィンズ夜王の棺列』よ

！」

「な、何だって!？」

ノスフェラトゥ・コフィンズ  
夜王の棺列（オリジナル）

【通常罨】

このカードはルール上「ヴァンパイア」カードとしても扱う。

(1)：自分のアンデット族モンスターが戦闘・効果で破壊された時に発動できる。

破壊されたモンスターを可能な限り、墓地から特殊召喚する。

(2)：このカードが相手によって破壊、または除外された場合に発動できる。

次のバトルフェイズ開始時、デッキからレベル4以下の「ヴァンパイア」モンスターを3体まで守備表示で特殊召喚できる（同名モンスターは1枚まで）。

この効果で特殊召喚したモンスターと同名のカードが自分の墓地または除外状態で存在する場合、その攻撃力分のダメージを受ける。

「しまった……！ 除外したのが徒あだになったのか……！」

金属音の発生源、それは亜空間から襲来した真っ黒な棺だった。そこに『承影』の剣がぶつかり、派手な音を立てたようだ。

まさか妨害を警戒して除外したがトリガーになるなんて……、わたしも詰めが甘いなあ。

『『夜王の棺列』の効果により現れなさい、我が同胞達よ！』

『キキキキ！』

『ガアアッ！』

『フッ！』

一列に並んだ黒い棺桶の蓋が開き、中から眠っていたナニカが姿を見せる。

1 人目は蝙蝠を象った錫杖を持つ魔法使い。

2 人目、いや2 匹目は体の右半分が黒い魔獣と化している白い狼。

3 人目は赤いドレスを翻しながら優雅な振る舞いを見せる貴婦人。

いずれも吸血鬼らしく、鋭い犬歯を覗かせている。

『承影』の効果で守備力1800ダウン！」

ヴァンパイア・ソーサラー：DEF 1500↓0

ヴァンパイアの眷属：DEF 0

ヴァンパイア・レディ：DEF 1550↓0

『ヴァンパイアの眷属』の効果発動。特殊召喚に成功した時、ライフを500払いデッキから「ヴァンパイア」と名の付いた魔法・罫カードを1枚手札に加える」

幻影カミュラ：LP 1900↓1400

「私がデッキから選ぶのは『ヴァンパイア・リベンジ』よ」  
 「バトル続行！ 全軍、総攻撃！」

モンスターが並んでようと関係無い、全て打ち払うまで。

幸い攻守は著しく下がっているから破壊するのに何の問題も無い。

『ヴァンパイア・ソーサラー』、『ヴァンパイア・レディ』、『ヴァンパイアの眷属』、撃破  
 ！」

『ヴァンパイア・ソーサラー』が破壊された時もまた、デッキから「ヴァンパイア」と名の付いた魔法・罠カードを1枚手札に加えるわ。私は「ヴァンパイア」カードとして扱う『ブラッド・シャワー』をサーチ！」

ヴァンパイア・ソーサラー（効果モンスター）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 1500 / DEF 1500

(1)：このカードが相手によって墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから闇属性の「ヴァンパイア」モンスター1体または「ヴァンパイア」魔法・罠カード1枚を手札に加える。

(2) : 墓地のこのカードを除外して発動できる。

このターンに1度だけ、自分はレベル5以上の闇属性の「ヴァンパイア」モンスターを召喚する場合に必要なリリースをなくす事ができる。

ヴァンパイアの眷属 (効果モンスター)

星2

闇属性 / アンデット族

ATK 1200 / DEF 0

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが特殊召喚に成功した場合、500LPを払って発動できる。

デッキから「ヴァンパイア」魔法・罫カード1枚を手札に加える。

(2) : このカードが墓地に存在する場合、手札及び自分フィールドの表側表示のカードの中から、「ヴァンパイア」カード1枚を墓地へ送って発動できる。

このカードを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

ヴァンパイア・レディ (効果モンスター)

効果モンスター

星4

闇属性／アンデット族

ATK 1550 / DEF 1550

このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与える度に、カードの種類（モンスター、魔法、罫）を宣言する。

相手はデッキからその種類のカード1枚を選択して墓地に送る。

自分のミスとはいえ、このターンで倒したかったんだけどな。除外するカードはちゃんと確認しないと駄目だね、次に活かさないと。

わたしに次があれば、だけど。

「リバースカードを2枚場に出して、ターンエンド！」

ファイオ：LP 900

手札：『宣告者の神巫』『破壊の代行者 ヴィーナス』『天空の聖域』

フィールド

：代行者の近衛 ムーン（ATK 1800）



・相剣大公―承影 (ATK 4800)、マスター・ヒュペリオン (ATK 2700)  
 ・伏せカード2枚、天空の聖域 (フィールド魔法)

「私のターン、ドロロー！ 手札から『強欲な壺』を発動！ デッキから2枚ドロロー！」

〔BGM：カミューラのテーマ〕

幸い『天空の聖域』があるから、わたしの天使族との戦闘でダメージは発生しない。『マジエステイ・ヒュペリオン』を残せば良かったかな、あつちを攻撃表示で残しておけばダメージを相手に与えるコンボになったんだけど。攻撃力で勝り自分で蘇生できない『マスター・ヒュペリオン』を温存したのはミスだったかも知れない……。

そんなわたしの迷いを余所に、敵の吸血鬼の影はニヤリと笑った。

「マジックカード『ブラッド・シャワー』を発動！ 私のデッキから『ヴァンパイア帝国』

を発動する！ この時、相手がフィールド魔法を発動していればそれを破壊する！」

「なっ!?!」

ブラッド・シャワー (オリジナル)

## 【通常魔法】

このカードはルール上「ヴァンパイア」カードとしても扱う。

(1)：デッキから「ヴァンパイア帝国」を1枚選び発動する。

その後、相手フィールドにフィールド魔法が表側表示で存在する場合、その効果は無効にして破壊できる。

(2)：自分の「ヴァンパイア」モンスターが相手の効果によってフィールドを離れる場合、墓地のこのカードを除外して発動できる。

その効果の発動を無効にし、破壊する。

上空からベタつく赤い雨が降り始め、まるで溶けるようにわたしの周囲に広がっていた雲上の遺跡が消えていく。雨が上がった頃には、再び月光に照らされる不気味な古城が広がっていた。

「装備魔法『ヴァンパイア・リベンジ』を発動！ 墓地から『ヴァンパイアジェネシス』を召喚条件を無視して特殊召喚、これを装備して攻撃力を500ポイントアップする！」

『ガアアアアア！』

「くっ、また出て来た……！」

ヴァンパイアジェネシス：ATK 3000↓3500

フィールド魔法が無くなった事で今度はダメージが入るようになった。このまま『ムーン』を攻撃されればわたしの負け。

伏せたカードで防げると良いんだけど。

「この効果で特殊召喚した『ヴァンパイアジェネシス』は効果が無効になり、他の『ヴァンパイア』が攻撃しない限り攻撃できない」

「つまり一体しかない今、攻撃の権利が無いって事か……」

「その通りよ。でもそれならこうすれば良い！ 墓地の『ヴァンパイア・ソーサラー』の効果発動！ このカードを除外し、このターン1度だけ『ヴァンパイア』モンスターのアドバンス召喚にリリースは必要無くなる！」

手札には既に別のモンスターがいるのか！ 躊躇ってる余裕は無い！

「この瞬間『承影』のモンスター効果発動！ 場の『ヴァンパイアジェネシス』と墓地の『ヴァンパイアの眷属』をそれぞれ除外する！」

『ブラッド・シャワー』を除外し効果発動！ 『ヴァンパイア』モンスターが相手の効果でフィールドを離れる場合、その発動を無効にして破壊するわ！」

くつ、さつきのカード……。『承影』の効果も対策済みか！

『承影』は効果で破壊される場合、墓地のカード1枚を除外して身代わりにできる！  
墓地から『テラ・フォーミング』を除外し、破壊を防ぐ！」

再び青白い炎を吐いて吸血鬼を焼き払おうとする龍の剣士。しかし吐き出した火炎は赤黒い水の盾によって防がれ、跳ね返されてしまった。素早く地面からカード型のバリアを張って反射を遮るが、完全に攻勢が移る前に対処できなかったのは痛い……。

「フン、防ぐとは生意気じゃないの。『ヴァンパイア・ソーサラー』の効果により、手札の『ヴァンパイア・ロード』をリリース無しで召喚！」

『フッフ、フアアッ！』

ヴァンパイア・ロード：ATK 2000

これで2体目のモンスター、攻撃できない制約も外れてしまった。

マズいなあ……。

「まだ終わらないわ！ 魔法カード『ヴァンパイア・ステッキング』を発動！ 私の場の『ヴァンパイア』モンスターの数だけ相手のモンスター効果を無効にしつつ、その枚数だけ魔法・罨カードを破壊する！ この効果にはチェーンできず、破壊された時に発動

できるカードの効果は無効になる！」

「何だっ!?」

無数の杭が私のモンスター達と2枚の伏せカードに突き刺さり、ブルーシートやテントのように地面に縫い留められ、地の底に沈んでいく。

ディスクの画面にも『Unabable to Activate』と表示されており、手を1つ削り取られてしまった。

「これで『承影』の効果で下がった攻撃力は元に戻り、効果で破壊されない耐性も消滅する。さあ、覚悟は良いかしらあ？」

「くっ!」

「行くわよ、バトル! まずは『ヴァンパイア・ロード』で『代行者の近衛 ムーン』を攻撃! ここで『ヴァンパイア帝国』の効果が発動し、攻撃力が500アップ!」

ヴァンパイア・ロード: ATK 2000 ↓ 2500

「消えなさい、雑魚モンスター!」

「くうっ!」

『フハハハハハ、ハアッ!』

『キャアアアアア！』

ファイオ：LP 900↓200

マントをはためかせながら吸血鬼が飛び掛かり、鏡を持った天使の首を噛み千切る。攻撃によって爆発が起こり、わたしのライフとデッキを削った。

『ヴァンパイア・ロード』が相手に戦闘ダメージを与えた時、相手のデッキからカードを1枚墓地に送らせる！ 罠カードを1枚送りなさい！  
「ならデッキから『失われた聖域』を墓地に送る！」

ヴァンパイア・ロード（効果モンスター）

星5

闇属性／アンデット族

ATK 2000 / DEF 1500

このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、カードの種類（モンスター・魔法・罠）を宣言する。

相手は宣言された種類のカード1枚をデッキから墓地へ送る。

また、このカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた場合、次の自分のスタンバイフェイズ時にこのカードを墓地から特殊召喚する。

「この瞬間、『ヴァンパイア帝国』の効果発動！ デッキから『ヴァンパイア・デューク』を墓地に送り、『相剣大公―承影』を破壊するわ！」

「くうっ！」

流石に狙って来るかつ！ これでわたしの場に残っているのは『マスター・ヒュペリオン』だけ、しかも攻撃力は『ヴァンパイアジェネシス』より800も低い！

「トドメよ！ 『ヴァンパイアジェネシス』で『マスター・ヒュペリオン』を攻撃い！」

この瞬間『ヴァンパイア・リベンジ』の効果発動！ 装備モンスターの攻撃宣言時、除外されている『ヴァンパイア』モンスター1体につき攻撃力を500ポイントアップさせる！」

「いけません、除外されているのは先程の4体に『ヴァンパイア・ソーサラー』を加えて5体です！」

ヴァンパイアジェネシス：ATK 3500 ↓ 4000 ↓ 6500

マスター・ヒュペリオン：ATK 2700

「こ、攻撃力6500!?!」

「ッヘルビシヤス・ブラアアアツドッ ツッ!」

文字通り血風が吹きすさび、わたしの前に立つ太陽神を襲う。

伏せカードは文字通り押さえ込まれ、攻撃力を上げるカードも下げるカードも無い。

ダメーτζ防ぐ手段は無く、ライフポイントを容赦無く直撃した。

「ぐ、うあああああああああああああああああああああああつ!」

「マスタアーツ!」

「……ファイオ!」

「ファイオ殿!」

「オホホホホホ! これぞ私の勝ちよ!」



マスター・ヒュペリオン：ATK 0

ファイオ：LP 50

ま、0になるとは言っていないけれどね。

「いったあああいつ！ めっちゃ痛い！ バカ田の時の何倍も痛いっ！ 何なの闇のゲームって！ マゾヒストの性癖か何かなワケ!? ううう、いたたたた……!」

「ふう……。マスター、ご無事で何よりです」

「フレイ、後で治してえ……」

「くっ、一体何故！ お前に対抗手段は残っていない筈！」

「つつうー……。うん？ 生き残った理由？」

地面を転げ回るのをやめて、素早くネットクスねスプリング起で起き上がり墓地のカードを手に取る。

わたしが生き残った理由、それはこのカードさ。

「速攻魔法『聖域の検問』を発動したんだよ。このカードの効果で相手モンスターは元々

の攻撃力でバトルを行い、戦闘ダメージも半減する。本来の攻撃力の差は300、だからダメージは半分の150になり、わたしは生き残ったってワケ。そして戦闘を行った自分のモンスターはこのターン破壊されない。ただし攻撃力と守備力は全部0になるけどね」

「莫迦な、『ヴァンパイア・ステータキング』の効果で発動はできない筈……!」

『聖域の検問』は『天空の聖域』を3枚除外する事で墓地からセットでき、そしてセットしたターンに発動できる。『ヴァンパイア・ステータキング』で封印できるのは破壊された時の効果だけ、こういうのは無問題ってワケさ」

ヴァンパイア・リベンジ（オリジナル）

#### 【装備魔法】

(1)：墓地から「ヴァンパイアジェネシス」1体を選択し、召喚条件を無視して特殊召喚してこのカードを装備する。

装備モンスターの攻撃力は500アップして直接攻撃できず、効果は無効となる。

またこのカードが存在する限り、自分フィールドのモンスターはそれぞれ1ターンに1度しか攻撃できない。

(2)：装備モンスター以外の全ての自分モンスターが攻撃宣言を行っていない場合、装

備モンスターは攻撃できない。

(3) : 装備モンスターが戦闘を行う攻撃宣言時、ターン終了時まで装備モンスターの攻撃力は除外状態の「ヴァンパイア」モンスターの数×500アップする。

ヴァンパイア・ステッキング (オリジナル)

#### 【速攻魔法】

(1) : 自分フィールドの「ヴァンパイア」モンスターの数だけ相手フィールドのモンスターを選択して発動する。

選択したカードの効果ターン終了時まで無効にし、その後その枚数まで相手フィールドの魔法・罠カードを破壊する。

この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない。

この効果で破壊されたカードは、破壊・フィールドを離れる事で発動する効果が発動できない。

(2) : 相手がEXデッキから光属性モンスターを特殊召喚した時、墓地のこのカードを除外して発動できる。

そのモンスターの元々の攻撃力は0になる。

聖域の検問（オリジナル）

【速攻魔法】

このカード名の（2）の効果はデュエル中に1度しか発動できない。

（1）：自分フィールドの天使族モンスター1体を対象に発動する。

そのモンスターと戦闘を行う相手モンスターの攻撃力は元々の数値となり、発生する戦闘ダメージは半分になる。

また戦闘を行ったその天使族モンスターのモンスターの攻撃力・守備力はダメージ計算終了時に0になる。

その後、変化した攻撃力の数値より低い攻撃力の天使族モンスター1体を墓地から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となつて発動できず、攻撃宣言できない。

（2）：自分・相手ターンのメインフェイズで、手札・フィールド・墓地の「天空の聖域」、または「天空の聖域」としてカード名を扱う魔法・罠カード3枚を除外して発動できる。

このカードを墓地からセットする。

その後、次の自分のターン終了時まで、お互いのプレイヤーは効果ダメージを受けな

い。

この効果でセットされたこのカードは、セットしたターンに発動できる。

わたしは墓地から『失われた聖域』と『パーシアスの神域』、そしてさつき破壊された『天空の聖域』を吐き出して咄嗟に半透明の障壁を展開、これで相手の攻撃を受け止めてモンスターとライフを守ったのだ。本当に辛うじてだけど、それでも生きているのならまだ戦える。

「『失われた聖域』は墓地で『天空の聖域』として扱う効果を持つ、『ヴァンパイア・ロード』の効果で罨カードを墓地に落としてくれたお陰で辛うじて発動条件が整ったのさ。ありがとうさん」

「小娘が……い！」

あー、ヤバかった。バチバチにヤバかった。

一手間違えていたらわたしのライフが消し飛んでいたよ。

「『聖域の検問』の効果により、『マスター・ヒュペリオン』より低い攻撃力の天使族モンスターを墓地から特殊召喚する。効果を無効にして蘇れ『マジエステイ・ヒュペリオン』！」

『ヌンツァー！』

マジエステイ・ヒュペリオン：DEF 2700

再び並び立つ2人の太陽神。片方は効果が無効、もう片方は攻撃力が0になったけれど。

「本当にしぶといわねえ、ゴキブリの生まれ変わりか何かかしらあ?」

「さーね、前世の事なんて誰が真実を知ってるんだって話でしょ」

「チツ、墓地の『ヴァンパイアの眷属』の効果発動! 『ヴァンパイア・ロード』を墓地に送り、このカードを特殊召喚する!」

『グルルツ!』

「そして特殊召喚成功時にライフを500払い、デツキから『ヴァンパイア』と名の付いた魔法・罫カードを手札に加える! 私は永続罫『ヴァンパイア・ムーンライズ』を選択!」

幻影カミュラ：LP 1400↓900

ヴァンパイアの眷属：DEF 0

「そしてこの『ヴァンパイア・ムーンライズ』を伏せてターンエンド！ 『ヴァンパイア・リベンジ』の効果終了、攻撃力は元に戻る！」

「同時にこの瞬間、無効化されていた私のモンスターの効果は元に戻る」

幻影カミュラ：LP 900

手札：0枚

フィールド

：ヴァンパイアジェネシス（ATK 3500）、ヴァンパイアの眷属（DEF 0）  
 ・伏せカード1枚（『ヴァンパイア・ムーンライズ』）、ヴァンパイア・リベンジ（装備  
 魔法・『ヴァンパイアジェネシス』に装備）、ヴァンパイア帝国（フィールド魔法）

「わたしのターン」

状況を整理しよう。

わたしのライフは残り50、フィールドにモンスターは2体。そして手札にはチューナーと、効果の使えないモンスターが1体に加え、このデッキのキーカードであるフィールド魔法。場に残した『マスター・ヒュペリオン』の効果で『ヴァンパイアジェネシス』を除去できれば、と思うけれど恐らく『ヴァンパイア・ムーンライズ』はその

対策としてサーチした筈。

相手のライフは900、そしてバトルの時に攻撃力の跳ね上がるモンスターが1体。馬鹿正直に真正面から倒すのは少々難しい。かと言って、もう防戦に回れるような余力は無い。

「これが最後のターン。わたしが勝つか負けるか、運命の1枚」

後は……、もし後1つ希望があるとすれば次のドロ。このカードに全てがかかっている。

運命よ、世界よ、精霊よ、太陽よ……、どうかわたしに優しい化物を守る力を。

「行くぞ、カードドローツ！」

わたしがこの土壇場で引いたカードは……。

「来たあー！」

「良いカードを引けたようですね」

「うん！ まずは『マスター・ヒュペリオン』の効果発動！ 墓地から『ムーン』を除外し、『ヴァンパイアジェネシス』を破壊する！ 『バニシング・ブレイズ』！」

両手を掲げ、炎のエネルギをボール状に集める太陽神。小型の太陽を作り上げた炎の神はそれをそのまま思い切り砲丸投げのように筋肉達磨の吸血鬼に投擲した。

「私は永続罫『ヴァンパイア・ムーンライズ』を発動！ 自分の手札かフィールドのアン



デット族モンスター1体をリリースする事で、このターン私の『ヴァンパイア』カードは相手の効果でフィールドを離れない！ 『ヴァンパイアの眷属』をリリース！ そして自身の効果で特殊召喚されているため、『ヴァンパイアの眷属』は除外される！」

投げられた炎の砲弾は相手の展開した月光のバリアによって防がれる。これでこのターンはもう『マスター・ヒュペリオン』の効果を使っても意味が無いワケだ。

「おのれ、また『ヴァンパイア』カードを除外したか！」

『ムーンライズ』のもう1つの効果！ リリースしたモンスターが吸血鬼の時、墓地から名前の違う吸血鬼が復活する！ 蘇れ『ヴァンパイア・デューク』！」

『ククククク……！』

「モンスター効果発動！ 特殊召喚した時、お前のデツキからカードを1枚墓地に送る！ 魔法カードを宣言するわ！」

更に月光に導かれ整髪料で黒髪を固めたような細身の吸血鬼が現れる。映画なんかに出る悪い吸血鬼は、大体こんな感じだろうか。

ヴァンパイア・デューク：DEF 0

「デツキから『天空の聖水』を墓地に送る！」

「フィールド魔法『ヴァンパイア帝国』の効果！ デッキから2体目の『ヴァンパイアの眷属』を墓地に送り、『マスター・ヒュペリオン』を破壊する！」

「くっつ！ ごめん、『マスター・ヒュペリオン』！」

相手のカードが怪しく光り、こちらのモンスターを何の前触れも無く爆殺させる。

『マスター・ヒュペリオン』に復活効果は無い、再利用はもう無理だろう。

ヴァンパイア・デューク（効果モンスター）

星5

闇属性／アンデット族

ATK 2000 / DEF 0

「ヴァンパイア・デューク」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

このカードをX召喚の素材とする場合、闇属性モンスターのX召喚にしか使用できない。

(1)：このカードが召喚に成功した時、自分の墓地の闇属性の「ヴァンパイア」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

(2)：このカードが特殊召喚に成功した時、カードの種類（モンスター・魔法・罫）を

宣言して発動できる。

相手は宣言された種類のカード1枚をデッキから墓地へ送る。

ヴァンパイア・ムーンライズ（オリジナル）

【永続罫】

（1）：iターンに1度、自分の手札・フィールドのアンデット族モンスター1体をリリースして発動できる。

このターン、自分フィールドの「ヴァンパイア」カードは効果ではフィールドを離れない。

この効果でフィールドの「ヴァンパイア」モンスターをリリースした場合、自分の墓地からリリースしたモンスターとは名前の異なる「ヴァンパイア」モンスター1体を選択し、守備表示で特殊召喚する。

（2）：このカードが相手によって破壊、または除外された場合に発動できる。

墓地の「ヴァンパイア」モンスター3体を選択してデッキに戻し、2枚ドローする。

『マスター・ヒュペリオン』が！」

「……………」のままではギリ貧」

「効果の使えない『マジエステイ・ヒュペリオン』だけでは戦線を維持できんぞ！」  
良いんだよ、フレイ、ポーラ、桜さん。

どっちかが生き残ってくればそれで！」

「チューナーモンスター『デフレアラ！デイツァイナ！宣告者の神巫』を召喚！」

『ふうっ！』

「このカードを召喚した時、デツキまたはエクストラデツキの天使族を墓地に送ってレベルを上げる効果があるけど、今回は使わないよ」

召喚するのは『イーバ』の効果でサーチしておいた巫女。フードを被った帯のような翼を持つ女性が、重力を感じさせないゆっくりとした動きで私の前に降り立つ。

宣告者の神巫：ATK 500

感覚を研ぎ澄ます。これが最後の一手、失敗すればもうわたしに打てる手はゼロになる。

視界がモノトーンになり、時間の流れが緩やかになるような錯覚がする。極限まで時間感覚を延長させ、生きる手を見極める状態なんだと、直感的に理解した。

大丈夫、このデツキは黎の組んだデツキ。そのデツキが失敗する筈が無い。

「わたしは、レベル8の『マジエスティ・ヒュペリオン』にレベル2の『宣告者の神巫』をチューニング！」

翼を持つ巫女が帯状に分解され、緑の輪へとその身を転換し、一列に並んだ輪の中に日食の太陽神が潜って輪郭だけの姿に変わる。やがて8つの星だけが残った太陽神は、眩い光の柱となった。

「その炎は愛、その炎は法、その炎は鋭き剣！ 光明よ、天の流れを司る太陽の輝きを以て、全てを照らす眩まばゆき焰となれ！」

☆8+☆2=☆10

「シンクロ召喚！ 希望の明日よ、今ここに！ 『マスターフレア・ヒュペリオン』！  
『ハアアアアアア、トアアツ！』」

マスターフレア・ヒュペリオン：ATK 3200

光から現れたのは金色の炎。天使の翼のようなそれを背負った、赤色の太陽神。太陽系の円環を背負った、光明の神の真の姿だ。

夜の使徒である吸血鬼、それを打ち倒すのには太陽の力こそがやはり相応しいだろう。

「この瞬間、『ヴァンパイア・ステーキング』を除外してその効果発動！ 相手がEXデッキから光属性モンスターを召喚した時、元々の攻撃力を0にする！」

「！」

マスターフレア・ヒュペリオン：ATK 3200↓0

攻撃力が0に……。

これは。

ありがとうと言わざるを得ないかな。

札を言うよ、除去じゃなくて弱体化という事に！

その効果で『マスターフレア・ヒュペリオン』を除去されたら負けていた！

「『マスターフレア・ヒュペリオン』には本来、天使族を除外して場のカードを除外する効果があるが……」

「……『ヴァンパイア・ムーンライズ』の効果で、それは効かない」

「わたしは『マスターフレア・ヒュペリオン』の効果発動！ 1ターンに1度、手札・デッキ・エクストラデッキから“代行者”か“天空の聖域”関連のモンスターを墓地に送り、このターンだけそのモンスターの名前と効果を得る！ わたしはこの効果で『奇跡の代行者 ジュピター』を墓地に送る！」

デッキがカードを1枚吐き出し、それを受け取る。

宣言通りのカードである事を確認してから相手にも見せ、それを墓地ポケットに流した。

「コピーした『ジュピター』の効果発動！ 墓地から『ジュピター』を除外し、ターン終了時まで『マスターフレア・ヒュペリオン』の攻撃力を800アップさせる！」

マスターフレア・ヒュペリオン：ATK 0↓800

「その程度のパワーアップが何になる！」

「必要なのさ、その程度のパワーアップが！ フィールド魔法『天空の聖域』を発動し、コピーした『ジュピター』のもう1つの効果を発動！ 『天空の聖域』の中でのみこの効果は発動でき、手札の天使族を1体捨てて、除外されている光属性・天使族モンスター

を特殊召喚できる！」

手札の『破壊の代行者 ヴィーナス』もまた墓地に消え、同時に輝ける太陽神が次元に穴を開ける。

白く光る亜種の召喚ゲートは、その中からまた別の天使を強引に手繰り寄せた。

「わたしの最後の召喚、それは——『勝利の導き手フレイヤ』！」

「待ってました！」

「効果で天使族の攻撃力が400アップ！」

勝利の導き手フレイヤ：ATK 1000↓500

マスターフレア・ヒュペリオン：ATK 800↓1200

マスターフレア・ヒュペリオン（シンクロ・効果モンスター）

星10

光属性／天使族

ATK 3200／DEF 2600

チューナー＋チューナー以外の天使族モンスター1体以上

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。



(1) : 「代行者」モンスター1体または「天空の聖域」のカード名が記されたモンスター1体を手札・デッキ・EXデッキから墓地へ送って発動できる。

エンドフェイズまで、このカードはそのモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る。

(2) : 相手がカードの効果を発動した時、自分の手札・墓地から天使族モンスター1体を除外し、フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを除外する。

奇跡の代行者 ジュピター (効果モンスター)

星4

光属性 / 天使族

ATK 1800 / DEF 1000

(1) : iターンに1度、自分の墓地から「代行者」モンスター1体を除外し、自分フィールドの天使族・光属性モンスター1体を対象として発動できる。

その自分の天使族・光属性モンスターの攻撃力はターン終了時まで800アップする。

(2) : 1ターンに1度、手札から天使族モンスター1体を捨て、除外されている自分の

天使族・光属性モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

この効果はフィールドに「天空の聖域」が存在する場合に発動と処理ができる。

「これで、準備は整った!」

「そんな雑魚の群れ如きに何ができる!」

「できるとも、バトル!」

貧弱な攻撃力を晒すわたしのモンスター達を嘲る吸血鬼。残念ながら悪いんだけど、もう勝負はついてるんだ。

夜の王と太陽の神の戦い、今回はこつちが貰うよ!

「フレイで『ヴァンパイア・デューク』を攻撃! フィールド魔法『ヴァンパイア帝国』の効果は守備力には作用しない、よって守備力は0のままだ! チアリング・コンバット!」

相棒の姿を模した天使が飛び掛かり、鋭い回し蹴りを吸血鬼に叩き込む。

永続罫『ヴァンパイア・ムーンライズ』は発動のためにコストが必要、これでコストに使えるモンスターが1体減った。

まあ、もうコストを払う必要なんて無いんだけどね!

「チイツ、私のモンスターが！でも残った『マスターフレア・ヒュペリオン』じゃあ『ヴァンパイアジェネシス』には敵わない！次のターンで『ヴァンパイアの眷属』は自身の効果で蘇る、それでお前は終わりよ！」

「……それは貴女に次のターンがあれば、でしょう？」

「何ですって!?!」

「わたしは『マスターフレア・ヒュペリオン』で『ヴァンパイアジェネシス』を攻撃！」「自爆!?! どうとう血迷ったかしら！」

驚くのも当然、攻撃力の差は歴然なのだから。

しかもバトルの時、『ヴァンパイアジェネシス』は更に強化される。

「何を考えてるか知らないけど、お望み通り返り討ちにしてジ・エンドよ！フィールド魔法『ヴァンパイア帝国』、装備魔法『ヴァンパイア・リベンジ』の効果！攻撃力は合計で3500アツプする！」

除外されているモンスターは『ヴァンパイア・ロード』『ヴァンパイア・グレイス』『ヴァンパイア・レッドバロン』『ヴァンパイア・シェリダン』『ヴァンパイア・ソーサラー』『ヴァンパイアの眷属』の6体か。随分と除外されたね。

ヴァンパイアジェネシス：ATK 3500↓6500↓7000

攻撃力7000……。凄いなあ、まさかこんな大型モンスターと戦う日が来るなんて。

普通に考えれば対抗策なんて無い。これに対抗するには十代君の『シャイニング・フレア・ウィングマン』みたいに枚数を参照して強化するモンスターや、カイザーの『パワー・ボンド』『リミッター解除』みたいな攻撃力を倍にするカードみたいなものじゃないと無理だ。当然、それらはこのデッキには入ってない。

「見よ、この圧倒的な攻撃力！これが夜の支配者の力、闇の王の本領よ！」  
「なら教えてあげるよ、光が差せば明けない夜は無いつて事を！」

だから、こうする！

「手札の『オネスト』のモンスター効果発動！」

「お、『オネスト』ですって!？」

「このカードを手札から捨てて、バトルする相手モンスターの攻撃力を『マスターフレア・ヒュペリオン』に加える！」

マスターフレア・ヒュペリオン：ATK 1200↓8200

「攻撃力8200!？」

「言ったよね、『その程度のパワーアップ』が必要なんだって！」

フレイだけじゃあ攻撃力は400しか上がらない。

『ジュピター』の効果では800だけ。

それじゃあ、あの吸血鬼さんの残りライフ900は削りきれない。

2つを合わせる必要が、わたしにはあつたのだ。

『マスター・ヒュペリオン』は斃れ、『マジエステイ・ヒュペリオン』は攻撃できないあの状況、このモンスターで攻撃する以外に勝つ手段は無かった。だからこの流れは、全て必定！

「これで最後だ！ 夜の王よ、朝日と共に塵と化せ！」

「お、おのれえっ！」

「『アルティメット・オネステイ・シャイニング』！」

太陽神の金色に輝く炎の翼が巨大な円状に広がってゆく。

それはまるでもう1つの太陽、夜を終わらせ朝を告げる光。

輝きは『マスターフレア・ヒュペリオン』の両手の前に新たな輝きを生み出し、そこから吸血鬼の巨人に向けて一直線に伸びる光線を撃つ。過たずそれは『ヴァンパイアジェネシス』の心臓を穿ち、陽光の力で全てを灰にした。

「ギィヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

幻影カミューラ：LP 900↓0

ファイオ：WIN

幻影カミューラ：LOSE

巻き起こる大爆発、吹きすさぶ熱風。筋骨隆々な闇の支配者を焼き尽くした一撃の余

波が終わった時、そこには何も残っていなかった。黒い影の吸血鬼も、黎の右腕も、邪悪な気配も、全て。

「ふう……」

つ、疲れたあ。

全身痛いし慣れない戦術で頭が痛い。

それでも、わたしは黎を守る事ができた。あの邪悪な気配と悪意から彼を守れた。

「あー、全身痛い」

ごろりとその場に寝転ぶ。地面に触れて体重を受ける背中すら痛い。

けれど、その痛みは戦った証。わたしが勝って生きている証拠。

なら……、今は良いや。

「うん、お疲れ様、わたし」

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 89 : 文明社会の邪蛮人

SIDE : 無し

—— 相当な築年数の経っている宿泊施設

「ぶるるるああ……」

「あは、変な溜息」

童実野町のとある古い宿にて。

海馬コーポレーションの城下町とも称される童実野町だが、その実情は発展途上の治安の悪い町である。

現在は開発が進みオフィスビル等が増えているものの、安全な都市には未だ程遠い。この古い宿もまたその一つ、十数年後か数十年後かには不良やギャング、家出をした子供が懇意にする安宿である。あからさまに治安が良くない場所にはなるが、一方で金が無くとも泊まれる事から親しみを込めて「ノーマネーの宿」と呼ばれるようになるら



しい。

「お嬢さん」

「看板娘の弥生やよいです」

「では弥生ちゃん、ビールを一缶貰って良いかな?」

「どうぞー」

現在は寂れた宿ではあるものの客は経営できる程度には泊まりに来る、低空飛行を続ける宿。そんな宿泊施設に、かつてタイタンと名乗りデュエルアカデミアで闇討ちを行った大男が泊まっていた。

現在タイタンは闇のデュエリストから足を洗っている途中であり、生活費を催眠術の他に手品や大道芸で賄いながら旅を続けている。また旅路の途中ではかつてのコネや伝手を使い、悪質なデュエリストをデュエルで負かしては得意な催眠術で成敗していた。彼の知人曰く「催眠の内容にリアリティが増した」との事。

まさかそれが彼の実体験から得た産物とは誰も思うまい。

「ぶるうああ……、このキンキンに冷えた一缶のために生きているう……」

「ビールってそんなに美味しいんすか?」

「ん、大人になれば分かる。尤も、ビールじゃない別の酒が好きになるかも知れないがねえ」

「ふーん？」

ノーマネーの宿でタイタンは宿泊しつつ、他の宿泊客のためにマジックショーを開いていた。

結果は上々、お陰でビールをタダで提供して貰った。以前よりも収入は減ったが、それでもあの悍ましい死の恐怖をもたらす闇社会と絶縁できるのなら安いものである。

おまけに2階の見晴らしの良い部屋まで取れた、もう一泊しても良いかも知れない。

「良ければもう一缶いかがですか？」

「いやあ、やめておこう。残りは風呂上がりだあ」

「かしこまりました」

宿の看板娘がぺこりと頭を下げる。

年は十代半ばが精々だろうか、下手をすれば小学生かも知れない。いずれにせよ自分が闇討ちしようとした少年と年はそう変わらないだろう。

自分は依頼で将来有望な若者を、なんて殊勝な考えは持っていない。だが今後はこのくらいの年の子を見る度に思い出すのだろう、自分が足を洗うキツカケになった事件を。

そうしみじみと思いながら、巨漢は風呂に行く支度を始めた。

『闇の残り香がするな』

「！」

『今日は運が良い。だがまずは邪魔な蠅を駆除しておこう』

或いは、それに感謝する事があるとはタイタンは思わなかった。思う日が来るなんて有り得ないとすら考えていた。

しかし闇の世界に僅かながらも触れた事で、彼は肌で『それ』を察する事が出来た。故に、走る。

「伏せるんだア！」

「きゃあつ！」

巨大な鉄塊が空を裂き、自分の服と宿の古い壁が抉られる。間一髪で弥生を庇ったタイタンの背中に木屑が降り注ぐも、大事には至らなかった。

「弥生ちゃん、無事かね？」

「う、うん」

無傷であると確認したタイタンは、安堵の息を吐く事無く襲撃者の姿を確認する。

オールバックの刈り込んだ髪、無駄な筋肉の無い鍛えられた細身の肉体、そして身の丈より巨大な斧。黒いスーツをまとった全身は、ビジネスマンよりも喪に服す葬列の参加者を連想させた。

さながら武人、それも殺人鬼に身を落とした軍人崩れ。それがタイタンの抱いた第一

印象であつた。

「何者だあ、貴様……！」

「これから贄となる餌以下に名乗る必要があるのか？」

「おいおい冥途の土産くらい良いじゃないかあ、滅るものでも無し」

「ククカカカカハハッ！ 実に浅慮な人間らしい発言だ！ ならば教えてやろう！ 我はラース！ 貴様をカードに封じて大いなる我が君に捧げる憤怒だ！」

ゴウツ、と圧が増す。

明らかに格上だと巨漢は察した。

「弥生ちゃん、逃げるんだあ。ここは私が時間を稼ごう」

「ほう、我相手に時間稼ぎができると？」

「今その腕にデュエルディスクが表れた、デュエルするんだらおう？ 1ターンが10秒であつても時間は掛かる、ならば1秒でも多く時間を稼ぐのが私の役目エ！ 急ぐんだあ！」

「は、はいっ！」

死ぬのだろうか、とタイタンは恐怖で震えるのを自覚する。

これが因果か、あの時に救われた命が再び闇に食われるというのが。

しかし、それでも。

一人の少女を逃がせるのなら……、それは無意味じゃない。

「クククカハ！ 無駄だ！」

「何い？」

「あいたつ！」

ごんつ、と鈍い音が鳴り響いた。

振り返れば、半透明の壁のようなものに頭を打ち付けた弥生の姿。無論、そんな壁は先程まではなかったのは言うまでもないだろう。

「いたたた……、な、何か見えない壁みたいなのがある！」

「……既に閉じ込められたという事か」

「そうだ、我は貴様を獲物と定めた故に逃がす術を潰したのだ。その小娘の死を餌により芳醇な怒りに滾った贄にしてやろうと思ったが、貴様の後に殺してもまあ大差はあるまいて」

「おのれえ……！」

これで自分と彼女は一蓮托生、逃げ場は無い。

更に恐らくだが、この宿にいる他の宿泊客もこの様子だと閉じ込められているだろう。その行く末は……、語るまでも無い。

「どうやら勝たねばならないようだあ」

「人間の詐欺師如きが笑止」

「詐欺師はとつくに廃業している、今の私はただの旅芸人だあ」

荷物からデュエルディスクを取り出し、装着。デッキもセットしてディスクのスイツチを入れる。

勝てるとは思っていない、それでも、0%であっても、戦わねばならない。デュエルストにはそういう時があるのだ。

「おじさん、アタイもやるよー!」

「弥生ちゃん、危険だ。こいつとのデュエルでは冗談抜きに死ぬぞお」

「分かっています、こいつは何か……、何かヤベエって事くらい。でもどうせ部屋からは逃げられないんだ、ならここで戦う! 死ぬならせめて戦って死ぬよ、アタイだってデュエリストなんだ!」

デュエリストである事を引き合いに出されては、タイタンとしては止める術が無い。

この不良やチンピラの多い宿で看板娘をしている以上は、こういった鉄火場も経験があるのだろう。なら今はそれに頼らせて貰うとしようか。

「カカハ、威勢だけは一人前だな。しかし小娘よ、それを蛮勇と呼ぶ事を死を以て知るが良いい!」

「おじさん、アタイ頑張ります!」

「ああー！」

「「デュエル！」」

タイタン&弥生 VS ラース

LP 4000×2 VS LP 4000

☆

——謎の場所

暗闇の中を揺蕩う。

果たして自分は今、生きているのか、魂だけ抜け出ているのか。

(この程度で倒れるとはな)

己の貧弱さに、黎は顔を顰めた。

本当に顰めているかは分からないが。

(それだけこの世界に順応して来ているって事かね)

なお彼は『この程度』と言っているが、普通の人間なら1000人死んでなお余りある猛毒であった事を明記しておく。

撃たれても斬られても死なない黎が片鱗ですら逆流しただけで倒れる、それだけ邪神の力は凄まじく強いのだ。

元より邪神は護衛の時点で次元を超えて逃げられる上、本体に至ってはどこの次元でもない場所に潜んでいる。間違はなく神、それも『オシリスの天空竜』のような「人間の崇め奉る神」とは異なる、「現象・災害としての神」。それこそが黎と敵対している名も知らぬ邪悪なる神である。

故に黎の奮闘はいわば、武器を構えて嵐に挑もうとしているに等しい。普通ならば無意味にして無駄死にの未来しか無く、彼が人外であり、嵐に対抗できる武器を得られたが故に無謀ではなくなっただけの事。普通なら己が命惜しさに逃げて震えるもの、蛮勇を振るって立ち向かう黎の方がおかしい。

(……それが、どうした)

黎は頭かぶりを振った。

(元より俺は異端の命、人間の敵として生み出された存在。俺の存在理由は都にだけあった。今もそう)

大切なたった1人の家族のため、彼は生きて来た。今もそれを取り戻すために戦って



いる。

遊馬崎都のために立って戦う、そこに揺るぎはない。

ただ、そこにフィオや桜、フレイやポーラ、十代や翔、そして異なる次元で戦っている同じような同志達——即ち優や輝、ライや真奈達——も追加されただけの事。

それが黎にとつて最も重要な事であり、自分の手で敵の命を奪う最大の理由である。

……言い換えれば、自分の命は勘定に含まれていないのだが。

(クソ邪神さえ討伐できれば、後は都の人生、都の命。俺が守ってやるような邪悪はいない。……多分)

言い切れないのが悲しい所である。

デュエルモンスターズの世界はオカルトの世界、彼の想像を裏切る脅威が現れる可能性は否定できない。

そしてそれに都が敗北する確率は、ゼロに非ずである。

だが都として1人の人間、いつまでも自分に負んぶに抱っこではいけない。いつか義兄離れをする日が来なくてはならない。その時に自分の足で立てないようでは論外も良い所だ。

それまで守るのが義兄としての役割。その後は彼女の人生なのだから。

(まあ、義妹離れしねえといけねえのは俺もか。そのためにも取り敢えず起きねえとな)

意識を集中させ、肉体に神経を巡らせる。

黎の能力は所謂『メタモルフオーゼ』、自身の肉体であれば自由に操る事ができる。体内に金属を取り込む事で髪の毛を刃にしたり腕を剣にしたり、爆薬を食べる事で切り離れた手を爆弾に変えたりと、意外と柔軟性が高い。

他人に化ける事として可能だし、体内で薬や毒の調合としてお手の物。

故に化物。

故に人外。

光や炎を操ったりするヒーロー然としたものでなく、人間を襲う魔獣のような能力であるが故に、彼は化物なのだ。

(おらつ、とつとと起きろ俺の体。いつまで寝てるんだ)

起床も睡眠も意識1つ。裂けた肉も折れた骨も自力で修復できるのだ、片腕如きどうという事は無い。

(起きろつて)

だが予想に反して肉体は全く動かない。産毛の1本ですら自意識で動かせるのに、だ。

(クソが、完全に落ちてやがるな?)

意識1つで己の肉体にまつわる事は何でもできる黎だが、逆を言えば意識が無ければ

何もできないという事でもある。

脳が機能停止をしてしまうと、彼は普通の人間と同様に無防備になってしまう。そこが化物の限界だった。

(しゃーねえ、脳味噌吹っ飛ばすか)

如何に肉体を意志で操れるとはいえ何の躊躇いも無く頭を破壊する選択ができるのはどうなのだろうか。

とはいえ、彼が取れる選択肢の1つとしては現実にあるのだから仕方ない。破壊されず残った部分から頭を再生する手法は前世でもやった事がある、数秒だけ意識が混濁するがその後はしつかり覚醒できるのだから良いだろうと、彼は考えている。

自分の命なぞその程度。数多の命を奪った己の命が重くあつてはならない。

それが彼の持論だ。

『やめておけ、無意味じゃ』

「!」

いきなり声をかけられた。

驚いた黎が後ろを振り向くと、そこには闇のように真っ黒なドラゴンの姿が。

その出で立ちは降々とした筋骨によって強調されており、闇が噴き上がるが如き黒い鱗や翼が死の国を連想するような不吉さを醸し出している。短くも鋭い爪牙に敵を睨

み殺すような輝く眼、全身に走るダークカラーの模様、ところどころにある青いクリスタル。それらを総合してより恐ろしさを演出させる巨竜。

即ち『冥王竜ヴァンダルギオン』がいた。

冥王竜ヴァンダルギオン（効果モンスター）

星8

闇属性／ドラゴン族

ATK 2800 / DEF 2500

相手がコントロールするカードの発動をカウンター罠で無効にした場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、無効にしたカードの種類により以下の効果を発動する。

- 魔法：相手ライフに1500ポイントダメージを与える。
- 罠：相手フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。
- 効果モンスター：自分の墓地からモンスター1体を選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

☆

—— 宿泊施設・闇のゲーム空間

タイタン : LP 900

手札 : 0 枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罨無し

弥生 : LP 1100

手札 : 0 枚

フィールド

: モンスター無し

: 伏せカード1枚

レース : LP 3000

手札：1枚

フィールド

：メテオ・ブラック・ドラゴン（ATK 4300）

：天威無崩の地（フィールド魔法）、一族の結束（永続魔法）

宿の一室に閉じ込められたタイタンと弥生は、ラーズを相手に苦戦を強いられていた。

ラーズのデツキは通常モンスター軸のドラゴン族、敢えて言うのなら「スキドレドラゴン」デツキ。通常モンスターをサポートするカードが多く、タイタンの「デーモン」と弥生の「アマゾネス」はそれぞれが苦戦を強いられていた。

前のターンに何とか『スキルドレイン』は除去できたが、代償は大きい。

再び回って来たタイタンの手番で何とか逆転できれば良いのだが。

「私のターン、ドロロー！ 魔法カード『天使の施し』を発動！ デツキから3枚ドロローしい、2枚捨てるっ！ 私が捨てるのは『トリック・デーモン』と『ジェノサイドキングデーモン』！」

「ここで手札交換か。手札の無い貴様にはまさに天の助けだなあ？」

「そしてこの瞬間、捨てられた『トリック・デーモン』の効果発動う！ デツキから『ト

リック・デーモン』以外の『デーモン』と名の付いたカードを手札に加える事ができない！ 私はデッキからこのカード、『デーモン・アボキメラブル』を手札に加えるう！」

トリック・デーモン（効果モンスター）

星3

闇属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 0

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが効果で墓地へ送られた場合、または戦闘で破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「トリック・デーモン」以外の「デーモン」カード1枚を手札に加える。

ジェノサイドキングデーモン（効果モンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 2000 / DEF 1500

自分フィールド上に「デーモン」という名のついたモンスターカードが存在しなければ

ばこのカードは召喚・反転召喚できない。

このカードのコントロールローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に800ライフポイントを払う。

このカードが相手のコントロールするカードの効果の対象になり、その処理を行う時にサイコロを1回振る。

2・5が出た場合、その効果が無効にし破壊する。

このカードが戦闘で破壊した効果モンスターの効果は無効化される。

タイタンにとっては恐らくこれがラストターン。残りライフは僅かとなり、自分のフィールドにカードはもうない。

後はこの新しいカードに賭けるのみ。

「儀式魔法『億万伏魔の絶対儀式』！ 墓地からレベル4の『ジェノサイドキングデーモン』と『デーモン・ソルジャー』を除外し、儀式召喚を行おう！」

床に怪しげに輝く魔法陣が展開され、2鬼の悪魔の魂が吸い込まれていく。

これこそタイタンの新たな切り札。『デーモン・マタドール』と悩んで投入した攻撃型のモンスター。

それが今ここで初のお披露目となる。





罨カードを除外した枚数まで場の魔法・罨カードを破壊できる！ 私は墓地の  
デーモン・グリッチ  
 『悪魔の技』と『血の刻印』を除外し、貴様の魔法カードを2枚とも破壊するう！」

「チッ！」

メテオ・ブラック・ドラゴン：ATK 4300↓3500

天威無崩の地

【フィールド魔法】

(1)：このカードがフィールドゾーンに存在する限り、効果モンスター以外のフィールドの表側表示モンスターは、モンスターの効果を受けない。

(2)：iターンに1度、自分フィールドに効果モンスター以外のモンスターが存在し、相手が効果モンスターを特殊召喚した場合に発動できる。

自分はデッキから2枚ドローする。

悪魔の技

【通常罨】

(1)：自分フィールドに悪魔族モンスターが存在する場合、フィールドのカード1枚を

対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

その後、デッキから悪魔族モンスター1体を墓地へ送る事ができる。

血の刻印

【永続罫】

自分フィールド上に存在する「デーモン」という名のついたモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターがスタンバイフェイズに払うライフポイントは相手プレイヤーも払う。

このカードがフィールド上から離れた時、選択したモンスターを破壊する。

選択したモンスターがフィールド上から離れた場合、このカードを破壊する。

「だが攻撃力はまだ3500、たかが1000程度で何ができる」

「バトル！ 私は『デーモン・アボキメラブル』で『メテオ・ブラック・ドラゴン』を攻

撃！」

「何!?!」

「この瞬間モンスター効果発動！ 墓地の『迅雷の魔王・スカル・デーモン』を除外し、その攻撃力の半分だけ『アボキメラブル』の攻撃力が上がる！ そして貴様のモンスターは逆の下がるのだあ！」

『『スカル・デーモン』の攻撃力は2500、って事は……！』

デーモン・アボキメラブル：ATK 1000↓2250

メテオ・ブラック・ドラゴン：ATK 3500↓2250

「攻撃力が並んだ！」

「喰らえええええ！ 必殺、

鮮血淋漓・屍山血河”ア！」

「チツ！ バーニング・ダーク・メテオ！」

醜悪な悪魔と隕石の黒龍の攻撃が真正面からぶつかり合った。

血のような赤い濁流と燃える巨岩の衝突によって古い宿屋の一室を大きく揺るがすような大爆発が起こり、赤黒い爆煙が周囲を覆う。

煙が晴れた時、そこには黒龍の亡骸と。

『Jaaaa……』

悪魔の無事な姿があった。

「ほう、破壊耐性か」

「その通り、『デーモン・アボキメラブル』は効果を使ったターン戦闘では破壊されない！ 更に『アボキメラブル』の最後の効果により、除外されている『悪魔の技』と『ジェノサイドキングデーモン』をデッキに戻し、1枚ドロウするっ！」

億万伏魔の絶対儀式（オリジナル）

【儀式魔法】

「デーモン・アボキメラブル」の降臨に必要。

(1) : 自分の手札・フィールドから、レベルの合計が8以上になるようモンスターをリリースし、手札から「デーモン・アボキメラブル」を儀式召喚する。

この時、自分の墓地からレベルの合計が8になるよう「デーモン」モンスターをゲムから除外する事もできる。

(2) : このカードを墓地から除外して発動できる。

このターン相手によって破壊された、儀式モンスターを含む「デーモン」モンスターのレベルの合計より低いレベルの悪魔族モンスター1体をデッキから守備表示で特殊召喚する。

デーモン・アボキメラブル（儀式・効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／悪魔族

ATK 1000 / DEF 0

「億万伏魔の絶対儀式」により降臨。

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか発動できない。

（1）：自分の墓地から「デーモン」魔法・罫カード、または「デーモン」モンスターが記された魔法・罫カードを任意の枚数除外して発動できる。

除外した枚数までフィールドの魔法・罫カードを破壊する。

（2）：このカードがモンスターと戦闘を行うそのダメージ計算時に1度、自分の手札・墓地から「デーモン」モンスター1体を除外して発動できる。

ダメージ計算終了時までこのカードの攻撃力は除外したモンスターの攻撃力の半分アップし、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力はダウンする。

この効果を使用したこのカードは、ターン終了時まで戦闘では破壊されない。

（3）：このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合に発動できる。

除外されている「デーモン」カードを2枚選択してデッキに戻し、1枚ドローする。

タイタンの胸当て型ディスクにあるデッキに2枚のカードを差し込み、新しくカードが手札に加わる。

ダメージこそ与えられなかったが、これでラースのフィールドは更地になった。まだ悲観するには早い。

「私はリバースカードを1枚場にセット、これでターンエンドだあ！」

タイタン：LP 900

手札：0枚

フィールド

：デーモン・アボキメラブル（ATK 1000）

：伏せカード1枚

「アタイのターン、ドロロー！ 手札から『強欲な壺』を発動、デッキから2枚ドロロー！」  
ターンが移り、次は弥生のターン。

ここで畳み掛けなければ恐らく次は無い。

「リバースカード、オープン！ 永続罫『アマゾン・カーニバル』！ 手札を1枚捨てて効果発動！ 墓地からレベル4の『アマゾネス』モンスターを3体特殊召喚する！

さあ蘇りなア！」

アマゾネスペット虎タイガー：DEF 1500

アマゾネスの聖戦士：DEF 300

アマゾネスの鎖使い：DEF 1300

墓地ポケットに『アマゾネスの急襲』が飲まれ、入れ替わりに2人と1匹が復活する。蘇生されたモンスターの効果は無効となるが、次の一手を打つには充分過ぎるリターンだ。

アマゾネスペット虎（効果モンスター）

星4

地属性／獣族

ATK 1100／DEF 1500

(1)：「アマゾネスペット虎」は自分フィールドに1体しか表側表示で存在できない。

(2)：このカードの攻撃力は、自分フィールドの「アマゾネス」モンスターの数×400アップする。



(3) : このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手モンスターはこのカード以外の「アマゾネス」モンスターを攻撃できない。

アマゾネスの聖戦士 (効果モンスター)

星4

地属性 / 戦士族

ATK 1700 / DEF 300

自分フィールド上の「アマゾネス」という名のついたモンスターカード1枚につき、このカードの攻撃力は100ポイントアップする。

アマゾネスの鎖使い (効果モンスター)

星4

地属性 / 戦士族

ATK 1500 / DEF 1300

(1) : このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、1500LPを払って発動できる。

相手の手札を確認し、その中からモンスター1体を選んで自分の手札に加える。

## アマゾネスの急襲

## 【永続罠】

(1)：1ターンに1度、自分・相手のバトルフェイズに発動できる。

手札から「アマゾネス」モンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力はターン終了時まで500アップする。

(2)：自分の「アマゾネス」モンスターが相手モンスターと戦闘を行ったダメージ計算後に発動できる。

その相手モンスターを除外する。

(3)：フィールドのこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、自分の墓地の「アマゾネス」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

「そして2体のモンスターをリリース！ アドバンス召喚、これがアタイの切り札『アマ

ゾネスの大剣豪』だああああ！」

『はあああああ、タアツ！』

アマゾネスの大剣豪：ATK 2700

1人と1匹のアマゾネスの力が1本の巨大な剣に。果てに生まれたのはその剣を手に現れた、アマゾネスらしからぬ革鎧をまとった剣士。筋肉を隠すような見た目の女戦士という異質さが、逆説その存在を際立たせる。

『大剣豪』の効果発動！ 1ターンに1度、墓地から攻撃力1500以下の「アマゾネス」1体を特殊召喚する！ 蘇れ、『アマゾネスの剣士』！』  
『ハアッ！』

アマゾネスの剣士：ATK 1500

曲がった剣を持った女戦士が並び立った事で、攻撃力の合計が4300となった。これでラースのライフを完全に削り取れる。

「バトル！ まずは『アマゾネスの剣士』でダイレクトアタック！」

「我はこの瞬間、手札の『チェックサム・ドラゴン』を特殊召喚。そしてその守備力の半分、ライフを回復する」

「何だって!？」

チエツクサム・ドラゴン：DEF 2400

ラーズ：LP 3000↓4200

ガンツ！ と金属音が響き、小麦色の肌の剣士の攻撃が止められる。

赤い金属性のプレートで攻撃を受け止めた機械チックなドラゴンは、攻撃を1ミリと後退せず受け止めた。

『アマゾネスの剣士』との戦闘で発生したダメージは相手が受ける！』  
「小癩」

ラーズ：LP 4200↓3300

「なら続けて『アマゾネスの大剣豪』でも攻撃！ このカードがバトルする時、他のアマゾネスの数だけ攻撃力が500アップして、更に貫通ダメージを与える！ アタイのフィールドに他にいるのは『アマゾネスの剣士』と『アマゾネスの聖戦士』！ よって攻撃力は1000ポイントアップだ！」

アマゾネスの大剣豪：ATK 2700 ↓ 3700  
 ラース：LP 3300 ↓ 2000

「よし、『チェックサム・ドラゴン』撃破！」

「痒いな」

『チェックサム』は黎も使用したモンスターカード。これで両者の敗北をそれぞれ防いだという皮肉なモンスターとなってしまった。

アマゾン・カーニバル（オリジナル）

【永続罫】

このカード名の（1）（2）の効果はデュエル中にそれぞれ1度しか発動できない。

（1）：手札の「アマゾネス」魔法・罫カードを1枚捨てて発動する。

自分の墓地からレベル4以下の「アマゾネス」モンスターを3体選び、守備表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、EXデッキからモンスターを特殊召喚するための素材にできない。

（2）：このカードがフィールドを離れた時、フィールドの地属性モンスターを全て破壊

する。

この効果で自分のモンスターが2体以上破壊された時、自分の墓地から(1)を発動するために捨てたカードをセットできる。

アマゾネスの大剣豪(オリジナル)

星8

地属性/戦士族

ATK 2700/DEF 1800

(1):このカードは魔法・罠の効果では破壊されない。

(2):1ターンに1度、自分の墓地からこのターンに墓地に送られていない攻撃力1500以下の「アマゾネス」モンスター1体を対象に発動できる。

そのカードを自分フィールドに特殊召喚する。

(3):このカードがアドバンス召喚されている場合、このカードが戦闘を行う攻撃宣言時に発動できる。

このカードの攻撃力は自分フィールドの他の「アマゾネス」モンスターの数×500アップし、守備表示モンスターと戦闘を行った場合、このカードの攻撃力が守備力を超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与える。

アマゾネスの剣士(効果モンスター)

星4

地属性/戦士族

ATK 1500 / DEF 1600

(1) : このカードの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは代わりに相手が受ける。

「どうした？ まだ我を倒せてはいないようだがあ？」

「っ、ターンエンド……！」

弥生 : LP 1100

手札 : 0枚

フィールド

・アマゾネスの大剣豪(ATK 2700)、アマゾネスの剣士(ATK 1500)、

アマゾネスの聖戦士(DEF 300)

・アマゾン・カーニバル(永続罠)

「私のターン、ドロロー。手札から『邪慾な壺』（じやく）を発動、墓地または除外されている種族か属性が同じモンスターを4体までデッキに戻し、戻した枚数より1枚少ない数だけドロローする。私は除外されている闇属性モンスター『融合呪印生物―闇』『暗黒竜コラプサーペンント』『F・G・D』、墓地の『始祖竜ワイアーム』をデッキに戻し3枚ドロロー」「ぬう、やつと倒した『F・G・D』がデッキに戻ったかあ……！」

「おまけにあの厄介過ぎる『ワイアーム』まで……！」

ライフは差引1000の減少。2人がかりで、である。

タイタンも弥生も切り札を出したというのにこの状況、ラースの腕の高さを伺わせるというものだ。

邪慾な壺（オリジナル）

### 【速攻魔法】

このカードは既に自分がこのカード以外の魔法カードを発動しているターンには発動できない。

(1)：自分の墓地、または除外状態の種族または属性が同じモンスターを4体まで選んで発動する（同名モンスターは1体まで）。

選んだモンスターを全てデッキに戻し、戻した枚数―1枚ドロローする。



(2) : 自分のカードをドロローする効果が相手によって無効になる場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

「おじさん、ごめん。アタイが倒せていけば……!」

「まあだ焦るのには早いぞ弥生ちゃん、このターンさえ何とかかなればチャンスはある」

「クハ、このターンを凌ぐつもりか」

「勝負は時の運と、よく言うだろう?」

「笑止千万! ならその運すらも踏み砕く強さを魂に刻むが良い!」

魔法カード『復活の福音』を発動! 我の墓地からレベル7または8のドラゴン族モ

ンスターを叩き起こす! もう一度働け、『メテオ・ブラック・ドラゴン』!」

『グオオオオオオオオオオ!』

「くっ、また復活しやがった!」

「まだだ! 我は墓地の通常モンスター『アレキサンドライドラゴン』と『メテオ・ドラ

ゴン』を除外し、『星遺物の守護竜メロダーク』を特殊召喚!」

『ギガアアアアアアア!』

「そして2体目の『アレキサンドライドラゴン』を通常召喚!」

『キュウウウウウウウ!』

メテオ・ブラック・ドラゴン：ATK 3500  
 星遺物の守護竜メロダーク：ATK 2600  
 アレキサンドライドラゴン：ATK 2000

一瞬で並ぶハイパワーなドラゴンモンスター達。1体は蘇生、もう1体は召喚条件があるとはいえ、この終盤では非常に驚異的だ。

『メロダーク』の効果発動、貴様らのモンスターの攻撃力・守備力は私のフィールドのドラゴン族の数×500ダウンする！」

「ぐっ、あのモンスター共は3体ともドラゴン族かつ！」

デーモン・アボキメラブル：ATK 1000↓0  
 アマゾネスの大剣豪：ATK 2700↓1200  
 アマゾネスの剣士：ATK 1500↓0  
 アマゾネスの聖戦士：DEF 300↓0

怪しい濃霧が赤い四ツ目の黒龍から漂い、2人のモンスターのステータスを下げる。

これでは生き残っても殆ど意味が無い。

「バトル！ 我は『メロダーク』で『デーモン・アボキメラブル』を攻撃！ 消えよ、下等種！」

神の血を引く龍の顎が開かれ、そこに青黒い炎が溜まっていく。

実質3100の攻撃力をまともに受ければ、その時点でアウトだ。

「そうはさせせん！ リバーストラップ、『聖なるバリアーミラーフォース』を発動！ 相手の攻撃宣言時、攻撃表示の相手モンスターを全て破壊するう！ これで逆転だあ！」

「又ルいわあ！ 墓地の『復活の福音』はドラゴン族モンスターが破壊される時に身代わりになる！ これで破壊されぬう！」

「何イ!?!」

復活の福音

【通常魔法】

(1) : 自分の墓地のレベル7・8のドラゴン族モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

(2) : 自分フィールドのドラゴン族モンスターが戦闘・効果で破壊される場合、代わり

に墓地のこのカードを除外できる。

星遺物の守護竜メロダーク（効果モンスター）

星9

風属性／ドラゴン族

ATK 2600 / DEF 3000

このカード名の（1）（3）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分の手札・墓地から通常モンスター2体を除外して発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

（2）：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手フィールドのモンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールドのドラゴン族モンスターの数×500ダウンする。

（3）：フィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊された場合に発動できる。

このカードとは元々の種族・属性が異なるレベル9モンスター1体を自分の墓地から選んで手札に加える。

煌めくシールドを張って青い炎を跳ね返すタイタン。十代とのデュエルで自分のモンスターを破壊した時の事を思い出して投入してみたが、強力なカードとしてあれ以来

何度も助けて貰っている。

しかし今回はラーズも同じようにシールドを展開し青い炎を防いでしまった。これでは役目を果たせない。

「これで攻撃は止まらぬ！ 灼熱のアマルトウブレス！」

『デーモン・アボキメラブル』の効果発動！ 墓地から『デーモンの召喚』を除外し、攻撃力を1250アップさせる！ そしてこのターン戦闘では破壊されない！」

デーモン・アボキメラブル：ATK 0↓750

星遺物の守護竜メモダーク：ATK 2600↓1350

「攻撃力1250ではなく750だと!？」

『デーモン・アボキメラブル』の攻撃力は0になっていたが、下がりきらなかった残り500が消えたワケでは無い。残った500ポイントのダウンはこのタイミングで再度計算され直したのだ！」

「ぬ、ぐおおおおおおお！」

タイタン：LP 900↓300

「これでトドメだ、『アレキサンドライドラゴン』で続けて攻撃！ 例え破壊されなからうと、攻撃力750程度では壁にもならぬわあ！」  
「ぬあああああああああああああああ！」

タイタン：LP 300↓0

「残念だったなあ？ 再計算が無ければ2体の攻撃を受けても首の皮一枚ライフが残っていたものを」

「が、あ……」

「おじさんっ！」

「余所見をするな娘、まだ私の攻撃は終わっておらぬ！ 『メテオ・ブラック・ドラゴン』で『アマゾネスの大剣豪』を攻撃イ！」

『大剣豪』の効果発動！ 再び攻撃力が1000ポイントアップする！」

メテオ・ブラック・ドラゴン：ATK 3500

アマゾネスの大剣豪：ATK 1200↓2200

「足りぬわあ！ 死ね、「バーニング・ダーク・メテオ」！  
「きやあああああああああああああああああああ！」

弥生：LP 1100↓0

「ぐ……、おお……、すまない、弥生ちゃん……私が弱いばかり、に……！」

「弱いのは、アタイですよ……ゴホッ！ おじさん、ホントに、ごめ、ん……！」

「敗者が戯言をほざくな！ 遺言など残さずさっさと生贄のためにカードになれ、このグズ共めが！」

タイタン、弥生：LOSE

ラース：WIN

☆

——謎の場所

「『ヴァンダルギオン』、無意味ってのはどういう意味だ？」

『文字通りだ、今のおんしに肉体を動かす力は無い』

「……！」

って事は、と黎は息を呑む。

己の肉体に限っては完全に自由自在に動かせる黎が、それが不可能であれば理由は一つしかない。

「……は死後の世界って奴か」

黎として己の死の全てを避ける事は不可能だ。

頭が吹っ飛んでも修復できるし、心臓を穿たれても塞ぐ事はできる。毒やバイオテロにも耐性があるし、銃弾の雨を浴びても死なない。包丁で刺されようと雷に打たれようと、ガソリンをぶっ掛けられて燃やされようとプレス機やダンプカーに潰されようと生きていられる。

けれども、それにだって限度はあるのだ。

そうでなければ死んで『遊戯王GX』の世界に転生なんてしないのだから。

『半分正解じゃのう』

「……半分？」



『ここは此岸と彼岸の狭間、死にかけて者が現世に戻れる最後の場所……。分かりやすく言えば、三途の川の川岸よ』

「この良く分からない場所がか……」

黎が死ぬのはこれで2度目だ。

その時もよく分からない空間に漂っていたが、その時は周囲を観察する余裕なんて無く記憶にもほぼ残っていない。

故に改めて周囲を見回して「成程」と納得した。

この場所を『良く分からない空間』だと呼称するが、周囲はそうせざるを得ない場所であった。まず色がよく分からない。赤いのか青いのか、白いのか黒いのかも分からない。

次に明るさも分からない。暗いような明るいような、どちらでもあるような無いような。

そして浮いている感じはするのだが体幹そのものが無い。バランスを取る必要が無い、自分がボールになってしまったような錯覚すらある場所。

総じて『良く分からない空間』としか表現できない——或いは人間のボキャブラリーでは文字にできない場所なのだろう。

とある漫画には『ナンダカワカンナイノ』という見るからに何とも良く分からない生

物がいたが、それに倣うのなら確かにここを『良く分らない空間』と呼ぶのは適切と言えた。

「俺は……、このまま死ぬのか？」

『いや、おんしの仲間が必死に治療してくれておる。生き返るであろうよ』

「ならば何故、俺の目の前に現れた。俺をここで殺すためか？」

放つておいても生き返るのなら、黎に接触する必要は無い。

この冥王が顔を出したからには必ずそこに意味がある筈だ。

『悔るな、小僧』

静かに怒る事無く、しかし威厳を感じさせる声で黒い巨龍は宣った。

『ワシが貴様のような小僧一匹屠るために出て来たとも思うてか』

「いや、だが他に理由が思いつかなくてな」

『驕りは身を滅ぼすぞ』

「そんなつもりは無い。ただ……」

数秒、黎は黙り込んだ。そしてゆっくりと口を開く。

「――」

『おんし……!』

それを聞いた『ヴァンダルギオン』は驚愕で目を見開くと、顎に手を当てて暫く思案

した。

『把握しておったのか』

「それを知ったのは体感的にはついさっきだけだな」

『ふむ』

顎から手を離れた冥王竜は、ややあつて黎を真正面から見据える。

品定めとも凝視ともまた異なる、まるで珍奇な生物を見るような眼差しだ。

『死を恐れぬか』

「怖いさ」

『ならば何故取り乱さぬ、命あるものならばそう思うのが当たり前であろう』

「……生きる意味の違いだ」

『生きる意味とな?』

「大抵の命は己のため、そして子孫を残すために生きる。だが俺は違う、俺は自分のために生きてるんじゃない。俺は都の、大切な義理の妹の未来を守るために生きる。だから俺は俺の死を恐れない、受け入れている」

『他人のためか』

「それに」

『うむ』

「数えきれない程の命を奪ったクズに、今更自分の命を惜しむ権利があると思うか？」

それは彼の嘘偽り無い本音。

前世で多くの命を奪って生き永らえた事実、例え罪悪感を覚えてなくとも彼の心に刻まれている。

命の軽さ、命の重さ。

命の弱さ、命の強さ。

実体験として返り血として認識してきたそれらは、彼の命に対する価値観を明確にした。

即ち『人は死ぬ時は死ぬ』。

言葉にすれば当たり前の事だ。だがその『死』が唐突に訪れる悲しく虚しいものであるとも知った彼にとって、自分の命が終わる時に自分の未来を欲する欲深さは恥ですらあった。

ましてやそれを他人に押し付けて身、『自分さえ良ければ良い』という発想ができれば

或いは良かったのかも知れないが、彼にそんな事はできなかったのである。

『死を受け入れる事は偉業では無いぞ』

「だろうな。だが、俺だけ死ぬのは嫌だなんて我儘を言えるような精神性は持っていないんだよ、俺は」

『然様か』

「……いい加減に本題に入ろう、互いに時間の不経済ができる暇人でも無いだろう」

『それものを得ているか』

頷いた冥王竜は青年に問うた。

『おんしには精霊の宝玉を与えてあったな』

「ああ、ジョーカーが全部持つていつてしまったがな」

『何を持つていたか、覚えておるか?』

「……炎、草、地、水、風、雷だ」

デュエルモンスターズが持つ6つの属性、そこに草と雷を足したものが彼の持つている宝玉だった。それを元に生み出した力で戦い、勝利を積み重ねてきたが……。

『光と闇は特別な宝玉でなア、他の6つとは少々勝手が違う』

「……そういやポーラがそんな事を言っていたな」

『うむ。光と闇とは即ち概念、他の6つと異なり自然界は在ってもモノとしてはそこに

は無い。見える、しかし見えぬ、それが光と闇よ』

見えるけど見えないもの、つて奴か。その概念をこんな場所で聞くとは。だがしかし、確かにそうだ。

炎は炭素と酸素。

草は炭素。

地は珪素や鉄やアルミ等のミネラル。

水は水素と酸素。

風は空気に含まれる酸素や窒素といった気体。

雷は元素じゃなく電子。

物質としてはそれぞれ存在している。もし原子や電子を掴む事ができるのなら、これら6種類は文字通り手に取る事が可能だ。

だが闇は物質じゃないし原子や分子も無い、いわば『無』。

一方で光はいわゆる電磁波であり、エネルギーそのものだからこつちも元素が無い。故にその2つは他の6つとは違うものだ。

『そも、光と闇とは何だとおんしは思う』

「光と闇が何か……？ 先刻感じ取ったもの……じゃあ答えとしては相応しくないようだな」

『うむ、おんし自身の光と闇ならそれで良いが、ワシの求める答えとしては不適合よ』  
目を閉じ、考える。

光とは。

闇とは。

希望と絶望だろうか。否。

善と悪だろうか。否。

昼と夜だろうか。否。

太陽と月だろうか。否。

どれも違う。それらは要素の1つに過ぎない。

「駄目だ、俺の……、俺の中にある殺戮<sup>過去</sup>と可能性<sup>未来</sup>くらいしか真つ当な答えが無い」

『死、だ』

「死？ 光によって生き、闇によって死ぬ、と？」

『そうではない。闇とは、命である。一度<sup>ひとたび</sup>この世に命を授かり意志あるものとして産まれたのであれば、それは闇として影を大地に落とすものだ。苛烈な光に対するため、闇としてこの世に轍を刻む。』

対し光とは、有無である。この世の始まりに一枚のカードがあり、そのカードの放つ輝きを以てこの世に光が産まれた。光が産まれた事により、相対的に闇が刻まれ、影と

いう概念もまた刻まれたのだ』

世界が始まった時、そこには光は無かった。

太陽が無ければそこには色は無く、相手を目で認識する術も無い。

やがて燃えるような星が現れ、世界が照らされた。照らす光が生まれた事で、物には形があると認識された。

色や陰影によって神羅万象に形を与え、形に意味を与える。これが光の役割である。では光の生まれる前には形に意味の無い、闇の世界だったのだろうか。

否。

光の無い世界に闇もまた存在しない。何故なら光と闇は一对の存在だからである。

太陽があつてこそ月が輝くように。

絶望するからこそ希望に縋るように。

光によって “明るい” 場所が生まれた事により、相対的に “暗い” 場所が生まれた。これが闇だ。

即ち、光の無い世界では闇は存在しない。闇とは光あつてこそ認識されるものなのだから。

故に原初に闇は無く、ただただ『何も見えない』『無』があつた。『何かが見える』『有』あつてこそ、闇も知覚できる。



そしてただ光が輝いているだけでは、そこは真つ黒だった世界が真つ白になるだけではない。

世界を白だけにするのではなく、光を遮ったり反射したりする事で色が、命の形が明確になる。それが闇の役割である。

『死を司るという事は、生を司るという事。生と死は表裏一体、別つ事適わぬ。ワシからすれば2つは1つ、そこに差は無い』

「ふつ、冥界の王者らしいセリフだ」

『無論である』

光無くして闇は無く、闇失くして光も無し。

それが真実。

『だからこそ、ワシはおんしに告げよう』

「ああ」

一拍。

『今のおんしに闇の宝玉を授ける事はできぬ』

「だろうな」

『ほう?』

「俺の命、長くないんだろ。 “死” を闇が司ると言うのなら、迂闊に譲渡すれば俺はそこ

に引きずり込まれる、戦いの本番になる前に文字通り死ぬ」

『何と、そこも理解しておったか』

「まあな」

特に驚く事も無く、「薄々察していた」と黎は小さく頷いた。

☆

——宿の庭

「分かっていた事、です……。どうせ私なんて……。どうせどうせ……」

「フン、五月蠅い女だ。エネルギーが無いよりマシ程度とは、貴様は余程ツイてない人生だったようだな」

タイタンと弥生を敗ったラーズは、その後もその宿にてハンティングを行った。

宿泊客は他に6名、内デュエリストは3名。

「報告せよ」

「ハッ！」

デュエルを行わない者はカードに封印しても殆ど旨味は無いため、適当に殴って転が

しておいた。

また他にいたデュエリストもチンピラが1名、孫に付き添って始めたばかりの老人が1名と大した収穫では無かった。という旨をグリーフとファイアーから報告されたラーズは親指の爪を噛む。

「チツ、これだから人間は……！ 我が仕留めた2匹以外は雑魚以下か！」

「ラーズ様！」

そんな彼の元に、別行動を取らせていたヴァニティが報告のために飛んで来た。

本来ならこの3人は会話もロクにできない程度なのだが、今回は状況を自分に知らせられるよう調整しておいたのである。

「何事だ」

「奴らが……、バランサーと『騎士』の魂が光の領域にて光の宝玉を入手する運びとなりましたであります！」

「……事実だな？」

「ハッ、光の領域の長たる『アルカナ ナイトジョーカー』に勝利したのをこの目で。今は倒れておりますが、起きれば光の宝玉を入手する事は確実であります！ 始末すべきとは考えましたが、あの場ではそれも難しいと判断し急ぎ戻りましたであります！」

「ふむ」

面倒な、とラーズは呟いた。

既に邪神の護衛は自分1人。倒れた6人の内4人は協力者ありきだったとはいえ黎の手で倒されており、これ以上パワーアップさせれば、その牙が自分に届く可能性は大いに有り得る。そうなれば邪神は無防備だ、邪神に勝てるワケが無くとも邪神に手を出されるのは護衛として避けねばならぬ事。

プライドの号令で4人の護衛が次元の違う場所に逃げたのがミスだとはラーズは思っていない。しかし下手にアドリブで逃げた所為で、更に違う次元の敵も招き入れるとはラーズも想定外だったのである。しかも全く違う次元に逃げたせいでこちらから連絡も取り辛くなっており、やっと探せた時には既に3人もやられていた。

これ以上人間の好きにさせるのは屈辱極まりない。そして汚名を雪ぐチャンスは今回を逃せば残っていないだろう。

「良かろう、我らも聖域に向かうぞ」

「サー・イエツサー！」

「かしこまりましたであります」

「押忍！」

「向こうでは我らの力は大きく制限される。そのためグリーンフ、ヴァニティ、ファイアー」

「ハッ！」

「貴様らには死んで貰う」

t o b e c o n t i n u e d

## STORY90：『虚構』

SIDE：黎

目覚めるとそこは聖域の床だった。

頭の後ろが柔らかい感じがするので誰かが枕でも置いてくれたのだろうか。

「……ん、目が覚めた？」

「ポーラか……？」

「……私の膝枕、寝心地が良かったみたいで幸い」

はあ、膝枕。そっか、それは有難いな。

嬉しい筈なのに頭が動かない、ブーツとして上手く考えられない。

肉体の頑丈さだけが取り柄なのに、情けないっただら無いぜ。

「目が覚めたようだな、主殿」

「さく——」

「動くな」

続けて聞こえた俺の相棒の声。顔を動かして声が出た方を見ようとしますが、それより早く彼女の刀の鞘が俺の額を押さえ、動きを止めた。

「己が何をしたのか覚えているか？」

「……ああ」

「結果、貴方は腕を切断せざるを得なくなった。主殿の事ならまた生えるとは思いますが、それでも負担がゼロでは無かろう。今は安静にしている」

言われてみれば確かに、右腕が無い。ほぼ肩口からバツサリと無くなっていて、代わりに多肉植物の葉が包帯のように巻かれている。

桜がやってくれたのか。

「主殿がいつか致命傷を負うのは目に見えていた、故に事前に用意していたまでの事。自傷の結果使う事になる可能性も考慮していたが……、まさか本当にその可能性で使う未来になるとは思わなかったよ」

むう、反論できねえ。

あの場で負けるワケにはいかなかったのは確かだが、命を賭けるべき場面だったかと言えばそれは違う。あの場で死んだらそれこそ本末転倒だ。

(腕や足が消えるなんてのは前世じゃあ日常茶飯事だったが、今世では初めてだな。必要経費ではあるが、ここで払うべきタイミングでも無かった、……かな)

猛省。

だが同時に、得られるものもあつた。

この場で邪神の力を受けねば、恐らく生涯知る事の無かつたものだ。

(問題はその『得られたもの』を桜達に言うワケにはいかないって事か……)

言えない理由は2つ。

1つ目はそれが俺の感覚的な話だから。言えば信じて貰えるとは思うが、証拠が無い。またこの場で『ケイオス・フォース』を発動し倒れるなんて真似をするのは御免だ。ぶつちやけあいつらが怒るし泣く。

2つ目はそれを言えば桜達と敵対する可能性があるからだ。これは絆とか信頼の問題じゃない、理屈と本能だ。最後にそうなるならまだ良い、だが今あいつらと戦うのは悪手でしかない。

「あれ、そういやファイオとフレイは？」

「……ファイオはサーが寝てる間に出て来た敵と戦った、フレイはその治療中。……礼拝堂のベンチにいる」

「ちなみにその敵とは、主殿の腕を触媒に姿を得た邪神のエネルギーだ」

うげ、知らない間にファイオを殺そうとしたって事か。

「悪い事、しちまつたなあ」



「反省する気があるのなら、回復してから謝れ」

「ああ。よつと」

「返事をしながら立ち上がるな馬鹿主」  
ほかあるじ

「時間が無い」

「何？」

「歩きながら説明する、ジョーカーはどつちだ」

「……あつちの方、多分彼の私室。……この道を真つ直ぐ行つた突き当たりだから迷う事は無い」

「サンキュー。つと……」

一歩足を踏み出そうとして、僅かばかりバランスを崩した。

立ち眩みではない事は明々白々。ざつと肉体を探ればあちこちに損傷が見受けられる。

骨……、ああ右の肋が全部グチャグチャだな、歩き続けたらボロボロに割れていくだろうな。足や首の骨もヒビが入ってる。

筋肉……、腰と腿がヤバいか。この程度なら問題は無い、重くて動かすのもしんどい  
がまだ回復できる範疇だ。

神経系……、酷いな、末梢までズタズタだ。右腕と一緒に作り直すしかねえや。

浸食は右腕で粗方抑え込めたようだが、どうやら細い根のようなものを俺の体内に巡らせて寄生しようとしたらしい。肉体の根深い部分にまで入り込んでいるせいで、この聖域の清らかなエナジーでも浄化できていない。

しゃーない、今は戦うための機能をオフにして回復に全振りだ。修復に注力すれば取り繕えるようになるまでそんなに時間は要らない。

髪の毛も取り込むか。武器の意味もあるが、こういう非常時のために伸ばしておいた面もある。中に構築している蛋白質をフィードバックさせて緊急用のエネルギー源にする、気休めにもならないが無いよりマシだろ。

後は悪いが桜のこの包帯代わりの葉も貰う。右肩を変質させて獣の顎のようにし、一気に食い漁るとそこそこの魔力と栄養が体内に取り込まれた。流星は桜、良い仕事をしたな。

「こらー！ それはオヤツじゃないんだぞ主殿！」

「悪い、本当に時間が無いんだ。ここからはタイムアタックになっちゃうんだよ」

「だからと言ってだな……」

「……諦めよう、サーはこういう人。……目的のためなら善意も悪意も、自分自身だって食べちゃう怪物」

「それは分かっている、この男は死にたがりだとな」

「酷い評価だ。……その通りだけだな」

はあ……。光の宝玉、フィオ、フレイ、邪神……。やる事多すぎるだろ。

何から手を付けるか決めただけど、本当に宝玉から良いのか？

(フィオに謝罪とお礼……。いやジョーカーの方が先か。光の宝玉を手土産にしないと、あいつが体を張った甲斐を目に見える形で教えてやらないとな)

あいつの性格からして、動けるまで回復できれば戻って来る筈。なら今は回復させてやるべきだ。

フィオは人間……。かどうかは最早分からないけど、傷付けば倒れる命である事は間違いない。桜とポーラの反応から、死に瀕した重体でも無さそうだし、ほんの少しでもゆっくりして貰おう。

「して、主殿。説明をしてくれるのだろうか？」

「……私も疑問。……どうしていきなり動き出したの、生き急ぐべきじゃないよ」

「その発言はババ臭いぜ、ポーラ」

「……蹴つて良い？」

「やめて」

あー、頭がぼーつとするよホント。

無駄に強い肉体が取り柄の化物が情けない。

「説明するが……、フィオには言わないでくれるか」

「何故だ」

「あいつに心配かけたたくない。俺と浅からぬ縁があるかも知れないけれど、これは俺の問題なんだ。俺と都と邪神の問題、あいつに要らない負担はかけたたくない」

「……サーがそう望むなら」

「色々な意味で無用とは思うがな」

「それでもだ」

☆

重い足を引きずる事、約5分。ポールの案内で俺はとある扉の前まで来ていた。

「( )か？」

「……うん」

見るからに荘厳な造り……、というワケでも無く質素な感じの木製のドア。模様が彫られているのでもなく、まるで既製品をそのまま取り付けたかのような場違い感すらある。

余人が見れば戸惑うかも知れないが、ここがジョーカーの部屋で間違いない。その証

扱に『Joker』と部屋のネームプレートに刻まれていた。

「ここからは俺1人で行く」

「承知した、我々は部屋の外で待っているぞ主殿」

「……ジョーカーの人柄は信頼できる、何も無いと信じてる」

緊急で生やして右腕と傷付いた左腕で戸を押す。

ゆつくりと開く扉の先で、ジョーカーは椅子に座って待っていた。あの特徴的な紫の鎧は装着しておらず、事務仕事のために軽装でペンを滑らせていた。

「漸く来たか」

「ああ、時間かけて悪かったな」

「だから言ったんだ、使うべきじゃないってな」

「悪い」

ドアを閉めると同時、ジョーカーは片手で簡易的な魔法陣を展開しドアに魔法を施す。

陣には『防音』と書かれていた。

「聞かれたくない話、持って来てくるんだろ」

「……何で知ってるんだ」

「お前が『ヴァンダルギオン』の爺さんと会ったからだ。あの爺さんとは浅からぬ付き合い合

いがあるてな、精神だけだろうが近くに来れば分かる。爺さんは自身の領域から滅多に出て来ない、なのに接触したって事はそれだけ重要な何かがあるって話だろうよ。例えば……、お前の今後の進退とかな」

そこまで察してるのか、参るね。

まるで俺という今代の主人公を導く先代主人公じゃねえか。

或いは、互いに本当に何かの物語の主役だったりしてな。

「じゃあ単刀直入に訊くぞジョーカー。悪いニュースと超悪いニュース、どっちから聞きたい？」

「良いニュースはねえのか」

「無い」

「ハッ、こいつはお笑い種だ。護衛を残り一人になるまで切り崩して良いニュースが無いとはな」

「違う。で、聞くのか？ 聞かないのか？」

「聞くよ、お前の好きな方から聞かせてくれ」

「なら悪いニュースからだ」

笑い種、か。

そうだな、確かにそう表現するのは的を得ている。

20年以上生きた。社会の酸いも甘いも知る奴からすれば若造だろうけれど、それでも俺は無知じゃない。

だからこそ、分かる。

俺にとつて■こそが■つて事が、誰にとつても最悪なニュースだという事が。

「俺の命だが、もう残り少ない。『ヴァンダルギオン』曰く、強敵と後2回戦えるかどうか、だそうだ」

「1回はあるのか」

「ラースと戦つて勝つた後、邪神に喰らい付けらるって意味で良いなら、その通りだ。ただもし奴らが1人でも敵を増やしていたら……、俺は邪神と戦う前に斃れる」

「難儀だなア、お前の人生は」

「良いさ、返り血と殺し合いこそ俺の花道。それが俺の闇だからな、夜中にこそ咲く花は太陽の下では枯れるのが道理だろう？」

「ならば光は？」

「——未来が欲しい、明日が欲しい、そこで皆と笑っていたい。そんな程度のモノさ。都合がそこで笑つてくれる世界が、できれば俺も一緒に笑つて過ごせる世界が欲しい。安っぽいだろ」

「ハ、安くなんてねえよ」

クツクツとジョーカーは笑う。

「知ってるか？　そういう有り触れたものを願うのは、この世で一番の強欲なんだぜ？」  
「そういうものか？」

「当たり前は冷たいモンだ。素知らぬ顔をして傍らにいるクセしていつの間にかふつとなくなるとしてオレ達は消えて初めて有難みをやっと教えられるんだ。故に、当たり前が欲しいと願う奴は、永遠の安寧という値段のつけられない宝を欲するのと同じなのさ」

「……」

「だが良い答えだ。良い子ちゃんみてえな優等生ぶった回答でも無く、悪党に吹っ切つて光を捨てた奴の回答でもない。化物であろうと人間として歩み、人間であっても化物である事を忘れなかったお前だけの答えだ。お前は今、無意識にお前の答えをオレに示した。合格だ」

顔に模様を刻んだ騎士が笑みと共に掌を上に向け、白い光を生み出す。

光は球状にまとまると内側から七色の光を生み出し、それは瞬く間に俺の中へと溶けて行つた。

「お前から持つて行つた宝玉、そして新しい光の宝玉をここに。光は希望となり、だが光の輝きを以て全てを塗り潰す暴あかしまにもなる。闇と光は表裏一体、どちらかだけじゃあ誰も



何も生きられねえ事を忘れるな」

光、か。

そういや2年生編で敵対するのは破滅の光つってたか。

俺みてえな化物でもこれを受け取れるとは、光つてのは本当に人間を見てねえんだな。必要なのは光の力を受け取り振るう事のできる器……、それだけか。

とはいえこれで俺の中に精霊の力が戻った。炎、水、風、地、草、雷、そして新しい光。

残すは、闇ただ一つ。

「上手く使えよ、救世主」

「救世主なんてガラじゃねえよ」

「なら何と呼べば良い？」

「化物で充分だ」

反射的に否定してしまっただが、実際救世主呼ばわりは勘弁して欲しい。俺は聖人じゃないし、善人でもない。徹頭徹尾俺自身の望むように動くヒトデナシ、ただ困ってる奴を見捨てるのが気が悪い。誰かに手を差し伸べるのは俺のためでしかねえのさ。今夜の夢見を守るためでも思っておいてくれ。

だというのに、ジョーカーは笑みを崩さなかった。

「何だ知らねえのか？」

「何が」

「誰かのために動けて、誰かのために助けられて、誰かのために傷付いてでも戦い、その見返りを物理的には求めない奴を何と表現するか」

「ああ？」

「それこそヒーロー救世主って言うんだよ」

ヒーロー、ね。

それこそ、十代の専売特許だろ。

俺みたいな殺戮マシンには似合わないってんだ。

そう思った俺の顔は、恐らく過去一番に苦々しい表情をしていただろう。

「で、超悪いニュースってのは？」

おっと、言い忘れる所だった。

「ああ。——だ」

努めて何でも無いかのように言う。

それを聞いたジョーカーは驚きで目を見開き、しかし1秒もせず見開いた目を戻して冷静さを取り戻した。

「マジか」

「マジだ」

「そうか……」

斬られるかとも思ったが、しかしジョーカーは顔を伏せて考えるだけで動こうとしな  
い。

「いや、その問題は置いておこう」

「良いのか？」

「質問に質問を返すようで悪いが、この場で解決できるのか？」

……無理だな。

衝撃の真実ではあるが、暴露してどうこうなるものではない。

だつてそうだろう？



邪神の存在が『虚構』だなんて。

☆

S I D E : 無し

黎がジョーカーから光の宝玉を受け取ったのと同時刻、聖域の上空にラースが到着した。

彼が作り出した3人の新しい護衛は彼の中に収納されており、またラー스自身も気配を殺して移動したため誰にも気取られていない。

「フン。精霊の宝玉の大半が『騎士』の魂の元に渡り、精霊界を攻撃する旨味は失せた。加えて攪乱のため護衛は全員異世界に転移し、精霊界を攻撃する手間が割に合わなくなつた。故にここまで放置していたが……、どうやら我の失策だつたらしい」

聖域の一ヶ所から強い力を感じる。

燃えるような赤、流れるような青、吹きすさぶ黄、力強い茶、恵みをもたらす緑、全てを引き裂く紫、そして燦然と輝く白。火山で見えた時まみには無かつた精霊の力が彼の元に戻っていた。

だがそれ以上に恐ろしい事実が秘されていた事にラーズは気付く。

「そうか、そういう事だつたのか。だからこそ奴は我々に勝つて来たのか。ただの人間でも無く、特殊な出自でも無く、それが故に……。成程、邪神様と敵対できるのも領ける」

この予想が真実ならプライド達の敗北も納得だ。

であれば自分も勝てないかも知れない。

「しかし、器は脆いようだな。まあ当然だ、これまで多くの護衛と戦い傷を負つて来た。生温い怪我では無い。一方で我らが主上は不死の肉体に宿つておられる、であれば最後の戦いの結末は明白。我の役目は、その明白な未来に必ず辿り着けるよう器のヒビをより深くする事だ」

ククク、とラーズは意味深に笑みを深める。

これから死地に向かう男とは思えぬ、寧猛な狂信者の笑みだ。

「ヴァニティ達には死を強いるが……、我自身にもまた強いる道を取るか。我は死ぬ、だが暫しの時の後に貴様も死ぬのだ、”騎士”の魂よ」

ぼうっ、と獲物の巨大な斧を手取る最強の護衛。

それを思い切り振り被ったかと思うと、一瞬で流星群のように数を増やして聖域に向けて投げる。

激しい爆発が、巻き起こった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 91 : 強襲

SIDE : 黎

最初に聞こえたのは爆発、というより破砕音だった。

ダンパーカーがコンクリートブロックに突撃したかのような派手な音、重い物が硬い物にぶつかるような音。それが俺の耳に届き、一瞬より短い時間だけ遅れて振動も伝わった。

「っ、ジョーカーこれは！」

「分かってる、出るぞ！」

音と振動は断続的に降り注ぐ、まるで爆撃機が空襲に来たかのように。

まさかラーズが攻撃を仕掛けて来た？ 今迄の護衛は異世界に引き籠っていたのに対して奴は完全にフリー行動、何らかの準備に奔走していた。それが攻めに転じたって事は……。

いや、考えるより先に動かないと。



ジョーカーの執務室から飛び出すと、天井からパラパラと砂が降っていた。

間違いなく上から攻撃されている、しかもこの気配は……。

「桜、ポーラ！ フィオ達の所に行ってくれ！」

「心得た。敵の狙いが分からぬ以上、バラバラなのは危険すぎる」

「……すぐ合流する、それまでサーをお願い」

「任せろ。オレ達は外に行くぞ、まずは敵の姿が見えねえと話しにならねえ」

「了解だ！ 2人とも、正面入り口前で！」

「承知！」「……ん！」

ダンツ、と精霊の脚力で飛び出す桜と、ジャツ、とスケートで走り出すポーラ。

本来なら俺が迎えに行きたいが、フィオとフレイがどこにいるのか俺は知らない。彼女達に任せる以外に無い。俺達も襲撃者を止めるため、外に出なくては。

こうしている今も上から響く重い音は続いている、1秒だつて余裕は無いだろう。

「しかし何故だ、何故このタイミングで仕掛けて来る？ もっと別の機会があつた筈だ」

「私見なんだが……、光の宝玉に加えて俺のランクアップ・マジックの所為だ、すまない」

「どういう事だ？」

「お前も見ただろう、俺の『RUM—ケイオス・フォース』を。邪神の力と清廉な力。2つを合わせて辛うじて人間が使える段階に引きずり落としたカード、最後の護衛ラーズ

にとって恐らく唯一の計算外にして未知のカード」

「ああ」

「俺はあのカードを使い、ラーズの分身に勝利した。ラーズにとって『ケイオス・フォー』は最大の異分子なんだ。そこにこれまで持っていなかった力が加わるというのなら、阻止しないとならないと奴は考える筈だ」

この世界はゲームや漫画じゃない、生きるか死ぬかの殺し合いをするのなら当然の理屈だ。ラーズだって俺に殺されるために来てるワケじゃないのだから。

外に飛び出した俺達は素早く上空を探す——必要もなく、遙か空の彼方から黒い何かが降り注ぎ続けているのをガッツリと視認した。飛んでいる誰かは豆粒のように小さいが俺には見える、あの黒スーツのマツスル野郎はラーズだ。

思い切り大きく息を吸いこみ、戻って来た風のエネルギーを込める。口の中で音波を最大限に増幅しつつ余計な方向に飛ばないようにフルパワーのベクトルで俺は大きく叫ぶ。

「リアース！ 何をやってやがるテメエ！」

俺の声は無事に届いたようで、ラーズはこちらを向いて急速かつ一直線の軌道を描いて地上に飛来してきた。さながらミサイルのように地面に突っ込み、もうもうと土煙をあげる。無茶苦茶かこの野郎。

「ラーズッ！」

「ククククハ、名をそう何度も呼ぶ必要は無い。我もまた貴様を殺したくて仕方なかったのだからな」

「そいつは嬉しいな、飛んで火にいる夏の虫たあこの事だ」

「笑止」

ギシ、と肋骨が軋んだ音が体内に響く。俺の体が無理をしている事をラーズは察しているようで、凶暴そうな笑みを崩そうともしない。

「本来なら今すぐその素そつ首を切り落とし至高の最高邪神へと奉納すべきなのだろうが、今の我は機嫌が良い。己の幸運に感謝せよ」

「何を言ってるやがる……」

「ほんの数分であっても回復の時間をくれてやろう、と言っているのだ」

パチン、とラーズが指を鳴らすと、途端に奴の影がまるで生き物のように蠢蠢き始めた。グネグネと波打つ影はやがて大樹のように枝分かれし、その枝の先から3つの影が姿を現す。

1つ目の影は仮面を被った細身の女。フルフェイスの仮面のため表情は何えないが、少々の猫背からかその漂う雰囲気は陰鬱に思える。ローブで体を隠しているのもそれを助長していた。

2人目は軍服を着た軍人。迷彩服に傷のある顔、日焼けした肌に黒い眼帯と、見るからに鬼軍曹と言わんばかり。全身の筋肉も無駄が無く、まさに理想的な細マッチョ。

そして3つ目の影は筋肉の塊のような大男。2番目の男とは逆にボディビルダーのように筋肉を付ける事そのものを目的にしたような肉体。暑苦しい、という表現がピッタリだ。

「紹介しよう、我が作った新しい護衛だ。仮面の女がヴァニテイ、軍人がグリーンフ、最後のファイアー。クハハハカカカ、仲良くしてくれると我も嬉しいぞ?」

「白々しい、邪神のお仲間ってのは挑発はお得意じゃないようだな」

3人か……。今ここにいるのは俺とジョーカー、どっちも負傷兵。向こう側の新人はプライドレベルには力がありそうだ。もうプライド程度には負けない俺ではあるが、このダメージを負っている状況で数の利すら握られているのは辛い。しかもあの3人を倒した所で後ろにラースが控えている。

「ジョーカー、戦えるか?」

「やるしかねえだろうよ。お前がオレの鎧をぶつ壊さなけりやあこんな奴ら物の数じゃなかつたんだがよ」

「真剣勝負の結果だ、悪く思うな」

「分かっている」

だが、戦わないという選択肢は無い。

ここでブツ倒す。

怪我をしていたら手を抜いてくれるような敵はいない、連戦だからとハンデをくれるような敵はいない。こつちがどれだけ不利な状況であろうとも、戦って勝つ以外の未来は用意されていないのだから。

そんな俺の覚悟を、ラースは鼻で嗤った。

「慌てるな有象無象から抜き出た羽虫よ。この3人の相手は貴様ではない」

「何……?」

「どういう事だ? ラースは何を考えている?」

「やれ」

「ハッ!」

疑問符を浮かべる俺をよそに、ラースは呼び出した3人の部下に指示を出した。

そして。

ガジャンツ!

何とグリーンフ達は脇目も振らず、一直線に聖域に突っ込んで行った。

聖域は俺を拒んだ時以上の拒絶反応を以て3人の新参護衛を弾いているが、その3人は構わずバリアのようなものに体当たりを続けている。

「……は？」

「なっ！」

何が起きたか分からない俺に対し、ジョーカーは激しい動揺をしていた。

「な、何だ？」

「貴様、仮にも自分の部下に何という指示を！」

「ククハハハハハ！ 目の前きゆうしよじやくしよにある急所弱所を放置する阿房あほうになった覚えはなくて

なあー！」

「聖域を破壊する事はできるかも知れねえが、部下は死ぬんだぞ！」

「結構結構、目的を果たせるのなら命は惜しくないのが我らだ。貴様らのような脆弱な

下等種族と同一視するでないわ」

「チツ！ 止めるぞ、あれを砕かれたら光の宝玉の力が致命的に弱まる！ あの神殿は

光の宝玉に光エネルギーを供給するための集積装置でもあるんだ！」

「何だど!？」

そうか、これは水の精霊達を操り炎の精霊達に攻め込んだのと同じ事か。精霊の力を弱め、連鎖的に俺を弱体化させる作戦。邪神と対抗するための武器を失えば、俺の力も

削減されて勝率も下がるのが狙いか。

あの時は風・地・草の領域の長が来てくれたから助かったが、奇跡は2度起きない。あれを止めなければ、折角手に入れた光の宝玉も無意味に終わってしまう。

対価として聖域の清らかなエナジーである3人もまた死ぬというのも分かるが、ラーヌはあの3人を『作った』と言っていた。なら別の護衛を作られてしまえばそのマイナスも補える以上、阻止しなくてはならない。

「行くぞー！」

「ああー！」

「させぬわー！」

聖域の光の領域を壊そうとする3人、それを阻止しようとする俺達を、更にラーヌが斧を振るって止めに入る。間一髪で俺達は回避できたが、地面が抉れる程の重量と脅力を以て殆ど武器の軌道は見えなかった。

身の丈より大きな黒い斧は病み上がりと防具無しで受け止められるものでも無い、喰らえば文字通り真つ二つだろう。

かといってこのまま手を拱こまねいてるワケにもいかない……。しかし聖域の力場が壊れる前に何とかしないとイケないのに、俺達には何とかするための手が無い。炎や雷を放とうとすればラーヌは確実に止めて来るし、片方が囷になっても斧を投げて攻撃できる

のはさっきの空襲で証明されている。目の前に敵がいるのに、俺達には止められないのか。

ピキペキと何かが割れる音がして、もうあのバリアみたいなのも持たない――

「じゃあかしいわあつ！」

と思った次の瞬間、3人の新しい護衛は吹き飛んだ。

一瞬、本当に1秒にも満たない一瞬だけ、巨大な光る拳のようなものが出現し、それによってヴァニティ達は殴り飛ばされたのだ。

「ワシのマスターが怪我をして休んでおるんじや！ キンキンと結界に体当たりして騒音を出すな、生後1月も経つとらん餓鬼共が！」

「ふ、フレイ……？」

何か知人が口調を変えて光を放つ正拳突きをしていたでござる。

「……ありや、黎坊、もとい黎さん。おほほほ、これは恥ずかしい所をお見せしました。結界が割れたら聖域の中にいるマスターも危ないと思つて、つい取り乱してしまいました



た」

「そ、そうか」

「本性見せてその誤魔化しはキツイぞバアさん」

「お口チャツクしないと蹴り決りますよ?」

「そういやフレイは長生きしてるんだったなあ。モデルになったのは北歐神話の女神らしいし、それがそのまま彼女の伝承に紐づいているなら果たして何千歳、いや万を超えてるか?」

「実年齢を知りたいなら冥途の土産にお教えしますよ?」

「考えてる事を読まないで下さい……」

怖い怖い。

「さて、もう一度突っ込んで来ますか? こう見えて喧嘩はそれなりに強いですよ?」

「ぐぬうううう!」

「下名達はここで死ぬために来たので、自爆するしか無いでございますね」

「そうでありますなあ」

余裕綽々なフレイに対し、新しい護衛3人は歯ぎしりをしている。

そんなフレイの後ろからは、更に桜とポーラ、そしていつの間にか合流した『アテナ』と『破滅の女神 ルイン』がいた。

「……危ないと思って、急いで呼んで来た」

「近くに来てくれて助かった、これで数の利はこちらにある」

「よもやここまで侵入を許すとは、我々の予想以上に邪神の復活が早まっているという事ですか」

「もう猶予は無い。私達で何とかする。それしか残っていない」

取り敢えずこれで聖域の破壊は免れそうである。

そう思った俺の肩を、ジョーカーの大きな日焼けした手が軽く叩いた。

「オレはあいつらと一緒に敵を抑える。お前は恐らくこの後でラーズの奴と戦う事になるだろう、1秒でも長く回復に集中しろ」

「だがお前、まだ俺とのデュエルでのダメージが残ってる筈じゃ……」

「お互い様だ、ンなの。だからお前を残すんだ。ラーズに対抗するにはお前が必要だ、ならお前を温存する以外に無い。そうだろ」

……確かに。俺のランクアップマジックと光の宝玉をラーズは警戒している。逆説それは、俺の未知数の力なら奴を倒せるかも知れないという事。

だったらジョーカーの言葉に従うのがこの場は正しい。

「……死ぬなよ、ジョーカー。俺達は2度もデュエルした、知らない仲じゃなくなった。そんな奴が目の前で戦死するなんて真つ平だぜ？」

「当然だ、ここはオレの死に場所じゃねえんだからな」

強がってはいるが、こいつは俺と同じ重傷者。新しい護衛が弱いワケが無い以上、このダメージが致命傷に繋がる未来は有り得る。

それでも俺にできるのは信じる事のみ。信じて、彼の勝利を待ち、ラーズの顔が部下の敗北で歪んだ所で畳み掛ける。それが俺の役割なのだから。

「つーワケだ、ラーズ。お前の計画が次の段階になるのはもう少し先らしいぜ。実際には永遠に先延ばしだろうがな」

「ほごくではないか。良からう、その余興に付き合つてやる」

聖なる場所の近く、ラーズの破碎した道端。そこに生まれた大きな瓦礫に俺は腰掛ける。

呼吸を整え、心を静め、リラックスして心身の回復に努めて。

ラーズはきつと強い。そいつが作った部下もきつと強い。

だが幸か不幸か、あの3人は聖域に突撃しフレイによつてぶつ飛ばされダメージを負った。ファイアー達と戦うのは6人の精霊、3 v s 6、1対2。ならばワンチャンあるかも知れない。

「折角だ、相応しいリングを用意してやろう。ボクシングであろうと剣道であろうと、戦いの舞台に適した場というものがあるというものよ」

「何をするつもりだ！」

「こうするのだ！　ぬうん！」

気合い一発、ラーズは再び地面に己の影を伸ばすと3人の護衛ごと皆を包み込んでしまった。

ドーム状になって広がった影はすぐに消え、まるで虫籠のような網目に囲われた闘技場へと姿を変える。

よく見れば虫籠の闘技場は内部にも網による仕切りがあり、丁度2人ずつのチームに分かれていた。

「言わずもがな、闇のゲームだ。敗北すれば……、分かるな？」

「当然だ」

邪神の一派との戦いは、最初から敗北と死が等号で繋がるデスゲーム。それに身を投じる俺は当然、味方をする彼女達に、覚悟ができていないなんて事は有り得ない。

俺が思う事はただ一つ、生きて皆が勝利する事だ。

「おやおや、まさかまた貴方と組む日が来るとは思いませんでしたよジョーカー」

「足を引つ張るなよ、バアさん」

「分かってますよ」

「……キャラ被りが、ちよつと不安」

「貴女の台詞は。分かりやすいから大丈夫だと思う」

「……だと良いな」

「さしずめ残り物同士といった所か、よろしくお願い申し上げます」

「ええ、共に勝って帰りましょう」

「無論です」

しかし一方でも不安もあった。

彼女達のデッキはタッグ用に調整していない。以前、桜と十代が組んだ時は歩幅を合わせるのに少し時間がかかったし、そもそもあれは十代の主人公補正と桜のシンクロが互いに妨害されない形で展開したからこそその噛み合わせだった。第一敵は雑魚だったし。

特にジョーカーとフレイは戦術が真逆。迂闊に手を組めば大惨事なのだが……。

そんな俺の不安をよそに6人が眼前の空間を払うと、そこに都合40枚のカードが並んだ。更にそこを一撫でするといくつかのカードが消えて、再び空間を撫でると空白になった箇所にもカードが現れる。

（はぁん、あれでデッキを調整したのか。カードの精霊ならではだな）

物理的にカードを入れ替えなくて良いのは、お手軽で少しばかり羨ましい。

準備が整った6人はディスクを展開し、そこにデッキを力強く挿入して起動スイッチ

を入れた。

「デツキセツト！ デュエルディスク、起動！」

「……こちらの準備は整った、いつでもどうぞ」

「後はブツ倒すだけです、全力で行きますよ？」

頼むぞ、皆。

最悪勝てなくても良い、死ぬな。生きていれば——、何とかなる可能性は残るのだから。

勿論、勝ってくれるのが良いんだが、自分の命を犠牲にして勝利なんて道は取って欲しくない。

化物だ殺人鬼だと自称する俺だが、身内には甘いもんだ。我ながら呆れてしまう。

「お前と横並びになるのはいつ以来だろうな」

「さて、ここ千年程は記憶にありませんねえ」

「……お互い勝てるよう頑張ろう」

「頑張ったけど負けた。は無しで」

「強敵です、努々ご油断なさらぬよう」

「はい、過去一番の敵と思えますよう」

「勝てよ、皆」

『デュエル!』

フレイ&amp;ジョーカー VS グリーフ

ポーラ&amp;ルイン VS ヴァニティ

桜&amp;アテナ VS ファイアー

LP 8000 VS LP 8000

LP 8000 VS LP 8000

LP 8000 VS LP 8000

「たかが精霊6人程度、小官達が決り殺して踏み潰して焼き払ってやるであります」  
 「下名はこの戦い、下等な精霊と邪神様の力の差を証明する良い機会かと存じますれば」  
 「ウオオオオオオオオ! ワシらで世界の残酷さを教えてやろうじゃねえかあああああ  
 ああ!」

「ククク、絶望を教えてやれ」

「小官が先攻であります！」

「下名から参ります！」



「ワシのターンじゃあああああああ！」

「『魔法カード『葬送討逸』を発動！ 全員の手札の合計枚数×2000ポイントのダメージを与える！ このダメージは無効にならず、軽減もできない！』」

……え？

葬送討逸そうそうふいつ（オリジナル）

【通常魔法】

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できず、発動と効果は無効にならない。

（1）：お互いの手札がそれぞれ5枚以下の場合に発動できる。

お互いの手札の合計枚数×2000のダメージを相手に与える。

このダメージは無効にならず、相手のカードの効果で半減・減少されず、0にする事も回復にする事もできない。

デュエル開始から最初のカードだから、桜達の手札は5枚ずつ、相手は4枚、合計14枚。

って事は28000ダメージ!? いきなりそんなのアリかよ!?

「世の中には戦ってはいけない敵がいるのであります」

「たかが精霊如き、邪神様に楯突いた事を後悔して下さいませ」

「テメエらに時間をかけるだけ無駄だ、死ねえ！」

敵の発動したカードから極大な灰色のビームが放たれる。

防ぐ事のできない一撃を前に、桜達は断末魔の悲鳴も無く呑み込まれた。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 92 : 悲嘆

SIDE : 無し

もうもうと煙が立ち込める。

初手で放たれた2万以上のダメージを与えるカードによつて発生した爆発は、確実に精霊達を呑み込んでいた。

「……………」

黎は忘れていたのかも知れない、邪神というものがどれ程の脅威なのかを。

幾人も斃し乗り越えた故の油断か、それとも直前にジョーカーという強敵が構えていた事による失念か。兎角、彼らはこの手の法外なダメージを与える効果を持つカードばかりを使うという事を、今まざまざと痛感させられていた。

「さ、桜！ フレイ！ ポーラアツ！」

これ程の熱量を放つ大爆発、直撃した彼女達が無事とは思えない。

されど叫ばずにはいられなかった、万が一より小さくとも彼女達が無事だろうという

願いを捨てられないからだ。

「ジョーカー！ 『アテナ』！ 『ルイン』！」

「クハハハハ、無駄だ。奴らは死んだ、所詮精霊など人間と同等の雑魚だっただけの話よ」

「ッ！」

同じように戦いの成り行きを見守っていたラースが嘲う。

やがて視界を奪う煙が晴れていき。

フレイ&ジョーカー：LP 8000

ポーラ&ルイン：LP 8000

桜&アテナ：LP 8000

無傷の彼女達の姿が黎の眼に映った。

「何だと!？」

「良かった……」

よく見れば彼女達の前には輪の模様が施された結果が張られており、そこより後ろにいる彼女達の足元は焦げ跡1つ無い。あれでダメージを打ち消したのだろう。

「あ、有り得ないでございませす、ダメージは0にならない効果の筈でございませす！」

「テメエら、何しやがった！」

焦る邪神の護衛に対し、冷や汗を拭った桜達は冷静に説明した。

「永続罫『精零せいれいかっせん隔禁』を発動したのだ」

「……自分フィールドにカードが無い時、手札からも発動できる」

「これでダメージを打ち消しました」

「だからそれが出来ねえから言ってるんだろうが！」

「喚くな小物、慌てる乞食は貰いが少ないと言うぞ？」

「何い!？」

「0にしたのは28000のダメージではありませんよ、1枚につき2000の方です」

「ど、どういう意味でありますか!？」

「……このカードはダメージの倍率を落とす効果を持つてる、0には何を掛けても0という話」

「チッ！」

敵の発動したカードはダメージを0にする事はできない。つまり数式の解に手を加

える事を許さない極めて強力な耐性を持っている。

一方で桜達の発動したカードは計算の途中式そのものを書き換えてしまう効果であり、これは敵の耐性をすり抜けるというワケだ。

せいれいかっきん  
精零隔禁（オリジナル）

【永続罫】

自分フィールドにカードが存在しない場合、このカードは手札からも発動できる。

(1)：このカードがフィールド（表側表示）に存在する限り、効果ダメージを与える効果の発動に対して以下の効果が適用される。

●カード1枚につき800以上のダメージを与える場合、1枚につき0のダメージとして扱う

●3000以上のダメージを与える場合、そのダメージを100として扱う

●モンスターの元々の攻撃力・守備力の3倍以上のダメージを与える場合、0倍のダメージとして扱い、またその時モンスターはフィールドを離れない

●同じカード名の効果で同じターンに3回以上ダメージを受ける場合、そのダメージを回復として扱う

(2)：このカードは発動ターン相手の効果を受けず、また相手の効果でフィールドを離

れる場合、代わりにデッキ・手札から「精零隔禁」を1枚墓地に送る、または墓地から除外する事もできる。

(3) : このカードはモンスター・の召喚・特殊召喚、およびカードの発動のためにフィールドから離す事はできない。

「……このためのサイドチェンジ。……反射も考えたけど、反射を反射されると面倒だったからこうした」

「そういう手を打つ事は予想済みでしたからね、デッキ調整の時に仕込ませて頂きましたよ」

「まあ、流石に初手から遠慮無く繰り出された時は少々焦ったがな」

用意が良いなど黎は思ったが、すぐに道理だと思ひ直した。

桜はずっと黎の戦いに同行して邪神一派のやり方を見ていたし、フレイはフィオと共に黎の戦いについて聞いて聞いていた。ポーラに至っては意識が表層化しなかつただけで邪神の膝元にいたのだ、対策を打っても何ら不思議ではない。

ラーズ達は邪神の圧倒的なパワーで簡単に倒せると見縊っていたのだろうが、彼女達はそれを超えた腕を持っていたのである。

「すまん、助かった」

「タツグパートナーを助けるのは当たり前ですよ」

「とても心強い」

「……ん」

「この御恩は必ず」

「うむ、だが恩返しの前に勝利を」

「小癪な手を使うのでございますね」

「申し訳ございません、ラーズ様。仕留め損ないましたであります」

「次で必ずブチ殺して首を並べて晒してやりませう！」

「デュエルに於いて妨害に会うのは当たり前だ、故に我はこの失敗は許そう。だが敗北は許さぬ、分かっておるな？」

「ハッ！」

☆

フレイ&ジョーカー：LP 8000

手札：4枚／5枚



フィールド

：モンスター無し

：精零隔禁（永続畏）

グリーフ：LP 8000

手札：4枚

フィールド

：モンスター無し

：魔法・畏無し

状況は仕切り直し、3チームがそれぞれのデュエルを再開する。

手札を1枚ずつ使用した攻防など寝起きの茶番、三文芝居。ここからが敵も味方も本番だ。

「まさかそのようなカードで小官達の一撃必殺を回避するとは。しかし所詮は小細工、真の大いなる力の前には無意味であります」

「そう思うのであればかかって来なさい」

「小物程、口煩く喚くものだぞ？」

「口だけは貴様らであります！ たった一枚のカードを凌いだ程度で優劣は変わらないのであります！」

手札から魔法カード『悪念融合』を発動！ 小官のフィールドにモンスターが存在していない時、デッキと手札からモンスターを素材に融合するのであります！ 小官は手札の『マッド・ソロウラー』とデッキの『サドネス勲功爵』を融合！

グリーフの墓地に2枚のカードが落とされ、それが赤と青の渦に溶け込んでいく。悪意を持ったエグい色のロードローラー、そして嘆き疲れたナイトの爵位が混ぜ合わさり、その姿を一つにした。

「融合召喚！ 現れよ、『アポカリプト・フェニックス』！」

『ガアアアッ！』

アポカリプト・フェニックス：ATK 3500

「いきなり攻撃力3500か……」

「気合いが入りますねえ」

「融合素材になった『サドネス勲功爵』の効果発動であります。カード効果で墓地に送られた時または除外された時、手札の魔法カードを1枚捨てて3枚ドロウするのであります」

す」

現れたのはドス黒い炎を燃やす不死鳥。毒々しい黒と赤と茶色を混ぜた炎に包まれた鳥は地面スレスレでゆっくりと羽ばたきながら滞空し、その後ろでグリーンフは手札を増強する。

モンスターの陰になっていて捨てられたカードはよく見えないが、フレイとジョーカーという類稀な身体を持つ精霊は捨てられたカードが2枚目の『悪念融合』だと気づいていた。ダブリを捨てた、といった所だろうか。

「カードを伏せて、小官はターンエンドであります。このエンドフェイズ、『アポカリプト・フェニックス』の効果発動であります！ 自分のターンが終わる度に、相手に2000のダメージを与えるのであります！」

「くうっ！」

「ぐおっ！」

フレイ&ジョーカー：LP 8000↓6000

黒い不死鳥から巨大な炎の玉が放たれ無数に枝分かれし、フレイとジョーカーに雨のように降り注ぐ。

先んじて発動しておいた防壁の発動条件は3000以上のダメージ、20000ポイントでは適用されない。初撃から手痛い攻撃を2人は受けた。

グリーフ：LP 8000

手札：3枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：アポカリプト・フェニックス（ATK 3500）

：伏せカード1枚

「いきなりブチ込んでくれるじゃねえか」

「今度はこちらの番です、まずはわたくしから。ドロロー！」

変則タッグデュエルでは通常のタッグフォースルールと同じ方法でデュエルが行われる。よってこのターンからドロローと攻撃が可能だ。

「魔法カード『帝王の深怨』を発動！ 手札の『怨邪帝ガイウス』を相手に開示し、デッキから『真帝王領域』を手札に加えます！」

「早速揃えて来たでありますか」

「わたくしはスケール4の『アンカモフライト』を、ペンデュラムスケールにセッティング！」

初手で配置されたのは隠居した老人のカード。そのままフレイの背後に立った青い柱の中を登り、4の数字を刻みながら上空に配置される。

『アンカモフライト』のペンデュラム効果、わたくしのエクストラデッキに『アンカモフライト』を除くカードが存在しない時、このカードを破壊して1枚ドロウします。そしてエクストラデッキに加わった『アンカモフライト』はペンデュラム召喚できない代わりに、同条件でそのまま特殊召喚できるのです」

『ホッホッホー！』

アンカモフライト：ATK 1800

アンカモフライト（特殊召喚・ペンデュラム・効果モンスター）

星5

光属性／魔法使い族

ATK 1800／DEF 0

【Pスケール：青4／赤4】

このカード名のP効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分のEXデッキのカードが、存在しない場合または「アンカモフライト」のみの場合に発動できる。

このカードを破壊する。

その後、自分はデッキから1枚ドローする。

#### 【モンスター効果】

このカードは通常召喚できない。

このカードがEXデッキに表側表示で存在し、「アンカモフライト」以外のカードが自分のEXデッキに存在しない場合のみ特殊召喚できる。

この方法による「アンカモフライト」の特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

(1)：モンスターゾーンの表側表示のこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。

「もう1枚、フィールド魔法『真帝王領域』を発動！ 1ターンに1度、手札の上級帝王のレベルを2個下げます！ これにより手札の『怨邪帝ガイウス』のレベルを8から6にします！ そしてそのまま『アンカモフライト』をリリースしてアドバンス召喚！」

『ゴオオオオオ！』

「そしてこの瞬間『アンカモフライト』は、自身の効果により除外されます！」

怨邪帝ガイウス：ATK 2800

ペンデュラムゾーンからエクストラデッキに、そしてフィールドから除外ゾーンへと目まぐるしく移動する老紳士。バトンタッチするように現れたのは邪悪な力が滾る黒い悪魔のような帝王、強力な除外効果を持つフレイの主力の内の1体である。

『『ガイウス』をアドバンス召喚した事で効果発動。『アポカリプト・フェニックス』を除外し、1000ポイントのダメージを与えます』

「ぐぬうっ！」

グリーンフ：LP 8000↓7000

「この瞬間、『アポカリプト・フェニックス』の効果発動！ エクストラデッキから次の『アポカリプト・フェニックス』を特殊召喚するであります！」

「フィールド魔法『真帝王領域』の効果！ こちらのフィールドにアドバンス召喚されたモンスターが存在する時、相手はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できません

ん！」

「何!？」

「バトル! 『ガイウス』でダイレクトアタック!」

「がはあああ!?!」

グリーフ：LP 7000↓4200

巨大な悪魔の拳が放たれる。次元を歪ませる程の闇をまとった鉄拳は軍人かぶれのようなプレイヤーを過たず直撃し、強烈なインパクトを以て吹き飛ばした。

ライフを半分近くにまで削ったフレイだが、しかし油断はせず慎重に手札を引き抜いてディスクに差し込む。

「魔法カード『帝国の金脈』を発動します。このターンにアドバンス召喚されたモンスターが効果の発動と攻撃に成功している場合、手札を1枚捨てる事で3枚ドロウします」

帝国の金脈（オリジナル）

【速攻魔法】



このカード名の効果は(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。  
 (1) : このターンにアドバンス召喚された守備力1000のモンスターが効果を発動しており、また戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、フィールドのそのモンスターを対象に発動する。

そのモンスターとはカード名の異なる手札を1枚捨てて3枚ドローする。

(2) : このカードを含めた墓地の「帝国の金脈」を3枚除外して発動できる。  
 デッキから2枚ドローする。

「わたくしはカードを1枚伏せて、ターンエンドです。ターンプレイヤーがジョーカーに移るのは貴方のターンの終了後、それまではエクストラデッキをロククさせて頂きませう」

フレイ&ジョーカー : LP 6000

手札 : 3枚 / 5枚

フィールド

: EXモンスターゾーン無し

: 怨邪帝ガイウス (ATK 2800)

：伏せカード一枚、真帝王領域（フィールド魔法）、精零隔禁（永続罨）

「少々油断があつたであります」

パンパン、と服についた土埃を払い落としながらグリーンが立ち上がった。

「しかしここからが本番であります、貴様らには邪神様の偉大なるお力を魂に刻みながら死んで貰うであります」

「寝言は寝てから言いなさい、グリーン」

「ならばその寝言で打ち負かせてやるであります、貴様のエンドフェイズに速攻魔法『悪女の涙』を発動！ エクストラデッキからカードを一枚墓地に送り、貴様のフィールドの魔法・罨カードを全てデッキに戻すであります！」

「なっ！」

『『アポカリプト・フェニックス』を墓地に送り、貴様の3枚のカードを根こそぎ駆除するでありますよ！』

「フレイ！」

「防げ、バアさん！」

「バアさん言うんじゃありません！ 永続罨『精零隔禁』はデッキから同じ名前のカードを墓地に送り、除去効果から身を守ります！」

「では残る2枚を戻すのみであります！」

紫色のカードを墓地ポケットに落とし、魔法カードから大量の濁流が噴き出す。

咄嗟に1枚のカードだけはバリアを展開して守ったものの、残りのカードは水底に沈みロックも伏せカードも全て消えてしまった。

「これでロックは解除されたであります。更に墓地の『アポカリプト・フェニックス』の効果により、エクストラデッキから3体目の『アポカリプト・フェニックス』を特殊召喚であります！」

『ギギヤアアアアアア！』

アポカリプト・フェニックス（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星9

炎属性／悪魔族

ATK 3500 / DEF 3500

元々のコントローラーが自分のカード名の異なる闇属性モンスター×2

(1) : このカードは手札に戻す効果を受けない。

(2) : このカードが墓地に送られた、または除外された時に発動できる。

EXデッキから「アポカリプト・フェニックス」1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターはこのターン攻撃できない。

(3)：自分のターン終了時に発動する。

相手LPに2000ダメージを与える。

再びフィールドに現れる黒い炎の不死鳥。フレイのフィールドのカードは大幅に減っており、一転して情勢はピンチと化していた。

アポカリプト・フェニックス：ATK 3500

「小官のターン、ドロー！」

そしてこれはフレイのエンドフェイズ、これからグリーフの攻撃が始まるのである。

「墓地の速攻魔法『悪女の涙』の効果発動であります。このカードと手札の闇属性モンスターを1枚除外する事で3枚ドローするのであります。小官は『サドネス勲功爵』を除外し3枚ドロー」

「『サドネス』が除外されたって事は……」

「除外された事で効果発動であります。手札の魔法カードを1枚捨てて3枚ドローであります」

サドネス勲功爵（効果モンスター）（オリジナル）

星 10

闇属性／悪魔族

ATK 4100 / DEF 0

このカード名の（1）の効果は1ターンに1度しか発動できない。

（1）：このカードが除外された、または効果によって墓地に送られた場合に発動できる。手札の魔法カードを1枚捨てて3枚ドローする。

（2）：自分フィールドの守備力0の闇属性モンスター1体を手札に戻して発動できる。手札・墓地のこのカードを特殊召喚する。

このターン、このカードとの戦闘で相手に与えるダメージは0となる。

悪女の涙（オリジナル）

【速攻魔法】

（1）：相手フィールドに魔法・罫が3枚以上存在する場合、EXデッキからカードを1枚墓地に送って発動する。

相手フィールドの魔法・罫カードを全てデッキに戻す。

(2)：墓地のこのカードと手札の闇属性モンスター1枚を除外して発動できる。  
デッキから3枚ドローする。

グリーフの墓地に『異次元からの埋葬』が捨てられ、更に手札が潤う。これで差し引き4枚の手札強化、手札は6枚に回復した事になる。

「小官は墓地の『マッド・ソロウラー』の効果を発動。相手フィールドに空いているカードゾーンが8ヶ所以上存在する場合、デッキの1番上のカードを墓地に送り、このカードを特殊召喚するであります」

マッド・ソロウラー：DEF 0

「っ、オレ達のフィールドはペンデュラムゾーンを含めれば10ヶ所も空きがある！」「ルールを逆手に取られましたね……！」

「そしてこれを手札に戻す事で、墓地の『サドネス』が復活するであります」  
『フウウ……』

「更に手札の『マッド・ソロウラー』を召喚」

『ギギギギ……』

サドネス勲功爵：ATK 4100

マッド・ソロウラー：ATK 3000

デツキトップのカード——『幻銃士』だった——が消滅し、フィールドに禍々しい色のロードローラー、そして頬のこけたみすぼらしい騎士が現れる。前者は錆び付いて口々に動かなさそうなエンジン音を、後者は今にも倒れそうな吐息を空間に溶かしながらの登場だ。

マッド・ソロウラー（効果モンスター）（オリジナル）

星2

闇属性／機械族

ATK 3000 / DEF 0

このカード名の（3）の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：このカードの攻撃力は3000より高い数値にならない。

（2）：このカードは召喚・特殊召喚されたターン、直接攻撃できない。

（3）：相手フィールドのカードゾーンが8カ所以上使用されていない場合、デツキの1

番上のカードを墓地に送る事で発動できる。

手札・墓地のこのカードを守備表示で特殊召喚する。

「このターン『マッド・ソロウラー』は直接攻撃できません。また『サドネス勲功爵』は戦闘ダメージを与えられないであります」

「……」

「故に小官は魔法カード『悪念融合』を発動であります！」

「3枚目か……！」

「場の通常召喚された『マッド・ソロウラー』と手札の『幻銃士』2体を融合！ 出でよ、

『血恨詐狐』！」

『グジャアアアアアアアア！』

血恨詐狐：ATK 3900

「攻撃力3900！」

「オレを超えたか！」

ビチャビチャと液体の滴る音が鳴る。獲物を喰らった時に嘔き出した血だ。



それを平然と踏み続け、前足と口元が真っ赤に染まった毒々しい毛並みの狐がそこにいた。PTAが見れば真っ先にクレームをつける魔獣である。

「バトルであります！ 『サドネス勲功爵』で『ガイウス』を攻撃！ ダメージは与えられずともモンスターは駆除できるのでありますよ！」

「ちよつと待った！ 貴方のターンのメインフェイズ終了時、手札の『天帝アイテール』の効果発動！ 墓地の『帝王の深怨』を除外し、このカードをアドバンス召喚します！」

「小官のターンにアドバンス召喚ですと!?!」

「『ガイウス』を2体分のリリース素材として、守備表示で現れなさい『アイテール』！」

「ハアツ！」

「そして効果発動！ デツキから『帝王』カードを2枚墓地に送り、攻撃力2400以上で守備力が10000のカードを特殊召喚です！ カモン、『ウィッチクラフト・ハイネ』！」

「フツ！」

天帝アイテール：DEF 1000

ウィッチクラフト・ハイネ：DEF 1000

グリーフの号令より早く、闇のオーラを漂わせる悪魔が虹色の光に消えゆく。光はそのまま神々しい輝きを放つ別の帝王に姿を書き換え、更に輝ける王はその手の中から別の光を放つと黒いレーザーローブを羽織った魔導士をこの次元に呼び寄せる。

フレイのデッキは帝ステータスを持つモンスターを数枚混ぜており、『ハイネ』もその内の1枚というワケだ。

「更に『ウィッチクラフト・ハイネ』の効果発動！ お互いのターンに1度、手札の魔法カードを1枚捨てる事で相手の表側表示のカードを1枚破壊できます！ 『帝国の金脈』を捨て、『アポカリプト・フェニックス』を破壊です！」

「ぬっ！ 攻撃力に惑わされなかったでありますか！」

「このターンの終わりにまた2000ダメージを与える効果が発動するのなら、そのモンスターの攻撃力は実質5500です。3900より高いと判断するのは当然でしょう？」

「『アポカリプト・フェニックス』は死んでもお前のEXデッキから転生して戻って来る。だが既に今のが3枚目、もう転生できねえ以上はそいつを狙っても問題無いしな」

「チッ！ 精霊の分際で小癩な、であります！」

天帝アイテール（効果モンスター）

星8

光属性／天使族

ATK 2800 / DEF 1000

このカードはアドバンス召喚したモンスター1体をリリースしてアドバンス召喚できる。

(1) : このカードがアドバンス召喚に成功した場合に発動できる。

手札・デッキから「帝王」魔法・罨カード2種類を墓地へ送り、

デッキから攻撃力2400以上で守備力1000のモンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに持ち主の手札に戻る。

(2) : このカードが手札にある場合、相手メインフェイズに自分の墓地の「帝王」魔法・罨カード1枚を除外して発動できる。

このカードをアドバンス召喚する。

ウィッチクラフト・ハイネ (効果モンスター)

星7

闇属性／魔法使い族

ATK 2400 / DEF 1000

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの他の魔法使い族モンスターは相手の効果の対象にならない。

(2)：手札から魔法カード1枚を捨て、相手フィールドの表側表示のカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

このモンスターは先のサイドチェンジで入れ替えたカードの1枚だ。公式大会でサイドデッキは本来なら15枚、だがここは言わば野良デュエルの場合である以上、デッキを何枚入れ替えても問題無い。フレイは敵のデッキの傾向をこれまで黎が戦って来た相手から把握し、的確にカードを交換したのである。

「ならば今度こそバトルであります！ 『サドネス』、その邪魔な魔女を処刑せよ！」

『ゲヘエ！』

「ありがとうございませす、『ハイネ』……！」

病的に細い騎士が剣を一振り、見えない閃光が走る。次の瞬間、黒服の魔女はその首を刎ね飛ばされ派手な血飛沫と共に絶命させられたのだった。

攻撃は止まらない。嘆きの騎士が跳躍して元の場に戻ると、今度は血の滴る巨大妖狐が大きな口を開けて光の帝王の上半身を噛み砕く。

「そして『血恨詐狐』で『アイテール』を攻撃であります！ 消えよ、疎ましい光め！」  
「くううっ！」

「この瞬間、モンスター効果発動であります！ 相手モンスターを破壊した時、そのモンスター元々の攻撃力1000につき1枚、デッキの上からカードを裏側表示で除外！ 次のターン、ドロウする代わりにそのカードを手札に加える事ができるのであります！」

血恨詐狐けつこんざぎつね（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星10

水属性／獣族

ATK 3900 / DEF 3600

通常召喚された闇属性モンスター+それとは種族の異なる闇属性モンスター×2

(1) : EXモンスターゾーンはこのカードは相手の効果の対象にならない。

(2) : このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時に発動できる。

破壊した相手モンスターの元々の攻撃力1000につき1枚、自分のデッキの上から

カードをめくってお互いに確認し、裏側表示で除外する。

この効果で除外したカードは次の自分のターン、通常ドロワーの代わりにお互いに確認して手札に加える事ができる。

(3)：このカードを墓地から除外し、相手フィールドのEXデッキから特殊召喚されたモンスター1体を対象に発動できる。

その効果を無効にして破壊する。

この効果は相手ターンでも発動できる。

相手ターンで発動した場合、次の自分のドロワーフェイズにドロワーしたカードは全て除外され、スタンバイフェイズに除外されているこのカードを特殊召喚する。

グリーフのデッキの上からカードが2枚、光となって消える。消えたカードは3人のデュエルデスクにデータとして表示され、そのカード名と効果を晒した。

除外されたカードは『闇次元の解放』と『邪神の極風』。前者は除外された闇属性モンスターを帰還させる永続罫、後者は手札の魔法・罫カード1枚を除外し相手のフィールド・手札・墓地から魔法・罫カードを全て除外する魔法カードだとフレイとジョーカーは確認する。

「小官はカードを2枚伏せ、永続魔法『悪徳の監視』を発動。発動時の処理として除外さ

れている『アポカリプト・フェニックス』を墓地に戻し、これでターンエンドであります」

グリーフ：LP 4200

手札：0枚

フィールド

：血恨詐狐（ATK 3900）（右のEXモンスターゾーンに配置）

：サドネス勲功爵（ATK 4100）

：伏せカード2枚、悪徳の監視（永続魔法）

「オレのターンだ、ドロー！」

「この瞬間『悪徳の監視』の効果発動であります！ ドローしたカードを確認し、魔法・罠だった場合、互いのプレイヤーはこのターン1度しか魔法・罠を発動できないであります！」

「……引いたカードは『フーコーの魔砲石』だ」

「チツ、モンスターでありますか。モンスターカードだった場合、相手はデッキから同じ名前のカードを手札に加える事ができます。ただし小官はその攻撃力分のラ

ライフを回復するであります」

「良いだろう、デッキから2枚目の『フーコーの魔砲石』手札に加えるぜ」

「攻撃力は2200、その数値分こちらのライフが回復であります」

グリーフ：LP 4200↓6400

悪徳の監視（オリジナル）

【永続魔法】

(1)：このカードの発動時の効果処理として、除外されているカードを5枚まで選択して持ち主の墓地に戻す。

(2)：ドローフェイズに相手がドローしたカードを確認して発動する。

そのカードの種類によって以下の効果を適用する。

2ターン続けて同じ種類の効果が適用される場合、それを無効にしてこのカードを除外する。

●モンスター：相手はデッキからそのカードと同名カードを手札に加える事ができ、自分はその攻撃力分LPを回復する。

●魔法・罫：このターン、お互いに魔法・罫を1度しか発動できない。



(3) : 自分のターンのドローフエイズ開始時に、フィールドのこのカード(表側表示)を手札に戻して発動する。

通常ドロローを2回行う。

ピーピングを行いつつライフを回復するグリーン。折角フレイの与えたダメージも8割がた癒されてしまいジョーカー達のライフを上回られた。

ここで何とかしなければジョーカー達に未来は無い、1ターン目から正念場となったジョーカーは武者震いと共に不敵な笑みを浮かべる。

「マジック発動、『天使の施し』! デッキから3枚カードをドロローし、その後2枚を捨てる! 捨てるのは『ドラコニアの海竜騎兵』と『スキルサクセサー』!

続けて『苦渋の決断』を発動! デッキからレベル4以下の通常モンスターを1枚墓地に送り、同じ名前のモンスターを手札に加える! オレが選択するのは『ライブラの魔法秤』だ!」

これで準備は整った。ジョーカーのイメージする陣形を以て敵を突き崩すべく、日焼けした光の騎士は手札を2枚右手に持たせて開示した。

「オレはスケール2の『フォーコーの魔砲石』と、スケール7の『ランスフォリンクス』で、ペンデュラムスケールをセッティング!」

ジョーカーの背後に並ぶ2本の光の柱。そこを大砲と振り子を合わせた機械と、鋭い嘴を持つ翼竜が登り、上空で地上を見下ろす。

先のフレイと異なり、今度は正式なペンデュラムの構えがされた。

「これでレベル3から6のモンスターが同時に召喚可能！ 天に弧を描く光の共鳴よ、闇を従え魂を震わせよ！」

### ☆3 || ☆6

鳴り響くは青き輝きのペンデュラム。

光のアークを描き、朋友の魂に働きかける輝きが、世界に響く。

「ペンデュラム召喚！ 出現せよ、オレのモンスター達！」

レベル3、チューナーモンスター『ハロハロ』！

レベル4、チューナーモンスター『ライブラの魔法秤』！

レベル4、『聖鳥クレイン』！

レベル5、『フーコーの魔砲石』！

レベル6、『ファイヤーオパールヘッド』！

『ハロロ〜！』

『びびー!』

『キョオー!』

『ギョーン!』

『ガアアアッ!』

「『クレイン』を特殊召喚した時、オレは1枚ドロする!」

ハロハロ：DEF 600

ライブラの魔法秤：DEF 1000

聖鳥クレイン：DEF 100

フーコーの魔砲石：ATK 2200

ファイヤーオパールヘッド：ATK 2500

南瓜のお化け、魔法の天秤、聖なる白鳥、大砲の振り子、燃える恐竜が光の軍勢となつて場に出現する。

ここから更に展開し、陣形を整える。未知数過ぎるこの敵に猶予を与えるワケにはいかない。

「レベル6の『ファイヤーオパールヘッド』にレベル4の『ライブラの魔法秤』をチュウ

ニング!

続けてレベル5の『フーコーの魔砲石』にレベル3の『ハロハロ』をチューニング!

☆6+☆4||☆10

☆5+☆3||☆8

「シンクロ召喚! 勝鬨を上げろ、『フルール・ド・バロネス』!」

『ハアツ!』

「吹雪け、『アダマシア・ライズ魔救の奇跡—ドラゴイト』!」

『ギガアツ!』

フルール・ド・バロネス: ATK 3000

魔救の奇跡—ドラゴイト: ATK 3000

召喚されたのは青い鉱石の龍と白百合を飾った女騎士、それぞれが光の召喚柱の中から飛び出しジョーカー達の前に陣取る。先の黎とのデュエルでも猛威を振るった強力なシンクロモンスター達の登場である。

「『バロネス』の効果！ 1ターンに1度、フィールドのカード1枚を破壊する！ オレは『サドネス』を破壊する！」

「ぬっ！」

「お前の手札はゼロ！ 交換するための手札が無ければ、手札を補強できないだろ！」

「しかし小官のフィールドにはまだ攻撃力3900のモンスターがいるのであります、貴様のモンスターでは倒せないであります！」

「まだだ！ オレは『ドラゴラド』を召喚！」

『グウツ！』

「召喚成功時、墓地から攻撃力1000以下の通常モンスターを呼び戻す！ 蘇れ、2体

目の『ライブラの魔法秤』！」

『キュウ〜ン！』

ドラゴラド：ATK 1300

ライブラの魔法秤：DEF 1000

「レベル4の『聖鳥クレイン』と『ドラゴラド』に、レベル4の『ライブラの魔法秤』をチューニング！」

☆4＋☆4＋☆4＝☆12

「シンクロ召喚！ 現れろ、『超重天神マスラーO』！」

『ヌウン！』

超重天神マスラーO：DEF 4000

召喚は終わらない。ジョーカーは更に白い機械巨人を呼び出し戦線を固める。

守備力4000を攻撃力の代わりにでき、手札も補充できるこのカードなら3体目のシンクロモンスターとしては不足が無い。

「バトル！ オレは『マスラーO』で『血恨詐狐』を攻撃！ このカードは守備力の数値を使い守備表示で攻撃できる！  
// 叢雲嵐祇斬りむらくもおろしぎ！！」

「トラップ発動、『砕け行く刃』！ 攻撃モンスターの破壊して攻撃力の10倍ライフを失わせるであります！」

「10倍だと!?!」

「マズい、ダメージじゃないから『精零隔禁』では防げないぞー！」

「これぞ邪神様の崇高なる御力！ 卑しい精霊よ、消えるであります！」

ラストの使ったカードだ、と黎は顔を歪めた。

あの時はユニオンモンスターを盾にダメージを凌いだが、今度は何も装備していない。対処する方法は1つだけである。

『ドラガイト』の効果発動！ 1ターンに1度、相手の魔法・罠の発動を無効にして破壊する！ “アンメサイア・キャスト”！」

「よし、これで攻撃は通ります！」

「ぬっ！」

グリーンフ：LP 6400 ↓ 6300

地に濡れた狐が討伐されて真つ二つになり、小規模な爆発がグリーンフを襲う。ダメージは軽微だが、これでモンスターはいなくなつた。

「続けてオレは『ドラガイト』でダイレクトアタック！」

「永続罠『有刺鉄線拘束術』を発動！ 『ドラガイト』の効果は無効になり、攻撃力も5000下がるのでありますよ！」

「させねえ！ 『バロネス』の効果発動！ このカードが表側表示で存在する時に1度だ

け相手の効果の発動を無効にして破壊できる！」

「チェーンするであります、墓地の『血恨詐狐』の効果発動！ 『フルール・ド・バロネス』の効果が無効にして破壊するであります！」

「何っ！」

「ハツハツハア！ 手札が無いなら、何でありましたかなあ？ 先刻貴様が言った事、

うっかり忘れてしまったであります」

「テメエー！」

「意趣返しですか……！」

しかし追撃は通らない。青い石のドラゴンは鉄の棘縄で縛り付けられ、白百合の騎士は狐の怨霊によって彼岸に取り込まれ、それぞれが攻撃できなくされる。ジョーカーの攻撃できるモンスターはこれいなくなつた。

このワイヤートラップはエンヴィーの使っていたカードだ。過去に使われたカードにある種の懐かしさと、「間違いなく敵は本気だ」とそれ以上の危機感を黎は覚える。

砕け行く刃（オリジナル）

【通常罫】

相手の攻撃宣言時に発動できる。



攻撃してきた相手モンスターを破壊し、その攻撃力の10倍分相手のライフを減らす。

このカードは発動後、墓地には送られずにゲームから除外される。

このカードが除外されたターンのエンドフェイズ時、自分のデッキから異なる名前の罠カードを2枚選択して自分の場に裏側表示でセットする事ができる。

有刺鉄線拘束術（オリジナル）

【永続罠】

フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターは攻撃する事ができず、効果は無効化され、攻撃力は5000ポイントダウンする。

選択したモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

「……『マスラーO』の効果。相手が魔法罠を発動した時、デッキから手札が3枚になるようドロウする。リバースカードを3枚伏せ、ターンエンドだ」

「無様でありますなあ、光の宝玉を守る長と言えど所詮はこの程度でありますよ。邪神様に歯向かう程度の頭脳では理解できないでありますよ」

「オレは『フーコー』のペンデュラム効果発動。セッティングされたターンの終わりに、フィールドの表側表示の魔法・罫を1枚破壊する。オレは『有刺鉄線拘束術』を破壊。これで『ドラゴイト』は再び効果が使えるようになる」

「ぬ、小癪！」

フレイ&ジョーカー：LP 6000

手札：1枚／0枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：超重天神マスター0 (DEF 4000)、魔救の奇跡—ドラゴイト (ATK 3000)

：ランスフォリンクス (7) Ⅱフーコーの魔砲石 (2)

：伏せカード3枚、精零隔禁 (永続罫)

ターンの再び回る。

フレイのカードは壊滅し、ジョーカーのカードで固めた盤面で、グリーフの手番に移る。その恐ろしさが何を意味するか、解らない者はこの場にはいないだろう。

「小官のターンであります。『血恨詐狐』けっこんざぎつねを相手ターン中に除外した場合、通常ドロシたカードは除外されるであります。しかし……」

「前の貴方のターン、除外した2枚のカードをドロローの代わりに手札に加える事ができる。ドロローしたカードでは無いので除外されない、というワケですか」

「然り然り。というワケで除外されていた2枚のカードが手札に加わるであります。更に除外された『血恨詐狐』はここでフィールドに復活するであります」

『ゴオオオオオン!』

血恨詐狐：ATK 3900

地面から瘴気が渦を巻くように噴き出し、その中から倒した血だらけの巨狐が飛び出して復活する。これで再び手札を補充しつつEXデッキから召喚されたモンスターを破壊するコンボが使えるというワケだ。先程100だけとはいえダメージを受けたのも、墓地から除外して破壊する効果と、この再召喚する効果を狙ったの事か。

「今度こそ終わりにしてやるであります」

「やってみろ、オレ達のフィールドには守備力4000の『マスラーO』がいる!」  
「根拠の無い空っぽの自尊心なぞクソの役にも立たない事を教えてやるであります。」

魔法カード『邪神の極風』を発動！ 手札の『閻次元の解放』を除外し、相手の場・手札・墓地に存在する全ての魔法・罫カードを裏側で除外するであります！」

「チツ、ここがマストカウンターか！ オレは『ドラガイト』の効果により、その発動を無効にする！」

邪神の極風（オリジナル）

【通常魔法】

（１）：手札の魔法・罫カードを１枚除外して発動する。

相手の手札、フィールド、墓地に存在する全ての魔法・罫カードを裏側表示で除外する。

（２）：このカードが除外された時、デッキから１枚ドローする。

グリーフの発動したカードは極風、即ち高緯度の地域で吹く東風を呼び出し広範囲の除去を繰り出すカードだった。通せば確実に負けるため、ジョーカーは石の青龍が凍える風を起こしてこれに対抗する。黒い風と青い風はぶつかり合い、瓦礫を砕く程の風圧を以て相殺された。

「これでテメエの手札はゼロ！ もう打つ手はネエだろ！」

「攻撃力3900であってもこちらのライフを一撃でゼロにはできません、次のターンわたくしがモンスターを追加で召喚すれば決着です！」

グリーフの手札はゼロ、フィールドには今は効果を発動しない永続魔法とモンスターが1体いるのみ。

この状況で敗北する方が難しいだろう。

「ナメてるでありますなあ、精霊如きが」

「何？」

だが、こと邪神に至っては真逆だ。

その難しいという状況は、逆説突破できれば一気に敵を討てる事でもある。そして圧倒的なカードパワーを持つグリーフ達にとってそれは余りにも易しい条件である。

「小官は墓地の『悪念融合』の効果を発動するであります！」

「ここですか!?!」

「このカードが3枚墓地にある時その全て、及び墓地に眠る同名カード3枚2組、即ち合計9枚のカードを除外する事で、デッキからこのカードを手札に加えるであります！」

これにより、墓地の『幻銃士』と『アポカリプト・フェニックス』全てを除外するであります！」

「くつ、『アポカリプト・フェニックス』はこのための布石だったのか！」

「フレイ、ジョーカー、来るぞ！」

「分かつている！」

グリーフの墓地からカードが異次元へと波打って一気に消える代わりに、彼のディスプレイが1枚のカードを吐き出し手札に加えさせた。

新しく増え、フレイとジョーカーに開示されたそのカードの名は——『邪道統合』。異世界からの転生者を破滅させた、必殺の邪悪な『超融合』である。

### 悪念融合（オリジナル）

#### 【通常魔法】

（1）：自分の手札・フィールドのモンスターを融合素材とし、融合モンスター1体を融合召喚する。

自分フィールドにモンスターが存在しない場合、デッキのモンスターを1体まで融合素材にする事もできる。

（2）：自分の墓地からこのカードを含む「悪念融合」を3枚除外して発動できる。

自分の墓地に存在する元々のカード名が同じカード2種類を3枚ずつ除外する。

その後、デッキから「邪道統合」を1枚手札に加える。

邪道統合（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：自分墓地の魔法カードを2枚除外して発動する。

表側表示で除外されている自分モンスター1体を裏側表示の除外状態にし、相手フィールドのモンスターを任意の枚数だけ裏側表示で除外する事で、それらのモンスターを素材扱いとして融合召喚を行う。

「『マスラーO』の効果！ 相手が魔法・罫を発動した事でオレは3枚をドロロー！」

「無駄にして無意味にして無価値！ これから死ぬ貴様らに手札が3枚だろうと30枚だろうと何も変わらぬであります！ 魔法カード『邪道統合』を発動であります！ 発動コストとして、墓地から『邪神の極風』と『異次元からの埋葬』を除外！」

グリーンフが最後の手札を持ち直し、それをディスクに差し込んで発動するとカードが読み込まれ、フィールドに黒い二筋の光が交差するように呑み込む禍々しい色合いと霧囲気の『融合』が展開されていく。

そしてそこから発生した暴風にも匹敵する吸引に、白い機械巨人と青い石龍は呆気無く吸い込まれていった。

「そして『サドネス勲功爵』を表から裏の除外に変更し、貴様のフィールドの『超重天神





とは別に牙を剥く口が存在し、両手の爪もまるで大振りのナイフか斧のように鋭く分厚い。

歴戦の英傑である彼らでも、これに組み付かれたらアウトだろう。

「このモンスターが融合召喚されている限り、効果の対象にならず相手は融合モンスターを召喚できないであります。つまりその騎士ごっこ、貴様自身の召喚は不可能であります」

「騎士ごっこたあ言ってくれるじゃねえか」

「攻撃力は3000、2体の攻撃を受ければ6900のダメージで我々は終わりですか……!」

「アマいであります! 『ウエンカムイ』の攻撃力は除外されているカード1枚につき1000ポイントアップするでありますよ!」

「何?」

「何ですって!」

【ジョーカーの除外されているカード】

超重天神マスラー○

魔救の奇跡—ドラガイト

【フレイの除外されているカード】

帝王の深怨

アンカモフライト

【グリーフの除外されているカード】

サドネス勲功爵（裏側）

悪女の涙

悪念融合

悪念融合

悪念融合

アポカリプト・フェニックス

アポカリプト・フェニックス

アポカリプト・フェニックス

幻銃士

幻銃士

幻銃士

闇次元の解放

邪神の極風

## 異次元からの埋葬

「除外されているカードは合計18枚！ よって攻撃力は18000アップ！ そして『邪神の極風』が除外された時、カードを1枚ドロウするであります！」

「何と法外な……！」

悪四牙のウエンカムイ：ATK 3000↓21000

メギリ、と筋肉の軋む音が鳴る。初期の7倍になったこのパワーは、このモンスター自身にも最早制御できていないようだ。

これこそがグリーフの切り札。除外するカードを駆使し、圧倒的な攻撃力を得る。昨今では除外をコストにするカードも多いため圧倒的な攻撃力を得るのも難しくくない。仮に相手が除外をしない「ティアラメンツ」等であってもデッキを16枚も削らせたり『邪道統合』で並べられた5体のモンスターを除外したりする事で極端なパワーアップも楽に可能なのである。

「まだであります。小官は魔法カード『寡婦やもめから搾取された涙』を発動。このカードは互いの墓地のモンスターを除外し、同名モンスター3体を融合召喚するであります！」

「こつちの墓地から除外して素材にするだど！」

「しかも一気に3体の融合召喚!？」

「小官の墓地から『マッド・ソロウラー』を、貴様らの墓地から『フルール・ド・バロネス』を除外し、融合！ 現れよ、3体の『デイストレストランク・ダムセル』！」

『ア、アアアアアアアアア！』

デイストレストランク・ダムセル：ATK 2000

デイストレストランク・ダムセル：ATK 2000

デイストレストランク・ダムセル：ATK 2000

悪四牙のウエンカムイ：ATK 21000↓23000

召喚されたのはキャタピラつきの台車に括り付けられた女性の亡骸。由来は恐らく  
ヒロインピンチ  
 『ヒロピン』と同じ意味を持つ『DDistress in Damse』だろう。死してなお戦車の如く兵器  
 に使われる様は、ピンチどころか破滅と言うべきかも知れないが。

寡婦から搾取された涙（オリジナル）

【速攻魔法】

(1) : お互いの墓地からモンスター1体ずつを除外して融合素材とし、融合モンスター1体を融合召喚する。

その後、融合召喚扱いで同名モンスターをEXデッキから2体特殊召喚する。

(2) : (1) の効果で3体特殊召喚できない場合、その特殊召喚されたモンスターは裏側表示で除外され、除外されたカードの枚数×1000ダメージを受ける。

『デイストレストランク・ダムセル』の効果発動であります。自分の墓地から魔法・罫を任意の枚数除外し、相手フィールドの魔法・罫カードを同じ枚数除外するであります。小官は墓地の『葬送<sup>そうそうふいつ</sup>討逸』『邪道統合』『砕け行く刃』『有刺鉄線拘束術』を除外し、貴様のフィールドの伏せカード3枚と、その邪魔な永續罫を全て除外してやるであります！

「永續罫『精零隔禁』は墓地から同じ名前のカードを除外しても自身を守る事ができません！」

「オレもトラップ発動、『ジョーカーズ・ワイルド』！ デッキから『ジョーカーズ・ストレート』を墓地に送る事で、その効果を得る！ 現れろ、絵札の三銃士達！」

ジョーカーズ・ワイルド

## 【通常罫】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分・相手のメインフェイズ及びバトルフェイズに、デッキから「クイーンズ・ナイト」「ジャックス・ナイト」「キングス・ナイト」のカード名が全て記された魔法カード1枚を墓地へ送って発動できる。

この効果は、その魔法カード発動時の効果と同じになる。

(2)：自分・相手のエンドフェイズに、自分の墓地の戦士族・光属性モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを手札に加える。

## ジョーカーズ・ストレート

## 【通常魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分の手札を1枚選んで捨て、デッキから「クイーンズ・ナイト」1体を特殊召喚し、デッキから「キングス・ナイト」「ジャックス・ナイト」の内1体を手札に加える。

その後、モンスター1体を召喚できる。

このターン、自分は戦士族・光属性モンスターしかEXデッキから特殊召喚できない。

(2) : 自分・相手のエンドフェイズに、自分の墓地の戦士族・光属性モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを手札に加える。

クイーンズ・ナイト : DEF 1600

キングス・ナイト : DEF 1400

ジャックス・ナイト : DEF 1000

鉄の台車に乗せられた女の亡骸、その内の1体が黒い雷を放ち2人の魔法・罠カードを撃ち抜く。

咄嗟に1枚は守り、もう1枚をチェインする事で絵札の三銃士がフィールドに並び立つが、伏せられていたままの『連成する振動』『ガード・ブロック』を含め3枚のフィールドのカード、そして墓地から5枚の魔法・罠が除外となる。何とかフィールドは保たれたが、これで『ウエンカムイ』は更に強化されてしまった。

表側守備表示の召喚が可能、というルールがあるのがせめてもの幸いだらうか。

悪四牙のウエンカムイ : ATK 23000 ↓ 31000

グリーフのフィールドのモンスターは5体、ジョーカーとフレイのモンスターは3体。

ライフは6000も残っているが、敵側には攻撃力が3万以上の怪物がいる。あれを防がねば首の皮すら残らない。

「バトル！ 小官は3体の『ダムセル』で壁モンスターを攻撃！ このカードは貫通効果を持つであります！」

「何!? ぐおおっ！」

「くっとううう！」

『『キイアアアアアアアアアアアアアアアアア！』』』

戦車に組み込まれた女の亡骸が悲鳴をあげ、黒い雷を放つ。

邪悪な意志によって無理矢理動かされた女達の雷鳴は、絵札の三銃士を残らず焼き払った。

フレイ&ジョーカー：LP 6000↓5600↓5000↓4000

「これで最後であります！ 我が力の結晶『ウエンカムイ』よ、あの無様な精霊共を食い



殺せ！ // 鮮血のカリストマーダー！！」

「させません！ 墓地の『真源の帝王』の効果発動！ 墓地の『帝王の轟殺』を除外し、このカードをモンスター扱いにして特殊召喚します！」

真源の帝王：DEF 2400

悪四牙のウエンカムイ：ATK 31000 ↓ 32000

首を噛み千切ろうと迫る巨大な牙と爪。これを受けるわけにはいかないと、フレイは墓地から光のヴェールに包まれた帝王の像を産み出して盾にする。一瞬で食い千切られてしまったが、代わりに2人は無事だった。

真源の帝王

【永続罫】

「真源の帝王」の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：1ターンに1度、自分の墓地の「帝王」魔法・罫カード2枚を対象として発動できる。

そのカードをデッキに加えてシャッフルする。

その後、自分はデッキから1枚ドローする。

(2)このカードが墓地に存在する場合、このカード以外の自分の墓地の「帝王」魔法・罨カード1枚を除外して発動できる。

このカードは通常モンスター（天使族・光・星5・攻1000/守2400）となり、モンスターゾーンに守備表示で特殊召喚する（罨カードとして扱わない）。

「悪足掻きを、『アイテール』で墓地に送ったカードでありますか」

「返しのターンに捲切り返されるられるのは分かっていますので、防御札は仕込んでおくものです」  
白く輝く帝王の像は粉々にされたが、フレイ達には掠り傷一つ無い。

だが一方のグリーンにも、まだ攻撃は残っていた。

「ならば『血恨詐狐』でダイレクトアタックであります!」

「ジョーカー! がはああっ!」

「フレ、ぐおおおおおっ!」

フレイ&ジョーカー：LP 4000↓100

最後の攻撃を前にフレイは、咄嗟にジョーカーを庇って血の滴る妖狐の攻撃を真正面

から受け止める。

だが妖狐は突進から嘯み付きに変更してフレイの胴に牙を突き立てると、更に尾を伸ばしてジョーカーの体を貫いた。

「ガハッ！」

「ぐ、が……！」

「無様なり、庇ったつもりが何の意味も無いとは」

素早く精霊の魔力を防御に回したお陰で致命傷は避けられたが、手痛い重傷となったのは間違いない。

これでフィールドのモンスターも魔法も罫もゼロ、手札もゼロ、墓地のリソースも枯れて『真源の帝王』も使えず、壊滅状態にまで追い込まれてしまった。

腹と口からドクドクと流れる血を抑えつつ、2人は何とか立ち上がりディスクを構築直す。

『ダムセル』の効果。戦闘ダメージを与えた次の小官の通常ドロワーは2倍になるであります」

「ガ……、ぐっ……。2枚ドロワー、と……いえ、まさか……！」

「察したようでありますなあ？　そう、『ダムセル』はこのターン3回ダメージを与えたであります」

「ぎ、ぐ……！！ 2の3乗で8枚ドロカよ……！！ ガフッ！」

「然り。そしてこのエンドフェイズ、除外された『砕け行く刃』の効果発動。デッキから名前の違う罠カードを2枚セットするであります」

グリーフのデッキからカードが2枚排出され、それがディスクに裏向きで置かれる。同時にフレイとジョーカーのディスクにそのカードの名前とテキストが確認できるようデータが転送された。

暗雲の接收（オリジナル）（改訂版）

【通常罠】

（1）：魔法・罠・モンスター効果の発動、モンスターの召喚・特殊召喚・反転召喚を無効にして破壊し、ゲームから除外する。

その後、相手LPに1000ダメージを与える。

このカードの発動に対し、カウンター罠を発動する事はできない。

アブソプシヨンドロー（オリジナル）（改訂版）

【通常罠】

（1）：相手の直接攻撃宣言時に発動できる。

その攻撃で受けるダメージを無効にし、攻撃モンスターの元々の攻撃力700につき1枚ドロースする。

伏せられたカードは万能無効のカード、そして直接攻撃を無効にしてドロースするカード。残りライフ100では除去は必須だが、その除去カード自体にチェーンされてしまえばジ・エンド。

しかもグリーンフはピーピング用のカードを場に出し、魔法・罠をドロースれば行動がロックされる。

これらに加えて5体のモンスターが並ばれては、降参しても最早誰も文句を言うまい。

「小官に手傷を負わせた褒美に、『ウエンカムイ』の効果を覚えておくであります。こいつが倒された時、除外された小官のカードが全て手札に戻るであります」

「何、ですって……!?!」

「クソが、それじゃあ『幻銃士』を戻されたら一巻の終わりだ……!」

悪四牙あくしぎのウエンカムイ（融合・効果モンスター）（オリジナル）

## 闇属性／獣族

ATK 3000／DEF 5000

悪魔族モンスター1体以上+相手フィールドのEXデッキから特殊召喚されたモンスターを含むモンスター2体以上

(1)：EXモンスターゾーンのこのカードの攻撃力は除外状態のカードの枚数×1000アツプする。

(2)：融合召喚されているこのカードはフィールドに表側表示で存在する限り相手の効果の対象にならず、相手は融合モンスターを特殊召喚できない。

(3)：フィールドのこのカードが相手によつて墓地に送られた、または除外された時に発動する。

除外されている自分のカードを全て手札に加える。

このデュエル中、自分の手札が7枚以上であってもエンドフェイズに手札を捨てる処理を行わない。

デイストレストランク・ダムセル（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星6

闇属性／機械族

ATK 2000 / DEF 1000

機械族モンスター1体+効果モンスター1体

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか発動できない。

(1) : 自分の墓地から魔法・罫カードを任意の枚数除外して発動できる。

同じ枚数だけ相手フィールドの魔法・罫カードを除外する。

(2) : このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える。

(3) : このカードが戦闘ダメージを与えた場合に発動できる。

次の自分の通常ドロローの枚数を2倍にする。

「小官はこれでターンエンド。サレンダーは許さぬ、小官達に、否、邪神様に齒向かった愚かさを無限の闇の中で永遠に後悔するが良いであります」

グリーフ : LP 6300

手札 : 0 枚

フィールド

: 悪四牙のウエンカムイ (ATK 32000) (左のEXモンスターゾーンに配置)

・血恨詐狐（ATK 3900）、デイストレスタンク・ダムセル（ATK 2000）  
×3

・伏せカード2枚（『暗雲の接收』『アブソプシヨンドロー』、悪徳の監視（永続魔法）

状況を整理しよう。

フレイとジョーカーのライフは残り100、フィールドには効果を持たないペンデュラムカードが2枚。墓地で発動できるカードは『スキルサクセサー』。そして相手の場には発動と召喚を無効にして1000ダメージを与えるカードと、ダイレクトアタックを防ぐカード。更に3万を超える攻撃力のモンスターまでいる。

「はあ、はあ……、わたくしのターンです」

「バアさん、勝てるか……?」

「すうー……ふうー……。……勝ちますよ、勝たなくてはなりません。後バアさん言うのやめなさい、女性に年齢の事についてあれこれ言うのは失礼でしょう」

「フン……、グブツッ！ クソ、減らず口叩いても痛いモンは痛いなあ」

「でしようね、グ、ウ……!」

胴体に走る痛みを堪えながらデッキに手を伸ばすフレイ。

手札を見る。速攻魔法『帝王の烈旋』、相手モンスターをリリースするカード。強力な



除去効果だが、『暗雲の接收』がある以上は自殺にしなければならない。

ジョーカーが手札コストで捨てたカード、そして自分の手札のカード、ドローして手札に加わる正体不明のカード……。現時点で使えるカードは3枚か4枚だろう。

ならば、恐らくこれがラストターン。全ては、この1枚次第だ。

「行きますよ、わたくしのターン……。ドロー！」

「永続魔法『悪徳の監視』の効果！ ドローしたカードを開示せよ！」

「わたくしの引いたカードは……。これです！」

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 93 : 虚無

ポーラ&ルイン : LP 8000

手札 : 4枚 / 5枚

フィールド

: モンスター無し

: 精零隔禁 (永続畏)

ヴァニテイ : LP 8000

手札 : 4枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・畏無し

「初撃を防いだ程度で調子に乗るなです、二の矢を以て殺せば良いだけでございます」  
「……別に気を緩めてはいない」

「まだそつちのターン。早く進めて」

「ポーラ、ルイン、気を付けろまだ来るぞ！」

時間は少々巻き戻りヴァニティと対峙しているポーラ、そしてルインのデュエル。

28000という大ダメージは凄いだが、まだまだ相手はやる気のようなだ。

「下名はチューナーモンスター『お手盛りのデビルキャスト』を召喚でございます」  
『ギギギギ！』

お手盛りのデビルキャスト：ATK 0

「このモンスターは手札の魔法カードをレベル4モンスターとして扱い、シンクロ召喚  
できるのでございます」

「……手札の魔法カードと!?!」

「下名は手札の『チェーン・ペナルティ』と『墓穴の指名者』に、レベル2の『デビルキャスト』チューニングでございます」

「いきなりレベル10の組み合わせ……!」

ヴァニテイの手札が2枚消失し、魔法使いのローブを着た醜い小悪魔もまた光となって消える。

全ての光は何処かへと失せ、やがて悪臭を放つ霧が立ち込め始めた。

☆2＋☆4＋☆4＝☆10

「シンクロ召喚、出撃でございます『ヘドロ・ピーファウル』！」  
『キケエエエエーン！』

ヘドロ・ピーファウル：ATK 3100

悪臭は鼻を劈く程に強さを増し、その霧の中から一羽の雄の孔雀が現れた時に最高潮に達する。全身が文字通りのヘドロにまみれており、雌にアピールするための美しい羽は台無しになっている。

幸いにも召喚演出の一環だったらしく臭いは消えたが、もう10秒も続いていたら吐き気を催していたに違いない。

『ヘドロ・ピーファウル』を特殊召喚した事で効果発動、今の相手の手札の枚数と下名

の手札の枚数の差だけドロウするのでございます」

「……成程、これのために3枚も手札を使って召喚したんだ」

「これにより破滅の女神、貴様の手札は5枚、下名は1枚となりました。よって4枚カードをドロウ致します。ただしこのドロウを行った場合、ターン終了時まで下名はセットを行えず効果を発動できるのは残り1枚となるのでございます」

お手盛りのデビルキャスト（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星2

闇属性／獣族

ATK 0 / DEF 100

（1）：このカードが通常召喚に成功した自分のメインフェイズに発動できる。

手札の魔法カードを任意の枚数選択し、そのカードをレベル4のモンスターとして扱う。

その後、フィールドのこのカードと手札の魔法カードをS素材としてS召喚を行う。

この効果でS素材になる魔法カードは種族・属性を持たないモンスターとして扱い、このターン同名カードの効果は発動できない。

（2）：相手によって自分が効果ダメージを受ける場合、このカードを手札から捨てて発

動  
できる。

そのダメージを0にし、相手のLPをダメージの数値分減らす。

ヘドロ・ピーファウル（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星10

闇属性／鳥獣族

ATK 3100／DEF 500

闇属性チューナー+チューナーとは種族の異なるモンスター1体以上

（1）：このカードが特殊召喚に成功した時に発動できる。

自分の手札が相手より少ない場合、同じ枚数になるようドローする。

この効果を発動した場合、自分はターン終了時までカードをセットできず、「ヘドロ・ピーファウル」以外の効果を1度しか発動できない。

（2）：自分の手札が相手より多い場合、自分のターンのバトルフェイズ開始時に発動する。

このカードをEXデッキに戻し、自分のLPを3000回復する。

「下名は魔法カード『虚栄の金切り声』を発動致します。下名の墓地のモンスター1体を

除外し、その攻撃力の2倍より高いダメージを相手ターンの終わりまで受けなくなりま  
す。墓地より『デビルキャスト』を除外し、次の下名のターンまで0の2倍、即ち0よ  
り高いダメージは受けません。ターンエンドでございます」

虚栄の金切り声（オリジナル）

【通常魔法】

(1) : 自分の墓地のモンスター1体を除外して発動する。

相手ターン終了時まで、自分は除外したモンスターの攻撃力の2倍より高いダメージ  
を受けない。

(2) : 墓地のこのカードを除外し、お互いのフィールドのモンスター1体ずつを選択し  
て発動する。

選択したモンスター1体のレベルはエンドフェイズ時まで、もう1体のモンスターの  
レベルと同じになる。

このカードの(1)の効果で攻撃力100未満のモンスターを除外した場合、このカー  
ドが墓地を離れる場合に裏側表示でゲームから除外される。

ヴァニティ : LP 8000

手札：4枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：ヘドロ・ピーファウル（ATK 3100）

：魔法・罠無し

「先に行く」

「………任せた」

「ん。私のターン、ドロ」

一周目の手番、クールな女神にターンが移る。

自分の6枚の手札をゆっくり眺めた女神は、戦術が決まったのかその中から1枚を取り出した。

「このカードは自分の場にモンスターがない時にリリース無しで召喚できる。現れろ

『時械神ミチオン』！」

『フウウウ、フンツ！』

時械神ミチオン：ATK 0



初手で召喚されたのは赤い盾状のクリスタルの胴体を持つ巨大な天使。

中性的な顔がクリスタルに浮かび、遙か頭上からフィールドを睥睨している。

「バトル。私は『時械神ミチオン』で『ヘドロ・ピーファウル』を攻撃」

「血迷ったようですね、或いは大いなる邪神様の威厳を前に自害の潔さを悟ったのでございませうか」

「私は精霊でありデュエリスト。そんな事はしない。『時械神』は破壊されず戦闘ダメージもゼロにする効果を持つ」

巨大な天使が突進を仕掛け、穢れた孔雀に正面から衝突。赤い火花を散らして周囲に衝撃波を発するも、その後ろで待機しているルインには一切のダメージを伝えない。寧ろ衝撃波に混ざって怪しい光がヴァニティを襲った。

『『ミチオン』の更なる効果。バトルフェイズ終了時。相手のライフを半分にする。これはダメージじゃないから防げない』

「何!?! ぐううううううう!」

ヴァニティ：LP 8000 ↓ 4000

時械神ミチオン（効果モンスター）

星10

炎属性／天使族

ATK 0 / DEF 0

このカードはデッキから特殊召喚できない。

（1）：自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで召喚できる。

（2）：このカードは戦闘・効果では破壊されず、このカードの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

（3）：このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に発動する。

相手のLPを半分にする。

（4）：自分スタンバイフェイズに発動する。

このカードを持ち主のデッキに戻す。

「……お見事、まさかの選出に私ちよつとビックリ」

「私のデッキは。切り返しに対する耐性が薄い。頑丈な『時械神』は非常に頼もしい  
岩」

無表情に、しかし良く見ると少しだけ得意気な顔を作るルイン。

そのまま手札からカードをディスクに差し込んだ。

「リバースカードを2枚伏せる。ターンエンド」

ポラ&ルイン：LP 8000

手札：4枚／3枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：時械神ミチオン

：伏せカード2枚、精零隔禁（永続罨）

「薄汚い精霊如きが、生意気ですな」

「何とでも言つて。私の心には響かない」

「自分が下等生物と自覚しないドブネズミ程、無価値な命は無いでございませう。下名のターン、ドロー！」

ヴァニテイの手札は再び5枚。破壊されないモンスターを盾にしているとはいえ、油断はできない。

「下名は手札から『フリー・ド・リッター』を特殊召喚致します。このカードは自分のライフが7000以下の時、特殊召喚できるのです」

『フンッ!』

「更にチューナーモンスター『お手盛りのデビルキャスト』を通常召喚。今回は効果を使用しません」

『ギギギギ!』

フリー・ド・リッター：ATK 100

お手盛りのデビルキャスト：ATK 0

ヴァニティが手札から出したのは寂れた鎧の騎士と、先程召喚した小さな悪魔の2体。後者はチューナー、またシンクロを目論んでいるのだろう。

「そして墓地の『虚栄の金切り声』を除外し効果を発動致します。墓地のこのカードを除外する事により、相手モンスター1体のレベルを下名のモンスターと同じにする効果がございます。下名は『ミチオン』のレベルを『デビルキャスト』と同じ2にするのでございます」

「私のモンスターのレベルを変えた……」



響き渡るのは重い汽笛の音。大地を揺るがす轟音を鳴らし、亜空間より海竜が牽引する漆黒の軍艦が姿を現す。

竜と船の双方に全体に赤黒い唐草模様が施され、煙突から夜より暗い煙を排出している姿は、強さより恐ろしさを前面に押し出していた。

『フリー・ド・リッター』の効果発動でございます。このカードがシンクロ素材になった時、カードを2枚ドロウ。そして自分フィールドから素材になった、自身以外のモンスターの数だけ手札をデッキに戻します。下名が素材にした自分のモンスターは『フリー・ド・リッター』と『デビルキャスト』の2体、よって下名が戻す枚数は1枚でございませう」

「……手札補充された、面倒な」

「更に『ドレッドヴォイド』の効果発動、特殊召喚成功時に相手のライフを半分にするのです。これはダメージではないためその小賢しい永続罠では防げないのでございます。

……おやおや、さつき聞いたようなセリフですね？」

「白々しい。つきやああああっ！」

「……ぐつ、ああああああっ！」

ポーラ&ライン：LP 8000↓4000

フリー・ド・リッター（効果モンスター）（オリジナル）

星6

地属性／戦士族

ATK 1000 / DEF 1000

このカード名の（1）による召喚方法は1ターンに1度しかできない。

（1）：自分のLPが7000以下の時、このカードは手札から特殊召喚できる。

（2）：このカードはX素材にできず、S素材にする場合、相手フィールドのモンスター1体もS素材にしなければならない。

（3）：このカードがS素材として墓地に送られた時に発動する。

デッキから2枚ドローし、自分フィールドからS素材となった「フリー・ド・リッター」以外のモンスターの数だけ手札をデッキに戻す。

超邪道戦艦ドレッドヴォイド（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星10

闇属性／海竜族

ATK 4000 / DEF 4000

チューナー+チューナーとは属性の異なるチューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか発動できない。

(1)：このカードが特殊召喚に成功した自分のターンに発動できる。

相手のLPを半分にする。

(2)：1ターンに1度、自分のEXデッキからSモンスター1体を墓地に送って発動できる。

次の自分のターンまで、このカードは相手の効果でフィールドを離れない。

この効果で墓地に送ったカードの効果は無効となり発動できない。

(3)：このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した時に発動する。

相手のLPを半分にし、その数値だけ自分のLPを回復する。

その後、この効果で回復したLPの数値1000つき1枚、相手フィールドのカードを破壊する。

一気にライフを半減させられ強制的に並ばされるポラとルイン。

まだ終わらない、ヴァニティは続いてディスクに内蔵されているEXデッキに手を伸ばした。

『ドレッドヴォイド』の効果発動でございます。下名のエクストラデッキからシンクロ







「次は通さない……。速攻魔法『光神化』発動。手札の天使族モンスター『サイバー・プチ・エンジェル』を特殊召喚。……ただしこの時攻撃力は半減する」

サイバー・プチ・エンジェル：DEF 200

『サイバー・プチ・エンジェル』の効果発動。召喚時にデッキから『サイバー・エンジェル』を手札に加える」

「邪魔でございませす、去ねです！」

人食いパンダの爪が機械仕掛けの丸い天使を切り裂き爆散させる。熱風がルインを襲うが、ライフダメージはゼロである。

「……『パンダ・マタイオデス』がバトルしたモンスターは除外されるのでございませす。本来なら更に攻撃力500ごとに手札を1枚除外するのでございませすが」

『サイバー・プチ・エンジェル』の攻撃力は300。私の手札は無事」

「運の良い女でございませす」

サイバー・プチ・エンジェル（効果モンスター）

光属性／天使族

ATK 3000 / DEF 2000

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した場合に発動できる。

デッキから「サイバー・エンジェル」モンスター1体または「機械天使の儀式」1枚を手札に加える。

パンダ・マタイオデス（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星10

闇属性／獣戦士族

ATK 3500 / DEF 1900

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか発動できない。

(1)：このカードが相手の効果でフィールドを離れた場合、手札を1枚捨てて発動できる。

このカードを特殊召喚し、攻撃力を2倍にする。

(2)：このカードと戦闘を行ったモンスターはダメージ計算終了時に除外され、そのモ

ンスターの攻撃力500につき1枚、相手の手札をゲームから除外する。  
 (3) : フィールド・墓地のこのカードを除外して発動する。

このターン自分が受ける戦闘・効果ダメージを全て0にする。

この効果は相手ターンでも発動できる。

「今度こそ粉碎してやりましょう、『ドレッドヴォイド』でダイレクトアタック！  
 観念して潔く死になさい！」

「お断り。トラップ発動『ガード・ブロック』。ダメージをゼロにして1枚ドロ―  
 最後の戦艦の集中砲火と竜のプレスはバリアを張って防ぐ。」

大量の雨が周囲の地面を抉り爆煙を巻き上げるが、2人は無事だ。

「さながら油虫でゴキブリございますね、その生き汚さには誰もが吐き気を催すでしょう」

「……一々煩い、まだそつちのターン」

「凶星を突かれると口汚くなる、ああ人間達は斯くも浅ましい。下名はカードを1枚  
 セットし、ターンエンドでございます」

ヴァニティ : LP 4000

手札 : 2枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：ヘドロ・ピーファウル（ATK 3100）、超邪道戦艦ドレッドヴォイド（ATK 4000）、パンダ・マタイオデス（ATK 3400）

：伏せカード1枚

「ごめん。焼け野原にされた」

「……大丈夫、まだ負けてない」

相手フィールドのモンスターは3体。耐性は無いが攻撃力が高い。

（……この女からは血のニオイがする。……それもサーと同じ、別世界の血のニオイ。

……パワーでゴリ押し奴がサーに勝てるレベルで強いワケが無い、切り札は別にある筈。……それを焙り出して倒さなければ、私達に勝利は無い）

手札は初期枚数から1枚少ない4枚。フィールドにはオーバードメージを防ぐ永続罠が1枚。

相手がゴリ押しをするパツとしない盤面なのは、このカードで守れているからだろ  
う。

「……私のターン、ドロロー。……魔法カード『テイク・オーバー5』を発動、デッキから

カードを5枚墓地に送る。……更に『強欲な壺』を発動して2枚ドロー」

「デツキから墓地に送られたカード」

『化合獣ハイドロ・ホーク』

『死者蘇生』

『化合獣カーボン・クラブ』

『デュアル・ソルジャー』

『スーペルヴィス』

ポーラのデツキは「デュアル」、墓地にカードがあつた方が都合が良い。

落ちた5枚のカードをイメージし、そして残る手札を見て、それぞれがラインで繋がっていく。

「……、ん。……私のやる事は把握した」

結論から言えばこのターンで倒す事は不可能だ。

相手の動きはが鈍いが、その鈍さの裏に何かを隠している気がする。それを引つpegとして白日の下に晒す、それが今回の自分の役目とポーラは判断したのである。

「……フィールド魔法、発動。……『スパイク化合電界』！」

## 化合電界

### 【フィールド魔法】

(1)：このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分はレベル5以上のデュアルモンスターを召喚する場合に必要なリリリースをなくす事ができる。

この効果は1ターンに1度しか適用できない。

(2)：このカードがフィールドゾーンに存在する限り、自分は通常召喚に加えて1度だけ、自分メインフェイズにデュアルモンスター1体を召喚できる。

(3)：1ターンに1度、相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

自分フィールドのもう1度召喚された状態のデュアルモンスター1体を相手エンドフェイズまで除外し、対象のカードを破壊する。

「……魔法カード『ダイマール・シンセンス二量合成』を発動、デッキから『バーンアウト完全燃焼』と『かじうじゅう化合獣オキシシン・オックス』を手札に加える」

## 二量合成

### 【通常魔法】



このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 以下の効果から1つを選択して発動できる。

●デッキから「化合電界」1枚を手札に加える。

●デッキから「完全燃焼」1枚と「化合獣」モンスター1体を手札に加える。

(2) : 墓地のこのカードを除外し、もう1度召喚された状態のデュアルモンスターを含む自分フィールドの表側表示モンスター2体を対象として発動できる。

ターン終了時まで、対象のモンスター1体の攻撃力を0にし、その元々の攻撃力分も1体のモンスターの攻撃力をアップする。

### 完全燃焼

#### 【通常罫】

「完全燃焼」は1ターンに1枚しか発動できない。

(1) : 自分フィールドの表側表示の「化合獣」モンスター1体を除外して発動できる。

デッキから「化合獣」モンスター2体を特殊召喚する(同名カードは1枚まで)。

(2) : 相手モンスターの直接攻撃宣言時に、墓地のこのカードを除外し、除外されている自分のデュアルモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはもう1度召喚された状態として扱う。  
この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。

準備は整った。後は動きつつ敵の出方を見るのみだ。

「……魔法カード『トライワイトゾーン』発動。……墓地からレベル2以下の通常モンスターを3体蘇生する」

「デュアルモンスターは墓地で通常モンスターとして扱う。よって対象にする事が可能」

「……私は墓地から『デュアル・ソルジャー』、『化合獣カーボン・クラブ』、『化合獣ハイドロン・ホーク』を特殊召喚」

『ハアッ!』

『ゴキキ、ククククク……』

『ピヒャアアア!』

「……そしてさつき手札に加えた『オキシソ・オックス』を守備表示で召喚」  
『モオオオオ!』

デュアル・ソルジャー：DEF 300

化合獣カーボン・クラブ：DEF 1400

化合獣ハイドロン・ホーク：ATK 1400

化合獣オキシシン・オックス：DEF 2100

「おお、一気に並べたな！」

「……新しいデュアル、まだまだこんなものじゃない」

ポーラのフィールドの床、その3ヶ所に穴が空き中から、マフラーを巻いた緑色の少年と半透明の結晶で形作られた鷹と蟹が出現する。

横向きの召喚ゲートから現れた半透明の燃える角を持つ牛も合わせれば、2枚のカードで4体のモンスターを並べた結果が残った。

「そんな雑魚の群れに何ができるのでしよう、やはり精霊は間抜けしかおりませんね」

「……手札から『ウルトラ・デュアル・サモン』を発動する。……今私のフィールドにいるデュアルモンスターは全て再召喚される」

「ほう」

ウルトラ・デュアル・サモン（オリジナル）

【通常魔法】

このカード名の効果はデュエル中1度しか発動できない。

(1)：自分フィールドのデュアルモンスター全てを再度召喚した状態にする。

このターンのエンドフェイズ、この効果を受けたデュアルモンスターを全てゲームから除外し、その元々の攻撃力と守備力の合計分のダメージを受ける。

(2)：再度召喚された自分のデュアルモンスターが相手によって破壊された場合、手札を1枚捨て、墓地のこのカードを除外して発動できる。

その破壊されたデュアルモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたデュアルモンスターは再度召喚された状態となる。

「……効果を受けたモンスターはターンの終わりに除外されてダメージを受ける」

残る手札はこれで2枚、余裕は無い。一気に仕掛けるのみ。

「……まずは『カーボン・クラブ』の効果発動。……1ターンに1度、デッキからデュアルモンスター2体を選択し、片方を手札に加え、もう片方を墓地に送る。

……続けて『オキシシン・オックス』の効果も発動。……1ターンに1度、手札のデュアルモンスターを特殊召喚して、私のデュアルモンスターのレベルをそのモンスターと同じにする。……出て来て、『進化合獣ダイオーキシシン』」

『ガアアアアア！』

「ポーラちゃんの召喚した『ダイオーキシン』はレベル8。よって4体のモンスターもレベル8になる」

更にフィールドに現れるのは牛の頭と蟹の爪を持つ魔獣。合成獣の異形な姿が地響きと共に出現すると同時に、ポーラの軍団の階級が強制的に引き上げられた。

進化合獣ダイオーキシン：ATK 2800 / ☆8

デュアル・ソルジャー：☆2 ↓ 8

化合獣カーボン・クラブ：☆2 ↓ 8

化合獣ハイドロン・ホーク：☆2 ↓ 8

化合獣オキシシン・オックス：☆2 ↓ 8

化合獣カーボン・クラブ（デュアル・効果モンスター）

星2

炎属性 / 水族

ATK 700 / DEF 1400

(1)：このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

(2)：フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚で

きる。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●自分メインフェイズに発動できる。

デッキからデュアルモンスター1体を墓地へ送る。

その後、デッキからデュアルモンスター1体を手札に加える。

このカード名のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

化合獣オキシシ・オックス（デュアル・効果モンスター）

星2

風属性／獣族

ATK 0 / DEF 2100

(1)：このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

(2)：フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚できる。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●自分メインフェイズに発動できる。

手札からデュアルモンスター1体を特殊召喚し、自分フィールドの全てのデュアルモ

ンスターのレベルはターン終了時まで、この効果で特殊召喚したモンスターの元々のレベルと同じになる。

「化合獣オキシシン・オックス」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

すう、と息を吸い込む。

順番を間違えてはならない、妨害が来る事を前提にして最も被害の少ない展開の経路を辿れ。ここがデュエリストとして積み重ねて来た自分の総決算だ。

「……私はレベル8になったデュアルモンスター、『カーボン・クラブ』と『デュアル・ソルジャー』でオーバーレイ。……2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築」

『クククク！』

『ハアアア！』

手を大きく振り上げる。赤い光になった半透明の蟹と、緑の光になった風の戦士を銀河の渦で混ぜ、新しい命を生むために。

渦巻く光の中に2つの別の光が飛び込み、より強力なモンスターを導くための爆発を起こす。敵を倒すためのロードマップを刻むために。

☆8×☆8 Ⅱ★8

「……エクシーズ召喚！ ……燃え盛る氷、海底より産声をあげろ！ ……『超ちようかじうじゆう化合獣  
メタン・ハイド』！」

『シイイイフオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

超化合獣メタン・ハイド：ATK 3000

銀河の膨張から飛び出すのは半透明の魔獣の塊。鋭い赤い双角、その間にある真っ白な一本角、蟹の鋏のような右手、大きく広げられた青い翼、緑色の左手と足の爪、節立った黄色い複数の尾。『化合獣』達を合わせて産まれたクリーチャーが雄叫びと共にポーラを守るために降り立った。

「……『メタン・ハイド』の効果発動。……エクシーズ召喚に成立した時、墓地のデュアルモンスターを復活させる。……さつきデッキから墓地に送った、『エヴォルテクター シュバリエ』を呼び戻す」

『トアッ！』



エヴォルテクター シュヴァリエ : DEF 900

超化合獣メタン・ハイド (エクシース・効果モンスター)

ランク8

炎属性 / 獣戦士族

ATK 3000 / DEF 3000

レベル8デュアルモンスター×2

(1) : このカードがX召喚に成功した時、自分の墓地のデュアルモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

(2) : X素材を持ったこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手は自分フィールドのデュアルモンスターを攻撃対象にできず、効果の対象にもできない。

(3) : デュアルモンスターが召喚に成功した時、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

相手は自身の手札・フィールドのカード1枚を墓地へ送らなければならない。

「雑魚が何体並んでも無意味でございます。我が軍のモンスターは全てレベル10、攻

撃力は全て3000を上回っているのでございます」

「……ここでフィールド魔法『スパーク・フィールド化合電界』の効果により、『ダイオーキシン』を再召喚」

『オオオオオ……！』

「……この瞬間、『メタン・ハイド』の効果。……デュアルモンスターが召喚された時、オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、相手は手札かフィールドのカードを1枚墓地に送らないといけない」

「何ですと!？」

クリスタルの魔獣に赤い光の玉が吸収され、弾けた光がヴァニティのフィールドと手札のカードに降り注ぐ。

対象を取らず、相手に行動を強制するため『ドレッドヴォイド』や『パンダ・マタイオデス』の効果も使えない強力な除去効果だ。

仮面の向こう側で渋面を作ったヴァニティは、忌々しげに手札の『暴風クロー』を墓地に送る。高街歩恵莉とのデュエルで使用したこのカードを使い、手札補充と効果除去を防ぐ算段だったのだろう。

暴風クロー（効果モンスター）（オリジナル）

星4

風属性／鳥獣族

ATK 2100 / DEF 1800

(1) : このカードを含めた手札を2枚捨てて発動する。

このターン、自分フィールドのカードを対象として発動した相手の効果は、自分が2枚ドロウする効果となる。

この効果は相手ターンでも発動できる。

(2) : 自分のモンスターが相手の効果によって破壊・除外される場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

(……つまりこの妨害カードを切り捨てても、あの伏せカードは守りたいという事。……或いは墓地で身代わりになる効果だけを使うつもり……?)

墓地の公開情報を見ながらポーラはヴァニティの次の手を予測する。まだ分かっていないカードが2枚ある、あれをどうにかしなくてはならない。

ポーラの残った手札は2枚、その2枚でプレイできる内容は既に決まっている。

「……速攻魔法『デュアルスパーク』……『シユヴァリエ』をリリースして、『パンダ・マタイオデス』を破壊する」

炎の騎士を白いビームに変え、魔獣のパンダを電撃で粉碎するポーラ。

ヴァニティはそれに慌てる事無く手札を1枚切って、ディスクの墓地ポケットに手をかざした。

「……そして1枚ドロー」

『パンダ・マタイオデス』の効果発動でございます。相手によってフィールドを離れた時、このカードは手札を捨てる事で何度でも蘇生するのです。更にこの時攻撃力は2倍になるのでございます」

『ゴアアアアアアアアア！』

パンダ・マタイオデス：ATK 3500↓7000

破壊した筈の大熊猫が、半透明の爪で地面を掘って復活する。

目は赤く爛々と光り、破壊された憎しみを滾らせるように牙を軋らせていた。

その憎悪を受け、しかしポーラは飄々と墓地に捨てられたカードを確認する。『ダーク・バリア』、ダメージ反射のカード。先に捨てられたカードと合わせてドロー加速を狙っていたのだろう。逆説、伏せられたカードが本命である可能性がこれで高まった。

先に落としておいた『暴風クロウ』の効果は温存、またはこの攻撃力を倍にする効果のために使わなかったのだろう。

「蘇生効果。しかも攻撃力が倍加。これは厄介な」

「まだ無意味な事をするのでございますか？」

破壊しても蘇り、防がれ、この護衛の実力は低くない。あの手この手を妨害されては、確かに無駄な抵抗と見られても仕方ないかも知れない。だが全てが無駄に終わる等と思っている者は、最初から邪神相手に戦いを挑んだりはしない。

「……本当に無意味かどうか、これから確かめる！ ……『ダイオーキシン』の効果発動！ ……墓地の『デュアル・ソルジャー』を除外し、そのパンダを破壊する！」

「ヴァニティの手札は今ので尽きた、行けるか！」

「何の。下名は墓地の『暴風クロウ』を除外し、破壊を無効に致します」

「……続けて『ハイドロン・ホーク』の効果！ ……手札を1枚捨てて、墓地からデュアルモンスターの『ダークストーム・ドラゴン』を特殊召喚する！」

ダークストーム・ドラゴン：DEF 2500

進化合獣ダイオーキシン（デュアル・効果モンスター）

星8

闇属性／悪魔族

ATK 2800 / DEF 200

(1) : このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

(2) : フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚できる。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードがモンスターゾーンに存在する限り、デュアルモンスターの召喚は無効化されない。

●1ターンに1度、自分の墓地のデュアルモンスター1体を除外し、相手フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

化合獣ハイドロン・ホーク (デュアル・効果モンスター)

星2

水属性 / 鳥獣族

ATK 1400 / DEF 700

(1) : このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

(2) : フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚で

きる。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●手札を1枚捨て、自分の墓地のデュアルモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示で特殊召喚する。

「化合獣ハイドロン・ホーク」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

「再召喚されていないデュアルなど、牙の無い鼠も同然。取るに足らない雑魚を出して何をするつもりでございますか？」

「……フィールド魔法『化合電界』の効果、再召喚されたデュアルモンスターを除外して相手フィールドのカードを1枚破壊する事ができる！……『ハイドロン・ホーク』を除外し、そのリバーブカードを破壊する！」

「くっ！」

フィールドに広がった電気の波が波打つ。水色の水晶で作られた猛禽の力を得た力は、伏せられたカードをその波動で粉碎した。

破壊されたカードは『ヘドロパレード』、エンヴィーの使用した相手モンスターを全て除外してトークンを召喚するカード。2人をまとめて倒すには打って付けというワケである。

ヘドロパレード（オリジナル）

【通常畏】

2000ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時のみ発動できる。

相手の場のモンスターを全てゲームから除外し、自分の場の空いているモンスターゾーン全てに「ヘドロトークン」（アンデッド族・水・星4・攻/守 3000）を特殊召喚する。

この効果で除外したモンスターはエンドフェイズに相手の墓地へ送られる。

ダーク・バリア（オリジナル）

【通常畏】

このターン発生するプレイヤーへのダメージは全て相手を受ける。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事でデッキからカードを1枚ドローできる。

ままと伏せカードを割られたヴァニティだったが、しかし爆風が収まると首をコキリと鳴らした。



これでポーラの手札は残り1枚。フィールドには効果を使用したカードや、実質バニラのモンスターのみ。自分のモンスターの攻撃力は4000と7000と3100、1体潰されただけで優位性は何も変わっていない。

「……墓地の『二量合成』ダイマール・シンセシスを除外して、もう1つの効果！ ……『ダークストーム』の攻撃力を、『ダイオーキシン』の攻撃力に移す！」

ダークストーム・ドラゴン：ATK 2700↓0

進化合獣ダイオーキシン：ATK 2800↓5500

「攻撃力5500、しかし『パンダ・マタイオデス』の方が上でございます」

「……まだ終わらない。……私はレベル8の『カーボン・クラブ』と『ダークストーム・ドラゴン』でオーバーレイ！」

☆8×☆8★8

「……エクシーズ召喚！ ……現れよ、黄泉に輝く鋼の騎士！ ……『宵星の機神』シール・オルフェゴールデイン

ギルス！」

『ホオオオオ、トアアッ!』

宵星の機神デインギルス：ATK 2800

出し惜しみはしないと云わんばかりに更にエクシーズ召喚を続けるポーラ。蟹と龍を合わせて産まれたのは黄金の機械騎士、妹思いの兄が最後の力を振り絞って作り上げた総決算である。

「今更、攻撃力2800如き——」

「……『デインギルス』の効果発動。……召喚成功時、相手のカードを1枚、対象に取らず墓地に送る」

「何!?!」

宵星の機神デインギルス（エクシーズ・効果モンスター）

ランク8

闇属性／機械族

ATK 2600／DEF 2100

レベル8モンスター×2

自分は「宵星の機神デインギルス」を1ターンに1度しか特殊召喚できず、自分フィールドの「オルフェゴール」リンクモンスターの上に重ねてX召喚する事もできる。

(1) : このカードが特殊召喚に成功した場合、以下の効果から1つを選択して発動できる。

●相手フィールドのカード1枚を選んで墓地へ送る。

●除外されている自分の機械族モンスター1体を選び、このカードの下に重ねてX素材とする。

(2) : 自分フィールドのカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードのX素材を1つ取り除く事ができる。

「チェーンがあるなら今の内。無いなら分かるよね?」

「ぐ、おのれ! 墓地の『ダーク・バリア』を除外し、効果発動でございます! これにより下名は1枚ドロ!」

「……私は『デインギルス』の効果で『パンダ・マタイオデス』を墓地に送る」

「墓地へ送られた『パンダ・マタイオデス』を、手札1枚と引き換えに特殊召喚致します!」

「よっし、これでヴァニティの手札は無くなったぞ！」

土壇場でヴァニティが補充した手札——『無常を謳う一角獣』だった——と引き換えにパンダが再び墓地へと行って戻る。攻撃力7000の除去に失敗したように見えるが、ヴァニティの手札は確実に減って0枚になった。これでもう『パンダ・マタイオデス』を自力で蘇生する事はできない。

無常を謳う一角獣（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星5

闇属性／獣族

ATK 1550 / DEF 0

このカード名の（2）の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：このカードはリリース無しで召喚できる。

その後、手札の魔法・罫カードを1枚捨てる。

（2）：墓地の魔法・罫カードを3枚除外して発動できる。

相手フィールドのモンスターの全てをレベル1のモンスターとして扱い、このカードを含めた素材としてSモンスター1体をS召喚する。

「……このカードは、オーバーレイ・ユニットが2つ以上あるランク8から10の闇属性エクシーズモンスターを素材に、エクシーズ召喚できる！ ……ランク8の『ディングルス』でオーバーレイ！」

「何!? 更にエクシーズでございますと!?」

「……ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！」

★8↓★11

「……現れる、『No. 84』！ ……魔導を蝕む猛毒の蜘蛛、『ペイン・ゲイナー』！」

No. 84 ペイン・ゲイナー：DEF 0↓3800

機械仕掛けの金色騎士は、続いて緑と紫の毒蜘蛛へと引き継ぐ。

その守備力は自分フィールドのランクの合計の200倍、『メタン・ハイド』の8と自身の11を足した119に200をかけて3800となった。

「……『ペイン・ゲイナー』の効果発動！ ……オーバーレイ・ユニットを1つ使い、自分より守備力が低い相手モンスターを全て破壊する！」



毒蜘蛛はより禍々しく悍ましく変貌する。機械のようにシャープな白いボディ、刃のような青い足、その両者を繋ぐ目玉のような節。虫から悪魔へと進化した、ランク12のモンスターが邪悪なオーラをまもって出陣した。

No. 84 ペイン・ゲイナー（エクシーズ・効果モンスター）

ランク11

闇属性／昆虫族

ATK 0 / DEF 0

レベル11モンスター×2

このカードはX素材を2つ以上持っている自分のランク8〜10の闇属性Xモンスターの上に重ねてX召喚する事もできる。

(1) : このカードの守備力は、自分フィールドのXモンスターのランクの合計×200アップする。

(2) : X素材を持っているこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、相手が魔法・罫カードを発動する度に相手に600ダメージを与える。

(3) : 1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

このカードの守備力以下の守備力を持つ相手フィールドのモンスターを全て破壊する。

No. 77 ザ・セブン・シンズ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク12

闇属性／悪魔族

ATK 4000 / DEF 3000

レベル12モンスター×2

このカードは自分フィールドのランク10・11の闇属性Xモンスターの上に重ねてX召喚する事もできる。

この方法で特殊召喚したターン、このカードの（1）の効果は発動できない。

（1）：1ターンに1度、このカードのX素材を2つ取り除いて発動できる。

相手フィールドの特殊召喚されたモンスターを全て除外し、その後、除外したモンスターの中から1体を選んでこのカードの下に重ねてX素材とする。

（2）：フィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊される場合、代わりにこのカードのX素材を1つ取り除く事ができる。



「…………これが、今の私が出せる全力。…………今の手札で出せる一番強いカード。…………まだ雑魚って言える？」

「ぐぬう！」

ポーラの場のモンスターは3体。

攻撃力5500となった蟹爪の牛の悪魔。

攻撃力3000だがデュアルモンスターを守れる魔獣。

攻撃力4000の邪悪な蜘蛛。

対するヴァニティのフィールドはモンスターが1体いるだけ。

「…………バトル！…………『ダイオーキシン』で『ドレッドヴォイド』を攻撃！」

「墓地の『パンダ・マタイオデス』の効果を発動致します！このカードを墓地から除外し、このターン下名が受けるダメージを全てゼロにするのでございます！」

結晶の悪魔がブレスを吐き出し、禍々しい竜と戦艦を焼き払う。ヴァニティはバリアを張って後逸を防ぐが、戦艦と竜は灰も残さず消滅したのだった。

「防がれた」

「…………想定していた。…………代わりにアイツは、もう使えるカードが無い。…………フィールドも、手札も、墓地も」

「貴女は。そのために？」

「……ん。……ここで雑魚をぶつける筈が無い。……私達2人がかりで何とか倒せるくらいの敵が、多分甘く見積もった最低ライン。……ならまず手を削ぎ落さない」と  
 「合理的ね」

ヴァニテイの墓地に不明なカードはもう無い、既知のカードの中に墓地で発動するカードも無い。

残りライフは4000、次のターンで倒せる。

「……私はカードを1枚伏せて、ターンエンド。……『二量合成』の効果は切れる」

進化合獣ダイオーキシン：ATK 5500↓2800

ポーラ&ルイン：LP 900

手札：0枚／5枚

フィールド

：No. 77 ザ・セブン・シンズ (ATK 4000・ORU：3) (左のEXモン  
 スターゾーンに配置)

：超化合獣メタン・ハイド (ATK 3000・ORU：1)、進化合獣ダイオーキシン (ATK 2800・再召喚)

：伏せカード1枚、精零隔禁（永続罨）、化合電界（フィールド魔法）

「下名のターン、ドローでございませす」

逼迫した状況であるのに対し、ヴァニティに焦りは見られない。仮面で顔を隠しているという事を差し引いても、その声は非常に落ち着いていた。

「手札より『邪慾な壺』を発動します。墓地か除外ゾーンの種族か属性が同じモンスターを4体までデッキに戻し、戻した枚数より1枚少ない枚数ドローするのです。下名は闇属性であり、除外されている『パンダ・マタイオデス』『虚栄王 離狩弩腕<sup>リカルドワン</sup>』『お手盛り のデビルキャスト』、そして墓地の『無常を謳う一角獣』の合計4枚をデッキに戻し、3枚ドローでございませす。

更に速攻魔法『グラティス・リソース』を発動。下名が効果でドローを行った場合、新たに4枚をドロー致します」

邪慾な壺（オリジナル）

【速攻魔法】

このカードは既に自分がこのカード以外の魔法カードを発動しているターンには発動できない。

(1)：自分の墓地、または除外状態の種族または属性が同じモンスターを4体まで選んで発動する(同名モンスターは1体まで)。

選んだモンスターを全てデッキに戻し、戻した枚数—1枚ドローする。

(2)：自分のカードをドローする効果が相手によつて無効になる場合、代わりに墓地のこのカードを除外できる。

グラティス・リソース(オリジナル)

#### 【速攻魔法】

自分が通常ドロー以外でドローした時に発動できる。

デッキからカードを4枚ドローできる。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、「グラティス・リソース」以外の除外された、または墓地に存在するカードを3枚選択してデッキに戻し、カードを2枚ドローできる。

この効果はこのカードが墓地に送られた次の自分のスタンバイフェイズまで使用する事はできない。

「……そんな、手札が0枚から6枚に!？」

「不味い。これじゃ話が変わって来る！」

一瞬で大量に調達された手札を見てヴァニティはほくそ笑む。6枚もあれば大抵の事はできる、そしてこの手札でなら猶更だ。

『グラティス・リソース』は他の護衛達も度々使用していたカード。手札を追加で補充できる上、墓地から除外して更にドローを加速できる優れたもの。あれを引かれてしまつては手札枚数の回復は避けられない。

「手札から『ダークシー・レスキュー』を召喚し、『シエンの間者』を発動致します。このターンの終わりまで『ダークシー・レスキュー』は相手フィールドに移動するのでございます」

『へへへへ……！』

ダークシー・レスキュー：ATK 0

「そしてチューナーモンスター『暁のグライフ・バット』を通常召喚！」

「1ターンにモンスター2体を召喚した!?!」

「このカードは相手フィールドのモンスターが2体以上存在し、下名のフィールドにモンスターが存在しない場合、追加で召喚可能なのでございます」

『キキイー!』

暁のグライフ・バット：ATK 500

6枚に潤った手札が早速半分消費される。

ポーラ達に押し付けられた、ゴムボートに乗る闇の住人。そして血のように赤く、ギョロリとした目玉を持った巨大蝙蝠。両者がフィールドに現れた。

「私達にモンスターを送り付けた? 『グライフ・バット』の条件は最初から満たしていたのに?」

「……何か来る。……多分、アイツの逆転の切り札が!」

『『グライフ・バット』の効果発動でございます! 相手フィールドのモンスター全てをレベル1のシンクロ素材とし、このカードでチューニング致します!』

「私達のモンスターを素材に!」

「レベル1として扱う『ザ・セブン・シンズ』『メタン・ハイド』『進化合獣ダイオーキシン』、元よりレベル1の『ダークシー・レスキュー』に、レベル4の『暁のグライフ・バット』をチューニング!」

「……『メタン・ハイド』の防御をすり抜けた、対象を取らない効果!」

☆1+☆1+☆1+☆1+☆4||☆8

「シンクロ召喚！ 出でよ、レベル8！ 『虚栄王 離狩弩腕』！」  
リカルドワン

『フツ、ハアアアアアアアア！』

「そして『ダークシー・レスキュー』がシンクロ素材になった事で1枚ドロ一致します！」

虚栄王 離狩弩腕：ATK 1800

酸の唾液を垂らす蝙蝠にモンスター達が吸い取られ、虚飾にも等しい豪勢な鎧を着た騎士が現れる。上質なモンスターを奪ったというのに、その豪華な造りの鎧は見栄を張る事以外の目的は見受けられなかった。

『離狩弩腕』はチューナー以外のモンスターが全て相手モンスターでシンクロ召喚された場合、ダイレクトアタックが可能です。また、そのシンクロ素材となったモンスターの数だけ攻撃ができます。今回素材にしたのは5体、よって5回攻撃が可能」

「……『ダークシー・レスキュー』は元々相手モンスターだから使えない、けれどそもそも私達のフィールドにモンスターはいない……！」

「これは不味い。残り9000のライフじゃあ。1回でも攻撃を受けたら終わり……!」

暁のグライフ・バット（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／獣族

ATK 5000／DEF 2500

（1）：相手フィールドにモンスターが2体以上存在し、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、このカードは通常召喚とは別に召喚できる。

（2）：相手モンスターを任意の数選んで発動できる。

そのモンスターを全てレベル1扱いとし、このカードを含めた素材としてSモンスター1体をS召喚する。

この時、選んだモンスターの効果は以下のものとなる。

●1ターンに1度、相手墓地の魔法・罫カードを2枚選んで除外する。

虚栄王 離狩弩腕（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／戦士族



ATK 1800 / DEF 0

閻属性チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

(1) : S 召喚されたこのカードは、S 素材となったモンスターの数だけ攻撃できる。

(2) : このカードのS素材となったチューナー以外のモンスターが、全て元々のコントローラーが相手のモンスターである場合、以下の効果を得る。

●このカードは直接攻撃できる。

●このカードが直接攻撃を行う攻撃宣言時からダメージ計算終了時まで、相手は魔法・罠カードを発動できない。

(3) : EXデッキから特殊召喚されていない相手フィールドのモンスターをS素材にしたこのカードは直接攻撃できない。

「ご安心を、でございます。エクストラデッキから召喚されていないモンスターを素材にした事で、このカードはダイレクトアタックできなくなっております」

それなら、と安心なんてできやしない。無駄にあのカードを召喚するワケが無いからだ。

「なので、このカードを使うのでございます。魔法カード発動、『死者蘇生』！」

「……………」

「っ！」

「蘇りなさい、『グライフ・バット』！」

暁のグライフ・バット：DEF 2500

これでチューナーとシンクロモンスターが揃った。レベルの合計は12、強力なモンスターが現れるだろう。

しかしヴァニティはそれでは飽き足らず、更に手札を1枚切った。

「下名は更に魔法カード『死者群棲』を発動でございます！ 自分の墓地よりこのターンに発動した『死者蘇生』を除外し、モンスター1体を特殊召喚！ 更にデッキ・手札・墓地より、そのモンスターと同名モンスターを可能な限り特殊召喚致します！」

「何?！」

「現れなさい、3体の『お手盛りのデビルキャスト』！」

『『キイツへへへへへへ！』』

「ただし効果は無効になるのでございます。そして手札から『二重召喚』を発動し、2体目の『暁のグライフ・バット』を召喚でございます！」

お手盛りのデビルキャスト：DEF 100  
 お手盛りのデビルキャスト：DEF 100  
 お手盛りのデビルキャスト：DEF 100  
 暁のグライフ・バット：ATK 500

更にフィールドに現れるは小柄な悪魔と禍々しい蝙蝠。先に召喚された無駄に豪華な鎧の騎士がEXモンスターゾーンに配置されている事で可能となった、合計6体のモンスターの軍団である。

「……チューナーが、5体」

「一体何を……!」

「そしてこのモンスターは、フィールドのチューナーをレベル1扱いにしてシンクロ召喚する事が可能なのでございます!」

よって下名はレベル8の『離狩弩腕』に、レベル1の『グライフ・バット』2体と、『デビルキャスト』3体をチューニング致します!」

「なっ!?! レベル合計13……!?!」

「……チューナー5体を素材に、シンクロ召喚!?!」

世界が揺れて弾けてモノクロになった。

その中で6体のモンスターが光に解<sup>ほど</sup>け、新たな下僕を呼ぶための召喚ゲートへと身を転じる。

だが通常の白い光の召喚ゲートだというのに、そこから漂う気配は暗く恐ろしい。まるでモンスターの世界ではなく、冥府より悍ましいどこかに不正に繋がっているかのようだ。

「有り得ざる栄光の剣を携え、玉座より鮮血を求めた騎士よ！ここに立ち上がり戦場に断末魔の合唱をもたらせ！」

☆8 + ☆1 + ☆1 + ☆1 + ☆1 + ☆1 + ☆1 || ☆13

「シンクロ召喚！ レベル13！ 『虚栄心帝  
『ゴオア、アアアアアアアアアアアア！』  
レオンソウル・マストリクス！』」

怒号が大地を震わせる。

重々しいプレツシャーが瓦礫を砕き、ポーラとルインの足を竦めた。

暗黒の稲妻の轟く召喚の光かた姿を現したのは、獅子と梟ふくろうを象った鎧の巨人。先のモンスターとは異なり鎧はあちこちに疵が付いており、歴戦の豪傑であろう事が伺える。

特筆すべきはその右手に持った聖剣と思しき目映い輝きの剣だろうか。邪神の従えるモンスターとは思えない程に神々しい光を放っており、アーサー王伝説に伝え聞くエクスカリバーを連想させた。

そしてそのレベルは異様なりし13。ランク13なら僅かばかり前例があるものの、レベル13は本来有り得ない数値。その有り得ない事を邪神はやつてのけたのである。

虚栄心帝 レオンソウル・マストリクス：ATK 5000

「攻撃力5000……！」

『レオンソウル・マストリクス』は、その素材となったチューナーの数によつて効果が増加致します。5体以上を素材にした事により、貴様らのフィールドと墓地に存在するモンスターは全て除外されるのでございます」

「……!?!」

ジャキン、と2人のディスクが大量のカードを墓地から吐き出す。墓地にモンスター1体しかいなかったルインと異なり、大量に肥やしておいたポーラにとって、この除外は極めて痛い。デュアルは墓地リソースを活用するデッキでもあるため猶更だ。

「続けて4体以上を素材にした効果により、このカードはEXデッキから特殊召喚されたモンスターと戦闘を行う場合、相手の元々の攻撃力を0にし、またEXデッキからモンスターを召喚するための素材にできませぬ。

3体以上を素材にした事により『レオンソウル・マストリクス』はリリースできず相手の効果を受けなくなり、またダメージを0にする効果は封じられます。

そして2体以上を素材にした事で下名は新たに5枚ドロし3枚をデッキに戻すのです」

「面倒な耐性を……」

「更に1体以上を素材にした事で、手札を1枚捨てて召喚素材となった『離狩弩腕』を、効果を無効にして攻撃力を2倍にして特殊召喚でございます。この瞬間、墓地の『死者群棲』の効果により、捨てたカードを手札に戻し1枚ドロ致します」

『ヒィーハハハハハア!』

虚栄王 離狩弩腕：ATK 1800↓3600

「そして今手札に戻った『チェーン・ペナルティ』を発動致します。これより3ターンの間、相手の効果を無効にしたプレイヤーは2500ポイントのライフを失うのでございます。これはダメージに非ず、貴様らの永続罠では防げませぬ」

「っ！」

「……っ！」

「そして元々備わっている効果を発動。1ターンに1度、自分の墓地のモンスター1体を除外し、そのレベル2つにつき1回攻撃回数を増やします。下名は『ドレットヴォイド』を除外でございます」

「……『ドレットヴォイド』のレベルは、10！」

「合計6回攻撃!？」

ヴァニティのモンスターは2体。片方は6回攻撃を仕掛けて来るため、その数は実質7体と言っても良い。

対するポーラとルインのフィールドはガラ空き。伏せカードが1枚あるだけで手札も0枚だ。



虚栄心帝 レオンソウル・マストリクス（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星13

闇属性／戦士族

ATK 5000 / DEF 3000

チューナー1体以上＋チューナー以外のSモンスター1体

このカードのS素材となるチューナーモンスターはレベル1として扱う

（1）：1ターンに1度、EXモンスターゾーンのこのカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時に発動する。

相手のLPを半分にする。

その後、破壊したモンスターの元々の攻撃力と守備力の内、低い方の数値分のダメージを相手に与える。

（2）：1ターンに1度、自分の墓地のモンスター1体を除外して発動できる。

このターン、除外したモンスターの元々のレベル2につき1回、このカードの攻撃回数を増やす。

（3）：このカードはS素材となったチューナーモンスターの数によって以下の効果を得る。

●1体以上：このカードのS素材として墓地に送られた、手札を1枚捨てて自分の墓

地のSモンスター1体を選択して発動する。

そのモンスターの効果を無効にし、攻撃力を倍にして特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターは、自分フィールドに他に攻撃可能なモンスターが存在する限り攻撃できない。

●2体以上：1ターンの1度、デッキからカードを5枚ドローして発動できる。

自分の手札を3枚選択してデッキに戻す。

3枚戻せない場合、このカードを破壊する。

●3体以上：このカードはリリースできず、相手の効果を受けない。

またこのカードが表側表示で存在する限り、「ダメージを0にする」効果は無効となる。

●4体以上：このカードはEXデッキからモンスターを特殊召喚するための素材にできない。

またEXデッキから特殊召喚された、攻撃力が元々の数値と異なるモンスターと戦闘を行う場合に発動する。

その相手モンスターの元々の攻撃力は0となる。

●5体以上：このカードのS召喚に成功した時に発動する。

相手のフィールドと墓地のモンスターカードを全て除外する。

死者群棲（オリジナル）

【速攻魔法】

（1）：このターンに発動した「死者蘇生」を墓地から全て除外して発動できる。

自分の墓地からモンスター1体を特殊召喚し、それと元々のカード名が同じモンスターを可能な限り手札・デッキ・墓地から特殊召喚する。

（2）：自分が手札を捨てた時に発動する。

墓地のこのカードを除外し、捨てたカードを手札に戻して1枚ドロウする。

この時、捨てる事で発動する効果は発動しない。

チェーン・ペナルティ（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：このカードの発動後、自分のターンで数えて3ターンの間、相手の効果を無効にしたプレイヤーはLPを2500失う。

（2）：このカードが相手によって破壊された時に発動する。

フィールドの最も攻撃力の低いモンスターを全て破壊する。

「バトル」

刻まれる、死刑宣告の言葉。

『レオンソウル・マストリクス』でダイレクトアタック致します。死ぬ、です。レギユラス・ヴールツハ“！”

掲げられた聖剣が振り下ろされ、必要以上に白く輝く——言い換えれば何もかもを無に塗り替える斬撃が放たれる。

例えこの一撃を防いでも、まだ5回分の攻撃が残っている。効果を受けないモンスターを相手に6回分の攻撃を防ぐ手段は……、2人のデッキには入っていない。

「……まで。なの……!?!」

「ポーラ、ルイン……!」

攻撃力5000のビームが放たれ、人影を呑み込んだ。

デュアル・ソルジャー：DEF 300

ただし呑み込まれた人影は1つであり、無事であったが。

『ぬんっ!』

「……ありがとう、助かった」

「何でございますか、これは?」

「これは……」

「……墓地の罨カード『バーンアウト完全燃焼』を除外した。……これで除外されてるデュアルを再召

喚状態で特殊召喚できる」

「貴女が除外したのはモンスターだけ。私達の魔法・罫は除外されてない」  
 「そしてポーラの『デュアル・ソルジャー』は再召喚されている時、1ターンに1度バトルでは破壊されない。だからあの攻撃を受けても無事だったんだ」

デュアル・ソルジャー（デュアルモンスター）

星2

風属性／戦士族

ATK 500／DEF 300

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

このカードが戦闘を行う場合、そのダメージ計算後に自分のデッキから「デュアル・ソルジャー」以外のレベル4以下のデュアルモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「小賢しい、たかが1度だけの壁ではありませぬか」

「……『デュアル・ソルジャー』のもう1つの効果。……バトルが終わった時、デツキからレベル4以下のデュアルモンスターを特殊召喚できる。……『シャドウ・ダイバー』を特殊召喚」

シャドウ・ダイバー：DEF 500

緑色の風をまとう小柄な戦士が剣ビームを受け止め、ポーラとルインを守ったのだ。ただではない、更に攻撃を防いだ時に生まれた暴風を以て新しい召喚ゲートを作り、背後から影に寄生する邪悪な魔獣を呼び戦線を補強したのである。

「……全滅くらい覚悟してたけど、ここまでされるとは思わなかった。……『デュアル・ソルジャー』を除外しておいたのは正解だった」

「ならば『シャドウ・ダイバー』に続けて攻撃です！」

「……速攻魔法『デュアルスパーク』。……『シャドウ・ダイバー』をリリース、『離狩弩腕』を破壊して1枚ドロ」

「ぬっ」

直後、影の魔獣は白く光りながら小さい方の鎧騎士に突撃し、雷鳴と共に爆散。大き

い方の騎士の剣をぬるりと避け、相手の攻撃を受け流しつつポーラの手札を補充した。「対象を変更、『デュアル・ソルジャー』を攻撃！ 今度こそ撃破でございます！」

「……再び効果発動、『業火の重騎士』を特殊召喚。……つ、ありがとう、助かった」

シャドウ・ダイバー（デュアルモンスター）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 1500／DEF 500

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●自分フィールド上に表側表示で存在する闇属性・レベル4以下モンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターはこのターン相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。



業火の重騎士（デュアル・効果モンスター）

星4

炎属性／アンデット族

ATK 1800 / DEF 200

（1）：このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

（2）：フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚でききる。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●このカードが、特殊召喚されたモンスターを攻撃するダメージステップ開始時に発動できる。

そのモンスターを除外する。

『レオンソウル・マストリクス』の更なる効果でございます！ そのターン最初にモン

スターを戦闘で破壊した時、相手のライフを半分にします！」

「なっ！ ぐつうううううううう！」

「……つつつ、おおっ！」

ポーラ&ルイン：LP 900↓450

「まだまだまだまだあ！ 更に半分にしたライフから、破壊したモンスターの攻守の内、低い方のダメージを与える！ 300のダメージを受けなさい！ ヴァニツシュ・ロア―！」

「があああああああああつ?!」

「……っ！ ぐぶっ?!」

ポーラ&ルイン：LP 450↓150

ぱんっ、と頭の中で派手な音が聞こえた気がする。

視界が空回って回転して、口の中が鉄臭さであつと言う間に溢れた。

相手が剣から衝撃波を放って自分達を闇の鉄格子まで吹っ飛ばしたのだと理解できたのは、さつきまで立っていた場所から手前まで瓦礫で轍が刻まれていたからだ。

幸いライフは残っている、もし『シャドウ・ダイバー』を破壊されていれば50だけライフが足りずに死んでいた。

「分かっているでございましょう? 『レオンソウル』はこのターン6回攻撃が可能、そ

してこれで2回攻撃を行いました。貴様らのフィールドに残っているのは『業火の重騎士』1体のみ、それさえ消せば残り3回の攻撃で終わりでございます」

「くっっ！」

「……ぼ、ちの、魔法カード『ウルトラ・デュアル・サモン』の、こうがつ！ ……手札を、ぐうっ！ ……手札を1枚捨てて、破壊された、『デュアル・ソルジャー』を、もう1度召喚された状態で、蘇生する！」

デュアル・ソルジャー：DEF 300

鼻の骨か歯でも折れたか、発音がイマイチ明瞭にならない。それでもデュエルは終わっていない以上、戦いは続く。

その事を理解しているポーラは最後の手札である『トランザクション・ロールバック』を対価に、墓地からモンスターを蘇生させて再び壁にした。

今のバーンダメージは1ターンに1度だけ、もう1度来る事は無いのが救いだろっか。

「ふうむ、『デュアル・ソルジャー』は実質4体分の壁モンスター、これでは倒せないでございませぬ。ならば『業火の重騎士』を攻撃！ これでバトルを終了でございませぬ！」

何とか難を逃れた。

辛うじて生き残ったモンスター一体、いないよりはマシと思おう。

「下名は『マストリクス』を対象に、手札より『タイムン・フェイク』を装備でございませぬ。これにより貴様らは『マストリクス』を攻撃しなくてはならず、攻撃しなかった相手は1000ポイントのダメージを受け、また『マストリクス』は1ターンに1度だけ戦闘では破壊されませぬ」

「攻撃強制の……カード……」

「また『タイムン・フェイク』は装備モンスターの守備力以下の効果ダメージを無効にでき、更に下名の場の魔法・罠カードが破壊される場合、墓地の魔法・罠カードで身代わりにする効果を持ちます。」

そして墓地の『空しきこの世全ての空しさ』の効果を発動。手札を1枚捨て、墓地のこのカードを除外。デッキから罠カードと魔法カードを1枚ずつセット致します」

ヴァニティの手札から2枚目の『チェーン・ペナルティ』が墓地へと消え、デッキから2枚のカードが場に伏せられる。ポーラとルインのディスクに転送されたカードの詳細によって、それらが『灰色の暴風俄か雨』と『失意のミス』というカードだという事だけは判明したが、何の救いにもなっていない。

空しきこの世全ての空しさ（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：自分の墓地から属性が同じチューナーとチューナー以外のモンスターを1枚ずつ除外して発動する。

EXデッキからその2枚と同じ属性で種族が異なるSモンスタを、S召喚扱いで特殊召喚する。

（2）：自分フィールドのSモンスターが相手によって破壊された自分のターンのメインフェイズ時に発動できる。

手札を1枚捨て、墓地のこのカードを除外し、デッキから魔法カードと罠カードを1枚ずつセットする。

この効果でセットされたカードはフィールドを離れた時、ゲームから除外される。

タイムマン・フェイク（オリジナル）

【装備魔法】

自分フィールドのレベル9以上のモンスターにのみ装備可能。

（1）：相手は装備モンスター以外に攻撃できず、装備モンスターは1ターンに1度、戦闘では破壊されない。

また装備モンスターの守備力以下の効果ダメージをコントローラーは受けない。

(2)：装備モンスターは以下の効果を得る。

この効果は、このカードが装備されたターンには発動できない。

●相手がこのカードに攻撃しなかったターンの終了時に発動する。

相手LPに1000ダメージを与える。

●自分フィールドの魔法・罫が破壊される場合、代わりに破壊される枚数と同じ数だけ自分・相手の墓地から魔法・罫カードを除外できる。

灰色の暴風俄か雨（オリジナル）

【通常罫】

プレイヤーが直接攻撃によって戦闘ダメージを受けた時に発動できる。

相手フィールド上の攻撃を行ったモンスター以外のモンスターを1体破壊し、相手にそのモンスターの元々の攻撃力の倍のダメージを与える。

このカードの発動に対し魔法・罫・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

失意のミス（オリジナル）

【通常魔法】

相手の場のモンスターを全て破壊し、その攻撃力の合計値分のダメージを相手に与える。

この効果で破壊した相手モンスターの数が3体以下の場合、このターンのバトルフェイズをスキップする。

「もう一枚カードをセット、これにてターンを終了致します。辞世の句は無用、死への恐怖と生の空しさを感じながら最後のターンを過ごさない」

「……このエンドフェイズ、ゴホッ！ ……前の、ターンに『スパーク・フィールド化合電界』で除外、された……、『スパーク・フィールドハイドロン・ホーク』が……、ぐっ！ ……フィールドに、戻る……！」

化合獣ハイドロン・ホーク：DEF 700

ヴァニティ：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：虚栄心帝 レオンソウル・マストリクス（ATK 5000）

：メインモンスターゾーン無し

：伏せカード3枚（内2枚は『失意のミス』『灰色の暴風<sup>グレイル</sup>俄<sup>スコー</sup>か雨<sup>ル</sup>』）、タイマン・フェイク（装備魔法・『虚栄心帝 レオンソウル・マストリクス』に装備）

「はあー……！ はあー……っ！」

「……立て、る？」

「何どか……」

ライフは残り150、フィールドには何とかモンスターを2体残せたが、どちらも貧弱に過ぎる。ルインの手札が潤沢にあるのだけが幸いだろうか。

しかし相手の場には攻撃を強制するモンスターがいて、そのモンスターは戦闘破壊以外での除去はほぼ不可能。EXデッキのモンスターの攻撃力を上げて殴っても元々の数値を0にされるため、『F・G・D』等で相討ちにしないでならぬ。

そして敵の場にはこちらのモンスターを全て破壊するカードと、直接攻撃後にダメージを与えるカード。更に正体不明の伏せカードもあり、それらは『タイマン・フェイク』の効果で守られている。

盤石、まさに鉄壁の布陣。

（……）

ルインは自分の手札を見る。



左から順に『マンジユ・ゴッド』『勇気の天使ヴィクトリカ』『ハーピィの羽根帚』『サイバー・エンジェルー棄天ー』『アテナ』。

強力な除去魔法である『ハーピィの羽根帚』だが、今相手フィールドの魔法・罫には耐性が付与されているため実質死に札。

天使族の展開を補助する『アテナ』は墓地のモンスターを根こそぎ除外された上に『タイマン・フェイク』の効果で3000以下のバーンが防がれてしまうので、これも腐っていると言つて良い。

残りのカードも逆転に繋げるには力不足。

「……ペッ」

「べっ」

それでも、まだ、負けてない。

血を吐き捨てて口の中の濁りを消し、落ち着いて前を見る。

「……まだ負けてない。……勝つて」

「勿論」

可能性が残っているとしたら、デッキの中にしかない。

何のカードを引けば良いのか分からないが、それでも引くのだ。最後の希望を、最後の可能性を。

（お願い。私のデツキ。どうか応えて。こいつに負けたら世界が終わってしまおう）

折れていないこちらの心を見て、相手は苛立っているのだらう。仮面で見えない顔の代わりに足が地面を叩いて苛立ちを表現している。

一発逆転の意志を込め、ルインは呼吸を整えながらデツキトップのカードを引き抜いた。

「私のターン。……ドロー！」

「……っ！」

引いたカードは風をまとう天使族、青色のフレームを持ったモンスター。『サイバー・エンジェル——韋駄天——』だった。

t o b e c o n t i n u e d

## STORY 94 : 恐怖

桜&アテナ : LP 8000

手札 : 4枚 / 5枚

フィールド

: モンスター無し

: 精零隔禁 (永続畏)

ファイアー : LP 8000

手札 : 4枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・畏無し

再度、時は巻き戻り、桜とアテナのデュエル。

爆発的な攻撃を防ぎ一命ならぬ二命を繋いだが、相手の動きはこれからだ。

「あの程度の恐怖じゃあヌルかったかあ？ ならもつと恐怖を植え付けてやるけん！」

「来い、いかに敵が恐ろしかろうと、勝ち目の無い相手であろうと、主のために剣を取った身。怖気付いて逃げるワケにはいかぬ」

「我々はこの神聖なる領域で戦い守護する者、邪悪なる存在に屈するワケには参りません」

「口だけの雑魚が、ブチ殺してやるわあ！ ワシは魔法カード『鬼胎きたいの合星』を発動じゃああああ！ 手札に同じ名前のモンスターが2体いる時、デッキの同名モンスターを特殊召喚し、手札の同名モンスター2体と共にエクシーズ召喚する！ 現れる、

『恐冷斬オッレザン』！』

『ヒィィエエエエ……！』

恐冷斬：DEF 0

「そして手札の2体の『恐冷斬』と、場の『恐冷斬』1体でオーバーレイ！ 3体のモン

スターでオーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4×☆4×☆4 Ⅱ★4

デッキから痩せた死神が現れ、手札の同じ姿のモンスターと共に闇色の光になってX字型に渦巻く銀河へと消える。

本来ならその後、光の爆発と共に新たなモンスターへと生まれ変わる召喚エフェクトは、しかし漆黒の光の柱を生やすという異様な構成と相成った。

「エクシーズ召喚！ 現れろ、ランク4！ 『ファイアフル・ホーン テッド』！」

『ヒヤッハアアー！』

ファイアフル・ホーン    テッド：ATK    100

闇より這い出たのは、ローティーンくらいの少年。その黒目は赤く、白目は灰色に変色し、肌の色もドブ色になっている。更に額からは捻じ曲がった角が生え、右腕は2本あるという異常な姿をしていた。名前の『ホーン』は、成程『角』と『悪魔憑き』のダブルミーニングか。

「このカードを特殊召喚した時、ワシは1枚ドロするうううううー！」

「逐一煩いな……」

「ええ、神殿ではお静かに願いたいものです」

恐冷斬（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

このカード名の（1）（2）の効果は、それぞれ1ターンに1度しか発動できない。

（1）：相手モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを守備表示にし、相手ターン終了時までコントロールを得る。

この効果でコントロールを得たモンスターはリリースできない。

（2）：このカードを含む「恐冷斬」が3枚除外されている場合、デッキの1番上のカードを裏側表示で除外して発動できる。

デッキから「恐嶺之冷闇水」1枚を選んで自分の魔法&罠ゾーンに表側表示で置く事ができる。

おそれのひやみず  
恐嶺之冷閻水（オリジナル）

【装備魔法】

（1）：相手モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターは悪魔族となって攻撃力は倍になり、そのコントロールを得る。

（2）：同じ名前の悪魔族モンスターが3体除外されている場合に発動できる。

墓地のこのカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたこのカードは、セットしたターンには発動できない。

鬼胎きたいの合星（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：手札の同名のモンスター2体を相手に見せて発動する。

デッキから見せたモンスターと同じ名前のモンスターを特殊召喚する。

その後、そのモンスターと見せたモンスター全てをX素材としてX召喚を行う。

（2）：（1）の効果でX召喚されたモンスターが自分の墓地に存在する時、自分の墓地のX素材となったモンスター3体を除外して発動できる。

そのXモンスターを守備表示で特殊召喚し、このカードとデッキの1番上のカード1枚をその下に重ねてX素材とする。





ファイアー：LP 8000

手札：1枚

フィールド

：ファイアフル・ホーン テッド（ATK 100・ORU：3）

：メインモンスターゾーン無し

：伏せカード1枚

攻撃力1000のモンスターを棒立ちさせ、伏せカードが1枚。明らかに罠だ。しかし罠であろうと飛び込まねば、その先にいる敵将の首は取れない。

「……」

「……」

桜もアテナもそれを理解している。故に互いに顔を見合わせ、頷きあった。

「それでは、こちらのターンから参ります」

「お願い致します」

「私めのターン、ドロー」

手札を見て目を閉じ、思案する。

自分が何をすべきか、自分はどうか戦うべきか。

数秒、戦略を脳内で組み立て、固めた。

「いざー！ 手札から永続魔法『エクソシスター・カルペデイベル』を発動！ このカードが存在する限り、自分の『エクソシスター』モンスターは蘇生されたモンスターの効果の対象になりません！」

「ほお？ 『エクソシスター』デツキかあ？」

エクソシスター・カルペデイベル

【永続魔法】

このカード名の(2)(3)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分フィールドの「エクソシスター」モンスターは墓地から特殊召喚されたモンスターの効果の対象にならない。

(2)：自分が「エクソシスター」モンスターのX召喚に成功した場合、カード名を1つ宣言して発動できる。

ターン終了時まで、宣言したカードと元々のカード名が同じカードの効果は無効化される。

(3)：自分の「エクソシスター」モンスターが戦闘を行う攻撃宣言時、相手フィールドの魔法・罫カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

「意外ですね、貴女自身を活用する天使族のデッキかと思つたのですが」  
「ふふ、よく言われます。そしてそのデッキも持っています」

少しばかり目を丸くする桜に対し、アテナは愉快そうに微笑んで返す。

「しかし時には、こういった意表を突くデッキも必要なのですよ。そもそもポーラさんもフレイさんも、そして貴女も自身を召喚せずに戦うデッキではありませんか」

「成程確かに、的を射るお言葉です」

「はい、では続けて参ります。私めは手札から『エクソシスター・ステラ』を召喚！」

『はあああああ！』

「更に自分フィールドに仲間がいる時、『エクソシスター・エリス』は特殊召喚できます！ この時『ステラ』が存在する事で、ライフを800回復する！」

『やあああああ！』

「更に『ステラ』の効果発動！ 手札の“エクソシスター”モンスター、『エクソシスター・ソフィア』を特殊召喚する！ そして『エリス』が存在する事でライフを更に800回復！」

『たあああああ！』

『ソファイア』の効果！ 味方の「エクソシスター」がいる時、カードを1枚ドロージャス！」

エクソシスター・ステラ：ATK 300

エクソシスター・エリス：DEF 800

エクソシスター・ソファイア：DEF 800

桜&アテナ：LP 8000↓8800↓9600

5枚あった手札はあつと言う間に2枚に、更に3枚に。そして代わりにモンスター3体が一気に現れる。ステータスこそ低いものの、破魔と浄化の力で悪霊を打ち倒す退魔師達の登場だ。

エクソシスター・ステラ（効果モンスター）

星4

光属性／魔法使い族

ATK 300／DEF 800

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分メインフェイズに発動できる。

手札から「エクソシスター」モンスター1体を特殊召喚する。

その後、自分フィールドに「エクソシスター・エリス」が存在する場合、自分は800LP回復する。

(2)：自分・相手の墓地のカードが相手によって墓地から離れた場合に発動できる。

「エクソシスター」Xモンスター1体を、自分フィールドのこのカードの上に重ねてX召喚扱いとしてEXデッキから特殊召喚する。

エクソシスター・エリス（効果モンスター）

星4

光属性／魔法使い族

ATK 500／DEF 800

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分フィールドに「エクソシスター」モンスターが存在する場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

自分フィールドに「エクソシスター・ステラ」が存在する場合、さらに自分は800

LP回復する。

(2) : 自分・相手の墓地のカードが相手によって墓地から離れた場合に発動できる。

「エクソシスター」Xモンスター1体を、自分フィールドのこのカードの上に重ねてX召喚扱いとしてEXデッキから特殊召喚する。

エクソシスター・ソフィア (効果モンスター)

星4

光属性/魔法使い族

ATK 1000/DEF 800

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 自分フィールドに他の「エクソシスター」モンスターが存在する場合に発動できる。  
自分はデッキから1枚ドローする。

自分はデッキから1枚ドローする。

自分フィールドに「エクソシスター・イレヌ」が存在する場合、さらに自分は800LP回復する。

(2) : 自分・相手の墓地のカードが相手によって墓地から離れた場合に発動できる。

「エクソシスター」Xモンスター1体を、自分フィールドのこのカードの上に重ねてX召喚扱いとしてEXデッキから特殊召喚する。

「ケツ、雑魚が群れおつて！ そんな程度でワシの首が取れるとでも思うてか、ナメとんのかあああああああああああ！」

「まだです！ 手札から『奇跡のマジック・ゲート』を発動します！ 自分フィールドに魔法使い族が2体以上いる時、相手モンスター1体を守備表示にしてコントロールを奪います！ そして“エクソシスター”は全て魔法使い族です！」

「何い!?!」

「ファイアの場のモンスターは、『ファイアフル・ホーン テッド』1体のみ！」

「必然、そいつのコントロールが変更となる！」

緑色の札から光が投射されると、その中から観音開きの扉が2枚現れる。

片方の扉が開いて相手の悪魔を吸収すると、もう片方から吐き出し強制的に寝返らせ  
た。

自分のディスクに転送された悪魔のテキストに目を通したアテナは「成程」と短く呟  
いて頷く。

ファイアフル・ホーン    テッド：DEF    2000



「更に『俊足なカバ バリキテリウム』を特殊召喚！」  
『ンムウウウウ！』

俊足なカバ バリキテリウム：ATK 1700

「このカードは手札から特殊召喚でき、この時相手はお互いの墓地からレベル4モンスター1体を特殊召喚できません」

「だが貴様の墓地にモンスターはいない、我々の墓地に至っては空だ」  
「チツ、低次元な小細工を！」

続いて赤マントを翻し、足の速いカバが現れる。蘇生効果を使われると「エクソシスター」の効果を使えるため、このデッキでは非常に相性の良いカードだ。

これでモンスターは4体。準備が整ったアテナは両手を眼前に突き出し、その手を淡く光らせる。

奇跡のマジック・ゲート

### 【通常魔法】

(1)：自分フィールドに魔法使い族モンスターが2体以上存在する場合に発動できる。

相手フィールドの攻撃表示モンスター1体を選んで守備表示にする。その後、そのモンスターのコントロールを得る。

この効果でコントロールを得たモンスターは戦闘では破壊されない。

俊足なカバ バリキテリウム（効果モンスター）

星4

風属性／獣族

ATK 1600 / DEF 600

このカード名の（1）の方法による特殊召喚は1ターンに1度しかできない。

（1）：このカードは手札から特殊召喚できる。

（2）：このカードの（1）の方法で特殊召喚に成功した場合に発動する。

相手は、自分または相手の墓地からレベル4モンスター1体を選び、自身のフィールドに特殊召喚できる。

「私めはレベル4の『バリキテリウム』と『ステラ』でオーバーレイ！」

『ムッ！』

『はああっ！』

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築します！ 陽光よ、天恵が如き恩寵を与え無垢なる魂を守護せよ！」

☆4×☆4＝★4

「エクシーズ召喚！ 抜剣、『エクソシスター・ミカエリス』！」  
『たあああああ、とおっ！』

エクソシスター・ミカエリス：ATK 2500

一番手のモンスターエクシーズは聖なる光を剣に宿した退魔剣士。太陽が如き輝きを放ち、フィールドに降り立つ。

「この瞬間、永続魔法『エクソシスター・カルペデイベル』の効果！ 〃エクソシスター〃をエクシーズ召喚した時、カード1種類の効果をターンの終わりまで封印します！ 私めが宣言するのは『ファイアフル・ホーン テッド』！」

『ファイアフル・ホーン テッド』は裏になる行為であろうとフィールドから消えた時、貴様の手札を補充する効果を持つ。だが『カルペデイベル』の効果により、このターン内

なら最早どこであろうとドロ効果は使えなくなった」

「おんどれえ……!」

「更に『ミカエリス』の効果も発動します!　“エクソシスター”を素材にエクシーズ召喚されたターンに1度、場か墓地のカードを1枚除外できるのです!　よってその伏せられたカードをゲームから除外します!」

手札補充の手段とバツクの守りを同時に消去するアテナ。

しかし光の女剣士がビームを切っ先から放つが、そのビームは闇に吞まれて消えてしまった。

「なっ!?!」

「永続罫『デビル・バインド』!　こいつを『ミカエリス』の装備カードにし、攻撃と効果を無効にするんじゃないやあああ!　更に貴様らのターンが終わる度に攻撃力の10倍のダメージを与えるっつ!　……もつともそっちは、その薄汚い永続罫で通らんが」

デビル・バインド（オリジナル）（改訂版）

【永続罫】

このカードは相手ターンのバトルフェイズ中には発動できない。

(1)：相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象としてこのカードを発動でき

る。

このカードを装備カード扱いとして、そのモンスターに装備する。

装備モンスターの効果は無効化され、攻撃できない。

(2) : 装備モンスターのコントローラーは、自分のエンドフェイズごとに装備モンスターの攻撃力の10倍のダメージを受ける。

エクソシスター・ミカエリス (エクシーズ・効果モンスター)

ランク4

光属性 / 戦士族

ATK 2500 / DEF 1800

レベル4モンスター×2

このカード名の(1)(3)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 「エクソシスター」モンスターを素材としてこのカードのX召喚に成功した自分・相手ターンに、相手のフィールド・墓地のカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを除外する。

(2) : このカードは墓地から特殊召喚されたモンスターとの戦闘では破壊されない。

(3) : このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

デッキから「エクソシスター」魔法・罨カード1枚を手札に加える。

女剣士を絡め捕る黒い煙を見て、エンヴィーの使っていたカードだと黎は表情を顰めた。

「先ずダメージからは守られているが、あれでは棒立ちになって都合の良い的になってしまう。」

「ならば私はレベル4の『エクソシスター・エリス』と『ソフィア』でオーバーレイ！」

『やあっ！』

『たっ！』

「大いなる海の愛、月光と共に清純なる加護と成せ！」

☆4×☆4||★4

「エクシーズ召喚！ 撃て、『エクソシスター・ジブリーヌ』！」

『ふっ、はああっ！』

「私めは『ジブリーヌ』の効果を発動します！ オーバーレイ・ユニットを1つ使う事で、

このターンのみ自分のエクシーズモンスターの攻撃力が800アップします！」

エクソシスター・ジブリーヌ：ATK 1400 ↓ 2200 / ORU 2 ↓ 1  
 エクソシスター・ミカエリス：ATK 2500 ↓ 3300

アテナは手を弱めない。

続いて聖水を込めた銃を持つ女性の被い屋を呼び出し、戦線を強化する。ターンの間中続く効果のため、幅広く味方を強化できる優秀なバツファーだ。

エクソシスター・ジブリーヌ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク4

光属性／戦士族

ATK 1400 / DEF 2800

レベル4モンスター×2

このカード名の（1）（3）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：「エクソシスター」モンスターを素材としてこのカードのX召喚に成功した自分・相手ターンに、相手フィールドの効果モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの効果をターン終了時まで無効にする。

(2) : このカードは墓地から特殊召喚されたモンスターが発動した効果では破壊されない。

(3) : このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

このターン中は自分フィールドのXモンスターの攻撃力が800アップする。

「バトルです！ 私めは『エクソシスター・ジブリーヌ』でダイレクトアタック！ この瞬間、永続魔法『エクソシスター・カルペディベル』の効果発動！ 自分の『エクソシスター』がバトルする攻撃宣言時、相手の魔法・罠カードを1枚破壊できます！ 私めは装備カードとなった『デビル・バインド』を破壊！」

「チッ！」

「よし、これで『ミカエリス』が戒めから解放された！」

永続魔法からビームが放たれ、永続罠を焼いて貫く。これで邪魔なカードは消失した。

当然攻撃は止まっていないので、退魔師の聖水銃撃はファイアーに躊躇無く浴びせられる。

「ぐおおおおおおお！」



ファイアー：LP 8000↓5800

「続けて『ミカエリス』でダイレクトアタック！」

「ぬうううううううううう！」

ファイアー：LP 5800↓2500

2連撃で攻撃を受けたファイアーは1メートルばかり勢いに押され後退した。

だがギロリと桜達を睨んだかと思うと、残った最後の手札をディスクを破壊する程の勢いで叩き付けて配置する。

「ワシが同じターンに2回以上ダメージを受けた事で、このカードは相手モンスター1体を守備表示にして特殊召喚できる！ 現れんかい、『銅鎌ツルギヤー』アアアアアアアアアア！」

『オツラアアアアアアアアアア！』

銅鎌ツルギヤー：DEF 1000

エクソシスター・ミカエリス：ATK 3300↓DEF 1800

召喚されたのは鈍い色の鎖鎌を持ったツツパリ。そのデカいだけの怒声に押され、光剣を持つ退魔師が半歩後ろに下がってしまう。

名前の由来は恐らく恫喝とドラマツルギーだろうか。見た目には演劇論が入っていないように見えるが、黎がかつて使用した『デスピアの大導劇神』ドラマトウルギアも同じようなもので気にはいけない。

「3体で攻撃しても届かないと踏んで2体に止めとどましたが、正解だったようです。もつともこの程度の効果なら別の戦法が良かったのも事実ですが」

「仕方ありませんまい、相手の迎撃を警戒してリソースを温存するのは間違っていない。敗北が死と同義であれば猶更」

「そうですね、ならばここから汚名返上と参ります」

「ケツ！ ならばどうするかいのお？ ア、ア？」

「はい、私めはバトルを終了し、メインフェイズ2に移動します。私めは——」

「おっと待ちやがれえ！ バトルフェイズ終了時、『銅鎌ツルギヤー』の効果発動！ このカードをゲームから除外し、デッキの上から5枚確認！ そして2枚をデッキに戻し、2枚を捨てる！ 最後の1枚は手札に加えるんじゃないいいいいいいいいっ！」

銅鎌ツルギヤー（効果モンスター）（オリジナル）

星5

闇属性／岩石族

ATK 1000 / DEF 1000

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか発動できない。

（1）：相手によって自分が2回以上ダメージを受けたターンに発動できる。

相手モンスター1体を選んで守備表示にし、このカードを手札から守備表示で特殊召喚する。

（2）：バトルフェイズ終了時、フィールド・墓地のこのカードを除外して発動できる。

自分のデッキの上からカードを5枚、お互いに確認する。

その中から2枚を選んでデッキに戻し、2枚を選んで墓地に送る。

残った1枚は手札に加える。

この効果はこのカードが墓地に送られたターンには発動できず、相手フィールドにE Xデッキから特殊召喚されたモンスターが2体以上存在する場合、相手ターンでも発動できる。

ツツパリがメンチを切りながらファイアの背後に移動し、勝手にデッキからカードを

抜き取る。荒い手付きだったため1枚しか手元に残らなかったが、ファイアーの手札と墓地に新しいカードが加わった事の方が問題だ。

「墓地に行ったカードは……、『ブラックコインケース』と『ソラマメイジ』か」

「手札には『闇の誘惑』が加わった、これで先はもう読めないぞ」

「では改めて、メイン2です。私めは『ミカエリス』のモンスター効果を発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使い、デッキから『エクソシスター』と名の付いた魔法・罠カードを1枚手札に加えます。デッキから『エクソシスター・バデイス』を手札に加えます」  
 加えたカードは『エクソシスター』を2体リクルートする罠カード。これで手札は2枚、迎撃にはまだ不安が残ると感じたアテナはEXデッキからカードを2枚選んで取り出した。

「このカードはレベル8ではなく、ランク4の『エクソシスター』を2体素材にしてエクシーズ召喚します。私めはランク4の『エクソシスター・ミカエリス』と『エクソシスター・ジブリーヌ』でオーバーレイ！」

「何?! ランクで足し算を行うという事かあああああああああ!?!」

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築!」

「奇跡と奇跡結ばれし時、希望の輝き満ちし聖歌と共に全ての魂を救済せよ！ エクシーズ召喚！ 集え、ランク8！ 『エクソシスター・マニフィカ』！」  
 『『ハアアアアアアアアア、ハアッ！』』

エクソシスター・マニフィカ：DEF 2800

「もう1枚行きます！ このカードはエクシーズモンスターがバトルを行ったターン、自分フィールドのエクシーズモンスターとそのオーバレイ・ユニットを素材に召喚できるので！ 私めは貴方から奪った『ファイアフル・ホーン テッド』でオーバレイ！」

「テメエ、ワシのモンスターを！」

「1体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを再構築！」

★4 || ★12

「人の希望は雷が如き鮮烈なる輝きとなる！ その究極の一撃を以て、災禍を撃滅せよ

！ エクシース・チェンジ！ 降誕せよ、『天霆號アーゼウス』！<sup>ネガロギア</sup>  
『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

天霆號アーゼウス：DEF 3000

決して手は緩めない。

モンスターの数減らしてでもアテナは戦線を補強し、相手ターンに備える。

紫電をまとう銀色の巨大ロボと、そして『エクソシスター・カスピテル』『エクソシスター・ミカエリス』が武器を交差して、それぞれが1体分のモンスターゾーンに守備体勢を敷いた。

『マニフィカ』は互いのターンに1度、相手の場のカードを1枚除外できる効果を持つ。これでフィールドのモンスターを素材にする戦術は大きく制限される。更に自身の効果により対象を取られても緊急回避も可能だ。

『アーゼウス』は自分フィールドの備えごと吹き飛ばしてしまうが、相手の展開に合わせて焼き払う事ができれば次のターンで仕留められる。それを相手に嫌わせられれば、行動に縛りを課して身を守る事にも繋がる。そして奪ったモンスターを墓地に置かず  
に処理した事で、相手の墓地利用も封印済みだ。

エクソシスター・マニフィカ（エクシーズ・効果モンスター）

ランク 8

光属性／戦士族

ATK 2800 / DEF 2800

ランク 4 「エクソシスター」 Xモンスター×2

このカードは上記のカードを X素材にした X召喚でのみ特殊召喚できる。

(1) : このカードは 1 度のバトルフェイズ中に 2 回攻撃できる。

(2) : お互いのターンに 1 度、このカードの X素材を 1 つ取り除いて発動できる。

相手フィールドのカード 1 枚を選んで除外する。

(3) : 相手が効果を発動した時に発動できる。

このカードが X素材としている自分の Xモンスター 1 体を EXデッキに戻す。

その後、そのモンスターを自分フィールドのこのカードの上に重ねて X召喚扱いとして EXデッキから特殊召喚できる。

ネガロギア  
天霆號アーゼウス（エクシーズ・効果モンスター）

ランク 12

光属性／機械族

ATK 3000 / DEF 3000

レベル12モンスター×2

「天霆號アーゼウス」は、Xモンスターが戦闘を行ったターンに1度、自分フィールドのXモンスターの上に重ねてX召喚する事もできる。

(1)：このカードのX素材を2つ取り除いて発動できる。

このカード以外のフィールドのカードを全て墓地へ送る。

この効果は相手ターンでも発動できる。

(2)：1ターンに1度、このカード以外の自分フィールドのカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合に発動できる。

手札・デッキ・EXデッキからカードを1枚選び、このカードの下に重ねてX素材とする。

「リバースカードを2枚セットして、私めはターンエンドです。ここで『エクソシスター・ジブリーヌ』の効果が終わり、上がっていた攻撃力も元に戻ります」

桜&アテナ：LP 8000



手札：4枚／0枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：天霆號アーゼウス（DEF 3000・ORU：4）、エクソシスター・マニフィカ

（DEF 2800・ORU：2）

：伏せカード2枚（片方は『エクソシスター・バデイス』）、エクソシスター・カルペ  
 デイベル（永続魔法）、精零隔禁（永続罨）

「ワシのターン、ドローじやあああああ！ 『闇の誘惑』を発動！ デッキから2枚ドロし、闇属性モンスターを除外するうううううううう！ 更に墓地の『ブラックコインケース』を除外し、もう2枚ドロオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

「っ、一々耳に響くな……」

「叫ばないと喋れない病気か何かでしょうか……」

ファイアの『D・D・クロウ』が次元の彼方へと消え、手札が4枚に増える。墓地がほぼ空っぽのためスタンバイフェイズに『ソラメイジ』の効果が使えないのがせめてもの救いだろうか。グラトニー戦ではあれの効果で厄介なカードを引きこまれたため、腐っているに越した事は無い。

ブラックコインケース（オリジナル）

【通常畏】

フィールド上に存在する永続罫を1枚デッキに戻して発動する。

デッキからカードを1枚ドローする。

墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、デッキからカードを2枚ドローできる。

ソラマメイジ（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／魔法使い族

ATK 1700／DEF 800

自分のターンのスタンバイフェイズ、墓地に存在するこのカードと闇属性モンスターを2体ゲームから除外して発動する。

自分のデッキからカードを2枚選択して手札に加える。

この効果で加えたカードは相手に見せなくても良い。

増えた手札を見て、ファイアーはニヤリと笑った。

「どうやら望ましいカードが引き込めたらしい。」

「行くぞお？　ワシは魔法カード『凶行執きようこうとつぱ』を発動おおおお！」

「なっ!？」

「『凶行執きようこうとつぱ』だど!？」

「ワシのライフが貴様らの半分以下の時、このターン1度だけ場にカードの有無を問う召喚・発動条件を無視できるんじやあああああああああああ！」

更に手札から『恐喝超召喚』を発動おおおおお！　カード名を1つ宣言し、貴様のエクストラデッキから効果と召喚条件を無効にし、モンスター1体を貴様の場に特殊召喚する！　ワシは『エクソシスター・カスピテル』を特殊召喚じやあああああああああ!」

エクソシスター・カスピテル：ATK 2300

召喚条件を無視するカードに加え、モンスターの強制増加。

一体何をするつもりなのかと顔を訝しげに顰めつつ、いつでもフリーチェインの効果を発動できるよう構える。

だがしかし、次の瞬間に3体のモンスターカードは不気味な光に変わると光渦巻く銀河へと呑み込まれてしまった。

「ワシは貴様の『エクソシスター・マニフィカ』『エクソシスター・カスピテル』『雷霆號アーゼウス』でオーバーレイ！」

「何だと!？」

「ランクの違う相手モンスターだけを素材にエクシーズ召喚!？」

これ即ちファイアーの奥の手。

E X デツキから召喚したモンスターが主戦力となる昨今のデュエル事情に於いて最強のメタ能力。魔法・罫も、他のモンスターもいてはならないという重い縛りがあるが、それさえ突破できればチェーンを許さず敵を一掃できる凶悪な一手である。無論、先の『凶行執爬』のように召喚条件を無視するカードも入れてあるので脅威度は更に上がっていた。

「教えてやらあ、エクシーズモンスターだけを素材にエクシーズ召喚するのは、貴様の専売特許ではないという事をなあ！」

★4×★8×★12∥★12



このカード名の効果は1ターンに1度、自分のLPが相手の半分以下の時しか使用できない。

(1)：このターン、1度だけ以下の召喚条件を無効にしてモンスターを召喚・特殊召喚、及び効果の発動ができる。

この効果を適用したカードの効果はターン終了時まで無効となり、そのカードがモンスターの場合は表側表示で存在する限り攻撃できない。

- フィールドに特定の名前、または種類、または場所にカードが存在する
- フィールドに特定の名前、または種類、または場所にカードが存在しない

恐喝超召喚（オリジナル）

#### 【通常魔法】

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：カード名を1つ宣言して発動する。

相手のEXデッキを確認し、宣言したカード名のモンスターが存在すれば、その内1体を相手フィールドに召喚条件を無視して特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、攻撃できない。

(2)：(1)の効果で特殊召喚されたモンスターが破壊された時に発動する。

相手にそのモンスターの元々の攻撃力と守備力の合計値の倍のダメージを与える。

死の瘴気を放つ死神のような異様な雰囲気醸し出す巨龍。ドス黒い鎧は鋼より固そうだし、爪と牙は大人の体より太い。黒目の無い3つの眼球はどこを見ているのか分からないし、4枚あるボロボロの羽は腐乱死体を連想させる。

もしこのモンスターが実在し、かつ目の前にいたら、屈強な精神力を持つ桜でも腰が引けていたかも知れない。

しかし。

「どんなモンスターも、効果と攻撃ができなければ意味はありません！」

「今のそいつは、まさに牙と羽をもがれた龍も同然！」

「確かにのう。召喚条件を無視した対価として、こいつは脅威を失った。『キルサードアイ』はダイレクトアタック出来ねば効果を発動できんモンスター、伏せてある『エクソシスター・バディス』で壁を呼ばれば何の意味も無い。

そもそも『キルサードアイ』はモンスター同士の戦闘を無意味にし、ダイレクトアタックすればオーバーレイ・ユニットを戦闘ダメージ扱いで貴様らに叩き込む。しかし3つしか無いのでは決め手に欠けるちゅーモンじゃあ」

キルサードアイ・ルチフェロ・ドラゴン（エクシース・効果モンスター）（オリジナル）  
ランク12

闇属性／ドラゴン族

ATK 0 / DEF 0

レベル12モンスター×5

このカードはX召喚でしか特殊召喚できない。

相手フィールドにEXデッキから特殊召喚されたモンスターののみが存在する場合のみ、それら全てをX素材として自分フィールドにX召喚できる。

(1) : X素材を2つ以上持つこのカードは戦闘では破壊されず、このカードとの戦闘によって発生する自分へのダメージを0にする。

(2) : EXモンスターゾーンのこのカードは相手の効果の対象にならず、効果では破壊されない。

(3) : このカードが相手に直接攻撃を行ったダメージ計算終了時に発動できる。

このカードのX素材を任意の数取り除き、取り除いた数×1000ダメージを相手に与える。

このダメージは戦闘ダメージとして扱う。

(4) : (3) の効果を発動したターン終了時に発動できる。



取り除いた数——枚のカードを相手の墓地から選び、このカードの下に重ねてX素材とする。

現在このドラゴンのオーバーレイ・ユニットは3つ、効果を発動しても桜達へのダメージは3000が限度となる。

転生者である阿玉春司を倒せたのは4000ライフ制であり、オーバーレイ・ユニットが5つあったからだ。8000ライフ制では複数ターンに渡って攻撃できない限り、このモンスターはフィンリッシュャー足り得ない。

せめて『アーゼウス』と同じく、上に重ねる形での召喚ならオーバーレイ・ユニットを引き継いだのだが。

「そこで、こいつを使う。ワシは『RUM—イーヴィル・フォース』を発動オオオオオオオオオオオオ！」

「っ！」

「ここでランクアップ・マジックだど!？」

「ランク12の『キルサードアイ・ルチフェロ・ドラゴン』でオーバーレイ・ネットワークを再構築！」

ファイアーが発動したのは邪悪な刻印よりモンスターに闇の力をもたらすカード。そ

こから紫色の光が放たれ、死神のような三眼龍は漆黒の光となつて亜空の渦へと飛び込み不気味な色の爆発を起こす。

「カオス・エクシーズ・チェンジ！」

★12↓★13

現れるのは、本来なら有り得ないランク13のモンスター。

実例は片手で数えられる程度しかない例外中の例外。

「現れろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

不気味な色の爆発が起きた、と先程表現したが、あれは取り消そう。

爆発では無い、これはただの高熱の熱風だ。

「我が恐怖はここに生まれ変わり、蒙昧なる弱者を虐げる力が開眼する！」

正体は燃え上がる炎だ、揺らめきだ、蜃気楼だ。

圧倒的な灼熱が混沌を導く扉から先に噴き出ただけだったのだ。

「<sup>な</sup>痿え縮め、震え慄け！ 絶望とは恐怖であると知れ！」

そうして現れたのは、黒い炎をまとう圧倒的なまでの巨大なドラゴン。

神殿の屋根より更に高い、山のような異様な姿形がそこに現れた。



死壊恐皇 マスクルマキシمام・シャファイアタン：ATK 100

ゾワツ、という恐怖を表すオノマトペがある。

見ているだけで寒気の走るような、生物的な危機感を煽られるような、そんな恐ろしさがそのドラゴンにはあった。

これと戦ってはならない、そう本能が警鐘を鳴らしている。

「ランク、13!」

「恐らくこのカードこそ奴の切り札……!」

『イーヴィル・フォース』は墓地に送らず、『シャファイアタン』のカオス・オーバーレイ・ユニットになるぞおおおおおおお!」

デュエルモンスターズに於いて、ランク13のモンスターの危険度は誰もが分かっている。

あらゆるカードを粉碎する、強制的に勝利する、デッキを破壊し圧倒的な破壊耐性を

持つ……。このカードにもそれに比肩し得る何かがあると見て良い。

「まだまだあああああ！ ワシは墓地の『鬼胎の合星』の効果発動オオオオオオ！ 墓地から『<sup>オッレザン</sup>恐冷斬』3体を除外し、『ホーン テッド』を蘇生！ このカードとデッキトツプ1枚をオーバーレイ・ユニットにするんじやいいいいいいいい！ 更に『ホーン テッド』の特殊召喚成功時、カードを1枚ドローするうううううううううううう！」「チェーンします、罠カード『エクソシスター・バデイス』発動！ ライフポイントを800払い、デッキから“エクソシスター”を2体特殊召喚！ 来て下さい、『イレーヌ』！」「ソファイア』！」

『「たああつ！」』

ファイアフル・ホーン テッド：ATK 100

エクソシスター・イレーヌ：DEF 800

エクソシスター・ソファイア：DEF 800

桜&アテナ：LP 9600↓8800

エクソシスター・バデイス

【通常罠】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1)：800LPを払って発動できる。

デッキから「エクソシスター」モンスター1体を選び、さらにそのモンスターにカード名が記された「エクソシスター」モンスター1体をデッキから選ぶ。

そのモンスター2体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに持ち主のデッキに戻る。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分は「エクソシスター」モンスターしかEXデッキから特殊召喚できない。

エクソシスター・イレーヌ（効果モンスター）

星4

光属性／魔法使い族

ATK 400／DEF 800

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札から「エクソシスター」カード1枚をデッキの一番下に戻して発動できる。

自分はデッキから1枚ドローする。

自分フィールドに「エクソシスター・ソフィア」が存在する場合、さらに自分は80

0LP回復する。

(2) : 自分・相手の墓地のカードが相手によって墓地から離れた場合に発動できる。

「エクソシスター」Xモンスターの体を、自分フィールドのこのカードの上に重ねてX召喚扱いとしてEXデッキから特殊召喚する。

相手の戦線強化に対抗すべく、アテナはデッキから壁モンスターを2体呼び込む。

『ファイアフル・ホーン テッド』に『無償交換』と『鬼胎の合星』が重なって敵モンスターが増えるが、同時にこれで『エクソシスター』の共通効果が発動できるようになった。

ライフコストによって発生した重圧に顔をしかめつつ、アテナは更に手を大きく振り被る。

「『エクソシスター』は、相手墓地からカードが離れた事をトリガーとして自身のみを素材にエクシーズ召喚できます！ 私は『イレエヌ』と『ソフィア』でそれぞれオーバーレイ！」

「何?！」

「2体のモンスターで2つのオーバーレイ・ネットワークを構築！」

☆4 || ★4

☆4 || ★4

「エクシーズ召喚！ もう1度、お願い致します、『エクソシスター・ミカエリス』！

『エクソシスター・ジブリーヌ』！」

『ハッ！』

「永続魔法『エクソシスター・カルペデイベル』の効果！ このターンが終わるまでの間だけ、『恐冷斬』の効果を無効にします！」

「よし、これでデツキから装備魔法を直接装備する事はできない！」

「小癪なああああ！」

エクソシスター・ミカエリス：DEF 1800

エクソシスター・ジブリーヌ：DEF 2800

「『エクソシスター』を召喚素材にした事で、『ジブリーヌ』と『ミカエリス』のモンスターの効果を発動します！ 『ジブリーヌ』の効果で『ファイアフル・ホーン テッド』の効果をターン終了時まで無効にし、また『ミカエリス』の効果で『マスクルマキシمام・シャ



「ファイアタン』をゲームから除外します！」

壁モンスターから次の兵力へとアテナはモンスターを切り替える。

再び剣士と銃士の退魔師を召喚、相手の理想的な戦術を切り崩しては盤面を固めていく。墓地の靈魂を鎮め、場の悪魔からは聖水で色彩を消す。そして魔王のような黒龍も駆除せんと光の斬撃を放ち……だが最後の斬撃は屈強な鱗に弾かれてしまった。

「……やはり通じませんか」

『マスクルマキシمام・シャファイアタン』は相手の効果を受けねえ！ 下らねえ小細工が通じるとでも思ったかあ！」

アテナとて、この除去が通じるとは考えていなかった。ただあのドラゴンがどのような耐性を持っているか、ファイアの口から語らせたいただけである。

もつとも完全耐性となれば、この試みはあまり意味が無かったかも知れないが。

「この程度の下策で対抗できるとは脳味噌が小さすぎるわ！ やはり人間に与する精霊など患者の中の愚者、生きる価値の無い貴様らには更なる絶望をくれてやらああああ！」

「っ！」

「言った筈じゃぞ、エクシーズモンスターを使ってエクシーズ召喚するのは貴様の専売特許では無いとなあ！ デッキから魔法カード『リロード』を裏にして除外いいいいい



そのまま更に力強いモンスターになった。

「ここで攻撃力3000か……!」

『テラード・オーガ』の効果発動オオオオオオ! このカードの攻撃力をフィールドのオーバーレイ・ユニットの合計×600アップさせる! そしてこのカードはカオス・オーバーレイ・ユニットを使う事で、相手はバトルフェイズ中にカード効果を発動できないいいいいいいいいいい!」

「フィールドのオーバーレイ・ユニットは『ミカエリス』と『ジブリーヌ』が1つずつ、『テラード・オーガ』が3つ、そして『シャファイアタン』が5つ……、合計10個!」

「使い所はここが最後のようです! 畏発動、『エクソシスター・リタニア』! ライフを800払い、墓地の『ソラメイジ』と、更にフィールドの『テラード・オーガ』の合計2枚を除外します!」

「チイツ!」

エクソシスター・リタニア

【通常畏】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

(1):自分フィールドのモンスターが「エクソシスター」モンスターのみの場合、80

0 LPを払い、相手のフィールド・墓地のカード1枚を対象として発動できる。  
そのカードを除外する。

その後、以下の効果から1つを選んで適用できる。

●自分フィールドのモンスターを素材として「エクソシスター」Xモンスター1体をX召喚する。

●このターンに自分がモンスターのX召喚に成功している場合、相手フィールドのカード1枚を選んで除外する。

Cホーン テラード・オーガ（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）

ランク5

闇属性／悪魔族

ATK 3000 / DEF 100

レベル5モンスター×3

このカードはデッキの魔法カードを1枚裏側表示で除外し、自分フィールドの「ファイナル・ホーン テッド」の上に重ねてX召喚する事もできる。

(1)：このカードの特殊召喚に成功した時に発動できる。

このカードの攻撃力・守備力はフィールドのXモンスターの下に重なっているX素材

の数×600アップする。

(2) : バトルフェイズ開始時にこのカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

バトルフェイズ終了時まで、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できず、このカードは破壊されない。

この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動出来ない。

(3) : 墓地のこのカードを裏側表示で除外、または除外状態のこのカードを裏側表示にして発動できる。

ターン終了時まで自分が効果ダメージを受ける場合、代わりに自分の墓地のカード1枚を自分フィールドのXモンスターの下に重ねてX素材にする。

桜&アテナ : LP 8800 ↓ 8000

回復したライフをそのまま全部注ぎ込むアテナ。これで相手の打つ手は潰したが、1600のライフゲインは帳消しとなり初期値へ戻った。

これでもう防衛の手段は無い、後は野となれ山となれ、である。

「小癪なあ……。ならバトル！ 『マスクルマキシマム・シヤファイアタン』で『エクソシスター・ジブリーヌ』を攻撃いいいいいいいい！」



死壊恐皇 マスクルマキシマム・シャファイアタン：カオス・オーバーレイ・ユニット 5↓4  
 桜&アテナ：LP 8000↓4000↓3000

一気に5000もの消耗を強いられ、さしもの桜も片膝をつく。

幸いまだ3000もライフが残っているが、ギリ貧になるのは自明の理。あのドラゴンを倒さなければ自分達に明日は無い。

「まだ、まだあー！」

「おうよ、ワシもまだじゃー！ 『シャファイアタン』はバトルフェイズ開始時に存在した貴様らのモンスターの数だけ追加攻撃できる！ 2回目の攻撃イ！ 死ね『ミカエリス』ウウウウウウウウウウウウ！」

「なっ!? きゃあああああああああー！」

死壊恐皇 マスクルマキシマム・シャファイアタン：CORU 4↓3  
 桜&アテナ：LP 3000↓1500↓500

続けて焼却され、爆風の中に消える光の剣士。

ライフが立って続けに消耗させられ、襲い来る熱波にアテナと桜は吹っ飛ばされ地面を

転がる。

「さあ、今度は『シャファイアタン』でダイレクトアタック！　喰らえ、　ゞブレス・オブ・サタニズムゞ！」

「アテナ卿！　があああああああああああああああ！」

「桜様！　うつ、あああああああああああああ！」

死壊恐皇　マスキルマキシمام・シャファイアタン：CORU　3↓2

桜&アテナ：LP　500↓400↓200

素早く盾を構えてアテナの前に出る桜。黒炎による高熱から彼女を守ろうと踏ん張るが、強力な熱波の前に2人まとめて影の檻まで吹っ飛ばされた。

『『シャファイアタン』の効果でライフを払えんかった貴様らは意志ある者として失格、罰として貴様らの墓地からカードを徴収する！　ゞオブリゲート・ヘルコレクトゞ！』

「勝手にツケた癖に、傲慢にも程があるわが……！」

「カツ、おうおう自覚が足りん女じゃのう？　邪神様を恐れぬ鼠以下の頭脳つちゅー事

がぶんぶん臭って来るわ」

臭い物を眼前にするかのように鼻を摘まむファイアー。



そのファイアーの従える龍の一睨みで、アテナの墓地から『エクソシスター・ジブリーヌ』『エクソシスター・ミカエリス』『エクソシスター・マニフィカ』が飛び出し不気味に光る結晶にされた。

桜にとって痛くは無いものの、相手がもう5回効果を発動できるという意味では脅威である。

死壊恐皇 マスクルマキシمام・シャファイアタン：CORU 2↓5

「ワシはカードを1枚伏せ、永続魔法『テラー・リズム』を発動ッ！ その効果でライフを2倍にする！ ターンエンドオオオオオオ！」

ファイアー：LP 2500↓5000

死壊恐皇 しかいきょうこう マスクルマキシمام・シャファイアタン（エクシーズ・効果モンスター）（オリジナル）

ランク13

闇属性／ドラゴン族

ATK 100 / DEF 100

レベル13モンスター×2

このカードはルール上「C」カオスモンスターとして扱う。

(1) : このカードは戦闘では破壊されず、自分が受ける戦闘ダメージも0となる。

また相手の効果を受けず、リリースもできない。

(2) : このカードはバトルフェイズ開始時に相手フィールドに存在するモンスターの数だけ、そのターンの攻撃の回数を増やす事ができる。

またこのカードと戦闘を行った相手モンスターは、ダメージ計算終了時に墓地に送られる。

(3) : このカードが「キルサードアイ・ルチフェロ・ドラゴン」をX素材にしている時、以下の効果を得る。

●このカードが戦闘を行ったダメージ計算終了時、このカードのX素材を1つ取り除いて発動する。

相手のLPを半分にし、更に相手は1000LPを払わなくてはならない。

相手が払えない場合、代わりに自分・相手の墓地からカードを3枚まで選択してこのカードの下に重ねてX素材とする。

テラー・リズム（オリジナル）

【永続魔法】

(1) : このカードの発動時の効果処理として、自分のLPを倍にする。

(2) : このカードが表側表示で存在する限り、自分が受ける効果ダメージは全て100として扱う。

(3) : 相手ターン終了時にカード名を1つ宣言する。

相手の手札を確認し、宣言したカードが存在する場合、そのカードを破壊する。

その後、自分はカードを2枚ドロウする。

ファイアー : LP 2500

手札 : 0枚

フィールド

: 死壊恐皇 マスクルマキシマム・シャファイアタン (ATK : 1000 / CORU : 5)

: メインモンスターゾーン無し

: 伏せカード1枚、テラー・リズム（永続魔法）

酷い状況だと桜は顔を歪ませる。

自分にとっては1ターン目なのに相手の場には強力な耐性を持ったモンスターが居座り、ライフは残り200ポイント。植物族にとって重要な墓地は全く肥えていない。

『シャファイアタン』はその効果によって、あのモンスター越しに戦闘ダメージを与える事はできない。かといって除外されている『テラード・オーガ』によって効果ダメージも妨害される。ファイアの墓地には『ファイアフル・ホーン テッド』『鬼胎の合星』『デビルバインド』『無償交換』『闇の誘惑』『凶行執爬』『恐喝超召喚』があり、7連続でダメージを与えるのはフルバーンデッキカーループでも無ければ不可能だ。

そして新たな永続魔法『テラー・リズム』の効果でバーンダメージは100で固定された。八方塞がりである。

幸い手札は4枚もある。この枚数ならベターな動きはできるが、それでファイアを倒せるかどうか。

「引かねば分からね、か。行くぞ、私のターン！」

全てはこのドロー次第。

女騎士は力強く指先を山札に乗せる。

「この瞬間！ 罨装備カード『悪魔崇拜の鉄拳恫喝工作』、発動オオオオオッ！」

「何?！」

「1ターンに1度、相手が通常ドローを行う前に手札を全て確認！ その中にある装備



通常召喚できるモンスターはいるが、『イービル・ソーン』はデッキからしか特殊召喚できない上に、効果ダメージを与えられない場合はリクルートも封じられる。しかもステータスに至ってはレベル1で攻守は100。

腐っている。否、相手によって強制的に腐らされた。

事故どころの話では無い、これでは文字通り手も足も出ない。

選ばれず残った6枚はデッキに戻されてシャッフルされたし、通常ドロウは可能だが果たしてそれが慰めになるかと言われたら完全に『否』である。

「カイツヒャアアハハハハハハハハハハ！ 見たか、それが貴様らの末路！ 貴様らは自分が底辺である事も自覚できておらんようだなあ、優しいワシが教えてやったわあああああああああああ！」

「……改めて私のターンだ」

「ア？ んじゃ貴様ア、諦めの悪いクソ女だのう？」

「当然だ。私は騎士、剣を取り主を守る者。時に支え、時に叱咤し、時に共に立つ。その私にサレンダーは許されるワケが無かろう」

それでも桜は諦めない。

彼女の目は幾度となく映して来たからだ。

強大な邪悪を相手にしてきた彼の姿を。

明らかにヒトが戦えるスケールではない邪悪と、主殿と呼ぶ彼はぶつかり合って勝利してきた。

なら剣を預けた従者が、ここで膝を折る事は許されない。

この1枚に、賭ける。

「ドロー！」

果たして引いたカードは……。

「……ファイアーよ」

「アッ？」

まだ希望が残っている事を示してくれる1枚。

「どうやら貴様のカードが私を助けてくれたようだぞ」

「ンだと!？」

「私は魔法カード『無謀な間伐』を発動！ 手札の植物族モンスターを全て墓地に送り、デッキから捨てたモンスターとレベルが異なる植物族モンスターを同数墓地に送る！

そしてデッキから墓地に送った枚数だけカードをドローする！」

「何い!？」

「貴様が私の手札に加えてくれた4枚は全て植物族、よって合計8枚の植物族モンスターが埋葬され、4枚をドローする！ 更に私はこのターン、植物族モンスターを通常

の召喚とは別に召喚する事ができる！」

サタニズム、マキャベリアニズム  
悪魔崇拜の鉄拳恫喝工作（オリジナル）

【永続罫】

（1）：自分フィールドのモンスター1体を対象としてこのカードを発動できる。

このカードを装備カード扱いとして、そのモンスターに装備する。

（2）：1ターンに1度、相手が通常ドロウを行う前に発動できる。

相手の手札を確認し、その中にある装備モンスターより攻撃力の高いモンスター・魔法・罫カードを全てデッキに戻す。

その後、相手のデッキの上から10枚のカードを確認し、そのからデッキに戻した枚数だけカードを選び相手の手札に加える。

（3）：装備モンスターは戦闘では破壊されず、装備モンスターとの戦闘によって自分が受けるダメージは効果ダメージとして扱う。

無謀な間伐（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：自分メインフェイズ1開始時に、手札の植物族モンスターを全て墓地に送って発



動できる。

デッキから、手札から墓地に送ったモンスターと同じ数だけ植物族モンスターを墓地に送る（同じレベルは1体まで）。

その後、デッキから墓地に送ったモンスターの中で、手札から墓地に送ったモンスターと異なるレベルを持つモンスターの枚数分、カードをドローする。

このターン、自分は通常召喚に加えて1度だけ、自分メインフェイズに植物族モンスター1体を召喚できる。

「私の手札にいたのはレベル1と6と8、デッキから送った4枚はこれらのレベルを避けた。よって私が引ける枚数は4枚！」

再びデッキトップに手をかざす。

この4枚が勝負だ。

あの巨大なドラゴンをこのターンで駆除し、ファイアを倒す。

「これが我々の運命を決めるドローだ」

「どうかご武運を」

「桜……！」

「行くぞ——、ドローッ！」

右手に収まったカードを見る。

敵モンスターはリリースできず効果を受けない。バトルでも破壊されず、効果ダメー  
ジも対策済み。

それを踏まえた上で桜は目を閉じて数秒思索し、そして笑った。

「駄目だな、今の私では『シャファイアタン』は倒せない」

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## STORY 95 : 不屈

フレイ&ジョーカー：LP 100

手札：2枚（内1枚は『帝王の烈旋』）／2枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：メインモンスターゾーン無し

：ランスフォリンクス（7）Ⅱフーコーの魔砲石（2）

：精零隔禁（永続罨）

グリーンフ：LP 6300

手札：0枚

フィールド

：悪四牙あくじきのウエンカムイ（ATK 32000）（左のEXモンスターゾーンに配置）  
けつこんさぎつね  
 ・血恨詐狐（ATK 3900）、デイストレストランク・ダムセル（ATK 2000）

×3

・伏せカード2枚（『暗雲の接収』『アブソプシヨンドロー』、悪徳の監視（永続魔法）

ポラ&ルイン：LP 150

手札：0枚／6枚（『アテナ』『マンジュ・ゴッド』『勇気の天使ヴィクトリカ』『サイバー・エンジェル』―弁天―）『サイバー・エンジェル』―韋駄天―）『ハーピィの羽根帚』

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

・デュアル・ソルジャー（DEF 300）、化合獣ハイドロン・ホーク（DEF 700）

：精零隔禁（永続罨）、スパーク・フィールド化合電界（フィールド魔法）

ヴァニティ：LP 4000

手札：0枚

フィールド

：虚栄心帝 レオンソウル・マストリクス（ATK 5000）

：メインモンスターゾーン無し

：伏せカード3枚（内2枚は『失意のミス』『灰色の暴風俄か雨』<sup>グレ!</sup>、『タイマン・フェイク（装備魔法・『虚栄心帝 レオンソウル・マストリクス』に装備）

桜&アテナ：LP 200

手札：5枚／0枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：メインモンスターゾーン無し

：エクソシスター・カルペディベル（永続魔法）、精零隔禁（永続罨）

ファイアー：LP 5000

手札：0枚

フィールド

：死壊恐皇 マスクルマキシマム・シャファイアタン（ATK：100／CORU：5）

：メインモンスターゾーン無し

：悪魔崇拜の鉄拳恫喝工作（永続罨・『死壊恐皇 マスクルマキシマム・シャファイアタ

ン』に装備)、テラー・リズム(永続魔法)

SIDE : 無し

「はあ、はあ……、はあ……っ」

「ぐ、があ……！」

「……ふう、ふう……ふう……！」

「うっ。あ。ああ……っ」

「ぜえ……ぜえ……、……っ」

「げほっ、ゴボッ！」

状況は非常に悪いものだった。

3チームともライフは残り僅か、召喚された筈の上級モンスターは軒並み壊滅。対する相手はライフが4000以上残っており、場には大型モンスターが待ち構えている。

それだけならまだしも、更にどこも手を思うように打てなくされたのが痛い。

フレイのチームは迂闊にカードを発動すれば1000ダメージを受ける。

ポーラのチームは直接攻撃を受ければ逆手に取られる。

桜のチームは絶対不滅の要塞を避けて通れなくされている。

圧倒的攻撃力と耐性、それを抜けてなお次の手が用意されている絶望。ライフは風前の灯火で、猶予は精々このターンだけ。

普通ならサレンダーしても咎められないだろう。

「やれやれ諦めるといふ事を知らぬ凡愚共であります」

「仕方ありません、それが人間という下等種でございます」

「ハッ、何の取り柄も無いたあ生きてる意味あんのかよ」

それでも6人はそこに手を置かない。

引けば世界の終わりを目論む相手を助けるだけでしかないからだ。

例えこの五体が引き裂かれようと、それだけは阻止せねばならない。明日を食むこの邪悪に屈する未来だけは避けなければならない。

「まだ、まだです………！ 最後まで何が起きるか分からないのがデュエルですよ！」

「そうだ、ゴフツ！ ナメんなガキ共！ オレ達は指一本でも動く限りデュエルを続けるんだ！」

口や腹から染み出る血を拭いながらフレイとジョーカーが睨む。

「……大丈夫？ ……私のカード、全部使つて。……それで勝つて」

「ポーラちゃんのカード……。あつ。そつか。その手があつた」

軋む全身を無視しながら次の手を考えるポーラと閃くルイン。



「大丈夫ですか？　ぐっ、思い切り……、敗北宣言したようですが……っ」

「ごぼっ！　ぺっ！　……さて、どうでしょう？　貴様はどう思う、フィアーとやら？」

桜とアテナは目が霞むのを誤魔化しつつディスクを構え直す。

三者三様だが、ただ勝利を捨ててない事だけは絶対的に共通していた。

そんな彼らを最後の護衛ラースは嘲笑う。

「クカカカカカ！　いやはや暗愚よなあ？　ここから勝てる方法がどこにある？　よし

んばあったとしても、それを今から再現できるのか？　いいや不可能だ、それだけの気

力がどこにある？　妨害を潜り抜ける方法がどこにある？　“騎士”の魂よ、貴様も

言つてやれ。もう負けだ、諦めろとなあ！」

怒りと言われている割に、その黒い細マツチヨは楽しそうだった。

桜達が傷付き無駄な抵抗をしているのが楽しくて仕方ないのだろう。

「何故だ」

だから黎は言う。

「何？」

「これから逆転するかも知れないってのに、何故水を差す必要があるんだ？」

その都合の良い妄想を否定するために。

「ハッ、とんだロマンチストだな」

「ならお前は差し詰めニヒリストか。虚しい虚しいと最後のド根性を否定するのは勝手だが、そいつに俺らを巻き込むのはやめろ。お前の諦め癖が移るじゃねえか」

「貴様……！」

黎はミミリだつて疑つてはいない、彼女達が勝利するという事を。

邪神の護衛との戦いはいつだつてそうだった。負けるかも知れない、もう勝てないかも知れない、それでも諦めず戦い勝利してきた。

そんな自分のため、自分の因縁のために、彼らは剣と盾カイドディスクを持つてデュエルをしてきているのだ。真つ先に己が勝利を見捨ててしまつたら、フレイ達の決意はどこへ行くのかという話である。

デュエルは一度始まつてしまえば横槍を入れる事は許されない、黎にできる事は勝利を信じる事だけ。

ならば、ポーラ達の勝利を心の底から確信する事こそ、彼女達にできる精一杯の応援。唯一の絆。その結束を否定する事は、人間で無い男に協力してくれる彼らへの裏切りに他ならない。

「ほら黙つて見てろラース、恐らくここからラストターンだぜ？」

「チツ、良かろう。貴様の無力な同胞が命と引き換えに勝つか、我の部下が当然の勝利を得るか。分かり切っている結末を見届けてやる」

斯くして、3つのデュエルは最終局面を迎える。

☆

フレイがデッキトップから通常ドローで手札を引き込んだのと同時、グリーフのフィールドで永続魔法が光を放つ。

先程ジョーカーにもやったように、ドローカードにピーピングを行う効果が発動したのだ。

「貴様がドローしたこの瞬間、永続魔法『悪徳の監視』の効果発動！ そのドローしたカードを見せるであります！」

「わたくしが引いたのは『冥帝エレボス』、モンスターカードです」

「『悪徳の監視』は確か、同じ種類の効果を2度続けて適応しようとするると自爆するんだったな」

「無駄に悪運の強い奴らめ！ しかしこれで小官のカードが更に除外され、『ウエンカムイ』の攻撃力が10000アップ！」

悪四牙のウエンカムイ：ATK 32000↓33000

グリーフの発動中のカードが消滅し、そのエネルギーが熊の魔物に吸収される。  
ライフ回復は無くなったが、敵の場には依然として攻撃力5桁のクリーチャーが居座っていた。

「すうー……、ふうー……」

フレイは大きく息を吸って吐く。

手札は2枚、『帝王の烈旋』と『冥帝エレボス』。後は運を天に任せるのみ。

デュエルは40枚のデッキをぶつけ合う以上、運の要素が混ざるのは避けられない。  
上級デュエリストに求められるのは、その『運』を『必然』に可能な限り近付ける事！

「ジョーカー」

「何だ、負けたらゴメンとか言うなよ」

「寝言は寝てから言うものです。……勝ちに行きますよ！」

「当然だ！」

腹の底に力を込め、青髪の天使は手札の内の1枚をディスクに挿入した。

「速攻魔法『帝王の烈旋』を発動！ このターン、相手モンスター1体をリリースしてアドバンス召喚できます！」

「成程、浅知恵でありますな。貴様の『帝王の烈旋』と『冥帝エレボス』はどちらも対象

を取らないカード、それで『ウエンカムイ』を退けようという算段でありますか」  
「……………」

『血恨詐狐』をリリースし、『ウエンカムイ』は『エレボス』でデッキに戻せば、小官は手札ゼロでターンを渡され貴様の場には攻撃力2800のモンスターが残る。次のターンでジョーカーめのペンデュラム召喚を組み合わせれば、フィールドを更に制圧できると」

### 帝王の烈旋

#### 【速攻魔法】

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン、自分はEXデッキからモンスターを特殊召喚できない。

(1)このターン、自分がモンスターをアドバンス召喚する場合に1度だけ、自分フィールドのモンスター1体の代わりに相手フィールドのモンスター1体をリリースできる。

冥帝エレボス（効果モンスター）

星8

## 闇属性／アンデット族

ATK 2800 / DEF 1000

このカードはアドバンス召喚したモンスター1体をリリースしてアドバンス召喚できる。

(1)：このカードがアドバンス召喚に成功した場合に発動できる。

手札・デッキから「帝王」魔法・罨カード2種類を墓地へ送り、相手の手札・フィールド・墓地の中からカード1枚を選んでデッキに戻す。

(2)：このカードが墓地にある場合、1ターンに1度、自分・相手のメインフェイズに手札から「帝王」魔法・罨カード1枚を捨て、自分の墓地の攻撃力2400以上で守備力1000のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

リリースというチェーンに乗らない除去に、対象を取らないデッキバウンスという再利用が難しくなる除去。どちらも強力な一手だ。これを防げるモンスターは個別にそれぞれ耐性が無い限りは存在しない。

グリーフのマストカウンターはここしかなかった。

「しかし愚か、実に愚かであります。小官は『ダムセル』の効果で次のターンに8枚ド

ローでできる、無意味にして無駄な足掻きと理解してないようでありますなあ？ ヒ  
ヒッ、それとも自爆するためでありますかあ？」

「何とでも言いなさい、若造」

「ならば畏発動、『暗雲の接収』！ 『帝王の烈旋』の発動を無効にし、1000ポイントのダメージを与えるのであります！ 老害として死ぬ！」

軍人の裏側のカードが開き、フレイの発動した竜巻を描くカードを雷撃で粉碎する。天使の消失した緑のカードはその場で受けた雷を放電し、武骨な騎士と共に2人を黒雷が襲った。

「ヌツハハハハハハハハハハ！ やはり人間などという下等種に肩入れする精霊など取るに足らず！ 邪神様のお力の前に平伏しながら死ぬでありますよ！」

「今だー！」

「ええ、お借りしますよジョーカー！ わたくしは墓地の『ドリーム・シャーク』のモンスター効果発動！ 効果ダメージが発生した時、このカードを特殊召喚してダメージを無効にします！」

「ン何い!？」

「蘇れ、オレの『ドリーム・シャーク』！」

『ジャワワワワワワワッ!』

『ドラガイド』の効果を使うために水属性モンスターを何枚か突っ込んでおいたのは正解だったぜ！」

そしてそれを理解していない2人ではない。

敵の電撃が直撃する直前、それを紫色の大鯨を呼び出して盾としたのだ。

「この効果で特殊召喚された『ドリーム・シャーク』は守備力が1000ポイント下がり、フィールドを離れた時に除外される」

「いやー、危ない所でした。『暗雲の接收』がカウンター罠だったら、この効果で受けられませんでしたよ」

「お、おのれえ……！」

ドリーム・シャーク：DEF 2600↓1600

防御能力が下がりはしたが、フレイ達はこれで無事。

更にグリーフのカウンターでできるカードが消えたため、もう何の懸念もなく彼女は動く事ができる。

「ここであたくしは墓地に存在する『帝国の金脈』の効果発動！ 墓地にあるこのカードを3枚除外する事で、2枚ドロウします！」



「3枚!? 莫迦な事を言うなであります! 貴様の墓地には1枚しかない筈!」

「ありますよ、3枚。1枚目は貴方も見た通りフィールドで発動しました。2枚目はその時に手札コストとして墓地に送りました。そして3枚目は『ウィッチクラフト・ハイネ』の効果を発動するために捨てました。はい、これで3枚です」

「アホだろテメエ、この海千山千のババアが分かりやすく見せびらかせて墓地に置くかよ」

「ジョーカー後で覚えてなさい」

女性に年齢の話をしてはいけません。

そんな教訓を暗に込めつつ、フレイの手札が再び増える。

ドリーム・シャーク (効果モンスター)

星5

水属性/魚族

ATK 0 / DEF 2600

このカード名の(1)(3)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1):自分フィールドのモンスターが、存在しない場合または水属性モンスターのみの場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

(2)：このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

(3)：このカードが墓地に存在し、自分にダメージを与える効果が発動した時に発動でききる。

このカードを特殊召喚し、その効果で自分が受けるダメージを0にする。

この効果で特殊召喚したこのカードは、守備力が1000ダウンし、フィールドから離れた場合に除外される。

「さあ行きますよ！ 墓地の『真源の帝王』の効果発動！ 墓地の『帝王の烈旋』を除外し、このカードをモンスター扱いにして特殊召喚します！ そして『真源の帝王』と『ドリーム・シャーク』をリリースして、『冥帝エレボス』をアドバンス召喚！」

『オオオオオオオオオオオオ！』

「同時に『ドリーム・シャーク』は自身の効果で除外される！」

冥帝エレボス：ATK 2800

悪四牙のウエンカムイ：ATK 33000↓36000↓37000

満を持して登場するのは死者の国を統べる帝王。悪魔よりもなお死を思わせる黒い王者は、巨大化した熊の魔獣とほぼ同じサイズでフィールドに姿を現した。

『エレボス』の効果発動！ デツキから“帝王”と名の付いた魔法・罠カードを2枚墓地に送り、相手の手札・フィールド・墓地のいずれかよりカードを1枚選んでデツキに戻します！ これにて御免、おさらばです『ウエンカムイ！』

『又ウン！』

闇の中へと葬り去られる四つ顎の熊モンスター。

これで圧倒的なパワーを持つエースは消えた、もうあの圧倒的な攻撃力を警戒する必要は無い。

「そして墓地に送った『汎神の帝王』を除外して効果発動。デツキから“帝王”と名の付いた魔法・罠カードを3枚選び、相手に1枚選ばせてわたくしの手札に加えます」

「ならばそのカードを選ぶであります」

フレイの開示した『真帝王領域』『帝王の深怨』『進撃の帝王』の中から、最後の永続魔法を指差すグリーンフ。

手札は3枚に増えたが、しかし圧倒的な優位を信じているグリーンフは鼻を鳴らして嘲った。

「何をしてしても無駄であります。小官のフィールドには攻撃力3900の『血恨詐狐』がい

るであります、確かに『ウエンカムイ』を失いはしたものの、次のターンで終わりである事に変わりはありません」

「そうですねえ。わたくし達のライフは後100、攻撃力の差は1100、敗北は防げません。仮に4体全てを効果で破壊しても貴方の場にはダイレクトアタックをドローに変換する『アブソブションドロー』がありますし、ならモンスター越しにと考えるとライフは6300なのでこれも難しい」

「無能の割に理解しているでありますなあ？ その通り、貴様に勝ち目は無い。今手札に加えさせた『進撃の帝王』に挽回の効果は無く、貴様は小官に掠り傷を負わせるのが関の山。いい加減に命を諦めなさい！」

「はあ？」

その返しは、フレイにしては本当に珍しく『呆れた』という感情がこれでもかと思われられている。

顔を歪めて笑みの欠片も無い見下しの視線は、恐らく黎やフィオでは死ぬまで見る事の無い侮蔑の顔。それを彼女はありありと浮かべていたのだった。

「そろそろ口を閉じんかクソガキ」

「何？」

「さつき黎坊も言うておったがのう、貴様らには諦め癖があるようじゃ。無駄、仕方な

いい、でも、だって、しょうがない、便利な言葉じゃなあ？ 言い訳にはピッタリ、誰もが納得できる魔法の言葉じゃ。ハッ、悲嘆が聞いて呆れるわ」

そう言ってフレイは残った3枚の手札を全て手に取った。

1枚は墓地に落とし、残った2枚は、ディスクに差し込む形で。

「そうやって楽な方楽な方へと進めば、成程傷付かん。誰かが成功しても『自分では無理だっただろう』と言い訳ができる」

「何が言いたいでありますか、当然の事を言ってる小官が間違っているとでも？」

「然様。諦観の道を選んだ者に輝かしい未来は無い、昨日より良い今日は無く、今日より良い明日も無い。妥協すればするだけ質は下がるのじゃから当然の話よ。例え一時苦しくて痛くても、困難な目標に向かう事こそ、未来を掴むために必要な対価。」

自分の人生は、いつだって自分の道を自分の手で進んだ者にしか、栄光をもたらさぬ。戯言だと思ふのであれば、諦めなかったワシの、この『フレイヤ』の最後の手を嘯み締めよ！」

墓地に送られたのは『進撃の帝王』。

場に現れたのは2枚の魔法カード。

「ワシは速攻魔法『アクションマジック・ダブル・バンキング』と『アクションマジック・フルターン』を発動！ このターン、自分のモンスターは連続攻撃ができ、更にモン

スター同士の戦闘で発生するダメージを2倍にする！」

「成程、それで『ダムセル』2体を攻撃する算段でありますか！　しかし！　攻撃力の差は800、倍にしても1600！　2回攻撃を受けた所で、受けるダメージはたかが3200！　小官の勝利に変わりはありません！」

アクションマジック・ダブル・バンキング

### 【速攻魔法】

(1)：手札を1枚捨てて発動できる。

自分フィールドのモンスターは、このターン戦闘で相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃できる。

(2)：このカードが墓地に存在する場合、自分メインフェイズに手札から魔法カード1枚を捨てて発動できる。

このカードを自分の魔法&罨ゾーンにセットする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。

アクションマジック・フルターン

### 【速攻魔法】

(1) : このターン、モンスター同士の戦闘で発生するお互いの戦闘ダメージは倍になる。  
(2) : このカードが墓地に存在する場合、自分メインフェイズに手札から魔法カード1枚を捨てて発動できる。

このカードを自分の魔法&罠ゾーンにセットする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動できない。

「バトル！ 『冥帝エレボス』で1番右の『デイストレストランク・ダムセル』を攻撃！

「アビス・オブ・シエディネス！」

地下世界の王者が掌に闇のエナジーを溜め、放出する。

女を括りつけた戦車に一直線に向かう闇の波動は、グリーンフに止める術は無い。

「たかが1600のダメージなぞ！」

「否！ 3200ダメージを受けて貰うぞ！ ジョーカー！」

「おう！ オレは墓地の『スキルサクセサー』の効果発動！ 自分フィールドのモンス

ター1体の攻撃力を、ターン終了時まで800アップさせる！」

「何!?! いつの間に!?!」

「へッ、最初のターンで仕込んでおいたのよ！」

冥帝エレボス：ATK 2800↓3600

「これで攻撃力の差は1600だ！」

『フルターン』の効果！ 戦闘ダメージを2倍にする！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

グリーフ：LP 6300↓3100

闇の波動はより強さを増し、敵のモンスターを呑み込む。

強烈な死の一撃が、今度はグリーフを影の檻の端まで吹き飛ばした。

「そして『ダブル・バンキング』の効果！ モンスターでバトルで破壊した時、もう1度だけ攻撃できるのじゃ！」

「ば、バカなバカなバカなあ！ 何故だ、何故こんな事にい!? あ、有り得ぬ！ イカサマをしたでありますか！ おのれ薄汚いクズめ！」

「自分の格を下げたくなければ黙りなグリーフ。最期の瞬間くらいはキレイな姿でいてえだろ」

「キツツツサマアアアアアアアアアアアアアアアアア！」



『冥帝エレボス』で左の『ディストレスタンク・ダムセル』を攻撃！  
 ブ・シエディネス“！”  
 〃リ・アビス・オ

再び地獄の帝王が黒い波動を放つ。

戦車はその直撃を受け、搭載していた女の死体は愚か、後ろにいたグリーンフごと木っ端微塵に吹っ飛んでいった。

グリーンフの場にある防御札は『直接攻撃を無効にしてドロウにする』罠カードと、相手ターンのメインモンスタースターゾーンでは何の効果も無い血達磨狐のみ。フレイがモンスターカードを引いた時点で、そして『帝国の金脈』で欲しいカードを引いた時点で、運命は決っていたのである。

つまり。

「うっ、ぐっ、あ、あああ、ぬおあああああああああああああああああああああああ  
 ああああああっ!」

錐揉みしながら派手に打ち上げられ、影の檻の天井に叩きつけられた男の、敗北である。

グリーンフ：LP 3100↓0

フレイ&ジョーカー：WIN

グリーフ：LOSE

「確かに強力なモンスターと強力なカードじゃったのう。しかし……」

「横に並んだのは別に強くネエ奴だった、ならそつちを狙うのは当然だ」

「馬力だけの赤ん坊にワシは、いいえ、わたくし達は敗れる弱者ではありませんよ」

「今更取り繕うな婆さん、全員に本性バレてんぞ」

「もう一度言ったら首を蹴り碎きますよ」

「おお、おつかねえ」

☆

「……」

「手札の運に見放されたでございますか。所詮はその程度、定まっていた絶滅に抗つても絶望が待っているだけとご理解頂けたようで幸いです」

6枚の手札が芳しくない事で苦しげな表情をしていたルイン。

それを見て仮面越しに嫌らしく破顔するヴァニティだが、当然誰にもその顔は見えない。

何より、ポーラは静かにアドバイスを1つ送れる程度には状況を絶望視していなかった。

「……ルインさん、私のカードを」

「ん。スタンバイフェイズに墓地の『テイク・オーバー5』の効果発動。墓地からこのカードを除外し1枚ドロー」

味方のいるデュエルに於いて、ターンを跨ぐ効果は意外なメリットやデメリットを呼ぶ。

時に自分のドローが相手に渡ったり、時にデッキに戻して再利用するカードが消えたり。

時に仕込みを相手に渡して展開を補助したり、時に対価を無視できたり。

今回はプラスに働いたようだ。

「！」

「……勝って」

「勿論」

ルインが引いたカードは欲しかったカード。

通れば勝てるが、問題は相手の伏せられたバツクの3枚。『失意のミス』は通常魔法なので無視でき、『灰色の暴風俄か雨』は直接攻撃がトリガーだからまだ良いとして、正体不明の3枚目が曲者だ。

(全ては運次第。あのリバースカードの正体次第で勝敗が決する)

敵の装備魔法の効果で、あの伏せカードを破壊しようとしても墓地のカードで身代わりにされてしまう。事前に除去する事はできない。

つまり自分の悪運が強いか、相手の邪道が全てを踏み砕くかの勝負。それを決めるため、ルインは手札からカードを1枚場に出した。

「『マンジュ・ゴッド』を召喚」

『ぬんー!』

「召喚成功時に効果発動。デッキから儀式魔法『機械天使の儀式』を手札に加える」

マンジュ・ゴッド：ATK 1400

敵に反応は無い。

マストカウンターのタイミングを決めているのか、それとも。

「……迷っていても仕方ない」

「分かってる。破滅と創世のサーキット展開。ポーラちゃんのモンスター使わせて貰う」

「……持って行つて」

「召喚条件は名前の違うモンスター2体。『マンジユ・ゴッド』と『デュアル・ソルジャー』をリンクマーカーにセット。サーキット・コンバイン」

地面に8つの矢印を持つ回路を開き、召喚の手続きを開始する。

銀色のゲートが開き、無数の腕を持つ魔神と風を司る小さな戦士が光となって回路に宿った。

リンクマーカー

L M || 左下・右下

「リンク召喚。出でよ。リンク2『クロシープ』」

『めえ〜』

クロシープ：ATK 700

現れたのは編み物をする大人しそうな羊。攻撃性は無いが、サポート能力は非常に高

い有能なモンスターである。

ここからだ、手順を間違えるな。着地点は決めてある、そこを目指して突っ走れ。その先にある勝利を掴むのだ。

マジユ・ゴッド（効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1400 / DEF 1000

（1）：このカードが召喚・反転召喚した時に発動できる。

デッキから儀式モンスター1体か儀式魔法カード1枚を手札に加える。

クロシープ（リンク・効果モンスター）

リンク2

地属性／獣族

ATK 700

【リンクマーク：左下／右下】

カード名が異なるモンスター2体

このカード名の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードのリンク先にモンスターが特殊召喚された場合に発動できる。

このカードのリンク先のモンスターの種類によって以下の効果を適用する。

- 儀式 : 自分はデッキから2枚ドローし、その後手札を2枚選んで捨てる。
- 融合 : 自分の墓地からレベル4以下のモンスター1体を選んで特殊召喚する。
- S : 自分フィールドの全てのモンスターの攻撃力は700アップする。
- X : 相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力は700ダウンする。

「その程度の雑魚に何ができるのですか、時間の無駄でございます」

「時間の無駄かどうかは後で分かる。儀式魔法『機械天使の儀式』発動！」

もつとだ、あのモンスターに繋げて勝利するにはもつともつと手順を踏まない。

1枚2枚のエースで勝てるなら自分達が負傷する道理は無い。デッキの全リソースを傾け、あのモンスターを討つのだ。

「私は手札からレベル6の『サイバー・エンジェル―弁天―』をリリース！」

契約は結ばれた！ その清廉なる魂は光へと導かれ新たな輝きに転生する！ 儀式

召喚！ 吹き荒れよ！ 『サイバー・エンジェル―韋駄天―！』

『とああああああ！』

地面に刻まれるは契約の魔法陣。そこに6つの炎が灯り、機械仕掛けの天使が起動する。

風を携え、何よりも速く駆け抜ける、天よりの遣いが『クロシープ』の右斜め後ろに降り立った。

サイバー・エンジェル―韋駄天―：ATK 1000

「この瞬間『クロシープ』『弁天』『韋駄天』の効果発動。『韋駄天』の効果でデッキから儀式魔法を、『弁天』の効果でデッキから光属性・天使族を手札に加える。最後に『クロシープ』の効果。リンク先に儀式モンスターが特殊召喚された事で2枚ドロ―して2枚捨てる」

『めえええ〜』

「デッキから『破滅の美神ルイン』と『エンド・オブ・ザ・ワールド』を手札に加える」  
ルインの墓地に『アテナ』と『ヴィクトリカ』が埋葬され、手札が合計4枚増加する。  
儀式と言う手札消費の荒いデッキでありながら手札の枚数を確保する、言うは易く行  
うは難しである事は当然の事、何より「サイバー・エンジェル」の補助能力の高さも目  
を見張るものだ。



サイバー・エンジェル―弁天―（儀式・効果モンスター）

星6

光属性／天使族

ATK 1800／DEF 1500

「機械天使の儀式」により降臨。

（1）：このカードが戦闘でモンスターを破壊し墓地へ送った場合に発動する。

そのモンスターの元々の守備力分のダメージを相手に与える。

（2）：このカードがリリースされた場合に発動できる。

デッキから天使族・光属性モンスター1体を手札に加える。

サイバー・エンジェル―韋駄天―（儀式・効果モンスター）

星6

光属性／天使族

ATK 1600／DEF 2000

「機械天使の儀式」により降臨。

（1）：このカードが儀式召喚に成功した場合に発動できる。

自分のデッキ・墓地から儀式魔法カード1枚を選んで手札に加える。

(2)：このカードがリリースされた場合に発動できる。

自分フィールドの全ての儀式モンスターは攻撃力・守備力は1000アップする。

「どれだけ手札を増やしても無駄でございませう。下名の最強モンスター『レオンソウル・マストリクス』の攻撃力は5000、更にEXデッキから召喚されたモンスター相手には無敵、他の効果も受けず1ターンに1度だけ戦闘破壊も防ぐのでございませう」

「ここで私はポーラちゃんフィールド魔法『化合電界』の効果発動。『ハイドロン・ホーク』を再度召喚」

「……『ハイドロン・ホーク』は、手札を1枚捨てて墓地のデュアルモンスターを蘇生させる効果がある」

「私はその効果を使う。『デュアル・ソルジャー』を墓地から特殊召喚」

デュアル・ソルジャー：DEF 300

墓地に『破滅の女神ルイン』を落とし、再び風使いの戦士がフィールドに戻る。

そしてそのまま風使いはフィールドに残っていた編み物羊と水晶鷹と共に光になり、

回路を起動させるエネルギーに転換された。

「再び現れて。破壊と創世のサーキット。召喚条件はトークン以外のカード名の違うモンスター2体以上。私は『ハイドロン・ホーク』『デュアル・ソルジャー』。そしてリンク2の『クロシープ』をセット」

L M || 上・左下・下・右下

「リンク召喚。射貫け『召命の神弓ーアポロウーサ』」

『ハアッ!』

「このカードの攻撃力はリンク素材の数×800となる」

召命の神弓ーアポロウーサ：ATK ? ↓ 2400

召命の神弓ーアポロウーサ（リンク・効果モンスター）

リンク4

風属性／天使族

ATK ?

【リンクマーカー：上／左下／下／右下】

トークン以外のカード名が異なるモンスター2体以上

このカードの(3)の効果は同一チェーン上では1度しか発動できない。

(1)：「召命の神弓ーアポロウーサ」は自分フィールドに1体しか表側表示で存在できない。

(2)：このカードの元々の攻撃力は、このカードのリンク素材としたモンスターの数×800になる。

(3)：相手がモンスターの効果を発動した時に発動できる。

このカードの攻撃力を800ダウンし、その発動を無効にする。

「無駄でございませぬ。チューナーを3体以上素材にした『レオンソウル・マストリクス』は相手の効果を受けませぬ、攻撃力を下げて効果を無効にする効果は無意味です」

「必要無い」

大熊に乗った女狩人を召喚してもルインの展開は止まらない。

それに効果を使うつもりも無い。このカードはただの繋ぎだ。

「ここでフィールド魔法を交換。『化合電界』から『祝福の教会ーリチューアル・チャー

チ』にチェンジ」

紫電の走る領域から、花が飾り付けられている教会の聖堂へ。

『テイク・オーバー5』の効果で引けたこのカードのお陰で勝利へのラインが整った。このまま突き進む。

必要なのは、残り4手。

『リチュアーアル・チャーチ』の効果発動。手札の魔法カードを1枚捨てる。そしてデッキから光属性の儀式モンスターか儀式魔法をサーチする。私が選択するのは天使の時の私」

墓地に『ハーピイの羽根帚』が呑み込まれ、デッキから新たに『破滅の天使ルイン』が手札に加わる。

今回はこのカードを儀式召喚する必要は無い、ただのレベル合わせだ。

「もう1つの効果。1ターンに1度。墓地の魔法カードをデッキに戻した枚数分のレベルを持つ天使族モンスターを蘇生できる。私は7枚のカードをデッキに戻す」

「何、7枚?！」

「ポーラちゃんが墓地に魔法カードをいっぱい貯めてくれたお陰」

「……後で返してね」

祝福の教会ーリチュアーアル・チャーチ

## 【フィールド魔法】

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：手札から魔法カード1枚を捨てて発動できる。

デッキから光属性の儀式モンスター1体または儀式魔法カード1枚を手札に加える。

(2)：自分の墓地の魔法カードを任意の数だけデッキに戻し、戻した数と同じレベルを持つ、自分の墓地の天使族・光属性モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

破滅の天使ルイン（儀式・効果モンスター）

星4

光属性／天使族

ATK 1700／DEF 1000

「エンドレス・オブ・ザ・ワールド」により降臨。

(1)：このカードのカード名は、手札・フィールドに存在する限り「破滅の女神ルイン」として扱う。

(2)：このカードが儀式召喚に成功した場合に発動する。

このターン、このカードは1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃でき

る。

(3) : このカードが墓地へ送られた場合、自分フィールドの儀式モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターが自分フィールドに表側表示で存在する限り、自分の儀式モンスターの攻撃宣言時に相手はカードの効果が発動できない。

2人のディスクが光を放ち、墓地から『光神化』『死者蘇生』『デュアルスパーク』『デュアルスパーク』『スーペルヴィス』『ハーピィの羽根帚』『化合電界』が吐き出される。ポラは自分のカードである5枚のカードをルインに差し出し、ルインは自分の2枚を合わせてデッキに差し込んだ。

これで彼女達の墓地から魔法カードが殆ど消えた、もう効果は使えない。

「来て『アテナ』」

アテナ : ATK 2600

7枚のカードを対価に、先程『クロシープ』で墓地に落とした槍と盾を持つ天使が復活する。

残り3手。

『アテナ』の効果発動。自分以外の天使族を場から墓地に送る。そして墓地の天使族を特殊召喚する。『アポロウーサ』を墓地へ」

「何!?! 折角召喚したリンク4をそのまま墓地に!?!」

「カモン 『勇気の天使ヴィクトリカ』」

勇気の天使ヴィクトリカ：DEF 800

『アテナ』のもう1つの効果発動。天使族モンスターが特殊召喚された時。相手に600のダメージを与える」

「装備魔法 『タイマン・フェイク』の効果により、下名は装備モンスターの守備力以下の効果ダメージを受けません。これはダメージを0にする効果では無いため 『レオンソウル・マストリクス』の効果の影響を受けず、よって3000以下のバーンは消滅致しませぬ」

地面に魔法陣で穴を開け、そこに熊に乗った女狩人を落とす。穴の中から入れ替わりに現れたのは、ギリシャ風のローブをまとった天使の子供。その天使から光のエネルギーを受け取った戦乙女は槍の穂先から雷撃を放つが、敵将が腕を一振りしただけで搔



き消された。

これで後2手。

「これで最後。儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』を発動。レベルが同じになるよう魂を捧げ儀式召喚を行う。私はフィールドの『サイバー・エンジェル―韋駄天―』と手札の『破滅の天使ルイン』をリリース！」

再び大地に契約の魔法陣が刻まれる。

円形に10の燭台が幻影のように現れ、そこに風を操る天使と幼い頃の女神が炎となつて灯りゆく。全ての蠟燭に火が点いた時、地面に刻まれた複雑怪奇な魔法陣は淡いマゼンタ色の光を放ち出した。

「再び契約は結ばれた！ その清廉なる魂達は破滅の闇へと導かれ新たな輪廻に転生する！」

10の炎は中央に集まり、より大きな炎に固まる。

赤は白に、バラバラは一塊に。契約を以て複数の魂は神に捧げられ、大いなる女神に変生した。

「儀式召喚！ これが私の終焉にして頂点！ 『破滅の美神ルイン』！」

破滅の美神ルイン：ATK 2900

フードはより長く。

ドレスは更に豪華に。

錫杖はもつと強く。

裁定者の降臨を讃えるための闇を祓い、世界を破壊と創世を以て愛する女神がデュエリストとしてそこに降り立つ。

「ほう、貴様自身の召喚と。しかし攻撃力はたかが2900、我が『レオンソウル・マストリクス』から見ればクズ同然でございます」

「私自身を対象に天使の私の効果発動。儀式モンスターが攻撃する時。相手は効果を出せない。そして『韋駄天』の効果。私のフィールドの儀式モンスターは攻守が1000バンブアツプする」

破滅の美神ルイン：ATK 2900↓3900

魂の残り香となった小さな女神と風の天使が、フィールドに進み出たルインに力を注ぐ。

赤い杖を握り締める手に力が入り、全身を青いオーラが満たした。

「これで終わらせる。バトル」

「……ルインが攻撃宣言をすれば、貴女はカードを発動できない。……何かするなら今だけ、どうする？」

「ナメるなあ！ たかが攻撃力3900の雑魚モンスター、攻撃する権利すら与えませぬ！ 永続罠『ヴァニシング・デスバレット虚無怨霊呪殺界限』発動！」

「！」

「相手フィールドに攻撃力が上がったモンスターが存在する時、その数値を全て打ち消す！ 更に相手モンスター全てからその数値を奪い、合計値分だけ下名のライフを回復致します！」

破滅の美神ルイン：ATK 3900↓2900↓1900

アテナ：ATK 2600↓1600

勇気の天使ヴィクトリカ：ATK 1400↓400

ヴァニティ：LP 4000↓7000

一方で黙ってやられるヴァニティでは無かった。周囲に渦巻くは怨霊。ヒヒヒヒヒ、と悍ましい呻き声を出しながらルイン達を取り巻き、その力を削ぎ落とした。崩された

勢いを吸い取った靈魂達は、王に傳く雑兵のようにヴァニティへとそれを献上し彼女の傷を癒していく。

「これで下名のライフは7000！ 更に『虚無怨霊呪殺界限』のもう1つの効果！ 相手モンスターは下名が指定した順番で下名が選んだモンスターを攻撃せねばなりません！」

ヴァニシング・デスパレート  
虚無怨霊呪殺界限（オリジナル）

【永続罫】

このカードの（1）の効果の発動に対し、お互いのプレイヤーはカードの効果が発動できない。

（1）：1ターンに1度、相手フィールドに元々の攻撃力より高い攻撃力を持つモンスターが存在する場合、そのモンスターを対象に発動できる。

そのモンスターの攻撃力は元々の数値となり、変化した数値分だけ相手フィールドのモンスター全ての攻撃力をダウンする。

その後、この効果でダウンした数値の合計値分だけ自分のLPを回復する。

（2）：このカードが存在する限り、相手がどのモンスターで攻撃するか、及びどのモンスターを攻撃するかはこのカードのコントローラーが決める。

「これで『クロシープ』で攻撃させれば、貴様らは5000ダメージ！ 紛う事無き惨敗にございます！ やはり邪神様の前には人間も精霊も有象無象！ 取るに足りぬ存在にてえ！」

現在、安楽椅子で編み物をしている羊の攻撃力は0。『レオンソウル・マストリクス』に攻撃すれば5000の反射を受け、2人は負ける。それは正しい。

だが、まだ1手足りない。

あれを倒して勝利するための最後の布石は、これからだ。

「ん」

「……………うん」

「さあ、貧弱な貴様自身で、我が栄光の略奪皇帝『虚栄心帝』レオンソウル・マストリクスを攻撃させます！ 死ねえ！」

「……………まだ終わらない。……………最後、使って」

「OK。私は墓地の罠カード『トランザクシオン・ロールバック』の効果発動」

「この局面で墓地から罠を!?!」

「ライフを半分払いこのカードを墓地から除外」

「……………私達の墓地にある通常罠1枚と、同じ効果を得る」

ポーラ&ルイン：LP 150↓75

地面に紫色の魔法陣が開き、その中から1枚の赤いカードが飛び出る。

ポーラとルインの生命力を吸い取った罠カードは、別のカードに絵柄を変えた。

沼地から飛び出す腕がカードを掴もうとする、残酷なイラストの1枚へと。

「私が選ぶのは『ハイレート・ドロ』！」

「……このカードは自分フィールドのモンスターを任意の数破壊し、その半分の枚数だけカードをドロ〜できる！」

「私は『アテナ』と『ヴィクトリカ』を破壊！　そしてカードを1枚ドロ〜する！」

「たかが1枚ドロ〜した程度で何ができる！　10倍にも開いたこのライフ差、いい加減に敗北を認めろ！　下名に啜られるための命乞いをしなさい！」

確かに場に残ったモンスターは『破滅の美神ルイン』のみで、攻撃力は1900に落ちた。

ルインがドロ〜したカードは『時械神ハイロン』、この状況下では使えないし、使っても意味が無い。

だが。

「……それはどうかかな？」

狙いはそつちじゃない。

「ここで破壊された『勇気の天使ヴィクトリカ』のモンスター効果発動！」

「何!？」

「……このモンスターが破壊された時、墓地から他の天使族を除外し、同じレベルの天使族をデッキから手札に加える事ができる」

「私は墓地から『破滅の天使ルイン』を除外！ 天使状態の私のレベルは4！ よつて

デッキからレベル4の天使族を手札に加える！」

「レベル4の天使族……、っ！ まさか貴様！」

「そのまさか！」

既にバトルフェイズに入っている中でサーチするのなら、手札誘発を狙うのが定石。

手札から効果を発動できる天使族の中で、レベル4かつこの局面で有用なモンスターは1体しかない。

「選択するのは『オネスト』！」

「……このカードは光属性モンスターに、相手の攻撃力を加える。……攻撃力が5000でも10000でも関係無い」

「お、おのれえ！」





錫杖が放つ光の軌跡が満月のように円を描く。過たず光輪は鎧の將軍を捉え、しかし將軍は手にした大剣でそれを悠々と受け止めた。

後逸した衝撃波が仮面女を襲うが、致命傷には程遠い。

「装備魔法『タイムマン・フェイク』の効果により、『レオンソウル』は1ターンに1度破壊されませぬ！ 『オネスト』の効果はこのターンのみ、次のターンで最後でございます！」

「……次のターンは、無い」

「寝言を……」

「神化した私自身の効果。儀式モンスターだけを素材に儀式召喚されている場合。私は2回攻撃できる」

「何い!？」

トランザクション・ロールバック

【通常畏】

このカード名の(1)(2)の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。

(1) : LPを半分払い、「トランザクション・ロールバック」以外の相手の墓地の通常畏カード1枚を対象として発動できる。

この効果は、その通常罫カード発動時の効果と同じになる。

(2)・墓地のこのカードを除外し、LPを半分払い、「トランザクション・ロールバック」以外の自分の墓地の通常罫カード1枚を対象として発動できる。

この効果は、その通常罫カード発動時の効果と同じになる。

ハイレート・ドロー

#### 【通常罫】

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分フィールドのモンスターを2体以上任意の数だけ選んで破壊し、破壊したモンスター2体につき1枚、自分はデッキからドローする。

(2)：このカードが墓地に存在する場合、相手メインフェイズに、自分フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを破壊し、このカードを自分フィールドにセットする。

この効果でセットしたこのカードはフィールドから離れた場合に除外される。

勇気の天使 ヴィクトリカ (効果モンスター)

星4

光属性／天使族

ATK 1400 / DEF 800

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが特殊召喚に成功した場合に発動できる。

手札からレベル5以上の光属性モンスター1体を特殊召喚し、自分はそのモンスターの元々の攻撃力分のLPを失う。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力はターン終了時まで倍になる。

(2) : モンスターゾーンのこのカードが破壊された場合、自分の墓地からこのカード以外の天使族モンスター1体を除外して発動できる。

除外したモンスターとレベルが同じ天使族モンスター1体をデッキから手札に加える。

破滅の美神ルイン(儀式・効果モンスター)

星10

光属性／天使族

ATK 2900 / DEF 3000

「エンドレス・オブ・ザ・ワールド」により降臨。

(1) : このカードのカード名は、手札・フィールドに存在する限り「破滅の女神ルイン」として扱う。

(2) : 儀式召喚したこのカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの儀式モンスターは効果では破壊されない。

(3) : 儀式モンスターののみを使用して儀式召喚したこのカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。

(4) : このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合に発動できる。

そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。

再び錫杖に光が灯る。

彼女の儀式素材になった『サイバー・エンジェル―韋駄天―』と『破滅の天使ルイン』はどちらも儀式モンスター。再攻撃の条件は揃っており、また『オネスト』によるバフはターン終了時まで続く。つまり今度は破壊を防げないという事だ。

「私自身でもう1度攻撃！ 破滅のクワルナフ・マンダラ！」

「……今度は、破壊を防ぐ事はできない！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」



ヴァニテイ：LP 3200↓0

爆発によって仮面が砕け、ヴァニテイが吹き飛ぶ。その内から醜く不細工な、否、見るに堪えない人間では有り得ない歪んだ顔を晒しながら。  
即ち、勝敗が決したのであった。

ポーラ&ルイン：WIN

ヴァニテイ：LOSE

「……何とかなった、ぶい」

「有難う。1人じゃ勝てなかった」

「……そう言えば頑なに読点を使わないけど、何かの呪い？」

「ただのポリシー」

「……そう」

「ん」

☆

「ハッ、敗北宣言かあ?」

『シャファイアタン』は倒せない。桜はハッキリとそう言った。

確かにあのモンスターは無敵だ。

まずこちらの効果は効かず、リリースできない。

相手モンスターの数だけ攻撃を追加でき、バトルしたモンスターは墓地に消えてライフを大きく減らす。

カオス・オーバーレイ・ユニットを補充する効果もあり、下手な壁モンスターは寧ろ逆効果だ。

更に戦闘破壊されず、戦闘ダメージは効果ダメージに変える装備カードもある。

そのバーンは永続魔法の効果で100に固定されてしまうし、除外された敵のカード効果でバーンダメージはオーバーレイ・ユニットを補充する効果とされてしまう。

ハッキリ言おう、このモンスターを倒せる方法は星の数程もあるカードを有するデュエルモンスターズでさえ殆ど無い。

「尚早に過ぎるぞ、肉達磨」

「アア?」

だが、桜は笑みを崩さない。

「私は確かにそのモンスターを倒す事はできないと言った。だが……、貴様を倒せないとは言っていないぞ?」

それならそれで、方法はいくらでもあるのだから。

「行くぞ? 私はまず『スポーア』を召喚!」

『ぼあく』

「私が植物族のチューナーモンスターを召喚した時、墓地の『ダーク・ヴァージャー』は攻撃表示で特殊召喚できる!」

スポーア：ATK 400

ダーク・ヴァージャー：ATK 0

胞子を模した青緑色の丸いモンスターと、双葉に目の生えた薄気味悪いモンスターが並び立つ。

ステータスこそ貧弱だが、それを効果で補うのが植物族。桜は既に、それをを用いて勝利するルートを見出していた。

「続けて永続魔法『超栄養太陽』を発動! 『スポーア』をリリースし、デッキから『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚!」



ローンファイア・ブロッサム：DEF 1400

「自身をリリースして効果発動！ デッキから『バラガール』を特殊召喚！」  
『はあああ！』

バラガール：DEF 600

次々と現れる植物族達。この展開力こそ植物族の力、例え焼き払われようと墓地に根を張り手札から種を飛ばし、幾らでも繁茂していく。

「私はレベル2の『ダーク・ヴァーヂャー』にレベル3の『バラガール』をチューニング！

万象の命を吸う黒き魔界の花園にて、今こそ花開け白亜の姫君！」

☆2+☆3=☆5

「シンクロ召喚！ 目覚めよ、『ガーデン・ローズ・メイデン』！」

『ハッ！』

『ガーデン・ローズ・メイデン』の効果発動、デツキから『ブラック・ガーデン』を手札に加える！」

ガーデン・ローズ・メイデン：ATK 1600

星と輪が召喚のコールを産み出す。現れたのは茨の繭、そこが裂けて中から髪も肌もドレスも真っ白な令嬢が姿を露わにし、デツキから反対色となるフィールド魔法を手札に加えさせる。

終わらない、もつと回せ。相手が『増殖するG』を使っていたら、デツキを全て引き切るくらいの勢いで。

ガーデン・ローズ・メイデン（シンクロ・効果モンスター）  
星5

闇属性／植物族

ATK 1600 / DEF 2400

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1) : このカードが特殊召喚した場合に発動できる。

自分のデッキ・墓地から「ブラック・ガーデン」1枚を選んで手札に加える。

(2) : 墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の、「ローズ・ドラゴン」モンスターかドラゴン族Sモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

ブラック・ガーデン

【フィールド魔法】

(1) : 「ブラック・ガーデン」の効果以外でモンスターが表側表示で召喚・特殊召喚される度に発動する。

そのモンスターの攻撃力を半分にする。

その後、そのコントローラーは、相手のフィールドに「ローズ・トークン」(植物族・

闇・星2・攻/守800)1体を攻撃表示で特殊召喚する。

(2) : フィールドの全ての植物族モンスターの攻撃力の合計と同じ攻撃力を持つ、自分の墓地のモンスター1体を対象として発動できる。

このカード及びフィールドの植物族モンスターを全て破壊する。

全て破壊した場合、対象のモンスターを特殊召喚する。

「私は墓地の『スポーア』の効果発動、『イービル・ゾーン』1体を除外してこのカードを特殊召喚！そしてレベルが1アップする！」

『ぼほ〜あー！』

スポーア：ATK 400/☆1↓2

「レベル5の『ガーデン・ローズ・メイデン』にレベル2となった『スポーア』をチューニング！」

召喚したばかりのモンスターを星へと分解し、綿胞子のモンスターを緑の輪へと再び組み替える。

5つの星は光の柱となり、今一度ゲートとなって世界にその身を晒した。

☆5+☆2=☆7

「シンクロ召喚！ レベル7、『瓔珞帝華—ペリアリス—！』」

『ふうふうう、はあっ！』

「『ペリアリス』の効果発動！ 1ターンに1度、私の墓地からレベル5以上の植物族モンスターを特殊召喚できる！ 蘇れ、『ギガプラント』！」

『ギイイ！』

「更に『ペリアリス』は自身以外の仲間の植物族モンスター1体につき攻撃力が400アツプする！」

瓔珞帝華—ペリアリス：ATK 1600↓2000

ギガプラント：DEF 1200

瓔珞帝華—ペリアリス（シンクロ・効果モンスター）

星7

光属性／植物族

ATK 1600／DEF 2400

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の（2）の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードの攻撃力は、このカード以外の自分フィールドの植物族モンスターの

数×400アップする。

(2)：自分メインフェイズに発動できる。

自分の手札・墓地から「瓔珞帝華―ペリアリス」以外のレベル5以上の植物族モンスター1体を選んで守備表示で特殊召喚する。

豪華な草花の法衣の女性、そして巨大な人食い植物を並べ終わり、桜は浅く呼吸を整え手札を見る。

準備完了、後はこの3枚のカードとデッキを駆使して、奴を倒す。

「ケツ、雑魚を何匹並べてもワシの『シャフィアタン』には勝てん！ 貴様らは所詮、雑草と同じ！ 群れるだけの無能！ ただ鬱陶しいだけの無価値な命！ 少しでも知恵があるのならワシらの手を煩わさせず、自分で自分を引っこ抜いて火の中に飛び込まんか！ いろいろいいいいいいいいいい！！」

「フィアー、その言葉には2つ物申すぞ」

「ふざけんなあ！ ワシの言葉に異を唱えるなんざ認められるワケがあるかあああああああああああつ！」

「いいや言う。1つ、雑草という植物は無い。人間が十把一絡げに呼称しているだけだ」  
「だから何じゃあ！ 所詮雑草は雑草、無意味に違いないわあ！」

「2つ、我々は無価値でも無能でも無い。それを今から証明してやろう、貴様の命でない！」

ジャキン、とディスクを振った反動で右端のフィールドカードゾーンを開く。衝撃ス  
イツチが入り顔を覗かせたその場所に、桜は先程サーチしたカードを置いて発動させ  
た。

「フィールド魔法、発動！ 『ブラック・ガーデン』！」

ガチン、とディスクが閉まると同時に生い茂るは暗黒の茨。

ここはモンスターの命を糧に花開く魔界の花園、敵も味方も全てが花の養分になる悪  
夢の世界である。

「ここで私は先に発動していた『無謀な問伐』の効果により、『ギガプラント』を再召喚  
！」

『ウ、ウウ……』

「この瞬間フィールド魔法『ブラック・ガーデン』の効果！ モンスターが召喚された時、  
攻撃力を半分吸い取り、相手フィールドに『ローズ・トークン』を攻撃表示で特殊召喚  
する！」

ギガプラント：ATK 2400 ↓ 1200

ローズ・トークン：ATK 800

養分になるのは同じ植物でも例外じゃない。

張った根から力を吸われ、黒いバラの養分として徴収されていく。

どんな命でも片端から力を奪われる世界に、ファイアーはせせら笑った。

「ハッ、何が証明じゃ！ このフィールドは貴様らそのもの！ 目的をでっち上げ、そのために何でも利用して踏み潰す、人間の醜さの生き写しよお！」

「確かに、人間は醜い。自分がとことんまで可愛く、他人の不幸で金を得られるならどこまでも不幸にする。それは否定しない。しかし貴様らのように傷付けるだけの連中に言われるのは筋が通らん。」

『ギガプラント』の効果発動！ 墓地に存在する『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚する！ そして『ローズ・トークン』もまた特殊召喚だ！」

ローンファイア・ブロッサム：ATK 500 ↓ 250

ローズ・トークン：ATK 800

「そんなモンスターを何匹呼んでも無駄じゃあ！」





ローズ・トークン：ATK 800

黒薔薇の龍すらも絡め捕り、その養分とする花園。次々に咲き乱れる不気味な人食い花を見ながら「もう少し」と桜は残った手札の内の1枚を切った。

再びディスクの衝撃スイッチを入れてフィールドカードゾーンを開くと、そこに置いてあったカードを指先で取って別のカードと入れ替えた。途端に黒い茨まみれだった周囲は、白バラが咲き誇る中庭へと姿が変わっていく。

「ここで私は『ブラック・ガーデン』を墓地に送り、フィールド魔法『ホワイト・ローズ・クロースタ白薔薇の回廊』を発動」

「ハア？ フィールド魔法を切り替えて何になるつちゅーんじや！ 貴様の手札は後1枚、その1枚で絶望を跳ね除けられるとでも言うんかあ？ ナメるな雌豚が！ ワシの『シャファイアタン』は無敵じゃああああああああああああああああ！」

「確かにそのデカブツは強い、倒しようが無いだろう。私が今発動した『白薔薇の回廊』も、現時点で使用できる効果は無い」

白薔薇の回廊

【フィールド魔法】

このカード名の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1) : 自分フィールドにモンスターが存在しない場合に発動できる。

手札から「ローズ・ドラゴン」モンスターまたは植物族モンスター1体を特殊召喚する。

(2) : 自分ドローフェイズのドロー前に、カードの種類(モンスター・魔法・罫)を宣言して発動できる。

自分のデッキの一番上のカードをお互いに確認し、宣言した種類のカードだった場合、このターン中、以下の効果を適用する。

●自分フィールドのレベル7以上のSモンスターの攻撃力は1000アップする。

『白薔薇の回廊』はドローフェイズか自分の場にモンスターがいない時にしか発動しない。既に『ブラック・ローズ』と『ペリアリス』が存在するため、この条件は満たせないのだ。

だがそれを気にする事無く、桜は両手を前に突き出す。

「私はレベル7の『ブラック・ローズ・ドラゴン』と『ペリアリス』でオーバーレイ！」  
「ほう、シンクロモンスター同士でエクシーズか！」

「2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！ 清廉なる森の守護者よ、そ

の羽ばたきで岩も山も越えて蒼穹へ飛び立て！」

☆7×☆7＝★7

「エクシーズ召喚！ 解き放て、『森羅の鎮神しんら オレイア』！」

『ケエエエン！』

森羅の鎮神 オレイア：ATK 2800

黒薔薇の龍と豪華な葉のドレスを着た貴婦人を素材に、生い茂る葉のような翼を広げた鳥の姿をした守護神が現れる。

攻撃力はランク7で2800と、森羅の中でも高い数値を誇る強力なモンスターだ。「墓地の『バラガール』のモンスター効果を発動、自分フィールドに植物族モンスターが存在する場合、このカードを手札に戻す事ができる。」

そしてこの『バラガール』を墓地に送り、墓地から『にん人』を特殊召喚する『オラアッ！』

にん人：ATK 1900

『オレイア』の効果発動。『にん人』を墓地に送り、そのレベル分だけデッキの上のカードを確認し並べ替える事ができる。『にん人』はレベル4、よって入れ替える事ができるカードは4枚だ」

指を細かく動かし、一気に4枚のカードをデッキから抜き取る桜。それらを一瞥した後、1番上にあたるカードだけを4枚目に移してデッキに戻した。

「そして『オレイア』のもう1つの効果を発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使い、デッキの上から3枚カードを確認。その中にある植物族モンスターを全て墓地に送り、その枚数までフィールドのカードを手札に戻す事ができる」

桜は再びデッキからカードを引き抜き、今度はそれを開示する。

見せたカードは3枚、『六花のしらひめ』『樹冠の甲帝ベアグラム』『イービル・ゾーン』だ。

「モンスターは2体、よって『ローズ・トークン』と『サタニズム・マキャベリアニズム悪魔崇拜の鉄拳恫喝工作』を手札に戻す」

「しかしトークンは手札に戻りません、ここで消滅となります」

にん人（効果モンスター）

星4

闇属性／植物族

ATK 1900／DEF 0

「にん人」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

（1）：このカードが墓地に存在する場合、手札及び自分フィールドの表側表示モンスターのほか、「にん人」以外の植物族モンスター1体を墓地へ送って発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

森羅の鎮神 オレイア（エクシーズ・効果モンスター）

ランク7

闇属性／植物族

ATK 2800／DEF 2500

レベル7モンスター×2

1ターンに1度、自分の手札・フィールド上の植物族モンスター1体を墓地へ送って発動できる。

そのレベル分だけデッキの上からカードを確認し、好きな順番でデッキの上に戻す。

また、1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。自分のデッキの上からカードを3枚までめくる。

その中に植物族モンスターがあつた場合、それらのモンスターを全て墓地へ送り、その数までこのカード以外のフィールド上のカードを選んで手札に戻す。

残りのカードは好きな順番でデッキの下に戻す。

ふしゅつ、と気の抜けた音がして綺麗さっぱり消えて無くなる黒薔薇のクリヤー、そして装備状態だった罠カードもディスクが弾き出して手札に押し戻す。

それを見てファイアーは鼻で嗤った。

「それがどうしたあ？ 貴様の手札は残り1枚。ワシのフィールドに『ローズ・トークン』を展開してそれ越しに殴るつもりなんじゃろうが、ワシのライフは5000！ 貴様の場には攻撃力2800のモンスターが1体いるのみ！ 貴様に勝機など最早無い、悪足掻きを試してみつともないと思わんのか？ アア？」

「思わぬ！」

「はんつ、これだから下等種は！」

「私は『エクシーズ・リベンジ』を発動！ 相手のオーバーレイ・ユニットを1つ奪い、墓地からエクシーズモンスターを蘇生させる！」

「かあああ！ これだから無能精霊は！ 『シャファイアタン』に貴様の効果なぞ通じんわ！」

桜の発動した魔法カードから光が放たれ、墓地からモンスターが1体蘇生する。

そこに巨大な邪龍の前に並んでいた結晶の1つが飛び込み、周囲を旋回する光の宝珠と化した。

効果の成立がされたのである。

「何?！」

「『シャファイアタン』は確かに効果を受けない、それは事実だ」

「しかし『エクシーズ・リベンジ』はオーバーレイ・ユニットに干渉する効果です、そしてモンスター自身の耐性はオーバーレイ・ユニットには適用されません。何故なら、オーバーレイ・ユニットはそのモンスターではなく、『どこでもない空間にある不随物』だからです！」

「ンだとお!！」

「蘇れ、『エクソシスター・ジブリーヌ』！」

エクソシスター・ジブリーヌ：ATK 1400/ORU 0↓1



エクシーズ素材はその扱いとしては魔力カウンターや残存効果のそれに近い。『エクシーズ・リベンジ』は直接オーバーレイ・ユニットを奪い取るため、『マスキュラマム・シャファイアタン』が持っている。相手の効果を受けない。効果では防御できないのだ。

### エクシーズ・リベンジ

#### 【通常魔法】

相手フィールド上にエクシーズ素材を持ったエクシーズモンスターが存在する場合、自分の墓地のエクシーズモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを特殊召喚し、相手フィールド上のエクシーズ素材1つを、選択したモンスターの下に重ねてエクシーズ素材とする。

「エクシーズ・リベンジ」は1ターンに1枚しか発動できない。

「おんどれえ、ワシを虚仮にしおつて！ 許さんぞ貴様ら！ そのハラワタと目ん玉をカラスの餌にしてやらああああああああああああ！」

「やれるものならやってみる！ その時に貴様が生きていたらな！ 私は『エクソシスター・ジブリーヌ』のモンスター効果を発動！ オーバーレイ・ユニットを1つ使い、こ

のターン自分のエクシースモンスタアの攻撃力を800アップさせる！」

エクソシスター・ジブリーヌ：ATK 1400↓2200/ORU 1↓0

森羅の鎮神 オレイア：ATK 2800↓3600

予め墓地にいた銃使いの退魔師の力を借り、緑の霊長共々強化が入る。  
だが。

「足りん足りん足りん、足りねえんだよおお！ それでワシに勝てると思うてか、莫迦にするなああああああああああ！」

そう、これでは攻撃力が足りないのだ。

『ローズ・トークン』の攻撃力は800、ファイアのライフは5000。

『ジブリーヌ』と『オレイア』がそれぞれ攻撃しても合計4200ダメージしか与えられず、ファイアのライフを削り切れない。半端に攻撃力を持っているせいでライフが800残ってしまうのだ。

「次のワシのターンで『シャフィアタン』が攻撃して貴様らの雑魚モンスタアは全滅、残りライフ200の貴様らはその後の直接攻撃で死ぬ！ 分かったらとつととターンエンドせんか、時間の無駄じゃあああああああああ！」



「……は？」

「貴様、何を呆けている？ 目の前で墓地に送った筈だぞ、オーバーレイ・ユニットとしてな？」

「な、あ？ は？ あ？」

『『ブラック・ローズ・ドラゴン』の攻撃力は2400、『ローズ・トークン』との攻撃力の差は1600だ』

「ダメージの合計は1400と2800、そして1600で……5800ですね」

「な、あ、ああああ……!?!」

白い令嬢の手によってフィールドに舞い戻るは、黒と赤の翼を持つ薔薇の龍。

足りない分を足せない。

なら足りない分を補えば良い。

それだけの単純な話だ。

倒せないモンスターがいるのなら倒さなければ良い。

倒せるモンスターを用意するもよし。

無理矢理倒すもよし。

デュエルモンスタアのカードは星の数程もある。馬鹿正直に真正面からの殴り合い

しかしない理屈は無いだ。

「バトルだ！」

「あ、有り得ねえ……、こんな、こんな事が!？」

『森羅の鎮神 オレイア』で1体目の『ローズ・トークン』を攻撃！

// ディープグリーン

ン・エコーバースト!!」

「ぐおおおおおおおおお！」

ファイアー：LP 5000↓2200

「続けて私めの『エクソシスター・ジブリーヌ』でも攻撃致します！」

// マズルストリー

ム・エクソシスム!!」

「ぎいいいいいいいいいっ！」

ファイアー：LP 2200↓800

緑色の衝撃波と聖なる銃撃が黒薔薇の魔獣を打ち倒し、ファイアーのライフを大きく削る。



「申し訳ございません、あのような状況で最初のターンを渡してしまつて」

「構いませんよ、後手が不利なのは世の常です」

「いいえ、我が身の招いた不徳。次があれば絶対に——」

「次こそは、このような無駄に痛い思いをするデュエル以外で組みたいものです。デュエルは戦いの儀であり娯楽でもあるのですから」

「……そうですね、その通りです」

「ええ。何にせよ今は、勝利の美酒に酔いましょう」

☆

決着。

ラーズの部下は悉く打ち破られ、今度こそラーズ独りが邪神を守る最後の砦となつた。

いよいよ、黎達が邪神へと王手をかけられる前まで来たのである。

その事を理解した黎とラーズは同時に顔を歪ませた。

片や勝利が見えた希望による希望で。

片や不甲斐無い他の護衛達に対する憤怒で。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



STORY 96 : 「わたしは君を死なせないためにここに  
いるんだ」

SIDE : 黎

ヴァニティ、ファイアー、グリーンフが黒い塵となつて消えていく。散つた塵は風に乗つて空へ、という事は無くより細かく砕けて目に見えなくなつていった。

残りライフは1あれば敗北にならない、とは誰が言つた事だったか。漫画版のアストラルが『ケインズ・デビル』と『アベルズ・デビル』の登場時にそんな感じの事を言つていた気がする。

故に。

フレイ&ジョーカー : LP 100

ポーラ&ルイン : LP 75

桜&アテナ : LP 200

例え瀕死の重傷であろうと、彼女達が勝利した事には変わらないのだ。

「どうだ、ラーズ。お前の部下は全滅したぞ」

「小癩な……」

「あいつら強いだろ？ 特にあそこの2人は俺に勝った奴だぜ？」

新しい部下を作らない所を見るに、どうやらそう簡単に量産できるものではないらしい。

然るに、最早奴の側の戦力は奴自身しかない。ラーズさえ倒せば邪神に手が届く。やつとだ、漸く俺はチエックメイトの幻覚を見る事ができるくらいまで駒を進められたんだ。

「……だが」

「あ？」

「此度は横槍は入らぬ、貴様に助力する異世界の猛者はここには来れぬぞ」  
「っ」

クツソ、痛い所を……。

エンヴィー、スロウス、グラトニー、ラストを倒せたのは、正しく違まじう世界の主人公の力を借りたからだ。彼らの力が無ければ俺は勝てなかつた事は確かだろう。

そしてそれができたのは護衛連中が違う次元に逃走したからだ。次元の歪みもたらした幸運、或いは世界の修正力や宇宙意志とも呼べる何かのお陰だった。言うなれば、世界そのものが俺の味方になってくれた。

一方でここは異世界とはいえ純粹な精霊界……、元々人間界と繋がりのある別世界である。ここに違う次元の何某がやって来れる理屈は存在しない。

そしてその悪条件の上で戦わなければならないのは、7人いた護衛の中で最強の男。「そして、連中も大きく負傷している。最早戦力にはなるまい」

フレイトとジョーカーは腹から血を流している。あんな状態でラースと戦うために組んで貰う？ 鎧袖一触も良い所だ。

ポーラとルインも負傷の度合いが酷い。大量のダメージを受けて吹っ飛んだ上にライフも1番少ない、立っているだけで偉い。

桜とアテナ、こちらも酷い有様だ。龍のブレスをしこたま浴びて、鎧も盾も焦げている。あの状態で戦えなんて、俺には言えないな。

つまり俺は誰の力も借りず、最強の護衛ラースと1対1で戦って勝たねばならないという事である。

「……………」

心を鎮める。

だから何だと自問自答する。

最初から俺は1人だ。

誰かを巻き込む事なんて最初は想定していなかっただろうに。

ただ、そう、世界そのものと利害が一致したから、強力な援軍がいてくれただけ。

彼らの厚意を利用した化物が、最後まで都合の良い形で戦えるワケが無い。

「それでも我と戦うと申すのだな、「騎士」の魂よ」

「逆に訊くが、俺がテメエらとの戦いで1度でも逃げの選択肢を取った事があつたか？」

「ククカハハハハハ、結構。その蛮勇を以て我と敵対する対価と見做す」

なら刺し違えてでも、ここでラースを斃す。

そして死体となろうと邪神を討ち、都を取り戻す。ついでに世界も救う。

俺の本来の目的はそれだ。ならそれ以外は余分であり、捨てて構わないものでしかな

い。

仲間も。

未来も。

命も。

希望も。

明日も。

全てくれてやる。代わりにお前らの全てを食い千切つてやるよ。

化物は化物らしく、別の化物と食い合つて共倒れしてやろうじゃねえか。

「ラース、辞世の句を用意しておきな」

「生意気な、なら貴様には断末魔すら無い終焉をくれてやろう」

精霊の宝玉を一つ取り出し、デッキに加工する。

それをデュエルディスクに迷いなく差し込み、ブレードを展開させた。

「行くぞ！」

「返り討ちだ！」

「ちよつと待ったあー！」

とんつ、と軽快な音がして、神殿から誰かが飛び出して来た。

軽やかに俺の隣に着地したのはセミロングの茶髪を白いリボンでまとめた少女——  
フィオ。

彼女はラースの方に向くと腰のホルダーからデッキを抜いて、俺と同じようにデイス  
クに差し込んだ。

「フィオ!？」

「マスター!？」

「フィオ殿!？」

「……フィオ!？」

「疲れて寝てたらドツカンドツカン煩くつてね。すわ何事かと慌てて飛び出したら大惨  
事じゃん」

彼女の革製のカードホルダーにはカードが何枚も残っていた。目算で……、15枚。

そしてこの自信にあふれた表情と、先に聞いた幻影とのデュエル。

まさか。

「お前、俺とタッグを組んでラースと戦おうつてのか!？」

「当然だろ。君を1人で戦わせるなんてとんでもない、そんなのわたしが許さない」

「やめろ、本気で死ぬ……いいや死ぬより酷い目に遭うんだぞ！ 逃げろ！ 今すぐ！」  
「だったら猶更だよ！ わたしは君に謝らないといけな、償わないといけな！ それより前に死んで貰っちゃ困るんだ！」

何、なんだよ、それは……。

俺に謝るって、何をだよ……！

命を掛けてでも謝罪しないとイケない事って何なんだよ！

邪神が虚構である事と何か関係があるのか!?

そんなものクソ喰らえだ、生きてこそだろう！

「フィオ！」

「……わたしは君を死なせないためにここにいるんだ。それだけは絶対に、例えば君であろうと否定させない！」

だが兎角この女の目に宿る意志は固い。鋼よりもダイヤよりも、搗いて時間が経った餅よりも固そうだ。俺にしがみ付いてでもデュエルの場に就いて戦ってやる、そんな決意を感じる。

なら、俺のやらねばならない事は。

「……約束しろ、フィオ。自分の身を守る事を最優先にしろ、俺を助ける事も、ラースを

斃す事も二の次にするんだ」

「お荷物になれって？」

「テメエの身一つ守れない女は足手纏いだって事だ。……できるな？」

「そういう事なら勿論さ、死んだらデュエルが続けられないからね」

「オーケー」

「ドーキー」

俺のすべき事は、ラースを斃す事。

その大前提として、フィオを守る事。

この2つを以て勝利を掴み、生きて帰る。

片手落ちは許されない、両方成し得て邪神に王手をかけられるんだ。それを肝に銘じなければならぬ。

「待たせたな、ラース」

「構わん、ここで貴様ら2人を排除できるのなら数秒の無駄にも釣り合おうぞ」

「へえ、わたしも警戒対象なんだ？ 光荣だね」

「クカカカカハ！ この期に及んでまだ白を切るかバランサーよ、本来は貴様こそがその男より先に警戒すべき相手であった。だが我らが血眼になつても貴様の存在は見つからず、そして気付いた時には既にただ命を取っただけでは意味の無い存在となつて



おったわ。よくこれまで身を隠していたものよ、記憶を封じて時を待つていたか？」

「さてね？　そもそも本当に記憶を消しているのなら、その疑問には答えられないと思わないかい？」

「成程、それも道理か。いや、実に見事よ。まさか己を代打に成り下げるとはな」

くつくつと心底愉快そうに笑う、いや嗤うラース。

balanサー、最初の警戒対象、俺達に謝らないといけない……。

何だ、この2人は何を知っている？

「なあフィオ、balanサーってのは」

「ごめん、説明は後で良いかい？　あんまり待たせるとコイツはキレルタイプだよ」

「ご尤も」

「わたしを信じてとは言わない、好きだけわたしを盾にして欲しい。わたしはそれだけの事を君ら義兄妹にやったんだ」

「……」

「その償いのためにわたしはここにいる、その贖いのためにこの世界この世界にいる。味方だと思えないとは思う、だけどわたしは最後の瞬間まで君の味方味方でいる事をここに約束する」

ジャキン、とデュエルディスクのブレードを伸ばして展開するフィオ。その眼差しに

ふざけている様子は一切無い。彼女は本気で俺と都に謝罪したいと思っっているし、指一本でも動く限り俺のために戦おうとするのだろう。

彼女が何をしたのか、俺には分からない。予想したくとも材料が足りない。

だが、だから何だ。

「ナメるなよ、ファイオ」

「黎？」

「俺は化物、人間を何人も食い殺した怪物だぜ？　今更謝られて楽になる気分があるワケがねえだろ」

俺は人殺し、社会の敵だったクリーチャー。男を切り裂き、女を殴り、子供を焼き、老人を沈めたクズ野郎。

バラし、晒し、並べ、そうして生きて来た人間社会にはならない存在。

であるのならば。

俺に謝罪なぞ不要だ。

「っ、君は……」

だと言うのに、ファイオはとても傷付いた顔をしていた。

何を悩む。

何を苦しむ。

なあ、フィオ。

お前が背負うそいつは、そんなにも重いのか？

「行くぞ、フィオ。俺と都に謝りたい事があるのなら、生きて俺達の前で頭を下げる。それが最低ラインだ！」

「了解！」

デッキをディスクに差し込み、レーンに沿ってブレードを展開させる。

青い球状のディスプレイにライフカウンターの4000が表示され、ブレードのランプも赤色に光った。

同時に地面にカードを配置するゾーンを描いた光が噴き出す。今回もこれまで使用していたEXモンスターゾーンとペンデュラムゾーンが複合した特殊ルールのそれではあったが、面白い事に俺とフィオのEXモンスターゾーンの片方が、ラースの使用できるEXモンスターゾーンと同じものだった。

上から見たら凸やwに近い形をしているだろう。3人が参加するとはいえ、面白い事になりそうだ。

「死の恐怖に怯えよ、矮小にして我らが栄光の覇道を阻む最後の壁よ！ 貴様達のライフをゼロにし、我らが邪神様の復活が貢物とせん！」

「やれるものならやってみろ！」

「お前で最後だラース、……覚悟！」

「「デュエル！」」

黎：LP 4000

フィオ：LP 4000

ラース：LP 8000

☆

フィールドのマス目が光を放ち、俺達の戦いの領域を示す。

変則タッグデュエルとして始まったこのデュエル、これまで通りに邪神の護衛側のライフが俺達側の合計値として始まった。

「我の先攻だ。変則タッグデュエルでは各プレイヤーは最初のターン、ドロート攻撃はできぬ。よって我らは手札5枚でデュエルを開始する」

「先手ドロートに慣れてるわたしからすると、据わりが悪いルールだよ」

「魔法カード『闇の誘惑』を発動。デッキから2枚ドロートし、手札から『スカル・サーペ

ント』を除外する。そして『スカル・サーペント』は除外された時、我の手札に戻す事ができる」

「手札コストにしたカードがそのまま手札に戻っちゃった……!?」

「気を抜くな、コストなんて基本的に払ったフリをするのが当然だと思え！」

「更に『スカル・バスター』を召喚」

『クカカカカッ!』

『スカル・バスター』の効果発動。我は手札を1枚捨て、1枚ドロウする」

スカル・バスター：ATK 1800

リースの手札から『ブラックコインケース』が捨てられ、手札が入れ替わる。

片腕にバズーカ砲を装着している骸骨は、これから始まる地獄を暗喩するように乾いた笑いを鳴らした。

手札を回転させつつ、墓地から除外してドロウできるカードを落としか。堅実だな。

「我のフィールドに存在する通常召喚された“スカル”モンスターが効果を発動した時、このカードは手札から特殊召喚できる。チューナーモンスター『スカル・サーペン

ト』を特殊召喚」

『シヤアアアアアア!』

「ただしこのターン、我は魔法・罫カードをセットできぬ」

スカル・サーペント：ATK 100

砲撃骨の隣に現れるのは骨の巨大な蛇。

成程、「スカル」という名前で縛ったアンデットデッキか。

スカル・バスター（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 1800／DEF 400

自分の墓地にカードが存在しない場合、このカードは通常召喚できない。

1ターンに1度、手札を1枚捨てる事で、デッキからカードを1枚ドローできる。

この時捨てたカードがアンデット族モンスターだった場合、このカードの攻撃力は300ポイントアップする。

スカル・サーペント（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 1000 / DEF 2300

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか発動できない。

（1）：自分・相手ターンに1度、通常召喚された「スカル」モンスターの効果が発動した場合に発動できる。

このカードを手札から攻撃表示で特殊召喚する。

この方法で特殊召喚するターン、自分は魔法・罨ゾーンにカードをセットできない。

（2）：このカードが除外された場合に発動できる。

除外状態のこのカードを手札に戻す。

「チューナー……！」

「来るぞ、ファイオ」

「レベル4の『スカル・バスター』に、レベル4の『スカル・サーペント』をチューニング」

『カカカカカカ！』

『ジャアアアア！』

「死の山を組み上げて呪い、世界を恨め！ 我、ここにあまねく命を罵らん！」

骨の砲撃兵が光る星となって上空へ飛び、そこに続けて骨の大蛇が飛ぶ。大蛇は緑の輪に分解されて骨の兵士を取り込み、光の柱となった。

☆4＋☆4＝☆8

「シンクロ召喚！ レベル8、『スカル・アーマード・ヴァーミン』！」

『ジジジジジジジジ！』

スカル・アーマード・ヴァーミン：DEF 2400

召喚された一番手は害虫の骨格を持った生物兵器。大きな骨を鉄板で補強し、棘や刃のついた装甲が溶接されている。

虫に骨は無いのだが、あれは或いは外骨格だったり虫に見える別の生物だったりするのだろうか。



「このモンスターは相手の効果の対象にならず、カードの効果では破壊されぬ。またフィールドのカードが破壊された時に貴様らに800のダメージを与える」

「成程、まずはカード効果の効かないモンスターを壁にして様子見か」

「このターンは『スカル・サーペント』の効果でカードをセットできないもんね」

「そして手札より装備魔法『怨嗟の骨盾』スカル・マリズ・フィールドを発動、これを『スカル・アーマード』に装備し守備力を3000アップさせる！」

スカル・アーマード・ヴァーミン：DEF 2400↓5400

骨の虫に装備されるのは、人の頭蓋骨を象った巨大な白い盾。

目を凝らすと巨人の頭蓋ではなく、無数の骨をコラージュのように組み合わせられているのが分かる。それを6本中2本の脚で抱えて構えており、空洞の筈の眼窩に赤い光が灯った。

「守備力5400……!?!」

「更に『怨嗟の骨盾』を装備したモンスターは戦闘では破壊されず、またこのカードはフィールドを離れる場合はどのような形であっても破壊と見做す！そして墓地に送られたターンに貴様らが効果ダメージを受ける場合、このカードを除外する事でダメー

ジを5倍にする！」

『アーマード・ヴァーミン』はカードが破壊された時に800ダメージを与える、それが5倍って事は4000ダメージか……」

「いきなりワンショットでできる範囲に来たね」

「ただし『怨嗟の骨盾』は相手によつて破壊されねばダメージを水増しできぬ。よつて我が自ら破壊したとしても意味は無い」

スカル・マリスシールド

怨嗟の骨盾（オリジナル）

【装備魔法】

「スカル」モンスターにのみ装備可能。

(1)：装備モンスターは戦闘では破壊されず、守備力は3000アップする。

(2)：装備されたこのカードが破壊以外の方法でフィールドを離れる場合、このカードを破壊する効果として扱う。

この時、このカードは除外されず手札・デッキにも戻らず、墓地に送る。

(3)：このカードが相手によつて破壊されたターンに相手が効果ダメージを受ける場合、このカードを墓地から除外して発動できる。

そのダメージを5倍にする。

「初手はこれで良からう、我はこれでターンエンドだ」

ラース：LP 8000

手札：手札3枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：スカル・アーマード・ヴァーミン（DEF 5400）

：怨嗟の骨盾（装備魔法・『スカル・アーマード・ヴァーミン』に装備）

「成程な、効果での除去が殆ど通じない『スカル・アーマード・ヴァーミン』を装備魔法で守りつつ、バトルによる破壊も防いだか」

「そして装備魔法の除去に合わせてワンキルを狙って来ている、1ターン目から殺意マシマシだね」

初手にしては妙に大人しめだが、あつちはあつちで後が無い以上は仕方ないのかも知れない。

それに俺達も最初のターンは攻撃できない、だから攻撃表示で出す意味も無い。攻撃

表示にするのは次の奴のターンでも充分間に合うと考えればプレミでも無いワケだ。

そしてあのバーン効果。こっちから除去しなければワンキルダメージは来ないが、こっちの効果を書き換えるようなカードがあればそれも無意味に終わる。よって求められるのは一刻も早い除去、足踏みしていればそれだけラースに有利になる。今、場の空気を支配しているのはラースだ。最強の護衛の名は伊達じゃ無いって事か。

「フィオ、俺から行く」

「了解。気を付けて、こいつはラスボスじゃない。ペース配分を間違えないでね」

「ああ」

ペース配分、ね。

そいつを実行できるだけの余裕は……、もう俺には無いんだよ。

もう1回か2回戦えば俺は力尽きる。だからここでも、そして最後の戦いでも俺は死力を尽くす。

出し惜しみは無しだ、文字通り命懸けで行くぜ！

「俺のターン！」

t o b e c o n t i n u e d

# STORY 97 : 憤怒

ラース : LP 8000

手札 : 3枚

フィールド

: EXモンスターゾーン無し

: スカル・アーマード・ヴァーミン (DEF 5400)

: 怨嗟の骨盾 (装備魔法・『スカル・アーマード・ヴァーミン』に装備)  
スカル・マリスシールド

黎 : LP 4000

手札 : 5枚

フィールド

: モンスター無し

: 魔法・罨無し

ファイオ：LP 4000

手札：5枚

ファイールド

：モンスター無し

：魔法・罠無し

SIDE：黎

とうとう始まった最後の護衛との戦い。

初手で立ちほだかるは骨で作られた盾を持つ、これまた骨でできた巨大な害虫。

戦闘・効果では破壊されず、効果の対象にもならない。そして装備魔法と組み合わせ  
てワンキルを狙って来た。

俺の相手はファイオ。力不足かも知れないが、贅沢を言っていられる余裕は無い。

「俺のターン！」

それに……、力不足はもう俺の方かも知れないからな。

「俺は手札から『ウインドW・スピリッツS スウォーム・レイニアスズ』を召喚！」

『『『』』』』

W・S スウオーム・レイニアスズ：ATK 500

こちらの一番手は百舌鳥モズの群れ。一羽一羽は然程大きくは無い鳥達だが、その分頭数を揃えた。

俺が選んだデツキはW・S、ウインド・スピリッツ。

風の結晶から産まれた疾風の中に生きるモンスタ―達だ。

『スウオーム・レイニアスズ』を召喚したターン、通常召喚とは別に“W・S”を召喚できる。そして手札の『W・S 風車獣デセルバ』は自分フィールドに仲間がいる時、リリース無しで召喚できる！』

『オオオオオ……』

W・S 風車獣デセルバ：ATK 2200

続けて召喚されたのは巨大な風車の装甲をまとった巨獣。恐らくモデルはかの有名なドン・キホーテの風車と、その作者ミゲル・デ・セルバンテス。

W・S スウオーム・レイニアスズ（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）  
星4

風属性／鳥獣族

ATK 500 / DEF 500

このカード名の（1）の効果は1ターンに1度しか発動できず、（2）の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：このカードを通常召喚したターン、自分は1度だけ通常召喚とは別に「W・S」モンスターを召喚できる。

（2）：相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを墓地から攻撃表示で特殊召喚し、攻撃宣言を行った相手モンスターの攻撃力の半分攻撃力がアップする。

その後、攻撃宣言を行った相手モンスターはこのモンスターへ攻撃し、ダメージ計算を行う。

W・S 風車獣デセルバ（オリジナル）

星6

風属性／悪魔族



ATK 2200 / DEF 1400

このカード名の(2)の効果はデュエル中に1度しか発動できない。

(1) : 自分フィールドに同名以外の「W・S」モンスターが存在する場合、このカードはリリース無しで召喚できる。

(2) : 自分フィールドにモンスターが存在しない場合、自分スタンバイフェイズに発動できる。

自分の墓地から同名以外の「W・S」モンスター1体を除外し、このカードを墓地から守備表示で特殊召喚する。

「俺はレベル6の『デセルバ』にレベル4の『スウオーム・レイニアスズ』をチューニング  
グー！」

「ほう、貴様もシンクロか」

鳥の群れがその場で透明になると4つの緑の輪となり一列になって天に飛ぶ。そこに続けて風車のビーストが跳び上がって輪の中を潜ると、獣は輪郭だけを残して6つの星になり、やがて一筋の光の柱に呑み込まれた。

「吹き荒ぶ猛毒の瘴気、鏝に塗り込めて飛び立つ少女とならん！ 絶望を超える明日となれ！」

☆6＋☆4＝☆10

『W・S ボーガン・ド・シヨモー!』

『ハアアアアアアアアア!』

W・S ボーガン・ド・シヨモー：ATK 3100

光を撃ち抜き現れるのは、右腕に巨大なボーガンを装着した有翼の少女。モンゴルに伝わる悪しき人殺しの鳥人、モーシヨボーだ。少女の姿で人間を騙し、頭蓋を嘴で割って脳髓を啜るというアジアによく見られる何ともエグい害鳥である。

『ボーガン・ド・シヨモー』の効果発動! 1ターンに1度、フィールドの魔法・罠カードを1枚選び破壊する! この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない! 俺は装備魔法『怨嗟の骨盾』を破壊する!」

「黎!」

「主殿!」

鳥人間の女が右腕のボーガンを構え、相手の骨の盾を射貫く。

突風をまとった矢は過たず白い盾を砕き、跡形も無く粉碎した。

スカル・アーマード・ヴァーミン：DEF 5400↓2400

「敢えて破壊するか、それとも自殺か。良からう、ならば発動してやる！ 『スカル・アーマード・ヴァーミン』の効果発動！ カードが破壊された時、貴様に800のダメージを与える！ そして墓地の『怨嗟の骨盾』の効果によりこのカードを除外し、そのダメージを5倍にする！」

盾の後ろで準備していたのだろう、骨の外骨格を持った巨虫が口からビームを吐いて俺を狙って来た。そのビームはラスのディスクの墓地から噴き出した怨念によって禍々しくドス黒い色に変色していく。

これを受ければ4000ダメージ、ならばこうするまで！

「……サー、防いで」

「ああ！ 俺は手札から『W・S スモークスマン』の効果を発動！ 効果ダメージが発生した時、このカードを手札から特殊召喚し、そのダメージを無効にする！」

『むううん！』

W・S スモークスマン：DEF 1900

ビームの直撃を受け止めるのは、手札から場に出した雲の魔神。下半身はアラジンと魔法のランプに出て来る精霊ジンのように細かいが、敵の光線を食らってもビクともして  
いない。

「小賢しい真似を、行儀良く死ぬという概念とは余程無縁だな」

「俺はカードを2枚伏せる。そしてターンの終わりに『ボーガン・ド・シヨモー』のもう  
1つの効果を発動、俺の場の『W・S』のレベルの種類だけカードをドロウする。『シヨ  
モー』はレベル10、『スモークスマン』はレベル5、よって2枚ドロウ」

W・S ボーガン・ド・シヨモー（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星10

風属性／鳥獣族

ATK 3100／DEF 0

「W・S」チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか発動できない。

（1）：フィールドの表側表示の魔法・罫カードを1枚選んで発動できる。

選んだカードを破壊する。

この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない。

(2) : このカードがS召喚されている場合、自分・相手ターン終了時に発動する。

自分フィールドの「W・S」モンスターの種類だけドロウする。

同じ名前・レベルのモンスターが自分フィールドに2体以上存在する場合、この効果は発動できない。

W・S スモークスマン (効果モンスター)

星5

風属性 / 戦士族

ATK 1900 / DEF 1900

(1) : 自分が効果ダメージを受ける時に発動できる (ダメージステップでも発動可能)。  
このカードを手札から守備表示で特殊召喚し、自分が受ける効果ダメージを無効にする。

(2) : このカードがフィールドに存在する限り、相手モンスターはこのカード以外のフィールドのカードを攻撃・効果の対象にできない。

またこのカードは対象を取らない効果を受けず、対象を取る効果では破壊されない。

「俺はこれでターンエンド」

黎：LP 4000

手札：2枚

フィールド

：W・S ボーガン・ド・シヨモー（ATK 3100・左のEXモンスターゾーンに配置）

：W・S スモークスマン（DEF 1900）

：伏せカード2枚

「わたしのターン。流石だね、黎。あの鉄壁のコンボをいとも簡単に崩すなんて」

「何事にも完璧なんてものは無い、あるのは亀裂を見えないようにする小細工だけさ」  
「成程、肝に銘じておくよ」

OCGでも無敵の布陣を作る人はいくらでもいるし、それを後出しで破るのは極めて難しい。

ただ全てに於いて不可能ではない。さっきの装備魔法との組み合わせだって、きつと

大会優勝とかの猛者なら何とかできてしまうのだろう。

……この世界でOCGの理論を語るというもの程、馬鹿らしいものも無いとは思  
うが。

「じゃあ、次はわたしがカッコ良い所を見せないとね。わたしは手札から『ヘカテリス』のモンスター効果を発動。このカードを手札から墓地に送ってデッキから『神の居城—ヴァルハラ』を手札加え、そのまま発動する」

おっと、お得意のサーチが来たな。

墓地に光属性・天使族を落とすつつ有用な魔法カードをサーチする、ファイオのデッキにとつては重要なアクションである。

「さあ、ブン回すよ！ 永続魔法『ヴァルハラ』の効果！ 手札から『フェアリー・アチャー』を特殊召喚！」

『ハアアアアア！』

「更に手札からチューナーモンスター、『デクレアラ！・デイヴァイナ宣告者の神巫』を召喚！」

『ふっ！』

フェアリー・アチャー：DEF 600

宣告者の神巫：ATK 500

早速2体並ぶ天使族。あの展開力こそ天使族の底力。パワーで押し切る悪魔族に対し、並べて連携する天使族という対比だ。

しかしやっぱそのデツキ持ち出してたのか。良いけどさ、組んだは良いけど使わないデツキだったし。

『宣告者の神巫』の効果発動！ わたしはエクストラデツキから『冥府の執行者ブルー』を墓地に送り、レベルを5つ上げる！

更に『フェアリー・アーチャー』の効果発動！ 1ターンに1度、わたしの場の光属性モンスター1体につき400のダメージを与える！ 800ポイントのダメージを喰らえ！」

宣告者の神巫：☆2↓7

ラース：LP 8000↓7200

光の矢が2本放たれラースの右脇腹と左肩に突き刺さる。だが黒いスーツの男は1ミリすら動かず、矢を引き抜いて握り潰した。まるで蚊を叩き殺すかのように。

「ヌルい」



「挨拶代わりさ、いきなり熱湯は無粋だろう?」

「ハッ、口先だけは一人前に戻ったかバランスーよ」

フェアリー・アーチャー（効果モンスター）

星3

光属性／天使族

ATK 1400／DEF 600

自分のメインフェイズ時に発動できる。

自分フィールド上の光属性モンスターの数×400ポイントダメージを相手ライフに与える。

「フェアリー・アーチャー」の効果は1ターンに1度しか使用できず、この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

冥府の執行者 プルート（シンクロ・チューナー・効果モンスター）

星5

闇属性／天使族

ATK 2300／DEF 0

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカード名はルール上「代行者」カードとしても扱う。

このカード名の(2)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1):1ターンに1度、自分の墓地からモンスター1体を除外し、フィールドの効果モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを裏側守備表示にする。

フィールドまたは墓地に「天空の聖域」が存在する場合、この効果は相手ターンでも発動できる。

(2):墓地のこのカードを除外して発動できる。

自分のデッキ・墓地から「天空の聖域」1枚を選んで手札に加える。

「わたしはレベル3の『フェアリー・アーチャー』に、レベル7になった『宣告者の神巫』をチューニング! 輝ける太陽の光その身に宿し、影を束ね無辺を両断する刃となれ!」

☆3+☆7=☆10

「シンクロ召喚！ 君臨せよ、『相剣大公―承影』！」ショウエイ

『ヌンツ、ハアツ！』

「このカードの攻守は除外されているカードの枚数×100アップし、同じ数値分だけ相手の攻守を下げる。除外されているのは『怨嗟の骨盾』1枚、よって変動する数値は100だよ」

相剣大公―承影：ATK 3000↓3100

スカル・アーマード・ヴァーミン：DEF 2400↓2300

ここで『承影』か。

となるとフィオの狙っているコンボは……。

「ここで墓地に存在する『プルート』のモンスター効果を発動！ 墓地からこのカードを除外し、デッキから『天空の聖域』を手札に加える！ 更に『承影』のモンスター効果！ 1ターンに1度カードが除外された時、相手フィールドと墓地のカードを1枚ずつ除外する！」

「だが『スカル・アーマード・ヴァーミン』は貴様の効果の対象にならぬ！」

「この効果は対象を取らない！ そのデカイ骨の虫と、墓地の『スカル・バスター』を除

外！」

「小癩な！」

手札を増やしつつ、相手のリソースを削る。デュエルに於いて基本の戦法である。

これで奴のフィールドからカードは完全に消滅、更に自身の効果で攻撃力もアップ。良い、理想的な動きだ。

相剣大公―承影：ATK 3000↓3300

捻じれた次元が敵の骨虫の後ろに現れ、地面ごと抉り取って消し去る。破壊じゃない除外して貰う、とはGX時代の名言である。

ラーズの手札は残り3枚、こっちはモンスターが3体いて手札も充分残っている。滑り出しとしては上々と言えた。

「わたしはカードを1枚セットして、ターンエンド」

「このエンドフェイズ、再び『ボーガン・ド・シヨモ』の効果発動。2枚ドロ」

ファイオ：LP 4000

手札：2枚（片方は『天空の聖域』）

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：相剣大公―承影（ATK 3300）

：伏せカード1枚、神の居城―ヴァルハラ（永続魔法）

「我のターン、ドロー」

一周して再びラースのターン。ここから互いにドローと攻撃が可能となる。

ライフ4000はデカいのを一発貫えば吹っ飛ぶ危険性を孕む、奴の動きに注意しないとな。

「クハ、流石に小手調べ程度では手落ちであったか。ならば良かろう、貴様らにはもう少し本気を出してやろうではないか」

「来るぞ、ファイオ」

「分かってる……!」

「我は手札から魔法カード『ハビタブル・アンダーワールド』を発動! デツキからフィールド魔法を1枚手札に加え、我のライフを2倍にする!」

「何?!」

「いきなりか……!」

ラース：LP 7200↓14400

折角ファイオが与えた先制攻撃のダメージが……！

「更に除外されている『スカル・アーマード・ヴァーミン』のモンスター効果を発動！

墓地・除外ゾーンのこのモンスターは、私の墓地のカードを2枚除外し、1度だけフィールドに戻る！ 我は墓地から『ハビタブル・アンダーワールド』と『スカル・サーペン

ト』を除外！ 攻撃表示で蘇れ、『スカル・アーマード・ヴァーミン』！

『ア、アアアアアアアア！』

スカル・アーマード・ヴァーミン：ATK 2400

「ただし効果は無効になる」

「チツ、クソ骨虫が復活しやがった！」

「しかも除外コストにされたのは……！！」

「そうだ、除外された事で『スカル・サーペント』は我的手札に戻る！」

損傷ほぼゼロで失ったアドバンテージまでキツチリ回復しやがった、先攻1ターン目

は最初から捨てる気だったか！

ハビタブル・アンダーワールド（オリジナル）

【通常魔法】

（1）：デッキからフィールド魔法を1枚手札に加え、自分のLPを倍にする。

（2）：このカードの発動・効果が相手によって無効になった場合に発動できる。

このカードを手札に戻す。

このターン「ハビタブル・アンダーワールド」の発動・効果は無効にならない。

スカル・アーマード・ヴァーミン（シンクロ・効果モンスター）（オリジナル）

星8

闇属性／アンデット族

ATK 2400 / DEF 2400

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体

（1）：このカードは相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されない。

（2）：フィールドのカードが破壊された時に発動できる。

相手に800ダメージを与える。

(3) : S 召喚されたこのカードが相手によってフィールドを離れた次の自分のターンに発動できる。

自分の墓地からアンデット族モンスターを含むカードを2枚除外し、このカードを攻撃表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードの効果は無効となる。

フィールドに骸骨鎧の巨虫が復活した上、手札が5枚になった。

これは少しシヤレにならねえ……！

「『承影』の効果！ 『スカル・アーマード・ヴァーミン』と——」

「速攻魔法『禁じられた聖杯』！ 大人しくしておれ！」

「くっ！」

「更に墓地から『ブラックコインケース』を除外し、2枚ドロー！」

効果を潰されたか……！

相剣大公―承影 : ATK 3400 ↓ 3000 ↓ 3400

「さあここからが貴様らの葬送曲の序章となる。フィールド魔法発動！」



「来たか、奴のフィールド魔法！」

「かいけいはっくわくせい会稽白骨惑星」！」

ラーズのディスクがフィールド魔法を読み込み、発動する。

途端に聖なる神殿の前の広場だった周囲は不気味な墓地に書き換わり、更に薄らと霧が出て来た。空も晴天から赤黒い夕暮れのような雰囲気になり、明らかに彼岸の雰囲気だ。

間違いなくここが奴にとって最も戦いやすい領域。雨を降らせたプライドのように、相手を遅くしたスロウスのように、このフィールド魔法がラーズのデツキの骨子を担う筈。どう出て来るか観察して対処しなくては、待っているのは敗北だろう。

「カイケイ……？」

「復讐、という意味だ」

「ククク、我は装備魔法『きんこつぼつたい金骨伐帯』を『ヴァーミン』に装備。これでこのカードは2回攻撃できる、ただし効果を発動する場合、攻撃力は0になる」

骨虫が金色に輝く帯を締める。攻撃力に変化は見られない。

成程な。効果が無効になっている今、そのデメリットは無いってワケか。

「バトルだ。確か『スモークスマン』がいる限り、そいつ以外には攻撃できなかったな？

ならば『スモークスマン』を攻撃！」

「くっ」

鋭く伸びた前脚が俺の煙の魔人を貫き、跡形も無く散らす。

これで盾はいなくなったが、奴のモンスターの攻撃力は俺達のモンスターより低い。どう出て来る、何のカードで底上げを仕掛けるんだ。

『『金骨伐帯』の効果によりもう1度攻撃！ 次は『ボーガン・ド・シヨモー』だ！』

「攻撃力2400で攻撃力3100を!？」

「迎え撃て!」

次は大きな顎で鳥人の弓兵を狙う。

恐らくクイックエフェクトでコンバットトリックを狙うつもりなのだろう。しかし差分700は小さいが無視できない、何のカードで穴埋めを——

『ギジャアアアアアアアア!』

ラース：LP 14400↓13700

「な!？」

「え!？」

そのまま返り討ちになった!? わざわざ自爆させたのか!? 何故!?

「クククカカカ、『金骨伐帯』が墓地に送られた事で我は3枚ドロし手札を1枚デツキボトムに戻す」

「手札を増やすためにわざわざあんな事を……?」

「愚かなり、そんなワケが無かるう。フィールド魔法『会稽白骨惑星』の効果発動！ 戦鬪によつて破壊されたアンデット族モンスターは墓地から攻撃表示で復活する！ もう1度働け、『スカル・アーマード・ヴァーミン』！」

『ゴジョジョジョジョジョジョッ!』

「更にこの時、その攻撃力は1500アップし、相手の効果では破壊されなくなる！」

スカル・アーマード・ヴァーミン：ATK 2400↓3900

攻撃力3900だど!?

この効果を使うためにわざわざ自爆させたのか！ しかも破壊されるとドロできる装備魔法も合わせた事でライフ700をバフとドロソに変えた！

「ただしこの効果で蘇生したモンスターを同じ方法で連続して蘇生させる事はできぬ、復讐の機会は一度きりよ」

「くっ!」

「もう一度『ボーガン・ド・シヨモ』を攻撃！ 消え去れえ！」  
「がっ、おとおおおおっ！」

黎：LP 4000↓3200

「黎っ！」

「掠り傷だ、気にするな！」

キッツいなあ、破壊しても強化されて蘇るのかよ。しかも1500のバンブアツプで効果耐性付き、おまけに自己再生時の自身の効果を無効にするデメリツもこれで消えちまった。

フィールド魔法の効果はこれまでの奴らと比べてもシンプルだが、逆にシンプルであるが故に強い。ゴチャついた効果は隙があったり逆手に取れたりするけれど、こいつはそれができる穴が無い。それ故に強い、蘇生効果に俺達を利用できる部分が無いんだ。「魔法カード『スカル・コール』を発動。我の場の“スカル”モンスターより攻撃力の低いアンデット族モンスターをデッキから1枚手札に加える。我は『スカル・アーマード・ヴァーミン』を対象にし、デッキから攻撃力0の『スカル・デIFエンダー』をサーチする」

スカル・コール（オリジナル）

【通常魔法】

自分の場に表側表示で存在する「スカル」と名のついたモンスターを1体選択し、選択したモンスターよりも攻撃力が低いアンデット族モンスターを1体、デッキから手札に加える。

この効果で手札に加えたモンスターは、このターン召喚・特殊召喚できない。

「そして『会稽白骨惑星』のもう1つの効果を発動。1ターンに1度、ゲームから除外されているカードを持ち主の墓地に戻す。我は『怨嗟の骨盾』スカル・マリスシールドを選択」

「バーンダメージを5倍にするカード……」

「カードを3枚伏せ、ターンエンドだ」

「この瞬間、『承影』の効果が元に戻る。除外されているカードは『プルート』『スカル・バスター』『ブラックコインケース』『ハビダブル・アンダーワールド』の4枚、よって400ポイント数値が変動！」

相剣大公―承影：ATK 3400

スカル・アーマード・ヴァーミン：ATK 3900↓3500

金骨伐帯（オリジナル）

【装備魔法】

「スカル」モンスターののみ装備可能。

(1)：装備モンスターはモンスターに2回攻撃できる。

(2)：装備モンスターが破壊される事によってこのカードが墓地に送られた時に発動する。

デッキからカードを3枚ドロウし、手札を1枚デッキの1番下に戻す。

会稽白骨惑星（オリジナル）

【フィールド魔法】

(1)：このカードが破壊された場合に発動できる。

デッキから「会稽白骨惑星」を1枚選び発動する。

(2)：このカードの効果で特殊召喚されていないアンデット族モンスターが戦闘で破壊された時に発動できる。

そのモンスターを墓地から攻撃表示で特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターの攻撃力・守備力は1500アップし、効果では破壊されない。

(3) : 1ターンに1度、このターンに同名カードが除外されていない除外状態のカードを1枚選択して発動できる。

そのカードを持ち主の墓地に戻す。

ラース : LP 13700

手札 : 3枚

フィールド

: EXモンスターゾーン無し

: スカル・アーマード・ヴァーミン (ATK 3900)

: 伏せカード3枚、会稽白骨惑星 (フィールド魔法)

「俺の、ターン！」

「……厄介なフィールド魔法、あの2人のデッキにアンデット族がいるとは思えない」

「効果がもう1個あるのが幸いですね、あれだけを宛てにするのは危険ですが」

倒すとパワーアップして復活する、骨なのにゾンビみてえな敵だ。手をこまねいてる

と、さつきみたいな自爆攻撃でライフ差を利用してドンドン強化されちまうな。

幸いにもその効果は連続使用できない。モンスターが1体しかない今が攻め時、守勢に回れば己の首を絞める。

手札は5枚ある、行くぜ！

「ファイオ、今の内にライフを削れるだけ削るぞ！」

「了解！」

「このスタンバイフェイズ、墓地の『デセルバ』のモンスター効果発動！ 自分フィールドにモンスターが存在しない時、墓地から“W・S”を除外して1度だけ特殊召喚できる！ 俺は『スモークスマン』を除外し、『風車獣デセルバ』を守備表示で特殊召喚！」

W・S 風車獣デセルバ：DEF 1400

「今だ！」

「はいよ！ 『承影』の効果発動！ わたしはフィールドの『スカル・アーマード・ヴァーミン』と墓地の『怨嗟の骨盾』を再び除外する！ 同時に攻撃力300アップ！」

「チッ！」



相剣大公―承影：ATK 3400↓3700

よし、ファイオが『承影』を召喚しておいてくれたお陰で除去がやりやすい。除外をトリガーに相手のカードを除去できるこのコンボなら的確に相手のアドバンテージを削り取れる。

「俺は『デセルバ』をリリースして『W・S カープランス・ドラゴン』をアドバンス召喚！ このカードはレベル8だが、『W・S』1体のリリースで召喚できる！」

『ゴアアアアア！』

「『カープラント・ドラゴン』の効果！ 手札・場・墓地のモンスターを素材に『W・S』を融合召喚する！ 俺は墓地の『ボーガン・ド・シヨモー』『風車獣デセルバ』、手札の『石切り大鳥 クラッグ・ラプター』で融合！」

「墓地のモンスターを除外して『融合』魔法を使わず融合!?」

「風吹く白き星の果てに、新たな薫風を得て目覚めよ！ 融合召喚！ レベル9、『W・S

ライトニング・ガルーダ』！」

『GAAAAAAAAAAAA!』

「更に魔法カード『精霊の吹き溜まり』を発動！ 除外されている自分の風属性モンスターを正規の召喚扱いで特殊召喚する！ 戻れ、『ボーガン・ド・シヨモー』！」

『たあああああつ！』

W・S	カープラント・ドラゴン	： ATK	2600
W・S	ライトニング・ガルーダ	： ATK	2800
W・S	ボーガン・ド・シヨモ	： ATK	3100
相剣大公	― 承影	： ATK	3700 ↓ 3800

手札3枚の消費で並ぶモンスターは3体。錦鯉のような模様の鱗を持つ乱気流の竜、雷雲を背負う鳥の神、蘇生した狙撃手の鳥女。更に差し引き1000だが更に攻撃力も上がった、この戦線は悪くない筈。

「良いぞ、これで攻撃力の合計は8600！ 全部通れば大ダメージだ！」

「バト――」

「リバースカード発動、罨カード『魍魎跋扈』。メインフェイズに手札のモンスターを召喚する。我は守備表示で『スカル・デイフェンダー』を召喚」

スカル・デイフェンダー：DEF 2250 ↓ 1450

さつき手札に引つ張つて来たカードか……。

あの大盾持ちの髑髏は明らかに防御用モンスター、攻撃を凌ぎつつ次の自分のターンに繋げるつもりか。

「ならば『カープラント・ドラゴン』で攻撃！ 『ライトニング・ガルーダ』は全ての風属性モンスターに貫通効果を与える！ 『タービュランス・ブレス』！」  
 「何？ ぐうおっ！」

ラーズ：LP 13700↓11550

風のブレスが骨の盾に吐き出され、後ろにいたラーズを余波が貫く。

だが風が終わっても白い塊は場に残っていた。

「破壊されてない、耐性があるんだ！」

「だったらサンドバッグにしてやる！ 続けて『ライトニング・ガルーダ』でも攻撃！」

「サンダー・ボルテックススクロー！」

「チイツ！」

ラーズ：LP 11550↓10200

雷撃の爪も通った。ダメージは大きく削られたが、ダメージである事には変わりなし！ ボヤク暇は無い、もつと打ち込んでやる！

「まだ攻撃は残ってるぜ！ 『ボーガン・ド・シヨモ』でも攻撃！ ットルネード・クラッシュ・ショット！」

「ぬううううう！」

リース：LP 10200↓8550

竜巻を率いる矢がまたまた敵に命中、今度は耐える事無く骨の盾を砕ききった。どうやら2回まで破壊されない効果があつたようだ。

『精霊の吹き溜まり』の効果で帰還したモンスターが攻撃を行った場合、破壊される。だが『ライトニング・ガルーダ』の効果により、俺の場の風属性モンスターは効果で破壊される時、手札1枚を身代わりにできる。俺は手札1枚を捨てて、『ボーガン・ド・シヨモ』の破壊を防ぐ」

2枚あつた手札の中から1枚を選び墓地に送る。このカードは墓地に仕込んでおいた方が良さそう、迂闊に手札に残しておくより戦術の幅が広がる。

「1枚カードをセット、俺はこれでターンエンドだ。そして『ボーガン・ド・シヨモ』の効果で俺はカードを3枚ドロウする」

W・S カープラント・ドラゴン（効果モンスター）（オリジナル）

星8

風属性／ドラゴン族

ATK 2600 / DEF 1700

このカードは「W・S」モンスター1体をリリースして表側表示でアドバンス召喚でききる。

このカード名の（3）の効果はデュエル中1度しか発動できない。

（1）：このカードを召喚したターンのメインフェイズに発動できる。

「W・S」融合モンスターによって決められた融合素材を手札・フィールドから墓地に送り、または墓地から除外し、そのモンスターを融合召喚する。

（2）：このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合に発動できる。

このカードを手札に戻す。

その後、この手札に戻ったこのカードをリリース無しで召喚できる。

（3）：墓地のこのカードを除外して発動できる。

自分の墓地からレベル4以下で同じレベルの「W・S」モンスターを2体選び、守備表示で自分フィールドに特殊召喚する。

W・S ライトニング・ガルーダ（融合・効果モンスター）（オリジナル）

星9

風属性／鳥獣族

ATK 2800 / DEF 2800

「W・S」Sモンスター+「W・S」モンスター×2

(1)：このカードがEXモンスターゾーンに存在する限り、自分の風属性モンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与える。

またその攻撃宣言時からダメージ計算終了時まで、相手の効果を受けなくなる。

(2)：自分フィールドの風属性モンスターが効果で破壊される場合、代わりに手札を1枚捨てる事ができる。

(3)：フィールドで破壊されたこのカードを墓地から除外して発動できる。

デッキから「W・S」モンスターを2体選んで墓地に送る（同名カードは1枚まで）。

精霊の吹き溜まり（オリジナル）

【通常魔法】

(1) : 除外状態の自分の風属性モンスター1体を対象に発動できる。

そのモンスターをEXデッキに戻し、正規の召喚扱いで特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターが攻撃を行った場合、ダメージ計算終了時に破壊され、その守備力分のダメージを受ける。

(2) : セットされたこのカードが相手によつて破壊され墓地に送られた場合に発動する。

このカードを墓地からセットする。

黎 : LP 3200

手札 : 3枚

フィールド

: W・S ライトニング・ガルーダ (ATK 2800)

: W・S ボーガン・ド・シヨモー (ATK 3100)、W・S カープラント・ド

ラゴン (ATK 2600)

: 伏せカード3枚

「わたしのターン、ドロ―！　ここが攻め時、臆してしまえば死あるのみ！」

勢い良くカードを引き、自分を叱咤するようにファイオが大きく息を吐いた。

そうだ、怯えていてはデュエルに勝つ事はできない。慎重と畏怖は違うという事を彼女はよく分かっている、竦んだ足では勝利のゴールテープは切れないと理解している。

「フィールド魔法『天空の聖域』、発動！」

ディスクの6番目のカードゾーンが開き、そこにファイオが手にした雲の上の聖殿のカードが配置される。

ラーズの周囲はおどろおどろしい墓地のまま、こちらは清浄な空気が満ち溢れる石造りの神殿となった。

「『神祕の代行者アース』を召喚！」

『ハアツ！』

「召喚成功時に効果発動！　『天空の聖域』が発動中である事で、デッキから『マスター・ヒュペリオン』を手札に加える！　更に天使族モンスター『アース』が効果を発動した事により、手札から『守護天霊ロガエス』を特殊召喚できる！」

『ハアツ！』



神秘の代行者 アース：ATK 1000

守護天霊ロガエス：ATK 2400

守護天霊ロガエス（効果モンスター）

星7

光属性／天使族

ATK 2400 / DEF 2100

このカード名の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

（1）：自分フィールドの天使族モンスターの効果が発動した場合に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚する。

（2）：相手フィールドの表側表示カード1枚と自分フィールドの攻撃表示モンスター1体を対象として発動できる。

その相手のカードを除外し、その自分のモンスターを守備表示にする。

（3）：フィールドのこのカードが戦闘・効果で破壊された場合、フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

このターン、そのモンスターは戦闘では破壊されない。

手札を使い切る勢いで一気にモンスターを並べるフィオ。

それで良い、臆さず突き進め。腰が引けた奴から殺される。それが闇のデュエルだ。

「ここでお前のフィールド魔法『会稽白骨惑星』の効果により、除外されている『冥府の執行者ブルート』を墓地に戻す。そしてこれを除外し、『マスター・ヒュペリオン』を特殊召喚！ 同時に『承影』の効果でお前の伏せカード1枚と墓地の『金骨伐帯』を除外！ 攻撃力は差し引きで2000アップ！」

『又ウン！』

「まだまだ！ 『ロガエス』は自分フィールドのモンスター1体を守備表示に変える事で、相手フィールドの表側表示のカードを1枚除外できる！ 『承影』を守備表示にし、フィールド魔法『会稽白骨惑星』を除外！」

マスター・ヒュペリオン：ATK 2700

相剣大公―承影：ATK 3800↓4000 / DEF 4000↓4100

奴のフィールド魔法が消滅し、半々に分けられていた世界が雲上の遺跡のような神殿一色になった。これで奴のリソースは食い荒らされてポロポロ。更にこれで攻撃力の合計は10200となり、全ての攻撃を通せばラーズのライフを完全に削り切れる。天

使族のパワーを全開にした布陣と言えた。

しかし凄いな、先日までシンクロ召喚を扱った事の無かった女とは思えない戦術だ。原作でクイーンと呼ばれていた明日香と並び立つて戦えるだけはある、本当に大した才能だよお前は。

「チマチマと鬱陶しいな、我のカードを次々と除外しおって。目障りだ」

『マスター・ヒュペリオン』の効果発動！ わたしの墓地の光属性・天使族モンスターを除外し、相手フィールドのカードを1枚破壊できる！ よっってお前の残った伏せカードは破壊だ！」

フィオのディスクから『ヘカテリス』が取り除かれ、奴の場に残ったカードは消えた。焼き尽くされる場を見て、しかしラーズは平然としている。まるで大黒柱を蟻がせせするように、いや蟻螂の斧の故事成語を再現するかのような態度で。

相剣大公―承影：DEF 4100↓4200

「『承影』を攻撃表示に変えてバトルだ！」

相剣大公―承影：DEF 4200↓ATK 4200

「わたしは『ロガエス』でダイレクトアタック！　“エノクの欺瞞”！」

「私は先に除外された罠カード『自家融解』の効果を発動。墓地に存在する同名のカードを2枚墓地に送り、カードを1枚ドロウする。そして私のフィールドに『ドクロトークン』を特殊召喚する。私は貴様が先程破壊したカード『エクスポート・エクトプラズム』をデッキから2枚墓地に送る」

「何!？」

ドクロトークン：DEF 2500↓1300

自家融解（オリジナル）

【通常罠】

(1)：このカードが相手によって破壊、または除外されたターンに発動できる。

このターン中に破壊されフィールドから墓地に送られた、または除外された自分のカードを1枚選び、デッキ・手札・フィールドから元々のカード名が同じ名前のカードを2枚墓地に送る。

その後カードを1枚ドロウし、自分フィールドに「ドクロトークン」（アンデット族・

闇・星1・攻0／守2500)を特殊召喚する。

このトークンは効果では破壊されず、戦闘によって発生するダメージも0となる。

成程な、防御の手段を残しておいたのか。

バウンス以外で処理されても良いように守りのカードを配置し、壁を作る。これで敗北の可能性はほぼ無くなった。

妙に守勢だが……、恐らく奴の狙いはそつちじゃない。しかも既に『承影』の効果は使われている、そこも計算に入れていたのだろうか。

「ならばそのままトークンを攻撃！　そして『アース』、『ヒュペリオン』、『承影』でダイレクトアタック！」

「ぐぬおおおおおおっ！」

ラーズ：LP 8550↓7550↓4850↓650

「良いですよー、マスター！　その調子ですよー！」

「もう一息だ、頑張れ！」

「……ファイト」

おっしや、とガッツポーズをするフィオだったが、妙だ。妙にラーズの手応えが薄い。モンスターも合計で3体しか出していないし、動きのテンポもスロー過ぎる。

(手を抜いている、のか？ だが何のために?)

奴の胸の内は分からないが、そんなのは問題じゃない。デュエルをする上で重要なのは相手の戦術を読んで切り返し、最後には勝つ事。極論、思考なんて無視しても良い。解せないのは相手のデュエルの進め方だ。

もうあっち側には余裕は無い筈。プライド、エンヴィー、スロウス、グラトニー、ラスト、グリードは斃れ、新しく作った護衛のグリーンフ、ヴァニティ、フィアーもまた敗れた。ラーズのリソースに余裕が無いのは、率いた部下が3人しかいない事から明白。ここで戦力を出し惜しみする理由はない。

本拠地に他の護衛がいるのか、それとも自分が敗死しても問題無い段階まで復活が進んだのか。

いずれにせよ、奴らが散々敵視した俺、そしてバランサーなる厄介な要素を持つフィオ。その2人を一度に仕留められるチャンスで手を抜くようなデュエルをするのは何故だ。

「メインフェイズ2、わたしはレベル8の『マスター・ヒュペリオン』にレベル2の『アース』をチューニング！

革命の白百合！ 勝利をこの手にもたらすために今、咲き狂え！」

☆8+☆2||☆10

「シンクロ召喚！ 出でよ、『フルール・ド・バロネス』！」  
『ハアアツ！』

フルール・ド・バロネス：ATK 3000

今だってフィオが『バロネス』を召喚したのに眉一つ動かしていない。

「1度だけとはいえどんな効果でも無効にするのに、何故あかも涼しい顔をしていら  
る？」

「ターンエンド！」

『『シヨモー』の効果で俺は再び3枚をドロウ。更に罠カード『ハンド・ファン』を発動、  
相手ターン中に俺が効果でドロウした場合、同じ枚数だけ相手にドロウさせる」

「サンキュー、黎」

「更にその枚数×600ポイント俺の風属性モンスターの攻撃力をアップさせる。フィ

オに3枚ドロークさせた事で、1800ポイントアップだ」

W・S	カープラント・ドラゴン	: ATK	2600	↓	4400
W・S	ライトニング・ガルーダ	: ATK	2800	↓	4600
W・S	ボーガン・ド・シヨモ	: ATK	3100	↓	4900

ファイオ: LP 4000

手札: 3枚

フィールド

・ルール: ド・バロネス (ATK 3000)、相剣大公―承影 (ATK 4100)、  
 守護天霊ロガエス (ATK 2400)

・伏せカード1枚

これで俺の手札は6枚、ファイオは3枚。

モンスターは6体も並び、伏せカードは合計4枚ある。

対する奴の手札は3枚、次のドロークで4枚になり、フィールドは文字通り焼け野原。

アドバンテージは圧倒的だ。ライフだって風前の灯火と来た。



勿論、これで安心なんてできない事は重々承知しているが、それでも奴の冷静さが際立つ。

「我のターン、ドロー」

通常ドローによつて最強の護衛の手札が1枚増える。

その引いたカードを見た瞬間、黒いスーツの男はニヤリと笑った。

「……来たか」

何が飛んで来る？ モンスターの全除外か、巨大な数字のバーンか、俺の知らない戦術か。

『憤怒』の名に反して冷静な黒スーツの男は、引いたカードを手札に加えると『自家融解』でドローしたカードをディスクに配置した。

「我は『スカル・マンモス』を通常召喚」

スカル・マンモス：ATK 2000

ラースが召喚したのは白骨化した巨象。薄茶色の『マンモスの墓場』や黄金色の『金色の魔象』の色違い、といった印象だ。

「我の手札を1枚除外し、モンスター効果発動。我の除外されているカードを3枚墓地

に戻し、その中で最も多い種類によって効果が変わる。我は『スカル・サーペント』を除外し、除外されている『会稽白骨惑星』『怨嗟の骨盾』『スカル・アーマード・ヴァーミン』を墓地に戻す。魔法カードを最も多く戻した場合、墓地から5枚のカードを対象を取らずに手札へ戻す」

「させない！ 『フルール・ド・バロネス』のモンスター効果発動！ その発動を無効にし、破壊する！」

手札が1枚蜃気楼のように消え、骨象が鳴き声をあげようとするが、その前に白百合の騎士によって両断される。

ラーズは召喚権をこれで失ったが……、同時に『バロネス』の1度しか使えないカウンターを使わされた。尤も奴の墓地には『禁じられた聖杯』がある以上、ここで使わないという選択肢は無いため仕方ない。

「除外された『スカル・サーペント』は自身の効果で手札に戻る。そして手札の『スカル・サーペント』と『スカル・サルベージャー』を墓地に送り、魔法カード『右腕の末路』を発動。このカードは手札のモンスターを2体墓地に送る事で発動でき、デッキから通常魔法を1枚手札に加える事ができる」

成程、コストの内容が調整された『左腕の代償』か。

モンスターカード2枚を捨てるだけで発動できるのなら、あつちより断然発動条件は

緩いが。

スカル・マンモス（効果モンスター）（オリジナル）

星4

闇属性／アンデット族

ATK 2000 / DEF 0

（1）：このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、手札を1枚除外して発動する。

自分の除外状態のカードを3枚墓地に戻す。

その後、戻したカードの中で最も多い種類によって以下の効果を発動する。

●モンスター：次の自分のターン終了時まで相手モンスターの効果は無効になり、攻撃力は0になる。

●魔法：自分の墓地からカードを5枚選び、手札に加える。

●罫：3回目の自分のスタンバイフェイズまで自分は効果ダメージを受けず、戦闘ダメージは半分になる。

スカル・サルベージャー（効果モンスター）（オリジナル）

星6

闇属性／戦士族

ATK 2000 / DEF 2000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、自分の墓地に存在するアンデット族モンスターを1体、効果を無効にして守備表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターは、表示形式の変更ができない。

右腕の末路（オリジナル）

【通常魔法】

このカード名の効果はデュエル中1度しか使用できない。

(1)：手札から種族と属性が同じでカード名の異なるモンスターを2体墓地に送って発動できる。

デッキから通常魔法カードを1枚手札に加える。

「我はこの効果で『スカル・オーバーロード』を手札に加える」

ラーズはデッキをディスクから抜き、底の方にあつた緑色のカードを手札へとサーチする。

だがこれで奴の手札は1枚、今加えたカードしかなくなった。

あのカード一枚で逆転を狙っているのだとは思うが、どんな効果を持っていて俺達の首を狙っているんだ？

「ク、クク……」

！

「クカカハ……、クカハハハハハハアーツ！ やつとだ！ やつと貴様らを地獄に落とす事ができる！」

「何！」

「どういう意味さ！」

「クカカツ！ 融合モンスター、シンクロモンスター、エクシーズモンスター、リンクモンスター、儀式モンスター……、我は貴様らと戦う時に備え如何なるモンスターで、戦術で、モンスターで首を取るべきか考えていた！ だが私の脳裏には常に敗北の影がチラついていたので！ 忌々しい事にな！」

突然笑い出したかと思えば怒りの形相になる最後の護衛。俺達に負ける可能性がある、という事実が許せないのだろう。

だがデッキが40枚のカードから構成されている以上、それは仕方のない事。どんなガチデッキだって常勝無敗で勝率100%なんて事はできないのだ。

「確かに貴様らは我らにとって是最悪の障害、都合9人の部下は討ち死にに遭い、我がこ

うして出向く事になった。それが何に置いても腹立たしい！ 人間如きに、否！人間が罪業を晴らさずに、我らに勝つなぞ、こんなにも業腹な事があるのか！ 確かに邪神様復活に貴様らが必要なのは明々白白々！ だが！ 罪を背負ったまま立ちふさがり！ 人間ではない存在が！ 我らの道を妨げた！ 聖人どころか真逆の化物が！ 一体これは何の冗談だあつ！」

「罪業を、晴らす？」

「……」

ラースは何に怒っているのだろうか。

フィオは何か知っているようだが、聞ける雰囲気では無い。

「だが……、それももう終わりだ。貴様らはもう我に勝利する事はできぬ」

「俺達が負けると？」

「然り。それもただの敗北ではない。絶望の末に敗北するのだ、勝利する方法が無いが故に敗北すると知るのだ！ 人間でも、化物でも、決して届かぬ大いなる存在の威光をその眼に焼き付けてなあ！ これが貴様らの、絶滅への道だあ！」

来る……！

「魔法カード発動『スカル・オーバーロード』！ その発動のため、我は発動コストを支払う！」

「通すぜ、コストを払いな」

「我が払うべきもの、それは！」

ジャギツ、という乱暴な音がした。

それは先程も鳴った音であり、デュエルディスクを持つデュエリストなら何度でも聞く音。

ディスクからデツキを抜く音である。

「私のデツキの全てと！」

次にラースの前に虹色に輝くプレートのようなものが出現した。

板には3桁の数字が刻まれており、それは急速に減少して最後に0を刻む。

初期の数値は650、紛う事無くラースのライフポイントだ。

「私のライフ全てだ！」

これはまさか……。

そうか、絶望つて、勝利する方法が無いって、そういう意味なのか！

「最初から簡単な話だったのだ……。我が敗北を許されぬのなら、そうならぬよう細工を施せば良かったのだ。そうして後は貴様らをじっくり始末すれば良い。負けぬのであれば、いくらでも時間をかけられる。いくらでも甚振る事ができる。我は難しく考えすぎたのだ、たかが矮小な下等生物を相手に怯えていたのだ。受け取れ、私の怒りから

産まれた絶望を！」

「れ、黎、これって……」

「ああ、最悪だ」

「リースはもう倒せないかも知れない」

リース：残りデッキ枚数 0枚



ラース：LP 650↓0

【デュエル続行】

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

# STORY 98 : 勝利の存在しない決闘 (デュエル)

ラース : LP 0

手札 : 0 枚

フィールド

: モンスター無し

: スカル・オーバーロード (通常魔法)

黎 : LP 3200

手札 : 6 枚

フィールド

: W・S ライトニング・ガルーダ (ATK 4600)

: W・S ボーガン・ド・シヨモ (ATK 4900)、W・S カープラント・ド

ラゴン (ATK 4400)

: 伏せカード 2 枚

ファイオ : LP 4000

手札 : 3枚

フィールド

: EXモンスターゾーン無し

: フルール・ド・パロネス (ATK 3000)、相剣大公―承影 (ATK 4200)、

守護天霊ロガエス (ATK 2400)

・伏せカード1枚、神の居城―ヴァルハラ (永続魔法)、天空の聖域 (フィールド魔法)

SIDE : 黎

「馬鹿な、ライフがゼロなのにデュエルが終わっていないだど!？」

「……有り得ない、何が起きてるの」

「マズいですよこれ、本当にマズいです」

ライフがゼロになり、デッキのカードも無くなった。否、自分から無くしたのに、ライフは敗北していない。

あの野郎、敗北条件を書き換えるカードを発動したって事かよ。

「『スカル・オーバーロード』の効果により、除外されているカードを全て持ち主の墓地に戻す。これで『承影』の攻撃力は下がる」

「くっ！」

「そして除外されていたカードの中から好きなカードを1枚手札に戻す。我は『会稽白骨惑星』を選択し、再び発動」

相剣大公―承影：ATK 4200↓3000

雲海の古跡に囲まれていた場が再び割れ、奴の足元から瘴気の沸き立つ死の世界が生まれる。

これで、俺達は再び白骨化したゾンビを倒さないといけなくなった。

だがそれ以上の問題は、ラースがデュエルというカードゲームを行う上で決して破ってはならない禁を犯しているという事である。

「何故だラーズ、何故お前のライフはゼロになったのにデュエルが終わらない」

「そう焦るな、今教えてやる」

効果処理が終わったのか、ラーズは己の黒く武骨なディスクから発動した魔法カードを引き抜き俺達に見せた。

見た目は普通の魔法カード、漂う気配もラーズの持つそれと大差は無い。絵柄も豪華なローブを纏った骸骨が黒いエネルギーの塊を構えた……、そう、『黒魔術のカーテン』のカードに何となく似ている。

「我は魔法カード『スカル・オーバーロード』を発動した。これは我を死者とするカードだ」

「死者にする、だと？」

「然様。死者に明日は無く、命も無い。そこにあるのはただ嘗てその地に生きていたという事、故に我はそれらを対価として失ったのだ」

成程、ライフとデッキが消えたのはそういう事か。

未来と現在を支払って、過去に縋りつく——奴は今、本物のゾンビになった。死という結末に辿り着かない、浅ましい存在に。

『スカル・オーバーロード』はライフとデッキを対価に我を死者にした。死者とは即ち、闇のゲームの敗者だ。しかし我はこうして生きている、生きてデュエルを続けている。これが何を意味するか分かるか？」

「デメエ……！」

「そうだ、我は今後ダメージを受けぬ、デッキからカードをドローできなくとも負けぬ。貴様らがこれまで何千年何万年と積み重ねてきた生死デュエルのルールの歴史そのものが、貴様らに牙を

剥くのだ。死者は死なず、生者は死ぬという当然の道理そのものが敵となったのだ！」  
「そ、そんな!？」

デュエルモンスターズに於いて、勝利方法は複数存在する。だがその大半は「相手のライフポイントを0にする」「相手のデッキを0枚にしてドロウさせる」の2通りに帰結してしまう。

そして削れるライフもデッキも消えた今、それらで勝利する事は不可能となった。

他に方法があるとすれば特殊勝利だが、俺のデッキにも、ファイオの使っているデッキにもそれは入っていない。

成程、こうすれば俺達はラーズに負ける。何せ『勝てない』のだから。極端な話、ラーズは今後ドロウ<sup>何も</sup>し<sup>ない</sup>で俺達のデッキ切れを待つだけで良い。

「そしてこのカードを発動したデュエル中、私のライフはゼロから変動せぬ。更に通常ドロウとして墓地から好きなカードを手札が5枚になるよう戻すのだ」

スカル・オーバーロード（オリジナル）

### 【通常魔法】

このカードの発動・効果は無効にならず、発動してから効果処理が終了するまで相手は魔法・罠・モンスターの効果を発動できない。

(1) : 自分のLPを全て払い、自分の手札・デッキのカードを全て墓地へ送って発動でききる。

除外状態である全てのカードを持ち主の墓地に戻し、墓地に戻った自分のカードの中から1枚を選び手札に戻す。

デュエル中、自分は以下の効果を適用する。

● 自分のLPは0から変化しない。

● 自分はLPが0でも敗北せず、デッキからドロウできなくても敗北しない。

● 自分が通常ドロウを行う場合、代わりに自分の墓地から手札が5枚になるようカードを選び手札に加える(相手はこの5枚のカードを確認できない)。

● 自分・相手のカードの、このカードのコントローラーの墓地のカードの枚数を参照する効果は無効となる。

(2) : (1) で墓地に送ったカードの効果は、次の自分スタンバイフェイズまで無効となり発動できない。

アリかよこんなの、敗北そのものが無いじゃねえか！

デッキから墓地に行ったカードは暫く使えないが、それでもその間に倒せないなら何の意味もネエ！

しかもフィールド魔法が復活しやがった、これでアンデット族モンスターは破壊耐性を持ったに等しい。クソ骨野郎が……！

「ど、どうしよう黎……、こんなのどうやって倒せば良いんだよ……。わたし、ライフもデッキもゼロの相手の倒し方なんて知らないよ！」

だが。

「それでも、踏ん張れファイオ」

「ふ、踏ん張れって」

「確かに、今の奴は無敵にして不死だ。限りあるリソースを分配して切り崩す俺達<sup>生者</sup>ではいつかスタミナの差ですり潰される」

「敗北宣言じゃん！」

「だが、それでも、足掻け。最後の1秒まで諦めず足掻くんた。死者は死者の国にいるからこそ死者、生者の国にしゃしゃり出て来た奴は火葬して土葬して水葬して骨の欠片も残さず分解されるんだよ。それが俺達の理屈、俺達の道理だ、現世に来たならあいつらも現世のルールに従っているんだ」

無敵、不死身、完璧。

そんなのはデュエルでは有り得ない。

鉄壁の布陣も永遠には続かない、どこかでスタミナが切れたり予想外の対策を喰らっ



たりして崩れるものだ。

無論、その対処法が俺の手の中に無ければ意味は無い。

それでもどこかに隙があると信じて、俺は諦めない、諦めたくないんだ。

「フィオ、俺は死人だ。だからこそ分かる。あんな骨に負ける程、人間は弱くない。喰らい付け、白骨死体なんて蹴り碎いてしまえ」

「……了解！」

「その意気だ」

諦めなければ勝てる、というのは幻想でしかない。

だが諦めたら勝てるかも知れない未来は絶対に掴めない、限りなくゼロに等しい数値であっても勝利できる可能性があるのなら、それに手を伸ばす。

敗北ではなく勝利を得たくば、それしか道は無いのだから。

「有りもしない希望に縋るか、愚かよな」

「俺の目には、ルールを捻じ曲げてまで敗北から逃げ惑うお前の方が愚かで可哀想な奴に見えるか？」

「笑止、なら己の愚かさを知らぬまま死ぬ！ 我は墓地の『エクスポート・エクトプラズム』を除外し効果発動！ 墓地及び除外ゾーンにこれが3枚存在する場合、内1枚を除外する事でエクストラデッキから『スカル』モンスターの効果と攻撃力を無効にして



「『エクスポート・エクトプラズム』の効果！ それを無効にし、除外ゾーンのこのカードを全て裏側表示にする！」

「くっ！」

エクスポート・エクトプラズム（オリジナル）

【通常罫】

このカード名の（１）の効果はデュエル中に３回まで使用でき、（２）の効果はデュエル中１度しか発動できない。

このカードの効果が発動するターン、自分は他の方法でEXデッキからモンスターを特殊召喚できない。

（１）：自分の墓地及び除外状態の自分の「エクスポート・エクトプラズム」の合計が３枚の場合、墓地のこのカードをゲームから除外して発動できる。

自分のEXデッキから「スカル」モンスター１体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターの攻撃力は０になり効果は無効となる。

（２）：このカードが除外されたターン、相手のモンスター効果が発動した場合に発動でききる。

その発動を無効にする。

その後、除外状態のこのカード、及び同名カードを全て裏側表示の除外状態にする。

「バトル！ 我は3体のモンスターで『ボーガン・ド・シヨモー』を攻撃！ さあ、負けて来るが良い！」

「何?！」

「やられたそういう事か！」

ラーズの指令を受け、俺の鳥女に向かつて3体の骨モンスターが飛び込んで来た。一瞬でせいづらは矢で撃ち抜かれるが……。

「フィールド魔法『会稽白骨惑星』の効果により、たった今破壊された私のモンスターは攻撃力を1500アップし特殊召喚される！」

「っ、そうか！ 奴のライフは今ゼロ！ どれだけ自爆特攻してもゼロはゼロのままなんだ！」

「そうだ、本来なら自分の首を絞める行為だが、奴は死者となった！ 首を絞めたって死なない！」

「カアークイハハハハハハッ！ ようやつと分かったか、我が貴様らに敗北する事は有り得ないという絶対の真実が！」

スカル・ウイングヴィラン：ATK 2100↓3600↓3300

スカル・ウエイストファイター：ATK 2300↓3800↓3500

スカル・デイスアポイントナイト：ATK 2500↓4000↓3700

これは……、想像以上に厄介だぞ……！

奴のフィールド魔法はモンスターの破壊がトリガーになって、破壊されたモンスターを蘇生する。だからその上から殴り続けなければいつかライフをゼロにする事は理論上可能だ。だが自分のカードでライフをゼロにしてデュエルを続行させられてはそれができる。奴にはもう傷を付けられるライフが無い、死者に痛みを与える事はできない。

「さあ再び戦闘だ！　まずは『ウイングヴィラン』で今度は『ライトニング・ガルーダ』を攻撃！　この瞬間、『ウイングヴィラン』の効果発動！　1ターンに1度、このモンスターがバトルを行う場合、相手の効果は無効となり攻撃力は半減する！」

「っ!？」

W・S ライトニング・ガルーダ：ATK 4600↓2300

「黎のモンスターの攻撃力が!？」

骸の鳥をまとった鳥人間の突進により、雷をまとった鳥神の力が大きく削がれてしまった。

そのまま突進してきた敵の攻撃を受け止める事もできず、心臓を真正面から貫かれてしまう。更にはその余波が俺を真正面から襲い、俺を数メートル吹き飛ばして片膝を付かせてくる。

黎：LP 3200↓2200

「ぐ、が……っ！」

「更にモンスターを戦闘で破壊した時、貴様らのモンスターを全て破壊し、1体につき2000のダメージを与える！ この時 “破壊されない” 耐性を貫通する！ 死ねえ！」

「主殿！」

くっそ、破壊耐性を与えるモンスターを潰されたか。だがそつちを通すワケにはいかない！

「カウ、ンター毘……ッ！ 『バックドライブ・ストーム』発動！ 効果ダメージを与える効果を無効にして、ぐっ、破壊する！」

「『会稽白骨惑星』の効果で特殊召喚されたモンスターは効果では破壊されぬ！」

「だがダメージを無効にする事は、つ、できるー！」

風には風を。死を運ぶ風には、同じく死を運ぶ風を。

追加で放たれた暴風にこちらも暴風で対抗、両者の台風が如き大風は相殺し合い消滅した。

くっそ、イツテエな……。弱って来ている俺の肉体にはこの程度の、たった10000  
ぼっちのダメージすら厳しいのか、情けない……！

バックドライブ・ストーム（オリジナル）

【カウンター罠】

（1）：自分フィールドに「W・S」モンスターが存在し、効果ダメージを与える効果が発動した時に発動できる。

その発動を無効にして破壊し、それがモンスターカードなら攻撃力分のダメージを与える。

この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない。

（2）：自分フィールドに風属性モンスターが存在する場合、ダメージステップにこのカードを除外して発動できる。

その戦闘で発生するダメージは半分になる。

「ならば続いて『ウエイストファイター』で『承影』を攻撃！ この瞬間、『ウエイストファイター』の効果発動！ このカードがバトルする時、自分フィールドの他の『スカル』モンスターの数×2000の攻撃力を得る！」

スカル・ウエイストファイター：ATK 3500↓7500

「攻撃力7500っ!？」

「4200のダメージで終わりだ！」

「マスター、避けてえっ！」

「俺は……っ、墓地の『バックドライブ・ストーム』を……ぐっ、除外！ ダメージを半減させるっ！」

「黎！……っ、『承影』の効果！ 除外されたカードが増えた事でステータスが100増減する！」

相剣大公―承影：ATK 3300↓3400

スカル・ウエイストファイター：ATK 7500↓7400



「鬱陶しい、いい加減に失せよ！」

「がっ、ぐ、ああああああああああああああああっ！」

ファイオ：LP 4000↓2000

強烈な右ストレートを受け、龍面の大剣士が吹き飛ぶ。その余波で同様にファイオも茶髪を散らしながら吹き飛ばされ、地面に叩き付けられた。

「がはっ!？」

「マスター！」

「いかん、直撃だ！」

「ファイオッ！ しつかりしろ、ファイオッ！ すまない、受け止め、られなかったっ、っ！」  
「いっつつつ……。はい、謝らない、いっただ……。ちゃんと受け身取ったし、そもそも隣で守るためにいるんだから、君の保護なんて期待して立ってないよ……。！」

「ファイオ……」

「それに、まだ終わってない……。！」

「然様、我にはまだ攻撃可能なモンスターが1体いる。更に『承影』が消滅した事で私の

モンスターの攻撃力は元に戻っておるぞ」

スカル・ウインググヴィラン：ATK 3200↓3600

スカル・ウエイストファイター：ATK 7400↓3800

スカル・デイスアポイントナイト：ATK 3600↓4000

「さあやれ『スカル・デイスアポイントナイト』、『守護天霊口ガエス』を攻撃イ！ 『デイスアポイントナイト』のモンスター効果発動！ オーバーレイ・ユニットを2つ使い、相手モンスターを全て破壊する！」

「だがそのモンスターは墓地から復活させたモンスター、オーバーレイ・ユニットは——」

「このモンスターは他のモンスターが全て攻撃宣言を行っている場合、オーバーレイ・ユニットを使わずに効果を発動できるのだ！ ただし攻撃力分のダメージを受けるがなあ！」

「またライフがゼロなのを利用された!?!」

「髑髏の騎士が鎧に格納されていた骨の翼を広げ、そこから黒い光の榴弾を無数に放つ。」

破壊の黒は全てのモンスターを巻き込み、俺達のモンスターは1体も残らず消滅した。

『ロガエス』と『バロネス』が!？」

「こつちも全滅だぜ……!！」

「更にこの効果を使用した場合、このモンスターは2回攻撃ができる！　まずは貴様だ  
 バランサー、死ねえ!！」

「リバースカード、オープン！　『レベル・レジストウォール』！　破壊された『バロネス』を対象に発動し、デッキから効果を無効にしてレベルの合計が10になるようモンスターを特殊召喚する！　わたしを守って、皆!！」

イーバ：DEF 2000/☆1

ブーテン：DEF 3000/☆1

マジエステイ・ヒュペリオン：DEF 2700/☆8

破壊されたモンスターの魂は別の壁モンスターに。フィオだつて雑魚じゃない、一廉ひとかどのデュエリストとして場に壁モンスターを並べて防御の陣形を張る。

一瞬だけ止まった髑髏の翼騎士は、その切っ先を今度は俺に向けた。

「なら貴様から駆除してやる、死ねえ！」

『ガード・ブロック』発動！ ダメージを0にして1枚ドロロー！」

「だがこのカードは2回攻撃できる！ 今度こそ死ね、〃騎士〃の魂イツ！」

「俺は墓地に存在する『スウォーム・レイニアズ』の効果発動！ デュエル中1度だけこのカードを攻撃表示で特殊召喚し、戦闘を継続する！ 更に相手モンスターへの攻撃力の半分を自分の攻撃力に加える！」

W・S スウォーム・レイニアズ：ATK 500↓2500

「邪魔だ、羽虫めが！」

「つ、——つつ！ ……が、あ……、ぐ……つつ！」

黎：LP 2200↓700

あつぶね……。

怒涛の二連撃を前に俺達は辛うじて攻撃を受け止め切った。状況はかなりキツイが、それでも死ぬよりマシだろう。

スカル・ウイングヴィラン (融合・効果モンスター) (オリジナル)

星6

風属性 / アンデット族

ATK 2100 / DEF 1200

属性の異なる「スカル」モンスター×2体

(1) : 1ターンに1度、このカードが戦闘を行う攻撃宣言時に発動できる。

戦闘を行う相手モンスターの効果は無効となり攻撃力は半分になる。

(2) : このモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時に発動できる。

相手モンスターを全て破壊し、1体につき2000ダメージを相手に与える。

この時「破壊されない」効果は無効となる。

(3) : このカードがモンスター効果で除外された場合に発動できる。

自分の墓地からレベル8以上の闇属性モンスターを手札に戻す。

スカル・ウエストファイター (シンクロ・効果モンスター) (オリジナル)

星5

地属性 / アンデット族

ATK 2300 / DEF 1300

「スカル」チューナー+チューナー以外のモンスター1体

(1) : このカードが戦闘を行う攻撃宣言時に発動できる。

ダメージ計算終了時まで、このカードの攻撃力は自分フィールドの他の「スカル」モンスターの数×2000アップする。

(2) : このカードが効果によってフィールドを離れた時に発動できる。

デッキから攻撃力の合計が2300以下になるようアンデット族モンスターを手札に加える。

自分のLPが相手より少ない場合、更に攻撃力の合計が2300未満になるよう相手は自分フィールドのモンスターを裏側表示で除外しなくてはならない。

(3) : 墓地のこのカードと「スカル」モンスターを2体除外して発動できる。

自分フィールドに「骨片トークン」(アンデット族・地・星2・攻/守0) 3体を守備表示で特殊召喚する。

スカル・デイスアポイントナイト (エクシーズ・効果モンスター) (オリジナル)

ランク4

光属性 / アンデット族

ATK 2500 / DEF 2500

アンデット族レベル4モンスター×2

(1) : このカードのX素材を任意の数取り除いて発動できる。

このターン、このモンスターは2回攻撃できる。

その後、取り除いた数によって以下の効果を発動する。

● 1つ : モンスターの攻撃を無効にする。

● 2つ : 相手フィールドのモンスターを全て破壊する。

(2) : 自分フィールドの他のモンスターが攻撃宣言を行っている場合、このカードはX素材を取り除かずに(1)の効果を発動できる。

その場合、自分はこのカードの攻撃力分のダメージを受ける。

(3) : このカードが除外された場合に発動できる。

自分の墓地または除外状態のフィールド魔法を1枚選んで手札に戻す。

「……さ、サー、大丈夫!?!」

「何とか……な……っ!」

「辛うじて防いだが、しかし苦痛の時を伸ばしているに過ぎぬ。我はこれでターンエンドだ」

ラース：LP 0

手札：0枚

フィールド

：EXモンスターゾーン無し

：スカル・ウイングヴィラン（ATK 3600）、スカル・ウエイストファイター（A

TK 3800）、スカル・デイスアポイントナイト（ATK 4000・ORU：0）

：会稽白骨惑星（フィールド魔法）

何とか生き残れたか……。

このままでは奴の言う通りジリ貧だ。何とかして手を打たないと。

手札は7枚、だがどのカードを使ってもライフもデッキも無くなった死者を滅ぼせない。さてどうしたものか。

「すうー……、ふうー……」

全身の痛みが全く引かない。呼吸を整えて息の乱れを静めても、頭痛や熱病の時のようなフラつく感じがする。

フィオも綺麗な明るい茶髪が泥まみれ、花も恥じらう年頃の乙女の柔肌も傷だらけ



だ。ああ、自分の情けなさに吐き気がするぜ。

それでも俺達はまだ戦える、戦えるんだ。今は奴をどう倒すかだけに意識を集中させてろ。

「……サー……」

「お2人を、信じましょう……!」

「迷った時はカードを引くのみ。俺のターン、ドロー!」

……駄目だ、このカードではラースという悪霊を祓う事はできない。

今の奴は亡霊だ、実体は無くただただ生きる者を害する。剣も銃も効かないアレを倒すには尋常ならざる手法が必要だが、果たしてそれを見つけられるか。

「黎、あんなのどうやって倒せば……!」

「分からん。だがそれでも、俺はライフが1でも残っている限り、デツキにカードが1枚でも残っている限り、指が1本でも動く限り、諦めはしない。諦めたら死ぬんだ、死んでラースに食われてしまうんだ。最後の1分1秒まで戦う覚悟を決めろ、フィオ」

「……分かってるよ!」

「ならばよし! まずは鬱陶しい3匹のアンデットから倒す、俺は手札から『W・S シャドー・ハーピー』を召喚!」

『キャハッ!』

デュエルでやる事は変わらない。

モンスターを倒す、魔法・罠カードを破壊する。

デツキのリソースが切れるまでそれを繰り返すんだ。何度でも、何度でも！

『シャドー・ハーピー』の効果発動！ 俺の墓地から“W・S”1体を除外し、その攻撃力1500につき1体『ハーピー・トークン』を特殊召喚する！ 俺は墓地の『ボーン・ド・シヨモ』を除外！ 『シヨモ』の攻撃力は3100、よってトークンを2体特殊召喚だ！」

W・S シャドー・ハーピー：ATK 1000

ハーピー・トークン：DEF 1000

ハーピー・トークン：DEF 1000

くノ一風味な翼人少女が羽をまき散らし、場にしもべを作り出す。

これ以上あいつらをのさばらせるわけには行かない、このターンで叩く！

「現れる、常闇に揺蕩うサーキット！ 召喚条件は“W・S”モンスターを含む、風属性モンスター2体以上！ 俺は3体のモンスターをセット！」

LM || 右・右下・下

「リンク召喚！ 吹き荒れる、リンク3！ 『W・S 風神ヴァユタ・プラーナ』！」  
 『ぬうん！』

W・S 風神ヴァユタ・プラーナ：ATK 2000

「『ヴァユタ・プラーナ』はリンク召喚に成功した時、墓地と手札から同じレベルの『W・S』を特殊召喚できる。蘇れ、『W・S シャドー・ハーピー』！ そして手札から『W・S フェーン・ジョイン・エレファント』！」  
 『イエーイ！』  
 『パオオオオッ！』

W・S シャドー・ハーピー：ATK 1000

W・S フェーン・ジョイン・エレファント：ATK 1900

青肌の猛々しい風神に導かれ再びフィールドに現れる忍者風のハーピー、そして新た

に熱風を身にまとう象も参戦する。

息継ぎすら惜しい、もつと、もつとだ。

もつとモンスターを展開して、もつと奴を返り討ちにするくらい強く押し込め。

命が何だ、死がどうした。

今ここで痛みに怯んでいたら、何も守れない。

「何体モンスターを呼んでも無意味！ 死者は殺せぬ！」

「殺せないなら、殺せるまで殺すまでだ！ そうやって俺達はグラトニーに勝った！

レベル4の『シャドー・ハーピー』と『ジョイン・エレファント』でオーバーレイ！」

☆4×☆4＝★4

「エクシーズ召喚！ ランク4、『W・S ブリザード・アルバトロス！」

『ア、アア！』

『ブリザード・アルバトロス』の効果！ オーバーレイ・ユニットを1つ使い、墓地か

ら『W・S』1体を回収し通常召喚する！ もう1度現れる、『スウォーム・レイニアス

ズ』！

『ピーーツ！』

『スウォーム・レイニアスズ』の効果により、手札から別の『W・S』を召喚する！  
2体目の『シャドー・ハーピー』を召喚！

更にこの瞬間、墓地に送られた『フェーン・ジョイン・エレファント』の効果発動！  
墓地からこのカードと風属性モンスター1体を除外し、『W・S』を融合召喚する！  
俺は墓地からさつき戻された『風車獣デセルバ』を除外！

「これはー！」

「渦巻く風よ、熱風に巻き上げられし巨獣を引き込み、ここに生まれ変われ！ 融合召喚  
！ レベル7、『W・S 幻獣帝スカイ・キマイラ』！

更にレベル4の『シャドー・ハーピー』にレベル4の『スウォーム・レイニアスズ』を  
チューニング！ 黒き暴風、曇天を引き裂く鍵爪の雄姿となるー！」

☆4＋☆4＝☆8

「シンクロ召喚！ 吹きすさべ、レベル8！ 『W・S ブラックウイング・アサルトソー  
ド』ー！」

『GAAAAAAAAAAAAAAAAA！』

『タアッ！』

W・S ブリザード・アルバトロス：ATK 2400/ORU 2↓1  
 W・S 幻獣帝スカイ・キマイラ：ATK 2100  
 W・S ブラックウイング・アサルトソード：ATK 2800

一気にモンスターを4体フィールドに出す。奴の3体より多い数を。

これが、今の手札で出せる全力。今の手札で出せる一番強いフォーメーション。

吹雪のアホウドリ、空色の双頭キメラ、長剣を構える鴉の剣士。そこに風の神を合わせた合計4体、これ以上のモンスターは今では出せない。

このままブツ叩く！

「行くぞバトル！俺は『ブリザード・アルバトロス』で『ウエイストファイター』を攻撃！」

『ウエイストファイター』の効果！ 攻撃力が4000アップする！」

「手札から『W・S ビル風小僧』を墓地に捨てて効果発動！ 相手モンスターの攻撃力が1000ポイント以上変化する時、それを無効にして同じ数値分だけ相手モンスターの攻撃力をダウンさせる！」

「何だと!？」

W・S シャドー・ハーピー (効果モンスター) (オリジナル)

星4

風属性 / 鳥獣族

ATK 1000 / DEF 1000

このカード名の効果は1ターンに1度しか発動できない。

(1) : このカードの召喚に成功した時、自分の墓地から「W・S」モンスター1体を除外して発動できる。

除外したモンスターの攻撃力1500につき「ハーピー・トークン」(鳥獣族・風・星1・攻/守0)を1体特殊召喚する。

このトークンはリリースできない。

W・S フェーン・ジョイン・エレファント (オリジナル)

星4

風属性 / 炎族

ATK 1900 / DEF 1000

(1) : このカードが破壊以外の方法で墓地に送られた場合に発動できる。

墓地のこのカードと風属性モンスター1体を融合素材として除外し、風属性Lモンスターのリンク先に「W・S」融合モンスターを融合召喚する。

(2)：このカードとレベル6以上の「W・S」モンスターを融合素材にしたモンスターは以下の効果を得る。

●このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時までモンスターの効果・魔法・罠カードを発動できない。

W・S ビル風小僧（オリジナル）

星3

風属性／悪魔族

ATK 0 / DEF 0

(1)：自分フィールドに「W・S」モンスターが存在し、相手モンスターの攻撃力が1000以上アップする場合に発動できる。

手札・フィールドのこのカードを墓地に送り、その発動を無効にする。

その後、無効になった数値分だけその相手モンスターの攻撃力をダウンさせる。

スカル・ウエストファイター：ATK 3800 ↓ 0



「フリーズ・ヘビータッシュ！」

「ぐおおおお！」

「続けて『スカイ・キマイラ』で『ウイングヴィラン』を攻撃！」

「『ウイングヴィラン』の効果発動！ 貴様のモンスター効果を無効にし攻撃力を半減させる！」

「融合素材になった『フェーン・ジョイン・エレファント』の効果！ このカードを素材にした『W・S』が攻撃する時、相手の効果は発動できない！ 更に『スカイ・キマイラ』の効果により、相手モンスターの元々の攻撃力を0にして自分の攻撃力を倍にする！」

スカル・ウイングヴィラン：ATK 3600↓1500

W・S 幻獣帝スカイ・キマイラ：ATK 2100↓4200

「キマイラ・デストロイグライド！」

「攻撃力4200だと!? ぐぬっ！」

「まだまだあ！ 更に『アサルトソード』で『デイスアポイントナイト』を攻撃！ 速攻

魔法『収縮』発動！ お前のモンスターの元々の攻撃力を半分にする！ 喰らえ、  
ラックボルト・スラッシュ！！」

「オーバーレイ・ユニットを踏み倒す効果は他の自分モンスターが攻撃した後のみ、相手のターンでは使えない！」

「ぬぐあああつー！」

スカル・デイスアポイントナイト：ATK 4000↓2750

氷をまとうアホウドリ、青い魔獣、黒い鳥剣士が飛び上がり、それを敵の骨人達が追いかける。

双方共に上空で殴り合い切り合い噛みつき合いの激突を繰り広げるが、滑空による突進がぶつかった時、重量差によって勝者が決定した。

敵は死んで骨だけ、重さでは勝てないのだ。

「3体とも粉碎！ 『会稽白骨惑星』の効果で蘇生したモンスターは再復活できない、よってそいつらがフィールド魔法の効果で特殊召喚される事は無い！」

「ぐ、ぬう……！」

「ハッ、死者を名乗る割には痛みは感じるらしいな？」

「ほぎけー！」

「ならもう一撃だ！ 『ヴァユタ・プラーナ』でダイレクトアタック！ 烈風のマール

テイ・ナツクル！」

「ぐぐあああああああああああー！」

最後に風神の鉄拳制裁がボディブローで叩き込まれた。

これだけブチ込んでやれば普通は吹っ飛んでライフも尽きる。ましてや敵の手札は0枚、降参してもおかしくは無い。

普通なら、な。

「ク、ククハハハハ……！」

「やはり駄目か……！」

レース：LP 0↓0↓0↓0↓0↓0↓0

殴って参るのは生きている奴だけ、命の無い敵では無意味。

減るライフが無いのでは、殴った所で何も変わらない、何も変えられない。

「駄目だ黎、ライフは0で行き止まりだ。これ以上は減らないよ……！」

「バトルフェイズ終了時に『スカイ・キマイラ』の攻撃力は元に戻る。そしてこの瞬間

『ヴァユタ・プラーナ』の効果を発動。1ターンに1度、リンク先の『W・S』の攻撃力・守備力が変化した時、その数値だけライフを回復する」

W・S 幻獣帝スカイ・キマイラ：ATK 4200↓2100

黎：LP 700↓2800

「そしてフィールド魔法『会稽白骨惑星』の効果により、除外されている『バックドラッグ・ストーム』を墓地に戻す。カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「無駄だ、無駄無駄。足掻いた所で何も変わらん、そよ風如きに何が成せる」

黎：LP 2800

手札：1枚

フィールド

置  
：W・S ヴァユタ・プラーナ（ATK 2000・左のEXモンスターゾーンに配置）

：W・S ブリザード・アルバトロス（ATK 2400・ORU：1・『W・S ヴァユタ・プラーナ』の右下のリンク先に配置）、W・S 幻獣帝スカイ・キマイラ（ATK

2100・『W・S ヴァユタ・プラーナ』の下のリンク先に配置）、W・S ブラッ  
クウイング・アサルトソード（ATK 2800）

：伏せカード2枚

7枚も手札を使つてこれだからな、本来なら7150もの大ダメージを与えられたん  
だが……。

『負け』が無い相手がこんなにも面倒だとは思わなかったぜ。

「わたしのターン、ドロロー！ 『強欲な壺』を発動、デッキから2枚ドロロー！」

「クク、バランサーよ、貴様なら分かるであろう？ どう足掻こうとも現実が変わらぬ、

邪神様の復活と共に全ては終わるのだとな」

「……そうだね、お前の言う通りだ。変化なんて望むべくも無い、お前すら倒せないのに  
邪神なんて対処できない」

フィオ……。

目を閉じ、圧倒的な敵の闇の前に彼女は肩を落としている。やはり隣に立つ事を認め  
るべきではなかったのだろうか。

「でも」

「ぬ？」

「それでもわたしは、黎が諦めないのなら、わたしだって諦めない。わたしは自分の責任から逃げないためにここににいるんだ、だから足掻く！」

「愚か者めが、人間なぞに感化されるとは天使の恥であろうに」  
「何とでも言えば良い、曲げる気は無いよ」

天使、か……。

ここまで来ればフィオの正体にも勘付く。

そうか、そういう事か。

お前は最初からずっと責任を果たそうとしてくれていたんだな。

だが今はそれに構う余裕はゼロ、デュエルに集中だ。

「手札は4枚、行くぞー！」

「例え聖なる光であろうと、死して動く骨は浄化できぬ！ 我らは死者、冥府の民！ 神

の手届かぬ幽かそけき恨みよ！」

「死者なら死者の国に帰れ！ ここは人の国、精霊の世界！ 骸の道理が通ずるものか  
！ わたしは『創造の代行者 ヴィーナス』を召喚！」

『ハッ！』

「そして『天空の聖水』を発動！ デッキから『パーシアスの神域』を手札に加え、更に『マジエスティ・ヒュペリオン』と『ヴィーナス』がいる事でわたしのライフを1000

「回復！」

創造の代行者 ヴィーナス：ATK 1600

ファイオ：LP 2000↓3000

「わたしはレベル8の『マジエステイ・ヒュペリオン』とレベル1の『イーバ』に、レベル1の『ブーテン』をチューニング！」

その炎は愛、その炎は法、その炎は鋭き剣！ 光明よ、天の流れを司る太陽の輝きを以て、全てを照らす眩き焰となれ！」

☆8+☆1+☆1=☆10

「シンクロ召喚！ 希望の明日よ、今ここに！ 『マスターフレア・ヒュペリオン』！」「ハアアアアアアア、トアアツ！」

「『イーバ』の効果で墓地から『フェアリー・アーチャー』と『ヘカテリス』を除外し、デッキからレベル2以下の天使族を2体手札に加える。わたしは『神秘の代行者アース』と『デクレアード・デイズ・オブ・ティ宣告の狂信者』をサーチする」

マスターフレア・ヒュペリオン：ATK 3200

召喚されたのは金色の炎を背負う太陽神。あまねく代行者の頂点に座す大いなる炎の神様。

ここまででファイオは、大型シンクロモンスターであるレベル10のシンクロ召喚を3度もこなした。もうあのデッキは完璧に彼女の手に馴染んでいると見て良いだろう。

『ヴェーナス』の効果発動。ライフを1500払い、3体の『ホーリーシャイン・ボール神聖なる球体』を特殊召喚する。ぐつ、うううう……！』

神聖なる球体：DEF 500

神聖なる球体：DEF 500

神聖なる球体：DEF 500

ファイオ：LP 3000↓1500

場に再び天使族モンスターが満ち、ファイオのフィールドに渋滞を起こす。

あまり無理をして欲しくない、1500ライフは初期4000ではかなり重いコスト



なのだから。

「さあ行くよ！　ここで墓地から『ブーテン』の効果を発動、自身を除外する事で『ヴィーナス』をチューナーにする！」

「何、チューナーでは無いモンスターをチューナーにするだろ!」

「レベル2の『神聖なる球体』3体に、レベル3の『ヴィーナス』をチューニング！　氷の世界を貫く魔槍！　その眼にて睥睨する世界の終わりに座せ！」

☆2 + ☆2 + ☆2 + ☆3 = ☆9

「シンクロ召喚！　世界を凍てつかせろ！　『氷結界の龍トリシューラ』！」

『クアアアアアアアアアアア！』

氷結界の龍トリシューラ：ATK 2700

一列に並んだ緑の輪に変化した金色の天使が、引き連れる白亜の球体を取り込み氷の魔龍を生み出す。

本来なら強力なシンクロモンスター、打点も効果も優れたカードだが……。

『トリシューラ』の効果発動！ シンクロ召喚した時、相手の手札・フィールド・墓地のカードを1枚ずつゲームから除外する！ わたしは場と墓地の『会稽白骨惑星』を除外！」

「ほう」

「これで墓地に残った同名カードは1枚！ そしてフィールド魔法の効果で墓地に戻せるのは1ターンに1枚のみ、『会稽白骨惑星』を戻せば他のカードは戻せない！」

成程、ファイオはラーズのフィールド魔法の厄介さに目を付け、利用し辛くしたのか。

確かに奴はデッキを失った、破壊してもこれまで共通して発動していたリクルートは使えない。除外状態から戻すにせよ、毎ターン1枚しか戻せない上に単体でアドバンテージを回復するには戦闘を介する必要がある。そして毎ターン5枚のカードをサルベージできるが、逆に言えばフィールド魔法を含めさせるのなら、それはサルベージ内容が4枚になるという事である。

これであいつのテンポを遅くして、チャンスを伺うつもりなのか。

「まだまだまだまだあ！ わたしは『マスターフレア・ヒュペリオン』の効果発動！

『天空神騎士ロードパーシアス』を墓地に送る！ そして手札から『宣告の狂信者』を

捨てて『天空の聖域』に関わりのあるカードをサーチする効果を使う！ わたしが選ぶ

のは『神罰』！」

「だが私の通常ドロワーが墓地から5枚カードを戻すのは既にルールである！　いかに神であろうと規定は規定、死者の国の常識には及ばぬ！」

「構うものか！　墓地の『マジエステイ・ヒュペリオン』の効果！　わたしは墓地からさつき強制的に戻された『プルート』を除外し、特殊召喚する！」

マジエステイ・ヒュペリオン：ATK 2100

「永続魔法『パーシアスの神域』を発動して、バトルだ！　わたしは『マジエステイ・ヒュペリオン』『マスターフレア・ヒュペリオン』『トリシューラ』でダイレクトアタック！

『エクリプス・ストリーマ』！　『アルティメット・シャイニング』！　『エターナル・バースト・ブリザード』！」

「ぐおおおおおおおおお！」

マジエステイ・ヒュペリオン：ATK 2100 ↓ 2400

マスターフレア・ヒュペリオン：ATK 3200 ↓ 3500

ラース：LP 0 ↓ 0 ↓ 0 ↓ 0

二重になった太陽の熱線、そして猛吹雪が同時にラーズを襲う。

これだけでも8000超え、初期ライフ8000でもワンキルのダメージだが、ライフが0の奴にとっては些事にすらならない。事実、ラーズは大きく後退ったもののすぐに不敵な嘲笑を浮かべつつ、悠々と歩いて元の位置に戻って来た。

服も焦げて斬れて髪も凍ってるのに、文字通りピンピンしてやがる。痛覚ってモンがねえのかよ。

「終わりか？」

「……！」

「クハッ！ 手札がまだ5枚もあると言うのに、所詮は人間の器ではその程度よ！」

フィオの手札の枚数は変わっていない。

だがその4枚の内2枚は『アース』と『神罰』……。どちらも速効性に欠く、逆転の一手にはなれないだろう。

「更に魔法カード『予約カウンター』を発動！ 手札のカウンター罫『神の宣告』を捨てて、このターンの終わりにデッキからカウンター罫を2枚手札に加える！」

宣告の狂信者（効果モンスター）（オリジナル）

星2

光属性 / 天使族

ATK 3000 / DEF 5000

このカードは特殊召喚できず、このカード名の(1)の効果はデュエル中1度しか発動できない。

(1) : このカードの召喚に成功した時、手札から攻撃力より守備力が高い光属性・天使族モンスターを2枚まで捨てて発動できる。

自分の墓地に存在する、または除外されているカウンター罫を2枚まで、自分の魔法・罫ゾーンに伏せる。

このターン、自分は魔法・罫カードを伏せる事はできない。

(2) : 自分フィールドの裏側表示のカウンター罫が相手によって破壊された時に発動できる。

墓地からこのカードを除外し、破壊されたカードを自分フィールドにセットする。

(3) : このカードの(1)(2)の効果でセットしたカードはセットしたターンでも発動でき、フィールドを離れた場合除外される。

予約カウンター (オリジナル)

【通常魔法】

(1)：自分の魔法・罨ゾーンに裏側表示でカードが存在しない場合、手札のカウンター罨を1枚捨てて発動できる。

このターンのエンドフェイズに、デッキからカウンター罨を2枚まで手札に加える(同名カードは1枚まで)。

「カードを2枚セット、そしてエンドフェイズに『龍皇の波動』と2枚目の『神罰』を手札に加える。これでターンエンド！」

ファイオ：LP 1500

手札：『神祕の代行者アース』『龍皇の波動』『神罰』

フィールド

：マスターフレア・ヒュペリオン (ATK 3500・右のEXモンスターゾーンに配置)

：氷結界の龍トリシューラ (ATK 2700)、マジエスティ・ヒュペリオン (ATK 2400)

・伏せカード2枚(内1枚は『神罰』)、パーシアスの神域(永続魔法)、神の居城―ヴァルハラ(永続魔法)、天空の聖域(フィールド魔法)

「私のターン！ 『スカル・オーバーロード』の新たなルールにより、墓地のカードを5枚ドロー！」

ここからラーズの墓地効果が復活する。

一応俺とファイオでEXモンスターゾーンは両方封鎖したが、それでどうにかなる相手では無いだろう。

俺の2枚のリバースカードに加えてファイオも『神罰』がバツクにあるし、モンスターも合計7体いる。だが、それでもラーズを抑えられる予感が、しない……！

「まずはこれだ、フィールド魔法『会稽白骨惑星』を発動。今更何かを説明する必要もあるまい？」

「……ああ、進めろ」

「主殿、構えろ。来るぞ」

「マスター、お気を付けて」

ラーズの手により、再び世界に死の気配が漂う墓地が刻まれる。俺達の場合は雲上の遺跡のままなのがせめてもの救いだろう。いくら俺でも、あんな不気味な場所で戦うのを喜べはしないのだ。

そして言うまでもなく、ラーズの悍ましい戦術は更に続く。

「続けて我はマジックカード『スカル・デスペンド』を発動！ 我の墓地から“スカル”ペンデュラムをそのままセッティングする！ よつて墓地からスケール―1の『スカル・アルファ』とスケール―12の『スカル・オメガ』をセッティング！」

「ペンデュラムスケールがマイナスだつて!？」

「モンスターのレベルを参照する数値がマイナスだと!？」

「死者と亡者の狭間で震える振り子よ、この世を滅ぼす邪道を導け！ ペンデュラム召喚！」

怒り男の背後に浮かび上がる、額に $A$ と $\Omega$ がそれぞれ刻まれた赤と青のしやれこうべ。その2柱の狭間で茨のような刺々しい糸に吊るされた闇が揺れ、円形の召喚ゲートを開いた。

そこから飛び出したドス黒い光は、5つ。

—1—1—1—2

「出現せよ、我が下僕共！ レベル1『スカル・イーター』！ レベル3『スカル・シンクローン』！ レベル4『スカル・ウルフ』！ レベル6『スカル・サルベージャー』！ レベル9『スカル・カノン』！」



スカル・イーター：DEF 0  
 スカル・シンクロン：DEF 800  
 スカル・ウルフ：DEF 500  
 スカル・サルベージャー：DEF 2000  
 スカル・カノン：DEF 1600

現れたモンスターは当然5体。

いずれも守備力は低いが、このまま壁にするとはい底思えない。

加えて言えば奴の手札はターン開始時に5枚、そこから2枚魔法カードを発動して3枚になっていた。なのに今もまた3枚、であればあのモンスター達は墓地からペンデュラム召喚されたのだろう。

減らないライフ、減らないデッキ、減らない手札、減らないリソース……。死という概念を生者にもたらす、まさに墓地に無数に埋葬されている骸の如し、か。

『アルファ』と『オメガ』はその効果により手札とエクストラデッキからモンスターをペンデュラム召喚できぬ。だが代わりに、私の墓地からレベルの違う「スカル」モンスターを召喚できるのだ」

「だろうね、手札が減ってないもの」

「墓地にありつたけデッキを落としたのは、そういう意図もあったのか……」

スカル・イーター（効果モンスター）（オリジナル）

星1

闇属性／アンデット族

ATK 0 / DEF 0

このカードを通常召喚する場合、裏側守備表示でしか出せない。

このカードの攻撃力は相手の場に表側表示で存在するモンスター1体につき100ポイントアップする。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、相手の場の最も攻撃力が高いモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える。

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

スカル・シンクロン（チューナー・効果モンスター）（オリジナル）

星3

闇属性／アンデット族

ATK 1300 / DEF 800

このカード名の(2)の効果はデュエル中1度しか発動できない。

(1) : このカードの召喚・特殊召喚に成功した時に発動できる。

フィールドのモンスター1体を選び、そのモンスターを持ち主の空いているメインモンスターゾーンに移動させる。

この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない。

(2) : このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地から「スカル」Sモンスターを除外して発動できる。

このカードを墓地から特殊召喚する。

スカル・ウルフ (効果モンスター) (オリジナル)

星4

闇属性／アンデット族

ATK 500 / DEF 500

このカードはデッキから特殊召喚する事はできない。

このカードが「スカル」と名のついたシンクロモンスターまたはエクシーズモンスターの素材となった時、エンドフェイズまで相手は魔法・罠を発動する事はできない。

スカル・サルベージャー（効果モンスター）（オリジナル）

星6

闇属性／戦士族

ATK 2000 / DEF 2000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、自分の墓地に存在するアンデット族モンスターを1体、効果が無効にして守備表示で特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したモンスターは、表示形式の変更ができない。

スカル・カノン（効果モンスター）（オリジナル）

星9

闇属性／機械族

ATK 0 / DEF 1600

1ターンに1度、自分の墓地に存在する「スカル」と名のついたモンスターを1体、装備カード扱いとして1体だけこのカードに装備できる。

このカードの攻撃力は、装備したモンスターの元々の攻撃力分アップする。

1ターンに1度、このカードに装備されたモンスターを1体墓地に送る事で、送ったモンスターの攻撃力の半分だけ相手にダメージを与える。

このカードが破壊される時、このカードが装備したモンスターを代わりに破壊する。

『スカル・シンクロン』の効果発動、貴様の『ヴァユタ・プレーナ』をメインモンスターゾーンに移動させる。この効果の発動に対し、相手はカードの効果が発動できない」

しまった、これではEXモンスターゾーン1ヶ所を奴も利用可能になってしまふ。

しかも移動させられた先は俺の場の端、リンク先にモンスターは無い。『ブラックウイング・アサルトソード』を右から2番目に置いたのは失敗だったか……。

「さあ、行くぞ?」

「っ!」

「……!」

「出現せよ、亡骸の嗤う絶望回路!」

天から降り注ぐ慈雨を受け止めるかのように大きく腕を広げるラーズ。そして奴の足元に巨大な銀色のサーキットが生まれ、そこに5体の骨のモンスターが飛び込んでい



現れたのは、絶対なる“死”を告げる者。狼の毛皮を被った死神にして、この世の絶望や混沌から這い出したかのような底知れぬ深淵の黒だった。

その手にした黒い鎌は命を刈り尽くす鋭い刃が砥がれ抜かれており、狼の頭に対する人の頭骨の面という組み合わせと黒い外套が、奴の死の使者という雰囲気強調している。

『ヘルノボーグ』の効果発動。このモンスターは2体以下の素材で召喚された時、ターンを強制終了し自身の効果を無効にする。だが逆に5体のモンスターを素材とした時、それら全てを可能な限り墓地から特殊召喚する！」

「何だ?!」

「そんな!」

スカル・イーター：ATK 0

スカル・シンクロン：ATK 1300

スカル・ウルフ：ATK 500

スカル・サルベージャー：ATK 2000

スカル・カノン：DEF 1600

また一気にモンスターが、5体も!?

しかも内1体はチューナーで自己再生持ち、シンクロもエクシーズも出せるじゃねえか。この陣形で一気に雪崩れ込まれたら、2人とも仕留められてしまう!

「クカハハハ、精々踊ってみせよ。貴様らが足掻いた分だけ私の勝利はより素晴らしい供物となるのだ」

「っ!」

「……っ!」

「主殿、構えろ……!」

「来ますよマスター!」

「……絶対持ち堪えて」

「さあ、我のお楽しみはこれからだああ!」

絶望は……、どうやら門を開けてすらいなかつたらしい。

ラーズのフィールドに並ぶ6体分の骨が、俺達を嘲笑うかのようにカタカタと音を立てた。

t o b e c o n t i n u e d